

暗殺者のうちが何でハンターにならなあかんねん

幻滅旅団

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

流星街出身の暗殺者、ラミナ・ハサン。19歳。

幻影旅団とは昔馴染みで、ある日彼らに借りを作ってしまったラミナは幻影旅団団長クロロに『ハンター試験受けてこい』と言われてしまう。

そして、ラミナは287期ハンター試験を受験する。

目次

#1	ヤミ×ノ×ビジヨ	1
#2	バケモノ×ノ×オテツダイ	7
#3	ゼツボウ×ガ×オソツテキタ	21
#4	シュツパツ×ハ×アラナミ	31
#5	ナビ×ヲ×サガセ	45
#6	シケン×ハジマリ×ハシリマス?	54
#7	ブツソウ×ナ×ゴツコアソビ	68
#8	ポーク×アンド×フィツシュ	84
#9	オジイチャン×ハ×カイチヨウ	102
#10	タワー×ヲ×オリヨウ	118
#11	カリ×ト×シトウ	129
#12	プレート×ノ×ウバイアイ	142
#13	メンセツ×ノチ×サイシュウシケン	155
#14	ゲキトウ×ノチ×ゴウカク	172
#15	オウチ×ニ×ゴシヨウタイ	187
#16	ナニガ×ドウシテ×ソウナツタ!?	206
#17	コンヤク×ノチ×タビダチ	222
#18	トウギジヨウ×ト×ネン	237
#19	ネン×ヲ×キタエロ	254
#20	シヨセン×ト×シシャ	268
#21	チョット×マツテ×オネエチャン	282
#22	キジュツシ×ノ×テジナ	296
#23	シュギョウ×ノ×オワリ	307
#24	シアイ×シアイ×シアイ	319

# 2 5	デシ×タイ×デシシボウ	335
# 2 6	ケツチャク×ソシテ×モドリマス	349
# 2 7	ヒサシブリ×ノ×オシゴト	364
# 2 8	ヨウコソ×マイ×シスター	376
# 2 9	デート×ノ×オサソイ	391
# 3 0	プロハンター×ノ×リユウギ	403
# 3 1	メンチ×ノ×チヨウリ	417
# 3 2	マダマダ×ナ×ナツクル	431
# 3 3	サマザマ×ナ×デシ	451
# 3 4	ナゼ×ノ×リユウ	464
# 3 5	オテツダイ×ハ×オワリ	477
# 3 6	ツワモノドモ×ガ×ツドウ	489
# 3 7	オークシヨン×ハ×オオアレ	506
# 3 8	ケイアイ×ナル×イチゲキ	521
# 3 9	オウモノ×ト×オワレルモノ	538
# 4 0	アミ×ヲ×ハル	551
# 4 1	アネ×タイ×コンヤクシャ	568
# 4 2	ウラナイ×ノ×シ	582
# 4 3	ラミナ×タイ×ヒソカ	599
# 4 4	モデル×カ×ノコル	616
# 4 5	ウラナイ×ノ×カイシヤク	629
# 4 6	シユウゴウ×ノチ×ハツカク	645
# 4 7	アメ×ノ×コウボウ	660
# 4 8	イツシユン×ノ×クラヤミ	674
# 4 9	ソレゾレ×ノ×ヒトジチ	687

# 50	ヤイバ×ト×クサリ	704
# 51	マサカ×ノ×シユウライ	722
# 52	ワカレ×ノチ×ヒガシヘ	738
# 53	カルト×ノ×ジツリヨク	756
# 54	ゾルデイツク×ノ×オシゴト	771
# 55	ソノコロ×ノ×ゴンタチ	790
# 56	トツクン×ト×シュツパツ	802
# 57	アラタ×ナ×モクテキ	813
# 58	アラクネー×ノ×チカラ	827
# 59	アンサツイツカ×ト×マファイア	842
# 60	ホンモノ×ノ×アラクネー	855
ラミナ・プロフィール	—	870
# 61	ゴウリュウ×ト×ソノコロ	879
# 62	イガイ×ナ×デアイ	895
# 63	ゲーム×ノ×ハジマリ	910
# 64	カリ×ト×ゴウリュウ	923
# 65	アネ×イモウト×サンシマイ? ?×サンシマイ?	939
# 66	フタリ×ノ×シシヨウ	953
# 67	ソイツ×ハ×ボマー	969
# 68	ヨウヤク×ノ×テガカリ	983
# 69	ジゴク×ハ×フカク	998
# 70	ブンサン×ト×ソウグウ	1009
# 71	ナカマ×ニ×サソオウ	1022
# 72	レンシュウ×ノチ×カチコミ	1037
# 73	ドツジボール×ハ×オソロシイ	1052

# 7 4	イノチガケ×ノ×キャツチ	
# 7 5	ソノサイノウ×ガ×オソロシイ	
# 7 6	オセツカイ×ノチ×ハツケン	
# 7 7	ジヨネン×ハ×カンリヨウ	
# 7 8	メンドウ×ナ×ヒツコシ	
# 7 9	ホウモツコ×ノ×セイリ	
# 8 0	クモ×ノ×フツカツ	
# 8 1	ブキ×ノ×オヒロメカイ	
# 8 2	クモ×ノ×チカラ	
# 8 3	シゴト×ハ×オワリ	
# 8 4	サイアク×ノ×マモノタチ	
# 8 5	ジンガイ×ノ×タタカイ	
# 8 6	チイサイ×ノニ×チメイテキ	
# 8 7	イチヤイチャ×ノ×イチヤイチャ	
# 8 8	ヨソウガイ×ナ×ジヨウキヨウ	
# 8 9	ニゲラレ×ハ×シナカツタ	
# 9 0	インネン×ノ×インネン	
# 9 1	ヒノメ×ト×ツキノメ	
# 9 2	マサカ×ノ×ヒガイシヤ	
# 9 3	トツクン×ト×デンワ	
# 9 4	NG L×ヨ×GL!	
# 9 5	ブキミ×ナ×アリタチ	
# 9 6	キュウヘン×ト×ソノコロ	
# 9 7	ヤルコト×ハ×カワラナイ	
# 9 8	ススنداサキ×ハ×シンエン	

1428140913961381136713481336132113061292127712661253124012281215120011811163115011301115109910831068

# 99	ニンギョウ×ハ×ダレカ
# 100	オノオノ×ニ×チカラヲ
# 101	ヨユウ×ハ×モテナイ
# 102	イタダキ×ノ×ガツシヨウ
# 103	キルア×ノ×カクセイ
# 104	タンジヨウ×ノチ×カイサン
# 105	ハハ×ト×コ
# 106	ナツカシ×ノ×ソノナハ
# 107	アラタ×ナ×オシエゴ
# 108	サイカイ×ノチ×サイカイ
# 109	トラノキバ×ニ×コイゴコロ?
# 110	イカリ×ノチ×ヤサシサ
# 111	シヌキ×ト×コロスキ
# 112	ホンノウニイキルモノ×タイ×ヤミニイキルモノ
# 113	ライホウ×ト×ヒトツノタノミ
# 114	アサノヒトマク×ト×ヨルノカイギ
# 115	ジンライ×ノ×ダンス
# 116	カイサン×ソノコロ×シュウゴウ
# 117	ゴウヨクノクモ×タイ×ボウシヨクノアリ
# 118	イト×ノ×ジョウオウ
# 119	ラミナ×ノ×デシ
# 120	ソコナシ×ノ×コウキシン
# 121	センニユウ×ト×キュウデン
# 122	セイギ×ハ×ソンザイシナイ
# 123	センソウ×ノ×ハジマリ

1778176517521741172917181706169416801666165216351622160815971585157115571537152315061490147114581443

# 1 2 4	オイツメタ×マタハ×オイツメラレタ?
# 1 2 5	ジンライ×ノ×ダンスパーティー
# 1 2 6	ソゲキ×ノチ×ツイゲキ
# 1 2 7	イカリ×ト×イカルゴ
# 1 2 8	センニユウ×ト×ゴウリユウ
# 1 2 9	チャンス×ト×コマ
# 1 3 0	サシテ×ハ×ドツチ?
# 1 3 1	シヨウネンバ×ハ×トツゼンニ
# 1 3 2	スルドイキバ×ト×ニブツタキバ
# 1 3 3	キョウフ×ハ×ミエヌモノ
# 1 3 4	ヘビ×ヲ×ニガスナ
# 1 3 5	センニユウ×ト×カンバック
# 1 3 6	カクゴ×ハ×オモク
# 1 3 7	サラニ×マタ×ウエニ
# 1 3 8	タガイ×ニ×オオツメ
# 1 3 9	トツニユウ×マデ×ビヨウヨミ
# 1 4 0	オチルリユウ×ノチ×トンダトリ
# 1 4 1	オモイ×ヲ×タクス
# 1 4 2	トビタツリユウ×ニ×トビダスゾウ
# 1 4 3	フキダスカンジョウ×ト×ヒエキルカンジョウ
# 1 4 4	コロシアウ×シカ×ミチハナイ
# 1 4 5	ケツシ×ノ×イジ
# 1 4 6	ナカマ×ノ×タメニ
# 1 4 7	カミナリ×ト×カミカゼ
# 1 4 8	コウカイ×ト×カケヒキ

2151213221212110209520802062204920352022200919961984197019531938192019021890187718531838182118051791



#149	ゲンカイ×ト×ジャクテン	2209219621772165
#150	カベ×ヲ×ヤブル	
#151	ゼンリヨク×ノチ×ケツチャク	
#152	ナマエ×タテマエ×オトコマエ	

## #1 ヤミ×ノ×ビジョ

小雨が降る夜の都会。

1人の女が傘も差さずに歩いている。

茶色の瞳を持ち、紅い髪を無造作に後ろで纏めており、黒のロングミリタリージャケットに赤のミリタリーズボンに黒のブーツを身に着けている。

クール美人と言える鋭い顔つきでモデルをしていてもおかしくない美貌だが、周囲の人は異常なほどに彼女に目も向けない。

そこにいることにすらも誰も気づいていないようだ。

「ホンマお偉いさんは簡単に言うてくれるわ。金払えば何でも叶うと思えばよってからに……」

彼女は小さく眉間に皺を寄せて、両手をジャケットのポケットに突っ込みながらボヤク。

目的地のホテルのロビーに入り、髪や服に付いた水気を払う。

「さてさて、お仕事開始やな」

彼女はスポーツサングラスをかけて、階段に足を向ける。

階段を上り始めると一気に駆け出しながら、白い靄のようなもので体を覆い、残像を残すほどの速度で移動する。

30階ほど上がると、フロアに出る扉の前に立っていた見張りの首をへし折って倒す。

彼女はフロアに入り、物陰に身を隠す。

「調べた限りやと念使いはおらんはずやけど……」

そう呟くと、体を覆っていた靄『オーラ』が勢いよく風船のように広がっていき、フロアを通り抜けていく。

「……変な奴はおらん。標的も確認。護衛は6。フロア貸し切りにして怯えるくらいなら、もっと護衛増やせばええのに。臆病なんか、呑気なんか……」

念の四大行の応用技【円】にて、フロア内の気配を感じ取ったため息を吐く。

しかし、すぐに顔を引き締めて、ズボンの太ももにあるポケットか

ら刃が特殊な形状をしているナイフを取り出す。

剣身の中が魚の骨のように刳り抜かれており、よく見ると刃の部分が鋸のようにギザギザになっている。

ナイフを右手に握り、廊下を警戒しながら歩いている護衛に向かって一気に駆け出す。

「っあ——!?!」

目を見開いて声を上げようとした護衛の男にナイフを投擲して、喉に突き刺す。

「ガ!?!」

男が刺さったナイフに手を伸ばそうとする。

女がパチン！と指を鳴らす。

するとナイフが突如消えて、女が瞬間移動したかのように隣に現れて、そのまま奥に走る。

男は喉から血が勢いよく噴き出して倒れ、その音で他の護衛達も彼女の存在に気づいた。

女は左手をポケットに突っ込んで、中の物を一番近くの護衛に投げつける。

「っ!!」

護衛の男は銃を構えて、投げられたものの正体を見極める。

「コイン?」

飛んでくるものはコインだった。

男が思わず呆気にとられていると、パチン！と指が鳴る音がして、突如コインがナイフに変化した。

「は!?! がっ!」

目を見開いた男は避ける事も出来ず、額にナイフが突き刺さる。

女は頭を仰げ反らせて倒れて行く男のナイフを掴んで引き抜きながら通り過ぎ、銃を構えている男に向かって再びナイフを投げる。

「馬鹿が! つな!?!」

鼻で笑って発砲した瞬間、彼女がまた瞬間移動して銃弾を躲す。

男は驚きながらも再び銃口を向けるが、女はもう目の前に迫っていた。

「なんだけっ!?!」

女は男の頭を掴んで、一気に180度ゴキリと捻って殺す。倒れて行く男に目もくれずに、床に落ちたナイフを拾う。

「これで後は部屋の中だけやなっとお!!」

ドバン!!

すぐ横の扉を蹴り壊す。

もちろんすぐ目の前には、拳銃を構えた護衛の男達。

「死ねえ!」

パン! パパン!

と、一斉に発砲するが、女はオーラを強めて銃弾を躲しながらナイフを猛スピードで投擲する。

ナイフは銃弾以上の速さで一番先頭にいた男の額に突き刺さって、頭が仰け反る。

直後、男の額の上に女が現れて、すぐ横にいた男の首に蹴りを刺し込んで押し折った。

「こ、このっ!」

最後の1人が何とか銃口を向けるが、パチン!と音がしたかと思うともう女の姿はなく、あったのは何故か宙に浮かんでいるナイフだけだった。

「なっ!?!」

「おもしろいもんやろ?」

「!?!」

扉の方から声がして、目を向けると猛スピードで女が走ってきた。そして、落ちているナイフを掴んで未だ啞然と目を見開いている男の首を一閃する。

女はナイフを振って、血を払う。男は首から血を噴き出して、ゆっくりと倒れた。

そして部屋に残っているのは女と、髭を生やした小太りの男だけだった。

「ひ、ひい……!」

「……あんたがザコナイフアミリーのボス、モアカンやな?」

「き、き、貴様！　だ、誰の差し金だ！」

「知ったところで、もう報復なんざ出来へんようになるから聞くだけ無駄やろ」

「おのれえ……！　暗殺者風情が……！　な、ならば雇い主の10倍払ってやる！」

「寝言は寝て言えや。うちの世界は命、信用、金の順で大事なんやぞ。ここで靡いたら、もう依頼が来んようになるやないか」

ターゲットの言葉を呆れながら切って捨てた女は、まるで息をするように自然で、かつ滑らかな動きで男の胸にナイフを突き刺す。

モアカンはあまりにも女の動きが自然過ぎて、何をされたのか分からず啞然と胸に刺さったナイフを見下ろす。

「……あ？」

「ほな、さいなら」

女はナイフを刺したまま腕を横に振ってモアカンを投げ飛ばし、窓ガラスを突き破って放り出す。

モアカンは呆然としたまま外に放り出されて、地面にまつすぐ落ちて行った。

「ふう……手応えないんもなんか疲れるわ〜」

女は首に左手を回してコキコキと鳴らしながら、またコインを取り出してコイントスをする。

パチン！と指を鳴らすと、コインがナイフに変わって女はナイフをキヤツチする。

人が近づく気配を感じると、彼女も窓から身を乗り出して飛び出し、夜の街へと消えていった。

直後に、下の階で待機していた部下達が駆け込んできた。

しかし、部屋にあるのは死体のみ。

彼らのボスは遥か下の地面に叩きつけられて、紅い池を広げている。

彼らは警察を黙らせて調査を始めたが、ボスがいた階は監視カメラを切っていたので、はつきりと犯人の姿を捉えた映像はなかった。

このホテルには一般客も泊まっているし、誰でも入ることが出来る

ので、他の監視カメラの映像だけでは断定できなかった。  
こうして彼らは犯人探しよりファミリーを立て直すことに手を取られていくことになるのだった。

女はホテルから離れて、電話を掛ける。

「……毎度どうも。お仕事終わりましたで。もうそろそろ一般人やら警察の下っ端やらわんさか目撃してはると思いますわ」

『——』  
「お早いことで。ほな、報酬は伝えた口座に」

『——?』

「あゝ、やめときますわ。連続で仕事引き受けると、互いに足が付くかもしれないさかいなあ。ほな、失礼」

女は電話を切って、歩き出す。

「しばらくはのんびりしよか」

その時、再び携帯が鳴る。

「はいはい」

『ラミナ、暇? 仕事手伝って欲しいんだけど』

「……断定し過ぎやで、マチ姉」

『で、来れる?』

「まあ、ちようど一仕事終わったところやし、かまへんけど。内容と報酬は?」

『殺しだよ。ちよつと相手が多いんだけど、ウボオーもノブナガも連絡がつかないからさ。5千万でどう?』

「相手は?」

『マフィア。十老頭直下のところ』

「……1億5千万」

『いいよ。じゃ、待ってるから』

全く渋ることもなく承諾して電話を切られる。

ラミナはため息を吐く。

「はあ、もつと吹っ掛けたったらよかったわ。……十老頭なあ。顔、隠

しとこか」

彼女の名はラミナ・ハサン。

流星街出身の19歳。

【リツパー】の名で知られるフリーの暗殺者である。

## #2 バケモノ×ノ×オテツダイ

翌日、ラミナは気持ち早足で指定された集合場所である廃ビルの最上階に到着した。

「お、来た来た」

「早かったね」

廃材や木箱が積み上げられた大部屋にいたのは、金髪の爽やかな雰囲気青年とピンク色の髪をポニーテールに纏めている鋭い雰囲気女性。

ラミナは歩み寄りながら、肩を竦める。

「そら、ご有名な幻影旅団様のご機嫌損ねて殺されたあないさかいな」

「あつはははは！ 似合わないなあ」

「気持ち悪い」

「うっさいわ。って、シャルとマチ姉だけなんかいな？」

ラミナは周囲を見渡して首を傾げる。

シャルナークは首を横に振る。

「いや、後シズクとパクノダも来るよ」

「……うちはウボォー達の代役なんやな」

「そういうこと。もちろん報酬は弾むからさ、仕事上がり直後で悪いけど頼むよ。団長からの御指名でもあるしさ」

「クロロからの？」

ラミナは流星街出身なので、同じく流星街出身の幻影旅団のメンバーとは関りが深い。というか、ほぼ一緒に育った仲だ。

幻影旅団の設立時はまだ念を覚えたばかりだったので、メンバーには誘われなかった。

ラミナが暗殺者として独り立ちした2年ほど前から、再び関係を密にし始めて時々こうして依頼と言う形で手を貸している。

今まではマチやシャルナークなどからの依頼が主だったが、幻影旅団団長であるクロロからの依頼は初めてのことで、ラミナは首を傾げる。

「なんやねん、急に？」



「さあ？ 多分、他の団員達も何かしら仕事してるからじゃないかな？」

「団員以外で信頼出来て、戦闘力があるって言ったらラミナだったんじゃない？」

「そんなら暗殺者冥利に尽きるんやけどなあ……。随分と大掛かりな感じやないか。マフィアンコミュニティーと戦争でもする気か？」

マフィアンコミュニティーと流星街は太いパイプで繋がっている。

流星街の住民は公式には存在を認められていない。なので、情報を集めるだけでも精一杯で、足がつかない戦力として重宝されている。

それもあってラミナや幻影旅団のメンバー達は未だにほとんど素性が知られていない。

もちろん流星街の全ての者と繋がっているわけではないので、敵対することも多い。

ラミナはフリーの暗殺者なので依頼者次第であり、幻影旅団は全く繋がっていない。

「かもね」

「かもねって知らへんのん？」

「まだ詳しい事は聞かされてないんだよ。とりあえず今回の相手はアタシらのことを潰そうとしてるらしくてね。鬱陶しいから潰しておけってさ」

「相変わらず自由なこって。まあ、報酬払ってくれるんならええわ」

鬱陶しいという理由でマフィアンコミュニティーの重役が率いるファミリートを潰そうなどと言えるのは、間違いなく幻影旅団くらいだろう。

普通なら確実に報復戦争が始まる。それを気にもしない連中がいるとは、凡人なら思わないのかもしれない。

マフィアと言う組織を率いていることで増長しているのかもしれないが、組織の大きさが必ずしも強いとは限らない。

幻影旅団はその特例のトップにいる。

「で、相手は？」

「ターゲットはミエハタファミリーだ。十老頭直下の組織で、構成員

は232人。念使いもそこそこ抱えてる」

「……うちはその念使い共の排除か？ それともボスの方？」

「念使いの方を頼みたい。ボスはパクノダに一度見せたいからね」

「せやるな。……はあく。こら大盤振る舞いせな、ちよつとキツイか」

「お！ 久々に見れるのかな？ 【刃で溢れる宝物庫】アルマセン・デ・エスパダ」

シャルナークが楽し気に言う。

ラミナは肩を竦めて、全員が集まるまで適当に待つことにした。

数時間ほど雑談しながら経過して、空腹を感じたのでハンバーガーを買ってきて食べる。

もちろんマチ達の方も購入させられる。

「ハンバーガーくらい買に行けや」

「全員でワラワラ行く必要ないでしょ？」

「サンキュー」

マチがふてぶてしく言い返しながらハンバーガーに齧り付き、シャルナークも礼を言っただけで食べ始める。

ラミナは小さくため息を吐いて、自分も食べ始める。

「そう言えば、マチ姉。シズクじゃない方の新人の面倒見とるんやって？」

「あ？ ……ああ、ヒソカね」

「どんな奴なん？ 流星街の奴やないんやろ？」

「らしいね。気味が悪くて、よくわかんない奴だよ」

「今回みたいな小さな集まりを何度か無視したこともあるね」

「また偏屈な奴やな」

「アタシはあんたを推薦したんだけどね。あんた、仕事で連絡付かなかったし」

「そら、すまんなあ」

肩を竦めて軽く謝罪するラミナ。

幻影旅団のメンバーは殺すことでその番号を奪うか、死んで空いた枠に団長が選んで補充するかしない限り、基本メンバーが変わることはない。

団員同士の殺し合いはご法度で、団長の許しが無い限り仲間割れは

ない。なので、誰かが死なない限り、メンバーの交代はありえない。ラミナは幻影旅団に入るのが嫌なわけではないが、そう簡単に勝てるメンバーではないので無理をする気はない。

「まあまあ。こうして仕事を一緒にやれるんだからいいじゃないか。俺達が団員以外とつるんで仕事するなんて滅多にないし。ましてや団長が認めるなんてさ」

シャルナークが苦笑しながらマチを宥める。

そうして食べ終わって、またのんびりしていると、2つの気配が近づいてくるのを感じた。

現れたのは胸元が開いた金髪の女性と、黒髪に眼鏡をかけた女性。

「あら、ラミナじゃない」

「久しぶりだね」

「久しぶりやな。元気そうで何よりや」

「ラミナにも今回手伝ってもらったことになった」

「それは頼もしいわね。私達は戦闘に特化した能力じゃないし」

金髪の女性、パクノダは豊満な胸の下で手を組んで笑みを浮かべる。

「それで、どう動くんですか?」

黒髪眼鏡のシズクがシャルナークに目を向けて尋ねる。

シャルナークは立ち上がって説明を始める。

「俺とラミナが陽動と殲滅。マチとパクノダ、シズクは俺達が暴れている間にマフィアのボスから情報を絞り上げてくれ」

「重労働やなあ。はよ、終わらせてや」

「努力はするわ」

「うん、頑張る」

「じゃ、さっそく作戦開始だ!」

シャルナークの言葉に全員が行動を開始する。

ラミナは鼻元までのフェイスマスクとサングラスを着ける。

「あれ、あんたってそんなマスクしてたって?」

「流石に暴れまわるし、顔バレの可能性は減らしときたいんよ。ミエハタファミリー傘下のところから仕事もろたこともあるしな」

「面倒ね」

「仕事はそういうもんやろ」

マチの言葉に呆れながらズボンのポケットから昨日使用したナイフを取り出し、左腕を横に振ると鎌状に湾曲しているファルクス型の剣が左手に握られていた。

「あ、それ。ベンズナイフ？」

「後期の作品やな」

「団長も一本持ってたよね？」

「そうね」

シズクが興味津々で覗き込む。

団長も持っていることを思い出してパクノダに訊ね、パクノダも頷く。

そして、二手に別れて、いよいよ作戦開始となった。

ミエハタファミリーは街の郊外に屋敷を構えており、その周囲には銃を持った構成員達が見回りを行っていた。

「ふわあ〜……い！」

「おい、気を抜くなよ」

「んなこと言ってもよ。ここに攻め込んでくる馬鹿なんていねえだろ。俺らを敵に回せば、十老頭も敵に回すんだぜ？」

「……まあなあ」

注意した者も気を抜いていた仲間の言葉に思わず同意してしまう。

十老頭直下のファミリーを襲うことは、間違いなく十老頭にもケンを売ることには等しい。

そんな馬鹿な者がいるとは思えないのが彼らにとっての常識である。

しかし、その常識から外れている者達が、彼らの目の前に現れる。

「あ？」

「誰だ!？」

右手に鎌状の剣、左手に独特な形状のナイフを握っている紅い髪の

女。

男達は抱えていたサブマシンガンを構えて睨みつける。

ラミナは男達に目を向けたまま、動かない。

男達はそれを訝しんでいると、首の後ろに痛みが走る。

男達は腕を伸ばして、確かめようとしたが突如意識が闇に呑まれ、二度と浮き上がることはなかった。

ラミナは銃を構えたまま虚空を見つめて固まっている男達を見て、流石に同情を覚えた。

「相変わらずえげつないこつて……。操作系の使い手って、これやから嫌やねん」

「これはこれで面倒なこと多いけどね」

男達の後ろに携帯を握って立っているシャルナークは肩を竦める。

「じゃあ、俺は周りで暴れさせるよ。ラミナは敷地の中を頼む」

「へいへい。屋敷は少しくらい壊してもええやろ？」

「ターゲットを逃がしたり、殺したりしなければね」

「注意はしとくわ。よっ！」

ラミナは柵を飛び越えて、敷地の中に入る。そして、一気に駆け出して正面玄関へと向かう。

正面玄関への角を曲がる直前に屋敷の壁へと向きを変える。

そして、そのまま屋敷の壁を垂直に駆け上がって屋根の上に乗る。

正面玄関前には20人近い構成員達が警戒していたが、ラミナは屋根から飛び出して構成員達の真上に移動する。

「ふっ！」

ラミナは真下にいた男にベンズナイフを投擲して、頭頂部に突き刺す。

「ぐげ!？」

「っ!?! なんだ!?!」

「上か!?!」

騒ぎ出しながら銃を上空のラミナに向ける構成員達を尻目に、ラミナはパチン!と指を鳴らす。

するとナイフを突き刺した男の頭の上にラミナが現れる。構成員達は突然移動したラミナに驚いて慌てて銃を向け直そうとするが、その前にラミナは右手のファルクス剣を振り抜きながら1回転する。

直後、周囲にいた男達から血が噴き荒れる。

ある者は首と右腕が斬り飛ばされ、またある者は左脚と鳩尾あたりで斬り飛ばされ、更には鼻から上と右脚と左肘から先が斬り飛ばされて死ぬ。

たった一振りですべて20人近くの者達を最低2回以上斬りつけている。上から落ちてきたベンスナイフをキャッチして、屋敷の扉に目を向ける。

再びファルクス剣を振ると、屋敷の扉がバラバラに吹き飛んだ。直後、屋敷の中から銃弾の雨が飛んで来たが、ラミナは横に飛んで射線上から離れていた。

「これで屋敷の中や近くの外回り連中がこっちに集まるやろ。反対側はシャルが暴れとるやろうし、すぐにマチ姉達が仕事を終わらせるやろうな。問題は念を使える護衛をこっちに誘い込めるかつちゅうこどやが……」

そう考えていると、屋敷の中から巨大なモーニングスターを肩に担いだ坊主頭の巨漢が現れた。

その後ろからは銃を構えた構成員達も現れ、ラミナを睨みつけていた。

「なんだあ？　どんな馬鹿かと思ったたら女じゃねえか。おい、女あ。ここがどこか分かってきたんだらうなあ、ええ？」

「……はあ」

巨漢の言葉にラミナは呆れたように小さくため息を吐くだけで答える。

舐められたと判断した巨漢は頭に血管を浮かばせて、顔を怒りに染める。

「舐めやがって……！　後悔しやがれえ!!」

体とモーニングスターにオーラを纏わせて、見た目からは想像出来ない速さでラミナに迫る。

ラミナの目前に迫ってモーニングスターを振り上げた瞬間、ラミナがベンズナイフを手首の力だけで巨漢の顔目掛けて投げる。

「ふんー」

巨漢は鼻で笑って、首を傾げるだけで躲す。そして、モーニングスターを振り下ろそうとした時、パチンとラミナが指を鳴らす。すると、ラミナの姿が消えて避けたはずのベンズナイフが現れ、巨漢の背後にラミナが現れる。

「!?」

「さいなら」

巨漢は目だけ後ろに向けたが、直後に両肘と腰に衝撃と痛みを感じて意識を失った。

構成員達の見開かれた目には、両肘の先が落ちて腰から上下に分かれて倒れていく護衛の巨漢の姿が映る。

いきなり瞬間移動しただけでも理解出来ないのに、ただの見当違いな空振りにしか見えなかった一撃が、まさかの結果をもたらして構成員達は全く理解出来ずに啞然とするしかなかった。

ラミナは一瞬で構成員達の目の前に移動し、また剣を一振りする。それだけで構成員達の体は2つ以上のパーツに分かれて命を落とした。

ベンズナイフを回収しようとしたラミナだが、そこに鞭が飛んでくる。

「ー」

ラミナは後ろに飛んで躲す。

「なかなかやるじゃないの、あんた」

「けど、ここまでだがや」

「大人しく死んでもらおう」

現れたのは両手に鞭を握る茶髪ドレッドヘアのスーツ姿の女、鉤爪を身に着けたタンクトップ短パンで裸足の男、褐色肌に坊主頭の長身でスーツの男。

（全員念使いか……。鉤爪はともかく、鞭と無手の方はちよつと厄介そうやな）

「3対1で、そっちの戦い方は今見させてもらった。そっちの不利は明確だ。諦めろ。雇い主や情報を吐くなら、少しは長生きさせてやるがな」

「ダス。そんなまどろっこしいことしてないで、さっさと痛めつけてやればいいのさ。死に掛ければ吐く気になるかもしれないじゃない」  
「ゲゲツ。ミブラの姉御の言う通りだがや」

「黙ってる、ミブラ、ゼルボ。まだ他にも仲間がいるようだからな。消耗は出来るだけ抑えたいだけだ」

「ハッ！ あんたの指示に従う理由はないよー！」

ミブラはダスの言葉を鼻で笑い、飛び出して鞭を振るう。

それにゼルボも続いて、獣のように四足走法で飛び出す。

ラミナは2本の鞭を躲しながら、剣を振るい鞭を斬り飛ばそうとしたが、剣が鞭に触れた瞬間に剣が勝手に動き出してラミナに襲い掛かってきた。

「！」

「はっはあ!! 私の【下僕<sup>クワイーン・ウイップ</sup>への愛の鞭】は鞭で叩いたものを私の支配下に置く！ あんたの剣じゃ相性最悪だよお!!」

「ちっ。操作系か」

「ガア!!」

得意げに説明されて、ラミナは舌打ちをするが、そこにゼルボが獣のように鉤爪を振るいながら突撃してくる。

ラミナはゼルボの攻撃や飛んでくる剣を紙一重で躲しながら、後ろに下がる。

（やつぱコイツは強化系。ちよつち面倒やな）

「ひゃあー！」

その時、ミブラが鞭を振るって、地面に転がっているサブマシンガンやライフルを叩く。

サブマシンガンとライフルはオーラを纏ってガシャン！と独りだけで起き上がり、ラミナに銃口を向ける。

「ちいー！」

ババババババ!!



一斉に銃弾が発射されて、ラミナは縦横無尽に動き回って躲している。

そこにダスが10mほど離れた場所から右腕を振ると、オーラが巨大な拳の形を成して伸びてきた。

(最後は変化系。昔からの知り合いっちゅうわけやなさそうやけど、嫌らしい組み合わせが揃つとる)

ラミナは顔を顰めながら、オーラの拳と銃撃を躲す。弾切れを待とうと思ったが、ミブラが次々と銃を支配していくので期待できそうになかった。

「……じゃあない」

ラミナは懐に右手を入れ、引き抜くように腕を引くと、その手にはブロードソードが握られていた。

「!! あの服、具現化系か? しかし、そうになると剣やナイフの能力も具現化系? いや、だったらさっさと念を解除して、回収すればいいだけのはず……」

ダスは攻撃しながら考察していくが、それは中断せざるを得なかった。

ラミナの剣を握る腕がブレて、銃弾を全て叩き落としていくのを目撃したからだ。

「「なっ!」」

もはや壁と言っても過言ではなかった銃弾の雨を叩き落とすという離れ業に目を見開いて固まる3人。

ラミナはその隙を逃さず、反撃に出る。

銃撃の射線上から飛び出したラミナは、いつの間にか握られていたベンズナイフを勢いよくミブラに向かって投擲する。

ミブラは更に目を見開いて鞭を振ろうとするが間に合わず、銃弾以上の速度で飛んでくるナイフを躲すので精一杯だった。

ナイフが通り過ぎようとしたその時、ナイフがラミナの姿に変わる。

「っ!」

「しっ!」

「ギャ!?!」

ブロードソードを握る腕が再びブレて、ミブラは頭と四肢が斬り飛ばされる。

銃撃が止まり、操られていた剣が地面に転がる。

「姉御!?! テメエエ!!」

「待て、ゼルボ!」

ゼルボは目を血走らせて飛び掛かる。ダスが呼び止めるが、完全にキレていて聞く耳を持たなかった。

ラミナはそれを無感情に見つめながら、左手に握っていた銃弾を放り投げて指を鳴らす。

銃弾はベンズナイフに変わり、更に指を鳴らすとファルクス剣が現れる。

「なっ!?!」

ゼルボは目を見開くが時すでに遅く、ラミナがファルクス剣を空振りするとゼルボの首と右脚と左腕が斬り飛ばされる。

ゼルボの体が勢いを無くして、地面に転がり首がラミナの足元で止まる。

「くっそがああ!!」

ダスは叫びながらオーラの拳を伸ばしてラミナに攻撃を仕掛ける。ラミナはそれを片足を下げて半身になり紙一重で躲すと、一気にダ

スの目の前に移動する。

「っ! た、体術だけで……!」

「さいなら」

ブロードソードで首を跳ね飛ばす。

噴水のように血を噴き出して、ダスの体は前のめりに倒れる。

「ふう〜。面倒やった」

ブロードソードが右手から消えて、ベンズナイフが現れる。

周囲から人の気配がなくなったことを感じると、ラミナは屋敷の中へと足を進める。

屋敷の中には人の気配を感じず、戦闘音も聞こえなかった。

「……シャルも終わったみたいやな」

「そういうこと」

声が出た方向に目を向けると、マチが待ちくたびれたように腕を組んで壁にもたれていた。

「遊びすぎ。もう引き上げるよ」

「……人に面倒な相手押し付けといて、そりやないやろ」

「ほら、行くよ」

「はあ……へいへい」

苦情を無視するマチにため息を吐いて、後に続いて撤退するラミナ。

マスクとサングラスを外して、廃ビルに戻る。

「お疲れ、ラミナ」

「なんで面倒なん全部こつちに来とんねん」

「知らないよ。運が悪かったね」

シャルナークは肩を竦めて苦笑する。シャルナークの相手は雑魚の構成員達だけだったのだ。

ラミナは首をコキコキと鳴らしながら、パクノダに顔を向ける。

「情報は取れたんかいな？」

「ええ、問題ないわ」

「監視カメラの映像も消して、壊してきたから修理する念使いでも現れない限り大丈夫だと思う」

「ほな、仕事は終わりやな。あゝ……!」

ラミナは伸びをして、体を解す。

「報酬はいつもの口座でいいんだろ？」

「せやな。ほな、うちは行くわ」

「もう?」

「現場近くからはさっさと出て行くようにしとるねん。特にこんな廃ビルとか簡単に踏み込まれそうで落ち着かへん」

「染みついてるわね」

「余裕ぶると死ぬだけやからな。用心深い方がええねん」

「だから旅団に入ればいいのに」

「戦闘メインのメンバー厄介な奴らばつかやないか。まだ死にたあな

いわ」

「あはははー！」

気軽に言うマチに、ラミナは顔を顰めて言い返す。  
それにシャルナークが笑う。

ラミナはため息を吐いて、手を振りながら歩き出す。

「ほな、また仕事出来たら依頼してや」

「ああ、また」

「野垂れ死ぬんじゃないよ」

「ばいばい」

「またね」

気軽に挨拶を交わして、ラミナは廃ビルを出る。

ラミナは適当な飛行船を選んで飛び乗り、街を離れる。

乗った飛行船は宿泊部屋があり、到着は翌朝の予定である。

「到着は明日の朝やな。さっさとシャワー浴びて寝よか」

ラミナは少しはのんびりできると服を脱ぎ捨てて、シャワーを浴びる。

そして、そのまま全裸でベッドに潜り込んで、眠りにつくのだった。

---

○ラミナ・ハサン

19歳。身長169cm。体重50Kg。

血液型O型。Cカップ。

紅い髪を後ろで無造作に纏め、茶色の瞳。

流星街出身で、旅団メンバーとは顔なじみ。

マチとは姉妹と間違えられるほど顔つきや雰囲気似ており、よく一緒に過ごしていた。なので「マチ姉」と呼んで慕っている。

流星街を出られる実力が身に付いた頃には、幻影旅団のメンバーはすでに旅立っており、活動も始めていた。

それを追う様に流星街を飛び出して、暗殺者として成長していく。

関西弁なのは育ての親が関西弁だったから。

ナイフや剣をメインとした戦闘スタイル。

体術はもちろん暗殺術も仕込まれている。

### #3 ゼツボウ×ガ×オソツテキタ

マチ達の仕事を手伝ってから2週間ほど経過した。

その間は依頼を受けずに寂れたホテルで悠々と生活していた。

今いる街は大きくもなければ小さくもなく、観光名所と言われる場所もあまりない。

それでもゆったりと暮らすには最適で、ラミナはこの街をよく休養地として使っている。

ゆったりしていると言っても情報収集は欠かしていない。

ミエハタファミリーの壊滅はかなり波紋を広げており、犯人探しに躍起になっているようだ。

今の所、ラミナや幻影旅団の名前は出ていない。

しかし、あくまでラミナが集めた情報の中で、ということなので油断は出来ない。

なので、そろそろ一度街を変えようかとラミナは考えていた。

「美味しいもんあるとこ言うたら、どこがええやろなく。っ……！」

夕暮れの街を練り歩きながら次の目的地を考えていると、妙な視線と気配を感じた。

しかし、それは一瞬だけですぐに消えて、感じ取れなくなった。

(……気のせい、と思うんは樂觀的やわなあ。同業者か。さて、どうしたもんかいな……)

出来る限り気配を乱さず、気づかなかつたふりをしながら人気のない場所を目指す。

所々で日常的にやっているように気配を探りながら歩き続ける。

(全く感じ取れんな。1人か？ それでもかなりの手練れやな。……こりやバレたか?)

ミエハタファミリーの報復で刺客を放たれたのか。

今1番可能性があるのは、それくらいしか思い浮かばない。

ラミナは眉間に皺を寄せて、逃げるか迎え撃つかを考える。

(人数次第やけど……ここまで気配感じさせへん奴相手に逃げれる可能性は低いやろなあ。2人以上ならまず無理か。戦うにしても、ど

こでつちゆうのもあるなあ……)

ラミナは憂鬱気のため息を吐きながら、見つけた5階建ての廃ビルの中に足を進める。

ありがたいことに商業用ビルだったらしく、中は広がった。

3階に上り、部屋の真ん中で足を止めてサングラスをかける。

少しすると、ラミナが入ってきた扉から2人の人間が現れる。

現れたのはウェーブのかかった長い薄い金髪のがたいの良い男と、同じく銀髪だが小柄の老人。

ラミナは2人の姿を確認して盛大に顔を顰める。

「……ゾルディック……」

「ほお……儂らを知っておるのか」

「伝説の暗殺一家を知らん暗殺者がおるかいな。それにしても、現当主と前当主が出てくるとは流石に予想外過ぎるわ。そこまで金出されるほど恨み買った記憶もないし、小娘1人を狙うほどの価値もないやろうに……」

「かつかつかつ！ まあ、そこは諦めてもらうしかないのう。儂らは依頼されただけじゃからのう」

「ちなみに依頼者は教えてもろてもええ？」

「ふむ。……まあ、構わんか。依頼主はクルツオアファミリーじゃ」

「……クルツオアやと？ ここ最近、連中の仕事ようけ受けたばっかやぞっ…」

「どうやら手柄を上げ過ぎたようじゃのお。要は証拠隠滅じゃな」

「それでゾルディック家とかアホやる。そつちもなんで受けんねん」

「金払いが良かったでな。義理は果たさねばなるまいて」

この前のザコナイファミリーの暗殺もクルツオアファミリーからの依頼だった。

他にも5、6回ほど依頼を引き受けて、全て完遂してきた。

それで邪魔に思うのなら、もう少し依頼の仕方を考えろとツツコミたいが、ゾルディック家に言ったところで仕方がないだろうと諦める。

「はあく……まあ、ええか。これであのゾルディック家から逃げ切っ

たつちゆう自慢話も出来るでな」

「……ほお、儂らから逃げ切るつもりか？」

「当たり前やろ。まだ死にたあないでな」

ラミナは僅かに腰を屈める。

それを見たゼノ・ゾルディックとシルバ・ゾルディックは、ゆつくりとラミナに向かって構えもせず近づいてくる。

そして互いの距離は5mほどになった時、ゼノとシルバの姿が消える。

「!!」

ラミナは体を大きく反らす。その上をシルバの脚が風を切る。

ラミナは左手を床につけて、体を捻りながら左腕を引いて横に飛ぶ。

直後、ラミナがいた場所にゼノの貫手が床に突き刺さる。

起き上がったところに再びシルバが詰め寄り、貫手を連続で放つ。

ラミナはオーラを腕に集中して、貫手を受け流して躲していくが皮膚が斬られて血が噴き出す。隙を狙って、脚を振り上げてシルバの顎を狙うが、シルバは軽やかに躲す。

シルバが離れた瞬間、ラミナはベنزナイフを抜いてゼノに突き出す。ゼノは首を傾げるだけで躲し、ラミナはそれを読んでいたかのように足払いを繰り出してゼノの接近を止める。

ラミナはベنزナイフを引くのと同時に背後にベنزナイフを投げける。

背後にはシルバが近づいてきていた。シルバも首を傾げるだけでベنزナイフを躲し、右ストレートを振るう。

しかし、パチン！と音がしたと思ったら、ラミナが突如背後に現れる。

「!」

ラミナは蹴りを放つが、シルバは右腕をさらに振り抜いて体を捻り、左肘を背後に突き出す。ラミナは両手で受け止めて、シルバの肘を利用して跳び上がってシルバの後頭部に右膝を叩き込む。

シルバは当たる直前に前に出て、ダメージを減らして前に大きく飛



び出す。

そこにゼノがシルバを飛び越えて、ラミナに迫ってきてオーラを右手に溜めて放出してきた。

「っんのー」

パチンと指を鳴らして、ゼノの足元に移動する。

「！」

「しいー」

ラミナはゼノに貫手を放とうとするが、右からシルバが掴みかかってきて中断する。ラミナは左手をシルバに突き出す。するとラミナの袖から細身の刃が飛び出してきた。

「ぬー！」

シルバは大きく跳び上がって、刃を躲す。

ラミナもベンズナイフを回収して、距離を取る。

そして、また睨み合う形になる。

「……ふう〜。きつつ」

「ふむ。思ったよりやるのう」

「それに面白い能力の使い手のようだな……」

「そら、どうも」

まだ5分も経っていないのに、ラミナはすでに汗だくだ。

それに対してゼノとシルバは汗1つ掻いていない。

ラミナは左手のレイピアと右手のベンズナイフを持ち替える。

「……ベンズナイフの後期、か。しかし、本物ではないな」

「……そりゃあ、分からへんやろ」

「そのナイフが纏っているオーラがベンズナイフ独特のものではない。先ほどの能力から考えて、恐らく具現化系で造られたものだ」

「ちっ。ベンズナイフマニアか」

ラミナはシルバの指摘に舌打ちで答える。

「ナイフと己を入れ替える、か。中々厄介な能力じやのう。そっちの細剣も何かしら付与されておると考えるべきじやろう」

「だが、入れ替えるときは指を鳴らす必要があるようだな」

「……はあく。自分ら、あれやろ。手品とか見たら、タネとか見抜いて

得意げに自慢するタイプやろ？ そんなんやとガキや孫が偏屈になるんちやうか？」

「……耳に痛いろう」

「……」

ラミナの呆れながらの言葉に、ゼノは目を瞑って髭を撫で、シルバも黙って目を背ける。

「どうやら思い当たる節があるようだ。」

それに気づいたラミナはサングラスの下から更にジト目を向ける。

「まあ……暗殺一家が偏屈になるんは当たり前か。……ご明察や。確かにこのナイフも剣も、うちが造り出したもんや。それで、それぞれに能力を組み込んだる」

「なるほど。暗殺には向いておるな」

「このベンズナイフモデルの能力は【チェンジリング妖精の悪戯】。効果は見た通りやな」

「奇襲にも逃走にも重宝出来る。いい能力だ」

「そら、どうも」

【チェンジリング】の長所は能力がバレたところで大して困らないところにある。

ナイフは壊されてもまた造り出せばいいし、警戒していても攻め込まれている時にずっとナイフを注意しておくことは隙を生み出しかねないからだ。

1対多数には向いていないと思う者がいるかもしれないが、そこは他の剣と組み合わせればどうとでもなる。

「さて……ほな、続きやろか。諦めてはくれへんのやろ？」

「当然じゃろ」

ゼノとシルバはオーラを強めて歩み寄る。

ラミナもオーラを強め、レイピアにもオーラを纏わせて構える。

先に仕掛けたのはラミナでレイピアを突き出して、シルバに攻めかかる。

シルバは半身になって躲し、右ストレートを放つ。ラミナは左腕でガードして、後ろに滑り下がる。

再びゼノがオーラを飛ばしてきたが、横に飛んで躲しながらレイピアを構える。

「啄木鳥ビース・ビークの啄ビークばみ」

ヒュン！とレイピアを突く。

ゼノは横に躲すと、左袖の一部に穴が空く。

「ぬ！ これは……貫通能力か！」

「そういうこっちゃ」

ヒュヒュヒュヒュ！と連続で突きを放つ。

シルバとゼノは切っ先を見抜いて、剣筋上に立たないように動き回る。

（厄介じゃのう。近づこうにもあのナイフの能力で背中を取られかねん）

（それに奴の純粋な戦闘力もかなりのものだ。ナイフや剣に気を取られ過ぎると危険か。それにまだどんな剣を持っているかも分からん）

ゼノとシルバは攻めあぐねていた。

念能力で攻める事も出来るが、ラミナの能力では一瞬の間が命取りになりそうだった。

それだけラミナの戦闘力は想像以上で、愉快でもあった。

「偶然じゃろうが、お主を殺すには見合った報酬じゃったようじゃのう」

「嬉しないわく。ここまでヒラヒラと避けられると自信無くすでな」

「よく言う。本気で戦ってないだけじゃろう」

（ありや、やつぱバレとるんか。ほな、さつさと逃げよか！）

ラミナはベンズナイフを窓から屋外に投擲し、パチンと指を鳴らし、建物の外に出る。

シルバとゼノは追いかけようとした時、再びラミナが指を鳴らす。

それに2人は足を止めて、先ほどラミナがいた場所に目を向ける。

そこにあつたのは手榴弾だった。

「!？」

「言い忘れとつたわ。このナイフ、他のもんとも入れ替えられんねん」

ドン!!とラミナの真上に爆風が通り過ぎて行く。

ラミナはすぐにナイフを路地裏に投げて、入れ替わる。

レイピアを消して、さらに【隠】で気配を消し、足音が出ないギリギリのスピードで走る。

あの程度で殺せるとも、足止めできるとも考えていない。目くらましになれば御の字である。

ふと後ろに目をやると、【円】と思われるオーラが広がって来ていた。

(どうやら見失ってくれたようやな。けど、これで逃げ切れたわけやない。依頼主をどうにかせんと厳しいな!)

ゾルディック家は一家全員どころか、使用人までも実力者揃いだ。総出で来られたら、どうやって逃げていけない。

ならば、一番殺しやすいのは依頼主のクルツオアファミリーのボスだけだ。

と言っても、今の居場所を知らないの探すのも手間なのだが。

【隠】を使ったままホテルの部屋に窓から飛び込んで、素早く荷物を回収する。

鍵を机に放り投げると、再び窓から飛び出して街の人混みの中に紛れ込む。

「さて……どうしたもんか……」

すると、携帯が鳴る。

「誰やねん、こんな時に。はい」

『まだ生きてみたいね』

「マチ姉？ なんやねん？」

『ゾルディックはまだ来てないの？』

「なんとか逃げ出して、逃亡中や。で、何で知つとんねん？」

『へえ、逃げ出したんだ。前の8番、殺した連中なのに』

「はあ!？」

前の8番とはシズクの前任者だ。もちろんラミナも顔見知りだった。

誰かに殺されたとは聞いたけど、ゾルディックだったとは知らなかった。

『それも2人相手らしいじゃない?』

「現当主と前当主や。正直、今も逃げ切れた感じはしてへん」

『安心しな。もう襲われないよ』

「はあ?」

『クルツオアファミリーは今、潰したから』

「なんでやねん」

もう驚く気にもならない。

ツッコむのが限界だった。

『この前、手伝ってもらった仕事の関係だよ。クルツオアファミリーもターゲットだったの。で、パクに調べてもらったら、あんたへの暗殺依頼出てたから電話した』

「……で? 何すればええんや?」

『今は何も無いよ。今はね。あ、団長から伝言。「暇ならハンター試験でも受けてこい」ってさ』

「……なんでクロロにそんなこと言われなあかんねん」

『今回助けられたのも、団長が命じたからだよ。団長にも借りが出来たんだから、大人しく従つときな』

「へいへい……。まあ、今回はマジで命拾いしたし、ちよつとほとぼり

冷まさないかんから丁度ええか」

『じゃ、あたし達への貸しはまた別口で頼むから』

「……了解や。どうも、おおきに」

『じゃ、またね』

ブツ!と切られて、ため息を吐くラミナ。

そして、人混みから抜け出して路地裏に入る。

すると、目の前に2つの影が飛び降りてきた。

「やれやれ、タダ働きにされるとはの」

「……クモと顔見知りなのか?」

「同郷や。まあ、世話にもなったこともあるでな」

「そうか……」

「8番殺したんはあんたか?」

「……ああ」

「なるほどなあ。ゾルディック当主相手やったらしやあないか。で？  
まだやるんか？」

「アホ言え。儂はタダ働きなんぞまっぴらじゃ」

「そりやよかつたわ」

「……ふむ。お主、うちに来る気はないか？ 使用人として雇ってやるぞ？」

「あく……ありがたいけど、今はやめとくわ。クモの方に借りが出来てもうたからな。おっかない姉に追いかけられそうや」

「残念じゃのう。まあ、気が向いたらいつでも来るがええ。ではな」

ゼノの誘いをラミナは肩を竦めて断ると、ゼノは楽し気に笑みを浮かべるとシルバを連れて去っていった。

2人の気配が遠ざかったことを確認したラミナは、大きく息を吐いて壁にもたれ掛かる。

「はあく……。ハンター試験まではのんびりしよ。バケモンに会い過ぎて胸やけしとるわ」

幻影旅団とゾルディック家。

知らぬ者はいない実力者達と短い間に関わり過ぎて、ストレスが半端ないラミナだった。

とりあえず、この街から離れてハンター試験について準備していくことにしたラミナは、さっさと空港に向かうのであった。

### ○ラミナの念能力

【具現化系】（ただし、特別条件下において【特質系】に変化する）

●【刃で溢れる宝物庫】  
アルマセン・デ・エスバダ

特質系。

刀剣類や槍や鎌などを念で生み出した空間に収めることで、入れた直後からその武器を具現化することが出来る。

80%以上形状が似通っていると収めることは出来ない。

具現化した武器が10回壊されると、本物も砕けてしまう。

武器は同時に複数具現化可能。

・【妖精の悪戯】

具現化したベンズナイフに付与されている能力。指を鳴らすことでナイフと入れ替わる。ナイフと入れ替えるものは細い糸のような念で繋がっており【隠】で隠している。

・【啄木鳥の啄ばみ】

具現化したレイピアに付与されている能力。

突き刺した直線状の空間を貫くことが出来る。射線距離は最大10m。

・【狂い咲く紅薔薇】

具現化したファルクスに付与されている能力。

一瞬【円】を放ち、ラミナのオーラに触れた相手の2〜4か所をラウンドで同時に斬りつける。

発動時は必ず剣を振らなければならない。

ラミナより【纏】【練】が強い相手には通用せず、斬りつける箇所は指定できない。

・【一瞬の鎌鼬】

具現化したブロードソードに付与されている能力。

ラミナの身体能力を極限まで強化して、高速の斬撃を放つことが出来る。

強化できるのは斬撃時のみ。なので、足が速くなるわけではない。

## #4 シュツパツ×ハ×アラナミ

ゾルディック襲撃から2週間。

ラミナは街を移って、ハンター試験の情報を集めていた。

ハンター試験応募カードはすでに提出している。

試験予定日までは後2週間。

それまでに出来る対策はしておくつもりだ。

……だったのだが。

『ハンター試験は毎年、会場も内容も試験官も違うから対策なんて無駄だよ』

と、シャルナークに言われて諦めた。

更に、

『会場に着くのも試験の一環だよ。どこに委託された試験官がいるか分からないから注意しなよ』

と、言われて更に顔を顰めた。

「なんでクロロはこんな面倒なことさせんねん。クロロにシャルかてライセンス持つとるやないか」

ブツブツ文句を言いながら、今年の会場であるザバン市を目指すことにしたラミナ。

「……この街からやと船でドーレ港目指すんが一番楽やな」

ルートを確認して、早速切符を買い、翌日に寄港した船に乗り込む。

すでに他の港から乗った受験者達をちらほらと見かける。

(つつつても、雑魚ばっかやなあ。こんな連中でもなれるんかいな?)

ラミナは呆れながら周囲の視線を無視して、帆先の見張り台に素早く跳ね登る。

その軽やかさに船員や乗客達はポカンと見上げていた。

ラミナは見張り台に上ると、伸びをして潮風を浴びる。

そして、下を見下ろして船長らしき赤鼻に髭面の男に声を掛ける。

「おーい、船長さ〜ん」

「ああん?」

船長は上を見上げてラミナの姿を捉える。



「ちよつとここに居させてもらいますわ。邪魔やったり、なんかあつたら言うて。寝とるかもしれないけど」

「ふん！ 傷はつけるんじゃないぞー！」

「はいな」

ラミナは手を振って答えると、見張り台に寝転んで足を投げ出す。

それを見ていた船長は、

「ふん……。さっきの動きといい、中々面白そうな小娘だ。さて……」

「コラア！ グズグズしてねえでさっさと仕事しやがれ！」

「「へ、へい!!」」

「つたく……次はくじら島か。あいつの息子はそろそろデカくなったはずだが……」

船長は思い出に浸りながら、操舵室に戻るのだった。

それから数日。

嵐もなく、航海は順調だった。

船長の話では次の島を過ぎれば、次がドーレ港とのことらしい。

ラミナは見張り台でのんびりしながら船員の手伝いをしながら過ごしていたが、時々船長から観察されていることに気づいていた。

「……どうやら船長は委託された試験官つちゆう奴か。道理でハンター志望者ばっか乗つとるわけやな」

そう感じながら、ラミナは「くじら島」という島に寄り補給をしているところを見下ろしていた。

すると、黒髪で緑の服を着た少年が船に乗ってきた。

「ほお、あんなガキがハンター目指すんかいな」

少年は母親らしき女性に別れを告げ、出港して離れて行く故郷を眺めていた。

その少年の姿を他の受験者達は馬鹿にした目で見つめていたが、ラミナは少年の歪な気配を感じていた。

「……なんやろなあ？」

気配の正体は分からなかったが、他の受験者と比べれば明らかに何

かが違う。

そう感じたラミナだった。

しかし、それを確かめる気はなく、再びいつも通り見張り台に寝転ぶ。

そして、1時間ほどすると、突如真上に気配を感じて目を開ける。そこには驚いた顔をしていた少年がいた。

少年は慌ててマストを掴んで方向転換し、ラミナの隣に降り立つ。

「うわつと!?! ぐ、ぐめんなさい! 気づかなかつた!」

「かまへんよ。こんなところで寝転んでる奴がおるとは思わんやろうしな」

(ギリギリまで気配感じんかったな。というか動物かなんかと思つとつたわ)

「うん、驚いたよ。つと、そうだった」

ラミナが内心驚いていると、少年は顔を風上に向けて何やら鼻を触っている。

その行動にラミナも鼻を引きつかせるが、特に異臭はしない。

すると、少年は何かに気づいたのか、振り返って身を乗り出して下を覗き込む。

「物凄くでつかい嵐が来るよ! 匂いで分かるんだ!」

少年の言葉にラミナは僅かに目を見開いて思わず起き上がって、先に目を凝らす。

すると、かなり遠くに確かに分厚くて黒い雲が確認できた。

(微妙な風は感じとつたけど、匂いで気づくってどういう五感しとんねん……)

人間離れた嗅覚に呆れながらも、その正確性に感心する。

下にいたのは船長だったらしく、少年の言葉を全く疑わずに船員達に指示を出し始める。

船長が行動に移したということは少年の言葉は正しいということだ。

ラミナも身を乗り出して、船長に声を掛ける。

「船長、手伝いいるか?」

「なめんじゃねえ！ この程度の嵐で素人に頼るほど落ちぶれちゃいねえ！」

「流石やな」

「テメエらもとつと降りて、中に入れ！ 海に落とされても助けねえぞ！」

「へいへい」

「はい！」

ラミナと少年は見張り台から飛び出して、ロープを掴んで下まで滑り降りる。

そして、船室に入るとすでに中はごった返していた。

ラミナは顔を顰めて周囲を見渡すも、まともな場所は残っていないかった。なので天井近くの梁に飛び乗って、壁を背に座る。

少年は端っこの樽の上に座る。

しばらくすると、徐々に船の揺れが大きくなっていく。

すぐに船室は縦横に大きく揺れ回る。

「うおわあああ！」

乗客達は船室内を悲鳴を上げながら転げ回る。

しかし、揺れはどんどん酷くなっていき、壁に叩きつけられたり、一瞬浮かんで床に叩きつけられて乗客同士で積み重なる。

ラミナは梁に足を絡めて体を支え、堪え切れずに飛んでくる未熟者達を手刀で叩き落とす。

少年は樽の上を玉乗りのように移動して揺れを軽減している。

他にも2人ほど顔色も変えることもなく、やり過ごしている。

すると船が大きく傾いたと思うと、浮遊感を感じて乗客達が宙に浮かぶ。

もはや悲鳴を上げる余裕もなく、涙を浮かべて手足をバタバタして、衝撃と共に床に叩きつけられてまた嘔吐する。

しばらくすると、揺れがマシになり、乗客達はホツとするも完全に船酔いで動けなくなっていた。

ラミナはあまりの惨状に呆れしか感じなかった。

「これでよう受ける気になったもんやな……」

さっきの少年はどうなったのか目を向けると、ケロっとしており、それどころか看病を始めていた。

すると、扉が開いて船長が顔を覗かせる。

船室内の惨状を見て、船長も呆れ全開の表情を見せる。

「全滅だ、こりゃ。情けねえ。こんなんでハンター試験受けようってんだから、はっ！ 全く笑わせやがる！」

「全滅ちゃうで」

「ん？ おお！ 小娘、無事だったか」

「あの程度でやられるかい。で、他にも元気なんおるで」

ラミナは船長の言葉に呆れながら、少年を指差す。

少年は酔い止めの薬草を配り、水を運んだりしていた。

「ほお……あの坊主……」

「他にもおるで」

次に指差したのはハンモックに揺られながら悠々と読書をしている金髪の美形と、樽にもたれ掛かって果物に齧りつくサングラスをかけたスーツの男。

それを確認した船長は口角を吊り上げる。

「ほう。ちつとは骨のありそうな奴がいるようだな」

「で？ もう乗り切ったんか？」

「まだだな。まあ、山場は越えただろうよ」

「さよで。で？ うちはお眼鏡に適ったんか？」

「……ほお。ハッハッハッ！ 丁度いい。おい！ 無事な連中、付いてきな！」

「ん？」

船長は上機嫌にラミナや少年達を呼び出す。ラミナ達は首を傾げたり、めんどくさそうに顔を顰めながらも大人しく歩き出す。

連れて行かれたのは操舵室で、ラミナ達4人は船長に向かい合う形で立つ。船長の隣には船員の1人が何やらボードを持って立っていた。

「まず、お前らの名前を聞いておこうか」

「俺、ゴンー」

「私はクラピカ」

「レオリオだけど」

「ラミナや」

少年、金髪美形、不貞腐れたスーツ男、ラミナの順で名乗る。

「どうやら金髪美形は男のようだった。」

「お前ら、何故ハンターになりたいんだ？」

「おい、えらそーに聞くもんじゃねえぜ。試験官でもないくせによー」

「いいから答えろ」

「俺は親父がハンターなんだ。親父が魅せられたハンターの仕事かどんなものなのか、どうしても知りたいんだ！」

ゴンが戸惑うこともなく、元気に答える。

それに船長がなにやら感慨深げに頷いていると、レオリオがゴンに突っかかる。

「おい、ガキイ！ 横から勝手に答えてんじゃねえ！」

「いいじゃん。理由を教えるくらい」

「協調性のねー奴だなあ。俺は嫌なんだよ！」

「うちは仕事の関係上で必要になったからやな」

「っ！ おい、俺の話聞いてたのかあ!？」

「別にあんたの仲間ちゃうしな。元々蹴落とし合う仲なんやし」

「……この野郎……！」

「野郎ちゃう」

レオリオの発言を無視して、次にラミナが答える。

レオリオが青筋を浮かべてラミナに噛みつくが、ラミナは目も合わせずに言い返す。

船長もレオリオを無視して、ラミナにもう一度質問する。

「その仕事ってえのは？」

「殺しやね」

「！！！！」

ゴン達や他の船員達が目を見開いて驚く。

船長も目を細めてラミナを見据える。

「小娘、てめえ殺し屋か？」

「フリーのな。まあ、護衛や警護、ブラックリストハントも請け負つてるで。まあ、それで次の依頼人から資格を取ってほしいっちゆうことだな」

「なるほどな。で？ お前さんは？」

ラミナの言葉を聞いた船長は特に何も言わずに頷いて、今度はクラピカに顔を向ける。

「悪いが、私もレオリオに同感だ」

「おい、お前歳いくつだ？ 人を呼び捨てにしてんじゃねーよ」

「もつともらしいウソをつけて、嫌な質問を躲すのは容易い。しかし、偽証は強欲と等しく最も恥ずべき行為だと考える」

「聞けコラ！ レオリオさんと訂正しろー！」

クラピカはレオリオの抗議を一切無視する。

「かと言って初対面の人間の前で、正直に告白するには私の志望理由は私の内面に深く関わり過ぎている。したがってこの場でその質問に答えることは出来ない」

「……ほくお、そうかい。おい！」

「はい、船長」

船長は傍に控えていた船員に鋭く声を掛ける。

「この2人も脱落者として、審査委員会に報告だ」

「一・一」

船長の言葉にクラピカ達は再び啞然とする。

ラミナだけは驚くこともなく、やっぱりと思っていた。

「ど、どういうこと？」

「まあだ、分かんねえのか？ ハンター試験はとつくに始まってんだよ」

「な、なに……!?!」

クラピカとレオリオは驚く。

船長は小さくため息を吐いて、説明を始める。

「ハンターの資格を取りたい奴らは星の数ほどいる。そいつら全部を審査できるほど試験官に人的余裕も時間もねえ。そこで、俺達みてえのが雇われて、受験者をふるいにかけるのさ。すでにお前ら4人以外

は脱落者として審査委員会に報告した。もうこの船を降りて、別のルートで行つても門前払いだ」

レオリオとクラピカは眉間に皺を寄せて唸る。

ゴンは感心したように頷いている。

「つまり、お前らが本試験を受けられるかどうかは俺の気分次第つてことだ。よく考えて、俺の質問に答えるんだな。まあ、小娘は俺の事気づいてたみたいだな」

「そら、こんだけ受験者しかおらん船、疑わん方が厳しくないか？ それに船長さんやらそっちの船員さんも妙に探るような視線向けてきよったし」

「はっ！ こちとら依頼されちゃあいるが、生粋の船乗りだ。テメエみてえに、その筋の技なんざ知らねえんだよ」

「だから、なんも言わんかったやろ？」

ラミナは肩を竦めて苦笑する。

2人のやり取りを聞いていたレオリオは更に眉間に皺を寄せる。すると目を瞑っていたクラピカがゆつくりと口を開く。

「私は……クルタ族の生き残りだ」

クルタ族と言う名前にラミナは僅かに目を見開く。

聞き覚えがあったからだ。

「4年前、私の同胞を皆殺しにした盗賊グループ、幻影旅団を捕まえるためハンターを志望している」

「……賞金首ハンター志望か。幻影旅団はA級首。熟練のハンターでも迂闊に手を出せねえ。無駄死にすることになるぜえ」

「死は全く怖くない。一番恐れるのは、この怒りがやがて風化してしまわないかと言うことだ」

（おー……恨まれとるなあ。まあ、しゃあないやろうけど。それにしても生き残りおったんかい）

クルタ族は【緋の眼】という特殊な瞳を持っており、それは世界7大美色の1つと呼ばれるほどだ。

それをマチ達幻影旅団は集落にいた全員を拷問して、両目を奪った。

『団長がえらく気に入っていたよ』とマチが楽しそうに言っていたのを覚えている。もう全て売り払ったはずだが、まさかここでその関係者と会うとは思わなかった。

クルタ族は外界との接触を極端に忌避していたと聞いた。だから、生き残りがいる可能性はほぼないとマチ達は言っていたが。

(こりゃあ、関わり合いは出来る限り避けなあかんあ。下手したら殺し合いになるで……)

ラミナは少しうんざりしていると、レオリオが馬鹿にしたようにクラピカに顔を向ける。

「要は仇討ちか。わざわざハンターにならなくたって出来るじゃねえか」

「この世で最も愚かな質問の1つだな、レオリオ。ハンターでなければ入れない場所、聞けない情報、出来ない行動と言うのが君の脳みそに入らないほどあるのだよ」

「く……」

「おい、お前は？ レオリオ」

悔しそうに歯を食いしばるレオリオに、船長が訊ねる。

「俺か？ あんたの顔色を窺って答えるなんてまっぴらだから正直に言うぜ！ 金さ!! 金さえあれば何でも手に入るからな！ デカい家！ いい車！ 美味しい酒！」

ラミナがあまりの正直さに逆に感心していると、クラピカは逆に呆れたように言い放った。

「品性は金では買えないよ、レオリオ」

「……3度目だぜ。表に出な、クラピカ。薄汚ねえクルタ族とかの血を絶やしてやる」

「……取り消せ、レオリオ」

「レオリオ『さん』、だ。来な」

「望むところだ」

完全にキレたレオリオとクラピカは話の途中だが、操舵室を出て甲板に向かった。

「おい、お前ら！ 俺の話は終わってねえぞ！」



「放っておこうよ」

「な……」

船長がクラピカ達の背中に叫びかけるが、それをゴンが止めた。

「その人を知りたければ、その人が何に対して怒りを感じるかを知れ。ミトさんが教えてくれた俺の好きな言葉なんだ。俺にはあの2人が怒ってる理由は何か大切なことだと思えるんだ。止めない方がいいよ」

「う……む」

「それよりもヤバそうな雰囲気やで、船長」

「なに？」

ラミナの言葉に振り向いた船長の目には、進行方向に巨大な竜巻が出現していた。

「ちい！ 舵変われ！」

「あ、あの竜巻が直撃すれば、ひとたまりもないぞ！」

「手伝う！」

「せやな」

「頼む！」

船長が慌てて舵を持ち、船員が慌てて外に出ようとして、ゴンとラミナもそれに続く。

甲板は波で荒れ狂い、油断すれば海に落ちて、二度と浮き上がって来れないだろう。

「帆を畳め！」

「急げ！ マストが折れちまう！」

総出でロープを引く。

ゴンとラミナも加わり、全力で引っ張る。ラミナが引いたロープは物凄い勢いで動く。

「うおお!？」

「す、すげえ！」

「余裕がある奴は他のロープ引けや！ ここはうちだけでもええ！」

「助かるぜ！」

全員が必死に動いている横でレオリオとクラピカは睨み合っている

た。

「さつきの言葉、撤回しろ。レオリオ」

「テメエの方が先だ、クラピカ。俺から譲る気は全くねえ」

レオリオはポケットから折り畳みナイフを取り出し、クラピカは紐で繋がった二振りの木刀を取り出して構える。

そして、今にも飛び掛かりそうに互いに屈んだ時、一段と強い突風が吹いた。

船やマストが大きく揺れて、甲板を波が襲う。

それに何人かの船員が脚を取られて、ロープを手放してしまう。すると、ロープに引つ張られて1人の船員が宙へと舞った。

「うああああ!？」

「!!」

船員はロープを手放してしまい、クラピカとレオリオの間を飛んで海へと向かっていく。

「なっ!」

レオリオとクラピカはすぐに武器を仕舞って駆け出す。

「ロープ代われや!!」

「っ! わ、分かった!」

「ちい!!」

ラミナも近くにいた者達にロープを頼んで走り出す。

(この風と波じゃナイフは使えん!)

ラミナはオーラを強めて一気に駆け出す。

レオリオとクラピカは甲板から飛び出して縁を掴んで手を伸ばすも、残念ながら手が届かなかった。

「くっ!」

「くっそー!」

2人は悔しがった瞬間、その間をゴンが身を投げ出す。

ラミナは目を見開く。

gonは船員の両腕を掴む。しかし、その体はすでに海の上。

そのゴンの両脚をクラピカとレオリオが今度こそキャッチする。

しかし、2人分の重さを支えきれずに、クラピカとレオリオも縁か

ら手が滑り落ちそうになる。

「くっ！」

「やべえ！」

「しっかり掴んどけや!!」

「!!」

そこにラミナが駆けつけて縁に足を掛け、落ちかけていたレオリオとクラピカのズボンのベルト部分を掴む。

そして、一気に4人を引っ張り上げる。

「おおおお!!」

4人は魚のように宙を舞って甲板の真ん中に落ちる。

レオリオは尻餅をつき、クラピカは綺麗に着地し、ゴンは気絶した船員を抱えて降り立つ。

ラミナもバク転して船縁から距離を取る。

「ふう。つと、ロープロープ」

「いや、もう大丈夫だ！」

「もう終わる！」

「あんたらは休んでくれ！」

ニカツと笑みを浮かべてロープを結んでいく船員達に、肩を竦めてラミナはゴン達の元に向かう。

「無事か？」

「ああ、なんとかな……」

「感謝する……」

「ありがとう！ ラミナさん！」

「ラミナでええ。お前はまずそいつ船に戻しや」

「つと、そうだね」

ゴンは船員を抱えたまま、船内に駆け込んでいく。

その後もラミナは手伝いを続け、クラピカとレオリオも決闘をする空気では無くなり、ラミナと同じく船員の手伝いを始めた。

途中からゴンも戻ってきた。

そして、数時間経過して、ようやく嵐を突破した。

ラミナ達4人は甲板に座り込んで一息つくつと、いきなりクラピカと

レオリオがゴンに詰め寄った。

「このボケ！ 俺達がお前の脚を掴んでなけりや、お前は今頃海の藻屑だったんだぞ!!」

「全く無謀極まりない……」

「でも、掴んでくれたじゃん」

「それに、そんなところで決闘しとったアホ共に言われたあないわな。引っ張りあげたんはうちやし」

「う……」

あつけらかんとしたゴンと呆れながら横やりを入れたラミナの言葉に、2人は気まずげに顔を背ける。

「で？ 決闘はどうするんや？ 今なら遠慮なくやれるで」

「……」

レオリオとクラピカは互いに顔を見合わせる。

そして、どちらともなく笑みを浮かべる。

「非礼を詫びよう、レオリオさん」

「何だよ、水臭えな。レオリオでいいよ。……俺の方もさつきの言葉は全面的に撤回する」

和解をした2人の様子にゴンも笑みを浮かべ、ラミナは肩を竦めて立ち上がって伸びをする。

「あく……！ ようやつとゆつくり出来るわって、そう言えば船長さんの話すつぽかしたままやな」

「あ!?! や、やべえ……もしかして俺ら……」

「……失格かもしれないな」

思い出したレオリオは顔を青くして、クラピカも右手で顔を覆う。「がっはっはっはっ！ お前ら、気に入ったぜ!」

そこに船長が豪快に笑いながら近づいてきた。

「今日の俺様は凄く気分がいい！ お前ら4人は俺様が責任を持って、審査会場最寄りの港まで連れて行ってやらあ!」

「ホント!? じゃあ、試験は?」

ゴンが嬉しそうに顔をほころばせるが、試験の事を思い出して首を傾げる。

「言つたろ？ 俺様の気分次第だつてな！ お前ら全員、合格だ！」  
船長の合格宣言にクラピカとレオリオはホツとして笑みを浮かべ、  
ゴンは跳び跳ねる。

ラミナは肩を竦めるも、内心ホツとしていた。

「やったー！」

「と言うても、後似たようなんが何個あるんか……」

「そうだな。港に着いてからも同じことがあると考えるべきだろう」

「ひえく……！ どんだけ試験あんだよ」

ラミナは先行きに不安を感じて、小さくため息を吐き、クラピカも  
同意する。

レオリオはうんざりしたような声を上げるが、そこにゴンが明るく  
言う。

「大丈夫だよ！ 俺達なら行けるって！」

「俺達で……。うちら競争相手やぞ？」

「え？ でも、会場に着くまでは一緒でもいいじゃん！ 受付人数に  
制限はないんでしょ？」

「……まあ、そやろなあ」

「だったら皆で行った方が助け合えていいじゃん！」

まだ名乗り合つて数時間。しかも決闘騒ぎまであったのに、異常に  
信頼を寄せているゴンにラミナは呆れるしかなかった。

（こいつ。うちが殺し屋つちゆうこと忘れとらんか？ ……まあ、え  
えか）

無理して距離を取ることもない。

試験会場に着けるかどうかも分からないのだから。

というか、船を降りたら別行動する気だったので、どうせバラバラ  
になる。

そう思い直したラミナは、港に着くまでの間、のんびりとゴン達と  
過ごすのであった。

## #5 ナビ×ヲ×サガセ

嵐を乗り越えた翌日。

ラミナ達はドーレ港に到着した。

「すげえ人だな……」

レオリオは街にあふれる人の多さに驚いている。

「……恐らく彼らのほとんどが我々と同じ目的なのだろう」

「やなあ。それにしても、多すぎんか？」

クラピカの言葉にラミナは頷くも、あまりの多さに首を傾げる。

交通機関の問題なのか、それとも別の理由があるのか。一筋縄ではいかなさそうだとラミナは内心顔を顰める。

「さて……ほな、うちはここで」

「え!? 一緒に行かないの?」

「うちはうちのやり方があるんや。言うたやろ? うちが殺し屋や。

裏の人間は裏の人間なりの動き方があんなん」

「そっか……」

「そんな寂しがらんでも、本試験で会えるやろ。そっちも頑張りや」

「うん! 気を付けてね!」

「そっくりそのまま返すわ」

「いてっ!」

ラミナは苦笑して、ゴンの額を小突いて歩き出す。

互いに手を振って挨拶を交わし、ラミナは街の中へと向かう。

「さて、バスは行列。しかし、あの船長の感じからすれば、ここも何かしらの試験と考えるべきや。そうなると正直にバスつちゆう手は怪しきしかないわ。それにバスで行ってもザバン市のどこが会場なんか分からんし。ここにも何かしら情報があるはず……」

ラミナはバス通りを外れて、近くのパソコン喫茶に入る。

「え〜つと、ドーレの情報屋は……」

ラミナは裏の人間がよく使う情報サイトを開いて、ドーレ付近の情報屋を探す。

二軒ほど確認して、自分でも本試験会場の情報を集める。

しかし、やはり情報サイトでもはつきりした情報はなかった。

「やつぱ、ハッカーハンターとかが対策しとるんやろなあ」

ラミナはため息を吐いて、パソコン喫茶を後にする。

そして、一番近い情報屋の元に向かう。

問題はハンター協会が情報屋にまで手を伸ばしているかどうかだ。裏社会の人間がラミナだけではないはず。そうなるとトラップにされている可能性がある。

しかし、とりあえず情報を聞いてみないと分からない。

ということ、情報屋を訪れる。

一般的なマンションだが、薄暗い部屋の中は狭いバーのようになっていた。カウンターの奥には無精ひげを生やした無愛想な顔をした男が椅子に座っていた。

「……なんだ？」

「ザバンのハンター試験会場の探し方。教えてほしいねんけど」

「……ふん。帰りな」

「……なんや、三流のところやったか」

「ああ？ なんだと、ガキ……！」

「せめて情報の対価を聞くくらいせえ」

「てめえ……！」

「下手な芝居しよつてからに。……いい加減、そこに隠れとる奴出て  
きこ」

「ぐ……！」

ラミナの指摘に男は盛大に顔を顰める。

すると、奥の扉が開いて、長い髭の老人が苦笑しながら現れる。

「やはり、駄目じゃったか」

「……すんません」

「まだまだ修行が足りん」

「で、これは試験なんか？」

「そうじゃの。試験でもある」

「……また面倒な。とりあえず、情報くれや」

「ふむ……ザバンにある本試験会場の探し方、じゃったな」

老人は髭を撫でながら、椅子に座って分厚いファイルを取り出す。「対価は、と言いたいところじゃが……弟子の未熟さで試験にもならなかったでな。今回はタダで教えるでしょう」

「弟子って……」

「まだまだ未熟者でのお。どうにも相手を先入観で対応する」

「大丈夫なんかいな。相手によっては殺されるで？」

「まあ、そうなれば愚かだったというだけよ。さて、儂が教えられる情報は……この街にはナビゲーターという者がおる。山の麓と、街外れの灯台のどちらかじゃの。彼らのお眼鏡に適えば、会場まで案内してくれるぞい」

「ふくん……。で、ホントのところはどうなんや？」

「!!」

ラミナの左手にはククリ刀が握られており、その刃は弟子と呼ばれた男の首筋に当てられていた。

ラミナは目を鋭くし、顔に薄笑いを張り付けて弟子と呼ばれた男を見据える。

「お前が本物なんやろ？ 下手な芝居って言うたやろが。せめて、この爺を使わなかったらよかったのになあ」

「……なんで分かった？」

「そんな長髭で、香水かける情報屋がおるか。情報屋は目立たず、特徴の少ない見た目で活動するんが鉄則やろが。しかも、そんなペラペラした紙に情報を纏めるアホもおらん」

「……オーケー。完敗だ」

男は両手を上げて降参する。

ラミナはククリ刀を下ろし、背中に仕舞うふりをして消す。

「お前、裏のモンか……」

「やなかったら、ここに来るかいな。言うたやろ？ 相手によっては殺されるで。うちやなかったら……2人とも首と胴体が離れてるで？」

男はラミナから一瞬感じた殺気に冷や汗が噴き出す。

老人も目を見開いて固まる。



(こいつ……殺しに慣れてやがる……！ かなりのやり手か……)

男はラミナの実力を本気で理解した。

「……悪かったよ。けど、仕方ねえだろ？ これくらいしか情報屋の試験官で出来ることはねえよ。誰かに犯罪者役やらせるわけにはいかねえし、情報を聞きに来た奴にこれが嘘の情報だって気づかせるのが試験にしろって頼まれたからな」

「ここに来れる時点でこの爺さんや店の内装にも無理があるって誰でも気づくやろ」

「それがよお……見抜いたのお前さんで2人目なんだよ。17人来てな」

「……」

「多分、知り合いか誰かに俺の事聞いただけなんだろうな。情報屋の事をろくに知らねえ奴らばっかだったぜ。そのせいで油断しちまったかもな……。来年はこの仕事引き受けないでおくぜ」

「それがええわ。情報屋がやるにはリスク大きいやろ。普段通り手助けするだけでええんちゃうか？」

「だなあ。つと、いけね。ちゃんと情報は渡さねえとな。ナビゲーターがいるのは2か所。山の一本杉の下、そして街外れのスラムにある赤い屋根の小屋だ。悪いが言えるのはそこまでだ」

「まあ、そんなもんやな。おおきに」

ラミナは懐の財布から札束を取り出して男の前に投げて、外に出る。

情報を貰った以上、報酬は払う。それを蔑ろにすると情報が広まってしまう、世界中の情報屋が敵に回る。

試験であろうが、そこは譲らない連中だろうとラミナは分かっていたので、しっかりと報酬を支払ったのだ。

「さあて、近いのはスラムやな。の、前に腹ごしらえしとこか」

ラミナは次の目的地を決めて、先に昼食を食べることにした。

近くのレストランに入って、ステーキ、ピザ、サラダ大盛、パエリアをガッツリと平らげる。

「ふう〜、食った食った」

満足して店を後にし、すぐさまスラムへと向かう。

スラムは歩いて2時間ほどの所にある。

流石にバスなどは出ていないし、今はバスは信用できないので歩いて行くしかない。

「のんびりするんも逆に疲れるか……」

ラミナは路地裏に入ると、駆け出して一気にスピードを上げる。

細い道を猛スピードで駆け抜けていき、時折路地裏を歩いている人の上を飛び越えて、スラムを目指していく。

20分ほど走って、スラムに着いたラミナは早速赤い屋根の小屋を探す。

「それにしてもスラムにナビゲーターって案内できる奴なんかいない？」

「死ねえ！　ごはっ!？」

「ひゃあ！　べへ!？」

「他のスラムの奴に殺されたりしてへんやろな？」

ラミナはナビゲーターがどのような者か想像しながら歩く。

ボロイ小屋の傍からナイフを持った小汚い男達が左右から飛び出してきたが、高速で左脚を動かして蹴り飛ばす。

ラミナは襲われたことなど意にも介さず歩き続ける。

「ばあさんのために——ごあ!？」

「じいさーん!？　よくもあんた——ぷへ!？」

「悪く思う——なごん!？」

「ぐへへ！　女——『ゴギツ』おえ?？」

「助けてください！　子供が死ねえ!——ほぶっ!？」

「ママ!？　コノヤロー!——きゅ!？」

「お前には血も涙もないのか!？　ごふう!？」

「ジゴ—!？　だいじよ——ぐぺっ!？」

「やっぱスラムって騒がしい所やなあ」

ラミナが通った後には死屍累々とした光景が広がっていた。

と言っても、ほとんどが気絶しているだけで、死んだのは卑猥な目で見てきた者や倒れたときに打ちどころが悪かったり、老人で折れた

骨が臓器に刺さって失血死したなど運が悪かった者だけだ。

もちろん襲われたラミナからすれば「ただやり返しただけ」なので、特に気が咎めることもない。

それにラミナはどんな者を殺したのか、誰が死んだのかなど把握していない。

どんな理由であれ、命を奪いに来るならば逆に奪われることも当然だからだ。

その後も襲ってくる者達を鼻歌を歌いながら撃退していくラミナ。その様子を眺めていた者達は冷や汗を流して、顔を見合わせていた。

「おい！ どうすんだよ!? あんなバケモンが来るなんて聞いてねえぞ??」

「んなこと言われても、俺だって分かんねえよ!」

「何なのよ、あの女……! 触れもしないじゃない! もう強い奴残ってないわよ!?!」

「?とりあえず、ボスに伝えに行くか?」

「気づかれないようにヒソヒソと小声で話すスラムの住民達。」

その時、

「よお」

「!!?」

ラミナがいつの間にか住民達の目の前に立っていた。

住民達は目を見開いて固まる。

「赤い屋根の小屋ってどこにあんの? 聞こうにも全員寝とつてなあ。困つとんねん」

「……ア、アチラデス……」

「おおきい」

ダラダラと滝のように汗を流しながら、住民達は同時に同じ方向を指差す。

ラミナの自分達を見る目に全く感情がないことに気づいてしまい、嘘を言うことなど頭に過ぎらなかった。

ラミナは礼を言っ歩き出し、その背中を見送った住民達はラミナ

の姿が見えなくなった瞬間、同時に腰が抜けて尻餅をつく。

「……………助かった……………」

「ボス……………ごめんなさい……………」

「まだ、死にたくないわ……………」

ラミナは教えられた方角に歩き続け、スラムの一番端にようやく赤い屋根の小屋を見つけた。

「一番奥とは面倒なところに……………」

「よおここまで来た」

小屋の中からヌウつと禿頭で皺皺な小柄の老人が現れる。

実力は無さそうで今にも倒れて死にそうだが、垂れ目気味の瞳が力強い光が浮かんでいることから、スラムの長老的存在であることが窺えた。

「あんたがナビゲーターかいな？」

「そうじゃ。と言つても、儂は碌に動けんから実際に案内するのは別の者じゃがの」

「案内してくれるなら誰でもええわ。で、誰が案内してくるんや？」

「……………悪いがまだ貴様を案内するかどうかは決めておらん」

長老がそう言うのと、周囲から武器を構えた者達がラミナを囲むように飛び出してきた。

しかし、その前にラミナがいつの間にか長老の目の前に移動して、長老の額にブロードソードを突きつけていた。

『!!?』

「っ!!?」

「動くなや。一步でも動いたら、この爺さんを細切れにすんで」

「なっ!!? 貴様、会場に行けなくなつてもいいのか!?!」

「案内するんは他の奴やろ? 別に爺さん死んでも問題ないやないか」

「貴様……………!」

「で、爺さん。どうするんや? うちとは別にええで? このスラムか

ら人がおらんくなっても。襲ってきたんはそっちからやしな。やり返される覚悟は出来とるんやろ？」

「……」

「5秒やるわ。5……4……3……2……」

「分かった。お主は合格じゃ」

長老は冷や汗を流しながら言う。

ラミナは剣を下ろして、一步後ろに下がる。

「でやああああ!!」

その時、先ほど突つかかってきた男が棍棒を振り被って飛び掛かってきた。

「っ！ 待っ——！」

長老は慌てて止めようとしたが、

ラミナはそれを冷めた目で見つめて呟く。

「……阿呆が」

直後、男の首から下が細切れになり、男の背後にラミナがブロードソードをぶら下げて立っていた。

長老や住民達は何が起こったのか、全く理解出来なかった。

殺された男も何が起こったのかという顔をしており、その表情のまま地面に落ちる。

しかし、頭が一度跳ねた直後、男の頭も細切れになり、肉片が浮かぶ血の水溜まりに変化する。

住民達は血と肉片が散らばっているのを見て、それが先ほどまで1人の男だったなどと、目の前で見ていたはずに信じることが出来なかった。

「……今回の審査委員会とやらは頼む相手間違い過ぎやろ」

ラミナはもはや血に見向きもせず、長老に顔を向ける。

「で、どうするんや？ まだ殺し合うんか？」

「……いや。もうよい。皆下がれ。けが人の手当てをしてやるのだ」

長老の指示を聞いて、住民達は武器を捨てて逃げるように走っていく。

ラミナはブロードソードを仕舞うふりをして消し、長老に歩み寄

る。

「相手を見る力がないのに、こんなやり方しか出来んなら全滅する覚悟持たせとけや。試験受けに来る中にはバケモンもおるんやぞ?」

「はあ……少なくとも儂は他の者にはそう伝えておったんじゃがな。軽く考えた者が多かつたようじゃ」

ラミナの言葉に長老はため息を吐いた。

「まあ、もうええわ。さっさと案内せい。逆恨みでまた襲われたらたまらんわ」

「そうじゃの。ついてくるがよい」

長老が小屋の中に戻り、ラミナも後に続く。

小屋の中は何もなく、床に地下へと続く階段だけがぽっかりと存在していた。

2人は階段を降りると、そこにあったのは大きな地下水路と小型クルーザーだった。

「なるほど。この水路がザバン市に繋がつとるんか」

「そうじゃ。運転はもちろんこちらの者が行う。お前さんは船の中でゆっくりとされよ」

「そうさせてもらうわ」

ラミナは船に飛び乗り、船室に入る。

船室はベッドが1つあるだけの小さなものだった。

ラミナがベッドに横になると同時に船が動き出す。

「ザバン市には明日の夜明けに到着する」

「了解や」

操縦を補助していた男が声を掛けてくる。

ラミナは返事をして、目を閉じる。

ラミナを乗せた船は、ザバン市に向けて暗い水路をゆっくりと進むのであった。

## #6 シケン×ハジマリ×ハシリマス？

翌朝、午前5時。

ラミナはザバン市の大河にある船着き場に到着した。

街はまだチラホラ程度にしか人影は見当たらない。

ラミナは案内人の後に付いて歩き、ある場所に案内された。

「……………ここか？」

「ああ、ここだ」

訝しむラミナの目の前にあるのは立派なビル……ではなく、小さな定食屋だった。

この街に似つかわしくない『24時間営業』と書かれた店。

とてもではないが、毎年数万人受けに来るハンター試験の会場の入り口には見えなかった。

「……………いや、だからこそナビゲーターか」

「そういうことだ。それっぽいビルでやってたら、ふるいにかける意味はねえ。見た目じゃ分からないからこそ、毎年数百人規模にまで減らすことが出来る」

「しかもナビゲーターがおるかどうかも重要か。運も絡んどるんな」

ラミナの乗ってきた船とて、見た限り一艘しかなかった。なので、ラミナの後にスラムに来た者達は認められても、もう間に合わないだろう。

何故なら今日が試験開始当日なのだから。

(ゴン達は間に合ったんやろか?)

「入るぞ」

「はいな」

ゴン達の事が頭に過ぎったラミナだが、案内人の言葉で我に返って店の中に入る。

中も普通の定食屋で数名の客もいた。

「いらつしやーい！ 注文は？」

「ステーキ定食ーっ」

「……焼き方は？」

「弱火でじっくり」

「あいよ！ 奥の部屋入んな」

「どうやら今のは合言葉だったようだ」とラミナは理解して、奥の部屋に入る。

奥の部屋には鉄板が設置されたテーブルが置かれており、店員が肉を焼き始めていた。

「座って、食つてりや会場に着く。頑張りな」

「おおきに」

「もし落ちて生き残ったら、また来な。まあ、ナビゲーターやってるか  
どうかは分からんがな」

「止めといたほうがええと思うで？」

「俺もそう思う。じゃ、達者でな」

店員と案内人が出て扉を閉める。

すると、下に下りて行く感覚がした。

「……ホンマ変な所に金掛け取るわ」

ラミナは無駄に大げさな仕掛けに呆れながら、焼けた肉を食べ始める。

思ってたより美味かったのが、また何とも言えないシユールさを実感させる。

食べ終えたラミナはのんびりとしながら到着を待つ。

5分ほど過ぎた所でポーン！と地下100階に到着したことを示す案内板が光る。

扉が開き、ラミナは足を進めると、巨大な地下に大勢の人が溢れていた。

（おおおお。流石に船やドローレでグダグダしとった連中とは少しちやうなあ）

一斉に近くにいた者達がラミナを見定めるように目を向ける。

それを涼しい顔で無視したラミナはゴン達の姿を探すも、どうやらまだ到着していないようだ。

（まあ、しゃあないか）



「ようこそ、ハンター試験へ。はい、これがあなたの番号札になります。無くさないように」

「おおきに」

緑色の顔をした豆みたいな小柄な男から、番号が書かれた丸いプレートを受け取る。

番号は『399』と書かれており、つまりラミナは399人目ということである。

「ふくん。多いんか少ないんか、分からんなあ」

「よお、新顔だね」

ラミナがプレートを胸元に着けていると、茶髪で鼻がデカイ小柄の中年男が声を掛けてきた。

「俺はトンパ。よろしく」

「どうも」

「俺、ハンター試験のベテランなんだ。よかったら、色々教えてやるよ」

「いや、ええわ。変な先入観植え付けられるん嫌いやねん」

「そ、そうかい？ まあ、気が向いたら聞いてくれ。これ、お近づきの印だ。飲みなよ」

トンパは人受けがよさそうな笑みを浮かべながら缶ジュースを差し出してきた。

ラミナはそれを受け取ると、トンパも缶ジュースを取り出して飲み始める。

「どうした？ 遠慮しなくていいぜ」

「……なんか薬入つとるな」

「!？」

ラミナは蓋を開けたときに漏れ出た匂いから混入物があることを見抜いた。

見抜かれたトンパは一瞬目を見開いて、汗を流し始めながらも笑みを浮かべる。

「そ、そんなわけないだろ？ 俺も目の前で飲んだじゃないか？」

「じゃあ、これ飲んでみ？」

「い、いや！ ひ、人にあげたものに手を付けるわけにはいかないさ」「分かりやすいやつちゃんあ。新人を見下すんが好きなタイプか」

グシャ！とラミナは飲み口をトンパの顔に向けて、缶を握り潰す。プシヤア！と中身が噴き出て、トンパの顔にかかる。

「うわっ!?!」

トンパは慌てて下がって、顔を拭う。特に口周りを入念に。

それだけで何かが入っていたことは十分わかる。

「無味無臭に近くて、今の手口からすると下剤か痺れ薬の類やろうな。もう少し胡散臭さ消す努力しいや。目が気色悪うてなんか企んどるって見抜きやすいわ」

ラミナは空き缶をビー玉サイズまで握り潰して、トンパの前に投げ捨てる。

そして、背を向けて歩き出しトンパの前から去る。

トンパはその後ろ姿を見送りながら、顔を歪める。

「……くそ！ また失敗かよ。今年の新人はどうなってやがんだ？」

トンパの異名は『新人潰し』。

新人の受験者をあの手この手で邪魔することが楽しみになっている目的が変わってしまった男である。

自分も命がけのスリルにいる中で、新人が絶望に顔を染めながら死んでいくのを見る事が生きがいになってしまった。

最初は見ているだけだったが、何回も受けるにつれて自ら仕掛けるようになった。

もちろん今年もそれ目的で受験した。

しかし、今の所その目論見はほとんど成功していない。

「ちっ！ まあいいさ。試験が始まったら、嫌でも巻き込まれる瞬間が来る。覚えてやがれよ」

トンパは歪んだ笑みを浮かべて、次の標的を待つ。

すでに死へと片足を突っ込んだことには、まだ気づいていない。

ラミナは壁際にもたれ掛かって立ち、ボケくつとする。

すると、受験者の中に手練れの念使いを見つけた。

1人は髪を後ろに流して右目の下に星、左目の下に涙のマークを描いている奇術師風の男。

もう1人は顔中に針を刺している男。

(……どつちもかなりの念使いやな。クロロやフェイタン達にも負けてへん。それに両方とも殺し慣れとる。要注意やな)

ラミナは2人を要注意人物として覚え、他にも変な人物がいないか探る。

次に目に付いたのは銀髪の少年と、坊主頭の男。

(念使いやないけど……あの2人もかなりの手練れやなあ。あんなガキがって……あの雰囲気、どっつかで見たことあるなあ)

少年に目を向けて首を傾げるラミナ。

すると、背筋に寒気が走った。

「!!」

目を向けると、奇術師風の男がラミナを見て、笑みを浮かべていた。そして、ゆつくりと歩み寄ってきた。

「……マジかい」

「ちよつといいかい?」

「……なんや?」

「君の名前ってラミナ?」

「……何で知つとんねん」

「くくく◆ やっぱりね♥ 僕はヒソカ♣ それで分かるだろ?」

「……お前が4番か……」

マチの話に出ていた3年前に入った旅団のメンバー。

それが目の前の男だった。

(確かに……何考えとるんか分からんなあ……)

マチの言葉に納得し、担当に選ばれたことに内心でマチに同情したラミナ。

ヒソカはラミナの隣に立ち、話を続ける。

「君の話は団長やマチから聞いたよ♥ 強いんだってね◆ 戦ってみたいね♣」

「遠慮しとくわ。あんたとやると怪我じゃすまなさそうやし。この試験かて団長から言われて受けとるし」

「それは残念♣ 君との戦いは面白いと思うんだけど♣」

(……こいつ、バトルジャンキーか。厄介なタイプやな)

ラミナはヒソカの性格に僅かに顔を顰める。

それと同時にある疑問が浮かぶ。

(なんで幻影旅団に入ったんや？ こいつからすれば捕まえる側の方が喜びそうやが……)

幻影旅団は私闘を禁じている。

これは流星街の特性を引き継いでいると言っても過言ではない。だから旅団の中では時々腕相撲大会なども開かれている。

どう考えてもヒソカの思考は旅団とは合わない。

盗みに興味があるようにも見えない。

「……ところで、もしかしてあの針人間とも知り合いか？」

「そうだね♦ 君と同じ穴の貉さ♥ もっとも、あれは変装で偽名だけどね♣」

「なるほどな。ほな、やっぱあいつにも手え出さんようにしとくわ」

「それがいいよ♥ あ、これ♦ 僕のホームコード♣」

「……後で送るわ。仕事用のしかないけどな」

「残念♦ 仲良くなりたかったのに♥」

ヒソカの名刺を受け取って、嫌そうに答えるラミナ。

ヒソカは残念そうに肩を竦めて去っていく。

ラミナはため息を吐いて、登録だけさっさと済ませる。地下で圏外なので送れないので、時間が出来たときにすることにした。

「……目立ってもうたなあ……」

ヒソカと話していたせいで、妙に注目を浴びてしまったようだ。

あまり印象に残りたくはなかったのだが、どつちにしろヒソカとは話すことになっただろうから仕方がないと思うことにした。

その後も新たな受験者がやって来る。

そろそろ18時になるが、ゴン達はまだ来ない。

(……そろそろタイムアップちゃうか？ あかんかったか……)

そう考えていると、再び扉が開いて、そこからゴン達が現れた。  
「お、間に合いよったわ」

感心するように呟いたラミナの視界に、トンパの姿が目に入る。  
トンパはゴン達にも缶ジュースを渡した。

ラミナはまたかと呆れていたが、ゴンは口に含んだ瞬間吐き出したのを見て、吹き出しそうになるのを耐える。

(くくく！ 裏の人間でもないのに、ホンマ鋭い感覚持つとるわ)

ゴンの反応を見て、クラピカとレオリオもジュースを捨てる。

クラピカは初めから疑っていたようだが。

すると、ゴンがラミナに気づいた。

「あー！ ラミナー！」

「おお！ やっぱ来てたかあ！」

レオリオも笑みを浮かべて近寄ってくる。

ラミナは苦笑してゴン達に歩み寄る。

「ゴン達は一本杉の方からか？」

「うん！ って、なんで知ってるの？」

「情報屋からな。ナビゲーターの居場所聞いたんや」

「情報屋か。なるほど……」

「流石、あんさ——」

「しっ！」

レオリオが余計なことを言おうとしたので、鋭く声を発して止める。

「余計なこと言うたらあかん。ここにおるんは正真正銘ライバルやぞ」

「……そうだった。悪い」

「分かってくれたらええわ」

「ぎゃあああ!!」

すると、悲鳴が響き渡った。

目を向けると、そこには両肘から先が無い男と楽し気に笑うヒソカの姿があった。

「な、なんだよ。あいつ……」

「あいつには気いつけとき。あれは息をするように人を殺せる人種や。近づいてもええことないで」

「お前がそう言うならそうなんだろうな……。あんな奴まで受けれるのかよ〜」

「それもうちが受けれるんやから、そらそうやろ」

「ああ……そりやそうだ」

レオリオはラミナの言葉に慄いたり呆れたり忙しかった。

「まあ、ここにおける連中はほぼ全員、人を殺す術を持つとるやろうけどな」

「っ！……そうだよな。ハンターが自衛の術を持たなかつたらすぐに死んじまうか」

「そういうこつちゃ」

ハンターは未知で危険な仕事をする者達。

どんな仕事であろうとも命の危険があるのが基本である。

ジリリリリリ!!

今度は目覚まし時計のような音が響き渡る。

するとエレベーターの反対側の壁が上に開き始め、壁の向こう側にスーツを着た口髭が特徴的な紳士が立っていた。

紳士は音を止める。

「只今をもって、受付時間を終了いたします。それではこれより、ハンター試験を始めます」

妙に響き渡る紳士の声。

試験開始の言葉に受験生全員に緊張感が走る。

「さて、一応確認致しますが、ハンター試験は大変厳しいものもあり、運が悪かったり、実力が乏しかったりすると怪我したり、死んだりします。さらには先ほどのように受験生同士の争いで再起不能になることも多々あります。それでも構わない……という方のみ付いてきてください」

紳士は注意事項を伝え、今ならば棄権も可能とも伝える。

もちろん誰も引き返す者はいない。先ほどヒソカにやられたもの以外は、であるが。

「承知しました。第一次試験404名、全員参加ですね。それでは参りましょう」

紳士はくるりと身を翻し、手足を大きく振り上げて歩き出す。

それに受験生達も続く。

「当たり前だが誰も帰らねえな。ちよつとだけ期待したんだけどな」

レオリオが緊張を紛らわせるように言う。

ラミナやクラピカ達はそれに肩を竦めたり、苦笑するだけで答える。

しばらくすると、

「ん？」

「おかしいな」

「？」

レオリオ以外の3人は変化を感じ取った。

すると、前方の者達が走り出し始めた。

「おいおい、なんだ？ やけに皆急いでねえか？」

「あの試験官のスピードが異常に上がったんや」

「ああ、だんだん速くなっている」

「前の方が走り出したんだ！」

完全に周囲はランニングペースになっている。

それに対し紳士は未だにスキップするかのような歩き方で先頭にいる。

（やっぱり試験官に選ばれるだけのハンターやな。【纏】も乱れもせん）

ラミナは小走り気分で付いて行き、紳士の動きを観察していた。

「申し遅れました。私、一次試験担当官のサトツと申します。これより皆様を二次試験会場にご案内します」

「？ 二次……？ つてことは一次は？」

「もう始まっているのでございます。二次試験会場まで私に付いてくること。これが一次試験でございます」

「！！！！」

「場所や到着時間はお伝え出来ません。ただ私に付いてきていただきます」

サトツの言葉に試験の意味を理解したり、首を傾げたりなど受験生の反応は様々だった。

「なるほどな……」

「変なテストだね」

「さしずめ持久力試験ってことか。望むところだぜ！ どこまでも付いて行ってやる！」

「……そう簡単なもんちゃうと思うでえ」

「ああ、どこまで走ればいいのか分からないのはかなりの精神的負荷となる。精神力も試されているな」

「他には周囲への注意力や。体力が減って酸素が回らなくなってくると、足元や周りへの注意が散漫になる。このままこの通路をずっとちゆうわけやないやる。気を付けないと……死ぬで」

クラピカとラミナの言葉にレオリオがゴクリと唾をのむ。

（ハンターは獲物を狙って、時には何時間も走り続け、追い続けなあかんちゆううことやな。それに危険な場所から離れるために足を止める事が許されん時もある。それを想定しとるわけか）

暗殺者であるラミナも似たようなことを体験した事もある。

もつとも走り続けるだけではなく、隠れ続ける事も必要とされたが。

（ハンターになるための試験や。そこらへんもどつかで試されるはずや。恐らく本試験会場まで来るんは、情報収集能力と突発的な事態への対処能力を試すためのもんやな）

ラミナは走りながら、今後どんな試験があるのを考えていた。

すると、ラミナ達の横を銀髪の少年がスケボーに乗って通り過ぎる。

それにレオリオが噛みついた。

「おい、ガキ！ 汚ねえぞ！ そりゃ反則じゃねえか！」

レオリオの言葉に少年が不思議そうな顔をして振り返る。



「なんで？」

「なんでって、こりや持久力のテストなんだぞ!？」

「違うよ。試験官はついて来いって言ったただけだもんね」

「ゴン!! てめえ、どっちの味方だ!？」

「どなるな、体力を消耗するぞ。それにうるさい。テストは原則持ち込み自由なのだよ」

「むしろスケボー持つことは褒めるべきやろな」

「〜!!」

レオリオは味方が誰もおらず悔し気に歯軋りをする。

少年は既にレオリオに興味を無くし、ゴンとラミナを交互に見ている。

「ねえ、君いくつ?」

「俺? もうすぐ12歳!」

「ふくん……。やっぱ俺も走ろ!」

突如少年はスケボーを蹴り上げて、ゴンの隣で走り出す。

スケボーをキャッチして脇に抱える。

「俺、キルア」

「俺はゴン!」

「あんたは?」

「ラミナや」

「ゴンにラミナね。おっさんは?」

「おっさんじゃねえ! 俺はまだ10代だ!!」

「ウソオ!？」

ゴンとラミナが目を見開いて驚く。

クラピカも声を上げなかったが、目を大きく開いている。

「は!?! 10代!?! レオリオ、いくつなん!?!」

「19だ!!」

「同い年!?! 嘘やろ!?!」

「同い年!?!」

今度はレオリオとゴンが驚いた。

レオリオとゴンはもう少し年下だと思っていた。もちろんクラピ

カモ。

意外な年齢暴露にゴン達は混乱に陥った。

「見た目詐欺すぎるやろ」

「お前に言われたくねえよ!」

「女が若く見られて何が悪いねん」

「うっ……!」

女の正論にレオリオは閉口するしかなかった。

ラミナはジト目を向けていると、キルアから見られているのを感じた。

さりげなくキルアの隣に移動するラミナ。

「うちがどうかしたか?」

「……いや。あんたさ、殺し屋だろ? 足音全くしないし、かなり強いね」

「そう言うお前さんもその手の仕込みされとるんやろ? その歳で

【暗歩】使いこなすとかどんだけやねん」

「まあね。ちよつと家が特殊でさ。親父に叩き込まれたんだよね」

肩を竦めるキルアを見て、ラミナはようやく誰に似ているか気づいた。

「……お前さん、もしかしてゾルディックか?」

「……へえ。よく分かったね」

キルアは一瞬呆気にとられたが、隠すこともなく笑みを浮かべて頷いた。

それにラミナはようやく納得した。

「なるほど。顔は親父さん、髪は爺さんに似とるんやな」

「会ったことあんの?」

「殺されかけた間柄や」

「はあ!? 親父とじっちゃんから逃げ切ったのか!?!」

「ちやうちやう。殺される前に依頼主の方殺してもろたんや。後5分遅かったら厳しかったやろな」

「いや、それでもおかしいから」

「まあ、向こうもまだ本気ちやうかつたからや」

ちなみにこの間、ゴンは静かに聞いていたが半分も理解出来ずに首を傾げ、レオリオは走るのに必死でそれどころではなく、クラピカは内心戦々恐々としていた。

(ゾルディックは私でも聞いたことがある伝説の暗殺者……。その息子と、伝説から逃げ切った者か。……。私の想像を超えた実力の持ち主だったようだ)

今も涼しい顔で走っている。

それも未だにランニング気分ですらなさそうだった。

(ハンターになるには、これくらいにならないといけないというわけか。……。幻影旅団はこの2人以上だと考えると……。私ではまだ捕らえることは出来ないのだろうか)

クラピカは自分が目指している場所の遠さを感じさせられたのだった。

そのまま走り続けて、数時間が経過した。

(……。4時間と37分か。走った距離は大体60kmくらいやな)

ラミナは携帯で時間を確認する。そして、大体の距離を確認する。前方はまだまだ地下通路が続いており、分かれ道すらない。

つまり、最低でも今まで走った距離の倍は走る覚悟をしておくべきだとラミナは考える。

ちなみにラミナは未だに汗を掻いていない。

隣に目を向けるとキルアとゴンもまだ涼し気な顔で走っている。

クラピカは僅かに汗ばんでおり、レオリオは汗だくだった。

(レオリオは、そろそろ厳しいか……)

かなり息も上がっており、徐々に遅れてきている。

そして、レオリオの手からトランクが落ちて、遂に足が止まる。

「レオリオー」

ゴンも足を止めて呼びかける。

「ほっとけよ。遊びじゃないんだぜ、ゴン」

キルアが冷たく言い放つが、ラミナもそれに同意する。

まだ一次試験。手を差し伸ばして引っ張り続けるには早すぎる。

「ぎげんなよ……。絶対にハンターになったるんじゃ！ くそつたれー!!」

レオリオは吹っ切ったように猛烈な勢いで走り出す。

ラミナ達の横を通り過ぎて、さらに前へと進む。

「うおおおおお!!」

「おおおお。まだまだ若いやないか、おっちゃん」

「俺はまだ10代だあああ!!」

ラミナの軽口に叫び返しながら、レオリオは走り抜いて行く。

後ろを振り向くとゴンが釣り竿でトランクを回収していた。

「上手いもんやな。さて、うちもスピード上げよか」

「現在60km通過。」

「脱落者未だ0。」

## #7 ブツソウ×ナ×ゴツコアソビ

一次試験開始から約6時間経過。

走行距離は約80km。

ようやく1人が脱落したのだが、スピードを上げていたラミナ達はもちろん知る由もない。

もつとも、気づいた者達もすぐに「最初の脱落者にならなくて良かった」とホツとするどころではなくなつた。

「か、階段……!?!」

目の前に現れたのは先が見えない階段。かなりの勾配があり、段差も決して低くない。

それが果てしなく続いていった。

だと言うのに、

「さて、ちよつとペースを上げますよ」

サトツは歩くような感じのまま2段飛ばしで登っていく。

それに受験者達は愕然としながらも必死に食らいついて行く。

ラミナはゴン、キルアと並びながら登り、徐々に先頭に近づいてきていた。

「こりやあ、ここで結構脱落するやろなあ」

「そうか?」

「足を上げるのも辛くなつとつた奴には、この階段は地獄やろ。しかもスピードも上がりよつたし、一瞬でも力が抜けてしもたら、もう立ち上がれんやろうな。それに階段に入ってから道が狭あなつたし、精神的にも圧迫感感じてペース乱される奴も出るやろおな」

「ふくん」

キルアは不思議そうな声を上げる。

キルアには今も全く辛くないので、ラミナの推測が理解出来ないのだ。

ラミナはキルアの反応に苦笑して、チラリとゴンに目を向けると、流石の野生児もじんわりと汗を掻き始めていた。

「クラピカとレオリオは大丈夫かな?」

「クラピカは大丈夫やろ。レオリオはクラピカの挑発に感化されて頑張るんちゃうか？」

「と言っても、ラミナはクラピカとレオリオと一緒に走っているのかどうかまでは知らないのだが。」

「しかし、なんとなくクラピカの感じからレオリオの近くにいるのではないかと思っただけだ。」

「そして、そんなこんなしている間に3人はサトツの真後ろに来てしまった。」

「いつの間にか一番前に来ちゃったね」

「うん。だってペース遅いんだもん。こんなんじや逆に疲れちゃうよな」

「せやなあ」

「……」

「ゴンはキラアとラミナが未だに汗を掻くどころか息すら乱れてないことに気づいた。」

「結構ハンター試験も楽勝かもな」

「うちが言うんもあれやけどな。うちらは身体面においてはプロハンターと大差ないと思うから、ここらへんは期待せん方がええと思うで？」

「あ、やっぱり？」

「うちやお前がガキの頃から仕込まれるもんなんざ、基本ハンター証ゲットしてから学ぶ奴も多いと思うで？　すでに習得しとるうちらからすれば、そりやつまらんやろ」

「だよなあ」

「そもそもこの試験はハンターの基礎能力を試すもんやしな。お前が楽しくなるんはハンターになった後からちゃうか？」

「ん〜……そう言われても、やりたいことなんてあんまないんだよなあ。面白そうだから受けただけだし」

「キラアとラミナは雑談しながら走る。」

「その会話はゴンはもちろん、サトツも聞いていた。」

（ふむ。今年の新人は中々面白いですね。まあ、彼女の方は新人と言

うべきか迷いますが)

もちろんサトツもラミナの【纏】を見抜いている。

【纏】の静けさから、ラミナがかなりの実戦と経験を積んでいることが窺えた。

今も真後ろにいるのに、ラミナの気配を時々失いそうになる。キルアと揃って足音を出さないのも拍車をかけている。

(間違いなく裏社会のプロ。下手したら私でも勝てないかもしれないねえ)

いい意味でも悪い意味でも要注意しておく人物。

それがサトツが抱いたラミナの印象だった。

その後も数時間走り続ける。

(もう1時間になるで……)

携帯で時間を確認したラミナは流石にうんざりしてきた。

一晩、地下で走り続けるのは少し予想外だった。

その時、

「あ！ 明かりだ！」

ゴンが先を指差す。

ようやく太陽の明かりを目にして、まだ走り続けている受験生達は流石にホツとした。

「ふう。ようやく薄暗い地下からおさらばだぜ」

坊主頭の忍が気持ちを切り替えるように言う。

先頭にいたラミナ、ゴン、キルアはサトツに続いて外に出る。

「お〜」

「うわ〜」

「マジかい」

キルアとゴンは目の前の光景に素直に感嘆し、ラミナは呆れた声を上げることしか出来なかった。

後に続いて出てきた者達も、その光景を見て絶句する。

目の前に広がるのは、広大過ぎる森と湿原だった。

「【ヌメーレ湿原】通称『詐欺師の埒』。二次試験会場はここを通過して行かねばなりません」

「こりやあ、まだまだかかりそうやなあ」

ラミナは右手を目の上に当てて地平線を見つめるが、建物など一切見えなかった。

「この湿原にしかない珍奇な動物達。その多くが人間をも欺いて食料にしようとする狡猾で貪欲な生き物です。十分注意して付いてきてください。騙されると死にますよ」

サトツの言葉が言い終わると同時に、背後の出口が閉じていった。

「ああ……ま、待ってくれ……!」

出口前で気を抜いてしまったのか、倒れていた男が手を伸ばすかも知らん誰も助けられないし、シャッターも止まらない。

シャッターは完全に閉じ、これで残りは331名となった。

「それでは参ります。騙されることのないように、しっかりと付いてきてください」

「はん! 騙されるのが分かってて騙されるわけねえだろ」

レオリオが強気に言い返した時、

「嘘だ! そいつは嘘をついている!」

『!?!』

出口の陰から突如、ボロボロの男が何かを引きずりながら現れる。

そして、男はサトツを指差す。

「そいつは偽物だ!! 試験官じゃない! 俺が本物の試験官だ!」

男の言葉に受験生達はサトツと男を交互に見て困惑の表情を浮かべる。

「偽物!? どういうことだ!?!」

「じゃあ、こいつは一体……!?!」

レオリオと忍は完全に困惑している。

クラピカは冷静に男とサトツを交互に見て、真偽を見極めようとしている。

「これを見ろ!」

男が引きずっていたものを前に出す。

それはサトツにそっくりな顔をした細身の猿だった。猿の顔を見た受験者達は衝撃を受けて、サトツを見る。



サトツは変わらず涼しい顔をして立っている。

「こいつはヌメーレ湿原にいる人面猿！ こいつは新鮮な人肉を好む。しかし、手足が細く非常に力が弱い。そこで自ら人に扮し、言葉巧みに人間を湿原に連れ込み、他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ！」

ラミナは男の話を呆れながら聞いていた。

「ツツコミどころしかないなあ……」

「ラミナはどっちが本物か分かったの？」

いつの間にかクラピカとレオリオの隣に立っていたラミナに、同じくいつの間にか横にいたゴンが訊ねる。

もちろんゴンの横には退屈そうなキルアもいた。

ラミナはポケットに両手をつ突っ込んで、面倒そうにゴンの質問に答える。

「もし、サトツはんが偽モンなら、そもそもここに来るまで待つとるんはおかしいやろ。とつとと地下に追いかけてくりやあええ。そうすりやあ、まだ真実味出たやろうけどな」

「けど、あの怪我だぜ？」

「試験官はプロハンターなんやろ？ 試験会場に選ばれた場所の危険性を知つとつて騙されるんやったら、どっちにしる試験官失格ちゃうか？」

「それは……そうかもしれないが……」

「それにサトツはんは力が弱いとは思えんな。あれだけのスピード出しとつて。まあ、一番は……」

「一番は？」

「あの男の歯と死んだふりしとる猿の歯。見比べてみ？」

「二歯？」

ラミナの言葉にゴン、クラピカ、レオリオ、そして近くで聞いていた受験生達は男と猿の歯を見比べる。

すぐにゴン、クラピカ、そして忍がラミナの言っていることに気づいた。

「あー！」

「なるほどな」

「そういうことか」

「なんだよ。どういうことだよ？」

「あの男と人面猿の歯の生え方が全く同じなんだよ」

「なにい!？」

クラピカの言葉にレオリオが慌て、もう一度確認する。

そして、確かに男の犬歯と人面猿の犬歯が全く同じであることがレオリオにも見えた。

「マジかよ……」

「まあ、実力からしてレオリオよりも弱いぞ？ そんなんが試験官つちゆうことはないやろ」

「ぐっ……!」

レオリオは一瞬イラつとしたが、レオリオ自身戦いがそこまで得意ではない自覚もある。なので、そんな自分よりも弱いというのは確かにあり得ないと思った。ムカつくことはムカつくが。

その時、トランプが空を切り、男の顔にサクつと数枚突き刺さる。

男は目を見開いて、そのまま仰向けに倒れる。

『!!』

ラミナは呆れた顔でヒソカに目を向け、そしてサトツに顔を向ける。

サトツの両手指にはトランプが数枚収まっており、死んだ男同様ヒソカに攻撃されたことが窺えた。

「くっく◆ なるほどなるほど♣」

ヒソカはトランプを弄りながら、楽しそうに笑う。

「……無茶しおるなあ」

ラミナは呆れながら人面猿に目を向けて、素早く右腕を振る。

「ギエツ!？」

死んだ男の傍で死んだふりをしていた人面猿が起き上がろうとしていたが、その額にスローイングナイフが突き刺さり、男の隣で死ぬ。もちろんラミナが投げたものだ。

「やっぱりいいねえ♥ 君♠」

「キモいわ」

「残念♣ けど、これで決定♦ そつちが本物だね♠」

「分かってやったくせに、よう言うわ」

「……お前、ホントはヒソカと仲いいんじゃないやねえの？」

「あ？」

「ナンデモナイッス！」

余計なことを言ったレオリオを割と本気で睨みつけて黙らせる。

ラミナはため息を吐いて、サトツに顔を向ける。

「あんなんがよっけおるつちゆうことやな」

「その通りです。これから通る場所には更に巧妙な罠を仕掛ける動物もいます。故に私から離れないように、と言ったのです」

「……なるほど……」

レオリオはゴクリと唾をのんで、これから行く場所の危険性を理解した。

「そして、もう一つ。次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆とみなし、即失格とします。よろしいですね？」

「はいはい♦」

ヒソカは肩を竦める。

サトツは小さく頷いて、クルリと反転する。

「それでは参りましょうか。二次試験会場へ」

その言葉で受験生達の顔が再び引き締まる。

サトツが歩くように走り始め、受験生達もそれに続く。

「ちっ！ またマラソンの始まりかよー！」

「くっ！ 下がかなりぬかるんでやがるー！」

湿原とあって、地面はかなりぬかるんでいた。

ただでさえ疲れている体にはさらに堪える。

「ここが本番みたいやな」

「そのようだな」

「この足場だけでも厄介なのに、これで騙されないように備えろとか無茶にも程があるぜー！」

ラミナの言葉にクラピカが頷き、レオリオは愚痴りながら必死に体

に鞭を打つ。

(……ヒソカの殺気がどんどん密かに大きくなってきとるな。器用なやつちゃ。やっぱ旅団メンバーになれるだけはあるわ)

ヒソカから離れるように移動を始めるラミナ。

更に霧がはじめており、どんどん視界が悪くなっていく。

「こら、マズイ」

ラミナはスピードを上げてサトツの姿を見失わないようにする。

ヒソカが後方に下がったのも前に出たい理由でもあるが。

「レオリオー！ クラピカー！ キルアが前に来た方がいいってさー！！」

「ドアホー！ 行けるならとっくに行つとるわい！！」

「そこをなんとかー！！」

「ムリだつちゆうのー！！」

いきなりゴンが後方にいるクラピカとレオリオに呼びかける。

(キルアもヒソカの殺気に気づきよったか。っ！ 霧が……)

キルアが忠告した理由を正確に理解したラミナは、さらに霧が濃くなっていくことに目を細める。

「なるほど。この霧もこの湿原に住む連中に有利に働くんやな」

『ぎゃあああ!!』

突如後方から悲鳴が聞こえてきた。

しかし、その方向は通って来た道から逸れていた。

「なんで、あんなところから悲鳴が!？」

「騙されたんだろ」

「おい、いつのまにか俺達の後ろにいた連中が消えたぜ」

「マジか。確か100人はいたはずだぜ」

ゴンが驚き、キルアが冷静に言う。

他の受験者が背後にいたはずの受験者達がごつそりといなくなつたことに目を見開く。

(こりや、ヒソカのやりたい放題やな。……クラピカとレオリオも騙されたか)

近くにいる集団の中にクラピカとレオリオの姿はない。

その時、

『つてえー！』

レオリオと思われる叫び声が耳に届く。

その瞬間、ゴンが身を翻して来た道に戻り始めた。

「ゴン!!」

キルアが呼び止めるが、ゴンは止まることなく霧の中に姿を消す。

「……やれやれ。そう簡単にやられるたあ思わんけど……」

ラミナはため息を吐いて、ゴンの後を追う。

「ああいう気持ちええ純粹さつちゆうんはもったいなあ感じるなあ。暗殺者やしとると尚更、な」

誰ともなくそんな言い訳をしながら、ラミナはスピードを上げるのであった。

時はちよつと戻る。

レオリオとクラピカは濃い霧の中を走っていたが、突如周囲から悲鳴がひっきりなしに上がり始めていた。

「ちい！ 知らないうちにパニックに巻き込まれちゃったぜ……!」

「どうやら後方集団が途中から別の方向に誘導されてしまったようだな」

レオリオとクラピカは動くに動けない状況だった。

もはや先頭集団がどの方向にいるのかも分からず、動こうにもあつちこつちから悲鳴や人間のものではない声が響き渡っている。

下手に動けば、その中の仲間入りになつてしまうだろうことは容易に想像できる。

更にレオリオは武器をゴンが担いでいるトランクの中に入れたままだった。

今のレオリオには自衛手段がないに等しい状況だった。

その時、霧の中から何かが飛んで来た。

「ぎゃあ!?!」

「がつー!」

「ぐっ！」

2人の近くにいた受験者達から悲鳴が上がり、血が噴き出す。クラピカはギリギリで気づいて、木刀を抜いて叩き落とす。しかし、レオリオは避けることも防ぐことも出来ず、左腕に鋭い痛みが走る。

「つてえー！！！」

叫びながら目を向けると、刺さっていたのはなんとトランプだった。

レオリオはそのような攻撃手段を取る者は1人しか思い浮かばなかった。

トランプが飛んで来た方向に目を向けると、霧の中に人影が浮かび上がる。

それは2人の想像通り、トランプを弄りながら不気味に笑っているヒソカだった。

「てめえ……なにしゃがる!!」

「くくく♥ 試験官ごっこ♥」

「なんだと……」

「二次試験くらいまでは大人しくしておこうかと思ってたけど、一次試験があまりにも退屈でさあ◆ 選考作業を手伝おうかと思ってね

◆ 僕が君達を判定してあげるよ♥」

ヒソカは周囲にいる受験者達を見渡しながら言う。

「判定え？ はっ。馬鹿め！ この霧だぜ？ 一度試験官からはぐれたら最後、どこに向かったか分からない本隊を見つけないなんて不能だぜ！」

受験者の1人がやけになったのか、ヒソカを小馬鹿にしたように笑って嘲る。

「つまりお前も取り残された不合格者なんだーきよ!?!」

小馬鹿にした男は額にトランプが突き刺さって言い切る前に息絶える。

「失礼だなあ◆ 君と一緒にするなよ◆ 奇術師に不可能はないのさ♥」

ヒソカは余裕を保ったまま自信たっぷりに言う。  
すると、受験者達は武器を構えてヒソカを囲む。

「殺人狂め！ 貴様などハンターになる資格はねーぜ！」

「二度と試験を受けられないようにしてやる……！」

20人近くに囲まれたヒソカだが、表情は全く変わらない。

それどころか、

「そうだなあ……君達相手なら、この1枚で十分かな♣」

と、1枚のトランプを出して自信たっぷりに言い切った。

「ほざけえ!!」

それを挑発と受け取った受験者達は一齐に攻撃を仕掛ける。

しかし、ヒソカは涼しい顔で躲し、さらに本当にトランプ1枚で急所を斬り裂いて殺していく。恐ろしいのが、ヒソカは全て喉か顔への一撃で受験者達を殺していくことだった。

「くつくく……あつはつはつはあー♥!!」

高らかに笑いながら、また命を奪う。

ようやく現実を理解した受験者達は逃げ出そうとするが誰一人逃げきれず、10分と経たずにクラピカ、レオリオ、角刈り頭の男の3人を残して全滅した。

「君達全員不合格だね♠」

トランプに付いた血を振り払って、クラピカ達に向く。

「残りは君達3人だけ◆」

「もう1人追加や」

「!!」

ヒソカの背後に人影が現れて、ヒソカの頭に蹴りを放つ。

ヒソカは大きく仰け反って躲し、そのままバク転して距離を取る。攻撃を仕掛けた人影は追撃はせずに、クラピカ達の前に移動する。

「ラミナー！」

「間におうたみたいやな」

ラミナはヒソカから目を離さずにクラピカ達に声を掛ける。

ヒソカはラミナの登場に笑みを深める。

「これはこれは♣ もしかして、君が相手をしてくれるのかい？」

「……まあ、しゃあないか。少し気晴らしに付き合ったるわ」

「それは嬉しいねえ♥」

「言つとくけど……」

ラミナはフツと姿を消し、ヒソカの真横に右拳を構えた状態で移動する。

「組み手気分やからな!!」

「十分♠」

ヒソカは半身になってラミナの右ストレートを躲し、トランプを仕舞う。ヒソカは左アッパーを放つが、ラミナは右手で払い退けて、そのまま左後ろ回し蹴りを放つ。それをヒソカは右腕で逸らして、さらに右脚で足払いを仕掛ける。ラミナはヒソカの足を踏みつけようとし、ヒソカは足払いを中断して、再び左アッパーを放つ。

ラミナは軽く仰け反って躲し、カウンター気味に連続で鋭い拳を放つ。ヒソカは全て両手で払い落とし、左肘を鋭く突き出す。右腕でガードしたラミナは後ろに下がりながら、しゃがんで足払いを振り抜く。バク転で躲したヒソカはすぐに高速で飛び出し、ラミナに詰め寄って蹴り上げを放ってきた。

それをラミナは何とヒソカの蹴り出された脚の上に片足で跳び乗って、もう一方の脚でヒソカの顔目掛けて膝蹴りを放つ。

ヒソカは両腕でガードする。ラミナはヒソカの両肩を掴み、腕と腹筋の力のみで逆立ちをして飛び上がる。そして、体を強く捻って空中回し蹴りをヒソカの後頭部を狙って繰り出す。

ヒソカは体を前に倒して躲し、そのまま右脚を振り上げる。ラミナは左腕でヒソカの脚を弾き、距離を取る。

「ふう〜……やっぱ強いなあ。躲すんで精一杯や」

「く〜く〜 ◆ よく言うよ♠」

息を整えて両手を腰に当てながら軽口を言うラミナに、ヒソカは上機嫌に笑う。

2人の戦いを眺めていたクラピカ達は次元の違いに呆然とするし



かなかった。

「……ラミナの奴、あんなに強かったのかよ……」

「ああ。だが、今も恐らく様子見のようなものだろう」

「マジか!？」

「2人の攻防に全く殺気を感じない。2人は本気で気晴らし気分で戦っているんだ」

あの攻防がお遊びだという事実には、クラピカとレオリオは冷や汗を流す。

すると、もう1人の男が2人に声を掛ける。

「おい！ 今の内にさっさと逃げるぞ！」

「けどよ……」

「俺達じゃ邪魔になるだけだ。あの女がいくら強かろうが、いつ標的が俺達に変わるか分からないんだぞ！」

「彼の言うとおりだ、レオリオ。それにラミナがここに来てくれたのが私達の為ならば尚更生き残らなければならない」

「……くそっ！」

レオリオは悔し気に舌打ちをする。

「行くぞ」

そう言うと、男が身を翻して走り出す。

クラピカとレオリオも後に続いて走り出し、ラミナとヒソカは横目でそれを見送る。

「……しもた。方向伝えてへん」

ラミナはクラピカ達に本隊がいる方向を伝えるのを忘れていたことを思い出した。

ヒソカは肩を竦めて笑う。

「くくくく ♣ それは残念 ♥ さあ、もうちよつと付き合ってもらおうかな ◆」

「……そろそろええやろ」

「邪魔が入らない少ない機会だろ？ 楽しめるだけ楽しまないとねえ

♣」

そう言うと、ヒソカは再びラミナに殴りかかってきた。

ラミナは舌打ちして拳を受け止め、殴り合いを再開する。

レオリオは少し走って足を止める。

「レオリオ？」

「……やっぱ我慢出来ねえ」

「レオリオ！」

レオリオはクラピカの声を見無視して、近くに転がっていた武器を手にして引き返し始めた。

「レオリオ!!」

「ちい！ 馬鹿が！」

クラピカも慌ててレオリオを追いかけ、残った男は2人を見捨ててそのまま走り去る。

レオリオは戦っているヒソカとラミナを見つけて、武器を構えて一気に迫る。

「うおりゃあああ!!」

「おや？」

「レオリオ!?! なんしとるんや!!」

「うるっせえ!! こちとらやられっぱなしで、しかも同い年の女に庇われたまんまでガマンできるほど、氣い長くねえんだよー!!」

レオリオは叫びながら武器を構えて、ヒソカに攻めかかる。

「んく、いい顔だ◆」

「ちい！」

「おっと♣」

「ぐう！」

ラミナは顔を顰めて殴りかかるが、ヒソカは一瞬だけ【硬】を発動して裏拳を繰り出す。ラミナは目を見開いて【堅】を発動してガードするが、大きく後ろに弾き飛ばされる。

その隙にレオリオが攻撃を仕掛けるが、ヒソカは素早くレオリオの背後に回る。

「っ！」

「ちい!! (あかん。間に合わへん!)」

ラミナは剣を作り出そうとするが、ヒソカの攻撃の方が速いと悟り

舌打ちをする。

その時、霧の中から黒い玉が飛んできて、ヒソカの額に直撃する。

「!!?!」

ラミナとレオリオ、そしてクラピカは目を見開いて、玉が飛んで来た方向に目を向ける。

そこには釣竿を振り被ったゴンの姿があった。

「ゴン!?!」

「なんちゆうタイミングで……」

ゴンは当たると思っていなかったのか、呆然と固まっている。

ヒソカは平然とゴンに顔を向ける。

「やるね、ボウヤ♣」

ゴンはビクツとして後退る。

本能的にヒソカの危険さを感じ取ったようだ。

「釣り竿? 面白い武器だね♥ ちょっと見せてよ♣」

「テメエの相手は俺だ!!」

「っ! 阿呆!!」

ヒソカの興味がゴンへと移り、レオリオがそうはさせまいと再び武器を振り被る。

それにラミナが怒鳴りながら右腕を振る。

しかし、その前にヒソカの拳がレオリオの頬に叩き込まれる。

レオリオは仰け反って吹っ飛びそうになった瞬間、レオリオの腰にワイヤーが巻き付き、引っ張られる。

「え!?!」

「……へえ♥」

レオリオを助けようとしたゴンは驚いて足を止め、ヒソカは笑みを浮かべながらラミナに顔を向ける。

ラミナは飛んで来たレオリオを受け止めて肩に担ぐ。ワイヤーは右袖の中に戻っていく。

「もうここまでにしいや。満足しとるんやろ?」

「くく◆ そうだね♣ 君達は合格だよ♥」

ヒソカは満足げに笑みを浮かべて頷く。

そして、すぐ近くにいたゴンに目を向けて、屈んで顔を近づける。

「ん〜…君も面白そうな子だ♠ いいハンターになりなよ♥」

ヒソカは立ち上がって歩き出す。

「それじゃあ、彼は任せていいかい？」

「…まあ、ええわ。お前に担がせるよりは安心するでな」

「酷いなあ◆ じゃあ、二次試験会場で♣」

ラミナはヒソカが消えていくのを見届けて、ゴンの元に歩み寄る。

クラピカも駆け寄ってきて、ゴンに声を掛ける。

「ゴン！ 無事か!?!」

「…うん。何もされてないよ。レオリオは？」

「気絶しとるだけや。顔も腕も見た目より酷おないで」

「よかった…」

「安心するんは二次試験会場に着いてからにしい。早よ行くで」

「うん!」

「道は分かるのか？」

「大丈夫や。それにヒソカの気配も追えるでな」

「…流石だな」

「それも着いてからにしい。飛ばすで、しっかりついてきいや」

「分かった!」

「ああ」

ラミナはレオリオを担いだまま走り出す。

ゴン達も後に続き、3人は出来る限り全速力で二次試験会場を目指すのだった。

## #8 ポーク×アンド×フィッシュ

ヒソカの物騒な試験官ごっこを乗り切ったラミナ達は、二次試験会場を目指して森の中を走り続けていた。

「本当にごっちで合っているのか？」

「合つとるで。ヒソカの奴がご丁寧に道しるべ残してくれとるしな」

クラピカの質問に、レオリオを担いで走っているラミナは周囲を顎で示して答える。

周囲には一撃で斬り殺されている動物の死体が点々と残されていた。

「それに先に人の気配があるしな。もう少ししたら着くやろ」

自信満々に断言するラミナに、クラピカはもう疑うのも馬鹿らしくなってきた。

そしてゴンに目を向けると、ずっと何かを考えている様子で俯いている。

「大丈夫か？ ゴン」

「うん……。ねえ、ヒソカが言ってた君達は合格ってどういう意味だと思う？」

ゴンはヒソカに言われた合格という言葉がずっと引つかかっていた。

「奴は試験官ごっこと言っていた。つまりヒソカは我々を審査していたのさ」

「どうやって？ だって俺はただ顔を見られただけだよ？」

「その前の行動やろな」

「行動？」

「レオリオは不利やろうと己のプライドをかけてヒソカに挑み、更には助けてくれたゴンからヒソカの注意をそらすために攻撃を仕掛けたからやな。で、ゴンはわざわざ戻ってきて、しかも見事な一撃を当てて、レオリオが殴られた際には迷わず飛び込んできよった。多分、奴はこう思たんやろな。『こいつらはいずれ自分を楽しませてくれる』ってな」

「楽しませる?」

「あいつは戦いに生きがいを感じとるみたいやしな。強くなりそうな奴は強くなるまで待つ気なんやろな」

ラミナの言葉をゴンは理解しようと必死に考える。

「考えたって分からんて。アレは変人の中でもとびきりの変人や」

「うん……。でも、あの時変な気持ちを感じたんだ」

「変な気持ち?」

「目の前に人がゴロゴロ倒れてて、そうした張本人のヒソカが近づいてきたとき、強力な圧迫感があつて怖くて逃げ出したかったけど背を向けることも出来なくて、「絶対戦つても勝ち目はない。俺はここで死ぬのかな?」なんて考えてただけど……。けどね、殺されるかもしれない極限の状況だったのにさ、俺、あの時少しワクワクしたんだ。変だよな?」

ゴンは自分に対して呆れたような笑みを浮かべながら言う。

クラピカはそれにどう答えるべきか考えていると、先にラミナが口を開いた。

「別に変ちやうやろ?」

「え?」

「お前が感じたんは、『未知との遭遇の興奮』や。得体が知れんヒソカが一体何を考えていたのか、ヒソカが何をしてくるんか、会つたこともない強者を前にして自分は何が出来るんか。それにお前は興奮しとつたんや。まあ、恐怖もあつたせいで自覚できるほど喜べへんかつたんやろうけどな」

「未知との遭遇……」

「自分の命が危険であろうが、未知へ飛び込むことはハンターにとって本懐なんちやうか? だから感じたことを別に怖がる必要もないと思うで」

「……うん」

ラミナの言葉に少しホツとしたのか、ゴンは穏やかな顔をして頷く。

ラミナも僅かに笑みを浮かべて、担いでいるレオリオに目を向け

る。

「ところで、まだ起きんのかいな？」

「その様子はないな。顔面がどんどん気持ち悪くなってきているが……」

「腕の方はもう血は止まってるね」

「このまま二次試験会場に運び込んでも、レオリオは通過扱いになるんやろか？」

「会場に着くことのみが条件だから、大丈夫だとは思うが……」

「つたく……女に庇われるんが嫌とか言うときながら、その女に担がれてどないすんねん」

ラミナは呆れながら、レオリオを担ぎ直す。

もうすぐ着くだろうというところで、レオリオが僅かに身じろぎする。

「う……あ……？」

「お。起きたんかいな。ダサ寝坊助」

「う……つつう!! な、なんだあ？」

レオリオは自分の状況や頬の痛みに混乱していた。

ラミナは足を止めて、レオリオを下ろす。レオリオは若干ふらつきながらも立って、周囲を見渡す。

「ここ、どこだ？ 俺はどうなってたんだ？」

「どこまで憶えているんだ？」

「あ？ えく……湿原入ってから……だめだ。思い出せねえ」

「まあ、色々あったんや。ほれ、走るで。そろそろゴールや」

「お、おう」

ラミナはとりあえず先に進もうと促し、レオリオは首を傾げながらも大人しく走り出す。

クラピカとゴンはラミナの横に着いて、

「言わない方がいいな」

「うん」

「まあ、無理して思い出させることはないわな」

というこで思い出すまで黙っておくことにしたのだった。

ヌメーレ湿原を抜けた所にある『ビスカ森林公園』。

ここが二次試験会場である。

サトツの後をしつかりと付いてきていた受験者達は、公園内にある倉庫のような建物の前で集まっていた。

一次試験を終えたサトツは、二次試験の様子が気になったので高い木の上に乗って様子を見ることにしていた。

（今年の受験生は豊作ですなあ。それにしても、あの少年と紅髪の女性はどこに行ったのでしょうか？）

気になっていた2人がいつの間にかいなくなっていた。

あの2人があの湿原の動物達に騙されるとは思えない。なので、なにかしら別のアクセシブメントがあった可能性が高い。

（ギリギリで合流してきた44番、でしょうね）

サトツは濃厚な血の匂いを纏って戻ってきたヒソカに気づいていた。聞こえた悲鳴のいくつかはヒソカによるものだ。サトツは確信していた。

しかし、ゴンとはともかく、ラミナがそう簡単に負けるとも思えなかった。

そんな事を考えていると、森から4つの人影が現れた。

目を向けると、噂をすればとばかりにラミナ達であった。

（ふむ。一度道を外れて、ギリギリで間に合うとは流石ですね）

他に気になっていたキルアがゴン達の元に駆け寄る様子を見ながら、サトツはこの後の試験について考えていた。

（さて、あの者達がメンチとブハラ試験にどう立ち向かうのか。楽しみですな）

サトツは内心ワクワクしながら、気配を消して忍び続ける。

無事に会場に着いたラミナ達は建物の前に留まっている受験者達に首を傾げる。

「なんで皆入らないの？」



「12時からなんだと。なんか中から唸り声があるけど……まあ、待つかないんだろうな」

ラミナは建物の上の方に時計が見え、12時まで後5分ほどであることを確認する。

建物の中からは「グオオオ」「グルル」「ゴゴゴ」「ガルル」と確かに唸り声のような音が絶えず聞こえてくる。

「獣にしちゃ唸り声以外音もせんし、気配もせんなあ」

「あんな建物にわざわざ閉じ込める必要があるのかという疑問もある」

「せやな」

クラピカの言葉にラミナも頷く。

周囲の森にも多くの動物達がいる気配がする。なのにわざわざ捕まえておく理由は思いつかない。

12時が近づくとつれ、受験生達の緊張感が高まっていく。

扉が開いた瞬間に飛び出してくる危険性があるからだ。

そして、時計が12時を示す。

それと同時に扉が開き、受験生達が身構える。

扉が完全に開き中にいたのは……足を組んでソファに座る勝気そうな女性と、その後ろで床に座っている3m近くの巨漢。

唸り声の正体は巨漢の腹から鳴り響く音だった。

その事実を受験生達は呆気にとられ、リアクションに困る。

そんな受験生の様子を無視して、試験官と思われる男女は話し始める。

「どお？ お腹は大分空いてきた？」

「聞いている通り、もーペコペコだよ」

「そんなわけで二次試験は『料理』よ!! 美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意して頂戴!」

料理と言う言葉に受験者達は更なる戸惑いを浮かべる。

まさかハンター試験で料理を作らされるとは思ってもいなかったのだ。

(美食ハンターはマイナーっっちゃうか、活躍が目立つ機会が少ない

ジャンルやからなあ。こりやあ厄介な試験になりそうやな)

ラミナもまさかのジャンルに眉間に皺を寄せる。

「まずは俺、ブハラ指定する料理を作ってもらい——」

「そこで合格した者だけがあたし、メンチの指定する料理を作れるってわけよ。つまり、あたし達2人が美味しいと言えば晴れて二次試験合格! 試験はあたし達が満腹になった時点で終了よ」

メンチの説明に全員が険しい顔をする。

ブハラはともかく、メンチは人並みにしか食べられそうにない。メニューによつては10人以下にまで減る可能性がある。

その事実を受験生達の緊張感も高まっていく。

「俺が指名するメニューは……『豚の丸焼き』!! 俺の好物!!」

告げられた料理名にどよめく受験者達。

ラミナは何故その料理なのかを必死に考察する。

「森林公園に生息する豚なら、種類は自由だよ」

(……わざわざ二次試験にしたつちゆうことは……その豚が厄介もんと考えるべきか。問題は豚の生息場所が厄介なんか、豚そのものが厄介なんか……)

ラミナはそう考えて、対策を考える。

「それじゃあ、二次試験スタート!!」

開始と同時に一斉に森に向かって走り出す。

レオリオは頬の腫れなど忘れたかのように笑みを浮かべて走っている。

「いやー、正直ホツとしたぜ!! 簡単なメニューだよ!」

「豚捕まえて焼くだけだもんね」

「しかし、早く捕まえねば。あの体格とはいえ食べる量には限界があるはずだ」

「まあ、そう簡単に捕まえられるんか分からんけどな」

「豚だぜ? 楽勝だろ!」

「そう言った結果が200人以上脱落した一次試験やけどな」

「……」

レオリオは笑っていた頬が引きつる。

「あの一次試験の次がこれか？ しかも美食ハンターが出すお題で？  
ある程度の厄介さは覚悟しとくべきやで。ここはあの湿原の傍やしな」

「そうだな。食べる数に限界がある料理ということは、それだけ料理  
が作ることが出来ない可能性がある」

「マジかよ……」

「とりあえず豚を見つけないと！ 話はそれからだよ！」

「まあ、そらそうや」

ラミナ達は再び走り回って、豚を探す。

こればかりは暗殺者だろうが、野生児だろうが地道に探すしかない。  
い。

そして、

「あ」

「げ!?!」

ゴンが小さく声を上げて、レオリオは顔を引きつかせる。

坂を滑り降りたところに豚の群れはいた。

体長3mほどの巨大な豚。鼻は大きく、先が角のように飛び出ている。  
口元には牙が見えており、獰猛さが窺える。

グレイトスタンプ。世界一凶暴な豚と言われ、巨大な鼻で獲物を押し潰して食らうビスカ森林公園唯一の豚である。

レオリオの声で、グレイトスタンプ達がギラン！と睨みつけてきた。

「ドアホ」

「う、うるせえ!!」

『ブオオオオオオオ!!』

「うおおお!?!」

ラミナがジト目でツツコミ、レオリオが言い返すとグレイトスタンプ達が一斉に叫んで猛烈な勢いで突進を仕掛けてきた。

ラミナ達は跳び上がって躲し、その真下をグレイトスタンプ達が地面を抉りながら突撃する。

その隙を狙ってゴンが釣り竿をグレイトスタンプの額に叩き込み、

ラミナはズボンのポケットからベンズナイフを取り出し、額に投擲して突き刺す。

2体のグレイトスタンプは倒れて動きを止める。

その様子を見たクラピカとレオリオもグレイトスタンプの倒し方を把握する。

「こいつら、頭部が弱点か！」

「巨大で硬い鼻は脆い額をガードするための進化というわけだ」

（つちゆうか、ここまでデカいと額くらいしか手ごろな急所がないんやけどな）

グレイトスタンプが死んでいることを確かめて、ナイフを抜いてポケットに仕舞う。

クラピカやレオリオも見事にグレイトスタンプを倒すと、鳴き声や音にひかれてキルアや忍など他の受験者も現れた。

「おく、でっけー豚」

「こいつなら試験官も満足できそうだな！」

「キルア！ 額が弱点だよ！」

「サンキュー」

ゴンがキルアに向かって弱点を伝えるが、もちろん他の受験者にもバツチリ届く。

ラミナは呆れながらグレイトスタンプを抱え、会場に戻る。

ゴン達も後に続き、手頃な広い所で調理を始める。

と言っても、丸焼きなのでほとんど手間はかからない。

なので、数十分後には、ブハラの前に大量の豚の丸焼きが積み重ねられるのであった。

「うひゃ〜！」

「あらま、大漁なこと。ちよつと舐めてたわ」

メンチは目を開いて、積み重ねられた豚の丸焼きを見上げる。

ブハラはもう我慢出来ないとはかりに早速1頭目に齧り付き、あつという間に骨だけになる。

ガツガツ。

「うん、美味しい美味しい」

ムシヤムシヤ。

「お。これも美味しい」

ボリボリ。

「これも美味」

と、全く勢い劣ることなく食べ続け、なんと用意された豚の丸焼き70頭全て食べ切った。

最後の1頭が骨に変わり、ブハラが遠慮なくゲップをして満足そうに服がはだけるほど膨れ上がった腹を撫でる。

「あく、食った食った。もうお腹いっぱい」

メンチがいつの間にか横に置いていた銅鑼をおもいつき叩く。

「しゅりょー！」

受験者達は本当に70頭全て食べ切ったブハラの胃袋に慄くか、呆れるしか出来なかった。

ラミナはもちろんただ呆れていたが。クラピカは明らかに食べた体積の方が多いことに真剣に悩んでいたが、人間の体の神秘にツッコむだけ無駄だとラミナは思っていた。

それはメンチも同様だったようで、呆れたようにブハラを見上げる。

「あんだねー、結局食べた豚全部美味しかったって言うの？ 審査になんないじゃないのよ」

「まー、いいじゃん。それなりに人数は絞れたし。細かい味を審査する試験じゃないしさー」

「甘いわねー、あんだ。美食ハンターたる者、自分の味覚には正直に生きなきゃだめよ。まあ、仕方ないわね」

メンチは再び銅鑼を鳴らす。

「豚の丸焼き料理審査！ 70名が通過！！ で、次はあたしの試験よ！」

どんな料理名を告げられるのかと受験生達はゴクリと唾をのむ。

今回はブハラと違って、作った料理全て食べられるとは思えない。つまり、早い者勝ちになる可能性が高い。

そして何より、今さつき言った「自分の味覚には正直に」という言

葉がラミナに嫌な予感を持たせる。

(ああいうタイプって頑固つちゆうかプライド高いんよなく。適当な味付けは駄目そうやな)

ちなみにラミナは料理が苦手というわけではない。

流星街にいた頃はマチに「ラミナ、お腹減った」と言われて、よく作っていた。仕事を始めてからは滅多にしなくなってしまったが。それでも時々マチ達と会ったときは料理をすることもあった。

しかし、美食ハンターを認めさせられる料理は出来ない。

(けど、厄介な食材集めは今したしなあ。そうなると次は食材がメインではないやろな)

そう推測したラミナはややうんざりしながら、メンチの言葉を待つ。

「あたしはブハラと違って辛党よ！ 審査も厳しくいくわよー。じゃあ、二次試験後半、あたしのメニューは……『スシ』よ!!」

告げられた料理名に受験者達は本日何度目かの困惑を露わにする。困惑する理由の多くは、初めて聞く料理名に想像が出来ないからだ。

想像出来ない料理を作るのは難しいなんてレベルではない。

「ふふん♪ 大分困ってるわね。ま、知らないのも無理ないわ。小さな島国の民族料理だからね」

ラミナは妙にスシと言う響きに覚えがあり、必死に記憶を探る。

「ヒントは建物の中の調理場よ！ 最低限必要な道具と材料は揃えてあるし、スシに必要なゴハンはこちらで用意してあげたわ」

メンチは説明を続けながら、建物の中に入る。

ラミナ達も後に続き、調理場を確認する。

「そして、最大のヒント!! スシはスシでも、ニギリズシしか認めないわよ!! あたしがお腹いっぱいになるまでなら、何個作って来てもいいわよー!」

(ああ……ノブナガの好物か)

ニギリズシという名前で、ラミナはようやく思い出した。

幻影旅団の1人、ノブナガと殺しの仕事をした後に店に連れて行か

れたことがあったのだ。

『これは俺のジジイの生まれ故郷の料理なんだよ』

『生魚とコメって合うんか?』

『バツキヤロー! まず食ってからいいやがれ!』

『生魚って臭いから、あんまり好きぢやうんやけどなあ』

『だから食ってみろって! すげえぞ? 職人のスシってえのは!

真似したことがあるんだけどよ、シャリつつうコメの堅さとかワサビの量、魚の切り方とか結構難しくてよお。思ってたより奥深えんだよ!』

と、ジャポン酒という酒を飲みながら、上機嫌に語っていた。

ラミナも食べてみたが確かに美味しかった。

ノブナガが店の大将を褒めちぎって、詳しい手法を聞き出していたことも思い出した。

(……確かスシに使う魚って海水魚がええんやなかったか? 川魚は寄生虫が多くて生には向かんとかなんとか……)

ラミナは目の前の料理場に目を向ける。

水道や包丁、ワサビに簡単な調味料はあるがコンロはない。

どうすべきか考えている時、

「魚あ!? お前、ここは森の中だぜ!」

「声がデカい!!」

レオリオとクラピカの声が響き渡った。

その瞬間、受験生達が外に走り出していく。

「……あんの阿呆。何回目の大声や」

ラミナは眉間に皺を寄せながらも魚を獲りに歩き出す。

しかし、その前にメンチに近寄って声を掛ける。

「ちよつとええか?」

「ん? なに? 他の連中はもう行っちゃったわよ」

「まあ、それはすぐに追いつくからええわ。で、聞きたいんやけど、火を使うんは構わへんか?」

「……ふうくん。いいわよ、別に。ちゃんとスシになってるなら、どんな調理をしようが文句は言わないわよ」

「おおきに」

ラミナは礼を言って、魚を獲りに向かう。

メンチはその後ろ姿を見送りながら、笑みを浮かべる。

「面白い事聞いてきたわね。もしかしたら知ってるのかもね」

「ニギリズシって焼き魚あつたっけ？」

「焼き魚って言うか炙りのネタならあるわ。けど、そうなると魚の味とかが変わるから、更に工夫がいるけどね。もしくは煮るのかもね。淡水魚をスシネタに使うなら一番最初に考えるべき方法ね」

「なるほど」

「399番、だったわね。期待しとこうかしらね♪」

メンチはペロリと唇を舐める。

(……大丈夫かなあ？ 食べる側に回ったメンチは妥協しないことが多いからな)

ブハラはメンチのウキウキした様子を見て不安を覚え始めていた。

30分ほどすると徐々に受験者達が戻り始め、調理を始める。

と言っても、ニギリズシの形が分からないので、どう捌いていいかわからずに魚を睨みつけることしか出来ない。

「悩んでるわね」

「そりやそうだと思うよ？」

「ヒントは十分出してるじゃない」

「まあ、そうだけだよ」

メンチの言うヒントとは自分の目の前に置かれているテーブルである。

テーブルの上には茶色の液体が入った小皿と箸が置かれている。

これらと『ニギリズシ』、『個』という言い方、そして用意された調味料や調理器具を合わせれば、何となくの形は見えてくるはずだとメンチは思っていた。

しかし、

「出来たぜ！ 俺が完成第一号だ！」

と、意気揚々と持ってきたレオリオが持ってきたのは、生きた魚をそのまま酢飯で固めただけのものだった。



もちろんメンチは放り投げて、レオリオを追い返す。

その後も数人、似たような料理が続いた。

「もく……まだ一つも食べれてないわよ！ あたしを餓死させる気！？  
色々ヒントあげてるのに」

と、不満を露わにする。

その時、ようやくラミナが戻ってきた。

メンチとブハラが目を向けると、ラミナは右手に5匹ほどの大きめな魚が、そして左手には果物と思われる木の実が握られていた。

「……へえ」

「……ふくん」

2人はラミナが握る果物を見て、楽し気に声を上げる。

ラミナは調理場に戻ると、2匹の魚を素早く三枚におろして切り身を水で洗い匂いを嗅ぐ。

(……やっぱ生臭いなあ)

切った魚は白身と赤身だった。

ラミナはため息を吐いて、魚を素早く全て捌き、ボウルに水を注いで外に出る。

そして火を起こし、ボウルを火にかけてお湯を沸かす。沸騰するまですではなく、指をつけて風呂より少し熱いくらいのところで火から外してサツと切り身を湯に通す。

匂いがしなくなったことを確認して、白身の1つをナイフに刺して炙る。

そこにゴンが顔を覗かせる。

「ねえ、なにしてるの？」

「ん？ 何って下ごしらえに決まってるやろ」

「お湯に通すのが？」

「生臭さを消すためのもんや。普通なら丸焼きが手っ取り早いんやけどなあ。ニギリズシには難しそうやし」

「ラミナはニギリズシってどんなのか知ってるの？」

「そこは自分で考えなあかんのちゃうか？」

「そっかあ……」

ゴンはがっくりして調理場に戻る。

ラミナも炙るのを終えて調理場に戻って、果物の皮を薄く切ったり、果汁を絞って、薄く切り分けた切り身と合わせて試食していく。色々な組み合わせを試していると、

「スシつてのはメシを一口大の長方形に握って、その上にワサビと魚の切り身を乗せるだけのお手軽料理だろーが!! こんなもん誰が作ったって大差ねーべ!!」

忍が思いつきり調理方法を叫びながらバラし、更には審査基準に思いつきりケチをつける。

その瞬間、メンチの目つきが恐ろしく鋭くなり、雰囲気も変わる。そして、忍の胸倉を掴み、

「ぎげんな、テメー!! 鮓をまともに握れるようになるまでは10年の修行はかかるって言われてんだ!! 貴様ら素人がいくら形だけマネたって天と地ほどの差があるんだよ、ボケエ!!」

「な……だ、だったら、んなもん試験科目にすんなよ」

「つせーよ、ハゲ! 殺すぞ!! お!? あ!? 言つてんだろーが、美味しいって言わせろつてな!! つまり知つてようが、その努力が見られなかったら美味しいわけねーだろ!! 料理舐めんよ、テメー!!」

メンチの勢いに忍は完全に呑まれて黙り込み、他の受験者は聞こえた調理法を実践するのに集中していた。

ラミナはシャリの握り具合を試しながら、呆れていた。

(あくあ……色々と余計な事口走りよつてからに……。忍つてあんな大声を出す阿呆ばつかなんか? もしかして追い出されたクチか? それにしても、あの怒り様やと、妥協したモンなんざ出せそうにないなあ……)

ブハラも止める気配はない。

忍への説教が終わると、怒涛のように受験者達が料理をメンチの元に持つて行く。

しかし、メンチはそれらを『握りが強すぎる』『切り方が悪い』『シャリの形がおかしい』『ゆっくり握り過ぎ』と流石に厳し過ぎる評価を続け、受験者達を追い返す。

ブハラも流石に厳しすぎると注意したが、メンチは聞く耳を持つことはなかった。

その結果、

「ふうく……わり!! お腹いっぱいになっちった!」

と、言い放ったのである。

受験者達は啞然と固まっており、ブハラは額に手を当ててため息を吐いている。

そこに、

「悪いんやけど、後1個だけ食うてんか?」

皿を持ったラミナがメンチの前に立つ。

「あら、やっと来たわね。随分時間かかったじゃない」

「どつかの連中のせいで、あんたを納得させれそうなモンのハードルが跳ね上がったでな」

「ホントよね。あのハゲ!」

(あんたもや)

(メンチのせいだと思っけど)

ラミナとブハラの思いが一致したところで、蓋を被せたまま皿をメンチの前に置く。

「まあ、食べるかどうかは見てから決めてくれてかまへんわ」

そう言つて蓋を開ける。

皿の上にちよこんと乗っているのは、炙られた白身の上に黄色い果物の皮を細かく削ったモノを乗せたニギリズシだった。

「……ふうくん。見た目はいいわね」

「どうも」

「結局炙った魚を使ったのね」

「生やと微妙に歯応えが悪うてなあ。炙った方がまだマシやねん」

「この上に乗ってるのは……」

「柑橘系の果物の皮やな。やっぱ微妙に生臭さを感じたんでな。誤魔化しや誤魔化し」

「はつきり言うわね。これ、醤油でいいの?」

「かまへんで。少し塩もかけとるけどな」

「そっ」

メンチはラミナから話を聞くと、一切ごねる事なく箸でスシを掴み、醤油につけて口に運ぶ。

それにブハラやレオリオ達は僅かに目を見開き、ラミナは腕を組んで採点を待つ。

メンチは目を閉じて味わっている。そしてゆっくりと飲み込み、湯呑に手を伸ばしてズズズと飲んで一息つく。

「ふう〜……」

『……ゴク』

ブハラやゴン達も緊張して唾を飲み込む。

「どや?」

「……うん。まあ、まだまだツツコミどころはあるけど、ここまで出来れば十分でしょ。399番、合格よ!!」

『!!』

「ふう……おおきに」

あの頑固なメンチがあっさり認めたことにラミナ以外の全員が驚き、ラミナはホツと息を吐いて礼を言う。

しかし、他の受験者達はやはり納得出来なかった。

「な、なんでそいつは一発オツケーなんだよ!?!」

「そうだぜ! そいつと俺達の何が違うって言うんだ!!」

「……はあく〜。ホンツツツトに料理が分かんない連中ね!」

メンチは盛大にため息を吐いて立ち上がり、ラミナが調理をしていた場所に向かう。

そして、米桶を持ち上げる。

「これ、見てみなさい」

開始時たつぷり入っていた酢飯は茶碗1杯分ほどしか残っていないかった。

「後は……ここらへんね」

次に示されたのは調味料が入っている瓶と魚の骨が入っている捨て箱、そしてまな板の上に乗っている数枚の切り身。

それを示されたレオリオや忍達は訝しむように眉間に皺を寄せる。

メンチが見た限りでは、意味を理解したのはクラピカとブハラくらいだった。

「それがなんだってんだよ……?」

「消費が合わないんだ」

「消費?」

レオリオはクラピカに顔を向ける。もちろん他の者達も。

「ラミナは私が見ている限り、さっきの一皿以外一度も試験官に料理を出していない。それなのにあのコメや調味料の減りはおかしい。少なくともスシを数十個握らないといけないはずだ」

「数十個?! おいおい、冗談言うなよ、クラピカ! お前が今、ラミナは1回しか料理を出していないって言ったじゃねえか!」

「そうだ。つまり、考えられる答えは1つ。あの一皿を出すまでに、何度も試作と試食を繰り返した。それだけだ」

「はあ!」

「その通りよ」

クラピカの考察にメンチが頷く。

「399番はシャリの堅さを何度も練習してたのよ。まずはシャリだけで、その次に切り身も乗せてね。スシネタによってベストなシャリの堅さは微妙に変わるものよ。それに魚の切り方や味付けの組み合わせも合わせて、最後の一皿を出すまでに試行錯誤を繰り返したの」

調味料の減りが多いのも、5匹分の魚の骨に比べて切り身の数がスシネタサイズで8枚ほどしかないのも、果物が半分しか残ってないのも、ずっと作っては食べて作っては食べてを繰り返していたからだっただ。

「分かる? どっかの舐めたハゲや偶然聞いた方法をそのまま試しただけの連中とは姿勢から違うのよ。注意力や観察力を見るとか以前の問題ってこと! だから、多少荒があっても合格なのよ」

メンチはソファに戻って座る。

「ということ、二次試験後半の合格者は1名のみ!! これは変わらないわ!!」

メンチの声が響き渡った会場は異様な空気に包まれる。

ラミナはそれのため息を吐いて、事態が落ち着くのを待つことしか出来なかった。

## #9 オジイチャン×ハ×カイチヨウ

なんと二次試験合格者はラミナー1人という結果となり、会場は異様な空気に包まれる。

そんな中で審査委員会に報告の連絡を入れているメンチの声が響き渡っている。

「だからあ仕方ないでしょ、そうなっちゃったんだから！ ……いやよ！ 結果は結果！ やり直さないわ！」

どうやら審査委員会からも問題ありと判断されたようだが、メンチは全く意思を変えようとしない。

（審査委員会に雇われた身なんやから領こうや。正直、ヒソカやら針男やらの殺気がどんどん強なってきた、めっちゃここから離れたいんやけど……。他の連中も殺気立ってきとるし）

ラミナは徐々に笑みを深めていくヒソカの気配に眉を顰める。針男からも禍々しいオーラを感じて、誰かが動けばそれに乗じる気配がビンビンである。

「報告してた審査規定と違うって？ なんで!? 始めから私が美味しいうって言ったら合格にするって話になってたでしょ？」

「メンチ。それは建前で、審査はあくまでヒントを逃さない注意力と——」

「あんたは黙ってな!!」

流石にブハラが注意しようとしたが、メンチは怒鳴って黙らせる。

サラツと凄いことを言ったことにラミナは更に眉間に皺が寄る。

（審査委員会と試験官の審査基準に差異があったんかい。思いつきり私情で動いとるやないか、この姉ちゃん……）

「こつちにも事情があんのよ！ 受験生の中にたまたま料理法知ってる奴がいてさく！ そのバカハゲが他の連中に作り方バラしちゃったのよ！」

「ぐ……」

「とにかく、あたしの結論は変わらないわ！ ちゃんと合格者も出る以上、この二次試験は合格者は1人よ!!」

メンチはまくし立てるように言い切ると、通話を切つて電源も切る。

携帯を投げ捨てる、足を組んで両手をソファの後ろに回して「ふん！」と不機嫌そうにする。

ブハラとラミナはそれにため息を吐く。

レオリオ達不合格者とされた者達は徐々にざわめきが大きくなり、殺気立ち始める。

「マジかよ……」

「まさかこれで本当に試験終了かよ？」

「冗談じゃねえぞ……!」

(やろうなあ。うちかて調理法知つとつたから出来ただけやしなあ)

ラミナも受験生の気持ちがよく分かる。

流星に理不尽が過ぎる気がする、不満が噴出するのは当然だと思っている。自分が合格してしまったせいと言うのもあり、尚更居心地が悪い。

ドオオオン!!

その時、何かが砕ける音が響き、目を向けると恰幅の良いレスラーの男が苛立ちを露わにして拳を握り締めていた。その目の前には大きくひしゃげたシンクが見受けられ、先ほどの音は彼が拳を叩きつけた音だったようだ。

「納得いかねえな。とても『はい、そうですか』と帰る気にはなれねえな」

男は青筋を浮かべてメンチを睨みつける。

「俺が目指しているのはコックでもグルメでもねえ！ ハンターだ！ しかも賞金首ハンター志望だぜ！ 美食ハンター如きに合否を決められたくねえな!!」

「それは残念だったわね」

「……何い!？」

「今年は試験官運がなかっただけよ。また来年頑張れば？」

メンチは涼しい顔で男に言い放つ。

それに男は我慢の限界を迎え、拳を更に握り締めて殴りかかろうと



する。

「……ふぎけんじや——!!」

その男の目の前をスローイングナイフが2本横切った。

男はギリギリで足を止める。スローイングナイフは壁に突き刺さって止まる。

男が飛んで来た方向に目を向けようとした時、

ブウオオン!!

男の目の前を巨大な手が猛烈な勢いで通過した。巻き起こされた突風で男は尻餅をつき、近くにいた受験生達も風に煽られて耐える。

「っ?!?」

「お?」

「……ちよつと399番。何の真似?」

男は何が起こったのか理解出来ず、手を振り抜いたブハラは空振りしたことに僅かに目を見開き、メンチは鋭い目つきでラミナを睨みつける。

ラミナは肩を竦める。

「いやあ、流石にこれ以上打ちのめされるんは可哀想やと思てなあ。それに姉さん殺す気やったやろ? やから、そっちの兄さんがブツ飛ばそうとしたんやろうけど、それも十分重傷になりそうやったでな」  
(それにヒソカが動きそうやったし)

「おー」

「……ふん。まーね」

メンチはソファから立ち上がる。その両手には四振りの包丁が握られていた。

男はメンチの武器に目を見開く。

「賞金首ハンター? 笑わせるわ! 今のナイフとブハラは張り手も見切れず、あたしの殺気にも気づかないくせに。どのハンター目指すなんて関係ないのよ。ハンターたる者、誰だって武術の心得があつて当然!!」

メンチはジャグリングをして、包丁の扱いになれている様子を見せる。

「あたしすらも食材探して猛獣の巣の中に入るのだって珍しくはないし、密猟者を見つければもちろん戦って捕らえるわ。その中には賞金首の奴だっている!! 武芸なんてハンターやったら嫌でも身につくのよ! あたしが知りたいのは、未知のモノに挑戦する気概なのよ!!」

メンチの気迫に男は肩を震わせる。

その時、

『それにしても合格者一人と言うのは、ちとキビシすぎやせんか?』

突如、外から声が響き渡る。

その声に、ラミナ達は外に出て上を見上げる。上空には飛行船が停まっていた。

飛行船の側部にはハンター協会のロゴが描かれていた。

「審査委員会か!？」

すると、飛行船から何かが飛び出してくるのが見えた。その影は徐々に大きくなっていき、それが人であると理解したときにはドォーン!と音を響かせて地面に着地していた。

飛び降りてきたのは白髭を蓄えた和装に高下駄を履いた老人だった。

数十メートル上から飛び降りてきたのにケロリとしており、負傷した様子もない。

(……なんちゆう研ぎ澄まされた【纏】や……。隙だらけやのに、全く殺せる気せえへん……!)

ラミナは目の前の老人の実力が読み切れず、背中にジワリと汗が噴き出してくる。

「な、何者だ? このジイさん……」

「審査委員会のネテロ会長。ハンター試験の最高責任者よ」

受験者の眩きにメンチが答える。

突然の最高責任者の登場に受験者達は、驚きとこの状況が好転するかもしれないという期待が湧く。

「ま、責任者と言っても所詮裏方。こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゃ。さて、メンチくん」

「は、はいー!」

ネテロに声を掛けられて、メンチはピシイ!と背筋を伸ばし気を付けをして返事をする。

流石にメンチもネテロに対してまで強気に出れないようだ。

「未知のものに挑戦する気概を彼らに問うた結果、1人を除いてその態度に問題ありと、つまり不合格と思ったわけかの?」

「……いえ。受験生に料理を軽んじる発言をされてついカツとなり、更にはその際に料理方法が受験生達に知られてしまうトラブルが重なりまして……。頭に血が昇っているうちに腹が一杯にですね……」  
「フムフム。つまり自分でも審査不十分だと分かつとるわけじゃない?」

「……はい。スイマセン。料理のことになると我を忘れるんです。審査員失格ですね。私は審査員を降ります。試験の無効かどうかに関してはお任せします。ただ……合格にした受験生に関しては認めて頂きたいと思います」

「ちなみに何故その1人だけ合格にしたのかの?」

「はい。それは——」

メンチはかしこまった姿勢のまま説明を続ける。

ラミナが魚を確保に行く際から質問してきたこと、魚だけでなく果物を採ってきて工夫しようとする様子が見られたこと、用意した材料を使い切るギリギリまで試行錯誤を繰り返していたことから好印象を抱いており、鮎も素人にしては十分なレベルだったので合格にしたことを語った。

「フム……。なるほどのう。確かにその者の合格は問題なさそうじゃな。よかろう」

「ありがとうございます」

「しかし、選んだメニューの難度が評価するにはお互いに少々高かったようじゃの。よし! こうしよう。審査員は続行してもらおう。ただし、新しいテストにも審査員である君にも実演と言う形で参加して

もらう、というのでいかがかな？」

『!!』

ネテロの提案にメンチや受験生達は僅かに目を見開く。

「その方が受験生達も合否に納得しやすいじゃろ」

「……そうですね。では……『ゆで卵』で」

メンチは新しいメニューを告げる。

そして、遠くに見える岩山を指差す。

「会長、あたし達をあの手まで連れて行ってくれませんか？」

「なるほど。もちろん、いいとも」

ネテロは意味を理解したのか笑みを浮かべて快諾する。

そしてラミナ達受験生は飛行船に乗り込んで、山へと向かう。

山に到着した一同はメンチの案内の元、山の中央を走る崖に歩み寄る。

「やあ、(´▽｀)よ」

メンチは崖下を指差す。

受験生達は下を覗き込んで唾をのむ。

崖の底は見えず、落ちたらそう簡単には助かりそうになかった。

「下は……どうなってんだ？」

先ほどメンチに殴りかかろうとしたレスラー男は青褪めながら下を見る。

メンチはブーツを脱ぎ始める。

「安心なさい。下は深い河よ。流れが速いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど」

そう言いながらメンチは崖際に歩み寄ると、

「それじゃ、お先に」

軽やかにジャンプして、崖へと飛ぶ。

『はあ!? なああああ!』

受験生達が驚く中、メンチは崖下へと落ちて行く。

そこにネテロが口を開く。

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を採りに行ったんじやよ。クモワシは陸の獣から卵を守るために崖の間に丈夫な糸を張り、卵を

吊るしておる。そして、今回の試験はその糸に上手く掴まり、1つだけ卵を採って岩壁をよじ登って戻ってくることじゃ」

そしてメンチが戻ってきて、茶色の殻の卵を受験生達に見せる。

「よつと、この卵でゆで卵を作るのよ」

簡単に言うメンチにレスラー男を始めとする一部の受験者は青褪めて足踏みをする。

しかし、そこに明るい声が響く。

「あー、よかった」

「こういうの待ってたんだよね！」

「走るのやら民族料理よりよっぽど分かりやすくもいいぜ」

キラア、ゴン、レオリオは一切戸惑うことなく崖へと飛ぶ。

クラピカや他の受験者達も続き、どんとんと飛び降りて行く。

ラミナもゆつくりと崖へと歩み寄る。

「あら、あなたはいいのよ？」

「いやあ、それもそれで居心地悪いなあ。ぶっちゃけスシ知ってたから、ちよつとズルした感じしとつてん。まあ、簡単そうやから行ってくるわ」

「ま、好きにしなさい」

「はいな」

ラミナもトン！と飛び降りて行く。

メンチはレスラー男達に顔を向けて声を掛ける。

「残りは？ ギブアップ？」

「……」

「やめるのも勇気じゃ。試験は今年だけではないからの」

ネテロはギブアップすることを肯定し、結果ラミナが最後の挑戦者となった。

崖を登り終えた受験者達は卵を用意してくれたお湯に入れて茹でる。

クモワシのゆで卵はとても濃厚で味付けもしていないのに、それだけで立派な料理として成立するほどの美味さだったそうなの。

「それじゃ!! 二次試験合格者は42名!!」

こうして今度は後腐れなく、合否が決定したのだった。

合格した42名は再び飛行船に乗って移動する。

その頃には夜になっていた。

「次の目的地は明日の朝8時に到着予定です。こちらから連絡するまでは各自自由に時間をお使いください」

番号プレートを配っていた豆顔の男の言葉に、受験生達は解散し飛行船内を移動する。

レオリオとクラピカは漸くの休息時間に一気に疲れが襲ってきた。

「俺はとにかくぐっすり寝てえぜ……」

「私もだ。恐ろしく長い1日だった……」

「ゴン！ 飛行船の中、探検しようぜ!!」

「うん！」

「元氣やな」

「お前もな」

キルアとゴンはテンション高く走り出し、その後ろ姿をラミナは呆れながら見送る。しかし、全く疲れていない様子のラミナにもレオリオは理不尽を感じてツッコむ。

ラミナは肩を竦めるだけで答える。

裏の仕事をしていると数日寝れないことなど珍しくないし、今回は激しく動き回っていたわけでもないので体力を消費する前に回復していただけのことだ。

調理中や山に行く間は【絶】で過ごしていたので、体力回復も早かったのもある。

「うちはメシ食うてくるわ」

「あく……俺も先になんか腹に詰めとくか」

「そうだな。朝に食べられるか分からない」

レオリオとクラピカも食堂に移動する。

そして、料理を頼んだのだが……。

「ラミナ……お前って大食いなんだな……」

「ブハラと言う試験官といい、お前達の胃はどういう構造をしているんだ？」

「ん？ ふおうは？」

ラミナの前にはステーキ、ピラフ、ローストビーフ、カルパッチョ、サラダの盛り合わせ、スパゲティなどが置かれている。

それらが一定のスピードで消費されていく。

レオリオとクラピカはもちろん、周囲にいた受験者達も唾然と見つめていた。

ラミナからすれば、今後いつ食べられるか分からないので食い溜めしておきたいだけだ。もちろん本当に腹が減らないわけではないが、『腹いっぱい以上に食べた』という事実を実行することで、数日間満足に食べられなくても大丈夫という自己暗示をかけるのだ。

もちろん限界はあるが、それでも3日ぐらいは意外といけるとラミナは実体験で理解している。

「……やっぱハンターってどつか異常なところがねえと厳しい世界なんだな」

「全くだな」

常人枠にいるつもりなのにレオリオとクラピカの言葉に首を傾げながら、ラミナは食事を続けるのだった。

その頃、試験官達も食事をしながら盛り上がっていた。

「ねえ、今年は何人くらい残ると思う？」

「合格者ってこと？」

「そ。中々の粒ぞろいだとは思うのよね。料理はセンスがない連中ばっかだったけど」

「でも、それはこれからの試験内容次第じゃない？」

「そりやまあ、そうだけど。それでも結構いいオーラ出してた奴いたじゃない？ 念って意味じゃなくてさ。サトツさんはどお？」

「ふむ。そうですね……。ルーキーがいいですね、今年は」

「あ、やっぱリー！」

メンチは我が意を得たりとばかりにテンションを上げる。

「私は399番と294番がいいと思うのよね。片方ハゲだけど」

（スシを知ってたからね。まあ、399番は確かに分かるけど）

「私は断然99番ですな」

「えー!? あいつ、きつとわがままでナマイキよ！ 絶対B型！ 一

緒に住めないわ！」

（似てるもんね）

ブハラは料理を食べながら内心で呆れる。

「私も399番は注目してます。しかし、彼女はすでに念を使えるようですから、ルーキーと呼ぶには少し特殊と思いますね」

「あ〜……そういうことか」

もちろんメンチとブハラも、ラミナやヒソカ達の【纏】には気づいていた。

「正直、念に関してはあたしより上かもね。あのナイフ投げからすれば賞金稼ぎか、殺し屋ってところね」

「殺し屋だと思えますね。足音を全くさせませんでしたから」

「ふくん……。けど、偏屈そうじゃなさそうだし、合格したら仕事一緒にしてもいいかもね。即戦力だし」

メンチは随分とラミナを気に入ったようだ。

あの時レスラー男を止めた手腕も気に入ったのだろうとブハラは推測する。

その後はサトツが少しずつ説教にシフトして、再びメンチが荒れるという出来事があったが、もう受験生に被害が及ぶことはなかった。

食事を終えたラミナは通路を歩いて寢床を探していると、目の前にヒソカが現れて胡散臭い笑みを浮かべて手招きしてきた。

それに全力で顔を顰めるが、無視したらどんなストーカーをされるか分からないので渋々付いて行く。

案内されたのは倉庫と思われる一室で、中にはヒソカの他にもう一人いた。

そのもう一人を視界に捉えたラミナは、更に顔を顰める。



そこにいたのは針男ことギタラクルだった。

口がカタカタと震えており、不気味さしかないその風貌としぐさが得意な人間はいないだろう。

「……なんのつもりや?」

「紹介しておこうと思つてさ♠」

「変装中なんやろ?」

「見せてあげなよ◆ 素顔♥」

「まあ、いいけど」

ええんかい、と内心ツツコんでいると、ギタラクルが顔に刺さった針を全て抜いていく。

抜き終わった直後、ギタラクルの顔が変形を始め、髪が急激に伸びて色が変わっていく。その様子をラミナは全力で引きながら見つめている。

変形が終わったのか、ギタラクルは長い黒髪の端麗な男となつていた。

(……見た目は普通っぽいのに、不気味さはこっちの方が上やな。あんま関わりたあないんやけどなあ)

感じるオーラの禍々しさはヒソカに勝るとも劣らない。

殺し屋としては一流なのだろうが、流儀は合わなさそうだと直感的に理解した。

「ふう。すつきりした」

「名前も偽名か?」

「そうだよ。本名はイルミ・ゾルディック」

「ゾルディック? キルアの兄貴か親戚か?」

「兄だよ。で、そっちは?」

「【リップパー】で通じるか?」

「リップパー……。ああ、親父達が逃したつて言う女暗殺者か。へえ、君が……」

「逃げてへん。旅団メンバーに依頼者始末してもらただけや」

「でも、一度は逃げたつて聞いたよ? それだけでも十分凄いや」

淡々と語るイルミ。まったく表情が動かないのが不気味さを煽る。

間違いない暗殺者の性なのだろうが。

思考が読みにくく、ラミナは警戒が解けずに落ち着かない。

「弟と全く似てへんな。で、変装してハンター試験受けたんは弟がおるからか？」

「俺は母親似で、キルは父親似だからね。いや、それは偶然。仕事の関係で必要でき。変装はそうだね。まあ、あんまり顔バレしたくもないつてもあるけど」

「ふうん。で？　なんで会わせたんや？」

「ただの交流さ♥　同じ穴の貉のね◆　共通点も多いし♠」

「共通点？」

「彼女は旅団と親しいのさ♣　僕以外のメンバーとね◆　で、君と同じく凄腕の殺し屋♥」

全く嬉しくない共通点で同類扱いされたことにラミナは全力で否定したかったが、悔しいことに間違っていないので耐えるしかなかった。

「へえ、面白いね。ところでキルと話してたけど……」

「あん？」

「キルのこと、どう思う？」

「ん〜……才能は恐ろしいと思うで？　あの歳で一流レベルなんは凄いなと思うわ」

「だろ？　俺達家族もそう思ってる。けど、精神面がまだ不安定なんだよね。だからさ、遊んでないで家に戻って欲しいんだ」

「念を教えないんもそれか？」

「そ。無駄に才能とスペックが高いからね。今の状態じゃ変な力にしそうだし」

「まあ、そこらへんは家庭の事情やし、かまへんけど。別にハンター証くらい取らせてええんちゃうか？　自分かて仕事で取りに来とるんやろ？　キルアかて必要になったら二度手間やろ。キルアだけあかん理由ないんちゃうか？　ハンター証取ったからって、別にハンターの仕事せないかんわけやないし」

「けど、別に今じゃなくてもいい。まだ一人前とは言い難いから、ちや

んと完成してからでもいいとも思うんだ」

きつぱりと言いつ切るイルミに、ラミナは何とも言えなくなる。

他者から見れば異常な価値観ではあるが、暗殺家系からすれば別に珍しくない価値観である。

そして、時々現れるのだ。キルアのようにその価値観から逃れようとする才能豊かな者が。

その場合、大抵衰退か躍進かのどちらかに家は傾く。

あの父親からすれば逃したくない逸材だろう。

「それにあの子供と仲が良いのも困るんだよね」

「ゴンのことか？」

「そう。暗殺者に友達はいらないだろう？」

「相手次第としか言えんわ。仕事の時に割り切れれば、別におつてもええやろ」

そう言うラミナも流星街や旅団以外とは非常にドライな関係である。

流星街の者でも全員と顔見知りなわけではないし、顔見知りであっても互いのポリシーがぶつかり合えば殺し合うこともある。

「それが出来るなら、こんな話してないよ」

「せやろな」

ラミナは肩を竦める。

ヒソカにとっては今のままでも、暗殺者となっても、戦えば面白そうだから口を挟まない。

「まあ、人の家庭に口を挟む気はないで。暗殺の流儀はそれぞれやからな」

(正直……キルアに殺し屋は向かん気いもするけどなあ)

そう思ったがイルミに通じるわけもないと思っただけなので黙っておく。

「そう言えば、ヒソカ。ゴンの近くにおる金髪の奴には気い付けや」と言うのと？」

「クルタ族の生き残りらしいわ。まあ、お前はそんな時は旅団におらんかったやろうけど。復讐する気満々やから、巻き込まれんようにしい

や」

「ふうん ◆ クルタ族、ね♥」

「……変なこと考えんなや？」

「はいはい ♠」

「はあ……もう行くで」

「あ、これ。俺の依頼用のホームコード」

イルミが名刺を投げ渡す。

ラミナは受け取る。

「悪いけど、うちは名刺ないねん。後でこつちから送るわ」

「構わないよ。流石に試験中は連絡しないだろうし」

「ほな」

「ばいばい ♠」

ラミナは倉庫を後にして、素早く離れると小さくため息を吐く。

「類は友を呼ぶって奴か？ あのと2人、並べられると心臓に悪いわ……」

時計は既に12時を過ぎてている。

寝床を探そうと思っていると、何やら上半身裸で汗だくのキルアが歩いてきた。

汗だくなのも不思議だが、纏っている空気もかなり物騒なものだった。

ラミナは嫌な予感がして後をつけると、キルアが受験生2人とぶつかる。

その瞬間、キルアの手が鋭く変化したのを見て、ラミナはキルアに一瞬殺気を飛ばす。

「っ!!!」

キルアはぶつかかった2人から跳ねるように離れて、ラミナに向く。

2人はキルアとラミナの一触即発の雰囲気を感じ取って、顔を青くして足早に逃げていく。

ラミナは2人が離れたのを確認して、キルアに声を掛ける。

「ったく……。何があったんか知らんけど、あんま不必要な殺しはお勧めせえへんぞ？ 殺し屋と殺人鬼は紙一重とはいえ、混同したらホンマ戻れんようになるで」

「……そう……だな」

「ゴンはどうしたんや？ 探検しとったんちゃうんか？」

「今は会長の爺さんとボール遊びしてる」

「会長とボール遊びい？」

何がどうなっただらそうなるのか分からないが、試験に関係ない所で随分と遊んでいたようだ。

「で、キルアは途中で抜けてきたんか」

「そ。ちよつと実力差が大きすぎてさ。あのまま続けてたら殺したくなりそうだったんだ」

「やからつて、雑魚殺そうとすんなや。危なっかしいやつちやな」

「だよなあ……。あゝ！ やっぱ染み込んじまつてるよ……」

キルアは苛立たし気に唸りながら頭を掻く。

ラミナは苦笑して、キルアに近づいて頭をぐしゃぐしゃと左手で撫でる。

「な、なにすんだよ!？」

「変に誤魔化そうとするから辛いねん。殺しに関わることなら、うちが相手したる。うちも依頼された相手以外は襲われん限り殺さんようにしとるしな。その代わり、もうちよいゴンやらレオリオとかと戯れて遊びや。あいつらなら変な悩みでも聞いてくれるやろ」

「……うっせえよ」

キルアはラミナの手を払い退けて、照れたようにそっぽを向く。

ラミナは歩き出して、ひらひらと手を振る。

「友達は大事にしときや〜」

「……母親かよ……」

キルアはラミナの背中を睨みつけて見送る。

(……なんか妙に頭がすつきりしたな。ゴンの奴、まだやってんのかな?)

キルアは急に思考がクリアになったことに首を傾げ、妙にゴンが何してるのか気になった。

来た道に戻り、先ほどまで暴れていた部屋に戻る。

ラミナはその気配を感じ取りながら、左手に目を向ける。

手のひらの上には、血に濡れた小さな針があつた。キルアの額に妙なオーラを感じたので、素早く引っこ抜いてみた。キルアは撫でられたことに動揺してくれたようで気づかなかつたようだ。

「……こんなもん埋め込まれとつたら、そりや変な歪み方するわな。こりやあ、イルミの奴か？ こりやあすぐにバレるかもしれないなあ。はあ……家庭事情に首突っ込まんつて言うたばつかやなのになあ」

ラミナはため息を吐きながら、針を放り捨てる。

この行為がキルアにどう影響を及ぼすのか、それは誰にも分からない。

## #10 タワー×ヲ×オリヨウ

ラミナは見つけた空いている長椅子に横になって、先ほどのキルアのことを考えていた。

（あの針には念が込められとった。けど、今まで分かんかったんは何でや？ 一次試験の時にもキルアの事は【凝】で見たが、なんも感じなかったのに……）

名乗り合った時に癖で【凝】を使ったが、【纏】を使っているようには見えなかった。しかし【絶】にしても、気配ははつきりと感じていたことから、まだ精孔が開かれていないということになる。

しかし、その時は何も違和感はなかった。なのに、今さっきははつきりと見ることが出来た。

（暗殺の経験があるみたいやし、【死者の念】の可能性はある。けど、あんな頭の真正面に針を入れられて気づかへんのはおかしいわなあ。それにイルミの話の感じからして、念使いを相手にさせるほど無謀なことはさせへんはず）

ということは間違いなくイルミが仕込んだということだ。それも恐らくキルアが物心つく前に。

問題は『何のために？』ということである。

（見つけた時と見つけられなかった時の違いは……殺意を込めた【発】を直前に飛ばした事）

そして、気になったのは殺意を発した時のキルアの異常な反応。

正直、ラミナが飛ばした殺気はそこまで強くはない。キルアなら訓練でもっと嫌な殺気を飛ばされているはず。

（込められた念の内容はともかく。考えられるんは『敵意が込められた念を感知して発動する』ようにされとったちゆうことやな）

【操作系】の能力は基本何かを操る時、かならず何かしらの条件をクリアしなければならぬ。

シャルナークならば『対象の体に針を刺す』が条件だ。

イルミもおそらく同じ系統の使い手だとラミナは推測する。

（オーラに長く浸った物は、即席の物より効果の条件付けの範囲は広

がる。うちのオーラに反応したつちゆうことは、普段のキルアの思考を大きく縛るものではなさそうやな)

先ほどのイルミの話の思い出して考えつくことは、あの針はキルアを『縛る』というよりも『守る』ことに重きを置いていた可能性があるということだった。

(恐らく念使いと敵対した時は『戦わず逃げろ』とでも思考を誘導するもんやろな。後は『俺に逆らうな』とでも刷り込んだか……)

ある程度推測を立てると、改めてやらかしたことに頭を抱える。

(よりによつて、あのイルミの仕込みを……！)

シルバとゼノならば、まだ説得できる可能性がある。しかし、イルミは出来る気がしない。とことん暗殺者の思考をしている相手に普通の取引は通じない。しかし、下手に出れば何をされるか分からない。では、強気に行けばいいかと考えても、間違いなくイルミとならば殺し合いに発展するだろう。

まだイルミの趣味趣向を知らないラミナからすれば、何が取引材料になるか判断できなかつた。

なので、

「……バレた時に考えよか……。寝よ寝よ」

と、開き直って後回しにし、寝ることにしたのだった。

翌朝。

予定時間の8時を過ぎたが、まだ到着する様子はない。

ラミナは首を傾げるが、ゆっくりでできるならいいかと考え直し、連絡があるまで体を休めることにした。

そして、9時半を過ぎた頃に、

『皆さん、大変お待たせいたしました。まもなく目的地に到着です』  
「お。やっとかいな」

椅子から起き上がり、ぐうぐうと伸びをする。

飛行船から降りると、そこはとてつもなく高い石塔の上だった。周囲を見渡すが、階段らしきものは見当たらなかった。



「ここはトリックタワーという塔のてっぺんです。ここが三次試験のスタートとなります。それでは試験官からの伝言をお伝えします」

「ビーンズと言う豆顔男が説明を始める。」

試験官からの伝言と言う言葉に受験生達は聞き漏らすまいと集中する。

『生きて下まで下りてくること。制限時間は72時間』。飛行船が離れたらスタートです」

ビーンズは飛行船に乗り、飛行船がゆっくりと浮かび上がっていく。

それを見送ったラミナは早速周囲を調べようと歩き出した、その時。

「おお？」

突如床が抜けて下に落ちる。

驚きはしたも焦ることなく着地したラミナは立ち上がって、周囲を見る。

しかし、出口のようなものは見当たらず、壁際に看板と何かが置かれている台があった。

近づいて壁に掛けられた看板を見上げると、

『【鎖の道】。君達2人はここからゴールまでの道を、互いに鎖で繋がれた状態で進まねばならない』

台の上には鎖で繋がった手錠が置かれていた。手錠にはタイマーが備え付けられていた。

「……これで片腕を塞いだ状態で行けつちゆうことか」

『その通り』

眩くと、突如部屋に声が響き渡る。

目を向けるとスピーカーがあった。

『このタワーには幾通りものルートが用意されており、それぞれクリア条件が異なるのだ。そこは鎖の道。決して離れられず、互いの協力が必要不可欠だ。ちなみにパートナーが死んでも、もう片方は失格にはならない。それでは健闘を祈る』

放送が終わり、ラミナは小さくため息を吐いて、誰かが来るのを待

っ。

(手錠で繋がれるつちゆうことは戦闘がある場合、かなり厄介やな。出来れば動ける奴がええけど……。ヒソカとイルミは来んといほしいなあ。てか、来るなや)

と、祈りながらも壁にもたれ掛かって待つこと10分。

天井付近の一部が一瞬動いた。

「お……」

誰かこの部屋の隠し扉に気づいたようで、下りてくるか観察する。

数秒、間が空くと隠し扉が開き、影が落ちてきた。

「ふう……さてつと……あ?」

「お前かい……」

現れたのは坊主頭の忍だった。

「お前こそ、なんでここにいんだよつて……出口がないのか? ええ

!? じゃあ、ここは外れか!」

「ちやう。ここは2人揃わんと先に進めへんねん」

ラミナは看板と台を指差す。

忍は看板の文字と手錠を見て、顔を顰める。

「つまり何か? ここから俺達は手錠で繋がったまま、下まで下りるのか?」

「そう言うこつちやな」

「めんどくせえ〜」

「で、おしゃべり忍はどつちの腕がええんや?」

「おしゃべり忍つてなんだよ!? 俺はハンゾーつて名前で、立派な忍だ!!」

ラミナの呼称に抗議するハンゾーを無視して、ラミナは手錠を手に取る。

「で、ハンゾーは利き手が空いとる方がええか? うちは別にどつちでもかまへん」

「無視かよ!? はあ……まあ、俺もどつちでも問題ねえけどよ。それよりもお前さんの名前と武器とか戦い方も教えてくれよ」

「ラミナや。戦い方はお前さんと似たようなもんや。やから、片手が

空いとるなら問題ないわ」

「なるほど。お前もプロか。……なら、ここはお言葉に甘えるか。俺は左手に着ける」

「了解や」

ハンゾーが左前腕に手錠を嵌め、ラミナが右前腕に嵌める。

鎖の長さは40cmほどで、2人は肩を並べて歩く形になる。

すると、壁の一部が動き出して、通路が現れる。

「やれやれ。そう簡単には下に行かせてもらえねえな」

「走るで。一次試験くらいの速さでええか？」

「ああ、問題ない」

2人は軽やかに走り始める。

お互いに足音がほぼせず、もし曲がり角の先に人がいたら、走って来ている者がいるなどと気づかないだろう。

「さて、この先に何があると思う？」

「まあ、十中八九うちの仲違いさせるもんやろ。トラップや1人ずつしか動けへん通路、後は戦闘やな」

「だよな。しかも体力の差が更に足を引つ張りかねえ。お前さんがパートナーでよかつたぜ。そこらへんは心配しなくて済む」

「うちは微妙やなあ。ハンゾーの実力見てへんし」

「俺は上忍だぜ？　そう簡単にやあ足引つ張らねえよ」

（上忍って忍の中やとベテランクラスやっけ？　それにしても念を使えへんのか？）

ハンゾーも僅かにオーラの気配はするが、精孔は開き切っていない。

つまり純粋な体術と技術で力を身に着けて来たということだ。

歴史が長いのであれば念を伝授する術は持ち合わせているはず。

しかし、まだ教えていないということはキルア同様何かしら理由があるのだろうか？　ラミナは推測する。

考えられるのは上忍成り立てで、このハンター試験合格が念を教えるかどうかの試験にもなっている可能性だ。

【発】は己の生き様や精神に左右される。忍ならば、そこを他者に教

えさせる可能性は低いだろう。

ラミナはそう推測して、念については話さないようにしようと思心を決める。

数回分かれ道があったが、話し合うこともなく揃って右に曲がる。常人は左に曲がりやすいという研究もあるが、2人は今までの経験則上右に曲がる方が安全な場合が多いと分かっているからである。

そして、曲がった先にあったのは、部屋の中央に穴が空いており、穴の中で柱が一定間隔で縦20×横10で立ち並んでいる広い部屋。

2人は穴を覗き込む。定番とばかりに底は見えない。

「……どう思う?」

「そらまあ……正解は一通りだけやろな」

「間違えれば真つ逆さまってか?」

「正解でも柱には2人も乗られへんけどな」

柱はどれもヒビが入っており、今にも崩れそうだった。

柱の直径は20cmほどで、柱の間隔は1m以上ある。どう頑張っても人2人は乗れない。

かと言って、背負おうにも手錠により、背負う側は片手が確実に胸の前に来る。

天井にもヒビが入っており、ナイフやワイヤーを刺してもぶら下がった瞬間に抜けそうだった。

つまり、純粋な体術と連携で進まなければならない。

「まあ……」

しかし、ここにいるのは熟練の暗殺者と忍である。  
なので、

「崩れる前に渡っちまえばいいだけけどな」

「崩れる前に渡ればええだけやけどな」

2人は手錠で繋がれた腕を限界まで伸ばして、それぞれ柱を高速で渡っていく。

しかも1本飛ばしで。

柱は僅かに衝撃で揺れるだけで、崩れることはなかった。

2人はなんなく反対側に渡り、喜ぶこともなく再び走り始める。

その様子を見ていた試験官、賞金首ハンター兼刑務所長のリップーは愉快気に笑う。

「くくくつ！ 脱落する可能性が高いと想定したルートだったが、案外簡単に攻略されそうだね」

2人が次に到着したのは闘技場のような部屋だった。

ちなみにスタートからここまで3時間弱が経過しており、残りは68：45：11と表示されている。

2人の目の前には手錠を嵌められた頭巾を被った囚人服を着た集団だった。

「……20人か」

ハンゾーがサツと人数を把握する。

すると、一番先頭にいた巨漢の囚人の手錠が外れ、頭巾を脱ぎ捨てる。

頭巾の下から現れたのは、金髪オールバックに口髭を生やした男。「俺らは審査委員会に雇われたモンだ。お前らはここで俺らと戦ってもらうぜえ。勝負は2対20の乱戦だ。武器はあり。殺しもあるのなんでもありだ。ただし……お前らは俺らを1人殺すごとに3時間の時間を貰うぜ」

「ってことは、全員殺しちゃうと60時間か」

「けど、向こうは殺す気で来よる。面倒なこつちや」

「しかも倒すのに時間をかけちゃうと、ペナルティーが響くな」

「もちろん、お前らは手錠で繋がれたままだ！」

「ハンデありまくりやな」

「どうする？ 受けるか、諦めるか!？」

「やる」

2人は即答する。

それに男は一瞬目を見開くも、すぐに表情を戻す。

男は頷いて、背後にいる囚人達に顔を向ける。

囚人達の手錠が外れ、頭巾を脱ぐ。

全員が男で、腕や首元の肉付きから全員がかなりの武闘派であることが窺えた。

「……自分ら、傭兵か？」

「正確には特殊部隊だけだな。戦争でへましちまってな。殺されはしなかったが、この通りだ」

「ってことは、この試験でなんかあんのか」

「お前らの1時間が俺らの刑期1年だな」

「なるほどな」

ハンゾーが頷いていると、男達はナイフや弓などを装備していく。

「銃は使わへんの？」

「流石にそこまでは認めてもらえねえ」

肩を竦めて答えながら、リーダー格の男は手甲や脚甲を身に着ける。

部下達も同じく装備を整えていく。

「重装備だなオイ」

「はっ！ 銃に比べりや可愛いもんだろうが」

ハンゾーとラミナは呆れながら、準備が終わるのを見つめている。

「で、どう動くんや？」

「そうだな……。めんどくさいから右から順番に倒していくか。弓矢は躲せるだろ？」

「余裕やな。なんやったらナイフでも投げて牽制しとくわ」

「りよーかい」

（……この2人、俺らより手練れか……。くそっ！ せめてどつちかでも雑魚だったらよかつたんだが……）

リーダー格の男は顔を顰めながら、心の中で吐き捨てる。

しかし、

（悪いが、なんでもありって言ったからな。開始の合図なんて出さねえぜ！）

部下達に目配せして、弓を持つ者達は矢を番える。

その時、

「がっ!？」

「ぎゃ!?!」

「うぐ!?!」

「「なっ!?!」」

弓矢を持つ者達の両手にスローイングナイフと十字手裏剣が突き刺さり、手放してしまう。

もちろん投げたのはラミナとハンゾーである。

「騙し打ちするんやったら」

「殺気と目配せはやめときな」

「てめえ!! っ!?!」

リーダー格の男が反撃に出ようとした時、すでに2人は目の前にいた。

「「遅い」」

ラミナは右ローキックを繰り出して男の左膝関節を砕き、ハンゾーは右掌底を男の左こめかみに叩き込む。

リーダー格の男は一瞬で意識を失って倒れる。

ラミナは左手にスローイングナイフを取り出して、部下達の太ももを狙って投擲して動きを阻害する。

奇襲と司令塔が真っ先にやられたことで混乱した元特殊部隊の男達は、1時間と経たずに20名全員が地面に倒れて呻き声を上げるこゝととなった。

「暗殺者と忍相手に『なんでもあり』って、奇襲してくださいって言うてるようなもんだけどな」

「奇襲するにしても弓矢は向いてない思うぞ? せめてナイフの連中が投げるとかで奇襲すんなら分かるけどな。まあ、一番は司令官に依存しすぎなことやけどな」

「軍隊って、俺らみたいな連中とは相性悪いよな」

「やから、需要あんねん。相性良かったら、うちら廃業やで」

「そりやそうか。じゃ! 早めに手当てして貰えよ!」

と、軽い口調で部屋を後にする2人。

もちろん死者は無し。待機することなく、2人は先に進むのだった。

次に2人が出たのは小さくカーブしている坂道の通路だった。

「嫌な予感するわ」

「奇遇だな、俺もだ」

2人が目を向けたのは、頭上にある大きな空洞だった。

「やっぱ、岩が落ちてくるよな?」

「やろうな。まあ、一本道やったし諦めて進もうや」

「はあ、仕方ねえな。罨を踏まないようにしねえとな」

そう言つて2人は通路を歩き出す。

足元に注意しながら10mほど歩くと、

ズツツシイーン!!

と、後方から轟音が響き渡る。

2人は背後を見ると、やはり岩の大玉が出現していた。ゆつくりとこちらに向かつて転がり始めていた。

「やっぱりかよ! けど、俺ら何にも押してねえぞ!」

「そら、モニターしとる試験官が動かしたんやろ」

「ちくしょー!」

「ええから走るで!」

徐々に速度を上げて迫る大玉に2人は出せる限りの全力で走る。

しかし、やはり逃げ道はなく、トドメとばかりに傾斜が大きくなつていく。少しずつだが大玉が2人との距離を詰め始めた。

「くっそー!! 1人なら隅に隠れるとか術はあるんだが!」

「2人やからこそやなあ。そこらへんの奴やったら、あの戦いの後で体力切れを起こして終わりやろうな」

なんだかんだで余裕がある2人。

20分ほど走ると、

「ハンゾー、上や!」

「!!」

ハンゾーは上を見ると、天井に穴が空いていた。

「右壁!」

「おう!」



2人は右壁に方向転換して、同時に壁を蹴って上に跳ぶ。

穴に入り込んで、壁に掴まる2人。真下を大玉が猛スピードで通過して、音は遠ざかっていく。

「ふう〜……やれやれだぜ。それにしても嫌らしい所に穴がありやがる」

「手錠に繋がれた片方が潰されたら道連れやからなあ。まあ、パートナーは死んでもええっちゆうんやから、相手の腕を切り落として逃げる奴らはおるやろうけど……」

「ぜってえこの後2人いなかったら駄目な仕掛けあるだろ」

「そう思うわ」

2人の推測通り、次の道には2人同時に踏まなければ開かない扉があった。

踏む場所が2mも離れていたの、1人ならば開けるのは難しいと思われた。

その後も2人は何だかんだでクリアしていく。

そして、

『294番ハンゾー！ 399番ラミナ！ 三次試験通過、第三号!!』

所要時間8時間49分!!』

無事に1階までたどり着いた。それと同時に手錠が取れる。

すでにヒソカと変装したイルミの姿があった。

「いや〜、パートナーがお前さんで助かったぜ！ お互いハンターになったら仕事も一緒にしようぜ。お前さんなら安心して背中を任せられそうだ」

「おおきに。こっちも楽出来たわ」

「残りの試験も頑張ろうな！」

「せやな」

その後、終了時間までず〜っとハンゾーのおしやべりに付き合うことになり、ラミナは「絶対こいつ忍やない」とうんざりさせられるのだった。

## #11 カリ×ト×シトウ

ハンゾーのおしゃべりに60時間以上付き合うという試験以上の苦行をようやく終えたラミナ。

ゴン達が制限時間ギリギリで現れたので、逃げ場所がなかったのだ。

内心で「遅いわ阿呆」と思いながらも、それはお門違いだと分かっているので必死に怒りを抑え込む。

そして、タイムアップを迎える。

通過者は26名。しかし、内1人がゴール直後に死亡したので、実質25名が通過したことになる。

制限時間が終了したのと同時に扉が開き、太陽の光が差し込む。

ラミナ達通過者は外に出て、新鮮な空気を肺に吸い込む。

外にはリッポーと補佐役の男が立っていた。

「諸君、タワー脱出おめでとう。残る試験は四次試験と最終試験のみ」  
残る試験は2つ。

その事実を受験者達は気合を入れる。

リッポーは遠くに見える島を指差す。

「四次試験はあのゼビル島にて行われる。では早速だが……」  
パチンとリッポーが指を鳴らし、補佐の男が小さな箱を持ってくる。

箱の蓋部分には穴が空いていた。

「これからクジを引いてもらう」

「クジ……?」

「これで一体なにを決めるんだ?」

ハンゾーが腕を組んで訝しむと、リッポーは笑みを深める。

「狩る者と、狩られる者」

物騒な言葉に受験者達の空気が張り詰める。

「この箱の中には25枚のナンバーカード。すなわち今、残っている諸君らの受験番号が入っている。今からタワーを脱出した順に1枚ずつ引いてもらおう。第一号の者から」

リッポーの言葉と同時にヒソカが動き出す。

ラミナは4番目にカードを引く。周囲に見られないように、すぐさまポケットにカードを仕舞う。

全員が引き終わると、リッポーが説明を再開する。

「全員、引き終わったね。今、諸君がそれぞれ何番のカードを引いたのかは、全てこの機械に記憶されている。したがって、もうそのカードは各自自由に処分してもらって結構。……そして、それぞれのカードに示された番号の受験者が、それぞれのターゲットだ」

リッポーが説明をする度に、受験生達の緊張感が高まっていく。もうすでに試験は始まっているのと同義だった。

「奪うのはターゲットのナンバープレート。自分のターゲットとなる受験生のナンバープレートは3点。自分自身のナンバープレートもまた3点。そして、それ以外のナンバープレートは1点。最終試験に進むために必要な点数は、6点！」

リッポーは両手で6本の指を立てる。

「ゼビル島の滞在期間中に6点分のナンバープレートを集める事。それが合格基準だよ。それじゃあ、下に船が待ってるから。それに乗ってくれたまえ」

リッポーがそう締めると、受験生達は誰一人一言も発せず移動を始める。

ラミナもその流れに乗りながら、ナンバーカードを確認する。

書かれていた番号を確認したラミナは、僅かに眉を顰める。

しかし、すぐに表情を戻してナンバーカードを手裏剣のように森に向かって飛ばす。

ナンバーカードは森の中の木に突き刺さった。

書かれた数字は……『404』。

船に乗り込んだ受験生達は自分のナンバープレートを隠し、周囲の者達の観察に神経を注いでいた。

といっても、ヒソカ、イルミ、ラミナ、キルアの4人は堂々とナン

バープレートを胸に着けたままだったが。

ハンター協会の制服を着ている女性がにこやかに説明を始める。  
『ご乗船の皆様、三次試験お疲れ様でした！ 当船はこれより2時間ほどの予定でゼビル島に到着します。ここに残った皆様25名の方々は来年の試験会場無条件招待権が与えられます。例え今年受からなくても、気を落とさずに来年また挑戦してくださいねっ！』

「「……………」」

(うつ…………辛気臭え)

当然のことながら、その明るさにノツてくる者はいない。  
ハンゾーですらも顔を鋭くして、集中しているようだ。

彼らの問題は『自分を狙う者は誰なのか?』ということである。特に緊張している理由はヒソカ、そしてラミナである。

ヒソカは元々ヤバイ空気を醸し出しているから。そして、ラミナは一次試験や二次試験でのナイフ投げを見て、かなりの手練れであることが窺えたからだった。

多くの者がこの2人に狙われたら、勝ち目は薄いと思っている。なので、少しでも違うという確信が欲しかった。

そして、ラミナは違う意味で神経を尖らせていた。

(…………やっぱバレたみたいやな)

変装中のイルミからヒシヒシと殺気が向けられていた。

キルアの針はやはりイルミによるものだったのだと確信出来たが、同時に試験どころではなくなりそうだった。

(どっかで仕掛けてくるやろうなあ…………。面倒やなあ…………)

感じる殺気だけで交渉はほぼ不可能だと理解する。

ただでさえ、他の者からも狙われる可能性もあるのに、伝説の暗殺一家の長子からも逃げなければならぬなど苦行にも程がある。

ラミナは近づいてくるゼビル島を見つめながら、ため息を吐くのがあった。

そして、一行を乗せた船はゼビル島に到着して着岸する。

「それでは、先ほどクジを引いた順番に下船して頂きます！ 1人が

下船してから2分後に次の人がスタートする方式となります！ 滞在期限は丁度1週間！ その間に6点分のプレートを集めて、またこの場所に戻ってきてください！ それでは1番の方、スタート!!」

ヒソカが悠々と歩いて上陸する。

2分後にイルミが降りて、森の中へと消えていく。

(……厄介やな)

待ち構えられている可能性が高い。

この状況だとヒソカ、イルミ、ハンゾーと腕が立つ者にいきなり襲われる可能性が高い。

ヒソカはまだ狩りを楽しむ可能性があるが、イルミとハンゾーはそんなタイプではないだろうと推測する。

「それでは4番の方、スタート!」

すぐにラミナの番が来て、小さくため息を吐きながら船を降りる。

とりあえず、イルミが消えた方角とは違う方角に足を進めて、森に入る。

直後、【隠】を発動して気配を殺し、音を立てないように注意しながら全力で駆け出す。

木々の間をすり抜けたり、枝の上を跳び移りながら身を潜める場所を探す。

と言っても、身を潜めやすいと思う場所は他の受験者も来る可能性があるのです、微妙なところを探すつもりだった。

背後の気配を探ると、追ってくる気配を感じなかったのでどうやらイルミはまだ追ってきてはいないようだった。

「……先にターゲットを狩る気か？」

イルミはシルバ達から情報を聞いているはず。そして旅団と仲が良いという話から、決してラミナに勝つ気で来ても油断はしないだろう。

なので、負傷して動き辛くなる可能性を考えて、先にターゲットを狩ってから襲ってくるのではと推測する。

「まあ、油断は出来んわな」

下手な予断を捨て、ラミナは移動を再開した。

そして、大きめの木の上に登って【隠】を使ったまま座り、しばらく様子を見ることにした。

それから6時間が経過したが、1人として姿を見かけることはなかった。

夕暮れも過ぎ、鬱蒼とした森が更に暗くなり、月や星の光すら届きそうにない。

「……来よったか」

ラミナは猛スピードで近づいてくる禍々しい気配を感じた。サングラスをかけ、右手にブロードソード、左手にスローイングナイフを数本具現化して、地面に下りる。

直後、ラミナの目の前に現れたのは、変装を解いたイルミだった。見た目は穏やかそうだが、視線や纏う気配は禍々しい物だった。

「随分と物騒な雰囲気やないか。うちがお前のターゲットかいな？」

「違うよ。けど、来た理由は分かってるんだろ？」

「……キルアの頭に埋め込まれとった針のことか？」

「そうそう。やっぱりお前が抜いたんだね」

「すまんすまん。無駄な殺しをしようとしたキルアに殺気を込めた【発】を飛ばした時に、気づいてしもてなあ。抜いてからお前さんの仕込みやって気づいたんよ」

「まあ、そうだろうね。けど、だからって見逃す理由になると思う？」

「思てへん」

ラミナとイルミの周囲の空気が急速に冷え込んでいく。

イルミは両手に針を持って構える。

「流石にお前相手やと手加減出来ひん。死んでも恨むなや」

「優しいねえ。悪いけど俺は——」

ラミナは【一瞬の鎌鼬】を発動して、無拍子で投げられた針を全て叩き落とす。

そして、仕返しとばかりに5本のスローイングナイフを高速で投擲する。

「手加減って知らないからさ」

「ふんっ」

言葉の続きを言いながら、軽々とナイフを躲す。

ラミナはそれを鼻で笑いながら、次々とスローイングナイフを連続で投げつける。

イルミは躲し、弾き落としながらも針を投げて、ラミナは高速の斬撃で全て切り落とす。

「親父から聞いてた武器とは違うね。確か武器ごとに能力が違うんだっけ？」

「企業秘密やな。けど、そっちは分かりやすいな」

「まあね。ただ……いつまでも避けられると思わないでよ」

イルミが一瞬でラミナの背後に移動する。それと同時に針を投げるが、針はラミナの体をすり抜けて、ラミナの体は煙のように消える。

残像だと理解したイルミは背後に右裏拳を繰り出す。しかし、そこにラミナはおらず、頭上からスローイングナイフの雨が襲い掛かる。

イルミは【堅】で弾きながら、後ろに下がる。

その背後にラミナがゆらりと現れる。

イルミは前に出ながら、両肩の関節を外して針を握った両腕を真後ろに鞭のように振るう。

ラミナは攻撃を中止して、後ろに下がりながらスローイングナイフを再び投げ、イルミは体を捻じりながら両肩を嵌め治して、スローイングナイフを躲す。

「……流石親父と爺ちゃんから逃げ出したことはあるね」

「せやったら、もう帰りたい。あと6日もあんのに疲れたあないねん」

「大丈夫。もうすぐ疲れなんか感じなくなるからさ」

「つたく、たかだか針1本で仰々しいこつちや。キルアはあの針が無くなつたくらいじゃ大して変わらんやろ。さつさとゾルディック家で念教えた方がむしろ安全な気がするで？」

「余計なお世話だよ」

イルミが再びラミナに詰め寄りながら針を投げる。ラミナはブロードソードで切り落としながら後ろに下がり、背後にあった木に後ろ走りて登り、スローイングナイフを投げる。

イルミは右に跳んで躲し、がら空きになった脇腹目掛けて針を投げ

ようとしたが、突如ラミナの左手に大鎌が出現して横に振るう。

「っ！」

イルミは後ろに跳びながら針を投げるも、ラミナも横に跳んで躲す。

「……一体いくつ具現化出来るんだい？」

「そりゃ、ぎよーさんや」

「けど、そんな大物よりナイフの方が良かったんじゃないの？」

「そうでもないわ。もうナイフは十分散らばったでな。……『飛び交

え』アーデント・ホーネット【執着する雀蜂】」

ラミナが呟いた直後、周囲に散乱していた全てのスローイングナイフが突如独りでに浮かび上がり、イルミに一斉に襲い掛かる。

「！」

イルミは全力で駆け出して躲そうとするが、スローイングナイフの群れは軌道を変えてイルミを追尾する。

【アーデント・ホーネット執着する雀蜂】はキーワードを唱えると、ラミナが最後に目にした者を半永久的に追いかける。

スローイングナイフを止めるには、砕くか、ナイフが入れない場所に逃げ込むか、ラミナに別人を見させるかである。

「鬱陶しいな」

「ふっ！」

イルミが少し面倒になっていると、ラミナが大鎌を片手で回転させてイルミに向かって猛スピードで投げる。

風を切りながら飛び迫る大鎌をイルミは躲して、蹴り飛ばす。

イルミは針を投げて牽制しようとするが、ラミナの姿はすでにそこにはなく、それどころか周囲を見渡してもラミナの姿が見当たらなかった。

「……逃げた……？ (いや、【隠】か！)」

「んなわけあるかい」

「!!」

真横からラミナの声がして目を向けようとした瞬間、脇腹に衝撃が走り横に吹き飛ぶ。



地面に両手をつけて体勢を整えて、未だに襲い掛かってくるスロウイングナイフの群れを再び躲す。

ラミナに目を向けると、ラミナはスウ……と音もさせず、闇と同化するかのように姿が消える。

「ちつ……。 (まいったな。完璧な【隠】で気配どころか殺気も感じない……。一体どれだけ隠し持つてるんだ？ 普通ここまでバラエティ豊かに具現化なんて出来ないと思うんだけどな)」

イルミは舌打ちをしながら、ラミナの異常性を理解する。

本来【具現化系】の能力で物を具現化する場合、長い間その物に触れ続けないといけない。そこに付与する能力の数も増える程、制限が多くなるものだ。しかし、ラミナはその制限が妙に少ないように思えたのだ。

そんな事を考えていたことで僅かに集中が疎かになり、スロウイングナイフの1本がイルミの左肩を掠って血が滲む。

「おっと……」

イルミは僅かな痛みで集中を戻すと、突如スロウイングナイフ達の動きが変わる。イルミの右肩、正確に言えば血が滲んだ傷に向かつて、蜜を塗られた蜂のように一斉に飛び掛かり始めたのだ。

「血に反応するのか」

「そういうことっや」

背後から声がかして、直後に背中に鋭い痛みが走った。

イルミは前に飛び出して、振り向きながら針を投げる。しかし、針は全て切り落とされて、地面に転がる。

『『止まれ』』

ラミナの命令にスロウイングナイフ達は動きを止めて、空中で静止する。

ラミナはイルミと向かい合う様に立ち、イルミも特にダメージを気にする様子もなく立っている。

イルミはラミナの左手に短刀が握られているのを確認する。

「あの斬撃を掠り傷程度で躲すんか……。 やっぱ流石ゾルディックやな。ホンマ、疲れるわあ」

「それはごっちのセリフだよ。ホントにどれだけ具現化できるんだか……」

「ここまでにせえへんか？ 別にうちはキルアを殺す気も、暗殺者になるんを邪魔する気もないねん」

「信じると思う？」

「思わへんなあ。……しやあない。ほな、本気で行くで？」

ブロードソードを消し、更にはスローイングナイフも消す。

それを内心訝しむイルミを横目にラミナはサングラスをかけ直す。

「そういえば、そのサングラスっておしやれ？ 夜なのにサングラスってあんまりカッコ良くないけど……」

「別におしやれのつもりやないわ。コレしとかんと、ちよつと怖がらせてまうねん」

そう答えたラミナのオーラの質が、ガラリと変わるのをイルミは感じ取った。

ラミナは勢いよく飛び出したと思ったら、再び姿が闇に消える。

暗殺者の勘が大きく警鐘を鳴らし、イルミは反射的に右横に向かつて針を全力で投げる。

そこには短刀を構えたラミナがいた。

ラミナの左肩、胸、右太ももに針が突き刺さり、イルミが能力を発動しようとする。

しかし、ラミナは何事もなかったかのように、右脚で突き刺すように蹴りを繰り出して、イルミの脇腹に突き刺さる。

イルミは大きく吹き飛び、脇腹からゴキゴキ！と骨が砕けたような音がして、大砲でも打ち込まれたような衝撃が走る。

「っ!? (針が……発動しない？ それに【堅】も簡単に貫かれた?)」  
イルミは何が起こったのか理解出来ず、ただただ痛みに耐えながら

体勢を立て直す。

その時、背中に怖気が走り、転がる様に前に飛び出る。

直後、イルミがいた場所に大鎌の刃が突き刺さる。

「あれは……」

『オオオ……！』

そこにいたのは黒いボロ布を纏った骸骨だった。

カタカタと歯を鳴らしながら、ラミナが先ほど投げた大鎌を構える。

それでこの骸骨もラミナの能力であることを理解する。

「また悪趣味な……」

「お前に言われたあない」

「っ!!」

ラミナが目の前に現れて、右ストレートを繰り出してきた。

イルミは両腕を交えてガードするも、やはり物凄い衝撃が走ってボキゴキーと骨が折れる音を響かせ、地面を滑りながら後ろに下がる。

「……オーラを増幅する能力か？　それともオーラを無効化する能力か？」

「さあ？　どないやろおなあ」

イルミは一切顔を歪めることなく、針を抜くラミナを見つめる。

すると、サングラスの下に黄色く輝く瞳のようなものが見えた気がした。

（……瞳が変わってる。もしかして、それで【特質系】に変わった？

ということとは、今の攻撃や針が効かないのはそのせいかな）

「変わった眼をしてるね」

「……よお、見えるもんやな。……はあ。うちは【月の眼】って呼ぶんだ。この眼になつとる間、うちは【特質系】に変わんねん」

「やっぱりね」

「ここまでにせんか？　キルアの件については、何かしら埋め合わせはしたる。ただし、もちろんゾルディック家当主にやで？　ゾルディック家の跡取りにちよっかい出してもうたからな」

「……………いいだろう。親父と相談する。けど、それで殺せって言われたら、次はとことんやるから」

「へいへい。まあ、出来れば穏便に済ませてくれると助かるわ。ああ、連絡先送つといたさかい。話がついたら、それで連絡してや」

「分かった。じゃあ、今回はここまでにしとこう。じゃ」

イルミは相変わらずの無表情のまま、背を向けて去っていく。

ラミナはそれを見送り、気配が遠ざかるのを確認して、大きくため息を吐く。

「はあく……い……疲れるわく……」  
サングラスの下の瞳が茶色に戻る。

それと同時に大鎌と短刀がバキン！と碎けるようにして消える。  
虚脱感に襲われるラミナはサングラスを外して、懐に仕舞う。

「大分、手の内晒してしもたなあ。まあ、慰謝料代わりとでも思て諦めるしかないか……」

コキコキと首を鳴らし、両手を上げて伸びをする。

「……明日はのんびりしよか。この気疲れした状態でクラピカの相手はしたあないわ」

そう独り言を呟いて、ラミナは手頃な木の上に登って、体を休めることにした。

波乱の四次試験初日が、ようやく終わった。

### ●ラミナの最新情報！

・【月の眼】：正式名称は不明。

『夜、または視界の8割以上が暗い時』に感情が高ぶると、薄っすらと輝く金色に変わる。クルタ族とは違い、戦闘力は変わらない。

【月の眼】発動中は【特質系】に変わり、能力は『自身のオーラを、目にした相手のオーラと全く同じものに変える』こと。訓練により任意のタイミングで変えることが出来る。

それにより、相手のオーラと同化するため【練】【堅】【硬】をすり抜けることが出来る。すり抜けた直後にオーラの質を元に戻し、大ダメージを与える。具現化した武器までは、オーラの質を変えることはできない。下手をすれば、向こうの攻撃も同化して防御をすり抜けてしまうため注意が必要。

オーラが同化できることで、相手の【発】を無効化することも出来る。ただし、相手の【発】を使うことはできない。

使用後は強烈な虚脱感に襲われ、【刃アルマセン・デ・エスバダで溢れる宝物庫】で具現化した

武器に設定した10回分のストックが全て最低1回分減る。

【月の眼】を長く使えば使うほど、減る回数分が増える。

サングラスをしているのは、昼間でも使えるようにするため。夜にするのも電気や月明りで使い辛い時があるため。

\*クルタ族に近い血筋を持つ少数民族なのではないかと、クロロやシャルナークから聞かされているが、両親はすでに死んでおり、流星街で生きてきたので正確な出自は不明。ラミナの両親も流星街出身らしいので、かなり昔に滅んだ民族なのではと結論付けられている。

### ●ラミナの念能力

アーデント・ホーネット  
・【執着する雀蜂】

具現化したスロージョウナイフに付与されている能力。

『飛び交え』というキーワードを唱えることで起動。最後に見た対象をターゲットにし、飛翔して襲い掛かる。

血が流れている傷を確認すると、その傷を執拗に狙う。

複数の人間をターゲットには出来ないので、基本1対1でないと発動できない。

・【妖刀・朧霞】  
おぼろかすみ

具現化した短刀に付与されている能力。

相手の視界から姿を隠すことができ、強制的に【隠】を発動して気配も消す。熟練者が【凝】を使えば、僅かに輪郭が見える。

声を出したり、他の武器を振るうと解ける。

・【暗闇で踊る骸骨】  
ナイトライダー

具現化した大鎌に付与されている能力。

【月の眼】状態で、かつ暗闇や影がないと発動できない。

ボロボロの黒衣を纏った骸骨の死神のような姿をしており、ラミナが指定した相手に自動で襲い掛かる。しかし、移動できるのは影の上だけなので、夜や洞窟、鬱蒼とした森、明かりがつかない部屋でしか使えない。

対処方法は簡単。  
大鎌に強い光を当てると、影が維持できないので骸骨は消滅する。

## #12 プレート×ノ×ウバイアイ

イルミとの死闘を乗り切ったラミナは、昼過ぎまでのんびりして行動を再開した。

まずはクラピカを見つける事から始めなければならず、森を彷徨うしかなかった。

「他の奴に狩られてないとはいえけど……」

1時間ほど歩き回るも誰にも会わない。

流星に広すぎるかと作戦を練り直そうか悩み始めると、耳に何やら風を切る音が聞こえた。

ラミナは小さく身構えて、音がする方向に目を向ける。

飛んで来たのは小さな白くて丸い円盤のようなもので、ラミナはそれがナンバープレートであることを見抜いて、構えを解いてキャッチする。

「お〜……なんかゲット出来たわ。なんで飛んできてん？」

ラミナは飛んで来た方向を見ながら首を傾げるも、分かるわけもなくナンバープレートに目を向ける。

書かれていた数字は『197』。

残念ながら1点だった。

「まあ、クラピカなわけないわなく。つちゆうか、誰のプレートやろな？」

とりあえず、ポケットにしまつて再び歩き出す。

その後数時間、誰にも会うことなく2日目の夜を迎える。

気配を消して、音も出来る限り出さないようにして歩き続ける。

夜は身を潜めるのが普通ではあるが、だからこそそこが狙い目であると考えて動き回る者は多いだろう。

むしろ、互いに視界が狭まる夜の方が動きやすいと考えるのがハンターになるべき者の考え方だ。といってもラミナの場合は暗殺者としての考え方だが。

なので、昼間よりは誰かに会える可能性が高いとは考えているが、やはり島が広くて中々見つからない。

(飛んで来たプレートを考えて、5、6人はやられとると考えるべきやろな。そうになると、残りは20人くらいか……)

ラミナが考えながら、のんびりと歩いていると、

「しゃあー」

背後の木の陰から、黒の長髪の男が短剣を構えて飛び出してきた。

男はラミナの背中に短剣を突き刺した。しかし、ラミナの体は煙のように掻き消える。

「なっ!?!」

「【肢曲】。暗殺者が使う歩法や」

「っ!!」

目を見開いた男の背後から声がして、首後ろに手が添えられる。

一瞬で背後に回られた男は、恐怖で体が硬直する。

「さて、どないする? プレート渡すなら見逃したる。まだやるなら覚悟しいや」

「……わ、分かった。渡す……」

男は短剣を捨て、懐からナンバープレートを取り出して持ったまま両手を上げる。

ラミナはナンバープレートを受け取ると、男の首に手刀を叩き込んで気絶させる。

書かれていた番号は『89』。

「あ。こいつのターゲットがうちかどうか聞くん忘れとった」

倒れている男を見下ろして、思い出したラミナ。

しかし、すぐに「まあ、いいか」と考え直して、また移動を始める。その後も数時間歩き続けるが、誰にも会うことなく朝を迎えた。

「何だかんだで2点ゲットやな」

つまり後1点。ターゲットではない者を1人倒せばいい。

これでクラピカを狙う必要性がなくなってしまった。

「けどなあ……」

ラミナは眉間に皺を寄せて考え込む。

この試験は6点集めても、期限まで守り続ける必要がある。しかも、まだラミナを狙う受験者もいる。更に89番はともかく、197



番は血眼になって探している可能性がある。

6点確保しても全く心休まらない。

「厄介なことやな」

ラミナはため息を吐いて、歩き続けるのであった。

その夕方。

クラピカはレオリオと共に行動していた。

「くそ、誰にも会わねえな……」

「恐らくはもう半分の者がナンバープレートを集めたか、奪われたのだろう。集めた者は奪われないように隠れ場所を探しているだろうし、奪われた者はおそらく無傷ではあるまい。そうなれば、奪うより先に体力の回復に努めるだろう。生き残って来年の試験を受けるために。もしくは、すでに死んでいるかだ」

「ヒソカの奴か……」

2人は昨晚ヒソカの襲撃を受けた。

しかし、2人は1点分のナンバープレートを保持していたので、それを渡す代わりに見逃してもらったのだ。

その後、ゾワリとする殺気に背中から襲われたので、あの後誰かが犠牲になった可能性は高い。

「ヒソカはターゲットを探すなどしないだろう。目についた者3人を狩る方が早いだろうからな。そして、ヒソカに奪われた者達はほぼ確実に死んでいるだろうし、死んでいなくても重傷でまともに動けないと考えるべきだな。そうなるとヒソカからナンバープレートを奪おうとする者など、ほぼいないと考えるべきだ」

「ほぼって……誰もいねえだろ？ あんなの」

「そうでもない。私が思いつく限りでは2人いる」

「2人い？」

「1人はラミナだ。彼女はあのキルアの親と殺し合って逃げ延び、更にはヒソカとも戯れで戦えるほどの実力者だ。奪うくらいは出来るだろう」

「はあ!? ラミナの奴、いつヒソカと戦ったんだよ!？」

「……(まだ思い出してないのか……)」

湿原での出来事はどうやらレオリオにとっては、取り戻せない記憶になっているようだ。クラピカは呆れながら、レオリオの疑問をスルーして話を続ける。

「そして2人目は……ゴンだ」

「ゴン!? 馬鹿言え! あいつの勘は獣並み……いや、それ以上だぜ!?! わざわざヒソカを狙う理由はねえだろ!!」

「ゴンのターゲットがヒソカだったとしたら?」  
「っ!!」

「私はゴンのターゲットは知らないが……もし、ターゲットがヒソカだったならば、ゴンなら確実に一度は挑戦するだろう。ナンバープレートを奪えばいいだけだからな。ゴンならその方法を考えないとは思えん」

レオリオはその推測を否定できなかった。

これまでの試験の動きを見ていて、恐らくそうするだろうとレオリオも納得出来てしまっているからだ。

しかし、これはあくまでヒソカがターゲットだった場合の話である。

2人は違いますようにと願うしかなかった。その願いはすでに裏切られているが。

「問題はヒソカを狙う者がゴンでなかった場合だ」

「あ? 何か問題あるのか?」

「レオリオ、お前だったらヒソカを狙うか?」

「狙うわけねえだろ!! 他の3人探した方が楽だっ!? そうか。ヒソカを狙う奴がいなくて……」

「そう。他の3人の受験者からナンバープレートを奪うしかない。しかし、そうなるとその3人を狙う受験者もターゲット以外の受験者を狙うはずだ。ヒソカもターゲット関係なく襲っていることを考えると最低でも6人、ターゲットを横取りされた人物が出ることになる」  
「俺もその内の1人の可能性が高いってわけか……!」

クラピカはレオリオの言葉に頷く。

25人しかいない中で自分のターゲットは大丈夫と思うのは樂觀が過ぎる。

レオリオのターゲットは未だ名前と見た目だけで、実力は不明なのだ。なので、すでに奪われている可能性は高いと考えるべきだろう。ちなみにクラピカのターゲットはトンパで、レオリオを襲っている所に参戦してトンパを撃退して6点を獲得している。

そのままレオリオと組んで、今はレオリオのサポートをしているところだった。

「くっそく……！ だからって俺も今更1点を3人探すなんて厳しいぞ！」

「ああ。出来れば次に会う者がプレートを複数所持しており、我々2人で勝てる相手であることを願おう」

「ほお、それは怖いこっちやで」

「!!」

突如聞こえた声に、クラピカとレオリオは弾かれたように振り向く。

そこにいたのは、ラミナだった。腕を組んで木にもたれ掛かり、苦笑していた。

「今の話の流れやと、うちはお前らと戦わなあかなあ」

「じよ、冗談よせやい！ プロの暗殺者と戦うなんて勘弁だぜ。お前はターゲットでもねえしー！」

「ラミナはもう6点集めたのか？」

「いや、まだや」

「なんだ？ お前もターゲットが分かんねえのか？」

「いや？ 分かつとるで？」

「は？ じゃあ、見つからねえのか？」

「今、目の前におるで」

「は？ 目の前？ ってことは……！」

「……そうか。私がお前のターゲットか……」

「そういうこっちや」

ラミナは木から背中をどけて、まっすぐにクラピカを見つめる。  
それだけでクラピカは威圧感を感じ、レオリオも急に空気が締め付けられるような感覚に襲われる。

「……マジかよ」

「大マジやな。まあ、これがハンター試験つちゆうことや。それで、どうするんや？ 渡してくれるんやったら、なんもせえへんで」

「……」

ラミナはクラピカに右手を差し出して、ナンバープレートを渡すように告げる。

それにクラピカは鞆を下ろして、背中に仕舞っている木刀を取り出す。

「悪いが、渡すわけにはいかない。例え実力差があると分かっているもな」

「っ！ ……しょうがねえな」

レオリオは顔を顰めたまま折り畳みナイフを展開する。

それを見届けたラミナは、小さくため息を吐く。

そして、一瞬でクラピカの左横に移動し、左手でクラピカの首を掴む。

「!!？」

「動くなや。お前らが動くより先に、首の骨くらい押し折れるで？」

クラピカとレオリオの体に押し掛かるような殺気が襲い掛かる。

2人はピクリとも動けず、冷や汗が流れ出す。

「さて、改めて言うで？ 大人しく渡して無傷で他の3点を探しに行くか、死ぬ気で抵抗して必死に逃げて試験終了までずっと昼夜問わずうちに狙われ続けるか、無様に死んで人生を終わらすか。好きなん選び」

「……」

「あんまり待ってやらないで？ 自分の命くらい即決で決めてもらわんと」

「……分かった」

「クラピカ……!？」

あつさりと応じたクラピカにレオリオは驚く。

ラミナは表情を一切変えずに、右手を出す。

「ほな、ちょうだい」

「……」

クラピカは大人しく懐からプレートを取り出してラミナに渡す。

受け取って番号を確認したラミナはクラピカから手を放して、距離を取る。

クラピカとレオリオは強張った表情のまま、ラミナの動向を見つめている。

「これでうちは6点。そっちはこれから3点探し直しやな」

「……」

「つちゆうわけで、コレ、やるわ。もういらんし」

ラミナはポケットから何かを取り出して、クラピカの前に投げる。

それは3枚のナンバープレートだった。

書かれた番号は『198』『89』『362』。

目を向けた2人はそれを見て、目を見開く。

「はあ!? 3点!? じゃあ、クラピカのプレートいらなかったじゃ

ねえか!!」

「いるいる。クラピカやったら、その3枚が無くてもうちをもう狙う気ないやろ?」

「……そういうことか」

「どういうことだよ……!?!」

「さつき話しただろう。プレートを集めても、期限までそれを守らなければならぬ」

「それがなんだよ」

「プレートを2枚以上持っているということは、それだけ他の者から狙われる危険性は跳ね上がる。何故なら自分のターゲットである可能性があり、または自分のプレートを取り戻せば6点になる可能性があるからだ」

「あー!」

「そういうこつちや。うちからすれば、クラピカのプレートだけにな

れば気軽やねん」

「といっても、こうやって他の手の者に渡れば、その危険性はかなり低くなる。しかし、それは私に限ったことで、ラミナに関しては奪った者から襲われる可能性は残っている」

「1回倒したことがある奴なんぞ怖ないわ。それにそのプレートの半分はハンゾーから貰ったもんやし」

「はあ?」

ラミナはいたずらっ子のようにくつくつと笑う。

ラミナはクラピカ達に会う少し前に、ハンゾーとも出会っていた。

「お。ラミナじゃねえか。もう集まったか?」

「いや、後1点分やな。そっちは?」

「俺もだぜ。くっそく、ヘマしちまってよ。ターゲットの1番違い掴んじまってな」

「1番違い?」

「3人兄弟で参加してる連中だ。その内の1人が俺のターゲットだったんだけどな。あの銀髪坊主も兄弟の1人がターゲットだったみたいで先を取られちゃった。しかも、ご丁寧なことに他の兄弟のプレート思いっきりぶん投げやがってよ。ラッキーと思って、取りに行ったら違う方だったんだよ」

ハンゾーは『198』のナンバープレートを取り出して親指で弾く。

それを見たラミナは、ポケットから『197』のナンバープレートを取り出す。

ハンゾーはそれに気づかず、遠い目をしてあらぬ方向を見つめて黄昏ていた。

「忍とあろうものがとんだ失態を犯しちゃったもんだぜ。ああ、そういやあお前さんのターゲットは何番なん……だ……?」

ようやく顔を向けたハンゾーの目に『197』という数字が映る。

ラミナは顔の前にプレートを掲げて、ずっと待っていた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……なああにいい〜!!!」

「おっそ〜……」

しばらくハンゾーは目を見開いたまま固まっております、ラミナはハンゾーのリアクションを待っていた。

ようやく目の前の事実を理解して、大きく仰け反るかのようにリアクションを取りながら叫ぶ。

それにラミナは呆れるしかなかったが、ハンゾーは突如見事な土下座を披露した。

「頼む!! それと俺が持つてる1点プレートを交換してくれえ!!」

「ええで」

「感謝するぜー!!」

速攻で承諾されて、ハンゾーは土下座したテンションのまま礼を言う。

そして『198』『362』と『197』を交換し、2人は晴れて6点になったのだった。

と、そんなやり取りがあったことを2人に話したラミナ。

2人は疲れた表情をして、額に手を当てていた。

「じゃあ、なんでクラピカに襲い掛かったんだよ?」

「ん? 見つけたから揶揄っただけやで」

「おい!」

「んなゴチャゴチャ言うなや〜。別に点数は変わらへんやろ?」

「気分が良くねえんだよ!」

「気分で文句言いよったら、ハンターとしてやって行けへんぞ。クラピカは賞金首ハンター志望なんやろ? しかも相手は旅団や。言つとくけど、さっきの殺気を軽く流せへんかったら瞬殺やぞ? 旅団はキルアの親父さんレベルやろうからな」

「それは……」

「……」

ラミナが肩を竦めながら言うと、レオリオは口ごもり、クラピカは眉間に皺を寄せる。

今のクラピカでは念を会得しようとも勝率は0に近い。能力次第ではあるのも事実だが、旅団全員に対応できる能力など限界があるし、制限も多いだろう。

なので、素の状態でも殺気に耐えて、先ほどの動きくらい見抜いてもらわないと無駄死に等という言葉すら当てはまらない。

ラミナの基礎をとことん鍛えたのは旅団のメンバー達なのだから。

「ほな、頑張りや」

背を向けて歩き去るラミナ。

クラピカとレオリオはその背中を黙って見送ることしか出来なかった。

ラミナは集合場所近くでのんびりすることにして、ゆっくりと目指す。

途中で果物やらを手に入れて、木の上に登って太い枝に座って食べて休憩する。

まだ半分以上期間は残っているが、動き回っても疲れるだけなので、どこかで隠れ場所でも作って寝て過ごすことに決める。

「ん?」

「あ」

すぐ近くの木にキルアが現れる。

ラミナは思わず周囲の気配を探り、イルミを探すが特に気配を感じない。

「そっちはもう集めたのか?」

「おう」

「ふうくん。ターゲット、誰だったんだ?」

「クラピカや」

「はあ!?!」

キルアは目を見開いて驚く。

「クラピカから奪ったのか!?!」



「おう。まあ、代わりに3点渡してきたんやけどな」

「……意味あったのか？」

「クラピカの実力見てみたかったでな。」

「あいつはムラがあるみたいだぜ？　ただ目が赤くなると強くなるみたいだったけどな」

「ほお、そうなんか」

ならばもう少し追い込めばよかったかとラミナが考えていると、キルアがすぐ隣の枝に座る。

「なあ、ゴンの奴見てない？」

「ゴンは会うてないなあ。あいつのターゲットが誰か知つとるんか？」

「ヒソカ」

「……マジで？」

「マジマジ」

今度はラミナが目を見開いて絶句する。

まさかここでゴンとヒソカが絡むとは思わなかった。

「うくん……。ヒソカの奴、ゴンを気に入つとるみたいやったから、殺しはせんやろうけど……」

「あいつからプレート奪うとか逆に難しいよな」

「やなあ。ただ……ゴンやからなあ」

「そうなんだよな」

純粹無垢な野生児。

なのに、時たまとてつもない発想と能力を発揮するので、何をしてもかすか分からない。だから、ヒソカのナンバープレートを奪える可能性がある。

ラミナやキルアは暗殺者としての思考が染みついているので、最悪を想定してしまい、リスクな行動は中々取れない。

だから、ゴンが取る選択が時々予想を超えることがあるのだ。

「キルアはこの試験うかったら、どうするんや？」

「ぜんぜん決まってる。別に何か欲しいものがあるわけでもないし」

「まあ、すぐに何かせなあかんわけやないしな。ゴンとしばらく遊んでもええんちやうか？」

「そうだな。家に帰る気はないし、他にやりたいこと思いつかないしな」

ずっと暗殺者として育てられたので、それ以外の生き方が想像出来ないキルアだった。

「ラミナは？ 暗殺業に戻るのか？」

「そやな。元々この試験かて知り合いからの命令で受けただけやし」

「よく飽きないよな」

「仕事やからな。それに好きな時にしとるだけやし」

「いいなく。俺なんて親父や兄貴に言われた奴を殺すことばかりだったからさあ。全然楽しくねえの」

「あ、それはなあ……」

生まれてからずっと束縛されてきていれば、嫌にもなるだろう。

暗殺が日常になり過ぎており、機械のように命令された事をこなしているばかりだったからこそその反抗期のようなのだ。

それにあのイルミのひん曲がった期待を押し付けられたら、嫌にもなるだろう。頭に針を仕込まれて、恐怖を刷り込まれているのだから普通なら逃げ出したくなるに決まっている。

やはり、キルアはイルミよりもシルバやゼノに思考が似ているようだ。ラミナは感じた。

「探偵とか向いとるんちやうか？」

「探偵かあ……」

「それに幅広く活動しとれば色々したいこと見つかるんちやうか？」  
「だといいいけどねっ！」

キルアは答えながら枝から飛び降りる。

「じゃ、そろそろ行くわ」

「おう。気い付けや」

「大丈夫に決まってるだろ。じゃ、最終日だな」

手を振りながら去っていくキルアを見送ったラミナは、改めてキルアはイルミが望むような暗殺者には向いていないと思うのであった。

「雰囲気的にはマチ姉に似とるかもしれんなあ。絶対お互いに認めんやろうけど」

猫のように睨み合うマチとキルアを思い浮かべて苦笑する。

その後、ラミナも移動を始め、集合場所近くの巨木の上に登って、期限まで寝て過ごすことにする。

そして、その後は何事もなく、終了時間を迎えるのだった。

## #13 メンセツ×ノチ×サイシユウシケン

ポオーー!!

沖合いの船から大きな汽笛が鳴らされる。

『只今をもちまして、四次試験を終了とさせていただきます！ 受験生の皆様は速やかにスタート地点にお戻りください！ これより1時間の猶予時間を与えます！ それまでに戻らなければ全て失格となりますのでご注意ください！ なお、スタート地点に到着後のプレートへの移動は無効です！ 確認され次第失格となりますのでご注意ください！』

放送が島に響き渡る。

直後、スタート地点周囲の森から人影が次々と姿を現す。

ラミナも木の上から飛び降りて、スタート地点に出る。

1時間後に集まったのは10人。

ラミナ、ゴン、キルア、クラピカ、レオリオ、ヒソカ、イルミ（ギタラクル）、ハンゾー、頭にターバンを巻いた青年、髪を後ろで纏めている老人。

ラミナはゴン達に近づく。

「あれから間に合ったんやな。って、妙にボロボロやないか」

「色々あったんだ。まあ、ゴンのおかげだな」

「ああ、あの後ゴンと合流したんか」

「この近くでな。ゴンがいなかったら絶対見つけられなかったし、見つけられても死んでたかもしれねえな」

「ほお〜」

クラピカもレオリオの横で小さく頷いているので、本当にそこそこ危険な状況だったようだ。

そのゴンはキルアと笑い合っているが、ふとした時に空元気のような雰囲気を感じていた。

「……ゴンの奴、なんかあったんか？」

「……恐らくな。まだ何も聞いてないが」

「ふうん。まあ、そこらへんはお前らに任せるわ。お前の方が付き合いい長いぞな」

そう言つて、ラミナは近づいてくる飛行船を見上げる。

飛行船が着陸すると、リップポーとビーンズが降りてくる。

「それではプレートを確認させてもらおう」

全員がプレートを見せて、問題がない事を確認して全員合格となり飛行船に乗り込む。

ゆつくりと上昇して、移動を始める。

受験者達は前回と同じように自由行動となり、ゆつくり体を休めることになった。

ラミナは再び大量に食事を摂る。

テーブルには皿が高く積みまれており、近くでパフェを食べていたキラアや同じく食事をしていたレオリオが呆れながら見ていた。

「よくそんなに食えるな……。前も凄かったけどよ」

「胃もたれしねーの？」

「ングング……。ゴクツ。ふう……。この程度ですかい」

毒に耐えられる体をしているラミナからすれば、胃もたれなど全く問題ない。

なので、食べられる時には食べるべきだという考えが刷り込まれている。

その後も食べ続けていると、

『えー、これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までお越しください。それでは、受験番号44番の方。44番の方、お越しください』

「面談？ このタイミングで？」

「まさか……。これが最終試験か？」

「それはないんちゃうか？ あの爺さんは面接程度で決めるタイプちゃうと思うけどな」

「俺もそう思うな」

「そういや、キラアとゴンは爺さんと遊んだんやつけか？」

「そーそー。あの爺さんはどっちかと言えばややこしくして楽しむタイプだね」

キルアの言葉にラミナは納得するように頷く。しかし、レオリオはこれまでのハンター試験の事から疑うことを止められないようだった。

ヒソカの面談。

質問1：お主以外の9人の中で一番注目しているのは誰かの？

「……99番♥ 405番も捨てがたいけど一番は彼だね♣ いつか手合わせ願いたいなあ♠ くつくつくつ◆」

質問2：では、8人の中で一番戦いたくない者は？

「それは……405番だね♠ 99番もだけど、一番は彼かな◆」

53番、ポツクルの面談。

質問1について。

「注目しているのは399番と404番だな。見る限り一番バランスがいい」

質問2について。

「44番とは戦いたくないな。正直、戦闘では敵わないだろう」

キルアの面談。

質問1について。

「ゴンだね。ああ、405番のさ。同い年だし」

質問2について。

「53番かな。戦ってもあんまし面白そうじゃないし」

191番、ボドロの面談。

質問1について。

「44番だな。嫌でも目に付く」

質問2について。

「99番と405番だな。子供と戦うなど考えられぬ」

ハンゾーの面談。

質問1について。

「44番と399番だな。44番はダントツにヤバいし、399番は三次試験で一緒だったが、あいつも相当ヤバイ」

質問2について。

「もちろん44番だな。399番はまだ理知的だから、殺されたりはしないだろうから戦えるなら戦ってみたいぜ」

イルミ（ギタラクル）の場合。

質問1について。

「99番、399番」

質問2について。

「44番」

ラミナの面談。

質問1について。

「うくん……。99番と405番やな。両極端なタイプが揃とるでな。見てて飽きんわ」

質問2について。

「……99番やな。下手に怪我させると厄介事になりそうやし」

レオリオの面談。

質問1について。

「405番だな。恩もあるし、合格してほしいと思うぜ」

質問2について。

「そんなわけで405番とは戦いたくねえな」

クラピカの面談。

質問1について。

「いい意味で405番。悪い意味で44番。どっちつかずで399」

番」

質問2について。

「理由があれば誰とでも戦うし、理由がなければ誰とも戦わない」

ゴンの面談。

質問1について。

「44番のヒソカが一番気になってる。色々あったから」

質問2について。

「うくん……99・399・403・404番の4人は選べないや」

以上の面談結果をもとに、ネテロは筆を走らせる。

その結果を見て、愉快そうに笑う。

「ほお！ 思ったより偏ったのお」

出来上がったものを見た試験官達は目を見開いて、それを凝視する。

「会長……これ、本気ですか？」

「大マジじゃ」

（（確かに本気の日だ……））

「試験が楽しみじゃのお！」

ネテロが愉快そうに笑う後ろで、サトツ達試験官は不安に襲われるのだった。

その後、3日ほど飛行する。

ラミナ達にはそれぞれ個室が与えられ、ゆつくりと過ごすことが出来た。

到着したのは審査委員会が経営するホテルで、試験終了までは受験生の貸しきりになっている。

その中の大広間に受験生達は集まっていた。

ラミナ達の前にはネテロを始めとする試験官が揃っており、ネテロの横には布が被せられたボードのようなものが置かれている。

「さて、最終試験は1対1のトーナメント形式で行う。そして、その組



み合わせは……こうじゃ！」

ネテロが布を取り払う。

露わになった組み合わせにゴン達は目を見開く。

トーナメント表はひどく歪だった。

人によつて戦う回数が違い、レオリオとイルミに関しては最大2回しか戦う機会がない。

「げっ」

「ふうん♥」

ラミナの相手はヒソカだった。

ヒソカは嬉しそうに笑みを深める。

「最終試験のクリア条件だが、いたって明確じゃ。たった1勝で合格である!!」

ネテロの言葉に全員がこのトーナメント表の意味を理解する。

「つてことは……」

「さよう。つまりこのトーナメントは勝った者から抜けていき、敗けた者が上に登っていくシステムじゃ」

「この中から不合格者はたった1人つてことか？」

「その通りじゃ。しかも誰にでも2回以上の勝つチャンスを与えられておる。何か質問は？」

「組み合わせが公平でない理由は？」

「うむ。当然の質問じゃな」

ボドロの質問にネテロは頷く。

「この組み合わせは今までの試験の成績をもとに決められておる。簡単に言えば、成績のいい者にチャンスが多く与えられているということじゃ」

その言葉にキルアがピクリと反応する。

「それつて納得出来ないな。もっと詳しく点数の付け方とか教えてよ」

(確かにハンゾーはともかく、ゴンがキルアより成績が良いんは意外やな)

ゴン、ハンゾー、ラミナ、ヒソカが一番試合数が多い。次点でクラ

ピカにポツクル。キルアはその2人よりも試合数は少ない。

単純に実力だけで決めたわけではなさそうだった。

「ダメじゃ」

「なんでだよー」

ネテロはバツサリと切り捨てて、キルアは納得出来ずに食い下が  
る。

「採点内容は極秘事項でな。不合格者も出る以上、全てを言うわけに  
いかん。まあ、やり方くらいは教えよう」

ネテロはゆつくりと3本の指を立てる。

「まず審査基準。これは大きく3つじゃ。身体能力値、精神能力値、そ  
して印象値。これらの3つから成る。身体能力値は敏捷値・柔軟性・  
耐久力・五感能力等の総合値を。精神能力値は耐久性・柔軟性・判断  
力・創造力等の総合値を示す。だが、これはあくまで参考程度じゃ。  
最終試験まで残ったのじゃから、今更じゃな。重要なのは印象値!!」

ネテロは最後の『印象値』という言葉を強く言う。

「これはすなわち、前に挙げた基準では測れない『なにか』!! 言うな  
れば、ハンターの資質評価と言ったところかの。それと諸君らの生の  
声とを吟味した結果、こうなった以上じゃ!」

ネテロの説明にラミナやクラピカは納得するように頷く。

しかし、キルアは未だに納得出来ず困惑の表情を浮かべていた。

(資質で俺の方がゴンに劣っている……!?)

ラミナはその困惑をキルアの背後で感じ取っていた。

(まあ、印象値に関してはキルアはそつなくこなし過ぎたんが大きい  
やろうなあ。レオリオやクラピカの四次試験での話を聞くと、ゴンは  
かなりレオリオのために無茶したみたいやし)

ゴンはキルアほど戦闘技術はない。

なので、今までそれを補う何かが際立ったのだろう。

四次試験でのヒソカからプレートを奪った方法も、ヒソカから興奮  
気味に聞いた。その内容を聞いたラミナは確かに凄いと素直に感心  
した。奪った後はお粗末だったかもしれないが、それでもその集中力  
と技術、度胸は素晴らしいの一言に尽きる。

四次試験では受験者1人1人の後をつけていた試験官もそれを評価したのだろう。

キラアも凄い子供ではあるが、そつなくこなし過ぎてハンターらしい行動と言うのが目立たなかったのだろう。

(まあ、うちもなんで高評価なんかは分からんけど)

ラミナも自分の評価に内心困惑していた。

ゴンの話を聞く限りだと、そこまで目立つことはしてないと思っている。

「さて、最終試験に戻るぞい。戦い方は単純明快。武器オーケー、反則なし、相手に『まいった』と言わせれば勝ち！ ただし、相手を死に至らせてしまった者は即失格!! その時点で残った全員が合格となり、試験は終了じゃ」

「ふう……」

「残念♣」

殺し無しと言う言葉にラミナはホツとして、ヒソカは残念そうに呟く。

そして、さつそく第一試合が始まった。

「第一試合ー・ハンゾー対ゴン!!」

ハンゾーとゴンが前に出て、他の受験生は壁際に寄る。

(身体能力面やと圧倒的にハンゾーが上。しかも、さつきのルールやと気絶させても意味はない。……えげつなく)

この試験は聞く限りでは実力が上ならば有利のように見える。

しかし、よく考えると実力の方が制限が多いルールになっている。

今までのゴンを考えると、実力で劣っていようが絶対にまいったと簡単には言わないだろう。

その場合、実力が上の者が取れる手段は限られている。

気絶させても駄目。殺すと脅しても、殺せば失格になるので駄目。痛め続けて、運悪く死んでしまっても駄目。

出来るのは『拷問』か『説得』の2つくらいだろう。

イルミならば相手を操作すればいいだけだが、念能力を使える者は

少ないのでそれも出来ない。

常人なら勝ち目がない時点でギブアップするだろうが、ゴンがするとは思えなかった。

「始め!!」

開始と同時にゴンが横に全力で走り出す。

しかし、ハンゾーは音も出さず一瞬でゴンの目の前に移動する。

「!!」

「おおかた足に自信ありってどこか。認めるぜ」

ハンゾーは鋭い手刀をゴンの首筋に叩き込む。

「子供にしちや上出来だ」

ゴンはうつ伏せに倒れる。

ハンゾーはゴンの横に立って見下ろす。

「さて、決闘ならこれで終わりなんだが……」

ハンゾーはメンドそうに呟きながら、ゴンを仰向けにして体を起こす。

そして、ゴンの意識を覚醒させる。

「ほれ、目え覚ましな」

「っ……!」

ゴンは意識がはつきりするも、体が思うように動かず吐き気がする。

「気分最悪だろ? 脳みそがグルングルン揺れるように打ったからな。分かったら? 差は歴然だ。早いとこギブアップしちまいな」

「……嫌だ!」

やはりゴンは拒絶する。

直後、ハンゾーはゴンの側頭部を強く叩き、脳を再び揺らす。

脳を強く揺さぶられたゴンは強烈な吐き気に耐え切れず、嘔吐してしまう。

「げほっ!……おえっ!」

「よく考えな。今なら次の試合に影響は少ない。意地張ってもいいことなんか一つもないぜ。さっさと言っちゃまいな」

「……誰が言うもんか!」

直後、ゴンの腹部に拳が突き刺さる。

ゴンは再びうつ伏せに倒れて呻く。

その姿にレオリオがたまらず叫ぶ。

「ゴン！ 無理はよせ！ 次があるんだぞ！ ここは——」

「レオリオ」

クラピカが呼び止める。

「お前がゴンの立場ならまいったと言えるか？」

「死んでも言うかよ！ あんな状態でえらそーにしゃがって！ 分かってるが言うしかねえだろ！」

「矛盾だらけだが、気持ちはよくわかる」

レオリオの矛盾な意見にクラピカも頷く。

ラミナは腕を組んで、静かにゴンを見守る。

(ゴンとの試合やなくて助かったかもしれないなあ)

恐らくラミナでもハンゾーと同じようにするだろう。しかし、それでもゴンはまいったと言わないだろうし、ラミナもあれ以上の事をするのは気が引ける。しかし、それではゴンにまいったと言わせる方法が思いつかない。

かと言って、自分がまいったというのも納得出来ない。なので、手詰まり感全開になる気がしなかった。

その後、なんと3時間。

ゴンはまいったと言わず、ハンゾーはひたすらゴンを攻撃する。

「もう……3時間だぜ」

「もはや血反吐も出なくなっているぞ」

ポツクルとボドロが慄くように言う。

すると、レオリオが遂に我慢の限界を迎えた。

「てめえ、いい加減にしゃがれ！ ぶっ殺すぞ！ 俺が代わりに相手してやるぜ！」

「……見るに堪えないなら消えろよ。これからもつと酷くなるぜ」

レオリオが一步踏み込むと、黒服の試験官達がレオリオの前に立ち塞がる。

「1対1の勝負に他者は入れません。仮にこの状況で手を出せば、失

格になるのはゴン選手です」

「っ！」

すると、ゴンがゆっくりと立ち上がる。

「大丈夫だよ、レオリオ……。こん……。なの平気さ。ま……。だまだやれる」

「……」

ハンゾーも流石に顔色を変えて、僅かに歯を食いしばる。

すると、ハンゾーはゴンを押し倒して、うつ伏せにして左腕を掴む。

「腕を折る」

ハンゾーの言葉にレオリオ達は息を呑む。

「本気だぜ。言っちゃまえー」

「……。いい、嫌だ!!」

ボギツ

会場に耳障りな音が響く。

ゴンは左腕を押さえて、歯を食いしばっている。

「……。さあ、これで左腕は使い物にならなくなったぜ」

ハンゾーはゴンを見下ろして、言い放つ。しかし、その顔に余裕は一切ない。

ラミナは小さくため息を吐くを、隣から殺気が溢れてきて目を向ける。

そこには歯を食いしばって怒りに震えるレオリオがいた。

「クラピカ、止めるなよ。あの野郎がこれ以上何かしやがったら、ゴンにや悪いが抑えきれねえ……。い！」

「止める？ 私がか？ 大丈夫だ。恐らくそれはない」

クラピカも目を見開いている。瞳が赤く点滅しており、怒りに震えている。

「なら、うちが止めるで」

「!!」

ラミナはレオリオとクラピカの背後に回って、小さく殺気を放ちな

がら言う。

2人は四次試験での感覚を思い出して、体が固まる。

「たかが左腕が折られたくらいで騒ぐなや。本来ならもう殺されてもおかしくないねんぞ」

「っ……！ けどよ……！」

「お前らの自己満足でゴンの覚悟踏み躪る気か？ それでも我慢出来へんのやったら、レオリオ。お前がこの試験やめる言うたら、ゴンは今すぐ合格できるで。ただ……その時にゴンがハンター証を素直に受け取ると思うか？」

「っ!!」

レオリオはラミナの言葉に右手を握り締める。

ゴンは絶対に受け取らない。

それしか思い浮かばなかったからだ。それどころか「レオリオにあげるよ！ これを売ればお金になるんでしょ？」とか言って渡してくる可能性が高い。

そうなればレオリオも絶対に受け取らない。しかし、それではゴンはハンターとして活動することはないだろう。

ここでゴンを助けても、同じようにゴンの今までを踏み躪ることになることも理解出来てしまった。

「けどよお……けどよお……！」

「理解したなら我慢しい。それにゴンがまだやる気やったら、追い詰められるんはハンゾーや」

「……あ？」

「ハンゾーがゴンを殺して、失格になる覚悟をしたら話は別やけどな。けど、その覚悟がハンゾーに出来へん限り、ゴンに降参させる術はなくなる。ゴンからすれば、1本折られたんなら他の腕を折られようと構わんっちゆう覚悟がしやすくなったやろうしな」

ラミナの言葉にレオリオとクラピカは納得出来るよう出来ない感覚に襲われるが、それでももう少し見守ることに決めた。

ラミナは殺気を収めて、ゴンに目を向ける。

いつの間にやらハンゾーが片手で逆立ちしながら、忍について話し

始めている。

話すのと逆立ちに集中しているようで、ゴンの瞳が力強くなっていることに気づいていない。

(……こら、まだ諦める気ないな)

その考えを肯定するかのように、ハンゾーが何やら決め顔で言い放った瞬間、ゴンが左脚を振ってハンゾーの顔を蹴る。

「あ」

ハンゾーは完全に不意打ちを食らい、顔から床に落ちる。

ゴンは痛みにも呻くも、ふらつくことなく起き上がった。

「つて〜！ くそ！ 痛みと長いおしゃべりで頭は少し回復してきたぞー！」

「よっしゃああああ!! ゴン！ 行け!! 蹴りまくれ!! 殺せ!! 殺すのだ!!」

「それじゃ負けだよ、レオリオ……」

「調子ええやっちゃな」

レオリオは鬱憤を解消するように叫ぶ。

それにクラピカとラミナが呆れる。

そんな声など聞こえていないようで、ゴンはハンゾーに言い放つ。

「この戦いはどっちが強いかじゃない。最後にまいったって言うか言わないかだもんね」

その言葉にハンゾーが飛び起きる。

ハンゾーは鼻血を流しているのに決め顔をして、

「わざと蹴られてやったわけだが……」

「うそつけー!!」

レオリオがツツコむ。

ハンゾーはそれを無視して、鼻元を拭う。

「分かってねえぜ、お前。俺は忠告してるんじゃないぜ。命令してるんだ。俺の命令は分かり辛かったか？ なら、もう少し分かりやすく言ってみよう」

ハンゾーはゴンに歩み寄りながら左前腕に巻いてある布の下から刃を引き出した。



その瞬間、再び空気が一気に張り詰める。

「脚を斬り落とす。二度とつかないようにな。取り返しのつかない傷を見れば、お前も分かるだろう。だが、その前に最後の頼みだ。まいったと言ってくれ」

脅かすように刃を見せて言う。

直後、

「それは困るー!」

と、ゴンが言い放った。

その言葉に全員がポカ〜ンとしてしまう。

「脚を斬られちゃうのは嫌だ! でも、降参するのも嫌だ! だから、もつと違う方法で戦おうよ!」

「……なっ! 立場分かってんのか、テメー!!」

無茶苦茶な言葉にハンゾーが声を荒らげる。

「勝手に進行すんじゃねえよ! 舐めてんのか! その脚、マジでたたっ斬るぞコラア!!」

「それでも俺はまいったって言わない! そしたら俺は血が一杯出て死んじゃうよ」

「む……」

「そうなるど失格になるのはあっちの方だよね?」

「あ、はい」

「ほらね! それじゃお互い困るでしょ。だから、考えようよ」

ゴンの言葉に、ハンゾーは完全に困惑して顔を顰める。

そして、外野はゴンの言動に笑いが抑えられなくなる。

「もう大丈夫だ。完全にゴンのペースだ」

「……なんちゅうワガママな……」

(ホンマに見事なもんやで。ああいう場を一気に引っ張っていく才能っちゆうんは裏の世界の人間には滅多におらんタイプやなあ)

ラミナも苦笑しながら、ゴンの動向を見守る。

ゴンの恐ろしいところは、その言動に裏がないとはつきり分かっってしまうことだ。それ故に絶対にまいったと言わないのも本気なのだろうと分かっってしまう。

もちろん今のはルールがあるから故のものだ。ルール無用の殺し合いでは、ただ相手の怒りを買うだけだろう。

ヒソカのような変人でもない限り。

(ウボオーやノブナガは好きそうやけどな)

無邪気故に毒気を抜かれてしまう。それだけで場の空気を一気に支配してしまった。

一度抜かれてしまうと、再び戻すのはかなり難しい。

ハンゾーは齒軋りをして必死に突破口を探る。

そして、剣をゴンの額に突き立てる。

再び空気が張り詰める。

「やっぱりお前は何にも分かつちやいねえ。死んだら次もくそもねえんだぜ。片や俺はここでお前を殺しても、来年またチャレンジすればいいだけの話だ。俺とお前は対等じゃねーんだ!!」

ハンゾーの様子を見ていたラミナは、

(お前の負けや、ハンゾー)

そう確信していた。

事実、追い詰められているはずのゴンは全く揺らいでいない。対する有利だったはずのハンゾーは汗を流し、間違いなく追い詰められていた。

「何故だ。たった一言だぞ……? それでまた来年再チャレンジすればいいじゃねえか。命よりも意地が大切だったのか!? そんなことできたばって本当に満足か!」

ハンゾーの叫びにゴンは全く揺らぐことなく、

「親父に会いに行くんだ」

力強く言った。

「親父はハンターをしてる。今は凄く遠いところにいるし、一度も会ったことはないけど。それでも会えると信じてる。でも、もし俺がここで諦めたら、一生会えない気がするんだ。だから退かない」

己に誓う様に言うゴン。

「退かなきゃ……死ぬんだぜ?」

改めて剣を突き立てて告げるハンゾー。

それでもゴンはやはり揺らがない。

数秒見つめたハンゾーは目を瞑って、剣を引く。

「まいった。俺の負けだ」

剣を仕舞って、降参を告げる。

「俺にはお前は殺せねえ。かと言って、お前にまいったと言わせる術も思い浮かばねえ。俺は負け上がりで次に賭ける」

そう言っつて、ハンゾーはゴンの前から去ろうとするが、何故かゴンは不満そうな表情を浮かべた。

「そんなの駄目だよ、ずるい!! ちゃんと2人でどうやって勝負するか決めようよ!」

「……そう言うと思ったぜ。馬鹿か、てめえは!! てめえはどんな勝負をしようがまいったなんて言わねえよ!!」

「だからって、こんな風に勝ったって嬉しくないよ!」

「じゃ、どうすんだよ!」

「それを一緒に考えようよ!」

無茶苦茶理論をまだ展開するゴン。

ハンゾーは坊主頭に青筋を浮かせて、

「要するにだ。俺はもう負ける気満々だが、もう一度勝つつもりで真剣に勝負をしろと。その上でお前が気持ちよく勝てるような勝負方法を一緒に考えろと。こーゆーことか!」

「うん!!」

「アホかー!!!」

ハンゾーはゴンをアッパーで殴り飛ばす。

ゴンは避ける事も出来ずに吹き飛ばされて、床に倒れて気絶する。

「……阿呆」

ラミナは呆れて、そう言うことしか出来なかった。

「おい、審判。俺の負けだ。しかし、そいつが目覚めたら、きっと合格を辞退するぜ。一度決めたら意志の強さは見ての通りだ。不合格者はたった1人なんだろ? ゴンが不合格ならこの後の戦いは全て無意味なものになるんじゃないか?」

「心配ご無用。ゴンが何と言おうと合格じゃ。それは変わらんよ。仮

にゴンがごねて儂を殺したとしても、資格が取り消されることはない」

「なるほどな」

ハンゾーはネテロの言葉に納得して、控えに戻る。

ラミナは隣に来たハンゾーを苦笑しながら迎える。

「災難やったなあ」

「全くだぜ」

「ゴンが空気を変えよった時に、その空気に乗っかってやればまだ可能性はあつたやろな」

「……あく……確かにそうかもな。意地を張り過ぎたのは俺もか」

「いやあ、あれはしやあないやろ。うちらみたいな裏のもんに、あのまつすぐさは毒みたいなものやで」

「……そうかもな」

「意味分からんよなあ。満足出来んでも、納得出来れば死を受け入れられるんはなあ」

「全くだ」

ハンゾーは苦笑して、ラミナに同意する。

ラミナは試験官に運ばれていくゴンを見送って、前に出る。

それに合わせてヒソカも前に出て、会場の真ん中で向かい合う。

「第二試合！ ラミナ対ヒソカ!!」

因縁の対決が再び始まるうとしていた。

## #14 ゲキトウ×ノチ×ゴウカク

ラミナとヒソカが向かい合っていると、キルアがハンゾーに声を掛けた。

「なんでわざと負けたの？」

「……わざと？」

「殺さずにまいったと言わせる方法くらい心得ているはずだろ？ あんなならさ」

その質問にヒソカやラミナ、そしてクラピカ達も耳を傾ける。

ハンゾーは一拍間をおいて、口を開く。

「俺は誰かを拷問する時は一生恨まれることを覚悟してやる。その方が確実だし、気が楽だ」

「？」

キルアは意味不明とばかりに片眉を上げる。

「どんな奴でも痛めつけられた相手を見る目には負の光が宿るもんだ。目に映る憎しみや恨みの光つてのは中々隠せるもんじゃねえ。しかし、ゴンの目にはそれがなかった。信じられるか？ 腕を折られた直後なのによ。あいつの目はそれをもう忘れちゃってるんだ。気に入っちゃったんだ、あいつが。あえて言うなら、それが敗因だ」

ハンゾーを言い終わると目を閉じる。

キルアは未だに納得出来ていない様だが、ラミナは納得の表情で頷く。

（痛めつけたのに敵意も出さず相手はやり辛いわな。殺す理由を見出せへんし）

敵意を向けてくるなら、まだ「殺されることも受け入れている」と考えることが出来る。

暗殺のターゲットでさえ殺される瞬間は恨みなどを浮かべる。子供でさえも。

しかし、それを向けて来ない相手は殺し辛い事この上ない。

ラミナは殺しに快楽を見出してない。

恨みを向けられ、それを背負うことがせめてもの免罪符だと考えて

いる。それを向けられないということは、『許されない』ということだ。

それは逆にラミナにとっては苦痛となる。

だからこそ、ハンゾーが手を引いた理由がよく分かった。

(まあ、ゴンに暗殺依頼が出たら世も末やろうけどな)

ラミナは小さくため息を吐いて、ヒソカに目を向ける。

ヒソカはラミナを見て、楽し気に笑みを浮かべている。

「楽しそうやなあ」

「もちろん♣ 殺し合いでないのは残念だけどね♠」

「言つとくけど、うちは無手で行くで」

「そう♥ じゃあ、こっちは遠慮なくいつてみようかな?」

「好きにせえ」

重苦しい緊張感が会場を覆う。

レオリオはゴクリと唾をのみ、ポツクルやポドロも冷や汗が出始める。

「……それでは……始め!!」

審判の試験官が合図を告げる。

しかし、場の空気と異なり、ヒソカとラミナは動かなかった。

「くくく◆ 来ないのかい?」

「すまんなあ。変態にはあんま近づきたあないねん」

「それは残念♥」

ヒソカはくつくつと笑いながら腕のストレッチを始め、ラミナも嫌味を返しながら右手を首に当ててコキコキと鳴らす。

2人の様子が思わずレオリオが毒気を抜かれた瞬間、

2人の姿がブレて、気づいたら右腕同士をぶつけて押し合いを始めていた。

「なっ……!?!」

レオリオやポツクルが目を見開く。

ラミナは左脚を振り上げて、ヒソカの顔を狙う。ヒソカは左腕で防ぎ、右手で脚を掴もうとしたが、逆にラミナの左手がヒソカの右腕を掴む。

素早く左脚を戻し、右膝蹴りを繰り出す。ヒソカは左手で受け止め、ラミナの脇腹に左脚を振り上げる。

ヒソカの左脚が脇腹に当たる直前に、ラミナは右手で受け止めながら左側に体を倒し、ヒソカの左脚の上に横乗りになる。

すかさず左膝蹴りを繰り出し、ヒソカの鳩尾に叩き込む。

ヒソカは後ろに下がり、ラミナは手を放して体勢を整える。

ヒソカが猛スピードでラミナに詰め寄り、右ストレートを繰り出す。ラミナは仰け反って躲しながら右足を引き、しゃがみながら一回転して足払いを放つ。ヒソカはジャンプして躲すが、ラミナはそのままの勢いで左脚で蹴りを繰り出す。ヒソカは右腕でガードするも空中にいたために吹き飛ばされる。

ラミナは右足だけで大きく踏み出して、猛スピードでヒソカに詰め寄る。

そして、猛烈なラツシュを繰り出し、ヒソカも打ち合いに応じる。

互いに拳を突き出し、それを首を傾けて躲すか、打ち払う。時折脚が動くが、それに合わせて相手の脚も動き、牽制する。

ラミナが右ストレートを放つと、ヒソカが突如半身になって躲し、突き出した腕を掴んで背負い投げを放つ。

「っ！」

ラミナは体が逆さまになったところで左手でヒソカの背中に掌底を叩き込み、上に跳ぶ。

ヒソカは顔が床スレスレまで押されるがギリギリで止まり、体の下で両腕を交えたかと思えば、弾かれるように体を起こして両腕を勢よく広げる。

ヒソカの両手から何かが煌めいたかと思うと、空中にいるラミナは目を細めて、手裏剣のように飛んでくる数枚のトランプを捉える。

ラミナは全てのトランプの軌道と速度を素早く把握して、一番近いトランプに右手を伸ばして指で挟み掴む。

そして、右腕を素早く振るって残りのトランプを全て払い落とし、指で挟んでいるトランプをヒソカに向かって飛ばす。

ヒソカはそれを左手指で挟んで止める。

ラミナは地面に下り立って、息を整える。

「ふう〜……しんど」

「よく言うよ♣ まだまだ動けるだろ？」

「言うたやろ。変態に触られへんように気い使うねん」

「酷いなあ♥」

ヒソカはくつくつと笑う。

レオリオは大きく口を開けて、2人の戦いを唾然と見つめていた。クラピカやハンゾー、キルアも2人の攻防に冷や汗を流し、ポツクルとボドロはラミナの想像以上の動きに慄いていた。

「へえ、想像以上に動けるのね。あの子」

「凄いね」

メンチとブハラも感心しており、サトツも頷いている。

「ウォーミングアップはもういいだろ？」

「いやあ、これ以上ギア上げるんは——」

ヒソカの笑みが不気味に歪んだ瞬間、ラミナが一瞬でヒソカの真横に移動する。

「疲れるんやけどなっ！」

言いながら右掌底を繰り出す。

ヒソカは仰け反って躲し、小さく跳び跳ねて横に一回転しながら左蹴りを放つ。ラミナは右脇でヒソカの左脚を挟んで掴み、左拳でラツシュを叩き込む。

ヒソカは両腕を交えて防ぎ、ラミナは最後に掌底を叩き込んで脚を放し、ヒソカを後ろに押し飛ばして壁際に追いやる。

すかさず詰め寄ろうとするが、ヒソカが鋭い右ストレートを繰り出して来て、ラミナは大きく跳び上がってヒソカの上を越えて、壁に足をかけてヒソカの顔目掛けて右脚を振り下ろす。

ヒソカは屈んで躲し、振り返りながら右アッパーを振り上げる。

ラミナは両腕を交えてガードするも、ヒソカの拳はガードをすり抜け、鳩尾に叩き込まれて打ち上げられる。

「ぐう……！」

ラミナは呻きながらも壁を蹴り、会場の中央に戻る。



今度はヒソカが一瞬でラミナの目の前に現れ、ラッシュを繰り出す。

ラミナは後ろに下がりながら逸らし、躲す。

ヒソカの腕が引いた瞬間を狙って、ラミナは左脚を振り上げる。ヒソカは頭を仰げ反って躲す。

そこにラミナが左拳を繰り出し、ヒソカが右腕で防ごうと上げる。すると、ラミナの左腕が蛇のようにうねり、防御をすり抜けてヒソカの顔面に直撃する。

「っ……！」

「まだまだいくでえ」

ラミナの両腕が鞭のようにしなり、不規則な軌道でヒソカの顔や体に拳が連続で叩き込まれる。

「な、なんだありや?！」

「……【蛇活】」

レオリオが目を見開いて叫び、キルアが呟く。

関節を自在に曲げて攻撃をする暗殺術である。

ヒソカが顔面を殴られながら鋭い左アッパーを放ち、ラミナが顔を左に逸らして躲す。直後、ヒソカの右足が跳ね上がってラミナの左脇腹に叩き込まれる。

「っっ！」

「今度はこっちの番♥」

ヒソカが鋭く重い右肘を突き出し、ラミナの額に突き刺す。

ラミナが後ろに仰け反ると、ヒソカは連続で拳を鋭く繰り出し、ラミナは両腕で頭を庇って耐える。

猛スピードの蹴りがラミナの側頭部に叩きつけられる。ラミナは腕でガードするが、横に体が流れる。

ラミナはそのまま一回転して、左後ろ回し蹴りをヒソカの鳩尾に叩き込み、ヒソカは後ろに吹き飛ぶ。

ヒソカは床を後転して起き上がる。

そこにはラミナが拳を構えて、目の前にいた。

ヒソカは全力で横に跳び、直後ラミナの拳が床に叩きつけられる。

ドゴオン!!

巨大な重りでも叩きつけられたかのような音がして、床に亀裂が走り僅かにへこむ。

「なあ!？」

「なんだ、あの威力!？」

レオリオとポツクルが驚き、クラピカ達も目を見開く。

「……今の【硬】じゃなかったわよね?」

「ええ、恐らく【流】です。それでも、そこまで力を籠めていなかったようですが……」

メンチとサトツも想像以上の威力に僅かに目を見開く。

ヒソカは顔色を変えることなく、薄く笑ったままトランプを手裏剣のように投げる。

ラミナはバク転して躲し、天井近くまで跳び上がりながら距離を取る。

ヒソカは着地地点を予測してトランプを再び放つが、ラミナは天井に右手を突き刺してぶら下がって躲す。

トランプをやりすごしたラミナは床に下り立つ。

「はあ……このままやと勝負つきそうにないなあ」

「そうだねえ♣」

「これ以上、本気でやりたあないし。ここまでにしとこか」

「残念◆ けど、殺したら失格だしね♠ しょうがないか♥」

「ほな——」

「まいった♠ 僕の負け◆」

ヒソカが突如、降参を宣言する。

レオリオ達は哑然とし、ラミナは眉間に皺を寄せて訝しむ。

「……何のつもりや?」

「この後も楽しみにしてる人がいてね♥ だから、譲ってあげるよ♣」  
「……まあ、うちは合格になるからええけど」

ラミナはため息を吐いて、首をコキコキと鳴らす。

審判がヒソカのギブアップを認めて、ラミナの合格を宣言する。

ラミナはレオリオ達の元に戻り、壁に寄りかかる。

「あゝ……腹痛い」

「お前……マジで強かったんだな……」

「あ？ 何を今更って……まだ思い出しとらんのかい」

「え？」

「なんでもないわ」

ラミナは呆れながらも肩を竦めて誤魔化す。

(とりあえず、クロロからの命令は達成やな)

合格を手にして、一息つく。

続いている試合はハンゾー対ポツクル。

これはハンゾーが一瞬でポツクルをうつ伏せに押し倒し、ゴン同様左腕を捻り掴む。

「……悪いがあんたにや遠慮しねーぜ？」

「っ?! ……ま、まいった」

と、ポツクルはあつという間に降参してハンゾーが勝利する。

次はクラピカ対ヒソカ。

ヒソカはラミナの時同様クラピカの実力に合わせて戦いを楽しみ、しばらく戦った後に何かをクラピカに囁いて、また負けを宣言した。

(……嫌々な予感)

その様子を見ていたラミナは、ヒソカが旅団に関して余計なことを言った気がしてならない。

しかし、ラミナが訊ねた所でヒソカもクラピカも簡単に教えてくれそうにないので厄介だった。

案の定、クラピカに訊ねても答えてはくれなかった。

続いてはキルア対ポツクル。

しかし、キルアが「悪いけど、あんたと戦う気はないんでね」と自信たっぷりと言い、負けを宣言する。

(あゝ……次は地獄になると思うで?)

キルアの次の相手はイルミである。

絶対に何かしら仕掛けるはずだとラミナは考えた。しかし、もはや手遅れなので、黙って見守ることにした。

次のヒソカ対ポドロは、明らかにポドロの実力不足が目立ち、ヒソ

かもつまらなさそうに一方的にボドロを打ちのめしていく。

ボドロはボロボロになり仰向けに倒れるも降参はしなかったが、再び何かヒソカが耳元で呟くと、目を大きく見開いて降参した。

「……今度は何言うたんや？」

「ん？ 弱すぎてそろそろ殺したくなってきた ♠ って ♥」

「……さよで」

明らかに嘘だと直感で分かったが、そこをツツコむ気にはならなかったラミナであった。

そして、いよいよキルア対イルミとなった。

「始めー！」

キルアが僅かに脚を広げて構える。

すると、

「久しぶりだね、キル」

「!？」

イルミはそう言つて、顔に刺している針を抜いていく。全ての針が抜かれて、顔が歪んで髪が伸び始める。

キルアは目を見開いて固まる。

「あ……兄……貴……！」

「や」

素顔を露わにしたイルミは気軽に声を掛ける。

対してキルアは冷や汗が噴き出して、思わず右脚が一步後ろに下がる。

(……苦手意識の刷り込みはそう簡単には解けへんか)

「キルアの兄貴……!？」

レオリオは予想外の展開に驚く。

「母さんとミルキを刺したんだって？」

「まあね」

「母さん、泣いてたよ」

「そりやそうだろうな。息子にひで目に遭わされちやよ」  
「感激してたよ。あの子が立派に成長して嬉しうってさ」

「はあ!？」

(……母親が一番歪んどったか。そら、逃げ出したくもなるわな)

ラミナは呆れて、心底キルアに同情する。

「でも、やっぱりまだ外に出すのは心配だからって。それとなく様子を見に行くように頼まれてただけ。奇遇だね。まさかキルがハンターになりたいなんてね。俺も仕事の関係上資格を取りたくてさ」  
「……別にハンターになりたかったわけじゃないよ。ただ、なんとなく受けてみただけさ」

「……そうか。なら、心おきなく忠告できる。お前はハンターに向かないよ。お前の天職は殺し屋なんだから」

断言するイルミの言葉に、キルアは更に汗を流しながらもイルミを睨み返す。

「お前は熱を持たない闇人形だ。何も望まず、何も欲しがらない。陰を糧に動くお前が唯一歎びを抱くのは、人の死に触れたときだけ。お前は俺と親父にそう造られた。そんなお前が何を求めてハンターになると?」

(はつきり言いよるなあ。まあ、それだけ期待しとるんやろうけど……)

分かり辛い愛情にも程がある。

暗殺者に普通の愛情は足枷になるというのも分かるが、そこまで徹底するなら息子や弟などと呼ばなければいいのではとラミナは考える。

「確かに……ハンターにはなりたいと思ってるわけじゃない。だけど、俺にだって欲しいものくらいある」

「ないね」

「ある!。今、望んでることだってある!」

「ふくん。言っでごらん。何が望みか」

イルミの問いかけにキルアは僅かに躊躇する。

「どうした? やっぱりないんだろ?」

「違う!。……ゴンと……友達になりたい」

キルアは俯きながら言う。

「もう人殺しなんてうんざりだ。普通にゴンと友達になって、普通に遊びたい」

「無理だね。お前に友達なんて出来っこないよ。お前は人という者を殺せるか殺せないかでしか判断できない。そう教え込まれたからね。今のお前にはゴンが眩しすぎて、測り切れないでいるだけだ。友達になりたいわけじゃない」

「違う……」

「彼の傍にいれば、いずれお前は彼を殺したくなるよ。殺せるか殺せないか試したくなる。何故ならお前は根っからの人殺しだから」

「違う!!」

キルアは体を震わせながら叫び、否定する。

イルミは一瞬目を見開き、そして恨めし気にラミナに一瞬目を向ける。

ラミナはそれを涼しい顔で躲す。

そこにレオリオが一步前が出る。

「キルア!! お前の兄貴かなんか知らねえが言わせてもらうぜ!

そいつは馬鹿野郎でクソ野郎だ、聞く耳持つな!!」

(おく。ゾルディック家相手によく言えるなあ。湿原でのヒソカの時も思たけど)

「ゴンと友達になりたいだど? ふざけんな!! お前らとつくにダチ

同士だろーがよ!!」

「……!!」

「 gonはとつくにそう思ってるはずだぜ!!」

「え? そうなの?」

「つたりめえだ、バーカ!!」

レオリオの言葉にイルミが反応を示す。

「そうか……。まいったな。 gonはもうそのつもりなのか」

顎に手を当てたイルミは数秒考えて、

「よし、 gonを殺そう」

「!!」

キルア、レオリオ、クラピカが目を見開く。

「殺し屋に友達なんていらぬ。邪魔なだけだから」  
そう言うといルミは扉へと向かい始める。

「彼はどこにいるの？」

「ちよ。待つてください。まだ試験は——あ」

止めようとした試験官の頭にイルミは針を突き刺す。

試験官の顔が歪に変形し始めて、苦し気に呻く。

「どっどっ？」

「ト、トなりノ控え室二……」

「どうも」

無理矢理針を刺した試験官からゴンの居場所を聞き出したイルミは、扉に向かって歩き始める。

レオリオ、クラピカ、ハンゾーや試験官達が扉の前に立ち塞がろうとした時、

「うああああ!!」

「!!」

キルアが叫びながらイルミに飛び掛かり、蹴りを放つ。

イルミは軽やかに躲すが、明らかに動揺した霧困気を醸し出していた。

「はあー！ はあー！ はあー！」

キルアは滝のように汗を流しながら荒く息を吐き、瞳も震わせながらもイルミを睨みつける。

「キル……どういふつもりだい？」

「はあー！ はあー！」

「俺は教えたはずだよ。『勝ち目のない敵とは戦うな』って。まさか、俺に勝てると思ってるのか？」

イルミの霧困気が明らかに変わる。

禍々しいオーラを纏い、殺気が溢れる。

キルアは大きく距離を取り、困惑した表情で自分の脚とイルミを交互に見る。

「どうするの？ 俺を倒して、ゴンを助けるかい？ でも、お前が俺に勝てるのか？ お前を造り上げたのは誰だか忘れたんじゃないよね？」

イルミはゆっくりとキルアに歩み寄りながら告げる。

キルアは再び距離を取ろうとするが、

「動くな」

「!!」

「一歩でも動けば、戦いの合図とみなす。そして、このまま俺とお前の体が触れた瞬間から戦い開始とする。止める方法は1つだけ。だが……忘れるな。お前が俺と戦わなければ、大事なゴンは死ぬことになるよ」

「……うるせえ」

「……なに？」

「うるっせええええ!!」

キルアが叫びながら猛スピードでイルミに飛び掛かる。キルアは両手の爪を鋭くして、貫手を繰り出す。

イルミはそれを躲して、距離を取ろうとするが、キルアは一瞬で距離を詰める。そして、目にも止まらぬスピードで貫手を連続で振るう。

「いけえ!! キルア!!」

レオリオはゴンの時同様応援する。

しかし、ラミナは少しマズイと思っていた。

(……キルアは吹っ切れたかもしれないけど、まだ混乱しとるな。殺す気でいつとる。試験ってこと頭から抜けとるか。そんで、イルミも混乱しとるな。苛立ちが隠せんようになってきとる)

実力的にはまだイルミが上だ。だから、まだキルアを殺す気ではない様子ではある。

しかし、言うことを聞かなくなったことへの苛立ちはかなり大きいようだ。

このままでは、死者が出る可能性がある。

(なにより、このままやとイルミの奴、どっちにしろゴンを殺しに行き



そりゃな)

さつきまではキルアを脅すだけだったが、今となつては間違いなくイルミにとつてゴンは「キルアの邪魔」と認定されたことだろう。そうなれば、色々と面倒事になる気しかしない。

「あく……まったく。難儀な兄弟やな」

ラミナは頭をガシガシと搔きながら、壁から背中を離す。

イルミは蹴りを放つて、キルアは大きく跳び下がって躲す。

それと同時にイルミが針を投げて、キルアが気付いた時には目の前に針があつた。

(っ！ しまっ……い！)

イルミは針を投げた瞬間、力が入り過ぎた事を悟つて内心慌てる。

キルアは目を見開いて、一か八か腕で庇おうとした時、

突如、視界が歪み、気づけばラミナの左脇に抱えられていた。

ラミナの右手指には針が3本挟まれており、どう見てもラミナがキルアを庇つたことが窺える。

「なっ……!?!」

キルアはラミナの行動に驚き、レオリオ達も目を見開く。

「……どういふつもりだい?」

「2人揃つて殺気出し過ぎや。それに今の針、下手したら死んどつたで? そしたら困るんはそつちやろ?」

「……」

「それと会長」

「……なにかの?」

「イルミの試験官への攻撃は許されるんか? 明らかに試合で巻き込まれた攻撃ちゃうで?」

ラミナの質問に全員の視線がネテロに集中する。

ネテロは顎髭を撫でながら、ゆっくりと口を開く。

「確かにあまり褒められたことではないのは事実じゃ」

「つちゆうことは?」

「ただ、殺してはおらん。故に明確な反則とは言い難いの。試験官を攻撃してはならん、とは言うておらん以上はな」

「……なるほど。つちゆうことは、うちが手を出してしもたキルアが失格、やな?」

「……残念ながら、そうなる」

「なっ!? 冗談じゃねえぞ!? どう考えてもキルアの兄貴の方が失格だろ! あの攻撃でキルアが死んでたかもしれねえんだぞ!」

「しかし、そうならなかった以上、『もしかしたら死ななかつたかもしれない』という仮定が生まれてしもうた。なので、ギタラクルの反則行為は認められんのじゃよ」

「そんな……!!」

レオリオが悔し気に齒軋りする。

ラミナは呆然とするキルアを下ろす。

「……」

ラミナはため息を吐いて、イルミに顔を向ける。

「で、イルミ。まだゴンを殺す気かいな?」

「……そうだね……」

「おすすめはせえへんで。その時はキルアはもう二度とそっちには帰らんやろ」

「……分かった。ここで殺すのはやめよう」

イルミの言葉にレオリオとクラピカがふうくと息を吐く。

「けど、キル。条件として、お前には一度家に戻ってもらうよ。それが嫌ならゴンは殺す」

出された条件に再びレオリオとクラピカは齒を食いしぼる。

キルアも話は聞こえていたようで、

「……分かった。だから……ゴンは殺さないでくれ」

「もちろん、取引は守るさ」

「……」

「キル。もし、本当にゴンといたいなら、親父達を説得するんだね。親父が認めれば、俺も何も言わないよ」

「……ああ」

キルアは精魂尽き果てた様子でイルミの言葉に頷く。

そして、ラミナの背中を軽く叩き、

「……ありがとな」

そう言つてキルアは扉に向かつて歩き出す。

レオリオやクラピカが声を掛けるも、何も答えることなく扉の向こうに消えた。

そして、そのままキルアが戻ることはなく、後味の悪い雰囲気のまま、ハンター試験は終わりを迎えたのだった。

## #15 オウチ×ニ×ゴシヨウタイ

キルアの失格と言う形で終了したハンター試験。

レオリオ、クラピカは納得出来ない部分もあるが、ゴンが目を覚ますまで待つことにした。

翌日にハンター証についての講義があり、それが終了すれば晴れてハンターの仲間入りとなる。

ラミナは与えられた部屋でのんびりしながら、電話を掛ける。

『……ラミナか？』

「久しぶりやな、クロロ」

『どうした、急に？』

「……人にハンター試験受けさせといて、その言い方がい」

『ああ、すまない。そうだったな。それで？ 合格したのか？』

「受かったで。明日、ハンター証を受け取れることになった」

『流石だな』

「それで？ 何させるつもりやねん」

『9月1日からヨークシンシティで行われるオークションは知っているな？』

「もちろん」

『お前にはそれまでにどこかのマフィアの用心棒として潜り込んでほしい。出来れば十老頭に近いマフィアでな』

「簡単に言うことちゃうぞ、オイ」

『お前の実力なら問題ないはずだ。潜り込めたら、また連絡をくれ』  
一方的に切られてしまい、ラミナは苛立ちながら携帯を見下ろす。

「簡単に言いよってからに……！」

マフィアとの繋がりを持つのは簡単ではない。

「リップー」の名で近づくわけにもいかないの、ラミナの名で近づくなければならぬ。

問題はこの姿のまま近づくかどうかだ。

暗殺者は賞金首になりやすい。なので、あまり堂々と姿を見せたくない。

「……まあ、マファイア相手に気にするだけアホらしいか。はあ……」  
ラミナはため息を吐いて、段取りを考える。

その時、再び電話が鳴る。画面に出たのは見たことがない番号だった。

「誰や？ ……はいな」

『リッパーだな？』

「どちらさん？」

『シルバ・ゾルディックだ』

「……」

何故かゾルディック家当家から電話がかかってきた。

もちろん教えたのはイルミだろうが、まさか向こうからかかってくるとは思わなかった。

「用件は……？」

『イルミからキルアの話は聞いた。針の事も、試験の事も』

「さいでつか」

『それについて直接会って話をしたい。試験の後、パドキア共和国のククルーマウンテンに来てくれ』

「……はあく。まあ、当主に埋め合わせするて言うたからなあ。分かった。終わり次第向かうわ」

『待っているぞ』

ブツリと通話が切れ、ラミナはため息を吐く。

「バケモンの親玉共は気軽に人に言うてくれるわ、ホンマ」

ラミナは携帯を放り投げて、ふて寝することにした。

翌朝、ハンター証を各自受け取った合格者達は講堂に集まっていた。

「ゴンはまだ寝とるんかいな」

「ああ、恐らく疲れもあったのだろう」

「骨もハンゾーが綺麗に折ってたみたいだな。早く回復するそうだ」

「そら、よかった」

適当に座って待っていると、ネテロを始めとする試験官達が入室し

てきた。

「おはようじや、諸君。良き朝を迎えられたかの？ では、これよりハ  
ンター証などについて改めて説明を行う」

「それでは不肖ながら私、ピーンズが説明させていただきます」

その時、部屋の後方の扉が勢いよく開く。

全員が目を向けると、現れたのは真剣な顔をしたゴンだった。

ゴンは注目されていることなどお構いなく歩き出し、イルミの元へ  
と向かう。

「ゴン」

レオリオが声を掛けるが、ゴンは無視をしてイルミの横で止まる。

そして、イルミを鋭く睨みつけて、

「キルアに謝れ」

力強く言い放った。

「謝る？ 何を？」

「……そんなことも分からないの？」

「うん」

「お前に兄貴の資格はないよ」

「？ 兄弟に資格がいるのかな？」

その瞬間、ゴンはイルミの右腕を右手で掴み、片腕でイルミを振り  
上げた。

ゴンの力に見ていた者達は僅かに目を見開く。

イルミは緩やかに着地するも、その顔は僅かに驚きに染められてい  
た。

「友達になるのにだって資格なんていらんない!!」

ゴンはイルミの腕を握り締めながら言い放つ。

すると、ゴンが後ろを振り返り、

「キルアの元へ行くんだ。もう謝らなくていいよ。案内だけして  
くれればいい」

「そして、どうする？」

「決まってんじやん。キルアを連れ戻す」

「まるで誘拐されたような口ぶりだね」

「俺の命を人質にされて無理矢理従わされたんだから、誘拐されたも同然だ！」

ゴンは怒りを露わにして、イルミに向かって言う。  
「どうやら誰かから話を聞いたようだった。」

（これはどうしたもんやろか。うちがゾルディック家にお呼ばれされたん教えた方がええんか？）

ラミナはまた話がややこしくなってきた顔で顔を顰める。

ここでゴンが出てくると、シルバとの話がこじれそうだと考える。

しかし、ゴンの怒りも正当なものだと思うので、邪魔する道理はない。

「もしも今まで望んでないキルアに、無理矢理人殺しをさせていたのなら、お前を許さない」

「……許さないか。で、どうする？」

「どうもしない。お前達からキルアを連れ戻して、もう会わせないよ  
うにするだけだ」

（なあんでゴンと言い、レオリオと言い、相手関係なくあそこまで啖呵切れるんやろなあ。まあ、キレとるからなんやろうけど）

ラミナがどうでもいい事を考えていると、イルミが左手をゴンに向けてける。

イルミのオーラが僅かに強まった瞬間、ゴンはイルミから手を放して跳び下がる。

「ほお……気づいたんか」

イルミのオーラを躲したことに感心するラミナ。

禍々しくはあったが、殺気をそこまで乗せていなかったで、キレた状態なら気づかないかと思っていた。

ゴンはイルミの正体不明の圧迫感に警戒して近づかない。

そこにネテロが声を掛ける。

「さて諸君、よろしいかな？ とりあえず、キルアの所に行くにしても、まずは説明をしつかりと聞いた方が良いでしょう」

その言葉を聞いたゴンは苦い表情を浮かべるも、大人しく席に座る。

イルミも大人しく席に座り、説明会が再開する。

「それでは改めて。皆さんにお渡ししたカードがハンター証です。カード自体は見た目は地味ですが、偽造防止のためあらゆる最高技術が施されている以外は他のものと変わりません。ただし、効力は絶大！ まず、このカードで民間人が入国禁止の国の約90%と立ち入り禁止区域の75%まで入ることが出来ます」

(……もしかしてクロロの雲隠れってこれが理由か?)

「公的施設は95%が無料。銀行からの融資も一流企業並みに受けられます。売れば人生7回くらい遊んで過ごせますし、持つてるだけでも一生何不自由なく生きていくことが出来ます。それだけに紛失・盗難には気を付けてください。再発行は致しません。我々の統計ではハンターに合格した者の5人に1人が1年以内に何らかの形でカードを失っております。プロになられたあなた方の最初の試練は『カードを守ること』と言っていいでしょう!」

「次に協会の規約についてですが、十か条というものが定められています」

【その1】

ハンターたるもの何かを狩らなければいけない。

【その2】

ハンターたるもの最低限の武の心得が必要である。

【その3】

一度ハンターの証を得た者はどのような事情があろうと取り消されることはない。ただし、再発行はどのような事情があろうとも行わない。

【その4】

ハンターたるもの同胞を標的にしてはならない。ただし、甚だ悪質な犯罪行為に及んだ者に対してはその限りではない。

【その5】

特定の分野に於いて華々しい業績を残した者には星が1つ与えられる。

【その6】



5を満たし、かつ上官職に就き育成に携わった後輩ハンターが星を1つ得たとき、その先輩ハンターには星が2つ与えられる。

【その7】  
6を満たし、かつ複数の分野に於いて華々しい業績を残したハンターには星が3つ与えられる。

【その8】  
ハンターの最高責任者たるもの最低限の信任がなければ、その資格を有することができない。最低限とは全同胞の過半数である。

会長の座が空白になったとき、直ちに次期会長の選出を行い、決定するまでの会長代行は副たる者に与えられる。

【その9】  
新たに加入する同胞を選抜する方法の決定権は会長にある。ただし、従来の方法を大幅に変更する場合は、全同胞の過半数の信任が必要である。

【その10】  
ここにはない事柄の一切は会長とその副たる者参謀諸氏との閣議で決定する。副たる者と参謀諸氏を選出する権利は会長が持つ。これらを最低限憶えておけば、ハンターとして活動できるとのこと。

(……【その4】つて、うちはどうなんやらなあ……。暗殺者つて悪質な犯罪者ちやう？ それにハンター証渡すんつて矛盾しとらんか？) ラミナは色々と疑問を覚えたが、貰えるのだから大人しくもらっておくことにした。

そこをツツコむと他2名ほど、ラミナより悪人がいることにツツコみが飛びそうだったからだ。

「さて、以上で説明を終わります。後はあなた方次第です。試練を乗り越えた自身の力を信じて、夢に向かって前進してください」  
ビーンズは締めくくる様に告げる。

「ここにいる9名を新しくハンターと認定致します!!」

説明会が終わって、立ち上がるラミナ達。

すると、ゴンがさっきの続きとばかりにイルミに話しかける。

「キルアの居場所を教えてください」

「……止めといた方がいいと思うよ?」

「誰が止めるもんか! キルアは俺の友達だ! 絶対に連れ戻す!」

「……後ろの2人も同じかい?」

イルミの言葉にゴンは後ろを振り返る。そこにはレオリオとクラピカが立っていた。

さらにそこに、

「うちが知つとるで」

「ラミナ!」

ラミナも歩み寄る。

イルミが睨みつけてくるが、ラミナは肩を竦めて躲す。

「うちを呼んだんはそつちやでな。それに誰かが付いてくるだけや。まあ、安心しい。流星に敷地前までの案内や」

「……ならいいけど。来たところでどうせ辿り着けないだろうし」

そう言つて、講堂を後にするラミナ達。

ヒソカとイルミの視線を感じたラミナは、面倒くさげにするも一度話をしておくことにした。

「クラピカ。悪いんやけど『パドキア共和国』行きのチケット頼むわ。目的地は『ククルーマウンテン』」

「パドキア共和国のククルーマウンテンだな。分かった。一度めくつて、私達のと合わせて確保しておく」

「すまん。すぐに合流するわ」

クラピカに頼んで、ラミナはヒソカ達の元に歩み寄る。

「なんやねん?」

「くく♣ 君も物好きだと思つてね♥」

「ああいう輩は満足するまでやらせた方が諦めも早いやろ」  
「諦めればいいけどね」

「そこはゴン次第やからな。うちが何をしようと変わらへんわ」

「かもね♠ それにしても……」

「ん? ああ、これ?」

イルミはゴンに握り締められた腕を見下ろす。

「うん。折れてるよ」

「ほお」

「確かに面白い素材だね。お前達が見守りたいって気持ちがよく分かるよ」

「だろ♥」

「暗殺者と戦闘狂に面白い言われても嬉しくないやろうけどな。ところでヒソカ」

「なんだい？」

「クラピカに何言うたんか、聞いてええか？」

「……内緒♠」

「……ヨークシンのことやな？」

ラミナは目を鋭くしてヒソカを睨みつける。

ヒソカは笑みを深めるだけで、何も答えない。

「……まあ、うちは団員やないからお前が何を企んでようがどうでもええけど……。むやみやたらに引っ掻き回すだけやったら……。お前の数字、うちが切り取りに行くで？」

殺気を醸し出して、ヒソカを睨みつける。

「それは楽しそうだね♥」

「……変態が」

ラミナは眉間に皺を寄せて、吐き捨てながら2人の前から去る。

そのままゴン達の元へと向かう。

ゴン達の元に向かうとハンゾーとポツクルと話していた。

「あ、ラミナ」

「お。ちようどいいところに。ほれ」

ハンゾーはラミナに名刺を渡す。

『雲隠れ流上忍 半蔵』と書かれており、ホームコードと電話番号も書かれていた。

「……ホンマに忍か？」

「うっせえな。ほれ、お前さんのもくれよ」

「俺も貰っていいか？」

ポツクルもホームコードを渡してくる。

ラミナはそれを受け取るも、肩を竦める。

「後で送るわ。うちのホームコードは裏の仕事の奴でな。持ち歩いてないねん」

「わ、分かった」

「それでよく仕事来るな?」

ポツクルは堂々と殺し屋発言されて引き、ハンゾーは首を傾げる。「そりゃあ仲介者やマフィア相手にしとつたら、そこそこ情報は広がるでな」

「それもそうか。じゃあな」

「達者でな」

ハンゾーとポツクルは手を上げて去っていく。

見送ったラミナはゴン達に顔を向ける。

「チケツトはこれからか?」

「ああ」

「ちよつとあんた」

「ん?」

チケツトを予約に行こうとしたら、メンチが声を掛けてきた。

ラミナはクラピカ達を先に行かせて、話を聞くことにした。

講堂に再び戻ると、ネテロやサトツ達もいた。

「なんや?」

「念のことについてよ」

「念の?」

「さよう。実はハンター試験はまだ終わっておらんのじゃよ。お主とヒソカにギタラクル以外はの」

「……念の習得も試験なんか」

「そうです。先ほどの説明されたハンター十か条【その2】は念の修得の事を指します」

「裏ハンター試験って言われててね。プロハンターが教えることになってるの」

「せやから、うちから念の事を話すなど?」

「いや、もし話すのであれば、しっかりと教え込んでくれと言うこと

じゃ。中途半端に会得すれば、下手に死にかねんからの。そして、もし教えたのであれば、協会の方に一報を入れてほしいのじゃ」

「なるほど。まあ、今んところ教える気はないさかい、大丈夫やと思うけどな」

「それともう一つ。キルアのことじゃが」

「あん？」

「受ける気があるならば来年も受けるように伝えてやってくれ」

「……それはゴンに任せるわ。うちやとキルアをあの家から引っ張り出せんでな」

「果たしてそうかのお」

「あの兄貴と同じ穴の貉が説得してもな。ゴンやったら、大丈夫やろ。」

「話はそれだけか？」

「うむ。達者でのお」

「あ。今度仕事一緒にしない？」

「時間があれば構へんで。まあ、うちの暗殺者用のホームコードに連絡入れてや」

「教えなさいよ」

「持ち歩いてへんねん。マフィア連中が探せるんやから、プロハンターならすぐに見つけられるやろ」

「ぐぐ……！」

「ほっほっほっ！」

「ほなな」

講堂を出て、再びクラピカ達の前に向かう。

クラピカ達はパソコンの前に集まっており、ラミナも顔を覗かせる。

「見つかったんか？」

「おう。今日の夜に出発の飛行船を予約したぜ。大体3日くらいだよ」

「了解や。それで？　なんか調べとったんか？」

「親父の事だよ」

「ゴンの？」

「うん。ジン・フリークスって言うんだ。けど、ゴクヒカイイン？って奴みたいで何も分からなかったけど」

「電腦ページの極秘会員？ なんや、大物やったんやな」

「うん。ダブルハンターだつてサトツさんが言つてた」

「ほお。ベテラン中のベテランやな。まあ、新人ハンターですら意味分からんくらいの好待遇なんや。ダブルハンターまで行くと、それだけの権力と資金は楽に手に入るんやろうな」

「ひえ〜……プロハンターつてのはホントやべえな……。一体何億くらい資産あんだ？」

「兆の単位やと思うで？ 一暗殺者のうちが8億持つとるし」

「8……!?!? なんぞそんなに稼いでんだよ!?!」

「マフィアなんぞ敵対しとる奴殺すのに、5000万や1億とかポンポン出しよるでな。ゾルディック家やったら100億単位やないと雇えんのちゃうか？」

「……う、裏の世界つて凄まじいんだな……」

「ハンターになつた奴が言うセリフちゃうぞ」

ラミナは呆れながらレオリオを見て、ゴンに目を向ける。

ゴンはどこか嬉しそうに薄っすらと笑みを浮かべている。

「ほな、行こか」

「そうだね！ キルアに会いに行こう！」

(そんな簡単ちゃうやろうけどな)

そして、ゴン達は飛行船に乗って パドキア共和国を目指す。

3日後、パドキア共和国に着いたラミナは、呆れた顔でゴン達を見ていた。

「観光ビザで入国せんでもええやろ。せつかくハンター証ゲットしたのに」

「コレはまだ使わないって決めたから」

「頑固なやつぢやな。レオリオとクラピカまで付き合わんでええやろ」

「俺はゴンとキルアに合格させてもらったからな。せめてキルアを連

れ出すまではな」

「ということ、2人が使わないなら私も付き合うことにした。どっちにしろゴンとレオリオがここを去れば、私も引かざるを得ないしな」

「真面目な連中ばかりやなあ」

もちろんラミナはハンター証を使っている。

ラミナの目的はシルバに会うことなので、期限を設定するわけにはいかないからだ。

ちなみにもうすでにシルバには到着の連絡は入れてある。もちろんゴン達の事も伝えてはあるが、中まで連れて行く気はないことも言っている。

ククルーマウンテンがあるデントラ地区までは列車で向かう。

「見えてきたぜ」

列車の窓から巨大な山が見える。

標高3722mの死火山で、周囲は樹海で囲まれており、そのどこかにゾルディック家の屋敷があると言われている。

「暗殺一家のアジトか……。実際見ると嫌な雰囲気だな」

「うむ……。周囲の聞き込みから始めるか」

「まず宿を確保して作戦を立てようぜ」

「なんで？ 大丈夫だよ。友達に会いに来ただけなんだから」

ゴンが不思議そうな顔をしてレオリオとクラピカに言う。

それにラミナも含めて「脳天気な……」と呆れる。

「まあ、聞き込みはいらんやろ。ゾルディック家の門までは観光バスが出とるでな。そこに行くまでは簡単や」

「観光バスう!？」

「調べたんちやうんか？」

ラミナは再び呆れる。

デントラ地区では1日1回。山景巡りの観光バスが出ており、その山がククルーマウンテンである。そのため、必然的にゾルディック家のことも観光の目玉とされている。

「……暗殺者のアジトが観光名所？」

「うちもそうやけど、暗殺者言うたかて別に目につく人間全員殺すわけないやろ。基本的に金にならん殺しはせん。まあ、目標を殺すためやったら他人を巻き込むことは躊躇わんけどな。せやからゾルディック家からすりやあ、家の前でチョコロチョコロしとつても気にせんのやろうな」

「ハンターが来たらどうすんだよ?」

「んなもん、返り討ちにするだけやろ。あの敷地内における連中、使用人も含めて全員殺しのプロやぞ」

「……マジかよ」

「……想像以上に厄介な家庭のようだな」

「言っとくけどな、ゴンの思つとるように行かんと思うで。あそこはマフィアみたいなものや。その御曹司にそう簡単に会えると思ふか?」

「思えねえよなあ……」

ゴンは裏の世界を甘く見過ぎている。

正確に言えば、理解していないだけなのだろうが、そこを理解しようとせずに意地を張っているような様子に見える。

暗殺者の一家からすれば、友人など一番警戒する対象になるのは『普通』である。

殺しを生業にしている以上、逆に殺されることなど日常茶飯事なのだから。

人間の心の内など誰にも分からない。

だから、必要以上に人を遠ざけることは間違っていない。

キルアを縛り付けているのは、キルアを守るためでもあるのだから。

「ところでラミナは何でキルアの家に行くの?」

「ゾルディック家当主、つまりキルアの親父さんからお呼ばれされたんや。ちよいと色々あつてな」

「……確か前に命を狙われたのではなかったか?」

「もうその依頼主はおらんし。大丈夫やろ」

「なんでそこで確信持てるんだよ……」



「同業者やからな。あつちのやり方はなんとなく理解出来たんや。少なくとも当主は金にならん殺しはせん。余計なことをせんかったらな」

と言つても、その余計なことをした可能性があるのだが。しかし、面と向かつて話す以上、無闇に殺す気はないのだろうとは考えている。無理難題は吹っ掛けられそうだが。

嫌な予感がしているが、逃げられる気もしないので頑張つて取引を仕掛けるつもりなラミナだった。

(下手な取引したら、今度はマチ姉に殺されそうやしな)

優しくもおつかない姉は意外と沸点が低く、ラミナを『自分のもの』扱いしている所がある。

ゾルディック家に盗られたと思つたら、ウボオーなどを嚇けて戦争を仕掛ける可能性が高い。そうなれば、一番駆け回るのは間違いなくラミナであり、マチだけでなく、クロロやシルバに更に借りを作ることになるだろう。

それだけは勘弁だった。

(……クロロに連絡入れとこ)

先に予防線を張ることにしたラミナであった。

デントラ地区の街に着いたラミナ達は、早速観光バス乗り場に向かいバスに乗る。

バスガイドが明るい口調でゾルディック家について、説明している。

バスの中には一般の観光客に混じつて、賞金首ハンターのような者が4名ほど混じっていた。

「……明らかにカタギじゃねえ奴らが乗つてるな」

「ほつときい。ゾルディック家の噂を甘く見とるお調子もんやろ。実力はレオリオと同じくらいや。ゾルディックに会う前に死ぬやろ」

纏っている【纏】もお粗末なものだった。

恐らくは基本四大行の修得だけで満足した愚か者の類。殺し屋と

呼ぶ気にもならない。

「さて、皆さま。これよりゾルディック家の正門前にて一時停車致します。あまりバスから離れないようお願いいたします」

そのアナウンスの5分後にバスは停止し、ラミナ達は降車する。

目の前には巨大な門があり、7までの数字が記されている。

門の横には守衛室と思われる小屋があり、その隣は小さな扉があった。

「ここは通称『黄泉の門』と呼ばれております。入ったら最後、出られないという意味だからです。ちなみにここから先はゾルディック家の私有地となっておりまして、見学は出来ません」

「なにー!? まだ山までかなりの距離があるぜ!」

「はい。ここから先の樹海はもちろんククルーマウンテンも全て、ゾルディック家の敷地となっております」

「……マジかよ」

「まあ、長いこと仕事しとれば金くらい貯まるやろ」

レオリオは啞然と目の前の門を見上げる。

ラミナは特に意外でもないので驚きはしない。

ゴンはその横で悩まし気に門を見上げている。恐らくどうやって入ればいいのか考えているのだろうとラミナは推測する。

その時、ラミナに近づいてくる人影が現れる。

「ご歓談中に失礼いたします。リッパー様でございますでしょうか？」

声を掛けてきたのは眼鏡をかけた執事服の男。

ピシッと背筋を伸ばして礼儀正しい口調だが、纏う気配には一分の隙もない。

ラミナが頷くと、執事は頭を下げる。

「お待ちしております。私、ゾルディック家に仕える執事のゴトーと申します」

「わざわざおおきに」

「とんでもございません。それではご案内させていただきます。……ただし、お連れ様はここまでとさせていただきます」

「わあつとる」

ゴトーの言葉にラミナは頷いて、後に続く。

しかし、もちろんゴンがこの機会を逃すわけがない。ゴンはゴトーの前に立ち塞がる。

「待って！ 俺、キルアの友達のゴンと言います。俺達も中に入れてもらってもいいですか？」

「キルア様に友達などおりません。お断りいたします」

「……キルアに聞いてくれれば分かる」

「それは今、あなたを中に入れる理由にはなりません」

「っ！ ……キルアに会わせてくれるだけでいいんだ」

「くだい。仮に、本当にキルア様の友人にゴンと言う少年がいて、それが君だと言う確証もない。そして、本当にゴン本人であったとしても、私は何も聞いていない以上、その程度でキルア様に会わせるわけにいかない」

ゴトーの口調が高圧的なものになる。

僅かに殺気も溢れ出しているが、それでもまだ冷静かつ丁寧に理由を話して拒絶する。

ゴトーとゴンの会話が聞こえたのか、周囲の観光客や例の賞金首ハンター達も2人に注目する。

「君がキルア様……ゾルディック家の方々を狙う者に操られていないという確証は？ その友人である自体、演技ではないという確証は？ 全ての可能性がゼロにならない限り、我々執事が君の要望に応えることはない。ゾルディック家の生業は暗殺。自然、その輩のように敵も多くなる。そのような外敵から、命を懸けて主を守るのが我々の役目だ。故に、私はここで殺されても、そして逆に君をここで殺しても、案内する気はない」

力強くはつきりと告げるゴトーに、ゴンは歯軋りして両手を握り締める。

「お待たせして申し訳ありません。では、参りましょう」

「へいへい」

「っ！ ラミナ！」

ゴンは最後の望みとばかりにラミナに呼びかける。  
しかし、

「悪いけど、うちに決定権はない。頼むことも出来ん。うちからすれば、ゴトー殿の言い分は正しいでな」

ラミナはゴンの希望を切り捨てる。

言ったようにゴトーの立場上、ゴトーの態度は全く間違っていないと思っっているからだ。

これに関してはゾルディック家特有と言う話ではなく、マフィアだろうが王族だろうが、要人警護をする者ならば同じ対応をするだろうからだ。

故に客人に過ぎないラミナが、そこに口出しするのはお門違いであり敵対行為に等しい。

「けど、キルアに確認を取るくらい……!」

「それを決めるんはゴトー殿やない。キルアを始め、ゾルディック家のもんや。そして、ゾルディック家当主が『キルアに取り次ぐ必要はない』って言うてたら、キルアがどう言おうと使用人達はそれすらも出来ん。相手を間違えたらあかんで、ゴン」

そう言っつてラミナは歩き出す。

ゴンは項垂れてしまい、追いかけることは出来なかった。レオリオとクラピカはゴンを心配そうに見つめて、傍に寄る。

そこに今度は賞金首ハンターと思われる2人の男がゴトーとラミナに近づいてくる。

「待ちな。俺達も連れて行ってもらお——」

ズパァン!

ズパァン!

突如、近づいてきた男達の頭が吹き飛び、脳みそを撒き散らしながら即死する。

「うわあああ!?!」

「ひいひい!?!」

目の前で人が死んだのを目撃した観光客達は悲鳴を上げて、ゴン達や残った賞金首ハンター2人も目を見開く。

殺した張本人であるゴトーは眼鏡の位置を直しながら、死体を見下ろす。

「言っただろうが。主に危害を加える者は殺してでも案内する気はないってな……」

「中々おもしろい技やな」

「光栄です」

ゴトーの攻撃をしつかりと視ていたラミナは素直に称賛する。

ゴトーはすぐに殺気を収めて、笑みを浮かべる。

そのまま巨大な門に近づいて行く。

「こつちから入るんか」

「はい。もう一方の扉は侵入者のものですので」

「ほお〜」

「それですね。この扉はあなた様に開けて頂きたいと思えます」

「……なんかあるんか？」

「この門は正しくは『試しの門』と申しまして。1の扉は片方2トンあります。全部で7まで扉があり、1つ増えることに重さが倍に変わります。そして開ける者の力に応じて、大きい扉が開く仕組みです。この門には鍵がなく、この門から入れば侵入者用のトラップは発動しません」

「なるほどなあ。どれ……」

扉に手を掛けたラミナは、特に気合も入れずにゆっくりと力を籠めて押す。

ギョオオオオオ

音を響かせて開いた扉は4つ。

計32トンの扉が軽々と開き、ゴトーも一瞬目を見開く。

「……そのままお入りください。扉は手を放すと、すぐに閉まります」

「ほな、早よ入って。ゴンとかが来ても困るでな」

「ありがとうございます。失礼いたします」

ゴトーが中に入り、ラミナも続いて中に入って手を放す。

ドオオオン！ と音を立てて、扉が勢いよく閉まる。

「これって複数人で開けられたらどうするんや？」

「別に何も。1人で1の扉も開けられない者共程度、執事見習いで十分ですので」

「なるほど。ん?」

再びゴトーの案内で歩き出すと、すぐ近くの茂みから音がする。

現れたのは巨大な犬型の獣。

「お〜」

「こいつはミケという番犬です。ゾルディック家の命しか聞かず、トランプ用の扉から入った者は誰であれ噛み殺します。今はあなたの事を覚えようとしているのでしよう。あなたが敷地内を歩き回っても襲わないようにね」

「頭ええなあ」

すると、ミケが弾かれたように立ち上がり、猛スピードで森の中に消えていく。

「お?」

「どうやら侵入者のようですね」

「ゴンでないとええけど……」

直後、悲鳴が聞こえる。

「違う奴やな。残った賞金首ハンターか」

「それは良かった」

「で、どこまで行くんや?」

「途中で乗り物をご用意しております。それで本邸までご案内します」

「頼むわ」

こうしてラミナはゴンと言う不安要素を残したまま、伝説の暗殺者一族の巣に足を踏み入れたのだった。

## #16 ナニガ×ドウシテ×ソウナツタ!?

ゾルディック家本邸はククルーマウンテンの内部にあった。

というよりも、山そのものを家にしていた。

「見事なもんやな」

ラミナは素直に称賛する。

老朽化もほぼ心配ない。もちろん大地震が起きれば話は別だが。それでも周囲の樹海も含めれば、まさに天然の要塞だ。

下手に侵入すればミケのような獣に襲われ、試しの門から進んでもゴトーを始めとする暗殺術を仕込まれた使用人達が多数待ち構えており、本邸まで来ても更に鍛えられた本命のゾルディック一家がいる。

幻影旅団でも壊滅覚悟でなければ厳しいだろうとラミナは考える。正直、ずっと耐えているが首の後ろがピリピリして落ち着かない。流石に暗殺一家の本拠地において、落ち着けるわけではない。

更に先ほどからずくずと誰かに見られているような妙な気配を感じていた。

(隠れて見とるっちゆう感じやない。監視カメラか何かか? それで視線を感じるっちゆうことはカメラを通して誰かが見とるってことか)

眉間に僅かに皺を寄せながらゴトーの後ろを歩くラミナ。

ふと、窓から外を見ると、すっかり日が暮れていた。

「今日は面会あるんか?」

「はい。この後、客室にご案内後にシルバ様、ゼノ様とのご会食の予定となっております」

「……さよで」

全く喜べない。

毒料理でないこと、そして客室に隠しカメラや暗殺道具がないことを祈るラミナだった。

それを感じ取ったのか、ゴトーが苦笑しながら、

「ご安心ください。客室に変な仕掛けはございません。料理にも毒や

薬などを混ぜることもありません。お客人として招いた以上、礼儀を欠くような真似を好む方々ではありませんので」

「信じるで、ホンマ」

「その時は私の首を差し上げましょう」

その言葉にラミナは少し警戒を下げる。

シルバとゼノはそうでも、他の家族がそうとは限らないかもしれないので完全に解くことは出来ない。

イルミが似ているという母親には特に注意する気だった。今日の食事にはいない様だが、油断は出来ない。

「ご滞在の間はこちらでお寛ぎください」

案内されたのはホテルのスウィートルームのような部屋だった。

ソファやテレビが置いてある10畳ほどのリビングルームに、豪華な洗面台が備え付けられた浴室。そして清潔なシーツで整えられた2つのベッド。

「豪華やな」

「旦那様より最大級のおもてなしをと」

「怖いわ。一度殺し合いたした相手にここまでされたら」

「ふふっ。そうでしょうな。恐らくは以前タダ働きにされた意趣返しでしょう」

「ちっさ！ 伝説一家の当主のくせにちっさ！」

「それとリップパー様。これよりはこちらのアマネがご案内とお世話を担当させていただきます」

ゴトーが紹介したのは、黒髪の若い女執事。

「アマネと申します。なんなりとお申し付けください」

「よろしゅう。さっそくで悪いんやけど、スーツ一式用意してくれへん？ この服と靴、大分傷んでしもたから処分したいんよ。金は口座に振り込むさかい」

「わかりました。すぐに着替えをご用意いたします。スーツは何かご要望はございますか？」

「黒はそっちと混ざりそうやから、紺色で頼むわ。んで、シャツはブラウスやなくてTシャツやタンクトップでええわ。靴はブーツでつて



「どうか、今履いとるんと似たもんでええわ」

「承知しました。それではスーツだけでなく、何種類かお持ちしますので少々お待ちください」

「すまんなあ」

「いえ、こちらが良い経験となりますので。では、失礼します。アマネ、後は頼むぞ」

「はい」

30分後。

他の女性使用人達が多く、の衣装を持ってきた。

その中から紺色のジャケットに紅のタートルネックシャツ。オリーブ色のスキニーカーゴパンツにブーツを選んだ。

「おおきに」

「いえ！ なんですしたらご滞在中は残りの服も着てみてくださいませ。気に入ったものがあれば、そのままお譲りして構わないと旦那様からも許可を頂いております」

何故か少し興奮気味に言う女性執事。

訝しむ様にアマネに顔を向けるラミナ。

アマネは眉尻を下げて、少し戸惑いの表情を浮かべ、

「ゾルディック家でそのようなファッションを好む女性の方はおりませんので……」

「着せ替え人形が出来て嬉しいっちゆうことか？」

「……恐らくは。私達、使用人は私服に着替える機会などほぼありませんので」

「なるほどなあ。まあ、あんまり派手やなかったら構へんけど……」

「ありがとうございます!!」

「……気合入れてええで。いつまでおるんかは知らんし」

「しばらくは滞在してもらうつもりだと伺っておりますが？」

「マジで?」

「はい。例の……キルア様の友人を名乗る者達の様子を見るつもりとのことです」

アマネの言葉にラミナは首を傾げる。

「ゴン達はまだ門の前におるんか？」

「いえ、守衛の家で泊まっっているようです。なんでも『自力で試しの門を開けるために特訓する』とのことだ」

「……なんでそうなったんや？」

「そこまでは……」

「……ゴンのことやから、堂々と入ってキルアを取り戻したいってところか？ 呑気なんか頑固なんか……」

「試しの門を自力で開けても、ここまで来れる可能性はないと思いませんが……」

「まあ、そこらへんは意地で切り抜ける気やろなく。あれは暗殺者でも呆れるレベルの頑固さやでな」

「はあ……」

アマネは要領を得ない表情を浮かべる。

ラミナも伝わるとは思っていないので、苦笑して肩を竦める。

「それにしても、随分と若い使用人が多ないか？」

「ゾルディック家の執事は代々仕えている血筋の者もおりますし、流星街やスラムなどから引き取ることもあります。キルア様のお母様であるキキョウ様も流星街の出身なので」

「ほお……同郷なんか」

「リツパー様も？」

「そやで。でなかったら、この歳でフリーの暗殺者なんかしてへんて」  
「……なるほど」

アマネは納得したように頷く。

そこにノックが響き、会食の準備が整ったと告げられる。

ラミナはアマネの案内の元、会場へと向かう。

「そういえば、キルアは今どうしとるんや？」

「っ……!!」

ラミナの質問にアマネの体に一瞬緊張が走った。

それだけでラミナはあまりよろしくない状態であることだけは理解する。

「あんたらに聞かん方がよさそうやな。すまんかった」

「いえ……こちらこそ申し訳ありません」

「気にせんでええ。……キルアは嫌われとるわけやないみたいやな」

「それはもちろんです。キルア様を嫌う使用人など1人もおりません……！」

感情を露わにして言い切るアマネ。

それにラミナは苦笑する。

ゴトーのゴンに対する態度と言い、アマネの今の言葉と言い、キルアへの思いは本物であることは疑いようがなかった。

しかし、使用人故に庇うことも出来ない。それにシルバ達の愛情も理解しているのだろう。

だから、出来る限りキルアが平穩に過ごせるように全力を尽くす。命を賭けてでも。

ゾルディック家の一面が見られたことにラミナは少し満足する。

恐らくゴトー達はキルアの葛藤やイルミの針の事も知っていたのだろう。

それならばゴトーがゴンを強く警戒したことにも納得がいく。

「……難儀なもんやな。暗殺一家の使用人っちゅうんは」

「……」

アマネはその呟きには何も答えない。

もちろんラミナも答えを期待してはいなかった。

案内されたのはターンテーブルが置かれた部屋だった。

すでにシルバとゼノが座っており、ラミナも空いた席に座る。

シルバの背後には長身でモノクルをかけた老婆の執事が、ゼノの背後には白髪をオールバックに纏めた老練な執事が控えている。

ラミナの背後に控えたアマネが妙に緊張しているのを感じる。ラミナもこの2人に全く隙がなく、かなりの手練れであることが見て取れた。

「久しぶりだな」

「よう来たの」

「お招きどうも。豪華な部屋や服まで用意してもらてすまん」

「気にするな。こちら無理に呼び寄せた負い目もある」

和やかに会話をするラミナ達。

「酒は飲めるか？」

「もちろん」

ウイスキーを注がれて、3人はコップを掲げて乾杯する。

一口飲んで、ラミナは目の前に置かれた料理に目を向ける。

目の前に並べられているのは麻婆豆腐や酢豚、八宝菜などのアイジエン大陸方面の料理。

「……」

「どうした？ 食べるのか？」

「……アマネさん言うたな」

「はい」

「ゴトーさん、呼んできてくれるか？」

「……ゴトーをですか？」

「約束やからな。首を斬り落とす」

「!？」

突然の殺害宣言にアマネは目を見開き、シルバ達も目を細めて空気が変わる。

ラミナも体から殺気を噴き出して、

「ゴトーはあんたらが客人の料理に毒を盛る恥知らずやないと言った。もし、盛られとったら首を差し出すともな」

「……つまり……毒が？」

「舐められたもんやで。なんのつもりか知らんけどなあ！」

ラミナはグラスを握り潰して怒りを露わにする。

直後、右腕を振り、右斜め後ろに向かってスローイングナイフを投げる。ナイフは部屋の天井隅に突き刺さり、パキンとなにやら割れる音がした。

「いい加減ジロジロと鬱陶しいわ。で……答えてもらおか。うちを殺すために呼び寄せたんか？」

「……キキョウの奴め」

ゼノが呆れたように呟く。

アマネはどう動けばいいか判断できずに固まっております、2人の執事も直立したままだがいつでも動けるように備える。

「ラミナは【練】を強めて、シルバ達を睨む。」

「別にええで？ 殺し合いたいんやったら、とことんやろうや」

ラミナは右手を軽くテーブルに叩きつけながら、「硬】を一瞬発動してテーブルを叩き潰す。」

シルバとゼノは跳び下がり、床に料理や皿、テーブルの残骸が散らばる。

「……本気か？ いくら何でもここで戦えば、お主は死ぬぞ」

「せやろな。けど……この山を道連れに吹き飛ばすことは出来るで？」

椅子に座ったままのラミナの左横に2mほどのクレイモアが出現する。

「こいつは【死を呼び寄せる死】<sup>グクラウン・ドロ</sup>つちゆうてな。うちが死ぬことで発動する自爆装置や。この山から樹海くらいまでなら吹き飛ばせる威力はあるやろな」

「……壊しても駄目そうだな」

「当然やろ。うち以外の奴が壊せば、その瞬間に弾けるで。これを出した時点でそっちが取れる手段は逃げるか、取引するくらいや」

「決死の覚悟の現れという奴か。厄介じゃのう」

ゼノは顎髭を撫でながら考える。

ゼノがシルバに目を向けると、シルバは頷いて警戒態勢を解く。

「俺達にはお前を殺す気はない。こちらの無礼を謝罪する。すまなかった」

シルバが頭を下げて、ゼノや執事達も頭を下げる。

ラミナは数秒頭を下げるシルバを見つめ、小さくため息を吐いてクレイモアを消す。

「それで？ どう落とし前つけるんや？ スマンで済んだら殺し屋はいらんで」

「分かっている。ツボネ」

「はい」

シルバは傍に控えていた老婆に声を掛ける。

「この料理を用意した料理人と料理を運んだ使用人を全員連れてこい」

「承知しました」

ツボネは深々と頭を下げ、音もなく姿を消す。

「悪いが、ゴトーではなく料理人と使用人の首で勘弁してくれ。ゴトーは執事長でな。流石に死なれると困る」

「……料理人と使用人達だけで企んだと？」

「いや、恐らく妻のキキヨウの命令だ。俺やイルミから話を聞いて、お前を試したかったのだらう。あいつにも何かしらの処分を下す。だが、キキヨウに関して少し時間をくれ。あいつが何を考えて毒を盛ったのか、聞かねば判断出来ん」

「あ奴は単純にお主の力量を視たかっただけの可能性があるのでな。儂らが覚えておる限りでは、お主のことを好意的に見ておったはずだが……」

「……まあ、そこらへんが落としどころやな」

ラミナは眉間に皺を寄せて、不本意ではあるが納得する。当主の妻を殺せと言えるほど被害を受けていないのも事実だ。

トカゲのしつぽ切りではあるが、闇社会の組織ではよくあることだ。

これで今後は毒を盛られたり、変なことを仕掛けられることは無くなると思われるので、ラミナはそれで良しとすることにした。

【練】を抑えて椅子から立ち上がる。

「キルアが逃げ出したくなる気持ちがあった気いするわ……」

「……」

「耳が痛いとう」

「で、キルアはどうしとるんや？ また針かなんか仕込んでるんか？」

「アホ言え。今のキルアにそんなもん仕込めるわけなからう」

「まだ念も使えんのやから、気絶させるくらいいけないやろ？」

「今のキルアに何かを仕込めば違和感で気づかれる可能性が高い。だから、もう同様の手段はとれん」

シルバの言葉にラミナは納得する。

「けど、もう今のキルアは後継者にはなれんのちゃうか？ 実力や才能やなくて、思想的になって意味で」

「そこが困つとるんじやよ。流石にあの才能は惜しい。しかし、このままではキルアがキキョウ辺りを殺しそうでのお」

「あんたらはどうなんや？」

「恐らくまだ嫌われてはおらんじやろう。儂には時々甘えてきておつたし、シルバに関しては尊敬してると言っておつたしの」

「……キルアが直接俺に反抗したことはない」

「どうやらキルアは母型の気質が嫌いなようで、尊敬する相手にはしっかりと敬意を示しているようだ。」

シルバとゼノは『殺しは仕事』という姿勢を明確に示している。恐らくそれがキルアにとっては共感しやすかったのだろう。それに加えて、息子というのは強い父親に憧れを抱きやすいとも聞いたことがある。

そこから考えられることは、

「キルアは今まであんたらに言われたターゲットばかりを殺してきたんやろ？ 仕事っちゆうよりは訓練みたいな形で」

「ああ」

「それが嫌やったんちゃうか？ ハンター試験でのキルアを見とる感じやと、完全に殺しを忌避しとる感じやなかったで？ 自分が納得出来れば、殺すことを戸惑わんやろ。まあ、問題は仕事での殺しが納得出来るんかっちゆうことやけど」

「ふむ……」

「今後はキルアに仕事を斡旋するだけに留めたらどないや？」

「そうじやお……」

「……今、ここを目指している友人に関してはどう思っているんだ？」

シルバはゴン達について質問してくる。

ラミナは腕を組んで眉間に皺を寄せる。

「そやなあ……。ゴンに関しては難しいところやな。キルアだけに関わらず、人に影響を与えやすいタイプやな。更に価値観が非常に独特

や。一般人とも、裏社会の人間ともちやう。事実、キルアやうちにも普通に接してきよる。暗殺者つちゆう職業に嫌悪感も出さへん」

「せやけど、納得出来んことに対しては全く引かんし、妥協を知らん。例えそれで死ぬことになつてもな。やから、危うい面はある」

「なるほど……。それは厄介な小僧じやな」

「ただキルアとの相性がええんも事実や。直感的なゴンと理知的なキルアは互いの苦手な部分をカバー出来とる。ゴンの資質もかなりのもんやから、鍛えればキルアの足を引っ張ることも少なくなるやろ。後はゴンとキルアがどんな行動をしていくか、やな。それ次第で暗殺者家業を継ぐ気になるかもしれんし、やっぱり嫌やつてなるかもしれん。まあ、これはこのまま家に縛り付けても同じやろうけどな。家を継がせるなら、仕事せなあかん。仕事の度に監視付けるんにも限界があるやろ」

ラミナの言葉にシルバとゼノは考え込む。

しかし正直なところ、ラミナはもうキルアとゴンを無理に引き離すのは不可能に近いと思っている。

今言つたようにキルアをずっと閉じ込めておくことも出来ない。後継者にすることを諦めれば話は別だが、それだとキルアを暗殺者として使うのは制限がつくだろう。

では、一番簡単な方法は何か。

『ゴンを殺す』ことである。それでキルアは友達を作るのを諦めるかもしれない。ただし、間違いなく家族との関係は破滅的になる。今殺せば本当に殺し合いに発展する可能性もある。これも後継者にすることは絶望的になる。

現実的なのは『ゴンを説得して諦めてもらう』こと。

しかし、ゴンの性格上諦めるとは思えない。何年かかってもキルアを取り戻そうとして、ここにやってくるだろう。

それをキルアに隠し続けるのも難しい。

最悪は『キルアを殺す』こと。

才能が惜しいと言っても、それを活かせないのであれば下手に放り



出すのも危険な可能性がある。ならば、殺してしまう方が後腐れない。ついでにゴンも殺してしまえば、煩わしい事は減るだろう。

と言っても、それをシルバ達が選ぶ可能性は今までの話からすれば0に近い。

つまり、現状ゴンとキルアの関係を切ることは容易ではない。

2人の関係を認めようが、引き離そうが、確実に今後のゾルディック家に何かしらの影響が出る。

「まあ、ゆっくり考えるんやな。キルアとも話をして、な」

「……そうだな」

その後、料理人と使用人達10人ほどが連れて来られて、シルバが全員の首を手刀で斬り落としたことで食事は血塗られて終わった。

話した内容もあり、「別室で」などとなるわけもなく解散となった。

ラミナは客室で新しい食事を用意してもらって食べる。その後は入浴して、さっさと休むことにした。

それからなんと3週間が経過した。

理由はゴン達の特訓がようやく終わったからだ。

その間、ラミナはのんびりしたり、ゼノや使用人達と組み手したりして過ごしていた。

残念ながらキルアがどこにいるかも分からず、会わせてもらうことも出来なかった。

「なあ、爺さんや……ズズ……」

「ズズ……なんじゃ？」

ラミナはゼノと並んで座り、茶を楽しんでいた。

ゼノとはすっかり仲良くなっていた。ツボネやアマネを始めとする使用人とも仲良くなっており、なんだかんだで休暇気分楽しんでた。

ツボネがアマネの祖母というのに驚き、この前ゼノの後ろに控えていたのが祖父だったことにさらに驚く。

ちなみにキキヨウはシルバとゼノに叱られて、ラミナとの面会を禁止されていた。他にもキルアの兄弟がいるらしいが、1人はキルアに

刺されたことに対して仕返しをしており、もう1人は母親の傍から離れないらしい。

と言っても、ラミナは会う気もないのでどうでもよかったが、ゼノの孫への愚痴を聞きすぎて更に会う気はなくなっていた。

「うちがゴン達を待つ理由はあるんか？」

「んく、あると言えはばある。ないと言えはばない」

「おい」

「悪いとは思っておるが、その者達が動かなかったのだから仕方なかろう。シルバも凶りかねておるようでの」

「やから、それとうちが何の関係があんねん」

「……仕方ないのう」

ゼノは観念したようにため息を吐く。

「シルバはキルをしばらく自由にさせる気でおるようだな」

「ほお……ズズ……」

思い切った判断をしたことに茶を飲みながら感心するラミナ。

しかし、

「そこでキルの面倒をお前さんに見てもらおうと思っておる」

「なんでやねん」

速攻でツツコむ。

後ろに控えていたアマネや他の執事も僅かに目を見開いていた。

「うちかて仕事や予定もあるんやぞ？」

「別にずっとと言うわけではないぞ？ 正確にはキルに念を教えて

やってほしいんじやよ」

「……うちがあ？」

「儂らでは今までと同じように殺しに特化した能力を教えそうなのでな。お前さんなら暗殺向けも汎用的な能力も教えられるじやろ？

武器もまだまだありそうじやしな」

「それだけか？ まだなんかあるやろ。うちに頼むには理由が弱い？」

キルアの針を抜いた埋め合わせに関しては、ぶっちゃけこの前の毒料理でチャラになったと思っっている。

正直3週間も滞在させた上に、キルアに念を指導するのは少し関わらせ過ぎではないだろうかとラミナは疑問に思う。

それに念を教えるだけなら、この3週間の間に教えれば済んだ話である。もちろん全てを教えるには全然足りないが、それでも【纏】くらはいは会得させられただろう。

「すまんがこれ以上は僕の口からは言えん。あ奴の父ではあるが、今の当主はあ奴じゃからな」

「偏屈爺」

「かつかつっ!」

ゼノが笑って誤魔化し、ラミナがジト目でゼノを見る。

その時、執事の胸ポケットからバイブ音がする。

「はい。……承知しました」

執事は胸ポケットから携帯を取り出して、どこかから連絡を受ける。連絡を受け取った執事は通話を切り、携帯を仕舞いながらゼノに声を掛ける。

「ゼノ様」

「なんじゃ?」

「シルバ様から『独房にいるキルア様を部屋に連れてくるように伝えてほしい』と……」

「やれやれ。年寄りをこき使うのお」

「我々が行きましょうか?」

「いや、どうせまだミルの奴が暴れておるじやろ。だから、僕に行かせる気じゃ」

「うちは部屋に戻るとするわ」

「すまん」

「かまへんかまへん。ようやっと話が進みそうやからなあ」

ラミナも立ち上がって、客室に戻ることにした。

アマネの案内の元、廊下を歩いていると、

「そっぴやあ、ゴン達がどうなったんか分かるか?」

「少々お持ちください。……どうやら執事室に向かう途中で止まっているようです。恐らく執事見習いが見張りをしているところか

と」

アマネは携帯を取り出して、情報を確認する。執事の携帯には簡単な連絡事項などはメールで共有しているらしい。

「まだまだかかりそうやなあ」

「……どうやらキキョウ様とカルト様が向かったようですね。殺しはしないと思いますが……。追いつかれるかもしれません」

「また面倒なことしよるな」

ラミナはキキョウの行動に呆れるしかなかった。

余計なことをせずにさっさと執事室か本邸にでも連れてきて、適当に相手して追いつかせばいいのと思う。それならばラミナもここを出て行くきつかけになる。正直、これでまだここに滞在させられるなら、そろそろ抗議するつもりだった。

客室に戻りコーヒを飲んでのんびりしていると、ゼノが訊ねてきた。

「どないしたん？」

「シルバの奴からお前さんに本来の目的を話すように言われてな」

「伝言板やな」

「喧しい。ならキキョウから聞くか？」

「勘弁してえや……。つて、なんかめっちゃ嫌な予感するんやけど……」

キキョウの名前が出たことに、ラミナの頭の中で警鐘がガンガンと鳴り響く。

「うむ。これはシルバ、儂、キキョウの3人で決めたのじゃがな……」

ゼノがラミナの部屋を訪ねた頃。

シルバとキルアも会話を終え、『友達を裏切らない』と親子の誓いを交わした所だった。

「最後にキル」

「え？」

「リップパー……。ラミナのことはどう思っている？」

「ラミナ？ …… …… 凄い奴だと思うよ。イルミにだって負けてないだろうし…… 最後は助けてもらったし」

「そうか……。キル、お前を自由にする条件が2つある」

「っ！ …… なに？」

「1つはラミナに鍛えてもらうこと。暗殺術とかではない。お前が強くなることを望むのであれば、必ず身に着けなければいけないものだ。ラミナはもちろん、俺やイルミも使える。それをラミナに教えてもらえ。奴には親父から伝えてもらっている」

「……なんで親父じゃなくてラミナに？」

「言ったはずだ。その力は暗殺術ではない。いや、正確には使い方次第で殺しにも特化すれば、人を助けることにも特化するものだ。俺達はもちろんその力を殺しに使っている。俺達が教えるとお前の選択肢を奪いかねないからだ。その点、ラミナはそこら辺を考慮して、お前に教えてくれるだろう。お前が殺し技にするにしても、ラミナなら的確にアドバイスが出来る。もちろん殺し技じゃなくても、奴ならお前の助けになるはずだ」

キルアはその『力』が何か分からず困惑の表情を浮かべる。

しかし、シルバが嘘をついているようには見えなかったので、大人しく頷いた。

「……分かった」

「そして2つ目だ。これに関しては、俺とキキョウ、そして親父で決めたことだ。これはあくまで俺達の希望であって、別にすぐにどうこうするわけじゃない」

「……なに？」

なにやら嫌な予感がするキルア。

そして、シルバとゼノはほぼ同時に口を開く。

「ラミナをお前の婚約者にする」

「お前さんをキルアの婚約者とする」

「……………は？ ………………はあああああああ!?」

ククルーマウンテンに、2つの絶叫が響き渡った。

## #17 コンヤク×ノチ×タビダチ

突如、キルアとの婚約を告げられたラミナは、口を大きく開けて唾然としていた。

アマネも大きく口を開けて固まっていた。アマネは一定限度を超える感情が隠せなくなるようだ。

「婚約……？　うちとキルア……が？」

「そうじゃ」

「……………なんでやねん!!　意味分からんぞ!」

ラミナは叫びながら椅子から立ち上がる。

流石に冷静さを保つのは無理だった。いきなり婚約させられるなど予想外にもほどがある。

「ちゃんと説明する。だから落ち着かんか」

ラミナは顔を顰めて、椅子に座り直す。

ゼノは用意された茶を飲んで、話し始める。

「まあ、簡単に言えば、抜かれた針の代わりをお前さんに任せたいということじゃな。これが農らが提案する『埋め合わせ』じゃ」

「はあ？　…………ちっ」

「お前さんはあの毒でチャラにでもしたつもりかもしれないが、あれは関係者の首を斬り落としたことで落とし前をつけた。じゃから、『埋め合わせ』についてはまだ有効というのが農らの考えじゃ」

ゼノの言う通り、ラミナはそれで納得してしまった。あの時に『埋め合わせ』をチャラにするとはつきりと言っておけば、問題なかったのだ。

しかし、ラミナは関係者の首で終わらせた。なので『埋め合わせ』については関係ないところで決着がついたと言えるのである。

これは間違いなくラミナのミスだった。

それに気が付いた故の舌打ちである。

「けど、なんで婚約者にすんねん？　まだキルアは12歳やぞ」

「それは純粹に農らがお前さんを気に入ったからじゃな。キキヨウの奴も、同郷で、殺しが得意で、見た目もいいお前さんを気に入ってる

ぞ？ 何よりお主の暗殺術の腕と才能をこのまま見逃すには惜しい。しかし、お前さんは使用人にはならんじやろうからな。ならば、婚約者としてしまえばキルと共にいるのはおかしくないし、ゾルディック家とも繋がりを保てるというわけじゃ」

「……キルアが納得せんやろ？ まあ、うちもやけど」

「これはあくまで儂らが、ゾルディック家がそう思っておるというだけじゃ。別にお前さん達は嫌なら嫌で構わんよ。婚約じゃから解消もしやすい」

「つまりはうちやキルアに他の恋人が出来ればええつちゆうことやな？」

「キルに関しては、儂らが認められるかという問題もあるがな。お前さんに関してはそうなる。ただ、しばらくは婚約者のままでおる方がええぞ？」

「というと？」

「ゾルディック家は家族同士での殺し合いは基本御法度じゃ。婚約者もその内に含まれるのでな、イルミがお前さんの命を狙うことは一応不可能になる」

「一応、な」

「こればかりはの。婚約者で無くすことになれば、その制約も外れる」

しかし、婚約者である限りは命を狙うことは許されない。

さらにゾルディック家の関係者として仕事を受ける事も出来る。必要ならば執事を使ってもらっても構わないとまでゼノは言い切る。

その代わり、たまにゾルディック家からの依頼も引き受けてもらう必要もある。もちろん仕事である以上、報酬はしっかりと払うとも言われた。

「……まあ、報酬を貰えるんやったら仕事は引き受けるが……」

「婚約者に関してはキルと話し合っ決めてくれればええ。どのようにつき合うかはそれぞれの形があるじやろうからな」

「……はあ」

ラミナは何だかんだで本人達の自由に委ねてくるゼノにため息を



吐くしかなかった。

言っていた通り、この婚約はシルバ達ゾルディック家が勝手に言っていることだ。キルアとラミナが「違う」と言っても関係ない。そう言っているのだ。つまり、本人達の意味など関係ない。

それに政略結婚など闇社会では珍しくもない。

(キルアに念を教えるんは別にええねんけど……。婚約は厄介事になりそうやなあ)

マチが怖い。

クロロは笑うだろう。他の旅団も笑って「おめく」とか言うだろう。マチが怖い。

ラミナは未だにマチには頭が上がらない。実力をつけた今でも精神的に逆らいにくい。

キルアとも相性がいいとは思えないので、キルアを叩きのめすイメージしか浮かばない。

「……うちがクモと仲ええんは知つとるよな？」

「うむ」

「うちがクモに所属するんは問題ないか？ ちよつと団長から仕事依頼されとるし、団員の1人がうちを入団させたがとつてな」

「ふむ……。まあ、儂らの仕事の邪魔にならなければ問題はないぞ。

しかし、昔仕事で1人殺しとるし、今後も依頼が出るかもしれないぞ。」

「まあ、殺され方次第やな。あいつらからて殺し合いしとつて仲間殺されることくらい覚悟はしとる。納得出来れば受け入れる。そう簡単に仕返しをしにくることはないぞ」

「なるほどの」

「もちろんキルアを旅団に巻き込む気はないぞ。旅団やそっちの仕事の際は別行動するし、もしキルアが旅団に関わろうとするなら出来る限り止めたる。旅団にスカウトさせる気もない。それならええやろ？」

「ふむ……。それならば問題ないじゃろ」

ゼノの了解を得て、ラミナはホツと息を吐く。

後はキルアと話して、さつさと念を叩き込めばシルバ達の義理は果

たしたことになる。

その後はキルアの好きなようにやらせて、旅団に近づいてくるなら止めればいい。

「つちゆうことは、うちもようやく解放されるんやな」

「そういうことじゃの。あのキルの友人達は執事の屋敷を目指しておるようだな。キルもこれから向かうじゃろ。お前さんも同行して、今のうちに2人で話をしておけ」

「へいへい……。ほな、アマネさん。案内してや」

「はい」

「ほなな、ゼノ爺。まあ、仕事で一緒になったらよろしゆうに」

「元気でな。キルを頼むぞ」

「まあ、出来る限りの事はするわ」

ラミナはゼノに別れを告げて客室を出る。アマネの後を続いて、廊下を歩く。

「アマネはどう思つとるんや？ キルアとの婚約」

「え？ そうですね……。驚きはしましたが、喜ばしいことかと」

「うちでええんか？」

「来られたばかりの時に言われていたら疑問に思ってたかもしれない。しかし、今はラミナ様の実力も性格もある程度把握しておりますので、特に疑問も否定もありませんね」

むしろアマネは執事達もほぼ全員、喜ぶのではないかと思つている。

ラミナは別に不必要に痛めつけることもなく、無理難題も言わないし、組み手で指導などもしていて執事達には好印象だった。

シルバとゼノから逃げ延び、イルミと互角に戦い、キルアを助けてくれたことも後押ししている。

特に女性執事達は、キキョウとはまた違うタイプのラミナに親しみを感じていた。

祖母であるツボネも「正直、キキョウ様やイルミ様より仕え甲斐があるね」と言っていた。

なので、アマネはむしろラミナとキルアを応援する気満々だったり

する。

それを感じ取ったラミナはうんざりとして天を仰ぐ。

(……当分逃がしてくれそうにないなあ)

想像以上の好感度だった。そこまで好印象になるようなことをしているつもりはなかったのだが。

ラミナは小さくため息を吐く。

10分ほど歩くと扉が見える。

扉のすぐ近くには、顔を顰め腕を組んでいる不機嫌全開のキルアがいた。

キルアの姿を捉えたアマネが慌てて、キルアの元に駆け寄る。

「キルア様！ お待たせして申し訳ありません!!」

「……いいよ、別に。俺が勝手にここで待つてただけだし」

キルアは不貞腐れたままアマネに答える。

それに内心キョドるアマネだが、ラミナが怠そうな顔をしてキルアに近づく。

「ちゃんと断ったんやろな?」

「そういうそっちは?」

「ゼノ爺は『お前らに任せる』やと。後はうちらがどう思おうが、こっちはそう扱うとも言われたわ」

「爺ちゃん……。って、いつの間にゼノ爺なんて呼ぶ仲になったんだよ?」

「お前がお仕置きされとる3週間の間にや。まあ、ゴン達がのんびりしとったんが一番の原因やけどな」

「……暇なの?」

「アホ言え。帰してもらえんかったんや。親父さんから婚約以外にも聞いとるんやろ?」

「ああ。なんかお前から力を教われって」

「そういうこっちゃ。やから、お前が出てきて親父さんと話すまで待たされたんや」

ラミナはジト目をキルアに向ける。

キルアも流石に少し気まずそうに視線を逸らす。

「はあ。……まあ、ええわ。とりあえず、さっさと行こか。ゴン達も近くに來とるらしいし」

「だな。お袋がまた來たら嫌だし。行こうぜ」

「おう。ほなな、アマネ。元気でな」

「はい。キルア様、ラミナ様、お気を付けて行ってらっしゃいませ」

アマネが深く頭を下げる。

キルアはアマネに声を掛けることなく扉を開け、ラミナはアマネの後頭部をポンと労う様に叩いて続いて外に出る。

外はすっかり薄暗くなっていた。

「で、何を教えてくれるんだ？」

「あく……ちよい待ち。先に色々話すことと聞きたいことがあるわ」

「あん？」

「うちは暗殺者の仕事は続ける。お前の婚約者にされたことで、ゾルディックからも依頼が来るかもしれん。それに関してはお前を関わらせる気は一切ない。ゾルディックからの仕事やとしてもや」

「……分かった。俺も仕事したくないし」

「でや。うちはお前にある程度教えたなら、お前から離れる。別にお前を婚約者として扱う気もない」

「当ったり前だろ!! 俺だってお前を婚約者だなんて思いたくねえよ!!」

「なら良し。で、次はゴンのことや。ここを出たら、基本的に2人で行動する気なんやな？」

「俺はね。他にやりたいことないし」

「まあ、せやろな。ほんならゴンにも教えないかんか……」

ラミナは顎に手を当てて考え込む。

念を2人同時に教えるとなると、そこそこ時間がかかる。ある程度、場所を考える必要があるのだが……。

「キルア。金は？」

「……あんま持ってない」

「……なら、あそこ行こか」

「あそこ？」

「天空闘技場や。知つとるやろ？」

「知ってる。ってゆーか、行ったことある。6歳の頃だけど」

「6歳？ 何階まで行ったんや？」

「200階。2年もかかったけどね」

「は？ 200階で戦ったんか？」

「いや、行っただけですぐに帰った。だから戦ってない」

「なるほど。……なら、丁度ええか」

「確かにあそこなら金も貯まるし、修行もしやすいか」

「そういうことや」

天空闘技場。

高さ991m。地上251階。世界第4位の高さの建物だ。

勝てば勝つほど上の階に上がり、それに合わせてファイトマネーも上がる。戦いの聖地である。

建物内には様々なサービス施設があり、ある程度の階まで上がると個室も貰えて宿泊費が要らなくなる。

まさに強い者ほど好待遇が得られ、武骨者にとってはパラダイスのようなところなのだ。

「そこで教えよか。200階以上における連中は、全員その力を使える。修行相手にはええやろ」

「……分かった」

「まあ、ゴンの予定も聞かなあかんけどな」

「ゴンなら強くなれるなら来ると思うぜ。他の2人も来るんじゃないの？」

「そこまでは面倒見きれへん。本来はお前だけに教える契約なんやからな」

特にクラピカは恐らく旅団を相手にすることを想定して修行をするだろう。

流石にそこに力を貸すのは嫌だった。

旅団のメンバーとクラピカならば、ラミナは旅団を選ぶ。ヒソカならば喜んで差し出すが、クルタ族の時にヒソカはいなかったから復讐の対象になるかどうかは怪しい。

なので、ラミナはクラピカに念を教えるつもりはない。

「まあ、とりあえずさっさと会いに行こか」

「だな」

キルアとラミナは走り出し、駆け足で執事の屋敷を目指すのだった。

執事達が住む屋敷もかなりの大きさだった。

「立派やな。これってあれか？ 侵入者に勘違いさせるためなん？」

「それもあるね。けど、一番は執事に合ってるからだと思うぜ」

「そうかい……」

金持ちの道楽のようだった。

ラミナは呆れながら屋敷に近づくと、1人の執事が裏口に立っていた。

「お待ちしておりました」

「ゴンは？」

「今、応接室でゴトー達とお待ちです」

「サンキュ」

キルアは軽く礼を言って中に入り、ラミナも続く。

キルアは駆け足でゴンの元に向かう。

「ゴーン!!」

「キルア!!」

応接間に駆け込んだキルアはまっすぐゴンの元に向かう。

応接間のソファにはゴン、クラピカ、レオリオが座っており、その周囲をゴトー達が囲むように立っていた。

「ゴン!! 後えくつと、クラピカ！ リオレオ!!」

「ついでか？」

「レ、オ、リ、オ!!」

「久しぶり！ よく来たな！ って、どうしたゴン？ ヒデー顔だぜ？」

「キルアこそ」

ゴンとキルアは互いの顔を指差して笑う。  
そこにラミナがのんびりと歩み寄る。

「お！ ラミナもいたのか！」

「遅いねん、このドアホ。なんで特訓とか意味分からん事しとんねん。おかげでずっと缶詰やったやないか」

「うるせー！ その執事やキルアの家族が会わせてくれねえし、その門を自力で開けないと納得出来ねえってゴンが言ったんだよ！」  
「それでなんでゴンだけあそこまでボロボロやねん」

「言つたる？ 許可が出なかつたから、そこにいるカナリアと少し揉めたんだよ」

レオリオは控えている女の執事を指差す。

カナリアの顔にも傷があり、ラミナは納得の表情を浮かべる。と  
いっても、カナリアの傷はゴン達がつけたものではないのだが。

「ラミナは何もなかつたのか？」

「まあ、最初に毒料理出されたくらいやな」

「……そうか」

「いや、下手したら盛大に殺し合い始めとつたな！ もしくはその  
ゴトーの首が跳んどつたわ」

「はあ!？」

「あの時は大変失礼いたしました」

「もうええて。ゴトーが悪いわけやないし」

クラピカとレオリオは色々物騒な話に驚く。

ゴトーはすでに毒事件の翌日に謝罪をしているが、改めて頭を下げ  
て謝罪する。ラミナは右手をパタパタ振る。

それにキルアとゴンも興味を示す。

「なに？ 親父達となんかあつたの？」

「親父さんやのうて、お袋さんの方や。料理に毒を盛ってきてな。そ  
の前にゴトーが『そんなことはしない。その時は自分の首を差し出  
す』って言うてたから、まあ一触即発やんな」

「どうやって仲直りしたの？」

「毒盛った料理人とそれを運んだ使用人を首にすることで収めたで」

含まれた意味は全く違うが、ゴン達は『クビ』と勘違いして納得した表情を浮かべる。

キルアは意味に気づいたようでジト目を向けてくるが、ラミナは肩を竦めるだけで答える。

「まあ、その後はキルアの爺さんやゴトー達使用人と組み手して遊んどったで。ゴン達の中々こつち来んかったから、キルアの親父さんが判断付かずで待ちぼうげや」

「そうだったの!? ゴメン、ラミナ」

ゴンが素直に謝る。

(まあ、キルアの拷問も長引いとったことは言わん方がええやろなあ) キルアも特に何も思っていない表情を浮かべていたので、黙っておくことにした。

「それより早く行こうぜ! どこでもいいからさ。ここにいますとお袋がうるせえからさ」

「確かにもうあの母親には会いたくねえな」

レオリオもうんざりした顔で同意して立ち上がる。

「ゴトー、お袋が何言っても付いてくんないよ」

「承知しました。行ってらっしゃいませ」

ゴトーは頭を下げてキルアを送り出す。

ラミナがゴトーに近づき、

「まあ、出来る限り注意しとくわ」

「よろしくお願いいたします」

ラミナは少し歩いて、

「もし、うちの子守が我慢出来んかったら……」

ラミナは上半身だけゴトーに振り返り、指で自分の額を軽く突く。

「その時はうちの頭、撃ち抜かせたるわ」

ゴトーは小さく笑みを浮かべる。

「そのようなことにはならないと期待しております」

「期待すんなや。うちは、暗殺者やさかいな」

ラミナは振り返ることなく告げて、キルアの後を追う。

その背中にゴトーは改めて深く頭を下げるのだった。



夜を徹して移動したラミナ達はデントラ地区の町に到着した。

「はあ!? 観光ビザで来てんのか!? ハンター証を使えば観光ビザなんてなくても、ずっと滞在出来るんだぜ?」

「俺達もそう言った」

「うちは使つとるけどな」

「う〜〜…だつて決めたんだもん。やること全部やってから使うつて!」

「何だよ? やることつて」

「え〜つと…お世話になった人に挨拶に行つて…カイトと連絡とつて落とし物返したいし。でも一番は…」

ゴンはポケットから丸いものを取り出す。

それは『44』と書かれているハンター試験で使われていたヒソカのナンバープレートだった。

「このプレートをヒソカに顔面パンチのおまけ付きで叩き返す!! そうしないうちは絶対ハンター証を使わないつて決めたんだ!!」

(頑固やな)

ラミナは気合を入れているゴンを呆れながら見つめる。

「ふーん。で、ヒソカの居場所は?」

「…知らない」

「アホ」

「うう…」

ラミナとキルアに呆れながら言われて、項垂れるゴン。

するとため息を吐いたクラピカが口を開く。

「私知ってるよ」

「本当!」

「ああ」

「…最終試験の時か?」

「それもあるし、講習会の後にも聞いた」

レオリオが真剣な顔でクラピカに訊ねる。

「ずっと気になってたんだが。何を言われたんだ？」

「……『クモについていいことを教えよう』とな。そして、講習会の後に問い質したら『9月1日。ヨークシンシティで待つてると言った』  
「っ！（あのクソが……！）」

ラミナは殺気が漏れないように耐える。

やはりヒソカは旅団のことをクラピカに話していた。

（狙いは……あの戦闘狂からすればクロロ、次点でウボオーか。……はたまた全員か……）

一番の目的は恐らくクロロだろうと推測する。

そのためにクラピカを巻き込むつもりだろうだ。

（クロロには知らせとくか？ ……いや。まだクラピカがそこまでに  
どうなるかが分からへん。うちがマファイア側に潜り込めれば『仕事』  
として狙えるか……）

そして、もう一つ厄介なことになった。

（このままやとゴンはもちろん、キルアもクロロ達とぶつかりかねん  
か。くそっ！）

ラミナは心の中で盛大に吐き捨てる。

ヒソカただ1人に、全員がいいようにかき回されている感覚に襲わ  
れるラミナ。

ラミナが1人で考えている間にゴン達もヨークシンの話が終わっ  
たようだった。

「じゃ、私はここで失礼する」

クラピカがそう言った。

「え!？」

「キルアとも再会できたし、私としては一区切りついた。これからは  
本格的にハンターとして、仕事を探す。オークションに参加する金も  
要るしな」

「そうか。……じゃ、俺も故郷に戻るとするか」

「レオリオも!？」

「やっぱり医者への夢は捨てきれねえ。国立大学に受ければ、バカ高い  
授業料もハンター証で免除だしな。これから猛勉強よ」

「……うん！ 頑張つてね！」

「ラミナはどうするんだ？」

「ちよいとキルアの面倒見ろつて親父さんに頼まれとるでな。もうちよつとゴン達とおるわ。それが終わつたら、仕事に戻るやろな」

「お前も大変だな」

「うっさいわ」

「また会おうね！」

「そうだな。次は……」

「『9月1日。ヨークシンシティで!!』」

4人が誓い合う様に言う。その横でラミナも苦笑している。

本来なら約束する気などないが、仕事で間違いなくヨークシンシティにいるので再会する可能性は高い。

その時はクラピカとはどういう関係になつているかは、定かではないが。

クラピカとレオリオは空港で別れたゴン達。

「さて！ これからどーするの？」

「どうするつて、特訓に決まつてんだろ？」

「ヒソカ殴りたいんちゃうんか。何十年かける気やねん」

「うう……」

楽観的なゴンにラミナとキルアは呆れて、 gon は再び項垂れる。

「実はさ、ラミナが俺になんか力を教えてくれることになつてんだよ」  
「力？」

「ああ。ラミナ、いい加減教えろよ」

「……まあ、ええやろ。とりあえず説明はしとこか」

ラミナは頷いて、とりあえず念について簡単に話すことに決めた。

「今から教える力は『念』 っちゅうもんや」

「念？」

「そ。この力はプロハンターなら使えて当然。 っちゅうか、実力者と呼ばれとる連中は基本この力を使つとる」

「ヒソカも？」

「そやで。今回の受験者の中ではうちとヒソカ、そしてイルミが念を使える。試験官達はもちろん全員使える」

「どんな力なんだ？」

キルアが訊ねた直後、キルアとゴンはラミナから異常な圧迫感を感じて反射的に跳び下がる。

ラミナは【練】を行って、2人に威圧をかけたのだ。

「似たようなもん感じたことあるやろ？」

「……兄貴」

「そや。イルミがお前らを威圧してたんがコレや」

「今のが念なの？」

「正確にはその一種や。念は奥が深いし、人によっても使い方がちやう。やから、うちがお前らに教えるんは誰でも出来る技までや。それ以降はお前らだけで鍛えて行かなあかん。死ぬまでずっと、な」

ラミナから威圧感が消えて、ゴン達は息を整えて汗を拭う。

「念つちゆうんは『体に眠るオーラを自在に操る力のこと』や。オーラは生体エネルギーとも言う。つまり、誰でも使うことが出来る」

「オーラ……」

「生体エネルギー……」

「まあ、地域によつては『気』とも言っけどな。念の恐ろしいところは、オーラだけで人や物を簡単に壊せることや。これを防ぐには自分もオーラを強めるしかないねん」

ラミナはゴミ箱に入っている空き缶を拾い上げる。

それを右手で持ち、下に向けてゴン達の前に出す。

2人が首を傾げたところで、一瞬だけ【硬】を発動する。

その瞬間、空き缶が勢いよく弾け飛んで、地面に勢いよく叩きつけられる。

空き缶は潰れ、厚さは1mmもない板に変わる。

ゴンとキルアは目を見開いて啞然と潰れた空き缶を見つめる。

「これを人に向けて叩き込む。念を使えん人間が今のを防げると思っか？」

2人は冷や汗を流して首を横に振る。

「やる？ お前達にこれからこの力の使い方、そして守り方を叩き込む。言うどくけど9月1日までに仕上げるんはかなりキツイで。覚悟はあるか？」

「……これはハンターなら誰でも使えるんだよね？」

「使えんとプロハンターとは認めてもらえんやろな」

「だったらやる！ 親父を見つけるにも、ヒソカと戦うにも、ハンターとしてやっていくにも必要だったらやるしかないじゃん！」

「俺も兄貴に一発叩き込みたいし、やるよ」

ゴンとキルアは決意した顔で頷く。

ラミナも笑みを浮かべて頷く。

「オツケーや。ほな、その修行場所に行こか」

「修行場所？」

ゴンが首を傾げる。

「ゴン。金はまだあるのか？」

「……そろそろやばい」

「なら、やっぱうってつけだぜ」

「どういうこと？」

「鍛えることと金を稼ぐことを同時に行うことが出来る場所があるんや。その名も『天空闘技場』」

「天空闘技場……」

「とりあえず、そこに行くで。念の詳しい話はそれからや。落ち着いて長話できるようにならんとな」

「分かった！」

「おし、早く行こうぜ！」

こうしてラミナ、キルア、ゴンは、決意新たに『天空闘技場』へと向かうのだった。

## #18 トウギジヨウ×ト×ネン

ラミナ達3人は飛行船に乗って、天空闘技場を目指していた。

キルアとゴンは飛行船代で財布がほぼすっからかんになるらしい。

「まあ、すぐに数万くらい稼げるから問題ねえよ」

「そうなの？」

「ああ」

「お、見えてきたで」

目の前に高くそびえ立つタワーが現れる。

天空闘技場だ。

「うわぁ……！」

「あのタワー全てが戦いのためのモンや。降りたら早速登録やで」

「分かった！」

その時、ラミナの携帯が鳴る。

ラミナは携帯を取り出して画面を見ると、『メール受信』と表示がされていた。送り主はヒソカだった。

ラミナは訝しみながらメールを開く。そこに書かれていた内容を見て、顔を顰める。

そして、ゴンに目を向ける。

「? どうしたの？」

「……ヒソカからや」

「!!」

『200階で待ってる』やと。どうやら飛行船のチケット調べられたみたいやな。それに多分、イルミからうちがキルアの面倒見るようになったん聞いたんやろ」

「200階……」

「つまり、念を覚えてから来いつちゆうことやな」

(これでゴンの目的はさっさと終わりそうやな。ヨークシンに来てもヒソカを探し回ることはなくなりそうやな)

ラミナはある意味ヒソカの登場に助かったことになる。

その横でゴンは右手を握り締めて気合を入れる。

「まあ、とりあえずさつさと登録しよか。勝ち上がって、念も覚えて、戦い方も鍛える。やることはたんまりあるで」

「うんー!」

「おう」

ゴンは楽し気に、キルアは不敵に笑って頷く。

飛行船を降りたゴン達は天空闘技場に登録する者達の列に並ぶ。

「すごい行列だね。これ全部挑戦者なの?」

「ここはハンター試験と違って小難しい条件は一切ないからな。ただ相手をブツ倒せばいい」

列はあつという間に進み、3人は登録窓口に辿り着く。

用紙に記入して登録を済ませる。

「ラミナもやるの?」

「のんびり待つんも面倒やからな」

「キルア様は2054番、ゴン様は2055番、ラミナ様は2056番となります。1階では番号で呼びびますので、お聞き逃しのないように。それでは中へどうぞ」

3人は中へと足を踏み入れる。

ワアアアア!!

中は熱気で溢れており、16個の小さいリングでは挑戦者達が戦いを繰り広げていた。

「凄い活気だね。うう〜……緊張してきた〜」

「そう言えばゴン。お前、試しの門クリアしたんだろ?」

「え? うん」

「だったらさ、思いっきり押せ。それだけでいい」

「え? ホントに?」

キルアの言葉にゴンは懐疑的だった。

そこまで力が上がったようには思えなかったからだ。

しかし、キルアは問題ないと親指を立てて笑みを浮かべる。

『1973番、2055番の方。Eのリングへどうぞ』

『1992番、2056番の方。Kのリングへどうぞ』

「お。うちもか」

「頑張ろ！」

「まあ、余裕だろ」

ラミナとゴンはリングへと向かう。

女と子供の登場に、周囲は小馬鹿にするように笑う。

「おい、見ろよ。ガキだぜ？」

「こっちは女だ」

「おいおい！ おまえらあ！ 怪我する前に帰んな！」

野次が飛んでくるが、もちろん2人は気にもしない。

ラミナの相手は金髪モヒカンでガタイの良い男。

審判が近づいてくる。

「ここでは挑戦者のレベルを判断します。3分以内に自らの力を発揮してください。それでは、始め!!」

「ひゃっはー!! 怪我してもしらねえぞ、女あ!!」

モヒカン男が飛び掛かろうとした瞬間。

「ぶうえい!」

モヒカン男が突如真上に飛ぶ。審判や野次を飛ばしていた連中は目を見開いて固まる。

モヒカン男はそのままアーチを描いて、観客席の最上段に墜落する。

リングにはつまらなげに顔の前に右拳を掲げているラミナがいた。

「弱っ。振り抜いとつたら殺しとつたな」

ラミナは呆れながら呟く。

ドオオオン!!

そこに音が響き、目を向けるとゴンが右腕を突き出して立っており、その先には巨漢の男が場外の壁に突っ込んで倒れていた。

「な!? なんだ、あのガキと女!」

「どっちもすげえパワーだぞ！」

ラミナとゴンの力に周囲がざわつく。

審判がラミナに近づく。



「2056番、君は50階へ行ってください」

「おおきに」

ラミナはチケットを受け取り、観客席に戻る。

ゴンも戻ってきて、キルアが入れ替わる様にリングへと向かう。

「50階だつて」

「初めて挑戦した時は最大で50階までやねん」

「そうなんだ」

「キルアは2回目やから、もっと上に行くんやろうけど……」

その時、リングで再びどよめきが走る。

「おいおい、他にもまだ化け物みたいなガキ共がいるぞ！」

ラミナが目を向けると、注目されていたのはキルアと道着を着た坊主頭の少年。

坊主頭の少年は「押忍！」と挨拶をして、リングを去る。

ラミナはその少年が【纏】を纏っていることに気が付く。

（あんなガキが？）

【纏】はともかく、歩き方を見る限りでは実力的にはゴンとキルアが圧倒的に上だ。そして【纏】にまだまだ未熟さが見えることから念を会得したのは最近であるとも見抜いた。

ということは、あの少年には念を指導する存在が近くにいるはずである。

（どっかの古流武術か？）

ラミナは推察を続けるが、キルアが戻ってきたので思考を中断する。

「お疲れ、キルア！ 何階？」

「おう。俺も50階からにしてもらった。金稼ぎたいしな」

「ほな、さっさと行こか」

ラミナ達はさっさと移動して、エレベーターに乗り込む。

そこには坊主頭の少年も乗っていた。

50階に到着したラミナ達はエレベーターを降りると、少年が声を掛けてきた。

「押忍！ 自分、ズシと言います！ 御三方は？」

「俺、キルア」

「俺はゴン」

「ラミナや」

「さっきの試合、拝見しました。いやー、すごいっすね」

「何言ってるんだよ。お前だって一気にこの階まできたんだろ?」

「いや、自分なんかまだまだっす。ところで皆さんの流派は何すか?

自分は心源流拳法っす!!」

ズシはビシッとポーズをしながら流派を名乗る。

しかし、ラミナ達は顔を見合わせて、

「別に……ないよな?」

「うん」

「ええ!? 誰の指導もなくあの強さなんすか……。ちよつぱり自分シヨックっす」

「別に流派がないだけで、教わったりはしとるわ」

「あ……なるほどっす」

ラミナが呆れながらツツコむ。それにズシも納得して、軽く頭を下げる。

どうやら少し思い込みが激しいタイプのようなだ。

そこに拍手の音が聞こえてきた。

「ズシ！ よくやった」

「師範代」

眼鏡をかけて寝ぐせ全開の優男がズシに近づく。

ラミナはこの男がズシに念を教えているのだと理解する。

(そこそこのやり手やな)

「師範代、またシャツが」

「あ。ゴメンゴメン」

男は慌ててはみ出していたシャツの裾をズボンの中に戻す。

そして、ラミナ達に顔を向ける。

「そちらは?」

「ゴンさんにキルアさん、それにラミナさんす」

「初めまして、ウイングです」

「押忍！」

ゴンとキルアもズシの真似をして挨拶をする。

ラミナはその様子を呆れながら見ていたが、ウイングから視線を感じて顔を向ける。

「なんや？」

「いえ……。まさかズシ以外の子供が来ているとは思わなくて。それに付き添いがあなたのような女性なのも少し驚きまして……」

「誤魔化し下手やな。うちの【纏】を見て、実力測ろうとしたりつたんやろ？」

「……流石ですね」

「やっぱあんたがズシの念の師匠か。まあ、ここなら体術も念の修行にももってこいやしな」

念というキーワードにゴンとキルアは目を見開いて、ズシに目を向ける。

ズシは戸惑ったような表情を浮かべて、ウイングを見る。

ウイングも僅かに困ったような表情を浮かべる。

「その通りです。君達も？」

「そんなところやな。小遣い稼ぎもあるけど、この後からこいつらに念を教えるつもりや」

「なるほど……」

ウイングは顎に手を当てて考え込む。

「とりあえず、先にファイトマネーもろてきてええか？　もしかしたら、もう1試合あるかもしれんし」

「……そうですね。分かりました。ズシ、くれぐれも自分と相手、相互の体を気遣う様に」

「押忍！」

そう言つて、ラミナ達はとりあえず受付に行き、ファイトマネーを受け取る。

ファイトマネーは152ジュニー。缶ジュース1本分。

ラミナ達は自販機でジュースを買って、控室に向かう。

「なあ、ズシ。お前も念を使えるのか？」

「はい。師範代に教わってるっす」

「ふうん」

キルアはズシを見て、首を傾げる。正直そこまで強さを感じないからだ。

「ズシはまだ習い始めたところなんやろ。それにキルア達に敵意を持ってへんから、威圧感も感じひんだけや」

「そうっす。……まだ【練】の修行で止まってるっす」

「レンって何？」

「念の四大行の1つつす」

「あく、ちよい待ち。まだそこまで話してへんねん」

「なるほど。失礼しましたっす」

「キルア、ゴン。ちゃんと教えたるから、まずは宿代稼ぎや」

「分かった」

「ま、焦ったってしやあねえか」

「そういうことや」

控室に入ると、再び挑戦者達がざわつく。

女と子供の挑戦者はそれだけ珍しいのだ。

「ここからは10階ずつ上がっていくんだ。けど、負けたら10階下がって、ファイトマネーもない。まあ、この階程度の相手なら楽勝だよ。気楽にいこうぜ！」

「……キルアさん、声デカいっす……」

ズシがキルアのポリウムとその内容に冷や汗を流す。明らかに周囲の者達が殺気立ち、キルアを睨んでいる。しかし、キルア達3人は全く眼中になく談笑している。

そこに、

『ボコサ様、ラミナ様。58階A闘技場までお越しく下さい』

「お。うちか」

「頑張ってるね」

「まあ、余裕だろ」

「ぐ武運をつす！」

「おう」

ラミナは手をヒラヒラと振って、控室を出る。

そして、エレベーターで58階まで上がり、闘技場に足を進める。中は観客の熱気で溢れていた。

10階からは観客が観戦することが出来、更に公式に賭けが行われている。

『さあさあさあさあ!! おん待たせしましたー!! 次はなんと華麗な挑戦者のお出ましだー!!』

ラミナがリングに上がり、その向かいには禿げ頭のボクサースタイルの男、ボコサが立っていた。

『しかーし!! 見た目に惑わされてはいけません! 彼女は1階で凄い戦いをして、一気にこの50階クラスへやってきた強者です! それでは2人の戦いをVTRでご覧いただきましょう!』

会場の巨大スクリーンにラミナの1階での戦いが流される。

『ラミナ選手はまさに瞬殺!! アッパー1発で相手を観客席にまで吹き飛ばしました!!』

『対するボコサ選手は堅実ながらも全戦全勝でここまで勝ち上がってきた実力者! 鋭いジャブとストレートでKO勝ちでここまで来ています!』

紹介されたボコサは、ラミナを威嚇するようにシャドーを見せる。それに対してラミナは左手をポケットに入れて、大きくあくびをする。

「な……舐めやがって!!」

『さあ、皆さま! ギャンブルスイッチく、オン!!』

司会者が賭けの投票を促すと、観客達は一斉にボタンを押す。

その集計結果は、ボコサが1. 375倍。ラミナが2. 110倍だった。

『投票の結果では倍率はボコサ選手が優勢! やはり女性ということでは侮られたのか!』

(ええから早よせい)

いい加減めんどくさくなってきたラミナだった。

『それでは、3分3ラウンド、ポイント&KO制……始め!!』

「しい!! ぶっふう!!」

開始と同時にボコサが一気に詰め寄り、右ストレートをラミナに叩き込もうとした。

しかし、ラミナがそれよりも早くボコサの顎に右アッパーを突き刺して、1階同様ボコサを殴り飛ばして観客席に叩き込んだ。

「ク、クリティカルヒットオー! アーンド、ダウン!! ポイント、ラミナ!! 3-0!」

『な、なんとー!? 再びアッパーで観客席に叩き込んだー!! 3ポイント先取ー!! ってか、生きてる?』

ボコサは観客席の真ん中に落ちて、観客数人を下敷きにして白目を剥いてピクピクと震えながら気絶していた。

「ボコサ選手戦闘不能! ラミナ選手のKO勝ち!!」

『1発KO勝ちー!!』

ラミナは喜ぶどころか、あくびをしながらリングを去る。

その様子に関客達は今のでも全く本気ではなかったことに驚くことしか出来なかった。

60階に上がったラミナはエレベーター近くで待つ。

5分もせず、ゴンもやって来た。

「お疲れさん。キルアは?」

「お疲れ。俺より先に呼ばれたんだけど、相手がズシなんだ」

「……ズシか……」

ラミナは眉間に皺を寄せる。

「ズシは念が使えるんだよね? キルア、大丈夫かな?」

「まだ【練】の修行中って言うのだから、大丈夫やとは思うが……」

【纏】だけならば、キルアに勝てる可能性は低い。【纏】は体の頑丈さを上げるだけで攻撃力はそこまで上がらない。

問題は【練】を使った場合だ。

まだ修行中ということなので、ズシがコントロールをミスしたら大怪我を負う可能性がある。

出来ればズシとはもう少し後で戦わせたかった。

200階で戦っている者達は【発】を修得している者達のはずなので、その前に念初心者ズシと戦わせて、念能力者との戦いの感覚を掴ませたかった。

巡り合わせの悪さにラミナは顔を顰める。

ラミナとゴンは先にファイトマネーを受け取ることにした。

それから10分ほどすると、キルアがエレベーターから現れる。

思い詰めたような顔をしており、ゴンとラミナはキルアに歩み寄る。

「キルア！ ちょっと時間かかったね」

「……ああ。ちよつとてこずっちまった」

「強かったの？」

「いや、全然。素質はあるよ。でも、パンチものろかったし、隙だらけだった。なのに、倒せなかった」

キルアはラミナに顔を向ける。

「それも念って奴か？」

「そうやな。念は打たれ強くもなるで。まあ、人によつて差は大きいけどな」

「それに構えが変わった途端、凄く嫌な感じがした。ズシの師匠が大声で止めたけどな」

（ふむ。やっぱり【練】のコントロールが不十分つちゆうことか）

ラミナは納得するように頷く。

「ほな、ファイトマネー受け取って、ホテル取って、早速始めよか」

「押忍！」

「やめい」

ズシのノリを真似するゴン達にツツコんで、ラミナ達はホテルを探しに行くことにする。

すると、1階に下りたところにウイングが立っていた。

「お疲れ様です。少しいいかな？」

「……ゴン、キルア。先にホテル探してくれるか？ 少し広めの部屋を1つ頼むわ」

「分かった」

ラミナはゴンとキルアを先に送り出し、ウイングと向かい合う。

「それで？」

「……彼らの念を教えることについてです」

「……あんた、プロハンターか。つまり裏試験つちゆう奴やな？」

ラミナはネテロ達の話の思いを思いつく。

新人ハンターに念を教えるのはプロハンターの役目。それを裏ハンター試験と呼ぶ。

「ここに来たんは偶然か？」

「ええ。私は協会から君達がここに向かってしていると連絡を受けただけです」

「……ハッカーハンターか」

ラミナは舌打ちする。

それにウイングが申し訳なきように苦笑する。しかし、すぐに顔を引き締める。

「単刀直入に言います。彼らに念を教えるなら、私も関わらせてほしいのです」

「……どこまでや？」

「出来れば最初から最後まで」

「アホ言え。そんな面倒ゴメンや。口出しばつかされたらたまらん」

「……では、彼らの精孔をどのように開くつもりですか？」

「んなもんこじ開けるに決まっとる」

「それが外法だと分かって言っているのですか？」

ウイングの纏う気配が険しくなる。

しかし、ラミナは涼しい顔で受け流す。

「悪いけど時間ないねん。大事なんは開いた後。開き方なんざ問題ちやう。それにあいつらはすでに【練】の気配を感じ取れるでな。

【纏】をさつさと覚えさせる方がええ。ズシみたいに他に念を使える奴が200階より下におるかもしれんしな」

「それは……」

「あいつらはストレートで200階まで行く。外法やないと間に合わん」



ウイングはラミナの言葉に顔を顰める。

ラミナは歩き出して、ウイングの横を通り過ぎる。

「あくまで教えるペースはうちが決める。それでも見たいんやったら、ズシと一緒にやらせる形やな。比較対象が欲しかったでな。それでもええんなら、また声かけてや」

「……」

ウイングは険しい顔のまま、ラミナの背中を見送ることしか出来なかった。

キルアからメールでホテルの場所を聞いたラミナは、ホテルに到着する。

受付で手続きをしていたゴン達に合流し、キルアとゴンが広めのツインルームに泊まり、ラミナは普通のシングル部屋を取る。

流石に3日ほど泊まるとなると、ゴンとキルアだけでは金が足りないのので、修行をするためということとラミナもお金を出す。

すぐさま部屋に入った3人は早速念の修行を始めることにした。

3人は床に円座になって座る。

「さて、まずは念を目覚めさせた後、最初に覚えて行く技を教えるで」「レンとかテンって奴?」「そやな」

ラミナは部屋に備え付けられているメモ用紙に文字を書いて、4枚のメモをゴン達の前に置く。

【纏】【絶】【練】【発】とそれぞれ書かれていた。

「この4つのことを四行つちゆうねん。念の全てはこの4つから始まり、この4つを極めれば必然的に念の全ての能力が上がる。要は基礎やな」

「四行……」

「まずは【纏】。これはオーラを体に留める技で、体を頑丈にして若さを保つことが出来るんや」

「若さも……?」

「オーラは生命エネルギーつちゆうたやろ？ お前らは普段それを少しずつ垂れ流しとるんや。それを漏れんようにしたら、体にエネルギーが充満するイメージは出来るか？」  
「なるほど……」

「次に【絶】。これはオーラを体の内に引つ込める技や。生命エネルギーを一切無駄にせんことで疲労回復を速めたり、気配をほぼ完全に消すことが出来る。ただし……」

「念の攻撃を受ければ、即死ぬ……」

「その通りや。つまり【絶】は隠密や潜伏、逃走に使う。戦闘中に使うことはまずない」

ラミナの説明を真剣に聞くゴンとキルア。

2人は下手に聞き漏らせば命に関わることを理解していた。イルミの念の悍ましさを体が覚えているからだ。

「そして【練】。オーラを通常以上に放出する。そこに感情が乗ることで圧迫感を感じさせることが出来るし、【纏】よりも攻防力は上がる。ただし、生命エネルギーであるオーラを通常より放出するんやから、長く続ければ当然疲労するんは早くなる」

「つまり短期決戦ってこと？」

「いや。【練】と【纏】は毎日繰り返すことで熟練度は上がるし、扱える量も増える。言うたやろ？ 死ぬまで鍛え続けるつてな。それに

【練】と【纏】が強なれば、自分より未熟な敵の攻撃はほぼ通じんし、防御は貫ける。念能力者の戦いでは、この2つを疎かにしとったモンから死ぬ」

ゴンとキルアはゴクリと唾をのむ。

「最後に【発】。これは自分のオーラを操り、自分独自の能力を作り上げることや。これに関しては【練】が出来んと話にならんし、イメージが重要やから今は後回しや。で、今一番の問題は、どうやって念を呼び起こすかや」

「どうやってっ？」

「やり方があるんじゃないの？」

「あるで。主に2つ」

ラミナは新しいメモ用紙に『精孔』と書く。

「念は全身の精孔を開くことで目覚める。その方法はゆっくりと自分一人で開くか……。他人の手で無理矢理開かされるか」

「無理矢理？」

「出来んの？ そんなこと」

「自分のオーラを相手に叩き込むんや」

「!!」

ゴンとキルアはすぐさま言われた意味を理解した。

「もちろん、うちがやる場合は害意をオーラに乗せんから体が壊れる可能性は低い。けど、もしお前らがこのまま200階に行つとつたら……」

「200階にいるのは念能力者。そいつらと試合をすれば……」

「目覚める可能性はあるが、体に何かしらの障害が残るか、最悪死ぬやろな。これを200階では『洗礼』と呼ばれとる」

「洗礼……」

「でや、ゆっくり起こす場合、目覚めるのはそれなりに時間がかかる。お前らでも1週間以上は確実やと思つとる。そこらへんの人間やつたら数か月レベルやな」

「ラミナはどれくらいで目覚めたんだ？」

「うちは無理矢理開いた。もちろん仲がええ奴に手伝つてもろてな。これは早くて今晚。遅くても明日には念は目覚めるで」

「じゃあ、無理矢理起こす」

「そう言うと思たわ」

即決の2人にラミナは苦笑するしかなかった。

「だって、時間をもつたいたないもん。それにラミナだったら、俺達の体壊さないだろうし」

「だな。むしろ、ここで逃したらそれこそ洗礼の仲間入りだ。だったら、お前にやつてもらった方がいい」

「オツケー。ほんなら今から目覚めさせるで」

ラミナが立ち上がって、ゴンとキルアも立ち上がる。

2人に上着を脱ぐように伝えて、2人はシャツ一枚になる。

「先に言うところか。【纏】は最初は目を閉じて、自然体で行う方がええ。オーラが流れるイメージは血液。全身を巡らせるイメージや。そして、最後は全身が湯船の中に浮かんだような穏やかに体を包むイメージにしていくんや」

「オーラって見えるの?」

「目にも精孔はあるでな。見えるようになるで。ほな、背中を向けるや」

ゴンとキルアはラミナに背中を向ける。

ラミナは【纏】を大きくして、2人の体を包む。

2人は見えない粘膜に全身を包まれていき、背中を直接押されているような圧を感じた。しかし、全く嫌な感じはしない。

「……行くで」

ラミナがそう言った直後、ゴンとキルアは全身に衝撃が走る。

すると、体から白い煙のようなものが噴き出していくのが見えるようになった。

「おお!」

「こ、これは!」

「湯気だ! ヤカンから噴き出す蒸気みたいだ!」

「それがオーラや。ほれ、ボケつとすんなや!! そのままやとオーラ出し尽くして倒れるで!!」

「っ!!」

ゴンとキルアはすぐさま目を閉じて、自然体になる。

ラミナは2人の正面に回り、様子を見守る。

すると、2人の勢いよく噴き出していたオーラがピタリと止まり、体の周りに留まる。

(……1回くらいぶつ倒れると思ってたけど一発かい……)

ちなみにラミナは1度オーラが尽きて気絶した。

マチに呆れられたが、ウボオーが「マチだって2回くらい気絶してたじゃねえか」と笑いながら暴露して、マチに追いかけて回されるなどと色々あったが。

それをアドバイスしたとは言え、2人があっさりと【纏】を成功さ

せたことにラミナは嫉妬を通り越して呆れるしかなかった。

「……どうや？ 感じは」

「……なんか……温い粘液の中にいるみたい」

「うん……重さのない服を着てるみたいだ」

「それが【纏】や。それを無意識でも出来るようになるのが目標やな」

ゴンとキルアがラミナに目を向ける。オーラが見えるようになった2人の目には、自分達より遥かに穏やかで小さく、それでいて力強いラミナのオーラが映る。

それだけでラミナとの差を実感できたゴンとキルアだった。

「これでお前らも今日から念能力者や。けど、過信はすんなや。お前らの【纏】なんざ、ホンマに服一枚分くらいの防御力しかないで」

「……うん、分かる。今のラミナの【纏】でも防げる気がしない」

「まずは1週間、【纏】の修行に費やすで。これは瞑想や禅が一番や。さっきの自然体のように【纏】のイメージをひたすら続ける。200階まで行ったら【練】の修行も始める」

「【絶】は？」

「キルアはもう出来る。尾行するときの気配を消す感覚や。ゴンもハントー試験でヒソカを追いかけ回した時に使えとったと考えとる。実際、今やってみ？」

キルアとゴンは言われた通り、尾行するつもりで神経を集中する。

ラミナの目には2人から完全にオーラが消えたのを確認した。ゴンとキルアも互いのオーラが全く見えなくなり、気配も希薄になったのを感じて驚く。

「やつぱ出来たな。それが【絶】や。今日はそのまま休みい。明日には疲れも吹き飛んどるやろ。まずは100階までさっさと行くで。で、個室をゲットしたら、そこからは1日1試合ペースで念の修行の方を重きに置く。それでも2週間後には200階に行けるやろ。言うとかけど、それでも早すぎるペースや。まだ念能力者と戦うのは無謀っちゅう言葉すら生温いで。ええな？」

ゴンとキルアは頷く。

「言うとか、ヒソカもイルミもうちと同等以上の念能力者や。念を

使う以上、ヒソカ達やってハンター試験みたいに易しくはないで。さらに難易度は上がったと思えや」

ゴンは冷や汗を浮かばせながらも、楽しそうに笑みを浮かべる。

それを見たラミナは「逆効果やったか……」と呆れ、キルアも苦笑する。

こうしてゴンとキルアの念修行が始まったのであった。

## #19 ネン×ヲ×キタエロ

ゴンとキルアが天空闘技場にやってきて、さらに【纏】を覚えて4日目。

3人は当然のようにストレート勝ちで、一気に100階まで到達した。

『3日前に登録してから怒涛の一発KOでの6連勝！ 手刀のキルア、押し出しのゴン、アツパーのラミナ!! この3人組の勢いを止める者はいないのかあ!』

などと騒がれていたが、ラミナ達は一切気にすることなく【纏】の修行に集中していた。

今日からは闘技場内の個室に移れるので、さつさと移った3人は早速【纏】の特訓を始める。

「ほれ、ただ【纏】すればええんちゃうぞ。その感覚が当たり前になるまで、ひたすら瞑想や」

【纏】において重要なのは、ほぼ無意識で発動・維持を出来るようになることだ。

敵意を感じた時や危険や戦闘を意識した時に、反射的に【纏】が発動することが理想である。

そのためにはひたすら【纏】を続けるしかない。

こればかりは積み重ねしかないのだ。もちろん、その感覚を掴む早さは人によって差があるが。

キルアとゴンは自然体で立ち、目を閉じて瞑想している。

ラミナは2人に暇があれば、どこでも【纏】の瞑想をやらせている。少しでも時間を無駄にせず、【纏】の感覚を掴ませるためだ。

(感覚が重要なものに関しては、やっぱり筋がええな)

すでにゴンとキルアの【纏】はかなり精錬されてきている。目覚めさせた時に比べると、オーラもなだらかで静かになってきている。

まだまだ乱れる事が多いし、オーラの量もまちまちで弱々しいが、目覚めさせて数日である事を考えると十分すぎる上達の早さである。

もちろん、ラミナは一切褒めないが。

(200階まで後10日。……180階くらいで【練】を一度やらせてみよか。出来れば200階の連中と戦わせる前に【凝】を教えられれば、そうそう遅れはとらんやろ。まあ、相手の【発】次第やけど) それでも放出系や変化系の【発】を躲せる手段を教えておかなければ、死ぬ危険性が段違いである。

2人の才能次第ではあるし、ぶつちやけ異常な速度で教え込もうとしているが、それでも普通について来れそうな気がしているラミナだった。

(これがホンマモンの天才つちゆう奴か。ゾルディックが期待するんも納得やな)

しかし、それは危険な場に出やすいことでもある。プロハンターとて実力も素質もピンキリである。

その中でゴンとキルアは間違いなくトップレベルの素質の持ち主だ。この2人の好奇心の高さも合わされば、様々な仕事の現場に参加することになるだろう。

魔獣の中にも念を使う奴はいるし、賞金首にもごまんという。なので、修羅場に巻き込まれる可能性は非常に高いと考えている。

(……いずれはうちとも殺り合うかもしれない)

ラミナは暗殺者だ。賞金首になりやすい。

仕事の内容によつては、ぶつかり合う可能性はある。

その時はラミナは逃げる事も、手を抜くことも出来ないはずだ。それが自分の流儀なのだから。仕事を引き受けた以上、例え知り合いが敵にいようと、殺しても達成する。もちろん、依頼を受ける前にゴン達がいるのが分かれば、引き受けないという方法を取るつもりではあるが。

(まあ、その時にはうちの手から離れとるやろけどな)

一人前になったならば、2人が選ぶことに文句を言う権利はない。そして一人前ならば、殺しても寂しくはなるだろうが、悲しくはならないだろう。

(全く……難儀なもんやで)

ラミナは目を閉じて、小さく鼻でため息を吐くのがあった。



それから更に5日後。

順調に150階まで到達したゴン達は、【纏】の修行も順調すぎる程進んでいた。

「ちよつとレベル上げよか。外に出るで」

ラミナの提案で向かったのは、人気がなくそこそこ広い空き地だった。

「なにすんの？」

【纏】を維持したままで、うちと追いかけてこや」

「追いかけてこつて言っても……」

ゴンは周囲を見渡す。空き地はもちろん障害物など見当たらない。「もちろん範囲はこの空き地の中。もちろん攻撃アリ。まあ、怪我せん程度でな」

「俺達はラミナを追えばいいの？」

「そやな。ただし、うちはちよつとズルするで」

「ズル？」

ゴンとキルアが首を傾げると、ラミナの左手に短刀が出現する。

突如現れた短刀に2人は目を見開く。

「それも念なの？」

「そうや。【発】で作り出したもんや。ただ、これはうち独自のモンやから、お前らが出来るわけやないで」

「そんなことも出来んのか……」

「ほな、始めるで。どんな時でも【纏】を維持せえよ」

「押忍！」

ラミナはもう2人のノリにリアクションをすることを諦めていた。開始と同時にラミナの姿が溶け込むように消える。

2人は目を見開くも、すぐに顔を引き締めて周囲の気配を探る。すると、

「っ!? 【纏】が……!」

気配を探ろうとすると、【纏】が乱れ始めた。

2人は慌てて【纏】を練り直す。

「がっ！」

「でっ！」

【纏】だけに集中しとつたら、うちを捕まえられへんでえ。動きながら、気配を探りながら、【纏】を維持できるようにせんと大怪我すんで」  
ラミナが2人の後頭部を小突いて言う。そして、また姿を消す。

ゴンとキルアは駆け出して、周囲の気配を探る。しかし、やはり【纏】が乱れ始め、どれにも集中しきれない。

「くっ！（少しやるこが増えただけでここまで【纏】を保つのが難しいなんて!）」

「ほれほれ、どこ見とんねん」

「イタっ！」

「くそっ！（全っ然気配を感じねえ。姿が消えるってどんな念なんだ!?)」

「もつと周りに気を配れや」

「つてえ！ くっそっ！」

その後もゴンとキルアはラミナを全く捉えることが出来ず、3時間が経過した。

2人は荒く息を吐いて座り込み、【纏】も維持出来なくなっていた。ラミナは短刀を消して、疲れ切った2人を苦笑しながら見つめる。

「分かったやろ? 【纏】の修行にとことん費やす理由が」

「……うん。全然思う様に動けなかった……」

「命の危険があるって思ってるから、尚更乱れると焦って【纏】に気を取られるな……」

「けど、【纏】が出来へんと、この後教える予定の【練】も維持出来へんで? 戦いでは【練】の方が重視されるでな」

「うえっ……」

キルアはうんざりしたように項垂れる。ゴンも空を仰いで、道のりの長さを思い知る。

「明日もやるで。それとこれからは【纏】をずっと維持すること。試合の時もな」

「ずっとな……寝るときもっ……」

「もちろん。それくらい出来んと、戦いの中で【纏】を維持出来へんやろ。ヒソカ相手に【纏】に意識割く余裕なんざないで」

「まあ、そうだよな……」

ラミナの言葉に納得するしかないゴンとキルア。

敵は【練】を使って攻撃してくるし、ラミナのように念で作った武器を使ってくる者もいる。【纏】を維持出来ないと話にならない。

その上で相手の素の戦闘技術にも対応しなければいけない。

ヒソカは念無しでも、かなりの強さを誇っている。

というか、ゴンでは念を覚えても、素のヒソカに勝てない可能性がある。

「うちはヒソカの念を知らん。まあ、ヒソカに限らず、念能力者と戦うときは相手の実力＋念能力が何かを見極めなあかん。さっきのうちみたいな見えなくする技や能力もある。念能力者同士の戦いはやることがたんまりやでな」

「どっひ〜……!」

「そんなに覚える事あんのかよ〜……!」

ゴンとキルアは仰向けに倒れる。自分達がまだスタート地点に立ったどころか、立つ準備をしている段階であることを理解したのだった。

それでもやめるわけにもいかない。

ゴンとキルアは努力を続けることを改めて誓うのだった。

そして、それから6日後。

3人は180階に到達した。150階からは登録者数が多かったようで、試合が隔日で行われることになった。その分、修行に時間を割いたのでラミナ達には文句はなかった。

「今日からは【練】の修行も始めるで」

「【押忍!】」

「……気に入ったなあ」

ラミナは呆れて2人を見るも、すぐに切り替えて説明を始める。

「【練】は前に説明した通り、オーラを多めに放出する技や。イメージ

としては全身から体の中心に力を溜めて、それを一気に解き放つ感じや」

そう言うところミナナのオーラが一回り膨れ上がり、力強さが増す。今にも爆発しそうな程の圧があり、ゴンとキルアは冷や汗が流れる。

「ここで間違ったらあかんの、ただオーラを強く出すだけやとすぐにガス欠することや。しかも、それやと結局スカスカで相手の攻撃は防げへん。強く出したと同時に【纏】を意識せなあかんで」

「蒸気っていうよりは、風船みたいなイメージか……」

「それよりはボールの方がええ。【纏】がボール、オーラはボールの中の空気うちゅう感じやな。空気を多く入れれば、ボールは張って硬く感じるやろ？」

「なるほど……」

「けど、もちろんその分【纏】のコントロールは難しくなる。気を緩めると、途端に弾けてまう」

「そうなるならオーラを無駄にするだけってわけか……」

「さらに【練】の密度を高めれば、その分攻防力も上がる。これが【纏】と【練】を毎日行えっちゃう最大の理由や」

鉄や砂を押し固めて硬度を上げるように、オーラも密度を上げれば硬くなる。

故に毎日【纏】と【練】を行い、その密度を高め、その硬度をすぐさま出せるように感覚を覚える必要がある。

「まずはオーラを強く出すことからや。やってみ」

ミナナは【練】を手本のように維持したまま、ゴンとキルアにやらせる。

ゴンとキルアは拳を握って脇を締め、目を閉じて集中する。

髪の毛の先や足先から力を体の中心に集めるイメージを連想する。

そして、それを一気に解き放つて外に。

ブオッ！とゴンとキルアのオーラが炎のように膨れ上がる。

【纏】！！

「っ！！」

ミナナの一喝に、ゴンとキルアは噴き出したオーラを押し留めよう

と意識する。

2人のオーラは普段の二回りほど大きく膨れ上がり、今にも弾けそうなほど不安定なものだった。

といつても、初めて行ったのだから不安定なのは当然である。

「【纏】の意識が遅いし、オーラもデカすぎ。今の半分程度までには抑えんとあかん。それにまだまだ力も弱い」

「ぷはあ！ は、初めてなんだからしょうがねえだろ！」

「ふう……。30秒程度なのに結構疲れるね」

「【練】はずつと力んどる状態に等しいでな。それだけ体力も使うんは当然や。それに加えて、ただ全力で動き回ることより集中力もいる。慣れるまで疲労感は普段とは比べもんにならないで」

ラミナは【練】を解いて言う。

キルアとゴンは息を整えて汗を拭う。

「【纏】【練】【絶】の順に1セットとして、それを10セット。出来る限り【纏】の大きさを維持してオーラを強めることを意識せえや。ゆつくりでもええ。200階に行くまでに素早く安定した【練】を出来るよう目指すで」

「鬼教官かよ!?!」

「なんや、優しい方がええんか？ それでもええけど、ヒソカと戦えるんは数か月先になんで」

「ぐ……!?!」

「今のペースって普通とどれくらい違うの？」

「ん〜……。まあ、ちよいと早いくらいやな」

（うちやマチ姉達と比べれば、やけどな。そこらへんの奴と比べたら倍以上やけど）

ゴンとキルアは素質も高く感性も豊かであるのも原因だろうが、それ以上に同年齢の者達と比べて肉体が恐ろしく鍛え上げられている。恐らくラミナが何もしなくても、きっかけを見つけるだけで2人はそう遠くない内に自然と念を目覚めさせていただろう。

後は簡単なコツと経験を積みませれば、この2人は自然と最適のやり方に気づくことが出来る。

ラミナはそう評価していた。

(つちゆうても、あと半年足らずで全部を実戦レベルまで教え込むのは無理。とりあえず最低限の知識とコツを教え込んで、後は自分達で鍛えて行くしかない)

「ほれ、回復したんならさっさとやるで。ゲームで言うなら、まだチュートリアルすら終わってへん。レベルアップしたいんなら、さっさと終わらせんな」とな

「押忍！」

ゴンとキルアは気合を入れ直して、特訓を再開する。

そして、4日後。

ラミナ達は遂に200階に足を踏み入れた。

エレベーターを降りたゴンとキルアは、受付に向かう通路に足を踏み入れた途端、ゾクリと怖気が背中に走る。

咄嗟に「纏」を発動すると、怖気が大分和らぐの感じたが、それでも嫌な予感は消えない。

「いきなり殺気かよ……」

「【纏】が出来なかつたら、進む気にもならなかつたね……」

「おい、ヒソカ。試すんは十分やろ」

「!!」

「くつくつくつ ♠ そのようだね ♡」

通路の奥角からヒソカが笑いながら顔を出す。

ラミナはジト目を向けながら通路を進み、ゴン達も続く。

「200階クラスへようこそ ♡ ラミナがいるなら洗礼は受けずに済みそうだね ♣」

「そこは相手次第やろ。まだ【発】まで行ってへんし」

「君はまだゴン達をここで戦わせる気はないんだろ？」

「そらな」

「なら、やっぱり問題ないね ♠ けど……まだ駄目だね ♣」

ヒソカはゴンに顔を向ける。

「ラミナが許可を出さないだろうし、僕もまだ君と戦う気は全くない

♠

ヒソカは両人差し指を立てる。

すると指の間でオーラが蠢き、オーラで♠マークを作り、さらに髑髏マークへと変える。

「しつかりと念を学びなよ、ゴン◆ ラミナが許可を出して、かつこのクラスで1勝出来たら相手になろう♥」

そう言っつて、ヒソカは背を向けて歩き出す。

それを見送ったラミナ達は登録をするために受付に向かう。

「200階クラスへようこそ！ こちらの登録の署名をお願いします」

受付嬢から用紙を受け取って登録する3人。

「ありがとうございます。それでは、早速参戦の申し込みもなさいますか？」

「え？ 申し込むの？」

「はい。このクラスは申告戦闘制としまして、90日間の戦闘準備期間を用意して御座います。その間であれば戦いたい日に戦っていただけるシステムなのです。毎日でも構いませんし、期限ギリギリまで戦わなくても構いません。一度戦闘を行えば、また90日間の戦闘準備期間が与えられます。ただし、期限内に戦わなければ即失格となり、登録抹消となります」

「二度戦えば？」

「このクラスをクリアするには10勝が必要となります。ちなみにこのクラスからはファイトマネーは発生せず、名誉のみの戦いとなりますのでご了承ください。更にこのクラスからは武器の使用も認められております。怪我、死亡などは自己責任となりますのでご注意ください。そして、10勝する前に4敗してしまいますと、これまた失格となります」

「ふくん……」

「まだ申し込みはせんでええで。うるさそうなハイエナがおるみたいやけどな」

後ろを振り向くと、そこには車椅子に乗った男、左腕がない能面顔

の男、そして一本足の義足で杖を突いている者がいた。

「……なんか用？」

「いいや？ 俺達も申し込みたいから並んでいるだけさ」

「ほな、すぐ退くわ」

「せつかく来たんだからさー。いつなら戦えるか教えてよ。君らと戦ってみたいからさー」

能面顔の男がいやし気に笑みを浮かべて言う。

その言葉でゴンとキルアもこの3人が洗礼を受けた者達で、自分達がされたように新入りに標的を定めて勝ち星を稼ぐ連中なのだと理解した。

ラミナは無表情で3人を順に上から下まで観察する。

「……ええで。ほな、1人選びい。うちが相手したるわ」

ゴンとキルアは目を見開いて、ラミナを見る。

男達はニヤリと笑みを深めて、顔を見合わせて相談を始める。

キルアが近づいてきて、小声でラミナに問いかける。

「大丈夫なのか？」

「別に問題ないわ。小物狙いしか出来ん雑魚やしな。それにお前らに一度念能力者同士の戦いを見せとかなとな。まあ……参考になる戦いになるんかは怪しいけどな」

ラミナは肩を竦めて、つまらなげに3人を見る。

キルアも3人に目を向ける。

正直、キルアの目にも全員が自分達より格下に見える。しかし、それを覆しかねないのが念であると、ズシとの試合でキルアは実感していた。

なので、念に関しては向こうが上である以上、自分達ではまだ危険だと判断していた。

「お待たせ。俺が相手をさせてもらおうよ」

声を掛けてきたのは能面顔の男。

ラミナは頷いて、申込用紙に『いつでもオーケー』の欄にチェックを入れる。

「これでええな」



「ああ」

「では、ラミナ様は2234号室となります。戦闘日は決定次第お知らせします」

ラミナ達は鍵を受け取って、部屋へと向かう。

部屋は100階の時とは違って、かなり豪華で広くなっていた。

荷物を置いたラミナは、ふとテレビに目を向けると画面に通知が表示されていた。

『戦闘日決定！ 225階闘技場にて、3月11日午後3時スタート！』

「明日か」

ラミナはそう呟いて、ゴンの部屋へと向かう。

そして、今日も【纏】【練】【絶】の修行をやらせながら、明日の予定を話した。

「はやっ！ 明日かよ」

「準備は大丈夫？」

「いらんいらん。いつでも戦えるようにしとくんがプロやぞ？ それより、明日はしつかりと試合を見ときや」

ラミナはゴンの部屋に備え付けられていたワインを傾けながら、余裕全開で言う。

ゴンとキルアはラミナがそう簡単に負けるとも思っていないが、あまりにも油断しているように見えて不安になる。

「それより、そろそろ次の段階に行こか」

「！」

次の段階と言う言葉にゴンとキルアは一瞬で意識が切り替わる。

「遂に【発】か」

「いや、ちやう」

「え？」

「これから教えるんは【凝】 っちゆう技や」

ラミナはメモ用紙に【凝】【隠】と書いて、2人に見せる。

「え？ でも、四大行で残ってるのって……」

【発】やけどな。どっちかと言うと【凝】の方が重要やから、先に教

える」

「【隠】って方は？」

「それはまだ名前だけ覚えとけばええわ。まあ、説明聞いたら分かるやろうけどな」

そう言いながらラミナが左人差し指を立てる。

「ゴンとキルアは首を傾げる。」

「よおしく目え凝らしてみい」

「……」

言われるがままに2人は目を凝らす、何も見えるものはない。

「一体何なんだよ？」

キルアがそう訊ねた直後、ラミナの指の上に髑髏マークが突如現れる。

「!？」

「これが【隠】。【絶】の応用技で、オーラを消すんやなくて見えにくくする技や」

「応用技……」

「【隠】の利点は、オーラを保ったまま【絶】のように気配を消せること。そして、今みたいに形を変えたオーラで不意打ちすることが出来る。例えば、うちがお前らに見せた短刀。あれはオーラで具現化したモンやから、【隠】を使えば無手のように見せる事も出来る」

キルアとゴンは【隠】の恐ろしさを理解して、冷や汗が流れる。

目に映るオーラだけに注意するだけでも厄介なのに、見えないオーラまであるとなると一体どれだけ注意を払わなければいけないのか。

「そして【隠】を見破るために使うんが、【練】の応用技の1つ【凝】や」「見えなくなったオーラを見えるようにする技ってこと？」

「そうや。両目にオーラを集中して、視力を強化する。まあ、【凝】は正確には『オーラを集中させる技』や。目だけやなくて拳や脚にも使えるけど、まずは目で使うことを意識することやな。実力者と思われる相手に出会ったら、【纏】の次に【凝】を使うんが鉄則。もちろん定期的に【凝】を使って相手を探る癖も身に着けなあかん」

「……もちろん【纏】や【練】を維持してだよな？」

「当然やろ」

「うがー!! やつと動きながら数秒【練】を維持できるようになったばっかだつてのにい!!」

キルアが髪を掻き乱しながら嘆く。

その様子をゴンは苦笑して見ているが、気持ちは同じだった。

「少なくとも【纏】【練】【凝】の3つを戦闘中に素早く使えんと【発】どころやない。今、教えとるんは『相手の念から身を守る技』ばっかや。今のお前らは、まだ念能力者相手に逃げ回ることしか出来んつちゆうことを理解せえ」

ラミナの言葉にキルアとゴンは顔を引き締めて頷く。

事実、ラミナとの追いかけてこころでは、今のところ必死に気配を探つて逃げ回ることとで精一杯だからだ。

「まずは【練】。そこから全てのオーラを目に集中するんや」

ゴンとキルアは【練】を行い、オーラを目に集めるように意識する。

「ぐ………! (きつつ………!)」

「う……。(体より小さい所に凝縮するのがこんなに辛いなんて………!)」

「ほれ、何が見える?」

ラミナが再び左人差し指を立てる。

2人は必死にオーラを目に集中させたまま、目を向ける。

ラミナの指の上に薄っすらと何かが見えた。

「……丸?」

「いや、0じゃないか?」

「残念。8や」

「ぶっはあ!! きつつー!!」

ゴンとキルアは【凝】が解けて、息を吐く。

初めて【練】を使った時と同じくらいの疲労感に襲われる。

「ぼんやりとしか見えなかった……」

「まだまだ集中させたオーラが足りんつちゆうことやな。【隠】も使い手が強ければ強いほど見えにくくなる。【凝】が下手やと、どんな能力に襲われるか分からんで。しかも、念にはトラップや物を遠隔操作で

きる能力もある。基本、それらは【隠】で隠されとることが多い。【凝】を使う癖がないと、何をされたか分かる前に死ぬで？」

「……聞けば聞くほど暗殺向けじゃん」

「そうでもないで。例えば、傷を癒す箱を生み出す能力があるとする。それを戦場に【隠】を使って隠せば味方の援護も出来る。他には偵察機みたいな能力に特化させれば、暗殺者や動物などの動向を探る事も出来る。使い方次第っちゆうことや」

「……」

「っちゆうことでや。これからは【纏】【絶】【練】【凝】の順で1セット。それを1日20セット。出来る限り素早くな。追いかけてこども【凝】を使っていくように」

「げっ！」

「ほれ、さっさと始めんかい。朝になってまうで」

「ひいっ！」

ゴンとキルアは悲鳴を上げて、修行を再開する。

2人の修行はまだまだ終わりが見えないのだった。

## #20 ショセン×ト×シシヤ

3月11日。

ラミナの初戦である。

『さあさあ！ 今日は大注目の一戦！ 破竹の勢いで勝ち上がってきたラミナ選手が早くも登場です！』

200階クラスはやはり人気があるようで闘技場もかなり広く、観客席も満席だった。

ゴンとキルアもチケットを買って観戦していた。

『対するサダソ選手はここまで6戦して、5勝1敗とまずまずの戦績を残しています!!』

サダソは口を吊り上げて卑しい笑みを浮かべている。

ラミナは両手をズボンのポケットに入れて、つまらなげに立っている。

「くくく。安心しなよ。殺さないようにしてあげるからね」

「……はあ」

「ポイント&KO制！ 時間無制限一本勝負!! 始め！」

審判が開始を告げるのと同時にサダソの靡いていた左袖が、不自然に蠢き出す。

ラミナがポケットに両手を突っ込んだまま右に跳ぶと、ラミナがいた場所の床に何かが叩きつけられたような音がして亀裂が入る。

「へえ……」

サダソは笑みを浮かべたまま、ラミナに体を向ける。

ラミナは上半身を屈め、そのまままた横に跳ぶ。次に大きく跳び下がって、リング端まで移動する。

『さっそく出ているようです！ サダソ選手の見えない左手ー!! しかし、ラミナ選手も見事に躲している、ようです!! 見えないから実況し辛い!!』

「……ゴン。見えるか？」

「うん……。なんとか、だけど……」

キルアとゴンは不慣れな【凝】をして、サダソの念の正体を見る。

オーラで形作られた歪な左手が大きさや長さを変えながら、ラミナに襲いかかっていた。

2人には昨日同様ぼんやりとしか見えず、すぐに【凝】が限界を迎えて見えなくなる。

「くそっ！ あれが【隠】って奴か。俺達じゃすぐに捕まっつて終わりだ」

「うん……」

キルアは顔を顰めて悔し気に言うが、ゴンはどこか上の空で返答する。

それに気づいたキルアは首を傾げる。

「どうしたんだ？」

「ラミナのオーラだよ」

「あいつの？」

ゴンに言われて、キルアもラミナに目を向ける。

ラミナのオーラは見事な【纏】を維持していた。攻撃を躲しながらも全く揺らぐ様子もない。

なのに、サダソの見えない左手の動きを完全に捉えている。つまり

【凝】をしながら動き回っているということだ。

それだけラミナの念の技量は高い事を示している。

その時、ラミナが足を止める。直後、ラミナのオーラが強まり、右脚を振り上げる。

すると、サダソが何かに弾かれたように体がよろめく。

「まさか……【練】で蹴り飛ばしたのか!？」

キルアとゴンが驚く。

ラミナは勢いよく駆け出し、猛スピードでサダソに迫る。そして、そのまま左膝蹴りを繰り出して、サダソの鳩尾に叩き込む。

「ぐおっ！」

サダソはくの字に体を曲げて呻く。ラミナは僅かに後ろに下がりながら回転し、サダソの側頭部に左後ろ回し蹴りを浴びせる。

「ぎゃあ!？」

サダソは頭を勢いよく弾かれて、うつ伏せにリングに倒れる。

「クリティカル！ アーンド、ダウン!! 3ポイント!! ラミナ!!」  
『ラミナ選手の強烈なコンボー!! しかも、まだラミナ選手は両手をポケットに入れたままー! 余裕! 余裕です!!』

ラミナはサダソから距離を取る。

(変化系の使い手。どうやら左腕以外から生やせんみたいやな。後は左手の形状をどこまで変えられるか、やな)

サダソの能力を推測して、警戒するポイントを整理する。

(大きさも変えられるみたいやが……。大きく、そして伸ばすとパワーも下がって軽くなる。無理に攻めんかったら問題はないけど……)

ラミナは両手をポケットから出す。

サダソは口から流れた血を拭いながら立ち上がり、ラミナを睨みつける。

「やってくれたね……!」

「退屈やねん。もうちよつとやる気出してくれへん?」

「……いいだろう。後悔しなよお!!」

サダソの左袖からオーラが噴き出し、巨大な左手が出現する。左手指が鉤爪のように鋭くなっている。しかし、倒すことに力を入れたからか、【隠】を使っていない。

蛇のように左腕がうねり、ラミナに襲い掛かる。

ラミナは指の間をすり抜けるように躲し、右拳を握り締めて【流】を使い、念の左手に強く叩き込む。

ドバン!!

轟音が響き、リングの床が碎ける。

ラミナはもちろん、ゴンやキルアの目には、サダソの念の左手も共に碎けたのがはっきりと映る。

「なっ!」

サダソが目を見開いて驚く。

ラミナはその隙を逃さず、一瞬でサダソの目の前に移動する。右アッパーを鋭く放ち、サダソの顎を跳ね上げる。更に左掌底を胸に叩き込んで、後ろに吹き飛ばす。

サダソは場外まで吹き飛び、床を転がす。

「クリティカル！ アーンド、ダウン！！ プラス、ポイント！！ 6―0！！」

『恐ろしいパワーと鋭い攻撃ー！！ 一気に6―0の大差ー！！ サダソ選手まだやれるかあ!?』

「ぐっ……い！」

サダソは胸を右手で押さえ、ふらつきながら立ち上がる。荒く息を吐き、汗も大量に流れている。

「ギブアップするか?」

「っ！ ふざけるなああ!!」

サダソがラミナの挑発に簡単に乗り、「発」を発動する。しかし、オーラが途中で塞ぎ止められて、袖が膨れ上がる。

「なっ!? つ!? なにい!」

サダソが再び目を見開く。

目に映ったのは、縛られた左袖。

『な、なんとー!! いつの間にかサダソ選手の袖がきつく縛られていたー!! これでは左腕は出せないのか?』

「袖なんぞに拘らんかったら、中々の能力やと思たんやけどなあ」

「っ！」

ラミナが右拳にオーラを集中して、サダソの懐に現れる。

サダソは左袖に気を取られていたことで、ラミナの接近に気づくのが遅れた。下から迫るラミナの拳に【練】を発動することも出来ず、ただただ目を見開くことしか出来なかった。

「ぶえべぶっ!!」

サダソの顎にラミナのアッパーが突き刺さり、顎を完全に砕いて真上に高く打ち上げる。

サダソは、これまでラミナにやられた者達と同様に大きく弧を描いて観客席に叩きつけられる。

『パーフェクトアッパー!! ここでもラミナ選手のアッパーフィニッシュは健在ー!!』

審判が大急ぎでサダソが落ちた観客席に向かって走っていく。



しかし、リング側からでは観客席へは壁が高く登れない。すると、どこかに控えていた係員が観客席に現れ、サダソの状態を確認する。

サダソの顎は完全に砕けており、サダソは異常なほど大きく開いた口から泡を吹いて、ピクピクと痙攣しながら失神していた。

惨状を聞いた審判は頷いて、ラミナに手を向ける。

「サダソ選手、失神K.O!! 勝者、ラミナ選手!!」

『圧勝です!! ラミナ選手の勢いは全く止まる気配がありません!!』

これは今後も見逃せない!!』

ラミナは全く疲労の色を見せずにリングを去る。

ちなみにサダソは、下顎骨粉碎骨折、右肩甲骨亀裂骨折（落下によるもの）、胸骨粉碎骨折、肋骨8か所完全骨折、4か所亀裂骨折、左鎖骨完全骨折、左側頭骨亀裂骨折。更に折れた肋骨が肺に刺さっており、全治7か月の重傷と診断され、天空闘技場を去ることになったらしい。

試合を終えたラミナはゴン達と合流する。

「どやった?」

「……とりあえず、まだ戦うのは早いつてのは理解した」

「俺達じゃ、あの攻撃は避けられなかったと思う」

「まあ、【凝】に慣れればお前らでも楽勝やと思うで? 厄介なんは見

えんことだけやからな」

「それがムズイんだよ」

「ほな、とつとと上手くなることやな。今の試合は録画しとるから、

【凝】の練習にでも使い」

そう言つて部屋に戻ろうとしたラミナ達の前に、ウイングとズシが現れる。

「あ、ウイングさん! ズシ!」

「押忍!」

「元氣そうで何よりです。ラミナさんも、先ほどはお見事でした」

「そらどうも」

ウイングは和やかに声を掛けながら、ゴンとキルアに目を向ける。  
（……僅か3週間で別人のように見違えた……。2人とも【纏】を自然に使っている）

ウイングはゴンとキルアの【纏】を見て、内心驚きを隠せない。

ゴンとキルアは既に意識せずに、なだらかで力強いオーラを維持している。

「ズシは今、何階にいるんだ？」

「ま、まだ70階っす」

ズシもゴンとキルアの【纏】を見て、動揺している。3週間前まではオーラすらも使えなかったはずの2人が、ほぼ完璧な【纏】を使っている。

あまりの上達具合に、ズシは恐怖すら感じていた。

「……ゴン君とキルア君は今、どのような念の修行を？」

「今は【纏】【絶】【練】【凝】を20セットと、それを使ってラミナと追いかけてっこして動き回りながらも【纏】や【凝】を使える特訓だよ」

「後は【纏】をずっと使って、この状態に慣れるって奴」

「……もう【凝】まで？」

「覚えが早いでな。まあ、【凝】は昨日教えたばっかやけど」

ラミナが肩を竦めて言う。しかし、ウイングはあまりの進行速度にめまいを感じた。

「……お2人の念を見せて頂いても？」

「構へんで」

ラミナ達はウイングとズシの家に行き、修行の成果を見せることになった。

「ほな、【纏】【絶】【練】【凝】な」

「押忍！」

ゴンとキルアはこれまでやってきた通りに順番に行っていく。

やはり【凝】は時間がかかり、まだまだ不安定だったが、昨日教えた事を考えれば十分だろうとラミナは考える。

一通り見せ終えたゴンとキルアは「ふう」と息を整える。

「やつぱ【凝】は時間がかかるな〜」

「うん。長く続けようとすればするほど難しく感じちゃうね」

(……レベルが……違い過ぎるっす……)

(3週間で修めた【練】で、昨日教えられた【凝】をあそこまで……?)

なんて子供達だ……)

ズシとウイングは、ゴンとキルアの才能に慄くしかなかった。

特にウイングは「この2人をもし自分が教えていたら、自分は冷静に教えることは出来ただろうか?」と考えていた。

正直、この2人をコントロールできる気がしない。確実に自分はこの才能を持って余すだろうと思った。

「……お見事……の一言ですね」

「凄すぎるっす……」

「そう? ズシはどこまで行ってるの?」

「……自分はまだ【練】までっす」

「え?」

ズシの返答にゴンは僅かに目を見開いて、ラミナに顔を向ける。

ラミナは呆れたように、

「言うたやろ? お前らは普通よりちよつと早いってな」

(ちよつとどころじやないと思うっす!!)

ズシは心の中で叫ぶ。

ウイングは冷や汗を流しながら、ラミナに訊ねる。

「この後はどう教えていく予定なのですか?」

「あと1週間は今のを続けて行く予定やな。その後に【発】にひと月くらい。で、最後に【堅】を教えれば、後は自分達で十分やろ」

「……なるほど」

「ヒソカとはいっ頃戦えそう?」

「……せめて【発】の修行が終わってからやな。四行の修得と説明はしとかなあかん」

「ってことは……4月の終わりか、5月の始めくらいか」

「まあ、その前に1, 2回は戦わんとあかんけどな。やから、もうちよ

「い後やな」

「分かった」

ラミナの予定を聞いて、ゴンは納得したように頷いているが明らかに早くヒソカと戦いたくてウズウズしているのが分かる。

キルアとラミナは呆れたように、その様子を見つめていた。

ウイングはラミナが述べた予定について考えていた。

（先ほどの修行法と言い、今の話と言い……。どうやら無茶をしているわけではなく、純粋に2人の修得状況と才能を見極めた上で進めているようだ。……ならば、下手な口出しは無粋というものか）

ウイングはそう判断して、ゴン達の修行を見守ることに決めた。

ウイングの家を後にして、部屋に向かっていたラミナ達。

エレベーターを降りた所で、3人に声を掛ける者がいた。

「おや。君達は……」

現れたのは白の長髪に黄色のマントを羽織った男。

「誰？」

「失礼。私はカストロ。君達と同じく200階クラスの戦士だ」

同じクラスの選手であることにゴンとキルアは警戒するが、カストロは笑みを浮かべて首を横に振る。

「安心してくれ。私は新入り狙いなどと言う無粋な真似はしない。私も洗礼の経験者だからね」

カストロはそう言いながら、ラミナに顔を向ける。

「試合を見たよ。テレビでだけだね」

「そらどうも」

「君もかなりの使い手だね。ヒソカにも引けを取らないだろう」

「ヒソカを知ってるの？」

ゴンが警戒を解いて、カストロに訊ねる。

「知ってるも何も。私を洗礼してくれたのがヒソカさ。2年ほど前だがね」

「!!」

（ほお。つちゆうことはヒソカに気に入られたんか。確かにかなりのの

実力者やな)

纏っているオーラもかなり洗練されており、自然体でありながらほとんど隙が無い。

ヒソカが好きそうな人種だとラミナは納得する。

「もう少し早く君が現れていれば、ぜひ君とも手合わせをお願いしたかった」

「とうとう?」

「私は今9勝1敗だね。最後の1勝はもちろんヒソカへのリベンジさ。先ほどヒソカと戦闘日時の打ち合わせをしてきたところだ。それに勝てば、次はフロアマスターが相手だ」

「!!」

「ほお……」

天空闘技場の230階から250階には『フロアマスター』と呼ばれる実力者が各階に1人いる。

200階で10勝した者だけがフロアマスターに挑戦することが出来、勝てばその者に代わってフロアマスターになれる。

ちなみにクロロも地味にフロアマスターをしている。

ラミナは前に問題ないのかと聞いたことがあり、「面白い能力者がいるかもしれないからな」と言っていた。

戦ったことがあるのかどうかは知らないが。

「自信ありげやな」

「そうでなければ挑まないさ。彼に敗けてからの9戦。一度として全力で戦ったことはない。全てはヒソカに勝つための修行に過ぎない。

次こそは彼に勝つ」

自信満々に言い切るカストロ。

それにラミナ達は何かしらの奇策があるようだと理解した。

「ほんなら楽しみに待たせてもらおうわ」

「ああ。楽しみにしてくれ」

カストロはそう言って、去っていく。

その背中を見送ったラミナは、

(うーん……。ちよいと自信過剰すぎる気いもするなあ。ヒソカの能

力を知らんから何とも言えんけど……)

しかし、カストロの能力も知らないのです、それを口にするのはなかった。

ラミナはゴンに顔を向けて、

「試合、見るか？」

「もちろん。ヒソカの念も見れるかもしれないしね」

「だな」

「ほな、その日までに【凝】を完璧にするで」

「【押忍！】」

「ええ加減やめーや」

そう言って部屋に戻って修行を再開するゴン達であった。

1週間後。

ゴンとキルアはいよいよ【発】の修行へと進むことになった。

「さて、今日からようやく【発】の修行に入るで」

「【押忍！】」

2人はやはりやめてくれなかった。

そしてラミナは諦めた。

「【発】と一文字で言うとするけど、実際は自分独自の能力を指す。せやから、うちはもちろん、ゴンとキルアでも同じ能力になることはまずない」

「なんで？」

「念にも体術とかと同じように、人によって得手不得手があんねん。それは『生まれつきの才能』と『今まで生きてきて培った経験や環境』の2つが大きく影響する。やから音楽家とか芸術家なんかの天才と呼ばれる連中は、無意識に念を込めとることもある。音色や声、作品にオーラが込められて表現力を上げるつちゆう感じやな。けど、お前らにそれが出来るか？」

「【無理】」

「やろ？ つちゆうことで、どんな能力がええんかはその人によって違う。まあ、似ることはあるけどな。けど、そこに籠められた思いに

よって能力の強さも変わる。やから、基本的に全ての念能力は初見と  
思えや」

「だから【凝】が重要なんだね」

「そういうこつちや」

ラミナは大きめの紙を取り出して、壁に広げて張り付ける。

紙には六角形が描かれており、それぞれの頂点に『強化系』『変化系』  
『放出系』『具現化系』『操作系』『特質系』と書かれている。

「【発】の能力はこの6つに分類することが出来る。人のオーラは必ず  
このうちのどれか1つの性質を持つとる。ちなみにそれぞれの位置  
は決まっとして、近い系統ほど相性が良くて組み合わせやすいんや」  
「じゃあ強化系なら変化系と放出系と相性がいいってことか……」

「そうやな。まあ、といつても強化系全員が変化系と放出系を同じ力  
量を修められるわけやない。得手不得手がここでも出てくる」

「へ〜……」

「ただし、基本的に自分の系統の能力しか100%極めることは出来  
ん。強化系やったら放出系と変化系は最大80%。具現化系と操作  
系は最大で60%。特質系はちと特殊でな。基本的にどの系統であ  
ろうと0%や」

「0?」

「特質系は他5つに含まれない異常な能力全てが含まれるんや。け  
ど、たまくに具現化系と操作系のモンが後天的に特質系に変わること  
がある。せやから、具現化系と操作系の間にあるんや」

「ふ〜ん……」

「強化系は言葉通り『身体能力や物の働きを強くする』能力や。例えば  
剣の切れ味を強化したり、頑丈さを強化したりな。変化系は『オーラ  
の性質を変える』能力。オーラを炎に変えたり、オーラに切れ味を持  
たせるとかが出来る。サダソの見えない腕がこれに当てはまる」

「放出系も言葉通り『オーラを飛ばす』能力。操作系は『オーラを与え  
た物質や生物を操る』能力やな。これはイルミが使うとる。針を相手  
に刺して、刺された人間を操るんや。他には銃弾を操って、追尾能力  
を付加するとかやな。最後に具現化系は『オーラを物質化する』能力。

これがうちが使うとる武器のことやな」

ラミナは短刀を生み出す。

説明を聞いたゴンとキルアは腕を組んで唸る。

「どうやって自分のオーラの系統を調べるんだ？」

「一番広まっとるんは水見式つちゆう方法や」

ラミナはワイングラスと小さな葉っぱを持ってきて、ワイングラスに縁ギリギリまで水を注いで葉っぱを置く。

「両手を近づけて【練】を使う」

ラミナが【練】を発動して、手をグラスにかざす。すると、グラスの底に水晶が出現する。

ゴンとキルアは目を見開いて、グラスを覗き込む。

「これが具現化系を示す特徴や。ゴンからやってみ」

「うん！」

ラミナは水晶を取り出して、水を注ぎ直す。

ゴンはグラスに手をかざして、【練】を行う。

すると、コップの縁から一筋の水が流れ出す。

「これは？」

「動いただけ？」

「いや、水が僅かに増えたんや。水が増えるんは強化系の特徴やな」

「強化系……」

「よし！ 次は俺だ！」

キルアが意気揚々とゴンと変わって【練】を行う。

しかし、どれだけ待っても変化が起きない。

「……何も起きない？ え……俺って才能ねえ？」

「それはありえへん。つちゆうことは……」

ラミナが水に指をつけて舐める。

キルアとゴンも真似をして水を舐める。

「……？ 少し甘い……か？」

「うん。ほんのちよっと甘い」

「水の味が変化したつちゆうことは、キルアは変化系やな」

「変化系か……！」



「これから一か月。この水見式で【発】の修行や。基本的には【発】の修行を最優先で構へん。けど、ちゃんと今までやった修行もやりや。一か月後まで、うちは見にも口出しもせえへんから。しつかりとやりや〜」

「押忍!」

ゴンとキルアはすぐさま修行を始めるために自室に戻っていった。(これで四五行は終わりやな。系統能力は自分らで見つけるしかないでな。後は応用技を何個か教えれば終了、やな)

終わりが見えてきたことにホッとする。

ゴン達の修行が終わるまでは、クロロの仕事をこなすための情報収集に充てることにしたラミナだった。

それから20日。

明日がヒソカとカストロの試合ということで、ラミナはチケットを購入する。

「15万ってポツタくり過ぎやろ」

なんと1枚15万ジエニー。ちなみにラミナとサダソの試合のチケットは2万ジエニーだったらしい。

明日はゴンとキルアの【発】の修行の経過を見てやる予定になっており、それは試合後に行うことにした。試合も録画する予定なので、ついでにヒソカの念を研究するためである。

時々、様子を見ていたが【纏】の上達が見てとれたので、ちゃんと修行をしているようだった。

「まあ、あの2人がサボるとは思わへんけど……」

街をぶらつきながら呟く。

その後、

「そう言うあんたはここで何してんだい？ ラミナ」

すぐ後ろから僅かに苛立ちが込められた声が聞こえ、ラミナは体が

硬直して足が止まり、一気に冷や汗が噴き出す。

ここにいるはずのない、けれど聞き間違えようのない、この世で一番逆らえないだろう人の声。

大好きだが、同じくらい恐ろしい人の声。

それが真後ろから聞こえて、ラミナは一瞬で首と心臓を握り締められたような感覚に襲われる。

いや、首に関しては本当に何か巻き付けられており、地味くに締め付けてきていた。

ラミナは錆び付いた歯車のようにギギギと背後を振り返る。

「……マ、マチ姉……」

「久しぶりだね。で……団長から仕事を依頼されてるはずのあんたが、なんでこんなところでサボってるのか。教えてもらおうか」

僅かに据わった眼で睨み、右手でラミナの首に巻き付けられている念の糸を握っている地獄の使者が如き『姉』。

マチ・コマチネが、そこにいた。

## #21 チョット×マツテ×オネエチヤン

突如、現れたマチは不機嫌そうにラミナの首を絞めている念糸を更に引く。

「ぐうえ?! ちよ、ちよいタンマ……!」

「だったら、とつとと白状しな。ハンター試験終わっても何にも連絡寄こさないで、こんなところで油を売ってるんだ。よっぼどのワケなんだろうね?」

「……………多分? ごお!? 言う言う言う!! ちゃんと全部話すから!」

「ふん」

マチは不機嫌な顔のまま念糸を外す。

荒くなつた息を整えたラミナは、汗を拭って疲れた顔でマチに向く。

「うちの部屋行こか……。それとも、そっちの部屋でええか?」

「あんたの部屋でいいよ。さつさと案内しな」

「へいへい……」

さつさと天空闘技場の部屋に移動することにしたラミナ。

特にキルアとゴンに会わせないようにしなければならず、必死に気配を探つて近くにいないことを確かめる。

マチ相手に隙を見てメールを送るなど出来ないので、本気で会わないことを祈っていた。

なんとか誰にも会わず、部屋へと戻ることが出来たラミナ。

ソファを勧めて、部屋に備え付けられた酒を何本か出して、ツマミと共にマチの前に並べる。そしてマチの向かいに椅子を動かして座る。

「へえ。たかが闘技場なのにいい部屋だね。タダなんだろう?」

「勝ち残つとる間はな」

「あんたがそう簡単に負けるわけないでしょ。ヒソカと戦うなら、話は別だけど」

マチは念糸で酒瓶の口を切り落として、直接傾ける。

ラミナもワインを開けながら、首を傾げる。

「ヒソカがおるんは知つとるんか？」

「あいつに用があつて来たからね。まあ、なんか明日試合あるらしいから、念糸縫合も依頼されてるけど」

「ふくん……」

「で？ いい加減あんたの言い訳を聞かせて欲しいんだけど」  
「……」

マチはソファに足を投げ出し、横目でラミナを睨みつけながら問いかける。

ラミナはボトルに口を付けようとして固まる。

ちなみにラミナは一切を隠す気はない。

問題はキルアにマチの手が伸びないようにする言い方である。

このまま話すと、マチはキルアを探し出して殺しかねない。そうならば、ゾルディック家が総出で動く。それは面倒事ではないので全力で阻止したい。

下手な庇い方をすれば、マチが怖い。

すでに怖いのが、マチが怖い。

ラミナは一口ワインを飲んで、覚悟を決めて話し出す。

「ハンター試験受ける前にゾルディック家に襲われたやん？ マチ姉が助けてくれた奴」

「ああ、あれね。その時にハンター試験受けるように伝えただっけ？」

「そうそう。それで、まあ真面目にハンター試験を受けに行つたんやけどな。そこにゾルディック家の長男と三男も受けに来とってん」

「へえ……暗殺一家がねえ……。まあ、団長やシャルも持つてるから不思議でもないか」

マチはツマミを口に放り投げながら話を聞く。

「それで？」

「長男は変装して偽名を名乗って受けとったから、その時は知らなかったんやけどな。三男の方は顔も名前も変えずに受けとって、色々縁もあつて仲良うなつたんよ」

「ふうくん……」

少し不機嫌な声に変わったマチに、ラミナは一瞬頬が引きつる。  
誤魔化すようにツマミを放り込んで、ワインを飲む。

「ふう……。んで、まあ……ちよつとした時にな、その三男の頭ん中に針が刺さつとることに気づいてしもてな」

「……針？」

「そうそう。額のちよい上あたりにな。本人は気づいてる様子もなかったし、場所が場所になってしもたから、パツと引っこ抜いたんやんよ。それが実は長男が三男を守るために埋め込んだ奴だったらしくてなあ……」

「……なんで守るために頭に針を埋め込むのか意味が分かんないけど……。あんたはどうやってそれに気づいたんだい？」

「ゾルディックの長男とヒソカが知り合いやってん。それでその少し前にヒソカの仲介で引き合わされてなあ……」

「ヒソカ？ あいつもハンター試験受けてたの？」

「そやな。あいつも受かつとるで」

「……ホント、何がしたいんだか……」

マチは呆れながら、変人奇術師を思い浮かべる。

ラミナも大いに頷きながら、説明を続ける。

「でな。針を抜いたことが試験中にバレてしもてなあ。長男と殺し合  
いになってん」

「ゾルディックによく狙われるわね、あんた」

「全く嬉しないわ。それでまあ……その三男が後継者候補筆頭つちゆうことらしくてな。三男はまだ念を知らんかってん。その針が三男を敵意のある念から守るためやっちゆうことを聞かされてなあ。流石に試験どころやなくなりそうやったし、ゾルディック家当主に取引を持ち掛けたんや」

「取引……？」

「そや。まあ、余計な手出しをしたんは事実やしな。またあの当主2人が出て来て、狙われるんも面倒やったし」

「あんたって、時々変なところで甘いよね」

「……ふん」

呆れながら言うマチに、ラミナは顔を逸らして不貞腐れるしか出来なかった。

今回の騒動は事実ラミナの甘さが招いたことだった。

「それで？」

「……まあ、その後も色々あったけどハンター試験に無事に合格して、クロロの仕事を始めようと思たんやけどな。ゾルディック当主から連絡が来て、ゾルディック家に行くことになったんや。取引した以上逃げるわけにもいかんから、そのままゾルディック家に向かったんや」

ラミナは緊張を誤魔化すようにワインボトルを傾けて、ツマミを口に放り込む。

マチは新しい瓶に手を伸ばし、瓶の口を切り落として傾ける。

ラミナはいよいよ婚約させられたことを話さねばならない。

ここが正念場なので、嫌でも緊張する。

「で……まあ、何だかんだでゾルディック家の連中とは仲良くなったんやけどな……」

「だけど？」

「その……ん……気に入られ過ぎたみたいでなあ」

「はっ」

「……………取引の条件を……お、御曹司と……ここ、婚約するつちゆうこととにされてしもでござえ!!」

最後は顔を背けながら告げると、突如体を縛りつけられる。そのまま椅子を倒しながら後ろに引つ張られて、床に仰向けに倒される。

さらに両脚も縛られて、マチがラミナの腹の上に乗る、両脚でラミナの体を締め付ける。

「ぐえっ……!」

「誰と……なんだって？」

「ちよっ……ちよど待てえ……! ギヅィ……じゅ……ずぎい……!?!」

見た目と違ってマチの力はかなり強く、旅団女性メンバーの中では

1番強い。

ちなみにラミナの力も強い方ではあるが、マチほどではなくクロロより少し弱いくらいだ。

なので、こうなるとラミナがマチから逃れる術はない。殺すつもりで本気になれば話は別だが。

両親よりも長い時間共にいたマチは、ラミナにとっては特別な存在なので殺す気になることはないが。

「誰と……なにをしたって?」

「い、言うとかくけど! 向こうが勝手に言っただけやで!? うちとそいつは認めとらんから! ゾルディック当主陣が勝手に決めて、そう思っただけやから! ゾルディック家にホンマに嫁入りなんぎせんから!!」

「……そのクソ野郎はどこにいるの?」

「ここにおるけど、言うたとおりそいつもうちと婚約なんかする気ないねんて。しかも12歳のガキやで? うちかてガキに興味ないわ」「じゃあ、なんで一緒にいるんだい?」

「もう1つ、ゾルディック家から頼まれたんや。念を教えてやってくれってな。それでここに来たんや。念を教え終えたら、クロロの仕事に戻るつもりやったし、そいつともおさらばする気や。それはそいつも了承しとる」

「……」

「そ、それとな! ゾルディック当主からもうちが旅団に入ることは認められとるから! や、やから欠員出たら、今度は仕事中でもちやんとそつちに合流するから!」

「まさか、ゾルディックのガキも入れろなんて言わないだろうね?」

「言わん言わん。そいつは殺しに嫌気さしとるから旅団には向かん。基本的にそいつを旅団に関わらせる気はないとも当主に言うとする。やから旅団に入ったら、そのままずっとおさらばになるはずや」

「……」

マチは鼻と鼻がくつつきそうなほど顔を近づけて、ラミナの目を見つめる。

嘘はついていないのでラミナも目を逸らさない。

「そ、そろそろ脚か念糸か緩めてくれへん？」

「……」

「……」

先ほどより圧迫感は弱まったが、マチは明らかに不機嫌なままだつた。

困ったことにこうなったマチを宥めるには、大人しく言うことを聞くしかない。

マチはクロロの言葉でもラミナに関することになると中々譲らないので、旅団メンバーはマチの前ではラミナが関わることにあまり口出ししないのが暗黙の了解になっていたりする。

10分ほど見つめ合っていた2人。

マチは眉間に皺を寄せたままラミナの上から退き、ソファに戻ってラミナの念糸を解く。

ラミナは大きく息を吐いて起き上がる。

「団長は婚約の事知ってんの？」

「まだ言うてへん。マチ姉が初めてや」

「……そ」

マチは酒瓶を傾けて呷く。

ラミナが椅子を戻して座り直すと、マチがラミナに目を向ける。

「ヨークシン」

「ん？」

「ヨークシンでの仕事の間、アタシの言うこと1つ聞いてもらうよ。どんな状況で、どんな仕事であってもね」

「……まあ、クロロの邪魔になる……ことなんぞ言わんか。了解や。姉様のご命令には逆らわへん」

「なら、今はクソ野郎は見逃す。けど……向こうからアタシの前に現れたら知らないよ」

「そうならんように祈っとくわ。流石にあいつから近づいたんやったら、死んでもそれはあいつのミスや。別に文句は言わん。まあ、ゾルデイツクと戦争にはなりそうやけどな」



「その時は潰せばいいさ。ウボオーとかフェイなら喜んで参加するよ」

「やから面倒やねん」

確実に都市1つ吹き飛ばす戦いになる。派手になるとプロハンターも出張ってくる可能性があるので、それもまた厄介だ。

そんな戦いのきっかけに自分が関わるなど冗談ではないラミナだった。

「ところでヨークシンで何するんか知つとるか？」

「知らないね。ただ……」

「ただ？」

「旅団全員集めるように言われたから、デカイ仕事みたいだよ」

「……なるほど。……うちが外に出てから全員集まって初めてちやうか？」

「そうだったかね」

ラミナが本格的に流星街の外に出て活動を始めたのは約2年前。そうなつてからは全員揃つたという話は聞いたことはない。

「まあ、ヒソカはよくすつぽかしてたしね」

「よう許したな……」

「団長が許してるからね」

「ふうくん……」

(やっぱクロロの奴、ヒソカのこと警戒しとるんか?)

幻影旅団<sup>モ</sup>にとって団長<sup>頭</sup>の命令は基本絶対。それを無視するのは掟違反。

しかし、クロロはヒソカを罰しない。ヒソカの実力をそれだけ認められている、少し違和感がある。

「ヒソカって戦い好きやのに、そんなにすつぽかすんか？」

「あいつは戦い好きって言っても、タイマンに拘るタイプみたいだからね」

「ふうくん……」

(つまり旅団全員と同時に戦うような奴やない。さらに言えば、徒党を組むタイプでもない。なら考えられるんは……クロロとの1対1

での殺し合い)

ならば、ヒソカがクラピカに話したのは『クロロと1対1で戦う機会を作るため』。

そう確信したラミナは、心が冷えていくのを感じた。

恐らくクロロは、何となくではあるのだろうがヒソカの目論見に気づいている。自分に気づけたことがクロロが気づけないわけがないと、ラミナは考える。

「うちがクロロから依頼されとるんは皆知つとるんか？」

「知ってるのは依頼した団長を除けば、アタシだけだよ。依頼内容までは知らないけどね」

「……そうか」

「なに頼まれたの?」

「ん? 十老頭に近いマフィアに潜り込めつちゆうだけしか聞いてへん。詳しくはうちも知らん」

「そ。ツマミ、なくなった」

「へいへい……」

呆れながら、新しいツマミを用意するために立ち上がるラミナ。

新しいツマミを出しながら、ラミナは一度クロロに連絡を取ることを決めたのだった。

その後は比較的和やかに酒を飲むマチとラミナ。

「今日、どこ泊まるんや?」

「……」

「……まあ、ええけど。ほな、飯どうする?」

「ここってキッチンとかないの? それか美味しい店とか」

「メニューは?」

「肉」

「ほんならステーキでも行こか」

「その前にシャワー浴びるわ。借りるよ」

「お好きにどうぞ」

マチは浴室に向かう。

ラミナはその隙にキルアとクロロに素早くメールを打つ。  
キルアには『明日の観戦、特訓は各自で。成果の確認と試合の考察は来週に』。

クロロには『マチ姉に会った。仕事の件で話がある』と送る。  
すると、クロロからすぐに着信が来た。

「もしもし?」

『マチに会ったのか。今どこにいるんだ?』

「天空闘技場。ちよいと色々あつてな」

『ふむ。お前がそんなところに興味があつたとはな』

「やから、色々あつてん。まあ、それは近いうちに話すわ」

『マチは何してるんだ?』

「今は風呂や」

『ふつ。怖い姉の隙を突いたわけか』

「うっさいわ。それで、ヨークシンでの仕事の件やけど」

『どうした?』

「ヒソカが不穏な動きを見せとる。狙いはクロロやろな」

『……そうか……。どんな動きを見せている?』

「今回のハンター試験の合格者の中に、旅団に強い恨みを持つ人間がおる。そいつにヨークシンに旅団が集まることを話した」

『……ふむ』

「ただ、そいつはまだ念を覚えてへん。やから現状では脅威度は未知数や。ヨークシンに来たとしても、ヒソカの協力者となりえるかも分からん」

『そうか……。それはそれで面倒だな』

「でや、お前がうちに依頼したいんは十老頭の暗殺だけちゃうな? 他にもなんかあるやろ?」

『……ふつ、流石だな。いや、予定変更だ。十老頭の暗殺に関しては、他の奴に依頼する』

「ほな、うちは?」

『お前には旅団のサポートをしてもらいたい。基本やることは俺かマチ、シャルナークの3人から伝える。一番やつてもらいたいのはヒソ

力の監視。もし、奴が動く気を見せて隙があれば……殺せ』

「……報酬は？」

『仕事が終わったときに言い値で払おう。それと……『4』の数字だ』  
「……ええやろ」

『よし。俺も含めて団員達は、ヒソカが明確に裏切り者と分からない限り動かない。この話も俺とお前だけで留める。マチにも言うな。感づかれないように注意しろ』

「……まあ、頑張るわ」

マチの直感は恐ろしい嗅覚と正確さを誇る。

それを掻い潜るのは簡単ではないことは、ラミナが一番知っている。

電話を切ったラミナは息を吐いて、素早く通話記録を消す。

「明日の試合でどこまで実力が見れるかやな。まあ、マフィアを探して近づかんでよくなったんは助かるわ」

おかげで時間的な余裕も出来たので、その間に万全の体勢を整えることに決めたラミナだった。

夜。

マチとラミナはステーキ屋を訪れていた。

もちろんテーブルマナーなど知ったことではない2人は、高級ではあるが大衆的な雰囲気のお店を選んだ。

「それでクソ野郎にいつまで念を教えるの？」

「今【発】の修行やらしとるから、後1か月もかからんと思うで」

「あんたが人に教えるなんてね」

「うっさいわ。うちかて思ったらんかったわ」

2人の前には皿がそれぞれ10枚以上積まれている。若い女2人の食べっぷりに周囲は唾然としており、それでもまだ淡々と食べている姿に慄く。

「そういえば、あんたは明日のヒソカの相手、知ってんの？」

「顔と名前はな。なんやヒソカに因縁あるみたいで、そこそそ実力は

ありそうやったで？ まあ、ヒソカの方が上やと思うけど、うちもヒソカの能力知らんし」

「あいつの能力は中々に厄介だね。まあ、団長やあんたほどじゃないけど」

マチはステークを口に食べながら、ヒソカの念能力について話す。

ヒソカは変化系の能力者で【伸縮自在の愛】と【薄っぺらな嘘】の2つの能力を持っている。

【バンジーガム】はオーラをゴムとガム両方の性質をもつものに変える。至る所に貼ることが出来、好きな時に剥がすことが出来る。よく伸びて、素早く縮む能力。

【ドッキリテクスチャー】は紙のように薄っぺらいものにイメージを加え、オーラで見た目や質感を再現する能力。

「……弾力性と粘着性を持つオーラか。厄介やなあ」

【隠】と合わせて使うし、殴られれば付けられるからね。あんたはともかく、そこらへんの奴なら基本逃げようがない」

ラミナは【月の瞳】を発動すれば無効化は出来る。

しかし、それでもあくまでラミナ自身に影響がないだけで、他のものに使われると面倒ではある。それに【月の瞳】を発動する以上、早期決着を狙わなければならない。時間をかければかけるだけ、武器のストックが減るからだ。

しかも【凝】にも意識を削がなければならないので、ヒソカの身体能力を考えるとかなり手の内を晒さなければ厳しいだろう。

「特性も単純だからバレたところで大した問題にならないし、応用の幅も広い。よくできてるよ」

「やなあ」

ラミナも純粹にヒソカの能力に感心する。

攻撃・防御・回避・逃走・奇襲、全てに対応できる能力を持っている。

キルアに真似させたいくらいである。

食べ終えた2人は部屋へと向かっていた。

「50万ジエニーか」

「まあ、あの味ならそんなもんじゃない?」

もちろん支払いはラミナである。

マチとの食事では、基本奢るのはラミナだ。これに関してはもうラミナは諦めている。

「明日はどうするんや?」

「団長の伝言もあるから、ヒソカには会う。終わったら次はフランクリンに会いに行く予定」

「フランクリンはどこにおるん?」

「知らない。ホント、携帯くらい持ってほしいね」

「フランクリンが使える携帯なんざあるんか?」

「……ないかもね」

帰る途中、店で酒やらツمامミを買い足す。

部屋に戻った2人はまた酒とツمامミを広げて、さらに服を脱ぎ捨てて下着姿になり、髪を解いて下ろす。

女同士で、姉妹同然に育った仲なので、下着姿くらいでとやかく言うこともない。

というか、習慣が似ているのだ。寝るとき下着姿なのは、2人にとっては昔からの事だった。

「ベッド使ってええで」

「一緒に寝ればいいでしょ? 昔はよく抱き着いてきたじゃない」

「10年以上前の話やろが。それに今はうちの方が身長たかつ!」

身長の話をした瞬間、マチのしなやかな脚が飛んできて、反射的に頭を反らしたラミナの鼻先を通り過ぎる。

「あぶなっ!」

「ふん!」

マチは不貞腐れたようにラミナを睨みつけながら、酒瓶を傾ける。姉にとって、妹に身長で抜かれるのは地味に屈辱なのだ。

ラミナは呆れながらグラスに氷を入れてウイスキーを注ぐ。

「パク姉がおるんやから、今更気にすることないやろ」

「うつさいよ」

ギロリと睨みつけるマチ。

ラミナは苦笑して、ツマミを食べる。

「今、育ててるクソ野郎は強くなりそうなの？」

「ん〜……どうやるなあ……」

「……………やっぱ言わなくていい。殺したくなりそうだし」

少し酒が回ったのか、マチは僅かに頬を赤くして顔を背ける。

ラミナは苦笑して、マチにハイボールを作ってグラスを渡す。マチは不貞腐れたように僅かに顔を顰めながらも、グラスを受け取って傾ける。

「安心しい。そっちがしとる慈善事業と似たようなもんや。そいつらが強くなるうが弱くなるうが、そこまで面倒見る気はないでな」

「ふん。どうだか……。あんたは変なところで甘いし、無駄に義理堅いからね」

「そら、育ててくれた姉が似たようなところがあるでなあ」

「あんたほどじゃないよ」

ツマミを口に放り投げながら呆れたように言うマチ。

その後も飲み続けて、日付が変わった頃に2人でベッドに横になる。

「……………何年ぶりだっけ？　こうやって寝るの」

「ん〜……10年は経つとるやろ。互いに念の修行始めたり、旅団を作ってから特になあ」

「……………そうだね。あの家、もうないんだっけ？」

「あるで。ただ……他のガキ共にくれてやったけどな。そいつらは流星街出る気ないみたいやったし、うちらが使い続けるよりはええやろと思てな」

「ふうん」

「まあ、外に拠点にしとる家があるけどお!？」

脇腹に肘打ちを食らい、ベッドの下に突き落とされるラミナ。

マチは横向きになり、ベッドの下で呻いているラミナを見下ろす。

「ぐうおおおお……!」

「それ知らないんだけど」

「う、嘘やん……。クロロやフェイタン達、皆来たことあるで？」マチ姉にも場所伝えとく』て言うてたで？」

「メールとか電話は？」

「フィ尼克斯がマチ姉の携帯が壊れとるから連絡がつかんって。事実、電話通じんかったし……」

「……あの時か」

マチは数年前に携帯が壊されたことがあり、「しばらくはパクヤシズクにいるからいらない」と言つて、持たなかった期間があった。

どうやらその時にマチとラミナは他のメンバーから揶揄われていたらしい。

マチは怒りが込み上げて目を吊り上げる。

ラミナは脇腹を押さえながら、ベッドによじ登つて仰向けになる。

「……あいつらの修行終わったたら、一度帰る予定やから……。その時に連絡するから来ればええ」

「場所は？」

「サヘルタ合衆国の「カゴツシシティ」や。ヨークシンにも近いで」

「カゴツシね。メールでも送つといて」

「へいへい……」

ラミナはグデツとして頷き、再びマチの御機嫌取りをするのだつた。

その後は穏やかに時間を過ごし、ラミナは眠りにつく。

マチは隣で静かに眠るラミナを見つめ、

「ふ……」

ラミナの頭を優しく撫でながら柔らかい微笑みを浮かべ、マチも目を瞑つて眠りにつく。

久しぶりの姉妹だけの時間は、何だかんだで和やかに過ぎていった。



## #22 キジュツシ×ノ×テジナ

姉と仲良く一夜を過ごしたラミナは、観客席へと向かう。

マチも一緒に観戦することになり、高いチケットを購入させられた。200階クラスの選手だったので、優先的に購入させてもらうことが出来た。

会場は超満員で熱気に包まれていた。

「ヒソカの試合がここまで盛り上がるとはね」

「ヒソカっちゆうより相手の選手なんちゃうか？ 聞いた話やと相手はここで勝てばフロアマスターに挑戦出来るらしいし、ヒソカへのリベンジマッチでもあるらしいでな」

「ふくん」

「それにヒソカもなんだかんだで8勝3敗。3敗は全部不戦敗らしくて、出た試合は全部勝つとるらしいで？」

「そりやね」

マチは退屈気に足を組み、その上に肘をつけて手に顎を乗せている。

ラミナは苦笑して、マチに購入したポップコーンを差し出す。

マチは横目でポップコーンを見て、2,3粒摘まんで口に放り込む。

『さあー、いよいよです！ 今、フロアマスターに最も近い2人!! ヒソカ選手対カストロ選手！ 因縁の大決戦!!』

ヒソカとカストロが登場して、リングに上がる。

ヒソカはいつも通りの飄々とした笑みを浮かべており、カストロはマントを羽織ったままヒソカを鋭く見つめている。

「へえ、どんなゴリラかと思ってたけど」

「好みなんか？」

「殺すよ」

「ゴメン」

マチはポップコーンを食べながら横目で睨み、ラミナは速攻で謝罪する。

2人がそんなやり取りをしている間に試合が始まり、早速カストロ

がヒソカに飛び出して右手刀を構える。

手刀を横振りに振るい、ヒソカは頭を屈めて躲す。

しかし、何故か振り抜かれたはずの右手が、ヒソカの右頬に直撃する。

「ん？」

「へえ……」

ラミナは違和感に肩眉を上げ、マチはカストロがヒソカに攻撃を当てたことに感心する。

ヒソカは横に吹き飛ばされるも倒れることなく、膝立ちになって耐える。

しかし、その顔から笑みは消えており、今起こった現象について探るような視線を送っている。

「クリーンヒットオ!!」

『まずはカストロ選手の先制攻撃が炸裂ー!!』

カストロは無理に追撃せずに、ヒソカを睨んでいる。

「本気で来い、ヒソカ」

カストロがヒソカを挑発するも、ヒソカはゆらりと立ち上がる。

「本気を出すかどうかは僕が決める♠」

「……そうか。では、早めに決断することだ!!」

カストロが飛び出して、左手を鉤爪状にしてオーラを纏って横振りをする。

ヒソカは再び頭を屈めて躲したが、また時間が戻ったかのように左手がヒソカの目の前に戻り、ヒソカの左頬の皮膚を引き千切る。

ヒソカはギリギリで顔を背けながら倒れるように後ろに跳んで、ダメージを減らす。

カストロはジャンプして上からヒソカに両手を叩きつけるように迫る。ヒソカは手で横に跳んで躲し、カストロの追撃も躲していく。

カストロがヒソカの顔に目掛けて左ハイキックを繰り返す。

ヒソカが腕を上げてガードしようとする。

すると、今度はカストロの姿が消えたかと思うと、ヒソカの真後ろに現れて蹴りを叩き込んでヒソカをリングに倒す。

「クリーンヒット！ アーンド、ダウン!!」

『カストロ選手の一方的な攻撃が吸い込まれるように当たるー!! 一気にポイントは4-0! しかし……今のは……気のせいでしょうか!』

周囲は今日にした不思議な光景にざわついている。

マチとラミナはすでにカストロの能力を見抜いていた。

「間近でやられると分かりにくいかもね」

「せやな。あのマントもそのためのもんか」

2人はカストロが攻撃の瞬間に残像のように増えて、素早く背後に回っている姿をしっかりと捉えていた。

恐らくヒソカは目の前にいて、さらにカストロのマントが視界の邪魔をしていたのでまだ見抜けてはいないだろう。

「それにしても、あの能力を選ぶとはね」

「まだなんか能力があるんかもしれないが……」

「どうかね。あんなリングで自分の具現化なんて普通なら選ばないと思うけど」

「やんなあ……」

カストロの能力は「自分自身の具現化」。

攻撃の直前にオーラで自分の分身を作りだし、二連撃を繰り出しているのだ。

恐らく最初に攻撃しているのが『分身』で、ヒソカが反撃・回避をした直後の隙を狙って『本体』で攻撃する戦法のようなのだ。

カストロはこの戦法に自信があるようだが、マチとラミナからすれば微妙な選択だった。

カストロの能力は非常に高度な能力だ。

自身を『具現化』し、具現化したオーラを『放出』することで独立性を確保し、具現化した自身を『操作』する。

具現化系、放出系、操作系の複合能力だ。

相性が悪い系統を組み合わせるので、かなりの念の熟練度が求められる。なので、カストロの念能力はかなり高いのは間違いない。

しかし『具現化するのが自分である』というところが、正直言つて

『微妙』の一言である。

複合能力で生物を作り出す場合、『念獣』という自分とは違う見た目をした存在にすることが一般的である。

更には特殊能力を組み合わせて、戦闘の補助や自身の代わりに戦わせるなどがメインとされる。

カストロのような使い方はかなり稀だ。

「どっちかというと、アタシらみたいな裏の人間が使う技だね。奇襲や暗殺、攪乱とかで」

「せやな。障害物がない正々堂々の場で使うには不向きや。一撃で殺すなら、まだ有効やろうけど……」

しかし、カストロはまだ殺す気は見られない。ヒソカにバレていないからか、余裕すら見せている。

すると、カストロが先ほどとは異なる構えを見せる。

両手を鉤爪状にして、オーラを集中させる。

「出たぞ！ 虎咬拳！」

「カストロの方が先に本気になったぞ！」

「ココウ拳？」

「確か……獣の爪や牙のように敵を引き裂く拳法やったかな？」

ヒソカはまだ余裕綽々と立っている。

カストロは顔を顰めて駆け出し、ヒソカに猛スピードで迫る。

すると、ヒソカが左腕を突き出す。

「あげるよ♥」

「！ ふん！ 余裕か毘のつもりか!? どっちにしる腕はもらった!!」

ヒソカの左腕にカストロが両手を挟み込むように振るう。

しかし、当たる直前にカストロが消え、ヒソカの背後に現れる。

「こっちのな」

カストロは両手で噛み千切る様に振るい、ヒソカの右腕を肘手前から千切り飛ばす。

ヒソカの右手が宙に舞い、観客がどよめく。

「なにしてんだか……」

「ほお」

マチはヒソカの行動に呆れ、ラミナはカストロの虎咬拳の威力に感心する。

そして、2人同時にポップコーンを口に放り込む。

「結構な威力やな。あのオーラからすると、そこまで【凝】は強くなかったように見えたが……」

「強化系っぽいね。だとしたら、余計になんであの能力なのか分からないけど」

「全くやな」

強化系なのだとしたら、具現化系と操作系は最も苦手とする系統だ。最大でも60%。放出系でも最大80%。

しかし、大抵の者はそこまで高めることなど出来ないのです、強化系ならば選ぶ理由がない。

ヒソカはカストロから距離を取り、飛んで来た右手をキャッチする。

「くつくつくつ ♠ なるほど ♥ 君の能力の正体は……【ダブル】だろうか？」

「……流石だな。その通りだ」

カストロはヒソカの指摘に笑みを浮かべて、【ダブル】を発動する。カストロの隣にもう1人のカストロが出現し、観客達は目を見開く。

「私は念によって【ダブル】を作りだすことに成功した。もちろん【ダブル】はただの幻影ではなく、消えるまではそこに実在するもう1人の私。それは【ダブル】の蹴りを受けて実感しただろう。お前は2人の私を相手にしなければならぬ。これが念によって完成した真の虎咬拳。名付けて【虎咬真拳】!!」

「だっさ」

マチとラミナが同時に言った。

「あいつ……もしかして弱点に気づいてない？」

「それはないやろ。いつ完成したんかは知らんけど、今日まで一度も使わずに戦うてきたとか」

「けど、もうどつちが本物かバレバレなのにさ。あそこまで自信満々に言うなんて、普通無理じゃない？ 体術もそこまで差があるわけじゃないし、あれ以上能力がないなら対処も簡単だしね」

「まあ……なあ」

ラミナはマチの言葉を否定できなかった。

キルアやゴンが相手なら、まだその余裕を保っていてもいいと思うが、ヒソカ相手ではあの程度で余裕を出すのは油断が過ぎるだろう。(……そう言やあ『今まで全力で戦ったことはない』とか言うもったいな……。まさか「ダブル」を隠しとったんか？ あく、でも虎咬拳とか体術はヒソカに引けを取らんし、そこらへんの奴なら使わずに勝てたんか)

カストロの余裕の理由に気づき、ラミナは呆れるしかなかった。

なまじ才能があるが故に、能力を十全に使う相手に恵まれなかったのだろう。さらに言えば、念を教えた者が未熟だったのか、独自に学んだのかは知らないが「ダブル」が自分に合っているのかも理解していないようだった。

「次は左腕を頂く。まだ下らぬ余裕を見せていたいか？」

「うくん、そうだなあ ◆ ……ちよつとやる気、出てきたかな？」

ヒソカは千切れた右腕の切れ端を噛み千切りながら言う。そして、右腕を脇に挟んでスカーフを取り出すと、右腕を覆い隠す。

「じゃあ、今度は僕の番 ♥ 予知能力をお見せしようか ♣」

そう言うと、ヒソカはスカーフを上放り投げる。

ラミナとマチの眼には勢いよく天井に飛んで張り付く右腕が映る。そして、13枚のトランプが舞い、観客達の目には右腕がトランプに変わったように見えただろう。

ラミナはカストロに目を向けると、カストロも右腕がどこに行ったのか分かっていないようだ。

さらに言えば、

「……ヒソカの「隠」にも気づいとらんみたいやな。それにしても随分と伸びるし、枝分けも出来るんやな」

「ああ。だから厄介なんだよ」

天井の右腕とスカーフに纏わりついたオーラはヒソカの右腕と繋がっており、地面に散らばったトランプからもオーラが伸びていて、ヒソカの左手に握られている。

【隠】を発動していてオーラを見えなくしているが、ラミナ達の軽めの【凝】でも簡単に見えるので、カストロにも見えるはずだ。

「この中から好きな数字を選んで、頭に思い浮かべて ♠ いいかな？ 思い浮かべた数字に4を足して、更に倍にする ♣ そこから6を引き、2で割った後に最初に思った数を引くと、いくらになるかな？」

突如質問を始めるヒソカ。

観客達は馬鹿正直に計算を始める。

「僕にはその数が最初から分かってた ♡」

そう言うとヒソカは、なんと左手を右腕の傷口に突っ込み始める。突然の奇行に、ラミナやマチも流星に顔を顰める。

傷口から手を抜いたヒソカの左手指には血濡れのトランプが挟まれていた。

「1だろ？」

トランプを得意げに掲げるヒソカ。

カストロはヒソカの奇行に不気味さを感じて、冷や汗を流し出す。

「記念にあげるよ ♡」

ヒソカは片方のカストロに血濡れのトランプを投げる。

カストロはトランプを手で弾き落とすが、今のヒソカの行為の意味に気づいていないようだった。

【凝】使うことすら考えてなさそうやな」

「たまたま本物に投げられたとでも思ったんじゃないの？」

「さっきからヒソカの視線は本物にしか向いてないんやけどなあ」

ヒソカが先ほどから向かって右側のカストロに声を掛けていることに気づいていない。

カストロはヒソカの余裕や言動に苛立っているばかりで、まったく他の事に警戒をしていない。

「下衆め……。一度とふざけた真似が出来ぬように、左腕もそぎ落としてくれる!!」

右側のカストロが叫ぶと、左側のカストロが走り出す。

すると、ヒソカがまた左腕を捧げるように突き出す。その瞬間、ヒソカの左手からオーラが伸びて、後方に控えたままのカストロの顎に付着する。

「さつきから言ってるだろ？ あげるよ♥」

「っ！ ならば、望みどおりにしてやる!!」

前に出たカストロは虎咬拳で、ヒソカの左腕を右腕同様引き千切る。

左腕が宙を舞う。その瞬間、天井に張り付いていた右腕とスカーフが、猛スピードでヒソカの右腕に繋がり傷口を隠すように覆う。

カストロや観客達は、宙を舞う左腕に注目していたためにヒソカの右腕の変化に気づいていない。

「っ!?! な、なに!?!」

左腕を引き千切ったカストロが驚くと、その姿が靄のように消える。

「やはり【ダブル】の方で攻撃してきたか◆ もし本体で攻撃して来たらカウンターをくれてやろうと思ったのに……こっちで♥」

ヒソカは繋げたように見せかけた右腕を見せつける。

カストロは目を見開いて動揺し、無意識に一步後ずさる。

「くくく♣ これも手品です♠ さて、どんな仕掛けでしょう?」

ヒソカが笑いながら右腕を掲げる。

カストロはそれを見て、僅かに冷静を取り戻す。流石にこれほど異常なことが起これば、何かの念能力であろうことは想像つくだろう。

「なんで、そこで【凝】を使わんのや。手には【凝】出来る癖に」

「やっぱ熟練の念能力者との実戦経験がないんだらうね。アレはもう駄目だね」

「やな」

マチとラミナは、カストロの限界を悟る。

能力の選択を間違え、その弱点も知らず、経験も足りていないカストロ。

その結末はもはや言うまでもない。



「君の『ダブル』を作る力は素晴らしい◆　だが、もうネタは分かっちゃった♣　そこからどんな攻撃が来るかも想像がつく♣　それに対処する方法もね♥」

ヒソカはゆっくりとカストロ口に歩み寄る。

「非常に残念だ♣　君は才能溢れた使い手になる◆　そう思ったからこそ生かしておいたのに……♣　予知しよう♥　君は踊り狂って死ぬ♣」

「くっ……！　だ、黙れええ!!!」

カストロは完全に冷静さを失って『ダブル』を発動して飛び掛かる。ヒソカは本物のカストロに目を向ける。

「なっ!?!」

カストロは驚いて、後ろに下がって距離を取る。

ラミナはその行動に呆れる。

「何で下がんねん……。そこは無理にでも突っ込んで手数稼ぐところやろ……」

「もう行くよ」

マチが立ち上がり、ラミナもそれに続く。

「まったく……。あんな奴に両腕捧げて、アタシが治療しないといけないななんてね」

「ボツタクればええんちゃう?」

「両腕で1億くらいもらおうかね」

リングでは『ダブル』の弱点、『戦いの最中についた汚れは再現出来ない』ことをカストロに告げるヒソカの姿があった。

(さらには『ダブル』の維持・操作には大量のオーラと集中力を要する。ダメージを負えばその形は保てず、防御に徹すればすぐにガス欠になってまう。『ダブル』系の戦闘は『いかに本体も分身もダメージを最小限にする』かが重要や。拳法家のカストロには向いてへんやろな。せめて、腕や足を増やすとかにしとけば、ヒソカにも勝てた可能性はあったやろうに)

完全に分身するのではなく、最大で上半身か下半身のどちらかまでにしておけば、オーラの消費もコントロールも楽だし攻撃もしやす

かっただろうにとラミナは考える。

といっても、もうカストロにそれを伝えることは出来ない。

ヒソカはカストロの顎に付けていた「バンジーガム」を発動して、場外に転がっていた左腕でカストロの顎を殴って脳を揺らす。

ふらついたカストロを確認したヒソカは、今度は体中に付けていた「バンジーガム」を発動して13枚のトランプがカストロに向かって飛ぶ。

カストロは脳震盪で「ダブル」どころかまともに動けない。

そしてオーラで強化されたトランプがカストロの全身に刺さり、全身から血を流す。

胸にも数枚のトランプが刺さり、カストロはゆっくりと後ろに倒れて行く。

観客達はその光景を顔を青くして見つめていたが、マチとラミナはそれを見ることなく観客席を後にした。

ラミナとマチはリングへの通路に向かっていった。

「今日も泊まるか？　これからヒソカの治療して、フランクリンの所に行くくんは微妙な時間ちゃう？」

「……確かにそうだね。どうせ急ぐことじゃないし、今日も泊まる」

「ほな、先に飯屋探しとくわ。何がええ？」

「アイジエン」

「へいへい」

ラミナはマチのリクエストを聞いて、先に店を探しに行く。

ヒソカに会いたくないのが理由である。殺しの命令も受けていることもあり、触らぬ神に祟りなしということである。

そして、1時間もせずにマチも治療を終えて合流する。

「早かったやん」

「繋げるだけだからね」

「いくら？」

「右手7千万、左手3千万」

「左右で違うん？」

「利き手の方が高いに決まってんでしょ」

「そらそうか」

ラミナは納得して、店に案内する。

本日もガッツリ食った2人は、本日も部屋で酒盛りして仲良くベッドで寝る。

翌日、マチはなんだかんだ真面目にフランクリンを探しに行くことにした。

「ちゃんと連絡寄こしなさいよ」

「わあっとる」

「じゃ、またね」

「おう」

2人はサラッと別れを告げて、マチは飛行場に向かい、ラミナは部屋に戻る。

「さあて……後はゴンをさっさとヒソカと戦わせて終わらせよか」

今後の予定を考えるラミナの足取りは軽く、鼻唄を歌いながら機嫌よさげに天空闘技場へと向かうのだった。

## #23 シュギョウ×ノ×オワリ

【発】の修行を始めて、1か月。

キルアとゴンは修行の成果を見せる時が来た。

「ほな、見せてもらおか」

「押忍！」

まずはゴンが水見式を行う。

洗面器の中に置かれたグラスから勢いよく水が溢れ出す。

「おお、すつげえ勢い！」

「ほお……」

「よしー！」

「次はキルアやな」

キルアはゴンと交代して、水見式を行う。

変化系なので、グラスの水の見た目に一切変化はない。

「よし、いいぜ」

キルアが【練】を止めて、ラミナとゴンが水を舐める。

水はハチミツのように甘く感じた。

「……うん。これくらいで十分やろ」

「よしー！」

「やったね！」

キルアとゴンはハイタッチをして喜ぶ。

「これで基本の四五行は修めた。と言っても、これからも続けてもらわなあかんけどな」

「なあ、ヒソカとカストロの試合の事なんだけどさ」

「なんや？」

「俺らでも似たようなこと出来んの？」

「出来るかもしれんし、出来んかもしれん。ほな、ビデオ見ながら説明しよか」

ラミナは録画しておいたヒソカとカストロの試合を流し始める。

「あの試合。ヒソカの念はどこから見えたんや？」

「んくつと……ヒソカがランプの手品を言い始めたところから、か

な？」

「ああ。そこからは【凝】で見てたけど、トランプをばら撒いた時は気づかなかった」

「まあ、カストロよりは及第点やな」

「カストロは何で【凝】を使わなかったんだ？ あんな凄い能力も使えたのに」

「そこまでは知らん。あいつの師匠が未熟やったんか、独学やったんかもしれんしな。ただ、カストロの失敗は【ダブル】を選んだことや」「なんで？」

ラミナは六性図を描いた紙を広げる。

ゴンとキルアを座らせて、ラミナは話を続ける。

「カストロの虎咬拳はかなりの威力やった。そこから考えられるんは、カストロの系統は強化系つちゆうことや」

「確かにヒソカの腕を軽く引き千切ったもんね」

「まあ、あれはヒソカが【練】を使うてなかったんも大きいけどな。まあ、それでもヒソカの腕は引き千切れとった可能性は高い」

「けど、それが何の問題があんだよ？」

「【ダブル】の能力はな、3つの系統の能力があるんや。自分を形作る『具現化系』、その次に具現化した分身を切り離す『放出系』、そして分身を操る『操作系』。この3つを同時に言うことで成り立つ能力や」

キルアとゴンは目を見開く。

「そこまで高度な能力だとは思っていなかったのだ。」

「この前話したな？ 極められるんは生まれ持った系統だけやって」「うん」

「カストロが強化系やった場合、放出系が最大80%、操作系と具現化系が最大60%。苦手な系統を2つも使えば、他の能力を身に着ける余裕はないやろな。ぶつちやけ【ダブル】を作れただけでも大したもんや」

「じゃあ、俺達じゃ無理か……」

「やめた方がええやろな。そもそもお前ら、【ダブル】に思い入れやないやろ？」

「ない」

「ほんなら余計無理や。言うたやろ？ 念は生まれ持った才能と育った環境に影響を受ける。思い入れがないもんに力を注いでも大した力にはならん」

キルアとゴンは納得したように頷く。

「じゃあ、ヒソカは？」

「ヒソカの能力は変化系一択。恐らくヒソカは変化系能力者やな。つまりヒソカは自分の能力を十全に使えるっちゆうことや」

「粘着性のゴムみたいな能力だよな？」

「そうやな。【バンジーガム】って言うのとったわ。ゴムとガムの性質を持つみたいやで。小難しい能力ちやうから、オーラの消費も少ないし集中力もいらん。それで【隠】や【練】にも力を注ぐことが出来るし、カストロみたいにはバレた所で能力が使い辛くなることもないでな」  
「うわ……」

ゴンは自分が戦うことを想像して、顔を顰める。

「能力は出来る限り、自分の両隣を含めた3つを使って構成するのがベストや。単一だけでもええけど、ヒソカみたいな能力でもない限り応用力が無い能力になるで。ゴンなら放出系と変化系、キルアなら具現化系と強化系やな」

「うくん……」

「ゆっくり考えや。それと他にも能力を強くする方法がある」

「他にも？」

「制約と誓約や」

ラミナはメモ用紙に【制約】【誓約】と記す。

「念能力を使う時にルールを定めて、心に誓うんや。例えば『殴られれば殴られるほど、オーラが強くなる』『密閉空間で暗闇がある場所では使えない』とかな。クリアする条件が難しいほど、その力が跳ね上がる。ポーカーの役みたいなもんやな。難しい役ほど点数が高いやろ？」

「なるほど……」

「ただし、難しい制約を課せば課すほど、破ったときの反動はデカくな

る。ひどい場合は二度と念が使えなくなったり、最悪命を落とす。しかも、制約を付ける以上、下手したら念が使いもんにならない場合もある。やから、制約を設ける能力と設けへん能力を作る必要もある」

「……難しいな」

「何度も言うけど、ゆつくりと考えや。焦って作ってもロクなモンやない可能性が高いで」

「そういえばラミナの能力はあの刀だけなの？」

ゴンが訊ねた瞬間、ラミナは無表情になる。

ゴンとキルアは背筋にゾクリと怖気が走る。

「忠告しとくわ。念能力者に【発】を聞いたらあかん。自分の能力がバレルんは、死に直結しかねん。やから、基本的に念能力者は親しい間柄でもバレてもええ能力やない限り、絶対に、話さへん。特にハンターや暗殺者とか命の危険が常にある者はな。やから、うちもお前らがどんな【発】にするんかは聞くつもりはないし、教える気もない」

ゴンとキルアは冷や汗を流し、唾をのんで頷く。

ラミナは威圧をやめて、いつも通りの雰囲気に戻る。

「つちゆうことで、後は四大行の応用技を何個か教えるで」

「……【隠】って奴？」

「【隠】はお前らの能力次第やから、わざわざ教えん。これから教えるんは【堅】と【円】つちゆう技や」

「それで全部？」

「いや？ まだまだあるで。残りは頑張って自分で探すんやな」

そう言った直後、ラミナは【練】を発動し、その状態を維持する。

「【練】と【纏】の応用技【堅】。【練】を長時間維持することで、防御力をあげる技や。最低でも30分が目標やな」

そして、次に部屋を覆う様にオーラを球体状に広げる。

「!!」

「こつちが【練】と【纏】の高等応用技【円】。オーラを2m以上広げることで、範囲内の物や人の形や動きを肌で感じ取ることが出来る。この状態を最低1分維持すること。これは【絶】で隠れても意味ないから、オーラの範囲内から脱出するしかない。ただし、この範囲は人

によってちやうからな。1 mも出来ん奴もおれば、数百 mで出来る奴もおる」

ラミナは【円】を解く。

「この2つが出来れば、そう簡単に負けたり奇襲も受けんやろ。ただし、【円】は目に見えるから気い付けや」

ゴンとキルアは頷く。

「これでうちの修行は全部終了や。ヒソカとやりたいんなら好きにしい。まあ、その前に他の奴らと戦わんといかんけど」

「もう終わりか」

「ああ、そうや。先にウイングの所に顔出してきい。うちからの修行が終わったこと伝えといて」

「え？　なんで？」

「まあ、行ったら分かるわ」

ゴンとキルアは首を傾げながらも、部屋を後にする。

それを見送ったラミナは、ヒソカとシルバにメールを送り、2人の念の指導を終えたことを伝える。

シルバには教えた内容を伝えて、【発】に関しては自主性を重視させたことも伝える。

まだ【硬】や【周】などが残っているが、ヒントは与えているし、自分で考えなければ成長が出来ない。

特にゴンの場合は応用技がそのまま決め技になる場合があるので、変にイメージを固めさせないようにしないといけない。

「ゴンが強化系で良かったわ。強化系なら、今でもヒソカに1発入れられるやろ。変化系はイメージとインスピレーションが重要やからなあ。うちが説明したところで役に立たんやろうし」

猛スピードではあったが、伝えるべきことは伝え、教える技は教えた。

ここからは2人の努力次第である。

「まあ、2か月で終わったんやから十分やろ。ヒソカの試合くらい見届けたら、おさらばしよか」



ゴンとキルアは、ウイングとズシの家を訪れていた。

「おや、2人とも。どうしましたか？」

「ラミナがウイングさんに『修行が終わったから顔出して来い』って」  
「なんかあんの？」

「……そうですか。どうぞ中へ」

室内に招いたウイングは、未だ不思議そうにしているゴンとキルアに振り返る。

「すいませんが、お2人の【発】を見せて頂けますか？」

「え？ うん」

「いいけど……」

ウイングが水見式の準備をして、ゴンとキルアはラミナに見せたように【練】を行う。

その結果を確認したウイングとズシは目を見開く。

「……確かに。本当に2か月でここまで修めるとは……」

「すごいっすー！」

「ラミナの教え方が良かったからだよ」

「それもあるでしょうが。間違いなく2人の才能が素晴らしいからですよ。ラミナさんは少し早いくらいだと言っていました。正直かなり早い部類ですよ」

「そうなの？」

「ええ。ラミナさんも驚いたことでしょうね」

ウイングは苦笑しながら言う。

正直、これで少しと思われたらズシが可哀想だ。ズシでさえ才能がある方だと言うのに。

ウイングは顔を鋭くして、ゴンを見る。

「？」

「ゴン君。裏ハンター試験、合格です」

「「え？」」

ウイングの言葉に、ポカンとするゴン、キルア、ズシの3人。

ウイングは少しだけ表情を柔らかくして、

「念の修得はハンターになるための最低条件。プロハンターには相応の実力が求められるからです。犯罪者を捕らえることは、ハンターの基本活動。犯罪抑止力としての強さが必要になります。しかし、悪人が使えば恐ろしい被害を出しかねないこの力を、公に試験の条件とするのは危険です。それ故に表の試験を合格した者だけに課します」

「じゃあ、もし俺達がラミナに教わらなかつたらウイングさんが？」

「そのつもりでした。君達が私でいいのならば、ですが」

「どうやってゴンの事を？」

「心源流拳法の師範はネテロ会長なんですよ。君達やラミナさんのことは師範から色々聞きましたよ」

キルアとゴンはネテロの顔が頭に浮かぶ。

どこか嵌められた気分になり、2人はどうにも喜び辛い。

「キルア君」

「ん？」

「ぜひ、もう一度試験を受けてください。今の君なら十分資格があると思いますよ」

「……ま、気が向いたらね」

キルアは少し照れ臭そうに答える。

すると、ゴンが思い出したように顔を上げて、ウイングに訊ねる。

「ねえ、ウイングさん。他の人達がどうなってるか聞いてる？」

「ええ。クラピカ、ハンゾーは別の師範代の下、先日念を会得しました。ヒソカ、イルミ、ラミナさんの3人は最初から条件を満たしています。ポックル、ボドロは【練】の修得に手間取っており、レオリオは医大受験後に修行を始めるそうです」

「皆、頑張ってるんだね！」

「だな」

「さて……お2人は修行を終えた以上、これから試合を行っていくつもりなのでしょうか？」

ウイングの言葉に、ゴンとキルアは頷く。

ウイングは真剣な顔で2人に告げる。

「ラミナさんからも聞いているとは思いますが、君達が修めた念はま

だスタート地点から走り出したばかりです。先日のヒソカとカストロ以上の戦いが、これから君達を待っているでしょう。それだけ念はまだまだ奥が深い。200階クラスでの戦いは十分に注意してください。無理だけはしないように」

「押忍!!」

「それでは、これから頑張ってください」

ゴンとキルアはウイングの家を後にして、天空闘技場に戻る。

キルアはメールが届いていることに気づいた。

「ん？ ラミナからだ」

「なんて？」

『今後は自分達で修行して、試合する日を決めるように』だと。ヒソカとの試合が終わるまでは、ここにいてくれるらしいぜ」

「そつかく。んく……能力とかについて聞きたかったんだけどなく」

「言ってただろ？ 能力は俺達の思い入れや環境で決まるって。それに自分の能力の事も簡単に人に教えるなってさ」

「そうだけど……」

「……お前、忘れてるかもしれないけどさ。あいつの本業は殺し屋だぜ？ いつかハンターとして、あいつを捕まえるために戦わないといけないかもしれないんだぞ？」

「ラミナとはそんなことにならない気がするけど……」

「甘い！ あいつは親父達でさえ認めたプロだぜ？ 普段の時と仕事の時は違うはずだ。殺されはしないかもしれないけど、手足の1、2本は覚悟しとくべきだ」

「うくん……」

ゴンはキルアの言葉に眉間に皺を寄せる。

ゴンはこれまでラミナが暗殺者としての姿を見たことがないので、ピンと来ないのだ。

ラミナとヒソカとの戦いも、結局ゴンは一度も見たことがない。ぶっちゃけキルアの方がまだ殺し屋らしいとすら思っている。

なんだかんだでラミナは優しく丁寧に色々なことを教えてくれた。そもそもゴンはキルアのついでだったはずなのに。

そのせいかゴンはラミナのことを強く信頼していた。

今のメールとて、全くラミナとは関係ないヒソカとの戦いまでここにいてくれるとも言っていた。

そこまで付き合ってくれているラミナが、キルアが危惧するほど変わるのか想像できなかった。

「まあ……お前はそれでいいか……」

キルアは納得していないゴンを見て、ため息を吐く。

ゴンが知り合いを無闇に疑うようになったら、それはそれで大問題だ。

そう言う部分は自分の役目か、とキルアは自分に言い聞かせる。

「けど、キルアだってラミナが俺達に問答無用で殺しにくるなんて思っただけでしょ？」

「……まあな」

「そもそもラミナに俺達……っていうかキルアに念を教えるように言ったのは、キルアのお父さんなんでしょ？ 一度は殺されかけた相手の頼みを聞くなんて殺し屋でありえるの？ 別にこれに報酬とかないんでしょ？」

「……多分」

キルアは思わず顔を顰める。

正直キルアは、確かにいくらシルバに頼まれたとはいえ、ラミナがここまで丁寧に念を教えてくれるとは思っていなかった。

本当にキルアを暗殺者にする気などなく、様々な可能性があることを教えてくれた。

婚約者という面倒な立場に関しても、ククルーマウンテンを出てからは一度も嫌味や文句を言ってきたことはない。

と言っても、文句を言われても困るが、恐らくラミナも婚約者の事は考えないようになっているのだろうと、キルアは考える。

キルアもラミナの事は婚約者の事がなければ、好ましく思っているし信頼もしている。

しかし、それと同じくらいラミナの暗殺者としてのプロ意識も理解出来ている。

なので、もし敵対すれば、きつとラミナは手を抜かないだろうと確信している。

(まあ、プロなり立てとアマチュアのハンターにそんな依頼来ないと思うけどな)

それでも注意はしておくべきだろうとキルアは心の中で考える。

(……あいつとゴンがもし敵対したら……。俺は……。どうする?)

いつか来るかもしれない未来に、キルアは一抹の不安を感じたのだった。

天空闘技場に戻り、エレベーターを降りた所で2人の前を塞ぐ影があった。

以前200階に来た時に見たサダソ以外の2人だ。

「何か用？」

「くつくつくつ。そろそろ俺達と戦わないか？ まだ200階に来て一度も戦ってないだろ？」

「げっげっげっ。俺達もそろそろメ切が近くてな。どうだ？」

ゴンとキルアは顔を見合わせて頷く。

「いいぜ。師匠からも許可出たしな」

「どっちからやる？」

「……強気だな。じゃあ、俺がお前とやろう」

義足の男がゴンを指差し、車椅子の男がキルアと戦うことになった。

その後、4人は受付で試合の申し込みをして別れる。

「勝てるかな？」

「雰囲気的にラミナやヒソカ、カストロの足元にも及ばない。だから念能力にさえ注意しとけば一方的に負けることはないだろ。とりあえず、教えてもらった【堅】を一度練習してみようぜ」

「うん」

部屋に戻ったゴンとキルアは、さっそく【堅】を練習することにした。

「えつと……。【練】を最低30分だっけ？」

「ああ。【練】を維持するだけだし、余裕だろ」

2人は【練】を発動して、30分維持しようとする。

しかし、

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

1分足らずで【堅】どころか【纏】も解けてしまい、大量の汗を流して四つん這いになる。

「はあ……はあ……【練】を維持するだけが、ここまできつかったなんて……」

「……なるほどな。応用技として名前がつけただけの違いがあつたってことか……。この感じじゃ【円】もまだ俺達じゃ厳しそうだな」

キルアの推測通り【円】に関しては、オーラを広げるところか球状にすることすら出来ず、形に拘らず広げようとしても1mも広がらなかった。

そして、【堅】同様【練】の維持が出来ずに、すぐにオーラが途切れてしまう。

「くつそ……！ これじゃあ【練】をしてるだけと変わらねえ……！」

「あいつらとの試合には間に合いそうにないね」

「ああ……。ん？」

キルアはテレビに顔を向ける。

画面には試合決定のアナウンスが表示されていた。

「4月20日。明後日か……」

「キルアも決まったんじゃないの？」

「そうだな。ちよつと見てくる」

キルアは駆け足で自室に戻り、試合の連絡が来てないか確認する。表示された日はゴンと同じく4月20日だった。

キルアは駆け足でゴンの部屋に戻りながら、ラミナにメールを入れる。

「ただいま。俺も明後日だった。ゴンが午前で、俺は午後だな」

「そっか」

「ラミナにはメールいれといた。とりあえず、今は【堅】とかよりも四大行と【凝】に力入れようぜ。後、明日軽く組み手もしてみるか」

「うん！」

修行も終わり、ようやく初戦を迎える2人は、早く試してみたいとばかりに胸を躍らせるのだった。

その頃、ラミナは。

「見つけたってんだよゴリアア!! 俺っちと戦えってんだよゴリアア!!」

「……………なんやねん」

ケンカを売られていた。

## #24 シアイ×シアイ×シアイ

ラミナは天空闘技場周辺にある武器屋を見て回っていた。

しかし、めぼしいものが見つからなかった。部屋に帰ろうとエレベーターに乗ろうとした時、突如後ろから大声で名前を呼ばれた。「ラアミナアアア!!」

「あ?」

ラミナは少しイラつとしながら振り返る。

そこにいたのは、茶色の逆立てた短髪で、サイドは雷を思わせるバリカンアート。鋭い目つきをしており、赤のタンクトップに黒のダメージジーンズを履いている180cmほどのイキった男。

男はラミナをビシイ!と指差して、

「見つけたってんだよゴラア!! 俺っちと戦えってんだよゴラア!!」

「……………なんやねん」

ラミナは突然ケンカを売られて、呆れるしかなかった。

すると、なんだなんだと見ていた野次馬から声が聞こえてきた。

「あ。あいつ、ナグタルじゃねえか?」

「選手か?」

「200階クラスだな。喧嘩屋みたいな奴で、期限ギリギリまで戦う相手を見定めて、気に入った奴にああやって大声で勝負を申し込むんだよ」

「正々堂々なのか、迷惑なのか分かんねえ奴だな」

「どっちもだろ。ただ、天空闘技場の性質からすれば、ああやって勝負挑んだ方が断られにくいんだよ」

「ああ……………なるほどな」

天空闘技場は殺されることもあるが、基本的には格闘試合の聖地。なので、スポーツマンシップに則ったやり方は周囲の好感を集めやすい。そして、ここで断ると周囲から臆病者扱いされるので、プライドが高い者ほど断り辛くなる。

サダソ達とはまた違う厄介さがあるのだ。

「俺っちの名はナグタル・アームドックってんだよゴラア!!」



「……喧しいやつちやなあ」

「俺つちと戦えってんだよゴラア!! あんな卑怯モンが200階の普通だと思っくんじゃねえってんだよゴラア!! それを俺つちが教えてやるってんだよゴラア!!」

「……」

ナグタルの異様な熱気に、ラミナはもうドン引きだった。

別にサダソが普通だとも思っていないが、卑怯だとも思っていない。天空闘技場のルール上、勝てる相手を選んで勝負を仕掛けるのはズルでもなんでもないのだから。周りからどう言われようが構わないのであれば、であるが。

なので、ラミナは別にナグタルと戦う理由はない。

「いや、うちはもうここで戦う気ないねんけど……」

「ああん!?! なんてだっってんだよゴラア!! じゃあ、何のために来たってんだよゴラア!!」

「知り合いの修行。それももう終わったでな。ここにおける理由はないねん」

「じゃあ、最後に俺つちと戦えってんだよゴラア!!」

「いや、やから理由ないねんて」

「逃げんのかっってんだよゴラア!!」

「別に名誉とかいらんしな」

ラミナは本当にゴン達の修行のためにここに来た。

その用事も済んだので、もうここに用はない。戦っても金にならないのも大きい。

「戦いたいんやったら……」

「だったら?」

ラミナは右手を出して、

「金、くれや。挑戦料つちゆう奴やな」

「ああん!?! 舐めんなっってんだよゴラア!!」

「んく……ほんなら、うちが勝てばお前の有り金全部貰う。負けたら、うちの有り金全部やる。それならどうや?」

「……」

ナグタルは腕を組んで眉間に皺を寄せる。

ドンドン野次馬が増えていくので、さっさと決めてほしいと思うラミナだが、ここで逃げても追いかけてきそうだったので大人しく待つ。その時にキルアからのメールに気づき、2人が明後日試合することになったことを知る。

(……相手誰やねん?)

対戦相手の名前を見ても、全くピンと来ないラミナ。

その直後、悩んでいたナグタルが、

「ぬああああ!!」

と、突然叫び出して、再びビシイ!とラミナを指差す。

「やってやるってんだよゴラア!! 俺たちは逃げも隠れもしねえってんだよゴラア!!」

「よっしゃ。ほな、試合は3日後な」

「上等だってんだよゴラア!!」

「喧嘩屋・ナグタルと打上姫うちあげ・ラミナの試合が決まったぞ!!」

「チケット買う準備しねえと!」

野次馬達が一斉に走り出して、チケットを買い集める準備に向かう。

その後ろ姿を見送りながら、ラミナは頬を引きつらせる。

(なんやねん……。打上姫って……)

意味が分からない二つ名を付けられていた。

余計なことを知る羽目になった原因であるナグタルを、今すぐぶん殴りたくなつたラミナだが必死に我慢する。

額に青筋を浮かべながらエレベーターに乗り、受付に向かってナグタルとのことを伝えて申込用紙を出す。

とりあえず、色々と忘れなくなつたラミナは酒を飲むことにするのだった。

そして、2日後。

午前がゴン対ギド。午後がキルア対リールベルトの試合だ。

ラミナはチケットを買って、ゴンとキルアとそれぞれの試合を観戦することにした。

「ナグタルってどんな奴なんだ？」

「イキりきったレオリオ」

「……分かったような、分かりやすいような……」

キルアは微妙な例を出されて、首を傾げる。

ラミナとキルアは並んで観客席に座っている。

『さあ!! 大注目の一戦がやってまいりました!! これまで破竹の勢いで勝ち上がってきたゴン選手がようやく登場!! 対するギド選手はここまで5勝1敗とまずまずの戦績を残しています!!』

リング上で向かい合うゴンとギド。

ゴンは【纏】を纏って、ストレッチをしている。しかし、その顔は興奮が隠し切れていない。

早く戦いたくてウズウズしているようだ。

「始め!!」

開始が告げられると同時にゴンは【凝】を使う。

それに対してギドは袖から何かを取り出して、投げ上げる。それはオーラを纏いながら回転している独楽だった。

「ふん。どれだけ鍛えたかは知らんが……。俺の独楽から逃れられると思うなよ!」

ギドが杖を横にすると、独楽をさらに取り出して10個ほど並べる。

『出ましたー!! ギド選手の舞闘独楽!』

「行くぞ! 【戦闘<sup>戦いの</sup>円舞曲】!」

ギドが独楽を放ち、リング上に10個の独楽が走り回る。

ゴンは周囲に展開された独楽を警戒して、足を止める。

その時、背後で独楽同士がぶつかり合ったかと思うと、勢いよく弾かれてゴンの背中に銃弾のように叩きつけられる。

「ぐう!?!」

「クリーンヒット!!」

「げっげっげっ! 念を込められた独楽は何時間でも回り続ける!

複雑に舞い飛ぶ独楽の動きはもはや俺でも予測不可能！」

「つうつ！ (あんな小さな独楽なのに、ハンマーで殴られたような衝撃だぞ!?)」

ゴンは背中中の痛みに呻きながら、動き回る。

キルアは動き回る独楽を見ながら、ラミナに訊ねる。

「あれは強化系？ それとも操作系？」

「両方やな。独楽の回転を強めるんが強化系。そして、独楽を操り命令を付与しとるんが操作系」

「相性悪いんだよな？」

「そやな。けど、見る限りギドの独楽への思い入れが強いんやろな。それとあの独楽に与えた命令もそこまで複雑やない」

「どんな命令？」

「少しは考えんかい。見れば、すぐに分かるで」

キルアは独楽の動きに集中する。

独楽は互いにぶつかり合い、無秩序に動き回っている。しかし、よく見ると必ずしもぶつかり合った独楽はゴンに向かっていているわけではない。

独楽同士で連鎖するようにぶつかり合って、時々ゴンに向かっていく。だが、ゴンに向かって飛んでいく独楽も、体のだ真ん中に向かっていくというわけでもなく、体すれすれを通り過ぎて行く独楽もある。

「……そうか。あの独楽は別にゴンを狙ってるわけじゃないのか」

「そういうこつちや。独楽が飛んでいく先に偶々ゴンがおるだけや。やから、あれも言うとしたやろ？ 『俺にも予測不可能』ってな」

「つまり、あの独楽に与えられた命令は『ぶつかった相手を弾き飛ばせ』ってことか」

「やな」

「ゴン……!」

「今のゴンなら、問題ないと思うけどな」

その頃、ゴンも独楽の特性に気づき始めていた。

しかし、それでも全ての独楽の動きを読むことは出来なかった。

「なら……!」

ゴンは勢いよくギドに向かって走り出し、それと同時に【練】を発動する。

独楽がゴンに襲い掛かるも、独楽はゴンの【練】に弾かれる。

「くっ! なら、これならどうだ!」 【散弾独楽哀歌】!!」

ギドは新しく独楽を数個取り出して、その全てをゴン目掛けて発射する。

それをゴンは両腕で顔を庇いながら、【練】で受け止めて全ての独楽を弾く。

「なっ!?!」

(俺の【練】は長くはもたない! 一気に決める!)

ゴンはギドが動揺している隙に一気に詰め寄る。

「このっ! 舐めるなよ!!」

「!!」

『出たー!! 攻防一体の奥義【竜巻独楽】ー!!』

ギドが勢いよく回転を始める。

ゴンは滑りながら足を止める。

「俺はこの体になってから負けたことはない! 自ら独楽と化し、攻撃は他の独楽に任せる。地味だが、確実にポイントを稼げる戦法さ!」

ギドは自信満々に言う。

すると、ゴンが【練】を発動しながら左脚を大きく前に出して、右脚にオーラを集中させながら身を低くする。

「おりゃあああ!!」

そして、思いつきり右脚を振り抜いて、ギドの義足に足払いを繰り出す。

一瞬互いの脚がせめぎ合う。

しかし、オーラを脚に集めていたゴンの力が勝り、ギドは義足が地面から離れて一瞬宙に浮く。

「なっ!?! わっ!?!」

ギドは慌てるも、立て直すことなど出来ずにリングに倒れる。

ゴンはすかさず左拳をギドの脇腹に叩き込む。

「がっはあ!？」

ギドは横滑りに場外まで吹き飛ばされる。

「クリティカルヒット! アンド、ダウン!! ポイント、ゴン!! 3—  
1!!」

『ここでゴン選手が逆転!!』

「よし—」

「確かに上手い技ではあるけどなあ。ゴンの集中したオーラにパワー  
負けしよったか」

（つちゆうかゴンの奴、本能的に【流】使いよったな。ギドの義足の  
【周】じゃ防ぎきれんのは当然か）

義足に精孔はないので、【周】を使わなければ強化出来ない。

いくら回転で強化するにしても、同じ強化系のゴンの肉体には勝て  
ないだろう。

（まあ、そもそもすでに【練】からしてゴンの方が上やな）

元々の身体能力もゴンの方が上なので、【練】さえ上回ればゴンに敗  
ける要素はない。

ギドに他の能力があれば別だが、今までの流れからすれば恐らくギ  
ドの資質は強化系だと推測できる。

ギドは呻きながら起き上がるも、ダメージが大きすぎたのか再び仰  
向けに倒れる。

杖は吹き飛ばされた時に落としてしまっており、手元にはない。

『お〜つとギド選手、起き上がれないかあ!?! かなりのダメージのよ  
うです! これは試合続行は厳しいかあ!?!』

リングの独楽は未だに回り続けている。

しかし、ゴンは飛んでくる独楽を全て叩き落としていき、もはやギ  
ドに攻撃の手段はない。

「ギド選手、戦闘不能!! 勝者、ゴン選手!!」

審判がギドは試合続行不可能と判断し、勝利宣言を行う。

「次はキルアやな。頑張りや」

「おう。ま、その前に飯だけだな」

その後、ゴンと合流し、ゴンから「ヒソカに会って、好きな日を選

べって言われた」と聞き、ラミナはゴンの好きにしろと伝える。

ゴンはようやく目的を達成できそうだと気合を入れ直すのだった。

そして、午後。

『さあさあ!! こちらも大注目の一戦!! 初登場のキルア選手と、現在5勝2敗のリールベルト選手!! 一体、どんな戦いを見せてくれるのかー!?!』

「始め!!」

試合開始と同時にキルアが姿を消す。

観客がどよめき、リールベルトは背中に怖気が走って車椅子にオーラを注ぐ。

「オーラバースト!!」

車椅子の背中にある噴出口からオーラが噴き出し、車椅子が勢いよく走り出す。

キルアは上空から右手を振るうも、躲かれてしまう。

「あれは放出系?」

「せやな。噴出口からオーラを放出して推進力をあげとるみたいやな。まあ、あれだけのスピードやと回避に集中せざるをえん感じやけど」

リールベルトは背中から2本の鞭を取り出す。

そして、2本の鞭を猛スピードで振り乱し、自分の周囲に鞭の嵐を作り出す。

『出ました! ソング・オブ・ディフェンス【双頭の蛇による二重奏】!』

「はっ! いきなりの奇襲か! 残念だったな、キルア! この型に持ち込めば、もはやお前に勝機はないぜ!」

「なんで?」

「見れば分かるだろう! 常人にこの鞭の動きを見切るのは不可能! 狭いリングでは逃げも隠れも出来んぞお!!」

高らかに笑いながら、リールベルトはキルアに鞭を振るう。

しかし、キルアは凄まじいスピードで振るわれる鞭を、難なく掴んだ。

「!?」

「常人じゃねえんだよ、悪いけど」

「っ……いっ！ はっ！ いい気になるなよ！」

リールベルトは持ち手にあるスイッチを押す。

直後、キルアの体に高圧電流が鞭に流れる。キルアの体は電流により、硬直する。

「はーはっはっ！ 驚いたぞ、キルア！ 2本の鞭を見切ったのはお前が初めてだ！ だが、無理に突破したり、怪我覚悟で掴む奴は何人もいた！ そんな奴の為にはこの「双頭の蛇の正体」！ 両方合わせて100万Vの電流をプレゼント!! どんな大男でも——！」

意気揚々と語っていたリールベルトだが、突如引つ張られてリング天井近くまで飛び上がる。

もちろん投げ飛ばしたのは、キルアである。

「電流は効かない。拷問の訓練は一通り受けたから。でも効かないのは我慢出来るって意味でさ。痛いのは変わりないんだよね。だから、ちよつと頭に来た」

キルアは電流を浴びながらも涼しい顔で言う。

その様子をラミナは僅かに眉間に皺を寄せながら見る。

(……まあ、問題なさそうには見えだが……。こら、キルアの能力がないなモンになるか想像出来へんなあ)

キルアの過去は暗殺家業に染まっている。

なので、思い入れのあるものと言うと、その経験の中から選び抜かれる可能性が高い。そうなると自然と暗殺向けの能力になるのは想像に難くない。

ラミナからすればそれ自体は全く問題ないのだが、その能力をキルアが受け入れられるのは別問題である。

(下手な制約作らんかったらええけどな)

ラミナはそう思いながら、天井近くのリールベルトに目を向ける。

リールベルトは上空で手を振り回して、完全に打つ手なしのようだった。

「その高さから落ちたら死ぬな。どーする？」



「ひっ!? た、頼む! 受け止めてくれえ!!」

「オーケイ。安心して、落ちてきな」

そう言うキルアは未だに電流を浴びている。

リールベルトは目を見開いて、涙を流しながらまっすぐキルアに落ちて行く。

「あ、ああ……!? ひいいい!?!」

そして、キルアは見事にリールベルトをキャッチする。

「ギャアアアアアアアア!?!」

リールベルトは自分の武器の電流を浴びて、悲鳴を上げる。

1分もせずに失神し、キルアはリールベルトと鞭を放り投げる。

「どんだけ痛いかわかったか、バーカ」

「リールベルト選手失神によるKOとみなします! 勝者、キルア選手!」

「やったね、キルア!」

「まあ、あんま念能力関係なかったけどな」

ラミナは苦笑する。

キルアは別にヒソカと戦うことはなく、ゴンよりは念能力を使用しでの戦闘をシミュレーションしているだろうと考えているので、特に問題視はしなかった。

(まあ、この2人はいきなり賞金首ハントなんでせんやろうし、ヤバイ相手と戦う機会はそうそうないやろ)

特にキルアはゾルディック家のしごきで、無理な戦いはしないように叩き込まれている。よほどの相手でなければ逃げることは出来ると考えるラミナだった。

そして翌日。

ラミナとナグタル戦は、ヒソカ対カストロ戦並みの超満員となった。

『いよいよ、本日のメインイベントがやってまいりましたあ!! 会場は超満員で熱気にあふれております!!』

その時、ナグタルが入場してきて、歓声が湧き上がる。

『先に現れたのは、喧嘩屋の異名を持つナグタル選手!! 現在7勝2敗の好成績! 燃え上がる闘志は今日も健在かー!』

ナダクルは上半身裸で、両腕には黒のミトングントレットを装着している。

ガキイン!と拳を打ち合わせ、ガントレットの硬さを周囲に自慢する。

その反対側からは、ラミナが両手をポケットに突っ込んだまま飄々とした態度で登場する。

『続いて現れたのはラミナ選手!! 未だ1戦1勝ですが、その人気は鰻登り! 今回はどんな戦いを見せてくれるのかあ!』

リングに向かい合うラミナとナグタル。

「覚悟しろってんだよゴラア!!」

「……なんでそんな気合入ってんねん」

相変わらずの熱気の違いにうんざりするラミナ。

正直、何がそんなにナグタルの琴線に触れたのか、さっぱり分からない。

なので、全くやる気になれないラミナだった。

「ポイント&KO制! 時間無制限1本勝負!! 始めえ!!」

「行くってんだよゴラア!!」

開始と同時にナグタルがボクシングスタイルに構えて突っ込んできた。

ラミナは未だに両手を入れたまま、ナグタルを見据える。

「ツラア!!」

ナグタルが右ストレートを繰り出し、ラミナは顔を傾げるだけで躲す。続けて左アッパーが飛んで来たが、それも頭を僅かに反らして躲す。

ラミナはそのまま2, 3歩下がり、ナグタルは逃がすまいと距離を詰めてくる。

ナグタルは胴体を狙って右フックを繰り出す。ラミナはくの字に体を曲げて躲すも、そこに左フックが顔を目掛けて飛んで来た。

ラミナは左に跳んで距離を取り、ナグタルの拳を躲す。

「てんめえ!! 逃げんじゃねえってんだよゴラア!!」

「逃げるに決まっとるやろ」

「この野郎!!」

「野郎ちやう」

「うっせえってんだよゴラア!!」

ナグタルは激高しながらラミナに迫り、今度はラツシュを繰り出す。

しかし、ラミナはそれを全て見切り、紙一重で躲していく。

この間、ラミナはずっと両手をポケットに突っ込んだままだった。

『ナグタル選手の猛ラツシュ!! それをラミナ選手は軽やかに紙一重で躲すー!!』

その後もラミナはナグタルの猛攻を躲し続ける。

(蹴りは使ってこんな。フェイントもあんまないし)

ゴン同様素直というか直球タイプのような。

ラミナは大きく後ろに跳んで距離を取る。そして、両手をポケットから出す。

「やつとやる気かってんだよゴラア!!」

「いや、入れとくんも疲れただけや」

「っ!! ……てんめえ……!」

「体術やと勝負にならん。はよ、本気出せや」

「……言いやがったなあ。後悔しやがれってんだよゴラアアア!!」

ナグタルが額に青筋を浮かべて雄たけびを上げる。

すると、ナグタルの両腕のオーラが炎へと変化する。

「ほお……」

【アンリミテッド・ブレイブハート絶えず燃え盛る闘魂】ってんだよゴラア!! さっきみたいに避け続

けられると思うなってんだよゴラア!!」

ナグタルは勢いよく飛び出し、ラミナに殴りかかる。

ラミナは大きく横に跳んで躲す。

「避けんなってんだよゴラア!!」

ナグタルが怒り叫ぶと両腕の熱量が更に上がるのを感じた。

(……オーラを炎に変えて、熱量を強化する能力か)

ラミナは冷静にナグタルの能力を推測する。

(けど、拳主体なんは変わらんみたいやな。なら……)

ナグタルが再び右拳を構えて殴りかかってくる。

ナグタルが右ストレートを繰り返すと、ラミナは左拳を脇に構えて屈んでナグタルの拳を躲す。そして、ラミナがナグタルの鳩尾を目標けて拳を振るう。しかし、微妙に距離が遠かった。

「届かねえってんだよゴツフウウ!」

届かないと思っていたナグタルの腹部に衝撃が走る。

ナグタルはくの字に後ろに3mほど下がるも、倒れる事なく耐える。

「なっ……はあ……!」

「クリーンヒットオ! 1ポイント! ラミナ!」

『ラミナ選手のカウンターがヒットオ!!』

「つつう……! 何しやがったってんだよゴラア……!」

「さあなあ」

(完璧に決まったと思ったんやけどな。こいつ、資質は強化系か)

ちなみにラミナが今使ったのは【流】【円】【発】の高等応用技【伸】。攻撃の瞬間に集中したオーラを1mほど伸ばす技である。これを素早く行い、一点集中で相手の【練】や【堅】を貫くことも出来る。

【流】により威力が上がっているはずなのだが、ナグタルはそれを耐えた。

ダメージがないわけではなさそうだが、膝をつくほどまでではない。

そこからナグタルの本来の系統が強化系であることを見抜いたらミナ。

「この程度で倒れるかってんだよゴラア!!」

ボオウ!!と両腕の炎が更に勢いを増す。

再び殴りかかってくるナグタル。

ラミナは後ろに下がって躲す。炎の勢いが増したことで、隙を突いて懐に飛び込むのも難しい。

(中々厄介やな。ただ……両腕以外のオーラは弱まってきとるみたい

やな)

先ほどより体を覆うオーラが弱くなっているように見える。

「オオラアアア!!」

「……ふん」

ラミナはナグタルが右ストレートを繰り出した瞬間を狙って、ナグタルの右側から一瞬で回り込んで、右脇腹に左フックを叩き込んだ。

「ゴオ!」

ナグタルが呻いた瞬間、ラミナは右腕で【蛇活】を放ち、鞭のようにナグタルの右腕を潜り抜けて顎を跳ね上げた。

更に左脚で足払いを繰り出して、ナグタルの脚を跳ね上げる。

「がっ!」

ナグタルは後頭部から地面に倒れる。

「クリティカル! アンド、ダウン! プラス、ポイントツ! 4—0!」

『ナグタル選手の燃え盛る猛攻を鋭く掻い潜るラミナ選手の攻撃—!!』

一気にポイントを引き離した—!!』

ラミナはナグタルから距離を取る。

ナグタルは頭を押さえながら起き上がる。

「流石は強化系。頑丈やなあ」

ラミナはナグタルの頑丈さに呆れる。

ナグタルは僅かにふらつきながらも起き上がり、また両腕に炎を纏ってラミナを睨みつける。

「なあ、なんでうちに戦いを申し込んだんや? 正直、おまえにそこまですぐ縁掛けられる理由思いつかんのやけど」

「……決まってるってんだよお。……てめえの……アツパーに惚れちゃったんだってんだよお!!」

『「は?」』

ナグタルの叫びに会場にいた全員がポカンとする。

「てめえのあのトドメのアツパー!! あの淀みのない動きに、滑らかな腰! なにより、あの凄まじい威力!! 全てが完璧だったってんだよお!!」

「……」

ラミナはもうドン引きだった。

ヒソカにも負けなくらいの変態だったようだ。

「だから、てめえと戦えるのが楽しみだったってんだよゴラア!!」

「どんな理由やねん」

「俺っちはてめえに勝あつってんだよゴラア!!」

「どうやったら、そんな結論に変わんねん」

「ウオオオオオ!! くらええ!! 【散り燃える炎弾】!!」

「!!」

ナグタルが両腕を突き出すと両腕の炎が弾けて、拳大の火の玉の群れがラミナに襲い掛かる。

ラミナは一瞬目を見開くも、すぐさま目を鋭くして【堅】を発動する。

そして、当たりそうな火の玉を全て拳や蹴りで叩き落とす。

「まだまだ行ってくてんだよゴラア!!」

パチン!

「あ?」

「こっちや」

「っ!? ぐえ!!」

何かが弾ける音がしたかと思ったら、いつの間にかラミナが背後にいた。

ナグタルは目を見開きながら振り返るも、何も出来ずにラミナの拳が左頬に突き刺さる。

ナグタルは場外まで吹き飛び、地面を転がって観客席の壁に叩きつけられる。

「クリティカル! アーンド、ダウン! ポイント、7-0!」

『ラミナ選手が一瞬で背後に回って、ナグタル選手を吹き飛ばしたー!! これは大ダメージかあ!』

「今のどうやったの?」

「分かんねえ。指を弾いたのしか見えなかった……」

ゴンとキルアはラミナが何をしたのか分からなかった。

ラミナはベンスナイフを具現化して【隠】で見えなくして、ナグタルの足元に置いておいたのだ。

そして【チェンジリング】を発動して、背後に回り込んで【流】で思いつき殴っただけである。

ベンスナイフを消して、ラミナはナグタルが倒れている方を見る。

ナグタルはうつ伏せに倒れていた。

審判が駆け寄って確認すると、ナグタルは白目を剥いてピクピクと震えて気絶していた。

「ナグタル選手、失神KO！ 勝者、ラミナ選手!!」

『へんた……コホン。ナグタル選手も一方的に撃破ー!! ラミナ選手の勢いは一体誰が止めるのかー!?!』

「もう戦わへんけどな」

そう呟いてリングを後にするラミナ。

とりあえず変態を撃破したラミナは、ゴンとヒソカをさっさと戦わせて、天空闘技場を去ろうと心に決めたのだった。

## #25 デシ×タイ×デシシボウ

ラミナはキルア達と合流して部屋に戻ろうとしていた時、気絶から回復したナグタルが物凄い勢いで駆けつけて来た。

そして、ラミナの目の前でスライディング土下座を決めた。

「俺っちを弟子にしてくれてんだよおお!!」

「「は?」」

突然の弟子志望にラミナ達は啞然とする。

「俺っちはあんたの強さに惚れたってんだよ! だから、俺っちを弟子にしてくれてんだよ!!」

「嫌や。とりあえず、約束の有り金全部寄せや」

「払えば弟子にしてくれるのか!」

「なんでや阿呆。負けた方が有り金全部払うっちゆうんが、この試合を受けた条件やろが。すり替えんな」

「ぐ……」

ラミナのツツコミにナグタルは言葉に詰まる。

ゴンとキルアはラミナが言った条件に呆れていたが、ナグタルもそれに同意したのならば仕方がないと考え、口出しはしなかった。

「ほれ、約束は守らんかい」

「……わ、分かったってんだよ……」

「ほれ、これが口座や。今、振り込めや」

(マファイア……?)

取り立てをしているラミナの後ろ姿にゴンとキルアは同じことを思っていた。

ナグタルは携帯を操作して、言われた通りに金を振り込む。

口座を確認したラミナは金を振り込まれているのを確認する。それが本当に有り金全部かどうかは確認しない。ぶっちゃけ振り込まれれば、それで十分だったからだ。

「確認した。ほな、さいなら」

「ま、待ってくれてんだよ! 弟子にしてくれてんだよ!!」

「嫌や言うてるやろ」



「な、なんでだよ!? そいつらは鍛えたんだろ!？」

「こいつらは親から教えてくれって脅されたからや。それももう終わったでな」

「だったら、ついでに俺っちも鍛えてくれよ!」

「なんでやねん。それにこいつらに教えたんは念の基本だけや。別に体術は教えてへん」

「ぐう……!」

ナグタルは悔し気に顔を歪める。

ラミナはメンドクさ気に腕を組む。

そこにゴンが口を開く。

「教えてあげるくらい、いいじゃん」

「!!」

「アホ言え。そもそもお前らに教えるんやって面倒やったのに、なんでこいつ鍛えなあかんねん」

「でも、まだここにいるんでしょ?」

「それはお前次第や。お前がヒソカと戦うんに2か月待つか言うんやったら、うちは次の仕事があるから出て行くで」

「次の仕事って?」

「言えるかいドアホ。とりあえず、うちはもう誰かに教える気はない」  
ラミナのきつぱりとした言葉に、ナグタルは項垂れる。

ゴンは可哀想な目でナグタルを見て、ラミナに目を向ける。キルアもこればかりはラミナの言い分も理解できるので、呆れた顔でゴンを見つめる。

ゴンの視線を感じたラミナは盛大に顔を顰めるが、そこにあることを思いつく。

「ほんなら、そのキルアと戦えや。キルアに勝ったら、ここにおる間は鍛えたる」

「ホントかってんだよ!？」

「はあ!？」

「キルアくらい勝てん奴に教える気はないでな」

「いいぜ!! やってやるってんだよゴラア!!」

ナグタルは気合を入れて立ち上がった、キルアを睨む。

そして、ビシィー!とキルアを指差して、

「てめえみたいながきに俺つちが負けるかってんだよゴラア!! 覚悟しやがれってんだよゴラア!!」

「な、なんで俺が戦わないといけないんだよ!?!」

キルアは巻き込んできたラミナに食って掛かる。

ラミナは腕を組んだまま、涼しい顔で答える。

「いや、お前もこの後何にもないやろ? それに昨日の試合やと念能力者と戦えたとは言えんし、こいつで経験しとけや。せつかくええ感じの能力者やし」

「む……」

「念能力はあいつが上やけど、ぶつちやけ身体能力はお前の方が上や。油断せんかったら勝てる相手やで」

「……ちっ」

キルアはラミナの言い分が正しいと理解出来てしまったので、舌打ちして不貞腐れる。

事実、リールベルトとの戦いは念能力をほとんど使わずに終わってしまった。

なので、自分の【練】などがどこまで通じるのか分かっていない。

「……分かったよ。やればいいんだろ、やれば!!」

「わざと負けたら許さんでな。イルミに逐一居場所報告したる」

「てめっ!」

「ほれ、さっさと試合申し込んでこいや」

「くっ!」

「ぜってえ俺つちは弟子になってやるってんだよ!」

キルアとナグタルは試合の申し込みに行く。

それを見送ったラミナはゴンに目を向ける。

「ゴンも早めにヒソカと打ち合わせしときや。あんまり時間かけてもええことないで。ヒソカは9勝3敗。もう上に行くか、ここを出て行くしかないで?」

「あ!?! そっか! えつとヒソカはカストロの試合が最後だから

……」

「まあ、2か月は確実にあるわ。それでもそこまではうちは待たんで」  
「う〜……!」

「まあ、もううちがお前に教えることはないけどな。どうせ、付け焼刃の能力なんざヒソカに通じるとは思えんし、さつさと戦ってこいや」  
「それもそつか。うん、分かった」

ゴンは笑みを浮かべて頷く。

1, 2か月では作った能力の特性を把握するのは簡単ではない。さらに能力を組み合わせて戦うのならば、更なる修練がいる。

ただでさえ【練】や【凝】での戦闘にまだ慣れておらず、【堅】【流】も使えないゴンにそんな余裕はないだろう。

なので、下手な能力を作る前にさつさとヒソカと戦って実力差を実感した方が、ゴンにとってはいい方向に向かうだろうとラミナは考える。

そして、キルアに関しても実戦を経験させないと実力を伸ばすのは難しいだろうと考える。

キルアの場合は閃きを期待するよりは、より多くの実例を見せた方が自分に適した能力を探すことが出来るはずだ。

だから、ナグタルとの試合は渡りに船だと思ったのだ。

ゴンの部屋に戻って待っていると、キルアが顔を顰めて戻ってきた。

「お。日にち決まったんか?」

「ああ。1週間後にした」

「頑張りや」

「なんで俺が戦うことになるんだよ!」

「そら、あいつの能力が丁度ええからや。あれほど分かりやすい典型的な念能力者は珍しいでな」

「って言うത്?」

「オーラを炎に変えるのは変化系。熱量を上げるのは強化系。火の玉にして放つのは放出系。ヒソカより分かりやすい能力やでな」

シンプル故に応用性は高い。

ヒソカの能力からもそれは窺える。

「ただ、あいつの能力は両腕限定みたいやけどな。恐らくそれが制約の1つなんやろうな」

「他にもあるのかな？」

「あると思うで？ そうやないと、あそこまでの熱量は出せん」

「なんで？」

「オーラを別のモンに変えるには、それだけ強いイメージがいるんや。具現化系に関しては、具現化するモンを数日ずうくと肌身離さず持つて、匂い嗅いだり、あちこち叩いて音を聞いたり、舐めたり、模写したりな。それでようやく本物と変わらんモノを作れる。変化系に関してはそこまでやないけど、それでも水や炎とかに変えるんはそう簡単なことやないでな。よっぽど火と拳に思い入れがあるんやろ」

「あの性格とも相性がいいのだろう。それでもあそこまでの炎に変えるには、かなり危険な特訓をしてきたはずだ。」

「それにあの頑丈さからすれば、あいつの資質は強化系やと思う。やから、あいつの能力は自分の系統にピッタリではある」

強化系と相性がいいのは変化系と放出系。

ナグタルの能力は非常に資質とも相性がいい。

「やから、キルアも参考できる使い方やとは思うで？ せつかくやし、目の前で体験しとけや。天空闘技場を出たらそんな簡単に念能力者と会えんやろうし、会っても友好的とは限らん。ここはまだポイント制のおかげで殺されにくいでな。経験積むには丁度ええで」

「……分かったよ」

キルアも渋々ではあるが、ラミナの言葉に納得する。

そして、ゴンとキルアに【練】と【纏】の修行を引き続きするように伝えて、ラミナは部屋を後にするのだった。

1週間後。

キルアとナグタルの試合を迎えた。

「おい、ガキイ。火傷する前にとつととギブアップしろってんだよゴ

ラア!!」

「冗談。そつちこそ、怪我する前にギブアップすれば?」

「んだとお……!」

「ふん」

『なにやら不穏な空気! それもそのはず! キルア選手とゴン選手はあのラミナ選手の弟子! そしてナグタル選手は、先日の試合後にラミナ選手へ弟子入りを志願したとの情報があります! つまり今試合はラミナ選手に弟子入りできるかの試練とも言えます!! しかし、この戦いで負ければナグタル選手は4敗となり、即失格となります!』

何故か詳しい情報が運営サイドに伝わっていることに顔を顰めるキルアとラミナ。

しかし、事実であるために否定も出来ず、我慢するしかなかった。

キルアはラミナに弟子入りしたつもりはなかったが、教えてもらっている間は弟子ノリでいたため仕方がないと受け入れるしかなかった。

「ポイント&KO制! 時間無制限、一本勝負!! 始め!!」

【アンリミテッド・フレイブハート絶えず燃え盛る闘魂】オ!!」

開始早々ボオオ!!と両腕に炎を纏うナグタル。

『おくつとお!! いきなり炎の拳を出してきましたあ!!』

「速攻で決めてやるってんだよゴラア!!」

ナグタルは拳を構えて、キルアに飛び掛かる。

キルアは顔を引き締めて、後ろに下がりながら【バク肢曲】を使ってナグタルを攪乱する。

「しゃらくせえってんだよゴラア!! 【バクシヨクン・バースト抑え切れない我が闘志】!!」

「!」

振り抜いた右腕の炎が弾けて、熱風となつてキルアの分身を吹き飛ばす。

キルアは上に跳び上がって躲す。

しかし、ナグタルは左腕を振り上げて熱風を放ち、キルアを追撃する。

「くっ！」

キルアは両腕を交えて顔を守りながら【練】を発動する。直後に熱風が襲い掛かり、キルアは場外まで吹き飛ばされる。上手く着地してダメージはなかったが、キルアの顔は渋い。

「ちっ！ (【練】のおかげで火傷まではしなかったけど、かなりの熱量だ。このままじゃ近づけない……！)」

「どうしたあ!! その程度かってんだよゴラア!!」

再び両腕に炎を纏いながら挑発するナグタル。

キルアはリングに素早く戻り、ナグタルと向かい合う。

(……真正面からはやや不利。かと言って、回り込もうにもさっきの熱風が来るだけ。奴には炎弾もある。けど、こっちは近づかないと勝ち目はない。くそっ！ 体術は俺が上だって言っても、それが使えないんなら意味ねえだろ！)

「来ねえならこっちから行くってんだよゴラア!!」

「くっ！」

ナグタルが殴りかかってきて、思考を中断するキルア。

炎の拳を躲しながら必死に作戦を考えるも、少し離れた瞬間に熱風が放たれて回避に精一杯になってしまう。

そのまま10分ほど、同じ工程が繰り返される。

(そういうえば、この熱風はなんでラミナの時は使わなかったんだ?)

ようやくナグタルの動きにも慣れてきたキルアは、ふとした疑問が頭を過ぎる。

キルアは必死に頭をフル回転させる。

(あの熱風は放出系の技に属するはず……。放出系ってことは……。熱風を放つたびにオーラを消費してる!)

キルアはナグタルの炎の弱点を見抜いた。

(あの炎だってオーラをガソリン代わりに燃やしてるんだ! ってことは、炎を出し続ける限りオーラは消費されていく!)

キルアは【凝】を使う。

そして、ナグタルの体を覆う【纏】が最初より薄くなっていることに気づく。

それにより自分の推測が間違っていないことを確信したキルアは、弾けるように走り出してナグタルの周囲を駆けまわる。

「はっ！　また攪乱かってんだよゴラア!!　んなもん、無駄だつてんだよゴラア!!」

ナグタルはイキりながら左腕を振り、熱風を放つ。

キルアは更にスピードを上げて、一瞬でナグタルの背後に回り込む。そして、ナグタルの左脇腹に左フックを叩き込む。

「があっ!?!」

「クリーンヒット!」

「づうあっ!!」

ナグタルは痛みに呻くも膝をつくこともなく、左裏拳を繰り出す。

キルアは後ろに跳び下がって距離を取る。

そして、もう一つ、ナグタルの能力の弱点を見つけたキルア。

(あいつの炎は一度熱風を放つと、また燃え上がるまでタイムラグがある！)

オーラを炎に変えて燃やし、さらに熱風などに変えて放つ以上、消費は【練】よりも激しいはずだ。

ならば、使えば使うほど燃料であるオーラは減るはず。

そう考えたキルアは再び駆け出して、ナグタルの周りを動き回る。

それを見ていたラミナはキルアがナグタルの能力の欠点に気づいたことを悟る。

「お。キルアの奴、ナグタルの弱点に気づいたみたいやな」

「弱点?」

「そ。ナグタルの能力は確かに上手いし、応用力も高いけどな。けど、あの能力はオーラの消費が激し過ぎるんや。特に炎なんざ普通の自然現象でも長時間維持出来へんやろ?　火は必ず油や炭、ガスとかの燃料がいる。燃料が無くなれば、当然火は消える」

「そっか。オーラが燃料だから、使えば使うほどオーラも減っちゃうのか」

「そういうこっちゃ。炎の特性を再現しとる以上、絶対消えん炎なんざ出来へん。あの能力は本来あんな初っ端から、しかもずっと使うモ

ンやないねん」

死によつて強まる念ならばまだ可能性があるが、今までの感じだとそこまで強まる性質ではない。

「恐らくは『発動は両腕のみ』。それと『興奮すればするほど熱量が上がる』つてのが制約やな。そうになると、あいつはオーラの絶対量がそこまで多くないんやろな」

「ふうん」

「まあ、一番アホな人は……」

「アホなのは？」

「炎が弱まるっちゆうことは、同時に【練】や【纏】も弱まるっちゆうことやな」

「あ」

その時、ナグタルの炎の勢いが弱まった。

それを見逃さなかったキルアは一気に間合いを詰めて、ナグタルにラッシュを仕掛ける。

「ぐう!？」

『ここで一気にキルア選手が攻め込んだー!!』

「このっ!」

ナグタルが歯を食いしばりながら両腕を突き出す。

その瞬間、キルアは屈んで足払いを繰り返す。

【散り燃える炎弾<sup>イラプション・ショット</sup>】を放つと同時に両足が宙に浮く。炎弾を放ったことによる推進力で、ナグタルは勢いよく後ろに吹き飛ぶ。

「ぐお!!」

ナグタルはリングを転がり、キルアは猛スピードで詰め寄ってナグタルの腹部に蹴りを叩き込む。

「ぶうえ!!? ぐっ! があ!!」

腹を押さえて、転がる勢いを利用して気合で立ち上がるナグタル。しかし、その目の前にはキルアがいた。

「っ!!? う、うらああ!!」

目を見開くも反射的に右ジャブを放つ。

しかし、その腕には炎はなく、【練】どころか【纏】も曖昧で、拳の



勢いもなかった。

「……ふん」

キルアは素早くナグタルの右肘の下に左手を添え、そして右手刀を上から右ガントレットに叩きつける。

ボギツ

鈍い音が響き、ナグタルの右ガントレットが凹み、右腕が歪に曲がる。

「がああああ!!」

「これで右腕は使えないぜ」

「クリティカル! キルア、プラス2ポイント!! 3-0!」

『な、なんとー!? ガントレットごとナグタル選手の腕を押し折ったー!!』

「づう! 右がなくても……まだ左があるってんだよゴラア!!」

ナグタルは目を大きく見開き血走らせながら、左腕に炎を纏わせて殴りかかる。

キルアは冷静に下がって躲し、ナグタルが左腕を引いた瞬間に間合いを詰めて、右側に回り込みながら【練】を使った状態で左フックを脇腹に叩き込む。

「げえっ!?!」

ただでさえ弱まっていた【纏】を破られてしまい、ナグタルは衝撃と激痛に動きが止まり、炎が解ける。

続けて、キルアは跳び上がって、ナグタルの顎に右脚を振り上げて突き刺した。

「つつっ!?!?」

ナグタルは一瞬意識が刈り取られ、大きく仰け反って後ろに吹き飛んで場外に落ちる。

「クリティカル!! アンド、ダウン!! キルア、プラス3ポイント!! 6-0!」

『これは重い一撃が入ったー!! これは決まったかー!!』

(確実に顎を砕いた感触もあったし、これで終わりだろ)

「ごぼっ! がはっ! ぐ……お……」

「!!」

キルアは勝利を確信していたが、なんとナグタルはふらつきながら体を起こした。

口から血を吐き、瞳を震わせながら呻き、足をガクガクと震わせながら、それでもゆつくりと立ち上がった。

『なんと、なんとー!? ナグタル選手、立ち上がった!! まだ戦う気だー!! しかし、その姿はもうボロボロです! リングまで戻れるのかー!?』

ナグタルは足を引きずりながら前に進む。

しかし、一步ごとに大きくふらつき、今にも倒れそうだった。

「……」

キルアはその姿に追撃を躊躇う。

これ以上の攻撃は本当に命の危険にかかわるからだ。

「……ま……ぢや……ぢや……。お、ちえっぢば……ま、ばま、でね

、ええええ!!」

顎が砕けて、まともな言葉にならないナグタルはそれでも叫びながら、キルアに向かって両腕を突き出す。

「!!」

「ぶつつぢよべええええ!!」

ナグタルの両腕から、これまでとは比にならない熱を放つ炎が噴き出す。

キルアは全力で【練】を発動し、全力で跳び上がる。

直後、ナグタルから巨大な炎が放たれる。

直径5mほどの赤い光線がキルアの真下を通り過ぎて、リングの壁に突き刺さる。喉が焼けると思う程の熱風が吹き荒れ、壁付近にいた観客達は顔などの皮膚が火傷して悲鳴を上げる。

キルアは観客席上の壁を蹴って方向転換し、ナグタルの背後に下りる。

炎が止まり、ナグタルはそのままうつ伏せに倒れる。

キルアは噴き出した汗を拭い、炎が直撃した場所を見る。

リングの壁は溶け、未だに赤く熱されている。

それだけで高熱だったことが窺え、キルアは「もし今のがもつと万全な状態で撃たれていたら、避けられたのか?」と思い、ゾツとする。「な、なんとも恐ろしい熱さでした……。これが直撃していたら、人は骨も残らないのではないのでしょうか……」

審判がナグタルに恐る恐る近づき、状態を確認する。

「……ナグタル選手、失神KOにより! 勝者、キルア選手!!」

『キルア選手、順調に2勝目ー!! そしてこの瞬間、ナグタル選手は残念ながら失格となってしまいましたー!』

キルアは担架で運ばれていくナグタルを見送る。

しかし、キルアには喜びも勝った実感もない。

(間違いなくアレを最初に使われていれば、俺は死んでた……)

体術で優れていても、アレは耐えられない。

今もまだ皮膚がヒリヒリと熱を浴びているような感覚に襲われている。

キルアは重い足取りでリングを後にする。

控室に戻ると、ゴンとラミナがそこにいた。

「キルア! 大丈夫?」

「……ああ」

「最後のは肝が冷えたやろ? いや、肝が燃やされたっちゆう方が正しいか?」

ラミナが苦笑しながら冗談を言う。

キルアは椅子に尻餅をつくように座り込み、ゴンから渡された水を飲む。

「……最後のあれも念、なんだよな?」

「そうやな」

「あいつの炎は使えば使うほど、オーラは減っていく。俺はそう考えた。これは?」

「合つとるで」

「なら、最後のあの炎はなんだ? あれは明らかにオーラの量がおかしかつたぜ」

「……恐らくは誓約の力やろう。あの土壇場で何かしら強く誓ったん

やろな」

「……誓約はオーラが足りなくても関係ないのか？」

「内容によるでな。ただし、大抵は命を落とすか、二度と念が使えんようになる。軽くても数年から数十年、オーラを使うことが出来んこともある。その代償が、あのドでかい一発や。あれがもつと万全な状態やったら、ホンマに危なかったなあ」

「……」

ラミナの言葉にキルアとゴンは真剣な顔で聞き入る。

それだけあの最後の一撃は2人に強烈な印象を残した。

「ええ機会やから言うとかわ。念の一番恐ろしい能力について」

「恐ろしい能力？」

「そうや。念にはな、死ぬことで強まる念が存在する」

「!!」

「多くの場合は恨み、未練などによるモンやけどな。死ぬことでその能力を残し、更には強くなることがあるんや。その場合、多くは恨みや未練の対象に襲い掛かる場合がほとんどやけどな。厄介なものは、どの能力が死んで強まるんかは本人すら分からへんつちゆうことや」

一番多い例は具現化系、特質系、操作系の3つである。

特質系は能力が多様過ぎる故に。具現化系は具現化された物体が残り続け、操作系は与えられた命令が消えない。

死の直前に、念にどのような思いを込めているかによって死後も残るかどうかが決まるので、本人すらも分からないのだ。

「やから、念能力者と戦う際は確実に戦闘不能にし、相手の念が消える事を確認するまでは油断したらあかん」

具現化系や操作系の場合は意識を失っても動き続ける場合もある。

だからこそ、経験を積んでいき、念能力を見極められるようにならなければならないのだ。

「ええ経験になったやろ？」

「……ああ」

「念って本当に色々あるんだね」

「まあ、うちも最後の攻撃は驚いたけどな。何年も念を使つとるうち

でも、初見の能力なんざようけある。やから、頑張って生き残れるように努力しいや」

「押忍！」

「もうええっちゆうに」

ラミナは呆れながら、2人を見る。

これでゴンとヒソカの試合を残すのみとなった。

## #26 ケツチャク×ソシテ×モドリマス

キルアとナグタルの試合から1か月後の5月28日。

いよいよゴンとヒソカの試合となった。

【堅】「くらいは出来るようになったんか？」

「戦いながらだとまだ10分くらいかな。維持するだけなら30分くらい」

「まあ、そんなもんか」

と言っても、まだ【周】【硬】【流】【伸】などが残っているので、戦いながらも【堅】を30分以上当たり前に維持出来なければお話にならない。

特にゴンは強化系なので、四五行と応用技が戦いの基本戦法となるはずだ。

なので、ゴンに関しては1時間維持出来て合格と言えるだろう。

(ウボオーほどではないけど体も強靱やし、ゴンはウボオーを見習わせればええんやろうけどなあ。普段のウボオーはともかく殺し慣れとるところがゴンとは絶対的に合わんやろおなあ)

パワーと頑丈さにおいては旅団では追隨を許さないウボオーギン。シンプルな殴り合いが好きで、能力もシンプル故にその破壊力も恐ろしい。

余計な事を考えないでいいので、ゴンにも向いていると考えられる。

しかし、ウボオーの殺しを厭わない性格は、ゴンとは合わないだろうとも思う。

(といっても、うちもゴンの殺しを受け入れるラインがはっきり分かんやけどなあ)

ゴンの物事を受け入れる基準が未だによく分からない。

だからこそ、旅団に関わらせる気も、今後必要以上に関わる気もラミナにはない。

(さて、ヒソカはこの試合でどうゴンを判断するか……)

恐らく今のゴンではまだ見限るようなことはないはずだ。

能力も決めてないのだから、まだまだ成長の余地はある。

『ヒソカ選手 VS ゴン選手!! いやいよ注目の一戦が始まろうとしております!』

司会の声にラミナはリングに意識を戻す。

ゴンとヒソカは同時に現れ、ゆっくりとリングを指す。

『ゴン選手は未だ1戦1勝のみですが、師匠であるラミナ選手、同じ弟子であるキルア選手の活躍を見る限り波に乗っているのは間違いありません!』

ゴンは鋭い顔でリングに上がる。

その反対側からは、ヒソカがいつも通りの不敵な笑みを浮かべてリングに上がる。

『対するヒソカ選手は現在9勝3敗!! 勝てばフロアマスター、負ければ一転地上落ち!! まさに分け目の勝負!! しかし、リングに上がれば未だ負けなし!! 無敗神話は続くのかー!?!』

司会の言葉に観客のボルテージは嫌でも上がる。

そして、ゴンとヒソカは足を止めて向かい合う。

ゴンはまっすぐにヒソカを見て、緊張しているどころか薄く笑みを浮かべている。

(ああ……… ♣ そんな目で見るなよ ♠ 興奮しちゃうじゃないか………  
♡)

ヒソカはゴンのその表情と充滿している【纏】を目にして、興奮が高まり下半身が疼く。

その興奮を表すようにヒソカのオーラが禍々しくうねる。

(うわぁ………キモオ………)

ラミナは興奮しているヒソカの様子にドン引きする。

審判が2人に近づき、手を上げる。

「ポイント&KO制!! 時間無制限、一本勝負!!」

審判の宣言と同時にゴンが構える。

会場が一気に緊張感に包まれて、歓声が止み、息を呑む。

「始め!!!」

「ふ!!!」

開始と同時にゴンが飛び掛かり、ヒソカの顔面目掛けて右ストレートを振り抜く。

ヒソカはそれを難なく躲し、がら空きの背中に肘を叩きつける。ゴンは地面に両手をつけて着地し、すぐに跳び上がってヒソカの顔面目掛けてラツシユを繰り出す。

ヒソカはそれを顔と上半身を傾けるだけで躲し、ゴンの顔に左掌底を突き出す。ゴンは慌てて体を傾けて避けようとすると、ヒソカの左脚が鋭く振り上がりゴンの脇腹を蹴り上げる。

ゴンは空中で逆さまになるも、手を下に伸ばして落下を防ぐ。そして、ヒソカの右側に素早く回り込んで、また跳び上がって殴りかかる。

「……なんで顔面ばつか狙つとんねん」

「そりや、一番の目的がヒソカに顔面パンチを叩き込むことだからだろ」

「……ゴンには体術も教えなあかんかったか……」

ラミナは右手で顔を覆って項垂れる。

これでもし、ヒソカの顔面を殴れずに負けたらどうする気なのか。まさかここで10勝してフロアマスターになったヒソカに挑戦する気なのかと不安になってきたラミナ。

（しもた……。身体能力高いから、戦い慣れとるもんやと思つとつた……。よう考えたらゴンがガチンコで戦つとるところ見た事ないわ。まさか格上の人間相手と戦い慣れてないとは……）

なまじ身体能力が高く、『試しの門』で筋力も上がったことから、そこからへんの連中では相手にならなかつたことの弊害がここで露出した。

キルアと仲が良いこともあり、ラミナはどこかでゴンも戦い慣れていると思ひ込んでいたのだ。

ラミナが項垂れていることも知らず、ゴンはヒソカの顔面を狙い続ける。

しかし、全て躲されて攻撃直後の隙を突かれて、ヒソカは涼しい顔でゴンの脇腹に掌底を叩き込む。

「ぐぎっ」



ゴンは顔を顰めて脇腹を押さえるも、すぐにまた殴りかかる。

しかし、やはり全て見切られてしまい、腕を引いた瞬間、顔面に肘を叩きつけられる。

ゴンは後ろに倒れながら右脚を振り上げるが、ヒソカは肘打ちを放った体勢のまま蹴りを防ぐ。そして右拳を動かした瞬間、ゴンは空中で回転して距離を取る。

そして、また飛び掛かりラツシユを繰り出す、全てヒソカの両手でいなされる。

ヒソカはいなした瞬間、鋭く左ジャブを繰り出し、ゴンは後ろに吹き飛ばされるもギリギリで腕でガードしていた。

またゴンが正面から飛び掛かり、今度はヒソカがラツシユを繰り出す。ゴンも全て見切って躲すが、最後に目の前でヒソカの右拳が止まり、ゴンも思わず動きを止めてしまう。その瞬間、ヒソカの左拳がゴンの頬に叩き込まれ、ゴンは頭を仰げ反りながら後ろに下がるも踏ん張って倒れるのを防ぐ。

ヒソカは余裕の表情で左手をクイクイと動かして、もつと来いと手招きをする。

「クリーンヒット!! 1ポイント、ヒソカ!!」

審判が宣言した瞬間、観客席から歓声が轟く。

『す、凄まじい攻防です！ 実況を挟む隙さえありませんでしたー!!』  
「【堅】とか念以前の問題やな。もうちよつとフェイントとか脚やら腹やら狙う場所考えんかい」

ラミナはゴンの素直さに呆れるしかなかった。

それでもゴンの並外れた身体能力による攻撃は見事だとは思いう。空中にいて攻撃を躲したり、あの体勢から蹴りを放ったのは見事の一言だ。

しかし、その身体能力を活かした攻撃が出来ていない。直感と本能故に時折意外な攻撃が出ているが、それ以外はまさしく素人拳法だ。

現段階ではヒソカの顔面を殴るなど、夢物語である。

「けど、ヒソカもそれを自覚してるからこそ油断してる。そこに付ける隙はある。それにゴンなら今のでフェイントを使うのがいいこ

とくらしい気づいたさ」

「まあ、そうやろうけどなあ……」

キルアの言葉にラミナは頷くも、付け焼刃のフェイントがヒソカに届くとは思えなかった。

それに何より、

「ヒソカはまだ自分から動いてへんしなあ。そこから本番やと思うで？」

「まあ……なあ……」

ラミナの言う通り、ヒソカは開始位置から動いていない。それに全てゴンが攻撃を仕掛けてきてから対応しているので、まだヒソカは遊んでいるだけなのだ。「バンジーガム」もまだ使っていない。

確かにそれは隙ではあるのだが、ゴンの動きが変わればヒソカもそれに合わせた動きに変わるだろう。

なので、次の初手が最後の好機だと言える。

【堅】のおかげでまだダメージは少ないけど、まずヒソカは本気で殴ってへん。それにフェイントまで組み込むとなると、【堅】を維持する集中力はそう続かんやろな。能力もまだ使ってへんし、長引けば長引くほど不利か……)

ゴンが再びヒソカに殴りかかる。

殴りかかる直前で拳を止めて、動き回りヒソカを翻弄しようとする。時々牽制的な攻撃を繰り返して、早速フェイントを組み合わせる。

すると、ゴンは大きく横に跳んで距離を取る。

「!?」

流星のヒソカも警戒の色を見せて、注意深く見つめる。

ゴンはヒソカの立っている場所のすぐ傍の石板の隙間に両手を刺し込む。

「だっ!!!」

ゴンはリングの石板をひっぺ返し、ヒソカの前に壁のように立てる。

『なんとリングの石板をひっくり返したー!? 何をする気だー!?』

「おおりやああ!!」

ゴンは石板に跳び蹴りを叩き込み、石板を砕く。

石板は大小の石礫となり、ヒソカへと襲い掛かる。

「ほお……」

ラミナは目を見開いて、感心の声を上げる。

ヒソカが礫を両腕で砕いていく。

ゴンは「絶」を使い気配を消して巨大な礫の陰に身を隠し、ヒソカはゴンを見失う。

そして、ヒソカが見失っているのを確認した瞬間、勢いよく石板の陰から飛び出し、ヒソカが反応する前に右ストレートを繰り出して、ヒソカの頬に叩き込んだ。

「クリティカル!! 2ポインツ!! ゴン!!」

『遂にゴン選手の一撃が突き刺さったー!! 更にクリティカルの判定!! これで2ー1でゴン選手が逆転しましたー!!』

ゴンのクリティカルに観客が一気に沸き立つ。

キルアも思わず拳を握り締めて「よしっ!」と叫び、ラミナも純粹に称賛する。

(けど、これでヒソカもスイッチ入ったんちゃうか?)

ヒソカは倒れることも開始場所から動くこともなかった。

ゆっくりと背筋を伸ばし、ゴンに向かって歩き出す。そしてゴンも歩み寄って、至近距離で向かい合う。

その行動に観客達は首を傾げてどよめく。

それを無視して、ゴンは上着のポケットからナンバープレートを取り出し、ヒソカに突き出す。

ヒソカもプレートを受け取り、手品のように仕舞う。

そして、同時に距離を取って構え直す。

『今のは一体何だったんだー!?!』

「これで目的は達成やな」

「ああ。後は勝負をつけるだけだな」

最低条件はクリアしたことにホッとするラミナ。

これでラミナが解放されることは確定した。

ヒソカがゴンに訊ねる。

「念について……どこまで習った？」

「？ 基礎全部と【堅】に【円】まで」

「そう ◆ 君、強化系だろ？」

「えっ?!? なんで分かるの!?!」

「くくく、君は可愛いなあ ♥ 駄目だよ、そんな簡単にバラしちや ♣」  
「む。うるさいなく。なんで分かったのさ」

「血液型性格判断と同じで根拠はないけどね ♠ 僕が考えたオーラ別性格判断さ ♥」

ヒソカはビシッ!とゴンを指差す。

その時、さりげなく「バンジーガム」を飛ばしてゴンの左頬に張り付けたのをラミナは見ていたが、ゴンは気づいていない。

「強化系は単純一途 ♥!!」

(合ってる……)

(合つとる……)

キルアとラミナは物凄く納得する。

「ちなみに僕は変化系 ◆ 気まぐれで嘘つき ♠」

(合ってる……!!)

(合つとるなあ……)

これにもゴン達は納得する。

もちろんラミナの頭の中にはマチ、ウボオーギン、ノブナガの姿が浮かんでいた。

「それと具現化系は神経質 ♣ ラミナが確かそうだっただろ？」

(合ってる……!!!)

(うっさいわ)

ラミナは特質系も持っているので実際は違うが。それでも納得出来る部分がある。

「くくく…… ◆ 僕達は相性がいいよ？ 性格が正反対で惹かれ合う ♥ とっても仲良しになれるかも ♣ だけど、注意しないと変化系は気まぐれだから、大事なものがあつという間にゴミに変わる ♠ だから……」

ヒソカの雰囲気が一層に禍々しくなる。

ゴンは顔を引き締めて、警戒する。

「僕を失望させるなよ、ゴン♠」

そう言った直後、ヒソカが猛スピードで飛び出す。

「!!」

ゴンは目を見開くが、避ける暇もなくヒソカの左肘が頬に突き刺さり、吹き飛ばされる。

ヒソカは両脚にオーラを一瞬集中させて勢いよく飛び出し、一瞬でゴンの背後へと移動する。そして、ゴンの背中に掌底を叩き込んで、反対側に吹き飛ばす。

「がっ!?!」

ゴンはリングを転がり、なんとか両手をついて場外を防ぐが、すでに目の前にヒソカが迫っていた。

何とか横に跳ぶゴン。

そこにヒソカの蹴りが振り抜かれ、石板を引っぺがして観客席まで蹴り飛ばした。

「!?!」

『け、蹴りで石板を観客席まで蹴り飛ばしたー!? なんとというキックカー!!』

ヒソカはすぐさまゴンとの間合いを詰める。

ゴンは逃げようとするが、すぐにヒソカに追いつかれてしまい、ヒソカに地面に叩きつけられる。

「ぐっ!」

「クリティカル!! ヒソカ!! プラス、ポイント! 3―2!!」

ゴンはすぐさま起き上がるも、圧倒的な連撃にクリティカルの判定が出る。

「ゴン……! くそっ!」

「流石にもう無理やな。【堅】も続かなくなったし、【バンジーガム】もすでに付けられてしまった」

「なっ!?! つ!! ゴン!! 【凝】だ!!」

「っ!?! しまっ……!!」

ゴンはキルアの声が聞こえて、「凝」を使う。  
ヒソカの左手から、ゴンの左頬にオーラが伸びているのが目に入る。

「くく……◆ 最初は【凝】を使ってたのにねえ♣ 油断大敵だよ♥」  
「ぐ……！」

「くそっ……！ いつの間に……」  
「性格判断でゴンを指差した時や。そら、あんなだけポケエつとしたり誰かて使うわな」

キルアも【凝】が出来ていなかったことに半ば呆れながら、ラミナは言う。

ヒソカの【バンジーガム】の注意点はしっかりと伝えていた。

なのに、少し会話するだけで【凝】を忘れるなど油断が過ぎる。カストロの時だって、会話中に付けられていたというのに。

（まあ、もつともあれだけ一方的にボコられたり、真正面から挑み続ければ、いつでも【バンジーガム】を付けられたと思うけどな）

【バンジーガム】の恐ろしさは能力の防ぎにくさにある。

いつでも発動できるし、殴り合い中でも貼り付けられる。

攻撃を全て避けるだけでも非常に難しいが、ヒソカはオーラを飛ばせるので躲されても貼り付けることは可能だと考える。

故に【バンジーガム】を避けるには、ヒソカが捉えられない速さで動き回るか、念を無効化する能力が必要なのだ。

（うちは【月の眼】があるし、最悪具現化した武器を身代わりに出来るけど。それも長いことは出来へん。まあ、相手のオーラを斬る武器もあるけどな……）

ラミナはその能力故に様々な手段があるが、それでもあまり明かしたい手段ではない。

なので、ヒソカと戦う時は短期決戦でなければならぬ。

（……問題はもう1個の能力。【ドッキリテクスチャー】か。あれがマチ姉が知っただけの能力とは限らん。まあ、【バンジーガム】もそうやけど……。厄介なやつちゃで……）

ラミナはヒソカを殺す時の事を考えて顔を顰める。

ヒソカは素の戦闘能力も旅団の中では上位に入るだろう。先ほどの動きもまだ本気とは言い難い感じだった。

確実に殺すにはかなりの賭けが必要だとラミナは判断した。

「さて……もう何が起きるか、分かるよね？」

ヒソカが左手を引く。

ゴンは腰を据えて耐えようとするが、全く堪え切れずに体が持ち上げられて引っ張られてしまう。

『お〜つと!? ゴン選手がヒソカ選手に引き寄せられるように飛んで行くー!!』

ヒソカは左手を引きながら、右腕も引いて拳を構える。

そして、思い切り踏み込んで、ゴンの右頬に拳を叩き込んだ。

ゴンは防御も出来ずに、体が跳ね上がるほどのパワーで地面に叩きつけられる。

「よく伸び、よく縮む。つけるも剥がすも僕の意味 ♣ もう逃げられないよ ♡」

「クリティカル、アールドダウン!! プラス、3ポイント!! ヒソカ!!

6-2!!」

「スタンダ〜ップ ♡ ゴオ〜〜ン ♡」

ヒソカはオーラが伸びる指を見せつけるようにしながら、立ち上がる様に言う。

ゴンは歯を食いしばりながら立ち上がるも、ふらついてしまう。

（ぐう……! ちゃんとずっと【凝】を使っておけば……!）

「1つ、忠告しておこう ♢ 君が【凝】を使い続けていれば、今回に關しては避けることが出来ただろう ♣ だが、もし殴られた時だったら？」

「っ!」

「僕は直接攻撃の時でも【バンジーガム】を付けることが出来る ♣

【隠】を使うのは相手が油断している時だけ ♣ 普通は相手を殴った時についてに付ける ♡ 殴る時ならオーラが見えていようがいまいが関係ないだろ？」

「ぐう……!」

ゴンは歯を食いしばる。

(ラミナの特訓が、如何に実践的だったのかよく分かる……！ 今の俺じゃ【凝】に【堅】を使いながら、ヒソカの攻撃なんて避け切れない！……ならー！)

「それじゃ、そろそろ戦闘再か——」

ヒソカがそう言った瞬間、ゴンが勢いよく飛び出してヒソカに迫る。

(逃げられないなら、向かうまでだ!!)

ヒソカはゴンの覚悟を決めた顔を見て、ゾクリと興奮が走る。

(ああ……いい！ いいよお、ゴン！ その瞳、その表情、その心意気!! ああ……今すぐ君を……壊したい……♡)

思わず舌なめずりするヒソカを見て、ゴンは目の前の人間が、悪魔か何かに見えて背筋に過去最大級の怖気が走る。

「うわああああ!!」

ゴンは恐怖とヒソカの表情を打ち払うかのように、拳を振るう。

ヒソカは一切防御もせずに殴られ、ゴンはそこに疑問を持つ余裕もなく、ただただラツシュを繰り返す。

(……何しとるんや？ ヒソカの奴……)

ラミナはヒソカの奇行と謎の歓喜の表情を訝しむ。

ヒソカは何十発も顔面を殴られる。

しかし、ゴンは全力で拳を叩き込んでいるのに、ヒソカは顔を仰げ反るだけで吹き飛ぶどころか倒れもしない。

(……【練】だけで耐えとるな。それに足元を【バンジーガム】で固めとるんか？ いや……使うてないか)

ゴンはもはやダメージもあり、【練】が維持出来ていない。それでもゴンの拳はかなりの威力の筈だ。

その拳をヒソカは【練】と素の身体能力だけで耐えている。

その時、ヒソカが殴られながら左手を引いて、【バンジーガム】を縮める。

ゴンは空中にいたため堪え切れずに引き寄せられる。

ヒソカはその瞬間左拳を前に出し、更にオーラを集中させる。それ



によって僅かな動きでもかなりの威力になり、ゴンは大きく仰け反る。

更にヒソカは左腕を引いてゴンを引き寄せる。そして、叩きつけるように右拳を振り下ろす。

「がぎっ！」

ゴンは再び地面に叩きつけられる。

何とかガードして、すぐに起き上がって距離を取る。

しかし、

「両者クリティカル!! 2ポイント! アンドダウン!! プラス、1ポイント!! ヒソカ!! 9-4!!」

「え!?!」

ゴンは審判の判定に目を見開いて驚いて、ヒソカから目を外す。

「ダウンじゃないよ! すぐ起き——!!」

「こんボケェ!! 相手から目え逸らすなやあ!!!」

「!!?」

ラミナの怒号が轟き、ゴンは弾かれるようにヒソカに目を向ける。

その直後、ゴンの左頬に衝撃が走った。

目を向けると、それはゴンが砕いた石板の礫だった。

「!!?」

「くくく♥ 君が審判に文句を言った瞬間に、左手のオーラを石へ投げ付けた♣ そして、すかさず縮むように発動したのさ♥ ラミナの言う通り、あの状況で目を逸らしたのは致命的だよ、ゴン◆」

「くっ!!」

ゴンは素早く起き上がる。

しかし、

「クリーンヒットオ!! アンドダウン!! プラス、2ポイント!!」

審判が判定を下した。

それはつまり、

「1-4!! TKOにより勝者、ヒソカ!!」

審判がヒソカの勝利を宣言する。

ヒソカは背を向けて歩き出し、ゴンは唾然とする。

「え!? これで終わり……?」

「大した成長だ♣ でもまだまだ実戦不足♠ あと10回くらいやればいい勝負が出来るかもね♦ 天空闘技場であれば、だけどね♥ だからもう、ここでは君とは戦わない♠ 次はルール無しの真剣勝負でやろう♣ 命を懸けて♠」

そう言つて、ヒソカはリングを去っていく。

ゴンはヒソカの言葉を聞いて、拳を握り締める。

まだまだヒソカとの差を実感し、それと同じくらい自分が成長出来る事も実感した。

(もつと念を鍛えて、ヒソカに敗けない能力を見つけるぞ!!)

そう誓いながらゴンも控室に戻った瞬間、

ガシツ!!

と、ラミナのアイアンクローがゴンの顔に襲い掛かった。

「イダダダダダ!!」

「こんのド阿呆……!! あんだけやられて、なに注意逸らして【凝】もサボツとんねん……!!」

「ゴ、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ!!」

「カストロの試合で、勝負中のヒソカのおしやべりは罨やつて分かつとつたやろが!! 何、普通におしやべりに付き合つとんねん!! それに引つ張られて堪え切れんのやったら、顔目掛けて跳ぶなやヘタクソ!! ピョンピョンピョンピョン、一つ覚えみたいに顔しか狙わへんとか犬かお前は!! それにあんだけ顔殴るんやったら、せめて顎殴つて脳震盪くらいさせえや!! なに真面目に頬だけサンドバッグにしとんねん!!」

「うー……!!」

「うちの特訓の半分も出来てへんかったやないか! お前なんぞ単純一途どころか単純ド馬鹿で十分や!! 世の中の強化系に土下座せい!!」

「まあまあ、もうそこまでにしとけよ」

ゴンの手足のバタバタが激しくなってきた頃合いを見て、キルアが止めに入る。

ラミナは盛大に顔を顰めて、片手でゴンを控室の長椅子に放り投げる。

「ぎゅうー！」

「褒められるんは石板の一撃だけやな。それ以外は赤点っちゅうかまともに攻撃当てれたんそれだけやな。ルールがなかったら死んどつたし、うちやったら殺しとるわ」

「……うう」

「……はあー。とりあえず、うちの役目はこれでおしまい。後は好きにせえ。うちは明日、ここを出る」

「え!?! 明日!?!」

「当たり前やろ。もうここに用事ないでな。お前らかて、ここにおける理由ないやろ? まあ、念能力者と戦いたいんなら、それはそれでええけど」

「ん〜……」

ラミナの言葉にゴンは腕を組んで悩まし気に唸る。

キルアも頭の後ろで手を組んで、眉間に皺を寄せる。

「どつちにしろ、元々うちの仕事はお前らに念を教えるところまで。これ以上お前らの面倒見る気はないでな。それでも残るんなら、今後はウイングにでも指導受けたらええんちゃうか? うちには次の仕事に向かう」

「そつか……。じゃあ、次はヨークシンだね」

「それは仕事次第や。やから、うちは会えるとは約束出来ん」

会えたとしても、その時は望んでいない形になる可能性が高い。

だから、約束はしない。

「ほなな、頑張つて強うなりや。次はハンターの同僚として会うかもしれんし、敵同士かもしれん。その時は、うちに殺されんようにしいや」

「ラミナと殺し合いなんてしたくないよ」

「それは仕事次第や。嫌なら、しつかり仕事は選びや。キルアもあん

ま無茶せんようにな。お前になんかあったら、うちもゾルディックに狙われるんやからな」

「わあつてるよ。そっちこそ、これ以上ハマすんなよな」

「うっさいわ」

「??」

ゴンは2人のやり取りに首を傾げる。

それをラミナは無視して、今度こそ控室を出る。

ラミナはそのまま部屋に戻らず、飛行場へ向かう。

「ようやつと、か……。まあ、無抵抗に殺すことになるよりは、まだマシか……」

足を止めて、天空闘技場を振り返る。

数秒、天空闘技場を見上げたラミナは、小さく息を吐いて前を向く。

そして、携帯を取り出して、電話をかける。

「……………リッパーや。…………ちよつと私用で手が空かんでな。…………あ

あ、今日から復帰する。天空闘技場からヨークシンの間で簡単な仕事1つないか? ……了解や。これから向かう」

電話を切って、携帯を仕舞う。

「さて…………感覚、取り戻さんとなあ」

そう呟くラミナの顔からは感情が抜け落ちており、暗殺者の顔に戻っていた。

【リッパー】は再び社会の裏側へと、舞い戻るのだった。

## #27 ヒサシブリ×ノ×オシゴト

3日後。

ラミナはサヘルタ合衆国の「ゼルンロサスシティ」にやってきていた。

ゼルンロサスシティは、ヨークシンシティの反対側にある街。

ヨークシンシティと同規模の街で、ゼルンロサスは映画やゲーム、アニメなどのエンターテインメント系企業が集結した観光名所である。

「やて……」

サングラスをかけたラミナは中心街に出て、デツキカフェへと足を向ける。

そこは斡旋所から指定されたカフェで、デツキの席に座ってコーヒーを注文する。

コーヒーを飲んでいると、真後ろの席にハットを被ったスーツの男が座る。

ハットを脱いだ時に、ハットが手から滑り落ちてラミナの足元に落ちる。

「ああ、すみません」

「構へんよ」

ラミナはハットを拾い、男に手渡す。

「ありがとうございます」

男は礼を言つて、テーブルにハットを置く。

コーヒーを飲み終えたラミナは代金とチップを置いて、席を立って店を出る。

しばらく街をぶらついたラミナは、ポケットからメモ用紙を取り出す。

そこには『221-3098-5172』と書かれていた。

数字を覚えたラミナはメモ用紙を破り捨てて、ネットカフェに入る。

あるサイトを開いたラミナは覚えていた数字を打ち込むと、画面に

人の顔写真と名前や経歴が記載されていた。

この人物が今回のターゲットだ。

先ほどのハットを落とした男は、今回仕事を斡旋して貰った仲介所の職員でハットの内側にあのメモ用紙を挟んでいたのだ。

そのメモに書かれた合言葉を仲介所の裏職員が管理しているサイトに打ち込むと、ターゲットの資料を一度だけ確認できる仕組みになっている。

普通の暗殺者なら変装して会うのが普通だが、ラミナは見た目が派手なので、逆に素の姿が変装と思われる傾向にある。なので、ラミナは特に変装はしない。

「……マフィアンコミュニティに喧嘩売ったんか……。アホやなあ」

今回のターゲットは新参マフィア『キタカバファミリー』の若頭。

現在の主な収入源は、賭博と幻獣や希少生物の密輸。

資料によると、どうやら十老頭を批判して新たなマフィアンコミュニティの立ち上げを目論んでいるらしい。

それを裏で隠れて進めるのではなく、堂々と公言して色んなマフィアファミリーに声を掛け回っているようだ。そんなことをして、十老頭が怒らないわけがない。

しかし『新参者に自ら手を下すのも馬鹿らしい。だから、外部の暗殺者に頼む』ということになったらしい。

「……新参モンなら、そこまで強い奴はおらんか。さつさと済ませよか」

顔、名前、住所などを確認したラミナはネットカフェを出て、また別のネットカフェに入る。

次に使うのはハンターサイト。キタカバファミリーの情報を探し、構成員リストや所有しているビル、夜に滞在している屋敷などを確認していく。

中にはなんと屋敷の見取り図まであり、ハンター達の情報量にラミナは関心を通り越して呆れてしまった。

「構成員は233人か……。ん？」

構成員リストの中に用心棒の項目があり、2人ほど名前が記されていた。

その内、1人が念能力者との情報が記載されている。

写真の見た目はハンター試験にいたボドロと同年代の老練な男。情報によると若頭の親の代から用心棒をしているらしい。

「ふうくん……」

情報を確認したラミナは所有しているビルや屋敷の情報を印刷して、ネットカフェを後にする。

そして、夜になるまで時間を潰すことにした。

夜。

ターゲットがいる屋敷を確認したラミナは、サングラスをして黒の手袋を両手に嵌める。

ラミナは短刀とブロードソードを具現化し、短刀の能力で姿を消して屋敷の敷地内に潜入する。

屋敷の入り口には見張り数人がおり、庭やすぐそばの道路は監視カメラで見張っているようだった。

裏口近くにいた見張りの喉をブロードソードで素早く掻っ切つて殺し、再び姿を消して屋敷の中に入る。

屋敷内は監視カメラはないようだが、それでも構成員が頻繁に見回りを行っていた。

(……随分と警戒しとるな。こら、これまでも何回か暗殺されかけとるな)

ラミナは細心の注意を払いながら、ターゲットを探す。

この屋敷の見取り図は頭に入っているが、今現在どの部屋にいるかは分からない。また屋敷の見取り図もどこまで正確なのか不明ということもある。

それにここまで嚴重なら、用心棒の2人はターゲットの傍から離れることはまずないだろう。

念能力者もいるので、能力による待ち構えや【円】を使ってくる可能性もある。なので【凝】を使いながら2階に進む。

その時、ラミナのすぐ横の壁から槍が突き出してきた。  
ラミナは仰け反って躲し、後ろに跳び下がる。

(ふむ? 【朧霞】は問題なく発動した。やのに、的確にうちを狙ってきたな……)

そう考えていると、壁が蹴り破られる。

その穴から白髪オールバックに白口髭を生やし、茶色のシンプルな軍服を着た男が現れた。

80歳くらいに見えるが、その出で立ちはまだまだ力強く覇気がある。纏う【纏】は静かだが力強く、それだけでも老練さが窺える。

男は鋭い瞳で周囲を見渡す。

(……見えてへん、か。けど、勘っちゅう感じでもない)

ラミナがそう判断してゆっくりと離れようとしたが、男の【纏】が一瞬で広がってラミナをその範囲に捉える。

「そこかあ!!」

「ちい!」

【円】でラミナの位置を把握した男が、素早く握っていた槍を突き出す。

ラミナは舌打ちをして躲しながら短刀を消し、姿を見せる。

「……小娘ではないか。貴様のような者が暗殺者とはな」

「……護衛筆頭のロウ・ファンエンやな?」

「いかにも」

ロウは槍を構えながら頷く。

ラミナを小娘と嘲りながらも、その目には一切油断の色はなく、構えにも隙が無い。

「よううちの事が分かったなあ。姿も見えへんし、音も出してへんのやけど」

「この屋敷の調度品の中に、念で具現化した物を紛れ込ませておる。それは【円】の役割を果たし、姿を隠していても見破ることが出来る」

「……なるほどなあ。それがもう1人の護衛の能力か」

「……隠すだけ無駄か。その通りだ」

ロウは僅かに眉間に皺を寄せて頷く。



直後、勢いよくラミナに迫り、槍を突き出す。ラミナは半身になつて躲し、【シルフィード・シックル一瞬の鎌鼬】を発動する。

ロウは素早く後ろに下がり、高速の斬撃を頬や腕を掠る程度で躲す。

その動きを見たラミナは左手にレイピアを具現化する。

「具現化系か！」

「しいー！」

ラミナは素早くレイピアを突き出して、【ピアス・ピョク啄木鳥の啄ばみ】を発動する。

ロウは後ろではなく右に移動して躲すも、左肩に小さな風穴が空く。

「ぐっ！ はあっ!!」

「おつとお」

ロウは槍先にオーラを集中させ、右手の中で槍を回転させながら片腕で勢いよく突き出す。

ラミナは大きく後ろに跳んで躲す。

（反応もええし、【硬】も早い。片腕だけでも槍のスピードは速い。かなりのやり手やな）

恐らくは強化系の使い手だろうとラミナは予想する。

【堅】【周】【流】【硬】のオーラの流れがスムーズで、見事に尽きる。下手な能力など考えず、ただひたすらに基礎と応用だけを鍛えてきたのだろう。

すでにそれだけでも十分な能力だと言える。

「まあ、常人の範囲で……やけどな」

「なに？」

「いや、何でもないわ」

ラミナは肩を竦めながら、右手のブロードソードをファルクス剣に変える。

「……一体いくつの武器を具現化できるのだ？」

「知る必要はないやろ。もう死ぬんやし」

ラミナは一瞬【円】を発動する。

ロウは距離を取ろうと後ろに下がるが、それは悪手だった。

【クレイジー・ローズ狂い咲く紅薔薇】

ラミナがフアルクスを横振りする。

ロウはそれを訝しんだ直後、腹部と右肩に激痛が走り、口から血が噴き出す。

「がふっ!! な……なん……だと……!?!」

ロウは目を見開いて片膝をつきながら、激痛が走った個所に目を向ける。

腹部からは大量の血が噴き出して、内臓も飛び出していた。そして右腕は肩から先が無く、下に目を向けると槍を握っている右腕が床に転がっていた。

「腹と右腕か。すまんなあ。痛い思いさしてしもて」

ラミナは不憫そうにロウを見ながら、軽く謝罪する。

【クレイジー・ローズ】は斬る個所を指定できない。なので、ロウのように即死で殺せない場合がある。さらにはロウの力強い【堅】で威力がある程度落ちたことも、即死させられなかった原因の1つである。

「さいなら」

「っ!!?」

ラミナは別れの言葉を言いながら、レイピアを突き出して【ピアス・ビーク】を発動する。

ロウの額に風穴が空いて、ロウは大きく目を見開きながら後ろに倒れて息絶える。

ラミナは小さく息を吐いて、ロウが出てきた壁の中に足を踏み入れる。

中は書齋のようで大量の本が本棚に並べられている。執務机の上には書類が散在しており、そのことから先ほどまでターゲットがここにいたことが窺える。

開け放たれているドアに目を向け、ため息を吐きながら【円】を発動する。

「……表に飛び出そうとするのが2人。ここに向かっとするのが12

人……」

前者が恐らくターゲットと残った護衛。後者は捨て駒にされた下っ端。

ラミナは再び小さくため息を吐いて、ファルクスを振る。

『ぎゃあああ!?!』

廊下から悲鳴が上がる。

ラミナは駆け出して廊下に飛び出し、道中倒れている構成員を無視して1階の正面玄関を目指す。

正面玄関直前で倒れている人影を発見して、足を止める。

それは首と胴体が離れている男の死体で、その傍には砕けた土偶が転がっていた。

「……ちっ、護衛の方が。……どうやって、うちの「クレイジー・ローズ」から逃げたんや？ この土偶か？」

「クレイジー・ローズ」は【円】の範囲に捉えた者全てを斬り裂く。ターゲットも捉えていたはずなので、ターゲットもどこかが斬られたはずだった。しかし、この死んだ護衛以外の死体は近くにはなく、血も男のもの以外は見当たらない。

「こいつの具現化したモンは、特定の人物の身代わりにもなるっちゆうところか。自分には適応されんのか、1人だけで精一杯やったんか……。身代わりの能力は放出系に属するから、1人が限界と考えるべきか」

ラミナの【妖精の悪戯<sup>チエンジリソグ</sup>】もオーラで結んだものしか入れ替えられない。い。

人の傷を入れ替える程になると、1人出来ただけでも見事なものだ。

「あ……くそっ！ こら、逃げられたか？」

ラミナは顔を顰めながら、玄関へと向かう。

無駄かもしれないが車のタイヤ痕でもあれば、まだ追うことが出来るかもしれない。

しかし、

『た、頼む!! 命だけは助けてくれえ!! もう十老頭には逆らわねえ

!!

『だから、俺達は十老頭の刺客じゃねえ。ハンターだつて言つてんだろうが!!』

『とつとと密猟した動物達の居場所を教えやがれ!!』

「あ?」

なにやら表が騒がしい。

ラミナはファルクスを消して、短刀を具現化して【隴霞】を発動する。

姿を消したラミナは出来る限り音と気配を消して、表を覗き込む。

そこにはサングラスをかけて大きな煙管を担いだ男とリーゼントに白の長ランを着た男が、尻餅をついた若頭に詰め寄っていた。

(……同業者やなさそうやなあ。さて、どうするか……)

【纏】を使っているの、念能力者であることは分かっている。

能力も分からないので、下手に姿を晒したくはない。しかし、このままターゲットが捕まっても困る。下手な情報が漏れて、ラミナの責任にされても困る。

「俺はシングルハンターのモラウだ。こっちはビーストハンターのナツクル。お前が密猟した動物達を救出に来た! お前が大人しく動物達を返すなら、命は助けてやるぜ?」

モラウが親指で自分を指しながら言い、ニカッ!と男気のある笑みを浮かべる。

「わ、分かった! 全部返すし、全部話す! だ、だから俺を守つてくれ!!」

「よし! 交渉成立だ! 今から俺達がお前をしっかりと守つてやるぜ!」

ドン!と胸を叩いて、断言するモラウ。

その横でナツクルは腕を組んで呆れている。

「師匠、いいんですか? そんな安請け合いです」

「いいに決まってるんだろ! こいつがいねえと動物達探し辛えんだよ。それにこいつらが使つた密猟者共も捕まえねえといけねえしな!」

モラウが親指を立てながら言い切る。

その時、

「ぱうっ!?」

「!!」

若頭が側頭部を弾かれたように横に倒れる。その側頭部には小さな風穴が空いており、どう見ても即死だと分かる。

ギュルンと白目を剥いて、頭から血を流して絶命する若頭。

守ると言っただけのモラウとナツクルは目を見開きながらも、素早く構えながら攻撃が飛んで来たと思われる方向を見る。

そこにはレイピアを突き出している紅髪の女がいた。

モラウとナツクルがラミナの姿を捉えたと同時に、ラミナの姿が煙のように消えていく。

「っ!! 逃がすかつ!!」

ディーブパーブル【紫煙拳】!!」

「この野郎お!!」

ナツクルが弾けるように駆け出して、ラミナに殴りかかる。モラウは煙管を啜えて大きく息を吸い、口の中に煙を溜める。

そして、一気に煙を吐き出すと、煙がまっすぐにラミナへと向かう。

煙が到達する前に、ラミナの姿は完全に消える。

「逃がさねえよ! ナツクル、左だ!! 敷地外に向かつてる!!」

「押忍!!」

「!! この煙、【円】か!!」

完璧に居場所を当てられて、ラミナは煙の特性を看破する。

更にナツクルの想像以上の足の速さに、ラミナは顔を顰める。

(しやあないか!!)

ラミナはレイピアを消して、刃渡り30cmほどのソードブレイカーを具現化する。

そして、ソードブレイカーを振るい、姿を現しながら能力を発動する。

「フラジャイル・ホープ脆く儂い夢物語」

ソードブレイカーが煙に触れた瞬間、煙に含まれていたオーラが霧散して、ただの煙に戻る。

「!?」

「なっ!?!」

モラウは目を見開き、ナツクルも驚いて足を止める。ラミナの能力が理解出来なかったので、無理な追撃は危険と判断したのだ。

ラミナはそのまま再び姿を消して、屋敷を離脱する。そして、そのまま飛行場を目指して地下鉄に飛び乗る。

「ふう……………」

(まさか、あのタイミングでハンターが来るとはなあ……………。なんや最近、運悪いなあ……………)

ため息を吐いたラミナはとりあえず仕事完了の連絡を送る。

すぐに報酬の振り込みと後始末の請負の連絡があり、ラミナはホツとして気持ちを切り替える。

「……………家、帰るか……………。マチ姉を迎える準備もせなあかんし」

ラミナはそう決めてカゴツシに向かう飛行機に乗る。

姉との約束を果たす準備をするために。

翌日。

ゼルンロサスシティの倉庫で、ナツクルは盛大に顔を顰めながら苛立たし気に密輸された動物達の調査をしていた。

「くそっ!」

「いい加減にしやがれ、ナツクル。まだまだ調べることがあるんだぞ!」

「悔しくないんすか、師匠!?! たった1人にいいようにやられて!」

「悔しいに決まってるだろ? だが、それは俺達が未熟だったってことだろうが。俺らが油断してたのが悪い。それにあのガキが暗殺者に狙われていることも調査で分かってたことだ」

「ぐ……………」

モラウとナツクルも、ハンターサイトでキタカバファミリーが十老頭に喧嘩売って狙われていることは調べていた。

だから、夜であろうとも屋敷に突入したのだ。

それより先にラミナが目的を達成しただけだ。

相手が暗殺者であろうとも、ハンターが獲物を先に獲られた以上、未熟なのはハンターの方だ。

現場主義のモラウはそう考えていた。

「それに面白えことも分かったぜ？」

「面白いこと？」

「あの女、今期受かった新人ハンターだ」

「はあ!？」

「変装かもしれねえと思つてたが、紅い髪の女で調べてたらよ。今期の新人の中にこいつがいた」

モラウはニヤツと笑いながら、資料をナツクルに投げ渡す。

受け取ったナツクルは、資料にプリントされた写真を見て目を見開く。

そこに写っていたのは間違いなく昨日逃がした女だったからだ。

「暗殺者がハンターつすかあ？」

「爺さんに聞いたらよ。今期はなんでも他にゾルディック家のガキも受かつてるらしいぜ」

「ゾルディックつて、あの暗殺一家つていう？」

「ああ。つまり、今期は暗殺者が2人も受かったつてことらしいぜ。がつはつはつは!!」

「いいんすか？ それつて」

「よくはねえだろうな。だが、あいつが殺し屋だつて証拠はなかったからな。俺達の日撃証言だけじゃダメだろう。夜で、しかも俺の煙で見えにくかつた部分もあるし、あいつの能力なんだろうが姿が朧気だったから本物なのかどうかも分からん」

「それは……」

モラウの言う通り、ラミナが殺したという証拠は一切残っていない。監視カメラにも映像は残っていないかった。

そして、殺された瞬間は見たが、殺した瞬間は見ていない。そこが念能力の厄介なところだった。

「じゃあ、このまま泣き寝入りつすか？」

「いや？　面白い事を思いついた」

「面白い事？」

「こいつを次の仕事に誘う」

「はあ!？」

ナツクルは口をあんぐり開けて驚く。

「こいつがどんな奴か実際に向き合ってみて、クズだったら叩き潰せばいい。面白い奴だったら、それはそれでいい。それが一番すつきりするだろ？」

「……そりゃそうっすけど……」

「別に嫌だったら、お前は別に来なくてもいいぜ！　俺が会ってえだけだからな！」

モラウの言葉にナツクルは呆れるしかなかった。

ラミナはまた新しい厄介者に目を付けられたのだった。



## #28 ヨウコソ×マイ×シスター

7月10日。

ラミナは「カゴツシシティ」にある家でのんびりとしていた。カゴツシシティはヨークシンとゼルンロサスの中間にある都市で、美術館や博物館で有名な都市である。

ファツション街などもあり、芸術家やデザイナー、モデルが一度は夢見る場所だ。

ラミナの家は郊外にある。

レンガ造りのジョージアンスタイルの2階建てで、小さいが庭も付いており、ガレージもある。

もちろん仕事の報酬で購入したものだ。そして、とことんリノベーションもしており、ラミナが暮らしやすい家になっている。

今日のラミナは、赤のへそ出しチューブトップに黒のジャケット、ショートデニムパンツに黒のサンダルとお気楽スタイルである。

「ふわぁ〜……ねむ……」

ラミナは欠伸をして、コーヒーを飲む。

マチにはすでに家に戻ったことは連絡している。

マチが来るまでは掃除をして、食材を購入して、家に色々セキュリティを仕込んだり、武器の補充や手入れをしたりして過ごしていた。どうやらフランクリンとフェイタンも一緒にいるらしい。

なので、酒や食材は多めに購入してある。

ポケ〜とソファに寝っ転がりながらテレビを流し見る。

昼時が過ぎたとき、携帯が鳴りメールが届く。マチからのメールで中身を確認しようとする、チャイムが鳴る。

「ん？」

メールから目を外し、玄関の方に意識を向ける。

宅急便など頼んだことはないし、ここを知っている者など旅団メンバーくらいしかいない。

誰か確認しようとソファから立ち上がると、

ドンドン!

ガチャ!

……カチャカチャカチャ

「……」

明らかにピッキングされている音が聞こえてくる。

さらに、玄関の磨りガラスに巨大な陰影が見える。

そして、最初の荒いノックを考えると、辿り着く答えはただ1つ。

「……開けるからやめえや。フエイ」

「ちっ」

舌打ちが聞こえ、ピッキングの音が止む。

ラミナがため息を吐いて、玄関を開ける。

そこにはマチ、つまらなさそうにしているフエイタン、呆れているフランクリンがいた。

「メールとチャイムが同時ってなんやねん」

「忘れてた」

「だったら電話でええやんけ」

「うっさいよ。さっさと入れな」

「はあ……へいへい」

フランクリンをいつまでも外に置いておけば目立つので、大人しく中に入れるラミナ。

リビングに案内したラミナは適当にソファや椅子を勧める。

「あ、フランの椅子はガレージにあるわ」

「……ああ。まだあったのかアレ」

「あるに決まっとるやろ。お前がソファ座ったら変形するやないか」

「そこまで重くねえよ」

「最初来た時にソファ壊したん誰やねん」

「……あれは俺だけじゃねえ。ウボオーだって座ってただろ」

「一番最初に壊れたんはフランが座ったとこやったぞ」

「お前が買ったソファが脆すぎんだよ」

「50万のヴィンテージソファやで!? うちかてまだ数回しか座った

ことなかったんやぞ！　んで、フェイは堂々と盗聴器仕掛けんなや  
!!」

「ちっ」

「いいから、部屋に案内しな」

ラミナは小さくため息を吐いて、2階に3人を案内する。

2階は全部で5部屋。

ラミナの部屋と書斎。そして、シングルベッドが置かれている8畳ほどの部屋が2つに、キングサイズのベッドが置かれている8畳ほどの部屋がある。

「デツカイベッドの部屋はフランが使い。マチ姉はこっちの個室。フェイはフランと一緒にでもええし、空いとる部屋でもええで」

「あんたの部屋は？」

「マチ姉の部屋の隣。プレート下げとる部屋や」

「ふうん」

そう言ったマチは、当たり前のようにラミナの部屋に入る。

ラミナの部屋は非常に殺風景で、机と小さい本棚。そしてベッドの代わりにハンモックが置かれているだけだった。

「相変わらず寂しい奴だね」

「うっさいわ。寝るだけの部屋なんやからええやろ」

「逆になんで他の部屋にベッドがあんだよ」

「クロロやパク姉が置け置けうるさかったんや。書斎やって、半分以上がクロロが置いて行った本ばっかやし」

「団長、結構ここに来るの？」

「3, 4か月に1度くらいやな。いつの間にか合鍵持つとつだじぐうえ!？」

マチに背後から首を絞められるラミナ。

マチは両腕でギリギリと絞めながら、底冷えする声で言う。

「なんで団長が合鍵持つてて、アタシには教えずに渡されてないの？」  
「つつっ!!」

「マチ、少し緩めてやれ。それじゃあ喋れねえ」

ラミナが必死にマチの腕をタツプし、フランクリンが呆れながら助

け舟を出す。

マチが腕を放すと、ラミナは崩れ落ちて咳き込む。

「ゲホッ！ ゲホッ！ や、やから……クロ口達が教えとると思てたんやって……。合鍵のことやって知ったんも少し前やし……。この前会った時は持つとらんかったから渡せへんかったし……。ゲホッ！」  
「じゃあ、今渡して」

「わ、分かっとなるって。……ほれ」

ラミナはポケットから鍵を取り出して渡す。

鍵を受け取ったマチは「ふん」と不機嫌そうに鼻を鳴らしながら胸元に仕舞う。

ラミナは息を整えながら立ち上がって、マチに割り当てた部屋を指差す。

「その部屋はマチ姉の好きにしてええし、別にうちがおらん時でもこの家で過ごしても構わんよ」

「はいはい。あ、それと着替え貸して。後、シャワーも」

「服はうちの部屋から好きなん持って行き。脱いだ服は洗濯しといたるわ。フェイとフランも部屋に適当な服置いとるでな。洗濯するなら出しや」

「分かたね」

「おう」

「フェイタンはともかく、フランはなんで服まであるの？」

「フラン達が最初に来た時に買った奴や。それを残しとっただけのことちや」

その後、マチはラミナのクローゼットから服を持ち出してシャワーを浴びる。

フェイタンは白のタンクトップにジャージズボン。フランクリンは茶色のタンクトップにデニムズボンに着替えて、それぞれ好き勝手に過ごし始める。

ラミナは受け取った服を洗濯に掛けていく。

「ん〜……マチ姉の服は手洗いやないとかんか……」

マチの服は和服なので、帯も含めて洗濯機で回すわけにはいかな

い。

「……そういや、街に和服を扱う店が出来とったなあ……」

以前、街を散歩したときに見かけたことを思い出すラミナ。

せつかなので新しい服を買ってもいいかもしれないと考える。

「……まあ、そこらへんは本人に聞けばええか」

とりあえず、マチの服の洗濯は後回しにして、リビングに戻る。

フランクリンはなんだかんだでガレージから自分専用の椅子を持ってきて座っており、フェイタンもガレージからハンモックを取り出して寝転んでいた。

「酒出すか？」

「いや、俺は茶でいい」

「ワタシは何でもいいね」

「ほな、茶にするわ」

ラミナは2人に茶を出して、ソファに座る。

「もう後はヨークシンに行くだけなんか？」

「いや、後ノブナガと合流してから向かう予定だ」

「と言ってもノブナガがどこにいるのか知らないけどね」

「相変わらず音信不通連中が多いなあ」

「金を持たない主義の連中が多いからな」

「ワタシ達盗賊。欲しいモノは奪い取るだけね」

「さよで」

別に間違っではないないが、もう少し連絡手段を整えろよとも思う。

ラミナはそう呆れながら、茶を飲む。

10分ほどすると、マチが風呂から上がる。

マチは頭にバスタオルを巻いて、黒のタンクトップの上にジャージを羽織り、下は白のホットパンツ姿だった。

「茶でええか？」

「ああ」

マチの分の茶を用意して、並んでソファに座る。

「マチ姉の服やけど、街に和服扱うとる店があるから明日見に行くか？ 手洗いで洗うには今日はもう遅いし」

「……そうだね。今の服も傷んできたし」

「相変わらず仲が良い姉妹だな」

「うっさいよ」<sup>わ</sup>

揃ってフランクリンを睨む。

フランクリンとフェイタンは肩を震わせて笑う。

マチは不貞腐れたように茶を飲んで、話題を変える。

「そういうえば、ラミナ」

「ん？」

「あんた、武器の補充はどうしてんの？ 毎度毎度どつかから盗んだり、買い揃えてるわけじゃないんだろ？」

「そら、ここに集めとるで」

「あ？ ガレージにはなかったぞ？」

「んなもん見えるところに置いとるわけないやろ」

ラミナが呆れてフランクリンを見る。

フェイタンも興味を示したのか、ハンモックから起き上がる。

「つまり隠し部屋があるということか？」

「そやで」

ラミナは頷いて、足元を指差す。

それでマチ達は地下室があることを理解し、更に興味が湧く。

ラミナはマチ達の表情を見て、苦笑しながら立ち上がる。

「明日にでもと思とったけどな。見せたるわ。ちやうど渡したいもんもあつたし」

「渡したい物？」

「まあ、まずは案内するわ」

そういつてラミナが歩き出し、マチは頭のバスタオルを外して、フランクリン達と後に続く。

向かった先は階段下。

階段下の壁はレンガになっており、収納スペースなどはない。

「ハハハハ」

「そ」

首を傾げるマチを横目に、ラミナは迷うことなくいくつかのレンガ

をスイッチのように押し込む。

すると、残りのレンガもズズツ……と僅かに奥に動き、そのままゆっくりと下に下りて行く。

「へえ……」

「これは気づかなかたね」

「壁がそのまま下りる階段になるのか」

「がつつりとレンガで作つとるから、階段上つても、壁を叩いても空洞なんてないから音なんぞ響かんしな。調べてもそう簡単には見つけれへん」

1分ほどで地下へと降りる階段が出来上がる。それと同時に通路内に明かりが付き、道を照らす。

ラミナ達は階段を降りて、地下室に下りる。

「おお……こりやスゲエな」

地下室の広さは30畳ほど。部屋の中心にある階段を下りたマチ達は思わず目を見開いて、部屋を見渡す。

四方壁一面に武器が立て掛けられている。槍や大鎌、斧に打ち刀に太刀、ガンソードなど、刃が付くものは種類問わず様々な形状の武器が集められていた。

ナイフや脇差、ウルミ、圈など小さい武器は、棚に並べられており、その棚が部屋に10個鎮座している。

まさしく武器の博物館。もしくは武器の闇市とも言える程の保管量だった。

「よくここまで集めたもんだ……」

「そら、うちの生命線やしな。集めれるもんは集めとかんと。まあ、流星街にええ鍛冶職人見つけたから、大半はそいつの作品やけどな」

「……これ、全部オーラ纏ってるね」

マチは【凝】を使うと、目に見える全ての武器がオーラを纏っているのが分かった。

ラミナはその言葉に頷き、

「うちの【刃で溢れる宝物庫】アルマセン・デ・エスパダはオーラを纏うほどの武器やないと収納出来んでな。やから、すぐに必要な形状の武器がすぐに手に入るよう

にしとかなあかん」

「そんな制約あったの？」

「まあな」

いくらラミナが刀剣類の武器と相性がいいとはいえ、それだけであの能力は作れない。いくつか面倒な制約を設定するのは当然必要だった。

ラミナは柵の1つに歩み寄る。

柵から鞘に納められたナイフを手に取り、マチに投げ渡す。

「……なにこれ？」

「クロロから手頃でおもろいナイフあったら売ってくれって頼まれとってん」

マチが鞘からナイフを抜く。

そのナイフは魚の骨のような独特の形状の剣身をしていた。

フェイタンやフランクリンも覗き込んで、フェイタンが首を傾げる。

「これ、ベンズナイフか？」

「そやで。ああ、注意せえよ。毒があるで」

「毒？」

「鞘に薬を仕込んで、刃に毒を染み込ませるねん。0.1mgでクジラも動けんくなるでな。少しでも傷付いたら倒れるで」

「ふうん。で、これを団長に渡せばいいの？」

「そ。うちは別口でヨークシンに入るでな。そっちの集合日に行けるか分からん」

「了解。渡しとく」

マチはナイフを鞘に納める。

次にラミナは刀が並べられている壁に行き、その内の一振りを手取る。

「フラン。これはノブナガに渡してんか」

「ノブナガにか？」

「おう。カネミツっちゆう名刀なんやけどな。オーラがないからうちは使えへんねん」



「まあ、いいけどよ」

刀袋に入れてフランクリンに渡す。

フエイタンがキョロキョロと見渡し、ラミナに顔を向ける。

「お宝はないのか？」

「有名なお宝はないで。この部屋にはな」

「他にもあるの？」

「あるで」

ラミナは更に下を指差す。

まだ地下室があるらしい。

「かなりのお宝？」

「かなりのお宝やな」

「……」

「安心せえ。ここまで言うて、見せんとか言わんわ。ここで止めたらフエイが忍び込みそうやしな」

ラミナはそう言いながら階段に歩み寄る。

そして、階段の側面に手を当てて、力を籠めると一部が凹む。

直後、下りてきた階段に続くように、新たな階段が床に出現する。

「遊びすぎじゃない？」

「元々はシエルターにするつもりで作ったんよ。それを保管庫にしただけや」

マチが呆れているが、ラミナとてそんなつもりは一切なかった。

1年ほど前に偶々立て続けにお宝を見つけしまい、この地下室に置くのもなんか嫌だったのでシエルターに安置することにしたのだ。

「売ろうと思わなかったのか？」

「いやあ、下手に売るんも難しい代物でなあ……」

フランクリンの言葉にラミナが眉間に皺を寄せながら答える。

「どこで見つけたの？」

「1年くらい前に殺したターゲットの家。マフィアのボスやったんやけど、殺したところが蔵でな。そこに乱雑に置かれとったから、思わず盗んでしもた。もう1個はその少し後に殺した古物商の蔵で見つけた」

「乱雑に置かれてたのに、売るのが難しいのか？」

「レプリカと思っとならしいわ。古参やのに念能力者も抱えられんようなところやったから、誰も気づかんかったんやろな」

下りた先には鋼鉄製の扉。

扉には暗証番号入力キーが備え付けられていたが、ラミナはそれを無視して右の壁に向かってしゃがみ込む。壁と床の接地面に指を押し込むと、壁に手が入るかどうかの横長い隠し扉があり、その奥にあるスイッチを押す。

ガゴン！

重厚感がある音が響き、鋼鉄製の扉がゆっくりと奥に開く。

「だから遊びすぎ」

「何言うどんねん。逃げ込むためのシエルターなんやから、フエイクは当然やろ」

ラミナはそう言いながら中に入り、マチ達も呆れながら後に続く。

シエルターは8畳ぐらいの広さだった。

ラミナがマチ達に道を譲りながら奥を指差し、マチ達は奥に目を向ける。

そこにあつたのは、二振りの剣。

それぞれショーケースに納められており、倒れないようにしっかりと固定されている。

柄と鍔が重厚な金で装飾されている白銀の剣身を持つ両刃の両手剣。

柄と鍔が深紅で装飾されている漆黒の剣身を持つ片刃の両手剣。

その存在感は先ほどの地下室の武器達とは比べ物にならず、【凝】を使わずともその二振りがオーラを纏っているのが分かった。

「スゴイヤろ？　ここまでのオーラを持つ武器なんざ見たことあらへん」

「……そうだね。死の念で残る武器は見たことあるけど、ここまで強い念を込められたのは初めて見る」

「これ、一体なんの武器か？」

フエイタンが剣から目を離さずに訊ねる。

ラミナは苦笑しながら、説明を始める。

「ブリュセリア王国って知っとるか？」

「確か……昔あった国の名前だったか？」

「そ。一番有名なのは『アルサー王伝説』やな。それは聞いたことあるやろ？」

「ああ……聖剣が出てくる奴？ って、まさか……」

マチ達は目の前の剣の正体に気づく。

「そうや。金の剣がアルサー王が振るつたと言われとる【勝利を定められた王の剣】。もう一方がアルサー王を討ち取つたと言われとるモーグレットの剣、【王の命を吸った王位の証】や」

伝説の聖剣と、その担い手を討ち取つた伝説の魔剣。

それが目の前にある二振りの剣なのだ。

「……本物なのか？」

「調べた限りでは、完全に特徴は一致しとる。何よりあの剣に籠められとる念。これがヤバかった……」

「どういうことか？」

「2本ともな、触ると妙な記憶を見せつけられんねん。その2つとも見える情景がそっくりでなあ。出てくる人間とか、聞こえたセリフも同じやねん。視点が違うんやけどな、両方を見たらアルサー王とモーグレットって言うんが分かったし」

「あゝ……死んだ瞬間の後悔が刷り込まれたのか」

歴史に名を遺す者達なのだから、念能力者だった可能性は非常に高い。

しかも戦争中に死んだので、特に死で強まる念が生み出される可能性も高かっただろう。

更には分かっているかどうかはともかく、殺し合った相手の武器がすぐ近くに存在しているのも関係しているのかもしれない。

「具現化された武器の可能性も高いでな。どっちにしる念が強すぎて、念能力者はまともに触れん。けど、売るんももったいなくてなあ」「あんた、剣とか好きだもんね」

「ラミナは無類の刃好きね」

「うっさいわ」

「それでここか」

「売れんのやからしやあないやろ。言つとくけど、これクロロもまだ知らんでな。集まった時に自慢でもしいや」

「団長なら絶対見に来るだろうね」

「だね。団長、こういうの大好きね」

「ほな、戻ろうか。そろそろ飯の準備でもするわ」

「メニユーは？」

「色々揃えとるで。まあ、料理するん久しぶりやから味は保証せんけど」

流星街に暮らしていた頃は料理屋などまともな店はないし、あつても高いことがほとんどだったので、ラミナは自炊をしていた。

正確には「妹は姉に尽くすもの」というマチの理不尽に従っていただけなのだが。

その結果、クロロやウボオー達の食事の面倒も見るようになった。

もうその頃にはラミナは文句を言うということすら頭に浮かばなくなっていた。マチの教育が身洗脳に染みていたのだ。

「あんたの料理なら大丈夫でしょ」

「久しぶりに食べるね」

「だな」

リビングに戻ったラミナはすぐさま料理を始める。

先にダイニングテーブルに酒やグラスを並べて、目にも止まらぬ速さで包丁を振り、野菜、魚、肉を捌いていく。

マチ、フランクリン、フェイタンは当たり前のように酒盛りを始め、料理が出来るのを待つ。

先にサラダやカルパッチョ、作り置きしていたスープなどを素早く仕上げてマチ達の前に並べる。

「肉、早めにね」

「ワタシ、酢豚がいいね」

「パエリア出来るか？」

「ええい！ ビュツフエちやうねん！！ 順番に作るから待たんかい！！」

なんだかんだでちゃんとオーダーに応えるラミナ。

ステーキ、酢豚、パエリア、とんかつ、麻婆豆腐、パスタなど様々な料理を作り上げる。

それをマチ達は猛スピードで平らげていく。

「うちの分もちよつとは残せや！！」

「二嫌」

「昔より意地汚過ぎるやろ！！」

「久しぶりだし」

「タダだからね」

「美味えし」

あまりの理由にラミナはもう怒る気力もなくなった。

結局ラミナが食事でありつけたのは、3時間後だった。

その頃にはマチ達は完全に出来上がっており、リビングのソファとテーブルの方に移動して飲み続けていた。

(ノブナガがおらんで助かった……)

ノブナガがいれば和食が加わっていただろう。そうなれば、更に面倒だった。

ため息を吐いて、食事を終えたラミナは皿洗いは翌日に行うことにして、姉達の酒盛りに参加する。

3人のこれまでの仕事の自慢話に耳を傾け、ラミナも仕事で殺した相手の話をしたり、シルバやゼノに襲われた時の話をする。

他には「ヨークシンでクロロは何を狙うか」で盛り上がる。

その中でフェイタンが「ゲーム」と言った。

「ゲーム？」

「世界一高いゲームが何本かオークションに出るね。何でも世界一危険なゲームらしいよ」

「ふうん」

「ラミナ、ハンター証持ってんだろ？ 何か調べられねえのか？」

「そら、調べられるけど。ここで調べたら、面倒やから嫌や」

「なんで？」

「ハンター証を狙う連中がいるね。こんなところで使たらバレバ  
ね」

「返り討ちにすればいいだけだろ？」

「んな、群がつてくるアリをチマチマ相手にしたあないわ」

ラミナは顔を顰めてワイングラスを傾ける。

「けど、そんなちっこいモンのために全員集めるか？ 暇な奴やお  
て全員なんやろ？」

「そうだね」

「正面戦闘メインのウボオーやフラン、フィinksまで集めるたあ  
中々な仕事やと思うんで？」

「かもな。それはそれで面白いことになりそうだがな」

「オークション中のオークシンで大仕事。久しぶりに殺しがいがあり  
そうね」

「アタシは団長がしたいことを手伝うだけだ」

「相変わらずなこつて」

「当然」

ラミナは苦笑して、グラスにワインを注ぐ。

その後も酒盛りは続き、深夜まで盛り上がる。

「考えたら、ラミナと酒盛りって俺初めてか？」

「そうやっけ？」

「アタシは何回か」

「ワタシも初めてじゃないね」

「俺だけか？」

「んく……ウボオーとノブナガは仕事終わりで飲んだやろ？ フェイ  
とパク姉、シャル、ボノレノフ、クロロもあるなあ。コルトピ、フィ  
ンクスがないかもな。シズクとは何回か飯食うたけど、あいつは進ん  
で酒飲まんからうちも飲まんことが多いし」

「フィinksは知たら怒りそうね」

「コルトピは酒が好きなのじゃないから、大丈夫そうだけど」

「……なら、いいか。最後じゃねえなら」

「ああ、ヒソカがおったなあ。……あれはええか」

「あれはいいよ」

「ワタシ、ヒソカ嫌いね」

「俺も気に入らねえ」

「なら、ええわ」

「それにしても、ラミナももうすぐ20になんのか」

「別に年齢なんてええやろ。んなこと気にしとったらオツサンに見えるで、フラン」

「……やめてくれ」

「くくく、フランクリンはシズクの指導役だからね。2人が並んだら、もう十分オジサンね」

「うるせえよ」

くだらない話をしながら、まだまだ酒は進む。

盗賊と暗殺者の家族は、短い団欒の時間を心ゆくまで楽しむのだった。

## #29 デート×ノ×オサソイ

翌日、ラミナとマチは約束通り街へと買い物に出ていた。  
フエイタンとフランクリンは別行動で街をぶらついている。

『金、渡しとくわ。下手に暴れんなや。家がバレたら面倒なんやからな』

『分かたね』

『ああ』

盗みや殺しをされると面倒なので、お小遣いを渡しておいた。

妹にお小遣いをもらうのはどうかと思うが、金を持っていないのも事実なので諦めてもらおうしかなかった。

ラミナとマチは早速和服を扱う店に向かう。

「ここやな」

「ふうん」

入ったのは二階建ての店。

店内には様々な着物や小袖、帯などが並べられている。

「ようこそ、おいでやす」

着物を着た店員が声を掛けてくる。

「ここって袖なしの半着とか作務衣とかあるか？」

「お二階に揃えとります。オーダーメイドも承っておりますので、どうぞお気軽に言ってください」

「おおきに」

「お客さん、ジャポンの方？」

「いんや、親がこの喋り方やってん」

「そうですか。それではどうぞ、ごゆっくり」

2人は2階に上がる。

「あなたの訛りって、やっぱりジャポンドったんだね」

「みたいやなあ」

「まあ、あの街でどこの訛りとか何もないけどさ」

人種の坩堝と呼ばれる流星街に訛りなどあつてないようなものだ。

ラミナはもちろん旅団のメンバーとて、人種はバラバラだ。そもそも



も自分の祖先がどこの出身か分からない者もいるし、親や誕生日、生まれがどこか知らない者もいる。

なので、今更気にすることではない。

2人は並べられている半着や作務衣に目を通していく。

「柄物が多いね」

「そら、着物やしなあ。んく……赤や緑はパツとせんしなあ」

「派手過ぎるのは嫌だからね」

「わあつとる」

マチの好みは把握しているので、ラミナは頷いて何着を選んでいく。

「そういえば、ラミナって和服着ないの？」

「んく……別に嫌いってわけやないで。やけど、髪と合わせると目立ちそうでなあ」

ただでさえ紅い髪は注目を浴びる事が多い。

「別に仕事の時まで着るなんて言わないけど、今みたいな時くらいはいいんじゃないの？」

「まあなあ……」

「つて言うか、アタシも大して髪の色変わんないし。あんたが思うほど目立たないかもよ？」

マチは垂れ流したピンクの髪を摘まみ上げる。確かにマチの髪もかなり目立つ方ではある。

少なからず納得はするラミナ。

「それに目立たないような着物にすればいいでしょ。せっかくだし、あんたも何か選びな」

「へいへい……」

その後、マチは白を基調とした半袖の半着に、紺色の帯に紅色の帯紐を購入し、ラミナは黒を基調としたノースリーブの半着、紫の帯に紅色の帯紐を購入した。

その他にも何着か購入し、更にはマチの部屋に置く家具などを見て回り、気に入ったものがあれば家まで即日配達してもらおう手続きをする。

もちろん、全てラミナの支払いである。

更には食材や酒も買い足して、帰宅する。

まだフランクリン達は帰って来ておらず、マチは買ったばかりの着物に着替えに行き、ラミナはリビングに荷物を置いて、先に皿洗いと買い足した食材の片づけをする。

皿洗いが終わったところで家具が届き、受け取ってマチと共に部屋へと運ぶ。模様替えを素早く終わらせて、ラミナは続いてマチの服の洗濯をして干し、干しておいたフランクリン達の服を回収する。

「携帯、鳴ってたよ」

「ん？」

マチに携帯を投げ渡されて、ラミナは確認する。

メールが届いており、送信元を確認すると知らないアドレスからだった。

メールを開くと、なんとメンチからだった。

『やっと見つけたわ！ で、今暇？ 仕事手伝ってほしいのよね。連絡頂戴。今日中!!』

(……面倒やなあ。けど、無視したらしつこそうやしなあ。断つてもしつこそうやけど……)

「誰から？」

「ハンター試験で知り合ってたハンターからや。仕事手伝わんかったな」

「ハンターから？」

「試験官しとった美食ハンターでな。うちは別に食材に興味ないねんけど」

「ふうん」

とりあえず場所、仕事にかかる期間、仕事内容、報酬を尋ねる。

それと8/20以降すでに仕事が入っていると書き、それに合わせて例え途中でも離脱することも伝える。

すると、1分もせずに返信が来た。

(……【バルトア共和国】の【コルゴ樹林】。内容は『密猟者の摘発と捕縛』。期間は約1〜2週間。報酬は活躍次第……か)

バルトア共和国は今いるサヘルタ合衆国の隣。飛行船で約3日ほどの距離だ。バルトア共和国からヨークシンまでは約5日。

十分間に合う日程ではある。

8/20と期限を定めたのは、単純に早めにヨークシンに入りたいからである。クロロからの依頼をこなすためには、場合によってはファイアンコミュニティと接触する必要があるからだ。なので、旅団が動き出す前にヨークシンのマファイアンコミュニティの動きと戦力を把握しておく必要もある。

他にはゴン達やクラピカの動向も目を配っておきたいので、出来る限り準備期間を設けたいのだ。

その時、再びメンチからメールが届く。

『断つても逃がさないから』  
「……」

何故ここまで気に入られているのか。

ラミナは顔を顰めて疑問に思うが、こう言われてしまおうと行くしかない。

ため息を吐いて、到着予定日と連絡する。

「はあく、メンド……」

「なに？ 行くの？」

「行った方がヨークシンでの仕事に響かんでな。さっさと終わらせてくるわ」

「団長、なんでハンター証取らせたんだろうね？」

「全くやで……」

マチの隣に座り込んで、背もたれにもたれ込む。

「いつ出るの？」

「明日の昼には出るわ。そっちはどうするん？」

「そうだね……。こっちもそれに合わせて出るわ。ノブナガ探さないといけないし」

ノブナガがどこにいるのかはまだ知らないマチ達。

あまりのんびりしすぎて、集合日に間に合わなかったら目も当てられない。

「ほな、買った食材使い切らなあかなあ」

「テンプラ食べたい」

「げ」

突然の変化球オーダーに頬を引きつかせながら、夕飯の準備を行うラミナ。

そして、今日も食いしん坊達の注文に答えるのに必死になるのだった。

その頃、バルトア共和国。コルゴ樹林近くの都市にあるホテルのスイートルーム。

「ふっふっくん♪ ラミナ、ゲット♪♪」

上機嫌に鼻唄を歌いながら、人差し指で携帯を回して遊ぶメンチ。

そして、背後を振り返る。

「上手くいったわよ」

「おう。助かったぜ」

豪華なソファに座っていたのは、サングラスをかけた男。その背後にはリーゼントの男と紫の和服を着たコーンロウの細身の男が立っていた。

メンチは男の向かいに座って、足を組む。

「別にいいわよ。あたしもラミナとは仕事したかったしね。けど、仕事が終わるまでは手出し無用よ。報酬もしっかりと払うわ」

「分かってるさ。ハンターとして呼んだ以上、暗殺者だからって問答無用で叩き潰すなんて真似はしねえよ」

「なら、いいけど」

メンチは半目で男を見つめる。

「それで、密猟者共の拠点は見つかったのか？」

「数か所は確認したわ。けど、まだ全部じゃないでしょうね。あんた達が追ってたマフィアだけじゃなくて、他にも繋がりがあみたい」

メンチはハンター試験が終わってから数か月、ここで密猟者達を追っていた。

コルゴ樹林には特有の動物が多く、その内の数種は絶滅危惧種に指定されている。その指定されている動物達は珍味と言われている無精卵を産むことで有名で、美食ハンターとして保護活動を行っていた。

ここ最近密猟者が増え、絶滅危惧指定されていないが食材としては有名な動物達なども狩られている。

想像以上に密猟者の規模が大きく、また複数の組織が関わっているため一網打尽にしないとイタチごっこになってしまいう状況になっていた。

「アマチュアや保護団体じゃ手が足らないのよね。暇な美食ハンター共は保護活動には興味ないとか言うし、全く腹立つわ」

「美食ハンターには『未知の食材を見つける事が使命！』って勘違いしてるモドキ共が多いからな」

「ホント、自分が美味しいものを見つけなければいいって思ってるんだから、呆れるにも程があるわ」

メンチはため息を吐く。

美食ハンターは確かに未知の食材を見つけ、新しい料理を作り出すのが一番有名で最も名誉とされている。

しかし、その食材が食べられなくなったら意味がない。なので、メンチやブラハラなど名のある美食ハンターは環境保護、動物保護にも力を注ぐのが当然の仕事としている。

だが、そこを理解しない者達もいる。そして、意外とその数は多い。メンチは若くしてシングルハンターに認められるほどの功績を残しており、それを妬む者も多い。

そのせいか、今回のような仕事の場合、足を引っ張ろうとする者がいたこともある。

「まあ、変な奴に頼るくらいなら新人の方がまだマシよね。ラミナがどれくらい強いのか、楽しみだわ」

メンチはペロリと唇を舐めて、ラミナの到着を楽しみに待っていた。

翌日。

皿洗いなど諸々の後片付けを終えたラミナは、仕度をする。

昨日購入した黒の生地縁が赤いノースリーブの半着に、紫の帯と紅の帯紐を締める。その上に深紅のショート丈の革ジャンを着て、下は黒のミニデニムを履く。

さらに腰の後ろ側にベンズナイフとククリ刀をクロスするように収めたベルトを身に着ける。

「へえ、似合うじゃない」

「派手だな」

「まあ、今回は別に暗殺の仕事ちゃうし」

マチは白の生地縁が赤い半袖の半着に、紺の帯と紅の帯紐を締める。下は今まで通り黒のスパッツで、薄紫のレッグウォーマーに白の足袋である。

フランクリン達も来た時の服に着替えており、すでに出立の仕度を終えていた。

「なにて移動するんや?」

「歩き」

「私用飛行船一機くらい出したるか?」

「別にいいよ。一度ホームに戻るつもりだから」

家を出て、ラミナは空港を目指しながら付いてくるマチ達に訊ねる。

マチはラミナの申し出を断り、そのままカゴツシの外に出る道で別れることになった。

「ほな、ヨークシンでな。まあ、会えるかどうか分からんけど」

「ああ」

「世話になたね」

「またね」

サラッと別れて、ラミナは空港に足を向ける。

空港でチケットを取り、バルトア共和国へと飛ぶ。

3日でバルトア共和国に到着したラミナは、指定されたホテルの部屋に向かう。

エレベーターを降りた直後、ラミナは足を止める。

「……」

フロントとの空気が違う。

肌がピリつき、肩にのしかかる空気が重く感じる。

ラミナは目を鋭くして、ペンズナイフを抜く。

そのまま数分周囲の気配を探る。

(……堂々と気配を晒しとるんは1人。けど、妙に変な視線も混ざつとるな)

最低で2人。

そう判断したラミナは携帯を取り出しながらエレベーターのスイッチを押す。

『騙し討ちをする連中が待ち構えているようなので信用できない。この仕事から手を引く』

メンチにそう送信すると同時に、到着したエレベーターに乗り込む。

扉が閉まる直前にドバン！と荒く扉が開く音がしたが、その前に扉は閉まり、エレベーターはゆっくりと下に下りて行く。

直後にメールが届く。

『戻ってきなさい！ あたしはそんな指示は出してない！』  
すぐさま返信する。

『信用できない』

『そいつらを一発ずつ殴っていいから！』

『信用できない』

『そいつらに出る報酬、全部あんにやるわ！』

『信用できない』

『もう、分かったわよ！ 奴らの報酬プラスあたしのフルコース、タダで御馳走するわ！』

『世の中の信用は、飯より金』

『あんだねえ!! いいわよ！ あたしの報酬もやるわよ!!』

「……こんなところか」

ラミナはこれ以上は引き出せないと判断して、また戻る。

指定された部屋の前に立って、ノックする。

「開いてるわよ」

明らかに不機嫌なメンチの声が聞こえてきて、ラミナは呆れながらドアを開ける。

中に入ると目に入ったのは、試験の時のように不機嫌全開の顔で脚を組み、ソファにふんぞり返っているメンチ。

その足元に2人の男がラミナに向かって土下座しており、その横でどこかで見たサングラスの巨漢が腕を組んで呆れた顔で立っていた。

「……」

「悪かったわね。ったく！ 因縁があるのかどうか知らないけど、仕事が終わるまで手出し無用って言わなかったっけ？」

メンチはドスン！と白い服を着たリーゼントの男の背中に、両足を乗せながら言う。

「ぐう……い！」

「ふん！ ちょっとオツサン。弟子にどういう教育してんのよ。おかげであたしの印象最悪じゃない！ 元々はあるがあたしにラミナを呼べて持ち掛けたのよ！」

メンチは鼻を鳴らして、サングラスの男ことモラウに苦情を言う。

モラウは右手で頭を掻きながら、

「分かってるよ。だから、お前さんがあいつに渡すって言った報酬分を俺が払うって言ってんじゃねえか。もちろん俺やこいつらの報酬もあいつに払う」

「んなもん、当ったり前でしょ！ もっと出すもん出させて言ってるの！」

「いや、それで十分やけど」

「甘いわよ！ こういう馬鹿共はとことんすり身にしないと覚ええないんだから！」

「うちからすれば金と今後狙うなっちゅう約束して貰えば、それでええねん。どうせ因縁ってゼルンロサスでのことやろ？」

「そうよ。あんたにしてやられたのが悔しかったみたいね。ちっこい男よねえ〜!!」



「ぐっ……！」

足を乗せられたリーゼントの男、ナツクルは悔し気に声を上げる。ラミナは呆れながら、ナツクルの隣で土下座している男に目を向ける。

「そつちのは初めて見るはずやが……」

「あく……そいつらは俺の弟子だ。シユートは前はいなかったから、関係ないんだが……。ナツクルの奴に押し切られたんだろ」

「……申し訳ない」

シユートが土下座したまま弱々しく謝罪する。

ラミナはため息を吐いて、モラウに目を向ける。

「ほんで？ 約束してくれるんか？」

「ああ、約束する。依頼とかでぶつかり合うことにならない限りは、お前を狙わねえ。こいつらにも襲わせねえ」

モラウが誓いを述べ、ラミナはメンチに顔を向ける。

メンチは「証人として確かに聞いた」という意味を込めて頷き、ナツクルから足を退ける。

「じゃ、早速仕事の話をするわ。座って」

メンチに促されて、ラミナは大人しくソファに座る。メンチも座っていた椅子を元の位置に戻して、ラミナと向かい合う。

ナツクルとシユートも立ち上がろうとするが、

「あんたらは正座!!」

「はい!!」

メンチの一喝ですぐさま正座するナツクルとシユート。

2人の左頬は僅かに腫れており、すでにメンチに殴られていたようだった。

「ここまで来ると流石に哀れに思うラミナだが、特に庇うことはしない。

「あんたがゼルンロサスで殺したキタカバファミリー覚えてる？」

「そら、最近の仕事やし、そいつらの顔見れば嫌でも思い出すわ」

「そいつらが密猟してた動物達の大半が、コルゴ樹林の動物達。で、マフィアが使ってた密猟者グループがまだ残っててね。あたしはここ

の動物達の保護が目的で、こいつらはその仕事の延長戦で手を組んだってわけ」

「うちが選ばれた理由は？」

「俺がお前に興味を持って、メンチに提案したんだ」

モラウが説明を引き継ぐ。

「手練れの紅い髪の女で調べたら、今年受かった新人の中にお前の写真があったな。ネテロの爺さんに話を聞いたら、暗殺者だって言うからビンゴってな。そしたら、試験官をしたメンチが気に入ってるって爺さんが言ってたし、丁度俺達の仕事とメンチの仕事が繋がったから、メンチに頼んでお前を呼んでもらったってわけだ」

「事情は分かったけど、理由にはなってへん」

「言つたる？ お前に興味が湧いたんだよ。あの能力と実力にな」

「それで捕まえよう？」

「お前の暗殺者としての考えを聞いて、判断しようと思ってたんだよ。けど、馬鹿弟子共が突っ走ったせいで失敗しかけたがな」

「う……」

モラウの話聞いて、ラミナは眉間に皺を寄せる。

「今はその話はいいの！ 先にあたしの仕事よ！」

「分かってる。俺らも一番はそれが目的だしな」

メンチが再び苛立ちながら話題を戻す。

その後メンチは不機嫌なまま、ラミナに仕事内容を説明する。

仕事内容は『密猟者グループの一斉摘発と捕縛』。まだ全てを特定できてはいないが、現在分かっている拠点だけで5か所。少しでも先に密猟者の勢力を減らしたいとのこと。

「……ここにおける5人でそれぞれ1か所か？」

「いえ、アマチュアハンター達にも手伝わせる。小さい拠点3か所はアマチュアに任せて、残りの2か所があたし達」

「敵の戦力は？」

「念能力者は確認出来てないわ。だから、純粋にマフィアの下っ端構成員レベルと考えてる」

「制圧は全員捕縛か？」

「流石に規模が規模だけに、そこまでは言わないわ。リーダー格はともかく、下っ端は殺しても問題ないわ」

「……ふむ」

「ただ、降参した奴らは流石に見逃しなさい。あくまで抵抗した奴だけよ。殺してもいいのは」

「逃げ出した奴らは？」

「もちろん捕らえる」

「……ん〜……」

ラミナは眉間に皺を寄せて、悩まし気に唸る。

メンチは意外そうに首を傾げる。

「あら……自信ないの？」

「殺さずつちゆうんがなあ。うちの能力は殺しに特化しとるから、大人数相手に殺さずとなると使えるんがかなり制限されんねん」

「ああ、そこね。まあ、そこは組む奴を考えればいいだけよ」

「俺がそいつと組もう」

モラウが名乗り出る。

「モラウが？」

「俺の【紫煙拳<sup>デーパー・バール</sup>】なら、捕縛する奴と殺してもいい奴を選別できる。俺が捕縛を優先して、そいつには邪魔者の排除を任せる」

モラウの言葉にメンチは納得する。

ラミナは前回の戦い時の煙の能力を思い出す。

「じゃあ、あたしはその馬鹿共ね。迷惑かけられた分、こき使ってるわ」

メンチはナツクル達に目を向けて言う。

ナツクルとシュートは腫れた頬を引きつらせる。

ラミナは本当に大丈夫なのかと不安になりながら、使う武器を考えるのだった。

## #30 プロハンター×ノ×リユウギ

仕事内容も聞き終えたので作戦を詰めようとメンチが提案した時、モラウが待ったをかける。

「なに？ まだ何かあんの？」

「何ってまだ俺らとそいつの自己紹介してねえよ」

モラウは呆れながら言い、ラミナに顔を向けて親指を立てる。

「俺はモラウ・マツカーナーシ。シングルハンターで専門は海だ。まあ、今回みたいに動物関係にも手を広げることもあるがな。で、こいつらが俺の弟子の——」

「ナツクル・バインだ。ビーストハンターをやってる」

「シユート・マクマホン。UMAハンターだ」

ナツクルは腕を組んで顔を顰めながら名乗り、シユートは無表情に名乗る。

どつちも頬が腫れているので、全く締まっていけないが。

「ラミナ。暗殺者兼業の新人ハンターや。特に分野はまだ決めてへんけど、強いて言うなら武器ハンターやな」

「武器？」

「そ」

ラミナはベンズナイフとククリ刀を指差す。

「特に刃が付いとる武器を中心に集めとるな」

「……この前の時は違う武器を使ってたよな？」

「こいつらのことか？」

ラミナが両手を広げ、ソードブレイカーとレイピアを具現化する。

モラウやメンチ達は僅かに目を見開く。

「こんな感じで武器を具現化するでな。やっぱホンモン集めなあかんやろ？」

「……具現化系ってそんな何個も具現化できないわよね？」

「そこは制約次第やろ。うちは武器と相性ええみたいでな」

「俺の煙を解除したり、姿を消したり、遠くから殺したりしたのも、その武器か？」

「そやで。ま、どれがどんな能力かは教えんけどな」

「……。(腰の武器も具現化したモノだとしたら、一体こいつはどれだけの武器を隠し持っていることになるんだ？ それに武器ごとの能力が違うなら、こいつ一人で軍隊を相手に出来ちまうぞ……)」

モラウは背中に冷や汗が流れる。

正直ラミナは武器ごとの能力を話すくらいならば、特に問題はない。もちろん制約までは話さないが。

今、出している武器の能力をバラしたところで、まだ見せていない武器を使えばいいだけだし、バレても防げるかどうかは別問題だからだ。

ラミナは武器を消して、メンチに顔を向ける。

「密猟者がおもろい武器持つとつたら、もろてええ？」

「そこは取引次第ね。盗まれた物の可能性があるしね」

「それで十分や」

オーラを纏うほどの武器が下請け密猟者の元にあるとは思えないので、文句はない。あつたらラツキーくらいに考えているだけだ。

その後は特に荒れることもなく、作戦を詰めていく。

ラミナとモラウが攻めるところは街外れにある大型倉庫。周囲も倉庫で囲まれているが、それは無関係であることが確認されている。

なので、他の倉庫に被害を出さないように制圧する必要がある。

「1時間以内に潰してちょうだい」

「まあ、うちは暴れるだけやでな。雑魚だけやったら問題ないと思うで」

「銃も持つてると思うから、気を付けなさい」

「暗殺者のうちにそれ言うか？ マフィア相手にしとつたら銃なんざもう珍しないで」

「それもそっか」

ラミナは呆れながら言う。

メンチも納得して、苦笑する。

ラミナはモラウに顔を向ける。

「あの煙は倉庫を覆えるんか？」

「余裕だ。倉庫を丸々覆っても、まだおつりが出るぜ」

「ほな、逃げられることはないか」

「ああ、そこは宝船に乗ったつもりでいてくれていい」

「助かるわ」

ここまで言うのであれば大丈夫なのだろうと、ラミナは信用することにした。

担当の拠点が終わり次第、アマチュア達が担当している拠点に増援に向かうことも決めて、場所やルートを確認する。

段取りを決めたメンチ達はすぐに活動を開始し、アマチュアハンター達と顔合わせをして、所定の位置に向かうことになった。

ラミナとモラウは並んで、道を歩く。

2人はかなり目立っており、周りからチラチラと視線を向けられている。

「よお、1つ聞いていいか?」

「ん?」

「お前さんは殺しをする時は、無関係な人間を巻き込むことをどう思ってるんだ?」

モラウは口元は小さく笑みを浮かべてはいるが、纏う雰囲気は鋭い。

ラミナは横目でモラウを見て、すぐに前を見て口を開く。

「うちは基本的に無駄な殺しはせん。金にならんことするなんざ面倒やしな」

「……お前が依頼を受けるのはどんな連中なんだ?」

「基本的にはマフィアや闇商売をしとる連中。金次第では国の要人も殺す事もあるけどな。もちろんターゲットもそれなりに後ろめたいことをしとる連中がメインや。なんもしてない一般人や善人を安い金で殺すなんざ、アホらしいでな」

「……へえ」

「ただ、うちを殺しに来たなら話は別やで? 殺気や銃を向けられて、手加減なんざする気はない」

「そこまで文句は言わねえさ。殺しに来る奴は殺されてもしょうが

ねえ」

今度は本心から笑みを浮かべるモラウ。

「で、満足したんか？」

「ああ、十分だ。お前さんを今すぐ叩き潰す気はなくなった」

モラウは頷いて、上機嫌に足を進める。

ラミナは小さくため息を吐きながら、その背中に付いて行く。

(まあ、無駄に殺すんが面倒なんはホンマやけど。別に知らん奴が死のうがどうでもええんやけどな)

自分に不利益が降りかかる可能性が無いのであれば、特に気にしない。

なので、マチ達が誰を殺し回ろうが気にしないし、クラピカに関しても「運が悪かったな」くらいにしか思っていない。

流星街では人の生き死になど日常的に目にするので、そこらへんはラミナも比較的ドライである。

その後、ラミナとモラウは倉庫街に足を踏み入れる。

密猟者は基本的に夜間に活動する。なので、恐らく今は倉庫内で捕まえた動物達を確認したり、搬送する準備をしていると考えられる。

2人は目的地の2つ隣の倉庫の前で足を止める。

倉庫の前には見張りらしき警備員服を着た厳つい男が2人立っていた。

「……あれで隠しとるつもりなんやろうか」

「つもり、なんだろうよ」

物凄く浮いている。

他の倉庫には警備員はいない。この倉庫街はほぼ寂れており、不要なものを一時的に保管する物置のような感じになっているらしく、わざわざ警備員を雇ってまで守るものはここに保管しない。なので、泥棒が入ろうが気にもしない。

スラムのように住みこまれるのは困るようだが。

「ほな、行こか」

「おう」

ラミナはベンズナイフを抜いて、勢いよく駆け出す。

「ん？ っ!?! 誰だ!!」

「止まれ!!」

警備員の男達は拳銃を抜いて、ラミナに向ける。

ラミナはベンズナイフを男達の間を狙って投擲し、パチン！と指を鳴らす。

ラミナはテレポートしたように男達の間に見え、男達は目を見開く。

男達が動く前に、ラミナは素早く男達の首に手刀を叩き込んで気絶させる。

それを確認したモラウが巨大な煙管を咥えて息を吸い、一気に大量の煙を吹き出す。

煙は猛スピードで倉庫を覆っていく。

「ほお」

「スモークージェイル監獄ロツク」。この煙からは出られねえし、物理攻撃で壊すことも出来ねえ」

不敵に笑みを浮かべて歩み寄るモラウ。

「まだ戦えるんか？」

「言っただろ。余裕だぜ」

再び煙管を加え、今度はゆっくりと途切れ途切れに吹き出していく。

すると、煙が人型に変わり、あつという間に30人ほどの煙人形が並ぶ。

「お〜」

「デイープパープル紫煙機兵隊」。オートでもリモートでも操れる。俺はこいつらと捕縛を進めて行く。お前は好きに暴れろ」

「時間は？」

「一度出せば、数時間は楽に保つ。気にする必要はねえ」

「了解。ほな、行くで」

「おうさ!!」

ラミナは蹴りを、モラウは煙管でシャッターを吹き飛ばす。

「な、なんだ!?!」



突然、破られたシャッターの中にいた密猟者達が慌てふためく。倉庫の中には50人ほどいた。倉庫の奥には数十個の檻が重ねられており、中には動物達が弱っている様子で横たわっていた。

「すう……。ハンターだ!!! 大人しくすれば命は保証するが、抵抗・逃亡した場合は容赦しねえぞ!!」

「ハ、ハンター!?!」

「くそっ! 撃て!! 殺せえ!!」

リーダー格と思われる髭を生やした男が叫びながら拳銃を構える。それに部下と思われる者達もライフルやナイフを取り出して、ラミナやモラウに向けてる。

「おおおお。言うてしもたなあ」

「ったく、バカな奴だ」

「あれはあかんよなあ?」

「そうしてくれるとありがたいな」

「しやあないなあ」

ラミナは左手でククリ刀を抜き、右手にブロードソードを具現化する。

その直後、密猟者達が一齐に発砲を始める。

モラウは【紫煙機兵隊】の数体を盾にし、ラミナは【シルフィード・シックル】を発動して高速で剣を振り、銃弾を叩き落としていく。

「「なあっ!?!」」

「はっ! やるじゃねえかよ……!」

密猟者達は目を見開いて、思わず発砲を止める。

モラウも笑みを浮かべてはいるが、冷や汗を流して慄く。

「次はこっちの番や。頑張つて避けてみい」

ラミナはククリ刀を勢いよく投擲する。

ククリ刀は高速で回転しながら飛び、急にスピードが上がったと思ったら、なんと突如火を纏つて炎の円盤となる。

「はあ!?! ぎやっ!?!」

「ひいつ!？」

「な、なんで火が!？」

「驚いとる場合ちゃうで」

ラミナの目の前にいた男は避ける事も出来ず、右肩から胴体を抉られたように斬られる。

ククリ刀は更にスピードを上げながら、ブーメランのように弧を描いて戻ってきた。

「う、ウソツ!？ ま、待っじえ!？」

ナイフを握っていた女が慌てて背を向けて逃げようとするも、炎を纏ったククリ刀は無慈悲に女の体を胸辺りで上下に分かつ。

ククリ刀はラミナの左手に戻る瞬間に火が消え、ラミナは難なくキヤツチする。

「おいおい……」

「すまんなあ。うちは女やでな。男女差別はせん。年寄りとかギキはすこしくし配慮したるけど」

「まあ……武器を向けてたから仕方がねえけどよ。やっぱ、いい気分じゃねえな」

「なら、早よ捕縛せえ」

「だよな。行け!」

モラウは【紫煙機兵隊】に指示を出す。数十体の【紫煙機兵隊】は一斉に広がる様に飛び出して、軽やかに倉庫内を移動する。

それに密猟者達は標的を定められずに、視線や銃口が右往左往するラミナもそれに合わせて駆け出し、ブロードソードを消して、レイ

ピアを具現化する。

「このっ!」

「【啄木鳥ピィス・ピークの啄ピィばみ】」

「がつ!？」

ライフルを構えた男に、レイピアを突き出して額に風穴を空ける。そのまま、武器を構えている近くの男にククリ刀を投げ、直後に新しいククリ刀を具現化して、また別の男に投擲する。

2本のククリ刀は高速で回転しながら飛行し、火を纏う。

「投げると火が着くのか」

「正確には一定以上回転すると、やな。【<sup>ジャ</sup>太陽より飛び立つ<sup>アマ</sup>鷲<sup>デ</sup>】。標的を完璧に追えんのが難点やけどな」

「本当にいくつ具現化出来るんだよ……」

「さあなあ。ところで、そっちは？」

「さつき叫んでた男は捕らえた。他にも逃げようとしている連中も随時捕えてるぜ。後は証拠となる資料も集めさせてる」

「思ったより色々出来るんやな」

「まあな」

ニツ！と不敵に笑うモラウ。

ラミナは【紫煙機兵隊】の動きを感心するように見ながら、銃を向けてくる密猟者達を素早く殺し、ククリ刀をお手玉のようにキャッチしては投げ、キャッチしては投げを繰り返す。

その時、運よく生き残っていた男が武器を捨てて、両手を上げる。

「も、もうやめてくれ!? 投降する！ 投降するから!!」

「やったら、早よ周り止めんかい。うちはお前らが武器を捨てんから、殺される前に殺しとるだけや」

「わ、分かった!! 全員、武器を捨てろ!! 無理だ！ このバケモンには勝てねえ！」

男の叫びに他の者達も次々と武器を捨てる。

目に見える範囲の者達が武器を捨てたのを確認したラミナは、ククリ刀の1本を消してレイピアを下ろす。

「捕縛の余裕は？」

「問題ない。全員一か所に集めれば、もっと余裕も出来る」

「ほな、さつきと集めよか」

ラミナとモラウは【紫煙機兵隊】に捕まった者達や降伏した者達を一か所に集める。

モラウは【紫煙機兵隊】を解除して、オーラを回収する。

（放出したオーラを回収できるんか。それなら確にかなりの数と時間動かすことは可能やな。しかもさつきの動きからすれば、物にも触れるし、相手を捕まえればオーラを消さん限り振り払うことも出来

ん。かなり厄介な能力やな)

モラウは回収したオーラを使って再び煙を吐き、密猟者達を煙の縄で纏めて縛り上げる。

「な、なんだこれ……!?!」

「煙の縄だ。言つとくが、お前ら程度の力やナイフとかじゃあ千切れないぜ」

(煙ゆえにその形に制限もない。……ホンマ【フラジャイル・ホープ脆く儂い夢物語】創つといて良かったわ……)

モラウの能力を分析しながら、ラミナは【円】を使って他に隠れている者がいないかを探る。

「……ここはこれで終わりみたいやな」

「よし。【スモーキージェル】を解除して、人を呼ぶ。お前は先に他の場所に行ってくれ」

「了解」

ラミナは頷いて、アマチュアハンターが攻め込んでいる拠点に向かう。

レイピアを消して、短刀を具現化し、姿を消して全速力で次の場所を目指す。

10分ほど走ると、銃声が響いてきた。まだ戦闘中だと確信したラミナは、スピードを落とさずに足を動かす。

次の拠点は倉庫が併設されている2階建てのビル。目的地に到着したラミナは姿を消したまま倉庫に突入する。

アマチュアは黄色のベストを身に着けているので、判別は容易だった。

ラミナは短刀を消してベンズナイフを抜き、ククリ刀を腰に仕舞い、ファルクスを具現化する。

「援軍に来たでー」

「助かる!!」

「いっぺん銃撃やめろやー」

上手いこと密猟者とアマチュアは分かれていたので、ラミナはアマチュアに発砲を止めるように指示を出す。

アマチュアハンター達はすぐに銃撃を止める。ラミナはベンスナイフを投擲する。

ナイフは猛スピードで、密猟者達の間をすり抜けて背後の壁に突き刺さる。

「はっ！ どこ狙ってやがる！」

「ここや」

「「「なっ!?!」」」

密猟者の1人が鼻で笑うが、突如背後から声が聞こえて目を見開く。

いつの間にか背後にラミナがおり、何が起こったのか分からず密猟者達は口を開いたまま固まってしまふ。

「さいなら」

「「ぎゃあああ?！」」

ラミナは【クレイジー・ローズ狂い咲く紅薔薇】を発動して、密猟者達を一瞬で殲滅する。

返り血を浴びる直前に【チェンジリング妖精の悪戯】を再度発動して、アマチュアハンター達の元に戻る。

「ビルの方は？」

「問題ない。これで終わりだ」

「ええ、助かったわ。やっぱりプロって凄いわねえ」

「他の拠点はどうなったんか分かるか？」

「連絡取ってみるわ」

「頼むわ」

連絡を任せたラミナは、ファルクスを消して、ベンスナイフを腰に仕舞う。

「ん〜……! ふう……」

伸びをして、深呼吸をする。

倉庫の中に目を向けると、ここは特に動物などはいなかった。

「何もおらんのやな」

「ここは檻の保管と取引先と密会する場所なんだ。隣のビルには暗号化されてるが、帳簿や売り先がごっそり残ってるぜ」

「ほお〜……なら、ここを使つとつた連中は廃業確定か」  
「多分、だけどな。こいつらのスポンサーが誰かによる」  
「それもそうか」

ラミナはアマチュアハンターの男と話しながら、他の現場との連絡が終わるのを待つ。

「今年は試験受けんかったんか？」

「受けたかったんだが、メンチさんが試験官になったって聞いて止めたんだよ。あの人の試験なんて絶対厄介なんてもんじゃない。そうだったんだろ？」

「ええ勘しとるな。ってか、うちのこと知つとるんか？」

「メンチさんがご機嫌に君のこと話してたからね」

「……たまたまスシを知つとつただけで、なんでそこまで気に入られたんやろなあ……」

「スシを知っていたただけじゃなくて、その時の調理の姿勢が気に入つたそうだぞ？ まあ、実力も気に入つたんだろうけどな」

男は苦笑しながら言い、ラミナは呆れるしかなかった。  
すると、連絡を取っていた女性がラミナに声を掛ける。

「今回の作戦は完了よ！ あと、あなたはメンチさんが呼んでるから、ホテルに戻ってちょうだい」

「了解や」

ラミナは頷いて、男達に別れを告げて、再び走ってホテルに戻る。  
部屋にはすでにモラウやナツクル達も戻っていた。

「お疲れ」

「おう。で、これで終わりなんか？」

「残念ながら、まだよ」

「むしろ、これからが本番だぜ」

メンチとモラウがニヤつと笑う。

ラミナは首を傾げて、先を促す。

「あたし達が担当した3つの拠点にいた密猟者を何匹かわざと逃がしたの。拠点を潰された密猟者は、まだ見つけてない拠点に逃げ込むと  
思つてね」

「アマチュアに追わせとるんか？」

「あたしが追ってるわ」

「……念能力か」

ラミナの呟きに、メンチはペロオと舌を出す。

「そうよ。あたしの力、テイスト・オブ・ロイヤル【強欲なる女帝の舌】」

テイスト・オブ・ロイヤル【強欲なる女帝の舌】。

【周】で強化した包丁で傷つけた生物、または植物の『味』を覚え、居場所を随時把握する放出系能力。

相手の傷が完全に癒えてしまうと効果が切れてしまうが、傷がある間は最大10個の『味』を覚えておくことが出来る。

「まさに美食ハンターやな」

「当然でしょ？ 食材の為にその力の全て費やす。それが本物の美食ハンターよ」

「密猟者の殲滅も、か」

「そうよ。別におかしくないでしょ？ 獲物を追い詰めるのが、ハンターなんだから」

未知の食材を探すのも、それを邪魔する密猟者を絶滅させるのも、『美食ハンター』の仕事。

「あたしの食生活の邪魔をする奴は、残らず狩り尽くしてやるわ」

舌なめずりをしながら、目を据わらせるメンチ。

それを見たラミナは、密猟者獲物に僅かな憐れみを覚えた。

追跡している獲物は3人。

1人は街内に、残りの2人はコルゴ樹林の中に入っていったようだった。

「森の中に拠点か。まあ、当然だろうな」

「捕まえた動物達をすぐに倉庫や街の中に運べるわけないっすからねえ」

「つちゆうことは手練れがおる可能性が高いか……」

抵抗し逃げ惑う動物を捕まえ、拠点に運ぶまでの護衛をする必要があるので、それだけ手練れがいるはずだ。

更にもうすぐ夜になる。

襲う側からすればやや不利ではある。

「と言っても、そこまで大人数ではないはずよ。森の中にそんなデカイ拠点があれば、あたし達が誰も知らないはずないし」

「では、今後の方針は？」

シユートが訊ねる。

「言っただろ？ これからが本番だつてな」

「当然、これから潰しに行くわよ」

モラウとメンチが豪語する。

今度はラミナが訊ねる。

「街の方にもおるし、どう分けるんや？ アマチュア達はまだ制圧した場所の調査で動けへんやろ？」

「街の方はナツクルとシユートに任せるわ。森はあたしとモラウ、ラミナで行くわ」

「……俺らが市内つすか？」

ナツクルが不満そうに顔を顰める。

シングルハンター2人が行く現場に弟子の自分が行けず、新人が行く。プライドが刺激されても仕方がないことかもしれない。

「お前らの能力は森の中じゃ使いにくいだろうが。ラミナの能力の方が色んな状況に対応できるんだよ。適材適所だ」

「……うす」

ナツクルは渋々だがモラウの言葉に引き下がる。

ラミナは別に市内の方でも良かったのだが、依頼主のメンチとベテランのモラウが決めたことに文句を言うのも面倒だったので黙っていた。

「じゃ、さっさと狩るわよ」

メンチが締めて、ラミナ達は動き出す。

ハンター達の本格的な狩りが始まる。

ラミナ  S ウエポン!!

フラジャイル・ホープ  
・【脆く儂い夢物語】



具現化したソードブレイカーに付与された能力。  
斬りつけた相手の【発】を強制解除する。

相手のオーラに直接接触する必要があるため、体内に仕込まれている能力や遠距離攻撃能力は碎けない場合がある。

・【太陽ジャアマ・デ・アキラより飛び立つ鷲】

具現化したククリ刀に付与された能力。

投擲し、一定の回転数に達すると発火する。

ブーメランのように手元へ戻ってくる。その軌道に大きく外れない程度であれば操作可能。

メンチの念能力！ \*拙作オリジナル

・【強欲テイスト・オブ・ロイヤルなる女帝の舌】

放出系能力。

【周】で強化した包丁で傷つけた生物の体液、皮膚などの肉片、植物の樹液、果肉、表皮などの『味』を覚え、居場所を随時把握することが出来る。

相手の傷が完全に癒えてしまうと効果が切れてしまう。

最大10個まで『味』を覚えておくことが出来る。

これにより動物の巣を見つけたり、偶然見つけた果物の場所を記録したり、密猟者を追跡したり、樹林などで迷わないように目印にしたりと応用力は高く、ハンターらしい能力である。

### #31 メンチ×ノ×チヨウリ

ラミナ、メンチ、モラウは夜の闇に覆われた鬱蒼とした森の前に立っていた。

「2つとも同じ場所で止まってるわ。同じ組織だったみたいね」

「それか、森の中の拠点は共有してるのかもな」

「まあ、同じ所におるんやったら楽でええやん」

「じゃ、行くわよ。はぐれるんじやないわよ」

3人は森の中に飛び込む。

生い茂る樹々で月明りもほとんど届かぬ森の中を、3人は猛スピードで走り抜けていく。

「んなデカイ煙管抱えとんのに、器用なもんやな」

「何年こいつを使ってると思ってるんだ」

「つてか、どれくらい走るん？」

「このペースなら30分もあれば着くわ」

「このまままっすぐでええのん？」

「ええ」

「なら、先行って偵察行ってくるわ」

「大丈夫なの？」

「やから、暗殺者に言うことちゃう」

ラミナは呆れながらメンチに答えると、スピードを上げてメンチ達を追い抜き、音もさせず姿が見えなくなる。

あつという間に気配を感じなくなり、メンチはラミナの能力に改められて呆れる。

「……本当に厄介な新人ね」

「全くだ。まあ、暗殺者もハンターに必要なスキルを求められるから当然と言えば当然かもしれんがな」

正直、メンチとモラウの移動速度とて十分に速い。

アマチュア連中ならばとつくの昔に置いて行かれている。だから、メンチはプロだけで行くと言ったのだ。

その速度にラミナは余裕で付いてきて、しかも足音を一切立ててい

なかった。草が生い茂っている森の中だと言うのに。

更に言えば、メンチは森に入った瞬間からラミナの気配が希薄になり、注意してないと近くににいるのか分からなかった。

「戦闘じゃ、あたしは勝てないわね」

「あの能力も厄介だからな。正直1対1じゃ勝ち目は薄いな」

「あんたでも？」

「俺の念は強制解除されちゃうし、今日見た他の武器だけでも十分脅威だな。この前は姿や気配を隠す能力も使ってたし、まだ色々隠し持つてるぜ、ありやあ」

「一体どんな生き方してきたんだか……」

「それなんだがな、全く分からん」

「は？」

メンチはモラウに目を向ける。

モラウは前方を向いたまま、話を続ける。

「俺はもちろん、知り合いのハッカーハンターにも頼んで調べ尽くしたが、あいつが暗殺者として活躍し始めた数年前から前の足取りが一切不明だ。どこで生まれて、どこで育ったのか、何一つ分からなかった」

「国際人民データ機構は？」

「この世界の住民は基本スラムにしようが捨て子であろうが、必ず生体データを登録する義務がある。なので、姿をくらませたり、顔を変えて死んだふりをする事は出来るが、本気で調べられればすぐに判明する。」

「国際人民データ機構に登録されている情報は、絶対に外部から操作できない。3つのサーバーがそれぞれのサーバーを見張っており、どれか一つのサーバーの情報が変えられても1秒もせずには復元される。」

「さらにハッキングしようとした時点で『殺人未遂』と国際法で定められている。執行猶予もなく、速攻で刑務所行きである。なので、一度登録されたデータを変更することはほぼ不可能なのだ。」

「なかった」

「……それって……」

「ああ、恐らくあいつは流星街出身だ」

流星街は世界から忘れられた空白地帯。そこで生まれ、捨てられた人間は社会にその存在を認められていない。

国際人民データ機構にも、もちろん登録などされない。

なので、ハッカーハンターであろうとも、調べることなど出来はしない。

「それなら納得するわ。あの実力も暗殺者であることも……」

「ああ。マフィアや闇商人と仕事してるのは、流星街がマフィアコミュニティと繋がってるからだろうな」

「まあ、だからってあの子と距離置く気はないけどね。ハンターで出自不明の奴なんて珍しくないし」

「まあな」

メンチとモラウはスピードを落とさずに走り続ける。

10分ほど走ると、ラミナが2人の前に戻ってきたので足を止める。

「どう？」

「この先に洞窟があったわ。見た目は大型動物の巣穴のように見えるけど、明らかに人の足跡と車輪の跡があったで」

「大きさは？」

「奥はかなりの広さやな。数はぎつと見た感じ50人は超えとる。武装も整えて、迎え撃つ気満々やで」

「……何で逃げないのかしら？」

「それにどうやって洞窟から動物達移送してんだ？」

「洞窟の近くが微妙に開けとつたし、草は生えとるけど樹を切り倒した獣道みたいななんも作つとつた。その先に整備されたデカイ道があるんやろな」

「そうね。近くに遭難者を探したり、奥に急行出来るように道を作ってるわ。そこに合流するようにしてたのね。その道は巡回はしてたけど、検問や封鎖はしてないから」

メンチが腕を組んで顔を顰めながら言う。

「だが、迎え撃つつもりってことは、少なくともその連中はもう逃げ

場はないってことだな」

「みたいやで。かなり追い詰められとったわ。念能力者は見当たらん。【円】も特にオーラも隠さずに使ったけど、誰も気づいた様子はなかったでな」

「流石ね。姿隠せる能力を持つてるのは、ホントにありがたいわ。ねえ、やっぱり今後も一緒に動かない？」

「最低月3億。払ってくれるんやったら考えるわ」

「高いわよ！ 月1億、それとあたしの料理付き!!」

「それやったら、暗殺の仕事しとる方が儲かる」

「ぐ……!?!」

「勧誘は終わってからにしろよ」

モラウが呆れながらツッコむ。

メンチは「ふん！」と不機嫌そうに鼻を鳴らすも、すぐに顔を引き締めて腰から長包丁を抜き、両手に握る。

「じゃ、さっさと終わらせるわよ！」

「殺しは？」

「抵抗するならあり。降伏・逃亡なら無し」

「絶対に捕まえんとあかん奴は？」

「ここはいいわ。昼に押さえた拠点から出てくる情報で十分」

「了解。ほな、先に突入するわ。続いて入ってきい」

ラミナは短刀とファルクスを具現化して、走り出す。

メンチも後に続き、モラウは煙を吹き出しながら走り出す。

ラミナは【朧霞】を発動して姿を消し、スピードを上げる。

5分ほど走ったところ洞窟があり、入り口に見張りはいない。

一気に奥まで進むと、大きく開けた空間がある。地面を掘って空間を広げており、大型トラックが数十台は楽に入るだけの広さがある。

その中にライフルやショットガン、剣などの武器を構えて、入り口を睨みつけている密猟者達が待ち構えていた。

「気を抜くなよ！ いつハンター共が来るか分かんねえ！ 明日の朝には救援が来る！ それまで持ち堪えろ!!」

「もう来とるで」

リーダー格の男が叫び、部下達が頷く。

その直後に声が響き、最前線でライフルを構えていた男がくの字に体を曲げて吹き飛び、右脚を突き出した紅い髪の女が現れた。

「「なあ!?」」

「ハンターや。諦めて武器下ろしや」

「う、うろたえんな!! 撃て!! 女一人にビビんじゃねえ!! 撃てえ!!!」

突如目の前に現れたラミナに驚きながらも、聞こえた指示に素早く銃口を向ける。

それだけでそこそこ実戦経験豊富な集団であることが窺える。

しかし、引き金を引く瞬間にラミナの姿が消える。

「「!!」」

「ど、どこだ!」

「こっちや」

指示を叫んだ男の背後から声が聞こえ、弾かれたように振り向く。しかし、直後首に衝撃が走り、視界が急に下がっていく。

男は目を大きく見開いて、何が起こったのか理解する前に顔に衝撃を感じて意識を失う。

運よく生き残った密猟者達の目には、首から血を吹き出す胴体と地面に転がる生首が映っていた。

更にはその周囲の者達も、首や腕、胴体などが斬り飛ばされて地面に倒れ伏す。

「ひいつ!」

「な、なんだ!」

「うわああ!!」

密猟者達は何が起こったのか理解出来ず、大混乱に陥る。

ラミナは【クレイジー・ローズ】を発動しながら、上に跳び上がった後、入り口から数十体の【紫煙機兵隊】が入り込んできて密猟者達を更に混乱させ、メンチとモラウも入ってきた。

直後、入り口から数十体の【紫煙機兵隊】が入り込んできて密猟者達を更に混乱させ、メンチとモラウも入ってきた。

「ハンターよ!! 死にたくなけりや大人しくなさい!!」

「つて、もうかなり死んでんな」

「抵抗されたでな」

「まあ、そりやそうよね。そこに転がってる連中の仲間入りしたくないなら、今すぐ武器を捨てて地面に伏せなさい!!」

「う、うるせえ!! 怯むな!! 撃て!! 斬れ!! 殺せえ!!」

「だとよ」

「はあ……全く。だから馬鹿って嫌いなのよね」

メンチはため息を吐いて、密猟者達に向かって飛び出す。

モラウは煙を大量に吹き出して、密猟者達の視界を奪う。

「な、なんだこの煙!？」

「パパパ!!」

「ぎやつ!？」

「イツデエエエ!？」

「馬鹿野郎!! こんな状況で撃つな!! 同士討ちになるぞ!？」

「それどころじゃないからじゃない?」

「!？」

同士討ちを止めようとした男の目の前に、包丁を構えたメンチが煙から現れる。

男は目を見開きながらナイフを抜くも、その腕をメンチの包丁が斬り飛ばす。

「ぎゃあ!？」

「なかなか良い反応ね」

「くつぞお!!」

男が残った方の腕で銃を構える。メンチは一瞬で男の懐に詰め寄り、首を掻つ切る。

「このアマア!!」

「くたばれえ!!」

近くにいた密猟者達が剣を振り上げて、左右からメンチに斬りかかる。

メンチは腰にまだ差してある長包丁4本を全て抜いて、オーラを纏

わせながら6本の長包丁をジャグリングする。

【フライド・オブ・シエフ孤高の包丁捌き】

投げ飛ばされた包丁達が独りでに動き出して、男達の両腕を三枚におろす。

【フライド・オブ・シエフ孤高の包丁捌き】。

複数の長包丁を自在に操る操作系能力である。

「超一流料理人の包丁捌き、なめんじゃないわよ」

メンチは両手に3本ずつ包丁を掴んで、更にオーラを籠める。

そして2本ずつ放り投げて、メンチに向けられたライフルに向かつて飛ばす。それと同時に前方に走り出し、ナイフを構えている男に斬りかかる。

飛ばされた包丁は、ライフルを豆腐のように簡単に切り落とし、更に密猟者の腕を斬り落とす。

更にメンチの両腕がブレたかと思うと、ナイフを構えていた男の両腕が細かく斬り刻まれる。

「ぎゃあああ!!」

メンチはそのまま走り抜けて、斧を構えている男に迫る。

4本の飛ばされた包丁がメンチの元に戻ってくる。

メンチが右腕を横に上げると、4本の包丁が上下に2本ずつ平行に並ぶ。そのまま男に迫り、メンチは右腕を横に振る。メンチの腕に合わせて4本の包丁も動き、男の体に5本の赤色の細い横縞がにじむ。

「ぎいあああ!!」

メンチが周囲を見渡すと、ラミナが4本のククリ刀を投げながら舞う様に動き回っていた。

剣やナイフで襲い掛かってくる連中は顎を蹴り碎き、手刀で首をへし折り、顔面や腹を殴って吹き飛ばす。

銃を向けてくる連中には炎を纏うククリ刀が襲い掛かり、体を挟り、2つに斬り分ける。

「問題なさそうね」



すると、周囲を覆っていたモラウの煙が動き出して、視界が晴れていく。

煙が完全に消えると、洞窟内の惨憺たる有り様が露わになる。

両腕がなかったり、首がなかったり、下半身がなかったりと、五体満足で倒れている密猟者の方が明らかに少ない。

無傷な者達は全員煙で捕縛されており、仲間の死体や腕が斬り落とされて呻いている光景を見て、顔を真っ白にして震えている。

「お前らなあ……派手にやり過ぎだぞ。これじゃあ後始末が大変だろうが」

「全員捕まえたって移送が面倒やろ？」

「そうよ。それに死にたくないなら抵抗するなって最初にちゃんと言ったじゃない。聞かなかった奴が悪いのよ」

(……こいつら。組んだら更に化けそうだな……)

モラウはメンチとラミナの相性が思った以上にいいことに、内心呆れる。

モラウ自身も独自の理屈を押し通すタイプだと自覚しているが、この2人には負けるかもしれないと考える。

「シユートに連絡を取る」

「あたしも手が空いているアマチュア達に連絡するわ。ラミナは悪いけど、周囲の警戒と調査を頼むわね」

「へいへい」

素早く後始末と警戒に動くメンチ達。

2時間ほどすると、警察とアマチュアハンター達が到着し、密猟者達を引き渡し後始末を押し付ける。

ナツクル達の方も問題なく終了し、とりあえず一段落となった。

「悪いけど、まだもう少ししてもらおうわよ」

「まあ、1週間はかかるって言っとつたしな」

「多分、まだ拠点あるだろうしね。それに背後にいる組織も洗い出したいのよね」

「……この国だけでおさまらんで？」

「それはその国にいる知り合いのハンターや警察に依頼するのよ」

「連絡を入れるときは、こつちも証拠を押さえてるからな」

メンチとモラウの言葉に、納得するラミナ。

ホテルに戻ったラミナ達は、本日はこれで解散となる。

ラミナは近くのビジネスホテルにでも泊まろうとしたが、

「何言ってるの。あの部屋のベッドが1個空いてるから、そこ使いなさい」

「え〜……」

と、襟を掴まれて引きずられて、部屋まで連れて行かれる。

話し合っていた部屋の隣がベッドルームだった。

ベッドが2つ並んでおり、片方は綺麗だったが、もう片方のベッドは派手に乱れていて、ベッドの上に下着やら服やらが散らかっていた。

「空いてる方使って」

「……おう」

ラミナがメンチのだらしなさに呆れながら返事していると、メンチがシースルーの上着を無造作に脱いでベッドに放り投げ、ブーツもポイツと脱ぎ捨てる。

しかし、長包丁を収めたベルトホルダーは丁寧に外し、テーブルに置く。

自分の商売道具は丁寧に扱う姿はプロらしいとは言える。しかし、それ以外はかなり大雑把なようだ。

「あ〜、動き回ってお腹減った。あんたは？」

「そらまあ、食うてないしな」

ラミナもベルトホルダーを外しながら頷く。

仕事を始めてからは軽食しか食べていないので、空腹は感じている。

「ルームサービスやあかんの？」

「あんたねえ、美食ハンターの前でよくそんなこと言えるわね」

メンチが腰に両手を当てて、ジト目で見ると

しかし、もうすぐ深夜2時になるうとしている。ホテルの飲食店は閉まつてるだろうし、外に出かけても居酒屋くらいしかないだろう。

ならば、ルームサービスで終わらせてもいいのでは、とラミナは考  
える。

「あたしが作ってやるわよ。言ったでしょ？ あたしの料理も付け  
るって」

「作るってキッチンは？」

「あたしが泊まってるのに、いつでも使えるように交渉してないと思  
う？」

メンチは答えながら備え付けの冷蔵庫から缶ビールを取り出して、  
プシュー！と開ける。

「食材は？」

「んなもん、とっくに運び込んでるわよ。ここの食材を使っても、後で  
金払うか、あたしのレシピーつでも渡せば文句も出ないわよ」

ビールを飲みながら、当然のように言い切るメンチ。

これが星持ちの美食ハンターの権力かと感心するラミナ。

その後、最上階にあるレストランの厨房を開けさせたメンチ。

ラミナは窓際のテーブルに座って、部屋から持ってきたワインを開  
けて飲みながら料理が出来るのを待つ。

もちろん給仕は断っている。面倒だし、そもそも業務時間は終わっ  
ているからだ。

モラウ達の姿はなく、アマチュアハンター達もいない。

広いレストランにたった一人でワインを傾けるのは、ラミナも初め  
てで違和感が半端ない。

「お待たせ」

メンチが両手に皿を乗せて、やって来た。

まず目の前に置かれたのはサラダとカルパッチョ。さらに何回か  
往復して、スープ、パスタにローストポークがテーブルの上に並ぶ。

「お〜……！」

「時間も時間だし、簡単なものだけど」

「いやあ、十分やって。うちやとあの時間でここまでのもん出来へん  
し」

簡単に乾杯して、早速食べ始める。

「ちなみになんか珍しい食材入つとるん？」

「カルパッチョに使ってる魚はヨルビアン大陸最東端の『アカルル王国』でしか獲れない『チェリーサーモン』。後はローストポークの、カキン国の奥地にのみ生息する『クライミングゴア』くらいよ。まあ、スープとパスタはあたしが独自ブレンドしたスパイス使ってるけど」

「それもメンチが見つけたんか？」

「サーモンはあたしだけど、豚を見つけたのはブハラよ。肉に関してはブハラの嗅覚と執念は異常なのよね」

ワイングラスを傾けながら、メンチが話す。

どの料理も1時間足らずで調理したというのに、食材やスパイスの風味が素晴らしいの一言に尽きる。

「どう？ あたしと組む気になった？」

「こだわるなあ」

「食材と一緒によ。目の前にいる逸材をそう簡単に諦めると思う？」

「思わへんけど、そこまで食材や動物に興味ないでなあ……」

「人生、美味しいものに拘らないと損よ」

「食べるなら、そらそうやけどな」

しかし、そのために食材を探し求めたいほどではない。

暗殺の方が手っ取り早く儲かるし、分かりやすいのでメンチと組む魅力をそこまで感じないラミナだった。

「まあ、時々手伝うくらいやったらええけどな。暇な時で、報酬が良ければやけど」

「あんたも中々頑固ね。ま、今はそれでいいか」

グイッとワインを一气飲みするメンチ。

食べ終えた2人はさっさと皿を洗って、部屋に戻る。

シャワーを浴びた2人は髪を下ろしたバスローブ姿で、次はウイスキーを傾ける。

メンチは床に座って戦闘に使った包丁の手入れをしながら飲み、ラミナはツマミのチーズを食べながら、その様子を眺める。

「あなたの能力って手入れがいらなから楽でいいわよね」

「その分、そこそこの面倒やけどな」

「やっぱり?」

「そら、あんだだけ武器を能力付きで具現化するんが、簡単なわけがないな」

「やっぱそうか。あ、そういえば、あんだ他の同期とは連絡取ってんの? それとあの失格になった子とか」

「ゴンとキルアは色々あって、少し前まで天空闘技場でうちが念を教えてやったから、今も一緒やろ。天空闘技場でヒソカにも会うたけど、それ以外は知らん」

「は? ホントにあの2人にあんだが念を教えたの?」

「成り行きでな。つちゆうても教えたんは四大行と【凝】に、【堅】と【円】は手本を見せただけやけどな」

「半年足らずでそこまで出来たら十分すぎるわよ。それでどうだったの? あの2人の才能は」

「バケモンやバケモン。すでにそこらへんの奴らよりオーラの量は多い。身体能力も高いし、後は実戦経験積めば【発】無しでも、そう簡単には負けんやろな。【発】次第では、うちらもあつという間に置いてかれるで」

「……マジで?」

「大マジ」

ラミナは大きく頷いて、ウイスキーを喉に流す。

メンチはゴンとキルアを思い出しながら、驚きもするが納得もする。それだけの印象と能力は試験で見せてもらった。

「あの子らって何のハンター目指してるの?」

「さあ? ギンはまずは親父さん見つけることに集中するみたいやしな。それにあの2人は色んなことに興味持ちよるから、しばらく専門分野とか持たんのちゃうか? 多分、メンチが誘えば来ると思うで?」

「ふうくん。あんたは賞金首ハンターとかやらないの?」

「別にやってもええけどなあ。その前にうちが賞金首になつとる気もするけど」

「あんた、本名で暗殺者やってんの?」

「リップパーって名乗っとる」

「リップパー……リップパー……」

メンチはリビングからパソコンを持ってきて、何やら調べ始める。ラミナも横に移動して、画面を覗き込む。

「……あつたわ。賞金2000万ジエニー。まあ、殺し屋としては小物扱いね」

「ふうくん。まあ、依頼してくるんも殺すんも裏の人間ばっかやからやろな」

「でしょうね。そのせいか、顔写真とかもないわね。分かっているのは女ってことくらい」

「そんなもんなん？」

「ハンターサイトだったら、もうちよつと詳しく載ってるでしょうね。モラウも調べてみたいだし」

「やっぱ？」

「けど、ほとんど分かんなかったって言うってたわよ？ あんた、流星街出身なんでしょ？」

「あく……やっぱ分かるんか……」

「そりや、国際人民データ機構に情報が無いなら、そこしかないでしょ。NGLとかでも流星に登録してるしね」

ラミナはため息を吐いて、グラスを傾ける。

メンチはパソコンをベッドに放り投げて、ウイスキーを一気飲みして新しく注ぐ。

「まあ、あそこの出身だからって別に問題ないわよ。登録してたって死んだふりとか出来るし、あんた以上のクズなんて腐るほどいるし」  
(……家や旅団との関係とかもバレとるんやろか?)

明日にでも一度調べてみようかと決めたラミナだった。

「さて、そろそろ寝るわよ。明日はアマチュアや警察からの情報待ちだけど、動きがあるかもしれないし」

「へいへい」

そろそろと言っても、すでに時間は深夜4時。

もう朝とも言える時間だが、2人はツツコむことなくベッドに潜り

込む。

そして、2人とも1分も経たずに眠りにつく。

寝るときはすぐに寝る。それが一流の習慣でもある。

こうして、ラミナのプロハンターとしての初仕事の初日は終わりを迎えたのだった。

メンチの能力！ \*拙作オリジナル

ブライド・オブ・シエフ

・【孤高の包丁捌き】

操作系能力。

包丁を自在に飛ばして操る。

テイスト・オブ・ロイヤル

【周】で切れ味も強化でき、【強欲なる女帝の舌】も発動できるので、放出系・強化系・操作系の複合能力とも言える。

戦闘だけではなく、食材を捌く時や調理の際にも重宝している。

6本が一番扱いやすい。料理の動きをさせると緻密さが増す。

## #32 マダマダ×ナ×ナツクル

翌朝。

夜明け近くまで飲んでいたメンチとラミナは、そんな気配を全く感じさせずに普通に起床する。

コーヒーとホテルの朝食を食べた2人は、モラウ達やアマチュアハンターの纏め役数人を呼んで、調査経過を聞くことにした。

「保護した動物達の治療は問題なく進んでる。すぐに死にそうなほど衰弱してる動物は流石にいなかった」

「まあ、商品だしね」

「森の拠点はあそこだけのようです。連中が使ってたのは、ですが」「やつぱ、まだあるよな」

「だが、現存する密猟集団の拠点はほぼ全て洗い出しが終わった。森の中の拠点も縄張りが被らないようにするためか知らんが、バカなことに地図が残ってたんでな。ついでに連中の背後の組織も問題なく調べられた」

「……数が多かっただけってことか」

「とりあえず、警察関係者に情報を渡しといて。ここの密猟が潰されたのは、多分もうバレてるだろうし。夜逃げや証拠消される前に捕まえられる奴は捕まえたいわ」

「了解」

ラミナは渡されたスポンサー組織一覧の資料を見て、僅かに眉間に皺を寄せる。

「何か気になることでもあったのか？」

シユートがラミナの様子に気が付いて、声を掛けてくる。

それにメンチ達もラミナに目を向ける。

「んく……いくつかのマフィアは言うだけ無駄になりそうやな。警察と癒着しとるやろうし、無理に突っ込んでもスケープゴート出されて逃げ切ると思うで」

「証拠は出てんだ。逃げ切れるとは思えねえが？」

ナツクルが腕を組んで片眉を上げる。



ラミナは資料をテーブルに放り投げて、肩を竦める。

「んなもん、『敵対してる組が自分達を嵌めようとしたんだ』とか言うに決まっとる。言わんかってても組を抜けようとしとる構成員をスケープゴートにして、『こいつが組を抜け出すために勝手にやった』とか言い出すやるな。組の中には証拠なんぞ残しとらんやろうし」

ラミナの言葉にメンチとモラウは納得の表情を浮かべ、ナツクルやアマチュアは顔を顰める。

「事実、2つほど密猟なんざに手を出すような組やないねん。十老頭と顔合わせ出来るレベルの組やったら、近々開催されるヨークシンのオークションで競り落とす方が顔が立つでな。多分田舎の小さい組が、密猟者連中を引き込むときに箔をつけようと勝手に名乗ったんやろ」

「あく……そういうことか」

「やから、ここにツツコんでも白を切られるだけやな」

「ラミナ、行くだけ無駄なマフィアの名前に印付けといて」

「つちゆうか、ハンターサイトで名前騙ったマフィア調べとくわ。時期が時期やからな。マフィアンコミュニティに下手に喧嘩売るんは避けたいでな」

「暗殺の仕事が出来なくなるからか？」

ナツクルが挑発するように言ってくる。

メンチとモラウは小さくため息を吐き、ラミナは呆れたようにナツクルを見る。

「阿呆。マフィアンコミュニティに喧嘩を売るつちゆうことは、6大陸にあるほぼ全ての裏組織に狙われるかもしれんのやぞ。マフィア連中は表の社会とも繋がりが強い。そこを敵に回したら、普通に生きることはまず無理や。それにマフィア連中からハンターを抱えとる。お前の家族構成や故郷、拠点なんざすぐに調べられて、皆殺しにされんで」

ハンター証は世界を敵に回しても、その効果を剥奪されることはまずない。

マフィアと契約を結ぶハンターだって珍しくもない。なので、調べ

るだけなら十か条にも引つかからない。

ハンターではない念能力者などマフィアならいくらでも抱えているし、ゾルディック家とも繋がっている。

狙われたらプロハンターであろうと厄介なんてレベルではない。

そうラミナは説明した。

「ぐ……！」

「今回はここに拠点構えとる連中潰すだけで満足するんやな」

「あたしはそのつもりだったわよ。スケープゴートならスケープゴートでいいわ。それだけでも連中に損害は出るしね」

「ほな、うちは調べてくるわ」

「頼むわ」

ラミナはホテルのパソコンルームに移動して、調べものを始める。ハンターサイトを開いて、素早くマフィアの情報を集める。

(……やっぱ有名どころは全部騙り。半分が傘下末端の組。もう半分が敵対する組の傘下末端の組か)

ナツクルにも言った通り、デカイ組は直接密猟に手を出すことは少ない。

オークションや直接の取引で楽に手に入るからだ。なので、密猟を行うのは基本的に末端や中堅の野心的な連中が多い。

更に言えば、ハンターが縄張りを持っているところで密猟するのは、間違いなく情弱の新参か落ちぶれた連中。

つまり、上からすれば切り捨て前提の連中だということだ。

恐らく、上の連中は小耳に挟んだくらいで証拠など持っていないだろう。

ラミナは集めた情報を印刷して、メンチにメールする。

すぐにアマチュアハンターが取りに来たので手渡して、後は任せる。

ラミナはこの隙にフェイタンが話していたゲームと、自分と旅団の情報調べることにした。

グリードアイランドの情報料は2000万ジェニー。ラミナは戸惑うことなく、振り込んで情報を見る。

「……グリッドアイランド。ハンター専用のゲーム？ 販売数は100で、価格は58億……」

作ったのは念能力者（達？）。

ゲームを起動すると念が発動し、プレイヤーをゲームの中に引きずり込む。

現在も大富豪のバッテラ氏が高額の懸賞金をかけており、多くのハンターが挑戦するも達成者はいない。

今年のヨークシンのオークションで7本出品予定。最低落札価格は89億ジェニー。

「いわくつきやなあ。それにしても89億で。うちの隠れ口座も合わせても1本落とせるかどうかやなあ」

ラミナは内容に呆れながら、グリッドアイランドのページを閉じる。

そして、自分の情報を検索してみる。

リップパーの情報料は5000万。

もちろん戸惑うことなく振り込む。

ラミナの顔写真、名前、年齢、仕事経歴、ハンターであることが表示される。

仕事経歴は全てではないが、マフィアから依頼された仕事は完璧に記載されている。

「ネテロも知っとるし、モラウも調べさせた言うとったしな。ここらへんはもうバレとるか……」

シルバとゼノから逃げ切ったことも、ゾルディック家を訪れたことも記されている。

ゴンとキルアに念を教えた事まで、既に記載されていた。

「……キモ」

ラミナは呆れながら、情報に目を通していく。

過去の経歴が不明なため、流星街出身である可能性が高い事も記載されている。カゴツシの家については書かれておらず、他のホテルや避難用の隠れ家の方がメインの拠点の可能性があると書かれていた。

カゴツシの家はもちろん偽名を名乗り、変装して購入している。あ

の周辺は監視カメラもほとんど仕掛けられてないので、まだバレてはいない様だ。しかし、今回の件で今後露見する可能性は十分にある。そして、旅団との関係については何も記されてはいない。

「はあ……他にも家、買うところか」

続いて旅団の情報を調べる。

情報料は1億ジエニー。

「……流星なんか、安いんか……」

振り込んで、ページを開く。

しかし、活動内容くらいでまともな情報は一つもなく、顔写真すら無い。

「……なるほどなあ。情報が碌に無いから安かっただけか」

情報料に納得したラミナはパソコンルームを後にして、部屋に戻る。

「どう動くか決まったんか？」

「とりあえず、森にある拠点を先に潰すわ。片方はあたしとシユート、アマチュアで行くわ。もう片方をあんた達でお願い」

「対応は？」

「昨日の夜と同じ。抵抗すれば仕方なし。降伏すれば見逃す」

「へいへい」

ということで、ラミナはモラウ、ナツクルと共に森へと向かうことになった。

簡単に昼食を済ませたラミナは、地図を確認しながら駆け足で森を進む。

その隣をモラウ達も走っている。

「また先行して、偵察行くか？」

「そうだな。頼む」

「へいへい」

前回同様ラミナは先行して、【朧霞】で姿を隠して偵察に出る。

ラミナを見送ったモラウは、走り続けながらナツクルに顔を向ける。

「まだ納得出来ねえのか？」

「……実力は認めてるっすよ」

「だったら、何が気に入らねえんだ？ 別に快樂殺人者ってわけでもねえし、悪戯に力を振り回す奴でもねえ」

確かに一度敵対した相手には容赦がないが、それは殺し合いをしているのだから責めることでも怒ることでもない。

止めろと言えば止めるし、下っ端のような仕事にも文句も言わない。

「お前が今朝挑発した時だって、イラつくこともなく丁寧に教えてくれたじゃねえか」

「ぐ……」

「実際、マフィアに関してはあいつがいなかったら、無駄に長引いてた可能性はあるぜ？」

「分かってますよ！ それくらい！」

ナツクルは八つ当たりするように叫ぶ。

「けど、殺さずに終わらせることも出来るんすよ!? あの若頭だって殺さなくても捕まえられれば、もうマフィアなんてする余裕はなくなる！」

「それはラミナじゃなくて、依頼したマフィアに言うことだろ。雇われたあいつがそんな判断できる訳がねえ」

「それは……そうっすけど……」

（実力もあるし、頭も悪くねえんだがなあ……。どうも甘いというか、妥協を覚えられねえのがなあ）

悪いわけではないのだが、それを他者にまで押し付けてしまう癖がある。

ナツクルはラミナの事を認めているのだが、だからこそ暗殺者などをしているのが納得出来ないのだろう。

モラウもラミナの事はもったいないとは思いますが、昨日1日を通して関わって思ったのは、

（あいつも相当芯を持って動いてやがる。俺ら程度じゃ揺れることすらねえだろうな）

ということだった。

「今は仕事に集中しろ。まずは動物達を救うことが第一だろうが」  
「……うす」

「その必要はないで」

「!!」

ラミナが音もなく戻ってきた。

「どういうことだ？」

「もぬけの殻やった」

「逃げたってことか？」

「いや、檻どころか人がおった形跡もない。少なくとも、ここ数日で逃げ出したつちゆう感じやない。もつと前に放棄されとるな」

「ちっ！ ダミー情報か、別の理由で潰れて手を引いたってことか……」

「どうするんや？ もう少し辺り探すか？」

「そうだな。だが、歩き回るのも手間だ。俺の【紫煙拳】で周囲を探る」

「ああ……あの煙、【円】でもあったなあ」

ラミナは思い出したように頷き、モラウに任せることにした。

モラウが勢いよく大量の煙を吹き、一気に森を覆っていく。

「オーラ保つか？」

「師匠のオーラ総量はおよそ6万5000。森に広げるだけなら、数kmは余裕だ」

「……ああ。オーラの数値化か」

オーラは数値化出来るとされている。

しかし、実際には目算でしか計算する方法はなく、精神面や能力内容によっていくらかでも変動するので、あまり重要視はされていない。それをナツクルが言い出すとは、思っていなかったこともあり、ラミナは思い出すまで数秒ほど時間を要した。

「数値を言われてもピンとこんわ」

「意外と馬鹿に出来ねえぞ？ 相手の実力を測るにも使えるからな」

ナツクルは不機嫌そうな顔で言う。

ラミナはメンチにメールで報告しながら、肩を竦める。

「師匠。どうっすか？」

「……駄目だな。動物共しか感じねえ」

「メンチからは『なにもなかったら、一度撤退して構わない』やと」

「しようがねえ。帰るとするか」

「ちよつといいっすか？」

モラウが能力を解除して、ため息を吐いて撤退することを決めると、ナツクルが突然呼び止める。

少し嫌な予感したモラウだが、顔を向けて先を促す。

ナツクルはラミナに顔を向けて、指差す。

「俺と戦えや、コラ」

「なんでやねん」

「はあ……」

ラミナは呆れながらツツコみ、モラウは天を仰ぐ。

「テメエがクソ野郎じゃねえことは分かった」

「野郎ちやうからな」

「話の腰折んじゃねえよ!! いいから俺と戦え! ビビってんのか、コラ!!」

「理由ないやんけ。なんで無駄に疲れる事せんとあかんねん」

「俺が納得出来ねえからだ!!」

「知るか阿呆」

ラミナは呆れ顔でモラウに顔を向ける。

モラウは腕を組んで、首を横に振る。

ラミナは盛大に顔を顰める。

「戦う言うたって、まだ仕事中やぞ。戦った後に密猟者の拠点見つけたらどうすんねん?」

「そういうことだ、ナツクル。まだ仕事が残ってる中で、お前とラミナを戦わせるわけにはいかねえよ」

「ちっ!!」

「戦いたいなら、仕事が終わるまで我慢しろ。またメンチに殴られるぞ」

ナツクルは盛大に顔を顰めて、苛立ちを露わにする。

それに2人はため息を吐いて、それ以上何も言わずに走り始める。

「大丈夫なんかな？ あれ」

「腕は確かなんだがな。そのせいかどうかにも甘くて、敵の命でも死ぬことを避けちまうんだよ」

「……ハンターがそれでええんか？」

「よくねえから、まだ半人前なんだよ」

「難儀なやつぢやなあ」

「まあ、それが絶対に悪いってわけじゃねえ。殺さなくて済むなら、それはそれでいいことだ。だが、それを周りにも押し付けようとする癖があるのが難点だな。今回は念も使えない密猟者相手だから放置してるが、もし実力者がいれば仲間の命も危険に晒すことになる。その切り替えを出来るようになればいいんだがな」

「無理ちやうか？」

「そこで諦めちまつたら、師匠と言えねえだろ？」

ならば、ナツクルの手綱をしつかりと握って欲しい。

ラミナはそう思ったが、黙っておくことにした。

ラミナ達はホテルに戻り、メンチ達の帰りを待つ。

その間、暇だったので待機しているアマチュアハンターに、現在押収してる刀剣類の武器を見せてほしいと声を掛ける。

「大丈夫ですよ。欲しいものがあつたら、メンチさんに聞かないとダメですけど」

「分かっとる」

ラミナは苦笑しながら頷き、保管場所を教えてもらう。

アマチュアハンター達が使っているビルに向かい、武器を見させてもらう。

ナイフや剣、槍などが並んでいたが、やはり量産品物ばかりで珍しいものはない。

「レアもんはやっぱないわなあ」

「ここは前線部隊の連中の武器だけだよ。密猟者程度の連中がアンタが欲しがる武器なんか持つてるもんかい」

ラミナは声がした方向を見る。

青色のフレンチブレイドモヒカンに、銀縁のスクエア眼鏡。腹部に



獅子が刺繍されたオーバーストのスチームパンクコルセットに、デニムホットパンツ、そしてオープントゥニーハイサンダルを身に着けた身長140cmほどの女性。

右太ももにはナイフが差さっているレッグホルスター。それと細身の両手剣を背負っている。

「アンタが欲しそうな武器は隣の部屋だよ」

「……その前に名前聞いてええ?」

ラミナは目の前の少女が、そこら辺のアマチュアハンター達とは一線を画す實力を持っていることを見抜いていた。

「ああ、それもそうだね。あたいはコロロルク・ラルバン。プロ3年目でメンチさんの弟子さね」

「弟子? メンチも弟子おったんか。けど、プロなら何で昨日顔出さなかったんや?」

「着いたのがついさっきだからさ。他の仕事がやっと終わってね。ああ、アンタの名前は聞いているから名乗らなくていいよ」

見た目と話し方やしぐさとのギャップが半端ないが、ラミナはツツコむことはせずに握手をする。

「悪いけど、歳いくつ?」

「あたいかい? 26だよ。見えないだろ?」

コロロルクは苦笑する。

ラミナは年上だとは思っていたけど、5つ以上離れているとは思っていないかった。

もう一方の部屋に案内してもらおうことになり、コロロルクの後に付いて行く。

「コロロルクも美食ハンター志望なん?」

「いや。あたいは幻獣ハンターさね」

「ナツクルのビーストハンターとは違うんか?」

「ビーストハンターは保護を一番の目的にしているのさ。あたいは新種の発見と生態調査がメイン」

「なるほどなあ」

隣の部屋に案内され、武器を見て回る。

隣の部屋よりは造りがしつかりしているし、独自の装飾もされているが特にオーラを纏っている武器などは見当たらない。

「まあ、レアもんあったら上に売り払っとるわな」

「武器収集が趣味なのかい？ 暗殺者だって聞いてたけど」

「まあ、そうやな。剣とかナイフとか刃が付いとる武器は相性がええみたいでな」

「ふうん。っと……」

コロロルクは携帯を取り出して、メールを確認する。

「メンチさんが戻ってきたみたいだね」

「ほな、戻るか」

用は無くなったので、さっさと戻ることにした2人。

ホテルの部屋に戻ると、メンチ達の他に新しい顔がいた。

銀のロングストレートヘアを後ろで纏めている180cmほどの褐色肌の女性。

口元を黒のマスクで隠し、黒のポンチョマントを羽織り、灰色のカーゴパンツにブーツという傭兵を思わせる服装をしている。

左目に縦に走る一筋の傷痕があり、右瞳が青、左瞳が赤とオツドアイズが特徴的だった。

「紹介しとくわ。こっちもコロロと同じで、あたしの弟子。プロ2年目の——」

「ビーストハンターのザーニヤ・アマゾッドと申します」

礼儀正しく頭を下げるザーニヤ。

それを聞いたラミナは、思わず視線が隣にいるコロロルクとザーニヤを往復する。

メンチは腕を組みながら苦笑して、

「見た目と性格が真逆でしょ？ ザーニヤは誰にでも敬語で超真面目、コロロは誰にでもタメ口でガサツなのよね。ちなみに年齢も見た目の逆。ザーニヤが18歳で、コロロルクは26歳」

「いいだろ、別に」

コロロルクはジト目を向けて、師匠にツッコむ。

ザーニヤは小さくため息を吐いて、

「コロロルク。せめて、師には敬語を使いなさい。教えを乞うているのですよ」

「その師匠が何も言わないんだから、いいじゃないのさ」

「よくありません」

(ええコンビ……。いや、トリオっぽいな)

ラミナは2人のやり取りを見て、そう思った。

ザーニヤがメンチとコロロルクの適当なところをカバーして、コロロルクが暴走気味なメンチに付き添い、メンチはその2人を引っ張っていく。

ザーニヤの心労がやや心配にはなるが、コロロルクとメンチなら姉御肌気質でそこをカバーするのだろう。

美味しい食事や年上の余裕で、ザーニヤを引っ張っているのだろうと推測する。

2人のプロが合流したことにラミナはあることに思い至る。

「弟子2人も合流したことやし、うちはもうこの仕事にいらんのちゃうか?」

「まだ調査が終わってないから、もう少し待ちなさい」

「まあ、ローテーションは出来るから、仕事は楽になるがな」

「暇だったら、この子達の特訓の相手でもしてあげて」

「それやったら帰らせてえや。なんや、ナツクルにも勝負挑まれるし」

「……あんた……まだ根に持ってるの?」

メンチが呆れながらナツクルを見る。コロロルクとザーニヤもジト目を向ける。

ナツクルは腕を組んで、顔を顰める。

「納得出来ねえことを後回しにするのは性分じゃねえんだ」

「じゃあ、一回戦えば満足するの?」

「ちよい待てい」

「けど、このまま放置しても鬱陶しいでしょ? あたしも面倒だもの」

「そうなんだが、こいつの能力はちょっと厄介なんだよ。下手したらラミナはこの後使い物にならなくなる」

モラウが面倒そうに頭を掻きながら、口を開く。

その内容にメンチ達は首を傾げる。

「能力ってこと？」

「ああ。こいつの能力は一定の条件をクリアすると、相手の念を1ヶ月封じるんだよ」

「へえ」

メンチは興味を持ったようで、ラミナを見る。

視線を感じたラミナは盛大に顔を顰める。

「こいつに勝ったら報酬アップに、仕事が終わるまでこいつは事務仕事と動物の世話に専念させるわ。あんたが負けたら、仕事が終わるまでゆっくりすればいいわ。もちろん報酬はしっかり払うし、料理も作る。それでどう？」

ラミナは断ろうとしたが、ナツクルはもちろんモラウやシユート達からも視線を感じて、開きかけた口を閉じる。

当然のことながら全員がラミナとナツクルの戦いに興味を持っている。

ラミナは1分程顔を顰めたまま、葛藤するように思考に耽る。

そして、諦めたように小さくため息を吐く。

「はあく……しゃあない……か」

「よっしやあ!! じゃあ、早速——」

「ただし」

ナツクルが拳を掌に合わせながら、獰猛な笑みを浮かべて早速始めようとするが、ラミナがそれを遮る。

「うちは本気で戦わん。殺す気はないでな。それでええんなら、戦うたる」

「ああん!? 舐めてんのか、テ——!!」

「待て、ナツクル。お前だって殺す気はないんだろ? だったらいいじゃねえか」

「けど!!」

「それでも文句があるなら、戦って無理矢理本気を出させればいいだろ。違うか？」

「……違わねえっす……」

「なら、お前はただ本気でやればいいだけだ」

「押忍!!」

モラウの言葉にナツクルは気合を入れ直す。

ラミナは舌打ちをして、眉間に皺を寄せる。今の挑発でゴネてくれれば、更に文句を言つてうやむやにして逃げようと考えていたが、見事にモラウに修正された。

これでナツクルはただラミナに全力をぶつければいいだけだ。

(まあ、それでも本気でやる気はないけど)

【月の眼】はもちろん、殺傷力が高い武器は使わないつもりでいる。まだナツクルの能力が分からないので、どの武器が良いかは判断できていないが。

ラミナ達はホテルを出て、ラミナとモラウが暴れた倉庫へと向かう。

すでに死体はもちろん動物達もおらず、すっからかんになっていた。

「手加減なんざしねーぞ、コラ」

ナツクルが肩を回しながら、ラミナと向かい合う。

メンチ達は壁際に並んで、観戦する。

「さあて、どうなるかしらねえ」

「ラミナが武器に拘らなきゃ、ナツクルが不利だな」

「けど、今もやる気出して無さそうよ?」

「それならそれで、ナツクルが有利になるから構わんさ」

ラミナは気だるげに両手を腰に当てて、ナツクルを見ている。

ナツクルはそれを見て、歯軋りをする。

「舐めやがって……!!」

ナツクルからオーラが力強く噴き出す。

「後悔すんなよコラア!!!」

叫びながら猛烈な勢いで飛び出すナツクル。

猪突猛进かと思ったが、左右にフェイントを入れてラミナを惑わそうとする。

「ほお……」

「オラア!!」

ラミナは感心の声を上げながら、頭を仰げ反らせて左から飛んで来たナツクルの右ストリートを躲す。

ナツクルはすかさず右フックを繰り出す。ラミナは左足を引いて半身になって躲す。そして、右脚一本で後ろに跳び下がる。ナツクルはラミナから離れないとばかりに詰め寄ってくる。

(ゼルンロサスでも、森でも、無手で突っ込んできとったな。動きや雰囲気からすれば強化系っぽいけど……)

「オラア!!」

ラミナは考察しながらナツクルの動きを観察する。

(……うちの能力を知っとつても詰め寄ってくるか。けど、確かに体術もスピードもかなりのもんやな。……なら)

ラミナはナツクルの蹴りを躲して、大きく跳び下がる。

ナツクルはすぐに詰め寄ろうとする。

しかし、ラミナの右手にハルバートが出現して、足を止める。

「……長物か」

(これで詰め寄ってくるなら、あいつは強化系か、相手に触れることで発動する能力つちゆうことやな)

ラミナは両手でハルバートを素早く振り回して、ナツクルを牽制する。

「あれは初めて見る武器だな」

「全く……どれだけ武器を出せるのかしら……」

「あのナツクルの攻撃もまだ余裕をもって躲してますね」

「まあ、ナツクルの奴もまだ本気で動いてねえけどな」

シユートが眉間に皺を寄せて、ラミナの身体能力の高さに慄く。

すると、ナツクルが上衣を脱ぎ捨てる。

「本気で行くぞ、コラア!!」

ナツクルが姿が霞むほどの速さでラミナに迫り、右後ろに拳を構えて現れる。

ラミナは石突を突き出して、ナツクルを牽制する。

ナツクルは拳を構えたまま、右膝を突き出して石突を弾き上げる。

ラミナはその勢いを利用して、刃を掬い上げるようにハルバートを振り上げながら振り返る。

「ぐっ！」

ナツクルは食いしぼりながら上半身を反って躲す。

「それで躲したつもりか？」

ラミナの左手にハルバートがもう一本出現する。

「!?」

「具現化した武器やぞ。複数出せるに決まっとるやろ」

ラミナが鋭く左のハルバートを、ナツクルの右肩を狙って突き出す。

「んのっ！」

ナツクルは半身になって紙一重で躲し、左アッパーを繰り出す。

それをラミナは頭を反らしながら右手のハルバートを横にして、ナツクルの内肘につつかえ棒のようにしてアッパーを止める。

その隙を狙って、ラミナの左ミドルキックがナツクルの腰に叩き込まれる。

「つつうオラア!!」

ナツクルは左足を大きく踏み出して前に飛び出るのを耐え、無理矢理腰を捻って左フックを繰り出す。

しかし、ラミナは蹴りの直後に後ろに跳んで、ナツクルから距離を取っていた。

「……テメエ……なんで追撃してこねえんだ？」

「殺しそうやったでな」

「んだとお……舐めてんのかコラア!!」

「いやいや、お前の能力もなんとなく読めたでな。ここからが本番つちゆうことやな」

「っ!!」

ハルバートで右肩を軽く叩きながら、ラミナは確信を持って言い放つ。

ナツクルは目を見開いて、メンチ達も目を見開く。

「俺の能力が分かっただあ？ 適当なこと言ってるじゃねえぞコラ」

「まあ、細かいところまでは分からんけどな。けど、お前の能力はうちを殴ることが発動条件つちゆうことは分かったわ」

「!!」

「それときつきのモラウの言葉やな。『相手の念を一か月封じる』。そこから考えられるんは放出系か特質系能力。お前のオーラをうちの体に浴びせる事が必要みたいやな?」

「……っ!」

「なら、もうちよいこのままでええか」

ラミナは右手のハルバードの刃先を、ナツクルに向ける。

「今度はうちが見せたるわ。『起動せよ』ステイール・ジュネラル【不屈の要塞】」

唱えた瞬間、ラミナの全身が漆黒の西洋鎧に包まれる。

頭部は額に両刃の剣のような突起が生えており、肩にも突起が生えた肩甲が威圧感を醸し出す。

隙間なくプレートが展開されており、重厚な鎧騎士が目の前にいた。

「なっ……!?!」

「お前の能力は鎧の上からでも効くんか? ちなみに、この鎧には外部からのオーラは弾く特性があるでな。氣い付けや」

ドオン!とラミナが地面を砕き、ハルバードを振り上げてナツクルに迫る。

ナツクルは全力で横に跳び、叩きつけられるハルバードを躲す。

ナツクルはすかさず詰め寄って、兜に右拳を叩き込む。

しかし、ラミナはビクともせず、むしろ拳を押し返してきた。

「!?!」

「悪いが、ただのパンチなんぞ効かん」

そう言いながら、ラミナの右裏拳がナツクルの胸に叩きつけられて、ナツクルは大きく後ろに吹き飛んで壁に叩きつけられる。

「があ!!」

「……オーラを弾くって……」

「反則だろ」

「その代わり、うちも放出出来ん。まさにガチンコ戦闘しか出来んっ



ちゆうことや」

【不屈の要塞】発動中は、ラミナも【練】が出せない。【周】なども出来ないので、純粹にハルバードと鎧の硬さとラミナの身体能力のみでの戦いとなる。

「なるほどねえ。新しい武器も出せないんだね？」

「当然や」

コロロルクの言葉に頷くラミナ。

「こりや、念能力者には天敵だな」

モラウが腕を組んで冷汗を流す。

(まあ、防御力も普通の鎧と変わらんから、普通に碎けるんやけどな)

オーラを弾くだけなので、ハンマーなどで殴られれば普通にへこむ。

ウボオーの怪力に殴られれば普通に顔が潰れかねないし、ハルバードも折れる。そして、ハルバードが折れれば鎧も消える。

更にハルバードはオーラを弾けない。

【不屈の要塞】を破りたいなら、ハルバードを狙えばいいだけなのだ。

ラミナの能力は基本的に武器を壊せば、簡単に攻略できる。

もちろん、そうならないようにラミナは体術を鍛えているので、簡単なことではないが。

「もうええやろ？ これ以上は疲れるわ」

「あたしはもう満足よ。っていうか、今のナツクルじゃ無理ね」

「ぐ……！」

ナツクルは腹を押さえながら歯軋りをする。

ラミナは鎧とハルバードを解除して、肩を回す。

「あく……肩凝る能力やわ」

「本当に器用な奴だな」

「凄いです。体術も素晴らしかったです」

モラウが呆れ、ザーニヤが目をキラキラさせながら言う。

シユートはナツクルに声を掛けており、メンチも腕を組んでナツク

ルに顔を向ける。

「今回はここまでよ。これ以上はもう認めないからね。今のあんたじゃ、ラミナの能力を破れそうにないし」

「……うつす」

「相性が悪かったな。まあ、コイツの能力は大抵の奴が相性が悪いがな」

「だねえ。あたいたいじゃ無理さね。メンチさんが気に入るのも分かるよ」

「ということ、ナツクルは明日から事務仕事と動物の世話ね。しつかりやりなさい」

「ぐう……」

「今回はお前が悪い。大人しくしとけ」

「うつせえぞ！」

シュートに八つ当たり気味に叫ぶナツクル。

まだ納得は出来ていなさそうだが、これ以上はメンチとモラウも許可はしないだろうと考え、ラミナもこれ以上下手に刺激するのを止めておこうと決めた。

その後、ナツクルは「チツキショー!!」と叫びながら、走り去っていった。

モラウとシュートがため息を吐きながら後を追いかけて、メンチやラミナ達は呆れながら見送った。

「さ、帰ってご飯にしましょ」

メンチの言葉に頷いて、ラミナ達はナツクルの事を忘れてホテルに戻るのだった。

ラミナの新能力！

・ステイル・ジエネラル【不屈の要塞】

具現化したハルバードに付与した能力。

オーラを弾く鎧を纏う。

ラミナもオーラを外に放出できないので、【纏】【練】【周】などで鎧

や武器をオーラで覆えない。

なので、鎧を展開中は新しい武器を具現化できず、素の身体能力で戦わなければならない。相手の念による攻撃もほぼ全て無効化されるので、ゴンの「硬」もただのストリートパンチになり、キルアの電気も弾き、ヒソカのバンジーガムも張り付きません。ゲンスルーの爆破能力も効かない。具現化された武器も弾く。

さらに、防御力も実際の鎧やハルバードと変わらないので、殴られ続ければ凹んで碎ける。ハンマーや車、バズーカなどを受け止めれば、普通に碎ける。

鎧の一部が碎けても、再生できない。再生する場合は、能力を完全に解除しなければならぬ。

ハルバードはオーラを弾くことは出来ず、碎ければ鎧も消える。

### #333 サマザマ×ナ×ゲシ

翌日。

ラミナはコロロルク、ザーニヤと共に森の中を調査することになった。

「かなりの広さやぞ。奥までとか無理ちゃうか？」

「奥はいいさね」

「なんで？」

「コルゴ樹林の奥地は巨大な魔獣の住処なのですよ。密猟者程度では拠点を作る前に食い潰されるでしょうね」

「へえ。それでもまだまだ広いで？ モラウみたいな能力ならともかく、うちは【円】は100mが限界やし、広範囲を探る能力は流石に持ってへんわ」

「広いよ、十分」

コロロルクは呆れた表情を浮かべる。

100m以上の【円】を使用者など熟練ハンターですら中々いない。それを小さいと確信しているかのような言い方をした。

一体ラミナはどれだけの化け物と戦ってきたのかとコロロルクは呆れを通り越して、恐ろしくすらある。

(まあ、だからこそあの実力ってことかねえ)

昨日の戦いを思い出して、コロロルクは一人で勝手に納得する。

「大丈夫だよ。モラウさんほどじゃあないが、ザーニヤの能力も便利なもんさ」

自慢げなコロロルクの言葉を受けて、ラミナはザーニヤに顔を向ける。

ザーニヤは力強く頷くと、胸元に手を入れてあるモノを取り出す。

「……アクセサリーか？」

ザーニヤの右手に乗っているのは、樹で彫られた鷹の顔に本物の羽が付いており、その首元からシルバーのチェーンと戦闘機と思われるシルバーのミニチュアが繋がっているアクセサリーと思われるものだった。

「はい。私はアクセサリー作りが趣味でして。もつとも、これはアクセサリーとしては実用的ではないですがね」

ザーニヤは苦笑しながらアクセサリーにオーラを注ぎ込む。

オパール・シルバークォーツ  
「銀を纏う精霊軍」

ザーニヤの右手に銀色の翼をもつ鷹が出現する。

「具現化系か……」

「はい。具現化したい動物の一部を組み込んだ自作のアクセサリーにオーラを注ぐことで、再び命を与えることができます。この子達が視たものや感じたものは私も知ることも出来ます。もちろん、居場所も常に把握出来ます」

ザーニヤが右手を掲げて、鷹が羽ばたいて空へと舞い上がる。

「けど、あいつ一羽だけやと厳しくないか？」

「ええ。ですから……」

ザーニヤのポンチョマントの下から、銀色の毛を持つ犬、猫、猿、鷲、兎、狐。さらに銀色の鱗を持つ蛇やトカゲが出現する。

動物達は森の中へと散らばっていく。

「この子達にもお願いします」

「ほお……」

ラミナは小さく目を見開いて、動物達を見送っていく。

ここまで多種多様な動物を具現化するのはかなり高度な技術が必要で、かなり面倒な制約が設定されているはずだ。

「制約は多そうやな」

「確かに多いですが、使用に関してはそこまでではありません」

「そうなん？」

「はい。この能力は具現化するまでが一番重要なんです」

ザーニヤは具現化しなかったアクセサリーを取り出す。

亀の甲羅とシルバークォーツの盾を組み合わせたバッジのようなものだった。

「私が具現化した動物達は、私がお世話をしていた子達なんです。私の父がビーストハンターで、母が獣医でした。その関係で私も生まれた時から動物達と一緒に暮らしてきました」

「つまり、その甲羅やさっきの羽は……」

「はい。私がお世話していた子達の遺骸です。それを趣味だったアクセサリー作りで形見として所持していました」

「環境と思い入れ故の能力つちゆうことか」

「その通りです。裏試験に合格した後父から聞かされたのですが、私はアクセサリーを作る時は無意識でオーラを込めていたようで、動物達の遺骸を使ったアクセサリーは特にオーラが強かったそうです」

「ほお〜」

「私が定めた制約は『私が一年以上世話をした動物の遺骸を使うこと』『自分で作ったアクセサリーであること』『動物が私の事を記憶していること』『寿命、または病気で死んだ動物であること』『私が最期を看取っていること』『壊れたアクセサリーは二度と使えない』『いかなる理由であろうとも、私が殺した動物は具現化出来ない』『具現化出来るのは、私が世話した日数まで』。これを全てクリアした場合のみ、あの子達の力を借りることが出来ます」

（……借りる、か。魂が戻ってきとるわけでもない。それでも、二度目の生を与えたつちゆうことか）

しかし、だからこそ具現化に成功した際の性能は段違いだろう。

能力への思い入れも強く、それを為すための制約の数も多い。

しかも、今挙げたのはあくまで能力を発現するための制約。発動中の制約などもあると考えられるので、ポテンシャルは計り知れない。

「戦えるんか？」

「最低限の自己防衛は出来ます。だからって貴女方に勝てるわけはありません。基本的に逃げることに特化させてます」

「だから、あたいと組んでるってわけさ。基本的に荒事はあたいの仕事さね」

コロロルクは背中の剣を親指で示す。

「なるほどなあ」

「だからアンタが組んでくれると、あたいも楽なんだけどねえ」

「金払いが良ければな」

「月3億だっけ？ それは暴利じゃないかい？」

「それくらいマフィア連中は毎月払ってくれるでな」

「しかし、ラミナさんならば賞金首ハンターでもすぐにシングルになれるのでは？」

「暗殺者も賞金首ハンターも大した差はないやろ。ターゲットが変わるくらいで、殺すんは変わりないでな。別に殺して星とか興味ないし」

ラミナは肩を竦める。

コロロルク、ザーニャは小さく首を傾げる。

（殺して名誉が欲しいわけでもない。しかし、金のためには殺しが手っ取り早いからやめる気もない、ということなのでしょうが……）  
（暗殺者に拘る理由がピンと来ないねえ……。別に賞金首ハンターだけに拘る必要もないし、この子の才能なら結構幅広く仕事出来ると思っうけど）

実力もメンチが「あたしじゃ勝てない」と言い切るほどで、昨日のナツクルの決闘でもコロロルク達より上であるのは動きを見ただけでも明らかだった。

これまでの仕事の話を聞いても頭が悪いわけでもないし、判断力も優れている。

十分暗殺者を辞めても生きていけるだろうと2人は思う。

（流星街出身が関係してんのかねえ。けど、流星街で金がいることって何かなんて分からないし……）

しかし、そこまで踏み込んだところでラミナは答えないだろう。

それに強く勧誘するのも悪手そうだ。

ラミナとは本人も言う通り、その時その時で誘う方がいい関係を築けそうだとコロロルク達は理解した。

「で、なんかあったかい？」

「特には何も。人が動き回っている気配もないですね」

「じゃあ、こっちは外れかね」

「戻るか？」

「メンチさんに連絡を入れます」

ザーニヤが携帯を取り出して、メンチと連絡を取り始める。

ラミナとコロロルクは近くの樹の根元に座って、のんびりすることにした。

「聞き辛いこと聞けどさ」

「ん？」

「アンタの能力って『武器が主体』なのかい？ それとも『能力が主体』なのかい？」

武器を作ってから、能力が決まるのか。

能力を作ってから、武器を決めているのか。

どっちが主体かというのは、かなり差がある。

「……ん。どっちも、やな」

「色んな武器を出せるって聞いてるけど、それってザーニヤみたいにかなり厄介な制約があるんだろ？」

「そら、もちろん」

ラミナは当然とばかりに頷く。

【刃で溢れる宝物庫】の制約は11個。

『【月の眼】発動時のみ、本体となる武器収納が可能。ただし、必ず刃を持っている武器であること』

『一度収納すると、壊れるまで本体を取り出すことは出来ない』

『収納できるのはオーラを纏っている武器のみ。ただし、他者の念により具現化された武器は収納できない』

『形状が80%以上一致している武器は収納できない。ただし、長さが1m以上、および大きさが3倍以上の差があれば認められる』

『具現化した武器が10回破壊されると、収納している本物も砕ける』

『ストック数はいかなる手段をもってしても回復しない』

『同じ能力は2つ以上の武器には付与できない。付与したい場合は、現在その能力を付与されている武器を破棄しなければならぬ』

『具現化した武器は、5分以上ラミナの手から離れていると砕けてストックが減る』



『【月の眼】を一度発動すると、必ず武器のストックが最低1つ減る。発動後3分経過ごとに、ストック減少数が1つずつ増える』

『武器に付与できる能力は、収納した武器が持っているオーラの量、質によって限界がある。【月の眼】状態でなければ発動できないかどうかは、作ってみなければ分からない』

『【刃で溢れる宝物庫】に収納されている武器が0になると、二度とこの能力は使用できない』

上記の制約+武器ごとの制約をクリアしなければならない。

特に厄介なのは『武器に付与できる能力は、収納した武器が持っているオーラの量、質によって限界がある』、『【月の眼】を発動すると、必ずストックが減る』である。

例えば、『妖精の悪戯』を付与しているベンズナイフのストックが0になって本体が砕けた場合。

またナイフに付与したくても、必ずしも付与できるとは限らないのである。もしかしたら、槍にしか付与できないかもしれないのだ。

今、現在切り札としていた武器もいつか必ず使えなくなる。なので、ラミナは地下倉庫に大量の武器を集めたり、優秀な鍛冶職人を探している。

そして、『月の眼』を発動しなければ武器を収納できないので、新しい武器を収納して能力を作る度に、すでに収納されている武器のストックが減ってしまうこと。

なので、常に全ての武器のストック数を把握しておかねばならず、下手なことで『月の眼』を発動できない。

ラミナの切り札は、全て時限付きなのだ。

そして、この能力故にマチやヒソカのように恒久的に使える能力を作るメモリの余裕はない。

「ま、流石に話せへんけどな」

「話されても困るさね。大変だねえ。厄介な能力を作っちゃまうと」

「そう言ううちゆうことは、コロロルクの能力はシンプルなんか？」

「まあね」

コロロルクは立ち上がり、【練】を発動する。そして、その場で軽くジャンプして、両足裏にオーラを集める。

そのまま着地するかと思ったら、両足裏のオーラが潰れるように形を変えてコロロルクの体を空中で支えた。

直後、全く踏み込んでいなかったコロロルクが10m以上高く跳ね上がる。

「ほお……」

「これがあたいの能力。【何でも弾く美女の肌】さね。オーラをバネにするだけだよ」

「怖いやろ、十分」

ヒソカの【バンジーガム】ほどではないが、先ほどの跳躍力を見れば十分脅威である。

軽く跳ねただけで10mも跳ぶのであれば、本気で踏み込めば何十mの距離を一気に跳び上がることが出来るはずだ。

移動だけではなく、攻防にも使える。

牽制で軽く殴っただけでも距離を取られて追撃が難しくなり、コロルクの攻撃を防いでも大きく弾かれる可能性もある。

戦う相手にとっては、やり辛いことこの上ない。

そこにザーニヤが戻ってきた。

「一度戻って来て構わないそうです」

「ほな、戻るか」

「もう森にはいないかもしれないねえ」

「と言っても、私達が探したのはコルゴ樹林の3分の1程度ですがね」「動物達はええんか?」

「まだ数時間は保ちます。1時間ほどしたら一か所に集めて、鷹以外の子をアクセサリーに戻して運ばせれば大丈夫です」

「なるほど」

ラミナ達は森を出て、集合場所に指定された場所へと向かう。

そこは押収した倉庫とは違う大型倉庫で、中からは動物の鳴き声が大量に聞こえてくる。

「おい、ケンカすんじゃないやねえよ。お前の分もあるつつつてんだろ!」

ラミナ達が中を覗くと、ナツクルが保護した動物達に囲まれていた。

餌をあげているようだが、もちろん言うことなんて聞くわけはない。

「お〜……懐かれとるなあ」

「ナツクルさんは見た目や言葉遣いはアレですけど、根は優しいから動物に好かれるんですよ」

「まあ、ちよつと構い過ぎるらしいけどね」

「そうですね。決して悪いわけではないのですが……」

「森に帰す事を考えたら、困りもんやな」

「ええ。餌をもらうことに慣れてしまうと、中々戻れないですからね。下手したらここに戻ってくるかもしれないですし……」

同じビーストハンターであるザーニヤは眉尻を下げて、動物に囲まれるナツクルを見つめている。

ザーニヤは近いうちに森に帰す動物は最低限の接触を心掛け、食事

も住んでいた環境に合わせるのを信条としている。懐かれるのは嬉しいが、人間に慣れ過ぎても困るのだ。人が近づいてくるのに慣れてしまえば、再び密猟者などに出会ってしまう可能性があるからだ。

餌をもらうのが当たり前になり、狩りをしなくなつて森から出てくるようになれば、今度は害獣扱いされかねない。

もちろんザーニヤはそのような動物を保護する活動もしているが、住む環境が変わればストレスで体調を崩すことも多い。

なので、最大限故郷で暮らせるように配慮すべきと言うのが、ザーニヤの方針なのだが……。

「がつつり市販の餌やって、がつつり撫で回して、がつつり構い倒しとるで？」

「だねえ」

「はあ〜……ナツクルさんが責任を持つなら、私が文句を言うことではないんですよ」

ハンターは互いの流儀に口を出すことは基本タブーとされている。

もちろん仕事に大きく関わるならば、別であるが。

今回の仕事に関しては、ザーニャはあくまでメンチの手伝いなので、大きく口出しすることはしたくない。

ナツクルはメンチとは別口で今回の任務に就いており、メンチ達とは協力体制にあるだけなので、先ほども言ったようにナツクルが責任を持てるならば問題はない。

しかし、やはり目の前で自分のやり方と違う手段を見ると、ツッコみたくてウズウズするようでザーニャは眉間に皺が寄ったり消えたりで、ソワソワしている。

「どうしたの？」

そこにメンチ、モラウ、シユートも合流する。

「ザーニャがナツクルの世話に不満があるみたいだな」

「ああ、そういうこと。あいつが世話してる動物は元の住処には帰せそうにないのよね。だから、どっかの保護区に送る予定なのよ」

「そうなんですか？」

「ええ、だからザーニャ。あんたも後で動物達の移送先探しといて」

「お任せください……！」

ザーニャはフンスー！と力強く頷く。

(……やっぱ見た目と中身が合うとらんなあ)

身長も高く、体つきもガツシリしており、雰囲気はクールな傭兵。しかし、会話をすればするほど、乙女チックなところがある女の子であることが良く分かる。

本当にコロロルクとザーニャの中身を入れ替えれば、一切違和感はなくなるだろう。

ちなみにザーニャが口元をマスクで隠しているのは『恥ずかしいから』らしい。

目元の傷が原因で昔イジメられたことがあるそうで、『かわいい』『美人』などと言われ慣れていないようで、昨夜素顔を見たラミナが「美人な顔やな」というと、顔を真っ赤にしてフリーズした。

更に寝る時は黄色のパジャマらしく、「中身は本当に年頃の乙女」とメンチとコロロルクが言っていた。

もちろんコロロルクはメンチとラミナ同様、豪快な性格である。酒も飲むし、寝るときは下着または全裸である。

昨夜はメンチ、ラミナ、コロロルクの3人で遅くまで酒盛りして、コロロルクはソファで寝ていた。

「で、今後はどう動くんや?」

「森の調査が終わるまではこのままね。街中や近くの街にも調査の手を伸ばしてるけど、ほぼ撤退したみたいで拠点だけが残されてるわ」  
「国外の方も調査が進んでいるが、やっぱりダメー会社だったり、シツポ切りで見捨てられた連中ばっかだな」

「まあ、そうやろな」

「報復の可能性は?」

シユートが訊ねる。

メンチやモラウは腕を組んで考える。

「少なくともデカイマフィアはせんやろうな。可能性があるんは今回で潰れる可能性がある後戻りできへん底辺マフィアか、同じく後がないここしか縄張りが無いアホな密猟者集団くらいちゃうか?」

「なるほどねえ」

「密猟者に関しては、どのグループも少なからず被害は出てるから可能性は低いと思うけど?」

「グループ同士が手を組むかもしれねえぜ」

「ああ……なるほど」

コロロルクの疑問にモラウが答え、ザーニヤが納得したように頷く。

メンチはザーニヤに顔を向ける。

「動物達はどう?」

「駄目ですね。何も見つけれませんでした。すでにここに戻していただきます」

「まあ、あの広さじゃ仕方ないわよね」

「森に関しては、俺とザーニヤで調査を続けよう」

「……なあ、うちいる?」

もういらぬ気がしてならないラミナ。

調査に関してはラミナは護衛以上のことは出来ないし、戦闘に関しても密猟者程度ならばメンチ達でも問題ないだろう。

もう仕事は終わった気がしてならない。

一週間どころか3日しか経っていないが。

「付き合ひ悪いわね」

「うちは潜入偵察か戦闘がメインやねん。待機するだけなら、他の仕事探す方がまだ有意義やないか」

「一度引き受けた仕事は最後までやるもんだぜ」

「うちはあくまで手伝いに来ただけやでな」

「昨日も言ったけど、せめて森の調査が終わるまではいなさい。マフィアの動向でも探って、あんたの同業者が来ないかどうか警戒してよ」

「……しゃあないなあ。まあ、暗殺者来たところで大した奴ちやうと思うで？」

「アマチュアとかが狙われるかもしれないでしょ？ 暗殺者の行動なんてあたし達じゃ読めないし」

ラミナはため息を吐いて項垂れる。

モラウは苦笑して、話を纏める。

「じゃあ、森の調査は俺とザーニヤ、護衛にコロロルク。マフィアや暗殺者に関してはラミナとシユート。ナツクルはあのままで、メンチは統括と手が足りないところへの応援って形でいいか？」

「あたしはそれでいいわよ」

メンチが頷いたことで、他の者達も文句は言わない。

「ほな、今日の夜から見回りでもするわ。シユートは昼の見回り頼むわ」

「昼か？」

「別に暗殺者だけちやうかもしれんしな」

「あく……悪いが出来れば2人で動いてもらえるか？」

「は？」

ラミナがシユートと役割分担しようとする、モラウが口を挟んでくる。

ラミナが首を傾げると、シュートが眉間に皺を寄せて顔を背ける。

「こいつも実力はあるんだが……」

「だが？」

「弱気というか、好機とか危険な時に二の足を踏んじまうんだよ。流石に暗殺者やマフィアなら問題ないと思うんだがな……」

「じゃあ、ええやん」

「だが、1人だと対応が遅れるかもしれないねえんだよ。それだと困るだろう？」

「……ハンターやる？」

「ハンターだな」

「……ナツクルも動かし。今日の夜はうちとシュートで見回る。明日の昼はナツクル動かさせや」

「そうだな。分かった」

「あたかも参加しようか？」

「それやとコロロルクの負担が大きすぎるわ。まあ、見回りくらいなら大丈夫やつて」

ラミナは肩を竦めて、シュートを見る。

シュートは少し居心地が悪そうに、体をソワソワさせる。

ラミナはそれを呆れたように見つめて、小さくため息を吐く。

実力はあるという言葉信じて、ラミナは夜の見回りに備えることにしたのだった。

・ザーニヤの能力！

オーバーソウル・シルバーアーミー  
【銀を纏う精霊軍】

具現化系、放出系、操作系の複合能力。

動物の遺骸を組み合わせた自作アクセサリーを媒介にして、動物を具現化させる。

基本的に『遠隔操作』。複雑な命令は出来ない。

動物達の視覚を共有することが出来る。

『戦闘形態』があり、それは組み合わせたアクセサリーやミニチュアによって異なる。

例：鷹《シルバーホーク》の場合。

付属させたミニチュアは『戦闘機』。戦闘形態に移行すると、翼の下にミサイルが出現する。攻撃力はそこまで高くはない。

元の姿を具現化させるだけならば10体以上可能だが、戦闘形態に移行させた場合は2体までが限界。

制約は『1年以上世話をした動物の遺骸を使うこと』『自分で作ったアクセサリーであること』『動物がザーニヤの事を記憶していること』『寿命、または病気で死んだ動物であること』『ザーニヤが最期を看取っていること』『壊れたアクセサリーは二度と使えない』『いかなる理由であろうとも、ザーニヤが殺した動物は具現化出来ない』『具現化出来るのは、ザーニヤが世話した日数まで』。

元ネタは「シャーマンキング」。パッチ族シルバのオーバーソウル。

・コロロルクの能力！

【何でも弾く美女の肌】  
変化系能力。

オーラに『バネ』の特性を持たせる。

跳躍力を上げることで機動力、速度、攻防力をまさしく跳ね上げる。

相手の攻撃を利用して簡単に距離を取る事も出来るし、自分の攻撃で相手を吹き飛ばすことも容易になる。

作り上げた念弾を、バネのオーラで押し出して高速で発射することが出来る。

あくまで『バネ』なので、銃弾を跳ね返したりすることは出来ず、剣や槍の突きなども貫かれる。

ヒソカの「バンジーガム」のように、他の物に引っ付けることは出来ない。

元ネタは「ワンピース」の『バネバネの実』、『僕のヒーローアカデミア』のオール・フォー・ワンの『《筋骨発条化》で空気を押し出す技』。



## #34 ナゼ×ノ×リユウ

それぞれの仕事を割り振ったラミナ達は、早速仕事に取り掛かる。ラミナは双眼鏡とノートパソコンを用意して貰って、ホテルと動物を保護している倉庫の両方が見渡せるビルの屋上を探す。

「何故屋上なんだ？」

「そら、見通しがええからや。たった2人でこんなデカイ街を隅々まで見回り出来るわけないやろ。下手に動き回って向こうを警戒させるくらいなら、下手に動かずバレにくい場所で監視しとる方が見張りやすいねん」

アマチュアハンターも使っているとは言われているが、下手に見回りさせるより現場にいてもらった方が暗殺者は手を出しにくいし、防衛力も高くなる。

もちろんプロハンターレベルの実力者が来れば話は別だが、実力がある暗殺者の行動はラミナであれば予測できる。

「襲撃があればどうするんだ？」

「そら、頑張つて行くだけや」

「……それでいいのか？」

「アマチュア連中にはヤバいと思つたら、すぐに逃げろて言うとする」  
「……」

「まあ、うちの経験から言うとな。平凡な殺し屋やつたら、あの人数相手に攻め込まん。んで、ヤバイ奴やつたら正面から堂々と来る事が多い。どっちにしろ被害が出るんやつたら、さつさと逃げた方が意外と被害少ないことがあんねん」

商業ビルの屋上を選んだラミナとシユート。

ラミナはホテルと倉庫が見える角に座って陣取り、ノートパソコンを地面に置く。ここに来る前に購入した飲み物や軽食を広げて、過ごしやすい環境を整えてる。

シユートは未だ不安そうな表情で、ラミナの背後でその様子を見つめている。

ラミナは電源を入れたノートパソコンをネットに繋いで、あるサイ

トを開く。

「……」

「それは？」

「裏の情報屋サイトや。殺し屋やマフィア、ハンターに警察とかの動きがリアルタイムで更新されることがあんなねん。この街に条件を絞れば、この街に入り込んだ殺し屋やマフィア、ハンターとかの情報が出る。本来なら情報屋しか見れへんのやけど、ちよいと裏技でな」

「……俺達のことか？」

「もちろん。もうガッツリ出とるで」

「……」

「そんな驚く事か？ ハッカーハンターやって同じことしとるやろうに」

シユートは少し顔が青くなるが、ラミナからすれば情報屋もハッカーハンターも大した差はないし、バレないと思っっている方が無理がある。

もちろん監視カメラとかが配備されていない街や場所ならば情報は少ないが、情報屋は人を雇って監視カメラ代わりにしたりしているので、意外と情報は広まっている。

ちなみに情報屋達はこのサイトに入る裏技があることはもちろん知っているので、金にならない情報しか載せていない。

それでも『マフィアのボスが来た』『殺し屋が街に潜伏している』などの誰が来たくらいの情報ならば、載せてくれるので意外と馬鹿に出来ないのだ。

「さて、後はひたすら見張りやな」

ラミナは買った携帯食の封を開けて、食べながら双眼鏡を覗く。

シユートは戸惑った表情を浮かべたままだが、大人しく座ってラミナの方針に従う。

その後、数時間。

ラミナとシユートはずっとその場を動かさず、双眼鏡とパソコンを覗いてひたすら見張る。

後1時間で日付が変わろうかという時、

「よう」

モラウとナツクルが顔を覗かせた。

「どうしたんや?」

「メンチからの差し入れだ」

モラウは右手に持つてる岡持ちを掲げながら親指を立てる。

モラウとナツクルも座って、岡持ちからどんぶりを取り出してラミナとシユートに渡す。

蓋を開けると、中はかつ丼だった。

「これまた豪勢な差し入れやな」

「全くだ! メンチがいると飯に困らなくていい。美食ハンター様様だな」

モラウとナツクルも食べるようで、どんぶりを手に取っていた。

ラミナはシユートに先に食べるように言い、見張りとパソコンの情報の確認を続ける。

「来ると思うか?」

「さあ? 可能性があるマフィアの情報も調べたけど、微妙なところやな。全財産を使うんやったら、そこそこの奴も呼べる。組の再生も視野に入れるんやったら、中堅以下の奴しか呼べんやろうな。ただ、もし組同士で手を組んで消費するなら、うちらレベルも呼べる。油断は出来んっちゆうことやな」

「落ち目のマフィアの依頼を受ける物好きなんかいるのか?」

「金が貰えればええんやから、別に報酬貰ってから潰れようがどうでもええやろ。やから、小遣い稼ぎに受ける連中が出てもおかしくない」

双眼鏡を覗きながらモラウの質問に答えるラミナ。

その言葉にナツクルがイラついたように顔を顰める。

「テメエらはなんでそう簡単に人を殺せるんだ?」

「……ナツクル」

「テメエらの金のために、悲しむ家族や仲間がいる。その人達に対して何も思わねえのか?」

「……あんま思わんなあ。うちからすれば、殺される方もそれなりの

事をしてきたからやり返されたつちゆうだけのことや」

ラミナは双眼鏡を覗いたまま、答える。

「暗殺者をわざわざ探して、金を払ってまで殺してほしいと依頼する。んなもん、少なからず殺される方はそれだけのことを依頼者にしたつちゆうことや。そこまでの奴ちやうなら、うちらなんぞ雇わずに自分で殺すやろうし、警察や別の報復を考えるやろ」

「……この前のゼルンロサスの若頭もそうだったのか……？ まだ30歳にもなってなかったんだぞ、ええ？」

「キタカバファミリーか？ お前、あの若頭のこと調べとらんのか？」  
「なんだと、コラ……！」

「あの若頭、密輸拠点を作るときに村一個潰しとるんやぞ？ 追い出したんちやうで？ 皆殺しって意味やぞ」

「なっ……!?!」

「……ホンマに調べとらんのか？」

「キタカバファミリーのことを調べたのは俺だ。こいつにはそこまで伝えてねえ」

モラウがナツクルを庇う様に言う。

ラミナは肩を竦めて、話を続ける。

「まあ、ええけど……。とりあえず、少なくともうちが殺してきた連中は、誰かに恨まれるようなことをしてきたつちゆうことや。やったらやり返される。それだけのことや」

「じゃあ、テメエは自分が殺されても、そう言えんのかよ？」

「阿呆。殺される覚悟もなく、殺し屋なんぞするかい。言うたやろが。やったら、やり返される。誰かを殺した以上、誰かに殺されて当然。んなもん、当たり前のことや」

「……」

「……怖くはないのか？」

今度はシユートが訊ねてきた。

「見ず知らずの人を殺すことに、そして殺されるかもしれないことに恐怖はないのか？」

「見ず知らずの人間やから、殺しても大して罪悪感ないんや。それが

マフィアやったら尚更やんな。自分と関係ない人間を殺そうが、恨まれたところでどうでもええでな」

「……」

「殺されるんは怖いぞ？ 殺される恐怖比べたら、殺す方がまだマシっちゅうことや。で、どうせ法や倫理に反するなら、金でも貰った方が更に罪悪感減るでな。人殺しに快楽を得るよりはマシやろ？ それにうちは自分が腐り果てた人間やっちゅうことは理解しとるしな」

「「……」」

ナツクル達は黙り込んで、眉間に皺を寄せている。

ラミナは双眼鏡をシュートに投げ渡す。

「交代」

「……ああ」

ラミナはかつ丼を食べ始める。その間もパソコンを適度に確認することを欠かさない。

モラウが再びラミナに訊ねる。

「ハンターになったのに、暗殺者を辞めないのはなんでだ？」

「んなもん、今更辞めて真っ当に生きれるとも思うか？ ここで辞めたら、それこそクズやろ」

「じゃあ、なんでハンターになったんだよ？」

「依頼人からハンター証取ってこいって言われたからや。普通なら入国出来るところにおる奴でも依頼したいんやろな」

「……ずっと殺し屋の人生なんて空しくないか？」

「お前なあ……うちの出身どこか知つとるやろ？ 流星街で暮らしたって大して変わらんわ」

食事を終えたラミナは口を拭い、水を飲む。

流星街とて命が軽いのは変わりない。

独自のルールがあり、それはそれで狭苦しく感じる事もあった。だから、旅団やラミナは外に飛び出した。

今も時折流星街と連絡を取っており、流星街を出る変わり者の世話をすることもある。

「間違えただけやったら、まだやり直せるんかもな。けど……自分の意思で殺し屋であることを選んで殺し続けてきたんは、間違いと言えるんか？ そんな人間がやり直すとか言うてええことちゃうと、うちは思うけどな」

明確な意思を持って人の命を奪った以上、やり直せるかどうかを決めるのはラミナではない。

そもそも誰がやり直していいのかどうかを決めるのだろうか。

ラミナは被害者の家族も違うと思っている。決めるべきなのは被害者本人であるべきだ。

しかし、ラミナが襲った被害者は基本全員死んでいる。なので、ラミナがやり直すことを認める人達はこの世にいない。

ラミナは、殺した者の恨みを背負うことが免罪符であると考えている。

やり直すということは、その恨みを忘れるということだ。それはラミナの免罪符が消える事を意味する。

なので、ラミナは殺しを止めることは許されない。

それがラミナが暗殺者を辞めない理由の1つである。

「デメエ……」

「……」

（こいつ……。この若さで悟りきって、覚悟が完璧に固まってやがる。まさしく『鍛え抜かれた刃』そのものだな）

自分が行った結果をありのままに受け入れ、真正面から向き合い、その全てを背負っている。

普通なら折れて壊れかねないほどの重圧を、ラミナは一切曲がることなく背負い、その覚悟を貫いている。

（こりや今の俺達が何を言っても、こいつの意思を揺らすことも出来ねえな）

モラウはラミナの意志の強さにただただ敬服するのみだった。

（ナツクルやシユートにもこのくらい覚悟が出来ればいいんだがなあ。……いや、流石にこれは劇薬過ぎるか……）

未だ眉間に皺を寄せて唸っているナツクルと、同じく眉間に皺を寄

せて考え込んでいるシュートを見て、小さくため息を吐く。

実力は確かなのだが、最悪の事態を想定した時の覚悟が出来ない。それをラミナを通して、何かを掴ませようとしたが、ラミナの方が振り切れ過ぎていた。

その時、

「……かかったで」

「!!」

ラミナがパソコン画面を見て眩く。

その言葉にモラウ達の意識が切り替わり、鋭い気配を纏う。

「どんな奴だ？」

「最悪の二歩手前」

「あん？」

「現れたんは暗殺者だけやけど……実力はプロ並み。アマチュアじゃ無理や」

ラミナの言葉にモラウ達が弾けるように立ち上がる。

「ちなみに最悪はなんだ？」

「暗殺者が2人以上でマフィアも一緒に来る、やな」

「なるほどな」

「ナツクル、倉庫の裏手から脱出するように連絡しい。相手は正面から来る。モラウはメンチに連絡入れてんか？ シュートは後からついて来い」

ラミナは素早く指示を出すと、携帯食の空袋を掴んで屋上から飛び出す。

「ちよつ?! おまつ?! ここ、10階——?!」

ナツクルが目を見開いて腕を伸ばし、モラウも煙管を啜えて煙を出そうとする。

その声を無視するラミナはベンスナイフを具現化して、下に見えるビルの屋上に向かって投擲する。

指を鳴らすと下のビルの屋上にラミナが現れ、ラミナが先ほどまでいた場所にベンスナイフが現れる。ビルに下り立ったラミナは、再び指を鳴らして持っていた空袋とベンスナイフを入れ替える。

そして、勢いよく駆け出し、ビルを跳び移りながら倉庫を目指す。ナツクルとシュートは啞然と見送る。

直後、煙がナツクルとシュートを掴んで、ラミナの後を追う様に空を舞う。

「おおお?!」

「ナツクル、早く電話してラミナを追え！俺はこのまま周囲の警戒を続ける!!」

「りよ、了解い!!」

「シュート！ビビるなよ！」

「は、はい……!」

モラウは指示を叫びながら、メンチに連絡するために携帯を取り出す。

ナツクルもビルに着地して携帯を取り出しながら駆け出し、シュートも続いて走り出す。

ラミナは路地裏の壁を走り、ベランダの手すりを蹴り跳び、剥き出しの非常階段の縁を掴んで振り子のように飛び、猛スピードで移動する。

そして、ラミナは倉庫正面向かいにある路地裏に下り立つ。

その正面には人影が1つ。

「……何か用、カネ？」

「随分と物騒なオーラを垂れ流しとるなあ。この先になんか用かいな？」

「……ハンター、カネ。……随分と血の匂いがする奴、カネ」

暗殺者は茶色のくせつ毛に中性的な顔をした狐目の男。

末広がりになっている長めの両袖の黒い詰襟の服に、下は黒い袴を履いている。

(あの袖の下になんか隠しとると考えるべき、か)

「それで？出来れば帰って欲しいねんけど」

「……殺し屋が依頼放り出すとでも思っている、カネ？」

「思わんけどなあ。標的と報酬金、つり合つたらんと思うでつて……標的は誰なん？」



「……さあ？ 知らない、カネ」

男の口が三日月に釣り上がる。

直後、滑る様にラミナに迫る。ラミナも後ろに下がって距離を取る。

2人は倉庫前の大通りに出る。

ラミナは目だけで周囲を見渡すと、車や歩行者の姿が一切見えなくなっていた。

どうやら交通規制が敷かれたようだ。

「ほお、仕事が早いやないか」

「……これは面白くなりそう、カネ」

男はラミナに詰め寄って、右腕を鞭のように振るう。

「シヤア!!」

ラミナが躲そうとしたところで、男の袖から5本の鞭のようなものが飛び出してくる。

「!!」

ラミナは目を見開きながら、ベンズナイフを手首だけで背後に投げ、【妖精の悪戯】を発動する。

十分な距離ではなかったが、それでもラミナは大きく後ろに跳び下がって間合いを取る。

「……中々いい反応、カネ」

「そらどうも。……ウルミ、か」

「……よく分かった、カネ」

男の両袖からシヤラリと5本ずつの細い帯状の剣、ウルミが垂れ下がる。

(……両腕にウルミ、狐目の男……。聞いたことないなあ)

ラミナの殺し屋リストには、目の前の男の情報は無い。

マフィアのお抱えか、新人か。

ラミナはベンズナイフを消して、短刀とブロードソードを具現化する。

男は片眉がピクリと跳ねるも、素早く構えて攻撃に備える。

その時、男の背後から高速で迫る複数の物体があった。

「!?!」

男は素早く反応し、振り返りながら両腕を振る。

10本のウルミが蛇のように、明らかな意思を持って動いて迫る物体を叩き落とそうとする。

しかし、飛び迫る物体達も軌道を変えてウルミを躲し、男の右頬、左肩、右脇腹に当たって男が仰け反る。

そこにシュートが一瞬で男に詰め寄り、男の右頬を殴る。

「ぐう……!?!」

「手……う？」

男に当たったのは、3つの手。更にシュートの左横には鳥籠が浮かんでいる。

ラミナが訝しんでいると、今度はバランスを崩している男の横から勢いよく迫る白い影。

「オラア!!」

「ぐふっ!!」

現れたのはナツクルだった。

男の左脇腹にナツクルの拳が突き刺さり、男は横に吹き飛ぶも倒れることなく耐える。

「つう……!?! ……? 痛くない、カネ? つ!?! 目が……!?!」

男はナツクルに殴られた所に衝撃はあっても痛みがないことに訝しむと、右側の視界が失われていることに気づく。

男の右眼周囲はぼやけたように失われていた。

そして、さらに男の横に天使のような変な人形が出現していた。額には『210』と数字が表示されていた。

「な、なんだ……!?!」

『時間です。利息が付きます』

天使人形が声を上げて、額の数字が『231』と増える。

「このっ!!」

男はウルミを操って、天使人形にウルミを叩き込む。

男はどうやら操作系能力者らしいと推測したラミナは武器を消して、ナツクル達の能力に注意を向ける。

「体を消すんはシュート。あの人形はナツクルか？」

「おうよ。能力名は【天上不知唯我独損】。あいつはマスコットのポットクリンだ」

ナツクルは腕を組んで、不敵に笑う。

「そいつはテメエの隣で利息の増加を告げるだけだ。だから、攻撃は効かねえ」

「り、利息……?」

「そうよ。利息はトイチ！ 10秒で1割、増えていく！」

「……そ、それが何だ、カネ？」

「最初の一撃で、俺はテメエに210オーラを貸した。その数字はテメエの借金だよ」

「に、210オーラ？ 貸した？ 借金？」

男は完全に混乱状態に陥った。

「オラ、もたもたしてつと破産ぞ？」

「ぬ……ぐ……!」

男はナツクル、シュート、ラミナを順に見て、完全に足が止まる。その間もどどんポットクリンの数字が増えていき、更に大きくなっていく。

「あれはどこまでデカなるんや？」

「あいつ次第だ。あの借金の数字が、あいつの潜在総オーラを越えるまで、カウントは続く！」

「……破産すると？」

「ポットクリンはトリタテンに変わり、30日間破産者に付きまとう。その間、破産者は完全に【絶】状態！ 念能力は使えなくなる！」

「なっ!？」

「ほお……」

「そして、テメエが借金を返し終わるまで、俺はテメエからダメージを受けねえ！」

（怖っ。【不屈の要塞】選んでよかった）

ラミナは昨日の自分の判断を改めて褒める。

そして、モラウが甘いと言っていた理由も何となく理解した。

ナツクルの能力は間違いなく『殺さず、出来る限り無傷で無力化する』を前提としている。相手の念を封じれば、確かに大抵の相手は捕らえられる。

そして、シユートの能力もそれに近いと推測できる。

(殴った個所を封じ込める能力つちゆうとこやな。まあ、こつちはダメージはあるみたいやけど)

それでも出来る限り『不殺』を心掛けている能力だ。

(まあ、UMAハンターつちゆう事を考えれば、間違うとるわけやないか)

ラミナは完全に観戦モードに移行している。

もはや勝負は見えているからだ。

半分視界が失われており、時間制限もある状態で、ダメージを当てられないナツクルと3つの手を操るシユートを相手にするのは無理だろう。

まだ能力を隠していれば分からないが、それでもナツクル達はこのまま待っていればいいだけなので、有利であることに変わりはない。いくら10本のウルミを操作できるからと言っても、限界があるだろう。

「大人しく捕まれや、コラ」

「お前にもう勝ち目はない」

「ぐ……!」

男は歯を食いしぼる。

その時、男の真後ろにラミナが音もなく現れて、男の首に手刀を叩き込む。

「がっ……!?!」

「言うたやろ? 標的と報酬がつり合つとらんってなあ」

男はうつ伏せに倒れ伏す。

ラミナは腕を組んで男を見下ろし、ナツクルに顔を向ける。

「能力はそのままにしとけよ。操作系みたいやからな。シユートは相手の体を封じる能力やつたら使つとき」

「……いや。もう必要はないだろう」

「ん？」

「もう少しトリタテンに変わるはずだ。俺の【ホテル・ラフレシア暗い宿】は、相手の体にダメージを与える必要がある。流石に動けない相手にこれ以上追撃するのは気が引ける」

「そうなのか。まあ、ウルミだけでも外しとこか」

ラミナは素早く男の両腕からウルミを外す。

「よっしゃ。ほな、うちは周囲の警戒に戻るで。シユートとナツクルは、こいつとここを頼むで」

「おう」

「承知した」

後始末を任せられたラミナは、ビルの屋上に戻ることにした。

「まあ、もうあれ以上の暗殺者を雇うことなんぞ出来んやろうし、数を増やしたところで腕利きは集まらんやろ。後は組の連中が来るかどうかやけど……。玉砕覚悟か、オークションまで耐えてどうにか他の組と繋がりを得るか、やな」

あと2日ほど様子を見れば判断できるだろう。

そう判断したラミナはビルの屋上に戻って、再び監視を始めるのだった。

## #35 オテツダイ×ハ×オワリ

暗殺者撃退から3日。

それ以降は特に襲撃もなく、森の中に密猟者の拠点も見つけられなかった。

ラミナはビルの上でパソコンを見ながら、見張りを続けていた。

「……ふむ。やっぱ、もう余裕はなくなっただみたいやな」

ラミナはハンターサイトと情報屋サイトを見て、マフィア連中はこの街から手を引いたようだ。

というよりは、手を出す資金も戦力もないから何も出来なくなっただけだ。

「オークシヨンの方に力を向けたか。まあ……相手にしてくれる奴がおるとは思わんけどなあ」

オークシヨンにおいて重要なのは『金を出して、お宝を競り落とす』か『オークシヨンを無事に終わらせる事』である。

事業に失敗し、まともな戦力もない。

正直、競り落とす金もなければ、防衛に差し出す戦力もないのではと思うラミナだった。

恐らくただただ見下されて終わるのではないだろうか。

金を搾り取られて、事業も乗っ取られるだけの未来が待っている気がする。

「ん……それはそれで面倒になるか？ まあ、それはうちの仕事ちやうか」

ちなみにこの前の暗殺者はやはり成りたての新人だった。

正確にはどこかの国の兵士として戦っていたのだが、凶暴過ぎて追放されたらしい。

今回は依頼主を見定めなかったのと、プロハンターの実力を甘く見ていたのと、運が悪かったようだ。

死ななかつただけ、運がいいと思うべきなのかもしれないが。

ラミナは片づけをして、ホテルに戻る。

部屋ではモラウとメンチが今後の方針を話し合っていた。

「あら？　まだ交代にはまだあるけど？」

「もう新手は来んやろ。マフィアはヨークシンの方に集中しとるみたいや。密猟者の方もスポンサーがヨークシンに備えて動かんから、反撃に出れんみたいやで」

「ヨークシン？　……ああ、オークションね？」

「そ。地下競売はマフィアンコミュニティの十老頭が仕切る大舞台やでな。買う側は金を貯めとかんといかんし、守る側は余計なことに戦力なんぞ割いとる場合ちゃうやろ」

「つてことは、しばらく密猟者共も動けねえか」

「その間に体勢を整える事くらい出来るやろ？」

「まあ、そうね」

ラミナの話聞いて、モラウとメンチは納得するように頷く。

「森の調査はまだ手えいるか？」

「いや、もういいだろ。残ってるのはもう森のほぼ端だけだ。その先は崖だからな。動物を匿うには不便だし、他の道を作りようもねえ。飛行船も停めれる場所も見つからなかったから、拠点がある場所は低い。まあ、コルゴ樹林の奥に行ったのであれば話は別だがな」

「奥は飛行船が飛ぶことすら出来ないわよ。真上を飛ばば魔獣に確実に襲われるからね。プロハンターでもベテラン10人がいなきや全滅する恐れがあるのよ？　密猟者やマフィアじゃ、どうにもできないわよ」

「だよな」

「ほな、うちはおさらばするわ」

「あんたも拘るわね」

「もうええやろ、別に」

「なんか予定あるの？」

「……はあ。……仕事の連絡が入つとるんや。向こうから連絡を寄こすんは珍しいでな。話は聞いときたいんや」

ゼルンロサスの時とは違う斡旋所からの連絡だが、そこはお抱えの暗殺者が数名おり、滅多なことでは他者に連絡をしない。

なので、それだけのデカイ仕事である可能性がある。

オークションの時期が近いだけに、オークション関係の仕様の可能性がある。場合によっては旅団の活動に影響が出るかもしれないので把握しておきたいのだ。

「それにうちが依頼されたんは『密猟者の摘発と捕縛』。それはある程度達成したやろ。調査や対応策を考えるんは専門外やしな」

ラミナは肩を竦めて、メンチに小さいメモ用紙を投げ渡す。

メンチは受け取って、メモを見ると口座番号と思われる数字が書かれていた。

「そこに報酬振り込んどいて。また縁があつたら仕事受けるわ」

「……ドライねえ」

「暗殺者が別れ際にしんみりするとでも思とんのか」

「あんま無茶するんじゃないわよ？」

「やから暗殺者に言うことちゃうわ」

「あんま派手にやりすぎんなよ」

ラミナは肩を竦めて、背を向けながら手を振って部屋を後にする。

コロロルク達には挨拶をせずに、ホテルを後にしたラミナはタクシーで空港に向かう。

「あ……そう言えば、メンチのフルコース食うてないな……。ま、えっか」

報酬を一部貰い忘れたことに気づいたが、すぐに気を切り替える。普段の食事でも十分すぎる程美味しかったので、文句はなかったのだ。

ラミナは空港に到着して、すぐさまチケットを取って乗り込む。

目指すはサヘルタ合衆国の【アトンサニオン】。

サヘルタ合衆国の南側にある都市で、オフィスビルが集中している商業都市である。

飛行船で移動している間、コロロルクやザーニヤから『挨拶ないとか薄情じゃないか!』と苦情のメールが届いたが、軽い謝罪のメールを送るだけで終わらせた。

「……ヨークシンでの仕事終わったら、仕事用のホームコード変えるか……」



3日かけて到着したラミナは、そこからバスで100kmほど離れた町に向かう。

夕方になった頃に目的地に到着したラミナは、街外れにある小さなバーに入店する。

「……何にするんだ？」

「頼んであった限定品の樽酒」

「……裏に回りな。おい、案内してやれ」

「へい」

強面のマスターに合言葉を言うと、マスターが近くにいたウェイターに指示を出して、ラミナを案内させる。

店を一度出て、店の裏手にある扉から入り、倉庫の床に隠してあった階段で地下に下りる。

地下は赤絨毯が敷かれており、洋館風な通路になっている。

「地下2階13番のお部屋にどうぞ」

「おおきやう」

地下2階に下りて、指定された番号の扉を開けて中に入る。

中は4畳ほどの個室で、部屋の真ん中には椅子が置かれており、扉のすぐ横には多種多様な飲み物やつまみが置かれている。扉の反対側には黒のカーテンが掛けられており、椅子はカーテンに向かって設置されている。

ラミナは茶とピーナッツを手にとって椅子に座り、小さなサイドテーブルに置く。

携帯の電源を切り、黙って時間が来るのを待つ。

ラミナは店の裏から入った時から、気配を消していた。

理由は他の部屋に同業者がいるからである。

ここは依頼のオークション会場のような場所で、時間になると簡単に要約された依頼内容が告げられる。その依頼を受けたい殺し屋はカーテンを開けることで、『入札』の意思を示すのだ。もちろん、カーテンを開けても顔は見えないようになっていた。

普通のオークションと違うのは、複数の希望者が出ても問題視されないこと。つまり、希望者で競争して、最初にターゲットを殺した者

だけが報酬をゲットできる仕組み。

ならば、オークション形式にする意味があるのか？ という疑問が出るが、これは斡旋所が有望な殺し屋のあぶり出しが目的である。

殺しの依頼には簡単なものから絶対に達成不可能だろうというものまで、様々な依頼がなだれ込んでくる。

斡旋所からすればアホらしい依頼でも、依頼を持ち込まれた以上紹介をしないわけにもいかない。なので、下手に一人を選んで依頼を斡旋するよりも、このように参加者を募り、自分で選ばせる方が楽なのだ。

そして、依頼の簡単な内容を聞いて、即座にターゲットを推測して難易度と報酬が釣り合っているかを判断できる者がいるかどうかを見極めるのだ。

なので、この形式で出される依頼は基本『厄介なんてレベルではない依頼』ばかりなのである。

それでも受ける者は必ず出るのだ。成功すれば一目置かれて今後も依頼を貰え、失敗すれば『危険察知能力がない未熟者』と蔑まれるだけ。

受けないのであれば最低限の危険を察する嗅覚があることがわかるので、それはそれで合格とされる。

2時間ほど待って、周囲に人の気配が増えてきたところで、『大変長らくお待たせ致しました。これよりオークションを開催致します』

声が響き、ラミナは声に意識を集中する。

『今回の品は……【十老頭】で御座います！』  
会場が一瞬騒めいて殺気立つ。

しかし、ラミナを始めとするベテラン勢はすぐに気配を抑えて、話の続きに耳を傾ける。

『条件は『9月1日から9月5日までの間に品を納める事』。それ以前、それ以後の納品は認められませんので、ご注意ください』

(クロロの奴やな？ いくらなんでも相手と条件がシビアすぎるやろ……)

ラミナは呆れながら、小さくため息を吐く。

『達成報酬は50億!! 複数納品が確認された場合は、数に応じて山分けとなります!』

(安っ!)

十老頭1人50億ではなく、全員で50億。しかも、複数で暗殺すれば山分けで報酬が減る。

どう考えても割りに合わない。

(こらあ本気で頼んどるわけやないな。ベテラン勢をヨークシンから遠ざけるのが目的やな)

ラミナもクロロからの話を聞いていなければ、絶対にヨークシンに近づかない自信がある。

こんな依頼を持ち込んでくる奴が現れた以上、ヨークシンで何かが起こる可能性があると考えるのが普通だ。

触らぬ神に祟りなし。

経験豊かな殺し屋達ならば、手を引くだろう。それによって仕事の邪魔になりそうな者達を遠ざけるつもりなのだ。ラミナは推測した。

『それでは『入札』を始めます!!』

ラミナは入札開始と同時に席を立って、部屋を後にする。

【朧霞】で姿を消して、誰にも見られないようにして店を出る。

足早に店から離れていくと、

「なんだよお。やっぱお前も来てたのかあ? リツパーよお」

「ん?」

すぐ横の路地裏から声を掛けられる。

目を向けると、建物の壁に気だるげにもたれかかっている黒髪。パーマの男がいた。

草臥れた茶色のタンクトップに黒のジャージを腰に巻いており、ジャージのズボン。そしてビーチサンダルという超ラフな180cmほどの男。

なで肩に垂れ目、猫背とフリーターにしか見えない。

しかし、見る者が見れば、その男が只者ではないことが分かる。

気だるげな雰囲気の下に、陰湿で禍々しい気配が潜んでいた。

「久しぶりやな、【振魔】」

「最近あんま噂聞かねえからよお。くたばったのかと思つてたぜえ」  
見た目通り気だるげな話し方をする振魔。もちろん彼も殺し屋で、  
歴はラミナよりも長いベテランである。

今回のオークションに彼も呼ばれていた。

「お前は入札せんかったんか？」

「馬鹿言うんじゃねえよお。あんなクソみたいなもん、受ける奴あバ  
カかアホだけだろうがよお」

「まあな」

ラミナは苦笑して同意する。

2人は人目に付きにくい建物に囲まれた空き地に移動する。

「んで？　なんか話あるんやろ？」

「あの依頼についてだよお。お前、なんか知つてんじゃねえかと思つ  
てよお」

「なんでや？」

「勘、に決まつてんだろお」

「その話、儂らも聞かせてもらつてよいかの？」

真上から新しい声が聞こえる。

2人が上を見上げると、建物屋上に2つの人影があった。

1人は灰色のフードパーカーに茶色のカーゴパンツを履いた14  
0cmほどの少年。

フードを被っており口元しか見えぬ、両手をパーカーのポケットに  
入れている。

もう1人は青色の鎧を身に着けた170cmほどの女性。兜は目  
だけが露出していて口元も隠されており、兜の後ろからは銀の長髪が  
靡いている。

腕を組んで、冷たい瞳でラミナ達を見下ろしている。

しかし、その両腕や両脚の関節は、可動式フィギュアのような人工  
的なものだった。

新たに現れた2人は音もたてずに、ラミナ達の傍に飛び降りる。

「久しぶりじゃの」

「息災・何より」

「そつちもな。【アルケイデス】【チャリオット】」

「お前らまで呼ばれてたのかよお」

「他にもチラホラ大物がおったぞ」

「先刻・【ロストマン】・【アラクネー】・目視」

「マジかい……」

アルケイデス、チャリオットはもちろん、今名前が挙がった2人も殺し屋として名を馳せている者達だ。

ここまで大物が揃うことなど滅多にない。

「それにしちやあ、変な依頼過ぎるよなあ。まあ、本気で十老頭を殺る気なら分からなくもねえけどよお」

「それにしては報酬が安いじゃろ。1人2人じゃたら分かるかの」

「罨・または・警告・可能性・示唆」

「やろうな。それだけの何かが起こるかもしれないことを知らせるためやろ。あの仲介屋にはうちらを貶める理由がない」

「じゃのう」

ラミナの言葉にアルケイデスは同意するように頷く。

「で、なんか知ってのかよお。リッパ」

「知るわけないやろ」

「……ホントかあ？」

「ホンマや。……それどころか困つとるくらいやでな」

「どういうことじゃ？」

「……依頼でな。マフィアと契約を結んどる。この後、ヨークシンに入る予定やったんや」

もちろん嘘だが、元々その予定だったので演技は難しくなかった。それにマフィア側にある程度接触する気でもあった。

お抱え契約ではなく、普段はフリーで待機しており非常時のみ仕事を引き受けるというものだ。もちろん、その間は他の依頼は受けられない。

あまり褒められた契約方法ではないが、マフィアからすれば「ずっと契約するのも馬鹿馬鹿しい」という思いもあり、構成員でもない者

をずっと雇っているのも他の組からツッコまれる場合があるので、期間限定で契約する方がありがたいのだ。

「まあ、十老頭やないから問題ないとは思うけどな」

「疑問・何故・契約？」

チャリオットが首を傾げる。

ラミナであれば契約など結ばなくても、仕事など腐るほどあるはずだ。

ラミナは肩を竦めて、

「色々あつてな」

「ゾルディックと殺り合つたのと関係あんのかあ？」

「よう知つとるな。まあ、少し関係あるな」

「なるほどのう」

「つてこたあ、やつぱ手え出さなくて正解だつたなあ。お前とはやり辛えからよお」

振魔は後頭部を搔きながら言う。

ここにいる面子全員と何度か戦つたことは当然ある。依頼が被つたり、依頼者同士がお互いに殺し屋を雇つたりなどは当たり前だからだ。

なので、ここにいる全員はある程度お互いの能力を知っている。

「俺はオークション中はヨークシンに近づかねえ。リツパーに、あんな依頼する奴がいるところなんざ怖くて不眠症になっちまうよお」

「よう言うわ」

「まあ、本来はオークション中は組同士の抗争はご法度のはずじゃけどな」

「？ 翁・依頼人・承知？」

「分かるわけなからう。十老頭を狙う奴など、国の要人が権力を恐れぬ狂人くらいじゃらうて」

アルケイデスは呆れた顔で肩を竦める。

振魔は気だるげな雰囲気をつつたまま、背を向けて歩き出す。

「じゃあ、俺は行くからよお。生きてたら、またどっかで会おうぜえ」  
振魔はそのままフラリと音もなく、夜の闇に消えていく。

その背中を見送ったラミナ達。

今度はチャリオットが声を出す。

「我・出立」

「おう」

「達者での」

「貴殿ら・達者」

チャリオットは建物の屋上に跳び上がって、見た目と違って音をほとんど立てずに消えていく。

ラミナはそれを見送って、アルケイデスに顔を向ける。

「で？ まだなんかあるんか？」

「……あの依頼を出した者。ルシルフルじやる？」

「相変わらず油断出来ん爺やなあ」

アルケイデスは流星街出身である。

しかも、この見た目にして70歳を超えている。

能力なのかは分からないが、老化を抑え込んでいるらしい。

なので、見た目で油断していると訳も分からず殺されてしまう。

言ってみれば、超経験豊富なキルアである。

念の戦いはもちろん、暗殺術や体術も恐ろしい熟練度を誇っている。

流星街を飛び出した者達の長老のような立ち位置にいて、ラミナや旅団も流星街を出てすぐの頃は世話になったことがある。

ラミナの暗殺術や体術のいくらかは、アルケイデスに教わったものだった。

「お前がそんなくだらん契約を受けるものか。ルシルフルやコマチネ達が関わるとるのは容易に想像がつくわい」

「……」

「安心せい。邪魔するつもりはないわい。殺されたくはないしの。しかし、あまり派手にやり過ぎるでないぞ？ 十老頭と流星街の関係を完全に壊すとなると、流星にあの引きこもり共も黙っとらんぞ」

「そこはクロロに言いや。うちはサポートを依頼されただけや。ホンマに十老頭の暗殺をするんかは知らん。他の奴に頼むとか言うとおつ

たしな」

「……不安しかないのお。っと、そう言えばお前、ハンターになって、ゾルディックと縁が出来たらしいの?」

「……ハンターはともかく、ゾルディックの方はなんで知っとなねん」  
「くくくつ! ネテロの爺とゼノは顔見知りでな。あいつらと仕事を  
したこともある」

「あく……まあ、確かに裏の仕事で流星街も関わるなら、ありえるわ  
なあ」

「そういうことじゃ。今後はお前を推薦しとくからの」

「やめえや」

「冗談じゃ冗談。旅団に深く関わっとるお前を何度も使うのは、流石  
にマズイ。他の奴を育てとるわい」

「他の奴?」

「お前がこの前連れ出してきた小僧じゃよ。あれは裏の人間に向か  
ん。体術と念を鍛えたら、ハンターにでもする方がいいじゃろうな」  
「……………ああ、あのガリガリやつた……」

ラミナは思い出すのに、やや時間がかかった。

武器の調達で流星街に戻った時に、2人の男を長老達に押し付けら  
れたことがある。

連れ出すだけでいいと言うので、アルケイデスに連絡して会わし、  
後を任せたのだ。

2人揃ってガリガリで、とてもではないが戦えるようには見えな  
かった。

適当な戸籍を与えて、簡単な仕事をしているかと思っていたが、ま  
さか鍛えられていたとは思わなかった。

「強いん?」

「儂やお前らに比べたら全然じゃな。まあ、中堅位のハンターにはな  
れるじゃろう」

「ふうん」

「まあ、まだ数年はかかるじゃろうから、今はええわい」

アルケイデスはトン!と軽く跳んで、建物の屋上に上がる。



「やるならしつかり殺すんじゃないや。下手に残して、僕らに依頼なんぞ来させるでないぞ?」

「クロロに伝えとくわ。聞くかどうか知らんけど」

「はあ……。全く……。聞かん坊共め」

「今更嘆くなや。会った時から分かつたことやろ」

「それもそうじゃな」

アルケイデスは苦笑しながら肩を竦めて、他の2人同様夜の闇へと消えていく。

「はあ……。世界はバケモンで溢れとるなあ」

見送ったラミナは小さくため息を吐いて、同じく闇へとその姿を消す。

そして、ヨークシンに潜伏する準備を始めるのだった。

## #36 ツワモノドモ×ガ×ツドウ

8月中旬。

ラミナはすでにヨークシンに入って、準備に取り掛かっていた。ヨークシン内に複数の隠れ家を偽名で購入し、様々な物資を運び込む。

「ふわあ……」

ラミナは隠れ家の1つでパソコンを眺めながら、欠伸をしていた。

「んく……これである程度、隠れ場所は確保できたか。車にバイク、気球も手に入ったし……」

旅団が使えるであろう移動手段なども確保し、旅団の集合場所である廃墟も確認を終えた。

他にも地下競売の会場の下見も終え、後は旅団が揃ってからの対応となる。

ヨークシンにある裏の仲介屋にも滞在中であることを連絡し、必要時依頼を受けつけることは伝えてある。

「後は……キルア達か……」

そろそろ誰かやって来ていてもおかしくはない。

ラミナは飛行機のチケット購入記録を調べてみる。

「……ゴンとキルアはもう来とるんか」

ゴンとキルアは2日ほど前にヨークシンにやってきているようだった。

各ホテルの宿泊者リストを調べ上げて、ゴン達が宿泊しているホテルを突き止める。

その周囲にはあまり近づかないように注意するように頭に書き留める。

「クラピカがどうなっとなるかやな……」

プロハンター成りたてのクラピカの情報など、ハンターサイトでもほとんど更新されていない。

しかし、余りにも情報がないので、そこから考えられることは2つ。

「まだ念の修行中か、マフィアに入り込んだか……」

マフィアと契約を結んだのであれば、いつかは情報が出るだろうが、それもしくはらく先の筈だ。

まだ新人のクラピカをデカイ組が雇うとは思えない。なので、中堅以下のマフィアに所属したと考えられるが、そうなると情報の質はやや下がる。

なので、ヨークシンに入つて来るまでクラピカの情報是不明のままの可能性が高い。

「厄介なこつちや」

ヒソカとの密約の相手の情報が手に入らないのは、非常に面倒だ。結局、当日まで待つしかないのだ。

ラミナはため息を吐いて、再び情報収集に戻るのだった。

そして、8月31日。

クラピカは飛行船から降りて、周囲を見渡す。

「問題ない」

「よし、俺達は車だぜ」

リーゼントの口髭の男、バショウがクラピカに声を掛ける。

クラピカはマフィアのノストラードファミリーの護衛団と契約を結んだ。

ノストラードは元は田舎の小さな組だったが、組長の娘の『占い』によつてのし上がった成り上がりである。

その娘が人体収集家という趣味を持っており、クラピカは【緋の眼】を奪還するために泥を呑むことになつても近づくことを決めて、上手く入り込むことが出来た。

(…………いよいよ明日からか…………)

9月1日から行われる地下競売。

地下競売はマフィアコミュニティ主催であるため、旅団が狙う可能性は高い。

明日はヒソカと会う約束の日でもあり、クラピカの緊張感は嫌でも高まつていた。

車の助手席に乗り込んだクラピカは、携帯を確認する。

すると、メールが届いており、送り主はゴンだった。  
クラピカはメールを開く。

『久しぶり！俺とキルアはもうヨークシンにいるよ！どこかで会えるかな？連絡待ってるね！』

クラピカは小さく笑みを浮かべる。

しかし、すぐに顔を引き締めて、仕事だから時間が取れるかは分からないと返事をする。

流石にマフィアに属した以上、そう簡単に人と会うわけにはいかない。しかも、今は護衛。護衛対象から私用で離れることは基本的に認められるものではない。

なので、メールや電話くらいしか出来ないかもしれない。

(……今は仲間の眼を取り戻すことを最優先に考えろ)

ヨークシンでやるべきことを終えてからでも、会う機会はある。

そう考えて、クラピカは携帯を仕舞い、仕事に意識を戻すのだった。

クラピカ達が乗っている車が走る道のすぐ近くの荒野。

そこをマチ、フェイタン、フランクリン、ノブナガの4人がヨークシンに向けて歩いていった。

「見えたね」

「13人が一堂に会するなんて何年ぶりだっけかあ？フェイタン」

「3年2か月。と言っても、あの時とは2人面子が違うね。4番と8番、別の人に変わった」

「マチ、ヒソカの野郎はちゃんと来るんだろうな？」

「知らないね。あたしに聞くな」

「お前の役目だろ」

「来いと伝えただけだ」

マチは不快そうに顔を顰めて、吐き捨てるように言う。

フェイタンも僅かに眉間に皺を寄せて、

「今回もワガママ言たら、流石の団長も許さないはずよ。その時はワタシが殺すね」

「そう簡単にはいかねえと思うぜ？あいつの【バンジーガム】はよお

く出来てる。ありや戦り辛えぜ、正味な話」

「買い被りだ。大したことねえよ、あんな奴」

「口だけじゃ何とでも言えるからなあ」

ヒソカを褒めるノブナガに、フランクリンが強気に言い、ノブナガも挑発するように答える。

直後、フランクリンが右腕を振り、ノブナガは腰に差していた刀を鞘ごと抜いて受け止める。

そのまま殴り合いを始めるフランクリンとノブナガ。

マチとフェイタンは、それを無視して歩き続ける。

「別に誰が殺しに行ってもいいけどさ。どうせ、抜け番に次入るのは決まってるし」

「ラミナか？」

「そ」

「ああ、なんだ？ ラミナの奴、ようやくクモに入る決心しやがったのか？」

ノブナガが殴り合いを止めて、マチ達の会話に参加する。

フランクリンは舌打ちするも拳を引っ込めて、歩き始める。

「この前、そんなこと言ってたか？」

「その前に会った時にね」

「なら、別にヒソカ死んでも問題ないね。ラミナの方が面白いよ」

「あいつの能力は団長並みに厄介だからなあ。あいつ今、どこにいないだ？」

「ヨークシンにいるよ。今回、団長の依頼で仕事手伝うってさ」

「ほお！ 団長の奴、随分と気合入れてんなあ！ こりゃあ、大物狙いだな」

「ワタシ達全員集めてるのだから当然ね」

「ラミナとも久しぶりに会うな」

「あの子はアタシ達とは別行動だからね。マファイア側に入り込んで、こっちのサポートをするらしいよ」

「そりゃ、またご苦労なこった」

フランクリンが肩を竦めて、ラミナを労う。

マチは少し不満げに腕を組む。

「別にサポートなんてやらせなくても一緒にやればいいのに」

「団長の指示なら仕方ないね。それかマチがラミナに手伝いに行けばいいよ」

「はっはっ！ そりゃ、面白れえ！」

「うっさいよ」

マチの反応をフェイタン達はニヤニヤと笑みを浮かべる。

その後、マチの念糸が舞い乱れ、フェイタン達は笑いながら荒野を走り回って逃げるのだった。

ヨークシン郊外、廃墟ビル。

薄暗い倉庫の中で、蠟燭が灯っている。

傍には額に十字の入れ墨がある黒のオールバックの青年、幻影旅団団長のクロロが座って本を読んでおり、少し離れたところにシャルナークと、金髪をオールバックにした眉無し of ジャージの男、フィンクスが静かに壁に背中を預けて立っていた。

そこに足音が近づいてくる。

シャルナークとフィンクスが顔を向けると、現れたのはパクノダだった。

「パクノダ！ 元気だったか？」

「お久しぶり、シャルナーク」

「ちっ。もう少し早く来いよ」

フィンクスが舌打ちをして、パクノダに苦情を言う。

パクノダは腕時計を見て、

「あら。時間ピッタリのはずだけど？」

「集合時間10分前が常識だろうが。お前らもだよ」

フィンクスは眉間に皺を寄せながら、パクノダの後ろに目を向けて言い放つ。

柱の陰から全身に包帯を巻いた男、ボノレノフ。そして長髪で顔が隠れた小柄な男、コルトピが現れる。

「ボノレノフ、コルトピ！ お前達も一緒だったのか」

シャルナークが嬉しそうに言う。

さらに、

「よお！ 久しぶりじゃねえかあ。お前らー！」

毛皮を身に着けた獣のような巨漢、ウボオーギンが姿を現す。

「着いたぜ、団長！ 今度の獲物は何だ？ 早く命じてくれ！」

ウボオーギンは凶暴な笑みを浮かべて、クロロに声を掛ける。

それにクロロは本から目を離すことはないが笑みを浮かべ、シャルナークとパクノダが苦笑する。

「慌てるなよ、ウボオー。フェイタン組が夜に到着する。全員揃ってからだ」

「相変わらずせつかちねえ」

「くそお。まだ半日もあるのかよ……！」

ウボオーギンは待ちきれないとばかりに舌打ちをする。

そこに今度はシズクが顔を覗かせる。

「お！ シズクじゃねえか」

「ども」

シズクは軽く会釈をして、挨拶をする。

シズクの姿を見たパクノダがシャルナークに顔を向ける。

「もう1人の新顔はまだなの？」

「さあ？ マチにでも聞いてくれ」

シャルナークは肩を竦める。

「マチも大変ね。変わり者の面倒を見させられて」

「仕方ねえだろ。上の番号の奴が、下の番号の面倒を見るってのが

ルールだからな」

フィンクスがぶっきらぼうな顔のまま言う。

ボノレノフがその言葉に頷きながら、

「だから、あいつはラミナを入れたがってたのにな」

「連絡付かなかったみたいだからね」

コルトピが少し呆れながら言う。

ラミナの名前にウボオーギンが反応する。

「ラミナ！　　そういやあ、ここしばらく会ってねえなあ！　　あいつは元気なのか？」

「さあ、俺とパクノダ、シズクは年末にあったけど……」

「ゾルディックに襲われてたわね、そう言えば」

「ゾルディックう？　　前の8番を殺した暗殺一家のか？」

「ああ、俺達がギリギリで依頼主殺したから助かってるはずだけだね。　　そういえば、団長の伝言でハンター試験受けるようになって伝えてたっけ」

「ハンター試験？　　あいつが？」

「フィンクスが訝しみ、シャルナークは肩を竦める。」

「まあ、ラミナのことだから問題なく受かっていると思うけどね」

「あいつはまだ殺し屋やってんのか？」

「ああ、俺達ほどじゃないけど、結構その筋じや名前は売れてきているみたいだ。　　ゾルディックに暗殺依頼が出るくらいだしね」

「ほおー！　　あのマチの後ろに引っ付いてたガキが、随分と成長したもんだー！」

「いつの話をしてるのよ。　　それに何度か仕事も一緒にしてたでしょ？」

「そうだけだよ。　　あの時はまだまだヒヨッコだったからなあ」

ウボオーギンは腕を組んで、ラミナと最後に仕事をした時を思い出す。

　　と言っても、あくまでヒヨッコはウボオーギンの基準であり、その時のラミナはすでにそこらへんにいるプロハンターならば楽勝レベルではあったのだが。

「今はどれくらい成長したんだ？」

「1対1なら、ウボオーやフィンクスでも分からないと思うわよ？」

「……へえ、そりやあ楽しみじやねえかあ」

ウボオーギンはパクノダの言葉を聞いて、歯を剥き出しにして癡猛な笑みを浮かべる。

フィンクスもしばらく会っていないので、面白そうに笑みを浮かべている。



シャルナークはその様子に呆れる。

「おいおい、ウボオー。殺し合うんじゃないぞ?」

「マチが怒るわよ」

「おおっと、そりゃ面倒だな。あいつはラミナのことになるとしつけえからな」

ウボオーギンは肩を竦める。

それにシャルナーク達は笑い、バラバラだった間どのように過ごしていたのかを語り合う。

それから数時間後。

すっかり日が暮れた頃にマチ達も合流して、残りはヒソカのみとなった。

「やつぱり……」

「ちっ」

「あの野郎……」

マチは呆れてため息を吐き、フェイタンは舌打ちし、フィックスは顔を顰める。

蝋燭と割れた窓から差す月明りだけが照らすビルの中で、マチ達はヒソカを待つ。

その時、マチがあることを思い出した。

「つと、そうだ。団長!」

「ん? どうした?」

マチは鞆からラミナから預かったナイフを取り出す。

「これ。ラミナから」

「ラミナから?」

「ナイフ。頼んでたんでしょ?」

「ああ、それが」

マチはナイフを投げ渡し、クロロは鞆に入ったナイフを抜く。

「ほお……ベンズナイフか」

「鞆に毒が仕込んであるって、何でも0.1mgでクジラも動けなくするらしいよ」

「ふっ。流石だな」

クロロはナイフを納めて、ポケットに仕舞う。

そして、マチに目を向ける。

「ヒソカは来てないが、まあいいか」

「ん？」

「マチは知ってるだろうが、今回の仕事にはラミナがサポートに回ってもらっている」

「ラミナが？」

「はっはあ！ 噂をすれば、なんとやらじゃねえか」

シャルナークが首を傾げ、ウボオーギンが笑う。

クロロも小さく笑みを浮かべる。

「ラミナはすでに街に入っている。隠れ家や情報収集、移動手段の確保を主に頼んである」

「なるほどね」

「ラミナへの連絡は基本的に俺、マチ、シャルナークの3人がする。だが、マチとシャルナークも基本的に俺が指示した場合と、非常時以外での連絡は控えてくれ」

「了解」

「……しようがないね」

シャルナーク達はクロロの命令に頷く。

マチは少し不満げだが、クロロの指示なので渋々同意する。

「もちろん、場合によっては俺達と敵対する場合もある。その時は適当に戦って、不自然になりすぎない形で離脱しろ」

「殺さねえように気を付けねえと、おつかねえ姉が暴れるからなあ」

「なんか言ったかい？ ノブナガ」

「おっとお、何でもねえよ」

「ふん」

マチはノブナガを睨みつけて、鼻を鳴らす。

全員が苦笑して、マチを生温かい目で見つめる。

「そーいや、さっきシャルからラミナがハンター試験受けたって聞いたが、受かったのか？」

フィックスがマチに訊ねる。

「当たり前だろ？　なんでかヒソカも受かったみたいだけどね」

「ヒソカも？」

「そ。だから、ラミナとヒソカの顔合わせは終わってるよ。別に会わせなくてもよかったけどさ」

「もうあのサボり野郎殺して、入れ替わりでラミナ入れた方がいいんじゃないか？　強くなってんだろ？」

「アタシもそう思う」

フィックスの言葉に、マチは力強く頷く。

フェイタンやフランクリンも頷いている。というか、基本的に全員ラミナ寄りである。

「団長はどう思うか？」

「……そうだな。今回来なかつたら、ラミナをヒソカに差し向けてみるか」

クロロも顎に手を当てて、話の流れに乗る。

その時、

「少しくらい自分で処罰すること考えろや。頭張つとるんやったら、アホな部下の後始末くらいせえ」

全員が声がした方向に顔を向けると、鞆を肩に担いだラミナが呆れた顔で立っていた。

マチと買った半着の上に黒の短丈革ジャンを着て、下も黒のカーゴパンツを履いている。

「おー！　久しぶりじゃねえかあ!!　ラミナ！」

「久しぶりやな、ウボォー。相変わらずで何よりや。他のモンも元気そうで何よりや」

ラミナは苦笑しながら挨拶し、シャルナークに向かって担いでいた鞆を投げる。

「つとお！　なんだこれ？」

「クロロから頼まれとった資料。今ヨークシンにおけるマフィア一覧と、競売を仕切つとるマフィアの情報と会場の見取り図に、地下競売の保管場所その他諸々。まあ、当日の警備体制までは流石に無理やつ

たけど、分かっとなる限りの戦力も纏めとるでな」

「ビュー♪」

「流石ね」

「それとここの裏側のビルに車1台と気球を置いたでな。偽名で購入しとるし、中古やから壊しても押収されても問題ないで。後2台くらいなら、すぐに手配出来る用意もしとる」

「至れり尽くせりだな」

感心したようなフィックスの言葉に、ラミナは肩を竦める。

「そういう依頼やからな。一応、マフィア側とはコンタクトが取れる。有事の際はうちにも依頼が来る、かもしれん」

「かもなのか？」

「基本的にマフィアは自分達の戦力で事を収めたがるでな。まあ、念使いはそこまでおらんから、襲ってきたんが念使いつて分かれれば、うちにも声がかかるやろうな」

「なるほど」

ボノレノフとシズクが納得する様に頷く。

ラミナはクロロに顔を向けて、

「何するんか知らんけど、なんかやるなら早めに連絡よこせや」

「分かった」

「それとベテランの殺し屋を遠ざけたかったんかもしれんけど、もう少し考えて依頼出せや。アルケイデスの爺も呼ばれとって、旅団がなんか企んどるって気づいたで？」

「……翁がいたのか……」

「一応、手は出さんつて言うつつたし、うちと顔見知りの殺し屋共は狙い通り手を引いたけどな」

「そうか。分かった。次は気を付けよう」

「次てオイ。十老頭暗殺なんぞ何回も出すもんちやうわ」

十老頭暗殺と言う言葉に、マチ達も僅かに目を見開いてクロロに目を向ける。

マフィアの情報を集めていることから、地下競売関係を狙うことは予測できていたが、十老頭暗殺は大事が過ぎる。

今回の仕事がそれだけ大掛かりであることを理解したウボオーギンは笑みを深めていく。

「十老頭暗殺はもう別の奴に依頼を出してる。次の依頼を出すことは多分ないだろう」

「は？　引き受けた奴おったんか？」

「お前もよく知ってる連中だ」

「あん？」

ラミナは首を傾げる。

クロロは「ふっ」と鼻で笑い、

「イルミ、と言えば分かるだろ？」

「げ!？」

ラミナは盛大に頬が引きつる。

その反応にクロロは更に愉快そうに笑い、マチ達は訝しむ。

「イルミって誰だよ？」

「……ゾルディックや」

「ゾルディック？　……もしかしてあんたの婚約者になったって言う？」

『は?』

マチが目を据わらせながら言い、その内容にマチとラミナ以外の全員（クロロ含む）が耳を疑った。

ラミナは右手で目元を覆って、天を仰ぐ。

1分ほど沈黙が場を支配し、ようやく内容を理解したシャルナークがマチに訊ねる。

「マチ、ゴメン。今、なんて言った？」

「あ？　だから、そのイルミって奴がラミナの婚約者になった奴かって言ってるの」

マチは未だに周囲の反応に気づいていない。

しかし、その直後、

『婚約う!!?』

団員達の叫びが、ビルに響き渡る。

ラミナは大きいため息を吐きながら、項垂れる。

「……マチ姉……」

「なに？」

「……いや、なんもない」

マチは悪いが、悪くない。

口止めなどしてないことを思い出したからだ。

なので、一番悪いのはラミナである。

しかし、このタイミングでの暴露はないだろうと嘆くのは絶対に悪くないはずだと思う。

「はあく……言つとくけど、そいつやない。そいつは長男の方やから、1回殺し合った奴や」

「ということは、婚約した相手は違うけど、婚約したのはホント？」

「……まあ……うん」

シズクが首を傾げて訊ね、ラミナは盛大に顔を顰めながら頷く。

すると、ずつと腹を抱えたり、口を押えていたノブナガやフェイタン、フィックスが我慢の限界を迎えた。

『ブハハハハハハ!!』

3人の笑いに引つ張られて、マチ以外の団員達も笑い始める。

「くははっ！ こ、婚約……！ ラミナが婚約?! だ、駄目だ！ くははははは!!」

「し、式はいつだ？ ブハハハハ!!」

ノブナガとフィックスが腹を抱えて大笑いし、他の団員達も涙を浮かべる程笑う。

ラミナは額に青筋を浮かべて腕を組み、殺気を振り撒く。

しかし、旅団に効果があるわけなく、不機嫌なマチ以外は笑い続ける。

完全にキレたラミナは、

ズドン!!

と左側にクレイモアを具現化して突き刺し、右手にバトルアックスを具現化して肩に担ぐ。

「今すぐ笑うん止めるか、こいつに叩き潰されるか、このビル一帯ごと全員纏めて吹き飛ばすか、選べや……!!」

「わ、悪い悪い……! ブフツ!」

「よっしゃ、皆で粉々になるか。【死を呼び寄せ——!!】」

「ストップストップ!! もう笑わないから!!」

「落ち着いてちょうだい」

流石にシャルナークとパクノダが慌てて制止し、ノブナガ達も笑いを引込める。頬は引きつっているが。

ラミナは無表情で青筋を浮かべたままだが、大人しく武器を消す。それでも殺気は纏ったままである。

マチもまだラミナの傍で不機嫌そうに顔を顰めていて、シャルナークやパクノダはクロロに目を向けて、姉妹の対応を押し付ける。

クロロはすでに完全に普段通りに戻っており、シャルナーク達の視線に苦笑する。

「ラミナ、事情を話してくれないか？ ある程度把握しておかないと、俺達も地雷を避けようがない」

「……ふん」

ラミナは盛大に顔を顰めながらも、マチに話した説明をもう一度する。

不機嫌顔の仲良し姉妹を宥めながら、話を聞いたクロロ達は笑う者と同情する者に分かれた。

ちなみに同情したのはパクノダ、シズク、フランクリン、コルトピ、ボノレノフ。

笑ったのはノブナガ、ウボオーギン、フィックス、フェイタン、シャルナークだ。

クロロは苦笑で留め、ラミナを慰める。

「災難だったな。まあ、ゾルディックと繋がりが持てたのはいいことじゃないか。それにお前とそいつは結婚する気はないんだろ？」

「当たり前や」

「なら、いいじゃないか」

「うっさいわ」

そもそもクロロがハンター試験を受けろと言わなければ、こんなことにはならなかったのだ。

それを思いつきりぶつけたかったが、自分の責任も大いにあるのでラミナは必死に我慢する。

流石にクロロに文句を言えば、隣の姉が黙ってないのもある。さつきから不機嫌オーラがラミナに襲い掛かっているのだ。

そろそろ逃げ出したい。

「ふん。ほな、仕事でハマすんなや。十老頭も殺すんやったら、ちやんと殺せよ。この仕事が終われば、うちはしばらく殺し屋なんぞ出来んな。報酬しつかり払えるように成功させてや」

「あ、そっか。ラミナの商売相手ってマフィアが多いんだっけ？」

「そうやで。マフィアンコミュニティにケンカ売るんやったら、流石にずっと隠し通すんは厳しいやろうからな。商売相手、新しく探さんとなあ」

ラミナはため息を吐いて、頭を掻く。

ノブナガが顎を擦りながら、

「お前ほどの腕なら、マフィアじゃなくても依頼してくる奴多いんじゃないかねえのか？」

「おるけど、金払いが極端やねん。マフィア連中は意外と律義な金額提示してくれるでな。仕事の難度を見極めやすいねん」

「へえ〜」

シズク、コルトピが興味深そうに頷く。

「まあ、ええわ。ほな、それなりに気い付けて動きや。あつとお、用意した隠れ家の鍵は扉横の植木鉢の下や。パソコンとかも置いとるでな。好きに使い」

「助かる」

シャルナークが礼を言う。ラミナは手を振りながら、ビルを後にしようとする。

「つとお、マチ姉」

「ん？」

ラミナは唐突に振り返り、マチに何かを投げ渡す。



受け取った物は、鍵だった。

「どこの鍵？」

「今、うちが拠点にしとる部屋の鍵。好きに使ってええで」  
「そ」

「場所はシャルに渡した鞆の中に入つとるでな。尾行に気を付けて来いや」

「分かってる」

「ほなな」

ラミナは今度こそアジトを後にする。

マチは鍵を懐に仕舞って、シャルナークに向く。

「シャル、地図」

「はいはい」

シャルナークは苦笑しながら鞆を漁る。

そして、隠れ家が記された地図をマチに投げ渡す。

「団長は？」

「マフィアの資料をくれ」

「はい」

クロロはシャルナークから分厚い紙の束を受け取って、読み始める。

シャルナークはパクノダに鞆を預けて、車と気球の確認に行く。

「ヒソカが来たら、呼んでくれ」

「おう。っていうか、ヒソカの野郎。まだ来ねえのかよ。もう日付変わるぞ」

「あの野郎……。今度会ったらすりつぶしてやる……！」

フィックスとウボオーギンがまだ現れないヒソカに怒りを募らせる。

そして、ヒソカがやって来たのは9月1日の夜明け前。

ようやく幻影旅団全員が揃い、クロロより明かされたのは、

「地下競売のお宝、全部丸ごと搔っ攫う」

というものだった。

そのすぐ後に、ウボオーギンの獣のような雄叫びが轟く。  
それが幻影旅団始動の狼煙代わりとなったのだった。

ヨークシンシティを舞台に強者共が動き出す。

## #37 オークション×ハ×オオアレ

旅団のアジトから戻ってきて、すぐクロロからメールが届く。

『狙いは地下競売のお宝全て。潜入する準備を頼む』

そう書かれていた。

「マジかい……」

ラミナは流石に冷や汗が噴き出す。

完璧にマファイアンコミュニティに戦争を仕掛けるつもりだった。

「そら、十老頭暗殺せな。あかんわな」

そして、色々と理解したラミナは仮眠をとる準備をしながら、予定を考える。

潜入ということは、会場である『セメタリービル』にマファイアのふりをして潜り込むということだ。地下競売は夜に行われる。

つまり、それまでに競売経営側のマファイア達を潰さなければいけないということだ。

「お宝を持ち出すんはシズクの能力を使うとしても……。スーツとか用意しとかな目立つか……」

クロロに参加するメンバーを教えてもらい、ラミナは一度仮眠をとることにした。

これから数日は寝るのも厳しいかもしれない。

ここでしっかりと体を休めることに集中するのだった。

そして、陽が昇って、少しした頃。

ラミナの携帯が鳴る。

「……んあ?」

ラミナは目を擦りながら、携帯を見る。

知らないアドレスからメールが届いており、開くとゴンからだつた。

『久しぶり! 携帯買った! ラミナはオークシンにいるの? キル

アとレオリオもいるよ! 連絡頂戴ね!』

「おく……携帯買ったんか……」

ラミナは素早く『工作中。会うのは難しい』と返信して、再び眠り

につくのだった。

携帯を買ったゴンは、ラミナからの返信を見て残念そうに眉を下げ  
る。

「ラミナも仕事で会うのも難しいって」

「だろうな。そもそもあいつがヨークシンに来る理由ねえし」

キルアはアイスを齧りながら、当然とばかりに頷く。

しかし、ゴンは納得出来ないように眉を顰める。

「皆で会うって約束したじゃん」

「天空闘技場で会えるかどうか分からないってのも言ってただろ？」

だから、あいつはあの後すぐに出て行ったんだ」

キルアはラミナの仕事を理解している。

なので、ラミナがここに来るなど最初から期待していなかった。殺  
し屋が再会を期待するなど、基本的にあり得ないからだ。

次会った時は殺し合いになるかもしれない。ラミナもそう言っ  
ていたように、殺し屋はいつ顔見知りを見殺すことになるのか分からない  
から。

「うゝ……修行の成果も見てもらいたかったんだけどなあ」

「それは……まあ、そうだな……」

もちろんゴンとキルアは、ラミナに言われた通り日々の修練を欠か  
していない。なので、成長しているとは思いますが、それがどれくらいな  
のかが分からないのだ。だから、ラミナに見てもらって、評価しても  
らいたかったのだ。

「それにしても、ラミナが念を使えたなんてよお。俺も教えてもらい  
たかったぜ」

レオリオは顔を顰めながらサングラスを直す。

レオリオはまだ念の修行の途中で、ヨークシンにやって来ていた。  
ただし、本人はもう覚え終えたつもりでいるが。

「言つとくけど、ラミナは俺に教えるって契約だったんだからな。ゴ  
ンだって、俺といえるからついでに教えてもらえただけだぜ？」

「そうだけだよ……」

「もし親父達がラミナに何も言わなかったら、俺達だってあいつに教えてもらってなかったと思う」

キルアの言葉にレオリオは黙り込むしかない。

同じ殺し屋だったキルアが言うのだから、レオリオに否定できる材料はない。

「それよりもまず金策考えよーぜ。もうオークションの開催期間に入ってるんだ。サザンピースまで時間がない」

「そうだね」

「つっても89億だろ？　なのに、お前らの所持金500万ジェニーって……」

レオリオは呆れるしかなかった。

ゴンとキルアは天空闘技場の金を合わせても10億にも届かなかった。なので、買うのではなく、出品する方で金を集めようと考え、ネットでお宝を探そうとしたが見事に詐欺にやられて、一気に1000万まで減った。

そこでやめればいいものを2人は500万ずつ分け、競争して増やそうとまた金策に走り、キルアは見事にすっからかんになり、ゴンは2万しか増やせなかった。

なので、ゴン達は競り落とすどころか、オークションに参加することすら出来ないのだった。

「まず入場料すら払えねえぞ？　カタログ買うだけでも1200万いるのによ」

「う……。入場料のこと全然考えてなかった……」  
「だなく」

ゴンは項垂れて、キルアは空虚な笑みを浮かべるしか出来なかった。

そして、もちろんレオリオにもそんな金はない。金がないからハンターになったのだから。

「どうしよっか……」

「とりあえず、ホテルで考えようぜ。ネットとかで調べてみれば、なん

か方法見つかるかも」

「だといいけどな」

ゴン達はやや意気消沈してホテルに戻る。

そして、必死に儲ける方法を探すのだった。

その裏ではラミナや旅団達が動き始めているとは知らずに。

そして夕方6時頃。

ラミナはセメタリービル近くの隠れ家に移動していた。

そこにはマチ、ウボオーギン、シャルナーク、ノブナガ、フエイタン、フランクリン、シズクもやって来ていた。

「一応、全員分のスーツとかサングラスとか用意しといたで」

「サンキュー」

「ホントに何でも揃えられんだな」

シャルナークが礼を言い、ウボオーギンが腕を組んで感心する。

ラミナは肩を竦めて、

「この街やったら金さえあれば大抵のモンは揃う。もちろん経費は後で請求するけどな」

「それじゃ、一度着てみよう。着るのは男連中だから」

「まあ、マチやシズクじゃその筋の人間って言うのは難しいわな」

ノブナガ達は頷いて、スーツを手取る。

ラミナ達女性陣は、目の前で着替えられようが特に恥ずかしがることは無い。

涼しい顔で今後の予定を確認していく。

「気球やお宝はシズクの能力やな？」

「そりゃあね。じゃないと無理」

「やんな。で、予定は？」

「え〜と……夜8時までビルに潜入して、邪魔者を排除。競売に来たマフィアを全員殺して、『デメちゃん』で死体とか全部吸い取って、お宝を奪う予定。で、周りの構成員が来る前に気球でトンズラ」

「……ド派手やな〜」

ラミナは思わず呆れるが、それでもしないとビルの中にいる構成員

が暴れ出して面倒なのも事実だ。

さつさと殺して証拠を出来る限り消した方が、時間を稼ぎながら逃げられる。

なので、ラミナは旅団の予定に文句を言うつもりもない。ただ、とことん喧嘩を売る気であることに呆れているのだ。

「うちは？」

「ラミナは潜入までだよ。ビルで競売を仕切ってる連中を殺したら、抜け出していいから。アタシ達の仕事がバレたら、マフィア側の方を願う」

「了解や」

マチの言葉に頷いたラミナは、着替え終えた男性陣に顔を向ける。

「……ウボオーとノブナガ、似合わんなあ」

「ノブナガはまずそのチョンマゲやめたらどうですか？」

「ウボオーはサンングラスかければ、まだマシになりそうだね」

「うるせえな」

「俺だつてこんな堅っ苦しいの嫌いだ」

女性陣の評価にノブナガとウボオーギンは顔を顰める。

「まあ、サイズは問題なさそうやな」

「だね」

「時間までまだあるぜ？」

「ビルに向かいながら腹ごしらえすれば、丁度いいくらいだろ」

「スーツは車に乗せて運ぼう。俺とマチ、ラミナでさつそくビルに侵入だ」

「了解」

「へいへい。ウボオー、ノブナガ、金渡しとくから仕事まで騒ぎ起こすなや」

「おう。悪いな」

ラミナはノブナガに金が入った袋を投げ渡す。

悪びれもなく袋を受け取って懐に仕舞うノブナガを見て、ラミナは僅かに呆れながら出かける準備をし、シャルナーク達はスーツを脱いで着替え直す。

フランクリン、フエイタン、シズク。  
ウボオーギン、ノブナガ。

シャルナーク、マチ、ラミナと3組に分かれて、動き出す。  
ラミナ達は車でセメタリービルの近くまで行く。

しかし、ビルから500m以内は警戒が強いので、少し離れた所に車を停める。

「じゃ、行こうか」

シャルナークの言葉と同時に、3人は勢いよく走り出す。

ラミナは短刀を具現化して姿を消しながら、裏口を目指す。

裏口に控えていた警備の構成員2人を素早く手刀で気絶させ、マチと共に中に入る。

気絶させた構成員達はシャルナークがアンテナを刺して操り、1人はそのまま立たせて、もう1人を連れて中に入る。

ラミナとマチは目に入った構成員達を素早く殺していき、シャルナークも操っている1人を利用して隙を作り、気を取られている間に素早く殺していく。

地下競売中はマファイアンコミュニティの人間のみしかセメタリービルには入れない。

さらに地下競売の証拠を残さないために、監視カメラも使用していない。最低限のセキュリティと信頼のみで成り立たせているのだ。そのため、警備を担当しているマファイア達は仲間が次々と死んでいくことを確かめる術はなく、侵入者がいることにも気づけない。

そこからへんの侵入者ならば、すぐに目視されて連絡が回るだろうが、相手は普通ではない。

ラミナは「円」で位置を探り、「隴霞」で姿を消しているので、相手がラミナに気づいた時にはすでに殺されている。

マチは連絡される前に念糸で縛り、首を絞めて殺していく。  
シャルナークは姿を隠した状態で操っている人間に仲間割れを演じさせ、その隙について殺す。

念も使えないマファイアンコミュニティの構成員達が3人に適うはずもなく、夜8時を回ってウボオーギン達が合流する頃には生き



残っている者はたった一人になっていたのであった。

しかし、

「ああ？ お宝がないい？」

ウボオーギンはシャルナークからの報告を聞いて、眉間に皺を寄せ  
る。

他のメンバーも訝しむが、シャルナークやマチ、ラミナも顔を顰め  
ている。

「どういうことか？」

「金庫が空っぽなんだ。ビルをくまなく探したけど、どこにもそれら  
しい物も隠し部屋もない」

「ってことは何か？ ラミナの調べが間違ってたってことか？」

ノブナガが腕を組んで言うが、シャルナークは首を横に振る。

「いや、それはない。ちゃんと競売をする用意自体はされてるんだ。  
参加予定のマフィアの情報もあるし、セキュリティも使う準備が出  
来てる」

「けど、お宝はないんでしょ？」

「オークシヨニアを軽く尋問したんだけど、『知らない』の一点張り  
で」

「なら、ワタシがやるよ」

「ああ、頼む」

「で、どうすんだ？ 引き上げるか？」

「いや、もう少し情報を集めたい。もし、これが罠ならこれから来る客  
も武器とかを持ってくるはずだ。それを見極めてからでも遅くはな  
いだろう」

シャルナークの方針に全員が頷く。

「とりあえず、フェイタン以外は予定通りに準備してくれ。シズク、屋  
上に気球を出して、殺した構成員達の後処理を頼む」

「了解」

「ほな、うちは一度抜けるわ。ついでに情報を探す」

「頼んだ」

ラミナは【朧霞】で姿を消して、セメタリービルを後にして、車で

拠点に戻る。

拠点に戻ったラミナは素早く半着を脱いで、紅いシャツに着替える。

そして、情報サイトを開いて地下競売の情報を探す。

「……なんも載つとらんな。つちゆうことは、お宝を横取りするような連中が？　けど、それにしても警備員達の動きはお粗末やった。ホンマに金庫にお宝があると思つとつた感じやった。流石に誰にも気づかずに盗むのは無理や。となると……お宝動かしたんは十老頭の指示つちゆうことになる……」

競売を仕切っているのは十老頭だ。なので、競売の品を移動する権限も十老頭が持っている。

しかし、そうなるど、

「なんで動かすような指示を出したんか……。うちらが来ることを知つとつた？　いや、それならあの警備は変や。んく……。どうにも対応全部が中途半端で気持ち悪いなあ……」

ラミナは顔を顰める。

相手の行動の理由がはつきりせず、推測を立てるだけの要素もないのがどうにも不気味だ。

その時、携帯が鳴る。

確認すると、マチからのメールだった。

『気球にて移動開始。お宝を持ち出したのは陰獣。情報提供者がいる可能性あり』

簡潔に纏められていたが、最後の情報が非常に厄介である。

非常にラミナが疑われやすい状況にあるからだ。

ラミナがそうでないと思っいても、念能力で操られていたり、動きを視られている可能性を否定できない。

「まあ、操られとる可能性は低いとして、覗かれとるんは確かめようがないでなあ……」

操られているなら、とつくにマチ達を襲っているはずだ。

しかし、視られているだけならば、どうしようもない。その手の能力は大抵感知できないようにしている場合が多いからである。

「それにしても陰獣が出しやばって来よったか……。もうちよい後かと思つとつたが……」

陰獣は十老頭の懐刀だ。

それを出したということは、最大限警戒はしていたのだろう。しかし、そうなるとやはり今回の対応が中途半端なのが気になる。

陰獣を動かしておきながら、警備に陰獣を出していない。セメタリービルに待機させてすらいないのが、気になる。

「陰獣が動かすほどの事が起きるとは分かつとつたが、具体的にどんな奴が来るまでは分かつとらんかった？　どんなことになれば、そんなことになんねん」

考えれば考える程、気持ち悪くなってくる。

そんな中途半端な情報を十老頭が信じ、中途半端な対応を十老頭が指示をした。

マフィアのトップがするとは思えない行動である。

「それだけ情報元に信頼を置いとるつちゆうことか……。どんな情報屋なんや？」

ラミナは腕を組んで唸る。

その時、再び携帯が鳴る。今度は電話のようだった。

「はいな」

『リップパー。仕事の依頼だ』

「……ほお」

『依頼者はマフィアンコミュニティ。ゴールドー砂漠方面に向かう気球に乗っている連中だ。今回はマフィア連中も追ってるから、堂々と殺しに行つてもらつて構わん』

「……気球を追えばええんやな？」

『そうだ』

「報酬は？」

『最低20億。その後、相手の素性が分かり次第、報酬を上げるとのことだ』

「ふん……」

『悪いが、これを断るなら今後この街では依頼を出せない』

「おお、怖い事言うなあ。へいへい、了解や」

ヨークシンの仲介屋の多くはマフィアとずぶずぶな関係なので、マフィアンコミュニティからの依頼など絶対に断れない。

それを理解しているから、連絡を入れていたので文句はないが。

電話を切ったラミナはパソコンを閉じて、動き出す。

「意外とお呼びがかかるもんやな」

今回に関しては、まだマフィアと陰獣だけで動くと予測していた。しかし、どうやら地下競売に参加した者達が全員姿を消したので、マフィアンコミュニティも焦っているようだ。

恐らくシズクの【デメちゃん】によって、死体なども残っていないので攫われたとでも考えたのだろう。

ラミナはクロロとマチに依頼が来たことをメールする。

拠点を飛び出したラミナは用意してあったスポーツバイクに乗り込む。

サングラスをかけて、エンジンを掛ける。

数回吹かして、フルスロットルで夜の街に飛び出す。

車と車の間を猛スピードですり抜け、紅い髪を靡かせながら郊外のゴルドー砂漠を目指す。

「さて、殺されんようにせんとなあ」

その頃、ゴルドー砂漠。

「うわあああ!?!」

「ひいいい!?!」

「はっはあ!! オラオラ、どうしたあ!!」

ウボオーギンがマフィア数十人相手に、たった1人で暴れ回っていた。

マフィア達は拳銃を発砲するが、【練】で体を強化したウボオーギンの体には掠り傷すら付けられず、素手で人間を引き千切って行く。

その様子を、マチ達は高台の上に座って見下ろしていた。

「ゴリラ対アリだな」

「ただの銃でウボオーの体に傷なんか付けられるかよ」

「肉体の強さは旅団1ね」

「まだまだ来るよ」

「ご苦労なことだね」

シズクとマチは次々とやって来るマファイアの車を眺める。

次々と停まっては、拳銃を持って降りてくるマファイア達。

ウボオーギンはそれをつまらなげに眺めていた。

足元には人だったものの残骸が転がっている。

「ふん。これじゃ陰獣やラミナが現れるまでの準備運動にもならんぜ」

その時、ウボオーギンの耳に風が切る音が聞こえてきた。

直後、額と胸元に衝撃を感じた。

「つつ!! つてくく。ライフルか? こそこそ狙いやがつて……」

スナイパーライフルですら血も流さない。

その事実にもファイアやスナイパーは目を見開いて固まる。

「あそこか……。ムカつく奴らだ」

ウボオーギンは数百メートル離れている岩場に目を向けて、石を拾い上げる。

そして、その岩場を目掛けて、全力でその石を2回連続で投げる。

ウボオーギンの眼には、腹と顔が吹き飛んで死ぬ2人のスナイパーを捉える。

「おくし!! 大命中!!」

「そこまでだ、バケモンが!!」

「ん?」

大柄の男がバズーカ砲を抱えて、ウボオーギンに叫ぶ。

「戦車も一発でおしやかにしちまうスーパーバズーカ砲だぜ!! コナゴナになれや!!」

「……悲しいぜ。俺はたかが戦車と同じ評価かよ」

ウボオーギンは冷めた顔で右手をまっすぐに突き出す。

その直後、バズーカ砲が発射され、ウボオーギンに直撃して爆発を起す。

直撃したことにマファイ達は勝利を確信して笑みを浮かべる。  
ウボオーギンを倒したところで、まだフランクリン達が控えている  
のだが。

しかし、

「……流石にかなり痛えな」

死ぬどころか、血すらも流れていないウボオーギン。

上半身の服は流石に消し飛んでいるが、それだけだった。

『うわああああ!!』

バズーカ砲ですら無傷で耐えきった事実には、マファイ達は完全に心  
が折れて恐怖に叫びながら逃げ出す。

しかし、ウボオーギンが飛び出して、誰一人、車に乗り込むことす  
ら出来ずに引き千切られ、叩き潰され、抉られて死んでいく。

「もう終わっちゃうな」

「どうするの? このまま待つのか?」

ノブナガが退屈そうに言い、シズクはマチ、フランクリン、シャル  
ナークとトランプしながら尋ねる。

その時、フェイタンがウボオーギンから視線を外して、遠くの岩場  
を見る。

「……来たよ。どうやら退屈せずに済みそうね」

ウボオーギンがバズーカを受け止めたのと同時に、クラピカも現場  
に到着する。

車を降りて、双眼鏡で戦場を見たクラピカは目に映った光景に慄く  
しかなかった。

「……敵も……念の使い手だ。それも……桁外れに強い……!!」

「なっ!?」

「先に来た連中は全滅だな。銃器では歯が立たないらしい」

クラピカはそう言いながら、隣にいる護衛団リーダーのダルツオル  
ネに双眼鏡を渡す。

双眼鏡を覗き込んだダルツオルネは、ウボオーギンが生み出した光

景と、その実力を見て同じく慄く。

他の者達も双眼鏡で現場を見て、顔から血の気が引く。

「一体……何モンだ、ありやあ……」

「ひ、人を素手で紙屑のように引き千切ってるぞ!? あれを捕まえる!? 冗談じゃねえぞ!!」

「俺もだな。到底勝てる気がしねえ」

「っ!! 待って!!」

クラピカの仲間達がウボオーギンの実力に怖気づいていた時、小柄で出っ歯の人物、センリツが耳に手を当てて、すぐ近くの岩場に目を向ける。

「どうした?」

「バイク……。バイクの音がすぐ上を走ってるわ。あそこに向かってる!」

「バイクだと!」

クラピカ達はセンリツの言葉に、驚きながら目を向ける。

その直後、岩場の上からバイクが飛び出し、ウボオーギンがいる戦場に飛び出す。

「あ?」

ウボオーギンも目を向ける。

その時、バイクから何かが飛来するのが見え、ウボオーギンが目を凝らす。

直後、飛来するモノが発火して、炎の円盤となってウボオーギンに飛び迫る。

「っ!! うお!」

ウボオーギンは驚いて反射的に横に跳んで避ける。

真横を炎の円盤が通り過ぎて、ブーメランのようにバイクの下へ戻って行く。

バイクは後輪から着地し、軽くスリップしながらも猛スピードでウボオーギンの横を通り過ぎる。

ウボオーギンの目に、紅い髪が映る。

それを見たウボオーギンはニイイ!と獰猛な笑みを浮かべる。

バイクはウィリーをして、そのままマチ達がいる岩壁を登る。マチ達の目の前を飛び上がっていくバイク。

マチ達はバイクに跨るラミナを見て、軽く手を上げる。

ラミナも左手で返事をして、空中で方向転換しながら再び岩壁を下っていく。地面に下りる直前でウィリーをして、岩壁から飛び上がり着地する。

スライディングしながら停まろうとするバイクから、再び何か投げられ、ウボオーギンは拳で払おうとする。

すると、突如目の前に右拳を構えたラミナが現れた。

「っ!!」

「ぶっ飛ばやああ!!」

ウボオーギンは振り払おうとした右腕で、ラミナの右ストレートを受け止める。

ウボオーギンは1mほど後ろに下がるが、

「オラア!!」

無理矢理腰を捻って左フックを放ち、ラミナは上半身を大きく仰け反らして躲す。

そして、そのまま数回バク転し、ウボオーギンから距離を取る。

「イツツく……! 相変わらずカツタイやつちやなあ〜」

「遅かったじゃねえかよお。ラミナア……!」

ラミナは右手をプラプラと振って、ウボオーギンは拳を鳴らして笑みを浮かべる。

ラミナの左手には圈が握られていた。

「ウボオー対ラミナか」

「お手並み拝見ね」

「お〜い。殺しちや駄目だからな〜」

「さて、どうなるかね」

ノブナガが楽しそうに顎を擦り、フェイタンも頷く。

シャルナークがウボオーギンに声を掛け、マチも腕を組んで観戦モードになる。

クラピカも双眼鏡を覗いて、誰が現れたのかを理解する。



「ラミナ……!?!」

「だ、誰だ?」

「殺し屋だ。私と同期のプロハンターでもある」

「殺し屋か……。マファイアンコミュニティに雇われたんだろう」

「おいおい、1人でやるつもりか……!?!」

（確かにいくら何でも無茶だ。ラミナがそれを見抜けないわけがない。一体どういうつもりだ……?）

クラピカは眉間に皺を寄せて、ラミナがどうするのかを注視するのであった。

ラミナは周囲を見渡して、マファイアの死体が散らばっている凄惨な現場に呆れ顔を浮かべる。

「相変わらず猛獣みたいな戦い方しよるなあ。バズーカ砲を片手で受け止めるとか、ようするわ」

「はっ！俺がまどろっこしい戦い方が出来ると思ってたのかよ?」

「思てへん」

ラミナは右手にバトルアックスを具現化する。

「それで俺と戦うつもりか?」

「おう。この2つともう1つ。……退屈はさせんと思うで?」

「……へえ。そりゃあ……楽しみだぜえ!!」

ウボオーギンは初めて構えを見せる。

ラミナもバトルアックスを肩に担ぎ、半身になって圏を突き出す形で構える。

その瞬間、パイインと空気が張り詰める。

「久しぶりに遊ぼうや。ウボオー兄」

「遠慮なく来な。ラミナア!!」

直後、2人は同時に飛び出す。

兄妹の物騒で過激な戯れが始まった。

## #38 ケイアイ×ナル×イチゲキ

同時に飛び出したラミナとウボオーギン。

ウボオーギンが右腕を引き絞った瞬間、ラミナはバトルアックスを消しながら屈んで、右足払いを繰り返す。

「甘え!!」

ウボオーギンは左足を滑らせるように前に出して、オーラを集中する。

その瞬間、ラミナは右足を止めて、左脚だけで飛び上がり、左手の圈で殴りかかる。

ウボオーギンは素早く右フックを放ち、圈に拳をぶつける。

ガアアン!!

ぶつかり合った瞬間、衝撃が弾けて、ウボオーギンは2mほど滑り下がり、ラミナは3mほど跳び下がる。

「へえ! やるじゃねえか!」

「全然オーラを籠めてないとはいえ、ウボオーの拳を受け止めるとはな」

「あの武器の能力かな?」

「多分ね」

ノブナガとフランクリンが感心の声を上げ、シズクとマチはラミナの能力を推察する。

ラミナは圈に目を向ける。

(ふう……あの程度なら大丈夫か。けど、そう何度もぶつけ合わせるんは無理やな)

圈が碎けなかったことにホツとするも、今の拳は全く本気ではないので油断は出来ないラミナ。

「やるじゃねえか。その武器の能力かよ?」

「さあなあ」

「ま……別に言わなくてもいいけどよ!!」

ウボオーギンが再びラミナに猛スピードで迫り、右ストレートを振り抜く。

それをラミナはすり抜けるように紙一重で躲してウボオーギンの背後に回り、ウボオーギンの背中に右肘を叩き込む。

「ぐっ！ おお!!」

ウボオーギンは僅かに前につんのめるも、すぐさま振り抜いた右腕でそのまま裏拳を繰り出す。

ラミナは跳び上がって、ウボオーギンの右肩に右手を乗せて逆立ちして躲す。そして、左脚を振り下ろして、ウボオーギンの後頭部を蹴り飛ばす。

「がつー!」

再びウボオーギンは前のめる。

ラミナは着地するも、無理をせずに一度距離を取る。

「つつう……!」

(やつぱ頑丈さが半端やないな。攻撃したところがめつき痛いわく。  
【ビッグテッド・ナックル意地を貫く拳】やないと、防御する気にもならん)

ラミナは顔を顰めて、左足をプラプラと揺らす。

【ビッグテッド・ナックル意地を貫く拳】は『ラミナの体を強化する』能力である。

ラミナは普段は具現化系なので、強化系は最大60%しか極められない。  
ない。

【ビッグテッド・ナックル意地を貫く拳】はそれを最大80%まで引き上げることが出来る。  
それでも十分だと思っていたが、ウボオーギンを相手にするには全然足りなかったようだ。

「すばしっこいだけじゃあ、俺には勝てんぜ？ 残りの武器、さっさと出せよ」

ウボオーギンは首を鳴らしながら、ラミナを挑発する。

ラミナは肩を竦めて、再び構える。

ウボオーギンは鼻で笑うも、その顔は蔑みの色はなく純粹に楽しんでいるだけである。

ノブナガは闘いを見下ろしながら、

「動きはいいけど、パワー不足だな」

「ウボオー相手じゃ、しょうがねえだろ」

フランクリンが呆れながら、ノブナガに言う。

「それにしても陰獣まだ来ないのかな？」

「全くだね。このままじゃ落としどころが難しくなるよ」

シズクとマチは僅かに眉間に皺を寄せて、陰獣の到着を待つ。

しかし、あまりに長引くとウボオーギンとラミナの戦いを止めるきっかけを作り辛くなる。

マチ達がそう考えていると、ウボオーギンが再びラミナに殴りかかる。

ラミナは今度は動かずに【堅】を発動して、ウボオーギンの動きを注視する。

ウボオーギンは構わずに左ストレートを繰り出す。

ラミナは再び紙一重で躲すが、今度は反転しながらウボオーギンの懐に潜り込む。

「!!」

ラミナは伸びきったウボオーギンの左腕を抱えて、一本背負いを放つ。

そして、ウボオーギンが空中で逆立ちした瞬間、ラミナは腕を放して猛スピードで前方に駆け出し、ウボオーギンの背後に回り込む。

ウボオーギンの大きな背中にラッシュを叩き込んだ。

ウボオーギンは逆立ちしたまま吹き飛んでいく。

バキン!!

ラミナの圈が粉々に砕け散る。

ウボオーギンは空中で体勢を直して、倒れることなく着地する。

「はっはあ!! やるじゃねえか! ちょっと驚いたぜ! 【堅】を使わねえと危なかったかもな!」

「こんのバケモン……!」

ラミナは盛大に顔を顰めて、バトルアックスを具現化する。

それにウボオーギンが笑みを深めて、右足を踏み出そうとした時、ラミナ達は近づいてくる気配を感じた。

目を向けると、歯が鋭い細身の男、坊主頭の小柄の男、そして、小太りの男が歩み寄ってきた。

「ようやく来よったか……」

「陰獣か」

ウボオーギンは陰獣に向く。

「競売品をどこにやった？」

「警備と客はどうした？」

「殺した。競売品は？　言わねえと——」

その時、ウボオーギンは背後から殺気を感じた。

ウボオーギンが振り返った直後、左頬に衝撃を感じる。

そこにはパンツ1枚の長身の男が右腕を振り抜いていた。

(地中から!?)

ラミナも3人組の方に意識を向けていたので、男の出現に気づくのが遅れた。

陰獣の3人もウボオーギンが殴られた瞬間、走り出す。

ラミナはそれを確認した瞬間、意識を切り替えて離れるふりをし、3人の背後に回り込む。

ウボオーギンは僅かに仰け反るも、倒れることなく堪える。

ウボオーギンを殴った陰獣、蚯蚓は殴った右手の指が変な方向に折れ曲がっていることに僅かに目を見開く。

「効いたぜ」

お返しとばかりに、ウボオーギンが蚯蚓の右頬に拳を叩き込む。

蚯蚓は右頬が窪み、右目が飛び出す。

しかし、指が折れ曲がった右手でウボオーギンの左腕を掴む。

「おっ」

すると、蚯蚓は倒れ込むように頭から地面へと潜り始め、ウボオーギンを地面へと引っ張り込む。

「お？　おお!?!」

想像以上のパワーにウボオーギンも地面に倒れ込み、左腕は完全に地中へと沈む。

「くくく。もう逃げられねえ……。さあ、選びな。地中で俺に殺されるか!?　地上で3人に殺されるか!?!」

地中に引っ張り込まれるウボオーギンの背後から陰獣3人が飛び掛かる。

「馬鹿が!! 逃げられねえのはテメエだあ!!」

ウボオーギンはオーラを強めて、右拳にオーラを籠める。

「げっ!？」

「おい、ウボオーも本気だ」

ラミナは慌てて後ろに下がり、ノブナガ達も衝撃に備える。

「ビッグバンインパクト【超破壊拳】!!」

ウボオーギンは右ストレートを地面に叩き込む。

地面に巨大なクレーターが生まれ、大地を大きく揺らす。

陰獣3人はギリギリで飛び上がって躲し、蚯蚓は粉々に吹き飛んだように姿は見えない。

「つひやく……。相変わらず意味分からん威力やなあ」

ラミナはウボオーギンの「硬」の威力に呆れる。

「それにしても……。せっかく楽しんどったのに、邪魔されたんちよ  
くつとムカツクなあ……」

ラミナは陰獣3人の背中に苛立ちを感じた。仕事の演技で、互いに本気ではなかったとはいえ、せっかく楽しんだところを断りもなく横取りされたことに見下されているようで気分が悪かった。

「……まだ陰獣は残つとるし、あれらはええか……」

ラミナはゆっくりと歩き始める。

そんなラミナに気づくことなく、陰獣3人はウボオーギンの背中に見えたクモの刺青を見て、顔つきを変える。

「さあ、次は誰が死ぬ?」

「幻影旅団か……」

「調子乗ってるな、こいつ。うん」

「死ぬのは……テメエだよ!!」

陰獣3人は一斉に飛び掛かる。

ウボオーギンは笑みを深めて、構える。

「いいねえ!! 命知らずで好きだぜ、お前ら!!」

陰獣はウボオーギンを囲むように広がろうとするが、

「っ!!? 豪猪! 蛭! 後ろだ!!」

「!!」

鋭い歯を持つ陰獣、病犬が目を見開いて叫び、ウボオーギンも僅かに目を見開く。

その声に豪猪と蛭は顔だけで背後を振り返る。

そこには、バトルアックスを両手で振り上げているラミナがいた。

バトルアックスには膨大なオーラが注ぎ込まれており、刃の部分が淡く輝いていた。

「敬愛する——」

ラミナは両腕に力を込めて、豪猪と蛭の間に全力で振り下ろす。

「——兄の剛腕」オ!!!」

地面にバトルアックスが叩き込まれた瞬間、オーラが爆発するように吹き荒れてバトルアックスは粉々に砕ける。そして、クレーターを更に広げて、再び大地を揺らす。

真横で衝撃を浴びた豪猪と蛭は、一瞬で体をバラバラにして吹き飛び、病犬とウボオーギンは腕で体を庇いながら後ろに跳び下がって衝撃を耐える。

「おいおい……!! マジかよ……!!?」

「本当にウボオーの【超破壊拳】に敗けてないね」

「こりや、驚いたな」

ノブナガ、フェイタン、フランクリンも目を見開いて、ラミナの一撃に驚く。

マチ達も目を見開いて驚いている。

「うちのこと無視すんなや……ええ!! ウボオー!!」

「くくっ! はははははっ!! スゲエじゃねえか!! いいぜ、来いやあ!!」

ラミナは新しく具現化したバトルアックスを再び振り上げて、ウ

ポオーギンに攻めかかる。

ウボオーギンも完全にラミナに標的を変えて、拳を構えて殴りかかる。

しかし、またもや邪魔が入る。

病犬が横から飛び込んできて、ウボオーギンの右肩の肉を噛み千切る。

「てめっ！」

「はっ！ 隙を見せるテメエが悪いんだよ！」

ペツ！と噛み千切った肉を吐き捨てながら、病犬は言う。

しかし、

「邪魔するお前が悪いに決まっとるやろ」

「がっ!!」

ラミナが一瞬で病犬の背後に回り、後頭部に拳を叩き込む。

病犬は顔から地面に倒れ込む。

ラミナは全力で跳び上がり、岩壁を駆け上がる。マチ達がいる場所まで上がって、そこから更に高く跳び上がる。

そのラミナは右手にガンブレードを具現化する。

そして、体を捻って銃口がある切っ先を、病犬とウボオーギンに向けてける。

「敬愛する——」

ラミナは眩きながら、ガンブレードにオーラを籠めていく。

「——兄の咆哮!!!」

ドツツバァン!!

巨大な念弾がガンブレードから放たれる。

発射の反動でガンブレードが砕け、ラミナは腕が跳ね上がり後ろに吹き飛んでいく。



ウボオーギンは目を見開いて大きく後ろに跳び下がるが、病犬はダメージが抜けきれずにラミナの砲撃の範囲から抜け出すのが間に合わなかった。

病犬は跡形もなく吹き飛んで、地面に3つ目のクレーターが出現する。

マチ達は爆風を腕で庇う。

「ビュート♪ こりゃ、マジでスゲエな!」

「凄いけど、ちよつとやり過ぎ」

「陰獣死んじやったね」

「まあ、あいつらは競売品盗んだ奴じゃないみたいだし、問題ないでしょ」

「ウボオーの奴、生きてるか?」

「あそこいるよ」

ノブナガが口笛を吹き、マチが目の中の光景に呆れる。

シズクが肉片に変わった陰獣を見ながら言い、シャルナークは腰に両手を当てて特に困った様子も見せずに言う。

フランクリンがウボオーギンを探し、フェイタンが指をさす。

ウボオーギンは何故か尻餅について座り込んでいた。

「どうしたの?」

「腰でも抜けたのかあ?」

「まっさかあ!」

シズクが首を傾げ、ノブナガが冗談を言い、シャルナークが笑う。

フランクリンがウボオーギンに声を掛ける。

「どうした?」

「急に体が動かなくなつた! 首から上は動くんだけどよ!」

「ラミナの能力?」

「いや、そんな能力には見えなかったから、多分あの陰獣の仕業じゃないか?」

「で、ラミナは?」

「ラミナもあそこで寝転んでるね」

ラミナも少し離れているところで、大の字で倒れていた。

「どうしたのかな?」

「オーラを使い過ぎたんじゃねえか? デカいの2発も使ったしな。強化系と放出系の能力なんて、あいつに不向きなはずだし」

「【円】は上手いのだね。それ以外は典型的な具現化系だから」

フランクリンとマチが少し呆れながら、ラミナを見つめる。

シャルナークがウボオーギンの傍に下りて、体を調べ始める。

「触られてる感触は?」

「あるぜ」

「つてことは……神経毒かもね。シズクの能力なら吸えるはずだよ。問題ない」

「助かるぜ。おーい! シズク! 毒、吸い出してくれ!」

「今、行く!」

シズクが岩場から滑り降り始める。

ラミナはゆっくりと体を起こし、立ち上がっていた。

「ふう〜……しんど〜……。やっぱオーラを爆食いするなあ」

ラミナは息を整えて、汗を拭う。

とりあえず、今のうちに逃げたことにしようと考えて、動こうとした時、

「うおお!?!」

「あ?」

ウボオーギンの声が聞こえて目を向ける。

すると、ウボオーギンの上半身に鎖が巻き付かれて、引っ張り上げられていた。

「はあ?」

ラミナは目を見開いて、ウボオーギンを見送ってしまう。

シャルナーク達もあつという間に攫われたウボオーギンを助けることは出来なかった。

「見えたか?」

「うん。一瞬にして鎖が巻き付いて……」

「ウボオーはまだ毒で体が動かせねえしな」

シズクの隣にノブナガが下り立ちながら腕を組む。

フエイタン達も下りてきて、シャルナークの周囲に集まる。  
ラミナも気だるげに歩み寄る。

「ウボオーはどうかしたんか？ あっさりと攫われよったけど」

「陰獣の神経毒みたいだぜ」

「……はあ。つたく……で、どうするんや？」

「今ならまだ行き先が分かるよ。針を刺しておいたから、【凝】とかで見破られない限りは追跡できる」

マチが指から糸状のオーラを伸ばしながら言う。

「しようがない。助けに行くか」

シャルナークが立ち上がり、ノブナガ達は肩を竦める。

ラミナはため息を吐いて、腕を組む。

「うちは一度街に戻るわ。依頼失敗を連絡せなあかんし、どこがウボオーを攫ったんか調べとく」

「分かった」

「フラン。お前も一度アジトに戻れ。お前の図体じゃ車に乗れねえしよ」

「しようがねえな」

「じゃ、急ぐか」

ラミナとフランクリンを残して、マチ達はマフィアの車に乗り込んで猛スピードで走り出す。

ラミナもフランクリンと別れて、転がっていたバイクを起こして拠点を目指して走り出す。

走りながら携帯を取り出して、連絡をしてきた仲介屋に電話をかける。

『……終わったか？』

「あかん。失敗っちゅうか無理」

『……なに？』

「幻影旅団やったわ」

『幻影旅団だと……!?!』

「クモの刺青があったし、マフィアは全滅。陰獣4人も一方的に殺された。流石に1人で6人も相手に出来ん」

『陰獣もか!?!』

「たった1人に殺されたわ。そいつの相手をしながら、他の5人にまで注意なんぞ流石に出来ん」

『……そこまでか』

「お前、バズーカ砲を無傷で受け止める相手やぞ」

『……分かった。今回の依頼は取り下げる。しかし、マフィアンコミュニティにもすぐに連絡が行くだろう。また依頼が出る可能性はあるぞ』

「他にも手練れがこつちにおるんやったらええけどな。1人やったら断る」

『分かってる。とりあえず、しばらくは待機しててくれ』

「へいへい」

通話を終えて、しばらくバイクを走らせると、再び携帯が鳴る。

確認すると、クロロからのメールだった。

『ヒソカが動いた。誰かと会うらしい』

「マジかい……。ああ、クソ！ 次から次へと！」

ラミナは吐き捨てながらバイクを飛ばし、猛スピードで拠点に戻る。

部屋に入ったラミナは汚れた服を脱ぎ捨てて、パソコンを起動する。

「ヒソカが監視カメラなんぞに映る場所を選ぶとは思えんし、クラピカはどこにおるかも分からん。くっそ〜」

頭を掻きながら眉間に皺を寄せる。

ラミナは地図を取り出して広げる。

「監視カメラが無くて人気がないところ、と考えるべきか？ けど、旅団が使つとるアジト周辺は避けるはず……。そうなると……」

スラムやバー、ホテルなども避けるだろう。特にクラピカがそれを望む筈。

無関係な人間を巻き込むリスクや下手に情報が聞かれることを出来る限り避けるはずだ。

なので、考えられるのは廃墟か郊外の荒野や砂漠。

「……荒野と砂漠方面は移動するには目立つ。しかも今はうちらが暴れたばっかやし、マフィア共がウヨウヨしとる可能性がある」ということは、廃墟の可能性が高い。

廃墟ならば、人が近づけばすぐに察知できる可能性があるからだ。旅団アジトとは異なる廃墟で、移動にあまり手間や時間がかからない場所を調べて行く。

そして、見つけたのは、

「……潰れた遊園地」

郊外にある廃遊園地。

周囲は山で囲まれており、住宅街からも離れている。

他に人が近寄るような場所はない。密談には最適だ。

「他にもいくつがあるが……。一番はここやな。他に手がかりもないし、行くしかない、か……」

目的地を決めたラミナは、マフィアンコミュニティの情報を集める。

「……ん？ ウボオーの情報がない？ 陰獣が出撃した情報まではある。しかも、全員……」

ラミナは携帯を手にして、マチに電話を掛ける。

『ラミナか？』

「ん？ フェイ？ マチ姉は？」

『今、お宝を隠した陰獣を縛てるね』

「ああ、なるほど。つちゆうことは、ウボオーも見つけたんか？」

『いや、ウボオーを攫たの、陰獣じゃないね。陰獣、縛てる奴以外全員殺したよ』

「……陰獣やない？ つまりマフィアか？」

『かもね。とりあえず、一度アジトに戻るよ』

「了解や。ついでにシヤルに、渡した資料の中にマフィアンコミュニティの連絡中継所の場所も書いてるって伝えって伝えってんか？ 多分、マフィアなら、そこに連絡が行くはずや」

『分かた』

「ほな」

ラミナは電話を切って、新しい服を手にとって着替える。

「うし。これでウボオーの事はシャルに任せればええか。うちはヒソカに専念しよか」

ラミナは再びバイクに乗って、遊園地の近くに向かう。

バイクを停めて、短刀を具現化する。

姿を消して、音を出さないように細心の注意を払って廃遊園地に足を進める。

廃遊園地内の見晴らしが良い場所を探して登り、園内を見渡す。

(……おった)

メリーゴーランドのところにヒソカがいた。

ラミナは場所を変えて、話が聞こえ、かつ視界の端でヒソカ達の姿が捉えられるであろう場所を見つける。

(後は待つのみ。根比べ、やな)

ラミナは座って目を瞑り、クラピカが現れるまで待つことにしたのだった。

そして、3時間ほど経過した頃。

(……来た、か)

ラミナは目を開ける。

意識と耳だけヒソカがいる方に向ける。

ヒソカの前で足音と気配が止まる。

「早かったね♥」

ヒソカがクラピカに声を掛ける。

しかし、クラピカは黙って何も答えない。

「安心しなよ♣ 今、君と戦う気はないから◆」

「無駄話はしたくない。早速お前達の事を教えてもらおう」

「そうかい？ それじゃあ……クモは構成員13名で、その証はナンバー入りのクモのタトゥー♠」

ヒソカはよく知られている旅団の情報を話し始める。

その時点でヒソカが裏切り者と判断するには十分だったが、最後まで

で聞くことにした。

(……クラピカの姿をしつかり捉えときたいんやけどなあ。この距離やと流石に視線でバレてまうか……)

クラピカであることは間違いないのだが、オーラの質や実力を見極めるには視界の端に映っている程度では難しい。

ラミナは今、クラピカの左側にある瓦礫の陰に隠れている。

【朧霞】で姿がバレることはないだろうが、【円】や能力で見つかる可能性があるので下手に動けない。さらにヒソカやクラピカならば視線を感じ取ることくらい出来るだろう。全く人がいない状況では、特に敏感になっているはずだ。

「僕も2，3年前に4番の男と交代で入った◆ 目的は団長と戦うことなんだが、ガードが固くてね♣ 常に最低2人は団長の傍にいる♣ そして一度仕事が終わると姿を消して、手掛かりすら掴めなくなる◆ そこでお互いへの結論だが、1人では目標達成が困難じゃないか？」

「……何が言いたい？」

「団員の能力を教えようか？ 僕が知ってるのは7人だけだがね♥ 僕と組まないか？」

(……決定)

ラミナは必死に殺気を抑え込む。

「さあ、どうする？ 僕と組むか♥ 1人でやるか♣」

ヒソカが決断を促す。

クラピカは黙っていたが、その時クラピカのポケットから携帯が鳴る音が響く。

ヒソカが許可を出し、クラピカが電話に出る。

「私だ。……何!? 奴が!? 自力でか？」

クラピカは驚きの声を上げる。

ラミナは話の内容を聞き逃すまいと集中する。

しかし、そこでクラピカは通話を終える。

「……ヒソカ、1つ聞く。緋の眼の行方を知っているか？」

「……残念だが僕が入る前のことだ♣ 団長は獲物を一頻り愛でると

全て売り払う♣ 緋の眼も例外ではないはずだ♦

「そうか……」

「組むかと聞いたが一蓮托生ってわけじゃない♣ 情報交換を基本としたギブアンドテイクだ♥ 互いの条件が合わなければ、それ以上の協力は無理強いなし♦ 気楽だろ？ ……返答は？」

「……明日また同じ時間に」

そう言っただけでクラピカは歩き去っていく。

ラミナも素早く移動して、クラピカの後をつける。

(……警戒心強いなあ。やっぱり視線は向けられへん)

クラピカとの距離は40mほど。

ヒソカと会ったばかりだからか、常に周囲を警戒している。これ以上意識を向けるとバレかねない。

(けど、立ち振る舞いはハンター試験の頃とは比べモンにならない。

……旅団が関わるとるからか?)

想像以上に厄介そうになっているクラピカに内心ため息を吐く。

もう少し人がいるところに移動してほしかったが、その前にクラピカは車に乗り込んで走り出してしまう。

「……マジかい」

ラミナは能力を解除して、ため息を吐く。

バイクを置いている場所は、かなり離れている。流星に追いかけるのは難しい。

「くっそ……結局実力を見極める暇なかったな……」

マフィアに属してはいそうではあるが、具体的な組の情報はなかった。

先ほどの電話がヒントになりそうだが、そこまで細かい情報は聞かえなかった。

「まあ、しゃあないか……。とりあえず、ヒソカがアウトってことが分かっただけでも御の字やな……」

ラミナはため息を吐きながら、携帯の電源を入れる。

すると、マチからの着信履歴が数件残っていた。

ラミナはすかさずマチに電話を掛ける。



『ラミナ?』

「すまんすまん。ちよいと調べもんでな」

『ふうん。まあ、いいけど』

「で?」

『お宝は手に入ったし、ウボオーは助け出した。ノストラードファミリーってところ』

「……ノストラード?」

ラミナはその名前に聞き覚えがあった。

『知ってんの?』

「んく……ああ、思い出した。占い娘の組か」

『占い娘?』

「組長の娘でな。めっちゃ占い当たるらしいで? 十老頭とかにもファンがおるとか聞いたことあるわ」

『ふうん』

「で、鎖の使い手は?」

『いや、逃げられた。ウボオーの馬鹿が大声出したから』

「何してん」

『でき、ウボオーの奴が『鎖野郎とケリをつけるまで戻らねえ』って言い出してさ。シャルが手伝いに行った』

「ふうん……。ちよいと顔出してみるわ」

『大丈夫だと思うけどね。あんたも少しは休みなよ』

「へいへい」

ラミナは苦笑しながら通話を終え、シャルナークに電話を掛ける。

そして、ウボオーギン達がいる場所を聞き出して、向かうことにするのだった。

ラミナの新武器!

・【ビッグテッド・ナックル意地を貫く拳】

具現化した圏に付与された能力。

ラミナの身体能力を強化する強化系能力。

強化系の資質の上限を最大80%まで上げることが出来る。

制約が『武器を握っている時のみ強化できる』『効果の重複は出来ない』の2つだけなので、そこまで能力は高くならなかった。

それでもラミナの素の身体能力が高いので、大抵の相手にはこれで十分なのである。

・【敬愛する兄の剛腕】

具現化したバトルアックスに付与された能力。

ラミナ奥の手の1つ。

ウボオーギンの【超破壊拳】を参考にした能力。

オーラを武器に籠めて、強力な一撃を放つ。

『一回の使用にオーラ総量の半分を消費する』『一度使うと必ず碎けてしまう』『発動時はこの武器しか具現化できない』が制約。

・【敬愛する兄の咆哮】

具現化したガンブレードに付与された能力。

ラミナ奥の手の1つ。

ウボオーギンの【超破壊拳】の放出系版を参考にした能力。

オーラを武器に籠めて、強力な念弾を放つ。

制約は上記の3つと同じ。

## #39 オウモノ×ト×オワレルモノ

ラミナはウボオーギンとシャルナークがいる隠れ家に顔を出した。「見つけたんか？」

「いや、構成員リストには奴の顔は載ってなかった」

ウボオーギンは苛立たし気に顔を顰めながら答える。

ラミナはシャルナークが表示した構成員リストを覗き込む。

「……ふうん。あれだけの念使いが顔も出とらんのか？」

「けど、鎖野郎と一緒にいた連中の顔写真はあつたよ」

シャルナークに渡された紙には、ダルツオルネを始めとする5人の顔写真が載っていた。

ラミナは記されている情報を見て、眉を顰める。

「組長の娘のボディガード？」

「そ。なんで娘のボディガードがあそこにいたのか分からないけどね」

「この娘はマフィアじゃ有名な占い師らしいで。十老頭にもファンがおったはずや」

「占い？」

「ああ。でや、今回のセメタリービルの変な対応。それが、もしこの娘の占いによるもんやったとしたら？」

ラミナの言葉にシャルナークとウボオーギンは、すぐに言いたいことが理解出来た。

「やつは俺達の中に裏切り者はいなかったってわけだ」

「だね」

(マフィアに売る奴は、やけどな)

「まあ、とりあえず、言いたいんはこの娘の占いがどこまで予知できるんかってことや。陰獣全滅の事を考えれば微妙な感じやけど、その娘のボディガードしとる連中が誰一人占いされとらんっちゃうんも考えにくいでな」

「確かにね」

「関係ねえよ」

ウボオーギンはラミナ達の懸念を切って捨てる。

ウボオーギン是不敵な笑みを浮かべて、扉に向かう。

「1人でええんか？」

「おう、問題ねえ。これは俺の我儘だからな。お前らにまで迷惑をかけられねえよ。お前らは団長の仕事の手伝いがあんだろ？ お前ら2人をずつと付き合わしちまえば、団長の仕事が滞るかもしれねえからなー！」

「ウボオー！ 油断禁物だよ！」

「ああ」

ウボオーギンは力強く頷いて、隠れ家を出て行った。

ラミナとシャルナークはその背中を見送る。

「さて、どうなるかな？」

「まあ、ウボオーの実力やったら、そう簡単に遅れはとらんやろ。それにノストラードの連中も、馬鹿正直にこの宿泊施設使ったまんまとは思えんけどな。実際、1人プロハンターがおるんやろ？」

「ああ。この右端の男がそうだよ」

シャルナークと言う男をシャルナークが指差す。

「つちゆうことはハンターサイトを見れる。この情報も見とる可能性は高いやろうな」

「そうだな。もしかしたら、もう逃げてるのかもしれないな。まあ、それならそれでいいけどさ」

「とりあえず、シャルも一度戻りや。次の仕事の準備あるやろ？ ウ

ボオーのことはうちも気にかけてくぞな」

「悪いな。頼むよ」

シャルナークも拠点を後にして、ラミナはパソコンの前に座る。

そして、クロロにメールを打つ。

『ヒソカは黒。目的はクロロと1対1で戦うこと。協力者はいるも、ヒソカ自身が今すぐ仕事に害を出す可能性は低い。ヒソカの始末か、ウボオーのバックアップか、次の仕事の準備か。どれがええ？』

ヒソカの目的はクロロと1対1で戦うこと。逆に言えば、クロロがそれを約束すれば、ヒソカは仕事に関して無害になる。

なので、どちらかと言えばクラピカの方が危険性は高い。

しかし、クラピカの居場所が分からないので調査は継続するも、急ぎようがない。

ハンターサイトでクラピカを調べてみるも、やはり目新しい情報はない。

ヨークシンは人が多いので、人探しには不向きなのもまた厄介である。

「しばらくは様子見、か。腹ごしらえして、仮眠取るか」

その時、クロロから返信が届く。

『ヒソカは後回しでいい。お前が殺せる時に殺せ。今はウボオーを攫った奴とヒソカの協力者の調査を優先しろ。仕事の方は問題ない。地下競売のお宝は2日分あったからな。今日はない』

「ふむ。……つまり、陰獣がやられたこともマファイアンコミュニティが気づくには十分な時間やな。ウボオー達の情報がある程度出回るか。賞金をかけられる可能性は高いな」

ラミナはこの後のマファイアンコミュニティの行動を予測しながら、拠点に戻る。

途中で弁当を買って、拠点に戻ってから食べ、シャワーを浴びてから仮眠をとることにした。

その頃、クラピカはノストラードファミリーの組長から護衛団のリーダーを引き継がせてもらい、早速リーダーとして動いていた。

ラミナの予測通り、ハンターサイトでノストラードファミリーの所有物件と宿泊中のホテル、そして構成員リストを確認して、すぐさま護衛対象のネオンを別の部屋に移すように指示を出す。

そして、クラピカはウボオーギンがここに来ると考えて、待ち構えることに決めた。

その間、クラピカは昨日のラミナとウボオーギンの戦いの事を思い出していた。

(まさかラミナが、あそこまでの念の使い手だったとはな……。クモや陰獣とも互角に戦えるあの実力は未恐ろしい)

クラピカは旅団に対してのみ使える能力を有しているからこそ、旅団と戦うことを恐れない。

しかし、陰獣やラミナと敵対をすればひとたまりもないだろう。念を覚えた時には『これでヒソカやラミナにもそう簡単に負けることはない』と思ったこともあったが、昨晚の戦いを見てその思いは自惚れであったことに気づいた。

(それにしても、あの能力……。具現化系に属するのだろうか、一体どんな制約を課せばあそこまで力を……)

地面を吹き飛ばし、マフィアンコミュニティー最強の実行部隊『陰獣』を簡単に殺した能力は非常に脅威だと感じていた。

(あの後……ラミナは逃げれたのだろうか……。あの11番を捕えて逃げるだけで精一杯だった……。)

ラミナの性格から考えれば、逃げるだけの余力は残しているはずだ。

そして、あの後、旅団の者達が追ってきた事を考えると見逃された可能性もある。

連絡をしようにも、ラミナの直接の連絡先を知らない。

ハンターサイトで調べれば、ラミナの仕事用のホームコードは分かるかもしれないが、分かったところでどうするかという思いも湧いてきて、結局調べずに終わっている。

(あれだけの実力……。出来れば、味方に引き入れたい。このオークシヨンの間だけでも……)

しかし、クラピカにラミナを雇い入れる資金もなければ、権限もない。

組長に言えば可能性はあるのだろうか、限定的な雇い入れには難色を示すかもしれない。ただでさえオークシヨンが控えているのだから。

もちろん、旅団の今後の動き次第ですべて中止になる可能性はあるが、それはそれでラミナを引き入れるメリットが小さくなる。

(相変わらず扱いが難しい奴だ……)

クラピカは小さくため息を吐く。

そして、ラミナの事を思い出したことで、ゴン達のことも思い出す。  
(……何をしているのだろうか。ヒソカを追いかけ回していないとい  
いが……)

ヒソカを探すことは必然的に旅団を探すということに等しい。  
出来れば止めたいが、ここで『ヒソカを探すのはやめておけ』と言  
えば、逆にヒソカがここにいることを教えることになる。

ゴンならば確実に探しに行く。それにキルアやレオリオも手伝う  
だろう。ヒソカが旅団だとは知らないのだから。

(ラミナが止めて……いや、ラミナも仕事 중이다。ゴン達とは会ってい  
ない可能性が高いか……)

その時、クラピカの携帯が鳴る。

画面を見ると、ヒソカからのメールだった。

「ヒソカ……?」

メールを開くと、そこにはウボオーギンの情報が書かれていた。  
と言っても、ウボオーギンは典型的な強化系なのは昨日の段階でわ  
かっていたので、そこまで目新しい情報はない。

しかし、最後に『彼は1人で君を探している』と記されていた。  
(……これは奴が私と手を組むという提案が本気であること示すため  
のものか)

昨日のヒソカの情報から考えると、確かにヒソカ1人でクロロと戦  
うのは難しいだろう。

なので、この機会を逃したくないはずだ。

飄々としてはいるが、ヒソカもヒソカで必死なのだろう。

(私がやることは変わらない。現れたクモを始末するだけだ)

クラピカは気持ちを切り替えて、誰もいないホテルの部屋でウ  
ボオーギンを待ち構えるのだった。

ゴンとキルア、レオリオの3人は、サザンピースオークションに参  
加する資金を稼ぐために『条件競売』として腕相撲を行っていた。

昨晚から始めており、275万ジエニー稼ぐことは出来た。しか

し、それでもまだ1000万にも届いていない。

目標最低金額は89億ジエニー。

参加するためには1200万ジエニーが必要だ。

そして、競り落としたいなら、更に倍は欲しい。

つまり、現在無一文に等しい状況である。

しかし、昨晩の無敗で荒稼ぎしたため、今は誰も挑戦してくる様子はなかった。

「これで大丈夫なのか？」

「おう。むしろ、これを待ってたんだよ」

キルアは半信半疑の眼をレオリオに向ける。

レオリオはそれでも自信満々に頷いて、周囲にいる野次馬に目を向ける。

すると、スーツ姿の大男と小柄な男が前に出てきた。

「お!? 挑戦ですかあ？」

「いや、こいつじゃそのガキに勝てねえのは分かってる」

「それじゃあ？」

「お前ら、もつと儲けたくないか？」

「というと？」

「こんなところでチマチマ稼ぐより、もつと大きな勝負が出来る場所がある。そこで勝てば何百倍、いや何千倍にもなるぜ？」

小柄な男の言葉に、レオリオはニヤリと笑みを浮かべる。

そして、店じまいをしてゴンとキルアを伴って、男達に付いて行くのだった。

その様子を少し離れた路地裏から眺めている者がいた。

「……あんなところで何しとんねん」

ラミナである。

ラミナは茶髪のカツラを被っていた。

マフィアの動向を調べている途中だったのだが、人垣を見てふと目を向けると、そこにいたのはゴン達だった。

「……腕相撲で金稼ぎ? しかも、今付いて行ったんは下っ端マフィ



アの人間か」

レオリオとキルアがいる以上、3人揃って変なことに頭突っ込んで  
いるわけではなさそうだ。

そう判断したラミナは、ゴン達を追わずに調査を再開するのであつ  
た。

ゴン達は路地裏にあるバーに入り、その奥にあるエレベーターに  
乗って地下に下りて行く。

地下ではリングの上で腕相撲が行われており、リングの周囲では観  
客が囃し立てている。

「お〜お〜、殺気立ってるねえ」

「このアームレスリングは無差別の賞金制だ。試合ごとに賭けが行わ  
れ、勝者には賭け金の10%支払われる」

「おおー!」

「1回の試合で動く金は、億単位だ」

「つてことは、1回勝てば千万単位!」

「場合によっては、もっとだ。俺は紹介料として取り分の50%を頂  
く」

「50%!? 取り過ぎじゃねえか?」

「俺の紹介がなけりや参加出来ねえぞ? それにお前も賭ければい  
い」

「なるほどお!!」

レオリオが完全に食いついていたが、戦うのはゴンだ。

そして、そのゴンは未だにそこまでやる気になっていない。

その時、リングの上にピエロのような化粧をした露出が多い服装の  
男が飛び上がる。

そして、マイクを握って喋り出す。

『突然ではありませんがぁ!! アームレスリングは中止させていただきます  
きい、これより条件競売を始めさせていただきますまあす!!』

「中止?」

『この条件競売はぁ……【かくれんぼ】でございまあす!!』

「かくれんぼ?」

レオリオが訝しむと、スタッフと思われる女性達がプリントを配り始める。

ゴン達も受け取り、目を通す。

そこには7人の男女の写真が載っていた。

『配られたプリントの写真をご覧ください!　そこに写った7名の男女が今回のターゲットでございませす!!』

ゴン達はその内の1人を見て目を見開いていた。

「おい、ゴン。この眼鏡の女の子……」

「うん。昨日腕相撲に来てた子だ」

昨晚にシズクはゴン達の腕相撲に参加していたのだ。

ゴンは本気で戦ったこともあり、よく覚えていた。

『落札条件は標的を確保し、我々に引き渡すこと!!　そうすれば標的1人につきい、20億ジュエニーの小切手と交換させていただきます!!!』

言い渡された賞金にどよめきが広がる。

『期限はございませす!!　標的の生死も問いませす!!　捕え次第、ご連絡ください!!』

「1人20億!?!」

「全員捕まえりや、140億だぞ!!」

ゴンとレオリオが賞金で盛り上がっている横で、キルアは真剣な表情で目を細める。

『ただし、参加費用としてお1人様500万ジュエニーいただきますませす!』

「当然参加だよな!」

「うん……」

レオリオが参加費用を払い、署名する。

そして、3人は店を後にして、外に出る。

周囲では仲間に連絡を回し、早速探し始める者達の姿があった。

「俺達も急ごうぜ!」

レオリオが2人を囃し立てる。

「心配しなくても、あんな連中にや捕まえられるよ」

「え？」

「何しろマフィアでさえ手を焼いてんだから」

「どういうことだ？」

「さっきのさ、条件競売だって言いながら、まるつきし賞金首探しだろ？ つまり、マフィアが自分達の力で見つけれないって認めてるよ  
うなもんじゃないか」

「そーいやあそーうだな。予定を変更してでも、こいつらを探す必要が生じた……」

「さつき聞いたけど。昨日、地下競売が襲われたらしい」

キルアの言葉にレオリオが目を見開いて驚く。

「地下競売が!? まさか……こいつらが。それで盗人の首に賞金を懸けたのか……」

「そ。マフィアのお宝を盗むなんて、頭イカれてるだろ？ でも、俺達はその連中に心当たりがある」

キルアが言いたいことをようやく気付いたゴンとレオリオ。

足を止めて、キルアを振り返る。

「幻影旅団……!!」

3人の間に緊張感が走る。

その時、ゴンの頭にはクラピカの事が浮かんだ。

「そういえば……クラピカはどうしてるんだろ？」

「確かにもう着いてるはずなのに、全然連絡ないな」

「電話してみよ」

ゴンは携帯を取り出して、クラピカに電話を掛ける。

しかし、一切出る気配はない。

「出ないよ」

「仕事中か？」

「仕事？」

「あいつ、ボディガードしてるって聞いたぜ？ おそらくVIPの護衛か。緋の眼を追ってたから、当然闇の要人だよな」

「その人の護衛で地下競売に行つて、事件に巻き込まれたのかも……」

「巻き込まれたってのは正しくねえぜ？ あいつは相手が旅団なら、積極的に介入するはずだからな」

「すでに団員の2，3人は捕まえてるかもしれないねえぜ？」

「……だいたいけど……」

レオリオが楽観的な事を言い、ゴンの不安を和らげようとする。

ゴンはそれに同意するも、やはりクラピカの事が心配になる。

「……親父がさ」

「ん？」

「仕事で旅団の1人を殺ってるんだけどさ」

「!!」

「珍しくボヤいてたんだ。割に合わない仕事だったって。それってさ、標的に対する最大の賛辞なんだけどさ」

キルアの話にレオリオは唾を呑む。

「親父がそこまで言ったってことは、旅団の連中だって念を使うはずだ。まだ基礎レベルしか出来てない俺達じゃ勝ち目はないと思うぜ」

「けど、それならクラピカがヤバイってことじゃねえか？」

「そこも念次第だよ。制約と誓約次第だと思う」

「なんだ、それ？」

レオリオはほとんど念の修行を終えていないので、もちろん制約と誓約の事など知らない。

キルアはホテルに戻りながら、ラミナから教わった事を話す。

「念ってそんなことも出来んのかよ……」

「だから、裏試験があるんだろ。まあ、俺の場合はちよつとズルだけどさ」

「ラミナに能力の作り方は教わらなかったのか？」

「教わりようがないんだよ。人によって能力全然違うんだ。それに能力を下手にバラすのもマズイ。だから、俺達もラミナの能力はほとんど知らない」

「そうか……」

「けど、それは俺達だつてかなりのリスクを負えば、旅団に勝てるだけの能力は出来るってことだ。けど、ゴン」

キルアはゴンに真剣な眼差しを向ける。

「今のお前の目的はグリードアイランドだろ？ 旅団を捕まえれば金が手に入るとはいえ、そのために能力を作るのか？ 一度作った能力はそう簡単に変えられないってラミナは言ってたぜ？」

「……ううん。クラピカを助きたいけど……流石にそこまでは出来ないかな」

「そうだな。正直、今ここで能力を考えたって旅団に通じるとは思えない——」

「だから、今の俺達に出来る事をしよう!!」

キルアの言葉を遮って、ゴンが力強く言う。

キルアとレオリオは一瞬呆気にとられる。

「捕まえられるかどうかはともかく、探して見つかるだけでもクラピカの助けになるかもしれない。だったら、やれることはやってみようよ！」

ゴンの言葉にキルアとレオリオは顔を見合わせて、互いに笑みを浮かべて肩を竦める。

「しゃーねえな」

「なら、まずはハンターサイトで情報を探してみようぜ」

「うん！」

ゴン達はホテルへと足を進める。

やれることをやっていく。

そう決めて、ゴン達は旅団を探し始めるのだった。

それより少し前。

ラミナはウボオーギンと会っていた。

「ホテル・ベーチャクル。ここに組長の娘がおる」

「つてこたあ……」

「鎖野郎もおる可能性は高いやろうな」

「ようやく見つけたぜえ……!!」

ウボオーギンは猛獣の如き笑みを浮かべて、目の前のホテルを睨む。

ラミナはその隣で呆れながら見つめる。

「ホンマに1人で行く気か？ 仲間と待ち構えとる可能性もあるで？」

「問題ねえよ。あの地下に居た連中は、毒で動けねえ俺にビビってる連中ばっかだったからなあ。あの鎖野郎だけが俺に殴りかかってきた。相手になるのは鎖野郎だけだ」

「……覚悟を決めたら厄介な能力使ってくるかもしれないで？」

「その能力ごとブツ飛ばせばいいだけだろ？」

「……はあ。流石は突攻隊長。……ほれ」

ラミナは缶ビールを取り出して、ウボオーギンに投げ渡す。

「景気づけに飲んでいき」

「おお！ サンキュー！」

ラミナも自分の缶ビールを開けて、ウボオーギンと乾杯する。

「ぷっはあー！」

「ふう……。……マファイアがウボオー達に賞金を懸けた。生死問わず、1人20億やと」

「ああ？ はっ！ やっすい賞金だなあ」

「まあな。けど、それでもあちらさんもそこそこ本気になったつちゆうことや。油断したらあかんで。一度無様に捕まったんやしな」

「分かってるさ。……じゃあ、行ってくらあ」

ラミナはウボオーギンの背中中の刺青がある部分を叩く。

「死んだらその番号、うちがもらうで。兄貴」

「はっ！ 生意気言う様になっただじゃねえか、小娘が。お前なんかはこの数字はやらねえよ」

「やったら、とつとと殺してきい。まだ仕事が残つとるんやでな」

「ああ、すぐ戻ってやるさ」

ウボオーギンは勢いよく飛び上がって、ホテルへと向かっていく。ラミナはその背中を見送って、残ったビールを飲み、缶を握り潰す。

「……さて……。どうしたもんか……」

このままウボオーギンの戦いを陰から見守るべきか、仕事に戻るべきか。

ラミナは判断に困る。

戦闘に関してウボオーギンの信頼は大きい。

ラミナとてウボオーギンが負けるとは思っていない。しかし、なにやら嫌な予感がするの事実。

「……いや。これはウボオー個人の戦いや。うちが口出すんはお門違い、か」

ラミナはそう言って、ホテルに背を向ける。

自分で戦いを挑んだ以上、生死は自己責任。この世界では当然のことだ。

ウボオーギンがそれを理解して、覚悟していないわけがない。そうやって生き残ってきたのが、ウボオーギンの何よりの誇りである。

親しい者であろうと、それを無闇に汚してはいけない。

なので、ラミナはウボオーギンを信じて、仕事に戻ることにした。

それが、ラミナとウボオーギンの最後の会話になった。

## #40 アミ×ヲ×ハル

日付が変わり、9月3日になった。

クラピカやマフィアの動向を調べていたラミナに、シャルナークから電話があった。

「ウボオーがまだ戻らない……?」

『ああ。何か知らないか?』

「ウボオーは間違いなく鎖野郎がおるホテルに行ったはずや。まあ、もうこの街から逃げとったら話は別やけど。少なくともシャルやうちが調べた場所は全部回ったから、そこに鎖野郎がおらんかったら、ウボオーは手掛かりがなくなるはずやで」

『ウボオーがそのホテルに向かったのは?』

「夜7時ちよい前」

『……もう5時間は経ってる……』

「……今の所、マフィアの情報網にウボオーのことは何も出とらん。うちが今からホテルに行く」

『頼む』

通話を終えて、ラミナは拠点を飛び出す。

ホテル・ベーチタクルに向かい、短刀を具現化して姿を隠して、ノストラードファミリーが借りている部屋に入り込む。

鍵は開いており、というよりは壊されており、室内はもぬけの殻だった。

（……暴れた形跡は一切ない。つまり、ここでは戦つとらんつちゆうことになる）

戦闘の痕跡を隠した様子もない。

もし、また鎖で捕まったにしても、全く部屋に被害が無いのはありえないだろう。ウボオーギンとて馬鹿ではない。相手の部屋に入る際には、鎖がいきなり来る可能性は考えていたはず。全く避けられないなんてことはないはずだ。

つまり、ウボオーギンは別の場所に向かったことになる。

（……けど、もうノストラードファミリーが所有しとる物件やホテル



はない。いくらウボオーでも手がかりがなくなれば、アジトに戻ってクロロやシャルを頼るはず。……つちゆうことは、ここに何かしらの手がかりがあったんか。それとも……場所を変えて戦うことを選んだか……」

ラミナは部屋を後にして、ホテルのパソコンルームでノストラードファミリーの情報をもう一度調べる。

しかし、目新しい情報はなく、ウボオーギンが暴れたような情報もない。

もちろん捕縛、殺害されたという記録もない。

もし、やられていればマファイア達に広まっているはずだ。

(……鎖野郎がもしクラピカやっただとして、殺したことをマファイアに隠す理由はないはず……)

むしろ報告すれば、十老頭から旅団討伐のバックアップを得られるはず。

クラピカがこれを逃すとは思えなかった。

(つちゆうことは鎖野郎は別人……？ くそっ！ 情報が少なすぎる！)

ラミナは再びシャルナークに電話を掛ける。

『どうだった？』

「ホテルで戦闘をした形跡はなし。マファイアでもウボオーに関する情報は一切ない。つまり、何かしら手がかりを見つけたんか、場所を変えて戦うとる可能性が高い」

『そうか……』

「けど、ウボオーを相手に4、5時間も戦い続けられるとは思えん。ウボオーもそこまで戦えば、一度退く判断くらい出来る。その様子がないつちゆうことは……」

『……やられた可能性が高い、か』

「もし、そうならマファイアに情報が広がる。けど、それもないつちゆうことは鎖野郎はノストラードファミリーを利用しただけの単独犯か、組そのものがマファイアンコミュニティを切り捨てたか、やな。が、流石に後者の可能性は低い。なら……」

『鎖野郎は組に所属しておきながら、単独でウボオーと戦って、そのことを誰にも話していない』

「やな」

『くそっ！』

「自分だけを責めんなや、シャル。ウボオーが1人でええって望んだんやし、お前を帰したんはうちや。最後にウボオーを1人で行かせたんもな」

ラミナも、シャルナークも、誰一人としてウボオーギンが正面から挑んで負けるとは思っていなかった。

これまで全ての敵をねじ伏せてきたのだから。戦闘に関して、誰もがウボオーギンには無条件で信頼していた。

だから、これは誰の責任でもなく、全員の責任でもある。

「クロロはなんて？」

『……予定変更だよ。夜明けまでにウボオーが戻らなければ、競売までは2人1組で鎖野郎を探して連れてこい、だつてさ』

「網を張るつちゆうことか。うちは？」

『ラミナはそのまま単独で動いてくれてさ。俺達が動けば、マフィアも動くはず。その隙に情報を集めてくれ』

「了解や」

通話を終えて、ラミナは一度拠点に戻る。

再び情報を確認するが、やはりウボオーギン目撃、確保などの情報は一切ない。

確保はともかく、目撃情報すらも一切ないのが気にかかる。

ウボオーギンが本気で暴れば、どうやっても目立つ。一切情報が無いのはあり得ない。

「場所を変えたんならゴールドー砂漠方面の荒野か……」

そこならば、今はマフィアも警戒していないだろうし、暴れようがすぐにはバレない。

そして、誰を殺そうが死体を処理するのも楽だ。

ラミナは嫌な予感が強まっていく。

(……ウボオーはなんだかんだでクロロや旅団に迷惑を掛けるほど我

を通す奴やない。見つけれんかったなら、一度必ず戻ってくる)

『またお宝盗めば、奴も出てくるはずだ!』とでも言つて、仕事に集中するはずだ。

しかし、ウボオーギンは帰つてこないし、どこかにいる痕跡もない。

「……馬鹿兄貴」

最悪の結果を予想して、小さく呟く。

すぐに気持ちを切り替えて、カツラを被り眼鏡を掛けて変装をする。

流石に仮眠をとる気にはならず、街に出てウボオーギンやクラピカ、鎖野郎の調査を行う。

と言つても相変わらず手掛かりはない。

「唯一の手掛かりはノストラードファミリヤけど……。ホテル・ビーチタクルの部屋はすでもぬけの殻。他の部屋やホテルでもノストラードファミリヤ関係者の名義は無し。ちゆうことは、まだ知らん構成員がおるちゆうことやな。新入り……。か。流石にそうなる情報が出るんは時間がかかるか」

ラミナは小さくため息を吐き、街を練り歩く。

もちろん手がかりなど見つかりはしない。

空が完全に明るくなつてきた頃。

ファーストフード店でハンバーガーを食べながら、ノートパソコンを取り出して情報を調べ直す。

(……ウボオーの情報は相変わらず無し。マチ姉達の情報も無い。意外とバレんもんやなあ。ノストラードファミリヤの情報は……。お!)  
組長の娘の写真とボディガードの顔ぶれが2人程増えている。すぐさま増えた2名の名前でホテルの宿泊名義を検索する。しかし、ヒットする場所は無かった。

「ちつ……」

どうやらまだ判明していない顔ぶれがいるようだ。

飛行船はもちろん偽名で私用船を使っているはずなので、渡航記録などでは名前が出てくるわけもない。

なので、まだヨークシンにいるのかも、もういないのかも判断が出

来なかった。

クラピカの方を探そうにも、今回はヒソカは動かなかったらしい。つまり協力体制を拒否されたか、メールか何かで返事をした可能性がある。メールでのやり取りとなると、流石に調べようがない。

これでクラピカを探すのが、更に難しくなった。  
「……悉く裏をかかれとるなあ。……いや、ヒソカがうちのことをバラした可能性があるか?」

ラミナはクロロにメールをする。

『ヒソカはうちが手伝つとること知つとるよな?』  
すぐに返信があった。

『俺の前では誰もお前の名前は出してない。もちろん、俺がいないところでマチやシャルナーク達が話した可能性はあるがな』

「……微妙なところやなあ。まあ、バレとると思て動こか」

もしクラピカが旅団を追っているなら、どうせいつかは敵対する運命にあるはずだ。

ならば、ヒソカと繋がっていることが分かった時点でバレていると考えておく方がいいだろう。

パソコンを閉じて、店を後にする。

すると、電話が鳴る。

「はいな」

『リップー』

「お。また依頼か?」

『逆だ』

「逆う?」

『マフィアンコミュニティが殺し屋を募っていてな。俺達はまたお前を推薦したんだが、前回の失敗と言うか中断したことが腰抜けと思われたようだな……。却下された』

「おやまあ、強気なこつて。で? なんでそんなことわざわざ連絡してきたんや?」

『俺達はお前と今後もいい付き合いがしたいってことさ』

「ああ、なるほど。ほな、うちののんびりして、ここから撤退するわ」

『分かった。またこつちに来ることがあったら、連絡をくれ』

「へいへい」

電話を終えて、携帯を仕舞う。

「んく……陰獣が死んだから、専門を呼んだつちゆうことか……。嫌な予感がするなあ」

旅団に抵抗するためにわざわざプロの殺し屋を呼ぶ。

面子を保ちたい十老頭がわざわざ依頼を出したのだから、依頼料を出し渋ることはないだろう。

ということとは、

「ゾルディックが呼ばれんわけないわなあ……」

イルミにはクロロが依頼を出している。

ならば、マフィアンコミュニティに答えるのはシルバかゼノ。もしくはその両方。

顔を顰めたラミナはクロロに今の情報とゾルディックが来る可能性をメールで伝えておく。

すると、すぐに返信があり、

『ならば仕事の時、少し手伝ってくれ。俺のスーツとマフィアっぽい車、参加証を手に入れてほしい。詳しくはまた連絡する。それまでは休んでくれていい』

「少し……なあ。クロロの少しは面倒事やからなあ」

ラミナはため息を吐いて、手に入れる物を確認する。

スーツや車は問題ないが、参加証に関しては少し厄介だった。

すでに始まっているので、通常の手段で手に入れるのは難しい。

「ちつこいマフィアから奪うしかないか……」

ラミナは眉間に皺を寄せて、作戦を考える。

奪う以上、皆殺しにしなければならぬ。しかし、発覚が早ければ参加証が使えなくなる。

奪うタイミングが非常にシビアだ。

「……あ、いや。シズクに手伝ってもらえばええか」

ラミナは目についた喫茶店に入って、人気の少ない場所に拠点を構えるマフィアを探す。

そして、手頃な標的を見つけて、ラミナはシズクに電話を掛ける。

『どうしたの?』

「クロロに頼まれた関係でな。手伝うて欲しいねん」

『仕事に関わるなら良いよ』

「おおきに。ほな、1時間後に駅前で」

『うん』

ラミナは店を出て、待ち合わせ場所に向かう。

車の手配をしながら待っていると、時間ピツタシにシズクとフランクリンが現れる。

「すまん」

「ううん」

「で、なにすんだ?」

「クロロが地下競売の参加証欲しい言うてな。しよばいマフィアからもらお思て」

「私の【デメちゃん】がいるってこと?」

「そ。発覚がバレると、参加証が使い辛くなるでな。行方不明程度なら今日くらいは誤魔化せるやろ」

「なるほどな」

「そっちは? なんも引つかからんのか?」

「うん」

「全然だな」

「フランとか目立つ思うんやけどな」

ラミナは呆れながら、シズクとフランクリンを連れて歩き出す。

「ラミナはなんで変装してるの?」

「ん? そらあ、うちがお前らと繋がったんバレたら面倒やからや。仕事が終わればバレてもええけど、終わる前にバレたら仕事がしにくくなるでな」

「ふうん」

「そっちはウボオーのことは何か分かったのか?」

「……残念ながら、や。どこの情報サイトでもウボオーのことは出回っとらん。マフィアも同じ」

「そうか……」

「鎖野郎が所属しとるはずのノストラードファミリーの居場所も不明。おかげで手がかりが一切無し」

「じゃあ、私達が動き回るのが一番の近道ってこと？」

「やな。それと今日の地下競売、やろな」

鎖野郎がマフィアに所属している以上、再び地下競売の会場で待ち構えている可能性は高い。

時間はかかるし、会うまで情報はほとんど手に入らないがこれが一番確実ではある。

ただし、もし鎖野郎に会った場合、それはウボオーギンが死んだことを確定づけることにもなる。

そうなると、正面から戦うのは危険である。

「まあ、今は地道に動くしかないやろ」

「だね」

そして、大通りから少し離れたところにある3階建てのビルの近くで足を止める。

ビルの正面入り口にはスーツを着た男2人が立っており、駄弁つてはいるが明らかに見張り役であろうことがわかる。

「あそこ？」

「おう。うちが先に入って暴れてくるから、後からゆつくり来てんか」

「1人でいいの？」

「お前の図体と能力は目立ちすぎんねん。フランはバレンように隅っこで小さくなつとって」

「おい」

「ほな、行ってくるわ」

フランクリンの文句を無視して、ラミナは短刀を具現化して姿を消す。

そして、一気に見張り2人に詰め寄り、一瞬で2人の首をへし折つて殺す。

ラミナは倒れかけた見張り2人の襟を掴んで、黒張りされている正面入り口から中に入って死体を運び込む。

中に入って死体を床に放り捨てて、ラミナはまた姿を消して1階を回る。

1階は倉庫のようで他に構成員はおらず、ラミナは2階に上がる。

2階は構成員の部屋と警備室だったようで、警備室の中にいる構成員数名を素早く殺し、監視カメラを止めてデータを全て消去する。

そして、部屋でのんびりと駄弁っていた下っ端達は、「狂い咲く紅薔薇」で皆殺しにする。

殺し損ねた者も素早く首を斬りつけて、声を出される前に殺した。シズクに電話して、入ってきていいと伝え、ラミナは3階に上がる。

3階は組長の部屋と応接室で、客はいないので組長の部屋に姿を消した状態で中に入る。

「あ？」

突然独りでに開いたドアに、部屋の中にいた5人の男が訝しむ。

もちろんラミナの姿など見えないので、警戒はするも武器には手を掛けない。

ラミナは高級な椅子に座っている小太りの男以外の4人の首を【一瞬の鎌鼬】を発動して、一瞬で斬り落とす。

「なあっ!？」

「動くなや」

「っ!!」

組長は目を見開いて驚くが、直後背後から首筋にブロードソードが添えられる。

組長は目だけを動かして、ラミナの姿を捉えようとするが、首を動かそうとした瞬間、刃が首に触れる感触がして動きを止める。

「て、てめえ……こんなことして……!」

「このビルの部下は全員死んだら。監視カメラも止めた。お前を助けに来る奴はおらん」

「っ……!!」

「でや。地下競売の参加証、持っとするやろ?」

「さ、参加証?」

「そ。参加証、ちょうだい」



「そ、そんなことのために……!」

「ええからさっさと頂戴。殺してから探すん面倒やねん」

「っ! わ、分かった……! う、後ろのテーブルの一番上の引き出しの中だ……」

「ふうん。シズク、頼むわ」

「分かった」

「!!」

ラミナは入ってきたシズクに声を掛ける。

突然現れたシズクに組長は目を見開く。

そして、シズクの顔に見覚えがあることに気づく

「て、てめえら……。ク、クモか……!?!」

「んゝつと……あ。あつたよ。これでしょ?」

「おお、それぞれ」

組長の問いかけを無視して、シズクは言われた場所を探って参加証を取り出して、ラミナに見せる。

ラミナも頷き、シズクから参加証を受け取る。

「ク、クモがなんのっ!?!」

組長が再び問いかけようとした時、ラミナがブロードソードを振るって、首を舞い上がらせる。

噴き上がる血から素早く離れて、ラミナはシズクに声を掛ける。

「ほな、すまんけど血と死体だけ吸い込んでくれん?」

「オツケー」

ラミナはシズクの仕事を見守りながら、今後の予定を考える。

休めと言われたが、現状情報収集を止めるのも難しい。

ただでさえ、マチ達も動き回っている。流石に誰も手配書の間人だと気づかないと思うのは無理があるだろう。

あれだけ情報サイトで写真が出回っているのだから。誰かしら気づくはずだ。

網にかかった者によつては、自分も調べる必要があるとラミナは考える。

その後、全ての死体と血、そして監視カメラ映像が録画されてる

ハードディスクを回収して、ラミナ達はビルを後にする。

「あ。ねえ、あいつらに鎖野郎とかの話、聞けばよかつたんじやない？」

「あ」

「おいおい……」

シズクの言葉にラミナも今更ながらに気付き、フランクリンが呆れる。

参加証の事ばかり気にしていたので、すっかり忘れていた。

「ま、まあ……あんなちっこいファイアが、そんな情報持つとは思えんでな。うん、知らんやろ、きつと」

「お前な……」

「それもそっか」

「納得するのかよ」

ラミナの言い訳と、それに納得するシズクに呆れるフランクリン。

しかし、ラミナの言っていることも分かるし、殺した以上どうにもならないのでそれ以上何も言うことはなかったのであった。

その頃。

ゴンとキルアは息を潜めて、隠れていた。

理由は目撃情報を受け取って、見つけたマチとノブナガを追跡しているからである。

マチとノブナガは手配書とは服装と髪形を変えていたが、堂々と街中を歩いていた。

そして、キルアは2人の姿を目の当たりにした瞬間、自分達で勝てる相手ではないと悟る。

しかし、それでも金を手に入れるチャンスファイにしたくはないとこのことで、全神経を注いで尾行を行っていた。

(……くそつ。全っ然、気を緩めねえ……！)

キルアは冷や汗が止まらない。

もしバレれば、一巻の終わり。

それでも何かしらの情報を手に入れたいという思いもある。

【絶】を使っているの、位置まではバレていないはず。

しかし、それは相手も念使いであれば、警戒はしているはずである。キルア達はまだ念能力の基礎を終えたばかりだ。相手の位置を探る能力を持っていれば、手の打ちようがない。

(位置まではバレていないはず。だから、連中は移動を続けている。問題は尾行していることがバレているかどうか……)

バレていなければ移動先がアジトの可能性が高い。しかし、バレていれば、その先は罠かもしれない。

その見極めがまだ出来ないキルアだった。

(……奴らに不自然な態度はない。まだ行ける！)

キルアは尾行を継続する。

しかし、キルアとゴンは追跡することに集中し過ぎていて、自分達も追跡されている可能性にまで頭が回らなかった。

キルアとゴンから少し離れた場所で、その背中を見つめる人影があった。

「へえ、ガキのくせに随分と尾行に慣れてやがるな」

【絶】も完璧ね。どこの子飼いかしら？」

フィックスとパクノダである。

2人はクロロの付き添いとして出かけたのだが、

『敵を騙すにはまず味方からだ。誰もノブナガ達に気づかないことはないだろう。逆にその相手を尾行して捕まえろ』

と、言われたのだ。

「今頃、ノブナガとマチはビビってんじゃねえか？ 4人につけられてよ」

「マチは勘で気づくかもしれないわよ？ それにノブナガも我慢出来なくなるかもね。ウボオーのことで一番納得してないでしょうから」

「まあ、しょうがねえだろ。ウボオーとノブナガはよく組まされてたし、相性も良かったしな」

「フィックスだって、納得してないんでしょ？」

「……当たり前だ。あいつをたかが鎖で縛れるわけがねえ」

フィックスとて、ウボオーギンが負けたとはまだ信じていない。

いくら具現化系や操作系とはいえ、完全にウボオーギンを拘束できるとは思えなかった。

ウボオーギンのオーラは強化系故にかなりの強さを誇る。それを突破して数時間拘束したり、操れるとはとても思えない。

しかし、それは逆に言えば、ウボオーギンが死んだ可能性が高い事も示している。

なので、ノブナガやフィックスはそれに気づいても、納得が出来ないのだ。

パクノダもその思いを理解しているので、それ以上何も言うことはしなかった。

「動くわよ」

「ああ」

そして、2人はゴンとキルアの尾行を再開するのだった。

マチとノブナガは視線を感じ取るも、位置が掴めていなかった。

「いくら何でも急に増えすぎじゃねえか？」

「知らないよ。けど……思ったより釣れたね」

「鎖野郎のことを知ってればいいけどな」

マチとノブナガは人気のない方向に移動することにした。

そして、レンガ造りの廃墟に足を進め、中庭と思われるところで待ち構えることにした。

しかし、何となく気配は感じるも結局位置も分からず、襲ってくる気配もない。

「……誘いに乗ってこないね」

「……鎖野郎じゃないかもな」

「なんで？」

「……急に機嫌悪くなつてねえか？」

「うっさい」

マチはここに来てから妙に目が据わり始めて、不機嫌になってきていた。

ノブナガは訝しむが、マチの機嫌はどんどん下降していく。

「どうしたんだよ？ つけてる奴らになんか感じてんのか？」

「……そうだね。なんかラミナと繋がってる気がする」

「ああ？ ラミナとお？ 鎖野郎じゃなくてか？」

「……鎖野郎とも関わってると思う」

「おいおい、本気で言ってるのか？ それだとラミナと鎖野郎が繋がってることになりかねえぞ？」

「そこまでは知らないよ。でも、今隠れてる奴らはラミナとも鎖野郎とも繋がってる気がする」

「勘か？」

「勘だ」

「はあく……お前の勘は当たるからなあ」

ノブナガは頭を掻きながらため息を吐いてボヤク。

マチの勘は旅団内でも頼りにされており、それで救われたことは何度もある。

なので、マチの勘は意外と馬鹿に出来ない判断材料とされている。

「けどなあ……流石に位置も分からねえこの状況じゃなあ」

「まあね」

マチもイラついてはいるが、状況は把握できている。

無闇に飛び掛かって、隠れてる者達を逃がすようなヘマはしない。

その様子をキルアは、冷や汗を流して見つめていた。

(バレたか？ いや……だったら、もうとつくの昔に襲われてる)

マチから怖気がするほど殺気が放出されているのだが、無造作に放出されていることから挑発か、ノブナガとの会話でイラついただけなのか。

広場で見つけた時も、一度マチとノブナガの間で恐ろしい殺気が放たれた。

なので、今回もそれかもしれないと考える。

しかし、先ほどとは違い、妙に体の震えが止まらない。

(……なんでこんなに嫌な予感がするんだ？)

キルアの頭の中で警鐘が鳴り響く。

(逃げるか？ けど、今下手に動けば逆に位置がバレるかもしれない)

……)

キルアは別の場所に隠れているゴンに電話を掛ける。

『キルア?』

「大丈夫か?」

『うん……これって、バレたのかな?』

「位置はバレてないと思う。けど、俺達が尾行してきたのはバレてるだろうな。問題は、この殺気で下手に動けば、位置がバレるかもしれないってことだ……」

『どうする?』

「仲間が来る可能性もある。動かず様子を見よう」

その時、ノブナガ達の辺りから携帯が鳴る。

「!! ゴン! 一度切るぞ! 注意して見てろ!」

キルアは電話を切って、ノブナガ達を注視する。

ノブナガは電話に出る。

「おう、なんだ?」

『どんな様子かと思つてな』

「今、つけられてんだけどよ。襲つて来ねえんだ。中々位置が掴めねえし、長引きそうだな」

『それじゃあいいこと教えてやるよ』

「あ?」

『右の4階。2人、いるぜ』

その言葉と同時にノブナガは告げられた方向を見る。

「!!」

ゴンとキルアは完全に捉えられたことを本能的に悟り、合図もなく同時に逃げようと駆け出す。

しかし、出口に遮る様に人影が立っていた。

キルアの前にはフィックス、ゴンの前にはパクノダがいた。

キルアはすぐさま部屋の天井や壁を素早く跳び跳ねて、フィックスを攪乱しようとする。

しかし、フィックスは完璧にキルアの動きを捉えていた。

横を抜けようとしたキルアの足を掴む。

しかし、キルアはそれを読んでいたかのように掴んでいた大量の小石を投げる。

それをフィンクスは容易く躲す。

キルアはそれすらも布石として、掴まれていない足を振り抜く。

だが、それもフィンクスは容易く片手で受け止める。

「くっ!!」

キルアはすぐさま両手で地面を掴み、全力で体を捻じる。両足から血を吹き出しながら、フィンクスの手から逃れて距離を取る。

「ヒュウ♪」

フィンクスはキルアの行動に感心して、口笛を吹く。

キルアは再びどうにかして逃げ道を探そうとするが、

「よお、フィンクス」

窓にノブナガの姿があった。

(なっ!? ここ、4階だぞ!?)

「なんでお前がここにいる? 団長とお出かけだったんだろ?」

「敵を騙すには、まず味方からだだよ」

「かく〜。また団長にしてやられたよ……」

ノブナガが頭を掻きながらボヤク。

しかし、すぐさま雰囲気鋭くしてキルアを睨む。

「さて、兄ちゃん。いくつか聞きてえことがあるんだが……」

ゴンの方はパクノダとマチが挟み込んでいた。

ゴンは下手に動かず、交互に2人を見て、隙を狙っていた。

マチはゴンを見て、

(……やっぱり薄っすらとラミナの気配を感じる)

そう感じていた。

(でも、こいつはそこまでムカつかない……。ちっ、ノブナガの方だったか)

マチは内心舌打ちするも、油断なくゴンを見据える。

「ボウヤ。鎖野郎って知ってる?」

「え？」

「鎖を使う念能力者のことよ。あんた、そいつに頼まれてアタシ達の事、つけてたんでしょ？」

「知らないよ。俺達は自分の意思で、お前達を追ってたんだ」

「ふうん。じゃあ、ラミナって名前に聞き覚えは？」

「え!? ラミナ!?!」

ゴンは唐突にラミナの名前を聞かれて、誤魔化すことが出来ずに正直に反応してしまう。

「……やっぱり」

「なんで急にラミナの事聞いたの？」

「勘」

「……そう」

パクノダは相変わらず変なところで発揮されるマチの勘に呆れるしかなかった。

「じゃ、色々聞かせてもらおうか。もう1人のことも、ね」

遂に恐ろしい姉の糸に、ゴンとキルア<sup>獲物</sup>が絡みついた。



## #41 アネ×タイ×コンヤクシヤ

マチがゴンにラミナとの関係を問いただしている頃。

キルアは生死を懸けた緊張感の中にいた。

「問1。何故俺達をつけた？」

「簡潔に述べよ」

ノブナガとフィックスが一切の油断なくキルアを睨みつけながら問いかける。

キルアは下手な嘘は逆に危険と考えて、正直に答える。

「マフィアがあんた達に莫大な懸賞金をかけたんだ。あんた達の居場所を教えただけで大金をくれるってサイトもいくつかある」

「問2。尾行は誰に習った？」

「……尾行って言うか、【絶】って技なんだ。俺、プロのハンターを指してるから」

「誰に習ったって聞いてんだよ」

「……プロハンターだよ」

「問3。鎖を使う念能力者を知ってるか？」

「？ 鎖？」

「具現化系か操作系の使い手だ」

「お前の師匠つてのが右手にジャラジャラ鎖を束ねてるんじゃないのか？ それともおまえ自身がそうか？」

「……俺の師匠は確かに具現化系だけど、俺が見たのは刀を具現化したところで鎖は知らない。それに教えてもらったのは基本の四五行と【堅】と【円】だけだ」

「刀、ねえ……。じゃあ、問4。ラミナって名前に心当たりは？」

「!？」

ラミナの名前にキルアも流石に一瞬動揺を露わにしまった。

フィックスも訝し気にノブナガを見る。

「あ？ なんてあいつの名前がここで出てくんだよ？」

「マチの勘だ。こいつらはラミナにも鎖野郎にも繋がってそうだって言ってるよ」

「へえ……。どうなんだ？ ガキ」

「……鎖野郎は知らないけど、ラミナは知ってる。さつき話した俺に念を覚えてくれたプロハンターがラミナだよ」

「お前に念を教えた……？ ちよつと待て、お前もしかして……」

「ゾルディックか？ あいつの婚約者つて言う……」

「なっ!？」

キルアは目を見開いて固まる。

その反応を見たノブナガとフィックスは、当たり前だと理解して、一気に吹き出す。

「ブハハハハ!! な、なんだよ、まだガキじゃねえか!! ハハハハ!!」

「あ、あいつ、シヨタコンだったのか！ ブハハハハハ!!」

「ち、ちげえよ!! 親父達が勝手に言ってるだけだ！ 俺もあいつも認めてねえ!!」

「親公認なんじゃねえかよ!! クハハハハハ!!」

「ちい!! (あいつ!! なんでこんな奴らに話してんだよ!!)」

「くくく!! いいぜ、坊っちゃん。ここで殺すのは止めといてやる」

「けど、もう1人の方は保証しねえ。どうする?」

ノブナガとフィックスは未だ笑いながら、キルアに問いかける。

キルアは苛立っていたが、ゴンのことを示唆されてすぐに冷静になり、大人しく両手を上げる。

「……大人しく従う。だから、向こうにもそう伝えてくれ」

「ほお……いい判断だ。いいぜ、連絡はしてやる」

ノブナガが携帯を取り出して、電話を掛ける。

キルアはどうかこの場での命は繋いだことにホッとするも、まだまだ油断できないと気を引き締める。

(どうにかして隙を作つて逃げ出さねえと……! ラミナと顔見知りみたいだし……そこから突破口が出来るか?)

キルアはそう考える。

しかし、キルアはまだ知らない。

もう一方に処刑人がいることを。

ノブナガとフィックスはキルアを連れて、ゴンを連れれたパクノダとマチと合流する。

その瞬間、キルアの全身と首に何かが巻き付いて、絞め付けられる。

「ぐう……!!」

「キルア!？」

「……あんたがゾルディックだね?」

「つつ!! (見えなかった……! ヤ、ヤバイ……!?)」

徐々に首や全身を絞め付ける力が強くなっていく。

呼吸も厳しくなってきた、抜け出そうにもビクともしない拘束にキ

ルアは死を予感した。

「オイオイ……。いきなりだな」

「おい。落ち着けよ、マチ。まだこいつから情報を全部聞き出せてねえ」

「片方だけ生き残ってればいい。別にこいつはいらない」

「待ちなさい。せめて、ラミナに一度連絡した方がいいと思うわよ?」

「ラミナからは『向こうから来れば、死んでも自己責任』って言質を取ってある。アタシらを旅団だと知って、つけてきたんだ。その覚悟くらい出来るよ。ゾルディックの御曹司なら尚更ね」

「……はあ。ホントにおめえはあいつのことになると沸点低いよな」

「うっさい」

「キルア! やめろ!」

「知らないね」

「マチ。ラミナからよ」

「あ?」

パクノダが携帯をマチに差し出す。パクノダはマチが暴走することを予想していたので、ラミナにメールをしていたのだ。

マチはラミナからということ、絞め付けるのを止めて携帯を受け取る。それでももう片方の手で糸を引き、力を緩めはしないが。

「もしもし」

『ストローツプ！ マチ姉！！ 今、その場で絞め殺すんはちよつと待って!?!』

「あんたが言ったことだよ。こいつからアタシの前に現れたら、死んでも自己責任だって」

『そうなんやけど!! 今はあかん!! 今、そこでそいつ殺したら、クロロの仕事に支障が出かねん!!』

「は? どういうこと?」

『クロロが十老頭暗殺を依頼しとるんもゾルディックやろ? そいつはキルアを溺愛しとるから、殺されたん知ったら依頼を拒否する可能性があるんや。しかも、十老頭もクモに備えて殺し屋を集め始めて、その中にゾルディック当主が来る可能性が高い。やから、ここでキルアを殺したら、マファイアンコミュニティとゾルディック家を同時に相手にせなあかん! そうなったら仕事どころちやうやろ? 鎖野郎もまだ見つかつたらんのに。流石にこれ以上敵を増やすんはあかんで。ゾルディックは陰獣とは格がちやう。ウボオーがおらん今は控えるべきや。せやろ?』

「……………」

マチは盛大に顔を顰めて、殺気を撒き散らす。

キルアとゴンは冷や汗全開で体が硬直し、ノブナガ達は顔を見合わせて肩を竦める。

『こ、この仕事終わったら、マチ姉が満足するまで一緒に仕事するから!! どんな仕事でも文句言わんし、他の仕事は無視するから!! やから、もうちよつと待って!! せ、せめてクロロの判断聞こ!? な? な?』

「……………ふん」

マチが鼻を鳴らすと、キルアを縛っていた糸が解ける。

キルアは崩れ落ちて、ゴンが慌てて支える。

「っはあ!! げほっ! げほっ!」

「キルア!!」

「……………今の話。嘘じゃないだろうね?」

『取引で嘘つかんって。元々この仕事終わったら、しばらくはマチ姉

達と一緒に行動するつもりやったんや』

「……なら、今は見逃す。これからアジトに戻るから、団長に聞いて。それとあんたも来な」

『了解』

「じゃあね」

マチは通話を切り、パクノダに携帯を返す。

そして、キルアを冷たく見下ろす。

「ラミナに感謝するんだね。もう少し生き延びれるよ」

「っ……！」

「で？ どうすんだ？」

「アジトに連れて行く。その間にラミナが団長にこいつらの処遇を聞いてるから」

「なるほどな。というわけだ。大人しく付いてきな。逃げ出せば、流石に俺達ももう止めねえぞ」

フィックスがゴンとキルアに言い放ち、ゴンとキルアも頷いて大人しく連行されていく。

その頃、電話を終えたラミナは精魂尽き果てて崩れ落ち、同情していたフランクリンに背負われて運ばれていたのだった。

それから1時間ほど経ち、ゴンとキルアは車で旅団のアジトまで連行された。

移動中一切目隠しされることもなく、堂々とアジトがある廃墟を見せる。

さらに車から降りても、周囲を囲むだけでアジトまでの道のりを一切隠す気はない。

（こんなところを見せてもいいのかよ……。生きて帰す気はないってことか……）

キルアはどうかして逃げ道はないかと考え続ける。

しかし、先ほどのフィックスとマチの動きから、隙を作れても逃げ切れるかは怪しかった。

(特にあの女の能力……。絞めつける能力ってことは、網とかでも張って俺達を捕まえることも簡単なはず。今の所は何もされてないみたいけど……)

やっと余裕が出来て【凝】を使ったが、特に何もされてなかった。ゴンにも特に何も仕掛けられていないし、周囲にも変なものは見えない。

「アジトへようこそ」

廃倉庫の扉を開けながら、パクノダが2人に言う。

そして、ゴンとキルアが中に踏み込んだ瞬間、顔を掴まれて持ち上げられ、アイアンクローを浴びせられる。

「イダダダダダダダっ!!」

「こんボケエ!! どんな思考回路作ったら、クモを尾行しようってなんねん!! いくら暗殺者一家の御曹司や言うたかて、念覚えたてのクソガキがどうにか出来るとでも思たんか!! ええ!? 念使いは見た目で実力を判断出来んって言うたやろが!! それにお前が無様に死んだら、うちがお前のクソ兄貴や親父から命狙われるて言わんかったか!? この脳みそには忠告を聞くつちゆう能力はないんか!!」

「ゴ、ゴメンナサイゴメンナサイ!!」

「ゴメンで済んだら、警察も殺し屋もいらん!!」

ラミナは振り返りながら放り投げる。

ゴンとキルアはうつ伏せに地面に落ちる。

「ぐえ!!」

「はあく……マチ姉」

「ん?」

ラミナは疲れ切った顔でマチに携帯を投げ渡す。

受け取ったマチは画面を見る。

『ゾルディックとの必要以上の敵対は流石に困る。出来れば止めてくれ』

と、クロロからのメールが届いていた。

マチは盛大に顔を顰めて、キルアを睨みつける。

「な、なんだよ……!?!」

「……ふん」

マチはラミナに携帯を勢いよく投げ返す。

ラミナは難なくキャッチして、携帯を仕舞う。

キルアとゴンはようやく周囲に目を向けて、眼を見開く。

そこにはクロロとウボオーギンを除く全員が揃っていたからだ。

もちろんヒソカも。

「あ」

「あん？ 誰か知ってんのか？」

「ヒソカや。言うたやろ？ ヒソカもこいつらも今年のハンター試験受けとんねん。そっちのどんがり坊主とうち、ヒソカはハンターの同期でもある」

「ほお……」

「で？ なんで旅団をつけどつたんや？」

「マフィアが懸けた懸賞金狙いらしいぜ。本当なら、な」

フィックスがニヤニヤしながら言う。

フェイタンやノブナガもラミナを見てニヤニヤしており、シャルナークは流石に余裕がないのか顔が険しい。

コルトピ、ボノレノフは顔が隠れているのでよく分からないが、どちらかと言えばフランクリン同様ラミナに同情的な視線を向けている。

シズクは我関せずな感じで読書をしており、ヒソカはいつも通りの嘘くさい笑みを浮かべている。

パクノダは不機嫌なマチを宥めている。

「懸賞金ん？ お前ら天空闘技場で十分金は儲けたやろ。なんでわざわざリスク犯して懸賞金狙うねん？」

「……ちよつとオークションで競り落としたいものがあってさ。天空闘技場の金じゃあ足りなかったんだよ」

キルアは顔を顰めながらも正直に事情を答える。

ゴンも頷いており、ラミナはその雰囲気から事実であることを悟る。

「……何を競り落としたいんか知らんけど、20億程度でクモを狙う

とかアホやる。お前、自分の親父を20億で狙うか？」

「……………無理」

最低その10倍は欲しい。それでようやくやるかどうか検討する。キルアはそう思った。

ラミナは右手で顔を覆って、深くため息を吐く。

「はあく………で？　パク姉。2人は鎖野郎のこと知つとるんか？」

「いいえ。2人とも、本当に知らないみたいよ」

「ホント？」

「ええ。彼らに鎖野郎の記憶はないわ」

「……おかしいね。まあ、パクが言うなら間違いないんだろうけど」

「ラミナの方は当たったのにな」

マチは納得しきれていないが、記憶を覗き込んだパクノダが言うならば文句言うことは出来ない。

（マチ姉の勘に引っかけたつちゆうことは……やっぱり鎖野郎はクラピカか？）

「じゃあ、もう帰してもいいんじゃないか？　殺すのはまずいんだろ？」

「待てよ。こいつらが鎖野郎を鎖野郎と知らねえだけかもしれないぜ？　黒幕を吐かせてからでもいいんじゃないよ。」

「黒幕がいても、そいつは鎖野郎じゃないよ。俺も調べたし、ラミナの調査でも鎖野郎は単独で行動してるはずだから」

「せやな」

シャルナークの言葉にラミナも頷く。

「ノストラードファミリーに所属しとるんか客員なんかは知らんけど、それでもマフィアと繋がりが持つとる奴が、こいつらに依頼を出すメリットはないでな。ウボオーの実力を知つとれば、こんな未熟モンに尾行させるんはお粗末すぎる」

「確かにな」

「俺達の標的は鎖野郎だけだ。それ以外はほっとけばいい」

フランクリンが頷き、フィックスも納得する。

そして、フェイタンが揶揄うようにゴン達に声を掛ける。



「だ、そうだ。よかたね。お家帰れるね」

「とつとと出て行きな。殺されたくなければね」

マチがキルアを睨みつけながら言い放つ。

キルアは流石にイラつとしたが、勝てないのは理解しているので必死に耐える。

それにノブナガが笑いながら、キルアの肩を叩く。

「くくくっ！ 災難だな、坊っちゃん。あいつは妹のことになるとしつけえぞ〜」

「……妹？」

「マチとラミナは姉妹同然に育ったんだよ。ま、俺達もあいつがガキの頃からの付き合いだがな」

「ラミナも旅団のメンバーなの？」

「ちやうで。今回はただの手伝いや。まあ、近いうちに入団するつもりではあるけど。こればかりは団長殿次第やな」

ラミナはゴンの問いかけに肩を竦めて答える。

ゴンはその答えに僅かに眉を顰める。

それはつまり、クラピカと敵対することに他ならない。

「けど、それって……無関係な人間を殺すことになるんでしょ？」

「お前なあ……んなもん、暗殺者に言うことちやうやろ」

ラミナは呆れるしか出来なかった。

「だってラミナは無関係な人間を殺せる人間じゃないでしょ？」

「……その無関係っちゆうんはどこまでを指すんや？」

「え？」

「やから、お前の言う無関係って誰やねん」

「それは……」

「今回のうちらで言うたら、誰が無関係になるんや？ まさかマフィアとか言わんやろうな？ マフィアはがつつり関係者やぞ。末端だろうが関係ないで。で、今の所、うちらはまだマフィア関係者以外殺しとらんぞ。まあ、多分やけど」

流石に全員が誰を殺したまで把握はしてないが、今の所無駄な殺しは誰もしてないはずだ。

一番可能性があるのは鎖野郎を探し回ったウボオーギンだが、調べようがないので無視する。

「それに無関係な人間を殺したとして、なんか困るんか？ 仕事に影響が出るなら生かすけど、影響ないなら生かしく理由もないやろ。なあ？」

「そうだな。だから、俺達はお前達を帰してやるって言ってるんだ」「殺してもつまらん奴を殺す理由はねえな。疲れるしよ」

ラミナの問いかけにシャルナークとフィックスが答え、他の連中も同意するように頷く。

正確に言えば、無関係か関係者かなど判断などしていない。

しかし『仕事の現場にいるなら、無関係って言えなくね？』と言う思いもある。

つまり、巻き込まれた奴が悪い。もしくは、運が悪かっただけ。

ラミナも暗殺の現場にいれば、無関係だったとしても殺す。それが仕事だからである。

ただ、殺す時はしつかりと一度目を合わせて、自分が殺したことを刻み込ませる癖が来ている。

そうすれば、恨みを自分に向けさせることが出来るからだ。

なので、ゴンの言葉は、ラミナや旅団にとってはやや的外れのように感じるのだ。

ゴンが言いたいのは恐らく盗賊行為についてなのだろうとラミナは推測する。

と言っても、そこはラミナには話す資格はないので何も言わないが。

「さて、そろそろ行こか。うちらも人探しがあるし」

「鎖野郎って奴？」

「そ」

「……なんでそいつを探してんの？ わざわざ人目につくところに出てまで」

キルアが意を決したように訊ねる。

「旅団のメンバーがそいつにやられた可能性があるからや。手配書に

写真があつてここにおらん奴がおるやろ？」

キルアとゴンはメンバーを見渡して、確かに手配書に載っていた者が1人いないことに気づく。

「鎖野郎はノストロードファミリーに所属しとるはずなんやけど、その団員と一緒に雲隠れしたみたいでな」

「復讐ってこと？」

「余計な邪魔者は早めに殺しときたいっちゆうことやな。まあ……何人かは、復讐メインやけどな」

ラミナはノブナガを見る。

ノブナガは不機嫌そうに「ふん！」と鼻を鳴らして、そっぽを向く。

「……あいつやうち、他の団員の何人かはクモ設立前からの付き合いでな。うちにとつては兄貴みたいなもんや。そいつはゴンと同じゴリゴリの強化系でなあ。パワーでは旅団一やった。そのノブナガとはよおコンビ組んどつたみたいやで」

ノブナガを顎で示しながら、ラミナは少し寂しそうに語る。

ノブナガも悔し気に眉間に皺を寄せて、右手を握り締めている。

その様子にゴンとキルアは旅団への印象を変える。

血も涙もない人間の集まりだと思っていた。

しかし、仲間内では強く結ばれていることが今のだけでも十分理解出来た。

だからこそ、

「だったら、なんで……」

「ん？」

「だったら、なんでその気持ちをはんの少しだけ、お前らが殺した人間達に……何で分けてやれなかつたんだ!!」

ゴンは感情が爆発したように旅団に向かって叫ぶ。

その瞬間、フェイタンがゴンの背後に回って、左腕を捻り上げて地面に押し倒す。

「ゴン……」

キルアが飛び掛かろうとした時、ラミナが素早く動き、キルアの首に右腕を回して捕まえる。

「ぐっ！」

「暴れんな。これ以上暴れば、ゴンも死ぬ」

「っ！」

ラミナはそう呟いて、すぐにキルアを放す。

キルアは素早く周囲を見渡し、マチや他の旅団達がキルアを鋭く睨みつけていることを確認した。

「っ……………」

キルアは動くに動けない状況に歯軋りする。

そして、ゴンは腕の痛みを食いしばって耐える。

「お前、調子に乗り過ぎね」

「フエイ、無駄や無駄」

「何が？」

「そいつは納得出来んことは腕を折られようが、頭に刃を突きつけられて殺されかけようが、弱音も言わんし降参もせん。頑固さはウボオーにも負けへんで」

「……………ほお」

フエイタンは逆にどこまで耐えられるか興味が湧いたようだ。

ラミナは失敗を悟ったが、すぐに切り替えて言葉を続ける。

「そいつは鎖野郎の事は知らんし、もううちらに勝てんことは理解しとるやろ。今は無駄なことせず、鎖野郎と次の仕事に集中しとけや。ウボオーがおらん以上、お前やフィックスが前に出る事も増えるんやで？」

「ふん。別にこれくらいなら疲れないね」

「うちが言うとするんは、鎖野郎の関係者を捕まえた時の拷問の方に力を割いた方がええんちゃうんかってことや。ゴンよりそっちの拷問の方が団長の命令に沿うんちゃうか？」

「……………確かにね。師匠に感謝するよ」

「っ……………」

フエイタンはゴンから離れて、ゴンは腕をさすりながら立ち上がる。

キルアはゴンに駆け寄る。

ラミナは呆れたようにゴンとキルアを見て、小さくため息を吐いて、マチ達を振り返る。

「うちはこいつらを追い出してくる。そっちは仕事に戻りい」

「いや、駄目だ」

「あ？」

「そいつは帰さねえ」

突如、ノブナガが口を開く。

「ボウズ、クモに入れよ」

「はあ？」

いきなりの言葉にラミナはもちろん、マチ達も顔を見合わせる。

「俺と組もうぜ」

(……ああ。ウボオーと似とるからか……)

その言葉でラミナはノブナガの心の内を悟る。

しかし、もちろんゴンは頷くはずもなく、

「いやだ。お前らの仲間になるくらいなら死んだ方がマシだ！」

「くくくくつ!! 嫌われたもんだ。なあ、ラミナ。こいつ、強化系なんだろ？」

「……まあ、そやな。けど、ウボオーには程遠いで？」

「分かってるさ、んなことあ。けど、団長に推薦するくらいならいいだろ？ それまではいつらここをここに置いてくぜ」

「……ええく……」

「俺が見張る。それに推薦する奴を殺しやしねえよ。それなら団長の指示にも、お前の要望にも沿うだろ？」

「……まあ、そうやけど……」

確かにどこかに閉じ込めておく方が、下手に仕事を引つ掻き回されなくていいと思う。

けど、ノブナガに任せるのは、それはそれで不安である。しかし、ラミナはクロロの仕事が控えているので、流石にノブナガに付き合うわけにもいかない。

「ラミナ。ノブナガがそうしたいんだから、ほっときなよ」

「そうだよ。ラミナだって、まだ仕事があるんだろ？」

マチとシャルナークが、ラミナに言い放つ。

「……はあ。……ホンマに殺すなや」

「わあってるよ」

「どうだか……。ゴン、キルア。ええか？ 大人しくしとけよ。下手に逃げようとすれば、殺されんでも腕か足が一本斬り飛ぶで。それだけの差がある。ええか？ 絶！ 対！ 余計なことすんなや!!」

「……」

「……分かってる」

gon は黙ったままノブナガを睨みつけており、キルアは顔を顰めながら渋々と頷く。

(逃げる気満々やな……)

ラミナは小さくため息を吐いて、右手で顔を覆う。

「ラミナ、行くよ」

「……へいへい」

マチのやや威圧が込められた声に、ラミナは大人しく従う。

こうして、不安を抱えたまま、ラミナは仕事に臨むことになるのだった。

## #42 ウラナイ×ノ×シ

ラミナ達は場所を変えて、今後の予定を話し合う。

「マフィアは動きを止めたな」

「多分、集めた殺し屋達を使つて待ち構えるつもりやな。それにセメタリービル周囲に検問が敷かれ始めとる。関係者以外はビルに近づくことも出来ん。近づくには、この参加証がいる」

ラミナは奪つた参加証を見せながら説明する。

「つまり、警備のマフィアと殺し屋だけで俺達を殺せると思つてるつてことか」

「舐められてるね」

「ということはノストロードファミリーや鎖野郎もセメタリービルにいる可能性が高いってことね？」

「ああ。マフィアンコミュニティーは意地でも競売は成功させたいはずや。つまり、旅団を相手にしながら競売も問題なく経営することでマフィアンコミュニティー、十老頭の力も示せるってわけやな」  
「なるほどな」

フランクリンが頷く。

その時、ラミナの携帯が鳴る。ラミナは確認すると、クロロからのメールだった。

内容を確認したラミナは立ち上がる。

「団長から？」

「おう。そろそろ動くそうや。一度戻る」

「アタシ達には？」

「何も書いてへん。まあ、でもセメタリービルにゆっくり向かいながら、鎖野郎探したらええんちゃうか？」

「ふうん……」

「なんやったら来るか？ ノブナガは動けんし、ペアおらんのやろ？」  
「……そうだね。暇だし」

「じゃあ残りのメンバーは引き続きペアで行動して、セメタリービルに向かおう」

「僕はどうしたらいいんだい？ ペア、いないんだけど♠」  
ヒソカがランプを弄りながら、シャルナークに訊ねる。  
シャルナークは眉間に皺を寄せて、メンバーを見渡し、マチで止まる。

マチはラミナの隣に立って盛大に顔を顰める。

「……ヒソカなら別に1人でいいでしょ。あいつ別に手配書載ってないし」

「酷いなあ♣」

「それもそうだな。ヒソカは1人でいいか」

「酷いなあ♦」

ヒソカは悲しそうに言うが、その顔は全く変わらず胡散臭い笑みを浮かべている。

ラミナはその様子にイラつとするも、

（……まあ、あいつからすれば仕事なんてどうでもええし、1人の方が都合ええか……）

と、自分を納得させる。

恐らく仕事の邪魔はしないはず。なので、今は我慢するラミナ。

その後、解散となり、マチとラミナは集合場所の隠れ家に顔を出す。

マチは仕事時の着替えも持ってきていた。

クロロはすでにスーツに着替えており、髪を下ろして額の十字を包帯で隠していた。

「マチも来たのか？ ノブナガはどうした？」

「ああ……ちよいとな」

「？」

クロロは首を傾げる。

ラミナは参加証を渡しながら、事情を説明する。

「……なるほど。確かに面白そうな奴だな」

「勘弁してえや」

「いらぬよ。あんな奴ら」

ラミナとマチは盛大に顔を顰める。

クロロはそれに苦笑し、ラミナもスーツに着替えるように言う。



「うちも?」

「ああ、お前には運転手と付き添い役をしてもらおう。髪もカツラを被ってくれ」

「なるほど……。フィックスとかの方がええんちゃうか?」

「そう言いながらも、ラミナは大人しく着替え始める。」

「ほんなら、マチ姉は愛人役でもするか?」

「ちよつと」

「残念だが、流石に地下競売に愛人を連れて行く奴はいない。それにマチの美顔はマフィアに知られてるからな」

「団長も揶揄うな」

「悪い悪い」

マチの睨みにクロロは両手を上げて苦笑して謝り、ラミナも苦笑しながらカツラを被ってサングラスをかける。

「で? もうビルに行くんか?」

「いや、その前に探す奴がいる」

「探す奴?」

「こいつだ」

クロロが写真が載せられた紙を見せる。

ラミナとマチが覗き込むと、そこに写されていたのは女の写真だった。

「……ノストラードファミリーの占い娘か?」

「そうだ」

「こいつに近づくんか?」

「なんでわざわざ?」

「恐らく、この娘の占いは念能力だ。本人が自覚してるかどうかは分からんがな」

「……盗むつもり?」

「ああ。もしかしたら鎖野郎も見つかるともかもしれないからな」

「ふうん」

マチはどうでもよさそうに頷き、ラミナはパソコンを立ち上げてノストラードファミリーの娘について調べる。

「……空港におるな」

「ああ。ボディガードが殺されたせいかな、組長と入れ替わる様に帰されるらしい」

「ほんなら近づくと意味ないんちゃうか？」

「駄目だったら、それはそれでいい。あくまで機会があれば能力が欲しいだけだ」

「ほんなら、さっさと空港行こか。マチ姉はどうする？」

「少しここでのんびりしたら、ビルに向かうよ」

「気をつけるよ」

「分かってる」

「ほなな」

「ああ」

クロロとラミナは用意した車に乗り込んで、空港まで飛ばす。

空港に到着した2人は、足早に空港内を動き回る。

すると、空港の売店で買い物をする目標の娘を見つける。

その周囲には傍仕えの女性2人と、その背後に荷物持ちをしている護衛と思われる男と小柄な人間がいた。

「やっぱ1人で動き回るわけはないわな」

「ああ。けど、随分な我儘娘のようだ。隙はありそうだ。もう少し様子を見よう」

「了解」

クロロとラミナは二手に分かれて、娘を見張る。

買い物に満足した様子の娘は、待合の椅子に座って傍仕えの女達と談笑する。

その様子にこれは難しいのではないかとラミナが思い始めた時、おもむろに娘が立ち上がってトイレへと駆け込んだ。

その時に見えた娘の顔が、妙に真剣なことに違和感を感じたラミナは集中してトイレの入り口に集中する。

少しすると、トイレから若い女性グループが出てきて、その内の1人の歩き方に既視感を感じたラミナ。

「……まさか……」

クロロに素早くメールを送り、ラミナは今出てきた女性グループを追いかける。

すると注視していた女が、突如そのグループから離れて歩き出す。少しすると髪を掴み、引つ張ると髪がズレて青い髪が露わになる。

それを見た瞬間、ラミナはダツシユで車に戻り、正面に車を回す。脱いだカツラをごみ箱に捨てた女は、そのまま意気揚々と空港を飛び出してタクシーに乗り込む。

ラミナはギリギリでそれを目視し、後から出てきたクロロの前に車を停める。

「どうする?..」

「つける」

「やんな」

娘が乗ったタクシーを追いかけてようと、車を走らせるラミナ。

タクシーはそのままセメタリービルへと向かう道を走っていく。

「検問で弾かれるやろな」

「検問の少し前で止めて様子を見る。すぐにUターンできる位置だな」

「へいへい。口説く準備しときや、色男」

「ふつ。そっちもカッコいいボディガードになりきってくれよ」

「お任せください、若様」

「うおっ、寒気が」

「喧しいですよ、若様」

くだらないやり取りをしながら、ラミナは検問前で路肩に止めて、タクシーの動向を見つめる。

娘を乗せたタクシーは、やはり門残払いを食らって引き返し始める。

ラミナはすぐに車を走らせて、そのタクシーの少し後ろにつく。少しするとタクシーが停まり、娘が降りる。

ラミナ達の車は一度その横を通り過ぎ、再びUターンする。

「行くで」

「ああ」

しよんぼりと歩道を歩いている娘の近くで、車を停めるラミナ。クロロは後部座席の窓を開けて、娘に向かって声を掛ける。

「おじよーきーんー！」

「ぶっつー！」

爽やか青年のような声で呼びかけたクロロに、思わずラミナが噴き出してしまう。

ゴン！と外からは見えない位置で座席を殴って叱責するクロロは、顔は爽やかな笑みを浮かべたまま、クロロに気づいた娘に言葉を続ける。

「もしかして、ノストラードさんの娘さんかな？　こんなところでどうしたのー？」

「あ、あの……セメタリービルに行きたいんですけど……」

娘は少し警戒しながらも、クロロの爽やかかべビーフェイスに騙されて事情を話し始める。

クロロは爽やかな笑みを浮かべて、

「それなら、俺もこれからセメタリービルに行くところなんだ！

乗って行くかい？」

「え!?　いいんですか!？」

「もつちろん！　こんなところお嬢さん1人で歩かせるのも危ないしさ」

「ありがとー!!」

(おいおい……。マフィアの娘がもう少し警戒せえや……)

ラミナは簡単に釣れた娘に呆れている間に、娘は嬉しそうに車に駆け寄って、後部座席に乗り込む。

乗り込んだことを確認したラミナはゆっくりと走り出し、検問所に向かう。

検問で止められると、クロロから参加証を受け取り、警察官に提示する。

機械で参加証を確認した警察官は、特に後部座席を確認することなく道を開ける。

「どうぞ、お通りください」

「どうも」

ラミナは参加証をクロロに返して、走り始める。

「良かった。検問通れなくて困ってたの。ホントにありがとう」

「どういたしまして」

「私、ネオン」

「俺はクロロ」

甘い雰囲気を作る2人。

それにラミナは笑い出さないように必死に耐えながら、無表情で運転を続ける。

検問を過ぎたら、交通量はほぼゼロなので10分もせずにセメタリービルに到着する。

しかし、その道中はマフィアの構成員達が武装して見回りしている姿をあちこちで視認できた。

(街中はマフィアの構成員だけか)

セメタリービルに到着し、車を降りた3人はビルの中に入る。

ビルの中も前回と違い、銃を装備した警備の構成員がどこに目を向けても待機している。

ラミナはサングラスの下で素早く周囲を観察し、警備状況と殺し屋の姿を探す。

(……目立つところはマフィアか。まあ、当然か)

「競売品の下見までも、まだ時間があるね。そっちで休んでようか」  
「うん」

クロロはカフェを指差して、ネオンを連れて行く。

「若様、私はしばらく離れますが……」

「ああ、分かった。ここの警備は嚴重だ。競売が終わるまでは自由にしてくれていい」

「よろしいので?」

「構わない。迎えが欲しくなったら、また連絡する」

「承知しました」

ラミナは頭を下げて、クロロ達から離れる。

(この間に邪魔な殺し屋を始末せえってことか……。会場は10階

やったな)

ラミナは一度トイレに入り、【朧霞】を発動する。姿を消した状態で、5階から15階を動き回ることにした。最初に15階に上がり、殺し屋を探す。

相手も念使いである可能性は高いので、【円】は使い辛い。

(流石に監視カメラも回つとるやろうな。ゾルディックはどないしよ?)

クロロが動く前にゾルディックと殺し合うのは流石にマズイ。

ゾルディックを相手にすれば、絶対に周囲にバレるからだ。

ラミナはゆっくりと歩きながら彷徨っていると、14階で仮面を被った男が周囲を警戒しながら歩いているのを見つける。

マフィアにしてはスーツでもないので、恐らく雇われた殺し屋なのだろうと推測する。

(……そこそこ経験はあるみたいやけど……二流、やな)

動きとオーラの淀みから、実力は低いと判断したラミナ。

そのまま音も立てず、殺気も漏らさずに、男の背後に歩み寄って、明かりが点いていない通路に入った瞬間に行動に移す。

男の両膝裏に蹴りを叩き込んで膝をつかせ、左腕を捻じり上げながら短刀を首に添える。

「ぐう……!?!」

「騒ぐな」

「っ!!」

「雇われた殺し屋やな?」

「あ……ぐ……!」

「あと何人おるんや?」

「っ……!!」

「ま、言わんよな。さいなら」

ラミナは素早く男の首を180度捻りながら、男の正面に回る。

さらにトドメに手刀を叩き込んで、確実に骨を砕く。男の首がグニヤリと横に90度以上曲がり、そのまま崩れ落ちる。

ラミナは再び姿を消して、死体をそのままに歩き出す。

13階に下りると、糸目の男が薄暗い廊下に立っていた。実力は先ほどの仮面の男と同レベル。

(まあ、クロロの策略で腕が立つ連中はほとんどヨークシンから手を引いとるはずやからな。ここにおるんはあんなレベルか、ゾルディックレベルくらいか)

クロロが十老頭暗殺をあちこちで依頼していたために、危険を察知したベテラン勢はヨークシンから離れている。

なので、恐らくいると思われるゾルディック以外は、そこまで強くはないはずだとラミナは推測する。

(……あそこで待ち構えとって【凝】も使わんレベルか)

仁王立ちしときながら【凝】を使わない。

それだけで殺し屋としても、念使いとしても二流以下である。

ラミナは糸目の男まで5mほどの距離まで歩き、直後一瞬で男に詰め寄って喉を掻っ切る。

そして、一度短刀を消し、すぐに新しく具現化して再び姿を消す。

「つつ……!?!」

男はラミナの姿を捉える事も出来ず、誰かに斬られたことしか把握できなかった。

そして、振り向いた時にはすでにラミナの姿はなく、糸目の男は何が起こったのか理解することなく、崩れ落ちて意識を闇へと永遠に落とすのだった。

ラミナは殺し屋探しを再開すると、携帯が震える。

取り出して確認すると、クロロからのメールだった。

『ハント終了。娘は狙うな。ゾルディックは俺が相手をするから、もし見つかった場合正直に話して構わない。それと、団員達もこれからここに呼ぶ。暴れさせながら来させる予定だ』

「おっおっ。またド派手やなあ」

ラミナは呆れながら呟き、一度クロロを探すことにした。

クロロの能力の制約上、占ってもらっているはずだからだ。

そして、なぜわざわざ派手に暴れさせることにしたのかを聞きたかったからだ。

クロロが好きそうな場所を探す事、20分。

大きな窓が開き、2つの死体が転がる大部屋にクロロはいた。

爆発音や銃声が響く地上を見下ろしながら、指揮者の真似事をしていた。

その後ろ姿が妙に寂しそうに見えたラミナは、5分ほど入り口で黙って見守っていた。

クロロがゆっくりと両腕を下ろしたところで、ようやく声を掛けた。

「ヘタクソな…指揮やなあ。全然音が揃ってなかったで？」

「ふふっ。何しろ初めてだからな。それでも…これでウボオーが穏やかに成仏するなら、な」

「……」

ラミナは出かかった疑問を必死に抑え込みながら、未だ戦場を見下ろすクロロの横に移動して、窓から足を投げ出す形で座る。

「……なんか占いで出たんか？」

「……ああ」

クロロは手帳を取り出して、ラミナに渡す。

ラミナは受け取って、開かれたページを見る。

「あの娘の占いは4〜5つの4行詩で出来ている。それが月の週ごとに起こることを予言してる。今日は9月3日の金曜日。一番最初の詩だな」

「ふうん……」

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬うだろう

喪服の楽団が奏でる旋律で

霜月は高く穏やかに運ばれていく

菊が葉もろとも涸れ落ちて

血塗られた緋の眼の地に臥す傍らで

それでも貴方の優位は揺るがない

きつと刃が舞い踊ってくれるから



幕間劇に興じよう

向かうなら東がいい

懐刀を持って行くといいだろう

それが待ち人への道標となるはずだ

それ以降も続いているが、特に印象に残ったのはこの3つだった。

「……霜月、か。霜月は11月。ちゅうことは……」

「ああ。ウボオーのことだ。俺の数字は0。団員は丁度暦の数と一致する」

「……遺されて……高く穏やかに運ばれていく……」

「……文字と表現から考えれば……そう言うことだろう」

「そうか……。そうかあ……」

ラミナは俯いて、左手で目元を覆う。

クロロは何も言わずに、黙って戦場を見下ろし続ける。

互いの頬に一筋の跡が走ろうとも、視ないふりをして。

ラミナは目元を拭って、いつも通りの雰囲気再び話しかける。

「2つ目の詩の最初……。菊が葉もろとも涸れ落ちてつちゆうんも団員の事やな?」

「ああ。菊月、葉月、水無月だと思う。そして『欠ける』が死を意味するならば、『落ちる』も死を意味すると考えられる。パク、シズク、シャルが来週死ぬことになる。そして、緋の眼が……俺達の相手だろうな」

「……ヒソカの協力者が旅団に恨みを持つとるんは言うたな?」

「ああ」

「名前はクラピカ。クルタ族の生き残りや」

「……なるほどな。……そいつはここに?」

「おるはずや。ムカつくことに情報はないけどな」

「そうか……。ラミナ」

「ん?」

クロロが突然A4サイズの紙とペンを差し出してきた。

「この紙に名前、生年月日、血液型を書いてくれ。それで占える」

「ふうん」

ラミナは言われるがままに書いていく。そして、クロロに渡す。

「紙を押さえててくれ」

「へいへい」

クロロは右手に【盗賊の極意】で具現化した本を持ってページを開く。

左手にペンを持ち、能力を発動する。

左手に不気味な念獣が現れ、物凄い勢いで紙に記入し始める。

一切の淀みなく書き進めていき、1分と経たずに書き終えた。

「いいぞ」

「どうも」

「ちなみにこれは自動書記で俺は何を書いたかは知らん」

「へえ」

ラミナは紙に目を通す。

気高き獅子が鎖で天へと連れ去られる

貴方は親愛なる蜘蛛の憤怒を背負い

鎖の友を追いかけて

偽りの数字を刃に血塗るだろう

暗くて僅かに明る日

家族と友の間で貴方は揺れ動く

箱舟に飛び乗るといいだろう

鎖を千切れるのは貴方しかいないのだから

縛られた逆十字の男の孤独を埋めよう

実在する幻が喜ばれるはずだ

蜘蛛の待ち人を探すといいだろう

それが獅子の誇りを受け継ぐ近道となる

「……」

「どうだ？」

ラミナは黙ったまま、クロロに紙を渡す。

目を通したクロロは目を細め、そして小さく微笑む。

「……どうやらお前は俺にとって幸運の女神になるらしいな」

「みたいやなあ。んで、鎖野郎はやっぱりクラピカ、クルタ族の奴やな」

『鎖の友』の部分か？」

「ああ。お前の占いと合わせるとそうなるわ。ウボオーを殺したんな」

「そうか……」

ラミナは立ち上がって手帳をクロロに返し、クロロは紙をラミナに返す。

「うちはどうする？」

「言つたる？ 好きにしてい。時間間に合うようにはしてほしいがな」

「了解や。詩が続いとるってことはゾルディックに襲われても大丈夫そうやな」

「そのようだな。まあ、油断は出来ないが」

「くくつ！ やろうな。ほな、頑張りや」

「お前もな」

ラミナは手を振りながら歩き出し、短刀を具現化して姿を消す。

クロロはそれを背中で見送って、ラミナの気配が完璧に消えてから歩き出す。

クラピカはセメタリービルの中を歩いていた。

クラピカはノストラードファミリーのボスの命令で、殺し屋チームに参加していた。

ネオンは客室で無事に保護されており、今は本来の目的の旅団を見つげるためにビルを搜索していた。

(おそらくネオンを連れてきたのは旅団の者だ。必ずこの中に旅団がいる)

クラピカは新たな標的を探すために歩き回る。

しかし、気になる事もある。

少し前に、ヒソカからあるメールが届いたのだ。

『ラミナはクモ側♠』

と、言う内容だった。

(このメールからすれば……ラミナは団員ではないが、クモを手助けする役割を担っている。それならば、あの戦いも納得は出来る……) わざと敵対して、マフィアにスパイとして入り込んでいたのだから。

しかし、今回の殺し屋チームには呼ばれていなかった。

それが少し不思議に思っていたが、ヒソカのメールで納得出来た。

(……厄介だな。団員でないなら、私の鎖が使えない)

クラピカの中指の鎖【束縛する中指の鎖】は旅団員にしか使えない。使えば、死んでしまう。

なので、もし戦闘になればクラピカは圧倒的に不利である。

ラミナとの戦闘になった場合どうやって乗り越えようかと考えていた時、携帯が鳴る。

「もしもし」

『あ、クラピカ!? 良かった! ようやく繋がった!!』

『ゴン!?』

ゴンからの電話だった。

『今、大丈夫!』

「いや、悪いが忙しい。こちらからかけ直そう」

『じゃ、1分だけ!! 用件だけ言うから!』

「……なんだ?」

『……俺とキルア、旅団に会ったんだ。っていうか、捕まったんだけど』

『!!?』

まさかの内容にクラピカは目を見開く。

「何を考えているんだ!! 相手がどんな連中か分かっているのか!!?」

『……分かってたつもりだけど、会って痛感した。今の俺達じゃ手も足も出ない。だから、クラピカの協力があるんだ』

『俺達も力になりたい』

キルアとゴンの言葉に、クラピカは頭が冷えていく。

「ふぎけるな。お前達の自殺行為に手を貸すつもりはない」

『……奴らのアジト、知りたくない?』

「……情報提供者はちゃんという」

『奴らの能力についても分かったことがある』

「くどい!! いいから、旅団から手を引くんだ!!」

『旅団の協力者にラミナがいてもか?』

「っ……!!」

『奴らの1人を倒した鎖野郎ってクラピカだろ? あいつら、血眼で

探してるよ。ラミナもね。……旅団のメンバーとは設立前からの付

き合いで、クラピカが倒した奴は……ラミナにとって兄貴みたいな存

在だったってよ』

「っ!!」

キルアの言葉にクラピカは歯を食いしばる。

『このままいけば、ラミナもクラピカに復讐するぜ。お前はそれを受

け入れるのかよ? そこでラミナを殺せば、お前は旅団と同じになる

ぜ』

「……」

『……お前が俺達の事、対等とも仲間とも思えないなら、どんな手を

使ってでも協力してもらおうぜ!!』

『……クラピカ』

再びゴンに交代する。

『ラミナ……。死んだ団員の事を話したとき、凄く寂しそうだったん

だ。あんなラミナ、初めて見た……。他の団員も凄く悲しんでる人も

いて、けどラミナとは本当に家族みたいな雰囲気だった。それを見た

時、無性に悲しくて……。許せなくて……。このままじゃクラピカとラミ

ナ、どっちも辛い目にしか遭わないと思うんだ。俺達も旅団を止めた

いんだ。クラピカとラミナに殺し合って欲しくないから……』

「……こちらから、かけ直す」

クラピカはそう言って通話を切る。

(旅団とラミナが……。家族のような存在……。このままいけば……。私

はラミナの家族を奪う、ということか)

しかし、だからと言って自分の復讐を止めるのか？

それでは、仲間の無念はどうなる？

元々全てを犠牲にする覚悟ではなかったのか？

そのためにここまで来たのに。

しかし、全てをやり遂げた時、自分には……何が残るのだろうか。

このまま進めば復讐と仲間の無念は晴らせるが、新たな恨みと仲間を失うだろう。

しかし、ここで止まれば仲間を得ることは出来ても、何を目的に生きればいいのかだろう？

もうすでに、ラミナの仇になってしまったのに。

(……私はもう、止まらない……)

クラピカは誓う様に右手に鎖を具現化する。

そして、再び旅団を探して、ビルの中を歩き始めるのだった。

セメタリービルの周囲では銃声と爆発、悲鳴が絶えず響き渡っていた。

「絶景♥ 絶景♥」

ヒソカはビルの上で団員が暴れているのを楽しそうに見つめていた。

「うくん……どこで団長と2人つきりになれるかなあ？ ゴン達まで関わってくるとなると、流石に流れが読みにくいねえ♥」

「暇そうやなあ。ヒソカ」

「おや♥ ラミナじゃないか♣」

ヒソカの背後に、ラミナが現れた。

ヒソカはラミナから放たれる殺気を感じ取って、ヒソカは笑みを浮かべるも警戒態勢を取る。

「随分と物騒だけど◆ どうしたのかな？」

「別に？ 仕事しに来ただけやで？」

「……仕事？」

「ああ。なんや裏でコソコソと仲間を売ろうとしとる不屈きモンを見つけてしもてなあ」

「それはそれは♠ 大変だねえ♥」

「鎖野郎と遊園地で会うとったよなあ？ ヒソカ」  
「……」

「前に言うたはずやぞ、ヒソカ。むやみやたらに引つ掻き回すだけやったら……お前の数字を切り取るってなあ!!!」

【練】を発動して、右手にブロードソード、左手にファルクスを具現化するラミナ。

ヒソカもトランプを両手に広げて、オーラを強める。

「お前の数字は偽モンらしいなあ……!! 覚悟せえや!! お前はここで殺す!!!」

「ああ……♥ 丁度退屈してたんだ◆ 君が相手してくれるなんて嬉しいよ、ラミナ♠」

ラミナとヒソカの死闘が始まる。

## #43 ラミナ×タイ×ヒソカ

鋭い殺気を放つラミナと、凶々しい殺気を放つヒソカ。

「クロロの依頼……でいいのかな？」

「そうやで」

「残念♠ 出来ればクロロに来てほしかったんだけど♣」

「クロロは今ゾルディックと遊んどるさかい。諦めえや」

そう言いながらラミナは飛び出して、ヒソカがトランプを乱れ投げる。

「一瞬の鎌鼬」で全てのトランプを斬り落とし、ヒソカに詰め寄ろうとするが、オーラが飛んで来たのを見逃さなかった。左に跳んで、「伸縮自在の愛」を躲す。

そこを今度はヒソカが飛び込んできて、殴りかかる。

「飛び交え」アードレント・ホーネット【執着する雀蜂】！」

ヒソカの接近を確認したラミナは、キーワードを唱える。

直後、ラミナの後方から20本近くのスローイングナイフが飛んできて、ヒソカに襲い掛かる。

「!!」

ヒソカは背後に伸ばしておいた【伸縮自在の愛】を発動して、勢いよく後ろに跳ぶ。

スローイングナイフはもちろんヒソカを追い迫る。

(近づこうにも近づけないな……♠)

ヒソカは作戦を考えていると、ラミナのオーラが膨れ上がり【円】を発動し、ヒソカを【円】の内側へと閉じ込める。

(ここぞ【円】……?)

ヒソカは訝しむが、ラミナが離れているにも関わらずファルクスを振り被る。

それを見た瞬間、死の予感に襲われてヒソカは全力で【堅】を発動して、首を庇う。

「クレイジー・ローズ狂い咲く紅薔薇」

ラミナは能力を発動しながら、ファルクスを振るう。



直後、ヒソカの左肩と右前腕、左外大腿が斬り裂かれて血が流れる。  
「ちっ！」

(思ったより傷も浅いし、斬られた場所も微妙なところだな……  
相手のオーラで威力が減退し、斬る場所はランダム……かな?) ◆

ラミナの能力を推測しながら、襲い掛かってきたスローイングナイフの群れを素早く手刀で叩き落とす。

ラミナはファルクスとブロードソードを消して、レイピアとククリ刀を具現化する。

「!!」

「ビィアス・ビーク啄木鳥の啄ばみ」

ラミナは連続で突きを繰り出す。

ヒソカはもちろん剣筋から体を外そうとするが、左上腕の皮膚が抉れ、右肩に小さな穴が空く。

そして、さらにラミナはククリ刀を投擲する。

「ジャアマ・デアギラ太陽より飛び立つ鷲」

高速回転するククリ刀が炎を纏ってヒソカに襲い掛かる。

「へえ……♥」

ヒソカは跳び上がった躰し、ククリ刀にオーラを飛ばしてみる。しかし、炎に弾かれてしまう。

ならばと、スローイングナイフに向かって左五指からオーラを伸ばす。

今度は問題なく「伸縮自在の愛」を貼り付けることに成功し、左腕をすぐさま振り回す。周りのスローイングナイフとククリ刀に叩きつける。

続けて、ラミナに向けて振ろうとしたが、

「!? いらない……?」

ラミナの姿がなく、周囲を見回しても見当たらないし、気配もしない。

しかし、直後背中に怖気が走り、ヒソカは反射的に背後に向かって右肘を繰り出す。

【朧霞】で姿を消して背後から突き刺そうとしていたラミナは、突然

のヒソカの反撃に目を見開く。

顔面に飛んでくる肘を、短刀を握る左腕を咄嗟に上げて受け止める。

ラミナは歯を食いしばりながら、攻撃を受け止めた衝撃をいなすように上半身を仰け反らし、無理矢理左脚を振り上げてヒソカの背中に蹴りを叩き込む。

ヒソカは前につんのめりながら、後ろ右回し蹴りを放ってラミナの右脇腹に叩き込む。

「づう……！」

ヒソカはさらに左腕を振って、スローイングナイフをラミナに叩きつけようとするが、ラミナはスローイングナイフを消して攻撃を無効化する。

ラミナとヒソカは互いに距離を取って、向かい合う。

「これは想像以上に楽しめそうだね……♡」

「ふん……」

ヒソカは仁王立ちして飄々と笑みを浮かべている。

ラミナは僅かに眉間に皺を寄せて、左腕と右脇腹の状態を確かめる。

（アバラー，2本イっとるな……。やっぱ身体能力とオーラの強さは向こうが上やな）

遠距離系能力ではヒソカの動きについていけない。

ククリ刀ならば【伸縮自在の愛】の影響は受けない様だが、スローイングナイフのような高度な追尾能力はないし、何度も使えば見切られてしまうだろう。

オーラの練度はヒソカが上のようで【狂い咲く紅薔薇】は効果が薄く、【啄木鳥の啄ばみ】も簡単に見切られてしまった。

（本能的に殺気に気づいて、攻撃してくるとは……。厄介やなあ……。近接戦を仕掛けるのも、少し厳しい。しかも、近づけば近づくほど【伸縮自在の愛】から逃れにくくなる。

まだ【月の眼】は使いたくない。ラミナはサングラスの位置を直して、短刀を消す。

「面白い能力だね♣ 団長達が君を気にかけるのも納得だよ♥」  
「とつとと死んでほしいねんけどなあ。何個も使うと疲れんねん」  
「そう言わずにもつと遊びたいなあ♠」

左手に圏を具現化して体を強化するラミナ。

〔伸縮自在の愛〕は基本両手から飛んでくる。あいつのことやから両足からも飛ばせると考えるべきやな。ヒソカの間を突く攻撃やないと、いつオーラが付けられるか分からん……。ホンマ、嫌らしい能力やこつて)

【凝】をサボるわけにはいかないのも厄介だ。

【不屈の要塞】や【脆く儂い夢物語】を使えば、少しは有利になるだろうが武器を狙われればストックが厳しくなってくる可能性もある。

恐らく【月の眼】はどこかで使わねばならない。なので、無駄撃ちは避けたい。

「はあく。ホンマ……」

ラミナはため息を吐いて、一瞬体から力を抜いた直後、音もなくヒソカの目の前に現れる。

「ムカつくわ」

ボヤきながら右アツパーを繰り出す。

もちろんヒソカは驚くことなく、腕で防ごうとする。

しかし、腕に当たる直前で右アツパーは止まり、左手に握っている圏をフックのように脇腹を狙って放つ。

ヒソカはそれにも反応して右肘を叩きつけようとするが、圏も直前で止まる。

ラミナは右膝の力を抜いて屈みながら、左フックを放つ勢いを利用して左足払いをヒソカの左脚に叩き込む。

しかし、ヒソカの足は僅かにズレるだけで、地面から離れることはなかった。

「っ!? バンジー!?!」

「正解♥」

ヒソカの右脚が振り抜かれ、ラミナは両腕を交えてガードする。

ヒソカは左足を粘着させていたことで踏ん張りを強くして、威力を

上げていた。

「ぐう?」

ラミナは横に吹き飛ばされる。

「逃がさないよ♠」

「っ!!」

ラミナの眼には、ヒソカの右脚と自身の右腕と繋がっているオーラが見えた。

そのオーラが勢いよく引っ張られていくのを確認した瞬間、ラミナは左手の圈を消すと同時に右手にハルバードを具現化する。

『『起動せよ』!』

キーワードを唱えて、ラミナは「不屈の要塞」を発動し、全身に鎧を纏う。

その直後、ラミナの体に付いていたヒソカのオーラが弾かれるように千切れる。

「!!」

「おおお!!」

ヒソカは目を見開き、ラミナは勢いよくヒソカに詰め寄り、左拳をヒソカの鳩尾に突き刺した。

ヒソカはくの字に体を曲げ、ラミナは更に左脚をヒソカの右脇腹に叩き込む。ヒソカは「伸縮自在の愛」をラミナの体に付着しようとしたが、また弾かれてしまう。

(オーラを弾く!!)

鎧の特性に気づいた直後、ハルバードの石突がヒソカの左頬に叩き込まれる。

「っっ!!」

ヒソカは勢いに逆らわずに体を捻って、両手を地面について逆立ちしながら跳び上がり、ラミナから離れる。

しかし、その一瞬の隙にラミナの姿が再び消えていた。

体を起こして体勢を整えた直後、再び背後に怖気を感じた。

(発動!!)

逆立ちした際に、保険で右足から地面に貼り付けておいた「伸縮自

在の愛」を発動して、勢いよく下に下りようとする。

しかし、直後背中に鋭い痛みが走る。

「っ!!」

下りながら背後に目を向けると、左手に短刀を握り、右手でブロードソードを振り下ろしているラミナの姿があった。

ブロードソードの刃には、4が刻まれたクモの絵が描かれた布が血で張り付いていた。

「ちっ」

ラミナは感触でまた傷が浅いことを理解し、舌打ちをする。

地面に下りたヒソカはそのまま勢いよく前に駆け出し、ビルの屋上から飛び出す。

ラミナは地面に下りて、ヒソカを追いかけながらブロードソードに付いた布を見る。

描かれているのは旅団の証である数字が刻まれたクモの刺青で、それは消えて血で汚れた白い布に変わっていった。

それを見た瞬間、ラミナは占いの言葉を思い出した。

『偽りの数字を刃に血塗る』……! まさかヒソカを殺すつちゆうことやなくて……!?!』

ラミナは歯軋りをして、ブロードソードを消しながらスピードを上げる。

ヒソカを追って、【朧霞】を発動しながらビルから飛び出す。

すると、すぐ下にヒソカがビルの壁に両足だけでしっかりと仁王立ちしていた。

さらにヒソカからオーラが膨れ上がっており、そこにラミナは飛び込んでしまった。

【伸縮自在の愛】で壁に張り付いて【円】……!?!』

「くくっ ♠ 見つけた♥」

「くそがっ!!」

ラミナは【朧霞】を解除して、短刀を消す。

ヒソカは素早く左手からオーラを伸ばして、ラミナの胸に貼り付ける。そして勢いよく左手を引き、壁からジャンプしながら右ストレー

トを振り下ろす。

ラミナは右腕に【流】でオーラを集中して、ヒソカの右ストリートを防ぐ。吹き飛んで右腕の骨が軋むのを感じながら、左手にハルバードを具現化する。

『起動せよ！』

【不屈の要塞】を発動して、【伸縮自在の愛】を弾く。

すぐに鎧を解除して、ベンズナイフを右手に具現化して地面に向かって投げる。指を鳴らして【妖精の悪戯】で入れ替わり、地面に下り立つ。

ベンズナイフを消して、今度はウルミを右手に具現化する。

（具現化するのは必ず両手◆ 武器を振るうか、キーワードを唱える事で発動する♣ 武器によって能力は全く違うみたいだけど、逆に言えば一度に使える武器は多くて3つくらいが限度か◆ それでも十分厄介だけど♥）

ヒソカはラミナの能力を纏めていく。

しかし、ラミナがウルミを鞭のようにうねらせ始めたのを見て、思考を中断する。

『墓穴を貪る蛇』  
グレイブ・ヴァイパー

ラミナが振り抜くと、剣先が地面に潜り込む。

そして、地面を抉りながら進み、ビルの壁すらもうねりながら登っていく。

『!!』

ヒソカは両足のオーラをガムのままにして、壁を横に走る。

ウルミも猛スピードで壁を抉りながら、ヒソカを追いかける。

ラミナはハルバードを消して、ククリ刀を具現化して投擲する。ククリ刀は炎の円盤となり、ヒソカに襲い掛かる。

ヒソカは能力を解除して、ビルの壁からジャンプする。

そして、ラミナに向かってトランプを10枚ほど乱れ投げる。

ラミナはウルミを消して、右手にブロードソードを具現化して高速で剣を振ってトランプを全て斬り落とす。

戻ってきたククリ刀をキャッチしたラミナは、再びヒソカを狙って

投擲する。

(これはキャッチ出来ない！)

ヒソカは【伸縮自在の愛】を飛ばして、すぐ近くの樹が生い茂る公園の樹に貼り付けて、速度マックスで縮ませて公園に飛び込んでいく。

「ちっ！」

ラミナは舌打ちをして、ブロードソードとキャッチしたククリ刀を消しながら公園に入る。

(しもたな。ここまで樹が並ぶと【伸縮自在の愛】使いたい放題や。もう【朧霞】やと危険やな)

【円】を使えば居場所がわかる事もバレており、【伸縮自在の愛】を張り巡らせれば【朧霞】は簡単に移動を制限できることにも気づいているだろう。

ラミナはソードブレイカーと圏を具現化する。

(……気配が消えた。【不屈の要塞】は【凝】も使えんようになるから、この森では逆に使い辛い。それにヒソカが見えん状態やと【月の眼】も使えん。なら……！)

ラミナは【円】を発動する。

7 mほど先の樹の上にヒソカが隠れているのを把握したラミナは、【凝】で畏を警戒しながら一気に詰め寄る。

ところどころ木々の間に【伸縮自在の愛】が張られており、ラミナは無理にソードブレイカーで壊さずに躲しながら進む。

そして、ヒソカがいる場所に迫ると、ヒソカが勢いよく飛び出した。追いかけてようとしたラミナだが、

(っ!! 速い!?)

木々の間をヒソカが猛スピードで飛び交う。

(あの【伸縮自在の愛】は畏だけやなくて、高速移動のためか!! やつたら……!)

ラミナは武器を消して、ハルバードを具現化する。

【不屈の要塞】を発動した直後、ハルバードを振り回して周囲の木々を切り倒していく。

全方位から数十枚のトランプが再び襲い掛かってきた。

ラミナはハルバードを振り回し続けて、トランプと木々を切り飛ばしながら、公園の森を切り拓いていく。

その時、ハルバードが物凄いパワーで引っ張られて、ラミナの両手から飛び出していく。

「!!」

「その鎧には【伸縮自在の愛】は効かないけど、その武器には効くのはその鎧に殴られた時に試してたんだよね◆ それと殴られた感触から、その鎧を着てる時は君も【練】や【凝】を使えないみたいだね◆」

「ちい!!」

「だ・か・ら♥」

直後、ラミナが薙ぎ倒した木々が弾かれたように跳び跳ね、ラミナを挟み込むように勢いよく飛んで来た。

「!?」

「別に殴らなくても、純粋な物量で押し潰せばいい◆」

ラミナには見えていないが、ラミナに迫る木々を繋ぐようにオーラが貼られており、しかも用意周到にラミナの前後2か所に【伸縮自在の愛】を貼っていた。どちらか一方が消されても、もう一方で挟み込めるように。

ラミナは【不屈の要塞】を解除して、【堅】を発動しながら勢いよく跳び上がる。

ラミナは視線を巡らせてヒソカを探すが見当たらず、右手に圏を具現化して【意地を貫く拳】を発動して【堅】を強化する。

その直後、後方から風を切る音が耳に届く。

顔で振り向くと、顔目掛けてトランプが数枚飛び迫ってきていた。

「こんっの!!」

ラミナは全力で体を捻りながら仰け反って、圏を握る右手でトランプを叩き落とす。

しかし、1枚だけ突如軌道を変えて、ラミナの顔に向かって追撃してきた。

(鎧を解いたと同時に頭にガムを貼り付けた!?)



「ぐっ……!!」

ラミナは顔を背ける。

トランプはラミナの右頬を掠り、少量の血を噴かせながら通り過ぎる。そして、そのまま体を捻り、左手刀でトランプを叩き落とす。

しかし、空中でほぼ無防備なラミナを、ヒソカが見逃すはずはない。

「パンジーガム伸縮自在の愛」 ♥ 縮め……!」

ヒソカが両手からゴムを伸ばし、パチンコ玉のように両足をラミナに向けて折り畳んだ姿勢で猛スピードで飛び出してきた。

そして、両足にオーラを集中させて、未だ体勢が乱れているラミナに向かって勢いよく両足を揃えて突き出す。

「っ!!」

ヒソカの姿を視界の端に捉えたラミナは、ヒソカの両脚が左脇腹に直撃する直前に、左腕を差し込んで「流」を発動してオーラを集中する。

ヒソカの両足を受け止めた左腕から鈍い音と痛みが走り、ラミナは真横に吹き飛ばされる。

(飛び出した勢いと両脚の脚力は、流石に受け止めきれなかったか…… ♣ それでも左腕とアバラ数本で耐えきるとは ◆? ちよつとシヨックかな ♠)

ほぼ完璧と思った一撃だったのに、最低限のダメージで済まされた。

おそらく勢いに逆らわなかったこともダメージが軽減した理由であろうが、それでも少し意外だった。

(あの武器の能力かな? ハンター試験や天空闘技場で見た時よりもオーラが強まった気がしたし…… ◆)

そんな事を考えていると、ラミナが吹き飛びながら大鎌を具現化して、ヒソカに投擲してきた。

ヒソカは「伸縮自在の愛」で方向転換して躲し、大鎌は地面に突き刺さって止まる。

ラミナはそのまま森の中に飛び込んでいき、ヒソカは一気に勝負を決めようと追いかける。

ラミナは圈を消して、体勢を立て直す。

そして、両腕を無造作に振るい、勢いよく胸の前で交差させる。

その動作にヒソカが訝しむと、

ラミナが空中で急にスピードを落として止まった。

「!?」

ヒソカは目を見開き、ラミナは右足だけで地面に着地したと思うと、そのまま片足で勢いよく踏み出してヒソカに迫る。

ヒソカは両手にトランプを1枚ずつ取り出して両腕を振り、ラミナに斬りかかる。

ラミナは紙一重でヒソカの斬撃を躲しながら連続で殴りかかり、ヒソカも紙一重で躲す。

(? 雰囲気が変わった……?)

ラミナの気配が妙に変わったことを感じ取って、ヒソカは距離を取ろうと後ろに跳び下がった瞬間、

ラミナの口が三日月に歪む。

「かかったね」

ラミナが持ち上げた両手を、力強く握り締めながら交える。

直後、ヒソカの手足が引っ張られて、大の字で空中に固定される。

ヒソカは【凝】を使い、目にした光景に目を見開く。

自分の四肢に細いオーラの糸が巻き付いていたのだ。

その糸は周囲の木々を介して、ラミナの両手に繋がっていた。

ラミナの両手にはグローブ型の鉤爪が嵌められており、両手指の鉤爪からオーラの糸が伸びていた。

「これは……マチの……!!」

「あんたさ、アタシはあれだけ能力作れるんだよ？ ウボオーの能力を真似したんだよ？ アタシがマチ姉の能力を真似しないと思つてたのか？」

「っ!!」

「【親愛なる姉様との絆】。捕まえた獲物は、逃がさない。ま……首に巻けなかったのは悔しいけどね」

この世で一番愛する姉の能力。

ラミナが最も信頼する武器にして、ここぞという時にのみ使う最愛の切り札である。マチほど精密に念糸を操れないし、切れ味が高いわけでもないが、それでもこの武器が一番だと思っている。

思い入れの強さ故に『能力使用時はマチの口調になり』『他の武器は握れない』。

それ故に、この能力を使う時は、

『オオオオ……!』

ヒソカの背後から不気味な声が聞こえてきた。

顔だけで振り返ると、ヒソカの背後に大鎌を抱えたボロボロの黒衣を纏った骸骨【暗闇で踊る骸骨】が迫って来ていた。

「……死神のつもりかい？」

「そんな大層なもんじゃないよ。アタシの代わりに、捕えた獲物の首を斬り落として処理してくれる働き者さ。便利だろ？ 血で汚れないし、疲れないしさ」

ラミナはサングラスの下で両眼を金色に輝かして、妖艶な笑みを浮かべながらヒソカを見据える。

「ふうん…… ♣ あの大鎌を味わってみてもいいけど……それよりも彼は君を守ってくれるのかな？」

ヒソカは右人差し指を振って、ラミナに【伸縮自在の愛】を伸ばして貼り付ける。

続けて、素早く再度人差し指を振り、横にある樹の幹に貼り付ける。そして、笑みを浮かべながら、

「【伸縮自在の愛】♥ 縮め♥」

能力を発動する……が、ラミナは吹き飛ばぶどころか、その場から動くことなく立ち続けていた。

「……？」

「もうアタシにあんたの能力は効かない。だから……さっさと死にな」

『オオオオ!!』

「っ!!」

骸骨が大鎌を振り被り、ヒソカに斬りかかる。

ヒソカは左人差し指からオーラを飛ばして、大鎌の刃に貼り付ける。

ラミナはすかさず念糸を引き絞るも、ヒソカは手首と指だけを動かしてオーラの反対側を自分の右前腕に貼り付ける。

(縮め!!)

【伸縮自在の愛】を発動して、大鎌の刃を右腕へと向けさせる。

そして、ヒソカの右腕が斬り飛ばされた。

「っ!! (【伸縮自在の愛】!!)」

ヒソカは痛みなど気にせず自由になった右腕を振り、左側の念糸を支えている樹の根元にオーラを飛ばす。

そして、右腕を引き上げながら【伸縮自在の愛】を縮ませて、樹を根元から引き抜いた。

「なっ!?!」

「油断大敵♠」

念糸が緩んだ瞬間、ヒソカは左手でトランプを投擲してラミナと右側の樹を狙う。

ラミナは躲しながら念糸を引き絞ろうとするが、突如ヒソカがしゃがみ込み、その真上を樹が飛び越えてラミナに迫ってきた。

「!!」

「ここに来る前に【伸縮自在の愛】をセットしておいたのさ♥」

「ちい!!」

ラミナは横に跳んで躲す。

その隙にヒソカは【暗闇で踊る骸骨】を左腕だけで掴んで一本背負いを放ち、地面に叩きつける。そして、大鎌を掴んで掬い上げるように振り、念糸を纏めて斬り飛ばそうとする。

しかし、念糸は切れなかった。

(強度も似てるのか！)

ヒソカはすぐさま大鎌を捨て、すぐ横に倒れている樹に【伸縮自在の愛】を伸ばして、縮めながら全力で片腕だけで振り上げて、またラミナに投げ飛ばす。

ラミナは舌打ちをしながら樹を躲そうとするが、樹の陰からヒソカが飛び込んできて、鋭い蹴りをラミナの鳩尾に突き刺した。

「ごお……!! つつうー!」

一瞬呼吸が止まるが、ラミナは右手を振って新たな念糸をヒソカの脚に巻きつけようとした。

しかし、ヒソカは再び【伸縮自在の愛】で勢いよく後ろに下がって躲した。

「げほっ! ごほっ! (つとに厄介な!!)」

その時、念糸に感じていた重みが消えた。

「!? しまった!」

ヒソカに念糸を切られたことを悟り、目を見開くラミナ。

ヒソカはラミナが痛みにも引いて力が緩んだ瞬間に、【硬】で強化したトランプで切ったのだ。

ラミナは見渡すが、すでにヒソカの姿は見当たらなかった。

「くそっ!!」

「くくくっ…… ♣ 残念だけど、ここは退かせてもらうよ ♣ 今の僕の狙いはあくまで団長だからね ♠」

ヒソカの声だけが響いてきた。

「ぎげんなっ!! テメエはここで殺す!!」

「怖い怖い♥ じゃあね ♠」

「待ちやがれ!!」

ラミナは【円】を発動するが、一瞬感じ取ったヒソカの気配はすぐにラミナの【円】の範囲から消えてしまう。

すでに追いかけられる距離ではないと悟ったラミナは、歯軋りをし  
て思いつきり叫ぶ。

「くつつそがああああ!!」

荒く息を吐いて、必死に怒りを抑え込む。

ラミナは武器を消して、【月の眼】を解除する。

「あんのつくソ奇術師が……っ！　っ！　ごほっ！　ゲホゲホツ!!  
ぐっ……!」

ラミナは悪態をついた直後、咳き込んで強烈な虚脱感に襲われて片  
膝をつく。

（あんだだけ武器を費やして……この体たらく……!　【敬愛する兄の  
剛腕】は使わんで正解やったか……）

【敬愛する兄の剛腕】と【敬愛する兄の咆哮】は威力が高いが隙が大  
きく、オーラの消費量が激し過ぎる。なので、ヒソカとの相性は悪い  
と考えて、使用は控えていた。

（……左腕は完全に折れとるな。アバラも5、6本……。これだけで  
済んだ……と思うべきか……）

ため息を吐きながら、頬を流れる血を拭う。

（向こうは右腕1本と右肩に風穴……くらいか。それでどれだけ動き  
を封じられるか……）

それでもあれだけの動きを見せたのだから、止血さえ終えればすぐ  
にクロロを狙ってくる可能性がある。

やはりここで仕留め切れなかったことが悔やまれる。

ラミナは歯を食いしばって、ひとまずこの場を離れることにする。  
短刀で姿を消して、公園から離れて路地裏に入り込む。

そして、携帯を取り出してクロロに電話を掛ける。

『……ラミナか。今どこだ?』

「ビルの近く。そっちはどうや?」

『何とか無事だ。既に競売を始めていて、コルトピがコピーしたモノ  
を売りさばいている。俺やマチ達手配書に載ってるメンバーの死体

も作ったから、少し調べれば俺達が流星街出身であることが分かるだろうさ』

「そら、よかった。ほな、うちはビルに寄らずにアジトにこのまま向かう」

『ああ。そつちはどうだつたんだ？』

「……はあくく、悪い。依頼は失敗。取り逃がしてしもた。右腕はもろたけど、アレはまだまだ動けると思う」

『そうか……』

「まだ諦めん言うとつたから、団員達にはしばらく1人で動かんように伝えといて。特にシズクやコルトピ、パク姉とかには」

『それがよさそうだな』

「ほな、これからゆつくりアジトに向かうわ」

『ああ、気をつけてな』

「そつちも、な」

通話を終えたラミナは再びため息を吐いて、路地裏の地面に仰向けに倒れ込む。

未だ煙が立ち上る夜空を見上げ、そして思い浮かんだ言葉を口にする。

「……しんどー」

### ラミナの新武器

グレイブ・ヴァイパー  
・【墓穴を貪る蛇】

具現化したウルミに付与された能力。

地面や壁を掘り進んで、地中から襲い掛かる。

最大で50mまで伸びるが、ターゲットを視認していなければならぬ。

途切れた場所は乗り越えることは出来ない。なので、ビルとビルの間は越えられない。

土やコンクリートならば時速4kmで掘り進むが、鉄などはややす

ピードが落ちる。

・【親愛なる姉様との絆】

具現化されたグローブ型鉤爪に付与された能力。

ラミナが最も信頼している奥の手。

マチの【念糸】を参考にした能力。

指先の鉤爪部分からオーラを糸状にして伸ばすことが出来る。

伸ばせる長さ、念糸の強度はマチの念糸の半分程度。

念糸の先を小さな鉤状に出来、引っかけることが出来る。また、対象との距離が1m以内であれば念糸の切れ味も上げることが出来る。

『マチが使う能力』ではなく、『マチ』への思い入れから生まれた能力である。

そのため、制約が一部特殊。

『使用時はマチの口調になる』『両手で発動しなければならない』『他の武器は握れない』『手元から念糸を離すと、念糸は消えてしまう』が制約。



## #44 モドル×カ×ノコル

クラピカはやりきれない怒りと大きな虚無感の両方に襲われていた。

その手には、仲間の【緋の眼】が入ったケースが抱えられている。『ゾルディックが旅団のリーダーを始末した。残党も続々と死体が見つかっており、競売は始まっている』

そんな情報が入ってきた時は、全く信じられなかった。

しかし、現場に駆け付けると、黒髪の青年が血だらけのボロボロの姿で、瓦礫にもたれかかって死んでいた。

周囲ではマフィアの構成員が血の採取や顔の写真を撮っていたりしていた。

クラピカはそれをどのような感情で見つめればいいのか分からなかったが、旅団のリーダーが死んだのは認めざるを得ないのだと理解させられた。

更に手配書に載っていた旅団員の死体も見つかったという情報も、構成員から聞いた。

そつちも確かめたかったが、競売が始まっているという事実も無視出来なかった。

今日の競売では【緋の眼】が出るのが分かっているからだ。

クラピカは会場に飛び込むと、丁度【緋の眼】が競りにかけられたところだった。何とか競り落とすことに成功したが、それでもクラピカには全く達成感はなかった。

(これで旅団も死んだも同然で、仲間の眼も手が届く場所に来た……。なのに……何故こんなにも虚しさがこみ上げてくる?)

自分の手で殺せなかったからなのか。死ぬ瞬間を見られなかったからなのか。

仲間を殺した自分をどう思っているのか聞けなかったからなのか。クルタ族を殺した時にどう思っていたのかを聞けなかったからなのか。

仲間の眼をどこに売ったのか聞けなかったからなのか。

何故クルタ族を狙ったのか、本人の口から聞けなかったからなのか。

様々な推測を自分自身に問いかけるも、どれも当たってはいるが、どこも違うという思いもある。

「……ラミナ……」

思わず口に呟いてしまう。

共にハンター試験を乗り切った友でもあり、旅団と家族のような関係だった。

(私は……ラミナの家族を奪った、ということか……)

厳密にはマフィアとゾルディックだが、クラピカも関わっているし、ウボオーギンを殺したのは間違いない。

そうになると、今度はクラピカがラミナにとって間違いなく仇になったことになる。

それをゴン達から聞いた時には、それでも止まれないと思った。

しかし、実際に旅団がほぼ壊滅した状況を目の当たりにすると、その事実が重く押し掛かってきた。

クラピカはネオンが運び込まれた病院に向かい、ネオンに【緋の眼】を渡す。

その後、仲間から少し休むように言われ、クラピカはその場を後にする。

そして、屋上に上がり、携帯を取り出して電話を掛ける。

『……クラピカ!?!』

「……ああ。旅団を止めたいと言っていたな。その必要はなくなったよ。クモは……死んだ」

『!? えっ! クラ——』

電話を切ったクラピカは、そのまま電源を切って、少しの間夜空を見上げるのであった。

gonはすぐさまかけ直したが、電源が切られて通じることにはなかった。

「駄目だ、繋がらない。電源切られちゃった……」

「なんて？」

「……旅団が死んだって……」

「!? ホントかよ!？」

「つてことは、リーダーがやられたつてことか……」

キルアが目を見開き、レオリオが眉間に皺を寄せる。

そこにもう1人、静かに聞いていた元贗作製作者で現在目利きを生業にしている男、ゼパイルが首を傾げる。

「ヤバイ奴らなんだろう？ いいことなんじゃねえのか？」

「……仲間が旅団と親しい間柄なんだ。家族みたいだつて言つてた」

「……そうか」

「確かに旅団は悪い奴らだけど……その仲間は旅団が出来る前からの付き合いだつたから……。それを思うと、一概に死んでよかつたとは言えないよ……」

「……そうだな。これでラミナにとつたら、クラピカが仇になつたつてことだな」

レオリオが悩まし気に唸りながら、缶ビールを傾ける。

キルアは携帯を取り出して、電話を掛ける。

「ラミナ？」

「ああ。………駄目だ。やっぱ出ない」

しかし、ラミナは電話に出ない。

キルアは顔を顰めて、ゴンに顔を向ける。

「どうするんだ？」

「……明日、2人にメールしてみよう。公園で会えないかって」

「本気か？ 下手したら、その場で殺し合いだぜ？」

「でも、会わないとお互いのことが分からないよ」

「それは……まあ、そうだけど……」

「それにクラピカの言い方も気になるんだ」

「言い方？」

「うん……。『死んだ』つて言つてたけど……。クラピカが殺したなら、『殺した』つて言うと思うんだ」

「……確かにクラピカなら、そこを誤魔化すのは変だな。つてことは、

殺したのは別の奴ってことか……」

レオリオが悩まし気に腕を組む。

キルアも顎に手を当てて、考え込む。

(あいつらに捕まってラミナに会った時、あいつらは『殺すのはマズイ』って言っていた。何故だ？ 俺達みたいなガキを殺して、何の問題がある?)

捕まった時の旅団とラミナの会話を必死に思い出すキルア。

あの時は逃げ出すことに必死だったが、今考えれば内容が些かおかしかったことに気づく。

(……マフィアンコミュニティに喧嘩を売ったあいつらが、団員でもないラミナの言葉に全員が従うのは変だ。ってことはリーダーも俺達を殺すのはマズイってラミナの考えを支持したってことになる……。……待てよ。あいつらは俺の事を知っていた。ってことは、俺を殺せば親父達が動くと思ってたから？ そして、クラピカ以外に旅団を殺せて、マフィアが依頼を出したら……！)

キルアは答えに辿り着く。

「……旅団のリーダーを殺したのは、親父かもしれない」

「え？」

ゴンとレオリオがキルアに顔を向ける。

「マフィアは旅団1人に20億も懸賞金を出した。けど、だからって自分達も動かないわけがない。だから、プロを呼んでいた可能性がある。A級首の旅団に万全を期すなら、同じくらいの奴をぶつけるしかない」

「そこで殺しのプロなら有名なゾルディック家にマフィアンコミュニティが依頼を出した……！」

「親父も旅団相手なら、兄貴や爺ちゃんを連れてきたかもしれない。なら、可能性はある。そのことをラミナが前もって知ってたのだとしたら、俺とゴンを殺さないように旅団を説得して、連中が受け入れたのも納得出来る」

「キルアを殺せば、ゾルディックに戦争を仕掛けたことになっちゃうからな……」

「けど、結果的にリーダーは殺されちゃったけど……」

「そこは……どうやって戦ったのか分かんないから何とも言えないけどさ。けど、もしそうだったらラミナが動いてないのが気になる」

来ると分かっている相手をみすみす見逃すとは思えない。

シルバ達全員を相手にするのは無理だとしても、誰か1人の足止めをするだけでもラミナならば十分可能なはずだとキルアは考える。

しかし、クラピカの話の中にはラミナの名前は出てこなかった。ならば、ラミナはどこにいたのか。

「アジトに行ってみる？」

「馬鹿言うなよ!! 今、行ったらノブナガに何されるか分かんないぜ!?! それにラミナだって、どんな精神状態か分かんないんだ。下手したらクラピカへの人質にされて、最悪の事態を招きかねない」

「うう……」

「だから、アジトに行くのだけは無しだ」

「明日公園で待ち合わせるのは構わないと思う。けど、クラピカとラミナにはお互いが来ることは伝えないほうがいい。まず来るかどうか分かんないけどさ」

「うん……でも、何もしないのも嫌だし。連絡するよ」

「ああ」

ゴンとキルア、レオリオは2人に連絡を取ることを決める。

「……キルアの親父がゾルディック? 暗殺一家の……? マジか?」

と、衝撃を受けているゼパイルを放置して。

旅団アジト。

右手に【盗賊の極意】を持ったクロロが、目の前に小さく纏まった布を置く。

すると、小さな布が蠢き出して大きくなり、数秒後には目の前に大量の木箱が並らんでいた。

「よっ」

クロロが本を閉じて、風呂敷を消す。

風呂敷は陰獣の梟の能力で、具現化した風呂敷に包んだものを小さくして運ぶことが出来る。

「これで残るは明日の競売だけか」

「ワタシ達の死体も置いてきたし、マファイアは油断してるはずね」

フィックスは蝶ネクタイを緩めながら言い、木箱の上に飛び乗ったフェイタンが気楽そうに言う。

その横でノブナガとマチが不満げに顔を顰めていた。

ノブナガはゴンとキルアにまんまと逃げられたから。

マチはもちろんラミナについてである。

「団長、ラミナは？」

「今ここに向かつてるはずだ」

「なんでヒソカのこと、教えてくれなかったのさ」

「全くだぜ。1人で行って、結局逃がしちゃったんだろ？」

マチの苦情にフィックスも同意する。

もつともフィックスはラミナの失態を強調するような言い方だったが。

クロロは競売を終えた直後、マチ達にヒソカの裏切りとその処分にラミナが行っていることを説明した。

マチがすぐさま飛び出そうとしたが、すでに戦闘は終わっていること、ヒソカは逃げてラミナはアジトに向かっていることを説明し、今はアジトに戻ることを優先すると命令を下したのだ。

マチは盛大に顔を顰めて納得してなかったが、クロロの命令なので渋々大人しくアジトまで引き上げたのだ。

まだ捕らわれているはずのキルアに八つ当たりするつもりで。

しかし、戻ってみれば不満げなノブナガがおり、ゴンとキルアが逃亡したということで八つ当たりの矛先がなくなり、更にストレスが溜まるのだった。

ノブナガもヒソカとラミナの事を聞き、マチ同様不貞腐れていたのだった。

他の者達はそんな2人を見て、苦笑したり呆れたりとの反応で、とり

あえず打ち上げの準備をしながらラミナの到着を待つのであった。

クロロはいつもの服に着替えて、木箱に腰掛ける。

そこにシズクがクロロに声を掛ける。

「団長、これからどうするんですか？ ヒソカを探すんですか？」

「どんどん探す奴が増えていくな」

フランクリンが増える標的に呆れる。

シャルナークも僅かに眉間に皺を寄せながら頷く。

「いや、ヒソカに関しては警戒はするが、今は無視する。お宝もまだ残ってるしな」

クロロは首を横に振り、仕事に集中することを告げる。

それにマチは不満そうにするが、仕事も重要なので文句は口にしなかった。不機嫌オーラは全開だったが。

「マチ、俺は別にヒソカを許せなんて言っていない。仕事が終われば、好きにすればいい。それにこれでラミナを堂々と団員に出来るんだぞ？」

「悪いけど、その話はしばらく無しや」

頬から血を流し、右手で左脇を押さえているラミナが現れる。

全員がラミナに視線を向け、ボロボロのラミナを見て、様々な反応を見せる。

「なんだよ。ホントに結構やられてんじゃねえか」

「大丈夫か？」

「1人でいいところ取りするからね」

「本当に大丈夫なの？」

フィックスが想像以上のボロボロ具合に僅かに驚き、シャルナークとパクノダが近づきながら声を掛け、フェイタンが少し嫌味を言う。

ラミナは僅かに顔を顰めて、右手を上げてシャルナーク達を止め、クロロに歩み寄る。

「大分やられたな」

「まあ、クソでも団員を名乗るだけの奴やったっちゅうことやな。甘く見とったんも、うちの実力が足りんかったんも否定はせん。奥の手も月の眼も使うたけど、仕留めきれんかったからな」

「ほお……」

「電話でも言うたけど、ヒソカの右手は斬り落としたし、右肩に穴空けたけどな。あいつの能力的にはまだ油断は出来ん」

「そうか」

「せやから、依頼は失敗。報酬の金と『4』の数字は貰えん」

「ちよつとラミナ」

「これは依頼を受けた殺し屋としてのプライドや。マチ姉でも譲れん」

はつきりと言い放つラミナに、マチは腕を組んで顔を顰める。

「なら、『11』は？」

クロロがラミナに問いかける。

それはウボオーギンが死んだことが確定したことを告げる内容であり、未だ納得が出来ていないノブナガは跳ね上がる様に立ち上がる。

「待てよ、団長！ まだ——」

「ウボオーは死んだ。これは間違いない」

「ああ!？」

「ノストラードの娘の100%当たる占いで、それがはつきりと書かれていた。俺も、ラミナもな」

『!!』

クロロはラミナを見つめながら、ノブナガに告げる。

その内容にノブナガはもちろん、マチ達も僅かに目を見開く。

さらに、

「そして、鎖野郎の正体も分かった」

『!!』

流石にこれには全員が驚きを隠せなかった。

「……ホントかよ?」

「ああ。正確には俺じゃなくて、ラミナが知ってたんだがな」

「……ラミナ。どういうことだ?」

「ちよつとノブナガ」

「うるせえ!! どういうことだって聞いてんだよ!!」



ノブナガが鋭い目でラミナを睨む。

マチがラミナを庇う様に立つが、ノブナガはマチを押しつけてラミナに詰め寄る。

ラミナはまっすぐノブナガと目を合わせて、

「……確信を持ったんはその占いを見たからや。それまではまだ疑念の段階やった。それにそいつの情報も随時探しとったけど、見つからなかったしな。そいつと鎖野郎を結び付けるだけの確証がなかった」  
「っ!! 誰だ? 全部話せ。鎖野郎のこと!! おめえが知ってること全部だ!!」

「わあっとる。やから、ちよいと落ち着かんかい」

「っ! いいから、さっさと——!」

「ノブナガ!! いい加減にしな!」

「ノブナガ。ラミナは怪我してるし、今日1日動きっぱなしなんだぞ!」

ラミナは木箱に腰掛けながら、ノブナガを宥める。

ノブナガは掴みかかろうとするが、マチとシャルナークが両肩を掴んで諫める。

ノブナガはラミナの姿と、僅かに呼吸が乱れていることに気づいて、流石に少し冷静になる。

マチはラミナをいつでも庇えるようにラミナの傍に立つ。

「……ちっ」

「……はあ。ラミナ、話せるか?」

「問題ない。限界になったら、後はパク姉に任せるわ」

シャルナークの言葉に、ラミナは苦笑しながら答えて、そしてゆっくりと話し始める。

「鎖野郎の名前はクラピカ。クルタ族の生き残りや」

「クルタ族……。目が赤くなる連中ね?」

「つまり鎖野郎の目的は復讐ってことか」

パクノダとシャルナークが顎に手を当てながら言う。

「それと仲間の眼の回収も、やろうな」

「いつ、どこで出会った?」

ノブナガは変わらず鋭い声で訊ねる。

マチも目を鋭くするが、ラミナが腰を軽く叩いて宥める。

「会ったんは、ハンター試験や」

「あ？ ちよつと待て。ハンター試験ってことは……」

「もちろんヒソカも知つとる。それにノブナガが逃がしたゴンとキルアもな」

「ちよつと待ちな。ヒソカはともかく、あのガキ共はパクが一度調べたはずだよ？」

フランクリンが首を傾げ、ラミナがゴン達の名前を告げる。

それには流石のノブナガやマチも目を見開いて驚き、マチが振り返って問いかける。

「知らんかっただけやろうな。クラピカはハンター試験の時は念の事は知らんかった。やから、うちの前では鎖を見せたことはない」  
「なるほどね」

パクノダが分からなかった理由に納得する。

マチは自分の勘が外れてなかったことに、舌打ちをして逃がしたことを後悔する。

「ハンター試験に受かった後のゾルディック家滞在が終わった時にも、そいつはおつてな。その時にヒソカがそいつにクモがヨークシンで集まる事を話したことが分かった」

「なんで、その時に言わなかつたか？」

「オーラも扱えん復讐者なんざ伝えたところで、お前らは警戒したんか？」

「するわけないな」

ボノレノフがラミナの言葉に同意するように頷く。

他の者達も確かに念も使えない者が復讐を狙っているとわかれても、「日常茶飯事だ」と言うだけで気にも留めなかつただろうと納得する。

「言うとかけど、天空闘技場でマチ姉に会った時にクロロにはヒソカに関しては何も伝えずで？ クラピカについても可能性については伝えずで？」

「は？ いつ？」

「マチ姉がシャワー浴びとった時。けど、あの時はマチ姉がヒソカに伝言を伝える前やったし、ヒソカの狙いがクロロと戦うことやと思つとった。それを裏切り者と言えるかどうかは微妙やった」

「俺はそこで『ヨークシンでのサポートと、ヒソカを監視し、もし旅団に害するならば殺せ』と依頼した。そして、それはマチはもちろん誰にも言うなと命令した。ラミナも言っていたが、その時は鎖野郎もヒソカも仕事の障害になるかどうか分からなかったからな」

「なるほど……」

ラミナとクロロの説明にシャルナークが頷き、他の者も納得の表情を浮かべる。

「んで……ヨークシンに来てからはずっとクラピカを探しとったんやけど……新人ハンターの情報なんてハンターサイトであつても少ないし、マフィアに入つとったみたいやから、更に情報は中々出んかった」

「ヒソカが裏切り者だと分かったのは？」

「……ウボオーが攫われた直後、ヒソカがここを離れてクラピカと密会した。クロロからヒソカが動いたことを聞いて、密会でできそうな場所を推測して行ってみたら運よく当たりやった」

「そこで鎖野郎だつて分からなかったの？」

「周囲に人がおらんかったから、下手に視線を向けるとバレそうやったんよ。やから、その時はクラピカの鎖の事は気づけんかった。バレてヒソカと手を組んで攻められたら逃げれるか判断出来んかったんもある。……ここで見抜けんかったんは間違いなくうちのミスや。もし、その時に気づけとったらウボオーを1人で行かせることはさせんかったやろな。……納得出来んのやったら構わん。好きにせえ」

ラミナはノブナガをまっすぐ見て、自身の責任を認めて、はつきりと言ひ放つ。

ノブナガは無表情でラミナを見つめる。しかし、すぐに目を伏せて、その場に座る。

「お前がウボオーを殺したわけじゃねえ。仇でもねえ奴を殺しても意

味ねえだろうが……」

「……すまん」

「バアロー。謝んじやねえよ。少なくとも今の話からお前が出来る限りのことはしたってことくれえ、俺でもわかる。俺達だってウボオーが捕まってた場所に行ったのに、連中を逃がしたしな」

「まあ、原因はウボオーだがな」

フィンクスが茶化すように言う。

ノブナガは顔を顰めるが事実なので何も言わなかった。

「んで……仕事の準備とウボオーやクラピカの搜索を続けとつたところに、ゴンとキルアが捕まりよつた。マチ姉の勘を聞いた時も、クラピカの可能性が高いとは思ってつたけど、結局確証がないんは変わらんかった。あの時はキルアを殺されるわけにはいかんかったし、ヒソカがあそこで暴れば、ヒソカを殺すことが出来ても、パク姉やコルトピ、そしてキルアが殺される可能性もあつたでな。そうなれば仕事どころやない。仕事の邪魔までする気配はなかつたから、下手に刺激も出来んかった」

「なるほどな。確かに戦闘が苦手なコルトピ、パクノダを道連れにされていたら仕事に影響が出ていただろうな」

「ちっ……」

クロロがラミナの判断を支持し、フェイタンとフィンクスが舌打ちする。

「後は……クロロの付き添いで仕事を手伝う中で、クロロがノストラードの娘から占い能力を盗んで、うちも占ってもらつた。その結果がこれや」

ラミナは懐から紙を取り出して、マチに手渡す。

マチは紙を広げて、中身を見る。ノブナガやパクノダ、シャルナークも覗き込む。

「これ、どう読めばいいの?」

「占いは4〜5つの4行詩で構成され、その月の週ごとに起こることを予言している。今は一番最初の詩だな。ちなみに俺の占いはこれだ」

クロロが説明して手帳を差し出す。シャルナークが手帳を受け取り、マチ達と共に改めて予言を読む。

「……クロロとうちの占いを合わせた結果、鎖野郎がクラピカやちゆうんが分かった。それで……その占いにある通り、『偽りの数字』であるヒソカを殺しに行ったんや。ムカつくんは……『血塗る』ちゆうんが、殺すことやなかったことやな……」

「なるほどな」

「でや、クロロ」

「なんだ？」

「まだ『1』もいらん」

ラミナははつきりとクロロに言い放つ。

それはつまり、まだ旅団に入るつもりはないとのことだ。

「ラミナ？」

『4』に関してはヒソカを殺しとらんのに受け取れるわけない。『1』に関しては、まだクラピカがどうウボオーを殺したんか分かつたらんし、ミス挽回出来とらん。このままウボオーのお下がり貰ても、うちが納得出来ん。うちのプライドが許さん……！」

ラミナは殺気を放出して断言する。

その言葉にマチは小さくため息を吐いて、シャルナーク達は苦笑する。

クロロは小さくため息を吐くが、その顔には小さく笑みが浮かんでいる。

「クラピカ……鎖野郎を探し出す。それで落とし前をつける……！」

ラミナは誓う様に宣言する。

遂にラミナの切っ先が、クラピカへと向けられる。

## #45 ウラナイ×ノ×カイシヤク

ラミナ達は、とりあえず今日の仕事の打ち上げを始めた。

ノブナガは仕事に参加してないので、酒は無しだった。ゴンとキルアを無様に逃がしたことへの嫌がらせでもあるが。

「そういえば、あの2人どうやって逃げたんや？」

「あ？ ……ふん」

床に座って木箱に背中を預けながら缶ビールを傾けるラミナは、ノブナガにゴン達がどうやって逃げ出したのかを訊ねる。

しかし、床に胡坐を組んで座っていたノブナガは不貞腐れたように顔を顰めてそっぽを向く。

それを見たフィックスは揶揄う気満々の笑みを浮かべて、

「まさか気絶でもさせられたのか？」

「んなわけねえだろ!! 左右の壁を蹴り破って飛び出したんだよ!!」

「ほお……」

「黒髪の方を追いかけたんだが、見失って【絶】で気配も消された。あいつら、『ブツ飛ばす』とか言っときながら逃げやがって……」

「追いかけてなかつたか？」

「【円】で待ち構えてたんだよ! ……それがフェイクだって気づいた時にはもう奴らはどこにもいなかったんだ」

ノブナガは再び不貞腐れる。

フィックスやフェイタンはその様子に笑い、マチはため息を吐き、シャルナークやパクノダは肩を竦めて呆れる。

ラミナも呆れた表情を浮かべながら、

「お前なあ……その前に散々実力差見せつけとるのに、2対1になつたくらいで殴りかかってくるでも思つとつたんか。そこまでアホな奴らちやうわ。家出中とはいえゾルディックの御曹司に、ガキとはいえあの歳でプロハンターやぞ」

「ぐ……」

「まあ、その前にお前らを尾行して捕まった大ポカしとるから、しゃあないかもしれないけど」

それでも子供2人にいいようにされたのは無様でしかないが。

「次会ったら絶対に逃がさねえ……！」

「やめときい。言うたやろが。あの2人はクラピカ側や。捕まえたらクラピカとゾルディックが来るだけやし、クラピカを殺したら余計に仲間になんぞならんで？ キルアも殺しを辞めたがとるとるし、旅団には合わん。旅団に入るくらいやったら、ゾルディック家に帰るやろ」

「……情けない奴」

ラミナの隣で飲んでいたマチが、キルアの名前を聞いて顔を顰める。

ラミナは苦笑して、それ以上は何も言わなかった。

パクノダが話題を変えようと、ラミナに問いかける。

「そういえば、怪我はどんな感じなの？」

「左腕とアバラが数本折られたくらいや。左腕も力が入らんわけやないし、武器を軽く振るうくらいは出来るで」

ラミナは肩を竦めて、左手を持ち上げて離握手する。

そして、クロロに顔を向ける。

「クロロって治癒系の能力とか盗んどらんのか？」

「いや、持っていないな」

「つまらんやつぢやな」

「酷いな」

「変な能力盗むくらいなら、治癒系1つくらい持つとけや」

「怪我する前に勝つからな」

「嫌味か」

「ああ」

クロロは不敵な笑みを浮かべて、ラミナは盛大に顔を顰める。

それにマチやシャルナーク達は笑い、和やかな雰囲気になる。

そして、日付が変わる頃まで宴は続き。

「あら」

「ん？ どうした？」

パクノダがあることに気づき、ボノレノフが首を傾げる。

パクノダは穏やかな笑みを浮かべて、ある方向を指差す。

ボノレノフや声が聞こえていたフィックス達も目を向ける。

そこにはラミナが頭をマチの肩に乗せて、スヤスヤと眠りについていた。

マチはもちろんな文句を言わずにラミナを受け止めて、静かにビールを飲んでいる。

「相変わらず仲が良い姉妹ね」

「随分と無防備な顔だな」

「マチが隣にいるからだろ」

「成長したかと思つたが、この寝顔を見ると全然変わつてねえな」

「女の子の寝顔は何年経つても変わらないものよ」

「私、ラミナの寝顔初めて見たかも」

「僕も」

「シャルも言つてたが、マチがいるからだろうな」

パクノダが微笑ましそうに言い、ボノレノフはラミナの珍しい姿に驚き、シャルナークがビールを傾けながら言う。

フィックスがラミナの寝顔を見ながら言い、パクノダが呆れたように言い返す。

そして、シズクとコルトピが珍しそうに見つめ、フランクリンも微笑みながら言う。

マチはもちろんな話は聞こえていたが、ラミナを起こさないようにと思ひ、そっぽを向くことで羞恥を誤魔化す。

それに更にパクノダ達が笑う。

その間もラミナはマチにもたれかかたまま、寝顔が無防備に晒しながら眠り続けるのであった。

翌日、昼前までがつつり寝たラミナは寝ぼけ眼を擦りながら起きる。

「ふわあ〜……い！ん〜……い！」

そして、思いつきり欠伸をして、伸びをする。

その様子をマチが呆れながら見つめる。



「ちよつと扱い抜きすぎじゃない?」

「いやあ。今日で終わりやし、せめて体力と気力は回復させんとなあ」  
両肩を交互に回して、体の調子を確認しながら答えるラミナ。  
そして、携帯の電源を入れる。

「ん?」

メールの着信が表示されていた。

(キルア?)

キルアからのメールに訝しみながら開封する。

『デイロード公園で待つてる。キルア・ゴン』

(……旅団の事はもう知つとるはず……。話を聞きたいってところか?  
? クラピカとまだ連絡取れんのか? ……今は無視でええか。これからクラピカを殺す気やとバレたら、邪魔して来るやろうし)

今はクラピカを優先すべきだと考えるラミナは、『会える状況やない』と返信して電源を切る。

ゴンとキルアがクラピカに会わせようと考えていたなど、思いもせず。

その時、クロロが全員に言い放った。

「今夜、仕事が終わったらそのまま引き上げる」

「……あ?」

ノブナガが顔を鋭くして、クロロに顔を向ける。

ラミナは立ち上がりながら、

「占いか?」

「ああ」

「どういうことだよ?」

「クロロの占いの2週目の詩に『菊が葉もろとも涸れ落ちて』ってあったやろ? それがパク姉、シズク、シャルが死ぬことを暗示しとる可能性があんねん」

「あ、やっぱりそうなんだ?」

シズクも占いを讀んだ時に、何となくだがそんな気をしていたのだ。

納得が出来ないノブナガは顔を顰めて、クロロに訊ねる。

「なんで、その3人って分かるんだ？」

「占いではウボオーのことは霜月と表していた。だから、この占いでは団員番号のことを暦で表していると考えられる。菊は菊月で9月。葉は葉月で8月。涸れるは水無月を指していて、6月を表す。この場合は『落ちる』という言い方は死を意味する可能性が高い」

「……」

「今日は9月4日の土曜。今日中にここを離れば、予言は回避できる」

「それは分かんと思うで？」

「……なに？」

ラミナがクロロに待ったをかける。

「確かにその占いは2週目のことやけど。具体的な時間は分かんのかな？」

「……ああ」

「つまり、このまま仕事に行って、クラピカやヒソカが待ち構えとって、戦うやらなんやらして日曜に跨いだ瞬間のことかもしれないわけだな」

「……なるほどな」

「とりあえず全員、占ったらどうや？　もしかしたら、うちの時とは変わったかもしれない？　鎖野郎が誰か判明して、ヒソカが出て行って、団長であるお前が占いの結果で引き上げを決めた状況下で占えば、な」

クロロは顎に手を当てて、少しの間考え込む。

(それにこの占いに関しては気になつとることもあるしな……)

ラミナが占いの説明と、今のクロロの判断からある疑問を覚えたのだ。

この占い能力は、使っていた本人も占いが念能力であることは知らなかった。さらに聞けばネオンは人の占い結果を見ないようになっていたらしい。

つまり、使っていたネオンも知らない能力の落とし穴や制約がある可能性があるのだ。

そこでラミナが思ったのが、占いの内容が『その者が占いの内容に従うことを見越した上での内容だとしたら?』というものだった。

つまり、クロロが今日引き上げると言うことも見通された上での、占い結果だとしたら?

必ずしも今日ヨークシンから離れることで、予知を回避出来ると言い切れなくなるのだ。

クロロやラミナ達は、今までネオンが占ってきたマファイア達の占い結果を知らないし、結果に従った者が全員生き延びているのかも分からない。

なので、判断材料が非常に少ないのだ。

(うちとクロロの占いには警告みたいな強い言い方はなかったしな)

なので、もしラミナの推測が正しかった場合、引き上げることが危険な可能性もあるのだ。

「そうだな。これから全員占う。シズク、シャル、パクはもちろん、他のメンバーも死を想像させる詩があれば言ってくれ」

クロロがペンと人数分の紙を用意しながら、説明する。

「それぞれ紙に名前、生年月日、血液型を書いてくれ」

「ワタシ生年月日知らないね」

「俺なんて血液型も知らねえよ」

「僕も」

「げ」

フエイタン、フィンクス、コルトピが言い、クロロが素で囲まる。

ラミナも天井を見上げて、片手で顔を覆う。

(……流星街の悪いところが……。まあ、はつきりと言葉にされとるパク姉達に分かるだけマシか……)

流星街では赤子の時に捨てられる場合があったり、元々そんなことを調べる部族ではない者達が集まっていたりする。

なので、生年月日や血液型などは不明なままの者も多いのだ。

クロロもため息を吐きながら、他のメンバーからの紙を受け取る。

そして、能力を発動し、一気に書き始める。

それぞれ紙を受け取って、まずは自分だけで中身を読む。

マチは占い結果を見て、目を細める。

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬うだろう

貴方は仲間と墓標に血をそえる

霜月が寂しくないようにと

菊が葉もろとも涸れ落ちて

血塗られた緋の眼の地に臥す傍らで

貴方は愛しき月の眼に祈りを捧げる

蜘蛛の牙が抜かれることになろうとも

愛しき月の眼の文を待つといい

仲間の遊戯を見守れば

貴方の糸は紡がれる

待ち焦がれることになろうとも

その後も占いは続いて行く。

なので、マチは死ぬことはない。

しかし、その内容は見逃せるものではなかった。

「ラミナ」

「ん？」

「あんたの占い見せて」

「へいへい」

ラミナはポケットから紙を取り出して、マチに渡す。

マチは見合わせながら、改めて自分の占いを見る。ラミナも横から覗き込む。

「……蜘蛛の牙が抜かれる、なあ……」

「団員……って感じじゃなさそうだね。最初の文は団長と同じだし」

「うちの連絡を待つようなこと……。けど、そんなうちはクロロと一緒にいる感じじゃけどなあ」

「この感じだと団長とアタシ達は一緒にいない感じだね……」

「つまり、クロロについてマチ姉にわざわざ連絡するようなことが起

きる……。パク姉達はとうやったんや?」

「……こんな感じよ。そつちも見せて」

パクノダが少し鋭い雰囲気で紙を渡してくる。

それにラミナとマチはやはり死の予言が出たのだと悟る。

紙を交換して、マチとラミナはパクノダの占いに目を通す。

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬うだろう

貴方は仲間と墓標に血をそえる

霜月が寂しくないようにと

暗くて僅かに明るい日

貴方は狭い個室で2択を迫られる

誇りか裏切りかしか答えはないだろう

死神が貴方の傍に佇む限り

占いはこの2つで終わっていた。

「……これ……」

「時期がうちと同じやな……。しかも、これ……避けようがないか?」

『暗くて僅かに明るい日』『狭い個室』以外明確な情報はない。

これがヨークシンでのことなのか、他の場所での事なのかが分からない。

しかも『くしてはいけない』ではなく、どちらかしか選べない状況に追い込まれることが確定されているような表現だ。

「その死神つてのが誰かってことなのよね」

「やなあ……。雰囲気的にクラピカやなさそうやしなあ」

パクノダは眉間に皺を寄せて、右手で前髪を掻き上げる。

そこにシャルナークやシズク達も近づいてくる。

「見せてくれないか?」

「もちろん」

マチとパクノダは3人分の紙を渡し、マチ達はシャルナークとシズ

クの占いを見る。

2人の占いは1つ目はマチやパクノダと同じだった。

問題は2つ目。

シャルナークの場合。

電話をかけてはいけない

一番大事な時に繋がらないから

電話に出るのも勧めない

3回に一度は死神に繋がるから

シズクの場合。

黒い商品ばかりの収納場で

貴方は永い眠りを強いられる

何よりも孤独を恐れなさい

2人きり程怖いものはないのだから

と、ここまでで終わっている。

「シャルナークもまた微妙ね……」

「けど、シャルナークは電話に出なければいいし、シズクは誰かと一緒にいればいいみたいだね」

「パクはどうすればいいんだろうね？」

「つちゆうかシズクの収納場ってどこや？ 地下競売は今日までやろ？ 2つ目の詩つちゆうことは明日からやから、地下競売のことやない？」

「それともやつぱ今日の仕事でトラブルが起きる？」

「ちよつとラミナ、落ち着きな」

「ああ、すまんすまん」

シズクの占い内容に眉間に皺を寄せながら、眩きながら考え込む。それをマチが声を掛けて止める。

「けど、確かに競売にしては日時が変だな」

「もしかして、( )？」

「……なるほど。既に奪ったアジトのお宝のことかもしれないか……」

「しかも、私やシャルナークみたいに死神ってワードがないから、鎖野郎じゃないかもしれないわね……」

シャルナークが顎に手を当てて唸り、シズクが首を傾げながら言う。

それにシャルナークやパクノダが頷きながら、考え込む。

ラミナはノブナガ達に顔を向ける。

「ノブナガ達はどや？」

「俺は5つ出てるな。ただ、ちよつと物騒な文がある」

「俺もだ」

「……」

フランクリンとボノレノフが答え、ノブナガは黙ったままだった。

「物騒？」

「2つ目での詩でな。途中までは団長と一緒になんだが、残りの2文がな」

「内容は？」

『それでも蜘蛛は止まらない。遺る手足が半分になろうとも』だ」

「俺も同じだ」

「……俺もだ」

フランクリンの言葉に、ボノレノフとノブナガも同じだと言う。

それに全員が顔を見合わせる。

「流れで言えば、手足は団員のことか？」

「でしようね」

「ウボオー、シャルナーク、パク、シズク。……それに裏切り者のヒソカも入れれば5人。つてことは……」

「占えてももらえてない俺か、フェイタンか、コルトピの誰かだな」

「すでにおらんウボオーとヒソカ以外は、全員後方支援タイプやな。そこから考えれば、コルトピの可能性が一番高そうやな」

「だね」

フィックスが首を傾げ、パクノダが頷く。

マチが死んだ者、死の占いが出た者、抜けた者の名前を挙げていき、フィックスが引き継ぐ。

そこにラミナが死の占いが出た者の旅団での役割からコルトピの名前を挙げて、コルトピ自身も頷く。

「厄介なのが、3人共鎖野郎に殺されるのかはつきりしないってことだな」

「どうするんや？ クロロ。どの判断しても微妙やぞ。一番は今すぐここを離れる事みたいやけど」

「……そうだな……」

シャルナークが腕を組んで顔を顰め、ラミナがクロロに訊ねる。

クロロは顎に手を当てて考え込む。

(しもたな……。ヒソカを追い出したせいで、相手がはつきりせんようになってもた……。)

ラミナは自分の失敗を改めて悟った。

ヒソカがクロロと戦うのを諦めていないことで、ヒソカがクロロの敵意を自分に向けるために、団員を殺すかもしれない可能性が高まった。

なので、死神と言うのはヒソカの可能性も生まれてしまったのだ。しかも、日時もはつきりしないので、ヨークシンでの事なのかはつきりしていない。

クラピカがマフィアを抜けて、ヒソカと共に追いかけてくる可能性もあるのだ。

少なくとも、ラミナとクロロはクラピカと敵対する。

そこにマチ、ノブナガ、フランクリン、ボノレノフも関わっているのは間違いない。

なので、死神であるのはクラピカである可能性は高い。

(……やっぱやらかしたなあ……)

ラミナはため息を吐いた。

そこにマチがラミナの脇腹を突く。

「げえ!?!」

「余計な事考えなくていいの。ヒソカに関しては、あんたのせいじゃ



ない」

「マチ、ラミナはアバラが折れてるのだけど」

「ぐうおおおおお……!!」

「あ」

ラミナは脇腹を押しえて、蹲って痛みを耐える。

その姿にすっかり忘れていたマチは声を上げて、パクノダ達は苦笑するしかなかった。

「で、どうするか？ 団長」

フェイタンがクロロに問いかける。

クロロはゆっくりと顔を上げて、

「……残ろう。そして……こちらから動く」

その言葉にノブナガが笑みを浮かべる。

「マフィアンコミュニティはともかく、鎖野郎はヒソカから俺達の偽装の事を知らされていてもおかしくない。恐らく今日の競売も油断せずに待ち構えているだろう」

「確かにな」

「それでも奴がノストラードファミリーに属しているのは間違いない。なら組の拠点を襲って頭を殺せば、競売どころではなくなるはずだ」

「まあ、娘が組を引き継ぐことは出来んやろうしな。派手に死体を晒せば、マフィアンコミュニティは組として瓦解したと思うやろうな。競売にも参加できるか怪しいでな。金払えんやろうし」

ラミナはやや涙目で脇腹を擦りながら、クロロの作戦を後押しする。

「問題は鎖野郎の能力が未だはつきりしないことだ」

「わかっているのはウボオーを縛り付けた能力だけ。それでウボオーを殺せるとは思えない」

「まだ何かあるってことか。まあ、そりや当然だろうけどよ」

「ラミナ、鎖野郎はどんな性格だ？ どんな能力を考えそうな奴だ？」

クロロがラミナに訊ねる。

ラミナは眉間に皺を寄せながら、

「ん〜……一度覚悟を決めれば、厄介な奴やな。やから、能力も復讐に適したモンにしとる可能性が高い。正直、制約や誓約も命懸けとつても驚かん」

「……なるほどな。そうなると……やはりラミナ、お前が鍵になりそうだ。」

「【月の眼】と【脆く儂い夢物語】、やな？」

「ああ。鎖を使う以上、具現化系か操作系だ。能力を無効化できるお前は、間違いなく鎖野郎の天敵となる」

クロロが断言し、ラミナは納得するように頷く。  
そこにシャルナークが声を上げる。

「問題は奴らがどこにいるか、だね」

「……コルトピ」

「なに？」

クロロがコルトピに問いかける。

「競売品の中に【緋の眼】はあったか？」

「……あったよ。確かコピーした」

「確かお前のコピーは【円】の効果もあったな？　今、どこにあるか分かるか？」

「本物を触ればね」

「よし、全員で探すぞ」

クロロの命令で全員が木箱を開け始める。

「ノストラードが【緋の眼】競り落としたんか？」

「憶えてないわね」

「かなりの数があつたしな」

「まあ、クラピカなら意地でも競り落とすか？」

「ノストラードの娘は人体収集家でもある。奴がノストラードに近づいたのは、そのための筈だ」

「なるほどな」

クロロの言葉にラミナは納得して、開封を手伝う。

30分ほど探し、シズクが【緋の眼】を見つけた。

（これがクラピカの仲間なのれの果て、か……。哀れなもんやな）

同じ変色する眼を持つ者としては、僅かに同情の念を覚える。しかし、それでも弱かったのが悪いのも事実なので、すぐにその思いも消える。

コルトピが【緋の眼】に触れて、コピーの位置を探る。

「同じ形の物は……あつちの方角。大体2500m」

「地図をくれ」

「ほい」

フィックスがクロロに地図を渡す。

そして、確認したクロロが口にした場所は、

「……ホテル・ベーチャクル」

「あ?」

その名前にラミナが思わず声を上げる。

「ベーチャクルやと? ……ちっ! 別名義で部屋を変えたんか……!」

すぐにクラピカ達が取った方法に気づき、盛大に顔を顰める。

「シヤル。パソコンどこ?」

「あつち」

「借りるで。もう一度ノストラードとクラピカの情報を探す」

「ああ」

「クロロ。その間に動き、決めといて」

「分かった」

ラミナはすぐさまパソコンの前に移動して、ハンターサイトでノストラードファミリーの情報を浚う。

しかし、まだクラピカの情報もなく、構成員リストも変化していない。

「ちっ」

そして、やはりベーチャクルの宿泊名義にクラピカの名前はなかった。

「いや……9月2日で、クラピカがヒソカと会った後の時間で、同じクラスの部屋を借りた奴がおれば……」

すぐに機転を利かせて、9月2日の宿泊名簿を照会する。

「……センリツ。こいつやな。ノストラードの名簿にも無し。くつそ……！ どんだけ運が悪いねん、うちら」

すぐにセンリツについてハンターサイトで検索してみる。

「プロハンターか。写真は無しって、ああ！ くそー！」

どうやらあまり目立った活動や能力を持っていないようだった。

それではハンターサイトでも大した情報は載らない。

「クラピカといい……！ 欲しい情報が全っ然手に入らん……！」

ラミナは愚痴りながら、クロロ達の元に戻る。

「どうだった？」

「センリツって名前の名義で部屋を借りとるんは分かったけど、センリツの情報はプロハンターっちゅうこと以外、特になし。クラピカも情報に載ってへん。ハンターサイトはしばらく期待薄や」

「そうか……」

「で？ どう動くんや？」

「俺、ノブナガ、コルトピ、シズク、マチ、パクでホテルに向かう。残りはここで待機。連絡役はフィックスだ。シャルに電話しても出ないから注意しろ」

「まあ、占いからすればそうやるな。うちは？」

「もちろん、俺達と一緒にだ。ただし、先んじてリパ駅に向かってくれ。

俺達は電車で向かう。その後は俺を離れた所から監視しろ」

「ええんか？」

「構わん。俺達とお前は別行動と連中に印象付ける。鎖野郎がこっちに気を取られた隙を狙え」

「了解や」

「ヒソカに注意しろ」

「もち。ほな」

ラミナは短刀を具現化して、姿を消す。

それを見送ったクロロは、コルトピに顔を向ける。

「コルトピ、あと10棟。アジトのコピー増やせるか？」

「あと50はいける」

「頼む」

コルトピはすぐに作業に入る。

クロロはフランクリンとボノレノフを護衛に付ける。

「コルトピが戻り次第、行動開始だ」

クロロの言葉に、出動組が頷く。

いよいよ蜘蛛もクラピカ排除に動き出した。

## #46 シュウゴウ×ノチ×ハツカク

ラミナ達がそれぞれの占いを始めていた頃。

クラピカは重い足取りながらも、デイロード公園に足を踏み入れた。

広い公園の芝生には多くの人が思い思いに過ごしており、昨日のセメタリービル周辺の殺伐さが嘘のようだった。

ネットではクロロやマチ達の死体（偽物）の解体動画がアップされており、世間を騒がしているが、それもほんの一部だ。

クラピカも話では聞いているが、そこまで辱めたかった気持ちはないので見てはいない。

死んだ者にまで恨みをぶつける気はなかった。

それにやはりラミナのことや頭が過ぎることもある。

その時にゴンから『デイロード公園で待ってる』とのメールがあったのだ。

旅団への復讐が終わったと考え始めているクラピカは、センリツ達が「少し休め!」と言ってくれたことにより、余裕が出来たので会いに行くことにしたのだ。

そして、公園内を見渡すと、ゴンとキルアがピザやパイ、アイスやポテトなど大量に広げて、早食い競争を始めていた。

相変わらずな2人の様子に心が温かくなかった気がしたクラピカはゆっくりと歩み寄る。

すると、頬を膨らませていたゴンが、クラピカに気づいて口の中のものを吐き出しながら声を上げる。

「ぶあは。ピカ!!」

吐き出されたものは盛大にキルアの顔にかかる。

gonはそんなことなど気づきもせず、クラピカに駆け寄っていき。

クラピカは何か問い詰められるかと覚悟したが、

「終わったね!」

と、ゴンが笑みを浮かべながら言ってきて、一瞬固まってしまった。

「クモが死んで、これでやっと一番やりたかったことに集中出来るね！ 早く見つけてあげなきゃ！ 仲間達の眼」

ゴンの言葉にクラピカが呆氣にとられる。

「俺達にもってつだぶ——」

ゴンが言葉を続けようとした時、キルアが背後から近づいてゴンの顔にアイスクリームを叩きつける。

ゴンはキルアに飛び掛かって、キルアは笑いながら躲す。

クラピカは啞然とその様子を見つめていたが、再びキルアがゴンの顔にパイを叩き込んだのを見た時、どこか気が抜けてしまう。

「……ふふっ」

そして、笑みを浮かべて、久しぶりに心の底から笑うことが出来たのだった。

その後、ホテルでレオリオとも合流する。

「久しぶりに4人揃ったね！」

「……ラミナには連絡してないのか？」

ゴンが明るく言うが、クラピカの言葉で一瞬にして明るい雰囲気霧散する。

しかし、避け続けられる話題でもない。

キルアが肩を竦めて、

「連絡はしたんだけどさ。やっぱ……会える状況じゃないってさ」

「そうか……」

「けど、あれだろ？ 昨日の旅団に関してはクラピカじゃないんだろ？」

「まあ……な」

「親父達、来てなかった？」

「……ああ。シルバとゼノと言う者が来ていたな」

「やっぱ親父と爺ちゃんか……」

人気がないラウンジの奥に向かいながら、話すゴン達。

「それにしても……」

「？ なんだ？」

「何かオメー、威圧感つーか迫力みてえなもんが出た気がするな」

「君は……大して変化もなさそうだな、レオリオ」

「ムカつく度も増したな、オイ」

「軽口を言い合うも、半年前のように話せることにどこかホツとする4人。」

ラウンジ奥のソファに座った4人は、ゆっくりと話を始める。

「これからどうするの?」

「まだマフィア続けるのか?」

「……そのつもりだ。今の雇い主は人体収集家だな。【緋の眼】の情報は集まりやすいと考えている」

ゴンとレオリオの問いに頷きながら、理由を答える。

そこにキルアが鋭く切り込む。

「……旅団の残党は? どうするんだ?」

「……奴らの頭が死んだ以上、無理をするつもりはない。……ラミナの事もある……」

「そうだな……。まさか旅団と親しかったとはなあ。……ホントに旅団の1人を倒したのか?」

「……ああ」

レオリオの問いかけにはっきりと頷くクラピカ。

それにキルアとレオリオは顔を顰め、ゴンは真剣な顔で見つめていた。

「……どうやって倒したの?」

「……クモの残党を捕まえたいならやめておけ。私の話は参考にならない」

「それだけじゃないよ。俺達だって念を極めたいと思ってるし……それにラミナを止めたいんだ。もちろんクモも止めたい気持ちもあるけど……」

「……」

「なあ、クラピカ」

キルアがクラピカの前に紙を広げて、差し出す。

それは地下リングでもらった旅団の顔写真だった。



キルアはその中の1人、マチを指差す。

「こいつさ、ラミナの姉みたいな存在だつてよ。旅団の連中も……ラミナの事を妹を見るみたいな目だった」

「……」

「こいつはクラピカが殺したわけじゃないけどさ。俺の親父だつてあいつの家族を奪った仇になったわけだし。でも、これでラミナは一気に家族を失ったことには変わりはない。クラピカと同じように」

「……そうだな」

「このままじゃ復讐の連鎖だ。出来れば、俺達の手で止めたい。……俺とゴンはあいつに念を教わつたし、俺はあいつに色々之恩がある」

「うん」

「……」

「けど、今の俺達じゃ旅団にもラミナにも、手も足も出ない。だから、少しでも参考にしたいんだ」

キルアは真剣な表情でクラピカに言い放つ。

ゴンも力強く頷き、クラピカをまつすぐ見据える。

クラピカは顔を俯かせて数秒考え込み、そして覚悟を決めて顔を上げる。

「なら、余計に私の話は参考にならない」

「え？」

「私の能力は旅団以外の者には使えない」

「!!」

クラピカの暴露にゴン達は目を見開いて固まる。

「制約と誓約は知っているか？」

「ああ」

クラピカは右手を3人の前に出して、鎖を具現化する。

「念は精神が大きく影響する能力。覚悟の量が力を上げる。私は能力の大半をクモ打倒に使うことを『誓った』。そして、その制約が『クモでない者を鎖で攻撃した場合、私は命を落とす』というものだ」

「!!」

クラピカは左胸を指差す。

「私の心臓には念の刃が刺さっている。私の能力は憎悪が生んだ恨みの産物だ。クモ以外には全く通用しない能力だ」

「ま、待てよ!? それじゃあ、もしラミナに襲われれば……!!」

「……恐らく勝ち目はないだろうな。だから、他言しないでくれ」

「っ!! マズいんだ!! 生き残った団員の中に記憶を読む能力者がいる! 恐らく触れるだけで欲しい記憶を読み取れる能力だ!」

「けど、前はバレなかったよ?」

「あの時は俺達もクラピカが鎖野郎だと知らなかった。けど、今はもう知ってる」

キルアはパクノダの能力とその危険性に気づいていた。

なので、またパクノダに記憶を読まれれば、すぐさまラミナに情報が渡り、ラミナはクラピカを殺しに来るだろうことは想像に難くない。

「しかしよ、こっちから近づかなけりや安全だろ?」

「……俺達が鎖野郎をクラピカだって予想出来たんだ。ラミナが予想してないはずがない……!」

「そりゃあ……そうだけどよ……」

「けど、ラミナが予想してても確かめようがないんじゃない? 確かめるために俺達を襲いに来るとは思えないし……」

「今のあいつがいつも通りの判断能力があるとは限らないだろ? 俺達を人質にして、クラピカを誘い出そうとする可能性はある。……俺を捕まえれば、親父達も誘い出せるしな……」

「あー!」

旅団のリーダーを殺したのはシルバとゼノとなっている。

なので、ラミナや旅団の復讐対象はゾルディック家も含まれる。キルアを捕まえれば、クラピカとシルバを同時に誘い出せると考える可能性は高い。

そうなれば、クラピカはともかく、ゾルディックとの戦争は止められない。

「他にノブナガって奴がゴンに執着してる。多分、ゴンを探すのを諦めてない。ラミナが俺達とクラピカの事を話せば、あいつらが俺達を

探し回る可能性が高い……！ それにヒソカもいるしな」

「いや……ヒソカはもうクモとは動かないだろう。奴は私と協定を結んでいるからな」

「!!」

「ただ、奴は私が鎖野郎だと知っている。旅団のリーダーが死んだ今、話す可能性はある」

ヒソカからはまだラミナと交戦した連絡は来ていなかった。

ちなみにこれは昨夜ゴン達に電話した後から、クラピカがずっと携帯の電源を切っていたからだ。

その時、

ピルルルル！ ピルルルル！

クラピカのポケットから着信音が響く。

クラピカは携帯を取り出し、画面を見る。

「っ！ ヒソカ……！」

「え!？」

何とヒソカからの電話だった。

クラピカは素早くゴン達を見回して、

「スピーカーで通話する。しばらく黙っていてくれ」

ゴン達は顔を引き締めて頷き、クラピカはスピーカーモードにして電話に出る。

『……やあ♥ 忙しいのかな?』

「……いや、問題ない。何かあったのか?」

『ちよつと、ね◆ 困ったことになってさ♠』

「困ったこと? 旅団のリーダーが死んだことか?」

『くくく♣ それについても報告があるけどね♥ まずは1つ目◆

僕と君の繋がりがバレた♠』

「!!」

『昨晚、ラミナに襲われちゃってさ♠ 命からがら逃げ出したけど、僕はもう旅団には戻れない♣』

「……私のことは……」

『もちろん♥ ラミナは君が鎖野郎だと気づいてた◆ どうやら、廃

屋で会ってたところを見られてたみたいでね♣』

「……そうか」

だが、バレることは覚悟していたことだ。

今も話していたところなので、そこまで動揺はない。

「他には……」

『ラミナから逃げて団長達の死体が出た後に、イルミから電話があったんだ♥』

「……イルミから？」

クラピカやゴン、レオリオは思わずキルアを見る。

キルアは盛大に顔を顰めるが、続きを促す。

「……それがどうした？」

『くくく♥　そこで面白い話を聞いたんだ◆　きつと君が喜ぶと思つてね♥　いや、それとも残念なのかな？』

「ふざけるなら切るぞ」

『残念♣　じゃあ……団長を殺したはずのゾルディック家当主なんだけど◆』

「ああ」

『タダ働きさせられたって言うてたらしいよ？　この意味、君なら分かるだろ？』

「っ!!」

クラピカとキルアは目を大きく見開く。

ゴンとレオリオはまだ意味が分からずに、2人の顔を交互に見る。

『ちなみにイルミや他のゾルディック家の者はクモを狙ってはいない♣　そして、僕がラミナに襲われる直前まで、クモはノブナガを除く全員が大暴れしながらビルに向かっていた……◆　マフィアの銃で死ぬような連中じゃないのは、君は目撃してるはずだろ？　じゃあ、見つかった死体は何でしょう？　くくくっ！』

「……死体は……偽物っ！」

『クモはまだ死んでいない♥　さあ、どうする？』

ブツツ　ツーツーツー

ヒソカは挑発するような事を言って、電話を切った。

クラピカは弾かれるように立ち上がる。

「死体は偽物って……！ マジかよ……!?!」

「……確かに同じ具現化能力者なら可能だ……！ くそっ！」

「そーか!! 天空闘技場の……!」

「カストロ！ 自分の分身を作り出した人!!」

キルアとゴンも、旅団の能力をようやく理解する。

念は人の体すら作り出す瞬間を2人は目の当たりにしている。なので、死体を作り出すことなど難しくはない事も理解できた。

キルアは顔を顰めて、事態が急変したことを悟る。

「そうなるとマズい……! 旅団もだけど、ラミナがクラピカに対して動きを見せないのはおかしい……!」

「なんでだよ?」

「親父達がいなくなった以上、旅団とラミナにとって一番の邪魔者はクラピカだ。今日も地下競売を狙うにしても、まだ時間がある。先にクラピカを排除しようとしなのは不自然なんだよ!」

「けど、ヒソカと繋がってたのも分かってんだろ? もうバレてると思うのが普通じゃねえか?」

「だったら、余計にクラピカを狙う! ここで無視しても、クラピカが競売で待ち構えていることくらい簡単に想像できる! 連中からすれば今のうちにクラピカさえ倒せば、悠々と地下競売を狙える!」

「そ、そうか……!」

ゴンとレオリオも、事態が最悪に近い事を理解する。

その時、再びクラピカの携帯が鳴る。

「! またヒソカ?」

「……いや、違う」

クラピカは首を横に振り、3人から離れる。

「私だ」

『クラピカ? あたしよ』

「センリツか。どうした?」

『コミュニティーが旅団の残党狩りを断念したわ』

「な!?!」

『奴らが流星街の出身だと分かったそうなの』

「流星街……!?! 旅団が……!?!」

『十老頭が直々に終戦命令を下したらしいわ』

「……分かった。競売は?」

『まだ何も連絡はないわ』

「……分かった。また何か分かったら連絡をくれ」

『ええ』

クラピカは電話を切って、ゴン達の元に戻る。

「大丈夫?」

「ああ。それよりも、コミュニティが旅団の追跡を諦めたらしい。懸賞金も白紙に戻したそうだ」

「え!?!」

「一体なんで……!?!」

「……旅団が、流星街出身だと判明したそうだ」

「流星街……!?! そうか、それで……」

今度はレオリオだけが、意味を理解した。

ゴンとキルアは顔を見合わせて問いかける。

「リュウセイガイって?」

「社会的には存在していないとされる連中の街さ」

「存在しない?」

「国際人民データ機構にも登録されず、国民番号も持たないってことさ」

「紆余曲折を経て、流星街は政治的干渉を全く受け付けない空白地帯となった。投棄される廃棄物を再利用して、1000万近い人間が暮らしていると言われているが……。実はゴミと称して、彼らに大量の武器と貴金属を援助する連中がいる。それが、マフィアンコミュニティだ」

「!?!」

レオリオとクラピカの説明にゴンとキルアは目を見開く。

「どういうこと? だって旅団はマフィアと……あれ?」

「見返りとして、マフィアは貴重な人材を得る。社会的に存在しない

連中。犯罪にはうってつけだ」

「ああ……ラミナのような者が、な」

クラピカがラミナの名前を挙げる。

ゴンは一瞬何故ラミナの名前が出たのかと思ったが、旅団との関係を思い出した。

「あ……そうか。ラミナは旅団と家族みたいだって言ってたから……」

「ああ。ラミナも流星街出身なのだろう。それならば、殺し屋になつたことにも説明がつく」

「マフィアの依頼を受けてたみたいなのも言ってたしな。けど、本来なら流星街とコミュニティは蜜月の関係で、ラミナは旅団と利害が合わないはずなんだがな」

「……それでも家族との関係を選んだ、ということなのだろう。旅団がコミュニティに喧嘩を売った時に覚悟はしていたはずだしな」

「旅団に入るつもりだって言ってたし。コミュニティと縁が切れても問題ないってことだろ」

「だよなあ……」

キルアの言葉に、レオリオはラミナとはもう前のように会えないという予感が頭を過ぎる。

キルアはクラピカに顔を向ける。

「どうする？ マフィアは手を引いた。今にもラミナや旅団がここに現れてもおかしくないぜ」

「……」

クラピカはキルアの言葉に考え込む。

正直なところ、キルアとしてはもう懸賞金もなくなったので旅団を狙う理由はない。

しかし、ラミナとの関係をこのままにしておくことも出来ない。

その時、キルアの頭にある可能性に思い至る。

「クラピカ」

「なんだ？」

「旅団って新しい団員入れるのに、なんかルールあるの？ ラミナは

団長次第って言うたけど」

「……入団希望者が在団員を倒せば交代で入れる。もしくは、今言っていたように団長が選ぶ。この2つのはずだ」

「つてことはさ。ラミナはもう入団した可能性があるんじゃないか？

クラピカが倒した1人分欠番が出たし、ヒソカを追い出したのもラミナだ。旅団としてはここでラミナを引き入れない理由はない」

「そう言われればそうだな……」

キルアの推測にレオリオは頷く。

クラピカも顎に手を当てて、考え込む。

（確かにその可能性は高い。ヒソカも私の制約はもちろん知らないし、他人に話したのはゴン達とイズナビだけ……）

なので、ラミナや旅団に制約がバレている可能性はない。

キルアの推測通り、ラミナが旅団員入りしている可能性は高い。ここでラミナと旅団がバラバラに動く理由はないし、入団したかどうかなど本人達しか分からないのだから、マフィア側にスパイとして入り込んでもそう簡単にバレはしないだろう。

ウボオーギンと戦い、ヒソカを退けるだけの実力があり、家族のような間柄であるラミナを旅団が歓迎しない理由はない。

（あの11番を倒した事実は、ラミナやクモ達には十分私の能力を警戒させているはず。ラミナ1人で突っ込んでくる可能性は……低い）  
ならば、旅団と共に動くはず。そうになると、尚更入団しない理由はない。

クラピカとキルアはそう判断した。

ラミナが謎のプライドを発動して、入団を拒否していたなど夢にも思わず。

クラピカ達は作戦会議を始めた。

クラピカは心の底ではゴン達を巻き込みたくはないが、パクノダとラミナを無視することは出来ない以上、協力者は多い方がいいと判断したのだ。

「まず奴らのアジトを張る役。中継係が1人」



「俺がやるよ」

キルアが立候補する。

「ターゲットは最優先がパクノダ、次鋒でラミナ。それ以外は無視していい」

「了解」

「くれぐれも慎重に」

「分かっている。無理はしない。つつーか、出来ない。ラミナ相手に俺の考え方なんて、すぐに見抜かれるだろうし」

キルアは肩を竦める。

クラピカは頷いて、次にレオリオに顔を向ける。

「私と共に行動する運転手が1人。レオリオ、頼めるか？」

「い!? お、おう」

「運転できるのはクラピカを除けばレオリオだけだし、仕方ないよ」

「まあ、そうだけだよ……」

「それでクラピカ。俺は？」

「敵の目を眩ます役。攪乱係だ」

「っ!? ちょっと待った! それはかなりヤバイ役だろ! また奴らと直接対峙しなきゃなんないじゃん!」

「それはやり方次第だ」

「? 一体どんな作戦だよ?」

「いたって単純だ。敵がゴンに気を取られている隙に、私がパクノダを捕えて車で連れ去る。不確定要素が多すぎて、これ以上細かな作戦は立てられない。方法はゴンに任せるが、最低0.5秒、出来れば1秒。相手の注意を引きつけてほしい」

「……あの連中から1秒……」

前回は2人相手に全く逃げる暇を与えられなかった。

さらに今回はラミナまでいる可能性がある。

非常に厳しいと言わざるを得ないだろう。

しかし、やらねばならない。

「……ゴン。お前が鍵だ。出来そうか?」

「……まだ分からない。考えてみるよ」

流石にゴンも簡単には出来るとは言えない。

自分の命はもちろん、クラピカの命もかかっているのだから。だからゴンはある覚悟を決める。

「ねえ、クラピカ。俺にも念の刃、刺してよ」

「!?!」

ゴンの言葉にクラピカ達は目を見開く。

「念の刃をって……」

「オイ、ゴン。話を聞いてたか!? 旅団以外の人間を攻撃したらクラピカは死ぬんだぞ!」

「声がデカイ!」

レオリオが思わず声を荒らげ、クラピカが若干イラつきながら怒鳴る。

「でもさ、だったらなんでクラピカの胸には念の刃が刺さってんの?」

ゴンの疑問にキルアとレオリオはハッ!として、クラピカに顔を向ける。

「……ここからの話は更に私のリスクを上げる」

「……分かったよ」

レオリオは立ち上がって、キルアに顔を向ける。

キルアはゴンに顔を向けて、よく見る『絶対に譲らない表情』のゴンを見て、ため息を吐いて席を立つ。

2人が離れたのを確認したクラピカは早速、本題を語る。

「結論から言おう。それは確かに可能だ」

クラピカは自分の能力について説明していく。

まずは【束縛する中指の鎖】について説明する。

そして、

【律する小指の鎖】にも使用条件がある。『緋の眼の時にしか使えない』

クラピカは両眼を緋の眼に変える。

自力で発動できるようになったことにゴンは僅かに驚く。

「自分の力を出せるの?」

「訓練した。緋色になるまでかなり時間がかかるがな。そして、私は

緋の眼の間のみ特質系に変わり、覚えた能力であればいかなる系統でも100%の精度と威力で使用できる」

「……つまりは俺にも念の刃は刺せるってことだね？」

ゴンは結局クラピカの説明をほとんど理解出来なかった。ここらへんはラミナもしつかりと説明していたのだが。

もしラミナがいたら、アイアンクロウではなく、飛び蹴りが飛んで来たことだろう。

クラピカはそこにはツツコまず、しつかりと頷く。

「いいよ。ルールは任せる」

ゴンはクラピカとしつかりと目を合わせて言う。

クラピカもしつかりと見つめ返し、

「……お前の覚悟、確かに受け取った」

その時、クラピカの背後にキルアとレオリオが顔を出す。

「！」

「その刃つてき、3本出せる？」

「任務終了後にはそのルール、ちゃんと解除できるんだろうな？」

キルアとレオリオがクラピカに問いかける。

その内容から2人も念の刃を刺してもらうつもりであることが分かる。

「答えは？」

クラピカは目を閉じて、

「……両方とも、可能だ」

しかし、目を開けたクラピカの両眼は普段の色に戻り、右手の鎖も消す。

「私はお前達に剣を刺す気など、最初からないのだよ？」

「え？ でも……もし俺がパクノダに捕まったら……」

「私の能力はバレるだろうな。かと言って、秘密を守るルールをどう決める？ 『パクノダに触れてはいけない』とでもするか？ それでは反撃のチャンスをむぎむぎ潰すことになるぞ」

「あ……」

「パクノダに触れられても、すぐ記憶を読まれるとは限らないし、仮に

捕まっても記憶を他の者に話す前に倒せばいい。触れられた瞬間にルールで死んで、反撃の可能性を0にすることはないだろう?」

「……まあ」

「そりやそーだ……」

キラアとレオリオも納得はする。

「でも……だったらなんでリスクが増すだけなのに、俺たちにこんな話を?」

「……お前達の覚悟に対する私なりの礼だよ。お前達から秘密が漏れたとしても、私はもう何一つ後悔しない。そして……ラミナと戦うことになったことへの懺悔でもある」

クラピカはどこか胸が軽くなった気がした。

(私は……いい仲間を持った)

だからこそ、ゴン達をラミナと敵対させることを償わなければならぬ。

だからこそ、この作戦で死んでも後悔だけはしないようにしたかった。

仲間に託したことを恨まないように。

「……では、準備を始めよう」

これで全てを終わらせるために。

## #47 アメ×ノ×コウボウ

外は雨が降っていた。

ラミナは再びカツラを被って、雨の中を移動する。

「ヒソカがどう言うかはともかく、旅団が生きとることは伝わったと考えるべきやな」

その時、ラミナの携帯が鳴る。

「はい？」

『マフィアンコミュニティーが俺達の懸賞金を解除した。まあ、奴らは俺達が生きてる事を知らないから当然ではあるが、死体を確認していないはずのウボオーとノブナガの懸賞金も消えたことから、連中は俺達が流星街出身であることを知ったんだろう』

「つまり、マフィアは完全に手を引いたっちゅうことか。ほな、仕事までにクラピカを仕留めればええんやな」

『ああ』

「了解。ほな、リラ駅に向かう」

『いや、ホテルの前で待機してくれ。鎖野郎やノストラードの者が現れたら、追跡で留めろ。1人で突っ走るな』

「努力はするわ」

ラミナは電話を切って、移動を再開する。

ヒソカやゴン達からアジトの場所を聞いてバレている可能性が高いので、短刀を具現化して姿を消して一気に駆け出して、街中に向かう。

（雨っちゅうんがなあ……。【朧霞】は姿と気配を隠すだけで、透過するわけやないからなあ）

雨の中では【朧霞】の弱点が特に露出する。

雨がラミナの体に当たって輪郭が見えてしまうのだ。なので、雨の中では常に動き回るか、人込みの中に紛れるしかない。

それでも姿を消せるだけ有利ではあるが、実力者の前ではその違和感が見事に看破されてしまう可能性が高いので、一切油断は出来ないのだ。

(ヒソカには【朧霞】の見抜き方はバレとるし、うちが姿を消して動いとることは予想しとるはず。かと言つて……変装程度やとクラピカやヒソカに近づくのは厳しいしなあ)

ラミナは顔を顰めながら走り続け、駅近くで【朧霞】を解除する。そのまま電車に乗つて、リラ駅に移動する。

駅から外に出て、一度周囲の気配を出来る限り探る。もちろん【円】は使わない。

(……特に視線は感じん。さて、ここからが勝負やな。どこでホテルを見張るか……)

屋上がベストではあるのだが、この雨では【朧霞】は逆に目立つ。しかし、下では雨に傘、人混みで見えにくい。

【朧霞】で姿を隠せて、周囲を見渡せる場所を探さなければならぬ。い。

「ホテルの近くで非常階段みたいななんがあるビルがあればええけど……」

とりあえず、ホテルに足を進めるラミナ。

ホテル正面入り口の近くまで移動して、周囲を見渡す。道路を挟んで反対側の4階建てビルに、外付けの非常階段を見つけた。

ラミナはその3階部分踊り場まで上がり、【朧霞】を発動しながら周囲を見渡す。

(ん……やっぱ見渡しは悪いなあ。しゃあないか……)

そのビルの屋上まで上がり、さらに隣の7階建てビルの壁をよじ登つて屋上に上がる。

屋上の縁へと進んで一度下を覗き込み、すぐ下の窓上に出つ張りがあるのを見つけた。

出つ張りは何とか足を乗せられるくらいだった。

(ないよりはマシやな)

ラミナは迷わず出つ張りに下りて、落ち着く位置を探す。

背後は諦めるしかないが、ここからならばホテル正面玄関と左右の大通りも見ることが出来た。

(車の出入り口が見にくいか……。けど、反対側は動くには細い道

ばっかやし、こっちに出てくるはず)  
そして、ラミナは監視を続けるのであった。

一方、その頃。

旅団アジトがある廃墟を監視に来たキルアは、離れたビルの屋上で眉間に皺を寄せていた。

「大量のビルまで具現化出来るとかアリかよ……」

旅団アジトがある廃墟のビルの数が増えていた。

もちろんすぐに旅団の仕業であることを見抜き、一度近づいたもののすぐに撤退した。

今はクラピカに『援軍が行くから待て』と言われて、待機している。

(……雨のせいで音も気配もはつきり感じ取れない。けど、下手に近づくと向こうに感づかれちまう……)

悔しいが、実力は向こうが上。

念についても未熟でしかないキルアでは警戒しようにも、警戒しきれない。【円】も使えないし、感じ取れる自信もない。

最大限の警戒がこの場所だったのだ。

(けど、この場所もラミナならすぐにバレそうなんだよな……)

元殺し屋のキルアの考え方や動き方など、同じ殺し屋のラミナなら簡単に思いつくことが出来るだろう。

なので、キルアにとって最善な場所は、ラミナにとっても警戒すべき場所になるのだ。

今にもラミナが隣に現れそうで、心臓のバクバクが止まらない。

ブルルルル、ブルルルル

携帯が鳴り、キルアは携帯を取り出す。

「もしもし」

『あ、キルア君?』

「ああ。あんたは?」

『クラピカの仕事仲間。左の方を見てくれる?』

言われるがままに左を見ると、2, 3個先のビルの屋上に帽子を被った小柄な人、センチツが立っていた。

『ケータイ、切って。すっごい小声で私に何か命令してみて』  
「? 右手上げて」

携帯を切りながら、小声で呟くキルア。  
すると、センリツが右手を上げる。

(おお! すっげー地獄耳。こいつは使えるね)

その後、センリツと合流する。

「よろしく」

「ええ」

センリツは早速廃墟に顔を向けて、耳に集中する。

「……! 足音がするわ。声も聞こえる」

「!」

キルアは目を見開いて、自分でも耳を傾ける。

「……雨音で内容までは無理だけど……。足音からして5, 6人ね。女も混ざってる。こちらとは反対方向に向かっているわね」

「……すげーな。全然聞こえねー」

「そう言う能力だから。さ、急ぎましょ」

「ああ」

2人は急いで、移動を開始する。

街中に入って、センリツ先導の下、旅団を追う。

「……ねえ、あなた……まさか殺し屋さん?」

「? 元だけど。なんで?」

「足音よ。こんなに近くにいてもエステイントだから」

「エ……? ああ……癖になってんだ。音殺して動くの」

「今まで会った人の中で一番静かよ。凄い技術だわ」

「……これくらいの音だったら、どれくらいの距離まで聞こえる?」

「? そうね……。流石にこの雨じゃ50mが限界かも」

「……相手にもこれくらい音を消して動ける奴がいる。殺し屋の女で、俺やクラピカの顔見知り」

「……そう。だから、あなた達は協力してるのね」

「ああ。ちよつとそいつには貸しがあつてさ。クラピカと殺し合いになつてほしくないんだよね」



「そう……。なら、頑張らないとね」

「……ああ」

「っ！ ストップ！」

センリツが突然止まる。

キルアも足を止めて周囲を素早く見渡すも、旅団の姿はない。

目の前は人通りが多い大通りだった。

センリツはすぐに左方向を指差して、

「この道を曲がって、さらに100mくらい先に奴らがいるわ」

「……他の奴の足音と区別つくの？」

「癖があるのよ。それぞれ微妙にね」

「……よし。ちよつとここで待つてよ。上に登って本命がいるか確

認してくる」

キルアは素早くビルの壁をよじ登って、ビルの屋上に上がる。

上がったキルアは双眼鏡を取り出して、覗き込む。

すると、

「いた……！ げっ……!?!」

パクノダの姿を確認したキルアは、その周囲にノブナガとマチの姿

を目にして顔を顰める。

しかし、その中に初めて見る男がいた。

(……こいつがリーダーか……。けど、ラミナがない)

キルアはラミナがないことを確認して、携帯を取り出す。

ゴンに電話を掛ける。

『……キルア?』

「ああ。あの女がいたぜ」

『!』

「だけど仲間と一緒にだ。6人で行動中。チョンマゲにピンク頭もいる

ぜ」

『げっ』

「ただ、ラミナはいない。それとあと1人、俺達が昨日見てない奴が

いる。多分、リーダーだ」

『どんな奴?』

「背中に逆十字の黒いコート着てる。黒髪オールバック、顔は見えない。てかな、隙なさすぎ。正面なんて怖くて回れねえよ」

背中を見ているはずなのに、今にも目が合いそうな気がする。

それなのに、その周囲を更にノブナガ達が囲んでいて、更に隙が無い。

あと数m近づけば、全員がこっちに気づくだろう。

「相当警戒慣れしてるぜ。あいつらが固まっている限り、微塵の隙も出来ねえと思うぜ?」

あの6人相手に、同時に、出来れば1秒、注意を引きつけなければならぬ。

(……逃げることも考えたら……絶望的だな)

姿を見せないようにすればいいのかもしれないが、それでも全員の注意を引けるのかは怪しい。

特にクロロの注意を引き付けるのはかなり困難のように感じた。

すると、電話の相手がクラピカに変わる。

『今、どのあたりだ?』

「モトバビル前コンチネンタル通りを西の方へ歩いている」

『……駅があるな。同じ電車には乗れそうか?』

「状況によるね。混雑していなければ何とか」

『分かった。奴らが電車に乗ったら連絡をくれ』

「了解」

キルアは電話を切って、センリツの所に戻る。

そして、バレないように駅を目指す。

顔がバレていないセンリツにお願いで、旅団と同じ車両に乗ってもらい、キルアは最後尾の車両に乗る。

クラピカにカスツール方面であることを伝え、旅団が降りるまで待つ。

その時、マチは携帯を取り出して、電車に乗ったことをラミナにメールで知らせる。

それをクロロ達は黙ったまま、見つめていた。

クロロはアジトを出る前に、

「ここを出ればラミナへの連絡はメールで、基本はマチがしてくれ。そして、ラミナの名前は一切出すな」

と、厳命していたからである。

すぐにラミナから『特に変化はない』と返信が来た。

マチは携帯を仕舞い、クロロに顔を向けて首を横に振る。

そして、クロロ達はリパ駅で電車を降り、ホテルに近い出口へと向かう。

外へ出て、シズクがホテルの場所を確認していると、

「!! 動いてる」

コルトピはコピーが動き始めたのを感じとる。

「下にゆっくりと動いてる」

「エレベーターだな。出かける気か」

「急ごうぜ、団長」

マチは携帯を取り出して、ラミナに素早くメールを打つ。

「これから全員で捕獲に入る。互いに互いをフォローできる間合いを保て。パクノダ、捕まえたらウボオーの事を聞き出せ」

「了解」

「後はノブナガ、お前の好きにしろ」

ノブナガは鋭い顔で頷く。

そして、クロロ達は一斉に走り出す。

それを離れた所の車内で見ていたクラピカ、ゴン、キルアは目を見開く。

「ホテルの方向だ! 速い!」

「レオリオ! 車で先回りは!?!」

「そろそろラッシュの時間だ! 奴らの方が早いかもしれねえ!」

「くっ!」

「クラピカ!?!」

変装しているクラピカが助手席から飛び出していく。

ゴンも慌てて飛び出して、後を追う。

クロロ達は人混みの上を飛び越え、壁を走って高速で移動する。

「! 2時の方向へ、時速40kmほどで移動中」

「車に乗ったな。マチ」

「了解」

マチがまた携帯を取り出すが、それと同時にメールが届く。

「！」

『ノストラード リスト者 追跡』

「もう動いてる」

「ふっ。流石だな」

ラミナはマチから『コピーが移動開始』とメールを確認して、目に全神経を注ぐ。

5分ほどした時、ホテルすぐ横の路地裏から車が一台出てきて、運転手の顔を見た瞬間、ネオンのボディーガードリストにあつた顔であることを見抜いた。

ラミナは素早くメールを打って、車の追跡を始める。

車を運転しているのはスクワラという褐色肌の男。

ボディーガードの1人で、犬を操る操作系能力者である。

つい先ほどクラピカから旅団が迫っているとの電話があり、犬と

【緋の眼】 だけを持ち出して、車に飛び乗ったのだ。

「ふう……たまんねえぜ。次の仕事が見つかるまでとか思ってたが、とてもじゃねえ！ 今日で最後だ！」

スクワラはプロハンターではなく、ただ犬と恋人を養えるだけの給料が出る仕事だからとボディーガードに就いたのだ。

ただの我儘娘の護衛のはずだったのに、何故か幻影旅団に追われるようなことになっている。

すでに仲間が何人も死んでいる。そんな世界だとは分かっているが、たった3日で半分以下に減れば嫌にもなるだろう。

「くそっ！ ラッシユとかついてねえな！」

車で逃げれば大丈夫だと思っっているが、少しでも早くホテルから離れたかった。

まだ動いてはいるが、少しずつスピードは落ちていつている。

徐々に日が暮れていき、雨足も強まっている。

それがまた不気味で、嫌な予感が強まる。  
そして、それは的中する。

ドオン!!

突如、車のボンネットに何か落ちてきて大きく凹む。衝撃が走り、フロントガラスにヒビが入る。

「うおお!!」

スクワラは悲鳴を上げて、咄嗟にブレーキを踏む。

車が停まった直後、腕がヒビ割れたフロントガラスを突き破ってきて、スクワラの胸倉を掴む。

「ぐう!? がっ!!」

スクワラは振り解く暇もなく、フロントガラスを完全に突き破りながら引っ張り出される。

そのまま持ち上げられる。

「ぐっ……!」

「……ノストラードの人間やな?」

「っ!!」

茶髪のカツラを被ったラミナが右腕一本で、スクワラを持ち上げながら問いかける。

スクワラは両手でラミナの腕を掴むがビクともしない。

スクワラのピンチに犬達が歯を剥き出しにして唸り、飛び掛かろうと構えた瞬間。

犬達の額にスローイングナイフが突き刺さった。

「ギャウン!!」

「ガッ!!」

「や、やめ……!?!」

「もう遅い」

すでに犬達は全滅していた。

スクワラが念使いであることを見抜いていたラミナは、この犬達がただのペットでもないと考えていた。

わざわざ犬を連れ出した以上、操作系能力者であることは想像に難くなかった。

「……………のヤロ……………!!」

「野郎ちやう。……………なあ？ クラピカがどこにおるんか知らん？」

「……………知らねえよ。誰だ？」

「……………ま、そらそうやんな」

ラミナはスクワラを横に放り投げて、道路に落とす。

スクワラは背中から道路に落ちて、素早く立ち上がる。

「ぐっ！ くっ……………！」

「オイ。動くな」

「!!?」

逃げようとしたスクワラの背後から、恐ろしい殺気と共に鋭い声が突き刺さる。

スクワラは顔だけで後ろを向くと、そこにはノブナガ、パクノダ、コルトピが立っていた。

「……………こいつだけか？」

「残念ながら、な」

「ちっ。パク」

「ええ」

パクノダはスクワラの背後に回りながら、右腕を取り関節を極める。

スクワラの左をラミナが、右をコルトピが立ち、正面にノブナガが立つ。

「少しでも動けば、斬る」

「いくつか質問するから、正直に答えて」

「……………！」

「あんたの仲間に鎖を使うクラピカって奴がいるでしょ？ 今どこ？」

「だから、誰だよそいつは!? てめえら誰だ!？」

「ゴギッ！」

「があ!!」

スクワラの右手が容赦なく折られる。

パクノダは涼しい顔で、今度は左腕を掴む。

「質問に答えてね。次は左手を折るわよ」

「それに動くなつて言つたらうが。直立不動で聞かれたことだけに答えろ、ボケが」

「っ……………」

「ウボオーギンはどうしたの？ あんた達が攫つた大男よ」

「あ!? 逃げたよ、そいつは！ その後は知らねえな！」

「他の仲間はどこ？」

「一足先にシマに帰つたよ！ 俺も帰るところだつたんだ！」

「…………嘘はいけないわね」

「本当だつて!! こんな状態でデタラメ言うわけねえだろ!？」

「もう一度聞くわよ。クラピカはどこ？」

「だから知らねえよ！ そんな奴、俺の仲間にはいねえ!!」

「…………最後の質問。あなた、大切な人はいる？」

「…………そんな奴がいたら、こんな仕事してねえよ」

今までの質問とは明らかにトーンが変わつたスクワラ。

それだけでラミナでさえも嘘だと分かったが、パクノダ相手にはもつと酷い結果が待っている。

「…………へえ、エリザつて言うのね、その子。美人ね」

「っ!!」

名前を告げられた瞬間、スクワラは完全に動揺し、目を大きく血走らせてパクノダに振り返る。

「デメエら!! もしもエリザに指一本——」

その瞬間、スクワラの首に一陣の風が走る。

そして、ノブナガがキインと鏢を鳴らして、スクワラの背後に一瞬で移動する。

「触れてみやがれ!! ……………？」

スクワラの首は叫びながら宙に舞い、直後不思議そうな顔して地面に落ちる。

「動くなつたろおが。二度もよお」

ノブナガがつまらなげに言う。

突然の大惨事に周囲で停まっただけで目撃した一般人達は悲鳴を上げる。

しかし、ラミナやノブナガ達は一切気に留めない。

「クロ口達は？」

「俺らの後をつけてる奴らがいてな。そっちの対応をしてる」

「また馬鹿な連中がおったもんやな」

「で？ 情報は引き出せたのか？」

「もちろん。口で説明するのも面倒だから、3人にも記憶を撃ち込むわ」

「撃ち込む？」

ラミナとノブナガが首を傾げると、パクノダは拳銃と3発の弾丸を具現化する。

弾丸を弾倉に装填し、銃口をノブナガに向ける。

「撃つけど、怖いならやめるわよ」

「アホか。早くやれ」

パクノダが挑発するように言うが、ノブナガは特に構えもせず早く撃つように言う。

コルトピとラミナも頷く。

パクノダは笑みを浮かべて、直後3連射してノブナガ達の額に銃弾が直撃する。

僅かに頭が仰け反った3人だが、頭の中に次々と映像と音が浮かび上がっていく。

どこかの屋敷で重り付きの鎖を振り回して銃弾を防いだり、鎖でウボオーギンを縛っていたり、拘束したウボオーギンの顔を殴りつけたり。

様々な光景と声が浮かび上がっては消えていく。

「……おい、ラミナ。こいつか？」

「……ああ」

「なるほど、こりゃあ便利だ……。こんな面してやがったか、クラピカさんよお……！」



ようやく仇の顔が分かったノブナガは、両手を握り締めてこみ上げる怒りを抑え込む。

「てめえの面と名前！ 殺すまで忘れねえぜ!!」

「けど、ウボオーの最期と鎖野郎が今どこにいるのかは分からないね」「やけど、クラピカがこいつに逃げるように伝えとったっちゆうことは、クロロ達の方が本命かもしれないな」

「確かにね。団長に電話するわ」

「うちは一足先にホテルに戻るで。大分騒ぎになってきたしな」「ええ」

ラミナは短刀を具現化して姿を消しながら、移動を開始する。そして、パクノダ達もクロロに電話しながら、歩き出すのであった。

ラミナはホテル前に戻りながら、先ほどの記憶を思い起こしていた。

(右手で鎖を操る能力。それも指ごとに用途が違う感じやったな)

薬指が迎撃用、中指が拘束用と考えたラミナ。

しかし、それでウボオーギンを殺せるとは思えない。

(残りの3本のどれかがトドメ用っちゆうことやとしたら……厄介やなあ)

指と鎖を組み合わせることで、能力を細かく振り分ける事を可能にしている。

基本的に具現化系でラミナなど複数の能力を持っている者は、能力によって具現化するモノが変わることが多い。

そのため、具現化したモノによってオーラの消費量や能力の内容や精度はバラつきが大きい。

しかし、クラピカはそれを『指』に主体を置くことで、同じ鎖でもそれぞれ独立したモノとして具現化することに成功したのだ。

それによって、鎖それぞれに能力を設定し、制約も細かく定めることが出来る。

(どれか一本だけに命がけの誓約と制約を決めれば、確かにウボオー相手でも一発逆転は全然ある……！ しかも旅団はクラピカにとつ

て不？戴天の仇。その力は計り知れん。精神面では最大限のパフォーマンスを発揮できる状態になる、か)

ラミナは再びホテル前のビルに戻る。

すでにクロロ達が入っているはずだが、流石にここからは見えなかった。

(なんも連絡ないっちゆうことは、クラピカやなかったんかな。残りのノストラードファミリーか?)

そう考えていたラミナ。

しかし、ホテルの中では、

「ぐっ……!! がっ……!?!」

「キルア……!!」

「騒げばホントに殺すよ」

「っ! ぐ……!!」

「いいんですか? 団長」

「……殺さなければな」

キルアとゴンが、再びマチに首(キルアのみ)と両手を締め付けられていた。

## #48 イツシユン×ノ×クラヤミ

スクワラが車に乗り、ラミナがそれを追いかけて始めた頃。

クロロ達は引き続き、猛スピードでホテルへと目指していた。

しかし、

「……尾けられてるな」

と、クロロが背後の気配に気づいた。

「!! いつから!?!」

「やば。追うのに夢中で気づかなかった」

「ちっ!」

マチとシズクが目を見開いて、ノブナガが鞆袋から刀を取り出す。

クロロは素早く指示を出す。

「ノブナガ、パクノダ、コルトピ。前を追え!」

「了解!」

ノブナガ達がスピードを上げた直後、クロロ、マチ、シズクは背後を振り返りながら警戒態勢を取る。

直後、2つの人影が物陰に隠れるのが見えた。

「見えたか?」

「姿は見えなかった。路地に1人」

「ゴミ箱の後ろに1人」

「OK。【凝】を怠るな」

「了解」

シズクは【デメちゃん】を具現化し、マチも両手に念糸を生み出しながら頷く。

そして、一切の油断なく、人影が隠れた場所を見据える。

完全に気配を捉えられたことを、ゴミ箱の裏に隠れているゴンと路地裏に隠れたクラピカは感じ取った。

クラピカは右手に鎖を具現化して、完全にこの場で戦闘を行う構えを取る。

しかし、ゴンはその姿を見て、内心慌てる。

（駄目だ、クラピカ……! こんな警戒された状況で、しかもこんな人

通りが多いところで3人相手に勝ち目はない!!)

3人同時に縛れるわけもないし、能力も分らない。

1人でも逃せば、ゴンではクラピカを守り切れない。

その時、クラピカがいる路地の奥に人影が見えた。

それが見えた瞬間、ゴンはゴミ箱裏から飛び出して、クロロ達の前に出て両手を上げる。

「ごめんなさい！ もう追いかけないから許してください！」

ゴンの姿にシズクは首を傾げ、マチは目を細める。

「？ またこの子？」

「つてことは……。出てきな、ゾルディックのガキ」

マチは路地を睨みつけながら言う。

すると、キルアが顔を顰めて路地から現れる。

「ほう……。こいつらがあいつの弟子か」

「……。どうする、団長？ 殺す？」

「でも、この子達、鎖野郎の仲間なんだよね？」

「！」

クロロは興味津々にゴン達を見つめる。

マチは僅かに殺気を漏らしながらクロロに訊ね、シズクが首を傾げる。

クラピカの仲間と言う言葉に、ゴンとキルアは一瞬目を見開く。

(やっば、俺達のことバレてるか……！)

(マズイ……。更に警戒引き上げただけでも……)

キルアとゴンは悔し気に顔を歪め、クロロはそれを見逃さなかった。

「捕まえろ。まだ殺すな」

「……。ここで殺した方がいいと思うけど」

「鎖野郎への人質になるかもしれない。まあ、ならなかったらその時は殺せばいい。それと、逃げようとすれば殺していい」

「……。了解」

マチは顔を顰めたまま、2人の両手を縛る。

クロロは携帯を取り出して、電話を掛ける。

『もしもし』

「フィックス。俺だ。ベーチタクルホテルまで来てくれ」

『了解』

電話を切ったクロロはマチ達に顔を向ける。

「ホテルでフィックスやノブナガ達を待つ。鎖野郎や他の仲間もいるかもしれない。警戒を怠るな」

「了解」

歩き始めたクロロに、ゴンが唐突に問いかける。

「ねえ、1つ聞きたいんだけど……」

「ん？」

「何故、自分達と関わりのない人を殺せるの？」

直後、雷が轟いて、稲光がクロロを照らす。

その照らされた顔があまりにも無機質だったため、ゴンは一瞬ゾクツと怖気が走る。

「……ふ。白旗を上げた割に敵意満々だな。……何故だろうな？ 関係ないからじゃないか？」

クロロは顎に手を当てて、急に1人で考え始める。

「改めて、問われると答え難いものだな。動機の言語化か……。あまり好きじゃないしな。しかし、案外……いや、やはりと言うべきか。自分を掴む鍵はそこにあるか……」

ゴンに明確に答える事もなく、自問自答するクロロにゴンとキルアはやはり普通な奴ではないと理解する。

そして、このタイミングを利用して、キルアはもう1つ問いかけた。

「……ラミナは今、どこにいるんだ？」

「お前には関係ない」

「ぐっ……」

クロロではなく、マチが即答する。

全く取り付く島もない答えに顔を顰めるが、クロロは小さく笑みを浮かべる。

「婚約者が気になるのか？」

「なっ!? ちげえよ!!」

「婚約者!？」

クロロの言葉にキルアは慌てて否定し、ゴンは状況も忘れて驚く。キルアは、よりによって何故このタイミングで!と憤りを覚えるが、元はと言えば言わなかった自分も悪いのでクロロを睨みつけるだけしか出来なかった。

「なんだ? 言っていないなかったのか?」

「……俺達は認めてない。親父達が勝手に言ってるだけだ」

「ふっ、なるほどな」

「……で?」

「さあな。昨日の夜から会ってない。ヒソカとの戦いで大分痛めつけられたらしい」

「ふうん……ぐえっ!？」

肩を疎めるクロロの表情を、キルアは鋭く見つめて真偽を見極めようとしたが、首に念糸が巻き付けられて締め付けられる。

「とつとと歩きな」

「ぐ……!」

「キルア!」

「マチ」

「殺さないよ。けど、無駄なおしやべりする必要もないだろ?」

「……ふっ。それもそうだな」

クロロ達は歩く速度を上げる。

キルアは息が出来ないほどではないので、息苦しきを感じながらもなんとか歩く。

首を絞め付けられたのと危機的状況のおかげか、ゴンはキルアの婚約者話は頭から吹き飛んでいた。

その100mほど後ろから、クラピカとセンリツは追跡を継続していた。

「この距離が限界ね。奴らの警戒網に引っかかるわ」

「……くそっ!」

クラピカが苛立ちを露わにする。

それを見たセンリツは言い聞かせるように声を掛ける。

「幸い2人は今すぐ殺されないみたい。焦りは禁物よ、クラピカ!」  
「分かってる!」

「分かってないわよ! あなたの無謀な追跡のせいで2人がまた危険な目に遭ってるのよ!」

センリツは苛立ちを抑えられないクラピカを叱責する。

「どうして2人が自ら捕まりに行ったのか分からないの? あなたがここで見つかったら、もう誰も旅団を止められないからよ!」

その言葉にクラピカは深呼吸して、頭を冷静にしようとする。

事実、ゴンとキルアはまだ【発】を完成させていない。

そもそも旅団と因縁があるわけでもない。

なのに、クラピカやラミナがいるから、命を懸けてくれている。

その事実をクラピカの一時の感情で無意味にするところだったのだ。

「……すまない」

素直に謝ったクラピカに、センリツはホツとする。

しかし、依然状況は最悪に近いのは変わらない。

(婚約者って話は、今はしない方がいいわね)

センリツ自身も全員の関係を理解しているわけではないので、どこまで伝えていいのか判断できないのもある。

だが、キルアやゴンの反応からすると、間違いなく今言うことではなさそうだとセンリツは考えた。

「奴らはビーチタクルホテルに向かうみたいね。スクワラはどうなったの?」

「携帯に出ない。どうやらホテルに置き忘れたみたいだな」

「そう……。どうするの? ホテルに入られたら、流石に奴らの隙を突くのは不可能に近いわよ」

「……先回りする。準備をしないといけない」

「準備?」

「ゴンが考え付いた作戦だ」

クラピカは携帯を取り出して、電話を掛ける。

『クラピカか!? 無事か!?』

「レオリオ。今どこだ？」

『もうすぐホテルだ！ そっちは？』

「……すまない。奴らに気づかれて、ゴンとキルアが旅団に捕まった」  
『はあ!?!』

「奴らはホテルに向かっている。そこで奴らを待ち構える」

『待ち構えるって……』

「レオリオはホテルに着いたら、準備してほしいものがある！」

『用意してほしいもの？』

「ホテルスタッフの制服と、発電室の場所の確認だ」

「何をやる気なの？」

小走りでホテルに向かいながら、指示を出すクラピカにセンリツは首を傾げる。

「確かに奴らの警戒を突破するのは難しい。しかし、いくら奴らでもいきなり視界が闇に覆われれば、対応が遅れるはずだ！」

「視界を闇に？ ……まさか……!?!」

『なるほどな。確かに被害を最小限にして、連中全員を同時に注意を逸らすにはそれがベストか……』

「問題はタイミングだ。ゴンとキルアにどうにかして伝えなければならぬ」

未だ状況は流動的だ。

2人に知らせずに作戦を決行して旅団の誰かを拉致しても、それは意味はない。

暗闇に乗じて2人も脱出できるようにしなければならない。

『けど、旅団相手に確実に逃げれんのかよ?』

「……ターゲットを変える」

「え？」

「2人が逃げ切れなかった場合の人質をこちらにも手に入れる」

『人質って言ったって……』

「旅団の頭を狙う」

『!?!』

「いくら奴らとて、リーダーが攫われればゴン達をすぐには殺せない」



『けど、それじゃあ結局旅団に返すだけじゃねえか』

「【律する小指の鎖】で『念の使用』と『団員との会話・接触』を封じる。そうすれば、奴らはもう一緒にはいられなくなる」

『……なるほどな』

旅団を壊滅することは出来ないが、今まで通りの活動も出来なくなる。

どれだけ効果があるかは不明だが、それでもしばらく活動に支障は出るはずだと考える。

「そして、ゴン達が上手く脱出すれば……ただ始末すればいい」

向こうに人質がいなくなれば、クラピカは遠慮する理由はない。

頭を潰して、同じく活動に支障が出た残りの団員を一網打尽にすればいい。

クロロを捕えられれば、最低でも最高でも旅団の動きを封じることが出来る。

ならば、この作戦に全力を注ぐべきだとクラピカは覚悟を決めた。

その時、センリツがクラピカを止める。

「待って！」

センリツは耳に手を当てる。

それにクラピカは通話を止める。

「……あなたがバレたみたい。ホテルのロビーで待ち合わせをするみたいよ」

「ロビーならば、逃げ道も確保しやすいし、紛れ込みやすい。後は時間だけだな」

『分かった。とりあえず、準備するぜ！』

「頼む。それとレオリオ。お前がゴン達にメッセージを伝えてくれ」

『お、俺が!?!』

「私とセンリツはバレた可能性が高い。お前がマフィアの真似でもすれば、まだ誤魔化せる可能性がある」

『けど、俺のことだってラミナからバレてる可能性はあるぜ?』

「かもしれないが、可能性は低い。名前は分かっても、顔までは全員知ってることはないはずだ。後は……ラミナがないこととパクノダに

記憶を見せていないことを祈るだけだ」

『博打にもほどがあんだろ!』

「元々すでに博打だ。ゴン達が捕まった以上、危険は覚悟しろ」

『だよな……。時間は?』

クラピカは時計を確認する。

現在は18時45分。

「……7時ジャストだ」

『分かった。急げよ!』

通話を切り、クラピカ達は足を速める。

作戦の準備を整えるために。

ホテルに到着したクロロ達は、正面入り口すぐ前の柱で待機する  
とにした。

「ここで待つ」

マチはゴンとキルアを縛った念糸を握ったまま、柱を背に立つ。

クロロはその隣に、クロロを挟むようにシズクが立つ。そして、ホ  
テルに入ってくる者、奥から現れる者に注意を払う。

常に死角を減らすように視線を動かしていくクロロ達の気配に、キ  
ルアは顔を顰める。

(隙は一切なし。今から入ってくる奴、近づいてくる奴は最優先で警  
戒されちまう。それに……。もし作戦を決行しても、この首の糸をどう  
にかしないと……。!)

両手は関節を外せば、逃げられる。しかし、首はどうにも出来ない。  
(ゴンは両手の関節は外すなんて出来ない。どうにかして、この糸を  
解かないと……。!)

しかし、その手段が思いつかない。

今、暴れたら間違いなく何も出来ずに殺される。

一番逃げられる可能性がある作戦は浮かんでいるが、それを伝えら  
れていない。ゴンとクラピカがどのような会話をしたのかも聞けて  
いない。

クラピカ達が同じ作戦を考えられていることと、すでに準備を終え

ていることを願うしかなかった。

その時、

「何時だと思ってたんだ、てめえ!!」

ロビーに怒鳴り声が響き渡る。

目を向けると、待合のソファに座っている男が新聞を叩きつけながら携帯を耳に当てていた。

「バーカ! ベイロークじゃねえよ、ビーチタクルホテルだよ!!」

(レオリオ!?)

ゴンとキルアは目を見開いて、声を出さないように必死に抑える。すると、レオリオがクロロ達に顔を向ける。

「ん? 何見てんだコラ、あ? 勝負すつか? お?」

「……消します?」

「ほつとけ。目を合わすな」

シズクがクロロに訊ねるが、クロロは無視することを決めた。

それはラミナからレオリオのことまでは伝わっていないということを示していた。

「つたく、間抜けな手下を持ったおかげで、俺のお先『真っ暗』だぜ!

いいか! 『目えつぶる』のは今回だけだ! 次、ハマしたら分かつ

てんな! よく聞けよ、『7時きっかり』だ!! それまでにホテルに来

い!! 1秒でも遅れたら速攻クビだ!!」

レオリオの言葉を聞いたゴン達は、それがメッセージだと気づく。

そして、レオリオは苛立ちを浮かべる演技を続けて、ラジオをつけて再び新聞を広げて顔を隠す。

ゴンとキルアはそれぞれに小さく笑みを浮かべる。

(クラピカもこっちに気づいてる! 7時決行!)

(こいつらだつて突然停電すれば、闇に慣れるまで時間がかかるはず! 後の問題は、俺達がどうやって逃げ出すか……)

キルアはチラリと背後にいるマチに目を向ける。

やはりマチに隙は見えず、そう簡単に逃げ出せそうにはない。

(……こいつがそう簡単に糸を緩めるとは思えない。生半可な攻撃じゃ殺されるだけだ。暗闇になった一瞬で……殺るしかない……)

自分とマチとの実力差を客観的に判断したキルア。  
しかし、それは、

(……俺自身がラミナの仇になる……)

ラミナをどうにか止めたくてクラピカに協力したはずなのに。

このままでは完全にラミナと決別して、敵対することになってしま  
う。

ただでさえマチは旅団の中で、ラミナと最も親しい間柄だ。

間違いないここで殺せば、決定打となる。

決行時間まで、あと5分。

あまり考える時間はない。

(……最優先は……クラピカがリーダーかパクノダを捕獲すること  
……。いや、リーダーを捕縛すること。クラピカなら、それを考えて  
いるはず。……なら、俺達が取るべき行動は……)

キルアは歯を食いしばって、ある決断をする。

その時、ホテルの正面入り口からノブナガ達が現れる。

ゴンとキルアはノブナガを見て、顔を顰める。

ノブナガもゴン達を見つけて、僅かに目を見開く。

「お!! なんだオメエら。まあ捕まったのか?」

「懲りない子達ね」

パクノダは呆れながら、クロロ達に合流する。

「それとも入団する気になったのか?」

「ふん。あんた達の——」

「まあ、お前らがクラピカの仲間だって分かった以上、そんな気はねえ  
がな」

「っ!!」

ノブナガの表情が鋭くなり、キルアとゴンは喉元に刃を突きつけら  
れた感覚に襲われた。

一瞬にして息苦しくなり、キルアとゴンは冷や汗が流れ出す。

「言え。クラピカはどこだ?」

「知らないよ。ハンター試験から会えてないし、ヨークシンにいるか  
どうかも知らないんだ」

「ウボオーを捕えたのは奴だ。ノストラードファミリーの奴からパクノダが聞き出したから間違いねえ。そいつはクラピカから俺達が近づいてることを知らされて逃げ出した。そして、このタイミングでお前らが現れた。偶然にしちゃあ出来過ぎてる」

(っ?! くそ……!)

キルアは歯軋りをし、ゴンも顔を顰める。  
最悪のバレ方だ。

作戦決行直前で、クラピカとの協力体制が疑われるのはマズイ。

「……パク、この2人を調べろ」

キルアとゴンの表情の変化を、クロロはやはり見逃さなかった。

「OK。何を聞く?」

「何を隠している?」かだ」

クロロのその言葉にキルアは再び歯を食いしぼる。

情報を引き出すには最善の問い方だった。

特にこの場合、間違いなくクラピカの事や作戦のことが頭に浮かんでしまう。

(くそっ……! どうすればいい!? あと2分弱……! それだけの時間が稼げれば……!)

パクノダがキルア達に手を伸ばす。

なので、キルアは何とか足掻いて時間を稼ぐ。

「……無駄だね」

キルアはパクノダと目を合わせて、はつきりと言い放つ。

「俺達だって捕まったのは予定外なんだ。今、クラピカが何をしてるかなんて知るわけないよ」

キルアはあえてクラピカとの関りを口にする。

ゴンは目を見開いて、キルアを見る。

「確かに俺達はクラピカに会ったさ。ラミナのこともあったしね。けど、物別れだよ。俺達じゃ旅団に敵うわけない、力にならないってね。実際、俺達はまだ【発】も完成させてないし」

ゴンもキルアがわざと事実も織り交ぜて、時間を稼いでいることを理解し、すぐに追隨する。

「けど、俺達はラミナとクラピカを戦わせたくなかったんだ。だから、先に俺達で捕まえようってキルアと決めただけだよ」

「そう……。でも、あんた達の言い分なんてどうでもいいの」  
パクノダはゴンとキルアの首を掴む。

「っ!!」

「私が引き出すのはあんた達の創り出すイメージじゃなくて、原記憶って言うものよ。記憶の底にある最も純粋な記憶なの」

レオリオはその様子を顔を食いしばって、新聞の陰から見つめていた。

19時まで、まだ1分半はある。

このままでは、記憶が読まれて作戦がバレてしまう。

どうすべきかと考えていた時、

ガッツシャアアアン!!!

突如、正面入り口のガラスが割れた。

『!!?』

全員が目を向ける。

そこには、

「ぐっ！ んのっ！ バケモンが……!!」

「くくく♥ 酷いなあ♠」

ククリ刀とハルバートを握っているラミナが床を転がりながら顔を顰め、ラミナを追いかけてヒソカがトランプを左手に構えて不気味な笑みを浮かべて迫っていた。

ラミナは起き上がりながら背後に跳び下がり、ヒソカはそれを追う。

「ラミナ！」

「ヒソカ!! つのヤロオ!!」

ゴンとノブナガが叫ぶ。

ラミナとヒソカは空中で目だけ向ける。

「っ!? キルアにゴン……!!?」

「おやおや ◆ 面白い組み合わせだねえ ♥」

「デメエ……!」

「待て、ノブナガ!」

「っ!?! 団長!?!」

「奴は鎖野郎と手を組んでいた。鎖野郎が来る可能性がある。お前と俺でコルトピ、シズク、パクを守る。マチはそいつらの糸に集中しろ。ヒソカはラミナに任せる」

「ちい!」

「全員、警戒しろ」

クロロはクラピカを警戒して、ラミナの援護を止める。

それにゴンとキルアは目を見開くが、動けないのでラミナを助けに行けない。

マチは顔を顰めて、クロロの指示を無視しようとするが、

「いらん!! こいつはうちだけでええ!!」

「っ!!」

マチの動きを悟ったラミナが鋭く叫ぶ。

マチは動きを止めて、歯軋りする。

ヒソカはクロロに目を向けて、口を吊り上げる。

「させるかい!!」

ラミナがククリ刀を消し、レイピアを具現化して素早く突き出す。

ヒソカは体を捻って剣筋から外れて、攻撃を躲す。

そして、ヒソカは右拳を構える。

ラミナはヒソカの攻撃に備えながら、床に着地する。

その後、

バツンツ!!

「!?!」

突如、ラミナ達を暗闇が包み込んだのだった。

## #49 ソレゾレ×ノ×ヒトジチ

18時54分。

ラミナはホテル向かいのビルに戻って、再び監視を続けようとしていた。

ビルの屋上に上がり、窓上の出っ張りに戻ろうとした時、

「っ!!?」

背後から殺気を感じ、風が斬る音が聞こえ、確認もせずに横に跳ぶ。短刀を消して、右手を地面について後ろを振り返る。

先ほどまでラミナがいた場所に突き刺さっていたのは、トランプだった。

「っ！ ヒソカ……!」

「くくっ！ やあ ♣ 昨日ぶり♥」

ラミナは隣のビルの屋上に笑みを浮かべて立っているヒソカを見て、顔を顰める。

(このタイミングで！ つ!?)

ラミナはヒソカの姿を改めて見て、目を見開く。

斬り落としたはずのヒソカの右腕が元通りになっていたのだ。

(一晩で回復した!? ヨークシンにそんな能力がある奴が!?)

「ああ……◆ この腕かい？ くくく ♣ どういう手品でしょう？」

ヒソカはプラプラと右手を振って、見せびらかす。

ラミナはそれを見て、逆に頭が冷える。右手にブロードソード、左手にハルバートを具現化する。

「手品でも何でもええわ。また斬り落とせばええだけのことやでな」

「……やっぱり君はこの程度じゃ動揺してくれないか ♣」

「で？ お前の狙いはクロロちやうんか？」

「そうだけどね ♣ アジトの近くで見つけた時、やっぱり周りに人が多くてね ♣ だから、先に君に昨日のお礼をしようと思ってさ♥」

「……クラピカと組んだるわけやないんか？」

「彼とはあくまで情報交換を基本としたビジネスパートナー◆ けど、こんな状況だろ？ 伝えられる情報なんてほとんどなくなっ



ちやつてさ♠」

ヒソカは嘘くさい笑みを浮かべたまま、肩を竦める。

ラミナは僅かに顔を顰めて、武器を構える。

「退く気はないんやな？」

「もちろん♥」

「なら、うちはお前をここで殺すだけやつ!!」

力強く言い放ちながら、ハルバートを振り上げてヒソカに斬りかかるラミナ。

ヒソカも左手にトランプを広げて、投げつける。

ラミナはブロードソードを高速で振って、トランプを斬り落とす。

(やはり、あの剣は斬撃速度を上げる能力か……♣　じゃあ、トランプはあまり効果はないな♠　そして、あの槍もオーラを弾く鎧を生み出す奴か……◆)

近づけば高速の斬撃に襲われ、「伸縮自在の愛」を使ってもオーラを弾かれてしまう。

槍は弾かれないことは分かっているが、それに対処していないとは思えない。

ヒソカにとって非常にやり辛い状況だった。

(けど……♣)

ヒソカはラミナから距離を取りながら、右腕を構える。

「だからこそ、面白そう♥」

そう言いながら右腕を振り抜く。

すると、右手が勢いよく伸びて、ラミナに迫る。

「なっ!?　ちい!」

ラミナは一瞬目を見開くが、すぐにブロードソードを振って右腕を斬り払おうとする。

しかし、刃が当たった瞬間、右腕がグニヤリと形を変えて刃に張り付いた。

「っ!　バンジーか!」

「正解♥」

「くっ!」

ラミナはブロードソードを解除して、距離を取る。

〔伸縮自在の愛〕で手を形作って、〔薄っぺらな嘘〕で肌質に変化させとったんか！ くそっ！ 厄介なやつちゃん！〕

ラミナが歯を食いしばると、ヒソカはラミナに勢いよく迫ってくる。

ラミナはハルバートを振り回して、搦り上げるように振り上げることが、ヒソカが右腕をハルバートに伸ばして掴もうとしていた。

「っ！」

ラミナはハルバートを止めて、無理矢理右蹴りに切り替える。

しかし、ヒソカは左腕で防ぎ、腰を捻って左脚を突き刺すようにラミナの腹部を狙う。

ラミナは右腕で蹴りを防ぐも、堪え切れずに後ろに吹き飛ばされる。

「ぐっ！」

その時、ハルバートがラミナの左手から引き抜かれる。

ヒソカはあのまま右手でハルバートを掴んでいたのだ。

「！ くそっ！！」

ラミナはハルバートを消して、下に目を向ける。

運よく車の通行がなく、ラミナは道路に着地して、すぐさま跳び上がる。

ホテル側に移動しながら、ラミナは薙刀を具現化する。

（！ 初めて見る武器！）

ヒソカは初見の武器に警戒を強めながら、ラミナに攻め寄る。

ラミナが薙刀を振り回す。

すると、刃に触れた雨粒が、弾丸のようにヒソカに飛び迫ってきた。

ヒソカは目を見開いて、体を捻って躲す。

弾丸となった雨粒はそのまま道路を横断し、ビルの壁や窓に穴を空ける。

「ふうっ！！」

歩道に下り立ったラミナは、再び素早く薙刀を振り回す。

すると、雨粒や水溜まりがうねり上がり、刃に水を纏わせていく。

（水を操る能力!!）

「乱弁天」  
みだれべんてん

薙刀を横に振り抜くと、サッカーボール大の水弾が5、6個、ヒソカに飛び迫る。

ヒソカは右腕の【伸縮自在の愛】を横に伸ばし、すぐに縮めて躲す。ラミナはククリ刀を具現化して、周囲に目を向ける。通行人の何人かがラミナ達の戦いに目を向け始めていた。

（これ以上暴れると人目が集まり過ぎるか……!）

すぐ背後のホテルにはクロコ達がいる。

下手に騒ぎを集めると、外に出辛くなりかねない。

場所を移そうと移動しようとした時、右足が地面に貼り付いたように離れなかった。

「!? バン——!?!」

【伸縮自在の愛】は足からでも飛ばせる♠

右腕の【伸縮自在の愛】を堂々と晒して伸ばした時に、左足先から【隠】で見えなくした【伸縮自在の愛】をラミナの右足に飛ばしていたのだ。

そして、ガムに変えて地面にくっつけ、

「縮め♥」

ヒソカと繋がっているオーラを一気に縮めて、ラミナに跳び迫る。

「くっ!!」

ラミナは薙刀を消して、ハルバートを具現化する。

能力を発動しようとした時、ラミナの右足のガムが解除されて、右足が引っ張られる。地面が雨で濡れていたせいで左足が滑り、踏ん張り切れずにバランスを崩す。

そこにヒソカの左脚がラミナの腹部に突き刺さり、ラミナはくの字に背後に吹き飛ぶ。

「ぐおー」

ヒソカはその隙を逃さずに、転がるラミナの背中に【伸縮自在の愛】を伸ばして貼り付けて、反対側を思いっきり飛ばしてホテルの入り口に貼り付ける。

そして、すぐさま発動し、ラミナが体勢を立て直す前にゴムを縮める。

「ぐっ!？」

ラミナは【不屈の要塞】を発動しようとするが、その前にホテルのガラス戸を突き破り、ラミナはホテルに飛び込む。

ヒソカもすぐさま追いかけて、ホテルの中に入り、ラミナを追いかける。

「ぐっ！ んのっ！ バケモンが……!!」

「くくく♥ 酷いなあ♠」

ラミナはすぐに起き上がって背後に跳び上がり、ヒソカもトランプを左手に構えながら跳ぶ。

「ラミナ！」

「ヒソカ!! つのヤロオ!!」

そこに声が聞こえてきて、2人は目だけを声が出た方向に向ける。

そこには何故かゴンとキルアがマチにまた縛られ、パクノダに首を掴まれていた。

「っ!? キルアにゴン……!？」

「おやおや◆ 面白い組み合わせだねえ♥」

ノブナガが飛び出そうとしていたが、クロロがそれを止める。

しかし、マチが動こうとしていたので、

「いらん!! こいつはうちだけでええ!!」

「っ!!」

マチが動けばキルアとゴンも動くに違いない。

更に場が混乱すれば、ヒソカの思うつぼだとラミナは考えた。

しかし、ヒソカがクロロに目を向けて、口を吊り上げる。

それにクロロにちよっかいを出して、マチ達を無理矢理動かそうとしているとラミナは見抜いた。

「させるかい!!」

ラミナはククリ刀を消して、レイピアを具現化して、素早く突き出す。

ヒソカは体を捻って剣筋から外れて、攻撃を躲す。

そして、ヒソカは右拳を構える。

(マズイ! 【伸縮自在の愛】をクロロに飛ばす気か!)

ラミナは床に着地して、クロロの前に移動しようとした時、

バツンツ!!

『!!?』

ホテルのロビー内の電気が全て消え、視界が闇に包まれる。

(なあ!? このタイミングで停電?! このっ!)

ラミナは一瞬驚いて動きを止めるも、すぐに【円】を発動する。

そこで感じ取ったのは、

(!!? クロロ!?)

クロロが物凄いスピードで離れていく。

その先にもこの闇の中を迷わずに走り抜けていく者が3人。

(これは……まさかクラピカ!? それにレオリオもか!? つ!! いかん!!)

クラピカとレオリオの存在に驚いていると、ヒソカがマチ達に向かって攻めかかろうとしていた。

ラミナは跳び上がりながら、ヒソカの頭を狙ってレイピアを突き出す。

すると、ヒソカは頭を屈めて【啄木鳥の啄ばみ】を躲した。

「っ!」

(しもた! 【円】と殺気……!)

しかし、それだけではなかった。

「縮め♥」

「っ!」

ラミナは勢いよく胸元から引つ張り上げられる。

「ゴン達に驚いてた時に付けといた♠」

「ぐっ! 『起動せよ!』」

ラミナはすぐに【不屈の要塞】を発動して、オーラを弾く。しかし、すでにラミナの体は浮かんでおり、ヒソカはラミナの目の前に迫って

いた。

ヒソカは左拳を勢いよく振り抜き、ラミナは左脚を振り上げる。  
ガイイン!!

ヒソカの拳はラミナの左脇腹に叩き込まれて、鎧を凹ませる。

そして、ラミナの左脚はヒソカの右頬に叩き込まれる。

「ぐう!!」

「っ!!」

ラミナは後ろに吹き飛ばされながら、武器と鎧を消す。

ヒソカもホテルの入り口側に吹き飛ばされていった。

ラミナはマチ達の真上を越えて、クロロ達がいた柱の隣の柱に背中から激突する。

「ぐお……!!」

ラミナはそのまま床に崩れ落ちる。

(ぐ……!! くっそ……! またアバラか……!)

脇腹の痛みと叩きつけられた衝撃から立ち直るのに、時間がかかるラミナ。

だが、いまはそれどころではない。【円】を全力で発動して、ヒソカやクラピカ達の動きを追う。

しかし、クラピカ達どころかヒソカの存在も感じ取れなかった。

(ヒソカもおらんやと?)

ラミナは脇腹を押さえながら立ち上がり、【円】に集中する。

しかし、やはりヒソカの気配もなく、クラピカ達もいない。

(くそっ! この停電はクラピカか! 嫌らしいこと考えよるやないか! ……それにしても……)

そろそろ目が慣れてきたので、ノブナガ達の元に向かう。

キルアとゴンは何故か逃げずに、その場に留まっていた。キルアは両手を糸から抜け出していたのに、何故か誰も攻撃をしていなかったのだ。

ラミナの【円】はもちろんマチやキルア達の動きも感じていた。

しかし、何故かキルアとゴンはほぼ動かずに、それ以上逃げる素振りを見せなかったのだ。

「ラミナ、大丈夫？」

「おう。ただ――」

「団長がいねえ。どこ行ったか分かるか？」

「……クラピカに攫われた。停電はあいつの作戦や。ヒソカもグルやったんかもしれん」

『!!』

ラミナの言葉にマチやノブナガ達は目を見開く。

ノブナガが詰め寄ろうとした時、カランと足で何かを蹴る。

「あ？」

目を向けると、そこにあつたのは紙が巻かれているナイフだった。

ノブナガが拾い上げて紙を広げ、ライターで明かりを灯す。

「……パクノダ。お前にだ」

中身を読んだノブナガはパクノダに紙を渡す。

そこには『2人の記憶。話せば殺す』と書かれていた。

パクノダは紙の記憶を呼んで、クラピカがすぐ近くのホテルの受付に変装していたことを読み取った。

「っ！ ホテルの受付に……！」

「とりあえず、パクノダ。お前はこれから一言も話すな」

ノブナガが指示を出し、パクノダも頷く。

ラミナは僅かに息を乱しながらも、必死にこの後のクラピカの行動を予測する。

(ゴンとキルアをこのままにはしとかんはず。なら……クロロとの人質交換。その場合、一番クラピカが警戒するんはパク姉、か。パク姉を交渉相手に指定して、クロロの命を盾に残りの団員の行動を縛るはず……。うちがおるんはさっきのでバレた。うちが姿を隠せるんはヒソカから聞いた可能性が高い。だから、うちや団員が余計な動きをせんようにさせたいはず……)

ラミナはポケットから紙を取り出して、パクノダのポケットに突っ込む。

パクノダが訝しむが、ラミナは首を横に振って口に人差し指を立てる。

パクノダは意味が分からなかったが頷いて、今は考えないようにする。

ラミナはそのまま柱にもたれかかる。

「マチ。お前は糸に集中しろ。俺とシズクでこいつらを押さえる。メッセージを残した以上、連絡があるはずだ。こいつらは大切な人質だ。死守するぜ」

「了解」

「追いかけてえが、ヒソカまでいる状況じゃラミナを1人で行かすわけにもいかねえし、こいつらも逃がすわけにもいかねえ。全力で警戒しながら、フィリンクス達を待つ。ラミナも出来る限り、体を休めろ」

「……了解や」

「どこかやられたの?」

「最後にまたアバラをやられた。昨日の分も合わさって、ちよいとダメージがデカかった」

ラミナは血混じりの唾を吐いて、床に座る。

そして、ゴンとキルアに目を向ける。

「お前ら、なんで逃げんかったんや?」

「……お前とヒソカのせいで、逃げようにも逃げる隙が見つけられなかったんだよ。この首の糸もあつたし……」

キルアは盛大に顔を顰めて、言い訳をする。

「……首の糸やったら暗闇に目が慣れてなかったマチ姉を倒せば、外せた可能性があつた。お前がそれに気づかんかったとでも?」

「……言つたろ? お前とヒソカの乱入のせいで隙を見つけられなかったんだよ」

「……ふうん」

ラミナは事実ではないと見抜いていたが、それ以上追及はしなかった。

gonはキルアとラミナを心配そうに交互に見る。

gonは暗闇になる直前に、ヒソカとラミナが気になったがちやんと目を閉じていたのだ。

そして、目を開けて、問題なく動けることを確認して、パクノダを



攻撃しようとした時、キルアがゴンの腕を掴んできたのだ。

ゴンは驚いて、キルアに顔を向けた。

キルアは下唇を噛んで俯いたまま、首を横に振ったのだ。

それはつまり、逃げようとするなということだった。

ゴンは訳が分からなかったが、キルアの雰囲気と時間が経過してしまっただけから、大人しくすることにしたのだった。

電気がつき、従業員が慌てて動き出す。

ラミナはカツラを脱ぎ捨てて、近くの生垣に放り投げる。

少しでも入り口から飛び込んできたのが、自分であるとバレないようにするためだ。

運が良いことに、従業員や周囲の客は、髪色が変わり武器を持っていないラミナを見ても何も言わなかった。

(今日はまだ土曜日……。占いの2つ目は来週の話やけど……。やっぱり占いを元に行動を決めたからズレが生じて来るとるんか?)

しかし、今の状況が非常に2つ目、3つ目の詩に近づいてきている。外では未だに雨が降り、雷が鳴っている。

(……暗くて……僅かに明るい日……)

外を見ながら、ラミナは占いを思い出す。

そして、ゴンとキルアに目を向ける。

(家族と友の間で揺れ動く……。クロロとキルア達の人質交換……。つちゆうことなら、じっくりくる……)

占いの内容と現在の状況を照らし合わせていく。

しかし、そうなると思われる問題が浮かび上がる。

(パク姉もうちと同じ日……。つまり、パク姉の占いも今の状況に係しとるはず。……。パク姉の『死神』はキルアとゴン、か)

つまり、人質を抱えている限り、パクノダは選択を迫られ続けるということだ。

そこで思い至るのが……。旅団の掟。

(最優先は旅団が生き残る事……。生かすべきは団長ではなく、旅団という存在)

クロロが旅団を作る際に、話した掟。

『誇り』か『裏切り』か……。それは掟を守るか、破るかちゅうことか。……つまり、うちがクロ口の救援が遅れば遅れる程、パク姉が死ぬ可能性が高まる?』

そんな事を考えていると、フィックス、フエイタン、シャルナークが現れる。

ラミナは思考を中断して、3人に顔を向ける。

「説明しろ」

「停電したの」

「その隙に団長が攫われた。鎖野郎のメッセージがこれだ」

シズク、ノブナガが簡潔に伝えて、メッセージが書かれた紙をフィックスに渡す。

フエイタンがノブナガに問いかける。

「何故すぐに追わなかつたか?」

「ヒソカの野郎がいたせいで、下手に動けば団長を追うどころじゃなくなる。けど、こいつらも人質の価値があるから放置できねえ。だから、すぐに動ける状況じゃなかつたんだ! ラミナも流石にダメージがデカすぎる。ヒソカと鎖野郎がグルの可能性がある限り、1人で追わせるわけにはいかねえ」

「とりあえず、対策だ。これからは全員で行動して、負傷したラミナとこの2人をフォローしながら団長を追う。外は雨だし、かなりのラッシュだ。捕まえられる可能性はある」

ピルルルル! ピルルルル!

その時、フィックスの携帯が鳴る。

フィックスが訝しみながら携帯を取り出すと、

「団長の携帯からだ」

全員の顔が更に引き締まる。

フィックスが携帯に出る。

「もしもし」

『これから3つ指示する』

「……鎖野郎か」

「早速来たか」

ノブナガが顔を顰める。

『1つ、追跡はするな。2つ、人質の2人に危害を加えるな。3つ、パクノダという女に代われ』

「ちよつといいか？ 2つ目の指示だが、俺達が来る前にかなり暴れたようだな。2人共何か所か骨折してるぜ」

フィックスは小馬鹿にした笑みを浮かべて、嘘をつく。

それにラミナは呆れていると、

『ならば、交渉の余地はない』

と、通話が切られた。

フィックスは呆気にとられて、すぐにかげ直す。

『なんだ？』

「すまん。2人は無傷だ。許してくれ」

『次はないぞ。下らん真似をするな。パクノダに代われ』

「パク」

フィックスはため息を吐きながら、パクノダに携帯を差し出す。

「つたく、シャレの通じねえ野郎だぜ」

直後、ノブナガ、パクノダがフィックスに拳骨を落とし、マチが背中を蹴る。

「いって……なにすんだよ」

「馬鹿かテメエー！ 団長の命がかかってんだぞ！」

「いや、だって切るとは思わねえし。オメーらだってやられっぱなしはムカつくだろう？」

「時と場合は考えなよ」

マチが青筋を浮かべながら、フィックスを睨みつける。

ラミナはその様子にため息を吐きながらも、パクノダが電話に出る様子を見る。

（やっぱパク姉を選びよったな。このままやとマズイ、か。けど、クラピカがうちらを自由に動ける状況にするとは思えんし……）

ここまで用意周到に動いているクラピカが、複数で追跡される可能性を無視するわけではない。

どうにかして、ここにいるメンバーが常にいる事を確認するはず

だ。

(……可能性が高いのは、ゴンとキルアを使うことか。となると、ここで動かんとヤバいか……)

ラミナはポケットからサングラスを取り出す。

そして、すぐさま行動に移すのだった。

パクノダはクラピカの指示で、1人離れた場所に移動する。

「移動したわ」

『スクワラという男とは接触したか?』

「ええ」

『ならば、こつちにセンリツという能力者がいることは引き出したな』  
「……ええ」

『ならば、話は早い。偽証は不可能だ。よく聞け。まず、今から仲間とのコミュニケーションを禁じる。会話はもちろん動作・暗号・アイコンタクト・筆記・その他一切だ。細心の注意を払え。これから場所を指示する。その時、僅かでも鼓動に動揺があれば人質は殺す』

「……ええ」

『一度、代われ。さっきの男以外の奴だ』

パクノダはノブナガ達の所に戻って、ノブナガに携帯を差し出す。

「お?」

「代われって」

「ふん……代わったぜ」

『これからパクノダ1人と会う。残りの者は全員アジトに戻れ。もちろんラミナもだ。10人常と同じ場所に居ろ。人質もだ。この携帯はパクノダに渡して、もう1つ携帯を用意しろ。そちらに不定期でこちらから電話を掛ける。その時に1人でも欠けていたら人質は殺す。いいな』

「……ああ」

そして、再びパクノダと変わる。

『場所はリンゴーン空港。8時までに来い』

パクノダは通話が終わった瞬間、1人でホテルを出て行く。

それをフィックス、フェイタン、シャルナークが追いかけてようとする。

「待てー！」

ノブナガが3人を呼び止める。

「鎖野郎の指示だ。俺達はアジトに戻る。パクは1人で行かせるんだ」

「……そういや、追跡するなとか何とか言ってたな。それがどうした？」

「なっ!? てめえ、まだ分かんねえのか!? 後追ってバレたら団長が死ぬんだぞ!」

「馬鹿か、お前。そうなったら鎖野郎を殺して終いだろぅが」

「っ!!」

ノブナガはフィックスの言葉に詰まる。

「団長もきと同じこと言うよ。最優先はクモ。ノブナガ、お前の考え、クモへの侮辱ね」

「……っ！」

「同感だな。パクー人だけ行かせても意味がないよ。団長が返ってくる保証もないし、占いの事もある」

シャルナークもフェイタン達に同調する。

しかし、マチとコルトピが声を上げる。

「アタシもノブナガに賛成だよ。今はまだ鎖野郎の指示に従った方がいい」

「僕も」

「今は? そりゃいつまでだ? 手足が半分になるまでか?」

フィックスが苛立ちながら、マチとコルトピに反論する。

その時、シズクが、

「ラミナ、大丈夫?」

その言葉に全員がラミナに目を向ける。

ラミナは顔を俯かせ、目を閉じてグツタリとしていた。

「ラミナ?」

「……気絶してるみたい」

シズクが確かめて、ラミナが気絶していると言う。

ゴンとキルアも心配そうにラミナを見つめているが、マチの念糸で近づくことは出来なかった。

「気絶したラミナとガキ2人抱えて、追いかけるのか？」

「別に俺達3人だけでもいいぜ」

「フィックス、ちよつと落ち着こうよ」

「ああ？　なんだと、コルトピ」

フィックスは額に青筋を浮かべながら、コルトピを睨みつける。

コルトピは両手を顔まで上げて、フィックスを押さええるように、

「ラミナを放っておくとマチが怒るよ。この状況で喧嘩してる場合じゃないでしょ」

「んなこと、今は——」

「待て、フィックス」

「あ？」

シャルナークがフィックスの肩を掴んで止める。

フィックスはシャルナークを振り返ると、シャルナークは真剣な顔でラミナを見つめていた。

マチもラミナに近づいて、状態を確かめる。

そして、

「……アタシはラミナを連れてアジトに戻るよ。こんなところで寝かして、雨の中ずっと鎖野郎を追わせるわけにいかない」

ギロリとフィックスを睨みつける。

それにフィックスが更に苛立つと、

ピルルルル！

シャルナークの携帯が鳴る。

「団長の携帯からだ」

「俺が出る」

フィックスが舌打ちして、ノブナガがシャルナークから携帯を受け取る。

「もしも——」

『人質の2人を出せ』

「……ほらよ」

ノブナガも流石に苛立ちながら、キルアの耳に携帯を当てる。

「もしもし」

『奴らは全員揃っているか?』

「今はね。でも、さっきまでパクノダを追うかどうかで揉めてたぜ」

『ラミナはいるか?』

「ヒソカにやられたダメージで気絶したみたいだ」

『……そうか。男に代わってくれ』

キルアはノブナガに目を向けて、ノブナガはキルアから携帯を離して代わる。

「もしもし」

『1つ、教えておいてやろう。こつちには嘘を見破る能力者がいる。パクノダが1人で従ったのはそのためだ。どんな小細工をしようが構わない。リーダーが死ぬだけだ。分かったら、30分以内にアジトに戻れ。また連絡する』

そして、また一方的に切られる。

耳を近づけて、盗み聞きしていたフィックスは拳を握り締めて震える。

シャルナークがため息を吐いて、

「人質を連絡係にされたら、どうしようもないな。とりあえず、パクを信じて今は戻ろう」

「くそが!!!」

「シャル、ノブナガ。このガキ共をお願い。アタシはラミナを背負うから」

「おう」

「分かった。フィックスとフェイタンはヒソカに警戒してくれ。コルトピ、シズクはマチを」

「うん」

「分かった」

マチは念糸を伸ばして、ラミナを背負う。

シャルナークとノブナガは、ゴンとキルアの背後に回って腕を掴ん

で歩き出し、マチ達がその後ろに付いて行く。

「……頼んだよ」

マチは背中のラミナの位置を整えながら歩き出し、アジトを目指すのであった。



## #50 ヤイバ×ト×クサリ

クロロの拉致に成功したクラピカ達は車に乗って、移動を開始していた。

運転しているレオリオは常に周囲を見渡して、追手が来ないか警戒している。

「大丈夫だ。暗闇でヒソカを相手にして、こっちに人手を割く余裕はないだろう。ゴン達も殺せなくなつたから、加勢が来るまではまともに動けまい」

「……」

「何を見ている？」

クロロは隣に座っているクラピカをじつと見ていた。それにクラピカは目も向けずに、クロロに言い放つ。

クロロは縛られている状況でも一切余裕を崩さずに、

「いや……鎖野郎が女だとは思わなかつた。ラミナも男だと思つていたようだからな」

クラピカはカツラを外しながら、

「私がそう言ったか？ 見た目に騙されぬことだな。それより発言には気をつける。何がお前の最後になるか分からんぞ？」

「殺せはしないさ。大事な仲間が残つてるだろ？ まさかラミナが止めると思つてるのか？」

「……挑発を受け流せるほど……今の私は冷静じゃない……!!」

挑発したクラピカが逆にクロロに挑発されて、顔を顰める。

クラピカが睨みつけるが、クロロは涼しい顔で躲して前を見つめる。

「クラピカ、よせよ……！ ここでそいつを傷つけたら、ゴン達がやられるかもしれねえんだぞ……!!」

「ぐ……い！」

レオリオがバックミラー越しにクラピカを叱責する。

それにクラピカが歯を食いしばって、必死に怒りを抑える。

それを横目で見ていたクロロは、不敵に笑って、

「あの娘の占いでも、このことは書かれてなかった。そして、俺の占いはまだまだ続いてた」

「!?」

「つまり、この状況は予言するほどでもない、取るに足らない出来事だということだ」

「貴様……!!」

クラピカは我慢出来なくなって、クロロの胸倉を掴んで拳を構える。

センリツが慌てて後ろを振り返って、呼び止める。

「クラピカ!」

「クラピカ……! もし、そいつを殺したら、俺がお前を殺すぜ……!」

レオリオが運転しながら、クラピカに凄む。

ここでクロロを殺せば、間違いなくゴン達は死ぬ。そうなれば、レオリオも我慢出来るわけではない。

しかし、再びクロロが口を開く。

「何を苛立っているのかは知らんが……。俺にとって、この状況は昼下りのコーヒーブレイクと何ら変わらない平穏なものだ」

「っ!!」

クラピカは完全に頭に血が昇り、クロロの右頬に拳を叩き込む。

しかし、クロロはすぐに笑みを浮かべる。

それにクラピカは更に拳を振り、数回クロロを殴る。

レオリオが運転しながら腕を伸ばして、クラピカを制止する。

「クラピカ!! いい加減にしろ! らしくねえぞ!!」

もちろん内心では、キレて当然だと分かっている。

仲間の仇が目の前にいて、殺したくても殺せない。なのに飄々と笑って、余裕で縛られているのだから。

しかし、ゴン達の命もかかっている以上、レオリオは言うしかない。止めるしかない。

「状況は五分! 何も進展してねえんだ!!」

「……五分? お前もとんだピント外れだな」

クロロは両頬を僅かに腫らしながらも、一切痛みには呻くことも余裕を崩すこともなく、レオリオに言い放つ。

「前提がまず間違っているよ、お前達は。俺に人質の価値はない」

「これ以上下らん戯言を並べるなら、もう一度口を塞ぐぞ」

「……嘘じゃないわ」

クラピカが再び凄むが、センリツが僅かに戸惑いを浮かべながら口を開く。

それにクラピカも戸惑いを浮かべて、センリツに顔を向ける。

「彼が言ってるのは全て……本当よ……」

「そういうことだ。これはただの事実。俺が死んだところで、クモは止まらない。追い詰められているのはお前達の方だ」

「……どうということだ!?!」

「彼の心音はいたって平常。動揺は微塵もないわ。死への不安・恐怖・虚偽への不協和音、何もないわ。恐らく死なないと思ってるんじゃない。この音は……死を受け入れている音」

センリツは縛られても、殴られても、一切変わらない心音に恐怖を感じ始めていた。手で耳を押さえて、必死にクロロの心音が聞こえないようにする。

その様子を見ていたクラピカも、目の前の男が不気味に見えてきた。

「お前達は……一体……!?!」

「クモさ。ヒソカから、俺達の事を聞いたんじゃないのか？ ヒソカは、俺が死ねばクモも死ぬとでも言ったのか？ あいつにはクモの掟を伝えてはくれないがな」

「……5年ほど前、クルタ族を虐殺した時、すでにお前はリーダーだったのか？」

クラピカはクロロに訊ねる。

クロロは目だけクラピカに向けて、何も答えない。

クラピカは「律する小指の鎖」を取り出して、切っ先を向ける。

「答える!!」

「……それが、ウボオーを殺した鎖か」

「……」

「ウボオーは最後に何とやっていた？」

「覚えていないな。私の質問に答えろ！」

「嘘だな。だろ？ お仲間さん」

クロロはセンリツに訊ね、センリツが何も答えないことから正解だと確信する。

「そうだな……。ウボオーなら……。『殺せ』か『くたばれ』、か？」

「っ！」

「俺も同じ気持ちだよ。お前に話すことは何もない」

「き……。さま……。！」

「クラピカ!! 挑発だ!! 乗るなよ!!」

「ラミナがお前を放置していた理由がよく分かったよ」

「……。どういふことだ……。？」

「ラミナの前でヒソカからヨークシンで俺達が集まる事を聞いたことを話したんだろ？ 確か……。あのゾルディックの息子を迎えに行つた後くらいだったか……。！」

「……」

「お前を無駄に敵視し過ぎたな。お前は取るに足らない、よくいるただの復讐者だった」

「っ!!」

クロロは無機質な目でクラピカを見つめながら言い放ち、もう本当に話すことなどないかのように前を向く。

それにクラピカは齒軋りをして、念の刃を刺そうとしたが、

「クラピカ!! それ以上は駄目だ!! 本当に人質の意味がなくなる!!」

レオリオの言葉がギリギリでクラピカの理性に届き、クラピカは右手を止める。

事実、ここで【律する小指の鎖】を使えば、間違いなく交渉の余地は一切ない。

もし、下手に話せば死ぬと命令しても、目の前の男は戸惑いなく、来た者に全て伝えるだろう。それで死んでも、クロロの笑みが消えるこ

とは絶対にない。

そして、そうなればゴンとキルアは絶対に戻ってこない。

それを理解出来るだけの理性はまだ残っていた。

クラピカは歯軋りをして、クロロを数分睨み続ける。

そして、【律する小指の鎖】を戻して、クロロから取り上げた携帯を取り出す。

(決定的だな。意外な……いや、あの子供やラミナの話からすれば、別に意外でもないか。こいつは使命より、仲間をとる……！)

隣でクラピカがパクノダに指示を出しているのが聞こえてくる。

それにクロロは更なる確信を得る。

(ラミナがこの弱点に気付いていないはずがない。あいつはすでに動いている……！)

あそこにいるメンバーを考えれば、ラミナは確実にクラピカの裏をかく作戦を考えているはず。

それをパクノダに気づかせる方法も。他のメンバーに伝える方法も。

ならば、恐れることはやはりない。

クロロはただただ刃が鎖を千切るのを待つだけだった。

パクノダはホテルを出て、すぐさまタクシーに乗り込む。

もちろん誰も追いかけて来ないことを確認しながら。

(フィinks達がついてくるかと思っただけど……。ノブナガやマチと殺し合っていないといいわね……)

小さくため息を吐きながら、リンゴーン空港を目指す。

(……これでいいのか……)

未だに迷いは消せないパクノダ。

旅団の掟からすれば、間違いなく全員で行くのが絶対である。

しかし、ここでクロロを失うのもパクノダは受け入れられない。

例え裏切りで責められても、いなくなるよりはマシだから。

(そういえば……)

パクノダはラミナから渡された折り畳まれた紙をポケットから取り出す。

紙を広げると、それはラミナの占いが書かれたものだった。

(……何故?)

パクノダは疑問に思いながらも、改めて中身を読む。

すると、その意味をすぐに理解することが出来た。

(あの子は……諦めていない……!)

そして、自分の行動が間違っていないことも確信した。

この選択は間違いなく、『誇り』であると。

(ならば、死ぬのは……怖くない)

パクノダは胸の中にあつた不安と恐怖が消えるのを感じた。

ゴンとキルア、マチ達はアジトへと戻る。

アジトで待機していたフランクリンはゴン達を見て、

「またこいつらかよ」

「それで、団長はどうなんだ?」

ボノレノフはゴン達を無視して、ノブナガ達に訊ねる。

ノブナガは用意して貰っていた鎖をゴン達に巻きつけながら、

「今、パクが鎖野郎と会いに行ってる。その結果を待つしかねえ」

「大丈夫なのか?」

「鎖野郎だって、こいつらを殺されたくはねえはずだ。それまでは団長もパクも、下手に殺されることはねえだろ」

「ラミナは?」

「寝てるだけだよ」

マチが丁寧にもラミナを下ろしながら答える。

その様子を見ていたフランクリンとボノレノフは、僅かに首を傾げる。

鎖で瓦礫に体を固定されたゴンは心配そうにラミナを見つめる。

「ヒソカの野郎は?」

「また姿を隠した。鎖野郎と繋がってんなら、団長の近くにいるかもしれねえな」

「ヒソカの狙いは団長みたいだし、今は下手に引つ掻き回すことはないと思うよ」

ノブナガは顔を顰めながら言い、シズクが首を傾げながら答える。  
フィンクスがゴンとキルアに顔を向けて、

「お前らは何か知らねえのか？」

「……俺達がクラピカとヒソカが繋がってたのを知ったのは今日だよ。あんた達の死体が偽物だって連絡はあったけど、ラミナを襲ったのは俺達もクラピカも想定外さ」

「嘘じゃねえだろうな？」

「言ったらって、あんたには言っていないか。俺達だって捕まったのは想定外なんだ。あの停電だって、俺達は直前に知らされた」

「あ。やっぱりあの新聞の奴もグルだったんだ」

キルアは正直に答える。

それにシズクが呑気に言っつて、フィンクスは少しカツクリと肩の力が抜ける。

「……まあいい。とりあえず、大人しくしとくんだな」

「……分かってるよ」

キルアは少し思い詰めたような顔で頷く。

その様子をゴンが心配そうに見つめていることに気づいていたが、キルアは何も言うことはなかった。

空港に到着したパクノダは、クラピカに電話を掛ける。

『第3航空路に飛行船が停まっている。乗ったら入り口付近で待機しろ』

パクノダは指示通りに動く。

ヒソカだけが唯一の不安要素だったが、今の所ヒソカがいる気配はない。

ラミナに関しては、信頼をしているのでただ信じて待つていればいい。なので、ラミナを探す必要は一切ない。

クラピカとセンチツは、パクノダが近づいてくる様子を飛行船の窓から監視する。ちなみにレオリオはもしもの時のために、飛行場で待

機させている。

「……1人か？」

「見える限りはね。流石に飛行船の中からじゃ、外の音までは拾えないわ」

「……。つまり、クモはリーダーを救うつもりでいる？　しかし、ならば先ほどのこいつの言葉は……。くそっ……。！」

クラピカはクロロの言葉とパクノダの行動の矛盾に、頭が混乱してきた。

しかし、ここまで来た以上、動かないわけにもいかない。

「パクノダが乗り込み次第、離陸する」

クラピカはそう言って、パクノダと面会する場所へと歩き始める。

その間、クロロは目を閉じて、流れに身を任せるのだった。

パクノダは指示通りに停まっている飛行船に乗り、入り口付近で立ち止まる。

すると、外から扉が閉められる。

そして、ゆつくりと飛行船が浮かび上がり始める。

かなり地面から離れ、街の上空に差し掛かった時、携帯が鳴る。

「もしもし」

『そこから左に進み、突き当りの部屋に入れ』

「分かった」

パクノダはすぐに歩き始め、言われた通りに右突き当りの部屋に足を進める。

倉庫のような狭い部屋の中には、クラピカとセンリツ、そして鎖に口元と体を縛られたクロロがいた。

クロロの顔が腫れていることに、パクノダは怒りがこみ上げるがここで暴れても勝ち目は薄いので必死に耐える。

「確認する。パクノダ本人だな？」

「もちろん」

クラピカはセンリツに目を向ける。

センリツはしっかりと頷く。

「本当よ」



それに頷き返したクラピカは、パクノダに顔を向ける。

「お前達2人に、それぞれ2つ条件を出す。それを厳守すれば、お前達のリーダーは解放する」

そう言いながら、クラピカは【律する小指の鎖】を取り出す。

それを見せつけながら、

「まずは、お前達のリーダーへの条件。1つ、今後念能力の使用を一切禁じる」

クロロとパクノダはクラピカが提示したことに一切動揺を見せなかった。

(命を奪われる内容ではない。焦る理由はないわ)

もちろんクロロもパクノダも除念の存在を知っている。

なので、使えないだけならば問題はない。

「2つ。……………」

「？」

突如クラピカが黙り込む。

パクノダは訝しむようにクラピカを見つめ、センリツは心配そうにクラピカを見上げる。

クラピカは迷っていた。

クロロの「俺に人質の価値はない」と言い切り、それを確信している事。しかし、パクノダはクロロが定めた掟を破る行動をしていること。

どちらが本当の旅団の姿なのか。

本当に今、言おうとしている『今後、団員との一切の接触を禁じる』という条件でいいのか。

もしクロロの言い分が正しければ、それでは旅団は止まらない。瓦解するどころか、動きを鈍らせることすらどこまで効果があるのかが疑問になって来ていた。

しかし、ならばもつと効果的な条件はあるのか。

下手に厳しい条件を出したら、間違いなくクロロはこの場で死を選ぶだろう。

そうなればゴンとキルアは死ぬ。

しかし、それでクロロとパクノダが殺せれば、クラピカの復讐は大きく進展する。

そのためにここまで来たのではなかったのか？  
クラピカは己にそう問いかける。

しかし、思い浮かばない。

ならば、これでいいと信じるしかない。

(そうだ……。今大事なのは、俺の復讐じゃない。巻き込んでしまったゴンとキルアを取り戻す事！)

「2つ。今後、旅団員との一切の接触を絶つこと！」

クラピカは覚悟を決めて、2つ目の条件を言う。

流石にパクノダは一瞬眉が動くが、大きく表情を崩すことはなかった。

「この2つが条件。そして、それを守らせるためにリーダーに【律する小指の鎖】を刺す。それでOKか否か。お前が決める、パクノダ」

「……」

パクノダは奥歯を噛み締める。

流石にこれはすぐには決断は出来なかった。

(……ラミナは……間に合わない？ ……いいえ。疑うのは、そこじゃない。ここで否と言えば、団長と私が殺されること。ならば、私の誇りは……もう決まっている)

「……OKよ」

パクノダはクラピカの条件を呑む。

クロロはパクノダの言葉でも一切その表情を変えることはなかった。

クラピカは【律する小指の鎖】を操り、クロロの胸に突き刺す。

クロロの心臓に鎖が巻き付き、念の刃が突き立てられる。

そして、鎖が千切れ、新たな刃が生まれる。

「次はパクノダ。お前だ」

その時、

飛行船が大きく傾いた。

「なっ!?!」

「きゃ!?!」

「っ!?!」

「!!」

全員が驚いて、倒れないように踏ん張る。

その直後、クラピカ達の背後の扉が勢いよく吹き飛んだ。

『!!』

クラピカとセンリツは振り向きながら扉を躲すが、

「フラジャイル・ホープ脆く儂い夢物語」

バツキイイイイン!!!

「!!?」

突如、クロロを縛っている【束縛する中指の鎖】が砕ける。

そして、クラピカとクロロの間に、右手にソードブレイカー、左手に短刀を握っているラミナがいた。

クラピカとセンリツは、突然現れたラミナと鎖が砕かれたことに驚き、行動が一瞬遅れる。

ラミナは短刀を消しながら体を捻り、右脚を振り上げてクラピカの左脇腹に叩き込む。

クラピカはギリギリ左腕で防いだが、その衝撃は想像以上で、左腕からボギツ!と鈍い音が響く。

そして、金色に輝くラミナの両眼と目が合う。

「がつ!?!」

クラピカは飛行船が傾いたことでバランスが崩れていたため、踏ん張りが利かずに壁に叩きつけられる。

しかし、すぐに【束縛する中指の鎖】を再び具現化し直す。

そして、クラピカがラミナに目を向けて、縛りつけようとすると、

左手でクロロの腕を掴んで背中に引き込んでいるラミナの姿を捉えた。

それにクラピカは大きく目を見開いて、本能的に攻撃を中断する。クロロも僅かに目を見開いているが、クロロが【律する小指の鎖】で心臓を潰される様子はない。

それはつまり、

(ラミナは……旅団員ではない!!?)

【律する小指の鎖】は切り離すと、その後の判定は刺された本人の認識で判断される。

つまり、クロロはラミナを旅団員と認識していないということだ。

それは同時に、

(【束縛する中指の鎖】が使えない!!)

「ならっ……!!」

クラピカはパクノダを狙おうとする。

しかし、

「パク姉!!」

ラミナが鋭く叫ぶ。

パクノダは言われるまでもなく、ラミナの姿を捉えた瞬間に拳銃を具現化して、クラピカ達に向けていた。

それにクラピカとセンリツは目を見開いて、破られた扉へと飛ぶ。

パクノダが発砲し、更にラミナがセンリツに右拳を構えて詰め寄る。

クラピカは折れたと思われる左腕でセンリツを引っ張り、入れ替わる様に前に出て【練】を強める。

パクノダの銃弾は外れたが、ラミナの拳はクラピカの左脇腹に叩き込まれる。

クラピカは後ろに勢いよく吹き飛び、センリツを巻き込んで通路へと飛び出していく。

ラミナは追撃せずに、右手に圈を具現化し、窓がある壁に向かって右腕を振り被って飛び掛かる。

そして、**圏**にオーラを集中させ、

【ビッグテッド・ナックル意地を貫く拳】!!」

強化した一撃で壁をぶち破り、大きな穴を空ける。

「飛ぶで!!」

ラミナはそう言いながら圏を消して、今度はククリ刀を具現化する。

そして、クラピカ達がいる方向に全力で投擲する。

結果を見ることなく、ラミナはクロロとパクノダの腕を掴んで引張り、穴から飛び出した。

クラピカとセンリツは通路の床を転がる。

センリツはすぐに起き上がる。

「クラピカ!」

「ぐっ!! ぐほっぐほっ!! がっは……!!」

クラピカはうつ伏せに倒れたまま右手で左脇腹を押さえて、血を吐きながら咳き込んでいた。

(な、なんだ……この威力、は……!!? ラミナは具現化系の筈……!!? なのに、あの11番に敗けていない……!!?)

クラピカはダメージに呻きながらも【癒す親指の鎖】を発動して、まずは左脇腹の自己治癒力を強化して治療する。

すぐに痛みは引き、クラピカは立ち上がる。

「大丈夫!」

「ああ。もう完治し——」

その時、何かが碎ける大きな音がして飛行船が揺れ、先ほどまでの部屋に向かって空気が勢いよく吹き込んでいく。

「壁を破ったのか!? っ!! センリツ!!」

「!!」

部屋から炎の円盤が猛スピードで飛び迫ってきた。

クラピカとセンリツは横に跳んで、その間を炎の円盤が通り過ぎていく。

「ぐっ! 逃がすか!」

クラピカはラミナ達を追おうとするが、

「クラピカ！ 後ろ!!」

「なっ!？」

背後を振り返ると、炎の円盤が船内の壁を次々と突き破りながら戻って来ていた。

船員達の悲鳴が響き渡るのが聞こえてくる。

「くっ!!」

「このままじゃ船員に被害が出て、下手したら街中で墜落するわ!!」

「……あれを止める!!」

クラピカは歯を食いしばりながら、ラミナ達の追跡より被害拡大を食い止める事を選択するのだった。

外は未だ冷たい雨が降っており、真下には街灯が輝く市街が広がっていた。

高さは約400m。

「クロロ!! 着地は自分で行けるやろ!!」

「駄目!! 団長は鎖野郎に念を封じられたわ!! 使えば死ぬ!!」

「はあ!？」

「それと団員との接触も駄目よ!! だから、私と触れさせないで!!」

「私はいいから、団長を!!」

「っ!! くっそがあ!!」

ラミナは叫びながら、手段を考える。

すでに地面まで300mを切っている。

飛行船を振り返るが、穴にクラピカの姿は見えない。

〔月の眼〕で殴ったんや。すぐに動けるダメージやないはず……!〕

しかも、〔太陽より飛び立つ鷲〕が船内で暴れているはずだ。残念ながら機関室に直撃はしなかったようだが、それでもまともに飛行するのは難しいだろうと推測する。

そうになると、クラピカならばこちらより〔太陽より飛び立つ鷲〕の対処を優先する可能性が高い。

「……パク姉！ 左腕に乗れ！ 一度、真上にぶん投げる！」

「っ！ 分かったわ！」

「クロロ!! ビルの屋上にぶん投げる!! 上手く着地せえよ!!」

「……ああ」

ラミナは左腕にオーラを集中させながら仰向けになり、パクノダが両足をラミナの腕に乗せる。

「ふんっ!!」

ラミナは左腕を振り抜いて、それと同時にパクノダは真上に跳び上がる。

そして、ラミナは両手でクロロの左腕を掴み、全力で体を捻ってクロロを振り回しながら、一番近くの高いビルに向かってぶん投げる。

「つうりゃっ!!」

クロロは上手くビルの上に着地する。

それを確認したラミナは両手にグローブ型鉤爪を具現化する。

真下は運がいいことに大通りだった。

【親愛なる姉様との絆】!!」

両腕を広げて、指先から念糸を飛ばし、左右のビルに引っ掻ける。

すぐに念糸を引き絞りながら両腕を胸前で交差させる。

両腕と念糸をネット代わりにして、勢いを殺して着地する。

上空から落ちてきたラミナに、周囲の通行人達は驚きながら慌てて距離を取る。

ラミナは通行人達のことなど気にも留めずに上空にいるパクノダを見据える。

そして、念糸を引き戻しながら、ジャンプの瞬間にオーラを両足に集中させて力を籠めて、一気に跳び上がる。

地面をヒビ割れさせながら、スリングショットのように飛び出して、猛スピードでパクノダに迫る。

ラミナが迫ってくるのを見たパクノダは、仰向けになりながら背中を丸めて、両脚を軽く折り畳む。

ラミナは両腕でパクノダをしつかりと受け止めて、念糸を伸ばしてすぐ横の右側のビルの屋上に念糸を引っかける。

一気に念糸を巻き戻してビルに近づき、壁を蹴って屋上へと跳び上

がる。

「ぶっはあ!!!」

パクノダを下ろしたラミナは息を思いつき吐き出しながら、【月の眼】を解除する。

「助かったわ」

「まだ早い。クロロと合流してからや」

「……そうね」

「確か……あそこか……」

クロロを投げ飛ばしたビルを確認して、パクノダを連れて駆け出す。

「で、クロロに何があったんや?」

「……クラピカの【律する小指の鎖】って能力で、胸に刃付きの鎖を埋め込まれたの。『今後念の使用を禁じる』『旅団員との一切の接触を絶つこと』を命令されたわ」

「ちっ……。パク姉は?」

「あなたのおかげでギリギリ免れたわ」

「そうか……。はあく、うちとクロロは結局占い通り、か」

ラミナはため息を吐いて、携帯を取り出す。

「マチ?」

「……いや、先にヒソカや」

「ヒソカ?」

パクノダはヒソカの名前に顔を顰めて訝しむ。

ラミナはメールを打ち、それをヒソカに送る。

「なんで?」

「クロロがクラピカのせいで戦えんって伝えとった方が、もう襲われんやろ。これ以上、アレに狙われるんは面倒や」

「そうね……」

パクノダは思い詰めた顔をして、クロロがいるはずのビルを見上げる。

それを見逃さなかったラミナは、

「悔やむなや。生きとる限り、除念の可能性はある」



「……そうね。ラミナは無理なの？」

「……流石に体に埋め込まれると無理や」

【脆く儂い夢物語】は直接切りつける必要があり、【月の眼】も直接触れ、かつクラピカを捉えている必要がある。

体の中に埋め込まれてしまうと、そのどちらも不可能に近い。

なので、現段階ではクロロにかけられた念を解除することは出来ない。

「あの子達を使えば？」

「まあ、やってみるしかないなあ。まずはクロロを匿う」

クロロを下ろした高層ビルに到着し、侵入できる場所を探す。

パクノダには近くの路地裏で待機してもらい、ラミナは短刀を具現化して姿を隠して、ビルに侵入する。

そして、屋上まで一気に駆け上がり、屋上に出る。

クロロは屋上で空を見上げており、黙って雨に打たれていた。

「無事か？」

「……ああ。そっちは？」

「パク姉は下で待つとるで」

「そうか」

「とりあえず、一度うちの隠れ家に行くで」

「……ああ」

ラミナは再び【親愛なる姉様との絆】を具現化して、クロロを抱えて屋上から飛び降りる。

そして、パクノダと合流するも、もちろん2人は話すことも触れ合うことも出来ない。

「この近くに隠れ家がある。そこに行くこ」

ラミナの言葉に2人は黙って頷いて、歩き出す。

「そう言えば、どうやってホテルから抜け出したの？」

「コルトピのコピーや。パク姉が電話しとる間に、コルトピにゴンとキラアにバレんように声を掛けて、コピーしてもらおうのと同時に【朧霞】で姿を消して、シズクに気絶したつちゆう印象を植え付けてもらうように伝言を頼んだ」

サングラスを滑らせて、近くにいたコルトピの足に当てて気づかせ、ゴンとキルアにバレないように近づいてもらい作戦を伝えた。そして、自分をコピーしてもらった直後に姿を消して、ホテルを出たのだ。

後はパクノダが乗り込んだタクシーの上に飛び乗り、後をつけた。パクノダが飛行船に乗り込んだ瞬間に一緒に滑り込むように乗って、パクノダが入る部屋を確認して、先に操舵室に向かい、飛行船のバランスが崩れるようにスローイングナイフで操縦桿を無理矢理傾けたのだ。

後は全力で部屋に飛び込んで、クロロ達が知る状況となった。隠れ家の1つに入ったラミナは、クロロにタオルを投げ渡す。

「顔を洗って、服も着替え。その間にこっちで動く」

「すまんな」

「一般人はのんびりしとけや」

「ふっ……」

クロロを部屋に放置して、ラミナとパクノダはアジトに向かう。再びクラピカとキルア達は窮地に追い込まれるのだった。

## #51 マサカ×ノ×シュウライ

旅団のアジトではフィックスやノブナガが苛立たし気に、パクノダやクラピカの連絡を待っていた。

ゴンとキルアは大人しく鎖で縛られて、座っている。

他の者達も座って、静かに連絡を待っていた。

「……ちっ！ 全く連絡ねえな……」

フィックスがしびれを切らしたのか、徐に立ち上がる。

シャルナークが少し呆れながら、

「まだ戻ってきて、30分くらいだぞ？ どこで会ってるのかも分からないしき」

「んなこた、わあつてんよ」

「それに連絡がないってことは、今まさに会ってるかもよ？」

「……だといいいがな。ラミナの奴、ちゃんとパクの後を尾けてんだろうな？」

フィックスはシズクの言葉に顔を顰め、そしてマチに顔を向けながら言う。

ラミナの名前が出たことにゴンとキルアが驚き、マチは不機嫌そうに肩を竦める。

「アタシが知るわけないだろ。今はあの子とパクを信じて待つだけだよ」

「ちっ」

「ねえ、どういうこと？ ラミナはそこで……」

ゴンが声を上げて、未だ気絶して寝転んでいるラミナに顔を向ける。

すると、ラミナの体がぼやけて消えた。

「え!？」

「偽物……! (しまった……! 偽物の死体を具現化した能力!!)」

ゴンは目を見開いて、キルアは先ほど自分でヒソカから死体は偽物だと聞いたと言ったばかりなのに、すっかりその可能性が頭から抜け落ちていたことに齒を食いしぼる。

フィinksは優越感全開の笑みを浮かべて、キルア達を見る。

「そういうこった。今頃、鎖野郎はラミナに殺されてるかもな」

「っ！ ラミナがクラピカを殺すもんか！」

「殺すよ。あの子が自分で落とし前をつけるって言ったからね」

ゴンが否定するが、マチがすかさずゴンを睨みつけながら言い放つ。

ゴンはマチを睨むが、悔しいことにラミナの事を知っているのは旅団の方なので「そんな奴じゃない！」と叫んでも説得力がない。

なので、言い返そうにも、それだけの根拠がなかった。

「クラピカが殺した団員の復讐のため？」

今度はキルアが訊ねる。

キルアは正直、ラミナが復讐だけで動くとは思えなかった。

マチはキルアの言葉には顔を顰めて、睨みつけるだけで答ええない。

それにキルアも歯軋りして睨み返すが、そこにノブナガが口を開いた。

「いいや。あいつはウボオーの復讐なんて考えてねえさ」

「……じゃあ、なんで……」

「言っただろ？ 落とし前をつけるってな。あいつは『ウボオーが殺

されたこと』に怒ってるんじゃないやねえ。『自分が鎖野郎を甘く見て、ウ

ボオー1人で行かせて、ウボオーが死んだこと』に怒ってるのさ」

「それと『その時に鎖野郎を確認しなかったこと』だな」

「そのせいで俺達が鎖野郎相手に後手に回ることになった。だから、

ラミナは自分のミス挽回したいだけだ。ウボオーの仇討ちがした

いわけじゃねえだろうよ」

ノブナガ、シャルナーク、フィinksの言葉にキルアは納得するも、

ゴンは納得出来なかった。

ノブナガ達の言う通り、ラミナが今回クラピカを狙っているのは『自分のミスで仕事に影響を出してしまった事への仕返しと挽回』である。

ウボオーゴンが1人で行った後に、過信せずに後を尾けて戦いを見守っていれば、ウボオーギンを死なせずに済んだし、そこでクラピカ

を殺すか行動不能にしておけば、もっと仕事は簡単に終わったのだ。ヒソカもわざわざこんな状況で狙わずに済んだだろう。

しかし結果として、現在ヒソカがどこかに彷徨っており、クロロが攫われるような状況になった。

間違いなく自分のミス。

ラミナはそう思っていた。

依頼主である旅団がどう思っているかではない。

自分がそう思っている以上、自分で挽回しなければならない。そこに妥協をしてはならないのだ。

それがラミナの殺し屋としてのプライドである。

「だから、あいつが鎖野郎を殺すことを躊躇うことはねえよ」

フィックスが断言し、それに他の団員達も頷く。

ゴンが更に何かを言い返そうとすると、

ピルルルル！ ピルルルル！

「お。さあ、どっちだ？」

フィックスがシャルナークの携帯を取り出す。そして、画面を見る。

「パクが持つてる携帯からだ」

パクノダからの着信に全員に緊張が走る。

「もしもし」

『フィックス？』

「パクか。どうなった？」

『団長の救出に成功したわ。私もラミナも無事』

「へっ！ やるじゃねえか」

フィックスの言葉に団員達は笑みを浮かべ、ゴンとキルアは顔が強張る。

「で？ 鎖野郎は殺したのかよ？」

『……それについて、ちょっと問題が出たわ』

「あ？」

パクノダの言葉にフィックスが訝しむ。

その様子にノブナガ達も笑みを消す。

「どうした?」

「問題って何だよ?」

ノブナガの問いを無視して、フィックスはパクノダに訊ねる。

そして、パクノダからクロロに埋め込まれた「律する小指の鎖」と、その条件について説明される。

「……念を使ったり、俺達と接触すれば、団長は死ぬってことか?」

『……ええ。ラミナは問題ないみたいだから、全く団長と意思疎通出来ないわけじゃないのだけど……。能力の内容からして、今鎖野郎を殺すのはマズイかもしれないわ』

「……死後に強まる念か……」

『ええ。今、ラミナが鎖野郎に連絡を取ってるわ。だから、まだ人質2人は殺さないで』

「こいつらをネタに団長に刺された念の鎖を解除させる、か……」

『そういうこと。とりあえず、私とラミナでそっちに戻るわ。無理矢理取り戻しに来る可能性があるから警戒は怠らないで』

「……分かってるよ」

フィックスは盛大に顔を顰めて、通話を切る。

ずっと黙って我慢してたノブナガがすぐさま詰め寄る。

「どういうことだよ? 団長が死ぬって……!?!」

「鎖野郎に念の鎖を心臓に刺されたらしい。決められたルールを破れば死ぬかもしれないねえ」

「そのルールは?」

『念を使わないこと』『団員との一切の接触を絶つこと』の2つだよ』

「……なるほどな。ちくしょう!!」

ノブナガが足元の瓦礫を蹴り飛ばして、シズクが顎に指を当てて、

「ラミナはまだ団員じゃないから運が良かったね」

「そうだな。しかし、そうなる……」

「ああ、鎖野郎を下手に殺せねえ。今、殺せば死の念で団長が死んじまう」

シャルナークの懸念をフィックスが顔を顰めながら言う。

それにマチが歯軋りをして、キルア達を睨みつける。そして、フェイタンも右手にオーラを集中する。

それを見逃さなかったシャルナークが、マチやフェイタンに声を掛ける。

「マチ、フェイタン。まだ人質に手は出すなよ。こいつらを殺せば、団長にかけられた念を消す交渉が出来なくなるんだからな」

「……ちっ」

マチとフェイタンは舌打ちをする。

ゴンとキルアはまだ殺されることはないことにホツとする。

（けど、マズイ！　というか、最悪の状況だ……！　このままじゃクラピカはせっかく団長に刺せた鎖を解除しないといけなくなる……！）

しかし、逃げ出す隙はない。むしろ、さらに警戒が強まった。

（くそっ！　最善は俺達が自力で逃げ出す事……！　けど、この人数を相手に逃げ切るなんて不可能だ……！）

ここは旅団のホームだ。

【絶】などで隠られるわけもないし、スピードもパワーも誰かには負ける。

【発】を使われれば、キルアとゴンに防ぐ手段は一切ない。

どうやっても、ここから逃げられる可能性は0に近かった。

（団長の鎖が解除されるまで俺達が解放されることはない。だから、同時の人質交換は成立しない。……俺達を諦めるのが一番いい……）

キルアはクラピカが自分達のことを諦めるのが、最善であると考えてしまった。

自分達が人質としての価値が無くなれば、この最悪の状況から脱出は出来る。

あくまで客観的な意見としては、であるが。

最後に話したクラピカの状況から考えると、クラピカが自分達を切り捨てる事が出来るとは思えなかった。

しかし、それではただクラピカの顔や能力、そして弱点がバレただけで終わってしまう。

旅団はほぼ無傷で活動を再開するだけだろう。

(……くそっ！　せめてあの時、ゴンだけでも逃がしてやれば……！)

キルアは停電の時にゴンを止めたことを後悔した。

何故キルアが脱出を中止したのか。

それはラミナとの関係をこれ以上悪化させないためだった。

キルアとゴンがああ状況から逃げるには、『マチを殺す』ことが絶対条件だったのだ。

キルアの首の念糸とゴンの両手の念糸を解くには、キルアの実力で殺すのが一番確実な手段だった。

しかし、マチはラミナにとって一番関係が深い家族だ。

もしマチを殺していれば、もうどちらかが全滅するまで絶対に止まらないとキルアは確信していた。

だから、あの時は下手に動かず、人質交換の構図にするのが最も最善だと判断したのだ。

クラピカが必ずクロロに【律する小指の鎖】を刺すとは考えていたので、その上で人質交換をすれば、クラピカ達の被害は少なく、旅団は動きを鈍らせる可能性が高かったからだ。

それがクロロの奪還で、一気に裏返ってしまった。

(……俺が囮になって、ゴンを逃がす……？　いや……ゴンは絶対に戻ってくる)

そして、その逆もまた然り。

キルアは完全に袋小路にいることを実感したのだった。

クラピカはリンゴーン空港のベンチに座って、頭を抱えていた。

その様子をセンチツとレオリオも眉間に皺を寄せて、黙って見つめるしか出来ない。

あの後、なんとか【導く薬指の鎖】でククリ刀を止め、墜落することなく空港に引き返すことに成功した。

奇跡的に怪我人も軽傷者3人ほどで、死者もいなかった。

しかし、クラピカ達の心境は絶望一色だった。

「まさかラミナが追って来てたとはな……」

「いや……死体を作る能力者がいるはずだったのに、それを忘れて



いた私のミスだ……」

クラピカもキルア同様、すっかりとコルトピの存在が抜け落ちていた。

ただクラピカに関しては、その前にクロロとひと悶着あったこともあり、冷静さが失われていたという言い訳は立つ。

事実、センリツとレオリオはそう思っていた。

「これでゴンとキルアを助け出すには……」

「私がリーダーに刺した念の刃を解除する……しかないだろうな……」

「けど、それは同時に私達が一網打尽にされる危険も高まるわ。キルア君達の交換と同時ってのは、向こうは認めないでしょうから」

「そうだな……。誰かを指定しても、もう尾けてきてないかどうかを確かめる術もねえし。全員同時に来られたら勝ち目は0だな……」

「ええ。そして、それは2人が自力で逃げ出せないということね」

「……」

クラピカは下唇を噛む。

「あー！ ヒソカはどうだ!?!」

「……ヒソカはむしろ旅団に手を貸すだろう。リーダーと戦うのが目的だからな」

「げ……」

レオリオがヒソカの名前を挙げるが、クラピカは首を横に振る。

「ヒソカの一番の目的は『クロロと1対1で戦うこと』」

現状では間違いなく、クロロの鎖を解除したいはずだ。

ヒソカの性格から、念を使えないクロロと戦いたいと思うはずがない。

ピルルルル！ ピルルルル！

クラピカのポケットから着信音が鳴る。

鳴っているのはクロロの携帯だった。

3人に緊張が走り、クラピカが電話に出る。

「……もしもし」

『おう。ヤツキはどうも』

「……ラミナか」

『用件は言わんでもええやんな？　ゴン達を助けるか、見捨てるか。選びや』

「っ……!!」

わざわざゴン達の方を口にしたラミナに、歯を食いしばるクラピカ。

それがクラピカを最も効果的に揺さぶることが出来ると、分かっているからだ。

『ごつちも我慢強い連中ばつかやないねん。お前がさつきまで挑発しまくったせいだな。クロロに関しては、別に時間がかかろうが除念は探せるでな。あんまり時間かけて考えると、ゴン達の命は保証出来へんで』

完全に先ほどまでとは立場が逆転した。

先ほどまではクラピカが主導権を握っていたために高圧的な態度に出ていたのが、ここで更に追い詰めてくる。

しかも現在、クラピカ達にはラミナや旅団の暴走を止める手札はなに等しい。

「……私の命と引き換えに、ゴン達を解放することは？」

『ド阿呆。うちらが死後に強まる念を警戒しとらんとでも？』

「……」

『30分やるわ。その間に決めとき』

一方的に告げられて、電話を切られる。

クラピカは顔を顰めて、携帯を握り締める。

「くそっ!!」

そして、感情を抑え切れずに吐き出す。

電話が聞こえていたセンリツはクラピカを心配そうに見つめ、センリツに通訳して貰って内容を把握していたレオリオも顔を顰めて歯軋りする。

クラピカは右手で顔を覆い、必死に頭を回転させる。

（私の命も担保にならない。ヒソカや他の者達も助けを求めるのも無理。力づくで取り返しに行っても、ラミナに反撃されるだけだ。その

間にゴン達は殺される……!)

ラミナは旅団員ではないと分かった以上、【束縛する中指の鎖】は使えない。

【律する小指の鎖】が唯一の可能性だが、

(あの【束縛する中指の鎖】を砕いた能力……。そして、異常な程の力) 簡単に砕かれてしまい、【練】の上からでも耐えきれないほどの力。そして、ウボオーギンやヒソカとも凌ぎ合えるほどの戦闘技術。

そして、実力を目にしてはいないが、あのシルバとゼノに襲われて生き延びた者。

間違いない、1対1では勝ち目はない。

(それに……あの時、見たラミナの両眼……)

見間違いというには印象が強すぎる【金色の眼】。

あれがあのかの能力や力の原因なのだろうか？

(ということとは、ラミナも私……クルタ族のような特殊な一族？ 眼の色を変えることで特質系に変わる体質なのか?)

クルタ族がいるのだから、他にも同じような部族がいる事はおかしくない。

クルタ族も隠れて暮らしていたので、流星街に隠れて暮らしていたのも十分考えられるし納得出来る。

(……くそっ！ ゴンやキルアを危険に晒してまで、ここまで来たのに……!)

今出来るのは、やはり大人しくクロロの鎖を解除することだけ。

そう確信してしまったクラピカは、もう一度覚悟を決めるのであった。

クラピカとの電話を終えたラミナは、携帯を仕舞いながらパクノダと共に歩く。

「さて、じっくり焦らしていこか」

「大丈夫なの？」

「ここでゴン達を見捨てられるんなら、飛行船の時も仲間や船員を庇わんやろ。あの犬使いにもホテルから逃げるように伝えとったし」

「なるほど」

ラミナからすれば、クラピカは絶対にゴンとキルアを見捨てられないと考えている。

見捨てる発言をすれば、レオリオも黙っていないだろう。

冷徹を貫くならば、絶対に人質交換をクラピカから持ち出してはいけなかったのだ。

旅団から訴えていれば、ラミナもここまで強気には出られなかっただろう。

「とりあえず、アジトに戻るか」

「ええ」

やや早足でアジトを指すラミナとパクノダ。

そして、廃墟に足を踏み入れた瞬間、

ラミナの背中に怖気が走った。

「!! 生まれ、パク姉!!」

ラミナはパクノダを呼び止めて、周囲を見渡しながら構える。

それにパクノダも拳銃を具現化して、周囲を警戒する。

ラミナが左方向に目を向ける。

少し離れたところにある崩れた廃墟の瓦礫の上に、人影が見えた。

そして、その姿に見覚えがあったラミナは目を見開く。

相手もラミナと目が合ったことに気づいて、

「久しぶりじゃの」

「……ゼノ……ゾルディック」

「!!」

ゾルディックの名前にパクノダは目を見開く。

ゼノは笑みを浮かべて、瓦礫から飛び降りて、ラミナ達の前に下り立つ。

「……キルアか？」

「まあ、そういうことじゃの」

「……今の所、キルアに命の危険性はないで」

「そうかのう？ 取引相手はかなり追い詰められようじゃが？」

「っ！ 随分と詳しいやないか……。っ!! ヒソカか!!」

「そこまでは知らん。儂らはイルミから聞いただけじゃからの」

「……儂ら？ つ!!」

ラミナはゼノの言い方を訝しみ、すぐ近くに別の気配を感じた。

ラミナは弾かれたように背後を振り返り、100mほど離れた廃墟ビルの屋上へと目を向ける。

そこには腕を組んで、ラミナ達をまつすぐ見下ろしているシルバ・ゾルディックがいた。

「シルバまで……! つ!!」

シルバの姿に齒軋りしたラミナだが、その背後から更に不気味な気配があるのを感じ取って、背中に悪寒が走る。

冷や汗が噴き出し、一気に体温が下がったのを感じるラミナ。

その反応を見逃さなかったゼノは、笑みを深める。

「……ほお。流石じやのう。まあ、ゾルディックの名を持つ者とだけ言うておくか」

(……シルバとゼノにも負けん…いや、下手したらそれ以上に強い……? ……まさか!?)

ラミナは1人だけ心当たりがあった。

「……マハ・ゾルディック、か?」

「……」

ゼノは答えなかったが、言い当てたことが面白かったのか齒が見える程の好戦的な笑みを浮かべる。

それを確信を持ったラミナは一度天を見上げて、両手を上げる。

「降参や……。キルアはこの後すぐに無傷で解放する……」

「ラミナ……!?!」

パクノダが目を見開く。

しかし、ラミナの顔色が少し青くなっており、額に雨だけではない水滴が浮かんでいるのを見て、すぐに黙る。

ゾルディック家が周囲にいるのは今の会話でパクノダも理解しており、このままではゾルディック家との戦争になる気配も感じ取っていた。

ククロもおらず、クラピカと敵対している状況で、相手にする場合

ではないのはパクノダも理解出来た。

ピルルルル!

その時、ラミナの携帯が鳴る。

ラミナはゼノに目を向ける。

「構わんぞ」

ゼノの許可を得て、ラミナは携帯を取り出す。

「……もしもし」

『や、久しぶり』

「……イルミ」

このタイミングでのイルミからの電話。

偶然なはずがないと思ったラミナは、嫌な予感がした。

「おい……今どこにおるんや?」

『流石だね。今、クロロの目の前だよ』

「っ!! ……ヒソカか?」

『当たり前だけど違う。ヒソカからキルが捕まったって連絡はあったけど、その後からは俺達独自で動いた。今、ヒソカが何してるのかは知らない』

『そうか……。で?』

『そうカリカリしないですよ。キルを解放してくれるなら、これ以上は何もしない。あ、クロロに代わってあげるよ』

「……」

『ラミナ』

「無事か?」

『ああ、仲良くテレビを見てるところさ』

「……なら、ええわ」

『ラミナ。頑張ってくれたのに悪いが、これ以上は仕事どころじゃないし、事態も混乱するだけだ。あの子供2人を鎖野郎に返して、鎖野郎から手を引け。団員には団長命令だと言ってくれて構わん』

「……それでええんか?」

『ああ。流石にゾルディック家は、鎖野郎とは格が違う。戦争しても得られるものはない。それだったら、占い通りに動いた方がいい』

「……分かった。終わったら、そっちに向かう」

『スマンな。頼んだ』

そう言って通話が切れる。

携帯をポケットに仕舞ったラミナは、深くため息を吐いて項垂れる。

紅い髪を頬に貼り付けて、疲労感全開の顔でゼノに顔を向ける。

「はあ〜。……団長命令が出た。キルアは解放する。他の団員もちゃんと説得したる」

「すまんの。この埋め合わせはするつもりじゃ」

「……まあ、しばらくマフィアから仕事は貰えんし、そっちの仕事受けさせてくれればええわ」

「ええじゃろう。ではな」

ゼノはラミナ達に背中を向けて、歩き去っていく。

シルバとマハと思われるバケモノの気配も遠ざかったのを感じたラミナは、その場に尻餅をつくように座り込む。

「……そろそろ寿命が尽きそうやわ」

「本当にね……。私の占いの『死神』は、ゾルディックの坊やだったみたいね」

「今だけは……ちよつと婚約者やったことに感謝やわ……。ちやうかつたら、間違いなくうちらとクロロは殺されて、戦争になつたな」

ラミナは土砂降りになってきた雨が、今は心地良かった。

流石にバケモノ3人に睨まれたのは、生きた心地がしなかった。

ラミナはゆっくりと立ち上がり、気だるげに歩き出す。

「あ〜……体イタイ、疲れた、腹減った〜……」

「……お疲れ様。本当に」

疲労感とこれまでの怪我の痛みが一気に襲ってきたラミナ。

その姿にパクノダは心の底から労わりの言葉をかけるのだった。

そして、アジトに戻ったラミナとパクノダは、クロロに起こったことと先ほどのゾルディック騒動について説明し、キルアとゴンをこれ

から解放することを伝えた。

もちろんノブナガやフィックス、そしてマチは納得など出来るわけもなく、盛大に顔を顰める。

そして、キルアもシルバ達の介入を聞かされて、顔を顰めている。ゴンはキルアの家族への印象を少しだけ変えていた。

「団長の命令とはいえ……流石に気に入らねえな……！」

「ゾルディックのガキだけ解放すればいいじゃねえか。なんで、黒髪のがキまで解放しなきゃいけないんだ？」

「そらあ、キルアだけ解放したところで、こいつはゴンを取り戻そうとして、またここに来る可能性が高いからや。その度にゾルディック家に見え付けられるんは鬱陶しいやろ？ クロロが念を使えんことは向こうにバレとる。ゾルディック家に人質に取られたら、流石に今回みたいに隙を突いて助け出せるとは思えんぞ、うちは」

「まあ、取引もそう簡単にはいかないだろうな」

シャルナークもラミナの言葉に同意する。

シルバやイルミは間違いなく、取引に納得出来なければ、すぐさまクロロを殺して旅団を皆殺しにしてくるだろう。

「ゾルディック家だけでも厄介やのに、その執事とかも出てくれば数でも負けるぞ？ 執事やって戦闘力ではパク姉やシズクより上の奴らもおるし、流石に手足半分の被害じゃスマンぞ」

クラピカなどどうでもよくなるレベルの闘争となるのは間違いない。

執事見習いでさえ殺しにどっぷり浸かっている家だ。

もし総動員で動かれたら、流石に旅団でも厳しいだろう。

「ちっ……」

「キルアとゴンは連れていくぞ。ええな？」

「……団長命令は絶対。それがクモの掟だからな」

フィックスは腕を組んで座る。

ラミナは他の団員達を見渡し、ノブナガ以外は納得している様子であることを確認する。

マチはまだ不機嫌な顔をしているが、キルア達から顔を背けて座っ



ていた。

ラミナは小さくため息を吐いて、キルア達に顔を向ける。

「ほれ、とつとと行くで。そんな鎖、自力で出られるやろ？」

「あ、うん」

「……」

ゴンとキルアは腕力で鎖を引き千切る。

ラミナは携帯を取り出しながら外に向かい、ゴンとキルアはそれに続く。

それを見送ったフランクリンはマチとノブナガに目を向ける。

「追わねえのか？」

「ふん！ 団長命令だし、せっかく助け出した団長がまた殺されるかもしれないならしょうがねえだろが！」

「……アタシは……あの子に祈るだけだよ」

「祈る？」

「占い」

フランクリンが訝しむと、マチは不貞腐れた顔のまま懐から占いの紙を取り出して、フランクリンに投げ渡す。

占いを読んだフランクリンは納得の表情を浮かべる。

そこにパクノダが歩み寄り、

「ちなみにこっちはラミナの占い」

「……なるほどな。団長とラミナは今後除念師を探しに行くってことか」

「ええ。そして、私の占いは『死神』がいなくなったから、もう選択を迫られることはない」

「シャルと私はまだ微妙だね」

「シャルナークは電話に出なきやいいだけね。シズクもお宝に近づかなければ問題ないはずよ」

「とりあえず、ラミナから団長の今後を確認してから、俺達もどうするか決めよう」

「だな」

シャルナークの言葉に全員が頷く。

こうして、クラピカと全く関係ないところで、事態は一気に収束へと向かっていくのであった。

## #52 ワカレ×ノチ×ヒガシへ

クラピカ達はラミナからの電話を待っていた。

「そろそろ30分だな」

「……ああ」

すぐに動けるように車に乗り込んで待機していた3人。未だに止む気配がない雷雨が、更に気持ちを沈ませる。

ピルルルル！ ピルルルル！

「！ 来たか……」

携帯が鳴り、再び緊張が車内に走る。

クラピカが電話に出る。

「もしも——」

『これから2人を解放したる』

「!? ……どういうことだ?」

『ゾルディック家が出しやばって来よってな。団長命令で2人を解放して、お前から手を引くことになった』

『ゾルディック家が……!?!』

クラピカは事態が呑み込めずに、驚くことしか出来なかった。

レオリオやセンリツもゾルディック家の名前が出たことに顔を見合わせる。

『1つ、聞きたいんやけど。団長の胸に埋め込んだ鎖は、そこから解除できるんか?』

「……無理だ。解除するには、私の視界に捉えている必要がある」

『ふうん。なら、ええわ。ほな、10時までにはヒソカと密会しとった廃遊園地に来いや』

「ラ——!」

ブツッ!

一方的に通話を切られる。

すぐにかげ直すが電源が切られていた。

「くっ……!」

「おい、クラピカ。ゾルディック家って何だよ?」

「……詳しくは分からないが……。恐らくキルアを助けに来たのだろう……」

「……キルア君ってゾルディックの人なの？」

「ああ」

「じゃあ、ラミナって人と婚約者って言うのと関係あるのかしら？」

「は？」

センリツの言葉にクラピカとレオリオは目を見開いて啞然とする。

「ちよ、ちよつと待ってくれ……。だ、誰と誰が婚約者だって？」

「キルア君とラミナって人。キルア君が捕まった時に、リーダーと話してたわ。お父さん達が勝手に言ってるだけって言ってたけど」

「……なにいいー?!?!」

車内にレオリオの叫び声が響く。

センリツとクラピカは耳を押さえる。しかし、それを責めることはない。

クラピカも同じ気持ちだからだ。

「待って待って?!? キルアってまだ12歳くらいだろ?!? なんで婚約なんざ!!」

「ゾルディック家もラミナも殺し屋だ。ラミナの実力を気に入ったのだろう。恐らく、私達がキルアに会いに行こうと特訓してた頃に決まったのだろうな。キルアとラミナが承諾してるのかはともかく……」

「納得してない感じだったわね」

「恐らくキルアやゴンに念を教えたのも、ゾルディック家から頼まれたからだ。今回は流石にキルアの命が危険に晒されたから、ラミナと旅団を止めに来たのだろう。そして、旅団もゾルディック家を相手にするのは流石に厳しいと判断した」

「そういや、キルアが親父さんが昔、旅団員を殺したことがあるって言うってたな……」

「団長は念を使えないし、団員と接触・会話は出来ない。そのせいで守るにも限界がある。せつかく救い出したのに殺される可能性が生まれた以上、早急にキルアを解放することにしたんだろう」

「けど、ゴンは？ キルアだけ解放すればいいじゃねえか」

「それをキルアが拒否すれば？ 解放してもまたゴンを救うために旅団の元に行けば、同じことの繰り返しだ。だから、ゴンも一緒に解放する方がいいと判断するのは想像に難くない」

「なるほどな……。とりあえず、指定された場所に行くか？」

「ああ……」

レオリオは車を走らせて、指定された場所に向かう。

クラピカは深呼吸をして、気を引き締める。

まだゴン達が無事に帰ってくるかは分からない。

だから、まだ気を緩めるわけにはいかない。

アジトを出て廃墟を歩きながらクラピカに電話をしていたラミナは、通話を終えて携帯を仕舞う。

左腕には箱を抱えていた。

通話を背後で聞いていたゴンは、クラピカのことが気になったので声を掛ける。

「ラミナ。クラ——」

その時、ラミナが振り返りながら、ゴンの頬に右拳を叩き込んで殴り飛ばす。

ゴンは完璧に油断していたので、全く抵抗出来ずに真横に吹き飛ばされて瓦礫に突っ込んだ。

ラミナは左腕で抱えていた箱を地面に下ろす。

「ゴッ——!？」

キルアが目を見開いて叫ぼうとしたが、今度はラミナの左拳がキルアの鼻頭に叩きつけられて、キルアは後ろに仰け反って地面を転がる。

ラミナは折れている左腕の痛みだけに僅かに顔を顰めながらも、瓦礫に突っ込んだゴンに歩み寄り、胸倉を掴んで引っ張り上げる。

「っ……！・ラミ——」

「一度捕まった時に力の差は理解しとったやろ。力もないクソガキが二度も首を突っ込みよってからに。何回、人の忠告を踏み躪んねん」

「……ゴメン。けど、やっぱりクラピカとラミナをこのままにしておけなかったんだ……」

「やったら、自分の力で止めれるようになってからにせえ。最低限自分の身も守れん奴が、人の心配なんざ10年早いわ!!」

「う……」

ラミナはゴンから手を放して、次はキルアを振り返る。

キルアは鼻を押さえて、未だに座り込んでいた。

「キルアもゴンと心中するために家出したんか？ シルバにゼノもそんなことのために許可したんちゃうやろ？ 家に連れ戻されてもおかしなかったんやぞ」

「……」

「うちらとクラピカは殺し合いをしとるんや。そんなところに中途半端な力で、中途半端な覚悟で、首突っ込むんがお前らのしたかったことか？ 元殺し屋のお前なら、それがどれだけ危険かくらい理解してるやろ」

「……」

キルアは顔を俯かせる。

理解していたつもりだったが、物凄く甘かった。

捕まっている間に、それを嫌というほど痛感した。

「高望みするんは構わん。けどな、それはふさわしい実力がある奴だけが許されるんや。それがない奴は、どれかしか選ぶことは出来ん。もしくは何も得られずに死ぬだけ。今回のお前らは何も得られずに死ぬ方や」

「……分かってるさ」

「殺しが嫌なんは構わん。殺し屋になりたあないんも構わん。けど、お前がゴンと一緒におりたいんやったら、生き残るための覚悟はしとけや」

「……ああ」

ラミナは箱を拾い上げて、背を向けて歩き出す。

ゴンとキルアは顔を見合わせて、互いに考え込むような顔で黙ったまま、その後が続くのであった。

ラミナ達は廃遊園地のメリーゴーランドの下で雨宿りしながら、クラピカ達を待つ。

ラミナは馬の乗り物に座り、ゴンとキルアは中心の柱にもたれて座る。

あの後から会話は一度もなく、キルアは思い詰めたような顔で俯いており、ゴンは時折ラミナとキルアを見て、また俯くという行動を繰り返していた。

その時、

「修行……ちゃんと続けとるんやろうな？」

ラミナが前を見つめたまま、2人に問いかける。

ゴンとキルアは顔を上げて、言われた内容を理解して、顔を見合わせる。

そして、僅かに笑みを浮かべながら、

「うん……！ ラミナに見てもらいたかったんだ！」

「ほな、そこで見せてみい」

「うん！」

「ああー！」

ゴンとキルアは雨に濡れるのも構わず、ラミナの前に並んで立つ。

そして、【纏】【練】【凝】を順番に見せていく。

天空闘技場で見た頃より、【纏】は滑らかで力強く、【練】は大きく密度もあり、【凝】も素早く乱れもない。

「……確かにサボつとらんみたいやな。【堅】は何分や？」

「俺は37分」

「俺は42分」

ゴンが先に答え、キルアが答える。

最低ラインは越えていることに頷いたラミナは、2本の指を立てる。

「次は2時間。維持できるようにせえ」

ゴンとキルアは言われた時間に目を見開く。

この3か月でようやく30分を越えたのに、その4倍を目指せと言

うのだ。

ラミナは馬の乗物から降りて、【堅】を発動しながらすぐ近くの瓦礫に歩み寄る。

「【堅】はあくまで防御。しかも、体全体を覆つとるから効率は悪いと言える。なら、どうする?」

「どうする……?」

「腕を狙われとるのに、体全体にオーラを放出しても無駄が多すぎる。なら、オーラを集中すればええ」

「【凝】か……!」

ラミナは右腕を上げると、右拳にオーラが集中し、体を覆うオーラが減る。

「オーラが集中すれば、それだけその部分の攻防力は上がる。それを攻撃の瞬間に、防御の瞬間に、素早く行う」

ラミナは普通の【堅】に戻して、右拳を構えて目の前の瓦礫に右ストレートを軽めに振り抜く。

拳が当たる瞬間に、オーラを集中させる。

当たった瞬間、瓦礫が粉々に吹き飛んだ。

その光景にキルアとゴンは目を見開く。

「オーラを素早く移動させて、攻防力を変化させるんや。【凝】の応用技で【流】と呼ぶ」

「【流】……」

「通常の【堅】の状態を攻防力50とする。それを状況に合わせて、比率を変える。右手に攻防力70で集めたら、全体は30。それを各部位で行っていく訓練をしていきい。ある程度感覚を掴んだら、ゆつくりと組み手をしながら【流】に慣れていくように。それを全力の組み手で出来るようになるんが最低目標や」

「だから、【堅】が数時間維持出来ないと厳しい……」

「そういうこっちゃ。で、次は……」

ラミナはゴン達に振り返って、足元に転がっている鉄パイプを拾い上げる。

「普通の物体はオーラを纏わん。けど、素手で戦うのも限界はあるし、



具現化するんは相性が響きすぎて現実的やない」

ラミナは【周】を発動して、鉄パイプにオーラを纏わせる。

「【纏】の応用技【周】。物にオーラを纏わせて強化する。あくまでその物体の元々の能力を強化するだけやが、ナイフとかでは非常に有効や。もちろん【凝】【流】も合わせて使える」

「……物体の強化か」

「そんで、最後」

ラミナは鉄パイプの先にオーラを集中させて、【硬】を発動する。そのまま、ゆつくりと瓦礫に近づかせていく。

ゴンとキルアが首を傾げる。

鉄パイプが瓦礫に触れた瞬間、瓦礫が爆発したように粉々に吹き飛んだ。

「!!」

ゴンとキルアは大きく目を見開く。

軽く叩いただけで、先ほどの【流】以上の威力を出していた。

ラミナは鉄パイプを放り投げて、ゴンとキルアを見る。

「これは……教えんところか。自分で考えてみい」

「……うん」

「これでうちがもう教えられることはない。今後はうちに頼らず、自分で考えていきや」

ラミナは先ほどまで座っていた馬の乗り物に歩み寄る。

「また敵対するようなことがあったら……その時はもう容赦はせん」

ゴンとキルアはその言葉に少し寂しそうな顔をする。

しかし、それは一人前として扱うということでもあるのだ。

プロハンターとして、プロハンターを目指す者としては喜ぶべきことではある。

それでもやはり殺し合いなどしたくはないのが、2人の本音である。

そんな2人の表情を見て見ぬふりをして、ラミナは携帯で時間を確認する。

「……そろそろやな……」

あと10分ほどで指定した時間になる。  
すると、近づいてくる気配を感じて、ラミナはその方向に目を向ける。

ゴンやキルアも人が近づいてきたことに気づく。

現れたのはクラピカ、レオリオ、センリツの3人だった。

「クラピカ、レオリオ！」

「ゴン！ キルア！ 無事か!？」

「うん！」

ゴンとキルアはクラピカ達に駆け寄る。

クラピカ達はホツとした顔を浮かべて、2人の状態を確かめる。

「何もされていないか？」

「もちろん！」

「さつきラミナに殴られて叱られたくらいだよ」

「……そうか」

改めて、ホツとしたクラピカは、ラミナに顔を向ける。

ラミナは無表情で前を向いたまま、座っていた。

クラピカ達はゆっくりと歩み寄る。

「……ラミナ」

「これで今回は手打ちや。旅団はお前から手を引くことで決まった。多分、競売も襲わんやろ」

「……」

「全く……お前らには引つ掻き回されたわ。おかげで体ボロボロや。ヒソカも殺し損ねたし、ゾルディック家に念を封じられたクロロを人質にされて脅されるし……」

「……こつちも十分引つ掻き回されたのだが……」

「ムカつくんは、ここでお前を殺すことが出来んことやな」

「っ!!」

クラピカ達は一瞬向けられたラミナの殺気に、身構える。

しかし、ラミナはそれだけで実行に移すことはなかった。

「殺す気はないて言うてるやろ。無駄なことはせん。ヒソカと戦ったり、飛行船から飛び降りたりで疲れとんねん」

「……」

クラピカはセンリツに目を向ける。

センリツは頷いて、

「本当よ」

「……これからどうする気なんだ？」

「そら、クロロに刺された念の鎖をどうにかする方法探すに決まってるやろ。ネオン……言うたか？ あの娘の占いでも、クロロとうちが一緒に行動しとるみたいやったしな」

「っ……！」

ラミナは馬の乗り物から跳び出して、クラピカ達から少し離れた瓦礫の上に立つ。

「クモは頭を潰そうが止まらん。次にクモを狙う時は、問答無用で殺す事やな。今のメンバーは殺されようがお前に情報を売る奴やおらんし、死ぬくらいでお前の情報を話すのを止める奴もおらん。『生かすべきはクモ』。これが絶対の掟や」

「……」

「ああ……そうや……。クラピカ」

「……なんだ？」

「ウボオーのことやけど。お前はウボオーと正面から戦って、1対1で倒したんか？」

ラミナはまっすぐにクラピカの眼を見つめる。

クラピカは両手を握り締めるが、それでもまっすぐに見返して頷く。

「ああ……。私は1人であいつを殺した」

「……ホンマか？ センリツ、やつけ？」

「……本当よ。私達もクラピカ1人で戦うとは聞いてたし……」

「……そうか。なら、ええわ」

「っ！ ……いいのか？ お前の兄のような者だったのだろう？」

「そやな。けど、あいつが1人でええっちゅうて、お前と戦うて負けただけやったんなら……ウボオーが弱かっただけの事や。なら、うちはウボオーの死を受け入れられる。お前にいちいち恨みを向ける気は

ないで、うちはな」

「……!!」

クラピカは復讐されないことに、恨み言を言われないことに目を見開いて固まる。

「誰かを殺すと決めた以上、誰かに殺されるんは必定や。お前とウボオーがそれに納得して殺し合ったんやったら、うちはその結果に必要以上に口出す気はないで。特に真正面から戦ったんなら尚更、な」  
ラミナは肩を竦める。

「けどまあ……それでもウボオーを殺したお前と……前みたいに接するんは、もう無理や。お前がうちの兄貴を殺した事実は、変わらんな」

「っ!!」

「ほなな、クラピカ。お前と次会う時は……クモの1人として、決着つけさせてもらうで」

ラミナはそう言って振り返り、闇の中へと姿を消していく。  
クラピカ達は、それを黙って見送ることしか出来なかった。

「……行っちゃまったな……」

「……うん」

レオリオとゴン、キルアは寂しさを顔に浮かべて、ラミナが消えた方向を見つめる。

クラピカは両手を握り締めて、ラミナがいた瓦礫の場所を見つめていた。

完全なる決別。

分かっただけはいたことだ。避けられることではないと理解して、覚悟もしていた。

しかし、直接言われると、やはりかなりの衝撃があった。しかも、恨み言をほぼ言われなかったことも、気持ちのやり場がなくなってしまうのだ。

「あらっ？」

「どうした？　って、箱？」

センリツとレオリオの声に力なく振り返るクラピカ。

目を向けると、ラミナが座っていた馬の乗り物の下に、箱が置かれていた。

「なんだこれ？ ゴン、キルア、知ってるか？」

「ううん。俺達をここに連れて行く時に、ラミナが持ってきただけだから」

「何が入ってるかまでは聞いてないよ」

ゴンとキルアも中身は知らなかった。

レオリオは困った表情で箱を見つめて、意を決したように手に取って開けようとする。

「駄目だよ、レオリオ！ ラミナに確認もしないで……！」

「確認って言ったって、どう確認取るんだよ？ あの感じだと、もう電話もメールも繋がらねえだろ？ 預かるにしても中身知つとかなきゃ、どう扱えばいいか分かんねえし」

「それは……そうだけど……」

ゴンはレオリオの言い分も正しいと思い、トーンダウンする。

レオリオが箱を開けると、ゴンとキルアも何だかんだで覗き込む。

しかし、3人は中身を見た瞬間、目を見開く。

「っ!! おい、これって……!?!」

「ク、クラピカ!」

「? どうした?」

ゴンが慌ててクラピカを呼ぶ。

後ろで眺めていたクラピカは呼ばれるがままに近づく。

そして、箱の中の【緋の眼】を見て、目を見開く。

「っ!! な……ぜ……」

【緋の眼】は自分が競り落としたはず。

そして、スクワラが持っているはずだと考えた瞬間、クラピカは弾かれたように携帯を取り出す。

「クラピカ?」

【緋の眼】は私の仲間が持っていたはずなんだ……!」

「!! 確かノブナガの奴、ホテルでクラピカの仲間からパクノダがクラピカの情報を聞き出したって……!」

キルアがホテルでの会話を思い出す。  
クラピカはスクワラの携帯にかけ、センリツがホテルの方に電話する。

しかし、そのどちらも出なかった。

「……出ない……！ くそっ!!」

「ん？ !! クラピカ、これ見ろ！」

レオリオが箱の中から小さな紙を見つけた。手に取って中を見ると、目を見開いてクラピカに差し出す。

紙を受け取ったクラピカは中に目を通すと、

『これが本物』

と書かれていた。

「これが本物……。ということは、昨日競り落とされた競売品は全て偽物だった……!!」

「はあ!? 念ってそんなに色んなもん具現化出来んのかよ……!!」

「……絶対にありえないとは言えない。コピーに特化した能力ならば可能だろう……」

「触れたモノをそのままコピーするくらいだったら、難しくはないわね。そのコピーに更に何かしら能力を付け加えるのは難しいでしようけど」

「……マジかよ」

念をほとんど知らないレオリオは唾然とするしかなかった。

クラピカはラミナの行動の意味が分からなかった。

「何故わざわざ……」

「本物の【緋の眼】を返すから、今回はもう旅団を狙うなってことじゃないの？ 今回の地下競売に出品されてる【緋の眼】はこれだけなんだろう？」

キルアがラミナの考えそうなことを想像して告げる。

その内容にクラピカは納得は出来るが、受け入れられるかどうかと聞かれれば別である。

(……旅団から……仲間の眼を返されるとはな……)

ラミナはクルタ族を滅ぼした時は団員ではないとはいえ、それでも

旅団関係者から自ら返されるとは、あまりにも情けなくなる。

「でも、旅団にずっと盗まれてるよりいいじゃん!!」

「まあ、そりやそうだ」

ゴンが明るく言い、レオリオも同意する。

ゴンが箱を抱え上げて、クラピカに渡す。

「はい！ クラピカ！」

「……ああ」

クラピカはまだ複雑そうな顔ではあるが、丁寧に箱を受け取る。

「よっし！ 色々とあつたが、これで一段落！ ……つて言つてもいいんだよな？」

「全く問題は解決してないけどね」

「むしろ、複雑になった気がするわね」

レオリオが声を上げるが、最後は首を傾げてキルア達を見る。

キルアは肩を竦めて複雑な表情を浮かべ、センリツは心配そうにクラピカを見ながら小さくため息を吐く。

結局、旅団やラミナとの関係はややくしくなっただけだ。

ウボオーギンを殺せたことが唯一の成果と言えるが、その後の状況を考えれば素直に喜ぶことは出来ない。

「とりあえず、今日はもう休みましょう。ボス達もこれ以上放置できないし」

「……そうだな」

センリツの言葉に全員が頷いて、移動を開始する。

そして、車に乗り込むと、クラピカが意識を失い高熱を出し始めて、レオリオ達は一度自分達のホテルで休ませることにするのだった。

廃遊園地を出たラミナは、雨の中を走っていた。

(……クラピカの奴、鎖を使って来んかったな。正直、縛り付けてくると思つとつたんやけど……)

しかし、結局何もしてこなかった。

だから、殺気を出して挑発してみたのだが、それでも構えるだけで鎖は使つてこなかった。

(何かしら条件があるつちゆうことか。まあ、クロロやウボオーが逃げ出せんかったんやし、何かしら制約はあるんやろうけど……) ラミナはそう考えながら、携帯を取り出してイルミに電話を掛ける。

『もしもし』

「キルアは解放したで。まあ、説教ついでに一発殴ったけど」

『まあ、今回はキルのミスだし。親父達でも殴っただろうから、そこはいいよ』

「ほな、クロロから退いてや」

『もう俺は出て行ってるよ。埋め合わせの1つとして、ヒソカにも嘘の情報を教えて、クロロに近づけないようにしたから』

「……どうも。なあ、まだキルアと婚約者になつとかなあかんか？ 今回でもう無理やと思うんやけど」

『親父達はそう思ってないみたいだよ。だから、無理じゃない？ 俺もこの程度で破棄しろなんて思ってないし』

「……さよで」

『じゃ、後はよろしく』

「あ？ おい、どういう…あっ！ おい!？」

電話を一方的に切られてしまう。

すぐにかかけ直すが、電源を切られていた。

ラミナは盛大に嫌な予感がするが、先にマチ達に報告と今後について話しておくことを優先する。

猛スピードでアジトに戻ったラミナ。

「戻ったで」

「あ、お帰り」

「無事で何より」

シズクとシャルナークが挨拶を返す。

フィングスやノブナガはまだ不貞腐れていた。

「ゾルディックは退いた。多分、明日にはヨークシンからおらんようになるやろ。クラピカもこれ以上は手を出せんと思うで。ゴン達はもう巻き込めんやろうしな」



「ラミナはこれからどうするの?」

パクノダが訊ねる。

ラミナは肩を竦めて、

「まあ、占い通り、クロロと一緒に動くわ。流石にあの状態のクロロを放置できんしな。車でゆつたりと東を目指すわ」

「お前だけで大丈夫なのか?」

「厳しそうやったら、アルケイデスの爺とかにでも手え借りるわ。ああ、そうや。マチ姉」

「ん?」

ラミナはマチに紙を投げ渡す。

「なにこれ?」

「うちの新しい番号にアドレスとホームコード。クロロが使った携帯とか、今回でマフィアンコミュニティにもバレたやろうからな。今までののもう使えん。そっちも今回使った番号、破棄しときや」

「分かってるよ」

「そっちはホームに戻るんか?」

「いや、来週いっぱいはこちらにいるつもりだ。俺とシズクは占いのこともあるし、こうなると下手に動くよりここで時間が過ぎるまで待つ。それから除念師を探したり、それぞれに仕事をやっていくことになる」

「了解。……クロロに関しては、こっちから定期的に動きを報告を入れる。そっちも何か分かったら、うちに連絡くれや」

「もちろん」

「ほなな。つとお……ノブナガ!」

「あ?」

ラミナはアジトを去ろうとして、顔だけで振り返ってノブナガに声を掛ける。

「ウボオーは、クラピカと1対1で戦って負けたそうや」

「……」

「じゃ、今度こそ、ほなな」

ラミナは手を振って、今度こそアジトを後にする。

また雨の中を歩いていると、携帯が鳴る。

携帯を見ると、マチからのメールだった。

『お疲れ。団長のこと、頼んだよ』

「…………ふっ」

ラミナは小さく笑みを浮かべて、『頑張るわ』とだけ返信したのだった。

ラミナは一度拠点に戻って、着替える。

そして、色々と必要になりそうな荷物を纏めて、予備で用意していた車に乗り込む。

クロロがいる隠れ家に向かい、中に入る。

「クロロ、無事か？ ……あ？」

「終わったのか？」

ラミナが中に入ると、そこには黒いシャツとズボンに着替えているクロロ以外に、もう1人。

黒髪に黒の着物を着た少女がいた。

ラミナは一瞬呆気にとられたが、その少女から血の匂いがして、すぐに普通の少女ではないことを理解した。

「まあ、とりあえずはな。で、誰？」

「カルト・ゾルディック。イルミとお前の婚約者の弟だそうだ」

「弟お？」

「…………よろしく」

カルトはラミナをじいーつと見て、ぶっきらぼうに挨拶をする。

ラミナは首を傾げるが、イルミのよろしく発言を思い出して、顔を顰めてクロロに目を向ける。

「まさかイルミが言うつつたんは…………」

「ああ、埋め合わせの1つで護衛にくれるそうさ。10歳だが、念も会得してるらしい」

「あ？ キルアがまだやったのに？」

「…………ボクは兄さんみたいに才能はないから」

カルトは僅かに不機嫌そうに、顔を背けながら言う。

(……まあ、確かにキルアよりは弱そうやなあ。念を覚えてこれやつたら、今のキルアでも勝てそうと言えれば勝てそうやけど……)

能力もあるので確実とは言えないが、【発】無しだったら確実にキルアが勝つ。

そう判断したラミナは、それはそれで疑問が出る。

「そこら辺の奴やったら、問題ないやろうけど。護衛にするには、ちよいと力不足やないか？」

カルトは少しムツとするが、イルミから「お前じゃまだ手も足も出ない」と言われているので黙って耐える。それにカルト自身も、ラミナの実力は認めているのだ。

キルアの婚約者という点はともかく。

クロロはラミナに紙を差し出す。

「シルバ・ゾルディックからだそうだ」

「あん？」

『カルトが旅団に興味を示している。10歳でまだまだ未熟なところが多い。団長の護衛ついでに、暗殺術なども含めて面倒を見てやってほしい。もちろん、カルトを利用してゾルディック家を使ってもらって構わない。まあ、お前はキルアの婚約者だから、わざわざカルトを通す必要はないが』

「……はあく」

「ふふつ。ゾルディック家に随分と気に入られているな」

「うっさいわ。で、車とかは用意出来たで。どうする？」

「そうだな……。もうここに用はないし、早速東を目指すとするか」

「了解。ほな、まずはとっととヨークシン出て、うちの家でも目指すか

？ 一応東方面やし」

「そうしよう。そこで準備と今後の予定を考える」

クロロは立ち上がり、カルトもそれに追従する。

ラミナは運転席に乗り、クロロは助手席、カルトは後部座席に乗り込む。

「カルトはなんか買つとくもんあるか？」

「大丈夫。必要なものは家から届けてもらえるから」  
「さよで」

呆れながら、ラミナは車を走らせ始める。

ゆっくりと夜の街を走り、ヨークシンの外へと目指す。

「たった4日で随分と変わったもんやな」

「そうだな……。まさか、お前とゾルディックの人間と3人でドライブすることになるとはな」

「ホンマになあ……。あゝ、どっかで飯食ってええ？ 腹減ったん忘れとった」

「俺も軽くしか食ってないしな。構わんぞ」

「カルトは苦手な食いもんあるか？」

「特にない」

「ほな、ファミレスでも寄るか」

何だかんだでカルトの存在を受け入れるラミナ。

ラミナ、クロロ、カルト。

不思議な組み合わせとなった3人は、仲良く東を目指すのであった。

### #53 カルト×ノ×ジツリヨク

ヨークシンを出た翌日の9月5日。

ラミナ達はヨークシンシティとカゴツシシティの中間にある街で1泊することにした。

モーターに車を停めたラミナは、ふとカルトを見て、

「カルトって男でええのん？ 女がええのん？」

「……男でいいよ。この格好は見た目に合ってるからってだけだし」

「ふうん。じゃあ、クロロと相部屋でええか」

カルトは僅かに眉を顰めて言う。

ラミナはそれに頷いて、クロロとカルトを相部屋にする。

クロロはその間、新聞を購入してフロントの椅子に座って読んでいた。

部屋を取ったラミナ達は部屋に入る。

「クロロは部屋でちよつと大人しくしとれや。情報とお前の護身用の武器とか集めてくるから」

「ああ。すまんな」

「カルトもクロロの護衛。その間、クロロに旅団のことも聞いとぎ」

「分かった」

「クロロ、なんか欲しいもんあるか？」

「……いや、今は特にないな」

「分かった。早めに戻るから、ちよつと待つとき」

ラミナは部屋を後にして、街中のネットカフェに向かう。

パソコンの前に座り、さっそく情報収集を始める。

まずはヨークシンでの旅団や地下競売の情報。

昨日暴れたので、マフィアンコミュニティにも死体が偽物だとバレた可能性がある。

（……地下競売は中止しとったんか。旅団の残党の復讐を警戒したか……。それ以外での旅団に関しては特に反応なし。まあ、十老頭の指令に背く度胸はないっちゆうことか）

続いて、自身の事を調べる。

やはり仲介屋や情報屋にはラミナと旅団の関係はバレていた。

(おく……。がつつりバレとるな。こら、マフィアと太く繋がつとる仲介屋はもう使えんな。まあ、ゾルディックの方が金払い良さそうやからええけど)

引き続きハンターサイトに移動して、自分と旅団の情報について調べる。

やはりハンターサイトには、ラミナと旅団の関係も、旅団が生き延びているのもバレている。

流石にクロロの状況まではバレていないし、ラミナ達がヨークシンを抜け出したことは載っていない。

(全く……。クラピカやノストラードは全然情報出さんかった癖に、こっちは1日かいな。選り好みしよつてからに……)

ラミナはため息を吐いて、パソコンの前から立ち上がる。

ネットカフェから出たラミナは、携帯ショップに向かい、新しく携帯を一台購入する。

そして、郊外にある武器屋に顔を出して、クロロが使えそうな武器を適当に購入する。

その後も細々と買い物をして、モーターへ戻る。

「戻ったで」

「ああ」

クロロは椅子に座って未だ新聞を読んでおり、カルトはテレビを見ていた。

「ほれ」

「ん？」

ラミナは購入してきたものをベッドの上に広げる。

クロロは新聞から目を放して、ベッドへと目を向ける。

ベッドの上には拳銃やナイフ、暗器などが広がっていた。

「念を使えん以上、銃も視野に入れんな。服も何着か買うて来たから、それと合わせて武装しい」

「やれやれ……。あまりゴチャゴチャしたのは好きじゃないんだがな」

クロロは拳銃を手にして、ジロジロと眺めながら愚痴る。

ラミナはベッドに腰掛けながら、呆れたようにクロロを見る。

「贅沢言うなや。今のお前はあの拳銃の弾で簡単にお陀仏するんやぞ？ まあ、素人の発砲やったら避けれるやろうけど」

「そうだったな。全く……当たり前前に使えていたものが使えなくなるの不便なものだな……」

「それと新しい携帯とお前の財布。口座に関しては早めに手続きしときや」

「ん？ 俺の携帯はアジトにあつたはずだが？」

「ド阿呆。今までの携帯やと、下手にマチ姉達から連絡が来たら死ぬかもしれないやろうが」

「……それもそうか」

クロロは顎に手を当てて、考え込む。

ラミナは小さくため息を吐く。

「お前が逃げ出したことはまだバレてへん。まあ、うちとお前らが繋がつとるんは仲介屋や情報屋、ハンターサイトにはバレたけどな」

「追手は来そうか？」

「今の所、大丈夫そうやな。マフィアコミュニティはまだ十老頭のことを隠しとるんか、気づいとらんのか知らんけど、動く気配はなし。一番可能性があるんは、うちが利用しとった仲介屋やな。まあ、その場合ターゲットはうちやろうけどな。クロロはしばらく大丈夫やろ」

「なら、出歩いてても、そこまで問題はなさそうだな」

「それはええけど。額の刺青だけでも隠して、うちかカルトを連れて行きや」

ラミナは立ち上がったって、カルトに顔を向ける。

カルトはつまらなそうに武器を眺めていた。

「うちもちよつと着替えてくるわ」

「ああ」

ラミナはクロロ達の部屋を出て、隣の部屋に入る。

着ている服を脱ぎ捨てる。そして、体の調子確かめる。

(ん〜……左腕は明後日。アバラは【絶】で休めて1, 2週間。左腕が治れば戦闘に支障は出んな)

ラミナは赤のクロスホルタータンクトップを着て、茶色のホットパンツを履く。

(問題は【刃で溢れる宝物庫】の方か……。メインで使った武器のほとんどが、ストックが残り3つ以下になってしまった。補充しようにもなあ……。補充したら壊れる武器も多い。けど、また【月の眼】を使うような相手といつ出会うか分からんし……。武器のストックは多い方がええんやけどなあ……)

【刃で溢れる宝物庫】に武器を補充するには、【月の眼】を使わなければならぬ。

つまり、新しく補充すると同時に、すでに収納している武器のストックが最低1つ減る。

せっかく補充したのに、また減ってしまうのだ。それでは意味はない。

なので、武器を補充するタイミングは非常にシビアなのである。

今回のヨークシンでは【月の眼】を短期間で2回も使ってしまった。そのしわ寄せが襲ってきていた。

(今の武器達は能力と合つとるからなく。しばらくは【月の眼】を使わんようにせんとな)

紺色のミニGジャンに袖を通し、ブーツサンダルを履く。

そして、髪紐を解いて手櫛で軽く整える。

ラミナはサングラスや携帯をジャケットのポケットなどに入れていく。

そして、再びクロロの部屋に戻る。

クロロも着替えていた。髪を下ろして額に包帯を巻いている。

紺色のシャツに、薄手の黒いジャケット。そして、灰色のスラックスを履いていた。

ベッドの上に残っている武器を見て、何を装備したのか確認する。

「拳銃の手入れは？」

「ある程度は知ってる。ゆっくり慣れていくさ。早めに止めれるよう



になりたいがな」

「そうは言うてもなあ。除念師なんざ、そう簡単に見つからんで？流星街におったんはくたばったし、ハンター協会公認はたった1人やし。他は見事に雲隠れ。ハンターサイトでも数百億の情報料で、その情報も数年前とかなんやろ？」

「そうだな。ヒントは俺とお前の占いだけだ。『東』と『実現する幻』という2つ。全く持って答えが分からん」

「占いつて？」

カルトが首を傾げる。

それにクロロとラミナが説明して、2人に出た内容を伝える。

説明しながらラミナは地図を広げる。

そして、ヨークシンから東に向かつて、指を滑らせていく。

しかし、もちろん地名が連なるだけで、ピンとくるものはない。

「続きにもヒントなかったの？」

「なかったなあ」

「つてことは、今月は絶対見つからないってことじゃないの？」

「だろうな」

「まあ、下手したらこの大陸を横断することになるでなあ。1か月じゃ無理やろな。行く先々調べなあかんし」

ラミナはうんざりしながら地図を放り投げる。

村や町に街。それだけでなく山や森なども探索する必要性があるかもしれないのだ。

村や街にいる人間を虱潰しに調べる必要もある。

とてもではないが、1、2か月で終わる話ではない。

「まあ、占いの雰囲気からすれば、この大陸を出る感じやないけど……」

「果てしない話だね」

「全くだな」

「誰のせいや」

「鎖野郎だろ？」

「……」

カルトもうんざりするように言い、クロロも同意するように頷く。ラミナはそれに若干イラつきながらクロロに文句を言うが、言い返されて黙り込む。

その後、3人で夕食に食べに出る。

モーター近くのファミレスに入り、思い思いに料理を頼む。

ラミナは1人で5品ほど注文して、カルトに呆れられる。

「……昨日もだけど、よく食べるね」

「怪我を治すためや。食わんと治すだけの体力が保たん」

「ふうん」

「つちゆうか、お前ももつと食べた方がええんちゃうか？ 体、デカあならんし、兄貴らみたいに強うなれんぞ？」

「大きなお世話だよ」

カルトは眉を顰めて、そっぽを向く。

人形のような見た目だが、思ったより感情豊かなカルトに苦笑するラミナとクロロ。

すぐに料理が届き、食べ始めるラミナ達。

クロロはパスタ、カルトはドリア。ラミナはステーキにピザ、ドリアなどを食べる。

さつさと食べて、モーターへの帰路に就くラミナ達。

「そう言えば、シルバからお前を鍛えろと言われとるんやけど」

「……別にいい」

カルトはまたも拗ねたようにそっぽを向く。

ラミナは肩を竦めて、

「まあ、無理強いはせんけど……。旅団に入りたいんやったら、もうちよつと力付けん仕事任せて貰えんで？」

「仕事って？」

「盗みに殺し。盗みはともかく、殺しは任せてもらえんやろうなあ。せやろ？」

ラミナはクロロに顔を向ける。

クロロはカルトに目を向けて、すぐに前を見る。

「……そうだな。今回の仕事だったら、アジトで待機させてただろう

な」

クロロの言葉にカルトは顔を顰める。

ラミナは苦笑して、

「まあ、お前の能力がどんなもんかにもよるやろうけどな。今まで見たる感じやと、下から3番目くらいじゃうか?」

「……その下の2人って?」

「情報処理や隠蔽作業メインの団員や。やから戦闘はそこまで得意やない」

「……僕じゃ他の団員には勝てない?」

「無理やな」

「……」

はつきりと断言されたことに納得出来ない表情を浮かべるカルト。確かに自身が未熟であることも理解している。

しかし、それでも弱いとも思っていない。

「納得出来ないようだな」

クロロが前を向いたまま言う。

カルトは不貞腐れた顔で頷く。

「なら、ラミナと戦ってみるといい」

「……まあ、そうなるわな」

ラミナは話の流れからそうなることは想像出来た。

あれだけ「お前は弱いよ」発言すれば、誰だってイラつく。

カルトはゾルディック家の者とは言え、まだまだ子供なのだから感情を制御できないのが普通である。

ラミナはため息を吐いて、

「じゃあ、車で少し離れたところにある湖畔に行こか。流石に街中で暴れれば目立つ」

と、言うことでラミナ達は車で1時間ほどの所にある湖に向かう。

周囲に人の気配は一切なく、明かりすらない。

湖の傍にラミナとカルトは向かい合って立つ。

クロロは車にもたれ掛かって、全力で観戦状態である。

「そっちは全力でええで」

ラミナは右手にブロードソードを具現化して、言い放つ。  
カルトはずくつと不機嫌顔で扇子を口元に当てて、ラミナを睨みつけている。

「……死んでもいいの？」

「殺せるならな」

「……ふん」

ラミナの挑発に、カルトは完全に目が据わる。

そして、扇子を広げ、その上に小さな三角形の紙きれを散らしていく。

カルトが勢いよく扇子を振り抜くと、紙きれがオーラを纏って宙を舞う。

（操作系か……）

ラミナは僅かに目を見開いて、紙吹雪を見据える。

カルトが扇子を振ると、紙吹雪が蛇のようにうねりながらラミナに迫る。

ラミナは横に跳んで躲す。

素早くカルトが扇子を振ると、ラミナを囲う様に紙吹雪が動く。

ラミナは囲まれる直前に囲いを抜けて、カルトに迫る。

「ちっ……っ……」

カルトは舌打ちをして、扇子を振る。ラミナの真後ろから紙吹雪が襲い掛かる。

ラミナは一瞬で高くジャンプして、紙吹雪をまた躲す。

（自動追尾はなし。細かく枝分かれする様子もなし。あくまで風とオーラを混ぜ合わせて飛ばし、操作する能力）

ラミナはブロードソードを消し、薙刀を具現化する。

そして、湖のすぐ傍に立つ。

カルトは目を細めて、警戒を強める。

ラミナは不敵に笑みを浮かべて、薙刀の刃を湖面に突き刺す。

【乱弁天】

勢いよく薙刀を振り上げると、水柱が立ち上がる。

そして、その水柱はカルトの紙吹雪同様、蛇のようにうねって紙吹

雪に襲い掛かる。

紙吹雪は水に呑み込まれて動きを止める。

「っ!!」

「紙ゆえに水には弱いわなあ」

「具現化系で、水を操る能力……!」

「一番ええんは雨の日に使うことなんやけどな。こいつは、操る水は刃で触れなあかんでな」

「……なんでわざわざバラすの?」

「ん? バラしても問題ないからに決まっつとるやないか」

「っ!! 舐めるな……!」

カルトは殺気を全開にして、袖から新しい紙キレを取り出して、撒き散らして操る。

ラミナは刃を湖に突き刺す。そして、再び振り上げて水を操る。

操られた水は、今度は10個ほどのバスケットボール大の水弾となってカルトに向かって飛ぶ。

カルトの紙吹雪は再び水弾に食い破られて、カルトは後ろに跳び下がって躲そうとするが、

「こつちでええんか?」

ラミナがいつの間にか背後に回り込んでいた。

「っ!!」

カルトは目を見開く。

ラミナは左掌底をカルトの背中に叩き込む。

「ぐっ!」

「操作系に多いんよなあ。操るモノに依存しすぎて、体術が疎かになる奴が」

「っ!!」

「それにまだまだ【流】が遅いし、【堅】も未熟や」

カルトが歯を食いしばって扇子を振ろうとするが、ラミナは一瞬でカルトに詰め寄って、左手で扇子を握っているカルトの腕を弾く。

「なっ!!?」

「操作系はその性質上『操るための操縦桿』が必須。相手に刺すか、自

身で振るうか、またはその両方やな。お前の場合は自分で直接振るうタイプやんな。やったら、その動きを止めてやれば、お前の今の能力は簡単に封じられる」

「ぐっ……」

カルトはラミナから離れようとするが、ラミナはピツタリとカルトに引つ付いたままで付いて行き、振り切ることが出来ない。

「無駄や無駄。お前の体術はイルミどころかキルア以下。それじゃあ、うちからは逃げられんで」

カルトは扇子を刃のように振るい、ラミナに斬りかかる。

しかし、容易くその腕は掴まれてしまった。

「!!」

「うちがどんな武器が得意か知つとるやろ。うちに斬撃が届くと思うなや、未熟モン」

ラミナの殺し屋の二つ名は「リツパー」。

あらゆる刀剣槍類を使いこなす戦闘スタイルゆえに付けられた名前だ。

その形状を見れば、どんな太刀筋で振るわれるかなど、簡単に予測できる。

更にはカルトの体術は、ラミナより下。

予測できている以上、見切つて腕を掴むなど簡単に決まっている。

パン！ パン！

「そこまでだな」

そこにクロロが手を叩いて、試合終了を告げる。

ラミナはカルトの腕を放して、カルトは素早く後ろに下がる。

カルトは悔し気に歯を食いしばって、ラミナを睨みつける。

ラミナは腰に両手を当てて、息を整える。

「おもしろいし、強い能力やとは思うけどな。それにかまけ過ぎや。操作系は体術が優れとる方がもつと余裕が出来るで？」

「……」

「で、どうするんや？ 今の感じでも、そのままでええんか？」

「……嫌だ」

「なら、修行するつちゆうことできえな」

カルトは不貞腐れた顔で小さく頷く。

その雰囲気ごとくなくキルアに似ており、ラミナはやはり兄弟だ  
と思つて苦笑する。

「まあ、能力に関してはお前が自分で改良するなりすればええ。うち  
はお前の基礎部分に手え出すで」

「……分かった」

「じゃあ、早速で悪いんやけど、【纏】【練】【凝】【流】の順で見せてん  
か」

カルトはぶすつとした顔のまま、言われた通りに【纏】【練】【凝】【流】  
を見せる。

ラミナは腕を組んで、僅かに眉を顰める。

【堅】はどれくらい維持出来る？」

「40分くらい」

ラミナは憐れみの表情を浮かべて、思わずカルトの頭を撫でる。

「なっ!? なにするんだよ!?!」

カルトは目を見開いて、感情的に叫びながらラミナの手を払い退け  
る。

「おお、すまん。カルトつて念を覚えてどれくらいや?」

「……1年くらい」

「……うん。まあ……頑張るか」

「なに、その同情的な目は!?!」

「いやあ……念を覚えて半年くらいで、まだ【発】も出来とらんキルア  
にも負けとるんがなあ……」

そして、ゴンにも負けている。

【流】はまだカルトが上ではあるが、【纏】【練】【凝】は昨日見た限  
りではキルア達の方が上だった。

もちろん、これが一般的な修得状況ではあるのだが、旅団やゾル  
ディック家からすれば、普通では邪魔なだけだ。

「……兄さんと比べられても……」

「その友達にも負けとんで」

「っ……!!」

「まあ、せいともキルアに負けん才能の持ち主やからしやあないけどな。とりあえず、明日からゆっくりやっていこか」

ラミナは苦笑しながら、再びカルトの頭をポンポンと軽く叩く。

カルトは扇子で払おうとしたが、ラミナは素早く手を引つ込めてクロロに顔を向ける。

「オーラは見えたか?」

「見ることは出来る。あくまで使えないだけだからな。精孔が閉ざされてるわけじゃない」

クロロは腕を組んで車にもたれ掛かったまま肩を竦め、その言葉に頷くラミナ。

オーラが見えるならば、少しは自分でも警戒することが出来るということだ。

「まあ、【纏】が出来んから無防備なんは変わらんか」

「そうだな」

「厄介なこつちや」

ラミナはため息を吐きながら、車に歩み寄る。

その後ろにカルトも不貞腐れた顔のまま、付いてきていた。

「帰り運転してんか?」

「ああ」

車のキーをクロロに投げ渡し、ラミナは助手席に乗り込む。

クロロが運転席に乗り、カルトが後部座席に乗って走り出す。

しばらく走ったところで、

「随分とあつさりと指導することを決めたな」

「ん?」

「あの婚約者の弟だからか?」

「む……」

クロロがキルアの事を口にして、カルトが眉を顰める。

その反応をクロロとラミナは無視する。

ラミナはゾルディック家に行った時から、クロロはこの前のイルミ達の話から、ゾルディック家が『キルア大好き!』なのは十分理解し



ていた。

「んなわけあるかい。お前がわざわざ『戦ってみるか?』なんざ言うから、お前がカルトを旅団入りさせることに前向きやって思ったからや」

「え?」

ラミナが助手席に浅く座つてもたれ掛かった状態で、呆れた表情でクロロに目を向けながら言う。

その内容にカルトが僅かに目を見開いて驚く。

「ヨークシンのことで、ゾルディックとの繋がりを太くしとく方がよさそうやからなあ。けど、今のまま入れても死ぬ確率高そうやし。シルバの言う通りにうちが鍛えたらゾルディック家に恩も売れるし、戦力にもなるつちゆうことやる?」

「ふっ……」

クロロは笑みを浮かべるだけで肯定も否定もしなかった。

しかし、雰囲気から正解だとラミナは理解する。

「まあ、後は……またキルアがクラピカと旅団を攻めてきたら、カルトをぶつければ兄弟喧嘩に出来るかもしれんしな」

「え」

カルトは頬を引きつかせて固まる。

ラミナは「くつくつくつ!」と笑いながら、

「今回の件で、婚約者とは言えその気になればうちがキルアを殺す可能性があるんをゾルディックも理解しとるやろ。やったら、まだカルトの方がキルアも止めるには適任やろな」

「ちよつ! ちよつと待つて?! ボ、ボクが兄さんと戦うの!?!」

「そら、家族のことは家族に任せるんが一番やんな」

「そうだな」

クロロも笑みを浮かべて、ラミナの言葉に同意する。

カルトは唾然とした顔で固まる。

「つちゆうわけやから、頑張つて強うなりやろ。そしたら、キルアにも認めて貰えるかもな」

「……兄さんに……」

カルトは閉じた扇子を口に当てて、黙り込む。

少しすると、何を妄想したのか少しうっとりし始める。

ラミナはその様子を、バックミラーで見呆れる。

(……ゼノ爺からなんや電話来たけど……兄弟関係も思ったより歪んだるなあ)

実は買い物に出ている時にゼノから電話が来ていたのだ。

『カルトはキルに憧れとるし、好いておるんじやがな。カルトが物心つく頃には、キルはイルミの針が埋め込まれたこともあって、カルトに構わなくなつてしもうたんじやよ。そのせいでカルトはキルに対して、少くし歪んだ親愛と承認欲求を持つておる』

『それがなんで旅団に入るって考えになんねん』

『恐らくじやが……シルバと儂、イルミと戦つて生き延びたお前さんと団長がおるからじやろうな』

『あ……』

『それともう一つ』

『ん?』

『カルトにとっての理想のキルは、『針が刺さった頃のキル』じや。つまり、今のキルは認めておらん可能性が高い』

『……操り人形っちゆうか、冷酷冷徹で殺しを厭わん暗殺者のキルアがええと?』

『そういうことじやな。キキヨウやイルミと仲がええからのう。嗜好もあの2人に似るところがある』

『あ……納得。雰囲気はイルミ寄りやんなあ』

『まあ、それはそれで構わん。しかし、今のカルトではキルの目には留まらんじやろうからな。軽くでもええから面倒見てやってくれんか?』

『流石に命の保証はせんぞ? キルアに念を教えるんとは意味がちやうし』

『分かつとる。そこらへんは儂らが鍛えても同じじやしの』

という、やり取りをしていたのだ。

なので、ぶつちやけクロロが言わずとも、ラミナはカルトの実力を

測るつもりでいたのだ。

(この家族。見た目と系統で父親似か母親似かはつきりしとるなあ)

操作系は間違いなく母親であるキキョウの血筋なのだろう。

ラミナは未だトリップをしてるカルトを見つめながら、

「……最悪フェイタンにでも押し付けるか」

と、呟くのだった。

それにクロロも笑みを浮かべて、

「ああ……それも面白そうだ」

トリップしたままのカルトは、2人の言葉を聞き逃した。

カルトは己がどんな集団に近づいているのかを理解するのは、まだまだ先の事であった。

ラミナの武器情報！

・【乱弁天】みだれべんてん

具現化した薙刀に付与された能力。

刃に触れている水分を操ることが出来る。

蛇のように操る場合は刃から水を切り離せない。水弾のように切り離すと、遠隔操作は出来ない。

高圧水流で切れ味を上げる事も出来る。

体を斬りつければ血も操ることも出来るが、あくまで操れるのは刃が触れた血液だけなので、失血死するまで血を引き抜くこと出来ない。

そのため、水辺の傍か、雨の日でもない限り、本領発揮は出来ない。

## #54 ゾルデイック×ノ×オシゴト

それから5日。

ラミナ達はカゴツシの家に来て来た。

「グリードアイランド?」

『そ。フィックスとフェイタンが盗んできた』

「それを2人で?」

『ああ。それに今、シャルやシズク、コルトピもやろうって言ってる』

「ほお〜」

ラミナは自室でベッドに寝転がりながら、マチと電話していた。

ラミナとマチは、6日から毎日夜にメールを交わしていた。占いで連絡を取り合っているとあったためだ。

そして今、マチの目の前で『仲間の遊戯』が始まっていた。

「まあ、フィックスもシズク達も占いがまだはつきりしたらんからなあ」

『そうだね。だから、5人はしばらくアジトにはいないよ』

「……あ? いない? ゲームしとんちゃうんか?」

『このゲーム、念で作られててき。体ごとゲームの中に入るんだって。実際消えたしね』

「……ふうん」

ラミナは思わず考え込む。

しかし、

『そつちは今、あんたの家?』

「ん? おう。昨日着いた。ちよつと体を休めて、準備を整えたら除念師探し開始やな」

『2人で大丈夫なの?』

「……あ」

『……あ?』

ラミナはカルトの事を伝えるのをすっかり忘れていたことに気づいた。

マチもラミナの反応に何かを気づいて、声が低くなる。

『何？ 他に誰かいるの？』

「……えくつと……ゾルディックの五男のカルト……」

『は？ ……またゾルディック？ なんで？』

「ヨークシンで最後にしゃしゃり出たことへの埋め合わせやと。クロロの護衛つて名目で、入団希望だそうやで」

『ゾルディックのガキが入団？ 本気？』

「クロロは前向きに検討しとるで？ まあ、少し実力不足やから、またうちが面倒見とるけど」

『……団長が認めてるなら……いいけどさ。強いなの？』

「まだ微妙。まあ、ゆつくりと念の基礎と体術を教えていく予定や。ゾルディックからの仕事受けながらな」

『ゾルディックの？』

「ヨークシンでうちと旅団の関係バレたからなあ。下手な仲介屋から仕事受けるより、ゾルディックからの紹介の方がまだ安全や」

しかも、ゾルディックでの仕事ゆえに報酬も高い。

その分、難易度も高いが、ヨークシンでの仕事に比べればマシだろうとラミナは考える。

「まあ、カルトに関しては、どつかで一度そつちに顔出させるわ」

『あつそ。あのクソ野郎より使えるんだらうね？ 殺し嫌がつてるとか』

「安心しい。ちゃんとゾルディックに染まっとする。やから、実力さえ上がったたら、十分戦力になるで」

『ふうん……。ま、期待せずに待ってるよ』

「それでええと思うで？」

『団長、今何してんの？』

「地下のお宝の前で酒飲みながら読書」

『ぷっ！ あはははは!! さっすが団長!』

マチの笑い声が響く。

昨日、家に着いた後、元気づけてやろうと地下のお宝を見せてやったのだ。

すると、今朝から椅子と大量の本を持ち込んで、本を読んでは剣を

眺め、また本を読んではまだ剣を眺め、更に酒を飲むという贅沢空間を満喫していた。

地下でシエルターゆえに雑音がしないというのも気に入ったらしい。

ちなみにカルトはお宝よりも武器庫の方が興味が強かったようで、すぐに上に戻って短剣や暗器類を見つめていた。

「まあ……状況が状況やから、リラックスするんはええんやけどな」  
『盗まれないように気をつけなよ』

「怖い事言わんとつてえや」

『ふふっ！ まあ、団長が元気そうなら、それでいいよ』

「また連絡するわ。そっちも気い付けや」

『分かってる。じゃあね』

通話を終えて、ラミナはベッドから起き上がって、音を立てずに1階に下りる。

リビングではカルトが黒のTシャツ、半ズボンとラフな格好で立って、瞑想しながら【纏】を行っていた。

今は【纏】【練】【堅】を毎日やらせていた。

そして、夜には体術の訓練を行っていた。

ラミナはカルトに一瞬殺気を放つ。

カルトは目を見開いて、【練】を発動して構える。

「遅いわ、阿呆」

「いたっ!？」

ラミナは一瞬でカルトの背後に回り、カルトの後頭部を軽く押す。

カルトは後頭部を押さえて、ソファに倒れ込む。

「殺気飛ばされてから反応すんなや。うちがリビングに来た段階で構えんかい」

「……じゃあ、どうやって気づけばいいのさ……」

「視線は向けとった。ここにはうちしかおらんのやぞ？ それで視線に気づけんと、尾行されたら終わりやで」

「……」

カルトは眉を顰めて不貞腐れたように顔を背ける。

ラミナはため息を吐いて、両手を腰に当てる。

「暗殺者はこういう時ほど、周囲の存在に気を配れなあかん。自然に、素早く、気取られず。旅団に入りたくないやったら、プロハンターレベル相手でも居場所は分かんでも存在くらいは感じ取れるようにならんとな」

「……くっ！」

カルトは悔し気に歯を食いしばる。

ラミナは苦笑しながら、カルトの頭をガシガシと搔き乱す。

「頑張らんとなあ」

実はカルトはまだ1人で仕事を行ったことはない。

シルバやイルミの仕事に付いて行き、そこでターゲット以外の殺しをしながら経験を積んでいる状態だったらしい。

これに関しては不思議なことでも遅いわけでもないのです、決してカルトに才能がないわけではない。

キルアがありすぎただけなのだ。

そのせいでカルトがキルアと比べられてしまうのは仕方がない事かもしれない。

シルバ達はなんだかんだで家族に甘い。なので、カルトを大事にしているからこそ、独り立ちをまださせていない。

しかし、旅団に入るならば、そういうわけにはいかない。

なので、ラミナを利用して独り立ちを後押しする気なのだ。

(……暗殺一家のくせに、過保護やんなあ)

「いい加減放して！」

「おお、スマンスマン。ほな、次は両腕の関節外しの練習な」

手を払われたラミナは、軽く謝罪しながら次の特訓の指示を出す。

両腕の関節外しは捕縛からの脱出や【蛇活】に繋がるので、ラミナからすれば非力なカルトこそ会得すべき技術だと考えていた。

しかもカルトは手指の身体操作もまだ不得意なので、そこも鍛えなければならぬ。

カルトはソファに座って、指と手首の関節を外し始める。

「カルトの能力は扇子で紙吹雪を操る。つまり、関節可動範囲を広げ

れば、操れる軌道も増えるかもしれん。それに扇子での攻撃も、剣筋が読みにくくなるでな」

「……簡単に言わないでよ」

「念はともかく、それに関してはやれば誰でもできるもんや。つべこべ言わずにまずはやる」

カルトは眉を顰めたまま、関節を外しては嵌め、外しては嵌めを繰り返す。

ラミナは苦笑しながら、その様子を見つめる。

その時、ラミナの携帯が震える。

「ん？」

ラミナは携帯を取り出す。

メールが来ており、送信主はゼノだった。

メールを開いたラミナは、中身を読む。

「……仕事か」

内容は殺しの依頼だった。

しかし、ターゲットの情報はなく、『そちらに使いを送る。詳細はその者に』としか書かれていなかった。

(さて……まあ、仕事するんはええとして……。カルトを連れて行くか、連れて行くんやったらクロロをどうするか、やな)

クロロに関しては、地下でのんびりさせていれば問題は無さそうだとは思う。

それに情報収集を続けているが、クロロを追いかけているような勢力も見られない。

なので、すぐさま誰かに襲われる可能性はないだろうと考える。

数日空けるくらいならば、問題はないだろう。

(その使いとやらにクロロの面倒でも見て貰えばええか)

そんな事を考えていると、

ピンポーン！

チャイムが鳴り響く。

ラミナが玄関に向かい、扉を開ける。

そこにはゴトー、アマネ、そして男と女の執事の4人が立っていた。



ゴトー達は頭を下げて、

「お久しぶりです、ラミナ様」

「……連絡と到着時間がおかしいと思うんやけど」

「申し訳ありません。連絡するのを忘れていたそうです」

「……あつそ。まあ、入り」

「失礼いたします」

ゴトー達を家の中に入れ、リビングに通したラミナ。

突然現れたゴトー達にカルトは目を見開く。

「お邪魔致します、カルト様」

「それにしても、使いにしてはちよいと多ないか？」

「旦那様のご命令でして。私とアマネは今回の仕事でのラミナ様とカルト様のフォロー役。残り2名はその間のクロロ様の護衛となっております」

「ふうん……。カルトの参加は決定か」

「ええ。その方がゾルディックが依頼を果たしたという面目が立つ、との仰せです」

「そらそうや。ま、ソファの方に適当に座り」

「ありがとうございます」

ゴトーとアマネはカルトと同じソファに座り、残りの2人はその背後に立つ。

ラミナは人数分の茶を入れてテーブルに置き、1人用のソファに座る。

「ほんで？ 依頼ちゆうんは？」

「はい」

ゴトーは背後の男執事に目配せすると、男執事が手に持っていた封筒から資料を取り出して、ラミナとカルトに渡す。

「場所はここから北に50kmほどの街。ターゲットはマフィアとも繋がりがある財閥の社長一家と幹部、計8名です」

「ふうん」

ラミナはターゲットの家族構成を見る。

「……7歳のガキまでたあ、随分恨まれとるなあ。この家族」

「マフィアと裏で人身販売をしているのですよ。その被害者の1人に、ある国王の隠し子がいたそうです」

「あく……裏事業を完全に潰せるようにつちゆうことか。ガキを神輿にされんように」

「そのようですね」

「マフィアの方はええんか？」

「そちらはゼノ様が動かれるとのことですよ」

「あの爺……ガキ殺すんが嫌やから、こっちに回しよったな？」

「……そこまではなんとも……」

ゴトーは苦笑いを浮かべながら、眼鏡の位置を直す。

アマネ達も僅かに頬を引きつかせて、顔を背ける。

「殺しの方針はうちが決めてええんやな？ カルトやお前らに関しても」

「はい。そのように仰せつかっております」

「ふうん。調べた限りやと、相手の護衛に念使いはおらんのやな？」

ラミナは資料を見て、相手の戦力を把握する。

あくまでも雇っているのは一般企業のシークレットサービスらしい。

プロハンターや流れの念使いがいる情報はない。

「マフィアの方はいるようですが、こちらは確認されておりません」

「なら、さっさと終わらすか。カルト、着替えてきい」

「分かった」

ラミナはソファから立ち上がって、地下に下りる。

そして、シエルターを覗き込むと、お宝を見上げて酒瓶を傾けるクロ口の姿があった。

ラミナは呆れながら入り口の壁に寄りかかる。

「なにかあったか？」

「ゾルディックからの仕事が入った。これから出る。カルトも連れてくでな。一応、護衛にゾルディックの執事2人付けてくれるらしいわ」

「そうか」

「……ここにおるんは構わんけど、飯とかは自分で何とかせえよ」

「ああ」

「……はあ」

ラミナはお宝から全く目を放さずに答えるクロロにため息を吐いて、背を向ける。

そして、ラミナも2階に上がり、ブーツサンダルをブーツに履き替え、下ろしていた髪も後ろで紐で束ねる。

1階に戻ると、すでにカルトも着物に着替え終えていた。

「ほな、行こか。ああ……クロロは今、地下におるわ。悪いけど、執事の2人はクロロが自分で上がって来るまでは、地下に下りんように。別に1階や2階は好きにしてええから」

「承知しました」

護衛の執事に伝えて、家を後にするラミナ達。

外は夕暮れに差し掛かって来ていた。

「車で向かわれますか？」

ゴトーの問いかけにラミナは顎に手を当てる。

「……いや、走ろか」

「え？」

カルトとアマネが声を上げて驚く。

ラミナはカルトに目を向けて、

「特訓や特訓。50kmやったら……2時間くらいで着くか」

「え」

「ほな、行くで」

カルトとアマネはまだ状況を受け入れられていないが、ラミナは気にせず走り出す。

カルトとアマネは啞然とその背中を見送るが、

「カルト様、置いて行かれますよ？」

「あつ！ えっ!? ちょっと！ ホントに!？」

ゴトーに声を掛けられて、カルトは慌てて走り出す。

アマネも困惑しながらもゴトーと共に走り出し、後ろにつく。

ラミナはジョギングのような軽やかさで走りながら、猛スピードで

街を駆け抜けていく。

その背後をカルト達も付いて行くが、ゴトーはともかくカルトとアマネはそれなりに本気で走っている。

20分ほどでカゴツシを抜けたラミナ達は、人気が少ないところを選んで走る。

「な、なんで走るの?」

「やから特訓やって。50kmくらい楽に走り抜けんと、プロハンターレベルの獲物追いかけるんに苦労するで?」

「だからって……」

「もうちよいスピード上げるで〜」

「え」

ラミナはグン!とスピードを上げる。

カルト達はあつという間に距離が離されていく。

「ああ、もう……!」

「頑張りましょう。カルト様」

「分かってるよ!」

カルトはやけくそ気味に叫びながら、スピードを上げる。

ゴトーは苦笑してスピードを上げ、アマネも僅かに慄きながら後を追う。

そして、太陽が沈んで夜を迎えた19時頃。

ラミナ達は目的の街に到着した。

「はあ! はあ! はあ!」

カルトとアマネが息を切らして膝に手を当てている。

ゴトーはピシ!と背筋は伸ばしているが、僅かに汗を流して息も乱れている。

もちろんラミナは全く汗を掻いておらず、息も乱れていない。涼しい顔で立って、僅かに呆れながらカルト達を見つめていた。

「そこまで飛ばしてないし、50kmくらいで情けないなあ」

「あ……あれで……!?!」

「イルミとキルアやったら、汗掻いてないと思うで?」

「ぐっ……!」

「いくら才能がある言うても、キルアと2歳しか変わらんのやから、せめてゴトーくらいの余裕で走り切らんと。お話にならないで?」

「恐縮です」

「まあ、ゴトーは歳のわりに息を乱し過ぎやけどな。アマネは論外」

「……」

「うう……」

酷評を浴びせられるカルト、ゴトー、アマネ。

カルトは悔し気に顔を歪め、ゴトーは眼鏡を直しながら黙り込み、アマネは顔を俯かせて落ち込む。

ラミナはその様子に苦笑しながら、資料を取り出す。

「さて、標的一家と幹部の8人。全員が一緒におるタイミングは、あんなまいわなあ。あっても、目撃者や監視カメラとかはわんさかやろなあ」

「全員殺せばいいんじゃないの?」

「ド阿呆。一体どれだけの数を、どれだけ時間かけて殺す気や。仕事で無駄な手間と無駄な証拠を残さんのが一流や。罫り殺したいなら、仕事に関係ないところでしい」

「けど、イルミ兄さんは……」

「イルミは無駄な殺しをしとるようやけど、あいつの能力はその無駄な殺しを利用できるからなあ。手間もかからんし、証拠も出にくい。たかが針に操られとるなんざ、警察に調べられんやろ?」

ラミナは資料を眺めながら、肩を竦める。

資料を細かく引き千切って放り投げる。

「まずは幹部から回っていか。カルト」

「……なに?」

「この仕事、うちとお前は念を使たらあかん。体術と暗殺術だけでやる」

「な!」

ラミナの提案にカルトとアマネは目を見開く。

ゴトーは理由をすぐさま理解して、目を鋭くする。

「今回のターゲットは一般人。念も使えん雑魚や。念を覚える前のキ

ルアですら簡単にこなせる仕事や？ 別に驚くことちやうやろ」

「そう……だけど……」

「やから、ゴトーとアマネはカルトのフォロー。あくまで、フォローな」

ラミナはゴトーとアマネに言いながら、サングラスをかける。

「扇子も駄目？」

「あかん。まあ、念使いがおったらええけどな」

ラミナは両手をゴキゴキと鳴らしながら、歩き始める。

カルトは盛大に顔を顰めて黙ったまま付いて行き、ゴトーとアマネも歩き始める。

アマネは小声でゴトーに話しかける。

「大丈夫なんですか？」

「……まあ、この仕事ならば問題はない。それにラミナ様の言い分も間違っていない。旦那様達もカルト様については甘やかしていたと後悔なされているからな。まあ……カルト様は奥様はかなり構っておられたから、仕方がない部分もあるがな」

キキヨウは歪んでいる所があるが、子供への愛は本物である。

末っ子のカルトは特に甘やかされていた部分があるのだ。

イルミが独り立ちし、ミルキは引きこもり、キルアはシルバやゼノに後継者として育てられており、四男は事情により隔離された。

なので、シルバやキキヨウにとって、カルトは『厳しく育てる必要もない普通に家族の愛情を注げられる子供』となったのだ。

イルミもキルアほど熱心に育てることもなく、ミルキと四男は論外。

キルアは針を埋め込まれてからは、下の兄弟に構う余裕はなくなつた。

なので、カルトは非常に中途半端な育てられ方になったのだ。

ゼノ、シルバにキキヨウは、キルアが家出した最近になってそれに頭を悩ませていたが、今更厳しくするのも心境的に難しい。

そこに現れたのが、ラミナというわけだ。

「旅団に入るのは不安だが……ラミナ様がいるならば、ゾルディック

にいるよりは成長する可能性はあるだろう」

「……」

「お前もラミナ様に鍛えてもらうか？ 旦那様やツボネ先生は喜んで許可してくれるだろう」

「え!?!」

「ふっ、冗談だ。そこまでラミナ様に負担をかけられるわけがない」

「……」

「早く行くぞ。置いて行かれる」

「は、はい!!」

ゴトー達は駆け足でラミナ達を追いかけるのだった。

ラミナ達がやって来たのは、幹部の1人がいるビルの部屋の前に立っていた。

【円】で標的がいるのを確認している。

「ターゲットの他にも数人おる。銃に気を付けえよ。あ、アマネかゴトーは警備室行って、監視カメラの映像回収してきてくれへん？」

「アマネ」

「はい」

ゴトーがアマネの名を呼んで、アマネは姿を消す。

それを見送ったラミナは扉を蹴破る。

「な、なんだ!?!」

「誰だ!!」

「殺し屋」

ラミナは慌てふためいている男達に、余裕綽々で歩み寄っていく。護衛と思われる4人ほどの男達が拳銃を抜こうと、胸元に手を入れる。

しかし、

「遅いわ」

ラミナが一瞬で男達の目の前に移動したかと思ったら、次の瞬間に男達の背後に現れる。

男達は目を見開いて、背後を振り返ろうとしたが、そのまま胸や口

から僅かに血を噴き出しながら倒れていく。

ラミナは両手をプラプラと振って、両手に付いた血を払う。

「ちっ……。うちも人のこと言えんな。大分なまっとするわ」

ラミナは舌打ちをしながら、男達の死体を見下ろす。

カルトは僅かに目を見開いて、

（……両腕が動いたのは見えただけ、最後何したかまでは分からなかった……）

「……ゴトーは見えた？」

「……最初の一撃だけ、ですが……」

「……どうやったの？」

「……恐らく【蛇活】で心臓を潰したのだと思われます」

ゴトーの推測通り、ラミナは【蛇活】で両腕をしながら4人の胸に手を突き刺して、全員の心臓を握り潰したのだ。

ラミナは小さくため息を吐きながら、部屋の奥で震えている男達に目を向ける。

「だ……誰だ……？ お前達は……」

「やから、殺し屋やっちゅうとるやろ。諦めて死んで」

「ふぎ——！」

ターゲットの男が怒りに叫ぼうとしたが、ラミナがいつの間にか目の前に立っていた。

ターゲットの男が驚いて目を見開く。

そして、ラミナの右手に脈動している心臓が乗っているのが目に入った。

「なんっ!? そ…それ……」

男は限界まで目を見開いて驚くも、そのまま両目が裏返って崩れ落ちて死ぬ。

ラミナは心臓を放り投げて、左右にいた秘書と思われる男2人の首に手刀を叩きつけて骨をへし折る。

「ひいひい!?!」

「た、助けてくれえ!!」

生き残った男達は恐怖に泣き叫びながら、逃げ出そうとする。



ラミナより、少女に見えるカルトと執事服を着ているゴトーの方が逃げられると判断したのだ。

「カルト、片方くらい殺せ」

「……ふん」

カルトは近づいてくる男に一瞬で迫り、男の顔を掴んで背後に回り込みながら180度捻じり回して殺す。

そして、残った方の男はゴトーがコインを弾いて、頭を吹き飛ばした。

「まだまだ非力やな」

「くっ……!」

「それにしても……うちも修行し直しやなあ。もうちよい血が噴き出るんが遅かったし、量も少なかつたんやけど……」

ラミナは小さくため息を吐いて、部屋に置いてあるティッシュで手を拭う。

そこにアマネが戻ってくる。

「警備室と監視カメラの映像の処理。終了しました」

「おおきに。ほな、どんどん行こか」

その後も幹部がいるところを襲撃し、ターゲットと目撃者を殺していく。

そして、夜の23時。

残りは社長一家のみとなった。

「いやあく……一度鈍るとそう簡単にや戻らんなあ」

ラミナは両手を離握手しながらため息を吐く。

「……十分な技術だったと思われませんが……」

アマネが困惑の表情を浮かべながら、ラミナに言う。

ラミナは不満気に顔を歪めて、

「出来とったことが出来んようになったら落ち込むやろ？ あそこま  
で血で汚れると面倒なんよなあ」

（よく言うよ……! 片手で人の首捻じり折ったり、手刀で首を抉り  
斬った癖に……!!）

カルトはラミナの言葉に苛立ちながら、心の中で愚痴る。

(けど……お父様達が気に入った理由がよく分かった……)  
実力も技術も、レベルが違い過ぎた。

しかも、

『今のと同じことは旅団のメンバーも出来るで？ 心臓潰しに関してはうちの一番やったけどな』

と、当たり前のように言い切った。

それだけで、それが事実だと思い知らされた。

(今のボクじゃ念以前の問題……。本当に実力不足……！)

カルトは歯軋りをして悔しがる。

(……いいさ。耐えるのは慣れてる。そして、こいつから貰えるモノ全部自分のモノにしてやる……!!)

カルトは覚悟を決めて、更なる精進を誓う。

「さて、最後の社長一家は一軒家。ありがたいことに家政婦などもおらず。シークレットサービスもなし。随分と家庭的な社長やな」

「元々はスラム出身らしいですよ」

「ふうん。やとしても、マフィアと裏稼業しとる癖に随分と無防備やな」

アマネの言葉に、ラミナは相槌を打ちながら、その一軒家を見下ろす。

今、ラミナ達は社長一家の自宅の向かいにある家の屋根にいた。

「両隣の家が護衛の家なのですよ」

「じゃあ、あの家は見張られとんの？」

「恐らくカメラで」

「えく……じゃあ、両隣の家も始末せなあかんの？ 面倒やなあ……」

ラミナはうんざりした顔でボヤク。

それにゴトーとアマネが苦笑する。

「はあ……。ほな、カルトとアマネが左、ゴトーが右。うちが正面」

「……ここも念は無しだよね？」

「もちろん。ただ……奴らが持つとる武器を利用するんは認めたるわ」

「……分かった」

「じゃ、行こか」

そう言ってラミナ達は一齐に飛び出して、それぞれの家に向かう。ラミナは扉に掌底を叩き込んでぶち破る。

「っ!! な、なんだ!?!」

男の声がリビングから聞こえてきたので、ラミナは素早く声がした方向に向かう。

リビングにはバスローブを着たターゲットの社長がおり、ラミナの姿を見て目を見開く。

「だ——!?!」

「さいなら」

ラミナは胸に右手を差し込んで、心臓を握り潰す。

今回は引き抜かずに、胸に手を差し込んだまま男の最期を見つめる。

「がっ……!?!」

「欲をかきすぎたなあ、社長さん」

「お……あ……」

「安心しい。すぐに家族にも会える。お仲間も先に逝つとる。……スマンな」

胸から手を引き抜く。

男はそのままソファに倒れ込むように座って、息絶える。

「ひいっ!?!」

背後から悲鳴が聞こえ、ラミナが振り返ると、そこには寝間着を着た女性が顔を真っ青にして立っていた。

資料に載っていた社長の妻だった。

「あ……あなた……!?!」

ラミナが妻に向かって足を一步踏み出すと、

「ひい!?!」

妻は悲鳴を上げて、ラミナに背を向けて逃げ出そうとする。

ラミナは一瞬で距離を詰めて、妻の首に手刀を叩きつける。

「あ……」

妻は意識を失って、崩れ落ちる。

ラミナはその体を左手で受け止めながら、素早く右手で背中から胸に突き刺して心臓を潰す。

「あ……いー」

妻は一瞬体を跳ねさせて、そのまま死亡する。

床に体を横たわらせたラミナは、すぐ近くの階段に目を向ける。

【円】で2階にあと1人いるのを感じとった。

「ターゲットもあと1人……。はあく……。気が引けるなあ」

ラミナはため息を吐いて、階段を上る。

ゴキツ　コキコキツ

ラミナは血濡れた右手指を操作して、爪を鋭くする。

そして、子供部屋と思われる部屋の扉を開ける。

部屋は暗く、ベッドには最後のターゲットである7歳ほどの娘が心地よさそうに眠っていた。

「起きんかったんか……。凶太い娘やなあ……」

ラミナは静かに娘の傍に歩み寄る。

そして、右手の人差し指と中指を立てて、一瞬で娘の心臓に突き刺して引き抜く。

娘は痛みを感じることなく、そのまま息絶える。

ラミナは娘の布団を整えて、部屋を後にする。

そして、再び家にあった布で手を拭う。

社長宅を出たラミナは、カルトとアマネがいる家に向かう。

「おっい。終わったか」

ラミナが声を掛けながら入ると、

「ひ……。ひい……。いー」

「くふふふ♪ もっと頑張つてよ」

カルトが椅子に縛り付けられた男の脚に、包丁を刺してグリグリと捻りながら廻っていた。

アマネはその様子を眉尻を下げて見守っていた。

(……。武器を手にしたら、コレかい……。キキョウとイルミのどうで

もええところだけ影響を受け取るなあ)

ラミナはため息を吐いて、気配を消してカルトの背後に近寄る。

「ふふふ♪ さあ、次は……♪」

「次やないわ、阿呆」

「イタツ!」

ラミナはカルトの頭にチョップする。

「な……なにをするの……!」

「余計な時間かけるな言うたやろ。監視カメラは？」

「処分は終えています」

「ほな、もう行くで。周囲の家が異変に気づいて警察でも呼んだら面倒や。仕事は終わったし、ここに留まる理由は無い。さっさと殺しい」

ラミナはそう言つて、家を後にする。

カルトは眉を顰めて、縛り付けた男の首を搔つ切つて殺す。そして、包丁を放り捨ててラミナの後を追う。

外ではすでにゴトーも待機しており、ラミナ達そのまま街の外れまで移動する。

「あく……い。なんや煮え切らん仕事やったな」

ラミナは伸びをして、サングラスを外す。

「お疲れ様でございました」

「そっちもな。それにしても……カルトは今後どうするかなあ？」

「なにが？」

ゴトーが頭を下げて、ラミナがカルトを見ながら悩まし気に腕を組む。

それにカルトは首を傾げる。

「いやあく思つとつたより、お前が念と扇子使えんと微妙つてことが分かつてなあ。どう鍛えたもんか……」

「……」

カルトは眉を顰める。

「まあ、しばらくは【蛇活】と心臓を抜き取る技に集中しよか。後は足運びとかやな」

簡単に方針を決めるラミナ。

カルトはラミナの方針に文句を言えるほどの実力もないので、黙って頷くしかなかった。

「よし。じゃ、また走って帰るか」

「え」

ラミナの言葉にカルトとアマネが顔を引きつかせる。

「大して体力使つとらんし。行けるやろ？ ほれ、行くで」

そして、ラミナはまた走り出す。

「ああ!! もう!!」

カルトはまたやけくそ気味に走り出し、ゴトーとアマネは苦笑しながらそれに続く。

そして、また2時間近くかけて、カゴツシへと戻るのであった。

## #55 ソノコロ×ノ×ゴンタチ

時は少し戻って9月6日のヨークシンシティ。

ゴン達が宿泊しているホテル。

ゴンは顔を顰めて、キルアと向かい合っていた。

「くっそく……い！ ムカつくく……！」

「仕方ねえよ。俺達じゃ実力不足だって思い知ったばっかだろ？」

ゴンは苛立ちを隠さず、キルアは呆れながら宥める。

ゴンとキルアはゼパイルと3人で、サザンピースオークションに向かった。

もちろんお金など稼いでいないので、誰が競り落とすのかを確認しに来たのだ。

競り落とした者にプロハンターとして、ゲームクリアに協力するとプレイさせてもらおうと考えていたのだ。

競り落としたのはハンターサイトにも載っていたバッテリーという大富豪だった。

ゴンとキルアは取引を持ち掛けたが、バッテリーと共にいたプロハンターのツエズゲラに『プレイさせるだけ無駄』と断言されてしまう。

ゴンは食い下がったが、ツエズゲラがゲーム経験者であることから、否定できる材料がなかった。

バッテリーから9月10日に新規プレイヤーの審査を行うことを聞いて、それまでに念を鍛えてこいと挑発されたのだ。

ゴンは未だにそれにイラついていたのだ。

「けど、ムカつくじゃん！」

「そうだけどき。だからって、このまま挑んだって厳しいかもしれないのは事実だろ？ 旅団相手に全く歯が立たなかったんだぜ？」

ゲームに参加してる連中全員があレベルとまでは思わないけどさ。1人もいないわけがないし、少し下のレベルってだけでも俺達じゃもう勝てない」

「……じゃあ、どうするのさ……」

「【発】だよ。必殺技さ」

「必殺技かあ……」

ゴンが悩まし気に腕を組む。

「命がけの制約と誓約のおかげとは言え、クラピカはそれで旅団の1人を倒して、団長の念を封じた。まあ、俺達はそんなわけにはいかな  
いけどさ」

「そうだね……」

「けど、ラミナやヒソカ……あの糸女みたいに、自分の系統に合つて、  
実践的で、応用が利く能力」

「ん〜……」

ゴンは唸ったまま考え込み、少しすると耳から煙が噴き上がる。

キルアは呆れながら軽くゴンの頭を叩く。

「まあ、お前に関してはヒントはあるぜ?」

「え!? ホント!?!」

「ラミナが最後に見せてくれた技だよ。自分達で探せって奴」

「あ……!!」

「ゴンは強化系。武器は使うタイプじゃないから、体を強化する能力  
がいい。だから【堅】に【流】、それで最後の技が一番使いやすくて応  
用力もあつて、必殺技と言える威力もある」

「確かに……」

「【堅】と【流】は修行を続けるしかない。だから、今は最後の技だ」

「……うん!」

ゴンは両手を握り締めて、頷く。

キルアは微笑みを浮かべて、立ち上がる。

「じゃ、俺は自分の部屋に戻る」

「え?」

「俺は俺で考えてる事がある。それを試す」

「え!?! なになに!?!」

「言わねえよ! まだ出来るかどうかも分かんねえんだしさ」

キルアは両手を腰に当てて、呆れた顔を浮かべて言う。

その時、部屋のドアからノック音が響く。

「はい?」



「私だ」

「クラピカ!」

ゴンは慌てて扉に駆け寄ってドアを開ける。  
そこには未だ疲労感全開のクラピカとレオリオ、センリツが立っていた。

「もう大丈夫なの?」

「ああ、熱は下がった」

「熱はな。まだフラついてんだから、無理すんなよ」

レオリオは小さくため息を吐きながら言う。

クラピカは高熱を出して、丸2日寝込んでいたのだ。

極度の緊張感の状態が続き、【緋の眼】の使い過ぎによる反動によるものだと考えられている。

ゴンとキルアはクラピカをベッドに座らせて、レオリオとセンリツはゴンとキルアと共に床に座る。

「オークシオンはどうだったんだ? レオリオから高価なゲームを狙っていると聞いたが……」

「うくん……ちよつとね……」

ゴンとキルアはオークシオン会場であったことを話す。

「なるほど……。プレイヤーの選考審査か」

「うん……。でも、今のままじゃ厳しそうなんだ……」

「で、【発】を考えようって話になったんだよ」

「お前らでも厳しいってどんな連中がいんだよ……」

レオリオはゴンとキルアの話に慄き、クラピカとセンリツは2人の話に納得するように頷く。

「けど、あまり上手く行ってないんだよね」

「そうか……」

「あつ! そうだ、クラピカ! 聞きたいことがあるんだけど!」

「ん?」

ゴンはクラピカにラミナを見せてくれた技について訊ねる。

クラピカは顎に手を当てて、

「……思い当たるモノはある」

「ホント!？」

「しかし、それではラミナの指導に反するのではないか？」

「う……………」

「ヒントが欲しいなら、ラミナに聞くべきだと思うが…………。連絡が取れないのか？」

クラピカの言葉に、ゴンとキルアは顔を見合わせて、表情を曇らせる。

キルアが携帯を取り出して、スピーカーモードにしてラミナに電話を掛ける。

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません』

という音声流れる。

キルアは電話を切って、肩を竦める。

「メールもホームコードも繋がらない。完全に雲隠れ」

「そうか……………」

「ハンターサイトも調べてみたけど、情報料が1億で旅団員並み。ネットで見られる懸賞金サイトを調べたら、昨日付けで賞金も1億まで上がった」

「1億う!？」

レオリオは目を見開いて驚く。

「…………恐らくマフィアや仲介所に旅団との繋がりがバレたのだろうな。ラミナは一度マフィアに雇われて、旅団と敵対したフリをしていたしな」

「ええ」

「つてことは、今の俺達じゃそう簡単に見つけられねえか…………」

キルアは小さくため息を吐いて、携帯を仕舞う。

(…………親父達なら知ってるか? けど…………わざわざ聞くのもなあ…………)

気にはなるが、無理して聞き出すほどではない。

しかも、今のキルアはシルバ達に大きな借りがある状態だ。旅団から解放するようにラミナに働きかけたのはシルバ達。

自分のミスを取り戻せていない今の状況で、ラミナの連絡先を聞き

出そうにも取引材料がない。

『なら、帰ってこい』と言われる可能性が高い。

「クラピカはこれからどうするの?」

「ラミナと旅団の事は気がかりだが……。今は返してもらった【緋の眼】の保管と、他の仲間の眼を取り戻すことを優先する。それに、私達のボスが昨日ヨークシンを離れている。私もセンリツも、立場上明日には戻らねばならない」

「そっか……」

gonはクラピカを心配そうに見つめながらも、ヨークシンを離れる方がいいと思った。

実はゴンとキルアはオークション会場で、フィックスとフェイタンと会っていたのだ。

なので、まだ旅団はこの街にいる事を知っている。

もちろん、今のクラピカにまた旅団を追う体力はないだろう。

それにラミナとの約束もある。

ここで旅団を追えば、わざわざ【緋の眼】を返してくれたラミナの思いを裏切ることになりかねない。

流石にそうなれば、ゴンとキルアもクラピカを止めるだろう。

なので、クラピカがヨークシンを離れることは、むしろ喜ぶべきことだ。

クラピカが何かを思い出したように、キルアに顔を向ける。

「そういえば、キルア……」

「なに?」

キルアはペットボトルのお茶を飲みながら首を傾げる。

「ラミナと婚約しているというのは本当なのか?」

「ぶっほ!!」

「あ!! そうだ!! 忘れてた!!」

「そうだぞ、キルア!! テメー、何で黙ってた!!」

キルアはお茶を噴き出して、ゴンとレオリオが思い出してキルアに詰め寄る。

キルアは盛大に顔を顰めて、

「だから、親父達が勝手に決めただけだって！俺とあいつも認めてねえし、そんなつもりもねえよ！」

「言っておくけど、本当よ」

センリツがキルアに助け舟を出す。

それにレオリオとゴンは引き下がるが、好奇心全開の目をキルアに向けていた。

クラピカは2人に呆れながら、キルアに質問を続ける。

「ククルーマウンテンの時か？」

「そ。ゴンといるのを認めてもらおう条件が、ラミナを婚約者にするこ  
とと念を教えてもらうことだったんだよ」

「よくラミナも受け入れたな」

「詳しい理由までは知らないけど、なんか親父達に借りがあつたらしいぜ」

「じゃあ、今回の件で解消されたんじゃないか？」

「いや……旅団に入ったくらいで親父達がラミナを手放すとは思えない……。それに今回は俺達っていうか、俺が未熟なまま旅団に突っ込んで捕まったのが原因だし。それにラミナと旅団の関係を親父達が知らないとは思えないし」

「……やっぱお前の家族って変だよな……」

「暗殺一家に常識を求めんなよ」

キルアは呆れながらレオリオに言う。

「とりあえず、俺とラミナは結婚するつもりはないよ。だから、言う必要もなかったってだけ」

「まあ、ラミナも美人だしなあ。ガキのキルアよりいい男なんざいくらでも見つけられるよな」

「うっせえな……」

キルアはレオリオを睨みつける。

結婚する気はないが、自分が大した男じゃないと言われるのはやはりムカつく。

「まあ、これ以上はラミナとキルアの問題だ。本人達はその気じゃないなら尚更な」

クラピカが話を纏めて立ち上がる。

「クラピカ？」

「特訓しなければならぬのだろう？ 時間がないなら尚更な」

「それにクラピカももう少し休まねえとな」

「そうね」

「うくん……」

レオリオとセンリツも立ち上がり、ゴンは結局何も分からないことに腕を組んで悩ませる。

レオリオがゴンを見下ろして、

「他に教えてくれそうな人とかいねえのか？ ゾルディック家の執事とか、天空闘技場で知り合った人とか」

「あ!!」

レオリオの言葉にゴンとキルアは声を上げる。

ゴンとキルアはウイングの事を思い出したのだ。

「ウイングさん!! ……は、いいのかな？」

「ラミナはあの人に教えてもらうのはアリって言ってたし、聞くくらいならいいんじゃないか？」

「だったら電話してみるよ」

「手がかりが見つかったようだな。頑張ってくれ」

「うん！ ありがとう、クラピカ！」

「お前らもあんま無理すんなよ」

「ゴン、俺も行くぜ」

「うん」

クラピカ達は部屋を後にして、キルアも部屋を出て行く。

1人になったゴンは早速携帯を取り出して、ウイングに電話をかけた。

『……もしもし?』

「あ、ウイングさんですか？ ゴンです」

『おや、ゴン君。お久しぶりです。お元気ですか?』

「うん。元気だよ」

『それは良かった。それで、どうしたのですか?』

「実はちよつと相談したいことがあつて……」

ゴンはウイングにラミナが教えてくれた技について質問する。

もちろん、現在ラミナと連絡が取れない状態であることも伝えてい  
る。

『なるほど……』

「ラミナは前にウイングさんに教えて貰つてもいいつて言つてたから  
……。それでウイングさんにヒントだけでも貰えないかなつて……」  
『ふむ……。なら、ヒントをあげましょう』

「ホント!？」

『【周】や【堅】などの応用技を教わつた時、それが何の技を応用した  
ものかは聞いてますか?』

「……たぶん……」

『ふふつ。まあ、そこはキルア君なら覚えているでしょう。1つ目の  
ヒントは『まだ試していない組み合わせを考えてみることに』。そして、  
2つ目は『全て同時に使うこと』……です』

「???’

ゴンは首を傾げて考え込むも、再び耳から煙が上がる。

『一つ一つゆつくりと考えて試していきなさい。では、頑張つて』

ウイングとの電話を終えたゴンは、早速教わつた事を思い出ししてい  
く。

(えくつと……【堅】と【円】は【練】と【纏】。【周】は……【纏】。【流】  
は【凝】……だったかな? で、その【凝】は【練】の応用技。【隠】は  
【絶】……。んゝ……。まだ試していない組み合わせって言われても  
なあ……。残つてるは【発】だけ……)

すでに全ての組み合わせを使つているのではないだろうか。

ゴンは唸りながら必死に頭を動かす。

「あの時のラミナは……」

技を見せてくれたラミナの様子を必死に思い浮かべ、考えられる組  
み合わせを考える。

そこでゴンはあることに気づく。

(ん? 鉄パイプにオーラを纏わせてたのは……【周】だよな? じゃ

あ、鉄パイプの先にオーラを集めたのは【凝】じゃないの？ けど、それだと【流】と変わらないじゃん。でも、【流】と威力は段違いだった……)

ゴンは自分の右拳に【凝】でオーラを集めていく。

まだオーラの扱いに慣れていないゴンは、それだけでもかなりの集中が必要だった。

(……だめだ。あそこまで強いオーラにならない。それにこれじゃ、ただの【凝】だし……。あれ?)

ゴンは右前腕に目が行く。

右腕にも僅かにオーラを纏っていた。

「……【絶】 って……オーラを溜めた右手以外で使えるのかな？」

ゴンは早速試してみる。

右手だけで精孔を維持し、他は全て閉じるイメージをする。

全身から汗が噴き出し始め、腕や体のオーラが消え、右拳のオーラが強まっていくのを感じた。

暴発しそうになるのを留めようとしたら、【絶】が維持出来なくなっ  
てしまった。

「うわっ!? ふう……。けど……」

(あつた！ 新しい組み合わせ！)

ゴンは右拳を握り締める。

【纏】【凝】【絶】。もしここに【練】を組み合わせたら……！  
想像したその威力にゴンはゾクリとする。

しかし、まだそのレベルではない。

「まずは……【纏】の状態で【凝】と【絶】に慣れないと……」  
まだまだ修行は必要だ。

それでも道筋は確かに見えた。

「よっし!!」

ゴンは立ち上がって、気合を入れる。

そして、早速練習を始めるのだった。

その隣の部屋でキルアも、【発】の開発に挑んでいた。

(オーラを何かに変えるって言ってもヒソカや糸女みたいに、ゴムや糸に思い入れはない)

能力は生きてきた環境や思い入れが大きく作用する。

(ムカつくけど、応用力があった戦い抜ける力となると、家でのことになるよな)

殺し屋を廃業して1年も経っていない。

なので、どうやっても思い入れがあるものとなると、殺し屋時代のことになる。

(けど、ラミナやクラピカみたいな武器にも思い入れはないしな)

そうなると、やはり変化系に特化した能力が無難だという結論になった。

具現化の場合、クラピカのような制約に縛られてしまうのもデメリットが大きいとも感じたのもある。

(ラミナの能力の情報がもう少しあれば印象が変わるかもしれないけど……)

クラピカから聞いた情報も合わせると、ラミナは普通では考えられないほどの武器を具現化できるようだった。

同じ具現化系であるクラピカでさえも、「普通ではありえない」と言い切っていた。

具現化系の能力では、1つのものを具現化するだけでも数日はかかるとされている。

触って、描いて、舐めて、動かしてなど、様々な工程を経てイメージを固めていく作業が必要なのだ。

キルアはその作業がめんどくさいと思うので、自分が具現化能力に向いていないと思っている。

(けど、問題は下手な能力にするとナグタル…だったけ？ みたいにガス欠になっちゃう……)

天空闘技場で戦ったナグタルの能力を思い出す。

ナグタルの【絶えず燃え盛る闘魂】は強力ではあったが、使えば使うほど【練】が弱くなっていく欠点がある。

(俺の【練】や【堅】は旅団クラス相手じゃ話にならない。それに実戦



経験もない。【流】や最後の技もあるし、【発】に依存する能力は危険すぎるな。ヒソカ同様俺の身体能力を主体に活かせる能力)

そうして辿り着いたのが、右手に握るスタンガンである。

(オーラを電気に変える能力。相手を麻痺させて、自分の身体能力を上げる事も出来るし、遠近も対応出来る)

家の拷問で何年も浴びてきた。

毒も考えたが、自分は効かない体質になっているし、シルバも完全ではないが毒が効かない。

そうになると、他の者達とて必ずしも毒が効くとは限らない。

しかし、電気は誰であろうと、慣れていようと、必ず一瞬動きが止まる。

その一瞬で自分の速さを上げられれば、その隙を見逃さない攻撃が出来るはずと考えた。

(けど、そのままだとナグタルと一緒に。だから『体に溜めた電気量に威力や使用時間は依存する』って制約にすれば、【発】でオーラが尽きることはまずない)

キルアは【纏】を発動して、スタンガンのスイッチを押す。

そして、スタンガンを左腕に押し付ける。

「ぐっ……！」

一瞬、体の筋肉が硬直するのを感じるも、すぐに慣れる。

1分ほど体に電気を流したキルアは、スタンガンを床に放り投げる。

(そして……自分をスタンガンに見立てて……溜めた電気を一気に放出するイメージで、オーラを練る！)

オーラを強めながら、両手を近づける。

指と指の間に電気が走るイメージを強く念じる。

バチィ!!

すると、指と指の間に電気が走った。

成功を確信したキルアは笑みを浮かべる。

「後はどれだけ電気を溜めれて、どれだけ放出できるかのチェック。それとオーラを電気に変える速度を上げることだな。今はそれに専

念するか」

再びスタンガンを手取る。そして、左腕にスタンガン当てて、電気を流す。

こうして、キルアも【発】向上に向けて進んでいくのだった。

## #56 トツクン×ト×シュツパツ

9月12日。

ゾルディックからの仕事を終えたラミナは、いよいよ除念師探しに取りかかろうとしていた。

「休暇は満足したんか？」

「ああ。だが、出来ればお前が見たという剣に刷り込まれた記憶も見なかったな」

「ん……ん……」

クロロとラミナはリビングで話し合いを始めていた。

「阿呆。念に無防備なお前が見たら、どんな影響が出るか分からんやろが」

「分かっているさ。だから、我慢しただろ？」

「ん……ん……」

ラミナは呆れながら言い、クロロは肩を竦める。

「そんで？ 車で行くつちゆうことでええんか？」

「……そうだな。だが、余りにも詮索範囲は広い。今まで使ってた車は少しこの旅には不向きだな」

「まあなあ……。キャンピングカーでも買うか？」

「それがいいかもな。あまりホテルを使うのも危険かもしれない」

「ん……ん……」

「そう言えば、ゾルディックからの仕事はいくらだったんだ？」

「相手が一般人やったからな。5000万や」  
「なるほど」

「まあ、今後も時々仕事受ければええやろ。カルトの進捗状況に合わせて、依頼の難易度上げて貰えばええし」

「ん……んぐ……ん……」

クロロはソファに座って、コーヒーを飲みながら頷く、ラミナは肩を竦めながら下に目を向ける。

ラミナは今、カルトの背中に胡坐を組んで座っていた。

そして、カルトはラミナを乗せた状態で腕立て伏せをしていた。

「ん……ん……」

「ほれほれ。まだ2000回くらいやぞ」

「ぐ……」

「腰、曲がってきとるぞ。まっすぐ伸ばしい。それと上げるときはもつと瞬発的に力入れんか」

「ぐぐ……」

カルトは仕事から帰って来てから、すぐに特訓が始まっていた。

念も鍛えたいが、まずはフィジカル面から鍛えるべきだとラミナは考えたのだ。

その理由の1つが『試しの門』であった。

カルトは『試しの門』を【1】までしか開けられないことが判明したのだ。

『せめて【2】は行こうや。坊っちゃん』

『ぐう……』

と言うことで、ラミナは筋トレを始めさせていた。

才能はともかく、身体面に関してはイルミとキルアの弟であるのだから、鍛えればそこまで差は出来ないと思っている。

もちろん鍛えた体をどう動かしていくかは、才能が大きく作用するのだが。

とりあえず、体のバランスが崩れないレベルで、筋力と体幹を最大限まで鍛えるつもりでいるラミナだった。

「まだ腹筋やスクワットもあんで。その後には組み手もあるし、頑張らんと寝るんがどんどん遅なるぞ」

「わかっ……てる……」

ちなみにゴトー達は昨日のうちに引き上げていた。あくまで仕事のサポートのみということらしい。

さりげなく、カルトの好きな菓子や着物の予備を置いて帰っていたが。

「んで？　いつ頃出発を目途にする？」

「今週中には出よう。大陸横断だしな」

「了解。……ほれ、スピード落とすなや」

「ぐ……い」

「ふっ」

そんなこんなでラミナ達は穏やかな時間と共に、方針を決めたのであった。

腕立て伏せを終えたカルトは、そのまま腹筋を始めていた。

もちろん、普通の腹筋ではない。

「うぐぐ……!!」

小庭に繋がる窓の縁に足を引っかけて腹筋をしているカルトは、胸の前で腕を交えている。

その両手にそれぞれエキスパンダーの持ち手を握っており、その反対側の持ち手をラミナは1つを右足に引っ掛け、もう1つを左足に引っ掛けている。

ラミナは涼しい顔でソファに座り、テレビを見ていた。

「ほれほれ、たかが計1tの負荷やぞ。1000回くらい涼しい顔でこなさんかい」

特注のエキスパンダー1本の負荷は500Kg。それを2本使って計1tの負荷である。

カルトが体を起こす時にテンションが張り、負荷をかける。

カルトはラミナに引っ張られたり、持ち手を放さないようにしないといけないので、腹筋だけでなく、両腕、握力、両脚もかなりの力を籠めなければならない。

ラミナもカルトに引っ張られないようにしなければならないが、筋力が違い過ぎるので足に力を入れるだけで問題はなかった。

ラミナは『試しの門』を軽々と「4」まで開ける筋力がある。

「1」しか開けられないカルトでは、差がありすぎてラミナに引っ張られないように耐えるだけで精一杯なのだ。

(けど、やっぱりこの家じゃあ負荷をかけるんも限界あるでなあ……)

『t』レベルが当たり前なゾルディック家と違い、この家はあくまで補充と休暇のためのものなので、カルトの実践的な訓練には向いていない。

そして出発すれば、更にやりにくくなる。

(とりあえず、念と暗殺術強化を第一にすべきか……)

ラミナはそう考えて、必死に腹筋をしているカルトを見る。

(……ある程度進めたら、フェイに押し付けるか？ 系統はちやうけど性格や戦闘スタイルも似とるし)

小柄な見た目に反して筋力もあるし、暗殺者スタイル。

カルトに近いし、参考出来る技も多いだろう。

拷問好きなどころも相性がいいかもしれないとラミナは考える。

「ペース落とすなや〜」

「わかつ……てる!!」

カルトはキレ気味に叫び返して、腹筋の速度を上げた。

そして、夜。

ラミナと着物に着替えたカルトは、夜の街を音も立てずに高速で駆け回っていた。

ビルの屋上や壁を跳び移っていく。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

カルトは必死にラミナの後について行っていた。

ラミナが移動したルート完璧にトレースしており、『5m以上離れないようにする』のが今回の特訓内容である。

それをすでに3時間ほど続けていた。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

この前の50km往復マラソンとは違い、動きも複雑でアップダウンも激しい。更に【暗歩】を維持した状態なので、想像以上に集中力と体力の消耗が激しい。

「お〜い。この程度でへばったら、戦いでもすぐにへばるぞ〜」

「ぐ……」

ラミナはポケットに両手をつっ込んだ余裕の態度で、カルトに言う。

ラミナの今のスピードは50%程度。

旅団でやっていきたいなら、この程度でへばられては困る。

その後、1時間続けて、カゴツシで最も高いビルの屋上で足を止める。

「次は組み手や。扇子は無し。【練】【堅】【流】とかは使ってもええで」

「はっ……はっ……はっ……わ、分かった……」

「ほな、行くで」

「っ!!」

ラミナは、ゆらりとカルトに拳を構えて迫る。

カルトは目を見開いて後ろに下がろうとするが、ラミナは右手でカルトの額を素早く押す。

「ド阿呆。両腕を広げて下がるな。首と胸を庇うようにして下がらんと、即死やぞ」

「……!!」

ラミナは左拳をカルトの顔目掛けて振るう。

カルトは右腕を上げて【流】でガードしようとするが、直前でラミナは左拳を止めて左脚を振り上げ、カルトのガラ空きの脇腹に叩き込む。

「づう……!! (あそこから攻撃を変えた!?)」

「視線を拳に長く向け過ぎや。【流】も早すぎる。そこまで速い拳やないんやから、修正くらい出来るわ。うちが【練】使うとったら、死んどったぞ」

ラミナはそう言いながら、ラツシュを繰り出す。

カルトは必死に両腕を動かして、弾いていく。

そこにラミナが右脚を振って足払いを放って、カルトの両足を地面から浮かせる。

「!？」

「お前、自分の服装考えて対応せい。脚が動かさにくい服装やのに、足元疎かにしてどないすんねん」

「っ!!」

ラミナは右脚をそのまま振り上げて、カルトを上空に投げ飛ばす。

カルトは空中で体勢を整えて着地する。

しかし、すでにラミナが目の前にいた。

カルトは両腕を首と胸元に上げる。

ラミナはまた右手を額に伸ばそうとし、カルトは首を庇っていた左腕を額に上げて防ごうとするが、ラミナの右手が止まる。直後、左手がカルトの右脇腹に迫り、カルトは右腕を下げようとするが、また左手が止まってラミナの右脚が動き出すのが見えた。

すかさずカルトは右手を左脇腹に回して、ラミナの右腕を受け止めようとするが、ラミナは右足を僅かに前に踏み込んだだけで、一度止めた左手を再び動かしてカルトの脇腹に叩き込む。

「がはっ！ (何回フェイントを……!?)」

「今のはフェイントやなくて、お前の動きが遅すぎるだけやぞ？ お前の動きを見てから、動きを変えられる余裕があるだけや」

「っ!!」

「受け身で動き続けるお前の動きなんざ簡単に予測出来るわ。どうやって防ぐか、どうやって逃げようとするか。全部素直過ぎて、フェイントを疑う気すら湧かん」

「実戦経験がないことが、すぐに分かる。しかも、反撃する機会を窺う余裕も偽れない。」

シルバ達が心配し、ゴトー達がやって来た理由がよく分かる。

(覚えた技術レベルと身体能力、それに実戦経験が釣り合ったらんな)

念は確かに身体能力を度外視する能力が作れる。

操作系であれば、それが特に許されることが多い。

しかし、カルトの能力的に高い身体能力は必須だ。

カルトの素の身体能力は非常に微妙といったところだ。

パワーはレオリオに負け、身のこなしや速さはクラピカよりやや下。

ゴンとキルアは比べるまでもない。

「実戦経験はゴンといい勝負かもしれないが、ゴンはそれを補えるほどの意外性がある動きが出来る身体能力がある。」

(何か一つ。念能力以外で、特化した長所が欲しいところやな)

そう思いながら、ラミナは両腕を高速で動かして、カルトの額、右頬、左肩、胸、右二の腕、左脇腹をほぼ同時に押す。



カルトは後ろに吹き飛んで地面を転がる。

「うぐう!!」

ラミナは追撃せず、カルトが起き上がるのを待つ。

カルトは歯軋りしながら立ち上がり、ラミナを睨みつける。

「今のを躲すか受け流せるようにならんとな。今のもつと力入れたり、【流】や【硬】使うたら終わつとつたで」

「……」

「次はそつちから来いや。しばらく受け身でおつたるから、好きに攻撃してこいや」

「……ふうー。……っ!!」

カルトは深呼吸して息を整える。そして、一息にラミナとの間合いを詰める。

そしてラミナの顔を狙って、【凝】を使った右貫手を繰り出すが、ラミナは首を傾げるだけで躲す。

「しい!!」

カルトはそのまま手刀として真横に腕を振るが、ラミナは僅かに体を仰げ反らして躲す。

カルトは扇子を振るう様に手刀を連続で繰り出すが、ラミナは軽々と躲していく。

「っ!!」

カルトは歯軋りをして左貫手を繰り出し、右手刀を構える。

ラミナは半身になって躲し、続いて迫ってきた手刀を跳び上がったで躲す。

(こっこっ!!)

カルトは左貫手を全力で突き出す。

しかし、ラミナは空中で体を捻って躲す。

「なっ!? 空中で……!?!」

「まだまだやなあ」

ラミナは着地して、後ろに下がる。

「暗殺者が正面に固執すんなや。しかも、バカ正直に急所ばつか狙いよってからに。横や背後に回ったり、もうちよいフェイント入れんか

い」

ラミナの呆れたような視線に、カルトは歯を食いしばってすぐに駆け出す。

ラミナは今度はビルの屋上を動き回って、カルトを翻弄する。

カルトは何とか隙を見つけようと、必死に追いかけてながら頭を回転させる。

(角に追い詰めれば！)

ラミナが屋上に角に差し掛かった瞬間、カルトは一気にスピードを上げる。

更に直前で【肢曲】を使って、残像を生み出す。

「お」

ラミナは僅かに目を見開く。

しかし、すぐに目を右に向ける。

そこには手刀を構えているカルトがいた。

(っ！ 簡単に……！ なら、もう一度！)

カルトはもう一度【肢曲】を使って、背後に回ろうとする。

しかし、今度はカルトの動きに合わせてラミナも後ろを振り返って、カルトと向かい合う。

「!!」

カルトは目を見開いて固まる。

ラミナはカルトの額を右手で小突く。

「イタツ!？」

「このド阿呆。残像出す方向考えろや。正面の残像、前の奴と今の奴で腕が被つとつたぞ」

「あ……」

「まあ、狙いは悪うなかったけどな。ただ殺気の濃さが違い過ぎや。隙を突くなら、殺気は直撃の瞬間まで隠せるようにしい」

「ぐ……」

「じゃあ、サービスタイム終わり」

「え」

ラミナは一瞬でカルトの背後に回り込む。

そして、カルトの背中に掌底を叩き込んで押し飛ばす。  
ラミナの扱きは、むしろここからだったことを思い知るカルトなの  
だった。

空は夜明けを迎えていた。

ラミナはぐったりしているカルトを肩に抱えて、家へと戻る。

リビングに入ると、テーブルでトーストを食べているクロロがい  
た。

「随分と長くやっていたな。鬼教官は嫌われるぞ?」

「これで文句言うなら、ゾルディックの教育がしよぼいっちゅうだけ  
のことや」

ラミナはカルトをソファに放り投げて、肩を竦める。

「どうだった?」

「まだまだのまだまだ、やな。そこらへんの奴らより資質も才能もあ  
るけどな。ただ、生まれた家と順番が悪かったなあ」

「あのお前の婚約者か?」

「キルアはお前と同等以上の才能と資質を持つとるでな。あれと比べ  
られるんは流石に可哀想やわ」

ラミナは呆れながら、冷蔵庫から水を取り出して飲む。

クロロは笑みを浮かべながら、コーヒーを傾ける。

「シャワー浴びたら、キャンピングカー買いに行ってくるわ。内装で  
なんか希望あるか?」

「ふむ……いや、特にないな。寝れるだけで十分だ」

「了解。ほな、シャワー浴びてくるわ」

「ああ」

ラミナは風呂に向かい、手早くシャワーを浴びる。

シャワーを終えたラミナは下着姿で2階の自室に上がって、着替え  
を済まして再び1階に下りて髪を乾かす。

リビングに戻ったラミナは、トースターにパン2枚を差し込んで焼  
き始める。

次に冷蔵庫から牛乳を取り出して、2つのコップに注ぐ。

トーストが飛び出すと、ラミナは1枚を啜え、もう1枚を持ってカルトへと近づく。

そして、仰向けに寝転んでいるカルトの口にトーストを角から突っ込んだ。

「ぶお!？」

「朝やぞ。とつとと起きろや」

「ぶっはあ!! なにするの!？」

「朝食わしただけや。ほれ、牛乳はテーブルや。飲まんと背、伸びんで」

「余計なお世話だよ!!」

「うちはこれから買い物もん行ってくるから。飯食ったらシャワー浴びて、念の修行しときや」

「え」

「1徹くらいでへばんな。修行の合間合間に【絶】で休めば、すぐに回復するやろ。筋トレは負荷がない分、回数は倍な」

ラミナはトーストを食べながらカルトに指示を出す。

カルトは眉間に皺を寄せながらトーストを食べて、牛乳を飲みに行く。

その後、ラミナはキャンピングカーや必要な物品を購入しに出かけ、カルトは言われた通りにシャワーを浴びてから修行を始めるのだった。

その3日後。

準備を終えたラミナ達は、街外れの倉庫にやって来ていた。

3人の目の前には大型ワゴン車タイプのキャンピングカー。

「流石にうちのガレージには2台も入りきらんし、目立つでな。布団や食料に食器、飲みもんは既に積んである。後は、家から持ってきたもん積みめば、すぐに出れるで」

「立派だな」

「そらあ、数か月の旅やしな。ほれ、とつとと荷物乗せえ。この倉庫は今日までや」

「ああ」

クロロ達はキャンピングカーに乗り込み、中を確認する。運転席にすぐ後ろがテーブルと簡易ベッドになるソファ、そのすぐ横にテレビ。その向かいにも横付けのソファ。

一番奥は2人ほど横になれる段上ベッド。そして、ソファとベッドの間にキッチン、その反対側にトイレとシャワーが設置されていた。クロロはテーブルがある方のソファに座り、カルトは向かいのソファに座る。

運転席に座ったラミナはエンジンを掛ける。

「ほな、行こか」

「ああ、頼む」

「カルトは車に乗つとる間も筋トレや念の修行せえよ」

「……分かつてるよ」

「ほな、しゅっぱくつ」

クロロ達はようやく除念師探しを開始したのであった。

## #57 アラタ×ナ×モクテキ

カゴツシシティを出発して、早2週間が経過した。

10月に入り、遂に占いも全く役に立たなくなった。

そして、ヒントも全くないので進みは遅かった。

『で、今どの辺なの?』

「サヘルタ合衆国の真ん中ちよい東にある「アンシャイシティ」の近く」

『……微妙……だね』

「せやな」

『で、今は何してるの?』

「山狩り」

『は?』

「やから、山狩り」

ラミナ、ククロ、カルトは今、山の中を歩き回っていた。

『……なんで?』

「そら、東方向に山があったからやろ」

もちろん3人は大真面目に除念師探しをしている。

ヨークシンシティから真東に向かうと、この山にぶつかったのだ。

山小屋などある可能性もあるので、ラミナ達はたった3人で山を探索していた。

流石にラミナはブーツにカーゴパンツスタイルに戻っており、ク

ロも山登りスタイルの服装で雰囲気を出して楽しんでいた。

もちろんカルトは着物である。

『そんなところにホントにいるの?』

「さあ? そもそも直接除念師が見つかるんかも分からんしなあ」

『実在する幻』という言葉の正体も分からないままだ。

なので、見つかるのが除念師なのか、それに繋がるヒントなのか、全く関係ないものかもしれない。

ただひたすらに見聞きしたものを精査するしかないのだ。

「そっちのゲームはどうなったんや?」

『なんかシャルナークが見つけたみたいでさ。今、なんか調べもの始めてる』

「調べもの?」

『ゲームは現実世界で行われてる可能性が高いんだって。つまり、始めるときに体が消えたのはゲームの中に入ってるんじゃないかって、別の場所にワープさせてただけらしいよ』

「……あく……納得。ゲームの中に体ごと入るっちゅうんが、妙に違和感感じとったんよ。ワープ装置なんやったら分かるわ」

『で、今、その場所を調べてるみたいだよ。どっかの島らしいってさ』  
「島、なあ。……ん?」

ラミナは何かが頭に引っかけた。

『どうしたの?』

「……いや、なんでもない。まあ、とりあえず、こっちは元気にハイキングしてるで」

『……それはそれでムカつくけどさ。まあ、元気ならそれでいいよ』

「おう。また進展あったら電話するわ」

『了解。団長よろしく』

「おう」

マチとの通話を終えて、携帯をしまう。

そして、少し離れたところで搜索という名目でのハイキングをしているクロロとカルトの元に戻る。

「なんかあったか?」

「あるように見えたか?」

「なあんも」

「人の気配は全くないね、この山」

「人が歩いた形跡も見当たらんからなあ」

「ハズレのようだな」

クロロは苦笑して肩を竦める。

カルトもラミナも頷いて、下山することに決めた。

「そういえば、ゲームとか島とか言ってたが、何のことだ?」

「ん? ああ、今シャルやフィinks達が遊んどるゲームや。グリー

ドアイランドつちゆうオークションに出されとった奴」

「ああ……あれか……」

「でな、そのゲームが仮想世界やなくて、現実世界のどっかの島で行われとる可能性が高いんやと」

「……ほう」

クロロが足を止めて、ラミナに振り返る。

その反応にラミナも頷く。

カルトだけが理解出来ずに首を傾げる。

「それがどうかしたの？」

「……『実在する幻』、か」

「その可能性が高そうやな」

「あ……！」

カルトも2人の考えていることが分かり、目を見開く。

現実世界で行われているかもしれないゲーム『グリードアイランド』。

仮想世界で行われていると考えられていたものが、実は現実世界で行われていた。

まさしく『実在する幻』である。

「島つちゆうことやから、地図には載つとらんはずや。しかも邪魔者が入らんように、普通では流れつかんような場所」

「そうだな。街で調べよう」

「ついでにグリードアイランドも探しとこか。ゾルディック家は持つとらんのか？」

「……ないと思う。ミルキ兄さんがこの前のオークションでわざわざ狙ってたし」

「ふうん……。オークションに出とったんはバッテラつちゆう大富豪が全部競り落としたしなあ。その1個はフィinks達が盗んだから、今はもうバッテラの拠点のどっかにプレイヤー集めて始めとるやろうなあ。マチ姉の話やと、オーラで動くから電源も関係ないらしいで？」

「ふむ……。ということは、闇市とかで出回ってる可能性はあるな。」



プレイヤーが行方不明扱いにされていたら、貸家とかならば持ちモノを回収されてるかもしれない。電源なく動く不気味なゲームなら、裏で売られていてもおかしくはない」

「それでも果てしない作業やなあ」

ラミナはうんざりした顔で言う。

真偽の確認だけでもとてつもなく面倒な作業であるのは間違いない。

「まあ、グリードアイランドに関しては、まず島を見つけ出してからでもいいだろう」

クロロはそう言って方針を立てる。

ラミナとカルトはそれに否はないので、頷いて山を下りる。

そして、車に戻って、近くの街に向かう。

ネットカフェを見つけて中に入り、クロロとラミナでパソコンを開く。

「ハンターサイトならヨルビアン大陸の東海域にある全ての島が載ってるはずだ」

「後は海流、潮流のデータやな」

「ああ」

クロロが海域の地図を開き、ラミナが同じ海域の潮流のデータを出す。

パソコンを並べて、地図と見比べながらデータを動かしていく。

「……ん〜……怪しいんが何か所か……」

「…………待て。ここは？」

クロロが指差した場所には島がある情報はない。

しかし、潮流にしては少し不自然な流れがあることを示していた。

「……確かになんか障害物がある感じやな。それを無理矢理誤魔化しとる感じや」

「それもかなり大きい。さつき候補に挙げた島の数倍はあるかもな」

「……当たりかもな。もしここに島があれば、自然に船とかが流れつくことは絶対がない。しかも、ヨークシンの真東」

「グリードアイランドは未だにクリアされていない。もし本当に現実

世界で行われているなら、それなりの広さがあるはずだ」

「まあ、そうやないと人で溢れるだけやもんな」

「でも、なんで地図に出ないの？ ハンターサイトの地図なんですよ？」

カルトが首を傾げながら尋ねる。

「グリードアイランドは本来ハンター専用ゲームだ。だから、プロハンターが作った可能性がある。ならば、ハンターサイトに情報が載らない裏技を知っていてもおかしくないな」

「さて、そうなるよ……アカルル王国まで行かなあかんか。車では問題なく行けるな。船はそこで手配するとして……」

ラミナはアカルル王国までの道を確認する。

さらに情報屋サイトを覗いて、気になる情報がないか確認する。

「……っ！」

ラミナはある情報を見つけて、目を鋭くする。

それにクロロが気づいた。

「どうした？」

「うちの情報に懸賞金が懸けられとる。懸けられたのは2日前。……」

まだクロロとカルトの事はバレてへんか。けど、時間の問題やな」

「誰が金を出している？」

「……タラチュネラファミリー。アカルル王国とバルトア共和国の間にある【コキシメ王国】の首都を裏で牛耳る大マフィアやな」

「ほう……。なぜ、そいつらが？」

「……【アラクネー】」

「アラクネー？」

カルトが首を傾げる。

「かなり有名な殺し屋や。本名は『パスイダ・タラチュネラ』。タラチュネラ家の長女やったはずや」

「マフィアの娘が殺し屋なのか？」

「長女やけど、愛人の娘らしくてな。やから、家の汚れ仕事を仕切ってるっちゆう話や」

「強いのか？」

「かなりの使い手やな。もしヨークシンに来とつたら、仕事はかなり苦労したやろうな」

「ほう」

「もちろん念も使える。けど、それ以上に厄介な人はボスの娘でデツカイ街を牛耳つとるだけあって、末端のチンピラまで含めると部下の数が半端ないねん。まさに『蜘蛛の巣』みたいに情報網が敷かれとる。首都に入ったら、まず逃げ場はない。故に「アラクネー」っちゅう二つ名がついた」

サヘルタ合衆国内のマフィアにもかなり顔が利くので、マフィアがいる土地では恐ろしい組織力を発揮する。

ちなみに今回のヨークシンの地下競売には参加していなかったよ  
うだ。

「タラチュネラファミリーはマフィアンコミュニティには入つたらん。まあ、国王と裏で通じとるしな。十老頭と肩を並べられるだけの力がある。……もしかしたら、今回で十老頭になるかもな」

「そんな奴が何でラミナの情報を？」

「……んく……マフィアンコミュニティにでも泣きつかれたか？」

タラチュネラファミリーは流星街とも繋がりはないし、うちや旅団を狙って流星街との関係がこじれようが大した問題やないっちゅうことやろ」

「連中からすればマフィアンコミュニティに貸しを作るいい機会つてことか」

「やろなあ。んく……どうしたもんか……」

ラミナは悩まし気に腕を組む。

マフィアンコミュニティも間違いなく情報収集に動いてるはずだ。

その子飼いの情報屋も動いている可能性が高い。

「東に行けば、嫌でも相手せなあかな」

「南に下って、海で大回りするか？」

「……船やと逃げ場がない。流星にここから海出るまでバレンっちゅうのは楽観的すぎるやろ」

「港なんて絶対マフィアがいるよね？」

「おるやろなく。はあく……どっちにしる潰さんと厄介事になるか……」

ラミナはため息を吐く。

とりあえず、方針を決めたクロロ達は車に戻る。

ラミナの情報に賞金が出てるとなると、下手にホテルに泊まれなくなつたのもある。

今回はクロロが運転席に座り、車を走らせる。

ラミナは上着を脱いでタンクトップ姿になり、ソファに座る。

「アラクネーとの戦いの間は、ゾルディック家にクロロの護衛を頼むか……。その前にどっかで仕事引き受けとくか……」

「ボクじやダメなの？」

「ん？ お前もうちと一緒に戦わせるつもりやけど？」

「え？」

「流石にアラクネーを相手にしながら、他の雑魚の相手は面倒やからな。お前の相手には丁度ええやろ」

ソファに寝転がって携帯を弄りながら、カルトに言うラミナ。

なんだかんだで2週間以上鍛えてきたのだ。

カルトもめげずに真面目に修行を続けてきたので、そこそこ実力は伸びてきている。

もちろん、まだまだ旅団レベルには程遠いが。

それでも流石はゾルディックの子。

教えたことは、しっかりと吸収して自分の力にしていた。

今ならばヨークシンで見た当時のゴン相手でも、1対1ならば問題なく勝てるだろうとラミナは考えている。

キルアは本気になられたら少しまだ厳しいかもしれないが。

なので、ここで一度実戦を経験させてやりたいと思っていたのだ。

「コキシメに着く前に、どっかで1回仕事やらせてもらおうとな」  
ラミナは携帯を操作し終えてポケットに仕舞う。

カルトは首を傾げて、

「もしかして、お父様？」

「いんや、ゼノ爺」

「……なんでお爺様に？」

「シルバが苦手やから」

「……」

ラミナがゾルディック家で一番仲が良いのがゼノだ。滞在時よく組み手したり、茶を飲んでいたこともあるので尚更だ。

シルバのことは、イルミヤキキョウほど嫌ってもいないが元々寡黙であり、滞在時はほとんど関わっていない。そのせいか、襲撃されたり、この前威圧されたこともあつて、妙に苦手意識を覚えてしまったのだ。

それとシルバに直接連絡すると、キキョウが出てきそうな気がしてたまらない。

「お母様はそんなに酷い人じゃないよ？」

「いきなり人の飯に毒を仕込んだ奴が？」

「それは……うちじゃ殺し屋を名乗るなら毒は対処できて当然だし……」

「それを初対面の人間にやるか？ しかも、旦那である当主に黙って」

「……お母様だから……」

「説得力ないぞ、オイ」

ラミナはジト目を向け、カルトは顔を背ける。

クロロは笑みを浮かべて、

「ゾルディックの奥方はどんな人だったんだ？」

「さあ？ うちはその毒料理のせいで接近禁止になったから会うてないわ。ああ……でも流星街出身らしいで？」

「え!？」

カルトは目を見開く。

キルアもそうだが、カルトも母親の出身は聞いたことはなかったのだ。

ラミナは苦笑しながら、

「まあ、家族連れで里帰りするところやないしなあ」

「そうだな。むしろ悪影響かもな。ゾルディック家はどうか分からん

が。まあ、流星街出身なら、常識を求めるのは無理じゃないか？」  
「……まあ、なあ……」

自分達も常識から外れている自覚はあるので、キキョウのことをあまりとやかく言えない。

しかし、苦手なものは苦手なので、そこを譲る気はない。  
すると、ラミナの携帯が鳴る。

「おー！ 早いな」

ラミナは携帯を開き、中を読む。

「……クロロ。明日、次の街で停まる。そこで仕事受けるわ」  
「ああ」

「カルト、次の仕事は念を使ってええで。ただし、基本あの紙吹雪はなしな。覚えた体術と扇子での攻撃がメインな」

「分かった」

ラミナの言葉に頷くクロロとカルト。

と言っても、すでに夜になってきているので、今日はどこかの駐車場で泊まることになる。

ラミナはソファから起き上がって、欠伸をしながら伸びをする。

「ふわあ〜……いー さあて、晩飯どないしょ〜？」

冷蔵庫を開けて、中の食材を確認するラミナ。

もちろん料理はラミナが担当している。

「ん〜……ミンチカツ、ハンバーグ、麻婆豆腐、酢豚……」

「ハンバーグ……！」

カルトが目キラキラさせて、ラミナを見つめている。

ラミナはジト目を向けて、

「……ガキ。……って、ガキやったな」

「なっ……!?!」

「ふふっ……。ラミナ、俺もハンバーグが良いな。シチューソースがいい」

カルトは目を見開いて、すぐに眉を顰めて顔を背ける。

それにクロロが運転しながら笑い、カルトを庇っているのか、揶揄っているのか分からないが、オーダーを告げる。

ラミナはそれに呆れながら、

「まあ、ええけど……。カルトはチーズかけたろか？ それとも目玉焼き？」

「どっちでもいいよ！ ……けど、チーズの方が好き」

「くくく！ はいよ」

「……」

カルトは顔を真っ赤にして震えている。

ラミナはそれ以上揶揄うことはせずに、準備を始めていく。

クロロは車を休憩所の駐車場に停める。

「酒は自分で用意しいや」

「分かってるさ」

クロロは苦笑しながら、グラス2つと赤ワインを取り出す。

カルトも自分でコップと飲み物を取り出して、テーブル側のソファに座る。

ラミナは手早く調理を進めていく。

カルトはラミナの調理を興味津々な目で見つめ、漂ってくる匂いに明らかにウズウズしていた。

「ふっ」

「っ！ ……な、なにさっ！」

「いや。やはり子供というのは、人が料理をしているのを見るのが好きなのだなと思ってな」

「なっ……!?!」

「流星街にいた頃も、よくラミナが料理をしていると子供が覗き込んでいたな」

「あれは隙あらば横取りする気やったただけやろ」

「そうか？ ウボオーやコルトピ、シズクは後ろでずっと覗き込んでたじゃないか」

「オイ。シズクやコルはともかく、ウボオーは止めとけや。まあ、一番つまみ食いして、一番ぶん殴った記憶あるけど」

ラミナは手を止めずに呆れるように言う。

クロロは笑いながら、ワインを傾ける。

「婚約者にも食べさせたのか？」

「アホ言え。家やこんな状況やなかったら、料理なんぞするかい」

「じゃあ、カルトの兄はラミナが家庭的なことは知らないのか……」

「知らんやろうな」

「カルトは家の者から聞いてなかったのか？」

「ううん。家にいた時はボクも会わなかったし、お爺様からは組み手やお茶したくらいしか聞いてない」

「そら、組み手とお茶しかしとらんしな」

ラミナは苦笑しながら、用意が出来ていたサラダを2人の前に出す。

そして、直後ハンバーグを焼き始め、シチューソースを完成させる。

地味に炊飯器が置かれており、ラミナは皿に白米を乗せる。続いて、パンも数個取り出して皿に乗せる。

ライスをクロロの前に、パンをカルトの前に置く。

この2週間でカルトの好みも理解し、カルトもラミナがそこまで心配りしてくれることを理解しているので、もう驚かない。

ちなみにカルトは白米が嫌いなわけではなく、『洋食にはパン、和食には白米』というスタイルらしい。

そして、ハンバーグも完成し、蕩けたチーズが乗っているハンバーグ2つをカルトの前に置き、シチューに浸かったハンバーグをクロロの前に置く。

「ほい」

「いただきます」

クロロとカルトは早速ナイフとフォークを手にして食べ始め、ラミナもクロロと同じメニューをテーブルに並べて食べ始める。

「明日、食材買い足さんとなあ……」

「俺が行こうか？ アラクネーとか言う奴に見つかるとかもしれんな」

「ほな、メモでも書いとこか。……食材とか分かるんか？」

「分からなければ店員に聞かせ」

「変な食材買わせれんようにせえよ？」



「多分な」

クロロは肩を竦めて、ワインを飲む。

ラミナはジト目を向けながら、小さくため息を吐いてワインを飲む。

「流星街におつた頃、お前ら時々珍しい食材を見つけては持ってきて、無茶振りしてきよつたからなあ。信頼出来んわあ」

「そうだったか？」

「コラおい。お前は見たこともない魚一尾だけ持ってきて、『テンプラに出来るか?』とか言うてきたことあるぞ。しかも、テンプラがどんな料理かも教えずにや。聞いたら『知らん。美味しいとだけ聞いた』とかぬかしよつたんやぞ」

「……ああ。あつたな、そんなこと」

「そのせいでマチ姉に『ちゃんと調べといで』とか言われて家から放り出されたし、ノブナガに意味分からんハイテンションで連れ回されたし。散々やったわ。まあ、ジャポン料理やったから、ノブナガが妙に張り切つとつた理由は分かったけど」

ラミナはうんざりした顔でハンバーグを食べる。

「まあ、そのおかげで料理は上手くなったじゃないか」

「誰も料理人なんぞ目指しとらんっちゅうねん」

「マチから聞いたが、美食ハンターと仲良くなったんだろ？ 仕事も

一緒にしたそうじゃないか」

「密猟者の摘発やけどな。そいつのフルコースは食べさせてもらてないし」

「試験官だったのか？」

「そ。スシなんぞ試験にしとつたわ。うちはノブナガのおかげで知つとつたけど。キルア達は苦勞しとつたな。料理なんぞしたことないやろうし」

「俺やシャルもその試験だったら落ちてたな」

「流石に会長の爺も出てきたわ。出て来てなかったら、ヒソカにイルミも暴れとつたやろくな」

「イルミ兄さんが料理……」

「似合わんよな。焼き鳥とかなら完璧かもしれんけど」  
「……」

カルトは何故か屋台で焼き鳥を串に刺して焼いているイルミの姿を想像してしまい、嘔き出しそうになって口を手で押さえる。

ラミナはそれに苦笑して、

「クロロやマチ姉達もそうやけど、イルミやキルアも恐ろしいほどに料理するイメージが似合わんなあ」

「全くだな」

「包丁で食材を生きたまま切り刻むのは想像出来るね」

「それはただの虐殺か狩りや」

ラミナは呆れながら、ハンバーグを食べ終える。

食器や皿を片付けて、カルトには羊羹、クロロにはチーズのつまみを出す。

羊羹はゾルディック家が運んで来たものだ。

「お酒って美味しいの？」

「人によるな」

「紅茶派やコーヒー派とかと大して変わらんやろ。別に酒やからとか、気にせんでええと思うで？」

「ふうん」

「苦味や酸味が苦手やったら、まだ止めとき」

「分かってるよ。別に飲みたいとは思わないし」

カルトはそう言いながら、羊羹を食べる。

洗い物を終えたラミナは、ソファに座ってワインをグラスに注ぐ。

「それにしても、ゲームの島に何があるんやろなあ」

「ゲームのアイテムが除念出来るものなのか、ゲームに除念師がいるのか、だな」

「やつぱりゲームを探した方が早いんじゃないの？」

「まだ何とも言えんな。今の俺は念を使えないから、そのゲームが出来ない。もしゲーム内のアイテムが目当てのものなら、結局どうにかして潜り込む必要がある」

「マチ姉達にはどうする？」

「確信出来てから連絡しよう。まだ本当に島があるかどうかも分からないしな」

「確かにな」

「まずはアラクネーの排除。そして、島を探し出すことに集中だ」  
「了解」

方針を改めて決めたクロロ達は、今日はもう寝ることにした。

ラミナとカルトがベッド。

クロロがソファで寝る。

クロロとラミナは交代でベッドとソファで寝ている。

カルトは特訓などもあり、更にやはり子供ということもあり、ベッドを使わせていた。

少しずつだが目的に近づいているのを、クロロ達は確かに感じながら、眠りにつくのだった。

## #58 アラクネー×ノ×チカラ

翌日。

ラミナ達はサヘルタ合衆国国境近くの街にやって来ていた。ここでゾルディック家の者と合流し、仕事を受けるためだ。街外れにあるスーパーの駐車場に車を停めたラミナ達は、ゾルディック家の者が来るのを待つ。

もちろんキャンピングカーの事も、居場所も教えている。

1時間ほどのんびりしていると、ドアがノックされる。

ラミナがドアを開けると、そこにはなんとゼノがいた。

「ゼノ爺？」

「久しぶりじやのう。邪魔するぞい」

「お爺様……!？」

「元氣そうじやな、カルト。……ふむ、中々に成長したようじやの」

ソファに座っていたカルトは慌てて立ち上がり、ベッドの方で読書をしていたクロロもゼノの登場に本から目を放す。

他に付き添いがいないことにラミナは首を傾げるも、ドアを閉める。

「緑茶でええか？ あとカルトの羊羹」

「おう、すまんの」

とりあえず、相手が相手なのでしっかりとおもてなしの用意をする。

カルトはゼノをテーブルがある方のソファに座わらせ、カルトもその隣に座る。

クロロも興味が湧いたのか、向かいのソファに座る。

「久しぶりだな、ご老人」

「元氣そうじやな、坊主。まあ、前の頃とは随分と可愛くなったようじやが」

「ふっ。今ならあの時よりもっと殺しやすいぞ？」

「言うたじやろうが。儂や無駄な殺しはせん」

互いに不敵な笑みを浮かべて、軽口を言い合う。

一度殺し合った仲ゆえか、そこそこ打ち解けている様子だった。ラミナはゼノの前に緑茶と羊羹を置いて、ゼノ達と同じソファに座る。

「で？　今回はゼノ爺が付き添いっちゆうことか？　どんな厄介な奴がターゲツトや？」

「いや、それが少し別の意味で面倒になっての。まあ、お主と大きく関係しておるんじやが」

「あ？」

ラミナは眉を擡めて訝しむ。

ゼノは緑茶を飲んで、一息つく。

「今回の仕事は国境を越えてすぐの『クヘンタシティ』なんじやがな……」

バルトア共和国の『クヘンタシティ』は国境近くの街ということもあり、そこそこ大規模な街である。

「だが？」

「そこに例のお前さんの情報に懸賞金をかけとる連中が入り込んでおる」

「!?　アラクネーが？」

「うむ。どうやらクヘンタにおけるマフィアと闇組織が協力しておるようじやの。そして、今回のターゲツトが闇組織の方なんじやよ」

「あく……そらあ、ゼノ爺くらい出てくるわなあ……」

厄介なことこの上ない状況であるということだ。

「じゃあ、アラクネーがうち、闇組織がゼノ爺で……」

「マフィアがカルトじやの。それと前回同様ゴトーとアマネも付ける」

「念使いは？」

「もちろん闇組織もマフィアも抱えとる。まあ、マフィアは2, 3人レベルじやがの」

「なら、そのままではええか。問題はアラクネーがどれだけの戦力を連れてきたかやな……」

「かなりの数のようじやぞ？」

街中に奴の部下の証である『ハートの

クモ』の刺青を彫った連中がウロウロしとるらしい」

「ほう……クモの刺青か……」

クロロがゼノの話に興味を示した。

ラミナが肩を竦めながら、

「アラクネーは体がハートで、手足が6本のクモを思わせる刺青をトリードマークにしとる。そんで、その刺青をしとる奴らは念使いばつからしいわ」

「……能力か」

「その可能性が高そうやな」

ラミナが頷いて、ゼノに顔を向ける。

「けど、3つの組織が手え組まれたら、流石に厄介ちやうか？ マフィアのボスとアラクネーは一緒におると思うぞ？」

「とりあえず、頭を潰すしかあるまい。どれか一つでも潰れば少なからず乱れるじやろうて」

「流石に相手が相手や。ずっとカルトの面倒まで見きれへんで？」

「それくらいは分かつとるよ。まあ、仕事を引き受ける以上、死ぬこと位覚悟はしとる」

ゼノは不敵に笑って、カルトに顔を向ける。

カルトは真剣な顔で頷く。

それを見たラミナは苦笑して、立ち上がる。

「ほな、行こか。クロロの護衛はおるんやろ？」

「うむ」

「さつさと終わらせよか。ターゲットはあくまで闇組織の方やな？」

「そうじゃ。写真は向こうに着いたら見せる」

「了解。行くで、カルト」

「うん」

「クロロの買いもん、よろしゅう」

「ああ」

ラミナ、カルト、ゼノは車を降りて、ゾルディックが用意した車に乗り込む。

流石に今回は無駄な体力消費は控える状況である。

3時間ほどで国境を越えて、夕方には街に入り込む。

そのまま郊外にあるビルのガレージに入って、そのままそのビルの2階に上がる。

部屋にはゴトーとアマネ、その他に10人ほどの執事がいた。

ラミナ達是用意された椅子に座る。

「あ、飯多めに用意されて貰えてええ？」

「すでに別室にて準備させて頂いております」

「お、流石やな。ほな、さっさと話し聞かせて」

「はい」

ゴトーがホワイトボードを前に出して、説明を始める。

「ターゲットはこの街を拠点にしている闇組織【黒狗】のボスと幹部達4名。こいつらは人身販売や臓器販売を主な仕事しており、その主な後ろ盾が同じくこの街を拠点にしている【グスマシファミリー】です」

「警察との癒着は？」

「ありません。ヨークシンとは違い、ここの市長はマフィアや闇組織の撲滅を目指しています。そのためにプロハンターを数名護衛に雇っているようです」

「……こちらが暴れたら出てくるか？」

「いえ。今、市長はこの街を離れています。だからこそ、タラチユネラファミリーを引き寄せることが出来ています」

「なるほどな」

「アラクネーはグスマシファミリーが用意した拠点のどこかにいると思います……。未だ発見には至っていません。申し訳ございません」

「いんやあ、それがあいつのやり方やからなあ。グスマシファミリーの拠点はダミーの可能性すらあるわ」

ラミナは苦笑しながら言う。

「アラクネーはな、基本的に相手の前に姿を見せん。恐らく幹部との相互協力型能力やろな。部下に念使いが多い理由は、そこにあるはずや」

「なるほどのう……」

「自分は巢の中心で悠々と、自分の糸に捕まった獲物が、子供に嬲られるんを眺める。そう言う奴や。ホンマ、厄介なこつちや」

ラミナは面倒そうな顔を浮かべる。

どれだけ部下を殺してもアラクネー本体を殺さなければ、すぐに戦力を回復するのだ。

ここで中途半端に被害を与えれば、完全に敵対することになる。

流石にずっとタラチュネラファミリーを敵にし続けるのは厄介でしかない。

アラクネーと戦うならば、ここで絶対に殺さなければならぬ。

「カルト、流石にこの面子で出し惜しみは死ぬだけや。全力で殺しや」

「分かった」

「今回は相手が多い。変に嬲るなや」

「分かってる」

カルトは眉間に皺を寄せて、不貞腐れたように答える。

それにラミナとゼノは苦笑する。

「さて、飯食って、日が暮れたら動こか」

その後、ラミナは用意して貰った食事を食べて、ゼノは茶を飲んでいるんびりする。

執事に手伝ってもらいながら、カルトは紙を細かく切り、扇子の紙も新しくする。他にも色々と準備をして、気合を入れていく。

そして、20時。

寝っ転がっていたラミナが起き上がって、体を伸ばす。

「んー！ ふう……。さて、行こか」

「ボクはどう動けばいい？」

「とりあえず、マフィアの拠点に行こか。そこに1人か2人、アラクネーの部下もおるやろ。ゴトー、案内してや」

「承知しました」

「ほな、ゼノ爺。頑張りや」

「ふん！ 誰に言うとするんじや」

「そらそうや」

サンングラスをかけたラミナはカルト、ゴトー、アマネを引き連れて、



ビルを出る。

ビルを出て、すぐに駆け出し、路地裏を猛スピードで移動していく。もちろん体力温存のため、全力ではない。

「奴らの本拠地とされているビルは、あれです」

ゴトーが示したのは10階建てのビル。

「カルト、ゴトー、アマネはまず監視カメラの排除。その後は好きに暴れや。死体は放置でええ」

ラミナの指示に頷くカルト達。

そして、スピードを落とすことなく、ビルの正面から迫る。

入り口を見張っていた構成員達も、近づいてきたラミナ達に気づく。

「っ!! 誰だ!?!」

「おい! あれ紅髪の女!!」

「まさか!?!」

「くそっ! 止まれ!!」

構成員達は素早く拳銃を取り出すが、その前にラミナがスローイングナイフを投げ、ゴトーがコインを弾いて、構成員達の額を一瞬で射貫く。

そのままビルに入り込んで、ラミナとゴトーが目についた人間全てをすぐさま頭を射抜いて殺していく。

「うちとカルトは最上階。ゴトーとアマネは下から」

ラミナはそう言って、カルトを連れてエレベーターに乗る。

「9階で降りるで。マフィアにも念使いがおるから、注意せえよ」

「うん」

9階に着いてドアが開いた瞬間に、まずはブロードソードを具現化したラミナが飛び出す。

エレベーターロビーにはライフルを構えた構成員が3人おり、引き金を引く前にラミナは一瞬で3つの首を斬り飛ばす。

さらにベンズナイフを具現化し、角に潜んでいた構成員達に向かって投擲する。

構成員達は爆弾かと思つて一度下がるが、壁に突き刺さったのがナ

イフだと分かった瞬間、再び攻勢に出ようとする。

構成員達が角から飛び出した瞬間、ラミナが指を鳴らして構成員達の背後に移動する。

「「はあ!?!」」

ラミナは間近の数人の首を斬り飛ばし、遠い連中にはスローイングナイフを頭に突き刺す。

「ん?」

ラミナは足元に倒れた男の首元に、ハートのクモの刺青があることに気づく。

しっかりと確かめようとしたが、その刺青が溶ける様に消えてしまった。

(……消えた? つちゆうことは、この刺青がアラクネーの能力……!)

ラミナは推測を立てながら、カルトに目を向ける。

カルトはラミナとは反対側に向かい、部屋から飛び出してきた構成員達はカルトの姿を見て、目を見開いて一瞬固まる。

襲撃と思つて外に出たのに、着物を着た子供がいたら流石に一瞬思考が止まるのは仕方がないことだろう。

しかし、それは致命的な隙だった。

カルトは扇子を広げて、足音も出さずに一瞬で構成員達に迫り、舞う様に扇子を振るう。

そして、気づけば構成員達の背後に移動していた。

「「っ!!?」」

構成員達は振り返ろうとして、そのまま首や腕、体から血を噴き出して崩れ落ちていく。

血を払ったカルトは警戒を解かずに周囲の気配を探る。

それを見ていたラミナはカルトに声を掛ける。

「上に行くで」

「分かった」

2人は階段を上がり、最上階に上がる。

最上階に入った瞬間、先ほどまでとは雰囲気が違うことを感じ取つ

た。

「殺気を全く隠さんなあ」

「待ち構えてるってこと？」

「そうちゃうか？ 自信があるんやろ」

ラミナは苦笑しながらブロードソードをレイピアに変えて、目の前の扉に近づく。

特に警戒もせずに扉を開け、中に入る。

中は広い応接室兼執務室のようで、部屋の一番奥の机にマフィアのボスとみられるスーツを着た壮年の男が座っていた。

その周囲に4人の男が立っていた。

軍服を着た黒人の男、黒革の手袋を嵌めスーツを着た金髪の男、両腕に刺青を彫って両耳に大量のピアスを付けているアロハシャツを着た茶髪の男、そしてタンクトップの筋肉質な坊主の男。

4人共オーラを纏っており、念使いであることが窺える。

ボスの男は顔を顰めて、ラミナを睨みつける。

「……リッパ。まさか貴様の方から攻めてくるとはな……」

「ちよいと伝手があつてなあ。そつちからタレコミ貰てな」

「ちつ……！ それにしても……いつから子守りを始めた？」

「1か月くらい前から。なんや？ まだ知らんかつたんか？」

「ぐつ……！」

今の会話でアラクネー達がラミナの情報を全く集められていないことが分かった。

「ところで、アラクネーの駒はどれや？」

「誰が教えるか、バーカ」

タンクトップの男が両手を鳴らしながら、前に出てくる。

それに黒人の男が舌打ちしながら、オーラを強める。

更にアロハシャツの男も、右手に赤いボールと青いボールを具現化した。

それを見たラミナは、残った男に目を向ける。

「お前がアラクネーの駒か」

「……何を言っている？」

「さつき下でな、お前の仲間を殺したんやけどな。例のクモの刺青が、目の前で消えたんよ」

「……」

「それで分かったんは、アラクネーの能力は『その刺青を刻んだ奴の情報を共有する』ことが出来る。やったら、ここにおけるんは護衛よりも連絡役やんな」

「っ……………」

ラミナの言葉に、金髪スーツの男は一瞬眉を顰めてしまった。

「うるっせえな、テメエよお!!」

タンクトップの男が両腕を広げて、ラミナに飛び掛かってくる。

ラミナは後ろに下がりながらベンズナイフを投擲し、軍服の男を狙う。

「!!」

黒人の男は横に躲し、ナイフは机に突き刺さる。

ラミナは【肢曲】で残像を生み出して、タンクトップ男の攻撃を躲す。

(強化系……分かりやすいやつちゃ)

ラミナはタンクトップ男の背後に回り、金髪スーツ男に一瞬で詰め寄ってレイピアを素早く振り、額と胸を突き刺す。

「がっ?!」

「ちっ!」

「このアマア!!」

タンクトップ男が目を血走らせて、ラミナを振り返る。

他の男達もすぐ近くに迫ったラミナに目を向けてしまう。

そこをカルトが見逃すはずもなく、袖から手裏剣型に切った紙を指に挟んで取り出す。

それにオーラを籠めて、アロハ男を目掛けて投擲する。

紙手裏剣は本物のように猛スピードで風を切って飛び、アロハ男の首とこめかみに刺さる。

「げあ……………」

「ぐっ!」

黒人の男がカルトから注意を逸らしたことに歯軋りする。しかし、直後額と胸に衝撃を感じて、意識を闇に落とした。

【啄木鳥の啄ばみ】で黒人の男を殺したラミナは、指を鳴らしてベンズナイフと位置を入れ替えて、再びタンクトップ男の突撃を躲す。

「ああ!? くっそがあ!! 避けんじやねえよお!!」

「なら、死ねや」

「がひゅっ!」

ラミナは苛立ちながら叫ぶタンクトップ男の額に向かって、レイピアを突いて【啄木鳥の啄ばみ】で風穴を空ける。

タンクトップ男は目を見開いたまま、うつ伏せに崩れ落ちて死に絶える。

あつという間に護衛が死んだことにマフィアのボスは、冷や汗を流して固まるしかなかった。

「上手いやないか、カルト」

「あれだけ鍛えられたんだから、これくらい出来るよ。全員動き遅かったし」

「マフィアの護衛なんてこんなもんや。こいつらはハンターやなくて、傭兵崩れやチンピラ上がりっちな感じやし」

マフィアが抱える念使いなど、あくまで護衛でしかない。

なので、滅多に所属を変えないため、腕が鈍っていることに気づかない連中が多くなる傾向にある。

しかも、念使いを抱える組も少ないので、荒事になって一方的に終わってしまうので、自分の実力を勘違いする者も増える。

「さて、おっちゃん。アラクネーの居場所、知つとるか?」

「……知らん。一度ここで会ったが、それ以降はそいつを通しての連絡だ。俺はただお前を始末する手伝いを、マフィアンコミュニティから命令されただけだ」

「やろなあ。はあく……探すん面倒やなあ。おおきに、ほなな」

「かっ!」

嘘かもしれないが、それを確かめる術はない拷問も面倒なので、ラミナはため息を吐いてレイピアを振って、ボスの額に穴を空ける。

武器を消したラミナは、金髪スーツの死体に近づいて、体を漁る。男のポケットから携帯を見つけ、中を確認する。しかし、着信は全て非通知で、電話帳には1つも番号は登録されていない。

「ちっ。やっぱり別の連絡方法がある、か……」

すると、カルトの携帯が鳴る。

「……ゴトーから。監視カメラの処分は終わったって」

「そろそろ外の死体に誰か気づいて、警察が来るか。脱出して、裏手で合流しよか」

「分かった」

カルトは素早くメールを返して、ラミナと共に脱出することにした。

それとほぼ同時期。

「あや。殺されちゃったネ」

「……やはりリッパーに手を出すのは危険だったのでは？」

「殺られたのは下っ端だろ？ 手足の爪がいくら切られようが問題ねえよ」

「油断は出来ぬぞ。どうやら他にも何かがいるようだ」

薄暗い部屋に4つの人影。

部屋の中心には、白い長髪に赤いチャイナドレスを着た美女が、目を閉じて豪華な椅子に足を組んで座っている。

「アラクネー」。パスイダ・タラチュネラだ。

そして、彼女を囲むように幹部の男が立っている。

パスイダを心配そうに見つめるキツチリとスーツを着た茶髪オールドバックの30代くらいの男性。

スーツを着崩して胸元を大きく露出したホスト風の紫パーマの20代後半の男性。

そして、灰色の長髪を後ろで結び、口髭を生やした襟詰めのデールという民族衣装を着た壮年の男性。

この3人がパスイダを支える幹部であり、「アラクネー」の一部でもある。

「他あ？」

「街に出張ってる奴らからの定期連絡が途絶え始めている」

「街のアチコチで、変なスーツ連中が暴れてるネ。かなりの手練れネ。」

「黒狗」の方は姿も見えない前に殺されちゃったネ」

「黒狗にも襲撃が……!?!」

「幻影旅団が揃ってんのか？ あいつらってまだヨークシンにいるんじゃないのかよ？ 転移系の能力者でもいんのか？」

「数が多いネ。それに情報の見た目と一致しないネ」

パスイダは目を閉じたまま会話を続ける。

「連れてきた連中じゃ地力が違い過ぎて、武器出す間もないネ。奇襲失敗。作戦が裏目に出たネ」

パスイダは目を開けて、小さくため息を吐く。

ラミナの情報に懸賞金を懸けたことはバレていると考えていたパスイダ。

ラミナの実力を過小評価をしていないパスイダは、本拠地で待ち構える事も出来た。

しかし、同じくパスイダのことを過小評価していないラミナが、警戒していないわけではないと考えていた。

『最悪、幻影旅団を集めるかもしれないネ。そうなれば、被害はタラチユネラファミリーだけに留まらない可能性が高いネ』

国そのものが崩壊する可能性がある。

流石にラミナレベルの強者が10人以上揃われると、被害を食い止める余力はない。

ヨークシンの情報を見る限りでは、1人殺すだけでもかなりの戦力消費を覚悟しなければならない。

なので、奇襲を仕掛けるのが最善だと判断したのだが……。

「他にもあんな手練れを抱える仲間がいたなんてネ。流星街やプロハンターとは連絡を取っていないと思っただけどネ」

「他の殺し屋……というわけでしょうか」

「多分ネ。……あの子供。もしかして……」

パスイダは人差し指を顎に当てて考え込む。

「お嬢様？」

「……チエイツオン。ゾルディック家の資料を持ってくるネ」

「ゾルディック家……!? 承知しました」

壮年の男であるチエイツオンは一瞬目を見開いて、すぐに頷いて動き出す。

「ラニヨス、撤退準備。ここが襲撃される前提で動くネ」

「あいさー！」

「シユピネス。部下を暴れさせて、少しでも注意を周りに向けるネ。周囲を警戒するネ」

「はー！」

素早く指示を出し、それに従うラニヨスとシユピネス。

シユピネスは両手にサブマシンガンを具現化する。

パスイダは目を瞑って、

『総員、武器を具現化。周囲警戒。目標捕捉次第、攻撃開始。周囲被害は無視。これより目標を伝えるネ』

パスイダはそう言って、街に散らばる部下達にカルトやゴトー達の顔映像を送りつける。

命令と伝言を受け取った部下達は、シユピネス同様サブマシンガンを具現化していく。

パスイダの能力【百蜘蛛夜行】。

パスイダの血を混ぜた墨で『ハートのクモの刺青』を彫ったタラチユネラファミリーに所属する者の視覚と聴覚、記憶を共有し、互いに伝達が出来る。

『ハートのクモの刺青』は【神字】が埋め込まれており、それによって彫った者のオーラを無理矢理引き出す。

ただし、この能力でオーラを引き出された者は、四大行は使えるが独自の能力は作りだせない。そして、死んだらその刺青が消える。

シユピネス、ラニヨス、チエイツオンの相互協力型能力【ガ我ンらズはお嬢バの手レ足ドなり】。

3人で協力して作り上げた能力。



『ハートのクモの刺青』を彫ったタラチュネラファミリーに所属する者に、3人が触れることで付与できる。

『サブマシンガンを具現化』し、『標的を追尾する念弾を発射』し、『着弾直後、念弾を炎に変える』。

サブマシンガンと念弾のオーラは、武器を使った者のオーラを消費し、弾数、威力、燃焼力は使用者のオーラ総量に依存する。

この4人の能力を駆使して、タラチュネラファミリーは「アラクネー」として殺し屋業界に名を馳せてきた。

もちろんパスイダには他にも能力を持っているし、シユピネス達も念弾の威力は部下が使うより数倍の威力がある。

幻影旅団の『クモ』とは、また別の形の『クモ』。

完全にパスイダを頭として、存在する集団である。

「やっぱり有象無象に依存するのも限界があるネ……」

「しかし……戦力を補充するにも……」

「そうネエ。リッパ―や旅団に対抗できる奴なんか、そう簡単に集められないネエ」

パスイダはため息を吐く。

「それにしても、リッパ―がゾルディック家と関係を結んでいたとは……」

「一度狙われたって情報があったけどネ。まあ、殺し屋同士だから、依頼が終われば遺恨は引きずらないって可能性もあるネ」

「それでもゾルディック家にわざわざ依頼を出したと？」

「……それは考えられないネ。だったら、旅団を集めた方が良いネ」

「確かに……」

「ゾルディック家と何らかの協定関係にある……。流星にそこは想定外ネ」

「お嬢！」

そこにチエイツオンが戻ってきた。

資料を受け取ったパスイダは家族構成のページを確認する。

「……やっぱりゾルディック家ネ。リッパ―といた子供。ゾルディッ

ク家の末っ子ネ」

「なんと……。では、他にも……!?」

「いると考えて動かないと駄目ネ」

パスイダは立ち上がって、歩き出す。

その後ろにチエイツオンとシユピネスも付き従う。

「……けど、少しくらいお返ししないとネ。こつちも『クモ』としての意地を見せてやるネ」

パスイダは不敵な笑みを浮かべて、反撃の準備を始めるのであった。

## #59 アンサツイツカ×ト×マファイア

ラミナとカルトは、グスマシファミリービル裏にある建物の屋上でゴトー達と合流する。

「やっぱアラクネーは巣穴に潜つとんなあ」

「手がかりは無いの？」

「ん〜……一度拠点に戻るか。確かパソコンあったやんな？」

「はい」

「あんま期待できんけど、情報屋サイト覗こか」

ラミナは悩まし気に眉間に皺を寄せながら、方針を決める。

それにカルト達は頷いて、拠点に戻るために走り始める。

先ほど同様路地裏を走っていくが、

「奴らだ!! 見つけたぞ!!」

「撃て撃てえ!!」

「!!!」

突如、サブマシンガンを構えた男達3人ほどが現れた。

ダダダダダダダ!!

男達は躊躇なく発砲を始める。

ラミナ達はすぐさま路地裏や物陰に隠れる。

しかし、弾丸が4人を追いかけるように曲がってきた。

ラミナ達は目を見開いて、すぐに隠れていた場所から飛び出す。

「!? 念弾か!」

ラミナは銃弾ではなく念弾であることを見抜き、さらに念弾が当たった壁が発火するのも見逃さなかった。

「カルト、ゴトー! 先に念弾に当てろや! アマネはカルトのフオロー!!」

ラミナは両手にククリ刀を具現化して、指示を出す。

ゴトーはラミナの指示を聞く前から、コインを弾いて念弾に当てていた。

カルトは舌打ちし、紙吹雪を操って壁を作って念弾の防ぐ。しかし、紙なので発火した炎で紙吹雪は一気にその数を減らしてしまう。

アマネは地面に転がる石や廃材、ゴトーのコインを投げて、念弾を  
防いでいく。

ラミナは壁を蹴って素早く跳び回って念弾を躲しながら、二振りの  
ククリ刀を投げる。

ククリ刀は炎を纏って、念弾を弾きながら男達に迫る。

「なっ!? ぎゃ!?!」

「ぐえ!?!」

「くそっ! がっ!?!」

2人はククリ刀で腰から上下に体を分かれ、もう1人はラミナにサ  
ブマシンガンを向けた所をゴトーのコインに頭を撃ち抜かれる。

「止まるな! 屋上まで上がって一気に走るで!」

ラミナ達は一気にスピードを上げて、路地を駆け抜けながら建物の  
屋上にかかる。

そして、建物の屋上を跳び移りながら、拠点を目指す。

「なりふり構わなくなったね」

「やっぱ部下の視覚を共有出来るみたいやな。うちらがグスマシファ  
ミリーのところで暴れたんがバレたんやろ。多分、ゼノ爺や扇動中の  
執事連中もバレとるやろな」

「それにしても、あの銃と念弾は……」

「相互協力型の能力やな。あれがタラチユネラファミリーの部下に念  
使いが多い理由なんやろ。他の執事共は下げた方がええんちゃうか  
?」

「……そうですね。周囲の注意を引きながら、街を脱出するように指  
示を出します」

その後も2回ほど襲撃を浴びるも、特に問題なく撃退する。

ラミナ達は少し遠回りして、拠点へと戻る。

拠点の中には数名の執事が傷の手当てをしていた。

「死んだ奴はいるか?」

「いえ、今の所はここにいるケガ人だけです。他の者は合流しながら、  
郊外を目指しています。ただし、大旦那様と共にいる者達は引き続き、  
大旦那様のサポートをしています」

ゴトーは部下の報告に頷き、カルトは今のうちに紙の補充を行い、アマネはそれを手伝う。

ラミナはパソコンの前に座り、情報屋サイトを見る。

「さて……どこにアラクネーがおるか、やけど……」

「分かるの？」

「まあ、この街の情報屋はほとんどアラクネー側っちゅうか、グスヌシファミリーや闇組織と絡んどるから、嘘の情報が多いやろな」

「判別できるのですか？」

「ゴトー、この街の地図。ホワイトボードに貼つとるデカイ奴」

「はい」

ゴトーと手の空いている執事はすぐさまホワイトボードを動かしてくる。

ホワイトボードにはこの街の地図が貼られていた。

「これから言う場所にチェック付けてって」

「承知しました」

ラミナは次々と住所や地名、建物の名前を挙げていく。

ゴトーや執事達は言われるがままにバツ印をつけていく。

カルトは印がついた場所を見て、首を傾げる。

「この中にあるの？」

「グスヌシファミリーと闇組織の拠点は？」

「このこと……ここですね」

ゴトーが色を変えてバツ印をつける。

それを見たラミナは地図とパソコンを見比べながら、顎に手を当てて考え込む。

「グスヌシファミリーのビルは、うちらが暴れた。闇組織の方は情報無し。んで……執事達が暴れ回つとったところと、タラチュネラファミリーが暴れた情報……。それと……サブマシンガンを持つとる男達の目撃情報……」

ラミナは立ち上がって、地図に3か所ほど丸を描く。

「これは？」

「多分、この中のどれかがアラクネーの拠点や」

「なんで？」

「情報屋連中はアラクネーの拠点をバラさんように忖度するはずや。やから、うちらや部下が暴れた情報ばつかを流して、アラクネーの拠点に近い情報は挙げんやろうな。けど、パスイダはうちがこのサイトを使つとることくらい調べとるやろ。やから、わざと拠点近くの偽情報を流すようにしとるはずや」

「……なるほど。だから、他の場所と比べて情報が少なく、ピンポイントに情報があるところが逆に怪しくなる……というわけですか」

「そういうこつちや。グスマシファミリーと闇組織が潰れた今、パスイダは情報屋共を操作する権力はない。やから、情報の偏りを直す余裕はないやろ。後は……普通の情報サイトと警察へのハツキング……。あ、ここ捨てる用意しといてや」

「すでに完了しています」

「流石やなあ……つと、よつしや。1か所、警察の情報にも挙がつとらん場所がある。後はその中のビルのどれかについてことやなあ……」

流石にピンポイントで当てることは無理だ。

後は現場でどうにかして探し当てるしかない。

「とりあえず、行こか。近づいて【円】でも使えば、分かるやろ」

「ここからは6kmほどですな」

「さつき同様建物の上から行こか」

「分かった」

「お前達は私達が出たら、すぐにここを脱出しろ」

「はい」

ラミナ、カルト、ゴトー、アマネはビルの屋上から目的地へと向かう。

残った執事達は素早く痕跡を消して、車で脱出を始めるのであった。

パスイダ達も撤退の準備を整えていた。

「……完全に見失ったネ。やつぱり部下達じや手も足も出ないネ。それにスーツを着た連中も街から逃げ始めたネ」

「ということとは、ゾルディックはグスヌシファミリーと黒狗が標的だったと?」

「……その可能性はあるネ。けど、リップパーはまだ油断できないネ」

パスイダは街に散らばっている部下達の記憶を必死に探るが、ラミナの姿は見つからない。

一緒にいたカルトの姿も見当たらない。

パスイダも完全にラミナ達を見失っていた。

「……マズいネ。情報屋達からは何か連絡は?」

「特に何も……。というよりは……」

「足元を見られ始めたネ?」

「……はい。グスヌシファミリーと黒狗の頭が殺されたことに気づかれたようです」

「はあ……。仕方ないネ。流石にアタイ達だけで連中を牛耳る時間はなかったしネ。撤退するネ」

「はっ」

「りよ〜かい」

パスイダは目を開けて、脱出を決意する。

立ち上がって、移動を始めようとした時、

パスイダ達がいる場所をオーラが駆け巡った。

『!!?』

「バレたネ!! 備えるネ!!」

パスイダはチェイツオンから一振りの両刃の剣を受け取り、左手にサブマシンガンを具現化する。

チェイツオンとラニヨスもサブマシンガンを両手に具現化して、周囲を警戒する。

その時、ビルの壁から炎の円盤が飛び出してきた。

パスイダ達はそれを躲し、飛んで来た側の壁に銃口を向ける。

直後、左側の壁を突き破って、何やら銃弾のようなものが大量に撃ち込まれてきた。

「ぐっ!」

「おのれ……!?!」

パスイダ達は何とか銃弾であるコインを躲す。

「3方発砲!! このまま正面に出るネ!!」

「はっ!!」

チエイツオン達は左右と正面に連射する。壁は勢いよく炎が上がり、穴が空く。

そのまま正面に走り出し、シュピネスを先頭に外へと飛び出す。飛び出したのはビルの2階。

地面に下り立ったパスイダ達の真上から、紙吹雪が襲い掛かってきた。

「ラニヨス!」

「あいさあ!!」

パスイダが素早く指示を出し、ラニヨスが紙吹雪を銃撃する。

紙吹雪は一気に燃え広がり、攻撃は不発に終わる。

パスイダ達はすぐさま移動を始めようとするが、パスイダは背後に怖気が走り、反射的にサブマシンガンを背後に向けて発砲する。

「おっとお!!」

背後にはハルバードを構えて、全身鎧を身に着けた騎士がいた。

念弾は全て鎧に弾かれて、発火することなく霧散する。

「なっ!?!」

「しつかりと顔を合わすんは初めてやなあ、アラクネー」

「リッパ―……!?!」

「死ね」

ラミナはハルバードを振り下ろす。

パスイダは横に跳んで躲し、右手の剣を振る。ラミナは僅かに仰け反って躲し、ハルバードを横振りする。

それを跳び上がって躲したパスイダは、駆けつけたシュピネスと共にサブマシンガンを乱射する。

しかし、念弾は全て鎧に弾かれて霧散する。

「念弾が効かない……!?!」

「なんと……!?!」

「ゴトー! 1人任せる! カルトとアマネはペアで1人殺れや!!」



ラミナは指示を出して、ハルバードを振り回す。

ゴトーは隣のビルから飛び降りながら、右手でコインを連射する。カルトとアマネはラニヨスを挟み込むように下り立ち、カルトは扇子を振って再び紙吹雪を真上から襲わせる。

チエイツオンとラニヨスは舌打ちをして、サブマシンガンを構えてコインと紙吹雪に向けて発砲する。

ラミナはパスイダとシュピネスを同時に相手取る。

サブマシンガンが効かないことに歯噛みをするシュピネスは蹴りを多用しながら牽制し、パスイダはシュピネスの攻撃の隙を狙って剣で攻撃する。

ラミナはパスイダの剣はハルバードで受け流し、シュピネスの蹴りは躲していく。

（ふむ。決め手に欠けとるな。向こうもみたいやけど）

【不屈の要塞】を使用中は他の武器や【練】【堅】も使えない。

念弾を弾けるだけでもありがたいが、今の状況を打開するには少し厳しい。

（それにもう少し離れ離れにせんと、連携されたら厄介や。手下共も集まってくるやろうし……。どうしたもんか……。）

ラミナがパスイダ達を引き連れて行く方法を考えていると、

突如、上空に3匹の龍が現れる。

『!!』

ラミナはもちろんパスイダ達も動きを止める。

3匹の龍は大きくうねりながら、ラミナ達に迫る。

「っ！」

ラミナは後ろに跳び下がる。

すると、3匹の龍は突如スピードを上げて、チエイツオン、ラニヨス、シュピネスを啜えて空へと舞い上がった。

「「「なっ!?!」」」

「おお」

「ラミナ様！ あれは大旦那様の能力です！ 警戒は必要ありません！」

「なある。ほな、そのままついて行きい」

ラミナはゴトローの言葉に頷いて、指示を出す。

カルト達は頷いて、龍に飛び乗る。

龍を見送ったラミナは鎧を解除して、パスイダを見据える。

パスイダは歯軋りをして、空を見上げていた。

「残念やったなあ。まあ、頑張つて生き残ることを祈りや」

「くっー！」

「じゃあ、本番行こか」

ラミナはハルバードを消して、ブロードソードとソードブレイカーを具現化する。

そして、パスイダに斬りかかり、パスイダも構えて戦いを再開するのだった。

龍に攫われたシュピネスは必死にもがき、龍を銃撃していた。

しかし、龍は全く堪える様子はない。

「ぐっ!! 早くお嬢様の下へ戻らなければ……!!」

すると、龍が突如消え、シュピネスは高層ビルの屋上に放り出される。

シュピネスはすぐに屋上の端まで行くが、流石に高すぎて飛び降りるのは厳しかった。

「っ!! おのれ……!! この高さでは……!!」

「やれやれ……。これではタダ働きなんじゃがの……」

「!!?」

シュピネスは聞こえてきた声に弾かれるように振り返る。

その視線の先には、気だるそうに腕を後ろに回したゼノが立っていた。

「……お前は……まさか……!!?」

「まあ、孫のことで面倒をかけたるしのお……。これも仕事の延長と考えるとやるとするか」

ゼノはシュピネスのことなど、全く気にもかけずに独り言を呟く。

シュピネスはパスイダが調べさせた資料を見ていたので、ゼノの顔

を覚えていた。

「おのれえ!!」

シュピネスが叫びながら、サブマシンガンをゼノに向ける。

それによくやくゼノは、シュピネスに意識を向ける。

「やれやれ……」

そう呟いた直後、ゼノの姿が消える。

「っ!」

引き金を引こうとしていたシュピネスは目を見開いて固まり、周囲を見渡そうとした直後、胸と背中から血が噴き出す。

「がふっ!! ……な……にが……!」

「なんじゃ、未熟者じゃったか。これなら手助けせんでも良かったかもしれない」

シュピネスの背後にいつの間にもやら移動していたゼノが、つまらなげに言う。

シュピネスは口からも血が溢れ出し、両膝を地面につく。しかし、それでも左腕を震わせながらサブマシンガンをゼノに向けようとする。

「こ……こで……死ぬ……わ……け……」

「その気概は褒めてやらんでもないが、心臓を潰された以上、お主は死ぬ定めじゃよ」

ゼノはシュピネスに背中を向けたまま言い放つ。

その言葉を見捨て、シュピネスは歯を食いしばって引き金を引く。

直後、左腕が千切れて、念弾を放ちながら宙を舞う。

その念弾の数発がシュピネスの体に直撃する。

「っ!! が……あ……!!」

シュピネスは背中から倒れて、地面に大きく血の池を作りだす。「拳銃程度が儂に届くわけないじゃろうに。舐められたもんじゃ」

「……お……じよ……ま……もう……わ……」

ゼノは呆れた顔をシュピネスに向け、すぐに顔を逸らして歩き出す。

シユピネスは既にゼノの声など聞こえておらず、パスイダに謝罪しながら息絶えるのだった。

ゴトーとチエイツオンは、ビルの屋上で向かい合っていた。互いにすぐに撃ち出せる構えで、睨み合っている。

「……いくら貴様のコインが銃弾のように撃ち出せようが、我らの能力に勝てると思っっているのか？」

「ああ、余裕だな」

「……ゾルディックの人間だろうが、いい気になるなよ……」

「たかがマフィアがいい気になるなよ」

「っ!! キツサマア!!!」

チエイツオンは簡単に挑発に乗り、引き金を引く。

両腕のサブマシンガンから念弾が放たれる。

ゴトーは横に跳び出しながら、コインを連射する。

念弾とコインがぶつかり、炎が舞い上がる。撃ち落とせなかった念弾はゴトーを追尾してくる。

ゴトーは念弾の軌道を素早く予測し、回転を強めにかけてコインを発射する。

「いつまでも逃げ回れると思うなよお!!」

チエイツオンが強気に言い放った。

その直後、

キイーン! キイーン!

鋭い金属音のような音が響き渡り、チエイツオンの両肩に鋭い痛みが走る。

「がああ!」

チエイツオンは両肩から切り裂かれたように血を噴き出し、叫びを上げながら後退る。

両腕から力が抜けて、サブマシンガンを手放してしまう。

「言っただろうが、いい気になるなっよ」

ゴトーは右手で眼鏡を直しながら、チエイツオンに言う。

「……な、何をした……!」

「コインを縦にして、全力で撃ち出しただけだよ。速度に全振りして  
るからな。直撃すれば丸鋸のように切れる。連射が出来ねえのがク  
ソなところだがな」

ゴトーはチエイツオンを見据える。

地面に落ちたサブマシンガンは消滅し、チエイツオンは額に大汗を  
流しながら後退る。

「ぐ……！」

「どうした？ もう腕が動かねえのか？ じゃあ、銃はもう使えねえ  
な。他に能力は持ってねえのか？」

「……」

「なるほどな。その銃と念弾はテメエらの相互協力型能力ってわけ  
だ」

「っ！」

「じゃあ、もう用はねえ。死ね」

ドウドウドウドウン！

「がうつ!？」

チエイツオンは額や体に風穴を空けて、仰向けに倒れて息絶える。

「……ゾルディック家の執事を舐めんじゃねえよ」

ゴトーはすぐに駆け出して、カルト達の元へと向かうのだった。

その頃、カルトとアマネは、

「ぐ……！」

「どうしたの？ ボクはまだピンピンしてるよ？」

ラニヨスを追い込んでいた。

カルト達は路地裏で戦っていた。

路地裏にある廃材や砕いた瓦礫を利用して念弾を防ぎ、隙を見ては  
紙手裏剣や石礫を投擲してラニヨスを攻撃していた。

「こ、このクソガキ……！」

「そのクソガキに負けてるのは誰だろうね？」

(どうしよう……。カルト様。また癪り癖が出てきて……。)

アマネは物陰に隠れており、カルトの様子を見て眉尻を下げる。

ラミナがいれば「さっさと殺せ言うたやろ」と注意するのだろうが、アマネではそう簡単に注意出来る立場ではない。

厄介なのは、このままでも確かにラニヨスを殺すことは出来るからだ。

念弾は厄介であり、ラニヨスの身体能力もそこそこ高いが、それでもカルトやアマネより下である。

鍛えられた成果か、カルトもまだまだ体力的に余裕があるようで、それで久々の仕事でテンションが上がり過ぎたらしい。

アマネがどうしたものか悩んでいると、ラニヨスのサブマシンガンが突如消滅した。

「なっ!!?」

「あれ? 諦めたの?」

「んなわけ……!! っ! で、出ねえ……!?!」

ラニヨスはサブマシンガンが具現化できないことに目を見開いて、震える両手を見つめる。

「まさか……チェイツオンが……!?!」

「……ああ、そっか。その銃と念弾って相互協力型能力だっけ……。もしかして、お前達が作ってたの?」

「っ……!」

「まあ、お爺様とゴトー相手じゃ当然か……。ねえ、もしかしてもう能力ないの?」

カルトは扇子を口に当てて、少しずつ興奮が冷めて行くのを感じていた。

(こいつじゃ、どれだけ強くなったか。分かり辛いや。もう戦えないみたいだし)

カルトは小さくため息を吐いて、袖から紙吹雪を取り出す。

「もういいや」

「!」

「風ッ!!」

カルトは扇子を振り抜いて、紙吹雪を舞い上がらせる。

紙吹雪はラニヨスを囲い、ラニヨスは【練】をした状態で左右を見

渡して右往左往する。

ラニヨスの背後にカルトは音もなく移動し、扇子を素早く振る。

ラニヨスは背中に激痛を感じて、思わずそのままに前に飛び出し紙吹雪を突き破る。

「アマネ、殺しちゃって」

「はい」

「っ!」

カルトは追撃せず、扇子を畳んで退屈そうに言う。

アマネは右拳に【硬】を発動して、ラニヨスの真上に現れ右拳を振り抜く。

ラニヨスは目を見開いて、真上から迫る拳を見つめる事しか出来なかった。

「ふっ!!」

「?!」

アマネの拳はラニヨスの顔面に突き刺さり、ラニヨスは顔面を陥没させながら後頭部を地面に打ち付ける。そのまま頭が破裂して、血と肉片が地面に広がる。

「お疲れ様です、カルト様。お見事でした」

「こいつじゃ全然強くなった気がしないや。あの女の方が欲しかったなあ……。あれがアラクネーなんでしょ?」

「恐らくは」

「……まだ戦ってるかな? けど、戦っててもラミナ相手じゃ、もう無傷じゃないか……。そんな相手を横取りしてもな……」

カルトは扇子を口に当てて、独り言を呟く。

アマネはそんなカルトを見て、小さくため息を吐く。

その数分後にゴトーもやって来て、ラミナの下へ移動することにするのだった。

## #60 ホンモノ×ノ×アラクネー

パスイダはサブマシンガンを構えて、ラミナに向けて発砲する。ラミナは舌打ちして横に跳ぶが、やはり念弾はラミナを追尾してくる。

「逃げれないネー！」

「んなこた、知つとる」

ラミナはソードブレイカーを構えて、素早く振って迫る念弾を斬りつける。

すると、念弾は霧散するように消えて、発火することもない。

「なっ!? またネ!?!」

【脆く儂い夢物語】でも問題なし。まあ、念弾なんやから当然やろうけど……)

ラミナは特に喜ぶことはない。

何故なら、まだまだ大量の念弾が迫って来ているからだ。

(やっぱ数が多すぎる!)

ラミナは両手の武器を消して、ハルバードを具現化する。

『起動せよ!』

【不屈の要塞】を発動して、鎧を纏う。

そして、方向転換して一気にパスイダへと迫る。

背後や側面から念弾が襲い掛かるが、全て鎧に弾かれて霧散する。

「くっ!」

「ふっ!」

パスイダは顔を顰めて後ろに下がり、ラミナがハルバードを連続で突き出す。

パスイダは剣で弾きながら、後ろに下がり路地裏へと入り込み、ラミナとせめぎ合いながら移動する。

あそこで戦い続けていれば、警察がすぐに駆けつけるからだ。

別に殺しても問題ないのだが、目立ちすぎると後処理が面倒なのだ。

ラミナもそれに否はないので、お互いに牽制しながら移動していっ



た。

「疾ッ!!」

「ふう!!」

パスイダは突きを繰り出し、ラミナはハルバードで逸らして右脚を振り上げる。それをパスイダは横に躲して、サブマシンガンを間近で発砲する。

しかし、やはり通じない。

「ちいー!」

「無駄や無駄」

「喧しい…ネッ!!」

パスイダは再び剣を振るも、ラミナはハルバードで受け止める。

しかし、直後ラミナは兜の左眉間付近に衝撃が走り、横に体が弾かれる。

「っ!」

ラミナは素早く脚を滑る様に動かして、体勢を立て直す。

「あや。これもそこまでのダメージないネ?」

パスイダは僅かに目を見開く。

パスイダの右半袖の裾から5本の糸が伸びており、糸の先には10cmほどの柳葉刀が繋がれていた。そして、左袖からも同じく5本の柳葉刀が現れており、それらが蛇の頭のようにパスイダの周囲をユラユラと浮かんでいた。

(操作系能力か……! クラピカの鎖のように糸で繋ぐことで操作系に全振りしとる……)

「さあ……ここからが本番ネ!!」

パスイダは好戦的な笑みを浮かべて剣を振り上げる。同時に両腕の柳葉刀も動き出して、ラミナに両側から襲い掛かる。

ラミナは舌打ちをし、ハルバードを振り回して柳葉刀を弾き、パスイダに頭突きを繰り出すことで間合いを詰めて、剣の間合いを外す。

パスイダは後ろに大きく仰け反って頭突きを躲す。ラミナは左脚を滑らせる様に振るい、足払いを繰り出す。

両足を払われてバランスを崩したパスイダに、ラミナはハルバード

を掬い上げるように片手で振り上げる。

しかし、突如パスイダの体が宙に浮き上がり、ハルバードを躲した。

「!!」

「甘いネ」

6本の柳葉刀が襲い掛かり、それはラミナはハルバードと左腕で弾く。

そしてラミナの目に、4本の柳葉刀をビルの壁に突き刺して宙に体を持ち上げているパスイダの姿が映る。

さらに、パスイダの両太腿からも新たにそれぞれ5本ずつの柳葉刀が現れていた。

ビルの間にぶら下がっているその姿は、まさしく蜘蛛の魔物である。

「……なるほどな。それが【アラクネー】のホンマの由来か……」

「くふふふ。確か……そっちの『クモ』の手足は12本だったネ？ アタイの手足は24本ネ。そっちよりも多いネ」

「手足が多かろうが、頭は1個やろ。それくらい大した問題ちゃうわ」「そうかね？　じゃあ……味わうといいネ!!」

パスイダはラミナに飛び掛かり、両脚の柳葉刀も遅いかかる。

ラミナはハルバードを構えて、【肢曲】を使って残像を作りながら躲し、パスイダの左側に回り込もうとする。

ダダダ!!

しかし、パスイダが発砲し、数発の念弾が本物のラミナを追尾する。

「っ！　ちい！」

「くはははは!!」

本物を見破ったパスイダはすかさず左腕と左脚の柳葉刀で襲い掛かり、右腕と右脚の柳葉刀を壁や地面に刺して、空中で体勢を変える。

（くそっ！　厄介なやつちやな！）

ラミナは顔を擧めて、ハルバードで5本ほど柳葉刀を叩き落とし、残りは鎧で受け止めたり、逸らしながらパスイダに強引に迫る。

ラミナは右ストレートを繰り出し、パスイダは身を振って受け流すように躲し、そのまま一回転してラミナの右顔に左蹴りを繰り出す。

それを左腕で防御したラミナだが、左脚の柳葉刀3本が襲い掛かってくるのを視界の端で捉えて、右に跳ぶ。

しかし、そこを狙っていたかのようにパスイダが右手で握る剣を振り下ろす。

ラミナは左手だけでハルバードを回し、石突をパスイダの右肘を狙って掬い上げるように振り上げる。

しかし、1本の柳葉刀が横から飛んできて、ハルバードの石突に突き刺さって軌道を逸らした。

それを見た瞬間、ラミナはハルバードを手放して、左フックを繰り出して剣を殴り弾く。

そして、左足でハルバードを蹴り上げて浮かし、右手で掴む。

「!!」

「ふっ!」

短く掴んだハルバードを、ラミナはすかさず横振りする。

パスイダは体を後ろに引きながら、上へと移動してラミナから距離を取る。

パスイダの左脇腹から少量の血が噴き出す。

「ぐっ! ……ホント……全く気が抜けないネ……」

「ごつちのセリフやわ、阿呆が……」

互いに呼吸を整えて、攻めきれないことに苛立つ。

しかし、パスイダが突如ニイイと笑みを浮かべる。

「けど、糸は張り終えたネ」

「あ? つ!!」

一瞬訝しんだが、突如路地裏、ビルの窓、ビルの屋上にサブマシンガンを持った集団がラミナを囲むように姿を見せる。

すぐに全員が銃口をラミナに向ける。

(しもた! 【絶】か!)

「くふふふ! アタイ達の能力、甘く見てたネ?」

パスイダはラミナと戦いながら部下達に指示を送り、罨を張っていたのだ。

【百蜘蛛夜行】でオーラを引き出された者達は四人行をもちろん修



そして、ベンズナイフとブロードソードを具現化する。

ラミナは背後を振り返りながらベンズナイフを投擲する。ナイフは猛スピードで飛び、念弾を掻い潜って背後にいた男の額を狙う。

「っ!？」

男は目を見開くも、ギリギリでナイフを躲した。

ラミナはすぐさま指を鳴らし、「妖精の悪戯」でナイフと入れ替わり、男の背後に現れる。そして、「一瞬の鎌鼬」で首を斬り飛ばす。

「なっ!?! ギャっ!?!」

すぐ近くにいた構成員も一瞬で詰め寄って、首を斬り飛ばして殺す。

その早業にパスイダや構成員達は目を見開く。

「っ!?! 一瞬で……!?!」

「くっ!?! 一体どれだけ能力持つてるネ……!?! けど、念弾は追いかけるネ!!」

パスイダは顔を顰めながら叫び、その言葉通り念弾は一斉に方向転換してラミナを追いかける。

ラミナは指を鳴らして、斬り飛ばした男の頭とベンズナイフを入れ替える。

そして、ビルの壁を駆け上がって、ビル半ばまで上がると宙に跳び出して、反対側のビルの窓から乗り出していた構成員に向かってベンズナイフを全力で投擲する。

「ぎっ!?!」

構成員はナイフが額に突き刺さって頭を跳ね上げ、後ろに仰け反って倒れて行く。

念弾がギリギリまで迫っていたラミナは、上着を脱いで真下の念弾に投げつける。一番近くに迫っていた数発の念弾は上着に当たって燃え上がり、その炎で後続の念弾も炎を上げる。

その隙に指を鳴らしてベンズナイフと入れ替わり、ビルの中に入り込む。そして、ベンズナイフを消す。

タンクトップ姿になったラミナはククリ刀を具現化して、反対側のビルの屋上にいる構成員を狙って投擲する。

炎の円盤となったククリ刀は、念弾をものともせず猛スピードで飛び、屋上にいた男の上半身を縦に抉って通り過ぎる。

「うお!?」

「な、なんだ!?!」

死んだ男の近くにいた構成員2人は悲鳴を上げて、炎の円盤に銃口を向ける。

しかし、ラミナがククリ刀を消したことで、構成員達は能力の正体が分からずにさらに混乱するのだった。

ビルに入り込んだラミナはブロードソードを消して、ハルバードを具現化する。

そして、【不屈の要塞】を発動した直後、

突如、ラミナを追尾していた念弾が方向を変えることなく、まっすぐ飛び始めた。

「あ?」

ラミナは訝しみながらも、飛んで来た念弾を鎧で霧散させながら躲す。

そして、外で念弾の変化を見ていたパスイダや構成員達は目を見開いていた。

「追尾が止まった!?! シュピネスがやられたネ!?!」

念弾の追尾能力は、操作系であるシュピネスが担当していた。

それが使えなくなったということは、シュピネスが死んだことにならない。

「くう……!!」

パスイダは盛大に顔を顰める。

そして、その機を逃すラミナではなかった。

ラミナが窓から飛び出してきた。

右手にはククリ刀を握っており、ラミナは屋上に残っていた構成員達目掛けて投げつけ、左手に具現化していたスロージングナイフで他の構成員達を狙う。

「ぎゃあ!?!」

「ぐえっ!?!」

「ぎっ！」

「くっ！ 撃つネ!! リッパを自由に動かすんじゃないネ!!」

パスイダはすぐに気を持ち直して、指示を出す。

それに構成員達も顔を引き締めて、銃撃を再開する。

(追尾能力が消えたんなら、ただの銃と大して変わらん!!)

ラミナはそう判断して、念弾を軽やかに躲しながらスローイングナイフを投げて、構成員達の額に突き刺していく。

しかし、パスイダの指令で街中に散っていた部下達が徐々に集まって来ていた。

さらに銃声や炎、そして悲鳴で、野次馬が集まり、そして流石に警察も駆けつけてきたが、流れ念弾に巻き込まれる者達が続発し、戦場の周囲は大混乱に陥っていた。

しかも、そこにサブマシンガンを持った者達も現れ、警察と銃撃戦になり、さらに混乱が大きくなっていく。

「くっ！ (マズイネ……！ 騒動が大きくなり過ぎてきてるネ……！)」

パスイダは銃撃を続けながら、徐々に悪化していく状況に冷や汗が流れ始める。

部下も駆けつけて来るよりも、殺されるペースの方が早い。

しかも、部下が集まるのを期待できる状況ではない。サブマシンガンを消してから、ここに来ようにも周囲で銃撃戦にまだっている状況で、警察が止めないわけではない。無理矢理突破しようものならば、やはり警察と戦うことになるはずだ。

問題は撤退しようにも、結局周囲にいる警察や野次馬達をある程度蹴散らさなければならぬことだ。

パスイダだけならば、簡単に突破できるが、流石に部下達全員が逃げ切れるとは思えない。

タラチュネラファミリーであることがバレない可能性は低い。しかも、この状況では情報屋も警察やプロハンターに情報を売る可能性がある。

現状、ラミナやゾルディック家が暴れた証拠は少ない。

なので、最優先で捜査の手が向けられるのは、間違いなくタラチュネラファミリーとなるはずだ。

もちろんたかが警察くらいならば、国王に言えば止められるだろうが、あまり国王に借りを作るべきではないし、タラチュネラファミリーの活動にも影響が出るだろう。

(けど、このまま戦い続けても……!)

パスイダが撤退すべきか悩んでいると、今度はサブマシンガンそのものが消えた。

「!!? チエイツオンまで……!?!」

「銃が消えたなあ」

「っ!?!」

「ほな……」

ラミナは全員のサブマシンガンが消え、それに慌てている様子からパスイダ達にとって想定外な状況であることを見抜く。

そして、標的をパスイダのみに定めて、右手にブロードソード、左手にソードブレイカーを具現化して、一気にパスイダへと迫る。

「反撃開始や」

「ちい!! 舐めるでないネエ!!」

パスイダは吠えて、四肢の柳葉刀を操って地面に下り立ち、剣を構える。

そして、鞭のように糸をうねらせ、高速でラミナに飛ばしながら、パスイダも斬りかかる。

ラミナも避けずに突っ込み、

「疾イ!!」

ギギギギギギギイイン!!

【一瞬の鎌鼬】で嵐のように迫る柳葉刀や剣を弾き落とす。

パスイダは靴先から仕込んでいた刃を出して、左脚を振り上げて蹴りを繰り出す。

ラミナは顔を後ろに仰け反らせて躲し、同じく左脚を振り上げる。パスイダは左脚を振り上げた勢いのまま、体を仰け反らしてバク転し、今度は右脚を蹴り上げる。



ラミナは左脚を無理矢理右に方向転換して、パスイダの右足の刃を躲し、右脚だけで踏み込んでパスイダに詰め寄る。

パスイダは両腕の柳葉刀を2本ずつ左右斜め後方に飛ばして壁に突き刺し、体を浮かしながら体を起こす。

そして、両脚の柳葉刀を操りながら、両足を鋭く連続で突き出して靴先の刃でも攻撃する。

ラミナは両腕を高速で振り、柳葉刀と足の刃を弾く。

「!?」

パスイダは後ろに下がりながら、目を見開く。

その目には靴先の刃が折れており、更に糸に繋がっているはずの柳葉刀が6本ほど斬り落とされていた。

ラミナは【脆く儂い夢物語】で糸を切りつけて能力を解除し、そこを【一瞬の鎌鼬】で糸を切っていたのだ。

両足も斬り落とすつもりだったが、パスイダはラミナの両手を見事に狙ってきたので、刃を弾くのが精いっぱいだった。

ラミナはソードブレイカーを鋭く突き出し、パスイダの腹部を狙う。

パスイダは左脚の残った2本の柳葉刀を壁に突き刺して、体を横に持ち上げて躲す。そして、下側になった右手の剣を掬い上げるように振り上げる。

ラミナはブロードソードを振ろうとするが、突如右腕が動かなくなる。

「っ!?!」

目を向けると、右腕に糸が絡まっていた。左腕を動かそうとしたが、同じく糸が絡まって動きにくくなっていた。

(くそっ!)

ラミナは歯軋りして、体を左に傾けながら出来るかぎり仰け反らせる。

「ぐっ!?!」

右肩に鋭い痛みが走り、血が噴き出す。

ラミナは顔を顰めるも、すぐさま左脚を全力で振り上げてパスイダ

の右脇腹に蹴りを叩き込む。

「が!? つー! しゃあ!!」

パスイダも顔を顰めながら、右腕と右脚の柳葉刀を飛ばす。

ラミナは両手の武器を消して、右手にハルバードを具現化する。

『起動せよ!』

【不屈の要塞】を発動して鎧を纏って、両腕の糸を吹き飛ばしながら柳葉刀を鎧で受け止める。

「ぐっ!・らあ!!」

「ぶっ!」

ラミナは衝撃で後ろに下がりながら、片腕でハルバードの石突を振り上げてパスイダの右頬を打ち上げる。

パスイダは体を一回転させながら後ろに吹き飛ぶも、すぐさま四肢の柳葉刀を操って地面や壁に刺して、体勢を整える。

ラミナはハルバードを消し、【不屈の要塞】を解除する。

そして、スローイングナイフを両手に4本ずつ具現化して、連続で両腕を振るって投擲する。

パスイダは剣や柳葉刀で叩き落としたり、躲わしていたが、ラミナが最後に放った1本がパスイダの左上腕に突き刺さった。

「ぐっ!! つー! しまった!」

パスイダは痛みに呻くが、ナイフが刺さった位置からラミナの狙いに気づき、左上腕に目を向ける。

左上腕に付けていた柳葉刀を繋いでいた糸を固定していたリングが壊され、腕から外れていた。

「まずは1個」

「つー! ツアアアア!!」

パスイダは再び吠えながら左腕のナイフを抜き捨て、ラミナに飛び掛かろうとすると、

『飛び交え』

ラミナが呟くと、地面に散らばっていたスローイングナイフ8本が浮かび上がり、独りでにパスイダに襲い掛かる。

「なっ!」

「お返しや」

パスイダは弾かれたように跳び上がり、残った柳葉刀を使ってビルを登り縦横無尽に動く。

しかし、スローイングナイフの群れは、パスイダ達が使っていた念弾のようにパスイダを追尾する。

パスイダはスローイングナイフを弾くが、スローイングナイフはすぐに再び飛び上がる。

ラミナはレイピアを具現化して、レイピアを構える。

それを見逃さなかったパスイダは、更にスピードを上げる。

「ビース・ビーク啄木鳥の啄ばみ」

ラミナは目を細めて、素早く突き出す。

直後パスイダは右上腕に痛みを感じ、右腕のリングが外れる。

「!? (ホントにどれだけの能力を……!? それよりもマズイネ!

両脚だけじゃバランスが……!?)」

「遅い」

「ああああ!?!」

パスイダは両脚の糸を操って地面に下りようとするが、その前にラミナがレイピアを連続で突きを放つ。

両太腿に痛みが走り、両脚のリングも壊される。

パスイダは移動手段を失って、地面に落ちて行く。

迫ってくるスローイングナイフを剣で弾きながら地面に下り立ち、すぐに動き回ってレイピアの剣筋を定めさせないようにする。

スローイングナイフから逃げ回るというのもある。

四肢から血を流しているが、それを気にしている場合ではない。

「……流石やな。カルトにも見習わせたいわ」

ラミナはパスイダの実力を素直に称賛する。

今までのパスイダの戦い方を考えれば、系統は操作系の可能性が高い。

部下を運用する能力とサブマシンガンを造り出す相互協力型能力だけでも十分だろう。なのに、それに加えて自身の強さを高めるのも怠っていない。

(クロロが見たら、仲間にしたがったかもしれんなあ)

ラミナはそう考えたが、すぐに気を締め直してパスイダに向かって飛び出す。

スローイングナイフを消し、ブロードソードを構える。

パスイダはスピードを落とす事なく動き回り、ラミナとの距離を保とうとする。

それを見たラミナは両手の武器を消す。

パスイダはそれに訝しむが、直後ラミナが拳を構えて【肢曲】で残像を生み出しながら迫ってくる。

「ちいー！」

パスイダは舌打ちをして、更に距離を取ろうとするが、直後背中に衝撃が走った。

「があ?！」

「残像って分かってても惑わされちゃうだろ?！」

パスイダの背後で右拳を突き出していた。

そして、再び一瞬でパスイダの前に移動して、回転しながら屈み、立ち上がりながら右後ろ回し蹴りをパスイダの顎を狙って繰り出す。

パスイダはギリギリで両腕でガードするが、耐えきれずに両腕の上に弾かれ、顎を蹴り上げられて上空に打ち上げられる。

「つつ!!?！」

「終わりだよ」

ラミナはパスイダの真下を踊る様にステップを踏みながら通り過ぎて背後に回り、両腕を胸の前で交えて両手を鉤爪のように曲げながら両腕を引き絞る。

パスイダは頭の上で両腕が何かに縛り付けられて、両脚も縛られ、首と腰にも何かが締め付けてくるのを感じながら空中に固定された。

「……………!!? (これは……………オーラの……………糸!?)」

「【親愛なる姉様との絆】。アタシの奥の手さ」

ラミナは両手に力を入れながら、背を向けたまま言う。

パスイダは首と腰の締め付けが徐々に強まっていくのを感じ、己の結末を悟る。

「悪いけどさ……。この能力と名前に誓って、あんたに負けるわけにはいかないんだよ。本望だろ？」【アラクネー】

「……はっ。……ク……ソ……くらえ……ネ……」

「あつそ。……じゃあね」

ラミナは両手を握り締め、両腕を力強く広げる。

背後で折れる音と潰れる音が響く。

ラミナは能力を解除して、そのまま歩き出す。

ドシヤツと地面に落ちる音がしたが、ラミナは振り返る事なく歩き続ける。

ラミナは短刀を具現化して姿を消し、現場から離れる。

1 kmほど離れた所で能力を解除する。

「はあ……もう出てきてええんちゃうか？」

ラミナは小さくため息を吐いて、虚空に向かって声を掛ける。

すると、上から人影が下りてくる。

ゼノにカルト達である。

「少し手こずったの」

「うっさいわ」

「くくく！ まあ、あの能力の組み合わせは中々に厄介じゃったと思うがの」

「はあく……あんたの前ではあんまり能力見せたあなかつたんやけどなあ」

ラミナは再びため息を吐く。

そして、カルトに顔を向ける。

「なんや大人しくしとつたな。手え出してくると思っとなつたけど」

「……ボクじゃ足手纏いになりそうだったから……」

カルトは悔し気に眉を顰めながら言う。

カルトは実際乱入する気であの場合まで行つたが、ラミナとパスイダの動きを見て、自分が入れる戦いではないことを思い知らされた。

必死に動きを観察して脳内シミュレーションをしたが、柳葉刀の動きや2人の動きを追いきれず、自分ではすぐに負けると理解した。

手数自体は少ないように見えたが、それは互いに僅かな動きや視線

で牽制していたからであることも理解することは出来た。

「どれだけ見えない攻防があったかまでは分からなかったが。」

「まあ、あれくらい動けるようになるんが理想やな〜」

「……分かってる」

「ラミナ様、車を近くに呼んでおります」

「おおきに。さっさと離れよか。クロロも呼ばなあかんし」

「それに関しては、部下が運転してこの街を目指しております。」

「ですので、この街を抜けた先で合流するように手配しております」

「マジで？ 助かるわ〜」

ラミナはゴトリーの有能さに感謝して、車に向かう。

そして、警察が混乱している間に、街から抜け出したのであった。

## ラミナ・プロフィール

○ラミナ・ハサン

19歳。身長169cm。体重50Kg。

血液型O型。Cカップ。

紅い髪を後ろで無造作に纏め、茶色の瞳。

刀剣類などの刃が付いている武器が好き。

流星街出身で、流星街出身の旅団員とは顔なじみ。

マチとは血の繋がった姉妹と間違えられるほど顔つきや雰囲気似ており、ほぼ一緒に暮らしていた。

『幻影旅団』創設メンバーともほぼ家族同然の関係で、料理、洗濯などを押し付けられていた『お母さんの妹（マチ仕込み）』。

なので、創設メンバーの事は『兄』『姉』と慕っており、マチとパクノダは『マチ姉』『パク姉』と普段から呼んでいる。

そのおかげか何だかんだで面倒見がよく、世話好きで、無駄な殺しは好まない。

しかし、逆にその性格が災いし、面倒事に巻き込まれたり、押し付けられることも多い。

特に『暗殺業』と『旅団関係』で、最近そこに『キルア関係』が追加された。

そのせいか『自他の生死』に関しては、ある意味クロク達以上に独特な価値観を持っている。

本人もそれを自覚してはいるが、現状その価値観が一番しつくり来ており、覚悟も固まっているので直す気はない。

関西弁なのは育ての親が関西弁だったから。

両親は生まれてすぐに他界している。

ゴンやキルアのように突出した才能はないが、アルケイデスやクロロやシャルナークなどに戦闘以外のことも色々教わったせいか、観察力や考察力、情報収集力があり、総合力が全体的に高くなっている。

そのため、実力としてはプロハンターのベテランクラス。

暗殺者としての名は「リッパー」。

パスイダ殺害後、旅団同様A級首に指定され、懸賞金は10億まで跳ね上がっている。

○主な関係者への印象（旅団員除く）

ゴン：見てる分には面白い子供。しかし、あくまでキルアのついでであり、もし敵対すれば殺す覚悟は出来てはいるが、キルアのこともあり、厄介な存在でもある。念関係しか指導してないので、あまり弟子とは思っていない。

キルア：ゴン同様見てる分には面白い子供。しかし、やはり子供にしか見えないので、結婚する気は一切ない。ゾルディック家の影がチラつくせいで、非常に扱いに困っている。ちゃんとゴンの制御をしてほしい。念関係しか指導していないので、あまり弟子とは思っていない。

クラピカ：これ以上自分や旅団の前に現れたり、狙ってこななければ放置。来るならば、今度こそ殺すと決めている。

レオリオ：ゴンやキルア同様、余計なことをしなければ放置。

ヒソカ：今度は絶対殺す。

シルバ：嫌いなわけではないが、家族問題になると面倒なので苦手。

ゼノ：気は合うが、シルバ同様家族の事が絡むとやや面倒。

キキヨウ：会いたくもない。

イルミ：会いたくもない。

ミルキ：誰？

カルト：正当な直弟子となっている。家族関係を理解してからは同情する面もあり、旅団入りを目指していることから特に鍛えることに文句はない。子供っぽい面もあり、なんだかんだで素直なことから、どちらかと言えば好ましいと思っている。

ゴトー：ゾルディック家で一番頼りになる。

アマネ：まだまだ未熟。主に精神面。

○戦闘技術

系統：『具現化系』（【月の眼】発動中は『特質系』）



念を覚えたのは6歳。

オーラ量、四大行および応用技の練度は、プロハンターならばベテランクラス下の中。

系統上放出系は苦手だが、【円】は直径100mまで使える（超頑張った）。

【暗歩】【蛇活】【関節外し】【身体操作】などのゾルディック家御用達の暗殺術も会得している。

【心臓潰し】【心臓抜き】はキルア以上、シルバ以下。【蛇活】と併用可能。

【肢曲】は走りながらも使える。

幻影旅団腕相撲ランキングでは、マチ以下、クロロ以上。

ゾルディック家【試しの門】は『4』まで（軽く）開けられる。

●【月の眼】：正式名称は不明。

『夜、または視界の8割以上が暗い時』に感情が高ぶると、薄っすらと輝く金色に変わる。クルタ族とは違い、戦闘力は変わらない。

【月の眼】発動中は【特質系】に変わり、能力は『自身のオーラを、目にした相手のオーラと全く同じものに変える』こと。

訓練により任意のタイミングで変えることが出来る。

相手のオーラと同化するため【練】【堅】【硬】をすり抜けることが出来る。すり抜けた直後にオーラの質を元に戻し、大ダメージを与える。具現化した武器までは、オーラの質を変えることはできない。下手をすれば、向こうの攻撃も同化して防御をすり抜けてしまうため注意が必要。

オーラが同化できることで、相手の【発】を無効化することも出来る。ただし、相手の【発】を使うことはできない。

使用後は強烈な虚脱感に襲われ、【刃で溢れる宝物庫】で具現化した武器に設定した10回分のストックが全て最低1回分減る。

【月の眼】を長く使えば使うほど、減る回数分が増える。

サングラスをしているのは、昼間でも使えるようにするため。夜にするのも電気や月明りで使い辛い時があるため。

\*クルタ族に近い血筋を持つ少数民族なのではないかと、クロロやシャルナークから聞かされているが、両親はすでに死んでおり、流星街で生きてきたので正確な出自は不明。ラミナの両親も流星街出身らしいので、かなり昔に滅んだ民族なのではと結論付けられている。

○ラミナの念能力

アルマセン・デ・エスパダ

●【刃で溢れる宝物庫】

特質系能力。

刀剣類や槍や鎌などを念で生み出した空間に収めることで、入れた直後からその武器を具現化することが出来る。

【刃で溢れる宝物庫アルマセン・デ・エスパダ】の制約は1個。

【月の眼】発動時のみ、本体となる武器収納が可能。ただし、必ず刃を持つている武器であること』

『一度収納すると、壊れるまで本体を取り出すことは出来ない』

『収納できるのはオーラを纏っている武器のみ。ただし、他者の念により具現化された武器は収納できない』

『形状が80%以上一致している武器は収納できない。ただし、長さが1m以上、および大きさが3倍以上の差があれば認められる』

『具現化した武器が10回破壊されると、収納している本物も砕ける』

『ストック数はいかなる手段をもってしても回復しない』

『同じ能力は2つ以上の武器には付与できない。付与したい場合は、現在その能力を付与されている武器を破棄しなければならぬ』

『具現化した武器は、5分以上ラミナの手から離れていると砕けてストックが減る』

『【月の眼】を一度発動すると、必ず武器のストックが最低1つ減る。発動後3分経過ごとに、ストック減少数が1つずつ増える』

『武器に付与できる能力は、収納した武器が持っているオーラの量、質によって限界がある。【月の眼】状態でなければ発動できないかどうかは、作ってみなければ分からない』

『【刃で溢れる宝物庫】に収納されている武器が0になると、二度とこの能力は使用できない』

上記の制約＋武器ごとの制約をクリアしなければならない。

・【妖精の悪戯】

具現化したベンズナイフに付与されている能力。

『指を鳴らす』ことでナイフと入れ替わる。

ナイフと入れ替えるものは細い糸のようなオーラで繋がっており

【隠】で隠している。

ラミナ自身は入れ替えられるが、他の生物は入れ替えられない。死体は入れ替え可能。

壁などの大きな遮蔽物があると、オーラが途切れてしまい、入れ替えられない。

・【啄木鳥の啄ばみ】

具現化したレイピアに付与されている能力。

突き刺した直線状の空間を貫くことが出来る。射線距離は最大10m。

・【狂い咲く紅薔薇】

具現化したファルクスに付与されている能力。

一瞬【円】を放ち、ラミナのオーラに触れた相手の2～4か所をランダムで同時に斬りつける。

発動時は『必ず剣を振らなければならない』『ラミナより【纏】【練】が強い相手には威力が減退する』『斬りつける箇所は指定できない』『生物のみ使用可能』。

・【一瞬の鎌鼬】

具現化したブロードソードに付与されている能力。

ラミナの身体能力を極限まで強化して、高速の斬撃を放つことが出来る。

強化できるのは斬撃時のみ。なので、足が速くなるわけではない。

アーデント・ホーネット  
・【執着する雀蜂】

具現化したスローイングナイフに付与されている能力。

『飛び交え』というキーワードを唱えることで起動。最後に見た対象をターゲットにし、飛翔して追尾する。

血が流れている傷を確認すると、その傷を執拗に狙う。

複数の人間が視界に入っていると、発動できない。なので、基本1対1でないと発動できない。

わぼろかすみ  
・【朧霞】

具現化した短刀に付与されている能力。

相手の視界から姿を隠すことができ、強制的に【隠】を発動して気配も消す。

熟練者が【凝】を使えば、僅かに輪郭が見えてしまう。【円】でもバレル。

声を出したり、他の武器を振るうと解ける。

ナイトライダー  
・【暗闇で踊る骸骨】

具現化した大鎌に付与されている能力。

【月の眼】状態で、かつ暗闇や影がないと発動できない。

ボロボロの黒衣を纏った骸骨の死神のような姿をしており、ラミナが指定した相手に自動で襲い掛かる。しかし、移動できるのは影の上だけなので、夜や洞窟、鬱蒼とした森、明かりがつかない部屋でしか使えない。

対処方法は簡単。

大鎌に強い光を当てると、影が維持できないので骸骨は消滅する。

【月の眼】状態でしか使用できないので、使用後は必ず壊れる。

フラジャイル・ホープ  
・【脆く儂い夢物語】

具現化したソードブレイカーに付与された能力。

斬りつけた相手の【発】を強制解除する。

相手のオーラを直接切りつける必要があるので、体内に仕込まれて

いる能力や遠距離攻撃能力は砕けない場合がある。

・【ジャ  
アマ・デ  
アギ  
ラ太陽より飛び立つ鷲】

具現化したククリ刀に付与された能力。

投擲し、一定の回転数に達すると発火する。

ブーメランのように手元へ戻ってくる。その軌道に大きく外れない程度であれば操作可能。

・【ス  
テイル  
ル・ジ  
エネラ  
ル不屈の要塞】

具現化したハルバードに付与した能力。

オーラを弾く鎧を纏う。

ラミナもオーラを外に放出できないので、【纏】【練】【周】などで鎧や武器をオーラで覆えない。

なので、鎧を展開中は新しい武器を具現化できず、素の身体能力で戦わなければならない。

相手の念による攻撃もほぼ全て無効化されるので、ゴンの【硬】もただのストレートパンチになり、キルアの電気も弾き、ヒソカのバンジーガムも張り付かない。ゲンスルーの爆破能力も効かない。具現化された武器も弾く。

ただし、防御力も実際の鎧やハルバードと変わらないので、殴られ続ければ凹んで砕ける。ハンマーや車、バズーカなどを受け止めれば、普通に砕ける。

ハルバードはオーラを弾くことは出来ないので、砕ければ鎧も消える。

鎧は一部が砕けても、再生できない。再生する場合は、能力を完全に解除しなければならない。

・【ビ  
グテッ  
ド・ナ  
ツクル意地を貫く拳】

具現化した圏に付与された能力。

ラミナの身体能力を強化する。

強化系の資質の上限を最大80%まで上げることが出来る。

制約は『武器を握っている時のみ強化できる』『効果の重複は出来ない』の2つだけなので、そこまで能力は高くならなかった。最大威力は『【硬】を覚えたばかりのゴン』と同程度。

・【墓穴を貪る蛇】  
グレイブ・ヴァイパー

具現化したウルミに付与された能力。

地面や壁を掘り進んで、地中から襲い掛かる。

最大で50mまで伸びるが、ターゲットを視認していなければならぬ。

途切れた場所は乗り越えることは出来ない。なので、ビルとビルの間は越えられない。

土やコンクリートならば時速4kmで掘り進むが、鉄などはややスピードが落ちる。

・【乱弁天】  
みだれべんてん

具現化した薙刀に付与された能力。

刃に触れている水分を操ることが出来る。

蛇のように操る場合は刃から水を切り離せない。水弾のように切り離すと、遠隔操作は出来ない。

高圧水流で切れ味を上げる事も出来る。

体を斬りつけければ血も操ることも出来るが、あくまで操れるのは刃に触れた血液だけなので、失血死するまで血を引き抜くこと出来ない。

・【死を呼び寄せる死】  
グセラウインド・ゼロ

具現化したクレイモアに付与された能力。

自爆用の奥の手。

ラミナが死ぬか、他者が壊すと大爆発する。

ラミナが殺された場合は【死後に強まる念】の効果も相まって、直径4kmほど吹き飛ばす。

ただ壊された場合は直径500m程度。

・【敬愛する兄の剛腕】

具現化したバトルアックスに付与された能力。  
ラミナ奥の手の1つ。

ウボオーギンの【超破壊拳】を参考にした能力。

オーラを武器に籠めて、強力な一撃を放つ。

『1回の使用にオーラ総量の半分を消費する』『一度使うと必ず碎けてしまう』『発動時はこの武器しか具現化できない』が制約。

・【敬愛する兄の咆哮】

具現化したガンブレードに付与された能力。

ラミナ奥の手の1つ。

ウボオーギンの【超破壊拳】の放出系版を参考にした能力。

オーラを武器に籠めて、強力な念弾を放つ。

制約は上記の3つと同じ。

・【親愛なる姉様との絆】

具現化されたグローブ型鉤爪に付与された能力。

ラミナが最も信頼している奥の手。

マチの【念糸】を参考にした能力。

指先の鉤爪部分からオーラを糸状にして伸ばすことが出来る。

伸ばせる長さ、念糸の強度はマチの念糸の半分程度。

念糸の先を小さな鉤状に出来、引っかけることが出来る。また、対象との距離が1m以内であれば念糸の切れ味も上げることが出来る。

『マチが使う能力』ではなく、『マチ』への思い入れから生まれた能力である。

そのため、制約が一部特殊。

『使用時はマチの口調になる』『両手で発動しなければならない』『他の武器は握れない』『手元から念糸を離すと、念糸は消えてしまう』が制約。

## #61 ゴウリュウ×ト×ソノコロ

ラミナ達はゾルディック家が用意したリムジンに乗って、街を抜け出していた。

ラミナはゼノと行動していた執事に傷の手当てをしてもらい、執事からシャツなどを借りて着替えていた。

「……儂らもおるんじやがの」

「女の下着姿くらいで恥ずかしがる歳でも、職業でもないやろうに」

ラミナは呆れながらシャツのボタンを留めていく。

カルトはもう見慣れているので恥ずかしがることはないし、ゴトーも仕事柄動揺を表に出すことはなく、何やらパソコンを操作していた。

そして、アマネもまた携帯でどこかに連絡を取っていた。

「先に脱出していた執事全員の無事の確認が取れました。全員、サヘルタ合衆国を経由して屋敷に戻る予定です」

「……クヘンタシテイでの情報操作もある程度は終了しています……。やはり完全にラミナ様とカルト様の情報を隠蔽するのは難しいかと……」

アマネとゴトーが報告し、それにゼノが頷く。

「まあ、あれだけ派手に暴れば仕方あるまい。警察に捕まった奴らの手下共からもラミナの情報も出るじやろうしの」

「やろなあ。まあ、どうせプロハンター共にはもう情報が流れとるやろ。ヨークシンのことも、もうバレとるしな。マフィアンコミュニティはこれでしばらく黙るやろうし、そろそろ十老頭が死んだことの混乱が出てくると思うで？」

ラミナもジャケットを羽織り、肩を軽く回しながら言う。

マフィアンコミュニティはタラチュネラファミリーの大きな貸しが出来た形になる。

パスイダ達が死んだ今、タラチュネラファミリーの戦力はガタ落ちする可能性が高い。

タラチュネラファミリーがマフィアンコミュニティに所属して



いれば、そこまで問題はなかった。しかし、今回はマファイアンコミュニティが外部のマファイアに依頼した形なので、依頼失敗とはいえない程度の補償をしなければならぬはずだ。

恐らく成功報酬は十老頭の一席だったのだろうと、ラミナは推測する。

しかし、パスイダ達を失ったタラチュネラファミリーにどこまで力が残っているのかは不明だ。しかも、今回の騒動で警察やらの捜査の手も伸びるだろうから、その対処も行わなければならない。

恐らく十老頭などになっていない場合ではない。下手したらコキシメ王国の裏の勢力図が変わる可能性がある。

タラチュネラファミリーの勢いが衰えるのを待っていたマファイアがいるはずだからだ。

そして、マファイアンコミュニティもそろそろ十老頭が死んでいることを隠しきれなくなってきているはずだ。

流星に1か月近く姿が見えなければ、疑っていたマファイア達が声を上げ始めるだろう。

「そやなあ……。ゴトー、パソコン貸して」

「はい」

ゴトーからパソコンを受け取ったラミナは、素早く操作していく。

「何してるの？」

「手頃な情報サイトや情報屋連中に、十老頭がオークション中に殺されとったことをリークした。あ、ゾルディック家の名前は出しとらん」

「何故そんなことを？」

「これでマファイアンコミュニティの中堅以下は、それ以降の十老頭の命令は直系組連中が偽って出しとったと思うやろな。流星にそれをツッコまれば、直系組連中も押さえ込みに全力を注がなあかん。しかも、新しい十老頭を決めるんも、そう簡単ちゃうやろうしな」

カルトとアマネの質問にパソコンを弄りながら答えるラミナ。

ついでにクヘンタシテイの情報も集める。

「……おく、大騒動になつとるなあ。まだタラチュネラの連中、暴れ

回つとるわ。大人しく捕まっつたらええもんを」

暴れば暴れる程、罪が重くなる。そうなればコキシメ王国に移送すらも許されなくなるだろう。

大人しく捕まって、大人しく供述しておけば祖国に移送され、すぐに王国とタラチュネラファミリーの関係で釈放される可能性は高いとラミナは思うのだが、現在進行形で逃げ回っていた。

「まあ、おかげでこっちに目が向くんは時間かかりそうやからええか。おおきに、ゴトー」

「いえ、とんでもございません」

「コキシメ王国の方は大丈夫なの？」

「そこはもうちょい時間かけて情報を集めんな。パスイダ達はあくまで実行部隊。母体にどれだけの影響が出るんかは未知数やでな」

カルトの問いに肩を竦めるラミナ。

コキシメ王国側がタラチュネラファミリーを切るならば、もはや敵ではないだろう。しかし、まだ関係が続けるならば用心すべきではある。

なので、もう少し情報を見極めなければならぬ。

「まあ、うちの車がバレとらんかったら、そのまま突っ切ればええやろ」

「そっか」

その後、小さな町でゼノ達と別れたラミナとカルトは、翌日到着したクロロと合流する。

「……おい、クロロ」

「なんだ？」

「この冷蔵庫に入つとる見た目が気持ち悪い魚や果物はなんや？」

「ああ、それか。店員に勧められたから、買ってみた。美味いらしいぞ？」

「やから、せめて味見かなんかしてから買えや!! 見たこともない魚や果物渡されても、調理に困るやろが!!」

「魚は揚げ物、果物はシャーベットが美味いらしいぞ？」

「メンドくさつ。どっちもメンドくさつ」

と、一悶着ありながら、再び東へと目指すのだった。

グリードアイランド内のある荒野。

ゴンとキルアは荒野の真ん中で穴を掘っていた。

シャベルと一輪車を使って、掘っては土を出し、掘っては土を出しを繰り返していた。

そして、すぐ傍にはもう1人いた。

ビスケット・クルーガー。

二つ星のプロハンターで、ゴン達同様バツテラ主催の選考会に合格した齢57歳の見た目少女な実力者である。

ビスケは最初はゴンとキルアを揶揄うつもりでいたが、2人の戦闘での動きや対応があまりにも中途半端だったことに我慢が出来なくなり、揶揄うどころかコーチを始めたのであった。

ビスケはストーンハンターであるため、宝石のような才能を持つ人物を見ると磨きたくなる性格をしているのだ。

もちろん最初はゴンとキルアは拒絶したが、直後他のプレイヤーに襲われて、そこでビスケの実力を目の当たりにしたことで教わる決意をしたのだ。

襲ってきたプレイヤーも、ゴンやキルアよりも実力者であったこと、そしてウイングの師匠であることも理由である。

こうしてゴンとキルアは新たな師を迎えて、修行を開始したのであった。

今、2人が行っているのは【周】を使い、シャベルで穴を掘りながらまっすぐ【魔法都市マサドラ】へと向かう修行である。

「そういえば、あんた達に念を教えたラミナってどんな奴なの?」

修行の休憩中にビスケが訊ねる。

ゴンとキルアは僅かに息を乱しながら、顔を見合わせる。

それにビスケは首を傾げる。

「なに? なんかないにくいことでもあるの?」

「そういうわけじゃないよ」

「ちよつと色々あつてさ。そういえば、今どうしてんのかなつてさ」  
「ふうん。で？　どんな奴なの？」

ゴンとキルアはラミナのことを話す。

出会いからハンター試験、ククルーマウンテン、天空闘技場、そしてヨークシンシティと幻影旅団のことを。

「なるほどねえ。それにしても幻影旅団とは、あんた達よく無事だったわねえ。ホント、その子に感謝しときなさいよ」

「分かつてるさ」

「けど、納得もしたわさ。あんた達がなんで中途半端なのか。あくまで基本技はともかく、応用技は簡単に指導されただけで、念での戦闘に関してはほぼ全くなってわけね」

「うん」

「まあ、四五行に【堅】。それに天空闘技場での教わり方を聞く限り、非常に丁寧で真つ当に教えてくれてるわ。戦闘も教えてもらえていれば、ここらへんのモンスターくらいなら楽勝だったでしょうね」

ビスケは納得したように頷く。

聞いただけでもラミナの実力はかなりのものだと推測できる。

（間違いなく実力と経験はプロハンターの中でも上位側に入るわね。この前のビノールトとは格が違う。しかも、聞いた感じ頭も切れる。私も元の姿じゃないと厳しいだろうね）

ビスケはそう考えながら、目の前のゴンとキルアを見る。

（旅団のことがなければ、ホントに良い師弟関係だったろうに。まあ、だからこそ深くこの2人に教えなかったのかもしれないけど）

実際ヨークシンでは敵対関係になった。

今はどうか分からないが、前のように教えてもらえらるゝとは限らない。

殺し合う可能性もある。だからこそ、その時に互いに手が鈍らないように出来る限り最低限の指導をしたのだろうと推測する。

「さあ、そろそろ再開するわよ」

「押忍！」

キルアとゴンは立ち上がって、スコープを手にとって穴へと潜って

いく。

ビスケはそれを見送りながら、(けど、最低限教えられている分、成長も早い。【堅】が30分以上維持できるのはありがたいわね。しかも、次の目標設定もすでにしてくれている)

ゴンとキルアはビスケに教わりながらも、ラミナから教わった【纏】  
【練】【堅】【凝】の修行方法だけは譲らなかつた。

【周】に関しては修行方法が思いつかず、【流】は【堅】の時間を伸ばすことに重きを置いていた。

なので、【流】に関してはビスケが教えることを伝えた。

ラミナの教え方が一般的なものであったため、ビスケが教えようとしている方法とほぼ似通っていたので、ゴンとキルアも否はなかつた。

こうして、ゴンとキルアは日々進歩を続けていたのであった。

10月下旬。

ノストラードファミリー本邸。

クラピカは未だノストラードファミリーに所属していた。

理由は『緋の眼』の所有が未だネオンであること。そして、現在ノストラードファミリーが大きく揺れているからだ。

「まだ……まだネオンの力は元に戻らないのか!？」

ライト・ノストラードが目を血走らせながら叫ぶ。

その様子にクラピカとバシヨウは小さくため息を吐く。

「……現在、原因を調査中です」

「いつまで調査をしているんだ!? もうすぐ1か月になるぞ!!」

「……お嬢様にはオーラが確認出来ていますので、念能力そのものを失ったわけではないと考えています」

「じゃあ、何故占えない!？」

「そこが問題なのです。何故か能力だけが使えなくなっている。普通ではまずありえません。なので、一番可能性が高いと考えられるのは

「……同じ念能力による攻撃です」

「攻撃!? ネオンが!？」

「相手の能力を封じるもの、と私は考えています」

「誰だ!? 誰がネオンを攻撃した!？」

ライトは更に目を血走らせて、今にもクラピカを襲いそうなほどだった。

占いでここまでのし上がってきたライトにとって、占いが無い状況はもはや耐えられない。

現在も顧客から催促の電話が何度もかかって来ている。

「それを現在調査中です。恐らくはヨークシンシティで攻撃を受けた可能性が高く、例のお嬢様を会場まで連れて行った者と考えています……。なにぶん日にちが経っていますので、調査が少し難航しています」

「くっ!! あの時か……!! くそお!! 何としても見つけ出せ!! いない!!」

「はい」

クラピカ達は頭を下げて、ライトの部屋を後にする。

そして、自分達の待機部屋まで戻ると、バショウが大きくため息を吐いた。

「はあく……簡単に言ってくれませ……」

「仕方ないだろう。唯一の商品を失ったのだからな」

他の収入源はネオンの占いに比べれば、ないに等しかった。

そして、顧客もネオンの占い以外に興味はない。

なので、このままではノストラードファミリーは衰退するのは確かだった。

「あの子の能力もそうだけど……。十老頭が全員死んだことはいつ伝えるの?」

少し前に十老頭が全員死亡していたことがマフィアンコミュニティに所属している組全てに知らされた。

そのため、今は新しい十老頭になろうとマフィアンコミュニティ内部はドロドロ状態である。

「……今の状態では伝えたとところで、あまり意味はないだろう。今まで何をやるにしても、占いに頼ってきていたからな」

「それもそうだな。けど現実問題、あの嬢ちゃんの能力を封じてる奴なんて、どうやって探すんだ？ さつきは怪しい奴がいるたあ言ってたが、そいつが犯人かどうかなんて確証はねえんだろ？」

「確証はないが……確信はある」

「は？ マジかよ？」

「……まさか……!？」

センリツは目を見開く。

クラピカは眉間に皺を寄せながら、小さく頷く。

「幻影旅団だ」

「……本気で言ってるのか？」

バシヨウは顔を鋭くして、クラピカを睨みつけるように見る。

クラピカやセンリツはもちろん、バシヨウにとっても旅団の話題は非常にデリケートなものになっていた。

仲間の半分以上が旅団に殺されたのだから、当然ではある。

特に最後に殺されたスクワラに関しては、ネオンのお付きだったエリザという恋人がいたのだから、尚更胸糞悪かった。

「旅団のリーダーと……ラミナが、ネオンに占ってもらったようなことを話していた。それが出来たタイミングは一度しかない」

「空港から逃げ出した時……。気絶させた時に何かしたってわけね」

「確かに……辻褄は合うか……。ってこたあ、どうにかすんには旅団のリーダーを見つけねえといけねえのかよ……」

「……」

バシヨウの言葉にクラピカとセンリツもただただ黙り込むしかなかった。

ちなみにバシヨウにも旅団との間に起こったことは説明していた。もちろん大まかにはあるが。

しかし、クロロに「律する小指の鎖」を刺して、念の使用と団員との接触を禁じたことは話している。

「問題は見つけることが出来たとしても……」

「ああ。能力を解くためには、私の能力を先に解かなければならない」  
「……流石にそれは勘弁願いてえな。せつかくお前らが命がけで封じたのによ」

「それに正直なところ、あの子にとってはこのままの方が幸せになれるかもしれないしね」

「見つけるにしても、まずはそれまで組を維持する収入源が必要だ。今の状況で我々が手っ取り早く出来ると言えば……」

「ま、用心棒だろうな」

「後は賭博だな。この2つはこの国では合法だ。まずはこの2つの事業を確立する。それと並行して情報収集を行っていく」

「果てしねえなあ」

「ボスはそれを認めるかしら?」

「あの状態ではまともな判断は出来ないのは、誰が見ても分かるだろう。だったら、無視してでも行わなければ収入以前に不信感で組が空中分解する。そうなれば、探すどころじゃない」

「そうだな。他の組の連中が、今までの憂さ晴らしに仕掛けてきたら面倒だしな」

「ああ。十老頭がいない今、マファイアンコミュニティの繋がりがなくて全く信用できん。ならば、まずはこの国での立ち位置を確立することを最優先にすべきだ。用心棒の方はバシヨウとリンセンに頼みたいのだが……」

「構わねえぜ。流石にこの状況で一抜け出来る程、薄情になれねえしな」

「ふっ……助かる」

クラピカはバシヨウの言葉に、ホツとして小さく笑みを浮かべる。

もはや念を使える者はクラピカ、センリツ、バシヨウ、リンセンのたった4人。

全員がプロハンターであることはある意味幸いでもあるが、逆に言えばノストラードファミリーに固執する理由もないのだ。

だから、ここでバシヨウ達が「組を離れる」と言っても、止めることは出来ない。



「センリツはボスとお嬢様の警護を頼む。特にボスが荒れ始めたら、音楽で宥めてほしい」

「努力してみるわ」

「で、クラピカが賭博か？」

「ああ。それと旅団の追跡も行う」

「見つけられんのか？」

「旅団は難しいだろうが、ラミナの方を調べればある程度情報が見つかる可能性はある」

クラピカはそう言いながら、部屋に設置されているパソコンの前に座る。

そして、ハンターサイトを開く。

「そのラミナって奴は旅団と一緒にいるのか？」

「リーダーに刺した鎖が外されれば、私はそれを感じることが出来る。今の所、それを感じてはいない。だから、別れ際の言葉からラミナはまだリーダーと共にいるはずだ」

「まあ、除念師なんて簡単に見つからねえよな」

バシヨウとセンリツもクラピカの横からパソコンを覗き込む。

クラピカはラミナの項目を開く。そして、すぐに目を見開く。

「……っ!! A級首に指定されている……!!?」

「はあ？」

「懸賞金は……10億ジュエニー……」

「何かあったのかしら？ ヨークシンで1億まで上がったのに、一月でその10倍だなんて……」

「………これだ。1週間ほど前、バルトア共和国クヘンタシティで殺人騒動を起こしている……」

「それで10億まで上がるか？」

「相手はクヘンタシティに本拠地を置くマファイア、グスヌシファミリー。そして……コキシメ王国を裏で牛耳る一大マファイア、タラチュネラファミリーだ」

「!?!」

バシヨウとセンリツはタラチュネラファミリーの名前に目を見開

く。

流石に2人もノストロードファミリーにいれば、世界のマフィアの情報など嫌でも耳に入る。

そして、タラチュネラファミリ―は広く名が知られたマフィアなのだから、マフィア社会にいれば知らない方が難しい。

それに今、コキシメ王国の裏社会情勢はちよつとした話題である。

「グスヌシファミリ―はボスとその側近が全滅。そして、タラチュネラファミリ―はボスの愛人の娘で実働部隊を率いていたパスイダ・タラチュネラ、通称【アラクネー】とその幹部に部下数十名が殺されたようだ……」

「おいおい……マジかよ……」

「けど、何故タラチュネラファミリ―の実働部隊がそんなところに？」  
「……恐らくはマフィアンコミュニティから依頼でもされたのだろう。マフィアンコミュニティはラミナに引つ掻き回されたからな」  
「それで返り討ち、か……。だから、コキシメ王国は荒れてんのか」

現在、コキシメ王国ではタラチュネラファミリ―と他のマフィア同士での権力闘争が勃発中なのだ。

王族はそれに不介入を貫いており、勝ち残ったマフィアと繋がりを持つつもりのようなのだ。しかし、タラチュネラファミリ―に対するバルトア共和国の警察の捜査はしっかりと妨害しており、移送されたタラチュネラファミリ―の構成員達はすぐに釈放していた。

現状はやはりタラチュネラファミリ―がやや優勢らしい。

パスイダ達が殺されたのは痛手だったが、ボスやパスイダは【アラクネー】が死んだ時の対策はしっかりと準備していた。

他にも念を使えるプロハンターや傭兵を雇っており、パスイダはしっかりと後継者を育て上げていた。しかし、【百蜘蛛夜行】や【我らはお嬢の手足なり】のような能力ではないので、やはり今までのような情報収集力や殲滅力は失っている。

その埋め合わせが間に合っておらず、そこを他のマフィアに突かれている状況である。

「それでも、ここまで上がるモノかしら？」

「そうだな……。ん？ ……なっ!？」

クラピカはセンリツの言葉に眉を顰めながらも、情報を読み進めていき、更に目を見開く。

「今度は何だよ?」

「ラミナの傍にゾルデイツク家の五男と執事の姿が確認されている……」

「ゾルデイツク家だとお!? あの伝説の暗殺一家のか?」

「……そうか。ラミナはゾルデイツク家と婚約関係にあったな。それでか……」

「は? 婚約?」

「ああ。ラミナはゾルデイツク家の三男と婚約している。それでマフィアンコミュニティから、仕事を受けられなくなった今、ゾルデイツク家から仕事を貰っているんだろう……。幻影旅団とゾルデイツク家の両方と関わりがあるならば、この懸賞金の額にも納得出来る」

「最悪の盗賊集団と伝説の暗殺一家とかよ……」

バシヨウは頬が引きつるが止められなかった。

誰が考えても最悪の組み合わせである。

「こりやあよ……。近づくの無理じゃねえか?」

「……そうね」

(……ヨークシンで出てきたのはキルアがいたから。この場合では、ラミナの味方をする可能性が高いか……)

クラピカもリスクが高すぎるといふ結論に達する。

クラピカはため息を吐き、

「……お嬢様の能力に関しては、引き続き情報収集に留める。……占いについては、もう取り戻せないものと考えて動く」

「だな」

「分かったわ」

クラピカの言葉に頷くセンリツとバシヨウ。

クラピカは立ち上がって、

(……今は仲間の眼を取り戻す体制を整えることに集中すべきだ)

そう決心して、クラピカは動き出すのであった。

同時期。

とある場所にて。

マチ達、旅団はヨークシンから本拠地に戻っていた。

「シャルの奴、まだ調べものしてるの？」

「ああ。流石に島の特定は簡単じゃねえってことだろ」

シャルナークはグリードアイランドから戻ってから、ずっと調べものをしていた。

といつても、グリードアイランドを行ったり来たりしており、石や植物の葉を持ち帰って調べている。

マチやパクノダ、ボノレノフ、フランクリンは本拠地でのんびりとしていた。

シズクとコルトピはゲーム攻略には興味はなく、占いからも解放されたのでシャルナークの調べものが終わるまでのんびりしていた。

フィнкクスとフェイタンは未だゲーム内で遊んでおり、ノブナガは近くの街までふらりと出かけている。

ヨークシンから戻ってから、やはりクロロとラミナのことが気になり、あまり他の仕事に動く気にならなかった。

ラミナから連絡があれば、すぐに動けるようにしたい気持ちがあるからだ。

「ラミナ達は今どうしてるの？」

「のんびり東を目指してるみたいだよ」

パクノダがマチに訊ね、マチは肩を竦めて答える。

それにフランクリンは腕を組んで、

「まあ、もう占いは頼れねえしな」

「分かってる占いでも、除念師が見つかるかどうかも分からないしな」  
ボノレノフも頷いて、缶ビールを傾ける。

パクノダは小さくため息を吐いて、

「せめて、ある程度目途が立てば、私達も余裕が出来るんだけどね

……」

「除念師なんてそんな簡単に見つからないと思うよ?」

「まあ、まだ二か月も経ってないんだ。あまりかつかしてたら、もたないぞ?」

「それにヨークシンまでは2、3年は皆バラバラで仕事してたしね」

「それもそうね」

コルトピとボノレノフ、シズクの言葉に、パクノダは笑みを浮かべる。

そこに体を伸ばしながらシャルナークが現れる。その右手には紙を持っていた。

「あゝ……!」

「おう。終わったのか?」

「いや、もうちよつと時間かかるな。今度は具体的な島の位置を推測しないと」

「ご苦労様」

「好きだねえ、あんたも」

パクノダとマチはやや呆れた表情を浮かべる。

シャルナークは肩を竦め、

「お宝の為だからな。ああ、それとラミナの事だけど。面白いことになつてるみたいだよ」

「は?」

「ラミナが?」

「なんかあつたのか?」

「気分転換がてらハンターサイトで調べたらさ、こんな情報が出たんだ」

シャルナークは持っていた紙をマチ達に配る。

中身を読んだマチ達は、

「……へえ。A級首に懸賞金10億か……」

「随分と有名になったもんだ」

マチが少し嬉しそうに笑みを浮かべ、フランクリンも感心するよう  
に言う。

そこにパクノダがカルトの情報を見つけて、

「それにゾルディック家と随分と仲良くなってるみたいね」

「婚約者だからだろ」

「それに仕事は今ゾルディック家から貰ってるって言ってたしね」

ボノレノフが揶揄うように言い、マチは肩を竦めてラミナから聞いた話を言う。

「っていうか、これ。団長は大丈夫なの？」

「今の所、団長の情報は出てない。ラミナならそこら辺の気配りは出来るだろうしね」

シズクが首を傾げながらシャルナークに訊ね、シャルナークは肩を竦める。

フランクリンはマチに顔を向けて、

「そういえば、この五男って奴。旅団に入りたがってるんだっただか？」

「らしいよ。だから、ラミナが鍛えてるってさ。ってことだから、団長もオツケー出したってことでしょ」

「なら、こいつが4番。ラミナが11番って感じか」

「それにしても……一昨日電話した時は何も言われなかったの？」

今度はパクノダがマチに訊ねる。

それにマチは少しだけ不機嫌そうに顔を歪めて、

「どっかのマファイアと殺り合っただのは聞いた。ゾルディックのガキの事もね。けど、それくらいだよ。一応何かしら目的が出来たらしいけど、下手にアタシ達が手伝おうとして、団長に鉢合わせになったらマズいからってさ。詳しくは聞いてない」

「ああ……なるほど」

「今はこの紙に書いてあるコキシメ王国を抜けたところらしいよ。コキシメ王国では寄り道せずに出っ切ったみたい」

「まあ、だろうね。タラチユネラファミリーはそれどころじゃなさそうだし、流石に俺達やゾルディック家と繋がっていることが分かった今、ラミナには手を出しにくいだろうな」

マチの言葉にシャルナークは苦笑しながら頷き、他の者達も納得の表情を浮かべる。

「じゃ、もうしばらくは待つしかないんだね」  
「そういうことね」

シズクの言葉にパクノダが同意する。

クロロの復活を今か今かと待ち焦がれる団員達なのだった。

## #62 イガイ×ナ×デアイ

サラツとコキシメ王国を通り過ぎたラミナ達は、ようやくヨルビア  
ン最東端の国【アカルル王国】に入った。

「何事もなく抜けたな」

「そやな。頑張ってくれたマフィアさんに感謝しとこか」

ラミナ達が街で停まらなかつたこともあり、タラチユネラファミ  
リーはラミナ達に気づくことはなかつた。

と言っても、今現在も敵対マフィアとの抗争が続いており、それど  
ころではなかつただろうが。

「まあ、油断は出来んけどなく。なんや懸賞金跳ね上がったし、A  
級首になつてもうたしなく」

「気にすることないんじゃないか？ クモもすでに同じだしな」

「A級首2人に、ゾルディック家の子供。アホな物好きなら手え出し  
てくるかもしれんやろ？」

「ふっ」

「次の街で買い物するの？」

「そやな。コキシメは田舎町ばつかがやつたし」

その数日後、ラミナ達は久しぶりに大きめの街に立ち寄つた。

食料を買い込み、ネットカフェで情報収集を行った時、クロロがこ  
の街の事を調べてあるところに興味を引かれていた。

「この街は骨董市や骨董屋が結構あるようだな」

「行くか？」

「……そうだな。面白いものが見つかるかもしれん」

コキシメ王国ではあまり外に出られなかつたこともあり、ラミナは  
クロロの気晴らしに付き合うことにした。

もちろんカルトも黙って後ろをついてきている。

まずは骨董市に向かつたラミナとカルトは、クロロの気が済むまで  
周囲をさりげなく警戒していた。

「どうや？ 気になる気配は見つかつたか？」

「……強そうなのが2つ。こつちを注目してる視線が3つくらい」



「惜しいなあ。要注意な気配は3つ。視線は合うとるけど、ねちっこいだけやから単純に女好きか、幼女趣味の変態ってところやな。まあ、気配の方もうちらのことに気づいとらんから、近づいてこん限り無視でええやろ」

「……」

カルトは僅かに顔を顰めて、改めて気配を探り直す。

それにラミナは苦笑して、

「ま、この2か月くらいでそこそこ成長したんちゃうか？ 後は【絶】で隠れた奴の視線を感じられれば、合格やな」

「……分かった」

やはりゾルディック家の子供だけあって、この2か月でカルトは大分成長していた。

もちろん、まだまだ幻影旅団の中の順位は変わらないが、ヨークシン時のゴンとキルアに圧勝は出来なくとも、絶対に負けることはないくらいまでにはなっている。

(まあ、あの2人は今頃もうちよい強くなつとるやろうけどな)

しかし、ゴンとキルアはカルト以上に念を使つての実戦経験はないはずだから、それでもそう簡単に負けることはないだろうとも思う。

まだ【蛇活】や【肢曲】【身体操作】などは甘い、それでも当初に比べればラミナとの組み手も続くようになってきていた。

骨董市ではあまりいい物は見つからなかったのか、今度は骨董屋が集まっている通りに移動しようとした時、ラミナが近くの露店の老人に声を掛ける。

「なあ、爺さん」

「ん？ なんだい？」

「この街の裏通りとかにも骨董屋とかつてある？」

「……ないこたあないね。ただ、かなり物騒だし、いわく付きの品を扱ってるらしいから、下手なモン買うと後で襲われたりするって噂があるな。だから、余り近づかん方がいい」

「やつぱそうやんな。氣い付けるわ。おおきに。あ、これ買うわ」

「あんがとよ」

ラミナは小さな茶器を購入して、クロロ達の元に戻る。

「や、そうやで」

「ふっ。そっちに行ってみるか」

クロロ達は骨董屋が集まっている表通りの裏通りに足を進める。通りを一本ズレただけだが、かなり薄暗く、物が散乱していた。スラムなどの雰囲気に近いものがあり、一般人には近づきがたい雰囲気を醸し出していた。

もちろん、クロロ達がそんなものに怯むことはない。

堂々と裏通りを進んでいく。

所々に人相の悪い男共が座り込んでおり、クロロ達を鋭く睨みつけていた。

これまたもちろん、クロロ達がそんなものにビビることはなく、堂々と歩いて行く。

「待ちな」

しかし、それが気に食わなかったのか、男達は立ち上がってラミナ達に声を掛けてきた。

クロロ達は足を止めて、男達に目を向ける。

男達はクロロ達の前に立ち塞がる様に移動し、更にラミナ達の背後にも路地裏から男達が現れて挟み込まれる。

「何か用か？」

「ここはおめえらみてえなガキが来るところじゃねえ。痛い目を見る前に帰りな。まあ、出すもん出したら……な」

クロロの目の前に立っている坊主の男がニヤニヤしながら言う。

それにクロロは鼻で笑い、肩を竦める。

「ああ!?! てめえ、なめて——!?!」

坊主男はそれに怒鳴りつけようとした瞬間、クロロが鋭く右アツパーを男の顎に叩き込む。

男は顎を砕かれて、大きく仰け反らせて後頭部から地面に倒れる。

「なっ!?! て、てめえ!!」

「カルト、殺すなよ」

「分かってる」

「このっ！ ふざけやがってえ!!」

「ぶっ殺してやらあ!!」

「うっさいわ」

ゴロツキ達が怒鳴りながらカルト達に殴りかかろうとした時、ラミナが無造作に前蹴りを繰り出して、目の前の男の鳩尾に叩き込む。

「ぐえ!!」

男はくの字に体を曲げて後ろに吹き飛び、嘔吐しながら地面を転がって倒れ伏す。

その隣ではカルトが他の男の脚に手刀を叩き込み、男は一回転して背中から地面に叩きつけられる。

「がっ!? あああ!? あ、足があ!!」

男の右足は折れ曲がっており、痛みに悶える。

クロロは殴りかかってきたゴロツキの顔面にカウンターパーチを叩き込んで、男の顔を軽く陥没させる。そのまま男の襟元を掴んで振り回し、近くにいた仲間に向けて投げる。

「ぎゃ!!」

「ぐえ!!」

「な、なんだよ!? お前らっぺえ!!」

慄く男の顎をラミナが蹴り上げて、男は顎が碎けて倒れる。

「今更遅いわ、阿呆」

ラミナは呆れながら、倒れた男を見下ろす。

あつという間にゴロツキ達は全滅し、3人の周囲には呻き悶えているゴロツキ達が倒れていた。

「はあ……弱すぎると逆に手加減がしづらいわ。クロロはどうや？

久しぶりに暴れたけど」

「ふむ……そうだな。まあ、この程度の連中だからな。特に問題ないさ」

「そろそうか。念使いやなければ、あんま問題なさそうやな」

ラミナは苦笑して、クロロは肩を竦めて笑う。

カルトはつまらなげに倒れている男達を見下ろしていた。

「ほれ、行くで」

「うん」

クロロ達は男達をほったらかして歩き出す。

何店か骨董屋を見て回っていると、

「ん？」

「どうした？」

ラミナはある物にふと目が止まる。

クロロはその様子に気づき、ラミナの視線の先に目を向ける。

カルトは店の外に並べられた掛け軸を眺めていた。

商品が所狭しと並べられているショーケースの奥の壁に、『それ』は立て掛けられていた。

銀色の刃に黒紫の剣身と柄を持つ両手剣。

古びてはいるが、妙な存在感を放っていた。

「あの剣か？」

「……みたいやなあ」

ラミナは店の奥で座っている眼鏡をかけた胡散臭い老店主に顔を向ける。

「なあ、店長。この剣、なんか知つとる？」

「ん？ ……ああ、それかい。かなり古い剣つてのは確かなんだがお。詳しい事は知らん」

「ふうん……。いくら？」

「そうじゃの……。200万ジエニーでどうじゃ？」

「……買うわ。布巻いて、なんか入れ物に入れてんか？」

「構わんぞ。バットケースにでも入れてやろう」

老店主が立ち上がって、ショーケースに歩み寄っていく。

その様子を見ていたラミナにクロロが声を掛ける。

「……もしかして、そうなのか？」

「うちの記憶が正しければ、な……。オーラも見えた」

「どれなんだ？」

ラミナは布に包まれていく剣を見つめたまま、頭に浮かんだ名前を口にする。

「ブリュセリア王国終焉のきつかけを作った不義の男。『湖の騎士』と呼ばれたランスロットの剣……【血の湖に浸かる無毀の剣】」

剣を収納したバットケースを肩に担いだラミナは、支払いを終えて店を出る。

「思わぬ出会いだったな」

「まだ本物か分からんけどな。まあ、オーラも他の二振りほどやないけど似通つとるし、多分当たりやろ」

「これで3本目か。何か繋がりでも出来たのかもな」

「……あんま嬉しくないなあ」

「呪いかもしれんがな」

「うっさいわ」

ラミナが呆れながら言い、クロロは苦笑する。

カルトは首を傾げるが、未だ何を買ったのか教えてもらっていない。

ラミナの買い物で、クロロも掘り出し物を見つけようとその後も色々と店を回っていく。

そして、ふとクロロがある店で目を止める。

『色物中古屋』という看板の横に、地下へと下りる階段があった。

「また直球つちゆうか……」

「胡散臭い……」

「だからこそ、面白いものがありそうだろう？」

ラミナとカルトは店名に呆れるが、クロロは足取り軽く階段を下りて行く。

それにラミナ達は大人しく付いて行き、店に入店する。

中は骨董屋以上に多種多様な品物が並べられている。

店の中にはブツブツと呟きながら棚を眺めているガリ眼鏡の男や頭に布を巻いた無精ひげを生やした男など、他にも客の姿があった。

「……これまた色んなもんがあるなあ」

古書に武器、壺や茶器、さらに人形や絵画、電化製品、ゲーム、スポーツ用品、衣服など、目を向けただけでも数えきれないほどの種類

が乱雑に並べられている。

「ま……これだけあったら、確かに掘り出しものの1、2個くらい見つけられそうやな」

横を見れば、ホルマリン漬けの心臓まで置かれている。

(……違法品も堂々と置いとるな。……あ?)

ラミナは更にその近くに置かれている仏像を見て、訝しむ。

「おい、クロロ」

「ん？」

「あれ、お前らが前に盗んだ仏像ちゃうか？」

「……そのようだな」

クロロは仏像を少し見つめて頷く。

間違いなくそれは旅団が以前盗み、売り払った物だった。

「つちゆうことは……ここは『闇市』なんか」

「闇市って、こんな店でやるものなの？」

「堂々と店をやってるからこそ、逆にバレにくいのだ。ここまで堂々と置いておけば偽物とでも思うだろう。恐らくこの店が本命で、他の闇市は囷なんだろうな」

クロロはカルトの疑問に答えながらも、周囲の品物を見渡している。

そして、クロロは気になった古書などを手に取っていると、カルトが声を上げる。

「あ」

「ん？ どした？」

「これって……」

カルトが手に取ったのは、『グリードアイランド』だった。

歩み寄ったラミナは呆れた表情を浮かべて、

「……マジかい……」

「……まあ、可能性はあったな」

クロロも苦笑するしか出来なかった。

「……で？ 買うとくか？」

「……そうだな。一応持っておこう」

「オークションで89億やったなあ……」

ラミナはカルトからグリードアイランドを受け取って、小さくため息を吐きながらレジへと向かう。

レジには胡散臭そうな眼鏡をかけたチョビ髭の男がいた。

グリードアイランドをレジに置く。

「ほお、そのゲームか。んゝ……そうだねえ……。100億でどうだい?」

「……あ?」

明らかに相手を見てから値段を決めている言い方に、ラミナは一瞬目を細めて殺気を男にだけ飛ばす。

男は一瞬で顔から血が引いて顔色が白くなり、大量の冷や汗が噴き出す。目が合った瞬間に体が金縛りにあつて目が離せなくなり、首が斬り飛ばされる光景が頭に浮かんだ。

「……」

「もう一度、聞くで? なんぼやって?」

「……ご、50億ジエニー……です……」

「……元々が58億やったな。……ま、ええやろ」

ラミナはレジに提示されている口座に金を振り込む。

男は体を震わせながら、振り込まれたのを確認して、手を震わせながらグリードアイランドを袋に入れてラミナに渡す。

「……ここで店長気取りたいんやったら、相手の力量を見極められるようになるか、あの程度の殺気くらい耐えられるようになれや」

ラミナはそう言い放って、背を向けて歩き出す。

男はようやく金縛りから解放されて、椅子に座った状態で崩れ落ちる。

そこにクロロが何気なく歩み寄って、商品をレジに置く。

「これも頼む」

「ひっ!? は、はい……」

店長はラミナと一緒に入ってきた男だということに気づき、先ほど同様大きく値下げした金額を提示した。

クロロは笑みを浮かべて代金を支払う。

「行くか」

ラミナ達は店を出て、キャンピングカーに戻ることにした。

そして、裏通りを歩いていると、

「ちよつといいか？」

背後から声を掛けられて、クロロ達は足を止めて振り返る。

そこには先ほどの店にいた客の1人である頭に布を巻いた男が両手をポケットに入れて立っていた。

「なんや？」

ラミナは飄々と訊ねながら、クロロとカルトをいつでも庇えるように備える。

ラミナは店に入った時から、ずっとこの男を最大限の警戒をしていたのだ。

だから、あの店主に軽く八つ当たりしてしまったのだ。

後3分でもあの店に滞在していれば、殺気を抑え切れない自信があった。

それほど、目の前の男は強い。

(……くそつ。隙だらけのくせに、全く攻撃が届くイメージが湧かない……！ これ以上間合いを詰めて、一瞬でも殺気漏らしたら戦闘開始やな……。クロロとカルトを逃がせる時間をどれだけ稼げるか……)

「落ち着け。お前らとやり合うつもりはねえよ」

「っ!? ……ちっ……」

男はラミナの様子を見抜いており、声を掛けてきた。

ラミナは一瞬目を見開くも、すぐに舌打ちして男を睨みつける。

「……バケモンが……。何モンや？」

「俺はジン。ハンターだ」

「……。(ジン……? どっかで……)」

「そう警戒すんなって。別に俺は賞金首ハンターじゃねえし、お前らの懸賞金にも興味ねえよ」

「……うちらのことも知っとるわけか……」

「そりやな。ヨークシンにクヘンタで、あんだけ暴れりやあ情報くらい仕入れるさ。幻影旅団団長、ゾルディック家五男、そしてその両方



と関りを持つ殺し屋リッパー。そんな連中、プロハンターがほつとくかよ」

ジンは肩を竦めて、クロロ、カルト、ラミナを指差しながら言う。それにカルトが目を細めるが、

「やめとき、カルト。お前じゃ勝てん。悪いけど、戦いになったら、うちはお前を気にかける余裕はないで」

「っ!? ……分かった」

ラミナの言葉にカルトは目を見開いて、殺気を収める。

クロロがラミナの肩を叩いて、ジンに訊ねる。

「それで……何の用なんだ?」

「そいつが背負ってるバットケースの中身を見せてほしいってだけさ。なんか妙なオーラを感じてよ」

「だ、そうだぞ?」

クロロとカルトはラミナに顔を向け、ラミナは盛大に顔を顰める。

「……見せるだけやで」

「おう、それで十分だ」

「なら……どつか個室行こか」

「それなら、俺が用意しよう。こっちが頼んだしな」

ジンが携帯を取り出して、どこかにメールを送る。

そして、ホテルの一室を確保したジンは、ラミナ達を案内する。

「ここでもいいだろ?」

「ああ」

「じゃ、早速見せてくれよ」

「……はあ」

ラミナはため息を吐いて、バットケースから布に巻かれた剣を取り出す。

そして、テーブルの上に置き、布を外して剣の姿を晒す。

「……へえ。【死後に強まる念】のオーラを纏った剣、ってところか?」

「多分な」

「……かなり強いオーラだな」

ジンはギリギリまで顔を近づけて、剣を観察する。

「少なくとも1000年は経ってるな……」

「ちよいとええか？ 確かめたいことあんねん」

「確かめたいこと？」

ジンはラミナの言葉に顔を上げ、ラミナはそれに答えずに剣の柄を握る。

直後、ラミナの頭の中に膨大な映像や声が一気に駆け抜けていく。戦争に、国王と言いつく光景、どこかの女性と逃げだす光景、そして後悔に苦しみながら自害する姿。

「ぐっ……！」

剣から手を放して、ラミナは右手で額を覆いながら軽くふらつく。クロロがすかさずラミナの体を支える。

「見えたのか？」

「……ああ。当たり前やな」

「なんだ？ お前、物の記憶でも読み取れるのか？」

「ちやうちやう。アルサー王国時代の剣は触ると、使い手の記憶が見えるんや。理由は分からん」

「へえ……。俺も触ってみてもいいか？」

「……まあ、柄やったらええで」

「サンキュ」

ジンは笑みを浮かべて、柄に触れる。

「……なるほどな。確かに本物みてえだな」

「見たことあるんか？」

「いや、前に仕事でアルサー王国時代の城や遺跡を調べたことがあつてな。同じモンが見えた」

「ほお……」

「で、お前は他の剣も持ってんのか？」

「あ？」

「さつき『アルサー王国時代の剣』って断言したじゃねえか」

「言ってたな」

「……しもた」

ラミナは目元を覆って項垂れる。

記憶を見た衝撃で、完全に気を抜いてしまっていた。

「で？ これ以外にどれ持ってんだ？」

「……」

「アルサー王の【エクスカリバー】に、モーグレットの【クラレント】だ」

「おい!？」

ラミナが言い渋っていると、面白がっていたクロロがバラす。

明かされた名前に、流石のジンも目を見開く。

「……マジで？ 持ってんの?？」

「ああ、こいつがな」

「お前なあ……!!」

クロロがまた暴露して、ラミナが額に青筋を浮かべる。

「どこにあるんだ？」

「言うかい、ド阿呆」

「だよな。じゃあさ、覚えてるだけでも剣の見た目とか見た記憶教えてくれねえか?？」

「剣の見た目はともかく、記憶は量が多すぎるわ」

「じゃあ、メアド教えとくからよ。そっちのペースでいいから、送ってくれ。もちろん報酬は出す」

「……まあ、それならええけど」

「あと、ネテロの爺に剣のこと伝えといてやるよ」

「なんでやねん」

「本物の【エクスカリバー】【クラレント】【アロンドイト】だぜ？ 剣の記憶についての情報を俺を通して公表すれば、十分シングルハンターになれる功績になる。ネテロの爺に伝えれば、先んじて星は貰えるさ。本部に行かなくてもハンター証は届くように手配もしとく」

「別にいらん。っちゅうか、なんでそこまですんねん」

「まあ、そう言うなよ。これに関してはおちよつとした打算と礼だよ」

「打算に礼？ 報酬は金で出してくれるんやろ?？」

「息子のことだよ。世話になったみてえだしな」

「息子お? ……ああ!？ お前、ゴンの親父か!？」

ラミナはようやくジンの事を思い出して、目を見開く。

カルトは首を傾げ、クロロはラミナに顔を向ける。

「あの黒髪の子供か？」

「そうそう。念を教えてくれたんだろ？ これでゴンがシングルハンターになれば、お前はダブルハンターになれる。シングルやダブルになつとけば、今よりは出来る事も増えるぜ？ 旅団の団員でも、そう簡単に手出しできなくなると思うぜ」

「ほう。それはありがたいな。ラミナ、せっかくなんだ。貰っておけ」  
「……はあ。分かった」

クロロの言葉に、ラミナはため息を吐いて頷く。

ジンからメアドを貰ったラミナは剣を丁寧に包んでバットケースに仕舞う。

「そういえば、グリードアイランド買ってたけど、なんかお目当てでもあるのか？ 正直、お前らが欲しいもんはないと思うぜ？」

「やったことあるのか？」

「製作者の1人だ」

「は？」

「ほう」

グリードアイランドの製作者という言葉に、ラミナとカルトは目を見開き、クロロも流石に小さく驚きを露わにする。

「じゃあ、1つ聞いていいか？」

「攻略に関わらねえことならな」

「そのゲームの中には除念が出来るアイテムのようなものはあるか？」

「除念？ いや、そんなもんはない。治癒だったり、若返りの薬とかはあるけどな。流石に他者の念能力に直接関わるものは無理だ」

「そうか……」

「お前がオーラを出さないことに関係してんのか？」

「直球だな」

「別にお前をどうこうする気はないからな。ハンターなんてしてれば盗賊みたいなこともするし、殺しもする。敵対しなけりや別にお前ら

がどこでどうしようが構わねえよ」

「なるほどな」

(……確かにとどころどころでゴンを感じさせるなあ。……実力も地位もあるゴンって厄介でしかないな)

動きが読めないし、止められない。しかも間違いなくラミナより場数は踏んでいる。

今は戦う気はないと言っているが、もし敵対する気になったら勝ち目は低い。

旅団全員揃っていても五分五分なのではないかと、ラミナは考えてしまう。

「最後に……グリッドアイランドがある島は、ここから東か？」

「……さあ、どうだかな」

ジンはとぼけるが、その顔には笑みが浮かんでいる。

それにクロロとラミナは、合っていると理解する。

「では、俺達はこれで失礼する」

「ああ、ありがとよ。楽しかったぜ。つと、そうだ。ゴンには俺の事は黙っといてくれ」

「ん？　なんでや？」

「俺を探してんだろ？　なら、人伝いじゃなくて、自分で痕跡を見つけて貰わねえとな」

「……まあ、ええけど。こっちもうちらのこと黙っといて欲しいでな」

「交渉成立だな。じゃ、例の記憶の方、頼むぜ」

「へいへい。ほなな」

ラミナは肩を竦めて、クロロ達と共に部屋を後にする。

キャンピングカーに戻る間、追跡されていないか、ラミナは全力で警戒していた。

そして、何事もなく、キャンピングカーに戻ると、ラミナは倒れ込むようにソファに横たわる。

「はあ~~~~……。心臓に悪いわあ……」

「運が良かったな」

「全くやで……」

「どれくらい強かったの？」

「シルバとゼノを同時に相手にして、互角以上に戦えるやろな」  
「!!」

カルトはジンの評価を聞いて、目を見開く。

カルトでは実力差が大きすぎて、見極められなかったのだ。

「まあ……色々と収穫があったんが救いやなあ」

「だな」

「結局グリードアイランドはどうするの？」

「やるで。うちとお前でな」

ラミナは起き上がって、カルトに告げる。

「場所は合つとったから、占いは間違いなくグリードアイランドの事を示しとる。んで、ゲームのアイテムでは除念は出来人以上、ゲーム内で探すんはプレイヤーで参加しとるであろう除念師その人やな」

「なんでそんなこと言い切れるの？」

「占いでは『待ち人』と出ていたからな」

「……なるほど」

「アイテムではない以上、ゲームに関係する人物ではないということだ。しかし、グリードアイランドが目的地。ならば、残るはゲームに参加するプレイヤーということだな」

クロロの説明にカルトは納得する。

「正直、今カゴツシの家に帰るんは嫌な予感しかせんから、どっかの街でホテルかアパートでも借りよか。クロロだけにするんは不安やけど、うちとカルトよりはバレにくいやろうし」

「そうだな」

「体制を整えてジンからの仕事済ませたら、マチ姉達にも連絡して動こか」

「ああ。俺も剣の記憶を読みたいしな」

「……まあ、頑張るわ」

「頼んだ」

方針を決めたラミナ達は、移動を再開して準備を始めるのだった。

## #63 ゲーム×ノ×ハジマリ

12月中旬。

ラミナ達はアカルル王国南側の港町にアパートを借りていた。

先にジンへの依頼を終わらせようと、ラミナはずつとパソコンの前に陣取り、思い出せる限りの記憶を記述していた。

それが終わったのが昨日の事である。

エクスカリバー、クラレント、アロンダイトの記憶を合わせて、A4用紙3000ページを超える超大作となったのだ。

「……あのクソ……」

ラミナはベッドに倒れ込んで、両目の下に隈を作ってジンへと恨み言を呟く。

クロロはすでに酒を傾けながら、ラミナが書き上げた記憶を読み始めており、その周囲にはアルサー王伝説関係の書籍が積み重ねられている。

カルトはクロロの様子に呆れながら、羊羹を食べている。

「報酬は貰えたの?」

「……メール送った直後に指定した口座に300億振り込まれたわ」

「さっ……!?!」

「阿呆。1つの記憶に100億やぞ? むしろ安すぎるわ。多分今回の振り込みは前金や」

「……それで前金なの?」

「今はクロロが積み重ねるとる本とかに書かれとる事実との確認作業を行つとるんやろ。やから、もうしばらくして、ジンが言つとったように発表された時の反応で正確な報酬が決まるやろうな」

「……」

カルトはどれだけ報酬が膨れ上がるのか想像が出来ずに呆然とする。

ラミナはそれに苦笑して、

「まあ、しばらく先の話や。んで、明日から早速グリードアイランド始めるで」

「分かった」

「とりあえず、一度お試しで入ってみよか。シャル達が戻って来とらんやったら、うちらでもすぐに戻れるやろ」

「旅団との合流はそれからってこと？」

「いや、連絡は入れるで。向こうから来るんやったら、それでよし。来んかったら、来んかったで一度戻ればええ。まずは情報収集と除念師を探すんにどれだけ時間がかかるんかを確認して、クロロに報告するのが最優先な」

「うん」

「じゃ、今日はもう飯食って休もか」

ラミナとカルトは、明日に備えて休むことにした。

そして、クロロはそのままパソコンの画面を見つめ続けていたのだった。

翌日。

流石のクロロも資料から目を放して、ジョイステーションの準備を見つめていた。

「メモリーカードは？」

「1人1枚使い切るんやと。まあ、別に攻略が目標ちやうし、うちだけでええやろ」

「それでいいよ」

「時間の流れはもちろん現実と一緒に。やから、クロロ。流石に1, 2週間は帰れんと思うから、無茶すんなや」

「分かってるさ」

「じゃ、行くで」

「うん」

ラミナはジョイステを挟むよう両手をかざして、【練】を行う。すると、クロロとカルトの目の前から、ラミナの体が消える。

「ほお……」

「ホントに消えたね」

「確かにこれを見るだけでは、ゲーム内に消えたように感じるかもな」



「じゃ、ボクも行ってくる」

「ああ」

そして、カルトも手をかざして【練】を行い、グリードアイランドへと飛んだ。

ラミナは気づいたら、不思議な空間に立っていた。

「ほお、一瞬でか。この周りの紋様になんかあるんか？」

不思議な紋様が刻まれた壁や床を見渡す。

しかし、ここにいてもしようがないので、目の前の扉へと足を進める。

そして、扉を出て廊下を進み、奥の部屋へと入る。

部屋の中心には浮かんでいる椅子があり、頭に巨大なヘッドセットを被っている女が座っていた。

そのすぐ近くには螺旋階段があった。

「ようこそ、グリードアイランドへ。新規プレイヤーの方ですね？」

「おう」

「それでは、まずはプレイヤーネームをご登録させていただきます。どのようなお名前がよろしいですか？」

「ん？ 自由に変えられるんか？」

「はい」

「んく……いや、ラミナでええわ」

「承知しました。プレイヤーネーム『ラミナ』様で登録致します」

案内役の女性はパソコンを操作する。

「登録完了しました。では、こちらをお受け取りください」

ラミナは女性から指輪を受け取った。

「指輪？……神字か」

ラミナは指輪の内側に神字を彫られているのを見つける。

「そちらはこのゲームには欠かせないアイテムとなっております。まずはそれを指に嵌めて、『ブック』と唱えてみてください」

「……ブック」

ラミナは右手人差し指に指輪を嵌めて、唱える。

すると、指輪から一冊の本が出現する。

「ほお」

「このゲームでは入手したアイテムを全てカード化することが出来ます。これはそのカードを納める本となります。このゲームの目的は、その本を完成させることです！」

その後もラミナは説明を聞く。

指定ポケット、フリーポケット、『ゲイン』とその注意点、カード限度枚数、簡単な注意点などを聞いた。

「それではご健闘をお祈りしております。そちらの階段からどうぞ」「おおきに」

女性に示された螺旋階段を下りる。

すると、そこは広大な草原のど真ん中だった。

「おく……なあんもないなあ」

ラミナは周囲を見渡すも、人影や建物、道などは一切見えない。しかし、

(……全く視線が隠せてへんなあ……)

2方向から複数の視線を感じて呆れてしまう。

敵意を隠す事も出来ていない。これでは隠れて見ている意味はなにに等しいだろう。

(ま、逆に言えば、それでも問題ないっちゅうことか？ 何やら実力差

関係なく戦える方法がある、か……)

カルトの到着を待ちながら、推測する。

そして、地面に落ちている石を拾う。

すると、ボン！と音がして、石がカードへと変わった。

「なるほど。この島にあるもんは基本的に、何でもカードに出来るんか」

カードには『21449』『H-∞』と書かれていた。

「ん……数字がカード番号。Hがカードランクで、∞がカード化限度枚数ってどこか？ まあ、石が重要アイテムなわけないやろうから、Hが最低ランクと考えるべきか。……ゲイン」

呪文を唱えると、カードが石へと戻り、手のひらに落ちる。

今度はカード化することはなかった。

それを確認したラミナは石を捨てて、階段へと目を向ける。

丁度カルトが下りてきたところだった。

「思たより時間かかったな」

「扉が開かなかったの。1人ずつじゃないと説明聞けないみたい」

「ああ……なるほどな」

「で、どうするの？ 見てる奴らから情報聞き出す？」

「まずは街を指すか。視線がある方向に行けばあるやろ。その近くまで尾いてきたら、お話しよか」

「分かった」

ラミナとカルトは視線を感じる方向へと歩き出す。

「けど、なんでスタート地点なんて見張ってるんだろ？」

「まあ、新規プレイヤーがどんな奴か探るためか、有名プレイヤーで一時期島外に出とった奴が戻ってくるんを狙っとるんか、やろな。まあ、前者の方が可能性ありそうやけど」

「こんな簡単にバレてるのにな？」

「細かいところまでは知らん。バレても問題ないと思わせる理由があるんやろ。ゲーム言う以上、何かしらの独自の戦闘ルールがあってもおかしくないでな」

「戦闘ルール？」

「ああ。ブック」

ラミナは右手を出して、本を取り出す。

「この本にアイテムを集めるだけやったら、とつくに誰か攻略しとるやろ。けど、まだ誰も出来てへんっちゆうことは、それだけ厄介な何かがあるんやろうな。最低限の説明の中になんもないっちゆうことは、カードを使って呪文みたいなんがあると考えるべきや」

「なるほど……」

ラミナの考察にカルトは頷いて納得する。

そして、2人は森へと足を踏み入れて歩き続ける。

相変わらず視線は消えず、2人を追い続けている。

「一番近い距離、分かるか？」

「……20mくらい」

「数は？」

「……1つ。後は80m以上離れてる」

「よし、お話聞いてみよか。行ってみい」

「分かった」

カルトは目を鋭くして、ラミナの横から音もなく姿が消える。

それに視線の主は動揺する気配を感じ取ったが、ラミナは本を消してまっすぐ視線の主を指して走り出す。

視線の主は慌てて逃げようとするが、

「遅いよ」

「!?」

すでに背後にカルトが立っていた。

隠れて見張っていた男は目を見開いて固まる。

カルトは扇子を広げて振り、男の右足と左腕を斬りつける。

「ぎあ……!?!」

男は悲鳴を上げて後ろに倒れ込む。

「ひい……ブ、ブツク!!」

男は本を出して、何かをしようとしたが、男の左腕にスロージングナイフが突き刺さり、右手首を踏みつけられて骨を砕かれる。

「ぎゃあああ!?!」

「ちよ〜つと失礼するでえ。カルト、左腕押さえとけ」

「分かった」

カルトは男の左腕を踏みつけて押さえ込む。

ラミナはスロージングナイフを消して、男が出した本を開いて中を見る。

「………ほお〜、結構色んなカードがあるみたいやなあ。……お、やっぱり呪文カードがあったわ」

男のフリーポケットにあったのは、『窃盗』『盗視』『再来』『交信』『名簿』×2の計6枚。

他にはモンスターカードに動物や昆虫カード、食料のカードに金のカードまであった。

「金までカードなんかい……。まあ、ええか。さあ、兄さん。ちよつと色々聞かせてんか？　ちゃんと話してくれたら、解放したるから安心しい」

「……わ、分かった……。だから、殺さないでくれえ……。！」  
(……こんなんでよおこのゲームに挑みよつたな……)

このゲームにいる以上、念使いの筈なのだが下手したら一般人にも負けそうな気配である。

体も鈍りきっており、もはや念を使えるのかも怪しく見える。

(指定ポケットも0。……なるほど。何年経つてもクリアどころか、指定ポケットカードを1枚も集められず、ゲームから出る事すら出来なかったんか……。それで新規プレイヤーを尾行して、指定ポケットカードを手に入れた所を狙うと……)

ラミナは男の状況を理解し、そしてゲーム内の現状も何となく理解した。

(こんな連中で溢れとるんやろうな。そして、攻略出来とる連中はそれぞれグループでいがみ合つとると。限度枚数を超えたカードの取り合いも起こつとるんやろうなあ)

ラミナは小さくため息を吐いて、怯えている男を見下ろす。

「まずは……呪文カードについてやな。知つとる事全部教えてんか？」

「わ、分かった……」

「ちなみに嘘ついたら……カルト」

「うん」

ラミナに声を掛けられた瞬間、カルトは男の左手を前腕半ばから斬り落とした。

「いぎやああああ!!」

「……阿呆。せめてまずは指にせえや」

「え？」

「はあく。まあ、残り3本、どれかが飛ぶで？　けど、仏の顔も三度まで……やからなっ」

「いぎい……。あ……あが……」

「……おい、聞いたつたか？」

「ひい!? は、はい!!」

「ほな、早よ話せ」

ラミナから殺気を飛ばされて、男は痛みを一瞬忘れて返事をする。

そして、男は痛みと恐怖に耐えながら、話し始める。

呪文カードは全40種類。

相手を傷つけたり、命を奪う呪文カードはなく、あくまでカードを奪うことを目的としている。

そして、それを防ぐ呪文、監視する呪文、調べる呪文、連絡や移動をする呪文がある。

近距離呪文は使用者の半径20m以内が効果範囲。

遠距離呪文は島全体。

そして、この20mというのは『遭遇判定』にも用いられている。

攻撃呪文を受けた場合、本を出し、かつ防御呪文を所持していれば、攻撃呪文は最大15秒間待機状態となる。その間に防御呪文を使うかどうかを判断出来る。

なので、敵プレイヤーが現れた場合、最初に本を出すのが重要である。

「なるほど……。じゃあ次、金がカードになつとるんは?」

「こ、このゲームでは現金は使えない……。だから、ア、アイテムを換金するんだ……」

「まあ、ゲーム通貨は当然か。次、地図は持つとるか?」

「……ズ、ズボンのポケットに……」

「カルト」

「うん」

カルトは男のポケットを探って、巻物状の地図を取り出す。

「呪文カードが手に入る街は?」

「ま、魔法都市【マサドラ】だ……」

「地図にも載ってるよ」

「オツケー。じゃあ、最後……今の話、嘘ちやうよな?」

ラミナは男の右腕に乗せた足に、更に力を籠める。

「ひいつ!? う、嘘じゃねえ!! し、信じてくれ! 信じてください!!」

男は涙と鼻水を流して叫ぶ。

ラミナはもうこれ以上は大した情報は無さそうだと判断する。

「ブツク」

ラミナは本を出して、呪文カードと食料カード、金カードを奪う。

それを男は絶望の表情を浮かべて見つめるも、もはや何も出来なかった。

本を消したラミナは、男の右手から足を退ける。

そして、右手にブロードソードを具現化する。

「……右手は折れて左手も斬り落とされて、ゲームの外に出る事も出来へん。体も念も鈍って攻略も無理。もうどうしようもないやろ?」

「……え?」

「さいなら」

ラミナは男の背後に回り込みながらブロードソードを振り、男の首を斬り落とす。

男の本は消えて、更に体も輝いたかと思つた直後、消滅する。

「消えた?」

「多分、ゲームを始めた場所に戻ったんやろ。死体の後始末せんでええんは楽やな」

「どうする? マサドラに行くの?」

「まあ、そこが一番人が多そうやしな」

というこどで、ラミナ達はマサドラを目指すことに決めて歩き始める。

周囲の気配は更に遠くなり、視線もかなり減った。

今の拷問を見て、雑魚連中は逃げ出したようだった。

感じる気配は位置を悟らせないので、こっちはそれなりの実力者のようだった。

「ふむ……。残った連中は新参狩りの奴らかもな」

「なんでそんなことするの?」

「そらあ、これ以上邪魔者に来て欲しないからやろ。多分、指定ポケッ

トのほとんどはもう限度枚数超えとるんやろな」

すでにゲットしてる者から奪うのも難しいのだろう。

呪文カードにも限度枚数がある。それすらも回り切らないほどにプレイヤーが蔓延っているのだ。

「このゲームはセーブデータを気にせんかったら、何人でも入ってこられるでな。遊び半分が入って、想像以上に過酷で出るに連れなくなった未熟モンが多いんやろ」

「出る手段が限られてるってこと？」

「それもあるやろうけど、モンスターとかに殺されるんとかやうか？ さっきの奴とか、一番強かった時でも今のクロロに負けそうやったし」

ラミナは地図を広げて、街の位置を確認する。

それぞれの街の距離は、60km以上は離れていそうだった。

「移動しながらモンスターと戦うとなると、さっきの奴じゃ厳しいかもしれないなあ。途中で宿みたいなんがあればええけど、他のプレイヤーがおつたらと思うと泊まりにくいんやろうな」

「ふうん」

「まあ、モンスターがどれくらいか知らんけど」

ラミナは肩を竦めて、歩き続ける。

カルトはそれに続きながら、周囲の気配を探り続ける。

「ところで、カルト。お前、さっきの拷問」

「？」

「いきなり手首落とすなや。脅しはあくまで脅し。『これからどれだけ、どんな目に遭うのか？』つちゆう恐怖を植え付けるためのもんやぞ。理想は爪を剥ぐ。次点に指を折る。最悪で指を斬り落とす。最初に手を斬り落とすは論外や。あいつはそれでも良かったけど、少しでも修羅場経験しとる奴やったら、耐える覚悟決めさせる可能性が高いで」

「……」

カルトは扇子を口元に当てて、考え込む。

その後は特に何事もなく、移動する。



そして、森を通り抜けると岩石地帯が広がっていた。

「おっ……また大きく変わりよったな」

「後ろの気配も消えたね」

「まあ、隠れる場所が少なあなるしな。まあ、他にも理由がありそうやけど」

そう言いながら、2人は岩石地帯に下り立った直後、

目の前に一つ目の巨人の集団が現れた。

「おお」

「大きい……！」

一つ目巨人が棍棒を振り上げて突っ込んでくる。

ラミナはスローイングナイフを具現化する。

「どこ狙うんや？」

「目」

「理由」

「そこだけオーラが揺らいでる」

「正解」

カルトは紙手裏剣を、ラミナはスローイングナイフを、一つ目巨人達の眼玉を突き刺す。

一つ目巨人の群れが一瞬でカードに変わる。

ラミナはカードを拾い上げる。

「今のでGランクか……。こりゃあ移動も命がけの奴も多いやろな」

「ボク達でも直撃すればマズかったかもね」

「かった、やなくてマズイ。うちらは強化系攻撃は苦手。あの巨体には効果はほぼないやろうな。デカいっちゆうんはそれだけ頑丈や。岩や鉄の方がまだ砕けやすい。やのに、人の体みたいに肉と骨……柔らかさと硬さの両方を持つとる方が厄介やわな」

筋肉で衝撃が少なからず減退し、威力が下がる。

あの巨体を支えるだけの筋肉と骨だ。普通の人間と同じダメージだと思う方が無茶である。

「氣い抜けんあ、こっ。【凝】怠るなや」

「分かってる」

その後も巨大蜥蜴や高速で動く毛玉、紅白の泡を出す馬などが現れるが、見事に撃破していく2人。

それでもランクが最高でCまでであること。さらに撃破するには四大行や【凝】を的確に使っていかねばならないことに、ラミナは改めてクリア者が今まで出ず、ゲーム内で数年閉じこもっている者達が続出していることに納得した。

「こりや挫折する連中多いわけやな。遊び感覚で来るんやったら、今のカルトレベルの実力がないと厳しいわ」

「……9月くらいのボクだったら？」

「死にはせんやろうけど、何匹かは苦労するんちやうか？　うちやったら、ここで修行……レベルアップさせとるわ」

「……」

「ハンター専用ゲームつちゆうだけはある。このゲームをクリア直前まで行けば、間違いなく身体能力に四大行とその応用技、そしてハンターとして必要な考え方に動き方とかに関してはかなり鍛えられるでな」

「……ってことは、このゲームは……」

『プロハンターを育て上げるための箱庭』、やな。多分、指定ポケットはうちらだけじゃクリア出来ん条件のもんがあると思うで？　例えば一定数以上の人とチームを組んだり、期間限定とか、限度枚数を考えたら他プレイヤーとのトレード交渉に、強奪。良くも悪くもハンターとして活動するなら、求められるもんやな」

「なるほど……」

「そこにバツテラつちゆう大富豪が賞金なんぞ懸けたから、ややこしい事になつとるんやろな。まあ、そのおかげで今この島は『念使いの宝庫』とも言える。……それとも『牧場』つちゆうた方がええかもしれんけど」

「確かに一か所に念使いが大量に集まってる場所なんて、ここだけかもね」

「しかも、ここは治外法権地帯とも言える。うちらみたいなアウトローな連中や、表立って動きたくない奴にとっては隠れ家に持ってこ

「いやな」

「人を殺しても死体は残らないし、金にも困りにくいもんね」

「まあ、その分実力はいるけどな」

駆け足で岩石地帯を移動しながら話す2人。

2人は夜通し移動を続けた。

途中で無人の村を見つけたので、そこで休むことにし、奪った食料をカードから戻して食べる。

「後、半分くらいやな。明日の朝に着くようにしよか。物価も知りた  
いし、集めたモンスターカードを換金できるんかも知りたいしな」

「宿とかあるのかな？」

「あるんちゃうか？ 泊まれる部屋の数があるかどうかは知らんけど」

方針を決めながら、ラミナとカルトはグリードアイランドで初めての夜を過ごすのであった。

## #64 カリ×ト×ゴウリユウ

ラミナとカルトは翌朝には魔法都市「マサドラ」に到着していた。  
「さて、まずは情報収集やな」

「何を調べるの？」

「呪文カードを売つとる店とかやな。後は宿とか飯屋に、島を出る方法も聞かんとなあ」

そう言つてラミナとカルトは街を歩き回つて、カードショップを見つけた。

中に入って店員に声を掛けると、

「1パック3枚入りで10000ジェニーだけど……。あいにく今品切れなの。ごめんなさいね」

と、言われてしまった。

「品切れつてことは……」

「やっぱ限度枚数を超えるほど、プレイヤーがおるつちゆうことやな。これで呪文カードでの脱出はほぼ不可能つちゆうわけや」

恐らくは攻略組のプレイヤー達が買い占めているのだろうとラミナは推測する。

脱出したいだけのプレイヤーならば、すぐに使っているはずだからだ。なので、普通ならば1パックも買えない状況というのはありえないだろう。

ということとは、攻略組が独占している可能性が非常に高い。

「まあ、他にも脱出方法はあるやろ」

「でも、それならなんで他の人達もそれを使わないの？」

「そら、そつちも面倒な手段が必要なんやろ。金か実力か、それとも両方は知らんけどな」

「数百万ジェニーか、あのモンスター達を倒せるくらいじゃないと厳しいってこと？」

「そう考えるのが妥当やろ。Cランクのモンスターはともかく、他のモンスターは倒せんと厳しいと言わざるを得ん。移動もまともに出らんやろうからな。せやから、ゲーム攻略そのものを諦める奴も出始



「……一番近い奴だけ捕まえよか。他のは流石に遠いわ」  
「分かった」

カルトが頷いた直後。2人揃って。音もなくその場から姿を消す。突然ラミナ達の姿を見失ったことに、監視をしていた坊主の男は目を見開く。

嫌な予感がして、慌ててその場を離れようとしたが、両足にスローイングナイフが突き刺さって転んでしまう。

「があ!？」

「ブック。ゲイン」

ラミナは素早く本を取り出して、更に先ほど購入しておいたロープを物体化する。

そして、男の両腕を素早く縛り付けて、本を操作させないようにする。

「さあて、ちょっとお話しよか」

「ぐっ……!」

坊主男を座らせて、ラミナが正面に立ち、カルトが背後に立つ。

ラミナは右手にベンズナイフを具現化して、坊主男と目線を合わせるようにしゃがむ。

「逃げようとすなや? その時は殺すでな」

「……」

「さて、まずはお前の本出してもらおか」

「……大したカードは入ってね——」

「カルト、右人差し指の爪剥がせ」

「うん」

「!? ぎい!!」

坊主男が出し渋った瞬間、ラミナはカルトに躊躇いなく指示を出し、カルトは戸惑いなく実行する。

直後。坊主男の右手に激痛が走り、痛みに呻く。

「もう一度言うで? 本を出せ」

「だ、だから大し——」

「左手の指1本、砕け」

「じゃあ……(´▽｀)」

坊主男はまだ抵抗しようとするが、ラミナが再び指示を出し、カルトは樂しげに指を選んで、坊主男の中指の第2関節を扇子で砕く。

「っ!? があ……!」

「とつとと出せ」

「わ、分かった……。ブック」

一切感情の籠らぬ声でラミナは告げ、坊主男は観念して本を出す。カルトは目の前に現れた本をラミナに渡し、ラミナは本を開く。

「……指定ポケットにもカードあるやないか。呪文カードもある。嘘つきよってからに。カルト、左親指切り落とせ」

「っ!」

「うん♪」

「ぎゃあああ!!」

再び躊躇なく指を切り落とされて、悲鳴を上げる坊主男。

ラミナは本を見つめたまま、

「命令に逆らったり、嘘ついたら痛い目に遭うでえ。指輪しとる指は切り落とせんけど、爪剥ぐんと骨砕くんは出来るでな」

「っ……!」

坊主男は目を見開いて、ラミナの顔を見る。

そのラミナの顔は無表情で、瞳にすらも感情を映していなかった。

「さあて……あんたは何本、指残るんやろなあ?」

ゾクリと男の背筋に怖気が走る。

「呪文カードは『同行』『防壁』『磁力』『複製』『贋作』『暗幕』『密着』『窃盗』か……。んで? なんでうちらを尾けて来たんや?」

「……お前達のこととはスタート地点の時から見ていた。前の男を拷問した手際を見て、お前達はいずれ脅威になると判断した。だから、呪文カードが少ない今のうちに『密着』を仕掛けようと思ったんだ」

「っちゆうことは……少し離れたところからこつちを見とる連中はお前の仲間か」

「いや、違う」

坊主男は即座に否定したが、直後ラミナの右腕がブレて男の左耳が

斬り飛ばされる。

「!?」

「!!? がああああ!!」

カルトは目を見開き、男は一瞬何が起こったのか理解出来ず、左側頭部に熱と激痛が走って悲鳴を上げて蹲る。

ラミナはベンズナイフに付いた血を振り払いながら、

「嘘つくな言うたやろ。否定するんが早すぎるわ」

もし仲間でないのであれば、何者かを考えてしまうので絶対に一瞬答えるのに間が出来る。

逆に即座に否定したということは、あらかじめ答えを用意していたことに他ならない。それはつまり、仲間がいるということである。

ラミナは今までの経験から、そう判断していた。

「安心しい。右耳は残しといたる。話がし難くなるでな」

ラミナは坊主男のカードを自分の本に移動させながら言う。

しかし、坊主男は冷や汗を流し、恐怖と痛みで体の震えが止まらなかつた。

「そういえば……お前の指輪をうちが着けたらどうなるんか知つとるか?」

「そ、その場合は、最後に嵌めた指輪のデータに上書きされるらしい……」

「ふうん。そう上手くはいかんか。じゃあ、次。港の通行チケットについてやけど、なんか知つとるか?」

「……しよ、所長の無理難題は答えても意味はないってことくらいしか知らねえ。本当だ!!」

「……まあ、ええか。で、最後の質問や。……お前、除念師に心当たりあるか?」

「じよ、除念師? い、いや、ない。このゲーム内じゃ念での戦闘は、あくまで最終手段みたいな暗黙の了解になってる……。ただし、【ボマー】って呼ばれてる未だに正体不明のヤバイプレイヤーキラーもいる。ほとんどの連中は呪文カードや指定カードの独占で攻めてる。あ、後……う、噂じゃあ、どっかの70人くらいの集団が呪文カード



を独占して一気に指定ポケットカードを集めきるつもりらしい。い、今はそいつらがゲーム内で一番多い集団だ。そ、そいつらの中にならいるかもしれない。ただ……アジトがどこにあるのかは知らない……！」

「なるほど。なんだかんだで佳境には入ってきとるんか。で、お前らはどこのチームにも入れてもらえんかったから、初心者プレイヤーを狙ったと」

「お、俺達は報奨500億をこれ以上分配で減らしたくなかったただけだ……！」

「ああ、お前らもバッテラ組なんか……。ま、もう諦めときい。もうお前は、ここでゲームオーバーや」

「え？」

「カルト」

「うん」

カルトが扇子を振り、男の首を斬り飛ばす。

男は啞然とした顔のまま、頭は地面に転がっていき、体ごと消滅した。

そして、残ったのは血の跡とロープだけとなった。

「全く……やっぱこの程度の連中やと微妙な情報ばかりやな」

「ねえ、耳の次はどうする気だったの？ その次は？」

「ん？ ……まあ、手か足の指。後は……ん……片目を刺す、上の前歯を全部折る、鼻を削ぐ、腕か脚の骨を砕く……のどれかやろなあ」

「なんで目や耳は片方なの？」

「そらあ視覚や聴覚が無くなると話し辛いからに決まっとるやろ」

「でも、五感のどれかが無くなった方が怖がらない？」

「その前に『目が見えなくなるか、耳が聞こえなくなる』っちゅう恐怖を与えた方がええやろ？」

「なるほど……!!」

カルトは目をキラキラさせて頷いている。

それを見たラミナは失敗を悟った。

(しもた……。さらに拷問好きを強めただけやった……)

別に拷問をするのは構わないが、時と場合を考えない傾向にあるカルトにはまだ早かったかもしれない。

ラミナは小さくため息を吐いて、話を戻す。

「さて、出る方法はともかく、除念師探しは難航しそうやな」

「話に出てた集団のところに行く?」

「居場所も知らんし、名前が分かっても探せんしなあ」

「……僕の使用ええ見つかるともかもしれない……」

「あ? お前、そんな能力持ったんか?」

「あんまり正確じゃないから、期待は出来ない。占いに近いかもしれない」

「なるほどな。まあ、まずは修行しよか。他にも獲物が来るかもしれない」

「分かった」

こうして、ラミナ達は修行を始める。

ちなみに坊主男の仲間達は、子供だと思っていたカルトが躊躇なく仲間を殺したのを見て、完全に怖気づいて呪文カードでその場から逃げ出したのであった。

そして、1週間ほどが経過して、年の暮れ。

ラミナとカルトは修行をしながら、マサドラで除念師探しをしていた。

「まあ、そう簡単にはいかんわな」

「……」

カルトは顔を顰めて、道を行き交っている人達を睨みつける。

今、2人はマサドラの呪文カードショップ近くの路地裏にいた。

カルトの様子にラミナは苦笑して、

「お前の能力は人探しメインちゃうんは分かつとるから、拗ねんてええ」

「……拗ねてない」

「むしろ、違う連中が分かつとるんやから、前進しとるやろ」

カルトが言っていた探索方法は、カルトの紙切れを対象の体に貼り

付け、カルトが持っている人形の紙に対象の会話を聞き出し、状態を確認出来ると言う能力だ。

これは本来追跡・諜報能力が主体なので、今回のように人探しにはやや不向きなのである。

「例の集団のメンバーとやらも引つかからんし、のんびり行こか」  
「……うん。そういえば……教えてもらった『交信』の使い方、試したの？」

「ああ……そっぴやあ、忘れとったわ」

少し前に再びプレイヤー狩りをしていた愚か者と『お話』して聞き出した情報があったのだ。

『交信』を使う時の裏技で、カードを消費せずにプレイヤーリストを確認出来るというものだ。

早速ラミナは本を取り出して、『交信』を窪みに嵌める。  
すると、すぐ上のモニターに大量の名前が表示される。

「おっ……結構すれ違つとるなあ………あ？」  
「どうしたの？」

カルトが首を傾げて訊ねると、ラミナは盛大に顔を顰める。

「……ゴンの名前がある……」

「え？」  
「つちゆうことはキルアもおるんか？ ……ん？ キルアはおらん  
な」

しかし、キルアの名前がないことに訝しむ。

ゴンがいるならキルアもいるはずなのだが、表示されているリストに名前はない。

（別行動しとるってことか……。まあ、それならそれで……よおないわ!!）

「うちのリストに名前が出とるってことは、ゴンのリストにもうちの  
名前出るやないか!!」

「あ」

「お前も出るで!! キルアと一緒に確認されたらアウトやないか!!」  
「え」

「ゴンとキルアがうちとカルトが一緒におることを知つとるわけなし……。絶対これが分かったら探ってくるわ」

ラミナは右手で顔を覆う。カルトもまさかのキルアとの遭遇の可能性に頬を引きつかせる。

「ラミナはカードを外して、『交信』をフリーポケットに戻す。」

「……一度クロロの所に戻るか？」

「……でも、兄さん達がここからすぐにいなくなるとは思えないけど……」

「まあ、奴らがここに来た理由はゲームクリアやろうしな……。つて、そうか……。ゴンはこのゲームがジンが作った奴やって知つとるんか」

「ああ……」

2人はジンの事を思い出して、更に頭を抱える。

流石にこのタイミングで会うのは避けたい。

ゴンはともかく、キルアが単純にゲームを楽しんでいるなんて信じるわけがない。

「……旅団と一緒にいるところだけは見つかつたらあかんなあ」

「どうするの?」

「……まあ、合流してから考えよか」

『交信』と『同行』などを止める手段はない。

ゴンが『交信』をしばらく使わないことを祈るのみである。

「そういえば、旅団はまだ来ないの?」

「流石にシャルならもう調べ上げて、ここに来ると思うんやけどな……」

すでに年の暮れだ。

流石に3か月はかかり過ぎな気がする。

「……もしかしたら、船とかじゃ近づけんのかもな」

ジンが侵入を許すようなシステムを作るとは思えない。

なので、もしかしたら船が近づくと迎撃されるようなシステムでもあるのかもしれない。

「そろそろゲームに戻つて来とると思っうんやけどなあ。まあ、一度

島を出るとフリーポケットのデータ消えてまうから、呪文カードがないやろうし。誰かから盗むまでは、そう簡単に来られへんかもなく」  
ラミナが腕を組みながら、そう言った直後、

「もう来てるよ」

と、背後から声が聞こえてきた。

ラミナとカルトは弾かれたように後ろを振り返る。

そこには腕を組み、ジト目で2人を見つめているマチがいた。

「……【絶】で忍び寄るんやめてんか？」

「氣い抜いてたアンタが悪い。で？ そっちのがゾルディック家の？」

「ああ、カルトや。そっちこそ他の連中は？」

「シャルはすぐそこ。残りは少し離れた森の方にいるよ。シャル、もういいよ」

「ああ、久しぶりだな」

マチが背後の建物の方に顔を向けて、声をかける。

そこからシャルナークが現れて、ラミナに挨拶する。

「そんなところで何しとってん？」

「ここに来るまでに奪ったカードの整理。後は除念師の情報を集めた」

「成果は？」

「流石に無理だよ。とりあえず、そっちの情報も教えてほしいし、新入りの話も聞きたいし、皆のところに行こう。『同行』を使うぞ」

「おう」

『『同行』 オン！ フィンクス！』

シャルナークが呪文カードを使用すると、ラミナとカルトは浮遊感を感じる。

一瞬空に浮かび上がったかと思うと、すぐに森に向かって勢いよく落下していく。

そして、着地したかと思うと、ラミナとカルトの目の前にはフィン

クス達幻影旅団のメンバー全員が揃っていた。

「お。来やがったか」

「なんや。全員で来たんか？」

「つたりめえだろ。団長の除念がかかってんだからよ」

ノブナガが腕を組んで、呆れた顔を浮かべて言う。

フィングスがラミナを睨みつけ、

「随分と派手に動き回ってたらしいじゃねえかよ。団長は無事なんだろうな？」

「無事やで。今頃、酒飲みながら読書でもしとるやろ」

「なら、よかったわ。それで？ 除念師探しはどうなの？」

「その前に、そっちのガキの自己紹介が先じゃねえか？ 新入りなんだろ？」

ラミナが肩を竦めて答える。それにパクノダがホツとするも、すぐに顔を引き締めて本題に入ろうとする。

それをフランクリンがカルトを指差しながら提案し、全員がカルトに視線を向ける。

カルトは怖じ気づくことはなかったが、内心はドキドキしていた。

シズクは首を傾げて、

「この子がゾルディックな」

「あんまり強そうじゃないな」

「本気で団長は入団させる気なの？」

ボノレノフとパクノダの言葉に、マチ達も頷く。

カルトは眉間に皺を寄せ、ラミナは苦笑しながらカルトの頭をポンポンと軽く叩く。

「クロロはそのつもりみたいやで。実力に関しては、まあ、まだまだ要修行やけどな。ゾルディックだけあって、そこらへんの奴らよりは将来有望やと思うで」

「ラミナが鍛えてるか？」

「今はな。まあ、これからはお前らも気が向いたら教えてたつて」

「……カルト・ゾルディック。よろしく」

「団員ナンバーは『4』な。で、うちが『11』」

「……はあ。まあ、いいけどさ……」

マチがため息を吐いて頷く。

しかし、ヨークシンでゾルディック家の面々と会ったことがあるパークノダは僅かに顔を顰めて、

「けど、その子が死んだら、またゾルディック家に何か言われなにかしら？」

「そこは当主の言質貰とるから安心しい。入団した以上、立派な仕事っちゆうことらしいで」

「なら、俺達は団長の決定に従うだけだな」

シャルナークがカルトの入団を受け入れ、他の面々も頷く。

そこにラミナがあることを思い出す。

「ああ……そういえば、こいつ。男やからな」

「「は？」」

フィングス、フェイタン、ノブナガが目を見開いて、カルトを凝視する。

カルトは僅かに眉間に皺を寄せるが、よく言われることなので何も言うことはなかった。

シャルナークやマチ達は以前ラミナの情報を見た時にカルトの顔写真も見えており、『五男』という情報から女装である可能性は高いと考えてはいた。本当に男だったとは思わなかったが。

「まあ、そこはええとして。本題の除念師探しやけど」

「見つかってなさそうだな」

「全くやな。情報は一切なし。そもそも、まだ可能性の段階から抜け出せてもないわ」

「ああん？　じゃあ、どうやって探すんだよ」

ノブナガが訝しみ、ラミナはそれに肩を竦める。

「地道に探すしかないやろな。やから、カルトの能力で探しとったんやけど、いくら何でも数が多すぎるんよなあ。ここにおるんは全員念使いやし」

「見た目じゃ能力までは分からないもんね」

「除念なんて、滅多に使う能力でもないしな」

「それにゲームを攻略するのに、除念なんて必要ないしな」

ラミナの言葉にシズク、ボノレノフ、シャルナークが納得するように頷く。

確かめるために念をかけるわけにもいかない。敵対するわけにはいかないのだから。

「じゃあ、どうするんだよ?」

フィックスがしかめっ面で腕を組む。

ラミナはシャルナークと顔を合わせる。

「全員で動いたところで悪目立ちするだけや」

「だな。除念師と判別できる手段を持つてる奴も少ないし」

「それと取引材料も集めとかんとな」

「取引材料?」

「今、このゲームにおけるプレイヤーは3タイプに別れる。バッテリーに雇われた者、純粋にゲームクリアを目指す者、逃げ出したくても逃げ出せない者やな。最後の奴なら問題ないけどな。残りの2つやった場合、それなりの報酬を用意せんとあかん」

「なるほど」

コルトピが頷き、マチが首を傾げて訊ねる。

「バッテリーが出す報酬って?」

「聞き出した話やと、500億ジエニーや。まあ、金に関しては用意出来るやろ。うちやクロロも金出すし」

「ああ。ホームに保管してあるお宝を売れば、500億は楽に行くはずだ」

「じゃあ、問題はゲームクリアを目指してる場合ね……」

「そうやな。その場合、うちらも指定ポケットカード集めを手伝う必要がある」

そうなれば、かなりの時間を要することになる。

更にまだ話してはいないが、ゴンやキルアとも顔を合わせるリスクが非常に高まる。

しかも、今の状況からすれば他の攻略プレイヤー達とも争うことになる。それは非常に面倒である。



「やから、今のうちに集められるカードは集めとくべきやな」  
「つまり、2手に分かれるってことか？」

「それが無難だな。じゃあ、チーム分けをしよう」

フランクリンの言葉にラミナとシャルナークが頷き、シャルナークがチーム分けを提案する。

「カード集めはフィックス、フェイタン、俺、シズク、コルトピ、フランクリン。除念師探しはラミナ、マチ、パクノダ、ボノレノフ、ノブナガ、新入りで行こう」

「まあ、俺やフェイタンは元々ゲームクリア目指してたしな」

「ワタシは構わないね」

「俺やシズク、コルトピは人探しには向いてねえしな」

「俺とボノだつて向いてねえよ」

「2人はパクノダと新入りの護衛だな。マチとラミナはパクノダ達のサポート。新入りはまだラミナという方がいいだろうしな」

「分かった」

「へいへい。……で、もう1個あるんやけど……」

全員がラミナに顔を向ける。

ラミナは盛大に顔を顰めながら、カルトの頭に手を乗せる。

「……ゴンとキルアもここに」

「……あいつらが？」

マチの目つきが一瞬で鋭くなる。

カルトの背筋に寒気が走り、無意識に一步後ずさる。

ラミナは苦笑して、安心させるように頭を撫でる。

しかし、フィックスとフェイタンはオークション会場で見かけたことを思い出す。

「ああ……そういやあ、バッテリーになんか売り込んでたな」

「いたね」

「まあ、あいつらは純粋にゲームクリアを目指しとるだけやろうけど。うちの事を知れば、首を突っ込んでくるかもしれない」

「見かけたのか？」

「いや、『交信』のリストの中にゴンの名前が出たんや。つちゆうこと

は、向こうにもうちとカルトの名前が登録されとるはずやからな。下手したら、接触してくる可能性がある」

「なるほどな」

「カルトもおるしな。バッテラの選考でゲームを始めたら、うちとカルトが一緒におることは知らんやろうから、確認に来てもおかない。……まあ、情報料払えるんかどうかは知らんけど」

「その時は俺達もゲームクリアを目指してるとでも言ええばいい。実際俺達のチームがカード集めてるしな。そっちはパクノダがいるから、情報集めてつて言えば説得力は出る」

「キルアに関してはゾルディック当主も黙っとらんやろうから、うちと弟のカルトで対応する。やから殺さんとしてな、マチ姉。クロロの居場所はゾルディック家も知つとるから」

「……仕方ないね」

マチは顔を顰めて、そっぽを向く。

カルトは小さくため息を吐いて、ホツとする。

「じゃあ、1か月後に「ルビキュータ」で集まろう。マサドラじゃあ、奴らに会う可能性が高いからな」

シャルナークの言葉に全員が頷く。

「あつとお……呪文カードやけど、今は売り切れ中や。なんや、買い占めとる集団がおるみたいやで」

『同行』と『交信』があればいいから。どれか1枚くらいなら、奪えればいいや」

「まあな。それとうちが盗んだ指定ポケットカード渡しとくわ。N.O. 4『美肌温泉』、N.O. 11『黄金天秤』、N.O. 32『ウグイスキャンディー』、N.O. 60『失くし物宅配便』の4枚。後、『防壁』『複製』『贋作』『暗幕』『密着』『窃盗』も渡しとくわ」

「サンキュ」

ラミナはシャルナークに必要なカードを渡す。

そして、それぞれのグループに分かれる。

「さて、なんだかんだで団員12人揃ったわけだ」

「そういえば、そうだね」

「その初仕事が『団長の除念』とはね。まったく締まらないね」

「けど、これを終えれば、クモは完全復活よ。その時こそ、楽しい初仕事を団長に決めてもらいましょ」

「だね」

シャルナークの言葉にシズクが頷き、フェイタンが少し呆れ気味に言い、それにパクノダが微笑みながら答え、コルトピが頷く。

ボノレノフがカルトに目を向けて、

「新入りの指導係はラミナのままでもいいのか？」

「うちも新入りなんやけどな」

「じゃあ、サポートでマチも付ければいいだろ。姉妹で面倒見てやれよ」

「……まあ、たまになら良いけどさ」

ラミナが肩を竦めながら言い、それにフランクリンが提案して、マチは渋々と言った感じで了承する。

マチの様子にノブナガやフィックスが笑い、マチが睨みつける。

「じゃあ、行動開始だ」

遂に幻影旅団はラミナとカルトを迎え、完全復活のカウントダウンが始まったのであった。

## #65 アネ×イモウト×サンシマイ？

12月31日。

シャルナーク達と別れたラミナ達は、「ソウフラビ」という街に移動していた。

「マサドラじゃダメなのかよ？」

「今のマサドラは呪文カード売り切れで滞在するメリットがないねん。1週間おつても見つからなかったしな」

「で、なんでここなの？」

「指定ポケットの1枚でな。『一坪の海岸線』つちゆうカードがこの街にあるらしいんやけど、まだ誰もゲットできたことないらしいねん」

ノブナガとマチの質問に答えるラミナ。

「バツテラに雇われとうろくが関係なからうが、ゲームクリアを目指すならここに必ず来なあかん。やから、マサドラよりもここらへんでおる方がまだ見つけやすい……かもしれん」

「かもかよ」

「除念師がホンマにおるかどうかも分からんのやから、しゃあないやろ？」

ノブナガの言葉に顔を顰めながら言い返すラミナ。

占いに合致しているのは間違いないが、絶対ではない。

そもそも本当に『待ち人』が除念師なのかどうか、確信がないのだから。

あくまでクロロとラミナの推測と願望でしかない。

そこにマチが腕を組んで呆れながら口を開く。

「とりあえず、探さないとどうにも判断できないよ」

「そうね。で？ どう動けばいいの？」

「そうやなあ……。まずパク姉で確かめたいことがあんねん」

「私？」

「このゲームのキャラクター達からも記憶は読み取れるんかつちゆうことや。このゲームのキャラクター達は念獣に近い存在やからな」

「……なるほど。確かに念獣相手じゃ私の能力は微妙なところね」

「読み取れる場合と出来ない場合があるんだったか？」

「ええ。特に遠隔操作型は駄目ね。自立型なら少しは読み取れることはあるのだけど……」

パクノダは物の記憶を読み取れる内容は、人と比べて遥かに少ない。

その物に触った人物だったり、その物が深く関わっている事件などでピンポイントで読み取れるわけではない。

しかも、それが念獣や具現化された物になると、更に読み取れる記憶は少ない。

理由は『念獣や具現化武器は、基本的に必要時に具現化されるため』である。

一度消されると、その時の記憶が消えてしまうのだ。

更に念獣は通常の人体の構造とは全く別物なので、原記憶という概念そのものが通じない。

ノブナガは腕を組んで、街を歩く人々を見る。

「ここの連中は自立型っぽいけどなあ。ここまで数が多いとなると、微妙かも知んねえなあ」

「ええ。あまり期待はしないほうがいいかもしれないわね」

「とりあえず、試してみてんか？ 駄目なら駄目で指輪をしとる連中だけ声かけていけばええやろし」

「分かったわ」

「で、新入りの探し方はどんなものだ？」

ボノレノフがカルトを見ながら尋ねる。

カルトはラミナに顔を向け、ラミナは頷く。

カルトは袖から紙きれと人型の紙を取り出す。

「こっちの小さい紙を相手に貼り付けると、こっちの人型の紙から声が聞こえるようになる。ある程度、居場所も分かるよ」

「なるほど。それでそれっぽい会話を盗み聞きするわけか」

「うん」

「つちゆうわけで、まずはパク姉の能力がどこまで通じるかの確認やな」

「了解」

「けど、この人数で行っても目立つだけやな。ノブナガ、ボノレノフが護衛役な。うちらは少し離れた所でカルトの能力で探しとるわ」

「しゃあねえな」

「分かった」

パクノダ、ノブナガ、ボノレノフの背中を見送ったラミナ達は建物の屋上から搜索をすることにした。

「で、カルトはどれくらい同時に声を聞けるの？」

「え？」

マチの言葉にカルトは目を見開いて、マチを見上げる。

それにマチは訝しむように眉間に皺を寄せて、

「なに？」

「いや……」

「くく！ 急に名前呼ばれて驚いたんやろ」

「はあ？」

「さつきまで新入りとしか呼ばれとらんかったしな。なんだかんだでまだ団員として認められとらんとでも思っと思ったんやろ」

ラミナは苦笑しながら、カルトの心情を推測する。

それにカルトは恐る恐る頷き、マチは不貞腐れたようにそっぽを向く。

「ふん……。団長が認めて、ラミナが鍛えてるならアタシが文句を言うことはないよ」

「……」

「それに駄目ならアタシも鍛えてやればいいしね」

そう言いながらマチはニヤリと笑って、カルトを見下ろす。

カルトは一瞬背筋に寒気が走る。

「アタシの扱きはラミナみたいに甘くないけどね」

「……」

「まあ、マチ姉は『とりあえず実戦。限界を超えろ』やしな」

「いちいち理論立ててメニユ―考えるなんて面倒だろ？ とことん追い込んだ方が嫌でも強くなるもんだよ」

マチは呆れた顔を浮かべて、ラミナを見つめる。

ラミナは肩を竦めて、啞然としているカルトを見る。

「カルトはどつちがええんや?」

「……今はまだ……ラミナでいい……」

「や、そうやで」

「ふん」

「さて、カルト。そろそろ仕事しよか」

「分かった」

カルトは5枚ほど小さい紙きれを放り投げて、下の通りにいるプレイヤーと思われる人達に紙きれを貼り付ける。

そして、人型の紙人形を取り出す。

紙人形から声が聞こえ始め、周囲の会話や独り言などが入り乱れる。

カルト、ラミナ、マチは耳を傾けて、情報を聞き逃さないように注意する。

しかし、聞こえてくるのはやはり攻略の事などゲームに関することばかりだった。

「……やっぱそう簡単に能力の話なんざせんわなあ……」

「流石にこれじゃ見つからないんじゃない?」

「……これは元々追跡・諜報のための能力なの」

「それは見れば分かるよ。別にあんたを責めてるわけじゃなくて、これで探そうと思ったラミナに言ってるの」

「じゃあないやろ? これくらいしか探しようないやないか。仲間集めのフリして声を掛け回って、余計な連中ばっか釣れても邪魔なだけやないか」

「まあね」

ラミナとて、この方法が下策中の下策であることは分かっている。

しかし、それ以外に最善と言える方法がなかっただから、しようがなかったのだ。

ラミナの能力の中には人を探し当てるものは一切ない。

なので、地道に探っていくしかなかったのだ。

「うちら盗賊やのに、人や物探すん下手くそやんな」  
「全くだね」

ラミナとマチはため息を吐く。  
クロロやシャルナーク、ラミナによる入念な下調べの下で、これまで仕事を遂行してきた。

マチやノブナガ達は実行部隊として動くことが多いため、人探しなどになると一般人レベルのやり方しか出来ない。

「ここやとハンターサイトも情報屋もないでなあ……。手間と時間をかけて探し回るしかないか」

「全く……面倒だね」

「まあ、地道にやっっていくしかないでな」

その後も何人もの会話を盗み聞きしていく。

残念ながら除念師は見つからなかったが、

『おい。呪文カードを大量に集めてた連中のこと、聞いたか?』

『ああ。全員、ボマーに殺されたらしいな』

『マサドラに大量の呪文カードが納品されたからな。まず間違いないだろうぜ』

『つてことは連中の集めてた指定ポケットカードも……』

『ボマーが独り占めしたんだろうな。急にゲンスルーって奴がランキングに出てきたし』

という会話が聞こえてきた。

ラミナは腕を組んで顔を顰める。

「ふむ……。ちよつと厄介なことになったんかもしれんなあ」

「どういうこと?」

「呪文カードを集めとる連中がな、このゲームで最大のプレイヤー集団やったはずやねん。除念師がおるとしたら、そこにおるかもと考えとつたんやけど……」

「そいつらがボマーって奴に全滅させられたと……」

「これでまた除念師の手がかり0やな」

「マサドラに戻る? 呪文カードが買えるようになったんでしょ?」

カルトがラミナとマチに訊ねる。



ラミナは首を横に振って、

「いや。もう今ある分は買い占められたやろ。ここまで噂が流れとるんやからな。そこそこ呪文カードを押さえとった奴らがマサドラに行かんわけがない。多分シャルナーク達も動いとるやろ。なら、シャルナークが買いに来とる連中に声を掛けるはずや。やから、うちらはわざわざマサドラに戻るんは無駄手間になるかもしれん。やったら、それ以外の街で探しとる方がまだええと思うで？」

ラミナの言葉にマチとカルトは特に異論は唱えなかった。

2人は呪文カードに興味は一切ないからだ。

そういうことはラミナに任せておけばいい。

2人はそう考えていた。

ラミナが顎に手を当てて今後の作戦を考えていると、パクノダ達が合流してきた。

マチが顔を向けて、

「どうだった？」

パクノダは肩を竦めて、

「残念ながら収穫なし。やっぱりNPCからはまともな記憶が読み取れなかったわ」

「ま、それはしやあないでな。覚悟はしとったし」

「つていうか、ここにいる連中。本当に念使いなのか？ 雑魚ばっかじゃねえか」

「念が使えるだけの連中もおるやろうな。ゲーム感覚で来て、出れんようになつた阿呆な連中もわんさかおると思うで？」

「そうね。記憶を読んだ連中の半分は、ここから出る事をほとんど諦めてるわ。中にはこの中で結婚してる奴もいたわよ」

「結婚？ ゲームの中で？ 現実とはいえ？」

ラミナの推測をパクノダが後押しし、その内容にマチが思わず聞き直す。

パクノダも理解出来ないとばかりに右手で額を覆って頷く。

「ええ。プレイヤー同士でね。仕事にも就いてるみたいよ。まあ、そいつらはここが現実だつてことは知らないみたいだったけど」

「尚更救えんやないか」

「ホントにね」

「まあ、それはいいわ。この後はどうするの?」

「もう2日くらい、ここで情報集めよか。他の街に行くにしても、その街の情報も集めなあかんし」

「了解。ああ……そういえば、例の坊や達に会った奴もいたわよ」

「それは今はどうでもええわ。……ああ、カルトはその記憶が欲しいかもしれないけど」

「え!」

突然話を振られて目を見開くカルト。

パクノダ達はカルトに目を向ける。

「そういえば、ゾルディックの坊やはこの子のお兄さんだったわね」

「なんだ? 兄貴の顔知らねえのか?」

「知ってるよ! ……ここ数年会ってないけど……」

「家出中やしな、あいつ。ちゅうか、ホンマにキルアがゾルディック家に帰った時、会つとらんのか?」

「……会ってない。お母様に止められてたから……」

カルトは少し寂しそうにそっぽを向く。

それにラミナは憐れみの目を向けながら、慰めるように頭を撫でる。

その様子にマチ達は呆れた目で見つめ、

「随分と懐かれてるみたいね」

「ラミナは面倒見いいからね」

「ま、こいつが指導役なんだし、いいことじゃねえか」

「マチは寂しくなりそうだな」

「あ?」

「別に何も」

ボノレノフがマチを揶揄うが、マチに睨まれてすぐに黙る。

マチはふん!と鼻で息をして、ラミナ達に視線を戻す。

カルトがラミナの手を払い退けるのを見て、マチは流星街でラミナと暮らしていた頃を思い出した。

マチは小さく笑みを浮かべて、2人に声を掛ける。

「で、今日はどうするの？ もう日が暮れるよ」

「そうやなあ。宿探すか？ それとも野宿するか？」

「食事は？」

「一応マサドラで食材とかは仕入れとるで」

「じゃあ、野宿。っていうか、あんたの飯」

ラミナが料理の用意をしているのを知ったマチが即答し、パクノダが苦笑する。

ノブナガとボノレノフも久々のラミナの料理なので、文句はない。

「ここってジャポン酒とかあんのか？」

「流石にないんじゃないか？」

などと、飲む気満々な会話をしていた。

カルトもちろん文句はないので、何も言わない。

「じゃあ、ちよつと離れた森の中でも行こか」

ラミナは苦笑しながら提案し、一同はさっさと移動する。

森の中で開けた場所を見つけて、思い思いに座って料理が出来上がるのを待つことにしたマチ達。

ラミナは早速本から調理器具やら食材をゲインしていく。

「肉ある？」

「あるで」

「私はカルパッチョとかが食べたいわ」

「いけると思うで」

「俺はパスタが食いたい」

「まあ、ええけど……」

「俺はテン普拉かスシ」

「野宿で作る料理ちやうわ!!」

「ボクはシチューかハンバーグがいい」

「……あく……うん。ハンバーグは出来るわ」

相変わらぬの好き放題注文になったかんだで律義に答えるラミナ。

それを眺めながら、マチはカルトに顔を向ける。

「カルトって今、いくつなの？」

「10歳」

「あのクソ兄貴は？」

「……ミルキ兄さんのこと？」

「違う。ラミナの婚約者の方」

「……キルア兄さんは12歳になったと思うけど……」

カルトは尊敬してる兄をクソ兄貴と呼ばれて顔を顰めるが、怒らずにマチの質問に答えて行く。

マチはそれを無視して、

「ふうん……。あいつは【発】とか使えないみたいだったし、殺しも渋ってたのに、あんたは【発】を覚えてるんだね」

「ボクはキルア兄さんほどの才能はなかったから。だから、早めに念を教えて貰えたただだよ」

「けど、今ならオメエの方があの兄貴より強いんじゃないか？」

「どうなの？ ラミナ」

パクノダがラミナに訊ねる。

ラミナは調理の手を止めることなく、

「ん〜……微妙なところやろなあ」

「あ？ そうなのか？」

「キルアは身体面がカルトより圧倒的に上やからな。念の方もヨークシンで最後会った時は、キルアの方が【堅】の維持時間長かったでなあ」

「今は？」

「身体面はまだまだキルアが上やろうな。念に関してはどっこいどっこいくらいにはなったやろうけど、最終的にキルアの【発】次第やな」

「ふうん……」

「ちつ。やっぱあん時逃がさなきゃよかったぜ」

酒瓶を傾けながら、ノブナガはゴンとキルアを逃がしたことを今更ながらに悔やむ。

それをラミナやマチ達は呆れながら、『どうせクラピカのこと思い出したら、許さんとか言うくせに』と思っていた。

「まあ、キルアもそうやけど、カルトもまだ10歳やで？　うちらやってその頃は念を覚えたばかりくらいやったことを考えれば、十分過ぎるやろ。まだまだ体は成長するし、その分オーラも増えるはずや。今のペースで行けば、20歳くらいになる頃には今のうちらでもかなり手こずるくらいの実力はつくやろ。まあ、後10年もうちは面倒見る気はないけどな」

「言われてみればそうね」

「それにキルアやゴンの才能が異常なだけで、カルトもうちらに負けん才能持つとるわ。マチ姉達かて、クロロの才能と比べられても困るやろ？」

「そりやね」

「確かにな」

ラミナの言葉にマチ達は納得するように頷く。

確かにカルトはまだまだ未熟だが、歳を考えれば十分異常な実力者の範囲に入る。

成長期であることも考えれば、伸びしろはここからだと見てやるべきだろう。

(まあ、だからこそゴンとキルアの行く末なんざ想像もしたあないけどな)

あの2人が今のままで20歳になった時の実力など、ラミナやクロロはもちろん、シルバやゼノをも凌駕しているだろうことは想像に難くない。

ラミナはそう思いながら、出来た料理を続々とマチ達に出している。

「おう、久しぶりだなあ！　ラミナの飯は！」

「ヨークシンでは食べられなかったものね」

「腕は落ちてない様だな」

「そらあ、ここ最近クロロとカルトの飯作ってたしな」

「で、カルトもしっかりと餌付けされたってわけね」

「……だって美味しいし」

「ふふっ、そうね。私達も昔からよく食べさせてもらってたしね」

「団長から無茶振りはされてないのか？」

「されたに決まっつとるやろ。人が必死に商売敵と殺し合っつとる間に変な魚とか買っつて、疲れて帰っつたら『フライが美味いらしい』とかのうのうと言っつてきよっつたわ」

「ぶわっはっはっはっはっ!! 相変わらずだな、団長の奴!」

ノブナガ達が笑い、ラミナが顔を顰める。

その後はチマチマと酒のツマミのような料理を作りながら、ヨークシン後のそれぞれの活動を語り合う。

と言っつても、マチにほとんど伝えており、マチからほとんど聞いていたので、そこまで目新しい情報はなかったのだが。

それでもちよこちよこ知らない話が出て、それに笑い合うラミナ達。

それをカルトはラミナの横でお茶を飲みながら聞いていた。

カルトは初めて見る幻影旅団の姿に、内心で意外感を覚えていた。

(もう少しうちみたいなの感じなのかと思っつたけど……。全然和やかな雰囲気だ)

誰もが知っつている極悪犯罪集団。

もう少し殺伐とした雰囲気なのかと思っつたが、普通にそこらへんにいるゴロツキみたいな雰囲気です話をしてた。

それでも意識の隅っつこで周囲の警戒を怠っつていないのは、カルトはなんとか理解出来た。

もちろん仕事の時はまた違っつうのだろうと、カルトはなんとなく察しっつてはいる。

「そっつういやあ、カルト」

「なに?」

「おめえ、なんでまた旅団に入りたっつて思っつたんだ? ぶっつちやけ、俺達よりゾルディックに居る方が儲かるし、安全だぜ?」

ノブナガがカルトに訊ねる。

「確かに家に居ても問題なかっただろっつうけど、余り仕事は任せて貰えなかったと思っつう。今まで1人で仕事したっつことないし」

「だから、旅団に?」

「お爺様やお父様達からラミナと旅団の関係は聞いてたから。キルア兄さんに念を教えたり、暗殺技術も高いってのも聞いてたから、せつかくならラミナにも会えて、お父様達が警戒していた旅団も見てみたくなって」

「それで本当に来たの？」

「……まあ、他にもあったけど。ラミナに出会ってすぐに挫かれたから」

「あ？　うちが？」

「……正直、そこまで実力差があるとは思ってなかったから……」

「ああ……そっぴいあ、最初うちや旅団に勝つ気でおったな。まあ、夢物語にもほどがあったけど」

「何だ？　ラミナと戦ったのか？」

「そらあ、カルトの実力を知らなかったら鍛えようがないでな」

「で、手も足も出なかったってわけ？」

「……」

マチのトドメの言葉に、カルトはそっぽを向く。

それにノブナガとボノレノフ、ラミナが笑い、パクノダは苦笑して内心同情する。

ノブナガはツマミを口に放り込みながら、上機嫌にラミナを見ながら言う。

「それにしても、ラミナが弟子を持ったあな。成長したもんだな、おめえも」

「あのガキ共も弟子になるのか？」

ボノレノフの言葉に、マチが眉間に皺を寄せる。

それにラミナが苦笑しながら肩を叩いて宥める。

「キルアとゴンは念だけやからな。それも【流】や【硬】は見せただけで、自分達でやらせるようにしたし。カルトに比べれば、弟子とは言えんなあ。カルトは今のところ間違はなくうちの弟子やな。暗殺術や戦闘技術も教えとるし」

「じゃあ、仕上がるのも時間の問題か？」

「ん〜……こいつの体がどう成長するかやなあ。あんまり身長伸びん

のやったらフエイタンに少し任せたいし、伸びるんやったらクロロやノブナガ達にも手伝ってほしいところやな」

「俺達が？」

「男の体の動かし方は、うちじや教えきれん。今はそこまで関係ないけど、成長したらそうもいかんやろうし」

「なるほどな」

「まあ……カルトが成長しても女っぽい体つきがええっちゆうんなら、話は別やけどな」

ラミナは酒瓶を傾けながら、カルトに目を向ける。

カルトは眉間に皺を寄せながら、

「……まだ決められない。ボクがどこまで成長するのか分からないし」

「いや、お前。男がええんやったら、男らしさを目指せや」

「アルケイデスの爺みみたいな術って出来ねえのか？」

「アルケイデスって、あの？」

「そ。あいつ、流星街出身の殺し屋やねん。うちらも流星街出た時に少し世話になってな。あいつ、ゼノ爺より年上のくせに見た目がカルトと同じくらいガキやからな。あれも多分、念やと思うんやけど……」

「あれってなんかメリットあるの？」

「見た目で油断させられるっちゆうくらいいやうか？」

ラミナも試したことはないので、どこまでメリットがあるのか判断できない。

正直殺し屋稼業で『見た目が子供』にメリットの方が強いとは思えない。

しかも、どのような能力なのかもはっきりと知らないなので、他の者が出るのかどうかも分からない。

「まあ、あれはあんま参考に来れんと思うで？」

「そうね。それにカルトはそのまま成長しても女っぽさは残るんじやないかしら？」

「そう？」



「ええ。だって……どこことなくラミナやマチに似てるもの」  
パクノダは並んで座っている3人を見比べ、笑みを浮かべながら言う。

それに真ん中に座っていたラミナが、マチとカルトを交互に見比べて、首を傾げる。

「……似てるか？」

「顔というよりは雰囲気かしらね」

「ああ、確かにそうかもな」

「なんだ？ ってこたあ、三姉妹ってわけか？ ぶわっはっはっはっ

!! そりゃあいい!!」

ボノレノフとノブナガもパクノダの言葉に同意する。

それにラミナは呆れ、マチとカルトは顔を顰める。

「妹って……こいつは男だろ？ あいつの弟なんて御免だね」

「……」

「まあ、好きに思えばええわ」

ラミナはすでにクロロとの旅の間に何度も姉妹やら親子やらに間違われてきたので、もうどうでもよくなっていた。

「見た目だとラミナが長女で、マチが次女だな」

「は？」

「身長か」

「殺すよ？」

「冗談に決まってるだろ!？」

こうして、和やかな？夜を過ごしていくラミナ達。

なんだかんだでカルトは問題なく旅団に迎え入れられるのであった。

## #66 フタリ×ノ×シショウ

謹賀新年。

年も明けて、1月1日。

ラミナ達は今日も、二手に分かれて除念師探しをしていた。もちろん全く進展はなかった。

「……1回クロロの様子見て来よか……。年越しまで放置してしもたし」

「それがいいかもね。時間かかりそうだし。パク達にはアタシが伝えとくよ」

完全に放置しているクロロの様子を見に行くことにした。

それにマチも賛同し、ラミナは金のカードをマチに渡す。

そして『交信』のカードを使い、シャルナークと通信する。

『どうした?』

「そつちはどうや?」

『今、33枚。ランクが低いから交渉には使えないかもな』

「まあ、しゃあないわな。で、こつちはやっぱ中々引つかからんでな。

一度、外に出てクロロの様子でも見に行こうと思とるんやけどな。

『離脱』持つてへん?」

『いや、持つてない。だから、港で署長倒してチケットを手に入れるしかないよ』

「ああ……倒したらええんか。なら、楽勝やな。おおきに」

『外に出るとフリーポケットのカードは無くなるから。呪文カードとかは預けときなよ』

「分かつとる」

通信を終え、ラミナは『再来』のカードのみを残して、他のカードをカルトに渡す。

「なんでボク?」

「呪文カードについては、お前の方が色々知つとるやろ?」

「まあ、話は聞いてたけど……」

「別に使うこともないし大丈夫やろ。で、うちがおらん間はマチ姉達

に修行つけてもらい」

「え」

カルトは頬を引きつらせて、マチを見る。

マチは腕を組んで顔を顰めて、

「別に殺したりしないよ。『団員同士のマジ切れはご法度』。アタシ達は裏切りが確定しない限り、仲間内では殺し合いはしない」

「……」

「ま、手加減しても勝手に死んだら、それは知らないけどね」

「……」

「まあ、最初は【発】と武器無しでやらせてもらえや。それなら、そう簡単には死なんやろ」

「……ホント？」

「お前が気い抜かんかったら、大丈夫やと思うで」

「……」

カルトは眉間に皺を寄せて黙り込み、『ホントに大丈夫なの!?!』という思いを込めてラミナを睨んでいる。

ラミナはその視線に苦笑するが、更に嫌な現実を叩きつける。

「ちなみにおこちにおるメンバーやと、マチ姉が一番力強いで。うちよりもな」

「え」

「逆にノブナガ達はうちよりも力は弱いでな。やから、しっかりと防御すれば殴られたくらいで死にやあせん」

カルトは呆然と目を見開いて、マチに目を向ける。

マチは顔を顰めて、ラミナを睨む。

「ちよつと」

「事実やる？ まあ、腕相撲で……やけどな」

「……腕相撲か……」

カルトは腕相撲ということに思わずホツとするが、それをマチとラミナは呆れた目で見つめていた。

腕相撲とはいえ、ラミナやノブナガ達より力が強いという事実は変わらないし、それが実戦に影響しないわけがない。

「……本当に大丈夫なの？ この子」

「まあ、そこらへんの現実を教えてやって。クロロが念を使えんから、実践訓練がうちとぼつかやったからなあ」

「なるほどね。了解」

「ほな、行ってくるわ」

「ああ」

『『再来』オン！ マサドラへ！』

ラミナは呪文カードを使用して、マサドラへ飛ぶ。

マサドラの入り口の前に着地して、そこから港へと向かう予定である。

「さて、まずは情報屋でもう一度港の場所を聞くか」

地図はマチ達に預けている。

港の場所は暗記してはいるが、思い違いをしていないかを確認はしておくべきである。

情報屋で場所を確認して、簡単に食べられる果物を購入する。

そして、港を目指そうとマサドラを出た時、

「あ!! ラミナ!?!」

「あ?」

突如背後から名前を呼ばれて、足を止めるラミナ。

振り返るとそこにいたのは、ゴンとビスケだった。

「げ……!?!」

「なんでここにいるの!?!」

ラミナは顔を引きつかせて、ゴンは驚きに目を見開いたままラミナに訊ねる。

ビスケは一步後ろに下がって、ラミナを観察し始めていた。

(ふうん。この子が……。確かにパツと見ただけでもかなりの強さを持つてるだわね。そこらへんの奴らじゃあ手も足も出ないだろうね)

ビスケはラミナの実力がある程度見抜いていた。

「ラミナは今クロロといえるんじゃないかなかったの?」

「まあ、まだ一緒におるで」

「え? けど、ここには念を使えないと……」

「ゲームの外で待つとるだけや。旅の途中でこのゲームを見つけたから、試しに入ってきただけや。下見つてやつやな」

サラツと嘘を混ぜ込むラミナ。

しかし、ほとんど事実でもあるので、特に困ることはない。

ラミナの言葉にゴンは僅かに顔を顰めて、

「もしかして、それって奪ったゲーム？」

「いや、闇市で見つけただけや」

「そっか。なら、いいけど……」

「そっちこそ、キルアとコンビ解消して彼女でも作ったんか？」

「違うよ。キルアは今、ゲームを出てハンター試験を受けに行ってるんだ。こっちはビスケって言うって——」

「初めまして！ ビスケと言います！」

ビスケは猫を被り、胸の前で両手を組んで可愛らしく挨拶をする。

それをゴンは呆れたように見る。

しかし、ラミナはビスケを鋭い目つきで見据える。

「……お前、見た目通りの年齢ちやうやろ。知り合いにおる見た目クソガキの爺と同じ気配しとる」

「!？」

ラミナの指摘にビスケは目を見開く。

しかし、すぐに落ち着きを取り戻して、猫を被るのを止める。

「ふん、流石だわね。あまり見破られたことないんだけどね」

「似たような奴知らんかったら、騙されとったやろな。……まあ、それでもキルアよりも身のこなしが上な時点で、警戒しかせんけどな」

「……まいったわね。本当に……」

ビスケは両手を腰に当てて、ため息を吐く。

気を付けているつもりではあったが、やはり体に染みついているものなので、無意識に動きに出してしまうのだ。

ラミナは一切の油断なくビスケを見据えており、腕を組んで立ってはいるが、先ほどまでと違って隙がほとんど無くなった。

そして、そのまま鋭い目つきでゴンへと視線だけに移す。

（自然に纏つとるオーラの静けさがヨークシンの時と段違いやな。 9

月からこの中におったとしても、成長が早すぎる……)

ゴンのオーラを見ただけでも成長していることが分かる。

しかし、あれから半年も経っていない。

いくらなんでも、成長速度が異常だとラミナは思った。まだ念を教えてから1年も経っていないというのに。

ゴンとキルアに教えたことはあくまで基礎の訓練法のみ。

しかも、それらは全て自主的に、かつ1人でやれるものばかりである。

しかし、【硬】はともかく【流】は1人で修行するには限界があり、【周】には道具が必要となる。

【流】に関しては、ラミナは簡単なやり方と『組み手をやれ』として言っていない。

いくらなんでもゴンとキルアだけでは、短期間で完璧にやるの難しいはずだ。

つまり、指導した誰かがいる可能性が高い。

そして、その可能性があるのは、ただ1人。

ラミナはビスケに視線を戻して、

「あんたがゴンとキルアを鍛えとるんか？」

「まあね。と言っても、一番重要な基礎はあんたがしっかりと鍛えてたからね。そこまで苦勞してないし、この子達の才能に驚かされてばかりだわさ」

「なるほど。それならもううちがおらんでも大丈夫そうやな。これからもあんたが鍛えたって。どうせ系統別の修行もしとるんやろ？」

「ああ、始めてるよ」

「ねえ、ラミナ！ ビスケと一緒に修行つけてよ!! もうすぐキルアも戻ってくるしきー！」

ゴンがラミナに共に行動しようと声を掛ける。

もちろんゴンはラミナを旅団に戻そうとするのを止めようとしているのではなく、単純にラミナに修行をつけてもらいたいだけである。

それにラミナは呆れ、

「ド阿呆。流派が同じならともかく、全く関係ない2人が同時に教えるとかいがみ合う可能性しかないわ。そもそも、うちがお前に教えたんはキルアのついで。ちゃんとした師匠が出来たんなら、もうお前に教える理由がうちにはない。キルアに関して、もうゾルディック家からオツケー貫とるから、キルアにも教える理由ないでな」  
「でも……」

「ええ加減にせえ。うちはもうお前らに教える気はない。これからはそいつにちゃんと教えてもらいや」

ラミナは未だ渋るゴンにそう言つて、背を向ける。

「まあ、うちはこれから港に行つて、ここを出るけどな」

「え?」

「言うたやろ? 下見やつて。ゲームクリアに本格的に挑むんやつたら、クロロはもちろん、他の連中にも声をかけなあかんしな」

「え!? でも、クロロはクラピカの鎖で旅団とは一緒にいれないはずじゃあ……」

「うちを介せば命令出せるでな。別にリーダーとして動けんわけやないで」

「あ……そっか」

「ほなな」

「あ、待って!」

ゴンが呼び止めるも、ラミナは勢いよく飛び出して森の中へと飛び込む。

そして、短刀を具現化して、姿と気配を消す。

ゴンは手を伸ばすも、あつという間に気配が消えたことで追いかけることが出来ず、寂しさを顔に浮かべて見送るしか出来なかった。

「ラミナ……」

ビスケは小さくため息を吐いて、

(ビノールトと言ひ、ゴンの善悪の基準が良く分からないわねえ。確かにあいつは根っからの悪人ではなさそうだけど。それでも殺し屋で幻影旅団なんだけどねえ……)

もちろん、決してそれが悪いわけではない。

ビノールトは最終的に自首すると言ったから、ビスケも見逃した。しかし、ラミナや幻影旅団が簡単に自首や投降するとは思えない。(というより、とことん殺し合う未来しかないだろうね。さっきのあいつの目……。ゴン達と殺し合うことすらも覚悟をしてるわさ。……いや、というより……。闇の世界で生きること覚悟してる……って感じだわね。光に当たることを考えてもいない)

絶対に『己の業』の後始末を他者に押し付ける気もなく、清算する気もない。

許されることも、償うことも、望んでいない。  
そんな覚悟を決めている者の目をしていた。

今のままでは、確実にゴンとキルアにとつては望まぬ結末しかやってこないだろう。

なので、ラミナからすれば、今後会わないことを望んでいるはずだ。先ほどの突き放すような言葉からも、それが感じ取れていた。

ゴンもそれを感じているはずだが、今までの関わりから『もしもの時』の覚悟は中々持てないのだろう。

(全く厄介なことだわさ。ネテロはどう考えてるのかねえ。副会長派が騒いでそうだけど……)

プロハンターにして殺し屋であり、幻影旅団に入団した者。

どう考えても、ハンター十か条改訂論者を刺激する。

ネテロはそんな動きも面白がるのだろうか。

しかもビスケはずっとゲームにいたので知らないが、ラミナとジンが繋がりを持ち、ラミナがシングルハンターになるかもしれないことを知れば、更に頭を抱えるだろう。

「ほら、ゴン。今は修行に専念だわさ」

「うん……」

gonはまだラミナが消えた森の方向を見つめたまま頷くのだった。

1時間後、ラミナは港に到着した。

「それにしても、随分なベテラン捕まえよったなあ。しかも、このゲームの中でとは……。あの女やったら、このゲームの活かし方も分かつ



とるやろうし、そらあ強うなるわな。……カルトはもう少し本腰入れてやらなあかんか？ いや……カルトは今のペースが限界か。これ以上は体の成長に悪影響やろうし」

10歳のカルトにとって、今以上体を酷使するのは少々問題である。

すでに筋肉などは同い年の子供から見れば異常レベルなのだから。「今は念と体の動かし方をメインに鍛えてやるべきやな。実戦経験も積ませてやらなあかんし」

カルトの修行の方針を決め直したラミナは、港を管理している所長がいるところに向かう。

無理難題を吹っ掛けられたが、無視して首をへし折る。

すると、所長の死体がカードに変わる。

『通行チケット』と表示されていることを確認して、ラミナはすぐさまチケットを具現化して使用する。

船乗り場に入って部屋に案内されると、そこはゲームに入った時と同じような部屋だった。

「いらっしやい」

中にはゲームに入った時とそっくりな女がいた。

「島から出るのですね？ それでは行き先を決めてください。選択できる港は50以上ありますので、希望の場所を選択してください」

「ん？ ゲームを始めた場所には戻れへんの？」

「いいえ、戻れます。ゲーム開始場所を選択されますか？」

「ああ」

「かしこまりました。島の外に出ると、フリーポケットのカードのデータが消滅してしまいますが、よろしいですか？」

「かまへん」

「それでは、またのお越しをお待ちしております」

女性がパソコンを操作すると、ラミナはその場から姿を消した。

そして、気づくとゲームを始めた部屋の中にいた。

「戻ったのか」

クロロの声がして振り返ると、

そこに何故かジンがいた。

「……なんでおんねん」

「ネテロと話がついたから、お前の新しいハンター証届けに来たんだよ」

「新しい？」

「おう。シングルハンターのな。ほれ、これだ」

ジンがポケットからカードを取り出して、ラミナに投げ渡す。

ラミナは受け取って、確認するとハンター協会のマークが書かれていた面のデザインが変わっていた。

「これがシングルハンターなんか？」

「そうだ。で、元々の奴、くれねえか。もう使えねえし、俺がハンター協会に渡しとく」

「ええんか？」

「いいも何も、そのために来たんだよ」

「つて、忘れとった。どうやってここを？」

「メール送ったら、ここの住所が送られてきたぜ」

「俺が送った」

「おい」

まさかのクロロが呼び寄せていた。

ラミナはすかさずツッコむが、クロロは肩を竦める。

「新しいライセンスは早めに貰っておいた方がいいと思っとな」

「……はあ。もうええわ。んで、2人でなにしとってん？」

「お前が纏めたアルサー王伝説の話をした。もうすぐ発表するらしいが、大分大騒ぎになってるみたいだぞ？」

「そりゃあ、アルサー王、モーグレット、ランスロットは重要人物トツプ3とも言えるからな。そいつらの記憶が判明したとか、歴史家からすりゃあ商売あがったりだろうよ」

「よう信じられたな？」

「そこは俺の名前でごり押しした。まあ、当然だが全く矛盾点がねえんだ。下手な歴史家連中が推測してた伝承より、説得力はあるよな」

「ふうん」

ラミナはジンに元のハンター証を渡して、部屋の中を見渡す。

案の定、部屋の隅にはカップ麺やファーストフード、ピザなどの空箱がゴミ袋に詰められており、酒瓶もたんまりとゴミ袋に溜められていた。

「……はあ……。まあ、お前に自炊を期待するんは無理やんな」

「外食の方が美味しいからな」

「食材買ってくるわ。年も明けたしな。ジンも食っていくか?」

「おう。食う食う」

「ほな、待つとき」

冷蔵庫の中を確認して、必要な食材や調味料を買いに行く。

さつさと買い物を済ませたラミナは、さつさと部屋に戻ってすぐに調理の準備を始める。

「ジン以外で、なんかあったか?」

「何もないな。ジンが来なかつたら、退屈で死んでたかもしれない。そっちはどうだ?」

「残念ながら、情報すら見つかつたらんな。あのゲームじゃ除念能力なんぞ必要なさそうやでな」

「いらねえだろうな。四大行と応用技をしっかりと修得すれば、十分クリアできるレベルに設定してあるからな。そんな【発】に依存するシナリオ作つたら、それこそ誰もクリアできねえし」

「やろうな。ちちゅうわけで、まだまだ時間かかりそうやわ」

「そうか……」

「で、テーブル片付けてや」

クロロとジンは言われるがままに、テーブルの上に広げられた資料や本を片付ける。

部屋中にいい匂いが広がっていき、クロロとジンはそのまま酒を飲み始める。

「そーいや、ジン」

「ん?」

「ゴンがおったぞ」

「げっ」

「げって、オイ」

「俺のこと言っただろな？」

「言うかい。そんなこと言うたら、付きまとわれるやないか」

「ああ……。お前ら、ヨークシンで敵対したんだっけか。ゾルディックのガキとまだ一緒にいんのか？」

「おるみたいやで。今、ビスケってプロハンターに修行付けて貰とるみたいやったわ」

「ビスケ……。あのババアか」

「やつぱ有名なん？ あの女」

「ああ。ダブルハンターだ。本当の姿はゴリラみてえにマッチョらしいぜ？ ネットロと同じ流派のはずで、かなり弟子がいるはずだぜ」

「ふうん」

やはりかなりの実力者のようだ。

ならば、やはりゴンとキルアの指導はビスケに全て押し付けた方がいいだろうとラミナは判断した。

そして、テーブルの上に次々と料理を並べて行く。

「おお！ こりやあ、美味そうだな」

「テンプラとかも作ったるから、待っときや」

「それは楽しみだ」

クロロとジンは早速食べ始める。

ラミナはテンプラやアヒルの丸焼き、魚の煮物などを調理しながら、ジンに訊ねる。

「なんで、ゴンに会うん嫌がつとるんや？ 自分のガキなんやろ？」

「あん？ 別にいいだろ？ それに父親つつたって、父親らしいこと何もしてねえしな。ぶっちゃけ、なんで俺に会いてえのか分からん」

「そらあ、好奇心やないか？ アロンダイト見せてもらいたって言うたお前と、好奇心全開のゴン。そっくりやぞ？」

「……」

ジンはラミナの言葉に、顔を顰めながら料理を食べ続ける。

その様子を見ていたラミナは苦笑して、

(気にはしとるけど、放置した負い目もあつて素直に会えんつちゆう奴か?)

「……ま、あいつもプロハンターだ。俺1人くらい、自力で見つけて貰わねえとな」

「……まだまだ会うんは先になりそうやなあ。まあ、ええか。ほれ、テンプラとアヒル」

ラミナは呆れながら、新しい料理を2人の前に出す。

そして、空いた皿を片付ける。

クロロは黙って料理に集中しており、ジンもこれ以上ゴンの話題は嫌なのか黙って料理を食べ続ける。

ラミナは味見と称して、チョコチョコつまみ食いしていた。

その後も料理を作つて、全ての調理を終えた時、

「とりあえず、これで全部や」

「十分だ」

「マジで美味しいな。お前つて結構多才なんだな」

「料理は慣れれば誰でもできるやろ」

ラミナは皿を片付けながら言う。

すると、ジンは何かを思い出したようで、

「そういえば、メンチとか言う美食ハンターがお前を探し回つてたぞ。ネテロの所にも聞いてきたらしい。他にも何人かお前のことを訊ねてきたハンターがいるらしいぜ」

「あく……まあ、メンチは一度ハンターとして仕事引き受けたことがあるでな。他のはモラウとかちやうか?」

「そうそう、そんな名前もいた。まあ、爺は何も言わなかったらしいがな。どうせ、お前の事も自分で調べてるだろ」

「……ネテロはゾルディック家やアルケイデスと繋がつてるからなあ。そこから情報貰つとるやろなあ」

「だろうな。だから、爺はお前を問題視する気はねえと思うぜ。爺はな」

「その下におる、うちを狙う連中も問題視せんつちゆうことやな?」

「ああ。一応、お前はハンター十か条【その4】に引つ搔かつてるつて

「言えちまうからな」

「まあ、もうあんまハンターとして動く気ないからええねんけどな」

「俺は気にしねえから、時々依頼出してもいいか？　なんだったら、旅団で動いてくれてもいいぜ」

「そこはクロロと話をつけといてんか。旅団を動かすとなると、流石にうちじや決めれん」

「内容によるがな。報酬をしつかりとくれるなら構わない」

「サンキュ」

「軽いな、オイ」

簡単に話を纏めたクロロとジンに呆れるラミナ。

そして、そのまま4日ほど現実で過ごし、色々とクロロが過ごしやすいうようにしてから、またゲームに戻るのだった。

ラミナがゲームに戻る数日前。

キルアは【ドレレ港】近くの一本杉の下。

魔獣キリコ一家の家でのんびりと、ハンター試験まで過ごししていた。

キルアはビスケから言われている日課の修行を終えると、携帯を取り出して電話をかける。

『……はい』

「あ、もしもし、ゴトー？　俺、キルア」

『これはこれはキルア様。お久しぶりです。お元気そうで何よりでございます』

「そつちもな。で、ミルキにまた繋いでくんね？」

『承知しました』

そして、10秒ほど経過し、

『なんだよ、キル。まだグリードアイランド探してんのか？』

「そつちはもう見つけた。今回は別件。兄貴さ、ヨーヨー作れねえ？

特殊合金で電気よく通す奴がいいな」

『ヨーヨー？　また変な物だな』

「まあまあ。で？　できる？」

『余裕に決まってるだろ。そんな玩具。見返りは金か?』

「ああ。グリードアイランドの情報なんて、もういらねいだろ?」

『ふんっ、いらねいだね。じゃあ、出来たらいつもの方法で送る』

「サンキュ」

『じゃあなつて、そういえばキル。お前、婚約者のこと調べてるか?』  
「ラミナ? いんや、最近ずっとゲームの中にいたし。俺、ハンターサ  
イト見れないし」

そして何より、見れたとしても情報料を払えない。

今のキルアの残高は1000万もない。

『じゃあ、特別に教えといてやるよ』

「なんかあったのか?」

『あいつ、今カルトと一緒にいるぜ。んで、カルトが幻影旅団に入っ  
た』

「はあ!？」

『さらにデカイマフィアの実働部隊を1個潰してさ。うちとの繋がり  
もバレて、あいつ今懸賞金20億のA級首だぜ』

キルアはミルクからの情報に啞然とする。

僅か数か月で、恐ろしいことになっていた。

「懸賞金はともかく、なんでカルトが旅団に入ってるんだよ?」

『俺が知るかよ。けど、ママがなんか喜んでたし。爺ちゃんも一緒に  
仕事してみたみたいで、飯の時パパ達と楽しく話してたぜ。カルトの奴、  
お前の婚約者にかなり鍛えられてるらしい。それが狙いなんじゃ  
ねえの?』

「……あいつがラミナに?」

キルアは顔を顰める。

カルトの事は今まで興味がなかったもので、あまり深く接したことは  
ない。

その弟が、婚約者なののはともかく、自分の師とも言えるラミナに鍛  
えられているのは少しだけ気に入らなかった。

「あいつも念を覚えたのか?」

『覚えたも何も。カルトはお前より先に念を覚えてるよ』

「はっ。」

『うちで念の事知らなかったのは、お前だけだよ。カルトはお前が家出す前から【発】まで修得してたぜ。だから、今は念の基礎や暗殺術とかをお前の婚約者に鍛えて貰ってるらしいぜ。あ、言っとくけど、お前には場所を教えるなってさ。まあ、俺は知らないけど。ゴトー達に聞いても無駄だと思うぞ』

「……!!」

キルアは歯軋りをして、怒りを抑える。

過保護のためなのか、それとも他の理由なのか。

あれだけ期待していると言っておきながら、何故自分には教えずにカルトには教えているのか。

未熟者扱いされていたようで、それがムカつくキルアだった。

しかし、すぐに気持ちを落ち着かせる。

「……どっちにしろ、今ラミナがどこにいるか知らないし。俺も今、別の人に鍛えて貰ってるから、別にいいよ」

『あつそ。じゃ、出来たら届けるから。ちゃんと金払えよ』

「分かってる。じゃあな」

電話を切ったキルアは、ため息を吐く。

「半年も経ってないのに……。何してんだよ、あいつは……!」

懸賞金20億のA級首で、幻影旅団とゾルディック家と繋がりがあ  
る殺し屋。

どう考えても、賞金首ハンターの絶好のターゲットになっている。

「クラピカももう知ってるんだろうな……。くそっ……。厄介なことになつてきたかもな」

キルアはクラピカに電話をかける。

『……キルアか?』

「クラピカ、今大丈夫か?」

『10分くらいならば問題ない』

「そっか。……ラミナのこと、聞いた?」

『……懸賞金が上がったことか?』

「やっぱ調べてるよな。今、どこにいるか知ってる?」



『いや……ハンターサイトもそれから更新されていない。時折調べてはいるが、今は完全に行方をくらませた』

「そっか……」

『ゾルディック家の方が知ってるのではないか？ お前の弟と一緒にいるようだが？』

「……教えてくれねえんだよ」

『……なるほど』

「……ラミナを捕まえる気？」

『……いや、今の所そのつもりはない。こつちも色々問題が起きていてな。ラミナや旅団に手を割く余裕はない』

「そっか……。クロロの鎖はまだ刺さったまま？」

『ああ。外された場合、私はそれを知ることが出来る。だから、まだ旅団は完全復活は出来ないはずだ』

「了解。またなんか分かったら、適当にメール入れる」

『ああ、すまない。礼を言う。ではな』

通話を切られて、キルアは携帯を仕舞う。

(……とりあえず、最悪のパターンは避けられそうだな。今、動かれたら間に合わないかもしれないからな)

キルアは小さくホツと息を吐く。

しかし、結局ラミナとの関係をどうするか答えは全く出ない。

敵になりたくはないが、味方にもなれない。

適度な距離感を保てばいいのだが、その距離感が難しすぎる。

「……あゝ、やめやめ！ 今はハンター試験とグリードアイランドに集中！」

とりあえず、問題を先送りにするキルアだった。

ゲームに戻ったら、ゴンから衝撃情報を知らされるとも知らずに。

## #67 ソイツ×ハ×ボマー

ゲームに戻ったラミナは、最初の平原に足を踏み入れる。

「なるほど。最初は必ずここに戻るつちゆうわけか。フリーポケットのカードは消えたから、呪文カードで目的地に戻ることも、仲間に連絡することも出来ん……。中々に厄介やな」

『離脱』を手に入れられる者は、ゲームクリアをするために滅多に外には出ない。

なので、あくまで最終離脱手段としてキープされ続けるだろう。

場合によっては、トレードの対象になるかもしれないが、命のやり取りがある状況になった今では、手放し辛いだろう。

それによつて、更にゲームから出たい連中にとつて『離脱』が手に入らない状況になってしまっている。

しかし、港まで行く実力もない。マサドラから出るのも一苦勞。

そして、引き当てたレアカードと交換してもらいたくても、殺される可能性があるから自分から声を掛ける勇氣もない。ただでさえ巷では「ボマー」がプレイヤー狩りをしているのだから。

見事なほどリタイア希望プレイヤー達は、袋小路に追い詰められていた。

「さて……まだソウフラビにおるか？ それともマサドラか集合場所で待つとくんがええんか……」

ラミナはとりあえず、ルビキュータを目指しながら今後の予定を考える。

誰かからカードを奪うことも出来るが、何も持っていなかったら無駄でしかない。

「……はあ……。マチ姉達がうちが帰ってきたかどうか確認するとは思えんでなあ。カルトは多分それどころやないやろうし」

恐らくマチやノブナガにそこそこ追い詰められているはずだ。

むしろ、ちゃんと除念師探し出来ているのかさえ不安である。パクノダがサボると思えないので、何もしていないわけではないだろうが。

そして、森の中に入って街を目指していると、

「ちよつといいかい?」

「ん?」

突如、声を掛けられて振り返るラミナ。

そこには眼鏡をかけた面長の男が、にこやかな笑みを浮かべて立っていた。

「なんか用か?」

「君、初心者だろ? このゲームのこと、教えて欲しくないか?」

「なんで、そんな親切なんや?」

「実はちよつと人手が足りなくてね。正直、慣れたプレイヤーを仲間に引き入れるより、初心者の方が揉めなくていい」

「ふうん……。で、うちの後ろにおける2人組はお前の仲間なんか?」

「!! ……まいったな」

眼鏡の男は一瞬目を見開き、眼鏡を直しながら小さくため息を吐く。

そして、合図を送るとラミナの背後の木陰から、額に刺青を入れた男2人が現れる。

(……そこそこ出来る連中やな)

静かに現れ、3人揃って隙が少ない。

それなりの実力者であることを見抜いたラミナは、3人を視界に捉えられるように位置を変える。

「それで? ホンマの用はなんや?」

「……死にたくなけりや、大人しくしな。せつかくこのゲームを始めたんだけ。もう少し楽しくプレイしたいだろ?」

眼鏡の男がガラリと雰囲気を変えて、ラミナを脅し始める。

しかし、ラミナにそんな脅しが効くわけもなく、

「お断りや。それに……死ぬんはそつちかもしれへんでぞ?」

ラミナは【練】を発動する。

それを見た3人組も【練】を発動しながら、距離を取る。

「こいつ……!」

「こつちは3人だぜ? 勝てると思ってるのかよ?」

「……はっ。数が多いくらいで勝てると思とるんか？ 随分と生温い勝ち方しかしてこんかつたんやな」

「てめえ……!」

「落ち着け、サブ。……ただのハツタリじゃなさそうだ」

眼鏡の男は油断せずにラミナを見据える。

その言葉に他の2人も苛立ちを抑えて、ラミナを睨みつける。

それにラミナも内心で警戒心を上げる。

(……戦い慣れしとるな。こっち側の人間か)

幻影旅団と同様に、明確に『殺し』を手段として受け入れている連中。

ラミナは目の前の3人をそう判断した。

「こいつはここで殺す。まあ、運よく生きていたら、好きにしていいるろ」

眼鏡の男がその場で構え、他の2人がラミナを左右から挟み込むように移動する。

その瞬間、ラミナはブロードソードと圏を具現化しながら、黒髪の男の方へ飛び掛かる。

「っ!!」

「ふっ!!」

ラミナが剣を高速で振り、黒髪の男は慌てて後ろに下がってギリギリで躲す。

「速え……!?!」

「くっ!」

「こいつ!」

眼鏡の男とサブはラミナに向かって飛び出す。

ラミナは両足にオーラを籠めて、一気にサブに向かって突っ込んでいく。

「なっ!?!」

サブは目を見開いて足を止めようとするも、すでにラミナは目の前まで近づいていた。

ラミナはブロードソードを振ろうとするが、そこに眼鏡の男が右手

を伸ばして来て、ラミナは左足だけで方向転換して攻撃を中断して躲す。

(……殴るやなくて、掴みに来た?)

ラミナは眼鏡男の攻撃に疑問を感じる。

普通ならば、ここは殴る場面だ。

両手に武器を持っている人間の体を掴んだところで、反撃されるリスクしかない。

(つまり、こいつの能力は『触れるか掴むことで発動する』能力)

もちろんあくまで可能性の段階だが、それだけでも予測出来れば十分である。

ラミナは圈を消して、ククリ刀を具現化する。

「……3つも武器を具現化する能力だと……?」

「変な能力があるとしても、そんな無駄な能力考えるか普通?」

「つまり、普通じゃないってことだ」

男達はラミナの警戒度を更に高める。そして、突出しないようにゆっくりとにじり寄る。

ラミナはククリ刀を手の中で回して、威嚇する。

そして、黒髪の男に向かってククリ刀を投げる。

黒髪の男は危なげなく躲して追撃を警戒するが、ラミナが斬りかかったのはサブの方だった。

眼鏡男も黒髪のフォローに回るつもりだったので、一步反応が遅れた。

「くそっ!!」

サブは慌てて後ろに下がりながら、反撃の隙を探る。

すると、次にラミナは更に方向転換して、3人から離れるように駆け出した。

「なっ!?!」

「しまっ!」

「バラ、サブ、追え!!」

眼鏡男達はラミナを追いかける。

囲う様にラミナを追い詰めようとするが、

「くそっ!! 速え!!」

ラミナとの距離が詰まらなかった。

すると、ラミナはブロードソードを消して、レイピアを具現化する。

「!? また武器を!」

「具現化じゃなくて、出し入れする能力か!」

「だったらいいが……っ!? バラ、後ろだ!!」

「なにつ!」

眼鏡男の言葉にバラは背後を振り返る。

すると、背後から炎の円盤が勢いよく飛び迫ってくるのが見えた。

「ちつくしよ……!!」

バラは横の茂みに跳び込んで、直後炎の円盤が通り過ぎる。

炎の円盤はラミナの目の前で勢いを弱めて炎を消し、ラミナの左手に戻る。

「やっぱ能力付きの武器だったか……!」

ラミナはすぐさま眼鏡男にククリ刀を投擲する。

そして、次にレイピアを構えて、サブに切っ先を向ける。

「【啄木鳥の啄ばみ】」

能力を発動しながら、勢いよく突き出す。

サブは足を止めるが、直後右肩に穴が空いて血が噴き出す。

「があ!」

「サブ!」

「くそっ! つ!! サブ!! 横に跳べえ!!」

「!?! くっそがあ!!」

サブは右肩を押さええながら、眼鏡男の声に迷うことなく横に跳ぶ。

背後から炎の円盤が襲い掛かり、サブの背中を僅かに掠って服を焼いて、皮膚を焦がす。

「づあっちい!」

「サブ!」

「バラ!! 女から目を放すな!!」

眼鏡男の言葉にバラはすぐにラミナに目を戻す。

ラミナはレイピアをバラに向けて突き出そうとしていた。

「あの剣の先からズレろ!!」

眼鏡男が叫んで、すぐさまバラは動き回る。

サブは痛みを耐えて、木陰に隠れる。

ラミナはレイピアを突き出しながら、眉を顰める。

(残りの2人……一切能力見せんな。強化系か？ それにしても何の能力を使う素振りすらも見せん……)

ノブナガのようにタイマンで威力発揮する能力ならば理解できるが、それが2人もというのは普通ありえない。

目の前の3人組はかなり長い期間行動を共にしている雰囲気だ。

眼鏡男がリーダー格であり、他の2人はそれを一切疑問に思っていない様子だった。

そんなグループで能力が被るなど、まずあり得ない。

(なら一番考えられるんは……相互協力型能力者!!)

ラミナはサブとバラの役割を判断して、【円】を発動して手負いのサブの居場所を確認する。

「!? サブ!! ここから離れろ!! 狙われてる!!」

「逃がさん」

ラミナはククリ刀を投擲して、眼鏡男達を牽制する。

そして、すぐさまサブがいるところに向けて、レイピアを勢いよく連続で突き出す。

茂みや木の幹に何個も穴が空く。

サブは勢いよく木陰から飛び出すも、躲し切れずに右脇腹と左脚に穴が空く。

「があああ!!」

「サブ! くそっ! バラ、撤退だ!!」

「分かった!!」

「やから、逃がさん」

ラミナは戻ってきたククリ刀をキャッチし、再び投擲しようとしたが、

「ブック!」

眼鏡男とバラが本を具現化する。

それを気にせずラミナはククリ刀を投げる。

『左遷』 オン！ ラミナ！」

『同行』 オン！ マサドラヘ！」

眼鏡男の呪文カードを唱え、光がラミナに当たる。

すると、ラミナは体が浮かび上がるのを感じた。

「ぐっ！」

ラミナはククリ刀を消し、その直後勢いよく空へと舞い上がる。

そして、どこか別の森へと移動させられた。

「……ちっ。強制移動の呪文カードか。場所が分からなくなつてもたな……」

ラミナはレイピアを消して、周囲を見渡す。

もちろん目印など一切ないので、場所など分からない。

ラミナは小さくため息を吐いて、先ほどの連中を思い出す。

「1人は確実にしばらく戦線復帰は無理なはずやけど……。中々厄介な連中やったな。ゴンとキルアは見つかつたら、ヤバかつたかもしれんなあ」

サブとバラの能力は結局分からなかったが、それでもオーラ量や

【流】の動きはかなりのものだった。

ゴンでは間違いなく誰にも勝てないだろう。キルアでも、念を使った戦いの場合は厳しいと言わざるを得ない。

「あいつらが何モンか確かめようにも呪文カードはなし。けど、向こうはうちの名前も確認しとつたし、あの呪文カードの使い方からして、攻略組なんは間違いなさそうやなあ」

ラミナは腕を組んで、小さく眉間に皺を寄せる。

とりあえず、ラミナは再び周囲を見渡して、高い樹を探す。

見つけた樹の一番上まで登って、周囲を見渡す。

辺り一面、森と山で、少し離れた場所に海も見える。

「……街は一切見えんなあ。まいったなあ……」

目的地も定められず、仲間に連絡する手段もない。

ラミナは小さくため息を吐いて、とりあえず山に向かって移動することに決めたのだった。



その頃、マサドラ近くの森。

「サブ、どうだ？」

「……ああ、問題ない。悪い、ゲンスルー。独占してた『大天使の息吹』を……」

「構わんき。別になくなったわけじゃない」

サブの怪我は完治していた。

『NO. 17 大天使の息吹』は対象者の怪我や病を完治させることが出来る。

カード化枚数制限はたった3枚で、ゲンスルー達は例の呪文カードを集めていた集団を皆殺しにして奪ったカードを『複製』で独占していたのだ。

それを今回、1枚使用してしまったのだ。

「バラ、どうだ？」

「駄目だ。『複製』出来ねえ」

「……可能性があるのはツエズゲラか。くそっ！」

「こればかりは仕方ない。これは決めてたことだ。『俺達の誰かが瀕死の怪我を負えば使う』っていうのはな。それに他にも独占してるカードもある。大きな問題はない」

ゲンスルーは自責の念に駆られるサブを慰める。

事実、3人は『大天使の息吹』を独占した時に、話し合いで決めていたことだった。

なので、使ったことにゲンスルーとバラに後悔はない。

「それにしてもあの女……何者だ？」

「さあな。ただ、俺達も少し油断していたな。ここは念使いが揃う場所だ。手練れがいてもおかしくはない。ニツケス達や他の雑魚共ばかり相手にしてからな。勘が鈍っていたかもしれん」

「確かにガチな戦闘なんて、ここ数年やってなかったからな」

ゲンスルーの言葉にバラとサブも頷く。

このゲーム内では念を使った戦闘は、あくまで最終手段。

女1人で、カードも全く持っていなかったラミナを『ゲーム初心者』

としてしか見ておらず、実力を度外視していたゲンスルー達のミスである。

これまで会ったプレイヤー達もほとんどがゲンスルー達より弱い事も、慢心した要因でもある。

「とりあえず、あいつにお礼するのは後だ。あいつに拘って、ツエズゲラ達に先を越されたらたまったもんじやないからな」

「だな」

「ああ、分かってるさ」

サブとバラも頷いて、再びゲームクリアに向けて動き出したのであった。

その翌日の夜。

ラミナはようやく街に辿り着いた。

「……変な街やなあ」

街の真上に巨大なハートが浮かんでいる。

街の名は【恋愛都市アイアイ】。

なんでも出会いに溢れている街らしい。

ラミナが周囲を見渡すだけでも、悪漢に襲われている女、貧しい格好で花を売っている女性、泣き崩れている男、ケンカしているカップルなど、ベタなシチュエーションがたつぷりとあった。

「……これのどれかが指定ポケットカードになるんか？ 面倒やな」

もちろん大半は大したことないアイテムカードやトラップなのだろうが。

しかし、それを確認するには関わりを持たないとならない。

ラミナはそれは面倒だと、呆れながら情報屋に向かう。

途中で倒したモンスター達を換金して、マサドラなどの情報を得るためだ。

「マサドラはここから南東に120km。ソウフラビはマサドラから更に南東に200kmだ」

「おおきに」

情報屋から出て、飯屋を見つけて食事を摂りながら情報を整理する。

「マサドラだけでも、余裕を持って移動して1日くらいか……。ソウフラビは更に2日はかかる、か」

大盛の料理を食べながら、ラミナは思ったより時間がかかることに眉を顰める。

すると、

「お嬢ちゃん、大食いだなあ！ どうだい？ 俺と勝負しねえか？」

「飯食う前に言えや、阿呆。帰れ」

「君、1人？ 一緒にどう？」

「いらん。帰れ」

「レデイ。私ともっといい店で飲み直さないかい？ おしやれなバーがあるんだ」

「きもい。帰れ」

何度も声を掛けてくる男連中。

最後には女まで絡んできた。

「あんたね！ あたしのカレを誑かしたの!!」

「盗られる女が悪いし、その程度で靡く男もクズやしいらん。っちゆうか、知らん。誰のことやねん」

「あなた！ 男達に声を掛けられたくらいでいい気になるんじゃないわよー！」

「なっとなるように見えるんやったら、目の手術してもらってこいや」

「ねえ、聞いてよ！ 私の彼氏が酷いの！」

「なら、とつとと殴れや。帰れ」

額を引きつかせ、苛立ちを抑えながら全て撃退していく。

食べ終えたラミナはさっさと店を出る。

「さっさと街出よ……」

「おいおい、嬢ちゃん。俺の前をタダで通ろうって——」

「じゃかあしい!!」

「ぶへえ!？」

ラミナは後ろ回し蹴りを繰り出して、立ち塞がった男の腹に叩き込

む。

男はくの字に吹き飛んで、建物の壁に穴を空けて、建物の中に叩き込まれる。

ラミナはふん！と苛立たし気に鼻で荒く息を吹き、ポケットに両手を突っ込んで歩き出す。

そのまま街を出て、森の中で野宿することにした。

「……ジンの奴、どんな街考えとんねん……」

大樹の太い枝に寝転びながら、製作者のジンに恨み言を呟く。

恋愛都市とは言え、あそこまで出会いが多すぎるとウザイだけである。

「あそこに除念師がおらんことを願うだけやな……」

あんな街に滞在できる者などと関わりたくはない。

絶対に変態か変人だと確信するラミナであった。

「問題はマサドラまで行って、どうするかやなあ。……呪文カードでも買ってみよか」

どうにかして、マチ達に連絡を取りたい。

「……マサドラで少し様子見るか。シャル達も来るかもしれんし。

……ゴン達に会わんように気をつけないかな」

そう判断したラミナは夜明けを待って、マサドラを目指すのだった。

それから更に数日後の1月8日。

ゲームの外では、キルアがハンター証をビーンズから受け取っていた。

「おめでとうございます」

「サンキュ」

ハンター証を受け取ったキルアは、すぐに建物を出る。

「さてと……またここからバツテラの城まで戻らないといけないのか

……」

ここからヨークシンまで数日かかる。そこからバツテラの城まで1日近く。

帰るだけでも手間も金もかかる。

「まだ兄貴から頼んだモンも届かないし」

「それならここにあるぞい」

「!!? じ、爺ちゃん!」

背後に突然現れたゼノに、キルアは反射的に飛び退く。

「久しぶりじやのう、キル。……………ふむ。中々に成長したようじやの」

「……………まあね」

「ほれ、これがミルクに頼んでいた物じや」

ゼノはポケットから2つのヨーヨーを取り出して、キルアに渡す。

キルアはやや混乱したままでヨーヨーを受け取る。

「あ、ありがとう……………」

「1個50Kg弱はあるらしいぞ。鳥での運搬はちと厳しかったようじや」

「だからって、なんで爺ちゃんが?」

「せっかくじやからお前の顔を見ようと思つての。ハンター試験も合格したようじやし、祝いに飯でもどうじや?」

「うん……………いいけど……………」

ゼノの提案に大人しく付いて行くキルア。

2人は高級アイジエン料理屋に入って、料理を頼む。

「どうやら【発】の方向性が決まったようじやの」

「うん。まあ、まだまだ実戦じやあ使えないけどね」

「確か……………ラミナからの報告では、お前は儂やシルバと同じ変化系じやつたの」

「爺ちゃんと親父も?」

「うむ。まあ、オーラ量が増えれば、出来る事も増えよう。変化系能力はオーラ量に大きく依存するでな」

届いた料理を食べながら、キルアが家を出てからの事を聞くゼノ。キルアもゼノから色々ヨークシンでの裏話やヨークシンを出てからのラミナの話を聞かせてもらう。

残念ながら、今どこにいるかは教えてもらえなかったが。

「カルトの旅団入りなんて、よく許したね」

「あいつが自分から言い出したことじゃしの。良い経験になると思っ  
てな。あ奴も伸び悩んでおったし、家におつても儂らじゃ甘やかして  
うじゃからな。ならば、ラミナがおる今の旅団なら、そこまで問題な  
いと判断した」

「また依頼が出たらどうするの?」

「その時はその時じゃ。まあ、少し前にラミナと儂らが繋がっておる  
とバレたからな。儂らにはもう依頼はこんじゃろ」

「ふうん」

食事を終えたキルアとゼノは店を出る。

すぐにでもヨークシンに戻りたいと言ったキルアにゼノは、

「最後に少し儂と遊んでいかんか? どれだけ成長したか、見せてみ  
ろ」

「いいの?」

「どうせ今は暇じゃしの。せっかくじゃし、儂の念も少し見せてやろ  
う」

そして、街外れで模擬戦を始めたキルアとゼノ。

しかし、やはりキルアは躲すだけで精一杯で、【発】を試す暇もなく  
ゼノの【発】を必死で躲し続けるのだった。

「じ、爺ちゃん!! ちょよ、ちょつとタンマ!?!」

「なんじゃ情けない。それではラミナに追いつけんし、カルトに追  
抜かれるぞ?」

「ぐっ……………」

「ほれ、次行くぞ。【龍星群】」

「げっ!!!」

そして、キルアは1時間もせずにオーラが尽きて倒れ伏す。

「まだまだじゃの。念ばかりでなく、体術の方も修行を怠るでないぞ。  
本当にカルトに追い抜かれてしまうぞ? あ奴はラミナの暗殺術も  
間近で見て、直接鍛えてもらつとるからのう」

「……………」

「じゃ、儂は帰るぞ。小遣い、ここに置いてくからの」

「……………」

「ちなみにラミナじゃったら、今のでも余裕で反撃してくるじやろうな。あ奴の能力は中々に厄介じゃぞ？ イルミから聞いた話では、更に希少な能力を持つとるようじゃしの」

「希少……？」

「なんでも瞳の色が変わると特質系になるらしい。しかも、相手の【発】を無効化し、【練】や【堅】を貫けるらしい」  
「なっ……!!？」

「あ奴も旅団団長並みに手強い。……団長が念を使えるようになって2人で組まれたら、儂とシルバの2人でも勝てるかどうか分からん」  
「っ……!!」

「じゃから、しっかりと精進せい。婚約者に腕つぶしで勝てぬと、とことん尻に敷かれてしまうぞ？」

「ぐっ!!? だ、だから、俺はあいつと結婚する気はないっ!!」

「もったいないことを言うのお。実力も含めて、あれだけ良い女はおらんぞ？ 見た目もいいし、家事も出来る。面倒見もいいし、執事達からもすこぶる評判も良い。別に殺しに飢えてもおらん。ゾルデイツク家とか関係なく、あ奴は嫁としても引く手数多になるぞ？」

ゼノの言葉にキルアは黙り込むしかなかった。

ゼノはその様子に苦笑して歩き出す。

その背中を見送ったキルアは、置かれた小遣いを手に取って小さくため息を吐く。

「はあ……。変化系ってあんな能力まで作れんのかよ……」

キルアは立ち上がって、体の汚れを落とす。

「……良い女、か。……分かってるつつうの」

そうボヤいて、キルアは街に向かって歩き出す。

「……今日は泊まる」

そう、呟いて。

## #68 ヨウヤク×ノ×テガカリ

マサドラに到着したラミナは呪文カードショップに寄り、2パック程購入してみることにした。

「おー！」

出たのは『窃盗』×2、『透視』『名簿』『念視』『磁力』。

「ラッキー。『磁力』出たんは助かるわ〜」

ラミナはショップを出て、早速カードを使う。

「『磁力』オン！ カルト！」

ラミナは空に浮かんで、ある場所に引き寄せられる。

飛んだのはどこかの森の中。

下り立った場所のすぐ傍にカルト達はいた。

「お。ラミナ」

「おう。戻ったでえって……。カルトどうしたんや？」

「……」

カルトはノブナガに担がれて、ぐったりとしていた。

覗き込むとどうやら気絶しているようで、服も汚れていた。

「……随分と派手にやったんやなあ。ノブナガか？」

「そ。ちよつと強く入っちゃってね」

「悪い悪い。ちいと楽しくなって、力入っちゃった」

「まあ、別にええけど。で、状況は？」

「ソウフラビの後に別の街で探してたけど、見つからなかったわ。今は新しい街に向かっているとところよ」

「【リーメイロ】って街だよ」

「了解。シャル達の方は？」

「一昨日連絡くれた時は38枚だったわ。今はもう少し増えてるでしょうけどね」

「団長は？」

「元気も元気。ただ早よせんと考古学者に目覚めそうやわ」

「相変わらずのようだな」

「ま、団長だしね」



互いの状況を報告し合い、移動を開始するラミナ達。

ラミナはマチに顔を向けて、

「実戦形式での修行か？」

「ああ。念については、あんたが教えた奴を自主的にやってるからね。だから、実戦経験の方を重視してるよ」

「本音はそっちの方が楽だからだろ？」

「うっさいよ、ボノ」

「まあ、それで十分や。念はともかく戦闘訓練の方は、うちだけじゃ限界があつたでな」

できる限り戦闘スタイルは変えているが、やはり自分の癖は消せない。どうやっても一定のパターンが出来てしまうのだ。

なので、マチ達が相手をしてくれるのは非常にありがたい。

マチ、ノブナガ、ボノレノフは系統も戦闘スタイルも全く違うので、カルトにはいい刺激になるはずである。

「【発】は？」

「アタシは時々使ってる。ノブナガ達は使ってないよ」

「俺のは手加減が難しいし、ボノのは目立つからな」

「そらそうか。で、感想は？」

「確かに筋はいいな。まだまだ動きは遅えし、予想外の動きをされる」と持ち直すのに時間がかかるがな」

「そうだね。まだまだ反射が遅い。急所を狙ったら、避けるわけでも守るわけでもなく固まっちゃうよ」

「あく……そこはなあ。癖になつてしもとるみたいでなあ」

「理由は分かってるのか？」

「多分、ゾルディック家での訓練やな。寸止めが多かったんやろ。仕事もそこまで難しい相手を任されとらんかったみたいやし」

「なるほどね。10歳だもの。しょうがない部分はあるわね」

「やから、そのまま容赦なく気絶させまくって。その方が体が覚えるやろ」

「だな」

「了解」

カルトが気絶している間に、更なる地獄が決まった瞬間だった。その1時間後。

休憩しているとカルトが気絶から復帰した。カルトが身だしなみを整えていると、ラミナが声を掛ける。

「カルト」

「なに？」

「ほい」

「……え？」

突然カルトの背中への帯に棒が取りつけられる。

馬の鼻先に人参を吊るすかのように、カルトの頭の上や顔の前に計5個の輪っかがぶら下げられていた。

「……え？」

「念の修行。操作系の特訓」

「……どうするの？」

「紙手裏剣を操作して、この輪っかに全部通すこと。目標はどんな順番でも1秒以内で通過やな」

「……それくらいなら……」

「もちろん、移動中でもな。揺れる輪っかに正確に通すように。輪っかに触れたり、壊したらやり直しな」

「……」

カルトは輪っかを見つめて黙り込む。

輪っかは木のツルで出来ているので、非常に揺れやすそうだった。

「それと……」

「え」

「うちやマチ姉が時々小石投げるから、それをちっこい紙で撃ち抜いて壊すように。ちなみに小石には念を込めるからな。壊せんかったり、外したら、倒れるまで【練】。ただ、倒れてもうちらは手助けせんでな。まあ、足は止めたるけど」

「……もちろん輪っかの訓練をやりながらだよな？」

「当然」

「……。（むしろ厳しくなっただけなんじゃ？）」

カルトは背筋が一瞬寒くなる。

そして、ラミナ達は移動を再開し、カルトは地獄度が増した修行を開始する。

森の中なので道は凸凹しており、5つの輪っかは大きく縦横無尽に動き回る。

それをカルトは必死に紙手裏剣を操って輪っかに通していくが、1周するのに4分もかかった。

「く……い！」

「そろそろこっちも行くで〜」

「え」

輪っかに集中していたところにラミナの声が聞こえてくる。

カルトが啞然とすると、ラミナがビー玉サイズの小石にオーラを籠めて、カルトの目の前に山なりに放り投げる。

「ちよっ……!?!」

カルトは慌てて小さい紙切れを取り出して、オーラを籠めて小石に向けて飛ばす。

しかし、紙切れは小石に当たるも砕くことは出来ず、更に紙手裏剣の操作をミスリ、輪っかの縁に当たって1つ壊してしまう。

「あー！」

「ほい、アウト〜。ちよいと早すぎるから、【練】をしながら輪っか通し続けえ。もちろん歩きながらなく」

「うぐ……い！」

カルトは歯軋りして、【練】を始めて4つに減った輪っか通しを続ける。

しかし、案の定1時間経過した頃にガス欠で崩れ落ちる。

「流石に足は止めれんなあ。ほれ、カルト。とりあえず、歩けや」

ラミナはカルトの背中から棒を抜いて言い放つ。

カルトは汗だくでフラつきながら立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。

マチやノブナガ達はカルトの様子を苦笑しながら見つめていた。

「ラミナがただ優しいわけねえのにな」

「合理的な分、時々アタシ達より無茶なこと言い出すからね」

「まあ、ラミナがやらせてる以上、ある程度成長が見込めるってことだろ」

「あの子は地獄でしょうけどね」

ラミナは冷静に分析した結果、『このレベルで行ける』と思えば、それを容赦なく相手に課す癖がある。

それは仕事の時も同様で、サラッとクロロ並みに無茶苦茶な提案をするのだ。

そして、その提案は『きついで、確かに出来ないわけではない』というギリギリのラインを攻めてくるのだ。

なので、今のカルトに課している修行も、『カルトならばすぐに出来る』と判断しているからこそそのものだ。

やらされる本人は苦行でしかないが。

「ま、アタシ達の仲間になるなら、これくらいクリアしてもらわないとね」

「だな」

その後、移動を重視するということで、【練】と【絶】を交互に行わされることになった。

崩れ落ちては立ち上がり、回復したら【練】を始める。

それを街に着くまで繰り返させられる。

その間、一度も手助けはなく、1時間だけ休憩しただけだった。

そして、夜になった頃。

ラミナ達は【リーメイロ】に到着して、宿を取る。

カルトは晩ご飯を食べたら、そのまま気絶するようにベッドに倒れて眠りについたのだった。

ラミナ達はそれを横目に酒を飲んでいた。

「そういえば、あれから誰も襲つとらんのか?」

「いや、3人くらいカード奪って殺したな」

ボノレノフが答えてパクノダを見る。

パクノダは頷いて、本を取り出してラミナに見せる。

「……………は? Sランクカード?」

指定ポケットに『No. 9 豊作の樹』『No. 16 妖精王の忠告』というSランクカードがあった。

『妖精王の忠告』に関してはカード化限度枚数は6枚とレア中のレアである。

他にも3枚ほど指定ポケットにカードがあった。

「ああ、それね。『宝籤』って呪文カードで出たらしいわ」

「ふうん……。呪文カードでも手に入るんやなあ。お、呪文カードは結構手に入ったんやな」

「ええ。と言つても、私達にはあまり必要ないカードばかりだけど」

「レアカード持ってた奴らは、もしもの取引のため。呪文カードはどこかの攻略組のメンバーだったみたいだよ」

「なるほどな。まあ、いらん呪文カードはシャル達にでもやればええやろ。『交信』と『同行』が3枚、『離脱』が1枚か。これがあるだけでも助かるわ」

移動手段と連絡手段があるだけでも、非常に助かる。

なので、呪文カードがあればあるだけありがたい。

「それにしてもよ、全然見つからねえな」

「そりゃあ、この島の中からたった1人を探し出すわけだからな」

「ヨークシンでのクラピカ探しより範囲広いんやで？ しかも、情報ほぼなし。そりゃあ1か月程度じゃ見つからんやろ」

ノブナガのボヤキに、ボノレノフとラミナが呆れながら言う。

ただでさえ広いのにネット環境はなく、島を出る手段が複数あつてどれも確認することが出来ない。しかも、出た先を調べる事も出来ず、いつ戻ってくるかも分からない。

電話さえ通じないので、連絡を取るのも一苦労。さらに、島内の移動は歩きか、呪文カード。これまた探すのが一苦労な要因である。

「街におるかどうかも結構賭けなんやで？ 森や山に引きこもつとつたら、もうお手上げに近いわな」

「ちっ……。ゲームの外でも探した方がいいんじゃないやねえか？」

「ここで人手を割くのは悪手よ。それこそ見落とす可能性が更に高くなるわ」

「つちゆうごとやな」

ただでさえ二手に分かれている。

これ以上人手を減らすのは悪手でしかない。

パクノダとカルトの能力だけが頼みの状況なのだ。ラミナ達のようにプレイヤー狩りをしている者が他にもいる状況では、ノブナガとボノレノフの戦力は必要不可欠である。

この前襲われたゲンスルー達にパクノダとカルトが襲われれば、もしもの可能性があるのだ。なので、1人になるような状況は避けたい。

「時間がまだかかりそうやったら、一度今クロロがおる拠点を変える。そろそろヒソカとか賞金首ハンターが何かしら情報を掴んでもおかしくないでな」

「……そういえばヒソカの奴がいたね」

「ゾルディック家には口止めしとるけど……。イルミの奴はヒソカとも親交があるでな。無理矢理執事から情報を引き出して、ヒソカに売り渡すかもしれん」

ラミナは僅かに眉間に皺を寄せる。

ゾルディック家の中でも、イルミはやや特殊な立ち位置にいる。

当主であるシルバや祖父のゼノの完全な支配下におらず、ある程度自由を認められているようなので、ヒソカに情報を売る可能性を否定できないのだ。

かなり狡猾な性格であるのは理解しているので、イルミに利益があれば迷いなくヒソカに情報を売るだろう。

それが今、一番の懸念材料でもある。

ヒソカがクロロの前に現れても殺すことはないだろうが、ここでヒソカがこのゲームに参加されても面倒でしかない。

ぶつちやけ、ヒソカと手を組む利点はほぼない。

人手が増えるのはありがたいと言えはありがたいが、信用できないし除念した瞬間にクロロに戦いを挑まれても面倒である。

「マサドラ辺りで待ち構えられたら、誰かは見つかるやろうな」

「それならそれで殺しやいいだけだろうが」

「まあな」

ノブナガの言葉にボノレノフが頷き、ラミナとパクノダが苦笑する。

マチはふん！と不機嫌に鼻を鳴らし、酒を傾ける。

そして、ラミナ達も休んで、除念師探しに備えるのだった。

数日後。

やはり除念師探しは依然と前に進んでいなかった。

カルトは見つからない状況と、厳しさを増した修行の疲れでゲツソリとしていた。

「まあ、除念師が見つからないのはどうしようもないな。何度も言うてるけど、手掛かりが一つもないし」

「……うん」

ラミナは苦笑しながらカルトの頭を撫でる。

疲れ切っているカルトはその手を振り払う元気もなかった。

「けど、確かに何かしらきつかけが欲しいわよね」

マチも眉間に皺を寄せ、腕を組んで悩まし気に言う。

ラミナもそれに頷き、何か策はないか考えるが名案などそう簡単に思い浮かぶわけではない。

昼時となり、パクノダ達と合流して昼飯となった。

そこでパクノダが、

「少し面白い話を聞けたわ」

「なに？」

「ラミナが言ってた全滅した呪文カードを集めた連中。生き残りがいるかもしれないらしいわよ？」

「……なんやて？」

「バツテラに雇われた連中で、一番最近ゲームに参加したプレイヤーと会ったの。そいつがね、例の集団の誘いを断った時に参加したメンバーを聞いてたらしくてね。他のメンバー全員がボマーにやられたのに、そいつだけ未だにゲームに参加状態になってるらしいわ」

「……ほお〜」

「ちなみにボマーの名前も分かったわよ。ゲンスルー。その全滅させたグループの創立メンバーだったらしいわよ?」

「あ? ゲンスルー?」

「なに? 知ってるの?」

ラミナの反応にマチが訊ねる。

「クロロの所から帰ってきた時に襲ってきた連中や」

「は? 襲われたのかよ?」

「ああ。返り討ちにしたけど、逃げられてしもてな。うちも呪文カードで変な場所に飛ばされてしもたし」

ラミナはマチ達と合流した後、『念視』の呪文カードでプレイヤーリストを確認していたのだ。

サブとバラという名前は憶えていたので、その前に表示されていたゲンスルーという名前を確認していた。

実はラミナ、カルト、マチは、それより前に依然ゲンスルーの名前を聞いていたのだが、全く覚えていなかった。

「あいつがボマーやったんか」

「強いのか?」

「パク姉とカルトは厳しいかもな。仲間が2人おって、そいつらもそこそこ動ける。まあ、うちらやったら問題ないわ」

「なんでえ。その程度かよ」

「ただ、60人近い連中を一気に全滅させたんや。能力はそれなりに強力なんやろうな。その分、制約は面倒なはずや。パク姉、うちの記憶読んでマチ姉達に撃ち込んで」

「了解」

食事を終えたラミナ達は、街の外の森へと移動する。

パクノダがラミナに触れて、記憶を吸いだし、拳銃と【記憶弾】を具現化する。

「行くわよ」

そして、マチ、カルト、ノブナガ、ボノレノフの額に撃ち込む。

4人の頭の中にラミナが戦ったゲンスルー達の姿が流れ込んでくる。



「……へえ、面白い能力だね」

「こんなこと出来たのか」

「まあね」

マチとボノレノフは感心し、カルトは未だに流れ込んでくる記憶に啞然としていた。

パクノダは肩を竦める。

「戦った感じからすると、触ることが発動条件っぽいな。多分、集団を全滅させた能力とは別に戦闘に特化した能力もあるはずやな」

「残りの2人はよく分からないね」

「能力を使う雰囲気もねえな」

マチとノブナガが、サブとバラの方に注目して腕を組む。

「まあ、1人はそれなりの深手を負わせたでな。カードで傷を癒すもんが無い限り、すぐには戦えんはずや。パク姉とカルトも1人にならんようにすれば、いきなり殺されることはないやろ」

「まあ、顔が分かってんだから、こっちから近づかなけりやいいだろ」

「そうね」

「そういえば、生き残った奴の名前は分かるとるんか？」

ラミナはパクノダに話の続きを訊ねる。

パクノダは腕を組んで、

「アベンガネっていう黒人の男よ」

「アベンガネ……」

ラミナは本を具現化して、『念視』のカードを嵌める。

プレイヤーリストが表示され、ラミナはアベンガネの名前がないか探す。

「……うちは会つとらんな。全員、一度確認してんか？」

「了解」

カードを外して、ラミナはマチに渡す。

順番に確認するが、残念ながら誰もすれ違っていなかった。

「シャル達の方も聞いてみたら？」

「せやな。ちよいと聞きたいこともあるし」

「聞きたいこと？」

「ちよいとカルトのことだな」

「ボク？」

カルトは首を傾げる。

ラミナは面倒気な表情を浮かべて、

「クロロの所に戻るときに、ゴンと会ってしもてな。キルアはなんやハンター試験受けとるらしくておらんかったけどな。けど、戻ってきたらゴンが話さんわけないし。そうなれば『念視』や『交信』を使われれば、お前の名前が出る。そうなれば、キルアは間違いなくお前に接触を図るやろうな」

「え……」

「今はまだ会いたあないんやろ？」

「……うん」

「それでちよつと思いついたことがあつてな。シャル達に聞きたいねん。ちちゆうわけで、『交信』オン！ シャルナーク！」

ラミナは呪文を発動し、シャルナークに通信する。

「シャル、今ええか？」

『ラミナ？ どうした？』

「報告が1つ。除念師かもしれん奴が見つかった。アベンガネちちゆうプレイヤーや。こちらは誰もすれ違つたらん。そつちも確認しとつて」

『了解』

「それともう1個。シズクやコルつてメモリーカード使つとるん？ 前に入った時やけど」

『いや、使つてないよ』

「じゃあ、一度ゲームを出した場合、データはセーブ出来んやんな？ 今回入った時、もう1回プレイヤー名を登録し直したんか？」

『ああ。そのはずだ』

「なるほどな。おおきに。じゃ、そつちも頼んだで」

『ああ』

通信を終えて、ラミナはカルトに顔を向ける。

「カルト。『離脱』で一度ゲームを出ろ。んで、また入り直して、プレ

イヤー名変えてこいや。アナグラムとかやめとけや」

「いいけど……。ここまで、また戻ってくるの？」

「うちがスタート地点まで迎えに行くわ。ああ、それとクロロにマチ姉達の事は話すなや。お前が旅団に受け入れられたこともな」

「分かった」

『離脱』オン！ カルト！」

呪文カードを使用して、カルトをゲームの外に飛ばす。

飛んでいくのを見送ったラミナは、マチ達に顔を向ける。

「じゃあ、うちも行ってくるわ。すぐ戻ってくるから、街で待って」

「いいけどさ。なんで団長に話すななんて言ったの？」

「そら、クロロに刺さつとる念の鎖が反応したら困るやろ？」

「……そういうことね」

ラミナの懸念を理解したマチは頷く。

ノブナガ達も納得するように頷き、ラミナは『同行』でルビキユータに飛ぶ。

ルビキユータに到着したラミナは、駆け足でスタート地点に向かう。

30分ほどで到着すると、すでにカルトが到着していた。

「早やかっただな」

「誰もいなかったから、さっさと戻ってきた」

「クロロの奴、出かけとったんか」

「うん」

「で、なんて名前にしたんや？」

「単純に『アイン』にした」

「まあ、それならよおある名前やし。大丈夫やろ」

ラミナは頷きながら『念視』を本に嵌める。

カルトの名前の横にあるライトは暗くなっており、アインの方が明るくなっていった。

「よし、上手く行つとるな。じゃ、戻ろか」

「うん」

『同行』オン！ リーメイロ！」

ラミナとカルトは再びマチ達と合流する。

その数日後。

キルアがグリードアイランドに戻って来た。

そろそろ戻ってくるかと思っていたゴンとビスケは、スタート地点近くで待っており、キルアの姿が見えたので駆け寄る。

「おかえり、キルア！」

「おう」

「試験どうだった？」

「もちろんソツコー合格!! むしろ帰ってくるのに時間かかって、しんどかった」

「流石だね！」

ゴンとキルアはハイタッチして喜び合う。

そこにビスケが声を掛ける。

「喜んでいるところ悪いけどさ。呪文カード見て頂戴な。それに伝えときたいこともあるし」

「伝えたいこと？」

「とりあえず、場所を変えましょ」

「ああ」

「うん」

ゴン達は修行していた岩石地帯に移動して、話し合いを始める。

もちろん話題は、

「ラミナがここに？」

「うん」

「理由は聞けたか？」

「偶然このゲームを見つけて、お宝がないか下見だつて言った」  
「……ふうん」

「クロロはまだクラピカの鎖を外せてないみたいだったけど……。他の団員はここに呼ぶかもみたいなことも言ってた」

「まあ、奪われた1個目のジョイステはあいつらの仕業だろうからな。」

メモリーカードは1人か2人くらいにしておけば、1つのジョイステでも旅団全員がゲームに入ること自体は出来る」

「そっか……」

「ところで、ラミナは1人だったのか?」

「1人だったけど……。どうして?」

「ハンター試験受けるまで案内人の家で待ってる時に、ちよつと兄貴から聞いたんだけど……。今、俺の弟がラミナと一緒にいて、旅団に入団したらしい」

「え!?!」

「あんたの弟ってことは、ゾルディックってことだわよね?」

「当然だろ。しかも、ラミナの奴、A級首になって懸賞金も20億まで跳ね上がったらしいぜ」

「ええ!?!」

「まあ、幻影旅団とゾルディック家と繋がりがあるんだったら、それくらいは当然だわね。むしろまだ安いくらいだわさ」

「ああ」

キルアの言葉にゴンは驚くが、ビスケはむしろ当然とばかりに頷きながら言う。

それにキルアも同意する。

「けど、ちよつと違和感があるな」

「違和感って?」

「ラミナがクロロの除念よりも、こんなゲームを優先したことさ。別にあいつらはバッテラに雇われてるわけではないし、ぶつちやけこのゲームのアイテムにそこまで価値があるとは思えない」

「だから、それを下見に来たんじゃないの?」

「どうやって判断するんだよ? 指定ポケットカードすら全部判明してないし、そもそもどんなアイテムかまでは分かんないんだぜ?」

「あ、そっか」

情報屋や呪文カードで調べられるのは、あくまで名前と手に入られる場所、良くて入手手段である。

それがどんなカードで、どんな効果を持っているかは手に入れた者

しか分からない。

なので、このゲームにお宝があるかどうかを判断するには全てのカードを手に入れなければ判断しきれないはずなのだ。

「手間だからじゃないの？ 盗賊が大真面目にカードを集めるなんてしないだろうし、お宝を手に入れるにしても時間がかかり過ぎると判断するには十分だわさ」

「まあ……そうだな」

「それに私達が会った時はゲームを出る気だったみたいだし、もういないかもしれないわ。だから、今は自分達のことには集中しましょ」

「……だな。よし！ 呪文カードだっけ？ 見せてくれよ」

「うん。ブツク！」

キルア達は気持ちを切り替えて、呪文カードを確認することにした。

しかし、その後試した『交信』で、ラミナがまだゲームにいる事とカルトの名前があった事に再び頭を悩ませることになるのだった。

## #69 ジゴク×ハ×フカク

キルアは盛大に眉間に皺を寄せて、プレイヤーリストを睨みつけている。

もちろん睨みつけているのは、ラミナとカルトの名前である。

「カルトっていうのが、キルアの弟の名前？」

「ああ」

「けど、名前の横が暗いってことは、もうゲーム内にいないってことじゃないの？」

ビスケの指摘通り、カルトの横のランプは消えている。

それはグリードアイランド内にあることを示していた。

「そうだな……。けど、ラミナがゲーム内にいるのは事実だ。ってことは、下見って言う話は嘘の可能性が高くなったってことだ」

「じゃあ、旅団がこのゲームクリアを目指してるってこと？」

「それは分からない。もしかしたら、別の目的があるのかもしれない」「別の目的って？」

「分かるかよ、そんなの」

「じゃあ、聞いてみる？」

「馬鹿かよ！ あいつが正直に答えるわけねえだろーが！」

「そうだね。それにゲームクリアが目的なら、どうせどこかでぶつかると思うわよ？ もし旅団が来てるなら、あつという間にカードを集めていくだろうし、ゲンスルーみたいに他のプレイヤーから奪うことだって躊躇わないだろうからね。というか、ゲンスルーよりもよっぽどヤバイかもしれないわさ」

幻影旅団は団長を除けば12人。

12人全員がゲームに入ってくれば、ゲンスルーの名前が霞む程の被害が出る可能性は高い。

もし戦うようなことになれば、ビスケと言えどゴンとキルアを守る余裕はないだろう。それどころか、ビスケとて一瞬で殺されかねない。

「今は修行とゲーム攻略に集中するわよ。出会ってすぐに殺されない

ようにしないといけないしね」

ビスケの言葉にゴンとキルアは頷く。

しかし、

「しばらくしても、まだゲームにいたら一度会ってみようよ」

と、ゴンが言う。

「本気かよ？」

「ラミナならいきなり殺しに来たりしないよ。欲しいカード渡せば、見逃してくれると思うけど」

「まあ……そうかもしんねえけどさ」

「はいはい！ とりあえず、今はその話は後！ キルア、修行の成果を見せなさいな。ゴンもあんたに見せたいだろうしね」

「ああ」

キルアとゴンは別行動していた間の修行の成果を見せることにし、ゲーム攻略を進めていくことにしたのであった。

ラミナ達はアベンガネを探しながらも、アベンガネが除念師ではない可能性を考慮して、今までの通り街にいるプレイヤー達を探っていた。

しかし、アベンガネの事を知っている者は少なく、情報はあまり集まっていない。

「まあ、アベンガネはゴン達と同じタイミングで始めた奴やしなあ。知っとる奴は少ないやろ。そんで、本人が自分の名前を言うわけないでな」

「結局、手間が増えただけじゃないの？」

「名前が分かっとなるから、シャル達の方でもプレイヤーリストを確認すれば見つかる可能性はあるでな。アベンガネは見つけさえすりゃあパク姉の能力で探れる」

「なるほどね」

「うちゅうわけで……」

ラミナはカルトの頭を掴む。

「え」



「お前の修行をレベルアップする余裕が出来たっちゅうわけやな」  
「……………え」

カルトは目を見開いて固まる。  
ラミナはニヤリと口元を歪める。

カルトは背中に冷や汗が流れるのを感じ、マチは腕を組んで呆れる。

「念は今の修行でええけど、体術の方はそろそろ一対一も飽きてきたやろ?」

「ま、まさか……………」

「おう。今からうちとマチ姉、同時に戦ってもらおか」  
「……………」

カルトは顔を青くして頬を引きつらせる。

「もちろん、こちらは【発】はなし。それと【流】と【硬】も使わんでおいてやるわ。お前は何でも使うてええで」

「……………死なない?」

「お前の頑張り次第、やろなあ」

「……………」

「ほれ、行くでえ」

カルトの後ろ襟を掴んで、ヒョイと背中に担いでぶら下げて歩き出すラミナ。

その後ろをマチは苦笑しながら付いて行き、カルトは暴れるもビクともせずに街の外へと運ばれていくのであった。

街の外にある森に連れ出されたカルトは、眉間に皺を寄せて目の前にいるラミナとマチを睨みつけていた。

ラミナとマチは腕を組んで、カルトを見据えていた。

その雰囲気はそっくりで、血が繋がってないという方が信じられないくらいだった。

「覚悟は出来たか?」

「……………出来てなくてもやるんでしょ?」

「そら、もちろん。けど、出来とる方が——」

突如、ラミナの姿がブレて、カルトの視界から消えた。

カルトは目を見開いて、視線だけを左に動かす。その視線の先には、腕を組んだまま右脚を振り上げるラミナの姿があった。

「うちらも楽しめるやろ？」

カルトはギリギリで左腕を顔の横に上げて、ラミナの蹴りをガードする。

しかし、力負けして右に蹴り飛ばされそうになったので、自ら右に飛んでダメージを減らして体勢を崩すのを防ぐ。

「ぐっ……！」（なんであんな軽く放った蹴りで、こんなに重い……!?!）

それでも想像以上の衝撃にカルトは顔を顰める。

カルトは扇子を広げようとする、背後に寒気を感じた。

「!!」

慌てて真上に跳ぶ。

直後、カルトの真下に風を切り裂くような蹴りが猛スピードで通り過ぎる。

マチがそこにいた。

（相変わらず速いって……!）

カルトは歯軋りして体勢を整えようとするが、すでにラミナがカルトに跳び迫って来ていた。

「っ！」

「ほれほれ、もっと周囲に気を配らんかい。相手は1人やないんやぞ」

ラミナが右拳を構えて、右ストレートを繰り出す。

「このっ！」

空中にいたカルトは扇子を刃のように振り抜く。

すると、ラミナは右ストレートを途中で止めて、腕を引っ込める。

「!?（あのタイミングで止められるの!?）」

「後ろがお留守だよ」

「っ!? がっ!!」

カルトは目を見開いて驚いていると、すぐ後ろからマチの声が聞こえ、その直後に右脇腹に衝撃を感じて横に吹き飛ばされる。

右フックを叩き込んだマチは、同じく空中にいたラミナに右手首を掴まれて引つ張られる。

更にラミナは左脚を上げて、その上にマチが乗る。

「だらっ!!」

ラミナは全力で腰を捻って、左脚を振り抜く。

それと同時にマチがラミナの脚を踏み台にして、勢いよく飛び出す。

「なあ?」

カルトは痛みも忘れて、目を見開く。

「連携しないなんて言っていないよ」

「ぐっー!」

一瞬でカルトに飛び迫ってきたマチは、鋭いラツシユを繰り出す。

カルトは両腕で首と頭を守り【堅】を発動するも、ラツシユは全弾腹部に叩き込まれる。

「ぐお……!!」

「ほら。ボーっとしてると……もう1人が来るよ」

「っ……!」

腹部を押さえながら地面に下り立ったカルトは、マチの言葉に本能的に視線を左に向けると、ラミナがすでに拳を構えた姿ですぐ目の前にいた。

(だから……速すぎるって……!)

カルトは心の中で愚痴りながら、すぐに左腕で首と頭を、右手の扇子を左脇腹に回して防御しようとする。

しかし、

「甘いわ」

ラミナが左脚を振り上げると、左脚が蛇のようにならねって左爪先がカルトの背中に突き刺さる。

「がっ!!」

カルトは肺の中の酸素が一気に排出され、一瞬意識が遠のく。

前のめりに体が倒れて行くと、ラミナは追撃で右掌底を防御が緩んだカルトの側頭部に叩き込んで、真横に押し飛ばして地面を数メートル

ル転がっていく。

ラミナはゴキゴキ!と左脚の関節を嵌め治しながら、追撃せずにカルトを見据える。

「**打蠅**」。腕のように細かいコントロールは出来んし、身体を貫いたり引き裂くとかも出来んけどな。脚だけあって威力はそこそ高いで」

「相変わらず器用だね」

「体の扱いに関しては、フェイにも負けん自信はあるでな。暗殺者が両手両腕の関節外すだけで終わらせるわけないやろ?」

マチは腕を組んで呆れた顔でラミナに言い、ラミナは肩を竦めて我慢げに答える。

カルトは咳込んでふらつきながら立ち上がる。

「げほっ! げほっ! ぐっ……!」

立ち上がったカルトにラミナとマチは顔を向ける。

「相手の動きを見てから動いとつたら、防御で精一杯やぞ?」

「アタシ達レベル相手じゃ、そりや致命的だね」

「ぐう……!」

「予測出来んのやったら、予測できるような状況を作り出さんかい。それとスピードで負けとる相手に跳び回るんは隙でしかないで。せめて、跳ぶと同時に紙吹雪出さんとな」

「……」

カルトはラミナとマチの指摘に歯軋りする。

その反応にラミナはため息を吐き、

直後、ラミナとマチが一瞬でカルトを挟み込むように移動する。

「!!」

「言われた時点で紙吹雪出さんかい、ド阿呆」

ラミナが右手を動かし、それにカルトが反応しようとする、マチが素早くカルトの首に手刀を叩き込む。

「がっ……! あ……」

「だから、行動が遅いよ。ラミナが動いた瞬間、アタシのこと頭から抜けてたでしょ」

カルトはうつ伏せに倒れて気絶し、マチは腰に両手を当てて呆れながら言い放つ。

ラミナもため息を吐いて、気絶したカルトを見下ろす。

「お前の能力は後出しで間に合うもんちやうやろうに……」

「シヤルミみたいに相手を操るなら仕方ないけどね。後はこの場にある物を操るとか。けど、この子の場合は自分で用意してるものだしね。むしろ、積極的に使って戦場に散らばしておくくらいしとかないと……」

「うちらレベル相手やと逃げるんも無理やろな。ま、今は反応が良くなってきただけでも良しとしとこか」

「甘いのか、厳しいのか……」

「飴と鞭を使い分けとるつちゆうこつちや。……で、いい加減鬱陶しいんやけど。なんか用か？」

ラミナとマチは背後に鋭く殺気を放つ。

途中からこちらをずっと見ている者達がいることに気づいていたのだ。

すると、10mほど離れた木陰から2つの人影が現れる。

顎髭を生やした長身の男と、頭にバンダナを撒いた大柄な黒人の男。

揃いの戦闘用軍服のような服を着た者達だった。

「すまない。少し見惚れてしまっていた。襲う気はない」

「……ふん。下手くそな嘘つくんじやないよ。何度か狙おうとした癖に」

「……」

「大方、『念視』でうちの本の中を見て、大したカードがないって分かったんやろ。それが分かるまでの間、うちらのことボマーとでも思っつて、動きを観察でもしとつたつちゆうところか？」

「……ふん。やはり、只者ではないか……。単刀直入に聞く。貴様達がボマーか？」

顎髭の男は眉間に皺を寄せ、すぐに警戒を全開にして問いかける。「ちやうちやう。それはゲンスルーつちゆう奴や」

「……ゲンスルー……。奴か……」

「違うって分かったんなら、とつとと消えな」

マチが苛立ちながら睨みつけて、男達に言い放つ。

一瞬だけ本気で殺気を放ち、男達は本能的に後ろに一步後ずさる。

「ぐ……！……分かった。すぐに去る」

男達は後ろに下がりながら本を出し、呪文カードを取り出す。

ラミナもすかさず本を取り出して、カルトの傍に立って攻撃に備える。

『同行』オン！ ソウフラビヘ！

男達はそのまま呪文カードで飛び立っていった。

ラミナは『念視』のカードを嵌めて、今の者達の名前を調べる。

「……ツエズゲラ、ロドリオット、バリー、ケース。後ろに隠れとつた奴らも名前出とるな」

「まあ、どいつがどいつだか分からないけどね」

もちろんラミナとマチは男2人の後ろに、まだ2人隠れていたことに気づいていた。

「まあ、ゲンスルー達よりは弱そうやったし、ほつといてええやろ。さっきのでうちらとの差を感じ取ったみたいやろうし、いきなり襲ってくる度胸もなさそうやし」

「まあね」

ラミナとマチは男達を無視することに決めて、カルトに意識を戻す。

カルトはまだ気絶したままだった。

「つたく……そろそろ、起きんかい！」

ラミナはカルトの後ろ襟を掴んで持ち上げて、背中を叩いて気付けをする。

「がふっ！ げほっ！ げほっ！」

カルトは咳込んで目を覚ます。

「ほれ、もう一回いくで」

「……ちよ、ちよつと待って……」

「十分寝て休んだやろ。ほれ!!」

ラミナはカルトを放り投げて、カルトは慌てて体勢を立て直して着地する。

そして、再び地獄の特訓が始まり、その後カルトはラミナとマチのコンビネーションに手も足も出さず、5回も気絶をさせられたのだった。

ソウフラビ近くの砂浜。

ラミナ達から逃げたツエズゲラ達は、冷や汗を拭っていた。

「ふう……。とんでもない奴らだったな……」

「戦闘になっていたら、ヤバかったかもしれないな……」

「かもではなく、確実に全滅していただろうな。あんな奴らがここにいたとは……」

顎髭の男、ツエズゲラは顔を顰める。

「けど、おかげで情報も手に入ったな」

「ゲンスルーはボマー、か」

ツエズゲラ達もゲンスルーの事は知っていた。

例の全滅したと言われているアベンガネがいたチームに所属していたのを、覚えていたのだ。

全滅したはずなのに生きており、しかも一気にランキングの上位に上がって来たので疑ってはいた。

それに以前話した時に、急にボマーに関する話題が変わったことに違和感を感じていたのだ。

「しかし、連中はどうやってそれを知ったんだ？」

「……もしや、あの『大天使の息吹』……」

ツエズゲラは仲間の言葉にある推測が頭に浮かんだ。

「『大天使の息吹』？」

「ゲンスルー組が独占していたと思っていた『大天使の息吹』。その『引換券』がこの前突如変わっただろう？ 奴らが何に『大天使の息吹』を使ったのか疑問に思っていたんだが、もしあの連中と戦り合っ  
てゲンスルーかその仲間の誰かが重傷を負ったのだとしたら？」

ツエズゲラの推測に仲間達は目を見開く。

『大天使の息吹』はゲイン待ちの場合、『引換券』というカードになる。

『大天使の息吹』は呪文カード40種類全てを手に入れることが条件で、ツエズゲラ達も条件を達成したのだが、その前にゲンスルー達が手に入れて『複製』で増やして独占していたのだ。

「ケース。連中の名前は分かってるか？」

「ああ。ラミナ、マチ、アインだ。指定ポケットカードは0。もしかしたら、ゲームに来たばかりなのかもしれない」

「そうか……。あのピンク髪の女……。見覚えがある」

ツエズゲラはマチの顔に見覚えがあった。

「ホントか？」

「ああ。だが……。どこだ……。？ 最近だと思っただが……」

「最近ってことは、この前ヨークシンのオークションか？」

「!! それだ！ あのピンク髪の女……。！ 地下競売を襲い、マフィアンコミュニティに懸賞金を懸けられていた連中の1人だ！」

「マフィアンコミュニティに喧嘩を売ったのか!？」

「しかし、死んだことで懸賞金は白紙になったはずだが……。逃げ延びていたのか」

「おいおい！ 冗談じゃないぜ！ ボマーよりよっぽど厄介じゃねえかよー！」

ケース達は拭ったはずの冷や汗が再び噴き出すのを感じ、心の底から戦闘にならなかつたことに安堵する。

ツエズゲラ達とて戦闘に一家言はあるが、マフィアンコミュニティに喧嘩を売るのは流石に不可能である。

規模だけで言えばハンター協会をも凌ぐマフィアンコミュニティに、喧嘩を売るなど自殺行為でしかない。

それを実行した集団の1人と、その仲間というだけで十分恐ろしい。

「隣にいた女もか？」

「……いや、あの残りの2人は載っていなかった。しかし、仲間なのは



間違いないだろう。ゲームの1つを奪ったのも奴らの可能性がある  
な」

ツエズゲラは腕を組んで、奪われたグリードアイランドのことを思  
い出す。

グリードアイランドに逃げ込めば、世間的に死んだと思わせるだけ  
の時間は稼げるし、好きな場所に移動できる。

「……他にも仲間がいるかもしれない。そいつらが指定ポケットカード  
を集めている場合、いずれ厄介なことになりかねん。ゲンスルー達も  
そうだが、今後プレイヤーとの接触は細心の注意を払うぞ。理想は奴  
らが潰し合ってくれることだがな……」

「それは下手したら、一気に99種類集まる可能性があるぞ？ ゲン  
スルー達はすでに90種を超えてるし」

「そうだな。そのリスクはある。それにゲンスルー達は一度やられて  
いる以上、奴らとは接触を避けるだろう。そうなれば、我々や他のプ  
レイヤー達に標的を移す可能性は高い」

厄介な敵が増えてしまったことにツエズゲラ達は顔を顰める。

しかし、ここでゲームクリアを諦めるわけにはいかない。

「今の所、あの女達に用はない。下手に刺激をしなければ問題はない  
だろう。問題はゲンスルーの方だ。奴らが独占しているカードをど  
うするかを今は考えよう」

ツエズゲラの提案に仲間達も頷く。

グリードアイランドはゲームクリアに向けて、更に加速していく。

ラミナやマチ達にその気は全くないのだが、その特異性故に嫌でも  
注目され始めるのだった。

## #70 ブンサン×ト×ソウグウ

2月中旬。

幻影旅団はルビキュータに集まっていた。

「全っ然見つかんねえじゃねえか。お前ら、真面目にやってんのか？  
ああん？」

フィックスが苛立ちを隠さずに、腕を組んでラミナ達を睨みつける。

それにノブナガも青筋を浮かべて、

「そっちだって見つかってねえだろうが。カードだって57枚って、  
まだ半分じゃねえかよ」

「んだとお……！」

「んだよ……！」

「やめなよ、2人とも」

「そうやで。んなこと言い合ってたって状況は変わらんで」

「それに団員同士のマジ切れご法度だよ」

一触即発状態のフィックスとノブナガに、シャルナークとラミナが  
呆れながら止め、シズクは掟を口にして宥める。

マチやフランクリン達もため息を吐く。

「でも、実際にこっちは手詰まりだね」

「こっちも今以上にペースが早められそうにねえしな」

「だから、ささと90種類以上も持てる連中からカード奪えばいいね」  
フェイタンが気だるげに言う。

ラミナもため息を吐いて腕を組み、

「それは最終手段や。まずはやっぱ除念師を見つけないと話にならん」  
「だな」

「けど、もう私の力じゃ見つけられないかもしれないわ」

「どうして？」

顔を顰めたパクノダの言葉に、コルトピが首を傾げる。

ラミナも顔を顰めて、

「アベンガネの名前は知っとしても、顔を知らん奴ばっかだな。どう

やら、ゲームに入つてすぐ例の集団に参加したみたいで、ゲンスルーに仲間をやられたせいで顔見知りがほぼ皆無の状態や。それと流石にパク姉のことがプレイヤー内で広まって来とる」

「それが何の問題があるんだよ？」

「ゲンスルーがボマーつちゆうことも広がってきとつてな。なんでも、ゲンスルーも妙に馴れ馴れしく声をかけてきて、体に触れてきたらしいで？ それで怪しんどる連中が出始めて、パク姉も警戒され始めとる」

ニツケス達がほぼ同時期に一齐に殺されたことから、ゲンスルーの能力が広範囲、または相手に直接付与する能力であることは予測出来る。

それに思い至った何人かが、『ならば、標的の体に触ることが能力発動条件の一つなのではないか？』ということにも思い至るは当然のことだろう。

それが広がっていき、多くの攻略を進めているプレイヤー達は相手に触られることを忌避するようになってきていた。

そのため相手の記憶を読むために相手の身体に触る必要がある。パクノダも、警戒対象となってしまうのだ。

「なるほどな……」

「ちなみにお前らも好戦的なプレイヤーとして、目立ってきてるぞ」  
シャルナークが顎に手を当てて考え込むと、ボノレノフがフィンクス達を手で指して言う。

正確にはフィンクスとフェイタン、フランクリンの3人が、であるが。

しかし、それでも各グループがゲーム内で目立ち始めているのは事実だ。

普通ならば、別に知ったことではないのだが、

「もしアベンガネって奴が除念師だった場合、俺達やパクノダから身を隠す可能性があるか……」

「そうなるよ、ちよつと面倒だね」

フランクリンが面倒気に眉を顰め、シズクが顎に指を当てて言う。

それにマチ達も同意するように頷く。

「つちゆうても、これ以上は更にチームを分けるくらいしか手がなあ」  
「そうだな」

ラミナとシャルナークが悩まし気に顔を顰めて、考え込む。

マチ達も悩まし気にするが、ラミナとシャルナーク以上の案が出るわけもない。

「少しチーム分けよか」

「どう分けるの？」

「シャル達は引き続き、指定ポケットのカード集め。ただ、出来る限り2チームに分けて行動してんか？ 出来ればすでに目立ってきたとるフィンクス、フェイ、フランで組んでほしいわ」

「3人を陽動……というか暴れさせて、俺達は別組として指定ポケットカードを集めながら情報収集してわけだな」

「そ。んで、うちらも分かれる。ただ、抜けるんはうちだけや。残りは引き続き5人で行動してほしい」

「理由は？」

「パク姉が目立って来とる以上ノブナガとボノも少なからず噂になるとるやろ。やから基本的にカルトの能力で探していくしかない。パク姉達は囷。マチ姉はカルトのお守り」

「ちよつと」

「まあ、カルトも大分強おなってきたから、そこまで一緒におらんでもええけどな」

「ラミナはなにすんだよ？」

「アベンガネがパク姉の情報を知つとつたら、パク姉を見つけたらすぐに街から逃げ出す可能性がある。やから、うちは他の街で待ち構えて、探す。フィンクス達やゲンスルーからも逃げると考えれば、攻略にあんま関係ない街や村に来る可能性が高いでな」

「なるほど」

ラミナの提案にパクノダや他の者は頷く。

マチは不服そうに腕を組んで、眉間に皺を寄せているが。

「うちもゲンスルーに会つとるしな。正直、今ここで一番バレたらあ

かんののはカルトや」

「カルトの能力が最後の砦だものね。これまで対抗されたら、本当にプレイヤー狩りに従事するしかないわね」

「出来れば、それは避けたいんよな。絶対ゴン達が出しやばってくるし」

パクノダの言葉に、ラミナが頷いてうんざりした表情を浮かべる。

プレイヤー狩りを本格化すれば、間違いなくゴン達が文字通り飛んでくるだろう。

gonはともかく、キルアは殺せないし、ビスケという不確定要素がいるので出来れば面倒事は避けたい。

正直、今もゴン達の耳にフィinks達の情報が届いてそうで気が気でない。

カルトもいる以上、キルアは殺せない。

カルトがキルアを本当に止められるのかも定かではない。

なので、まだゴン達とぶつかり合うのは避けたいのだ。

それに他のプレイヤー達とも結託されたら、それもそれで厄介である。

「カルトのプレイヤー名を変えさせたから、ゴン達が接触して来るのはうちのはずや。やから、うちが離れとる方がまだカルトの邪魔にならないと思う」

「ああ、そっちもあつたか」

「まあ、そっちはあくまでそうなればええなっちゅう感じやけどな。

お前らが先に見つかったら、意味ないでな」

「確かにそうね」

「見つけても殺さんとしてや。うちやカルトに押し付けてくれてええからな」

「分かった。じゃあ、早速行動再開だ」

シャルナークの号令と同時に動き出す旅団。

ラミナはマチ達とも別れ、一人でルビキュータを出す。

本を具現化して、呪文カードを取り出す。

『再来』 オン！ リーメイロ」

呪文カードを発動して、ラミナは「城下都市リーメイロ」へと移動する。

「……さて、こことその周囲の町や村が狙い目やな。ここらへんの指定ポケットカードはAランク以下ばかり……。手に入りやすいモンばかりや。ゲンスルーはもうすでに手に入れとるはずやし、他にも手に入れとる連中はぎよーさんおるはず。なら、ゲンスルー達がここに現れる可能性は低い」

なので、アベンガネが隠れる理想的な環境でもあるはず。

そして、今は噂になっていたパクノダもいなくなっているので、ここに再び現れる可能性は十分にある。

と言っても、ラミナはアベンガネの顔も知らないのでどうしようもないが。

とりあえず、ラミナは大通りに移動して、料理屋の外に置いてある席に座って料理を食べながら周囲の気配を探る。

1時間ほどそこで過ごし、代金を払って店を出る。

路地裏に入って本を取り出し、『念視』を嵌めてプレイヤーリストを確認する。

残念ながらアベンガネの名前はなかった。

「……デカい街は避けとるんかもしれないな」

そう考えたラミナは、情報屋に行きリーメイロ周辺の小さな町や村の場所を訊ねる。

「リーメイロ周辺には3つの村と町がある。北東に6 km、東に7 km、北西に9 kmだ」

「おおきに」

場所を確認したラミナは東を目指してリーメイロを出る。

駆け足で移動して、30分もせずに村へと到着する。

村はありふれた農村で、泊まる宿がある様には見えない。

「……逆に言えば、潜める場所には最適とも言えるな」

住民を説得さえすれば、隠れ住むことは出来る。

農業の手伝いなどをすれば、住民に紛れ込むことも出来るだろう。

このゲームの厄介なところはNPCであっても、想像以上にやりと

りは人間臭いところがあるということだ。仕事を紹介してくれるし、家も提供してくれる。

基本的に攻略に関わらないNPCでないかぎり、会話は比較的自由なのだ。

そのせいで攻略も脱出も諦めたプレイヤー達も問題なく仕事に就けて、住むことが出来る。

なので、人探しが非常にめんどくさいことになっている。

「ここまで自由度高いんやったら、独自にネット環境作り上げそうな奴出そうやけどなあ」

誰1人パソコンに詳しい者がいないというのも、違和感がある。

もちろん島中にネット環境を整えるのは無理だろうが、街の一角程度なら作り上げていてもおかしくはないとラミナは考える。

「……流石にそこまではジン達も許さんか。それに部品も揃わんか。ケーブルとかに関しては、この島にあるとは思えんし。外に出て持ち込めるなら、別にネットなんぞ造らんでええもんな」

すぐに自分で否定して、ラミナは除念師探しに意識を戻す。

村を一通り回って再びプレイヤーリストを確認するが、やはり名前前は出なかった。

「ハズレか……。まあ、しゃあないわな。頭が切れる奴なら、ここに来る可能性も考えとるやろうしつて、あく……」

ラミナはあることに思い至って、右手で顔を覆う。

「……ゲンスルー達はすでにアベンガネをプレイヤーリストに登録しとる。ちちゆうことは、アベンガネからしたら別にマサドラやドリアスにおつても見つからんかったらええだけやないか……」

サブとバラは分からないが、サブとバラは例のグループにいなかったようなので、そもそもアベンガネの名前や顔を知らない可能性が高い。

つまり、アベンガネにとつては知り合いに会わないようにすることが最も注意すべき点となる。

しかし、知り合いとなると、すでにプレイヤーリストに登録されているはずだ。なので、近くにいようと見つからなければ、問題はない。

『追跡』のカードは近距離呪文カード。なので、目の前にいなければ効果はない。

遠距離の呪文カードで他のプレイヤーの居場所を探すものはない。つまり、身を隠せば比較的逃げられる可能性は高くなる。

『同行』『磁力』『交信』を使われれば、逃げようがないが。

しかし、そこまでして追いかけるのはゲンスルーくらいだろうし、ゲンスルーも気づいていたとしても『あの程度の雑魚ならば放置していてもいい』と考えるかもしれない。

普通ならば、どうやって能力から逃れたのか確認するために追い詰めて、話を聞いたら殺すだろうが。

「変装は……出来るか。このゲーム、ある程度の服は手に入るし」

ブランド物は無理だが、このゲーム独自の服屋は営業している。変装しようと思えば、問題なく出来る。

金さえどうにかすれば、であるが。

「とりあえず、他の町も見て回るか」

ラミナは他の町にも素早く移動して、アベンガネを探しに行く。

しかし、やはりアベンガネは見つからず、ラミナは他の街へ行くことにした。

「呪文カードはないから徒歩で移動やけど……。ここから一番近いんがアイアイつちゆうんがなあ」

【恋愛都市アイアイ】。

ラミナはあの街は出来る限り避けたかったが、行かないわけにもいかない。

あの街はパクノダやカルトの能力とは相性が悪い。

街は常に騒がしく、人が入り混じる。

あれだけ（ムカつく）出会いに溢れた街だ。

必要なカードを手に入れば、さっさと出て行くプレイヤーも多いだろう。

なので、隠れ場所に適していると言えば、適している。

「……はあく……」

ラミナはため息を吐いて、徒歩でアイアイに向けて移動を始めるの



であった。

その頃、ゴンとキルアはソウフラビにいた。

「しかし、勧誘って言っても難しいな……」

「呪文カードはあまりないぜ。引き入れに失敗は許されないと思った方がいい」

そう言うのは、ゴレイヌというゴリラ顔のプレイヤーである。

ゴンとキルア、ビスケは他のプレイヤーから声をかけられて、ある集まりに参加した。

それはクリアしそうなゲンスルー達をどうにかして阻止したいという名目で、情報交換をするものだった。

集まりに参加したゴン達は、『ゲンスルーの能力』と『No. 75 奇運アレキサンドライト』の情報を提供し、カード交換をしたりしてゲンスルー達への対策を考えることになった。

そこで一番手っ取り早いのは、ゲンスルー達が持っていないカードの独占だった。

しかし、ほとんどのカードはすでに他のグループが所持しているモノばかりで、唯一残っていたのは『No. 2 一坪の海岸線』だった。集まった者達全員でソウフラビに移動し、情報収集を行おうとした。

すると、なんとあつという間に情報が集まり、それどころかイベントが発生したのだ。

今まで誰も見つからなかったのが不思議でしょうがなかったが、メンバーの1人が『15人以上で『同行』を使ってソウフラビに訪れるのが条件なのでは?』と推測した。

そして、海賊の拠点へと向かい、レイザーという頭目と出会う。

「1チーム15人。1人1勝で、先に8勝した方の勝ち。バトル形式はスポーツだ」

ということとで、早速始めたがキルア達はメンバーの実力不足を即座に見抜いて、再度挑戦するための情報収集へと切り替えてわざと負けることにした。

敗北して追い出されたメンバー達だが、『むしろこのまま放置していた方が、ゲンスルー達への対策になる』と言って解散することになった。

そうして残ったのは、ゴン達3人とゴレイヌの4人となったのだ。た。

今は作戦会議でソウフラビの飯屋にいた。

「確かにゲンスルー達はそのままじゃ手にいられないだろうが、だからって放置したら俺達だってクリア出来ないし、手に入れた瞬間ゲンスルーに襲われちまう」

「だよな。むしろ、ゲンスルー達がまだ他に手に入れるカードがある今のうちにゲットしとくべきだ」

ゴレイヌとキルアはお互いの意見に同意する。

「悪いが、俺の方には心当たりはない……と言うと語弊があるか。強い奴はいるが、多くても2, 3人のチームだ。確実にカードの取り合いで揉める」

ゴレイヌの言葉にゴン達は頷くも、すぐに眉間に皺を寄せて唸り始める。

『一坪の海岸線』のカード化限度枚数は3枚。

15人以上のグループでは絶対に分けられない。

仲間割れをほぼ確実に誘発するイベントと言えるのだ。

なので、仲間集めは慎重な人選と交渉が求められる。

「って言っても、俺達もそこまでプレイヤーと関わってきたわけじゃないしな」

「顔と名前が一致しないプレイヤーって多いよね」

「となると……やっぱラミナだよなあ」

キルアはラミナの顔を思い浮かべて顔を顰める。

ラミナがゲーム内にまだいるのは、毎日確認していた。カルトに關してはずっと名前の横が暗いままなので、ゲームにいないと考えられるが、何故かラミナはずっとゲーム内にいた。

「強いのか？」

「かなりね。俺とゴンが束になって挑んで、ようやく互角ってとこ」

「なら、誘うだけ誘ってみればどうだ？」

「ん〜……けどなあ……」

「どうしたんだ？」

「ラミナは幻影旅団の団員なんだよ」

「げ……!!」

ゴレイヌは旅団の名前に目を見開いて固まる。

「な、なんでそんな奴と知り合いなんだよ……？」

「会った時はまだ違ったんだよ。団員になったのは最近。まあ、ずっと前から旅団とは知り合いだったけどさ。同郷だつて言つてたし」

「旅団がこのゲームになんで参加してるんだよ……」

「知らねえよ。それを聞いて答えてくれるとも思えないし」

「だけど、仲間にすれば凄く心強いよ。知らない人を誘うくらいなら、まずラミナに声をかけるべきだよ」

ゴンはラミナを誘うことを提案する。

しかし、キルアとゴレイヌは顔を顰めて、やや難色を示す。

そこにビスケ（猫被りモード）が声を上げる。

「彼女は殺し屋でもあるのでしょうか？ ならば、報酬や取引を持ち掛ければ可能性はあるのでは？」

「……そうかもだけど……」

「とりあえず、そいつの目的がゲームクリアかどうか確認したい」

「どうやって？」

「それが出来ねえから困ってんじやん」

ビスケの言葉にキルアは渋り、ゴレイヌがラミナの目的を探ることを提案する。

ゴンやキルアが首を捻り、それにゴレイヌが少し呆れた表情を浮かべて、

『念視』を使いよ

「……」

「そいつがゲームクリアが目的なら、カードをそこそこ集めてるはずだ。違う目的ならカード集めには興味はないはずだ」

「なるほど……。ゴン」

「うん」

キルア達は納得して、早速『念視』を本に嵌める。

プレイヤーリストが表示されて、ラミナがまだゲーム内にいることを確認して呪文を発動する。

ラミナのカードデータがすべて表示される。

「指定ポケットは0だよ」

「フリーポケットは食料、着替えに金。後は移動用の呪文カードと『念視』だけか……」

「なら、まだ誘いやすいな。クモってところは不安だが、顔見知りのお前達が問題ないって言うなら任せるさ」

「とりあえず、会ってみようよ。なんでここにいるのかも知りたいし」「教えてくれるとは思えないけどな」

「そうかもしれないけど、聞かないと分かんないんだから。会うしかないじゃん」

「まあ、そうだけどき……」

「とりあえず、他の候補者も考えようぜ。そいつは1人なんだろう？」

「流石に他の団員がいたら無理だな。けど、もう俺達じゃ他に思いつく奴はいないぜ？」

キルアは腕を組んで、顔を顰める。

そこに再びビスケが声を上げる。

「会っていない人のなら、心当たりあります」

「誰だ？」

「ツエズゲラさん」

ツエズゲラの名前にゴン達は納得の表情を浮かべる。

しかし、ゴレイヌが眉間に皺を寄せて、

「あいつらもボマー組と同じくらいのカードを集めてる。あまり仲間にしたくはないな」

ゲンスルー達のゲームクリアを阻止するためでもあるのに、ツエズゲラがゲームクリアしてしまったら意味がない。

「と言っても、俺達誰もツエズゲラと会ってないから交渉しようがないんだけどな」

「あはは……そうだね」

キルアの言葉にゴンは苦笑いを浮かべるしかなかった。  
そして、翌日。

ゴン達はラミナに会いに行くことにした。

「じゃ、行くよ」

「ああ」

『同行』オン！ ラミナ！

呪文カードを発動して、ゴン達は空を飛ぶ。

キュイイイイイン！！

「……ん？」

ラミナは近づいてくる音に、空を見上げる。

すると、ラミナから5mほど離れた湖の傍に光が墜落する。

そこから現れたのは、ゴン達だった。

ゴン達はラミナの姿を捉えた瞬間、大きく目を見開く。

ラミナはパンツ1枚のほぼ全裸姿だった。

「なあ?!?!」

「わ、わあ!?! ゴ、ゴメンナサイ!!」

「す、すまん!!」

キルア、ゴン、ゴレイヌは顔を赤らめ、慌ててラミナに背を向ける。

「な、何で裸なんだよ!?!」

「水浴びしとったら悪いんか」

ラミナは見られたことなど意にも介さず、顔を顰めて腕を組む。

「で? いきなり揃いも揃って、何の用やねん?」

「いいから先に服を着なさい、服を。少年達には目の毒だわさ」

ビスケが呆れながらラミナに言う。

「そっちから押しかけてきていて、随分な言いようやな。たかが裸ぐらいで騒ぎ過ぎやっちゆうねん」

ラミナは小さくため息を吐きながら、足元に置かれていた服を手に

取り身に着けて行く。

赤のタンクトップに黒の短丈革ジャン、同じく黒のホットパンツにブーツを履き、まだ水気を帯びた髪を靡かせたままにする。

着替え終わる頃には、ゴンはすでに平常に戻り、ゴレイヌはまだ少し気まずそうに視線を逸らし、キルアは未だ顔を赤くして思いつき顔を逸らしている。

「そんで？ 知らん顔が増えたみたいやけど、今更なんの用やねん？」

ラミナは訊ねると同時に雰囲気は刃のように鋭くなり、ゴン達は一瞬で気を引き締め直される。

ゴン達は僅かに冷や汗を流しながら、ラミナに交渉を持ちかけるのだった。

## #71 ナカマ×ニ×サソオウ

ラミナはゴン達を鋭い目で見据えている。

(フィinks達の事がバレたか?)

それにしても『交信』も使わずに突撃してくるなど不用心にも程がある。

下手したら、一瞬で抑え込まれていた可能性があった。

「そんで? 知らん顔が増えたみたいやけど、今更何の用やねん?」

ラミナは鋭く見据えたまま、ゴン達に問いを投げかける。

ゴン達はラミナが放つ殺気まではいかないも喉を絞めつけるような圧に冷や汗を流しながら、何とか口を開く。

「聞きたいことと話があるんだ……」

「聞きたいこと、なあ……」

「お前、下見でここに来たんדר? なんでまだここにいるんだよ?」

ラミナはキルアの問いに呆れ、腰に両手を当てる。

「下見が終わってここにおるんやから、仕事に決まっとるやろが」

「……旅団がここに来てるの?」

「いんや。他の団員はまだ別の工作中。何人かは一度ここに来たことあるけどな。ここで待ち合わせしとる段階や。このゲームは便利やんな。ゲームさえ持っとれば、好きな港に飛べるし。まあ、携帯が使えんのは面倒やけど」

「……」

キルアはラミナの言葉の真偽を見極めようと眉間に皺を寄せて考え込む。

しかし、やはり全く分からなかった。

「……クロロの除念は諦めたのかよ?」

「んなわけないやろ。けど、除念師なんぞそう簡単に見つかるもんやない。ハンター協会でさえ公に認めとる除念師は1人。他は見事に雲隠れ。探す言うても手掛かりはもう無いでな。やから、仕事しながら探すことにしただけや」

「……」

再びキルアは考え込む。

それを見たラミナは、

(別に嘘ちやうしな。疑いは持つても、確信は持てんやろ)

「んで、もう1個の話っちゅうんは？」

ラミナはこれ以上今の話題を続ける必要はないと判断して、もう1つの方に話題を移すことにした。

ゴンとキルアは顔を見合わせて頷く。

「実は攻略で人を集めないといけないんだ。それも出来れば強い人」

「んで、俺達の知り合いだったらラミナってわけ」

「ちゃんと説明せえ。全く事態が分からんし、手伝う気も起きん」

ラミナは交渉する気があるのか分からない言い方に、顔を顰めて言い返す。

キルアが改めてソウフラビで起こったことを細かく説明する。

「——ってわけで、出来れば俺達と同等以上の奴らを最低でも8人、見つけないといけなくなった。それでラミナに会いに来たってわけ」

「ふうん……」

「悪いけど『念視』で本のデータを見た。別にゲームクリアを目指してるわけじゃないんだろ？ だったら、協力してくれないか？」

「……報酬は？ 確かにゲームクリアはどうでもええけど、殺し屋雇うんにタダっちゅうわけにはいかんのは分かつとるやろ？ 親しき

仲にも礼儀あり、やで」

マチヤクロ口相手でも、しっかりと報酬を求めてきた。

なので、しっかりと報酬が提示できないのならば、手伝う理由はない。

ゴンとキルアは顔を顰めて、顔を見合わせる。

ゴレイヌも腕を組んで眉を顰める。

「金、つちゆうてもこのゲームじゃあ金は意味がない。ゲームの外で改めて貰うっちゅうんもあるけど、お前らにそんな金ないやろ？」

あったらヨークシンで旅団を狙わんかったもんな」

普通ならばここでカードでの報酬があるのだろうが、ラミナはゲームクリアを目的にしていない(ことになっている)ので、カードでは



報酬にならない。

一番取引材料となる可能性があるのは除念師についてだが、ゴン達に除念師の心当たりはない。カードでも除念に関する効果を持つモノは見つけていない。

(ゴン達ならアベンガネのこと知つとるかもしれないけど……。ここでそれを報酬にすれば、間違いなくキルアかビスケが勘づく可能性があるから言えんなあ)

アベンガネもゴン達も、一番最近雇われて参加したバッテラ組だ。知り合っている可能性は高い。

しかし、今の流れからアベンガネの事を聞けば、間違いなく疑われるだろう。

なので、アベンガネの情報も報酬には出来ない。

「あ！ バッテラさんから貰える成功報酬は？ 500億もあるし！」

「無茶言うなよ。俺達がそれを貰える保証はないんだぜ？ そんなあやふやな金であいつが雇われると思つてんのか？」

「せやな。んな金で雇われる阿呆はおらん。おつても、そいつは新人とも言えんど素人やろな」

「ん〜……」

ゴンは腕を組み、唸りながら悩んで頭から煙を上げ始める。

ラミナは小さくため息を吐いて、

「無いんやったら、もうええか？」

「ちよ、ちよつと待つて！ 考えるから！」

「考える言うたかて、なんもないやろ？」

「ちよつといいか？」

ゴレイヌがゴン達に声をかけ、手招きする。

ゴン達は首を傾げ、ラミナに少し待つように伝えて集合する。

「なに？」

「これも確実じゃないがな。お前らが成功報酬を手に入れて、あいつに報酬を払う方法がある」

「ホント!？」

「どんなの?」

「ツエズゲラだよ。あいつを仲間に引き入れて、あいつを最初にクリアさせる。俺達は『一坪の海岸線』入手を手伝った報酬として、10%の50億をもらえるように交渉するのさ」

「……なるほど……」

「それならあいつに10億払っても、俺達もそれぞれ10億手に入る。500億と比べればちつぽけだが、バッテラ組じゃないあいつからすれば十分過ぎる額じゃないか?」

「確かに……」

「けど、そうなるらと確実にツエズゲラさんを仲間に引き入れて、かつ必ずカードを手に入れないといけませんね。さらにツエズゲラさんを最初にクリアするように手助けしなければならぬ」

「そうだな。けど、俺はそれで諦めがつくし、全く金が貰えないよりはマシだ。お前らは?」

「俺とキルアはゲームクリアが一番の目的だから、最初にクリアしなきゃいけないってわけじゃないしね」

「まあ、クリアするなら最初がいいけどな」

「私もクリア報酬が目的なので、最初である必要はありません」

「なら、決まりだな。もつとも、この案をあいつが受け入れてくれればの話だけだな」

ゴン達は改めてラミナへと振り向く。

ラミナは髪紐で髪を纏め、いつも通りの髪型になる。

「どうするか決まったんか?」

「ちよつと相談なんだけど」

ゴンは話し合った内容を伝える。

ラミナは腕を組んで、顔を顰めて考え込む。

「そのツエズゲラはすぐにクリア出来るんか?」

「ツエズゲラ達はもう95種を超えている。そして、残っているカードで唯一入手方法が判明していなかったのが『一坪の海岸線』だ。他のカードは独占されているだけで、ゲイン待ちのものばかりのばりはず。俺達がゲームクリアをして成功報酬を手に入れるよりは確実だ」

「……」

ゴレイヌの言葉にラミナは目を瞑る。

(……確かにゴン達に期待するよりはええか。まあ、そのゲイン待ちちゅうんが嫌な予感がするけど。まあ、うちはあくまで『一坪の海岸線』入手までやしな。無理やったら無理で、ジンとゼノ爺に吹っ掛けたらええか)

「けど、そのツエズゲラを仲間に来るんか？ その感じやと、まだ交渉すら出来てない感じやけど」

「……ちよつとそこが問題なんだよね」

「はあ？」

「あははは……。俺達、誰もツエズゲラとゲーム内で会ってないから、『交信』も使えないんだよね……」

「……最初から躓き過ぎやろ。ほんなら今の話は完全に夢物語やないか」

「ラミナさんは知らないのですか？」

ラミナは呆れを全開にするが、そこにビスケ(猫被りモード)が訊ねる。

ラミナはビスケの態度に顔を顰めるも、下手な事を言うと言質を取られかねないので黙っておくことにした。

「まあ、知つとるで」

「ホント!？」

「じゃあ、悪いが『交信』を使わせてくれないか？ もちろん交渉はこつちでやる」

「……はあく……。うちを引き入れるための人材が、うちやないと連絡付かんっておかしくないか？」

ゴレイヌの提案にラミナは盛大にため息を吐く。

しかし、ここで無視しても、自力でツエズゲラを仲間にした後にまた会いに来るだろうことは容易に想像が出来る。

ラミナはもう一度ため息を吐き、大人しく本を出す。

『交信』はそつちが出せや」

「うん！」

ゴン達はラミナに駆け寄って、『交信』のカードをラミナに手渡す。ラミナは気だるげな表情を浮かべたまま、呪文を発動する。

『交信』オン。ツエズゲラ」

ラミナは呪文を発動し、本をゴン達の方に動かす。

『……誰だ?』

「ツエズゲラさん? ゴンだけど」

『ゴン? ああ、あの少年か。何か用か?』

『『一坪の海岸線』について情報があるんだ。一度、どこかで会えないかな?』

『……ほお』

「ただ、これ以上は直接会って話したい。『交信』の時間じゃ足りないってのもあるけどさ」

『……いいだろう。どこで会えばいい?』

「こつちが『同行』でそつちに行く」

『分かった。ならば30分後に』

「分かった」

通信を終えたのを確認したラミナは本を消す。

ゴン達はツエズゲラと交渉出来そうなことにホツとし、誰が交渉するかの相談を始める。

(……どつかでマチ姉達に連絡しとかんとな)

絶対に団員達とゴン達を合わせるわけにはいかない。

(出来れば『一坪の海岸線』は手に入れたいが、ここは欲を出したら面倒になるだけやな。うちらもまだ60種類程度……。ゴン達が手に入れた後に、ツエズゲラを襲えば一気に手に入るが……。それも最終手段やな)

入手手段が分かるだけでも御の字とも言える。

15人でいいならば、旅団と適当なメンバーを入れれば問題はないはずだ。

(この分やと『No. 1 一坪の密林』も、『一坪の海岸線』と似たような面倒さがある可能性が高いか……。ホンマ、ジンはええ性格してるわ)

それだけハンターは活動の幅が広く、持てる手段は多い方がいいということである。

プロハンター達でさえ、何年もたった100枚のカードを集めるのに時間と手間をかけている。

しかし逆に言えば、これをクリアすればハンターとしては何枚の皮が剥けたと言えるほど成長するだろう。

事実、ゴンとキルアは1年前と比べて、恐ろしいほど成長している。(このゲームは良くも悪くもハンターの一面を見せつける。うちらやゲンスルー達のようなやり方をする奴らやって、ハンターでもおらんわけやない)

今、このゲーム内で行われていることは、ゲームの外でも日常的にある話だ。

ゴン達は嫌うだろうが、目的を達成するためには手段を選んでいる場合ではない時もある。

(まあ、今回はゲームに熱くなり過ぎな感じがするけどな)

ラミナは苦笑して、まだ相談しているゴン達を見る。

(そういえば……)

ラミナは先ほど聞いた話を思い出して、ある疑問が浮かんだ。

「ちよつとええか?」

「ん? なに?」

「その海賊のボスは何の競技をしたんや?」

「え? ボスは出て来てないよ?」

「ええ、手下達だけでしたね」

ラミナの質問にゴンとビスケは「それがなんだ?」と首を傾げる。

その答えにラミナは天を仰ぎ、キルアとゴレイヌはラミナが言いたいことを理解した。

「しまった……!」

「え? なに? どういうこと?」

「どう考えたって、最後はボスが出てくるに決まってる。そいつの競技次第で、俺達が7勝してもひっくり返される可能性がある……!」

「あ……!」

「そうならば手練れが最低8人つちゆうんも厳しくないか？ ぶつちやけ、2，3勝あたりでボスを引きずり出さんと今の作戦じゃあ勝てんぞ」

「確かに……。せめてツエズゲラの仲間が5人以上いればいいが……」

「前に会った時は本人入れて4人やったで。うちを入れても9人。微妙なところやなあ……」

ラミナは眉間に皺をよせ、ゴン達も最悪の事態を想定して顔を顰める。

しかし、ゴンが首を傾げ、

「けど、ゲームのキャラだし……。そこまで自由なのかな？」

(……ああ……。こいつら、ここが現実の島って知らんのか。まあ、中々気づくきっかけはないやろうし、しゃあないことか)

話を聞いた限り、ラミナはその海賊達はNPCではなく本物の人間だと思っている。

モンスターと比べても、戦い方が柔軟過ぎるのだ。

今まで見てきたモンスターは全て一定のパターンがあったが、ボクシングや相撲、リフティングなどのスポーツではそうもいかないだろう。しかも、相手の妨害もありだという。

(まあ、レーザーだけが人間で、他の連中が念獣の可能性はあるか……)

「1つ言うとかけどな」

「なに？」

「ここ、現実やで」

「「え!」「」」

「ここはヨルビアン大陸東にある孤島や。まあ、地図にも載つとらんし、普通では来れんみたいやけどな。ゲームはあくまで転送装置つちゆうわけや」

「ここが……現実」

「ゲームソフトに神字を刻んどったとしても、ありふれた物を介して【練】程度で、人間の身体や持ち物、念能力までこの広さの異空間に取

り込むには限界がある。そういう能力は能力者本人が近くにおらんかったら、まず無理や。もしやるんやったら、同じ能力者を数十人レベル必要やろうな」

「なるほどねえ。けど、現実のどこかに飛ばすだけならば、一気に難度は下がるわね」

「そうやな」

すっかり素で話すビスケに、ラミナは特にツッコむことなく頷く。

キルアが首を傾げて、

「どうやってラミナはそれを見抜いたんだ？」

「最初に気づいたんは団員の1人や。うちはそこから、邪魔が入らんようにするなら島。それも地図に載らず、海流だけでは辿り着けん場所を探しただけや。んで、ここと思われる島を見つけた。まあ、結局ソフト見つけたから、確認はしとらんけどな。けど、気候や島の大きさからして間違いないとは思っとるで」

ラミナの言葉にキルアやゴレイヌは、納得の表情を浮かべる。

ゴンはおもはや会話についていけず、ただただ感心するしかなかった。

「さて、そろそろ行こか。結局レイザーの問題は解決しとらんけどな」「そうだな……。けど、まずはツエズゲラを仲間に引き入れないと、どっちにしろ無理なんだ。そこはツエズゲラを引き入れてから、改めて話し合おうぜ」

「ほな、行くでええ」

ラミナはゴンから貰った『同行』を唱えて、ツエズゲラの元へと飛ぶのであった。

ツエズゲラ一派と会ったのは、ソウフラビ近くの森にある湖の傍だった。

ツエズゲラとロドリオットは飛んで来たゴン達の中にラミナの姿を見つけて、目を鋭くする。

「お前は……」

「ああ、うちはまだこいつらの仲間ちゃうから。先にこつちと話して

んか」

ラミナはそう言ってゴン達からも離れて、樹の根元に座つてくつろぎます。

それにキルアやゴレイヌは呆れ、ツエズゲラは眉間に皺を寄せる。

「……それで、『一坪の海岸線』の情報とは？」

「ちよつと待て。その前に決めておきたいことがある」

「ふん。なんだ？」

ゴレイヌが前に出て、ツエズゲラと交渉を始める。

『一坪の海岸線』を手に入れば、お前達はゲームクリアに限りなく近づくのは分かつてる」

「……そうだな。隠すつもりはない。俺達はゲームクリアまで後3種類。『一坪の海岸線』『奇運アレキサンドライト』『闇のヒスイ』だ」

ツエズゲラは不敵な笑みを浮かべて、残りのカード名を告げる。

後3枚という状況にゴンとキルアは目を見開いて、更にその内の1枚を持つていることに顔を見合わせる。

「それで。『一坪の海岸線』入手を手伝った報酬として、バッテラの成功報酬500億の10%、50億をもらいたい。それが呑めなきゃ、情報は話せない」

「……法外だな」

「状況が状況だからな。それに今のあんた達じゃ、このカードを自力で発見するのは絶対に困難だぜ」

「しかし、それはお前達もだろうか？」

「まあな。現状の俺達じゃ入手不可能だ。だが、俺達はすでに入手方法は知ってるから、時間をかければいい。ボマーも入手は難しいだろうけどな」

「……本当にまだ入手してないんだな？」

「だったら、とつくに売りつけてるよ。わざわざ入手に協力しろとか、こんな金額ふっかけないさ」

ゴレイヌは肩を竦めながら、はつきりという。

その様子に嘘はないと判断したツエズゲラは、横に控えていたロドリオットと顔を見合わせて頷き合う。



「よし、条件を呑もう。話を聞かせてくれ」

ゴレイヌは頷いて、ソウフラビでの話を始める。

話を聞き終えたツエズゲラは愉快気に笑い始める。

「くつくつくつ！なるほどな。確かに入手は簡単ではないな」

「で、どうだ？ 悪い話じゃないだろ？」

「そっちは全部で5人か？」

「いや、ちよつと待ってくれ」

「ん？」

ツエズゲラは首を傾げるが、ゴレイヌはそれを無視してキルア達に振り返り、キルア達は頷いてラミナに顔を向ける。

「ツエズゲラとの交渉は終わったぜ。これでいいか？」

「……はあく……。まあ、金が用意できるんやったらしやあないか……。じゃ、報酬は2億。このイベントだけの契約やで」

「ああ、十分だよ」

ラミナは大きいため息を吐いて、契約を纏める。

キルアはそれに頷いて、ゴレイヌに向き直る。

ゴレイヌはツエズゲラに向き直り、肩を竦めて、

「これで5人だ」

ツエズゲラは眉間に皺を寄せながら指を鳴らすと、背後の森から2つの人影が姿を現す。

「こっちは4人だ。……あの女が何者かは問わん。だが、あの女には仲間がいたはずだ。何故そいつは誘わない？」

「仲間？」

「つてことは団員が今ゲーム内にいる？」

「ピンク髪の女がいたはずだ。それと黒髪の少女」

「あく……そっちは無し。協力なんざ出来ん出来ん。そこのキルアを殺しかねんでな」

ツエズゲラの指摘にキルア達はラミナを見るが、ラミナは顔を顰めながら顔の前で手を振り、マチ達の参戦はありえないと断言する。

キルアはマチの顔を思い出して盛大に顔を顰め、ゴンもキルアが何度も殺されそうになったので眉間に皺を寄せる。

「一体どういう仲間なんだ……?」

「命を奪い合った仲間やな」

「……俺の記憶が正しければ、その女は幻影旅団だったはずだが……。お前達、あの審査の前にそんな無謀なことをしてたのか?」

ツエズゲラは呆れながらゴンとキルアを見つめる。もはや呆れを乗り越えて、恐怖すら感じそうな程だ。

それに gon は誤魔化すように苦笑いし、キルアも肩を竦める。

「あははは……」

「まあ、ちよつと事情があつてね。もちろん手も足も出なかつたよ」

「当然だ。ボマーよりもよつぽど手を出したくない相手だぞ」

「やっぱりボマーより旅団の方が強いのか?」

ゴンが首を傾げて、ツエズゲラに訊ねる。

しかし、ツエズゲラがもちろん断言できるわけではない。

「正確には分からん。だが、ボマーは3人組だ。10人以上いる旅団を相手にすれば、流石に厳しいだろう」

「別にうちだけで殺せると思うで? 前にも振り返りにしたし」

『はっ』

ラミナが気だるげに歩み寄りながら言うと、全員が目を見開く。

「ゲンスルーと戦つたのか!?!」

「他にも2人おつたで。えくつと……確かサブとバラつちゆう名前やつたな」

「ラミナは他の団員といたのか?」

「いんや。1人」

「1人で3人と戦つて、振り返りにしたのか……!?!」

「……なるほどな。だから連中は『大天使の息吹』を使つたのか」

「『大天使の息吹』?」

「指定ポケットカードの1枚だ。どんな怪我も病もたちまち完治するらしい。ゲンスルー達が独占していて、俺達はゲイン待ちだったのだが……。少し前にそれが『大天使の息吹』に変わった。だから、連中が使うような状況に陥つたことは知っていた。だが、相手までは分からなくてな。その後にかいつらに会つて、もしやとは思っていたが

……」

「そんなカードがあるんか……。つちゆうことは、もう回復しとるんか。ちっ……」

ラミナは小さく舌打ちをする。

道理でゲンスルー達の動きが衰えないわけだと、納得したラミナであった。

「ゲンスルー達ってどれくらい強いのか？」

ゴンがラミナへと尋ねる。

ラミナは腕を組み、全員を見渡す。するとビスケは実力を比べられていると見抜いて、胸の前で手を組んで目を潤ませながらラミナを見つめ、自分のことは黙っておくように圧力をかける。

もちろん、それをしつかりと感じ取ったラミナは一瞬ビスケに呆れた視線を向けて、すぐに目を逸らす。

「……んく……能力次第ではあるが、ゲンスルーはうち以外じゃ絶対勝てんやろうな。サブとバラの方は、まだ可能性はあると思うで。その2人は体術とか身体能力はキルアの方が上って感じや。ゴンはどっこいどっこい。けど、オーラの量や念の練度は向こうが圧倒的に上って感じやな」

「そっか……」

「他の2人の能力は？」

「それがなあ……その2人、全く【発】を使わなかったんよ。負傷してもな。やから、相互協力型能力持ちかもしれないな」

「でも、ラミナから逃げたんだから、それだけ強いってことだよな……」

「逃げたつちゆうても、呪文でうちを島のどっかに飛ばしただけやし。うちもそこまで本気で戦つとらんしな。殺すだけやったら、問題ないと思うで。うちやったらな」

ラミナは肩を竦めながら言うが、ゴン達は顔を顰めて腕を組む。

「それでも今の俺達じゃ太刀打ち出来なさそうだね」

「ああ、戦るにしてもかなり作戦を練らないとな。しかも、戦るなら確実にそこで倒さないと駄目だ」

一度逃せばもう同じ作戦は使えないし、次は一切油断はなくなるはずだ。

そもそも一度ラミナにやられているのだから、すでに慢心は捨て去っている可能性がある。

(つていうか、ラミナつてどこまで強いんだよ……)

ゴレイヌには『俺とゴンと一緒に挑んで互角』と言ったが、今の話を聞く限りではここにいるメンバー全員をラミナー人で殺せると言われたようなものだ。とキルアは理解していた。

もちろんビスケやゴレイヌ、ツエズゲラ達の実力も全て知らないの。簡単ではないだろうが、それでもラミナはパツと見でツエズゲラ達の実力を『ゲンスルー組以下』と判断した。

今までのラミナの言動を考えると、その見極めは大きく外れていないだろうとキルアは考える。

しかも、ヨークシンのことから、ヒソカはそんなラミナに重傷を負わせる程の実力を持っているということだ。

ラミナもヒソカにある程度怪我を負わせたらしいが、殺し切れなかった事を考えるとラミナと同等以上の実力者なのは間違いない。

天空闘技場での戦いは、本当にお遊びレベルだったということになる。

そして、それは同時にゴンとキルアはまだまだ『ひよっこ』という現実を叩きつけてくる。

キルアは奥歯を噛み締める。

努力はしている。

それもビスケが『恐ろしい上達速度』と呆れながら言うほどに。

なのに、それでもラミナはもちろん旅団や父親達の背中すら見えてこない。

焦って上達するわけがないことは理解しているが、それでもやはり焦りが心に生まれてしまう。

キルアは実感してはいないが、キルアはすでにラミナ達の足元には辿り着いている。

しかし、まだ【発】が完成したと思えていないこと。殺し屋として

の戦い方や技術を避けてしまっていること。そして『イルミの教育』の影響で常に敵のMAXを無意識に考えてしまい、更にそれを敵の常と考えると癖が染みついていくからである。

実戦経験がないことも影響しており、キルアは『念』『体術』『暗殺術』を上手く組み合わせるといふ発想が未だにない。

ビスケに鍛えられて、ようやく『念』と『体術』を組み合わせる事を意識しだしたくらいだ。

『暗殺術』も使い方次第だと気づくには、まだまだ時間がかかりそうである。

「とりあえず、今は『一坪の海岸線』だ。もう一度詳しく説明しながら、作戦を練ろう。懸念もあるしな」

「いいだろう」

ゴレイヌとツエズゲラの言葉に、意識をゴレイヌ達に戻すキルア。  
(今は『一坪の海岸線』に集中だ)

そう己に言い聞かせて、キルアも作戦会議に参加するのだった。

## #72 レンシユウ×ノチ×カチコミ

ゴン達は『一坪の海岸線』ゲットに向けて、各々得意な競技を決めて練習を始めていた。

更にレイザーの不安はあるものの、これ以上は実力者を集めてもカードの取り合いになる可能性が高いので、残りは現実に帰りたい連中で固めることにした。

ちなみにラミナは、

「まだ7競技も分からんの残つとるんやろ？ やったら、知らん奴が来た時のために選ばんでおくわ。まあ、一番は2, 3競技目あたりでレイザーを引つ張り出すことやけどな」

と言つて、メンバー集めや練習を終えるまでの間、のんびりしていた。

マチやシャルナークにはすでに連絡を入れており、注意するように伝えている。

マチはまたキルア達と行動すると聞いた瞬間、「あ？」と背中に怖気が走るほど低い声を出したが、カルトの事と除念師探しの事を念押しして何とか引き下がってもらった。

今はツエズゲラとゴンがバレーボールの練習をしている様子を、樹の根元に座つて昼食の準備をしていた。

料理をしているのは単純に手持ち無沙汰だからである。

ゴンから「念を見てよ！」と言われたが、「ビスケの前で言うなや阿呆」と拳骨を叩き込んでビスケの前に放り投げた。

その後、ビスケが笑っていない笑みを浮かべて、キルアを巻き込んで2人がぶつ倒れるまで修行という名のお仕置きを受けていたが。

今はシチューを作りながら、他に何の料理を合わせようか考えている。

そこにビスケやキルア、ゴレイヌ、ロドリオットが近づいてきた。

「おお、美味そうだな」

「なんか意外だな。料理が出来るとは……」

「助かりますね。他の方々は料理できませんから」

「別に出来んでもええやろ。金が稼げれば外食でええし、うちはあくまでガキの頃の延長線なだけや」

そう言いながらシチューを温めるだけの段階まで仕上げ、次にステーキを焼き始めるラミナ。

その手際は流れるように淀みがなく、相当料理慣れしていることが窺える。

キルア達は鍋を囲むように座り、料理の出来上がりを待っている  
と、

「そう言えば、ゲンスルー達はどれくらい集めとるんや?」  
と、ロドリオットに訊ねる。

「朝に確認した時は95種だな。『一坪の海岸線』『奇運アレキサンドライト』『浮遊石』『身代わりの鎧』。後半の2つは俺達が独占してる。で、俺達が欲しい『闇のヒスイ』はゲンスルー達が独占してるな」

「……それってどっちにしろゲンスルー達と戦り合わんといかんのとちやうか?」

「だろうな。連中は『闇のヒスイ』のゲイン待ち対策もしてるはずだ。どうにかして連中からカードを奪わないといけない」

『奇運アレキサンドライト』は別に誰かが独占しとるわけやないんやろ? 他の奴から奪つとったら、後はゲンスルーにお前ら狙われて終わりちやうか?」

「そこは対策次第だな。戦闘になったら確かに苦しいが、やり様は色々ある」

「……なんや、もう少し報酬上乘せして今のうちにゲンスルー達を狙た方がええ気がしてきたわ」

「そうになったら、ゴンは確実に怒ると思うぜ」  
「やろな。相変わらず面倒で偏屈な考え方しとるやつちや」

キルアの言葉にラミナは肩を竦めて、調理に意識を戻す。  
ステーキも焼き上がって、サラダを用意したら完成である。

「ゴン達も呼んできて、好きに食べえ」

ということ、ゴンとツエズゲラも特訓を中止して、ラミナが作った料理を食べる。

「凄い美味しいよ!」

「そらよかった」

「いや、マジで美味しいな。ステーキの味付けとか店で食べても違和感ないぞ」

ゴンやゴレイ又は手放しで褒め、キルアは感想は言わないがおかわりをしてひたすら食べ続けていた。

ゼノの『意外と家庭的』という言葉を思い出して、妙に感想を言うのが恥ずかしくなっていたのだ。

食事を食べ終えたゴン達は、再び特訓を再開し、仲間集めに街へと向かった。

キルアはゴンがバレーボールの練習をしているので、ビスケに念の修行をつけてもらうのも気が引けたので、1人で修行をしていた。

ビスケとラミナは各々のんびりとしていた。

1時間ほどしたところで、キルアがラミナに歩み寄ってきた。

「なあ?」

「ん?」

「今、カルトってどれくらい強くなったんだ?」

「そうやなあ……。まあ、筋力や体術はまだキルアが上やけど、身のこなしや念は大分伸びたな。念はキルアよりも間違いなく上や。お前の【発】は知らんから、戦ったら分からんけど」

「……俺とあいつ。戦ったらどっちが勝つと思う?」

「……ん〜……。今ならカルトやろな」

「っ! ……理由は?」

「念アリやったら、実戦経験がカルトの方が多いでな。うちや団員とも組み手しとるし。うちらは【発】無しやけど、それでも2人同時に相手して15分は戦えるようになってきよったしな」

キルアは歯軋りして、悔しさを露わにする。

ラミナはその様子に小さくため息を吐く。

(眼中になかった弟が、自分より強くなったことに納得出来んってところか? 念無しやったら、キルアの方が上やけどな)

だからと言って念は人によって能力も得意分野も違うのだから、変



な対抗心を燃やしてもあまり意味はないのだが。

ラミナはそう思いながら、未だに悔し気に顔を顰めているキルアを見つめる。

すると、

「俺と組み手してくれない？ 【発】も使っていないからさ」

「なんでやねん」

「暇だろ？ 別に念を覚えてもらうわけじゃないし」

「だからって、なんで【発】まで使わなあかんねん」

「俺の方が体術上だし、それくらいじゃないと緊張感でないだろうからさ」

明らかにカルトへの対抗心と強がりにはか聞こえない。

聞き耳を立てていたビスケですら呆れを浮かべており、ラミナも同じく呆れていた。

（まあ、今のキルアの実力を見るんはええ機会ではあるか。カルトもキルアと比べようとするし）

ヨークシンから半年も経っている。

念の熟練度や、あわよくば【発】も確認できるかもしれない。

「まあ、軽くならええやろ。そっちも【発】を使うてええし、なんやったら殺す気でええで」

「……ああ」

「場所変えよか。ゴンが気になって、特訓に集中出来んようになるやろうし」

そう言つてラミナとキルアは、近くの開けた草原に移動する。

ビスケもさりげなくついてきており、ラミナが視線を向けるが肩を竦めて躲かされてしまう。

ラミナはため息を吐くも、本気でやる気はないので無視することにした。

（うちの實力も含め、キルアの動きも把握したいっちゆうところか）

キルアと向かい合ったラミナは、ビスケの目論見をそう判断する。

そして、意識を切り替えて、両手に武器を具現化する。

右手には白い剣身の片刃の短剣。鏢はなく、柄元には太極図が刻ま

れている。

左手には右手と同じ形の短剣が握られているが、剣身は黒く、赤い網目状の線が描かれていた。柄元には同じく太極図が刻まれている。

「っ！」（天空闘技場の時とは違う武器……！ 本来に複数の武器を具現化できるのか）」

キルアは素早く構え、油断なくラミナを見据える。

ラミナが一对の短剣を手の中で回し始めたかと思うと、ラミナの姿がブレる。

「!!」

キルアは一瞬目を見開くも、すぐに視線を左に向ける。

そこにはラミナが短剣を構えていた。

キルアは右に跳んでラミナに体を向けようとするが、直後背中に衝撃が走る。

「があっ!?!」

キルアは前方に勢いよく吹き飛び、ラミナへと飛んでいく。

そして、飛んで来たキルアにラミナは右脚を振り上げて、キルアの左頬を蹴り飛ばす。

「っっ!!」

キルアはガードも間に合わず、横に吹き飛んで地面を転がる。

両手で地面を押して空中に跳び上がり、体勢を立て直して着地する。

「っつう……!?!」

キルアは頬を拭いながらラミナに目を向けて、その光景に目を見張る。

そこには2人のラミナが存在していた。

（あれは……【ダブル】……!?!）

天空闘技場で見えたカストロの能力。

（けど、この能力には弱点がある。戦いで負った傷までは再現できないことと、高い集中力がいること。いくらラミナが具現化系だからって、放出系と操作系が不得意なことには変わりはない。武器の具現化まで含めると、かなりの容量を使うはず……。前に見た短刀、クラピ

力が見たって言った武器、更に爺ちゃんと言った能力を考えると……ありえない。絶対的に容量が足りないはず……！」

「ぺっ……」

ラミナの能力が分からずに思考が混乱する。そこに口の中で鉄の味を感じて、血が混じった唾を吐く。

口元を拭って、構え直す。

「……ダブルってかなり高度な技術なんじゃなかったっけ？」

「そうやな。ただ、これは天空闘技場で見た『ダブル』とは少しちゃうし、もちろん絡繰りがあるで」

「へえ、どんな？」

「さあな。頑張って考えてみい。まあ……」

2人のラミナは同時に姿がブレて、キルアを挟み込むように移動する。

左に現れたラミナは左手の短剣を振り下ろし、右のラミナは右手の短剣を逆手に握って振り抜く。

キルアは慌てて後ろに下がって躲して距離を取るが、右のラミナはそれを読んでいたかのように振り抜いた勢いを利用して、キルアに詰め寄る。

「ぐっ！」

キルアは逃げ切れないと悟って右ストレートを繰り出して、ラミナの顔を狙う。

しかし、その拳は顔をすり抜けて、ラミナの顔が煙のように霧散する。

「なっ!? (オーラで創った偽物!? じゃあ、本物はもう1人の方!)」

キルアは左に回り込もうとしてるラミナに顔を向けて、飛び掛かるうと足に力を籠める。

すると、分身と思っていたラミナの顔が一瞬で元に戻り、無防備なキルアの右脇に右蹴りを叩き込んだ。

「がっ?!?!」

キルアは再び吹き飛んで、地面を転がった。

本物だと思っていたラミナが霞のように姿を消す。

キルアは脇腹を押さえて咳込みながら立ち上がる。

「ごほっ！　ごほっ！　な、何が……」

偽物だったはずなのに、攻撃を入れられた。

（こっちの攻撃は無効化して、向こうの攻撃は当たる……!?　そんなことまで出来るのか!?)

「……やっぱ、お前に【発】はまだ早かったか」

そう呟いたラミナは武器を消す。

「【流】と【練】の意識がまだまだやな。それに……相変わらず格上相手には基本距離を取って、攻撃はギリギリまでせんなあ」

「!!」

「念を用いた戦闘で、後手に回るんはあんまり褒められたもんやない。まあ、そういう能力やつたら別やけどな」

反撃型の能力はダメージを負うことが条件であることが多いため、基本的に相手の攻撃を待ち受け、見切るスタイルの者が多い。

しかし、そうでなければ自分のペースに引き込むために攻め続けるのが定石である。

ダメージを負わせれば、相手の能力を制限できる可能性がある。

そして、一番大事なのは相手が能力を使う前に倒すのが理想だ。なので、キルアの慎重な戦い方は、念を用いた戦闘においては不利に陥りやすい。

更に、

「オーラ量やオーラの攻防力移動が上の相手に『受け』は致命的やろ」

そう言いながらラミナは、キルアの目の前に一瞬で移動する。

キルアは歯軋りをしながら再び右ストレートを繰り出そうとするが、ラミナは【肢曲】を使って分身を生み出しながらキルアの左から背後へと回り込み始める。

（速っ……!）

自分が使う【肢曲】よりも倍は速いことに顔を顰めるキルア。

どれが本物かを見極めようと集中し、視線と顔を素早く巡らせる。

しかし、相手は同じ技術を持つラミナ。

キルアの顔が僅かに背後に向き、視線が左端に移動した瞬間、キル

アの左斜め前にいたラミナが動き出す。

キルアも反射的に体が反応して左腕で顔を守ろうとするが、ラミナは【蛇活】で左腕を蛇のようにしならせてキルアの腕をすり抜け、キルアの顎を打ち上げる。

「つつ!!?」

キルアは顔を跳ね上げながら仰け反り、後ろに倒れる。

ラミナはそこで動きを止めて、キルアから距離を取る。

そして、ビスケに顔を向けて、キルアを指差す。

観戦していたビスケは小さくため息を吐いて、キルアへと歩み寄る。

キルアは気絶してはいなかったが、脳震盪を起こして起き上がることが出来なかった。

「う……あ……」

「思い知ったかい？ 今のアンタじゃ、まだまだあいつとの念を使つた組み手は3年早いわさ」

ビスケは両手を腰に当てて、言い放つ。

「念だけじゃない。体術、筋力、反射、速さ、そして思考の速度。どれを取ってもあいつの方が上だわさ。焦つたところで、その差は埋まらないよ」

「ぐ……」

「今日は念の修行も含めて、ここまで。しっかりと体を休めなさい」

ビスケはそう言って、ラミナへと向き直つて歩み寄る。

「それにしても……。ゴン達から聞いてた時から思つてたけど、アンタの能力は面白いわね。具現化した武器に、それぞれ独自能力を組み合わせるのには常套手段ではあるけど……」

「さっきの能力みたいなのは普通出来へん、か？」

「出来ないとは言わないけど。1000人に1人出来たら御の字だわね。具現化と【ダブル】の組み合わせだなんて。しかも、ただの【ダブル】じゃない」

「ま、ぶつちやけ今みたいな正面戦闘は不向きやし、応用が出来んから使い辛いんやけどな」

ラミナはビスケの言葉に肩を竦める。

先ほどの武器は『干将莫邪』かんしょうぼくやという二刀一对の短剣である。  
能力名は「虚実投影」。

オーラで形ばかりの分身を作り出して操り、分身と自身を入れ替えることが出来る『虚像と実像を使い分ける』能力である。姿勢は変わらないので、パツと見ではいつ入れ替わったのかは分からないのが利点ではある。しかし、入れ替わるには分身の位置を視認していないといけないため、奇襲などには少し不向きとなってしまった。

「まあ、キルアの場合、問題は他にあるけどな」  
「そうだわねえ……」

ビスケはため息を吐いて、未だに倒れたままのキルアを見る。

しばらくそつとしとくべきだと判断した2人は、のんびりしていた場所に歩きながらキルアの問題点を話し合う。

「あの子はどうにも格上相手には逃げ腰一辺倒になるわね。多分、鍛えた人間のせいなんでしょうけど」

「やろうな。ゾルディック家の後継者として目えかけられとるし、最初は頭に針を埋め込まれとったくらいやしな」

「針って……」

「ゴンに出会うまでのあいつは、結構悲惨やったからな。ちよつとやそつとじゃ、あの癖は抜けんと思うで」

「だろうね」

「まあ、そこらへんはアンタに任せるわ」

「簡単に言ってくれるわねえ」

「あいつの弟を鍛えとるうちが言うてもな。意地を張るだけやろ」  
「まあ、今の感じだとそうだわね」

ビスケはため息を吐き、ラミナは肩を竦めるのだった。

その後、キルアは夜になるまで黙り込んでおり、その様子にゴンが心配していたがビスケが「しばらくほっときなさい」と言いつける。

翌日からは特に組み手を頼み込んでくることもなく、キルアは修行を続けながら考え込むようになるのだった。

そして、ラミナやツエズゲラ達を仲間に取り入れて1週間。

いよいよ『一坪の海岸線』ゲットに向けて、海賊の拠点へと足を踏み入れたのであった。

「再挑戦、ってことでもいいのか?」

「ああ」

海賊達のボスであるレイザーの言葉に、ゴンが頷く。

ラミナはレイザーを見て、

(……ゲンスルーより強い。こらあ、戦闘系競技やったら、うちかビスケやないと無理やな)

下手したら、再挑戦すら厳しくなる可能性がある。

念を使い、相手を攻撃することが許されるのならば、死ぬことだけあってありえるのだから。

どうやら最初の競技は、前の時と同じでボクシングだった。

これはツエズゲラの仲間のビリーが難なく勝利を収め、その後のボウリングとフリースローもロドリオットとケスーが勝利を収める。

「よし、これで3連勝だね!」

gonは喜ぶが、ラミナは僅かに眉間に皺を寄せる。

(ここでボスを引つ張り出したいところやな……。突っついてみよか)

ラミナは前に出て、レイザーを見据える。

レイザーとその手下、そしてゴン達もラミナに目を向け、

「これ以上そっちの雑魚が出てきても時間の無駄や。どうせこっちは6, 7勝したら、お前が帳尻合わせで出てくるんやろ? さっさと出てこいや」

「ほう……」

「なんだと……!」

ラミナの挑発にレイザーは笑みを浮かべ、手下の1人が怒りを露わにするが、

「引っ込んでれや雑魚。……殺すぞ」

「!?!」

ラミナが殺気を放って黙らせる。

手下は一瞬で体を硬直させて、顔を青くして冷や汗が噴き出した。  
「どうや？ ボス猿」

「……いいだろう」

ラミナの挑発にレーザーが乗る。

ゴン達が顔を引き締めてレーザーを見据えると、レーザーの手下で顔が少し火傷している巨漢の男が前に出る。

「ちよつと待てよ。俺はそのガキとやるって決めてんだ」

「おい！ ボポボ！」

仲間の1人がボポボを止めようとするが、ボポボは帽子を脱ぎ捨てる。

「ここからは好きにやらせてもらうぜ。おい、小僧！ 表に出ろ！」

「表？ 土俵じゃないの？」

「遊びは終わりだ。なんなら今ここで殺してやろうか？」

「ボポボ!!」

ボポボはキルアに挑みかかろうとするが、その前にレーザーが声を上げる。

「そいつは契約違反だな、ボポボ。ムシヨに逆戻りだぜ」

レーザーの言葉にボポボは唾を吐く。

「ぺっ！ 知るかよ！ このクソゲームに付き合うのももうヤメだ！」

(おいおい……。雇用囚人で、設定無視してええんかい……)

ラミナはレーザーの言葉からボポボの素性に気づいて、呆れるしかなかった。

ボポボは他の手下達に顔を向けて、

「他に俺に乗る奴はいねえか!? 全員でかかればこんな奴、一捻りだぜ！」

ラミナはため息を吐いて、スローイングナイフを具現化してボポボに投げようとした瞬間、レーザーが念弾を生み出してボポボの顔面に投げつける。

ボポボは防ぐことも出来ず、脳味噌と目玉をぶちまけながら死んで倒れる。



その光景に手下達と数合わせのプレイヤー達は顔を真っ青にする。

「タブーを破ったら厳罰。こいつに言つてなかったか？」

「いや……ちゃんと……」

「ふん！ 殺されなくても高をくくっていたか。馬鹿が！ まあ、俺が殺さなくても、あいつに殺されてたろうがな」

レイザーはラミナに顔を向けながら言う。

ラミナは肩を竦めながら、スローイングナイフを消す。

「んで？ 勝負の外でそいつは死んでもうたけど。どういう扱いになるんや？」

「お前達の勝ちでいいさ。数合わせだろう連中の中から選んでくれても構わないぜ」

「あつそ。キルア、誰か選んどいて」

「じゃあ……あんた」

キルアはレイザーの行為に震えているプレイヤーの1人を選ぶ。

それ選ばれなかったプレイヤー達が怖気づいて、文句を言い始めた。

「な、なんだよイツら。仲間で殺し合ってるじゃねえかよ……」

「じよ、冗談じゃない！ あんな奴らと戦えないよ！」

「待て待て。戦うのは俺達だけだ」

「ああ、俺達が負けた場合、アンタ達は戦わずに不戦敗でいい」

「ホントだな!？」

「俺達は絶対戦わないぞ！」

(あんなんでよおハンター専用ゲームに挑んだもんやな)

ラミナは数合わせプレイヤー達の言い分に呆れながらも、レイザーに向き直る。

「で、アンタの競技は？」

「ああ。俺の競技は……8人ずつで戦う、ドッジボールだ!!」

競技名を告げると同時に、レイザーの足元から胸元に1〜7の数字が記された人型念獣が7人出現する。

それを見たラミナは、

(やつぱ、最後は1人で帳尻合わせられる競技か。しかもさっきの攻

撃と念獣から考えて、こいつは放出系。厄介やな)

「そつちに勝てば8勝ちゆうことでええやんな？」

「その通り。この競技に勝った方が、勝負に勝つ。分かりやすいだろ？」

「ちつ……！ やっぱ人数が足りんかったか」

ラミナは舌打ちしてゴン達を振り返り、数合わせのプレイヤー達を見る。

それにプレイヤー達は後退る。

「あんたらから2人。出さなあかん」

「む、無茶言うなよ!？」

「さつきみたいな玉、当たったら死んじまうよ!!」

「命の方が大事だ！ 俺は帰る!」

「ちよ、ちよっとタンマ！ 今、考えるから!」

キルアやロドリオット達が慌てて宥めて説得するが、それでも効果はない。

ボポボが死んだ光景が頭から離れないのだ。

「俺達だけでやろうよ」

そこにゴンが険しい顔をしながら言う。

「命がけなんだから、やれる人だけでやろう。こつちは6人でもいいでしょ?」

ゴンはレイザーに訊ねる。

しかし、

「いや、そうはいかないな。8人对戦がルールである以上、数はしつかりと合わせてもらう。そうでなければ15人集めさせた意味がないだろう?」

「まあ、そらそうや」

「そつちは1人じゃないか！ ふざけるなよ!」

ラミナは納得するが、ゴンは怒りを露わにして声を荒らげる。

「仲間だったんだろ? ボポボって人が殺されなきゃいけないほど、何をしたらって言うんだ!」

「……はあく」

ラミナは盛大にため息をつく。

「ボスへの反乱は普通打ち首やる。犯罪者相手に何を怒つとるんや……」

「けど……!」

「どうせアイツはここを追い出されたら、死ぬまで刑務所暮らしか死刑やぞ? せやろ?」

「ああ。あいつは強盗殺人に強姦殺人、他のも合わせると確定してるのは11件だったかな」

「え!」

ラミナとレイザーの言葉に、ゴンとキルアは目を見開く。

「ボポボを始め、手下連中はこのゲームのために雇われた死刑囚やろうな」

「そうだな。絶対服従を条件にハンターが雇うことはまあある。ボポボは命令違反に脱走の扇動までしていた。極刑は当然。むしろここで罰さないと雇い主が罰せられる」

ツエズゲラが詳しく説明して、ゴンとキルアは感心するように頷く。

「恐らくレイザーはゲームマスターだ」

「ゲームマスター?」

「ゲームを作った連中の1人ってことさ」

「え!? じゃあ……じゃあ!」

ゴンはレイザーに顔を向けて、

「ジンもグリードアイランドにいるの!」

と、問いかける。

ゴレイヌがジンという名前に首を傾げるが、レイザーはジンの名前を告げられたことにゴンの素性を悟る。

「そうか……。お前がゴンか……」

「うん!」

ゴンが頷いた直後、レイザーが纏うオーラが爆発したように力強く噴き上がる。

「お前が来たら手加減するな……と言われてるぜ。お前の親父にな」

口を吊り上げてレイザーが言い放つ。

「ラミナはそれに思わず天井を見上げる。」

（あんの放蕩親父……！ ガキが気になつとるんやったら、さつさと会えや！）

心の中でジンに愚痴りながら、これでは数合わせ連中はもう駄目だろうと悟った。

案の定、数合わせ連中は逃げ出し始めた。

その背中を睨みつけていたラミナは、レイザーに顔を向ける。

「メンバーは念獣でもええんか？」

「ああ。今いるメンバーが生み出した奴なら問題ない」

「なるほど。（つちゆうても、「虚実投影」を使うても後1人足らん。それに【虚実投影】は他の武器が使えん）」

腕を組んで策を考えるラミナ。

そこにゴレイヌが、

「なら、問題ないぜ」

そう言つて、背後に白毛と黒毛のゴリラの念獣を生み出した。

「ほお……」

「これで2人追加だ。8人揃ったつてことでもいいよな？」

「ああ」

レイザーが頷いたことで、メンバーの問題も解決した。

「いよいよ、決戦が始まる。」

## #73 ドッジボール×ハ×オソロシイ

ドッジボールコートに入ったゴン達8人。

レイザーがルールの説明を始める。

「ゲームは外野1名、内野7名でスタートする！ もちろん内野が0になったチームが負けだ！ コート内の選手は敵の投げたボールに当たればアウト！ 外野に出る！ ただし!! スタート時に外野にいた選手を含め、チームでたった1人！ 一度だけ内野に復活することが出来る！」

「また厄介な……」

「これもまた仲間割れを誘ってやがるな……」

ラミナとゴレイヌが顔を顰める。

「これは『バック』を宣言すれば、いつでも戻れる!! 極端な例としてはスタートと同時に『バック』を宣言すれば、8人が内野でプレーすることが出来るというわけだ。ただし、外野が1人もいない状況で球が外野に出た場合は、相手側の内野のボールとなるので注意されたし!!」

「まあ、そりやそうだな」

「さらに!! ここでは当たり判定として『クッション制』を採用している!! 例えば俺の投げたボールがゴンに当たって跳ね返り、隣の少年に当たって床に落ちた場合、2人ともアウトになる!!」

「けどその場合、俺がゴンが当たったボールをキャッチすれば、両方セーフだろ?」

「その通り!! しかし、俺の投げたボールがゴンに当たって跳ね返り、その球がダイレクトで俺のチームの選手に当たって床に落ちた場合は、アウトになるのは俺のチームの選手となる!!」

「ふむ……」

「その場合、そいつがキャッチすれば、アウトになるのはゴンだな?」「いかにも!」

「 gonはすでにルールの把握が出来なくなっていた。」

「……えーっと」

「とりあえず、お前は捕るか避けなければいいんだよ」

キルアはゴンが器用に跳ね返すなど出来ないと分かっているので、簡単に纏める。

そこにラミナがレイザーに質問する。

「念の使用はどこまでアリや?」

「もちろんアリだ。ただし、攻撃性、致死性のある能力で選手を直接攻撃するのは禁止だ!!」

「つまり、具現化した武器で相手を斬りつけるのは無しっちゃうことやな?」

「そうだな。ただし、ボールに攻撃するのはアリだ」

「例えば、相手の動きを阻害する能力は?」

「それがダメーτζを与えない能力ならばOKだ」

「なるほど……。これ以上念獣を増やすことは?」

「禁止だ。今いる8人を超えることは認められない。もちろん俺も同様だ」

「俺も質問。外野にいる選手でもアウトは取れるの?」

「ああ。ただし、内野に戻れるのは『バツク』を宣言した選手のみだ」

「まあ、そりやそうだよな」

キルアはレイザーの答えに頷く。

ラミナも今は特に質問はなくなった。

(……フェアではあるし、こっちの念能力も問題なく使えるルールやな。逆に言えば、それでも勝つ自信があるっちゃうことやな)

ラミナはそう考えながら、レイザーが生み出した念獣達を見つめる。

(……そこまで強力なオーラを籠められとるわけでもない。レイザーの方がまだまだ強い)

1人であるの人数の念獣を生み出すのは、そう簡単なことではない。普通ならば生み出すだけで精一杯だ。他の能力まで付与するとなると、絶対的にオーラ量が足りない。

(うちが思いつく限りで、このゲームで一番手っ取り早い勝ち方は『ボールの威力を上げる事』や。キャッチさせない、避け切れないボー

ルを投げるのが最善で安全な戦い方やんな。……あいつは放出系……。強化系とも相性はええ……。ボールにオーラを籠めて、ボールを強化するのはお手の物やろな……)

念弾だけで人の頭を破壊するだけの威力だ。

それと同じだけのオーラをボールに籠めれば、威力は更に上がるだろう。

「……下手したら、死人が出るかもしれんな……」

「どうした？」

ラミナの眩きが僅かに聞こえたゴレイヌが顔を向ける。

ラミナはゴンとキルアに顔を向けて、

「あいつのボール。注意するときや。多分、捕るだけでも命がけやで」

「さっきの念弾を見てれば分かるよ」

「あんなもん参考にならん。避け切れん時は【硬】で防ぐんやぞ。……

多分、うちの【堅】なんざ気休めにもならん。【硬】でも骨が砕ける

んは覚悟しときや」

「……」

「外野に出たら、恐らくまともにゲーム続行は出来んと思つた方がええ。レイザーにボールを捕られた時点で、全滅も覚悟しとくべきやろな」

ラミナは真剣な顔でレイザーを睨みつけながら言い放つ。

その言葉に全員が冗談でも何でもなく、その見込みはほぼ当たっていると理解して息を呑む。

ラミナ達は話し合つて、最初の外野をゴレイヌの白い念獣に決める。

すると、外野に『0』と顔に表示された念獣が出現する。

『それでは試合を始めます。審判を務めます、No. 0です。よろしくお願いします』

最初はジャンプボールでのスタートとなり、審判がボールを抱えてコート中心の円へと歩み寄る。

ゴンチームからはラミナが、レイザーチームからは背が高い念獣が歩み出る。

『スローインと同時に試合開始です！ レディー……ゴー!!』

審判が合図と同時にボールを真上に高く投げる。

ラミナは高く跳び上がるが、念獣は跳び上がらずにコートに戻っていく。

「なんやと……？」

ラミナは訝しむも、ボールを自陣コートに弾く。

ボールはゴレイヌがキャッチすると、レイザーチームはコート奥側に横一列で並び、腰を屈め構える。

「先手は譲ってやるよ」

「余裕こきやがって……！」

レイザーの挑発にゴレイヌは眉を顰めながら、そのまま勢いよく駆け出してボールを持っている腕を振り被る。

「挨拶代わりにかましてやるよ!! どりやつ!!」

ゴレイヌは気合を叫びながら、ボールを猛スピードで投げる。

狙ったのはレイザーではなく、『4』と書かれた小さめな念獣だった。

『ギシエツ!!』

念獣はキャッチすることもなく、後ろに吹き飛ばされる。

ボールは外野の床に落ちる。

「おお！ やったー！」

「よーし!! まず一匹！」

ゴレイヌはガッツポーズを浮かべるが、ラミナは今の光景を訝しむ。

(……確かに十分な威力ではあるが……避けるどころか、キャッチする雰囲気もなかった?)

アウトになった念獣は外野に移動する。

しかし、スタート時から外野にいた念獣の傍ではなく、右側面で足を止める。

ラミナはその行動の理由を必死に考える。

その間にゴレイヌの念獣が、ゴレイヌにボールを戻す。

「よっしや。もう一丁いくぜ」



ゴレイヌは再び腕を振り被って、投げようとする。その時になって、ようやくラミナはレーザーの作戦を悟った。

(っ……!! あかん……! 止められへん……!)

レーザーの作戦を止める手段が思い浮かばない。

結果、ゴレイヌを止めることも出来ず、ゴレイヌはまた念獣にボールを当ててアウトにする。

そして、アウトになった念獣はやはり左側面側に向かう。

「よし、準備OK」

レーザーがそう言った。

「あ? 今、なんて言った?」

「お前達を倒す準備が整ったって言ったのさ」

「……へえ、面白れえ」

ゴレイヌはレーザーの言葉を鼻で笑って、再び腕を振り被る。

ラミナはゴレイヌの体勢や腕の動きから、レーザーを狙っていることを見抜いた。

「阿呆!! レイザーちゃう!! 他の念獣や!!」

「!?」

ラミナが叫ぶも、ゴレイヌはすでにボールを投げてしまっていた。

「くそっ!!」

ラミナはベンズナイフを具現化して、オーラをボールと繋げるとすぐさま指を鳴らす。

すると、ボールがベンズナイフに変わる。

「!!!!」

ベンズナイフは勢いよくレーザーへと飛んでいく。

レーザーは笑みを浮かべたまま、左手を上げる。

ラミナはボールをキルアに投げ渡しながら、再び指を鳴らしてベンズナイフと自分を入れ替える。

「ぐっ!」

ラミナはレーザーにぶつかる前に床を強く押し蹴って真上に跳ぶ。天井まで跳び上がったラミナは天井を蹴って、自陣コートに戻る。

「……………」

「ほお……ナイフと入れ替わる能力か」

「今のはルール違反か？」

『いえ、問題ありません』

「おい！ どういうことだ!？」

ラミナは審判に訊ねて、問題ないと言われてホツと息を吐く。

そこにゴレイヌ達が駆け寄ってきて、ゴレイヌが詰め寄ってくる。

ラミナは顔を顰めて、ゴレイヌを見る。

「あんなタイピングでレイザー狙うなや。あのままやったら簡単に受け止められて、向こうボールになつとつたぞ」

「なんだと……!？」

「いきなり入れ替わったナイフすら驚くことなく、掴もうとしたりボールくらい簡単に受け止めるやろ」

ラミナは地面に転がっているベンズナイフを消して、レイザーを睨みつける。

「で、なんであんなことしたんだ？」

「そらあ、ボールを渡さんために決まつとるやろうが。周囲を囲まれる状況で、ボールを奪われるわけにいかんやろ」

「あ？ 周囲い?」

「あいつらは外野に3人配置するために、わざとアウトになったんや」  
キルア達は3方向に配置されている念獣達を見渡す。

先ほどより妙に威圧感がある気がして、ラミナの推測が外れていないことを悟る。

「あの審判の念獣を考えると、あいつの能力はこのゲームに特化しとると考えられる。そうなると、あんな簡単にアウトになるんは違和感しかないわ」

「じゃあ、何のために?」

「そらあ、パスを通すためやろな。開始時の状況ではパスは基本1パターンのみ。外野がウロチョロしようが、注意を払うんは容易い。けど、3方向に外野がおれば、最短コースでパスを縦横無尽に回せる。やから、ここでボールを向こうに取られたら、取り返すどころか避けるんも厳しなるで」

「……じゃあ、どうすんだよ?」

「レイザーは最後の方がええ。内野が0になった時点で勝ち。つまりラスト1人になった時点でレイザーは『バック』を使えん。他の念獣も油断は出来んけど、レイザーに『バック』を言わせるよりマシや」  
「……確かにそうだな」

ラミナの作戦にツエズゲラも同意する。

ゴンはやや不服そうだったが、キルアとビスケが押さえ込んでいた。

「キルア、ボール寄せや」  
「ん」

キルアはラミナにボールを投げ渡す。

「お前が投げるのか?」

「提案した以上、ある程度責任は持つでな。それに、うちの方がパワーは上やろうしな」

ラミナは片手でボールをリフティングしながら不敵な笑みを浮かべ、レイザー陣に向き直る。

レイザー達は最初と同じくコート奥で横に並んで構えている。

「次はお前か」

「そういうこっちゃな。まあ、メインディッシュは最後にしとくけどな」

「ほう……」

ラミナは右手に力を籠めて、ボールを掴む。

そして、右爪先で軽く床を2、3回叩くと、一瞬で腕を振り被った体勢でコート真ん中まで移動する。

ドン!!と、床が大きく揺れる程左足を大きく踏み込んで、左足から腰、腰から右肩、右肩から右腕に力とオーラを流し、変形するほど握ったボールにオーラを籠めて、気合と共に投げる。

「つぁらっ!!!」

空気が爆発したような音を轟かせて、ラミナが投げたボールは高速

で『3』と書かれた念獣に迫る。

「!! (No. 3じゃ無理!!)」

レイザーは一瞬で判断したが、対応は間に合わない。

ボールは念獣の胸に叩き込まれ、そのまま念獣を押し飛ばしながら背後の壁に激突する。

「……これは恐れ入った……」

レイザーは素直に称賛の言葉を呟く。

ラミナは体を起こしながら、息を吐く。

「ふうー……」

「……なんと……いう……」

「……ははは……」

ツエズゲラは想像以上の威力に慄き、ゴレイヌは乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

ビスケは素直に感心する表情を浮かべており、キルアやゴンは特に驚くことはない。2人はラミナがゾルディック家の『試しの門』を【4】まで軽く開けたことを知っているからだ。

レイザーの念獣は、壁にめり込んだまま沈黙している。

ボールは床に転がって、ゴレイヌの念獣が掴み上げる。

「よっしやあー！ これで後4人!!」

「あの威力なら行けるぜ!!」

観戦していたロドリオット達は盛り上がり、レイザーの部下達は目を見開いて冷や汗をかいている。

ラミナはボールを受け取って、投げる準備を始める。

「さて……どうしたものか……」

レイザーは構えながら、対策を考える。

「だがまあ……あれくらいならば……」

そう呟いた直後、ラミナが振り被ってコートの中に見れる。

レイザーはラミナが投げた瞬間に、コースを予測する。

すると、残った3体の念獣が混ざり合っって体が巨大化する。

「はあ……」

キルアは驚きの声を上げる。

『15』と記された念獣は、ラミナの剛速球を見事に受け止めてキャッチする。

「マジかい……」

「審判！ あれ、アリかよ!？」

『アリです』

「合体もアリなら、分裂もアリなのか!？」

『はい。ただし、人数をオーバーするのは駄目です』

「あく……増やしたらあかんのは聞いたけど、合体はあかんとは言うとらんなあ。あいつの念獣なんやし、そら合体も分裂も自在やわな」  
「そういうことだ」

レイザーは薄ら笑いを浮かべたまま念獣からボールを受け取ると、念獣を『2』と『13』に分裂させる。

ラミナのパワーを考えて、1体は合体させたままにしとくべきと判断したのだった。

「さて……正念場やな」

「ああ」

ラミナは後ろに下がって、腰を据える。

他のメンバーも構えて、いつでも動けるように備える。

すると、レイザーはボールを受け取った位置から、ゆっくりと腕を振り被る。

「？ あんな位置から?」

「パスに注意しろ!」

「もち!」

（流石に向こうからのボールに【妖精の悪戯】を使えんな。うちもあいつのボールを受け止められるかどうか分からんし、オーラは無駄に出らん。自分らで躲してもらおか）

ゴン達はレイザーの構えを訝しむも、油断は出来ないと気を引き締める。

ラミナも流石に余計なことに意識を割く余裕はないので、ゴン達には自分で対処してもらおうことにする。

そして、レイザーが腕を振り抜いた瞬間、

先ほどのラミナとほぼ同じ威力のボールが、猛スピードでゴレイヌの顔面を掛けて放たれる。

「っ！ (そこまで力入れたように見えなかったのに……!)」

ラミナはゴレイヌに防ぐことは不可能と判断する。

(横からなら逸らせるか……!?)

ラミナは駆け出して、右拳に【凝】でオーラを集中させる。

すると、

「ホワイト・ゴレイヌ白の賢人!!」

ゴレイヌの身体がオーラに包まれた直後、ゴレイヌの姿が白い念獣に変わる。

「っ！」

ラミナは僅かに目を見開いて、足を止める。

白い念獣の顔面にボールが直撃し、頭部が吹き飛んで体もそのまま砕けて消える。

ボールは大きく弧を描いて跳ね返り、レーザーの元へと戻る。

「ナイスリバウンド」

レーザーは後ろを振り返ると、そこには膝をついて荒く息を吐くゴレイヌの姿を捉える。

「自分と念獣の位置を入れ替える能力か」

「はあ……はあ……」

白い念獣は戻ることなく、そのままオーラが霧散していく。

(念獣が粉々に砕けた。それはすなわち、ゴレイヌがレーザーの攻撃を見て受けたイメージそのものだわね)

ビスケ、ラミナ、ツエズゲラはゴレイヌの精神的ダメージは大きいと判断する。

少なくとも、白い念獣の方はしばらく再び生み出すことは出来ないだろう。

砕かれたイメージはそう簡単に克服できるものではないからだ。

(まあ、死なれるよりはマシやな。もしやられとったら、3人減って外野無しになっとな)

ラミナはゴレイヌの行動は十分及第点と判断する。

そこにキルアが審判に声を掛ける。

「この場合、アウトなのは白い念獣の方だよな？」

『はい。しかし、ゴレイヌ選手が内野に戻るには『バック』が必要となります』

「つまり、念能力での交代はOKなんやな？」

『その通りです』

審判の言葉に満足したラミナとキルアは、頷いて再びレイザーの攻撃に備える。

「さあ、次行くぞー！」

レイザーは今度は外野にいる念獣にさつきほどではないが高速で投げる。

「来よった……！」

「速っ……！」

すると、念獣達は受け流すようにスピードを落とさずにパスを回し始める。

内野ではレイザーがパスの向きを変え、スピードを維持させる。

ゴン達はもはや内野中央でボールの軌道を追いかけるしかなかった。

まだゴン、キルア、ビスケ、ラミナは素早く反応しているが、黒い念獣はもちろんのことだがツエズゲラも僅かに反応が遅れ始めた。

「ぐっ……！」

「速すぎ……！」

（黒い念獣とツエズゲラは無理。……賭けやけど……）

ラミナは右手にブロードソード、左手に圈を具現化する。

それにキルア達やレイザーは僅かに目を見開く。

（また新しい武器!?!）

（ほう……。この状況を打開できると……。面白い！）

レイザーは笑みを深めて、更にパスの速度を上げる。

そして、左外野にいた念獣が、パスを奥側の念獣に回した瞬間、ラミナが全力で床を蹴り抜いて、パスコースに入り込む。

「ふっ!!」

右手に握るブロードソードを高速で振り上げ、ボールを掬い上げるように受け流す。更にすぐさま振り下ろし、今度は打ち上がりそうになるボールを抑え込むように当てる。

その後も目にも止まらぬ速さでブロードソードを振りながら、ボールの進行方向に動く。

高速で飛んでいたボールは、徐々にスピードを落としていき、最後にラミナが体を回転させながら左腕でボールを抱え込んで内野中央に跳び下がる。

「はあくく……しんどお……」

武器を消して右腕を解すように振りながら、大きく息を吐いてポヤク。

あまりの離れ業にキルア達は啞然とし、レイザーもこれには小さくではあるが驚きの表情を浮かべていた。

「腕は無事なのか？」

「ギリギリやったけどな。一度念獣を経由すると、一段階スピードもパワーも下がりよるから上手くいったわ」

それでも【意地を貫く拳】で体を強化してなければ、止めきれなかっただろうとラミナは内心舌を巻く。

右腕も限界の速度で剣を振っていたので、あれ以上速めることも、パワーを上げることも出来なかった。

更に【周】にも回すオーラも限界だったので、下手したら砕けていたかもしれない。

かなりギリギリだったことに、ラミナは内心歯を食いしばる。  
(次も上手く出来る自信はない……。このチャンスが無駄には出来んな)

しかし、まだ右腕は僅かに痺れており、先ほどと同じようなボールは投げられないだろう。

(けど、それやとあの念獣共にまた合体されて捕られるだけやな。……しやあないか)

ラミナは小さく息を吐いて、ボールをキルアに渡す。



「ちよつと持つとつて。準備するわ」

「準備？」

「審判。ちよいタイム」

『はい』

キルアは首を傾げながらボールを受け取る。

ラミナはキルアの疑問に答えずに、審判に告げて一度コートの外に出る。

そして、上着とブーツを脱いで、タンクトップと裸足姿になる。

キルア達は一体何の準備かと更に首を捻る。

ラミナは自然体を取り、目を瞑って呼吸を整える。

数秒ほど深呼吸しながら両足を肩幅まで開く。

そして、突如大きく目を見開いて、

「はあ!!」

気合を叫ぶと同時に、全力の【練】を発動する。

床に大きくヒビを入れて、膨大なオーラが噴き出す。

キルア達は目を見開いて、体に叩きつけられる圧に体を踏ん張る。

「な、なんてオーラ量だ……!」

「す、すごい……!」

「……化け物かよ……」

「……凄まじいの一言だね……。完全にベテランハンタークラスのオーラ量だわ。これでもまだオーラをコントロールできるギリギリで抑え込んでいる……。つまり、コントロールすることを諦めれば、まだ増えるってことだね」

ツエズゲラ、ゴン、キルアは冷や汗を流し、ビスケは顔を鋭くしてラミナの実力を見極めようとする。

ラミナは恐ろしいオーラを纏ったままコート内に戻る。

四肢の筋肉はやや膨れ上がり、血管が浮かび上がっている。

「ボール」

「……ああ」

「少し離れときい」

ラミナはボールを受け取って、ラインギリギリまで下がる。

そして、左手に圈を具現化し、右腕にボールを抱えると、陸上のクラウチングスタートの姿勢を取る。

「……………ふう……………」

そして、ゆっくりと息を吐き、更に全身に力を籠めて行く。

オーラが増えることはないが、明らかに「練」の密度が上がっていることをその場にいる全員が理解する。

レイザーも流石に笑みを消し、真剣な表情で構える。

(豹……………いや……………猛虎か龍、だな)

レイザーがそう思った瞬間、ラミナが更に身を屈める。

「っ!! 来る……………!!」

「おおおお!!」

レイザーも体に力を入れて、【練】を発動する。

ラミナは体育館内の空気を震わせるほど叫び、両脚の筋肉が一瞬更に膨れ上がったかと思うと、右腕に抱えていたボールをコート中央天井スレスレまで高く放り投げる。

直後、床を砕きながら一歩前に踏み出して、更に全力で跳び上がりながら体を全力で捻る。

「なっ!?!」

「何をする気だ……………!?!」

ロドリオット達は目を見開いて、ラミナの動きを見守る。

ラミナは回転しながら体を横にし、ボールに近づいて行く。

「まさか……………!」

「蹴る気……………!?!」

キルアとビスケはラミナが何をする気か気づき、目を見開く。

その言葉通り、ラミナは膨大なオーラを全て右足に集中させる。

「おおおお!!」

叫びながら、右脚を全力で振り上げる。

そして、叩きつけるようにボールを蹴りつける。

ボールは大きく凹み、破裂する直前で大砲を撃ったかのように爆音

を轟かせながら放たれた。

音速かと思うほどの超高速で放たれたボールは、強烈な回転をしながら彗星の如くレーザーへと迫る。

（これは……!! 角度的に跳ね返すのは無理！ しかし、捕るにしても確実にコート外まで吹き飛ばされる!! 念獣は……貫かれる!!）

レーザーは即座に回避行動をとる。

一番動きやすかった後ろに反射的に下がる。

しかし、強烈な回転をかけられたボールが、ホップしてレーザーを追う様に顔面に向かって飛んで来た。

「っ!!? ちい!!」

レーザーは両腕を上げて、顔の前で交えてオーラを集中させる。

直後、爆発したかのような衝撃がレーザーに襲い掛かった。

レーザーは後ろに吹き飛ばされて壁ギリギリまで転がっていき、ボールは真上に跳ね上がって天井に当たる直前に破裂した。

「ボ、ボールが爆発した!」

「なんて威力だよ……!?!」

「あの威力だ! レイザーもただじゃすまないだろ!!」

ラミナはコート中央に着地して、息を整える。

「ふう……。さて、どうなった?」

ラミナは圈を消して、レーザーに目を向ける。

誰もがレーザーの動きに注目していると、仰向けに倒れていたレーザーが両脚を上げて、反動をつけて飛び起きて立ち上がる。

「なっ!?!」

「ふう……。流石に今のは焦ったな」

レーザーはそう言いながら、両腕の状態を確認する。

僅かに腫れているだけで、骨折などはしていなかった。

「……ちっ。（【硬】で防ぐのと同時に、体ごと上半身を反らして衝撃とダメージを減らしよった……! バケモンが!）」

ボールが真上に跳んだのがその証拠。

もし受け流せていないのであれば、確実にラミナ達のコート側にボールが飛んできているはずだ。

「あのボールを完璧に受け流されるんは、ちよいと自信無くすんやけどなあ」

「そう言うな。あれ以外どうにも出来ないと思っただし、それでも上手く行くかは分が悪い賭けだったんだぜ？俺が運が良くて、お前は少し運が悪かっただけさ」

「その『少し』が、今はデカすぎるでなあ」

「それは、まだ分からんさ。で、だ。『バック』！」

レイザーはバックを宣言し、内野に戻る。

「これでこっちは後がなくなってしまったな。なりふり構っている……場合じゃない、か」

レイザーはそう言いながらも、不敵な笑みは消えていない。

そして、ラミナも汗を流しながらも不敵に笑う。

「……それはこっちも、やな」

命がけのスポーツは、まだまだ続く。

## #74 イノチガケ×ノ×キヤツチ

レイザーは念獣からボールを受け取る。

「さて……レイザーはもう『バック』は出来んけど……」

「こつちは、アウトになった後にそもそも『バック』出来る余裕があるかってことになりそうだな」

「せやな。悪いけど、ぶっちゃけうちはさつきみたいに高速パスは止められんぞ。これ以上オーラを消費する余裕は流石にないでな」

「分かってる」

（どっかのババアがもつと本気でやってくれば話は早いんやけどな。まあ、ゲームで、やり直し可能っちゅう以上無理強いも出来んか）  
レイザーとしては今回で勝負を決めたいのが本音である。

途中でやめて回復を待ち、修行してからまた挑戦となると、流石に報酬ももらえるか分からないし、旅団の方も放っておくわけにはいかない。

ここでタダ働きになることだけは避けたいのだ。ここまで能力などを晒したのだから。

レイザーはビスケに視線を送る。

もちろんビスケは気づくが、すぐに目を逸らして「ホホホ」と誤魔化すように笑う。

「ちっ……」

「さあ、そろそろ行くぞ」

レイザーは舌打ちをして、レイザーの言葉に気を引き締め直す。

レイザーは大きく踏み込んで、再び高速パスを始めた。

「くそっ！」

「さつきより速いよー！」

キラアとゴンは先ほどよりスピードが速くなっていることに、冷や汗を流して必死にボールを目で追う。

ビスケとレイザーは素早く対応しているが、やはりツエズゲラとゴレイヌの黒い念獣は追いきれなくなった。

いつのまにか『3』の念獣も外野に復帰しており、外野には4体の

念獣がいることで先ほどより更にパスのコースが短く、複雑になり、スピードが維持されるようになった。

(こら、どつちにしろ止める余裕ないわ！)

念獣から念獣までボールが回るまで0.5秒もない。

流石に先ほどのように剣で止めるには距離が足りないし、割り込む時点で念獣の目の前になるだろう。

そして、遂に無防備に背中を晒しているツエズゲラの背後にいる念獣にボールが回り、その背中に向けてボールが投げられる。

「ツエズゲラ!!」

「後ろだ!!」

「!! ぞお……!!?」

ツエズゲラは咄嗟にオーラを背中に集中させる。直後に強烈な衝撃が体を襲い、骨が砕ける音が響く。

ツエズゲラは吹き飛ばされて床を転がり、ボールは地面に落ちる。

キラアがボールをすぐさま拾い上げるが、ズシツとまるでボウリング玉のような重さを感じて落としそうになった。

(あれだけパスを回してこの重さかよ……! そりやラミナも無理っと言うよな。むしろ、最初よく止めれたもんだぜ……)

キラアは改めて自分達がどれだけ危険な状況にあるのかを思い知る。

ちなみにラミナは、

(やっぱ直撃すれば続行は無理やな。アウトを防ぐには直撃する前に止めんと駄目か……)

【妖精の悪戯】でツエズゲラのアウトを防ぐことは出来たが、ツエズゲラの様子を見て発動を止めたのだ。

明らかに骨折した音が聞こえ、受け身も取れていなかった。

確実に戦線離脱だろうと判断したのだ。

ツエズゲラは僅かに血を吐きながら咳込み、ふらつきながら立ち上がる。

「折れた骨が内臓を痛めているかもしれないな。おい、手当してやれ！」

レイザーが手下に声をかけ、手下達がツエズゲラに近寄るが、ツエズゲラはそれを拒否する。

「だ、大丈夫だ。触るなっ」

明らかに強がりだが、敵に治療されるのも信用できないので仕方ないと言えば仕方ないだろうとラミナは思う。

ツエズゲラは外野に出て壁近くに座り込む。

『プレー続行不可能となる怪我をした場合、その選手は退場となりません。外野としても内野としてもカウントされないのをご注意を。ただし、ゲームに勝った場合は8人に含まれますので、ご安心ください』  
審判の言葉にラミナ達は頷く。

ロドリオット達がツエズゲラに声を掛ける。

「大丈夫か？」

「ああ……俺もなまったもんだ」

『大天使の息吹』使うか？」

「馬鹿言え……！この程度で使えるか！」

ツエズゲラはロドリオットの提案を強く拒絶する。

（業腹だが、俺が回復したところで役には立たん……。反射神経、敏捷性はゴン達の方が上。そして、ラミナは全てにおいて俺を勝っている。間違いなく、この勝負の切り札はラミナだ。ならば、ラミナが倒れた時のために『大天使の息吹』を残しておくのが最善だ……）

ツエズゲラは歯軋りをして、コートに残ったメンバーを見つめる。

キルア達は集合して、作戦を練る。

「レイザーは最後だよな？」

「そらな」

「つてことは、まずは念獣達からだね」

「まずはチビのほうやな。あいつなら、まだ普通に投げてもいけるやろ。ボール」

「頼んだ」

キルアからボールを受け取って、ラミナは腕を振り被って足を踏み出す。

そして、勢いよくボールを投げる。

すると、念獣は素早くレイザーの背後に回ってボールを躲す。

「ちっ！」

「まあ、躲さないなんて言っていないわよね」

ボールは壁に当たって、ゴレイヌが素早く拾う。

「……」

ゴレイヌは眉間に皺を寄せたまま、コート横側に移動する。

「ゴレイヌ？」

ゴン達は首を傾げ、レイザー達は素早く反対側に移動する。

「……やられっぱなしってのは性に合わないんだよ。借りを返すぜ!!」

ゴレイヌは後ろに下がって、腕を振り振りながら勢いよく駆け出す。

「行くぜ!!」

(……レイザーに届かんのは分かっとするはず……。なんか手段があるっちゅうことか？ ……白い念獣は自分と入れ替える……。なら、黒い方はまさか……。！)

ラミナはゴレイヌの狙いを推測する。

その推測を後押しするように、黒い念獣が前に出てレイザー陣のコートに足を踏み入れる。

すると、ゴレイヌは黒い念獣の顔面に向けて、ボールを投げる。

直後、黒い念獣とレイザーの身体がオーラに包まれて、一瞬で位置が入れ替わってレイザーの頬にボールが叩き込まれる。

「ブラック・ゴレイヌ黒い賢人」！ どうだ！ テメエも外野に引っ込みな!!」

レイザーの頬に叩き込まれたボールは、大きく跳ね上がって外野に吹き飛んでいく。

(外野まで飛んだ！ ……これで落ちれば……。！)

ラミナはボールが落ちる瞬間を見届けようとすると、レイザーの合体したデカイ念獣の手に小さい念獣が飛び乗ると、勢いよくボールに向かって投げた。

「なっ!?!」

念獣は落ちる前にボールをキャッチする。



ラミナはベンズナイフを具現化するが、その前に小さい念獣は背後にいるデカイ念獣に向けてボールを投げる。

【妖精の悪戯】を発動しようにも、ボールがデカイ念獣の身体に隠されてしまった。

「ちい!!」

デカイ念獣はしつかりとボールをキャッチし、小さい念獣は見事に着地する。

ボールが床に落ちる前だったので、レイザーはセーフということになる。

「な……」

ゴレイヌは小さい念獣の動きに唾然とするが、直後頬に強烈な衝撃が襲い掛かって意識が遠のく。

デカイ念獣がボールをゴレイヌにぶつけたのだ。

ボールは跳ね返って、レイザーがキャッチする。

「なっ!?!」

「ゴレイヌ!!」

レイザーは倒れてピクついているゴレイヌを見下ろして、

「少し焦ったぜ。中々いい能力だ。大事にしなよ」

「ちよつとアンタ! なんてことすんのよ!」

「ん? 相手にパスしちやいけないルールはないぜ?」

ビスケの抗議に、レイザーは涼しい顔で言う。

すると、黒い念獣が体を崩して消滅していく。

「ゴレイヌの念獣が……!」

「そら、使い手が気絶したんやから当然やろ。あの能力からすれば遠隔操作型やろうしな。審判! 黒い念獣はアウトになつたらんけど、どういう扱いになるんや?」

『ゴレイヌ選手が意識を取り戻せば、内野に復帰して頂いて構いません。ただし、その前に内野が0になった場合は決着となりますのでご注意ください……』

「了解。ま……無理やろうけどな」

ラミナは未だに痙攣しているだけのゴレイヌに目を向けて、小さく

ため息を吐く。

ロドリオット達も駆け寄って、ゴレイヌの状態を確認する。

「こりや無理だ……！」

「運よく意識を取り戻せても、とてもじゃないが念獣を出せるコン  
デーションじゃないぜ……！」

「やんな。やってくれるで、ホンマ……。これでこちらは外野が0。  
しかも1人減って残り4人で、ボールはそっち。絶望的やなあ……」  
「これもゲームだ。諦めてもらおうか」

「まあ、確かに油断したんはこつちやから、うちは文句言う気はない  
で。恨み言は言わせてもらおうけどな」

「それは怖いな」

ラミナの言う通り、外野は安全と思い込んでいたラミナ達の油断で  
ある。

『外野が0の場合、外野に出たら相手ボールになる』『外野にいる選  
手は一度だけ『バック』を宣言できる』『続行不能の選手は外野にも内  
野にもカウントされない』。

この3つのルールを考えれば、どう考えたって『外野の選手を続行  
不能にして0にすれば『バック』の意味を無くす』のが一番手っ取り  
早い作戦である。

ラミナ達が運よくほぼ無傷でレイザーのボールをキャッチしたと  
しても、ラミナチームの外野は0なので、レイザー達は躲せば自動的  
に自分達のボールになる。

「まいったなあ……。かと言って、ここで誰か外野に出ても内野の数  
を減らすだけで不利になるだけやし……」

「まずはボールを捕らないと話にならないけどな」

キルアは眉間に皺を寄せて、レイザーを見据える。

レイザーはもはやデフォルトになっている不敵な笑みを浮かべて、  
「さて、そろそろ一度勝負してみるか、ゴン」

「!!」

「【堅】か【硬】を使えるならば、全力で使え。そうすれば死にはしな  
いだらう。当たり所が良ければ、だがな」

「……やってやるさ」

ゴンは腰を落として、【堅】を発動する。

キルアもその隣で同じ姿勢を取り、【堅】を発動する。

(……ええ【堅】やな。【纏】と【練】をしつかりとやっとなる証拠。発動の滑らかさから考えれば【流】も速やかに出来るやろうな。実戦経験さえ積み上げていけば、大抵の奴は相手にならん。ホンマ……未恐ろしい奴らやで。カルトの奴も面倒な目標を掲げたもんや)

ラミナは弟子に憐れみを感じながら、レイザーの投擲に備える。

レイザーは腕を振り上げて、大きく脚を踏み出す。

その力強さはゴレイヌに投げた時の数倍にも感じられた。

ツエズゲラは死のイメージしか思い浮かばなかった。

「来おい!!」

ゴンが叫ぶ。

それに答えるように、レイザーは宣言通りゴンに向かって剛速球を放つ。

その瞬間、ゴンは更に身を屈めて両手の甲を額に当てる。

更に【硬】で両手と頭を覆い、攻防力を最大まで高める。

(吹き飛ばされる!!)

ラミナは受け止めるには足のオーラが足りないことを見抜き、ゴンへと駆け出す。

ボールはゴンの両手に直撃する。

ゴンは踏ん張ろうとするも、靴が脱げてしまい一瞬で後ろに吹き飛ばれる。一度だけ床を跳ねて、勢いよく壁へと激突する。

ラミナはボールをキャッチしようとしたが、ボールは真上へとほとんどスピードを落とさずに跳ね上がって天井に激突してしまった。

「ちい!!」

「ゴン!!」

ラミナは穴が空いた天井を見上げて、舌打ちする。

キルアとビスケはゴンの元へと駆け出して、一時ゲームは中断される。

「レイザーと違って真っ向から受け止めたからか……」

「計算してかなり頑丈に作ってもらったんだが……。まあ、突き抜けなかっただけでも良しとするか」

「作ったん数年も前やろ？ そらあ数年もあれば威力は上がったるやろ」

「それもそうだな」

レイザーは肩を竦める。

ラミナは呆れたようにため息を吐き、ゴンの元へと移動する。

ゴンは起き上がっているが、額から血を流している。

「意識は？」

「大丈夫！ 足の踏ん張りが出来なかったただだから！ 手も動くよ！」

「……はあ。次は捕るってよ……」

「……お前なあ」

『バック』は俺がするからね」

「おい」

「するから」

ゴンは立ち上がって、レイザーを睨んだまま力強く言う。

絶対に折れてやらないと伝わる声色に、ラミナ達は呆れるしかなかった。

3人共が、こうなったら人の忠告など届かないことなど知っているのだから。

「……はあ。分かったわさ。ただし！ 『バック』は内野の人数が残り2人になってから！ いいわね！」

「うん」

「まずはとっとと手当てして来いや。血を流し続けとる奴が戻ってこられても、うちは信頼出来ん。置物扱いするで」

「うん」

聞いているのかどうか分からない返事をするゴンに、ビスケとラミナは改めてため息を吐く。

「審判。ゴンの手当てが終わるまでタイムすることは？」

『認められません』

「オイ!？」

『認めると、ツエズゲラ選手やゴレイヌ選手の回復を待つことも認めることになりますので』

「……ちっ!!」

『そして、ボールの落下予測地点はゴンチームの内野ボールで再開しますー!』

「じゃあない。おい、ツエズゲラ! 軽いパス回しくらい出来るやろ! 座ったままでええから、少し場所変えろや!」

「……分かった」

ラミナはツエズゲラに鞭を打って、ツエズゲラをコート近くまで移動させる。

新しいボールを受け取ったキルアは、ツエズゲラとパスを回す。

「これならいいだろ?」

『問題ありません』

「さて……この後、どうするか……」

「レイザーを狙うのが最善だけど……生半可なボールは届かないものね」

「もううちのボールは止められるやろうしなあ。周りから潰すにしても、ボールがレイザーに渡ったらヤバイし……」

ラミナとビスケは顔を顰めて、作戦を考える。

「……ここまで来ても、隠し玉は出さんのやな?」

「悪いと思うけど、出したところで大して解決にはならないわよ」

「さよで。とりあえず……チビの方だけでも飛ばすか。……2億じゃ安かったかもしれんなあ」

「そこは後でツエズゲラ達と交渉しなさいな」

ラミナはため息を吐き、ゴンの手当てが終わったのを確認してボールを受け取る。

ラミナは思いっきり振り被って、小さい念獣に向かってボールを投げ

る。小さい念獣は両腕を胸の前で交えて、小さく跳び上がって上半身を少し下に向ける。

「！ あいつつ……！」

ラミナはその動きの狙いに気づいて、目を見開く。

小さい念獣はボールが直撃して後ろに吹き飛ばされるが、ボールは跳ね返って床に叩きつけられたことで外野に出ることもラミナの方に戻るのも防ぐ。

レイザーが素早く動いてボールを掴む。

「ホンマ、ムカつくわあ……」

ラミナは顔を顰めて、距離を取る。

「外野がどんどん潤沢になっていくわねえ」

「そこはもう諦めるしかないやろ。レイザーに念獣が碎けるイメージを持たせるのも、気絶させるのも無理やし」

軽口を叩きながら、構えるビスケとラミナ。

すると、レイザーが足を踏み出して、アンダースローでボールを投げる。

ボールは強烈な回転を纏いながら、キルアに向かって勢いよく飛んでいく。

キルアは受け止めるのは無理と判断して、右に跳ぶ。

すると、ボールが左に直角に曲がり、ビスケへと迫る。

「っ!!」

ビスケはギリギリで跳び上がったて躲し、ビスケの横にいたラミナはベンズナイフを具現化しながら、身を反らして躲す。

しかし、すぐ横に念獣が待機しており、見事にボールをキャッチして、素早くラミナに向かってボールを投げる。

「ラミナー！」

ラミナはベンズナイフを手首だけで前方に投擲し、素早く指を鳴らす。

【妖精の悪戯】でベンズナイフと入れ替わってボールを躲す。ボールはベンズナイフに直撃し、バキン！とベンズナイフが折れる。

「げっー！」

ラミナは頬を引きつかせる。

しかし、躲されたボールをビスケとキルアも躲して、反対側にいた

念獣にキャッチされて、更にレイザーへと戻っていく。

ボールを受け取ったレイザーは、今度はオーバースローでラミナへとボールを投げる。

「ちいー」

舌打ちしながら左手に圈を具現化して、体を強化する。

そして、両腕にオーラを集中し、体を横にしながら腰を捻って跳び上がる。

剛速球で迫ってくるボールを抱えるように右腕を伸ばし、ボールを体の下に引き込みながら体を捻っていく。ボールが体の真下に来たところで、圈を握る左手をボールの背後から回す。

体の回転に加え、右腕でボールを引き上げ、同時に左手でボールを押し上げる。最後に勢いよく右腕を引いて、縦回転しているボールに横回転を掛ける。

スツツパアアン!!

ボールは完璧に速さと威力を掻き消されて、3mほど打ち上がる。

「なあ!？」

「ほお……」

キルア達は目を見開き、レイザーは感嘆の声を出す。

ラミナは着地して、落ちてきたボールを右手で受け止めて、そのまま人差し指を立ててボール回しをする。

「ふう〜……危ない危ない……」

息を吐いて圈を消し、左腕で額の汗を拭う。  
すると、

『ビスケ選手アウト! 外野へ移動です!!』

審判の宣言にロドリオット達は驚く。

「はあ!？」

「避けただろ!？」

全員がビスケに目を向けると、ビスケのスカートの一部が破れていた。

「衣服も体の一部……ってことだわね。不覚……」

ビスケは顔を顰める。

その時、

「バック!!」

ゴンが『バック』を宣言し、内野へと向かう。

『ゴン選手、『バック』を宣言！ 内野へ移動です!』

「……本当に大丈夫かよ？ ラミナに残しておくべきじゃねえか？」

「レイザーもそれを見越してくるかもしれない……。それにあいつだってレイザーと真っ向勝負したんだ」

「ラミナだって消耗してきてる。賭けに出ないと勝ち目は増えないぜ」

ロドリオット達がそう話している目の前で、ゴンとビスケがすれ違  
う。

「大丈夫？」

「うん」

「いいこと？ 無理は絶対にしないこと」

「うん」

「……1+1は？」

「うん」

「はあ。OK、死んでも倒しておいで」

「オス！」

「そこは聞いとるんかい」

ビスケはため息を吐いて、外野へと向かう。

ゴンはラミナとキルアの元に歩み寄る。

「平気か？」

「大丈夫！」

「そら、良かった。さて、どないしょ。残るはレイザーと合体念獣。どっちも生半可な力じゃ受け止められるだけや」

「あの入れ替わるナイフは？」

「残念ながら砕かれてしまったから、しばらく使えん」

「そうか……」



(つちゆうか、もう二度と使えんのやけどな……。はあ……。こんなところで使い切るとは……)

ベンズナイフは今のでストックが0になってしまったのだ。

新しく作らない限り【妖精の悪戯】は二度と使えない。

「流石にうちもオーラが限界に近い。これ以上受け流す余裕もないし、あの時の攻撃も後1発やな。それ以上となると、念獣のボールでもヤバなる」

「念獣のボールなら、威力は下がってんの？」

「気休めやけどな。ツエズゲラみたいに骨折で済むやろ。ゴレイヌも無事やしな」

「なるほど。じゃあ、レイザーの球に注意して、避ければ大ダメージは避けられるな」

「やな」

「それじゃあ、勝ったことにならない」

「「あ?」」

ゴンの言葉にキルアとラミナは声を低くして、睨みつける。

「ぎけんじゃねえぞ。まず、どんなでも勝たなきや、それこそ意味ねえだろ。頭に昇った血い下ろせ、バーカ!!」

「ムカついてないの?」

「ああ!?!」

「左に避けてたら死んでたかもしれない」

「っ!」

「俺はすつごく頭に来てる。ハンパには勝たない! 完璧に負かしてやる!!」

「意気込むんはええけど、手はあるんやろうな? ないんやったら、うち

「はここに降りるで。お前の意地なんぞ知らん」

「ある。俺がやるから、ボール頂戴」

「……ほお。ええやろ。見せてみい」

ラミナはゴンにボールを渡す。

ゴンはキルアに顔を向けて、

「キルア、真ん中に立って」

「? ああ」

キルアはゴンに言われるがままに、コート我真ん中に立つ。

「腰を落として、しっかりボールを持っててね」

「……分かった」

キルアは腰を落として、ボールを上下で挟むように押さえる。

すると、ゴンは腰を落として、右手を握り締めて左手を添える。

そして、右拳にオーラを集中させる。

それにキルア達もゴンの狙いに気づく。

(おいおい……! 本気か!?)

ラミナは集中するオーラの量を考えて、目を見張る。

(それなら投げるよりはパワーはあるやろうけど……! キルアの両

手、下手したら吹き飛ばぞ!?)

キルアもゴンの狙いを理解しているので、両手のオーラをギリギリ

まで減らしている。

「最初は、グー!! じゃん!! けん!!!」

右拳に大量のオーラを籠めて、掛け声と共に勢いよく右ストレート

を振り抜く。

「グー!!!」

ドゴン!!と大砲を撃ったかのような音を響かせて、ボールが猛スピードで発射される。

キルアの両手は衝撃に弾かれる。

「っ!!」

顔を顰めるも呻き声すらも上げずに堪える。

そして、ボールは合体念獣に向かって飛ぶ。

合体念獣は腰を落として、ボールをキャッチするが、

そのまま両足が床から離れて、外野まで吹き飛ばされる。

「ほお」

『No. 13アウト!! 体がエリア外に触れた状態での捕球は反則無効です! ゴンチームの外野からリスタートとなります!!』

「よっしやああ!!」

「一番デカいのを吹き飛ばしたぜ!!」

ロドリオット達は盛り上がるが、ラミナ、ビスケ、ツエズゲラは顔を顰めてキルアを見つめている。

「くそっ! あんなんじゃないだめだ!!」

しかし、ゴンは納得出来ていないようで悔しがる。

(まあ……うちが蹴ったボールよりは弱いんは確かやけど……。これ以上威力を上げる気なら……)

「おい、キルア」

ラミナはキルアに声を掛ける。

キルアは何故声を掛けられたのかを理解しているようで、不敵な笑みを浮かべて、

「大丈夫。まだ行ける」

「……お前がええなら、うちはええけどな。……覚悟はしときや」

「わかってるさ」

キルアは頷いて、ビスケからボールを受け取る。

(問題は……威力は上がっても、ボールにそこまでオーラが籠められるわけやない。レイザーの体術を考えると……さっきの倍の威力は欲しいところやな)

しかし、それは同時にキルアの両手へのダメージも跳ね上がるといふことだ。

正直、さっきの攻撃とて、よく無事だったと思うべきなのだ。

それでも、

「よーし! もういつちよ行こうぜ! レイザーに1発ぶちかましてやれ!!」

「……うん!」

キルアの言葉にゴンは笑みを浮かべて頷く。

試合はいよいよ、佳境を迎えたのだった。

## #75 ソノサイノウ×ガ×オソロシイ

キルアは再びボールを構える。

ゴンは先ほどよりも威力を上げるために意識を集中する。

(もつともつと威力がある……)

ゴンは最初にオーラを目覚めさせた時のように、自然体をとって目を瞑る。

その状態で練れるオーラを【練】として全て引き出す。

ゴンの身体から膨大なオーラが噴出し、その量にツエズゲラ達は冷や汗が噴き出す。

まだラミナほどではないが、それでもあの歳の子供が出せるオーラ量ではなかった。

レイザーはそれでも不敵な笑みを崩さない。

ゴンはゆっくりと腰を落として、右拳を構える。

「最初は、グー!!」

練り上げたオーラを全て右拳へと集中する。

極限まで収束されたオーラがビビビ!!と空気を震わせる。

その圧にラミナとビスケも僅かに目を見開く。

ゴンは左脚を大きく踏み出して、全力でボールに向けて拳を振り抜く。

「ジャン!! ケン!! グー!!!」

爆音と共にキルアの両手は大きく弾かれて、ボールはまさしく大砲が如く放たれる。

その威力はラミナの蹴りと遜色ない威力だった。

(完璧！ 捕れっこねー!!)

キルアも両手の痛みを耐えながらも、手応えを感じていた。

すると、レイザーが両足を大きく開いて腰を落とし、両手を組んで両腕を伸ばしてレシーブの構えを取った。

「レシーブ!!?」

誰かの驚きの声とほぼ同時に、レーザーの腕にボールが激突する。レーザーはボールが直撃する瞬間に「硬」で腕を強化した。ボールが直撃した直後、腕と同時に体を大きく引いて、後ろに大きく跳び下がる。

「……恐れ入ったわ……」

ラミナはレーザーのレシーブに感服する他なかった。それはビスケも同様だった。

(刹那の狂いも許されないタイミング！ それを同量のオーラをぶつけ、完璧に捕えて受け流した……！ この男、本当に強い！)

ボールはラミナやレーザーの時とは違い、天井に当たることもなく、完全に威力を相殺していた。

レーザーは素早く起き上がって、コートに戻りながら、「逃げる」と捕るだけじゃないってことさ。ま、あまり参考にならないと思うがね」

ゴンはレーザーの技術に慄くどころか、ハンター試験で初めてヒツカと衝突した時のような興奮が湧き上がってきて、思わず笑みを浮かべる。

「すっげえ……！」

レーザーは落ちてきたボールをキャッチする。

「くそお……！ 絶体絶命か……」

ロドリオットが顔を顰める。

ツエズゲラも頷いて、ゴン達を見る。

「ラミナとゴンはオーラをかなり消費している。かなりの疲労感が襲ってきているはずだ」

「じゃあ、無事なのはキルアって少年だけ？」

「いや、一番重傷なのはキルアだ」

「はっ」

「キルアはゴンがボールを撃ち出す時、ほとんど両手をオーラでガードしている」

「!? 馬鹿な!? あの威力だぜ!?!」

「あれは両手で大砲の筒の代わりをしているようなものだ。しかし、

あの時キルアがオーラで両手をガードしていたら、キルアのオーラが邪魔をしてゴンのパンチ力を殺して、威力を下げてしまっていた。だから、キルアは両手をほとんどオーラで守っていない。キルアの両手はもはや握ることすら出来ない程、酷く負傷しているはずだ……」

ツエズゲラは顔を顰めて、ゴン達を見つめる。

ゴン達は一度集合して、

「まだ立つとれるか？」

「うん。でも……もう後1発が限界だと思う」

「キルアは？」

「……行けるに決まってるんだろ」

「……そうか。まあ、まずはレイザーの球を捕らんと話にならんけどな」

「だな……」

その時、ツエズゲラが審判に声を掛ける。

「タイム！ 審判、質問だ」

『はい』

「内野の選手が自分の意思で外野に出ることは可能か？」

『はい。ですが、もう内野には戻れませんよ？』

「ああ。おい！ 来てくれ！」

ツエズゲラは審判の回答を頷いて、ゴン達に声をかけて招き寄せる。

ゴン達やビスケはツエズゲラと共に、体育館端に移動する。

「ゴン。お前が外野に来てくれれば、俺がボールを持てる！ キルアの両手はボロボロのはずだ。とてもしっかりとボールを押さええられない状態じゃないだろう。だからと言って、ラミナの両手までボロボロには出来ない」

ツエズゲラの言葉をゴン達は黙って聞く。

「俺ならばオーラの攻防力を超高速で移動させることが出来る！俺がボールを持つから、外野からレイザーを仕留めるんだ。それしか勝つ方法はない！」

「……それじゃ駄目だ」

「うん」

キルアがツエズゲラの提案を否定し、ゴンも同意する。  
それにラミナは小さくため息を吐いて、ツエズゲラは戸惑いを浮かべる。

「な、なにがダメなんだ……？」

「それじゃ逃げたことになる」

「なっ!? もうそんなこと言ってる場合じゃないだろ!? ゲホツ！  
げほっ！」

ゴンの答えにツエズゲラは声を荒らげて、痛みに咳込んでしまう。  
それにキルアが呆れながら、

「無理すんなよ、おっちゃん。あんただって、相当酷くやられてんだろ？  
俺ならへーキ。おっちゃんが思ってるほど痛んじやないぜ」

「……なら、両手を見せてみる」  
「平気だつて」

キルアは頑なに強がって、両手をポケットから出さない。  
しかし、そこにビスケが背後から近づいて、キルアの右腕を引く。  
キルアの右手はほぼ完全に皮が剥がれており、真っ赤に腫れあがっている。

「見ろっ！ もう痛み以外の感覚すらあるまい!？」

「……やれるさ。もう1球くらいなら大丈夫だよ、ゴン！ 俺はやる  
からな！」

「無理だ、ゴン！ お前からも言つてやれ！」

キルアとツエズゲラに詰め寄られるゴン。

しかし、ゴンは少しバツが悪い表情を浮かべて、

「俺、キルアの手のこと、分かった」

「!？」

「ツエズゲラさん、俺は外野へは行かないよ」

ゴンははつきりと言い放つ。

「球はキルアが持つてないと。キルアじゃないとダメなんだ」

絶対の信頼を寄せた言葉に、誰もが口を開けない。

「ラミナは分かってくれてるみたいだけど。ビスケやラミナじゃ、多

分俺は思いつきり撃てない。何も考えず、球に集中して全力をぶつけることが出来るのは、キルアがボールを持つてくれるからなんだ」「……ま、お前の無茶にずっと付き合ってきたんはキルアだけやからな。お前が人に怪我をさせてまで勝ちにこだわるんやったら、キルアやないと無理やろな」

「うん」

まだ1年程度ではあるが、それでも一番ゴンの傍にいて、ゴンと苦楽を共にしてきたのは間違いなくキルアである。

ゴンの性格を考えれば、仲間に大怪我をさせてまで勝ちを目指すことなど普通は選ばない。

それでも勝つためにはこれしかないと思っっているからこそその選択で、その選択はキルアがいるからこそ選べたものだ。

ラミナでも、ビスケでもない。キルアがいるからこそその戦法なのだ。

だから、ラミナはキルアに声を掛けても、ゴンには声を掛けなかった。

「まあ、怪我を治すカードもあるんやろ？　時間はかかるかもしれんけど」

「……そうだな。って、ことで。おっちゃん、戻って休んでな」

「……分かったよ。頼んだぞ」

ツエズゲラはゴンとラミナの言葉に、これ以上説得できる言葉はないと判断して大人しく引き下がる。

ビスケは呆れながらも、慈愛の籠った笑みを浮かべて外野へと戻っていく。

キルアはゴンへと顔を向けて、

「でだ、カッコいいこと言っても、レイザーからボールを取り戻さないと攻撃出来ねえんだぞ？」

「……もちろん！」

「なんか策あるんか？」

「ちよつといい？」

ラミナとキルアはゴンに耳を寄せて、作戦を聞く。



作戦を聞いたラミナとキルアは顔を顰めて、考え込む。

「まあ、可能性はあるが……」

「んく……ちよつと自信ねえなあ」

「下手したら、反撃分のオーラも使い果たすかもしれんぞ？」

「大丈夫。まだ行ける！」

「……はあ。頑固モンは厄介なこつちや」

「つたく、オメーはいつもとんでもないこと思いつくよな」

「へへへ、頼むよ、キルア」

ラミナとキルアは呆れるしかなく、ゴンはそれに開き直ったように朗らかに笑う。

ラミナ達がコートに戻り、審判が試合再開を宣言すると、

突如レイザーが指を鳴らす。

すると、外野にいた全ての念獣が崩れ去ってオーラに戻り、レイザーへと飛んでいく。

「オーラが……!?!」

「レイザーに戻っていく……!」

大量のオーラがレイザーへと戻り、先ほどのゴンにも負けないほどのオーラを纏う。

そして、そのオーラの半分近くをボールへと注いでいく。

「……あれは今までの比やないで。反撃のことはひとまず頭ん中から放り出せ」

「うん」

「分かってる」

「ふつ。まさか、これを使うことになるとはな。くくく！ 久しぶりに、いい感じだぜ!!」

レイザーは気を昂らせながら、前に駆け出してボールを高く放り投げける。

「?!? ボールを上……!?!? あれは、まさか……スパイク!?!」

「おい、あれ!!」

ツエズゲラ達がゴン達に目を向ける。

そこにはゴン達が集まって、隊列を組んでいた。

一番先頭にゴンは腰を落として構えており、その背中にキルアが背中合わせで立っており、そして一番後ろでラミナが両手をゴンの両肩に置いて、両腕を伸ばして両脚で踏ん張る体勢を取っている。

「まさか……あれで受け止める気か!？」

レイザーは3人の動きを見て、その狙いを理解する。

(果たしてどちらが勝つか……勝負!!)

レイザーは全身に力を籠めて、跳び上がりながら右腕を振り抜いてボールに手を叩きつける。

爆音と共にボールが彗星のように、ゴン達に向かって猛スピードで飛び迫る。

そして、ボールが直撃する瞬間、ゴンが全てのオーラを両手に集めてボールを受け止める。

体をオーラで覆っていたキルアは背中に衝撃が走った直後に、オーラを両足に集中させて踏ん張ってゴンの身体を支える。

ラミナも直撃の瞬間までゴンの身体を支える。

「無理だ!! ギンが壊れるぞ!!」

ツエズゲラが叫んだ瞬間、ラミナが動いた。

ゴンがボールを受け止めた瞬間、ラミナは床を蹴る。

ゴンの両肩を支えにしてゴンの頭の上で逆立ちしながら体を捻って、ゴンと向かい合うように着地する。

そして、両手にオーラを集めて、ボールを上下に掴んで後ろに体を引く。

「!!!」

ゴン、キルア、ラミナは歯を食いしばって、声にならぬ気合を叫ぶ。キルアの足が床を滑る音が響き、ラミナの両腕の筋肉が再び膨れ上がり、踏ん張る両足の指先は床にめり込み、床を砕きながら滑って行く。

数秒とも、数十秒とも、感じる行く末を全員が息を飲んで見つめる。そして、

遂にゴン達はコートギリギリで止まり、完璧にボールを受け止めた。

「…………ふー…………」

「っはあ!!」

ラミナが息を深く吐いて横にずれ、 gon は止めていた息を大きく吐き出し、キルアは床に座り込む。

それにロドリオット達が歓喜の声を上げ、思わずレイザーの手下達も声を上げる。

「うおおおお!! 止めたー!!!」

「前後からボールを掴んで、止めるとかマジかよ!!」

「凄すぎんだろ、お前らー!!」

レイザーは腰に手を当てて笑みは崩さないも、その内心は純粹に3人への称賛の思いで溢れていた。

(脱帽…………だな。俺のパワーを奴らのセンスが上回った。その中核を為したのが…………)

レイザーはゆつくりと立ち上がって笑みを浮かべているキルアを見る。

(gon は俺のボールを受け止めるため、手に全てのオーラを集中。臆すことなく、正確にボールを止めた精神力と集中力は称賛に値する。

そして、ラミナ。一番威力が大きいインパクトの瞬間にゴンが吹き飛ばないように支え、流石の身体能力でゴンの前に移動して、反対側からボールを掴むことでゴンがボールを取りこぼすのを防ぎ、更に後ろに体ごとボールを引くことでゴンとキルアにかかる負担を限界まで減らした…………!)

最後にキルア。ゴンとラミナの間に挟まって、クッションと踏ん張りの役割を果たした。オーラの攻防力移動によって…………! 体のオーラが少なければクッションの役目を果たせず、ラミナがゴンの前に回る前にボールの衝撃でゴンとキルアは大ダメージを受けていただろう。逆に足のオーラが少なければ、これも同じくラミナがゴンの前に回る前に3人共外野まで吹き飛ばされていた。体と足への攻防力のバランスは恐らく誤差1%以下の精度を要求されたはず!!

オーラの攻防力移動は戦いの基本であるのと同時に奥義でもある。これほど経験とセンスが要求される技術は他にない！」

レイザーはキルアの才能に背中に冷たいものを感じる。

しかし、それだけではないことも見抜いており、ラミナに目を移す。(ラミナが最初にゴンを支えたこと、そしてゴンの前に移動してボールを引き止めたことで、キルアに調整する余裕を作った。ラミナが力を出し過ぎれば、キルアのコントロールを乱して、ゴンがダメージを受けていたかもしれない。出来る限り身体能力だけで踏ん張り、キルアの攻防力移動にほぼ完璧に合わせた……。あの若さで恐ろしいほどの経験と実力を持ち合わせている……!!)

レイザーと同じことをビスケも見抜いており、キルアの才能とラミナの実力に感服していた。

(恐ろしい子達だわね……。恐らくあたしがラミナの域にまで達したのは30代の後半……。キルアに関しても20代の後半くらい……。)そして、2人はほぼ同時にゴンを見る。

ラミナはキルアにボールを渡しながら、ゴンに声を掛ける。

「いけるか？」

「うん」

「ほな、ここで決めてこいや。全部、出し切ってみい」

「押忍!!」

ゴンは天空闘技場の頃のように返事をする。そして、深呼吸をしながら自然体を取り、意識を集中する。

ラミナはゴンの背後に回って、少しでもオーラの回復に努める。

ゴンは先ほどより深く、体の奥に意識を向ける。

そして、感じ取った全てをオーラを一気に引き出す。

ゴンが目を見開いて、全身に力を籠めた瞬間、

先ほどよりももう一回り膨れ上がったオーラが噴き出した。

「!!!!!!」

想像以上のオーラ量にキルアは笑みを浮かべ、残りの全員が驚愕する。

レイザーすらも、笑みが消えて呆然とゴンを見つめる。



全身全霊渾身の一撃をボールに叩き込む。

レイザーのスパイクと遜色ない威力のボールが放たれる。

レイザーは両腕に力を籠めながら、オーラを集中していく。

(捕れば外野まで吹き飛ばされる。しかし、あそこまでされて、俺が逃げるわけにはいかんだろう!!)

「あの威力を完璧に受け流せるわけがねえ!!」

「そうだ！ さっきのだって天井近くまで上がったんだ！ あの威力なら完璧だったとしても天井に当たるに決まってる！」

ロドリオット達はゴン達がキャッチした興奮が冷めずに、やや楽観的な推測を叫ぶ。

しかし、それも間違っているわけでもないので、ツエズゲラも内心では勝利を確信したような気持ちになっている。

「それは……レシーブの……。(方向によるだろう!!)」

レイザーはボールが両腕に当たった瞬間、勢いよく両腕を振り上げ、更に溜めていたオーラを前部に向かって放出する。

それによつて、ボールはまっすぐゴンに向かって跳ね返った。

「なっ!？」

(よし!!)

「そのままはじき返した!？」

「無理だ！ ゴン、避ける!! それでも勝てるんだー!!」

ツエズゲラは痛みも忘れて叫ぶ。

(いや、避けないね。そんな勝ち方を望むなら、さっき避けてるさ!!)

レイザーはこれまでの戦いでゴンの性格をよく理解していた。

しかし、ゴンは拳を振り被った姿勢のまま床に倒れた。

ボールはゴンの真上を通り過ぎて行く。

「!!?」

レイザーは驚くも、ゴンの様子から気絶しているのに気づいた。

全てのオーラを出し切ったことで限界を迎えたのだ。

(これは逃げたわけじゃない！ お前の勝ちだ、ゴン!!)

ツエズゲラはゴンを称賛する。

しかし、ボールの進行方向には腰を落として構えているラミナがい

た。

「な、なぜわざわざ……!?」

「ふん！…んなもん、決まっとるやろが……!!」

ラミナはレーザー同様レシーブの構えをとり、オーラを全て両腕に集中させる。

そして、四肢に力を籠めながら目を見開き、ボールを見据えながら叫ぶ。

「ガキ2人がボロクソになるまでやっとなのに……ここでうちが逃げられるかボケエ!!」

僅かに高い、と判断したラミナは小さく舌打ちして、軽くジャンプして両腕にオーラを集中させて、空中でボールを受け止める。

「ふん!!」

再び両腕に全力で力を籠めて両腕を振り上げ、後ろに吹き飛ばされながらボールをレーザーに跳ね返す。

「うおお！…また弾き返したあ!!」

しかし、レーザーはすでにレシーブの姿勢になっていた。

(駄目だ……！…このままじゃこっちの体力切れで負ける！)

キルアは歯軋りするが、その時キルアとゴンの真上を影が通り過ぎた。

それはラミナだった。

「!!」  
「!!」  
「!!」

ラミナは両手を突き出した姿勢で猛スピードでレーザーに迫っていく。

レーザーとビスケは素早く【凝】を発動すると、

(オーラの糸!!)

ラミナの両手指からオーラの糸が伸びており、それはボールに絡みついていった。

ラミナはレシーブする直前に【親愛なる姉様との絆】を発動して、弾き返した瞬間念糸を巻き付けていたのだ。

それを巻き戻しながら、レーザーへと迫るラミナ。

そして、レーザーの両腕にボールが当たる直前、勢いよく体を捻つ

て回転を始める。

レイザーはその行動を訝しむが、

(跳ね返せば関係あるまい!!)

そして、ボールが腕に接触した瞬間、

念糸がレイザーの腕にも巻き付いていき、ボールと腕を縫い付けて行く。

「なっ!？」

「クモの糸は、そう簡単に引き千切れないよ」

「うおおお——!!」

ボールが腕から離れないため、ボールの威力に耐えるしかないレイザー。

しかし、恐れていた通り、どれだけ足を踏ん張っても床を滑り続けてしまう。

ラミナは床を蹴って大きくジャンプし、レイザーの真上を飛び越えながら外野へと向かう。

そして、能力を解除して念糸が消える。

その時、レイザーは、コートの外に出ていた。

『レイザー選手！ エリア外に触れた状態での捕球は反則です!!』

審判がレイザーの反則を宣言する。

それと同時にラミナがビスケの隣に着地する。

『よって、この試合！ ゴンチームの勝利です!!』

「うおおおおお!!」

ロドリオット達が歓喜に叫ぶ。

その声でゴンは目を覚ます。

「え……？ 最後、どうなったの？」

ラミナは微妙に痺れを感じる両手を離握手して確かめながら、ため息を吐く。

「……ホンマ、あいつらと関わると余計に能力使わされるわあ……」

「ホントに面白い能力だね」



「しゃべんなや。バラしたら、お前の事もバラすぞ」

「分かってるわよ。あんたみたいな奴に狙われるのはごめんだわさ」

ビスケとラミナは言い合いながら、ツエズゲラ達の元に向かう。

そこにゴンとキルアが歩み寄ってくる。

「ラミナが最後決めてくれたの?」

「まあな」

「つていうか、最後の何だよ?」

「【擬】を使つたらんお前が悪い。で、ゴン。レイザーがお前と話したそうやぞ」

「え?」

ゴンが振り返ると、レイザーが歩み寄って来ていた。

「完敗だ。約束通り、俺達は街を出て行く」

「あ」

「そーいや、そんな話だったな」

「その前に、ゴン。ジンについて、少し話してやろう」

「!!」

「向こうで話そうか」

レイザーは体育館の端を指差して移動し、ゴンもそれに付いて行く。

ラミナは上着と靴を取りに行き、キルアとビスケはツエズゲラ達の元で待つことにした。

ラミナは靴を履いて上着を着ると、再び大きいため息を吐く。

「はあく……【親愛なる姉様との絆】までは使う気はなかったんやけどなあ……」

しかし、使わなければ、決着はつかなかっただろう。

いや、避ければ終わっていたのだが、その場合ゴンがごねていた可能性があった。

そうなれば、面倒でしかないので無理矢理でもここで終わらせたかったのだ。

「2億か……。ここまで能力使って、ベンズナイフ壊されて2億か……。なあんか割りに合わんでなあ」

ボヤきながら重い足取りでツエズゲラ達の元に戻る。

そこではビスケがキルアの両手の状態を確認していた。

「痛う~~~~」

「あくあく無茶して。グツチャグチャだよ。両手とも」

キルアの両手はもはや3倍くらいに腫れあがっており、紫色に変色していた。さらに指も骨折しているようで明らかに変形していた。

「おくおく。こら、普通に治すんやったら3、4か月はかかるやろなあ」

「やつぱり?..」

「ここまでになると、固定して冷やさんと手術しようもないやろ。大人しくツエズゲラ達の手伝いして、クリアしてもらってから治癒のカード探した方がええやろな」

「うええ……」

「ツエズゲラが持つとるん使わせてもらったらええんかもしれんけど、その分クリアからは遠なるでな。ま、そこらへんは話し合って決めたらええんちゃうか? で、ツエズゲラ」

「なんだ?」

「これ、うちの口座。2億、ちゃんと振り込んでや」

「ああ。間違いなく振り込もう」

「さて、後はカード貰うだけやろ? うちの仕事は終わりやな」

「もう行くのか?」

いつの間にもやら気絶から復活し、頬を腫れあがらせたゴレイヌが首を傾げる。

ラミナは肩を竦めて、

「やることないでな。それに、そろそろ仲間のところ顔出さんと、文字通り飛んできそうやし」

「仲間って言うと……」

「クモやな。……これ以上依頼を受ける気はないで。それでも、近づいてくるんやったら、死ぬ覚悟してから来いや。うちは他の団員を止めきれぬ自信はないでな」

ラミナはそう脅して、出口に向かって歩き出す。

その背中をキルアは呼び止めようとしたが、言われた通りこれ以上引き留める理由がないので、口を閉じるしかなかった。

ゴンは確実に引き留めるだろうと想像は出来るので、この方がいいかもしれないと思い、キルアはその背中を見送るのだった。

「いいの？」

「止めようがねえからな。無理矢理引き留めても、拗れるだけだ。ゴンは拗ねるだろうけど、まだこの方が今後も会いやすい」

「旅団員にまた会いたいだなんて、物好きだわねえ。あ、もしかして……惚れてるの？」

「んなわけねえだろ!!」

「ホホホ。随分必死に否定するだわねえ。まあ、美人だもんねえ」

「だから違え!!」

「ホホホのホ」

ビスケはキルアの淡い青春を揶揄う。

恋愛経験のないキルアは、この手の揶揄いに対する上手い誤魔化し方など全く経験がないので、ビスケの掌の上で転がされるしかないのであった。

レイザーのアジトを出たラミナは、呪文カードでマチ達の元に戻ろうとしたが、

「……」

どこからか視線を感じて、動きを止める。

立ったまま視線の方向を探ると、少し離れた崖の上からだった。

その視線に悪意のような不快な感情が込められており、それにラミナは僅かに昂っていた気分が一気に冷めていくのを感じた。

「ちっ……水差しよってからに……」

ラミナは小さく舌打ちをすると、殺気を全く漏らすことなく、すぐ近くの森に向かって歩き出す。

苛立ちの元を刈り取るために。

## #76 オセツカイ×ノチ×ハツケン

レイザー達の話聞き終えたゴンは、キルア達と合流してクエストの情報をくれた女性NPCと共に灯台を登っていた。

ラミナがすでにいなくなってしまうことにゴンは不満を感じていたが、キルア達から「契約は終わった以上引き留められない」と言われて不服そうに黙り込んでいた。

「あいつが自分から出て行った以上、引き留めれば拗れるだけだって」「けど、お別れくらい言わせてくれたっていいじゃん」

「そう言いながら、どうせもう少し一緒に行動しないかって言う気だっただろ?」

「う……」

「言っただろ? 旅団もここにいるんだ。これ以上あいつを引き留めたら、本当にここに来るぜ?」

「む……」

ゴンはキルアの言葉に反論はしなかったが、納得はしていない唸り声を上げる。

それにキルアとビスケは呆れたようにため息を吐く。

「ほら、今は『一坪の海岸線』をゲットに集中しようぜ。あいつの報酬を払えるように、手伝わねえといけないんだし」

「うん……」

その後、NPCの話聞いたゴン達は、ようやく『一坪の海岸線』を入手する。

それを『複製』で数を増やして、ツエズゲラとゴレイヌに渡す。

オリジナルはゴンが持つことになり、灯台を後にする。

するとツエズゲラがゴン達に顔を向ける。

「さて、ラミナとの契約を果たすためにゲームクリアを目指さねばならんが……」

「ゲンスルー……だね?」

「ああ、間違いなくこの先ゲンスルー組との一騎打ちになる。だが、戦闘力では圧倒的にこちらが不利だ」

ツエズゲラの言葉にゴン達も頷く。

強がったところで勝てるわけでもない。

ただでさえ勝ち目は薄いのに、キルアとツエズゲラは負傷している。

数日で万全になることは不可能なのは間違いなく、更に戦闘力は低下している。

しかし、

『大天使の息吹』を使えばいいが、ゲンスルーとどう決着がつくか予想出来ん以上、今使うのは悪手だ』

『もしここでツエズゲラかキルアに使って、ゲンスルー達を殺したら『大天使の息吹』も消えちまうからな。もう誰も『引き換え券』を持ってないから、呪文カード集め直しか、他のプレイヤーに独占されたら繰り返しだしな』

『そういうことだ』

ゴレイヌの言葉にツエズゲラも頷き、ゴン達も納得する。

『俺の負傷や修行不足を抜きにしても、奴の足元にすら及ばない。それがお前達からゲンスルーの能力を聞いて得た印象だ。ラミナも言っていたしな。間違いなくゲンスルーはクモと同じ穴の貉だ。根本的に戦闘に関する心構えが違う』

その時、ツエズゲラの本が具現化した。

「！！！！」

『他プレイヤーがあなたに対して、『交信』を使用しました』

本からアナウンスが聞こえ、緊張感が走る。

このタイミングであることに、全員が嫌な予感を感じ、それは的中する。

『……久しぶりだな。誰だか分かるか？』

ゲンスルーの声が聞こえて、全員が反射的に身構えて周囲を見渡す。

もちろん、姿は見えなかった。

「……何の用だ？ ゲンスルー」

『嬉しいね。覚えててくれたのか。さて、まずはおめでとうと言って

おこうか』

「……なんのことだ?」

『とぼけても無駄だぜ。』一坪の海岸線』をゲットしたんだろ? たった今『名簿』で確認したしな』

「くっ……」

『単刀直入に言おう。』一坪の海岸線』を寄せ。代わりにお前達の命は保証しよう』

「……ふざけるな」

『くくくっ。声がおかしいぞ? 対決でダメージでも受けたか?』

まあ、こっちは別にガチンコでもいいぞ? もし取引に応じるなら、一時間後にお前1人でマサドラの入り口まで来い。来なければ力づくでカードを頂く』

(くそっ! 何故こんなに早くバレた……!?)

『アスタ、アマナ、マンヘイム、——、——……』

突如ゲンスルーが名前を読み上げ始める。

ツエズゲラは訝しむが、その名前にゴンやゴレイヌ達は目を見開く。

『お前達の15人の仲間だった連中……。そうだろ? 本で確認してみな。もうここにはいない。……この世にもなあ』

「なっ!?!」

「ブツク!!」

ゴンが本を具現化して、プレイヤーリストを確認する。

そして、告げられた者達全員がゲーム不在であると表示されていた。

その事実にはゴンは一瞬で頭に血が昇り、

「ゲンスルー!!」

『……だれだ? お前』

「ゴン・フリークスだ! 俺が相手になってやる!!」

「なあ!?!」

「バツ!!」

突然の宣戦布告にキルア達は慌てる。

『……ゴンか。3人組のガキだなっ!?!』

突如ゲンスルーの声が驚愕の色へと変わった。

それにゴン達は訝しみ、声を掛けようとしたが、

『誰だ!?!』

『やっぱお前らやったなあ』

「えっ!?!」

「ラミナ!?!」

何故かラミナの声が本から聞こえてくる。

『お前——』

そこで『交信』が切れた。

時は少し戻る。

ゲンスルー達はゴンがいる灯台の近くの崖の上から単眼鏡を覗きながら、『交信』していた。

『ゴン・フリークスだ! 俺が相手になってやる!!』

「……ゴンか。3人組のガキだ——」

ゴンの声に答えていると、突如ゲンスルー達に殺気が叩きつけられて、3人は弾かれるように立ち上がる。

「誰だ!?!」

「やっぱお前らやったなあ」

森から現れたのは、紅い髪の女。

「お前は……!?!」

ゲンスルー達はもちろんラミナのことを忘れているわけもなく、目を見開いて驚愕する。

ラミナは薄ら笑いを浮かべながら、ゲンスルー達と向かい合う。

「ゲスな視線を感じたでなあ。タイミング的にお前らやろなあて思ってたんや」

「ぐっ……!?!」

ゲンスルーは少し前に単眼鏡で1人灯台から出てきたラミナの姿を捉えていた。

しかし、こつちに気づくわけではないと思っていたのでスルーしたの

だ。

まさか気づかれており、ここまで来るとは思ってもいなかった。

「ゴンの声が聞こえたつちゆうことは、『一坪の海岸線』を寄せとでも脅しとつたんやろ?」

「……」

「まあ、ぶつちやけお前らがプレイヤーからカードをどうやって奪おうが知ったこつちやないんやけどなあ」

「……だったら、何の用だ?」

「あいつらから奪われると、うちに報酬が入らへんねん。流石にタダ働きにされるんは……」

ラミナの顔から表情が抜け落ち、同時に全身を押さえつけるかのような膨大な殺気がラミナから発せられる。

「今すぐ殺したなるわ」

「!!?!」

ゲンスルー達は空気が重くなったかと錯覚するほどの殺気に、冷や汗を噴き出しながら【練】を発動する。

ラミナは無表情のままゲンスルー達を見据える。

「つたく……人のことと言える立場やないけど……。こんな小さい島の中で粋がんなや? 小物共」

ゾクリと背筋に怖気が走るサブとバラ。

ゲンスルーも息苦しさを感じて、本能的に足がにじり下がる。

(……マズいな。確実に俺達よりも場数を踏んでやがる……。ここ最近一方的な戦いばかりだったし、ニツケスのところに数年いたせいで鈍ってるのもある)

ツエズゲラのような実力者とは出来る限り戦闘は避けていた。

ゲンスルーもツエズゲラ同様にこのゲームのやり方に長く浸っていたことで、実戦から遠ざかっていたツケが回って来ていた。

(こんなところで死ぬわけにはいかない。どうにかして隙を見つけて、『同行』で逃げないとな……)

しかし、それすらも簡単ではないことは前回の戦いで思い知らされている。



また『大天使の息吹』を使わされることを覚悟しなければならない。  
そう考えたゲンスルーは構えをとる。

それを見たサブとバラも覚悟を決めて構えるが、ラミナは相変わら  
ず無表情で突っ立っている。

「お前の能力は聞いた。キーワードを言いながら体に触る必要がある  
んやろ？ もう1個も触る必要があるみたいやな」

「っ……………」

「残りの2人はお前の能力の強化に能力を費やしとるんやろ？ 前回  
なあんも能力出さなかったし」

「ぐ……」

「つちゆうことは、雑魚共から殺すべき、やな」

そう言った瞬間、ラミナの殺気が完全に消える。

それにゲンスルー達が戸惑った瞬間、

ラミナが一瞬でサブの目の前に拳を構えて立っていた。

「!?!」

「ちい!! (こいつ、殺気を完全に抑え込みやがった!)」

サブとバラは目を見開いて反応が遅れ、ゲンスルーは反射的に左手  
にオーラを集中させながら左腕をラミナに伸ばす。

ラミナは上半身を反らしながらゲンスルーの腕を躲し、【打蠟】で右  
脚をしながらサブの鳩尾に叩き込む。

更に両手にスローイングナイフを具現化して、左脚だけで後ろに跳  
び下がりながら3人に向かってスローイングナイフを投擲する。

「があ?!」

「ぐっ!」

「くっそっ!!」

サブはくの字に後ろに吹き飛び、ゲンスルーは顔を顰めてギリギリ  
でスローイングナイフを叩き落として躲し、バラも頬や腕にスローイ  
ングナイフを掠らせながらサブの腕を掴んで、無我夢中で引っ張る。

顔面や急所に向かって飛んでいたナイフは何とか外れたが、1本が  
左上腕に突き刺さる。

「でえ?!」

「サブー！」

ラミナは最初の位置まで下がりながら、スローイングナイフを消す。

そして、ファルクスとレイピアを具現化する。

「っ！ マズイ……！ バラー！」

「分かってる！」

ゲンスルーはレイピアを見て、2人の前に出ながらバラに呼びかける。

バラも流石のコンビネーションで本を取り出す。

ラミナがレイピアを構えた瞬間、

ラミナの横に本が出現する。

『他プレイヤーがあなたに対して、『交信』を使用しました』

『フィンクスだ……。見つけたぜ。これからそっちに行く』

「！……」

ラミナはフィンクスの言葉に動きを止める。

ゲンスルー達はそれに訝しむも、その隙に距離を取る。

「……5分後で。今、取り込み中だな」

『分かった。じゃあな』

『交信』を終えたラミナは、武器を消して構えを解く。

「……前といい、運がええこつちや……」

「……」

「……はあく。ムカつくが……流石にこれ以上は我儘言えんか……」

ラミナはため息を吐いて、ゲンスルー達に背を向ける。

ただでさえ除念師探しを押し付けて、ゴン達と行動を共にしていたのだ。

これ以上私情で動けば、流石にマチ達は怒るだろう。

ここでゲンスルー達を見逃すのは業腹ではあるが。

「……どういうつもりだ？」

「残念ながら、時間切れや。見逃したるから、さっさと失せえ」

「……バラ」

「ああ」

「お前、何者だ？」

「幻影旅団」

「っ！」

『『同行』オン！ マサドラへ！』

ゲンスルー達は呪文で飛んでいく。

それを見送ったラミナは、ため息を吐いて歩き出す。

「……今のキルア達が勝てるとは思えんし、阿呆なことしよったゴン  
をぶん殴りたいところやけど……。流星にそこまでうちが面倒見る  
ことちやうか」

ラミナは森の中に歩みを進めながら短刀を具現化して姿と気配を  
消し、フィックスとの合流に備えるのだった。

ゴン達は恐ろしい殺気を感じて、崖の方へと目を向けていた。

そして、呪文による移動と思われる光が崖から飛んでいくのを見  
て、どちらかが逃げたことを理解する。

「キルア、今のつて……」

「ああ。ラミナの殺気だ……。逃げたのは、多分ゲンスルー達……。だ  
と思う」

「……ここまで殺気が届くなんて……。あいつは本当にどれだけ強いん  
だよ」

ゴレイヌが冷や汗を拭いながらボヤク。

ゴンが本を取り出して、『交信』を使う。

『『交信』オン！ ラミナ！』

しかし、カードは発動せずに消失する。

『対象者が見つかりません。『交信』は破壊されます』

「え!?! なんて!?!」

「恐らく指輪を外したのだろう。指輪を装着した状態でなければ、本  
は使えない。他の呪文カードの対象にはなるし、『同行』などでも選べ  
るがな」

「じゃあ……」

「待ちなさい、ゴン。ラミナがそうしてるってことは、あたし達と話す

気はないってことだわさ」

「けど、怪我してるかも……!」

「だとしても、行ってどうするの？ 治療も出来ないのに」

「それは……」

「まずはゲンスルー達をどうするかが先だ。俺達が危険な状況であることは変わらない」

ツエズゲラがゴン達に声を掛ける。

ゴレイヌも頷いて、

「ゲンスルー達も無傷じゃないかもしれん。だから、今のうちに作戦を決めるぞ。今でゲンスルー達も精神的に追い込まれた可能性もある」

「ゲンスルーはゴン達の実力を知らない。恐らくオリジナルの『一坪の海岸線』は俺達が持っていると考えるはずだ。だから、奴らは俺が回復する前に決着をつけたがるはずだ」

「ラミナが今後、どう動くか次第ではあるが……。あいつが俺達と行動してたのは知ってるはずだから、ツエズゲラとラミナが組む可能性も考えているはず。それを利用して、出来る限り時間を稼ぐ」

「だから、ゴン、キルア。その間に身体を治せ」

「!」

「倒せる実力を秘めているのは、お前達だ。俺達が時間を稼ぐから、お前達はその間に『この条件ならゲンスルーを倒せる』という条件を整えてくれ。ゴレイヌと協力してもらい、今の状況を最大限に利用して……恐らく3週間が限度だ」

「3週間……」

「こつちからも攻撃を仕掛けて持久戦に持ち込めば、俺達の方が分があるはずだ。それでもキルアの回復は厳しいだろうがな」

ツエズゲラとゴレイヌの提案に、ゴン達は頷く。

「だが、ゴン」

「？」

「先ほどのお前の行動は、最も愚かな行為だ！ もしも奴らが挑発に乗り、ここへ来ていたら負傷しているキルアはどうなる!? 最悪全滅

していた可能性もあったのだぞ!!」

「っ!!」

「ラミナが運よく介入してくれたから、良かったものの。お前とてオーラを限界まで使い、明日になれば恐らく身動きすらとれまい! 一時の感情で自分のみならず、仲間の命まで危険に晒したのだぞ!! これはハンター以前の問題だ!!」

「……ごめんなさい」

「ラミナだったら、間違いなくブツ飛ばしてるな」

「だわね」

ツエズゲラの説教にキルアとビスケも頷く。

恐らく指輪を外したのも、今ゴンの声を聞けば怒りを我慢出来ないと考えたからだろうと2人は思っていた。

その後、ツエズゲラとゴレイヌは作戦を考えて、ゴン達と別れる。ゴン達もすぐさまゲンスルー撃破に向けて、動き出すのだった。

ラミナはフィックスと合流し、シャルナーク達の元に『同行』で飛んで合流する。

「ん? 随分と消耗してないか?」

「ついさつきまで暴れとつてな。中々面倒なイベントやったわ」  
「ほう?」

フェイタンが興味を持つが、ラミナは肩を竦める。

「残念やけど、カード化限度枚数MAXや。今、行ったところでなんもないやろうな」

「それは残念ね」

「で、目標は?」

「マチ達が尾けてるよ。早く行ってやってくれ。ノブナガとカルトが可哀想だからな」

「大分、たまってるわよ」

「……ま、今回はしやあないか」

シャルナークの指に結ばれた念糸の先を見ながら、マチが苛立つて

いることを告げられたラミナはため息を吐く。

それにシャルナークやパクノダが苦笑して、フィックスやフェイタンは愉快気に笑う。

「まあ、そこは頑張れよ。で、交渉もお前に任せるぜ。成功させろよ」  
「わあつとる」

ラミナはフィックスの言葉に手を振って、念糸の先へと向かう。

10分ほど歩いた先の森の高台に、単眼鏡を構えたマチ達がいた。

「あ、来た」

「やあつと来やがったかよ」

「……」

カルトとノブナガがラミナに顔を向けるが、マチは黙ったまま不機嫌オーラを纏って単眼鏡を覗いている。

ラミナは小さくため息を吐いて、マチの横に立つ。

「あの町におるんか？」

「ああ。あんたが遊んでる間に、カルトが見つけたよ。あんたが、遊んでる間にね」

「……」

明らかに当て付けなマチの言い方に、ラミナは黙り込むしかない。

その後ろでノブナガとカルトは疲れた顔で呆れていた。

「一週間も遊んでやがって。宥めるの大変だったんだぞ」

「主にパクノダとボクがね」

「……悪かったって……。もうあいつらと会うことも、つるむ理由もないでな。ちゃんと仕事は果たす」

「あつそ」

「……はあ。ほれ」

マチの横にしゃがみ込んで、ラミナは自分の指輪を差し出す。

「これで『交信』を使われても話すことは出来ん。『同行』とかで来たら、対応はマチ姉とカルトに任せる」

「……ふん」

マチは横目で指輪を見て、不機嫌な顔のまま指輪を手にとって懐に仕舞う。

少しだけ不機嫌オーラが弱まり、ラミナに単眼鏡を渡す。

ラミナはずらさないように気を付けながら、覗き込む。

見えたのは町の大通りだった。

「露天の飯屋にいる全身フードで覆ってる奴だよ」

「……ああ。あいつか」

「名前は間違いなくアベンガネだったぜ。カルトの紙を貼り付けてあるが、まだ除念師とは判断出来てねえ。ただ……」

「ただ？」

「妙な念獣を連れてる。あの服の下に隠してるんだけど、絶対に離れないんだよ」

「……念獣を使って除念するタイプっちゅうことか……」

「多分な」

「……やから、まだゲームにおけるんやな。まだ完全に除念出来たらんっちゅうことか」

「どういうこと？」

カルトがラミナの言葉に首を傾げる。

「除念したい念を念獣に喰わせたとしても、念獣を消すには条件があるっちゅうことやな。恐らく除念した能力の使い手に対して、なんかクリアせなあかん条件があるんやろ。殺すのは当然として……触れる、相手の身体の一部や体液がいる、再び能力を使わせる、とかな」

「なるほど……」

「つてこたあ、協力してもすぐに団長の除念は頼めねえかもしれねえつてことか？」

「そんな時は旅団全員でボマーを捕まえに行きやええだけやろ。ま……まずは交渉を成功させんと話にならんけどな」

「それもそうだね」

「カルトとマチ姉、うちで町に行こか。ノブナガはシャル達の所に戻って、報告待つとって」

「おう」

「ほな、行こか」

「ああ」

「うん」

ラミナ、マチ、カルトは勢いよく飛び出して、猛スピードで町へと向かう。

10分もせずには到着したラミナ達は、アベンガネがまだ食事をしていないのを確認する。

「さて、行ってくるわ。2人はここで待って。複数で行くと、警戒されるやろうし」

「あいよ」

そう言つてラミナはアベンガネに近づいて行き、アベンガネの隣に座る。

フードを被ったアベンガネは一瞬だけラミナを見て、すぐに食事に戻る。

ラミナは適当に料理を頼んで、料理が届くのを待つふりをしながら、アベンガネに声を掛ける。

「なあ」

「……なにか？」

「兄さん、この辺の人？」

「いや、違う」

「そうかあ……。アンタの知り合いに、お祓い、得意な人とかおらん？」

「……お祓い？」

「そうそう。うちの祖国でな、悪魔に憑りつかれた仲間がおってなあ。お祓い出来る人を探しとるんよ」

「……」

「ええ人知らん？ アベンガネさん」

「……」

アベンガネは食事の手を止め、顔ごとラミナに目を向ける。  
ラミナも顔を向けており、2人はまっすぐに目を合わせる。

「依頼したいんやけど」

「……こっちの依頼を受けてくれるならな」

「もちろん、ええで？ 金でも、殺してもな」



ニヤリと笑うラミナに、アベンガネは頷く。

2人は金を支払って町を出て、森へと向かう。その背後をマチとカルトが【絶】で付いていく。

5mほど距離を取って、互いに樹を背にして向かい合うラミナとアベンガネ。

「さて、まずは除念の報酬を訊いところか？ あんた、バツテラのところからの参加やる？」

「……ああ」

「なら、500億。こっちは支払う用意はある。それとも、ゲームクリアが目的か？」

「いや、金で十分だ。金額もそれでいい」

「なら、こっちは文句なし。でや、次はそっちの話やな。あんたのその念獣……それが除念能力なんやる？」

「……そうだ。それで協力してもらいたい」

アベンガネは簡単にはあるが、フードを取って念獣を見せて自分の能力の説明をする。

そして、今の念獣を消す方法も伝える。

「その能力って体の中に埋め込まれた念でも除念可能か？」

「可能だ」

「で、解除するには、ボマーを殺すか、奴自身の能力の解除方法を満たせばええんやな？」

「その通りだ」

「ちなみに他の方法は？ 念獣を殺せばどうなるんや？」

「この念獣は他の方法では消えない。殺すこと自体が出来ない」

「言い方を変えよか。その念獣を除念したらどうなるんや？ ボマーの能力も消えるんか？ それとも、またお前の身体にボマーの能力が発動するんか？」

ラミナの問いかけに、アベンガネは目を見開く。

「!! ……試したことはないが……恐らくボマーの能力も消えるはずだ。ボマーの能力自体はすでに念獣が吸収・同化しているはずだからな。あくまで」

条件は念獣を消すためのものになる」

「……なるほどなあ。……なら、試してみる価値はありそうやな」  
「なに？」

ラミナの呟きに、アベンガネは訝しむ。

そして、ラミナは右手にソードブレイカーを具現化して、一瞬でアベンガネに詰め寄る。

「なっ……!!？」

フラジャイル・ホープ  
「脆く儂い夢物語」

ラミナは念獣にソードブレイカーを突き刺して、能力を発動する。

「ギューイイイイ!!？」

念獣は不気味な悲鳴を上げて、大きく身体をうねらせる。

アベンガネは慌てて離れ、ラミナは更に深くソードブレイカーを突き刺す。

そして、念獣は塵のように碎けて消える。

ラミナはアベンガネに目を向け、アベンガネは自分の左肩を見る。

しかし、特に何も変化は起こらない。

「成功みたいやな」

「……焦らせないでくれ」

「すまんすまん。ま、これでそっちの懸念は無くなったつちゆうことやんな？」

「ああ。……だが、その能力があるなら……そうか。それは刺す必要があるから、体の中に埋め込まれた能力に使い辛いのか」

「そういうこつちや」

ラミナはソードブレイカーを消して、肩を竦める。

「さて、これでうちの依頼でも、念獣に困ることはなくなったな」

「そうだな。出来れば、時々組んでもらいたいくらいだ」

「やめときい。うちはあんたが思つとるより悪人やからな。さて、じゃあこれから病人の所に行こか。港に行ったことは？」

「ある」

「そこからカバル港に転移してもらおう」

「確か……ヨルビアン大陸の左端の国にある港街だな。分かった」

「ほんなら……出てきてええで」

ラミナは後ろを振り返って、呼びかける。

すぐ後ろの木陰からマチとカルトが姿を現して、アベンガネは目を見開く。

「安心しい。仲間やから。カルト、『再来』のカードちようだい」

「うん」

「アベンガネは持つとるか?」

「あ、ああ。問題ない」

「ほな、さつさと行こか。2人は向こうに合流して、ゲームを出て金の準備しとって」

「了解」

マチは頷いて、カルトがカードを渡す。

そして、ラミナとアベンガネは港へと移動して、クロロがいる港街へと向かうのであった。

幻影旅団完全復活の時は、すぐそこまで迫っていた。

## #77 ジョネン×ハ×カンリヨウ

ラミナは港で所長をさっさと倒して、アベンガネの分のチケットを手に入れる。

アベンガネに街にある駅広場で待っているように伝えて、ラミナはゲームを始めた部屋に戻る。

クロロは読書をしており、戻ってきたラミナに顔を向ける。

「……動きがあったか？」

「見つけたで。駅広場で待ち合わせしとる。準備せえ」

「ふっ……。流石だな。分かった」

クロロは本を閉じて立ち上がり、服を着替える。

ラミナも服を着替えて、カツラを被って変装する。

「ああ、そうだ。またジンから振り込みがあつたぞ。正式な報酬らしい」

「ほお……。どらどら」

ラミナは携帯で口座を確認する。

「……2兆か……。まあ、こんなもんやな。これで除念の報酬もすぐに払えるでな」

「いくらだ？」

「500億。まだ幻影旅団つちゆうことは言っへんから、口止め料がいるかもしれんけど」

「そうか」

着替えを終えた2人は、アベンガネとの待ち合わせ場所に向かう。

その道中、ゲームでの出来事を話す。

キルアとゴン、レイザーのことまで話し終えると、クロロは楽しそうに笑う。

「くくくっ！ とことん腐れ縁があるようだな。まあ、婚約者と腐れ縁なのはいいことなのかもしれんがな」

「やめえや。あいつらと組むと碌なことにならない」

ラミナは顔を顰める。

それにクロロは笑い、それ以上キルア達の話題を口にするとはな

かった。

ラミナは顔を顰めたまま駅広場へと到着し、素早く見渡してアベンガネを見つける。

「あいつや」

「ほう……」

2人はアベンガネに歩み寄る。

アベンガネは近寄ってくるラミナ達に視線を向けて警戒を強めるが、

「うちや、うち」

「……驚かささないでくれ」

「すまんすまん。で、こいつが病人や」

「よろしく頼む」

「なんでわざわざ変装を？」

「そらあ、ちと厄介やからや」

「……まあいいが……」

「それで場所を変えないかんよな？」

「ああ。森か林に行かなければならん」

「了解。車で行こか」

その後、ラミナ達3人はタクシーに乗って、街外れの山へと向かう。

山のふもとの森に足を進めていくと、ラミナが携帯を取り出してアベンガネに声をかける。

「先に報酬を払うわ。口座、教えてんか」

「ああ」

口頭で伝えられた口座に、ラミナは携帯を操作して入金する。

アベンガネも携帯を取りだして口座を確認し、確かに500億入金されていることを確認した。

「……確かに」

「悪いが、これは口止めも含む。納得いかんなら、まだ50億は出せるけど」

「……いや、十分だ。これ以上欲張って、また追い詰められたくはないからな」

アベンガネは両手を上げて、首を横に振る。

ゲームと思って手を出した結果がボマー騒動だったのだ。

なので、今もアベンガネはラミナやクロロの名前も素性も聞いていない。変装までしてきている時点で、お尋ね者であることも予想はついている。

実力も念獣を殺された時の動きだけで、自分では勝てないことも理解している。

だから、このまま依頼を果たして、さっさと別れるべきだろうと考えているのだ。

「じゃあ、頼むわ」

「ああ」

アベンガネは木で人形を手早く作り、更に草を集めて束ねる。

更に木の枝を集めて、火を点ける。

「そこに立ってくれ」

「分かった」

クロロを火の傍に立たせると、木の人形を手にとってオーラを出す。

「ミガームラ、サミンガードウラ、インテラミンガ、ゼンペラルブラ。森の精霊よ。彼に憑りつきし、不浄の念を取り去り給え」

そう呪文を唱えると、束ねた草を人形の前で振り、更にクロロの身体を軽く叩いたと思ったら、今度はその草を紐状にしていき人形に巻き付けていく。

そして、草の服を着させた人形を作り上げると、

「行くぞ」

「ああ」

アベンガネは人形を火の中に放り投げる。

すると、炎が爆発的に勢いを増して、大きく噴き上がる。

数秒もすると、炎の中にバスケットボール大の卵のようなものが出現し、割れると中から顔が鋭く、アベンガネに纏わり付いていた念獣の3倍の大きさの念獣が誕生した。

「うげっ………！」

「ほう……」

「これは……なんと強力な念だ……！　ここまで大きさになったのは初めてだ。あのボマーの能力よりも数倍は強いということか……」  
ラミナは頬を引きつらせ、クロロは何やら楽し気に念獣を見つめる。

アベンガネもその大きさに顔が引きつるのを感じる。

正直、ラミナの能力がなければ、ボマー以上の絶望を感じていたかもしれない。

念獣はバクのような体つきをしており、もはや象にも等しい。

念獣はゆつくりとクロロの元へと歩み寄り、その鋭く長い口をクロロの胸に当てる。

その口がクロロの胸の中に入り込んでいく。

クロロは涼しい顔で立っており、ラミナはため息を吐きながらソードブレイカーを具現化する。

グジュグジュ、ジュルルル！

どう見ても内臓ごと吸われているようにしか見えない光景と音。

近くに一般人が通ったら、吸血鬼とでも間違われそうだなとラミナは馬鹿馬鹿しい事を考えて気を紛らわせる。

1分ほどすると、念獣がクロロの胸から口を引き抜く。

「終わったのか？」

「……そのはずだ」

クロロの問いに頷くアベンガネ。

ラミナは素早く念獣に詰め寄って、その横っ腹にソードブレイカーを突き刺す。

「ギョアアアアアア!？」

念獣が悲鳴を上げて暴れ、ラミナはソードブレイカーを引き抜きながら念獣の背中に跳び乗り、ソードブレイカーを逆手に持ち直して頭頂部に突き刺す。

再び念獣が悲鳴を上げて、横に倒れる。

ラミナはソードブレイカーから手を離して、念獣から飛び降りる。

そして、念獣はガラスのように碎けて塵のように消え、ソードブレ

イカーだけが地面に転がる。

「ふう……」

「酷い奴だな。俺を助けてくれたのに」

「こうせな、あの念獣はそいつに付きまとって、念をかけた奴を殺すか、外す条件をクリアせんと消えんらしいからな。こうやって消した方がお互いに後腐れなくてええねん」

「ほお……なるほどな」

「で、ここからが本番やで。……【纏】、使ってみい」

「……ああ」

ラミナとクロロの間に緊張が走る。

クロロも流石に顔が僅かに強張っている。

ラミナとアベンガネはこれ以上何も出来ない。

アベンガネは間違いなく除念したので、ここでクロロが死んでも失敗と責めるのはお門違いだろうとラミナは理解している。

他の団員達が納得してくれるかは不明だが。  
そして、クロロはゆつくりとオーラを纏うイメージをする。

その直後、クロロの身体からオーラが発生し、何の問題もなく【纏】が発動する。

クロロとラミナはそのまま1分ほど経過を見守り、何も変化が起らないことで除念成功だと確信する。

「ふうく……。心臓に悪いわ」

「全くだな」

クロロは苦笑して、アベンガネに顔を向ける。

「本当に助かった。礼を言う」

「依頼だからな。金を受け取った以上、礼を言われる事じゃない。それじゃあ、俺はここで失礼する。その方がいいんだろ？」

「ふつ。まあ、俺達は問題ないが、俺達といるのがバレた時は面倒だろうな」

「だろうな。それでは。もう会わないことを祈りたいものだ」

「ああ。達者でな」

アベンガネは手を上げて、森を去っていく。



それを見送ったラミナは、クロロに顔を向ける。

「ええんか？ 除念能力とかレアやぞ？」

「確かにレアだが、この手順は面倒過ぎる。念獣というのも手間だな」  
「まあ、それもそうか」

「鎖野郎みたいな能力ならあいつの能力がいいが、他の能力ならばお前のその短剣の方がいい」

「そらどうも。さて、これでマチ姉達とも合流できるな」

「そうだな」

「とりあえず、街に戻るか。家や車の処分もせなあかんし」

ラミナとクロロは駆け足で街へと戻る。

その間にシャルナークとマチにメールを送り、除念完了を伝えておく。

家に戻ったラミナとクロロは、必要な物だけ手早く荷物を纏める。

そこに部屋のチャイムが鳴り、クロロが扉を開けると、そこにはカルト、マチ、シャルナーク、シズクが立っていた。

「久しぶりだな」

「ホントにね」

「無事で何よりです、団長」

「上手く行ったようで良かったよ」

数年バラバラに活動することもあるので、そこまで感動はない一回だった。

ラミナはクロロ達の軽い挨拶に苦笑しながら、顔を覗かしてカルトに声を掛ける。

「カルト、いる荷物だけ纏めえ。シズク、片づけが終わり次第、「デメちゃん」でいらんもん全部吸い込んでくれん？」

「うん」

「いいよ」

「クロロとシャルは今後の予定立てるか、他の団員の所にでも行ってこいや。フィックスとノブナガが待ちくたびれて喧嘩でも始めたら面倒やし」

「あははは！ 確かに」

「ふっ」

「マチ姉はどうする？ 片づけにちよつと時間かかりそうやけど」

「……団長というよ。片づけとか面倒だし」

「了解」

「シャル、ついでに情報収集しといて。うちの情報と……ヒソカの情報」

「ヒソカ？」

「そろそろ、ここを突き止めそうやからな。あの変態」

「確かに。了解」

ククロ、シャルナーク、マチは先に街に出る。

1時間ほど片づけをした結果。カルトは結局着物だけ回収し、ラミナはずつと放置していた「アロンドイト」、そして機能停止しているジョイステを回収して、残った物はシズクが処分する。

「カルトの服は……キャンピングカーに置いて、ゾルディック家に車の処分ついでに回収してもらおか」

「分かった。連絡しとく」

ということ、キャンピングカーにカルトの荷物を乗せて、後はゾルディック家に押し付ける。

ラミナはバットケースとリュックを背負って、シズク達と共に団員達がいる場所に向かう。

「つちゆうか、どこに隠れとるんや？」

「港の廃倉庫」

「よう見つからんかったな」

「人は殺して、『デメちゃん』で隠したしね」

「なるほど」

ラミナはシズクに苦笑する。

20分ほど歩いて、港の端つこにある廃倉庫に到着する。

中に入ると、フィンクス達が退屈気に座っていた。

まだククロ達はやって来ていないようだった。

「あ？ おい、団長はどうした？」

「すまん。多分、シャル達と一緒に情報収集中。こちらは隠れ家の処

分しとったでな」

「そうかよ。で、除念は？」

「完璧や。ちゃんと念も使えること確認したし、シャル達と話しても問題なかったで」

「そう。……よかつたわ」

パクノダは心の底からホツとする。

自分が領いたことで、クロロの念が封じられ、旅団から離されたこととの責任をずっと感じていたのだ。

「まあ、ようやくこれで旅団も完全復活だな」

「半年程度で除念出来たのは早い方だと思うけどね」

「全くやな」

感慨深げに言うノブナガに、コルトピがツツコミ、ラミナが同意する。

雪男より見つからないという除念師を、約半年で探し当てたのだから、これこそ一つ星の功績でもいいのではとラミナは思う。

占いのキーワードとシャルナークからの情報だけで、ここまで来たのだから十分過ぎるだろう。

時間がかかった感は確かにあるが、正直かなりの速さでやり終えたと自負している。

(ん? ……つちゆうことは、半年程度でカルト引き取って鍛えて、アラクネー倒して、剣とゲーム見つけて、ゲームで色々しながらアベンガネを見つけた? ……ホンマよお見つかつたな)

ラミナは思い直して、うんざりとした表情を浮かべる。

半分以上はラミナの自業自得ではあるが。

そこにクロロ達が現れる。

「お! 団長!」

「久しぶりだな。ノブナガ」

「まったく、面倒掛けやがって」

フィックスが腕を組んで、クロロに言うが他の全員がジト目を向ける。

「男のツンデレは受けへんぞ?」

「誰がだ!? 殺すぞ!!」

「お? 団員同士のマジ切れ御法度ちやうんか? ん?」

「……てめえ……!」

「やめなよ、フィンクス。ラミナは今回の一番の功労者なんだからな」  
「ちい!」

フィンクスは舌打ちして、そっぽを向く。

シャルナークは苦笑して、ラミナに紙束を投げ渡す。

「ん?」

「調査資料だよ。それと、除念師に払った500億とゲームの50億。  
振り込んでおいたから」

「おお。おおきに」

ラミナは礼を言いながら、資料に目を通すと、

「……懸賞金は変化なし、か」

「けど、シングルハンターになったことで警戒度は上がったみたいだぞ。ジン・フリークスって奴が推薦したのが一番の原因らしいけど」  
「……やろうなあつて、ん? カルトも賞金首になつとんか。今までゾルディック家つちゆう括りで個人に懸けられとらんかったのに」  
「え?」

「クモに入って、ラミナの弟子って情報が出たからだな。恐らくハンター協会の会長がジンとゼノ・ゾルディックから聞いて、そこから広まったんだろう。アラクネーを殺した時にも目撃されているしな」

クロロの言葉にラミナは右手で顔を覆って、項垂れる。

「あく……居場所は黙つとけ言うたけど……。カルトのこと黙つとけとは言うてないなあ」

「まあ、どうせ時間の問題やったろうし、ええか。んで、ヒソカの情報は?」

ヒソカの事を聞くと、マチが腕を組んで忌々しそうに眉間に皺を寄せる。

「残念ながら大した情報は無いね。けど……」

「けど?」

「右腕は完全に治ってるらしいよ」

「……マジかい……」

ラミナは顔を顰め、マチも同じく顔を顰めて頷く。

シャルナークも眉間に皺を寄せて、

「マチほどの腕じゃないみたいだけど、治療系の能力者を見つけたらしい。最近まではその治療トリハビリって感じだったんだろうな」

「……」

シャルナークの言葉にマチは少しだけ不機嫌に顔を歪める。

その理由をラミナはすぐに理解した。

（確かにマチ姉の【念糸縫合】は超がつくほど優秀や。けど……数日経過した腕の縫合となると、筋肉と神経まで完全に繋げるのは難しいな。うちらがヨークシンを離れた時点で、ヒソカの右腕を斬り落として丸1日は経過しとった……。そこから治療系能力者を探し出したとしても、4、5日は経過しとるはず……。それを完全に回復させつつゆうことになる、十分マチ姉に負けんレベルの能力者やな……）

「その治療した能力者は分かつとるんか？」

「……分かんなかった」

マチは顔を顰めたまま、今にも舌打ちしそうな不機嫌さで答える。

ラミナも僅かに眉間に皺を寄せる。

（これに関しては調査しとかんとな。今後ヒソカと戦り合った後に、また逃げ込まれたら面倒やし）

そう決めたラミナは小さくため息を吐いて、資料を丸めてバツトケースに仕舞う。

ラミナはクロロに顔を向けて、

「で、今後の方針は？ 団長」

「ふっ……。お前にそう言われると、むずがゆいな」

クロロは笑みを浮かべて、全員を見渡す。

団員全員がクロロを見て、笑みを浮かべている。

それにクロロは更に笑みを深めて、

「【クカンユ王国】にある『ブルブ美術館』は知ってるな？」

「そりゃあ、世界最大級の美術館だしね」

「数十万点以上の美術品や歴史的価値が高い品物が展示されているところですよ?」

シャルナークとパクノダの言葉にクロロは頷く。

「そこのお宝を狙うってことか? ヨークシンみてえに全部か?」

「そりや流石に無理だ。数が多すぎる」

ノブナガの疑問に、フランクリンが流石に無茶だとツツコむ。

クロロはそれに頷く。

「そうだな。流石に全ては無理だ」

「じゃあ、その中のどれかってことか?」

「そうでもあるが、そこじゃない」

「あ?」

クロロの言い方にフィinksやノブナガ達は訝しむ。

クロロは笑みを浮かべたまま、

「これは公然の秘密とされているが……ブルブ美術館には『裏倉庫』というものがある」

「裏倉庫お?」

「国や歴史家とかが展示を止めとる品物を保管しとる倉庫の事やな。大抵は歴史がひっくり返ったり、国で反乱が起きかねん事実が秘められたモンらしいで? ブールブ美術館に「貧者の薔薇」ミニチュア・ローズを落としてでも、隠し通したいもんがたんまりあるそうや」

ラミナが知っている情報を話す。

そして、呆れた表情をクロロに向ける。

「裏倉庫を狙う……つちゆうことか?」

「その通り」

クロロは一瞬の逡巡もなく力強く頷く。

それにフィinks達は楽しみ気に笑みを浮かべる。ラミナは呆れた表情を浮かべたままで。

「マフィアンコミュニティの次は、国に喧嘩売るたあ……力取り戻したからってハイになり過ぎちゃうか?」

「そうか? 丁度いいと思うがな。どうせ表に出せないお宝だ。地下競売同様、派手に暴れた所で連中は表立って騒げないだろうからな」

「まあ、そうやけど」

「それに今回はノストラードの娘の占いはない。さらに一日で仕事を終わらせる予定だ。ゾルディックのような手練れを呼び寄せる暇も与えるつもりはない」

「……元々手練れが揃えられとるつちゆうねん……」

国立美術館。それも絶対に表に出せない品まであるのだから、配属している警備員はそこらへんの強盗では太刀打ちできないくらい強い。

というより、プロハンターや同レベルの実力者、軍人崩れの傭兵ばかりである。つまり、念能力者ばかりなのだ。

「面白れえじゃねえか。ヨークシンじや雑魚ばかりで、最後は暴れられなかったからな。それくらいの方がやりがいがあるぜ」

「だね。手応えある方が腕が鈍らないね」

「俺はそもそも暴れてねえしな。ヨークシンでの鬱憤をぶつけてるところだ」

フィックス、フェイタン、ノブナガが盛大にやる気を出している。

そして、マチが、

「団長が決めたんだ。団長命令は絶対、だよ」

と、トドメを刺してくる。

それにラミナはため息を吐いて、

「いきなり大仕事はプレッシャーやねんけどなあ……」

「驚いたな。ラミナがプレッシャーを感じる性格だったとは」

「全く似合わないな」

「うん、似合わないね」

ボノレノフ、シャルナーク、コルトピがラミナを揶揄う様に言う。

ラミナは肩を竦めて、

「前任者が偉大やったからな。番号負けせんように気合を入れんといかんぞな」

「なるほど。確かに、そりや大変だ」

「ノブナガとコンビ組むんですか？」

「まあ、ラミナは基本的に誰とでも組めるからな。作戦次第ってここ

だな」

フランクリンが微笑ましく笑みを浮かべ、シズクがウボオーギンの事を考えて首を傾げる。

それにシャルナーク顎に手を当てながら言う。

ラミナはクロロに顔を向けて、

「言うとかけど、ヨークシンの時から何個かはストックが切れて使えんようになった武器があるで？ 後、1回壊れたらアウトなんもある。必要な武器があるなら、先に言いや」

「分かった」

「それと、先に一度家に戻らせてもらうで。これ、家に保管したいでな」

「ああ、構わんぞ。お前に任せたいと思ってる仕事は、メールで送っておく」

「頼むわ。で、ゲームはどうする？ 移動に使うか？」

ラミナはそう言っつて、ジョイステが入った鞆を示す。

クロロは顎に手を当てて、

「……そうだな。せっかくだから、一度ゲームに入ってみるか」

「ほな、マチ姉。うちの指輪、クロロにやって。うちは飛行船で家に向かうわ」

「はいはい」

マチは胸元から指輪を取り出して、クロロに投げ渡す。

クロロは受け取って、しげしげと観察する。

「団長、アタシもラミナと行くから」

「ん？ ああ、わかった」

マチの言葉にクロロは疑問を感じる事なく頷き、他の団員達はマチがそう言った理由を理解して微笑む者とニヤニヤする者と二通りの反応を示す。

カルトは視線だけでクロロとラミナで往復し、悩まし気に小さく眉を顰める。

もちろんラミナとクロロはその視線に気づき、

「カルトは今回クロロの方な。フェイ、シャル」



「ん？」

「なにか？」

「暗殺術と拷問、後は操作系の指導してやってくれん？　うちが合流するまででええから」

「構わないよ」

「いいよ。ゾルディック家の暗殺術や拷問の話も聞いてみたいしね」

「つちゆうことで、合流したら確認するでな。しっかり教わりや」

「……分かった」

カルトは少し不満げに頷く。

そこでラミナはあることを思いつく。

「ああ……せつかくやから、クロロとも戦ってみい。団長との差を知っておくんもええ経験やろ。クロロもリハビリがいるやろうしな」  
「ふむ。確かにな」

「じゃ、さっさと行つてこいや。クロロの荷物もうちの家に置いとくから」

「頼んだ」

クロロ達は順番にゲームの中へと入っていく。

最後にコルトピが入ったのを確認したラミナは、ジョイステを鞆に仕舞ってクロロの荷物も持つ。

「ほな、行こか」

「ああ」

ラミナとマチは、久しぶりに2人っきりの時間を過ごしながら、家へと向かうのだった。

そして、ノストロード家屋敷。

「!!」

センリツ、バシヨウ、リンセンと廊下を歩きながら、報告や相談をしていたクラピカが突然目を大きく見開いて止まる。

「どうしたの？」

「なんか思い出したのか？」

センリツ達は首を傾げながら振り返ると、クラピカの両眼が『緋の

眼』に変わっていることに気づく。

それにただ事ではないと悟ったセンリツ達は顔を鋭くする。

「おい、クラピカ」

「まさか……旅団が？」

「……ああ」

無意識に鎖を具現化しながら、右手を見下ろす。

そして、歯を食いしばって、右手を握り締める。

「団長に刺した鎖が……外れた……！」

幻影旅団を縛っていた唯一の鎖が、解き放たれた。

## #78 メンドウ×ナ×ヒツコシ

ラミナとマチは一週間ほどかけて、カゴツシの家へと戻る。理由はまっすぐ帰ると、家がバレる可能性があるからだ。

ラミナは旅団関係者で一番顔バレしている存在とも言える。なので、迂回するように飛行船を乗り、変装を変えながら家へと帰っていた。

と言っても、マチはほとんど変装せずにジャージ姿と着物姿を交互に着ていただけなので、あまり意味はないかもしれないが。

しかし、そこを怒る度胸はラミナにはない。

ただでさえ、ここ最近マチをないがしろにする状況が続いていた。クロロの復活で機嫌が直っているだけで、それを忘れるマチではない。

なので、埋め合わせを忘れると後で厄介なことになるのだ。

ということ、移動の間、ラミナはマチの要望を出来る限り叶えて、機嫌を取ってきたのだ。

「団長達は？」

「まだジョイスステ動いとるみたいやから、遊んどるんちゃうか？」

「ふうん」

「おかげで何の武器がいるんか判断出来んわ」

夜になってから家に帰ったラミナとマチは、荷物を下ろしながら話す。

マチは前回家に置いて行った服に着替えて、ソファに寝転ぶ。

ラミナは先に地下室へ行つて、「アロンドイト」を収納する。

予備のケースに収めて、さっさとリビングに戻る。

夕食は空港で食べてきて、冷蔵庫にはほとんど食料はないので、今夜は帰りに買ってきたツマミと酒を広げるだけである。

「団長達がゲームから出るまでは……」

「そのつもりやな」

「……それはそれで暇だね」

「先にクカンユ王国にでも行くか？ それとも別るところか」

「……それもそれで時間がかかりそうだね」

「まあ、のんびりしてもええと思うで？」

1人用のソファに座って、缶ビールを開けて飲み始めるラミナ。マチもソファに寝ころんだまま、缶ビールを開けて飲み始める。

「それにしてもクロロの奴、除念早々仕事とは。何だかんだで、ストレス溜まっとなんやろなあ」

「まあ、念が使えなかったしね。アンタがいたとしても、それなりに不安だったんじゃない？ 特にゲームに入ってる間はさ」

「ヒソカはもちろん、ゾルディック家がなあ……。あの家は全員が信じられへんから厄介やでなあ」

カルトが入団したからと言って、ゾルディック家からすればクロロを狙わない理由はない。

シルバやゼノは断る可能性はあるが、イルミは一切戸惑うことなく依頼を受けて、クロロを狙っただろう。

しかも、ジンまで現れば、ハンターさえ現れる可能性があったのだ。

流石のクロロも気が気でない時があっても仕方がないだろう。

頼みの綱の念能力も仲間も頼れなかったのだから。

「今回の仕事は溜まったストレスの解消っちゅうわけやな」

「それとアタシ達への償いってところね」

「パク姉やフィンクスもギリギリやったからなあ」

「フェイタンも結構際どかったね。正直、ゲームで殺しが駄目だったら、あそこまで大人しくしてなかったと思うよ」

「やんなあ……」

パクノダはクロロへの負い目。

フィンクスとフェイタンは、クロロがいないことで自分が好きなように動けないこととなんだかんだでクロロと会えないストレスが、溜まっていたのだ。2人とも分かりにくいのが、クロロへの思いは他の団員にも負けていない。

それは『クロロが定めたクモの掟を命を賭して順守する』という姿勢からも窺える。

なので、クロロは生きているが、団長として動けない。団長として動けないが、生きているクロロ以外で団長を選ぶのも情理的に無理。という状況が非常にストレスだったのだ。

「全く……愛され過ぎな団長つちゆうんも厄介やな」

「アンタだつて人の事言えないでしょうが」

「マチ姉達ほどやないわ。……多分」

流石に旅団の中では、そこまで激しく『クロロ愛』に溺れていないはずだとラミナは思う。

もちろん殺されたりすれば、その相手に怒りを覚え、クロロの死を悲しむのは間違いない。しかし、『刺し違えてでも殺す！』とまではならないだろうと、ラミナは考えている。

「大して変わらないよ」

マチはジト目を向けながら、缶ビールを傾ける。

「ところで、カルトは後どれくらい鍛えるつもりなの？」

「ん？ ん……何とも言えんなあ。前も言うたけど、あいつの身体がどう成長するか次第やし。それにそもそもアイツがずっと旅団におるんかも分からんしなあ」

シルバに頼まれ、クロロが認めたから面倒を見ているだけなので、ラミナはカルトが考えている最終目標を知らないのだ。

【発】が完成している以上、念を教えるのも限界があり、肉体を鍛えるにしても体の成長を待たなければ方針を決めようもない。

なので、今カルトにしてやれることは、少しでも実戦経験を増やしてやることくらいなのだ。

「旅団が復活した以上、うちばつかが面倒見る必要もないやろ。フェイタンとかノブナガにも付かせたらええんちゃうか？」

「なるほどね」

ラミナとマチはその後も酒を飲み続けて、その日はマチに引っ張られてダブルベッドの部屋で一緒に眠ることになったのだった。

翌日。

ラミナとマチは食料の買い出しに出かける。

もちろんマチは手伝うことなどなく、ひたすらにラミナの後ろに付いて、『あれ食べたい』『これ食べたい』を言い続けただけである。

ラミナは諦めているので、最初からマチの要望に応える形で買い物を進めていく。

一週間分の食料と酒を購入して、さっさと家に帰る。

すると、家のポストに手紙が挟まっていた。

「ん？」

「手紙？」

ラミナは両腕に食材を抱えているので、マチが手紙を手に取り勝手に封を切る。

そして、2人で覗き込んで素早く中を読む。

「……アルケイデス？」

「……みたいやな。あのクソ爺……」

アルケイデスにこの家について話したことなどない。

なので、この家に手紙を送ってきたということとは、

「……警告か……。この家のことが怪しまれとるみたいやなあ」

「だね。鼠の歯が届きそうだったさ」

「まあ、最近目立ちすぎたからなあ。流石に気づく奴くらいおるわな」

「どうすんの？」

「他にも用意しとる隠れ家はあるけど……。地下倉庫の荷物がなあ……」

「あれ全部運び出すの？」

「流石に放置できんやろ。クロロの本とかもあるし」

ラミナは顔を顰めて、引越しスケジュールを考える。

手紙であることから、まだ猶予はあるだろうと推測できるが、クワン王国の仕事に行けば、帰ってくる頃にはこの家は襲撃された残骸が残っているだけだろうことは間違いない。

とりあえず、食材をキッチンにしまって、ラミナとマチはすぐさま地下室に向かう。

「……って隠し通路とかないの？ シェルター作つといて」

「あるで」

「……あつそ」

サラリと答えるラミナにマチは呆れるしかなかった。

ラミナは奥側の壁に歩み寄り、壁にかけている武器を下ろして棚を退ける。

そして、シエルターを開ける時と同じように壁の一番下に窪みがあり、そこに手を差し込んで奥にあるスイッチを押す。

壁の一部が下がって、隠し通路が出現する。

「遊びすぎ」

「安全考えたら、これくらいになるんやって」

「で？ どこに通じてんの？」

「少し離れたところにある貸し倉庫。そこにトラック置いとるから、これら運び出すわ」

「時間かかりそうだねえ」

「それはもう諦めるしかないわな。早速始めるわ」

「手伝うよ。暇だし」

「悪いけど、まずはシエルターのあの3本から行くわ。ケースごと運び出すでな」

「……面倒だね」

ラミナとマチは早速武器を運び出していく。

倉庫の端に繋がっていた地下への入り口を開けて、そこに置かれていた6トントラックにドンドン武器を運び込んでいく。

お宝の3振りのケースをトラックの奥に設置して、ロープで固定する。

その後は、ドンドン長物の武器から運び出して、刀剣類、短剣類は箱に仕舞ってドンドン運び出していく。

「集め過ぎだよ」

「しゃあないやろ。うちの生命線なんやから」

2時間経っても、まだ終わらない作業にマチはうんざりした顔を浮かべる。

ラミナは申し訳ないと思うが、隠れ家にする以上武器を貯めておか

ないといけないのだ。

更に1時間かけて全ての武器を運び出し、その後は書斎の本や団員が気に入っていた家具を放り込む。

必要な荷物を運び終えた頃には、夕暮れを迎えていた。

「明日の朝に引越ししよか」

「どこに？」

「まあ、お楽しみつちゆうことで」

「……まあ、いいけど。で、誰が狙ってるのか予想はついてるの？」

「一番可能性が高いんは賞金首ハンターやろな。その次にハンターを雇ったマフィアンコミュニティ。大穴で仲介屋が雇った殺し屋」

「どいつにしろ、念能力者つてことね」

「まあ、せやろな」

「透視系の能力者とかがいたら、アウトじゃない？」

「うちがそこを考えとらんとでも？ この家の壁には神字を張り巡らせて、念能力じゃあ覗けんようにしとる」

「そんなこと出来んの？」

「まあ、あくまで念能力の効果を外側から弾くだけやけどな。機械類使われたら、どうしようもないけど」

「ふうん」

準備を終えたので、ラミナとマチは余裕のディナーを迎えていた。

正確にはマチの、であるが。

ラミナはいつも通りマチのリクエストに応えながら、つまみ食いしながら調理を進めていく。

買い込んだ食料が半分ほど余ったが、無理に食べてもこの後に差し支えるので諦めることにした。

「全く……最近散財ばっかやな」

「次の仕事で今回は取り戻せると思うよ？」

「次の仕事は盗むもんが中々売りにくい代物やからなあ。金としては微妙な気がするんよなあ」

「じゃ、諦めるんだね」

「はあ……。まあ、殺し屋で旅団員なった以上、ここは近いうちに放棄



することになるとは思いつたけどな」

料理を食べ終えたラミナはため息を吐きながら、ワインの栓を抜いて直接口を付ける。

マチは苦笑しながら缶ビールを傾けていると、僅かに目を細めて玄関側に視線を向ける。

ラミナも顔を引き締めて、庭側の窓に目を向ける。

「……いくつ？」

「……はつきりしとるんは表に4匹。裏に3匹」

「じゃあ、倍は覚悟しとくべきだね」

ラミナはコインを弾いて、手で隠す。

「どつちや？」

「裏」

「……表やな」

「ちっ」

「包丁とかいる？」

「いない」

ラミナは包丁を右手に持ったまま、ワイン瓶片手にリビング側に歩いていく。

マチは缶ビールを飲み干して缶を握り潰し、玄関側に立つ。今のコイントスはどつちが狭い玄関側を受け持つかというものだったのだ。

その直後、庭に通じる窓とカーテンを突き破って、念弾と思われる光弾が大量に飛び込んでくる。

更に黒い覆面を被った傭兵のような男が右手にコンバットナイフを構えて、ラミナに迫ってくる。

更に玄関側からもドアが蹴破られる音が響き、数人の気配が駆け寄ってくるのを感じた。

ラミナは念弾を避けながら、【周】で包丁を強化して飛び交う念弾よりも高速で投擲する。

包丁は迫ってくる男の顔の横を掠めながら飛んでいく。

傭兵の男は外したと思ったが、自分の背後に誰がいるのかを思い出す。

「!?」

男は背後に顔を向けると、シヨットガンを構えていた同じく傭兵風の男の眉間に包丁が深く突き刺さっていた。

「っ！ おのれ！ なっ!?!」

男はラミナに顔を向け直すも、目の前にワイン瓶が飛んできていた。更にラミナの姿が消えていた。

男は反射的にワイン瓶を左手で払い退ける。

しかし、ワイン瓶が男の真横で制止する。

それを視界の端で捉えた男は、目を見開いて顔を向ける。

直後、男の喉に鋭い衝撃と痛みが走り、目の前にはいつの間にか、左手でワイン瓶を掴み、右腕で短刀を振り抜いているラミナの姿があった。

「がっ……!?!」

「突攻役が後ろの仲間やられたくらいで、目え逸らすんはあかんやろ」  
倒れて行く男に呆れながら言い放って、ワインを煽るラミナ。

すると、背後を振り返りながらワイン瓶を振り被り、オーラを籠めて投げる。

マチが最初に飛び込んできた男の首をへし折っているところに、続いてマチに迫って来ている男の顔面にワイン瓶の底がぶつけられる。

「ぶえっ!?!」

男が怯んだ瞬間、ラミナは短刀をレイピアに変えながらマチの元に駆け寄り、能力を発動して素早く男の額と左胸に風穴を空ける。

マチはワイン瓶をキャッチしながら後ろに下がり、ラミナと入れ替わる。

ラミナは左手にスロージングナイフを具現化し、風穴を空けた男の死体を蹴り飛ばして、後続の敵を牽制する。

スロージングナイフを投擲して、更にレイピアを連続で突き出す。

「があ!!」

「ぎえ!!」

悲鳴が廊下から響き渡り、ラミナはマチの傍に下がる。

マチは呑気にワイン瓶を煽っている。

「後は？」

「……【円】に引つかかったんは3人。けど、気づいて逃げられたわ。そこそこ慣れとる連中やな」

「見た目は傭兵っぽいね」

「まあ、こいつら全員がプロハンターかどうかは分からんけどな。トップ、または雇い主だけがプロハンターなんかもしれんし」

「なるほどね」

その時、庭の方から何かが家の中に投げ込まれる。

目を向けた2人が捉えたのは、オーラを纏う手榴弾だった。

それに対処しようとした瞬間、ラミナの背後に巨大な蠅螂のような化け物が出現する。

「蹴とばせー！」

「分かってるー！」

ラミナは左手にソードブレイカーを具現化して、念獣に向き合う。

マチは素早く左脚を振り抜いて、手榴弾を蹴り飛ばす。

手榴弾は勢いよく窓から飛び出し、裏手の一軒家に叩き込まれた瞬間爆発して家が吹き飛ぶ。

更に念獣はソードブレイカーに斬りつけられて、その身体を霧散させる。

「あらら……。こら、とつとと逃げんと警察やら他のハンターも来るな」

「どうせ、バレるんだし。今更でしょ」

「まあな。さて……。ほな行くかって……。漫画みたいな登場やなあ」

ラミナは呆れた表情を浮かべて玄関側を見て、マチはめんどくさげに庭に目を向ける。

満を持した感を纏って玄関から現れたのは、黒い丸刈りで柔道着を着た40代くらいの男。

そして庭から現れたのは、2mくらいで筋肉質な浅黒い肌を持つ女。

前半分をコーンロウにして、後ろ半分を肩まで無造作に流している茶髪に、チューブトップにハーフパンツとアマゾネス感全開である。

もちろん2人ともオーラを纏っている。

マチはワインを飲みながら、

「アンタがさっきの手榴弾投げた奴？」

「はっ！ そんなわけないだろ？ あんなチマチマした戦い方なんざするかい」

アマゾネス女は嗤い飛ばして、ゴキゴキと指を鳴らす。

それにマチとラミナは「強化系か……」と、分かりやすい性格に呆れる。

ラミナも柔道着男に目を向けて、

「アンタもあの傭兵共のボスつちゆう感じやないなあ」

「無論。我らはただ雇われたのみである」

「賞金首ハンターか？」

「うむ。悪名高き幻影旅団。殺し合うには不足なし」

「そっちも？」

「そうだね。まあ、噂ほどじゃなさそうで、ガツカリだけだね。こんなヒョロい小娘があのかモの一員だなんてさ」

アマゾネス女は肩を竦め、マチを見下ろして鼻で笑う。

マチは小さくため息を吐いて、ワイン瓶をラミナに放り投げる。

ラミナは目を向けることなく、ワイン瓶をキャッチする。

「そのままでええの？」

「問題なし。そっちは？」

「聞くまでもなし」

「じゃ、さっさと終わらせるよ」

「へいへい」

「……言ってくれるじゃないか」

「甘く見ておると、痛い目に遭うぞ？」

アマゾネス女と柔道着男は目を鋭くして、オーラを強める。

ラミナは肩を竦めると、手首の力だけでワイン瓶を柔道着男の顔を目掛けて投げる。そして、スロージョウナイフを左手に数本具現化すると、ワイン瓶を目隠しにして続けて投擲する。

柔道着男は全く驚くことなく素早く右腕で払い除け、続けて迫って

くるスローイングナイフを全て両腕で弾いたかと思うと、  
全てのスローイングナイフが爆発して碎かれる。

「ほお……」

「無駄ぞ。その程度のもものでは我には届かん」

柔道着男の両腕には、武骨な黒い手甲が出現していた。

（あれに触れたモンを爆破する能力か。攻防一体の武闘家らしい能力やな。けど、そこまで威力はない。油断は出来んけどな）

ラミナは右手にファルクス、左手にブロードソードを具現化する。

「……多種多様の武器を具現化する能力。情報通りだな」

ラミナはその言葉に答えず、小さく【円】を発動して柔道着男をオーラ内に捉える。

柔道着男は滑る様に前に出て、右拳を鋭く突き出してラミナに殴りかかる。

ラミナは一步下がりがりながら、右腕を弾くようにファルクスを振り上げて【狂い咲く紅薔薇】を発動する。

ファルクスの刃が手甲に触れた瞬間に爆発が発生し、ラミナの右手に連続で衝撃が叩き込まれる。

「っ!!」

「ぐっ!?!」

ラミナは僅かに目を見開いて後ろに跳び下がり、柔道着男も左肩と右脇腹から血が噴き出して動きを止める。

ラミナはファルクスに目を向けると、大きく刃毀れしており、剣身にヒビが入っている。

ファルクスはラミナの意志に関係なく、右手から消滅する。

「……なるほど。対象に触れ続ける間爆発する能力か。相手に触れた時間が長いほど爆発の威力が上がるつちゆうところか？」

「ぐほっ! ……その通りだ。我が【鐵拳断風】てっけんたちかぜは、相手に触れている間常に炸裂する」

「確かにうちの能力と相性が良い……て考えるやろなあ」

ラミナは頷くと、一瞬で柔道着男の背後に回る。

「!?!」

柔道着男は目を見開くも、左裏拳を素早く繰り出す。

しかし、

「遅い」

【一瞬の鎌鼬】を発動して、柔道着男の左腕が肩口から斬り飛ばされる。

更に背中からも血が噴き出し、ラミナが再び一瞬で正面に移動する。

(っ!! は、速すぎ……!!)

「その能力を活かすんやったら、受けに回るんは悪手やぞ。老いぼれ」  
柔道着男は右腕を動かそうにも、すでに右腕は男の肩から斬り離れ始めており、気づいた時にはラミナの右手には心臓が握られていた。

男は目を見開いて己の胸に目を向け、胸からジワリと血が滲み始めているのを見て、それが己の心臓だと気づいた時には、男の意識は永遠の闇へと落ちていった。

ラミナは心臓を放り投げて、ブロードソードを消す。

「……これでスローイングナイフとファルクスもストック0。はあ……まあ、仕事で使えなくなるよりはええか」

ラミナはマチの方に顔を向ける。

マチは特に怪我もなく立っており、

その足元には、何やら呻きながら蠢く肉玉が転がっていた。

「うー!! うう! ううお!!」

「ふん……」

「相変わらずえげつないこつて……」

肉玉はアマゾネス女だった。

四肢は折り畳まれた状態で固まっており、左目と口を閉じて、右目だけが大きく見開かれて血走っている。

全身に汗が噴き出しており、太く血管が浮かび上がるほど力を籠めているように見えるが、全く姿勢が変えられていない。

アマゾネス女の身体中には、マチの念糸が縫い付けられていた。

脚はふくらはぎと太腿、太腿と腹部で縫われており、腕は交えるように胸や脇腹に縫い留められている。

もちろん左目と口も念糸で縫われている。

全ての念糸の先はマチの両手に握られていた。

(両腕は殴りかかって縫われ、両脚はまずふくらはぎと太腿を縫いながら引つ張られてバランスを崩したところに、太腿と腹を縫われて固定されたか……。切り離された念糸ならともかく、まだマチ姉が握つたる状態じゃあまず引き千切れんわな)

「終わったんなら行くで」

「ああ」

マチはラミナの言葉に頷いて、窓際に落ちているナイフを拾う。

握っている糸をナイフの柄に縫い付け、最後にアマゾネス女の首に念糸を巻き付けて、その念糸の先もナイフの柄に縫い付ける。

ラミナは首を傾げていると、マチはアマゾネス女を右腕のみで掴み上げ、左手に握っているナイフを天井深くに突き刺した。

「ラミナ、ちよつとコレ持ってて」

「……まあ、ええけど」

ラミナはマチが何をやる気なのか気づいて、頬を引きつらせながらアマゾネス女を抱える。

マチは念糸でナイフが抜け落ちないように天井に縫い付ける。

「もういいよ」

「あいよ」

「うゝー!？」

アマゾネス女もようやく何が起きるのか理解して体を揺するが、もちろんその程度で念糸から逃れるわけではない。

そして、ラミナが手を離れた瞬間、アマゾネス女の首に巻きついた念糸が勢いよく締め付け始め、更に体を縫い付けている念糸も引つ張られて力強くなる。

「うゝ……おゝお……!ー うゝおー!!」

「千切れへんの?」

「この長さの本数なら、しばらく保つと思うよ」

「ふうん。ほな、さつさと行くか」

「ああ」





そして、出発を促すも、ラミナは意味深な言葉を言つてエンジンをかけない。

そのことにマチが訝しむと、

ドオオオオン!!

「!!」

少し離れた場所で巨大な爆発が起こる。

マチが目を見開くと、今度は周囲の家や街灯の明かりが全て消える。

それと同時にラミナはトラックのエンジンを始動させる。

「よっしゃ、行こか」

「……これもアンタの仕業?」

「おう。あの地下への入り口を無理矢理開けると、家中に仕掛けてあった爆弾が弾ける仕掛けや。さらに発電施設も連動して爆発して、街中を停電させることで監視カメラとか止めて、その隙に悠々自適に逃げ出すつちゆうことやなく」

「……」

ラミナはトラックを走らせながら説明し、マチはただただ呆れるしかなかった。

「家は跡形もなく吹き飛ばやろうから、死体もまともに残らんやろ。地下室も埋まるように仕掛けたから、掘り出すだけでも時間かかるやろな。あの隠し通路と倉庫に気づくんもだいぶ先やろうしな」

「……だから、遊びすぎ」

「家を荒らしよつた奴に、仕返ししたいだけや。結構気に入つとつたし、金掛けて改築したんやで?」

ラミナはハンドルに顎を乗せて不貞腐れながら運転する。

それにマチは苦笑し、後部座席に置いてあるジョイステに目を向ける。

ジョイステは未だオーラを纏つて起動中だった。

「団長……目的忘れてんじゃないだろうね?」

「つちゆうか、クロロとかシャルは出とるんちやうか？ カルトとかフィックスとかが残つとるだけで」

「……なるほどね」

マチは携帯を取り出して、シャルナークにメールを送ってみる。数分もすると着信があった。

「……団長はまだゲームの中で勘を取り戻して戻ってき。今、外にいるのはシャルにパク、コルトピ、フラン、シズクだつてき」

「なるほどな。あ、ついでにこっちの状況も軽く伝えとつて」

「了解」

マチは頷いて返信する。

その後はひたすらラミナが運転して、新しい拠点を目指すのだつた。

その頃。

吹き飛んだラミナ邸。

消防車、救急車、パトカーなどがひしめき、捜査関係者や野次馬やらが大勢動き回っていた。

「あくあ。こりゃひでえ」

「随分と派手にやったわねえ」

顔を出したのはモラウとメンチ。そして、ナツクル達弟子組だ。

ナツクルは盛大に顔を顰めており、コロロルクとザーニヤも険しい顔で悲惨な現場を見つめている。

ラミナ邸は跡形もなく、地面が窪んでいる。

その両隣の家も半壊状態だった。

停電しているせいで明かりが少ないので、未だに被害状況の全容が見えない。

焦げた臭いと、僅かに匂う肉が焼けたような臭いが立ち込めている。

モラウ達はハンター証を見せて、規制線の中に足を踏み入れる。すると、ラミナ邸の前に牛を思わせる白黒の服を着た男が立っている。

るのに気づいた。

「あいつは……」

「ん？ あら、十二支んじゃない」

「ん？ お前達は……」

モラウ達の声に気づいて、振り返った男の名はミザイストム。

ネテロが選んだ12人の優秀なハンターの1人で、ミザイストムはその見た目同様『丑』の称号を与えられている。

もちろん実力があるだけでなく、それぞれ得意分野を持っており、星持ちハンターばかりである。

ミザイストムは『クライムハンター』を名乗るダブルハンターで、弁護士の資格を持ち、警備会社を経営している。

賞金首ハンターとは少し毛色が違うので、ここにいることにモラウ達は自分達を柵に上げて首を傾げる。

「何でアンタがここにいるんだ？」

「……たまたまこの近くで仕事をしていたんだ。そしたら、あの爆発で、この現状だ」

「なるほどね」

「お前達は どうしてだ？」

「この家の持ち主が、俺達の顔見知りだな。襲撃するって情報を聞いて、駆けつけたんだが……」

「間に合わなかったってわけ……」

「……ふむ」

ミザイストムはモラウとメンチの言葉に、顎を手に当てて考え込む。

ナツクルとコロロルクはラミナの家に近づくも、警察の鑑識に止められる。

ミザイストムはモラウ達に顔を向けて、

「こつちで話そう」

ミザイストム達は警察からも野次馬からも離れた場所に移動する。

そして、モラウ達から詳細を聞き、盛大に顔を顰める。

「クモとゾルディック家に関りが深く、ハンター証を持つ凄腕の暗殺

者か……」

「しかも、最近アンタのお仲間の『猪』が一ツ星にしたけどな」

「……ジン……!」

「今はそんなことどうでもいいのよ。ここを襲った連中の生き残りはいないの?」

「今の所、見つかっていない。あの現場だ。身元が分かる状態の死体なんて残ってないと思うべきだろうな」

「だよな……」

モラウは頭をガシガシと搔いて、ため息を吐く。

すると、苛立ちがマックスに達したナツクルが、

「あの女も吹き飛んだんじゃないっすか?」

「あん——!」

「それはないな」

メンチがすかさず怒鳴ろうとしたが、その前にミザイストムが力強く否定する。

「おかしいと思わないのか? この停電」

「は?」

「たかが家一軒、しかもこんな郊外の場所で爆発したくらいで、街全体が停電になると思うか?」

「確かにな」

「発電所でも原因不明の爆発が確認されている。恐らく、その女だな」

「なんでそんなところに?」

「今も街の中心部以外はまだ停電したままだ。信号や監視カメラも含めてな」

「っ!! 追跡を逃れるためってわけかい?」

「そう考えるべきだ。しかも、あの家の床の崩れ方……」

ミザイストムはラミナの家の床が窪んでいるのを思い出す。

「あの崩れ方は地下室があった可能性が高い。ここまで用意周到な奴だ。地下通路があってもおかしくはない」

「……つまり、今頃は余裕綽々でこの街を出て行っている?」

「ああ。止めようにも、この状況じゃあ警察は停電の対処で間に合わ

んだろうな。それに運良く見つかったとしても、捕らえるには相当の被害を覚悟すべきだな。ヨークシンやクヘンタの二の舞を起こすわけにいかん」

「そもそも幻影旅団はヨークシンで団長達の死体が見つかったのでは？」

シユートが動画で首を晒されていたことを思い出す。

それにミザイストムが腕を組んで鼻でため息を吐く。

「あれは念で造った偽物の死体だ。あの動画の後、死体が消えたそう。マファイアンコミニティーはかなり焦ったが、連中が流星街出身であることと十老頭が殺されていたことで手出しを止めた。しかも、首の動画を晒したその日に、ホテルや街で暴れている旅団の姿が目撃されている。……まあ、欲をかいってタラチユネラファミリーを動かして、酷いしっぺ返しにあつた奴らもいたがな」

「つまり旅団はピンピンしてるってことね」

「ああ。マファイアンコミニティーは立て直して手一杯だろう。立て直したとしても、ゾルディック家と繋がっている可能性がある以上、もはや手出しできないだろうがな」

「で、今回はハンターが手を出して、返り討ちにあつたと……」

「誰がやられたのか分からないのが何ともな」

「1人は分かってるぜ。賞金首ハンターのドルドーって奴だ」

モラウが呆れながら、ハンターの名前を挙げる。

ちなみにドルドーは蠅螂の念獣の使い手で、地下室への扉を無理矢理開けて、爆死している。

そして、手榴弾を投げ込んだ部下とこの家を見つけたハッカー担当の部下も一緒に吹き飛んでいる。両隣の家にまで被害が出たのは、この部下の手榴弾もまとめて爆発したせいである。

メンチは盛大に顔を顰めて、

「あくもう！ だから、あたし達が行くまで手を出さなって言ったのよー！」

「まあ、来てもどうにか出来たか分からんがな」

「こんな被害出すくらいなら、とつとと逃がしてやった方がマシだっ

たわよ」

「まあ……そりゃあな」

「手柄に焦って全滅。しかも、どこ逃げたかも分かんないって最悪じゃない。これだったら、放置して監視してた方がよっぽどマシよ」  
「まあ……そうですね」

ザーニヤもメンチの意見に賛同する。

メンチ達もようやくラミナの手がかりを見つけ、余計なことをしよ  
うとしている連中を引き留めようと急いできた結果がこれである。

完全に手がかりを失ったことで、また調査は振り出しだ。

むしろ、メンチは今もよく我慢しているとすら思っている。

しかも、一年足らずでシングルハンターになっているのだから尚更  
である。

「メンチさん。流石にこれ以上は無理だよ。依頼が溜まって来てる」

「……分かってるわよ。手がかりもなくなったしね」

「俺らもだな」

「俺が調査を続けよう。何か分かったら、連絡してやる」

ミザイストムの提案に、メンチとモラウは頷いてホームコードを交  
換する。

そして、メンチ達はそれぞれの仕事に戻ることにして、ミザイスト  
ムを残して去る。

ミザイストムはその背中を見送って、大きくため息を吐く。

「旅団員の可能性があるシングルハンターの暗殺者、か。会長はもち  
ろん、パリストンも興味を持っていてもおかしくはない。いや……も  
しや、今回の襲撃も奴が煽った可能性があるか……。何にしても、厄  
介な存在だな」

ミザイストムはラミナの脅威を決して過小評価せず、まずは徹底的  
に情報を集めるために動き出すのだった。

## #79 ホウモツコ×ノ×セイリ

翌朝。

ラミナが運転するトラックは「フィンメス」という街から10km離れたところにある別荘地に到着する。

ここに来る前に食料などの買いこみは終わっている。

別荘地とあって人気はなく、トラックが走ろうとも大して注目は集めない。

ラミナはその別荘地の更に外れにある洋館の前で、トラックを止める。

「(トク)？」

「おう」

「……前の家より大きいじゃん」

「デカすぎて管理が面倒やねん。しかも、移動に不便やしな。ちよつと待つとつて」

ラミナはトラックから降りて、門を開ける。

すぐに運転席に戻って、敷地内にトラックを入れる。

屋敷の裏手に回ると大きめの倉庫が設置されており、そのシャツタワーも開けてトラックを入れる。

「到着つと」

「また荷物運ぶの？」

「先に屋敷の中、確認しよか。しばらく使うてなかつたし」

ラミナとマチは倉庫から出て、屋敷の中に入る。

屋敷は2階建てで、昔貴族が使っていたと言っても納得する造りだった。

「……前の家よりも金かかってんじゃないの？」

「いや、こっちは軽くりノベーションしたくらいやな。地下室は元々あった奴を弄っただけで、新しく建てたんはガレージとトラック停めた倉庫くらいや」

「ふうん」

「一階はリビング、食堂、キッチン、応接間、風呂、物置。二階は書斎

と各自の部屋」

「アンタの部屋は？」

「前同様、部屋の扉にプレートかけとる。他の部屋は空いとるから、好きを選んで使い」

「了解」

マチはさっそく二階へと上がっていき、ラミナは一階の各部屋の設備を確認をして回る。

「……問題なく使えそうやな」

ラミナはガスや電気が問題なく使用でき、テレビなども動くことを確認して一息つく。

冷蔵庫に食料を仕舞った後、ジョイステを30畳ほどあるリビングのソファに放り投げて、ラミナは次にガレージへと向かう。

ガレージには車が一台置かれており、ラミナはエンジンやバッテリーなどの確認をする。

車も問題ない事を確認すると、今度は物置に向かう。

物置には清掃道具などが置かれており、ラミナはそれらに目もくれず部屋の奥の壁に歩み寄る。

そして、前の家同様レンガ状の壁を順番に押していく。

すると、壁が下がり始め、地下への階段が出現する。

「問題なしっ」と

「だから、遊びすぎ」

後ろに振り返ると、マチが呆れた表情を浮かべて入り口にもたれていた。

ラミナは肩を竦めて、

「やから、しゃあないやろ？ 悪党の隠れ家が普通な方が無茶やって」

「ま……そうかもだけどさ」

「部屋は決めたんか？」

「ああ」

「ほな、先に本とかを運びこもか。武器はゆっくりやるわ」

「はいはい」

ラミナとマチはトラックに戻って、武器以外の荷物を下ろして屋敷



へと運ぶ。

書斎の空っぽの本棚に本を詰めていく。

それが終わったら、マチはジャージに着替えて風呂へと向かい、ラミナは倉庫へと向かう。

「……カラーリングは流石に無理か……」

ラミナは小さくため息を吐きながら軍手を嵌め、ナンバープレートとタイヤを交換する。

タイヤはタイヤ痕を変えるためだ。もちろん新品ではバレルるので、ある程度使い古したタイヤである。

出来れば塗装まで変えたいが、流石にめんどくさかった。

「まあ……この辺りは監視カメラなんぞないし、警察やハンターがここを嗅ぎつけるにや早くとも数週間はかかるやろ。州も跨いだし」

外したタイヤを棚に仕舞い、ナンバープレートを手で丸めて潰す。

ゴミ箱に放り込むと、倉庫の端にある棚に向かって歩く。

棚を開けて奥板をずらすとスイッチがあり、それを押す。

すると、床の一部が開いて、地下通路の入り口が現れる。

前の家と同じ仕掛けだ。

「ん〜……お宝に関しちや、別の隠し場所探した方がええかもなあ……」

トラックの奥に置かれている聖剣を見ながら呟く。

この屋敷とて、いつまでも隠し通せるとは思えない。発覚するたびに聖剣を運び出すのは厳しいだろう。

今回はアルケイデスがわざわざ知らせてくれたから、対応出来ただけなのだから。

「けどなあ……。手頃な場所で防犯がしっかりしとる、または改造できるところとなると……少ないわなあ」

武器を入れた箱を抱えて、地下通路を歩きながらボヤク。

この屋敷の地下室は前の家の2倍以上の広さがあり、武器の収納数も多い。

数回往復して、聖剣以外の武器を全て運び終える。

ラミナは素早く倉庫に安置されている武器を見渡して、

「……何本かはこの箱から出さんとあかんか」

ラミナは箱を開けて数種類の武器を取り出し、部屋の中央に置かれているテーブルに並べる。

そして、今度はゆっくりと並べられている武器を見て回る。

時々、武器を手を取って【凝】でオーラの量と質を確認していく。

「ん〜……【朧霞】も後1個……。バトルアックスも銃剣も造り直しておくべきか……」

バトルアックスや銃剣も手に取って、テーブルに置く。

今度はナイフなどの短剣類や投擲を目的とした短剣を置いてある棚に向かう。

一通り目を通すも、

「……【妖精の悪戯】に適したんはなさそうやな。さて、どうしたもんか……」

似たような能力は出来るだろうが、その微妙な違いは一秒を争う戦いでは大きく影響する。

「【執着する雀蜂】を諦めれば、スローイングナイフでも良さそうやけど……。そうなると迂闊に数を増やして投げれへんなあ。箱の中のも似たようなもんやし……」

腕を組んで唸る。

【妖精の悪戯】はかなり使い勝手がいいので、出来れば改めて創っておきたい。

しかし、それに適した武器が見当たらない。

「……【執着する雀蜂】は諦めよか。んで、スローイングナイフの代わりになる武器で、なんか能力考えればええか」

ということ、スローイングナイフを手に取り、他に投擲系の武器を探す。

10分ほど悩んで武器を選び、テーブルに並べる。

ラミナは地下室から出て、リビングに入る。

すると、中にキョロキョロとリビングを見渡しているカルトの姿があった。

「あ？ カルト？」

「あ」

「なんで、こつちに戻って来てん？ クロロ達は？」

「……団長達はクカンユに行った。ボクはラミナ達のところに戻れて言われただけ」

眉を顰めながら答えるカルトに、呆れの表情を浮かべるラミナ。

恐らくはラミナとマチを揶揄うためにフェイタンとフィックス辺りに送り出されたのだろうと推測したラミナは、ため息を吐いて機能を停止したジョイスステに目を向ける。

「ところで、ここどこ？」

「新しい隠れ家。前の家は昨日ハンターに襲われて木っ端微塵や」  
「……」

「ま、出来る限り追跡できんように逃げたでな。ゾルディック家でも、まだここは見つけとらんやろ」

「ふうん……」

カルトは窓からの景色を眺めながら頷く。

その時、ラミナの携帯が鳴る。

クロロからのメールで、中にはクロロが知ってる限りのラミナの能力名が記されていた。

「……これを用意しとけてることか。……何とかなりそうやな」

携帯を仕舞い、ソファに座って創る能力を考えていると、頭にバスタオルを乗せたマチが入ってくる。

「あ？ カルト？」

ラミナと全く同じセリフとリアクションをするマチに、カルトは呆れながらもラミナにした説明をもう一度する。

マチは呆れた表情を浮かべながら、

「あいつら……面倒になったから、こつちに押し付けたわね」

「やるなあ。で？ クロロはどうやった？」

ラミナは苦笑しながら、カルトに顔を向けて訊ねる。

カルトは盛大に顔を顰めながら、

「……手も足も出なかった。ラミナと同じくらい厄介で意味わかんない能力だったし」

「あいつの能力はなあ。うちも細かく知らんし」

「それは他の団員もそうだけどね」

「……仲間なのに能力知らないの？」

「知らんな。パク姉みたいな能力者おったら困るやろ？ やから、うちやってお前に能力の全容聞いたことないで？」

「……そう言えば……」

ラミナもマチに全ての武器について話したこともないし、マチもラミナに全部話していない。

他の団員よりはお互いの能力は知っているだろうが、一番重要な部分は話さない。

信頼していないからではなく、『何よりも重要なのはクモの存続』という掟に従って。

情報を引き抜かれて、仲間には危険が及ぶ可能性を少しでも減らすために。

ラミナはずっと旅団員ではなかったが、だからこそ『知らないし、聞かない』を徹底したのだ。

「ま、そういうことやから。能力を開発する時は、うちに隠れた所でやりや。カルトやったら、実家に帰ったらええだけやろうけど」

ゾルディック家ほど、カルトにとつて安全な場所はない。

カルトは頷いて、ソファに座る。

「2階で好きな部屋選んでこいや。うちの部屋はプレートが下がってるし、マチ姉の部屋は……」

「ラミナの隣」

「らしいから」

「うん」

「うちもちよつと着替えてくるわ」

「ん」  
カルトとラミナは2階に上がり、ラミナは自室に入って、カルトはマチの2つ隣の部屋を選ぶ。

ラミナはタンクトップにジャージのズボンとラフな格好に着替え、髪紐を解いて髪を下ろす。

着替え終えたラミナはノートパソコンを持ち出し、キッチンで飲み物とコップを持ってリビングに戻る。

マチはソファに寝転びながらテレビを眺めていた。

ラミナはマチの分の飲み物も用意して、1人用のソファに座ってノートパソコンを開く。

「団長から。準備が出来次第、こっちに来いってさ」

「……やったらカルトも連れて行けっちゅうねん」

「弟子は師匠というもんだろってさ」

「言うたんかい」

「そりゃね。で、準備は？」

「……明日の夜にでも出よか。今晚中に仕度するわ」

「ん」

マチは寝転んだまま返信を打ち始め、ラミナはノートパソコンでカゴツシの情報を集める。

停電からは完全に回復したらしいが、まだ家の調査は続いているらしい。

手榴弾の爆発に巻き込まれた裏手の家の住民は死亡。半壊した隣の家の住民は死者はいないが、重傷者が数名出ているらしい。

全壊したラミナ邸に関しては、死者が出たのは確かだが、誰が死んでいるのか、何人なのかは依然不明らしい。

周辺住民はもちろんラミナ達の正体など知らないし、滅多に帰ってこない存在なので、インタビューにまともに答えられる者などいない。

せいぜい『何をしてるか分からない怪しい人』くらいである。

しかし、メディアにもハンター証を持っている人間もいるので、ラミナが暗殺者であることはすぐに報道された。

だが、実名や幻影旅団であること、そしてハンターであることは、報道していないようだった。

(……クモやゾルディック家からの襲撃を恐れたか？ まあ、死体が全部ハンター関係者っちゅうことを広めたないんもあるかもしれないが……)

しかし、その判断は正解だった。

ラミナは実名が報道されていたら、確実に報道したテレビ局や記者を狙った。

報道した内容によってはゾルディック家も動いた可能性もあっただろう。

この手の凶悪犯の情報は、下手に開示すると逆に追い込んで被害を広めるだけになる可能性がある。

情報を扱うプロハンターならば、その辺りは弁えていたようだ。

ちなみにこれにはネテロ、ミザイストムを筆頭とするハンター協会からもストツプがかかっていた。

ハンター協会会長まで出張ってきたことで、一般の報道関係者も『これ以上の深追いはヤバイ!』と悟ったのだ。

(……この辺りはネットカフェみたいなんはないし……。どつかで情報収集せんとな)

この屋敷を使わなかった理由がこれである。

非常にネット環境が使い辛いのだ。情報屋サイトも下手をすると、場所を特定される可能性もあるので、拠点では滅多に見ない。

一応サーバーを特定されないように処置をしているが、ハッカーに勝てる程腕はないので使わないに越したことはない。

ラミナは小さくため息を吐いて、ノートパソコンを閉じる。

そして夕食の準備のために、キッチンへと向かうのであった。

いつもの通りの理不尽なオーダーが飛び交う夕食を終えたラミナは、聖剣を地下室の奥に運び込み、風呂も終えてリビングでのんびりとしていた。

マチもはや定位置と言いつ張るかのようにソファで寝転んでおり、カルトはリビングの端っこで【纏】【練】などの修行をしていた。

ラミナはコーヒーを飲み終わると、ソファから立ち上がる。

「地下室の整理してくるわ」

「あいよ」

ラミナは地下室に下りて明かりをつけるが、明かりは部屋の角当た

りだけ点け、武器が並べてあるテーブル周囲は薄暗くしている。暗闇に目を慣らせたラミナはテーブルに歩み寄る。

「まずは……」

ラミナは右手に短刀を具現化すると、刀身に左手を添える。

「っ！」

左手に素早く掌底を叩き込んで、バキン！と折り砕く。

残った柄は消滅し、ラミナは次にバトルアックス、銃剣。薙刀を具現化して殴り砕く。

「なんで砕いてんの？」

「ん？」

背中から声が聞こえて振り向くと、マチが入り口にもたれ掛かって首を傾げていた。

「ストックが後1個やったからな。先に砕けば、新しく造り直せるんですよ」

「なるほどね」

「で、見ていくんか？」

「暇だしね」

「ま、ええけど」

「……いいの？」

少し前に能力は見せないようにと話したばかりだというのに。

マチはそう思いながら呆れ、ラミナは肩を竦める。

「別にここ見られたくらいじゃ困らんしな」

「ふうん……。そのテーブルに置いてある奴を入れるの？」

「そ。まあ、後は見てのお楽しみつちゆうことで」

ラミナは笑みを浮かべて、その瞳を金色に輝かせる。

オーラを体から噴き出して、右手を横に掲げる。

「現れ、開き、整えろ【刃で溢れる宝物庫】アルマセン・デ・エスパダ」

ラミナの右手からオーラが噴出し、ラミナの右横に広がっていく。

オーラは徐々に形を変えて、黄金の三日月の紋章が刻まれた両開きの銀の扉が出現する。

扉は左右にスライドして開いていく。

扉の中身は白く光っているだけで、どうなっているかは分からなかった。

完全に開ききるとラミナが立っている反対側に、扉から刃が折れ砕けている短刀やナイフ、バトルアックスなどの残骸が排出されている。

「それがストックがなくなった武器の本体？」

「そ」

ラミナは頷きながら、テーブルに並べている武器を無造作に放り込んでいく。

「そんな適当でいいの？ 確か似てる形の武器って入れられないんですよ？」

「あかん奴は向こうに放り出されるでな。まあ、入れた奴くらい覚えとるから、大丈夫な奴しか選らんどらん」

ラミナの宣言通り、テーブルに置いてあった武器全てが問題なく扉の中に納まる。

「納め、閉じ、消えろ【刃で溢れる宝物庫】」

再び唱えると、扉が閉じて虚空に消える。

それを見届けて、ラミナは【月の眼】を解除し、大きく息を吐く。

「はあー……。しんど」

「それで武器は出来たの？」

「出来たで。まあ、能力はこれから付けていくけど」

ラミナはそう言うときスローイングナイフを具現化する。

それにオーラを籠めて、1分ほど見つめ続ける。

すると、ラミナはスローイングナイフを山なりに前方に放り投げる。

パチン！

指を鳴らした直後、ラミナとスローイングナイフが入れ替わる。

「よし。上手く出来た」

満足げに頷いたラミナはスローイングナイフを消す。

「今のは前にも使ってた奴だね」

「おう。【妖精の悪戯】やな。今ここにあるナイフ系の武器やと、ス



ローイングナイフしか付与できなさそうやったんよなあ。上手く出来てよかったわ」

「なんか、今まで使ってたなかった変な武器もあったけど。大丈夫なの？ 捻じれた角みたいなの剣とかあったけど」

「ん〜……多分」

「ちよつと」

「じゃあないやろ？ 能力はそれぞれ考えとるけど、こればかりは能力を付与してみんと分からのやから」

【刃で溢れる宝物庫】は【月の眼】の使用時間とストック管理をしつかりしていれば、使うだけならば実はそこまで面倒ではない。

一番厄介なのは、武器を入れた後の『能力付与』である。

付与する能力と設定する制約によって、普段使いが出来るか切り札的になるかが決まる。

大鎌のように【月の眼】を使わなければ、能力を使えないかもしれないのだから、非常に面倒である。

「……そこらへんが使い辛そうで、あんまり羨ましく思えないんだよね」

「マチ姉の念糸に比べたら、大抵の能力は面倒やで……。それにクロロやフェイよりは、まだ使いやすいと思うけどな」

「……まあ、そうだね」

「さて、うちは外で試行錯誤に没頭するわ。適当に寝とってや」「あいよ」

2人は地下室を出て、ラミナは屋敷を出て裏山へと向かい、マチはリビングに戻って、カルトの修行が終わるまで待つてやることにした。

ラミナは屋敷からは見えない場所に移動し、新しく納めた武器に順番に能力を付与していく。

1時間ほど試行錯誤した結果、

「……ん〜……やっぱ実戦で試さんと何とも言えんなあ。試し撃ちも出来ん能力も出来てしもたし。なにより……やっぱ【月の眼】やないと使えん能力も出来てしもたわ……はあ〜」

ラミナは大きくため息を吐いて頂垂れる。

基本的に武器を振ったり、相手を斬りつけて効果を発揮する能力が多いのがラミナの能力の特徴である。

新しい能力の場合、木や人形を斬りつけるのでは発動しない能力や、【敬愛する兄の剛腕】のように一度発動する度に壊れてしまう能力もあるので、試すに試せないのだ。

そして、能力を発動しようとしても、うんともすんとも言わない時は【月の眼】状態でなければ使えないということだ。

「使えんわけやないやろうけど……。どこで試すかも判断し辛いんですよあ」

どの能力も暇な時に考えていたものばかりだ。

数か月単位で構想を練っているので、全く役に立たないわけではなはずだ。

しかし、ストックを無駄遣いできないので、雑魚に使うのもためらってしまう。

そのため、10回も使わずにストックを使い切る武器も時々存在する。

「ここらへんが面倒なんよなあ……」

同じ能力を使い回したくても、それが自分が思い描いた武器に付与できるか分からない。

なので、少しでも選択肢を増やしておく必要がある。

「まあ……。今まで入れられなかった武器も入れられたし。能力も少しは成長しとるみたいやから、それはそれで収穫か」

ラミナは携帯を取り出して、クロロのメールを見返す。

必要とされる能力はちゃんと創れたことを確認して、ホツとする。

「最近、人の面倒ばっかで身体の方が疎かになつとるしなあ。この仕事終わったら、そこらへんも引き締めんとなあ。……ちよつと、ここで体動かしくか」

ラミナは小さくため息を吐いて、旅団員やヒソカを想定したシャドーを始める。

1人で集中出来るのは久しぶりだったからか、軽くのつもりが2時

間ほどやり込んでしまい、中々戻ってこないことに我慢の限界を迎えたマチが様子を見に来て、

「終わったんなら、さっさと戻りな」

「ぐえ!？」

と、念糸で首を絞められて強制終了となり、そのまま運ばれて風呂に放り込まれるのだった。

カルトはすでにベッドの中で、聞こえるマチとラミナの喧騒に呆れながら、巻き込まれないようにと眠りについた。

## #80 クモ×ノ×フツカツ

翌日の夜。

ラミナ、マチ、カルトはクカンユ王国に向けて、出発する準備を整えていた。

「ここから空港って近いの？」

「車で30分くらいかな」

「車で行くの？」

カルトが首を傾げると、ラミナが顎に手を当てて考え込む。

流星に空港に車を置いておくのはリスクでしかないし、走っていくのも面倒だ。

そこで思いついたのが、

「ゲームで行くか」

「は？」

「いや、やから。グリッドアイランドを通れば、簡単に行けるやん。見つかるリスクもないし」

偽名で移動できるし、好きな国に飛べる。

向こうから帰ってくる時は大変だが、ここから行く時はある意味これほど安全な移動手段はないだろうとラミナは思う。

「メモリーカード抜いとるで、うちも偽名で登録し直しになるやろうから、前に会った連中にバレることはないやろうし」

「まあ……そうだね」

「つちゆうわけで、物置から行くか」

そう言っただけで、ラミナは、リビングの明かりを消して物置に向かう。

マチとカルトはその後に続きながらも、何か納得しがたい感情に襲われていた。

マチは久しぶりの仕事、カルトは初めての仕事なのに、その出発がゲームと言うのは何か締まらないと思っていたのだ。

ラミナは2人の複雑そうな顔を見て苦笑する。

しかし、これが一番手軽で安全かつ金もかからないので譲る気もない。

物置に入ったラミナは、乱雑に置かれているジョイステに歩み寄る。

「あ。扉閉めとつてな」

「……分かつてる」

カルトは懺然とした顔のまま頷いて扉を閉める。

ラミナはさっさと【練】を発動して、ゲームの中に入り込む。

マチはため息を吐いてラミナの後に続き、カルトも続いてゲームに入る。

適当に名前を登録した3人は、駆け足で港へと向かう。もちろん街には寄らず、人気のない場所を走る。

「ふむ。なんだかんだで便利なもんやな。フィックス達が奪ったんはホームにあるんか？」

「ああ」

「ん〜……いや、もう1個持ったところで、結局誰かが持ち運ばないから意味ないか……」

「もういらないよ。ホームとアンタの家があれば十分だろ？」

呆れながら言うマチに、ラミナは苦笑しながら頷いて港を目指す。

2時間もせずに港に到着したラミナ達はさっさと3回所長を倒して、船に乗ってゲームの出口へと向かう。

ラミナ達はクカンユ王国の港町に転移する。

最後のカルトが転移したのを確認したラミナは、クロロにメールを送る。

すぐに返信が来て、メールを確認すると住所のみが記されていた。

「……【スリパ】の郊外やな。またどっかの空きビルか？」

「だろうね」

「スリパはこの港から……150kmほどやな」

「……走るの？」

「「夜やしな」」

「……」

カルトはラミナとマチの即答にうんざりする。

もちろん師匠とその姉は、カルトの心情など一切無視して歩き出

す。

そして、3人は再び目的地に向かって、ひたすらに走るのだった。

翌朝。

スリパの郊外にある工場地帯の空きビルに到着したラミナ達は、地下への階段を見つけて下りる。

地下は広い倉庫のような部屋になっており、そこにクロロを筆頭に全員が揃っていた。

「来たで〜」

「早かったな」

「ゲームを使ったでな」

「ふつ。なるほどな」

「んで？ 準備は？」

「ほぼほぼ終わった。後は詳細を詰めるだけだ」

「了解」

「ところで、そっちは大丈夫なのか？ あの家、ハンター達に見つかったんだろ？」

シャルナークが両手に腰を当てて、心配そうに訊ねる。

パクノダも頷き、

「シャルナークが調べてくれたけど、かなり派手にやってみたんじゃない。新しい隠れ家は大丈夫なの？」

「しばらくは大丈夫やろ。監視カメラに映らんように移動したし、家や倉庫とはちやう偽名使うとるしな。まあ、備えはせないかんけど」

ラミナは肩を竦めて、クロロの方を見る。

「お前の本も移したでな。次は持ち出せるかどうか分からんし、残しときたい本は自分で管理せえよ。後で住所教えるから」

「すまん。この仕事が終わったら、一度顔を出そう」

「じゃあ、仕事の話に戻ろうか」

シャルナークが話を戻して、資料を取り出す。

ラミナ、マチ、カルトは床に置かれている廃材に腰掛ける。

「美術館の下見とお宝の場所は団長、俺、パクノダで調査済みだ。警備

室や監視カメラの位置が書いてある地図も手に入れた」

「じゃあ、もう盗むだけじゃねえかよ」

フィンクスがつまらなげに呟く。

しかし、シャルナークは呆れを浮かべながら、

「まあ、そうなんだけど、そう簡単にもいかない。流石に国が守ってる場所だ。ヨークシンのマフィア達とは設備も練度も比べるまでもない」

「そりやそうだな」

どつしりと座り込んだフランクリンがシャルナークの言葉に頷く。

「マフィア達に比べれば警備員の人数はそれほど多くないけど、念能力者は多いと考えた方がいいと思う」

「あの……なんだったつけ？ ああの鎖使いを追う時に邪魔しに来た連中」

「陰獣ね」

「そうだったけ？」

「シズクに言うだけ無駄ね。忘れてら思い出さないよ」

パクノダに教えられても、シズクは一切思い出せずに首を傾げる。

それにフェイタンが呆れながら言い、シャルナークに顔を向ける。

「で、そこにいる連中は陰獣より強いね？」

「流石にはつきりとは分からないけど、弱いということはないだろうな。分かっているだけでも元軍人や元傭兵が小隊レベル。プロハンターも数人雇われてるみたいだ」

「ほお……そりやあ楽しめそうだな」

「久しぶりに遊べそうね」

フィンクスやフェイタンがニヤリと凶暴な笑みを浮かべる。

ノブナガもニヤけており、明らかに楽しそうに思っている。

それにクロロやシャルナークたちは苦笑し、ラミナやマチ、パクノダは呆れる。

「そんで、どうするんや？ その感じやお宝の場所に到着するだけでも厄介そうやないか。お宝を持ち出す時間とか、逃げる時間とか稼げるんか？」

「そこがお前の仕事だ」

「あ？」

「姿を消して警備室に忍び込んで、警備システムを全て掌握してくれ。監視カメラと警報装置を止め、俺達を裏倉庫へと入れてもらう」

「結構な賭けやなオイ」

「お宝の持ち出しは？ シズク？」

ラミナがクロロの作戦に呆れ、マチが一番重要な部分を訊ねる。

それにシャルナークが首を横に振る。

「いや、トラックを使う」

「トラックう？」

「あの美術館の品は全てトラックや車で施設内に搬入され、そこから展示室や倉庫に運ばれる。裏倉庫も例外じゃない。パクノダの情報だと、裏倉庫はトラックの駐車場と直接繋がっている。もちろん、そこまで二重三重の防犯システムがあるがな」

「そこをラミナにクリアしてもらいたいってこと」

クロロとシャルナークの言葉に、ラミナは納得はするが流石に顔を顰める。

「念能力者の警備員全員誤魔化せるとは思えんぞ？」

「分かっている。そこもちゃんと考えてるよ」

「駐車場以外から裏倉庫に行くにはエレベーターを使わなければならないんだが、そのエレベーターはたった1つしかない。そして、そこに向かうにはラミナに押さえてもらう警備室がある通路と、他に3つのルートがある。その3つのルートを、ノブナガ、フィックス、フェイタンにそれぞれ任せる」

「それはつまり……」

「お前達4人で、大暴れして、殺せ」

クロロの指令に指名された3人は、更に笑みを深める。

そして、クロロはラミナに顔を向けて、

「お前達が暴れている間に、残りのメンバーでお宝をトラックに乗せて脱出する」

「クロロ、下手したら他の美術品壊すかもしれんけど、それはええんや



な？」

「構わない。別に展示されてるモノに興味はないからな」

「了解」

「それじゃあ、各自準備を始めてくれ」

クロロの言葉にラミナはシャルナークに歩み寄って、見取り図を見せってもらう。

ノブナガ達も覗き込んで、どこのルートで暴れるのかを選ぶ。

「……中に入るんは？ どこから入るにしても防犯装置あるやろ？」

「休みの警備員を捕まえて、パスワードとカードキーは手に入れてある。それを使えば入ること自体は簡単だ」

「俺達は？」

「ラミナが警備システムを止めた直後に、こことここ、ここから侵入してくれ。そうすればすぐに所定のルートに入れるから」

「地図、コピーしといて。ノブナガとフィックスは迷うと思うわ」

「んだとお!!」

「大丈夫。もうしてあるから」

「おい!!」

「じゃあ、この地図見て、どこがどうか分かるんか？ ほな、正面入り口から第一保管室へのルート示してみい」

「馬鹿にすんなよお！」

「そのくれえすぐに……!!」

フィックスとノブナガはラミナの挑発に乗って地図を見るが、

「……」

「おいおい、そこは階段だぞ。上がってどうするんだよ」

「っ……!!」

「阿呆。そこは展示スペースで行き止まりや」

「……!!!!」

「残念だたね。そのエレベーターじゃ保管室には行けないね」

「分かったやろ？ 大人しく地図持ったとき」

「ちくしょー!!」

ノブナガとフィックスは地図を放り出して叫ぶ。

それにクロロ以外の全員が呆れ、ラミナとシャルナークは作戦会議を再開する。

「で、うちはここから入ってまっすぐ行くとしても、流石にその間にバレンとは思えんのやけど」

「そこは俺が捕まえた奴と適当な奴を操って、注意を引く予定だよ。全員は無理だろうけど、ある程度は引き付けれると思う」

ラミナはやや不安が残るも、これ以上詰めようがないのも事実なので諦めることにした。

「そういえばトラックはどしたん？」

「ん？ 美術館のを盗む気だけ？ ナンバープレートだけは用意してあるけどね」

「……」

「コルトピの能力でトラックをコピーすれば、時間稼ぎ出来るよ」

「まあ、お前らがそれでええならええか……」

ラミナは本当に色々諦めて、準備することにした。

そして、深夜。

いよいよ作戦開始である。

美術館は柵で囲まれており、景観の問題で周囲に美術館より高い建物はない。

そのため、アパートなども離れた所にあり、厳しい警備もあつて夜には人気がなくなる。

「まあ、ある意味狙いやすいなあ」

「だろ？」

「それにしても、クロロの奴。待つとる間、ずっとこのこと調べとつたとは……」

「よっほど暇で、早く復活したかったんだらうね」

美術館の少し離れた建物の屋根にラミナとシャルナークが、双眼鏡で美術館を眺めながら話している。

「さて……さつさと行かんと、ノブナガとフィックスが飛び込みそっやな」

「そうだな。じゃ、よろしく」

「ま、やるだけやるわ」

ラミナは肩を竦めて、右手に柄の両端に10cmほどの片刃の剣身を持つ緩やかなS字状の短剣ハラデイと言う武器を具現化する。

そして、屋根から飛び上がるのと同時に姿が消える。

フアントムミラージュ  
【朧 霞】。

短刀の能力を、そのままハラデイに付与したものである。

ラミナは姿と気配を消して、素早く5mもある柵を乗り越える。

(ここに赤外線センサーでもあったら、もうちよつと手こずったけど……。念能力者を雇つとるし、ホンマに盗みに来るとも思とらんのやろなあ)

ラミナは素早く周囲を見渡して、警備員や監視カメラなどの警備システム、そして念能力が仕掛けられていないかを確認する。

はつきりと確認出来なかつたので、ラミナは駆け出して所定の入り口へと向かう。

しかし、その道中でも特に念能力が仕掛けられている様子はなかつた。

(……監視や【円】代わりの能力を使う奴くらい1人はおると思つたけど……)

ラミナは訝しみながらも高速で駆け、入り口を見つける。

ラミナは渡されたカードキーとパスワードを使い、扉のロックを開ける。

それと同時にシャルナークに1コールだけ電話をかけ、中に入り込む。

30秒ほど入ったところで足を止めるも、誰も来る気配はない。

ラミナは再び駆け出して、警備室へと向かう。

すると、

『正面玄関にて暴徒確認！ 数、2！ その片方は一般警備員のガリアス！ こちらに向けて発砲中!!』

「ガリアスだ?! どういうことだ!?!」

「分からん！ とりあえず向かうぞ！」

無線からの声と通路を掛けていく警備員達の声が聞こえる。

下手に【円】を使うと悟られるので、周囲の気配に最大限警戒する。

(感じ取れる範囲の気配はシャルの囿に引っかけた。動いとらん気配は警備室辺り。……念能力者もおるな)

警備室の中に2つほど強い気配を感じた。

流星に警備の要に念能力者が1人もいないのは楽観的過ぎるか、心の中で自虐しながら猛スピードで警備室の前に辿り着く。

警備室のドアの前には拳銃を握っている警備員が2人立っていた。

ラミナは一気にスピードを上げて、手前側にいた警備員の頸動脈をハラデイで切り裂き、左腕で【蛇活】を繰り出して奥側の警備員の心臓を爪で抉り潰す。

悲鳴を上げる間もなく、意識を闇に落としてゆっくりと倒れて行く警備員2人を放置して、左手に新調したファルクスを具現化しながら警備室のドアを開けて、中に飛び込む。

「!!」

「誰だ!？」

警備員達が気付いた時には、ラミナは一瞬で部屋の真ん中まで移動していた。

しかし、念能力者と思われる2人の警備員はしっかりとラミナの姿を目で捉えており、【練】を発動していた。

(けど、遅い!!)

ラミナは【円】を発動して、警備室を完全にオーラの内に囲う。

そして、ファルクスを素早く振って、【狂い咲く紅薔薇】を発動する。

室内にいた警備員約10人の身体から血が噴き出し、首や腕などが斬り離される。

ラミナはもう一度ファルクスを振り、再び能力を発動する。

更に周囲から血が噴き出し、体の部位が舞う。

念能力者と思われる警備員2人の首も、体から斬り離されて血だまりが出来た床に転がっている。

もちろん周囲の機器も血で汚れてしまった。

「……まあ、ええか」

ラミナは武器を消し、シャルナークに再び1コール電話をして、警備システムをコントロールしている端末に歩み寄る。

操作して監視カメラや警報装置を止め、更に裏倉庫へのロックを全て開ける。

更に監視カメラのデータを全て消して、ラミナは警備室を後にする。

すると、シャルナークが駆けつけてきた。

「あ？ シャル？」

「お疲れ。ここは俺が受け持つよ」

「……まあ、ええけど。文句は受け付けんで」

「は？ どういうこと？」

「中見ればわかるわ。ほな、うちは行くで」

「……ああ」

ラミナは肩を竦めて早足に歩き出し、作戦に戻る。

シャルナークは首を傾げて、警備室に入ると、

「うお!? ちょっと汚し過ぎだろ!？」

血で汚れた惨状を見て、シャルナークは思わず叫ぶ。

その声が聞こえたラミナは頬を掻いて、1人なのにそっぽを向く。

「まあ、言わんかったお前が悪いっちゆうことで」

ドオオオン！

どこかで何かが崩落する音が響いた。

「……まあ、フィックスやろな。警備室と連絡も取れんこともすぐにバレルやろうし」

ラミナは左手にハラデイ、右手にブロードソードを具現化して姿を消す。

すると、通路に隔壁が下り始めて、ラミナ達のルート以外の道が全て閉ざされる。

(なるほど。これで敵の足止めと、うちらが迷わんようにすると……けど、これってうちの通路に敵が集中せんか?)

どう考えても、この時点で警備室に敵が侵入したことがバレたも同

然だろう。

そうになると、警備室奪還に全力を注ぐことになるのが普通だ。

(少し急ごか。合流予定の広間で迎え撃った方がやりやすそうや)

ラミナは駆け出し、敵が雪崩れ込んでくる前に戦いやすい場所を指す。

すると、銃を構えた警備員数人が前方から走ってくる。

もちろんラミナに気づいた様子はなく、警備室へと急いでいた。

ラミナもスピードを落とすことなく、警備員達の中に飛び込みながら【一瞬の鎌鼬】で剣を高速で振り、全員の首を刎ね飛ばす。

首を無くした体は数メートルそのまま走って、ダイブするように倒れる。

ラミナは再び姿を消しながらそのまま走り続け、続々と向かってくる警備員達をどンドン殺していく。

(ああ、もう！ 面倒やな！)

ラミナは苛立つて、床に転がっていた人の頭部を前方に蹴り飛ばす。

突然目の前に転がってきた人の頭と姿を現したラミナに、向かってきていた警備員達は慌てて足を止める。

「ひい!?!」

「だ、誰だ!?!」

ラミナはそれに答えることなく、ハラデイを消してファルクスを具現化しながら、一瞬で警備員達のだ真ん中に飛び込んで【狂い咲く紅薔薇】を発動し、更に【一瞬の鎌鼬】で首が斬れなかつた者達の首を刎ねて、返り血を浴びる前に集団を抜ける。

その様子を目撃した後続の警備員達は顔を真っ青にして、震える腕で拳銃を構えていた。

「な、なな、な、なんだよ……あれ……!?!」

「俺が分かるかよ……!?!」

「い、一瞬であの人数の首を……」

「お前ら、下がりな」

震えている警備員達の背後から声がかけられる。

そこに立っていたのは軍人を思わせる戦闘服を着た、茶髪坊主頭の男。

右頬には一筋の傷痕があり、二振りのサーベルを両手に携えていた。

男はオーラを纏いながらラミナを鋭く見据え、道を空けた警備員達の間を歩み出る。

「ワイグさん……!」

「こいつはただの盗人じゃねえ。お前らじゃ天地がひっくり返っても敵わねえよ」

「そんな……!」

「巻き込まれねえようにホールまで引き返せ。そこに隊長達もいる」

「わ、分かりました。おい、行くぞ!」

「りよ、了解」

念も使えない警備員達はワイグの指示に従って、来た道を走って戻っていく。

ラミナは両手の武器を消して、邪魔者がいなくなるのを待つてやることにした。

そして、通路にはラミナとワイグのみとなった。

「……何者だ? こゝがどこか分かって、襲撃したんだらうな?」

「それもちろん」

ラミナは肩を竦めながら、右手に剣を具現化する。

切っ先は平で刃はなく、両刃の剣身を持つ120cmほどの剣。新しく追加した武器の1つである。

「……それは……」

「斬首剣やな。処刑で使う奴や」

「……」

ワイグは先ほどと武器が違うことに警戒を強める。  
ラミナは右手で斬首剣を回して、感覚を確かめる。

「ほな、やろか」

「……舐めるなよ、小娘」

「そつちこそ舐めんなや、軍人崩れ」

「っ!!」

ワイグは殺気を噴き出して、サーベルを構えて一息にラミナに詰め寄る。

ラミナはその動きを完璧に捉えており、すでに斬首剣を構えていた。

「っああああ!!」

ワイグは両腕を高速で動かして、二振りのサーベルを華麗に操って鋭い斬撃を繰り出す。

ギギギギギギイーン!!!

しかし、その全てをラミナは斬首剣で打ち払う。

ワイグは目を見開いて、追撃を中止して距離を取る。

しかし、ラミナはニイと口を吊り上げて、

「もう手遅れや」

そう呟いた直後、ワイグが握る二振りのサーベルが異常なほど重くなった。

「!!?」

ワイグは目を見開いて、すぐにサーベルから手を放して更に距離を取る。

ズガアン!

ズガン!

サーベルは尋常じゃない重量を感じさせる音を響かせて、床にめり込んだ。

「なん……!!?」

ワイグは戸惑いを浮かべるも、腰からコンバットナイフを抜く。

「……その武器の能力か?」

「そうやで。1回斬りつける度に、その物の重さを倍にする」

「っ……………」

ワイグはラミナの言葉に顔を顰めて、コンバットナイフを仕舞う。たとえ元々が軽量とは言え、さっきの斬撃を全て打ち払われた以



上、ナイフ1本で太刀打ちできる能力ではない。

(くそっ……！ まさか同じタイプの能力者だったとは……！)

ワイグの能力も相手を斬りつけることが条件だった。

ラミナと違ったのは、物体に作用するタイプではなかったことだ。

相手の身体を斬りつけなければ、能力は発動しない。

「そっちは能力使わへんのん？」

「……」

「だんまりかいな。この場合は適当にはったり言うた方がええと思うけどなあ。まあ——」

ラミナが肩を竦めたかと思うと、

一瞬でワイグの目の前に現れた。

「あんま意味はないけどな」

「!? ぐっ!!」

ワイグは目を見開きながらも、反射的に右フックを繰り出す。

しかし、再びラミナの姿がブレて消え、直後ワイグの右前腕と左脇、左太腿から血が噴き出す。

「がっ!! つ?!?」

痛みに顔を顰めた瞬間、ワイグは全身が何かに押さえつけられたかのように重くなる。

両足を踏ん張り、何とか倒れるのを防ぐが、それでも体の重さは変わらない。

「これ……は——」

「もちろんこの剣の能力やで？ 別に生物に効かんとか言うてないで」

「ぐっ——」

「生き物の場合、対象を3回斬らなあかんのが難儀でなあ。まあ、その分……重さは3倍に出来るんやけど。ただ、一緒に斬りつけた服や装備は2の3乗倍や。水に濡れたように重くなったんちゃう？」

ラミナは面倒気に斬首剣を見ながらボヤクも、最後は揶揄うような笑みを浮かべてワイグを見る。

ラミナの言う通り、ワイグは体や身に着けている服が重くなり、滝

の中にいるかのように動き辛さを感じていた。

「終わりにしよか」

「があ!？」

ラミナが再びワイグの身体を3度斬りつける。

ワイグの身体は更に重量を増して、遂に重さに耐えきれなくなつて崩れ落ちてしまう。

その瞬間、ワイグの首と両手に木製の枷が、両足には鉄球付きの鎖を嵌められて固定された。

「なっ!？」

「うちの前に崩れ落ちたな?　つまり、お前はうちより弱いことを認めた」

ワイグは背筋に悪寒が走つて、上を見上げる。

そこには全身黒づくめで斬首剣を両手で握つて掲げている人の形をした何かがいた。

「!？」

「そいつはこの能力で斬りつけられたモンが、うちの前で膝をついた時に現れる念獣や。お前のオーラを使うて具現化し、弱さを認めたお前を処刑する働きモンや」

「俺の……オーラを……!？」

「オーラも消費して、重みと枷で逃げることも出来んやろ?　ぜえんぶお前がうちより弱かったせいや。うちより強ければ、この能力は発動せんかったでなあ」

「……!!」

「バッド・ルーザー【弱さは罪】。それがこの剣の能力名。冥土の土産に教えたるわ」

ラミナはそう言いながら、ワイグの横を通り過ぎる。

念獣はゆつくりと、斬首剣を振り被る。

もちろん、その足元には縛られているワイグ。

「ぐっ!？　く……そ……!？」

「恨むなら、弱かった自分を恨みや。ほな、さいなら」

別れを告げた直後、念獣が斬首剣を力強く振り下ろす。

鈍い音がして、何かが転がる音と液体が床にこぼれる音が通路に響

いて、念獣が消える。

ラミナは斬首剣を消して、通路を進む。

「ん〜……微妙な感じやなあ。具現化系には意味ないし、実力が拮抗しとる相手やったら3回斬るだけでも簡単なことやないしなあ。雑魚やったら、ここまでせんでも勝てるし」

悪くない能力ではあるが、武器の選択を誤ったか。もしくは、まだ能力に改良の余地がありそうだと考えながら、ラミナは通路を進む。ワイグとの戦闘は長引いたわけではないが、すぐに終わったわけではない。

なのに、誰も増援に來ないことに首を傾げるラミナ。

誰かがやって來る気配もない。

訝しみながら気配を読むと、

「……フェイ達か……」

どうやらすでにフェイタン達が、この先のホールに到着しているようだった。

その事から、恐らくこの通路に行きたくても、ノブナガ達を無視することが出来ずに睨み合いになっているのだろうと推測する。

ラミナは小さくため息を吐きながら、通路を歩く。

そして10分ほど歩くと、吹き抜けになっている広いホールに出た。

ラミナはそこに広がっている光景を見て、思わず感嘆の声を上げる。

「おおおお。これまた大漁やなあ」

ラミナから見て、ホールの真ん中から奥側にワイグと同じ服装の者が10人ほどおり、その背後に私服の者や制服警備員達が数十人と集まって、こちらを睨んでいた。

「やつと来やがったか」

「遅刻にもほどがあんだろ」

「そろそろ我慢の限界だたよ」

横に目を向けるとノブナガ、フィックス、フェイタンが待ちくたびれていた。

ラミナは肩を竦めて、

「別に3人で食べ尽くしてくれてもよかつたんやけど」

「バカ。新入りに活躍の場をやるうっていう先輩の優しさだよ。気づきやがれ」

フィンクスが顔を顰めながら言い、ラミナはそれにマジ引きする。

「……きんもお……」

「てめえ……!!」

「やめるね。変に先輩面するからよ。それに、これでもう我慢の必要なくなたね」

「そういうこつたな。ようやく暴れられるぜ」

フェイタンとノブナガの言葉に、ラミナは首を傾げる。

ノブナガはニヤリと笑いながら、

「ようやく旅団が復活したからな。せつかくだから4人全員で暴れようって、フィンクスがよ」

「団長の命令は『4人で暴れる』ね。11番継いだなら、切り込み隊長やらなきや駄目よ。じゃないと、ウボオーが化けて出てくるね」

「そういうこつた。ま、ウボオーなら1人でやるとか言うだろうが、新人のてめえにそこまで譲る気はねえがな」

3人の言葉にラミナは苦笑する。

「ほな、新人は先輩の優しさに感激しながら、暴れさせてもらおか」

ラミナ、ノブナガ、フィンクス、フェイタンは不敵に笑いながら、オーラを強めて前方に群がる『餌』を見る。

「一番殺した数が少なかった奴は他の3人に飯を奢るってのはどうだ？」

フィンクスが指を鳴らしながら提案し、

「面白れえ。乗った!」

ノブナガが左手を鞘に添えながら乗り、

「それじゃあラミナが雑魚しか狙わないね。念能力者は1人10点。最低1人は念能力者を狩らないと負けにするね」

フエイタンが笑みを深めながらルールを付け加え、

「さつき殺した奴はカウントされん？」

「するかよ、バアカ」

「やんな〜」

ラミナは肩を回しながら冗談を言う。

10倍以上の人数差があるのに、怖気づくどころか、笑って話している4人に、警備員達は否が応でも目の前の連中は異常であることを理解する。

幻影旅団復活の生贄達の運命は、絶望のみであることを知るのは、この後すぐのことであった。

## #81 ブキ×ノ×オヒロメカイ

不敵に笑ってこちらを見るラミナ達に、戦闘服を着た警備員の何人かは馬鹿にされたように感じて怒りを覚える。

「舐めやがつて……!」

「レオルデ隊長。あんな連中、俺達だけで十分つすよお」

「自分達だけで殺します」

ガタイの良い金髪オールバックの男が歯を食いしばってラミナ達を睨み、赤モヒカンの若い男が手の中でコンバットナイフを回しながら言い、黒髪をツীবロックに刈り上げた女性が目を鋭くして宣言する。

他の者達も頷いて一步前に出ると、その後ろで腕を組んで仁王立ちしている黒の角刈りの50代くらいの男、レオルデが口を開く。

「待て。奴らを侮るな。奴らは只者ではない」

「しかし……!」

「隊長さんの言う通りだ〜ね〜。あいつら、かなりヤバイ連中だ〜ね〜」

レオルデ達の背後の階段に座っていた草臥れた茶色のシャツを前開きにして素肌を晒し、下は草臥れたジーパンにサンダルを履いた男が、レオルデの言葉に同意する。

紫色のくせっ毛の髪で、左目が前髪で隠れている曲者感を醸し出している。

「どういうことだ? バギイ」

「あの女、少し前にハンターサイトで見た事あるだ〜ね〜。ベテランの殺し屋で、幻影旅団と繋がりがあある奴だ〜ね〜」

「幻影旅団だ?!」

「それに、他の連中も少し前にヨークシンを騒がした連中の手配写真で見たことあるだ〜ね〜。間違いない、こいつらクモだ〜ね〜」

プロハンターのバギイの言葉に、警備員達からどよめきの声が上が

る。  
バギイは立ち上がった、

「隊長さん。後ろの連中、下がらせた方がいいだ〜ね〜。念も使えない連中を嚇けたって犬死だ〜ね〜」

「そのようだな……。お前達はここから離れて、外で警察と合流しろ！ 他にも仲間がいる可能性が高いから決して1人で動くな！ 最低5人で行動しろ！」

バギイの言葉にレオルデは頷いて、制服警備員達に指示を飛ばす。幻影旅団の名前を聞いてビビっていた制服警備員達は、すぐさま指示に従って逃げるようにその場から離れていく。

それを見送ったラミナ達は、

「あらら。大分減つてもうたな」

「まあ、大物が残ってるからいいだろ」

「ひー、ふー、みー……。残ったんは17人やな」

「なら十分ね」

「じゃ、始めっか」

フィックスが合図とばかりにコインを上弾く。

その瞬間、残った警備員やハンター達も顔を引き締めて、広間が緊張感に包まれる。

キーン！

コインが床に落ちた瞬間、ラミナ達はバラけるように飛び出す。それに警備員達も反応し、それぞれの相手を見定めていく。

ラミナの前に現れたのは先ほどレオルデに宣言していた戦闘服の女性と、長い金髪を靡かせる赤いボンテージスーツを着た美女の2人。

ラミナを含めたこの3人が、この場にいる女性全員である。

「お？ 女の相手は女とか律儀やな」

「そんな理由ではありません」

「あんなみみたいな女の考えそうなことは、同じ女の方がよくわかるっただけさ」

「ふうん」

「援護はお任せします。ゼーラー」

「任せな。アハト」

ゼイーラは両手に銃を具現化する。

更に両足の踵部分にも拳銃が具現化された。

「四丁……!?!」

「さあ、とくと味わいな。【乱れ踊る硝煙】!!」ガンズ・ダンスパーティー

ゼイーラは両手の拳銃を発砲しながら、ラミナに迫る。

ラミナは横に跳んで念弾と思われる銃弾を躲しながら、ハルバードを具現化する。

(普通の銃弾と思うんは危険やな)

能力を発動して攻めかかろうと思った時、真上から殺気を感じた。

「!!」

上を見上げると、そこには右手にコンバットナイフ、左手に拳銃を構えたアハトがいた。

ラミナは慌てて後ろに下がると、アハトの姿が消えて左後ろに現れる。

「!! (転移能力!?! けど、マーカーも無しに!?!)」

ラミナは目を見開きながらも左手にスローイングナイフを具現化して、背後に投げる。

アハトが引き金を引く瞬間、指を鳴らして【妖精の悪戯】を発動して入れ替わって銃撃を躲す。

「っ! 転移……いえ、入れ替わる能力ですか」

ラミナはスローイングナイフを消すと、ゼイーラがすぐそこまで迫って来ていた。

ゼイーラは右蹴りを繰り出し、ラミナは顔を背けて蹴りを躲す。

しかし、踵の銃口がラミナの眉間に向けられる。

「っ! 起動せよ!」

「ビュウ!!」

ドパン!!

【不屈の要塞】を発動して鎧を纏った直後、踵の拳銃から発砲されて銃弾が撃ち出される。

しかし、その銃弾は兜に直撃した瞬間、霧散する。



ゼイーラはそれに目を見開き、ラミナはハルバードを振り上げて切りかかる。

ゼイーラは蹴りと発砲の勢いを利用してバク転することで斬撃を躲し、距離を取りながら4丁の拳銃で発砲するも、弾丸は全て鎧に当たって霧散する。

そこにアハトが真後ろに出現して、ラミナの背中にコンバットナイフを突き出す。

ラミナは前に飛び出して躲すも、左横にアハトが転移してきて銃口を向ける。

更にゼイーラも発砲を続けるが、ラミナはそれを無視してアハトにタツクルを繰り出す。

アハトはそれに目を細めると、再び転移してゼイーラの横に移動する。

「オーラを無効化する鎧のようです。ゼイーラ的能力とは相性が悪いですね」

「けど、それ以外には脆いみたいだねえ。あんたのナイフと銃を躲そうとするのがその証拠」

アハトとゼイーラは「不屈の要塞」の弱点を見抜いて、作戦を考える。

ラミナも一度鎧を解除して、アハトの能力を考察する。

(……マーカーをしとる様子はない。考えられるんは『不可視の念獣』か『オーラを飛ばして入れ替わる能力』。やけど、後者の場合はオーラの消費が大きすぎるし、対応速度に限界がある。あの感じやと前者と考えるべきやな)

アハトの能力は【飛び移る梟便<sup>ジャンプ・オウル</sup>】。

術者にしか見えない3羽の梟の念獣を生み出して、更に術者の背中に同じく不可視の丸い留め具が具現化される。3羽の念獣の足には鉤具が吊るされており、そこに引っかけられる形で転移することが出来る能力である。

(拳銃使いの方は、うちの方がスピードは上。弾丸を躲すんも特に問題なし。なら……)

ラミナは【不屈の要塞】では対処しきれないと判断し、ハルバードを消す。

そして、左手にスローイングナイフを具現化して、右手にフランベルジュを具現化した。

「……武器をいくつも具現化できる能力？ そんな馬鹿な……」  
「武器を具現化するだけなら可能だろうけど……。あの能力を考えると、普通はありえないねえ」

ラミナの武器を見て、警戒度を高める2人。

アハトは素早くゼイーラからも距離を取って、ラミナの狙いを一か所に集めないように動く。

しかし、ラミナはアハトを無視して、ゼイーラに向かって全力で飛び出す。

一瞬でラミナが目の前に現れ、ゼイーラは大きく目を見開く。

それでもラミナの右腕が動いた瞬間に後ろに身体を傾け、両足の銃を連射してその衝撃をブースターのように使って、ラミナから離れようとする。

ラミナの高速の斬撃は、ゼイーラの右前腕と左太腿を僅かに斬りつける。

「ぐっ！」

ゼイーラが離れた瞬間、アハトがラミナの背後に現れる。

しかし、コンバットナイフを振ろうとした瞬間にラミナが指を鳴らして、姿が消えてスローイングナイフが目の前に現れる。

「なっ……!?」

「後ろだよ!!」

「!!」

ゼイーラの声に顔だけで振り返ると、ラミナが左腕を肘を突き出して構えた状態で迫って来ており、左腕の前腕には手甲のようなものが装着されていて手の甲側から両刃の剣が飛び出していた。

アハトは能力を発動しようとするが、その前にラミナが手甲剣を振り抜く。

刃がアハトの右肩から左脇へと一直線に走るのと同時に、

ボボボボボオオン!!!

アハトの背中が連続で爆発する。

「がつ!?!」

アハトは強烈な衝撃と、体内が焼ける感覚に襲われて意識を永遠に闇へと落とす。

ラミナは斬りつけたのと同時に【妖精の悪戯】で、アハトの前に移動したので返り血を浴びるのを躲していた。

ラミナはゼイーラに詰め寄りながら、スローイングナイフを【隠】で隠して床に放置していたのだ。

アハトが死角を突いてくることは容易に予想出来たからである。

後ろでアハトが崩れ落ちる音を聞きながら、ラミナはゼイーラを見据える。

ゼイーラはラミナに攻撃せずに、片膝について蹲っていた。

「ぐ……いー な、なん……?」

「気持ち悪いやろ? 手足が考えらんと逆側が動いて、見えるもんも真逆になっていくんわ」

ゼイーラは今、不可思議な現象に襲われていた。

ラミナに斬りつけられながら離れて、すぐに反撃しようとしたが、右腕を上げようとしたら左腕が上がり、左足を動かそうとしたら右足が動いたのだ。

それでバランスを崩して片膝をついてしまい、アハトの背後にラミナの姿が見えて叫んだ直後に、今度は目に映る光景の天地が逆になった。

【矛盾する心身】。斬りつけた相手の手足の動きと、視界を逆様にする。それがフランベルジュの能力や」

「……!?!」

「それで視界は30秒経つと左右が逆になり、その30秒後に前後も逆様になる」

話を聞いている間に、ゼイーラの視界ではラミナの右手に持ってい

たフランベルジュが左手に変わったように見えた。

「身体だけならすぐに対応出来るかもしれないけど、視界まで変わると上手く体が動けへんやろ？ お前みたいな戦闘スタイルには致命的やんなあ」

ラミナはゼイーラに歩み寄りながら、左腕の手甲剣を構える。

「ちなみにこっちは【てっけんたちかぜ鐵劍断風】言うてな。少し前に襲ってきた老いぼれの能力を貰ったもんや」

切っ先をゼイーラの額に向けて、ゆっくりと近づける。

「こいつの能力はな」

そして、切っ先がチクリとゼイーラの眉間に刺さった瞬間、

ゼイーラの顔が爆発する。

「?!?!」

「刃に触れたもんを爆破するんや。刃に触れとる間、ずくつとな」

ゼイーラはゴトンと後頭部から倒れ、両手足の拳銃が消える。

そのまま起き上がることはなく、ラミナは武器を消して次の標的を探そうとすると、2つの人影が近づいてきた。

1人はバギイ。もう1人は茶髪をオールバックにして、整った顎髭をした30代ほどのホスト風の男だった。

紫のスーツに胸元を開けさせたシャツに革靴。胸元には金のネックレスに、指には指輪が何個も嵌めている。

そして、何故か右手にウイスキーの酒瓶を持っていた。

「なんでこいつらと来んかったん？」

「へっへっ。そうしたかったけどねえ。俺様の能力、お姫様達と相性悪くてさあ」

「それにアンタの戦い方も見たかったからね」

ホスト風の男はヘラヘラと笑いながら肩を竦めて酒瓶に口を付けて傾け、バギイも卑屈に笑って堂々とアハト達を噛ませ犬扱いする。

「……これから戦うっちゅうのに酒、か」

「俺様の流儀なもんでねえ。バギイも一杯どうだい？」

「……そうだね。景気づけに貰おうかだね」

バギイは肩を竦めて、酒瓶を受け取って一口飲む。

ホスト風の男はラミナに顔を向けて、

「お姫様も一杯どうだい？」

「遠慮しとくわ」

「そりゃあ、残念だなあ。けどお……これでごつちの勝ちだ」

ホスト風の男の顔が急に凜々しくなったかと思うと、周囲の景色が変わった。

「!!」

バーを思わせるカウンターと酒が並べられた棚、そして革張りのソファが設置された店の中。

店の中にはラミナとバギイ達3人しかおらず、足元にあったゼイラの死体もなくなっていた。

「……念空間か。つ!!」

ラミナが軽く舌打ちすると、突如視界が歪み、体がふらついた。なんとか踏ん張って倒れるのを防ぐが、気持ち悪さは消えなかった。

まるで酒に酔ったかのような。

「そのとおり。これが俺様の能力。【酔い<sup>ワッ</sup>を分かち<sup>ン</sup>合う酒場<sup>ナイ</sup>】さ」

ホスト風の男は店奥のソファに足を組んで座りながら言う。

「俺様の酒の誘いを断った奴は、この店にいる限り『他の奴が発動前に飲んだ酒分、俺様の代わりに酔っぱらう』のさ」

念空間に引き込む条件は『念空間に入りたい相手の目の前で酒を飲み、「一杯どうだ?」と誘うこと』。

飲んで相手は飲んで分の酔いを、相手に押し付けることが出来るので、一杯だけ飲めば能力の被害を受けない。

「俺様は酒に強くてねえ。お姫様に会うまでに3本はウイスキーを空けたから、かなり気持ち悪いんじゃないかい？」

「ぐっ……」

ラミナは遂に片膝をついてしまう。

「アンタは近接系の使い手だくね。その状態はかなりピンチだと思うだくね」

「……そうやなあ。けど……」

ラミナはニイと口を吊り上げると、左手にソードブレイカーを具現化する。

そして、床に突き刺して能力を発動する。

【フラジャイル・ホープ脆く儂い夢物語】

ソードブレイカーを刺した箇所から店全体にヒビが入り、割れたと思った瞬間には美術館の広間に戻る。

「なっ!? 何をしやがったあ!」

「さあなあ」

ラミナはソードブレイカーを消して、右手に両刃の剣身を無理矢理捻じたような形状をしている変わった剣を具現化する。

それを右手内で回転させると、勢いよく回転を始めてバチバチと帯電を始めた。

「!!」

バギイ達はそれに見開きながらも構えて警戒する。

ラミナは槍投げのように左足を大きく踏み出して、

【ウニコルニオ・レランパトゴ天を衝く一角獣】

右腕を振り被った瞬間、バヂイイン!!と閃光が弾ける。

突然の閃光に一瞬ラミナを見失った直後、

バアアアアアアン!!!

と、広間に爆音が轟いた。

あまりの轟音にノブナガ達も耳を押さえて、戦闘が中断する。

全員が音源に目を向けると、

「つつう~~~~~……!」

盛大に顔を顰めながら左手で耳を押さえ、右手をプラプラさせるラミナの姿があった。

「コラア! ラミナ! 派手に騒ぐなら、そう言いやがれ!!」

「鼓膜破れるかと思ったじゃねえか!!」

フィックスとノブナガが苦情を叫び、フェイタンも恨みがましい視線を向けていた。

ラミナは右手をプラプラさせ続けながら、

「すまんすまん。あそこまで派手になるとは思ったらんかったんよ。こら、建物の中で使える能力ちやうな……」

「なんだよ。今まで分かんなかったのか?」

「ここに来る直前に創った能力なんよ。一回使うとストックが減る制約にしとるから、下手に試せへんかったんや」

「なるほどね」

「しかも、使った手がめっちゃ痺れて痛い痛い。まあ……威力は十分みたいやけど」

ラミナは螺旋剣を投げた方向を見る。

フィックス達も目を向けると、そこには、胴体に大きな穴を空けたバギイが立ったまま死んでいた。

更にその後ろの建物も壁などに穴が空いており、穴の縁は焼け焦げたように黒くなっている。

「バギイ……!」

「なんて威力だ……!」

「おい、ラミナ! それで何人目だ!」

「ん? 3人目やな。アレで4人目」

フィックスの問いに、ラミナは座り込んでしまっているホスト風の男を指差す。

(んく……まだ痺れがとれん。こら、もうちよいせんと使いもんにならないな)

ラミナは小さくため息を吐くと、フィックスに顔を向ける。

「フィックス!」

「あん?」

「お前、アレに何回回す?」

「はあ?」

フィックスは訝しみながら、座り込んでいるホスト風の男を見る。

しかし、ぶっちゃけどう見ても、能力を使う必要もないほどに戦意を失っていた。

「あんなんに使わねえよ」

「まあ、そりやそうか。ん〜……じゃ、5回くらいにしとこか」  
「ああ？」

フィックスやノブナガが眉を顰めていると、ラミナは左手にバルディツシュを具現化する。

ホスト風の男にゆつくりと歩み寄りながら、左手のみでバルディツシュを回し始める。

「いくち……にいくい……さあくん……」

「おいおい……ありやまさか……」

ラミナがバルディツシュを一回転させる度に、刃に集中したオーラが膨れ上がる。

ノブナガ達はその能力に見覚えがあった。

「ごとおつとおー！」

そして5回回すと、左腕一本で大きくバルディツシュを振り被る。

刃には強大なオーラが集まっており、ホスト風の男はもはや震えて固まる以外出来ることがなかった。

「ほな、さいなら」

「ひ、ひいいいいい——!!」

ガアアアン!!

力強く振り下ろされてくる刃に、ホスト風の男は情けない悲鳴を上げる事しか出来なかった。

そして、先ほどまでではないとはいえ、それでもかなりの轟音と衝撃を響かせて、刃が叩きつけられる。

ホスト風の男は頭と胴体が粉々になり、クレーターに血溜まりが出来る。

両腕と腰から下がクレーターの周囲に残っており、それがまた悲惨さを増大させている。

ラミナはバルディツシュを消して一息つく。

「ふう……十分過ぎたか……」

【仁愛なる兄の豪肩】

フィックスの能力を模倣した能力である。フィックスの能力より一回転ごとに上がる威力は低い、それでも使い勝手はよいものに収



まった。

「さて、これで4人……」

ラミナはフィックス達に目を向けると、それぞれ1人ずつと戦っていた。

残っているのは、レオルデのみであった。

ラミナは右手の調子を確かめながら、レオルデに声を掛ける。

「おっちゃん。暇があったら、相手しよか?」

「……」

レオルデは眉間に皺を寄せて、ラミナに目を向ける。

「……貴様1人で俺に勝てるんでも?」

「いやいや。ほぼ全滅の状況で、そんなこと言われても恥ずかしいだけやで」

「……クモとは言え、小娘であることは変わらん。引退して戰場から離れてここで隠居同然とは言え、まだまだ衰えてはおらん。舐めてみると、痛い目を見るぞ」

「そつちこそ、小娘や思て舐めとつたら痛い目見るぞ? 死ぬんなら、痛くない方がええやろ?」

「……口が減らんガキめが……」

レオルデは額に青筋を浮かべて、オーラを強める。上着を脱ぎ捨てて、インナーだけになる。

その右前腕には、10個のハートマークが刻まれており、その内8個は中心が割れたようなマークになっている。

しかし、ラミナはその全てがオーラで刻まれているのを見逃さなかった。

「……部下の命を利用する能力か」

「私直々に鍛え上げた部下が死んだ時、そのオーラは我が力となり。私が死んだ時、私を含めて他の部下のオーラが生き残った部下に振り分けられる。これが我らの絆、【隊は1つの命なり】だ!!」

ドン!!と、膨大なオーラが噴き上がる。

そのオーラ量は確かに馬鹿に出来ないものだった。

「そして、部下達より受け継いだオーラを注いで造り出すのが我が力

!!

更に体から膨大なオーラが噴き出し、レオルデの身体が浮かび上がっていく。

噴き出したオーラは徐々に巨大な人の形に変化していき、最後にはオーラが金属に変化していく。

そこに現れたのは5mほどの鎧巨人。

両腕は鮫肌のように逆立っており、下手に防げば体が削り千切れそうだった。

レオルデは兜の口部分から顔を覗かせていた。

「お〜……」

【パンツァー・レオルデ我は巨将なり！ 全てのオーラを注いで造りあげた、この鎧は先ほどの閃光や剣とて防ぎ切る!!】

（まあ、【脆く儂い夢物語】で終わりそうなんやけど……。それはそれでつまらんなあ）

そんな事を考えていると、レオルデの鎧が更に一回り巨大化する。

ラミナは首を傾げて、顔だけで背後を振り返ると、

「お〜お〜、でっかくなりやがって」

「見た目だけのパワーと硬さはあるぞね」

「ラミナ、代わってやろうか？」

ノブナガ、フェイタン、フィンクスが戦いを終えて、揃って腕を組んでのんびりとレオルデを見上げていた。

ラミナは苦笑して、

「問題ないわ。後ろで休んどきい」

そう言つて、ラミナは大太刀を右手に具現化する。

「お！ お前が太刀を使うのは初めて見るな」

「前は短刀と薙刀を持つとったから、使えんかったでな」

「なるほど。で、それはどんな能力か？」

「すぐに分かるわ」

「おのれえ！ いつまで雑談しているのだあ!!」

痺れを切らしたレオルデが巨鎧を操って、右腕を勢いよく振り下ろす。

ラミナは素早く左に跳んで、巨大な腕を躲す。  
ハンマーの如く、床が砕ける。

大太刀を左脇に構えたラミナは、巨鎧の右拳が床に叩きつけられたのと同時に跳び上がった。巨鎧の右上腕部分に向かって大太刀を振り抜いた。

その1秒後、巨大な右腕が切り離されて床に轟音を立てて落ちる。

「なっ!? バ、バカな!」

「ほお」

「なんでえ。随分と柔いじゃねえか」

「違うね。ラミナの太刀、よく見るよ」

「あん?」

フエイタンの言葉に、フィックスとノブナガがラミナの大太刀に目を向ける。

そして、目を凝らすと刃先にオーラが集中しているのが見えた。

「……あ? ありゃあ、もしかして【硬】か?」

「多分ね。太刀を出してからラミナのオーラが見えなくなたね」

ノブナガの言葉に、フエイタンが頷き、フィックスが呆れる。

「マジかよ。無茶しやがんな」

「つつうか、あんな細かい【硬】なんて簡単に出来ねえぞ?」

「つてこたあ、あれがああの武器の能力か」

「だろうね。もし、ラミナのオーラを全部籠めてるなら、あの切れ味が  
出て当然ね」

「なるほどな」

3人が雑談している先で、ラミナは一瞬で巨鎧の背後に回り込む。

しかし、

「舐めるなあ!!」

巨鎧の上半身が反転し、それに合わせて膝の向きも変わる。

下半身は完全にオーラで構成されているため、人形のように向きを簡単に変えることが出来るらしい。

さらに右腕もすでにくつついており、修繕されている。

レオルデは振り返った勢いで拳を叩きつけようとしたが、すでにラ

ミナの姿はそこにはなかった。

「!!」

「遅いわ」

声が聞こえたのと同時に、両膝が斬り飛ばされる。

レオルデは後ろに倒れて背中から地面に叩きつけられる。

「ぐっ!!」

衝撃に顔を顰めながらも上を見上げると、そこに大太刀を両手で振り被っているラミナがいた。

「!?」

「シイツ!!」

ラミナが鋭く息を吐き出すと、振り被っていた大太刀と両腕が霞む。

銀色に輝く風が巨鎧の上半身の中心を、シイン!と何かが擦ったかのような音を立てながら吹き抜け、気づいた時にはラミナは大太刀を振り抜いていた。

大太刀の刀身は床に沈んでおり、ラミナは息をゆつくりと吐きながら大太刀を消して体を起こす。

直後、巨鎧が消滅し、露わになったのは体が縦に両断されているレオルデの死体だった。

レオルデは何が起こったのか理解出来ていなかったようで、呆然とした顔で死んでいた。

「はあ〜……しんど〜……」

ラミナはオーラを大量に消費した虚脱感に襲われて、ため息を吐く。

そこにノブナガ達が歩み寄ってくる。

「すげえ斬れ味だな」

「そら、ほぼ全オーラを集中させとんねんから、あれくらい斬れ味ないと困るわ」

右肩を回しながら、呆れたように答えるラミナ。

「んで、これでうちは5人殺したんやけど?」

「俺も5人殺した」

「ワタシは4人ね」

フィinksとフェイタンも人数を口にする。

相手は17人だったはずである。

ということとは、

「ノブナガがビリだな。俺とラミナに後で奢りな」

「……マジかよ。金なんざ持ってねえぞ……」

「シャルナークにでも借りるね。それか今回のお宝の報酬ね」

「なんやったら、そこらへんの展示品パクって売ったらええんちゃう？」

「おっ！ その手があったか！」

ノブナガはラミナの言葉に指を鳴らして、金になりそうな展示品を探す。

ラミナ達はノブナガの行動に呆れながら、

「んで、団長達が盗み終えるまではここで待機か？」

「退屈ね」

「逃げ出した警備員でも追うか？ 警察とかもたんまり来とるかもしれんで？」

「雑魚が多いのはダリイだけだろ」

「脆いのはつまらないね」

そんなことを話していると、

ドドドドドドドドドド!!

ドオオン!!

パアン！ パパアン!!

と、外から銃声や爆音が聞こえてきた。

「フランクリンの奴か？」

「この音はそうやろな。クロロに電話してみよか」

ラミナは携帯を取り出して、クロロに電話をかける。

『……ラミナか？』

「そっちはどない？ なんやフランが暴れとる音がするけど」

『もうすぐお宝を積み終わって、駐車場から出る予定だ。今はフランクリンが適当に撃ちまくって、逃げる隙を作ってるどころだ』

「うちらは？ 念能力者の警備員は多分全員殺したけど」

『ごつちに合流してもいいし、自分で逃げ出してもいいし、フランクリンを手伝ってくれてもいい』

「了解」

通話を終えたラミナは、フィックスとフェイタンにクロロの言葉を伝える。

「だったら、フランクリンを手伝ってやるか」

「ワタシも付き合うよ。適当に殺して引き上げればいいね」

「うちはオーラも消費したし、クロロの所に行くわ」

「おう」

フィックス達は外を指し、ラミナは裏倉庫に繋がっているエレベーターを指して歩き出す。

ラミナがノブナガを忘れていたことに気づいたのは、クロロ達と合流した時だった。

---

ラミナ☒sウエポン!! お久し!

・バッド・ルーザー【弱さは罪】

斬首剣に付与された能力。

物体に対して：一度斬りつける度に、重さを倍にする。

生物に対して：3回斬りつける度に、重さを3倍にする。

斬りつけられた者が膝をついた場合、体が拘束されて念獣に首を斬り落とされる。

念獣と枷は、処刑される者のオーラを利用する。

具現化系で造られた武器や念獣にはほぼ無意味。

操作系は操られたモノ次第。

実力者相手になると、3回斬りつけるのも難しいので、基本雑魚にしか使えない。

\*元ネタは『BLEACH【侘助】』

・てっけんたちかぜ【鐵劍断風】

手甲剣に付与された能力。

刃が触れたものを爆破する。触れている間、常に爆破する。

\*元ネタは『テイルズオブベルセリア・ベルベットの刺突剣』『BLEACH【鐵拳断風】』

・パラドックス・ライフ  
【矛盾する心身】

フランベルジュに付与された能力。

1：斬りつけた相手の四肢の動きを逆様にする。

右腕を動かそうとすれば左腕、左腕は右腕と、片側だけならば反対側が動き、両腕同時の場合は両脚が動き、逆もまた然り。

2：斬りつけた相手の視界を逆様にする。

最初は上下が逆に、30秒後に左右が、その30秒後に前後が逆様になる。

ただし、両方発動する場合は2回斬りつけなければならない。

1回だけの場合は、四肢の方が優先される。

\*元ネタ『NARUTO：綱手【乱身衝】』『BLEACH【逆撫】』

・ウニコルニオ・レランバード  
【天を衝く一角獣】

螺旋剣に付与された能力。

回転させると帯電し、投擲すると雷が落ちたかのように閃光と爆音を発して高速で飛ぶ。

『投げるときは回さないといけない』『一度使うと壊れる』『使った場合、投げた腕がしばらく痺れる』が制約。

\*元ネタ『Fate：アーチャー【カラドボルグII】』『とある：御坂美琴』

・むくむらさめ  
【無垢村雨】

大太刀に付与された能力。

刃先にほぼ全てのオーラを【硬】で極限まで集中させることで、切れ味を高める。

刃先以外は普通の硬さで、体もオーラで包まないのだからかなり危険。

しかし、それ故にその威力は絶大。

制約は『発動中は【硬】しか使えない』『能力を解除するには必ず生き物を斬らなければならぬ』『何も斬らずに能力を解除すると、大太刀は壊れて全オーラを消費してしまふ』『一度壊れると、一週間具現化できない』

\*元ネタは『BLEACH【残火の太刀：“東”旭日刃】』

・リップパー・サイクロトロン【仁愛する兄の豪肩】

バルディッシュに付与された能力。

割愛w



## #82 クモ×ノ×チカラ

時は少し戻って。

コインが地面に落ちた瞬間、フェイタン、ノブナガ、フィンクスも飛び出して、各々の獲物を狩りに出る。

それぞれの前に戦闘服を着た者達が立ち塞がる。

フェイタンの前には、先ほど歯を食いしばって苛立っていた金髪オールバックの男を始めとする4人の戦闘服を着た警備員達がナイフや銃を構えて立つ。

「クモがこんなところに何しに来た……!?!」

「そりゃワタシ達盗賊。盗みに来たに決まてるね」

フェイタンは呆れながら男に言い返し、背中に右手を伸ばす。

それに警備員達はすぐに動けるように構えるが、フェイタンが背中から取り出したのは『傘』だった。

「……傘?」

「気を付けろ。能力に関係あるかもしれん」

「分かってらあ」

フェイタンが傘を正眼に構える。

傘の先が鋭く尖っているのが見えた警備員達は突っ込んでくると予測して、素早く散開して動き回る。

しかし、フェイタンが次に行ったのは、傘を開いただけだった。

「? なにを……」

訝しんだ直後、傘の左右から複数のフェイタンが飛び出してきた。「なっ!?!」

突然の分身に目を見開いて動きを緩めてしまう警備員達だが、次の瞬間には拳銃を構えて発砲して、フェイタン達に攻撃を行う。

しかし、全ての銃弾はフェイタン達の身体を通り抜け、一番先頭にいた金髪オールバック男の真上からフェイタンが下りてきて、逆手に握る刀を頭頂部から突き刺す。

「がっ!?!」

「なっ!?!」

「くそっ！ 喰らええ!!」

茶髪の男が左腕にオーラを集中させながら勢いよく突き出す。

男の左手から、巨大な手を模ったオーラが飛び出して、フェイタンに迫る。

「ふっ」

フェイタンは鼻で笑って、金髪オールバック男の上から飛び退く。

直後に巨大な手が崩れ落ちようとしていた男の死体を押し飛ばし、再びフェイタンの姿を見失ってしまう。

「ぐっ……!」

「速い……!」

「【円】を使え!!」

「遅いね」

「ぎゃ!」

フェイタンの速さについていけないことに歯噛みする警備員達。

その内の1人が【円】を使う様に指示を出すと、その背後からフェイタンが現れて首を斬り飛ばす。

フェイタンはそのまま傘が落ちている所に戻って、仕込み刀を戻して傘を巻く。

残った2人は動きについていけないフェイタンにどう攻めればいいのか判断出来ずに、動くに動けなくなる。

他の仲間を手を貸してもらいたかったが、他の者達もクモを相手にしているので厳しいだろうと考えて歯を食いしばるのだった。

そして、ノブナガの前には戦闘服警備員が2人、そして私服の男が2人立っていた。

「さて……さっさと始めるとすつか。俺あ戦い方も能力も、競争にはあんま向いてねえしな」

「ふん！ 舐めやがって!」

赤モヒカンの警備員がノブナガを睨んで、隣にいる長い黒髪を後ろで結んでいる40代くらいの警備員が肩を掴んで落ち着かせる。

「落ち着け、レイビス。相手は旅団なんだぞ」

「はっ！ 問題ねえっすよ、カズヒコさん。所詮は盗賊じゃないっすか。それにクモが凄かろうが、こいつがスゲエわけじゃないだろうし」

レイビスはカズヒコの忠告を鼻で笑い、ノブナガを見下す。

「こいつ一人くらい、俺だけで十分っす」

ノブナガはレイビスの強気発言を、冷めた表情で聞いていた。

左手は刀に添えたままだが、右手で顎を撫でる。

「……まあ、相手が誰だろうが構わねえけどよ」

ノブナガは左手で刀を構え、僅かに腰を落として右手を柄に添える。

居合の構えを取ったノブナガに、カズヒコは警戒に目を細めるが、レイビスは再び鼻で笑う。

「ちゃんと死ぬ覚悟をしてから、かかってこいよ」

「舐めんなっつってんだろうが!!」

レイビスがノブナガの挑発に簡単に乗ってしまい、ノブナガに向かって飛び出す。

すると、レイビスの両脚にオーラが集中し、膝から足先まで覆うグリーブが出現する。足先や脛部分には刃のようになっており、足裏にはローラー、ふくらはぎ部分には車のマフラーのような筒が付いている。

具現化を見た瞬間、ノブナガも目を細める。

「<sup>ターボ</sup>切り裂く韋駄天<sup>レック</sup>!!」

マフラーからオーラが噴き出して、爆発的にスピードを上げるレイビス。

スキーのように蛇行しながらノブナガに迫り、推進力を利用して飛び上がって、ノブナガの背後に回って回転しながら右脚を振り上げて高速の蹴りを放つ。

「死ねえ!!」

「……馬鹿が」

レイビスが蹴りを繰り出したのと同時に、ノブナガの身体の向きがコマ送りされたかのように一瞬でレイビスに向いた。

キツ、チン！

一瞬ノブナガの右腕がブレて、短い金属音が2回響く。そして、ノブナガの姿がレイビスの背後へと移動していた。

直後、レイビスの右脚が、付け根から離れる。

「?!?!」

更にレイビスの鳩尾辺りで身体が上下に分かれて、左脚だけとなった下半身が回転して飛んで行き、上半身はそのまま背中から床に落ちる。

「ば、ば……か……な……」

「馬鹿はテメエだ。居合相手にテメエから間合い詰める奴がいるかってんだ」

居合術はそもそもカウンター技で、それも速度を重視した剣術だ。それを使う以上、速さに自信があるのが単独でむやみやたらに突っ込むなど自殺行為でしかない。

しかも、お互い念能力者。

それで居合なのだから、速度に対応した能力なのは容易に想像出来る。

ノブナガの能力は単純明快、居合の極みである。

【抜刀・石火<sup>せつか</sup>】。

己の間合いでもある【円】に入った相手に対してのみ、一瞬で相手に向き、極限まで抜刀・納刀速度、それに関わる体捌きを強化する。

『シンプルイズベスト』を象徴するような能力である。

しかし、そのシンプルさ故に、同時に間合い内に複数の対象がいようが一度に1人しか斬ることは出来ず、納刀まで一工程であるために抜いたらそのまま別の者に斬りかかることも出来ない。

そこがウボオーギンとよく組まされることになった理由である。

ノブナガはカズヒコ達に向き直り、ゆっくりと歩み寄る。

「で、次斬らいたい奴はどいつだ？」

その頃、フィックスは足元に首が捻じられた2つの死体を転がしていた。

「ほれ、次は誰だよ？ それとも残り全員で来るか？」

「ぐっ……！」

「どけ。オイラがやる」

怖気づく黒短髪の戦闘服警備員を押しつけて前に出たのは、錆色のアフロ頭にタンクトップの男。

「デルデロ殿」

「銃やナイフ程度じゃ相手になんねえ。けど、オイラ的能力ならまだやれるだろうかな」

デルデロはオーラを強めて、ゆつくりとフィックスに歩み寄る。

両手をポキポキと鳴らしながら、フィックスを油断なく見据える。

「次はお前一人か？」

「おうさ。楽しませてくれよ？」

「それはお前次第だな」

フィックスは不敵に笑みを浮かべながら、デルデロに歩み寄る。

デルデロは一瞬両腕を脱力させたかと思うと、次の瞬間フィックスに一気に詰め寄る。

フィックスは右手をデルデロの顔に伸ばし、その腕をデルデロは左手で掴もうとする。

その動きに違和感を感じたフィックスは直前で右手を止めて、左脚を振り上げる。

それにもデルデロは掴もうと右手を動かしたのを見て、フィックスは左脚を止める。

デルデロは左手を爪立てながら振るい、フィックスの右袖を掠る。フィックスは一度距離を取るも、背後に黒短髪の男が回り込んでいた。

男の背後には巨大な人型の上半身が出現していた。

「ふっ！」

男が右腕を振ると、背後の巨人も右腕を振る。

小指が床を抉りながら迫る腕を、フィックスは高く跳び上がった躲して距離を取り、右袖に目を向ける。

右袖は溶けたように穴が空いており、僅かに異臭がした。

「……触れたモンを溶かす能力か」

「バレちまったか」

デルデロはお道化たように肩を竦める。

フィンクスは腰に両手を置いて、

(流石にオーラ全部を変えることは出来ねえだろうが……。そこそこ反応もいいから、面倒だな。なら……)

フィンクスは右腕を上げて、デルデロに向かって駆け出す。

デルデロは両手を構えて待ち受ける。

フィンクスは攻め寄りながら、右腕を回し始める。

デルデロはそれに訝しむも、

(何をしようが、その前に身体を溶かす！)

フィンクスの背後から黒短髪男も詰め寄ってきていた。

デルデロは溶かせなくても、牽制すれば、その間に黒短髪男が仕留められると判断する。

「オラ行くぞお!!」

しかし、フィンクスが右腕を振り被った瞬間、右拳に膨大なオーラが集中する。

「なっ!?!」

デルデロ達はその圧力に目を見開く。

「オオラア!!」

フィンクスは右腕を振り抜く。

デルデロも両手にオーラを集中させて受け止めようとするが、フィンクスの【廻天】のオーラに、デルデロはオーラごと上半身が吹き飛ばされる。

「っ!?!」

黒短髪男が思わず足を止める。

フィンクスはすぐさま振り返って、密かに回していた左腕を振り被る。

「ぐっ!?!」

男は巨人の両腕を交えるように体の前に出す。

直後、フィンクスの拳が叩きつけられると、男の両腕に激痛が走っ

てボギツ！と嫌な音が響く。

男の能力は巨人が受けるダメージを自身にもフィードバックするデメリットがあった。

巨人の両腕も折れたように曲がっていた。

その一瞬の隙を突いて、フィinksは巨人の腕を掻い潜って男に詰め寄る。

男が気付いた時にはもうフィinksの右手が目の前にあり、直後に視界が360度回転した。

喉に激痛が走り、男は意識を失った。

フィinksは倒れた男の死体を見下ろして、一息つく。

「さて、これで4人か。あと1人殺れば、最下位はねえだろ」

次のターゲットを探そうとした時、

バアアアアアアン!!!

と、広間に閃光と爆音が広がった。

フィinksは目を閉じて、耳を押さえる。

「つて………！…なんだあ?」

フィinksは顔を顰めながらそつちに向くと、盛大に顔を顰めているラミナの姿があった。

「コラア！ ラミナ！ 派手に騒ぐなら、そう言いやがれ!!」

「鼓膜破れるかと思ったじゃねえか!!」

フィinksとノブナガは怒鳴る。

ラミナは顔を顰めながら理由を説明し、フィinks達はバギイの死体と広間の壁に穴が空いているのを目撃した。

「随分と派手にやりやがったな。おい、ラミナ！ それで何人目だ!？」

「ん？ 3人目やな。アレで4人目」

ラミナは座り込んでいるホスト風の男を指差す。

それにフィinksは小さく舌打ちする。

「ちつ。つてこたあ、ラミナは4人確定かよ。やっぱもう1人殺しとかねえとな」

「フィックス！」

「あん？」

「お前、アレに何回回す？」

「はあ？」

フィックスは訝しみながら、座り込んでいるホスト風の男を見る。どう見ても戦意を失っており、能力など使う必要はなかった。

「あんなんに使わねえよ」

「まあ、そりやそうか。ん〜……じゃ、5回くらいにしとこか」

「ああ？」

フィックス達が訝しんでいると、ラミナが具現化したバルディッシュを左手で回し始める。

回す度に刃にオーラが集中し始める。

「おいおい、俺の能力まで使えんのかよ」

フィックスは呆れながら、相手を殺すラミナを見ていた。

「つと、いけね。俺も獲物見つけねえと」

フィックスはレオルデの方に顔を向けると、目の前に紫のドレッドヘアを後ろで束ね、黒い革ジャンとズボンを身につけたガタイの良い男が立ち塞がる。

「おつと。隊長さんのところに行くのは早いんじゃないやねえかな？」

「俺が行かなくても、あいつが行ってるぜ？」

フィックスはラミナを親指で指す。

ラミナはレオルデの方に歩み寄っていた。

「あの嬢ちゃんはかなり消耗してんだろ。あれだけの能力を使った後だしな。隊長さんの敵じゃねえよ」

「だから、俺の方が先ってわけか？」

「そういうことだ」

「ふうん。ま、いいか。俺は獲物が増えて助かるからな」

「……舐めてると……いや、ここまで一方的にやられてんだ。舐められても仕方ねえか」

ドレッド男はフィックスの言葉に一瞬苛立ちを露わにするが、ほぼ全滅状態なのも事実なので、すぐに怒りを引っ込めてため息を吐く。



そして、顔を引き締めると、両腕を広げて両手を開く。

両手の前に丸鋸状のオーラが6枚放出され、ドレッド男の周囲を飛ぶ。

「ほお……」

「アンタは近づけると危なそうだから、な!!」

左手を突き出して、3枚の丸鋸オーラを飛ばすドレッド男。

フィンクスはそれを紙一重で躲しながら詰め寄ろうとするも、ドレッド男は右手を動かして、自らの身体を守る様に3枚の丸鋸オーラを浮かべる。

その時、フィンクスが右腕を振り抜いて、何かを投げる。

それは先ほど巨人の腕が挟った床の欠片だった。

「っ——!?!」

突然高速で飛来してきた欠片にドレッド男は全く反応出来ず、額に風穴を空ける。

フィンクスはパチンと指を鳴らして、

「よっし！ 5人目え！」

と、喜びの声を上げ、フェイタンとノブナガを見る。

それと同時にフェイタンは最後の1人を傘で突くと見せかけて、持ち手のボタンを押して傘先の突起を発射する。

「は!?! きゃ?!」

警備員は目を見開いて、眉間を貫かれて死亡する。

そして、ノブナガも一気に詰め寄って居合で警備員の首を斬り飛ばす。

「お。向こうも終わったか」

「これで残るはラミナだけね」

その後、3人はラミナとレオルデの戦いを見守り、勝負が終わるとフィンクスとフェイタンはフランクリンに合流し、ノブナガはお宝を探しに行くのだった。

またまた時は少し戻って。

クロ口達は裏倉庫に入って、トラックにお宝を運び込んでいた。

もちろん、ここでもコルトピの能力でコピーが大活躍である。  
すると、外からサイレンの音が聞こえてきた。

「ん？ 警察か？」

「フランクリン」

クロロが携帯片手に裏倉庫から顔を覗かせて、フランクリンに声を掛ける。

「シャルからだ。外の警察と警備員を引っ掻き回してくれ」

「ラミナ達は？」

「あいつらは念能力者の警備員を相手にしているようだ。だから、外にいるのは雑魚の筈だ。シャルもそっちに行くらしいから、お前も車を中心に壊して来てくれ」

「あいよ」

フランクリンは頷いて、ノシノシと歩いていく。

それを見送ったマチ達は、

「アタシ達はいいの？」

「まだ他にも来るかもしれないから」

「了解。ほら、カルト。どンドン運びな」

「……分かってる」

新人ゆえの洗礼なのか、怫然とした表情でこき使われるカルト。

もちろんマチも運んでいるので文句を言うことも出来ず、護衛として待機しているボノレノフが少しだけ羨ましかった。

少しすると、銃声と悲鳴、爆発音が聞こえてきた。

「出来れば、この間に終わらせたいね」

「そうだね」

「急ぎましようか」

「つていうか、全部は流石に無理じゃない？」

シズク、マチ、パクノダがスピードを上げるも、カルトはまだまだ残っているお宝に呆れるしかなかった。

まだお宝は半分に行くかどうかで、しかもまだ運びやすいものから始めていたので、これからは大きい物なども運ばなければならない。

それにクロロも頷いて、

「そうだな。ここからは売れそうな物から運ぶか」

「最初からそうしてよ」

流石にマチも呆れながら言う。

シズクの能力もあるが、そうなるとコルトピのコピーが出来ない。流石に地下競売のお宝と違い、裏倉庫のお宝は今後取り返しに来る可能性が非常に高いので、少しでも時間を稼ぎたいのだ。

クロロは素早く目についたお宝を選んで、それをマチ達が運んでいく。

そこにラミナから電話がかかり、警備員討伐終了の連絡が来た。

クロロは指示を出して、電話を切ると、

「ラミナ達も終わったらしい。誰か来たら、フランクリンを拾って俺達も引き上げよう」

『了解』

「お客だ」

見張りをしていたボノレノフが立ち上がりながら、声を掛ける。

マチ達が顔を覗かせると、2人の男が近づいてきていた。

「……やられたぜ。まさかここにお客がくるとはな……」

「上は囷か？ やってくれるじゃねえか」

後頭部を搔きながら顔を顰めているスーツの黒髪パーマの男。

その隣に悔し気に顔を歪めて腕を組んでいるのは、同じくスーツの白髪坊主の男。

2人ともオーラを纏っており、間違いなく念能力者であった。

「まだ残ってたみたいだね」

「1人は俺がやる。もう1人は好きにしろ」

ボノレノフはマチ達に声を掛ける。

マチ、シズク、カルトは顔を見合わせて、ジャンケンを始める。

その様子に男達は額に青筋を浮かべる。

しかし、そこにボノレノフが体の包帯を脱ぎ捨てて、その身体を露わにする。

ギュドンドンド族の身体を見た男達は、顔を鋭くして構える。

その直後にジャンケンで勝ったマチが前に出て、更に怫然とした力

ルトが2人の戦いを観察しようとするも、パクノダに「仕事が先」と荷物運びを再開させられる。

身体を動かして音を奏で、双頭槍と仮面を身に着けた姿に変わるボノレノフ。

白髪坊主の男が背中から短刀を抜いて、斬りかかる。

黒髪パーマの男はマチに殴りかかり、マチは軽やかに躲して蹴りを繰り出して、男を壁へと蹴り飛ばす。

「があ!？」

黒髪パーマの男は背中から壁に叩きつけられて、地面にズレ落ちる。

「なんだ……。弱いじゃない」

マチはその一撃で実力差を見極め、ため息を吐く。

その後ろではボノレノフがあっさり和白髪坊主の男を殺していた。

黒髪パーマの男は痛みに顔を顰めて、立ち上がれなかった。

「……もしかして、下っ端?」

「ぐ……!」

マチの言葉に男は顔を顰める。

マチの推測通り、この2人は四人行を覚えたばかりの新人だった。

自分の推測が当たったことを反応から理解して、ため息を吐くマチ。

その時、

ドオン!!

男がもたれている壁の向こう側。美術館の中から爆発が起こった。

「爆発?」

「……今のは……」

「中の戦闘は終わったんじゃないのか?」

マチ達は首を傾げ、黒髪パーマの男は思い当たることがあったのか僅かに目を見開く。

直後、濃密な殺気が押し掛かる。

といっても、絶望を感じたのは黒髪パーマ男だけで、マチ達はそれが誰の殺気かすぐに分かった。

その数秒後、男のすぐ横にあったドアが勢いよく吹き飛んだ。

「!?」

更に殺気が濃くなり、男はもちろんカルトやパクノダも少し息が苦しくなる。

現れたのは、目が完全に据わっている不機嫌オーラ全開のラミナ。しかし、その顔や髪は黒く汚れており、上着はブラがギリギリ残っているだけで腹部が露出していた。ズボンも右脚の膝から下が破れているだけだった。

ラミナはすぐ横に座り込んでいる虫<sup>男</sup>けらのことなど気づきもせず、マチの傍まで歩み寄る。

「……あのクソ共が……!」

「爆弾?」

「みたいやな。エレベーターの扉の外側に仕掛けられとったから、気づくんがギリギリになって服が吹き飛んだわ」

基本的に裏倉庫に通じるエレベーターは使われないので、最終防衛手段としてレオルデはエレベーターのドアに爆弾を仕掛けていたのだ。

上の階を壊さないように計算されていたので、威力はそれほどではなかった。

ラミナは咄嗟に【堅】を発動して、ほぼ無傷で乗り切ったのだ。

ラミナは額に青筋を浮かべて、怒りのボルテージを更に上げる。

黒髪パーマの男は、更に強まった圧力と殺気、そして目に映った絶望の象徴に目を見開いて啞然とする。

「う……あ……」

露わになったラミナの背中に刻まれていたのは、『11』の数字を背負う12本脚の蜘蛛。

それが何を現すのか、男はよく理解していた。

「……幻影……旅団……」

「あん?」

ようやくラミナが男の存在に気づいた。

「なんやコイツ?」

「雑魚だよ。気晴らしに使えば?」

「はっ! こんなん殺したところで気が晴れるかい」

「だろうね。じゃ、アタシがやるよ」

マチは肩を竦めて男に歩み寄り、男の頭を蹴り砕く。

地面と壁に血が巻き散り、頭を失った身体が横たわる。

「シズク。悪いけど、片づけお願い」

「うん」

「コル。悪いけど、マチ姉の上着コピーしてんか?」

「いいよ」

シズクはデメちゃんを具現化して死体と血を吸い込み、コルトピはマチの着物と帯をコピーしてラミナに渡す。

ラミナはマチとお揃い姿になり、一息つく。

「いつの間に刺青入れたの?」

「マチ姉と2人でカゴツシに帰る途中」

「……ウボオーと同じ場所にしたのね」

「うちなりの供養つちゆう感じやな」

コルトピの質問に帯を締めながら答え、微笑みながら言うパクノダに肩を竦めるラミナ。

そして、クロロに顔を向ける。

「で、もう終わったんか?」

「ああ。後は撤収だけだ。フィンクス達は?」

「フィンクスとフェイはフランの所に行ったで。ノブナガは……どこ行ったんやろ?」

「「は?」」

「いや……4人で警備員一番殺した奴に飯を奢るつちゆう勝負して、ノブナガが負けたんやけど。金ないとか言うてたから、そこらへんのお宝奪えばええんちゃうか?とか言うたら、どっか行ったんよ。すっかり忘れとったけど」

「……馬鹿じゃないの?」

「まあ、ええんちゃう？ アジトの場所くらい覚えとるやろ。行こ行こ。どうせもうエレベーター動かんし」

「外で拾った方が早いわね」

「シャルナークに連絡しておけば大丈夫じゃない？」

「そうね」

ラミナの言葉にパクノダ、コルトピ、マチがそれぞれ反応し、クロ口も頷いて撤収の準備を始める。

すでに外では警備員も警察もほぼ全滅しており、クロ口達は悠々と美術館から逃げ出すのだった。

---

ラミナ☒sウエポン！（忘れてました）

・【虚実投影】

干将莫邪に付与された能力。

分身を生み出して操り、分身と自身を入れ替える能力。

入れ替わった際の姿勢は変わらないので、パツと見ではいつ入れ替わったのか分からない。

実像ではないので、分身は壊れてもオーラをあまり消費せずに元通りに出来る。

二刀一対であるため、他の武器との組み合わせが難しく、入れ替わるには分身を視界に入れていないといけないので、潜入などには不向き。

## #83 シゴト×ハ×オワリ

クロロ達はフランクリンを回収して、アジトに撤収する。  
トラックはアジト近くの廃倉庫へと入れる。

倉庫には同じ大きさのトラックがあった。

「これに移すの?」

「ああ。流石にこのトラックで移動するのは目立つからな」

「つちゆうことは、アジトまで船で行くんか?」

「そういうことだな」

躊躇なく頷くクロロに、ラミナ、マチ、カルトは呆れる。

パクノダとフランクリンは苦笑し、シズクやコルトピ達は「そうするしかないじゃん?」と思っていたので表情は変わらない。

結局、文句を言ってもどうにもならないので、大人しくお宝を移すラミナ達。

「陰獣から奪った能力はどうしたん?」

「無くなっていたな」

「ああ、あの陰獣なら邪魔だから殺したな」

「団長の能力がいつ戻るか分からなかったし、必要な情報は全部引き出したしね。フェイタンの拷問でボロボロだったし、マフィア達に返すのも面倒だったのもあるわ」

フランクリンとパクノダの言葉に、ラミナはそりやそうかと頷く。

カルトは陰獣を知らないので、首を傾げる。

「陰獣って強かったの?」

「弱かったね。旅団に入る前のカルトでも殺せたんじゃない?」

マチは肩を竦めながら言う。

シズクはとつくの昔に陰獣がどんな連中だったか忘れてる。そして、それは二度と思い出すことはない。

そこにシャルナーク、フィンクス、フェイタンが戻ってきた。

ノブナガがいなことにシズクが首を傾げる。

「あれ? ノブナガはどうしたんですか?」

シャルナークは呆れを浮かべながら肩を竦める。



「携帯持っていないから連絡が付かなかった」

「とりあえず、思いつき『先帰る』って叫んでやったから聞こえてはいるだろうよ」

「もうまともに警察も残ってないから、問題ないね」

「ノブナガって、ここ知つとるんか？」

「……知らないかもな。まあ、向こうのアジトに戻れば問題ないだろう」

哀れなノブナガに誰一人同情せず、クロロを除く者達はただただ呆れるのみだった。

マチはため息を吐いて、クロロに顔を向ける。

「この後はどうすんの？ まだ全員で動くの？」

「……いや、船を動かせる連中がいれば十分だ」

「残っておくべきメンバーは？」

「準備をしたシャルナーク。証拠隠滅要員のシズク、パクノダ、コルトピ。後は俺と護衛くらいだな」

「俺とボノは目立つからトラックに乗って護衛の方がいいだろうな」

「うちは結構顔バレしとるみたいやから、別行動した方が陽動になるやろ。警備員の生き残りがおったら面倒やしな」

「なら、俺とフェイ、ノブナガも別行動しとくか。俺らも警備員達の前に顔晒して、のんびりしてたし」

「そうね。ワタシ達なら、少しくらい追手が来ても問題ないね」

暴れ回ったラミナ、フェイタン、フィinksは別行動を取ることに決めた。

ラミナは他の団員より顔が広まっているので、わざとどこかで顔を晒せば賞金首ハンターの多くは自分の方に動くだろうと推測した。

フェイタンとフィinksは純粹にコソコソ動くのが面倒だから、である。

恐らくノブナガもフィinks達に同意するだろうと考えていた。

これで残ったのはマチとカルトとなり、もちろんマチは、

「じゃ、アタシはラミナと動くよ。そっちに残っても、トラックが狭いだけだし」

「いいだろう。カルト、お前は どうする?」

クロロは頷いて、残ったカルトに顔を向けて訊ねる。

カルトは閉じた扇子を口に当てて考え込む。

「……ラミナと行く。そろそろお爺様達から仕事も来るかもしれないし」

「あく……そうやなあ。もうクロロのお守りもないし、自由に動けるからなんか言うてくるかもなあ」

「まだやんの?」

「そりゃあ、今の所うちに仕事の依頼するんはゾルディックくらいやし。金払いがええんよなあ。今、仲介屋は信用出来んでな」

そもそもヨークシンに入る前に、クロロがあちこちの名のある仲介屋で偽の十老頭暗殺依頼を出しまくったせいである。

あの後、十老頭が本当にゾルディック家に暗殺されたのだが、それは「ゾルディック家にも依頼出してやがったのか」で終わる。

しかし、コルトピのコピーではあったがクロロの顔がネットに晒され、ラミナが旅団と繋がっていることは問題だった。

特にラミナは、ヨークシンの仲介屋はその時旅団とは知らなかったとは言え、ウボオーギン達の討伐依頼を引き受けていたことが決定的だった。

仲介屋の同業での繋がりは強くて広い。

1つの仲介屋を裏切ったら、全体の半数の仲介屋は使えなくなると言われているほどである。

そして、その情報はそう簡単に消えることはない。

ただでさえ幻影旅団と繋がっているのだから、実は仲介屋はマフィアや賞金首ハンター達よりも厳しい指名手配を敷いていたりする。

なので、ラミナは殺し屋としての収入は、完璧にゾルディック頼み状態である。

「なんか……やっぱ外堀埋められてないか?」

シャルナークが首を傾げ、その言い方にマチが顔を顰める。

ラミナは少し大げさに肩を竦めて、

「カルト押し込まれた時点で今更やで。流石に仲介屋も無しとなると

足元見られるし、旅団やつちゅんバラすわけにもいかんやろ？」

旅団員だとバラしたら、逆にターゲットにされるに決まっている。

「もう殺し屋は廃業でもいいんじゃない？」

「……まあ、なあ……」

パクノダの言葉にラミナは悩まし気に腕を組む。

確かに辞めても問題ないのだが、妙に後味が悪い辞め方であると感じているラミナ。

もつとも、旅団に入った時点で殺し屋を辞める辞めない以前の問題であることには誰も思い至らない。

盗賊である意識が強いためか、全員が頭の中で殺し屋とは違うと思いついていた。

唯一違和感を感じていたのは、カルトだけだった。

しかし、カルト自身も違和感の理由に気づいておらず、小さく首を傾げるだけだった。

カルトはどちらかと言えばシルバやゼノとは違い、『金のために殺す』ではなく、『殺したらお金が入る』という旅団に近い感覚の持ち主だからである。

これはカルトの殺しの多くが、イルミの付き添いであったことによる弊害と言える。

もう少しクロロの復活が遅れていれば、ラミナやシルバの感覚も理解できただろうが、その前にクロロが復活のめどが立って、旅団と合流したのでその未来は消え去った。

「まあ、辞めようが続けようが、ゾルディック家が連絡してくるやろうから、結局は変わらん。まあ、カルトへの仕事つちゅんことなら、今はカルトが他の団員に声かけてもええとは思って。小遣い稼ぎにはなるやろ」

と、問題を後回しにしたラミナだった。

その後、クロロ達は荷物の積み込みが終わり次第、出発した。

ラミナ達は最初のアジトに戻ると、苛立ちを隠さずに胡坐を組んで座っているノブナガを見つめた。

「あ、いた」

「あ！ テメエら、どこに行つてやがった!!」

カルトの声でラミナ達に気づいたノブナガは、跳び上がるように立ち上がって詰め寄ってくる。

それにマチ達は呆れを浮かべて、

「こつちのセリフだよ」

「団長達はもうホームに向かったぜ」

「ワタシ達はここから別行動ね」

「なにい!? じゃあ、俺が盗んだお宝はどうすんだよ!?!」

「んなもん自分で処理せんかい。お前が勝手に盗んできたもんやろが」

「つていうか、何盗んできたんだ?」

「ああん? ちつ……絵だよ、絵」

ノブナガは舌打ちして、奥の壁に立てかけている絵を親指で指す。

絵を目にしたラミナとフェイタンは、すぐに呆れの色を深める。

「お前なあ……なんでコレやねん?」

それは花瓶に飾られた向日葵の絵だった。

「んだよ? これつて有名なんだろ?」

「有名すぎんねん。もうちよい真贋が難しい奴にせえや。この絵は模写やら複写やらが星の数ほどあるから、偽モンの見極め方も有名で逆に簡単なんや」

「はあ!? マジかよ!?!」

「はあく……こころへんの骨董品屋や闇市にや出せへんぞ? それなりの裏ルートがある組織でもない限り、バレた瞬間終身刑確定やろうからな」

「じゃあ、その裏ルートがある組織に売ればいいじゃねえかよ」

「阿呆。コネもないし、そういう連中は大抵国とも繋がりを持つとる。裏倉庫の一部を奪ったうちらがのこのこと現れたら、速攻で通報されるで」

「それだけの組織は拠点もそう簡単に捨てられないね。だから、国とは持ちつつ持たれつの関係を作てるよ」

「マジかよ……。じゃあ、この絵は……」

「今の所、ただの荷物やな。まあ、この国から出れば、どっかで売れるかもしれないけど……」

ラミナは小さくため息を吐いて、

「あれだけ暴れたんや。もう世界的ニュースになつとるやろうし、裏倉庫の事は公表出来んけど、その絵が盗まれたんは公表できるやろうからな。ド田舎でも行かんと、怪しまれるだけやろな」

もう少し知名度が低く、かつ倉庫などに保管されていた物を盗んでいれば時間が稼げたかもしれないが、ここまで世界的に有名な絵などすぐにバレるに決まっている。

なので、下手に持ち運べないし、売りに出せない。

恐らくしばらくは、贋作であろうと売りに出されている目の前の作品は、この国やハンター達に全て売り主から入手ルートまで細かく調べられるだろう。

そして、それを売る側も理解しているはずなので、しばらくは出品はもちろん買取すらも控える可能性は高い。

なので、目の前の絵は間違いなく金銭的価値はない。

ノブナガは肩を落として項垂れる。

それに全員が呆れた視線を向けて、お宝への興味を無くす。

「お前ら、どこ行くつもりなんだ？」

「ん？ んく……サヘルタに戻るつもりや。隠れ家も近いし、色々と目をこっちに向けられるやろうしな」

「ふうん……。んじゃ、俺らはジャポンとかアイジエンの方にでも行ってみるか？」

「ジャポンでいいね。お宝の情報でも探しに行くよ」

ノブナガを放置して、お互いの目的地が被らないように相談する。

「じゃ、もう行く？ ここ、朝まで過ぎすには不向きだし」

「そうやな。流石にハンターも動いとるやろうし、隠れるにしてももう少し逃げやすい場所がええな」

「だね。行くよ、ノブナガ」

ここは廃ビルの地下。

警察でも真っ先に捜査の目を向けるだろう。

警察は殺せばいいが、ハンターは流石に面倒だった。

フェイタンが未だ落ち込んでいるノブナガに声を掛ける。

「はあ……わあつてるよ」

「その絵、ここに置いていけば？」

「だな。ラミナ達の話じゃ簡単に売れねえみたいだし。持って行っても邪魔なだけだ」

「ちくしよ〜」

「あ、奢りは無しにならんで。ちゃんと他の方法で稼ぎや。次の時まで待ったるから」

「わあつてる！　こうなったら、ジャポンで意地でも稼いでやる！

おら、行くぞー！」

「お前が仕切んな」

絵をその場に放置して足音荒くアジトを後にするノブナガに、呆れながらついて行くフィンクス達。

ラミナ達もそれに続いて、外に出てすぐに二手に分かれて、移動を始めた。

「飛行船？」

「の方が楽やけどな。流石にこの近くの空港はもう封鎖か、検問されとるやろうし……。忍び込むか」

「その方が楽だろうね」

「ほな、空港行こ」

ラミナ達3人は気配を出来る限り消して、最大速度で街を駆け抜ける。

しかし、それは同時に、

「お〜いカルト〜、早よ来んと置いてくど〜」

「っ……………」

カルトにとって地獄のマラソンになると言うことだった。

大粒の汗を額に浮かべて、これ以上離されまいと全力で脚を動かすカルト。

マチはラミナの少し後ろを走りながら、呆れた顔をラミナに向ける。

「あれじゃあ空港に着く頃には倒れるんじゃないの?」

「そこまで柔には鍛えとらん。大体うちよりも疲れるん早いってどういこうこつちゃねん」

クロ口達に合流してからは【絶】で回復に努めていたが、それでもまだ半分くらいしかオーラは回復していない。

更には完勝とは言え戦闘後なので、当然疲労は溜まっている。

なのに、そのラミナよりも先にバテるのは頂けない。

最近はこちらと体力、筋力面の修行をさせていないので、暇を見つけたら再開しようと考えてるラミナ。

更には最近修行と組み手でガチの実戦をさせていないことも問題かと思ひ、ラミナの方からゼノに仕事の依頼でもした方がいいかもしれないとも考えた。

そこから30分ほどかけて、空港に到着するラミナ達。

やはり空港周辺や中では警察や警備員やらがワラワラしていた。

「お。まあ、せめて国内に留めときたいわな」

「どれがヨルビアン大陸行き?」

「さあ?」

「あのねえ……」

「じゃあないやろ? 確認したいけど、明らかに空港内に念能力者がおるんやから」

空港内には【円】が張られていたのだ。

【朧霞】では【円】を誤魔化せないし、【絶】や【隠】で隠れるにはリスクが高い。

後ろでへばっているカルトもいることもあり、怪しまれる可能性が否定できない。

しかし、だからと言ってカルトを休ませないのがラミナとマチである。

「おい、カルト。もう行けるやろ。お前の能力でそこらへんの連中、盗み聞きして探れや」

「動かないし、行けるでしょ」

「……………分かった」

カルトは息を整えながら、手早く人型の紙を数枚取り出して操る。特にトランクなどの荷物を運んでいる職員を狙い、数人に貼り付けて声を聴く。

職員ならば、口頭確認で行き先を口にする可能性が高いからである。

飛び立ちそうな飛行船を集中的に狙い、10分ほどするとサヘルタ合衆国の名前が出た。

ラミナ達は飛行船に向かう経路を確認して、【朧霞】で姿を消したらミナが注意を引きながら3人は飛行船に飛び乗る。

乗り込んでしまえば、チケットを確認されない限りバレる可能性は低いので、飛び立つまでは食堂で客のふりをする。

ちなみにラミナは空港に向かう途中で干されていた洗濯物を物色して着替えている。

クカンユ王国からサヘルタ合衆国まで約4日。

その間、どうにかして寝床などを探さなければならぬが、

「バレたら全員殺して、飛行船に乗っとればいいよ」

というマチの言葉で、カルトは納得してラミナはため息を吐いて色々と諦めた。

しかし、初日からそれをするのも面倒だったので、空室を探してバレないように鍵を開けて、そこで寝泊まりすることにした。

それで運がいい（乗員にとって）ことに、バレることなくサヘルタ合衆国に到着した。

再びバレないように空港から抜け出し、街へと移動する。

到着したのは【ゼルンロサステイ】だった。

ラミナ達は安ホテルに部屋を取り、ラミナは一度ネットカフェに足を向ける。

その間もブルブ美術館襲撃事件が世間を賑わせており、テレビではコメンテーターが的外れの知ったかぶり発言をしていた。

どうやら襲撃者が旅団であることは、まだ発表されていないようだった。

（ふむ……。クモの名前くらいは出ると思ってたんやけど……ネテロ



やハンター協会が止めるわけないやろうし、ジンもちやうやろなあ）  
誰が情報を規制しているのか思い浮かばずに歩きながら首を傾げ  
るラムナ。

盗まれたかどうかはともかく、襲撃されたこと自体は報じても問題  
ないはずだ。

正体不明の襲撃犯を押し通すよりも、クモの名前を出した方が世間  
はまだ納得する可能性が高い。

（ああ……そうか。マファイアンコミュニティがおったな。一度『仕  
留めた』と大々的に発表して、ネットに首まで晒したのに『実は全員  
生きてました』となりや、ただでさえ駄々下がり of 権威が更に駄々下  
がりやもんなあ。下手すりや、マファイアンコミュニティそのものが  
崩れ去るか）

すでにマファイアンコミュニティはブランド名だけで生き永らえ  
ている集団に過ぎなくなってきた。

新十老頭への野心、抗争、消滅と新設の繰り返し。

特にカキン王国では、すでにマファイアンコミュニティの勢力は一  
掃されつつある。

王国の王子と繋がっていたマファイアが一気に台頭してきたからだ。  
もちろんほとんどの組がクモが生きていることに気づいているが、  
それを公表するしないでは大きな違いがある。

それはつまりヨークシン時にクモ討伐に関わった当時の十老頭直  
下組の失態を公表することになるからだ。

彼らは新十老頭に就任したり、新十老頭になった組の後ろ盾になっ  
たりしているのがほとんどだ。

その者達の失態が晒されたとなると、再び十老頭の選出し直しや落  
ち着いてきた抗争が再開される可能性が高い。

特にクモの情報すら掴めない血の気だけ多い組が、確実に暴れ出  
す。

そんな者達に潰されるほど弱つてもいないが、暴れられたという事  
実がすでに落ち目なのだ。

なので、マファイアンコミュニティは必死にクモの存在を隠そうと

している。

もちろん、無駄な努力で終わるのだが。

ラミナが入ったネットカフェで一般公開されているネットニュースの中にチラホラとクモの名前が出されていたからだ。

情報関係に携わるプロハンターやその庇護下にいるジャーナリスト達である。

マフィアの権力など知ったこっちゃない命知らずの者達が次々と出す情報が少しずつ広がって来ていたのだ。

しかし、何を盗まれたのかまでは流石に発表していない。

ノブナガが奪った絵すらも発表されていなかった。

「……裏倉庫は公表できんとして……。まさか、他はあの絵しか盗まれんかったから、クモやのうて火事場泥棒とでも思われたんか？」

戦闘で美術館を美術品そのものを破壊しているのに、あの絵だけをわざわざ盗んだ意図が警察やその他捜査関係者達には理解出来なかったのだ。

そのため、絵に関しては別人の可能性があると的外れの推測をしていた。

しかし、それを肯定も否定もする前に、廃ビルの地下で無造作に放置されていた絵を発見してしまい、急いで発表する必要もなくなってしまったのだった。

ラミナは続いてハンターサイトを見る。

「……お〜……うちが旅団に入ったんは確定扱いされとるな。ん？」

懸賞金が消えとるな。いや……単に規定額じゃなくなっただけか」

A級首集団の幻影旅団に入ったことで、ラミナを狙うことは旅団全体を敵に回す可能性があるのです、これまでのように単独の殺し屋として懸賞金をかけるのが難しくなったのだ。

それでも最終表示金額は数十億を超えていたので、最低でその額なのは賞金首ハンター達も理解している。

しかし、表示されないということは、ハンター協会ですら『危険度が高い』と判断したということだ。

そして、幻影旅団に関する情報の閲覧料も更に金額が上がってお

り、そこらへんのハンターでは見ることも出来なくなっている。それだけでも旅団の危険度が更に上がったことを示していた。

「逆に言えば、これから現れる奴はそれなりの腕を持つとる可能性が高いっちゆうことやな。まあ、今更やけど」

さらにラミナはヒソカやクラピカの情報を調べることにした。

ヒソカの情報は変化無し。

クラピカは、ノストラードファミリーの若頭になっていた。

「おおおお。立派になったもんやなあ。……そこそこ修羅場はくぐったみたいやなあ。所詮はマフィアとしての、やけど。緋の眼も結構取り戻してるみたいやな。終わった時にどう動くか、やなあ」

復讐に動くのか、鎮魂に伏すのか、正義に動くのか、自由になるのか。

「……前2つはともかく、後2つはないか。あいつがそんな器用に生かれるわけないわな。まあ……ゴンが関わったら分からんけど」

ゴン達はまだゲーム内にいるようで相変わらず情報がない。

そこで席を立つて、ラミナはホテルへと戻ることにした。

その時、携帯が鳴る。

表示された名前は、イルミだった。

「イルミい？」

ラミナは盛大に顔を顰めて、嫌々だが電話に出る。

「……もしもし？」

『や。久しぶり』

『何の用や？』

『仕事の依頼。手伝ってほしいんだよね』

『なんでうちに？』

『親父も爺ちゃんも他の仕事で動けなくてね。だから、カルトでもって思ったけど、今は君に鍛えて貰ってるって思い出してさ』

「……」

『団員になったみたいだし、そっちに伺いを立てるのが筋と見ただけ。それにクカンユの事件って旅団だろ？ なら、丁度暇になったんじゃない？』

「……まあ、カルトは一度仕事させようか思いつたからええんやけど……。場所は？」

『「トルシア」だよ。待ち合わせは4日後。どうだい？』

「……はあ。まあ、ええけど……。他の団員とも一緒におるから、相談してまた連絡するわ」

『了解』

通話を終えて、ラミナはため息を吐く。

「なんか企んでそうで嫌やなあ……。あいつだけはゾルディック家でもシルバ達の意見を無視する時がありそうやからなあ……。流石に殺しに來たりはせんやろうけど……」

信用ゼロのイルミからの誘いに、盛大に顔を顰めるラミナ。

しかし、暇だったのも事実なので、カルトに委ねることにした。

決してマチに睨まれたくないからではない。

カルトの修行にいいからである。

だから、カルトに決めさせるのだ。

そう心の中で言い訳したラミナは、帰る途中で酒とツマミを購入し、気持ちゆつくりな足取りでホテルに戻るのだった。

決してマチに睨まれたくないからではない。

ないったら、ないのだ。

## #84 サイアク×ノ×マモノタチ

翌日。

ラミナ、マチ、カルトは「トルシア」郊外にやってきた。ありがたいことにマチも文句を言わずに付いてきた。

「仕事中はどうするんや?」

「……暇だし、見学でもする」

「遠足か」

「雑魚くらいなら相手したげるよ。金はもらうけど」

「そこはイルミに言いや」

マチの言い分に呆れながら、ラミナ達は待ち合わせ場所に到着する。

そこは街外れの森の中で、周囲に人気はない。

「それにしても、イルミやったら人手くらい問題ないんちゃうか? 操作系能力やったやる?」

「そうだけど……。念能力者が複数人相手にいるなら、微妙かも」

「そういうこと」

悩まし気に眉間に皺を寄せながら話すカルトに、別の声に参加する。

顔を向けると、木陰からイルミが姿を現した。

「久しぶり。カルトが世話になってるね」

「お前が置いて行ったんやろが」

「おかげで親父達も喜んでるよ。ところで、そっちのが言ってた団員?」

「そうや。まあ、参加するかどうかは依頼内容と報酬次第やな」

マチはイルミを鋭く見据えている。

ラミナがキルアと婚約するはめになった原因でもあるからだ。

イルミはそれを無視して、早速本題に入る。

「で、仕事なんだけど。ちょっと厄介なことになったんだよね」

「あ?」

眉間に皺を寄せるラミナ。

カルトも首を傾げて、イルミに訊ねる。

「そんなに厄介なターゲットなの？」

「いや、ターゲットは新しい十老頭の1人だから、ターゲット自身は問題じゃない」

「十老頭やと？　ちゆうことは護衛に面倒なんがおるんか？」

「昨日連絡した時はそれだけだったんだけど……」

「いい加減はつきり言いな」

しびれを切らしたマチが睨みつけながら言い放つ。

それにイルミはお道化たように両手を上げる。

「はいはい。他にも同じターゲットの暗殺依頼した連中がいてさ。ブッキングしたんだよ」

「げ……。他にもつちゆうことは、マフィアンコミュニティ内は内乱状態か……」

「クモが大暴れしたからね。選ばれたばかりの十老頭の株は下がったどころか、マイナスさ」

「粛清と成り上がり戦争が始まったんか……」

昨日調べて考えていたことが、すでに始まっていたことに顔を顰める。

まさか旅団と繋がっている可能性があるゾルディック家に依頼するほど、なりふり構っていられない状況とまでは思っていなかった。「それでそれぞれ後釜になろうとしてる連中が、殺し屋を投入してきただって感じ。昨日はまだ誰か分からなかったんだけど、さつき判明したのがコイツら」

メモ用紙を取り出して、ラミナに放り投げる。

キヤッチしたラミナは紙を開いて目を通すと、盛大に顔を顰める。

「【振魔】に……【ロストマン】……。しかも、ターゲットの護衛に【アバズレ】え？　……マジか？」

「大マジ。参っちゃうよね」

「有名な殺し屋なの？」

「全員が旅団員レベルの実力者や。【アバズレ】は殺し屋つちゆうより傭兵に近いんやけど、実力はホンモンやなあ。1人でも厄介やのに

……」

うんざりとした表情を浮かべて、近くの樹の根元に座り込む。

そして、イルミに顔を向けて、

「護衛は『アバズレ』だけちやうんやろ?」

「もちろん。数人の念能力者と手下のマフィアがたんまりと」

「それを相手に『振魔』と『ロストマン』に先越されんように始末しろって? もはや笑い話にしか聞こえんでな。報酬が割りに合わんのちやうか?」

「そうなんだよね。正直、どうしようか悩んでる。今、依頼者に報酬の上乗せを交渉してるけどさ」

「いくら?」

「ブッキング状態でやるなら300億。解消してくれるなら100億。ちなみに元は70億だよ」

「……分け前は?」

「6:4で、そっちが6」

「阿呆言え。『振魔』と『ロストマン』相手やったら400億はもらわんと割りに合わんわ」

ラミナはもうやる気をなくしている。

殺し屋同士で競うということは、確実に殺し合いになるからだ。

【振魔】【ロストマン】はラミナよりも長く殺し屋世界で生き延びてきた強者達だ。

ヒソカやクロロと同時に戦うのと変わらないとラミナは考えている。

そして【アバズレ】もラミナやマチにも劣らない実力者である。

意識を他に向けて戦える相手ではないのだ。

「そんなに強いのか?」

「……【ロストマン】は昔コンビを組んどったこともあるから、その能力はよう知つとる。あいつの能力はここにおける全員と相性が悪い」

「あんたも?」

「あいつの能力は『弾丸』。……うちの能力と同じく、弾丸ごとに様々な力を付与することが出来るんや」

アンリミテッド・バレット・ワークス  
【無限の弾倉】

それが【ロストマン】の能力である。

ある『制約』を支払うことにより、具現化した弾丸に様々な能力を付与して撃つことが出来る。

自分の能力と似ているため、その厄介さをラミナは理解している。そして、マチやカルトも顔を顰める。

【振魔】の方は？

「あいつは変化系能力者。オーラをドリルにしたり、触れたモンを捻じ曲げることが出来る。ヒソカやマチ姉と同じく汎用性が高くて、対抗手段が少ないタイプや。ちゅうか、もう実力的にヒソカと戦うようなもんや」

【護衛の方は？ 【アバズレ】とかよく分かんない仇名だし」

【アバズレ】は金と人の血を流せる場所を提供してくれる奴なら、喜んで敵に寝返るんや。それで混乱した戦場や勝敗がひっくり返った事件もギョーサンある。別に戦い方にプライドがあるわけでもないから、戦い方は不意打ち、騙し討ち、暗器とか使いまくるから、【アバズレ】って呼ばれるようになったんや。見た目は美人やしな」

ある意味でカルトに近い存在かもしれない。

カルトは寝返ったりなどはしないが、見た目で油断させて相手をいたぶるのが好きなのだ。

【アバズレ】も同じく、見た目で油断させたところをブスリと刺して、いたぶるのが好きだと聞いたことがある。

「ゾルディック家に寝返らないかな？」

「……やめとき。強い奴の血を流すんが特に好きっちゅうんも聞いたことがあるわ。間違いなくゾルディック家と殺し合うんを選ぶやろうな」

打つ手なしに等しい状況に顔を顰めるカルト。

ラミナとマチはうんざりとした表情を浮かべており、イルミは表情を変えずに腕を組む。

答えは出ず、とりあえず依頼者の返答を待つことにしたラミナ達。

しかし、結果ブッキングは解消されず、報酬は350億しか支払わ



れないこととなった。

「執事共は呼べんのか？」

「流石に間に合わないよ」

「呼んどげや。うちに連絡する暇があるんやったら」

「普段頼まないから忘れてた。悪かったって」

「……はあ。んで、どうするんや？」

「俺とカルトでターゲットと雑魚をやるから。厄介な連中は任せてもいい？」

「……四つ巴にすれば……時間も稼げるたあ思うけど……。んな、上手く行かんと思うけどなあ」

「アタシも雑魚狩りに参加してやるよ。流石に面倒そうだからね」

マチは呆れた表情で参戦を告げる。

ラミナはありがたいとは思うが、結局面倒な相手を自分がするのは変わりない事に顔を顰める。

（月の眼）はもちろん、とことんストック大放出せな厳しいやろなあ。せめて【ロストマン】がおらんかったら、まだやりようがあるんやけど……）

間合いは圧倒的に【ロストマン】が有利。

しかも、ラミナの場合は振るうことが前提とされているので、銃撃と比べるとやはり攻撃動作が増える。

普通ならばラミナの身体能力が上なので、銃など恐れるに足りないのだが、相手が同等以上であるならばむしろ脅威でしかない。

更に厄介なのは『弾丸』なので、剣以上に見た目では能力を見極めにくい。

恐らく『物体に当たる』ことが制約である可能性は高いので、弾丸を弾いたり、斬り落とすのも容易ではない。

（ただ……今の【ロストマン】がどうなつとるんか……）

ラミナの【刃で溢れる宝物庫】同様、【無限の弾倉】も制約と誓約は厳しいものとなっている。

その内容がある程度知っているラミナは、複雑な表情を浮かべる。それに気づいたマチは、

「どうしたの？」

「……いや。……またエライ疲れる仕事やなって。はあ……カルトの修行成果を見る気軽なもんやったはずなのに……」

ラミナはため息を吐きながら、立ち上がる。

夕暮れを迎えるトルシアを見つめながら、ラミナは目つきを鋭くしていく。

潜んでいる強敵達を見透かすかのように。

トルシアのスラム街。

ボロイ平屋のボロイソファに、「振魔」は寝転んでいた。

「……ゾルディック家に、他の殺し屋だとお。おいおい、本気で言ってるのかよお」

『本気だ。だが、ここで日和るわけにはいかん！』

「そっちはそれでいいかもしれねえがよお。現場はそんなんで動けるわけねえよお。報酬が絶対的に足りねえなあ」

『ぐっ……分かっている。前金で最初の提示金を払う！ 成功すれば

その3倍だー！』

「……5倍だなあ」

『ふざけるな!!』

「こっちだって調べてんだよお。ターゲットの護衛に「アバズレ」。ライバルに「ロストマン」。もしかしたら「リッパ」がいるかもしれないえんだぜえ」

『なっ……!?!』

「【リッパ】はゾルディックと繋がってる可能性があっかんなあ。そうなれば、ターゲットどころじゃねえんだよお」

『……わ、わかった……。前金で2倍、成功報酬で6倍だ……』

「……まあ、それで手を打つかねえかあ……。一番は手を引くことだろうがよお。今回ばかりは失敗しても苦情は受け付けねえぜえ」

振魔はそう言って通話を切って、携帯を握り潰す。

残骸を放り投げて、ソファから起き上がる。

「あくあ……厄介な仕事になっちまったなあ。放り投げるにやあデカすぎる山だしなあ」

振魔もマフィアンコミュニティが一番のお得意様だ。

ほぼ全ての大陸にあるマフィアの元締めだ。

大抵の主要都市にいるマフィア連中相手が、どうしても商売相手になつてくるのだ。

仲介屋も裏の住人だ。

マフィアとの繋がりも深い。

落ち目のマフィアンコミュニティとは言え、状況が見えない中で切ることも難しいのだ。

そして、そのしわ寄せは殺し屋に来るのも当然の流れだ。

「アバズレ」【ロストマン】「リップパー」……。まあ、【アルケイデス】の爺がいねえだけマシかねえ」

振魔は気だるげに頭を掻いて、酒瓶を手取る。

「……最後の晩酒……かよお。はっ、似合わねえなあ」

自虐的に笑って、酒瓶を放り投げる。

そして、ポケットに両手を入れて猫背姿でボロ屋を出ようとするが、その瞳は気だるげな雰囲気とは真逆でとても鋭く、冷え切っていた。

同じ頃、トルシアの安ホテルの一室にて。

部屋に据え置きのパソコンの画面を見つめて、男は小さくため息を吐く。

赤茶の短髪に、引き締まった身体。

黒い外套とズボン、黄色の刺繍をした黒い腰マントを身に纏った目の鋭い男。

【ロストマン】である。

「もはや暗殺などという話ではないな。派手な殺し合いになる……。ターゲットどころではない、か……」

ロストマンも他の実力者達のことを調べており、その名前に振魔同様死を覚悟していた。

「……【リップパー】、か……。会うのは、いつ振りになるのだろうか……」

ロストマンは椅子から立ち上がって、ベッドの上に置いていたトランクから一冊の本を手取る。  
本を開き、その中身を読む。

「……こいつ、か」

何か納得するように呟いて、時間をかけて中を読み込んでいく。

「……手練れのような」

まるで他人事のように呟き、本を閉じてトランクに仕舞う。

「今回だけは……感謝すべきかもしれない」

そう呟いて、ロストマンは部屋を後にする。

死地へと赴くために。

そして、深夜。

満月が妙に爛々と輝いている。

トルシアの郊外にある屋敷風のホテル。

その一室に設けられた和室にて、1人の女性が正座していた。

黒い長髪を後ろで結び、薄赤の着物に真っ赤な袴、黒帯を身に着けており、女性を挟み込むように抜身の刀が二振り横たわっていた。

その顔は巫女のように清純そうで、今は目を閉じて瞑想をしていた。

すると、その小さな口がニイ〜と、突如大きく三日月型に歪んでいく。

一瞬で清楚は消え、淫靡と狂気に顔を染める。

「なあんや……うなじがピリピリしはるなあ。こらあ……殺気、やろかねえ」

女性、【アバズレ】こと『ツマベニ』はこのホテルに向けられた僅かな殺気に本能的に気づく。

「どうやら、死体予定の旦那様に媚びとった価値はあったようやねえ」

刀の柄を掴んで立ち上がり、引き戸を開けて廊下に出る。

ツマベニの姿を、警備にしていたマフィアの部下達が捉える。

「なっ!? お、お前、用もないのに出てく——!」

「お敵さんが来はるえ。お出迎えの用意しなはれ」

ツマベニの言葉に、部下の男達は目を見開く。

「ボ、ボスを逃がせ! 急——ぎやつ!」

慌てて指示を出した男の首が斬り飛ばされる。

「何言うてはるの? お出迎えて言うてるやないの」

ジャポン人形のような綺麗な顔の頬に返り血をつけ、ただただ顔を冷酷に染めて倒れる男の死体を見下ろしながら言い放つ。

「ひっ……!」

「下手に逃げはるより待ち構えなはれ。血に飢えた虎が獲物を定めはった以上、逃げたところで無駄無駄」

ベロオと頬についた血を舐めとつて言うツマベニに、部下達は慄きながら命欲しさに頷くしかなかった。

慌てて身を翻して走り出して、ボスに報告に行く。

「無粋は堪忍やよつて。わての一番の楽しみを邪魔するんは誰やろうとさせまへんえ」

強烈な殺気を隠すこともせず、廊下を歩き出す。

そして、ホテルは10分もせず銃や刀を構えたスーツ姿の男達が走り回り、一気に物々しくなっていくた。

ラミナ達は物々しい雰囲気のホテルの様子を少し離れているビルの上から眺めていた。

「……完全に武装してるね。バレてる?」

「かもね」

「他の殺し屋を雇ったマフィアが裏切ったんじゃないの?」

「……その可能性はないやろ」

腕を組んで鋭い目つきでホテルを睨みながらカルトの言葉を否定するラミナ。

それにカルトは訝しみながら顔を向ける。

「なんで？」

「……ホテルの真ん中に隠れる気もない獣みたいな殺気が1つ。その殺気に引きつけられるように、東から振じ曲がった殺気、西から鉄みたいに揺るぎがない殺気が近づいて来とる。……ピンポイントでうちらとホテルにおる獣に伝えるようにしてな」

「それって……」

「お互いに隠すだけ無駄っちゅうんは理解しとる。やから、むしろ挑発しとるんや。先に決着をつけようや、ってな」

「どうするの？」

「……まあ、うちは行かないかんやろ。多分、連中が一番引つ張り出したいんは、イルミやろうけどな」

「だろうね。けど、流石に俺は参加出来ないかな。悪いけど、頑張つて」

「……はあ。うちはもう生き残るだけで頭一杯になるでな。手助けは期待すんなや。仕事終わったなら、早めに合図せえよ」

「分かってる」

ラミナは疑いの目をイルミに向けるが、すぐにため息を吐いてサングラスを取り出して掛ける。

そして、ビルの屋上から飛び出し、ホテルを指す。

イルミ達もすぐに移動を始め、ターゲット暗殺へと動き出した。

ホテルは3階建ての四角状に建てられており、中心は開けた中庭になっっている。

普段はビアガーデンなどが行われているのだが、マフィア達が暗殺者が紛れ込まないようと全て撤去させていた。

そして、北側の屋根にツマベニが刀を携えて立ち、周囲に殺気を放出して待ち構えていた。

薄く笑みを浮かべていたが、向かいの屋根に人影が見えた瞬間に、口角が上がり上がり狂喜の笑みへと変わる。

南側に現れたのはラミナだ。

サングラスをかけ、後ろで束ねている紅い髪を夜風に靡かせなが

ら、両手をポケットに入れている。

ツマベニの正面で立ち止まった直後、東西の屋根に2つの人影が現れる。

東からは猫背で気だるそうにポケットに両手を突っ込んでいる男、振魔。

西からは右手に白い刃と銃身の銃剣を持ち、左手には黒い刃と銃身の銃剣を持つ男、ロストマン。

4人の殺人鬼が揃った直後、中庭の中心に四方向からの殺気で逃げ場を失った風が木枯らしのように渦巻く。

「久しぶりじゃねえかよお、リツパー。聞いたぜえ。クモに入ったんだってなあ」

「まあな」

「そして今はゾルディックの手先か？ 随分と節操がなくなったものだ」

「うっさいわ。そっちこそ、まだうちのこと覚えんのか？」

「さあ……どうだかな」

「ふふふ♪ これはこれは胃もたれしてまいそうやわあ」

「相変わらず気持ち悪い顔しとんなあ、【アバズレ】」

「そろもう。最近は味が薄いモンしか食べとらんさかい。飢えに飢えてもうてるんよ」

「それでわざわざ落ち目のマフィアにつてかあ？ 狂ってんよなあ」

「我々も人の事は言えないと思うがね。隠すか隠さないかの違いというだけで、結局は同じ穴の貉だろう。やることは何も違いはない」

張り詰めていく空気を無視するように、軽口を言い合う4人。

もはや空気が揺れているのではないかと、錯覚しそうなほどに殺気がその場を満たしている。

ホテル内にいる者達のほとんどは、その殺気で呼吸困難に陥っており、まともに動いているのはもはやイルミ、マチ、カルト、そして護衛の念使い達だけである。

しかし、カルトや護衛の念使い達も、気を抜けば一瞬でこの殺気の滝に押し潰されると理解して必死に体に活を入れる。

「なあ、リッパーよお。ゾルディック家の刺客ってお前だけかあ？」  
「いんや。長男が中におるでえ」

「はあ……やつばなあ。こりやあ……早く終わらせねえとなあ」  
「何だったら逃げてくれてもいいんだぞ？ その方が仕事が楽になる」

「そうしてえけどよお。引き受けた仕事を俺から放りだすのは、流石に気に食わねえなあ」

「このまま睨み合いで終わろうや。正直、うちはお前らとやり合うつもりで来たわけやないし」

「それはあきまへんえ。あきまへんよ、リッパーはん。A5ランクの霜降り肉を目の前にぶら下げられて、獣が我慢出来るわけないでっしゃろ？ もう構へん？ 始めても構へん??」

コテン、と狂喜の笑みを浮かべたまま首を傾げ、ゾワリと禍々しいオーラを噴き出すツマベニ。

ラミナは右手にソードブレイカー、左手にブロードソードを具現化してオーラを纏う。

ロストマンも両腕を僅かに広げて、振魔も両手をポケットから出してコキコキと指を鳴らしながらオーラを強める。

「ああああ、もう我慢出来まへん。血い見せてえな、浴びさせてえな、舐めさせてえな、啜らせてえな、飲ませてえな、満たさせてえな。今宵のわては、もう血に飢え過ぎやよってなああ!!」

「吸血鬼か」

「勘弁しろよお。んなもん、殺し辛くてたまんねえぜえ」

「なつていてもレッサーだろう。心臓を刺すか、抉るか、撃ち抜くかすれば、死なずとも止まりはする」

「それも楽しそうやなあ!! 試してみてやあ!! せやけど、その前に死なんでおくれやすう!!」

ツマベニは目を限界まで見開いて笑い叫びながら飛び出す。

それと同時にラミナ、ロストマン、振魔も飛び出す。

魔物の狂宴が、始まった。



## #85 ジンガイ×ノ×タタカイ

東西南北の屋根から、同時に飛び出す殺人鬼達。

しかし、空中でぶつかり合うわけではなく、中庭の地面に飛び降りてから中心に向かって駆け出す。

そのままぶつかり合うのかと思ったが、ロストマンが銃剣を構えてツマベニとラミナを狙って発砲する。

それを読んでいたかのようにラミナは【肢曲】を使って、分身を複数生み出して躲す。

ツマベニは迫る弾丸を見向きもせず、空気を切る音だけで位置を把握して刀を振り上げて弾丸を両断する。

(ロストマンの能力はアバズレかて知つとるやろうに。よおやるわ) 知ったことかとはかりに弾丸を斬り落としたツマベニに呆れるラミナ。

そのラミナは振魔の背後に回り込もうとしており、振魔は一切スピードを落とさずにまっすぐツマベニに詰め寄っていく。

ツマベニは口を吊り上げながら、左手の刀を横薙ぎに振って振魔に斬りかかる。

すると、振魔は走りながら屈んで斬撃を躲して、右手をツマベニの膝に、左手をロストマンに向ける。

その背後からラミナがブロードソードを振り上げて斬りかかる。

だが、そこにツマベニが右脚だけで跳び上がって、右手に握っている刀でラミナに突きを繰り出し、身体を捻る様に左手の刀を切り返して足元の振魔を狙う。

その一瞬をロストマンは見逃さずに、再びラミナとツマベニを狙って発砲しようとするが、ツマベニの斬撃を躲すついでにロストマンに飛び掛かってきた振魔に左手に握る銃剣を振って斬撃を繰り出し、もう一方の銃剣でラミナに発砲する。

ラミナは【一瞬の鎌鼬】で剣筋を無理矢理変えて、ツマベニの刀と打ち合わせて防ぐ。

「ちっ」

しかし、それにより数m先で放たれた弾丸を躲すのは不可能と判断し、【脆く儂い夢物語】で弾丸を斬りつけて除念する。

ラミナはそのまま南に跳び下がり、ツマベニは斬りかかった勢いのまま東に、ロストマンは振魔を躲すように北側に避け、振魔も突っ込んだ勢いのまま西側に走って、それぞれに仕切り直しとばかりに距離を取る。

位置を変えて再び向かい合う4人。

「はあー……しんど。イルミの奴、早よ終わらせてほしいわ」

「嫌やわあ。もうちよつと楽しみなはれ」

「無手の相手に武器を振り回しやがってよお。もうちよつとフェアにやろうと思わねえのかよお」

「殺し屋に殺し屋がフェアを求めるとは笑わせる」

「銃とか使うお前に言われたないわ」

「お前だって飛び道具があるだろう?」

「あかんなあ。殺しはちゃんと実感せんとお」

それぞれに再び仕掛けるタイミングを探りながら、会話をするラミナ達。

ラミナは内心盛大な舌打ちをする。

(ちっ。全員、近づくんも斬りかかるんも一苦勞な連中やな。こうなると【月の眼】も使えん)

【月の眼】の能力は1人のみを対象とする。

手練れが2人以上揃うと、どちらを視界に捉えるかが難しくなり、逆に隙が出来かねない。

(【不屈の要塞】やったら、ロストマンと振魔の攻撃は躲せるが……アバズレの刀は厳しいか)

ツマベニの刀は具現化した武器ではない。

もちろんオーラで強化した斬撃は弱体化させられるが、それでも強化した身体能力で振るわれる斬撃は馬鹿に出来ない。

ツマベニは強化系能力者である。

そして、能力は単純。

身体能力と刀をオーラで強化するだけ。

旅団で言うならば、ノブナガとウボオーギンを足して2で割った戦い方。

小細工無しの身体能力、我流の剣術、経験と本能のみで、戦い抜く生粋の戦闘狂だ。

だからこそ、恐ろしい。

強化系は六系統の中で一番戦闘においてバランスがいいと言われている。

四大行とその応用技のみで戦闘が出来、回復力や体を強化できるからだ。

戦闘において、強化という能力は単純故に強い。

精神が大きく影響する念において、ただ強化するだけの能力は、余計な雑念がないだけに強い。

そして、ウボオーギンやツマベニは、戦闘において一種の『覚悟』と言えるほどの『こだわり』を持っている。

『誓約』と言えるほどだ。

ウボオーギンは『拳で砕く』。ツマベニは『刀で斬る』。

戦いにおいて、ただそれのみに全てを捧げている。

それによって、ツマベニの身体能力と斬撃は恐ろしいほどに強化されている。

(頑丈さはウボオーほどやないとしても、素早さや攻撃の鋭さは上。まともに斬り合えば、うちの武器なんざ簡単に斬られる。アバズレは素でも鉄を切るほどの剣術の腕前。「不屈の要塞」の鎧ごと斬られると考えるべきやな)

そうなると、今度は振魔とロストマンが面倒になる。

振魔の能力は「捻くれ者の意地」。

オーラに『振れ』の性質を加えることで、オーラが触れたモノを振り、オーラの先端を尖らせて振ることでドリルのようにすることも出来る。

「さて……様子見をしてくれる相手じゃ、ねえよなあ」

振魔はそう言うのと両手を貫手に構える。

直後、両前腕を覆っていたオーラを高速で回転させる。更には両脚

の脛部分のオーラも勢いよく回転を始めた。

それを見たロストマンとラミナは僅かに顔を顰め、ツマベニは更に笑みを深める。

(勘弁してえや。余計に近づけんくなつたやないか……)

「……これは油断出来んな」

今度はロストマンが動きを見せる。

なんと、銃口を自分の胸へと向けたのだ。

「……まさか!」

「【アクセル・バレット】」

ラミナが何をする気か悟った瞬間、ドパン!と銃弾を自分に撃ち込んだ。

しかし、血が溢れることも風穴が空くこともなく、ロストマンは平然と立っていた。

「なにしはったん?」

「なに、大したことじゃない。ただ俺の身体能力を倍にしただけだ」

「十分大したことだろうがよお」

「ホンマ……厄介な能力やで……」

ラミナはソードブレイカーを消して、ククリ刀を具現化する。

それと同時に猛スピードで駆け出す4人。

しかし、ラミナは飛び出すと同時にククリ刀を投擲して、僅かにスピードを落として、次にウルミを具現化する。

ククリ刀は炎を纏って勢いよく飛翔し、ぶつかり合う予定だった中庭の中心に迫る。

だが、ロストマン、振魔、ツマベニは誰一人迫るククリ刀に驚くこととはなく、

ロストマンは連射して、ククリ刀に弾丸を浴びせて勢いを弱める。続いてツマベニが左手の刀を振り下ろして、炎を纏ったククリ刀を

両断した。

ラミナはそれを気にすることなく、ウルミを振るって能力を発動する。

ウルミは地面に潜って掘り進み、振魔の足元から勢いよく飛び出

す。

迫るウルミを軽やかに躲した振魔は、突如地面に跪く。

直後、回転するオーラを利用して、疾走し始めた。

「はあ!？」

「舐めんじゃねえ、よお!!」

目を見開くラミナに向かって、右貫手を突き出す。

振魔の腕で回転していたオーラが、うねりながらラミナの心臓目掛けて伸びた。

「!! ぐうー!」

ラミナはブロードソードを盾にして、受け流すように横に跳ぶ。

バキン!とブロードソードは半ばから折れて消滅し、ラミナはウルミも消してスローイングナイフとブロードソードを具現化する。

「伸びるとかアリか……!?!」

「誰も伸びねえなんて言っただけでねえよお」

飄々と言いながら振魔は左手を開くと、オーラも五指に分かれて指先で細いドリルのように回転する。

それを見て、何をしてくるのか悟ったラミナは頬を引きつかせる。

振魔が左手をラミナに向けると、推測通り5本の細いドリルが伸びて襲い掛かってきた。

ラミナは歯を食いしばって体を捻るも服に掠って破れ、ギリギリで躲しながらスローイングナイフを投擲する。

振魔は首を傾げるだけで避けるが、指を鳴る音が聞こえた瞬間、ラミナが振魔の背後に現れた。

「!!」

「しゅ!!」

【一瞬の鎌鼬】を発動して高速の斬撃を繰り返すが、振魔は体を捻じって左腕を掲げて回転させたオーラでブロードソードを受け止める。

嫌な予感があったラミナはブロードソードを消して、後ろに跳び下がる。

「ちっ」

(やっぱ、あのままやったら剣が振じ折られとったか)

ラミナがそう考えていると、背中に怖気が走る。

ブロードソードを具現化しながら振り返ると、ツマベニが凶悪な笑みを浮かべて両腕を振り上げながら斬りかかって来ていた。

「ひゃあ!!」

「こんくそがつ!!」

ラミナはもう一振りブロードソードを具現化して、ツマベニと嵐が如き剣戟を繰り広げる。

ギギギギイン!!と、まるでマシンガンでも撃っているかのような金属音が響き渡り、時折2人の間に火花が散る。

ラミナは高速の斬撃で真正面から斬り合うのではなく、ぶつけてはすぐに引き、ぶつけてはすぐに引きを繰り返して細かく連打することで、ツマベニの斬撃を弾いていた。

そこにロストマンが再び銃口を向ける。

「バースト・バレット」

ドドドドン!!

4発の弾丸を撃ち出し、銃声にラミナ達も目を向ける。

それと同時に弾丸が破裂したかと思うと、大量の念弾が雨のように襲い掛かってきた。

「いつ?」

「おやまあ」

「おいおい……!」

振魔もラミナ達に攻め寄ろうとしていたため、慌ててブレーキをかけて後ろに跳び下がる。

ラミナとツマベニも剣戟を止めて、念弾の雨の中を縫うように避けようとする。

しかし、そこに一条の閃光がラミナとツマベニへと飛んで来た。

「っ!!」

ラミナは二振りのブロードソードで防ごうとしたが、閃光は容易くブロードソードを貫いて僅かに軌道を変え、ラミナの右脇腹を掠って血を噴き出す。

ツマベニも身を振るも躲し切れずに掠り、背中を横一文字に抉って血を流す。

顔を顰めながらラミナはハルバードを具現化しながら壁ギリギリまで下がる。

そして、ロストマンを睨みつける。

「……【レーザー・バレット】」

「ほお……覚えていたのか」

「そらな。お前の必殺弾の1つやろ」

「見事に躲されたがな」

「ギリギリやったわ阿呆。(ブロードソードがストック0にされたしな。流石に厳しいか……)」

【天を衝く一角獣】は動きが鈍ってしまっているので、同時に3人倒すタイミングでもない限り使えない。

【弱さは罪】ならばツマベニに有効だが、他の2人には有効打にならない。

(ロストマンと振魔は一撃で仕留めんと無力化は無理やな。けど、今のうちの武器であるの2人を仕留められる可能性があるのは、【天を衝く一角獣】くらいか……)

「ところでロストマン」

「なんだ？」

「あと何年分の記憶が残つとるんや？」

「……」

「うちとお前が組んどつたんは3年前。……もうお前、うちのこと覚えとらんやろ？」

「……さあな」

「ほれみい。そう答えるんが証拠や。うちはお前に言うたぞ？ お前は誤魔化す時は『さあな』って言う癖があるてな」

「……」

ロストマンの【無限の弾倉】は銃剣と弾丸の具現化能力である。

それだけならば制約はないが、問題は『特殊能力を付与した弾丸』だ。

その制約は『1つの弾丸に能力を付与する度に、一番古い記憶が消えていく』こと。

消えていく記憶は能力の強さに比例して増える。

最低で1時間。最高で30日。

【バースト・バレット】が1発3時間。

【アクセル・バレット】が1発12時間。

【レーザー・バレット】が1発15日。

この戦いだけです。1か月分の記憶を失っていた。

古い記憶から失っていくので、戦えなくなることはない。

重要な記憶は迅速に本やデータに記録している。もちろん、見直したからと言って、思い出すことはないのだが。

そして、ラミナの推測通り、ロストマンはすでにラミナと組んでいた頃の記憶も失っていた。

記憶を失うのは、それまでの自分を失うことに等しい。

なので、命を懸ける制約と誓約と同等の威力を発揮するのだ。

ロストマンはすでに自分が何故殺し屋になったのかも覚えていない。

何故かその記憶については、どこにも記録されていなかった。

しかし、もう殺し屋になる前の記憶もない。

自分がどのような子供時代を送っていたのかも分からない。

もはや今の自分は、記憶を失う自分と同じ人間なのかどうかも分からない。

だからと言って、今更他の生き方も選べそうにない。

殺した者達すら忘れていったのだから。

「お前がここに来たんは、殺してほしかったからちゃうか？」

「……さあな」

「おやまあ。ほなら、わてが殺してあげますよって」

ラミナとロストマンのやり取りに、ツマベニが横槍を入れる。

背中傷など気にもせず、ゆらりと前に出てくる。

「やれやれ……そろそろ潮時かもしれねえなあ」

振魔がため息を吐いて、膠着状態になりつつある戦況に引き際を考



え始めていた。

そこにホテル内から拳銃や短刀を携えた黒服の集団が、東西側から中庭に駆け込んできた。

「そこまでだ、殺し屋共！」

「大人しくしやがれ！」

ターゲットの部下達が叫びながら銃を構えた瞬間、4人の殺人鬼は弾かれたように黒服集団に向かって飛び出す。

一瞬で黒服に詰め寄ったラミナはハルバードを横薙ぎして、3つの頭を宙に飛ばす。

同じ集団に攻め込んだロストマンは数人の肩間に銃弾を撃ち込んで、ラミナの視線がこっちに向いた瞬間に黒服集団に紛れるように黒服に斬りかかる。

その反対側では、ツマベニは先ほどまで浮かべていた笑みが消え、無表情になっていた。

「全く……力量も分からんのに出て来たらあきまへんえ」

「な……なんで……俺らを……」

足元で袈裟斬りに倒れた男が意識が遠のきながら言う。

ツマベニは冷たい瞳で見下ろして、

「食事しとる時に、目の前で虫がウロチョロされたら不快やない？」

それと同じやよつて。虫に邪魔されて、隙を作りたあないんよ」

そう言いながら、ツマベニはずっとすぐ近くで戦っている振魔に意識を向けていた。

振魔は一瞬で男達の背後に回り、男達の首に右手で触れていく。

触れられた瞬間、男達の首がギョルルルと独りでに振れ、首が勢いよく絞められたせい舌と目玉が飛び出して死んでいく。

そして、ツマベニに慄いて、振魔に背中を向けている男の背中に向けて、右貫手を繰り出しながらオーラをドリル状にして伸ばす。

「がぼっ、ぼががあああああ——!?!」

男の胴体に大きく穴を空けて、ツマベニに勢いよく迫る。男の身体はオーラに引きずり込まれるように回転しながら潰れていく。

ツマベニは横に跳んで躲し、着地と同時に飛び出して一瞬で振魔の

左横に移動する。

「あはっ♪」

刀二振りで袈裟斬りを繰り返して、振魔は左手刀で刀を弾こうとするが、直前で刀が止まり、ツマベニが屈んで左足払いを放つ。

振魔は反射的に後ろに跳び下がるも、ツマベニは二刀を突き出して右脚だけで飛び掛かってきた。

刀の切っ先にオーラが集中しており、振魔は防げないと判断して、両足から地面にオーラを広げて能力を発動する。

ガガガガ!!

地面が抉られて凹み、振魔の身体を下げる。

それによって、ツマベニは振魔を飛び越えてしまうが、腹筋と背筋に力を籠めて二刀を突き出した体勢から、二刀を全力で振り下ろした。

すぐさま横に跳んで斬撃を躲した振魔は、振り返りざまに右膝蹴りを放ち、そこからドリル状のオーラを伸ばす。

未だ空中にいたツマベニは全身に力を籠めて、身体を捻って迫ってくるドリル状のオーラにオーラを集中させた二刀を叩きつけて、その反動と勢いを利用して方向転換する。

「げえ。(【硬】で俺のオーラを押し飛ばしやがったのかよお)」

【硬】で集中させた膨大なオーラで振魔のオーラを押しつけ、刀に触らせなかったのだ。

「厄介な能力でんなあ。振れたオーラに触れてしもたら問答無用とは」

「力技で切り抜けた奴に言われたくねえよお」

「おや、座布団一枚」

「上手くねえよお」

バリイン!!

ガラスが割れた音に2人が目を向けると、ラミナの姿はなく、ロストマンはホテル内に向かって連射していた。

すでに中庭には黒服集団は誰も生き残っていなかった。

それからホテル内に逃げ込んだのはラミナだと判断したツマベニ

は、ロストマンに向かって踏み込む。

その隙を見逃さなかった振魔が攻めかかろうと構えた瞬間、

ツマベニが手首と指の力だけで、右手に握っていた刀を振魔の眉間目掛けて投げた。

「っ!!」

完全に虚を突かれた振魔は、目を見開いて大きく仰け反る。

ツマベニはニタアと笑みを深めるが、投擲した刀が勢いよく壁に突き刺さったのを見て、笑みが固まる。

仰け反っていた振魔が上半身を跳ね起こして、両手を突き出してオーラを伸ばしながらツマベニに飛び掛かる。

ツマベニは屈んで躲すが、後ろで結んでいた髪がオーラに触れて引き千切られる。

しかし、そんなこと気にもせず左手に握る刀を逆手に持ち替え、豹のように背を低くしたまま飛び出して、振魔の脇をすり抜ける。

ツマベニはそのまま壁に突き刺さった刀の元に走り、刀を抜きながら壁を駆け上がる。

振魔は振り返ってツマベニを目で追うも、左脇腹に痛みが走って思わず顔を顰める。

左脇腹は深く斬りつけられており、血が流れていた。更に額からも血を流しており、口元に流れてきた血をペロリと舐めとる。

「ちっ……今のはちよつとヤバかったなあ……。まあ、奴の刀を一本潰した代償と考えりやあしやあねえかあ？」

ロストマンに向かって屋根を走るツマベニを見て、ニヤリと笑う振魔。

ツマベニの左手に握っている刀は、中ほどから螺旋状に振れてしまっていた。突き刺すならともかく、もはや斬るのは不可能だろう。

「さてえ……どうしたもんかねえ。ぶつちやけ、もうここからターゲットを狙いに行ったところであ。ゾルディックがいやがるだろうしよお」

「もう逃げへん？」

「んあ？」

後ろを振り向くと、ラミナがうんざりした顔で窓際にもたれ掛かって頬杖をついていた。

「正直もう時間稼ぎは十分やろうから、うちのお役目終わつと思  
うんよな」

「けどよお、ロストマンがさっきの速え弾丸使つちまえば、分かんねえ  
ぞお？ 他にも念能力者の護衛がいただろおがよお」

「他にも動いとる奴おるし」

「ああん？ 他あ？」

「ゾルディック家五男と旅団員1人」

「……お前の弟子つて噂のかあ？」

「おう、よう知つとんな」

「……はあく。そりやあ無理だなあ。引き上げるとするぜえ」

振魔は大きくため息を吐いて、撤退を決める。

流石に負傷した状態で、これ以上敵が増えるのはリスクしかない。

しかもそれがラミナの弟子と言われているゾルディック家五男と、  
旅団員だと言うのだから絶対的に報酬が割りに合わない。

「そうだなあ。お前がいるんだから、ゾルディック家だけじゃなくて  
クモもいる可能性を考えとくべきだったよなあ」

「報酬が釣り合わんやろ？ うちかてお前ら相手に4人で350億と  
か割りに合わんわ」

「ひでえ依頼主だなあ。あくあ、こりやあ俺もマフィアンコミュニ  
ティーを見限らねえといけねえかよお」

「考えた方がよさそうやな」

「だよなあ。じゃ、俺あ行くぜえ」

「おう」

振魔はジャンプして、一息に屋根まで飛び上がる。

そのまま闇へと姿を消していく。

それを見送ったラミナは、ため息を吐いてロストマンとツマベニの  
戦いに目を向ける。

ツマベニはロストマンに間合いを詰め続けることで、発砲する隙を  
与えないように戦っていた。

振魔にやられた刀はいつのまにか捨てており、黒服の男達が持っていた短刀を握っていた。

それでも全くロストマン相手に隙を作らないのだから、本当に恐ろしい実力だ。

しかも、2人はラミナを巻き込もうと、斬り合いながらこつちに向かってきていた。

「もう終わつと思うんやけどなあ。……正直、ちよいとヤバいんやけどなあ」

ラミナは左腕へと目を向ける。

実はロストマンの連射の1発が当たり、左上腕からは血が流れていた。

力が入らないわけではないが、右脇腹の傷を合わせるとあの2人を相手にするには不安なコンディションである。

警察もそろそろ到着するだろう。

正直、逃げ出したい。

ラミナはそう考えていた。

しかし、ロストマンとツマベニが同時にラミナがいる場所に飛び込んできたことで、思考を中断して斬首剣とソードブレイカーを具現化して構えるのだった。

## #86 チイサイ×ノニ×チメイテキ

1人の殺人鬼が抜けて、3人になった殺人鬼の壮絶な殺し合いが続いている。

それをカルトは3階の窓から眺め、無意識に眉間に皺を寄せていた。

カルトの足元には体がバラバラになった死体がいくつも転がって血の海が出来ていたが、カルトはもはやそんなことは頭から消えている。

(……全然動きが見切れない。なんであんな体勢から攻撃が出来るのかが分からない。見逃したつもりはないのに、気づいたら攻撃が繰り出されてる)

中庭で行われているバケモノ達の饗宴に、自分がまだまだ未熟である事実を叩きつけられる。

瞬きもしていないのに、コマ送りされたように3人の姿勢が変わっており、位置が変わり、攻守が変わっている。

(なんで【アバズレ】って奴は、ラミナや【ロストマン】の様々な能力を見切ったように動けるの？ いや……見切ってるわけじゃない?)

「カルト」

後ろから声をかけられて、振り返るとマチが腕を組んで立っていた。

マチはカルトの横に立って、窓から中庭を見下ろす。

「……いつまで遊んでるんだか……」

「ラミナ?」

「あとイルミ。あいつもどっかで観戦してんでしようけど」

「まあ、イルミ兄さんは……。けど、ラミナは結構ギリギリっぽいけど?」

「全然よ。本気だったら、もっと手段を選ばずに派手な武器使ってるし、あんな弾丸避ける必要ないからね」

「……切り札って奴?」

「ん? アンタ、ラミナから聞いたことないの? 見たことも?」

「……ない」

「ふうん……。ま、どうせゾルディックを信用しきってないからなんだろうけど」

マチの言葉にカルトは顔を顰める。

確かにゾルディックは二度もラミナと殺し合ってる。ヨークシンではキルアのためとはいえ、脅したのもある。

婚約者というのはシルバ達が勝手に言っているだけで、本人達は認めない。

幻影旅団に属した以上、ゾルディックは敵対する可能性がある。その場合、カルトもゾルディック側に回る可能性がある。

だから、ラミナは必要以上に話さないし、必要以上に聞かない。妙にところどころ距離感を感じていた理由を理解したカルト。

「ま、切り札に関してはアタシ達だって話さないからね。だから、これはラミナにとっては切り札ってほどのもんじゃないよ」

「じゃあ、何？」

「あいつはどうかやら特殊な部族の血筋らしくてね。【月の眼】って言う能力で、自分のオーラを見た奴のオーラと全く同じものに変えて、相手の能力を無効化することが出来るんだよ」

「……」

「ま、他にもなんかあるかもしれないし、色々とデメリットはあるけど。それを使えば、ロストマンくらいは倒せるだろうね」

「アバズレは？」

「あいつはねえ……。見た感じウボオーやノブナガみたいな奴だから。小細工は難しそうだね。ラミナはあくまで時間稼ぎに徹してるんだよ。イルミがターゲットを殺せば、終わりだから。けど……。そのイルミが遊んでるんだから、あの子そろそろキレると思うよ？ アンタ、八つ当たりされないといいね」

「え」

「そろそろアタシはここを離れるよ。警察が来てるし。アンタも別に見ててもいいけど、巻き込まれないようにね」

マチはそう言つて窓から目を放して、反対側の窓に向かっていく。

カルトは頬を引きつかせてその背中を見送り、数秒中庭を見つめてラミナのオーラが膨れ上がった瞬間、猛ダツシユでマチの後を追いかけるのだった。

時は少し戻って。

ラミナはロストマンとツマベニの猛攻を凌ぎながら、徐々に苛立ちを高めていた。

(あんのクソ針……！ 何チンタラしとんねん)

いくつかの視線がこつちを見ているのはずっと感じ取っていた。

その内の1つがイルミであることは何となく感じていたが、それがずくつと動かないのだ。

針人間にでもやらせてるのかと思ったが、その周囲の殺気や気配が全然減らない。

マチやカルトだろうと思われる実力者が、さっさと周囲の気配を殺して、こつちを見ているのは構わない。

しかし、イルミが動かないのがムカツク。

(誰のせいだろうなつとんねん……！)

半分はラミナのせいだが、それを棚に上げる。

「いい加減、わてに集中しておくれやす」

ラミナが勢いよく屈むと、頭上を銀閃が走る。

「嫌や」

屈んだ姿勢のまま斬首剣を振り上げるが、ツマベニは打ち合うことなく横に跳んで躲す。

先ほどからツマベニは徹底的に斬首剣との斬撃を躲していた。

それに舌打ちをしたくなるラミナ。

「んとに、ムカツクやつちやなあ」

「おおきに。ほな、ようやく殺し合い出来ますえ」

「せえへん」

「いけずなお人やなあ」

「殺気の籠った攻撃がお望みかね？」

全く殺気の籠っていない声が2人の耳に届き、直後銃声が響き、閃



光が襲い掛かる。

ツマベニは大きく後ろに跳び下がり、ラミナはソードブレイカーで防ぐ。

ラミナは斬首剣を消して、レイピアに変える。

「啄木鳥の啄ばみ」

ロストマンに向かってレイピアを鋭く突き出す。

ロストマンは剣筋上から外れて、距離を取る。

(どいつもこいつも勘が良すぎるわ、全く……)

どうにも決定打に欠ける戦況に更に苛立ちを高める。

そこに再びツマベニが斬りかかってきて、嵐のような斬撃が襲い掛かる。

ラミナはレイピアを消して、その全ての斬撃を紙一重で躲す。

「くふ♪ ホンマ、楽しいわあ。リッパーはん」

「うちは楽しないわ」

「わては武器よりも、その身のこなしに惚れ惚れしますよって。わての腕の位置と筋肉の動き方から剣筋を読んでるんやろ？」

「……」

「振り始めと切り返す時は、どうやっても速さは落ちてまう。リッパーはんの目を誤魔化すんは厳しおすなあ」

ラミナは刃が付くあらゆる武器を使う。

故に「リッパー」と呼ばれているのだが、その真価はその武器達を使うこなす体術である。

ツマベニの斬撃は恐ろしいが、使っているのは熟知した刀。

姿勢や握り方、筋肉の動きを捉えれば、その剣筋を読むのは比較的容易い。

これまでの戦いから、【蛇活】などの関節を外す様子もない。

なので、ツマベニの斬撃は、人の関節可動域から外れたモノはないと判断できる。

「避けるんが精一杯やけどなー」

「嫌やわあ。躲されるんが一番屈辱的なんはリッパーはんもよお分かってはるやろうに」

防がれるならば、防御ごと斬ればいい。

しかし、避けられてしまえば、どうやっても斬ることは出来ない。刃が届かない。

それは刃の武器を扱う者にとって、何よりも屈辱なのだ。

「せやから……あんさんらを斬りたあて斬りたあて、たまらんのやあ  
ああ!!」

目を見開いて、狂気的な笑みを浮かべたまま斬りかかるツマベニ。しかし、向かったのはラミナではなく、二丁銃剣を構えるロストマンだった。

その瞬間をラミナは逃さなかった。

体からオーラを噴き出し、右手に具現化したのは螺旋剣。

回転させて帯電するのを確認した瞬間、斬りかかっていたツマベニと下がって躲していたロストマンは、弾かれたように左右に跳ぶ。

「ええ加減に……」

ラミナは左足を大きく踏み出す。

「せえやイルミイイイ!!」

ドツツツパアアアアアアン!!

ラミナが右腕を振り抜いた瞬間、轟音と閃光が中庭を支配する。

ロストマンとツマベニは片腕で目を守りながら、建物内に飛び込む。

ラミナは息を吐きながら屋根の上に移動する。

光が落ち着くと、中庭の様相が一変していた。

ホテルの北側が抉られたように崩れ去っていた。

ラミナはツマベニ達ではなく、全く仕事をしないイルミととつとと死にも逃げもしないターゲット達を狙ったのだ。

「ふん！　これで終わりやな。ほな、逃げよか」

痺れた右腕をプラプラと振りながら、崩れ去ったホテルを見下ろすラミナ。

その時ラミナは、化け物達との戦闘で少なからず消耗し、仕事を終

えたと思ったことで一瞬だけ集中と殺意を緩めてしまった。

その隙を、飢えた獣は見逃さなかった。

ラミナの右上腕を、銀閃と一筋の風が通り過ぎた。

「!!!」

大きく目を見開いたラミナは、右腕の感覚が消えたのを感じ、真下から獣が飛び出してきた。

「やられてしもたなあ……お互いに♪」

目を見開いて嗤うツマベニが、右手の刀を振り上げる。

次の瞬間、

ラミナが目を見開いたまま、無拍子で飛び出してツマベニの懐に潜り込んでいた。

ツマベニは背筋に悪寒が走り、反射的に左腕を胸の前に動かす。

直後、強烈な衝撃が襲われて吹き飛ばされた。

左脚を突き出しているラミナの姿を見て、蹴られたことを理解したツマベニ。

(全く見えへんかった……いー！ 殺気すらも……くふ♪)

それでも笑みを更に深めるツマベニ。

まだラミナに先があると理解したから。

中庭に下り立って、再び詰め寄ろうと顔を上げる。

しかし、ラミナはすでにいつも通りの雰囲気に戻っており、めんどくさそうな顔で斬り落とされた右腕を左脇に挟んで去ろうとしていた。

「やらかしたわ……。ホンマ……最悪の仕事やな」

「逃がさへんよおお!!」

ツマベニが獣のように身を低くして駆け出そうとした瞬間、側面から一筋の閃光が放たれた。

ツマベニは躲そうと小さく跳び上がったが、そこにもう一発の弾丸が迫って来ていた。

「っ!! ひゃあ!!」

左手の短刀で弾丸を斬り落とそうと刃が触れた直後、

バアアアン!!

弾丸が爆発して、ツマベニは反対側のホテルに吹き飛ばされて突っ込んだ。

突っ込んだ建物が崩れていくのを見ながら、ラミナは背を向けてホテルから去る。

「借り1つ、やな」

そして、銃弾を放ったロストマンも銃剣を消して、背を向ける。

「貸し1つ、だぞ」

そう言っつてホテルから姿を消した。

その直後にようやく警察が押し寄せてきたのだった。

ラミナはホテルから数km離れた路地裏で、壁にもたれて座り込む。

「はあく……しんどお」

「馬鹿なこと言っつてんじゃないよ」

大きいため息を吐いてボヤくと、マチとカルトが下りてきた。

マチは不機嫌全開でラミナに歩み寄り、カルトはラミナがやられていることに啞然としていた。

「とつとと腕出しな」

マチはラミナの右傍に屈んで、不機嫌に言い放つ。

ラミナは拗ねた顔を浮かべてそっぽを向き、右腕をマチに渡して右袖を捲る。

マチは捲った右袖を念糸で縛る。

「力抜いて、オーラ止めて。腕は持つて」

「……へ〜い」

「あ?」

「ハイ」

傷口から血が噴き出し、傷口に合わせるように右腕を固定する。マチが念糸を用意して、傷口を注視する。

「……行くよ。【念糸縫合】」

次の瞬間、マチの右腕がブレ、猛スピードで念糸が傷口と傷口の間に結ばれていく。

路地裏の暗闇に淡く輝く念糸が舞う。

それは30秒もせずに関わり、マチの手が止まった時には太い光がラミナの腕を繋ぎ合わせていた。

「終わり。血管、神経、筋肉、骨、100%繋げたよ」

そう言いながら右手を引くと、傷口と傷口が引き寄せられるように合わさる。

残ったのは右上腕を1周する皮膚の切れ目のみ。

右手を離握手して感覚を確かめたラミナは、大きくため息を吐く。

「ハァー……おおきに。代価は？」

「当分下僕。金は、あいつに貰う」

ずっと下僕だったとツツコもうかと思つたが、マチが縫合を始めた直後に現れたイルミを指差したので、言うのを止めた。

今のマチを刺激したくないというのが本音であるが。

「いや、悪い悪い。つい見入っちゃつた」

「嘘つけ阿呆。お前のターゲット、アバズレの方やつたな？」

「あ、やつぱ分かつた？」

あつげらかんと言い放つたイルミに、ラミナとマチは青筋を浮かべて、カルトは目を丸くする。

イルミは両手を上げて、

「言つとくけど、あのターゲットも嘘じゃないよ。あれはカルト達の方の仕事だったからね。だから、報酬は全額ちゃんと出るよ。交渉も嘘じゃない。俺の方は失敗だけどね」

「ほんなら、自分でやれや」

「いやいや、流石にあの面子は俺でも厳しかったんだよ。だから、アバズレが殺れたら、すぐにそつちのターゲットも始末するつもりだったんだぜ？」

「やかましいわ。道理で全っ然殺さへんと思たわ。あいつら殺したら、うちが戦う理由無くなったでな」

「そうなんだよ。けど、最初に正直に言うに乗らなかつただろ？」

「当たり前や。ロストマンと掟魔がおらんかったら、話は別やったやろうけどな」

「だから、厄介だつて言つたら？ どうやって君を乗らせるか必死に考えたんだ」

「このクソが……」

「でもアバズレの奴、全然隙見せてくれなくてさー」

「無理や無理。あいつに奇襲するんやったら、ああなる前にやらんな」

「うん、だから失敗。で、取引で騙した分の弁償はちゃんと払うよ。治療費込みの100億でどう？」

「……ま、そんなところやな。ただ、お前からの依頼はもう受けんで」  
「分かつてるよ。流石に親父達やクモをこれ以上怒らせる気はない」

イルミの言い方に何かが引つかかったラミナ。

「……待てやコラ。お前、何したんや？」

「ヨークシンで騙した埋め合わせにヒソカに医者紹介して、仕事手伝つてもらった報酬でクロロの情報渡した」

「……お前なあ……！」

ラミナは左手で額を押さえて項垂れ、マチは殺気を全開にして、カルトは流石に呆れた。

イルミからすれば、クロロの情報を隠しておく必要性はないので、話す可能性があると思つてはいた。

しかし、仕事の報酬となるとラミナからすれば正当な取引なので、怒るに怒れない。

「マチ姉、イルミにキレルだけ無駄や。もう情報渡しとるし、あれだけ暴れたらどつちにしろヒソカも分かつたやろ」

「ヒソカに教えたのは美術館襲撃直前だから、今の居場所はバレてないと思うよ。教えた場所から、あそこまで数日はかかるはずだし」

「ヒソカってホーム知つとるん？」

「……知らないはずだよ」

「なら、メールでクロロに連絡しとき。それでクロロなら十分身を隠せるやろ」

「……そうだね」

「ほんじゃ、うちらは行くで。ええよな?」

「ああ。今回は悪かった。報酬は爺ちゃんの仕事の時の口座でいい?」

「それでええ。はあ……早よ寝たい。当分はカルトに合わせた仕事よこせや。うちの腕も本調子に戻るまで時間かかるし」

「爺ちゃんに言っとく」

そう言つてラミナ、マチ、カルトは街を離れるために走り出す。

イルミもすぐにその場から離れて、後始末に動くのだった。

無残に崩れ去ったホテルにて。

警察、救急車、救急隊などが走り回つて、被害状況を調べていた。

そこにはミザイストムと坊主頭に金環を身に着けた十二支んが『申』サイユウ、そして白マントを靡かせる賞金首ハンターのブシドラがいた。

「おーおー、こりやスゲエな」

「この惨状にハンターが関わっているとバレれば、協会の名誉が汚される! やはりハンター十か条の改革は必要だ!」

「今は被害の確認が先だ」

サイユウは小指で耳を穿りながら言い、ブシドラは腕を組んで顔を顰めてラミナがハンターを名乗っていることを嘆き、ミザイストムはそれを宥めながら周囲の警戒を続けていた。

「ゾルディック家もいたかもしれねえんだろ? 賞金首のオンパレードだな」

「監視カメラのデータが完全に破損している。ゾルディックの方は確認しようがないな」

ラミナの【天を衝く一角獣】の攻撃で吹き飛んだ建物の一室に監視

カメラのサーバーがあつたのだ。

完全に崩壊したことでデータが取り出せず、ホテル内の監視カメラはただの飾りとなっていた。

その時、同じく崩れていた西側の建物の瓦礫が突如舞い上がる。

ミザイストム達はすぐさま現場に走る。

「ハンターだ!! 全員下がれ!!」

「巻き込まれても助けねえぞお!!」

ミザイストムとサイユウの言葉に警官達は慌てて離れる。

瓦礫の下から人影が飛び出して、崩れていない屋根の上に下り立つ。

「ふあ〜……ちよつと寝てしもたなあ。久々に動き過ぎて疲れてもうたんかねえ」

人影、ツマベニは周囲の状況など気にも留めずに欠伸をして首をコキコキと鳴らす。

爆発で吹き飛ばされて瓦礫に埋まり、今まで気を失っていたのだ。

最後のラミナの一撃に気を取られ過ぎて、ジャンプしていたせいで爆発の衝撃をいなし切れなかった。

「あれは、『アバズレ』……ツマベニか……!」

「ん? お? おやおやまあまあ、十二支んのお歴々やないの」

「んだよ、全然ピンピンしてんじやねえかよ」

「それでもありまへんえ? 左腕は折れてもうてるし、オーラも随分使してもたねえ。お宿も壊れてもうたし、寄生主も殺されてもうた。

今回はボロボロですよって」

「ならば、大人しく投降しろ!」

ブシドラの警告に、ツマベニは声を出して嗤う。

「くふふふ♪ おもしろいこと言いはるねえ。捕まったところで楽しめるものはないでっしゃろ? わてがそんなん受け入れると思てはるのん?」

「思わねえよ」

「わてはリベンジせなあきまへんよって。今日はここでさいならさせてもらいます」



「逃がすと思うのか!？」

「別に追いかけて来てもええけど……ちやんと、覚悟してからおいでやす♪」

ニヤリと獣の笑みを浮かべて言い放ったツマベニは、ヒラリと屋根から街の闇へと飛び込んでいった。

「逃がすか!!」

「待て、ブシドラ!!」

ブシドラはミザイストムの制止を無視して追いかける。

「くっ! 警官は誰も追わないように伝令しろ! あいつは常人が手に負える人間じゃない!!」

「は、はい!!」

ミザイストムは警察等に被害が出ないように指示を出す。

近くにいた警官達はすぐさま走って、ミザイストムの指示に従う。

「サイユウ。お前まで突っ走るなよ」

「命令すんじやねえよクソボケ。行くわけねえだろ。他にもいるかも知んねえのに、下手に動けるかよ。ブシドラはいいのか?」

「ああ。多分追いつけん。逃げ出したツマベニは一度見失うと、見つからんことで有名だからな」

「それにしても、やべえくらい気持ち悪いオーラだったぜ。あれで手負いとかどんだけだよ」

「会長が遊びたがってたくらいだ。かなりの実力者だろうさ」  
「げえ……」

ネテロが戦いたがるならば、十二支んレベルであることは疑いようがない。

十二支んの戦闘組でもあるサイユウでも、油断は出来ないということだ。

「闇の深いところで生きる連中の実力は計り知れん。下手に手を出すべきじゃない」

そう言うミザイストムの頭に浮かぶのは、同じ十二支んの1人。

（奴はどちらかと言えば黒幕側だが……。それでも、奴と同じ闇の世界で戦い抜いている連中に絶対隙を見せられない。何が『隙』となる

のかも、分からないのだから)

これだけ暴れておきながら、ほとんど情報を遺さず、中心人物は誰一人死んでいないのだから。

暗殺者でこれだ。

黒幕気質の者まで参戦すれば、ハンター協会ですらどこまで応戦できるのか。

それどころか、ハンター協会こそ一番警戒しなければならぬかもしれないことに、ミザイストムは恐怖を憶えずにいらなかった。

## #87 イチャイチャ×ノ×イチャイチャ

ツマベニ達との戦いから4日。

ラミナ達は未だにゼルンロサスでのんびりとしていた。

拠点に帰るには流石に暴れ過ぎて目立ってしまったので、しばらくゼルンロサスでやり過ごすことにしたのだ。

しかし、ホテルで泊まり続けるのも通報されたら面倒なので、街外れの2LDKの部屋を借りた。もちろんラミナの金、というかイルミからの慰謝料で。

そして、この4日間はラミナはマチの接待に全てを費やしていた。変装として、マチと同じピンク髪のカツラを被り、ゼルンロサスで購入した赤の筒袖の半着に黒の帯を着させられた。下は黒のホットパンツを履いており、

ついでにカルトも、

「アンタの兄貴達のせいでラミナがこうなったんだから、アンタもだよ」

ということ、カルトもピンク髪のカツラを被り、白を基調とした着物と赤の帯を着させられている。

マチはカツラは被っていないが、髪型を少し変えて黒の半着、白の帯を身に着けている。

これはこれで凄まじく目立っており、カルトは渋々とした表情でラミナと共にマチの無茶ぶりに付き合っていた。

「まあ、お前ももう顔バレとるし、諦めえ」

「……分かってる」

トルシアでの騒動は未だにニュースを騒がせていた。

しかし、やはりラミナ達はもちろん、ツマベニのことも公表されず、マフィア同士の抗争とされている。

ブルブ美術館のこともまだ捜査中とのニュースが流れていたが、遂に幻影旅団の名前が表に出始めていた。

「何で今更？」

「多分トルシアの事件でマフィアンコミュニティの力がまたガタガ

夕になったんやろな。報道を抑えさせることが出来んほど、落ちこぼれてきたつちゆうことやろな」

「その結果、クモが話題を搔つ攫ったってわけね」

「ここはマファイア連中も運が良かったみたいやな」

そう、運がいい事に『ブルブ美術館からすらも盗みを成功させた幻影旅団が相手ならば、マファイアンコミュニティが出し抜かれても仕方がない』という流れが生まれたのだ。

しかも、マファイアンコミュニティの十老頭が昨年のヨークシン時に死んでいたことも報道され、それも旅団の仕業となつて広まり、マファイアンコミュニティの勢力衰退が白日の下に晒されたのだ。

そのため、トルシアの事件も十老頭の後継者争い扱いされ、しばらくこの闘争は続くだろうとコメンテーターが顔を顰めて話していた。間違つてもいないが、真相を知らない者がそれを語ることにラミナ達は呆れながら部屋でテレビを眺めていた。

ちなみにマチはソファでラミナに膝枕させながら、ラミナが作ったマフィンを頬張っていた。

カルトは巻き込まれないように座布団に正座しており、ラミナはもう全てを受け入れており何も言わない。

「まあ、マファイアンコミュニティはしばらくどんちゃん騒ぎやろな」

「マファイアってまだ残つてんの？」

「ちっこい組が潰れた組のシマを取り込んで台頭してきたり、落ち目の組から抜け出して新しく作つたり、クーデターで組の頭が変わつたりやらバンバン起きとるみたいやで。イタチごつこな感じになつて来とるなあ。さらにタラチュネラファミリーとか国が後ろにおけるマファイアも出張つてきて、マファイアンコミュニティの勢力を更に削ぐうとして完全に戦争が始まつとるな」

「じゃあ、またこの前みたいな依頼が来るかもつてこと？」

「そこはシルバやゼノ次第やろ。シルバとゼノはあそこまでの依頼は出さんと思うで？ ゾルディック家は確かにクモと繋がつとるけど、同盟を組んだわけやないからな。持つてきたとしても、カルトをメイ

ンに働かせる依頼やる」

「……それはそれで面倒だね」

「しばらく依頼はないやる。うちの完治を待つと思うで」

今回のイルミのやり方は殺し屋同士では御法度に近い。

法を犯す殺し屋だからこそ契約や取引は最も重視する事柄だ。もちろん騙された方も悪いのだが、騙す方とて卑劣と言われ普通ならば絶縁になる。

それを本人は認めていないとはいえ、身内と呼ぶラミナに行ったのだからシルバやゼノとて当分は顔など出せないだろう。

ただでさえ、キルアとカルトが世話になっていているのだから。

「うちも当分は修行のし直しやなあ。体が鈍つとる感じやし」

「そうだね。右腕を斬り落とされるへましたし」

「……せやな」

ズバツと言われて、グウの音も出ないラミナ。

どう考えても、今回は100%ラミナのへまである。

「とつとと本気でやっておけば良かったのに、やる気も出さずに余裕ぶるからだよ」

「……反省しとります」

真下からジト目を向けられて、そつぽを向くラミナ。

その時、ラミナの携帯が震える。

「ん？………振込？」

「は？ 針野郎からはもう報酬は振り込まれたんでしょ？」

「のはずなんやけど………つて、ああ。ツエズゲラか」

「誰？」

「ゲームで会った奴や。キルア達に協力した報酬やな」

「………ああ」

思い出したのか、キルアの名前に苛立ちを隠さないマチ。そして、カルトはバツ！とラミナに振り返る。

ラミナは苦笑してマチの頭を撫でて、新しいマフィンをマチに啜えさせる。

「報酬が払われたつちゆうことはゲームクリアしよったんか。ボマー

から最後のカードも奪えたみたいやな」

「んぐんぐ……いくら？」

「2億。まあ、一回のイベントに付き合うただけやしな。こんなもんやろ」

「ふうん」

実際はバツテラの依頼キャンセル料から支払われただけで、ゲームクリアもしていないし、ゲンスルー達からもカードを奪ってはいない。

それどころか、ゴン達にゲンスルー達を押し付けて、ゴン達は数日後に戦いを始める準備をしているところだったりする。

ちなみにツエズゲラはツエズゲラで、ラミナ達の情報を調べて事件の事を知り、報酬を払うべきか葛藤していた。

結局契約に従って払うことにしたが、もう会うのはやめようと仲間と話し合って決めたのだった。

ラミナは携帯を置いてお茶を飲む。

「それにしても、これからどうしたもんか……。拠点に帰るんはちと厳しそうやし……」

「十二支ん、だっけ？　なんかウロチョロしてるハンターって」

「みたいやな。率先して動いとるんはミザイストムっちゆう奴らしいけど」

情報屋サイトとハンターサイトで確認したところ、カゴツシの吹き飛ばした家とトルシアの崩壊したホテルの現場に現れたらしい。

間違いなくラミナを追いかけている。ここがバレるのは問題ないが、拠点はバレるのは非常に厄介だ。

「十二支んは会長が選んだ実力者や。ミザイストムは警備会社を営しとるダブルハンターらしいから、警察関係者にハッカーハンター、情報に強いハンターとも仲がええやろうしなあ。流石に油断出来んでな。他の十二支んにも探偵をしとる奴もおる」

「アタシらとはどれくらい？」

「ちよつとだけうちらが分が悪いな。会長が参戦したら無理」

「……ふうん」

1人1人であるならばそう簡単に負けないだろうが、総力戦となる  
とカルト、パクノダ、コルトピが厳しいとラミナは考える。

ジンだけでも正直団員2人がかりでないと厳しい可能性が高い。

なので、必要以上に刺激するのは避けたいというのがラミナの本音  
である。

「ウボオーがおつたら、大分話は変わったと思うけどな」

「その場合、アンタかカルトがいないけどね」

「まあ、うちは元々ヨークシンの後は4番でクモに入るつもりやった  
し、カルトが団員やないっちゅうだけちゃうか？　うちの弟子みたい  
な感じで付き添いやったと思うで」

恐らくゾルディック家は何かと理由を作ってカルトを押し付けて  
きたと考えているラミナ。

カルトも団員になれなくても、ラミナに近づくつもりだったのでそ  
うなっていたらうなと頷いていた。

「まあ、まだクロ口達もホームに戻つたらんし、ゆっくりしよか」

「まあね」

その後マチはそのまま昼寝をして、ラミナは夕飯の支度をしたかつ  
たが動けず顔を顰め、カルトは呆れながら念の修行を始める。

ノートパソコンを使おうにも膝が埋まっているので使えず、ラミナ  
はただひたすらにマチが起きるのをテレビを眺めながら待つのだつ  
た。

「……カルト、茶あ淹れて」

「……はあ、分かった」

ラミナもやや眠気に襲われながら、空のコップを掲げる。

カルトはため息を吐いて、大人しくコップを受け取ってお茶を淹れ  
に行く。ここで渋れば夕飯で押揃われるのは目に見えているからだ。

ちなみにカルトは家の中ではカツラを外しているが、ラミナはずつ  
と被らされている。

『脱いだら、念糸で縫い付けるよ』

そう姉に脅されたからだ。

「は」

「さんきゅ〜」

微睡みながらコップを受け取って、一口お茶を飲むラミナ。

その後、ラミナも背もたれにもたれ掛かって、昼寝を始める。

カルトは眠っている2人を見て、

(……ホントにそっくりだなあ)

と、呆れながら念の修行を続けるのだった。

2時間後、ラミナはマチに叩き起こされて夕飯の支度を始めていた。

『とつとと起きな』

『イダア!』

文字通り叩き起こされて、やや不機嫌な顔で調理を進めていた。

もちろんマチはソファでふんぞり返って缶ビールを飲み始めており、カルトはピシツ!と背筋を伸ばして正座をして大人しくしていた。

「今日の夕飯なに？」

「んー……角煮、八宝菜、麻婆豆腐、キンペダックの用意中」

「ふうん……魚は？」

「……揚げ？ 蒸し？ 煮つけ？」

「ん〜……蒸し」

「あいよ」

ラミナは文句も言わずに冷蔵庫から魚を取り出して下拵えを始める。

そのやり取りにカルトはもう同情を憶えなくなっていた。

毎日似た会話が行われているのだから。

『肉が少ない。揚げた奴がいい』

『へいへい』

『もつと牛系の肉が食べたい。ローストビーフ、ステーキ、揚げ物』

『あいよ〜』

『ギョーザとラーメン』

『おう』



『あ。あと、もつの煮込み、焼き飯も欲しい』

『へーい』

と、追加の仕方が恐ろしく雑で、数が多いのだ。しかも微妙に手間がかかる品ばかり。

カルトは手伝うフリして大丈夫なのか訊いたところ。

「可愛いもんや。流星街における時や他の団員が揃つとる時は、もつと酷いし量も多いでなあ」

と遠い目をしながら答えられて、カルトはもう何も言えなかった。そして、テーブルにいつも通り見事な料理が並べられる。

ちなみにカルトにはさりげなくゴマ団子が用意されていたりする。これがまたラミナに逆らえなくなっていく要因となっていくのだ。

ラミナは紹興酒までも用意して、マチに出す。

カルトはもちろん普通にお茶である。

かなりの量だが、これもまたいつも通りどんどん皿から消えていく。

流石に追加を注文することはなかったが、夕食を食べ終わったら酒盛りが始まるので結局追加を作ることになるラミナである。

一先ず食べ終えた皿を手早く洗っている間、マチは新しい酒を出して下着姿になる。

ラミナもおつまみを用意して、上はブラだが下はハーフパンツ姿になる。もちろん、カツラはそのままである。

そして今日は、寝間着に着替えたカルトもマチに確保されていた。

「な、何でボクまで……!」

「アンタもそろそろ酒の味を覚えたら? 別に未成年とか気にする必要ないでしょ。殺し屋なんだし」

「ラ、ラミナ……!」

「ん? 別にええんちゃうか? 毒の訓練にでもなるやろ」

ラミナは毒の訓練のおかげで滅多なことでは酔わない。

マチもある程度訓練しており、ラミナほどではないが毒に耐性がある。

決して、妹に負けたくなかったからではない。

「師匠の許しも出たし、ほれ」

ガツシリと抱えているカルトに紹興酒が入ったコップを押し付けるマチ。

もちろんカルトの筋力で振り解けるわけもなく、コップに注がれていた全ての酒がカルトの喉を通り過ぎる。

毒とはまた違う熱さが喉を通り過ぎる。咽そうになるが、マチが口を押える。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

「つていうか、酒つて飲んだことないの？」

「……少しだけ、数年前に……」

「なんだ、じゃあラミナと大して変わらないじゃない。いけるでしょ」

「いや、うちも最初は駄目やったからな」

ラミナは呆れながらもマチを止めずに酒を煽り、マチとカルトのコップに酒を注ぐ。

やり方はどうあれ、酒に耐性をつけなければならぬのは事実だ。酒の味が分からなければ、酒に入れられた毒に気づけないのだから。

ポイツとカルトがマチとラミナの間に放り込まれる。

直後、するりと左右からマチとラミナの腕がカルトの両肩に回されて、逃げ道を塞ぐ。

下着姿の美女（見た目）に挟まれれば、健全な10歳の少年であれば赤面は間違いないのだが、そこだけは妙に熟成しているカルトはその程度では取り乱さない。

何故なら襲いかかってくるのは『色気』ではなく、『酒気』なのだから。

「 飲め 」

「……………」

数時間後、カルトは顔どころか首まで真っ赤にして寢室の布団に転

がることになったのは言うまでもない。

カルトを布団に放り投げてきたラミナは、リビングに戻ってマチとまた酒を飲む。

ちなみに寝室は3人一緒で、布団を並べているだけである。

「あの調子で大丈夫なの？」

「まあ、これからも適度に飲ませていくしかないやろ」

「そつちもそうだけど。戦闘の方だよ」

カルトを揶揄っていた雰囲気は一切鳴りを潜め、真面目な顔でウイスキーが入ったグラスを傾けながら言うマチ。

ラミナは肩を竦めて、

「うちの身体が治らんと修行もつけられんからなあ。ただの組み手だけやとそろそろ限界があるし」

「けど、アンタだって修行し直すんでしょ？」

「せやなく……流石にちよつとここ最近人の事や仕事に時間取られ過ぎたからな。鈍つとる体引き締めんと。そこにカルトも巻き込むつもりではおるで」

「まあ、アタシも最近本気で体動かしてないし、それもいいかもね」

「武器もちよつと補充したいでな」

2人はそのまま酒を飲み続けて、日付が変わった頃に寝室に行き、マチとラミナは寄り添う様に布団に潜って眠りにつくのだった。

それから更に数日後。

ようやくラミナの腕もほぼ完全に回復して、マチも満足したのかカツラや着物を強制しなくなった。

と言っても、変装のために外出時はラミナもカルトも被り続けているが。

「この街にも飽きたし、【ガスラベス】に行かない？」

「ガスラベス？ カジノでもやるんか？」

「やってもいいし、いいモノあったら盗んでもいいし。そこで2, 3日遊んで、修行しにいけばいいでしょ」

「まあ、ええけど」

というところで、ラミナが車を用意して3人はガスラベスに向けて出発した。

ノストラード組拠点。

スーツを着たクラピカは、部屋に入って中にいる者に声をかける。

「センリツ、バシヨウ」

「ん？」

「なに？」

「護衛の仕事だ」

「私も？」

「ああ。少し厄介そうだが、成功すれば金になる。私は賭博の方でリンセンと動く」

「厄介そう、ねえ。まあ、いいぜ。用心棒の仕事で厄介じゃない方が珍しいしな」

「助かる」

「で？ 依頼人は？」

センリツとバシヨウはソファから立ち上がりながら尋ねる。

クラピカは頷いて、

「依頼人はナダメジマファミリーの若頭。護衛対象は、その若頭の5歳の娘だ」

「……確かに厄介そうだなあ」

子供が相手と聞いてバシヨウは小さくため息を吐く。

「期間は一週間。外遊中の護衛とのことだ」

「外遊ってことは、あまり自分の組の護衛は動かせなかったってことかしら？」

「そこが『厄介』な理由なんだろうな」

組の若頭が自分の娘の護衛を、他の組に任せるとような状況なのだからぶっちゃけ少し厄介なんてレベルではない気がするバシヨウとセンリツ。

しかし、クラピカがそこを調べていないわけではないわけではないだろうし、2人でも問題ないと判断した以上そこまで大事でもないのだろうと考える。

少しづつノストラード家も持ち直してきているが、やはり念使いを増やせる余裕はなかった。なので、クラピカはセンリツとバシヨウ、リンセンの3人は一番失えない存在なのだ。

ボスやその娘よりも。

「場所は「ガスラベス」。ヨークシンとは違って、場所に気をつければ抗争を仕掛けてくることはないだろう。よろしく頼む」

再び因縁が巡り出そうとしていた。

## #88 ヨソウガイ×ナ×ジヨウキヨウ

ガスラベスはサヘルタ合衆国一の観光都市だ。

多くのカジノが存在しており、合法非合法を合わせると数える気にもならないほどになる。

カジノと言えばマフィアが裏で関わっているそうだが、合法カジノでは国とプロハンターが関わっているため、マフィアは地味に非合法の方に追いやられている。

特にヨークシン事変以降のゴタゴタで合法側で気張っていた組の多くも、寄親や寄子への対応で資金難に陥って潰れていった。

今ではマフィアンコミュニティの合法カジノは中規模の店しかなく、経営しているマフィアはずっと前に十老頭争いに負けて、ヨークシンにも顔を出さなかったために生き残ったなど、随分前に落ちぶれてカジノ経営で手一杯で今のコミュニティ内の抗争に巻き込まれていない運がいいのか悪いのか分からない組である。

カジノ以外でも他の国の観光名所を模した建物があったり、劇場があったり、無料ショーなどが24時間どこかで催されているなど『眠らない街』として有名である。

ラミナ達は夕方に到着して、安宿に泊まる。

「カジノでも行くんか？」

「この格好でもいいんだっけ？」

「行けるところはあると思うぞ。まあ……」

「まあ？」

「カルトが入れるかどうかは知らんけど」

「……」

どう見てもカルトは子供にしか見えない。なので、基本的に入店を止められる可能性はある。

ラミナとマチだけで行くならば全く問題ないだろうが、その場合カルトは1人で暇つぶしをしなければならぬ。

「非合法カジノやったら行けるかもしれないけど、確実にカモ扱いされて絡まれるやろな」

「……面倒だね」

「まあ、そもそもの話、非合法カジノはマフィアンコミュニティの連中が仕切つるところばっかやから、うちらが行ってバレたら大騒動やけどな。特にうちとカルト」

「変装すれば行けるんじゃないの?」

「まあ、行けると思うで。カルトの問題は変わらんけど」

「とりあえず行こ。変装してさ」

という長女の号令で向かうことにした3人。

ラミナはピンク髪を一本結びの三つ編みのカツラ、上は黒のジャケットに白のシャツ、下はスキニージーンズに着替える。

マチは肩ほどの長さの黒髪のカツラに、上は黒のライダーズジャケットに赤のTシャツ、下は黒のレギンスパンツにショートブーツという、ラミナ風の着こなしをしている。

カルトは茶髪ストレートロングのカツラをうなじ部分で団子に纏め、赤の着物に黒の帯を選んだ。

「殴り飛ばすはアリやけど、殺しはナシな」

「二分かつてる」

ということ、ラミナが子供でも入れる場所を調べて、3人はそこそこ大きい見た目ホテル風の非合法カジノに向かう。

15階建てのビルで、11階より上がスイートルームと偽ってカジノを経営している。

ラミナは合言葉をロビーで話して、カジノに入るためのカードキーをもらいエレベーターに乗って上がる。

カジノに入って、ラミナが換金してマチとカルトに渡す。

「何するの?」

「アタシはポーカーでもしてくるわ」

「ん、うちはまずスロットでも行こか。カルトは好きな方について行き。ただ、1人になるんはやめとけや」

「分かった」

カルトは領いてマチの後について行き、ラミナはスロットに向かう。

スロット用のコインに換金したラミナはスロットに座り、早速一回  
回す。

しばらく回転するリールを見つめ続け、ボタンを押していく。

タツタラー♪

初っ端から柄が揃い、コインがジャラジャラと排出される。

「ふうん……特に弄つとらんみたいやな。……どれくらい外すか  
……」

ラミナは腕を組みながら、再びコインを投入する。

すでにラミナはスロットの回転と反応の速度を見切ってしまった  
のだ。

なので、むしろ運営側から睨まれない程度に外す方に意識を向ける  
ことになる。すでにスリーセブンを当てるなど百発百中だと確信し  
ているのだから。

とりあえず、喧嘩を売られる前に稼げるだけ稼ごうと思い、ボタン  
を押してスリーセブンを揃える。

パンパカパーン!!

大当たりを引き当てて、抱えきれない量のコインが排出される。

ラミナは周囲から向けられる視線を無視して、近づいてきたスタッ  
フからコインの入れ物を受け取って入れていく。

ラミナは隣の台に移動して、再びスロットを回してスリーセブンの  
次に大きい当たりを揃え、またコインが大量排出される。

頬を引きつらせて近づいてきたスタッフから、また入れ物を受け  
取ってコインを入れて、また台を変えて今度はしばらくわざと外す。

それにスタッフがホツと息を吐き、周囲の者達も興味を無くした瞬  
間、

パンパカパーン!!

『!!?』

再び大当たりを出して、大量のコインを獲得するラミナ。

スタッフは顔を真っ白にして、震えながら入れ物を渡し、ラミナは  
涼しい顔でコインを入れていく。

そこで一度換金所に向かい、20枚ほど残して他のスロットコイン



をベット用のコインと交換する。

ラミナは一度ポーカーの席に向かうと、大勢の人が集まっているのが見えた。

まず間違ひなくマチだろうと人垣をすり抜けて最前列に出ると、退屈そうなマチが頬杖をつけてカードを持って座っており、その隣に小さく眉間に皺を寄せながらカードを見つめるカルトが座っていた。

ディーラーは顔を青くして頬を引きつらせており、同じく席についていた裕福そうな男2人も頬を引きつらせてカードを睨んでいた。

そして、マチの前には大量のベットコインが積まれていた。

(おおおお、マチ姉の独擅場か。カルトじゃ、まだマチ姉の表情を読んだり出来んやろうし、マチ姉の勘には勝てんやろ)

「降りる」

マチは表情を変えずにコインを掛ける前にカードをテーブルに投げる。それにカルトはしばらく唸るが、同じくベットせずに勝負を降りる。

他の2人も勝負を降りてお流れになり、ディーラーがカードを集め始めると、

「勝負すれば良かったのに。カルト、多分勝ってたよ」

と、マチがカルトに声をかける。

カルトは眉間に皺を増やし、

「……まだそこまで読めない」

「そんな難しいことじゃないと思うけどねって、来てたの」

マチはラミナに気づいて、声をかける。

ラミナは苦笑しながらカルトに近づいて頭を撫でる。

「やめときやめとき。マチ姉の勘には勝てんわ」

「……勘であれだけ勝てるのおかしいよ……」

「仲間内じゃマチ姉の勘はかなり重要視されるくらいや。ポーカー自体初めてのお前が勝てる相手ちゃうわ」

「そっちはスロットどうだったの？」

「儲けたで。イカサマ疑われそうやったから、一度抜けてきたんよ」

「ふうん。じゃ、アタシも飽きたし、ここまでにしとく」

マチが立ち上がって、コインをラミナに押し付ける。

ラミナは近くのスタッフからまた入れ物をもらってマチのコインを入れる。カルトもそこでやめて席を立つ。カルトのコインはすでにマチにほとんど取られていた。

「あんま面白くないね」

「正直、マチ姉にはカジノって向かん気がするわ」

負けたら負けたで不機嫌になって殺気を撒き散らしそうだから。

もちろん、そんなことは口にしないが。

その後は適当に色んなゲームを冷やかして、マチが満足したところでカジノを後にする。

ちなみに換金した金はもちろん持ち運べる量ではないので、口座に振り込まれることになった。

建物から出たラミナ達は無料ショーを数か所見て回って、初日は終了した。

翌日。

カジノはもう満足したのか、マチは「食い物巡りがしたい」と言い、ラミナとカルトも文句は言わなかった。

昨日と同じ変装で街に繰り出し、色々と食べながら無料ショーを見て、街を散歩していた。

大通りから一本外れた路地に入って、次はどこに向かうかと話しながら歩いてみると、

細い路地から小さい影が飛び出してきた、ラミナの脚にぶつかった。

「ん?」

目を向けると、そこにいたのは水色のロングウェーブヘアに、白のシャツに青いフリルスカートを着た少女だった。

少女は両目に涙を溜めており、何故かラミナの左脚に力強くしがみついていた。

「なんやチビッ子。迷子にでもなったんか?」

マチもカルトもめんどくさげな表情は浮かべても、流石に攻撃的な

発言はしなかった。

少女はラミナと目を合わせるが、身体を震わせて上手く言葉に出来ないのか口を開いては閉じるを繰り返す。

その様子にラミナは、

(……迷子にしては怯え過ぎやな。うちらを怖がつとるわけではなさそうやし……)

違和感を感じていると、

「見つけたぞ!!」

「もう逃がさねえ!!」

「ひっ!!」

少女が飛び出してきた細い路地からスーツを着たいかつい男2人が、駆け寄ってくる。

それに少女は小さく悲鳴を上げて、ラミナの背後に隠れる。

「おい女あ!! そのガキ寄こしな!」

「渡さねえと痛い目見っぞ!!」

「……はあ」

ラミナはため息を吐いて、少女に顔を向ける。

「チビッ子、あれはお前のお守りか?」

「!!」

少女は勢いよく首を横に振る。そして、またラミナの脚にしがみつく。

何故ラミナが守ってくれるかと思っっているのか分からないが、やはり怯えている子供を明らかにマフィア関係者であろう連中に渡すのは気が引けるラミナだった。

「……はあ。ちよつとだけ脚放してくれるか?」

「……」

少女は不安げだが、動き辛いというのは分かったのだろう。大人しく手を放す。

ラミナはそれに小さく頷いて、男達に顔を向ける。

「白昼堂々人攫いたあ度胸あるやつちやなあ……」

「おい!! さっさと渡せ!!」

「そう言われてもなあ……知り合いちゃうってチビツ子が言うてんねんけど」

「ああん!? んなことお前が知る必要ねえだろうが!!」

「ほな、お断りしとくわー」

棒読みな感じで言いながら、右脚を素早く2回振り上げて男達の股間を蹴り上げる。

男達は一瞬両足が地面から浮き上がり、何が起きたのか理解できないまま股間に走ったあまりの衝撃に口から泡を噴いて崩れ落ちて失神する。

突然崩れ落ちた男達に少女は涙を目尻に溜めたまま呆然とする。

「さて、なんか倒してしもたけど」

「その子、どうすんの?」

「まあ、警察に迷子つちゆうことで連れて行くんがええんちゃうか?」

あんま事情は聞きたあないし」

明らかに面倒事であることに呆れながら、ラミナは早々に少女をある程度安全な場所に連れて行くことに決める。

マチとカルトもそれに異論はなく、移動を始めようとしたが、少女は腰が抜けたのか座り込んでしまっていた。

それにラミナはため息を吐いて、左腕で抱え上げる。

少女は特に抵抗せず、それどころかラミナの首に両腕を回して強く抱き着いてきた。

「なんでアンタにそんなに懐いてんのかね」

「さあ?」

子供の考えなど分かるわけもなく、ぐずるよりはいいだろうと考えることにして歩き出すラミナ達。

しかし、数m歩いたところで、また人影が目の前に現れた。

「ここか!?!」

「無事?!」

「お嬢様!!」

現れたのはサングラスをかけたリーゼントの男、ハットを被った小柄の人物、そしてスーツを着た金髪ショートカットの女性の3人。

ラミナはその内1人、小柄の人物に見覚えがあった。

(こいつ……確か……)

とてつもなく嫌な予感がしたラミナだが、変装のおかげかまだバレていないようだった。

「お嬢様!!」

金髪の女がラミナに抱かれている少女に気づく。

恐らく本当に保護者なのだろうと推測したラミナはとりあえず早く渡して離れようと思い、少女を下ろそうとしたが何故か少女は腕を放さない。

「……おくい。お迎え来たぞ〜」

「……!!」

ラミナは少女の頭を撫でながら声をかけるが、やはり少女は腕を放さずむしろ更に力強くしがみつく。

「……なんでやねん」

「お嬢様。私です。ルシラです。さあ、こちらに。もう大丈夫ですから」

「や!!」

「なんでやねん」

何故か全力で拒否する少女。

ラミナは素でツツコみ、ルシラは崩れ落ちて落ち込んだ。

マチとカルトも呆れていたが、そこに小柄の人物―センリツがラミナに歩み寄ってきた。

「悪いのだけど、少しいいかしら？ お嬢様を安全な場所に連れて行きたいの」

「……はぁ」

ラミナはため息を吐いてマチ達に顔を向け、付いてくるか？と視線で問うた。

マチは肩を竦めて頷き、カルトは無表情で頷く。

それにまた小さくため息を吐いたところで、ラミナはあることを思い出した。

「ああ……このチビツ子追いかけてきよった連中は、そこで寝転んど

るで」

「……あの者達はどうせ下っ端だ。放っておけばいい」

ルシラが復活しながら言い放つ。

ラミナは少女を抱っこしたまま立ち上がる。センリツを見ると、彼女は僅かに目を丸くして顔を青くしていた。

それに気づかれたことを悟ったラミナは小さく舌打ちをして、少女にも聞こえないほど小さな声で、

「バラしたら殺す」

と呟いた。

センリツは小さく頷いて、僅かに震えながら先導を始める。

ラミナ達はその後に続いて歩き出す。

(さて、こいつらも問題やけど……マチ姉にバレるんも厄介よなあ)

センリツがいる以上、クラピカも来ている可能性は高い。

(ヨークシンで啖呵切ってもうたしなあ。それにマチ姉は間違いなくクラピカの仇で、クラピカも間違いなくウボオーとクロロを害したマチ姉の敵)

どう考えても出会った瞬間、殺し合いが始まる。

いや、始めなければならぬ。

それがマチとラミナにとっては『当然』であるからだ。

だが、今は面倒でしかないのも事実だ。

そろそろ一度周囲の目を旅団からズラしたいのもあるし、自分ばかり狙われるのもそろそろ鬱陶しい。

小声で相談しようにも、センリツに聞こえるので話も出来ない。

今のところ、マチ達は空気を読んでくれているのか黙って付いてきてくれるが、近いうちにラミナの態度に疑問を持つだろう。

(……面倒やなあ)

未だに強くしがみついている少女の背中を撫でながら、ラミナはどんなよりとした気持ちになるのだった。

移動した先は、喫茶店にある個室。

ラミナは椅子に座って、少女を隣の椅子に降ろそうとしたがやはり嫌がって離れない。

「……だから、なんでやねん」

「それについても説明させて頂きます」

「……えく……」

ルシラの言葉に嫌そうな声を上げるラミナ。その間に少女はラミナの膝の上で姿勢を変えて、後頭部をラミナの胸に預けた。

それにラミナは更に呆れた表情を浮かべる。

マチはそろそろ不機嫌さを隠しきれなくなっており、カルトもめんどくさいオーラを隠さない。

センリツは顔を強張らせており、バシヨウはこの状況に呆れている。

「改めて自己紹介を。私はルシラ。契約ハンターで、そちらのジョアナ・ナダメジマお嬢様の護衛です。こちらは同じく護衛のセンリツとバシヨウです」

「ナダメジマ……?」

ラミナはノストロードではないこと、そしてナダメジマの名前に聞き覚えがあったことに眉間に皺を寄せる。

「ガスラベスには依頼主である御父上と共に来られたのですが、お嬢様は少々特殊な才能があるのです」

「特殊な才能?」

「非常に直感が鋭いのです。それによって危険な場所や人物を予感したり、信頼出来る人物や最も頼りになる人物を見抜いたり、いる場所を探し当てます」

「……つまり、この状況は」

「お嬢様があなたの傍が今一番信頼できて安全だと、思っているからかと」

「……」

普通ならば「何言ってるの?」と言われるだろうが、ラミナにはとても身近に似たような能力を持つ姉がいる。

更には念能力でもある可能性があるので、否定する言葉が出なかつ

た。

「じゃあ、あの男共は？」

「そこは少々厄介な事情がありまして……。お嬢様の能力を知っている者や、御父上の失脚を狙う者達が雇った者だと思えます」

（……十老頭関係の抗争か？ それにしては随分と大雑把な……。ナダメジマファミリーはそこまでデカイ組やなかったはずやけど……。）  
ナダメジマファミリーは、マフィアンコミュニティ内ではノストラードファミリーと同じくらいの立ち位置で、十老頭には程遠かったとラミナは記憶していた。

（ヨークシン以降のドタバタで力をつけた？ いや、それにしてもチビツ子の護衛が中途半端や。契約ハンターしか護衛におらんとかありえへん。これだけの能力があるんやし。ノストラードの娘ほどではないけど、上手く使えば十分脅威を回避できるやろうに）

ラミナは色々と考えるが、問題はそこではないということをややぐ思い出した。

「まあ、チビツ子が狙われとるんは分かっただけど、この状況はどうしたらええのん？」

ジョアナはラミナの両腕を自分の腰に回さして、しっかりと固定している。もちろんラミナの腕も放さない。

「チビツ子がうちを信じてくれとることと、うちが今後もチビツ子を守るんは話が違うやろ」

「そうなんですよね……」

ルシラはラミナの言葉に項垂れる。

「つちゆうわけで」

ラミナは立ち上がって、ジョアナの両脇を抱えて持ち上げてルシラに渡す。

脇を抱えられたせいでラミナにしがみつけず、簡単にルシラへと手渡された。

「やー!!」

ジョアナは暴れるが、ルシラはしっかりと抱き抱える。

ラミナはその隙にとマチ達を伴って、出口へと向かう。



「ほな、後は頑張りや」

「おねえちゃん!! やー!!」

ジョアナの叫び声を無視して、さっさと外に出るラミナ達。

喫茶店から大分離れたところで、ラミナが大きく息を吐き出す。

「はあく、疲れた……」

「アンタって子供に懐かれんのかね？」

「嬉しくないわ。……ちよつと情報収集しよか。逃げるルートも考えときたいし」

「仕方ないね。ところでさ」

「ん？」

「アンタのこと、バレてない？ 特にあのちっこいのに。アンタも知ってそうよね。なんか、凄いイライラしたんだけど。もしかしてヨークシンのことでなんか関係ない？」

「……ホンマに厄介やなあ。勘っちゆうんは……」

やはり勘に引っかかっていたことに、項垂れて右手で顔を覆うラミナ。

睨んでくるマチの不機嫌オーラにラミナは両手を上げて降参を示す。

「はあ……あのちっこいのと男の方は、ヨークシンの時にノストラードファミリーにおつた奴らや」

「ノストラードって……鎖野郎の？」

「仲間やな。今は知らんけど……」

「会ったことあつたの？」

「ちっこい方はクロロを助けた時にクラピカの傍におつたんや。耳が凄く良くてな。心音とかで嘘を見抜いたり、盗み聞きするんや。どうやら、うちの声や心音とかで気づかれたみたいやな」

「ふうん……」

「やから、情報収集したいねん。クラピカがおるなら、敵に回ってもおかしくない。流星にあいつの能力は馬鹿に出来んでな。また除念師探しは嫌やろ？」

「まあ、ね」

「やから、殺すにしてもまずは情報がある。……多分この会話も聞かれとるやろうしな」

「ちっ……」

盛大に舌打ちしたマチに、ラミナは苦笑して肩を叩く。

そして、3人はパソコンがある場所に向かい、情報を集めることにした。

センリツとバシヨウは喫茶店の出口でラミナ達の姿を見送った。

「変な連中だったなあ」

「……」

「ん？ どうした？ センリツ」

バシヨウは黙り込んでいるセンリツに顔を向ける。

センリツは顔を盛大に顰めながら、背後を振り返ってルシラ達が来ないかを確認する。

「おい、本当にどうしたんだ？」

「……あの人」

「あ？」

「お嬢さんに懐かれた人……。例のラミナっていう暗殺者よ。クラピカと同期で、クモの仲間で、私達と戦った……」

「なんだと!?!」

バシヨウは目を丸くして、ラミナ達が消えた方向を見る。

まさか仲間の仇が目の前にいたとは考えもしなかった。妙に隙が無い連中であることは見抜いて怪しんではいたが。しかし、ジョアナが懐いていたことでそこまで悪人だとは思わなかったのだ。

「ってこたあ、他の2人も……」

「クモ、でしようね……。あの小さい子はゾルディック家の子じゃないかしら？ もう1人は多分地下競売を襲った団員の1人ね」

「……ブルブ美術館を襲って、まだ一月も経ってねえんだぞ？ それがこんなところで観光かよ。変装してるとはいえ……」

「変装もブルブ美術館を襲ったからっていうより、カゴツシであの子の家が壊されたからじゃないかしら？ 私の事に気づいた時は少

し焦ってみたいけど、ここに着いた頃には平常だったわ。他の2人に関しては、退屈だったり、苛立ったりつて感じだったけど。多分……いちいち追手を相手にするのが面倒つくくらいなのよ」

「バレたらバレたで構わねえってか……」

「ねえ、バシヨウ」

「ん？」

「クラピカにはこの事は報告しないでおきましょう」

センリツの提案にバシヨウは目を見開くが、すぐにその理由を理解した。

「まあ……今のクラピカや俺達に、あいつらを相手にしてる余裕はないわな。嬢ちゃんや依頼人を狙われたら、とてもじゃねえが守り切れねえ」

「ええ。幸い、向こうも私達を相手にする気はないみたいだから……クラピカさえ会わせなければ……」

「クラピカはカジノの方の商談でまだ数日は動けねえはずだからな。最悪の事態は避けられるか」

クラピカは現在大手カジノ経営会社と商談だ。

合法カジノの経営者との商談でホテルに缶詰め状態なので、よほどのことがない限りラミナ達と出会うことはないはず。

2人はそう考え、そう願っていた。

クロロにかけた念が解除された後から、再びクラピカは余裕がなくなつたように見える。

【緋の目】を探し始めたこともあるだろうが、それでもまた笑わなくなつた。

今の状況でラミナ達と遭うのはリスクが大きいとセンリツとバシヨウは考えたのだ。

命もそうだが、クラピカの精神面への影響が特に。

「幸いルシラは名前も聞かなかつたし、変装しているからすぐにバレることはないはずよ。けど……」

「あの嬢ちゃんは怪しいな。かなり離れるのをグズってたし……まあ、今も大泣きしてるが」

「それだけ不安なのよ。あの子はネオンお嬢様と違って、本当に子供なのだから。不安や不満はああやって表出するしかないわ」

「まあな。まったく……なんで俺達が会うマフィアの御令嬢は妙に厄介なのばっかなんだろうな」

「あの子達が厄介というよりも、その親側が厄介なんだと思うけどね」  
「それもあるけどよ。ま、デカイ子供よりは、本当に子供の方がまだ気持的的にはマシだがな」

「ふ、2人ともー!! いつまでそこにいるのですか！ は、早くこちらを!!」

「やー!! やー!! やー!!」

「……前言撤回だ。ああなった子供のあやし方は分からねえ」

「私もあそこまでとなると自信はないわね。フルーツでも落ち着いてくれるかしら?」

センリツとバシヨウはため息を吐いて、ルシラの援軍に向かい必死に大人3人でジョアナを泣き止ますのに手を尽くすのだった。

そして、その夜。

翌日にはガスラベスを離れることにして、夕食を食べてホテルに帰ろうとしたラミナ達の元に、

「見つけた!! おねえちゃん、いっしょ!!」

「なんでやねん」

と、ジョアナが何故か1人で突撃してきたのだった。

## #89 ニゲラレ×ハ×シナカッタ

ラミナは夜空を仰ぎ見る。

そうでもなければ、脚にしがみつくと存在を否定できないからだ。

「いい加減現実を見な」

「……やんなあ」

呆れているマチの言葉に、ラミナは大人しく現実を直視する。

「♪♪」

上機嫌にラミナの太ももに頬をこすりつけているジョアナ。

このままでは歩けないので、小さくため息を吐いてジョアナを抱っこする。ジョアナは一切抵抗せず、むしろ「もう離さない！」とばかりに首に力強く抱き着いてくる。

「……おいチビツ子。お守りの3人はどうしたんや？」

「知らない」

「待てやコラ」

「どこから来たの？」

もはや苛立つのもバカバカしいとばかりに、マチは気だるげに腕を組みながらジョアナに声をかける。

するとジョアナは素直に「あつち！」と指差した。

その方向には建物があったが、恐らくそのビルと言うわけではなく、純粹に方向だけを示したのだろうと考えるラミナ達。

その方向の気配を探ると、そこそこの強さを持つ気配が複数走り回っている。

「……2人はどうするんや？」

「待ってたって暇なだけでしょ。アンタが帰ってこないのに、街を離れたってしょうがないんだしさ」

「別にボクは困ることないからいいよ」

他人事の2人にラミナは渋々頷いて、走り回っている気配に向かって歩き出す。

「チビツ子。お前、なんでうちのところに来たんや？」

「ここが一番あんぜん。おじいさまにおそわれない」

「……やっぱそういうことかい……」

一度ジョアナ達と別れた後、適当なホテルのパソコンルームに入って情報収集をした結果、非常に厄介なことが判明した。

ナダメジマファミリーの内紛である。

ナダメジマファミリーのボスであるジョアナの祖父と、若頭であるジョアナの父が敵対関係にあるのだ。

しかし、クーデターとかではなく、ジョアナの父がマフィアを辞めて堅気になろうとしているのが原因である。

ジョアナの父は若頭とされているが、マフィアとしての活動は全くしていない。

ナダメジマファミリーの収入源の1つである輸入業を取り仕切っており、それが成功してナダメジマファミリーの後ろ盾などなくともやっていけるほどの規模になったのだ。すでにジョアナの父は商売の8割をナダメジマファミリーから独立させており、完全に堅気として経営している。

他のジャンルにも手を出して始めており、そっちでも成功の兆しが見え始めているため、ジョアナの父からすれば『マフィアでいるメリットがない』と思うに至ったのだ。

ジョアナの祖父はその動きを知って息子の商売を邪魔しようとしたが、息子ゆえに父が何をしているのかを熟知しているため、悉く妨害に失敗して、むしろ反撃を受けて構成員の多くが捕まるか死んでしまった。

ジョアナの父は組を辞めることを通告したのだが、子供は息子一人なので認めるわけにもいかず、結局どちらも引つ込みがつかなくなり遂にジョアナを巻き込んだの内紛に至った。

祖父はジョアナの『直感』と血筋を求め、父は純粹に親愛を持って娘をマフィアの世界から遠ざけたい。

他の組はジョアナの父の商売をわざわざ潰す利点がなく、ナダメジマファミリーが衰退するのはむしろ『どんとこい』なのでどちらにも手を貸さなかった。

ジョアナの父は商売を展開する土地のマフィア連中の商売をしつ

かりと調べてから、潰し合いが起こらないように調整していたので、むしろウェルカム状態で。

ジョアナの祖父に敵対して、もしジョアナの父が死んだらその後には報復が来るリスクが高いので、邪魔もしないが味方もしないというスタンスを表明したのだ。

故にジョアナの護衛にはルシラ達しかいなかったのだ。

下手に一般の警備会社から人を雇っても、マフィアの苛烈さや人質手法に負ける可能性がある。それ故にプロハンターを雇ったのだ。

クラピカに依頼が来たのは、ノストラードファミリーは現在用心棒と賭博のみを収入源にしており、用心棒でも暴利な報酬を求めるところも無いという情報からだ。

ナダメジマファミリーと関係も無く、睨まれてもナダメジマファミリーでは手を出せない土地に縄張りがあることも理由だ。

そして、組を仕切っているクラピカは契約ハンター。

なので、ジョアナの父はクラピカに、護衛を引き受けてくれるハンターを知らないかという依頼をしただけなのだ。

その結果、やってきたのがたまたまノストラードファミリーにいたプロハンターだったというだけ。

堅気、というにはグレーではあるが、クラピカ達はあくまでノストラードと契約しているプロハンターなので、アウトと言い切れるものでもない。

ということ、ラミナが倒した男共はジョアナの祖父の部下だったというわけだ。

ナダメジマファミリーは小さいがガスラベスでカジノを営んでおり、この街にも拠点がある。

ジョアナの父はこの街で商談があったので、護衛を雇ったのだ。家にジョアナを残しておくのも危険だと判断したから。

それにラミナは見事に巻き込まれたということだ。

「ナダメジマファミリーから仕事受けたことは？」

「ないない。ナダメジマファミリーはショボい組やから狙われることもないし、殺し屋雇って狙う相手もおらんかったと思うで。そうやな

「かつたら、チビツ子の親父さんの商売がここまで成功しとるわけないし」

ノストラードのように十老頭にすり寄り寄ったり、急激に影響力を持つたわけでもないで目の敵にする組などいかなかったのだ。

「けど、そんな組の構成員ならここまでして逃げてくる必要ないんじゃない？」

「それはチビツ子がどう感じとるかやろ」

「……おじいさまはすごくコワイ。ここに来てからずっと誰かにみられてるの」

「それはあのお守りの3人やなくて？」

「ううん。もつと気持ちわるいかんじ」

「今もか？」

「うん。むこうから」

ジョアナが指差した方向に顔を向けるラミナ達。

そっちはナダメジマファミリーが経営するカジノや事務所がある方向だった。

気配を探れば、確かにこつちを見つめている視線を感じ、囲い込もうとしている動きも感じた。

「……あかんなあ。シヨボすぎて見落としとった」

「だね。最近なんだかんだで狙ってくるのは念使いばつかだったし。まあ、弱かったけど」

念使いでもなく、殺し屋でもないで、ラミナとマチには『雑魚』とすら認知されないほどの連中となっていた。

つまりラミナ達の最低ラインにすら達していなかったのだ。

カルトは気づいていたが、襲われなければどうでもいいので無視していた。

そもそも視線を感じ取る修行をさせたのはラミナなので、ラミナは気づいていると思っていたのもある。

「……マジで修行し直さなあかんなあ」

と言いながらも、一度感じ取った気配を見逃すことはない。

それに言われるまで気づかないほどの存在なので、奇襲されても問



題などあるはずもない。

なので、ラミナ達は悠々と歩き続ける。

そして、そこに駆けつけてきたのは、センリツとルシラだった。

「やっぱり!!」

「よかった!!」

「とりあえず、そっちの拠点行こか。周りに集まってきたよる」

「!! わかりました。こちらです」

「センリツ」

「っ!! なにかしら?」

「クラピカはおらんよな?」

「……安心して。こちらにはいないわ」

「つちゆうことは街にはおるんやな」

「……ええ。けど、この仕事には関わっていないわ。だから、連絡は来ても顔を出すことはないと思う」

「まあ、そんならええわ」

センリツの言葉にとりあえず頷いて、ルシラの後を歩くラミナ。

マチは少し不満気だが、流石にこの状況は面倒だと思っているので口出しはしなかった。

周囲の気配は一度動きを止めた。

どうやらルシラの姿を見て、様子を見ることにしたらしい。しかし、ラミナは逆にそれが気になった。

(……妙に統率されとるな。昼間はあんな大雑把やったのに。誰一人抜け出そうとも、暴走する気配もない)

傭兵にすら通用しそうな統率力だった。

しかし、情報ではナダメジマファミリーは武力は普通以下だったはずだとラミナは眉間に皺を寄せる。

(もしチビツ子の爺もプロを雇ったんなら……チビツ子がセンリツ達も信用出来るのに納得は出来る)

ジョアナは直感で戦力差を理解したのだろう。無理矢理抜け出してでも、ラミナに会いに来た理由も理解は出来る。納得はし難いが。思っていたより厄介事であることにラミナは顔を顰める。

そして、恐らくこの情報をルシラ達は知らない。

これ以上仲間がいるようには思えないこともあり、ラミナは今後の対応を考える。

「今から行くところは防衛に向いとるんか？」

「……正直あまり向いていないと思います」

「むしろ普通なら選ばないわね」

「……けど、そこに行かんとあかんのやな……」

「ええ」

嫌な予感しかしないが、行かなければ話は進まないので諦める。

そして、30分ほど歩いた先で車に乗り込んで移動した先は、流石に予想外の場所だった。

「……孤児院？」

「孤児院って書いてるね」

「孤児院だよ」

「コジインだよ」

未だにジョアナを抱っこしているラミナが、建物の門にかけられた看板を見て眉を顰める。

マチ、カルト、ジョアナがラミナの違つて欲しいという希望を打ち砕き、ラミナは天を見上げる。

孤児院は街外れの住宅街の更に端っこにあった。

周囲の気配を探ると、やはりこちらを伺っている動きをしている者達の気配があった。

門の前にはバシヨウが立っており、明らかに護衛をしていることが伺えた。

中に入ったラミナ達は応接間に通される。

そこには施設の管理人の老年の男性もおり、やや困惑気な表情で壁際に立っていた。

ラミナは3人掛けのソファに座り、右側にマチ、左側にカルト、ではなくジョアナが座り、ジョアナを挟んでカルトが座る。

ここではジョアナも落ち着くのか、大人しくラミナの隣に座ったようだ。

それでもラミナの傍からは意地でも離れないのだが。

ルシラ達は未だに複雑そうだが、ラミナ達はもうツツコむ気持ちすら湧かない。

「んで？ この孤児院がナダメジマファミリーの親子喧嘩にどう関わつとるんや？」

「っ！ ど、どうしてそれを……！」

「昼にお前らと別れた後に調べたに決まつとるやろ。一応うちかてハインターやしな。この街にはナダメジマファミリーのボスのカジノあるし、数日前にボスがこの街に来とる情報もあつたでな」

「えっ?!」

「なんだと？」

ラミナからの情報にルシラ達は目を丸くする。

ちなみにジョアナの祖父が来たのが分かったのは、裏の情報屋サイトで集めた情報だ。

「それにさつきチビツ子を追いかけとつた連中、妙に統率力があつた。多分傭兵かなんか雇つとるで」

「そうだね。昼間に倒した男達とは動きが違ってプロっぽかったね」

ラミナの言葉にマチも頷き、ルシラ達は想像以上に事態が悪い事を理解する。

「んで、ここは一体どう関係しとるんや？」

「……お嬢様の父君がこの施設のスポンサーとなられたのです。今回この街に来たのは、ナダメジマファミリーとの関係から拠点を移すことも含めた今後の孤児への対応を話し合うためです」

ルシラが眉を顰めながら事情を話し出す。

「お嬢様は家に残しておくのも危険だと判断されたため、我々を雇つたのですが……」

「裏目に出た、いや、向こうの備えが一枚上手やったか」

「……はい。実力で言えば、我々3人でも十分なのかもしれませんが、やはり敵の数が多く……」

「向こうの手下と雇つた連中にええように踊らされたわけか。まあ、荒事はチビツ子の爺の方が上やわな」

ラミナは腕を組んで小さくため息を吐く。

(やつぱちビツ子はこいつらでは守り切れんと思ったわけやな。自分とこの孤児院を守るための戦力を引き込もうとしたわけか……)

悔し気に俯いているルシラに、ラミナは天井を見上げる。

(こいつの実力は見た感じヨークシン時のゴンくらい……後は能力次第か……。センリツと男も能力までは知らんけど、男はルシラと同等、センリツはそれよりも下……。論外やな。向こうにプロレベルがおったら、数で押し負ける)

「雇い主はちびツ子の父親やな？」

「はい」

「その商談が終わるんは？」

「……まだ数日はかかるかと」

「つまり耐えきるか、向こうが諦めるようなことにならないとちびツ子は解放されんっちゆうことやな」

「そうですね……しかし」

「まあ、わざわざ喧嘩を売りに行く必要はないわな。お前らは」

ラミナは被っていたカツラを脱ぎ捨てて、ポケットから髪紐を取り出して結ぶ。

それを見たマチとカルトもカツラを脱ぎ捨て、マチも髪を纏める。

ルシラ達は目を丸くしているが、それを無視してラミナはマチに顔を向ける。

「ええか？」

「面倒だけどね。流星に孤児まで巻き込まれるかもしれないなら、少しは手を貸してもいいよ」

流星街出身故に身寄りを無くすことの辛さは分かっている。

旅団も時々クロロやパクノダなどが主体で動いて、身寄りを無くした人を保護したり、孤児院に寄付したりなどの慈善活動をすることもある。

今回は無関係な子供が巻き込まれる可能性があり、解決しなければジョアナがまた追いかけてくるかもしれないので、さっさと解決した方が心残りがなくなるのだ。

「マチ姉とカルトは、一度ホテルに帰って着替えてきい。その間にナダメジマファミリーの拠点をリストアップして、携帯に送るわ」

「アタシとカルトで潰せばいいの?」

「おう。うちは連中を挑発して、囷になるわ。その間に頭始末してんか?」

「あいよ。行くよ、カルト」

「うん」

マチとカルトは止める間もなく部屋を出て行き、ラミナはルシラに声をかける。

「パソコン何処?」

「え、あ、え? あ、そ、そのノートパソコンを使ってもらって構いませんが……」

「おおきに」

「いや、そうじゃなくて! 何をする気ですか!?!」

「んなもん、突っかかってくる阿呆を潰すに決まっとるやろ。うちらは別に依頼されたわけでもないし。ナダメジマファミリーが消えてなくなるうが、知ったこっちゃないねん」

ラミナは素早く操作して情報を集めながら答える。

ルシラはそれでも、まだ口を開こうとしたがセンリツが止める。

「無駄よ、ルシラ。この人達は動き出したら、止められないわ」

「しかし……危険では?」

「……彼女達はクモなのよ」

「ク!?!」

ルシラと管理人の老人は驚愕に限界まで目を見開いて、ラミナを凝視する。

ラミナはそれを無視して、情報を集めてマチにメールを送る。

「……やっぱ傭兵雇つとるな。聞いたことも無い名前の連中やけど」

「規模は分かるか?」

「ハンターサイトの記録では23人。ハンターの情報はないから、念も知らんかもしれんな」

「なら、なんとかなるか……」

「その分、銃火器はたっぷり持ち込んだるみたいやけどな」

ラミナは情報を記憶して、椅子から立ち上がる。

「さて、まずは周りを片付けよか。こここの事はバレとるやろうし、監視が近くにおるやろ」

ラミナは左肩を回しながら扉に向かう。

ジョアナの方に顔を向けて、

「ええか？　ここで大人しくしとけや。流石にここから先は連れて行けんでな」

「……うん」

不安そうだが、しっかりと頷いたジョアナ。

それを見て、やはり一番の目的はラミナ達を巻き込むことになったのだと理解する。恐らくジョアナ本人はそう思っではないだろうが。子供ゆえに直感に従って動いているので、嫌な予感がしたら今も抵抗しているはずだ。

ラミナはセンチツに振り向いて、

「最低限の防衛は出来るやろ？」

「多分ね。私なら近づいてくる足音や声に気づけるし、戦いならルシラやバシヨウで行けると思うわ」

「まあ、問題があったら、その机にメモアド書いてるから、そこに連絡せえ」

そう言っってラミナも部屋を後にする。

ルシラはやはり心配そうにセンチツを見る。

「本当に大丈夫なのですか？」

「それはどつちの意味かしら？」

「……両方です」

無事に戻ってくるのか。そして、本当に信用できるのか。

相反する質問だが、ルシラにはどちらも判断できる材料がほとんどない。

あるのはジョアナの直感と、センチツの言葉だけだ。

「あの人はまだ信用できると思うわ。騙すような音でもなかったし、不安を抱えている音もなかった。それに、どつちにしろ私達じゃ束

でかかっても勝てないのだから疑ったところで無駄よ」  
「だな」

バシヨウは性格までは知らないが、実力に関してはウボオーギンと戦っている姿を見ていたので勝てる気がしなかった。

「あの着物を着た子供はどのようなのですか？」

「カルトって呼ばれたから、あの子はゾルディック家の人間だと思うわ」

「ゾルディック!？」

「……ああ、確か一緒に行動してるって情報があつたな」

「ええ。クモの2人と一緒にいるのだから、実力もクモに近いと思うべきよね。……とても静かで残酷な音だったしね」

センリツはずっと無関心か呆れているカルトの心音の冷たさを恐れていた。

しかも、

「……暴れるって話が出た時、とても嬉しそうな音に変わったの。それまでは退屈そうで、どうでもいって感じだったのに」

「……確かに表情も明るくなってたな。マフィアの拠点に2人で仕掛けるのに嬉しい、か……。まさに暗殺一家でクモの同類ってわけだ」

「けど、そんな人達をお嬢さんは頼った。あの子の勘では、私達じゃ荷が重かったってことね」

「……そう、ですね。……私も外で待機しておきます。お2人はお嬢様を」

「分かったわ」

「ああ」

ルシラは覚悟を決めた表情を浮かべて、部屋を後にする。

それを見送ったセンリツとバシヨウは、気を引き締めて警護に当たるのだった。

ラミナは孤児院から少し離れた小道にいた。

その足元にはスーツを着た男が横たわっている。

「さて、これで3人。次はあつちか」

ラミナは音も無く走り出して家屋の屋根に跳び上がり、猛スピードで飛び移っていく。

孤児院を出る前に視線を向けてきた場所はある程度把握していた。それを考えると、今いる連中は【絶】も出来ないレベルということだ。

今のところはマフィアの下っ端と思われる連中だけだったので、傭兵連中はいないのかもしれない。

そう考えていると、少し先に樹々で覆われた小さな森のような場所が見えてきた。

感じた視線の気配はそこから感じていた。

「あれは傭兵か？ 随分とお粗末やな」

ラミナは森の手前で地面に下りて、出来る限り音を立てないようにして突入する。

孤児院側の森の端付近に、軍服チックな服装を身に纏った男が3人。茂みに身を隠すようにして潜んで、双眼鏡や望遠鏡を覗き込んでいた。

ラミナは両手に柳葉飛刀を3本ずつ具現化する。

そして、男2人の後頭部を狙って、柳葉飛刀を投擲する。

男達はラミナや柳葉飛刀に気づくことはなく、双眼鏡と望遠鏡を覗いていた男2人の後頭部に3本ずつ柳葉飛刀が突き刺さる。

「か……」

「う……い！」

「なっ!? がっ!」

ラミナは残った男をうつ伏せに倒して背中に乗り、首筋にスロウイングナイフを当てる。

「さて、色々聞かせてもらおか」

「ぐっ……だ、誰が話すか」

「まあ、もう知つとんねんけどな。生き残るチャンス捨てるとかアホやな。さいなら」

「っ!? ま、ぎや!」



ラミナは容赦なく首を斬り裂いて殺す。

男達の死体を森の中心部に運び、機材も通信機以外は死体の傍に放る。

「感じた視線はこれで全部やな。さあて」

ラミナは通信機の電源を入れる。

「もしもし」

『ザザツ……………誰だ？ 何故この通信機を持つている？』

通信機からは渋い男の声。

ラミナはそれを無視して、話を進める。

「孤児院を監視しとった連中は全員殺した。ナダメジマファミリーの  
下っ端も含めてな。これ以上孤児院に関わるなら……………潰す」

『……………誰だか知らんが、調子に乗るなよ。我らを舐めると痛い目を見るぞ』

「はっ！ そんなんは戦果出してから言うべきやな。え？ 傭兵団

「ヘリファルテ」

『……………！』

「前回の戦場で随分と痛い目に遭うたらしいなあ。それでシヨボイマ  
ファイアの下っ端か。後20人、しっかりと狩らせてもらおうわ」

宣戦布告をして通信機の電源を切り、放り投げる。

続いて、携帯を取り出してマチに連絡する。

『……………もしもし？』

「そっちはどない？ こっちは監視しとった連中を始末したところや  
けど」

『ボスがいないシヨボイ拠点を潰したとこ。やっぱ念使いはいなさそ  
うだね。拷問した奴の話だとボスの護衛は、腕が立つ程度の連中だけ  
で、外部からは傭兵しか雇ってないってさ』

「その傭兵も念使いはおらなさそうや。戦場崩れの雑魚みたいやから  
楽に終わると思うで」

『了解。こっちは適当にやるよ』

「へいへい」

電話を切り、ラミナは街の中心部から孤児院に通じる大通り近くに

移動する。

孤児院から連絡は何もないので、街から来る可能性がある増援に備える。

「やれやれ。あの挑発で怖気づいてくれたらええんやけど……」

既に閉店しているレストランの屋根の上で【隠】で気配を消して、のんびりと待とうとした時、

背後から殺気を感じて、スローイングナイフとレイピアを具現化して振り返る。

そこにいたのは、

「やっと思つけたわよ!! もう逃がさないからね!!」

不機嫌全開で仁王立ちするメンチ、そしてコロロルクとザーニヤの3人だった。

## #90 インネン×ノ×インネン

突然現れたメンチ達にラミナは武器を消して、ジト目を向ける。

「……なんでこんなところにおるんや？」

「仕事でたまたまここに来てたのよ」

「そしたら、妙に街が殺気立っててね」

「私が動物達を飛ばして調べたら、貴女を見つけました」

「……変装しとったやろ？」

「私の動物は一度嗅いだ匂いを忘れません。たとえ変装したり、香水をかけていてもです」

「……ちっ」

ラミナは顔を顰めて舌打ちする。

それではもう今後はどう変装していても見つけれられるということだ。

しかし実は言わなかったが、ザーニヤの能力には欠点もある。

それは『匂いを忘れることはないが、追跡機能がない』というものだ。

本来の動物の機能を凌駕した分、本来あるべき能力が犠牲になってしまい、両方を保持しようとしたら、完全に動物の姿をした人形になってしまった。動かそうにも常に命令を細かく指示しなければならなくなったのだ。

そのため、追跡も拠点も見つけることは出来ない。見つけた人物の見極めを行うだけだ。もちろん追跡用の犬科の動物もいるが、その場合は匂いが染みついた物がある。

ザーニヤはラミナの匂いが染みついたものなど持っていないので、ここで逃げられれば追跡は出来なくなる。

「……んで？ どうするつもりや？」

目を細めてメンチ達を見据え、纏う気配を鋭くする。

それにザーニヤは冷や汗が流れ、コロロルクはいつでも動けるように身構える。

しかし、メンチは両手を腰に当てて、

「戦わないわよ。私達じゃアンタに敵わないしね」

「じゃあ、何の用や?」

「今、暴れてる理由を聞きに来ただけよ」

「聞いたところで止められんのか?」

「被害は減らせるでしょ」

つまりターゲット側に逃げるように促すということだ。

それを堂々とバラすメンチにラミナは苦笑して、

「安心しい。狙いはマフィアやでな」

「暗殺? にしてはここにいるのは変よね」

「いんや、今回うちは巻き込まれただけや。この先の孤児院を狙とる奴らがおつてな。その露払い」

「孤児院を狙うマフィア?」

「事情説明するんだルイわって、ん?」

どんどんメンドくさくなってきたラミナは、孤児院に行かせようとしたら街の方から大量の車がやってくるのが見えた。

ジープや黒塗りの車であることを確認すると、ラミナは伸びをしてサングラスをかける。

「悪いけど話は後や。お仕事開始やでな」

「あの車の集団がマフィア?」

「多分な。話聞きたいんやったら、この先にある孤児院に話聞きに行つてや」

ラミナは屋根の上から飛び降りて道路に下り立ち、右手に鎖鎌を具現化した。

車集団は急ブレーキをかけて停まり、先頭のジープから戦闘服を着た男達が降りてきた。

「お前らが【ヘリファルテ】か?」

「……その声。貴様が先ほどの通信の相手か。……貴様のような者が雇われているとは情報になかったが……」

「そら、さつき参戦したでな」

「なんだと?」

「お前らの狙いの嬢ちゃんに引つ付かれたんや。つたく、チビツ子」

人捕まえるくらい、とつととせえや」

ラミナは鎖鎌を回し始めながら愚痴る。

その言葉に拳銃を構える傭兵やマフィア達はラミナを睨みつける。「ならばどけ。死にたくはあるまい？ この人数相手に勝てると思っ  
ているのか？」

「足らんわ阿呆。たかが拳銃にビビる思てんのか」

「……そうか。ならば——」

「死ねや雑魚共」

傭兵リーダーが攻撃の指示を出す前に、ラミナが言葉を被らせて鎖鎌を飛ばす。

高速で回転しながら放たれた鎖鎌。

それが突如オーラを放出し始め、オーラが狼の頭を形作っていく。  
グルウアアアア!!

3秒もせずに鎖に繋がれた巨大な狼の頭が出現し、吠えながら大きな口を開けて太くて鋭い牙を見せつける。

突如現れた化け物に傭兵やマフィア達は驚き、狼の頭に銃口を向け  
て悲鳴を上げながら乱射する。

「うわあああー!」

「な、なんだよコイツ!」

「来るなあああ!!」

「ひいいい!」

「落ち着け! あんなものは幻だ!! 食われるわ——」

念を知らない傭兵の1人が落ち着かせようと幻だと叫ぶが、それを  
否定するように傭兵の上半身が食い千切られて、更に他のマフィアや  
車も食い千切られる。

【親愛なる妹のペット仲間】。

投げた鎖鎌に巨大な狼の頭部を具現化する能力で、その口に食われ  
たモノを全て呑み込む。ただし、指定することも出来ず、自由に操る  
ことも出来ない。ただ鎖鎌を投げた軌道上にいるモノ全てに食らい  
ついて呑み込むだけである。

その代わり、シズクの【デメちゃん】とは違い、『念で具現化した物』

も呑み込める。

「ほ、本当に喰われた!?!」

「な、なんだよアレ!?!」

「くっ! あいつも変な力を使うのか……!」

傭兵リーダーは苦々しく顔を顰める。

【ヘリファルテ】達は前の戦場で、他の傭兵達の念能力で敗北したのだ。

「女を狙え!! そうすれば、あの化け物も消える!!」

「狙えればええなあ」

「っ!!」

指示を叫んだ傭兵リーダーのすぐ横から声が聞こえた。

しかし、目を向ける前に首に鋭い痛みを感じ、直後勢いよく景色が移動していき、気づけば目の前に家の壁があつて防ごうにも腕が動く感覚はなく、頬に衝撃を感じて意識を失った。

そして、周囲にいた者達の目には、首を失って血を噴き出す傭兵リーダーの身体が映る。

一瞬でリーダーが殺されたことに、もはや全員が冷静さを失って無秩序に逃げ始めるが、

【狂い咲く紅薔薇】

左手にファルクスを具現化したラミナが【円】と能力を発動して、一瞬で半数以上の者達が首が跳び、身体が上下に斬り分かれて死んでいく。

運よく腕や足が斬り飛ばされただけで生き残った者達がいたが、再度ファルクスが振られて今度こそ殺される。

鎖鎌とファルクスを消して、レイピアとスローイングナイフを具現化する。

そして、猛スピードで【円】から逃げ延びた者達を追いかけて、1人1人始末していく。

すると、運よく後ろの方で生き残ってた連中が車に乗り込んで、勢いよくバックで逃げ出す。

ラミナはそれを追いかけてしようとしたが、目の前に念弾が飛んできて

足を止める。

目を向けると、すぐ近くの屋根の上でコロロルクが右腕を突き出していた。

「逃げる連中まで追いかけるこたないだろ？　流石にこれ以上はやりすぎだよ」

「……はあ。まあ、ええけど（ここで死んだ方が絶望せんでええと思うんやけどなあ）」

逃げた連中は必ず拠点に戻るだろう。

その拠点は恐らく今頃マチ達が暴れているはずだ。

無事に戻って来れたと思つた場所が壊滅状況で、そこをマチ達に見つかれば死ぬ時の絶望はとてつもなく大きいだろうなとラミナは考える。

武器を消したラミナは、孤児院に戻ることにした。死体やら車の残骸はもちろん放置である。

その後ろにはメンチ達も付いてきていた。

「警察とか呼んだわよ。文句ないわよね？」

「こつちに来んかったらな。つちゆうか、いつまで付いてくるん？」

「最後まで」

堂々と言い切るメンチにラミナは呆れるが、マチ同様言うだけ無駄だろうと思つて何も言わなかった。

孤児院に戻ると、ルシラが門の前で立っていた。

「こつちに誰か来たか？」

「いえ、誰も」

「ほな、こつちはもう大丈夫そうやな」

「……また増えてるようですが？」

「ああ、こつちはプロハンター。シングルハンターのメンチとその弟子」

ラミナの言葉にルシラはまた驚きに目を見開き、メンチ達を中に案内させてラミナは携帯を取り出してマチに連絡する。

『もしもしっ。』

「どうや？」

『今、本拠地を潰してるところ。カルトに暴れさせてるけどね。そっちは？ 少し前になんか団体が出て行ったけど』

「ほぼ終わったで。いくらか逃げたけど、そっちに向かっと思うわ。まあ、どうするかは任せるわ」

『了解。あと30分もあれば終わるから、アンタもこっち来な。そっちに戻る理由もないでしょ』

「それもそうやな。ほな、これから向かうわ」

通話を切ったラミナは、そのままマチ達の元に向かおうとすると、メンチ達が出てきた。

センリツやバシヨウも付いてきており、ラミナの元にやってきたメンチ達は少々複雑な表情を浮かべていた。

「まあ、今回はまともな理由みたいね」

「マフィアが絡んどる時点でまともな理由ちやうわ。んで、チビツ子は？」

「寝たわ。どうやら安心したみたい」

「まあ、自分を襲いに来る連中がいなくなったしな。後はボスの方を何とかすれば……」

「今からそっち向かうわ。そろそろ終わるみたいやし」

「終わる？」

「うちの仲間がナダメジマファミリーの拠点潰しに行つとるんよ。そろそろボスも殺しとるやろ」

「仲間って……旅団よね？」

「そら、もちろん」

「じゃあ、車で行こうぜ。ハンター証があれば、検問でも止められねえだろ」

「チビツ子の護衛はどうするんや？」

「私が残るわ。変な音や声が聞こえたらすぐに連絡するから」

センリツが残ることになり、バシヨウとザーニヤの運転で街に向かう。

ラミナの案内で拠点の近くに車を止め、ナダメジマファミリーの拠点へと足を進める。



進行方向に見えるのは、外壁に囲まれた4階建てビル。

鉄柵の門は開かれており、車が無造作に停められている。

「静かですね」

「死体もねえな」

「目立つところに死体なんで残すかい」

ルシラとバシヨウの言葉にラミナは呆れる。

特に警戒することもなく、ビルの中に入っていくラミナに続いて、メンチ達も中に入る。

すると、通路の至る所に死体が転がっており、ムワツと血の臭いが鼻に襲い掛かる。

それにルシラやザーニヤは顔を引きつらせる。

ラミナはそんな中を顔色一切変えずに進んでいくどころか、

「また変にいたぶつとるなあ。こんな奴らに手間かけてどうすんねん」

と、殺され方に呆れていた。

メンチやコロロルクは死体を見て、

「基本的に斬られて死んでるけど、ところどころ殴り殺されてるわね」

「というか……弾痕が見当たらないねえ」

「つまり、撃つ前に殺されたってわけか」

「別に驚くことちゃうやろ。この建物の中やったら、銃口向けられる前に近づけるわ」

さらにカルトは【発】の紙手裏剣などで遠距離攻撃も出来る。

拳銃程度に後れを取る2人ではない。

最上階まで上がって一番豪華な部屋に入る。

部屋の奥にある豪華なソファに白髪の老人が座らされており、手足から血を流し、右耳が斬り落とされた息も絶え絶えな状態で拷問を受けていた。

もちろん、楽しんでるのはカルト。

マチは別のソファに座って、酒を飲んでいた。

「……なんか増えてない?」

「ヨークシンの前に一緒に仕事したグルメハンターや。暴れとるとこ

ろを見つかってしもた」

「ふうん……」

どうでもよさそうに答えるが、目が細まって殺気が噴き出し始めたので苛立っているのは間違いない。

特にメンチを睨んでおり、メンチも実力差は分かっているはずだがまっすぐと睨み返していた。

それにザーニャ達は体を強張らせるが、ラミナは苦笑してカルトに顔を向ける。

「んで、お前は何しとんの？」

「他にも拠点がないかとか、企んでることがないかとか聞いてた」

「阿呆。こんなシヨボイマフィアのボスを拷問にかけた所で、うちらが欲しい情報なんざあるかい。とつとと殺しとき」

スローイングナイフを具現化して投擲し、ボスの額に突き刺す。

ボスは悲鳴を上げることもなく、一瞬身体をビクつかせて死んだ。

「これでうちらは解放やな。後始末はそつちやナダメジマの生き残りに任せたらええやろうし」

「だね」

「とりあえず、ここ離れよか。他のマフィアや情報屋、警察に孤児院近くで暴れたことでここは嗅ぎつけられるやろうし」

ラミナの言葉に頷いて、拠点から離れた路地裏に移動する。

そこでメンチが、

「ねえ、逃げ回ってるなら仕事手伝ってくれない？　また面倒な密猟者を潰さないといけないのよね」

と、ラミナに仕事の依頼をしてくる。

しかし、ラミナが答える前にマチが口を開く。

「ぎけんじゃないよ。ラミナは今アタシのだ」

「アンタに聞いてないわよ」

ギロン！と睨み合うメンチとマチに、コロロルクとラミナは小さくため息を吐き、ザーニャは相手が相手なだけにどう仲裁すればいいかと慌てる。

カルトは「こいつらと戦うのは楽しそう」と思っており、内心「やつ

「ちやええ！」と願っている。

ルシラとバシヨウは、巻き込まれないように距離を取ろうとしている。

「……どうにかしとくれよ」

「無茶言うなや。あの2人そつくりやから、止めた所で止まらんわ」

「似てない！」

「ほれ見い」

「だねえ……」

コロロルクは顔を手で覆って項垂れる。

ラミナは呆れを隠すことなく、メンチに声をかける。

「今うちを誘うんは色々と周りから言われるんちやうか？」

「別に気にしないわよ。仕事をしつかりするのがプロハンターにとって一番重要なんだから」

「十二支んやら賞金首ハンターが動いとるようやけど？ 十か条その4に引つかかるとるんちやうか？」

「証拠がないもの。ブルブ美術館に關しても、生き残った2,3人の警備員の証言だけで映像があるわけじゃないから、クモがいたからってあんたがそこにいたって言う確証はない。それ以外の騒動に關してはマファイアや暗殺者同士によるものだから、十か条に絶対に引つかかるわけじゃないわ。それがアウトなら、その連中だってアウトなもの」

「クモって時点であかん気がするんやけど？」

「ゾルディック家の人間がプロハンターになつてる時点で今更よ」

「……はあ。悪いけど、うちはもうハンター活動に興味はないでな。それこそゴンやキルアでも誘い。うちだけ誘うより戦力になるやろ」

「あいつら今どこにいんのよ」

「そろそろゲーム出たはずや。携帯にでも連絡すれば通じるんちやうか？」

「強くなつてんの？」

「うちら程やないけど、お前やザーニヤなら同等以上やと思うで」

コロロルクは戦闘向きの能力なのではつきりと比べられないが、ゲ

ンスルー達相手に生き延びたらしいので、かなりの実力になっていると考えている。

なので、ラミナ1人よりはマシだと十分に保証できる。相手に念能力者がいれば話は別だが。

その言葉にメンチは眉を顰めて考え込む。

それによりやくマチも苛立ちを抑え込もうとした時、

「バショウー」

ラミナの耳に、聞こえるはずのない声が届いた。

ラミナとバショウが勢いよく、他の者達は特に気にすることなくただただ声が聞こえたから振り返る。

そこにいたのは、

黒いスーツを着た、クラピカだった。

「っ!! 待て、クラ——」

バショウが止めようとしたのと同時に、怖気が走るほどの殺気がクラピカやメンチ達に振りかかった。

『!!?』

クラピカは足を止め、メンチ達は反射的に殺気の放出元から跳び下がって武器を抜く。

そこにいたのは、無表情にクラピカを見据えるラミナがいた。

クラピカもラミナの姿を捉えて、目を丸くして動揺を露にしながらも右手に鎖を具現化していた。

「ラ……ミナ……」

「久しぶりやなあ。もうしばらくは会うこたあない思ってたんやけど」  
「っ……っ……」

クラピカは歯を食いしばりながら、ラミナの背後にいるマチとカルトに目を向ける。

マチの姿を見て、胸の奥から憤怒が湧き上がりそうになったが、

ゾワリ

と、ラミナから寒気がするほどの冷酷で刃のように鋭い【練】が放たれて冷や水を浴びせられる。

「っ！（これが……暗殺者であるラミナのオーラ……！）」  
その場にいる全員が理解する。

あと一歩でも前に出れば、あれは斬撃の吹雪と化す。

呼吸すらも意識しなければならぬほどの圧。

そこに更に、

「ラミナ。あの金髪が、鎖野郎？」

マチの声が異常なほどに響き渡り、更にクラピカ達の身体を重く感じさせる。

何とかマチに視線を向けると、マチもラミナと同等の殺気とオーラを纏い、しかしラミナ以上の怒りを瞳に浮かべてクラピカを見据えていた。

「ああ。まだ、手え出すなや」

「なんで？ 殺さない理由がないよ」

「うちが先約や」

「知らないね」

「……流石にこれは譲れへんぞ」

お互い一歩も引かずに視線をぶつけ合うマチとラミナ。

本来ならただの隙でしかないのだが、クラピカ達はそれでも仕掛ける気にならなかった。

（隙ではあるが……私達の攻撃が届く前に対処される）

確信めいたものが全員の頭を過ぎる。

故にマチが唐突にコイントスを始めても、誰も動かない。

「表」

「裏や」

マチが手をどける。

その結果は、

「裏やな」

「……ちっ」

「カルト、お前も手え出すなや」

「……分かった」

カルトも物凄く不服そうな顔を浮かべるも大人しく頷く。

ラミナはクラピカを正面から見据える。

「さて……随分とマフィアが板についてきたみたいやけど。強おなつたか？」

「……」

「ま、お前の能力はうちには効かんけどな」

ラミナの挑発にクラピカは歯軋りをする。

「クロロからも聞いたとるで。お前の鎖の効果。縛り付けた相手を強制的に【絶】にするんは中指の鎖やな」

「っ……っ！」

「うちも具現化系やでなあ。能力の付け方はよく知つとる。念能力を得たばかりのお前が、そんな能力を付与するなら制約と誓約を使わんと無理。指の鎖ごと能力を変えるなら尚更や」

「……」

「しかも、クロロが攫われた時の状況を考えると、お前の鎖はある程度操作出来るはずや。そうなると、や……縛った相手を完全に【絶】状態にするのはともかく、旅団一の怪力やったウボオーが千切れへんのはおかしいと思うんよな。しかも、うちがクロロを助けた時も、その能力を使わなかったことから考えると……」

ラミナはニヤツと嗤い、

「クモにしか使えん……ちゆうところやな。それで、それを破れば念能力を失うか……死ぬ」

「っ……っ!!」

「それと心臓に刺す剣の鎖。それを使うにや【緋の眼】でおる必要があるんやろ？」

クラピカは全力で驚愕を押し留める。

だが、ラミナの口はまだまだ止まらない。

「お前の鎖は後3本。その内2つは大体予想出来とる」

「……」

「1つはここを見つけた能力。お前の仲間からの情報記憶ではダウジング  
を使えるみたいやったでな。人や物を探せる能力があるんやろ。も  
う1つは治癒能力。飛行船でうちの攻撃は確実に骨を砕いた感触は  
あった。やのに、お前は数時間で万全に回復しとった。装っても呼吸  
は乱れるもんやのに、お前は一切乱れとらんかったでな。それならウ  
ボオーとやり合った後で動き回れとったんも納得出来る」

「……！」

クラピカは左手を握り締め、バシヨウも必死に表情筋を抑え込む。

メンチ達はラミナ達とクラピカの動きに注視しており、余計な口を  
挟まない。

「問題は残りの1本やけど……。ヨークシンでは使う様子がなかった  
ことから、その時は持つとらんかったと考えるべきか？」

ラミナは話を続けながら左手に柳葉飛刀、右手に鎖鎌を具現化させ  
る。

「けど、お前が今も考えとらんわけがない。じゃあ、どんな能力か。  
……ヨークシンの後に考えたんなら、あの時のうちの立ち位置は忘れ  
られんよなあ。お前は」

「っ……！」

「うちの予想は、クモ以外の手練れが敵対した際に無力化する能力。  
特に念能力を封じることが念頭に置いた、な」

あの時のクラピカの最大の想定外は『ラミナが旅団員ではなかった  
こと』。

ラミナのようなアウトローの協力者、更にはヒソカやゾルディック  
家などと敵対する可能性をクラピカが無視できるわけがない。

仲間の眼を取り戻すために、マフィアの契約ハンターを続けるなら  
ば念能力は必須。

ならば、中指の鎖以外に相手を無力化する術がある。念能力者との  
戦闘において、念能力を封じれば制圧は容易になる。

そして、

(ヨークシンにおけるクラピカのもう1つの懸念材料は『仲間』。ゴンとキルアが捕まったことやノストロードの連中が殺されたんは、相当追い込まれたはずや。お前なら、絶対に最後の能力は『1人でも相手を制圧できる能力』にする！)

故に、相手の念能力を封じながら、更にある程度複数相手でも戦い抜ける能力にしているはず。

クラピカは馬鹿ではない。キルアよりも頭は回る。

しかしそれは逆に言えば、ラミナが考え付く最も使われたら嫌な能力の可能性が高い。

(十中八九、『相手の【発】を奪い、それを利用する能力』！ クロロと同じ能力！)

クラピカならば確実にネオンの占い能力を奪ったのがクロロであると見抜いているはずだと、ラミナは考えている。

そして、ラミナの能力もある程度知られていると思えば、クラピカが思いつくであろう能力を推測するのは容易い。

(クロロとうちの事を考えれば、ある程度使いやすさも重視しとるはず……。流石に奪うならば『相手との接触が必須』。そして使いやすくなるならば『一度に奪える数には限度があり、奪った能力にも使用回数があり』、1人で戦い抜くことを想定しているならば『それをサポートする存在を具現化する』のが妥当)

命を懸けないのであれば、これが限界だ。

クロロの能力【盗賊の極意<sup>スキルハンダー</sup>】は、奪った相手が生きている限り、その能力を何度でも使うことが出来る。

それ故に奪うにも使うにも、面倒な制約が多い。

しかし、制約を緩くするのであれば、絶対に回数制限が出る。

ラミナのように他のオーラを利用して能力を創っても、回数制限は排除できないのだから。

(『鎖』という部分から離れられん限り、クラピカの能力は対処できる) ラミナはそう結論を下した。

直後、柳葉飛刀を1本、クラピカの脚を狙って投擲する。

クラピカはもちろん軽々と後ろに下がって躲す。



しかし、それこそがラミナの狙いだった。

柳葉飛刀が地面に突き刺さった瞬間、クラピカは体が異常に重くなって動き辛くなった。

「なっ!?!」

ラミナはすかさず3本の柳葉飛刀を投げて、1本目の傍に突き刺す。

それと同時に身体が完全に動かなくなり、右手の鎖が消えた。

「!?!」

「裏を縛れば表も同じ」

「裏を縛れば表も同じ」。

影を刺された者は動きと念能力を封じられる。

相手の強さによって必要な本数が増え、約30秒しか封じられない。

しかし、30秒も動きと能力を封じれば十分だ。

「親愛なる妹のペット仲間」

鎖鎌を投げて、具現化した巨大な狼頭がクラピカに食らいつこうと口を開けて、飛び掛かる。

クラピカはその迫る巨大な口を、ただただ見つめることしか出来なかった。

## #91 ヒノメ×ト×ツキノメ

巨狼の牙がクラピカに食らいつこうとした瞬間、

「何でも弾く美女の肌」！ 『弾かれた雫』!!」

コロロルクが左手を突き出して、念弾を撃つ。

巨狼の右横つ面に念弾が叩きつけられて、左に吹き飛ぶ。

【親愛なる妹のペット仲間】は操れるわけではなく、鎖鎌の軌道で動くだけ。

なので横から弾かれると、そのまま吹き飛んだ方向に飛んで行くしかないのだった。

巨狼の頭はルシラとバシヨウの方に向かうが、2人はすぐに横に跳んでその牙を躲す。

巨狼はそのままビルに飛び込んでいき、一切の抵抗なくその壁と建物内の物品を噛み千切って鎖鎌に戻った。

そのあまりの無抵抗さにバシヨウは頬を引きつかせる。

「な、なんて威力だよ……!」

「ボケつとすんじゃないよ!! まだ一発凌いだけで、あの子の能力はまだまだあるよ!!」

コロロルクの声に、ハツとして視線を戻すバシヨウ。

その時にはラミナはすでに柳葉飛刀をクラピカに向けて投擲する。

クラピカはまだ影を縛られて動けない。

「ぐっ……!!」

しかし、柳葉飛刀とクラピカの間ルシラが飛び込んできて、両手を突き出してオーラを集中させる。

直後、ルシラの目の前に十字型の大盾が出現して、柳葉飛刀を全て弾く。

「盾、か……」

ラミナは僅かに顔を顰めて、鎖鎌と柳葉飛刀を全て消す。そして、左手にソードブレイカーと斬首剣を具現化して、視線をルシラから外

す。

向けた視線の先には、メンチが長包丁を全て抜いて浮かばせ、コロルクが剣を構えて迫って来ていた。

「ブライド・オブ・シエフ孤高の包丁捌き！」

「ふう!!」

コロルクが斬りかかり、その背後からメンチが能力で6本の包丁を操って左右から挟み込むように飛ばしてきた。

ラミナは全く表情を変えることもなく、逃げるどころかコロルクに逆に詰め寄る。

コロルクの剣をソードブレイカーと斬首剣の両方で受け止める。

【脆く儂い夢物語】で剣に纏わせていたオーラが消え、【弱さは罪】により剣を重くする。

直後、ラミナは左脚を振り上げて、剣の異常に一瞬戸惑ってしまったコロルクの隙を突いて、鳩尾に蹴りを叩き込む。

「いおー」

更にラミナは両腕を高速で振り、左右から迫ってくる包丁を全て斬り弾く。

ソードブレイカーで弾かれた包丁3本はその場で動きを止めて地面に落ちていき、斬首剣で弾かれた包丁はメンチの手元に戻っている。

「げっ！ 能力を解除する武器?！」

「ゴホッ！ 忘れたねえ……！ もう一本は切った物を重くするみたいだね」

「やっぱり厄介ねえ!!」

メンチとコロルクは相性最悪で盛大に顔を顰める。

ラミナはそれに一切反応せずにソードブレイカーを消して、落ちていつているメンチの包丁を全て拾い上げる。

そして【周】でオーラを籠めると、メンチ達に向けて勢いよく投擲する。

「!!」

メンチとコロルクは目を見開きながらも紙一重で躲した。

コロロルクは頬を掠めて僅かに血が噴き出す。

「あぐ!!」

「! ザーニャ!!」

2人の背後から悲鳴が聞こえて慌てて振り向くと、ザーニャの右肩と左脇腹に包丁が突き刺さっていた。

ラミナが投げた包丁はメンチとコロロルクの身体に隠れていたの  
で、ザーニャは回避が間に合わなかった。

ザーニャの負傷にクラピカも一瞬そっちに気が逸れてしまう。予  
期せぬラミナ達との遭遇で覚悟が固まっておらず、巻き込んでしまっ  
たという意識があったのでラミナから注意が逸れてしまったのは仕  
方がないことだ。

メンチやコロロルクも仲間がやられたのだから、当然である。

しかし、ラミナを相手にそれは致命的な隙だった。

ラミナは左手にガンブレードを具現化して、銃口をクラピカに向け  
る。

それを見ていたマチはカルトの襟首を掴んで跳び下がる。

「うわっ!」

「派手なのが来るよ」

そして、クラピカも視界の端でラミナの動きを何とか捉えた。

僅かな幸運は、その武器と能力をクラピカとバシヨウは見たことが  
あったことだ。

衝動的にクラピカは叫んだ。

「逃げろ!! 高威力の念弾だ!!!」

「お前が殺した男の技で死ねや」

ラミナは無慈悲にその引き金を引く。

【敬愛する兄の咆哮】

ドツツバアアン!!!

巨狼の頭より巨大な念弾が放たれる。

ガンブレードは砕けて、ラミナは左腕を跳ね上げながら自らジャンプして宙返りしながらマチ達のすぐ傍まで下がる。

メンチとコロロルクはザーニヤを抱えて、路地裏に飛び込もうと駆け出す。

クラピカとバシヨウも急いで下がろうとする。

しかし、ルシラは逃げず、盾を地面に突き刺して受け止める構えを見せた。

「無茶だ!! それは——」

「受け止めなさい——」

ルシラは怯むことなく、まっすぐ迫り来る念弾を見据えて、その能力を発動する。

盾の前面に光り輝く巨大な壁が出現した。

「アイギス・アナクフェイス慈愛なる守護の盾」!!」

念弾が光の壁にぶつかった瞬間、光の壁が形を変えて念弾を包み込んで球体になる。

行き場を失った念弾はそのまま爆発するも、光の球体は膨れることも壊れることもなく、その膨大なエネルギーを全て受け止めた。

「なっ……!」

「あの念弾を……」

「やるじゃない」

クラピカとバシヨウは威力を見たことがあるからこそ、完璧に防ぎ切ったことに目を丸くし、メンチ達はこれまで全く目立たなかったルシラの実力に感心する。

そして、ラミナ達もまさかのルシラの能力に目を丸くしていた。

「……マジかい……」

「あれを完璧に防ぐなんてね……」

ルシラは僅かに肩で息をしながら、まっすぐにラミナ達を見据える。

「私の能力は守りに特化しています。ボディガードを生業にしているのは伊達ではありません！」

「……銃器や放出系能力防御に特化した能力つちゆうわけか。その代わりに撃退する能力までは厳しい、か……。反射される可能性は考えておくべきやな」

「だね」

「まあ、もうさっきのは撃つ気はないんやけど……」

ラミナはソードブレイカーと鎖鎌を具現化して、ゆっくりと歩き出す。

ルシラは冷や汗を流しながらも盾を構える。

そこにクラピカがルシラの肩に手を置いた。

「ラミナのあのナイフは具現化したものを除念する。その盾も砕かれるだけだろう。それにあの鎖鎌の能力はその盾でも防げない可能性が高い」

「……かもしれませんが、だからと言って退けばいい状況でもないと思いますか？ あなたの能力は効かないのでしょうか？」

「あの刃に触れずに捕らえられれば、勝ち目はある。お前はあっちの3人を援護しながら、ここを離れるんだ」

ラミナの狙いはクラピカだ。

それ以外の者達は逃げれば見逃してくれる可能性がある。

しかし、

「カルト、そろそろお前にも遊ばせたるわ。あっちの怪我人抱えとる3人、お前の好きにせえ」

ラミナが目も向けずにカルトに告げる。

カルトは嬉しそうに頬を緩めるも、閉じた扇子を口に当てて首を傾げて訊ねる。

「いいの？ 殺しちゃっても」

「ええで。その程度を覚悟しとるから攻撃してきたやろうしな。クラピカの鎖に注意せえよ」

「うん」

カルトの口が吊り上がり、狂気の笑みを浮かべながらゆつくりとラミナの傍に歩み寄る。

久しぶりに殺しがいがある相手だからか、殺気と禍々しいオーラが抑えきれずにゾワリと溢れ出す。

それにメンチとコロロクは歯軋りする。

「ちよつとマズイわね」

「だねえ……。ザーニヤは？」

「急所は外れてるわ。刺さったままだから出血も少ない。けど、動けば傷が広がって臓器を傷つけかねないわね」

「す、すいません……！」

ラミナが参戦を許した以上、手練れであることは明白だった。

武器の重さは元に戻ったが、カルトの能力は不明のため下手に戦うことを選択は出来なかった。

クラピカはカルトの参戦に歯を食いしばる。

「バショウ！ 彼女達を連れて今すぐ逃げろ!!」

そう叫んだ瞬間、ラミナがクラピカ達の目の前に一瞬で移動した。

クラピカは目を見開いて対処しようとしたが、その前にラミナの右脚が動こうとしていた。

しかし、ここで再びルシラが先に動いた。

「【舞<sup>ロ!</sup>い防<sup>ア</sup>ぐ七<sup>イ</sup>の花弁<sup>アス</sup>】！」

ルシラの大盾が七つの小さな盾に分裂して、ラミナの頭上、顔、胸、右上腕、左上腕、右膝、左膝に出現した。

「!!」

ラミナも流石に動きを止められずに盾の群れにぶつかって、攻撃も止められてしまう。

クラピカも目を丸くしていた。

「その刃に切られると消えるのなら、触れないように、そして振れないようにすればいいだけです!!」

「こいつ……!!」

ラミナは歯を食いしばってルシラを睨みつける。

メンチ達はともかく、ルシラまで手にかけるつもりはなかったのだが、今最も面倒なのは間違いなくルシラだった。

そしてルシラが作った隙は、今度はラミナにとって致命的で、クラピカにとって最高の好機だった。

「!!」

クラピカの眼が赤く染まる。

一瞬。

時間にして0.1秒未満。

目の前で動きを止められてしまったが故に、ラミナにとっては防ぎようのないどうしようもない隙で、クラピカにとって巻き付けるには十分すぎる時間だった。

「【束縛する中指の鎖】……!!」

ラミナの身体に鎖が巻き付いた。

ラミナのオーラが消え、両手の武器が消える。

「っ……!!」

「これで……終わりだ……」

「言ったはずです。守りに特化していると、『守る』とは、阻害すること、相手に攻撃させないことも含まれるのですよ!!」

徹底的に危険を遠ざけ、攻撃を防ぎ、攻撃そのものを阻害する。

それがボディーガードの神髄である。

ジオアナには全く通じなかったが。

ルシラは後ろに下がり、七つの小盾はクラピカの周囲に浮かばせる。

ラミナが捕らえられたことにカルトは目を丸くして動きを止め、マチは怒りに顔を歪めて飛び出そうとする。



その時、

「誰が、終わりやって?」

ラミナの眼が金色に輝いて、クラピカを見据える。  
その変化にクラピカが目を見開き、一瞬動きが止まる。

直後、確かに縛り付けられていたはずのラミナが、鎖をすり抜けてクラピカに迫り、爪を尖らせた右貫手を心臓に向けて繰り出す。  
ルシラは驚きながらも何とか小盾を動かすが、ラミナの貫手を完璧に防げずに逸らすだけで精いっぱいだった。

ラミナの貫手は心臓から逸れて、クラピカの右脇下を抉る。  
だが、ラミナの左脚が突如振り上がって、蛇のようにならねってクラピカの鳩尾にドゴン!と叩き込まれる。

「ごあ!!?」  
クラピカは想像以上の衝撃とダメージに限界まで目を見開いて、くの字に吹き飛ぶ。

背後にいたルシラが咄嗟に飛び込んで、後ろに滑りながら抱き止める。

だが、その時にはすでに右手にフランベルジュを握るラミナが目の前にいた。

「!!」  
ルシラは小盾を動かして止めようとしたが、もう小盾の存在を知ったラミナには通じない。

直前でステップを変えて、一瞬でルシラの背後に回り込んで背中を2回斬り裂いた。

「がつ……!!」

「ちい!!」

メンチは包丁をラミナに飛ばし、コロロルクも念弾を放つ。

ラミナは左手にソードブレイカーを具現化する。

「オーバーソウル・シルバーアーミー銀を纏う精霊軍」……!」

更にザーニヤも気合で能力を発動する。

現れたのは銀色の翼を持つ鷲と鷹が出現した。

「コンバットモード、『シルバーイーグル』『シルバーホーク』……!」  
舞い上がった鷲と鷹の翼が、戦闘機を思わせる機械的な翼に変化する。さらに翼の下には武器も具現化され、鷹にはミサイルが、鷲にはガトリング砲が装備されていた。

高速で飛翔する鷲と鷹は、ラミナに砲撃を開始する。

それを見たラミナは大きくジャンプして、念弾と鷲の銃撃を躲す。ビルの壁を蹴ってマチがいる方に移動しながら追ってきたミサイルと包丁をソードブレイカーで斬り落とし、その直後にソードブレイカーを柳葉飛刀に変えて投げ、鷲の頭と鷹の背中に突き刺す。

鷲と鷹は悲鳴を上げて消滅する。  
2羽を具現化していたアクセサリーがバキン!と壊れて、地面に落ちる。

(動物を殺したら、アクセサリーも壊れるんか……)

マチのすぐ傍に着地して、柳葉飛刀を消してソードブレイカーに変える。

カルトも一度下がって、ラミナの眼を覗き込む。

「それがイルミ兄さんと戦った時に使ったっていう?」

「まあな」

「いい加減遊び過ぎだよ。もう待たないからね」

マチがギロリとラミナを睨みつける。

むしろ良く我慢してくれたなとラミナは思い、苦笑して肩を竦める。

「まあ、もうマチ姉が出る必要もなさそうやけどなあ」

ラミナはそう言っつて、クラピカ達に目を向ける。

クラピカは口から血を流しながら十字架の付いた鎖を腹部に当てており、ルシラは両膝をついて息を荒らげながら困惑気に手足や周囲を見渡している。すでに盾は消えていた。

メンチは包丁が残り一本しかなく、コロロルクとバシヨウ以外はもはや戦闘続行は不可能に近かった。

クラピカは息を荒く吐きながら、ラミナの両眼を見る。

「はあ…はあ…その…眼は…」

「別に眼の色が変わるんはクルタ族だけちゃうで。ま、もう一族は滅んで、名前も知らんけどな」

「…鎖をすり抜けたのは…」

「この眼の力やで。この眼…【月の眼】はうちのオーラを、目にした相手のオーラと同質化することが出来るんや」

「オーラを…同質にする…!?!」

「同じオーラやからお前の具現化した鎖に干渉してすり抜け、同じオーラやから【練】や【堅】も無視できる。んで、攻撃が当たる瞬間にオーラを戻して、無防備な身体に大ダメージを与える」

ラミナの言葉にマチを除く全員が絶句する。

そのリアクションにラミナはニヤリと嗤い、

「やから言うたやろ？ お前の鎖はうちには効かんてな」

「っ……………」

「ちなみにルシラは今手足が思うように動かず、視界が逆になつとるで。もう能力はまともに使えんやろなあ」

「な…………!?!」

「お前の【緋の眼】は能力の底上げつちゆう感じみたいやな。それに…オーラの雰囲気がちよいと変わりよつたな」

ラミナも眼の色が変わるとオーラの系統が変わる。

同じ気配をクラピカにも感じたのだ。

しかし、特に時間を気にした戦いをしないこと、そして鎖とは無縁な能力も見せないことから【緋の眼】はあくまで補助的能力であると判断した。

（鎖を使う制約に【緋の眼】を使うことを設定しとることから考えると…『全系統のブースト』が妥当やな。それやったら、あの回復能力にも納得できる）

恐らく特質系に変わっているであろうことは想像に難くない。

むしろ状態に合わせて系統が変わるなど、特質系くらいしかないのだから。

「さて……死ぬ覚悟は出来たか？」

ラミナ達が一步踏み出した瞬間、クラピカとルシラの傍に駆け寄っていたバシヨウが動いた。

さりげなく取り出していた短冊にオーラを籠めて握り潰す。

「グレイトハイカー流離の大俳人」

すると、路地を覆うほどの煙が一気に噴き出した。

ちなみにバシヨウが短冊に書いたのは、

『煙満ち 敵から逃げ延び 煙けむに巻く』

という微妙な俳句（正確には川柳）であった。

それでもラミナ達の眼から、一瞬でもクラピカ達は姿を隠すことに成功した。

その瞬間、ザーニヤも動いた。

『シルバーギガエレファント』！ 『シルバービッグボア』！

銀色の鼻を持つ巨象と、銀色の牙を持つ巨大な猪が具現化する。

「コンバットモード!!」

巨象は足裏にキヤタピラが出現して鼻が戦車の砲台に変化し、巨猪は前脚と後ろ脚にそれぞれタイヤに変化して車になった。

「ギガエレファント、足止めをお願いします！ 皆さんはビッグボアに乗ってください！」

戦闘にほとんど参加していなかったバシヨウとザーニヤはずっと逃げる隙を窺っており、逃走する用意をしていたのだ。

ギガエレファントは路地を埋め尽くすほどの大ききで、勢いよくラミナ達の元に突っ込んでいった。

その隙にバシヨウはクラピカとルシラをビッグボアの荷台に放り込み、ザーニヤはメンチに乗せられる。

コロロルクは能力で建物の上までジャンプして、クラピカ達を援護することにした。

ラミナ達は突然煙の中から現れて、砲撃してきたギガエレファントに特にリアクションは見せなかった。

ラミナがソードブレイカーを具現化した瞬間、バシヨウが具現化した煙が霧散した。

「あ？ なんや、この煙。能力やったんか」

「みたいだね」

単純に隠し持っていた煙幕弾だと思っていたのだ。

ラミナは砲撃を掻い潜ってソードブレイカーをギガエレファントの砲台に突き刺す。

ギガエレファントは姿を消し、地面に象牙と戦車の形をしたプレートを繋げたネツクレスが転がる。

クラピカ達はすでに猛スピードで走り出しており、姿は見えるも小さくなっていた。

「ちっ……！」

「追いかけるの？」

「当然だよ。ここで殺す」

マチの言葉に頷いて、3人は走り出す。

【月の眼】を解除して倦怠感に襲われるラミナだが、戦闘続行は可能と判断する。

3人は建物の上に跳び上がって、一気に距離を詰めようとしたが、ピリリリリ！ ピリリリリ！

マチの懐から着信音が鳴り響いた。

走りながら携帯を取り出したマチ、表示された名前を見て眉を顰める。

「団長から」

「あ？」

ラミナ達は足を止めて、マチが電話に出る。

「もしもし？」

『どうした？ 何か取り込み中か？』

『鎖野郎に会った。今、逃げられて追いかけてるところ』

『ほう……』

「そっちの用事は？」

『ホームに帰って、これから新しい仕事にとりかかろうと思ってな。その誘いだ』

「……」

マチはクロロのお誘いと、クラピカの命を天秤にかけて顔を顰める。

それにラミナとカルトは顔を見合わせる。

『俺としては、正直こっちに来てもらいたいんだがな』

「……分かった。そっちに行く」

『ふっ……じゃあ、待ってるぞ』

通話を終え、マチは携帯を仕舞いながら内容を話す。

ラミナとカルトは盛大にため息を吐くも、もちろん逆らえないので大人しく従うことにした。

「いっぺん、拠点に戻ってええか？ 武器の補充したいねん」

「いいんじゃない？」

「カルトは家に仕事の紹介してもらい。クロロの仕事がつまらんかったら、そっちの仕事で暴れたらええわ」

「うん。けど、あいつらはこのままでもいいの？ また追いかけてくるかもよ？」

「ん〜……そうやなあ。まあ、メンチ達は大した実力ちゃうし、放置でもええやろ。ルシラ？ は、娘っ子の依頼があるし」

「鎖野郎は？」

「……あんま気乗りせんけど……」

ラミナは眉を顰めながら携帯を取り出す。

そのまま操作を続け、数分ほどすると終えたのかポケットに戻す。

「なにをしたの？」

「……依頼、やな」

「誰に？ 何の？」

「まだ返事待ちや。オツケー貰ってから話するわ」

「ふうん」

「とりあえず、まずは移動しよか。クラピカ達が警察やら他のハンター呼び寄せてきたら面倒やし」

マチとカルトは聞きたそうだったが、ラミナの言葉に頷いて移動を始め、街から離れたのだった。

その数日後。

クラピカの耳に、衝撃的な情報が届いた。

「お嬢様が……殺された……!?!」

ラミナ☒sウエボン!!

・【裏シヤドを縛れば表バインドも同じ】

柳葉飛刀に付与された能力。

影に柳葉飛刀を突き刺して発動。刺された者は約30秒、動きと念能力を封じられる。

実力者ほど刺すべき本数が増える。

他の者に抜かれてしまえば解除されてしまうため、多人数相手には使い辛い。

元ネタは単純に『影縛りの術』。

・【親愛デメなる妹メのペツトワッ仲間ン】

鎖鎌に付与された能力。

投げた鎖鎌に巨大な狼を頭部を具現化する。

口の中はブラックホールのようになっており、喰らうというよりは『呑みこむ』。

シズクの「デメちゃん」をイメージして創ったが、全く似ていない。対象を指定できず、操作することも出来ず、吐き出すことも出来ない。

その代わり、念で具現化したものも呑みこむことが出来る。

ルシラの能力!

・【慈愛アイギス・アナクなる守護フェイスの盾イ】

等身大の十字の大盾を具現化して使用する能力。

銃弾、ミサイル、爆弾、放出系能力などを前方に作った反射能力がある光の壁で包み込んで無効化する。

『盾の前には敵しかいないこと』『後ろに誰か守るべき者がいること』『壁の大きさに比例してオーラを消費する』が制約。

\*盾のイメージは『FGO：マッシュ・キリエライトの【ギヤラハツドの盾】』。

・【舞<sup>ロー</sup>い防<sup>ア</sup>ぐ七<sup>イ</sup>の花<sup>ア</sup>弁<sup>ス</sup>】

七つの小さな盾を具現化する能力。

操作可能で反射能力があるが、上記の能力よりは脆く、面の部分でしか作用しない。

重ねて並べた場合の強度は随一。【超破壊拳】【天を衝く一角獣】ですら防ぎきる。ただし、あくまで『点』における防御において、である。

\*元ネタは『F a t e : 英霊エミヤ【ロー・アイアス】』



## #92 マサカ×ノ×ヒガイシヤ

翌朝。

メンチ達は病院にいた。

ルシラとザーニヤはもちろん治療のため入院していた。

クラピカは「癒す親指の鎖」ホーリーチエンで、ある程度回復していたため簡単に治療だけして、すぐに仕事に戻っていった。

薄情に思えるが、それはメンチ達をラミナ達から遠ざけるためだと誰もが理解していたので責める者はいなかった。むしろ、1人になるなど警告したくらいだ。

しかし、クラピカはもう巻き込みたくないという思いが強く、バシヨウの制止さえ聞かずに病院を出て行った。

バシヨウも一度1人になっているセンリツの元へと戻り、依頼主に色々と報告しに向かった。

メンチとコロロルクはルシラ達の護衛で残っていた。

だが、ラミナ達は追って来ずに街を出て行ったことが分かった。

「隠密性が高いフクロウを飛ばしたのですが……。何故か途中で引き返していく3人の姿を捉えています。おかげでギガエレファントを回収できましたが……」

「ったく……ホントによく分かんない奴ね。子供を助けたかと思ったら、いきなり襲ってくるし。かと思ったら、あっさり引き下がるし」「クラピカって奴と因縁があるみたいだけどねえ」

「あいつら、同期で結構仲良くやってたと思っただけどねえ」

メンチはハンター試験での様子を思い出しながら腕を組んで眉間に皺を寄せる。

コロロルクは眉尻を下げて、

「流石にもうあの子を仕事に誘うのは厳しいんじゃないかい？」

「そうねえ……。けど、モラウ達のことから考えれば、今回の事を無視して満足する報酬を出せば引き受けてくれる気もするのよねえ」

「あゝ」

コロロルクとザーニヤはメンチの言葉に納得の声を上げる。

それにうつ伏せでベッドに横になっているルシラが首を傾げる。

「殺し合いをしたのにですか?」

「あいつは良くも悪くも殺し屋が染み込んでるからね。色々どらいで、物事の判断基準もはつきりしてるのよ。殺し屋にとって敵味方が変わるの常。筋を通せば、ある程度の敵対した過去は水に流してくれるのよ」

「……あれである程度なのですか?」

「誰も死んでないしね。……あいつ、というかあいつらが最初から本気で来られたら、とつくの昔に全滅してたわよ」

「……まあ、それは……」

ルシラもそれには頷くしかなかった。

事実、ルシラは何故自分がこの程度の怪我ですんでいるのか不思議でたまらなかった。

あのクラピカを抱えた状態で背中を取られた時点で、ルシラにはどうしようもなかった。そして、直前のラミナの動きから、あの一瞬でルシラを殺すことは可能だったはずなのだ。

あの鋭い刃が首に飛んでいけば、間違いなくルシラの頭は宙に舞い、地面に転がっていた。

なのに、斬られたのは背中。しかも、数日で歩けるほどに回復するレベル。

ザーニヤも重傷のように見えたが、急所は外れており臓器は傷ついていなかった。数日安静にして傷さえ塞がれば、日常生活には問題ないレベルまで回復することも分かっている。

あのラミナの実力から考えれば、それは幸運過ぎる。

全員がそう考えていた。

すると、ドアがノックされた。

「どうぞ」

「お邪魔するわ」

入って来たのはセンチツとバシヨウだった。

それにルシラは目を丸くした。

「ふ、2人が来たということは、お嬢様は……!?!」

「ご両親と一緒にいるわ。……ナダメジマファミリーが壊滅したことで直近の脅威は去ったということ、私達は休暇を貰ったの。もう少し状況を見て、依頼完了か続行か決めるそうよ」

ナダメジマファミリーの壊滅は、当然関係各所に広まっていた。

これには事情を知っていた者達に衝撃が走った。あの息子がそこまで過激な対応をするとは思わなかったからだ。

しかし、その直後に更なる衝撃が走る。

『ナダメジマファミリー壊滅は幻影旅団によるものである』

『ナダメジマファミリーが雇った傭兵部隊が偶然通りがかつた幻影旅団の団員に喧嘩を売った』

という情報が駆け巡ったからだ。

ちなみにこれはクラピカが意図的に流した情報である。

ジオアナはともかく、その両親は明らかに巻き込まれただけだ。

少しでも彼らのダメージを減らしておくべきだと思ったのだ。それにルシラへの罪滅ぼしでもある。

これでナダメジマファミリーやジオアナ達は、『巻き込んだ張本人達』ではなく『巻き込まれた不運な連中』になった。

クラピカの目論見は見事に成功し、ナダメジマファミリーの縄張りに出すことにほぼ全員が戸惑っていた。

ジオアナの父は完全に被害者の立場であり、これで裏社会と完全に手を切るだろうと考えられたため狙う者は今のところいない。

本拠地にいるナダメジマファミリーの者達もこの状況でジオアナ達を狙う度胸などなく、大人しくしている。

下手に手を出して、また幻影旅団に襲われたらたまらないからだ。普通ならば「襲われるわけねえじゃん」と言えるのだが、実際に死んだ者がいる以上恐れてしまうのは仕方がないことである。

普通じゃ出来ないことをするから、【幻影旅団】なのだから。

「そうですね……。お嬢様の様子は？」

「あの人とお別れの挨拶が出来なかったって寂しがってたけど、ご両親といれて嬉しそうよ」

「……あの、人、ですか……」

もちろんラミナのことである。

「少しはお前の事も心配してたぜ。少し、だけどな」

「……」

バシヨウが苦笑しながらトドメを刺して、ルシラは顔をシートに埋めて静かに泣き始める。

そこにまたノックが響く。

「邪魔するぞ」

現れたのはミザイストムだった。

「あら、どうしたのよ?」

「どうしたって……お前らがあいつらと遭遇したって聞いたから顔を見に来たんだよ」

「は? もう広まつてるの?」

「いや、俺に協力してくれている情報系ハンターから聞いた。だから、ほとんどの奴らは知らん」

ミザイストムはゆっくりと部屋の中に入ってきて、ザーニヤ達を見る。

「再起不能までではなさそうだな」

「手加減されただけよ。本気だったら、だあれもここにいないわね」

「そうか……。事情を聞いていいか?」

「いいわよ」

「お前達もいいか?」

「十二支んは幻影旅団を追ってるのか?」

バシヨウが片眉を上げて訊ねる。

それにミザイストムは首を横に振り、

「俺が、俺達が追ってるのはラミナという奴だ」

「何故かしら?」

「奴の情報は知っているだろう? 暗殺者でありながらプロハンターになり、幻影旅団とゾルディック家と繋がっていて、ヨークシン以降色々と派手に暴れている。しかしその一方、メンチや他のプロハンターとも仕事をして、ジンの推薦ではあるがシングルハンターになった。優秀なハンターでもあり、賞金首でもある厄介な存在だ。下手を

すれば、ハンター協会にとつてとんでもない爆弾になりかねん」

「今のうちに対処したいと？」

「ベストはハンター協会側に引き抜けることだな」

「あいつを？ 副会長派とか、脱会長派が黙ってねえんじゃねえか？」  
「パリストン派は口だけさ。パリストンとて、本心では奴を欲しがっているはずだ。脱会長派は放っておけばいい。俺も十か条の四については議論の余地はあると思う。だが、正義感だけでプロハンターは務まるものでもない。確かにラミナという者は闇側の人間だが、どちらかと言えば現場主義の者という印象を持った。下手な権力など欲しないタイプの性格をしていると推察できる」

「……そうね。権力よりは金って感じね。まあ、流星街出身だから権力とは無縁だったつてのもあるんでしようけど」

「まあな。だが、逆に言えば、どこかの副会長のように暗躍される心配もない。純粹に戦力として期待できる人材だ。正直、十二支んに欠員が出れば、会長が次に選んでも不思議はないくらいだ」

凄腕の暗殺者で、幻影旅団とゾルディック家、流星街との繋がりがあつて、マフィアなどの裏社会、闇社会にも精通している実力者。

しかも、ジンとも繋がりがあつて、シングルハンター昇格に推薦するほどの者。メンチやモラウなど名の知れたプロハンターとも完璧な仕事をしたとされていることから、信頼関係が築けないわけでもないことが窺える。

そしてモラウやメンチの話から、かなり知恵も回ることも分かる。

味方にすれば、これほど心強い者はいない。

「けどねえ……あいつはそう簡単に引き込めないと思うわよ」

「だから情報が欲しいんだ」

それにセンリツとバシヨウは顔を見合わせて頷く。

そして、メンチ達はラミナの知っている限りの情報を話す。

センリツはクラピカのことについては少し悩んだが、いずれ知られる話でもあるのでクルタ族と幻影旅団の因縁について話すことにした。流石にキルアとの婚約は話さなかったが。

全ての話を聞いたミザイストムは顎に手を当てて、しばらく考え込

む。

「……………やはり難しい、か」

ラミナの勧誘は厳しいと判断した。

「幻影旅団と家族のような関係ならば、もはや抜けることはあるまい。こちらから下手に仕掛けなければ無駄な被害は減らせそうだが……………」  
「言ったところで止まるわけないでしょ。そんなんで止まればハンターなんてやってないわよ」

「だろうな……………。それに幻影旅団として活動している以上、どうやってもどこかで目立つ。無闇に手を出すな、くらいが限界か」

「それでも馬鹿は出るでしょうけどね」

「そこまでは責任が取れん」

「後はクラピカという者との因縁か……………。こればかりはどうしようもないな。止める理由がない」

ハンターになって以上、賞金首の幻影旅団を狙うことを止めることは出来ない。

無用な被害を出すなど言うくらいだが、今回は出来る限り1人でやり切ろうとしている節もあり、今回は純粹な事故だ。

責める理由はない。むしろ、よく逃げ切ったと言うべきだ。

「……………会長にも一応報告しておくか。すでに知っていそうだが」「でしようね〜」

「お前達はしばらくラミナを追うな。俺は調査を続けるが、今まで以上に慎重に動くつもりだ」

「分かってるわよ」

メンチはやや不服気に顔を顰めながらも頷く。メンチが頷いた以上、コロロルクとザーニャに否はない。

もちろんルシラ達も「誰が追うか!」という心境である。

問題はクラピカだが、過去が過去なので関係が薄い者が警告しても聞く耳は持たないと考えられるのでセンリツ達が注意して見守ることになった。

どこまで止められるか分からないが。

そして、2日後。

ルシラは無事に退院し、ジョアナの元へと戻っていった。

センリツとバシヨウは依頼達成でお役御免となり、クラピカの護衛に専念することになった。

メンチはまだザーニヤが入院中だが、コロロルクを残して次の仕事へと向かった。

ミザイストムもすでに街を離れた。

クラピカ達の商談も大詰めを迎えており、数日後には拠点に帰れるだろうと考えられていた。

だが、クラピカに届いた連絡に事態は急変する。

「なんだと!!?」

クラピカの驚愕と怒りが混ざった大声が滞在しているホテルの部屋に響き渡る。

その声にセンリツ、バシヨウ、リンセンも慌てて駆けつける。

目を大きく見開き、瞳を震わせるクラピカの姿に只事ではないことが嫌でも理解する。

「お嬢様が……殺された……!!?」

「!!?」

センリツ達も目を丸くして息をのむ。

「誰に!? どうやってだ!? ボスは無事なのか!?!」

クラピカも混乱を隠しきれずに、責め立てるように問いたです。

流石にこの状況でライトやネオンが死ぬのは、クラピカにとっては死活問題だ。

部下からの連絡では、幸運なことにボスであるライト・ノストラードは生きているようだった。

しかし、ネオンが死んでしまい、ただでさえ占い能力を失くしたことに追い詰められていたライトの精神は完全に崩壊したらしく、錯乱するか虚空を見つめてブツブツと何かを呟くのどちらかの状態を繰り返しているとのことだった。

完全に心を病んでいるライトの状態に、クラピカは歯軋りをして他に被害はどれくらいかを聞く。

死んだのはネオンと護衛に就けていた男連中数人。

世話役の侍女達は誰も死んでいなかった。

「どうやら銃で殺害されたようだが、銃弾や薬莖などが一切見つからず、また侵入経路が不明。」

盗まれた物はなく、完全にネオンを標的とした暗殺が目的だったことは明白だった。

「くっ！（一体誰が……!? まさかラミナ……? いや、占いをねだり続けていたマフィアンコミュニティの誰かか?）」

ネオンの占いはマフィアンコミュニティ内の顧客が多い。

ライトはそれでのし上がってきたので、「早く戻さねば!」と追い詰められていたのだ。

しかし、一向に能力が戻る気配はない。

それで痺れを切らした者が出てもおかしくはない。

ネオンの占いは基本的に的中率100%。

死を避けるためには最高の手段だったのだ。

己の死を知ることが出来なくなる。

その恐怖はネオンを恨むには十分な動機になる。

特に今マフィアンコミュニティは十老頭の席を狙って大混乱だ。

今こそ占いが欲しい。

しかし、手に入らない。

その苛立ちは、ある推測を生み出した。

『もしかしたら、他の組と手を組んで占いが出来ないふりを……?』

『もしや、最近調子がいい組はまさか……!』

一度考えてしまうと、否定できる材料はない。

占いなどファックス一本で終わるのだから。

こうなってしまうと、もう全てが疑わしい。

そして、行きつく先は……もう占いを期待しなくて済むようになること。

ネオンが死ねば、占いは絶対に出来ない。



「そうならば占いを求めることもないし、他の組も占いを手に出来ないのだから変に疑う必要もない。」

『なんだ……それが一番楽じゃないか』

「だって殺すのは、いつも通りプロに任せればいいのだから。なので、クラピカは犯人を特定することが出来なかった。」

「ちなみに犯人はラミナである。」

「もちろん仕返し、というよりは八つ当たりである。」

「依頼したのは『ロストマン』だ。」

「先日の戦いの借りを返した形である。」

「報酬は100億ジエニー。」

「一般人レベルの戦闘力もないネオンを殺すだけには、あまりにも法外な金額である。」

「これは前回命を助けられたにも等しいことへの、礼も含めていたからだ。」

「これで断る暗殺者はいない。」

「しかも、普段はいる念能力者の護衛もいない。」

「ロストマンは迅速に仕事に取り掛かって、ネオンを暗殺したのだった。」

「クラピカは手で目元を覆いながら、」

「センリツ、バシヨウ、リンセン。すぐに拠点に戻ってくれ」

「けど、それじゃああなたの護衛が……」

「今はそれどころじゃない。それにメンチ達の話ではもうラミナは街を離れたんだろう？ ならば、今は危険は少ない。明日中には商談を纏める。だが、それはノストラードファミリーが残ってなければ意味がない。流星にボスまで死なれてはたまらない」

「……そうだな。分かった」

「……無理はしないでね」

「ああ。そつちも気を付けてくれ」

「センリツ達は後ろ髪を引かれながらも、クラピカの指示に従って拠

点へと戻ることにした。

翌日、クラピカも商談を纏めて、すぐさまノストラード邸に向かう。

2日ほどかけて戻ったノストラード邸はどこか鬱蒼としており、クラピカが戻ってきたことに多くの者がホッとした表情を浮かべていた。

ネオンの遺体はすでに火葬を終えていた。

葬式はライトがそれどころではなかったし、暗殺されたマフィアの娘の葬式を行うことなど恥を晒すに等しいからだ。

身内でひっそりと、が流儀ではあるが、その身内もまともな状態ではないのでそれどころではない。

すでに屋敷の修繕も終わっており、クラピカはセンリツ達が集まっている部屋に向かう。

僅か一日早く帰っていただけだが、センリツ達の顔にはとてつもない疲労が浮かんでいた。

「ご苦労、だったな……」

「全く……ヨークシンでのごことがなかったら、今ここで辞表叩きつけるところだぜ……」

バシヨウは少しでも疲れやこの雰囲気やこの雰囲気やこの雰囲気を誤魔化すために冗談を言うが、6割くらいは本音で、センリツとリンセンの2人も同意するよきな雰囲気だったのであまり冗談になっていなかった。

「ボスの容体は？」

「……もう表に出るのは無理でしょうね。叫んだり暴れることは減ったけど、今にも自殺しそう。入院も視野に入れるべきね」

センリツの能力は音楽で心を落ち着かせるのが限界。

治療が出来るわけではないのだ。

クラピカは顎に手を当てて、

「そうだな……。別荘で少し休んでもらって様子を見よう。専属の精神科医やカウンセラーを手配して、常に監視を……。最悪を想定して、組の後継についても考え、ボスが落ち着いている時に書類で遺してもらおうべきだな。……お嬢様の侍女達は？」

「そっちはもう辞めさせてあげてもいいと思うわ。……流石にスクワ

ラとお嬢様を立て続けに亡くしたから……。他の子達も、流石にここを襲われたのはショックが大きいみたい」

「……そうか……。そうだな。彼女達には一般社会で職を探すと伝えてくれ。もちろん、就職できるかどうかは本人達次第だが、退職金や転居の費用も十分に出す」

「分かったわ」

「ボスや侍女達の対応が終わり次第、この屋敷も手放す」

「まあ、この状況でここを維持する理由はねえよな」

「……お嬢様のコレクションはどうする?」

リンセンの言葉にセンリツとバシヨウは僅かに顔を強張らせる。

クラピカも数秒黙り込んで、

「……オークションに出す。表に出していいものは一般のオークションで、無理なものはマフィアの裏競売に出す。幸い今年はネットオークションの予定だからな。開催が怪しいならば、他の裏競売を探す」

「……【緋の眼】はどうするの?」

「……私情を挟み、持ち主が亡くなっているのは気が引けるが……。私がい取らせてもらう。オークションで支払った金額を私の給料と貯金で支払うつもりだ」

クラピカの提言の是非を判定することはセンリツ達には不可能なので、その言葉に頷くしかなかった。

少なからず対価もしつかりと払っていると言えるので、火事場泥棒と後ろ指を差されることもないだろう。

しかし、センリツの耳にはクラピカの困惑と懺悔、そして強い覚悟を示す心音が聞こえていた。

それがセンリツの不安を増長させるが、今はライトの事や他の者達のことなどやるべきことがたくさんある。

「とりあえず、まずはボスの安全と療養体制を整える」

クラピカの言葉に全員が頷いて、すぐに動き出す。

これでまたクラピカは幻影旅団に構う暇など無くなってしまった。

ラミナは隠れ家に戻って武器の補充をして、マチ達に依頼の件を話した。

「——つちゆうわけで、これでクラピカは組の立て直しと【緋の眼】回収で手一杯になると思うで」

「……微妙だね」

「効果ある？」

「クラピカにとって、今更マフィアとの伝手が無くなるんはデカイやろうから宿主はしっかり守ると思うで？ 若頭つちゆう立場も失いたあないはずやでな。仲間の眼も取り戻すんは金も手間もかかるはずやし、こつちにわざわざ手え伸ばす余裕はなくなる」

マチとカルトは懐疑的だが、ラミナは十分な嫌がらせになると考えていた。

ラミナの仕業かどうか判断できないのが、またクラピカを精神的に追い詰めるだろうとも。

「ま、もう終わったことやし。クロロのどこに向かうことに集中しようや」

「それもそうだね」

「ラミナ、組み手して」

「あいよ」

と、3人はクラピカの事などポイツと放り投げて、ほのぼの？とした時間を過ごすのだった。

## #93 トツクン×ト×デンワ

ラミナ達はクロロ達の元にやってきていた。  
場所はサヘルタ合衆国の「スーティオン」。

自然豊かであり、音楽などが盛んな街でもある。

クロロ達はいつもどおり街外れの郊外の廃マンションに滞在していた。

拠点に入ると、クロロ、パクノダ、シズク、フランクリン、ボノレノフ、コルトピがいた。

「ん？ シャルは？」

「あいつはノブナガ達のところだ。大分暴れたらしくてな」

「目立ってるのはラミナ達の方かもしれないけどね」

「目立ちたくて目立つとるわけやない」

パクノダの言葉に不服そうに腕を組んで抗議するラミナ。

全く説得力はないが。

「まあ、ええわ。クロロ、ボノ、暇な時間組み手してんか？ ちよいと身体が鈍つとるみたいでな」

「構わんが、急にどうしたんだ？」

「……」

ラミナは拗ねたように顔を背けて、ボノレノフの質問を躲そうとする。

その態度にクロロを始めとする団員達は首を傾げて、マチに顔を向ける。

マチはラミナに呆れた目を向けながら、

「少し前にゾルディックの依頼で殺し屋連中と殺り合ってたね。その時、最後に気い抜いて右腕斬り落とされたんだよ」

「ほお……ラミナの腕を斬り落とした奴がいるのか」

「【アバズレ】や【アバズレ】。お前も少しは聞いたことあるやろ」

「……ああ。戦闘狂の女か」

「マチがいてよかったね」

「姉様様だな」

「ふん」

シズクとフランクリンの言葉に、揶揄われた気がしてマチは不満げに腕を組んで鼻を鳴らす。

「つちゆうわけで、手伝うて」

「いいだろう。俺も最近思いつきり身体を動かしてないからな」

クロロも小さく笑みを浮かべて頷く。

ちなみに仕事はクロロが欲しい古文書を大学や美術館から盗むことだった。

同時に仕事をするためにもう少し実行要員が欲しかったそうさ。

シャルナークがいないので、細々とした些事を手伝ってくれる要員が欲しかったのもある。

ある程度情報収集はしているようだが、もう少し情報を集めてから仕事に取り掛かることになった。

ラミナはボノレノフやクロロと組み手をしながら、情報収集や脱出経路などを決めていく。

組み手は【発】無し、それ以外の【四大行】関連の技はあり。

もちろん武器も無しである。

今はボノレノフとラミナで組み手を行っていた。

ボノレノフは連続で右ラツシユを繰り出し、ラミナは全て紙一重で躲す。

ラミナの動きを見切っていたボノレノフは左フックを腹部目掛けて放つも、ラミナは左手で逸らして躲す。

今度はラミナが両手でラツシユを繰り出すも、ボノレノフは躲さずに全てグローブや肘で弾き落としていく。

ラミナは右手のみラツシユを放つ際に【蛇活】を組み合わせてボノレノフのガードをすり抜けようとするも、ボノレノフは見事に見切つて紙一重で躲す。

2人は距離を取ったかと思うと、次の瞬間にはまた殴り合いを始めていた。

位置が一瞬で入れ替わり、普通ならありえない動きや姿勢から攻撃

が繰り出される。

この時間、僅か30秒。

カルトは目で追いきれずに眉間に皺を寄せて、必死に2人の戦いを見ていた。

(なんであそこからあんな……！ また入れ替わった！ ああ、なんであれを防げて、そのカウンターを躲せるの……!?)

「相変わらずボノはバランスが凄いな」

「全身から音を奏でなきゃいけないボノの身体は柔軟だけど引き締まってるものね」

「そのせいで動き読みづらいんだよね」

同じく観戦していたマチ、パクノダ、シズク。

パクノダもカルト同様完璧に見えているわけではないが、ある程度どう動いているのかは感じ取れていた。

ボノレノフとラミナの戦いはほとんど加速していく。

しかし、ボノレノフは途中から一か所に留まって、踊るように回りながらパンチやキックを繰り出していた。

ラミナは【肢曲】の残像でボノレノフを囲い、四方八方から攻撃を叩き込む。

「ちい！ 相変わらずタコみたいな動きしよるな！」

「そつちも相変わらず蚊みたいに動き回るな」

悪口にしかな聞こえない冗談を言い合い、ラミナとボノレノフは更に加速する。

カルトの眼にはもう動き回っていることしか分からなくなった瞬間、

パァン！

突如ラミナが仰け反りながら後ろに滑り、ボノレノフは悠々と拳を構えていた。

(ラミナがスピードで負けた……?!)

カルトは目を丸くする。

ラミナは額を軽く撫でながら、顔を顰める。

「つつう………！ 完璧に動き読まれとったか」

「殺されないと分かっているから出来ることだがな。戦闘時のお前はフェイタンに似てるから、読みやすい」

「まあ、そらな」

「……ここまでにするか？」

「おう、体の調子も分かったでな。軽い筋トレとクロロと組み手して、どっかで殺しやれば勘は戻るやろ」

右肩を回しながら言うラミナに、ボノレノフは頷く。

カルトもその後、ボノレノフとシズクと組み手をして、見事にボコボコにされたのだった。

準備をしていたクロロ達も合流し、当然のようにラミナの手料理タイムとなった。

明らかにラミナに料理させる気満々のキッチンが用意されており、ラミナはいつもの如く1人で大量の食材を捌き、大量の料理を作りあげていく。

途中でパクノダとコルトピが少しだけ手伝ってくれたが、ラミナの忙しさは変わらない。

「ラミナ、刺身出来るか？ あと麻婆豆腐」

「最初に言えや。しかも、どんな組み合わせやねん」

「アタシは煮つけが食べたい」

「俺はステーキ追加」

「俺も」

「……ハンバーグおかわり」

「……はあ」

「頑張りますよ」

「いつものことやからな……」

相変わらずの好き勝手オーダーにラミナはもう怒る気にもならない。い。

黙々と調理を始め、出来上がった料理が並べられていく。

カルトのハンバーグが頼んでから2分で、しかもチーズ乗せて出てきたのを見たクロロやパクノダ達は微笑ましい視線を2人に向ける。

カルトは恥ずかしそうに顔を逸らす、ラミナは苦笑しながら、



「カルトがハンバーグをおかわりするんは、いつものことやからな」  
「絶対に3回はおかわりするからね、この子」

マチの追撃に顔を赤くするカルト。  
それにシズクは大きく頷いて、

「ラミナのハンバーグってホントに美味しいし、飽きないんだよね。  
他の料理もそうだけど。私もハンバーグ欲しい」

「へいよ。んで、刺身」

「すまん」

「ええ加減刺身くらい自分で切れるようにならんかい。コツを掴めば  
すぐに食えるで」

「包丁の手入れが面倒でな」

「うっさいわ。研ぐ程度で変わる程度やったら【周】で十分やろが」

ジト目を向けながらツツコむラミナだが、クロロは肩を竦めるだけ  
で躲す。

それに小さくため息を吐いて、調理を再開するラミナ。

数時間後によく解放されたラミナだが、つまみ食いだけで腹は  
十分に膨れていた。

今日は休むことになり、ラミナはマチ、パク、シズクの女性陣で寝  
るようになった。

部屋の1つにワイドキングサイズのマットレスがドン！と置かれ  
ていた。

「……よう持ってこれたな」

「フランクリンにシズク、コルトピがいるもの。防犯カメラさえどう  
にかすれば大抵のものはバレずに盗めるわ」

女性陣4人は下着姿でマットレスの上に座って会話していた。

パクノダはラミナの右腕に注目して、

「傷跡は遺ってないようね」

「そんな雑な繋ぎ方しないよ」

マチが不服気に腕を組んで言う。

その言葉にパクノダは苦笑してマチを宥め、シズクはポフンと横に  
なって枕を抱く。

「そう言えば、鎖野郎と会ったんでしょ？」

「ん？ まあな」

「3人でも殺せなかったの？」

「……他にもハンターが数人おつてな……」

「それにラミナしか戦ってないしね。変なプライド出して、【月の眼】まで使ったのに結局油断して逃げられてさ」

「う……」

「なるほど。だから、鍛え直してるってわけね」

「やっぱり強いのか？ 鎖野郎って」

「いや……うちやったら一対一なら、まず負けんやろうな。他の連中もあの念を封じる鎖に、捕まらんように油断せんかったら勝てると思うで」

「ふうん……」

「じゃあ【月の眼】は有効だったのね？」

「おう、バッチシ」

そう答えながら、頭の後ろで手を組んでボフィンと枕に頭を乗せるラミナ。

それにマチとパクノダも横になる。

マチ、ラミナ、シズク、パクノダの順で並んでいる。

「なんか懐かしいかも」

「流星街ではよくこうして寝てたものね」

「デカくなったもんだね。シズクとラミナ」

身長のことを言っではいけない。あくまで成長したと言いたいのだ。

「あの時からラミナは皆の料理係だったよね」

「ふふ。違うわよ、シズク。『皆』じゃなくて『マチ』の、よ。そこに私達が押しかけてたの。マチが私達の分も作れって言ったから、ラミナはああなったのよね」

「せやなあ。クロロが来れば、全員来よったからなあ」

チビツ子だったラミナの目からも、団員達がアヒルの雛のように見えたくらいだった。

もちろんマチの後ろを歩いていたらミナも周りから同じように見られていたのだが。

シズクは当時フランクリンの肩に乗るのが好きだった。

ウボオーギンの肩に乗ったりもしていたが、フランクリンの方が落ち着くらしかった。

ラミナはマチに手を掴まれていたので、他の者に近づくことなど出来なかったのは言うまでもない。

まだマチの方が大きかったので、後ろから抱き着かれて顎をラミナの頭の上に置く状態が特にお気に入り（マチの）だった。

パクノダはそんな状態の妹分を可愛がるのが好きだった。

「今はカルトがその位置かしら？」

「はっ、冗談」

マチとラミナは同時に鼻で笑う。

「ちっこいフェイタンみたいなんが弟妹って、結構ムカツクでえ」

「ナマイキだしね」

「経験がない癖に自分がそこそこ強いこと分かつてるから、中途半端に傲慢なんよな。ゾルディック家のプライドっちゅうんもあるやろうし」

「ラミナに教わってるのもあるんじゃないの？」

「それもあるかもしれんけど、最近仕事もうちばっかやったし、互角で手頃な相手と戦つたらんからなあ。自分がどれくらい強なったか、どのくらいしか強くなつたらんのか、実感出来たらんのやろうな」

「さっきのラミナとボノレノフの組み手で少しは分かつたんじゃないかしら？」

「少しはな。けど、やっぱ殺し合いの緊迫感がないと微妙なところやろ」  
中途半端に強いので、手頃な相手が見つけれられないというのが実際のところである。

ゴンやキルアのように殺すことに拘らないのであれば組み手で十分だが、殺しに重点を置くならばやはり実戦が重要だ。

だが、今のカルトが程々に苦戦してギリギリで勝てる相手となると、なかなか見つからない。

「……この仕事で手頃な相手がおつたら、やらせてみるか」

「団長が許せばね」

「やんなく」

「ラミナが言えば問題ないと思うけどな」

「そうね。まあ、ラミナがお守りにつくのは変わらないでしょうけど」

「やんなあ」

ラミナはため息を吐いて、

(……ゼノ爺とシルバに確認させるんもアリか?)

と、考えるのだった。

その後もしばらく雑談をして、最後には肩を寄せ合うように眠る4人。

朝になって起きたパクノダは、マチとシズクに抱き着かれて若干寝心地悪そうなラミナを見て、笑みを浮かべるのだった。

その翌日の夜。

ラミナ、マチ、カルト、コルトピの4人で美術館へとやってきた。

ブルブ美術館と比べて格段に規模が小さい美術館なので、警備システムなども非常に粗末なものだった。

監視カメラを、姿を消したラミナが壊し、カルトも紙手裏剣で遠距離から壊す。

その後、姿を消したラミナが楽々と美術館内に侵入して警備室に忍び込み、防犯システムを止める。

「ん？」

ラミナは館内カメラに映る2つの人影を見た。

「警備員……にしては動きに隙がないな。プロか……」

マチ達に連絡しながら、防犯システムを壊して警備員達がいる場所に向かう。

姿を消した状態で向かうと、すでにカルト達と睨み合っていた。

運がいいことに警備員達の背後に出たので、実力が上であろう気配を持つ男の首を、新調したブロードソードで刎ね飛ばす。

「なっ!？」

生き残った青のスキンヘッドの男は目を見開く。

ラミナはそのままマチ達の元に戻る。

「お疲れ」

「おう。後はあいつだけや。カルト、せつかくや。お前がやってええで」

「いいの?」

「最近、実戦しとらんかったしな。この前も結局我慢させたし。ええから行ってこいや」

「うん」

カルトは嬉しそうに頷いて、前に出る。

仲間を殺されただけでなく、子供のカルトが出てきたことに、スキンヘッドの男は怒りの表情を抑えきれなかった。

「馬鹿にしやがって……! 幻影旅団が!」

「あれ? ボク達のこと、気づいてたんだ」

「あれだけ派手に暴れ回っていれば当然だろうが……!」

「それにしても、なんでこんなショボい美術館にハンターが警備してるんや? ハンターがおるにしては、他の防犯はザルやし」

「この館長は俺の弟だ。ここは俺達はもちろん、俺達の親父や仲間達が集めた物がほとんどなんだよ……!」

男の言葉に納得するラミナ達。

もつともカルトはどうでもいいとばかりに扇子を開いて、ゆっくりと歩み寄り始める。

それに男も【練】を発動して、構える。

男が更に腰を屈めて飛び出そうとした瞬間、カルトが音もなく男の真横に現れる。

「っ!」

カルトが扇子で斬りかかろうとしたが、男の脇腹から拳を握った腕が生え、カルトの顔面目掛けて伸びてきた。

カルトは目を丸くするも、軽やかに躲して一度距離を取る。

しかし、男がすぐさまカルトに詰め寄り、右ストレートを繰り出す。

カルトは左に跳んで躲すが、男の右肘から勢いよく脚が生えてカルトは屈んで躲す。

直後、生えた脚が消えて、男が左蹴りを放つ。

その脚に扇子で斬りかかろうとしたカルトだが、また男の左脚の脛から脚が生えてきて攻撃を中止し、一度大きく距離を取った。

(オーラを腕や脚に変える能力、ってことなのかな?)

カルトは僅かに眉間に皺を寄せて、男を睨みつける。

2人の戦いを見ていたラミナ達は、

「オーラから四肢を生やす能力か……。地味やけど接近戦タイプの能力者にしたら、微妙に面倒やな」

「大量に生やせないみたいだけど、その分籠められたオーラは多いから威力もあるだろうしね」

「見た感じやと生やせる場所は自由で、同じ腕や脚は同時に出せへんっちゅう感じか。後はどれだけ頑丈かつちゅうことやけど……」

「勝てるの?」

長い髪の間隙から覗く片目をラミナに向けて、コルトピが尋ねる。

ラミナは腕を組んで、

「速さと身体能力はカルトが少し上やな。やけど、念の熟練度は相手が確実に上。あいつの手足を生やす速さが、カルトの攻撃が届くより微妙に速いから、接近戦では少し手こずるやろうな」

「相手が目で追いきれない速さで動けば問題なさそうだけどね」

「まあな。まあ、自動防御能力がある可能性もあるでな。油断は出来んけど」

能力の感じからすると、男の系統は強化系か変化系。

それに放出系能力として生やした腕や脚が飛んでくる可能性もある。

修羅場もそこそこ経験しているようで隙も少ない。

人体の構造と動き上、どうやっても攻撃の際に出来る隙も能力で埋めているため、逆に『その隙を突くこと』がこちらの隙になる可能性があった。

しかし、

「まあ、カルトが真面目にやればええだけやねんけどな」

そう言ったのと同時に、カルトが左手を動かして紙手裏剣を4枚投げた。

男は小さく舌打ちして、紙手裏剣を叩き落そうとする。

その隙にカルトは紙吹雪を取り出して、振り落とし始める。

「!!」

「ふっー!」

カルトは扇子を大きく振って、紙吹雪を舞い飛ばす。

紙吹雪は男に勢いよく迫り、男は更に距離を取ろうとするが、カルトは素早く扇子を振って紙吹雪を枝分かれさせて縦横無尽に舞い飛ばす。

あつという間に男の周りを紙吹雪が囲う。

「ぐっ……い!」

『蛇咬の舞』

扇子を大きく振るい、紙吹雪が大蛇のようにうねりながら男の背後から襲い掛かる。

男は前に飛び出して背中に掠めながら躲して、そのままカルトに攻めかかるようにしたが、カルトが【肢曲】で残像を生み出したのを見て思わず足を止めてしまう。

その瞬間、カルトは扇子を真下に振って、再び紙吹雪を舞い上げさせる。

周囲に紙吹雪が舞い上がったことで男は身構えるが、今度は紙手裏剣が先ほど以上の速さで飛んで来た。

「っ!?!」

男は目を見開きながらなんとか躲したが、右腕と右脚が紙吹雪の中に入ってしまう。

『鮫削の舞』

直後カルトがその場で舞う様に回転しながら扇子を振る。

紙吹雪が高速で回転する竜巻となり、鮫肌のように男の右肘と右膝から先を削り切った。

「がああああ!!」

カルトはそのまま扇子を掲げると、紙吹雪が再び大蛇のようにうねり飛ぶ。

「終わりだね」

薄ら笑みを浮かべて、カルトは扇子を振り下ろす。

紙吹雪の大蛇はまさしく噛みつくかのように男の真上から勢いよく迫り、男の頭部を防ごうと掲げた腕ごと抉り潰した。

「!?!」

男は悲鳴を上げること出来ずに、ぐちゃぐちゃになった首から血を流して倒れて死ぬ。

カルトは扇子を閉じて、ゆったりと余韻に浸りながら死体に歩み寄る。

「もう少し楽しませて欲しかったな……」

最後の一撃は能力で躲すだろうと予想していたのだが、当てが外れてしまった。

痛み、そしていきなり手足を失ったことと子供にやられたというショックで、男は回避行動に意識を割く余裕がなかったのだ。

もう少し廻りながら色々と試したかったカルトはすでに余韻も冷め、冷え切った瞳で男の死体を見下ろしていた。

そこにラミナ達がやってきて、

「まあ、今くらいの相手やったら、接近戦で勝てるようになるんが目標やな」

「……接近戦だったら、どれくらいだった？」

「コルやパク姉は手こずるやろうけど、他は余裕で勝てるで」

「……」

「ま、確実に強くはなつとるから継続あるのみやな。ほな、仕事に戻るか」

「だね」

ラミナ達はさっさと目的の古文書を盗んでコルトピのコピーを置き、拠点へと戻る。

クロコ達も2時間ほど遅れて戻ってきて、コルトピが盗んできた古文書を渡す。



「あ、ククロ」

「ん？ どうした？」

「カルトやけど、もう他の奴らと自由に組ませてええで」

「え？」

カルトは目を丸くしてラミナを見る。

「どれくらいまで育ったんだ？」

「うちらレベルが相手やなかったら、まず大丈夫やろ。正直、もうここからは日々の修行と経験あるのみや。ゾルディックの仕事させてもええやろうけど、そこもカルトに決めさせればええわ。一々うちが付き添うんも、ここ最近微妙やしな」

「ふむ……そうか……。分かった、いいだろう。ただし、死んでも自己責任だぞ」

「そこは当然やろ」

殺し屋をしておいて、死なれたら困るなど恥でしかない。

シルバ達にもすでに自己責任であることは伝えて、許可をもらっているのでむしろ過保護だったとも言える。

「カルトもシルバとゼノ爺には伝えとくから、自分で仕事貰ってやってみい。もちろん、修行はサボんなや。時々確認するでな」

「……分かった」

カルトは喜んでいいのかどうか分からず、複雑な表情を浮かべていた。

それにラミナは呆れた表情を浮かべて、

「お前なあ、ホンマに旅団員レベルの強さになるまで面倒見るとでも思ってたんか？ そこまでおんぶに抱っこせなあかんなら、今すぐクモ辞めた方がええで」

「……」

カルトはまだまだラミナの技術を盗みたかったので眉間に皺を寄せるが、大人しく頷いた。

明らかに不満げなカルトにラミナとマチは呆れ、ククロ達は苦笑し、シズクは盗んできた古文書を読むのに集中していたのだった。

その後1か月ほど、ラミナ達は国や街を転々としてクロロの気まぐれに付き合っていた。

ラミナはもちろん料理番として、である。

カルトは実戦経験を積むということとでゾルディック家の仕事に集中して、ラミナ達から離れていた。

そんなある日。

滞在中の街のアジトで、クロロ達とのんびりしていたラミナの携帯が鳴った。

「……もしもし?」

『おう、久しぶりだな。俺だ俺、ジン』

『ジンン?』

ジンからの唐突の電話に訝しむラミナ。

ジンの名前にクロロも反応し、他の者達も顔を向ける。

「なんやねん? 急に」

『ちよつと、な……。頼みたいことがある』

「……クロロもおるからスピーカーで聞いてええか?」

『おう、構わねえよ』

ラミナは携帯を耳から離し、スピーカーモードにする。

『久しぶりだな、クロロ。最近は随分はしゃいでるじゃねえか』

「ああ。ようやく解放されたからな」

『そうかよ』

「それで? ラミナに何をさせる気だ?」

『そうだな……。どこから話せばいいか……。……キメラアントって知ってるか?』

『キメラアントオ?』

ラミナは首を傾げ、クロロを見る。

クロロも顎に手を当てて記憶を探っており、他の者達も首を横に振る。

それを感じ取ったのか、ジンが説明を始める。

『別名「グルメアント」。第一種隔離指定種に認定されてる蟻だ』

「第一種隔離指定種の蟻?」

『ああ。キメラアントの女王蟻はめちゃくちゃ大食いだな。自重の数倍の食料を一日で消費し、気に入った食料は絶滅するまで食いつぶす。気に入る食料は個体個体異なるから、グルメアントと呼ばれてんのさ。それだけなら問題ねえんだが……キメラアントは『摂食交配』をするんだよ』

「摂食交配……」

「食べて子供を産むってこと？」

『そうだ。女王蟻は食べた他生物の特徴を次世代の蟻達に引き継いで肉体に反映させる。それで兵隊を増やし、更に食料を集めさせて王を産む。そして、王は巣を旅立って他生物と交配して新しい女王蟻を産ませ、爆発的に数も多様性も拡大させる。しかも女王や王が死ねば、兵隊蟻も生殖能力を持つことも判明してる』

「ふうん。んで、その蟻が何やねん？」

『キメラアントは本来10cmくらいのサイズなんだが……少し前、ヨルビアン大陸の海岸で人間サイズの女王蟻の腕の一部が見つかった』

ラミナとクロロは片眉がピクリと跳ね、マチやパクノダ達は僅かに目を丸くする。

『んで、一週間くらい前だ。ハンター協会に【ミテネ連邦】の【NGL】でキメラアント目撃の報告が上がった。報告したハンターはカイト。俺の弟子だ。報告を精査したハンター協会や国の上層部連中はネテロの爺さんを動かした』

「……いい加減本題に入れや。お前の弟子や会長直々に動いとる話を、なんでうちにすんねん」

『……昨日、ネテロの爺から連絡が来てな。カイトを始めとするNGLに入った複数のプロハンターで、生きてNGLを出たのは2人だけ。他は全員やられたらしい。んで、その生き残ったプロハンターつてのが……ゴンとキルアっていうゾルディック家のガキだ』

「は？」

何故そこでゴンとキルアの名前が出るのか。

ラミナは流石に啞然とした声を出す。

「なんでアイツらが？」

『グリードアイランドのクリア報酬だ。実はちよつと細工しててな。【同行】を使えばカイトに、【磁力】を使えば俺の所に飛ぶようにしてあったんだよ。だから、キルアつて奴と一緒に会おうとしたんだろうな。その後は俺の話聞きながらカイトの仕事を手伝つてて、キメラアントの話聞いたつてとこだな』

「……」

『で、カイトとゴンの関係から俺に連絡来てな』

「やとしても、なんでうちが関わる必要あんねん」

『女王蟻は完全に人間を栄養源に定めただよ。つまり、人間が混じったキメラアントが生まれた。事実、人の言葉を話し、個性を持つ人の形をした大量のキメラアントをゴン達も目撃してる』

「……つまり、やられたプロハンター達も食われたというわけか。念を使える、一般人より強いオーラを持つ人間が」

クロロの言葉に、ラミナ達は目を丸くする。

『流石だな。だが、状況はもつと最悪だ』

「もつと？ ……オイ、待てやコラ」

今度はラミナが思い至った。

『ああ。念能力を使うキメラアントが出た。カイトはそいつにやられたらしい。一体でも現れた以上、他のキメラアントも念を会得するだろうな。そうなれば、プロでも勝つのは更に難しくなる。……カイトを倒した奴がどのくらいの立場かで、ネテロの爺でも厳しいだろうな。時間をかければ殲滅は出来るだろうが、間違いなく王が生まれるまでには不可能だ。ただでさえ元々の生命力も身体能力も向こうが上だ。そこに念能力が加われば、もう厄介なんてレベルじゃねえな』

「……お前ら十二支んや星持ち動かしたらええやないか」

『ネテロの爺はともかく、ハンター協会はまだ深刻さを理解してねえ。それに協会に詰めてる連中の多くは副会長の下っ端でな。ネテロの失脚も狙ってるみたいで、ネテロと同行に許可を出したハンターは2人だけって話だ。しかもサポート要員としてで、十二支んは誰も連れ

ていつてない。多分、ネテロが援軍要請しても許可は出ねえだろうな』

「……なるほど。そこで、ハンターでもあり殺し屋でもあるラミナか」  
「……ハンターがあかんから殺し屋として依頼して、文句言われたらプロハンターやっちゆう屁理屈で通せ、と?」

『そういうこつたな。んで、お前に依頼するのは俺だ。ネテロの爺じゃねえから協会本部に文句を言われる筋合いはねえ。俺は、ただカイトとゴンのことで頼りになる奴に個人的に頼んだだけ、だからな』  
「……聞いただけ無駄やろうけど、お前は?」

『俺が動けるなら頼みやしねえよ。むしろ、副会長派の連中が一番警戒してんのが俺だ。だから、今も監視が付いてる。盗聴までは出来ねえみたいだがな』

「……」

ラミナは腕を組んで眉間に皺を寄せ、視線をクロロに向けてる。

クロロは1分ほど顎に手を当てて、

「……報酬は?」

『前払いで500億。後払いは言い値でいいぜ。どれくらいの戦いになるか、分かんねえしな』

「……分かった。俺は構わない。後はラミナ次第だ」

「……」

『一応言つとくが、多分ゾルディック家の方にも連絡行つてると思うぜ。だから、ゾルディック家からも話が来るんじゃないか?』

「……あゝ……」

「ふつ、可能性はあるな」

マチの目がドンドン鋭くなり、苛立ちオーラが溢れ出している。

それにラミナは頬を引きつかせる。

『それと……あゝ……なんだ』

「あ?」

『カイトのことでゴンは意地でもまたNGLに行くはずだ。カイトの状態次第では、ゴンは止まらなくなる』

「……まあ、な」

ゴンは身内認定した人間のことになると、自分の命を度外視して超頑固になる。

これまでは何だかんだで運がいい事に、ゴンの知る範囲で死んだ者はいない。

特にカイトは捜しているジンの弟子で、凄腕のプロハンターだ。

そんな存在が殺されて食われていることを知ったら、今まで以上に怒り狂う可能性がある。

その場合、ゴンにどんな変化が起こるかは想像が出来ないが、

(碌なことにならないやろうなあ。んで、その尻ぬぐいをキルアがすると……)

これは確実だろう。

そして、そこに気づいてしまえば、

(……シルバ達も、うちに言ってくるやろうやなあ)

と、思ってしまったのだ。

それに確かにこのままカメラアントを放置していると、幻影旅団の活動に影響が出るほど面倒事になる可能性は高い。

そして、

「王が生まれたら、流星街に流れ込む可能性が高い……か」

「可能性はあるな」

『十分あり得るな』

「そうだったら、下手したら流星街ごと消されかねんな……。はあ……分かった。受けたるわ」

ラミナはため息を吐いて、依頼を受けることにした。

『悪いな』

「まだNGLやんな」

『ああ。王が生まれるまでは動かねえはずだ』

「今から行けば、2日後には着くか……。つたく……。いい加減ゴンに顔出せや。今回の報酬の1つにしたるからな」

『げっ……』

「ほなな、ツンデレ親父」

『デメ——』

通話を切り、ラミナはため息を吐いて立ち上がる。

「ほな、ちよつくら行つてくるわ」

「ああ」

「1人で行くの？」

「流石にハンター協会会長がおるところに連れてくれないでな。マチ姉も、キルアおるみたいやし」

不服気なマチに、ラミナは肩を竦めて答える。

「ヤバかったら連絡するわ」

「ああ」

ラミナはすぐさまアジトを出て、NGLを目指す。

この選択を後悔することになるのは、数日後の事だった。

## #94 NGL×ヨ×GL!

ヨルビアン大陸南方、【バルサ諸島】。

その最南端にある島には、5つの国で構成されている【ミネネ連邦】がある。

その西端の国が【ネオグリーンライフ自治国】——通称【NGL】——である。

NGLは『機械文明を捨てて自然のままに生きる』を絶対の掟としている国だ。

携帯やカメラなどの機械類はもちろん、プラスチック、石油製品、ガラス製品、化学繊維などが使われた製品も持ち込めない。

治療などで体内に埋め込まれたボルトや人工弁、インプラントに金歯銀歯ですら認められず、入国を拒否される。

無断で持ち込んだ場合、極刑か終身刑など過剰とも言える処罰が与えられる。

国内の通信手段は主に手紙で、移動は徒歩か馬。

病気や大怪我をしても他国に頼ることはなく、『自然のままに』の一言で死を受け入れる。

自然と共に生きるため、動物達も当然その一部。

故にNGL内の者達ならばカメラアクトを見ても、警戒はしても国の上層部に報告をしたりはしない。

それが最悪の結果を招いてしまったのだが。

そして、入国に厳しい理由がもう1つあった。

通称【裏のNGL】。

麻薬、武器の密造・密売を行っているNGLの裏の収入源にして、真の姿である。NGLはこのための隠れ蓑でしかなかった。

もちろん、他国は【裏のNGL】の存在に気づいていたが、証拠を手に入れることが出来なかったため数年間イタチごっこを続けて来た。た。

ラミナはそんなNGLの国境前に到着していた。



NGLの国境は崖と河で区切られており、入るには橋のように崖の上を渡っている2本の大樹を通らなければならない。

大樹の中は検問所兼大使館になっており、中では金属センサーや監視カメラ、X線検査、超音波検査などの機器が存在する。

ラミナは【朧霞】で姿を消して、足音を出さないように最大限警戒しながら悠々と検問所を通り過ぎる。

すでに国内にはネテロ達がいるはずで、大使館の者達も事態は知っているはずだが余計な足止めは面倒だったので、無視することにした。

ラミナは姿を消したまま猛スピードで駆け出し、奥へと進む。

昨日、ジンから連絡を受けたのか、ネテロから位置情報が送られてきていた。

大使館から離れたところで【朧霞】を解除し、周囲を警戒しながらもスピードを緩めずに走り続ける。

しばらくして、見晴らしがいい崖に出た。

周囲を見渡すと少し先の森の一角に煙が充満しているのが見えた。

「あ……？ あれって、もしかしてモラウか？」

火事にしては煙が白く火の手が見えない。更に風も吹いているのに、全く流れる様子もない。

そこから思い浮かぶのは、前に戦い、メンチと共に仕事をしたモラウだった。

「つてことは、もう1人はナツクルか？ いや、サポート要員やったらシユートの方か？ けど、ナツクルが大人しく我慢するタイプちゃうやろうし……。なら、違うハンターか」

そう結論付けたラミナは崖から飛び降りて、煙の方角へ向かう。するとその途中、前方から複数の気配を感じ取った。

ラミナはハラデイを具現化して【朧霞】を発動する。

姿を消して、枝の上を跳び移りながら気配の元に近づく。

気配の主の姿が見えた瞬間、足を止める。

そこにいたのは、蜂の頭にゴリラのような上半身にズボンを履いた異形の人。

その周囲にも、二足歩行になったカミキリムシ、トカゲの顔に蝙蝠のような翼の腕を持つ異形の獣、テントウムシの模様を持つカブトムシのような角を持つ虫、猫の頭には蜂の身体を持つ異形がいた。

その全てが人と同等以上の大きさで、二足で立っている。

(あれがキメラアントか……。完璧に全員が人の特性持つとるな。それに念も使える、か……)

ズボンを履いている蜂頭のキメラアントは、間違いなく力強いオーラを纏っていた。

(……服を着とるつちゆうことはそれだけ人間の因子が強いつちゆうことか？ まあ、戦うてみれば分かるか。さて……)

ラミナは勢いよく枝から飛び出し、まずは一番近くにいた猫顔キメラアントに迫る。

しかし、姿が見えないはずなのに、全員が間違いなくラミナに顔や耳を向けた。

(っ！ 音と匂いか!!)

「なんかいるぞ!!」

(虫頭の癖に流暢な口調やな!!)

ラミナは全力で地面を蹴り、猫顔キメラアントの頭部を掴んで引き千切って握り潰す。

姿が露になったことでハラデイを消し、ブロードソードとレイピアを具現化する。

「っ!? 誰だテメエはあ!!」

リーダーと思われる蜂頭キメラアントが殴りかかってくる。

(こいつは最後)

ラミナは一瞬でカミキリムシキメラアントの背後に回り込んで、ブロードソードで頭部を両断する。

そして、【啄木鳥の啄ばみ】でトカゲ頭キメラアントの額に穴を空けて殺す。

最後にカブトムシキメラアントに飛び掛かって、右脚蹴りを顔目掛けて繰り出し、【流】で右足先を強化する。

カブトムシキメラアントの顔面は吹き飛んで、体が仰向けにゆった

りと倒れる。

一度距離を取ったラミナを、蜂頭キメラアントは苦々しそうにギチギチと口を鳴らしながら睨みつける。

「テメエ……！」

（確かに人より手応えが重いし硬い。けど、まだ余裕で殺せる。問題はこいつらがどれくらいレベルか。まあ、こんなところで群れとらんやし、あいつが兵隊長、殺したんは最下級の戦闘兵やるな）

ラミナは武器を消して、軽く脚を開く。

それを見た蜂頭キメラアントは、ギチギチと口を鳴らし、

「なんだあ？ テメエ、手品師か？ 念も使えるみてえだしよ」

「……ほお、虫も手品とか知つとるんか？ お利口さんやな」

「俺を馬鹿にすんじやねえよ、テメエ!!」

簡単に挑発に乗った蜂頭キメラアントは勢いよく駆け出して、ゴリラの右腕を筋肉で膨らませながら振り被る。

それにラミナは【練】を強めて僅かに腰を据えたかと思うと、【肢曲】で残像を生み出す。

「なあ?」

蜂頭キメラアントは驚いて、動きを止めてしまう。

その瞬間、ラミナが蜂頭キメラアントの懐に姿を現し、蜂頭キメラアントが視線を向けた時にはすでに背後にいた。

「このっ！ チマチマしやがっ——！」

振り返って殴りかかろうとしたが、胸から勢いよく血を噴き出して膝から力が抜けた。

「んな……!?!」

「ふむ……ちよいと硬かったが……。お前レベルなら問題なさそうやな。体の造りも人間に近いみたいやし」

ラミナの左手には人間のより一回りも大きい心臓が乗っていた。

それに蜂頭キメラアントは自分の血が止まらない胸に目を落とし、ラミナが握る心臓に目を戻す。

「それは……お、俺の……!?!」

直後、ラミナは心臓を握り潰す。

「っ!! テ、テメエエ!! このクソアマがああ!!」

蜂頭キメラアントは叫びながら両腕を振り上げて、ラミナに飛び掛かる。

「心臓潰した程度やと鈍らせるくらい、か」

両腕が振り下ろされる瞬間、ラミナは一瞬で背後に回って頭を引き千切る。

そして、近くの樹の幹に勢いよく頭を投げて叩きつけて潰した。

今度こそ蜂頭キメラアントの身体は動きを止めて、うつ伏せに倒れる。

ラミナは左手の血を払う。

「瞬殺するんやったら確実に頭を潰すしかないか……。それに兵隊長でこのレベルやと、確かに厄介やな」

眉間に皺を寄せて、今の戦いを振り返る。

しかし、留まっていると仲間が来る可能性があるもので、再び駆け出しながらだが。

【朧霞】 はあまり意味がないと分かったので、もう使わない。

すでに血の臭いがはつきりと付いているはずだからだ。

(戦闘兵でも一般人じゃ無理やな。念を会得しよった今では銃器でも殺すまでに時間がかかり、武器では傷もつかんやろうな。兵隊長以上は素の身体能力でもそこらへんのハンターよりも上。オーラを扱えるようになったことで、戦闘特化の能力でもないかぎりハンターでも勝率は五割以下。師団長となるとコルとパク姉では無理やな。カルトでも混ざった生きモンによつては厳しい。ゴンとキルアはまだ勝てるやろうけど、消耗は大きいやろうな)

さっきの兵隊長がどれくらいの実力に位置するのかは分からないので正確なことは言えないが、それでも極端に差が出るわけではないはずだ。

(……気になるんは『念』という名前を知つとったこと。オーラの存在は分かっても、その名称を知る術はないはず)

念の会得・修行方法を書物等で残すことは、暗黙の了解ではあるが禁忌とされている。

気軽に手を出せるようになってしまえば、世界のバランスが崩れる可能性が高いからだ。

特にこのNGLでは、念を知る術などゼロに等しいはず。

(裏のNGL?) いや、せいつらやって変な奴に念を知られるリスクは避けたいはずや。つまり……やられたハンターの誰かが命乞いで話しよった……。最悪やな)

ラミナは顔を顰めて、内心で盛大に舌打ちする。

そんな事を考えながら煙の境目に到着したラミナ。

ネテロにメールを送ってみると、すぐに位置情報が送られてきた。すぐ近くの岩山を示しており、ラミナはすぐさま移動を再開した。5分もせずに到着し、人の気配を感じる洞穴に入る。

そこにはネテロ、腕を組んで眉間に皺を寄せているモラウ、そして黒スーツに眼鏡の男―ノヴがいた。

「久しぶりじゃのう。わざわざご苦労じゃったな」

「ま、報酬をしっかりともらえればな」

「……会長、何故この者を?」

「ん? いや、こ奴は儂が呼んだのではない。ジンから依頼されたようだな。それをジンが知らせてくれたのう」

「……なるほど」

「久しぶりじゃねえか。あの後から随分と落ちぶれたみてえだがな」

モラウが挑発してくるが、ラミナは肩を竦めるだけで、すぐにネテロに顔を向ける。

それにモラウが前のめりになるが、ノヴが肩を掴んで止める。

「随分とちんたらやつとるみたいやけど。状況は?」

「うむ、今は兵隊蟻を減らしておるところじゃな。2人の能力で孤立させ、儂が仕留めて回っておる。今あ2つ隊を潰したところじゃ」

「ちんたら過ぎるやろ。狙いは?」

「例のジンの弟子を倒したと思われる蟻の【円】が恐ろしく広うてな。近づこうにも近づけん。故に周りを消して、誘き出すつもりじゃ」

「……一隊の構成と数は?」

ラミナは顎に手を当てて考え込んで尋ねる。

それにネテロが顎髭を撫でながら、

「そうじゃのお……。大体60〜70匹じゃな。師団長1匹に一隊と言ったところか」

「……戦闘兵が50〜60匹、兵隊長が4〜6匹、それで師団長つちゅう感じか……。戦闘兵が千匹おるとしたら、兵隊長が約百匹、師団長が約30匹、護衛軍が3〜4匹くらいが統率に理想やな」  
「うむ」

「ジンの弟子を倒したんが護衛軍の一匹やったらええけど……。師団長やったら最悪やな。ちなみにジンの弟子つてどれくらいの強さなん？」

「ジンの話ではモラウやお主に匹敵するレベルじゃの」

「……なら、護衛軍が妥当か。姿とか見れたんか？」

「一度な。正直、厳しいかもしれん。少し前から巢に閉じこもってる」

「……」

盛大に顔を顰めるラミナ。

どう考えても戦力が足りていない。

「来る可能性が高い援軍は？」

「モラウの弟子、ノヴの弟子、そしてキルアとゴンじゃな」

「……ナツクル達は知つとるけど、もう1人の弟子の実力は？」

「戦闘力はナツクル達より低いのう。今、最寄りの街でゴンとキルアと組ませて、ナツクル達と戦わせておる。割り符を渡し、勝った方が1か月後ここに来れる」

「……悠長過ぎるし、2, 3人増えた所で微妙なところやな」

ラミナはゴンやナツクル達を戦力に数えるのを止めた。

流石に1か月も待つ気はなかった。

「正直、時間はそこまでないと思うで？」

「専門家の見解では王が生まれるまで、最短で2か月。まだ時間的余裕はある」

ノヴが眼鏡を直しながら言う。

それをラミナは鼻で笑う。

「はっ！ その2か月はいつからの計算や？」

「……なんだと？」

「女王がここに現れた具体的な日付は分かったらん。すでに護衛軍も生まれとるから、恐らく兵隊蟻は十分な数産んだんやろ。ほな、女王はいつから王の誕生に力入れたんか正確に分からんやろ」

「まだ生まれてはいないはずだぜ。毎日せつせと人間を運んでんだからな。これまで確認されているキメラアントの情報から考えると、王を産むためにまだ栄養がいるはずだぜ？」

「その専門家の計算は念能力者を数人食ったことを含めとるんか？」

「それは……」

「ジンの弟子は今も見つからんのやろ？ 念を使えるキメラアントがおる以上、念能力者は最高の餌として食われた可能性は高い。他にもプロハンターが数人おったんやろ？ そいつらも食われとったら、一般人数百人分の栄養は楽に摂れると思うで」

「……確かにのう」

「しかも連中、『念使い』つちゆう言葉を知つとつた。【円】を使うとることからも、蟻はすでに四五行はもちろん、六系統の知識も得とるはずや。後はどんな能力を創れるんか理解すればええだけの可能性がある。あれだけのバケモンや。キメラアントの【発】がうちの常識を覆す可能性は高い。全員が特質系でも驚かんぞ、うちは」

ラミナの言葉にネテロは顎髭を撫で、モラウとノヴも考え込む。

ラミナはネテロ達が結論を出す間に、一度巣を見に行くことにした。

モラウから単眼鏡を借り、方角と距離を聞いて洞穴を飛び出す。

30分ほど移動して、教えられた岩山に登る。

空にキメラアントがないことを確認して巣の方向を見ると、数km先の森のど真ん中に周囲の岩山よりも高い超巨大な蟻塚がそびえ立っていた。

そして、その巣を中心にアメーバのように歪に蠢くオーラが広がっていた。

(……生まれて1か月程度のキメラアントが使う【円】ちやうやろ

……。1 kmは楽に広がつとるぞ)

もちろん【円】の広さだけで実力が決まるわけではない。

だが、あの広さを長時間維持出来るだけでも十分脅威であるのは間違いない。

【円】は【纏】と【練】の応用技だ。

つまり、同じ【纏】と【練】の応用技である【堅】も凄まじい硬度を持つ可能性もあるのだ。

しかし、それ以上に、

(【円】以前に、あそこに近づくくんは嫌な予感しかせえへんなあ……。ここからでも不気味な気配が臭うてくるわ)

ツマベニ達との戦いの時以上の凶悪さと不吉さだ。

流星街、そして闇の世界に住む者達でさえも理解できない気配。

恐らくは『人の欲望』と『蟻の本能』が溶け合った結果なのだろう。人間みtainな仕草はあるのに、絶対に相容れない何か混ざっている。

キメラアント全てがというわけではないのだろうが、理解し合うのは絶望的だとラミナは思った。

単眼鏡を覗いて巣を見る。

特にキメラアントの姿は見えないことから、空中や周囲の警戒はあの【円】のみであることが窺える。

巣の周囲も観察してみると、今いる場所と巣の中間辺りの森の木々が折れて倒されているのが見えた。

地面も抉れていることから激しい戦闘の跡だと理解した。

焦げた跡がないから爆弾ではない。考えられるのは念での戦闘によるもの。

そして、キメラアントの【円】のギリギリ範囲内。

(あそこがジンの弟子が戦った場所やな。そこそこ派手にやったみたいやけど、数日で……。いや、ネテロ達が来たのはその翌日。つまり、半日足らずで【円】が万全に使えるようになる程度のダメージしか負わなかったつちゆうことか)

それだけの者が少なくとも、あと最低2匹。



モラウは直接戦闘タイプではない。ノヴもサポート要員であり、モラウとの連携で動いているため同じく直接戦闘タイプではないだろう。

故にネテロ、ラミナ、モラウとノヴの3組に分かれることになる  
と推測される。

だが、それでは女王を仕留める手が足りない。

キルア達が来たとしても、師団長以下多数を同時に相手にしながら女王を狙うのも現実的ではない。

何より護衛軍が4匹だったら、破綻確定である。

現作戦を続けて師団長以下を出来る限り数を減らそうにも、その前に王が生まれかねない。

(……ネテロを女王に当てるなら……手練れが後2人欲しいところやな。捨て駒になる覚悟で動ける奴が)

そうになると、やはりクロロ達は呼べない。何一つ旅団へのメリットがないからだ。

『生かすべきはクモ』。

絶対の掟からすれば、この仕事に旅団員を呼ぶのはありえない。

(同じ理由でゾルディック家も微妙なところやな。害虫駆除をやるくらいなら、他の奴を暗殺する方が金になる。他の暗殺者連中を呼び寄せるにも、うちと同じ条件やないと使えん雑魚しか来んやろうし。ネテロの爺がそこまで金を出してくれるか……)

ハンター協会はすでに期待していない。

この状況でもネテロが援軍を要請する様子がなかったからだ。

ジンの推測通り、要請しても却下される可能性が高いのだろう。

なので、ネテロ個人で金を出してもらうのがベストになる。

「……はあく。あのデカさやと【天を衝く一角獣】じゃ女王にピンポイントで当てるんは無理やし、【死を呼び寄せる死】グラウランド・ゼロでも護衛軍総出で庇われたら生き残りそうやし……。まあ、そもそも巢に届く前に壊されそうやけどな」

【死を呼び寄せる死】はキーワードを唱えれば遠隔爆破も出来る。

その代わり、爆破範囲は直径500mほどで威力も普通の爆弾と変

わらない。そして、ストックもどんなに残っていようが必ず0になつてしまう。

あくまで相討ち用の能力で、『死後強まる念』を利用することを想定しているので、普通に使えば当然威力は下がってしまうのだ。

それで殺せるならばネテロも困らないし、ジンも依頼などしてこないだろう。

なので、やはり護衛軍をどうにかして巣から誘き出さないといけな  
いという結論に戻る。

「NGL……いや、ミテネ連邦を見捨てれば、手はいくらでもあるけど……。ハンター協会がそこまで決定権はないやろうし、それやったらハンター総動員の方が被害は少ないわな。あくメンドクサイ」

ラミナはため息を吐いて項垂れる。

短期間での【円】の会得は流石に想定外だった。

しかも、ラミナでも見たことも聞いたことも無い規格外の範囲。

(確実に産まれる王は護衛軍以上の強さ。念能力者なんかは、まず間違いない。そうなれば、女王は殺せるかもしれないけど、結局王と護衛軍も追いかけなあかん。兵隊蟻達も人間の特性を持つとるから、女王やなくて王に付いて行く可能性もある。下手すれば、女王と王の両方からも離れるかもしれん。くそっ……！ 最悪を考えれば考えるほど、全部終わらせるには『今が絶好の機会』つちゆう結論になりよる……！)

ラミナは顔を顰めて、ネテロ達の元に戻る。

「結論出たか？」

「うむ。と言うても、これまでと変わらんかったがのう。今の儂らではこれ以上踏み込むにはリスクがちと大きすぎる。お主はどうじゃ？ 妙案はあるかの？」

ネテロの言葉にラミナはため息を吐いて、

「攻撃手段はある。が、確実に殺せる保証は出来ん。せめて、女王が巢のどこにおるんか分かればええんやけどな」

「……場所が分かれば、あの【円】を無視しても仕留められると？」

ノヴが訝しみながら口を開く。

「五分五分の確率やけどな。けど、やっぱ護衛軍の数と実力がネットクやわ。もし護衛軍全員で身を挺して守られたら、女王に届く前に止められる可能性はある。やから、そっちの周りから削る作戦も重要なんやけど……。どうも時間が足りん気がしてならん……」

「弟子達の結果が出た後では遅いと、感じておるのかの？」

「……ギリギリやな。直前か、直後か」

王が産まれる。

ラミナが言わなかった言葉をネテロはもちろんモラウ達も正確に読みとった。

「キルア達は遭遇した護衛軍について、なんか言うとしたか？」

「うむ。キルアは今まで会った誰よりも薄気味悪いオーラで、儂らでも勝てる気がしない、と言うとったのう。ゴンはキルアに気絶させられて寝ておったから聞けてはおらん」

「ふうん……」

「そういやあ、あのガキ共はお前の弟子だったな。念能力者同士の戦いで『勝ち目』なんて言ってるようじゃ、まだまだだな」

「まあ、キルアは暗殺者寄りの視点で敵を観察するでな。念での戦闘経験もまだまだ少ないやろうから、しゃあないやろ。それに、あいつは親父や兄貴のせいで敵のMAXを常と考えてまう癖が染み込んでるんよ。そろそろ直ってきたと思うたんやけどなあ……。まあ、今回は相手が相手やったけど。ああ、後今あいつらの師匠はビスケな。うちはあくまで念の基礎を教えただけや」

「だとしても、あの時の彼はパニック状態に近かったと考えられる。その見立てに信憑性はない」

「うちは信じる。本人にその気はないけど、ゾルディック家の跡継ぎ筆頭や。パニックであっても、敵の実力を見誤るほど未熟やない。やから、奴らの潜在能力がうちらより上なんは間違いない。勝てんとも言わんけどな。潜在能力だけで勝てる程、念能力は甘くない。経験と熟練度は間違いないこつちが上。これが覆る可能性はまだ低い。まだな」

「ふむ……。つまり、今こそ全戦力を投入すべき時と言うわけじやな」

ラミナははつきりと頷く。

しかし、ネテロは困ったとばかりな表情を浮かべて、

「じゃが、弟子達では不安が大きいの。他の援軍も選別に時間がかかるじやろうて」

今回は国からハンター協会への依頼である。

故にハンター協会審査部で選別する必要がある。ジンがラミナへの依頼を裏技呼ばわりしたのが、これが理由である。

ハンター協会会長だからこそ、ネテロは審査部を無視するわけにはいかない。

そして、ハンター協会会長であるネテロが、今回の依頼の指揮官だ。

モラウ達がネテロを飛び越えて援軍を求めるわけにもいかない。これはラミナも同様である。もともと、ラミナにNGLに絶対に呼べと言えるほどのハンターの知り合いなどほとんどいないのだが。

恐らく2か月の猶予があるという専門家の見解を理由に時間をかける。

故にハンター協会の援軍は期待できない。

結局、今のメンバーでやるしかないのだ。

「はあ……。お友達の爺連中、動かせへんの？」

「……まあ、声はかけてみようかのう。ただ、命の保証が出来んし、正確な敵の情報を伝えられぬ以上、断られるやもしれんぞ？」

「声もかけんよりはマシやろ。護衛軍一匹でも引き付けてくれるだけでも御の字やでな」

アルケイデスカゼノ。どちらかだけでも参加してくれば、ぶっちゃけキルア達を待つ必要はない。

ネテロならば2人より力関係が上の可能性もあるので、引っ張り出せるかもしれない。

ラミナはそう考えていた。

ということ、ラミナ達は師団長率いる部隊を削りながら援軍と機会を待つことにした。

この決断を後悔することになるなど、誰も知る由はなかった。

## #95 ブキミ×ナ×アリタチ

ラミナがネテロ達に合流してから数日。

キメラアント達はようやくその影を感じ取った。

「なに？ チオーナ隊が消えた？」

「うむ」

報告に振り返ったのは背中に翼を持ち、口が嘴を思わせる形をしているキメラアント師団長のコルト。

それに頷くのはペンギンの姿をしたキメラアント師団長で参謀役のペギーだ。

「今回もレイケイ隊と同じか？」

「うむ。先に隊長が消えて、徐々に仲間がいなくなったらしい」

先日から餌の調達に出た部隊が帰って来なくなったのだ。

「人間の反撃かの？」

「まあ、そうだろう。今は『選別』で兵隊の数が少なくなってる上に、餌がどんどん分散化しているからな」

これまでも何度か兵隊蟻が殺されたことはあった。

しかし、それでも数体レベルで、部隊レベルで倒されたことはほとんどない。

しかも、死体すらも見つかっていない。

故にどのように倒されたのか、そもそも倒されたのかどうかも分からないのだ。

だが、明らかに攻撃を受けているのは事実。

コルトとペギーは悩まし気な表情を浮かべる。

キメラアント達は念の修得の際、オーラを籠めた攻撃で無理矢理『精孔』を開いていた。天空闘技場で言う『洗礼』である。

そのため、攻撃に耐え切れずに死んでしまうキメラアントが少なからず出てしまったのだ。

師団長は全員生き残ったが、兵隊長で十数体、戦闘兵に関しては選別を受けたほぼ全員が死んだため途中で中止となった。

その結果、女王が王にのみ専念して産卵蟻を産むこともなくなった

ので、兵隊蟻を増やすことが出来なくなっているため戦力が減っているのだ。

「遠征する部隊を狙い撃ちする作戦だ。厄介だな……」

現在女王は食欲旺盛で、毎日250体分の餌を食べている。

すでに巢の周囲の集落に住む人間達はほとんど調達してしまった。なので、現在コルト達はかなり広範囲に渡って人間達を探し回っていた。

NGLの住人達もキメラアント達の存在に気づいて隠れ始めていた。

もつとも一番の原因は人間の特性で個性を持ったキメラアント達が、快楽で人間を殺したり、女王に献上せずに食べたりしたことだが。

「女王様に移城を進言してみるか？」

ペギーの提案にコルトは首を横に振る。

「駄目だ。女王に余計な心労をかけるわけにはいかん」

すでに女王は独りで歩くことは不可能なほど、腹が膨らんでいる。兵隊蟻達が細心の注意を払って運ぼうとしても、拒絶する可能性は高い。それほどまでに女王は王の誕生にのみ、心血を注いでいる。

コルトは師団長の中でも特に女王への忠義が高い。

故に少しでも女王の意に沿わないことを実行するのも、そもそも進言する事さえ気が進まない。

「ネフェルピトー殿に窺ってみるか？」

「気は進まんがな」

直属護衛軍の1人、ネフェルピトー。

猫耳と尻尾を持つ人間の見た目に近いキメラアントで、生まれた瞬間から念を会得しており、カイトを倒して「円」を展開しているキメラアント達の中でさえ化け物と呼ばれる存在である。

ただし、非常に気まぐれで、最近では「円」を展開しながらもずっと何か研究や実験をしている。

もう1人、シャウアップフという護衛軍が生まれているが、彼は女王の近くから絶対に離れずに声をかけてもあまり話を通じない。なのに、自分の思考が読まれるので誰も近づかなくなった。

シャウアップ本人は『それだけのこと』と、特に何も思わないらしい。

コルトとペギーがネフェルピトーのところに向かおうとした、その時。

「残念だったねえ。ピトッチは今も試験管とお人形くんにご執心だよ」

「!!」

背後から声をかけられ、同時に背筋に寒気が走ったコルトとペギー。

ガバツ！と振り返ると、柱の影からユラリと人影が現れる。

黒のボサボサ頭をした長身でやや猫背のパツと見人間の男にしか見えないキメラアントだった。

目は黒茶の細い布がバツの字に巻かれて隠されており、口と鼻も目の元の細布で固定された目玉が描かれた布が垂れ下がっているため、素顔は一切分からない。

五分袖甚平の紺色の上着に、茶色の野袴、サンダルを履いており、僅かに覗く額、手足の甲には銀色の鱗が見える。

そして、ネフェルピトー達にも匹敵するオーラの不気味さと強大さ。

「あ、あなた様は……」

「……軍団長殿、か……？」

「そうだよお。残念なことに軍団長になっちゃったアモンガキッド。初めまして」

アモンガキッドは右手をヒラヒラと振って、挨拶をする。

不気味さを纏っておきながら、一切覇気も威厳もない口調で話す。

それが逆に不気味さを煽り、コルト達は無意識に一步後ずさってしまった。

その反応に、アモンガキッドはガクリと項垂れて、

「やれやれ、残念だねえ。そんな怖がらなくてもいいじゃない……」



おいちゃん、別に敵じゃないしき。ピトっちへの相談を代わりに聞いたげようってだけじゃないの」

イジけたように野袴のポケットに両手を突っ込む。

その言葉にコルト達は気圧されたことに気づき、顔を見合わせてアモンガキツドに顔を向ける。

「も、申し訳ありません。アモンガキツド殿を始め、他の軍団長殿達も我々よりオーラが力強いものでして……」

「まあ、そうじゃないと軍団長は務まらないからねえ。それで？ 何がお困りなんだい？ どうやら外に出た兵達が帰ってこないみたいだけど」

「はい。先日から餌の調達に出た師団長率いる部隊が4つ、下級兵数匹を残して他全員が行方が分からなくなったのです」

「ふうくん……それは残念だねえ」

「恐らく人間の反撃だと考えられるのですが……死体や痕跡もないため、その手法が見当もつかず……」

「そりゃあ、念能力だからだろうねえ。ピトっちのお人形くんと同じようにハンターが動いてるってわけだ」

アモンガキツドはユラリと歩き出し、コルト達はその後続く。

ペギーは首を傾げて、

「ハンター達も念能力を使えるの？」

「そりゃあ当然さ。コルト君の部下だったっけ？ 最初に念能力を得たの」

「はい。ラモットという兵隊長です」

「そのラモット君はピトっちのお人形くんやその仲間にはやられたんでしょ？ それで念能力が目覚めたんだから、ハンター達が使えないわけがないよねえ。残念なことに」

「確か……他に子供が2人いたかと……。ラモットがやられたのはその子供ですが、その子供も念を使っていました」

「けど、ピトっちはお人形くんしか連れて帰らなかつた。ってことは、その子供達がお仲間を呼んだかもねえ、残念なことに」

アモンガキツドの言葉に、コルトは腕を組んで顔を曇める。

「こちらから仕掛けるか……」

「やめときなさいな。師団長以下が短時間で、しかも信号を残す前にやられてるんだ。君達じゃあ無理無理。残念だけどねえ」

「しかし……このままでは被害が増えるだけかと。女王様の食料はまだまだ必要で、そのためには兵を出さねばなりません」

「師団長達に忠告すればいいだけじゃない」

「……聞く者はいないでしょうな。皆、念能力を得てから妙に強気ですので」

「これまで倒されたと思われる隊は、部下達も好き勝手に動いている奔放型でして……。残りの隊も半分以上が同じ状況なのです」

ペギーとコルトはため息を吐く。

その時、アモンガキッドはソファを見つけて、そこに歩み寄ってドカリと座る。

そこはライオンのキメラアントで師団長のハギヤの定位置なのだが、護衛軍のアモンガキッドに「座っちゃ駄目」などと言えるわけないのでコルト達は何も言わない。

アモンガキッドが頭の後ろで手を組んで、背もたれに身体を預ける。

「念能力を得たって言っても、残念ながらコルト君達ってオーラを操るだけでしょ？」

「……個別能力の事を言っているのですか？」

「そうそう。誰か創ったの？」

「……我々の耳には、まだ誰も……」

「ふうん……。そういえば、プフっちが師団長の中に女王や産まれてくる王を押しつけて、自分が王になろうとか考えてるのがあるって言ってたっけねえ。……残念だねえ、身の程知らずって奴？」

頭も仰け反らせて背もたれに預けながら、最後の方はポツリと他人事のように呟く。

それにコルトとペギーはまた背筋にゾワリと寒気が走り、冷や汗が溢れ出す。

「おー、良いこと考えた！ おいちゃんが忠告すれば少しは効果あり

「そうじゃない？」

「アモンガキツド殿が直接、ですか？」

「そうそう。コルト君、悪いんだけど、今巢にいる師団長集めてくれな  
い？ 残念ながらおいちゃん達、テレパシー使えないんだよねえ」

「りよ、了解しました」

コルトは困惑しながらも、指示に従ってテレパシーを使って師団長  
に招集をかける。

普段ならば無視する者もいるのだが、流石に軍団長であるアモンガ  
キツドの名前を出されては無視は出来なかった。

数分もせぬうちに続々と師団長であるキメラアント達が姿を見せ  
始める。

誰もが初めて見るアモンガキツドの姿に困惑した表情を浮かべた  
り、面倒そうな表情を浮かべていた。

アモンガキツドは背もたれの後ろに両手を回して頭も預け、完全  
にダラけて誰が来ても一切反応を見せなかった。

特に自分の定位置である場所を奪われたように感じたハギヤは、歯  
軋りの音が響き渡りそうな程必死に苛立ちを抑え込んでいた。もち  
ろん、周囲の者達にはバレバレだったが。

招集をかけてから僅か10分足らずで、現在巢にいる師団長全員が  
集結した。

「アモンガキツド殿。師団長集まりました」

「おお、悪かったねえ。忙しいところ」

アモンガキツドはソファにもたれかかって天井を仰ぎながら、右手  
をヒラヒラさせる。

それにハギヤや、サソリの尻尾を持つ雌型キメラアントのザザンは  
露骨に顔を顰める。

「……一体何の御用でしょうか？ 軍団長殿」

「んくつとねえ……あれ？ なんだったつけ？」

苛立ちが若干含まれているハギヤの質問に、アモンガキツドは答え  
ようとして内容を忘れたと惚ける。

それにハギヤは更に目がつり上がり、ザザンやペギーなど師団長数

人は呆れた表情を浮かべる。

コルトは額に手を当てて、小さく溜め息を吐き、

「ハンター達のことです……」

「ああ、そうそう、それ。今、餌の調達に出てる部隊を潰して回ってる人間が、残念なことにいるみたいなんだよねえ。師団長もやられてるから、多分ハンターだと思っただけだよ」

「……そいつらを始末せよ、と？」

「んや？ 残念なことに逆。君達じゃ敵わないから、出会ったら手を出さずに全力で逃げるようにって話。単独行動も控えた方がいいねえ」

「我々が負けるの？ 人間如きに？」

ハギヤが鼻で笑いながら言い、ザザンやチーターの顔や体毛を持つキメラアント、チートウも顔を見合わせて肩を竦める。

他の者達もアモンガキツドの言葉を真剣に受け取らず、早く解散させて欲しいような顔をしていた。

「負けるねえ、確実に。多分、手も足も出ないんじゃないかねえ。ほら、残念ながら君達弱いじゃない？」

「っ!! それは——!」

ハギヤが言い返そうとしたその時、

ソファで寛いでいたはずのアモンガキツドが、いつの間にかハギヤの右横に立って肩を組んでいた。

ハギヤは驚愕に口を開いたまま固まり、他の師団長達も目を見開く。

「ほらねえ。おいちゃんの動き、見えなかったでしょ？ 残念なこと」

ポンポンと慰めるようにハギヤの肩を叩き、現実であることを理解させる。

それでもハギヤは本当にアモンガキツドが横にいるのか自信が持てず、今の一瞬で敵ならば自分は殺されていたことも理解して冷や汗

が嘔き出す。

「まあ、そう緊張しなさんな。別に食べやしないよ」

「……はい」

それでも一切緊張が解けないハギヤが小さく頷く。

周囲の師団長達もようやく落ち着きを取り戻し始めてホッと息をした、その直後。

ガチン!!!

突如師団長全員の顔の前に、直径1.5 mほどの球体に鋭い牙を持つ口だけを持つ化け物が現れて、勢いよく口を閉じて牙を噛み合わせた。

コルト達は誰1人反応出来ず、限界まで目を見開いて息が止まり、ブワリと大粒の冷や汗を流し始める。

(今……間違はなく全員死んだ……)

コルトはゆっくりと呼吸を再開しながら、そう考えていた。

「これ、おいちゃん的能力ね。これが念能力の怖いところなんだよ。確かに人間はおいちゃん達より力も弱いし、脆い。けど、残念なことに念能力に關しちや、人間の方が数倍上手なのが現実。翼があるうが、ライオンの牙があるうが、サソリの毒があるうが、チーターの脚力があるうが、通じない可能性があるんだよ。残念ながら、ね」

アモンガキッドが右手の指を鳴らすと、口だけ球体の化け物達は姿を消す。

コルトはゴクリと唾を飲んで、

「……それがアモンガキッド殿の能力、ですか?」

「まあね。と、いうわけで。君達はむやみやたらに襲い掛からず、異変を感じたら即撤退ね。んで、各隊必ず空を飛べる兵隊長以上の兵を連れて行くように。コルト君からの報告だと飛べる兵が生き残ってるみたいだからねえ」

ハギヤから離れて、ソファに座り直しながらアモンガキッドは指示を出し、コルト達は大人しく頷く。

「それと、これからは3隊1組で行動するようにしようか。各隊で三角形を描くように陣形を組んで、連絡を取り合いながら餌を探す。どこかの隊で異変を感じたら、すぐに救援に行かずに空を飛べる兵を使って状況を確認しながら撤退するようにしてね」

「……敵が仕留められそうな場合は？」

「残念ながら、ありえないねえ。その程度で倒せる連中の動きじゃないんだよ。今の所、狙われてるのはピトっちの【円】の外にいる統率性が低い隊みたいだからさ」

「……」

今まで好き勝手に動いてきたハギヤやザザン、チートウなどは不服そうに顔を顰める。

「ふっ……不満そうだねえ、残念なことに」

「っ!? ……いえ、そのようなことは……」

ハギヤはまさかバレているとは思わずに、すぐさま否定の言葉を紡ぐ。

「残念だけどさあ……おいちゃん、目が見えないわけじゃないんだよねえ」

そう言うと、アモンガキツドの周囲に、一つ目の直径1mほどの球体の群れが姿を現した。

先ほどとは違って口はなく、大きさも小さいが大量の目玉の出現は十分不気味だった。

「っ!! そ、それも……!?!」

「おいちゃんの能力だよ。オーラで生み出したモノってねえ、見えなくすることも出来るのさ。便利だよねえ。まあ、この子達は残念ながら見るしか出来ないけど」

だが、ハギヤ達はそれどころではない。

これではどこから監視されているか分からない。

更に、本当に見るしか出来ないのかも判断できない。

もし音まで聞こえているのならば、完全に監視されていることに等しく、少しでもアモンガキツドの怒りに触れば、いきなり自分の周囲にあの口だけの化け物が襲ってくることになるのだから。

だが、その不安もアモンガキッドは読み取っていた。

「安心しなよ。君達が女王様と産まれてくる王の害にならない限り、殺したりはしないからさ。ただ……残念なことにおいちゃんの指示を無視して、女王様に害が及ぶようなら……餌になってもらうだけだよ」

ゾワリと、絶望しか感じない不気味なオーラがコルトやハギヤ達を包み込む。

一瞬で極寒の地に放り込まれたかのように、血の気が引いて身体が震えだし、完全に身体が強張って止められない。

「王が産まれるまでの間だよ。残念だけど、我慢してくれないかねえ？ おいちゃん達は王が産まれれば、君達とはお別れだ。その後は女王様と君達の問題だから、好きにすればいいさ」

アモンガキッドはそう言うと、周囲の目玉を消して立ち上がる。

「じゃ、解散ね。コルト君、もうちよつと話そうか。ペギー君は編隊の調整をお願いね。出来たら一度教えてほしいかな」

アモンガキッドはコルトを連れてこの場を去り、ペギー達は2人を見送って大きいため息を吐いた。

ハギヤは膝から崩れ落ちて、今まで我慢していたものを吐き出すかのように荒く息を吐く。

「はっ！ はっ！ はっ！ ……ぐっ！ くそっ……！ ちくしょうが……！」

「……ホント、軍団長ってどいつもこいつも化け物ね……」

ザザンは汗で顔にへばりついた髪を払い、少しでも恐怖を誤魔化せるように口を開く。

ヂートウやワニのキメラアントであるグロークも頷いて、

「こりや言われた通り、当分は大人しくするしかないな」

「だワな。あのバケモンみたいなのも、どこにいいのか分からねえし。」

ヂートウはともかく、オレ様はあれから逃げ切れる気がしねえ」

「なんで生まれてすぐに、あんな能力創れるんだ？ ネフェルピトー殿もそうだが」

牛のような角に筋肉質の身体を持つキメラアント、ビホーンが腕を

組んで首を傾げる。

それに頭にバンダナを巻いている小柄なシロクマのキメラアント、ホワツベが肩を竦める。

「分かるわけないだろ？ 俺達でさえ化け物に思うんだ。思考から何から違うって方が納得出来る」

「だが……我らと共に女王様を守ろうとしているのも事実だ」

「そうかねえ。俺達が死んでも、なあんにも思わなさそうだけど」

チートウが頬を掻きながら、アモンガキッドが消えた方を見て呟く。

それにペギーは複雑な表情を浮かべながら、

「だからこそ、だ。そんなお方が我らでは勝てないとわざわざ忠告と対策までしてくれたのだ。我らでは勝ち目がないのも事実なのだろうよ」

「けっ……！ 気に入らねえな。俺達が死ねば、女王への餌の供給が厳しくなるからだろうが」

ようやく落ち着いてきたハギヤが、立ち上がりながら舌打ちする。

それにザザンや他の師団長も同意するように頷くも、ペギーは小さくため息を吐く。

「気持ちにはわかるが、本来我々兵隊蟻はそういうものだろう」

「カブファツファツファツ！ 気に入ろうが、気に入らなからうが、オイラ達のやることは変わりあるまい！ 女王様が殺されれば、オイラ達とてただではすまないであろう！ オイラ達に逃げるように忠告した以上、そのハンターとやらは護衛軍で対処してくれるというわけだな！ いやあ、助かったではないか！ 正直なところ、オイラはどう対処すればいいのか皆目見当もつかんかったからな！」

豪快に笑いながら、色々つぶちやけたのはビトルファンというキメラアント。

ビホーンより頭一つ分背が高く、カブトムシを思わせる頭部と角、そして頬からは2本の象牙が伸びており、体もカブトムシのような外殻に覆われている巨体を持っている。

パワーもビホーンと肩を並べ、頑丈さに関しては師団長一を誇る。



「……だが、3隊編成にしたところで被害は減るのか？ 数が増える以上、移動はかなり目立つことになる」

そのビトルフアンの隣で、疑問を口にしたのは雌型の虎のキメラア  
ントのテイルガだ。

金と黒のメツシユのツンツンヘアに虎耳。顔は人間の女性だが、瞳  
は獣のように縦に細長く、牙は鋭い。額に模様が描かれている。

体つきもザザン同様人間の女性に近く、腰に虎の尻尾が揺れてお  
り、両前腕と膝下から足先まで虎の体毛が生えている。手は人間に近  
く、足は獣の形をしている。

上半身には黒のアンダーシャツに緑のポンチョ風マント、下は迷彩  
柄のハーフパンツを履いている。

雌型の師団長はザザンとテイルガの2人だけだ。

「うむ。編隊後の動きについては、恐らくアモンガキッド殿から改め  
て指示が出るだろう。まずは飛行できる兵隊長を持つ者は手を上げ  
てくれ。その者達を中心に編成していこう」

ペギーがテイルガの言葉に頷き、編成を始める。

もちろん、簡単に纏まるわけはなく、かなりの時間を要するのだっ  
た。

ペギー達が編成について議論を始めた頃。

アモンガキッドとコルトは、かなり離れた場所に移動していた。

「さあて……コルト君。君とペギー君には、残念ながら今後もおい  
ちさんの補佐をしてもらうよ。まあ、コルト君は師団長でも数少ない  
鳥型だから、前線に出てもらおうことになるけどね」

「承知しました。我々だけでは限界も感じていたので、正直とてもあ  
りがたい」

「真面目だねえ。まあ、それでもなけりや参謀役なんて出来ないか。  
コルト君、もしおいちゃんが出て来なかったら、どう動くつもりだっ  
たんだい？」

「……恐らく、被害が出るのを覚悟して、奔放型の連中を泳がせ、統率  
が取れている隊と組ませて網を張ったと思います」

「だろうねえ。そして、残念ながらハンター達もそれを予想して、動きを変えてくるのさ」

「!!」

「あちらさんはこっちの数を減らしたい。けど、今まで通り奔放な隊ばかり狙うと、コルト君達のような統率が高い隊ばかり残っちゃうだろ? それはあちらさんにとっては避けたいはずなのさ。だから、こっちを混乱させるために餌役と網役の両方を狙ってくるはずだよ」

「……なるほど」

「そうなるよ、こっちが取れる有効的な作戦は、残念ながら籠城くらいしかなくなっちゃうねえ。けど、女王様の食欲と餌の貯蔵量を考えるところ……まあ一週間ちよつとが限界になるから、また調達に出なきゃいけない。多分、そこをまた狙ってくる」

「……確かに、俺達にとって女王様への餌の供給は最優先の責務。餌が無くなる以上……危険を承知で出立することになるのは間違いない」

「でしょ? で、あちらさんはこっちが籠城している間に、餌を少しでも遠くに逃がすだろうねえ。そうなれば、残念ながらこっちはどうやっても隙だらけだ。一気に狩られちゃうねえ」

「では、どうするので? 俺が考えたであろう作戦より、アモンガキツド殿の作戦の方が確かに被害は減るとは思いますが……」

「おいちゃんの作戦でも、被害が減らすだけで無くするのは無理だよ。残念だけどねえ。だから、こっちも向こうが想像出来ない動きをしなきゃならないのさ。残念ながら知識と経験では人間には勝てないじゃあ、勝つためには知識と経験だけじゃ対処できない方法を取るしかないでしょ。例えばあ……おいちゃんの能力とかね」

アモンガキツドがそう言った直後、周囲に先ほどの口と目玉の球体が大量に現れる。

それにコルトが目を見開く。

「行っといで」

命令と同時に球体の群れは猛スピードで、外へと向かっていく。

「あの子達に監視と陽動をさせるよ。敵も餌も探してあげよう。ピ

トっちの【円】もあるし、おいちゃんの能力であちらさんも少し動き辛くなるだろうね。もう少しで最後の軍団長のユピっちも目覚めるだろうから、そうなればおいちゃんも前線に出る余裕が出来る。それで王が産まれるまでの時間は稼げるはずさ」

「感謝します。アモンガキッド殿」

「礼はいらないよ。これがおいちゃん達の使命なんだしき。だけど、向こうも痺れを切らすかもしれない恐れもある。油断は出来ないし、残念だけど部隊のいくつかは本当に囷として死んでもらうことになる。コルト君とペギー君には、それを承知で部隊を送り出してもらう。……行けるかい？」

「それが女王様を守ることに繋がるならば……俺に迷いはない」

コルトは真剣な表情ではつきりと答える。

それにアモンガキッドは頷いて、

「助かるよ。それじゃあ、君も師団長の会議に参加しておいでよ。多分、おいちゃんの能力を警戒してるだろうし、残念ながら組み方で揉めるだろうからね」

「……師団長達を監視してはいないのですか？」

「残念ながらおいちゃんのオーラ量じゃ、そこまで余裕はないのよ。おいちゃんから離れれば離れるほど、操作するのも神経使うんだよねえ。流石にあれだけ脅せば、女王様に危害を及ぼすような真似はしないでしょ。だから、巢の中じゃ使ってないよ」

「……それは師団長に伝えても？」

「構わないよ。どうせ信じやしないだろうからねえ、残念だけど」

アモンガキッドは肩を竦めながら言い、コルトは内心同意して少し呆れるもすぐに師団長達の元に向かう。

その背中を見送ったアモンガキッドは、小さく肩を震わせる。

「くくく……クソ真面目なバカ達と分不相応な夢を持つアホ達って扱いやすいねえ。せいぜい王が産まれるまでの時間稼ぎをしてもらおう」

護衛軍と師団長以下の兵隊蟻は、王が産まれれば指揮系統が分かれる。

つまり、アモンガキッドからすれば仲間意識など一切ない。

『どうせ別の軍になる死んでも困らない連中』に過ぎない。

今は自分が仕える王を身籠っている女王を守る必要があるから、王が産まれるまで出来る限り長く利用する。

「全く……人間の個性に記憶なんて持つても師団長は師団長でしかないのにねえ。食われた奴らの記憶なんて、引きずったってしようがないだろうに。残念だねえ」

アモンガキッドは小さくため息を吐いて呆れる。

「さて……引つ掻き回させてもらおうよお。元同業者」

## #96 キュウヘン×ト×ソノコロ

その日の朝、ラミナ達は異変を感じた。

「……おい。連中、急に大部隊で動き出しよったぞ」

標的を決めるために巢の様子を単眼鏡で監視していたラミナの目に、これまで見たことも無い数のキメラアントが巢より出てくる様子が映った。

それにモラウとノヴが、ラミナに顔を向ける。

「どのくらいの数だ？」

「……少なくとも三倍は楽に増えとる。しかも、空を飛ぶ蟻も多い気がする。昨日話した『餌』と『網』の2隊1組とかいう予想外れたみたいやぞ。……反対側からも同じ規模の部隊が出よった。……なんや？ 中途半端に統率性を感じさせる動きやな……」

ラミナは何とも言えない気持ち悪さを感じながら、モラウに単眼鏡を投げ渡す。

モラウも覗き、ノヴも能力で双眼鏡を取り出して覗く。

「……確かにこれまで潰した隊の三倍はあるな。飛行能力がある連中を入れたからなのか、それとも単純に3隊編成になったのか……。確かに妙な気持ち悪さを感じさせやがるな」

「……飛んでいるキメラは全方位を警戒している……。中心付近に飛んでいるのが指揮官と考えるならば……。約3匹が指揮官、ですか。どうやら、3隊編成でそれぞれの隊が飛行部隊を抱えた可能性が高いようだ」

ネテロ達は昨晚。アモンガキッドの推測通り、これからキメラアント達は2隊1組で動き、片方が囮役となって動くと予測していたのだ。

そして、今後は網役の部隊も含めて不規則に襲い、敵の数を減らしていく作戦を考えていた。

上手くいけば、これで3、4隊を潰せると狙っていたのだが、それが外れたことになる。

「……しかも、真逆の方向にそれぞれ出て行きよったな……。流石に

あの規模となると会長チームはともかく、うちは取り逃がす可能性が高いで」

「それにあの飛んでる連中も厄介だな。俺の煙で閉じ込めるにしても、あれだけ広範囲に展開されてると囲いきる前に逃げられちまう。ノヴの能力も通じねえし……」

ノヴの能力は【4次元マインドシーク

念空間を創り出して、そこに人や物を転送させることが出来る能力だ。ただし、その入り口は壁や地面にしか設置できない。

つまり、飛んでいる者に関しては、別手段で地面に落とす必要がある。

モラウの【監獄ロック】であれば閉じ込めることは可能だが、煙である以上囲いこむ前に隙間から数匹は確実に逃げ出される。

その場合、テレパシーで連絡を取り合って、こちらの手の内がバレることはほぼ確実だろう。

「ちっ……思い切った手で来やがったな」

「一手、出し抜かれた感じやな。厄介な参謀がおると考えるべきか……。しかも、戦略を熟知しとる奴が……」

「言葉を話せる以上、本や何かしらで知識を得ていると考えるべきでしょう。裏のNGLの連中が戦術書でも持っていたか、それとも一部の人間を生かして尋問でもしているのか……。まあ、どちらにしろ、作戦を練り直す必要がありそうですね」

「だな」

ノヴが眼鏡を直しながら言い、モラウが携帯を取り出してネテロに連絡を取ろうとする。

ネテロはノヴの念空間の中で体を解している。

その時、ラミナがすぐ下の森で何かの視線を感じた。

「なんかおるぞ……！ 警戒せえ！」

「!!」

ラミナの警告にノヴはしゃがみ込んで地面に手を当て、モラウはパイプを啞えて煙を吸う。

ラミナは【円】を発動して、視線の正体を全力で探る。

そして感じ取ったのは、異常な数の動く球体だった。

「っ!! こっち見られとる!! 球体の飛行物体、約50体!! 敵の念能力の可能性が高い!! 能力見せずに走って下がれ!!」

ラミナは形と数からキメラアアントではないと判断し、ファルクスとブロードソードを具現化して、モラウ達に伝えると囿になるべく敵に向かって飛び出す。

モラウとノヴは躊躇なく、ラミナと反対側に走り出して岩場から飛び降り、森の中に飛び込む。

ラミナは【円】を狭めて、球体のみを捉える。

そして、ファルクスを振って【狂い咲く紅薔薇】で捉えた敵を攻撃する。次の瞬間には気配が消えるが、ラミナは警戒を解かずすぐにまた【円】を発動する。

やはり、少し離れた場所にまだ10体以上の球体を感知して、ラミナは一度その姿を確認するためにファルクスを消してハラデイを具現化して【朧霞】で姿を消す。

そして、茂みに飛び込んで球体の敵がやってくるのを待つ。

(血の臭いも、肉片もない。つまり、殺したんは念獣。なら、【隠】で姿も気配も分からん可能性は高い)

ラミナは最大限警戒しながら【凝】を使う。

すると視界に映ったのは、口だけの球体と一つ目の球体の群れ。

一つ目の球体の方はギョロギョロと忙しなく瞳が動き回り、口だけの方は鋭い牙を覗かして、いつでも飛び出せるような気配で一つ目の周囲を飛んでいる。

(……間違いなく念能力。しかも、探索型と攻撃型の2種類かいな。厄介やな……)

機能を制限していることで、それぞれの念獣の能力を向上させていると考えられる。

それはよくあることだが、問題はその数だ。

大きさを考えれば、複数具現化することを想定しているのは間違いない。

だが、それでも先ほど倒した数と合わせれば、60体以上一度に具

現化していることになる。

(モラウみたいに『核のオーラ』と『煙のオーラ』を使い分けて構成しとるならまだ分かる。やけど、それでも複雑な動きをするもんは数が減るし、形が違うもんは同時に作り出すのも限界があるはずや。これはどんな念獣でも同じ。問題は……あの目玉)

一つ目念獣に攻撃機能はなさそうだった。

ならば考えられるのは、あの口だけ念獣とワンセットであるか、あの一つ目が見ている視界を術者も見ている可能性が高い。

前者であれば数が多いのもまだ領けるが、そうなると思いでころと先ほどもまでの動きに違和感がある。

考えられる命令は『視界に捉えた動くモノを、口だけ念獣に襲わせる』というもの。つまり基本的に自動型ということになる。ただ、そうなると思先ほど視線を感じた時に何故襲われなかったのかという疑問が生まれる。なので、口だけ念獣と繋がっているわけではないと考えられる。

そして、この手の能力は一定範囲の専守防衛で効果を発揮する。巢の外ではなく、巢の中でこそ使うべき能力なのだ。

だが後者となると、術者はあの大量の一つ目念獣の視界を全て見ていて、それに並行して口だけ念獣を操作していることになる。

それでは術者への制約がとてつもなく多くなるはずだ。まともに動くことなど出来ないだろう。

何より数が多すぎる。

常時遠隔操作するならば、集中力もオーラの消費量も多くなる。半自動・半遠隔操作であっても、大した差はないというのがラミナの経験則だ。

(……相互協力型か？ けど、そうやとしたらエライ中途半端な姿やな……。わざわざ目と口を分ける意味はない)

ラミナは術者の正体が掴めず、眉間に皺を寄せる。

その時、一つ目念獣がラミナが隠れている茂みをギョロリ!と視た。

(!!) 【凝】も出来るんか!? 生まれたばかりの蟻が【朧霞】の【隠】を



見破れるほどの!?)

ラミナは驚くも、反射的に茂みから飛び出して一つ目念獣に斬りかかる。

ブロードソードを振って横に真つ二つに斬ると、一つ目念獣は霧散した。

ラミナはそのまま走り抜いて一度茂みに飛び込んでハラデイを消して、飛び出しながらファルクスを具現化する。

(モラウの煙人形同様、脆い！ 後は口だけの奴！)

ラミナに向かって、口だけ念獣達が口を大きく開けて飛び掛かってくる。

(そこまで速ない！)

動きを見切ったラミナは一瞬で先頭の口だけ念獣に詰め寄って、【一瞬の鎌鼬】で縦に両断する。

一つ目念獣より硬くはあったが、問題なく殺せるレベルであることを確認したラミナは、【円】を発動してファルクスを振る。

球体であるため全ての一撃が致命傷となり、身体が霧散する念獣達。

ラミナは【円】で警戒を継続しながら、モラウ達が逃げた方向に全力で駆け出す。

(あの口だけの奴……見た目のわりに脆かったつちゆうことは面倒な能力がありそうやな。それにしても、あの【円】だけでも厄介やのに、遂に能力も使ってきたか。それも想像以上の完成度やった。こちらあ下手に師団長達も攻めかかれへんぞ……)

走りながら携帯でメールを送り、すぐに位置情報が返ってくる。

スピードを一切緩めずに知らされた場所に向かい、裏のNGLが使っていた穴倉の1つに飛び込む。

そこにはノヴが待つており、ノヴが地面に手を翳すと念空間への入り口が開く。

ラミナは素早くそこに飛び込み、続いてノヴも入って入り口は閉じる。

中は扉が1つあるだけの殺風景な部屋で、ネテロとモラウもそこで

待機していた。

「ご苦労じゃったの。で、どうじゃった？」

「厄介なことになりよったでえ。1隊分の念獣の群れや。球体で口だけの奴と、同じく球体で一つ目の奴の2タイプ。両方とも【隠】で姿を隠しとつて、一つ目の方はうちの姿を消す能力を【凝】かなんかで見破られたわ」

「お前の【隠】を見破ったあ……!?!」

「幸い視線の気配は隠せんみたいやし、倒すんも難しいけど……口だけの奴の方はまだ能力を隠してそうやな。しかも、あくまであの場におったんは、や。巢の周囲に散らしとるとしたら、半端ない数になりよるで」

「ふむ……」

「浮いとるからノヴの罫は使えん。モラウの煙は【円】にもなりよるから、奇襲には備えやすいけどな。問題はそんな能力を連中が創り出せなかつちゆうことや。いきなりあんな念獣を創り出すとか、もう師団長共も何かしら能力を覚えたと考えるべきやろな」

ラミナは座りながらペットボトルを手にとって、親指の力だけでキャップを開けて飲む。

「3隊編成に飛行部隊の整備、そして大量の念獣……。どうやら、思考を読まれたのは我々の方だったようですね……」

ノヴが眼鏡を直しながら苦々しく口を開く。

「念獣つてのが厄介だな。今の話からすれば、キメラアント並みに見た目や能力が変わる可能性がある」

「しかも、弟子が来たとしてもや。ナックルとシユートは一对一の制圧型の能力者やから、念獣の相手は向かん。ゴンは強化系やから言うまでもなく、キルアはまだ能力を知らんけど、あいつの性格からして一掃型の能力にやせんやろ。何よりゴンとキルアには、蟻を相手にしながら【隠】を使う念獣まで警戒する器用な真似はまだ厳しいと思うで」

「俺の【紫煙機兵隊】は攻撃能力は低い。流石に囷にはなっても、倒すまでは厳しいな」

「出来れば倒しておきたいが、十中八九能力者は巢の中か、あの【円】の中じゃろうな。となると、結局儂らに出来るのは今までと変わらんと言っわけじやな」

「やっぱ時間も手も足りなさすぎるやろ。この状況ならもつとベテラン連中呼べるんちゃうか？」

「だと、いいがな。期待はしない方がいいぜ」

「……はあ。それが天下のハンター協会かいな」

ラミナはため息を吐いて、立ち上がる。

「うちはお前らとは違う隊を狙う。二手に分かれれば、念獣も分散するかもしれん。ま、あんま期待は出来んけどな」

「大丈夫か？」

「この部屋で戦うよりも、森の中で1人の方がうちは戦いやすいでな。少しこつちも踏み込まんな。ノヴの能力は出来る限り隠したいやろ？」

「そうじゃの。今後の事を考えると、まだ詳細を知られたくはないのう」

「なら、うちが派手に暴れるしかないやろ。その代わり、かなり連中を刺激するで。覚悟しときや」

ラミナはそう言っつて扉に向かい、1人出て行った。

それを見送った3人は、

「俺達は今まで通りでいいんで？」

「それしかなからう。お主の煙がなければ、ノヴの能力を隠せぬしな」

「それにしても……やはり協会本部からの応援は厳しそうですか？」

「……うむ。選定に時間がかかりそうじゃのう。その間に敵の能力をもっと情報を集めてほしい、とのことじゃ」

「ふんっ！ んな悠長なこと言ってる場合じゃねえことくらい分かってるだろうによ。前情報がなきや動けねえとか、あのキルアつてガキと同じじゃねえか。むしろ、今の段階でも十分すぎるくらいだろ」

「……こうなれば弟子達を全員呼び寄せますか？ 例の念獣や兵隊長以下の相手は出来ると思いますし、人が増えれば私やモラウの能力も少しは術者を攪乱できますが……」

「うむう……そうじやお……。もう少し、様子を見よう。ラミナがどう蟻達を刺激するのを見てからの方がええじゃろう。下手をしたら、一気に勝負に動かねばならぬやもしれん。そうなれば、弟子達では流石にまだ荷が重いじゃろうて」

ネテロの言葉に頷いて、モラウ達もすぐに動く準備を始めるのだった。

同じ日の夜、NGLの隣国である【ロカリオ共和国】。

最もNGL国境に近い【ドーリ市】でゴン達とナツクル達は、NGLに行く権利を手にするために勝負をしていた。

と言っても、ゴンとキルアはノヴの弟子であるパーム、そしてパームが呼び寄せたビスケに修行をつけてもらっている段階で、まだ本格的な戦いは仕掛けていなかった。

ゴンとキルアは現在【練】の継続時間を3時間以上に延ばしながら、ナツクルと組み手レベルの戦闘を行う毎日を過ごしていた。

「ナツクルに勝つには、それくらいしないと勝負にもならないわさ」と言う、ビスケの能力とパームの援助をフル活用しながら、へ口へ口の状態でゴンとキルアはナツクルに挑んでいた。

ナツクルも一度ゴン達と話をして、情に絆されてゴン達の特訓に付き合っていた。

ちなみにシュートはビビリが抜けずに、近くでナツクルとの戦いを見ていたが手を出すことが出来なかった。

今日もゴンとキルアは【練】の持続延長の特訓を行っていた。

と言っても、残り約16日の段階で課題をされていた3時間維持に成功した。

「よし……3時間経過だわさ！」

ビスケの号令と共に、ゴンとキルアは【練】を解いて軽く息を吐く。

「ふう……。なんとか3時間出来るようになったね」

「ああ、こればかりはラミナに感謝だな」

「こればかりはって。ラミナの教えは全部役に立ってるよ」

「ま、そうだけだな」

2人はヨークシンでラミナに「最低2時間」と言われてたことを真面目に続けていたのだ。

グリードアイランドを出る時点で、すでに2時間は維持できなくなっていった。

それでもやはり1時間も延ばすのは時間がかかった。

だが、それでもラミナに言われてなかったら、期間内ギリギリか間に合わなかっただろうとビスケも言っていたので、2人は心底実戦を想定して教えてくれたラミナに感謝しかなかった。

「さて、じゃ、30分休憩しなさい。体調を万全にしたら……ナツクルを倒しておいで」

ビスケの言葉に顔を引き締めて頷くゴンとキルア。

しかし、次の瞬間にはいつも通りの雰囲気に戻って、体を休めながら談笑を始める。

(けど、それでもまだナツクルの方が上手。ま、ナツクルも流石に今のこの子達相手じゃ全力を出さざるをえないと思うけど)

ビスケは微笑みを浮かべて、2人を見ながらそう考える。

(今日であと半月。今日の戦いで自分にならないもの、足りないものに気づければ、十分可能性はあるわさ。けど、未だにもう1人は姿を見せない。恐らく今日はゴンとナツクルの一騎打ちだね。今日の本気具合を見て、向こうもその気になれば……一カ月経つ前に結果が出るかもしれないわね)

ビスケもナツクル達の能力は知らないが、流石に全力での勝負になると結果次第ではNGLに行ける状態ではなくなる可能性もある。

特にゴンの能力は直撃すれば、ナツクルとてただではすむまい。

ゴンも未熟さ故に何かしら大怪我を負う可能性はある。

しかし、全力勝負でなければ当人達は納得しないだろうし、キメラアントと戦って生き残れるわけがない。

「そういうえば、知ってるかい?」

「え?」

「ナツクルとシュート、それに師匠のモラウはね、ラミナとハンターの仕事したことがあるらしいって話」

「ええ!？」

「時期はヨークシンのオークションの前だから……あんた達と天空闘技場で別れた後だわね。メンチってグルメハンターとも仕事したらしいわよ」

「メンチって……あの試験官やってた？」

「ああ……あのスシとか意味分かんねえお題出して、ラミナだけ受かった奴か……」

メンチのことを思い出した2人。

「あの後、そんなことやつてたのかよ」

「じゃあ、ナツクルさん達もラミナの事を知ってるんだ」

「だわね。旅団と一緒に動き出したって広まった後からは、ラミナを探し回ってたみたいよ」

「ああ……少なくともナツクルとラミナって相性最悪だよなあ」

「あはは……」

ナツクルは敵であろうと殺す必要はないと考える男である。

今回もキメラアントを問答無用で討伐することが気に入らないと、参戦を希望した。

そこがナツクルの一番の長所でもあり、一番の短所でもある。

そして、その考えは暗殺者であるラミナとは絶対に相容れないのは、キルアはもちろんゴンでもわかる。

だがナツクルからすれば、一度でも共に仕事をした以上無視することも出来ないのだろう。

「ラミナって、今どうしてるのかな？」

「そりゃ旅団の連中と一緒にいるに決まってんだろ。少し前もド派手に暴れたみたいだしさ」

「だわねえ。ブルブ美術館とかよく狙うわさ」

流石にゴン達もラミナや幻影旅団の情報は集めていた。

ハンターサイトの情報料があまりにも高いため、あくまでネットニュースの類ではあるが。そのため、ラミナがジンによってシングルハンターになったことも知らない。

それぞれの情報料がヨークシンの時より倍以上跳ね上がっていた

ので、それらが事実だろうと理解した。

それでもラミナの家やブルーブル美術館などのことは衝撃的で、クロ口の除念が完了したことは嫌でも分かった。

それがグリードアイランドでレイザーと戦った直後であることから、ゲーム内で聞いた話は嘘だったこともやはり少なからずショックだった。

「さてー…そろそろ時間だよ。行っておいで！」

「押忍!!」

気持ちを切り替えるように2人は気合を入れて、拠点を後にする。向かった先は夜の広い公園。

ナツクルは以前のように、その公園や周囲に住んでいる野良犬や捨て犬達に餌を食べさせて面倒を見ていた。

「……！」

そこに気迫に満ちた気配が近づいてきて、犬達も本能で気付いて慌てて逃げ出す。

「……ようやく本番みてえだな……」

ナツクルも顔を引き締めて、腕を組んで仁王立ちする。

ゴンが前に出て、キルアは少し後ろで足を止める。

「……戦う前に聞きたいことあるんだけど」

「あ？」

「ラミナの事と、シュートの居場所」

ラミナの名前が出たことにナツクルは僅かに目を丸くする。

「なんでテメエらがアイツの名前知ってんだあ？ コラ」

「俺達に念の基礎を教えてくれた人なんだ。俺はハンターの同期でもあるけど。一緒に仕事したんでしょ？」

「……なるほどな。じゃあ、メンチのことも知ってたのか」

「うん。ねえ、ナツクルから見て、ラミナはどうだった？」

「……」

ゴンの問いにナツクルは盛大に顔を顰め、歯をむき出しにして、

「……強えのは認めるぜ。俺やシュートはもちろん、師匠ですら勝つのは厳しいだろうぜ。今のテメエらの5倍は強え」

「そっか……」

「だが、俺はアイツの生き方も、ハンターであることも認めねえ!!」

今まで溜め込んでいたラミナへの怒りが爆発した。

「ああ、そうだよ!! アイツがスゲエのは疑いようもねえ!! 殺しを  
楽しむような生粋のクズじゃねえこともな!! 殺してきた奴らにも  
向き合ってるのも分かった!! だからって殺し屋のままで良いわけ  
がねえ!! 幻影旅団のメンバーが家族みてえな存在だかなんだか知  
らねえが、犯罪者集団に入って派手に暴れ回って、何人もハンターや  
警察、警備員を殺してる! いくら強かろうが、信念があるうが、ハ  
ンターとしても優秀だろうが関係ねえ……。俺はあの女をぜってえ  
認めねえ!!」

右拳を握り締めながら、力強く宣言するナツクル。

その叫びを聞いたゴンとキルアは、すでにラミナと一通りぶつかり  
合ったのだと理解した。

そして、返り討ちにあったのか、無視されたに違いないことも。

ナツクルはビシィ!とゴンを指差して、

「テメエらがアイツをどう思おうが勝手だが、俺はいずれアイツを  
ぜってえ捕まえて豚箱にぶち込んでやつかなコラア!!」

(無理だと思う……)

2人は何故かそう思ってしまった。

実力的というわけではなく、結局どこかで手を緩めてスルリと逃げ  
られそうなイメージが浮かんでしまったのだ。

「俺達もラミナの現状にはいろいろ思うこともあるから、ナツクルが  
そう考えることには怒る気はないよ。まあ、俺達じゃラミナにも旅団  
にも敵わないのは嫌ってほど理解してるしね」

(つて言いながら、いざ目の前にしたら忘れて挑むんだらうけどな)

キルアはゴンにそう呆れながら、両手を腰に当てる。

そして、話を本題に戻すことにした。

「で、シュートって奴はどこ?」

「んなこと聞いてどうすんだ? コラ。今から俺にぶちのめされちま  
うのによお」



「割符は2枚必要だからね」

「笑わせるじゃねえーか。俺を倒せたら、教えてやるよ。まあ、ありえねえがな」

ナツクルが拳を合わせて不敵に笑う。

ゴンも【練】を発して、構える。

それと同時にキルアはナツクルの背後の森に目を向ける。

そこにはシユートが潜んでいた。

いよいよ弟子同士は本格的な勝負が始まったのだった。

その頃、NGLでは。

「はあ！ はあ！ はあ！ クソが……！」

ボロボロなラミナが左肩を右手で押さえながら、森の中を全力で駆け抜けていた。

## #97 ヤルコト×ハ×カワラナイ

ノヴの念空間から出たラミナは、周囲を警戒しながら洞穴から飛び出す。

森に着地して【円】で周囲を探り、特に異常を感じなかったので全速力で駆け出して、キメラアントの集団を追いかける。

(あの念獣共は十中八九部隊の近くもおるはず。うちらが部隊を狙うとることはもう理解しとるはずやからな)

つまり、能力の使用は出来る限り控えるか、先に念獣を潰してからになる。

だが、あれだけの能力を創った以上、師団長達も何かしらの能力を使うと警戒しておく必要もある。

そもそも、今出ている部隊でさえただの囷である可能性があるのだから。

(連中にとって、最優先は女王の守護。今の段階で護衛軍が出てくる可能性は低い。やから、まだ待ち構えとるんは師団長クラスのはず) ラミナはハラデイを具現化して姿を消しながら、一度高く跳び上がる。

約3kmほど先に空を飛んでいるキメラアントの群れが見えた。

恐らくその下に地上部隊もいるはずだと、ラミナは推測して地上に下りて再び猛スピードで向かう。

10分もせずに、キメラアントの群れに近づいたその時。

前方から明らかにラミナに向けて殺気が飛んできて、複数の気配がラミナに向かってきた。

「!!」

ラミナは足を止めて近くの樹の枝に飛び乗って警戒を強める。

(……周囲に念獣の気配は感じんかった。他の能力か……?)

そう考えていると、すぐ目の前の少しだけ森が開けた場所に人影が現れた。

羽根つきハットを被った騎士を思わせる衣装の男。

口は嘴のように鋭く、背中のマントは孔雀の羽を思わせる。両足は

鳥足形で、何故か片足立ちで左手でハットを押さえ、右手をポケットに入れて何やらポーズを決めていた。

そのキメラアントは迷うことなくラミナがいる場所を、ビシィ!と右手で指差した。

「ふははは!・　そこに隠れている者!　我らの前では姿を消そうと無駄だ!　大人しく出てくるがいい!　この優雅なる師団長フラコックが率いる精鋭部隊がお相手しよう!!」

フラコックの言葉に舌打ちしたラミナは、完全に位置がバレていると理解してハラディを消して姿を見せる。

フラコックはラミナの姿を見て、僅かに目を丸くする。

「ほう……女だったとは。だが、我が目に映るそのオーラ。油断出来る相手ではないようだ!」

「……」

「其方が最近我らが同士を倒している者だな?　その狼藉、もはやここまでと知れ!　ふふふ、我らは師団長の中でも――」

(こいつがうちの場所を見つけたわけやなさそうやな。……もしかして、コウモリとか蛇の蟻か?　超音波や熱でうちの【隠】を見破った

……。それなら納得出来るか。ちっ!　ホンマ面倒な連中やな)

「おい!!　この私を前に無視とは良い度胸だな!」

舌打ちしたことで、フラコックはラミナが話を聞いていないと気づいたのだ。

ラミナはそれに呆れた表情を向けて、

「これから殺す奴らの話なんぞ、いちいち真面目に聞かない。人真似が楽しいんか知らんけど、蟻如きが口上なんぞ垂らすなんぞ似合わんで。涎ダラダラ垂らしてかかってこいや」

「……ほう、言ってくれるではないか……。人間風情が我々を虫扱いましたことお!!　あの世で後悔するがいい!!　来い!!!　我が精鋭達よ!!」

「!!」「オウ!!」「!!」

フラコックは片足立ちのまま、見事にブチ切れて右手を上げて号令を叫ぶ。

すると、背後の森から勢いよく影が複数飛び出してきて、ラミナとフラコックの間で横に並ぶように着地する。

「ポポッタブラウナー！」

カバ頭に虫の手足を持つ茶色の迷彩服を着たキメラアアント、ポポツタが左端でポーズを決め、

「ディアンヌホワイト！」

頭に鹿の角を生やした黒髪ロングの女性。白い司祭服を思わせる格好に、足は鹿の形をしているキメラアアント、ディアンヌが右端でポーズを決める。

そして、ディアンヌの隣で両手を掲げてポーズを決めたのは、河童の見た目に青の道着を着ているキメラアアント。

「カッパスブルー！」

そのカッパスの反対側には、豚の顔にマッチョボディを持つ暴走族風の格好をしたキメラアアント。

「グピアンピンク！」

最後に中央にいた猿のような見た目で上半身は裸、下に赤いジャージズボンを履いているキメラアアントがビシィ！とポーズを決めた。

「ゴクマキレッド！」

5匹は息の合った動きで、右手を前に出す。

「二二」5人揃って！ 兵隊長戦隊！ フラコック特戦隊!!」二二」

ガツキーン！と効果音でも聞こえてそうな切れのあるポーズを決めながら、名乗り切った5匹。

ラミナは途中から腕を組んで呆れ全開の表情で眺めていた。

隙だらけに見えたが、逆にそれが怪しくて手が出し辛かったのだ。まさかキメラアアントが戦隊モノを見せてくるとは思っていなかったものもある。

だが、5匹に続くように戦闘兵達がゾロゾロと姿を現したのを見て、ラミナは流石に顔を引き締める。

「……ところで、上の奴はその特戦隊とやらに入れてやらんのか？」

上空で待機しているキメラアアントの中にも兵隊長と思われる気配の持ち主がいることに気づいていたラミナは、相手の出方を窺うため

に質問した。

それにグピアンが胸を張り、

「ブーハー！ 彼は昨日フラコック隊に入隊したばかりなので、特戦隊の入隊審査中なのでございます！」

「……ふうん。（恰好と口調が合わんやつちゃな）」

聞いておきながらもどうでも良さそうに頷くラミナに、フラコックは片足立ちを続けたまま笑みを浮かべる。

「ふっ！ どうだい？ ゆ、優雅で精錬された兵達だろう？」

そう得意げに言うフラコックだが、ラミナはフラコックのこめかみや頬が引き攣っているのを見逃さなかった。

どうやら、特戦隊のノリは彼の美意識と合わなかったようだった。

そこからラミナは、キメラアントの部隊は気が合う者同士で組んでいるわけではないらしいと読み取ることが出来た。しかも、飛行部隊に関してはやはりこちらの作戦を読んだ上での対応であることも分かった。

（なら、残りの部隊もこっちに来るか？ それにしては増える気配はない……。数を増やしたのはうちらに勝つためちゃうんか？）

もう少し情報を集めたかったが、戦闘兵達が前に出てきたのを見て、ラミナはキメラアントの妙な動きに感じる気持ち悪さを頭の隅に追いやる。

「ふっ！ この数を相手に1人でやる気かい？ 奇襲じゃなければ敵ではない!! 行けっ!!」

フラコックの号令と同時に、戦闘兵達が一斉にラミナへと襲い掛かる。

ラミナは呼吸を整えて、

（せっかくな。特訓に付き合ってもらおうか）

ゴキゴキと両手を肉體操作して爪を鋭くする。

地面を強く蹴って、一瞬で戦闘兵達の群れに飛び込む。

【蛇活】で両腕をしながら高速で振り、先頭にいた数匹の頭部を一瞬で引き裂いて殺す。

それに驚いた後ろの戦闘兵達は、一瞬動きを止めてしまう。

その直後、再びラミナの両腕が高速で動く。

手刀にした右手で頭を突き刺し、左手では首を引き千切ると同時に握り潰し、そして両腕を広げて左右の戦闘兵の頭部を引き裂く。

次の瞬間にはラミナの姿は群れの中にあり、回転しながら【蛇活】と組み合わせ、タコの足のような残像を見せて、周囲の戦闘兵達の頭を潰し、両断し、引き裂いて殺す。

更に右脚を振り上げて【打蠅】で首元から上を吹き飛ばし、再びキメラアント達の視界から姿が消えたかと思うと、次の瞬間更に数匹の頭部が吹き飛ぶように消えた。

この時間、戦闘開始から僅か20秒。

たったそれだけで約半数の戦闘兵が死んだ。

その光景にフラコックや特戦隊達は目を見開き、ラミナは両手の血を払った直後、両足にオーラを溜めて全力でジャンプして一瞬で上空に跳び上がる。

上空にいるキメラアント達が気付く前に、両手に柳葉飛刀を具現化して両腕を交えて力を籠め、柳葉飛刀には【周】でオーラを溜める。

【円】で空中にいるキメラアント達の位置を把握した瞬間、全力で柳葉飛刀を投擲する。

柳葉飛刀は弾丸よりも速く飛び、上空にいる全てのキメラアントの頭部を貫通した。

すぐさま柳葉飛刀を消し、地上へと落下する。

地上にいたキメラアント達はようやく空中にいるラミナに気づく。

「上だど!? くっ! 速すぎる……! (アモンガキッド殿の忠告は脅しではなく事実だったのか……!?)」

「俺に任せてくませえ!!」

フラコックは明らかにラミナの実力が、自分達より上であることによくやく現実を理解する。

しかし、アモンガキッドの忠告を知らない兵隊長であるポポツタが、ラミナの落下地点に先回りして、カバの大きな口を全開にする。

「落下中は逃げられねえだろ!!」

「馬鹿が!! 奴は一瞬で空中にいる兵達を倒したのだぞ!? 飛び道具

か何かが——!!」

ズドオオオオン!!

フラコックが忠告しようとしたが、ポポッタの真上から勢いよく閃光が墜落して衝撃と爆風が吹き荒れた。

ポポッタは一瞬で全身が肉片に変わり、その周囲に待ち構えていた戦闘兵達も吹き飛んだ。

フラコック達は衝撃と閃光、巻き上がった土煙で見えなかったが、落下地点にはバルディツシュを地面に突き刺したラミナがいた。

ラミナは空中でバルディツシュを具現化して振り回し、「仁愛なる兄の豪肩」を発動しながら一気に落下したのだ。

10回近くは回したのと落下の勢いもあり、かなりの威力になってキメラアントごと地面を吹き飛ばした。

ラミナはバルディツシュを消して、干将莫邪を具現化する。

(……【円】には他に反応なし。けど、嫌な視線は感じる。うちの【円】の範囲を見極められたか?)

念獣や増援を警戒していたが、未だにやって来る気配はない。

それどころか、【円】である動きを感じ取ってしまい、無意識に眉間に皺が寄るが、すぐに気を切り替えて残りのキメラアントを殲滅することに集中する。

干将莫邪を手の中で回しながら土煙から飛び出して、すぐ近くにいた戦闘兵数匹を仕留める。

同時に能力を発動して分身を生み出し、入れ替わりながら戦闘兵達の死角から襲い掛かって頭部を両断していく。

(残るは4匹……)

左手に持つ剣を投擲すると、回転しながら飛ぶ剣はブーメランのよう曲がって、ラミナに気を取られていたグピアンの後頭部に突き刺さる。

「ブビ!!」

「グピアン!?!」

カッパスが目を丸くしてグピアンに顔を向けるが、その時にはラミナが真後ろに詰め寄っており、気づいた時には顔が上下に斬り分かれた後だった。

ラミナはグピアンの後頭部から剣を抜いて、ゴクマキに身体を向ける。

「貴様あー!!」

ゴクマキは目を血走らせて殴りかかる。

しかし、ラミナは避けずに迫る拳を眺めており、ゴクマキの拳が直撃したと思った瞬間、ラミナの身体が煙のように崩れた。

「なっ!? つ!! ディアンヌ!!」

ゴクマキは目を見開いて、背後にいるはずのディアンヌを振り返る。

そこで目に映ったのは、ディアンヌと、その背後で剣を振り上げているラミナの姿だった。

ゴクマキが限界まで目を見開いて、叫ぼうとしたがその前にラミナの腕が高速で振り下ろされる。

「ヤメ——!!」

その瞬間、ゴクマキの頭の中で突如見知らぬ光景が浮かび上がった。

農村で、他の人間と共に鍬を振っている。

すると、空から異形の化け物達がやってきて、仲間を襲っていく。

己も逃げるが、その先である人間の女が視界に入る。

その女も背後から化け物が迫っており、それに気づいていなかった。

己は手を伸ばして叫ぼうとするが、化け物の腕が無慈悲に振り下ろされ、己も背中に鋭い痛みが走って倒れて行った。

「はっ!?」

ゴクマキが正気に戻った時、すでにラミナは事を終えていた。

「これで、残りはお前だけや」



ラミナはゴクマキを見つながら言う。

ゴクマキは何故か涙を流して、呆然と跪いていた。

ゴクマキの視線は、ラミナの足元の死骸に向いていた。

「……」

(……仲間が殺されて茫然自失？ 敵の目の前やぞ？ 師団長みたいに逃げもせん。……さつきからの反応と言い、まるで人間を相手にしとるみたいやな)

フラコックはポポツタが死んだ直後、吹き飛ばされたフリをして猛スピードで逃げ出していた。

部下達を見捨てて。

しかしラミナからすれば、その方がキメラアントらしい。

いくら人語を話し、人間のように振舞っていても、所詮はキメラアント。

虫や混ざった動物の本能から仲間を置いて逃げ出すのはおかしいことではない。敵わないと判断した相手から逃げ、自分の命を最優先するのは当然だ。師団長であるなら、部下を捨て駒にする程度なら人間が混ざってなくとも実行してもおかしくない。

むしろ、階級がはつきりしている軍隊のようなキメラアントの生態から考えればフラコックの行動が最も正しい。

なのに目の前のゴクマキは逃げもせず、仲間が殺されたことに怒り、悲しんでいる。

(人間が混ざったつちゆうても……ちよいと人間臭すぎる。……これがずつと感じとる嫌な予感の正体か？ いや、これやけど、これやない。これの理由が、正体か……?)

ラミナは警戒しながらも、必死に目の前の違和感の正体を考える。しかし、

「うう……！ う、が……アア……ガ！」

ゴクマキが俯いたまま震え始め、呻き声が出る。

地面についた両手に力が籠っており、地面に指が突き刺さりそうな程だった。

ラミナは嫌な予感がして、トドメを刺そうとしたその時、

ドツクン！

ゴクマキの身体が脈動し、膨大なオーラが噴き上がる。

「!!」

ラミナは反射的に距離を取ってしまう。

それが失敗だった。

ゴクマキが両手を握り締めて、立ち上がる。

「ウガア………ウウウガアアアアア!!」

突如雄たけびを上げて、更にオーラが膨れ上がる。

更に全身の筋肉が一回り膨張し、体毛が茶色から真っ赤に変わっていく。

「っ!! (こいつ！ 命捨てよった!!)」

ラミナはゴクマキが何をしたのかすぐに理解した。  
制約と誓約だ。

この戦いの後を捨てたのだ。

ラミナを殺すことだけに全てを捧げ、本来引き出せない力を無理矢理引き出した。

それをキメラアントが行った。

その効果は測り知れないものになるに決まっている。

「ウウ…アア…アア………！ カアアアア………！」

ゴクマキの目が真っ赤に染まって、ダラダラと口から涎を流す。

明らかに先ほどまでの理性はなく、怒りとキメラアントの本能に支配されている。

それ故に発している殺気と纏うオーラの圧は、旅団にも負けていない。  
い。

(理性までも捨てたからこそその圧……。こらあ流石に、出し惜しみ出来んか……)

ラミナは全神経をゴクマキに集中して構える。

その後、

「ウギャギャオアアアア!!」

ゴクマキが吠え、腰を屈めたかと思うと、地面が爆ぜてその姿が消える。

同時にラミナが全力で後ろに跳び下がった直後、ゴクマキの拳がラミナが立っていた場所に突き刺さる。

地面が爆ぜてクレーターが生まれるが、ゴクマキはそんなことなど気にも留めずに猛スピードでラミナへと詰め寄る。

「ぐっっ! (こいつ、下手したらウボォーよりも……!)」

ラミナは「虚実投影」を発動して分身を生み出して攪乱しようとしたが、ゴクマキは分身に目もくれずに本物のラミナに右拳を振り抜いた。

ラミナは分身と入れ替わって拳を躲したが、ゴクマキはすぐさま左裏拳を繰り出してきた。

それをまた分身と入れ替わって躲した。

その時、ゴクマキが勢いよく右肩を突き出してタツクルしてきた。

「!! (完全に入れ替わった瞬間を見抜いとるやと!! 臭いか!?)」

ラミナは歯軋りして、全力でジャンプした。

ゴクマキはラミナの真下を大砲のように通り過ぎて森に突っ込み、木々を吹き飛ばした。

ラミナはその隙に地面にいる分身と入れ替わる。

「ガアアア!!」

ゴクマキが叫びながら振り返ると、大きく開いた口にオーラが集中する。

「げっ!？」

「ギャア、!!!」

ラミナは頬を引きつかせて全力でその場から逃げ出す。

直後、ゴクマキの口から念弾が撃ち出されて、ラミナが直前までいた場所に着弾し、大爆発を起こす。

爆音が轟き、爆風が吹き荒れて地面が大きく抉れて周囲の樹々を根元から吹き飛ばす。

ラミナは樹々を盾にしながら全力で爆発の範囲から逃れる。

(厄介やな!! 蟻に強化系は最悪の組み合わせか!!)

元々の身体能力が人並外れていることと、小難しい事に囚われない蟻と獣の本能は、強化系の特性とベストマッチだったようだ。

しかも、本能的にオーラの扱い方を理解し、放出系の技も会得したようだ。

そこに理性を消し飛ばしたとは言え、人の学習能力は失われていないだろう。

そしてトドメに制約と誓約だ。

人間とは比べられないレベルのパワーアップであることは容易に想像できる。

ドバン! ドバン!

爆発音が響き、ラミナが目を向けると。

ゴクマキが足裏からオーラを放出して、ブースターのように加速しながら迫って来ていた。

「はあ!?!」

ラミナは流石に驚愕で目を丸くして声が出てしまった。

ゴクマキは樹の幹や枝を掴んで跳び回る猿の特性と、オーラのブースターをフル活用して高速立体駆動を実現していた。

(成長が早過ぎるやろ……!?! 本能に身を任せただけで、ここまでき!?! これやったら人間の個性を得たんは、こいつらにとって足枷やつたんちやうか……!?!)

猛スピードで詰め寄ってきたゴクマキの、嵐というのも生温いと思わせる怒涛の殴蹴をラミナは紙一重で躲しながら反撃の隙を探っていた。

(ぐっ……!?! この速さとあの動きやと、螺旋剣や鎖鎌は躲されてまう。大太刀は無防備になる。柳葉飛刀は何本刺せばええんか予測も出来ん! バトルアックスにバルディッシュでも、あのオーラじゃ殺し切れる可能性は低いし、その後の消耗がデカイ……!?!)

フアルクスも同じくあのオーラに弾かれる。斬首剣もあの身体能力相手に膝をつかせるなど気が遠くなる。

鉤爪の念糸も引き千切られる可能性が高く、ブロードソードでも致命傷を与えられるとは限らない。

「なら、まずは……！」

ラミナはフランベルジュを具現化する。

ゴクマキの拳を躲した直後に【周】で強化したフランベルジュで、間接部位を狙って斬りかかる。

ゴクマキは本能的に首を庇い、二の腕や脇腹、太ももに傷を負う。ラミナは距離を取り、ゴクマキは追いかけてしようとしたが足が動かずに、何故か腕が上がってしまう。

もう一度動かそうとしたがやはり腕が上がり、腕を戻そうとしたら足が前に出て仰向けに倒れてしまう。

「ガア!？」

「効いたか……」

「ウガアアアア!!」

「!!」

ゴクマキが四肢を同時に動かして、大きく飛び上がった。

どれを動かせば分からないならば、全て同時に動かせばいいと考えたのだ。

そして、反動で顔が真下に向いた瞬間、再び大きく口を開けて念弾を発射した。

ラミナは今回は逃げずにソードブレイカーを具現化して駆け出し、念弾に斬りかかって霧散させる。

そのままラミナは勢いよく跳び上がって、落ちてくるゴクマキに斬りかかる。

ゴクマキは手足を乱雑に振り回して攻撃しようとしたため、ラミナは無理に首などを狙わず、まずは左腕を斬り落とした。そして、返す刃で左脚を斬り落とす。

「ギャガアアアア!？」

ゴクマキは悲鳴を上げながら、地面に落ちる。

ラミナは念弾や予期せぬ攻撃に備えて、一度距離を取った。

「ふう……」

「ウアア……ガアア……」

ゴクマキはうつ伏せに倒れたまま右手足を動かしていた。

だが、【矛盾する心身】の効果もあり、視界も前後左右逆に変わって  
るため上手く動けないようだった。

これでようやく決着かとラミナが思ったその時、

「ガガガ……ユリ、ア……。マモ……ル……。ゴ、ゴンド……コゾ

……」

「あ？」

「……ユリア……ゴロザゼ……グガア……ナ……イ……イ。バゲモノ」

……デエ、ダズ……ナ……」

突然何やら言葉を話し始めたゴクマキに、ラミナは訝しむ。

『ユリアを守る、今度こそ』『ユリア、殺させない』『化け物、手を出  
すな』

確かにそう言った。

だが、ユリアなどラミナは知らないし、今更化け物と呼ばれる筋合  
いはない。

先ほどのキメラアントで名前が分かっているのはフラコック、ポ  
ポツタ、カッパス、グピアン、ディアンヌだけだ。

もしや、空中にいた兵隊長か。そう考えたが、そうであればあの状  
態になったタイミングがおかしい。

ならばディアンヌがユリアの別名なのか。

だが、そうなると『今度こそ守る』『殺させない』『化け物』『手を出  
すな』は辻褄が合わない。

そもそも、これまでキメラアント達に『今度こそ守る』と思わせる  
ようなことがあったことに違和感がある。

少なくとも、ゴン達やネテロ達は出会ったキメラはほぼ殺している  
はずだ。

もしディアンヌがゴン達と戦っているならば、あのようなふざけた  
ポーズをしている余裕などないだろう。念を会得したとはいえ、ゴン

達も念を使えるのは知っているのはずだから。

つまり、ディアンヌとユリアは別人ということになる。

だが、それでも違和感はある。

ラミナがそう考えた時、

ガチン！

と、突如ラミナの頭の中で、これまでバラバラだった情報の欠片が完璧に組み合わさって『ある可能性』が浮かび上がった。

ラミナは大きく目を見開いて、目の前でまだ眩き続けているゴクマキを見つめる。

人の言葉を流暢に話し、個性が強い。

人のように作戦を立て、人の思考を熟知している。

念を始め、手品や戦隊モノなど様々な事柄を知っており、同じように使う。

キメラアントの女王は、人間を好んで摂取している。

そして女王は……『摂食交配』で兵隊蟻を産み、兵隊蟻には食べた生き物の特徴を反映させている。

これらの情報と、ゴクマキの眩きを組み合わせると……突拍子もない、されど一度思い至るとそうとしか考えられない事実が浮かび上がる。

『キメラアントの兵隊蟻は、食われた人間の記憶を引き継いでいる』

普通ならば『バカげてる』の一言で切り捨てる内容だ。

だが、ラミナはむしろ納得した。

これまでのキメラアント達の言動に感じた人間臭さも。

こっちの動きを先読み出来る思考も。

全てが一切の矛盾なく繋がるのだ。

もちろん、完全に引き継いでいるわけではないのだろう。

ゴクマキの混乱具合からも、それが窺える。

そして、ゴクマキの混乱していることが、ラミナの推測を裏付けてくる。

恐らくディアンヌが殺された光景と、ユリアという者がキメラアント達に襲われた光景と重なったのだろう。

だが、それはキメラアント達は人間だった頃の記憶に影響を受けている事をも示している。

もしかしたら、女王や他のキメラアント達を裏切る者が現れているかもしれない。それを僥倖と考えるか、危険要素と考えるか。人によって意見は分かれるだろう。

「ま……うちには関係ないか」

ラミナは小さくため息を吐いて、ソードブレイカーを消してバルデイツシュを具現化する。

そして、ゆつくりとゴクマキの元へと歩み寄っていく。

「すまん。うちは殺し屋やでな。依頼を引き受けた以上、お前らが蟻でおる限り、うちはお前らを殺さなあかん。食われる前の記憶があるがなからうが、関係ないんよ。うちが殺すんは『命』やから、な」  
どんな事情があろうとも、どんな種族であろうとも、標的に『命』があるならば、誰であれ何であれ殺すのが『殺し屋』である。

ラミナは右手でバルデイツシュを数回回転させながら歩き続け、ゴクマキの前で止まる。

「……今、楽にしたるわ。もし来世があるなら、次はちゃんと全部忘れてからにせえよ」

「……ガ……ア……」

ゴクマキは未だ右手足は動かしているが、涙を流しながらもう呻くだけだった。

ラミナはバルデイツシュを振り上げる。

そして、力を籠めて振り下ろした、その時。

「ア……り……ガ——」

ドオオオン!!



轟音が響き渡り、ゴクマキの頭部は肉片も残さずに吹き飛んだ。ビクリ！と一瞬身体が跳ね、ゴクマキの毛は元の茶色に戻って、体も戻る。

武器を消したラミナは、大きく息を吐く。

「はあく〜……………ド阿呆、殺そうとしとる殺し屋に……………礼とか言うなや」

眉間に皺を寄せて、死骸を見つめながらボヤクラミナ。

10秒ほど黙って死骸を見つめたラミナは、背を向けて歩き出す。

「……………面倒なことになってきよったなあ。ジンの奴、胸糞悪い仕事寄こしよってからに……………」

今後の仕事に憂鬱しか湧き上がらず、依頼人に恨みを向ける。

「これ……………ゴン達やナツクル達には教えられんなあ……………。甘ちゃん連中や。人やった頃の記憶があるってだけで、人と同じ扱いするやろなあ」

人の記憶があっても、同じ国の者達を餌として襲い、殺しているというのに。

ゴンやナツクルは、『もう人は襲わない』、この一言が出てくれば殺さずに見逃すだろう。

ラミナからすれば、人というだけでも信用できないのに、そこにキメラアントという種族が混ざった以上、尚更信用できないと考えるのだが。

「まあ、おらん連中の話はどうでもええか。さっさと殺せばええだけやしな」

ラミナは周囲の気配を探って次の標的を定めながら、少しでも身体を回復させることに努める。

「うちがやることは、変わらんな」

仕事を終わらせるために。

フラコックは後ろを振り返ることなく、巢へと一目散に逃げた。

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！」

『フラコック!! どこ行つたんだよ!? 死んだのか!? おい、聞こえてんのかよ!!』

頭の中で他の師団長からのテレパシーが響くが、フラコックはそれを無視してただただ巢を目指していた。

あの時、他の師団長には『手出し無用!』と伝えており、アモンガキッドの命令もあつて他の師団長達は戦場に近づかなかつた。

飛行部隊を偵察に出そうにも、フラコック隊の飛行部隊が一瞬で壊滅したために出し辛くなつたのだ。

(ここならもう安全か!? いや、あの女の力はよく分からなかつた! 油断できない!)

その時、フラコックの進行方向に一つ目念獣が出現した。

「?!?!?」

フラコックは目を大きく見開いて、地面を滑りながら足を止める。

直後、フラコックを囲むように一つ目念獣と口だけ念獣が次々と姿を現す。

「あ……ああ……!」

冷や汗をダラダラと流して、フラコックは身体を震わせる。

ガチン! ガチン! ガチン!

口だけ念獣達が牙を噛み合わせて音を響かせ、恐怖を煽る。

まるで、これから処刑を行うと宣言しているようだ。

「お、おお、お待ちください! アモンガキッド殿!! ちゅ、忠告と命令に背いたことは申し開きもございませぬ! で、ですがそれは……! 女王様への脅威を掃おうという忠義からの行動でして……!」

決して……決してアモンガキッド殿のお言葉を甘く見たわけでは……!!」

聞こえているかどうか分からないのに、必死に言い訳をするフラ

コック。

すると、周囲を囲んでいた念獣達がそっぽを向いて、フラコックから離れていった。

それに思わずホツとしたフラコックだったが、

突如目の前に、大きく口を開けた口だけ念獣が現れた。

「ひっ!? あ、ああああああ——」

ガチユン!!

悲鳴が途中で途切れて、鈍い咀嚼音が響く。

そして念獣は姿を消し、その場にはフラコックの脛から下だけが遺されていた。

「やれやれ……残念だねえ。おいちゃんの言葉ですら無視するんだから」

巢の中で、アモンガキッドがソファに寝転がりながら呟く。

「まだあの女と戦って殺された連中の方が褒めてやれるよ。命令無視して、戦いもせずに逃げ出すって残念過ぎやしないかい? 帰って来られたところで、何の仕事を任せられるっていうのさ」

小さくため息を吐いて、1秒後にはフラコックの存在を忘れたアモンガキッドは、覗き見してた戦いに思考を向ける。

「あのお猿くんは見込みがあったけど、あれは生き残ってももう戦えなかっただろうねえ。残念だなあ。それにしても、やつぱり師団長じゃ相手にならないか。しかも、例の煙とか出さなかったし。まだ他にもいるってことだねえ。残念だなあ」

しかし、これ以上師団長達の被害を減らす策はない。

アモンガキッド達護衛軍の誰かが出るしかないだろう。

だが、まだそこまで追い詰められていない。

少なくとも護衛軍は、であるが。

「ま、いっか。今はこのままで」

なので、アモンガキッドがもうしばらく作戦を継続することは至つ

て普通の結論だった。

師団長以下の兵隊蟻は、所詮使い捨ての盾なのだから。

「残念ながら、おいちゃんのやることは変わらないのさ。頑張ってる間を稼いで死んでおくれ、兵隊蟻くん」

## #98 スズンダサキ×ハ×シンエン

ゴクマキを倒したラミナは回復を図りながらも、近くの岩山に登って周囲の気配を探っていた。

「念獣はやっぱりうちの【円】の範囲の外か……。んで……。他のキメラアント達は撤退しよると……」

朝と同じねちっこい視線を感じるも、ラミナの【円】では気配を感じ取れなかった。

恐らく前回の戦いでラミナの【円】の範囲を推測されたようだ。

だが、逆に言えば今は朝とは違い、監視と観察に留めているということだ。

そこから考えられることは、

「3隊編成を決めたんは、この念獣の術者と考えるべきか。んで、奔放型が多かった連中が言うことを聞いとるっちゆうことは、護衛軍による命令の可能性が高い……」

先ほどの戦闘でも残りの2隊は加勢に来ず、勝負がついたと確認するとすぐさま巢へと引き返して行った。

「……フラコツク達は勝手に飛び出したんか、当て馬にされたんか……。前者であれば付け入る隙はある。後者であれば狡猾な指揮官……。両方やったら最悪の支配者。念獣の動きから考えると、後者か両方やろなあ……」

ラミナの能力や実力を観察することに終始していた。

もし、ここで倒すつもりだったならば、残りの部隊も投入して念獣でも襲い掛かればいい。

それをしなかったということは、朝の戦闘から戦力分析に徹することにしたのだろう。

「つまり、護衛軍にとって師団長以下はある程度死んでも構わんレベルの存在っちゆうこと……。そうなると、今の作戦はやっぱり雲行き最悪やな。進行方向は大嵐の海、か」

ラミナはため息を吐きながら、離れていくキメラアントの飛行部隊を眺める。

恐らくネテロ達の方も大した成果は出ていないだろう。

こちらと同じく、1隊を相手にしている間に残りは撤退している可能性は高い。

「あの編成はモラウの能力を観察することを目的としとるか……？」

あれだけの飛行部隊や。確実に囲う前に逃げられるやろうしな。上から見て、どうやって始末されるんか知ることが一番の狙い。見れなかったなら見れんで、対策を考えとるんやろうなあ……。それに今頃新しい部隊が餌の調達に出とるやろうし……」

ラミナ達は完全に陽動に引つかかったことになる。

もちろん、ある程度それを予想してはいたが、ここまで手堅くやられるのは少しだけ予想の上だった。

どれか1隊が襲われた時に、残りの2隊が加勢に向かう程度に考えていたのだ。

そして、それでも奔放型が痺れを切らして、結局ガタガタになるとも。

「けど、なんで護衛軍が急に出しやばってきよつたんや？ 少なくとも2週間以上前には産まれとつたはず……。最近、産まれた奴が指揮を始めたつちゆうことか？ まあ、それやったら念獣が急に出てきたんも納得出来るか」

つまり護衛軍も役割や性格に違いがあることが分かる。

当然のことかもしれないが、性格が違うということは考え方に違いが生まれるということ。つまり、作戦立案の幅が広がるということだ。

それに護衛方法も多種多様になる可能性がある。

念能力がある以上、どんなにこちらが挑発しても女王の傍から離れない可能性もあるのだ。

念獣を創る能力がある以上、その可能性は非常に高いと考えるべきだろう。

だが、先ほどの戦闘の感じからすると、護衛軍は師団長が全員死ぬまで今の状態を継続するかもしれない。

「やつぱ、ここらで巢にちよつかい出して引っ張り出さんとあかんか。

護衛軍を残しても意味はないしなあ。ぶっちゃけ師団長クラスなら、まだ念能力を得ようが殺せるやろうし……」

ラミナは森に戻って、新しく出立したのであろうキメラアートの大部隊がいると思われる方向に走る。

ネテロにメールを送って状況を聞くと、やはりこちら同様1隊を煙で覆っても残りの2隊は加勢せず、敗北濃厚になったら一目散に巢に戻っていったらしい。

飛行部隊も仕留めきれずに、モラウの能力の概要はある程度バレたと考えるべきだとネテロ達は推測していた。

ノヴの能力も遅くとも数日中にバレるだろうとラミナも考え、やはり対策を立てられる前の今のうちに仕掛ける必要があると確信した。

ラミナは果物などを収穫して腹ごしらえをし、途中で見つけた洞窟に入って【絶】で体力回復に努めた。

念獣を警戒していたが、向こうも警戒しているようで洞窟内に入ってくることはなかった。

そして、日が暮れた頃。

ラミナはほぼ万全に回復したことを確認して、行動を再開する。

ネテロに「仕掛ける。隙を見て動け」と連絡し、勢いよく洞窟から飛び出す。

巢に向かつて一直線に走り、護衛軍の【円】の500mほど手前で、螺旋剣を具現化して全力でジャンプする。

森から飛び出して、右腕を振り被る。

バチヂヂチ！と螺旋剣が回転しながら帯電し始める。

ラミナは巢を見据え、全身に力を籠める。

それを見ていた念獣達が一斉にラミナ目掛けて飛び迫る。

そして、巢の中では、

「ピトオオオオオ!! 10時の方角だああ!!!」

と、アモンガキッドが叫びながら猛スピードで駆け出す。

途中で、待機していた兵隊長2匹の頭を掴んで、抵抗させる暇もな

く連れ去る。

アモンガキツドの叫び声に、他の師団長達も目を丸くして思わず身構える。

そして、ラミナは、

「くうたばれやああ!!!」

叫びながら全力で右腕を振り抜いた。

ドツツツパアアアアアン!!!

轟音が轟き、流星の如き閃光がNGLの夜の闇を切り裂いて、高速で巢を目指して飛ぶ。

念獣達はラミナから閃光に狙いを変えて、進行方向を塞ごうと群れる。

だが、念獣達では全くスピードを緩めることすら出来ず、迅雷に焼かれて消滅する。

ドドオオオン!!

巢の2か所の壁が吹き飛んで、猛スピードで人影が飛び出してきた。

ネフェルピトーとアモンガキツドだ。

2匹は砲弾のように一瞬で閃光の前に飛んだ。

「逸らすぞおお!!」

「ニャアアア!!」

アモンガキツドはネフェルピトーの足元に足場となる念獣を出し、自身は両手で掴んでいた兵隊長2人にオーラを無理矢理流し込みながら、重ねて盾にする。

もちろん、それで止まる【天を衝く一角獣】ではない。

だが、先頭にいた1体目が蒸発しかけたその時、アモンガキツドはもう1体を少しナナメにずらして、そこを両手を組んで【硬】を発動したネフェルピトーが全力で飛び掛かりながら兵隊長の身体ごと、閃光に両手を叩き込んだ。

そこに更に、アモンガキツドも全力で右脚で【硬】を発動しながら、



念獣を盾にして閃光に蹴りを叩き込む。

【天を衝く一角獣】は僅かに軌道が逸れて、巢の外壁を挟むだけで通り過ぎて行った。

「!? くそつたれがあ!!」

ラミナは恐れていたことが現実となり、全力で悪態をつく。

しかし、ラミナですら背筋に怖気が走る凶悪過ぎる殺気が2つ、ラミナに突き刺さったのを感じた瞬間、スロージングナイフを具現化して、地面に向かって投げて【妖精の悪戯】で入れ替わって、地面に着地する。

それにネフェルピトーが両脚に力を入れて飛び出そうとした時、

「ピトー!!」

アモンガキツドが呼び止める。

視線だけを向けたネフェルピトーに、アモンガキツドは親指を立てて背後を指差す。

「残念だが、ありや陽動だ。本命はおいちゃん達がここを離れた時に来る。あつちはおいちゃんが行くから、ピトつちはプフつちと女王様を宥めてくれないかい? 【円】もお願い」

「……ニヤア〜」

「じゃ、任せたよ」

不服そうに鳴くネフェルピトーをアモンガキツドは無視し、念獣を踏み台に猛スピードでラミナが降りた場所目掛けて飛び出す。

ラミナは高速で迫ってくる凶悪な気配に、左手にフランベルジュを具現化する。右手はまだ痺れていて、武器を扱うのは厳しかった。

その直後、ラミナは弾かれたように真横に跳んだ。

そこにアモンガキツドが一瞬で現れて、直前までラミナがいた場所が地面ごと挟れる。

ラミナはアモンガキツドの姿をしつかりと捉え、【練】を発動しながらも足は止めずに走り続ける。

「護衛軍か?」

「どうだろうねえ」

「よう言うわ。あれを止めれるんが師団長なわけないやろ。覗き見し

とつた癖に」

「そうかねえ」

猛スピードで走るラミナの横を、楽々並走するアモンガキツド。

その周囲には同じ速度で付いてくる念獣達がいた。

「念獣はお前の能力か。視界を塞ぐことが制約つちゆうところか？」

「やっぱ人間には見抜かれちゃうねえ。残念だけど」

そう言いながら右手を振り、口だけ念獣数匹をラミナの左右と上から啖ける。

ラミナはスピードを落とすことなく、左から迫る念獣に詰め寄って両断し、上から来る念獣も素早く切り捨てて、右から来た念獣は左脚を振り上げて蹴り上げる。

その瞬間、アモンガキツドが背後に回り、両手で掴みかかってきた。

ラミナはその両手が蛇の頭のように見え、

(掴まったらあかん！)

と、直感して跳び下がって躲す。

樹が2人の間を横切るが、アモンガキツドの右手が樹の太い幹を全く抵抗を感じさせずに抉った。

ラミナは【肢曲】で残像を生み出して、アモンガキツドと念獣を困惑させようとしたが、アモンガキツドが迷うことなく本物のラミナに詰めかかり、右手を伸ばす。

僅かに目を丸くするラミナはフランベルジュで斬りかかるが、アモンガキツドの右腕が蛇のようにうねって斬撃を躲した。

「っ!？」

更に目を見開いたラミナだが、アモンガキツドの右手を躲しながら右脚を振り上げる。

それをアモンガキツドは左手で掴もうとしたが、ラミナの右脚も蛇のようにうねって、アモンガキツドの左手を躲して顎に迫る。

「おっとお」

アモンガキツドは余裕の声を出して、顔を仰け反らして躲す。

そこにラミナがフランベルジュで突きを繰り出すが、念獣が横からアモンガキツドを押し飛ばして身代わりになる。

ラミナは舌打ちしてフランベルジュを消し、右手にブロードソード、左手にファルクスを具現化する。

具現化された剣を見たアモンガキッドは、離れるどころか距離を詰める。

ラミナは【一瞬の鎌鼬】を発動して高速の斬撃を繰り出す。

しかし、アモンガキッドはその斬撃の嵐を紙一重で躲して、蛇のように両腕を動かして斬撃を逸らし、完璧にいなした。

更に左脚を鞭のようにしならせて、ラミナの右脇腹に叩き込む。

「がつ!」

ラミナは横に吹き飛んで、樹を押し折って6 m近く飛ぶ。

ギリギリ【流】で防御力を上げたため骨折まではしていない様だが、それでも鉄球を叩きつけられたような衝撃があった。

「くっ……! (身体能力はうちより上! しかも【蛇活】を使えるせいで隙が見つけにくい……!)」

だが、それでアモンガキッドの特性はある程度推測することが出来た。

(蛇の蟻やから、『ピット器官』を持つとるっちゆうことか。つまり、

【肢曲】は無意味!)

『ピット器官』は蛇などが持つ熱探知センサーだ。

大きさ、形、距離までも測定できるので、体温を追われれば残像では誤魔化せない。それに加えて、一つ目念獣による視界もあるため、俯瞰的な視点もあるので速さだけでは勝てそうにない。

そして、向こうの方が力が強く速いため、隙が作り辛いのだ。

(少しでも情報を集めるしかないか!)

ラミナは【円】を発動して、一帯を覆う。

その瞬間、アモンガキッドの髪が蠢いて、オーラと相まって大蛇が出現する。

そして、猛スピードでとぐろを巻いてアモンガキッドを覆い隠し、凄まじいオーラを纏う。

直後、ラミナがファルクスを振って【狂い咲く紅薔薇】を発動する。範囲内の念獣達は全滅したが、大蛇は僅かに皮膚が切れただけだっ

た。

「ちっ！」

「怖いねえ。お嬢ちゃん的能力」

とぐろを緩めた大蛇の隙間からアモンガキッドが飛び出してラミナに詰め寄り、高速で両腕を動かして掴みかかる。

ラミナはブロードソードとファルクスを連続で振って、アモンガキッドの両腕を弾こうとしたが、

バギキーン!!

ブロードソードとファルクスの剣身が、いきなり潰れて砕ける。

(!? 握り潰された!? こいつの握力、いや、能力か!?)

ラミナは歯軋りして、迫り来るアモンガキッドの手を素手で弾く。

ラミナも【蛇活】を使い、4匹の蛇が2人の間を目にも止まらぬ速さでぶつかり合う。

パァン!!

破裂音がしたと同時に、2人は猛スピードで駆け出す。

夜の森をほとんど音も出せずに、紅い女豹と黒い蛇が駆け抜けていく。

時折2人の両腕が霞んだかと思うと、空気が弾けるような音が響き、2人の間を横切った樹や茂みが掻き消されたように抉れる。

ラミナは左頬、右前腕、左上腕、左脇腹から血を流して汗を流している。

対して、アモンガキッドは口元の布と左袖が僅かに切れているだけで、怪我はしておらず汗もかいていない。

「驚いたねえ。ここまで凌がれるなんて、残念なことにおいちゃん自信無くしそうだよ」

「よう言うわ。自信もくそも、そもそもお前ら護衛軍が全力で戦ったことや無いやろ」

「おや、残念。バレちゃってるねえ。けど、自信が無くなりそうなのはホントだよ。これでも師団長達に化け物って言われてただけだよ」

ねえ」

「バケモンやろが十分」

「その化け物と戦えてるお嬢ちゃんに言われたくないねえ。こりや師団長じゃ敵わないわけだ。もう一方の人達も同じレベルかい？」

「知るかい阿呆ツ!!」

ラミナは体で隠しながら具現化したスローイングナイフを投擲する。

もちろん、ピット器官で気付いていたアモンガキツドは顔を傾けるだけで躲す。

直後、ラミナは指を鳴らして【妖精の悪戯】で入れ替わり、アモンガキツドの背後に移動する。

そして、爪を尖らせた右貫手を全力で繰り出して、後頭部を狙う。

「そりゃ残念だねえ」

しかし、アモンガキツドは驚くこともなく、また頭から大蛇を具現化してラミナの右手に巻きついて縛り付けて受け止める。

さらに関節を外して両腕を背後に伸ばして、ラミナに掴みかかる。

「このっ!!」

ラミナは再び指を鳴らして、拘束から抜け出す。

スローイングナイフは砕かれ、ラミナは左肩に痛みが走り、目を向ける。

左肩が少し抉れて出血していた。ギリギリ躲し切れずに掠ったらしい。

「ぐっ!!」

ラミナは顔を顰めるが、そこに口だけ念獣が5体ほど出現して襲い掛かってきた。

更にその後ろから大蛇がうねりながら迫って来ていた。

ラミナは右手にガンソードを具現化し、一振りで念獣達を倒して大きく後ろに跳び下がる。

そして、銃口をアモンガキツドに向けて、戸惑うことなく引き金を引く。

巨大な念弾が発射されて、アモンガキツドに迫る。

ラミナは発射の反動を利用して、背後を振り返って全速力で走る。直後、背後で大爆発が起こり、爆風が背中に襲い掛かる。それも利用して「円」を使いながら、振り返ることなく走り続ける。アモンガキッドを倒せたとは欠片も考えてはいない。むしろ、これで僅かばかりダメージを負ってくれていれば僥倖にも程がある。

「はあ！ はあ！ はあ！ クソが……！」

ラミナは悪態をつきながら、森の中を走り続ける。

そして、背後から猛スピードで迫る気配を感じ取った。

「ちいー！」

舌打ちをして、背後を振り返る。

その直後にアモンガキッドが目の前に現れて、右手で掴みかかってきた。

服や髪が少し汚れているくらいで、やはり怪我を負った気配はない。

ラミナは紙一重で躲し、続けて迫る左手も躲しながらすれ違う様に背後に回る。

そして、手を握り締めながら両腕を引っ張る。

すると、ガクン！とアモンガキッドの動きが止まった。

「げっ……！」

近くに飛ばしていた一つ目念獣から送られる視界に、ラミナの両手指から伸びる念の糸が、自身に絡みついているのが視えた。

「シィ!!」

ラミナは念糸を引き寄せて、全力で鉤爪を振るう。

アモンガキッドは体を回転させながら吹き飛び、念糸が引き千切られる。

アモンガキッドは即座に右足を地面について、滑りながら体勢を立て直す。

ラミナは追撃せずに、再び全速力で駆け出してアモンガキッドから距離を取る。

「ホント、恐れ入ったねえ」

アモンガキツドもすぐさま追いかける。

その背中、左前腕、右上腕には3筋ほどの引つ掻き傷があり、青い血が流れていた。

アモンガキツドは無理矢理体を回転させて、念糸を引き千切って距離を取ろうとしたのだ。

それでも流石に躲し切れずに、遂に傷を負った。

しかし、アモンガキツドもただやられたわけではなかった。

「あの距離と状況から、残念ながら掠っただけとはねえ。結構消耗してると思っただけだなあ」

回転して離れようとした直前に、両腕を蛇のようにうならせてラミナの心臓と右腕を狙ったのだが、もの見事に弾かれて左脇を掠っただけだった。

「さて……こつちもそろそろキツくなってきたねえ。ずっと念獣を出してたツケが出てきたか……」

かなりの数をラミナに倒されたのもあり、アモンガキツドもかなりオーラを消耗していた。

【天を衝く一角獣】や【敬愛なる兄の咆哮】などを防ぐにもかなりのオーラを使い、ラミナなどであればすでにスツカラカンになっているくらいのオーラを使っている。

しかし、【天を衝く一角獣】という脅威の攻撃手段を持つラミナを逃がすわけにもいかない。

ラミナは確実に迫ってくる限界を感じながら、必死に勝つ方法を考えていた。

（もうオーラは無駄遣い出来ん！ 武器に回す余裕はない！ 【無垢村雨】が切り札やな……。【月の眼】は念獣や蛇には有効やけど、あの体術は一瞬の隙が致命的になってまう……！）

【月の眼】で相手のオーラと同質化した場合、相手の能力を無効化できるが、体術に関してはお互いに【絶】状態で殴り合うことに等しくなる。つまり、速さや力、体術が上の者が相手の場合、諸刃の剣になるのだ。

アモンガキツドの身体能力はラミナより上。

お互いに【絶】状態で殴り合っただとしても、ラミナが不利なのは確実だ。

元々の頑丈さも違うし、すでに体力の消耗率も差が開いている。なので、現状【月の眼】は使えない。

(あと長くても10分が限界……！　また接近戦になれば、5分も保たん！　この5分が勝負！)

大太刀を具現化して、能力を発動し、斬りかかるまで約0・5秒。だが、それはラミナですら万全であれば十分躲すことが出来る時間だ。アモンガキッドであれば余裕で躲せるだろう。

一瞬でいい。

隙を作らねばならない。

しかし【肢曲】は通じない。目潰しも意味はない。

他の攻撃では十分な隙は作れない。

武器を具現化する余裕もない。

完璧にジリ貧である。

(ピット器官やなかったら、まだやりようがあんのに……！　暗殺者みたいな戦い方と能力にしようってからに！　ホンマ、同類系は碌な縁がないわ……！)

そんな事を考えていた時、

突如、進行方向に煙が出現する。

「!! (モラウか!)」

「お? お仲間かねえ」

「っ! 出てくんなボケエ!! コイツはピット器官持つとる!! 目くらましは効かん!!」

恐らくノヴもモラウのすぐ傍にいるはず。

モラウはともかく、ノヴだけはここで見られるわけにはいかない。

そう叫びながらも煙の中に入るラミナ。

アモンガキッドも戸惑うことなく煙の中に入ってきた。

もちろんアモンガキッドのセンサーには、ラミナと少し先に立っている男1人をしっかりと捉えていた。

しかし、突如ガン!と額に衝撃を感じて、たたらを踏む。



「イッタア!? おお? なんだあ?」

特に障害物は感じ取れない。

アモンガキッドは手を伸ばすと、明らかに壁のようなものに触れた。

モラウの【監獄ロック】である。

ならば一つ目念獣で追いかけてようと思ったが、そっちは煙で何も見えず、ラミナが何かを投げた動きを見せた直後に視界が見える。

一つ目念獣を潰されたのだ。

「……やられたねえ。こりゃ、もう残念ながらダメかな」

そして、10分ほどすると突如ラミナ達の近くで強力な熱が弾けて姿を見失った。

その直後に【監獄ロック】が解除されたのだが、その時にはラミナ達の姿はアモンガキッドのセンサーから完璧に消えていたのだった。「爆弾、かねえ。まいったなあ……。ピトっちやプフっちに怒られそうだ」

アモンガキッドは項垂れて、トボトボと巣へと足を向けるのだった。

ラミナはモラウと合流し、近くの洞窟に潜んでいたノヴがラミナ達の背後に閃光弾を投げて、その隙に念空間の中に飛び込んだ。

中ではネテロが胡坐を組んで座っていた。

ラミナは念空間の部屋に入った瞬間崩れ落ちて、四つん這いで荒く息を吐く。

「はっ! はっ! はっ! はっ! はっ! はっ!」

「ギリギリ、だったな」

「はっ! はっ! はあ……スマン、助かったわ」

「結局【円】が消えなかったからな。もし消えてたら間に合わなかったぜ」

「敵はかなり手ごわかったようじゃのお……」

ネテロが顎髭を撫でながら口を開く。

ラミナは未だ肩で息をしながらも体を起こして座り込む。

「最悪やな。距離は離れとったし、予想はしとったけど、あの一撃を逸らされたんはやっぱシヨックやわ。アレ、うちの最速の飛び道具やったんやけど……」

「そうじゃのう。それでもアレの対処には、護衛軍2人がかりでなければならんということが分かったのは僥倖じゃの」

「その後の追撃を考えれば微妙なところやけどな。あれを防いだ後でも、一方的に追い詰められたでな」

「ふむ……お主でも厳しかったか」

「相性が悪すぎるわ。暗殺術がほとんど効かんし、向こうも同じような技使うてくるし、身体能力もオーラ量も上。もし、もう1匹もおつたら、死んどったな、無理無理」

ラミナは上着を脱いで、傷の確認をしていく。

モラウはラミナの怪我を見て、腕を組む。

「護衛軍と師団長以下はレベルが違う、か」

「レベルっちゅう言葉すら合わんわ。次元がちやう次元が。師団長壊滅させても戦力は大きく変わらんと思うで？」

「ふむ……」

「殺せんことはないで？ 万全に体調を整えて、戦い方をもっと考えればな。まあ、一対一で、その後のこと考えんかったらやけど」

「ただ、もう同じ手は通じないでしょう。確実に向こうもこちらを最大限警戒するでしょうし、それに1人であるならば護衛軍が出てくることも判明しましたしね」

「だな……。正直、俺とノヴじゃ、あの護衛軍の速さにはついて行けねえ」

「まあ、少し様子を見ようかの。ラミナは一度手当てに戻るとええ。回復に2日あればいけるかの？」

「この程度やったらな」

「モラウ、ノヴ。一度外の様子を見て来てくれんか？」

ラミナは肩を竦めて立ち上がる。

モラウとノヴはネテロの指示に従って、扉から外に出る。

2人を見送ったネテロはラミナに顔を向ける。

「何か、言いたいことがあるようじゃのお」

「……この仕事、弟子連中には厳しい思うで。実力的にも、精神的にもな」

「……かも、しれんのう」

「あいつらの中に、人間の記憶を持つとる奴がおった」  
「……」

「兵隊長やったから、師団長にもおるやろうな。もちろん、個体によって差はあるやろうし、それがどの程度性格に影響出とるんか知らんけど……モラウと弟子連中やと、下手に同情して見逃しかねんで？

そっちがそれでええなら、うちは構わんけどな」

「そうか……。そりやあ……ちと厄介、じゃのう」

「やと思うわ。……冗談抜きでアルケイデス辺り呼んどけや。情緒に流されやすい奴やと、一瞬の隙で殺されるだけやぞ」

ラミナはそう言って、扉へと向かい念空間を後にした。

これがネテロ達が女王を仕留められたかもしれない、最後のチャンスだった。

## #99 ニンギョウ×ハ×ダレカ

キメラアントの巣では、兵隊蟻達が慌ただしく動き回り、落ち着きがない雰囲気にもまれていた。

もちろん、ラミナの攻撃とアモンガキッド達の防衛行動が理由である。

両者の想像以上の実力により師団長以下の兵隊蟻達は、恐怖と困惑に陥っていたのだ。

しかも、外では時折激しい戦闘音が聞こえてくる。

未だに勝負がついていないことの証明であり、あのアモンガキッドを相手にまだ生き残っていることに怯えていた。

それに対して、肝心のネフェルピトールとシャウアプフは至って平常心だった。

「ンニャ〜……ボクも遊びたかったニャア」

「駄目ですよ。キッドの言う通り、陽動の可能性が高い。あなたの【円】がなければ、先ほどのような攻撃が巣の目の前で使われる可能性があるのですから」

「……ンニャア」

ネフェルピトールは頭の後ろで両手を組んで不貞腐れる。

シャウアプフやアモンガキッドの【円】は、ネフェルピトールの範囲に遠く及ばない。なので、敵の接近に気づくのがギリギリになってしまうのだ。

あの遠距離攻撃の後で、【円】を解除するのは危険でしかない。

「キッドが出ています。いずれ賊は倒されるでしょう。我々は女王の護衛に徹すればいいだけのこと」

「その子の死体も人形にしたいニャア」

「好きにすればいいですよ。キッド相手にまともな身体が残っていれば、ですがね」

「だよニャア」

「しかし、あのような過激な手段に出たとなると、我々も対策を講じなければなりませんね」

シャウアップフが顎に手を当てて、思考に耽る。  
そこに強張った表情のホルトとペギーが現れた。

「ご苦労様、2人とも。どうだった？ 女王様は」

「少々取り乱しておいででしたが、軍団長殿達が迎撃に出ていることをお伝えしたら大分落ち着かれたようです。食事も再開され、王に意識を戻されました」

「そう、よかった。ボク達ってテレパシー使えないから、女王様の言葉が分からないんだよねえ……。困ってたんだよ」

ネフェルピトーは呆れたように肩を竦める。

シャウアップフもそれに同意するように頷く。

ホルトは少々不安げな表情を浮かべて、

「今後、我々はどう動くべきでしょうか？ はっきりと言って、師団長でもあのような攻撃を防ぐのは……」

「ん〜……無理だろうニャア。正直、今回だって距離があって、キッドが素早く動いたから防げただけだしね」

ネフェルピトーが尻尾を揺らしながら、顎に指を当てて言う。

「しかし、これまであれを使ってこなかったということは、そう何度も使えるわけではないのかもしれないですね。まあ、キッドが倒せば済む話ではありますが……」

その時、

「いやあ……残念なんだけどねえ」

その声に全員が振り返り、ホルトとペギーは大きく目を見開く。

小さいとはいえ傷を負い、服や体が汚れているアモンガキッドが、申し訳なさそうに頭を掻きながら現れたからだ。

「あらら……随分と汚れたねえ。もしかして、逃げられちゃった？」

「残念なことには」

ネフェルピトーの言葉に、アモンガキッドは両手を上げて答える。  
それには流石にネフェルピトーやシャウアップフも僅かに目を丸くする。

「あなたから逃げ切った、と？」

「いいところまで追いつめたんだけど、もう少しってところで援軍が

来ちゃってねえ。いや〜参った参った。あの例の煙、相手を閉じ込めることも出来たみたいでさ。残念ながら、おいちゃんじゃ破れなかった。その隙に、ね」

「では、またあの攻撃が来る可能性があるとか？」

「そうなつちやうねえ……。次までにユピッチが起きてくれるか、煙の使い手の方を仕留められればいいんだけど……」

「では、師団長の何隊かを追撃に回しますか？」

コルトの提案にアモンガキッドは首を横に振る。

「この前も言ったけどねえ。残念だけど、師団長じゃ無理。多分、煙使いの傍には他にも仲間がいるだろうし。あの飛び道具の使い手は、フラコック君の部隊を一人で壊滅させた相手。戦ってみた感じ、あの子は師団長並みの身体能力持つてるねえ。おいちゃんの攻撃、ほとんど弾かれちゃった」

「へえ〜、面白そうだニヤア」

ネフェルピトーはアモンガキッドの言葉に、ウズウズし始める。

シャウアップは小さくため息を吐いて、

「楽しんでいる場合ではないでしょう。その者にはどれほどの手傷を？」

「まあ、おいちゃんよりは負わせたけどねえ。残念ながら、致命傷や1週間も戦えないほどのダメージはないね。言ったでしょ？ ほとんど弾かれちゃったって。場数が違った感じだねえ」

「……人間にそれほどの者が……」

「念能力も結構厄介そうだったねえ。それも合わせて、師団長でも無理ってわけ」

「……我々も能力を考えなければならぬと？」

「それが理想だけど……残念だけど、それでもあの子には勝てないだろうねえ。言ったでしょ？ 場数が違うってさ。オーラが多くても、能力が凄くても、押し切れないのが念での戦いつて感じかな？ おいちゃん達じゃ経験値が圧倒的に足りてない。正直、次は対一じゃおいちゃん負けるかも」

はつきりと負ける可能性を口にしたアモンガキッドに、コルトとペ

ギーは衝撃を隠しきれなかった。

前回感じたアモンガキッドとの実力差と恐怖。

「どうやっても覆らないと思わされた実力差を、餌と違っていた人間がひっくり返すかもしれないというのは、コルト達にとって大きな衝撃だった。」

「悪いけど、おいちゃんも回復しないといけないし……。念獣は監視用の奴を最小限にさせてもらうよ。その代わり、師団長達の部隊の指揮はちゃんとやるからさ。」

「じゃ……。ボクは巢の外壁で警戒しようかニヤ」

「では、ピトーの反対側を私が警戒するとうましよう。王が産まれるまであと少し。我々はただ盾となる。それだけのこと」

「ということで、軍団長各自の行動を決めて、すぐさま行動に移す。」

アモンガキッドはコルトとペギーを連れて場所を移し、自分用に確保したソファがある部屋に座る。

「はあく……。疲れたねえ……」

「お疲れならば、しばらく我々が隊の指揮を執りましょうか?」

「あく大丈夫大丈夫。オーラと念獣はまだちよつと厳しいけど、体力はすぐに回復するからさ。話くらいは出来るよお」

アモンガキッドは手をヒラヒラさせながら答える。

「それで、あの攻撃で被害はどんな感じ? おいちゃんが2匹巻き込んじゃったけど」

「攻撃が外壁を穿った際の崩落と余波で、戦闘兵3匹、兵隊長2匹が死亡。負傷した者が数名出ておりますが、明日には戦線復帰出来るかと」

「ふうん……。あの兵隊長達はどこの隊の子?」

「テイルガとブロヴーダの隊です」

ブロヴーダとはロブスターのカメラアアントで、硬い鋏の両手を持っている師団長だ。

「あれ? それってフラコック君と組んでた隊だっけ?」

「はい」

「ありやま。ただでさえ、被害受けてるのにねえ。悪いことしたなあ。」

まあ、組み直さないといけなかったから、手間は同じか。これで師団長はあと何人だい？」

「26名ですな」

「う〜ん……ペギー君と……タンドル君を除いて編成し直そうかねえ」

タンドルは亀のカメラアントだ。老人のような顔つきで、転がって移動するのだが、やはり移動速度は他の者より遅いので長距離を移動する今となってはやや足手まといなのだ。

その後も3人で編成を考えて決めていく。

「編成内容と動きはそのままでもよろしいのですか？」

「うん。多分、数日は被害減ると思うんだよねえ。明日からは逆に出発させる隊の数を増やして、一気に餌を確保しに行こうか。この数日中に備蓄を増やしておかないと、残念ながらまた敵の勢いが戻った時に餌が捕れないかもしれないからねえ」

「なるほど……」

「というか、次に攻めてきた時は昨日より激しくなると思うんだよねえ。増援も来るだろうし」

ハンター達とてこちらの戦力はある程度把握しているはずだとアモンガキツドは考える。

もちろん、その考えにコルト達も同意して、すぐに出立できるよう師団長達にテレパシーで編成を傳達する。

それで一度解散とし、アモンガキツドはコルト達を見送るとまた立ち上がって、別の部屋に移動する。

そこはかなり広い広間のような場所で、今は訓練所として使われていた。

訓練場の高くなっている場所にネフェルピトーが尻尾を揺らしながら座っており、じい〜つと下を見ていた。

下では複数の戦闘兵が、1人の人間の男と戦っていた。

男は傷だらけの上半身を晒し、白い長髪を靡かせながら戦闘兵達と戦っていた。

戦闘兵達では相手にならないようで、戦闘兵達はほぼ一撃で頭や身



体を砕かれて死体を散らしていった。

「あくあく。全然相手になつてないじゃないの」

「ンニヤ？ ああ、キッド。まあ、戦闘兵は念が使えないからねえ」

「あのお人形くんはどれくらいなんだい？」

「兵隊長ならまだ勝率高いけど、師団長は厳しいかな。さつきも負けちゃったし」

「それじゃあ、訓練相手としちゃ微妙だねえ。残念だけど」

「だねえ。どうやらボク有能力、他の人を操ると死んじやうみたいなんだよね。言葉とか話させることは出来るけど、解除したらもう駄目だった。あの子は最初から死んじやうってたから気づかなかったけど」

「あらら……やっぱり蘇生するのは簡単じゃないってことかねえ」

「だニヤア。修理するだけでも物凄く燃費悪いし」

「けど、人形でも念能力は使えるんだねえ」

「オーラはね。けど、ボクと戦った時に使ってた能力は出せなかったんだよねえ。残念」

ネフェルピトーがアモンガキッドの口癖を真似して肩を竦める。

アモンガキッドはその内容に頷いて、腕を組む。

「全部が上手くいくわきゃないってことだねえ。残念だけど」

「だニヤ」

「ピトっちの修理能力と人形兵が使えたなら、師団長以下全員を人形に出来て楽だったのにな」

サラリと物騒なことを言うアモンガキッド。

だが、ネフェルピトーは一切表情を変えないことなく、

「命じるだけじゃダメなの？」

「面倒なんだよねえ。いちいち細かく命令して、サボってないかとか確認して、消耗が出たらまた整えてってさ。人間が混ざってるから、隙あらば成り上がろうと虎視眈々だし。これ以上は下手に追い込むと逃げ出しかねない連中もいるしさ」

「ふうくん……。処分しようにも、それはそれで不満が出そうだねえ」

「そうなんだよなあ。ホント、残念なくらい厄介な連中だよ。中途半端に力があつて、中途半端に頭が回る奴らつて」

「まあまあ、王が産まれるまでの間だしさ」

「あのハンター達がいなけりや、そう考えれるんだけどねえ。はあく、面倒だねえ」

アモンガキツドはため息を吐いてその場に座り、人形の戦いを見学しながら体を休めるのだった。

アモンガキツドと別れたコルトとペギーは巢の中を移動していた。

「しかし……人間共に軍団長から逃げ切れるだけの力があるとはな」

「うむ……。アモンガキツド殿は我らが能力を持っても敵わないと言うが、やはり何も努力せぬのも問題であろう」

「とはいえ、俺達には能力の創り方のノウハウはない。アモンガキツド殿達を参考にするのも厳しそうだしな」

「個別の能力は個人個人の嗜好や感情、願望、そして系統が大きく関わっているようだからな。ネフェルピトー殿は特質系。他の軍団長殿達は知らぬが、全員特質系でも驚きはせんな」

「ああ」

コルトが頷くと、先の通路からテイルガとペギーと同じくらいの身長の見た目少女キメラアントが現れた。

黒のショートボブに半目、口元を黒いマスクで隠し、服装も黒い詰襟マントコートを羽織っている。唯一露出している足元はコルト同様鳥型タイプで、背中には真っ黒な翼が生えており、翼をマントコートに合わせるように重ねている。

「テイルガ？ 何をしていたんだ？」

「む？ コルトとペギーか。今しがたネフェルピトー殿の人形と訓練をしてきたところだ」

テイルガの言葉にコルトとペギーは訝しむ。

「お前が？ 確かにあの人形はそこそこ強いが、お前相手では訓練になるレベルじゃないはずだ」

「私の訓練ではない。あの人形のだ。ネフェルピトー殿もどれだけ人形を動かせて戦わせられるかを把握したかったようだ」

「なるほどな……」

「だが、やはりお前の言う通り、我ら師団長には勝てんようだな。兵隊長ならば、少し厳しいかもしれん。事実、ブラールは勝負がつかなかった。まあ、ブラールは近接戦闘が得意なタイプではないというものもあるが」

ティルガは隣に控えているブラールに顔を向ける。

ブラールはフクロウのキメラアントで、基本的にティルガの補佐・偵察任務を担当している。

無表情・無言が常で、普段はティルガの傍を絶対に離れない。それと音もなく飛ぶフクロウの特性もあつて、周囲からは『ティルガの背後霊』と呼ばれている。

ブラールの声は未だに他のティルガ隊の者達すらも知らない。どんな状況であろうとティルガとしか話さず、命令もティルガのしか聞かないほど何故かティルガを慕っている。

「そうか……」

「しかし、本当に今の作戦を継続で大丈夫なのか？ 聞いた話では、アモンガキッド殿は例の敵を倒せなかったのだろうか？」

「うむ……。だが、少なからず手傷を負わせたようだ。故に今ならば、敵の邪魔も少ないだろうと結論が出た」

「この数日が勝負だそうだ。次は人間共も更なる戦力を連れて来ると考えている」

「……まあ、そうであろうな。人間は我らよりも圧倒的に多い。我らより強い者などいくらでもいるだろう。今の我らは数を減らすだけというのものもあるが」

「うむ……。故に我らも念能力を向上させる必要があると話し合っていたところだ」

ティルガはペギーの言葉に、腕を組んで眉間に皺を寄せる。

「軍団長達からは話を聞けないのか？」

「アモンガキッド殿には、我らが覚えたところで勝てる可能性は低いと言われてな。フラコック達を1人で壊滅させ、アモンガキッド殿が仕留め損ねる相手だ。否定も出来なくてな」

「それにネフェルピトー殿とシャウアップ殿は今後外壁で警戒を強

め、アモンガキッド殿は体力の回復を図りながら我らの指揮を執る。今あの攻撃を防げるのは軍団長達だけなのも事実だ。兵達の訓練を兼任する余裕はないだろう」

「……はあ。確かに最優先は女王の守護と王の誕生ではあるが……餌の調達に外へ出る我らが弱いままで、死んでもしょうがないと考えられるのもな。今はあの攻撃の直後だ。ほとんどの兵達は、アモンガキッド殿の方針や作戦に大人しく従うだろう。だが、数日もすれば確実に不満が噴出するぞ？ フラコック達がやられた時も、部下達からは不安の声がかなり噴出していた。明日以降もやられる隊がまだ出れば、下手すれば脱走兵が出かねん」

「それは承知しておるが、先ほども言ったようにこの数日で集められるだけ餌を集めねばならん。その量次第では籠城も考えておるそう  
だ」

「……全く安心出来ないな」

ティルガは盛大に顔を顰める。その隣でブラールはずっと無表情で黙っていた。

籠城したらしたで、ハギヤやザザンなどはかなりストレスが溜まるはずだ。

今の段階でもかなり我慢している様子が見られている。

まだ師団長故の理性で抑え込んでいるが、兵隊長や戦闘兵など理性が弱い兵達は堂々と不満を口にして、それを師団長に言う。

その不満を抑え込むのも、ハギヤ達からすればかなりのストレスだろう。

正直、いつ師団長からも脱走兵が出てもおかしくはないとティルガは思っていた。

人間の個性を持ってしまったが故に、女王や王への忠誠心が個々で大きく差が出来てしまったのだ。

コルトも眉間に皺を寄せて小さく頷くも、

「だが、今の俺達の戦力ではこれが最善だ。耐えるか、自力で強くなるしかない」

「結局そうなるか……。分かった。今はやるべきことをやろう」

「頼む」

そして、コルトとペギーは他の準備のために去っていく。

その後ろ姿を見送ったティルガは小さくため息を吐く。

「今はそれでいいだろうがな……。果たして、王が産まれた後もそう言えるのか……」

「……」

「……そうだな。確実にハギヤとザザンは王が産まれた直後に巣を出るか、女王を殺すのどちらかだ。女王は確実に我らより弱く、護衛軍も王が産まれたら我らとは別の軍になると明言した。ハギヤ達は解放感に浮かれて、我欲に忠実に従うだろうな。そして、少なくとも兵がその動きに乗るだろう」

コルトとペギーはまだどこかでハギヤ達が女王のために最後まで働くと思いついでいる。

だが、それはキメラアントとしては当然の思考である。

兵隊蟻が女王に叛逆するなどありえない。

しかし、それは普通のキメラアントであれば、の話だった。

「我らは高度な思考能力を手に入れてしまった。それで人間と同じことが、それ以上のことが出来ると知ってしまった。人間でもそれぞれ国を持っているのだから、我らでも国を持つと理解できてしまった。ならば、女王が邪魔だと思ふのは自然だな」

「……」

「我にその気はないさ。国など造っても、今と同じ状況になるに決まっている。だが、ここに残っても先はない。王と護衛軍がいなくなったこの巢に、ハンター達を倒せる者など残らん。確実に潰されるさ」

「……」

「……無駄だ。コルト達に伝えたところで、ハギヤ達は止められん。むしろ、それが叛乱の引き金になるだろう。だが軍団長に頼ったところで、いなくなる連中の言うことなど本気で従うわけもない。そして、女王は力も知識も無力に過ぎる。ハギヤ達を抑え込めるほどの案など今更出せはしない。……我らの未来は決まっているようなもの

だ。……コルト達を死なすのは惜しいと思うが、我にその力はない。己とお前だけで精一杯さ」

「……」

「そう遠くはないだろう。王が産まれた時か、ハンター達が巢を潰しに来た時か……だ」

ブラールは黙り込んだままテレパシーで、ティルガの話に答えていた。

ティルガにとっては、それが当たり前なので今更ツツコむこともめんどくさがることもない。

ティルガは【練】を発動して、右手に【凝】をしてオーラを集める。

「……我は強化系。下手な能力を無理に考える必要はない。あの人形との訓練で、戦闘時のオーラの流し方のコツは掴んだ。後は経験を積むだけ。……もつとも、その経験が積みにくいのだがな。戦闘兵や兵隊長では相手にならん。師団長ならばいい訓練相手になるだろうが……そもそも他の者達に我の戦い方を見せたくない。お前の能力もな」

「……」

「他の師団長達にも能力を考え、すでに創っている者もいるはずだ。特に外に出たがっている奴らは。だが、誰も言わない。つまり、すでにハギヤ達は他の師団長達すらも敵視しているということ」

「……」

「すでにこの巢も敵だらけ、というわけだな。アモンガキツドのあの能力は、どう言い繕おうが信頼など出来るわけがない。常に監視されていると思ってしまう、しかも野心を指摘された以上、ハギヤ達がそう易々と自分の能力をバラすわけではない。虎視眈々と寝首を搔く方法を探っているだろう」

「……」

「もちろん、護衛軍が気付いていないわけがない。だが、それでも構わないと考える程度にしか我らのことを思っていない。つまり、奴らにとって我らは仲間でも部下でもなく、ただの駒……いや、人形に過ぎないのだろうさ。だが、それはハギヤ達も同じだろう。女王や護衛軍

達の裏をかくつもりでいる」

「……」

「そうだな……。誰もが人形遣いになろうとして、他の誰かに人形のように掌の上で踊らされているようだ。そして、それは我らにも言えること……」

ティルガは目を瞑って、湧き上がってくる感情を必死に抑え込む。それにブラールはティルガに歩み寄って、コツンと額をティルガの身体に押し当てる。

「……」

ティルガはブラールの行動とテレパシーに微笑みを浮かべる。

「……ああ。もう、大丈夫だ。……女王に喰われた人間の記憶など……何故引き継いでいるのだろうか。それが我らが人間の特性を得た代償なのだとしたら……我は、誰を恨めばいいのだろうか？」

女王はティルガ達の母とも言える存在だ。もちろん、兵隊蟻は正確には女王と親子関係はないのだが、それでもティルガ達を産んだのは間違いなく女王のおかげだ。

人間の記憶を引き継いだのは女王が意図したものではない。だからキメラアントとして産まれた己が、女王を恨むのはおかしな話だ。では、喰われた人間を恨む？

力もない人間がキメラアントに襲われて喰われたことは、キメラアントになったからこそ、どうしようもなかったことだと理解できてしまう。そして、その者が喰われたから今の自分がいる。だから、記憶の元である人間を恨むのも何かが違う。

キメラアントに襲われ、喰われた時の記憶の衝撃は大きかった。それを『己』と捉えるのか。『ただの情報』と捉えるのか。ティルガはその境界で揺れていた。

間違いなく、人間の記憶はティルガの性格や思考に大きな影響を与えている。故に『ただの情報』と切って捨てるのは難しい。

しかし、自分は間違いなくキメラアントだ。人間には戻れない。故に『己』と断ずるのも難しい。

だからこそ、女王に殺され、女王によって産まれたという矛盾に

ティルガの『心』は揺れていた。

「女王への最低限の義理と義務は果たす。王が産まれるまでは」

そこで一度区切りとして、自分の在り方を考える。

ティルガはそう決めて、ブラールはそれに付いて行くことを決めている。

「人にはなれず、キメラアントにもなりきれない我は……何になれるのだろうか」

そう呟いて、ティルガはブラールを引き連れて歩き出す。

少しでも生き残る術を増やすために。

同じ頃、ハギヤのテリトリーにて。

「……ふん。あれだけ威張ってたわりに、結局人間に逃げられるたあ無様なこった」

ソファにふんぞり返って、コルトからの伝令からアモンガキツドの失態に気づいて、鼻で笑う。

もちろん、それがただの強がりであることも理解しているが。

「ねえ、ハギヤさま。もうここにいるのもヤバくないですか？」

後ろに控えていたハギヤ隊の兵隊長にして側近の1人であるウサギ型で雌のキメラアント、ヒリンがソファの背もたれに顎を乗せて言う。

その隣に立っているトンボ型のキメラアント、フラツタも小さく頷いている。

「もうちよつと我慢しろ。確かに気に入らねえが、今逃げてもコルト達に追われるか、あの軍団長のバケモノに喰われるか、ハンターに襲われるかのどれかだろうからな」

「では？」

「次に軍団長とハンターがぶつかった時が勝負だ。軍団長はハンターの排除と女王を守るのに集中する。女王主義のコルト達もな。そんな中、師団長と兵隊長数人がいなくなったところで、搜索に手を割く余裕はねえだろ。たとえ俺達が逃げ出さずって予想出来ててもな」

ニヤリと笑みを浮かべるハギヤ。



それにフラツタとヒリンも笑みを浮かべる。

そこに、

「相変わらず、悪だくみが上手いわねえ。ハギヤ」

「ザザンか」

ザザンが腕を組んで顔を出す。

「悪だくみとはひでえな。俺は大真面目だぜ？ 種の生存本能に従つてるだけさ」

「よく言うわね。王になる気満々じゃない」

「そりやあ王にならなきや繁殖できねえからな。せつかく巢を出たのに、また他の誰かの下に就くとか冗談じゃねえ」

「ま、確かにね」

ザザンは色々とぶつちやけるハギヤの言葉に肩を竦める。

咎めないのはザザンも同じことをする気満々だからだ。

「別に協力し合おうとまでは言わないわ。けど、お互いの邪魔はしないっていうことくらいは言わせてもらおうよ」

「しねえよ。それなら、まだ軍団長達の邪魔をする方に力を入れるぜ」

「ならいいわ。ま、その前に死なないようにね」

ザザンはそう言って、去っていく。

その後ろ姿を見送ったハギヤは、

「はっ。そつちこそ、ハマして俺を巻き込むんじゃねえぞ？」

「信用できるでしょうか？」

「出来るかよ。今のは『妨害は早い者勝ちで恨みつこなし』ってことだ。どいつもこいつも命がけになるだろうからな。様子見に来たんだろうぜ」

他の者達のことなど気にしてる余裕は、もうハギヤやザザンにはない。

生き残るためには命以外の全てを捨てる覚悟をしなければならぬ。

それだけの恐怖と覚悟を、アモンガキッドはハギヤに与えたのだ。

「出来れば念能力もどうにかしてえが……流石に俺は師団長の中でも特に要注意扱いだろうからな。下手に目立つことは出来ねえ」

「軍団長とハンター共が相討ちになればいいですけどねえ」

「それが最高だが、そこまでは期待してねえよ。せめて軍団長の1人2人は倒してほしいところだが、それすらも過剰な期待って奴だ」

自分では考えられないような攻撃を、軍団長は簡単に防いで追撃まで行った。

その事実をハギヤは甘く見ていなかった。

「俺達だって念能力を鍛えれば、あれだけの威力の攻撃が出来る可能性があるってことだ。問題はその方法だな。軍団長は俺達の叛乱を恐れて、能力を教える気はなさそうだしな……。他の師団長が知るわけねえだろうし」

どうにかして念能力の知識が欲しい。

しかし、その伝手はこの巢の中ではゼロだ。

やはりどうにかして抜け出すしかないという結論になるのだった。

「このまま使い捨ての駒で終わる気はねえ……！ 俺は、王に返り咲く……！」

故に今は牙を隠して身を潜め、力を蓄える。

再び己の爪と牙を、世界の中心にするために。

## #100 オノオノ×ニ×チカラヲ

アモンガキツドと戦った翌日。

ラミナはノヴの能力で、ロカリオ共和国の【クウエン市】のホテルに移動していた。

そして、手当を終えたラミナは、

ガツガツガツ!!

ズルルルルウ!!

ガジユブチチイ!!

ガチャガチャ!!

ゴッ! ゴッ! ゴッ!

タンクトップ短パン姿でホテルの部屋にて、物凄い勢いで大量の料理を掻き込んでいた。

ルームサービスで運ばれてきた料理はあっという間に消えていき、テーブルどころか、床にすらも大小様々な皿が物凄い勢いで重ねられていく。

ノヴから『対応を頼む』と頼まれてしまったスタッフ達は、顔を引きつかせながらバケツリレーの如く料理の乗った皿と空になった皿を際限なく運び込んで、運び出していく。

すでにホテルの厨房はラミナに出すための調理で手一杯となっており、他の客はホテル内での食事が不可能になってしまっていた。

本来ならそんなことは断るホテル側だが、ハンター協会会長の伝手ということと代金は言い値払い一括で払うと言われているため、領いてしまったのが運の尽きだった。

何が恐ろしいかというところ、すでに楽に40人前は食べているのに腹が膨れる様子が一切ないということだ。

ほとんど噛まずに、流し込んでいるに等しいというのに。

バラエティ番組でやっている大食い早食い選手権でも余裕で優勝できると、スタッフ達は考えて現実逃避をしていた。

ガシャン!!

「プハー!」

空になった井と箸を乱暴に置いて、ラミナは大きく息を吐く。

それにスタッフ達がホッと一息つき、厨房にもう調理はいいと連絡する。

体力と傷の回復のためと、そしてまたNGLに行けばまともに飯など食べてる場合ではなくなるのでその食い溜め。

十分な栄養摂取を終えたラミナは布で汚れた口元拭って、立ち上がって身体を伸ばす。

その間に、また注文されてはたまらないスタッフ達が物凄い速さで皿を回収して部屋を後にした。

その様子を気に留めることもなく、ラミナは体の調子を確認していた。

(……明日にはほぼ完治やな。体はこれでええやろうけど……)

問題は護衛軍をどう倒すかだ。

〔天を衝く一角獣〕を防ぐのに軍団長2匹、うちを追撃するんに1匹。けど、〔円〕が消えたのは1分足らずやったらしいから……。つまり、

〔円〕を使うとるんはあの猫みたいな奴で、念獣が蛇蟻つちゆうことか。あの一瞬でも、女王から離れたんやから、もう1匹は軍団長がおると考えるべきやな)

最低3匹いる軍団長。

それで打ち止めなのか、まだいるのか。

これだけで大きく討伐の成功率が変わる。

(ぶっちゃけ……女王だけ殺せても、あの軍団長をほったらかしに出来んやろうなあ。ジンの話では、確か女王が死んだら兵隊蟻も生殖能力を持つらしいし)

つまり、下手したら軍団長3匹がバラバラに世界に散る可能性がある。

今の女王蟻よりよっぽど厄介な巢が最低3つ出来る可能性があるとなると、世界は間違いなく大混乱だ。

しかも、ここからならヨルビアン大陸に最も被害が出る。

そうなれば間違いなく流星街やラミナの隠れ家も巻き込まれるだろう。

「はあ……結局尻拭いでクロロやマチ姉達に動かされそうやな。ハンター協会も変なこと言うて来そうやし」

流星にここまで関わって、王が産まれてキメラアント達が散り散りになったからといって『依頼失敗で終了。さいなら』と言える心情にはならない。

それが理想なのはわかっているが、それでも流星街にキメラアントが現れば、ラミナの責任にされかねない。

ハンター証を持っている以上、ハンター協会は『ラミナはハンターとして行動した』と判断して難癖をつけてくる可能性もある。

ネテロが庇おうとしても、今の状況を考えれば失敗したことを責められて発言力は地に落ちるだろう。

もちろんハンター協会にも責任はあるが、どう考えても国の上層部などはネテロ達実行部隊に全ての責任を押し付けることを後押しするに違いない。

なので、結局ラミナが面倒事に巻き込まれるのは間違いない。

それが幻影旅団の仕事に影響が出れば、その尻拭いもラミナがしなければならぬ。

ラミナも自分の責任もあると分かっているので、尻拭いに動くだろう。

結局失敗した場合、ラミナが地獄を見るのはもう決定事項なのだ。

ここで女王と軍団長を殺さない限り、ラミナに平穩はない。

怖い姉に首に念糸を巻かれて、犬のように働かされるに決まっている。

「はあ……」

ラミナはため息を吐いて、服を着替える。

ノヴは明日の朝に迎えに来る予定なので、それまでは自由行動となった。

(キルア達は隣のドーリ市か……。大真面目にやっとれば、そろそろ決着つくと思うんやけど。キルアは悪癖さえクリア出来とったら、ナツクルはともかくシユート辺りには勝てると思うけど、ゴンは厳しいやろうなあ。順当で行けばナツクルとキルア。ただ、キルアがゴン

を置いて行く気はないやろうから、結局ナツクルとシュートがNGLに来るか？ まあ、その前にナツクルがゴン達のことを気に入ったら、話は別やけど)

ナツクルがいつ全力で戦うかが大きな分かれ目だろうとラミナは考える。

ナツクルの能力【天上不知唯我独損】は、時間切れになると相手を一か月間【絶】状態にする能力だった。

ラミナと戦った時より実力は上がっていると推測すると、ゴンはほぼ確実に勝てない。

キルアは【発】次第だが、五分五分と言ったところだろう。

では、ゴンとシュートの組み合わせはどうかと言うと、やはりゴンが厳しいだろう。

確かにゴンの成長率と潜在能力は凄まじい。だが、それでもシュートの経験と実力に勝るほどではない。

ナツクルよりはいい勝負をするだろうが、倒す前にシュートの能力で決着がつくだろう。

つまりゴンがNGLに来る可能性は、奇跡と呼べるほどの確率しかない。

(まあ、ゴンがジンの弟子のことを話したら、ナツクルは絆される可能性はあるやろうけど)

その場合、期限ギリギリまでゴンとの組み手に付き合う可能性はある。

というか、ほぼ確実にそうなってるはずだ。

カイトの事を話す必要もなく、ナツクルならばゴンのひた向きさに絆される。そして、キルアはそれに合わせるはず。

ならば、ゴン達は期限ギリギリまで決着がつかないと考えるべきだ。

「まあ……はよ来られても殺す殺さんで面倒な問答になるやろうからな。それならそれでええか」

それに実力的に軍団長の相手はさせられない。

死なれたらジンやゾルディック家一同にまた面倒なことを言われ

それで、ラミナも集中できない気がするので来てほしくないのが本音である。

ラミナは街に出て、散歩がてら武器屋を回る。手持ちではアモンガキッドのピット器官に対応できる能力を持つ武器がないからだ。

唯一可能性があるのが【天を衝く一角獣】だ。しかし、一度見せてしまった武器が通じる程甘くはないだろう。なので、新しい能力を付与できる武器が見つけたいと思っていた。街の路地裏にある武器屋に足を進める。

最初の店に入って、品を見渡すが特にオーラを纏う武器はなかった。

次の店に向かい、薄暗い店の中に入る。

「ん？」

すると、壁に建て掛けられている偃月刀が目に入る。

偃月刀は間違いないくオーラを纏っていた。

オーラの量を確認して、十分能力が付与できると確信したので、偃月刀を買う。

他の店も全部回り、いくつかオーラ持ちの武器を購入する。

一度ホテルに戻って、早速【刃で溢れる宝物庫】に武器を納めて能力を付与していく。

その後はまたホテルを出て、食事に向かう。

そこでも大食いを発揮して店員と周囲を驚かせるが、ラミナは気にすることなく満足するまで腹を満たす。

再びホテルに戻って、休む準備をしながら携帯でメールを打つ。

「……ま、一応保険は用意しておくべきか。アルケイデスは携帯持つとらんから、うちじや連絡しようがないし……」

メールを送り終え、寝る準備をしていると電話が鳴った。

「誰や？」

『ふはははは！ 久しぶりではないか！ 刃花の紅玉』【セクメト】

よ！」

電話に出た直後、高笑いとは独特な呼称で呼ぶ声が響く。

ラミナは呆れながら、

「ええ加減その厨二臭い呼び名やめろや、【シーフ】」

『そちらこそいい加減に憶え給え！ 私は『不止ふしの暗艦』【アーク】だとな!!』

「盗賊兼運び屋のお前にそんな大層な名前つけるかい」

『相変わらず辛辣だな！ それにしても随分と噂になっっているぞ？』

『両儀の蜘蛛』の一足となって大暴れしているとなー!』

「まあな。んで、電話してきたんはさっきのメールのことやんな？」

『そうだ！ 時期も不明、場所もバルサ諸島近辺と非常に曖昧だったのではなー!』

「今、厄介事に巻き込まれとってな。もしかしたら、お前の移動能力が必要になるかもしれないと思っとなるんよ」

『……ふむ。それはアレか？ ハンター協会会長……『修羅たくせんの謫仙』【バアル】がNGLにいたること関係しているのか?』

「やから、分かりにくいっちゅうねん。まあ、それやねんけど（相変わらず情報収集能力とかは凄いのには、絡み辛いやっちゃな）」

油断出来ないほどに能力が高いのに、厨二病チックな呼称や口調が妙に調子を狂わせるのだ。

『つまり、『修羅の謫仙』や其方が殺し損ねる何かがある? 【裏のNGL】の王『餓虎の影主』と連絡が取れなくなったことと関係があるのかね?』

「あるある。そいつら壊滅したで。下手したらNGLそのものが壊滅するかもしれない」

『……『万慾の坩堝』サザンピースで見つかった異常な大きさの昆虫と思われる足と関係あるのかね?』

「ホンマに流石やな。大当たり。人間サイズのカメラアントや。それがNGLで暴れとる。人間を喰うてな」

『……なるほどな。いいだろう。一月ほど近辺で警戒しておこうではないか』

「助かるわ。んで、今【チャリオット】にも連絡しとるんよ」

『ほう！ 『金剛傀儡』【ゴーレム】か！ いいだろう！ 彼の者と協



力すればよいのだな!』

「向こうがオツケー出せばな」

『私からも連絡してやろう! 報酬は如何程だ!』

「相手次第やな。まあ、とりあえず参加だけで3億。その後に殺した相手で増額でどうや?」

『いいだろう! では、縁があればそちらで会おう! ふはははは!』

高笑いして通話が切れる。

それにラミナが小さくため息を吐いて、

「あいつの情報収集能力は怖いところがあるでなあ。あんまり関わると、うちの隠れ家もバレそうなんやけど……。背に腹は代えられんかなあ」

基本単独で活動している盗賊兼運び屋だけあって、情報収集能力と移動能力が非常に高いのが「シーフ」の売りである。

しかし、それ故に下手に仕事を依頼すると見せたくない腹の中までいつの間にか見られるので、非常に扱い辛い存在でもある。

依頼が終わったら、その情報を元に逆に盗みに入られることもあるので、要注意人物なのだ。

今回は拠点などは一切関係ないので、探られて困る腹はないから問題ないが。

「まあ、これでもしNGLから逃げ出した奴が出たら、すぐに追えるようになるやろ」

ラミナは自分が出来る備えをして、戦力を集めるのであった。

ドーリ市。

今夜もゴンとナツクルは勝負を始めていた。

しかしラミナの読み通り、ゴンは積極的にナツクルへと攻めかかるが、簡単にあしらわれていた。

ゴンがナツクルに殴りかかるが、ナツクルは軽やかに躲してゴンの横に回り込んで殴り返す。

「オラア!!」

「ぐうっ!」

ゴンは真横に吹き飛んで、地面を滑りながら体勢を立て直す。  
ナツクルは追撃せずに肩を回しながら歩み寄っていく。

「相変わらず軽いなオイ！」

「くっ……！」（一撃一撃が本当に重い……！）

「あの女はオメエに戦い方までは教えなかったようだなあコラ。オメエは俺より小せえし、体重も軽い!! 確かに人間の急所は上半身に集まっているが、そこを狙ってくると分かっつてりゃあ、カウンターでオメエは攻撃に耐え切れずに簡単に吹き飛んで、ダメージを受け流すことも出来ねえ!!」

ビシイ!!とゴンを指差しながら指摘するナツクル。

その指摘に、ゴンとキルアは天空闘技場でヒソカ戦の後にラミナに叱られたことを思い出した。

（うっ……。そういえば……。飛び跳ねすぎって言われてたっけ）

（ああ……。ヒソカの時にスゲエ頂垂れてたっけ。やべ……。俺もすっかり忘れてた）

天空闘技場でのヒソカ戦以降、実はゴンが本格的な戦闘をしたのはゲンスルー戦だけだったりする。

その時はビスケもキルアも、ゴンの戦いは見ていないため、その弱点に気づかなかった。

さらに付け加えれば、ビスケもキルアもゴンと身長も体重も変わらないため、2人との組み手では身長差と体重差の弊害が出なかったのだ。

ゴンはゲンスルーとの戦いでも、序盤は何度も吹き飛ばされたことを思い出した。

「オメエの【堅】はスゲエ。それは疑う気もねえし、素直に尊敬する。身体能力も、思い切りの良さもな。だが、オメエの身体は年相応!!」

今のオメエはそのオーラ量と強化系の特性、そして天性の直感で俺の攻撃を耐えられているだけにすぎねえ!!」

「ぐっ……！」

「そこから更に強くなるために必須なのは『経験』！ 確かに死線も何度か乗り越えてんだろうが、それでも念での戦いはまだまだ足りて

ねえのが丸わかりだコラア!!」

「……そんなのは分かっている」

ゴンは再び構えて、まっすぐにナツクルを見据える。

「だから、今戦ってるんだ!!」

そう叫んで、ナツクルへと駆け出す。

ナツクルはそれに不敵な笑みを浮かべて迎え撃つ。

ゴンが殴りかかるが、ナツクルは半身になって躲しながらアツパー気味に拳を繰り出して、ゴンの腹部に叩き込む。

ゴンは両脚で踏ん張って滑り下がり、すぐに飛び出そうとしたが、ナツクルの前蹴りが飛んできて両腕を交えて防ぐも、また後ろに滑る。

その時、ナツクルの姿が消える。

ゴンは背後かと目を後ろに向けようとしたが、

「こっちだボケェ!!」

左から声と同時に拳が飛んできて、ゴンの左脇腹に突き刺さる。

「がはっ……!?!」

「ゴン!!」

「ぐう……!!」

数回地面を転がったゴンは跳び起きて、右手で左脇腹を押さえて軽く咳き込む。

ナツクルは腕を組んで仁王立ちをして、余裕綽々で待ち構える姿勢を見せる。

「言つとくが、あの女は本気の俺より少し速えし拳も重えぞコラ。それにあの女の攻撃は武器が主体だ。生身で防ぐことなんざ、まず不可能。今のオメエじゃ10秒も保たねえ」

(なんだかんだで、ラミナを褒めるんだな。まあ、俺達の師匠だからつてのもあるんだろうけど。実力は認めてるって言ってたし)

キルアは僅かに呆れながらも、ナツクルの言葉は自分にも当てはまることには気づいていた。

確かに今のゴンはどんどん成長しているが、それはあくまで『ナツクルに対して』の成長だ。

もちろん、この成長は他の相手にも通用するものに昇華するだろうが、ラミナのように具現化した武器を使ったり、ゴレイヌやレイザーのように念獣を使う相手に対する戦闘経験はゼロだ。

(キメラアントはまだそんな能力を使う奴は少ないだろうけど……。元々の能力が全体的に高いから油断は出来ない。カイトを襲ったアイツが師団長かそれより上かどうかも分からない。確かに攻撃を受けた時点で、致命傷になりかねない……)

そう考えていると、

「最初はグー……！」

ゴンが腰を据えて拳を構える。

しかし、ナツクルが一瞬で距離を詰めて、ゴンの顎を蹴り上げて発動を防ぐ。

「——!!」

ゴンは声も出せずに仰向けに倒れる。

「……ここまでだな」

ナツクルはそう言つて、キルアに顔を向ける。

「オメエはどうすんだ？ コラ。ずうつとゴンばつかじゃねえか」

「……言つただろ？ 割符は2枚いるし、真つ向勝負で勝ちたいんだつてさ。あんたがゴンの相手をするなら、俺の相手はシュートつてことだよ。……ずつとこつちを探つてるだけで出てこないけどさ」

キルアは公園奥の森に目を向ける。

ナツクルも顔を向けて、そこにシュートが潜んでいることに気づいた。

「ちっ！ あいつはビビりでな。行けるつて確信が持てねえと動けねえんだよ。情けねえ！」

「……じゃあ、伝えといてよ。明日にでも一度戦おうつてさ。別に本番でもいいけど」

「……」

「あ、でもーつ言つとくぜ」

「あ？」

「もし俺が勝つても、ゴンがNGLに行けないなら俺も行かない」

「ああん!? 馬鹿にしてんのかコリア!!」

「馬鹿にしてるつもりなんてないよ。俺はNGLに行くなら、ゴンと一緒にだって決めてるだけさ」

キルアは覚悟を決めた瞳で、ナツクルを見据える。

それにナツクルは只ならぬ覚悟を感じて、それ以上言葉を紡げなかった。

キルアはカイトを置いて逃げた負い目がある。

その負い目を前向きにしてくれたのが、他ならぬゴンだ。

だから、カイトを助けに行くならば、絶対にゴンが隣にいるべきだと思っっているのだ。

(それに……もしゴンが行けなかった時、今度は俺が元気づけてやりたい)

キルアだけNGLに行っても、絶対にゴンのことが気になって集中出来ない。

それこそ邪魔になると考えてもいる。

「だから、期限ギリギリまで戦わなくてもいいよ。ゴンはその間に経験を積めるし。俺は最悪ビスケにでも頼むから」

キルアは体力切れで起き上がれないゴンに肩を貸して、起き上がらせる。

「いつ、決着をつけるかはそっちが決めてくれていいよ。俺達はいつでも本気で戦えるようにしてるからさ」

そう言っつて、公園を去っていくキルアとゴン。

その背中を見送ったナツクルは、舌打ちしてポケットに両手を突っ込む。

そこにシユートが顔を出す。

「……どうするんだ?」

「あ?」

「お前が本気を出すということは、ゴンは高確率で念が使えなくなる。そうなれば、キルアは無条件で俺に割符を渡してくる。流石にそれは

モラウさんも認めてくれないだろう」

「だろうな」

「だが俺とキルアが先に戦って、もしキルアが勝った場合、それでもゴンが負ければキルアは俺に割符を渡すだろう」

「わあってるつつってんだろおコラア!! だったら、テメエが勝てばいいだけの話だろうがボケェ!!」

「もちろん、そのつもりで戦うさ。だから聞いてるんだ。いつにするんだと。期限に合わせて、ギリギリで本番にするのか。明日決着をつけて、その内容次第で……全員でNGLに行けるようにネテロ会長達に頼むか、だ」

「……それは……」

「ああ。それは高確率で呆れられて、全員行けない可能性もある。それに、その案をあの2人が受け入れるかどうかも分からない」

「……」

「……会長が俺達にこの試練を課したのは、『あの2人を蹴落としてでも来る覚悟が出来るかどうか』を見極めるためだ。お前は相手に感情移入しすぎて、俺は危険や好機に尻込みしてしまう。今回はそれでは足手まといになってしまふ可能性が高い奴らと戦うんだ」

「だから、わあってる!!」

「だが、お前は今ゴンを倒すことに気後れしているだろう。ゴンがNGLに行く理由を聞いて」

「っ!!」

シュートの言う通り、ナツクルはゴン達と会った日に色々あつて共に食事をとって話をする機会があった。

そこでナツクルが今回の戦いに志願した理由も話し、ゴン達が志願した理由も聞いた。

だから、ナツクルはゴン達の修行に付き合っている。

そして、その意志の強さからゴン達も連れて行くべきだと思つてしまつている。

しかし、それでは条件達成にはならない。

ネテロやモラウを納得させる材料が示せないのだ。

モラウはともかく、ネテロは認めないだろう。それでは今ここで戦わせてる意味がないのだから。

故に『全員で行く』という結果はありえない。

「……やるなら対等だオラ」

だからナツクルが一番納得出来る方法は、ただ1つ。

「決着は期限最終日！ この期限内で成長しきったゴンと決着をつける！」

モラウには呆れられるだろうが、やはり自分の道は変えられない。それでも、仲間を助けたいと言うゴンを倒す、という覚悟は決めた。これだけでも、ナツクルは十分すぎるほどに甘さを捨てたつもりでいた。

もし、ここにラミナがいたら、モラウ以上に呆れていただろうが。

ということ、ラミナの予測通り、ゴン達は期限ギリギリまで戦うことに決めたのだった。

## #101 ヨユウ×ハ×モテナイ

ラミナは再びNGLにやってきていた。

念空間でネテロ、ノヴ、モラウと円座を組んで経過を聞いていた。「あれから農らで2隊ほど潰したんじやが、どうやら籠城の備えを始めておるようじやの。先日よりも多くの部隊が出立して、かなりの集落が襲われた」

「しかも俺の煙を目にした瞬間、即時撤退。外から仲間を助ける気配もねえ。探ろうとする様子はあるが、かなりの距離を取ってやがる」  
「モラウの煙はあの護衛軍から逃げる時に、一度囲まれたら逃げられんことがバレてしもうたからな。んで、連中の動きはうちの復帰と増援が来るんを見越して、か」

「恐らくな」

「うちが姿を見せれば牽制になるか？」

「多少の効果はあるとは思うが……。増援を確認せぬ限り、人間を襲うペースを下げる可能性は低いじやろうの」

「やんな……。けど、増援は来んのやろ？」

「……まあ、弟子達を除けば、あと半月は来ぬじやろうな」

「はあ……。あゝ……。またそつちとうちで二手に分かれて、隊を1日約2、3隊潰したとして……」

「確認された隊の数が全てだと仮定すれば、隊を潰し切るまでおよそ8〜10日、と言ったところでしよう。護衛軍を除いた巢の防衛戦力が常にいることも想定すれば、10〜12日……。その間に調達するであろう人体の数から考えれば、籠城すれば1〜2週間ほどで補給が必要になるかと」

ノヴの予測に、ラミナとモラウは盛大に顔を顰める。

「今のペースで行きやあナツクル達の決着予定日直前で籠城に入るか……」

「まあ、増援が来るんやったらええ時間稼ぎにもなるわな。その間に王が産まれる可能性もあるけどな。それに、護衛軍相手にナツクル達が役に立つんかも怪しいところやな」



「確かにあいつの甘っちょろいところは最大の不安要素だが、ナツクルの能力はかなり有効だと思うがな」

「あいつの能力って結構時間かかるんやろ？ 相手を【絶】にするまで」

「まあな。相手のオーラ総量で時間は変わる」

「……あいつらのオーラが尽きるまで耐えられるんかあ？ 別に時間が来るまでは能力もオーラも使えるんやろ？ しかも、あの手の能力って術者もそれなりに制限あるやろうし」

「ああ、ナツクルから離れ過ぎるとカウントが止まっちゃう。だが、オーラを消費させれば、それだけタイムリミットも早まりはするぜ」  
「……あいつらと下手したら数十分戦い続けるとか、うちはもう勘弁やぞ……」

ラミナは全力で顔を顰める。

護衛軍1匹に総出でかかるならばまだいいが、そんな上手い事行くわけないので間違いなくナツクルを守る役は1, 2人だろう。

数分程度ならばラミナでも余裕を持って対応できるが、十分以上となれば間違いなく命がけだ。

ナツクルを守りながら、護衛軍と戦えなど苦行に過ぎる。

そこでラミナは「シーフ」達の事を思い出して、ネテロに顔を向ける。

「ああ、そうや。もしもの後詰にうちの知り合い呼んだからな」

「ほお……」

「言つとくが、あくまで保険やからな？ キメラアントがNGLから逃げ出した場合の戦力やから、ここには呼べんぞ。一応うちの金から報酬出すつもりやからな。それに流石にここに呼ぶには向こうのメリットが少ないと思うわ」

「ふむ……確かにの」

「ちなみに、誰を呼んだんだ？ 団員か？」

「んなわけあるかい。賞金首仲間や。盗賊【シーフ】に殺し屋【チャリオット】。この2人やな」

ラミナが告げた名前にモラウとノヴは驚きを露にする。

モラウ達も【シーフ】達の事は知っていたからだ。

「【シーフ】って、アイツか？ 怪盗アルセフだろ？ 盗み成功率100%っていう」

アルセフは【シーフ】の本名である。

「それに【チャリオット】……。何十人も賞金首ハンターを返り討ちにしてる正体不明の殺し屋ですか……」

「そ。【チャリオット】やったら師団長程度問題なく殺せるやろうし、【シーフ】の足と情報収集能力で取り逃がす隙も少なくできるでな」「信用出来んのか？」

「【チャリオット】は途中で依頼を投げ出したり、裏切ることはまずない。それが売りの殺し屋やし。【シーフ】はキメラアントの情報や師団長当たりの死体1つでもやれば、満足するやろ。最悪、旅団が売ろうとしとるお宝でもやるわ。それに何度も言うたけど、あくまで保険や。もし女王を殺せたとしても、師団長達が逃げ出せばそこそこ被害が出るやろ。下手なハンターが来るくらいやったら、こっちの方が速いし確実やでな。それくらいはええやろ？」

「うむ」

ネテロは顎髭を撫でながら頷いた。

それにラミナも頷き返して、立ち上がる。

「ほな、仕事始めるわ」

そう言って、再びラミナ達は削りを始めるのだった。

ラミナはネテロ達と別れて、森の中を高速で移動する。

10分ほど走って崖の上に登ると、遠くに飛んでいるキメラアント達の姿を捉えた。

ラミナはその隊を標的に定めて、再び森に飛び込んで駆け出す。

ファルクスとレイピアを具現化して走り続け、気配を捉えた瞬間一気にスピードを上げる。

向こうもラミナの存在に気づいたようで、慌ただしく動き始めていた。

ラミナは【円】を全力で広げて、ファルクスを3回高速で振って【狂

い咲く紅薔薇」を発動した。

それで20近い気配が消えるが、それでもまだ動いてる気配を多数感じ取っていたラミナは、「円」を緩めずに一番近い気配の元へと向かう。

最初に見つけたのは上半身と下半身で分断され、右腕も斬り落とされているキメラアント。

頭部が無事だったためか、それでも動こうと藻掻いており、「啄木鳥の啄ばみ」で額に穴を空けて始末した。

次に見つけたのは、首だけになったカエル顔のキメラアント。首だけになっても、舌を伸ばして移動しようとしていた。

(やっぱ【狂い咲く紅薔薇】は動きを止める以上の効果はあんま望めんか……)

殺せても戦闘兵の中でも下級レベルのようだと推測し、小さくため息を吐くラミナ。

カエルキメラアントの頭を踏みつぶして殺し、他の体がバラバラになつてその場で藻掻いているキメラアント達を殺して回る。

ファルクスを消して、ブロードソードを具現化する。

その直後から戦闘兵と思われるキメラアント達が続々と押し付けてきた。

ラミナは【一瞬の鎌鼬】と【啄木鳥の啄ばみ】で次々と瞬殺していく。

(ふむ……逃げる様子はない? ……いや)

ラミナは離れていく複数の気配を察知した。

戦闘兵達は足止めのために捨て駒にされたのだ。

ラミナは舌打ちし、戦闘兵を無視して逃げ出した気配に向かって全力で駆け出す。

ブロードソードを消して、今度はスロージングナイフを具現化する。

数分もせずにキメラアント達の後ろ姿を視界に捉えたラミナは、目を限界まで見開いて障害物がない弾道を見極めて、全力でスロージングナイフを投擲した。

スローイングナイフはスナイパーライフルの弾丸のように高速で飛び、キメラアント達の間を縫う様に飛び抜けていく。

「はっ！ 外しやがった!!」

「馬鹿が!!」

パチン!!

嘲笑したキメラアント達の耳に、小さな音が聞こえた。

その直後、目の前を飛んでいたスローイングナイフが消え、後ろにいたはずのラミナが目の前に現れた。

『!!?』

「舐めんなや、虫けら共」

ラミナは【一瞬の鎌鼬】で間近にいたトカゲ顔のキメラアント、犬顔のキメラアント、イノシシ顔のキメラアントの顔が真ん中で上下に斬り分かれる。

残ったのは3匹。

キャップを被ったイタチ顔で、鋭い爪を持つヒップホッパー風の服装をしたキメラアント。

猿の頭部を持ち、スーツを着た細身の身体をしたキメラアント。

そして、蠅の頭に4本の腕を持つキメラアント。

3匹が顔を強張らせて、ラミナから跳び下がる。

「こ、こいつ……!!? 一体何しやがったんだY O……!!?」

「い、今のが念能力……?」

「じゃあ……いきなり他の奴がバラバラになったのはなんだよ……

!？」

(……フラコック達の方がまだマシやったな)

すでに戦意喪失しているように見えるキメラアント達に、ラミナは呆れた表情を浮かべる。

「ど、どうするのですか? ウィゼリス」

「軍団長に戦うなって命令されてんだろ?」

猿顔キメラアントと蠅顔キメラアントが、イタチ顔キメラアントのウィゼリスに顔を向ける。

ウィゼリスは一瞬顔を顰めるが、ラッパー風に両手を突き出して、

「逃げきれねえならファイトしかねえY O!! ゴートウ達にも連絡したからY O! あいつらならすぐに来てくれるZe!」

(やっぱ護衛軍に従つとる感じか。けど、縛り切れてもないみたいやな。力で無理矢理うちゆうことか……)

アモンガキツドの実力を考えれば、師団長でも束になったところで勝てはしないだろう。

しかも、あの念獣を考えれば、監視されているように感じてても仕方がない。

ラミナはそう考えながら、身構えて睨んできた猥顔キメラアントに一瞬で詰め寄る。

「なっ——!?!」

ブロードソードを振り上げて、目を見開いた猥顔キメラアントの鳩尾から頭頂まで両断する。

そして、そのブロードソードを蠅顔キメラアントに投げて、胸の中心に突き刺さる。

「がふっ?! ふん! この程度で俺が——!」

腕の一本で胸に刺さった剣を掴んで引き抜こうとしながら、ラミナに視線を戻すと、

靴底が視界を埋め尽くした。

「なっ?! ふばっ?!」

顔を仰け反らした瞬間に胸に刺さったブロードソードを消し、バルディッシュを具現化して勢いよく振り下ろし、頭から股下まで両断する。

「ケツ——」

素っ頓狂な声を出して死んだ蠅顔キメラアントを無視して、ラミナはバルディッシュを消してウイゼリスに飛び迫る。

爪を研ぎらせた右貫手を鋭く突き出して、ウイゼリスの顔を狙う。

しかし、ウイゼリスは大きく体を仰け反らしてラミナの貫手を躲し、右足を振り上げて反撃してきた。

「舐めんなY O!!」

ラミナは左手で蹴りを受け止めて、引き千切ろうと手に力を籠めた

瞬間、ウイゼリスは体を全力で捻って左膝蹴りを繰り出してきた。それをラミナは右手を素早く戻して受け止めた。

同時に両腕を全力で広げながら引き、ウイゼリスの左脚を根元から、右脚は膝下から引き千切った。

そして、【打蠍】で右脚を振り上げる。

「ギィアアアアビャー——!?!」

悲鳴を上げたウイゼリスの顎にラミナの足が鋭く、そして重く突き刺さり、ウイゼリスの顔を吹き飛ばす。

頭を失った胴体がドシヤリと地面に落ち、ラミナが距離を取って息を整えたその時、

突然、真横から猛スピードで迫る拳を視界の端に捉えた。

「!!」

ラミナは目を見開きながら全力で顔を仰け反らせる。

鼻先を何かが掠り、猛スピードで何かが通り過ぎていった。

ラミナは体を起こす勢いを利用しながら、後ろに跳び下がる。

「おわつ。今の躲すとかマジでやるじゃん!」

ヂートウは完璧と思った奇襲を躲されて、素直に驚いていた。

対して、ラミナはチーターの姿を持つヂートウを見て、眉間に皺を寄せる。

(チーターと混ざった蠍……! 今の速さはマズイ……!)

今のはヂートウの拳の軌道が甘かったから躲せたに過ぎない。

入り組んだ森であの速さならば、もっとスピードが上がる可能性があり、そうなれば流石にラミナでも追い切れない。

感じる気配の強さから師団長クラスと判断したラミナ。

「……護衛軍からうちの相手をせずに逃げる言われとるんちゃうか?」

「ん〜……まあ、そうなんだけどさ。正直、いい加減飽き飽きしてんだよね! あんた1人みたいだし、ここで倒せば怒られないっしょ」

「ふうん……。けど、その1人にお前の足元に転がっるとるお仲間はやられたんやけどな」

「ウイゼリスだろ? こいつって師団長でも平凡以下だったし。」

まあ、負けても大して驚かないね」

「……じゃあ、お前は師団長でどのへ——」

ラミナは尋ねようとした時、背中に寒気が走って反射的に横に跳んだ。

ラミナがいた場所を白い風が通り過ぎて、チートウの真横で止まる。

「あら……避けられてしまいましたわ」

「あははは！ 俺の攻撃も躲したんだから、俺より遅いお前じゃ、しようがないね！」

現れたのは全身白い雌型のキメラアント。

女性の顔に、地面スレスレまで伸びた真っ白のストレートヘア。そして、細い胴体と四肢を持つも、艶美さと優雅さを醸し出している。体つきは虫に近く、額からは長い触覚が生えていた。

「それにしても、チートウ様。師団長お一人で飛び出すのは勘弁してくださいまし」

「固いこと言うなよ、コローチエ」

「いいえ、言わせて頂きますわ。チートウ様に好き勝手動かれると……わたくし達の獲物が減ってしまいますもの。ねえ、ホイツパー」  
コローチエは優雅な仕草で髪を払いながら、チートウに文句を言いながら別の名前を告げる。

ラミナも背後から迫る風切り音に気づいており、また横に跳ぶ。

直後、真上から勢いよく何かが、ラミナがいた場所に墜落してきた。現れたのはバツタの顔をした筋肉質の体をし、腰にベルトを思わせる装飾を身に付けたキメラアント。

ホイツパーはゆっくりと立ち上がって、ビシィ！と親指を立てて己の顔を差す。

「俺!!」

そして、両腕と脚を広げて、再度ポーズを決めた。

「降臨!!」

「……」

いつかの特戦隊のノリを思い出して、顔を顰めるラミナ。

「蟻共にはヒーローもんでも流行つとるんか……?」

「さあ? 俺はコイツしか知らないけど?」

「この隊にはホイツパーだけですわね」

「……まあ、ええわ。んで、他にもまだ来るんか?」

「俺は知らないなあ。どうなつてんの?」

ヂートウは頭の後ろで手を組んで、 कोरोチェに顔を向ける。

कोरोチェは腕を組んで、

「わたくし達の隊は、すでに撤退命令を出していますわ。わたくしとホイツパーはお目付け役で来ましたが」

「他の連中は足が遅えからな! ヂートウに追いつけねえ連中が来たところで邪魔なだけだぜ」

その言葉にラミナは小さくため息を吐いて、腰に手を当てる。

「つまり……うちはお前ら程度でええと馬鹿にされとるわけやな?」

「あははは! まさか! 逆だよ逆! お前みたいに強そうな奴、他の奴に横取りされたくないだけさ!」

ヂートウは楽しそうに笑って言う。

その言葉に嘘はなく、本当にヂートウはただ楽しみを邪魔されたくないだけ。他の者では死ぬだけだと思っているのもあるが。

しかしラミナにとって、それこそが馬鹿にされている証だった。

もちろん、それはラミナが他の者にもやってしていることではあるが。

「護衛軍よりもザコのすばしっこいだけの虫けらが、調子に乗んなや」  
ラミナはブロードソードとフランベルジュを具現化して、ヂートウを睨みつける。

それにヂートウもニヤリと嗤い、構える。

「へえ……言ってくれるじゃん」

कोरोチェとホイツパーも構えて、飛び出そうと身を低くする。

直後、4つの影が同時に飛び出す。

【二瞬の鎌鼬】を発動して、高速の斬撃の嵐を繰り出す。

कोरोチェとホイツパーは直前で後ろに跳び下がり、ヂートウはラミナが誇る最速の斬撃を紙一重で躲して、鋭い拳をラミナの顔を狙って放つ。



ラミナも顔を傾けて紙一重、頬を掠めながら拳を躲す。フランベルジュを振り上げるが、チートウは僅かにラミナの腕が動いた瞬間に距離を取る。

(……速さはうちが完全に下か……。動体視力も速さに準じとるから、よほどの奇襲やないと触るんも厳しい。ただ、まだ見切れる速さでもある。躲すんはそこまで問題ない……)

ラミナは武器を消して、手刀を構える。

「あれ？ もう諦めちゃった？」

「アホ言え。下手に武器に頼るより、こっちの方がお前らを捕らえるのに適しとると思ただけや」

「ふうん……ま、無駄だと思うけど、ねッ!!」

チートウが再び猛スピードでラミナに飛び掛かって、また殴りかかる。

ラミナはチートウの右拳の構えを見て、拳の軌道を予測して左手を首元まで上げる。

それにチートウは左拳を鋭く振り上げる。

だが、それもラミナは読んでおり、右手を左拳の軌道を防ぐように動かす。

チートウは両拳を素早く引いて、ラツシユを繰り出す。

ラミナは目を限界まで見開いて拳の軌道を見極め、【堅】を強めて防御力を高める。

数発ほど拳を浴びるラミナ。

だが、ラミナはそれを耐えながら【蛇活】で腕を不規則に動かして、チートウの両腕を掴んだ。

「!!」

「捕らえた」

チートウは目を丸くして、ラミナはニイと口を吊り上げる。

しかし、そこに背後から कोरोーチエが高速で迫り、しなやかな脚で鞭のような蹴りを放ってきた。

「忘れて頂いては困りますわ」

「俺もなあ!!」

ホイッパーもラミナの真横から高速の飛び蹴りを繰り出す。

「ちいー」

ラミナは舌打ちして両手を放し、両腕を交えてホイッパーの飛び蹴りをガードして吹き飛ばされる。

地面を滑りながら体勢を立て直し、再びデイトウ達と向かい合う。(師団長は速いがヒットアンドアウェイを意識しとるせいかな、拳は軽い。兵隊長はあいつより遅いけど、攻撃に力が乗るとるな。けど、師団長の攻撃は全部無視できるほど軽いわけでもないし、兵隊長達もあいつより遅いつちゆうだけで、楽に躲せるほど遅いわけでもない)

両腕に感じた衝撃に、小さく眉間に皺を寄せる。

(実戦経験がないから、攻撃も連携も素直。やからこそ、まだ躲せるし、防げる。オーラの動きも未熟で【練】も【流】も使う感じもない。護衛軍の下におりながら、念の鍛錬や能力の開発をしとる気配がない……)

「へえ、今のはちよつと驚いたぜ。言うだけはあるね」

「デイトウ様、もう少し警戒してくださいまし。あの女は軍団長と戦って生き延びた者かもしれないのですから」

デイトウはどこか嬉しそうにステップを踏みながら言い、コローチエは呆れを浮かべながら注意を促す。

『かもしれない』。

その言い方に、ラミナは引つ掛かりを感じた。

「あん？ 自分ら、護衛軍にうちらと戦うとか言われとるのに、うちらと戦った話聞いとらんの？」

「俺はね。真面目なコルトやペギーは聞いてるかもしれないけど。いくら警戒したって、結局殺せばいいんだから聞いたって変わらないっしょ」

「ふうん……」

「それにさあ、警戒したところで結局俺達が女王様の餌を調達しに出ないといけないんだからさ」

「念の修行とか、護衛軍から教えてもらえへんの？」

「ぜくんぜん。今はあんた達が仕掛けてきたから女王様を守るのに集

中してるし、元々護衛軍って俺達のこと興味ないだろうからさ」  
(……)いつ、ベラベラしゃべるなあ……)

ラミナは内心呆れるが、元々キメラアントは体制こそ軍のようになっっているが、細かく規律があるわけでもなく、それを理解して入団したわけでもない。

そのため、個々の忠誠心にムラがあり、規律への考え方にも差がある。

『王を産む女王蟻のために働く』というのは、あくまで『キメラアントの本能』でしかなく、兵隊蟻全員が『順守するべき絶対的理想』でも何でもないのだ。

言うなれば、『学校に通う子供』なのだ。

真面目な子供もいれば、反抗的だったり、怠惰な子供もいる。

しかし、反抗的な子供も追い出されるのも面倒だから、大人が決めた学校のルールに仕方なく従っている。

その程度の雰囲気を感じさせるのだ。

キメラアントの場合、『退学』が『死刑』に等しいので渋々従っているのだろう。

そうラミナは推測した。

(統率力が低いんは間違いなく隙になる。けど、女王を殺すだけではやっぱり解決にはならん、か。しかも、護衛軍は師団長に興味がないっちゆうんも……厄介な状況かもしれない)

師団長すら捨て駒であることを隠さない。

つまり、今ネテロ達が行っている作戦は、護衛軍にとってはあまり効果がない可能性が高い。

(いや……餌の調達は師団長達が率いる隊でないとあかんとも言った。やから、補給を断つ作戦は有効ではある。ただ、今のペースでは微妙……王が産まれるまでなら耐えきれると考えとるっちゆうことか……)

ラミナが次の質問をしようとした時、ゼートウが再び猛スピードで殴りかかってきた。

ラミナは後ろに下がりながらガードするが、左右からコロイチエと

ホイッパーが蹴りを繰り出す。

ジャンプして蹴りを躲し、ホイッパーの脚を踏み台にして更にジャンプして距離を取る。

しかし、跳び上がったラミナの背後に、巨大な影が出現する。

「!?」

「カブシッ!!」

ラミナはギリギリで振り返って【凝】でオーラを集中した両腕を交えるように顔前に上げる。直後とてつもない衝撃が襲い掛かり、空中だったために堪えられずに勢いよく真下に叩き落される。

すぐさまラミナは四肢にオーラを集中させて、四つん這いで地面に勢いよく着地する。

そこにコローチエが詰め寄って来ており、右脚を振り上げてラミナの左脇腹に蹴りを叩き込む。

ラミナは直前に右に跳んでダメージを減らしたが、勢いよく横に吹き飛ばされる。

「ぐっ……い」

バルディツシュを具現化して地面に突き刺し、一瞬ブレーキをかける。

すぐさまバルディツシュを消して体勢を立て直し、背後に迫っていた木の幹に着地する。

それと同時に殺気を感じたので幹を蹴って離れる。

直後、ラミナが着地した木が半ほどで真つ二つに斬られる。

「ハッサミ!!」

そこにいたのは、蠅螂の頭部に上半身と両腕が蟹のような赤い甲羅に覆われ、両手が巨大な鋏になっているキメラアントだった。

そして、もう一匹は蜘蛛のような四足の下半身に、筋肉で膨れ上がった上半身と腕、そして蚊を思わせる尖った口を持つキメラアント。

「新手か……」

「カマツスに、クラッティじゃねえか」

「カブシ！ ビトルファン隊長、援軍!!」

「ゲゲッ！ ビトルファンに援軍に行けって言われてよお。来てやったぜえ」

カマツスはボディビルダーのようにサイドチェストを決めて単語を叫び、クラツティが銃を開閉しながら卑屈に笑い通訳する。

チートウは頭の後ろで手を組んで、

「あいつが部下を助けに出すなんて珍し——ん？」

しかし、途中で言うのを止めて、あらぬ方向を見る。

それにラミナは訝しむが、チートウはそれまでと違って唐突に顔を顰める。

「ちえっ……これからが面白くなるってのに……」

「ビトルファン様ですか？」

「いいや、コルト。軍団長様が俺に帰って来いってさ」

「あら……」

「流石に軍団長の命令を無視出来ないか。仕方ないね」

チートウは肩を竦めて、ラミナに顔を向ける。

「俺が殺せなくて残念だけど。もし生きてたら、また遊ぼうぜ！」

「あ？」

「じゃあねえ〜！」

チートウは軽く手を振って、猛スピードで駆け出していった。

「ホイッパー、どうしますの？」

「俺はこいつを倒すに決まってるんだろ！」

「そうですか。わたくしはチートウ様と戻りますわ。他の兵隊長では

チートウ様の脚について行けませんもの」

「好きにしな」

「では」

コローチエは一瞬ラミナを見てから、チートウ同様猛スピードで駆け出していった。

あつという間にラミナの感知範囲から気配が消えたチートウとコローチエに顔を顰める。

（……念話かなんかが出来るんか……？ けど、念能力は鍛えとらんはず……）

「なあ……お前らつて念話みたいなん出来るん？」

「ああ？ 念話？ 出来たらなんだってんだよ」

ホイッパーが訝しむも、どうでも良さそうに答える。

それにラミナは小さく舌打ちする。

今の言い方だとテレパシー能力は念能力ではなくて、キメラアントが生来持つ能力であると推測できる。

（いや……念話能力があるから、蟻は階級に従った軍事行動がとれるんか。本来こいつらは話せる種族やないんやし）

ただでさえ人間よりも身体能力が優れているのに、他にも人間よりも優れた伝達手段を持っているなど面倒にも程がある。

もちろん、これまで戦った感じではテレパシーでできる距離にも限界はあるのだろう。

だが空を飛べ、高速で移動するキメラアント達からすれば、それは大した問題ではない。

（念話を使われたら護衛軍達数匹誘き出す囷になっても、ほとんど意味はない!! 稼げて十数秒…… 護衛軍全員を女王から引き離さんと作戦成功率は2割もない……!!）

ラミナが歯軋りすると、

「そろそろ戦いを再開しようぜえ!!」

ホイッパーが勢いよく飛び出して、飛び蹴りを繰り出す。

「カブシー！」

「ハツサミィー！」

同時にカマツスとクラツティも駆け出す。

ラミナも一度推察を中止して、ブロードソードとフランベルジュを具現化する。

「オラァー！」

ホイッパーの高速の飛び蹴りを躲してブロードソードを振ろうとしたが、カマツスがすでに右腕を振り被って目の前まで迫って来ていた。

「!! (こいつも速つ……!? 四本脚やかからか!!)」

蜘蛛の足のように高速で動く四本脚が、速さとバランスを両立させ

ていたのだ。

殴る直前、カマツスの右腕の筋肉が膨れ上がり、剛腕が振るわれた。ラミナは防ぐ気にもならず、全力で後ろに跳ぶ。

カマツスの拳はパイルバンカーのように地面に突き刺さって、周囲1mほどが吹き飛んだ。

「素でこの威力か……!? ホンマ、どいつもこいつもウボオーかつちゅうねんツツ!!」

ボヤきながら、背後に向けて「一瞬の鎌鼬」で斬りかかる。

ガキイン!!

しかし、ラミナの斬撃はクラツティの胸を覆う甲羅に阻まれてしまった。

「!?」

「ゲゲッ! 効かなッサミ!」

目を丸くするラミナに、クラツティは両腕の鋏を開いてラミナに腕を伸ばす。

「チョッキンナア!!」

ラミナの左上腕と胴体を狙い、挟み斬った瞬間を想像して凶悪な笑みが浮かぶクラツティ。

その直後、クラツティの両腕が、肘から斬り飛ばされた。

「ゲ? ……っ?!?!? ゲギヤアアア!?!」

クラツティは一瞬啞然として、斬り飛ばされた腕が自分のものだと理解した瞬間に悲鳴を上げる。

「うちに斬り合い挑むなんざ十年早いわ、虫けら」

クラツティの背後に一瞬で回り込んで、冷え切った瞳を向け、冷え切った声で言い放つ。

言い終わると同時にクラツティの頭部が細かく斬り裂かれた。

「テメエ!!」

「カブツシ!!」

そこにホイッパーとカマツスが攻めかかってきたが、ラミナはクラツティの死体を盾にする。

流石の硬度を誇る甲羅で2匹の攻撃でも数秒耐え、クラツティの身

体が碎ける前にラミナは十分な距離を取ることが出来た。

ラミナは両手の武器を消して、突如2匹に背を向けて全力で駆け出す。

「逃がすかよお!!」

「カブシ!」

2匹はすぐさま追いかけるが、その時にはすでにラミナの姿は見えなくなっていた。

「ちい……!! おい、カマツス!」

「カブシ?」

「お前は帰れ! お前まで死んじまったら、俺がビトルファンに殺されちまう! ゼートウはもう巢に帰ってるし、援軍の意味もねえだろ」

「カブ……カブシ!!」

カマツスは頷いて、ビシイ!とダブルバイセップスを見せて、猛スピードで走り出す。

カマツスを見送ったホイッパーは、ラミナを探そうと勢いよくジャンプした瞬間、

全身が何かに縛られたように動かなくなり、空中で停止した。

ホイッパーは突然の事に驚いて、全力で体に入力するが引き千切れる気配はなかった。

「な、なんだあ!?!」

「やつぱり【円】や【凝】も出来ないんだね」

「っ!?!」

すぐ近くの木陰からラミナが姿を見せる。

「結局、混ざった生き物の生態に頼り切ってるってわけね。ま、所詮は虫だし、当然か」

「ゴ、ゴチャゴチャうるせえな!! テメエ!! 何しやがった!?!」

「まだ見えてないの?」

その言葉の直後、ホイッパーの身体に巻きつく細い輝く糸が見える



ようになった。

念糸は周囲の樹々に巻きついていった。

ラミナは【朧霞】で姿を隠し、ホイッパ―達の死角で解除して、鉤爪を具現化して【親愛なる姉様との絆】で念糸をホイッパ―の身体に巻きつけていたのだ。

「な、なんだよコレ……!!」

「何って念能力だよ。コレ、護衛軍の1人に見せてるんだけど？ ホントにアンタ達って、護衛軍に駒としか見られてないんだね」

「っ……！ チ、チクシヨオ……！ 人間のく——！」

ホイッパ―が悪態をつこうとしたら首に鈍い痛みを感じ、次の瞬間には目の前に冷たく鋭いラミナの顔があった。

「!?」

「アタシはアンタ達の何十倍もの人間を殺してる。アンタ達程度に、見下される覚えはないよ」

ラミナの冷え切った視線に、ホイッパ―は体を動かそうとしたが、首から下の感覚がない事に戸惑う。

「これ？」

ラミナはホイッパ―の顔を動かすと、ホイッパ―の視界に頭がない自分の身体が映る。

ラミナは念糸を足場にして、ホイッパ―の頭を一瞬で引き千切ったのだ。

「……!!」

ようやく現実を理解したホイッパ―はもはや絶句するしかなかった。

「だから言っただろ？ 虫けらが調子に乗るなってさ」

徐々に頭を掴むラミナの手の圧が強くなっていく。

「念話出来るなら、仲間に伝えときな。巢から出てくるなら、死ぬ覚悟してから出てきなってね」

「そう言って、頭を握り潰す。」

能力を解除して地面に着地したラミナは、数分その場で敵が来ないか待つ。

しかし、1匹も【円】にもラミナの感覚にも引つかかることはなかった。

「ちっ……さっきの筋肉蟻くらいは来ると思たんやけどな。護衛軍から命令の念話が来たんか……？　うちらから逃げろっちゅう命令は無視する癖に、新しく出た命令は従う……。はあく……こら、吉報やけど凶報でもあるな」

ラミナはため息を吐いて、新たな獲物を探して移動を始める。

（互いに余裕はない、か……。今のうちに出来ることは、戦力削減と餌の調達を邪魔すること。少しでも籠城できる期間を短くするくらいやな……）

兵隊蟻達でも連携や相性が嵌まれば、ラミナでも油断できないことも理解した。

念能力を完全に会得する前に、出来るだけ数を減らさなければならぬ。

そのためには、また巢を刺激する必要があるかもしれない。

護衛軍との再戦も考慮に入れて、体力とオーラの消耗を最低限にしなから迅速に敵を減らす。

余裕は一切持てない。

しかし、それこそが暗殺者の戦い方でもある。

ラミナは今は余計なことを考えず、ただ獲物を殺すことに集中するのだった。

## #102 イタダキ×ノ×ガツシヨウ

ラミナが復帰してから、更に数日。

ゴン達とナツクル達の試練の期日まで、あと一週間となった。

キメラアント達は師団長以下の隊を潰されながらも、餌の調達に従事していた。

しかし、先日と違ってラミナに関しては近づいてきたと分かった瞬間、迎え撃つこともなく全隊撤退するようになった。

おかげでラミナは戦闘兵や兵隊長を削ることは出来ても、師団長は仕留めることが出来ていない。

ネテロ達も1日1隊、捕まえるのがやっとという状況になってしまっている。

それどころか、最近ではもはや師団長が率いる隊ではなく、兵隊長が戦闘兵と雑務兵を率いて囷となっていた。

その間に、本命の師団長達が率いる部隊が餌の調達に出ていた。そして、夜。

「ここらもう籠城する気満々やな」

頭の後ろで手を組んで、洞穴の壁にもたれ掛かって座るラミナは、敵が籠城作戦に移行し始めていると推測した。

それはネテロはもちろん、ノヴ達も理解していた。

「確実に師団長が率いる隊を潰したいが、そもそも誰が師団長達か見分けるのが困難だからな。俺の【監獄ロック】はもう連中に完璧に警戒されちまつてるし」

「ここで逆にモラウを囷にして、会長とラミナ、私の3人で動いても意味はないでしょうね」

「そうになると、会長のこともお前の能力もバレちまう。それはまだ避けるべき段階だな。お前の能力がバレるのは、せめて巢の中へ出口を作った後だ」

「……はあ。つちゆうごとは、籠城自体は止めんのやな?」

ラミナはネテロに顔を向けて、確認する。

ネテロは顎髭を撫でながら目を瞑って、考え込んでいる。

「仕留めた師団長は恐らく半分くらい。それ以下の兵隊蟻も、まあ半分以下には減らしたやろうけど、肝心の護衛軍に関しては結局数すら不明のままや。前みたいのうちがちよっかい出したところで、出てくるのは1匹だけやろうし。【円】を使うとる護衛軍を引き離すには、ちと手が足らんで」

「……そうじゃのう」

「そう言えば、専門家連中は王が産まれるとされる期限は変えんかったんか？」

「うむ。念能力者を複数人喰らったと仮定しても、産まれてくる王の成長速度は大きく変わらんと言う結論になったようだな。短くしても、2週間ほどのことじゃ。つまり、今から最短で3週間、ということになるかのう」

「確かに念能力者は最上級の栄養となるでしょうが、それが逆に王の身体を形作る際に時間をかけるといふ意見も出ているようです」

「……生まれつき念能力が使えて、護衛軍よりも高性能の身体を造るためには時間がかかるつちゆうことか？」

「まあ、ありえねえ話じゃねえな」

「その代わり、産まれる王はバケモン中のバケモンつちゆうわけやな」  
護衛軍1匹ですら相討ち覚悟だというのに、それよりも化け物が現れる可能性があるなど冗談ではない。

もちろん、ラミナはすでにその可能性を予測していたが、それでもやはり現実味を帯びてくると勘弁してほしいという気持ちしかない。  
「けど、【円】を使うとる蟻と前にうちが戦った蟻だけでも引つ張り出さんと、女王に近づける隙は出来んか……。モラウの煙で囲えりや終わる話やけど、まずどつちか1匹は逃げられるやろなあ。それに巢の中で使われた時の対策をしとらんとは思えんし……」

これまでキメラアント達の指揮を執っている者の動きを考えれば、間違いない巢の中での防御策を講じているはずだ。

「籠城を許してしまえば、師団長以下の兵隊蟻も能力を開発する時間が出てくることになります。モラウの煙とラミナの動きを阻害することのみを目的とした能力を創らせる可能性は高いでしょう」

「だが、それを止めるにはあの【円】をどうにかしねえといけねえわけだ。結局、話は振り出しに戻っちまうな……」

モラウは苛立たし気に頭を掻く。

ラミナはそれに肩を竦めて、ネテロを見る。

「……うむ。正直、今の儂ではまだ護衛軍を退けるには厳しいじやろうな」

ネテロは正直に以前ネフェルピトーを視た時に感じた感覚と、現状を比べてまだ護衛軍を押しつけて女王を殺すには力が足りないことを認めた。

「お主らで護衛軍2匹を誘き出したとしても、最低あと1匹、最悪で2匹、女王の傍から離れることなく守るじやろう。そこに師団長達も加わるとなれば、少々手間がかかる。一瞬の隙が死に繋がる以上、せめて儂1人で護衛軍2匹を一瞬でも女王から遠ざけられるまでの力に戻さねばならんな」

「サラツと凄いこと言いよったけど、その力と勘を取り戻すための相手がおらんやろ？」

「そこでじゃ。ラミナ、儂と軽く戦ってはくれんか？」

「あ？」

「お主ならば護衛軍に近い実力があるからの。勘を戻すには丁度ええじやろうて。籠城を止められんのなら、来たるべき決戦に備えて牙を研ぎたい」

ネテロの言葉にラミナは全力で嫌そうな顔をして、モラウとノヴは顔を見合わせる。

「……うちは本気でやらんぞ。どうせゼノ爺やアルケイデスからある程度聞いとるやろうけど、うちは組み手に本気を出せる能力やないでな」

「うむ。出せる限りの全力で構わんぞよ。あくまで勘を取り戻せるだけ体を動かしたいだけじゃからの」

そう言っつて、ネテロはどこか楽しそうに笑うのであった。

ということで、巢の監視をモラウとノヴに任せ、ネテロとラミナは

NGL国境近くまで移動する。

ネテロは身軽なタンクトップ姿に裸足になっており、ストレッチをしていた。

その向かいでラミナも軽く体を伸ばしながら、眉間に皺を寄せていた。

【月の眼】【天を衝く一角獣】は使いたない。まあ、そもそも使うたところで勝てる見込みが低い相手やけど)

数十年ハンター協会の会長をやっている化け物だ。

ゼノやアルケイデスが子供の頃から、すでに爺だったと言われている。

ハンター試験の時やNGLで会ってからも、ずっとラミナはネテロのオーラを見て来た。

衰えたと言っているが、一切の揺るぎもなく無風の水面のように静かで、全く隙を見つけれないオーラ。

齢百を越えても、尚完成されている肉体。

たかが20年生きただけの小娘では到底辿り着けない武の領域を感じさせる。

(こうして向かい合つとるのに、それでも大樹や山と向かい合つとるような感覚になる……)

殺すイメージも、殺されるイメージも湧かない。

いや、そもそも拳を合わせるイメージすら浮かばない。

それほどまでに、巨おおきい。

(小細工は無意味。そして、『殺さず』の意気で届くほどの差でもない。やから……殺すつもりでいくのみ)

ラミナは右手にブロードソード、左手にフランベルジュを具現化する。

それにネテロは右手を出して掌を上にし、クイクイ

と、無言で始まりを告げた、と同時に。

ラミナはネテロの左横に一瞬で移動した。

しかし、ネテロはラミナの動きを完璧に捉えており、急ぐこともなく自然な動作でラミナに顔を向けていた。

ラミナもそれに驚くことなく、迷うことなくブロードソードを振って【一瞬の鎌鼬】で斬撃の嵐を繰り出す。

「うむ。中々に速い」

ネテロは感心するように言って、迫るブロードソードに目も向けずにラミナの右腕を左手で止める。

その瞬間、ネテロの右脚を狙って、フランベルジュを突き出す。

ネテロは右脚を体ごと退いて半身になって躲し、フランベルジュの刃に鋭く蹴りを放つ。

しかし、その前にラミナは両手の武器を消して、ラッシュを繰り出す。

それもネテロは流れるような動きで躲して受け流し、ネテロの姿勢を見切って振り上げられたラミナの右ミドルキックを、右足首だけの力でジャンプしてラミナの右脚の上に片足で乗る。

ラミナは両手を貫手にして、【蛇活】でネテロの両足を狙う。

ネテロは軽やかに跳んで、ラミナの頭の上に右手を置いて飛び越えようとする。

そして、飛び越えられた瞬間、ラミナは右手にスローイングナイフを具現化して手首の力だけで、背後に投げる。

スローイングナイフはネテロの股下を飛び抜けるが、そこで指を鳴らして【妖精の悪戯】でスローイングナイフと入れ替わり、ラミナはネテロの正面に移動した。

スローイングナイフを消して、干将莫邪を具現化させたラミナは空中にいるネテロに鋭く斬りかかる。

ネテロは体を強く捻って回転しながら空中で軌道を変え、ラミナの頭の上に足を乗せようとしたが、足が触れた瞬間ラミナの身体が煙のように崩れた。

「！」

ネテロは僅かに目を丸くし、崩れていたラミナの姿が完全に消え

る。

ネテロは視界右端に、レイピアを構えるラミナの姿を捉えた。

ラミナは容赦なく「啄木鳥の啄ばみ」を発動しようとレイピアを突き出そうとした、その瞬間。

ネテロが流麗かつ緩やかに、両の掌を合わせる。

ラミナはその動作を一瞬も逃さずに見ていたが、その一連の動作を見ていた己の身体が全く動いていないことにも気づいていた。

否。

ラミナの動きが止まったわけではない。

ラミナの意識の時間だけが、極限まで圧縮されていたのだ。

それほどまでに、ネテロの動きは自然で……美しかった。

そして、ネテロの右手が緩やかに、されど光速で真横に伸ばされる。

その直後、ラミナの正面に、金色に輝く巨大な掌が出現して迫ってきた。

意識では完璧に捉えてはいたが、体は全くついて来れずに無抵抗のままにラミナは掌底を浴びて後ろに吹き飛ばされる。

「?!?!? がはっ!!!」

ようやく体と意識の時間が合わさり、ラミナは現実世界に戻ってきた。

地面を十数mほど転がって、四肢で地面を押し跳び上がって体勢を立て直す。

(なんやねん今の?!?!?)

ラミナは地面を滑りながらも両足で蹴り、ネテロの周りを全力で駆けながらも、先ほどの感覚と攻撃に頭の中が混乱する。

間違いなく意識だけが加速していた。



ラミナでも時折強者との戦いにおいて、時間がゆっくりと感じることはあった。

だが、それでも今のは明らかにおかしい。

現実では刹那に等しい時間だったはずなのに、ネテロは間違いなく圧縮された時間の中で普通に動いていた。

しかも攻撃の瞬間ではなく、意味が分からない合掌にラミナの意識は最も引き寄せられていた。

もちろん、その後の巨大な掌も理解できなかったが、一番理解できないのがネテロの合掌だった。

「どうした。来ぬのか？」

ネテロは余裕綽々と仁王立ちして、ラミナを見据えていた。

ラミナは舌打ちして、とりあえず意識を切り替えて攻撃を再開することにした。

一瞬でネテロに詰め寄って、拳打の嵐を繰り出す。

それをネテロは軽やかに、柳のように躲していく。

ネテロが首を傾げて、ラミナの右拳を躲した直後、ラミナは突き出した右手にハラデイを具現化し、【朧霞】を発動して姿を消す。

そして、姿を消した状態で右腕を引く。

ハラデイの刃がネテロの首に触れようとした瞬間、

再びネテロが刹那の合掌を行うのを、ラミナの意識は捉えた。

ラミナの左横から再び巨大な掌が出現して、ラミナを薙ぎ払う。

「がっ——!!」

「姿と気配は消せても、筋肉が動く音や服が擦れる音は消せんようじゃのう」

ネテロは吹き飛ばされるラミナを見ながら、そう口にする。

ラミナはハラデイを消して、地面に落ちる前に体勢を整える。

(問題はそこちゃうわ阿呆!!)

歯軋りして、ようやく見抜いたネテロの攻撃と能力に思考を向ける。

（あの合掌が全ての攻撃の始点！ やのに、その合掌がどうやっても妨害出来ん……！ 速すぎる……！）

ラミナの最速ですら、足にも届かないほどの速さ。

もはや反射……いや、鼓動や呼吸と同じ域に到達しているほどの所作。

それが本来制限となるはずの制約を、完全無欠の攻撃へと昇華させている。

そしてそれ故に、ネテロの能力を恐ろしく強くする。

（数十年にも及ぶ修練によって、特質系以外の系統全てがうちの上をいっとる。そして、その全てを十全に組み合わせた能力……！）

恐らくまだ本気ではない。速さに比べて威力が明らかに弱い。

つまり、あの掌にはまだ先がある。

（合掌後の腕の動作に合わせて出現する念獣……。速い上に範囲も広い。接近戦ではどうしようもなく不利。けど、遠距離でもあの速さには勝てん。【天を衝く一角獣】ですら確実に弾かれる……！ 【脆く儂い夢物語】やと斬りつける余裕も無い）

ラミナはハルバードを具現化して駆け出す。

ネテロは待ち構えるように、僅かに両手を広げる。

そして、ラミナはハルバードを振り被った瞬間に、キーワードを叫ぶ。

『『起動せよ』！』

【不屈の要塞】を発動して、全身に鎧を纏う。

その時にはネテロの両掌に合わさって、右手が下に振り下ろされていた。

巨大な手刀がラミナの兜に叩きつけられるはずだったが、兜に触れた瞬間にその手刀は霧散した。

「ぬ……！」

「つああ!!」

ラミナは最後の好機に全力でハルバードを振り下ろす。

しかし、それと同時にネテロの身体がブレ、ラミナの胸部にネテロの正拳突きが叩き込まれる。

ラミナの身体に凄まじい衝撃が走り、また後ろに吹き飛ばされる。  
ガァン!!  
パァン!!

何故かネテロの拳が空気の壁を破った音と殴られた音が逆に、吹き飛ばされたラミナの耳に届く。

胸甲は砕け、呼吸が一瞬止まったラミナは意識が飛んでハルバードが消える。

地面に落ちた衝撃で意識が戻り、ラミナは反射的に両手を地面に伸ばして、地面を掻き抉ってブレーキをかける。

「……………がはっ! ゴホツゴホツ!!」

顔を顰めて片膝をつき、胸を押さえて咳き込むラミナ。

ネテロは申し訳なさそうに後頭部を掻いて、

「あく……………すまん。少し焦って、手加減を誤った」

「ゲホツ! すう……………ペツ!」

ラミナはややふらつきながら立ち上がって、血混じりの唾を吐き出す。

「……………気にすんなや。めっちゃ痛かったけど、それはそれで一矢報いた気分やからな」

「そう言ってもらえるとありがたい。それにしても、本当に面白い能力じゃな」

「全部殴り飛ばしときながら、褒められても嬉しないわ」

「まあ、そこは年の功という奴じゃな。だが、こんなにも早く【百式観音】を使わされるとは思つたらんかったぞ?」

「ま、そこは若手の意地つちゆう奴やな」

「ほっほ! そりゃ頼もしい限りじゃ。さて……………まだ行けるか?」

「はっ! 当然、やろっ!!」

ラミナは右手に鎖鎌を具現化して、素早く投擲して【親愛なる妹のペット仲間】を発動する。

巨大な狼頭が口を開けて具現化して、ネテロに噛みつきこうと迫る。しかし、やはりネテロは神速の合掌を行う。

それと同時にネテロの背後に巨大な千手観音を思わせる仏像が出

現する。

ネテロが左手を素早く横に振ると、仏像も高速で腕の一本を横に振る。

仏像の掌が巨狼の横顔を叩き飛ばす。

それと同時にラミナは左手にソードブレイカーを具現化しながら全力で飛び出し、鎖鎌を消して右手に柳葉飛刀を5本具現化する。

「シィ!!」

ラミナはソードブレイカーを【百式観音】の腕に突き刺そうとしたが、その前にネテロが合掌を解いて【百式観音】が解除される。

「っ!!」

ラミナは歯軋りして左手のソードブレイカーを消して、右手同様に柳葉飛刀を具現化し、ネテロの足元の影に全力で投擲する。

しかし、その前にネテロはすでに合掌を済ませており、右手を振って柳葉飛刀を全て弾き飛ばす。

柳葉飛刀を消しながら、ラミナはネテロに迫って両手を伸ばす。

だが、再びネテロは合掌して左手を振り、仏像の掌底でラミナを吹き飛ばす。

「舐めんじやないよ」

ラミナが両腕を交えると、ネテロは体が引っ張られる感覚に襲われ、ラミナが空中で停止する。

同時にネテロの身体とラミナの両手で繋がっている念糸が可視化した。

「ぬー!」

ネテロはすぐさま合掌して、右手を振り下ろす。

「ちいー!」

ラミナは念糸と鈎爪を解除して全力で横に跳び、【百式観音】の手刀をギリギリで躲す。

ちなみに今のは見切ったわけでもなく、読んだわけでもなく、直感で運よく躲せたただけだ。

故に、ラミナに反撃する余裕はなく、ネテロには追撃する絶好の隙だった。

合掌して、右手を突き出す。

巨大な掌が出現して、ラミナを再び押し飛ばした。

「ぐう……！」（腕だけの部分具現化とか厄介やな！）」

数回地面をバウンドしてから体を起こし、地面を滑りながら体勢を整える。

口元を拭い、再び血混じりの唾を吐き捨てて立ち上がる。

「ふう……！」

「どうするかね？」

「動けるんやから、まだやるに決まっとるやろ。それに……どんどんムカついて来とんねん」

「ふむ？」

「見れば見る程ムカついてくるわ……。お前の合掌も、【百式観音】もなあ……！」

凄まじい能力ではある。

間違はなくアイザック・ネテロしか使いこなせない能力だろう。

卓越した技術。そこに積み重ねられた尋常ではない修練。

暗殺者とはいえ、戦いを嗜む者としては称賛と畏敬の念を抱かずにはいられない。

事実、ラミナはずっと、ネテロの合掌を嫌でも目に焼き付けさせられている。

美しいとすら感じている。

いずれ己も辿り着きたいと思わせられる極致。

だが、それでも……絶対に認められないことがある。

「感謝なんかもしれん。祈りなんかもしれん。けど、うちは……お前の合掌から『憐れみ』と『謝罪』を感じる!!」

そう。ネテロの合掌を見る度に、その時のネテロの目を見る度に、ラミナは『弱いことへの憐み』と『己が強すぎて容赦なく叩き潰してしまうことへの謝罪』を読み取っていた。

「……」

「うちはお前より弱い。それを否定する気はない。めっちゃ悔しいから、そのままにしとくする気もないけどな。けどなあ……お前なんぞに見下される筋合いはない!!!」

実際その程度の実力しかないし、ネテロに比べたら大した人生を過ごしたわけでもない。

ネテロからすれば、ラミナが生きてきた時間など短すぎるかもしれない。

だが、それでも決して楽な道を歩いてきたわけでもない。

たかが百年生きてきた老人に、憐れみを覚えられる筋合いは絶対にないし、攻撃されることに謝罪される筋合いもない。

それが『武の極致』に立つ者が抱くモノなのだとしたら、

「そんなもん、もう武人としては死んどるんと変わらんやろ」

武に生きる者が、他者の武に憐れみを感じて手を差し伸べるなど。

武の頂きとは、絶対に孤高であるはずなのだから。

「もう強うなる気ないんやったら……とつとと隠居せえや老いぼれエ!!!」

ラミナはそう叫んで、オーラを全開にして飛び出す。

ネテロはラミナの叫びに対して、特に答えることはなかった。

だが、その直後に見せた合掌には、

先ほどとは異なる意味の『謝罪』。

そして、『感謝』の念が込められていた。

ネテロの背後に降臨した【百式観音】の輝きは、先ほどまでとは比べ物にならず。

ラミナは閃光に視界が埋め尽くされ、直後全身に強烈な衝撃を叩きつけられて意識を失ったのであった。

それから数時間後。

夜が明け始めてきた頃。

ラミナは全身に痛みを感じながら、目を覚ました。

「ほっほ……。生きておったか」

ラミナの隣で座禅を組んでいたネテロが、ラミナが目覚めた気配を感じ取って軽口を言う。

ラミナはフンツと鼻を鳴らし、

「体中が痛いわ阿呆。ホンマ、最後は死んだと思たけどな」

痛みに顔を顰めながら起き上がり、体の状態を確かめる。

感覚的に所々骨にヒビが入っているようだが、骨折まではしていないようだった。

「最後にオーラを全開にしたことが幸いしたようじゃの。それでなければ、数か所は骨折しとったじやろうな」

「つたく……結局まともな組み手になつたらんかったやないか」

「いやいや、十分じゃよ。二、三度ヒヤツとさせられたしの。蟻達ではまずその前に死んでしまうでな」

「やったら、もうとつとアルケイデスの爺でも十二支んでも呼べちゆうねん。まだうちはバケモノ連中の仲間入りなんぞしとらんねんぞ」

ラミナはネテロを睨みつけて苦情を言う。

ネテロは顎髭を撫でながら苦笑して立ち上がる。

「アルケイデスの奴を呼ぶには、ちと厄介な事情があつてのお」「あ?」

「実はな、あ奴には俺の暗殺を依頼しておるんじやよ。もう50年近く前のことじゃが、今もその契約は生きておる」

「……『婚前契約』か……」

殺し屋に自分の暗殺を依頼し、暗殺に成功すれば事前に用意しておいた報酬が振り込まれる特殊契約。

自殺では後々問題になる人間が行う『他者を使った自殺手段』として行われるものだが、時折ネテロのように強者との殺し合いを楽しむために利用する者もいる。

ちなみにゾルディック家は「割りに合わん」と断っていた。

「まあ、事情が事情。交渉はしてみるかの」

「つちゆうか、あの能力やったら護衛軍くらい吹き飛ばせる思うねんけど」

「問題は儂自身の反応が遅れておることじゃよ」

【百式観音】は完全操作型の能力。

つまり、ネテロの反応が遅れば、【百式観音】の反応も遅れてしまうのだ。

「お前さんに叱られたように、ここ数十年緩みに緩んでおったから  
のう……。アルケイデスが全然殺しに来んかったのもあるが……。  
万全を期して仕留めるならば、準備が必要じゃ」

「時間は？」

「……王が産まれる期日ギリギリ、と言ったところじゃろう」

「……まあ、向こうも籠城に入るし、増援待ちながらやったら問題ない  
やろうけど……」

ラミナも回復に努めなければならぬので、どちらにしろ今すぐに  
攻め込むという判断はない。

「それにしても……」

「ぬ？」

「なんか楽しそうな顔してるんは何や？」

明らかにネテロは興奮を抑えきれない表情を浮かべていた。

ネテロは顎髭を撫でながら笑う。

「ほっほっほっ！ この歳になって、挑むという言葉を使えるとは  
思っておらんんだでな」

「……はあ。アルケイデスの爺が来んかったんは、老いぼれとったか  
らちやうか？」

「そうかもしれないのお」

「それにしても、この状況で楽しめるとか……。やっぱそこらへんが  
うちがハンターになりきれんところやなあ」

「ほっほ。何を言うておるか。ハンターなぞ、『なる』や『らしき』な  
ど本来無縁の言葉じゃよ」

「あん？」



「そもそもハンターとは、誰も見つけておらず、誰も持たぬ『何か』を最初に手にするために、我欲を好き勝手に貫き通す愚か者のことじゃ。本来ならハンター証やハンター試験などで資格を決められるモノではないと、儂は思っておる」

「……」

「トレジャーハンター、幻獣ハンター、賞金首ハンター……。それらと同じように、ハンターは個人個人で異なっておるのがむしろ当然。殺し屋がハンターになったのであれば、それはそれで新たな道を切り開いたと言えよう。ハンターならば、それを称えるべきじゃと儂は思うがの」

「……ふん。殺し屋で幻影旅団に所属するハンターを称えるとか、それはそれで世も末ちやうか？」

「ほっほっほっ！ それも楽しめる者がハンターと言うわけじゃよ」

ネテロはそう言って、ノヴ達の元へと歩き出す。

ラミナは呆れたように肩を竦めて、その後が続く。

「そう言えば、もうすぐゴン達の結果が出るが。お前さんはどうなると思う？」

「あん？ ……どんな戦い方しとるか知らんから自信はないけど。多分、ゴンとナツクル、キルアとシュートの組み合わせで決闘することになるやろうな。その場合、順当であればナツクルとキルアが勝つ」  
「ふむ……」

「ただ、ゴンを置いてキルアが来るわけではない。やから、ナツクルとシュートが来る可能性が一番高い。けど、もし2対2の合戦なら五分五分。んで、最悪最低が、ナツクルがゴンの目的を聞いて絆されて『全員で行かせてくれ！』とかほざいてくる、やな」

「ほっほ。まあ、最後のは流石に認める気はないの」

「そら、よかった」

「お前さんも婚約者が危険な目に遭わんでよかったのお」

「黙れやクソ爺。はあ……。もう婚約続ける意味ない気がするんやけどなあ。まあ、そこはええわ。もしゴンとキルアがこの戦いに参戦しても、流石にお守りなんぞせんで。自分らでやるって決めたんやつた

ら、プロになった以上自分らで責任持ってもらわんな。その上で、作戦を一緒にするんは文句を言う気ないけど。まあ、めっちゃ不安やけど」

「うむ」

「んで？ 今後は組み手どうするんや？ 能力ナシでええんやったら付き合おうで。それやったら、うちの修行にもなるし」

「そうじゃのう……。弟子達の決着がつくまでは頼むとしよう」

その翌日からカメラアクト達は籠城を始め、ラミナとネテロは互いに牙を研ぎながら力を蓄えることにしたのだった。

## #103 キルア×ノ×カクセイ

期日まで後1日。

ゴンは相変わらずナツクルにボコボコにされているが、キルアはビスケと軽い組み手レベルで終わっていた。

しかし、先日になツクルから「期日前夜に決着をつけるぞオラあ!!」と言われて、いよいよ本番が近づいてきているため緊張感が高まって来ていた。

そんな時、キルアの携帯が鳴る。

「ん？ もしもし?」

『久しぶりじやの、キル』

「爺ちゃん?」

突然のゼノからの電話にキルアは困惑を顔に浮かべる。

『少し、厄介なことに首を突っ込んでおるようじゃな』

「……言つとくけど、引く気はないよ」

『分かつとるわい。儂がお前に電話したのは、お前の婚約者もNGLに行つておるぞと伝えておこうと思っただけじゃよ』

「ラミナが!? まさか……旅団が来てるのか!?!」

キルアはまさかの名前に目を丸くする。

『いや、来ておるのはラミナだけじゃよ。今頃、ネテロの奴と合流して動いておるじゃろうな』

「ネテロ会長がラミナを?」

『そこまでは知らん。儂が言いたいのは、ネテロとラミナがおつても未だ仕事が終わつたらんということじゃよ』

「……」

『そのキメラアントと言う蟻……かなり厄介な可能性がある。心してかかるんじゃぞ?』

「……分かった。サンキユ、爺ちゃん」

『うむ。ではの』

通話が切れ、携帯を仕舞うキルア。

その表情は心の内を表すように複雑なものだった。

(誰がラミナを呼びつけたかはともかく、確かにナツクルやあいつの師匠より強いって言われてるラミナが参加したのに、未だ任務を終えていないのは確かに少し時間がかかり過ぎか？ でも、元々会長達は2か月を目途に動くつもりだったみたいだし、ラミナが参加してもそれを变える理由はないと言えばない……。けど、ラミナがそんな悠長に動くとも思えないし……)

キルアは顎に手を当てて考え込む。

(ラミナは実力的に考えればカイトと同等以上……。師団長程度なら負けるとは思えない。会長もいるんだ。カイトを襲った蟻相手だつてそう簡単に負けるはずはない。それこそ、俺達をわざわざ待つ必要なんてないくらいに……。なのに……。未だ何も連絡がないってことは、事態は何も進んでいないということ)

そして、それでもナツクル達やゴン達の試練を継続させているという事は、ゴン達はもちろんナツクル達でさえ戦力的に不安要素が強いということに他ならない。

恐らくネテロからラミナには、キルア達の状況は伝えられているはず。

なのに、ラミナも何も言わないということは、ラミナもネテロ達の判断に否はないということ。

つまり、ゴンとキルアにとって、ナツクル達に勝つ程度ではまだ戦い抜くには厳しいということに他ならない。

もちろん、そんなことは理解していた。いや、理解しているつもりだった。

(……まだ甘かったんだ。……カイトを見捨てたことで思い知らされたことさえ、まだ甘い……！)

「っ……………」

キルアは歯軋りをして、両手を握り締める。

確かにゴンもキルアもこの一カ月で成長している。しかし、それでもまだ遠かった。

キルアは歩き出して、ビスケとゴンの元へと向かう。

「ビスケ」

「ん？」

「ちよつと別のところで修行する。帰ったら回復頼む」

「はあ？」

「キルア？」

いきなりのキルアの言葉に、ビスケとゴンは訝しんで顔を見合わせる。

冗談でもないし、これまで以上に真剣さを感じる。

だからこそ、突然とも言えるその変化に首を傾げるゴンとビスケ。

「爺ちゃんから電話が来てさ。今、NGLにラミナが来てるらしい」

「え!？」

「NGLに來た理由はともかく。ネテロ会長達と一緒にいるらしいけど、それでも何にも連絡がないってことは事態は変わってないか悪化してるかのどっちかだと思う」

「ふむ……」

「だから、ナツクルとシユートに勝つだけじゃ、NGLじゃ生き残れない。俺は今構想中の技を夜までに完成させる。それでシユートに勝つ！」

そう言つて、キルアはゴン達の答えも聞かずに部屋を後にした。

ゴンは心配そうにキルアが去つた扉を見つめていたが、ビスケは腕を組んで、

「ほら、ゴン！ 今は自分の事に集中なさいな！」

「うん……」

「キルアなら大丈夫だわさ。言つとくけど、今4人の中で一番弱いのはゴン、アンタだわよ。今のアンタでもまだナツクル相手に勝率は4割にも届いてないと思うわさ」

未だにナツクルは能力を使っていないし、本気で倒そうとしていない。

もちろん、ゴンは常に全力だ。しかし、それでも一撃ようやく当たるかどうかというレベル。

【ジャジャン拳】の弱点もバレており、それに対するフェイントも、

【ジャジャン拳】の連続攻撃もすで見せてしまっている。

すでにゴンは手札をほぼ全て見せてしまったに等しい。

ここから逆転するには、基礎能力を格段に上げるしかない。

(まあ、もう1つ大事な要素があるんだけど……。ナツクル相手には無理だろうしね)

それは『殺意』である。

殺しても構わないと思って、攻撃を放つこと。

それだけでも、念においては相手に与えるダメージは大きく変わる可能性がある。

だがゴンがナツクルに殺意を覚え、殺す気で攻撃を放つなどよほどのことがない限り、無理だろうとビスケは考える。

(けど、本来はそれこそが一番重要。だから、ナツクルも今ここにいる)

今回の任務ではキメラアントを殺すことが求められる。その生態から1匹でも逃すことは許されない。

しかし、今のゴンにそこまで求めるのも無茶である。

そもそもゴンが厄介なところは、最も成長して真価を発揮するのが『本番土壇場』であるということである。

つまり、その時その時の精神状態と集中力に、大きく左右されてしまうということ。

だからこそ、ナツクルとの決闘でも何が起こるか分からない部分はある。

今、ゴンが勝てるとすれば、それに賭けるしかない。

これまでのゴンを見て来たビスケからすれば、十分賭けるに値する要素ではある。

だが、それはあくまでナツクルとの勝負においてのみ。

その後のキメラアントとの戦いでは、大きな不安要素ではある。

「今日負けたらもう行けないんだよ。他の事に目を向けてる余裕はないわさ」

「うん……」

ゴンはそう言って、【練】を再開する。

それを見つめながら、ビスケはキルアのことに思考を向ける。

(キルアは【堅】や【流】はゴン同様拙いけど、身体能力ならナツクル達にも負けていない。能力も十分あの2人に対抗できる。問題はあの見切りの早さと慎重さ……)

ラミナも言っていたキルアの弱点。

暗殺者として育ち続けていたならば問題なかっただろう。

むしろ、最も重要なことと言える。

格上の相手には不用心に挑まず、不確定要素を抱えたまま暗殺をするのは死を招く恐れがあるのだから。

慎重に慎重を期するのは当然の思考である。それに突発的に念能力者と出会った時でも逃げ切れるようにすると言うのもシルバやイルミにはあった。

しかし、外に飛び出してしまった今では、それが大きな足枷となつてしまっている。

(グリードアイランドでのゲンスルー組との戦いとNGLでの戦いで、少しは改善されたようだけど……。それでも格上相手にはまだ悪癖が強く出る。まあ……。最後に出会ったキメラアントの話を考えれば、仕方がないのかもしれないわね)

その慎重さで救われているのも事実。

物事はどんなものでも一長一短な面があるのだ。悪癖と呼んではいるが、それはあくまでもハンターとして生き続けるならばの話だ。

それにゴンとのコンビにとっては、それが重要な役割を果たしてきたのも確かだ。

ここ最近ではビスケやカイトが、その代わりを果たしてきていたので悪癖が大きく表出することはなかっただけに過ぎない。

(グリードアイランドでもあの子がラミナを意識してるのは分かってたけど……。これがキルアの意識をどこまで変えられるか、だわね)

ビスケは鼻でため息を吐き、

(全く……。本当に厄介な子達だわね。まあ、一番悪いのはジンとゾルディック家だけ……)

特にキルアは未だに実家のしがらみから解放されてはいない。

(まー！ ここから先はラミナに任せようかしらね！ ぶつちやけキル

アに関しては、あたしよりラミナの方が適任だわさ)

ラミナは暗殺者でプロハンター。

キルアは元暗殺者でプロハンター。

キルアが抱く悩みなら、ラミナならばある程度共感することが出来るだろう。

キルアがラミナを意識しているのは、美人な婚約者だからだけではなく、暗殺者とプロハンターを両立させながらも自分を貫いている姿も大きいのだろう。

ラミナの強さと生き様。

それにキルアは憧れを抱いているのだ。本人は気づいていないだろうが。

(正直、歳の差さえ無視すればお似合いな2人だと思うんだけどねえ)

おばさん根性全開でラミナとキルアの組み合わせを考えるビスケ。

ゾルディック家が未だにラミナを婚約者に行っているのは、ビスケと同じことを考えているからだろう。

暗殺業はラミナがメインにやり、キルアはハンター業を続ける。

そして、ラミナの仕事に手がいるならばキルアが手伝えるし、キルアの仕事に手伝いがいるならばラミナが手伝う。

キルアは殺しは嫌かもしれないが、別に殺しをしなくともターゲット以外の者を足止めしたりするだけでも十分だろう。

ラミナもその辺りを十分考慮して、手伝いを依頼することは十分考えられる。殺しを無理に強要することはないし、ゾルディックからすればラミナが代わりに仕事する分には文句などないだろう。

まさしく互いに互いを支え合うことが出来る2人だと、ビスケとゾルディック家の面々は思っていた。

それに気づかないのは本人のみ。

ラミナは気付いているだろうが、本人の性格と幻影旅団との関係上、ラミナから動くことはないだろう。

(けど、キルアにラミナを口説き落とす度胸はないだろうねえ。まあ、そもそも未成年だけ)

それでもキルアが成人したところで、ラミナを口説き落とせるとは



思えないが。

ビスケの脳裏にラミナに揶揄われるキルアの姿が容易に浮かび上がる。

(……それならそれで、見てる分には面白いかもねえ)

しかし、それを見るためには、少なくともこの任務をやり遂げなければいけない。

ビスケは思考を一度止めて、ゴンの修行へと意識を戻すのであった。

そして、遂に決戦の夜。

ゴンとキルアはビスケの能力で万全に回復して、公園へと赴く。

公園の真ん中にはナツクルとシュートが、ゴン達同様これまで以上の気迫を纏って待ち構えていた。

「いいかコラア!! 負けた方が相手に割符を渡すう!! 負けても恨みっこ無あし!!」

「うん!!」

もはや怒気に近い気迫で叫ぶナツクルに、ゴンは力強く頷く。

キルアとシュートも黙って頷き、どちらともなく歩き出して森の方へと向かう。

ゴンとナツクルはいつもの場所で向かい合う。

ナツクルは上着のボタンに手を掛けて勢いよく脱ぎ捨てる。

「約束通り……はなから本気で行くぜえ!!」

上半身裸になって、これまで以上の【練】を発動する。

ゴンも構えて、遂にナツクルとゴンは全力全開でぶつかり合うのだった。

その数分後、キルアとシュートは公園外れの森の中で足を止める。

シュートは目を瞑ってから大きく深呼吸をして、全力全開で気合を入れ、先ほどまでの弱気な雰囲気霧散する。

シュートからナツクルにも負けない圧が、キルアの身体に叩きつけられる。

しかし、キルアは僅かに目を細めるだけで表情に変化はない。それにシユートは、ナツクルにボコボコにされていた子供という認識を捨て去った。

「……俺は……人を傷つけるのは嫌いだ。だが……」

突然言い始めたシユートの左腕がザワザワと動き出して、ビツと肩口から袖が外れる。

そして、現れたのは宙に浮かぶ3つの手と、同じく浮かぶ鳥籠。

キルアは両手をポケットに手を差し込んで、すぐさま【凝】を使う。

「お前達に教えてもらった。認めるからこそ、死力で戦わなければならぬ時があることを……!」

「……もちろん、俺も死力を尽くすよ」

キルアは両手をポケットに突っ込んだまま、口を開く。

「ただ、前にも言ったけど、俺はあんたに勝つてもゴンが負ければ割符をあんたに渡す」

「……それは何故だ？ カイトと言う者を助けたいならば、彼が行けなくてもお前だけでも行くべきだと思うが？」

「……俺だってカイトが心配じゃないわけじゃない。けど……俺はカイトよりゴンの方が大切なだけさ」

「……」

「俺はあいつみたいに誰にでも手を差し伸べることなんて出来ない。

俺は……大切な人が増やせるほど、選べるほど強くないし、誰でも彼でも大切な人にする資格もない」

「……」

「今更思い出したんだ。ラミナに怒られたことを」

修行でも何でもなく、本気で一度だけ叱られたことがある。

ヨークシンシテイで、別れる直前だ。

「中途半端な力で、中途半端な覚悟で、首を突っ込めば何も得られずに死ぬか、良くてもどれか1つだけ。俺は……ゴンの命を選んで、カイトの命は見捨てた。全てを得るだけの力がなかったからだ。その前のグリードアイランドで凄く強いつて言われてた念能力者達を倒したから、NGLで兵隊長レベルの蟻を倒したから、自惚れたんだ。カ

イトと一緒に戦えてるって、俺でも戦力になるって」  
「……」

「俺はもう殺し屋じゃない。もう殺しなんてしたくない。けど、俺はこれからもゴンと一緒にいたい……！ あいつの友達でいたい！ あいつの傍にいたい!!」

そう叫びながらキルアは【練】を発動して、冷たい瞳でシュートを  
見据える。

「ゴンを守るために!! ギンと生きるために!! ギンだけは絶対に見  
捨てないために!!」

望んだこと全てを手に入れられるほど強くない。  
だから絶対に失いたくないモノだけは、手放さないために。

「俺はもう、殺すことを迷わない!!」

たとえ周り全てを殺すことになっても。

たとえ家族やラミナを殺すことになっても。

大切な友<sup>ゴ</sup>達は、絶対に守る。

そう、覚悟を決めた。

覚悟を叫んだキルアの姿に、シュートは一瞬ラミナの姿を重ねた。

(彼らは……彼女の弟子でもあつたな……)

ならば、この覚悟の強さは納得出来る。

(これが俺にはない強さ……。ラミナにも感じた……美しいとすら感  
じさせる程の意志の固さ……!)

故に、自分こそが挑む側。

その覚悟に応えるだけの意志を、自分こそが示さなければならな  
い。

(俺には、お前のように殺してでも守りたいモノがない。自分だけで  
一杯一杯だ)

だから、傷つかないように好機や危険から全力で避けて来た。

『安全な檻』の中に閉じこもっている。

シユートの能力【暗い宿】は、そんな後ろ向きな自分をまさしく象徴する能力だった。

(俺にはまだその檻を壊す勇氣はない。それでも……全力で挑む!!)

シユートは開始の合図として、3つの両手を操作してキルアに高速で飛ばす。

キルアの瞳は一切揺るぐことなく、迫る手を見据えていた。

【隠】の気配はない。純粹な操作系能力。問題はあの籠。【隠】の気配がないのであれば、あの手に触れるのは危険!!)

そう判断してポケットから両手を出す。

その手にはミルキ特製のヨーヨーが握られていた。

そして、キルアは縦横無尽に飛び迫る3つの手に、的確に2つのヨーヨーを振り回して全て弾いて行く。

シユートは僅かに目を丸くして、その手捌きに素直に感嘆する。

3つの手だけでは決め手にならないと判断したシユートは、すかさずキルアに詰め寄って右手を顔目掛けて突き出す。

キルアは一瞬で詰め寄ってきたシユートに驚くことなく、シユートの手が届こうとした瞬間。

キルアの姿がブレて、シユートは右腕、鳩尾、右頬に衝撃を感じて後ろに吹き飛ぶ。

両足で踏ん張った直後、全身に一瞬電気が走って体が硬直する。

「!!? でん……げき……!!? 動きが……全く見えなかった……!」

【神速】『疾風迅雷』

キルアが完成させた新技。

完成したばかりで修行不足のため、【神速】状態を長く維持出来ないが、カウンター型の『疾風迅雷』に専念すれば10分は戦える。

(3つの手は囷か、それとも効果に差があるのか。けど、触れることで発動する能力なのは間違いない! 籠は発動した際に関係する可能性が高いけど、油断は出来ない)

キルアは冷静にシユートの動きから能力を推測する。

そして、キルアは無理に攻め込まずに、ヨーヨーで攻撃を仕掛ける。シュートは意識ははつきりしていたので、すぐさま3つの手を操ってヨーヨーを弾き、また縦横無尽に飛ばして攻めかかる。

(ここまで威力は強くない。それにあの一瞬でも攻めてこないということは、カウンター型の能力……？ 俺の速さでは対応できない。どうする……!?)

あのヨーヨーとキルアの速さを掻い潜るのは非常に難しい。

(オーラを電気に変える変化系。恐らくそれで身体能力を一時的に強化することが出来る……。だが、それはかなりの負荷を体にかけることになる)

先ほどシュートが感じた電撃以上のものが、キルアの身体に流れているはずだ。

だが、キルアは全く動きが鈍った様子はない。

(まだ何か絡繰りがあるのか?)

キルアがゾルディック家の人間とは知らないシュートに、キルアが電気に耐える拷問訓練をしていたため常人より電気に耐えられる体質になっているなど想像できるわけもない。

それがキルアにも匹敵する慎重な性格のシュートに、攻撃を踏みとどまらせていた。

(ならば、まずはあのヨーヨーから無効化する！)

シュートは3つの手の操作に意識を集中して、ヨーヨーの動きも見極めようとする。

キルアのヨーヨーはオーラこそ纏ってはいるが、その動きはあくまで普通のヨーヨーであることはすでに看破していた。

つまり、必ずどこかで手に戻し、再び放つ動作をしなければならぬ。

戻る瞬間と放った瞬間、そして伸びきった瞬間。

シュートはその瞬間を見極めて3つの手を操り、1つ目の手は右手のヨーヨーを真上から押さえ込んで地面に叩きつけ、2つ目の手は左手のヨーヨーは殴り弾いてキルアの顔に飛ばし、最後の手でヨーヨーとは逆側からキルアの顔に殴りかかる。

「っ！」

キルアは慌てることなく、身体に電気を流して【神速】を発動する。

【神速】『電光石火』！」

『疾風迅雷』とは違い、能動的に体を動かせる『電光石火』で指からヨーヨーの留め具を外しながら、高速で後ろに下がって躲す。

それを読んでいたようにシユートが、キルアの横に回り込んで右手を構えていた。

しかし振り抜こうとした瞬間、またキルアの身体がブレて、次の瞬間にはシユートの身体に高速の連打を叩き込まれる。

「ぐう……！」

「読んでたよ」

シユートの能力を十全に使うためには、どう考えてもヨーヨーが邪魔だ。

故に操作している手で無効化してくること、そしてヨーヨーを手放した隙を狙って本体が攻めてくることは容易に予測できる。

むしろ、キルアはその隙をわざと突かせることも想定して【神速】を創ったのだから、当然己の戦法の欠点など把握している。

キルアは『電光石火』で一瞬でシユートから距離を取る。

シユートは体の痺れに顔を顰めながら、

「……なぜ……追撃しない……？」

「アンタが動けなくても、その手は動かせる。無理に攻め込むことで、その鳥籠の能力が発動するかもしれない」

己の『疾風迅雷』が完成したからこそ、カウンター型の能力を最大限警戒する。

カウンター型の能力ならば、キルアの超速を無視できる可能性があるのだ。

残った電氣量がまだ完璧に把握出来ていないからこそ、今は無理をしない。

これまでの悪癖故の『逃げ』の慎重さではなく、勝利を掴むための慎重さ。

慎重過ぎたとしても、その遅れを取り戻せるだけの速さ。

そして暗殺者の如く、絶対的な好機を逃さずに確実に一刺しを当てる。

仕留められなくても、その一撃を次の好機への『楔』とする。

キルアはようやく、己が培ってきた経験を十全に活かせる能力と戦術を生み出したのだ。

後はこれを極めていくのみ。

(今充電できる電気量はもちろん、俺のオーラ総量もシユートより下。電気に頼り切るな。オーラと自分が培ってきた全てを使い！)

キルアはもう自覚していた。

自分の目標とする姿が、追いかけていた背中が、ラミナであったことを。

様々な能力を持っていながらも、それに頼り切らずに身体能力や念の基礎を高め、暗殺術と体術を組み合わせる。

それによつて、状況に合わせて念能力と体術を交互に囿に出来、攻め筋を何倍にも増やす。

キルアは攻め筋の多様性はラミナ以下かもしれないが、能力の応用の幅はラミナにも負けず、限界を超越した速度はラミナにも勝ると考えている。

しかし、それは同時にシルバやゼノ、ゾルディック家の『業』にも通じる道でもあった。

だが、キルアはその『業』から逃れるのではなく、従えることを選んだ。

(能力は使い方。俺の中にあるゾルディックの『業』も、俺というハンターを作り上げる糧にすればよかつたんだ。それは俺が『結局暗殺者にしかなれない』って証明するものじゃない。その程度のことには気づくだけでよかつた)

己が何者であるかを決めるのは、血筋でも、身に付けた業でも、犯した罪でもない。

己の意志である。

暗殺術を使おうが、殺さないように使えばいいだけのことだったのだ。

ただそれだけで、キルアを未だ縛っていたイルミの呪縛はいとも簡単に消え去った。

「っ!!」

シユートは再び3つの手をキルアに飛ばす。

キルアは【凝】で両手にオーラを集中させ、素早く2つの手を躲し、最後の1つの手を弾く。

特に異常が起きないことを確認したキルアは、【神速】を発動して『電光石火』で一瞬でシユートに詰め寄る。

シユートがキルアを認識した時には、すでに全身に衝撃が走って後ろに吹き飛ばされていた。

(は、速すぎる……! まさに……雷の如き速さ……!)

シユートは背後にあった樹に背中から激突し、地面に尻から崩れ落ちる。

痛みと痺れに顔を顰めながらも上げると、

爪を伸ばした右手刀を構えたキルアが、すでに目の前にいた。

キルアは右手刀、特に爪先に電気のオーラを集中させる。

「!？」

シユートが目を見開いたのと同時に、キルアは超速の右手刀を真横に振り抜いた。

ジツツツパツアン!!

何かが焼け付く音、何かが弾ける音が響く。

直後、シユートがもたれ掛かっていた樹が、シユートの頭のすぐ上の辺りで切り飛んだ。

切断面は焼き焦げたように一部が黒くなっていた。

【神速】『雷斬』。

身体操作で爪を尖らせた手刀の指先に電気のオーラを集中させ、『電光石火』で超速の斬撃を放って焼き切る。



ラミナを思い浮かべて創った、キルアの『殺す覚悟』を体現した技である。

イメージが鮮明故にその威力は絶大だが、まだ上手く調整できず、一度使えば溜めていた電気を全て使い切ってしまうのが今後の課題ではあるが。

「……これで俺はもう空だ。まだやる？」

「……いや、もう十分だ。どう考えても、今の一撃で俺は死んでいた。俺の……負けだ」

シユートは大きく息を吐いて、身体から力を抜いて項垂れる。キルアも大きく深呼吸をして、ヨーヨーを拾いに行く。

シユートも外した袖を回収する。

「ゴンとナツクルの所に行くか……」

「……割符はどうする？」

「2人の決着次第さ。言ったら？ ギンが行かないなら、俺も行かない」

「……」

「あんたとナツクルの能力、教えてもらってもいい？」

「……ああ」

シユートは大人しく自分の能力と、ナツクルの能力を説明する。

ただしナツクルの【天上不知唯我独損】については簡単な概要だけを説明した。

それを聞いたキルアは一瞬顔を顰め、すぐに悟ったような表情に変わって夜空を見上げた。

（……無理だ。ゴンじゃ……ナツクルに勝てない）

ナツクルの能力は、今のゴンには天敵に近い能力だ。

体術、念の熟練度、実戦経験。

その全てにおいてナツクルに劣っているゴンでは、どうやってもナツクルの能力発動を防げない。

そして、その能力を解除するにはナツクルを倒すしかない。

だが、ゴンの実力全てを把握していると言ってもいいナツクルに能力なしでも勝てる可能性は4割にも満たない。

それなのに時間制限のある能力など、焦燥に駆られたゴンでは下手をすれば勝率1割を切る恐れすらある。

故に、ゴンは……ナツクルに勝てない。

(……そうか……。だからラミナは、何も連絡してこなかったのか……)

ナツクルやシュートの能力をラミナも知っていたのならば、ゴンが勝てないことは容易に想像できるだろう。

そして、キルアは勝とうが負けようが、ゴンの傍から離れないだろうことも。

それでも、キルアは一縷の望みを賭けて、ゴン達の元へと向かう。森から出たキルアとシュートの目に映ったのは、

両手を握り締めて複雑そうな顔を浮かべて見下ろしているナツクルと。

その足元で崩れ落ちて泣いているゴンの姿だった。

それにキルアとシュートは全てを察する。

キルアは胸が張り裂けそうな感情に襲われ、それを必死に抑え込みながらポケットから割符を取り出して、シュートに差し出した。

シュートはやはりその割符を手にするのは躊躇したが、

両目尻に涙を溜め、唇を噛んで湧き上がる感情に必死に耐えているキルアの姿を見た直後、無意識に手を伸ばして割符を受け取った。

(……俺は……譲られたんじゃない……。託されたんだ)

そう感じたシュートは、受け取った割符を握り締める。

涙を拭ったキルアはゴンの元へ歩いていく。

それぞれに複雑な決着を迎えた4人。

だが、そんな4人の想いを嘲笑うかのように。

翌日、その時がやってきた。

## #104 タンジョウ×ノチ×カイサン

弟子達の期日当日。

ラミナ、モラウ、ノヴは日課となったキメラアントの巣を観察していた。

「変わりなしってか。奴らが籠城を始めて今日で6日目。早けりゃ、そろそろ餌が尽きて新たに調達する必要があるが出てくる頃合いだが……」  
「もう少し籠城するでしょう。籠城を止めるならば、また兵隊長以下が率いる隊やあの目玉だけの念獣が出てきて様子見をするでしょうからね」

「やな。空を飛べる蟻すらも出て来んし、抜け出す兵隊蟻もおらん。まだ余裕がある証拠やろ」

「まあ、弟子共を待つには、余裕が持ててありがてえけどな」

「来たところで出来ることやない思うけどなあ」

「だろうが、それはそれでいい経験になるだろうぜ。ナツクルはお前に喧嘩売ってくるだろうがな」

「売ってきたら殺してもええか?」

「駄目に決まってるだろうが!! 師匠に弟子を殺していいかなんて聞くんじゃねえよ!」

「ほな、頑張ってお前が止めるこっちゃ」

「ぐ……!」

ちなみに昨日、3人で「どっちの弟子が来るか賭けよう」という話になった。

モラウとラミナが「ナツクルとシュート」に賭け、そしてなんとノヴが「5人全員が来る」という大博打に出たのだった。

「ラミナよお……お前はもう少し自分の弟子を信じてやれよ」

「阿呆。信じたところで現実が変わるかい。どう考えたって、ゴンはナツクルにもシュートにも勝てん。んで、ゴンが来れんならキルアも来ん。博打関係なく分かり切った話やでな」

「ったく……盛り上がり欠ける奴だぜ」

「そもそも盛り上がる要素ないでな」

ラミナが肩を竦めて、単眼鏡をノヴに投げ渡す。  
そして、一度念空間に戻ろうとした時、  
ゾワア!!と、突如ラミナの背筋に怖気が走った。

「!!」

ラミナは弾かれたように巢の方へと振り返った。

それにモラウとノヴも動きを止めて、ラミナを見る。

「どうした?」

「……なんか……めっちゃ嫌な気配が……」

「まさか、護衛軍が……!?!」

「いや……何かが来るっちゆう感じじゃなくて……単純にめっちゃ嫌な予感がしたんや」

眉間に皺を寄せて巢がある方を睨みつけながら言うラミナの様子に、ノヴとモラウも気のせいと口にすることは出来なかった。

「……もうちよい様子見るわ。ネテロにいつでも動けるように言う妥妥て」

「ノヴ」

「分かりました」

モラウが残り、ノヴは念空間に飛び込む。

ラミナの勘が的中したことが判明するまで、あと数十分。

ラミナが悪寒を感じる少し前。

「ギイイイイイイイ!!」

巢の中に尋常ではない悲鳴が響き渡った。

それにコルト達は目を丸くして、女王の悲鳴であることに気づいて慌てて駆け出す。

そして、先日産まれた最後の軍団長、モントウトウユピーを加えた護衛軍一同は、

「いよいよ、ですか」

「うん、王の誕生だ。でも……」

「そうだねえ。こりゃあ、女王が死ぬかもねえ。残念だけど」

念獣で女王を見守っていたアモンガキツドの視界に、腹の中で暴れ

る王と苦しみ叫ぶ女王の姿が見えていた。

しかし護衛軍一同は慌てる様子も一切なく、悠々と立ち上がって王を出迎える準備を始める。

「いや、助かったねえ。正直、餌もあと数日分しかなかったからさ。待ち構えてる連中をどうしようか悩んでたんだよねえ」

「だニヤ。下手したらキッドかユピーを隊の護衛につけようかって話になってたもんね」

「しかし、安心するのはまだ早いでしょう。早産である王の状態を確認しなければ、ここを離れられないかもしれませぬ」

「そりゃあメンドクセエなあ」

「どうなのですか？ 王は」

「シャウアップがアモンガキッドに訊ねる。

アモンガキッドは頭の後ろで両手を組んで、

「……うん。問題なさそうだねえ。元気な王様だ」

アモンガキッドの視界には、女王の腹を破り裂いて誕生した王が師団長相手に話をしていた。

すると、女王の状態に気づいたペギーが慌てて駆けつけようとしたが、王の尻尾が素早く振られて頭を一瞬で吹き飛ばした。

「あらら……」

「どうした？」

「頑張ってくれてたペギー君が死んじゃった。女王想いのいい子だったのに、残念だねえ」

「それはともかく、少し急ぎますよ。これ以上、王を待たせるわけにいきません」

「だニヤ」

やや駆け足気味で女王の間へと向かうアモンガキッド達。

到着すると、更に死体が一つ増えており、コルトが冷や汗を流しながら王の尻尾を拭いていた。

「メシはどこだ？」

王が誰に対してでもなくそう呟いた直後、アモンガキッド達は跪いて王に声をかける。

「こちらで御座います」

その声に王や師団長達が、護衛軍に顔を向ける。

「お食事の用意は出来ております」

「これからは私共4人が王の手足となり」

「王が望むもの全てを手に入れ」

「王の望み全てを叶えまする」

「何なりとお申し付けくださいいな」

シャウアップ、ネフェルピトー、モントウトウユピー、アモンガキツドが順番に言葉を紡いで忠誠を示す。

それに王は笑みを浮かべて頷き、ネフェルピトー先導の元、移動を始める。

それを呆然と見送ったコルト達師団長は、女王の呻き声に正気に戻って慌てて駆け寄る。

「女王様!!」

「とにかく止血だ!!」

「オクターー!」

「うむ!」

コルトはもちろん、普段不真面目なチートウも真剣な顔で素早く動き、コルトは近くにいたタコ型の師団長オクターーに声をかける。

テイルガやビホーン、ホワツベも駆け寄り、出来ることを考える。

「どうだ!? 容態は!?!」

「酷いな……。かなり悪い」

オクターーは女王を一目見て、顔を顰める。

「複数の臓器が通常の治療では修復不可能な程、潰されている。このままでは……」

「!! ネフェルピトー殿に声をかけてくる! 出来る限りの治療を!」

「うむ! チートウ、ビホーン! 持ってきてほしいものがある!」

コルトが駆け出し、オクターーは慎重に女王の臓物を動かして傷を確認しながら指示を出す。

テイルガは自発的に動いて、周囲の兵隊蟻を下がらせる。

そして、周囲を素早く確認して、  
(ハギヤ、ザザン、マンデイス、ウエルフィン……。叛逆の恐れがあつた師団長が来ていない)

ティルガは女王の姿を見て、

(……無理だ。たとえ命を繋いだとしても、それでも長くないし、新たな王や兵隊蟻を産むだけの力は残らない。女王は死んだも同然……！ 引き金は引かれた！)

ティルガは恐れていた秩序の崩壊が始まったことを悟ったのだつた。

コルトはネフェルピトー達に追いついた。

「ネフェルピトー殿！」

「ん？」

「おや……」

コルトの呼び声にネフェルピトーとアモンガキッドが足を止め、シャウアップフが案内を引き継いだ。

「女王様の御命が危ない……！ 御力を貸して頂きたい!! あの男を修復した能力を！」

「あらら……」

「……彼はねえ、ボクにとって必要だからやったことなんだ」

アモンガキッドとネフェルピトーの反応に、コルトは嫌な予感が胸の中で大きくなっていく。

「王が産まれたらさー、彼女はもうボクらには関係ないんだ」

「言つたでしょ？ コルト君。王が産まれたら、おいちゃん達と君達は別の軍になるってさ。残念だけど、おいちゃん達はもうそつちに手を貸す義理がないのよ」

「……!!」

そして2人は揃って、コルトを地獄に叩き落とす言葉を口にした。

「女王は、もう要らない」



そう告げて、ネフェルピトーとアモンガキッドはコルトに背を向けて歩き去る。

コルトは怒り、絶望、悲観、焦燥など様々な感情に襲われながら、足取り重く来た道に戻る。

「やはり、駄目だったか」

「……ティルガ」

ティルガが腕を組んで、壁にもたれ掛かっていた。

コルトは顔を顰めて、両手を握り締める。

「オクターでは止血縫合の応急処置で手一杯だそうだ。潰れた臓器までの修復は無理だろう」

「……そうか。……ならー!」

「外にいる人間達に頼るか？ 我らを殺しに来た者達に。我らが殺してきた者達の同胞に。我らの仲間を殺してきた敵に。それが何を示すか、理解しているのか？」

「……ああ。女王様が助かるならば、喜んで俺の命を差し出す!!」

「……」

ティルガは数秒目を瞑り、懐から折り畳んだ紙を取り出してコルトに投げる。

コルトはキャッチして、訝しみながらもその紙を広げる。

それは巣を中心に描かれた地図のようで、巣から離れた場所にバツ印が記されていた。

「……これは」

戸惑いながら顔を上げたコルト。

ティルガはコルトに背を向けて、

「人間達が潜んでいる場所だ。白旗を持って行けば、話は聞いてくれるやもしれん」

そう言つて、ティルガは歩き出す。

何故そんな情報を知っているのか。

尋ねたかったが、まずは女王の命を救うことが最優先だと意識を切り替え、急ぎネテロ達の元へ向かうために駆け出した。

ラミナは、巢を単眼鏡で観察していた。

その隣でモラウはいつでも連絡して、かつ逃げられるように備えていた。

その時、ラミナの目に衝撃的な光景が映る。

「っ!! 巢の壁が一部吹き飛びよった……!」

「なんだと……?」

空いた穴から、尻尾が生えた人型のキメラアントが現れ、尻尾を壁に突き刺したかと思うと、腕を組んだまま体を持ち上げ、直後一気に巢の頂上まで跳び上がった。

その後から蝶の羽を持つ男型のキメラアント、そして赤黒い肌をした長身のキメラアントが翼を生やして飛び出したかと思うと勢いよく壁に激突し、最後に猫のようなキメラアントと、あの戦った護衛軍のキメラアントが姿を現して、念獣に乗って頂上に上がる。

「……空いた穴から5匹の蟻。内1匹はうちと戦うた護衛軍と思われる蟻や」

「……おいおい、まさか……」

「ネテロに連絡せえ」

ラミナは全力で顔を顰めて単眼鏡を外し、最悪の結果に苛立ちを抑えきれずに単眼鏡を握り潰した。

「王が産まれよった。まずは女王と師団長共を掃討する用意すんで」  
戦力は王と護衛軍が圧倒的に上だが、やはり数と繁殖力の脅威を無視するわけにはいかない。

しかも周囲の餌の少なさから大移動する可能性もある。

一纏まりになっっている今が叩き潰すチャンスなのだ。

モラウが頷いて連絡を取ろうとすると、

「っ! なんか飛んで来よる!」

巢の方からキメラアントと思われる影が、まっすぐこっちに向かってきていた。

モラウはすぐさま逃げる準備をするが、ラミナはキメラアントがある物を持っていることに気づいた。

「ちよい待ち。……白旗あ?」

「はあ?」

ラミナの言葉に、モラウも顔を向ける。

そこには明らかに白旗を握った鳥型のキメラアント、コルトが飛行していた。

「頼む! 話を聞いてくれ!! こちらにはもう敵意はない!」

「……どうするんや?」

「聞くだけ聞こうぜ。王の話も聞けるだろうしよ」

「……話せ」

「我々は降参する!! ただし、条件がある! 女王を助けてくれ!

もう女王に子を産む力はない!!」

「……王が産まれたからか?」

「……そうだ。すでに王は産まれた。女王の腹を力づくで引き裂いて」

「!!」

「女王はすでに瀕死の重体だ! このまま女王が死ねば、もう師団長達や兵隊蟻達の枷が完全に解けて収拾がつかなくなるぞ!!」

「……巢を飛び出す奴が出るんか?」

「確実に出る。もうすでに動き出した師団長がいてもおかしくはない! そうなれば世界中に散って、自分の国を造ろうとするはずだ」

「兵隊蟻に生殖能力ってあんのか?」

「ジンの話では女王が死ねば出来るようになりよるらしいで。種の生存本能って奴やな。別にキメラアントだけに見られることやない。

……人間も混じつとるんや。すでに生殖能力を失った女王を、死んだとみなす可能性は十分あり得る」

「……お前さん、名前は?」

「……コルト」

「よし、コルト。今からお前を俺達のボスの所に連れて行く。今と同じ話をボスにしてくれ。ただし、信じるかどうかは分からない。そして、信じてもらっても、お前が生きて帰れる保証はない。それでも行くか?」

「無論だ! 一刻も早く頼む!!」

コルトは一切躊躇することなく頷いた。

それにラミナはため息を吐いて、モラウは頷いて携帯電話を取り出して、ノヴに連絡を取る。

その後、ノヴが現れて、ネテロがいる念空間への入り口を開く。

モラウ、コルト、ラミナ、ノヴの順に念空間に入り、すぐさま話し合いを始めるのであった。

その頃、巢では。

オクターは女王の傍に控えていたが、それ以外の師団長達はい先ほど目の前で見せつけられた恐怖の残骸を見下ろしていた。

それはペギーだったモノと、タンドルだったモノ。

ビホーンは顔を顰めて、

「信じられねえぜ、全く。部下を……仲間を喰いやがった」

「そいつは間違いだな。あれは俺達とは全く別の生き物だ。恐らく自分以外の生き物は全部餌さ」

ホワツベも嫌悪感を顔に浮かべて言い放つ。

そう、王はペギーとタンドルを殺しただけではなく、喰ったのだ。

『ふむ……やはりマズい。だが、肉団子よりはマシか』

『では、ご軽食が済み次第、ここを出て餌を探しに行きましょう。我々もお供致します』

『うむ。よかろう』

と、軽い腹ごなし気分で2人の死骸を食い散らし、満足したら女王や他の師団長に目も向けずに去っていった。

ビホーンやホワツベ、チートウ達はそれを遠巻きに見ていることしか出来なかった。

チートウは王達が旅立ったことで、いつも通りの雰囲気に戻っており、すでにペギー達の死骸に何の感情も向けずに、腰に両手を置いて口を開く。

「ところで、俺達はどうする？ このまま女王様が死ねば、ここにいる理由はなくなるぜ？」

その言葉に答える者はおらず、全員がお互いの顔を見合わせる。

「くくく！」

笑い声が響き、ビホーン達は顔を向ける。

そこにいたのは今まで姿を見せなかったハギヤとザザンだった。

「もうすでに意味はねえんじゃねえか？」

「女王にはもう生殖能力はないんでしょ？」

「なっ!？」

「それもそーか」

「うむう……確かに新たな王も産めぬし、かといって重体の女王を動かすことも出来ぬ。何より、もはや餌もまともに調達も出来ぬ。オイラ達が女王に命を捧げる理由はないか……」

「!?!」

ハギヤとザザンの言葉にビホーンとホワツベが目を丸くするが、ヂートウやビトルファンが同調して更に目を見開く。

ハギヤも大きく頷いて、

「もう女王に王国を造るのは不可能！ ならば、俺達それぞれが王を目指すべきだろう？ 俺達は好きにさせてもらおうぜ！」

そう言うハギヤやザザンの背後に、フラツタやヒリンなど兵隊長達が姿を見せる。

ハギヤ達の行動に追従すると示すかのよう。

ビホーンはそれに声を荒らげる。

「お前！ 自分が何言ってるか分かってんのか!? そんな勝手に許されると思うか!？」

「ふん！ 俺達だけじゃねえぜ、きつと。ここを出たいと思ってるのはよ」

「なにい……!?! っ!?! お前ら……!?!」

ハギヤがそう言い、ビホーンが更に目を吊り上げるが、その隣をヂートウやビトルファン、ブロヴーダなど半分以上の師団長がハギヤ側に歩み寄っていき、ビホーンは唾然と目を見開く。

結果、ハギヤ、ザザン、ヂートウ、グローク、ブロヴーダ、ウエルフィン、マンデイス、メレオロン、ビトルファンの9人が『王』を指すことを表明した。

この場に残ったのは、ビホーン、ホワツベ、テイルガの3人のみ。その事実にはビホーンとホワツベは顔を強張らせて、

「分かったか？ どっちが少数派かかってことがよ」

「それにさあ。そもそも女王が死にかけの今、誰が私達を許さないつてのよ？ 王や護衛軍はいないし。そもそも、もう王達は私達に命令する立場じゃないじゃない」

ザザンが小馬鹿にするように薄ら笑いを浮かべて言い放つ。

それにハギヤや他のキメラアント達も頷き、

「そういうこつた。ここまできたら師団長や兵隊長とかだつて、もう意味なんてねえよ。安心しろよ。別に女王の治療の邪魔もしねえ。する価値もねえからな。がはははは!!」

ハギヤは笑いながら身を翻して歩き出す。それにフラツタやヒリン達も続き、ザザンやヂートウ達も後に続く。

「じゃあな！ せいぜい人間共に殺されねえように気をつけな！」

と、言い残して。

それを見送ることしか出来なかったビホーンは、苛立ちを隠さずに吐き捨てる。

「くそっ!!」

「やつぱ……こうなつたか。こりや、もう俺達の隊の連中も止められないな」

ホワツベはため息を吐く。

その予想通りビホーンやホワツベ達の隊にいた兵隊蟻達も、続々と捨て台詞のようなテレパシーを飛ばしてきて巣を飛び出して行った。

テイルガといつの間にか傍にやって来ていたブラールは巣に残り、他の隊からはコアラ型の兵隊長キメラアント、コランがわざわざ巣に残った。

「……そういえば、コルトの奴はどうしたんだ？」

「あいつなら巣を飛び出したままだぜ」

「こんな時にどこ行ったんだ？」

「……人間達のところだ」

柱に腕を組んでもたれ掛かっていたテイルガが、ビホーンの疑問に

答える。

それにビホーンはもちろん、ホワツベも目を丸くする。

「人間の!？」

「人間ならば女王の治療が出来る可能性があるだろうからな。それに賭けたようだ」

「大丈夫なのか？」

「さあな。そこまで我に分かるわけがない。人間からすれば女王を助けるメリットがないからな」

「じゃあ、なんで残ってるんだ？」

「巢を出た所で人間達が待ち構えている可能性が高い。ならば、コルトが見事交渉を成立させれば、こちらの方が安全になるかもしれない。それに……流石にあの女王をこのまま見捨てるのは心情的にな」

体を欠損しながらも必死に王を育もうとしてきたのに、その結果が王に腹を引き裂かれて、心配どころか感謝すらされずに見捨てられ、女王を守るべき兵隊蟻達からすれもほとんど見捨てられた。

たとえ女王に食われた人間の記憶があるとはいえ、今の自分があるのは間違いなく女王のおかげだ。

それを生殖能力を失っただけで見捨てるのは、キメラアントらしいのかもしれないが、テイルガからすれば薄情過ぎると思ってしまうのだ。

そんなテイルガの感傷も空しく、その数時間後にコルトが帰ってきた時には、巢に残っているのはオクター、ビホーン、ホワツベ、テイルガ、ブラール、コラン、そして12匹ほどの雑務兵しか残っていなかった。

ノヴの念空間に入ったコルトは、ネテロと向かい合い、ラミナとモラウに伝えた言葉をもう一度伝えていた。

「頼む!! 俺の命でいいならば捧げる! 王や護衛軍の情報も全て話す!! だから、女王を助けてくれ!!」

「……」

ネテロはまっすぐコルトを見据えて、話を全て黙って聞いていた。その様子をモラウとノヴは固唾を飲んで見守り、ラミナは壁際で腕を組んで座っていた。

(まあ、普通に考えたらありえへん取引やわな。女王こそ一番殺したい存在なんやし)

今は生殖能力が無くなっているかもしれないが、助けた後に回復する可能性も否定できない。

それだけの生命力を持っていることは十分考えられる。

「……いくつかよいかな？ コルトとやら」

ネテロは一切表情を変えずに、顎髭を撫でながら口を開く。

「たとえば我らであっても必ずしも救える保証は出来ん。それは了承してもらいたい。人間サイズのキメラアントは、我らも初めてじやからの」

「……ああ」

「そして、女王を治療するには巢の中に人間を送り込まねばならん。その場合、お主以外の蟻達に襲わぬように説得することは可能なのかのう？」

「……保証は出来ない。だが、その時は……倒してくれて構わない」

「……ふむ。では、最後じゃが……」

「ああ」

「女王を救えなんだとしても、お主らは我らの監視下に置かれることになる。それは、どうかの？」

「……俺はそれで構わない。だが、他の兵達に関しては……」

「もし、野に出て人間を襲う可能性があるかと判断した場合、殺すことになる。以上の点が受け入れられるならば、儂らも全力を尽くそう。どうかな？」

ネテロの言葉に、コルトは一度顔を俯かせたが、すぐに決意を固めた顔を上げる。

「全て受け入れる。女王の命を救う可能性があるのならば、迷うまでもない」

「……相分かった。お主の覚悟、確かに受け取った」



ネテロは力強く頷いて、

「ノヴ、モラウ、一度協会に戻るぞ。研究チームと医療班が手配出来次第、巢へと向かってもらう」

「はー。」

「ラミナ、お主はどうする?」

「……流石に協会に行く気はせん。やから、NGLで巢から出てきた蟻共を始末出来るだけ始末するわ」

「うむ」

「なあ、飛び出しそうな師団長の中に、海でも活動できる奴とかおるか?」

ラミナも立ち上がって、コルトに声をかける。

コルトは頷いて、

「いる。グロークという鰐の顔を持つ師団長だ。他にも兵隊長以下にそれなりに水中でも動ける者も存在する」

「ふうん……。なら、そっちは【シーフ】達に頼むか。おい、ネテロ。流石にNGLを出た蟻共の対処は他のハンターも出せるやろ?」

「うむ。手配させるつもりじゃ」

「なら、逃がしてもうた空を飛べる奴や陸型の蟻はそっちに任せればええか……。はあ、やからさっさと援軍呼べっちゅうたのに」

ラミナはため息を吐いて愚痴を言い、出口へと向かう。

その後、ラミナは目につく限りの兵隊蟻達を仕留めていくが、師団長や兵隊長格の姿は見つけることは出来なかった。

ラミナの奮戦空しく、キメラアント達は世界中へと旅立ってしまったのだった。

ナツクルとシュートはNGLの国境を越えた辺りで待機していた。ゴンとキルアは国境前まで見送りに来て、つい先ほどカイトの仲間と共にドーリ市へと戻っていった。

ナツクルは腕を組んで盛大に顔を顰めて、苛立たし気に指で上腕を何度も叩いていた。

理由はゴンから託されたカイトの救出に早く行きたいのと、ラミナがNGLにきていることを聞いたからだ。

「ちっ……い！ 会長もボスも何考えてやがんだ？ あんな奴呼ぶくれえなら、俺らやゴン達を呼ばばいいだろうが……い！」

「……確実に蟻を倒すためだろう。お前は蟻達を殺さないために行くと言った。俺は殺せる好機を怖気づいて逃してしまう可能性があり、ゴンは実力不足。キルアは今ならばともかく、一か月前はゴン同様未熟さが目立っていたからな。その点、ラミナならば殺すことに戸惑うことなく、実力も確かだ。失敗が許されない討伐任務には最適と言える。プロハンターでもあるしな」

「けっ……い！」

シュートの正論にナツクルは頭では同意しても、心ではやはり受け入れられなかった。

そんな険悪な雰囲気の中、2人の前にノヴが現れる。

「ノヴさん……い！ 状況は——!？」

「数時間前、王が産まれた」

「!!？」

単刀直入な言葉にナツクルとシュートは目を丸くする。

「王が産まれる際に女王は瀕死の重体になったようだな。師団長の1匹が女王の治療を条件に降伏、情報提供などの協力を申し出て、会長はこれを了承した」

「蟻が降伏……!？」

「だが、多くの兵隊蟻達が巣から飛び出している。我々が女王蟻の医療チームを連れてくる間、ラミナが出来る限り討伐していたが師団長

クラスは見つけられなかったそうだ」

「……!!」

「それすらも気にはなるが……まずは巢に向かい、女王蟻の治療と情報収集をすることとなった。すぐに向かう」

ノヴが地面に手を翳して、念空間への入り口を開ける。

想像以上に悪化していた事態にナツクルとシュートは険しい顔を浮かべながら、入り口に飛び込んで巢近くの岩場に移動する。

そこにはモラウ、ラミナ、そしてコルトが険しい顔で巢の方を見ていた。

「ボスー」

「……おう、来たか。見ろよ」

モラウは軽く挨拶して、巢の方を顎で示す。

ナツクルとシュートが顔を向けると、巨大な巢から大量のキメラアント達が飛び出していく光景が飛び込んできた。

「なっ……!?!」

「あれ全てが……」

「ああ、キメラアント共だ。ラミナとコルトの話では、最下級の戦闘兵ばかりで師団長とかは見当たらねえそうだ」

「戦闘兵は言葉も話せず、思考力も低い奴が多い。師団長や兵隊長達が出て行き、さらに女王が瀕死である事実を、認識して自分はどうするか判断するまで時間がかかったんだ」

コルトの言葉に、ナツクルとシュートはモラウに目を向けるが、モラウは力強く頷いて信用できると示す。

ナツクルとシュートは師匠が判断したことならばとすぐに受け入れて、ラミナへと顔を向ける。

「久しぶりだなコラ。オウ?」

「せやな」

「ゴンとキルアに顔を見せてやらねえのかよ? アアン?」

「それどころちやうやろ。顔見せたところで、ここに連れて来れるわけちやうし」

「っ! あいつらがどんだけ苦しんで、どんだけ頑張って、どんだけ悔

しがってると思ってたやがんだコラア!!」

今にも殴りかかりそうな勢いで、ナツクルが叫ぶ。

ラミナは呆れた表情を浮かべて、

「……アホらし……」

「んだとコラア!!」

「命がけの世界が苦しいわけないし、頑張るんはどの世界でも当然やし、実力社会で悔しさを知らずに強うなれるわけないやろ」

「っ……!!」

「あいつらはプロハンターでも油断すれば簡単に死ぬことなんざ、何度も見えてきとるはずやし、うちは伝えとる。一回殴ったこともあるしな。むしろ、今回で思い知るとか遅すぎるわ。なんで、そんな未熟モンを慰めんとあかんねん」

「この……!!」

「やめねえか、ナツクル。ラミナの言ってることは正しいだろうが」

モラウがナツクルの肩を掴んで止めて、指摘する。

ナツクルは齒軋りをして両手を握り締め、ラミナを睨みつける。

それにラミナは鼻でため息を吐いて、

「やっぱ、甘さは抜けとらんか。ま、ゴンら相手じゃあないか。と

ころでシユート」

「……なんだ?」

「お前、キルアと戦うたんやろ? あいつ、まだ能力創つとらんかったんか?」

ラミナの質問に、シユートは苦々しく眉間に皺を寄せる。

それにラミナはもちろん、師匠であるモラウも見逃さず、ラミナが語っていたある推測通りになったのだと見抜いた。

「シユート。お前、キルアに情けをかけられたな?」

「……いえ」

モラウの咎めるような言葉に、シユートははつきりと首を横に振った。

ナツクルが説明しようとしたが、モラウが手を上げて抑え、分かっているとばかりに小さく頷く。

それを見たナツクルは、ギリギリで口を閉じる。

「確かに俺はキルアに負けました。しかし、彼は戦う前から言っていました。『ゴンが負けたならば、俺も行かない』と。『俺がゴンを支える』と。だから、俺は……俺達はゴンとキルアからカイト救出を託されたんです……！　だから……俺達はたとえモラウさんに反対されても、カイトの救出に向かいます」

シュートは緊張で汗を流しながらも、はつきりとモラウに言い放つ。

ナツクルもモラウの隣で大きく頷く。

モラウは腕を組んで、1分ほど黙ってシュート達を見つめていたが、

「くっ！　わはははははは!!　言うようになりやがったじゃねえか!!」

と、大笑いを始めた。

シュートとナツクルは啞然として、ノヴは小さく笑みを浮かべて、ラミナは苦笑する。

「それでいいんだよ!!　会長と俺がお前達に与えた試練は『割符を手放さないこと』!!　ゴンとキルアと違って、『倒して奪ってこい』とは言ってねえ!!」

モラウの言葉に、シュートとナツクルは目を丸くする。

「大事なのはどんな経緯であれ、手にした割符に誇りを持ち、俺達が何と言おうとそれを貫く意志を持つことだ!!　それがプロハンターにとって何よりも必要な心構え!　シュート、お前にはそれが足りなかった!!」

「……」

「だが!!　宣った以上、もう戦うのが怖いとか、相手を殺せねえとか言わせねえし聞かねえからな!!　カイト救出はお前らに全て一任する!!」

カイト救出に関して、どんな結果になろうと、どんな事態になろうと、ゴンとキルアが絶望することになろうとも、基本的にモラウ達は介入せずにナツクルとシュートがその責を全て負う。

それは弟子ではなく、一人前のプロハンターとして扱うと宣言され

たも同意だった。

ナツクルとシュートは、顔を引き締め、力強く頷く。

話が纏まったところで、ラミナがコルトに声をかける。

「なあ、あの巣の中にまだ人間っておるんか？」

「……餌にされる予定だった人間。それと兵隊蟻の戦闘訓練人形として、護衛軍のネフェルピトーによつて修復されて操られている人間が1人いる」

「修復？」

「ネフェルピトーは治療する能力とその人間や兵隊蟻を操る能力を使っていた。その訓練相手とされていた人間は、我々と戦わされて傷を負つても、すぐに治療され、また戦わされていた。……だから、女王様の治療もお願いしたのだが……」

「断られた、と？」

「護衛軍は王が産まれれば、女王や俺達とは別の指揮系統になる。それを理由に……もう女王は要らないからと……」

悔し気に顔を顰めるコルト。

それにナツクルは怒りの表情を浮かべ、両手を握り締める。

「護衛軍の連中は、お前らと違って蟻の本能に忠実っちゅうわけか。厄介なこつちや」

「まあ、逆に言えば、王と護衛軍は必ず一緒に行動しているってこつたな」

「少なくとも、腰を据えるまでは被害は局所的なものになるかもしれないね」

「あんな期待できんけどな」

「……そろそろ行こう。今ならば巣の中も手薄のはずだ」

コルトの言葉に、全員が頷いて森の中に飛び込んで移動を開始する。

コルトも目立たないように低空飛行で先導し、ラミナ達は軽やかな足取りでコルトから離されることなく付いて行く。

10分ほどで到着したラミナ達。

ノヴが出口を設置して医療チームと研究班を迎えに行っている間

に、コルトが様子を確認しに行く。

女王の間に続く広い部屋にコルトが足を進めると、ビホーン達が出た。

「コルト!!」

「無事だったか!」

「女王様は!?!」

「まだ生きてる。けど、やっぱりもう手の施しようがないな」

「それに……他の連中は行っちゃったぜ」

「俺達やお前の隊の連中も、ほとんどが他の隊と合流して出てったよ」

「逆に他の隊から、こっちに残った変わり者もいるがな」

「そうか……。だが、結果的には揉めることがなくてよかったかもしれん」

コルトはそう言つて、離れた所にいたモラウに顔を向けて頷く。

その直後、ネテロが呼びかけた医療班達が機材を大量に運び込んできた。

ラミナやナツクル達も運ぶのを手伝つて、医療班は女王の間に速やかに機材を設置していく。

ラミナやモラウ達も女王の状態を確認する。

「……こりゃひでえな」

「この状態で数時間も生き長らえるとは……」

「これを自分のガキにやられたつてのによ……」

(……奇跡的に心臓と肺は無事。けど、それ以外の臓器はほぼ全壊で、もう血なんざほぼ体を巡つとらん。この状態で数時間、か……。こちら、無理やな……)

ラミナはすでに女王は、キメラアント持ち前の生命力で生きているだけにすぎず、首を斬り落とされていられるのも同然だった。

左目に傷痕がある女性医師が、女王の横に屈んで傷の状態を確認してオクターに顔を向ける。

「……止血縫合はあなたがやったの?」

「うむ。しかし、私ではこれ以上の処置は無理だ」

「私達だって似たようなものよ。期待しすぎないで。とりあえず、人

「工臓器を片っ端から付けてくわよ」

「俺の臓器は使えないか!? 血も全部使ってくれて構わない!」

コルトが藁にも縋る想いで言う。

しかし、女性医師は首を横に振り、

「残念ながら、キメラアントは1世代違ったら全く別種の生き物。同世代でさえ、周りの仲間を見ればどれだけ作りが違うか分かるでしょう?」

「っ……………」

「気持ちだけ受け取っておくわ。全力を尽くすから祈って。奇跡的に全ての臓器が機能するように」

「っ! (それだけなのか……………! 俺に出来ることは……………!)」

コルトは悔し気に顔を歪めて俯き、膝元に置いていた両手に力を籠める。

その背中をモラウやナツクル、シユートは同情するように見つめており、ラミナはすでに女王から興味を失くして、周囲のキメラアント達に意識を向ける。

特に少し離れた所にいるティルガ、ブラール、コランの3人に。

(……………あの虎と鳥の蟻。コルトや他の師団長と比べてオーラの静けさが上やな……………。あのコアラはオーラはともかく……………佇まいや小さな動作に殺し屋の気配を感じる……………。前世持ちか?)

そんな事を考えていた時、

『誰か……………誰かおるか?』

コルトや他のキメラアント達が顔を跳ね上げる。

それに女性医師やモラウ達も気付く。

コルトが前のめりになり、

『は!! 此方に控えております!! 何なりとお申し付けください!!』

「どうした?」

「……………信号ね」

「うむ。女王は我々のように話すことはしない」

「通訳してくれる? 何か救命のヒントがあるかもしれないわ」

女性医師の言葉に頷き、オクターが通訳を始める。



『息子は……私の息子は無事か？ どこか……身切れた所などはなかったか？』

自分の事よりも、王の事を最初に口にする女王。

それにコルトはもちろん、モラウ達も初めて聞くキメラアントの女王蟻の想いに少なからず衝撃を受ける。

『し、心配ご無用で御座います！ 大変お元気で、今は………今は護衛軍を連れ、女王様の傷に効きそうな薬草を探しに出られました』  
「実際には師団長を殺して食った後、新天地を求めて旅立った。二度と戻ることはないだろう」

「な……!? 食っただと……!?」

「王は……奴は女王様の身など、芥ほども気にしていない」

ナツクル達は啞然とするが、その後の女王の言葉に更に驚かされる。

『いけない!! すぐに王を旅立たせなさい!!』

もはや目も見えていない死に体の女王が、明らかに最後の命を燃やして力強く意志を発したことをラミナ達も感じ取る。

『私などに構っている暇はありません!! あの子には世界を統べる可能性があるのでから!! ……もう一度聞きます。王は、無事なのですね?』

『……はい』

『よかった……。早くに生まれ過ぎたからとても心配だったのだけでも、私は使命を全うすることが出来た……。それだけで十分です……』

『何をおっしゃるのです!! 女王様は我々の道標です!! 貴女がいなければ、皆迷い果ててしまいます!!』

『自分の身体の事は、自分が一番良く分かっています。私はもう長くない。しかし、何の心残りもありません』

『やめてください!! 頼む!! 生きてくれ!!』

コルトはもはや体裁に構う余裕もなくなった。

「使ってくれ!! 俺の身体を!! やってみないと分からないだろうが!!」

女性医師に向かつて、縋る様に叫ぶ。

しかし、申し訳なさそうに女性医師は目を瞑り、

「話を、女王の話をちゃんと聞いてあげなさい」

「っ!!」

コルトは歯を食いしばる。

その時、女王が震えながら手を上げ始める。

『最後に……1つだけ、頼みがあります。名前を……考えたの……。あの子の、王のため……「メルエム」……全てを……照らす光と言う意味……です。あの子に……伝えて……』

女王は何かの手を伸ばすような仕草をして、

『私の……可愛い……コ……』

己を見捨てた王に、最後まで愛情を示し続けた健気で哀れな女王蟻は、静かに息を引き取った。

NGLを混乱に陥れた諸悪の根源。

必ず殺さねばならない危険生物。

だが、その実態は……ただただ慈愛の母だった。

「……皮肉な話やな。一番人間から遠い女王蟻が……一番人間らしく死に。一番おるべき王に見捨てられ……一番遠ざけられるべきうちらに看取られるたあなあ」

ラミナの言葉が聞こえたノヴは眼鏡を直しながら、小さく同意するように頷く。

ホワツベやビホーン、オクターも悲し気な顔を浮かべ、テイルガも黙祷するように目を閉じる。

一番女王のために動いていたコルトは、女王を見つめながら湧き上がる無力感に絶望する。

「また……守れなかった。俺は誰一人……守ってやれない!!」

コルトの言葉に、ラミナはすぐさまゴクマキと同じことが起きていると悟り、それを知らないモラウやノヴは訝しんでホワツベに声をかける。

「また、とは？ 前にも何かあったのか？」

「いや、人だった頃の記憶と混同しているんだろう」

「!?!」

モラウやノヴ、女性医師達は目を見開く。

「あ……あるのか?! 人間だった時の記憶が!?!」

「そりやあるさ。もちろん個人差はあるけどね。前世の性格はかなり影響してるし、名前を憶えてる奴だつて多いぜ。でなきや、こんな流暢に話せるかよ。すぐにさ」

「!?!?!」

衝撃的な情報に、モラウやナツクル達は啞然として顔を見合わせる。

しかし、ラミナが全く表情を変えていないことに気づき、

「ラミナ……。お前、知ってたのか……!?!」

「……そら、あんだだけ殺し回れば、1匹2匹は見かけるに決まっとるやろ。仲間が殺された時に、蟻に殺された人の記憶と混じって、今のコルトみたいに混乱して命を捨てた制約と誓約を使いよつた奴もおつたしな」

「っ!! てめえ………それを知つてて殺したのかよ!?!」

ナツクルが殴りかかりそうな剣幕で、ラミナに詰め寄る。

しかし、ラミナは一切表情を変えずに、

「当たり前やろ。それがうちの仕事やでな。死んだ人間の記憶があるうがなかるうが、今のこいつらはキメラアント。んなもん、殺さん理由になるかい。……人やろうがなかるうが、指定された『命』を殺すから【殺し屋】名乗つとんねん」

殺し屋であつて、人殺し屋ではない。

依頼主達が指定してきた対象が、たまたま全て『人』であつただけ。それだけのことなのだ。

「もちろん責任者のネテロには伝えたで？ その上で、お前ら弟子組は今回の任務に向いとらんから呼ばん方がええと進言もした。やけど、ネテロはそれをモラウ達にも弟子組にも伝えぬまま、任務を続行すると判断した。やから、うちも誰にも言わんかつたんや」

ラミナの言葉に、モラウ達も顔を顰める。  
納得は出来ないが、ただラミナを責めるのも違うことは理解した。  
そもそもラミナはネテロが呼んだ戦力ではない。  
普通の依頼ならば、ネテロやモラウ達と協力する必要はないのだ。  
ネテロ達のスケジュールに合わせる義務も義理もなかったのだ。  
だが、今回は相手が相手故に、協力体制を敷いた方がいいと判断しただけに過ぎない。

その上でネテロに報告し、ゴン達やナツクル達のことにも心を砕いて進言した。無駄死にする可能性が高かったから。

ラミナは十分すぎる対応をしてきていた。

だから、モラウ達やナツクル達が、ここでラミナを追及することは許されない。

その時、亡くなった女王を見つめていたコルトの目に、何やら動くものが目に入った。

オクターもそれに気づき、

「何か動いておる……!?!」

「触るな！俺が……俺が取り上げる……!」

コルトは慎重に女王の内臓に手を差し込む。

それにモラウ達も息を飲んで見守り、ティルガもゆつくりと歩み寄ってきた。

そして、ゆつくりと引き抜かれたコルトの両手に乗っていたのは、

豆粒のように小さな胎児だった。

本来ならば生きれるはずもない大きさの胎児は確かに動き、そして……。

「オギャア！ンギャア！」

と、しつかりした泣き声を上げ、女王の間に響き渡る。

その確かな小さい命に、コルトは新たな希望を見出し、涙を流す。

「……この子は……俺が守る。絶対ッ……今度こそ……必ず……!!」

新たに己に誓うコルトの姿にナツクルは涙を流す。

そこにモラウが小さく舌打ちすると、コルトに歩み寄って煙管を取り出したかと思うと、それをコルトへと向ける。

コルトはゆっくりと振り返り、ノヴやナツクル達は突然の行動に戸惑う。

「モラウ……?」

「コルト。あんたとその子、今後『人は食わない』って誓えるかい？」

その言葉にノヴとラミナは、何を考えているのかを察して、ノヴもコルトに真剣な目を向け、ラミナは呆れたように小さくため息を吐く。

「もし、誓えないなら……どこか俺の目の届かない場所に消えてくれ。だが……もし誓うなら」

コルトに向けていた煙管を背中に回し、空いた手で親指を立てて自分の胸に向ける。

「何人たりとも、あんた達には指一本触れさせねえ!! 俺の目が黒いうちはな」

かつこよく決めたように見えるが、その鼻からは明らかに鼻水が出ていた。

「ぐすっ! 約束するぜ!! ぐすっ!」

モラウのまさかの言葉にコルトは目を丸くする。

「へ、へへへ……」

それにナツクルが突然笑い出す。

「何のこたねえや……。師匠譲りだぜ。俺が甘いのはよお」

そう言いながら、泣き笑いする。

「それなら文句はねえだろ? ラミナ……!」

モラウはラミナに顔を向ける。

ナツクル達がラミナに目を向けると、ラミナの右手にはスローイングナイフが握られていた。

「っ! テメ——!」

「待て、ナツクル」

ナツクルが殴りかかろうとするが、モラウが呼び止める。

そして、モラウはラミナと正面から向かい合い、

「こいつらは俺が責任を持って監視する。もし、こいつらが問題を起こしたら俺が手を下す……！」

「……」

「だから、頼む。ここは見逃してくれ……！」

ラミナはまっすぐモラウと目を合わせ、そしてコルトに目を向ける。

それにコルトは、自分の意志が試されていると理解して、

「……誓う。俺とこの子は、絶対に人は食わない……！ 食わせない

……！」

「……」

ラミナはしばらく黙ってコルトを見つめ、コルトも目を逸らさない。

それにモラウやナツクル達は固唾を飲んで見守り、場合によっては戦うことも辞さない覚悟を固めていた。

だが、ラミナはスローイングナイフを消し、腕を組んで目を閉じる。

「……うちが殺す対象は『人に害為す可能性が高い蟻』や。ちやうなら、殺す理由はない」

「……感謝する」

「礼を言う暇があるんやったら、とつとと保護する準備せえ。いつまでも豆粒の赤子をこんなところに放置すんなや」

「ぐすっ！ そうだな。先生！ この子供を診てやってくれ！ ノヴ、俺はロカリオでこいつらを匿える場所を用意する」

「ええ」

「分かった」

「ちよいええか？ 熊、牛、タコ」

「ホワツベだ」

「俺はビホーンだ！」

「オクターじゃ」

ラミナが唐突にホワツベ達に声をかける。

「こつて、墓場とかあるんか？」

「「はっ。」」

ラミナの質問に、ホワツベ達は首を傾げ、モラウ達も訝し気にラミナを見る。

ラミナは眉間に皺を寄せながら、女王を指差して、

「やから、女王を埋葬する場所とか、してやりたい場所とかないんか訊いとんねん」

その言葉に全員が目を丸くする。

「別にキメラアント研究するんやったら、コルト達やこれから討伐される蟻共の死骸でもええやろ？」

ラミナは女性医師に顔を向けて訊ねる。

女性医師は言葉の意図を理解して、

「ええ、問題ないわ。さつきまでの治療でも十分観察は出来たから」

ラミナはそれに頷いて、またホワツベ達に顔を向ける。

「つちゆうことで、せっかくここまで女王のために動いたんや。最後まで申ったりいや」

「……そう、だな」

「流石にこのままってのはあんまりだよな」

「うむ」

そして、女王はホワツベ達の手で巣の外に埋葬された。

「メルエム」という名前を考えた想いと、ずっと洞窟や巣の中に閉じこもっていたから墓くらいは明るい外でということらしい。

コルトも手伝ったそうだったが、赤子の事も気になり、ホワツベ達が「後で墓参りでも行つてやればいい」と言つて、コルトを赤子の傍に居させた。

ナツクルも手伝おうとしたが、

「阿呆。部外者が余計な手出しすな。お前らはとつとカイトを探さんかい」

と、ラミナに尻を蹴飛ばされた。

ナツクルはブツブツ文句言っていたが、シユートにも促されてカイトを探しに行くことにした。

そこにテイルガがブラールを従えて案内を申し出る。

「その人間がカイトとやらかどうかは知らぬが、ネフェルピトールと戦った人間はその者だけだ。恐らく訓練場にまだいるはずだ」

ラミナは暇だったので、ナツクル達に同行することになった。

コルト達の対応をするために動き始めていたモラウに頼まれたのだ。

と言っても、基本的に手を出す気はなく、あくまで付き添いだ。

ノヴは医療班の護衛に残っている。

「この先が訓練場だ。入り口付近は大丈夫だが、奥に進めば攻撃してくる」

「操られても念は使えんのか?」

「オーラは使えるが、能力は使えん。思考が止まっているからだろう」

「ならば、まだ戦えるか……」

「だが、油断はするな。最初は機械的な動きしかしないが、一度触れるとネフェルピトールの能力がフルに発動する」

「どうなる?」

「ネフェルピトールが具現化した念人形が姿を現し、動きが格段に向上して複雑化する。念人形と操られている者は糸で繋がれており、宙に浮かぶことも出来て、動きがより立体的になる。最初は師団長はもちろん兵隊長でも勝てたが、訓練を重ねるにつれて操作性も上がっていった。今では師団長でも場合によっては死ぬ可能性があるほど、強くなっている」

テイルガの説明に、ナツクル達は真剣な顔で頷いて訓練場に足を踏み入れる。

ラミナとテイルガ達は入り口近くで待機して、2人を見守ることにした。

すると、テイルガが、

「……感謝する」

「あん?」

「コルト達を見逃し、女王の弔いを認めさせてくれたことだ。其方からすれば、問答無用で殺した方が気が楽だっただろう?」



「大して変わらんわ。うちが面倒見るわけちゃうしな」

「……其方はこの後王達を追い、巢を出て行った兵隊蟻達を始末するのだろうか？」

「そうなるやろうな。止めろっちゅうんか？」

「いや……逆だ。確実に殺してほしい。そして、我らも連れて行つてもらいたい」

「あ？」

ラミナは眉間に皺を寄せて、テイルガを見る。

テイルガは真剣な目をラミナに向けており、しっかりと視線を合わせる。

「……理由は？」

「……ずっと考えていた。キメラアントに殺され女王に食われた人の記憶を持ちながら、キメラアントとして人を襲う我は何者なのか。所詮は前世と切り捨てればいいのかもしれんが、我はそう簡単に割り切れなかった。女王を恨もうにも、我が女王によって生み出された事実が変わらぬ。それでも他の兵隊蟻達が全員女王のために生きていたのであれば、どこかで諦めがついたかもしれん。だが、他の師団長達はあまりにも利己的だった。だから、王が産まれた後は今のような事態になると思い、せめてそこまではキメラアントとして、女王への義理を果たそうと思っていた」

「……」

「だが……ようやく産まれた王がアレで、女王はあの有り様だ。あの王を見て確信した。我らは決して『人』にはなれない。そして、我はあのような『キメラアント』にもなれない」

「……ほな、お前は何モンなんや？」

「その答えを知るために、まずは我らがしでかしたこの後始末をせねばならない。あのバケモノ達は間違いなく世界を乱す。それを止めなければ、我の礎となった少女に報いることは出来ず、この世界の一員になれないと思うのにな」

「……結構辛いで、それ」

「だろっな……。だが、それだけのことを我らはしたのだ」

「……そつちのちつこいんもか？」

「……」

ブラールは無表情のまま小さく頷く。

ティルガはブラールの頭に手を乗せる。

「ブラールは……私の……私の元となった少女の母親なのだ」

「は？」

ラミナは目を丸くして、ブラールを見る。

「蟻としては兵隊長だがな。顔を見合わせた時、何故かすぐに分かった。我らの前は、母娘だったと」

「……他にも、おるんか？」

「さあな。少なくとも我は知らん。だが、探せばいるだろう。気づかぬだけで、思い出せぬだけでな」

考えれば当然だ。

名前すら憶えている蟻がいるのだから、互いの前世の關係に気づいてもおかしくはない。

前世の記憶に人格が影響されるなら、前世の關係に縛られてもおかしくはない。

「我とブラールは、はっきりと憶えている方でな。他に父と弟がいて、家族一緒に殺されたのだが、父と弟の記憶を持っている蟻は見つかっていない」

「……」

「ブラールは、記憶を思い出したショックで声が出せなくなった。まあ、我らは信号で言葉を交わせるから困ることはなかったがな」

だが、ブラールは完全にティルガに依存した。

ティルガも母親であることに気づいてしまった以上、見捨てることは出来なかった。

「ええんか？　うちらと来る以上、死ぬかもしれんぞ？」

「それはどこにいても同じだろう」

「けど、なんでそれを今、ここで言うんや？」

「我はあの者達ではなく、其方に連れて行ってもらいたい」

ラミナはその言葉に顔を顰める。

「……理由は？」

「失礼な言い方やもしれぬが……其方には我らに近い何かを感じた。他の人間達とは違う、何か得体のしれないモノを」

「お仲間やから、一緒に行きたいと？」

「そこまで愚かなつもりはない。……もしもの時、我らを容赦なく切り捨てられると思ったからだ」

「……」

「あのバケモノ達に勝つには、好機であれば我ら諸共殺してくれる者でなければ無理だ。だが、あの2人や他の者達は、コルトへ見せた感情から考えれば間違いなく躊躇するだろう。それでは奴らを殺せない」

「……なるほど」

「それに其方の戦い方を参考にしたいのもある」

「あ？　なんでうちの戦い方知っとんねん？」

「ブラールの能力だ。あの老人の能力は見られなかったが、其方や他の者達の能力や戦いはずっと観察していた」

「その能力を知つとるんは？」

「もちろん、我だけだ」

ラミナはため息を吐いて、頭を搔く。

視線を感じていても【円】でも見つけられなかったのだから、かなり隠密性が高い能力なのだろう。

しかも、アモンガキツドの念獣を見た後だから、視線を感じてもその念獣だと思わせることも出来たのだ。

「……あの護衛軍の能力を参考にして、利用しよつたんか……」

「ああ。念獣は姿を隠すことが出来ることは奴が教えてくれた。ならば、後はそれに特化させた能力にすればいいだけだと考えた。ブラールはフクロウの特性を持っている。隠密性の能力とは相性がよかったのだ」

「なるほど……」

それは魅力的な能力ではある。

それだけで十分味方にした理由になる。

「ちなみに、お前の能力は？」

「ない。我は強化系でな。変な能力を考えるよりは四五行と応用を鍛えるべきと考えていた」

「……つまり、うちに戦い方を教えてもらって、討伐隊に参加したいっちゆうわけやな」

「ああ」

「見返りは？ それと、うちは殺し屋で賞金首集団の一員でもある。王達を殺したところで、殺し合いからおさらば出来る可能性は低いで」

「我らが出せるモノは忠誠しかない。すでに我らも人を殺しているから殺し屋と変わらないし、この体になった以上安穏と暮らせるとは思っていない」

「……」

ラミナは盛大にため息を吐いて、

(まあ……ネテロやモラウ達と別行動する可能性を考えたら、情報源となる師団長と隠密能力を使って空も飛べる奴は魅力的過ぎる存在やんな。しかも、そこらへんの奴より素で強いし……)

現状を考えれば拒否する理由はない。

(けどなあ……戦いが終わって生き残った後の処遇がなあ……。旅団にとつても役には立つやろうけど……こいつの性格的に合わん気がするんよなあ。そうなる……流星街か？ 隠れ家に置くには目立ちすぎるし……。まあ、それは生き残ってから考えればええか。はあ……なあんかここ最近メンドイ奴らの面倒よお見るなあ)

「わかった……。とりあえず、お前らはうち預かりにする。念能力も教えたる」

「……感謝する」

「ただし、見返りは出世払いや」

「？ それは、どういう……？」

「さあ？ 自分で考えろや」

ラミナは肩を竦めて苦笑し、訓練場の奥から聞こえてきた戦闘音に

意識を向けるのであった。

## #106 ナツカシ×ノ×ソノナハ

ラミナとテイルガが話している頃。

ナツクルとシュートは周囲を警戒しながら、訓練場の中を進んでいた。

何かがいる気配はするのだが、生物と言うには違和感を感じさせるのだ。

その気持ち悪さに眉間に皺を寄せながらも、油断することなく進むナツクル達。

だが、そこに奥から猛スピードで何かが迫る気配と音を感じ取った。

「っ!!」

ナツクルとシュートはその場から左右に分かれて跳び退くと、2人の間を何かが勢いよく駆け抜ける。

それは柱を蹴って跳び上がり、更に天井を蹴ってまた2人を跳び越える。

ナツクルは拳を構え、シュートは左袖を外して現れたそれを視界に捉える。

「なっ……!!?」

「……これは」

そこにいたのは長い白髪の人間だった。

上半身は裸で傷痕だらけ。下半身は今にも倒れそうな足取りで、軌むような動きをしている。

それにナツクルとシュートは目を見開いて、あまりの不気味さに冷や汗が流れる。

「こいつが……カイト……」

「操られているとはいえ……これは……」

カイトの左目は大きく見開かれており、右目は上を向いたままで固定されている。

顔も傷痕だらけで、本当にツギハギ人形なのではないと思わせる見た目になっている。

明らかに尋常ではない姿に、ナツクルは歯を食いしばる。

(この姿をゴンに見せろってえのか？ こんなボロボロのコイツを……!?)

もはや正常と言えるのは、人間の見た目をしていることくらい。

瞬きもせずにギョロギョロと動く左目、吊られているような姿勢の四肢、全てが普通の人間ではありえない様相だった。

「ナツクル!!」

「!!」

シユートと呼ばれて、ナツクルはハツとして頭を振り、今はカイトを止めることに意識を集中する。

ナツクルが数歩前に出ると、カイトが不気味な動きで飛び出してナツクルに殴りかかってきた。

無造作な動き方にも拘らず、振られた拳は鋭く速かった。

ナツクルは僅かに仰け反って躲す。

カイトは続けて左拳を振り上げて、ナツクルは半身になって躲す。まずはどこまで動けるのか確認することにしたナツクルは、反撃せずに連続で振るわれるカイトの攻撃を躲して防ぐ。

シユートもいつでもフォローできる状態で待機していた。

ナツクルが後ろに跳び下がると、カイトは足を止めて待ち構える様子を見せる。

「……どうやら、標的を見つけてからは近づかねえと攻撃されねえみてえだな」

「ああ……。『この部屋に入ってきた者を襲え』『近づいてくる者を襲え』という命令が施されているようだな」

「確かに訓練相手にすんなら、そんなところだろうな……」

絶えず襲い掛かるようなら、もはや訓練ではなく実戦でしかない。(今の動きもゴンに負けてねえ。実戦経験のねえ兵隊蟻には確かに手頃な相手と言える。そこらへんのハンターでも勝つのは一苦労するだろう)

ナツクルはまたゆっくりと歩み寄る。

そして、2 mほどの距離まで迫った時、再びカイトの右拳が振るわ

れる。

ナツクルもまた仰け反って躲すと、カイトは左アッパーを繰り出す。

それに既視感を感じたナツクルは、またしばらくカイトの攻撃を避け続ける。

その全てが先ほどの攻撃パターンと全く同じで、カイトはそれをただただ繰り返しているだけだった。

ナツクルは再び距離を取り、

「確かに、機械的な攻撃しか出来ねえみてえだな。速えが、それだけだ。大振りだし、フェイントも見え見えだ」

「だが、まだこの先がある」

「ああ……。こっからが本番だな」

ナツクルは上着を脱ぎ捨てて、

「〔天上不知唯我独損〕を仕掛ける」

「分かった」

「行くぜコラア!!」

ナツクルは全力で駆け出して、カイトに攻めかかる。

しかし、カイトは決められたパターンでしか動けないので、初手の右フックを繰り出す。

ナツクルは軽やかに左に躲して、カイトの右横に回り込み、

「ウォラア!!」

左拳をカイトの右脇腹に叩き込んで、カイトを殴り飛ばす。

カイトは倒れることなく、飛び跳ねながら後ろに下がって体勢を立て直す。

カイトの右脇腹付近にポットクリンが出現する。

そして更に、

カイトの真上にピエロのような見た目の上半身だけの念獣が出現し、念獣の両指先から糸が伸びており、それがカイトの全身に繋がっていた。

カイトはまさしく糸人形のようになり、不気味な姿勢にも納得が出来る見た目になった。



「あれが……!」

「護衛軍の……」

「ああ。ネフェルピトの能力だ」

ナツクルとシュートが振り返ると、ラミナとテイルガ、ブーラーがすぐ近くまで来ていた。

「もう一度触れると攻撃を再開する。気をつける。今度は行動不能にするまで止まらない」

「行動不能、とは?」

「脚をもぐか、生体機能が止まるほど傷つけるかだ」

テイルガの言葉に、ナツクルとシュートは盛大に顔を顰める。

カイトの全身にある傷痕の理由が分かったからだ。

「どうする? ナツクル。破産するまで待つか?」

「……」

「つちゆうかお前の能力って、容量越えたらあの念獣を封じれるんか?」

ラミナが首を傾げて質問する。

それにナツクルはカイトを見据えながら、悔し気に顔を歪め、

「……多分無理だ。カイトのオーラと、あの念獣のオーラは明らかに別物。だから、俺が封じることが出来るのはカイトのオーラだけだ」  
「やるなあ」

「だが、カイトのオーラを封じられれば、レベル1は【絶】状態に出来る。ゴンに合わせることもなくても、死ぬ可能性は下げられるから無駄にはならねえ」

(……こいつをゴンになあ……)

ラミナはカイトを細かく観察する。

(……操作された人間は脳や神経を支配されとるから、表情が弛緩したり、瞬きをせんかったり、瞳孔が開きつぱなしとかの違和感が出ることはよおあることやけど……)

だが、それにしてもカイトから感じる気配は明らかにおかしい。

(なんちゆうか……鼓動や呼吸を感じん。妙に筋肉も強張つとるように見えるし……。これ……解除したら死ぬパターンちゃうか?)

ラミナは眉間に皺を寄せる。

特にカイトは1か月近く操られていたはずだ。長期間、無防備な状態で相手のオーラに晒されていた場合、確実に精神や体に影響が出るはずだ。

（人間を操るタイプの能力は基本的に悪意・害意の塊や。操る相手の事なんざ考えとるわけない。……廃人になつとる可能性は高い、か）カイトが元に戻る可能性は絶望的だろうとラミナは推測する。

そうなるとジンが危惧していたように、ゴンの精神も耐えられない可能性が高い。

今でさえナツクルに負けたことで、かなり追い込まれているはずだ。

それがもうどうやっても治せないと知った場合、確実にゴンは平常ではいられない。

恐らくキルアもゴンほどではないにしても、精神的ショックはかなり大きいだろう。

（まあ、それならそれでこの仕事から手を引かせられるか……。とりあえず、この状態のカイトでどう反応するかで、あいつらが戦力になるかどうか分かるか……。嫌な予感するなあ……。ゴンは）

そう考えているラミナの前で、ナツクルがカイトに触って戦いが再開した。

すると、念獣がカイトを吊り上げて動かし始め、ナツクルの動きに合わせて動きや攻撃パターンが変化していた。

ナツクルは能力を発動しているので、ダメージを受けることはないが、

「ぐっ……いー（攻めきれねえ……！ まだ返済されることはねえが、差し引きで微妙に向こうが多い！）」

それだけカイト自身のオーラが多く、鍛えられているということ。ナツクルはこれほどの使い手が、こんな操り人形にされることに内心戦慄する。

利息で少しずつ増えてはいるが、破産させるまで10分以上はかかりそうだった。

攻撃を受けないようにしたいが、カイトの動きは先ほどとは比べ物にならないレベルで向上していた。

しかも念獣が上昇すると、カイトも体ごと引き上げられて浮かび上がって、普通では考えられないアクロバットな攻撃を仕掛けてくる。

そこにシユートの浮かぶ3つの手の1つが、カイトの胸に叩きつけられて後ろに吹き飛ばす。

「シユート……!」

「援護する。だが、俺自身はまだ攻撃しないぞ」

「わあつてんよ!!」

シユートの攻撃はカイトにダメージを与えてしまう。

そして、シユートはカイトを破産させた後が本番となるので、それまでは消耗しないようにしなければならぬ。

ラミナ達は少し下がって、ナツクル達の戦いを観戦していた。

「……操つとる人間のオーラも思ったより上手く動かしとるな。動きも最初と違って滑らかやし」

「この1か月、修復時以外はずっと戦い続けてきたからな。恐らく、今ならば普通の人間と変わらない動きもさせられるだろう」

「ま、それが操作系能力の特徴やからな。言葉さえも好きないように喋らせることも出来る。後は……どれだけの時間操れるんか、同時に何人操れるんか、数を増やした場合どれだけの命令が与えられるんか、操った奴の戦闘能力はどれだけ向上させることが出来るか、それを全ての念獣と人形に共有することが出来るか、そんで……【円】を併用しながらどこまで出来るかつちゆうところか……」

「……なるほど。ネフェルピトーはそれだけのことを、この1か月で試し続けていたのか。アモンガキッドと言い、産まれたばかりであるのによく思い付くものだ」

「人間、興味があるもんは際限なくアイディアを思いつくもんやからなあ。善悪関係なく、な」

「……なるほど。我らカメラアnantにとっては、相性が良すぎて悪すぎるな」

「そういうこつちや。けど、人間やないから、好きだけ試すことが出

来る。……こら、王が向かった先で何をしでかすか考えたくもないな」

ラミナはため息を吐いて、ナツクル達の戦いに意識を戻す。

ポットクリンはかなり大きくなっていたが、操られたカイトはそんなこと関係なくナツクルに攻め続ける。

念獣もポットクリンを認識できないので、気にせずカイトのオーラを操って攻撃を続けさせる。

ナツクルはシュートの操る3つの手の援護を受けながら、カウンター重視の戦法を取っていた。

足場が悪いので、柱を利用してカイトの動きを出来る限り狭めるように立ち回る。

カイトが上昇した際はシュートの操る手で攻めかかり、攻撃行動を妨害していた。しかし、やはりカイトの激しい攻撃にシュートも手加減が難しくなり、カイトの肉体にかなりのダメージを与えていた。

「ふむ……やっぱ攻撃パターンにも限界があるみたいやな。ある程度行動範囲を狭めれば、多くて3パターンくらいか」

「十分多いと思うが……」

「多くて言うたやろ？ それに3パターンちゆうても『後ろに下がる』『上に上がる』『その場で止まる』やしな。まあ、ナツクルがカウンター狙いで動いとるからちゆうんもあるけどな。攻めかかれば、もう数パターン増えるやろうな」

「手を貸さなくていいのか？」

「まだシュートもおるし、問題ないやろ。結局、動きが面倒なだけで、【堅】も【硬】も【流】も二流レベルやしな」

一番厄介な能力が使えないだけで、脅威度は格段に下がっている。実戦経験があるハンターならば、十分勝てる相手だとラミナは考える。

そして、6分ほど経過した時、

ポットクリンが弾けて、悪魔の羽を持つ猫のような念獣『トリタテン』に変わる。

カイトのオーラが消えて、【絶】状態へと変わった。

「よっしやあ!! シュートオ!!」

「ああ!」

ナツクルが一気に攻めかかり、その後ろからシュートも続く。

3つの手がカイトの両腕を掴んで、ナツクルが突撃してカイトを柱に押し付ける。

その瞬間、シュートが一気に右手掌でカイトの両脚に連打を叩き込む。

カイトの両脚が黒い靄に覆われて消え、ナツクルが素早くカイトの背後に回って両腕を脇から差し込んで抑え込む。

そして、トドメとばかりにシュートが再び手掌を一気にカイトの身体に叩き込む。

10発近く叩き込んだ直後に、カイトの全身が黒い靄に覆われて、シュートの傍に浮かんでいた鳥籠に吸い込まれていった。

念獣も一緒に吸い込まれていき、鳥籠の中に消えた。

「ふう……」

「なんとか保護は出来たが……ホントに今のカイトをゴンに会わせていいか、怪しいところだな」

苦々しく言うナツクルに、シュートは鳥籠を見つめながら頷く。

ラミナ達はその様子を少し離れたところで見ていたが、そこにモラウが現れた。

「おう。上手くいったみてえだな」

「どうやらなあ……。今のカイトをゴンに見せるんは、ちとゴンの様子を見てからの方がええと思うで」

「お前の能力で解放してやれねえのか?」

「うちの除念は一般的な『背負う』タイプやなくて、『強制解除』や。操作系の場合、下手な除念は被害者の心身に悪影響を及ぼす可能性が高い。カイトの場合、確実に廃人になるやろな」

「そう上手くはいかねえか……」

「まあ、どう会わせるんかはナツクル達に任せるわ。それもあいつらの仕事やし。んで? そっちはもうええんか?」

「ああ。ドーリ市外れの山にある屋敷を確保した。そこにコルトと赤

子、それとコランって奴が行くことになった。他の連中は女王の墓の管理と研究チームの協力のために巢に残るそう。そっちの2人はどうすんだ？」

「我らはこの者と行動を共にする。王達の討伐にも参加させてもらう」

「はあ？ 本気か？」

「ああ」

ティルガははつきりと頷き、モラウはラミナに顔を向ける。

ラミナは肩を竦めて、

「やる気は十分みたいやでな。情報も聞きやすいし、師団長と兵隊長やったから他の蟻に会っても遅れはとらんやろうし、そこらへんのハントーよりも強いし、連れて行ってもええやろ」

「けど、念能力はまだなんだろ？」

「ま、そこらへんも出来る限り仕込むつもりや。系統も知つとるみたいやし、身体能力も高いから少し扱えるようになるだけでも十分戦えると思うで」

「……まあ、お前は一応ゴン達を鍛えた実績もあるしな……」

「あいつらは基礎だけやから鍛えたと言えるか怪しいところやけどな。んで、こいつらを鍛えながら、散った蟻達の情報収集でもするわ。」

「シーフ」や「チャリオット」達も動き始めとるはずやからな」

「俺達もコルト達を屋敷に送ったら、搜索と討伐を始める。もちろん、王達の行方の搜索もな」

「とりあえず、その屋敷までは一緒に行くわ。あ、言うとかけど、【シーフ】達にや王に手え出すなて言うで？」

「それでいい。こっちも王の討伐は会長に一任する予定だ」

「ほな、方針決まったら連絡してや。こっちも時々情報を送るわ」

「ああ。それとだな……」

「あん？」

モラウは何やら照れ臭そうに頭を掻いて言葉に詰まる。

それにラミナは訝しむが、

「その……なんだ……。さっきは助かった」

「はっ？」

「お前があそこで悪者になってくれたおかげで、コルト達や俺達も覚悟を決めることが出来た」

「阿呆。お前が見逃すみたいなこと言うからやろが。なんやねん、『人を喰えないと誓えないなら、俺の目の届かないところに消えてくれ』て。人喰うかもしれん奴を放置出来るわけないやろ」

「まあ、そうなんだがな……。それでもだよ。俺が言いたかっただけなんだからな」

モラウはそう言つて、ラミナ達に背を向けてナツクル達を引き連れて戻っていく。

ラミナは呆れた目でその背中を見送り、ティルガとブラールに顔を向ける。

「ほな、うちらも移動してから修行始めよか」

「ああ」

「……」

ラミナ達もノヴの元に移動する。

ノヴの能力でドーリ市に移動して、そこからモラウが確保した屋敷へと向かう。

山の麓にある木々に囲まれた屋敷で、元は富裕層の別荘であつたらしい。

コルトや赤子の部屋を決め、モラウや女医が必要な物資を挙げていると、ノートパソコンを借りて情報を集めていたラミナが早速キメラアントの情報を見つけた。

「昼にパタ市で蟻が暴れたみたいやで。めっちゃ足が速い奴みたいやな……。これ、チートウとかいう師団長か？」

「恐ろくな」

「ハンター協会にロカリオ政府から捕獲依頼が出た。今後は蟻が発見され次第、ハンターが派遣されることになるだろう」

ノヴが携帯を見ながら、ラミナの報告に補足する。

それにナツクルやシュートは顔を顰める。

「くそっ！ おい、王が産まれた時に兵隊蟻はどれくらいいたんだ？」

ナツクルがティルガに問いかける。

「およそ500匹弱はいたはずだ。それがほぼ外に出たことになる」

「その内師団長は？」

「9匹だ。ほぼ全員が好戦的で、人を殺すことを楽しんでた連中だ。人目など気にせず暴れるだろうな。むしろ、ハンターを上質の餌と考えて、待ち構えているだろう」

「そのゼートウってのはどんな奴なんだ？」

「チーターの脚力を持つ蟻で、スピードと動体視力は兵隊蟻一だ。広い場所ではまず捕らえられないだろう」

「せやろなあ。うちの攻撃もほとんど躲されたわ。ダメージ覚悟のカウンターやったら行けるかもやけど、それで仕留められんかったら厳しいやろな」

「……ラミナの攻撃も躲すのであれば、私達でも厳しいか……」

ノヴが顎に手を当てて考え込む。

「1人で挑むんやったらって話やで？ 複数で囲い込んだら行けるんちやうか？」

「なら、ボスの煙で行けるか……？」

「可能性はあるけど、攻撃を当てるんは厳しそうやなあ。つとお……」  
ラミナが悩まし気に眉間に皺を寄せると、携帯が震える。

携帯を取り出して、届いたメールを開くと「シーフ」からだった。

「……………海で暴れとる蟻達を見つけたそうや。そっちは「チャリオット」と動くらしい。あと、「ロート山脈」にも数匹目撃情報があるらしい」

「ロート山脈か……」

「そっちはうちが行くわ。こっから近いし、こいつらの念修行もそこでするわ」

「分かった。会長から連絡があれば、また連絡する」

ラミナはそう言って出発の準備をして、ノヴも頷く。

ティルガとブラールも後に続き、

「んじや、まずは体力的な面を確認しよか。走っていくで〜」  
「ああ」



「……」

「あ、ブラールは別に飛んでもええで。お前は基本飛ぶことを前提に戦うやろうからな」

ブラールは頷いて、翼を静かに広げる。

それを見たラミナは駆け出して、ティルガも続いて駆け出し、ブラールも静かに飛び上がる。

山道をそこそこハイペースで2時間ほど走るが、ティルガとブラールは余裕で付いてきていた。

（ふむ。やっぱり体方面は十分か。山脈に入る手前で、念の方を確認しよか）

そして、30分後には山脈の近くに到着したラミナ達は、一度足を止める。

「よっしゃ。ここで念を見せてもらおか。【練】、やってみ」

ラミナの指示に頷いて、ティルガとブラールは【練】を使う。

力みも少なく、されど力強いオーラだった。

ブラールは少し揺らぎが視られるが、それでも念を得て1か月足らずと考えるならば十分すぎる熟練度だ。

（ティルガもグリッドアイランドのゴン達レベルはあるな。生まれつき体が完成されとって、蟻つちゆうか獣の本能のおかげか生きるために必要なもんに対する集中力もゴン同等、か）

個体差はあるだろうが、生まれつき生物としての性能が高いため、肉体と精神に釣り合うレベルまでの成長力も高いのだろうとラミナは推測する。

「その状態はどれくらい維持できるか知つとるか？」

「我は2時間20分弱。ブラールは1時間40分程度だ」

「……まあ、そんなもんか」

人間と比べれば恐ろしい成長率だが、護衛軍の人外レベルを考えればむしろ平凡以下とも言える。

ティルガとブラールは、これまでラミナが殺してきたキメラアント達より人間の面が強い。そこから考えると、散らばったキメラアント達の方が念の修得力、成長力に関しては上かもしれないと、ラミナは

推測する。

(こら、王達に合流する師団長や兵隊蟻がおつたら厄介な相手になり  
そうやな……)

「次は【凝】」

「ああ」

その後、【凝】【流】【円】【硬】を見せてもらう。

結果、ティルガはバランスよく修得しており、ブラールは【流】や  
【硬】はぎこちないが【円】に関してはラミナに匹敵する広さで使うこ  
とが出来た。

「ブラールは放出系か？」

「いや、操作系だ。ブラール、能力を見せてやれ」

「……」

ブラールは頷いて、右の翼を軽く羽ばたかせると、羽が数枚散る。  
散らばった羽根はオーラを纏っており、それが集まって一羽の黒い  
フクロウが具現化する。

「……羽を媒介にした念獣か」

ブラールが右目を瞑ると、黒フクロウの姿が消える。

ラミナは僅かに目を丸くして、周囲の気配を【円】で探るがやはり  
感じ取れなかった。

「能力名は【メリー・オブ・ブラックオウルあなたの後ろの背後梟】。ブラールが目を瞑っている間、

【円】でも念獣の存在を捉えることは出来ない。念獣が視ている景色  
をブラールも見ることが出来、ブラールの羽を持っている者にも共有  
することが出来る」

「ほお〜」

「最大八羽具現化できるが、片目で一羽しか消せない。なので、姿を消  
せるのは最大二羽までだ。そして、視界を潰すため戦闘は厳しくな  
る」

「十分十分。その感じやと、まだ能力増やすか改良は出来そうやし。  
そこらへんも詰めていこか」

「……」

ブラールは右目を開け、能力を解除して頷く。

ラミナはテイルガに顔を向けて、  
「んで、テイルガ。お前の能力も創るで」

「……もう思いついたのか？」

「お前が強化系つちゆう話を聞いた時からな。うちは能力の関係で日頃から色んな能力を考えとつてな。その内の1つや。それに合わせて、お前にはある武術も教える」

「武術？」

テイルガとブラールは小首を傾げる。

ラミナは頷いて、

「お前にピツタリやでえ。その武術は、両手を虎の爪や牙に見立てて戦うんや」

もう1年も前に見た今は亡き男が使っていた拳法。

ラミナは目にした時から、自分の武器とその武術を組み合わせられないか考えていた。

だが、適した武器に他の能力を付与していたため、ずっと死蔵していたのだが、テイルガを見た時に思い出し、強化系と聞いた時にテイルガにふさわしいと思っていたのだ。

ラミナはニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「武術の名は【虎咬拳】。それを元に、うちが考えた能力名はテイグル・トルメンタ【虎咬迅嵐】」

懐かしき名前と、ずっと秘めていた名前を告げる。

「時間は限られとるでな。1週間で完成させるで。生半可な修行はせんから、覚悟せえや」

ラミナの脅すような言葉に、テイルガ達は覚悟を決めた表情で大きく頷く。

そして、ラミナはまず山脈に潜むキメラアント達を仕留めに向かった。

## #107 アラタ×ナ×オシエゴ

山脈に潜んでいたキメラアントは4匹で、全て戦闘兵で兵隊長ですらなかった。

3時間もかからずに仕留め終えたラミナ達は、夜中ではあるが岩場に移動してそのまま修行を始めた。

「虎咬拳は両手を鉤爪状にし、両手に【凝】をして威力を高めるんや。基本的に攻撃は掌打で、叩きつけた際に爪で相手の身体を引っ掻き扶る」

「ふむ……確かに我、というか蟻の多くに最適な武術だな」

「せやな。んで、もう1つ技として……」

ラミナは右手を鉤爪状にしてオーラを集中させて、すぐ横の岩壁に向かって掌打を鋭く叩き込む。

その瞬間、手首を素早く捻って、ギャリ！と抉って岩壁を円形に抉り取る。

「つて感じで、更に傷を大きくすることも出来る」

「ふむ……」

「虎咬拳は掠っただけでもそこそこ肉を抉れるし、弾かれた程度やったら素早く腕を引くか振るかすれば、同じく肉を抉ることが出来る。更には相手の攻撃も掌で受け止めたり、弾くことが出来れば、手首の動きだけですぐさま肉を抉ることが出来る攻防一体の拳法なんや」

カストロは何故か【ダブル】に力を注いでしまったが、虎咬拳のみに注力していれば【伸縮自在の愛】ですら引き千切れた可能性もあつただろうとラミナは考えている。

故にラミナはあれから時間があつた時はネットなどで情報を集め、研究はしていたのだ。

しかも、虎咬拳はゴンの能力の元ネタとなっている【邪拳】をバラスよく組み合わせた拳法でもある。

「この鉤爪の構えから、握れば外部破壊の『拳』、二本の指を突き出せば局部破壊の『指』、そのまま叩きつけければ内部破壊の『掌』になる。そこに裂傷破壊の『爪』を合わせて生まれたんが【虎咬拳】なんや」

まさしく破壊のみを目的とした武術なのだ。

「普通の人間でも、身体を鍛えて【凝】が出来ればそこその実力者扱いされるやろうな。それにうちみたいに身体操作できる人間にも使い勝手が良くて、意外と暗殺向きでもある。まあ、うちの場合はどう心臓潰せるから、わざわざ虎咬拳に固執する理由はないけどな」

だがティルガに関して言えば、キメラアントの身体能力の高さと虎と混ざっているということ、そして虎咬拳という名前と戦い方から、フイーリング的にも相性超抜群で、世界で最も虎咬拳と相性が高い存在だろう。

恐らく、極めれば世界で一番の虎咬拳の使い手となれる。

「本来なら戦闘開始からずっと両手に【凝】をした状態で戦いたいが、それやと体の防御力が下がってまうし、相手に両手がヤバいと教えるようなもんや。まあ、お前の場合、人間相手やつたらそれでもええんやけど、師団長以上と戦うとなれば流石にリスクが高い」

「うむ」

「やから、お前は【堅】と【流】をとことん極めんとあかん。理想は【流】と同じ速さで【硬】を使えるようになることやけど、流石にそこまでは時間が足りん。やから、岩壁を相手に【流】と虎咬拳の修行、その次に強化系、放出系、変化系の系統別修行、そこで【堅】の修行。これを毎日行ってもらおう」

「……その言い方はかなり無茶なやり方なのだな？」

「超無茶苦茶やな。本来なら系統別修行は1日1系統が原則。しかも、段階的に難易度を上げていく。けど、お前らにそこまでの時間はない。やから、キメラアントの身体能力に期待して、最初からハイレベルでかなり負荷をかける修行をしてもらおう。それで、能力に関係する部分だけを集中的に鍛える。かなり偏ってまうけど、それでもすでにお前らは中堅クラスのプロハンターや念使いと同等以上やから、十分戦い抜けるだけの力は身に付くと思う」

「其方がそう考えているならば、我に否はない。早速始めよう」

「頑張りや」

ティルガはすぐさま岩壁に歩み寄って、両手を鈎爪状にして壁に向

かって振るい、叩きつける瞬間に【流】を行う。

「最初はゆっくりでええで。動きの一つ一つを確認しながら、どう動かせばええんかを理解すること」

「ああ」

ラミナはテイルガに軽くアドバイスをし、次にブラールに顔を向ける。

「ブラールはすでに能力が出来とるから、系統別の修行は念獣の具現化と操作の練習で十分やろ。んで、両目を瞑った場合の対処法なんやけど、具現化した梟の視界は全部同時に見えるんか？」

ブラールは小さく首を横に振り、指を4本立てる。

「見える視界は同時に4つまで。それ以上の場合には順次切り替え、やな？」

ブラールは頷く。

「ほな、お前は常に最低一羽を傍に置いとけ。戦闘になった場合、両目を瞑つとつても、その置いとる梟の視界を両目の代わりに出来るでな。もちろん、それに頼り切るんもあかんけどな」

「……」

「けど、それでもお前にや反撃手段があまりにもない。その手段を考えながら、【堅】を維持したまま念獣の操作の練習しよか。それに慣れてきたら、山の中で樹にぶつからんように飛び回りながら練習な。後はオーラを纏わせた羽根の状態で操ってみよか」

ブラールは小さく頷く。

「ほな、まずは羽根を操る練習から。まずは10枚。余裕がありそうやったら、限界ギリギリまで増やしてみい」

ラミナの言葉に頷いたブラールは、早速羽根を散らして操り始める。

ラミナはその間に次の修行の準備をしようと森に向かう。

その間にノヴからメールが来て、チートウの対処はモラウとナツクルが動き、ノヴとシユートはゴンとキルアの様子を確認して3日後辺りにカイトを見せる予定で動くとのこと。

「……問題はゴンの念が戻るまで王達が大人しくしとるかどうかやけ

どな」

ゴンは一か月念が使えない状態になっている。

その間に王達が動けば、ゴンがどれだけ戦いに参加したくても参加出来ない可能性はある。

流石に【絶】状態の人間を連れて行く余裕は誰にもない。

ぶつちやけた話、ラミナの【脆く儂い夢物語】であればトリタテンを除念出来る可能性は高い。

だが、もしゴンがカイトを見て暴走する可能性があるならば、そのままの方がいい。

(一応、カイトに合わせる前にうちも様子見とくべきか……?)

ジンの依頼である以上、やはりある程度ゴンの様子を確認しておくべきかもしれないと考えるラミナ。

とりあえず、ジンにゴンとカイトの状況をメールで伝えることにして、素早くメールを打って送信する。

そして、木の実や果物を収穫しながらテイルガ達の元に戻る。

テイルガは丁寧な、されど出来る限り速く腕を振って岩壁に掌打を叩き込んでいる。

ブラールは30枚ほどの羽根と念獣八羽を同時に操りながら、【堅】を維持していた。

(ふむ……やっぱテイルガは集中力が高いな。まあ、強化系はやる気になった事に対しては特に集中力を発揮しよる性格の連中が多いから驚くことやないんやけど。ブラールはちよいと飛ばし過ぎやけど、まだ現実的な範囲内で試しとるな)

操作系の人間も強化系同様、本人独自のペースに任せられた方が成長しやすい傾向にある。

自分が操作する側故に、他の者から行動やペースを決められるのを嫌うのだ。

己が認めている人間や団体に従うことに納得していれば、その限りではないが。

そして、その『基準』こそが能力に大きく作用する。

そのため、操作系を主体とした能力は本人の性格や思考を反映する

鏡とも言われている。

(ブラールに関しては、やっぱり羽根か翼を起点とした能力が良さそうやな。一番ええんは梟に攻撃能力を持たせることやけど……あの透明になれる能力を考えれば、下手に弄ると攻撃用と監視用ではつきりと姿が変わる可能性があるなあ)

最適なのは羽根を起点とした能力。

翼は引き千切られたら終わりだからだ。

(ただ羽根を撃ち出すのは効果が薄い可能性がある。一番予想しやすい能力やしな。けど、羽根を刺すことで発動する能力は流石に容量オーバー。それに羽根を刺すことで相手に梟の視界が見えるかもしれんし……)

単純な能力にすると、威力を高めるためにオーラを大量に消費する必要がある。

しかし、消費を抑えて効果的な能力となると、制約が難しくなる。

手頃な消費オーラで、そこそこ効果のある能力。

すでに念獣を具現化する能力があるだけに、中々に難しい。

(まあ、そこら辺はもう少し様子を見るか。ブラールは話せただけで、思考が止まっとるわけやないみたいやし。あれだけの能力を考える頭もある。自分で手頃な能力を思いつく可能性はある)

ラミナはそう考えて、しばらく2人の修行を見つめていた。

そして、1時間後。

ブラールがオーラを使い切って、ぐったりと座り込む。

羽根が地面に散らばり、念獣はブラールの周囲に下り立つ。

ラミナは収穫してきた木の実をブラールに投げ渡して、テイルガに声をかける。

「よっしゃ。テイルガ、次の修行ここか」

「む？ 分かった……ふう」

テイルガは頷いて、小さく息を整える。

打ち込んでいた岩壁一面にはボコボコに凹んでおり、もはや元の面影は一切ない。

「手は大丈夫か？」



「ああ。特に問題ない」

「よし。ほな、次はこれや」

ラミナが両手に持っていたのは、拳大の石と木の葉だった。

「強化系の修行『石切り』」

そう言つて、ラミナは手頃な高さの岩の上に石を置き、右手人差し指と中指で木の葉を挟む。

そして、木の葉に【硬】を使い、素早く石に向かって真横に振り抜く。

すると、石は刃物で切られたかのように、スパツと2つに割れる。テイルガとブラールは小さく目を丸くする。

【周】と【硬】で葉っぱを強化して、石を切る。これだけや。一枚の葉っぱで、200個の石を切ればクリアやな」

「……そんなに綺麗に切れるのか……」

「修行を積みめばな。うちの場合は能力の関係で、効果と結果がイメージしやすいつちゆうんもある。やから、お前は縦に振り抜いた方が切りやすいやろうな」

「ふむ……」

「ま、とりあえずやってみい。石はそこに用意しとる。ブラールは休憩ついでに、石を置いてやり」

ラミナはテイルガに木の葉を手渡して、用意した大量の石を指差す。

テイルガは頷いて、早速ブラールが石を岩の上に置き、間合いを確認してから木の葉に【硬】を行い、勢いよく腕を振り下ろす。

石は全く抵抗なく縦に斬り分かれる。

すぐさまブラールが新しく石を置き、テイルガも素早く腕を振り上げて、また振り下ろす。

それを30回ほど繰り返し続けていると、テイルガは眉間に皺を寄せ、歯を食いしばりながら石を切る。

石は最初と比べると、明らかに切れ味が落ちており、途中からは無理矢理割っている感じになっていた。

(ぐ……い……こんな小さな葉を強化するだけで、ここまで……！)

ラミナはティルガの表情から何を思っているかが手に取る様に分かって苦笑する。

(葉っぱと石やから簡単そうに見えるけど、葉っぱで石を切るっちゅう普通ではありえへん結果を出しとるんやから、そら消耗するオーラも集中力も想像以上に負担するわな)

『石切り』の難易度レベルは4。

葉や紙など明らかに石より柔らかく脆いものを、石以上の堅さに強化して攻撃する修行だ。

つまり、レベル1の石で石を砕く修行に比べると、格段に【周】【硬】に込めるオーラ量が増えるのだ。

それを200回維持し続けるには、かなりの体力、精神力、オーラを操る技術力、オーラ量全てが求められる。

石を切る度に、木の葉も確実に強度は落ちていく。

切れば切るほど必要なオーラ量が増えていくという、上限が見えない地獄の作業なのだ。

ちなみにレベル2は砕く石より小さい石で砕き、レベル3は細めの木の枝で石を砕く修行である。

(ぶっちゃけ、【堅】を3時間維持出来る奴でも200個割るんは重労働。流石に今のティルガやと70個割れば十分すぎる程や)

そう考えていると、47回目で木の葉が破れてしまった。

「ぐ……!?!」

「そこまで」

ティルガはガクリと膝をついて、肩で息をする。

「はあ……はあ……はあ……己の未熟さを叩きつけられるな」

「阿呆。初めてであそこまで出来たら大したもんや。そこらへんの念使いやったら、10回出来るかどうかやぞ」

実際強化系を極めたいとする者や、ビスケのような基本的に戦闘では体術に依存する能力者でもない限り、『石切り』まで行わない。

やってレベル2まで。

強化系能力者でも、能力次第ではレベル2で止まる。

ラミナは能力の関係上、『石切り』の修行をしたことがある。

ラミナは具現化系であることもあり、更には今よりも格段に未熟だったため、初回は29回と散々だった。

なので、ティルガの47回は十分すぎる結果なのである。

「30分くらい休憩しよか。あ、【絶】で休みや」

「ああ」

ティルガにも木の実を投げ渡し、ティルガは岩にもたれて体を休める。

ブラールもティルガの隣に座る。

ラミナも岩に腰掛ける。

「……巢に来た他の者達も、これくらいは出来るのか？」

「ん〜……まあ、お前よりは出来ると思うで。流石にオーラを操る技術では、お前は敵わんからな」

「……やはり其方達に降って正解だったな。今の我らが暴れても、すぐに殺されていたらう」

「ま、それだけの実力者が出てくればの話やけどな。人間も一枚岩やないし。カイトはともかく、お前ら師団長以下に倒されたハンターもおるから、ぶつける相手を間違えると喰われるだけやな」

「だが、揃えようとするれば揃うのだろう？」

「そらな。総数が段違いなんや。少なくとも師団長以下を殺す数は揃うと思うで」

「……師団長以下は、か」

「王と護衛軍はかなり数が絞られるやろな。もつとも、こつちも被害を度外視して戦力投入すれば話は別やけど。まあ、その判断は人間共にや無理やろうけどな」

「何故だ？」

「責任取りたあないんよ。人間の国や組織のほとんどは実力だけで王になれるわけやない。多くはコネクション、つまり他の人間達から担がれることで成り上がる。その結果、そこから蹴り落とされることを恐れ、出来る限り周囲から攻撃される要因を造りたあないんや」

「……そんな者達が、人の上に立っているのか……」

「やから、うちみたいな殺し屋でも仕事があるんや。実力があっても、

才能があっても、人脈があっても、いずれ必ず衰えるでな。永遠やない事を知つとるからこそ、手放したがるん。他国で起きとることに基本的には他人事で、責任は現場に押し付けよるから、今回もハンター協会の責任にするやろうな」

「……」

「はつきり言うとくぞ。たとえ、あの王がどこかの国を攻め落として、人間にも善政を敷いたとしても、こちらはあの王を殺すことになる」

「……人間と……共存の道を選んでも、か？」

「無理や。連中が人間を喰わず、他国に手を伸ばさんつちゆう契約をしても、キメラアントが人間を食らって進化した事実がすでに出来てしもた以上、人間は絶対に存在を認めん。『自分達に取って代わるかもしれないバケモノ』が仲間入りすることをな」

支配層の人間からすれば、人間とも繁殖でき、人間を食し、人間よりも強い存在など嫉妬の対象でしかない。

自分が支配している世界を脅かす存在を、支配する快感を知った欲深い者が認めるわけがない。

そして、支配される側は喰われるかもしれない恐怖に襲われる。

支配する側の『喰わない』と言う言葉などをすぐに信じる者はそういないだろう。

「人間つちゆうんはおかしなもんでな。普通に殺されるよりも、喰われることの方が怖く感じるらしいんよ。まあ、人間を喰う奴なんざ普通ちやうから当然かもしれんがな」

「……我らとて、王が師団長を喰らったことは衝撃的だった。前世の記憶もある故に、その気持ちはわかる」

だからこそ、ティルガは己がキメラアントとしては生きれないと思っただのだ。

「お前らやコルトは王になるつもりもないことは分かつとるでな。やから、下手なことをせんかったら、殺されるこたあないやろ。最悪、匿える場所はあるでな」

流星街ならばティルガとブラールくらいであれば受け入れてくれるだろうとラミナは推測する。

もちろん、ティルガとブラールが流星街に溶け込めればの話だが。

「さて、再開しよか」

「ああ」

ラミナは若干重苦しくなった空気を切り替えるように言い、ティルガも頷いて立ち上がろうとする。

それをラミナは制止する。

「そのままであえで。座ったままでも出来る修行やからな」

「そうなのか？」

「おう。次は変化系の修行『形状変化』や」

ラミナは人差し指を立て、指先にオーラで数字を形作る。

そして、素早く0〜9まで形を変える。

「こんな感じでオーラで数字を作る。目標は一周5秒。まずは1分を目標にしい」

「分かった」

「ブラールはもうちょい休憩。オーラをかなり消耗しとるしな。ただし、念獣は最大数を維持する事」

2人は頷いて、早速各々の修行を始める。

ティルガが指先に集中して、オーラを変えていくが、5に辿り着くころにはすでに1分過ぎていた。

（変化系は慣れしかないからな。レベル1から始めるしかない。つちゆうか、変化系能力にでもせん限り、これ以上のレベルはあんま意味ないんやけどな）

操作系、変化系、具現化系の修行は限度を見極めないと、良くも悪くも開発した能力に大きく影響する場合が多い。

しかし、変化系の修行はオーラを操る技術を高めるには最適なので、しないわけにもいかない。

（バランスは悪うなるけど……少しでも早く能力の完成と修練に力を注ぎたいでなあ。ティルガにはかなり無理させてまうけど、諦めてもらおか）

そして、更に数時間後。

すっかり日が昇ってしまったが、ラミナは次の修行をティルガに課

す。

「次は放出系の修行『打ち上げ』」

ラミナは右手を空へと向けると、そこから念弾が放たれて10mほど打ち上がって弾ける。

「これだけや。けど、念弾にオーラを固めること、体から離れたオーラを維持すること、そんでそれを勢いよく撃ち出すのは大変やで。今と同じくらいの大きさの念弾を、速く放てるようになればクリアや」

「ふむ……」

「いきなりやるんに自信がないなら、まずは掌の上にオーラの玉を出して維持する練習からでもええで。最低1分、維持出来たら十分や」  
ラミナはそう言って、手本のように右手の上に拳大のオーラの玉を浮かべる。

それに領いたテイルガは右手の平を上に向け、そこにオーラの玉を浮かべて、それを維持することに集中する。

「ブラールはまた【堅】の練習。まずは少しでもオーラ総量を増やす」  
ブラールは小さく頷いて、【堅】を始める。

正直、ラミナは無茶苦茶なことを言ったつもりだったのだが、ブラールは思ってた以上にケロツツとして【堅】をしていた。

（思ってたよりオーラの回復が早い。生命力の差か？ これやったらオーラを限界まで使わせても、丸一日寝込むことはないかもしれん……）

素の状態でも、首を切り離れた程度なら丸一日は生きていられる生命力を持つキメラアント。

心身の疲労程度ならば、人間の数倍の回復力はあるとラミナは推測した。

（それは護衛軍や王も同じ……いや、これ以上と考えるべきやな。それやったらカイトと戦った後でも【円】を使える状態まで、すぐに回復したんは納得出来る）

それは同時に下手な殺し方をすれば、制約と誓約を使い、死後に強まる念を生み出す余裕があるということに他ならない。

（ホンマ、厄介やな……。そもそも傷つけるんも厄介やっちゅうのに）

ラミナは小さくため息を吐き、テイルガ達の修行に意識を戻す。

テイルガはオーラを打ち上げ始めていたが、全く勢いはなく、風船のようにふわふわと浮いて、1mほどでパン！と割れる。

「むう……」

「オーラは掌だけや無くても、全身から打ち出すイメージや。水鉄砲や空気砲、もしくは物を投げる時のイメージ。全身から腕、そこで掌から打ち出す」

「全身から……」

「もしくは体の中心に玉をイメージして、その玉を体の中心から腕を通して押し出す感じやな。まあ、こればかりはイメージや感覚が人それぞれやでな。自分で掴むしかないで」

テイルガは頷いて、まずはひたすら念弾を放つことに集中する。

2時間後、再びブラールがダウンしたところで、再び休憩となった。

テイルガは休みながらも、右掌を見つめて眉間に皺を寄せていた。

「……難しいな……」

「こればかりはな。(つちゆうても、この2時間でそこそこ真つすぐに3mは飛ぶようになっただけ早いんやけどな)」

テイルガはゴン並みに素直で集中力がある。

しかも、集中しながらも思考力が衰えるどころか加速し、常に頭の中で思考錯誤している。

つまり、ラミナやキルアのような分析的思考も兼ね備えているのだ。

(テイルガの場合、蟻の本能と前世の人間の人格が上手く合わさったつちゆうところか……。ある意味、ゴンとキルアのいいとこ取りしたようなやつちやな。まあ、蟻の身体能力がなければ平凡やったかもしれんけど)

あくまで、この異常な成長率はキメラアントの生態が大きく作用しているからだ。

恐らく、数日もせぬ内に頭打ちになるだろう。

それでも十分強いのだが。

(けど、この感じなら細かく教えんでも一気に叩き込めるだけ叩き込

んで、後は実践と鍛錬の方がええかもしれんな。能力のイメージも伝えた方が、より修行のイメージも出来るかもしれん」

そう考えたラミナは予定を変更することにした。

「ティルガ。先にお前に会得させたい能力について言うわ。それで、イメージがどれだけでできるか素直に言うてんか？」

「分かった」

ラミナは地面に絵を描いたり、簡単な動作を見せながら能力の概要を説明する。

全てを聞き終えたティルガは目を瞑って腕を組み、頭の中でイメージを組み立てていく。

「……」

「どうや？」

「……イメージは問題ない、と思う。だが、それだけに今の我では完成させられないとも思っている」

「それが分かれば十分や。むしろ、足らん部分に分かることが重要やでな。制約と誓約を組み合わせれば、その足らん部分を補える可能性はあるし。あくまで、うちの能力は提案や。お前が一番ええと思う形に仕上げればええ」

伝えたのはあくまで素案。

最終的にはティルガが自分で自分に合う様に創る必要があるのだから。

「いや、其方の話してくれた能力に全く不満はない。むしろ、魅力的で実現したいと強く思っている。だからこそ、妥協はしたくないのだ」  
間違いなく、完成すれば自分にとって最適な能力だ。

そのため、是非とも完成させて戦いに挑みたいと、ティルガは思っている。

「なら、修行するのみやな」

「うむ」

「基本的に念に関しては、今までやらせたことと【堅】の練習。もう少し、それを続けてから組み手も取り入れていくで」

「ああ。よろしく頼む」



た。テイルガは至るべき場所を目指して、更に修行にのめり込むのだっ

## #108 サイカイ×ノチ×サイカイ

ティルガ達が修行している頃。

ドーリ市にいるゴンは……。

ノヴの弟子であるパームとデートをしていた。

パームはナツクル達同様ノヴ達に置いて行かれ、出された条件は『ゴン達が勝利したらNGLに来てもいい』というものだった。

そのため、パームは能力でビスケを探し出して呼び出し、食事を作るなどのサポートを行っていた。

パームは少々情緒不安定な一面があり、ゴンはもし自分達がナツクル達に勝てなければ、どんな償いでもすると約束していたのだ。

そして、ナツクル達の見送りから戻ってきたゴンに、パームが出した条件は『付き合って』という予想外なものだった。

それをゴンは戸惑うことなく了承し、ゴンとパームはデートをすることになった。

しかし、ゴンは現在ナツクルの能力【天上不知唯我独損】の影響で念能力が一切使えない。

ナツクルからカイトの保護終了とカメラアント達が巣から飛び出して世界に散ったことを聞かされたキルアは、ゴンを守るために陰から2人のデートを見守っていた。

(……何してんだろ……俺)

キルアは護衛のためとはいえ、2人の和やかなデートをストーカーのように後をつけていることに疑問を抱き始めていた。

普段のパームはボサボサの髪に化粧もしていない顔だったのだが、今回は髪も手入れや化粧もして、別人としか思えないほどの美人になっていた。

そのせいか、ゴンとデートしている姿が思ったよりサマになっており、意外とお似合いに見えてきていたのだ。

(いやいや、挫けるな。俺はゴンを守らないといけないんだ……!)

チートウを筆頭にカメラアント達が暴れたニュースはキルアも確認していた。

(陸生の動物と混ざった兵隊蟻の多くは、間違いないミテネ連邦内にいるはず。パタ市の奴はともかく、他のキメラアントが現れてもおかしくはない)

キルアは気持ちを切り替えて、ゴンの護衛に専念することにした。

そして、数時間後。

もうすぐ夕暮れになろうとしている時。

ゴンとパームは移動を始めて、街外れの森に向かう。

キルアも後をつけて、見つからないように最大限警戒して進もうとすると、

「なんや？　ゴンの奴、落ち込み過ぎて女に走りよったんか？」

「っ?!?!」

背後からいきなり声をかけられ、キルアはビクウ！と体を跳ね上げて、口を反射的に両手で押さえて飛び出そうになった声を全力で呑みこむ。

振り返るとそこにいたのは、呆れた顔でゴン達の背中を見ていたらミナだった。

「な、なんでお前がここに……?!」

「一応、今後もお前らが蟻討伐に参加するやろと思てな。お前ら……特にゴンの様子を一度見とこ思たんや」

「……場合によっては強制的に隔離するため？」

「まあな。現状、復讐だけで動くガキなんざ足手纏いになる可能性が高い」

「……」

「ま……あの様子やと、別の意味であかんかもしれんけどな」

「あ、あれはゴンが誘ったわけじゃねえよ。パームが無茶苦茶なこと言っただ……!」

「パーム……？　それってノヴの弟子やろ？　なんで、そいつがゴンとデートすることになったとるんや？」

ラミナは眉間に皺を寄せて訝しむ。

キルアは顔を顰めながら事情を説明し、話を聞き終えたラミナは呆

れるしかなかった。

まさかこの状況でデートを要求するなど、お気楽にも程があるだろう。

「ナツクルといい、シュートといい……。あいつらの弟子って、もうちよつとマシな奴おらんのか……？」

「とりあえず、後追うぜ。ゴンは今念を使えないんだ。兵隊蟻に襲われたらマズイ」

キルアはそう言ってゴン達の後を追ひ、ラミナもその後続く。

「で、実際のところカイトはどうなんだ？ 操られてるって話だったけどさ」

「ん〜……。ま、そのまんまやな。護衛軍の能力で操られとる」

「元には戻せないのか？ クラピカの鎖を解除した能力とかさ」

「操作系能力は下手な解き方すると、操られたモンに障害が残りかねん。やから、一番安全なんは背負うタイプの除念師か、術者本人に解除させるかや」

「そつか……。じゃあ、やっぱゴンは意地でも参加すると思うぜ」

「やるな。見極めはやっぱ今のカイトを見た時の反応次第か……」

はあ……。氣い付けろや。ああいうタイプは、大抵復讐に囚われるとええ方向に動くこた少ないで」

「……だとしても、俺はゴンと一緒に戦って、ゴンを全力で支える。そう決めたんだ」

「……ふうん……」

覚悟を語るキルアに、ラミナは何やら納得した、感心したような表情を浮かべて顔を向ける。

それにキルアはどこかむず痒さを感じて、

「な、なんだよ？」

「……シュートに勝ったつちゆう話からなんとなく思ってたけど……どうやらイルミの呪縛は振り切ったみたいやな」

グリードアイランドとは雰囲気がるで違う。

ブレブレだった芯が完全に固定され、今までバラバラだった欠片がピッタリと組み合わさった感じだ。

シルバやゼノを思わせる雰囲気を纏っており、オーラも静かでありながら力強さで漲っている。

「なんだよ？ イルミの呪縛って」

「……ああ、言うてなかったか？ ハンター試験の頃までな、お前のここにイルミの針が埋め込まれとってん」

「……はあ!？」

ラミナが額の少し上辺りを指差し、それにキルアは目を丸くして驚きの声を上げ、慌てて口を塞ぐ。

ゴンとパームはお互いのことに集中していて、キルアの声が届くことはなかった。

キルアはそれにホツとして、すぐにラミナに小声で詰め寄る。

「どういうことだよ……!？」

「やから、イルミの念が籠められとった針がお前の頭に刺さつとってん。まだ念を知らんお前を死なせんようにしたかったんやろうな。念能力者や敵わないと思わせる相手と相對した時、すぐさま逃げるように思考や動きを誘導しとったんや。心当たりあるやろ?」

「っ……!!」

それはまさしく、キルアがここ最近まで必死に振り払おうとしていた習性と思考だった。

それがただ鍛えられたからだけでなく、実際に操られていたからだったのは、やはり屈辱だった。

「親父達は……」

「もちろん知つとったで」

「……けど、なんでそれをお前が知つてんだよ?」

「その針を引っこ抜いたんがうちやからや。ほれ、お前らがネテロと遊んどった飛行船の時や。お前の頭を撫でた時にな」

その言葉に、キルアはラミナに頭を撫でられた後、妙に頭がすつきりしたことを思い出した。

考えてみれば、それからはあまり人を殺したくなるような衝動は起こっていなかった。

そして、そこからキルアはようやくラミナがなぜククルーマウンテ

ンに来たのか、イルミと戦ったことがあるのかを理解した。

「お前は俺の針を抜いたから……!」

「そうやな。イルミに喧嘩売られて、休戦する条件にシルバとの面会。んで、シルバが出した手打ちの条件がお前との婚約や」

キルアは全て原因が自分であったことに頭を抱える。

もちろん、ラミナのポカミスが大きな要因ではあるが、それでも全てのきっかけはキルアであることは否定しようがない。

(つてことは、ヨークシンでの親父達とクモのゴタゴタも俺が原因じゃねえか……!? そりや、あの糸女が俺にキレるはずだ……!)

本当によく殺されなかったなと、今更ながらに思った。

いくらゾルディック家と敵対するのはリスクが大きいからとはいえ、よくラミナはこれまで我慢してくれたなと心の底から感心する。

特にグリードアイランドの時など、もつと冷たく対応されてもおかしくなかったし、カルトもよく幻影旅団に受け入れられたなと思う。

(俺、めちやくちや図々しい奴じゃねえか……!!)

キルアはもはやゴンどころではないほどに自己嫌悪に襲われていた。

ラミナはその姿に若干の同情と、ようやくこれまでの苦勞を理解してくれたことに少なからずスカッとした気持ちになる。

「まあ、今更一年前のことでどうこう言う気ないわ」

「ぐっ……」

それはそれで自尊心を傷つけられる。

ラミナは苦笑しながらキルアの頭に手を伸ばそうとして、何故か途中で手を止めて、肩に手を置いて軽く叩く。

その時、ラミナは顔を鋭くして、ある方向に目を向ける。

そして、キルアもラミナと同じ方向を睨んでいた。

ラミナはキルアが気付いたことに僅かに感心する。

「ほお……気い付いたんか」

「ああ……。これ……。兵隊蟻の気配だろ?」

「やろな。……向こうもこっちの気配を、なんとなく程度やけど感じとるみたいやな」

「ちつ……ゴンの近くで戦うわけにもいかないし。けど、ゴンから離れるのも……」

「ゴンの方なら安心しい。他の覗き屋がおるから、そっちにも見張らしとる」

「他のつて、クモ?」

「んや。蟻」

「はあ!?!」

驚くキルアを無視して、ラミナは気配の方へ歩き出す。

キルアは啞然とするが、すぐにハツとして慌ててラミナを追いかける。

「な、なんで蟻と一緒にいるんだよ……!?!」

「二十匹くらいの蟻がな、巢から出ずにこっちに投降したんや。その内数匹はモラウの保護下に、ほとんどは巢に残って、最後の2匹がうちと行動しとる」

「大丈夫なのか?」

「少なからず信頼は出来るで。んで、その内の1匹の能力が隠密密偵系の能力でな。それをゴンにも付けさせとる」

「……やっぱり兵隊蟻も能力開発してたのか……」

「いや、そいつは特殊な例やな。ほとんどの蟻は能力を開発する余裕がなかったみたいやで。護衛軍の連中に目をつけられんようにな」

「どういうことだよ?」

「護衛軍と師団長以下の蟻は、王が産まれたら指揮系統が変わるんや。護衛軍は王に忠誠を誓い、師団長以下は引き続き女王に従う。師団長のほとんどは強欲で下剋上を企んどつたらしくてな。それを護衛軍の1匹に脅されて、王が産まれるまで抑え込まれとつたらしいで」

「……つまり、兵隊蟻同士で睨み合ってたってわけか……」

「そういうこつちや。やから、ほとんどの師団長は気が知れた相手以外には能力を見せるところか、創ったことすらも口にしたことはないらしいで。今うちとおる蟻も能力を隠しとつたみたいやしな」

「なるほどな……」

「でも、やつぱ基礎の四五行の方は未熟でな。今、うちと一緒におる2

匹に関しては、うちが鍛えとる。お前も来るか？」  
「え？」

まさかのお誘いにキルアは目を丸くする。

そもそもラミナがキルア達に念を教えてくれた理由はシルバの依頼だからであって、別に親切心でも何でもない。

もちろん、丁寧に教えてくれたことは親切心ではあるが、それは指導する依頼である以上手に手を抜いて、キルアが死ねばシルバ達に殺されるかもしれないというのが大きい。

事実、ラミナはヨークシン以来、キルア達に指導することを明確に拒絶していた。

なので、ラミナがまさか特訓に誘ってくるとは思ってもいなかったのだ。

「いいのかよ？」

「今のお前やったら、討伐隊に加えても文句ないで。殺す覚悟も出来とるみたいやし、暗殺術も受け入れとるようやしな」

「……」

「ただ、ゴンは別やで。理由は言わんでも分かつとるな？」

「……ああ」

今のゴンの精神面は落ち着いているようで、非常に崖っぷちなのだ。

カイトが無事だと思ひ込むことで、普段の己を保っているに過ぎない。

「はつきり言うとかくけどな。今のカイトは操られとることを無視しても、まともな状態やない」

「っ……………！ 正直……………どれくらいなんだ？ カイトが助かる可能性は

……………？」

「……………」

キルアの質問に、ラミナはただ小さく首を横に振る。

それにキルアは歯を食いしばって、両手を握り締める。

「っ……………！」

「人を強制的に操る能力は『洗礼』となんら変わらん。しかも、操作系



の場合は条件を満たし続けられれば、ずっと操り続けることが出来るんや。そんな害意しかないオーラを数時間浴びるだけで、一般人なら廃人になるやろな」

「……」

「普通でそれや。あの護衛軍のオーラの禍々しさから考えると、いくら強靱な精神力の持ち主やっても数週間も浴び続けられれば心も体もボロボロになってまう。イルミの針を考えれば、納得出来るやろ？」

「……ああ」

「操作系能力は基本的に条件を満たした時点で死んだも同然。除念出来たとしても、操られる前に戻るわけやない。やから、カイトが助かる可能性は、限りなくゼロに近い」

「……」

「正直、うちはゴンがクラピカ以上に復讐に囚われる可能性が高いと思うとる。けど、ゴンじゃ護衛軍にや勝てん。変な制約でも作ったら別やけど、そんなもんに縋るなら、他の手練れ呼んだ方がマシやでな」  
ラミナの言葉に、キルアは複雑そうに顔を顰める。

ゴンの想いも、ラミナの考えも理解できてしまうからだ。

今回の討伐任務はネテロまで出張っていることから、絶対に失敗が許されず、場合によっては命を犠牲にしても成し遂げる必要があると考えられる。

そこに私怨で動く者が参加するなど、普通は認められるものではない。

私怨で動く者ほど、行動が読めない存在はいない。

ただでさえ王や護衛軍の行動は読み切れないのに、仲間にもまで気を配るのは弊害以外の何物でもない。

暗殺者であるラミナからすれば、それは何よりの不安要素なのだ。

「まあ、尻拭いはお前がすることになるやろうから、それならそれで動くだけやけどな」

「……まあ……俺はゴンを全力でフォローするだけさ。カイトに関しては、俺だって負い目があるしな」

「そこらへんは好きにすればええやろ。うちは前払いされた依頼料分

働くだけやでな」

「それにしちや王と護衛軍の討伐まで参加するのか？」

「連中の特性を考えると、流星街にも手が伸びそうやからな。NGLで殺し切れなかったんを、クモの連中や流星街の長老共に突っつかれると、どうせ参戦させられることになるやろうし」

「クモって流星街とまだ繋がってんの？ マフィアンコミュニティに喧嘩売って、流星街にも損害出したんだろ？」

「長老連中はマフィアンコミュニティよりクモの方を重要視してる。同郷やし、別に流星街の人間に手え出したわけでもないでな」

念の存在を知っている流星街の長老達からすれば、どう考えても幻影旅団の方がマフィアンコミュニティより頼りがいがある存在だ。

マフィアンコミュニティはあくまで商売相手に過ぎないのだ。

その言葉に納得するように頷くキルア。

その時、兵隊蟻が動き出した。

それに合わせてラミナとキルアも駆け出して、相手を誘導する。

「どうする？」

「もう少し離れたら、待ち構えればええやろ」

「どつちが殺る？」

「それも考えとるから安心しい」

軽やかに、されど静かに、かつ高速で森を駆ける2人。

その背後から荒々しく、まるで恐怖を煽るかのようにわざと音を立てて、兵隊蟻が追いかけてきていた。

それにラミナは呆れの表情を浮かべる。

「うちらが逃げとると思とるんか。相手の実力も見抜けん雑魚みたいなやな」

「1匹だけか……」

「こつちは風上やし、ゴン達はもう大丈夫やろ。……そろそろええか」  
ラミナとキルアは足を止めて、後ろを振り返る。

その数秒後に現れたのは、耳が長く、両腕に羽毛が生えているキメラアントのラモットだった。

「おおく……人間の臭いがすると思つて追つてきてみりや。憶えてる

ぜ。お前、あの時のガキだろ」

ラモットはキルアを見て、凶悪な笑みを浮かべる。

ラミナはポケットに両手を突っ込んで、キルアに目を向ける。

「戦うたことあるんか？」

「俺達が一番最初に会った蟻だ。その時はまだ俺も能力が完成してなかったし、ゴンも殺す気で戦ってないから、仕留め切れずに逃げられたんだ」

「ふうん……」

「そつちの女は知らねえが……不運だと観念するんだな！」

ラモットは2人の余裕に気づかず、何やら悦にひたっていた。

「これからお前が味わうのは地獄の苦痛!!」

「で、どうすんだよ？」

「すぐに分かる」

「無視すんじゃねえ!! 人間風情があ!!」

ラモットの怒号に、ラミナとキルアは全く表情を変えない。

それにラモットは更に怒りのボルテージが上がる。

ラミナはポケットに両手を突っ込んだまま、ラモットの背後に目を向ける。

「お前の覚悟。見せてみい、テイルガ」

「ああ」

「!!」

ラモットが背後を振り返ると、茂みからテイルガが現れる。

テイルガはずっとラモットの風下に位置しながら、「**絶**」で追いかけていたのだ。

もちろん、ブラールの能力で離れた場所から監視しながらであるが。

キルアも現れたテイルガに目を丸くし、更に感じた気配の強さにも驚愕する。

キルアもテイルガの存在には気付いていなかったのだ。

少し大型の獣がいるような気配は感じていたが、ラモットのように兵隊蟻だとはつきり感じ取れなかった。

「お、お前は……テイルガ……!?!」

「……あいつがもう一匹の方?」

「ああ。元師団長のテイルガや」

「な、なんでアンタがこんなところに……!?!」

「テイルガ。疲れとるやろうが、ちようどええ獲物や。修行の成果、実践してみい」

「分かった」

テイルガは頷いて、ラモットを鋭く見据える。

テイルガは【堅】の修行で一度オーラを使い果たしてから、【絶】でオーラの回復に努めながらラミナについてきて潜んでいたのだ。

ラミナとテイルガの会話に、ラモットはようやくテイルガがここに現れた理由を理解した。

「てめえ……! 人間風情の下につきやがったのか? 師団長が落ちぶれたもんだぜ!」

「……そうか。お前にはあの者達がただの人間にしか見えないのだな……」

「ああ? 何言ってるやがる」

「いや、なんでもない」

テイルガはもはや何を言っても、ラモットではラミナ達の人外さを感じることは出来ないだろうと判断した。

テイルガは腰を僅かに落として、鉤爪状にした両手を構える。

そして【練】を発動し、両手にオーラを集める。

その構えにキルアは目を丸くした。

「あれは……!」

「見覚えあるやろ?」

「虎咬拳……。ラミナが教えたのか?」

「ああ。あいつは強化系やったでな。虎の蟻つちゆうんもあつて、相性抜群やと思てな」

「……確かに……」

「つちゆうても、教え始めてまだ1日やから、まだまだ見かけだけやし、能力も完成しとらんけどな。まあ、今回は本気でこちらに同行出

来るんかの確認みたいなもんや」

「それにしちやあ、かなりの圧を感じるけど……」

「師団長やしな。元々の身体能力が高いんやろ」

ラモットも流石にテイルガの構えがはったりではないこと直感で理解した。

元々師団長であるテイルガは、兵隊長であるラモットより実力は上だ。

念を会得してからはやや自信過剰になっていて、師団長相手でもそう簡単に負けないと思っていたのだが、その自信を見事に押し折られた。

(あの爪に触れたら殺られる……!)

ラモットは冷や汗が流れ出して、無意識に半歩右足が下がる。

背後にはラミナとキルア。

(後ろの人間共を一気に狙えば……!)

ラモットの視線が背後に向き、それにテイルガはラモットが何を考えているのかに気づいた。

「言っておくが、後ろの女はあのアモンガキッドと戦って生き残った者だぞ?」

「?!?!」

ラモットは目を限界まで見開き、後ろに下がろうとしていた足が止まる。

あのバケモノの護衛軍と戦って、生き残った人間。

そんな者と絶対に戦いたくない。

ラモットはようやく己に逃げ道がないことを理解した。

「ぐ……!」

「同じキメラアントのよしみだ。我がここで殺してやる。人間に殺されるより、まだマシだろう?」

「っ……!!」

「覚悟しろ。我はお前を食い千切る」

虎の爪牙が、血に染まる。

## #109 トラノキバ×ニ×コイゴコロ？

ラモットは必死にこの窮地を乗り切る方法を考えていた。

(冗談じゃねえ、冗談じゃねえ!! やつとクソツタレなコルトから解放されたつてのによお!!)

まだ巢を飛び出して1日しか経っていない。

まだ数人しか人間を食べていない。

まだ自分の縄張りを見つけてもいない。

まだまだ、まだまだやりたいことがあるのだ。

こんなところで死にたいわけがない。

しかし、前門の虎、後門の怪物の状態だ。

さらに、

(ティルガがここにいるってこたあ、あの背後霊のブラールも近くにいるはず……!! ここを上手く逃げれても、奴に追いかけられたら意味がねえ!!)

ラモットはやはり己がとことん追い込まれていることを理解する。

「お前には感謝している」

「……あ？」

ティルガの唐突な感謝の言葉に、ラモットは一瞬理解が追い付かずに訝しむ。

もちろん、ラミナやキルアも小首を傾げる。

「お前のおかげで我らは念能力を会得し、今ここに立つことが出来る」

「……ふうん。あいつが、なあ……」

ラミナはジト目をキルアに向ける。

キルアは頬を引きつかせて、顔を背ける。

どう考えても、ゴンとキルアと戦ったことが原因で、ラモットは念能力に目覚めている。

そしてティルガの言葉から、ラモットがきっかけでキメラアント達は念能力を会得したということだ。

「……まあ、護衛軍は生まれつき使えとつたみたいやし。お前らのせいとも言切れんか」

「……あ、ああ」

キルアはただ頷くしか出来なかった。

ラモットの念能力を指めさせたのはゴンなのだが、その可能性を一切考えていなかったキルアも同罪である。

「やけど……最初に目覚めたつちゆう割には、随分とお粗末なオーラやなあ」

「あのテイルガって奴が特別ってこと？」

「かもしれない。巢に残った師団長共は、あいつと大差なかったと思うし」

テイルガ達も隠れながら修行していたと話していたので、ほとんどの兵隊蟻はまともに修行などしていなかったであろうことは想像に難くない。

「ま、護衛軍相手に戦いを挑むわけにやいかんし、同じ兵隊蟻も同様。巢の外やとうちら以外の相手は基本敵にならんかったやろうから、熱心に修行なんぞせんかったんやろな」

「しかも、同じ師団長でも敵になる可能性があるから尚更、か」

「そういうこっちゃ」

そう頷くラミナの視線の先では、テイルガが更に腰を屈めていた。もう十分別れの言葉は告げたのだろう。

体に纏うオーラが更に力を増す。

ラモットは齒軋りをして、テイルガを睨みつけていた。

「行くぞ」

両脚に力が込められたと思った瞬間、テイルガが一瞬でラモットの目の前へと移動した。

ラモットは目を限界まで見開いて、反射的に全力で横に跳ぶ。

ラモットの胸があった場所にテイルガの右腕が勢いよく風を切る。

テイルガはすぐさまラモットを追い、左掌底を下から突き上げるように繰り出す。

ラモットは上半身を大きく仰け反って、テイルガの爪を躲す。

「ちい!!」

苦々しく顔を歪めたラモットは仰け反った勢いで、右足を振り上げ

る。しかし、テイルガは冷静に右手で払いのけようとする。

それにラモットはギリギリで足を止めて、片足で後ろに跳び下がる。

「ぐっ……！ （あの手をどうにかしねえと……！）」

ラモットは本能的にテイルガの両手の危険性に気づいており、攻め辛さを感じていた。

テイルガはラモットの葛藤に気づきながらも、それを無視して再び攻めかかる。

猛スピードで掌底の連打を放ち、ラモットは冷や汗を流しながら必死に躲していく。

しかし、ラモットとテイルガでは元々の身体能力に差があるため、テイルガは徐々にラモットを追い込んでいく。

「このクソがあ!! 舐めんじゃねえ!!」

ラモットは怒りに顔を歪めて叫びながら、両前腕部から3枚の刃を生やす。

「いくらその手がヤバかろうが、この刃までは防げねえだろお!!」

ラモットはただただ全力で「練」を発動して、右腕を全力で振り抜いて斬りかかる。

しかし、テイルガは一切顔色を変えることなく、

「やはりお前は楽観が過ぎる」

テイルガはそう呟いて、迫る刃を両手で挟みこむように振るい、その刃を噛み砕いた。

「なっ……!!?」

「【虎咬拳】。これが我が巢を出て得た力。そして、これは……お前が見下した人間達が築き上げた力だ。我ら蟻では、決して造り上げることの出来ぬ技。ただ快樂のために力を振るうお前に負ける道理はない」

そう告げたテイルガは左腕を素早く振るい、ラモットの右肘に左掌底を当てて手を捻り、ラモットの腕を抉り千切った。

「がああああ!?!」

ラモットは目を見開いて、痛みと恐怖に叫ぶ。



キルアはテイルガの虎咬拳の威力に、目を丸くする。

「なんつう破壊力……。片手を捻っただけだっただけなのに。確かにカストロもかなりの破壊力だったけどよ」

「カストロは『ダブル』のせいでオーラを両手に注ぎきれなかったでな。それでもあの威力やった。それを考えれば、テイルガのあの威力はむしろ当然やでな」

「本当に大丈夫かよ……。教えたばっかなんだろ？ それでアレって……。もし敵に回ったらかなり厄介な相手になるんじゃないやねえの？」

「んなもん、いちいち気にしながら鍛えられるかい。あいつの性格上、よほどのことがない限りうちと戦うことはまずないやろうし」

「……俺らはあるのかよ」

「そらあお前ら次第やろ」

ラミナは肩を竦めて、テイルガ達に意識を戻す。

テイルガはトドメとばかりに、右掌底を繰り出そうとしていたが、

「ウオアアアアア!!」

「!!!!」

ラモットはがむしやらに雄たけびを上げながら、左腕を振り上げて全てのオーラを刃に集中して【硬】を発動する。

それにテイルガは全力でジャンプして、ラモットの攻撃を躲す。

勢いよく叩きつけられたラモットの腕は、地面が砕ける。

上空に跳び上がったテイルガにキルアは悪態をつく。

「馬鹿……。なんで上に……。!?!」

どう考えても、悪手だった。

空中ではどうやっても動けないのだから。

ラミナは腕を組んで、黙ってテイルガを見上げていた。

ラモットも跳び上がったテイルガを見上げて笑う。

「ふはっ、ふはははは!! 偉そうにほざいてっからだぜえ、テイルガ元師団長さんよ!!」

テイルガは後悔するような表情を見せず、むしろ決死の覚悟を決めた表情をしていた。

「……まだ我では無理かもしれぬが……。だが、せつかくの実戦の機

会を無駄にする気はない!!」

テイルガは右手にオーラの玉を作り出す。

そして、それをまだ上昇している自身の真上に撃ち上げる。

「なにをして——」

「ぎはははは!!.. なんだそりゃあ?!.. 何処に撃ってんだ!?!」

キルアは訝しみ、ラモットは高らかに笑う。

だが、テイルガとラミナは真剣な表情のまま、放たれた念弾をまっすぐに見据える。

「行くぞ……!.. これが我が授かった真の能力、ティグレ・トルメンタ【虎咬迅嵐】だ!!」

テイルガが叫んだ瞬間、念弾は1m大の大きさになり、その場で停止する。

そして、テイルガは体を翻して、その念弾に着地した。

「なあ?!?」

「ぬう!!」

テイルガが念弾を蹴って飛び出すのと同時に、念弾が破裂し、その爆風を追い風にしてテイルガは更にスピードを上げた。

黄色の旋風がラモットに襲い掛かり、ラモットは咄嗟に跳び下がる。避け切れずに左腕の刃が砕かれ、右脇腹から血が噴き出す。

「がああ!?!」

「まだまだ行くぞ!!」

テイルガは勢いを緩めずに駆け抜け、周囲の樹を足場にして動き回る。

さらに再び進行方向に念弾を生み出して、それを踏んで跳び上がる。今度は爆発しなかった。

「なっ!?!.. 念弾を足場に!?!」

「ほお……土壇場の集中力で成功させよった」

「あ、あれはお前が教えたのかよ?」

「おう。どや? ええ能力やろ?.. 念弾を撃つんは放出系やから相性ええし、念弾を停めるくらいやったら操作系でも大したもんやないしな」

「あの爆発は?」

「テイルガが触れた場合は一定の衝撃で破裂する。他の奴が触れた場合は……」

「くそがあ!!」

ラモットは叫びながら、テイルガが踏み台にした念弾を自分も利用しようと思えば飛び乗った瞬間、

念弾が爆発した。

「があああ!!」

「つちゆう感じで、すぐに爆発する感じや」

「……なるほどな」

キルアは顎に手を当てて、テイルガの能力を考察する。

(自分のオーラだから爆発してもダメージは少ない……。けど、それ以上にヤバイのは、やっぱりあの両手だ)

テイルガの能力の起点は、あの両手。

だが、それが分かってても、能力を防ぐ術がほとんどない。

(近づけば普通に虎咬拳で対応し、少し離れただけならば虎咬拳をフェイントに念弾を放ち、大きく距離を取られたら念弾の足場を大量に作って攻めかかれればいい……。念弾が駄目でも、虎咬拳はそう簡単には潰されない。そして、キメラアントの身体能力……。！ 武術の特性も合わさって、ゴンの【ジャジャン拳】より応用力があって破壊力も遜色ない。マジで敵じゃなくて良かったぜ……。っていうかラミナの奴、カストロの試合を見ただけでこんな能力思いついてたのかよ……!)

キルアはテイルガと【虎咬迅嵐】の相性の良さど、ラミナがそんな能力を考えていたことに慄く。

キルアは少しでもテイルガの戦い方を観察しようと集中するが、テイルガはそれ以降念弾を放つ様子は見せず、樹を足場にして飛び回ってラモットに攻めかかる。

「……なんでもっと念弾を使わないんだ？ まだオーラに余裕はありそうなのに」

「言うたやろ？ まだ教えたばっかやって。正直、2回もよお使えたもんやしな」

「そうなのか？」

「四大行は鍛えとったけど、系統別の修行はしとらんかったでな。放出系関係はさっぱりやったんや。朝までは念弾を維持してまっすぐ飛ばすんも苦勞しとったわ。強化系やし、ゴン同様本番で力を発揮するタイプみたいやな」

「なるほど……」

「ま、元々あれを使わんでも、虎咬拳だけで十分勝てる相手なんやけどな」

そう話す2人の前で、テイルガとラモットの勝負は決着がつきそうだった。

ラモットは完全にテイルガのスピードに目が付いて行かず、ただただ匂いと気配がする方向に身体を向けることしか出来なかった。

テイルガは【絶】と【練】を組み合わせながら、ラモットの感覚を惑わしていた。

「ぐっ……！」

「おっ……流石虎の性質を引いとるだけはあるなあ。本能的に【絶】を織り交ぜるとは」

ラミナはテイルガの戦い方に感心し、キルアも頷いて同意する。

ラモットは目を血走らせ、歯を砕かんばかりに食いしばっていた。

「こんな……こんなところでえ……！ (俺が……俺が死ぬ……!?)」

ガサツ！

「!! そこかアアアア!!」

ラモットは最後の好機と右拳に【硬】を発動して、音がした場所に飛び掛かって拳を振り抜いた。

しかし、そこには誰もおらず、拳は空を切った。

「なっ……！」

「遅い」

「っ?!?!」

真上から声がして、ラモットは目を限界まで見開いて目だけを上に向ける。

そこにいたのは、逆様で顔の前で両腕を交えて爪を構えているティ

ルガ。

口元は両腕で隠れていたが、縦に鋭い虎の瞳が間違いなくラモットの瞳を見据えていた。

それにラモットは、大きく口を開けて鋭い牙を覗かせている虎の幻像が見えた。

そして、テイルガはその口を勢いよく閉じて、ラモットの頭にかぶりつく。

「くっそ——」

テイルガが両腕を広げたのと同時に、最後の叫びを上げようとしていたラモットの顔が一瞬で粉々に引き千切られる。

頭部を失ったラモットの身体はゆっくりと前に倒れる。

着地したテイルガは、30秒ほどラモットの身体が動かないのを確認して、息を吐く。

「ふう〜……」

「お疲れさん。能力も上手く使えたやないか」

「ああ……。だが、最初の2回以降は使える気がしなかった」

「それが分かるだけでも十分過ぎるっちゅうねん」

ラミナは呆れた目を向けながら言う。

しかし、すぐに目を真剣なものにして、

「んで、気分はどうや？」

「……流石に何ともない、と言える気分ではないな」

「それが普通や。別にそれで連れて行かんっちゅう気はないから安心して。躊躇せんことが重要やでな」

「ああ」

「さて……キルア」

「ん？」

「ほれ」

ラミナはポケットから黒い羽根を取り出して、キルアに投げ渡す。キャッチしたキルアは訝しんだように羽根を観察する。

「なんだよ、これ？」

「それが覗き屋の部品や。片目を閉じれば、ゴン達がおる場所が見えるはずやで。ま、今はドーリ市に戻つとるみたいやけどな」

「マジ!？」

キルアは慌てて右目を閉じる。

映ったのは、ドーリ市でゴン達が過ごしていた拠点の家だった。

「い、いつの間に……!？」

「ここはもうええで。この周囲に兵隊蟻もおらんぞな」

「ああ」

「これ、うちの今の番号とアドレスや。来る気になったら連絡しい。ただし、ゴンは連れて来たところで無視すんで」

「ああ、サンキュ」

キルアは頷いて、猛スピードでドーリ市へと向かう。

その後ろ姿を見送ったラミナとティルガ、そして樹の上に潜んでいたブラールが音もなく飛び降りてきた。

「……恐ろしい少年だったな。だが、あれほどの者ならばネフェルピトーが見逃すとは思えんが……。それにラモットが無事だったのも不思議でならん」

「そんな時はまだあそこまでちゃうかったんやろ。うちも少し驚いたでな」

「其方がもう1人いるように感じて、正直気が気でなかったぞ……。我の存在にも勘づいていたようだしな」

「そやなあ。ま、とりあえず今日は休もか」

ラミナはそう言って、一度コルトがいる屋敷に戻ることにした。

ティルガ達を伴って歩き出したラミナは、さきほどのキルアを思い出す。

(……最初からアレやったら、うちもキルアを旅団に誘ったやろなあ。まあ、ゴンのことで揉めたやろうし、マチ姉が面倒になりそうやけど) マチとキルアがいがみ合う光景が容易に想像できる。

だが、それはそれで周囲は楽しむだろうなとも思う。ラミナが巻き込まれるのは間違いないが。

(流石に、もうガキ扱いは出来んか)

と、地味にラミナの中でキルアの立ち位置が大人側が変わったのだった。

それで婚約うんぬんが変わるわけでもなかったが。

キルアは森の中を猛スピードで駆け抜けながら、ラミナから渡されたブルーの羽根を見る。

「羽根ってことは、もう一匹は鳥型の蟻か……。結局、そっちは視線は感じて気配の場所までは見抜けなかったな」

何かがいる気がしてはいたのだが、どこに潜んでいたのかまでは全く分からなかった。

しかし、だからこそラミナも連れて行くことを認めたのだと納得も出来た。

「それにしてもゴンの奴……。結局ここに何しに来たんだ？」

ラミナと合流してからはゴンの動向を知らないのです、何があったのかまでは分からない。

ちなみにラミナは時々覗いていたが、正直馬鹿馬鹿しくて口にするのも面倒になっていた。

(……それにしても、ラミナから誘ってもらえるなんてな……)

キルアは渡された連絡先が書かれたメモを見つめる。

ククルーマウンテンの時には連絡先は教えてもらったが、それはあくまで修行のためだ。

つまり、今回は初めて仲間として連絡先を教えてもらったことになる。

その事実気づいたからか、妙に体が軽くなった様に感じるキルア。

そして、その感覚に戸惑うのだった。

(……俺、嬉しいのか? ……まあ、確かにラミナに一人前扱いされたのは嬉しいか)

今回の試練でラミナの背中を追いかけていた事実気づいた。

目標でもあるラミナに認められたのだから、嬉しいのは当然だろう

とキルアは納得した。

僅かに引つかかるような感覚を頭の隅に追いやつて。  
それが恋愛感情だと気づくのはもう少し先のこと。



## #110 イカリ×ノチ×ヤサシサ

ラミナとキルアが再会した翌日。

ノヴ達はゴンの様子を確認しながらカイトを匿う場所であり、次の作戦に関わる場所を探していた。

そして、見つけた場所は、

「東ゴルトー?」

「ああ」

本日の修行を終え、コルト達がいる屋敷で休んでいたラミナはノヴの報告に眉間に皺を寄せる。

ノヴも眼鏡を直しながら頷き、小さくため息を吐いた。

「なんで、んなとこに?」

「王達がそこにいることが判明したからだ」

ノヴの言葉にラミナはもちろんティルガ達も目を見開く。

「よう見つけたな。ただでさえ、あの国は情報集まらへんのに」

「私の弟子の能力だ」

「お前の弟子って……パームとか言う奴やろ? ゴンとテートしとつた」

「ああ……。あいつの能力は稀少ではあるんだが、少々性格がな……。すでにパームは私の指揮下に戻している。これ以上暴走をさせる気はない」

「やったらええけどな」

ラミナはジト目を向けたまま、肩を竦める。

ノヴは誤魔化すように小さく咳をして、眼鏡を直しながら、

「私はこれから東ゴルトーの首都の「ペイジン」に向かう。明日、ペイジン近くの山の中の屋敷でゴンとカイトを会わせる予定だ」

「ほな、そこに行ける入り口をここにも作つとつてな。一応、うちも確認するわ」

「分かった」

「ところで、モラウらは?」

「モラウとナツクルはチートウとか言う。パタ市で暴れた蟻の対処に向

かっている。シュートは引き続きゴン達の観察をさせている」

「……あいつらじゃチートウはキツインちやうか？ 逃がさんようには出来るやろうけど……」

「今回は仕留めるのは目的じゃない。ナツクルのポットクリンをチートウに憑けるためだ。ナツクルはポットクリンを憑けた相手の居場所を大まかに把握できるらしいからな。場所さえ分かれば、相性のいいハンターを向かわせることが出来る」

「ふうん……」

ラミナは納得したように頷き、それ以上口出しをすることはなかった。

ノヴはその後すぐに出発し、ラミナはティルガやブラールの【堅】の修行を見ながらのんびりとしていた。

「それにしても、東ゴルトーとはなあ……」

「どのような国なのだ？」

【堅】を続けながらティルガが質問する。

「正式名称は【東ゴルトー共和国】。NGLの反対側にある国で、共和国とか言うときながら独裁政治を敷いとる排他的な国やねん。携帯電話は所持禁止で、ニュースとかも国営放送しか見れんから虚偽放送ばっか。で、国民には『指組』っちゆう面倒な監視体制を敷いて、革命や亡命を阻止しとるんや」

「『指組』とは？」

「無差別に組まされた集団で、他の集団を監視したり他国のスパイを見つけさせるんや。家族もバラバラの集団に組まされるから、犯罪者が出たら家族どころか集団全員が処罰されてまうんよ。その代わりに、反乱を企んでいる証拠や現場を押さえたら報奨金、スパイを見つけたら報奨金って感じで褒美も出して、ある程度成果を出せば集団に属する者達の階級が上がるらしいで」

「……我ら兵隊蟻よりもえげつないな……」

「まあ、やからこそこれまで国として成り立つとるんやろ。そんで、よほどのことでもない限り、NGL同様情報が出回らん厄介な場所もある」

「なるほど……。キメラアントからすれば絶好の狩場となるか」

「そやな。ハンター達から逃げた兵隊蟻が逃げ込めば、追い込むはかなり面倒になってまうなあ」

「……師団長は下手したら逃げ込むぞ？ 特にヂートウはあの者達と戦って、脅威を覚えれば迷わず王達の元に向かいかねん。そうなれば、誰も追いつけぬぞ？」

「そやなあ……。まあ、念空間で閉じ込める能力者とかおるかもしれないし、様子見するしかないやろな」

そこらへんの手配はモラウ達の仕事なので、ラミナは結果を聞くのみである。

「問題は王らが東ゴルトーでどう動くかつちゆうことやな。NGLみたいにとつかに巢を作るだけやったら、まだマシやけど……」

「……恐らく碌なことはすまい。奴らは念能力者を餌として好んでいゝ。今更国を1つ押さえ込んだところで大したことは出来ん。だが、奴らも使える手駒が欲しいはずだ。護衛軍が些事ばかりに手を割かれるわけにはいかないからな」

「ふむ……念能力者を生み出す方法を連中は知つとる。ただ、あの操作系能力はあくまでオーラを使わせるようにするだけ。手下にしても大した意味はないやろうし……。つまり、別の手段で手下を作るか？」

「可能性は十分にある」

「東ゴルトーの人口は約500万……。もし、国民を手下にするんやったら……約5万が念能力者として目覚めるかもしれんちゆうわけか……」

「……奴らならやりかねんな」

「……」

ラミナの推測にテイルガも同意し、ブラールも頷く。

だが、それを為すには国民が逃げないことが大前提となる。

流石にキメラアント達では、完全に国を封鎖することは不可能なはずだとラミナは考えたが、すぐさまそれを否定する考えが浮かんで顔を顰める。

「国のトップ連中をネフェルピトーの能力で操れば、国民を抑え込むことは出来るか……」

「っ……い……確かに」

ラミナの独り言のように発せられた言葉に、テイルガは一瞬目を見開いてすぐに顔を顰める。

ネフェルピトー達ならばやりかねない……いや、確実にやると理解できてしまったからだ。

ラミナの推測通り、王達は東ゴルトー総帥であるデイーゴを殺して操り人形にし、軍隊もほぼ人形に変えた。それ以外の間人はほとんど食用肉として選別されてしまった。

その悪魔的所業を見ていた国の上層部達は、服従したフリをして一部を残して宮殿と首都を抜け出すか、王達では担えない国の運営業務をやらされている。

目的はまさしく『選別』と『造兵』である。

「造った念能力者をどう操るんかは流石に分かんけど……。まだ能力が分からん護衛軍2人のどっちかが、それを解決する目途があるんやろな」

「恐らくな」

「はあく……面倒やなあ」

流石に国2つを巻き込む戦いの中心に参加するなど、ラミナの立場からすれば厄介でしかない。

一つ星になったとは言え、まだ新人ハンターであり、暗殺者で、しかも幻影旅団の一員が何故こんな大事に関わっているのかと今更ながらにツツコミたくなる。

(ネテロが同じことに気づいとらんわけないやろうし……。これでも十二支んやら他のプロハンターを呼び出す気配がないんやから、天下のハンター協会と言えど所詮は一民間団体つちゆうことか。まあ、ハンター証の効果も国の協力があってこそやから、当然つちやあ当然なんやろうけど)

多くの者がハンター証を求める理由は、普通では入れない場所や施設を利用出来たり、好待遇を受けられるからだ。

しかし、それはその対象の国や施設を管理する者達がプロハンターと言う存在を認めているからに他ならない。

つまり、その者達が『ハンター協会はもう信用しない』となると、プロハンターという存在はただのならず者になる可能性があるのだ。

そして、それを決めるのは国の長達だ。

なので、ハンター協会は国の意向には出来る限り忖度する必要がある。

今回のキメラアント討伐は間違いなくその忖度が足を引っ張っているのだが、それをどうにかする能力はネテロにもないのだ。

(例の副会長派とか言う連中も面倒やけど、ネテロからすればハンター協会を存続させる手段の1つではある。下手に上層部を関わらせて失敗すれば、ネテロ以外も責任を取らされて一気に協会がガタガタになりかねんやろうし……)

だからと言って、現状手が足りないのも事実だ。

しかし、そこらへんの者を呼び寄せても被害が増え、餌になるだけだ。なので、ベテランと呼べる実力者を呼ぶことになるのだが、そのような者は大抵それなりの立場に立っている者が多い。なので、失敗すれば社会に大きな影響を与える可能性もある。

なので、ネテロやハンター協会が増援に及び腰になるのもラミナは理解は出来る。同じくらい苛立ってもいるが。

これ以上考えると、殺気が漏れそうなのでラミナは考えるのを止めて、憂さ晴らしとばかりにティルガ達と組み手をすることにしたのだった。

そして、翌日。

ラミナ、ティルガ、ブラールは先んじてノヴと共に、ノヴが確保した東ゴルトー内の隠れ家に移動する。

そこは首都のペイジン近くの森の中にある古城だった。

「ここらまた随分と……いくら古城とはいえ、流石に国の管理ちやうんか？」

「その通りだが、その点は問題ない。すでにこの国の重役の一人と接

触に成功して、ここはその者が管理していた城だ」

「……それはつまり……」

「……ああ。王と護衛軍はすでに事実上この国を支配下に置いた。私達はその重役の亡命を条件に協力を要請した」

ラミナは恐れていた事態が現実なものとなったことに盛大に顔を顰める。

「蟻達だけでも厄介やのに、今度は操られた人間か。しかも国軍。まあ、念能力者は喰われたと考えても、兵器を大量に抱えとる状態であの念人形に操られとるとなると、かなり厄介やで？」

NGLで操られていたカイト並みに動けるかは分からないが、それでもそこらへんの人間やハンターでは間違いなく一方的に殺される。

更に問題は、

「ゴンやナツクル、シュートはそいつらの相手が出るんかも怪しいで？」

「……そうだな」

キルアは恐らく必要とあれば殺すことが出来る。故に殺さずに無力化することも出来るだろう。

しかし、ゴン、ナツクル、シュートの3人は間違いなく手加減する。操られた者が手加減された攻撃で沈黙する可能性は低い。故に下手すれば操られた兵隊に負ける可能性がある。

ノヴもその可能性を否定できずに眉間に皺を寄せる。

ラミナはその様子に最悪操られた連中は自分が引き受ける必要があると判断し、小さくため息を吐く。

「流石に東ゴルトーにチャリオットや他の殺し屋連中呼ぶわけにやいかんやろうし……」

「……流石にそれはやめてくれ。世界中に散ったキメラアント相手ならば偶然出会ったという言い訳が通じるが、この国で暴れば流石に会長やお前との関連を否定できない。元々この国で殺し屋が活動することは非常に少ない。いくらキメラアントが現れたとしても、ハンターではなく殺し屋が現れたというのは誤魔化し切れない」

「やろな」

ラミナは肩を竦める。

その後はゴン達が来るまで、遠目にペイジンを観察する。しかし、王達はペイジンから更に離れた宮殿にいるそうなので、ペイジンを眺めた所で特に何も無いのだが。

その頃、ゴンやキルアはコルトと面会しており、NGLであったことを詳しく聞いていた。

キルア達はゴンがコルトと会えば、問答無用で襲い掛かるかもと恐れていたが、特に問題なくむしろ友好的に接したことでホツとしていた。

そして、ゴン達はノヴの能力でペイジンの古城に移動する。

ラミナが先に来ていると聞いていたゴン達だが、そこにラミナの姿はなかった。

それに首を傾げるキルアだが、先にカイトと会うことを優先したため古城の一室に入り、シュートはカイトを封じ込めた鳥籠を部屋の奥に設置する。

「ここにカイトがいる。だが、もうお前達が知っている彼ではないぞ？」

シュートの言葉に、緊張感が増すゴンは顔を強張らせながらも頷く。

「大丈夫。絶対俺達が治してみせる」

ゴンの言葉に小さく頷いたシュートは鳥籠の入り口を開く。

すると、そこから小さな人形のようなものがゆっくりと出てきた。

「【暗い宿】。ある一定以上のダメージを与えると、その者を鳥籠に閉じ込めることが出来る。全身でも、一部でも。そして、鳥籠から出れば元の大きさに戻る。用心してくれ。念は使えないが、それでも手強い」

徐々に大きくなっていくそれがカイトだと気づくまで、それがあのカイトだと頭が受け入れるまで、ゴンは時間がかかった。

キルアはすぐに理解はしたが、やはり自分が作り出した現実に歯を食いしぼる。

もはや見た目すらもカイトとは呼べないカイトの姿に、ゴンは何も

言えない。

ただただ、必死に目の前にいるのがカイトだと受け止めるだけで精いっぱいだった。

ナツクルはそんなゴンの様子に顔を顰めながらも、

「……どうやら兵隊蟻の訓練に利用されていたらしい。近づくと奴を機械的に攻撃してくる」

ナツクルの言葉にゴンは何も答えず、ゆっくりと一歩踏み出す。

「カイト、もう大丈夫。大丈夫だよ」

まるで子供を宥めるように声をかけながら、ゆっくりと歩み寄る。そして、後2歩というほどまで近づいた時、

カイトの右拳がゴンのこめかみに叩き込まれる。

ゴンは数歩後退るも、倒れることはなかった。

殴られた個所から血が流れ出すも、それを拭うことなくゴンは再びカイトへと歩み寄る。

「あの時以来だね。カイトに殴られるの」

初めてカイトと出会った時のこと。

自分がハンターを指すきつかけとなった時のことを思い出す。

「あれは痛かったなあ……」

寂しそうに呟きながら、ゴンはまたカイトの間合いに足を踏み入れる。

すぐさまカイトが拳を振るい、ゴンは抵抗せずに殴られる。

しかし、今度は吹き飛ばされずに踏ん張って、すぐにまた歩み寄ってまた殴られるを繰り返す。

ゴンが殴られる音が部屋に響き渡り、それにナツクルは顔を顰めて、止めようとする己を必死に抑える。

「いいのか？ このままやらせといて。ゴンも念でのガードは出来ないんだろ？」

モラウがキルアに問いかける。

キルアもナツクル同様顔を顰めながらも、

「大丈夫……ゴンなら気づくよ。……もしかしたら、もう分かっているかもしれない。その上で……」



「……確かにな。反射で避けようとか防ごうとするのを、力づくで抑えてわざと攻撃を喰らってる感じだ」

キルアの言葉にノヴも同意する。

その言葉にナツクルは驚きと戸惑いを覚える。

(マジか……? いくら機械的な動きとはいえ……。今のゴンが数分やそこらで看破できるようなレベルじゃねえはずだ)

キルアはゴンの心情を少なからず理解していた。

同じく今のカイトを作り出してしまった要因の一人なのだから。

ゴンは身体で現実を理解しようとしていた。

目の前にいるカイトが幻でもなく、目の前にいるカイトを生み出したのは自分が弱かったからだという事実を。

(カイトはこんなに弱くない……。カイトの拳は、もつと痛い!!)

ゴンはカイトの攻撃を完璧に見切つて躲す。

その動きにナツクルやシュートは目を見開く。

そして、ゴンは優しくカイトの身体に抱き着いた。

それにカイトは動きを止める。

「ごめんね、カイト。俺達のせいでこんな……。少し休んでいいよ。後は俺達に任せて……」

ゴンはそう呼びかける。

それに応えるようにカイトは身体から力を抜き、ゴンは聞こえたのかとカイトから離れるが、ゴン以外の者達の目には全く違う現実が映されていた。

カイトの上に念人形が出現していたのだ。

「……あれは……」

「レベル2……。ゴンには視えねえだろうが、カイトに触れると発動する」

ナツクルの言葉に、ゴンは自分の希望が裏切られたことを理解する。

「クリアするにはかなり高度な戦闘技術が必要になる。カイト自身の念は俺の能力で封じてあるから、あれはカイトを操っている者の念能力。気をつけろよ。もう一度触れると、攻撃してくる」

「……どうすれば……どうやって止めたの？」

「……俺とナツクルの能力上、相応の深手を彼に与えた。やむを得なかったとはいえ、すまない」

シュートは自責の念に堪えながら、ゴンに謝罪する。

いつものゴンならば、シュートが謝ることではないとすぐに否定したはずだが、流石にそんな余裕はなかった。

込み上がってくる感情を、両手を握り締めることで必死に抑え込み、カイトに背を向ける。

「カイト、もうちょっと待ってて。すぐに戻す」

ゴンの誓うような言葉に、ナツクルは一瞬背筋に怖気が走る。

「キルア……」

キルアの傍にやってきたゴンは、キルアに声をかける。

「あいつは……俺一人でやる」

そう宣言したゴンは、キルアの答えも聞かずに部屋を後にした。

その後ろ姿をキルアは、寂し気に見送ることしか出来なかった。

古城の外に出たゴンやキルア達。

すると出た所に、腕を組んだラミナが立っていた。

「ラミナ……」

ゴンは様々な感情が湧き上がって、どう声をかければいいのか分からなかった。

ラミナはそんなゴンを真つすぐに見据えていた。

「……なんや。随分としおらしくなつとるやないか」

「……うん。俺が弱かったばっかりに……」

ラミナの言葉に、ゴンは俯いてしまう。

ナツクルやシュートはそんなゴンに労わるような目を向けるが、

ゴントツ!!

と、突如ラミナがゴンに拳骨を叩き込んだ。

「?!?」

「なっ?!」

ゴンは痛みに声を上げること出来ずに頭を押さえて蹲り、キルアやナツクル達は目を丸くする。

「ド阿呆。今更自分の未熟さを反省するなんざ遅いにもほどがあるわ。ヨークシンでうちが殴った時からどんだけ経つとんねん」

ラミナは呆れた目で、痛みに呻くゴンに向かって言い放つ。

「そもそもお前が未熟やなかったことなんざあったか? ハンター試験でも、ククルーマウンテンでも、天空闘技場でも、ヨークシンでも、グリードアイランドでも、うちが知つとる限りお前はずっと分不相応なことばっか宣う未熟モンや。念を覚えて、たかが1年足らずのお前が誰の足も引つ張らんとかのぼせ上がるにもほどがあるわ」

「っ……………」

「言うたやろ。高望みできるんは相応しい実力があるモンだけやってな。それをカイトがあんなんになってようやく理解するとか、どこに同情すればええんや?」

ラミナの言葉にゴンはただただ項垂れるしかなかった。

それにナツクルが我慢出来ずに反論しようとしたが、モラウに肩を掴まれて止められる。

「師匠……………」

「止めとけ。これからを考えれば、ラミナの説教は必要だ」

「ぐっ……………」

「はつきり言うで、ゴン。うちはお前に蟻討伐に参加出来る実力はなと思うとる。今のキルアはともかく、お前は絶対的に足手纏いや」

「っ!!」

はつきりと戦力外通告を告げられたゴンは、ただただ悔し気に顔を顰める。

キルアはゴンを心配気に見つめるも、ラミナが言うことも正しいた

め声をかけられなかった。

ラミナに叩きつけられた現実には、ゴンは両手を握り締め、歯を食いしばって耐える。

それにラミナは小さくため息を吐いて、

「はあ……今回はホンマに堪えとるみたいやな。普段やったら『俺を鍛えてよ』とか言うてくるやろうに。なんで言うべき時に言わず、言わんでええ時に迷わず言うんやろな、お前は」

「……ん？」

今のラミナの言い方にキルアは首を傾げた。

今の言い方はまるで鍛えてやってもいいという風に聞こえたからだ。

ゴンはそれに気づいていないが、ガバリ！と勢いよく顔を上げる。

「ラミナ、俺を鍛えてよ!!」

「嫌じゃボケ」

ガビーン!!

ゴンはまさかの即答に、先ほどまでのシリアス感が一瞬で吹き飛んで固まる。

(（じゃあ、なんで言ったんだよ……）)

キルア、モラウ、ナツクルは盛大に呆れ、シユートとノヴも同じく呆れていた。

「うちは今、他の奴らを鍛えとるでな。お前まで面倒見る気ないわ」

「そんなあ……」

「ま、勝手にうちらが修行しとるところに顔出すんは構わんけどな」

「え？」

ゴンはポカンとした表情でラミナを見る。

ラミナは肩を竦めて、

「組み手とかは人手が多い方がええでな。別にうちの修行の邪魔せんかったら、近くで修行しようが何も言う気はないで」

つまり、片手間ではあるが鍛えてやってもいいと言っているのだ。

それを理解したゴンは笑みを浮かべ、キルアは苦笑する。

「本当にいいのかよ？」

「あの状態で放置しても無駄そうやからな。やったら、まだお前らに監視させる方がマシや」

「……見てたのか？ ……例の覗き屋か？」

「まあな」

ラミナはブラールの能力で中を覗いていた。

それで最後のゴンの雰囲気から、目を放すのは少々危ういと判断を下したのだ。

もちろん、まだゴンは念が使えない状態だが、今後の作戦次第では念が使える状態になってから動く可能性もある。それならば、せめて師団長クラスには勝てるだけの戦力にすべきだとラミナは考えたのだ。

「……お前つてさ」

「あん？」

「やっぱ変なところで優しいよな」

「何がやねんど阿呆」

キルアの言葉にラミナは盛大に顔を顰める。

キルアは肩を竦めて、笑みを浮かべてゴンに声をかける。

「頑張ろうぜ」

「うん！」

まだ不安なところはあがあるが、それでも笑顔を取り戻したゴンを見て、キルアは少しだけホツとした。

ということ、ゴンとキルアも明日からティルガ達の特訓に参加することになった。

ゴン達を先に帰らせたラミナは、ティルガ達を外に待たせたまま古城の中に入る。

帰り道はすでにノヴに入り口を設置させているので問題はない。

ラミナはカイトがいる部屋に入り、未だ立ったままのカイトを見据える。

念人形は消えており、レベル1の状態に戻っていた。

特に表情を変えることなく、カイトに歩み寄る。

近づいてきたラミナに、カイトは攻撃を仕掛けるが、ラミナは易々とカイトの拳を右手で掴んで止める。

触られたことでカイトは一度動きを止める。

ラミナはカイトの腕を放して、数歩後ろに下がる。すると、カイトの上に念人形が具現化する。

「はあ……。これは高お付くで、ジン」

ラミナは小さくため息を吐いて、右手にソードブレイカーを具現化する。

「……恨むんやったら、負けた自分と胸糞悪い依頼をしてきた師匠を恨みや」

カイトにそう言って、ラミナは念人形を見上げる。

そして、その刃を振り下ろす。

「フラジャイル脆く儂い……ホープ夢物語」

これが救済だったのか。それとも凶刃だったのか。それが分かるのは、そう遠いことではなかった。

## #111 シヌキ×ト×コロスキ

カイトと再会した翌日。

ゴンとキルアは早速ラミナの元を訪れていた。

そこにはテイルガやブラールはもちろん、ナツクルとシュートもいた。

ゴンはテイルガ達とは初対面で、キルアもブラールとは初めて会うためお互いに自己紹介をする。もちろん、ブラールの自己紹介はテイルガがするのだが。

だが、そこでゴンとキルアにとって衝撃的な事実が叩きつけられる。

「え!? キメラアントって人間の時の記憶があるの!?!」

「それって全員?」

「いや、個人個人差がある。コルトはほとんど覚えていなかったから話題に出なかっただろう? 混ざった動物の記憶を持つ者もいる。だから必ずしも人間の記憶があるからと言って、我らのように人間の味方になるとは限らん。だから、敵対したら遠慮なく殺してくれ」

「……」

袂を別つたとはいえ元は仲間だった兵隊蟻を殺して構わないと言いつつテイルガに、ゴンとナツクルはやはり受け入れられないのか眉間に皺が寄る。

それにラミナはため息を吐き、キルアは両方の気持ちが分かるので何も言わず、シュートも黙っていた。

そして、テイルガも心の中で、

(やはりラミナを選んで正解だったようだな。別にこの者達が苦手と言うわけではない。むしろ好ましく思う。だが、今回に限って言えば、やはり隙にしかならんだろうな)

そう考えていた。

「よっしゃ。テイルガとブラールはまずはいつものメニューをこなし。ゴン達は終わるまでは好きに特訓しとき」

「分かった」

「……」

ティルガとブラールは頷いて、念の修行から始める。

ゴンとキルアは顔を見合わせて、ゴンがラミナに声をかける。

「ねえ、ラミナ。俺、今は念能力使えないんだけど、何すればいいかな？」

その言葉にラミナは小さくため息を吐く。

それにナツクルも助け舟を出す。

「お前の能力ならトリタテンを解除出来るんじゃないやねえのか？」

「え!?! ホント!?!」

ゴンは目を輝かせるが、ラミナは顔を顰める。

「ゴンが念を使えんのは真剣勝負の結果ちゃうんか？ 状況が状況とはいえ、なんでただのゴンの未熟さの結果をうちが尻拭いせなあかんねん」

「それは……」

「それにお前の弱さは念を使えるようになったら解決するんか？ そこをもう一遍考えてみい。なんでナツクルに手も足も出んかったんかをな」

ラミナはそう言って、ティルガ達に目を向ける。

ゴンは顔を顰めて腕を組んで考えだし、ナツクル達も眉間に皺を寄せる。

「じゃあ、ゴン。俺も念の修行すつからな。ちゃんと考えろよ」

「え? う、うん」

キルアは少し突き放すように言い放って、ゴンから離れて【練】を始める。

ナツクルとシュートはキルアの言動に顔を見合わせて、ゴンの邪魔をしないようにキルアの近くに移動する。

「おい、キルア。いいのかよ?」

「ああ。ラミナの指摘は間違いなく正しいよ。確かにゴンの念を元に戻すことに越したことはないけど、それじゃあゴンは結局念の修行に集中しちゃうだろうからな」

「お前はラミナが言いたいことを理解しているのか？」



「結構分かりやすかったと思うぜ？」

「どこがだよ？ ゴンにとって重要なのは【ジャジャン拳】の強化だろ」

ナツクルとの決闘で露出した【ジャジャン拳】の弱点。

『溜めが長いこと』と『硬』発動のため、リスクが大きいこと』の2つ。

これは決闘中に【ジャジャン拳】をフェイントに使うという解決策を編み出したが、それでも上記の2つが消えたわけではない。あくまで相手に手を出し辛くしただけに過ぎないため、根本的な解決にはなっていない。

本能的に動くキメラアントや、少しでも格上相手との戦いになればすぐに対応されてしまうレベルの小細工である。

なので、解決するにはオーラの移動と集中をスムーズにすることが最も有効のだが、それにはトリタテンを解除しなければならない。しかし、ナツクルでもトリタテンになってしまえば解除出来ず、除念能力に頼るしかない。

故にラミナの【脆く儂い夢物語】の事を話したのだ。

だが、ラミナとキルアはそう考えてはいなかった。

「確かにそれも重要だけど、それだけじゃダメなんだ」

「じゃあ何がいるんだよ？」

「……今は言わない。言えばゴンに言いそうだし」

「ぐっ……………」

「これも修行ってことだろ？ ゴンは頭を使うのが得意じゃない。少しでも考える癖をつけさせないと、直感や閃きばかりに頼ることになるからな」

そう言っただけでキルアは修行に集中する。

それにナツクルとシュートも顔を見合わせて、納得は出来ないがキルアが納得しているならばと自分に言い聞かせて、自分達も修行を始めるのだった。

ラミナはそんなキルア達の様子を横目で観察していた。

「……………いいのか？」

「ん？」

「あのゴンという子供。確かにどこか未恐ろしいものを感じるが、其方やキルアよりは未熟さ……というよりはムラが目立つ。生き残らせたいならば、しっかりと手解きすべきだと思うが……」

「それは否定せんけど、今のゴンはそれ以前の問題つちゆうことや」「というっ？」

「確かにゴンは才能あるで？　ちゃんと鍛えとるし、実力もある。ただし、子供にしては、やけどな。キルアと違って、子供やのに、とまでは言えん」

ゴンは確かに才能豊かで、実力はある。

だが、ラミナが言う様に、それは同年代の子供と比べれば、という言葉が付く。

もちろん、そこらへんのハンターよりは確実に強いが、ベテランや実力者の域には達していない。

キルアは今回のことでゾルディックの血と技を受け入れたため、心身共に完全に実力者側に入ったと言える。

だが、ゴンはどちらもそこまで達していないというのがラミナの見立てである。

正直なところ、これまでのゴンはキルアがいたからこそ戦い抜けてきたとすらラミナは思っている。

それも立派な実力とも言えるが、やはり一人前と呼ぶならば一人で戦い抜けるだけの実力がある。それは戦闘力だけではなく、思考力や推察力も求められるのは当然のことだ。

「今回うちらが戦う相手は全員が格上。助け合いも大事やけど、他人に気を取られとったら一瞬で死ぬ可能性もある戦いや。やから、お前らには必要な能力だけを鍛えるように、しかも無茶なレベルでやらせとる。1人でも生き延びられるようにな。けど、今のゴンには全てが足りんと言っても過言やない。現状、ホンマにただの足手纏いや」

故に自分で生き残る力を身に付けてもらわなければならない。

だからこそ、自分で考えて気づける思考を身に付けてもらう必要があるのだ。

キルアが言った様に、ラミナはすでに十分すぎるほどゴンにヒントを出しているのだから。

最低限自力でそこに気づいてもらわないと、トリタテンを除念する意味がない。

「……難しいものだな」

「私怨が絡んどるんや。単純なわけないねん。ほれ、お前らかてゴンと大して差はないで。しっかり集中しい」

「ああ」

ティルガは頷いて、修行に意識を戻す。

ラミナも頭の片隅にゴンのことを置いておきながら、ティルガとブール、そしてキルアの様子を観察するのだった。

そして、あつという間に夕暮れ。

ティルガ達の修行も一通り終え、組み手を始めようとしていた。

だが、ゴンは未だに答えを見つけられなかった。

「うくん……うくん……うくん……」

耳からブスブスと煙を立てながら、唸っているゴン。

流石にラミナとキルアもこれ以上は無駄だろうと判断した。

「はあ……ゴン」

「うくん……ん？ え、なに？」

「時間切れや。一回組み手したる」

「ホント!？」

ゴンは笑みを浮かべて、立ち上がる。

それにナツクルとシュートは訝しむようにラミナを見るが、ラミナはそれを無視して顔を鋭くしてゴンを見据える。

「組み手言うのとるけど、手加減はせえへんで。実戦と思て動けや。もちろん、うちも念は使わん」

正確には使う必要すらないのだが、まだそこまでは言わなかった。

ゴンも顔を引き締めて頷き、身体を解し始める。

ラミナも軽く準備運動をして、キルア達は少し離れたところに移動

する。

「準備ええか？」

「うん!!」

「ほな、始めるで」

「うん!!」

ゴンが腰を屈めて構えた瞬間、

ラミナが右フックを繰り出しながら目の前にいた。

「っ——!?!」

ゴンが目を見開いた時には、すでにラミナの拳は左頬に叩き込まれていた。

顔が跳ね上がるゴン。

後ろに身体が仰け反った時、ラミナは左拳をゴンの胸に叩き込んで吹き飛ばした。

「がっ——!?!」

ゴンは地面をバウンドしながら転がり、手足で地面を引っ掻きながらなんとか体勢を立て直して顔を上げる。

目に映ったのは、すでに拳を構えているラミナの姿だった。

「遅いわ阿呆」

冷たく言い放つラミナ。

そして、左フックをゴンの顔を目掛けて繰り出す。

ゴンはなんとか腕を顔まで上げるが、ラミナの拳が直前で止まり、右拳がゴンの左脇腹に振り抜かれる。

それも左肘と左膝で防ごうとしたゴンだが、その拳も直前で止まり、直後右脇腹にとつともない衝撃が走った。

「がふっ!!」

横に吹き飛んで、また地面を転がるゴン。

ラミナは振り抜いた左脚をゆっくりと下ろしながら、ゴンを見据えていた。

しかし、直後姿が霞み、ナックル達が気づいた時には猛スピードでゴンへと駆け迫っていた。

そして、まだ起き上がれてもいないゴンを蹴り上げて身体を浮か

し、猛烈なラッシュを繰り出す。

ゴンはなんとか両腕を上げて顔を庇うも、全身を襲うあまりの衝撃に一瞬意識が遠のく。

だが、ラミナは一切手を緩めず、ガードが緩んだゴンの鳩尾に右足を突き刺す。

ゴンは呼吸すらも止まり、勢いよくくの字に吹き飛んで、背後の木の幹に背中から叩きつけられ、その衝撃で意識が戻る。

地面に崩れ落ちたゴンは腹を押さえて咳き込む。

「ぐっ！ ゲホッ！ エホッ！」

「……少しは理解したか？ ゴン。それがお前の念を戻す必要がない理由や」

ラミナはゆっくりと歩み寄りながら告げる。

ゴンは痛みに吐き気、めまいなどに襲われながらも、必死にラミナの言葉に耳を傾ける。

「お前の能力については簡単に聞いた。ナツクルとの戦いについてもな。【ジャジャン拳】、やったか？ お前の能力の弱点はナツクルの指摘通りや。けど、お前の一番の問題は念云々かんぬん以前にある」  
「……」

「お前の一番の弱点は体術。お前は確かに強い。12歳のガキにしては、やけどな。それだけや。うちからすれば、それだけしか感想が出えへん」

「たい……じゅっ……」

「まあ、あくまで殺し合いに身を置く人間からすれば、や。実力者と呼ばれる域におけるモンからすれば、お前は見所があるガキでしかないねん」

ラミナは腕を組んで、ゴンを見下ろす。

「お前の【硬】は確かに無視できるモンやない。そこは素直に認めたる。けど、それだけや。他は何にも怖ない」

速さはある。だが、ラミナ達ほどではない。

力もある。だが、これもラミナ達ほどではない。

才能もある。だが、それを活かせるだけの経験が圧倒的に足りない

い。

そして、技術がない。だが、ラミナ達はその技術こそが強さの根幹にある。

時折見せる意外性もその時は無視できないが、それは初見だからこそ。

何度か戦えば、ある程度備えることは出来る。

それがゴンの弱点。

【ジャジャン拳】以前の問題なのだ。

「どんだけ【硬】や能力を鍛えようが、遅いんやったら躲せるし、元々の力が下やったらこっちも【凝】や【硬】で防げばええだけ。事実、お前はうちに手も足も出えへん。念が使えた所で、お前に能力を使わせる暇なんざ与えんように出来る。そうなればお前はもうただ一方的にやられるだけや」

「っ……………」

「それがナツクルに負けた一番の要因で、蟻達との戦いでは一番重要となる要素。そこで、強化系であるお前にとっては、能力よりも鍛えなあかんかった部分」

と言っても、それは今回の任務に参加しなければ無理に指摘する必要がなかったことでもある。

歳やこれまでの生活を考えると、今でも十分すぎるほど強い。

だが、今回の任務はそれでは足りない。未熟に過ぎるのだ。

だからネテロはナツクル達と戦わせた。

「お前が戦いたい相手は、うちですら分が悪いかもしれん。良くて五分。うちの方が強いとは自惚れても言えん。そんな相手に、全てが負けとるお前が勝てると思とるんか？」

「……………そんなことは、分かってる。だから、死ぬ気で修行して強くなるんだ……………」

ゴンはふらつきながらも立ち上がって力強く言う。

そんなゴンの姿にナツクルやシュートは心の中で応援するも、ラミナは鼻で笑う。

「はっ！ アホか。死ぬ気で頑張るくらい、おっぱい飲んどるガキで

も出来るで。その程度で強おなれるんやったら、誰も苦勞せんわ」

「だったら……！」

「殺す気で来いや」

ズウとラミナから押し潰すかのような殺気が噴き出す。

ゴンは一瞬足が下がりそうになるも、全力で堪える。

「お前は相手には全力で来いとか言う癖に、自分は殺す気で戦わんよな。憶えとけや、ゴン。それは本来格上が格下にする行為なんやぞ？ 殺せるだけの力があるから、殺さんように相手を倒せるんや。けどな、今のお前は念を取り戻したとしても、殺す力すら足りん」

ゴンが確実に殺せるのは兵隊長クラスまで。

師団長クラスになるとティルガでも一步届かず、護衛軍は言わずもがな。

自分を殺す力を持たない相手を、護衛軍が真面目に相手などするわけがない。

「死ぬ気で足らんなら、殺す気も持たなあかんやろうが」

「っ……！」

「お前の【ジャジャン拳】はシンプル故にどんな奴が相手でも勝てるだけのポテンシャルはある。けどな、シンプルかつ制約が少ないが故に、いきなりパワーアップ出来る能力でもないねん。地道に修行を積み重ねて真価を発揮できるようになるモンや」

故に、絶対にゴンはこの戦いにおいては足手纏いのまま参加するしかない。

ゴンが殺す気で相手に挑もうが、ゴンが強くなったわけではないのだから。ただ、今まで無意識にブレーキをかけていた力を出せるようになっただけに過ぎないのだ。

「お前の【ジャジャン拳】程度の威力やったら、うちでも出せる。能力を組み合わせれば、お前の倍以上の威力も出せるわ」

グーは【敬愛する兄の剛腕】で、パーは【敬愛する兄の咆哮】で、チョキは言わずもがな。

ラミナは制限があるとはいえ、ゴンの能力を完璧に上回ることが出来る。

グーに関しては、能力を使わずともラミナの「硬」の方が上だ。オーラ量も、オーラの扱いも、ラミナの方がまだまだ圧倒的に上のだから。

どうやってもゴンは『油断できない子供』レベルから抜け出せない。「殺す気に関してはナツクルやシユートもまあ、課題やけどな。それでもあの2人はお前より実力も経験も上やし、その課題を横に置けるだけの代わりが効かん能力を持つとる。ティルガとブラールも未熟ではあるけど、蟻の能力と情報は捨てがたいし、覚悟もある。キルアも殺す覚悟が出来て、ゾルディックの暗殺術はナツクルやシユートの課題を考えれば得難い戦力になった。けど、お前には何一つとして、お前でないとかかんと思わせるだけのモンがない。今、お前がここにおれる理由は『カイトのことで同情しとるから』。ただそれだけや。やったら、お前がこれからの戦いに参加してもええとうちらに思わせるんは、気概しかないやろが」

ラミナの言葉にゴンは歯を食いしばるしか出来なかった。

(まあ、それでも全然足りんやろうけどな)

ラミナは悔しがっているゴンを見ながら、内心ため息を吐く。

死ぬ気と殺す気を持つだけで強くなれるなら苦労しない。

あくまで『実力者』と呼ばれる域に足を踏み入れるための壁を乗り越えるきつかけの一つでしかない。

(けどなあ、ゴンを短時間で今以上に強くするんやったら、新たに制約を組み入れるか、他の何を犠牲にしてもネフェルピトーを殺すつちゅう覚悟を持たせるしかないんよなあ……)

だが、流石にそこまでゴンを追い込む必要性も義理も無い。

故に『殺す気で来い』としか言えないのだ。

「ほれ、早よ来いや。もう動けるくらいには回復しとるやろ」

「っ……!! おお!!」

ゴンは一瞬歯を食いしばるも、すぐさま叫びながら駆け出す。

拳を構えて殴りかかるも、やはりその拳には殺気がほとんど乗っていないかった。

ラミナは無表情でそれを見つめ、



「阿呆が」

そう聞こえた直後、ゴンは顔に強烈な衝撃を感じて、意識が闇に落ちる。

横から見ていたキルア達は、ラミナに思いつきり顔を殴られて吹き飛び、受け身も取れずに地面を転がったゴンにすぐさま駆け寄る。

ゴンは気絶しており、左頬がすでに大きく腫れ上がっていた。

「っ……………！ ラミナ……………テメェ!!」

「やめろ、ナツクル」

ナツクルが怒りに顔を染めて、ラミナに詰め寄ろうとしたが、キルアが鋭く呼びかけて制止する。

その鋭い声に、ナツクルは一瞬気圧されて無意識に足を止めてしまった。

「キルア……………。けどよ!!」

「言つたろ？ ラミナは間違つてない。今回の戦いがゴンにとって荷が重いのは分かつてたことだ」

「っ……………！ お前まで……………そんなこと言うのかよ……………！」

「だからって勘違いすんなよ？ 俺はゴンに手を引けなんて言う気はないさ。ゴンの足らない部分を俺が支えてやればいいだけって話だ。ゴンが殺せないなら、俺が殺して道を作る。ゴンが1人でやるって言ふなら、俺は邪魔が入らないようにしてやる」

ゴンを背負いながら力強く宣言するキルアに、ナツクルやシュートはもう何も言えなかった。

ラミナを除いて。

「それでもゴンやと一撃も入れることなく死ぬで。その覚悟も出来らんやろな？」

「……………ああ。けど、させない」

キルアはラミナにまつすぐ目を合わせる。

「こいつは殺させないし、死なせない。絶対に」

「……………なら、ええけどな」

ラミナはそれ以上追及することはしなかった。

「ゴンが起きたら言うとかや。本気で勝つつもりやったら、基礎訓練

と組み手からやり直させてな。修行の監督はキルア、お前がやりい。相談くらいは乗ったるでな」

「ああ。……サンキュ」

「ふん。ゴンを寝かしてきたら、次はお前と組み手したる。準備しときや」

「分かった」

キルアはゴンをコルトがいる屋敷へと運ぶ。

ラミナはそれを見送って、先にティルガと組み手を始めることにした。

だがその前に、ティルガはゴンを見つめながら、思ったことを素直に口にする。

「……本当にあの子供を連れて行って大丈夫なのか？ 我が言えることではないが、其方の言う通りあの子供ではネフェルピトーには到底及ばぬぞ。キルアが付いているとしても」

「やろな。まあ、自分の意志でプロハンターとして参加する以上、うちらがどう言おうが、結局手も足も出ずに死のうが、それはあいつらの責任つちゆうだけのことや」

ラミナは肩を竦め、ティルガもそれ以上何も言わずに頷いて、組み手を始めるのだった。

数時間後。

ゴンが意識を取り戻した時はすでに夜だった。

ゴンは布団の上で横たわったまま、顔や体に走る痛みで顔を顰める。

だが、それ以上にゴンに襲い掛かっているのはラミナに叩きつけられた現実だった。

何もかもが足りないという事実。

数日前に自分が弱い事を悔やみ、反省したばかりだというのに。

それでもまだ足りなかった。

「殺す気……か」

自分の命を懸けてもまだ届かない。

NGLでも何体かのキメラアントを殺したが、それは『やむを得ない』という意識が強かった。

だが、これから挑む戦いはそれではいけないのだ。

「……カイトを助けるためなら……迷ってる場合じゃない、よね……」

覚悟を固めるように呟いたゴンは、すぐにでも修行を始めたかったが、少しでも体調を万全にするために今は休むことにしたのだった。

## #112 ホンノウニキルモノ×タイ×ヤミニニキルモノ

時は少し遡る。

王が産まれて2日。

女王を見捨ててNGLの巣から飛び出した元師団長の一匹、鰐のキメラアントのグロークはバルサ諸島周囲の無人島の1つにいた。

グロークは『大食いキング』を目指し、海を移動していた。

理由は外敵の少なさと餌の多さである。

人間は水中を自由自在に動けない。

故にグロークに迫るには船を使わなければならないのだが、船を使って接近すればグロークならばすぐに気づくことが出来る。他にもグローク同様海に飛び出した兵隊蟻達があり、その者達と協力しながら移動しているので必ず船のエンジン音が響けば先にグローク達が気付ける。

そうやって備えながらも、グローク達は意気揚々と海を渡り、海の生き物や立ち寄った島の生物を次々と食い荒らした。

そして、グロークは食事を終え、浜辺で寝転んで体を休めていた。

「フウ……さあて、次はどこちに行くか……。そろそろ動物や魚も飽きてきたし、人間がいる島でも探すか？」

何より小さい島ではすぐに食い尽くしてしまう。

もちろん、小さい動物は放置しているが、腹が満たせそうな大ききの動物はほぼ食い尽くしてしまったのだった。

「まあ、まだ旅立って数日だ。もう少し移動すれば、ちょうどいい島の1つや2つ見つかるワな」

そう考えて昼寝でもしようとした、その時。

『タ、タスケテクレエ!!』

「おワ!? な、なんだ!?!」

突如グロークの頭にテレパシーが響いてきた。

グロークは目を丸くして、体を起こして周囲を見渡す。

すると、水平線ギリギリの海が不自然に揺らいで盛り上がったように見え、下級兵と思われる兵隊蟻からのテレパシーが途切れた。

しかし、同じく海で餌を探していた他の兵隊蟻達から止めどなくテレパシーが届いてきた。

『やられた！ タイタやられた!!』

『どこからの攻撃だ!? いきなり爆発したぞ!? つ!? なっ!? ギャアアア——!』

『また!? どこ!? 何処に隠れているの!?』

『いや、急に何かが現れたように見えましたよ!? その何かはタイタ達に当たって爆発しました!』

『ミエナイ！ 魚ダケ！ ミエナイ！ ミエナガアアア!!』

「んだあ……!? 何が起きてんだ!？」

グロークは入り乱れ、そしてどんどん減っていくテレパシーに事態が呑み込めずただただ浜辺で立ち尽くしていた。

その間も海面が不自然に揺らいで波立ち、その度にテレパシーが消える。

「敵か……!? けど、姿が視えねえって何だよ？ 人間？ けど、船なんてどこにもねえぞ?」

見渡す限り海しか見えない。島は近くにはグロークがいる島しかない。

つまり、敵は海の中になることになる。

「人間が海の中を自由に泳げるってのか？ それともアモンガキツドみてえに念獣でも出してんのか?」

グロークが考えている間も兵隊蟻達の信号はドンドン減り、遂に何も聞こえなくなった。

「くそっ！ 何だっつんだ!」

グロークは正体を確かめるべく、海に飛び込む。

猛スピードで海中を進み、荒れていた場所に近づくと前方にバラバラになった兵隊蟻達の死骸と血が辺り一面に漂っていた。

(いくら下級兵と雑務兵しかいなかったとは言え、全員が例外なくバラバラにされてやがる……。一体どんな奴がいやがるんだ?)

グロークは最大限警戒しながら周囲を見渡すが、敵の姿は見当たらない。

今の騒動で魚達も離れており、僅かに見当たるのは海底に潜む生き物と血の臭いに誘われてきた鮫ばかり。

その鮫もグロークが見る限り、普通の鮫で特にオーラを纏っているようにも見えない。

(ちっ……いー オレは【円】とか【凝】とか細けえの苦手なんだよな……)

グロークはほとんど人間だった頃の記憶はなく、どちらかと言えば動物寄りの思考で行動するタイプだった。

まどろっこしい国を造りたいわけでもなく、気ままに餌を貪り、気に入った雌を犯して孕ませればそれで十分なのだ。

故に念能力の修行も真面目にやっておらず、単純にキメラアントの身体能力だけで活動していた。

そのため、グロークは目に映るものや鼻で感じるもの以外に敵を探す能力はなかった。

グロークは舌打ちして、一度島に戻ろうとした時、右手から何かが迫ってくるのを水の揺らぎから感じ取った。

咄嗟にオーラを強め、両腕を交えて身を守ろうとした直後、腕に何かが勢いよく当たって猛烈な衝撃に襲われる。

「グウアアアア!？」

グロークは後ろに吹き飛ばされるが、必死に体勢を整える。

グロークにとっては致命傷を与えるものではなく、ただただとてつもない衝撃が叩きつけられただけだったが、それでも生きてきて一番のダメージだった。

(ヤ、ヤバかったぜ……。何だったんだ……。? 本当に何も見えなかったぞ?)

得体の知れない攻撃にグロークも混乱し、全力で周囲の気配を探るもやはり何も見当たらない。

(くそお……。誰だ!! 何処に隠れてやがる!!)

聞こえるわけもないが、徐々に怒りが頭を支配しながら周囲を睨み

つける。

その直後、グロークの真下で爆発が起こった。

「グオオオオオ!?」

グロークは海から吹き飛ばされ、弧を描いて先ほどまでいた浜辺に背中から勢いよく落ちる。

もちろん、浜辺に落ちたくらいでどうにかなるグロークではないので、すぐさま立ち上がる。

「一体……一体何が起こってやがる……!?」

『ふははははは!! ふははははははは!!』

「!? だ、誰だ!?!」

突如聞こえてきた高笑いにグロークは目を丸くして、その姿を探す。

だが、やはり人影らしきものはどこにも見えない。

『我が攻撃を受け切るとは、流石“修羅の謫仙”や“刃花の紅玉”を苦しめた“暴食の混獣蟻”の師団長だ!!』

そんなグロークの混乱を尻目に、高らかに謎の音が響き渡る。

「どこだ!! 何処に隠れてやがる!! 姿を見せやがれ、この臆病者があ!!」

『ほお……言うではないか。よかろう!! ならば刮目せよ!! そして後悔するといい!! 我が神秘を目にすることを!!』

「なんだと……?」

『光学迷彩解除!! 浮上せよ、【サウザンド・ワンピース世界を渡る秘宝艦】!!』

直後、浜辺から離れた海面が大きくうねり、海が盛り上がり始める。海はどんどん高くなり、突如弾けたかと思うと、

巨大な船が、水を排出しながら姿を現した。

グロークは大きく目と口を見開いて、啞然と突如海中から現れた巨大船を見上げる。

「な……な……な……な……！」

巨大船は未だ浮上を続けており、遂には海面からも離れた。

『ふははははは!! さあ、その目に！ 記憶に！ 魂に刻むがいい!!』

これこそが我が “不止の暗艦” 【アーク】たる所以!! そして、我ら怪盗団【ザ・ファントム】の象徴であり、完全無欠の移動要塞!!

サウザンド・ワンピース  
【世界を渡る秘宝艦】である!!』

サウザンド・ワンピース  
【世界を渡る秘宝艦】。

相互協力型能力で具現化された空海対応型移動要塞で、シーフがリーダーを務める怪盗団【ザ・ファントム】の拠点でもある。

神字や制約と誓約によつて、メンバー達のオーラや能力を強化して造り上げた船は全長100m、全幅18mの見た目フェリー船だ。魚雷や機雷、ミサイルを打つことも出来、【隠】を組み合わせた光学迷彩で姿を隠すことが出来る。

その正体は具現化した船の1/3程度の小型船である。

盗んだ宝はメンバーの一人が具現化した念空間の倉庫に収納しており、【世界を渡る秘宝艦】発動中は博物館のような様相に変わる。

ちなみにシーフ本人は特質系能力者で、能力名は【ワイルドマスケ絆の二十面相】。

己を含めたメンバー全員に仮面を身に付けさせることを制約とし、【世界を渡る秘宝艦】発動中は怪盗団の一員となった仲間の能力を増幅させる。生身での戦闘時には、仮面を交換したメンバーの能力を一時的に使用することが可能である。

基本的に【世界を渡る秘宝艦】発動中は艦長席に座っていることが制約の1つだが、予告状を送りつけた場所に忍び込む際は一定時間離れて活動することが出来る。

これが盗み成功率100%の理由である。

空を飛び、海に潜れる船などそう簡単には追えないし、見失った際に能力を解除されると見分けがつかなくなってしまうのだ。

ちなみに巨大船にした理由は『インパクトがデカイ方が、より相手の目を惑わせることが出来るから』である。



「こ、これも念……なのか？ ……ん？」

呆然と船を見上げていたグロークの目に、船首に立つ人影が見えた。

それは腕を組み、潮風に銀の長髪を靡かせる女騎士だった。

女騎士―【チャリオット】は無機質な瞳でグロークを見下ろす。

「目標・視認」

『うむー…ここからは任せようー！』

「了解・出撃」

チャリオットは船首から戸惑うことなく飛び出す。

すると、背中と足裏からオーラが噴き出して、猛スピードで浜辺へと飛翔する。

「な、なんだよ一体……!?!」

すぐ傍に着地したチャリオットに、グロークは完全に混乱していた。

チャリオットはグロークの反応を無視して、まっすぐ見据える。

「討伐・開始」

拳を構えたチャリオットはグロークに向かって駆け出す。

「っ!! なめんじゃねえ!!」

勢いよく迫ってきたチャリオットに、グロークは意識を切り替えて口を大きく開いて待ち構える。

チャリオットは一切躊躇することなく、右拳を振り抜く。

グロークはその拳を噛み砕こうとその口を勢いよく閉じる。

グロークは大きく顔を仰げ反らせて、後ろに数mほど滑って後退する。

しかし、倒れることなく、すぐに体勢を立て直して得意げに笑みを浮かべる。

「へっー！ やるじゃねえか！ ちよつと痛かったぜ。けど、お前はすげえ痛そうだワなあ」

愉快気に語るグロークの目には、右肘から先を失ったチャリオットの姿が映っていた。

「思ったより脆い鎧だワな。簡単に噛み砕けちまったぜ」

「……」

チャリオットは一切表情を変えずに、喰われた腕に目を向ける。

「損傷・確認。具現化系ユニット・修復開始」

「あ?」

訝しむグローク。

直後、チャリオットの右肘からオーラが噴き出したかと思うと、あつという間に右腕が復活した。

目を見開いて固まるグロークを尻目に、チャリオットは右手を離握手をして感覚を確かめる。

「動作・異常なし。戦闘続行・支障なし」

「な、なんだよ……。お前……!?!」

「コードネーム・【チャリオット】・殺し屋」

「殺し屋あ? だ、だとしても、どうやって腕を再生させやがった!?!」

いくら念能力でも、そんな簡単に再生するもんじゃねえだろ……。!?!」

「我・身体・人間・否」

チャリオットは拳を握った右腕をグロークに向けて突き出す。

「操作系ユニット・放出系ユニット・起動。ライトアーム・ロケットパ  
ンチ・発射」

すると、右肘からオーラが噴き出して、勢いよく右手が発射された。

「なあ!?! ガフツ!?!」

驚いて固まってしまったグロークの鳩尾に、放たれた右拳が突き刺さってくの字に吹き飛ぶ。

チャリオットの右手は巻き戻されたかのように、チャリオットの身体に戻る。

そして、足裏からオーラを噴き出して、大量の砂を巻き上げてグロークへと飛び迫る。

「このっ!! くそがあ!!」

グロークは起き上がりながら体を捻って、尻尾を全力で振る。

「強化系ユニット・出力増強。身体構成・具現化系ユニット・硬度増強」

猛烈な勢いで迫る尻尾に、チャリオットは冷静に言葉を呟き、左腕を顔の横に上げてグロークの尻尾を完璧に受け止める。

吹き飛ぶどころか動くことすらなく、先ほどのように砕けるどころか凹みすらしなかった。

「なっ……!!? (嘘だろ……!! 噛みつきと大して威力は変わらねえんだぞ!?) なのに、今度は傷一つ付かねえだど!?)」

「出力・硬度・問題なし。戦闘・継続」

チャリオットは右アッパーを繰り出して、グロークの出っ張った下顎に叩き込んだ。

「ゴブウ!？」

牙が数本折れ飛ばして顔を跳ね上げるグローク。

続けてチャリオットは左手を広げて、グロークの胸に向ける。

すると、左手の平が僅かに開き、小さな銃口が露出する。

「放出系ユニット・起動。レフトハンド・オーラキャノン・発射」

ドオン!!

左手からバスケットボール大の念弾が発射されて、グロークの胸に叩きつけられてくの字に吹き飛ばす。

グロークは浜辺を勢いよく転がっていき、仰向けに止まる。

胸から煙が上がっているが、グロークは呻きながらゆっくりと起き上がる。

「ぐ……!! 何なんだよ、お前は……!!?」

「……標的・損傷軽微。標的硬度推測値・修正。放出系ユニット・出力増強・オーラ消費量増加。標的潜在能力不明・オーラ消費量増加・危険・可能性あり」

グロークはチャリオットの人間離れた戦い方に、ただただ戸惑う。

チャリオットもグロークの想像以上の頑丈さに内心驚いていた。

それを船から観戦していたシーフは腕を組んで、グロークの頑丈さに感心していた。

「ふむ……我らの魚雷にも無傷で耐えきったただけはある。あの「ゴレム」の攻撃にも無傷とはいかぬとはいえ、軽傷で耐え抜くとはな」「大丈夫なの? ジョーカー。あのチャリオットが倒すのに手間取るなんて、只事じゃないわよ?」

豹の仮面を被る仲間の女が、シーフに声をかける。

シーフは仲間からはジョーカーと呼ばれている。

「問題ないさ。確かに今は手間取っているが、まだゴーレムも本気ではないだけだ。相手は念能力を持つキメラアント。下手に決めにかかって、反撃を喰らえばタダではすまない可能性があるからな」

「けど、チャリオットの攻撃に耐えるなんて、やっぱりこの眼で見ても信じられないわ。チャリオットって言えば、その名の通り戦車の如く頑丈さとパワーで敵を薙ぎ倒していく闇の世界でも上位に入る実力者。その攻撃を受けてすぐに起き上がって、一度とは言え噛み砕くなんて……」

「ってゆーか、俺はあの腕の再生の方に驚いたけどな」

肩に棘が生えたライダースーツを着た女性や髑髏仮面を着けた男の言葉に、仲間はそれぞれに反応を示す。

「故に彼女は『ゴーレム』なのさ。あの身体は全てオーラで具現化されている」

「けど、それにしては……」

「硬く、パワーがあり、念弾を撃てるのはありえない、か？」

「ええ」

「答えは簡単だ。あの身体もこの『世界を渡る秘宝艦』同様、相互協力型の能力で造られているのさ。まあ、正確には強制徴収型能力、かな？」

「強制徴収型能力？」

「あの身体を具現化して操っているのは本人だが、それ以外の強化や放出系は他者から無理矢理オーラを引き出して使っているんだ。意識を失わせた囚人や奴隷を使っただけ」

とある兄妹がいた。

兄妹はとても仲が良く、兄は研究が好きで、妹は戦いが好きだった。互いに念を修得し、それぞれに念を極めようとしていた。

だがある時、妹は事故で四肢を失い、寝たきりの身体になってしまった。

それに嘆いた兄はある装置を作り上げた。

寝たきりの妹に新しい体を造る装置だ。

妹のオーラを増幅させて、「チャリオット」の身体を具現化させ、意識をその身体に移す。

それ自体は珍しい能力ではないが、やはり戦闘力はどうしても低くなり、長時間身体を維持するのも難しかった。

その課題を克服したのが『オーラ強制徴収装置』である。

妹が寝ている装置の周りに、数人の人間を同じく装置に寝かして妹の装置に繋ぎ、その者達を『ユニット』及び『オーラの燃料タンク』として活用する術を編み出したのだ。

強化系、具現化系、放出系、変化系、操作系の五系統を持つ人間達を繋いで、それぞれに強化させる『ユニット』。更に系統関係なく人間達を繋いで、単純にオーラを補充する『燃料タンク』としたのだ。

繋ぐ人間達は死刑囚や奴隷、犯罪者達のみとしており、そのために殺し屋となって仕事をしながら人材調達を行っていたのだ。

兄は妹を助け、研究を続ける金と資材を得る。

妹は偽の身体とは言え、戦うことが出来る。

故に「チャリオット」である兄妹は、よほどのことがない限り依頼人を裏切らないのだ。

「チャリオット」の正式名にして、能力名は「ヴァルキユリアドール人造戦乙女・ブリュンヒルデ」。

美しい兄妹愛が成した、人道的目的で生み出された非人道的な能力である。

「変化系ユニット・起動。レフトアーム・オーラブレード・展開」

チャリオットの左手が変形して、剣と成る。

剣を構えて猛スピードで飛び出し、グロークに一気に迫る。

「ぐうー。うおらアアア!!」

グロークは折れた歯を食いしばりながら、全力でオーラを籠めながら尻尾を叩きつけようと振り抜く。

チャリオットは徹頭徹尾表情を変えずに、剣となった左腕を振り上げて、グロークの尻尾を難なく斬り落とした。

「ギヤアアア!?!」

チャリオットはすぐさま刃を切り返して、グロークの右脚を斬り落とす。

グロークは仰向けに倒れて、痛みへのたうち回る。

チャリオットは足裏からオーラを噴き出して、高速で飛び上がったグロークの真上に移動する。

そして、右貫手を構え、

「変化系ユニット・強化系ユニット・起動。ライトアーム・オーラドリル・駆動」

右手が勢いよく回転を始め、ドリル状になる。そして、硬度を強化して、全力で右手をグロークの顔面目掛けて突き出す。

「や、やめろオオオオゴゴッ——!!」

グロークの喉奥に、無慈悲のドリルが突き刺さる。

仰向けになっていたためにドリルは脳をも貫いて挽き潰す。

ビクリと大きく体を跳ねさせて、グロークの身体から力が抜ける。

完全に動かなくなるまでチャリオットはずっとドリルを押し込み続け、死んだことを確認して右手を元に戻す。

「討伐・遂行確認」

『ふはははは!! 見事だ、《金剛傀儡》【ゴーレム】よ! その死骸は我らが貰い受ける!』

「了解。今後・任務続行?」

『うむ。もう少し近海を搜索する。少しでも討伐数を増やせば、報酬も増えるだろうからな!』

「了解」

チャリオットはグロークの死骸を担いで、船へと戻る。

そして、周囲にまだ潜んでいた兵隊蟻を次々と討伐していくのだった。

時は変わって、ラミナとキルア達が修行を始めた頃。

場所はミテネ連邦が一国【ハス共和国】の街。

普段は楽し気な声で賑やかな街なのだが、今は悲鳴と怒号が飛び

交っていた。

街中にパトカーが走り回り、警官達が顔を強張らせて拳銃を構えて、ある生物に銃口を向けていた。

「カブシー・カアブシ!!」

暴れていたのはカマツスだった。

パトカーを片手で掴んで持ち上げて、猛スピードで近くの建物に投げ叩きつける。

警官達は発砲するも、カマツスの硬い筋肉が覆う身体を貫けずに弾かれる。

それに警官達は顔を恐怖に染め、構えた拳銃は震えている。

ロカリオ共和国や他国で出現しているキメラアントの情報はもちろん警官達も知っている。その全てが甚大な被害を受けている事も、そして被害のほとんどが警官ばかりだという事も。

まだキメラアントであるという情報はなく、新種の魔獣とされているが、それでも時期的にその新種の魔獣だと警官達は嫌でも理解してしまう。

次にニュースで被害者として報じられるのは、自分達。

その事実には警官達は恐怖で支配されてしまう。

そして、それを証明するかの様にカマツスの目が警官達に向く。

その時、

ガサツ!

カマツスのすぐ横にある公園の茂みが動いて、音を立てる。

それに全員が目を向けると同時に、茂みからフードを被った少年が顔を出す。

「ふう……。む? なんじゃ、取り込み中のようじゃのう」

脳天気と言う子供に、警官達は一瞬啞然としてしまうが、すぐにハツとして、

「危ない!! すぐに逃げなさい——」

「カブシ!!」

警官の警告も空しく、カマツスは少年にターゲットを変えて、勢いよく駆け出して襲い掛かる。

警官達は発砲しようとするが、少年に当たる可能性があり、発砲を躊躇してしまう。

そして、カマツスの大きい右手が少年へと迫る。

それに警官達はカマツスに少年の頭が握り潰される光景が頭を過ぎり、絶望に襲われる。

ズドン!!

カマツスが右腕を伸ばし切ると同時に、鈍い音が響き渡る。

警官達は思わず目を瞑って顔を背ける。

そして、ゆつくりと目を開いて顔を向けると、飛び込んできた光景に目を見開く。

上から押し潰すように伸ばされたカマツスの右手を。

少年は左腕一本で受け止めていた。

「カ、カブシ……!!」

「う、嘘だろ……?」

「な、なんだあの子供は……」

「ふむ……随分と節操のない虫じやの。まあ、虫に節操を求めるのもおかしい話かの? いや、人と混ざっておるのじゃから間違ってもおらんのか? うゝむ……面倒な輩じやのう」

少年―【アルケイデス】は周囲の反応を気にも留めずに呑気に独り言を呟く。

それにカマツスは馬鹿にされたと感じた。

「ウゝゝ! カブウシツ!!」

カマツスは右手を放して左拳を握り締め、左腕を勢いよく振り被る。

それに今度こそ警官達は最悪の光景を想像する。

カマツスが左拳を振り下ろす。



猛烈な勢いで迫るその拳を、アルケイデスは右裏拳で難なく弾いた。

アルケイデスは軽く振っただけのように見えたのに、カマツスの左腕は物凄い力で弾かれたように跳ね上がった。

カマツスは数歩後退し、僅かに痺れる左手に驚く。

「カブツ!?!」

「ふむ。力は中々じやの。やはり四本脚故に力を乗せやすいということか」

「カブウ……!・ カアブツシイイイ!!」

「おお」

カマツスは両腕を上げて怒りに叫び、全身から膨大なオーラを噴き出す。

想像以上に力強いオーラに、アルケイデスは小さく感嘆の声を上げる。

「カアブ、カブカブカブカブカブカブカブカブカブ!!」

カマツスは強烈なラッシュを繰り出して、アルケイデスに叩きつける。

警官達は今度こそ終わりだと思ったが、

ダダダダダダダダダ!!!

アルケイデスも高速で両腕を動かして、小さな拳でカマツスの大きな拳を全て弾いていく。

その場から一歩どころか半歩も動いておらず、踏ん張る様子も見せずに涼しい顔でカマツスの猛攻を防ぐアルケイデスに、ようやく警官達はアルケイデスがただの子供ではないことを理解する。

と言っても、アルケイデスはフードを深く被っているので、本当に子供なのかどうかも判断出来ていないが。

「ふむふむ。どうやら力に任せて、オーラについては全くの未熟のようじゃのう。まあ、小童並みの知能しかないお主が蟻の中でどれほど

なのかは知らんがな」

「カ、カブ……！」

「どうやら、お主からはこれ以上得るものはなさそうじゃの」

そう言ったアルケイデスは、未だ連続で殴りかかっていたカマツスの右手首を難なく掴んで、軽く捻ってカマツスの右腕を肘あたりで引き千切った。

「カブッシャア!?!」

自慢の腕がいとも簡単に千切られたショックと痛みに悲鳴染みた声を上げる。

「ほれ、驚いておる場合か」

アルケイデスはいつの間にかカマツスの後ろ脚を掴んでいた。

カマツスは振り解こうとしたが、直後物凄い力で引つ張られたかと思ったら、地面に背中から叩きつけられていた。

「カブシツ……!?!」

「まだまだじゃのう。力にかまけておるからじゃ」

警官達は目にした光景を受け入れられなかった。

自分達よりも小さい子供が、自分達よりも大きい怪物を片手で持ち上げて叩きつけたのだから。

「カブ……!?! カブウウ!!」

カマツスは左腕を振り上げて、左拳にオーラを集中させる。

「む」

アルケイデスはそれを見て、後ろに跳び下がる。

カマツスはそれに構わず左拳を勢いよく地面に叩きつけた。

地面が爆せて土が舞い、一瞬カマツスの姿を隠す。

直後、カマツスが土煙から猛スピードで飛び出してきて、アルケイデスに背を向けて一目散に逃げ出した。

アルケイデスはその逃げ足の速さに呆れるやら感心するやらだった。

「やれやれ……潔いと言うべきか、情けないと言うべきか。はあ……普段ならばあんな小童放っておくところじゃが……」

そう呟いたと思ったアルケイデスの姿が消えたかと思うと、すでに

数百mほど離れていたカマツスの真横に現れる。

「カブウ?!?!」

「スマンが依頼主の意向での。見かけた虫は一匹残らず踏みつぶすようにと言われておる」

「カツ、カアブシイイ!!」

カマツスは恐怖を振り払う様に左腕を振る。

「遅いわい」

アルケイデスがそう言うと、カマツスの左腕が半ばから千切り飛ばされる。

「ガツ!? カアブウ!!」

カマツスは一瞬痛みに呻くが、すぐに気を取り直して鋭い口をアルケイデスに向けて鋭く突き出した。

それをアルケイデスは、「凝】を行った右人差し指でいとも簡単に受け止めた。

「抗う心意気は認めてやるが、せめて【凝】くらい使うべきじゃったのお。さすれば、指2本は使わされたじやろうな」

アルケイデスは素早くカマツスの鋭い口を掴まんで引き下ろす。

カマツスは全く逆らえずに頭を下げる姿勢になり、その勢いを利用してアルケイデスは跳び上がって、空中で逆様になりながらカマツスの上に移動する。

「恨むなら、虫なんぞに生まれ変わった己を恨むんじやぞ」

アルケイデスが足を振り下ろす。

カマツスはちょうど頭を上げているところで、アルケイデスの爪先がカマツスの頭に軽く触れた瞬間、

ドヂャン!!

と、カマツスは一瞬でペシャンコに潰れて、息絶えた。

アルケイデスはまさしく虫のように潰れたカマツスの死骸の傍に

下り立ち、パーカーのポケットに両手を突っ込む。

「ふむう……。虫に食われて虫になっただけでも不運じゃというのに、虫になったせいで虫けらのように潰されて殺されるとは……。なんとも哀れじやのう。まあ、殺した儂が言うことではないかもしれんが」

アルケイデスは苦笑して、駆け寄ってくる警官達の気配を感じ取る。

「さて……。引き止められる前におさらばするのでしょうか。連絡が来るまで暇じゃし、この周囲の虫共くらい駆除しながら、ラミナの顔でも見に行くとするか。ゼノの孫もおるようじゃしの」

楽し気に笑みを浮かべるアルケイデスは、その場から一瞬で姿を消す。

その日以降、ハス共和国でキメラアントの目撃・被害情報が上がることは一切なかったそうなの。

しかし、ハス共和国内の各地でペシヤンコに潰された未確認生物の死骸が発見されたのだった。

### #113 ライハウ×ト×ヒトツノタノミ

ラミナとキルア達が合流して1週間が経過した。

キルア達は修行を続けており、ラミナは修行の面倒を見ながら裏の情報筋からキメラアンの情報を集めたり、モラウやノヴも時折顔を出しながらハンター協会から派遣されてきたハンター達と共にキメラアンの捜索と情報収集に動いていた。

ゴンはラミナとキルアの監督の元、基礎修行と組み手に終始していた。

全身に超重量の重りを着けて走り込みや筋トレをさせられたり、その状態でナツクルやキルアと組み手をしていた。

ブラールはシュートと組んで修行していた。

シュートは3つの手を操りながらブラールを追い回し、ブラールは能力を発動しながらシュートから逃げ続ける鬼ごっこである。

2人は森の中を飛び回り、互いに能力の精度向上を目指していた。ティルガはひたすら能力向上とナツクルやラミナとの組み手をしていった。

「おい、キルア」

「ん？」

「ゴンとの組み手、もう少し殺気出してやりい」

「え？ ……そういうことか。分かった」

キルアはすぐにラミナの意図に気づいて頷く。

そして、すぐにゴンとの組み手を始める。

ゴンはいきなり殺気を出して襲い掛かってくるキルアに戸惑うが、すぐにキルアの猛攻にそれどころではなくなり、必死に動き回っていた。

それにナツクルは盛大に顔を顰めて、ラミナに顔を向ける。

「オイコラ。何企んでんだあ？」

「何もクソも、ゴンに少しでも肌で殺気を感じ取って反応出来るように鍛えるだけや」

「ああん？」

「ゴンは所々獣染みとる癖にどうにも気配や殺気に鈍感やねん。視線とかも気付けるんが理想やけど、流石にそこまでは無理やろうから、せめて気配と殺気だけでも反射的に反応出来るレベルになつてもらわんと」

「ゴンだつてそれなりに死線を越えてんだ。それくらいもう出来るだろ」

「出来る状態になるまで時間かかんねん、あいつは。戦闘になつてからでないと敏感にならんなんざ遅すぎるわ」

「……まあ、な」

「護衛軍はもちろん、師団長以下も混ざつた動物によつちやあ気配も殺気もギリギリまで隠して攻撃できる奴が多い。特に【絶】は天性のモンや。つまり、今のゴンではエンジンがかかる前にやられる可能性があんねん。やから、気配や殺気くらい普段の状態から反応できるようになつてもらわんと、ネフェルピトールと戦うどころやないで」

特にネフェルピトールやアモンガキッドは、感覚の範囲外から一瞬で襲い掛かつてこれるだけの身体能力や念能力を持つている。

その一瞬に反応できる反射的な動きを身につけておかないと、何も出来ずに負ける。

キメラアントの恐ろしいところは、ネフェルピトール達と同じことを出来る可能性が兵隊長クラスでもあるということだ。

ブラールも梟の特性から気配を出来る限り感じさせずに近づくことは可能だし、テイルガやコルトの話では体を透明に出来る師団長もいるという話を聞いている。

なので、ゴンの感覚を鍛えるのも必須事項なのだ。

しかし、時間が足りない。だから、実戦形式で鍛えるしかない。

「ま、もうゴンに関しては勝つよりも死なんようにする術を叩き込むしかないでな。現状を続けるしかないわ」

「……確かにな」

死ななければ、いつかチャンスが来る。

それは経験豊富な者ほど、その事実が何よりも重要であることは身に染みている。

勝つ手段も重要ではあるが、それは自分が無事で、その勝つ手段を使える状態であることが絶対条件。

ゴンは少なくとも【ジャジャン拳】という相手を殺しうる技があるので、一番の課題はその技を十全に使えるように戦い、生き残ること。故に少しでも身体能力や身のこなしを向上させ、気配や殺気を感じる感覚を鍛える必要があるのだ。

「ネフェルピトーに辿り着くまでに、他の護衛軍や兵隊蟻に遭遇するかもしれないな」

「……ボスの話じゃ、ハンター協会が続々と蟻を討伐または捕獲するらしいが、数匹は逃げて東ゴルトー方面に向かったらしい」

「らしいな。けど、まだ師団長らしき奴は見つかつたらんのやろ？」

「ああ。コルトやテイルガに確認してもらつた限りじゃな。ただ、隣のアス共和国でもキメラアントが出たらしいが、なんでも子供に叩き潰されたらしいぜ」

「子供お？」

「おう。フードを被つたガキで、とんでもねえ力を持つてたそうさ。警官が多数目撃してる。そのガキはいなくなつたらしいがな」

（アルケイデス、やな。こつち来とるつちゆうことはネテロにでも呼ばれたか……）

アルケイデスの存在を知つたラミナ。

連絡する手段はないので、会おうにもどうしようもないのだが。

（まあ、来とるなら来とるでええか。あの爺なら護衛軍でもない限り殺されやせんやろうし。1人でも東ゴルトーに行けるやろ）

出来れば自分達が行く前に、仕留められるだけ仕留めておいて欲しいと思うラミナだった。

一番は護衛軍も1匹くらい殺してくれることだが、流星にそこまで他人任せにするわけにもいかない。

（なにより、そんなことまでされたら後からどんな無理難題を言われるか分からんな）

ラミナは小さくため息を吐いて、テイルガの組み手をして気晴らしすることにした。

ラミナとテイルガの組み手は、かなり激しいものだった。

「はああああ!!」

テイルガが気合に吼えながら、鉤爪状にした両手を連続で繰り出し、鎌鼬の如く風を斬り裂きながらラミナに攻めかかる。

しかし、その猛攻をラミナは柳のように紙一重で、されど軽々と躲していく。

「ぐっ……!」

「速さに力も申し分ないけど、狙いも軌道も素直過ぎや。構えた瞬間に何処を狙う気なんかすぐに分かってまうで」

テイルガは一度距離を取って、呼吸を整える。

ラミナはポケットに両手を突っ込んで、仁王立ちする。ちなみにゴンやキルア達も2人の組み手を観戦していた。

「虎咬拳を極めたい気持ちも分かるけど焦り過ぎや。虎咬拳は確かに強力な武術やけど、それだけやとゴンの【ジャジャン拳】と変わらん。ええか? 必殺技で大事なのは『確実に当てること』。フェイントや蹴り、その牙とかも使えるもんは全部使って、それを織り交ぜろや」  
「全部……織り交ぜる」

「その両手以外にも注意を向けさせるんや。『死なんまでも、やられたら動きが鈍る』とかな。ゴンに言うたんと同じや。一つしか注意せんでええなら、なんも怖ないんや」

「なるほど……」

「それと蹴りやフェイントを織り交ぜる程、虎咬拳の威力はギリギリまで隠すことも出来る」

ラミナはポケットから両手を出して、拳を構える。

そして、テイルガに詰め寄って右フックを繰り出す。

テイルガは左手掌を構えて掴もうとするが、直前で右拳が止まり、ラミナの左脚が振り上がる。

それを右腕で防ごうとしたテイルガだが、ラミナは左脚を直前で止めて、右脚を折り曲げることで身を屈ませる。そして、それまで見せた以上の速さで左ストレートをテイルガの鳩尾に叩き込んだ。



「ぶっ!!」

ティルガは顔を顰めて、後ろに下がる。

ラミナは立ち上がった、腕を組む。

「こういうこつちや。フェイントを織り交せて相手の防御を誘導し、自分の一番の攻撃を叩き込めるようにチャンスを作るんや。やけど、それにはそれぞれの攻撃が脅威と思わせるか、無視出来んと思わせなあかん」

「確かに……我にとって其方の攻撃はどれも無視できるものではない。それ故にフェイントの効果が上がるということか……」

「そやな。キルアやったら電撃に暗殺術、ナツクルは「天上不知唯我独損」、シュートにも【暗い宿】と、触れられたらヤバイと思わせるモンがある。ゴンにはそれがないから未熟ちゆうことや。まあ、念能力者の戦いは基本的に接触を避けるんが定石やから、躲せるなら躲した方がええんやけどな」

「……我の場合は虎咬拳、と言う訳か。だが、避けられれば意味はない」

「そういうこつちや。やから、体術やフェイントとかの技術は重要や言うとるんや。理解したか？」

「ああ」

ティルガは真剣な表情で頷く。

ラミナは難し気に眉間に皺を寄せているゴンにも顔を向けて、

「お前も頭に刻んだか？」

「……うん」

「お前は性格的に武術は向かんやろうから、ナツクルやキルアとの組み手で独自に覚えるんが一番早い。それで、これが殺意を持ってちゆう理由でもある」

「えっ」

「お前のことや。トドメ刺す時くらいやないと、殺気なんて籠めれんやろ？ つまり、敵からすりゃあ殺気がない攻撃は恐れるに足らんちゆうわけや。うちやったら、殺意がない攻撃なんぞ無視するでな」

「……」

「テイルガも同じや。籠める殺気に差があつてもええけど、フエイントやからつて気い抜くとカウンター喰らうで」

「ああ」

「ほな、テイルガは少し休憩。他の連中は特訓再開せえや」

ラミナが指示を出した、その時。

「ふむ……感心感心。思っておったより師匠っぷりが様になっておるのう、ラミナ」

頭上から響いてきた声に全員が弾かれたように顔を上げる。

樹の一番上にフードを被った少年―アルケイデスが口元に笑みを浮かべて立っていた。

「げっ……」

ラミナは頬を引きつかせて、カエルが潰れたような声を出す。

そして、テイルガとキルアはアルケイデスの気配を読んで背筋に悪寒が走った。

（っ!? なんだ……あの得体の知れん者は……!? キルアやゴンとは

……いや、ラミナとすらも比べる気にならん血と死の気配……!?）

（ネテロ会長や爺ちゃん、親父と同格……? いや、もしかしたらそれ

以上……!? 冗談だろ……!?）

アルケイデスは樹の上から軽やかに飛び降りて、音もなく着地する。

ラミナは眉間に皺を寄せて、腕を組む。

「……よおここが分かったな」

「あれだけ闘争の気配を出しておれば嫌でも気づくわい。それにしても……」

肩を竦めたアルケイデスは、音も気配もなくスウとキルアの正面に移動して、覗き込むように顔を近づける。

キルアはその動きに逆に動けなくなり、目を見開いて緊張で冷や汗を流す。

「っ………!!」

「ふむふむ、ほうほう。お前がゾルディックの小童か。中々面白い成長をしとるのう。ラミナの影響か？」

「っ……う、うるせえな……」

「くくく！ 初心じやのう。じゃがまあ、確かによく鍛えられておるし、いずれゼノやシルバの坊主を超えるのも可能じやろうな」

「……」

「そのもう1人の坊主も今はまだ未熟で些か歪じやが、見込みはありそうじやの。そっちの2人も、まあ小童達ほどではないにしても、中々に将来有望そうじやな。少し甘いところもあるようじやが……まあ、儂らのように殺し屋でも闇の住人でもないのじゃから、あまり気にすることもあるまいて」

ゴン、ナツクル、シュートを順に見て、評価していくアルケイデス。ゴンやナツクル達は突然現れた只者ではないであろう見た目子供の言葉に眉を顰める。

「オイコラ。誰なんだ？ こいつは」

「コイツは【アルケイデス】つちゆう殺し屋や。こんな見た目でも齡80を楽に越えとる世界最強最悪のクソジジイの一人や。流星街と外界を繋ぐ顔役でもあり、うちも含めて流星街の外に出た住人の世話役や。うちの師匠言うても過言やないな」

（こ、こいつがアルケイデス……!?!）

キルアは目を丸くする。

ゼノやシルバ、そして珍しくキキョウから『もし出会ったら絶対に手を出さず、逆らうな。敵対すれば、ゾルディック家は滅ぶと思え』と何度も聞かされたことをよく覚えている。

（そう言えば、お袋の故郷は流星街だつて聞いたことあったな。それに執事にも流星街出身がいるってゴトーが……。親父がお袋と結婚した時とかにコイツと会った可能性は高いか……）

「くくく！ まあ、クソジジイは否定せんがの。世界最強最悪と言うのは、否定させてもらいたいのう。まだゾルディックの長老も存命じやし、衰えてはおるがネテロの奴もおるでな」

「んで、そのネテロの依頼でここに来たんか？ ジジイ、ネテロから暗

殺の婚前契約受けとったんやろ？」

「うむ。最初は断ろうと思っただんじやがお。随分と切羽詰まってお顔をしておったからな。奴をそこまで追い詰める相手じや。噂程度ならば捨ておいたかもしれないが、細かく知った以上放置するのも少々寝覚めが悪い」

「……まあ、猫の手も欲しいところやったから、爺が参戦してくれるんはありがたいけどな」

「ああ、言うておくが儂が手を貸すのは王の討伐だけじや。他の護衛軍とやらはお主らで相手してもらおうぞい」

「おいクソジジイ」

「くくく！ ネテロの手伝いが依頼じやからのお。ま、お主らが動くまでは雑魚共の始末くらいはしてやろう。隣のハス共和国の方はあらかた始末してきたがの」

「ほなら、とつと東ゴルトーに突っ込んでこいや」

「そこまで老骨を折る気はないの。そもそもネテロやお前がしっかりと始末しておれば済んだ話ではないか。儂はお前の尻拭いで来たという事を忘れるでないわ」

アルケイデスの言葉に、ラミナはそっぽを向く。

それにアルケイデスは苦笑し、ティルガとブラールに顔を向ける。

「ふむ……。ラミナが鍛えておるとはいえ、これまでの蟻とは一味違うの。特に虎の娘」

「こいつは師団長やったでな」

「ほうほう、なるほどのお。それにしても、虎に虎咬拳を教えるとは、お前はそういう発想を思いつくのがほんに上手いのう」

「どこぞのクソジジイに何度も殺されかけたでな」

ただでさえ当時は体も体術も未熟だった。

そんな状態でアルケイデスに鍛えられたのだ。肉体スペックに差があり過ぎて、小技を考えるしかなかったのだ。

「あの頃のお前はまだ可愛げがあったがお。どこでその可愛さを捨ててしまったのか……」

「お前にいきなり流星街に攻め込んだマフィアの拠点に放り込まれた

時や」

「……おお、そんなことあったのう」

アルケイデスは思い出したように声を上げ、ラミナはもちろんキルア達も呆れた表情を浮かべる。

アルケイデスはふざけていたわけではなく、ラミナ以外にも色々鍛えてきた者達が数え切れないほどいるため純粹に忘れていたのだ。

「つていうか……ラミナ、アルケイデスの弟子なのかよ……」

「さつきも言うたやろ。流星街から出る奴らはこのクソジジイの世話になるんや。やから、クモのほとんどもうちと同じくこのクソジジイに鍛えられとるで」

「あのクロロや他の団員も？」

「そやな」

「ルシルフルはもちろん、クモの連中は流石に飛び抜けておったから、よお憶えておるのう。今ではすっかり儂より有名になりよったがの。まあ……最近、一番名を良くも悪くも広めたのはラミナじゃがな」

「ほとんどクロロの依頼のせいやけどな」

そう言つて、ラミナは肩を竦める。

アルケイデスはくつくつと笑い、

「あ奴らに振り回されるのは昔からじやろうに。さて、今日は久方ぶりにお前の飯でも馳走になろうかの」

「いきなりやなオイ。まあ、どうせ今日も作るやろうけど」

屋敷にいる間の食事はラミナが作っていた。

パームも料理が出来るが、パームは現在ノヴの手伝いで蟻の搜索や王達の監視をしているので、ここにはいなかった。

だから、料理が出来るのはラミナしかない。

ゴンとキルアはグリードアイランドでも食べたので驚くことはないが、ナツクルやシュート、テイルガ達は想像以上に美味しい料理に目を丸くしていた。

「前に忠告してやった駄賃じやよ。誼でわざわざ伝えてやったんじや。お得意やろう？」

「はあ……粥でええか？ ジジイやから顎弱いし、喉詰まらせたらい

かんやろ?」

「アホ言うでないわ。まだまだ鉄くらいなら噛み砕けるわい」

「何の自慢やねん」

「ほれ、さっさと案内せい」

「はあ……へいへい」

ラミナはため息を吐いて歩き出し、アルケイデスもそれに続く。

ティルガとブラールも付いて行き、キルアも行くこうとするが、ナツクルに声をかけられて足を止める。

「おいキルア。あのガキみてえな奴のこと、どこまで本当なんだ？  
確かにバケモンみてえに強えとは思うが……」

「強いなんてレベルじゃねえよ。それこそ、殺し屋界のネテロ会長みたいなもんさ。殺し屋やって、アルケイデスの名前知らない奴なんかいないって断言できるくらいだね」

「キルアのお父さんより強い?」

「多分な。親父や爺ちゃんも絶対手え出さな、敵対したら家は滅ぶって言ってたし。……実際、さつきアイツを見た時、親父や兄貴、クロロよりも不気味に感じたしな。……むしろネフェルピトーに近い感覚だった」

キルアの言葉に、ナツクルは眉間に皺を寄せてアルケイデス達が去っていった方を見る。

そこにゴンがもう1つ気になっていたことを尋ねる。

「ねえ、婚前契約って何?」

「ん? ああ、依頼方式の1つだよ。つっても、この方法を選ぶなんて殺し屋同士で殺し合う時くらいさ。互いに自分自身をターゲットに指定して報酬を事前に用意し、暗殺勝負をして殺した方に報酬が入るんだ」

「けど、ネテロ会長は殺し屋じゃないよね?」

「よく使われるのが殺し屋同士ってだけさ。けど時々、腕に自信がある奴が名のある殺し屋に勝負を挑むために使うことがある。例えばヒソカみたいな奴がな」

「ネテロ会長も?」

「そういうことだろうな。アルケイデスは正体不明で有名だったけど、ビスケみたいに子供みたいな見た目してたなら納得出来る。ビスケもあの見た目で60近いんだ。他にもいたっておかしくない。だから、ずいぶん昔に依頼して、ずっと殺し合いしてたってわけさ。結構そういう遊びが好きらしいしな、ネテロ会長」

gon はハンター試験での飛行船での遊びを思い出し、ナツクルとシュートはモラウからネテロ会長の噂を聞いたことがあったので、納得の表情で頷いてしまう。

「ゴン、グリードアイランドで言ってたこと憶えてるか？ お前の親父は念能力者としては世界で5本指に入るって話」

「うん」

「多分、アルケイデスは残った5本指の一本だ。それも、その中でも上に位置するな」

「あの人が……」

「ふん！ また殺し屋かよ」

ナツクルは不満げに腕を組んで吐き捨てる。

キルアは呆れた目をナツクルに向ける。

「ラミナを呼んだのはネテロ会長じゃないんだろ？ 会長が他のプロハンターを呼ばなくて手が足りなかったって、ラミナがボヤいてたしな。それで、今回は会長も好き勝手に増援呼べないんだろ？ 今あちこちに散ったキメラアントの捕獲や討伐に動いてるハンター達は、国や市からの要請でようやく動き出したくらいで、こっちに全然来ないみたいだし」

「……まあ、な」

「だったら、ハンターじゃない実力者を呼ぶしかないだろ？ それがアルケイデスだったってだけさ。それにアルケイデスが参戦するのは、あくまで王の討伐のみ。護衛軍まで手を割く余裕はなさそうだしな」

「つまり……王から護衛軍を分断することになるだろう俺達とは別行動、と言う訳か」

「ああ」

シュートの言葉にキルアは頷く。

キルアは3人に背を向けて、

「だから、アイツが何者かなんて気にするだけ無駄さ。そんなこと気にしてたらラミナや俺も問題だし、テイルガ達なんてもっと論外だ。そんなこと気にしてる余裕はないぜ。今の俺達じゃ、まだ護衛軍一匹を抑え込むだけでも命がけだ。ラミナがいてもようやく二匹。本当に猫の手も欲しい状況だ。この際、実力があっても信頼できるなら誰でもいい。……それこそ、クモでもな」

そう言い残してキルアは屋敷へと戻っていった。

ゴンはともかく、ナツクルとシュートはやはりどうにもしこりが残り、気晴らしにゴンの組み手に付き合うことにしたのだった。

そして、深夜。

ラミナとアルケイデスは屋敷の屋根の上で酒を飲んでいた。

「お前と酒を飲むのは初めてじゃのう」

「そう言やあそうやなあ」

「ふむ。意外と感慨深いもんじゃな」

「何やねん、気持ち悪い。死ぬ予感でもあるんか？」

「うむ。実はの」

ラミナの冗談に、本気が混じった言葉で頷くアルケイデス。

それにラミナも顔を鋭くして、

「……本気か？」

「うむ。数十年ぶりに本気のネテロの顔を見て、この仕事を引き受けた時になぁんとなくの」

「……」

「悔しいもんじゃのお。この数十年、老いぼれていくネテロを見て、殺す気にもならなかった俺も悪いが……。生まれたばかりの若造なんぞに、ネテロを本気にさせられたんじゃからな」

「嫉妬かい」

「そりゃあ嫉妬くらいするわい。俺が一番殺したかった男を蘇らせた



のじゃからな。じゃから、儂こそが今一番王とやらを殺してやりたいんじやよ」

「……まあ、やる気あるんはええけど。それでも死ぬ気するんか？」

「うむ。ネテロが決死を覚悟しておるようじやからの」

「……それだけの相手やからつちゆうにしては、随分と往生際が良さすぎるんちゃうか？ それに何でうちに明かすんや？」

「お前に頼みがあつての」

「あん？ 頼み？」

「……もし儂が死んだら、流星街を出る連中の世話役を引き継いで欲しいんじやよ。お前への」

ラミナはまさかの頼みに目を見開く。

「………本気で言うてるんか？」

「うむ。本気も本気じやよ」

アルケイデスはグラスを一気に傾けて、酒を喉に流し込む。

「ふう……。お前は殺し屋としても、ハンターとしても、幻影旅団としても、顔が広い。流星街とも繋がりを残しておるし、実力も申し分ない。今日の指導も中々のものじゃったしの。お前ならば最低限の面倒は見れよう。邪魔をする者も少なからうしな。ゾルディックも流星街の人材を引き入れやすくなるでな、手伝ってくれるじやろうて」

「………お前には言うておこう」

「あ？」

「奴の心臓にはの、『薔薇の種』が埋め込まれておるそうじや」

「薔薇の種……？ ………っ!! まさか……!!? 【貧者ミニチュアの薔薇アローズ】か………!?!」

アルケイデスは小さく頷く。

ラミナは目を限界まで見開いて、ただただ啞然とする。

「もちろん、あくまで奥の手じや。自爆なんぞする気は儂もネテロも無い。じゃが、それでも。死地に行くならば、やることはやっておかねばの」

「………ほんならうちと言うんはちやうんとちやうか？ うちかて同じ

死地に行く可能性があるんやぞ？ 護衛軍に負けるかもしれんし」

「くくく！ お前が出し惜しみなぞせねば、護衛軍の一匹二匹確実に仕留められるじやろうに」

「簡単に言うなや」

「まあ、駄目じゃったたら、その時はその時じゃて。じやが、儂が今頼むならばお前じやというだけのことよ」

アルケイデスはグラスを置いて、ゆっくりと立ち上がる。

「人生はままならんものよのお。ネテロを殺すために培った力を、ネテロを助けるために使うんじやからな」

「……」

「まあ、それもそれで面白いがの。殺し屋が己が死に場所を選べるわけも無し。覚悟を決めて後を託せるだけ、満足せねばなるまいて」

「……」

「ではの、ラミナ。殺されるまで、死ぬでないぞ」

アルケイデスは軽やかに夜の帳へと身を投げ出して、闇の中に姿を消す。

ラミナはアルケイデスが消えた場所をしばらく見つめ続け、

「……爺っちゆうんはこれやから……。好き勝手言うて、勝手に押し付けよってからに」

ラミナはグラスに残った酒を飲み干して、アルケイデスが置いたグラスの横に自分のグラスも置いて立ち上がる。

「爺臭い世話役なんざ御免や。流星街はそもそもなんにも縛られん場所。まさしく流星みたいに、勝手に流れ落ちて、勝手に燃え尽きるだけ。それでも押し付けたいんなら、生き残って無理矢理言い聞かせに来いや」

そう言い放って、2つのグラスを踏み砕く。

「蟻と薔薇なんぞに殺されたら、【アルケイデス】の名が泣くで」

ラミナは自室へと足を向ける。

「ちゃんと踏み潰してこいや、お師匠」

## #114 アサノヒトマク×ト×ヨルノカイギ

修行を始めて2週間が経った。

「ふわあく……」

朝。

起床したキルアはあくびをしながら寝室を出て、リビングに向かう。

「水……」

喉の渇きを感じ、眠け眼のままリビングの隣にあるキッチンに入ると、スポーツブラにホットパンツ姿のラミナが立っていた。

「っ!!」

「お、キルアか。おはようさん」

キルアは一瞬で目が覚め、ラミナはフライパンを振るいながらキルアに挨拶する。

「お、お前な……! ちゃんと服くらい着ろよ……!」

「ええやんけ別に。裸っちゅうわけやないんやし。相変わらず初心なやつぢやな。仕事しとった時は女の裸くらい見ることあったやろ」

「仕事してた時はそれに集中してたから、いちいち女の裸を意識したりしねえよ。仕留めるチャンスを窺うことに全神経注いでたんだから」

キルアは頬を僅かに赤くして、腕を組んで言い訳する。

もちろんキルア的には言い訳ではなく本当の事なのだが、ラミナには誤魔化しにか聞こえなかった。

ラミナは肩を竦めて、完成したスクランブルエッグを皿に移そうとコンロの前から離れて、キルアに背を向ける。

その時、キルアはラミナの背中に刻まれている蜘蛛の刺青を目にする。

「!! ……それが旅団員の証って奴か……」

「ん? ああ、せやで」

「その数字はお前が入った順番ってことか? カルトが『12』?」「ちやうちやう。『11』はクラピカに殺されたウボオーが持つとった

番号や。カルトはヒソカが持つとった『4』やな。まあ、カルトは刺青なんざ入れとらんやろうけど」

「ふうん……」

「んで？ 何しにここに来たんや？」

「ああ、水飲みたかったんだよ」

「あつそ。飯出来たから、とつとと隣来いや」

ラミナは皿を持って、リビングへと向かう。

キルアはそれを見送って、コップを手にして水を一杯飲んでからリビングへと向かう。

リビングにゴンやナツクル達の姿はまだなく、いたのはティルガとブラールだけだった。

そして、ブラールはいつもの恰好だが、ティルガはラミナ同様スポーツブラにハーフパンツとラフな恰好だった。

「お前もかよ……」

「む？ 何がだ？」

ティルガはキルアが何に呆れているのか分からずに小首を傾げる。

ティルガはただラミナと同じ格好をしているというのもあり、更に自分がキメラアントであることから自分が欲情の対象になるなど欠片も考えていないのだ。

確かにティルガはキメラアントだが、耳や尻尾、手足の毛以外の身体つきは人間の女とほとんど変わらない。

そして、十分美女である。

前世となった少女も、まだそこらへんの感性を知る前にキメラアントに喰われたので、性欲などについては無知に等しかった。

それ故に普段のティルガからは女っ気が一切ないのだ。

自分が雌、または女であるという自覚が、ラミナ以上に全くないのだから。

「はあ……まあいいか」

キルアは注意するだけ無駄だと理解して、ため息を吐いて諦めるのだった。

修行は順調と言えば順調だが、十分かと訊かれれば間違いなく「ノー」である。

ゴンは言わずもなだが、テイルガもゴンの【ジャジャン拳】同様本来なら時間をかけて鍛え上げる能力なので、一定レベルまで成長すればそこからは時間がかかることになる。

ブラールは能力の性質上、成長の確認が手間も時間もかかる。

キルアも自分の修行よりゴンの相手をすることに時間を割いていて、自己の研鑽に集中し切れていない。

もつとも、これはラミナがゴンを押し付けてたのが一番の原因であるが。

だが、ラミナもラミナで修行があり、キメラアントの情報収集もし、更に何だかんだでゴン達の食事も作っているので、地味に屋敷にいるメンバーの中で一番忙しかったりする。

ラミナはテイルガ達の修行を見ながら、ノートパソコンを開いて情報収集をしていた。

「ふうん……思ったよりヨルビアン大陸に渡つとるな。兵隊蟻の奴ら」

ニユースやハンターサイト、情報屋サイトなどを色々調べた結果、ヨルビアン大陸での目撃、捕獲、討伐情報が増加傾向にあった。一方ミテネ連邦では減少傾向にある。

もつとも、NGLや東ゴルトーの情報はないのでロカリオ共和国、ハス共和国、西ゴルトー共和国の情報のみだが。

（ロカリオはうちやモラウ達がメインで動いとるし、ハスはアルケイデスが潰し回つたらしいから当然として……。西ゴルトーは派遣されたハンター連中やと思うけど、ほとんど逃げられとんなあ……。まるで東ゴルトーに追いやるみたいにな）

もちろん、全ての兵隊蟻が逃げたわけではない。

3割は捕獲されたが、残りは全て東ゴルトーに逃げ込まれたらしく、討伐された兵隊蟻はゼロとのことだ。

（まあ、最終目標は東ゴルトーやから、逆に言えば王の元に集めたとも言えるか……。随分と厭らしいこと考える奴がおるみたいやなあ）

ラミナは明らかに作為的なやり方に眉を顰める。

だが、それでも悪意しかないとも言いきれず、指摘したところですぐに言い訳が出来る状態だ。

東ゴルトーは元々排他的な国で、ハンター協会とも距離を置いている。

故に王はもちろん、兵隊蟻を東ゴルトーに追いやることで、ハンター協会が東ゴルトーに踏み込む正当性を作ったとも言えるのだ。

ハンター協会上層部は王と護衛軍がいる場所はすでに知っているはずなのだから。

（これを考えたんはネテロやない。下手に兵隊蟻やハンターが踏み込める状況なんぞ作れば、王と護衛軍が東ゴルトーから出る可能性がある。少なくとも、今この作戦を行うメリットがネテロにはない。一番利益を得るんは……次期会長に手が届く副会長とか十二支んとかの側近。今の十二支んを考えれば、可能性が高いんは副会長かジン。けど、ジンは数万人規模の無関係の人間に被害が出る方法を選ぶ性格ちやうし、そもそもジンの命令に従うハンターなんぞ数えられるくらいしかおらん。つまり、黒幕は副会長のパリストン）

黒幕を断定したラミナだが、先ほども考えた通り、だからと言って現状パリストンを糾弾することに意味はない。

ラミナはそもそもジンからの依頼なので、むしろ逆に糾弾される可能性がある。

（なるほど……。噂通り、厄介な性格と思考の持ち主みたいやな。引つ掻き回すだけ引つ掻き回すも、ちゃんと黙らせるだけのメリットを提示して、納得させるだけの利益も出しよるつちゆうわけか。こらあしばらくハンター協会は近寄らん方がええな）

確実に面倒事になる。

下手したらパリストンが仕掛けたという証拠を見つけてることなく。

（この戦いでネテロが会長職から身を引く可能性は高い。どうやっても被害は尋常やないし、すでにNGLで失敗しとる。責任論は絶対出るし、副会長なら出すやろな。それこそ下っ端を総動員してでも）

ラミナはうんざりした表情を浮かべる。

「……まあ、今考えた所でどうにもならんか」

と、すぐに横に置くことにしたのだが。

その時、携帯が鳴る。

「連絡か？」

ラミナが携帯を取り出そうとすると、テイルガが顔を向けて訊ねてきた。

ラミナは小首を傾げて、

「そう言えば、前も携帯が鳴った時に反応しとったな。なんか感じるんか？」

「ああ、電波を感じるようだ。兵隊蟻が使う信号に近いからだろう。電話ならばある程度内容も分かる」

「……」

サラリと恐ろしい事を告げられたラミナ。

「……範囲は？」

「我はおよそ半径50mほどだ。ブールも恐らくそれくらいだろうな」

ラミナは思わず天を仰ぐ。

（つまり、隠密行動中は携帯での連絡は絶望的っちゅうことやな……）  
東ゴルトーは原則国民の携帯所持を認めていない。

つまり、東ゴルトー内で携帯の電波を受信すれば、それは潜入している者がいるという証でしかない。

（いや、でも王と護衛軍は信号を使えんっちゅうとったな……。つまり、先に師団長以下の兵隊蟻を始末すれば、まだ行けるか？）

それでもかなりキツイ作戦になるのは間違いないだろうが。とりあえず、ラミナは先にメールを確認することにした。

送信主は「シーフ」だった。

「………ほお、結構な蟻を仕留めたみたいやな。お、師団長も一匹仕留めたか」

内容はキメラアントの討伐報告だった。

ミテネ連邦近海にいるキメラアントをほぼ全て仕留めたらしく、依頼続行の有無を聞いてきていた。

(まあ、あんま頼りにならないけど、ハンター協会も動いとるし。バレたら面倒やから、ここまででええか)

依頼終了の連絡をして、用意していた報酬をすぐさま振り込む。その様子を遠くで見っていたキルアが近づいてきた。

「アルケイデス以外にも声をかけたのか？」

「アルケイデスはうちやないっちゆうに。うちが声をかけたんは【チャリオット】と【シーフ】や。海を泳げる蟻を仕留めてもらおと思てな」

「……どつちも十分大物じゃねえかよ……」

「まあな。おかげで30億も出費やわ。後でネテロに領収書出したろ」

「さっ……!?!」

「あの2人を動かすんはこれくらい出さんとなあ。ま、それだけの価値はあったみたいやで。師団長の一匹を仕留めたらしいで」

「師団長を……!」

「テイルガ。師団長に鰐のキメラアントおったやろ？」

「ああ。グロークという名だ」

「そいつを仕留めたらしいわ。これで海を泳げる師団長はもうおらんのかな？」

「そのはずだ。海を渡れる能力を創っていれば話は変わるがな」

「そこまでは流石に面倒見れるかい。まあ、もうヨルビアン大陸に渡つとるみたいや……から……」

ラミナは言いながらある事実に気づいてしまい固まる。

キルアとテイルガが首を傾げると、ラミナは険しい顔になってパソコンを凄まじい速さで操作する。

「お、おい……どうしたんだよ？」

「………あかん。流星街の近くにも目撃情報出とる……」

「あ……」

「忘れとったあ……」

ラミナは右手で顔を覆って項垂れる。

キルアも頬を引きつらせて、



「ヤバイんじゃないか？ あそこって、NGLよりも情報出ないんだろ？」

「せやな……。流星街に全く蟻が来んわけないやろなあ。兵隊長レベル数匹やったら大丈夫やろうけど……。嫌な予感するなあ……」

NGLと東ゴルトーと来て、流星街に蟻が行かないわけがない。

流星街にはハンター協会も手を出さないだろうから、流星街の関係者で対応するしかない。

(……クロロに連絡するか？ いや、まずはシャルやな。シャルに様子見てもらおか……)

ラミナはシャルナークにメールを送って、流星街の様子を確認してもらったことにした。

(もし流星街に被害出とつたら……爺共がうるさそうやなあ。報復と出来もせえへん癖に……)

流星街には暗黙の掟が存在する。

『我々は何者も拒まない。だから、我々から何も奪うな』

流星街に関わるモノに手を出せば、絶対に報復する。

それを警告する言葉である。

故にマフィアンコミュニティを始めとする世界は、流星街に手を出さない。

流星街に住む者を1人でも理不尽に殺せば、何十人と住人を犠牲にしようとも絶対に報復する。

だから、キメラアントが流星街に手を出せば、間違いなく死んだ女王や東ゴルトーにいる王に報復しようと考えるだろう。

成功率は皆無であったとしても。

そして、もう1つ。

ラミナには嫌な予感があった。

「……うちのがバレたら、面倒な要求が来そうやなあ」  
「お前って流星街と縁切れたんじゃないやねえの？ ヨークシンで流星街と繋がってるマフィアンコミュニティと敵対したんだろ？」

「縁切るくらいやったら殺しに来とるわ、あの街の長老共は。それが無いし、アルケイデスも何も言わんかったちゆうことは、マフィア

ンコミュニティと揉めた程度大した問題やないっちゅうことや。実際、別に誰かが死んだわけでも、奪われたわけでもないでな。けど、流石にキメラアント相手に1人も被害が出んわけないやろうから……NGLでミスったことを盾になんか言われそうやな。……メンド臭あ」

盛大に顔を顰めるラミナに、キルアは同情することしか出来なかった。

(ハンター協会でも流星街の防衛なんて動かないだろうしな。ただでさえ、今も戦力出し渋ってる感じがあるし)

今回は国が大きく関わっている。

結局一民間団体でしかないハンター協会では、表向き世界から認められていない流星街にハンターを派遣するなどまずありえないだろう。

下手したら流星街にキメラアントを集めさせて、流星街を戦場とされていた可能性もあったと考えれば、まだマシと言えるかもしれない。

そう考えながら、疲れ切った顔で携帯で誰かにメールを打っているラミナを見つめるキルアだった。

そして、日が暮れた頃。

モラウ、ノヴ、パームが屋敷に顔を出した。

「おう。頑張ってるみてえだな」

「お疲れっす。王達が動いたんっすか？」

「焦んなよ。まずは飯、っていうか食いながら話そうぜ」

と、言うモラウの提案で、今晚は外でバーベキューをすることになった。

コルトは赤ん坊が気になるので、カイトの仲間達と共に屋敷内で過ごすことにした。

なので、バーベキューは討伐隊のみで行うことになった。

もちろんラミナが調理する事になるのだが、今回はパームもいるので非常に楽だった。

始めは食べることに集中して、バーベキューに舌鼓を打つ。

そして、1時間ほど味わってから、モラウが本題に入る。

「王達は東ゴルトーから動く気配はねえ。何を企んでるかまではまだはつきりしてねえが、碌でもねえことだけは確かなようだ」

「……昨日、東ゴルトー内から密告があった。すでに総帥は王に殺され、ネフェルピトーに操られているらしい。抵抗した者達も皆殺しにされ、生き残った者達は王達に表向きに服従を誓い、軍はすでに王達の人形にされているとのことだ」

「ちっ!! 好き放題やりやがって……!」

ナツクルは盛大に顔を顰めて舌打ちし、ラミナとブラール以外の面々も顔を顰めている。

ラミナは顎に手を当てて、

「ふむ……思たより人間的な動きをしよるな。女王に比べて効率的に人間を管理し、餌、繁殖、戦力として利用するっちゆうところか」

「ああ」

「んで、テイルガ達が言っとったように、選別を始めるか」

「恐らくな。事実、密告者の話じや総帥を操ってる王達は、近いうちに開催予定だった建国記念大会の準備を続けているそうだ。それも全国民を強制参加させる方向でな」

モラウの言葉に、全員が王達が国民を利用しての念能力者の選別を行うのだと確信する。

「で? 俺達はどう動くんだ?」

「恐らく大会前日か当日をタイムリミットとして動くことになるだろう。会長はギリギリまで別行動。我々はゴンの念が戻るまで現状を維持して、その後各々のやり方で東ゴルトーに潜入する」

「ゴンの念が戻るんは8日後くらいやったか? そこから大会までは?」

「10日ほどだな。だから、ゴンの念が戻る前日には国境前に移動するぜ」

「ってことは、修行は出来てあと6日くらいか……」

ゴンは右手を見つめて呟く。

それにキルアやナツクル達も頷き、テイルガも真剣な表情で拳を握る。

そして、モラウとノヴはラミナに顔を向ける。

「でだ、ラミナ。そろそろお前の能力について話してくれねえか？

もちろん話せる範囲で構わねえし、真偽まで追及もしねえからよ。今回の作戦にはあらゆる局面に対応できるお前の能力は絶対不可欠だ。だから、お前の能力を把握しとかねえと俺達もフォローもバックアップも出来ねえし、お前にどこまでやらせていいのか分からねえ」

その言葉にキルア達もラミナに顔を向ける。

ラミナは腕を組んで眉間に皺を寄せ、1分ほど考え込むも最後は大きくため息を吐く。

「……………はあく。しやあないか……………」

「感謝するぜ」

ラミナは右手にブロードソードを、左手にフランベルジュを具現化する。

「うちの能力は見ての通り『武器の具現化』や。能力名はアルマセン・デ・エスバダ【刃で溢れる宝物庫】」

「それがあのような能力を持つ武器のネタなのか？ 本来、普通の具現化能力は一つの武器を具現化するだけでもかなりの手間と時間がかかるはずだろ？」

「そやな。簡単に説明すると、使いたい武器を創った念空間に納めることで、複数の武器を具現化することが出来るようになるんや」

ラミナの説明にモラウ達は納得、感心の表情を浮かべる。  
「なるほどな…………。念空間を運搬や相手を閉じ込めるためじゃなく、能力強化のバックアップにしたのか」

「しかし、それだけではあそこまでの能力を個別に付与など出来ないのでは？」

シユートの疑問に、キルアやナツクル達も頷く。

ちなみにゴンは会話について行けなくなってきた。

ラミナは小さく肩を竦めて、

「そこは制約次第やろ。回数制限付けたり、具現化できる武器の種類

を限定したりな。それに武器には好き勝手に能力を付与できるわけやないし」

「ふむ……。確かにそれならば……」

「けど、それにしちやああのNGLで女王の巢を襲った時に見せた威力はおかしくねえか？ 防がれたとはいえ、あの護衛軍が2匹がかりだったんだぜ？」

「これのことか？」

ラミナはブロードソードを消して、螺旋剣を具現化する。

「こいつの能力名は【ウニコルニオ・レランパージュ天を衝く一角獣】。高電圧の電気を纏って、高速

で飛ぶうちが使う最速の投擲武器や。ただ、一度使えば確実に壊れて、具現化できるストックが減ってまう。使い方を誤らんかったら、あと2回が限度やな」

「お前の武器は壊れれば、具現化可能回数が減るってことか？」

「ああ。正確にはうちの意志に反して消えた場合やけどな。壊されるか、うちの両手から離れて数分経過するか、やな」

「なるほど……」

「他にも高威力の武器があるけど、使えば武器が壊れてオーラを大量に消費するデメリットもあるでな。やから、使いどころを間違うと必要な時に使えんくなってしまう。東ゴルトーで補充できるとは思えんしな」

「ノヴの念空間に予備を仕舞っておくか？」

「いや。言うたけど、何でもかんでも武器を念空間に入れられるわけやないねん。入れられる武器の方にも、制約があるんや」

流星にオーラを持つ武器でなければならぬことや回数制限の具体的な数字は話さない。

話しても問題ないかもしれないが、どこで対策を立てられるかわからないので出来る限りボヤけさせerことは当然のことである。

ラミナは旅団員の能力を模倣した武器の事も話さず、他の武器についても能力は話しても制約までは話さなかった。

だが、その情報だけでもモラウ達にとっては膨大で、凄まじいものだった。

「……それだけの武器と能力をよく使いこなせるもんだぜ……」  
どの武器や能力が適切か。

常にコンマ秒での判断が求められる戦いを強いられるに等しいラミナの能力に、モラウ達は改めてその実力に慄かされる。

ただでさえ、命がかかっている戦いは極度な緊張を強いられる。

その状況で、更に周囲の環境や敵の戦い方に能力などを推察しなければならぬ。

そんな中で更に武器と能力の選別までしなければならぬなんて、とんでもない集中力まで要求される。

流星のモラウやナツクルでも、毎度毎度そんな戦いは御免だと思っ  
てしまった。

しかし、更にキルアが爆弾を放り込む。

「それだけじゃねえだろ」

「あん？」

「爺ちゃんやクラピカから聞いたぜ。お前もクルタ族の【緋の眼】みたいに変わるんだろ？ 瞳がさ」

「瞳が変わるだど？」

「それがお前が仕事の時とかにサングラスをしてる理由だろ？」

キルアは鋭くラミナを見据える。

ラミナは肩を竦めて、

「まあ、あまりにも目立ってまうからな。印象に残り過ぎるんも困る  
んや」

「ホントに瞳が変わるのか？」

「ああ。瞳が金色に変わるんや。うちは【月の眼】て呼んどる。正式名  
称は知らんがな。部族は大分前に滅んだらしいし」

「月の眼……」

「悪いけど見せられへんで。発動だけでも体力めっちゃ使うし、他に  
も色々副作用があるでな」

「つまり、それだけのパワーアップが出来るということですか？」

「パワーアップとはちゃうな。【月の眼】を発動したうちはオーラが特  
質系に変わる。んで、目にした奴のオーラとうちのオーラを同質にす

る」

「!? 同質!? つてえことは……!」

「相手のオーラを無害化することが出来る。そして、相手の【発】を無効にすることが出来る、ということか……?」

「全部やないけどな。けど、うちへの影響は完全に消せる。お前らの能力もな」

『……!!』

モラウ達はもちろん、話を聞いていたキルアも啞然としてしまう。

「けどなあ、キメラアント相手やと元々の身体能力に差があるから、使いどころがあるか怪しいんやけどな。師団長までやったら十分やけど、王や護衛軍にや使った時に仕留められんかったら負けるやろな。やから、この戦いでは【月の眼】は期待せんとつて」

「……確かにそうだな。俺達だって【練】無しじゃ兵隊長クラスに勝つのは厳しいだろうしな」

（確かに……。だからこそ、ラミナは暗殺術や体術を重要視してたんだ。相手の念を無力化したところで、元々の地力で負ければ意味がないから）

キルアはラミナの強さの理由をようやく理解できた気がした。

だが、それだけ万全に備えているラミナでも、王や護衛軍相手では厳しいと言わざるを得ないのだ。

キルア達ではもっと厳しい、いや絶望的というのは当然のことだった。

（やっぱりこの作戦成功の鍵はネテロ会長とラミナだ。2人を気兼ねなく全力で戦える状況を作るのが俺達の任務ってことになる。けど……）

キルアはゴンを横目で見る。

（間違いなくラミナにとつて、ゴンは一番の不安要素だな。ナツクルだって感情的に動くことはあるけど、状況判断を見誤るほど周りが見えない奴じゃない。けど、ゴンは違う。良くも悪くも一直線……。それはラミナにとつて最も致命的な隙を生むかもしれない不安要素）

だから、ラミナは厳しいとしか言えない言葉でゴンを追い込んだ。

(だから俺は今まで以上にゴンのフォローに徹する必要がある。ゴンの目をネフェルピトーに集中させること。それがゴンはもちろん、ラミナのサポートにもなる！)

キルアは改めて己の役目を理解して、覚悟を決めるのだった。



## #115 ジンライ×ノ×ダンス

修行を始めて3週間。

ゴンの念が戻るまで一週間で切ったが、修行のペースは相変わらずである。

そして、期日が近づくにつれてティルガやナツクル達の気合は高まるばかりだが、ゴンはどこか集中しきれていない様子が目立つようになっていた。

ゴンの休憩中、キルアはラミナに歩み寄って単刀直入に訊ねる。

「どう思う？」

「……どっちつかずちゅう感じやな。ゴンの性格からすれば」

「……それって……」

「今回の戦いを考えれば良い傾向。ゴンの本来の良さを考えれば最悪……やな」

「……」

それはつまり『殺す気になってきている』ということだ。

ラミナからすれば自分が注文したことなので、ラミナ自身に文句はない。

だが、キルアやナツクル達、そしてレオリオやクラピカからすれば複雑なんてレベルの問題ではないだろう。

「まあ、今は生き残ることが最優先や。お前の懸念は分かるけど、とりあえず今は後回しにしい。死んでもたら、それどころやないでな」  
「……ああ、分かってる。……分かってるつもりさ……」

キルアは顔を顰めて俯く。

ゴンの眩しさに憧れ、救われたと思っっているキルアからすれば、その眩しさに陰が差すのは死にも等しい恐怖だった。

復讐に走る辛さと虚しさは、クラピカとラミナを間近で見て来て理解しているつもりだ。

クラピカと違うのは仇が知り合いでも友人でもないこと。だから、ヨークシンのように人間関係での板挟みになる可能性はほぼないと言える。

だが、だからこそ復讐を正当に果たした時、ゴンの精神はどう変化するのかが想像出来ないのだ。

止めるのも心情的に難しい。けれども、このまま果たさせることも心情的に難しい。

心情面での板挟みにキルアは答えを見つけないことが出来なかった。故にキルアに出来るのは、傍に居てゴンを支えることだけ。

それでも十分ではあるが、それだけしか出来ないというのも否定できないう現実だった。

「キルア」

「ん？」

「本番も近いし、今日は少しマジで組み手しよか」

「は？」

「互いに【発】ありでやってみよかつちゅうとんねん。お前もそろそろ自分の修行に集中したいやろ？」

「！……分かった」

「今日のゴンの組み手はナツクルとシユートに頼んどき。テイルガは今日は組み手無しで休ませるつもりやし」

「……ああ」

キルアは小さく頷いて、ゴン達の元に戻る。

ラミナはその後ろ姿を見送りながら、

（やれやれ……人付き合いに関しては、まだまだヒョッコやなあ。とつとと本音をぶつけてしまえば、もう少し楽になるっちゅうのに）

だが、ゴンが初めての友人という事を考えれば、及び腰になるのも仕方がないともラミナは理解していた。

だからこそ、ラミナはこれも経験であると思い、そこに対するアドバイスはしなかった。

（まあ、ゴンに関してうちが出来ることはもうないでな。流星にこれ以上はジンに配慮する理由もないし）

ゴン自身が念を使えない状況でも参戦することを決めた以上、ラミナが口出す事ではない。

ゴンはすでにプロハンター。実力はともかく、社会的には一人前と

言えるのだから。

実際ジンにも明確にゴンのことを頼まれたわけではない。

(ま、今はキルアとの戦いやな。あいつの能力を全部知つとるわけやない。流石のうちも電撃を浴びれば動きは鈍る)

ラミナは意識をキルアとの組み手に向け、戦略を練り始めるのだつた。

ゴンの元に戻ったキルアは、複雑な表情を浮かべたままだった。

「どうしたの？ キルア」

「いや……この後、ラミナと試合することになってな。ちよつと緊張してんのかも」

「ラミナと……？」

「ああ。だから、今日の組み手はナツクルとシユートとしてくれ。俺はラミナとの戦いに集中したい」

「うん。分かった」

ゴンはキルアの心境に気づかずに笑顔で頷いて、修行に戻る。

キルアはゴンの姿を見て、ポケットの中で右手を握り締める。

頭を過ぎるのは、カイトと再会した時のゴンの言葉と顔。

『あいつは……俺一人でやる』

怒りに歪んだ顔で言い放った決意の言葉。

だが、キルアはその言葉を聞いた時、胸に鋭い痛みが走った。

そして、その痛みは、今も時折キルアを襲う。

(ゴンの気持ちも分かる。恩人で、ハンターを志すきつかけになったカイトがあんな姿になったんだ。誰だって怒り狂う。……けど……)

キルアは胸に走る痛みと共に、顔を俯かせる。

(俺だって……カイトやお前と一緒に戦ったんだぜ?)

そうゴンに言っただけだった。

そして、その後になんか言いたかった。

『一緒にアイツを倒して、カイトを助けようぜ』、と。

けど、どうしてもゴンを前にすると、声に出せなくなる。

(分かってる。……怖いんだ。お前に嫌われるのが……。お前を失うのが……)

この戦いで死んでしまうかもしれないというのに、絆どころか命を失ってしまうかもしれないというのに。

キルアは死ぬ以上の恐怖を覚えていた。

そして、日が暮れた直後。

ラミナとキルアは、互いに両手をポケットに突っ込んで向かい合っていた。

2人の間には凄まじい緊張感で満たされており、観戦するつもりでいたゴンやナツクル達も緊張して唾を飲む。

「準備はええか？」

「ああ」

「先に言うとかくけど、流石に【月の眼】までは使う気はないで。あれは反動がデカイでな」

「別にいいよ。その方が俺にも勝ち目があるからな」

「ほお……言うやんけ」

「……グリッドアイランドの時より俺は強くなった。けど、だからっってお前に勝てるだなんて、もう自惚れやしない。だから……本気で、全力で……殺す気で行くぜ」

キルアはポケットから手を出して、腰を据えて構える。

力強いオーラを纏い、瞳は静かに、そして冷たく沈んでいく。

ラミナは両手をポケットに突っ込んだままだが、同じく力強いオーラを纏い、油断なくキルアを見据える。

傍目には舐めているように見えるが、そこにいる全員がラミナに隙がないことを見抜いていた。

「……行くぜ」

「さっさと来いや」

直後、キルアは【神速】を使わず、素のまま飛び出してラミナへと攻めかかる。

爪を鋭く伸ばして、ラミナに貫手を繰り出すキルア。

ラミナは半身になって躲すが、キルアはそれを読んでいたかのよう  
に連続で貫手を繰り出していく。

嵐のような猛攻をラミナは柳のように躲す。

キルアはそれに焦ることなく、冷静に手刀も織り交せて攻撃パター  
ンを変化させる。

その時、ずっとポケットに突っ込んでいたはずのラミナの右拳が、  
気づけばキルアの目の前に迫っていた。

「っ!? ぐっ!?」

なんとか頭を傾けて、頬を掠めながらも直撃を躲したキルア。

だが、直後にラミナの右足がキルアの腹部に叩き込まれて、くの字  
に吹き飛ぶ。

キルアは空中で体勢を整えて地面を滑りながら着地し、再び勢いよ  
く駆け出す。

ラミナは片足立ちの姿勢で、迫ってくるキルアを見据えている。

(やっぱり速さも体術もラミナが上……! 【神速】なら上回るのは間  
違いないけど、充電が尽きれば終わりだ!)

故に少しでもこの状態で何かしろの活路を見つけなければならな  
い。

確実に【神速】や【雷掌】を直撃させる隙を作らなければならない。

(何よりせっかくの組み手だ。もっとラミナの戦い方を観察する!)

俺だって同じ暗殺術を使えるんだ。参考に出来る技や動きがあるは  
ず!)

キルアは直前で歩幅を縮めて、【肢曲】を発動して残像を生み出しな  
がらラミナの背後へと回り込もうとする。

だが、ラミナもすぐさま同じく【肢曲】を使って、キルアを追いか  
けるように残像を生み出す。

「くっ……!」

「歩幅を変えんと使えんたあ、まだまだ未熟やな」

ラミナは本物のキルアを見極めて、ラッシュを繰り出して襲い掛か  
る。

キルアは舌打ちして、ラミナの拳の嵐を躲し、いなし、防ぐ。

反撃の隙を見極めようとしたおかげか、ラミナの左腕が蛇のようにうねったのを見逃さなかったキルア。

だが、速さに身体が付いて行かなかったためガードが間に合わず、ラミナの左拳がキルアの右頬に叩きつけられる。

キルアは頭を仰げ反らして後ろに吹き飛ぶが、宙返りをして衝撃をいなし、すぐさま地面を蹴って再びラミナに攻撃を仕掛ける。

すると今度はキルアが【蛇活】を使って猛攻を仕掛けるが、ラミナはすり足で後ろに下がりながら柳のように不規則に動くキルアの両手を躲す。

キルアは素早く屈んで右足払いを繰り返すが、ラミナは軽やかに跳んで躲す。

そして、ラミナが空中で腰を捻って、キルアの顔面目掛けて左足で蹴りを放つ。

キルアは屈んだまま体を後ろに倒して蹴りを躲し、そのまま両足を持ち上げて両腕で地面を全力で押して飛び蹴りを繰り返す。

空中にいるラミナもキルアのように上半身を仰げ反り、勢いよく飛んだキルアの蹴りは外れてしまう。

大きく体が仰げ反った姿勢のラミナは、その場で腰を捻って回転して右肘をキルアの脇腹に叩き込む。

「がっ！」

キルアは呻き声を上げて横に吹き飛ぶ。

ラミナは右足で着地したかと思うと、そのまま片足だけで地面を蹴ってキルアに勢いよく迫る。

そして、そのままの勢いで右ストレートを繰り返した。

【神速】『電光石火』！

キルアは身体に電気を流して、能力を発動する。

バチン！とキルアの身体から電気が迸り、目にも止まらぬ速さで体勢を立て直し、逆にラミナの頬にカウンターを叩き込んだ。

「!？」

ラミナは足を踏ん張って倒れることはなかったが、身体に一瞬電撃

が走って数秒その姿勢のまま動きが止まる。

キルアはその隙にラミナから距離を取り、「神速」を解除する。それにティルガは目を丸くし、ゴンやナツクルは歓喜する。

「あのタイミングから完璧なカウンターを……!?!」

「凄いよキルア!」

「よっしやあ!!」

シュートはキルアの力を身を以て知っているので特に驚くことも無かったが、それでもやはりラミナに一撃を加えたことに小さく笑みを浮かべていた。

キルアは追撃することなく、油断せずに構えている。

ラミナは痺れが解けて、口端から流れた血を腕で拭う。

「……なるほど。電気で筋肉や神経に負荷をかけて身体能力を上げ、相手に微弱ながら電気を浴びせて動きを鈍らせるんか。よお考えたもんやな。もらってええか?」

「嫌だね」

「そら残念（まあ、勝手に創るけど）」

ラミナは肩を竦める。

（けど、ホンマによう考えたもんやな。多分、イルミの呪いを克服するために考えたんやろうけど……）

恐らくシルバやイルミすらも、キルアが電気を能力にするなど考えてもいなかっただろう。

電撃に耐える訓練など普通は考えないし、行わない。

間違いなくゾルディック家に生まれた故に創ることが出来た能力だ。

「……流石にその速さと電気は厄介やなあ」

「そりやどうも」

「ほな、第2ステージに行こか」

ラミナは右手にブロードソード、左手にフランベルジュを具現化した。

「……さあ、こっからだ……」

キルアは額から汗を流しながらも、妙な高揚感を感じて口を僅かに

釣り上げる。

グリードアイランドでは【発】を使わせることすら出来ない実力差があった。

もちろん、その時はまだ【神速】は完成していなかったし、今も【神速】無しでは結局敵わないが。

それでも【神速】を使えば、ラミナに能力を使わせるまでに戦えるようになった。

その事実には喜ばないわけではない。

(右手の剣はグリードアイランドのドツチボールで使ってたな。確かこの前話してた能力の1つで、高速の斬撃を放つことが出来る剣。もう一振りは初めて見る。剣の見た目からじゃ能力は分からないのが厄介だな……。話してた能力が全部かどうかも分かんねえし)

キルアは笑みを抑え込んで顔を鋭くする。

しかし、次の瞬間にはラミナがブロードソードを構えて、キルアの目の前に迫っていた。

「!？」

「あれが全速力や言うたか？」

「っ……【神速】『電光石火』！」

ラミナが【一瞬の鎌鼬】を発動して、高速の斬撃の嵐を放つ。

それと同時にキルアも【神速】を発動して反応速度を限界以上に上げる。

だが、それでもラミナの斬撃速度は凄まじく、『電光石火』でも回避行動に専念しなければならなかった。

「くっ……い！」

ラミナはすぐさま追撃を放とうとしたが、今度は逆にキルアがラミナの懐に入り込んでいた。

「!!」

『疾風迅雷』

キルアはプログラムされた攻撃を繰り出そうとしたが、ラミナも反射的にブロードソードを逆手に持ち替えて【一瞬の鎌鼬】でキルアに高速で斬りかかる。



『疾風迅雷』はそのラミナの斬撃にも反応して、更なる対処に身体が動こうとしていた。

だが、ラミナは左手のフランベルジュを消し、すぐさまブロードソードに変えて左手でも「一瞬の鎌鼬」を発動する。

（っ!! 駄目だ……! 『電光石火』!!）

キルアは自分の意志では動けない『疾風迅雷』では対処に失敗する可能性があるかと判断して、『電光石火』に切り替える。

バチン!と一度電気が弾け、キルアは猛スピードで後ろに下がる。

だが、ラミナは呼吸を整えるどころか、躊躇なくキルアを追いかけた。

（充電が尽きるまで攻め続ける気か!）

「戦闘前に充電するところ見せたんは失敗やったなあ」

オーラを電気に変える。

それだけならば、天空闘技場で戦ったナグタルと同じタイプの能力だとラミナも考えていただろう。

だが、ラミナは見逃していなかった。

スタンガンを腕に当てて、身体に電気を流すキルアの姿を。

すでにオーラを電気に変えることには成功している。今更イメージ修行などする意味はない。

つまり、それは他の意味を持つ行為ということになる。

考えられる中でラミナが一番可能性が高いと睨んだのは、まさしく『充電』である。

ナグタルが見せた弱点をキルアが忘れるわけではない。

それを制約か何かで補っていることは予想していたが、その答えが単純に充電だったとはラミナも知った時には笑うしかなかった。

「さあて、あと何分保つんや?」

「ぐっ……!」

ラミナは【練】を更に強めて、キルアから付かず離れずの距離を保って高速の斬撃を放ち続ける。

キルアは電速で駆け回りながら反撃の隙を窺うが、あと一步近づけない。

それでも牽制で攻撃を繰り返すキルア。

観戦しているゴンやナツクル達の目には、高速で動き回って入り乱れる電光と明かりに反射する刃の光がまるで舞い踊っているように映る。

それだけラミナとキルアの戦いは洗練されており、激しいものだった。

すると、ラミナは左手のブロードソードを消して、ハルバードを具現化した。

「あれは……！ 俺の時に使った武器だ！」

ナツクルの声が僅かに聞こえたキルアは、先日のラミナの話を思い出す。

（オーラを弾く鎧を生み出す能力か！ しかも長物かよ！）

片手でハルバードを振り回して、勢いよく突き出すラミナ。

それをキルアは紙一重で半身になって躲し、右手をハルバードに伸ばして掴む。

その瞬間、ラミナは右手のブロードソードを消す。

「痺れるー！」

『起動せよ！』ステイール・ジエネラル【不屈の要塞】！』

鎧を展開して、左手の籠手でハルバードに流されたキルアの電撃を弾く。

「悪いが、効かん」

ハルバードを両手で掴んで、全力で横に薙ぐ。

キルアは横に吹き飛ばされて、地面を数回バウンドして体勢を整える。

「ぐう……！ （ハルバードには電気が流れた……！ それに【流】でダメージを減らせた。ハルバードにはオーラを弾く能力はない！）」

キルアは作戦を考えるが、その前にラミナがハルバードを振り回しながら攻めかかる。

ブロードソードではなくなったことでラミナの攻撃速度が下がったと判断したキルアは、すぐさま『疾風迅雷』に切り替えようとしたが。

何故か『疾風迅雷』が発動しなかった。

キルアは目を丸くするが、ハルバードの刃が上から迫ることに気づいて、慌てて横に跳んで躲す。

「っ！ (しまった……！ あの鎧でラミナのオーラが……！)」

『疾風迅雷』は正確には『相手の害意を示すオーラの揺らぎ』に反応して、迎撃行動に出る。

だが、今のラミナはオーラを鎧で覆い隠している。

そのせいで『疾風迅雷』が反応しなかったのだ。

「マジかよ……!!？」

「ポケツとしとんなやあ!!」

「!!」

ラミナが舞う様にハルバードを操って、キルアに攻めかかる。

斬り下ろし、振り上げ、薙ぎ、突き、更に殴蹴を組み合わせ、キルアに息つく暇を与えない。

ハルバードを振り下ろすも、キルアが後ろに躲して刃を地面を叩きつける。

すると、ラミナはそのまま前に出てハルバードを地面に直立に立てたかと思うと、跳び上がってポールダンスの要領でハルバードを柱にして体を振り回し、勢いよく蹴りを放つ。

キルアは『電光石火』で跳び上がってラミナの蹴りを躲す。

(くそっ！ 動きが変わってやり辛え！ 速さで勝っても、あの鎧がある限り【神速】も【落雷】も意味をなさない……！ でも、今【神速】を解除すれば、あの攻撃の餌食だ！)

歯を食いしばるキルアは、ラミナが握るハルバードに目を向ける。

(あれが能力の本体。あれを壊すしかない！ けど、そんなことをラミナが気付いていないわけがない！)

キルアはポケットに左手を入れる。

それにラミナは目を細める。

「喰らえっ」

まるで居合を抜き放つかのように、ポケットから左手を抜くのと同時に超合金ヨーヨーをハルバード目掛けて猛スピードで投げ放つ。

だが、

「甘いわ阿呆」

ラミナはヨーヨーを右拳で真横から殴って弾き飛ばす。

だが、それがキルアの狙いだった。

キルアが『電光石火』で一瞬にしてラミナの左横に移動する。

右手刀を構えており、爪先に電気とオーラを集中させていた。

「!!」

『雷斬』!!」

全ての電気を消費して放つ光速の斬撃。

その速さにラミナは直感でハルバードを動かすも、ハルバードは半ばから焼き切られる。

ハルバードが破壊されたことにより鎧も消える。

キルアが放った超速の雷剣は、そのままラミナの顔へと迫る。

そして、キルアの切り札はラミナの顔に叩き込まれた。

ラミナの髪紐が焼き切れ、紅い髪が血のように広がる。

ゴンやナツクル、シュート、テイルガ、そしてブラールすらも驚愕に限界まで目を見開く。

「キルア……!!」

「やりやがった……!!」

「ラミナは無事なのか!? あの攻撃をまともに浴びたぞ!!」

「っ! いや、よく見ろ……!」

シュートの言葉に全員が改めてラミナとキルアに目を向ける。

『雷斬』が直撃したと思われたラミナだが、未だに倒れるどころかよろける様子も見られない。

全力で目を凝らしたゴン達の目に映ったのは、

左こめかみから血を流しながらも、キルアの手刀を右手で掴んで受

け止めている金色に瞳を輝かせるラミナの姿だった。

ラミナはギリツ！とキルアの右手首を握り締める。

キルアは痛みに顔を顰めて、右足を蹴り上げる。

それにラミナは手を放して、体を僅かに仰け反らして蹴りを躲す。その隙にキルアは後ろに下がって距離を取る。

キルアはすぐに構えるが、右手で小さくガッツポーズをして、口に笑みが浮かぶのを抑えられなかった。

「っし……！」

「……まさか……使わされるたあなあ……」

ラミナは右腕で血を拭い、「月の眼」を解除する。

使うつもりがなかった【月の眼】を使わされた。

それはつまり、使わなければ死んでいたと思わされたことに他ならない。

ラミナが油断していただけのことではあるが、それでも全員がそれだけの差があると思っていたのも事実だった。

「……くくくっ！ くははははは!!」

ラミナは右手で顔を覆って笑い出す。

「くくく！ 少し前まで念も知らんヒョッコとも呼べんかったクソガキが、ここまでするとはなあ……！」

「……うっせえよ」

「ふん……。ホンマ、今のお前やったら本気でゾルディック家から奪い盗る価値はあるかもしれんな」

「え……？」

「さて……【月の眼】を使っしてもた以上、この試合はうちの負けやな」  
ラミナは上機嫌そうだった顔を、苛立ちに歪めて右手で前髪を掻き上げる。

「けど……クソガキを調子に乗らせたままなんもムカツクわ。やから

――」

次の瞬間、ラミナが右拳を振り被ってキルアの目の前に現れた。

「!? っあゝっ!!」

ラミナの拳がキルアの鳩尾に叩き込まれて、身体がくの字に曲がる。

更にラミナは左手に柳葉飛刀を4本具現化して、キルアの影に突き刺して【裏を縛れば表も同じ】が発動する。

体が縛られたように動かなくなり、オーラを出せなくなったキルアは目を見開く。

「こ……………これは……………」

「終わりや」

「!!」

終わりを宣言した直後、ラミナの両腕がブレて黒い風がキルアに襲い掛かる。

直後、右頬と胸に強烈な衝撃が走ったキルア。

キルアは吹き飛ぶのを感じた瞬間、意識を闇に落とす。

(くそっ……………ここまでか、よ……………。けど……………近づけてる。近づけてるぞ……………親父や……………ラミナの背中に……………!)

そう実感しながら気を失うキルアは、悔しさと、それ以上の充足感で心が満たされていた。

## #116 カイサン×ソノコロ×シユウゴウ

ゴンの念が復活する前日。

ラミナ達は修行を終えて、東ゴルトーと西ゴルトーの国境近くの街に向かつて電車に乗っていた。

ちなみにティルガは尻尾をベルトのように腰に巻き、頭に帽子を被って耳を隠している。

ブラールは足まで隠すマントを羽織って翼を隠していた。

「なんでここに来て電車移動やねん」

「私の能力は設置できる出口に限りがありますから。今回限りしか使わない場所に出口を設置するほど余裕はありません」

「さよで」

ラミナは肩を竦めて、座席にもたれ掛かる。

ティルガとブラールは初めての電車故かずっと窓から景色を眺めていた。

ゴンとキルアは2人でトランプをして遊んでいた。

2人の様子からは、とてもではないがこれから死地に赴くようには見えない。かなりリラックスしているようにシユート達の目には映った。

「本当にゴンを連れて行って大丈夫なのでしょう？ 結局この一か月、ゴンは基礎訓練のみで終わってしまいましたか……」

「だな。修行中もどつか上の空って感じで集中出来てなかったしな」  
シユートとナツクルはやはり未だにゴンの参戦に関して心配していた。

モラウはその言葉に頷くも、

「奴らはもう立派な虎だ。テメエの尻拭いくらいテメエで出来るさ」  
と、力強く言い放ち、そして隣の座席に座っているラミナに顔を向ける。

「だろっ？」

「さあ？ ま、そこらへんの覚悟も出来ずに、参加するほど阿呆でもないやろ」

「……ゴンの方はかなり能力にムラがあるように見えるが？」

「ナツクルは分かるやろうけど、あいつは本番にならんと持ち前の集中力が発揮されんタイプ。ぶっちゃけ大丈夫かどうかはネフェルピトーの前に出るまで分からん」

「それが分かれば、そのムラも安定した法則と言えるだろ。今のゴンのやる気のなさは『バネ』だと思っうね」

「バネ？」

モラウの言葉にナツクルは首を傾げる。

「じつくり溜め込んでるってことよ。ほら、普段は全然怒らねえのに本気で怒ると手が付けられねえ奴ってのがいるだろ？ あれと同じさ。戦いに必要な感情全てを憎つき相手にぶつける時のためにな」  
「だからこそ、ゴンにとつて必要なのはその時まで生き残れる力……ということですよ」

モラウとノヴの言葉にナツクルとシュートは分かったような分からないような複雑な表情を浮かべる。

ラミナはそれに呆れた顔を浮かべるも、その時テイルガとブラールがラミナのポケットに目を向ける。

それと同時にラミナの携帯が鳴った。

ラミナは携帯を取り出して着信したメールを確認すると、

「げっ」

と、盛大に頬を引き攣らせた。

その声にテイルガ達やモラウ達はもちろん、ゴンとキルアも反応する。

ゴンとキルアは背もたれから顔を覗かして、

「どうしたんだよ？ アルケイデスから連絡でもあったのか？」

「あいつは携帯なんざ持っとらんわ。……流星街に蟻が入り込んだそ  
うや」

「マジ!？」

盛大に顔を顰めているラミナの言葉に、キルア達は目を丸くする。

キメラアントによる流星街の侵略は、ラミナはもちろんモラウ達ハ  
ンター協会も恐れていた事態であった。



「被害は？」

「そこまではまだ分からん。分かつとるんは流星街に蟻が来たことと……クモに蟻の駆除依頼が来たことだけや」

「クモに……!？」

「師団長がおるんかもしれんな。それやったら手に負えんのは納得出来るわ」

流星街にも念を使える手練れはいるが、やはり引きこもり気質であるためキルアやカルトのように経験不足の者が多い傾向にある。

そして、経験豊富の実力者は大抵流星街を出ているので、今回は運悪く手練れが誰もいなかったのだろう。

そもそも流星街では基本的に自我流で鍛えるのが主流であるため、実力が伸びにくい者が多い。

教え合わない理由は『いずれ殺し合う仲になるかもしれない』からである。

流星街を出る者は、マフィアや闇組織に雇われたり、殺し屋などの犯罪者になる者が大部分を占める。

そのため、いずれ敵対する可能性が非常に高いのだ。

もちろん、手を組めば恐ろしい団結力を発揮するのも特徴なのだが。

「クロロ達が行くってこと？」

「いや、どうやら二手に分かれて仕事しとるみたいやな。クロロはおらんようや。もしかしたら、カルトも呼ばれとるかもな」

「カルトってえと……確かお前と一緒に動いてたゾルディックのガキだったか？」

「そ。キルアの弟のな」

ゴンやナツクル達の視線がキルアへと集中する。

キルアは居心地の悪さに顔を顰める。

「強えのか？」

「ゴンよりは強いやろな。けど、モラウらやナツクルらよりは経験も無いし、やや格下やな。兵隊長クラスやったら大抵は問題ないやろうけど、ティルガとかチートウとかやったら厳しいと思うで」

「ふうん……」

キルアは改めて聞くカルトの情報に小さく頷く。

その反応にナツクルは訝しむ。

「なんだよ？ 弟の事、心配じゃねえのか？」

「ラミナが鍛えたし、親父達が入団するのを許したんだ。カルトだつて危険くらいは承知の上さ。それに……俺、あんまりアイツと絡んだ記憶がないんだよね。……多分、兄貴に針を埋め込まれて殺し屋の修行が始まったからだと思うけど……」

キルアは窓の外に目を向けながら淡々と言うが、その内容は明らかに普通ではない。

ゴンやナツクル達はその内容に顔を顰めていたが、ラミナはキルアの表情と握り締められた右手から、別のことで葛藤していることを見抜いた。

（カルトに関われんかったことを今更後悔するようなキルアやない。別に会えんわけやないしな。となると……今まで一度も話題に出て来んかった4番目、か……）

キルアはもちろん、カルト、イルミ、シルバ、ゼノ、そしてゴトー達執事からも名前すら出ない兄弟。

弟か妹かは知らないが、すでに死んでいるならば話題に出るだろう。

少なくともカルトとイルミならば、絶対に一度くらいは口にする。

だが、誰からも話題の片隅にも出ないし、存在すらも匂わせない。

（つまり……その4番目はゾルディック家において禁忌に等しい存在つちゆうことか）

ラミナは頭の片隅にメモしておくことにした。

街に到着したラミナ達は定食屋に入って食事をとることにした。

各々に料理を頼んで食事を楽しんでいると、定食屋のテレビで東ゴルトーのニュースが流れ始めた。

『……最近の東ゴルトーの急激な動きには、一体どのような意図があるのでしょうか？ 今日までディーゴ総帥自らがTVでスピーチを行

い、10日後に首都で開催される建国記念大会への国民全員参加を強く呼びかけました」

画面には東ゴルトー共和国総帥ディーゴが、国民達に向かって手を振る姿が映し出されていた。

しかし、ラミナ達の目には、ネフェルピトーの念人形がディーゴを操っている姿がはつきりと見えていた。

「隠しもせん。まあ、そもそも東ゴルトーのニュースなんざミテネ連邦でしか流れんやろうけど」

「まあな。それにしても、カイトとは違って結構普通の人間のように動かせるみてえだな」

「ええ。コルトから聞いた話ではネフェルピトーは治癒、もしくは修理と言える能力も使えるらしい。それとあの操作系能力を組み合わせれば、たとえ死んだ人間でも元通りにして生きているように操れるというわけか……」

「うちらも真つ青な下種さやな」

ラミナは肩を竦めて、ウイスキーを傾ける。

モラウは呆れた表情でラミナを見るが、特にツツコむことはなかった。

そして、顔を鋭くしてゴン達に顔を向ける。

「でだ。あのニュースから分かる様に、やはり連中は全国民の選別をそこで行うつもりだろう」

「念に目覚めた者達をどうするかまではまだはつきりしていないが……99%の国民がその選別で死に至る。その前に絶対に阻止する。リミットは10日間！」

モラウとノヴの言葉に、ゴンやキルアは緊張した顔で頷く。

「そう言えば、爺さん達はどうしてんの？」

「すでに東ゴルトー内に潜伏しているとの連絡はあったが、それ以来音信不通だ」

「アルケイデスもおるはずやから、やられたとかはないやろうな。まあ、どうせ組み手かなんかで盛り上がつとるだけちやうか？ それこそはそれでバレそうやけどな」

「だどいいが。もし今日中に連絡がなければ、やられたと判断して行動しろとのことだ」

その言葉にキルア達は顔を鋭くして、ラミナは盛大に顔を顰める。その時、ノヴの胸ポケットから着信音が鳴り響く。

ノヴは携帯を取り出して、内容を確認すると小さく笑う。

「フツ。噂をすれば会長です」

「あのジジイ、地獄耳だ絶対」

「そんな可愛いもんちやうやろ」

「残念ながら全てお見通しのようですよ」

ノヴは更に笑みを深めながら、携帯をモラウに投げ渡す。

携帯をキャッチして画面を見るモラウ。

ゴンやキルア達も画面を覗き込んで、呆れた表情を浮かべる。

『4手に別れて、護衛軍を王から引き離してくれ。決行は大会前夜0時ジャスト。可愛くない地獄耳のジジイより』

「つくづく恐ろしい爺さんだな……」

「やから可愛くないっちゆうとんねん」

そして、日付けが変わった深夜。

ホテルの中庭に出たゴンは、キルア達に見守られながらその時を迎えた。

ゴンの目の前にトリタテンが出現する。

『名残惜しいが、約束の30日が今過ぎちゃった！ それじゃあオレ様は消えるとするぜ！』

トリタテンがボン！と音を立てて消える。

ゴンは半信半疑で【纏】を使うと、何の抵抗もなくオーラが噴き出した。

「さあ、これで元通り念を使えるぜ。試してみろよ」

ナツクルの言葉に、ゴンは【練】を使おうとしたその時。

モラウが前に出る。

「ゴン。あいにくだが、俺はまだお前を認めてないぜ。お前の覚悟を見せてもらおうか」

モラウはネクタイを外して、シャツを脱ぎ始める。

「俺を仇だと思つて打つてきな。もしも、それが腑抜けた一発なら今すぐ代わりのハンターを呼ぶ」

（それが出来たら苦労しとらんやろうに……。相変わらず演技ヘタクソやな）

ラミナは呆れながら成り行きを見守る。

「ゴン、見せてやれよ。お前の【ジャジャン拳】」

ナツクルが背中を押すように声をかけ、ゴンはゆっくりとモラウに向く。

「本気でいいの?」

「ふぎけんな! 少しでも手加減したらテメエは不合格だ!」

モラウは怒りに顔を歪めながらシャツを放り投げて言い放つ。

「……分かった」

ゴンは頷いて、モラウに向かって歩き出す。

モラウは息を大きく吸って、全身に力を籠めると同時に【練】を発動しオーラを力強く噴き出す。

逆にゴンは静かに目を瞑り、頭の中でカイトとネフェルピトーのことを思い浮かべる。

そして、最後にあのボロボロになったカイトの姿が頭に過ぎった瞬間。

ゴンの瞳が昏く、深く、冷たく、沈んだ。

その瞬間、相対するモラウの背筋に悪寒が走る。

そして、ゴンの変化にナツクル、シユート、ノヴ、テイルガは冷や汗が流れ、ラミナは無表情に見つめ、キルアは悲し気に見つめていた。

ゴンが右拳を構えて、腰を据える。

「最初は……グー!!」

右拳のオーラを集中させるゴン。

以前とは比べ物にならないオーラが集中し、そして押し潰すような圧を発して、風が吹き荒れる。

想像以上のオーラにモラウは無意識に半歩後退る。

ゴンはそれでもオーラを集中させていく。

そして、溜め込んだモノを解き放とうとした、その時。

キルアが静かに歩み寄って、ゴンの肩に手を乗せる。

「ゴン……もう十分だ」

その言葉にゴンはオーラを霧散させて、気持ちを落ち着かせていく。

「だろ？ おっさん」

「あ……ああ……」

モラウは全身から冷や汗を流して小さく頷く。

そして、正気に戻ったゴンは慌て出す。

「キ、キルア、サンキューー！ ゴメンナサイ、モラウさん！」

ゴンはモラウに向けて両手を合わせる。

「ホントに殺しちゃうとこだった」

「……フツ、フハハ。フハハハハ！ 参ったぜ、完敗だ！ イカレ具合

も言うことなしの一人前だよ！」

モラウは高笑いを上げてゴンを褒め称える。

だが、ラミナは小さくため息を吐くのだった。

（やつは碌でもない方に傾きよったな……。まあ、うちが言うたことやけど……）

それでもやはり後々のゴンには悪影響な気がしてならない。

（いつかは乗り越えなあかんことやけど……今回やない方が良かったんは間違いないわな。こらあキルアの負担が大きすぎるか？）

ゴンのイカレ具合が少しだけ想像を超えていたことに、ラミナはキルアの方が心配になってきた。

実力の問題ではなく精神面、特に人間関係の経験の無さが仇になる

気がしてならない。

(とりあえず、期日までは様子見るか)

ラミナがそう考えていると、モラウが話を進め始めていた。

「ここからは別行動だ。これからはそれぞれの方法で任務を全うしよう」

シャツを着ながらモラウはゴンとキルアに顔を向ける。

「ゴンとキルアは、望み通りネフェルピトーを。ナツクルとシュートはモントウトウユピーって奴を」

「了解」

「俺とノヴはシャウアプフ。そして、ラミナとティルガ、ブラールはアモンガキツドだ」

「やんな」

「分かった」

「……」

「それじゃあ……健闘を祈る!!」

こうして、ラミナ達キメラアント討伐隊は本格的に始動したのだった。

その数日前、ゾルディック家にて。

仕事から帰ってきて休んでいたカルトの携帯に着信が届く。

「ん? ……シャルナークから」

クモの仕事かな? と思いながらメールを開く。

その内容に目を通すと、僅かに目を丸くする。

「ラミナが仕事をしくじった……? 流星街に?」

カルトもラミナがキメラアント討伐のためにNGLに向かったことは、ゼノやマチから聞かされていた。

ゼノからは「今回はラミナでも少々厳しいかもしれない」と言われていたが、それでもカルトはラミナが失敗するとは思ってもいなかった。

カルトはどうしようかと考える。

「ラミナの後始末か………いいかも」

手玉にされっぱなしのラミナに1つ貸しが作れるかもしれない。  
そう思うとカルトの口に小さく笑みが浮かぶ。

「ラミナが仕留め損ねた相手だし………楽しく遊べそう♪」

正確にはラミナ1人では数が多すぎて仕留められなかっただけなのだが、そこまで情報がないカルトはそれだけキメラアントの実力を高いと推測した。

カルトは足取り軽く自室を後にする。

向かったのはシルバとキキョウがいる部屋だ。

「お父様、お母様」

「カルトか」

「どうしたの？ カルトちゃん」

和室で寛いでいた2人は、訪れたカルトを温かく迎える。

「旅団から連絡がきた。流星街にキメラアントって生物が潜り込んだらしくて、その討伐を依頼されたって」

「キメラアント……？ ああ、オヤジから聞いたな。キルやラミナが動いてる奴らか」

「その者達が流星街に……。それで？ カルトちゃんも行くの？」

「うん。ラミナが仕留め損なった相手を見てみたいし、他の団員の力も見れるかもしれないから」

「なるほどな。分かった。気を付けて行ってこい」

「いつてらっしゃい、カルトちゃん」

「うん。行ってきます」

挨拶を済ませて、執事に空港まで送ってもらったカルトは、集合場所の最寄りの空港に向かう飛行船に乗る。

（お母様にラミナ、クモの故郷か……。強い奴いないのかな？）

カルトが会った流星街出身者はほぼ全員実力者ばかり。

それ故かカルトが抱く流星街のイメージは、化け物の巣窟のようなものだった。

それは間違ってもいないが、正確でもない。

流星街に生きる者達は、世界に存在を認められた人間ではないのだ



から。化け物と呼ばれても相違ない。

数日後、空港に到着したカルトは、ロビーにてタクシーで目的地まで行くか、歩いて行くか迷っていた。

(意地になって執事帰したの、失敗だったかな……)

そう小さな後悔を抱き始めていると、

「カルト」

「え？」

背後から声をかけられて振り向くと、そこにはマチが立っていた。

「マチも来たの？」

「まあね。ラミナが逃したキメラアントって奴を見てみたいし。あの子の尻拭いをしてやれば、言うこと聞かせられるからね」

「……」

自分と全く同じことを考えていたマチに、カルトは自分の事を差し置いて呆れを浮かべる。

マチは肩を竦めて、

「ま、今回は数の差があつたみたいだから、ある程度逃がしてもしようがなかったってあの子は言うだろうけどね。それでも失敗は失敗。アタシ達に尻拭いさせた貸しは消せないよ。他の連中だって、それ目的だろうからね」

そう言いながらマチは歩き出し、カルトは後に続く。

「他には誰が来るの？」

「シャルにフィックス、フェイにボノ。で、アタシ達。後は団長といるか、好き勝手に仕事を見つけてるよ。団長はともかく、来なかった奴らはラミナに貸しを作る気はないってことだね。ノブナガは自分で見つけた仕事のせいで来れなかったただけだけど」

「ふうん……」

「この街でシャルと合流する予定だよ。そこからはシャルが用意した車で行くから」

「分かった」

その後、マチとカルトはシャルナークと合流し、流星街に最寄りの町へと向かう。

クモと蟻の決戦はすぐそこまで迫っていた。

#117 ゴウヨクノクモ×タイ×ボウシヨクノアリ

流星街より依頼を受けた幻影旅団の面々は、最寄りの町に集結していた。

街頭のテレビではキメラアント達のニュースで持ちきりであり、マチ達はそれを眺めながらシャルナークの到着を待っていた。

集まったのはマチ、カルト、フィンクス、フェイタン、ボノレノフ、そしてシャルナークの6人である。

「随分と派手に暴れてやがんな」  
「だね」

煙草を吹かしたフィンクスの呟きに、フェイタンも頷く。

そこにシャルナークが合流する。

「お待たせ」

「よし、行くか」

フィンクスの号令に一行は移動を始める。

町を出て、蠅やガスが飛び交う荒野を歩いて流星街へと向かう。

「キメラアントて言うらしいね、あれ」

「聞いたよ。人と交じってあんなつたんだろ？」

「ああ。どうやらラミナが動いてたらしいけど、仕留めきれなかったみたいだな。だろ？ マチ」

「そうだね。ハンターに頼まれてミテネ連邦の方に向かったはずだよ」

「ミテネ連邦なあ。あそこらへんは訳分かんねえ国が多いからな」

「他の国のこと言えないね」

「けど、元は蟻だろ？ 巣の周りで女王蟻とウロチヨロしてりやいのによ」

フィンクスのボヤキに頷いたボノレノフは、マチとシャルナークに顔を向ける。

「ラミナから何か聞いてないのか？」

「もちろん聞いたよ。どうやら女王蟻が死んだらしい。それで、兵隊蟻達はそれぞれ王になるために巣を飛び出して行つたって話だ」

「ん？　じゃあラミナは依頼を達成したってこと？」

マチが小首を傾げて訊ね、シャルナークは小さく首を振る。

「いや、女王蟻を殺したのはその子供の王だつてさ。だから、ラミナの依頼はどつちかかっていうと失敗だな。で、ラミナは今、王を仕留める方に集中するんだと」

「ちっ……情けねえ野郎だな」

「野郎ちやうつて言うだろうけどね。あはははは！」

「それにしても、ミテネ連邦からまたなんで流星街に？」

今度はカルトが質問し、シャルナークは顎に手を当てる。

「んく……そうだなあ」

「たまたま行きついたか、ごみの臭いにでも誘われたか？」

「さあな。ただ偶然つてことはないだろうね。最初に蟻が見つかったNGLも、その近くにある東ゴルトも、外に情報が出ない国だ。流星街と条件は同じ。……いや、世界に存在を公に認められてない分、まだこつちの方が狙いやすいだろうな」

「蟻からすりや安心して侵略できるってわけか」

「なるほどね。ここならハンター協会も手を出せないし、いくら喰い荒らされようが他の国からすればむしろありがたいってことね」

「ああ。だから、ラミナも依頼を引き受けて、団長も許可したんだろうな」

「結局ワタシ達が尻拭いすることになたけどね」

「まあ、ラミナー人じゃ流石に千匹近い蟻を仕留めきるのは難しかっただろうな。メールじゃあハンター協会も3人しか派遣しなかったらしいし、女王蟻を守る蟻も念能力を使えて、かなり強かったらしいよ」

「へえ……」

フィックスとフェイタンが、興味を引かれたのか笑みを浮かべる。

それにシャルナークは苦笑して、マチは呆れる。

カルトもマチの隣で『見てみたいなあ……』と思っていたが、表情

には出さなかった。

その後、2時間ほど歩くと、前方の景色が変わる。

辺り一面ゴミの山。土の地面すらも見えず、敷き詰められたゴミの上をトラックが走り回っている。

その周囲には白い貫頭衣を纏った者達がゴミの山を漁って、使える物を選別している。

上空にはカラスが飛んでおり、相変わらず蠅も大量に飛び回っている。

「おく……結構久しぶりい」

「変わってねえなあ」

「ここが……流星街」

カルトはスラムのようなイメージを抱いていたが、想像以上に街として形を成していた。

ゴミの山から発生するガスのせいか、顔まで覆う服を着ている者がほとんどだが、それ以外はどこにでもありそうな街並みだった。

街に足を踏み入れたところで、マチ達の前に3人の人が現れる。

ガスマスクを被っているため顔は一切見えないが、今回依頼を出した者達の代表者であり、流星街を運営する『議会』の一員でもある者達だ。

シャルナークが代表して声をかける。

「状況は？」

「被害者と殉法者合わせて死人は300人を超えとる」

「爆弾も全く効かないし、対応に苦慮している」

「死者の定義についても、議会の間でも意見が分かれておつてな」

「あ？ どういう意味だ？」

「こつちだ」

フィックスの質問に答えず、男達は案内を続ける。

それに青筋を額に浮かべるフィックスだが、シャルナークが抑えて案内を続けさせる。

一行が向かった先は教会だった。

教会の外では冥福を祈る者達が膝をついて頭を下げていた。

教会の中には布を被せられ、手向けの花を乗せられた遺体が大量に並んでいる。

その内の1つに歩み寄って、男の一人が布を外した。

現れたのは、異形の死骸だった。

それにシャルナーク達も目を丸くする。

「つい先日まで普通の人間だった」

「……蟻の仕業かあ」

もはや人の面影は一切ない。

だが、それでも元は流星街の住人で、今は息をしていない。

「それでも死者には違いはないだろう？ 何が問題なんだ？」

「……生きて奴らに加担する者がいる……！ 異形の姿になつてな」

「ほお……」

「彼らを元に戻す術があるか否か……。現在議会はその点を死の境にする意見が大勢となっている」

「……クッククック」

フィックスはその言葉に小さく笑う。

「報復しようにも、仲間が死んだのか、改造されただけなのかで揉めるってか」

「……馬鹿馬鹿し」

マチは腕を組んで呆れた表情を浮かべる。

フィックスも頷いて、

「ホント変わらねえな。ずれたところで迷走してやがる」

「一番重要なのは『流星街の住人が襲われた』という事実のはずなのに。」

加担した者がいようが、死んだ者がいる以上流星街から奪われたのは間違いない。

ならば、どうするかなど……決まっているはずなのだ。

フィックスは男達に背中を向けて歩き出し、マチ達も後に続く。

「俺達は勝手にやるぜ。邪魔する奴は倒すだけだ」

目指すは流星街の外れの城。

「安心しな。今日中に退治してやるよ。自称『女王』をな」

そこは本来長老を始め、『議会』に出席できる者達が暮らす城だった。

だが、今は糸で覆われており、まさしく『虫の巣』と化していた。  
『繰り返す！ 服従せよ！ 我は女王なり！！ 逆らいし者は極刑に処す！！ 選ばれし者は楽園への永住を約束しよう！！』

流星街の子供でも騙せないであろう幼稚な言葉が、城から響いてくる。

フィックス達は城の前までやってきていた。

「アホらしい内容だね」

「蟻の癖に、蜘蛛の巣ってか」

「ワタシ達への挑戦ね。どっちが強いクモか教えてやるね」

「じゃあ……正面突破で」

「異議なくし」

フィックスは腕を解しながら、正面入り口へと向かう。

それにマチ達も続き、城の中へと入る。

城の中も糸で覆われており、誰の姿も見えなかった。

「誰もいねえな。ご自由にお入りくださいってか」

「よっほど返り討ちにする自信があるんだろうな」

「それならそれで、向こうから来てくれて楽に終わるね」

「だね。……じゃ、アタシはこっち」

マチは通路の1つを指差す。

それを見たフェイタンは、違う通路へと体を向ける。

「ワタシはこちね」

「じゃあ、俺は正面突破継続すつか」

「……皆バラバラ？」

「当然ね。誰が女王を殺るか、競争よ」

「お前だって、俺達に見せたくない能力くらいあるだろ？ まあ、ラミ

ナやマチにはバレてるかもしれないけど」

「最近カルトはずっとゾルディックにいたから、アタシは知らないよ」  
「くくく！ 向かってくる奴は全部始末しろ。もしも女王を倒せたら、お前の言うこと何でも一つ聞いてやるよ。ラミナと一緒にな」  
「……了解」

カルトは自分の後ろに付いてくるフィックスやラミナの姿を想像して、笑みがこぼれそうになる。

その様子をシャルナークは笑みを浮かべながら見つめており、  
(マチが女王を倒したら、これまでに以上にラミナと一緒にマチに振り回されるかもしれないことには気付いて無さそうだなあ)  
などと考えていた。

もつとも、フエイタンが勝っても地獄が待っているだろうし、誰が勝つにしろラミナが碌な目に遭わないのは確定事項なのだが。

そして、高確率でラミナはカルトを巻き込むだろうことも想像に難くない。

シャルナークは込み上げる笑いを必死に抑え込んで、合図を出す。  
「それじゃあ……」

『スタート!!』

同時に玄関ホールからそれぞれの道に飛び込むマチ達。  
いよいよクモの爪が、蟻に迫ろうとしていた。

女王の間にて。

元師団長の1人、ザザンは玉座に座って部下の一人にネイルをさせ  
ていた。

「侵入者はどうなったの？ パイク」

「はい。今、散りましただ」

ザザンの質問に答えたのは、元兵隊長で蜘蛛型のキメラアントのパイクだ。



城中に張り巡らされた糸は全てパイクの糸で、その糸に触れた振動を感じ取ることが出来る。

「糸から伝わる歩き方からも、今度の連中が只者ではないことが分かります。常時野生に身を置きし者の足運び」

「強いのか？」

「はい」

「じゃ、お前も行っておいで」

「は……しかし、それでは女王様をお守りする者が……」

「ウフフフ。私は大丈夫。私が心配なら一刻も早く敵を捕獲して戻って来なさいな。頼りにしてるわよ、パイク」

ザザンの言葉にパイクは感動に震える。

「お、おお……なんともつたいない御言葉……！ このパイク、ザザン様に全てを捧げますであ！」

高らかに宣言したパイクは全速力で侵入者排除に向かう。

「行って参ります!!」

パイクを見送ったザザンは、ネイルが終わったのを確認して悠々と玉座から立ち上がる。

「さて、私も……」

「御出陣ですね」

控えていた部下が衣服をザザンに差し出す。

その表情は一欠けらもザザンの敗北を想像していない。

ザザンは渡されたスカートを身に纏って、

「母最大の不幸は、戦闘の喜びを知らなかったこと」

すでに死んでいるであろう女王蟻を思い浮かべながら、己と比較する。

ザザンは女王蟻を反面教師としていた。

増兵には産卵ではなく、操作系能力【審美的転生注射クイーンショット】を活用して人間を変態させ、従えさせることで成し遂げた。

敵に引きこもることなく、撃って出ることによって己を高めて愉悦を得る。

その結果、今では軍勢を率いる女王となった。

ザザンは己が世界を統べる器であることを疑っていなかった。

「さあ、楽しませて頂戴ね。おバカさん達♪」

ザザンは不敵に笑みを浮かべて、標的目指して歩き出すのだった。

フィinksは悠々と通路を進んでいる。

「けっ……全っ然！ 出て来ねえじゃねえか。コソコソ隠れやがって……やる気あんのか？」

周囲に隠れているのはザザンで変態させられた元流星街の住人達である。

ザザンやパイクから『手を出すな』と命じられているのだ。

故に相手をするのは、

「お！ 来た来た」

「グエログエログエロ！ オデ様に見つかったのが運の尽きグエロ！」

現れたのは身長2mほどのカエルのキメラアント。

カエル顔にブヨブヨとした太っ腹、両腕の肘から先は熊のような手と爪を持っている。

ベロリと長い舌で口を舐めて、フィinksを見つめる。

フィinksは左手を右肩に置いて、首をゴキゴキと鳴らす。

「そりやどうかねえ？ ところで、お前ってどっちなんだ？」

「グエロ？ どっちい？」

「元から蟻なのか、ここで蟻になったかかってことだよ。身体を造り変えられるんだろ？ 自称女王とやらはよ」

「グエロロロロ!! 貴様あ!! 女王様を侮辱する気グエロ!? この兵隊長、フロガンが許さんグエロオ!!」

フロガンが唾を飛ばしながら捲し立てる。

フィinksはそれを鼻で笑って、拳を握る。

「じゃあ、どうすんだよ？ ええ？ 化けガエル」

「グエロロロオ!!」

フロガンは深く屈んで、下半身がブヨブヨの腹に沈む。

直後、砲弾のように猛スピードで飛び出し、フィックスに突撃する。フィックスは横に跳んで躲し、フロガンは柱に頭から激突するが、ブニユリと頭が腹部にめり込む。

そして、ゴムボールのように跳ね返って、スピードを全く落とさずに再びフィックスに迫る。

今度は両腕を広げて、爪を伸ばす。

フィックスは軽くジャンプして頭の上で両手を組み、迫ってくるフロガンに真上から叩きつける。

フロガンは地面に勢いよく叩きつけられるが、フロガンはベタン！と平べったくなったかと思うと、先ほどのように勢いよく跳ね上がる。

「おお!？」

「グエロロロロ！ オデ様に打撃は効かんグエロロ！」

「へえ……面白れえ身体してやがんな。殴り潰しがいがあるぜ」

フィックスは不敵な笑みを浮かべて、ゆつくりと右肩を回し始めた。

マチは駆け足で糸の廊下を進む。

「……粘着性はないね。ということは……この糸から相手に振動が伝わっていると判断すべきか」

小さく眉間に皺を寄せながらも、速度を落とさず走る。

「それにしても、ラミナの奴……。なんでシャルなんかに依頼するかね」

妹に頼られなかったことにボヤクマチ。

別に理不尽な命令をする気もない。ラミナからすれば、普段から十分理不尽なのだが。

その後も悶々としながら走り続けていると、広いホールのような場所に出る。

「!!」

その直後、天井からマチに向かって糸が飛んで来た。

マチは軽やかに後ろに跳んで躲す。

「糸……ってことは……」

「ウホホホホー！ 見つけただ、侵入者めえ！」

マチの前にパイクが笑いながら下り立つ。

パイクの見た目に、マチは顔を顰める。

「気持ち悪……」

「んなあ!? いきなり失礼なこと言う女子だがや！」

「もう少ししまともな顔してたら、まだ我慢したけど……。よりもよって、あんたみたいな奴とはね。どう見ても雌には見えないし、女王じゃなさそうだね」

マチは不快感を一切隠さずに言い放つ。

それにパイクも顔を顰めて、

「さつさと捕まえて、ザザン様に届けるべえ！」

パイクは尻をマチに向けて、肛門から糸を勢いよく発射する。

マチは横に跳んで躲し、すぐさまパイクに向かって駆け出す。

「させねえべえ!!」

しかし、パイクも後ろに猛スピードで下がりながら、連続で糸を発射する。

「ちっ」

マチは舌打ちして、急転換して糸を躲す。

(思ったより身軽だね……。糸も連射できるみたいだし、近づくのはそう簡単にはいかないか)

マチは足を止めることなく、ホールを駆け回る。

パイクもマチを近づけさせないように動き回りながら糸を発射して牽制する。

マチは柱に跳び移り、三角跳びの要領でパイクに迫ろうとするが、パイクも天井に飛び上がって天井の糸に掴まって糸を発射する。

それもマチは前方開脚倒立回転で躲し、その勢いのまま正面の柱に飛び乗り、今度はパイクではなく別の柱に跳ぶ。

「逃がさねえぞおー」

パイクは再び糸を撃ち出す。

マチは鋭くパイクを見据えて、反撃のチャンスを窺う。  
『蜘蛛の糸』を操るのは、パイクだけではないのだから。

カルトは歩きながら、両手の間に団員を模した紙人形を広げている。  
「じゃあ、どうすんだよ？ ええ？ 化けガエル」

『気持ち悪……』

『うくん……』

『俺の心には響かない』

『笑えない冗談ね』

それぞれの紙人形から声が聞こえてくる。

カルトは解散する直前に、マチ達に紙片を貼り付けていたのだ。

（……女王はフェイタンのとこかな。どうやって横取りしようかな……？）

紙人形を仕舞いながら、考えこむカルト。

そこに立ち塞がる影が現れる。

「オウオウオウ！ なんだいなんだい！ 童じゃねえかよい！」

赤い甲殻を持つ頭にクワガタの鋏を持つキメラアント。

鋭い爪を生やし、前腕部に棘を大量に生やした虫の両腕に、脇腹からも鎌の腕を生やしている。下半身には袴のようなズボンを身に付けていた。その足も大きく、太く鋭い爪が2本生えている。

「あ！ だが、侵入者は侵入者だよ！ 悪いが童あ！ 大人しくするんだよい！」

「いやだ」

「よよい!？」

キメラアントは、歌舞伎口調で大きさに驚く。

カルトはそれを一切無視して、歩き出そうとするが、

「あー！ 行かさねえ、よよいー！」

歌舞伎キメラアントは一足飛びにカルトの真上に移動して、踏み潰すかのように足を伸ばして落下する。

カルトは滑る様に後ろに下がって、足爪を躲す。

ズシン!!と着地し、大きく脚と両腕を広げて歌舞伎ポーズをとるキメラアント。

「よよよい!! あっしの名はスタグロウ! ここから先に行きたきやあ、あっしを倒していくがよよい!!」

「……うるさい奴」

カルトは扇子を広げ、苛立ちを瞳に浮かべてスタグロウを睨む。

だが、スタグロウはカルトの扇子を見て、「よよい!?!」と驚きの声を上げる。

「こ、これは……!?! 同好の士であつたか童あ!」

「は?」

「粹と雅を愛する者に悪人なし!! なんとという悲劇だよい……!?!」

「……」

「あ! しかあし!! あっしは姫の兵隊だよい! ここは心を鬼にして、戦わせてもらうよよい!!」

(……メンドクサイ)

カルトは半目になって、スタグロウを見つめていた。

(けど、さっきの動きは油断出来ないかも……。想像以上に速かったし、あの体も硬そうだな……。念も使えるはずだから、【堅】を使われたらボクじや破れないかも)

もちろん、観察は怠らない。

言動は馬鹿馬鹿しいが、肉体的には一切気が抜ける要素はない。

力が弱いわけではないだろうし、一度捕まればカルトでは逃げられない可能性は高い。

(ちよっと時間かかるかも……)

カルトは瞳を暗く、冷たくして殺気を纏い始める。

目の前にあるのはただの命。

人であろうとなかろうと、命があるならば殺すのみ。

特別なことは何もない。

カルトは、ゾルディックなのだから。

## #118 イト×ノ×ジヨウオウ

フィックスは迫るフロガンを見つめながら、肩を回す。

「5……6……7……8……」

【廻天】を発動して、右腕に膨大なオーラが集中する。

「グエロ!」

「くうたばれやあ!!」

フィックスは全力で右ストレートを振り抜き、フロガンの頭に叩き込まれる。

しかし、フロガンはバラバラにならずに後ろに勢いよく吹き飛んでいった。

フィックスはその手応えに眉間に皺を寄せる。

「ああ?」

フロガンはスーパーボールのように柱や壁で跳弾して着地する。

流石にノーダメージと言うわけにはいかず、ややふらつきながらフィックスを睨む。

「グエロロロロ……。驚いたグエロ。人間の癖にい……」

「テメエ……。何しやがった?」

「グエロロロロ!! オデ様のオーラはオデ様の身体と同じく、あらゆる打撃や衝撃を吸収するグエロオ!」

「ちっ……。面倒な奴だぜ」

「グエロロオ!! 死ねえ!」

フロガンは再び勢いよく飛び出して、フィックスに襲い掛かる。

フィックスは苛立ちに歯軋りして、フロガンに裏拳を叩き込む。

「舐めんじゃねえ!!」

フロガンは直角に軌道を変えるが、また柱にぶつかって跳ね返って部屋中を跳び回る。

そして、再びフィックスへと襲い掛かり、フィックスは右脚を振り上げてフロガンを蹴り飛ばす。

だが、フロガンはすぐさま跳ね返りまくって、またフィックスに攻めかかる。

「グエロロロロ！ 効かん効かんグエロオ!! まだまだスピードを上げるグエロよお!!」

フロガンの宣言通り、先ほどまでより跳び回る速度が上がる。

フィンクスは紙一重で砲弾のように飛んでくるフロガンを躲していく。

「ちっ……。(完全に膠着状態だな。奴の突撃を止めるのは簡単だが、仕留めるには手間がかかる)」

互いに決定打が欠けている。

フロガンもフィンクスを一撃で仕留める威力はないが、フィンクスの一撃で死ぬことはない。

だが、このままいけば、フィンクスの方がじきに追い込まれる可能性が高い。

(ちっ……俺あこういうねちっこい奴を相手にすんのは向いてねえんだよなあ。けど、このままじゃ他の連中に女王盗られちゃうな)

フィンクスはだんだんと苛立ちが募り始める。

その苛立ちがフィンクスの動きを雑にした。

「隙ありグエロオ!!」

フロガンがフィンクスの背中に猛スピードで突撃した。

「がっ……! くっそがあ!!」

フィンクスは歯を食いしばって右脚で踏ん張る。

更に腰を捻って左腕を背後に回して、フロガンの服を掴む。

そして、全力で腕を引きながら回転し、右膝蹴りをフロガンの脇腹に叩き込む。

フロガンは再び吹き飛ばされ、壁に叩きつけられるがケロツとした様子で着地する。

「グエロロロ。馬鹿な奴だグエロ。効かないって何度も言ってるグエロ」

フロガンはフィンクスを馬鹿にするが、フィンクスはそれを無視して右肩に手を当てて首をゴキゴキと鳴らす。

「あくあ。くそつたれ。蟻程度に、マジでやることになるたあなあ」  
「グエロ?」



「ま……時間もねえし。誰も見てねえし、別にいいか」

「何を言ってるグエロ？」

「おい、カエルアリ。一発だ。次の一発で、終わらせてやるよ」

フィンクスは不敵に笑って、宣言する。

それにフロガンは一瞬ポカンとするが、すぐに大笑い上げる。

「グエロロロロ!! やっぱり馬鹿だグエロ！ オデ様にお前の攻撃は効かないグエロよ！ お前は何も出来ずにオデ様に殺されるんだグエロオ!!」

フロガンは全力で踏み込んで、勢いよく飛び出す。そして、スピードを上げるためにフィンクスの周囲を跳ね回る。

フィンクスはそれを無視して、腕を回し始める。腕を回すごとにオーラが増大していく。

「……10つと。これくらいでいいか……。そんじゃあ……。やるかあ!!」

フィンクスは腕を回すのをやめると、なんとその場で勢いよく回り出す。

「グエロロロ!! なんだあ、それは！ それでオデ様を殺せると思ってるなら、片腹痛いグエロ!!」

フロガンはフィンクスの動きに大笑いしながら、最後に着地した柱を踏み碎いてフィンクスに突撃する。

「おおわありいだあグエロオ!!」

フィンクスは回転しながらも迫ってくるフロガンの気配を完璧に捉えていた。

「そりゃあ、お前だあ!!」

そして、フィンクスは回転をやめ、フロガンに向かって大きく足を踏み出して腕を振り被る。

その拳に纏っていた膨大なオーラは、

回転してドリルのように尖っていた。

「グエロオ!?!」

「くうたばれやあ!!!」

フィックスは全力で右腕を振り抜く。

フロガン程度がフィックスの拳を避けられるわけがなく、フロガンはドリルのようになつたオーラにいと簡単体が抉られて、肉片もまともに残さず砕け散る。

フィックスは拳を振り抜いた姿勢で止まり、ゆっくりと姿勢を戻す。

「ちっ……なんだよ。こつちもここまで回らなくても良かったな。どうにも匙加減が分からねえ能力になつちまつたぜ」

【廻天】と合わせて発動する能力。

クラッシュヤー・サイクロトロン  
【魔 廻 天】。

腕ではなく身体を回せば回すほど、【廻天】で増大させたオーラに回転を加える能力。

身体を回さなければならぬという大きな隙を作ること、増大したオーラが強力なほど身体を回す回数が増えるという制約がある。

「ラミナと戦つた振魔とかいう奴の能力を真似してみたはいいけどよ……。切り札にするにや、ちいと使い辛過ぎるかもな」

フィックスは小さく舌打ちするが、気を取り直して通路の先へと目を向ける。

「さて……どつちに行くか……」

視界に映るは二本の通路。

「右か……左か……」

フィックスは顔を顰めて、懐からコインを取り出す。

「コインで決めるか」

そして、フィックスはコインを弾き、向かつたのは右側の通路。

すると、前方で巨大な衝撃が発生し、壁が吹き飛んだ。

「ビュウ♪ おくおく。派手にやってんなあ」

フィックスは口笛を吹いて、衝撃の元へと歩く。

大きなクレーターが出現しており、その中心には身体に包帯を巻き直しているボノレノフの姿があつた。

フィックスはクレーター縁で足を止め、ボノレノフはフィックスに

顔を上げる。

「他の奴らは？」

「さあな。まだ楽しんでんじゃねえの？ それにしても派手にやりやがったな」

「逃げ足だけは速くてな。踏み潰すのに力を入れ過ぎたかもな」

「ま、いいんじゃないの？ それにしてもラミナの奴、数が多かったくらいでこの程度の連中を逃がしやがって……」

フィinksはクレーター縁に屈んでボヤク。

それにボノレノフはフィinksの相手は楽しめる相手じゃなかったようだ と推測する。

そこに近づいてくる気配を察知して、顔を向ける。

現れたのはシャルナーク。

「よお、シャルって、あん？ どうした？」

シャルナークの動きがどこかぎこちないことを見抜いたフィinksとボノレノフ。

それに服や体のところどころに傷が出来ていた。

「手間取ったのか？」

「俺と同じ操作系能力者でさ。最初に相手をしたのは操られている蟻だったから、俺の能力が効かなかったんだよね。それでちよつとだけ手間取った」

シャルナークは肩を竦めながら答える。

「へえ、じゃあ奥の手でも使ったのか？」

「さあ？ 　ただ、女王と遊ぶのは無理っぽい」

「よっしゃ！ 　これで競争相手が一人減ったな！ 　じゃあ、さつさと女王の顔でも拝みに行くか」

「だな」

「つたく……酷いなあ」

シャルナークは小さくため息を吐くも、すぐに笑みを浮かべてフィinks達と共に先へと進むのだった。

その頃、マチは相も変わらずパイクの放つ粘着糸を躲し続けた。

しかし、徐々にパイクの糸が張り巡らされていき、逃げ場が無くなっていくのであった。

「なははははは！　いつまで逃げ続けるだがや、オナゴ！　どんどん逃げ場がなくなってくだぞー！」

「ふん」

マチはパイクの挑発を無視して、動き続ける。

パイクがまた糸を発射したその時、

マチが猛スピードで糸を躲しながら、パイクへと殴りかかる。

「なあ!?　つとおー！」

パイクはすぐ近くの糸を掴んで身体を引き、マチの拳を躲す。

ターザンのように糸から糸に跳び移って、マチから距離を取る。

「ちっ……」

(ホントにすばっしこいオナゴだや……。けんど近づかなければ、そこまで怖くねえべ)

パイクはマチの動きを推測しながら、作戦を考える。

(どんどん糸を張っていけば、好き勝手に動けなくなるはずだべ。なら、足を止めた時が勝負だべ！　あの技は尻の穴にかなり負担がかかるだが……)

「まだまだ行くべえ!!」

パイクは再び糸を発射する。

マチは糸を躲して、また駆け回る。

(糸に制限はないか。面倒だね……。そろそろいいか……)

マチは足を止めて、パイクを正面から見据える。

パイクはそれを逃げ場が無くなったからだと思いい、上機嫌になって笑い出す。

「なはははははは！　遂に諦めたか!?　じゃあ、こっちもそろそろ本気で行くべえ!!」

叫びながら、パイクは大きく跳び上がる。

そして尻をマチに向けると、肛門が二回引き攣る。

直後、網目状になった糸がマチを覆うように発射された。

「これで終わりだべえええ!!」【愛ラブ・シヤワーの放射線】!!」

「終わり? 誰が?」

マチは一切驚くことなく、右手を握り締めて勢いよく引く。

すると、パイクが発射した網目状の糸が途中で何かに遮られたように止まり、周囲の粘着糸が不自然に曲がる。

「なあ?」

「甘いよ」

続いて左手を引く。

再び周囲の粘着糸が曲がり、パイクは何か縛られたように動けなくなる。

「な、なんだべ!? どういうことだか!」

「糸を使うのがアンタだけだなんて誰か言ったのかい?」

「い、糸お……?」

戸惑うパイクの目に突如細く輝く糸が現れ、それが自分の身体を縛り、【愛の放射線】を受け止めていた。

「こ、これは……オーラの糸、だべか……?」

「クモの糸は引つ付くだけじゃないんだよ」

動き回っていたマチは柱に針を刺して、念糸を垂らしていたのだ。

マチはオーラの糸を回収しながら、更に両腕を全力で引く。

マチの念糸で引つ張られていたパイクの粘着糸が引き切られ、パイクを締め付ける念糸の力が更に強くなる。

「ぐぐぐ……い……け、けど……これじゃオラは殺せねえだあ……!」

だが、パイクもキメラアント。見た目より頑丈なのだった。

マチの念糸が強力であったとしても、パイクの身体を締め千切るほどではなかった。

「だろうね」

マチは突如パイクを縛っていた念糸を消す。

そして、勢いよく走り出し、先ほどまで以上の速さでパイクに詰め

寄る。

パイクは慌てて糸を発射しようとするが、その前にマチの右ストリートがパイクの尻部に叩き込まれる。

「おぎよほお!?!」

パイクは変な悲鳴を上げて、後ろに吹き飛ぶ。

しかし、マチが左腕を引くと、パイクが突如脚を引かれたように空中で停止する。

「こ、今度はなんだべ!?!」

パイクが目を向けると、鋭い爪が生えている右脚に念糸が巻き付けられていた。

「捕まえた」

マチは両手で念糸を掴んで、勢いよくパイクを振り回し始める。

「ぬうあああああああ!?!」

パイクは悲鳴を上げるもあまりの力に抵抗出来なかった。

マチはパイクを柱に叩きつけて砕きながら、まだ残っている粘着糸を振り払っていく。

(な、なんて力だべえ!?! う、動けねえだあ!?! け、けど……これでも糸は使えるだぞ!!)

パイクは肛門に力を入れて、再び【愛の放射線】を放とうとする。

しかし、放った瞬間、糸がバラバラに引き裂かれてしまった。

「んなああぶげえ!?!」

パイクは目を丸くして驚きの声を上げるが、そこでマチが手を離して壁に叩きつけられる。

「まだ気付いてなかったの? アンタの肛門はアタシの念糸を縫い付けてある」

先ほどパイクの尻を殴りつけた時、左手で【念糸縫合】を発動して肛門に網目状に糸を張っていたのだ。

「な、な、な……!?!」

「気を付けな。糸を引き千切ろうとすれば、周囲の肉も千切れるよ」

「な、なんてことするだや、おめえ!!」

「これでアンタはもう糸を出せない。そろそろ終わらせるよ」

冷たく言い放ったマチは、再びパイクに一瞬で詰め寄る。

パイクが掴みかかろうとするが、マチは素早くしゃがんでパイクの足を蹴り抜いて足払いを繰り返した。

「ぬああ!?!」

パイクは無様に転び、マチは素早く立ち上がってパイクの尻部を全力で蹴り抜く。

吹き飛んだパイクの腹部は潰れて、肛門から勢いよく血が噴き出す。

「ぬぎゃああああ!?! オラの、オラの腹がああああ!?!」

パイクは悲鳴を上げて、地面で倒れて悶える。

マチはその様子を冷たく見つめながら、ゆっくりと歩み寄っていく。

「なんだ……随分と柔いね」

つまらなそうに呟いて、パイクの傍まで近づくと、

「ふがああああ!!」

パイクが勢いよく起き上がって、マチに掴みかかる。

マチは一番近いパイクの腕2本を素早く掴んで、また勢いよく振り回す。

そして、近くの柱にぶん投げて、すぐさまパイクへと跳び迫る。

念糸を繋げた針を四本投げて、一番上の両腕の付け根、三番目の両腕の付け根に針を突き刺す。

両手に念糸を二本ずつ持ち、更にスピードを上げてパイクの上に移動する。

勢いよく回転して、パイクの身体を縛っていく。

最後にパイクを踏みつけながら地面に押し付ける。

「ぐえ!?!」

「これでもう動けない」

「こんのお、舐めるでねえぞ!! オラが本気を出せばこの程度お!!  
ふんぬおおおお!!」

パイクは身体に力を入れて、念糸を振り解こうとするがビクともしなかった。

「残念だったね。アタシの糸はこの距離なら一番強度が高い。更にはアタシが握ってる以上、緩むこともない」

マチはまたパイクを振り回しながら勢いよく駆け出して、壁に叩きつけてめり込ませる。

「ごあ……!!」

「つたく……ラミナもやっぱりまだまだだね。こんな連中に手間取るなんて」

マチは呆れを隠さずに言う。

パイクは痛みを耐えながらも、マチを睨みつける。

「こ、この……オナゴの癖に……」

「たかが虫に言われる筋合いはないね。その女の力に勝てない癖に」

マチは幻影旅団では戦闘要員ではない。

暗殺・攪乱要員として動くことが多い。

だが、忘れてはいけないことがある。

幻影旅団は最凶最悪の犯罪集団。

そこに所属する者は誰であつても常人ではない。

そして、マチは設立メンバーであり、ラミナの姉である。

マチの念糸はラミナやキルアですら解けない。

マチの念糸がどれだけ強靱であろうと、縛り続けるには糸を握る者の力が強くなければならない。

幻影旅団・団員『No.3』マチ・コマチネ。

現団員腕相撲ランキング第4位にして、女性団員一の怪力の持ち主である。

そう。マチは……ラミナより力が上なのである。

「じゃあね。虫けら」

マチは拳を握り締めて、パイクの顔面に右ストレートを叩き込む。

パイクの顔面に拳がめり込み、パイクの顔が陥没する。

そこにマチは左ストレートを叩き込んだかと思うと、



ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

マチは両腕が霞む速度で、パイクの顔面にラツシユを叩き込んだ。もちろん、パイクが耐えられるわけがなく、数発で顔面は潰れたがマチはそれでも殴り続けた。

ただの八つ当たりである。

そして、満足したところで殴るのを止める。

「ふう……ちよつとすつきりした」

マチは頭どころか上半身の半分が潰れたパイクの死体を見下ろして、手に付いた血を払って言う。

「恨むなら蜘蛛に生まれ変わった自分を恨むんだね。アタシは『アラクネクイーン』。蜘蛛のバケモノの女王らしいからさ。他の蜘蛛に負けるわけにはいかないだよ」

マチはそう言って、先を目指して歩き出す。

「女王は盗られてるかもね……。ま、あの子にはまだ貸しがあるから、アタシが先約だけど」

マチはラミナに何をさせてやろうかと想像しながら、口を吊り上げるのだった。

## #119 ラミナ×ノ×デシ

「よよおい!!」

スタグロウは跳び上がり、右脚を振り上げて勢いよく振り下ろす。カルトは軽やかに後ろに跳び下がって躲すも、スタグロウはすぐさま摺り足でカルトへと詰め寄って鎌の腕で斬りかかる。

カルトは退屈そうな表情を浮かべながら僅かに頭を仰げ反らせるだけで躲し、反撃に出ようとするがスタグロウが棘の生えた右腕を振り下ろしてきたので大きく後ろに跳び、距離を取らざるを得なかった。

(……面倒だな。腕が多いから思ってたより隙が少ない。あの足の爪も油断できないし……。けど、ラミナに比べたら遅くて弱いしな……)

扇子を口元に当てながら、眉を顰めるカルト。

ラミナ達旅団員との組手をやり過ぎて、感覚と実際のギャップが生じていたのだ。

スタグロウはダン!と手足を広げて歌舞く。

「あー すばっしけえなあ童よよい! わっば だがあ! 逃げるばっかじゃあっしは倒せねえよよい!!」

「……はあ」

カルトは小さくため息を吐いて、扇子を開きながら前に出し、左手を掲げる。

そして、左手から大量の紙切れを降り散らし始める。

開いた扇子の上に大量の紙切れが積もり、それを見たスタグロウは訝しむ。

「……なんのつもりだよい?」

「紙吹雪。……風ツ!!」

カルトは不敵な笑みを浮かべながら扇子を振って、紙吹雪を舞い飛ばす。

風がうねり、紙吹雪が生きているかのように舞い踊る。

カルトが扇子を振る度に紙吹雪は向きを変えて、スタグロウを囲む

ように動く。

「これはあ……?!」

目を丸くするスタグロウ。

そこにカルトが扇子を振り下ろし、スタグロウの全身に紙吹雪が叩きつけられる。

だが、紙吹雪はスタグロウの身体にかすり傷1つ付けられず、表面で受け止められて地面へと舞い落ちる。

「あー！ 何がしてえんだよよい！ こんな紙切れで傷つくほど、あつしの身体は柔くねえんだよよい!!」

しかし、カルトはスタグロウの言葉を見せず、再び扇子を振り紙吹雪を舞い上げる。

舞うように扇子を振り、紙吹雪は蛇のようにうねりながら、勢いよく宙を舞う。

【蛇咬の舞】

扇子を振り下ろし、紙吹雪の大蛇がスタグロウへと襲い掛かる。

スタグロウは迫り来る紙吹雪の大蛇に目を見開くも、

「あ!! 舐めんじゃねえよおい!!」

と、棘の生えた右腕を振り被って、大蛇の頭に叩きつける。

硬く重い一撃に紙吹雪の大蛇の頭は砕け、紙吹雪は形を崩して散る。

カルトはその結果を目にしても、驚くことも嘆くこともなかった。

(やっぱりあの硬い皮膚を普通に傷つけるのは難しいかも……。狙うなら関節だけど……。あの棘の腕が邪魔だな)

硬いだけでなく、大量の棘も生えている。

そこにオーラを込められると、やはり紙切れに込めたオーラでは太刀打ちできない。

(能力を使う様子が無いから、強化系か【発】を会得してないのどつちか。それに【練】も未熟で【堅】が出来てない。なら……)

カルトは再び扇子を下に振って風を起こし、紙吹雪を舞い上げる。

「よよい!? それはもう効かねえこたあ、あ！ 分かったはずだろうがよい!!」

スタグロウの言葉を無視して、カルトは扇子を振るう。

再び紙吹雪の大蛇がスタグロウに襲い掛かり、スタグロウは再び右腕を振り被る。

その時、スタグロウの振り被った右腕が肘関節部から突如切り飛ばされた。

「なああ!? くおう!」

スタグロウは目を見開いて驚くも、直後紙吹雪の大蛇に襲われて吹き飛ばされた。

だが、すぐに起き上がって、カルトから距離を取る。

切り飛ばされた右腕以外に傷らしい傷はないが、履いていた袴があちこち切り裂かれてボロボロになっていた。

スタグロウは右肘に目を向けて、改めて現実を受け止める。

だが、やはり頭の中は混乱していた。

「な、何が起きたんだよ……!」

あの紙吹雪ではない。

では、何だ?

何が起きたのか全く理解できないスタグロウ。

もちろんカルトは不気味に笑みを浮かべながら歩み寄るだけで教えるわけもない。

「さあ? 頑張つて考えれば?」

カルトは扇子を振って、紙吹雪の大蛇を再びスタグロウに囁ける。

スタグロウは今度は迎え撃たずに躲すことを選択した。

「よよいー! よよいー!」

跳び跳ねながら大蛇の噛みつきを躲していくスタグロウ。

もちろん、カルトの動きを見逃さないように注意を払いながら。

カルトはそれに気づきながらも舞うように扇子を振るう。

そして、扇子を力強く振るい、大蛇を襲い掛からせる。

スタグロウも再び躲そうとした時、

カルトの左腕が素早く動いたのと、その左手から何か放たれたのを見逃さなかった。

しかし、その放たれたモノを見失い、気づいた時には鎌の左腕が関

節部から斬り飛ばされた。

「ぐう!？」

スタグロウは痛みに顔を顰めながら視線を動かし、捉えたのは手裏剣の形をした紙のようなものだった。

「しゅ、手裏剣!？」

「余所見してていいの?」  
「!？」

カルトの声が聞こえたのと同時にゾクリと背筋に怖気が走ったスタグロウ。

すぐさまその場を離れようと後ろに跳び下がるが、鎌の右腕の切っ先が半ばから斬り飛ばされた。

「ぬぬう!!」

スタグロウは顔を顰めながら、カルトへと視線を戻そうとしたが、

すでにカルトはスタグロウの足元まで迫っていた。

「よよいっ!？」

「ふっ!」

カルトは鋭く息を吐いて、広げた扇子を横薙ぎに振るう。

スタグロウは摺足で身体を半身にして斬撃を躲そうとするが、躲し切れずに腹部を斬り裂かれて血が噴き出す。

スタグロウはそれに構わずカルトから離れようと下がるが、カルトはピタリと張り付いて追い迫る。

「ぬう! よよいッ!!」

苦し紛れに右足を鋭く突き出して、爪でカルトに斬りかかる。

カルトは迫り来る爪を冷たく見据えていた。

「遅いね」

扇子を素早く振るい、全く抵抗を感じさせずに爪を斬り落とす。

スタグロウは半ば折れた鎌の右腕を鋭く突き出す。

だが、カルトはその右腕も難なく斬り飛ばした。

「ぐっ、おおおお!!」

スタグロウは完全に余裕を失って、棘の生えた左腕を全力で薙ぐ。直撃したかと思われたカルトだが、幻影のように姿が掻き消された。

「き、消えた……!?!」

「こつち」

カルトはスタグロウの背後にいた。

【肢曲】で背後に回り込んだのだ。

ラミナ達との地獄の組手乗り越えたカルトからすれば、スタグロウの攻撃など余裕を持って動ける。

「ぬう……!! 童と思っていたが、武者の類であったかよい……!!」

「違うよ。ボクは殺し屋。それとクモ」

「殺し屋だと……!?! 童のような子供が?」

「生まれて数カ月の虫に言われたくないね」

カルトは一切表情を変えずに言い放つ。

扇子を閉じて口元に当て、小首を傾げる。

「ねえ? 他に何かないの? そろそろ飽きてきちゃった」

「な、なんだと……?」

「お前達程度にラミナが負けるわけないよね……。ってことは、この女王より強い蟻がいるってことか。……あれ? それってラミナが見逃すほどの雑魚ってこと? じゃあ、女王も大したことないのかな……」

カルトは完全にスタグロウへの興味を無くしていた。

それよりも女王、そして今ラミナが追いかけている蟻の方へと興味を向け始めていた。

スタグロウはそれを侮辱と捉えて、顔を怒りで歪める。

「おのれえい! あっしだけでなく、姫様まで馬鹿にしよって!! もう容赦しないよよい!!」

スタグロウは一気に天井まで跳び上がって天井を蹴り、左足の爪で蹴りかかる。

カルトは小さくため息を吐いて、扇子を懐に仕舞う。

そして、右腕を軽く横に振ると、袖からスラリと長さ2m、幅5c

mほどの紙紐が現れる。

紙紐の先は剣のように尖っていた。

「それがどうしたよい!? 紐や鞭程度でやられるあつしじゃねえよよい!!」

スタグロウは恐れることも怯むこともなく、カルトを切り裂くことに全身全霊をかける。

しかし、カルトは絶対零度の瞳でスタグロウを見据えていた。

ただ心冷たく紙紐にオーラを流し込む。

垂れ下がっていた紙紐は、まさしく剣のようにピン!とまつすぐに張る。

そして、音もなく一瞬でスタグロウに飛び掛かり、

「かみのはばきり紙之羽刃斬」

冷たくその名を呟いて、すれ違いざまに右腕を振り抜く。

スタグロウは勢いよく膝をついて着地し、少し遅れてカルトは静かに下り立って紙紐を袖の中に仕舞う。

スタグロウはゆっくりと立ち上がる。

「……無念。されど、闘争の果てに死ぬは生物の本望だよい……。その相手が雅と粋の者ならば尚更だよい……」

独り言のように呟くスタグロウ。

そのスタグロウの身体を、縦に両断するように赤い線が走る。

「だが……ジャポンには……行って見たかった……よい……」

そして、スタグロウは左右に身体を割き、倒れ伏す。

「……ちよつと時間をかけ過ぎちゃったかな。とつと女王を探しに行けばよかった」

カルトは扇子を取り出し、口元に当てて後悔したかのようにボヤク。

「かみのはばきり紙之羽刃斬」。

キルア同様ラミナを意識して編み出した能力である。

紙紐を【周】と【練】で強化して武器のように扱うだけのシンプル

な能力だが、長さも自在で、鞭や槍などのように形を変えて操ることも出来る。

カルトは歩き出して、先を指すことにした。  
袖から旅団員の紙人形を取り出す。

それぞれの声を聴いて、どうやら女王はフェイタンと戦っているようだ判断した。

「フェイタンが相手じゃ着く頃にはもう終わってるかも……」  
カルトはつまらなさそうに言いながら、廊下を歩く。

20分ほど歩いていくと、マチが腕を組んで壁にもたれかかっていた。

「あれ?」

「遅かったね。もうアンタ以外はフェイのところには揃ってるよ」

「じゃあ、女王はもう殺しちゃった?」

「いや、まだ戦ってるよ。フェイの奴、随分と鈍ってるみたいだね。調子を戻すつもりで遊んでる。もうしばらくは楽しむつもりなんじゃないかい?」

「ふうん……」

マチとカルトは並んで歩き、先から飛んでくる殺気の元へと向かう。

「女王って強いのか?」

「アタシはチラツとしか見てないけど、そこそこ強そうに見えたね。女王を名乗るだけのことにはありそうだった」

「ふうん……」

「けど、フェイやアタシらの敵じゃないよ。アンタは少し手こずるかもしれないけど」

「……」

カルトは不満げに眉間に皺を寄せる。

マチはそれに気づきながらも、無視して話を続ける。

「さっきと片付けて団長のところに戻るか、ラミナの様子でも見に行こうかね。また蟻を見逃されたら面倒だし」

「王を狙う?」



「それもありがちね。ラミナに報酬を吹っ掛けられそうだし」

「ボクも付いて行つていい？」

「好きにしな……ん？」

マチは前方からシャルナーク達が走ってくるのを目にして足を止め、カルトも足を止めて小首を傾げる。

シャルナーク達もマチとカルトに気づいて、声をかける。

「お！ やつと来たのか。2人も早く逃げた方がいいぞー！」

「どうしたのさ？」

「フェイタンがキレた。能力を使う気だ」

「別に見に行つてもいいけど、巻き込まれて死んでも知らねえぞ」

ボノレノフとフィнкスの言葉に、マチは納得の表情を浮かべてカルトの襟首を掴んで背負い、フィнкス達の後に続く。

「うわっ!?! な、なにをするの!?!」

「フェイの能力は範囲が広い。しかも、キレて発動するから周りにアタシらがいても構わず全力でぶっ放すんだよ」

「前に見学しようとして、死にかけたんだよな」

「危うくあいつのせいでクモが全滅しかけたからな」

マチの説明に、フィнкスとボノレノフも肩を竦めて補足する。

それに未だにマチに担がれているカルトは尚更『見たい』と思うのだが、その時マチ達の後方、つまりカルトの正面から熱気を感じた。

フィнкス達も振り返った瞬間、炎が通路を埋め尽くしながら猛烈な勢いで迫ってきた。

「火!?!」

「ヤベエ！ 来やがった！」

「あそこに飛び込め!!」

運よく目の前の床に亀裂があり、マチ達は本気で急いでそこに飛び込んだ。

その直後に炎が真上を通り過ぎる。

「ふうー！ あぶねえあぶねえー！」

「もう少し下に行こう。張り巡らされた糸に引火して、火が広がるかもしれない」

「だね。それにしても、フエイがキレるってなんか厄介な能力でも持ってたの？」

マチはカルトを放り投げながら、シャルナークに訊ねる。

「フエイタンが女王の顔に一撃入れたら、女王がキレてトカゲみたいな顔とゴツイ身体になつてさ。その瞬間にフエイタンが【硬】を使って剣で仕留めにいったんだけど……まさかのノーダメージ」

「フエイタンの【硬】でノーダメージ……!?!」

カルトは目を丸くして驚く。

「フエイタンも流石に動揺したみたいでさ。そこに女王が弱つちいなからオーラを飛ばして、結構なダメージが入っちゃったんだよ」

「それで動きが鈍って、更に追い込まれて左腕が折られたんだ。それでキレちゃった」

「まあ、それならしょうがないか」

マチは腕を組んで呆れながらも、納得したように頷く。

やや早足で移動していたマチ達だが、そこにカルトが何かに気づいて背後を振り返る。

それにマチ達も足を止めて振り返ると、背後からゆつたりと上半身裸のフエイタンが歩いてきていた。

「お。もう終わったのか？」

「すぐに燃料切れになたね。熱も弱めだたし。終わたら呆気なかつたよ」

フエイタンは気怠げに肩を竦める。

カルトは想像以上にボロボロのフエイタンに僅かに目を丸くしていた。

マチも気怠げな雰囲気腕を組み、シャルナークに顔を向ける。

「で？ 女王とその取り巻きは倒したけど、他の蟻はどうする？ 住民も蟻になつてんでしょ？」

「女王は倒したんだし、今も新しい蟻が来ないところを見ると、生き残りがいても大した奴じゃないだろう。流石にそこまでは面倒見る必要はないよ。まあ、異形になつたっていう住民がどうなつたか確認する必要はあるだろうけど」

「じゃ、依頼自体はこれで終わりだな」

「ああ」

その後、マチ達は城の下に下りていく。

すると途中で放心状態で茫然としている異形達を発見した。

「やはり女王が死んでも、身体はもう元に戻らねえみてえだな」

「女王の支配からは解放されてるみたいだけどね」

「ラミナの除念能力なら戻せるかもしれないけど、あの子はここに来れる状況じゃないし」

「流石に異形にするのは普通の能力じゃないんじゃない?」

「かもね」

すると、一匹の異形が涙を流しながらフィンクス達に近づいてきた。

そして、

「ゴ…ボ。ゴロジ……デ…ク……レ……」

と、言ってきた。

すると、他の異形達も立ち上がって、同じように『殺してくれ』と懇願する。

それにフィンクスがビキリと額に青筋を浮かべる。

「嫌だね」

右腕を上げて、ゆっくりと肩を回す。

「慈善で殺しなんざまっぴらだ。かかってこいよ、クソ共」

その言葉に異形達はポカンとし、マチ達はフィンクスの意図を理解して顔を見合わせ、苦笑いを浮かべて肩を竦める。

「テメエら、腐ってもここの住人だろうが!! 最期まで根性見せやがれ!!!」

フィンクスの叫びに、最初に声をかけた異形がニヤリと笑い、

「グルウオオ!!」

牙を剥き出しにしてフィンクスへと飛び掛かる。

フィンクスも右拳にオーラを集中させて殴りかかる。

「派手に逝けやあ!!」

その1時間後。

フィinks達は街に戻っていた。

「爺さん達、今度は報復対象を本当の女王蟻まで広げるかどうかで揉めてやがった。つたく、付き合いきれねえぜ」

「ま、その本当の女王はもう死んでるから、広げたところで意味はないんだけどな」

「で、これからどうするの？ しばらくここに残るの？」

「まあな。他にやることねえしよ。またラミナがしくじって、ここに逃げ込まれたら面倒だしよ。ラミナの奴、よりによってあんな面倒な奴逃がしやがって……」

「そういえば、勝負はフェイタンの勝ちだな」

「あ!!」

シャルナークの言葉に、フィinksとカルトは思い出して声を上げる。

フェイタンはニヤリと笑みを浮かべ、

「ラミナには治療費とかも含めて仕事を手伝ってもらうね。フィinksとカルトも来るか？」

「誰が行くかバアカ！ それはカルトとした約束なんだよ！」

「ボクは別に構わないよ」

「まあ、まずはラミナが仕事を終わらせないと意味ないけどね」

マチは肩を竦めて、一番の問題点を挙げる。

ラミナが空くにはどうやっても、王を倒さないといけないのだ。

「そうだな。もうしばらくはここでのんびりするでしょう。団長も今は動いてないみたいだしな」

シャルナークは苦笑しながら言い、フィinks、フェイタン、ボノレノフ、シャルナークは流星街に留まることにし、マチとカルトは一度ラミナの拠点に向かうことに決めた。

そして、その団長のクロロは。

「クケケケケ……！ 美味そうな人間見つけ」

「……ほう」

キメラアントと遭遇していたのだった。

## #120 ソコナシ×ノ×コウキシン

幻影旅団団長ことクロロ・ルシルフルは、現在ヨルビアン大陸南方にある小国の山の中にいた。

山の中の廃教会に蠟燭を乱立させ、長椅子に座って薄暗い中で読書に耽っていた。

その近くには新聞を読んでいるパクノダと、柱にもたれ掛かって目を瞑っているフランクリンがいた。

ノブナガは個人的な仕事で別行動をしており、シズク、コルトピはその手伝いに行っていた。

もちろん、ラミナは未だにバルサ諸島に、マチ達は流星街にいる。ラミナとカメラアントのこと、更に団員がバラバラになっていることもあり、クロロはしばらく身を潜めて情勢を見つめることにしたのだ。

もちろん最近活発に活動したことで少々目立ち過ぎたからというものもある。

カメラアントに興味がない賞金首ハンターやハッカーハンターなどがクロロ達を見つけようと躍起になっているのだ。もちろん、ブルブ美術館の裏倉庫に機密を預けていた国々が雇ったハンター達である。他にも国が抱える暗部も動いている。

「……随分と派手に動き始めてるみたいね。カメラアント」  
パクノダの呟きにフランクリンは目を開ける。

「流星街にまで現れたらしいからな。流石にラミナでも虫けらの群れを殺すのは手が足りなかったみてえだな……」

「そうね。どうやら警察じゃ手も足も出ないみたいね。まあ、裏のNGL連中が壊滅したのだから当然と言えば当然だけど」

「ラミナに依頼してきたジンって奴の話じゃ、虫達は念を覚えたんだろ？ そりゃあ警察程度が太刀打ちできるわけねえよな」

「ラミナやマチ達ならそう簡単にやられることはないでしょうけど、ちよつと心配ね」

「どう思う？」 団長

フランクリンはクロロに声をかけ、パクノダもクロロへと顔を向ける。

もちろん、クロロは2人の話をしっかりと聞いていた。

「そうだな……。フェイタン達は問題ないだろう。流星街に現れた蟻共は所詮ラミナの殺し損ね……。NGLで殺す必要がないとラミナが判断して見逃した連中だ。フェイタン達の心配をするならば、やられるよりわざと見逃す可能性の方だな」

「……確かにフェイタンやフィンクスは流星街から出て行くなら興味を無くしそうだな」

「まあ、マチやシャルナークは余計な被害が出ないようにしっかりと殲滅するでしょうから、見逃す心配はないと思うわよ」

「下手に見逃すと、ジジイ共がうるさそうだからな」

「問題はラミナの方だ。兵隊蟻が世界に散ったということは、女王蟻が死んだのだろう。だが、未だバルサ諸島から出ないということは王が生まれた可能性が高く、そっちの方が厄介なんだろうな。ハンター協会会長まで動いてるらしいからな」

クロロが話しながら本から視線を外して、外へ繋がる扉へと目を向ける。

パクノダも目を鋭くして銃を具現化し、フランクリンもいつでも動けるように立ち上がる。

クロロは本を閉じて、ゆったりと立ち上がる。

「噂をすればって奴か？」

「確かにこの近くでも目撃されたらしいけど、わざわざこんなところに来るなんてね」

「餌場と巢は違う、ということなんだろう。さて……面白い奴だといいな」

クロロはフランクリンとパクノダを従えて、廃教会から外に出る。廃教会の外は鬱蒼とした森で、廃教会の左手にはボロボロの墓地があった。

ちなみにこの廃教会は俗に言う異教徒、それもテロを起こした犯罪結社の拠点の1つだった。もちろん、すでに軍やハンター達によつて

壊滅させられており、所属していた者達は捕縛されたか殺された。そのため、ここを訪れる者はもはや誰も存在しない。

そして、地元の人間からすれば、ここはまさに禁忌の地でもある。故に滅多に人は訪れない。

隠れ家としてはもってこいの場所だった。

犯罪者にとつても、異端な存在にとつても。

「出て来いよ。俺達に用があるんだろ？」

クロロはコートのポケットに両手を入れ、不敵な笑みを浮かべたまま森に声をかける。

ガサガサと茂みが揺れ、異端な存在が姿を現す。

現れたのは額に触角が生え、両前腕から鎌が伸びている異形の人型。

元師団長のカマキリ型のキメラアント―マンデイスだった。

「クキキキキ！ 人間の臭いがしたからよお。来てみたらよお。レアモノたあツイてるじゃねえかよお」

マンデイスが嫌な笑みを浮かべながら、クロロ達を見つめる。

その後ろから更に10体ほどのキメラアントが姿を現し、マンデイス同様ニヤニヤしながらクロロ達を囲い込む。

これまでマンデイス達を見た人間達は例外なく驚愕と恐怖の表情に染まっていた。

だが今回の人間、クロロ達は驚くどころか、

「ふむ……確かに人間と混ざった虫だな」

「けど、それだけね。品性も知性も欠片もないわ」

「人と混ざっただけなんだろ？ 品性や知性は別モンじゃねえか？」

「念に目覚めたと言っていたが、それだけのようだな。自然に目覚めたようにも見えないし、使いこなしているようにも見えない」

「流石に念を鍛えるには知性があつても、知識がないと無理じゃないかしら？」

「……それもそうか」

と、呑気に会話していた。

それも思いつきり自分達を貶してきた。



「……クケケ。レアモノだからって舐めんじやねえよお。念を使おうが人間の身体は脆いんだからよお」

マンデイスは嗤っているが、明らかに苛立ちが込められていた。部下のキメラアント達も怒りを隠さずに、クロロ達を睨みつけている。

「ふむ……少し遊んでみるか。フランクリン、余りモノは任せる。パク、周囲を警戒しろ。邪魔が入らないようにな」

「しゃあねえな」

「分かったわ」

フランクリンとパクノダに指示を出したクロロは右手に本を具現化した。

それにマンデイス達は僅かに目を丸くする。

「本？ どこから出したんだあ」

訝しむマンデイスを余所にクロロは本を開いて、あるページで止める。

その直後、クロロとマンデイス、マンデイスのすぐ傍にいたキメラアント2体の姿がその場から消えた。

『!!』

フランクリン達とキメラアント達は突然消えたクロロ達に驚く。

だが、フランクリンとパクノダはすぐに目を墓地の方へと向ける。

消えたはずのクロロ達は墓地にいた。

マンデイス達は目を丸くして慌てて周囲を見渡し、仲間達と先ほどまで自分達がいた場所を見つける。

「……どうなってんだよお……」

念をまともには知らないマンデイスは戸惑いを浮かべる。

クロロは本を閉じて消す。

「大したことじゃない。邪魔が入らないように少しだけ移動しただけさ。あまり遠くに行けないのがあの能力の残念なところだが、面倒な制約がなくて使い勝手がいいのでな」

「……お前1人でやるってのかよお」

「それがどうした？」

「舐めてんじや——」

マンデイスが顔を顰めて吠えようとした瞬間、クロロが目の前に現れてマンデイスの顔面に拳を叩き込んだ。

マンデイスは後ろに仰向けに倒れて、傍にいたキメラアント2体は目を見開いて固まる。

その次の瞬間、クロロは跳び上がった右脚を高速で2回振り、2体のキメラアントは顔に衝撃を感じて後ろへと吹き飛んだ。

クロロはゆっくりと着地して、軽やかに後ろに跳んで最初の位置に戻る。

「……確かに少し硬いな」

「っ！ テメエよお!!」

マンデイスが起き上がりざまに跳び上がって、鎌を振り上げてクロロに斬りかかる。

「ほお……」

感心するクロロ。

だが、視界の両端に動く影があったのをクロロは見逃さなかった。

「キシヤア!!」

「ビヨハア!!」

右から猫顔にラツパーのような恰好をした兵隊蟻が鋭い爪を振るい、左からは兎顔にボクサーの服装を来た兵隊蟻が棘の生えた脚を鋭く突き出してきた。

クロロは一切表情を変えずに2歩下がって攻撃を躲す。

「なるほど……身体の使い方は熟知している。それに身体能力も確かに高いな」

「余裕ぶってんじやねえよお!!」

「にやめんじやねえにや!!」

「ビヨシユシユ!!」

ボクサー兎が鋭く虫の腕を振って、ジャブを放つ。

手首の付け根に棘が生えていることに気づいたクロロは受け止めずに、余裕をもって躲す。

「毒針か……。餌の調達に使うのか？ なら神経毒の可能性が高い

な」

「ニヤシヤア!!」

ラッパ―猫が口を開くと舌が鞭のように伸びて、クロロに迫る。それもクロロはポケットに両手を入れたまま紙一重で躲す。

「混ざる生き物は1種類じゃないか。本当に面白い生き物だな……」

「このっ……! ちよこまかと……!」

「どけよおー!」

「っ!」

「クケケエ!!」

マンデイスが鎌にオーラを込めて斬りかかる。

クロロはまた紙一重で躲そうとしたが、オーラが僅かに伸びたのを見逃さずに後ろに跳び下がった。

「ちい……!」

「……【発】の使い方を見出しているのか。まだまだ未熟ではあるが……（それとも、今思いついたのか……）」

本当に面白い生き物だ。

クロロはそう思いながら、マンデイス達の観察をしていた。

（瞬間的なスピードは兎、しなやかさは猫の方が上。カマキリは突出したものはないが、全体的に能力が高い。だが、そこまで他の蟻より高いわけじゃない。一番差があるのは……オーラ量）

明らかにマンデイスのオーラは他のキメラアントより多い。拙さは同じくらいだが。

（だが、あの拙さであるのオーラ量は異常と言わざるを得ない……。キメラアント故、か。恐らくあのカマキリは師団長クラス（兵隊蟻）

まともに鍛えていない状態で中堅レベル以上のオーラ。

（ハンター達や流星街、それにラミナが対応に苦慮するのも頷ける。兵隊蟻でこれだ。女王や王、護衛軍とやらはもつと化け物なのだろうな）

クロロは眉を顰めているラミナの顔を思い浮かべて、小さく口角を上げる。

そして、再び右手に本を具現化する。

「つ……！　またその本かよお」

マンデイスは最初の瞬間移動を思い出して、二の足を踏む。

他の2体も警戒して動きを止める。

「スキルハンター盗賊の極意」。俺の能力だ」

「それも念能力なのかよお？」

「ああ。これも念能力だ」

本を開いて、あるページで止める。

「念能力はその使い手の願いやコンプレックスが大きく反映される。俺はそれを知り、馳せ、全て俺のモノにする。さあ、人間と混ざったお前達はどんな『心』を持っている？　どんな『闇』を持っている？

どんな『願い』を持っている？　どんな『お宝』を持っている？

どんな『お宝』を生み出せる？」

ゾクリとマンデイス達の背筋に怖気が走る。

「お前達は人間だった記憶はあるのか？　食われた時の記憶はあるのか？　人間を食べたことはあるのか？　どんな気持ちだった？　どんな味だった？　女王蟻が死んだ時どう思った？　何故王に付いて行かなかった？　巣を出た時何を考えた？　何を思っこの大陸に来た？　その身体はどうだ？　周りとは違う身体をどう思っている？　性欲はあるのか？　好みの女はいるのか？　人間でなくてもいいのか？　生まれた子供に愛情は持てそうか？」

クロロは尽きない疑問を口にする。

クロロを突き動かすのは底なしの好奇心。

特に惹かれるのが『人』。そして『人』が生み出したり、大切にしている『モノ』だ。

故に人と混ざり、言葉を話し、念を使えるキメラアントなど最高の観察対象である。

キメラアントの食欲に匹敵する、それ以上の貪欲な好奇心を本能的に感じ取ったマンデイス達は今すぐ逃げ出したい衝動に襲われていた。

だが、下等な人間を前にして逃げるのもプライドが許さない。

故にマンデイスは、

「クケエエエエエ!!」

雄叫びを上げて恐怖を押し退けながら、両腕の鎌を振り上げてクロロに襲い掛かる。

「気を付けろ。『お前の身体は炎に包まれる』ぞ」

クロロが告げた直後、マンデイスの全身が炎に包まれた。

「グギャアアアア!」

マンデイスは悲鳴を上げながら地面に倒れる。

クロロは不敵な笑みを浮かべたまま、のたうち回るマンデイスを見下ろす。

『その炎は消えない。お前の命がある限り、その炎は燃え続ける。お前の命が薪なのだから。さあ、転がる度に熱くなるぞ。動く度に熱くなるぞ。息する度に熱くなるぞ。鼓動する度に熱くなるぞ』

「ギイイイイイイ!!」

クロロが言葉を紡げば紡ぐほどに、本当に己の身を燃やす炎が熱くなっていく。

マンデイスは耐えられるわけがなく、自殺出来るわけがなく、ただただのたうち回ることしか出来ない。

「お、おい……マンデイス?」

「一体どうしたんだにや?」

しかし、他の2体はマンデイスを見て、困惑していた。

何故なら2体の目には、ただのたうち回って悲鳴を上げているだけだったからだ。

だが、マンデイスの身体が焦げていくのを目にして、2体は助けることも出来ずに後退る。

『命を燃やせ。オーラを燃やせ。身体を燃やせ。すでに炎はお前そのものだ。そら、お前の腕が炎になっていくぞ』

マンデイスが血走らせて見開いている目を腕に向けると、鎌先から炎になっていくのが映った。

「ギイアアアア!? 腕え! 俺の腕がアアア!」

マンデイスが悲鳴を上げると、2体の目に更にボロボロに焦げているマンデイスの腕が映る。

「な、なんだよ……!? これは……!?」

「……このヤロー!!」

ラッパ―猫がクロロに飛び掛かるも、クロロは軽やかに躲いて言葉を紡ぎ続ける。

「髪が、足が、身体が炎に変わる度に熱は上がる。炎は勢いを増す。もう誰にも止められない!」

「イギイ……!! ガアアアア!! ギギギ、ギシヤアアア!!」

のたうち回っていたマンデイスが突如雄たけびを上げながら、炎になったはずの腕を振り被ってクロロに飛び掛かる。

「ほお……」

クロロは言葉を止めて、マンデイスから距離を取る。

すると、マンデイスは全身を覆っていた炎が消えて、炎が変わっていた腕や身体が元に戻ったのを目にする。

ただし、未だに身体は熱く、両腕が火傷を越えて完全に焦げ付いていたが。

「ハア! ハア! ハア! ……な、何しやがったあ……」

「特に何もしてないさ。お前が勝手に俺の言葉から想像しただけだ。その想像が真実だと思い込んで、現実のように感じた。それだけのことだ」

「あ、あれが……想像だと……!? じゃあ、この焼けた身体はなんだよお!?!」

「真に迫る想像は現実に影響を与える事象は観測されている。『病は気から』という諺もあるほどだ。思い込みを馬鹿にするものじゃあない」

マンデイスはクロロの言葉に啞然と固まるしかなかった。

あれがただの思い込みなど信じれるわけがない。

「もつとも……今のは俺の能力によるものだな。【詐欺師の語り<sup>ライアーテイル</sup>】。

俺の言葉を聞き、その内容を具体的に想像すれば、それは本人にとって現実となる」

【詐欺師の語り】。

『対象にオーラを込めた攻撃を加えること』を発動条件とし、その対象に『想像させたい内容を聴かせ続けること』で、『聴かせている間、対象が想像した通りに現実と誤認させること』が出来る。

想像が具体的であればあるほど、対象に及ぼす影響は大きくなり、痛みを与える内容ならば想像と現実の差はなくなる。

場合によっては、ショック死してしまうほどに。

ただし、一度解除されてしまうと、再び発動条件を満たすことからやり直す必要がある。

「想像から抜け出せないように、蟻でも分かりやすい内容にしたつもりだったが……。無理矢理振り払うとはな。カメラアントのポテンシャルと混ざった人間の知能を合わせた故の火事場の馬鹿力、か？」

クロロは笑みを深めて本を閉じて消し、マンデイス達を見据える。「放っておけば面白い能力を身に付けそうだが……。それよりもお前達の王とやらの方に興味が湧いた。お前達からは奪うものはもうなさそうだしな」

そう呟いたクロロの姿が霞む。

マンデイス達が目を見開いた瞬間、首に鋭い衝撃を感じ、突如視界が落ちる。

首を斬り落とされたと感じたのは、顔面に衝撃を感じた直後だった。

一瞬でマンデイス達の背後に移動したクロロは、マンデイス達の身体が動きを止めたのを確認してフランクリンとパクノダの方に目を向ける。

フランクリン達と共に残されたカメラアント達はとつくに殲滅されており、ほとんどが原型を留めていなかった。

「終わったか？ 団長」

「ああ。そっちはどうだ？」

「見ての通りよ。フランクリンの銃撃であつという間。能力を使わせる暇もなかったわ」

「まあ、【堅】どころか【練】すらも使う様子がなかったから、【発】が

使えたかどうかも怪しかったけどな」

「そうか。まあ、それならそれでいい」

「そっちは当然、問題なかったみたいだけど……。まだ生きてるわよ？」

マンデイス、ラツパー猫、ボクサー兎の頭はまだ生きていた。

視線だけで殺せそうな程の殺気を込めて、クロロを睨んでいた。

「ああ、生かしているんだ。パクノダに記憶を見てもらいたくてな」

「記憶を？」

「人間の記憶を持っているのかとか、生まれた王の情報とかが知りたくてな」

「……ラミナのところに行くつもり？」

「それを決めるためでもある」

「王の能力を盗むつもりか？　けど、討伐されちまうんだろ？」

「別に能力だけを盗む必要はないさ。王ごと盗めばいい」

クロロの言葉にパクノダとフランクリンは一瞬目を見開くも、すぐに呆れへと変わる。

「……流石にラミナが怒るんじゃないか？」

「そうねえ」

「その時は誠心誠意謝るさ。それに、恐らくだがこいつらは王の能力を知らない。流石に何も知らないで、乗り込むほど冒険するつもりはない」

クロロは苦笑して、マンデイスの頭へと歩み寄る。

「今はこいつの記憶で満足するでしょう」

空腹の好奇心を少しでも満たすために。

強欲にして暴食の蜘蛛が、その食指を伸ばす。



## #121 センニユウ×ト×キュウデン

マチ達がザザン達を殲滅した頃。

ラミナ達は東ゴルトーに潜入する準備を終え、いよいよ国境に向かおうとしていた。

「こちらは基本的に村や町には近づかん。寄るにしてもうちだけや。お前らは護衛軍や東ゴルトーに逃げ込んだ兵隊蟻に面が割れとるからな」

「ああ」

「んで、ゴン、キルア」

「ん？」

「なに？」

ラミナはすぐ近くで同じく準備をしていたキルア達に声をかけ、持っていた袋を2人に投げ渡す。

「何これ？ ……服？」

「東ゴルトーの上級国民だけが着れる服と、そいつらが身に着けるとるバッヂや。軍服は流石にガキ過ぎて無理やろうからな」

「いつの間に用意してたんだよ？」

「王が東ゴルトーに入ったて聞いた時や。少しでもバレる可能性は下げときたいでな。うちは姿を消せる手段が他にあるけど、ゴンは限界あるやろ？ 今の東ゴルトーはガキがそこらへん歩いとつても目立たへんかもしれへんけど、見つかったらアウトなんは変わらんからな」

ラミナの言葉にキルアとゴン、そしてティルガとブラールも首を傾げた。

「なんで歩いてても目立たないって思うんだ？」

「うちの予想が正しければ、すでに選別は始まっとる」

『!!』

ラミナの言葉にゴン達は目を丸くする。

「恐らく国境付近、正確には首都ペイジンの真反対の地区からもう始めとるはずや。国民大会の日に一気に約500万人も選別できるわ

けがない。一日では絶対に終わらん。その間、国民にずっと騒がれずに待たせるとか出来ると思うか？」

「……確かに。どう考えても不可能だな」

「でも、だからって残り10日近くで選別できるほど兵隊蟻っているの？ どつちにしろ国民に騒がれないかな？」

「そこでネフェルピトーの能力や」

「っ!! そうか……! 軍人を操ればいい……!」

「……なるほどな。操れば、その者のオーラを操れるのは実証済み……。たとえば念能力者ではなくても、無理矢理オーラを引き出して拳にでも集中させればいいのか」

キルアとティルガの言葉に、ラミナは頷いて、ゴンは顔を顰める。

「東ゴルトーの国民にとつて、軍人は総帥の代弁者に等しい。操つた軍人達を通達と案内役と称して村に行かせて選別を行えば、他の村や町にバレる可能性はゼロに近いでな。あの国は政府関係者しか電話を持ってへんから、他の村や街に簡単に連絡が付かん。軍人が迎えに行くからいつでも出発できる準備しとけとか言うとけば、連絡を取る暇も隙もあらへん。誰か暴れば堂々と軍を動かして殴れるし、家や村に押し込む大義名分も出来るから王達からすれば万々歳やな」

「……なんとも恐ろしい方法を考え付くものだな」

同じ種族とは思えないほどの悪辣さに、ティルガはもはや怒りも湧き上がらない。

ラミナはそれに肩を竦めるだけで答える。

「今日から選別が始まつとると考えれば、うちらが国境を越えた時にはすでに50万人が選別され、5千人が次世代の兵士として生き残つとる計算になる」

「……」

「うちらはペイジンを目指す以上、どこかでその選別の場面に出会うかもしれない。その時の覚悟はしときや。耐えるも地獄、止めるも地獄やぞ」

耐えることを選択すれば、目の前で弱者が殺されるのを見逃すことになる。

王達を殺すためとは言え、目の前の助けられる命を見殺しにするのは並大抵の精神では耐えられないだろう。

止めれば選別が中断されることが出来るかもしれないが、同時に王達に侵入者の存在を教えることになる。

それこそ兵隊蟻が押し寄せ、最悪王や護衛軍が出てくるかもしれない。そうなれば、作戦は間違いなく破綻する。

「……恐らく選別を止めたところで王は出て来ないし、護衛軍も王の傍から離れんだろう。この選別を提案して主導しているのは護衛軍達のはずだ。王はむしろ我々を王宮で待ち構え、我々が来るのを楽しみにすらしているはずだ。だが、護衛軍は王に危険が迫るのを防ぎたい。故に逃げ込んだ兵隊蟻を使って使い潰す勢いで我々を殺しに来るだろう」

「まあ、それならそれで兵隊蟻を根絶やしに出来るし、王宮が手薄になるメリットもあるけどな」

「せやな。けど、兵隊蟻の数が分からんし、師団長クラスもおる。ハンターから逃げ切った連中は念能力の重要性を思い知ったはずや。間違ひなく能力を開発しとるはず。油断は出来んで」

「けど、能力を開発しても、絶対的に修行不足だろ？」

「かもしれないが……元々のポテンシャルが高いんや。能力次第で護衛軍に厄介さで匹敵する可能性はあるで。下手すれば、本番ではまともなコンディションで挑めんかもしれない。ええか？ 作戦に望むための最低ラインはしっかりと死守せえや。王と護衛軍を仕留め損ねれば、被害はこの国どころやなくなるで」

ラミナの言葉にゴン達は真剣な表情で頷く。

その時、ラミナの携帯が震える。

携帯を取り出して中を確認すると、シャルナークからだった。

内容は流星街を侵略した蟻の殲滅報告。ザザン達の容姿なども載せられていた。

「流星街の蟻は問題なく殲滅できたみたいやな。テイルガ、サソリみたいな尻尾を持つ女の蟻は知つとるか？ 女王蟻を名乗ったそうや」

「ザザンだな。元師団長だ」

「なるほど。ほな、これでシーフと合わせて二匹の師団長を仕留めたっちゅうことか」

「……ハンター協会は悉く逃がしたみたいだけどな」

キルアは嘆いて小さくため息を吐く。

各国各都市の要請にてキメラアント捕獲に動き出したハンター協会だが、戦闘兵雑務兵クラスのキメラアントは次々と捕獲・討伐に成功しているが、兵隊長クラスに至っては反撃されて半数近く逃げられ、師団長クラスに至っては全員に逃げられていた。

目撃されている師団長は現在4匹。

『【ネバスカ】の獅子男』として堂々とテレビの前に姿を晒したハギヤ、警察官を大量に殺したブロヴーダ、ウエルフィン、そしてナツクル達が仕留め損ねたチートウだ。

「ティルガの話やと、好戦的な師団長は後3匹。そうやな?」

「ああ。ビトルファン、マンデイス、メレオロンという者達だ。メレオロンに関しては見つからないのは当然だろうが、ビトルファンとマンデイスに至っては正直まだ見つかっていないのが不思議なくらいだ」「というと?」

「まずメレオロンだが、カメレオンの特性を持つキメラアントで戦闘力は師団長最弱だが、姿を消すことが出来る。【円】ならば見つけることが出来るが、使えなければまず見つけるのは不可能に近い」

「暗殺向けのキメラアントか……。面倒やな」

「対してビトルファンは単純に凶体がデカくて、見た目も人間とかけ離れてる。本人も自覚しているが頭は良い方ではないから、身を隠すなど絶対的に苦手なはずだ。マンデイスも両腕に鎌があるからそれなりに目立つ。奴も大雑把な性格だからずっと隠れるなどは考えにくい」

「確かに見つからないのが不自然だな」

「まあ、実力者はハンターだけやないしな。うちらみたいな裏社会の念能力者もおるし、傭兵とかもおる。そいつらと出会って殺し合った可能性はあるでな。実際、流星街にも現れとるし」

「……確かな」

「問題は逃げられた元師団長達やな。ネバスカに出たハギャつちゅう獅子男は、ハンターから逃げた後、東ゴルトー方面へと向かったつちゅう情報がある。ロブスターと狼の師団長も同じく東ゴルトー方面へと逃げたらしい。……十中八九、目的地は王と護衛軍がいる宮殿やな。逃げ込んできた兵隊蟻を護衛軍が信用するかは怪しいところやけど……戦力が欲しい連中なら受け入れると考えるべきやな」

「また師団長に戻るわけか……」

「でも、信頼関係が築けないなら隙はあるんじゃない?」

「確かにそうやけどな。護衛軍にとって師団長以下の兵隊蟻が時間稼ぎの使い捨てなんは間違いないやろうし、師団長以下もそれは理解しとるやろうけど……。王と護衛軍の実力を肌で知つとる連中なら、少々命懸けでも信用を得るために働くやろな」

「なんで?」

「考えられるのは2つ。ほい、キルア」

「……1つは純粹に王の庇護が欲しいから。護衛軍が信用できなくても、王から信用を得られれば殺される可能性は低くなるし、王の部下である以上おこぼれに与れる。それに王と護衛軍がいれば、そう簡単に負けるわけもない」

「2つ目は?」

「打算的な意味での王の庇護さ」

「打算的? 1つ目と何が違うの?」

「簡単に言えば【NGL】と【裏のNGL】さ。この場合、NGLが王と護衛軍。裏のNGLが師団長。王の庇護の元で自分の好き勝手したいってわけさ。んで、最終的な狙いは王と護衛軍の寝首を搔くこと」

「どちらにしてもや。信用を得るまでは必死に働かざるを得んつちゅうのがネックやな。王と護衛軍にとって今回の国民大会は失敗する気もなければ、させるわけにもいかん。師団長連中にとっては、ここで活躍すれば目的は果たせたも同然。やから、うちらを全力で仕留めに来るはずや。全兵力を費やしてもな」

互いにすでに後に退けない状況であるということ、ゴンもようやく理解する。

「つちゆうことで、出来る限り姿を隠しておく方が得策や」

ラミナはまっすぐゴンと目を合わせて言い放つ。

ゴンは悩まし気な表情を浮かべるも、小さく頷いた。

しかし、ラミナとキルアはその頷きを信じていない。

絶対にその場面を見れば、ゴンは手を出す。

そう確信していた。

(まあ、そこはキルアが止めるなりフォローするなりするやろ。そこまではうちも面倒見きれんわ)

ラミナは小さくため息を吐いて、ティルガ達に顔を向ける。

「ほな、そろそろ行くで。今日中に国境を越える」

「ああ」

「……」

ティルガとブラールは頷き、ラミナはキルアを見る。

「命の懸け所、間違えんなや」

「……ああ」

キルアは真剣な顔で小さく頷く。

ラミナはそれに何も言わずに、ゴンとキルアに背を向けて歩き出す。

ティルガとブラールも後に続き、ラミナ達はホテルを後にするのだった。

そして、宣言通り。

ラミナ達は夜を迎えた頃に国境を越えて、東ゴルトー共和国に入国した。

「さて、ここまでは問題なく来れたな」

「周囲にも人や蟻の姿はない」

「……」

ブラールの偵察結果を代わりに報告するティルガ。

それにラミナは頷き、携帯を操作して地図を表示する。

「……ここから一番近い町が南にあるな。一度そこでうちの推測が正しいかどうか確認しよか」

「分かった」

ラミナが音もなく駆け出し、テイルガも後に続いてブラールも音もなく飛翔する。

3人揃って夜の森を走っているとは思えないほどの速度で移動する。

20 kmほどの距離を1時間もかからずに走り抜いて、目的地付近に到着した。

手前の森の切れ際で足を止めて茂みに潜り込み、気配を探る。

「……やっぱ、こういう嫌あな推測は当たってまうなあ。ホンマ、やんなるわ」

「……全く人気がないな。そして……凄まじい血の臭いがする」

「……」

「ブラールも人の姿は見つけられないそうだ」

「やろうな……」

ラミナは茂みから立ち上がって、町の中へと足を進める。

明かりも点いていない真っ暗な町。

周囲が森であることもあり、ホラー映画の世界にでも入り込んだように錯覚するラミナだった。

流星街ですら、まだ人の気配や小さな明かりがあるのでここまで不気味ではない。

ラミナはすぐ近くの一軒家に歩み寄る。

扉に手をかけると、一切の抵抗なくノブが回って扉が開く。

家の中に入るも、やはり中にもぬけの殻だった。

一見すると何も起きていないかのようだが、ラミナは素早く部屋の中を見渡して違和感の正体を探す。

「……あそこか」

ラミナは壁際に立てかけてある箆筒へと歩み寄る。

そして横にズラすと、壁に大量の血痕が張り付いていた。

「これは……」

「ま、抵抗してやられたつちゆうとこやろな。床も大雑把に血を拭き取った跡がある。最悪バレても構わんけど、今すぐは困るつちゆうところか。素人やったら違和感を持つても、ここまでは気づかんやろうし」

「すでに選別が終わっているとしても……選別に漏れた者達はどこに？ まさか死体までも王宮に運んだというのか？」

「それはないと思うで。流星に死体は邪魔になるはずやし」

ラミナはそう言いながら外に出て、地面に目を凝らす。

そして、大量の足跡や何かを引きずった跡を見つけ、その方向へと目を向ける。

ラミナがその方向に足を向ける。

ティルガ達も後ろに続き、3人が辿り着いた先は町外れの森の中。ポツンとそこだけ草も生えていない土が剥き出しの空間があった。

ティルガは到着した瞬間に、土の下から凄まじい血の臭いを嗅ぎ取った。

「……まさか、この下に？」

「そうゆうことやろな……。けど、これではつきりしたな。すでに選別は始まつとる」

「……ゴン達は本当に大丈夫なのか？」

「キルアに期待するしかないやろ。それにナツクルも怪しいでな。モラウは大丈夫やろうやけど……どこまで我慢出来るか。はあ……」

「……スマヌが我も何度も目撃すれば、どこまで我慢出来るか自信はない……」

正直に申告するティルガの言葉に、ラミナは特に怒ることも呆れることもなく、今後の展開について考える。

高速で作戦を練り直したラミナは、ティルガに顔を向ける。

「作戦変更しよか。ゴン達が選別を妨害する前提で動く」「つまり？」

ラミナはニヤリと笑みを浮かべて、携帯を取り出す。

「ゴンやナツクルが暴れる前に、先にうちらが暴れたる。少なくともうちらとゴン達の2組で動き回って、キメラアンの戦力を分散させ



る。後はそこにナツクル達が加わってくれば、更に敵は戦力を分散せざるを得ん。そうなればそれぞれの負担は減って、こっちの勝ち目はデカくなる」

「……確かにそれならば……」

「もちろん、言うほど簡単ちゃうけどな。うちの存在の発覚が早まるの事実やし、向こうかて動きを変えてくるんは間違いない。体力的にも精神的にも追い詰められるんは確実や。下手したら作戦当日は自滅覚悟で足止めするしかなくなるかもしれん。それくらい綱渡りや」

「……」

「それでも、向こうにもそれなりにプレッシャーはかけられるはずや。やる価値は十分あるで」

そう言ったラミナはキルアとシユート、ノヴにメールを送る。

そして、答えも聞かずにラミナ達は選抜妨害に向けて動き出すのだった。

ラミナ達が東ゴルトーに入り込む数日前。

首都ペイジン近くの宮殿にて。

中央階段前の広間に、数体のキメラアントの姿があった。

2体は護衛軍のシャウアップとアモンガキッド。

その前にハギヤ、フラツタ、ヒリンの3体がボロボロの姿で土下座をしていた。

「おやおや……随分と可哀想で殊勝な姿になったねえ。前の自信に溢れてた頃とは残念なくらい落ちぶれたねえ」

「っ……」

アモンガキッドの言葉にハギヤは土下座したまま怒りに顔を歪める。

だが、

「……おっしやる通りです。私は巢を出て、少々浮かれておりました。NGLで人間に追い詰められた事実を甘く見ていたようで……」

やってきたハンターに手も足も出ませんでした……」

と、殊勝な言葉を述べる。

感情が読み取れるシャウアップフには全く意味はなく、アモンガキツドも感情は読めなくてもハギヤのそれが演技であることは容易に見抜いていた。

しかし、

「まあ、それだけのこと」

「残念なことに、おいちゃん達は猫の手も借りたいところだったからさ。獅子の手はありがたいところだねえ」

と、受け入れることに決めた。

それにハギヤ達は心の底からホツとして、再び頭を下げる。

「感謝致します……！ この御恩、必ずお返しし、王のお役に立ってみせます！」

「期待していますよ」

「そんじゃあ、まずは傷の治療をしておいでよ。その後にプフっちが君達に合う能力を見繕ってあげるからさ」

「……我々に合う能力、ですか……？」

「そ。残念だけど、ちまちまと君達が能力を完成させるのを待つわけにはいかないんだよねえ。君達がここに来たことはバレてるだろうからさ。ハンターとかが来るのは間違いないよ。だからさ、君達には早々に戦えるようになってもらわないとね」

アモンガキツドの言葉に、ハギヤ達は納得出来たような出来ないような表情を浮かべる。

「まあ、損はないんだからさ。やってもらうだけやってもらいなよ。別にプフっちに能力がバレるわけでもないしねえ」

「……承知しました。シャウアップフ殿、どうかよろしくお願い致します」

「……いいでしょう。王を守る戦力が增える。それだけのこと」

「感謝致します！」

再びハギヤ達は頭を下げて、治療へと向かう。

その後ろ姿をシャウアップフとアモンガキツドは無感情に見送った。

「さて……あと何体くらいが逃げ込んでくるかねえ」

「そう多くはないでしょう。すでに我々が巢を出て一か月……ほとんどの兵隊蟻がすでに討伐されるか捕縛されているでしょう。師団長だった者でもなければ、経験豊かな人間には敵わないでしょうね」

「だといいけどねえ。まあ、残念なことには彼らが来ちやつた以上、人間達が近い内に入り込んでくるよ？ 多分、それなりの実力者が」

「以前あなたが殺し損ねた者……ですか？」

「その可能性は高いだろうねえ。残念だけど」

「ならば余計にあの者達を早々に使えるようにしなければいけませんね。少しでも消耗させ、時間稼ぎをしてもらわなければ」

「そうだねえ。今のピトつちの人形は兵隊長クラスにも勝てないからねえ。肉壁は多い方がいいか」

「そういうことです。では、私は王のところに戻ります。あの者達の治療が終わったら、また呼んでください」

「あいよ」

シャウアップが階段へと足を向けて、アモンガキッドは中庭へと進む。

その頃、ハギヤは歯を噛み砕かんほどの力を込めて歯を食いしばっていた。

ちなみに今は下級兵に案内されている。

「くそっ……！ この俺様があんな無様を晒すことになるなんて……！」

「けど、ハギヤ様あ。あのままじゃ本当に死んでましたよ？」

「分かってる！ だから屈辱に耐えてまで、土下座したんだろうが！」  
ハギヤが八つ当たり気味に吠えたその時、

「カブファッフアッフアッフアッフ!! 何やら聞き覚えがある声があったと思えば、ハギヤではないか！」

元師団長のビトルファンがズシン！ ズシン！と音を立てて歩み寄ってきた。

「ビトルファン？ なんだ、お前も来てたのか」

「おう！ オイラは巢を出てから、まっすぐここに来た!!」

「は？ 最初から王の元を目指してたのか？」

「おう！ オイラは馬鹿だからな！ 王になるとか無理だ！ だが、他の師団長の元に降るのも納得できん！ ならば、あの護衛軍が従う王に降ろうと思ったのだ！ 今はこの宮殿で守衛長を任されている!!」

「……なるほどな。（ちっ……厄介な奴が先に来てやがったな）」

ハギヤは内心で舌打ちする。

確かに頭は良くないが、直感的に最善の道を選ぶことがあるのだ。

今回もハギヤは『まだ師団長は来ていないはず』と思い込んでいた。

そして自分同様、他の師団長がハンター達から逃げてくるまでの間に、他の者達より王や護衛軍の信用を得て、一步先の立場を獲得したかったのだ。

しかし、ビトルファンがいることでいきなり躓いてしまった。

「しかし、随分とやられたな！ 早く治療して来るといい！ カブファツファツファツファツ!!」

「へっ、そりやどうも。……そーいあ、お前もシャウアップ殿から能力を授かったのか？」

「おお！ そうだぞ！ オイラにピッタリの能力を創って頂いた!!」

「へえ……どんな感じで創って貰えるんだ？」

「繭に包んでもらって半分眠った状態で、己の思考や願いを反映させて能力を組み上げていく感じだな!! 催眠誘導という方が正しいかもしれない!! なので、実際にシャウアップ殿が何かをするわけではない!!」

「……なるほどな」

ビトルファンの言葉に、ハギヤはアモンガキッドの説明と齟齬がないことに頷く。

「カブファツファツファツファツ!! シャウアップ殿を疑って、自分1人で能力を考えたところで良い能力が出来るとは限らんぞ?! ならば、たとえ護衛軍の方々に能力がバレることくらい大したことではなからうよ！ 別に能力はそれだけしか創れんわけではないのだから

な!!」

「……それもそうだな。本当にお前は頭がいいのか悪いのか分からねえ奴だな」

「カブファアツファアツファアツ!! この程度は頭の良さなど関係なからうよ! ではな、ハギヤ!!」

ビトルファンは豪快に笑って、ハギヤ達の横を通り過ぎていく。

それを見送ったハギヤは自信を取り戻したかのように不敵に笑う。

「ふん! 上等じゃねえか。あいつに出来て俺様に出来ないわけがねえ。どうせ醜態を晒したんだ。今はそこに上塗りされたくらい、どうってことねえさ」

「そうですよ! ここからのし上がればいいんですよ!」

「だが、俺にだってプライドはある。繭に包まれるなら、それを機に名前を変えて再出発だ」

「へ? 名前変えるんですか?」

「ああ。ハギヤは負け犬の名前だからな。これからは……レオル。俺はレオルだ」

これまでの己と決別する決意として、改名するレオル。

その後、治療を終えたレオルはシャウアップから能力を授かるために繭になって眠る。

繭から孵った未来、王者となった己を夢見て。

## #122 セイギ×ハ×ソンザイシナイ

ラミナ達が本格的に選別の妨害を始めた頃。

ゴンとキルアも東ゴルトーに潜入していた。

「ラミナからメールが来てるな」

「なんて？」

「……ラミナの予想が当たった。すでに選別は始まってららしい」

キルアの言葉にゴンは顔を顰める。

「多分、この辺りの村や町もすでに選別は終わってると考えるべきだな」

「どうする？」

「まずは近くの村も確認しようぜ。どのくらいのペースで選別が進んでいるのか分からねえと判断出来ない」

「分かった」

キルアはラミナからの作戦はまだ伝えなかった。

1つは言った通り、選別の状況をこの目で見ないと判断が付かないため。

もう1つは、この段階で動くことにキルアはまだ不安だったからだ。

正確には『ゴンが動く』ことが、だが。

キルア自身はゾルディック家の訓練や仕事で長期間の活動には慣れている。

能力の使いどころさえ間違えなければ、9日後の作戦当日に体調を整えることは十分に可能だ。

だが、ゴンは流石に厳しいと言わざるを得ない。

手の抜きどころを知らないだろうし、一度作戦を始めれば緊張で身体を休めるなんて難しいだろう。

ただでさえ実力的に最も厳しいゴンが消耗することは本番に響く可能性が高い。

ネフェルピトーと戦うならば、万全のコンディションで臨ませたいキルアだった。

だが、そんなキルアの願いも届かず、キルア達が訪れた村もすでに選別を終えた後だった。

しかも埋められていた死体が、野犬に掘り返されて肉を喰われているという最悪の場面を目の当たりにした。

「決まりだな。国境近くの村や町はほぼ選別が終わってる。簡単に計算すれば50万人……。5千人が生き残って、49万5千人が死んだことになる」

「っ……………」

ゴンは歯を食いしばり、両手を握り締める。

キルアはそれにやはり不安を感じるも、ラミナからの提案を話すことにした。

「実はラミナからのメールには続きがあったんだ」

「え？　続き？」

「ああ。選別を妨害して、騒ぎを起こす。それで選別を中断させて、国民を逃がす」

「!!」

「けど、この作戦は綱渡りだ。この段階で妨害すれば、確実に王達に俺達の存在がバレるし、もちろんそれに対して対策を練ってくるはずだ。下手したら潜伏してる爺さん達やモラウ達の行動を邪魔する可能性もある」

「……………」

キルアの言葉にゴンは眉を顰めて考え込む。

キルア達はとりあえず移動を再開する。

「まず確実に王達の元に逃げ込んだ師団長達が出てくる。最悪護衛軍の1人が出しゃばってくる可能性もある。けど、ネフェルピトーはまらず出てこないと思う。ネフェルピトーの能力と広範囲の【円】は選別遂行と王の防衛に絶対不可欠だからな」

「……………」

ゴンは複雑な表情を浮かべるも、すぐに覚悟を決めた表情に変えて、

「やろう……………」　選別がすでに始まっているなら、黙って様子を見る

なんて無理だよ」

キルアはその言葉を予想していたので、驚くことも怒ることもなかった。

「……分かった。やろう」

それにゴンも頷こうとしたが、

「ただし、俺1人でだ。お前は潜め」

「え!? なんでき!? 2人の方が——!」

「大事な目的を忘れんな!」

キルアの言葉にゴンは言葉を詰まらせる。

キルアは真剣な表情でゴンを見据える。

「言っただろ? 動き出せば消耗は避けられない。ネフェルピトーを倒すんだろ? 気持ちはわかるが、他のことに目を向けてる余裕はない」

「……」

「それにお前にはワリーが、陽動だけなら俺1人の方が動きやすい」

「……」

「安心しろよ。ラミナだって動くんだ。あいつと連絡を取りながら上手く掻き回すさ」

ゴンはラミナの名前を聞いて、決して無理をするわけではないと思いい、渋々だが頷いた。

「……分かったよ。でも、何かあったらすぐに連絡してよね」

「それはこっちのセリフだ、バーカ。……お前こそ、本当に分かってんのかよ?」

「……キルア?」

突如鋭い顔を向けてきたキルアに、ゴンは戸惑う。

「約束しろよ! 絶対に動くな!! たとえ目の前で何人人間が殺されてもだ!! 約束しろ!!」

切羽詰まった表情で迫るキルア。

それにゴンはどう答えればいいのか、分からなかった。

ただ頷けばいいのも何か違う気がしたのだ。

しかし、答えが出る前にキルアが冷静に戻った。



「……悪い。俺も少しピリピリしちまつてる。……俺の方からメールを入れる。電話は出来る限り控えろよ。師団長以下の蟻は携帯の電波を感じ取れるらしいからな」

「……うん」

2人はその後やや微妙な空気の中、互いの動きを確認しながら移動する。

キルアはラミナに自分だけ参加することを伝え、途中でゴンと別れることにした。

しかし、その直前に背後から何か視線を感じ取った。

「！」

キルアは鋭く後ろを振り返る。

だが、そこには誰もいなかった。

「どうしたの？」

「……いや、何でも。（勘違いか？　けど、アモンガキッドって奴の念獣か、姿を消せるって話の師団長の可能性もある……。油断は出来そうにないな）」

キルアはとりあえず、泳がすことに決めた。

「気を付けろよ、ゴン。どこに誰が潜んでもおかしくないんだからな」

「うん。分かってる。キルアも、気を付けてね」

「ああ」

そして、2人は互いに互いへの不安を抱えながらも、互いに互いを信じて二手に分かれるのだった。

その頃、シユートは眉間に皺を寄せて考え込んでいた。

もちろん理由はラミナからのメールだ。

（……確かに一考の価値はあるし、やるだけの価値もある……。だが、師団長とて油断できない存在だ。下手をすれば、ラミナも含めてモラウさん達以外の全員がこれでリタイヤする可能性もある）

シユートの弱点ともされる臆病さが、潜伏を強いる現状では大きな武器となっていた。

自分達の命はもちろん、東ゴルトーや世界中の命の危機でもあるのだ。それくらいは当然だろう。

だが、目の前の男はそうではない。

「おい、いい加減話しやがれ。誰からのメールで、どんな内容だったんだよコラア」

ナツクルはただ潜んでいる現状に非常に苛立っていた。

当然だろう。こうしている間にも数十万という人間が死んでいるのだから。しかも、自分達のすぐ近くで。

世界のために、この国の人間達には犠牲になってもらう。

その考えはナツクルには絶対的に納得できるものではなかった。

ナツクルはただでさえ、未だにキメラアント達の討伐に反対しているのだから。

故にシユートはラミナからの提案を話せば、ナツクルはすぐさま飛んで行くことは想像に難くなかった。

だが、話さないのも問題だろう。どうせいつかはバレるのだから。

「……ラミナからだ」

シユートはナツクルの動きに注意しながら、ラミナからの提案について話した。

全てを聞き終えたナツクルは、案の定を勢いよく立ち上がった。

「迷う理由なんざねえだろコラア!! 俺らも参加する!! そう伝えろお!!」

「落ち着け、ナツクル」

「落ち着いてんだろおが!! オウ!? それともテメエはこのまま大人しくしとけてのか!?!」

「だが俺達まで動けば、最悪作戦当日に動けるのが会長とモラウさん達だけになってしまう。そうなれば本末転倒ではないのか?」

「ぐっ……!」

「別に動くなというわけじゃない。今すぐラミナ達と同調する必要はないと言ってるんだ、俺は」

「……あ?」

ナツクルは勢いに冷や水を浴びせられたおかげか、シユートの言葉

を冷静に受け止める余裕が出来ていた。

「ラミナ達、そしてキルア達が動いた場合、騒動は国境側に集中する。つまり、兵隊蟻達はこの国を横断することになるんだ。今、俺達がいるこの中央部をな」

「！」

シュート達がいるのは東ゴルトー中央部の森林に生える大樹の上だ。

宮殿より来るであろう敵に最も早く遭遇するのはシュート達である可能性が高い。

「俺達の能力は奇襲に向いてる。だから、共倒れの可能性を少しでも遅らせるために、ここは耐える時だ」

「……!!」

ナツクルはシュートの力強い言葉に、歯を食いしばる。

本当は今すぐにでも駆け出したかった。

だが、それはただの我儘だとも気付いている。

ラミナ達を信じ、作戦の事を考えれば、ここはシュートの言う通り耐えるべきだ。

ラミナとキルア達が動けなくなった時に、その尻拭いをするために。

それが仲間である自分達の役目だと、ナツクルは理解していた。

「…………ちっ、わあったよ。待てばいいんだろ待てばよ!!」

ナツクルは苦渋に顔を歪めたまま、ドカツ！と自分を押し付けるように座り込む。

なんとか説得に成功したことにシュートはホツとし、ラミナ、キルア、ノヴに自分達の決定を連絡する。

ちなみにノヴは、モラウにはこの事を一言も話さずに作戦を粛々と進めていたのだった。

それぞれが方針を決めている中。

「ラミナ達はまだ選抜が始まっていない町を見つけて、森の中に潜んでいた。」

町中には軍人達がおおり、その真上にはあの人形遣いの念獣が浮かんでいた。

それはまさしく軍人全員がネフェルピトーの人形と化していることを示していた。

「行かないのか?」

「今行つて軍隊を制圧したら、うちはただの気が狂った悪モンやないか。軍人共が選別を始めんとここに住んどる奴らを味方に出来ん」

「……そうか」

それはつまり、誰かが死ぬかもしれないのを待つということに他ならない。

だが、その前に倒してはラミナの言う通り、ただの犯罪者である。すると、軍人達が町民達に号令を出し始めた。

「これより国民大会に向けて移動する際の組み分けを行う!!」

軍人の言葉に町民達は戸惑いの表情を浮かべて顔を見合わせる。

「グズグズするな!! さっさと広場へと集まれ!!」

銃を持つ軍人の高圧的な指示に住民達は慌てて動き出す。

しかし、軍人達は理不尽に住民達を責め立てる。

「遅い! 何をしている!!」

「さっさとせんかあ!!」

軍人の1人が近くにいた男に殴りかかる。

男は頬を殴られて歯を数本折れ飛ばしながら吹き飛んで地面を転がった。

「ひいつ!」

「きやああああ!!」

まさかの光景に町は阿鼻叫喚に包まれる。

それを見ていたラミナは立ち上がる。

「始まりよつたな」

ラミナ達の目には確かに軍人の拳にオーラが集まっていたのを見逃さなかった。

「お前らはここにおりい。流石に目立つてな」

「ああ」

ラミナはテイルガ達にそう言つて、ハラデイを具現化して【朧霞】で姿を消す。

素早く町の中に潜入したラミナは左手にソードブレイカーを具現化し、猛スピードで軍人達に迫る。

そして、軍人達の念獣達を次々と斬つていく。

ソードブレイカーを振るう度にラミナの姿が露になるが、すぐさま【朧霞】を再発動して姿を消す。

夜で暗く、更に混乱している一般人の町民達に、ラミナの姿が捉えられるわけがなく、突然崩れ落ちる軍人達に更に混乱を深めていく。

20分と掛からずに全ての軍人を行動不能にしたラミナは、少し離れた場所で武器を消して能力を解除し、今駆けつけたように演技をして声を張る。

「た、大変だ!! わ、私が住んでた村が突然兵士達に襲われた!! こゝ、ここまで来る途中の村も同じく惨殺されていた!!」

「そ、そんな……!?!」

「兵士達は明らかにまともな様子じゃなかった! 何かに操られたみたいにい! このままじゃ他の町や村の人達も殺されてしまう!! 急いで近隣の村や町に知らせしてくれ!! 私も他の町に行く!!」

そう言つてラミナはすぐさま駆け出して森へと飛び込む。

それを見送つた町民達は、ラミナの走り去り方が鬼気迫っていたかのように見えて、ラミナの話の信憑性を上げた。

町は完全に大混乱に陥り、他の村や町に向かう者、家族を連れて国境へと目指す者、家に引きこもる者と様々に反応が分かれた。

その様子を木陰で確認したラミナ達は、猛スピードで駆け出して町民達がすぐには来られない町を目指すことにした。

「これでネフェルピトールはうちの存在に気づいたやろうな」

「どう動くと思う?」

「まあ、もう少し様子見やろ。他の町でも邪魔者が現れへんか確認するまではなつとお」

ラミナはティルガの質問に答えながら、携帯が震えたことに気づいて取り出す。

「キルア達か？」

「ああ。キルアは参加。ただし、ゴンは別行動。シュートとナツクルはうちらを狙うであろう兵隊蟻を奇襲するために引き続き待機。ノヴとモラウは当初の予定通りに動くみたいやな」

「そうか……」

「それともう一個」

「ん？」

「うちの仲間が師団長の一匹を仕留めたらしいで」

「!!」

ティルガとブラールが目を見開く。

メールはパクノダからだった。

「師団長はマンデイスっちゅう名前や。これで行方不明の師団長は二匹か……」

「ビトルファンとメレオロンだな。もしかしたら、2人ともこの東ゴルトーにいるやもしれん」

「そう考えとく方がもしもの時に驚かんでええか。正直、今はキルアとゴンの動向の方が重要やな」

「そう言えば、何故キルアとゴンは別行動を？」

「まあ、単純に考えればゴンには向かん作戦やでな。出来る限り相手に捕捉されんように動き回らなあかんから、キルア1人の方が楽っちゅうんは確かやな。それにキルアが囷になることでゴンから目を逸らすことも出来る」

「ゴンの力を温存させるためか……」

「そう考えるべきやろうな。とりあえず、キルアとは連絡を取り合っていないかとなあ。下手に近寄り合おうと総攻撃に遭いかねん」

その後、ラミナ達は数十キロ離れた村に到着し、再び軍人達を無力化していく。

ここでもラミナは演技をして、村人達を扇動して騒動を大きくしてから村を素早く離脱する。

村からそれなりに離れたところで、携帯を取り出してキルアにメールを送る。

数分後に返信が来て、キルアも扇動を始めたことの報告と場所、そして次へ向かう予定の場所が記されていた。

「ふむ……うちらがおる方とは逆方向やな。よう分かつとるわ」

「これで3か所……。ネフェルピトーには我々の存在は嫌でも伝わっただろう」

「そやな。うちの存在は確実に気づいたはずや。さて……どう出てくるか……」

ラミナは右手で顎を撫でて思考に耽る。

ティルガは腕を組んで眉を顰める。

「まず間違いないく護衛軍は出てこないだろうな」

「まあな。こんな場所まで出向くことはまずないやろ。つちゆうことは師団長共が出てくるんやろうけど……」

「それだけではないと?」

「それやとキメラアントの姿を国民に見られてまう。流石にキメラアントの姿を見て、全員が従うわけがないでな」

「ああ」

「やから、多分ネフェルピトー達は戒厳令を出すはずや。国民を家に引きこもらせて、外における連中は犯罪者として容赦なく処分する。んで、家を調べるといいう名目で押し入り、選別を手早く行う。悲鳴が聞こえても、反逆者の仲間を匿つとったとでも言えばある程度は納得させられるし、指組のシステムを利用して町丸ごとを不穏分子として処理するつちゆうところか……」

「その間に師団長が率いる兵隊蟻が、我々を狙うというわけか」

「やな」

ラミナは頷いて、ティルガは更に眉間の皺を深める。

どう考えても苦難しか待ち構えていない。

それでも選別の被害者を減らすためには仕方がないかとティルガが考えていた、その時。

「まあ、さつきうちらが扇動した連中も囷に出来るし、すぐにうちらが捕捉されることはないやろ。それか、うちが反逆者のフリでもして、町を巻き込むか……。いや、人形の視界を共有しとるわけでもなさそうやし、あんま意味ないか」

ラミナの言葉に耳を疑ったテイルガ。

「ん？ どした？」

「……いや」

「……お前、まさかうちが善意で選別を止めたとも思ってたんか？」

「……」

もちろんテイルガも100%善意とは思っていない。

だが、それでもやはり少しでも死者を減らそうと思ってくれていると、どこかで考えていた。

ラミナは呆れた眼でテイルガを見る。

「アホか……。うちらは正義の味方でも何でもないんやぞ？」

「……それは分かっている。しかし——」

「うちにとつて、この国の人間はすでに死人と同じや。ほつといても選別で大多数が死ぬ。それやったら、ここで王達を確実に殺すための生贄になつてもらおやないか。んで、運が良ければ生き残る。それだけのこつちや」

「……っ！」

「言うとかくけどな。うちはもちろん、ネテロのジジイやモラウ達も、この作戦での最小被害人数は500万人と考えとるで。すでに東ゴルトーの国民は犠牲者として計算しとる。まあ、モラウは納得しとらんやろうけどな」

ネテロとて選別がすでに始まっていることなど予想していたはずだ。

その上で作戦開始時間を大会前夜0時と定めた。

つまり、ネテロは王と護衛軍を確実に殺すために、国民を見捨てたに等しい。

それをラミナは理解していた。



「確実に王達を殺すためには、この国を潰す必要がある。うちもその判断に賛成や。やから、少しでもうちの負担を減らすために、国民には死んでもらう」

「そ、それでは本末転倒ではないのか……!?!」

「何がやねん。これ以上世界で犠牲者を出さんために、この国を生贄にただけのことやろ。間違えんなや、ティルガ。うちらはこの国を救いに来たんやない。王と護衛軍を殺すために来たんや」

「……」

「それともう一つ。ええか、ティルガ。うちらはこの国の国民より絶対的に命が重いで。間違っても、国民を庇って死ぬことはありえへん」

「……何故だ?」

「うちらが討伐隊やからや。今、この国にうちら以外に戦える奴がおらん。つまり、うちらが死ねば国民は死ぬ。やから、うちらは絶対に先に死んだらあかん」

医療者や救急隊などと同じ理屈である。

助けなければいけない存在のために、命懸けで動くことは間違ってもいないし、尊い事である。

だが、それで助ける人がまだいるのに、助けなければいけない人より先に倒れては意味がないのだ。

それこそ、本末転倒だ。

犠牲者を減らすためにも、命懸けで己の命をまず守る。

その矛盾を抱えなければいけないのだ。

その結果、助けられたかもしれない、助けられたであろう命を見捨てなければならぬ時は必ず来る。

「やから言うたやろ。見捨てるも地獄、救うも地獄やてな」

目的を遂行するためには、助けた命を利用しなければならぬ時もある。

それが今だと、ラミナは考えている。

「うちらは戦争しとるんや。その時点で善悪なんぞ意味はない」

たとえば世界を救うためであっても、それは『人間にとっての世界』に

過ぎない。

一方の立場に偏ってる時点で、正義なんてものには程遠いとラミナは思っている。

「戦いに正義はない。もし、あるとしたら……『勝った者が正義』、や」  
どんなに非情で卑怯な手を使おうが、勝利という結果がそれを覆い隠す。

それほどに『勝利』という事実は強いのだ。

「もうこの国では人間とか、キメラアントとか関係ないねん。この国におけるのは『生き残る者』か『死ぬ者』のどっちか。それだけや」  
「……」

「もういつペン覚悟決め直しい。こちらは戦いに来たんであって、救いに来たわけやない。うちらが勝ったら、周りが勝手に救われる。その程度のことや」

ハンターは一民間組織の一員であって、公僕ではない。

正義だの大義名分などは本来程遠い存在だ。

暗殺者など論外である。

故に世界を救うなどと言う戦いに参加するなどありえない。

この戦いは、ただ凶悪な生物を殲滅するだけのこと。

正義という言葉など、絶対に似合わない。

(ま……暗殺者の盗賊が参加しとる時点で、今更やけどな)

ラミナはそう内心で自虐しながら、思い詰めた顔をしているテイルガを見つめていた。

(さて……後どれくらいで連中が動くか)

恐らく半日も猶予はない。

そう予感するラミナの予想は、またも的中するのだった。

## #123 センソウ×ノ×ハジマリ

ラミナとキルアは東ゴルトー西側の街や集落を駆け回り、操られている国軍を次々と無効化していった。

出来る限り、住民達を扇動して自分の手が回らない町や集落に向かわせるか、西ゴルトーへと向かわせた。

ラミナとキルアは市名や位置だけをメールで送り合い、お互いの位置や次の目的地を共有し、効率よく作戦を進めていった。

その動きに、もちろんネフェルピトーは気付いていた。

(今度は南東と北東……。人形の動きが封じられて、南は能力自体が解除された……。早い。神出鬼没……。両方とも動きを読まれないようにしてるニヤ)

ネフェルピトーは宮殿にある塔の天辺で【円】をしながら念人形の動きを感知していた。

(刺客……。かニヤ？ 最低2人……。囧……。にしても素早く人形を無効化してる……)

「う〜……。！ うつとおしいニヤー!! 始末したいニヤー!!」

ネフェルピトーは選別が的確に妨害されていることにイライラが溜まっていき、すぐに爆発した。

王の不快を買わない程度の声で叫び、すぐさま頼りになる仲間のもとへと相談に向かった。

「誘導作戦……。それだけのこと。行ってはいけません」

シャウアップはバイオリンを弾きながら、ネフェルピトーの問いに答える。

「やっぱり？ でも動きが誘う感じじゃないんだよニヤア。ボクに捕まらないように慎重に行動してるようにしか思えないのさ」

「つまり、おいちゃん達の力がある程度知ってる連中の動きってことかねえ。残念なこと」

「となると……。NGLにいたハンター、もしくはその仲間ということになりますね」

「まあ、逃げ込んできた連中のことも考えれば、残念なことにハンター

達はおいちゃん達の危険性を正確に把握してるのは不思議じゃないねえ」

アモンガキツドも胡坐を組んで一つ目念獣の上に座り、腕を組んで考えを述べていく。

モントウトウユピーはこういう話にはついていけないので基本黙っている。もちろん、それに他の3人は一切文句は言わない。モントウトウユピーの役目は考えることではないと理解しているからだ。

「残念なことにハンター達だとしたら、連中の狙いは間違いなく王様だねえ。となると、やっぱりおいちゃん達の誰かが出向くのは止めた方がいいと思うねえ」

「ええ〜」

「この場合、出向くならおいちゃんかユピつちのどちらかでしょ？」

で、もし向かった先に何十人と待ち構えられてたら、流星に死んじやうかもねえ。残念ながら」

「そういうことです。敵が待ち構えているであろう場所に、わざわざこちらから出向く必要はありません」

「ンニヤ〜」

ネフェルピトーは不服そうに顔を顰める。

「答えはシンプル。私達の使命は王の護衛です。それ以外のこととは他の者に任せればいいだけのこと」

そう言い終わると同時にバイオリンを弾き終え、更に扉が開いて複数の人影が入ってきた。

現れたのはレオル、フラツタ、ヒリンことヒナの3人だった。

「出番ですね」

レオルは自信に満ち溢れた顔で口を開いた。

「ハンターに追われ、深手を負った我々を快く受け入れ、能力指導まで御教授してくださった御恩……。このレオル！ 今こそ御返しする機会とぎ!!」

目を血走らせて気合に声を張り上げるレオル。

だが、その本心は遂に手柄を上げて成り上がる機会が来たことに喜んでおり、本気で恩返しする気など更々ない。

もちろん、護衛軍一同はそんなことはお見通しであり、レオルもそれを理解している。

しかし、今はお互いに利用する価値があるために何もしないだけだ。

「ボクの人形を止めて回ってる奴らがいるんだ。殺っちゃってくれる？」

「二組いるらしいからねえ。ビトルファン君の部下も連れて行くといよ。彼には話を通してあるからね」

「ありがとうございます。お任せください」

「ケータイ持ってって。ボクらはテレパシー使えないから。連中の居場所は随時それで連絡するよ」

「はっ！」

ネフェルピトーは携帯電話を投げ渡して、レオルはそれを受け取って頭を下げて部屋を後にする。

レオル達が去って行った扉を見て、モントウトウユピーは首を傾げる。

「あんな連中、信用していいのか？」

「んくん、全然信じてないニヤ」

ネフェルピトーは肩を竦める。

「むしろ、あっちがボク達の信頼を得たいわけだから。言われた仕事は必死でやろうとするニヤ」

「あわよくば寝首を搔こうと虎視眈々……。ふっ、それならば、それ相応に扱ってやればいいだけのこと」

「残念な頭してるよねえ。あれで王になろうとか思ってるんだから、笑っちゃうよ。おいちゃん達に気に入られれば、王にも気に入られるとか思ってるんだからさ」

「だからこそ、扱いやすい駒となるのです。さて……。ピトー、我々も少し動きましよう」

「ニヤ？」

「あの総帥とやらの人形を使つて、戒厳令を出しましょう。流石にこれ以上選別の母数を減らされれば、王の偉業にケチがついてしまいま

す」

「それに総帥が健在と教えてやれば、国民もそう簡単にハンター達の言葉なんて信用しないだろうしねえ。まあ、残念ながら人形を減らされるのは止まらないだろうけどねえ」

「なるほど。了解」

ネフェルピトー達もただ黙ってレオル達に任せ、ラミナ達の好きなようにさせるつもりはない。

これはすでに戦争だ。

ならば、たとえ小さなことでも嫌がらせをするべきだと考える。

偉大なる王の完璧なる勝利のために。

ラミナ、ティルガ、ブラールは森の中で一休みしていた。

「ふう……これで国境近くの街のほとんどは選別を止められたか……」

「……そろそろ護衛軍も何かしらの手を打ってくる頃、ということかな？」

「やろな。流石に国民が騒ぎ始めたんも耳に入っとる頃やろ。亡命を希望しとるつちゆう奴らも、まだ王達に従ったフリしとるはずやしな」

ラミナは携帯を取り出して操作しながら、ティルガの問いに答える。

「……キルアも移動中か。(そろそろ一度キルアを休ませるべきやな……)」

キルアは現在単独行動中だ。

流石に戦闘から警戒、扇動全てを行うのはかなりの負担になってい  
るはずだ。

しかも、キルアは操られた軍人達を無効化する手段は殺すか捕縛するかのどちらかのみ。

この場合、殺すと扇動するのが難しくなるので、まず捕縛を選んで  
いるはずだとラミナは考える。

(キルアなら問題はないやろうけど、国民が殺されんように注意しな

がらやと流石に少し手間取るやろな。そろそろ蟻共も出てくる可能性も考えとるやろうから、気を休めるタイミングも難しくなつとるはず……)」

地の利は敵にあり、流石にキメラアントまで出てくれば厳しいどころではなくなるだろう。

「夜明けを目途にキルアと一度合流すんで」

「わかった」

「……」

キルアにも素早くメールを送り、移動を再開するラミナ達。すると、

ビー！　ビー！　ビー！　ビー！　ビー！

甲高い警報音が東ゴルトー中に響き渡る。

ラミナ達は足を止めて、周囲を警戒する。

『これより、偉大なるデীগオ総帥様より緊急の発表があります!!』

全国民が総帥様の玉言を拝聴できる様、各地区の伝令スピーカーの音量を最大まで上げてください!!　繰り返します!!』

森の中でもはつきりと聞こえる程の音量で流れる放送。

「来よつたでえ」

「……護衛軍達か……」

ティルガは目を細めて、放送に全力で耳を傾ける。

『こんばんは！　愛する同胞の諸君、デীগオである!!　たった今から東ゴルトー全域に戒厳令を発令する!!　不穏分子による叛逆行為が発覚し、これを取り締まるものである!!　同胞諸君は全員外出を控え、戸締まりを厳重に行うように!!　許可なく外出している者は叛逆分子と見做し、処分する!!　諸君はくれぐれも敵畜生の流言蜚語に踊らされることなく!!　私の指導に従うが良し!!』

『なお、誇り高き我がデীগオ精鋭軍が諸君らの家に行き、逆賊が隠れていないか調査する!!　それ以外は決して家の扉を開けないように!!』

「これで外におるうちらは叛逆者つちゆうわけやな。しかも、堂々と軍人共が家に乗り込んで選別を出来るようになったわけや」

「……隣の家から悲鳴がしても、それは逆賊が隠れていたから、と言う訳か……」

「そういうことやな。……やっぱ選別がバレても問題ないように対策を考えとったか……」

ラミナは眉を顰めながら携帯を取り出して、キルアに連絡を取る。

これでキメラアント達は堂々と軍を動かせて、暴れさせることが出来る。

更に人目が無くなるのでキメラアント達も堂々と国内を移動することも可能となった。

「作戦変更や。扇動は諦める。今まで逃がした連中も多くは家に戻ってくるやろ。多分、うちやキルアのこととも叛逆者とバレたやろなあ」  
思いつきり目の前で軍人達を倒し、殺したのだから。

どう考えても、東ゴルトー国民からすればラミナ達が犯罪者である。

しかも、すでに人形とは言えディーゴ本人が放送しているのだ。

一般人に偽物かどうかなど判断できるわけもなく、これで軍人が現れればそれはもう本物と変わらない。

殺される可能性があるのであれば、偽物の言う通り家に閉じこもるのが吉となるのは当然の心理である。

「しかも、これで外国の人間も基本的に手出し出来なくなった。動けるんはハンターと犯罪者くらいなもんや」

「確かにな……」

「まあ、逆に言えば、お前らも動きやすくなったでな。どうせ作戦当日には思いつきり国民連中の前で暴れるんや。ここで見られても大差ないやろ。うし……キルアと合流すんで。そこで今後の方針……兵隊蟻共への対応を考える」

「ああ」

「……」

ティルガとブラールは頷いて、再び3人は移動を再開する。



一方、同じ頃。

首都ペイジンに滞在していたモラウとノヴもその放送を聞いていた。

「……おい、ノヴ。お前、この騒動について何か知ってんじやねえか？」

「ええ。知ってますよ」

モラウの問いにあっけらかんと答えるノヴ。

モラウは額に青筋を浮かべる。

「お前なあ……い！」

「不穏分子はラミナとキルアのことでしょう。少し前にラミナから選別の妨害について提言があり、それにキルアが参加すると返事してましたから」

「何で言わねえんだよ!?!」

「言えば貴方も参加したでしょう。彼女が派手に動く以上、我々は少しでも温存しておくべきだと判断しただけですよ」

「くっ……い！」

正論ではあるが、納得など出来るわけがないモラウ。

ノヴは眼鏡を直しながら、

「ちなみに、ナツクルとシュートも我慢したようですよ。気になるのは1人になったゴンのことですが……キルアの事ですから、連絡は取っているでしょう」

「ラミナの野郎……い！」

「しかし、これで一般人が戦いに巻き込まれる危険性は格段に減りました。操られた軍人達を無効化するだけならば、まだ余裕があるでしょう。すでに国境方面の軍隊はほぼ無効化済みのはず……。選別を完遂するならば、連中は更に軍隊を分散せざるを得ない……」

「それが何だっつてんだ？」

「つまり、ペイジン周辺の戦力も減る、ということですよ」

「!!」

ノヴの言葉にモラウは瞬時にその意味を理解して顔を引き締める。

「ここは宮殿の目と鼻の先……選別は間違いなく大会当日となるはず。王達にとつて、ここに軍隊を余分に在駐させておく必要性はありません」

「だが逆に言やあ、ここで足止めすれば国境側の選別は確実に妨害できるとわけだ」

「更に宮殿のすぐ傍に敵が現れたとなれば……」

「護衛軍は宮殿の防衛と敵の排除に集中せざるを得ないってわけだ！」

モラウはニヤツと不敵に笑う。

それにノヴも小さく笑みを浮かべるが、すぐに顔を引き締める。

「しかし、我々もここで動くとなると、まず間違いなく作戦当日に戦う力は残らないでしょう。師団長クラスはもちろんのこと、下手をすれば護衛軍の誰かが出てくる可能性もあります」

「ああ。だが、やる価値は十分すぎるくらいにある！ 数万、数千でも助かるなら、俺の命を懸けるに不足はねえ!!」

モラウはドン！と右拳で胸を叩いて宣う。

ノヴは笑みを浮かべて頷き、

「ならば、ラミナにも連絡を取り、作戦を練りましょう。恐らく彼女達の元にはすでに兵隊蟻が差し向けられているはずです。その動きに合わせて、こちらでも動きましょう」

「おう！」

モラウ達も本格的に参戦することを決めたのであった。

数時間後。

ラミナ達はキルアと合流することに成功していた。

「無事か？」

「問題ねえよ。蟻にも出会わなかったしな」

「ゴンの方は？」

「それがゴンの方には蟻が出たらしい」

「何やと？」

「それも3匹。少し手こずったけど、勝つたらしいから多分兵隊長ク

ラスだと思う」

キルアも報告しながら眉間に皺を寄せ、ラミナは顎に手を当てて思考に耽る。

偶々遭遇したにしては数が多すぎる。

なのに動き回っていたラミナやキルアが1匹も遭遇しなかったのもおかしくなる。

ラミナもキルアも気配すら感じ取れなかった。

ブラールの能力でも影も形も捉えていない。

なのに、ゴンの前には3匹も現れた。

「……なんか意図的なんは間違いないと思うんやけどなあ」

「問題は何でゴンだけなのかってことだな」

「せやな。普通ならキルアの方を狙うはず。けど、こっちにや近づく気配もない」

「ゴンだけを狙う理由が分からないな……。敵のイメージが湧かない」

「ん〜……なあんか王達とは無関係な気がするなあ」

どうにも王や護衛軍達の意志とは、かけ離れた意図を感じるラミナ。

それにキルアも同意するように頷く。

「一度ゴンの所に戻るか？ 正直、軍の妨害は戒厳令が出た以上うちらだけでもええやろし」

「……いや、いい。本当にヤバいならゴンの方から連絡が来るだろうし、ここから先は俺達の方に兵隊蟻共が襲ってくるはずだしな」

「お前がええんやつたらええけどな。ほな、作戦を詰めよか。モラウ達からも連絡来とるしな」

「モラウ達は何て？」

「あいつらも動く気らしいで。ペイジンを包囲して、ネフェルピトーの注意を引くつもりらしいわ」

「……」

キルアは眉間に皺を寄せて考え込む。

「テイルガヤコルトの話から考えれば、護衛軍は選別よりも王の守護

に重きを置いとるはずや。やから、ペイジンで動けば間違いない。フエルピトーは人形を集結させるやろな。恐らく選別に人形を動かす余裕はない」

「けど、ほぼ確実に師団長達もペイジンに来るぜ？」

「やろな。やから、こつちも暴れるしかないつちゅうこつちや。少しでもペイジンに向かう人形の数を減らし、兵隊蟻共もこつちに引き寄せろ」

「そう上手くいくのか？」

「モラウ達が動くタイミングを少し遅らせる予定や。まずは大多数をこつちに呼ぶ。つちゅうても、恐らく師団長は多くても2匹くらいやろうから、うちらは兵隊長以下の蟻を仕留める。その後、うちは一気にペイジンに行くつもりや」

「……流石にその時は、俺はゴンと合流すべきだな」

「せやな。まあ、明日一日は兵隊蟻と追いかけてこや。まずはそれに集中しよか」

「ああ」

ラミナ達は森で収穫した果物を食べながら、作戦を練ることにした。

「恐らく敵……つちゅうか指揮官である師団長は、殺すことを第一としながらもうちのらの能力を探ろうとするはずや。兵隊長クラスでは相手にならん可能性をNGLやここに逃げ込むまでに十分思い知つたやろうからな」

「つまり、出来る限り能力を使わずに倒せつてことか？」

「お前とブラールは特にな。うちは武器を制限すればええし、ティルガも基本的には【虎咬拳】までで戦うようにすればええ」

「承知した」

「基本的にはキルアを囿にして、うちが姿を消してその横に着く。ブラールはうちの後ろ、約1km距離を開けて付いて来い。能力でうちらと上空、周囲を見ながらな。ティルガはその護衛」

「……」

「上空に敵を見つけたら、躊躇なく殺すんやぞ」

ブラールは表情は変えないが、しっかりと頷く。

ラミナはそれに頷き返し、

「問題は師団長やな。どいつが来るかで相手の動きも変わる可能性が高い」

「けど、まず師団長が誰がいるのか分からないだろ？」

「んなもん、残り全員おると考えるに決まっとるやろ。テイルガ、残った師団長がそれぞれ出てくるとしたら、どう動くと予想する？」

「残っているのはハギヤ、ビトルファン、ブロヴーダ、ウエルフィン、チートウ、メレオロンの6人。この中で部下を統制しながら動くであろう師団長はハギヤとウエルフィンだろう」

「ハギヤって「ネバスカ」に出た獅子男だよな？」

「ああ。奴は欲望に忠実だが、頭が悪いわけではない。状況判断と対応は早いはずだ」

「ふむ……」

「だが大物振ることがあり、基本的に絶対に仕留める自信がない限り、前に出てこない。そして、まず間違いなく他の師団長は信用しない。能力もギリギリまで使わない可能性が高い」

「なるほど……」

「そして、ウエルフインは絶対的な懐疑主義者だ。ハギヤ以上に他人を信用できず、常に最悪を考えて動く。だが、それは慎重というより臆病だからだろうな。恐らくラミナ達の実力を把握すれば、逃げるか降伏する可能性が高い」

「また卑屈なやつちやなあ……」

「もし2人のどちらかならば、まずハギヤが来るはずだ」

「今話を聞く限りだと、まず2人が組む可能性は低そうだな……」

「ああ。まず間違いなく、ウエルフインはハギヤが追い込まれない限り手を貸そうとはしないはずだ。そして、ハギヤもギリギリまで他の師団長の手は借りないはずだ。少なくとも、自分の手柄に出来る状況を作れない限りはな。ただし、これは護衛軍が口出しをしなければ、だが」

「まあ、せやろな」

ラミナは肩を竦めて、果物を齧る。

「ブロヴーダも馬鹿ではないし、突っ込む性格でもないが、まず緻密な作戦は練れない。NGLと変わらず小隊編成で動き、場当たりの対応で動くだろう。ビトルファン、チートウは語るに及ばず。全兵力でただ突っ込んでくるだけだろうな」

「問題はメレオロン、か……」

キルアの言葉にティルガは頷く。

「元々メレオロンは師団長なのが不思議なくらい弱い。姿を消せる。この能力だけでその座に座っていたと言っても過言ではない」

「でも、今は【円】があるだろう？」

「ああ。だが、だからこそ対策している可能性が高い。これから来るであろう師団長の中で、最も警戒すべきなのはメレオロンだと我は考えている」

「……ブラールと同じように【円】でも感じ取れん能力にしとる可能性は高い、か……」

「残った6人の中で知将に最も向いているのはメレオロンだろう。戦闘力が無いが故に、慎重で、狡猾で、知恵が回る。恐らく奴の存在を探る隙を作らせないような陣形を展開するはずだ」

「……けど、そんな奴がいきなり出てくるか？」

「せやなあ……。護衛軍が命令を出すんやったら、まずハギヤやな。次点でブロヴーダ、大穴でメレオロン」

「が、妥当だな」

「ハギヤが来るならば、まず間違いなく斥候にフラッタが出てくるはずだ」

「フラッタ？」

「奴の側近の兵隊長だ。空を飛ぶことが出来る」

「決まりやな。ハギヤを第一候補として動くで」

ラミナは残った果物を放り捨てて、立ち上がる。

それにキルアやティルガ達も続いて立ち上がる。

「ええか？　ここから先は躊躇したら死ぬだけや。敵対した奴は、確実に殺せ」

ラミナが表情を消して告げる。

それにキルアとブラールは一切表情を変えず、テイルガは僅かに顔を強張らせて頷く。

「ここでどれだけ殺せるかで、今後が決まるっちゅうても過言やない。ゴン、ナツクル、シユートは殺せる連中ちやうし、モラウとノウは場所的に自分の命を守りながら翻弄するんで手一杯やろうし、作戦当日に向けて準備してもらわなあかん。……うちらが殺さなあかんねん」  
消去法でこの面子しかないのだ。

更にここでキメラアントの絶対数を減らしておかなければ、王や護衛軍を殺した後にまた世界中に散っていくのは間違いない。

そうなれば、またどこかでキメラアントの被害者が出て、その責任はネテロやモラウ達、そしてラミナやキルア達に向けられる。

今後の面倒を減らすためにも、ここで殺しておかなければならないのだ。

「行くで。——戦争開始や」

命の喰らい合いが始まる。

## #124 オイツメタ×マタハ×オイツメラレタ？

8日目。夜明け。

ラミナとキルアは何個目かの街に襲撃を仕掛ける。

「そろそろ姿を消さないのか？」

「人形相手に姿を消してもな。それに護衛軍のアモンガキッドには、うちが透明になれることバレとるし」

ラミナは肩を竦めて、軽く右腕を回す。

少し離れた場所ではテイルガとブラールが潜んでいた。

「住民は無視せえよ。どうせあの放送でうちの扇動なんぞ聞かんやろうからな」

「操られてる兵士達だけを無力化すればいいんだな？」

「そやな。戦車もあるから気い付けや」

「分かってるさ」

「ほな、行くで」

「ああ」

キルアとラミナは同時に森から飛び出して、猛スピードで街へと突入する。

街中には兵士の姿しか見当たらず、一般人の姿は一切ない。

開けた道路や広場には戦車も見え、全方位からの襲撃に備えていた。

故にラミナとキルアの姿もすぐに発見されてしまう。

兵士達は一切声を上げることもなく、されど統制の取れた動きでサブマシンガンを構えて銃口を2人に向ける。

ラミナは両手にブロードソードを具現化する。

「後ろにおれ」

「ああ」

キルアがラミナの背後に下がる。

直後、炸裂弾が如く発砲音が響き渡り、2人に銃弾の雨が襲い掛かる。





砲台が2人に向くが、砲弾が発射される前にラミナは戦車へと辿り着き、

「おお!!」

砲身をアツパー気味にぶん殴ってひしゃげさせた。

キルアは右手の爪を伸ばして、キャタピラを斬り落とす。

その後も2人は的確に、最小限の労力で兵士や戦車を無力化していき、30分後には全ての戦力を沈黙させた。

「あく……メンドくさいわあ。どうせもう反逆者やし、堂々と殺してもええか。どうせ能力解除されたら死ぬんやし」

「まあ……俺はそれでもいいと思うけどさ」

「ここは効率よく行こか。次の街向かうで」

「ああ……」

キルアは呆れながらも、ラミナと共に駆け出して次の街へと向かう。

その後、軍隊を次々と無効化していく2人。

だが、未だにキメラアントの姿は1匹も見つけられなかった。

「ちつ……随分とのんびりしよってからに」

「どうする? もう西側の街や集落はほとんど回っちゃったぜ?」

「続けるしかないやろ。どっちしろ軍隊を潰さんと選別は止められんしな」

「だな……」

ラミナは空を見上げる。

上空には特に怪しい影は見当たらなかった。

続けて【円】を発動するも、少なくとも100m以内には怪しい動きをする存在も感じ取れなかった。

(……まあ、100mは逆に狭すぎるか……)

ラミナはビルの屋上に目を向ける。

そこにはブラールの念獣の鼻がいた。

ブラールが敵を見つければ、頭上を旋回する手はずになっていたが、どうやらブラールの方でも敵の姿は発見できていないようだった。

「潜んどる様子もなし、か」

「奴らの移動手段が徒歩だったら、まだ着かねえんじやねえの？ 斥候役じゃ俺らに勝てないのは予想してるだろうし」

「やなあ……。もう少し中央寄りの街で待ち構えとると考えとくべきか」

ラミナは腕を組んでため息を吐く。

（ここで二手に分かれるんは悪手……。けど、このまま手当たり次第動き続けても体力を消耗するだけ。流石に動き方考えんとあかんか……）

「今後はデカイ街だけ狙おか。移動距離も伸びるし、敵の数は変わらず多いやろうけど、集落における軍隊程度なら放置しても選別作業は大きく遅れるはずや」

「……しようがない、か」

今は前哨戦でもないレベルの駆け引きだ。

ここで無駄に体力を消費すると、キメラアントとの戦いに支障が出る可能性は高い。

特にキルアの能力は時間制限付きで、身体への負担も大きい。

オーラや電力の先に体力が尽きたら意味が無いし、能力を隠して戦い続けてもオーラが先に尽きたら最悪だ。

今後の作戦はキルアを囷とする。

故にラミナはキルアの消耗を常に考慮を入れて動かねばならない。

（……もう少ししたら、街から街へ移動する時間、街に留まる時間を伸ばしてみるか。それで護衛軍にうちらが消耗して動きが鈍ったと思わせ、うちらを殺しに来る師団長の部隊を誘き出すことが出来るかどうか、やな）

モラウ達が動き出すのは明日の正午。

それまでに師団長達とぶつかっておきたい。

だが、不安要素は他にもある。

元師団長のデートウだ。

昨晚、モラウからの連絡の中にデートウが猛スピードでこっちに移動しており、早ければ今日の昼頃にでも東ゴルトーに入るらしい。

ルート次第ではラミナ達と遭遇する可能性が高い。

そうなれば挟み撃ちされる形となってしまう。

デイトウの速度はラミナですら対応が困難だ。それこそ、キルアが一番勝てる可能性がある。

つまり、現状キルアが一番のジョーカーとなっているのだ。

キルアの使用のどこかを誤れば、一気に追い込まれてしまうだろうとラミナは考えていた。

もちろん、その対応策も考えてはいるが、それではラミナも大きく消耗してしまうので避けられるのならば、全力で避けたい。

(ナツクル達が動くとは言うとつたけど、下手すればナツクル達がうちらを狙う師団長と鉢合う可能性もある)

やはり全ての作戦が綱渡り状態であるという事実、ラミナは小さく舌打ちする。

一步でも踏み外すとその後全てに影響が出かねない。

ナツクルとシュートとて、デイトウと戦って、そのまま戦線離脱する可能性もある。

そうなれば、作戦当日はラミナ、キルア、ゴン、テイルガ、ブラーの5人しか動けない可能性すらある。

(ハンター協会の援軍は期待できんし、うちもここに呼べる知り合いは賞金首連中ばっか……。まあ、モラウにノヴまでリタイヤするんやったら、もうハンター協会が何と言おうが知ったこっちゃないんやけど……)

だが、どつちにしろ信頼できるかどうかが問題になる。

ハンター協会から派遣されたプロハンターであっても、テイルガ達仲間となったキメラアントを受け入れられるかどうか分からない。

少数精鋭で動く以上、それぞれの活躍に信頼を持たないと動くに動けない。

それで作戦失敗となれば目も当てられない。

(理想はデイトウとナツクル達が遭遇するのと同時に、こっちも師団長と遭遇すること。ナツクル達と連絡を密にするしかないか……)

ラミナは携帯を取り出して、地図を確認する。

「……次は南東に向かうか」

「ああ」

ラミナとキルアは次の目的地に向けて駆け出した。

その頃、レオルは部下を引き連れて、人気のない森の中を移動していた。

傍にはヒナが歩いており、上空にはフラッタが飛んでいた。

「獲物が集まった？」

『そ。襲撃場所が一か所ずつになった。多分、戒厳令を出して堂々と軍隊を動かせるようになったからだろうけど』

レオルは携帯でネフェルピトーと話していた。

『敵は国の西側で動いている。そのまま行けば中央部でぶつかるところから、そのまま殺っちゃってくれる？ 預けた部下はそのまま連れてっていいから』

「了解しました。必ず敵を仕留めてみせます」

『頼んだよ』

「はっ」

通話を終えたレオルは携帯を仕舞って、笑みを浮かべる。

「チャンスだな。さっさと仕事を終わらせて、護衛軍に恩を売って俺の評価を上げてやる」

「あははは！ レオル様、悪い顔してる〜」

「イケてるだろ？」

レオルはニヒルな笑みを浮かべて、移動を再開しようとする。

そこに1つの影が歩み寄ってきた。

「レオル様」

現れたのは कोरोチエ だった。

「なんだ？ कोरोチエ」

「ネフェルピトー様との連絡が終わったようですよ。この後の方針を訊きに参りましたわ」

कोरोチエは現在 ビトルファンの部下として、王のために働いていた。

ビトルファンと同じく、NGLを出てそのまま王の元に馳せ参じた一番最初の兵隊蟻である。

「大体は聞こえてたんだろ？ 当初の予定と変わらず、このまま進んで獲物を仕留めるだけだ」

「そうですか。承知しましたわ。では、わたくしの隊は引き続き後方から付いて行かせてもらいますわ」

「おいおい……指揮官を先頭に進ませるのかよ。俺は師団長だぜ？」

「それは女王の元にいた頃の階級に過ぎません。わたくしはもちろん、あなた方もその縛りが嫌だったから巣を飛び出したのでは？」

「……ま、確かにそうだがよ……」

「今のわたくしが仕える御方は王様ですの。わたくしはあくまであなた方の援軍でしかありませんわ。もちろん、王様の計画を妨害する輩は確実に殺しますが」

「けっ……」

「言っておきませんが——」

コローチエが一瞬でレオルの前に移動して、右脚を振り上げてレオルの鼻先で寸止めする。

「っ!？」

「あなたも、例外ではありませんわよ？ 王様の害となるのであれば

……殺しますわ」

「……」

コローチエは脚を下ろして、レオルに背を向ける。

「今はネフェルピトー様があなたを認めているから何もしないだけですわ。ですが、あなたが寝首を搔くつもりであることもまた、知っておりますの。元師団長であっても、あなたではわたくしの速さは捉えられませんわよ？ 精々、わたくしに寝首を搔かれないようにしてくださいまし」

脅しを残して、コローチエはレオルの前から去る。

レオルはコローチエがいなくなったのを見届けると、苛立ちを露にして舌打ちする。

「ちっ！ 王に尻尾を振った雌犬がほざきやがって……！ いい

ぜえ。見てろよお……！ 完璧に仕事をこなして、お前より成り上がってやる！」

レオルは獰猛な笑みを浮かべて、力強く一步を踏み出した。まだ見ぬラミナ達の首を思い浮かべながら。

昼前。

ラミナとキルアは結局休むことなく、動き続けていた。

「まだ行けるか？」

「ああ。問題ねえよ」

キルアはラミナの問いかけに軽快そうに答えるも、額に汗が浮かんでいた。

(まあ、丸1日動き回ったらしゃあないか)

ラミナはまだ汗1つ掻いてはいないが、それでも本調子とは言えないほどには疲労を感じていた。

今、ラミナ達がいるのは「ルオントン市」だ。

ちようど今、駐在していた大隊を無力化したところだった。

「次はどっちに行く？」

「そうやなあ……」

ラミナは携帯を取り出して、マップを表示する。

(……うちのペースは明らかに落ちとる。まあ、落としとるんやけどな。そこはキルアも気づいとるはず。問題はそろそろ敵さんと遭遇したいところなんやけど……)

ナツクルからのメールではすでにチートウは東ゴルトーに入国したとのこと。

そろそろ遭遇している頃だろうとラミナは推測する。

ブラールは未だに敵の姿を見つけれてはいない。

「うちはここからは姿を隠すでな」

「ああ」

「……次は北。北東沿いの国道横の森を進むで。お前のスピードで構わん」

「分かった」

キルアは頷くと同時に駆け出し、ラミナはハラデイを具現化して【朧霞】で姿を消して後に行く。

30分ほど移動していると、

「っ！ やつと来よったか……」

「！」

すぐ後ろから聞こえるラミナの声に、キルアは上を見上げる。

空に小さい影が見えた。

「豆粒にも等しい大きさだが、キルアはそこから視線を確かに感じ取った。」

「あれがフラツタって奴？」

「やるな。とりあえず、このまま真つすぐ進むで」

「ああ」

(……あの距離……。ティルガ達も見つかったかもしれない)

想像以上に離れている敵の姿にラミナは内心舌打ちする。

今のタイミングでまだティルガとブラールのことをバレルわけにはいかない。

(まあ、奴らに関してはティルガの方がよお知つとるか)

傍を飛んでいるはずの梟に変化はない。

ブラールには戦闘になった場合、こちらの梟の透明化を解除して構わないと伝えてある。

(ティルガにも、うちらが戦闘を始めるまでは空の監視者には手は出すなて言うとする。やから、見つからないように移動しとると信じるしかないか)

その時、猛スピードで迫ってくる気配をラミナは感じ取った。

「!!」

ラミナはキルアの後ろ襟を掴んで、足を止める。

「うおっ！」

キルアは驚愕の声を上げながらも、すぐに体勢を整えて着地する。直後、2人の目の前を白き鎌鼬が通り過ぎた。

鎌鼬が通り過ぎた場所は茂みや樹々が斬り飛ばされた。



「!!」

「……あら。また避けられてしまいましたわね」

現れたのはコローチエだった。

「……こいつ、兵隊長や。かなり足が速い。素のうちらじやまず振り切れん（それに……今の斬撃は……）」

小声でキルアに情報を伝えるラミナ。

それにキルアは眉を顰める。

「それにしても、1人だけとは……。後もう1人いると聞いていたのですが……。全く……。また獲物探しをしなければならぬようですわね」

コローチエは右手で髪をいじりながら溜め息を吐く。

ラミナは素早くコローチエの背後に回り込んで、首を狙ってハラデイの刃を突き刺そうとする。

しかし、コローチエはそれに気づいていたかのように高速でその場から飛び出した。

「なっ……!?!」

ハラデイを振ったことで姿が見えてしまったラミナは驚き、それを見ていたキルアも驚愕に目を丸くする。

「やはり、もうお一方も潜んでいましたか……。ネフェルピトー様とアモンガキツド様の忠告通りでしたわね」

【円】？ いや、オーラが広がった様子はなかった……。覗き屋が【凝】を使えるんか？ それともまた蛇か蝙蝠の蟻か？

「あら、あなたは……。なるほど。あなたが相手では兵士達では相手にならないのも当然ですわね」

コローチエはラミナを見て、納得の表情を浮かべる。

「あなたを殺せば、護衛軍の方々はもちろん、王様からお褒め頂けるに違いありませんわ。今回は確実に仕留めさせて頂きます！」

オーラを集中させた左脚を上げながら気合に猛るコローチエ。

それにキルアとラミナは同時に北東に向かって駆け出して跳び上がり、枝へと飛び乗ってそのまま枝から枝へと飛び移っていく。

「逃がしませんわー！」

コローチエも駆け出し、あっという間にラミナの真下へと移動する。

ラミナは枝の上で【肢曲】を使って、分身を生み出す。

「!! その程度で!!」

コローチエは一瞬目を丸くするも、すぐさま高速で樹を駆け上がって一瞬の内にラミナの分身を数体切り裂いた。

(また斬られた! 奴の身体に刃はない。間違いなく念による攻撃!)

キルアはコローチエの攻撃手段を見極めようとしていた。

(脚が動いたのは視えたから恐らく『蹴り』を主体にした攻撃……!)

蹴りによってオーラを刃に変えているのか、蹴りによる風圧を鎌鼬のように放つのか……。けど、斬られ方は明らかに刃物で斬られたかのような鋭い一本線。恐らくは前者!)

キルアは推測を続けながらも足を止めずに走り続ける。

コローチエはあっという間にラミナの分身を全て消滅させたが、肝心のラミナ本体の姿が見えなかった。

「また姿を……! あぐつ?!」

顔を顰めた直後、真横から衝撃が襲い掛かり吹き飛ばされた。

目を向けると、そこには右脚を振り抜いたラミナの姿があった。

「さつきは対応出来たのに、今は反応すら出来てへん……。上の覗き屋ではない、か」

ラミナは訝しみながら地面へと下り、キルアを追いかける。

コローチエもすぐさま体勢を整えて、ラミナへと駆け迫る。

ラミナは再び【肢曲】で分身を生み出しながら、姿を隠す。

しかし、コローチエは今度は迷うことなく姿が見えないはずのラミナ本体へと迫ってきた。

ラミナは顔を顰めて、また枝の上へと跳び上がる。

すると、

「くっ……!」

コローチエは歯軋りをして、周囲へと素早く視線を巡らせた。

それをラミナはもちろん、キルアも見逃さなかった。

(奴がうちの居場所が分かるんは地面におる時だけ！)

(地面から足が離れている上では対応出来ない！)

(つまり、覗き屋は地面の振動で居場所を把握している!!)

地中に潜んでいるのかは定かではないが、少なからず『視て』いるわけではない。

面倒なのは変わらないが。

(上の監視から逃れるにはどこかに隠れる必要がある。けど……)

(地面に下りれば振動で居場所がバレてまう。それに潜もうにも、追跡者の方が足が速い。やれやれ……厄介なこつちや)

能力を見られないように戦うには、コローチエの速さは中々に厄介だった。

一度森を抜けた2人は地面に着地して、スピードを上げる。

そのすぐ後ろをコローチエが猛追してくる。

「ちっ……！ この場所はあかんな」

障害物が無い。

上から丸見えで、地面から離れる場所もなく、コローチエの足を完全に活かせる。

絶対的に敵に地の利がある。

だが、コローチエは無理に距離を詰めず、ラミナ達を追い立てるように背後を走っていた。

「……？ 攻めてこない？」

「向こうも不意打ちが難くなったでな。スピードで勝るとは言え、2対1は変わらん。油断はせんちゅうことやろな」

「どうする？」

「仕留めたい、ところやけど……。他の兵隊蟻共が全然現れへんでな。流石にもう少し引き寄せたいところやな」

「じゃ、それまではこのままってわけだな」

「せやな。それに暴れるにしても、上の目は遮りたいとこや」  
すると目の前に崖が現れ、2人は躊躇なく飛び出す。

崖の下はジャングルになっていた。

「あそこやな。さつきまでの森より生い茂つとるから、上からはまず

見えんはずや。それで上の動きを見る」

「分かった」

一気に崖を駆け下りて、2人はジャングルの中へと駆け込む。

「ローチェはそれに不敵な笑みを浮かべる。

「ふふっ……追い詰めましたわ」

『モルモ。用意は?』

『整つてございます!』

『よろしい。では、レオル様の部隊が動くと同時に前達も出なさい。

ここで仕留めるのです!』

『御意ですます!』

『フラツタ。そちらの部隊は?』

『問題ない。だが、これ以上勝手な真似は控えろ!』

『あら? 獲物を狩るのがネフェルピトー様の命令。何も邪魔はしておりませんわよ? 手柄が欲しいのなら、しっかりと迅速に動きなさいませ』

『ちっ! ……まあいい。ここで確実に仕留めるべきなのは同意見だ』

苛立ちが籠ったフラツタの念話に、ローチェは鼻で笑う。

ラミナとキルアは跳び上がって枝の上に移動する。

上を見上げると、木の葉が頭上を覆い尽くして空を見通せない。

それは上からも地上は視えないということでもある。

ラミナ達は次の動きに備えようとすると、

ゴゴゴゴゴゴ!!

妙な音と地響きが始める。

「!?!」

『行け!! レオル陸軍! 見事獲物を捉えてみせろ!!』

『お行きなさい! コローチェ近衛隊! 王様への忠義を見せつけるのです!!』

敵の本隊が、遂にやってきた。

## #125 ジンライ×ノ×ダンスパーティー

キルアとラミナは震源方向へと顔を向ける。

そこから現れたのは巨大な大玉に乗り、周囲の樹々を薙ぎ倒しながら突っ込んでくる兵隊蟻だった。

腰から長い虫の脚が伸び、大玉の上でバランスを取っている。

「また原始的なやつちゃんあー!」

「ちい!」

ラミナとキルアは立っていた枝から跳び上がる。

直後、2人の立っていた樹が大玉がぶつかって押し折れた。

2人はそれぞれ別の樹の幹に着地する。

だが、樹の裏側から殺気を感じた。

キルアが降り立った場所に綺麗な横一文字の亀裂が走り、ラミナが降り立った場所にズドン!と巨大な棘が生えた。

しかし、すでにラミナとキルアの姿はそこにはなかった。

「!!」

大玉に乗っていたキメラアントとコロチエは目を見開く。

視界に映ったのは、首が振じ切られて両腕を破壊された尾に巨大なハサミを持つ兵隊蟻と、頭部が粉碎されて巨大な針が生えた尾が引き千切られた兵隊蟻だった。

(一瞬で頸椎部を振じ切り両腕を破壊……! もう一方も頭を破壊して尾を引き千切った……!?) 単独の接近戦では勝ち目がねえ!)

『奴はどこだ!?!』

『隊長、上です!!』

コロチエと大玉蟻は上を仰ぎ見る。

樹上では、猿系の特徴を持つキメラアント達や蜥蜴やカエルの特徴を持つキメラアント達が、それぞれ武器を構えてラミナとキルアを囲んでいた。

『一斉にかかるのです! 懐に入られたら死ぬと思いなさい!!』

『『『『はっ!!』』』』』

キメラアント達はコロチエに命令されるまでもなく、一斉に2人

に飛び掛かっていた。

だが、ラミナとキルアは焦りや絶望を浮かべるところか、涼しい顔をしていた。

ラミナは左腕でキルアの左手を掴んで引っぱり、自分の左肩に乗せる。

それと同時に右脚を鋭く振り上げ、棍棒を握っていた兵隊蟻の顎を蹴り抜いて頭部を砕く。

キルアはラミナの背後から迫ってきていたハンマーを振り上げているカエル蟻を見据えながら上に跳び上がって、トンカチを握る両腕が長い兵隊蟻の右腕を掴む。

ラミナはキルアが跳び上がった反動を利用して前転し、顔に伸びてくる兵隊蟻の指を躲す。

頭を下にしたラミナは右手に大太刀を具現化して、右にいた槍を突き出そうとしていた太った兵隊蟻の股から頭まで一瞬で槍ごと両断し、大太刀を消す。

キルアは掴んだ腕を引き寄せながら、両断された兵隊蟻が握っていた槍の先を左手で掴み、すぐ下にいたカエル蟻の額目掛けて投擲して額を貫いた。

ラミナは体を起こしながら左腕で【蛇活】を繰り出し、長い指を持つ兵隊蟻の胸を貫いて心臓を潰す。

更に最初に殺した兵隊蟻の身体を蹴って跳び上がり、キルアが引き寄せていた両腕が長い兵隊蟻の額を爪を研ぎらせた手刀で突き刺し、更に腕を薙いで頭部を砕く。

ラミナが右脚を伸ばすと、その上にキルアが当然のように着地する。

ラミナが身体を捻って左脚を振り上げる。それに合わせてキルアは軽く跳び上がり、振り抜かれるラミナの左脚に両足を乗せて一気に飛び出す。

飛んだ先には、異様に長い尾で鶴嘴を持ち、両手にハンマーを持つ兵隊蟻。

その兵隊蟻はすでに鶴嘴をラミナに向けて振るい伸ばしていた。

「っ!？」

いきなり飛び掛かってきたキルアに驚いた兵隊蟻は、何も出来ずに首を振り切られた。

更に伸ばしていた尾は、ラミナに軽々と手刀で斬り落とされ、尾で持っていた鶴嘴をラミナは素早く掴み取って、背後に振り返りながら投擲する。

投げられた鶴嘴は、キルアの左から迫って来ていた太い腕と蜥蜴のような尻尾を持つ兵隊蟻の側頭部に突き刺さった。

キルアはラミナが投げた鶴嘴を頭を下げて躲しながら、鶴嘴を投擲して伸ばされたラミナの右腕を掴む。

そして、全力で腰を捻って回転し、ラミナを引き寄せる。途中で手を離して両手を組み、目の前まで引き寄せていたラミナの足裏に組んだ両手を添える。

「ふう!!」

息を鋭く吐きながら両手を振り抜いてラミナを投げ飛ばし、ラミナは樹の幹に張り付いて固まっていた蜥蜴蟻へと飛ぶ。

あつという間に仲間がやられた衝撃で固まっていた蜥蜴蟻は、為す術なくラミナに首を引き千切られた。

一分と経たずに樹上の部隊が全滅したことに、大玉蟻は即座に撤退を決めた。

(樹上での複数攻撃ですら全く歯が立たない!)

『下がれ!! 態勢を立て直す!!』

まだ控えさせていた部下達に念話を飛ばして、撤退しよう動き出す大玉蟻。

しかし、キルアが素早く枝を飛び移り、大玉蟻へと猛スピードで迫る。

ラミナもそれを追いかけるながら、コローチエに殺気を飛ばして牽制していた。

キルアが大玉蟻の背後に迫ろうとした、その時。

別角度から様子を見ていたラミナの目に、口角を吊り上げる大玉蟻の顔が映った。



(罨か!!)

ラミナは左手に掌大のチャクラムを具現化した。  
その直後、

ポオウツ!!

大玉蟻の尻が爆発して火を噴いた。

「くくく、ヒャーハッハア!! どうよ!? 俺の一発はよオオ!?」

高らかに笑う大玉蟻。

樹々は爆発で薙ぎ倒され、所々火が点いている。

それに大玉蟻はキルアも吹き飛んだと確信した。

「ヒャーハハハハ!! ざまあみやがッ!?!」

高笑いをしていた大玉蟻の側頭部にスロージングナイフが突き刺さって、大玉蟻は横に吹き飛んで大玉から落ちる。

コロイチエが目を見開いて視線を向けると、そこにはキルアを脇に抱え、僅かに体から電気を放出しているラミナがいた。

ラミナはキルアを放り投げながら着地する。その左肩には帯電しながら高速で回転しているチャクラムが引っ付くように浮いていた。

チャクラムは左腕を滑るように移動し、左人差し指に引っ搔けられて止まる。

ラミナは顔を顰めて、右手を離握手する。

「ツつうく……! あかん……めっちゃ痺れるわあ……。お前、ようこんな能力創る気になったわ、ホンマ」

「……今の。まさか俺の能力を真似したのか?」

「まあなッ!! いツつうく……!」

ラミナは肩を竦めようとして、ビリッと身体に電流が走って一瞬硬直し、すぐに顔を顰める。

キルアは複雑な表情を浮かべながら、腕を組む。

「お前って電流に耐える特訓とかしてんのかよ?」

「しとるわけないやろが。お前んとこのイカれた一家と一緒にすんなや」

「だったら無茶にも程があんだろ……。俺だって痛くないわけじゃないんだぜ？」

「いやあ……。流石にお前やあの蟻みたいに速すぎる連中に対応するにやこれくらいせないかんかと思てなあ……」

ラミナはチャクラムを消し、顔を顰めて腕を回しながら答える。

【小生意気な雷童子】

ズートウ戦などに備えて創った能力で、キルアの「神速」を参考に創ったものの、やはり身体能力を上げるほどの電流を身体に流すのはラミナでもキツ過ぎた。

流石に電気拷問を耐える特訓などしたこともないし、考えもしなかったので、ラミナの電気耐性はそこらへんの人間と大差ない。

それでも『ちよつとキツイ』レベルで済んでいる時点で十分おかしいのだが、ラミナはもちろん、同じ能力を使っているキルアもそこには気付かない。

「こらあ……。やつぱ使っても1, 2秒やな……」

「動けるのか？」

「まあ、1, 2分もすれば戻るやろ。今はまず……」

ラミナは कोरोチエへと顔を向け、キルアも鋭く視線を向ける。

कोरोチエは顔を顰めて腕を組んでいた。

「傷1つ付けることも出来ずに、あつという間に戦力が半分以下ですか……。困ったものですわね」

(まあ、相手があの子であれば仕方がないことやもしれませんが……)

NGLにいた時はまだ念について無知だったとはいえ、師団長ですら歯牙にもかけなかった実力者。

いくらあの時から強くなったとは言え、やはりそう簡単に実力差が埋まるものではなかった。

『フラッタ、レオル様に連絡なさい。ネフェルピトー様に一度指示を仰ぎます』

कोरोチエは上空にいるフラッタへと念話を飛ばす。

しかし、フラッタから返事が返ってこない。

『……フラッタ？ フラッタ!! 何をしているのです?! フラッタ

!？」

大玉蟻が爆破を放つ少し前。

フラツタは変わらず空から戦場を俯瞰していた。

と言っても、フラツタの視界には地上の光景が当たり前のように見えているのだが。

サテライトンボ  
【衛星蜻蛉】。

フラツタが会得した念能力は、ブラールと同じく偵察用念獣を生み出すものだった。

見た目は普通の蜻蛉にしか見えない。ブラールと異なり、姿を隠すことはできないが、その分具現化できる数は多い。

更にフラツタは虫の特徴でもある『複眼』を利用して、全ての【衛星蜻蛉】から送られる映像を見ることが出来る。

故にフラツタの視界にはほぼ死角がなく、自分は安全地帯から敵を観察することが出来る。

『レオル様。陸軍はほぼ壊滅です。全く歯が立ちませんね。能力すらまともに使わせることが出来ていません』

『ちっ……所詮は雑魚共か……。少しでも良い。何か情報はないのか？』

『紅髪の女の方は武器を生み出すか、別空間から取り出すことが出来るようです。子供の方は以前NGLで見た奴ですね』

『そうか……』

『コローチエの話では、紅髪の女の方は例のアモンガキッド殿と戦って生き延びた女のようにです』

『なんだと……？ ちっ……フラコックやウイゼリス達を殺した奴か。厄介だな……』

レオルは眉間に皺を寄せ、顎髭を触りながら唸る。

ラミナのことはアモンガキッドが『君達じゃ念を覚えたところで勝てる相手じゃない』と言っていたこともあり、警戒対象として覚えていたのだ。

(今ならそう簡単に負けるとも思わねえが……アモンガキツドの野郎から逃げ延びた事実は無視出来ねえ。正面から挑むのは危険だ……。だが退くにしても、せめてネフェルピトー達が撤退も仕方ないと思わせるだけの有益な情報を手に入れねえと、俺の評価が下がっちゃう……！)

『フラッタ。何としてでも地底湖まで誘き出せ！ 流石に水の中なら連中も動きが鈍るし、能力を使わざるを得ねえだろ』

『了解』

(せめて連中の能力を知らねえと話にならねえ。何としてでも連中に能力を使わせる！)

レオルはもどかしさを感じながら、フラッタ達の連絡を待つのだった。

フラッタはレオルの言葉をコロイチエに伝えようとした、その時。

突如目の前に梟が出現し、足の爪で顔を引っ掻きに来た。

「なっつ!?!」

フラッタは驚愕しながら両腕で顔を庇う。

梟の突然の出現に、フラッタは反射的に【衛星蜻蛉】からの視界の大部分を切つて、目の前の存在に集中してしまう。

しかし、梟と己が両腕で視界がほぼ潰されてしまった。

それ故に、後方下から静かに、されど高速で迫る存在に気づけなかった。

フラッタは背中に衝撃と熱さを感じ、直後激痛が走って羽根の感覚を失った。

「があ!?!」

悲鳴を上げながら、何とか視線を向ける。

そして捉えたのは、音もなく風を切り裂きながら飛ぶ黒い翼を持つ黒づくめの少女、ブラールであった。

更に視界の端に映ったのは、自分の背中に生えているはずである羽根の一枚だった。

フラツタが見たもの全ての意味を理解する前に、フラツタは身体に重みを感じ、下に引かれるような感覚に襲われる。落下を始めたのだ。

「あ、ああ……！ うあああああああ!?!」

フラツタは【衛星蜻蛉】や念話を使う余裕もなく、ただただ悲鳴を上げて落下する。

ブラールは素早く旋回して再びフラツタへと迫る。

その翼にはオーラが集中していた。

ブラールの新たな能力【無音飛空艇<sup>ステルスウイング</sup>】。

翼や羽根を強化するだけの能力で、高速で飛ぶことで風圧と合わせ翼に僅かに切れ味を持たせ、羽根を矢のように鋭く撃ち出すことが出来る。

ありふれたちっぽけな能力かもしれないが、音を出さずに飛べる鼻の特性を持つブラールならば、十分すぎるほどの奇襲力を発揮するのだ。

ブラールは慌てふためきながら落下しているフラツタの背中を両足で蹴り飛ばし、フラツタの落下の方向を変えた。

「がっ、あああああああ!?!」

自分が襲われる、奇襲されるとは夢にも思っていなかったフラツタにとって、この状況から立ち直れるほどの精神力も経験もない。

念話で助けを呼ぶことすら思いつかず、フラツタはただただラミナ達が戦っているジャングルの端へと落ちていく。

地上まであと数秒というところまで迫った。

その時、フラツタは地上に人影を捉えた。

それは――

オーラを集中させた右鉤爪を構える、テイルガだった。

「!?!? (な、何故、ハニに!?!)」

「恨みはない。だから——」

ティルガは構えたまま、フラツタ目掛けて全力で跳び上がる。

「我を恨んで、死んでくれ」

そう呟き、風を切り裂きながら右鉤爪をフラツタ顔面目掛けて振るう。

フラツタは「練」を使うどころか、腕で防御することもせず、迫る虎の爪をただただ見つめていた。

そして、ティルガの右鉤爪がフラツタの顔面に触れた直後、

「——【虎咬拳】」

素早く右手首を捻り、一瞬にしてフラツタの頭部を喰い千切った。

頭を失ったフラツタの身体は血を流しながら、受け身もとれずに勢いそのまま地面に落下した。

ティルガは着地して、小さく息を吐く。

「……ふうく……」

「……」

傍にブラールも下り立ち、静かに翼を折りたたむ。

「……フラツタ以外に空を飛んでいる者は、いないな……?」

「……」

ティルガの問いに無表情のまま頷くブラール。

それにティルガも頷き返し、

「ならば、ラミナに合図を。……敵の覗き屋は、始末したとな」

ブラールは頷いて、ラミナへと合図を送るのだった。

ラミナとキルアが、コローチエが妙に慌て始めたことに訝しんだその時。

バタバタバツツ!!

ホーッ!!

「!!」

2人の頭上で鼻が音を立てて羽ばたき、鳴きながら飛び立っていった。

「あれは……!」

「上の覗き屋を仕留めた合図……! 行くで!! 一気に奴を仕留める!!」

「ああ!!」

ラミナとキルアはコローチエに猛然と駆け迫る。

それにコローチエは齒を食いしぼりながら、一度距離を取ろうと後退する。

(まさかフラツタがやられた!? まだ他にも仲間が潜んでいたのですか!?)

『モルモ!! フラツタはどうしたのですか!?!』

『こちらにも連絡が取れませんです! 上空にも姿が見当たりませんです!』

『他に敵の足音は!?!』

『感知範囲内にはいません!』

『くっ……!! 仕方ありませんか……。モルモ、わたくしが死ねば指揮はあなたが執りなさい。地上では勝ち目はありません。地底湖まで誘き寄せるのです』

『コローチエ様……!?!』

『その後は何としても敵の情報を護衛軍の方々とレオル様に伝えなさい。特に護衛軍の方々には、必ず伝えなさい! この者達の刃が王様に届くことだけは、何としてでも防がねばなりません……!』

『……了解致しましたです。必ずや、成し遂げますです』

『頼みましたよ、モルモ。では、ごきげんよう』

コローチエは全てを受け入れて柔らかな笑みを浮かべ、この後の全てを部下に託して別れを告げる。

ラミナとキルアはコローチエの悟ったような笑みを見逃さなかった。

「この状況で浮かべるにしちゃあ嫌な笑みやな」

「ああ……あれは死を覚悟した類の表情だ」

2人が感じ取ったのを裏付けるように、コローチエは足を止めてラミナ達と向かい合う。

ラミナ達も数メートル距離を開けて足を止める。

「……どうした？ 諦めたのか？」

「……まあ、そうとも……言えますわね。王様からお預かりした部隊は半壊。どうやらフラッタも殺されたようですし。……まだ仲間がいたとは、完全にしてやられましたわ」

「……」

「ここから逆転する手はわたくしにはありません。恐らくレオル様はわたくしを助けることなどしないでしょう。残った部下ではあなた達には逆立ちしても勝てませんし、先ほどの動きを見れば、わたくしではあなた達からどう足掻いても逃げ切れませんわ。ですので……」

コローチエは最初のように左脚を上げて構える。

「偉大なる王の配下として、偉大なる王を産んだ女王陛下の兵隊蟻として、敵たるあなた達に、ただ一矢報いたい。それだけのことですわ。願わくば……その一矢が今後のあなた達を苛立たせる傷とならんことを」

左脚に集中していたオーラが更に膨れ上がる。

そしてオーラは形を変え、膝から下がグリーブと長さ70cmほどの両刃の剣が一体化した脚甲となった。

「!!」

「トルナード・ガンバ舞い踊る白鳥」。これがわたくしの能力ですわ」

コローチエはその場でバレエを踊るかのように高速で舞う。

それに合わせて左脚の刃も舞い、斬撃の旋風が巻き起こる。

更にコローチエは左脚の刃を地面に突き刺して立ち上がり、右足を振り上げる。

右脚にも脚甲が具現化する。

コローチエの真っ白な躯体とバレリーナのルルベのような佇まいは『美しい』としか表現しようがなく、纏う覚悟も相まってラミナとキルアはコローチエはこれまで出会った兵隊蟻の誰よりも手強いと感じた。

「……ちつ。護衛軍以外の蟻が、ここまで打算なく王に従つとるたあなあ」



「予想してなかったわけじゃないけど、流石にちよつと驚いたな」

軽口を言いながらも、ラミナは右手にブロードソードを、左手にチャクラムを具現化し、キルアは構えながら目を細める。

「お前、なんでそこまで王に忠誠持つとるんや？ 王は生まれた時、師団長を喰ったんやろ？」

「……美しい。そう思ったのです。ただ、それだけですわ」

コローチエは生まれたばかりの王を見ていない。

一番最初に見たのは、新天地を求めて巣を旅立つ王の後ろ姿だった。

だが、コローチエはその後ろ姿がとてつもなく美しく見えた。

だから、NGLを飛び出して、真っ先に王の元へと走った。

コローチエが王の元へ辿り着いたのは、東ゴルトー制圧直後。

その時にただ一度だけ、コローチエは王と対面することが出来た。

「凛々しく、美しく、気高く、何より強くて、恐ろしい……。同じキメラアントと思うことすら不敬。そう心の底から理解させられるほどの存在だ。……そんな御方に仕えたいと思うのは、おかしい事ですか？」

どうひっくり返っても手が届かない存在。

同じ王を名乗ることすら烏滸がましい。

ならば仕える以外にどんな選択肢があるのだろうか？

コローチエは心の底からそう思っていた。

「正直なところ、わたくし、レオル様達の思考が理解できませんの。何故、あの御方の寝首を掻けると思えるのか。恩を売ったところで、信を得たところで、何故王様を裏から操れると思えるのか。何故自分も王になれると思えるのか」

あの王が『この配下は殺すのが惜しいから重用しよう』と、本気で考えると何故思えるのか。

「王様は完全無欠の存在ですわ。護衛軍はもちろん、わたくしも……。この世全ての生物は王様の雑用を担うための駒。代わりなどおらず、逆に王様はわたくし共が出来ることならば全て容易に為せる。王とは絶対の孤高たる存在。わたくしは王様の栄光を形作る石粒程

度の礎。十分ですわ。それだけで、十分なのです」

王が頂点にいる。

それだけで कोरोチェは満足なのだ。

褒められたいと思うことすら烏澁がましい。己を知ってほしいと思うことすら烏澁がましい。傍に置いてほしいと思うことすら烏澁がましい。

真なる忠義とは『何も求めず、されど王が為したいことに全身全霊全命で臨むのみ』。

ただそれだけでいいのだ。

そもそも本来、兵隊蟻とはそういう存在なのだから。

कोरोチェはただ、キメラアント本来の生き方に戻っただけに過ぎないのだ。

それだけのことが、ラミナとキルアに脅威を感じさせている。

「改めまして……兵隊長が一、 कोरोチェと申しますわ。我が王の偉業を防がんとする愚かで勇敢なる戦士様……どうか、お覚悟を」

कोरोチェは右手を左胸に添えて優雅な礼をし、まるで舞台挨拶するかのように名乗り、口上を述べる。

「……幻影旅団が1番。殺し屋、ラミナ・ハサンや」

「プロハンター、キルア・ゾルディック」

ラミナとキルアもそれに敬意を表して名乗り返す。

それに कोरोチェは感謝するかのように小さく微笑み、次の瞬間には顔を鋭くする。

「では、踊り合殺し合いいましょう」

そして、3人は同時に飛び出した。

勝負はあつという間だった。

まずラミナと कोरोチェが距離を詰め、互いに高速の斬撃を放つて、剣戟を繰り広げる。

ラミナの背後からキルアが爪を研ぎらせて飛び出し、コローチエに斬りかかる。

コローチエは勢いよく体を捻りながら右脚を上げ、バレリーナのよう  
にその場で回転する。

ラミナは後ろに弾かれて、キルアは舌打ちして攻撃を中断する。

コローチエはスケートのように猛スピードで滑り出し、ラミナに詰  
め寄る。

そして、左脚の刃を振り上げながらまた体を捻って逆立ちし、その  
場で勢いよく両脚を広げて回転を始めた。

剣圧で風を巻き上げて、まさに竜巻が如くラミナへと襲い掛かる。

ラミナは斬撃の嵐を紙一重で躲し、キルアがコローチエの横に回り  
込んで攻めかかろうとする。

しかし、コローチエは両腕で跳び上がって、両脚の刃を振り乱して  
キルアの接近を防ぐ。

ラミナはブロードソードを消して、左手のチャクラムを回転させ  
る。

高速で回転するチャクラムは帯電を始め、腕を滑るよう  
に移動して  
左肩で止まる。

直後、ラミナの身体に電流が流れ、僅かに髪が逆立つ。

それを見たキルアも【神速】を発動し、全身に電気を纏う。

コローチエは目を見開くも、すぐに顔を鋭くして両脚の刃を振る  
う。

直後、ラミナとキルアの姿が消え、コローチエの四肢が斬り飛ばさ  
れた。

「!？」

目を限界まで見開いたコローチエの目の前に。

爪を研ぎらせ、互いの手の甲を合わせるように手刀を構えるラミナ  
とキルアがいた。

「『終わりや』」<sup>だ</sup>

ラミナとキルアは同時に告げ、手刀を繰り出す。

コローチエはそれに小さく微笑み、

「ぐきげんよう」

2つの雷槍がコローチエの顔を吹き飛ばし、白い髪が乱れ舞う。

ラミナとキルアは同時に能力を解除すると、コローチエの胴体と四肢が地面に落ちる。

「あつづツ！ くうく……い！ 全つ然慣れへんわあ〜」

ラミナは痺れに顔を顰めてボヤク。

キルアはポケットに両手をつっ込んで、呆れ顔を浮かべる。

「そんな簡単に慣れられてたまるかよ……。ところでさ」

「ん？ イツツ!？」

「……はあ。そのチャクラムの能力、俺にも使えんの？」

「つつう〜……。……残念ながら、うちしか使えん。そこまで都合がええもんには仕上がらんかったでな」

「そうか……」

顔を顰めながら、キルアの質問に答えるラミナ。

キルアはもちろん予想していたことなので、特に落胆することはなかった。

「それにしても、まさかあそこまで王に忠誠を誓う蟻がいたなんてな」

「まあ、コルトらみたいに女王に忠実な奴らもおったんや。護衛軍以外にも1、2匹は出てもおかしくないやろ」

「まあ、な……」

「それよりも……。レオル様とか呼んどったけど、そんな名前聞いたことないなあ」

「フラツタって奴は確かハギャって奴の側近だったんだよな？」

「そのはずやけど……。まあ、ええか。動き続ければ、いずれ分かるやろ。さて、他にも潜んどる蟻はまだおるやろうし、まずはそいつらを始末しよか」

「ああ」

「ほな、行く——」

再び移動を再開しようとしたその時、ラミナの耳が何かを捉えた。反射的にキルアの襟を掴んで、後ろへと引き込む。

「!?!」

キルアが目を丸くして驚きの声を上げようとした、その時。

ヒュウン！

バシユ!!

何かが風を切る音がして、ラミナの右肩から血が噴き出したのだった。

## #126 ソゲキ×ノチ×ツイゲキ

ラミナは右肩から血を噴き出して、身体を仰け反らせる。  
キルアは放り投げられて着地しながらラミナを振り返る。

「ラミナ!!」

ラミナは右足を後ろに滑らせて倒れないように堪え、後ろに跳び下がる。

顔を顰めながら右肩を左手で押さえる。

「焦んな。掠っただけや。っ!! 2時の方角!!」

「!!」

ラミナの忠告にキルアは顔を向けて構えるも、

バシユン!!

「あぐっ!?!」

左首元に衝撃を感じて、後ろに吹き飛ばされた。

しかし、キルアは倒れることなく、両足で踏ん張って堪える。

「なにつ、か付いてる……!?!」

キルアは顔を顰めながら、首元に付いている何かを掴む。

それはデカイ奇形のノミのような生き物だった。

「ノミ……!?!」

「止まんない!!」

「!!」

キルアは目を丸くするが、ラミナの怒号に弾かれたように走り出す。

ラミナはブロードソードを具現化して、キルアの隣を走る。

そして、キルアが持つノミに目を向ける。

「撃たれた箇所は?」

「ダメージはほとんどないけど、血の勢いが止まらない。そっちは?」

「うちはもう止まっとる。十中八九、そのノミのせいやろな」

「【円】は?」

「あかん。発砲音すら聞こえんのやから、最低200mは離れとるやろうな」

「方角は？」

「2時から5時の間。ジャングルの外の可能性が高いな。一気に行くで」

「ああ」

ラミナとキルアは急転回し、狙撃位置へ向けて全速力で疾走する。

【円】を維持しながらで、ブロードソードでいつでも斬り落とせるように備える。

キルアはその斜め後ろから追走していた。

「上、上がるで」

「ああ」

2人は枝の上に跳び移る。

「やっぱ地面の振動で俺達の位置を？」

「やろうな。空は誰もおらんみたいやし。それにしても、ええ腕しとなな」

ビュン！とラミナ達の真下を蚤弾が通過する。

それはラミナ達が地上を走っていれば、間違はなく直撃していたコースだった。

「やっぱ敵は地上の足音しか分からんみたいやな」

「けど、近づけば流石に樹の振動も伝わるぜ？」

「その時はその時やて。それにうちはもちろん、お前なら能力で躲せるやろ」

「まあな」

2人は同時に跳び上がって、ジャングルの上に出る。

進行方向に見えたのは、高い岩が何本も聳え立つ岩礁地帯だった。

その1本の高い岩の上に小さな人影が見えた。

「あいつか！」

標的を捕捉した2人は、更に速度を上げるのだった。

狙撃手も2人に捕捉されたことに気づいた。

「見つかったしまったぜえ♪」

『では、予定通り動くのですます！』

「オッケー」

『ボクも出るのですます！ しっかりやるのですます！』

「オッライ」

狙撃手は岩から飛び降りる。

ジャングルから飛び出したラミナとキルアは、もちろんそれを見逃さなかった。

「逃がすかよー！」

「あれは逃がすと面倒やでな」

追撃しようと疾走する2人。

だが、突如目の前の地面が爆ぜる。

「!!」

「モルモ!!」

飛び出してきたのは、オーバーオールを着たモグラを思わせるキメラアント。

ラミナは一瞬顔を顰めて、キルアに顔を向ける。

「キルア！ 追え!!」

「!! 分かった!!」

キルアは足を止めず、むしろ一瞬だけ【神速】を発動して一気に駆け抜ける。

ラミナも速度を緩めずにモグラ蟻へと攻めかかる。

だが、モグラ蟻が飛び出してきた穴から、更に数体のキメラアントが飛び出してきた。

「!! ちっー！」

ラミナは急ブレーキをかけて横に跳び、キルアを追わせないように回り込んで進路を塞ぐ。

「モルモルモル。上手く分断出来たのですます」

モグラ蟻のモルモは、部下を周囲に展開させながら笑う。

「……お前がうちのらの位置を探とった奴か」

「モルモですます！ コローチェ様の仇！ 覚悟するのですます！」

つぶらな瞳をしたモルモはビシッ！と太い爪でラミナを指しながら



ら言う。

それに合わせて周囲のキメラアント達も武器や爪を構える。

「……今更お前ら程度が相手になる思ってるんか？」

「関係ないですます！ コローチエ様が見せた覚悟にボクらも続くですます！」

「……（嘘やない……。けど、それだけでもなさそうやな……）」

ラミナはモルモ達からコローチエと同じ覚悟を感じ取ったが、それだけではない何かがあると感じた。

（現状を考えれば、ここで全滅するよりも撤退するべきや。コローチエを倒したうちに、手下の自分らが勝てるわけないんは理解しては……。それでも挑んでくるだけの何かがある。しかも、わざわざこちらを分断までして……。罠……もやろうけど、情報収集が狙いか？ うちの能力を探ろうとしとるつちゅうわけか）

モルモ達の狙いをすぐに看破したラミナ。

それはつまりキルアの方にも、それなりの数の敵が待ち構えているはずだ。

（師団長が向こうにおつたら、ちと厄介やな……。とつと倒して、合流しよか）

ラミナが左手にファルクスを具現化する。

すると、1匹のキメラアントが前に出てきた。

筋肉質の身体に、胸元が大きく開けたシャツ、黒のズボン、そして蝙蝠を思わせる翼をマントのように靡かせている。

ウエーブがかったミディアムロングの金髪で、濃いめの顔つきをしているナルシスト風の雄型キメラアントだ。

「うふふふ♪ 可愛い顔して怖そうねえ」

口元に手を当てて、高めに作った声と女口調で話す蝙蝠蟻。

「ヴァトパス！ 見せてやるのですます！」

「うふふふ♪ お任せよおん」

ヴァトパスは妖艶な笑みを浮かべて頷くと、頭上で両手を組んでオーラを集中させ、

「ふんぬはあ!!!」

思いつきり野太い男の声で叫びながら、組んだ両手を地面に叩きつける。

するとオーラが何条もの線となってラミナを囲うように広がっていき、オーラ溜まりが二十か所ほど出来る。

そして、そこから土や草、根が盛り上がり、土塊のヴァトパスを形作る。

現れた20体ほどの偽ヴァトパスは、ボディビルダーのようなポーズを決めて、ラミナを取り囲む。

「ほう……」

「おほほほほ！ ただの土人形と思つてると痛い目を見るわよ！ アタシの【ビューテイクレイド】の戦闘力はそんじよそこらの下級兵より上よ！」

高笑いをあげながら得意げに語るヴァトパス。

ラミナは呆れ顔を浮かべ、小さくため息を吐く。

そこに背後に回り込む気配を感じ取った。

「シッカーー!!」

鹿の角を持ち、左腕が螳螂のような鎌状の爪になっているキメラアントが、掛け声と共に左腕を掬い上げるように振り上げ、地面を掘り起こしてオーラと共に土石流を放つ。

更にその反対側に犬の頭にゴリラの腕を持つキメラアントが立ち、大きく口を開けてオーラを収束させる。

「ウウオーー!!!」

遠吠えと同時にオーラをエネルギー波として放出した。

ラミナは顔色一つ変えることなく、高く跳び上がって躲す。

そこに槍を振り上げた狐顔のキメラアントと、二振りの鉈を振り上げる豚顔のキメラアントが飛び掛かって来ていた。

（念も連携もよう考えられとるな。あの कोरोチエの部下だけはあるわ。まあ……）

ラミナはキメラアントの連携に感心しながら、両手の武器を消して柳葉飛刀を具現化する。

「まだまだ甘いわー」

叫びながら柳葉飛刀を投擲して、飛び上がっていた2匹のキメラアントの額や胸に突き刺す。

柳葉飛刀を消して鎖鎌を具現化し、犬頭のキメラアントに向けて放つ。

犬頭キメラアントは息を吸い、オーラの咆哮で纏めて吹き飛ばそうとしたが、

鎖鎌が口を開けた巨大な狼の頭部になって、噛みついてきた。

「グウア!?!」

攻撃することも忘れて驚いた犬頭キメラアントは、一步後ずさった直後上半身を喰い千切られる。

落下しているラミナは鎖鎌を消して、右手にレイピアを具現化する。

そして、鹿頭キメラアントに向けて鋭く3回突き出し、額、喉、胸に穴を空ける。

「シガツ!?!」

着地したラミナは左手にファルクスを具現化して【円】を発動し、ヴァトパスや偽ヴァトパスを全て範囲内に取り込む。

「なに!?!」

驚くヴァトパスを尻目にラミナは躊躇なくファルクスを二度振るう。

直後、偽ヴァトパスは首、四肢、腰など斬り飛ばされてバラバラになり、地面に崩れ落ちる。

ヴァトパス本体も首、腰、右肩、右手首、左脚付け根が斬り飛ばされていた。

「な、なに……が……」

「……ちっ。逃げよったか、あのモグラ」

ラミナはファルクスを消して、舌打ちする。

一番最初に飛び出してきたモルモがいつの間にかいなくなっていた。

【円】でも感じられなかったことから、恐らくヴァトパスが能力を発動し、波状攻撃を仕掛けた時にいなくなったのだろうとラミナは考える。

(やっぱ狙いはうちの能力を探るためか……)

少し離れた場所の地面に穴が開いていた。

そこからモルモがラミナ達の戦いを観察していたのだろうと推測する。

「ちっ……(これでうちの情報は護衛軍とレオルとやらに渡ったっちゆうことか)」

また舌打ちし、顔を顰めたラミナはヴァトパスに目を向ける。

ヴァトパスも顔を顰めてラミナを睨んでいた。

「やってくれたわね……。流石は कोरोチエ様達をあつという間に倒した子だわ」

「……レオルとやらはどこにおるんや？ あの狙撃手がおる方か？」

「……いえ、恐らくはここから東……中央部付近で踏ん反り返ってるわ。もつとも、今は苛立つて歯軋りしてるでしょうけどね……」

正直に問いに答えるヴァトパスに、ラミナは片眉を上げる。

「えらい素直に話すやないか」

「アタシは कोरोチエ様の部下、更に言えばビトルファン様の部下なのよ。ハギヤなんて知ったこっちゃないわ」

「……ハギヤ？ 来とるんはレオルっちゆう奴やろ？」

「改名したのよ。理由なんて知らないし、興味もないけど」

「なるほど……」

「アタシ達はハギヤの援軍としてここに来たの。全く……ヘタクソな指揮のおかげで、アタシ達だけじゃなくて कोरोチエ様まで犬死になんてね……」

「……それが兵士っちゆうもんや。うちらも含めて、な」

「……そうね。あの化け物達に挑むなんて、アタシは死んでもゴメンだわ。さ……さっさと行きなさいな。アタシはどうせもう助からないし、流石にこれ以上話すことはないわ」

「さよで……ほな、さいなら」

ラミナは肩を竦めて背を向け、背を向けたまま軽く手を上げてヴァトパスの元から去る。

ラミナは腕を組んで今後の予定を考える。

(キルアの方はどうするか……？ 師団長の方も無視出来へんでなあ)

モルモも恐らく師団長の元に向かっているはず。

(護衛軍に知られるんは止めようがない。けど、動き回れる師団長の方は、ここで消しておきたいところやな)

だが、キルアの方に行けば、師団長も姿を眩ませるだろう。

部隊全滅とモルモが手にした情報を理由に撤退すれば、護衛軍から処分されるまではいかないはずだ。

それに追い込まれた獣は厄介事を呼び込むというのがラミナの経験則だ。

しかも、その獣は念能力を使うことが出来る猛獣。

殺せる時に殺すが最善。

ラミナは駆け出して、レオルがいるであろう場所を目指す。

空を飛んでいるであろう鼻に、キルアが向かった方向を指差して。

その頃、レオルはようやく届いた報告に絶叫したくなっていた。

『何の冗談だ!?!』

『冗談ではないですます！ 部隊はほぼ壊滅！ コローチェ様とフラッタは死亡したですます！』

『それでテメエはこのこ逃げ帰ってきたってわけか!?!』

『ボクはコローチェ様の命令で護衛軍の方々に敵の情報をお伝えに行かねばなりませんですます！ 地底湖に関しても観測、伝令用の部下を配置していますです！』

『くっ……!』

『では、ボクは宮殿へ戻るですます!』

『おい、モルモ！ モルモ!』

「ちい！ 俺にも情報寄せってんだよ……!」

レオルは何も情報を寄越さずにいなくなったモルモに怒りを覚える。

(くそっ！ コローチエが死んだのはいいが、フラツタは予想外にも程がある！ 敵に空を飛べる奴がいたのか……!? それとも狙撃系の能力か？ ……NGLで使った遠距離攻撃？ いや、あれはネフェルピトーとアモンガキッド2人がかりで逸らすのが精一杯だった代物だ。使えばかなり目立つ。他にも能力がある？ それともガキの方か？)

レオルは完全に思考の渦に嵌っていた。情報が無いので当然ではあるが。

だが、レオルはラミナと違って念能力に通じているわけでもなく、戦闘の経験も浅い。念の修得も他人の力に頼りまくってきたことも、ラミナ達の念を推測する材料を不足させている。

(くそっ!! 敵の能力を探ろうにも、もう俺に手札がねえ……!! ヒナはチートウの除念で動けなくなっちゃったし、そのチートウも宮殿で能力はこれからだ。他の師団長を呼んだところで、当て馬になるわけねえだろうし……)

すでに預かった部隊は壊滅だ。

地底湖にいるのは海で活動する生物と混ざった兵隊蟻達だ。地上に呼んだところで、ほとんど戦力にならない。

更にまだレオルはコローチエばかりに気を取られて気付いていないが、コローチエの部隊は王の配下の中で実は最も兵隊長クラスが多い精鋭部隊だった。

念を扱える兵隊蟻も多く、連携も鍛えていたこともあり、最も練度が高い部隊だったのだ。

それをレオルは全く活かすことが出来なかった。これはコローチエのミスもあるが、配置や作戦を決めたのはレオルなので、一番やらかしたのはレオルであるのは間違いない。

(地底湖部隊の報告を待つか？ ……いや、今、俺の周囲を守る奴がいねえ。ここで敵のどっちか一方でも来たら勝ち目が薄い……! こは一度退くべき!)

レオルは撤退を決めて、即座に身を翻して駆け出す。敵が来るかもしれないのに、のんびり歩いて移動など出来るわけがない。

だが、その判断を下すのが、少しだけ遅かった。森を抜けて岩場に入った時、

「!!!」

背中に怖気が走って、反射的に振り返る。

「ちっ……勘がええやつちやな」

スウと音もなく姿を現したのは、ラミナだった。

「……テメエがアモンガキツド殿と戦って生き延びた女か……」

「そう言うお前はハギヤヤんな？ 逃げまくりの獅子男」

「っ!! ……ハギヤ？ 誰だ、そいつは？ 俺はレオルって名前だな」

「あつそ。まあ、どうせ死ぬんやから、どうでもええわ」

ラミナは心底どうでもいいとばかりに適当に答えて、ファルクスを具現化する。

それにレオルは歯を食いしばり、手を握り締める。

（くそっ!! ……ここで……こんなところで死ぬわけにはいかねえんだよ!!）

レオルは無我夢中で能力を発動し、右手に小型の機械を具現化する。

【レンタルポッド謝債発行機】。

レオルの能力。

他者の能力を1回1時間レンタルすることで発動することができる。

ラミナは目を細めて、ファルクスの柄を握り締める。

（このタイミングで武器でもない物を具現化……。操作系……？ けど、念獣を具現化して操るタイプには見えん。かといって生物や物を操る様にも見えん。実物を操るんやったら、今具現化するんは遅すぎて不自然。つまり操作系能力やない。なら、最も可能性が高いんはうちやクロロと同系統……！ 複数能力を保存、または発現するための媒体!!）

見ただけでレオルの能力を看破したラミナは、すぐさま【円】を發動する。

「っ!? ぐっ!!」

レオルは【練】を發動しながら、発行機を手早く操作していく。  
(早くー…ここから逃げられる能力を……！)

しかし、無慈悲にも先にラミナの攻撃の方が速く、ファルクスが二度振られる。

直後、レオルの身体が切り裂かれ、血が噴き出す。

血が噴き出したのは右肩、右脇腹、左太腿、右上腕、左肘。

左肘から先は腕から離れ、地面へと落ちていく。

「ぐあああああ!？」

レオルは目を見開き、全身から汗を噴き出しながら絶叫する。

ラミナは小さく舌打ちして、ファルクスを消してブロードソードを具現化し、レオルに斬りかかる。

だが、その前にレオルが動いた。

「あああああオオオオオオオオ!!」

血走った目を見開いたまま、発行機のボタンを押す。

すると、発行機から小さな紙が排出され、レオルはそれをなりふり構わず牙で引き裂いた。

「!!」

ラミナは僅かに目を見開くも、能力発動前に斬り殺せばいいと、そのままレオルに斬りかかる。

しかし、ラミナが次に目にしたのは、

戦闘機のような翼を背中に生やしたレオルだった。

「なっ……!!?」

「飛べえええええ!!」

レオルの懇願にも近い叫びに応えるかのように、翼のエンジンから火が噴き出して、勢いよくレオルを空へと押し上げる。

「ちい!!」



「おおぼえてろよおお!! 下等な人間があああ!! 絶対……絶対こそ  
の首を喰い千切つてやるからなああああ!!」

レオルは屈辱と怒りのままに吠えながら猛スピードで飛び去って  
いく。

ラミナはレオルを見送るしかなく、ブロードソードを消して顔を顰  
める。

〔天を衝く一角獣〕は後1回……。アレ程度にや使えん、か。流石に  
追いかけるんは無謀やな)

小さくため息を吐いて、ポケットに両手を入れる。

(手負いの獣にしてもたんが吉と出るか、凶と出るか……。奴の能  
力がどこまで他人の能力を使えるか次第やな。あの手の能力は面倒  
な制約があるはず。確実なのは『対象の能力を見る、または聞くこと』  
『対象に直接接触して条件を満たすこと』。後は回数制限や時間制限  
次第やけど……。ほぼ間違いなく本来の能力の持ち主は、能力が使え  
なくなつとるはず。しかし、今の蟻達に命綱でもある能力を貸し出す  
とは思えん。つまり、本人の意志関係なく能力を徴収するタイプ)

ラミナは来た道に戻りながら、考察を続ける。

(少なくとも、うちは奴に能力を奪われる可能性は低い。武器だけ見  
せても意味がないんは、同じ能力のクロロのお墨付きや)

ラミナの具現化武器は【刃で溢れる宝物庫】の能力によって生まれ  
た副次的能力と言える。

故にラミナの能力を奪う場合、【刃で溢れる宝物庫】について知らね  
ばならないのだ。

(問題は他の連中の能力。特にノヴとナツクルの能力は奪われれば最  
悪)

モラウの能力は煙管を媒体とするため、能力をコピーしたところで  
発動条件を満たせない。

だが、ノヴとナツクルはそこまで難しくはない。

そして、その2人の能力は今回の作戦の要とも言える物だ。

絶対に奪われるわけにはいかない。

(とりあえず、全員に連絡しとかなあかな)

携帯を取り出して素早くメールを打つ。  
すると、突如ティルガが真横に下り立った。

「あ？ ティルガ？」

「キルアが重傷だ。今ブラールを救助に向かわせている」

一瞬ティルガの言葉を理解出来なかった。

「……なんやと？」

「敵の能力が恐ろしく強力だったようだ」

ティルガはブラールの羽根をラミナに手渡す。

目を瞑ったラミナが見たのは、血を大量に流して倒れているキルアと謎のタコ。

そのすぐ横にはキメラアントの頭が2つ転がっており、何やら叫び合っている。

キメラアントと思われるタコは、何故かキルアに手を伸ばして助けようとしていた。

「……場所は？」

「すぐ近くの地底湖だ」

「……ティルガ、ルオントン市に戻って、軍の駐屯地から救急箱持てるだけ持ってこい。車盗んでもええ」

「承知した！」

ティルガは頷くや否や、すぐに全力で駆け出した。

ラミナもすぐさま走り出し、全速力で地底湖に向かうのだった。

キルアの意識はもはや消える寸前だった。

(や……べえ……。血い流し……過ぎた……)

地底湖に飛び込んで、狙撃手―イカルゴにあつという間に勝利したキルア。

だが、イカルゴの漢気が気に入り、殺さずに助けたのだが、その隙を突かれて地底湖に潜んでいたオロソ兄妹の能力に襲われた。

オロソ兄妹の能力【死亡遊戯】。

妹が具現化したバツヂを取り付けた対象に発動し、兄が具現化したダーツゲームとリンクする。

ダーツの的が対象の身体の部位と繋がっており、ダーツが刺した的とリンクした部位にダツが突き刺さる。このダツは対象に触れるまで存在しないため、防ぐことも避けることも基本不可能なのだ。

この能力は一度発動するとオロソ兄妹ですら解除できず、このダーツゲームに失敗すると、それまで相手に与えていたダメージ全てがオロソ兄妹にはね返るといふ制約を背負っている。

これにキルアは基本成す術なく何度もダツに身体を貫かれる。

それでも何とかダーツゲームの種類とオロソ兄の性格を看破して、最後の一投を【神速】で防ぎ、やられた振りをしてオロソ兄妹を誘き出して仕留めることに成功した。

だが、それまでのダメージと、丸1日不眠不休で動き続けたことによる消耗によって限界を迎えてしまい、遂にその場で倒れてしまった。

全く思うように体が動かず、明らかに大量出血によるショック状態に陥っていた。

(くそ……せつかく……ここ……まで……来たのに、よ……)

ようやくラミナの背中が見えてきたのに。

ここで終わってしまうのか。

遂に視界までボヤけてきた。

(悪い……ゴン、ラミナ……役に……立て、な……)

意識が闇に落ちようとした、その時。

キルアの腕をイカルゴが掴んだ。

「……………タコ?」

「タコってゆうなああああ!!」

イカルゴがお決まりになっている雄叫びを上げた、その時。

バサア!!

キルアとイカルゴの真上で翼が羽ばたく音がした。

イカルゴが弾かれたように上を見上げると、ブラールがゆっくりと降下してきていた。

イカルゴは突然のブラールの登場に目を丸くする。

キルアはブラールだと理解したところで限界を迎えて気絶した。

「お前は……!? なんて、こんなところに……!?」

「……」

「コイツを……? お前、人間の仲間に……!? いや、今はそれはどうでもいい! コイツを病院に運びたい! 手伝ってくれ!!」

「……」

「上に仲間がいるのか……。そいつならコイツを助けられるのか!」

「……」

「分からないって……。医者を探すなら俺が知ってる! この先の地下水流に乗ればすぐだ!!」

イカルゴの言葉に、ブラールは判断できずに僅かに眉を顰める。

だが、突如地底湖に顔を向ける。

「おい! 早く決めねえとコイツが死んじま——!!」

イカルゴが苛立ちながらブラールに怒鳴ると、イカルゴも地底湖の上を移動する人影を視界に捉えた。

それに目を丸くすると、その人影は猛スピードで近づいてきて、ブラール達の傍に着地した。

「つたく、面倒なところで倒れよってからに」

【親愛なる姉様との絆】を使って移動してきたラミナは、小さくボヤきながらも素早くキルアの傍に跪く。

「……ちっ。首と腹の傷か……」

全身穴だらけだが、特に首と腹部からの出血が酷かった。

首はイカルゴのノミによるもので、腹部は何度もダツで刺されたも

のだ。

ラミナは上着を脱いでキルアの腹部に巻いて縛る。

「とりあえず、上に戻るか。今ティルガに救急箱取りに行かせとる」

「……」

「待ってくれ！ この地下水流の先にモグリの医者がある！ 裏社会専門の闇病院だ！ 王達の手も届いてない！」

「いつ襲われるか分からん場所に連れていけるかい。それやったら、まだ上の方がマシや」

ラミナはキルアを背負いながらイカルゴの提案を否定する。

「なんでお前がキルアを助けようとするんか知らんけど、気になるんやったら勝手に来いや。ブラール、お前がええんやったら運んだり」

「……」

ラミナは再び【親愛なる姉様との絆】を発動して、入口へと戻る。

ブラールはイカルゴに顔を向け、イカルゴが頷いたので渋々と言った感じで足を掴ませて飛ぶ。

その後、地上に戻ったラミナは気絶したキルアを背負ったままルオントン市目指して駆け出し、ブラールも後続く。

イカルゴは地上に出た所で放り出され、そこからは放置されたが全速力で追いかける。

1時間後。

ブラールの鼻によって、救急箱を乗せた車を運転するティルガと合流に成功したラミナは、キルアの治療を始めるのだった。

---

ラミナ☒sウエポン！（ホントにお久し！）

・【生意気な雷童子<sup>ブリッツ・ギア</sup>】

チャクラムに付与された能力。

キルアの【神速】を模倣した能力。

手元で回転させることで発動・発電し、身体に装着することで全身に電気の負荷をかけ、身体能力を急激に向上させることが出来る。

ただし、放出することは出来ず、能動的にしか身体を動かせない。

キルアで言う『電光石火』限定の能力である。

ただし充電を必要としないため長時間の運用が可能であるが、ラミナは電流に耐える訓練をしていないため、現在では長時間の使用には耐えられない。

更に他の者に使用することも出来ず、重ね掛けも不可能である。

制約は『手元で回すことで発動する』『回転速度に合わせて電力が上がる』『重ね掛けは出来ない』

## #127 イカリ×ト×イカルゴ

ラミナから命からがら逃げ延びたレオルは、森の中で斬り落とされた左腕を押さええながら蹲っていた。

「グウウウ……!! チキシヨオオ……!」

大量の脂汗を流しながら歯を食いしぼる。

「絶対え許さねえ……! 殺す、殺してやる……!!」

額を地面に擦りつけ、血走った目を見開きながらラミナへの恨み言をずつと呟いていた。

(クソがあ……!! 俺様の腕をよくも……!)

全ては油断していたレオルの自業自得なのだが、もちろんレオルは認めない。

レオルはゆつくりと立ち上がる。

「クソ……! 獲物2匹を仕留めるだけの仕事だったはずなのに……!  
! フラツタも部隊も失って、終いにや片腕まで……!」

成果はほぼゼロ。

標的が何者かが分かったただけだ。

(ネフェルピトーに治療を頼むか? いや、俺の腕程度で手を取られるわけにはいかねえって断られるか……。そもそも斬り落とされた腕もねえしな)

どう言い繕っても失敗したのは事実だ。

モルモの報告を聞いた護衛軍はレオルを容赦なく斬り捨てるだろう。

ここからレオルが逆転するのは不可能に近い。  
すると、そこに。

「あはははははは!! あははははははははは!!」

と、場違いな笑い声が聞こえてきた。

「あ? この声は……」

顔を向けると、少し離れた場所を槍を持ち、功夫服を着た蜥蜴顔の

キメラアントが猛スピードで走っていた。

「あいつは……！　おい！　バジリヤン！」

「んん？　おお!?　これはこれは、レオル隊長ではないですか！　あははははは!!」

バジリヤンは楽しそうに笑いながら、レオルの元へと駆け寄ってきた。

「おお!?　レオル隊長!?　そ、その腕は!?」

「……敵と遭遇しちまってな。気にすんな。それよりバジリヤン。お前、こんなところで何してる?」

「おお！　そうでしたそうでした！　モルモ殿から地底湖に誘い込んだ敵について偵察し、その後レオル様と護衛軍の方々に報告せよと御命令を受けまして！」

「そうか……。お前に頼んできたのか……」

「あははははは！　僕、 कोरोチエ様ほどではないですが、足には自信がありますので！」

バジリヤンはグリーンバシリスクのキメラアントだ。

水の上を走り渡ることが出来、更に足もそこそこ速い。

そのため地底湖では陰に隠れて、キルアの戦いを観察していたのだ。

バレたらヤバいので、ほとんどイカルゴとオロソ兄妹からの念話での情報だった。

そして、戦いが終わるや否や「あははははははは!!」とバレないように超小声で笑いながら水の上を走って逃げ出したのだ。

「それで？　獲物は仕留めたのか？」

「はい!!」

あまりにも速攻で領かれたので、一瞬レオルは理解できなかった。

「……ホントか？」

「オロソ兄妹が見事に仕留めました!!　2人から報告が来たので、間違いないと思います!!」

まさかの吉報にレオルは思わず笑みを浮かべる。

（これなら仕事を最低限こなしたと報告出来る！　まだ次に繋がられ



て、挽回するチャンスを手にする可能性がある……!」

「よくやった! お前は宮殿に戻ったモルモと合流しろ。俺様はネフェルピト―殿に連絡を入れて、この後の指示を仰ぐ」

「あはははは!! 分かりました!! では、失礼しまっす!!」

バジリヤンは頷いた直後、駆け出してレオルの前から去っていく。レオルはそれを見送ることなく、痛みも忘れてすぐさま携帯を取り出す。

『——もしもし?』

「レオルです」

『ああ、お疲れ。どう? 仕留めた?』

「それが……1人は仕留めたのですが、もう1人は返り討ちに会い、逃がしてしまいました。申し訳ありません……」

『ふうん……。強かったの?』

「……お預かりした部隊は水軍以外壊滅。コロ―チエの部隊もモルモ以外は……。私も片腕を奪われ、フラツタがやられました」

『あらら……。随分と派手にやられたねえ』

「今、モルモがそちらに報告へ向かっていますが……仕留め損なつたのは例のNGLでアモンガキッド殿と戦って生き延びた女です。やはり、王を狙つてのことでしょう」

『へえ……。あの女が来てるんだ。ちよ―つと面白くなってきたかニヤ?』

「……どうしますか? 情けない限りですが、追撃するには少々戦力が……」

『全つ然足りないだろうねえ。君もやられたみたいだし……。いいよ、一度戻っておいで』

「はっ」

通話が終わり、携帯を仕舞う。

そして小さく安堵の息を吐く。

「はあ……なんとか、持ちこたえたか……」

だが、まだまだ綱渡り状態だ。それも針金レベルの綱。いつ切れてもおかしくない。今切れてもおかしくない。

「問題はここからだ。次の戦いで俺の立場……。チートウなら貸しがあるから何とかなるかもしれないねえが、他の連中ならどうにかして言い包めねえと……。ウエルフィンだったら、かなり面倒な取引になりそうだな……」

レオルは再びラミナへの怒りが膨れ上がってきて、歯軋りしながら宮殿を目指すのだった。

ラミナは車の後部座席でキルアの治療を行っていた。

上着は脱いだままで、救急箱から針と糸を取り出してキルアの服を脱がす。

「輸血パックまであったんか。助かるわ」

「すまないが、扱い方が分からなかったから適当に運べるだけ運んだ。他にも保存食や酒などもあったから一応持ってきたが……」

「構へん構へん。コイツは頑丈やし、少しくらいの毒や菌にも耐えられる。少しくらい扱いが雑でも問題ないやろ」

申し訳なさに眉尻を下げるティルガの言葉に、ラミナは処置を続けながら苦笑する。

素早く、されど繊細に傷の消毒と縫合を行っていく。

「……傷の治療まで出来るのか……」

「縫合はおっかない姉が得意やでな。傷の治療は出来た方が暗殺の仕事に差し支えんからな。簡単に手を組めん裏の人間は、そう簡単に病院やら行けんからな」

イカルゴが言っていた裏社会専門の闇病院だとしても、金や裏取引で売られる可能性もあるし、毒殺される可能性もある。

特に殺しを専門とし、賞金首になりやすい暗殺者は尚更警戒が必要となる。

なので、自分で治療ができるに越したことはないのだ。

「それにしても、どんな能力にやられたんや？　おい、タコ。お前の能力か？」

「タコってゆうなあー!!」

「言うなって、タコやろが」

「ぐう!! ……はあ。俺じゃねえよ……。いや、首の傷は俺だけどな」  
「あ？ あの狙撃、お前やったんか？ うちが見た時人間やったはず  
やったけど、タコって姿まで擬態出来たか？」

「あれも俺の能力の1つだ。死体に潜り込んで操ることが出来る。  
で、他の傷はオロソ兄妹って奴らの能力だ」

イカルゴはオロソ兄妹の能力を簡単に説明する。

それにラミナは納得の表情を浮かべる。

「……なるほど。そらあ流石にキルアでも手間取るか……（つちゆう  
か、うちやったらやられとったかもしれん……）」

ラミナは流石にダーツゲームの種類までは把握していない。

念の分析に気を取られて、そこまで頭が回らなかった可能性が高い。  
い。

しかも、話を聞く限り、そう簡単に除念も出来ない。

バツヂに気づけばいいが、気づけなければ除念しようがない。相手  
がいないから【月の眼】も使えない。

（キルアやからこそ、トドメを防ぐことが出来た。……下手したら全  
滅しとったな）

やはり今後も油断は出来そうにないと改めて実感するラミナ。

だが、相互協力型能力であるのは不幸中の幸いだった。

（もし単一の能力やったら、あの獅子男に使われとったかもしれん  
……）

生首状態ではあったが、キメラアントの生命力ならば、あと半日は  
生き延びるはずだ。つまり、その間はあの兄妹の能力を使うことが出  
来るということだ。

「ああ、そうや。ハギヤの奴、なんか改名しとったで？」

「改名？」

「レオルとか名乗とったわ。理由は知らんけど」

「……奴の事だ。能力を創ったことで、それまでの自分と決別すると  
でも考えているのだろう」

「ふうん。またガキっぽい頭しとんなあ。とりあえず、ハギヤ、ビトル

ファンがここにおるんは確定っぽいぞ。タコ、他にも師団長来とるんか?」

「いい加減タコって呼ぶなあああ!!」

「名前知らんし」

「あ、そうだった。いいか!? 俺はイカルゴだ! イ・カ・ル・ゴ・な!!」

「なんでイカやねん。タコの癖に」

「うるせえな! 俺だって……俺だってイカに生まれたかったんだよ  
おおおお!!」

「……………」

悔しそうに涙を流しながら崩れ落ちるイカルゴに、ラミナ達は呆れた目を向ける。

「人間やなくて動物の方の記憶もあるんか……。つちゆうか、タコってそんなこと考えとるんやな。お前らもあるん?」

「あることはある。だが、あ奴のような感情までは憶えていない」

「……………」

「さよぞ。んで、イカタコ」

「んだよ、イカタコって!? イカで止めてくれよ!! イカで止めてください!!」

「やかましいわ。ええから他の師団長の情報、さっさと吐けや」

「うぐう……………! ……俺が知ってるのはハギヤ、ビトルファン、ウエルフィン、ブロヴーダの4人だ。けど、お前らと戦う直前にデートウも来たって話も聞いたぜ」

「メレオロンつちゆう奴は?」

「少なくとも俺は知らない。多分、俺と一緒にいた他の連中もな」

「……………はあ。喜ぶべきなんか、厄介なんが他の場所におるんを嘆くべきか……。まあ、ここにおらん奴のことを考えとる場合ちゃうか」

「そうだな。残りの5人がここにいるのは事実。そちらの方が差し迫った問題であろうな」

「せやな。ま、今はキルアの回復が最優先やな。もうすぐモラウ達の作戦も始まるし……。そうなれば連中はうちらを狙う余裕はなくな

るやろ」

レオルと会った時の状況を加味して、すでに王達の元に兵隊蟻はほとんど残っていないだろうとラミナは考える。

「……よし」

ラミナはキルアの傷の手当てを全て終える。最後に点滴と輸血の処置を行って、一通りの治療を全て終了した。

両手を水で洗い、アルコールで消毒して車から降りる。

「ふう〜……」

「もう大丈夫なのか？」

「明日の朝まで容体が変わらんかったら大丈夫やろ。今のところ落ち着いとるし、大丈夫やと思うけどな」

ラミナはトランクを開けてそこに腰掛ける。

食料が詰められた箱から酒を取り出して蓋を開け、直接口を付けて瓶を傾ける。更に缶詰を開けて中身を口に放り込む。

「んで？ イカ、お前はこれからどうするつもりや？」

「……どうするって……言われても……」

今更、王の元には戻れない。戻ったところで、またキルア達と戦わなければいけない。

しかし、国外に出るのも気が進まない。自分の見た目はどうやっても人としては生きていけないからだ。人に紛れることなど絶対出来ない。

死体を操って紛れ込んでも、1カ月もそこにいられない。死体である以上腐っていくからだ。

だが、他に行く場所はない。

どこに行っても自分は異形の生き物だからだ。

「……」

「……ま、キルアと縁があるんやったら、キルアが起きてから決めたらええわ。もちろん、何もせんかったら、やけどな」

ラミナは目を細めてイカルゴを見据える。

イカルゴは身体が締め付けられたような圧迫感を感じて冷や汗が流れる。

「っ……！ わ、分かってる。俺はもうお前らと戦うつもりも敵対する気も無いさ……！ あいつには命を助けられたしな」

「……やったら、ええけどな」

ラミナは視線を外して、食事を再開する。

イカルゴは大きく息を吐いて、

「はあく……。……それにしても、まさかアンタ達が人間と一緒にとはな」

イカルゴはテイルガ達に顔を向ける。

テイルガはラミナから缶詰を受け取りながらイカルゴに顔を向ける。

「王に降った者がいるように、人間に降る者がいてもおかしい話ではあるまい？ 念や世界についても人間の方が詳しいのだから」

「それはそうだがよ。なんでここにいるんだよ？」

「このまま王達を暴れさせれば、人間に降ったコルト達の立場が危しい。それに……。やはり元人間の身として、奴らの所業は目に余る。1人くらい、生み出してしまった責任を取るべきだろう」

「……そうか」

イカルゴは悩まし気に顔を顰めて、何やら考え込む。

テイルガはそれを見つめながら缶詰を開けて、車の横に座る。その横にブラールも座り、同じく缶詰を開けて食べ始める。

ラミナは乾パンの箱を取り出して、イカルゴに投げ渡す。

「うおっ……。い、いいの？」

「まだあるでな。最後の晚餐になるかもしれんのやから、味わって食べや」

「……」

イカルゴは頬を引き攣らせるも、何も言わずに大人しくその場に座って箱を開ける。

ラミナは酒瓶を傾けて一口飲むと、イカルゴにある問いかけをする。

「お前らってどうやって能力を創つとるんや？ NGLでは護衛軍から碌に教わつとらんかったんやろ？」

「……護衛軍の1人、シャウアップだ。奴の繭で一度寝ると、催眠誘導的な感じで自分に合った能力を創ることが出来る」

ラミナはイカルゴの話聞いて、顎に手を当てる。

「ふうん……なるほどなあ。それで選別した国民に能力を持たせると。お前らはその実験の一環か……」

「恐らくな。けど、誰でもってわけじゃなさそうだったぜ。知性が低い下級兵はあまり習得できなかったしな。目覚めるまで時間もかかってたし」

「……能力のイメージが上手く纏まらんちゆうことか。お前は何日くらいかかったんや?」

「目覚めるまでなら2日くらいだ。そこから能力を完成させるのに3日くらいかかった」

「……なるほど。それで納得出来たわ。お前らの歪さつちゆうか、あべこべさが」

「あべこべ?」

「能力を使うくせに【練】や【堅】は全然使わんへんねん。普通は能力……【発】は四五行や【堅】【凝】をある程度実践レベルまで鍛えた上で創るもんや。やけど、お前らはそれをすつ飛ばしとるから、能力は凄いのになにに隙が多いんや」

「……なるほどな」

「結局、蟻の身体能力や混ぜた動物の特性に頼つとるんよな、お前らって」

なので、ラミナからすれば念への警戒度が数段下がる。

能力も本能的なものが多いので、一度見ればある程度看破出来てしまうのだ。

駆け引きが未熟なのだ。

念での戦闘において、最も重要と言える『駆け引き』が。

フラッタならば、あの時に空を飛んでいなければ、まだ生き延びることが出来ただろう。結局ラミナ達はフラッタの能力を看破出来なかったのだから。

コローチエも1人で突っ込んでこなければ、まだラミナ達を追い込

めただろう。

あと一步。

あと一步、能力の使い方が考え切れていなかった。

それが全ての敗因となっているのだ。

「まあ、それで大抵の奴には勝てるからしやあないことかもしれへんけど。それに護衛軍からすれば、お前らが死のうが大した問題やないから、そこまで世話する気はないっちゅうことなんやろうな。反乱起こされても面倒やし」

ラミナは肩を竦めて、また酒を煽る。

それにイカルゴは複雑な表情を浮かべる。

ラミナの言葉を否定する材料が一つも無かったからだ。むしろ納得する気持ちの方が強かった。

その姿を見たティルガは、話題を変えるためにラミナに顔を向ける。

「これからどうするのだ？ キルアの回復まで待つのか？」

「ん〜……そうやなあ。ここで待つ理由はないけど……流石に舗装されとらん道路を走るのはキルアには厳しいやろうし……。かといって近くの街に行っても休める場所がなあ」

ラミナは眉を顰めながら、腕を組む。

元々の予定ではラミナは首都に向かう予定だった。

包囲作戦を開始するモラウ達のサポートのためだ。

キルアはゴンと一度合流する予定だったので、焦って移動する必要はない。

「……」

ラミナは眉を潜めたままイカルゴに目を向ける。

「……な、なんだよ」

「……はあ」

ラミナは小さくため息を吐いたと思ったら、一瞬でイカルゴの背後に移動し、ブロードソードを具現化してイカルゴの頭に切っ先を向ける。

「!？」



「動くなや」

「な、なんだよ……!?」

「お前、さつきももうちらに敵対する気はない、キルアに恩があるとか言うとったけど……」

「う、嘘じゃねえって……!」

「それをどう証明すんねん。ついさつきまで殺し合いしとったんやぞ? お前はテイルガ達とは事情がちやう。信用する根拠がゼロや」  
「っ……!」

イカルゴはラミナの言葉に顔を歪める。

「NGLの時は、まだ生まれたばかりで女王や護衛軍、他の蟻達の目から逃げるんが無理やったから渋々言うこと聞いとったて、無理矢理ではあるけど言い訳できるし、喰われる前の人間の記憶のこととかで同情的な面もある。けどや、女王が死んだ後の行動は全部お前らの意思やんな。お前は好き勝手するためにNGLを出て、ここに来て人間を、この国を食い潰すことに加担した。やのにキルアに絆されて、今は王達を裏切った。そんなフラフラしとる奴の何を信用したらええんや?」

「っ!!」

イカルゴは歯を食いしばって、両手を握り締める。

ラミナやテイルガはそれを侮辱されたことへの怒り震えていると捉えた。

しかし、今イカルゴが考えていることは、

(そうだ……。そうだよ……! 俺、スゲエ薄情な半端者じゃないか……!! 情けねえ……なんて情けねえんだ!!)

自己嫌悪だった。

(キルアに友達ダチになれるって、カッコいいって言ってくれたから……浮かれてただけ……! 何の、何の覚悟も示してない……!)

ただ付いてきただけだ。

何故それでラミナ達から信頼を得られると思っていたのだろうか。

キルアが認めてくれれば大丈夫と思っていたのだろうか。

(違うだろ！ そうじゃないだろ！ こいつらは仲間。命がけの戦いに挑む戦友なんだ！ なんでキルアが認めてくれれば、他の奴らも信用してくれると思うってたんだ……!!? 敵だった俺を！)

テイルガ達がいたから？

キルアを助けてくれるような人だから？

イカルゴはすでに受け入れてくれていると思いでいると自分でいた自分が腸が煮えくり返っていた。

「……分かった。お前が信用できないなら構わねえ……好きにしてくれ」

ラミナはピクリと片眉を上げる。

「俺はお前を撃った。本来ならアンタにもケジメをつけさせて貰わなきゃいけないかったんだ……。これはキルアがどうこう言える話じゃない」

「……」

「だから、アンタが俺を斬るっていうなら……俺は受け入れる」

「……ギリギリ及第点、やな」

ラミナはブロードソードを下げる。

それにイカルゴは意外そうな表情を浮かべて、ゆっくりとラミナを振り返る。

「……殺さない、のこか？」

「言うたやろ。キルアが起きてから決めたらええってな。お前程度、その後でも殺せるわ」

「……じゃあ、なんで……」

「命令や。キルアが起きるまで、キルアを護衛しろ」

「!!!」

イカルゴとテイルガは目を丸くする。

「キルアに何かあれば、分かつとるやろうが殺す。元々お前の処遇はキルア次第や。キルアを守り切らんと、どうせお前は死ぬ」

「……だ、だからって……」

「テイルガ、ブラール。お前らも残れ。イカルゴが怪しい素振りを見

せれば、即殺せ。もしその時、キルアが起きとったら、キルアに殺させろ」

「っ!!」

「……分かった」

「……」

「お前もええな? イカ」

「だ、だから、なんで……」

「もし、ここに襲撃に来る奴がおれば、ほぼ確実に蟻。お前はキルアを守る為に、元仲間と戦わなあかん」

「!!」

「それが出来ず、キルアやテイルガが死んだら、お前がさつきほざいた覚悟もその程度やったっちゆうこっちゃ。ただし……やり遂げれば少なからずその覚悟は本物やと、うちらに示すことはできる」

「……」

「達成報酬はうちを狙撃した件の不問」

「!!」

「やからって信用されるとか思うなや? お前がこれからうちらと共に戦うんやったら、今の覚悟程度じゃ全く足りんで。ちゃんと考えとけや」

ラミナはブロードソードを消し、まだ固まっているイカルゴの横を通り過ぎて、またトランク部分に腰掛ける。

「うちは夜が明け次第、ペイジンに向かう。テイルガ達はキルアが起き次第、こつちに来ればええ」

「承知した」

「……」

テイルガ、ブラールは頷き、イカルゴは未だに茫然としている。

(何を考えてるんだ……? こいつは……)

ラミナの意図が全く読めない。

今の命令にラミナの利点が全くと言っていいほどないのだから。(まるで俺が裏切らないことを確信してるみたいじゃないか……)

そして、イカルゴが仲間になるのを受け入れるつもりでいるような  
気さえする。

そう、まるで試験のような。

(いや、今考えるのはそこじゃない……！　今はキルアを守り切るこ  
とに集中すべき……！　例え、他の連中と戦うことになっても……  
！)

イカルゴは頭を横に振って、気持ちを切り替える。

その様子をラミナは酒を飲みながら見つめていた。

そこにキルアに気を付けながら、後部座席に腰掛けたティルガが小  
声でラミナに声をかける。

「……何故あのようなことを？」

「ん？」

「我が言うのもなんだが、流石に信用するのは難しいのではないか？」

「まあな。けど、お前が思ってるより結構キツイこと言うとするんやで？」

ついさつきまで仲間やった連中を殺せつちゆうとするんやしな。ア

イツ、見た感じ根が善良つちゆうか……身内意識強そうやからな。一

度仲間や思たら、そう簡単に殺せへん性格やと思うわ」

「……確かにな」

「けど、アイツが今後もキルアと動くんやったら、元仲間を殺す覚悟を  
持ってもらわんとあかん。お前らと同じように、な」

「……」

「連れていくなら戦力として数えんと邪魔なだけや。こちらは猫の手  
も借りたい所やでな。けど、これ以上ゴンやナツクルみたいな奴に來  
られても困るんや。キルアもそこまで面倒見られへんやろし。覚悟  
決めれるなら、覚悟してもらわんとあ

「もし、それでキルアが死んだら？」

「元々はキルアが蒔いた種や。裏切られてもキルアの責任やでな。そ  
こまで面倒見れるかいな」

ラミナは肩を竦める。

ラミナとしては十分すぎる程、キルアに譲歩している。

そもそもキルアがさつきと起きれば、こんな真似しなくて済んだの

だから。

その他に理由があるとすれば、やはりティルガ達の存在が大きい。状況が違うと先ほどは言ったが、やはり一度はチャンスを与えないと今後降伏したキメラアント達を受け入れるのが難しくなってしまう。

もちろん、それまでの行動にもよるだろうが、イカルゴに関しては恐らくそこまで殺人を犯していないのではないかとラミナは考えている。

ここで前例を作っておけば、色々と敵の戦力を吸収しやすくなる。(どうせモラウやナツクル、ゴンも殺したくないとか言う蟻が出るやろうしな)

小さくため息を吐くラミナ。

そして、ティルガに目を向けて、

「ちゃんとお前も見定めときや。今後引き入れた蟻の纏め役はお前になる可能性もあるで。少なくともこの戦場では、お前が一番うちらと一緒にいるしな」

「……自信はないが、努力しよう」

(お前もいつ殺したあない相手に出会うか分からんしな)

正直いちいち自分が見定めするのもメンドクサイ。

だから、ここでそれぞれに自分で見定め、自分で責任を取るような体制を作っておきたいのだ。

こうして、地味にイカルゴは重要な役割を任せられてしまったのだった。

## #128 センニユウ×ト×ゴウリユウ

7日目、夜明け。

ラミナはティルガ達と別れ、単独ペイジンへと向かっていた。高速で森や荒野を駆け抜け、猛スピードでペイジンへと迫っていた。

(モラウ達は今日の0時ジャストに作戦開始……。ペイジンの包囲は成功したらしいな)

途中の街を簡単に偵察をした際、人形兵達が慌てたようにペイジンへと移動を開始していた。

とりあえず、目に付いた人形兵は行動不能にしたラミナだが、以降はペイジンに到着することを最優先として移動に専念していた。

(恐らく師団長もペイジンに入る。電話はもう無理。メールも最低限やな)

ノヴの「4次元マンション」内でも通話は可能だが、問題はその電波は遮断できるのかということだ。

恐らくだが、不可能だとラミナは考える。

少なくともラミナ側の電波が傍受される。

ティルガ達にも今後はメールにするようにと伝えてある。

メールの内容までは流石に傍受されないだろうから、動きが読まれることはないだろう。

(幸運なものは護衛軍や王は電波傍受は出来んっちゆうことやな。まあ、アモンガキツドの念獣が来たら分からんけど)

それでも今はこの嫌がらせに集中するべき。

ラミナは思考を一時中断して、首都ペイジンを目指すのだった。

そして、昼前にはペイジンへと到着した。

【朧霞】で姿を消し、到着直前にメールで決めた待ち合わせ場所を目指す。

建物の屋根に跳び上がると、所々で銃撃音が響き、建物の屋根を白装束の男達が動き回っている。

モラウの【紫煙機兵隊】だ。

銃撃しているのは人形兵。

キメラアントと思われるような姿はない。

（大規模な戦闘はなし。お互い……いや、ネフェルピトーはまだこつちの正体が分からず様子見つちゆう感じか。アモンガキツドの念獣がおる気配もない。つまり、完全に専守防衛の構え）

街外れにある鐘がある高台へとやってきたラミナは、柱の陰に潜んでいるノヴの姿を見つける。

ラミナも能力を解くと、挨拶を交わすことなくノヴが開いた入り口へと飛び込む。

中にはモラウもいた。

「おう、待ってたぜ。キルアは大丈夫なのか？」

「まあ、山場は越えたと思うで。後はアイツの体力次第やろな」

ラミナは肩を竦め、それにモラウ達も頷く。

「一応そつちの話を聞かせてくれねえか？ メールとかで簡単には把握してるがよ」

モラウの言葉に頷いて、ラミナは昨日の戦いや得た情報について話す。

王の元に来たと思われる師団長、レオルの片腕を斬り落としたこと、念能力と四五行の熟練度のあべこべさ、そして仲間を引き入れたイカルゴのこと、キルアの負傷のこと。

全てを聞き終えたモラウ達は腕を組んだり、顎に手を当てて考え込んでいた。

「……敵には師団長が5匹、かで、念能力もばっちり開発してると……」

「しかし、四五行やその応用技は未だ未熟。兵隊蟻のほとんどを仕留めたことで、敵には手駒は残っていないに等しい……」

「まあ、護衛軍からすりゃあ師団長以下は時間稼ぎの駒としか思っかねえみてえだけだな」

「そらあもうすぐ何でも言うこと聞く兵隊が出来るでな。欲望まみれの女王蟻のお古やいらんつちゆうことやろ。師団長は打算的な忠誠

しかない奴らばつかやし、兵隊長以下は忠誠心があっても、知性や実力的には護衛軍からすれば今一つやろうしな」

「なるほどな……」

「しかし、厄介であることには変わりありません。師団長は未だ誰一人能力が判明していません。獅子男はラミナの推測が正しかつたとして、危険度が上がることはあっても下がることはありませんしね」  
「ああ、しかも手負いの獅子だ。激しい感情は能力に大きく影響する。連中の能力は間違いなく発展途上！ ラミナにやられたことで何かしら変化が起きても不思議じゃあない」

「まあ、まだ作戦まで1週間もあるんや。時間稼ぎしたいんはこっちも同じ。じっくりと観察して、さっくりと仕留めさせてもらおか」

ラミナの言葉にモラウとノヴも頷く。

少しでも選別を長く止めるために人形兵をここに留め、護衛軍の意識をここに集中させたい。

「連中はどう動くと思う？」

「護衛軍は間違いなく宮殿に閉じこもるでしょうね」

「やるな。アモンガキツドの念獣が出て来んのが証拠や。護衛軍は王のお守りに全神経を注いどる」

「ってこたあ、ここに来るのは師団長達ってわけだ」

「獅子男は当然として……あと何匹来るか、やな。いきなり5匹全員来ることたあないやろうから……テイルガの情報からしてチートウとプロヴーダが可能性として高いか」

「だが、それはラミナの存在がバレなければの話でしょう。こちらが3人とバレれば、師団長全員が出てくる可能性は十分にありうる」

「やなあ……うちはしばらく情報収集に徹するか。姿を消して、動き回ってみよか」

「頼んだ。俺はこれまで通り【紫煙機兵隊】を操って、前に出る」

「では、私は動き回ってラミナの存在を隠す罠になるとしましょう」

「いや、しばらくノヴも身を潜めて様子を遠くから観察していてくれ。お前の能力を敵に見られるのは、まだ早い」

「せやな。空飛べる奴がまだおらんとも限らんし、地面を歩く振動で



居場所を探る奴もまだ残つとるし。ノヴの能力を推測される情報はまだ出さん方がええ」

「……分かりました」

「ほな、集合場所は適時メールで」

「ああ」

ラミナは念空間を出て、【朧霞】で姿を隠す。

すぐにビルの上へと跳び上がり、ビルの屋上を跳び移っていく。

(現状、面倒なんはあのモグラやな。空にも気を付けなあかんけど……)

ラミナは途中で手頃なビルのベランダに飛び込む。

窓ガラスの傍にもたれ、室内に耳を澄ませる。

『銃声、止んだか?』

『分かるかよ。ここで下手に顔出して、見つかったら俺らが撃たれちまう』

『そうよ。どうせ国民大会まで外には出られないんだし』

確な情報はないとラミナが判断して、他の場所へと向かおうとした時、

『そう言えば聞いたか? 将棋とかチェスのプロが宮殿に連れて行かれたって話』

(……宮殿にやと?)

ラミナは眉を顰めて、元の位置に戻る。

『ホントなの? それ』

『間違いねえみたいだぜ。隠し持ってた携帯で確認したし。この国にいるそれぞれの盤上競技のプロで一番強い奴らが連れて行かれたらしい。どうやら総帥様のお客人の相手をしてるみたいだぜ』

(……蟻が将棋にチェス……? なんのために……?)

ラミナは顎に手を当てて考え込む。

(大会までの暇潰し。それ自体はおかしなことやない。やけど、なんでボードゲームなんや? いくら護衛軍でも王の護衛の最中にそんなことするわけない……。つまり、遊んどるのは王っちゅうことになる……)

しかし、わざわざ盤上競技を選んだ理由が分からない。

暇潰しだとしても、自分達を狙うわけでもなく、ただ遊ぶだけ。

（人間を食い物と思とる王が人間とゲーム？　ありえへんとは言いきらんけど……なあんか嫌な予感がするなあ）

作戦の邪魔となる確証など無いが、何か引つかかる。

しかし、どういう状況かなど確認しようもないので、ラミナは嫌な予感を抱えたまま作戦を続けるしかないのであった。

その頃、宮殿側ペイジン郊外。

レオルは苦々しい顔を浮かべて、ペイジンに踏み込もうとしていた。

もちろん、左腕は斬り落とされたままだった。

「ちっ……人間共が……。こんなところを攻めやがって……！」

レオルは結局宮殿に戻ることが出来ないまま、ペイジンに再び派遣された。

止血等の簡単な治療は出来たが、まだ時々鋭い痛みが走り、傷口が火傷をしているかのように熱を帯びている。

「宮殿は目と鼻の先なんだ……！　アモンガキッドかモントウトウユピーのどつちかくらい寄越せってんだ」

レオルは先刻のネフェルピトーからの電話を思い出して、歯軋りをする。

『……レオルです』

『敵がペイジンにも現れた』

『ペイジンに……!?!』

『ボクらは王の護衛に集中するよ。人形達もペイジンに集めるから、上手く使って』

『……他の戦力はお貸し頂けるので?』

『チートウが起きたから、もう少ししたら向かわせるよ。あと、帰って来させた兵隊長達も。絶対仕留めてね。確実に仕留めたのを確認したら、帰ってきていいよ。……言っとくけど、これが最後のチャンス

だからね?』

『……心得ております』

『ニヤハハ。期待、してるよ』

心にも思っていない言葉を思い出して、レオルは右手を握り締める。

(チートウはありがてえが、それでも俺を含めて4、5人しかいねえ……。もし、あの女もここにいたら、勝ち目はねえ……!)

完全にラミナの存在がトラウマになっているレオル。

(まずは敵を見つけて、作戦を練る。後はどうチートウを喚けるか、だな)

顎に手を当てて、行動指針を立てていく。

(くそ……! ヒナがまだ動けねえのが痛いな……。ヒナの除念はチートウが死ぬか、チートウにあの変な念をかけた能力者を仕留めねえと空かねえ。そいつがここにいれば……いや、そいつがここにいたら、もう能力を防ぐことが出来ねえ。あの能力も『見た』とは言い切れねえし……)

レオルの【謝債発行機】は相手の能力を直接見るか、詳しく聞くことが制約の1つとなっている。

だが、チートウに憑いていたナツクルの【天上不知唯我独損】のポツトクリンは能力が停止状態だった。それだけで『能力を見た』と言えるかどうかをレオルは自信がなかった。

(俺がヒナの能力を借りちまうと、チートウに憑いてた念がどうなるか分からねえし……。俺が敵に念をかけられるわけにはいかねえ。やっぱり他の連中を上手く使って、当て馬にするしかないか……)

レオルはドンドン袋小路へと追い込まれていく感覚に襲われ、焦りと苛立ちが込み上げてくるのだった。

「……………ん」

キルアはゆっくりと目を開く。

視界に映ったのは、車と思われる天井だった。

「ここ……は……？」

「お。起きたか。どうだ？ 気分は」

イカルゴが顔を覗かして、声をかける。

それにキルアは目を丸くして、イカルゴが誰か、自分が何をしていた、何が起こったのかを思い出して、飛び起きる。

「タコ!? ここどこだ!? どれくらい寝ていた!？」

「タコって言うなあ〜!!」

「早く!!」

「落ち着け、キルア」

掴みかかりそうな勢いでイカルゴに詰め寄るキルアに、ティルガが声をかける。

「ティルガ……!」

「ここは地底湖近くの森だ。寝ていたのは約1日。もうすぐ日が暮れる」

「……俺の治療をしたのは……」

「ラミナだ。其方が気絶した直後にラミナが回収して、ここで治療した」

「……そうか。ラミナは？」

「ラミナはモラウ達のサポートのために、先にペイジンへと向かった。我とブラールはこの後ラミナの元へと向かう予定だ。キルアは特に言われていないが……」

ティルガはイカルゴに顔を向ける。

「イカルゴの処遇と……責任はキルアに任せる、と」

「……イカルゴを連れて行って、もし裏切った場合、俺が殺せつてことか……」

キルアは点滴の針を外しながら、ラミナの意図を正確に読み取る。

ティルガはそれに頷き、

「それならば、ラミナはイカルゴに狙撃されたことを不問とするそうだ」

ティルガの言葉に、キルアは呆れた顔を浮かべる。

「……相変わらず甘いんだか適当なんだか……」

キルアは車から降りて、ストレッチをして身体の調子を確認する。  
「……まだちよつと戦闘は厳しいか……」

「そういえば、少し前にゴンから電話がかかってきた。事情は簡単に伝えてある。どうやらナツクル達と一度合流するつもりらしい」

「ん、分かった。早速電話してみる」

キルアはテイルガから携帯を受け取って、早速ゴンに電話をかける。

『——キルア!?!』

「ああ。悪い、心配かけたな」

『ホントに大丈夫?! 死にかけたって聞いたよ!?!』

「もう大丈夫だって。んで、今どこだ?」

『【マンダイ市】の近くの森だよ。ナツクル達とも合流したところ』

「そつちは何かあったか?」

『あ!! 忘れてた!! キルア、テイルガはまだいる!?!』

「テイルガ? ああ、いるけど?」

「む?」

『メレオロンって知ってる!?! 仲間になったんだ!!』

「なんだと?」

『メレオロン!?! 仲間あ!?!』

キルアはもちろん、電波で会話を聞いていたテイルガやイカルゴ達も驚きに目を丸くする。

「な、なんでメレオロンって奴が仲間になってんだよ!?!」

『え? なんでも王達に復讐したいんだって』

「……復讐? 元師団長が王達に? 本当に信用できるのか?」

『うん。少なくとも俺は話を聞いて、本当だと思ったよ。信用できるって思った。自分の能力についても教えてくれたし』

「……」

『とりあえず、直接会って話してみてよ。その上で俺達が考えた作戦を聞いてほしいんだ』

「……分かった。テイルガ達も連れてくぜ。ラミナにも一報入れとく」

『うん！　じゃあ、俺達もそっちに向かうよ！　中間地点で会おう！』

「ああ」

キルアは通話を終えて、ティルガに顔を向ける。

「どう思う？」

「……分からね。いくら取り入るためとは言え、復讐を理由にするのは怪しまれはしても、信用される要素はあまりないだろう。しかし、ゴンはそれを信用できると言った。会ってみるべきだとは思う」

「……それしかないか」

「だが、その前に」

「ん？」

「其方もイカルゴをどうするか決めるべきだろう。正直、メレオロンよりも動機が不明だぞ？」

「ああ」

キルアとイカルゴは顔を見合わせて、声を上げる。

キルアは一度深呼吸し、顔を引き締めてイカルゴを見据えて、ただ一言。

「来るか？」

「!!」

イカルゴはその言葉を期待していたが、実際に言われると言葉に詰まってしまった。

「あ……い……い、いいのか？」

「良いも何も、俺達もう友達ツレだろ？」

「っ!!」

イカルゴは涙が溢れ始める。

キルアは小さく笑みを浮かべて、

「もう一度訊くぜ？　——来るか？」

「ああ……行く。行くよ!!」

イカルゴも笑みを浮かべて頷く。

キルアは頷いて、すぐに顔を引き締める。

「1つ言っとくけど、もう仲間になった以上、次にこんなことあっても、もういちいち礼を言わないからな。俺がお前を助けるようなこと

があつても、お前も俺に礼を言うなよ」

キルアの言葉にイカルゴは不思議そうな顔を浮かべる。

「ツレがツレを助けるのは当然だろ？」

「！」

「これから色々協力して何かやってく時があるだろうけど、サポートし合うのは特別なことじゃねえからな。当たり前前のことで礼を言うのは、かっこ悪いだろ？」

イカルゴは目を限界まで丸くして固まる。

それはイカルゴが憧れていた世界だった。

強い信頼で結ばれ、背中を預け合つて命懸けで戦う世界。

キメラアント同士ではダメだった。

誰も彼も打算的で、欲深くて、本能的で、信頼なんて出来やしない。それでも人間と仲良く出来るわけなく、仕方なくそのままレオルの元にいた。

諦めかけていた。

だが、その世界が、殺し合いをした人間から齎された。

自分をカツコいいと言つてくれた相手から。

嬉しくないわけがない。

「う……うう……！……俺……俺……もう死んでもいい……！」

イカルゴは涙腺が決壊して、男泣きを始める。

それにキルアやティルガは意味が分からず、混乱する。

「な、なんで急に泣いてんだよ……!？」

「だつてこんな……俺なんか、こんな……」

キルアは何となく理由を察して、ため息を吐く。

「はあ……お前なあ……」

キルアはイカルゴの前に屈んで、目を鋭くする。

「オメーがこれから足を突つ込む世界はな、アリよりよっぽどシビアだからな!!」

キルアの真剣さにイカルゴは涙を止める。

「命を懸けることと、命を軽く扱うことは、似てるようで全然違うぞ。生死の境で生きてる奴は、死んでもいいなんて絶対思わない」

ラミナも、キルアも、もちろん死ぬ可能性は考慮している。

しかし、それは『死なないギリギリのライン』を見極めるためであつて、『死んでも仕方ない』などとは微塵も考えてはいない。

「毎日完璧な体調管理スケジュールをこなしながら、致死量ギリギリの毒をいつでも躊躇いなく飲む奴が生き残れるんだ。これから戦うところは、そんな世界さ」

そのキルアの言葉に、テイルガは納得の表情を浮かべる。

（確かにラミナは常に自身や我らのコンディションを考慮して作戦を決めていたな……。……。そうか。よく修行で限界まで【堅】をさせられたのは、我々のオーラ量がある程度把握するためのものか……。）

修行の意味、ラミナの行動決定の要素の1つをようやく理解したテイルガだった。

ラミナは修行を通して、テイルガ、ブラール、キルア、ゴンのオーラ総量を把握していた。

もちろんナツクルのように正確な数値化をしてるわけではないが、経験則で把握している。

それに合わせて、汗、呼吸、話し方、動き等で体調を把握しているのだ。

「来れるか？ こっちへ」

挑発するように問いかけるキルアに、イカルゴは不敵な笑みを浮かべる。

「へっ、愚問だな。楽園が目の前にあるんだぜ？ 行くさ！ 何を置いてもな！」

「……。よし、決まりだな！ じゃあ、合流場所に向かおうぜ！」

「車で行こう。我が運転する」

イカルゴを迎え入れたキルアは、テイルガの運転する車で合流地点に向かう。

到着した場所は街の郊外にある廃ビル。

キルア達が指定された部屋に入ると、ゴン達がすでにいた。

「キルア！」



「おう」

「怪我は大丈夫なの？」

「ああ、ラミナのおかげでな。2, 3日もすれば問題ねえよ」

「よかったあ。あ！ 紹介するよ！ 彼がメレオロンだよ！」

ゴンが振り返って手で示したのは、フード付きのツナギのような服を着た緑色の肌をした目が大きいキメラアント。

元師団長のメレオロンだ。

「よう。よろしくな」

メレオロンは気安い感じで右手を上げて挨拶する。

それにキルアはティルガを振り返る。

しかし、ティルガはメレオロンを見て、僅かに首を傾げていた。その後ろにいたブラールやイカルゴも同じく。

「……どうしたんだ？ まさか、メレオロンじゃないのか？」

「……いや、メレオロンなのは間違いないのだが……。我が知っているメレオロンとはどこか違う」

「違う？」

ティルガの言葉にブラールとイカルゴは頷き、キルアやゴン、ナツクル達は首を傾げ、メレオロンは苦笑する。

「我が知ってるメレオロンと言う師団長は、常に軽薄な雰囲気で何を考えているか分からない者だ。戦闘力が低いこともあって、任務の大半は部下任せの怠け者で臆病者と思われていた」

「……けど、今日の前にいるコイツは……」

「ああ。真逆……とまでは言わないが、妙に凜としていて芯が通っている……ラミナやキルア達にも通ずる雰囲気纏っている。……何があった？ 復讐とやらに関係あるのか？」

「……まあな」

メレオロンは真顔になって、僅かに俯く。

「と言っても、大したことじゃねえ。お前らと同じだよ。人間だった頃の記憶が少しだけ戻ったっただけさ」

「……」

「それで思い出しちゃったんだよ。あいつが……ペギーが、人間の時

の俺の里親だつてな」

ティルガ、ブラール、イカルゴはそれで全てを理解した。

ティルガは腕を組み、無念そうに目を瞑る。

「……そうか。ペギーが其方の……」

「今なら分かるぜ。お前とブラールもそうなんだろう？」

「……ああ」

「やっぱりな……。まあ、運が良かったあ口が裂けても言えねえな」

「ペギーってのは、どんな奴だったんだ？」

ナツクルが盛大に顔を顰め、腕を組んで訊ねる。そうでもしないと、涙が溢れそうだからだ。

「師団長の一人だ。戦闘力は高くなかったが、理路整然とした口調で知性が高く、コルトと共に参謀役を務めていた。……王が産まれた直後、瀕死の女王を助けようとして王に殺され……喰われた」

「なっ……!?!」

「ペギーは、コルト同様あまり人間の記憶を思い出していなかったようだったが……」

「だろうな。……けど、そんなこたあ関係ねえんだよ。あいつは間違はなく俺の知ってるペギーだった。名前も同じで、いっつも分厚いNGLの教本を抱えてたしな。……それだけで十分だった」

「……ああ、確かにペギーはいつも本を抱えていたな……。我も様々な知識を教えて貰った」

「だから、俺は王に復讐する……! 二度も恩人を奪われたんだからな! 俺も蟻だとか関係ねえ! 俺は俺だ! 俺から恩人を奪ったアイツらを俺は許せねえ!!」

メレオロンは覚悟を決めた顔で宣言する。

その覚悟が偽りではないと確信したキルアとティルガは、顔を見合わせて頷く。

「分かった。俺は信じるよ」

「我も信じよう」

「……ありがとよ。ぜってえ役に立ってみせる」

次にキルアがイカルゴを紹介し、ゴン達は『キルアが信用するなら』

と何の疑いの言葉も出さずにイカルゴを受け入れる。

イカルゴは思わず呆気にとられ、同時にラミナが妙に脅すように言ってきた理由を理解した。

ラミナは、あまりにも簡単に敵だった者を受け入れるゴン達が非常に危なっかしいと思っただのだ。もちろんラミナとてコルトやティルガ達を受け入れたが、この作戦中に仲間にするのは危険度が違う。

故にラミナはイカルゴの性格を見極めた上で脅し、妙な取引を持ち掛けて、裏切りにくい心境を作り出したのだ。

「んで、ゴン。考えた作戦って何だよ？」

「うん。メレオロンの能力なんだけど……」

「メレオロンの？」

「見てもらった方が早いと思うんだ。いい？」

「ああ、もちろん」

メレオロンは頷いて、前に出る。

「まず1つ目だが、これはティルガ達も知ってることだが【透明になる能力】だ」

スウとメレオロンの姿が背景と同化するが、キルア達は【円】を使うまでもなく、気配や視線でそこにいると分かる。

メレオロンは透明化を解いて、肩を竦める。

「まあ、これはもう聞いているとは思いますが、この能力は【円】を使えば簡単にバレちまう。それに臭いや視線とかでもな」

「ああ。ティルガから聞いている」

「だが、これは俺の本当の能力を隠すためのフェイク。本当の能力は、こつちだ」

メレオロンは軽く息を吸ったかと思うと、突然姿が消えた。

更に先ほどまで感じていた気配や視線、臭いなども感じ取れなくなったことに、キルアとティルガは目を丸くする。

「一瞬で消えた……!？」

「臭いも一瞬で消えたけど？ ブラール、【円】だ」

「……」

ブラールは頷いて、【円】を発動する。

キルアは【凝】を使って周囲を見渡すも、メレオロンの姿や痕跡も見当たらない。

「……【円】でも分からないそうだ」

【凝】でも分かんねえ……。オーラも出さずに一瞬で消えるなんて……」

「プハー」

「「!!」?」

戸惑っているキルア達の前に、突然メレオロンが現れる。

それにキルア達は目を丸くし、ゴンやナツクル達はドツキリが成功したかのような笑みを浮かべる。

「ど、どうやって……!?!」

「俺はずっとここにいたぜ? お前らが気付かなかっただけさ」

「な……!?!」

「これが俺の2つ目の能力【神の不在証明】パーフェクトブラン。俺が呼吸を止めている間、何人たりとも俺の存在に気づけない。【円】を使っても、俺を触ってもな」

「……マジかよ」

キルアはメレオロンの能力の恐ろしさを一瞬で理解して、悪寒が走った。

もし、この能力で後ろから攻撃されても絶対に気づけない。カウンタードころではない。あのオロソ兄妹の能力同様、攻撃されたという事実を認識できるのは攻撃された後なのだから。

自分達がメレオロンを危惧していたのは間違いではなかった。

そして、仲間に引き込めたことは、王や護衛軍を討伐したのと同じレベルのファインプレーであった。

「そして、3つ目」

「ま、まだあるのか?」

「むしろ、これが本命さ」

メレオロンは不敵に笑い、ゴンの肩に右手を置く。

そして、息を吸うと今度はメレオロンだけではなく、ゴンまでも姿が消えた。

「なっ!?!」

キルア達は再び気配を探ったり、【円】を使うもやはり2人の存在を感知できなかった。

すると、キルアの顔のすぐ傍で小風が吹く。

それにキルアが訝しんだ、その時、

突如キルアの右頬に拳を触れさせたゴンが現れた。

その後ろにはメレオロンがゴンの左肩に手を置いていた。

ティルガ達はそれに目を限界まで見開き、キルアも目を見開いて硬直していた。

「……ゴンにも【神の不在証明】が……?」

「その通り!　これが第3の能力【神の共犯者】。【神の不在証明】の発動中、俺が手を触れた者にも【神の不在証明】が連動する!　どうだ?　役に立ちそうか?」

「……ああ。最高だ!」

キルアは思わず笑みがこぼれる。

今キルアの頭の中では、物凄いスピードでメレオロンを組み込んだ戦略が浮かび上がっていた。

「俺達はラミナかナツクルのどっちかと組ませたらどうかって思ってるんだ」

「……そうだな。理想はラミナと組んでもらうことだ。ラミナとメレオロンが組めば、護衛軍どころか王さえ殺せるかもしれない」

「でしょ!?!」

「けど作戦を最優先に考えれば、速攻で護衛軍の1匹を仕留めて、残りの3匹と戦ってるどこかに参戦してもらうのがいいな。一番はナツクル達のところだ」

「……お前らの所の方がいいんじゃないのか?」

「俺らもその方が助かるけど、ラミナとナツクルっていう選択肢が出来る方がメレオロンが活きる。それでモントウトウユピーを倒して、俺達の所に来てくれる方が効率がいいし、勝率も上がる」

「……確かにモラウさんとノヴさんの能力は足止めに最も向いている。キルアの作戦が現実的だろう」

シチュートが顎に手を当てて、キルアの告げた作戦に同意する。

「けど、問題もある」

「問題って?」

「1つ目はラミナがアモンガキッドを仕留めるまでメレオロンが息を止めていられるか。突入場所のすぐ近くにいればいいけど、そうじゃなかったら一度どこかで息継ぎがいる。そうになると、高確率でバレル」

「……ネフェルピトーの【円】とアモンガキッドの念獣。その両方をやり過ぎせると楽観視出来ぬか」

「ああ。ネフェルピトーの【円】は戦闘になれば消せるかもしれないけど、アモンガキッドの念獣はそうもいかない。宮殿中に配置してるはずだし、突入直後なら能力を解除する可能性は低い。いくら早く息継ぎしても、1，2秒はかかる。バレないと思う方が難しい」

「そりゃあそうだな」

「2つ目。これが一番の問題」

「あん?」

「ラミナがメレオロンをどこまで信用できるか、さ」

キルアの言葉にメレオロンを除く全員が「あゝ」と納得の表情を浮かべた。

「ラミナは俺達が信用できるって言ったところで、絶対に自分で確認するまで判断しない。しかも、内容は作戦当日の肝だ。命が懸かった状況で、ラミナがメレオロンを信用して命を預けるとは、悪いけど俺は思えない」

キルア達でさえ、一緒に戦えるようになったのは東ゴルトー潜入の直前だ。

ゴンに関しては、まだ認められたとは口が裂けても言えない。

「殺し屋にとって『共闘』なんて、最も警戒するシチュエーションだよ。よほどの関係でもない限り、完全に信頼するなんてありえない。それこそ、旅団員でもないと思え」

「けど、俺達は殺し屋じゃねえ。後ろから襲い掛かるなんざ、ありえねえだろ」

「俺達の場合は少し理由が変わると思う。例えば……チャンス逃さず、躊躇なく殺せるかどうか、とかね」

「ぐっ……」

「チャンス逃す奴なんて、殺し屋は絶対に信用しない。今回の作戦は躊躇すれば、一瞬で全部がひっくり返るかもしれない戦いばかり。ラミナからすれば、殺すのを躊躇する奴と戦うなんて絶対に避ける。ぶっちゃけ此処にいるメンバーのほとんどが、ラミナからすれば絶対共闘したくないと思われると思うぜ。いくらメレオロンの能力が凄くてもな。だから、メレオロンはナツクルと組むことをメインに作戦を練るべきだ」

キルアはそう言いながら、携帯を取り出して素早くメールを打つ。「とりあえず、ラミナにメレオロンの能力の事を伝えとく。ナツクルと組ませようと考えてるのものな」

「随分と用心深いんだなあ、ラミナって奴は」

「殺し屋はそれくらいじゃないと務まんないからな」

メレオロンは呆れながら言い、キルアは携帯を仕舞いながら肩を竦める。

ティルガはキルアに顔を向けて、

「そろそろ我らはラミナのところに行ってもいいか？」

「ん？ ああ、そうだな……。俺達はどうか……」

キルアは顎に手を当てて、今後の方針を考えようとしていたその時、キルアの携帯が鳴る。

取り出して着信画面を見ると、ラミナからだった。

スピーカーモードにして通話ボタンを押す。

「もしもしっ」

『おう。傷はどないや？』

「ほぼ塞がってる。2, 3日もすれば万全に戦えると思うぜ？」

『そら良かった』

「それで？ そっちはどうなんだ？」

『今モラウが街を引つ掻き回しとる。うちとノヴはもうしばらく身を隠して、あつちの動きを観察することになった。うちは今、姿を隠しながら街外れの建物の上で電話しとる』

「敵の動きは？」

『今は兵士人形しか来てへんけど、そろそろ師団長の1匹2匹来るやろうな。護衛軍は動く気配は全くなし。念獣もな』

「そうか……」

『ところで、さっきのメール。ホンマやろな？』

「ああ。実際に見た。ティルガの鼻にブラールの【円】でも分からなかったし、俺も視線や気配が全く分からなかった。触られてもな」

『ふうん……。メレオロンっちゆう奴、そこにおるんか？』

「いるぜ」

「俺に何か用か？ 疑い深い殺し屋さんよ」

『王に復讐するために命を懸ける覚悟。ホンマにあるんやろな？ それとも、自分で殺したいってクチか？』

「……いや、流石にそこまで自惚れちやいねえさ。……まあ、殺れるなら、殺りてえけどな。だから、あんたらが王を殺してくれるってなら、喜んで力を貸すぜ」

『……ほな早速、その覚悟見せてもらおやないか』

ラミナの言葉にキルア達は首を傾げる。

『ティルガ、ブラールと一緒にペイジンに來い。車で構わんでな』

突然の招集にナツクルは思わず眉を吊り上げて、大股で携帯に歩み寄る。

「何させる気だコラ、ああ!？」

『その能力で、ノヴと一緒に宮殿に潜入してもらおう』

「「「「?!?!」」」」」

キルア達は目を丸くする。

「ほ、本気かよ!？」

『本気も本気や。うちの作戦は、ノヴの能力で出口を宮殿内に設置



しとることが大前提や。つまり、どつかでノヴには宮殿内に忍び込んでもらわんとあかん』

「……それは……まあ」

『けど、そのためにはあのネフェルピトーの【円】をどうにか潜り抜けなあかん。やから、どつかでネフェルピトーを宮殿の外に誘き出す必要があったんやけど……そのメレオロンの能力を使えば、ネフェルピトーを遠くに誘き出さんでええからな』

「け、けどよ……俺が息を止めれるのは良くて2分くらいだぜ？ ど  
うやって【円】のド真ん中で息切れしちまうぞ?。」

「それにアモンガキッドの念獣はどうすんだよ?。」

『ノヴ達が忍び込むと同時に、うちも宮殿を襲撃して護衛軍の注意を引きつける』

「はあ!。」

キルアとナツクルがとんでもない作戦に声を荒げる。もちろん他の者達も目を見開く。

「馬鹿言ってるじゃねえよ! 護衛軍4匹に師団長、下手したら王まで出てくる可能性があんだぞ!。」

「テメエ1人で何とかなる連中じゃねえだろが!!」

『護衛軍は出てきて3匹や。1匹は護衛のために王の傍から離れんやろうし。師団長なら逃げ切れるやろうしな』

「だからって1人で行くのは無茶過ぎるよ!。」

『ノヴとメレオロンだけで行かせる方が無茶やろが』

「じゃあ俺らも——!。」

『怪我人も未熟モンもいらん。つちゆうか、敵の注意をあちこちに分散させるわけにもいかんやろが』

「けど……!。」

『ティルガとブラールはペイジンに到着したら、モラウと合流して人形兵士と来た師団長達の相手。キルアは治療に専念、イカルゴはその護衛。ゴン、ナツクル、シユートはうちらが失敗してもうた時のために待機。こつち来たところで、うちらは相手にせえへんで。モラウ達にも話は通しとる。アホらしい仲間意識で全員で来て、作戦不可能に

でもなつたら、目も当てられんな。プロ名乗るんやつたら、しつかりと局面見極めえや』

「あつ、ちよつ、待て——」

一方的に指示を出されて、通話を切られてしまう。

それにキルア達は盛大に顔を顰める。

「あいつ……無茶苦茶なこと考えやがって……!」

「どうする? 皆で行く?」

「……」

ゴンは首を傾げて、キルアに訊ねる。

キルアは眉間に皺を寄せて腕を組む。

そこにイカルゴが声をかける。

「けど、キルアは安静にしとくべきじゃないか? まだ傷も癒えてないし、自分でも2, 3日は満足に戦えないって言ってたじゃないか」  
「う……」

「ゴンもキルアの傍にいるべきだと我は思う。ナツクル達もペイジンの近くに来るのは問題ないと思うが、ペイジンに来て我らと共にモラウと合流するのが限界だろう。ナツクルの能力はチートウに見られている。効果まではバレていないだろうが、殴られては危険だというのは広まっている可能性があるし、ナツクルが重傷を負って能力が解除されたらチートウを抑え込むのが難しくなる」

「ぐ……ちい!」

ナツクルは顔を顰めて、舌打ちする。

そして、メレオロンに顔を向ける。

「無理すんなよ、メレオロン」

「ああ。分かってるよ」

「……ホントにちやんと考えとけよ」

「キルア?」

キルアはポケットに両手をつっ込んで、真剣な顔でメレオロンを見つめる。

それにゴン達は首を傾げる。

「お前も言ってたけど、この作戦に参加すると途中で能力が解けて護

衛軍に見つかる可能性が高い。そうなれば、護衛軍に裏切り者つてバレルんだぜ？ ……もし、お前が裏切るつもりなら、逃げるなら今だぜ」

「っ!! オイコラ、キルアあ!! テメエ、まだメレオロンを疑ってんのかよ!!」

「疑ってねえよ。けど、この世に絶対なんてない。どんなに覚悟を固めていても、逃げ出したくなる時はあるからな」

「……ありがとよ、キルア。けど、この潜入作戦は今後に大きく影響するんだろ?」

「……ああ、間違いなくね」

「じゃあ、やるしかねえな」

「おいおい、大丈夫なのかよ!? ラミナの奴、下手すりやお前を囮にするかもしれないぞ!」

「ラミナはそんなことしなと思うけど」

「ああ」

「うむ」

「……」

ナツクルの言葉をゴンが否定し、キルア、ティルガ、ブラールも同意する。

それにナツクルは顔を顰めて腕を組む。

「けど、それを否定する証拠もねえだろ!? 暗殺者だったら、もしもの時は誰かを犠牲にするかもしれないねえじゃねえか!!」

「それは言い過ぎだと思っぜえ、ナツクルよ」

「メレオロン……!?!」

「ラミナって奴がもし俺を囮にする気だったら、あの護衛軍相手にまづ自分が囮になるなんて言わねえと思うぜ?」

「そう言う事。ラミナはメレオロンに酷い役目を押し付けたような言い方をしといて、実は安全を確保しようとしてんのさ。ノヴの能力ならいつでも撤退できるしな。ティルガ達だけを呼び寄せたのも、俺達の姿をギリギリまで隠すためだ。国民大会に潜り込む可能性もある以上、敵に姿を見られるリスクは極力減らすべきだからな」

「だったら、俺はやり遂げるだけさ。戦闘力がない俺が出来ることは、こう言う裏工作とかだろうしな。俺もお前らの仲間になったんだ。一緒に命懸けさせてくれよ」

「……ちっー」

「んで、これをやり遂げれば、無事メレオロンはモラウ達の信頼も勝ち得るってわけ。作戦遂行に必要な大仕事をやったんだ。ハンター協会からも庇護を受けられる可能性は高くなる」

「……そうだな。モラウさんなら、コルト同様責任を負うと言って認めさせるだろう」

キルアの推測にシユートも頷く。

それにはナツクルも納得せざるを得ず、更に眉間に皺を寄せる。

キルアは小さくため息を吐いて、

「つたく……ラミナもはつきりそう言えばいいのによ。……悪役を演じ過ぎなんだよ」

ティルガもその呟きに内心で大いに同意し、ラミナのどこか照れ隠しのようなやり方に小さく笑みを浮かべる。

「では、すぐに向かうとしよう」

「ああ」

「ブラール、キルア達に羽根を渡しておいてくれ。それで向こうの様子を確認することが出来る」

「……」

「俺達も途中まで同行するぜ。なあ、シユート」

「ああ。すぐに駆け付けられるように備えておく必要はあるだろう」

「ゴンは俺とイカルゴと一緒にだ。俺達は歩いてペイジンに向かうぜ」

「うん」

いよいよ作戦に向け、本格的に動き始める討伐隊であった。

ちなみに電話を切ったラミナは、

「あ、ゴンに『会ったら一発ぶん殴る』て言うん忘れとった。……まあ、ええか。黙ってぶん殴れば」

と、警戒していたメレオロンをサラツと仲間を引き込んでいたゴンに、八つ当たりをすることを決めていたのだった。

## #129 チャンス×ト×コマ

ラミナはビルの上に座り込み、キルアとの電話を終えて疲労の顔を浮かべていた。

「はあ……まさか行方知れずやった元師団長を味方に引き込むたあなあ……。しかも、なんちゆう能力を創つとるんや……」

ラミナはまたため息を吐いて、額に手を当てる。

（電話越しの感じやと嘘はついてへんとは思う……。やけど……すでに一度レオル達と接触しとったら？ 能力がすでにバレとって、レオルの能力の制約を満たしとったら？ メレオロンの能力を使うことはむしろ相手の罠に飛び込むだけの可能性もある。けど、あの能力の看破方法は範囲攻撃くらいしかない……。何か合図を決めとる可能性もあるが……）

考えられる裏切りパターンを思い浮かべるラミナ。

まだメレオロンと実際に会っていないので、やはり完全に信用することなど出来ない。

メレオロンの能力が恐ろしく暗殺向けなのだから尚更だろう。

「どうでしたか？」

考え込んでいるラミナの背後にずっと控えていたノヴが声をかける。

ラミナは一時思考を中止して振り返る。

「とりあえず、裏切る可能性は低そうやな。後は実際に会ってみんと何とも言えんわ」

「そうですね……。しかし、師団長全員の居場所を把握出来たのは大きい。後は王についた師団長達を始末することが出来れば文句無しなのですが……」

「焦んなや。まずはここに来た連中に集中せんと」

ラミナは腰からノヴから預かった単眼鏡を取り出して覗き込む。

ペイジンの街中ではモラウと【紫煙機兵隊】が動き回って、人形兵士を次々と倒していた。

単眼鏡を動かして、キメラアンの姿を探す。

「蟻の姿はなし。全っ然出て来おへんな」

「ペイジンには来ていたはずですが……」

「地下通路に潜り込んで、そのままや。他の仲間を待つとるんか、なんか作戦があるんか……」

ラミナはため息を吐いて、頭を搔く。

「探ろうにも地下やから潜り込んだら逃げ場ないし、例のモグラにバテてまうでなあ。ブラールがおったたら覗けるんやけど、声までは分からんし……」

「私やモラウも足音までは消せませんしね。巣穴から出てくるまで待つしかありませんか……」

「まあ、ティルガ達が来るまでの丁度ええ時間稼ぎにはなるけどな。とりあえず、今のうちにモラウを少し休ませよか」

「そうですね」

その後、数時間ごとにモラウとラミナは交代しながらペイジン内を動き回って、兵士人形を減らしていく。

しかし、それでも人形兵士は尽きることなく、次々と各地からやってきていた。

そして、夕暮れを迎えた頃にティルガ達が合流した。

モラウも含めて、ノヴの「4次元マンション」内に入って、メレオロンとの顔合わせをする。

「ナツクルくらい来る思ってたんやけどな」

「……其方があれだけ言えば、ナツクルとて来るに來れんと思うのだが……」

「アイツやったら意地になって反発しそうやないか」

「モラウ達の名前を出したのが効いたんだと思うぜ？」

メレオロンが肩を竦める。

ラミナはそれに肩を竦め返して、目を細めてメレオロンを見据える。

「さあて……メレオロン。改めて、覚悟見せてもらおか。王を殺すために犬死する覚悟……あるか？」

ラミナの脅すような言葉に、メレオロンは苦笑する。

それにラミナは片眉を上げる。

「……なんやねん」

「いや、キルアやテイルガ達の言ってた通りだったんでな。お前さんなら、俺を見極めるためにわざと怖がらせるようなことを言ってくるだろうってよ」

ラミナがテイルガを睨みつけると、テイルガはわざとらしく顔を背ける。

メレオロンは笑みを浮かべて、

「これはゴンにも言ったんだが……俺はもうアンタらを信頼してる。だから、たとえこの先信頼を裏切られても、後悔も責めもしねえ」

「けど、それはゴンやナツクル達に対してだろ？俺らやラミナは今会ったばかりだぜ？」

「まあ、そうなんだが……アンタらはナツクル達の師匠なんだろ？」

アイツの師匠ってんなら信頼するには十分だし、そっちの殺し屋さんは昨晚の電話で十分さ」

「あん？」

「アンタのその疑り深さは、俺にはよおしく理解できる。俺は殺し屋じゃあねえが、俺の能力は非常に暗殺向けで脆いからよ」

「脆い？」

「ゴイツの能力は『気づかんだけ』で、実際には触れるし【円】でも触つとる。攻撃を透過するわけちゃうから、普通にダメージを負ってまう。攻撃した側は気づかんけどな」

「その通り。俺からすれば能力を知る奴は少なければ少ない方がリスクが減るってわけだ。だから、最初はゴンにだけ教えて、他の連中には教えないつもりだったんだよ。だからこそ、殺し屋のアンタの疑り深さや慎重さは、俺にとっては逆に信頼できる要素になるのさ。まあ、ゴン達、そして何よりテイルガ達がアンタを信頼してるからつてもデカいけどな」

「なるほどな。普通は同族嫌悪するもんだが、逆にそれが信頼する根拠にもなるってわけか」

「そういうこと」



ラミナはそれに僅かに眉を顰めるも、それ以上は何も言うことはしなかった。

それにモラウはニヤつき、ノヴ達も笑みを浮かべるが、すぐに顔を引き締める。

ラミナも同じく顔を鋭くして、

「ほな、ある程度動きを決めとこか。ノヴ、メレオロンは潜入に備えて打ち合わせしとけや。その後はメレオロンはその時までここで待機。ノヴは待機するなり、外で動き回るなり、好きにせえ」

「オーケー」

「モラウとうちは引き続き、外で人形兵士と師団長達を引きつける囹役やな」

「おうよ」

「テイルガとブラールはもう少しここで待機」

「……よいのか?」

「まだうちらとお前らが一緒におるところを見られるわけにやいかん。お前らが出るんは、ノヴとうちらが宮殿潜入を始めた後や。多分やけど車で誰かが来たんはもうバレとるやろうからな。ここでお前らが出ると合流したんはお前らやとバレかねんし、元師団長のお前がおるつちゆうことは、まだ姿を見せてへんメレオロン、そしてクロロ達が仕留めた師団長達もおるかもしれんと警戒されてまう」

「つまり、騙し討ちを狙うってわけか」

「レオル……ハギヤとかウエルフィンっちゆう奴はそう簡単に騙せんやろうけど、他の連中やったら可能性があるやろ。テイルガは嫌かもしれんが、ここは怪我や消耗を限界まで減らさんとあかんでな」

「……承知した。其方やメレオロンが命を張るのだ。我が我儘を言うわけにはいくまい」

正直に言えば、いくら敵となったとは言え元仲間だ。

堂々と敵対したことを伝え、互いに覚悟を決めてから殺し合いをしたい。その方が心情的に楽だからだ。

しかし、ここで我儘を言つてモラウが大怪我を負い、ラミナ達の作戦に支障をきたしたら目も当てられない。

簡単に方針を決めたラミナ達は、すぐに作戦を再開するのだった。

宮殿。

宮殿3階『玉座の間』では、街で噂されていた通り王がプロ棋士達との娯楽に興じていた。

玉座の間には現在シャウアップが王の傍に控えており、入り口をモントウトウユピーが守護している。

ネフェルピトーとアモンガキッドは玉座の間の外で宮殿内の警戒に務めていた。

「ンニヤ〜……暇だニヤア。やっぱりпейジンに行けばよかったニヤア」

「残念ながら、ピトつちにここを離れられたら、おいちゃん過労死しちゃうよ」

床に座って壁にもたれ、頭の後ろで腕を組みながらネフェルピトーは退屈を隠さずにボヤク。

その横に座っていたアモンガキッドは苦笑しながら、1人将棋で遊んでいた。

「1人でやって面白い？」

「残念ながら全然。王がさつき将棋のプロ棋士殺しちやっただからねえ。ちゃんと教えてもらいたかったのに」

「にやははは。残念だったねえ」

アモンガキッドの口癖を真似してネフェルピトーが笑う。

すると、アモンガキッドが盤上の駒を回収した。

「さて、王はまだまだ遊ぶだろうから。おいちゃん達は真面目なお話をしようかねえ。残念だけど」

「とうとうっ」

「пейジンのことだよ。そろそろヂートウ君も出る頃だろうけど……流石に彼だけでこの状況がひっくり返るとは思えないんだよねえ。残念だけど」

アモンガキッドは肩を竦めて、駒の1つを手で遊ぶ。

ネフェルピトーもぶつちやけ同感なので、特に何も言わずに視線で続きを促す。

「厄介なのは、残念なことにおいちゃん達は未だに敵さんの情報を碌に知らないことさ」

「そうだニヤア……。例の女、街を包囲した連中くらい？ はつきりしてるのって」

「そうだねえ。後はチートウ君に念をかけた奴もいるみたいだねえ。けど、他はほとんど分からない。なのに、こっちはもう軍としては壊滅に近いし、遂にペイジンまで包囲されちゃった。残念なことに」

アモンガキッドはパチンと手前側に『玉将』を置く。

そして、その両側に『金将』を置き、金将の前にそれぞれ『飛車』『角行』を置く。

「これがおいちゃん達としよつか」

「玉将はともかく、他はどれが誰なの？」

「金将がピトつちとプフつち。飛車がユピつちで、角行がおいちゃんかな？ まあ、細かくはいいじゃない」

「まあね。それで？」

「ぶつちやけ、残念なことにおいちゃん達の陣営、残りの連中って『歩』に等しいんだよねえ。まあ、ビトルファン君が辛うじて『香車』って感じかな？」

「他の師団長達も『歩』？ 人形兵がじゃなくて？」

「人形兵は残念ながら雑兵にもなっていないねえ。今もじゃんじゃんやられてるんでしょ？」

「うん。そろそろ考えないと選別に困るかもニヤア」

「そうだねえ。でだ、問題は敵さんさ」

アモンガキッドは反対側に『飛車』を置いた。

「まず、おいちゃんと戦って、レオル君やコローチエちゃんの部隊を壊滅した、あの女ハンター」

「そいつと一緒にいた奴は殺したらしいね」

本当は生きているが、あれから報告も確認もされていないのでネフェルピトー達は勘違いしたままである。

「それで、次にペイジンを包囲してる連中。こいつらの実力はまだ不明。まあ、とりあえず『歩』にしとこうか」

『歩』の駒を6個纏めて並べる。

その後ろに『銀将』を置いた。

「それは？」

「司令官はいるだろうからねえ。いきなり現れたのもあるし」

そして、銀将の隣に『桂馬』を置いた。

「これがチートウ君に念をかけた奴。おいちゃん達はこれだけしか知らない。しかも、『飛車』の彼女以外は実力が残念なくらい不明」

「んニヤ〜……」

「でも一番の問題は、あちらさんの玉将」

アモンガキッドは一番奥に『玉将』を置く。

「これが飛車の彼女なら、話は簡単だ。でも、おいちゃんの勘では残念ながら彼女は玉将じゃあない」

「まあ、あれだけ動き回ってたらニヤア」

「じゃあ、ペイジンを包囲してる奴らの中に？ それも違うとおいちゃんは思う」

「なんで？」

「おいちゃん達はペイジンに『行けない』んじゃないで『行かない』だけ。あちらさんだって、それを考えてないはずがない」

アモンガキッドは目の前の『玉将』を優しく撫でる。

「向こうの目標は間違いなく王。だから、向こうの『玉将』は王を倒せるか、封じることが出来る念能力者のはず。そんな切り札を無闇においちゃん達が出てくるかもしれない場所に出すわけがない。力を温存させるのが定石さ」

「うん、それは分かるよ」

あの王に勝てるかどうかはともかく。

お互いにそう思ったが、わざわざそれを口にすることはない。

「ここから考えられることは、敵さんがいつ本気で来るか」

「そんなの分かるの？」

「別に難しいことじゃない。おいちゃん達が一番来てほしくないって

思うのはいつ?」

「……『選別』、だね」

「その通り。その時は残念ながら嫌でも敵が潜り込む隙が出来ちゃう可能性が高い。残念なことに、こっちの駒はどんどん減ってるしねえ」

「ボク達が動かないといけなくなると……」

「そうしないと王が飛び出しかねないからねえ。今はゲームで遊んでるからいいけど、『選別』中は王も見てるだろうから」

「ふむ……」

「だからと言って、ここでレオル君達を下げるわけにもいかないんだよねえ。残念なことに」

「ここで敵をフリーにするのは無理だよニヤア……」

「そうだね。少しでも敵さんにプレッシャーをかけて消耗させないとねえ」

レオル達が負けるとしても、少しでも傷を負わせ、殺して貰わないといけない。

ただでさえ、敵がどれだけ忍び込んでいるのか分かっていないのだから。

「決戦は大会当日か前日。出来れば、それまでにあの女ハンターだけでも始末したいねえ」

アモンガキッドはラミナを想定した『飛車』を手に取り、手で遊ぶ。「多分なんだけどね?」

「ンニヤ?」

「あちらさんの『玉将』はハンター協会会長のネテロって人だと思うんだよねえ」

「ハンター協会会長、ねえ……。なんでそんな人知ってるの?」

「だっておいちゃん、ハンターの記憶持ってるから」

ネフェルピトーは僅かに目を丸くする。

「まあ、正直記憶ツて言うより『記録』ってかんじだけどねえ。ビゼフ

君に外のことを聞いたなら、NGLから散った兵隊蟻達の討伐と捕獲にハンター達が動き回ってるらしいよ。だから、王を確実に仕留めるためにハンター協会会長が出張ってくると思うんだよねえ」

「ふうん……。その会長さんは王とボク達全員を相手に出来るの?」「流石に無理だと思うねえ。それが出来るなら、NGLの時点で突っ込んできてると思うよ?」

ネフェルピトーはアモンガキッドが何を言いたいのかわからず首を傾げる。

アモンガキッドはその姿に苦笑し、

「つまり、今暴れてる連中の狙いは、こっちの戦力を減らして、おいちゃん達護衛軍が出なきやいけないようにしたことだねえ。王からおいちゃん達を引き離したいのさ」

「なるほどニヤア」

「それを踏まえた上で、どう動こうかねえ……」

アモンガキッドは顎を手で撫でながら思索する。

ネフェルピトーは楽しみなのか、尻尾がうずうずと揺れていた。

「互いに互いを熟知したつもりでいる……。この残念な状況を利用しない手はないよねえ」

「ん? 向こうもこっちを知ってるって何で分かるの?」

「残念なことに、兵隊蟻のほとんどは王に忠誠を誓ってるわけじゃないからねえ。ハンターから逃げてきた連中ばかりで、おいちゃん達を隠れ蓑にしてるだけだからねえ。あの女相手じゃあ、殺されたくないからって色々と喋っちゃう子多いと思うんだよねえ」

「あく……兵隊長以下は馬鹿な子多いからねえ」

「そういうこと。それにレオル君達の話だとコルト君は巢に残ったみたいだし、彼からも情報は聞き出しただろうからねえ。だから、ハンター達は聞いたはずだよ? おいちゃん達護衛軍は王から離れることはないだろうってさ」

「その通りだと思うけど?」

「なら、護衛軍が出てきたらびっくりするだろうねえ」

ネフェルピトーは今度ははつきりと目を丸くする。

「おいちゃん達は人間がやりそうなことを思いつくことが出来る。でも、残念ながら向こうはおいちゃん達が何をしでかすかは想像しきれない。何故なら、おいちゃん達は生まれから前代未聞だからねえ」

人間サイズのキメラアントなんて前代未聞。人間を食べるキメラアントなんて前代未聞。人の言葉を話すキメラアントなんて前代未聞。人の記憶を持つキメラアントなんて前代未聞。念を使うキメラアントなんて前代未聞。

ここまでの全てがほぼ前代未聞。

そんな存在の思考を全て読むなんて不可能だ。

「レオル君がやられたら、ちよつと顔を出してみようかねえ。……どれくらい驚いてくれるか、楽しみだねえ」

独り言のように呟いたアモンガキッドは、苦汁を舐めさせられた女の顔を思い浮かべながら、『飛車』を握り潰した。

ペイジン。

ノヴを傍に控えさせながら単眼鏡を覗いていたラミナは、建物の屋上にある姿を見つけた。

「……モラウの進行方向に蟻1匹。……特徴からして、ゼートウやるな」

ラミナの言葉に顔を鋭くするノヴ。

だが、ラミナはあることに気が付いてしまった。

「……なあ、ナツクルはゼートウに憑けたポットクリンを解除したとか言うとつたか？」

「いや、そんな報告は聞いていない。……いないのか？」

「見当たらへん。確か居場所分かるんやなかったか？」

ノヴはそれに答えずに、携帯を取り出してどこかに電話をかけ始める。

「……ナツクルか？　チートウに憑けたポットクリン、どこにいるかまだ分かるか？」

ナツクルにかけたと理解したラミナは、引き続きチートウの動きを監視する。

「……場所は宮殿付近。ここ数日は移動した様子はない、か……。分かった。……ポットクリンの反応は消えていない。位置は地図と照らし合わせた限りでは、宮殿付近だそうだ。少なくとも、ここ数日は大きく移動していない」

ノヴは電話を切って懐に仕舞いながらナツクルから聞き出した情報を伝える。

それにラミナは顔を顰める。

「……流石に宮殿からペイジンまで移動すれば、ナツクルも気づくやろ。やのに、反応はそのまま、チートウはここにおるっちゆうことは……」

「宮殿に除念出来る者がいる……！　厄介なことになってきたか……」

「いや、そうとも言い切れへんでえ」

ラミナはゆっくりと立ち上がりながら、ノヴの言葉を否定する。

その言葉にノヴは眉を顰める。

「どういう意味だ？」

「宮殿に反応があるっちゆうことは、敵の除念は恐らくオーソドックスな『抱える』タイプ。つまり、ナツクルが死ぬ、または自分の意思で解除するか。もしくはチートウが死ぬか。このどれかが起こらん限り、除念師はナツクルの能力を抱え続けることになる。っちゆうことは、アイツを捕らえることが出来れば……」

「除念師を無力化することが出来る、というわけですか」

「まあ、モラウにそれだけの余裕があれば、やけどな」

ラミナは肩を竦めて、サングラスを取り出す。

「ノヴ、いっぺん引っ込みい。モラウはチートウで手一杯になるやろうから、うちが他の人形兵士や他の蟻共を狙うわ。今ペイジンにおるんはチートウだけやないし。多分、レオルはどっかで隠れて見とると



思うんよ」

「……あなたが言っていた他者の能力を奪う能力、ですか」

「多分な。この手の能力は、相手の能力を実際に見るんが制約になつとることが多いでな。ヂートウは考えるタイプちゃうみたいやし、当て馬には最適やろ」

そう言いながら、さりげなく単眼鏡を覗いて、モラウとヂートウの様子を確認する。

すると、ヂートウがモラウを殴ったかと思うと、突如モラウとヂートウがオーラに包まれて、その場から姿を消した。

「!? モラウとヂートウが消えた……!?」

「なんだと……!?」

ラミナは街に展開された【紫煙機兵隊】の様子を確認する。

「……周囲の【紫煙機兵隊】は動きは止まったけど消えとらんか……。ちっ……。念空間に引き込むタイプか」

「モラウの人形達は消されない限り、命令通りに動くでしょうが……。問題は他の蟻にやられれば、モラウの能力がバレてしまう」

「それはもう諦めるしかないやろ。モラウの能力でバレたらあかんのは、煙管が能力発動の媒体やちゅうことや。煙を操ること自体はバレても、対策される可能性は低い」

ラミナは単眼鏡をノヴに投げ渡しながら、サングラスをかける。

「テイルガ達はまだ出さんとってや。まずは覗き屋を仕留める」

「本当に1人でいいのですか？ 獅子男の狙いはあなたの可能性が高い。手負いの獅子は、油断出来ませんよ?」

「いや、むしろあの獅子もどきはもつとイラつかせた方がええ」

「……何故?」

「混ざり過ぎとるからや」

「……混ざり過ぎている?」

ノヴは眉を顰めて訝しむ。

ラミナは顔を向けずに、説明を続ける。

「NGLでうちらが手間取ったんは護衛軍の存在や【円】だけやない。連中の目的がはつきりしとったからや」

「目的……女王蟻への餌の供給、ですか」

「せや。けど、今のあいつらは打算で動いとる。さて、それは兵隊蟻の特性か？ 獅子の本能？ それとも——」

「人間の欲望か」

ラミナの言葉を先取りしたノヴに、ラミナは頷いて人指し指を立てる。

「兵隊蟻の特性が勝つとるなら、打算的に動く理由はない。ヂートウと一緒にモラウを潰しに行くべきや。獅子の本能があるなら、腕を一本失くした状態でここに来るわけがない。とつと逃げ出すべきや」

ラミナは話しながら中指を立て、最後に薬指を立てる。

「そんで、人間の欲望が勝つとるなら……ただの頭に血が昇つとる阿呆や」

ニイと口を吊り上げるラミナ。

ノヴは眼鏡を指で直しながら小さく笑う。

「身の丈も知らんクソガキを殺すんはいつでもええわ。あのモグラの方がよっぽど面倒やでな」

左手にハラデイを具現化しながら言い放つラミナ。

「もつともつと苛立つてもらおうやないか。苛立てば苛立つほど、死神が首輪を嵌めにくるだけやでな」

「……もし、それで更に能力が進化したら？」

「んなもん、決まつとるやないか」

ラミナは肩を竦めて、姿を消しながら歩き出す。

「逆立ちしたなるほどの——暗殺時や」

## #130 サシテ×ハ×ドツチ？

ラミナが単眼鏡でモラウ達が消えたのを確認した同じ時。

レオルもビルの陰からチートウとモラウが消えたのを確認していた。

(チートウの能力が発動したな。結局詳しくは分からなかったが、これで8時間は戻って来ねえ)

チートウが「あのサンングラスの相手は俺がする！」と宣言した時に、邪魔をしないためにと嘘をついて、どんな能力か訊きだそうとしたのだが……。

「スツゲエんだぜ!! 鬼ごっこするんだけどさ! 一度始めると8時間は遊べるんだ!」

と、ハイテンションで話すだけで要所要所しか分からなかったのだ。

とりあえず分かったのは、念空間に相互を閉じ込めて8時間鬼ごっこするということ。

レオルは足に自信はないので、正直微妙な能力だと思った。

相手だけを閉じ込めるのであれば最高だったのだが、自分も閉じ込められたら意味はない。

(俺の【謝債発行機】は一度に1つの能力しかレンタル出来ねえ……。そうじゃなかったら最高だったんだが……)

どこでも1対1になれる念空間ならば、自分の能力を見られずに済む。

だが、そうそう上手い話はない。

正直、レオルはこんな制約を造った覚えはなかったのだが、残念ながら自然とそうなってしまったのだ。

(だが、シャウアップの話だと今後成長すれば能力を改善すること出来るらしいからな。そうなれば、俺に敵はいねえ!)

レオルは不敵な笑みを浮かべる。

だが、それにはそれ相応の努力と経験が必要で、何よりそれまでチートウが生きることが絶対条件なのだ。

しかも、レオルの能力は回数制限付き。そこまで改善するにはキメラアントであろうとも数年レベルの修行が必要となることを、レオルは未だに理解していない。

教わっていないのだから当然ではあるのだが。

ラミナが聞いていれば、鼻で笑っていただろう。

クロロですら多くの制限に縛られているのだから。

『おい、モルモ。他の連中の動きはどうだ?』

『地上にいた連中は急に動きを止めたですます!』

『やはりあのサングラスが指揮官だったか……。他に動いてる奴は?』

『地上にはいません! でも、人形兵らしき者達が地面に落下してるですます! 動いてる敵がいるようですます!!』

『車で来た奴らか……。バジリヤンから何か報告はあったか?』

『はつきりとは確認出来ないようですますが、あの女らしき姿を見たそうですます!』

『つ!! あの女が来てるだとお!? どこだ!? どこにいる!!』

『動きが早すぎて追いつけないようですます!』

モルモの報告にレオルは舌打ちをする。

現在レオルの最優先事項は間違いなくラミナである。

レオルにとって幸運なことは、ネフェルピトー達もラミナの排除が優先事項になっていることだ。

なので、ここでラミナに標的を定めるのは決して間違いではない。

それがラミナの狙いでもあるのだが。

(だが、今の俺達じゃとてもじゃねえが敵わねえ)

しかし、レオルも馬鹿ではない。

怒り恨みを募らせていても、事実を受け入れる冷静さはまだあった。正確にはラミナに腕を斬り落とされたことが若干のトラウマになっただけなのだが、レオルはまだその事実に気づいていない。本能で気づくのを恐れている。

(そもそもモルモもバジリヤンも戦闘向きの兵隊蟻じゃねえし、今更兵隊長をぶつけたくらいでどうにかなる相手でもねえ……。かと

いって、俺も片腕を失くしたし、能力も見せちゃまった。あれだけでどんな能力までかは分からねえだろうが、これ以上情報を渡すわけにはいかん……！ 万全を期すには、師団長が最低でも後2人、駒がいる！)

レオルは顔を顰めて携帯を取り出して、ネフェルピトーに連絡し、応援を頼む。

ネフェルピトーは特に怒ることなく快諾し、ウエルフィンとブローダを送ると言った。

レオルは礼を言って、通話を終える。

(これでこの戦力は最低限揃う。だが、問題はウエルフィン達が来るまでに、どう現状維持するかだな……)

絶対にモルモとバジリヤンをやられるわけにはいかない。

この2体がやられたら、もうレオル達には索敵手段がなくなる。そうなるとウエルフィン達が到着しても、その戦力を十全に活かせず、恐らくレオルはネフェルピトー達に切り捨てられる。

(今はまだ攻め時じゃない……。一度退くか)

『モルモ、バジリヤン。ウエルフィン達が応援に来る。それまでは前のように地下に潜れ。索敵は最低限で良い』

『了解ですます！』

『あはははは！ 了解しましたー！』

レオルは2体に指示を出して、自身も地下へと向かう。

「首を洗って待ってるよ……！ 必ず殺してやるからな……！」

ラミナへの憎悪を滾らせながら。

ラミナは【朧霞】で姿を隠したまま、空を見上げて眉を顰める。

(一雨来そうやな……)

いつの間にやら空は灰色で覆われていた。

更に夜になるにつれて、何一つ輝きの無い漆黒の空へと転じ始めている。

時折、ゴロゴロと鳴っていることから雷も落ちる可能性がある。

(降り方次第で【朧霞】が使えるくなるか。でも、雨音でモグラの索敵を妨害出来るかもしれないあ)

ラミナはビルを跳び移って、モラウとチートウが消えた場所に降り立った。

【凝】を使って現場を注意深く観察するも、残念ながらチートウの能力の痕跡は見つからなかった。

(完全に独立した念空間……。となると、下手に外から能力を解除したらどこに飛ばされるか分からんな……)

ラミナは小さく舌打ちする。

(それにしても……。まさか念空間型の能力を創るたあなあ。あのスピード狂がそんな小難しいことを思いつくとは考えもせんかった)

ラミナがイカルゴから聞いている話では、シャウアップの能力開発は暗示によるものだったはず。

つまり、チートウはあの能力を創りたいと思うような情報があったということになる。イカルゴの言葉が正しければ、であるが。

(ネフェルピトーは『人形』。シャウアップは『繭』。アモンガキッドは『念獣』。モントウトウユピーは不明やけど、話に聞いた性格上、チートウ同様細かいことを考えるタイプやない。なら、師団長に似た能力者が？ けど、それはチートウに真似したいと思わせるほど自分の能力を話したつちゆうことになる。可能性があるんはブローヴァくらいやけど……)

あまり現実的ではない。

ならば、考えられる要因はこちら側。

そこから推測出来る能力は、

(ナツクルの【天上不知唯我独損】。それとモラウの【監獄ロック】か……)

ナツクルの能力の詳細は知らなかったはずだ。

なので『殴られたこと』と『ポットクリン』が大きく影響してると考えられる。

モラウの【監獄ロック】は恐らく十全に走り回れなくされたストレ

スがあつたからだろう。

(やとしても、奴の絶対の強みは『速さ』。それを無視するわけない……。つまり、全速力で走り回れる空間を創り出すことを目的にし、速さを活かす制約を組み込んだるはず……)

だが、いまいちラミナは自分の推察に確信が持てない。

何故なら、わざわざ念空間を創つてまでスピード勝負をする利点が少ないと思ってしまうからだ。

しかし、理由は至極単純だった。

チートウはただ『思いつきり走れて、邪魔されない場所』が欲しかつただけなのだから。

そこにただ勝敗を決める能力を組み込んだだけ。

まだまだ穴だらけの未完成の能力なのだ。

(まあ、モラウの能力なら問題ないやろ。どれくらいで帰ってくるかわからんけど、それならそれで考えればええし)

とりあえず、【紫煙機兵隊】は解除されず、接近する敵には防衛行動を行つている。

もうしばらくはバレずに時間稼ぎ出来るだろう。

すると、ラミナの頬に水滴を感じた。

空を見上げると、サンングラスや頬に更に水滴が降り注いだ。

それは一気に勢いを増し、大雨と言えるほどの本降りになった。

「……さて……第二ステージやな」

【朧霞】を解除したラミナは、周囲の気配を探る。

「ウロチョロしとつた奴も消えた。レオルの気配もまた潜りよつたし……」

濡れて垂れてきた前髪を掻き上げながら、レオルの狙いを推測する。

「ま、考えるまでもないけどな。増援の到着待ちと【紫煙機兵隊】の動きの確認やろうな」

ラミナはニヤリと嗤い、

「あの猫男、随分とビビつとるみたいやなあ。そおんなにモグラを殺されたないんか？ そおんなに1人でうちに挑むんが怖いんか？」





途中で足を止めてマガジンを交換し、連射を続けながら進軍する。レオルの殺気は衰えるどころか増しているのだが、気配は動いていないようだった。

待ち構えて、決着をつけることにしたのだろうかと推測したラミナは、口端を吊り上げる。

連射を止めたラミナは両手の機関銃を放り投げ、手榴弾を十数個ほど取り出してお手玉を始める。

そして、高速で両腕を動かして全手榴弾のピンを外し、更に高速で両腕を振るい、地下道の奥に全て投げ放つ。

「ド阿呆。誰が獣臭い穴に入るかいな」

意地の悪い笑みを浮かべたまま言い放ち、身を翻して来た道に戻り始めるラミナ。

十数個に及ぶ手榴弾の群れは、地下道の奥に吸い込まれるように転がっていき、

一気に炸裂した。

地上を揺るがすほどの大爆発。

地下道中に爆炎と衝撃波が雪崩のように流れる。

ラミナが地下道から飛び出して、真上に全力で跳び上がった。

その真下を爆炎と爆煙が勢いよく噴き出し、地下道の入り口が吹き飛んだ。

「お。思ったより威力あったなあ」

すぐ近くのビルの屋上に降り立ったラミナは、モウモウと煙が立ち上がる地下道の入り口を見下ろしながら呟いた。

すると、その横にノヴが降り立ち、呆れたような雰囲気醸し出しながら眼鏡を直す。

「ペイジンに穴を開ける気ですか……」

「あの程度で崩れ落ちる造りやないやろ。防空壕らしいしな、あそこ」

「……はあ。それで、仕留めたのですか？」

「んなわけあるかい。向こうにはモグラもおるでな。ただの嫌がらせや、嫌がらせ。ええ感じに苛立つとるでえ、あの猫」

「……はあ」

ノヴは再びため息を吐くも、すぐに表情を鋭くする。

「ブラールが宮殿から2体の蟻が出てきたのを確認した。テイルガとメレオロンが確認したところ、師団長のウエルフィンとブロヴーダだそうだ」

「ほお……師団長だけかいな。こらいよいよ敵さんの手駒は尽きてきたみたいやな」

「そして、護衛軍は手駒を使い果たしても、王の傍を離れる気はない……」

「ブラールには宮殿に近づき過ぎんように言うときや。下手に見つかってしもたら、メレオロンとお前が忍び込む隙が作りにくくなってまうでな」

「ええ、分かってますよ」

「モラウの方は？」

「まだ姿は見えません」

「さよで。まあ、しゃあないか。……とりあえず、応援の師団長は何もせずにペイジンに入れるでな」

ラミナは鬱陶し気に前髪を掻き上げながら告げる。

ラミナ達の狙いは宮殿に侵入する隙を作ること。

宮殿から戦力をここに誘い出せば、それだけ潜入しやすくなる。

同時にここで仕留めることが出来れば、作戦当日の成功率が更に上がる。

「理想は奴らが到着する前に、モラウが復帰してモグラを殺す事やけど……」

「流石にそう上手くはいかないでしょう」

「やな。とりあえず、嫌がらせ続けるとしよか！ というわけで、しばらく無視！」

ラミナは地下道の入り口に背を向けて歩き出す。

ノヴも足元に入り口を開いて、身体を沈める。

その後、ラミナは再び人形兵の討伐に集中し、レオル達のは気配を探るだけでちよっかいをかけることはしなかった。

だが、レオル達は地下道から未だに出てくる様子はなく、入り口付近でバジリヤンが顔を覗かせて周囲を確認しているだけだった。

(飛び出してくる思ってたんやけどなあ。逆にキレ過ぎて冷静になったか? ……いや、あいつはそんなタイプちゃうと思うんやけどなあ)

ラミナは顎を擦りながら訝しむ。

(……なあくんか嫌な感じやなあ)

根拠はない。だからこそ気にかかる。

(丁度良すぎる)

現状が。

互いに時間稼ぎをしたいのだから、当然とも言える。

だが、あまりにも状況が普通だ。

有利でもなければ、不利でもない。

勝てる確信もなければ、負ける気配もない。

異常事態が起こる気配を感じない。

NGLに来てから今まで、まともに想定通りに相手が動くことなどないに等しかった。

何故なら相手は前代未聞の新種なのだから。

なのに、あまりにも普通だ。

ラミナはそれがあまりにも気持ち悪く感じた。

(……どこからや?)

どこから普通になっていた?

どこから想定通りに動くようになっていた?

——ペイジンを包囲してからだ。

では、この場合、最も起きて欲しくないパターンは?

王が来ること。

(いや、それは流石に非現実的や。それなら今、王が現れんのはおかしい)

なら、次点。

護衛軍と師団長、全員が来ること。

(それもありえへん)

では次。

護衛軍が全員来ること。

(それもありえへん。すでに師団長のほとんどが、ペイジンに来とる。やとしたら、その次……護衛軍の誰かが来ること)

ありえない。——いいや、十分ありえる。

むしろ、何故来ないと思っていたのか。

(うちらが知つとるキメラアントの特性やない。けど、今うちらが戦つとるんは、うちらが知らんキメラアント。確かにこれまで護衛軍は常識内の行動しかしてへんかった。けど、それだけや。しないからと言って、出来んわけやない)

向こうは人間と同等以上に思考出来る生き物だ。

ならば、すでにこちらの狙いを看破されている可能性がある。

そして、それは……。

決して低い数字じゃない。

(動かされとる。向こうの狙い通りに……!)

根拠はない。ただの勘だ。

だが、ラミナにはそれで十分だった。

(護衛軍が来るとするなら誰や? ……アモンガキッド、やな。もし来るなら……ペイジンにおける師団長が死ぬか、増援の師団長が到着したすぐ後)

来てほしくないタイミングを考えるラミナ。

(増援が来た直後やったら最悪やな。モラウがおらんかったら、うちとティルガ、ブラールだけでアモンガキッドとレオル達師団長を一度

に相手にせんといかん……。流石にアモンガキッドまでおつたら、師団長まで相手にしてられへん……)

ティルガとブラールだけでは3人も師団長を相手にするのは流石にまだ厳しいと言わざるを得ない。

(けど、ノヴとメレオロンにとつちやあ最高の潜入タイミングや。時間を稼げるかどうかは、横に置いとけば、やけどな)

厄介なのは増援の師団長を先に仕留めても意味がない事だ。

逆にそれを理由にして、アモンガキッドが出しやばってくるに決まっている。

それならレオル達だけなので、ティルガでもいけるかもしれないがかなりの賭けであることは変わらない。

(ナツクル達を呼ぶか……。いや、それでナツクルがやられたら目も当てられん。やっぱりモラウに帰って来てもらうんが最善やな)

だが、こちらからモラウを呼び戻す術はない。

(結局運頼み、か。タイムリミットは最大4時間つちゆうところか) ウェルフィン達が到着するまで、後1時間ほどだろう。

到着して少し様子を見て、こつちに来ると推測するラミナ。

(それまでにモラウが戻れば、この一局はうちの勝ち。ただし……。うちとモラウはここでリタイヤの可能性が高い)

だが、もはやこの局面は終盤だ。

今更打つ手を変える時間も駒もない。

あるとすれば『投了』のみ。

つまり、ペイジンの放棄。

それもアリだが、間違いなく今後の作戦に大きく支障が出る。

ここが作戦本番までの一番の山場。

そして、ラミナにとつては、ここが最大の正念場と言える。

(ここでアモンガキッドを仕留めれば……。連中は間違いなく大混乱に陥るはず。『選別』の予定も狂わせることが出来るかもしれない)

十分勝負に出る価値はある。

「先手は取られた。けど、そう簡単にチェックメイトは言わせへん

「でえ。人間舐めんや」

「ラミナはもはやレオルのことなど、頭の片隅にも残していなかった。」

「ラミナとアモンガキッド。」

「どちらが指し手として優秀か。」

「判明するまで、あと数時間。」

## #131 ショウネンバ×ハ×トツゼンニ

モラウが消えてから4時間が経過した。

人形兵を潰しながらレオル達の動向に注意していたラミナの携帯にノヴから『増援が到着した』とメールが届いた。

一度様子を窺うため、ラミナはレオル達が潜んでいる地下道入り口近くのビルから離れた。

メールに記載されていた場所に移動したラミナは、待っていたノヴと共に「4次元マンション」に入る。

「獅子男達の動きは？」

「特に変化なしや。多分、応援に来た連中と落ち合うつもりやろな」

「……やはり、やり過ぎたのでは？」

「それはないやろ。あの時の叫びは間違いなくマジ切れやった。爆弾放り込まれたくらいで冷めるもんちやう。となると……冷めざるを得ん何かが起こったと考えるべきやな」

「……その何かとは？」

「切れたことで突っ込んで、あの爆発に巻き込まれて動けなくなったか。……モグラの方がやられたか」

ラミナの言葉にノヴやテイルガ達も考え込む。

だが、その時。

「む？ ……モラウとチートウが戻ってきたようだ」

テイルガがブラールに顔を向けて、念話の内容を伝える。

それにノヴが携帯を取り出す。

「ノヴ。モラウ迎えに行くついで、例のもん持ってきてんか？」

「……アレを、ですか？」

「おう。多分、そろそろ使う」

多分と言っておきながら、その言い方はあまりにも確信的だった。それにノヴはそれ以上訊かずに頷いた。

そして、ノヴはモラウに連絡を取りながら、ドアを出て行った。

ラミナはそれを見送ることなく、テイルガ、ブラール、そしてメレオロンに顔を向ける。

「お前らも体、解しときや」

「……我とブラールだけでなく、メレオロンも、か？」

「うちの予想が正しかったら、数時間のうちに潜入のチャンスが来る。そんな時は、総力戦になるで」

「……承知した」

「あいよ」

ラミナの言葉にティルガ達は頷いて、それぞれに戦う準備を始めた。

ラミナは部屋に置かれていた飲み物と携帯食を口にする。

10分ほどすると、モラウとトランクを手にしたノヴが天井から落ちてきた。

「よう。悪かったな」

「まあ、しゃあないやろ。んで？ チートウは？」

「逃げたよ。どうやら、奴の能力は一度破られるともう使えねえ制約だったらしくてな」

「なるほどなあ。それで能力の強化しとったわけか」

「発展途上だったってのもあるし、奴が馬鹿で能力を使いこなせてなかったから脱出出来たがな。他の師団長だったらヤバかったぜ」

「ふうん……」

「で、奴は『またシャウ様に新しい能力を貰う』って言つて宮殿に帰つていったぜ」

モラウは肩を竦め、ラミナ同様飲み物を手に取る。

ラミナは眉を顰める。

「それはそれで面倒やけど……。まあ、チートウを殺せば除念能力持ちがフリーになりかねんし、能力を創るために2、3日は動けんくなるやろうから、今は放置でええか」

「だな。それにあの頭の悪さは情報を引き出すにはもってこいだ」

「まあ、次に会う時に欲しい情報があればええけどな。んで……まだ殺し合う余力はあるか？」

モラウの状態を見極めるように目を細めて訊ねるラミナに、モラウは不敵な笑みを浮かべる。



「つたりめえよ！ 出るのに時間はかかっちゃったが、そこまで消耗するような戦いでもなかったからな」

モラウの言葉に嘘はないと理解したラミナは頷いて、ノヴに顔を向ける。

ノヴは眼鏡を直しながら、持っていたトランクを差し出す。

ラミナをそれを受け取ると、

「ノヴ、ペイジンの地図。作戦詰めるで」

「分かりました」

「モラウ、ちよいと訊きたいことあんねんけど」

「なんだ？」

携帯食を食べているモラウを呼び寄せたラミナは、考えていた作戦をモラウに説明する。

話を聞いたモラウは腕を組んで眉間に皺を寄せて唸る。

「……出来ないことはねえ。いや、まず出来る。だが、そこまでする必要性はあるのか？」

「あるから訊いとんねん。理由はこれから作戦詰めながら、説明するわ」

モラウは未だに疑問視していたが、ノヴが地図を床に広げ、ラミナやテイルガ達が集まったのを見て、その疑問を一度頭の隅に押し込む。

もつとも、すぐに疑問は解消されることになるだが。

ウエルフィンとブロヴーダは、バジリヤンからの念話に導かれて地下道へとやってきていた。

2体は地下道の一室に足を踏み入れ、盛大に顔を顰めて片腕を失っているレオルと壁際でぐったりしているモルモを見て、僅かに目を丸くする。

「おいおい……ボロボロじゃねえか。大丈夫か？」

「途中道が崩れてたけど、爆弾でも放り込まれたのか？」

「……ああ。あの女、ピトー殿の人形から手榴弾を奪って、ここに放り込みやがってな。その爆音でモルモの耳が少しやられちゃった」

モルモの探査能力はソナーに近い。地中に響く振動や音波を、音として感知し、位置を把握しているのだ。

だが、モルモは蝙蝠やイルカのように、生来音波を利用する生物が混ざったキメラアントではない。

そのため探査中は地中に潜って、ソナーに集中する必要があるのだが、それが今回裏目に出てしまった。

普通の地上であったならば、爆発しようとも多少耳が痛むくらいで済むのだが、地下道であったせいで爆発による爆音波と衝撃波による振動が、半端ないレベルでモルモに襲い掛かったのだ。

しかも爆発したのはモルモのすぐ近くであったことも、想像以上のダメージを受けた要因でもある。

「ん？ おい、待て。モルモが動けねえってことは、敵がどこにいるか分からねえってことか？」

「いや、完全に動けないわけじゃねえ。ある程度近づけば把握できる。だが、俺とバジリヤンだけじゃモルモを守り切れねえと思ってな。お前らを待ってたんだよ」

ウエルフィンの疑問に、レオルは怒りを全力で抑え込みながらも正直に話す。

それだけレオルは追い込まれていた。

己がラミナに良い様に挑発されていたことはすでに気づいている。だが、やり返したくてもやり返す余裕はもうなかった。

ラミナが待ち構えていることは嫌でも理解させられたのだから。どんな手を使っても殺したい。

だが、その『どんな手』がレオルの頭の中にはなかった。

自分がモルモの探査能力をレンタルしても意味はない。

足が速いわけでもないし、もう空を飛ぶ術もない。

バジリヤンを囷にするという案は浮かんだが、いくらバジリヤンでも囷にされたことは気づくだろう。言うことを聞くとはいえない。

つまり、今のレオルには安全に地下道を出る術がなかった。だから、屈辱と怒りに耐えて、耐えて、耐え続けてウエルフィン達が来るのを待ったのだ。

そして今、ようやく耐える時間が終わった。

レオルはゆったりと立ち上がって、血走った目を限界まで開く。

「さあ……反撃の時だ!!」

百獣の王に返り咲くために。

己の牙を踏み躪った獲物を噛み千切るために。

己が強者となるために。

しかし、結局レオルは最後まで気づかない。

今いる戦場は、百獣の王程度では太刀打ち出来ないことを。

雨のペイジン。

モラウは【紫煙機兵隊】を率いながら、再びペイジンを駆け回っていた。

周囲にラミナやテイルガ達の姿はない。

モラウ達は人形兵を数体倒した後、ビルの屋上で足を止めた。その数分後。

モラウ達の前にレオル達が現れた。

「……よお」

「誰かと思えば、ネバスカの獅子男か。随分と惨めな格好に成り果てたもんだ」

「っ！ ……ふん、いい加減お互いに様子見も飽きてきただろ？ そろそろ決着を付けようぜ」

レオルは一瞬顔を顰めるも、すぐに不敵な笑みを浮かべてモラウに声をかける。もつともこめかみがピクついていたが。

モラウはそれに笑い返す。

（苛立つちやあいるが、仲間が来たおかげか挑発だと理解するクールさはあるみてえだな。だが、それも結局脆い板で堰き止めた程度……。数回突けば簡単に決壊しそうだなあオイ）

「こつちは別にもう少し遊んでても構わないぜ？ さっきのチートウって奴と一緒に、逃げ帰って、傷を治してきたらどうだ？」

逃げ帰るといふ部分を強調して、再び挑発するモラウ。

レオルのこめかみが大きくピクついたが、レオルの表情は変わらなかった。

「……俺様は優しいんだ。お前程度ならこれで丁度いいハンデだぜ」

「ほお。つまり、お前さんは俺と一対一で戦うってわけか？」

「俺様は自分の戦いに横槍を入れられるのが嫌いでな。後ろの奴らは、あのいけ好かねえ女と周りの雑魚共を相手させる」

「なるほどねえ……」

モラウは煙管を右肩に担ぎながら、左手で顎を擦る。

（こいつ……自分じゃラミナに勝てる自信なくしてやがるな？ 他の奴に相手をさせて、自分は倒せる可能性がある俺を狙って、手柄を立てるってか？ なるほど……。ラミナが猫って言うわけだ）

援軍が来た瞬間に飛び出して来て、追い詰められたことを必死に強がって隠し、強気で前に出ながら最後の最後で保身を考える。

（コイツ、超小物）

モラウは大笑いしたくなる衝動を全力で堪える。

（……だが、油断は出来ねえ。思考はともかく、俺の見立てじゃあコイツはチートウと同程度……いや、ちよつと上か）

レオルはチートウよりも先に能力を創っている。

その分練度は上のはず。

(だが、すでに奴の能力はラミナが見破った。問題はその事実になが気付いているかどうかだが……今の感じじゃあ気付いて無さそうだな)

一対一で戦うと言ったのがその証拠。

自分の能力を周囲に見られたくないと考えている。

(ま、俺もラミナに能力の事を聞いてなかったら、あいつの言ったことを半分くらいは信じてただろうがな)

モラウはフウーと口から煙を噴き出す。

煙はモラウの周囲をゆったりと漂い始める。

それにウエルフィンとブロヴーダは僅かに身構えるが、

「チートウから聞いてるぜ？ そいつを色んなもんに変えられるらしいじゃねえか」

レオルは余裕を装って、モラウの能力を知っていることを告げる。

(俺の能力を知っていることを教えてビビらせようってか？ 甘えんだよ)

その程度でビビるなら、こんな使い方をしていない。

知られても勝つ自信があるからこそ、モラウはこの能力を信頼しているのだ。

「そいつは怖えなあ。でも、俺も聞いてるぜ？ お前さんの能力」

「……はっ。そりゃ、怖えな」

レオルは何とか強気に返したが、僅かに反応が遅れた。

もちろん、モラウはその理由を知っているので、ただただ不敵に笑うだけ。

もし雨が降っていないなければ、今頃レオルは冷や汗が噴き出しているのが全員にバレていただろう。

それほどにレオルの内心は疑心暗鬼に襲われていた。

ありえない。

あの程度でバレているはずがない。

きつとあの飛行能力についてという意味だ。

……だが、もし本当にバレていたら？  
いや、だとしても条件まではバレていないはず。

……本当に？ 似た能力を持つ奴なら同じ条件を持つ可能性はあるのではないか？

それをあの女が知っていたとしたら？

バレている可能性がある。

ということは、対処法も実は広まっているのではないか？

このまま戦って本当に大丈夫なのか？

どんだん思考の渦に呑み込まれていくレオル。

(いや!! はったりだ!! 俺の能力がバレてるわけがねえ!! 仮にバレていたとしても、俺がどんな能力を保有しているかは絶対に知りようがねえ!! 俺が有利なのは変わらねえんだよ!!)

レオルはそう己に言い聞かせて、このまま勝負に出ることにした  
「なら、やっぱ決着つけとかねえとなあ。あんまり広めたくねえんだよ。そういうもんなんだろう？ 念つてのはよ」

「さあ、どうだろうなあ」

「ふん。ふてぶてしい野郎だ。ウエルフィン、ブロヴーダ。分かってんだろうな？」

「分かってるよ」

「ホントにお前一人でいいのか？」

ブロヴーダとウエルフィンは頷きながらも、一応レオルを心配する。

ここでレオルが失敗すれば、自分達にも何かしら被害が及びかねないというのが本音だが。

レオルはその言葉を「フン」と鼻であしらい、戦いを始めようとした、その時。

「雰囲気壊しちゃって残念だけどねえ。お邪魔するよお」

突如響いた声に、レオル達は目を限界まで見開いて弾かれたように

振り返り、モラウも顔を引き締める。

アモンガキツドが、そこにいた。

絶対に王の傍から離れないであろうと、レオル達ですら考えていた化け物が。

仲間のはずなのに、今にも喰い千切られるところを想像してしまう理解できない存在が。

そこにいた。

それだけで、レオルは考えていた結末が完全に崩壊したことを本能で理解した。

もう、この戦場にはレオルの意思で動かせる者は、自身を含めていないのだと。

誰もがアモンガキツドを意識せずにはいられないのだから。

アモンガキツドは猫背のままゆったりとレオルの横に歩み寄って、モラウの前に立つ。

「やあやあ、NGL以来かねえ。それとも初めましての方がいいかい？ あの時、君は彼女を助けるために姿を見せなかったからねえ」

「……好きな方で、構わねえよ」

「あらら……ちよつと冷たいんじゃないの？ 残念だねえ。ところで、あの女ハンターちゃんはいないの？ 久しぶりに会いたかったんだけどなあ、残念残念」

(……マジかよ！)

モラウは全力で表情筋に働きかけ、表情が歪みそうになるのを堪えていた。

「ア、アモンガキツド殿……！ な、何故、ここに……」

「いやねえ……残念なことちよつと苦戦してるみたいだからさ。王様が飛び出さないように気を使うのも大変じゃない？ だから、手

伝ってあげようと思ってさ」

全く喜べない。

特にウエルフィンとブロヴーダは何のために来たのか意味が分からなくなっていた。

(どうやって、ここに来た？ ブラールの鼻にも気付かれずに近づいたってことは、コイツも姿を隠したり、瞬間移動みたいな能力を持つてんのか?)

モラウはアモンガキッドが現れた理由も気になるが、そもそもどうやって来たのかに思考を向ける。

既に現れた以上に、そのことに何故と考えることにあまり意味はない。だが、誰にも気付かれずに現れた手段については、考えておかないと不意を突かれる可能性がある。

もし、本当に姿を消したり、瞬間移動できるのであれば、今まで考えてきた作戦が根底から覆るのだから。

「ところで……どうやってこちらに？」  
すると、ありがたいことにウエルフィンがアモンガキッドに質問した。

「ん？ どうやって……おいちゃんの念獣に運んでもらったただけだよ。雨雲ギリギリまで上がってねえ」

アモンガキッドはあっさりとして、上を指差しながらペイジンに来た方法を語った。

モラウはそれに内心で納得して、ホッとした。

もちろん、嘘の可能性はあるが、モラウの経験から今の言い方は嘘ではないと思ったのだ。

十分厄介なのは変わらないが。

(さて……すでに俺の周りは奴さんの念獣で囲まれてると考えるべきだな……)

先ほどまではレオルの動揺を隠してくれていた雨は、今はモラウにも味方してくれていた。

流石に軍団長1体と師団長3体に睨まれているこの状況は絶望的にも程があった。



正直、冷や汗が止まらない。

だが、ここで逃げるといふ選択肢はない。

モラウは煙管を数回振り回して、振り被る姿勢で構える。

それを見たレオル達も身構え、アモンガキツドは特に構えることなく布で覆われた顔をモラウに向ける。

「……ふうん。一度逃げると思ってたんだけどねえ。流石はハンターさん。残念だねえ」

「逃げる？ 何故？」

「自分で言うのもなんだけどねえ。流石にこの状況は厳しいんじゃないかい？」

「はっ！」

モラウはアモンガキツドの言葉を鼻で笑う。

「お前さん、海を知らねえだろ？」

「海い？」

「海って生き物はなあ、何度も顔を変えやがる。穏やかな顔、無表情な顔、笑ってる顔、怒った顔ってな。しかも、その感情に法則はねえ。穏やかだと思ってたなら、急に怒り狂う。笑ってると思ったら、急に無表情になって、大泣きする」

モラウの突然の海語りにアモンガキツド達は訝しむ。

「俺は海で生きてきた。海の突然の荒波や嵐に比べりゃあ、この程度のピンチ、鼻唄歌いながら乗り切れるってえもんさ」

モラウは不敵に笑って言う。

それにレオルやウエルフィン達は顔を顰めるが、アモンガキツドはむしろ感心していた。

「凄いいねえ。怖い怖い（強がりってわけじゃなさそうだねえ……。どうにかなる根拠があるってことかな？）」

アモンガキツドが更にモラウを観察しようとした、その時。

モラウが勢いよく息を吸い込み、そして勢いよく煙を吹き出した。それと同時に周囲の建物の陰から大量の【紫煙機兵隊】が飛び出し、

アモンガキツド達に襲い掛かった。

レオル達が討伐に動こうとしたが、アモンガキツドが手で制止する。

「動くと思えばちやうよ」

その言葉の直後、口だけ念獣が大量に出現して【紫煙機兵隊】に襲い掛かる。

あつという間に【紫煙機兵隊】は数を減らされてしまう。

しかし、1体だけ念獣の猛攻をすり抜けて、アモンガキツドへと迫る。

「おお、やるねえ」

アモンガキツドは特に慌てることなく、迫る【紫煙機兵隊】を見つめていた。

【紫煙機兵隊】に攻撃力がないことをすでに見切っていたからだ。レオル達もそれを感じ取っていたので、特にアモンガキツドを庇おうとはしなかった。

キメラアント達の動きを見て、モラウは――。

口を三日月に釣り上げた。

直後、もうアモンガキツドの目の前まで迫った【紫煙機兵隊】が。

両手にブロードソードとフランベルジュを具現化した。

アモンガキツドがそれを理解した時には、

【紫煙機兵隊】が爆散して、剣を振り始めた全身銀色に輝く衣装に身

を包んだ何者かが、そこにいた。

そして、レオル達が気付いた時には、アモンガキッドは左肩や左上腕、右脇腹などに傷を作りながら横に飛び退いており、銀色の人物は両手の剣を振り下ろした後だった。

しかし、銀色の人物はそこで動きを止めなかった。

両手の剣が消えたかと思うと、両手に鉤爪付きのグローブが出現する。

それにアモンガキッドが動こうとしたが何故か動きを止め、念獣達が襲い掛かろうとしたら煙が行く手を遮った。

更にウエルフィンとブロヴーダの周りにも煙が覆い始め、レオルには【紫煙機兵隊】の生き残りが襲い掛かる。

レオルは煙から逃れようとビルから飛び降り、ウエルフィンとブロヴーダは何も出来ずに煙のドームに閉じ込められた。

そして、アモンガキッドは全身に念の糸を巻き付けられたかと思うと、勢いよく振り回されて思い切り投げられた。

銀色の人物は飛んで行ったアモンガキッドを追いかける。

アモンガキッドは途中で体を縛る念の糸が消えたかと思うと、髪の毛を蛇に変えて伸ばし、ビルの縁に噛みついてブレーキをかける。

そして、ゆっくりと地面へと下り立ち、髪を元に戻す。

それと同時に銀色の人物が10mほど前に下り立った。

「……いやあ、ホントに、驚いたねえ。ホントに……やられたよお。超残念なくらい、してやられたねえ」

「ふん、嫌味かクソ蛇。あんなだけ完璧なタイミングやった攻撃を、掠り傷で済まされるて何やねん」

アモンガキッドの言葉に、その人物は苛立たし気に答えながら銀色の覆面を脱ぎ捨てる。

その正体はもちろん、ラミナであった。

「いやいや、残念ながら運が良かっただけさ。一応、煙人形の攻撃に備

えてたから反射的に動けたっただけ。殺気はもちろん、気配もオーラも熱も感じ取れなかったよ。……その服が原因かな？」

「せやで。NGLで戦った後に造らせた特注品や。ま、ただのアルミでコーティングしただけなんやけどな」

ラミナは上着を脱ぎ捨ててタンクトップ姿になり、ズボンと靴はアルミ部分だけを引き剥がした。

「蛇のピット器官は赤外線。やから、ただ赤外線を反射するもんで身を包んだだけのこつちゃ」

「……だけにしては、随分と手が込んでたじゃないの。煙人形に身を潜めるなんてさ」

そう、ラミナは【紫煙機兵隊】の中にずっと潜んでいたのだ。

「しゃあないやろ。ああでもせんと、目立ってしゃあないからな。それに、赤外線を弾けても、普通に見えるし、臭いまでは消せへんでな」  
ウエルフィンがいるのが一番厄介だった。

だから、モラウが帰って来なければ絶対に使えない作戦だったのだが、ギリギリで帰ってきてくれた。

「煙で覆えば、姿も隠せて、臭いも誤魔化せる。後は【陰】で気配を隠せば、準備は完了」

「……まるでおいちやんが来るのが分かってたみたいだねえ」

「ああ、予想しとったで？　うちらが一番来て欲しないタイミングを狙うやろうってな。お前、蛇やし。舌をチロチロさせながら、音もなく忍び寄ってくる思とったわ。やから……お前が出て来たなるシチュエーションを作ればええだけのこつちゃ」

最終的にラミナが考え抜いた最も来てほしくないタイミングは『師団長との決戦時』だった。

流石に戦闘中となれば、嫌でも目の前の相手に集中せざるを得ない。相手が師団長クラスであれば尚更だ。

そこで護衛軍が出てくれば、絶対に後手に回り、隙が出来てしまう。

故にラミナ達は『アモンガキッドは来る』と決めつけて準備した。

ただそれだけのことだった。

「……」

「まさかとは思うけど……お前、うちがああ戦いから何も備えとらんと、本気で思ってたんか？ 暗殺者のうちが？ 殺し損ねた相手の対策を1個も用意せんと思ってたんか？」

ラミナは首や肩をゴキゴキと鳴らして解しながら言う。

「それとも何や？ 兵隊長以上のキメラアントには銃器効かへんかったから、念能力だけで勝負してくると思ってたんか？ アホか。そこまです人間自惚れてへんし、そこまで人間未熟でもないわ。お前らの能力を無効化する技術なんざ、いくらでもあるっちゅうねん」

ただ普段は持ち運べないだけだ。

だが、今回はノヴという『移動倉庫』がいた。

だから用意した。それだけのことなのだ。

「さて……そろそろ始めよか。そっちもそろそろ自分の状況、把握しとるやろ？」

「あらら……やっぱりバレてるのね……」

「そらあうちの能力のせいやしな。上手いこと手足が動かされへんやろ？」

【矛盾する心身】で一度斬りつけたことによって、今アモンガキツドの四肢の動きは逆様になっていた。

「まあねえ。これは……ちよつと本気でやらないとダメかもねえ」

そう呟いたアモンガキツドの髪が突如異常なほど伸びて、腰から下を包み込んでいく。

目を細めたラミナはブロードソードとレイピアを具現化する。

アモンガキツドの下半身はあつという間に蛇のようになり、ナーガを思わせる姿になる。

「とりあえず、これで下半身は意識しないで済むかねえ」

「ホンマ、バケモンやな」

「ところで、あのサングラスの彼はいいのかい？ 手練れのように見えたけど、1人で師団長3人は厳しいんじゃない？」

「3匹同時やったらな。今頃あの狼とザリガニは煙で閉じ込められと

るんちやうか？」

「ふうん……レオル君は閉じ込めなかったのかい？」

「あいつは他の奴が相手しとると思うで」

「他の奴、ねえ……」

「んなもん、お前がこれ以上気にする必要も暇も——」

ラミナは一瞬でアモンガキッドとの距離を詰める。

「ない思うでえ!!」

アモンガキッドはそれに下半身を振ることで応える。

ラミナの正念場が、始まった。

モラウはウエルフィンとブロヴーダを閉じ込めた【監獄ロック】の前で、油断なく見据えていた。

【監獄ロック】内では随分と暴れている気配を感じるが、今の所破られる気配もない。

(全くドンピシャ過ぎて逆に怖えぜ……)

モラウはアモンガキッドが現れた時、思わず「マジかよ。本当に来やがった!」と叫びそうになったのだ。

そして、ラミナの狙い通りに敵は罠に嵌った。

『アモンガキッドが来る可能性が一番高いんは、あの猫共と殺り合う時や』

『つまり、戦闘中か……』

『も、やな。戦いを始めようとする時に来る可能性もある。つちゆうか、そこが一番うちは嫌や』

『……確かにな。戦闘中は確かに敵に集中してはいるが、一番感覚が敏感でもあるからな。下手な横入りは直前で気づかれる可能性が高い』

『やから直前に現れると思とこか。んで、さっき話した通り、うちはモラウの【紫煙機兵隊】の中に隠れて奴を待つ』

『で、俺は獅子男共を呼び寄せる困ってわけか』

『それとうちとアモンガキツドの戦いに邪魔が入らんようにウエルフィンとブローヴァダを煙で閉じ込めて欲しい』

『あん？ 獅子男はいいのか？』

『あいつの能力は分かつとるけど、あいつが蓄えとる能力までは流石に分からんでな。お前の能力を無効化できる可能性がある』

『じゃあどうすんだよ？』

『逃がす』

『はあ？』

『その場からな。奴は追い詰められとる。うちとアモンガキツドが戦い始め、ウエルフィンとブローヴァダが煙で覆われれば、ヤバイと思つて逃げ出すはずや。そこを【紫煙機兵隊】で追いかければ、確実にその場から更に離れる』

『なるほどな。それで？』

『始末するだけや。……お前がな』

レオルは雨の路地裏を必死に走っていた。

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！ はあ！  
くそっ！ くそがあ  
!!」

後ろを振り返るとすでに煙の兵士達の姿は見当たらなかった。

もちろん、アモンガキツドの念獣も。

(どうする……!!? どうしたら、ここから逆転できる!?)

レオルは未だに諦めていなかった。

だが、すでに狩人が放たれており、すぐ近くにいることには気付いていない。

そして、その狩人がレオルの前に下り立った。

「?!?!  
?!?! お、お前は……?!?!」

「……其方と語ることは何もない」

狩人——テイルガはまっすぐにレオルを見据えて言い放つ。

「恨みはない。怒りもない。だが、哀れで惨めとも思わない」

「なんで……お前が、ここに……!!」

「言わねば分からないのか？ だから、其方は他者の掌で踊り続けているのだ。まあ……我も他者の手に引かれ続けているだけなのだな」

「っ……!! テイルガあ……！ テメエ……！ 人間なんかの仲間に……!!」

「フラツタは我が殺した」

「なっ!？」

「言っておこう。片腕がなかりうと、手加減は出来ん」

「……手加減だと？ お前が……？ 人間如きに降ったお前があ!! このレオル様に手加減だとおお!!」

「覚悟を決めろ、ハギヤ。貴様は我が殺す」

テイルガは両手を鉤爪に曲げ、腰を据えて両手を重ねる様に構える。

強欲の獅子と仁義の虎。

真逆の意志を持つ牙同士が、喰らい合う。



## #132 スルドイキバ×ト×ニブツタキバ

ペイジンで決戦が始まった頃。

ノヴとメレオロンはペイジンからも宮殿からも離れた山の麓にいた。

宮殿が観察でき、ネフェルピトーの【円】に入らないギリギリの場所。

その茂みの陰に2人は雨に打たれながら潜んでいた。

「……【円】は変わらず、か」

「まあ、消すわけねえよな」

相変わらず宮殿を中心に、アメーバのように不規則に形を変える不気味なオーラが広がっていた。

その時、ノヴの携帯が一度だけ震えて、すぐに止まった。

「……どうやら、向こうはラミナの読みが当たったらしい」

「流石だな。まあ、全然喜べねえけど」

メレオロンの言葉に、ノヴも眼鏡を直しながら小さく頷く。

今のは作戦を決めた際に決めた合図だった。

アモンガキッドが現れればコール1回。現れなくとも、作戦通り分断に成功して戦闘が始まればコール2回。失敗したらコール3回。

一度だけ震えたということは、アモンガキッドが現れたということ。

そして、以降鳴らないということは、作戦は上手くいったということとだ。

それは同時に、

「では、行くぞ。……覚悟は出来ているか？」

「ここまで来て、そりゃ聞きっこなしだぜ。出来てなけりや、ここにやいねえ」

ノヴとメレオロンの潜入開始の合図でもあった。

護衛軍の1人がペイジンにいるという好機を逃すわけには行かない。

例えネフェルピトーの【円】が健在であっても。

これは間違いなく絶好の機会なのだ。  
そして、天は更にノヴ達に味方した。

ネフェルピトーの【円】が突如消えた。

「……なに？」

「……消えた、のか？」

決意を胸に茂みを出たノヴとメレオロンは、目を丸くして足を止めた。

数分ほどそのまま様子を見ていたが、【円】が戻る気配はない。

【陰】で隠している気配もない。

「罨、か？」

「……いや、アモンガキツドがいない中で更に王を危険に晒す理由がない。アモンガキツドの念獣とネフェルピトーの【円】が消えた今、連中に接近する敵の存在を探知する術はないはず……」

「つまり、王かネフェルピトーに何かあった、ってことか？」

「そう考えるのが妥当なところだが……（罨である可能性は捨てきれないのも事実）」

王が【円】を止めさせた可能性は否定できない。

だが、先ほどもノヴ自身が口にした通り、アモンガキツドがいない中でそれを護衛軍が承知するとはとても思えない。

故にやはり想定外の事象が起きた可能性が高い。

「……油断は出来ないが、今が千載一遇……いや、万載一遇の機会。罨であろうと、ここで行かなければ、恐らく次はない」

その言葉に、メレオロンも力強く頷く。

ノヴの任務は『宮殿内に出口を最低1つ設置すること』。

すでに入り口は用意してある。

後は出口を作るだけ。

それさえ為せば……己は戦えなくなっても構わない。

「……背中に乗れ。いつでも息を止める用意をしておけ」

「分かってるさ」

メレオロンはノヴの背中にしがみ付く。

ノヴはモラウ達に比べれば華奢ではあるが、男一人背負ったくらいで全く動けなくなるほど柔ではない。

「行くぞ」

ノヴ達もまた一世一代の大勝負に出たのだった。

ペイジン。

鉤爪を構えて静かに、されど鋭くレオルを見据えるティルガ。

ただただ怒りに顔を歪めて、ティルガを睨みつけるレオル。

両者の間に降り注ぐ雨が、ぶつかり合う殺気によって軌道が歪む。

レオルが再び口を開こうとした時、

ティルガが地面を蹴り、レオルへと肉薄する。

鋭く突き出された右鉤爪。

それをレオルは身体を横に反らして紙一重で躲すも、ティルガは先読みしていたとばかりに左鉤爪を振るう。

レオルはそのまま転じてティルガの牙を躲す。

ティルガの牙はそのまま壁に叩きつけられ、壁を抉った。

レオルは素早く起き上がりながら、その結果を見過ごさなかった。

(触った場所を抉る能力か……!?)

ティルガはレオルに身体を向けながら、再び両手を合わせるように構え、直後その場で右腕を突き出した。

力強く突き出された右手から念弾が放たれる。

「なっ……!!」

レオルは目を見開き、慌てて右腕を前に出して念弾を弾こうとしたが、念弾に触れた瞬間に爆発した。

「ぐおお!!」

レオルは後ろに吹き飛ばされて、数回地面を転がる。

ダメージはそこまで大きくなかったので、すぐに起き上がったが、

その内心はもちろん穏やかではなかった。

（こいつ……！ 放出系まで……！ くそっ！ この路地で戦うのは不利だ！）

レオルはテイルガに背を向けて走り出し、テイルガもすぐさまレオルを追いかける。

レオルは道幅がある大通りに出て、更にビルの壁を蹴りながら屋上へと移動する。

屋上に下り立った直後、下から3発の念弾が打ち上がった。

「はっ！ 当たるかよ、そんなもん！」

鼻で笑ったレオルだが、念弾は何故か屋上の上空で停止した。

「あ？」

レオルが訝しんだ、その時。

猛スピードで飛び上がってきた影が、空中で停止した念弾に着地した。

その影がテイルガであると理解したレオルは限界まで目を丸くした。

「なっ……!?!」

「ふっ!!」

テイルガは念弾を蹴って飛び出して他の2発にも跳び移り、最後の念弾に着地した直後、全力で蹴り抜いて飛び出す。

直後念弾は爆発し、その爆風を追い風にしてテイルガが猛スピードでレオルへと迫る。

「!!」

レオルは全力で投げ出すように横に跳び、直前までレオルがいた場所を黄色の旋風が通り過ぎ、風を切る鋭い音が響く。

再び無様に地面を転がったレオルは素早く立ち上がる。

「くそ……！ どうする？ 下りるか？ いや、大して意味はねえ。地下はどうだ？ 駄目だ。逃げ場がねえ……！」

レオルは必死に逆転の糸口を探るも、テイルガの能力は比較的単純であるが故に妨害しにくいことに気づいてしまったのだ。

（俺のレンタル出来る能力でもある程度は邪魔できても、完全に無効

化は出来ねえ)

レオルの【謝債発行機】は確かに強力ではあるが、如何せんレオルが見聞きした能力はそう多くない。

しかも、条件の1つに『相手に貸しを作る』ことが大きかった。

つまり護衛軍に貸しを作れてはいないし、師団長以下の者達にも同様であまり貸しは作れていない。

デートウはすでに能力を失っているのでレンタル出来ない。

ウエルフィンとブロヴーダはまだ能力を見れていない。

兵隊長以下はほぼ殺されたので、もう使えない。

そのため、レオルがレンタル出来る能力の絶対数自体がそもそも多くないのだ。

「どうした？ 先ほどから逃げてばかりではないか」

ティルガの挑発にレオルは苛立つが、それに吊られることはなかった。

もつとも、冷静故の判断ではなく、恐怖による判断なのだが、未だにレオルは気づいていない。

それはある意味学んだと言えるのだが、タイミングがあまりにも遅すぎた。

「ふん……。あんまりいい気になんなよ、ティルガ。油断していると足元掬われるぜ？」

「貴様に言われるまでもない。我に戦いを教授したのは、貴様の腕を斬り落とし、アモンガキッドと戦った者だ。慢心など許されるわけがない」

ティルガは事実ゴン達よりも未熟者だ。そもそも生まれて半年も経っていない。

特殊な生まれであったとしても、経験の蓄積は絶対的に平等である。

1を知れば10を学ぶ者もいるが、それはまだ知識であり、経験とまでは言えない。

ティルガはラミナから能力を授かってから、実戦は今回が2度目。それもラミナのフォロー無しとなると、初めての实戦だ。

だが、ラミナからはこれまで耳にタコが出来る程戦いの極意を教わっている。

故にテイルガが慢心を抱くことはあり得ない。

『ええか、テイルガ。上手く相手が動いとる時こそ、全部疑え。罠かもしれん、じゃあ何でここで罠を張るんかを考えろ』

テイルガは常にレオルの動きを観察していた。

(もつとも、ラミナから奴の能力を聞かされていなければ、ここまで攻められなかっただろうがな)

レオルが保有している能力はそこまで多くないことはラミナから聞かされている。

モラウやノヴもその意見を否定しなかったので、テイルガにそれを疑う理由はない。

故に自身が取るべき策は自ずと決まってくる。

テイルガは再び両手を構えて、オーラを両手に集中させる。

【ティグル・トルメンタ虎咬迅嵐】

両手を交互に連続で突き出し、周囲を取り囲むように念弾を設置する。

レオルはそれに目を見開いて、逃げ道を探そうとしたがすでに遅かった。

テイルガが全力で跳び上がり、念弾の一つに着地したかと思うとすぐに念弾を破裂させて飛び出す。

次々に念弾へと跳び移り、破裂させながら徐々にスピードを上げていく。

レオルはすでに目で追うのも難しくなってきたおり、もはや逃げるどころではなくなっていた。

更に念弾の爆音と衝撃波に意識を逸らされ、テイルガを見失いそうになってしまう。

「ぐっ……!?!」

もはやレオルに出来るのは今更ながらの【練】を発動することのみ。

そして、遂にテイルガを見失った直後、レオルはゾワリと背中に怖気が走り、反射的に右に跳んだ。

レオルの左斜め後ろから黄色の旋風が駆け抜けた。

レオルは左脇腹に鋭い痛みが走り、視線を向けるとシャツの左脇部分がごっそりと穴が空いたように千切れており、脇腹が軽く抉られて血が噴き出していた。

「ぐうおおおおお!？」

やられたことを理解してしまったレオルは、激痛と怒りに大声を上げながら蹲る。

テイルガはレオルから少し離れた場所に下り立つ。

レオルは痛みを顔に歪めて歯を食いしばり、目は血走っていた。

(ここまで追い込んでも能力を出さぬか……。それほどまでに追い込まれているのか。それとも……)

テイルガは無理に追撃せず、油断なくレオルを観察していた。

まだ放出系が未熟なのもあり、オーラを少しでも無駄にしたくない。

レオルは呻きながらもゆっくりと身体を起こす。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……!」

肩で息をし、雨のせいで顔に髪が張り付くのも気にする余裕はなかった。

レオルはしばらく呼吸を整えたかと思うと、おもむろに座り込んだ。

テイルガはそれに訝しむと、

「参った……俺の負けだよ……」

「……どういふつもりだ？」

「降参だつて言つてんだよ。もう俺に勝ち目はねえし、こうなつちまったら王のところへ帰つても殺されるか、餌にされるか、良くてネフェルピトーの実験体だ。だったら、お前らに捕まった方がまだマシつて思つただけさ」

レオルは自虐的な笑みを浮かべて肩を竦める。  
もちろん、ティルガがそれを信じるわけがない。

「ま、信じられねえよな。いいぜ、俺が知ってる限りの情報を話してやるよ。ま、俺はここ最近お前らの相手してたから、ほとんど宮殿にやあ帰ってねえがな」

「……では、貴様が話せる情報とは？」

「『選別』の立案と進行は護衛軍の連中だ。王は宮殿でボードゲームで遊んでるらしいぜ」

「それは分かっている」

「……へっ、流石だな。じゃあ、これはどうだ？ あの宮殿にはビゼフって外交官がいて、他の都市にいる関係者との繋ぎを行ってるってのは」

「それも判明している」

「へえ……じゃあ、そうだな……。選別した兵士を改造するのはネフェルピトールとシャウアップだ。シャウアップの能力は鱗粉と繭を利用した操作系。モントウトウユピーは強化系で、身体を自由に変化させることが出来るらしいぜ。腕や目を増やしたりするのは当たり前、翼まで生やせるってよ」

「……」

「宮殿に残ってる兵隊長以上の奴はビトルファンとチートウ、そんでヒナ……いや、ヒリンだ」

「……ヒリンが除念の能力持ちか」

「お見事。だが、ヒリンは今、チートウに憑いてた念を除念してるから動けねえ。チートウは多分能力の再取得で2、3日は動けねえだろうな」

「ビトルファンの能力は？」

「聞いた限りじゃ単純な強化系みたいだぜ。力と頑丈さを上げるって言ってたな。まあ、それがアイツの自慢だからな」

「……」

「ウエルフィンとブローヴァダの能力は、悪いが知らねえ。この戦いのどっかで盗み見るつもりだった」



ティルガはレオルの言葉に嘘を感じ取れなかった。  
それは当然である。

何故ならレオルは正真正銘事実しか話していないのだから。

「どうだ？ 少しは役に立ったか？ ここまで正直に話したんだ。タダってことはねえだろ？」

「……いいだろう。だが、命の保証は出来ん」

「はっ、別に構わねえよ」

レオルがゆっくりと立ち上がると、その右手には小さな機械が握られていた。

それにティルガが気付いた時、すでにレオルは【謝債発行機】のボタンを押して券が発行されていた。

「お前を始末すれば全部丸く収まるんだからよお!!!」

レオルは嗤いながら宣い、発行された券を噛み千切った。

券はオーラとなつてレオルの身体に取り込まれていく。

「がははははは!! 馬鹿が!! これでテメエはもう能力は使えねえ!!」

「……」

ティルガは顔を顰めながら、右手にオーラを集中させる。

レオルは愉悦を隠すことなく、優越感に浸った笑みを浮かべていた。

「無駄だつて言つてんだろ？ テメエの能力は今、俺のモンなんだよ！ テメエはもうピョンピョン跳び跳ねることは出来ねえ!! ざまあねえなあ!! がっははははははは!!」

「……先ほどの会話が条件だったのか」

「ああ、そうさ。俺の能力はちよつと面倒だな。相手の能力を見聞きすることの他に、相手に貸しを作ってそれを承諾させる必要がある」

「……貴様に借り？」

「さつき言つただろ？ 『タダじゃねえ』つてよ。で、お前はそれを承諾した！ これで条件達成つてわけだ!!」

「……なるほどな」

「卑怯とか言うなよ？俺達は殺し合いをしてるんだ。戦闘中の中のうと敵の話聞いて、真に受けたテメエが間抜けなんだよ。恨むならテメエを恨みな」

レオルはニヤニヤと笑みを浮かべたまま、話し続ける。

だが、テイルガの反応はあっさりとしており、嘆いたり動揺する様子は一切見せなかった。

それにレオルは強がり、または事態を理解してないと思込み、またイラついた。

レオルは更にテイルガを動揺させようと口を開いた。

「あの構えがテメエの能力の発動条件なんだろう？ 片腕——」

すると、テイルガは先ほどと変わらず、また構えを取った。

レオルは目を丸くして、今度こそ苛立ちに顔を歪めた。

「テメエ……!! そこまで馬鹿だったのか!? もうテメエは能力が使えねえって言っ——!」

だが、テイルガはレオルの言葉を無視して、猛スピードで詰め寄ってきた。

あまりに迷いが無いテイルガの行動に、逆にレオルが動揺させられてしまった。

「このっ……!!」

レオルはテイルガの構えを片腕で真似をして、右腕を鋭く突き出して念弾を放とうとした。

そして、念弾が右手から放たれようとした、その時。

突如右手の前に鼻が出現した。

レオルが驚愕に目を限界まで見開いて、攻撃を中止しようとしたが

すでに遅かった。

放たれた念弾が梟に直撃して、レオルの目の前で爆発する。

「ぐおおお!」

レオルは右腕が跳ね上がり、爆風に後ろに吹き飛ばされそうになるが、全力で踏ん張って堪えた。

それは咄嗟の判断だったが、この場合は完全に悪手だった。

両鉤爪を構えたティルガが迫ってきていたのだから。

ティルガは爆発に驚くことなく、冷静にレオルの背後に回り込んでいた。

そして、レオルの跳ね上がった右肘に左鉤爪を添え、

一瞬で抉り千切った。

レオルの右手が宙を舞い、血飛沫が散る。

「ぎいあうおおおおおおお!」

レオルは激痛に血走った目を見開き、悲鳴を上げて地面に倒れ込んで悶える。

ティルガは素早くレオルから距離を取って、冷え切った瞳をレオルに向ける。

「ぐうおおおお……!?! な、何故だああ……!?! 何で能力が使える……!?! た、確かにテメエの能力は……!」

「奪われている」

ティルガはレオルの言葉を引き継いだ。

だが、レオルはその言葉を信じられなかった。自分が言おうとしていた言葉でありながら。

「じゃあ……なんで……!?!」

「別に難しいことではない。私の【虎咬迅嵐】は、正確には武術と念弾

を組み合わせた戦闘術に過ぎないからだ」

「ぶ、ぶじゅつう……?!」

「ああ。壁を抉り、貴様の身体や腕を引き裂いたのは【虎咬拳】という人間が編み出した武術であって、念能力でも何でもない。ただ両手を【凝】で強化しただけのモノだ」

「なっ……?!」

「故に、私の念能力は放出系能力のみと言える。貴様の能力は確かに、我から念弾を生み出す能力を奪っていた。だが……ただ強化されただけの武術は盗めなかった。それだけのことだ」

レオルはテイルガの説明を理解することを拒みたかったが、残念ながら理解できてしまった。

これまでのテイルガの動きについても。

「じゃあ……あ、あの構えは……?!」

「ただのブラフだ」

「!!」

レオルはあまりのショックに痛みを忘れて目を丸くした。

「貴様は徹頭徹尾、ラミナの掌の上だった。貴様の他者から念能力を奪う能力、性格、行動、全てラミナの推測通りだ」

「全て……だと……」

「ああ。貴様がその能力を得たのはあの宮殿に着いてからだ。ならば、貴様が奪った能力はそこまで多くないと考えられる。そして、以前ラミナの目の前で使った様子から、能力を奪う制約はそこまで厳しいわけではなく、されど奪った能力を使うには回数制限や時間制限がある可能性が高い。故に、戦闘中に能力を奪いに来る可能性が高いというのが、ラミナの推測だ」

「……!!」

「もっとも、貴様の能力を見抜けたのは、同じタイプの能力を持つ者が身近にいたからだそうだがな。だが、それ故に、我が貴様の相手を任された。私の能力を見れば、追い詰められた貴様は奪おうと画策する

だろうとな。そして、我でも十分に殺せるほど、今の貴様は弱い、とな」

「……………弱い？ この俺が…………？ 俺が弱いだとおお!!」

「そうだ。何故なら貴様は、自分の力だけでは戦おうとしないからだ」  
「!!」

レオルは叫んだ顔のまま硬直した。

「貴様はNGLにいる頃から、狩りをする時はまず部下達に追わせて弱らせる。最初から自身で相手をしようとは絶対にしなかった。それはここに来てでも変わらなかったな。常に部下達に戦わせ、このペイジンでもウエルフィン達が来るまでラミナ達に挑もうとはしなかった。その性格は念能力にもよく表れている。自分の力ではなく、他者の力を奪い、奪った力で戦う。勝てる状況が整わない限り、決して自身が前に出ようとはしない。それは…………貴様が言う下等な人間の戦い方に他ならない」

その戦い方が間違いとは言わない。

だが、それは絶対にキメラアントの戦い方ではない。

どちらかと言えば人間の戦い方。

それも、実力がない者達が行う戦い方だ。

少なくとも、『百獣の王』を自称する者が選ぶ戦い方ではない。

「貴様は王になることを目論んでいた。別にそれはキメラアントの特性としておかしいことではない。だが、貴様の言動や思考は全てにおいて、強欲で非力な人間のモノだそうだ。同じ人間達が揃って言うのだから、疑う余地はない」

「俺の考えは…………非力な、にんげ、ん…………？」

「ハギヤ…………貴様、己の牙を捨てたな？ 己の牙を貴様が一番信頼していないかった」

「…………!!？」

レオルはテイルガの言葉に怒りが湧き上がったが、言い返すことが出来なかった。

それは事実だからだ。

己の牙と爪が世界の中心だと思っていた前世。

だが、女王に喰われたことで、それが間違いだと知った……つもりだった。

だから、生まれ変わった今世では己の爪と牙以外の力を学ばなければならぬ。

そう思い、それが正しいと思い続けていた。

だが結局、己が王に近づいたことは、ただの一度もなかった。

前世では、己の力では頂点に立てなかった。

ならば、他人の力を使えばいい。

それを女王と自分達兵隊蟻との関係、そして【裏のNGL】の連中の戦い方で理解した。

王とは、自ら動くことなく欲しいものを手に入れ、他者から捧げられる者なのだ。

前世の自分に足りないモノはそれだったのだ。

レオルは確信にも近い実感があつた。

だが、結局それはNGLという狭すぎる世界で知ったもの。

それも文明を捨てた国での学び。

レオルがもつと世界に目を向け、歴史を学ぼうとしていけば結果は変わっていたかもしれない。

「他者の力のみ固執し、己の力を蔑ろにした者が、戦場で勝てる道理はない。戦場に出るのであれば、己すらも切り捨てる駒であると、考えられる者が勝利を掴むことが出来る。そう、我は学んだ」

ラミナはもちろん、同じ能力を使い集団の長であるクロロも、そしてハンター協会会長ネテロも、必要であれば自身を犠牲にすることを厭わない。

普通であれば忌避し、恐怖する考え方にはあるが、それが出来るからこそ己が望む結果を手にすることが出来る。

「そして、貴様は王になる者を気取っていたようだが……孤独な王ほど滑稽なものはない。玉座に王がいたとしても、その周囲に誰もいなければ、その玉座はただの飾りであり、王という称号は虚構に成り下

がる」

「俺は孤独じゃ……!?!」

「ならば何故、貴様の周りには誰もいない？ 誰も助けに来ない？」

「……!!」

「我がフラツタを殺したからか？ ヒリンが動けないからか？ ラミナ達が貴様の部下を殺したからか？ それだけで貴様の周りに誰もいなくなったのであれば、貴様の王としての人望はその程度であったというだけだ。まさに貴様の能力の条件と同じく、貸し借りで繋がった脆い絆だ」

故に、孤高の王ではなく、孤独の王。

今この場に、この世界に、レオルを王と崇める者はいない。

レオルの王国は、すでに滅んでいたのだ。

「獅子の着ぐるみを着ただだの愚かな人間。それが……我らが覚えた貴様の印象だ。故に、貴様を追い詰めるのは至極、容易であった」  
自身で戦おうとしないから、キメラアントの身体能力や特性に怯える心配はない。

人間のように王を気取っているのであれば、獅子の本能を気にする必要もない。

キメラアントでも獅子でもなければ、もはや知識も経験もないただのチンピラのリーダー、または零細マフィアのボスレベルの小物。

暗殺者が、最強最悪の幻影旅団が恐れる理由は何もない。

慢心する気にすらならない。

それほどに、レオルは落ちぶれていた。両腕が健在であろうと、その印象は変わらなかっただろう。

まだザンやマンデイスの方が、王としての資質があっただろう。クロ口達がこの場に居れば、間違いなくそう言うだろうと、ラミナは思っていた。

「終わりだ、ハギヤ」

ティルガが両手にオーラを集中させ、鋭い目つきでレオルを見下ろ

す。

レオルは頭の中でプチツと何かが切れた音がした。

「……………だから、俺はハギヤじゃねえ……………」

眩いたレオルは幽鬼が如くユラリと立ち上がり、

「俺は!!… 百獣の王レオル様だあああああ!!」

雄叫びを上げながら、口を限界まで開けてテイルガの喉に噛みつこうと飛び掛かった。

それをテイルガは、

予想していたかのように、静かに、されど素早く両腕を動かして、右鉤爪をレオルの頭に、左鉤爪をレオルの開いた顎に添えた。

見開かれたレオルの目に映ったのは、僅かに輝く気高き猛虎の鋭き瞳だった。

直後、レオルは頭を巨大な虎に噛み付かれた幻覚に襲われた。

【虎咬拳】『レイコウガ振咬牙』

テイルガは両鉤爪を全力で捻りながら、押し潰すように両腕を振るった。

レオルの頭はまるで紙風船のように、パン!!と一瞬で肉片すら残さず擦り潰された。

テイルガの顔や服に、レオルの最後の嫌がらせのように僅かな血がこびりつく。

だが、それも雨ですぐに流され、頭部を失った胴体は駆けていた勢いそのままテイルガの横を通り過ぎ、スライディングするかのように倒れ伏した。

テイルガはそれを顔だけで振り返って確認した。

「……………窮鼠猫を噛む、か。残念だったな、ハギヤ。我が師は、それすら



も読んでいた」

それはラミナが何度も口にしていた言葉だった。

『覚えときや。殺し合いや暗殺で一番怖いんは、仕留めたと確信した時や。特に決め技で殺そうとした時は、どんなに熟練でもその瞬間に意識が向いてまう。そこで反撃されたら、ほぼ確実に喰らう。やから、決め技を使う時こそ最大限に警戒せえ』

ティルガはその教えに従って、50mほど離れたビルの上へと移動した。

それでも数分は周囲を警戒しようとしたが、隣にブラールが降り立ったことでようやく警戒を解いた。

「すまない、ブラール。さっきは助かった」

「……」

ブラールは小さく頷くだけで答える。

先ほどレオルの念弾を妨害したのは、もちろんブラールの念獣であつた。

「……正直、我もハギヤに対して上から言う資格はないのだがな……」

あれだけ偉そうに言っておきながら、ブラールの援護を受け、ラミナやモラウに場を整えて貰つたお膳立てによる勝利。

良い所取りの勝利。

それが戦争というものではあるが、やはり勝つても嬉しいとは思えないティルガであつた。

「……」

「……ああ、そうだな。我は別に王にも将にもなりたいわけではない。レオルとは立場が違うが……。それでもやはり、な」

すでにティルガはラミナの下で戦うと決めた身。誰かの上に立ちたいとも思っていない。

レオルに憐れみも同情も覚えはしないが、ここまでラミナの掌で踊らされたとなると、少し不憫に思わないこともない。

ティルガはレオルであつた肉体がある方へと顔を向け、

「……貴様は余計なプライドを捨てるべきだったな。その鈍った牙を、本当に捨てる事が出来ていれば、貴様はここではないどこかで王になることも出来ていたであろうに」

もう牙は使えないと考えておきながら、その牙を持っていたことを誇りにし続けていた哀れな虚勢。

それを捨てて開き直ることが出来ていれば、東ゴルトーを離れてどこかに身を潜めながら勢力を強め、本当に王になることが出来たとテイルガは思っていた。

頭が悪いわけでも、弱いわけでもなく、苦渋に耐えることが出来なわけでもなかったのだから。

だが、捨てたはずの牙に固執したことによって、悉く選択を間違えてしまった。

その結果が孤立して、末端兵同然の死。

「……惨めだな、ハギヤ。恐らく貴様は、師団長の中で最も惨めに死んだ兵隊蟻だろう……。貴様は結局我らを誰一人殺せなかったのだから」

キルアが生きていと伝えなかったのは、せめてもの慈悲なのか。

それはテイルガ本人すらも分からなかった。

「行こう、ブラール。次はモルモを探す」

「……」

ブラールは頷いて、雨の中を再び飛翔する。

テイルガはそれに続いて、ビルを跳び移りながら移動する。

少しでもラミナ達の負担を減らす。

今のテイルガが出来ることは、ただそれだけだった。

### #133 キョウフ×ハ×ミエヌモノ

ラミナはレイピアを突き出しながら、アモンガキッドに猛然と詰め寄る。

アモンガキッドは太くて長い尾を振り乱して、ラミナを牽制する。

【啄木鳥の啄ばみ】によって、尾に穴を空けられるも、その穴はすぐさま塞がった。それは「一瞬の鎌鼬」で切り裂かれたとしても同じだった。

「ちっ（脚はほぼ根元。狙うにはちと遠いか）」

「君を近づけるのは怖いからねえ。おいちゃんにかかっている能力もずつつってわけにはいかないんでしょ？ まあ、残念なことにおいちゃんも君を圧倒する力はないんだけどねえ」

そう嘯きながらアモンガキッドは口だけ念獣達をラミナに喚ける。

ラミナはレイピアを消し、バルディツシュを具現化して口だけ念獣達を斬り払う。

更にアモンガキッドの髪が変化した大蛇が大きく口を開いて噛み付いてきた。

迫る巨大な口にラミナはバルディツシュを掬い上げるように振るうが、刃が振れる直前にその巨大な頭部が自ら割れた。

「!!」

割れた頭部は双頭の大蛇と成り、左右からラミナに迫る。

「それはおいちゃんの髪だからねえ。別に頭一つに限られないんだよねえ」

「せやろ、なっ!!」

ラミナは驚きはしたものの、冷静にブロードソードを高速で振るって2つの首を刎ねる。

だが、斬られた首はそのままラミナへと迫ってきた。

「くっー!」

歯を食いしばって上半身を仰け反らしながら、両手の武器を消して、ソードブレイカーに変える。

二振りのソードブレイカーを高速で振って大蛇の頭を斬り飛ばし

ながら、ラミナはバク転して距離を取る。

斬られた大蛇の頭2つは髪の毛に戻って地面へと散りばめられる。

「……へえ。もしかして、その武器。かけられた念も斬るのかい？」

「さあなあ」

ラミナはソードブレイカーを消して、ブロードソードとバルディッシュを再び具現化する。

「……やっぱ、君は厄介な能力の使い手みたいだねえ」

「お前に言われたないわ阿呆」

ラミナは武器を構えながら、アモンガキッドに言い返す。

(向こうも様子見しとるなら、今のペースを続けるんが得策か……。けど、持って後10分つてとこやるな。本番はそっから)

タイムリミットは他の師団長が合流した時。

モラウには無理して参戦はしないように伝えてある。

最優先は『足止め』、その次に『レオルとモルモの討伐』だ。アモンガキッドやウエルフィン達は殺せたら『超ラツキー』程度。

理由はキメラアントの生命力の高さにある。

人間では致命傷でも、キメラアントでは致命傷になりえない。厄介なのは個々によってその差が著しく大きいということだ。

首を斬り落とすのが確実なのは間違いないが、モラウはその手の攻撃は得意ではない。そもそもモラウはサポート要員であり、討伐メインの戦闘員ではないのだから。

モラウの能力は護衛軍分断に必要不可欠だ。

なので、余計な怪我を負わせるわけにはいかない。

(奴の能力もまだはつきりとせん部分があるしな)

念獣と髪を操作、変化、具現化する能力。

身体能力を組み合わせれば、脅威ではある。だが、これまでのアモンガキッドの言動を考えれば、大人し過ぎる。

まだ何かある。

ラミナの直感はその告げていた。

「……まあ、それは念能力者相手なら珍しくないか」

思考を一度中断したラミナは、アモンガキッドに詰め寄る。

高速で迫るラミナにアモンガキッドは、念獣の群れと再生した大蛇の頭で迎え撃つ。

ラミナはフィギュアスケートのステップを思わせるような身のこなしで、念獣の群れの間をすり抜けながらブロードソードを高速で振り、バルディッシュを振り回して、念獣達を切り裂く。

そこに大蛇の頭が迫ってきて、ラミナは再びバルディッシュで迎え撃とうとするが、やはり大蛇の頭が分裂して刃を躲す。

今度は3つ首の大蛇となって、左右と上からラミナに襲い掛かる。

ラミナは目を細めてスピードと軌道を予測し、左腕を突き出してバルディッシュを高速で回転させて、大蛇の頭を牽制する。

直後、ラミナがブロードソードを振り上げたかと思うと。

ブロードソードを超高速でアモンガキッド目掛けて投擲した。

高速で斬撃を放つ「一瞬の鎌鼬」によつて、猛スピードで飛翔するブロードソードを、アモンガキッドは顔を傾けて紙一重で躲す。

僅かに掠つたのか布が裂けて、頬から血が流れる。

その隙を突いて、ラミナは「仁愛なる兄の豪肩」で強化されたバルディッシュを地面に叩きつけて地面を吹き飛ばす。

爆発したかのような衝撃に3つ首の大蛇は吹き飛ばされた。

ラミナはブロードソードとバルディッシュを消し、全力で地面を蹴ってアモンガキッドとの距離を詰める。

「っ——!!」

アモンガキッドは太い尾を振って牽制しようとした。

しかし、ラミナの右手にソードブレイカーが握られているのを目にして失策に気づいた。

アモンガキッドが対処しようとする前に、ラミナはソードブレイカーを尾に突き刺す。

下半身を覆っていた太い尾が、バサツと髪の毛に戻ってアモンガ

キッドが空中に投げ出される。

しかし、アモンガキッドはラミナの追撃を受ける前に、真横から高速で飛んで来た口だけ念獣に体当たりされて、無理矢理移動する。

(やろうな)

ラミナは左手に具現化していたスローイングナイフをアンダースローで投擲すると同時に、右手のソードブレイカーを消して、手甲剣を具現化する。

アモンガキッドは口だけ念獣に乗って僅かに上昇し、高速で飛んで来たスローイングナイフが口だけ念獣の下顎に突き刺さる。

だが直後、アモンガキッドの足元、口だけ念獣の目の前に、突如ラミナが現れた。

「っ!!」

「シィッ!!」

アモンガキッドの右足を狙って、ラミナは手甲剣を鋭く突き出す。まだ手足が自由に動かせないアモンガキッドは腰を無理矢理捻って躲そうとするが、手甲剣の刃が僅かに掠る。

直後、掠った個所が炸裂した。

アモンガキッドはバランスを崩して念獣の上から放り投げられ、ラミナは指を鳴らしてスローイングナイフと入れ替わって距離を取る。(ホンット……どれだけ能力を持つてるのかねえ……!)

再び髪を蠢かして下半身を大蛇に変え、頭側は6つ首の大蛇を生み出して一斉にラミナへと飛びかからせる。

ラミナは右手にブロードソード、左手にソードブレイカーを具現化して迎え撃つ。

右から迫る大蛇を噛みつかれる直前に縦に両断し、上から来た大蛇は鼻先にソードブレイカーの切っ先を突き刺して髪に戻す。

高速で地面を這うように迫ってきた二頭の大蛇を跳んで躲すが、それを狙っていたかのように前後左右から四頭の大蛇が口を大きく開いて迫ってきた。

「ぐっ……！」（再生速っ……！）」

ラミナは顔を擧めて全力で体を捻りながら左脚を振り上げ、前方から迫る大蛇の顎を蹴飛ばして、右から迫る大蛇へとぶつける。

だが、ぶつかった大蛇同士融合し、頭を一回り大きくして襲い掛かってきた。

ラミナは目の前まで迫っていた巨大化した大蛇の口の中にソードブレイカーを突き刺して、噛みつかれる前に解除する。更にブロードソードを高速に振り、もう1頭の大蛇を両断するが、最後の1頭には間に合わず、全力で身体を捻って噛みつきを躲すも横に吹き飛ばされる。

そこに太い尾が猛烈な勢いで迫り、左脇腹に叩きつけられる。

「がっ——！」

ラミナは直角に吹き飛び、地面を数回バウンドする。

体勢を立て直して両手足を地面に着いて滑り、最後にバク転して立ち上がる。

「ぺっ！」

ラミナは唾を吐き捨て、ハルバードを具現化する。

「【起動せよ】！」

全身に鎧を纏った直後、ラミナに4頭の大蛇と太い尾が襲い掛かるも、鎧に触れた直後髪の毛の束に戻る。

「へえ……今度は念を弾く鎧って感じなのかな？ ホントに驚くほど多能だねえ」

アモンガキッドが呟いた直後、突如ハルバードが折れて消滅し、鎧が解除された。

「なっ……!?!」

「なるほどねえ。武器は無効化出来ないわけだ。どんな凄い能力も万能ではないってわけかねあ。残念残念」

（なんや今の……。まるで溶けたみたいやった……。毒か!!）

ラミナは何をされたか推測して、盛大に顔を擧める。

だが、まだ絶望は続く。

「さあてつと……ようやく体が戻ったみたいだねえ」

アモンガキツドが下半身の蛇を解除して地面に立ち、両腕でストレッチする。

「ちつ……もう解けたんか。……あ？」

ラミナは舌打ちした直後、アモンガキツドを見て違和感に気づいた。

アモンガキツドの傷が消えているのだ。

確かに深い傷ではなかったが、そんなすぐに癒える傷ではなかったはずなのに。

「驚いたかい？ おいちゃん、脱皮することで簡単な傷ならすぐに治せるんだよねえ」

「……蛇の脱皮でそんな理由ちやうやろ」

「残念ながら、これはキメラアントになったおいちゃん独自の特性つてわけだねえ。キメラアントの生命力と蛇の脱皮が上手く作用したって感じかねえ。平凡なおいちゃんだけど、護衛軍の端くれだからさ」

「ど阿呆。平凡て言葉、辞書で引き直してこいや」

「君を倒したら、帰って調べてくるよ」

「はっ、やれるもんならやってみいや」

ラミナは鼻で笑って、ブロードソードを二振り具現化する。

アモンガキツドは再び頭に6つ首の大蛇を生み出し、動くようになった両手をゴキゴキと鳴らす。

すると、周囲の口だけ念獣が消滅し、オーラがアモンガキツドへと戻っていく。

「……再生能力はオーラを消費するもんやんな」

「あらら、やっぱバレちゃうか……。まあ、それもあるけどねえ。前回の反省を踏まえて、今回は全力で戦わせてもらおうと思ってねえ」  
肩を竦めたアモンガキツドだが、

ヌルリと、一瞬でラミナとの距離を詰めた。



ラミナはギリギリでアモンガキツドの動きを捉えていた。

蛇が如くうねりながら伸びてくるアモンガキツドの右腕と、先ほどとは比べ物にならない速さで迫る大蛇に、ラミナは何とか【一瞬の鎌鼬】で反応する。

しかし、アモンガキツドの左脚が跳ね上がり、再びラミナの右脇腹に叩き込まれた。

ラミナは声を上げること出来ずに吹き飛ばされる。

錐揉み状に吹き飛ばされたラミナは、空中で体勢を整えてから受け身を取って地面を転がる。転がった勢いを利用して、勢いよくアモンガキツドとは逆方向に跳び下がる。

（くそっ……！ 防ぐだけで精一杯か……！ 見た感じ、頭の蛇は6頭が最大。まあ、信用できんけどな！）

ラミナは頭をフル回転させて、対策を考える。

（あの毒みたいなのがどこまでなんか分らんのがなあ……。掠るんも厳しいか……）

すると、突如アモンガキツドが6頭の大蛇を伸ばして、左右のビルに3頭ずつ噛みつかせた。

まるでスリングショットのように。

「!! このクソ蛇……！」

ラミナがボヤいた直後、アモンガキツドが弾丸となって飛ぶ。

音速に迫ろうかという程の速度でラミナとの距離を詰めたアモンガキツドは、両腕を蛇が如くうねらせてラミナに掴みかかる。

ラミナは大きく空気を吸って息を止め、全神経を注いで両腕で【一瞬の鎌鼬】を発動して、アモンガキツドの両手を捌き、一瞬の間を突いて右脚で【打蠍】を繰り出してアモンガキツドの右足に当てる。

アモンガキツドは右足を後ろに弾かれるも、頭の大蛇を地面に押し当てて身体を支え、倒れるのを防ぐ。

そして、反撃とばかりに6頭の大蛇と両手で、ラミナに襲い掛かる。

ラミナも高速の斬撃で受け流し、斬り落とし、躲していく。

その時、突如背後から口だけ念獣が出現して、大きく口を開けてラミナに迫ってきた。

ラミナは屈みながら左手のブロードソードを逆手に持ち替えて、背後に投擲する。

ブロードソードは口だけ念獣の身体に深く突き刺さり、空いた左手にはバルディッシュを具現化して鋭く突き出す。

アモンガキッドが僅かに後ろに下がった瞬間、ラミナは両手の武器を消して、全力で後ろに下がって口だけ念獣に突き刺さったブロードソードを抜く。

すぐさま大蛇がラミナに攻めかかる。

すると、突如ラミナの身体、左肩辺りからバチツと電流が弾けたような音がしたかと思うと、ラミナがこれまで見たこともない速さで動き、一瞬で全ての大蛇の首を刎ね、一瞬で高く跳び上がった。

アモンガキッドはすぐさま上を見上げる。

アモンガキッドの真上にいたラミナの右手にはバルディッシュが握られており、左肩にはチャクラムが留まっていた。

「仁愛なる——」

素早くバルディッシュを回転させ、チャクラムを消すのと同時に勢いよく振り下ろす。

「——兄の豪肩」!!!

膨れ上がったオーラを纏った刃を真下にして、猛スピードで落下する。

アモンガキッドは後ろに跳んで、大蛇で身体を覆う。

直後、ラミナが地面に激突し、地面が爆せてクレーターが出来る。

ラミナはバルディッシュを消して、鎖鎌を具現化して、すぐさま蜷局を巻いているアモンガキッドへと投げる。

「親愛なる妹のペツト仲間」

大蛇や口だけ念獣よりも巨大な口を持つ狼頭が、大きく口を開いてアモンガキッドへと迫る。

だが、突如ラミナとアモンガキッドの間から大蛇が飛び出して来

て、【親愛なる妹のペット仲間】を繋いでいる鎖に噛み付いた。

巨狼は動きを止めたかと思うと、大蛇が噛み付いた個所から鎖がドロリと溶け始めた。

ラミナは目を見開いて、鎖鎌を消す。

直後、ラミナの真下からも大蛇が飛び出して、ラミナの左靴底に噛み付いた。

「ヤバッ……!?!」

ラミナは後ろに跳び下がりながら慌てて左脚を振って、左のブーツを脱ぎ捨てる。

脱ぎ捨てられたブーツも腐ったように崩れて塵と変わる。

「腐毒か……!」

ラミナは顔を顰めて歯を食いしばる。

【小生意気な雷童子】を使った反動に耐えているというのもあるが。(具現化した武器も溶かせるっちゆうことは……)

「……その毒、オーラを溶かせるんやな?」

——パチパチパチパチ

アモンガキッドは大蛇を解除しながら拍手する。

「流石だねえ。その通り、おいちゃんヒュドラ・デイリデイリオの能力【悲劇を齎す毒の杯】は何でも溶かす毒を持つんだよ。石や鉄、樹はもちろん、水や空気、生き物、そして——オーラをも溶かす」

「……ヒュドラの毒、か。髪の毛と両腕、お前自身の頭で9つの頭っちゆうわけか?」

「ホントに良く分かるねえ。ホント……殺さなきゃいけないのがとても残念だよ。ねえ、君。こっちに就く気はないかい?」

「ないで」

「……即答とはねえ。結構ショックだなあ……残念」

アモンガキッドは本気で項垂れる。

正直、ラミナがそこまで人間の世界のために戦っているとは思えなかったのだ。

「あんまり君は人間とかカメラアントとか気にしない性格だと思ったんだけどねえ……」

「別に気にしてへんで」

「じゃあ、いいじゃない。君って真つ当なハンターってわけじゃないんでしょ？ こっちに就けば、この国のお金、そのままあげるよ？」

「いらんわ。お前らを仕留めた後に盗んだらええだけやないか」

「うわあ……そういうこと言っちゃう？」

「そもそもお前にスカウトされたかて、王が認めんかったら餌やないか。誰が信じんねん」

「そうでもないよ？ 今の王様なら、意外と認めてくれる気がするねえ……」

「……今の王？」

「今、王様は暇潰しで人間達と戯れてる。ただ殺して奪うだけの暴君じゃ無くなってきてる。君ほどの人間なら興味を持つ気がするねえ」  
「ふうん……」

「もしかしたら、君が仲間になることで人間達を救えるかもしれないよ？ まあ、残念ながらこの国の人間は諦めてもらわないといけないけどねえ」

「他の奴らなんざどうでもええわ」

「だったら、こうしておいちゃんと戦う理由もないんじゃない？」

「途中で依頼を投げ捨てるんは信条やない。前金も貰とるしな。んで、これはNGLで女王を仕留められんかった失敗の後始末なだけや。別に人類救済とか、ハンターの誇りとかで戦つとるわけちゃう」  
「……ん〜……なるほどお……。これは……難しいかねえ。はあ……残念だなあ」

「何より……」

ラミナはブロードソードを両手に具現化させ、右手の剣を肩に担ぐ。

「うちの王はもう決まつとる。生まれたてで何をするかも定まつとらんクソガキなんぞに、鞍替えするほど落ちぶれとらんわ」

「手厳しいねえ……。こりゃ駄目か。残念だなあ……。本当に……残

念だ」

アモンガキツドは右手で頭を搔いて、顔を俯かせる。

落ち込んだように見えるが、ラミナは間違いなくアモンガキツドの気配が更に不気味に変化したことを感じていた。

それをアモンガキツドも隠す気がないのか、ゾワリと不気味という言葉すら生温く感じるほどのオーラ殺気が噴き出す。

「君とは気が合いそうと思ったんだけどねえ……」

「そうかあ？　うちはめっちゃイライラすんねんけどな」

「酷いねえ。まあ……これも人生つてことか」

そう呟いた直後、アモンガキツドの髪が蠢いた。

勢いよく伸びた髪はアモンガキツドの身体を覆っていく。

頭には6つ首の大蛇。更には両腕も髪が覆い、大蛇を成す。

「おっおっ、気色悪い蛇が増えよったなあ」

「……君つて全然怖がらないよねえ。師団長達でさえおいちゃんにはビビってるのにさあ」

「はっ！　見えとるもんは何を怖がれつちゅうねん」

ラミナはアモンガキツドの言葉を鼻で笑う。

だが、アモンガキツドは意味が分からなかったようで、小さく首を傾げた。

「目に見えとるなら、逃げることも出来る。対策を考えることも出来る。倒すことも出来る。なんとか出来る可能性があるなら、怖がつとる合間に動く方がええに決まつとるやろ」

「……」

「やから、うちは見えんもんの方が怖い。見えんもんは対処のしようがないでな。どこから来るか分からんのやから逃げようがない。どんな姿かも分からんのやから対策を考えることも出来ん。見えん奴に攻撃なんざ当たたらへん。何をすればええのか、全く分からん。そっちの方が断然怖い」

「見えててもどうにも出来ないことつてのもあるんじゃない？」

「そんな時は潔く諦めるだけや。試せること全部試してもあかんのやつたら、そこがうちの寿命やつただけのこつちや。別に怖がる理由には

ならんでな」

「死ぬのが怖くないのかい？」

「怖いに決まっつとるやろ。けど、怖いと思うんと、怖がるんは別モンや。それに、うちは殺し屋や。人を初めて殺したその時から、すでに殺される覚悟なんざ決まっつとるわ阿呆」

怖いと思うのは当然だ。

しかし、怖いままにせず、対策を練れば恐怖は軽減出来る。何もせずに怖がるのはただの怠慢で、何もしていないのだから怖いのは当然である。

恐怖は心身共に動きを鈍らせる。

故にラミナは常に考え、備えているのだ。

「……」

「殺し屋の人間舐めんな、蟻」

「……全く。人間つてのはやっぱり怖いねえ、怖い怖い」

アモンガキッドはそう言いながらも、肩を震わせて声も出さずに笑う。

「そう言えば……君の名前、訊いてなかったねえ」

「……幻影旅団が11番、ラミナ」

「……幻影旅団の、ラミナちゃん、ね。いや、君にちゃん付けは失礼か。……うん、敬意を籠めてミナっちと呼ばせてもらおう」

「どこに敬意があんねん」

「おいちゃんがそんな呼び方するの、護衛軍達だけよ？ つまりさー君を同格と認めたってわけ」

そう告げたアモンガキッドは勢いよく飛び出した。

「だから、おいちゃんが骨まで食べてあげるよ。ミナっち」

「嫌じゃボケエ!!」

そして死闘は、新たな幕が上がった。

同時刻。

モルモは地下道の中で穴を掘って、その中で丸まっていた。

「う〜……ようやく耳が治ったですます。でも、もうボクの手に負える状況じゃないですます……」

モルモの耳に届くのは、アモンガキッドとラミナの戦闘音。

そして、もう一つ。

「だ、誰が下りて来てるですます……?」

レオルの足音ではなかった。

ウエルフィンやブロヴーダでもない。バジリヤンも今は外にいる。

だから、これは敵だ。

「に、逃げるですます? で、でもレオル様達にバレれば怒られるですます……。でもでも、逃げないと殺されるかもしれないですます。でもでもでもでも、逃げたらアモンガキッド様に食べられるかもですます……」

モルモは自分の命と使命に葛藤していた。

逃げ出さないのは、敬愛するコローチエの最期を思い出すからだ。

ここで逃げ出すのは、王を裏切ると同意。

それはコローチエをも裏切ることには他ならない。

しかし、死ぬのも怖い。

「と、とと、とりあえず、誰が来たのかを確認するですます……。うう……こ、怖いですますう」

だが、モルモは理解していなかった。

本当の恐怖とは、気づかず間に迫って来るものなのだ。

だから、人間は暗殺を、暗殺者を恐れるのだ。

パサツ

「!?!?」  
モルモのすぐ傍で何かが落ちる音がした。

モルモは弾かれたように顔を上げて振り返る。

そこにいたのは、漆黒の墮天使。

黒い翼を持つ小柄な少女―ブラールだ。

「ブ、ブブ、ブラールさん、ですます？　な、な、なんで、ここ、ここに、ここに？」

「……」

恐怖で口が上手く回らないモルモの問いに、やはりブラールは答え  
ない。

念話でも反応はなく、それがモルモの恐怖を更に煽る。

「……も、もしかして……今、ここに來てるのは……」

ブラールが誰とよく一緒にいたのを思い出したモルモ。

ティルガの名前を口にしようとした、その時。

ブラールがマントの下から右腕を上げる。

そこに握られていたのは、拳銃だった。

モルモがその事実を理解したのと同時に、

ドパン!!!

地下道に銃声が轟き、火薬残渣が舞う。

モルモは額に衝撃を感じた直後、意識が闇に落ちる。

ブラールは表情一切変えることなく拳銃を下ろし、穴の中で死体と  
なったモルモを見下ろす。



『ブラール。あのモグラを仕留めるんはお前や』

『……』

『しかし、モルモは地下にいる可能性が高いぞ？　ブラールの能力では厳しいのではないか？』

『やったら、能力以外で殺せばええだけやろ』

ラミナがブラールに差し出したのは拳銃だった。

『デザートイーグル。拳銃でも高威力を誇る奴やでな。これなら、目の前で撃てば額くらいは貫けるはずや』

『……』

『あの獅子気取りの猫を倒した後、お前の鼻で地下道に隠れとるモグラを見つげ出せ。そんで、地面に下りずに飛んで近づいて、至近距離から頭を撃ち抜け』

『……』

『あのモグラは音に頼り過ぎとる。やから、テイルガが囿になったりい。多分、それだけでモグラはお前の足音に気い取られるはずや』

『……承知した』

『安心しい。この殺り方が使えるんは今回だけや』

『……』

ブラールは頷いて、拳銃をマントの下に仕舞う。

『あのモグラに教えたれや。ホンマに怖がらなあかんのは、人知れず近づいてくるモンやってな』

ブラールはラミナの言葉を思い返し、テイルガが待っている出口に向かつて歩き出す。

もう必要ないと言わんばかりに、モルモの上に拳銃を投げ捨てて。

## #134 ヘビ×ヲ×ニガスナ

8頭の大蛇は、微妙にタイミングをずらすことで、間髪入れずにラミナへと襲い掛かった。周りから見れば、ほぼ同時にしか見えないのだが。

ラミナは無理に反撃せず、後ろ向きに走りながら大蛇の攻撃を受け流し、躲していく。

噛まれることは死を意味するので、大蛇の動きに全神経を注がざるを得ない。

故に、

「そおらっ！」

アモンガキツドの蹴りはほぼ反射で対応することになり、防ぎきれずに吹き飛ばされてしまう。

だが、ラミナはその衝撃を逆に利用して、アモンガキツドから距離を取る。

それによって、アモンガキツドも決定的なダメージを与えられず、膠着状態に陥り始めていた。

(まあ、時間制限付きだけどねえ。おいちゃんの蹴りは確実に君の身体にダメージを蓄積させてる。このまま行けば、近い内に限界が来ちゃうよ?)

もちろん、それはラミナも理解している。

だが、今のラミナの最優先事項は『時間稼ぎ』である。

少しでも長くアモンガキツドをここに釘付けにしなければならぬ。

レオルとモルモを倒す余裕を作るため、ノヴとメレオロンが宮殿内に出口を設置するために。

(ゆうて、どれぐらい時間経った? 30分経つとれば御の字やけど……)

流石のラミナも極度の緊張状態を強いられている戦いで、体感時間が狂い始めている。

雨というのもあり、空を見て時間を予測することも出来ない。

恐らく20分がいいところだろう。

ラミナはそう考えて、これからどう時間を稼ぐか模索する。

(逃げ回るのはまず無理。念獣が来るやろうし、この蛇がどこから来るか分からんようになってまう。それにモラウやテイルガ達と鉢合わせになったら目も当てられん)

大蛇の猛攻を捌きながら、ラミナはアモンガキッドを抑え込む方法を思考する。

(向こうもかなりオーラを消耗しとるはずやけど……。ネフェルピトーの【円】の大きさと維持時間を考えたら、まだまだ余裕はあると考えておくべきやな。大してうちはもう半分もない。無理はもう出らんけど……攻めんのもムカつくわ!!)

ラミナはいきなり一歩前に出る。

アモンガキッドはそれに構わずラミナに蹴りかかるが、ラミナはすぐに一歩戻って躲す。

アモンガキッドはそれを読んでいたが、直後顎に衝撃が走る。

「!?!」

突然の衝撃にアモンガキッドは後ろに数歩下がり、大蛇の動きが鈍る。

衝撃の正体は右のブーツだった。

その隙をラミナは逃さずに【一瞬の鎌鼬】を発動しながら、一気に詰め寄った。

アモンガキッドはそのまま後ろに跳び下がって、斬撃の嵐を躲す。

しかし、突如ラミナの両手からブロードソードが消えた。

(消した? いや、上!!)

頭上に二振りの剣が回転しながら飛んでいることに気づいた。

アモンガキッドは剣が囷であることを見抜き、それを無視して大蛇をラミナへと囀ける。

だが、ラミナは【肢曲】で残像を生み出して距離を詰めてきた。

「それは意味がないって知ってるよねえ?」

ラミナの分身を見抜いたアモンガキッドは、大蛇を操って一瞬で分身達を一掃する。

そこにアモンガキツドの背後のビルの陰からラミナが飛び出して来て、アモンガキツドに攻めかかってきた。

(分身? でも、さっきのとは動きが違う……?)

しかし、近づいてくる者を無視するわけにはいかない。

アモンガキツドは頭の大蛇2体を操って、背後から迫るラミナの両肩に噛み付いたが、そのラミナは霞のように身体を崩した。

やはり分身か。

そう思つて、正面のラミナに意識を戻した直後、ラミナの熱が突如一瞬で背後に移動し、崩れていたはずのラミナの分身が一瞬で元に戻った。

ラミナの両手には白と黒の短剣が握られていた。

「!? (分身と入れ替わる能力……!?)」

ラミナは二振りの短剣を振るい、アモンガキツドの背中へと斬りかかる。

アモンガキツドはギリギリのところで大蛇の1頭を滑り込ませます。

バツ字に剣閃が走り、大蛇が斬り飛ばされ、アモンガキツドの背中から血が噴き出すも、ラミナの手応えは微妙だった。

だが、ラミナはこれで決まるなどと微塵も思っていなかったので、気にすることなく左脚を鋭く突き出してアモンガキツドを蹴り飛ばす。

短剣を消したのと同時に、上から落ちてきた二振りのブロードソードをキヤッチするラミナ。

その目の前にはすでに4頭の大蛇が迫って来ていた。

ラミナは後ろに跳び下がりながら、高速で剣を振るって大蛇を斬り飛ばす。

(くっそ……あの蛇共、髪で出来とるからか地味に硬うて斬りにくい……!) 操作系を主体にした強化系と変化系の複合能力! 蛇の蟻やから、蛇を形作るんは息するレベルで余裕っちゅうわけか!)

本来ならば修行が必要な細かいレベルでのイメージ修行が一切必要ない。

それは間違いなくアドバンテージと成りえる。

（人の髪は束ねれば縄にもなるほど強靱さを持つ。それを強化すれば、鉄製のロープと変わらん硬さを持つつちゆうわけか！ ホンマ相性悪いやっちゃなあ!!）

顔を顰めながら大蛇の猛攻を捌く。

ラミナは一度ブロードソードを二振り共消し、ハルバードを具現化して能力を発動しながら後ろに跳び下がる。

今度はハルバードを壊されないように警戒しながら、空いた左腕で噛み付いてきた大蛇を弾く。

しかし、すぐにハルバードを消して鎧を解除し、再び両手にブロードソードを具現化する。

（ブロードソードのストックをゼロにされるわけにはいかん……!）

再び津波のように襲い掛かってくる大蛇の群れを剣戟で迎え撃つ。だがその時、3頭の大蛇がラミナの足元に噛み付いた。

直後、アモンガキッドは身体を持ち上げて、逆立ちした。

「!?」

「ギア上げるよお」

アモンガキッドは勢いよく右踵落としを繰り返した。

「ちいー」

ラミナは左腕を頭の上に掲げて、叩きつけられる瞬間に【流】でオーラを集中し、斜め下に腰を落とす。

衝撃が左腕に走る瞬間、ラミナは後ろにわざと転んでダメージを軽減する。

四肢で地面を強く押して、大きく跳び下がるラミナ。

すでに大蛇は目の前まで迫っており、ラミナは高速の剣戟で斬り飛ばす。

その右横に、両腕の大蛇を地面に突き立てたアモンガキッドが、地面スレスレを移動してきた。

（大蛇で立体機動……!）

まるで以前戦った「アラクネー」のパスイダを思い出させる。

凶悪さは断然アモンガキッドの方が上だが。

アモンガキッドは両脚を大きく振って回し蹴りを放ち、ラミナは大きく身体を仰け反らして紙一重で躲す。

アモンガキッドの足爪がラミナの腹部に掠り、タンクトップが裂けて少量の血が噴き出す。

ラミナはブロードソードを消して地面に背中を着け、ブレイクダンスを踊るが如く身体を捻り、回転しながら両脚を振り上げる。

そして、全力で地面を押し、両腕の力だけで跳び上がる。

すかさず大蛇が襲い掛かってくるが、ラミナは限界まで目を開いてその動きを見極め、噛みつかれる瞬間に手を上顎に置いて全力で身体を捻りながら持ち上げる。

大蛇の上を一回転して、身体を両脚で蹴って横に跳び、ビルの壁に跳び移る。

すぐにビルから跳び、ブロードソードを具現化する。

「ピトつちみたいだな軽さだねえ！ ホントにミナつちって人間かい？」

「人間やし、ミナつち言うなやスケベ蛇!!」

「酷いねえ……」

再び仕切り直しになったが、ラミナが追い詰められた状況なのは変わらない。

(めっちゃ逃げたい……!!)

そろそろ限界を感じたラミナは、内心弱音を吐くも悲しいかな逃げる隙が見つかからない。

それに時間稼ぎとしては全くという程成功していない。

(まあ、そもそもコイツ相手に数十分戦うのが無茶なんやけどな！)

正直、護衛軍相手に1人でここまで戦い抜いている時点で十分すぎる成果である。

求められる結果があまりにも高望み過ぎただけで。

しかし、ノヴ達の事を考えると、まだ求められた時間の半分くらい

しか稼げていないだろう。

(せめて宮殿の敷地内に1個だけでも出口を設置しといってもらわんと、割に合わんぞ……!!)

迫って来るアモンガキツドを睨みつけて、心の内で鬱憤をノヴ達にぶつけるラミナ。

【一瞬の鎌鼬】で大蛇を斬り落とそうとした瞬間、アモンガキツドはわざと大蛇を解除してラミナの剣を空振りさせた。

そして、一気にラミナの懐に飛び込んで、心臓目掛けて右貫手を繰り出してきた。

ラミナは目を見開きながらブロードソードを消して、右手でアモンガキツドの右前腕を叩いて逸らそうとするも、左脇を掠って肉を軽く挟られる。

直後、アモンガキツドの右脚が振り上がり、ラミナも左太腿を上げて防ぐ。

しかし、それも予測していたのか、アモンガキツドが左手をラミナの顔に伸ばす。

ラミナは後ろに仰け反りながら顔を傾ける。

アモンガキツドの左親指の爪が、ラミナの右頬を掠る。

「ぐっ……!!」

ラミナはチャクラムを具現化して、手の中で回す。

帯電したチャクラムはラミナの右肩に移動し、ラミナの身体に一瞬電流が走って髪が逆立った。

「っ!!」

直後、ラミナの右ストレートがアモンガキツドの頬に叩き込まれる。

更にアモンガキツドの右胸、左脇腹、鳩尾にラミナの拳が一瞬で突き刺さり、アモンガキツドは後ろに吹き飛ばされる。

ラミナは追撃せずに能力を解除する。

「はぁ……はぁ……はぁ……ぐっ!!」

右頬から血を流すラミナは、息を荒げて身体に走る痺れに顔を顰める。

(あかん……。冗談抜きで限界が来とる……)

流石に【小生意気な雷童子】の連続発動は身体の動きを鈍らせる。アモンガキツドはまだまだ動きが鈍ることはないだろう。

大蛇による波状攻撃、立体機動攻撃、フェイントまで組み合わされたアモンガキツドの攻撃を、今のコンディションでは防ぎきれない。その予測を裏付けるかの如く、アモンガキツドがユラリと立ち上がる。

「驚いたねえ。それは身体能力を上げるのかい？」

「さてな」

「ホントに怖いねえ、君は」

アモンガキツドが肩を竦める。

ラミナは「フン」と鼻を鳴らして再び構える。

アモンガキツドはラミナに向かって数歩進み出るが、急に足を止めた。

突如歩みを止めたことにラミナは訝しみ、警戒を強めるが、アモンガキツドは顔を横に向ける。

「……ん~~~~~?」

アモンガキツドは疑問を含んだ声を出しながら右手で顎を擦って首を傾げる。

「おかしいねえ〜」

「……なんやねん、急に？」

「いやねえ……そう言えば、ピトっちのお人形さんが全然見当たらないなってねえ……」

「はあ？」

ラミナは構えを解き、周囲を見渡して気配を探る。

すると、確かに街中にいた人形兵の姿が見当たらなかった。

更には銃声も全く聞こえず、他に戦闘している気配を感じない。

(……潜んだる感じでもない。ホンマに一体も動いてない？　なんでや？　ネフェルピトーからすれば、むしろ攻め時のはずや)

この戦いに手を出さないのは何となく分かるが、他で戦闘が起こってないのは流石にあり得ない。



『選別』を再開したんか？」

「ん〜…流石にピトっちもそんな判断しないと思うけどねえ。……まさか？」

アモンガキッドは何かに思い至ったのか、突如跳び上がって口だけ念獣を生み出して、その上に乗る。

「あ？ 急にどこ行くねん？」

「悪いねえ。残念だけど、ちよつと戻らないといけなさそうでねえ。帰らせてもらうよ」

ラミナは盛大に顔を顰める。

逃がすわけにはいかない。だが、帰ろうとするのを止めるとなると、向こうも早く終わらせるために本気で戦うのは想像に難くない。

(まあ、それは覚悟しとったことか……)

流星にここで引き下がるのは無理だ。

作戦会議時のノヴ達の出発地を考えると、ようやく宮殿に近づいたところだろう。出口の設置する段階ではないはずだ。

(せめて、あと10分は稼がんとあかん！)

「逃がすか阿呆！」

ラミナはレイピアを具現化し、一気にビルの壁を駆け上がって、アモンガキッドへと突きを繰り出す。

アモンガキッドは口だけ念獣を操って、レイピアの切っ先から逃れる。

アモンガキッドは口だけ念獣から飛び降りて、ビルの屋上に下り立つ。

「やれやれ……。ここで戦ってもあまり意味はないと思うんだけど——いや……。もしかしてミナっち、囷かい？」

宮殿で何かあったのではと考えていたアモンガキッドは、ラミナが無理に攻撃を仕掛けてきたことに疑問を覚え、別動隊が宮殿を襲撃したのではないかと思いついた。

ラミナの追撃が逆にアモンガキッドの推測を後押ししてしまったのだ。

だが、ラミナはここでアモンガキッドを足止めするしかないことに

は変わらない。

ただ、死闘が激しくなるだけのことだ。

ラミナはそれに答えずに、両手にブロードソードを具現化する。アモンガキッドは再び8頭の大蛇を生み出して、迎え撃とうとする。

しかし、先ほどとは違ってアモンガキッドの殺気が張り詰めており、ラミナは冷や汗が噴き出すのを感じた。

それでもアモンガキッドに斬りかかるが、気づいた時には全ての大蛇が目の前にいた。

「!?」

ラミナは目を見開きながらも【一瞬の鎌鼬】を発動して、大蛇達を斬り飛ばしていくが、大蛇の1頭が右手に握っていたブロードソードに噛み付いて剣を溶かす。

直後、砲弾のように猛スピードでアモンガキッドが飛び蹴りを放ち、ラミナは直撃を浴びてくの字に吹き飛ばされた。

「がっ——!?!」

「悪いけど、今日はここまでだよ」

アモンガキッドはすぐさま口だけ念獣に飛び乗った。

ラミナはビルを1つ飛び越えた先のビルの屋上に叩きつけられるように落下して、縁ギリギリまで転がる。

一瞬意識が遠のいたことでブロードソードが消滅したが、すぐに意識を取り戻してビルから落ちる前に片手で縁に捕まる。

「ゴホッ!・ゴフゴホッ!・ツツはあ!・はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……!・くっ……そっ……!」

ラミナは痛みで顔を顰め、ビルの屋上に這いずり上がる。つう……!・クソ蛇があ……!」

痛みに耐えながら攻撃された場所に目を向けると、

「あ?」

直系5mほどの煙の大玉が空に浮かんでいた。

モラウの【監獄ロック】だ。

「流石……！ て、言つてやりたいところやけど……！」

ラミナは大きく息を吸つて、

「離れるやモラウ!!! ソイツはオーラを溶かす!!!」

大声で忠告する。

直後、6頭の大蛇が【監獄ロック】を突き破つて飛び出してきた。

「クソ蛇、が……!!」

ラミナは身体に活を入れて起き上がり、全力でアモンガキツドの元へと駆け出す。

レイピアを具現化したラミナは跳び上がりながら、【監獄ロック】近くにいた一つ目念獣を【啄木鳥の啄ばみ】で仕留める。

あの一つ目念獣は戦いの始めからずっと上空からラミナとアモンガキツドを見下ろしていたのだ。

(とりあえず目を封じた!!)

ラミナは崩壊していく【監獄ロック】に跳び迫りながら、レイピアを消してバトルアックスを具現化する。

一つ目念獣が復活するが、その時にはラミナはすでに目の前まで迫っていた。

「【敬愛する——」

オーラを限界まで籠めたバトルアックスを振り被り、目の前にいる大蛇へと全力で横薙ぎする。

「——兄インパクトの剛腕【オオ!!!」

大蛇に触れた直後、ペイジン上空にオーラが爆発して衝撃波が吹き荒れる。

モラウの煙はもちろん、流石のアモンガキツドも大きく吹き飛ばさ

れ、ラミナもまた吹き飛ばされてビルの屋上に叩きつけられて勢いよく転がる。

今度はビルの縁に捕まることは出来ず、ビルの上から投げ出されて地面に向かって落下する。

しかし、地面に直撃する前に煙がラミナの真下に溜まり、クツションを形作る。

ボフィン!!と勢いよく落ちたラミナは、フラつきながら立ち上がる。そこにモラウが駆け寄ってきた。

「大丈夫か!？」

「おう……助かったわ……。悪いけど、うちはもう限界や。オーラがスツカラカン……。もうまともに戦えん」

「十分だ!! 後は俺が何とかする!」

「アモンガキツドは無視せえ。アイツの能力はうちらじや止められん。ノヴに連絡して脱出させえ」

「つてことは、まだ【監獄ロック】から抜け出せねえ師団長達の監視だな! 了解だ! お前はノヴのマンションの中でゆっくり休みな!!」

モラウは親指を立てながら駆け出していった。

その背中を見送ったラミナは、大きく息を吐いてビルの壁にもたれ掛かり、その場に座り込む。

「はあく……(【無垢村雨】でも良かったかもしれないけど、外したらシャレにならんかったし……) 【天を衝く一角獣】は残り1発。ここで使うわけにはいかんよなあ……)」

大太刀の能力【無垢村雨】は一度能力を発動すると、生物を斬らなければならぬ。

斬らずに能力を解除すると、無駄にストックを減らして、一週間具現化出来なくなる。

【天を衝く一角獣】は冗談抜きでストックが残り1しかない。

あの段階でもアモンガキツドを仕留める自信が持てなかったので使わなかったのだ。

ラミナは壁にもたれ掛かりながら立ち上がって、ふらつきながらペイジン内に設置されている【4次元マンション】の入り口を目指す。

アモンガキッドが来ると思っていたが、今の所来る気配はない。  
(やっぱり王がおる宮殿が最優先つちゆうわけか。それにしても……  
やっぱ人形共がおらん……)

ラミナは雨で濡れた前髪を掻き上げながら周囲を見渡し、街を移動する。

やはり人形兵の姿や気配を全く感じることが出来なかった。

(つまり、人形兵を操る余裕がないことが起こった？ ……ノヴ達見  
つかったんちやうやるな?)

宮殿の異変を知る由もないラミナは、嫌な推測が頭を過ぎる。

何とか無事に入り口に到着したラミナは、「4次元マンション」の部屋に入る。

ラミナは気だるげな雰囲気隠すことなく、各部屋に設置してある救急箱に歩み寄り、服を脱ぎ捨ててタオルで身体を拭いてから治療を始める。

応急処置とばかりに腹部や脇の傷を消毒して、ガーゼと包帯を巻く。

すると、テイルガとブラールも部屋にやってきた。

「ん？ おう、無事やったか」

「ああ」

「……」

「つちゆうことは、無事に仕留めたみたいやな」

「ハギヤとモルモは間違いなく始末した。もう1人いたのだが、アモンガキッドが現れた時に姿を隠し、モルモを倒した直後にペイジンから逃げ出した」

「宮殿に戻ったつちゆうことか？」

「いや、真逆の方向だ。恐らくこの国から逃げ出す気だろう」

「……まあ、アレくらいなら無視してええか」

ラミナは流石に戦える状況ではないし、テイルガ達を行かして、モラウ1人で戦わせるわけにはいかない。

兵隊長クラスであれば、他のプロハンターでも十分勝てる可能性がある。なので、少しくらいそっちに押し付けることにしたラミナだった。

「ティルガ、その箱に入つとる着替え取つて」

「ああ。……大丈夫なのか？」

「まあ、数日休めば、万全とまでは行かんかもしれんけど、十分に回復するとは思うで」

「そうか……」

ティルガはラミナに服を渡しながら安堵の息を吐く。

ブラールはティルガにタオルを渡し、互いに水気を拭う。

「……そういやあ、どれくらい戦つとつたんや？」

ラミナは携帯を取り出して、時間を確認する。

「4次元マンション」を出る直前に確認した時間から、約1時間20分が経過していた。

「……ここを出て、アモンガキッドらと対面するまで約20分くらいで……あつこからここに戻つて来るまで20分、治療に10分くらいやとしたら……30分くらいか……。全つ然時間稼ぎ出来てへんやんけ……」

「いや、30分戦っただけでも十分すぎるぞ……」

思わずジト目を向けたティルガの言葉に、ブラールも大きく頷いた。

致命傷を負うこともなく、逃げ回っただけでもなく、互角ではなかったが間違いなくアモンガキッドと渡り合っていた。

ティルガとブラールも覗き見ていたが、目で追いかけるだけで精一杯だった。

自分達であれば5分も持たないだろう。

それほどの激闘だった。

（それにしても……我らの中で間違いなく最強と言えるラミナでさえも、抑え込むことすら出来ないとはな……）

ネテロと【アルケイデス】を除けば、間違いなくラミナが討伐隊の中で最も強い。

そのラミナでもアモンガキッドの攻撃を捌き切るので精一杯であるという事実はやはりティルガには衝撃的と言わざるを得なかった。（そんな相手が他に3体……）

正直、考えるだけでも恐ろしい。

「テイルガ。悪いけど、飯が入った箱取って」

「む……ああ」

テイルガは携帯食や缶詰が入った段ボールをラミナの元へと運ぶ。タンクトップとハーフパンツ姿のラミナは、一番上にある缶詰を手に取り、蓋を開けると勢いよく食べ始めた。

テイルガとブラールも座り、

「……本当に作戦は大丈夫なのか？ 護衛軍4体を相手に同じことをするのだろうか？」

「相手と戦い方次第やろ。まあ、ゴンとキルアはちとヤバイけどな」

ゴンとキルアの能力は絡め手に向いていない。

純粋な真つ向勝負でネフェルピトーを抑え込まなければならぬのだ。

「もしかしたらお前もゴンの方に行ってもらいかもしれんな。覚悟はしときや」

「……分かった」

「とりあえず、ジジイ共が王を隔離して倒すまでは逃げまくってもええで」

「……逃げ回れる自信すらないのだが……」

「なら、倒す気で頑張るんやな」

「……」

ラミナは3つ目の缶詰を投げ捨てながら言い放つ。

テイルガは天井を見上げて、諦観に目を瞑る。

だが、ラミナは立ち上がって箱を抱え上げる。

「いっぺん出るで」

「む？」

「アモンガキッドが宮殿に戻るやろうからな。……もし、ノヴがやられたら、この空間がどうなるか分からん」

「!! ……そう、だな……。承知した」

そして、ラミナ達は「4次元マンション」を出て、雨宿りできる場所を探すのだった。

その少し前。

アモンガキツドはビルの屋上で大の字で倒れていた。

「まったく……してやられたねえ……」

ボヤきながら体を起こす。

「本気で戦うとなると【ナザル・ボンジュウ地母神の蛇眼】を2, 3個しか使う余裕がないのがねえ。まあ、【グラトニーマウス満たされない胃袋】もそうだけど、勢いで創つちやつた能力だから使い勝手が悪いのは仕方ないんだけどねえ」

【ナザル・ボンジュウ地母神の邪眼】は一つ目念獣のことで、【グラトニーマウス満たされない胃袋】は口だけ念獣のことである。

放出、操作、具現化の複合能力のため、【ヒュトラ・デイリテイリオ悲劇を齎す毒の杯】と同時に使うのは流石に厳しいものがあつたのだ。

同時発動出来たとしても、遠隔操作は出来なかったため、自分の目の前や近くでなければならぬ。

「さて……これからが面白いところだったんだけどねえ……」

アモンガキツドの衣服や顔布はボロボロではあるが、目立った外傷は見当たらなかった。

「やっぱりピトっちの人形がないねえ……。何があつたのかねえ」

アモンガキツドは口だけ念獣を具現化して飛び乗った。

直後、猛スピードで真上に上昇し、雨雲ギリギリまで上がる。そして、その高さのまま高速で移動を開始したのだった。

●おいちちゃんの！ 能力紹介ー！

・【グラトニーマウス満たされない胃袋】

具現化系、放出系、操作系の複合能力でねえ。

直系1. 5 mほどの鋭い牙を持つ口だけ球体の念獣を生み出すの。

残念ながら大した能力はないんだよねえ。一杯生み出して、一杯で

噛みつくだけ。

・【ナザル・ボンジュウ地母神の邪眼】



これも具現化系、放出系、操作系の複合能力だよ。  
直系1mの球体の一つ目念獣さ。

高性能の【凝】が出来るおいちゃんの眼。

これも同時に一杯生み出して、監視カメラみたいに使うだけだねえ。

ちなみに元ネタは『ナザル・ボンジュウ』っていうトルコのお守りだよ。

『メデューサの眼』、または『ホルスの眼』とも呼ばれる代物でねえ。  
嫉妬や羨望、悪意の視線を跳ね返すって言われてるんだよ。

おいちゃんはもちろん『メデューサの眼』をイメージしてるよ？

・【悲劇を齎す毒の杯】  
ヒュドラ・デイリテイリオ

おいちゃん最強の能力でねえ。

操作系、変化系、強化系の複合能力だよ。

まだこの作品では出てないけど、パームちゃんの【暗黒の鬼婦神】に近いかねえ。

髪を操作して8頭の大蛇を形作って、強化して、変化系能力で束ねた髪を蛇の見た目にして、オーラを毒に変えてるの。

毒は何でも溶かしちゃう。オーラ、つまり相手の念能力でも溶かせるんだよねえ。

ただ、この毒は大蛇の牙からしか出せないから、噛みつかないと効果が発揮しないんだよねえ。

それとあくまで『溶かす』だけで、毒も念能力には違いないから、ミナつちの【夢く脆い夢物語】や【不屈の要塞】には残念ながら勝てないんだよねえ。

あ、【ポットクリン】ちゃんは溶かせるよ？

元ネタは名前の通り、伝説の魔獣『ヒュドラ』。

イメージはそうだねえ……FGOのゴルゴーンさんの大蛇かねえ。

……レーザーは吐けないからね？

ということで、おいちゃんの能力は全部複合型ってわけさ。

だから、いくら護衛軍のおいちゃんでも全部同時に十全に発動・操作は難しいんだよねえ。流石に集中力やオーラの消費が激しいからさ。

## #135 センニユウ×ト×カンバツク

時間は遡る。

メレオロンを背負ったノヴは、慎重に、されど大胆に宮殿へと近づいていた。

ネフェルピトーの【円】は未だに復活していない。

すでにノヴ達は【円】の範囲内にいるのだが、少しでもメレオロンの息を温存するために姿を見せたままで移動している。

(ここで【円】が復活したら一環の終わり……。だが、このチャンスに怖気づいている間にアモンガキッドが戻ってきたら目も当てられない)

ラミナ達が命を懸けて稼いだ時間を、命惜しさに無駄にしたとなれば、それは失敗よりも最低だ。

死ぬ可能性を承知の上で、プロハンターの誇りを持ってここにいるのだから。

(失敗を覚悟するならば、ここは1分1秒でも早く宮殿に辿り着いて1個でも出口を設置すること！)

ノヴは覚悟を決めて、更に強く地面を蹴る。

雨でぬかるみ滑りそうになるも、それでも猛スピードで駆け抜けていく。

作戦開始から5分。

ノヴとメレオロンは無事に宮殿外壁入り口へと到着した。

「はあ……はあ……生きた心地がしないな……」

「ああ。でも、ここまでは想定以上に順調だぜ」

「そうだな。そして……ここからが本番だ」

メレオロンは顔を引き締めて力強く頷く。

ノヴはペイジンがある方向に顔を向けて、近づいてくる影がないか確認する。雨で視界不良ではあるが、それでも見える限りでは近づき影は1つも無い。

再びメレオロンを背中に背負い、ノヴは遂に宮殿敷地内に足を踏み入れた。

同時にメレオロンが息を止めて、「神の不在証明」と「神の共犯者」を発動する。

最初に踏み入れたのは、宮殿入り口前の庭園。

雨ということを除いても、全くと言つていいほど人気がない。

故にそれに目が行くのは自然なことだった。

宮殿正面入り口前に、10本の樹が左右に5本ずつ並んでいた。

しかし、樹を覆っていたのは葉ではなく、巨大な繭の群れ。

ノヴは根元に潜り込んで、繭を見上げる。

薄っすらとはあるが、繭の中には人の姿が見えた。

（やはりこれが『選別』されて生き残った人間達。話にあつた念能力を造る繭）

素早く他の樹々も観察する。

（1本につき約500。ラミナとキルアの攪乱で『選別』は1日で中断された。人口500万人を10日間で『選別』するとすると、1日50万人を『選別』。それでその1%が生き残ると考えれば約5000。計算は合う！）

つまり、数日後にはこの樹が100本並ぶことになる。

作戦が失敗すれば、この庭園を埋め尽くして余りあるほどの繭の林が出現する。

それだけは絶対に避けなければならない。

（数日後には5万人もの念能力を持つ兵士が誕生する。その後ろには会長やラミナですら勝つ自信がないと言わせるほどの化け物が5体。ハンター協会に現在登録されているプロは1000人にも満たない。戦力差は完全にひっくり返る……！）

最悪の事態は間違いなく実現が近づいている。

時間の余裕は、もうない。

ノヴは気を引き締め直し、指にオーラを集めて地面に丸を描く。

指を滑らせた跡には文字が綴られた線が描かれ、魔法陣が如く円を完成させると最後に中心を軽く突く。これで出口の設置完了である。

（『遠い出口』だが、これで最低ラインは満たした……！　だが、まだまだ遠い！）

ノヴは肩越しにメレオロンを見る。

メレオロンは小さく頷いたのを確認して、ノヴは再び駆け出す。

そして『中間の出口』を宮殿入り口前に設置する。

ノヴは宮殿内部に滑り込む様に侵入し、入り口傍にある大きな柱の陰に身を隠す。

周囲に人やキメラアントの姿は確認出来ず、外からも見えにくい場所であること、【円】や念獣などの存在もないことを確認したノヴは頷いて、メレオロンの手を叩いて合図を送る。

「プハ〜！」

メレオロンは息を吐いて、一度能力を解除する。

「周囲に気配はない。ゆっくり息を整えろ」

メレオロンは深呼吸をしながら頷くだけで応える。

ノヴは柱の陰から顔を出して、先を見る。

（見張りはいない……。恐らくは宮殿内にいるのは10匹弱の蟻とビゼフのみで、人間の護衛はすでに餌になったか、逃げだしたか、人形にされたか……）

監視はネフェルピトーの【円】とアモンガキツドの念獣がいれば、事足りるということなのだろう。

そう考えたノヴはやはり今が最大にして最後のチャンスだと確信する。

（少しでも作戦の成功率を上げるならば、ベストは宮殿3階中央玉座入り口。だが、それは王と護衛軍の鼻先まで近づくということ。メレオロンの能力があれば不可能ではない。不可能ではないが……近づいた痕跡は残ってしまう）

メレオロンの能力【神の不在証明】、2つ目の弱点。

『メレオロンとその共犯者が離れば痕跡を感知することが出来るようになる』ということ。

ただの人間相手であれば、そこまで問題はない。

だが、相手は動物の能力を持つキメラアント。

『臭い』を嗅ぎ取れる者が多いのが、この潜入作戦最大のリスクなのだ。

そして、雨。

ノヴは入り口に視線を戻す。

そこにはノブ達を通った跡を教えるかのように水滴が零れていた。(誰かがこの後、ここを通れば気づかないわけではない。臭いも残っている。追尾されれば、侵入者の存在や王に近づこうとした者がいたことがバレてしまう)

ここで出来る限り水滴を落とし切るべき。

そう判断したノヴは、服や髪を叩いて水滴を払う。それを見たメレオロンも素早く水滴を払う。

(つまり、今のベストは2階の中央階段……！)

設置場所を決めたノヴは、メレオロンに背中を向ける。

メレオロンは素早く背中に乗り、大きく息を吸って息を止める。

同時に2人の姿が消える。

ノヴは一度反対側の柱へと回り、中庭を目指す。

しかしその途中、ホールに続く廊下から1体の兵隊蟻が目の前に現れる。

(!!)

警戒してなかったわけではないが、やはりこの緊張した心理状態での唐突な遭遇は動揺せざるを得なかった。

メレオロンは口を片手で押さえて息が漏れるのを必死に堪える。

ノヴはすぐに冷静になり、後ろに大きく跳び下がる。

そして、背後に回り込んで、そのまま通り過ぎた。

兵隊蟻は一瞬足を止めて周囲を見渡して首を傾げるが、ノヴ達に気づくことなくそのまま進んでいった。

ノヴも振り返らずに、中庭に続く入り口を出る。

一気に中庭を抜けたノヴは中に入る前に、一度メレオロンに呼吸させる。

そして、息を整え終え能力を再発動したノヴ達が中央階段前に近づいた、その時。

ノヴの携帯が再び震えた。

(!!)

ノヴは目を見開いて、歯を食いしばる。

「アモンガキッドが帰ってくる……!」

「!」

取り決めておいた作戦中断コール。

アモンガキッドの足止め終了の合図。

しかし、

(止まるな……! ……ここまで来れば階段を駆け上がって、そこに出口を設置する!)

ノヴは足を止めずに階段を一気に駆け上がる。

だが、半ばまで上がったところで、

(!?)

不気味で凶悪なオーラが目の前に迫ってきて、本能的に足を止めてしまった。

ゆったりと壁を築くかのように階段上を満たしていくオーラに、ノヴはメレオロンの能力があっても飛び込める気がしなかった。

(……なんだ、このオーラは……!?! この世のあらゆる不吉を孕んでいる様……!)

(たとえばバレなくても……絡め捕られる予感がある……!)

まるで蜘蛛の糸を張り巡らせたかのような。

そして、一度絡まったら二度と抜け出せない予感が頭から離れない。

ノヴとメレオロンは一気に冷や汗が噴き出す。

(これが……これが護衛軍のオーラ……!?! こんな……こんな凶悪なオーラを持つ奴を相手に、ラミナは時間稼ぎのために戦ったというのか……!?!)

ノヴは護衛軍のオーラを間近に視たのは、これが初めてだった。化け物と呼ばれる護衛軍と言っても、所詮は師団長の1つ上。

ノヴはどこかでそんな考えがあった。

ネテロの『儂より強くね?』という言葉も単純にネテロがしばらく前線から出ていなかったただだから。

闇社会に生き、幻影旅団の1人のラミナが化け物と呼んでも、まだ若いのだからキルア達同様比較対象が少ない故の言葉だどこかで思っていた。

だが一番愚かだったのは自分だったと、ノヴは嫌でも思い知らされた。

何が何でもNGLで終わらせておくべきだった。

こんな化け物と戦うなんて、冗談ではない。

ノヴは覚悟にヒビが入ったのを自覚した。

だが、絶望は手を緩めない。

バシヤン

背後で水が跳ねる音がした。

同時にノヴとメレオロンは心臓が握り潰されるような圧迫感に襲われた。

「ん~~~~? ピトっちの【円】はないけど、戦ってる気配もないねえ」

現れたのはオーラではなく、オーラの放出元。

アモンガキッド。

服はボロボロだが、目立った傷も出血もない。



そして隠そうともしない、目の前に漂う凶暴なオーラにも負けない薄気味悪いオーラ。

絡め捕られたら一息に丸呑みされそうな、闇のように底知れない不気味さ。

今度こそ間近で浴びせられた化け物のオーラに、

ノヴの心が、覚悟が、パキリと割れた。

(動けな……い……！)

前門の不吉、後門の闇。

ノヴは透明になっていくことなど頭から吹き飛んでいた。

アモンガキッドはゆったりとした足取りで中央階段を上り始める。

ノヴはそれを息を潜めて、音を立てないようにゆつくりと端へと寄る。

その時、メレオロンがノヴの肩を叩いた。

「!!」

ノヴは弾かれたように階段から飛び降りる。

四肢を着いて着地したノヴは、頭をフル回転させる。

(ここは一度退く!! いや、だが奴が戻ってきた以上、すぐにこの宮殿内は念獣で溢れかえる！ 奴が状況を把握する前に、ここに出口を設置するべきだ！)

ノヴは階段下傍に走りながら、メレオロンを振り返る。

メレオロンはすでに限界そうな顔ではあるが、その瞳は――

(まだ行ける!!)

と、言っていた。

ノヴはそれを信じて、何も言わずに階段の傍に屈んで、全身全霊を懸けて出口を設置する。

出口を設置し終えたと同時にノヴは全力ですぐ近くの通路口へ向かって駆け出す。

「アモンガキツドはピット器官を持っている……！ 庭園に出るまで耐えろ!!」

メレオロンに声をかけて、全速力で走る。

ここで「4次元マンション」を使って逃げ出すのは簡単だ。だが、ここで使えば不自然に臭いが途切れ、侵入者は特殊な移動手段があることを教えるようなもの。

(まだ使えない……い……せめて敷地の外に出るまでは……い……)

今にも背後にアモンガキツドが現れそうな恐怖に耐えながら、庭園に出たノヴは足を止めずに走り続ける。

「今だ!」

「っ!!」

メレオロンは勢いよく息を吐く。

庭園にノヴとメレオロンの姿が出現する。

しかし、メレオロンはそのまま息を吸って止め、能力を再発動した。

ノヴはそのまま走り続ける。

すると、周囲を猛スピードで一つ目念獣の群れが飛翔する。

(!? バレた……!?)

ノヴとメレオロンは体が竦みそうになったが、一つ目念獣達が外壁の上や宮殿の角の上に陣取ったのを見て、

(いや、違う。監視網を敷いただけ……！ 大丈夫だ、まだバレていない……い……)

だが、いつ見つかってもおかしくない布陣が完成した。

ここで見つかれば、本当にアモンガキツドが、いや、全ての護衛軍が、王が、自分達を喰いに来る。

その事実と恐怖に、ノヴの心がまたバキリとヒビ割れる。

それでも走り続ける理由はただ一つ。

早くここから逃げ出したい。

ただそれのみである。

出口を消されないようにはなく、メレオロンを逃がすためでもな

く、人類を救うためでもなく、プロハンターとしてやり遂げたいわけでもない。

ただただ、あの化け物達に喰われたくない。

その恐怖から逃れるために両脚を動かしていた。

そして、ノヴは宮殿から飛び出したのと同時に「4次元マンション」の入り口を開いて、メレオロンと共に飛び込んだ。

「4次元マンション」の一室の天井から飛び降りたノヴは、そのまま四つん這いに崩れ落ち、メレオロンはその背中から仰向けに倒れて大きく息を吐いた。

「はあ！ ……はあ！ ……はあ！ ……はあ！ ……はあ！」

2人はしばらくそのまま荒く呼吸することしか出来なかった。

呼吸が落ち着いてくると、ノヴは体がガタガタと大きく震え始めた。

ノヴは蹲ったまま両腕で身体を抱える。

メレオロンは体を起こして、震えるノヴに慌てて声をかける。

「お、おい！ 大丈夫か……!?!」

「……なんでだ……」

ノヴは震えながら小さく呟いた。

「なんで、ラ、ラミナ達は……あんな……あんな化け物と、た、戦えるんだ……? 戦おうと思えるんだ……!?!」

「……」

メレオロンはその言葉で理解してしまった。

ノヴの精神が折れてしまったことを。

護衛軍の恐怖に、屈してしまったことを。

メレオロンは何度もあの化け物達と顔を合わせてきたので、ある程度耐性が出来ていたことがノヴとの大きな差だった。

「くそお……くそお……! 無理だ……俺はもう……あそこには行けない……!」

涙を流しながら必死に震えを抑え込もうとするノヴ。

だが、それでも恐怖は大きくなれども消えることはなかった。

(カイトを救うため？ 人類を守るため？ なんで戦えるんだ？)

自分よりも年下で、ハンター経験も未熟な若者達は何故あのオーラを視て、オーラに触れて、殺し合ってもまだ戦えるのか。

ノヴは理解出来なかった。

ゴンは死ぬことよりも、殺されることよりも、カイトをあのままにして死なれる方が嫌なだけだ。

キルアはゴンが1人で死ぬ方が怖いからだ。

ラミナは元よりまともな死に方が出来るなどとは思っておらず、オーラが不気味なくらいで怖がっているのは闇社会では生きていけなかっただけだ。

はつきりと言えば、ノヴの思考や反応が普通である。

ラミナはもちろん、ゴンやキルアも普通の子供、普通の思考回路を持っているとはお世辞にも言い難い。

故に考えたところで納得も理解も出来ないだろう。

しかし、現状において最も活躍していて、今後も活躍が期待されているのは、間違いなくこの3人である。

もつとも、今回の戦いは全てにおいて前代未聞で異常事態が常のようなものだ。

だからこそ、普段ではズレた思考回路と常識の持ち主である者達が、優れた戦士のように見えるのだ。

プロハンターは基本的に変人が多いのだが、ノヴは能力や求められる役割から常識人寄りの感性を持っていた。

今回はそれが災いしてしまった。

メレオロンは震えているノヴに無理に声をかけることはしなかった。

すでにノヴは役割を果たした。

これ以上下手に無理をさせると、本当に精神が壊れてしまう。その場合、苦勞して設置した出口はもちろん、この「4次元マンション」が崩壊する可能性がある。

ノヴはここでリタイヤさせた方がむしろ良い。

メレオロンはそう判断した。

メレオロンはノヴの背中を軽く叩くと、立ち上がって扉へと向かう。

扉を開けて外に出ると、そこはペイジンの端だった。

メレオロンは身体を透明にすると、周囲を警戒しながらモラウとラミナ達を探し始める。

（ピトーが【円】を使つてなかつたことを考えると、操り人形もないはず。アモンガキツドも宮殿に帰つた。つてこたあ、今ペイジンにいるのはハギヤやウエルフィン達のはず……。後はモラウの旦那達はどこまで戦つたのかだが……とりあえず、今はウエルフィンにだけは見つかるわけにいかねえ……！）

ウエルフィンに自分がここにいることがバレれば、宮殿に残つていゝるであろう臭いでバレてしまう可能性がある。

（雨である程度臭いは誤魔化せるとは思うが、宮殿内で潜んでた場所はそのうはいかねえはずだ。ここで遭つて臭いを覚えられれば、俺が忍び込んだことがバレちまう……！ そうなりやノヴの苦しみが水の泡になる。それだけは許しちやいけねえ……！）

メレオロンは素早く、されど慎重に街中を移動する。

壁を登り、ビルの屋上に上がると、少し離れた場所に煙のドームのようなモノが見えた。

（あれが旦那が話してた煙の牢獄つて奴か……！）

メレオロンは警戒を強めながら、【監獄ロック】へと近づいていく。すると、少し離れたビルの屋上のモラウの姿を発見した。

メレオロンはモラウの近くまで近づき、

「旦那、モラウの旦那……！」

「ん？ ……誰だ？」

「俺だ。メレオロンだ」

「!!」

メレオロンは小声でモラウに声をかけ、モラウはメレオロンが現れ

たことにサングラスの下で目を丸くするも、流石の判断力でメレオロンの名前は呼ばずに、親指で方向を示した。

メレオロンは一瞬だけ姿を見せて頷き、すぐに姿を消して移動を始めた。

モラウも【監獄ロック】から目を離さずに移動を始め、変化がない事を確認してからようやく背を向けた。

移動した先はラミナ達が潜んでいた屋根があるバルコニーのような場所だった。

「お前が帰ってきたつちゆうことはノヴもか？ それともノヴは捕まって、お前だけ【4次元マンション】で逃がされたんか？」

「安心しな。ノヴも無事だ……命はな」

「命は？ おい、まさか……」

「怪我もしちやいねえよ。だが……心の方が、な」

俯きながらのメレオロンの言葉に、ラミナとモラウ達はノヴの状態を察した。

ラミナは僅かに眉間に皺を寄せて、

「……発狂する可能性は？」

「……そこまでじゃねえとは思う。だが、もう護衛軍とは……宮殿には突入出来ねえだろうな」

「……そうか」

「宮殿で何を見たんや？」

「お前らが戦いを始めたのと同時刻、何故か宮殿をずっと覆っていたネフェルピトーの【円】が消えた」

「……【円】が消えた？」

「ああ。罨かもとは思ったが、近づいても一向に【円】が復活する気配はなかったぜ」

「ペイジンの人形達が消えたのとはほぼ一致するつちやあするな」

「……人形だけやなくて【円】まで？ つまり、警戒を全部中断するほどの何かが宮殿で起こった？」

ラミナは顎に手を当てて考え込む。

「俺達も気になったが、まずは出口を設置することを優先した。で、庭

園、宮殿入り口、宮殿内中央階段下側の傍に出口を設置出来た」

「下側？ 2階は行けなかったのか？」

「階段を上がろうとしたら、そこにオーラが張られたんだよ。あのオーラ……多分護衛軍のシャウアップだ。情けねえ話だが、俺達はそれを目にしたところで足が竦んじまったんだ。……そこに、アモンガキッドが帰って来てな。ニアミスしかけた。あの時は「神の不在証明」が発動してたとは言え、心臓が止まるかと思ったぜ……」

「……片方はオーラだけとは言え、護衛軍2人に同時に挟まれたわけか……」

「ああ。何度か奴らと会ってる俺でもヤバかったんだ。初めて護衛軍を目にして、特に緊張で張り詰めてたノヴにはかなりキツかったんだろうな」

「……そうか」

「まあ、ノヴの山場はこれで終わりや。次に働かせるとしたら、仕事が終わって撤退する時や。しばらく休ませるか、サポートでええやろ」  
「そうだな」

モラウは神妙な顔で頷く。

ラミナは立ち上がって、モラウに顔を向ける。

「モラウ、もうあの師団長共逃がしてもええで。正直、流れはこっちにあるけど、うちはもう戦えんし、ノヴも動けん。ここで無理してお前やテイルガまで下手に傷でも負ったら本番に響いてまう」

「……だな。分かった」

「うちはテイルガ達にメレオロンも連れて、いつペンキルア達と合流するわ。お前も一度【4次元マンション】で身体休ませや。後はこれまで通り、煙人形でペイジンを包囲しながら、あっちの動きを牽制しとって」

「おうよ。ノヴの方も俺がフォローしとく」

「任せるわ。ほな、今のうちに車でペイジン出るで」

「分かった」

「……」

「ああ」

その後、ラミナ、テイルガ、ブラール、メレオロンは車でペイジンを離れ、モラウは【監獄ロック】を解除すると同時に【4次元マンション】に潜って身体を休めることにしたのだった。

そして、【監獄ロック】から解放されたウエルフィンとブロウダーが、目にしたのはレオルとモルモの無残な死体と、人気を全く感じないペイジンの街並みだった。



## #136 カクゴ×ハ×オモク

ペイジンでの決戦翌日の午後。

ラミナチーム、ゴンチーム、ナツクルチームはペイジン近くの都市外れの廃屋に集まった。

キルア、ゴン、イカルゴが到着した時、ラミナは亡命希望の軍部内通者から無理矢理支給させた食糧を食べていた。

そのすぐ傍には空箱や空の缶詰が大量に転がっていた。

「おお、来たか。ほれ」

ラミナはキルアに缶詰を放り投げる。

「……なんだよ、いきなり」

「どうせ果物とか魚ばっか食うとつたんやろ？ 食わんと体力戻らんぞ」

キルアは顔を顰めるが、ラミナの指摘通りだったので反論も文句も言えなかった。

ゴンは首を傾げて、

「ラミナ、怪我は大丈夫なの？」

「別に致命傷は負ってへんから問題ないで。まあ、作戦本番までは休ませてもらうけどな」

食事の手を止めることなく、肩を竦めて答えるラミナ。

そこにナツクルが潰れたテーブルの上に色々と紙を広げ始める。

「よし。全員揃ったし、現状と作戦本番について打ち合わせするぜ。集まってくれ」

ナツクルの呼びかけにゴン達は素直にテーブルの周りに集まる。

ラミナはキルアの横に座り、2人の間には大量の食糧が入った箱が置かれる。

「さて……簡単には聞いてると思うが、ノヴさんとメレオロンの尽力で宮殿内に出口の設置が成功した。これで突入手段の確保は完了した」

「……ノヴさんは大丈夫なの？」

ゴンはラミナとメレオロンに顔を向ける。

ラミナは肩を竦め、メレオロンは難し気に顔を顰める。

「大丈夫、とは言えねえな。怪我は一切負っちゃいねえが、心は間違いなく折れちまつた」

「やから、ノヴは作戦本番には参加させん。まあ、元々アイツを前線に出す気はなかつたけどな」

「これはモラウの旦那も承知済み。つてことで、当日にノヴさんのマンションから宮殿に突入するのは10人。俺、シュート、ゴン、キルア、イカルゴ、メレオロン、ラミナ、テイルガ、ブラール、そしてモラウの旦那」

「会長は？」

「会長は独自に雇った協力者と別口で突入する。ピトーの【円】の外から来ることになるから、俺達よりも数秒遅れる。そして、俺達はその数秒で王と護衛軍を分断する」

ナツクルの言葉にゴン達は顔を引き締めて頷く。

それに頷き返したナツクルは、宮殿の簡単な見取り図を指差して説明を再開する。

「宮殿に設置した出口は3か所。庭園、宮殿入り口、そして一階の中央階段傍。王と護衛軍がいるであろう場所は、その中央階段を上った三階の玉座の間だ。つまり、俺達が突入する出口の第一候補はここ、中央階段！」

ナツクルは地図上の中央階段を指で叩く。

キルアは顎に手を当てて考え込んでいる。

(確かに普通に考えれば、それがベスト。けど……)

キルアはメレオロンに顔を向ける。

「メレオロン。お前らが宮殿に侵入した時、ピトーの【円】は消えてたんだな？」

「ああ、間違いねえ」

「ついでに奴の人形兵もペイジンから消えよつたで。アモンガキッドも戸惑つとつたから、まず何かしらのアクションが起こったんやろうな」

ラミナが新しい缶詰を開けながら捕捉する。

キルアは再び顎に手を当てて思考に耽る。それにゴンやイカルゴは首を傾げる。

「何か気になるの?」

「そりやな。護衛軍の最優先事項は『王』。これは疑いようがない事実だ。だから、あの状況……キッドがペイジンに出ている時にピトーが【円】を消して、人形兵を引つ込めるのはありえないはずなんだ」

「やけど、そのありえへんことが起こった。その理由をある程度考えとかんと、突入時に想定が外れて作戦どころやなくなるかもしれないちゆうことやな」

「ああ」

「ネフェルピトーの【円】が消えた後、宮殿の警戒に動いたんはシャウアプフとアモンガキッド。シャウアプフの【円】は二階までで、一階はアモンガキッドの念獣で補った。せやな?」

「ああ、間違いねえ」

「つまり、ネフェルピトーはオーラを他のことに割く余裕がない状態やったちゆうことになる」

ラミナはキルアの思考を手助けするように話す。

ゴンやイカルゴ、テイルガ達も腕を組んで考えるが、やはり答えは出なかった。

「……ラミナはどう考えてるんだ?」

同じく答えを思いつかなかったシュートがラミナに訊ね、キルアも含めて全員が視線をラミナに向ける。

ラミナは小さくため息を吐く。

「はあ……少しは自分らで考える努力せえや」

「それで分かんないから訊いてるんじゃないんやん」

ゴンが開き直ったようにあつけらかなと言いつつ、それにラミナは額に青筋を浮かべ、

(そっぴやあ、コイツいつペン殴らなあかんかったわ)

と、八つ当たりしようとして決めていたことを思い出した。

だが、今はそれを横に置いて、待つのも面倒なので説明することにしました。

「まずアモンガキッドが宮殿を出た以上、ネフェルピトー達が王の傍から離れるんはまずありえへん。つまり、ネフェルピトーは宮殿にいなながら、王の護衛以外に意識を向ける必要があったっちゅうことや」  
これは先ほども話していたので、誰からも異論はない。

「ここで思い出すべきは、ネフェルピトーにはもう1つ能力があるっちゅうことや」

「もう1つの能力？」

「治癒能力や。腕が斬り落とされたはずのカイトを治した能力」

ラミナが告げた内容に、ゴンやナツクルは顔を顰め、ティルガやメレオロンは思い出した表情を浮かべる。

「念を使つての治療は、その範囲に関わらず極度の集中力と大量のオーラが求められる。まず間違いなく【円】や他の能力にオーラを割く余裕はないはずや」

「……つまりあの時、ピトーは誰かの治療をしていた？」

キルアが眉間に皺を寄せて考え込む。

イカルゴも眉を顰め、

「でもよ、ただでさえ戦力が減った状態で【円】を解いてまで、誰を治療するんだよ？ 王なら分かるけど、あの王を怪我させられる奴なんていないだろう？」

「他の護衛軍とかじやないの？」

「いや、それはあり得ない。護衛軍が他の護衛軍のために王の守護を疎かにするなど、まず考えられない」

「俺もティルガに同意だ。まあ、王が命令すれば絶対とは言えねえが」  
「っちゅうことはや、ネフェルピトーが治療したんは王で、王を傷つけたんは王自身っちゅう結論が一番になりよるな。おもしろい事に」

ラミナの結論に全員が啞然とする。

しかし、確かに一番可能性が高いのは、その結論になる。一番納得出来る。

だが、そうなると次の疑問は、

「なんで王が自分で自分を傷つけんだあ!?! どんな状況だよ、そりやあ!?!」

ナツクルが全員の頭を過ぎった疑問を口にする。

しかし、ラミナは、

「んなもん知るかい」

とこのうのうと言いつつ放った。

「テメエが言ったんだろアアン!!」

「お前らが訊いてきたんやろが。うちかて確信持てへんかったから、口にする気なかつたわ」

だから、訊かれるまで何も話さなかつた。

推測を裏付ける情報もないのに、推測だけ語つてもただ惑わせるだけだ。

(けど、正直この推測が当たつとる気はしとる。それに……なんや見落としとる気がしてならん)

すでに手元にあるのに、気づけていない。

そんな気がしてならない。

そして、似たような感覚をキルアも感じていた。

(何か良くないことが起こつてる気がしてならない。このままだと、作戦自体が破綻しそうな何かがある……!)

ゾルディックの血を受け入れたからこそその感覚。

あらゆる事態を想定して暗殺するタイミングを決めてきたキルアは、あまりにも想像できない事柄が多すぎて、どうにも不安が頭を過ぎる。

「話を戻すぞー。とりあえず、ノヴさんがいなくなつちまつたが、それぞれのターゲットは変わらねえ。それはいいな?」

ナツクルの言葉にラミナ以外の全員が頷く。ラミナは新しい缶詰に手を伸ばしていた。

それにナツクルは目くじらを立てるが、回復に努めているということは理解しているので必死に飛び出しそうになる怒号を呑み込んだ。

「二応再確認しとくぞー! 俺とシユート、メレオロンがユピー。ゴン、キルア、イカルゴがピトー。モラウの旦那がプフ。ラミナ、テイルガ、ブラールがキッドを引き付ける」

「ちよい待ち。テイルガとブラールには残りの師団長を相手してもら

うで」

ラミナがティルガとブラールを見ながら告げる。

ティルガは一瞬目を丸くするも、意図を理解してすぐに頷いた。

「承知した」

「……」

「……確かに護衛軍との戦闘中に、師団長の横入りは面倒だな……」

シュートが眉間に皺を寄せながら言う。

「でも、大丈夫なのか？ 生き残ってる師団長って4匹くらいいるだろ？」

「別に倒せとは言わん。ジジイ連中が王を連れ去るまでの間、護衛軍に逃げられる隙を作らせたあないだけや」

キルアの言葉にラミナは食べながら答え、キルアも納得したように頷いた。

「問題は突入直後だ。連中からすりゃあ、俺達はいきなり自陣のど真ん中に現れる。そうになると、奴らが本能的に取る行動は——」

「身をもって王を守る——！」

「けど、ここから全員をバラバラにするのは簡単じゃないな……」

守られると言えど、動きも戦闘力も最も要注意なのは王だ。

王が攻めかかって来れば、まず作戦は失敗すると考えるべきだ。

「それを少しでも成功率を上げるのがパームなんだが……」

「パームは昨日？」

「……ああ。昨日、ビゼフの野郎に呼ばれて宮殿に入ったと亡命者から連絡が入った」

パームは変装して、ビゼフの貢ぎ物として潜入した。

目的は王と護衛軍を目視して、脱出すること。

パームは目視した者を水晶を通して動向を監視することが出来る。

少しでも早く護衛軍の元に辿り着き、分断するための重要な任務。

しかし、目視することが必要なため、化け物全員に近づく必要がある。

それはつまり、相手にも見つかる可能性が非常に高い超ハイリスクな

任務であるということ。特に【円】を使うネフェルピトー、ピット器

官と念獣を操るアモンガキッドへの接近はほぼ自殺行為に等しい。

故に成功すれば超御の字レベルで、ぶつちやけ人柱に近い作戦なのだ。

なので、ノヴやモラウは無理ならばビゼフのみを監視し、宮殿内の監視システムを無効化するだけに留めるようにと言われている。

「昨日の今日だ。流石にまだ動くに動けねえだろうが……」

「宮殿にはキッドの念獣がうようよしてゐるしなあ……。あれを掻い潜るのはかなり厳しいと思うぜ？」

シユート、ナツクル、メレオロンの言葉にゴンは心配そうに眉尻を下げる。

それにキルアが口を開こうとした時、

「お前は人の心配しとる場合ちやうやろ、ゴン」

ラミナが冷たく言い放つ。

「ゴンだけやない。ここにおける全員、他人に気を配る余裕なんざないで」

「んだとお!？」

「他を気にして戦える相手ちやうぞ、護衛軍は。お前とキルアは嫌という程理解しとるやろが。今度は逃げられんのやぞ」

全員が猫の手も借りたいほどの状況だ。

戦力の余分は一切ない。それどころか減ってしまったばかりだ。

他人の心配して、戦いに集中できないなど現状一番許されない言い訳と言えるだろう。

「うちもモラウも、万全な状態で戦えん可能性が高い。お前らをサポートできる余裕はない。特にうちは護衛軍に思くそ警戒されとるやろうしな。ジジイが王を連れ去るためには、こちらは真っ向からバケモン相手に最低でも1分。時間を稼がなあかん」

一度見向きもされず、全力で逃げ出した相手から1分。

普通ならば余裕と言えるのだが、今回はたった1分が恐ろしく長く感じさせる。

「ノヴは護衛軍のオーラを視て、近づかれただけで折れよった。殺気も何も籠められとらんオーラでな」

だが、ゴン達は絶対に敵意や殺気を向けられる。

しかも、王のすぐ傍に現れた敵だ。

その時のオーラは、アモンガキッドでさえ、想像を絶するほどの邪悪さが籠められているのは想像に難くない。

その時、まだ戦う気力が残るかどうか、こればかりはラミナですら自信がない。

「ジジイ共が去った直後に殺される覚悟、しときや。どんな理由、どんな目的があるうとな」

ラミナの言葉に全員が息を呑む。

唯一護衛軍と戦ったラミナの言葉に、流石のナツクルも言い返すことは出来なかった。

「お前に一番言うとするんやぞ、シユート」

ラミナはシユートを鋭く見据える。

シユートは大量の汗を掻いて固まり、ナツクル達はシユートに視線を向けた。

「っ……………」

「な、なんでシユートを名指しすんだよ……………!？」

「ナツクルとメレオロンが組むからや」

「!!」

ナツクルとシユートは目を丸くする。

「ナツクルの【天上不知唯我独損】を活かすなら、メレオロンの能力は絶対必要条件や。バレずに近づいて殴り、殴り返されないようにせなあかん」

「……………」

「お前らが相手にするモントウトウユピーは強化系。一撃まともに喰らえば、確実にポットクリンは消える。つまり、ナツクルは奴が破産するまで姿を見せることは出来ん」

「あ……………!？」

ゴンもようやく理解したのか、目を丸くしてシユートを見つめる。テイルガやイカルゴも同じく驚きを露にする。



「言わせてもらおうで。うちの予想が正しかつたら、モントウトウユピーが破産するまでの時間は、最低でも10分を楽に超える」  
「なっ……!?!」

ラミナが口にした時間にナツクル達は目を限界まで見開く。

「10分だとお?!? テメエ、10分もすりゃあポットクリンのカウントは10万を越えるんだぞ?!? それでも破産しねえってのか?!?」  
「せんな。絶対にせん」

ラミナは表情を変えずに断言した。

それにナツクルは出まかせでも何でもない嫌でも理解させられた。

「……本気かよ? 10万オーラつつたら、ボスやお前よりも多いんだぞ?」

「アモンガキッドと戦った感じやと、うちよりも倍はある。テイルガが師団長のハギヤから聞いた話やと、モントウトウユピーは強化系。アモンガキッドより多いことはあっても、少ないことはまずないやろな。それに……」

「それに?」

「テイルガ達の話やと、モントウトウユピーは身体を自由に変化させることが出来るらしい。そんで、モントウトウユピーには動物の特徴が特に少ないっちゆうもな」

「……それがなんだってんだ?」

「阿呆。お前、翼を自由に生やしたり、腕を増やせる動物見たことあるか? うちはないで」

「でも、複数の動物が混ざった奴もいただろ?」

「おったな。けど、大抵は知能が低い雑魚ばっかで、師団長や兵隊長格は基本的に単一の動物の特徴が強く出る傾向にある」

「……確かに」

「もちろん、護衛軍ならありえへんとは言わん。やけど、それ以上に納得出来る獣がおる。……魔獣や」

告げられた名前にキルア達は今度こそ絶句する。

あれだけの戦闘力だ。そして、あの広大な自然を持ったNGLだ。

魔獣とて生存していてもおかしくはないし、食料にされていてもおかしくない。

「オーラは生命エネルギーや。元々の生命力が高ければ、自然とオーラはデカくなる。これはもうこれまでのことから否定出来ん。となるとや、普通の獣より凶暴で生命力が高い魔獣と混ざったモントウトウユピーは、他の護衛軍より生命力が高いんは容易に想像出来るやろ？」

そこに強化系となれば、更に身体能力が優れている可能性が高い。

「理解できたか？ シュート。お前はそんなバケモン相手に1人で時間を稼がなあかんねん。奴が破産するまで、たった1人で」

何度も言うが、人的余裕は全くない。

シュートを援護する人材は絶対に現れない。

「まあ……ナツクルが能力を発動した後に姿見せて2人で戦うっちゃう手はあるで？ ただその場合、8割9割の確率でモントウトウユピーは倒せへん」

【天上不知唯我独損】の効果範囲は半径100m。

ずっとその中で逃げ続けるのはかなり厳しいと言わざるを得ない。更にモントウトウユピーがシュートを優先的に狙う可能性もある。

「シュートも能力を発揮するには直接攻撃せんとあかん。ナツクルも姿は見せても、攻撃を食らわんようにせんとあかん。かなりシビアな戦いを強いられる。それに求められる覚悟は、お前らが思ってるよりもずっと、強いぞ」

重く告げられる言葉に、シュートは右手を握り締める。

本心ではナツクルにも戦ってほしい。だが、作戦を考えればナツクルは潜み続けるべきだ。絶対に攻撃されてはならない。

そのためには10分以上、1人で戦い続けなければならない。戦いが好きでもなく、得意とも思っていない自分には荷が重すぎると考えてしまう。だが、それでは何のためにナツクルとメレオロンに危険を強いるのか。

(俺は……まで来て……まだ!!)

キルア達の想いを受け取った。そして、それはまだ果たせていないではないか。

まだカイトは救えていないではないか。

そのために戦おうとしているゴンとキルアを見捨てて、己はまた怖気づくのか。楽で安全な道を選ぶのか。

シュートは右手を握り締める。

その隣でナツクルも歯を食いしばっていた。

俺も戦うというのは簡単だ。仲間を助けることに戸惑うことなど何もない。

だが、それは同時にナツクルもシュートも共倒れする可能性を著しく上げてしまう。そうなれば、その尻拭いをするのは、己の師や自分が一度叩き潰した未熟な後輩か、いけ好かない暗殺者だ。

(それで俺は仕方ねえと死ぬのか？ テメエの勝手を他人に押し付けて?)

この任務に同行してから自分は何を成した？

ナツクルはシュートと同様に自問自答する。

カイトは救えたか——否。

蟻を倒したか——否。

王や護衛軍と語り合ったのか——否。

何一つ満足に成していない。

なのに、ここでまた我を押し通すのか。

それは違う。

もちろん、本番になれば状況次第で変わるだろうが、少なくとも現段階ではナツクルはシュートを信じて堪えるべきだ。

べきなのだが……やはり、心が納得しない。

「……まあ、まだ4日ある。パームのこともあるし、じっくりと考えや」

ラミナは2人の葛藤を感じ取って、全員に言い聞かせるように告げる。

「思考を止めんな。あらゆる事態を想像せえ。全てに対する心構えを固めとき。それが戦場で生き残る最大の武器や。あり得ないと分かっつつても、それが偶然起こる可能性を否定すんな。それが心を持つ奴を殺しに行く時の鉄則やでな」

これからの戦いは、たった1秒動きを止めれば即死に繋がるのだから。

「うちらがここに揃つとること自体がすでにありえんかったことやと理解せえ。やから、作戦本番でもありえんことは絶対に起きるで」

ラミナはメレオロンとイカルゴに視線を向けながら言う。

数日前まで敵だと思っていた、または敵として戦った者が、今は仲間としてここにいる。普通ではあり得ない。

もうこの戦場に『当たり前』『常識』『絶対』は存在しない。

むしろ、それこそが疑わしい。

「もう援軍は呼んだところで間に合わんやろう。今更来ても、よほどの実力者でもない限り、奴らと相対した時に発狂して死体が増えるだけや。うちらがやるしかないねん。やから……覚悟、決め直せ」

悪夢が実現しない戦場など、ありはしないのだから。

## #137 サラニ×マタ×ウエニ

2日後、国民大会まであと2日まで迫った。

覚悟を問われたナツクル達は、この2日間悩みに悩んでいた。そして、覚悟を問うたラミナはというと――

爆睡していた。

「スウー……スウー……」

「……コイツ、あんだけ脅しておいてこの緊張感の無さはなんだよ……」

ナツクルは悩み過ぎてもはや苛立つ気力すら湧かなかった。

ただただ部屋の隅っこで食っちゃ寝を繰り返しているラミナを、呆れながら見ていた。

シユートやメレオロン、イカルゴも同じ思いでラミナを見ていたが、

「少しでも体力とオーラを回復させようとしてるんだよ。モラウが今も動き回ってるからな」

ラミナのすぐ傍で同じく体力を回復させようと食事を持っていたキルアが、ラミナをフォローする。

モラウは今も【紫煙機兵隊】でペイジンを包囲し続けている。

ちなみにウエルフィンとブロヴーダは昨晚に宮殿へと撤退したらしい。

今はチラチラと姿を見せる人形兵とにらみ合いを続けていた。

「人形兵が戻ってきたってことは、ネフェルピトーの【円】も復活したってことだな」

「ああ」

「……パームは大丈夫かな」

部屋の中で腕立てや腹筋をしていたゴンが、再びパームの名前を口にする。

gon は ナツクル に 顔 を 向 け て 、

「パームから連絡は？」

「いや……まだねえ」

「……どうにかして連絡取れないかな？」

「無理だろうな」

キルアがゴンの想いを冷たく切り捨てる。

「キッドの念獣にピトーの【円】だ。もう脱出は不可能と言ってもいい。マルコスって亡命者から聞いた話じゃ、多分パーム達が連れて行かれたのは宮殿地下の格納庫。地下で宮殿から5kmくらい離れるからピトーの【円】には引つかからないだろうけど、携帯は持っていないし使えないだろうし、ビゼフから奪って使えるとしても師団長の誰かに電波がキャッチされる可能性がある」

「……」

「連絡がないってことは、死んでるか潜んでるかのどっちかだ。万が一奴らに見つかったら自ら死を選ぶ。あいつはその覚悟で敵地に向かった」

「こちらから彼女の様子を探ろうとするのは、彼女の覚悟を侮辱する行為だ」

キルアとシュートの言葉にゴンは反論出来ずに俯く。

「おい、ちよつと言い過ぎだろ！ ゴンはパームが心配なだけで――」

「だから、そんな余裕はないってラミナにも言われただろ？」

「んだと……!？」

「パームには脱出が不可能な時は、俺達の潜入を手助けする準備をするように言われてる。だから、俺達にとって大事なのは、パームが作戦本番に向けて準備を整えてくれてるって信じることだろ!？」

キルアの言葉にナツクルは二の句が告げなくなる。

「しかし……もし見つかっていたらどうするのだ？」

テイルガが言いにくそうな顔を浮かべながら口を開く。

だが、ここで言わなければ、パームのことはギリギリまで話題にならない可能性を考慮したからだ。

キルアはそれに頷いて、

「最悪なのは、死を選んでもピトーに無理矢理治療されて生け捕りに

されること。その場合、俺達のごときは十中八九敵にバレてる」

「……そうになると、俺達は飛んで火に入る夏の虫というわけか……」  
「どこに出口を仕掛けたかは知らないはずだけど、ノヴの能力を聞いた護衛軍なら設置候補なんて簡単に推測できる可能性がある。意気揚々と出口から飛び出したら、逆に護衛軍と師団長達全員が待ち構えてる可能性だってある」

「まあ、やから、突入前にブラールの能力で宮殿を覗いてもらうつもりや」

いつの間にか起きていたラミナが、寝ごろんだまま告げる。

「起きてたのかよ」

「こんな周りでゴチャゴチャ話されたら起きるわ阿呆」

ジト目をナツクルに向けるラミナ。

そして、眠たげな顔のまま、ブラールに視線を向ける。

「突入の1時間前に宮殿内に梟を1羽飛ばしてもらおうで。もちろん、姿を見えんようにしてな」

「……」

ブラールは小さく頷く。

ラミナは体を起こして伸びをする。

「ん〜〜〜……はあ」

「調子はどうなのだ？」

「ん〜……まあ、流石に万全は無理やろな」

右肩を回しながらテイルガの問いに答えるラミナ。続いて、ラミナ以外の視線がキルアに視線が向く。

「俺はもう問題ねえよ。傷もほぼ塞がった」

事実キルアはすでに包帯を全て外している。

露になつて腕には傷痕は全く残っていなかった。

「後はボスカ……」

「……流石にモラウさんでもここまでオーラを使い続けければ、万全までは戻せないだろう」

「まあ、モラウは戦闘よりも【監獄ロック】での足止めに集中してもらえばええやろ」

ラミナは立ち上がってストレッチをしながら言う。  
そして、調子を確かめるように【練】を発動する。

それを見たナツクルは違和感を感じ取った。

（ん？ ……コイツ、もうオーラが完全に回復してねえか？）

ナツクルは経験と勘で相手のオーラを数値化してきた。

なので、ラミナのオーラ総量も何度か数値化している。ライバル視しているが故に。

その経験からラミナのオーラ量が以前同等まで回復してるようにナツクルは感じた。

しかし、

（だが、確かにまだオーラが漲ってるとは言い難え……。ってこたあ、コイツ……。！ この数日でオーラの最大容量を増やしたつてのか!?!）  
ナツクルはラミナの成長度合いに目を丸くしていた。

実力的には己の師であるモラウをも凌駕し、オーラ量においても同等以上だったが、今回で完全にモラウを凌駕したとナツクルは感じていた。

そして、もう1人。

キルアもまたラミナの気配が大きくなったように感じていた。

（なんか一回りデカくなったような……。近づいてたのに、また距離が開いた気がする）

ビスケやヒソカと同じ領域にいると思っていたラミナが、ここでもだ急成長するのはやはり衝撃だった。

だが、それはそれだけラミナであっても激闘だったということだ。それは分かっているつもりだった。

分かっていたと思ひ込んでいた。

しかし、こうしてまた強くなったラミナを見て、キルアはやはり自分はまだまだ弱いのだと思ひ知らされた。

（事実、俺は護衛軍相手に数十分も戦えない。多分、爺ちゃんや親父、兄貴はラミナと同じくらい戦える……。奴らは確かに恐ろしく強い。それでも……。絶対に勝てない存在でもないんだ……）

たとえ種族は違くとも、同じ念能力を使う以上、勝つ可能性は必ず



ある。

(つまり……単純に俺がまだまだ弱いだけなんだ……)

これも分かっていたことだ。

分かっていたつもりだった。

だが、ここまで戦ってこれで、また勘違いしそうになっていた。

ラミナと肩を並べて戦えて、浮かれていたのだ。

キルアは両手を握り締める。

(まだこれじゃダメだ……！　俺は……まだラミナと肩を並べられない……！)

ラミナと肩を並べられるほどの強さを得たい。

ゴンと共に戦うことよりも先にそう思ったことに気づき、その理由を理解するのは……もう少し先のことだった。

その夜。

宮殿、玉座の間では1つの転機が訪れていた。

「名は……なんと申す？」

王が1人の少女に名を訊ねた。

杖を手に持つ目を閉じた少女。

東ゴルトー発祥の盤上遊戯『軍儀』のプロ棋士であり、これまで将棋、囲碁、チェスなど1日足らずでプロを圧倒してきた王が数日経った今でも1勝も出来ていない。丸一日、食事とトイレ以外はずっと打ち続けていても、未だに王は少女の足を掴めていない。

それどころか、少女の覚醒はこれからだった。

一度休憩することにし、少女が王の前を辞去する際、王は初めて、少女の名を訊いたのだ。

「ワダすの、ですか……？」

「他に誰がいる」

「……コツ、ココ、コムギ！　です……！」

コムギはどもりながら名を名乗る。

「コムギか……うむ」

反芻して名を頭に刻んだ王。

しかし、その直後、王は予期せぬ言葉をかけられる。

「総帥様は……」

「？」

「総帥様のお名前は……なんとおっしゃられるのですか？」

意を決した顔で訊ねてきたコムギに、王は目を丸くして固まってしまふ。

何故なら王は、己が名を知らないからだ。

目が見えないコムギは返答が来ないことに首を傾げるが、その後も何も言われなかったので悲し気に眉尻を下げ、頭を下げて玉座の間から去って行った。

(余の……名前……)

王はしばらく座ったまま、自問自答を繰り返す。だが、いくら王でも知らない事柄の答えは出ない。

故に頼りにする腹心達に訊ねることにした。

王はバルコニーに出て、すぐ目の前の塔の天辺に座っているネフェルピトーに声をかける。

「ピトー！」

ネフェルピトーは呼ばれるとは思っていなかったもので、少し驚きながらもすぐに目の前に移動する。

「はっ！… なんでございませう？」

しかし、王はそれに答えず、背後に顔を向ける。

「プフ！」

「はっ」

「ユピー！」

「はっ」

「キッド！」

「はい」

近くに控えていたシャウアップ達は名を呼ばれると、すぐにネフェ

ルピトラーの左右に並んで跪く。

「いかがなされましたか？」

シャウアップフが改めて訊ねる。

どこか心ここにあらずという様子の王は、腕を組んでシャウアップフに顔を向ける。

「プフ」

「はっ」

「……そう、お前はプフだ」

突如名前を確かめ始めた王に、ネフェルピトラー達は意図が分からずに内心首を傾げる。

「余の……余の名前は、なんという？」

まさかの問いかけに護衛軍は表情を変えることなくとも、心の中では驚いていた。

「……恐れ乍ら申し上げます。王は王です。それ以外の何者でもなく、唯一無二の存在……！ 今は様々な紛い物がその名を無断で使っています。全て排除、抹殺致します。『王』と言えば、世界中の誰もがたった一人の存在を思い浮かべる様……」

「それはただの前提であろうが。王は称号。称号は所詮冠で名前ではない」

シャウアップフの言葉に反論した王は、そのままモントウトウユピーに顔を向ける。

「ユピーはどうだ？」

「私には荷が勝ちすぎる問題……。到底答えを持ち得ることかないませぬ」

普段から考えることが苦手なモントウトウユピーは正直に答える。その性格を理解している王は、咎めることなく次にネフェルピトラーへと訊ねる。

「ピトラー」

「……んー……やはり王ご自身のお気持ちが一番大事で御座います。」

王ご自身が最も相応しいと思われる名を付けられるのがよろしいかと……」

「ふむ……キッド」

最後に問いかけられたのはアモンガキッドである。

「そうですねえ……。人間で言えば、多くの場合は親や目上の者から授けられます。我ら護衛軍もまた、女王から名を与えられました。しかし……」

「……続けよ」

「はい。王の御母堂であらせられる女王はすでにこの世におらず、この地に王より目上の者など存在致しませんからねえ……。故に、王に名を授けることが出来る者がいるとすれば……。ピトーの言う通り王ご自身か、王が認めた者のみかと……」

「ふ……む……まあよいわ」

「王よ、御名前は選別の後でも、遅くはありません。まずは明日！ 滞りなく作業を完了させることが先決で御座います」

何か嫌な予感がしたシャウアップは、無理矢理話を明日から始める選別へと話題を変えた。

しかし、やはり王はその言葉には反応を見せず、どこか上の空だった。

「……王。何か……？」

「何か気掛かりがおありならば、私め等に……。我々は、そのために此処にいます」

「……コムギの全身が、光に包まれていた」

「……コムギ？」

「アカズの女だ」

シャウアップは咄嗟に顔を下に向けて、王から顔を隠す。

今にもコムギに対して怒りが爆発しそうだったからだ。

「覚醒したのだ。コムギは飛躍的に強くなるだろう。軍儀に限った話だがな。……ピトー」

「はっ」

「もしもコムギを今回の……明日やる方法で『選別』をしていたらどう

なっていた?。」

「死んでますね。あくまで『選別』は兵士足りえる肉体と精神の持ち主を選ぶためのやり方ですから。生き残るのは戦闘能力が極めて高い者だけです」

「……うむ」

はつきりと告げるネフェルピトーに王は静かに頷いた。

「……コムギと出会って、強さにも色々あると学んだ。例えば、ここへ来る途中に余は、子供を殺した。あの子供ももしかしたら、ある分野で余を凌駕する才を目覚めさせていたかもしれない。その芽を……余は抓んだ。大した意味もなく……抓んだ」

まるで懺悔するかのような言い方に、シャウアップは心が張り裂けそうになっていた。

絶対の王、唯一無二の王に、後悔の念は相応しくないと。

他者を顧みるなど、似合わない。

しかし、

「くくく、くくくく!」

不敬と断罪されても止めようとした矢先、王が突如笑い始めた。

「だとしたら、何という強さ! 理不尽に現れ、他の数多ある脆い強さを奪い、踏み躪り壊す……! それが、余の力……!」

王は不敵の笑みを浮かべ、絶対の自信を漲らせていた。

「暴力こそ、この世で最も強い能力!!」

確信をもって断言した王は、そのまま護衛軍一同に声をかけることなく悠然と歩き去って行った。

王の背中を見送ったネフェルピトー達はゆっくりと立ち上がると、

「私は……護衛軍失格です」

突如シャウアップが跪いたまま涙を流し始めた。

「? 何で?」

「どしたのプフっち」

「見当違いの誤解で先走り、危うく王を侮辱するところでした……。王が自分の行いに悔いているのではないかと……。馬鹿なことを考えて」

「お前はいつも深読みしすぎなんだよ」

モントウトウユピーが呆れたように、シャウアップフに言い放つ。

「ええ……それだけのこと」

「ん〜、でも確かに王はあの娘が来てから少し変わったニヤ」

「ええ、それは事実……」

「別にいいじゃないの。愛玩動物ペットの1匹2匹いてもさ。ずっと玉座の間に座ってるってのも、退屈だろうしねえ。あれはあれで、王様の成長に繋がると思うけどねえ」

「……人間などと関わったところで、成長など出来るわけがありません」

「それは王様が判断することだよ、プフっち。おいちゃん達の偏見で王様の視野を狭めるわけにやいかないと、残念ながらおいちゃんは思うよ?」

「……」

シャウアップフは冷え切った瞳を、アモンガキッドへと向ける。

だが、空気が読めないモントウトウユピーが腰に手を当てて、

「どうでもいいけどよ。王にとってあの娘が邪魔なら殺せばいいじゃねえか」

「……ああ……私があなたと同じ思考レベルだったなんて……」

考えることが苦手なモントウトウユピーと全く同じことを考えていたことにシャウアップフは少なからず心にダメージを負う。

アモンガキッドとネフェルピトーは顔を見合わせて、肩を竦め合う。

「ねえ、キッド」

「なんだい?」

「あの子になんか思い入れがあるの?」

「なんで?」

「だって、今助けたでしょ?」

ネフェルピトーは今も【円】を使っている。

それでコムギがいる西塔の迎賓の間で起こっていたことも当然気付いていた。

窓から飛び込んできた鷹に襲われていたコムギを、アモンガキツドの口だけ念獣が食い殺して助けたことを。

「そりゃあ、王様のお客様だからねえ」

「ん〜、でもあの子を守れなんて言われてないでしょ？」

「でも、ここであの子が勝手に死んだら、王様は軍儀で負けたままでし、王様が自分で殺せないじゃないの。さっきの様子からすれば、王様が納得するとは思えないんだよねえ」

「まあねえ……」

「おいちゃんはあの子を大事にするなら、それはそれでアリだと思うよ？ おいちゃん達じゃ、王様の暇潰しの相手も出来ないんだからさ。娯楽は必要だよ、娯楽はさ」

「確かにニヤア……」

「そういえば、あの女からは何か訊き出せたのかい？」

「んニヤ。実はキツドが捕まえた後に自殺しようとナイフで自分の心臓を刺しちゃって」

「あらら……」

「どうせハンターだろうからニヤ。プフと相談して改造実験に使うことにしたよ」

「ふうん……まあ、そっちは任せるよ。おいちゃんは他にも鼠がいなか、ちよつと地下倉庫の方にも目を光らせておくからさ」

「うん」

アモンガキツドはヒラヒラと手を振って、ネフェルピトー達の前から去る。

その視界には、迎賓の間にて傷だらけのコムギに驚いている王の姿が映っていた。

そして、王が何か声をかけると、コムギは突然大泣きし始め、王は困惑した表情で立ち尽くしていた。

「……やっぱり、王にとってあの子は特別な存在になりつつあるみたいだねえ。さっきの名前も……あの子に訊かれでもしたかな？」

王達の様子を見ながら、王の変化について考える。

正直なところ、アモンガキツドはコムギと関りを持つことに関して

は否定する気は全くない。

護衛軍は『王を守る為』にいるのであって、『王を管理する為』にいるわけではない。

故に『王とはどういうものか』を決めるのは、王自身であって護衛軍がそこに口出しする資格は一切ない。

しかし、最近シャウアプフは少々干渉し過ぎな言動が目立ち始めている。

もちろん、それは王を至上に想うが故ではあることは承知している。

だが、やはりアモンガキッドと思う在り方とは違った。

「生物統一は必ずしも圧政でしか為せないモノじゃないからねえ。あの子の存在は、おいちゃん達にはない力を持つ存在を引き入れる架け橋になりそうな気がするんだよねえ。……ミナっちも、あの子と会えばこっちに来てくれるかな？」

人間の記憶を持つアモンガキッドからすれば、必ずしも人間全てを下等と決めつける考えはない。

自分達とて得意不得意があるのだ。

少しでも王を支えてくれる存在が多い方がいいに決まっている。

自分達は、決して不老不死ではない。

自分達の生まれ方が、それを証明している。

「王様。もっとたくさん話しなよ。もっとたくさん触れ合いなよ。もっとたくさん迷いなよ。もっとたくさん知りなよ。もっとたくさん試してみなよ。王様の生き方は……決して1つじゃない」

アモンガキッドは唯一無二の存在をただただ見守り、支える。

その感情は、決して臣下が抱えるものではないことを、まだ気付いていない。

「王様が進みたい道を阻むモノは、ぜんぶおいちゃんが噛み砕いて、溶かし尽くすから」



だが、護衛軍としての在り方を見失っているわけでもない。  
王を守る為に全身全霊を尽くす。  
世界が崩壊しようと、護衛軍の存在意義は絶対に変わらない。

「ああ……残念だなあ……」

それが何を示すのか、知るのは本人のみである。

## #138 タガイ×ニ×オオツメ

作戦まで遂に24時間を切った。

ナツクルとシユート、メレオロンは先にペイジンへと潜入し、モラウと合流するために移動した。

ラミナ達とゴン達はまだペイジン近くの森小屋で待機していた。

ラミナは体の調子を改めて確認する。

（やっぱ完全回復とはいかんか。まあ、8割は戻ったんやし良しとせなあかん。身体も怠きは少し残っとるけど、戦闘にそこまで支障はなし）

最低限と言えるラインはなんとか満たしたと判断したラミナ。

（けど、あの蛇を倒すだけで手一杯なんは変わらなさそうやなあ……。奴を引き連れて他の護衛軍のところに行けんやろうし。奴を倒さん限り、他の場所への救援はまず無理か）

ラミナは背後でキラアと打ち合わせしているゴンに目を向ける。

（落ち着いとるようやけど……パームのことと言い、妙に不安定さが目立つ時があるんがなあ……）

特にそれが目立つのは、誰かの死が過ぎった時であることをラミナは見抜いていた。

やはりカイトのことがあまりにも影響を及ぼしている。

それはこれまでのゴンを考えれば当然のことではあるのだが、ここ最近その不安定さがやはり嫌な予感として頭に過ぎる。

（この前も感じた見忘れた奴と繋がつとる気がしてならん）

だが、未だに何を忘れてるのが分からない。

しかし、それが何よりも重要なのだと、ラミナの勘が告げていた。（下手したら、ゴンが戦場で使いもんにならん可能性がある……。けど、あのノヴに宮殿内に入り口作れとは流石に頼めん。それこそノヴが先に壊れる）

一度突入したら、終わるまで何があっても退くことは出来ない。

ネフェルピトーは広大な【円】の使い手だ。隠れる場所は地下しかないが、それでは逃げ場が無くなってしまう。

だが、今更ゴンを外す選択肢は取れない。

誰も納得しないだろう。このタイミングで下手にモチベーションを下げるのは下策だ。

(厄介な人はゴンが死んでもキルアや他の連中に影響が出そうっちゃうことなんよなあ)

ラミナはため息を吐く。

そこにキルアが声をかけてきた。

「ラミナ」

「あん？」

「イカルゴなんだけど、パームの捜索を任せようと思うんだ」

「ええんちゃうか？ イカルゴは護衛軍との戦いには力不足やろうしな。パームと、パームと一緒に連れてかれた……」

ラミナは僅かに目を見開き、言葉を途中で止める。

「？ どうした？」

突然言葉を止めて考え込み始めたラミナに、キルアやその様子を見ていたゴン、ティルガ達は首を傾げる。

ラミナは顎に手を当てて、

「そうや……他の人間……！ 宮殿に連れ去られたちゅうプロ棋士……！」

ペイジンの住民から盗み聞きした話だ。

そして、思い出すのはアモンガキツドの言葉。

『今、王様は暇潰しで人間達と戯れている。ただ殺して奪うだけの暴君じゃなくなってきた』

つまりそれは、王が生かす価値があると認めた人間がいる可能性があるということ。

(もし、ソイツが王が自分を傷つける理由やったとしたら……!!?)

ラミナは考えられる不測の事態を高速で頭の中でリストアアップしていく。

(…………あかん。王とソイツの関係性に確信が持てん……!)

「おい、ラミナ。どうしたんだ？」

「……いや、まだ確信が持てんからええわ」

「逆に気になんだろ」

「……数日前、王達がこの国における盤上競技のプロ棋士を数人宮殿に連れ去ったらしい」

「プロ棋士？」

「王の暇潰しや思うんやけどな」

「……ソイツらがまだ生きてて、その内の誰かが王を傷つける原因になつたって言いたいのか？」

「否定できるか？」

「……」

ラミナと思考が近いキルアは答えられなかった。

キルアも前に感じた胸騒ぎの正体がそこにある気がしたからだ。

「ブラール。突入直前の梟の監視、もう1羽増やしてんか？ もし玉座の間におつたら作戦の邪魔になる」

「……」

ブラールは小さく頷いた。

それにイカルゴが腕を組んで、

「もし、そんな人間がいたらパームよりそつちを先に助け出した方がいいか？」

「玉座の間におつたら放置でええ。下手に連れ出したら逆に王や護衛軍が追いかけてくるかもしれんし。他の部屋におつたら、こちらは作戦優先で、イカルゴに任せる」

「お、俺の判断で動くのか……!?!」

「王にとって死んでほしくない人間で、戦いに巻き込まれそうやったら先に逃がしたらええし。王からも護衛軍からも離れた場所におつたら、とりあえず放置でええと思うで。タコのお前が声掛けるより、パームと一緒にの方が説得しやすいやろうし」

「タコって言うなああああ!!」

「ほな尖がった白い帽子探してきて、全身ペンキで白くして来いや」

「……スイマセンでした」

流石にそこまでする勇氣はなかったイカルゴはラミナに凄まじく一瞬で萎む。

ティルガは腕を組んで眉を顰める。

「しかし……本当にまだ生きているのか？ 【円】が消えてから、もう3日は過ぎた。もし、その者が原因で王が傷ついたのであれば、護衛軍が黙ってはいないだろう」

ティルガの言葉にキルア達も悩まし気な表情を浮かべて、ラミナに顔を向ける。

もちろん、ラミナも顔を顰めて、

「確かにその可能性もある。やけど、もし生きとつたら？」

「……良くも悪くも王も俺達も引つ掻き回す爆弾になりかねない」

「そういうこつちやな。ちつ……ジジイ共がどう王を連れ出すかわからんのが腹立つわ」

ネテロとは携帯が通じず、アルケイデスはそもそも携帯を持っていない。

ネテロ達の宮殿への接近方法が未だに不明なのだ。

もちろん、本命であるネテロの突入方法が漏洩しないためではあるのだが、こうも不確定要素が多い状態ではやはり作戦のすり合わせがしたい。

作戦を指揮する立場であるモラウは消耗し、ノヴはリタイヤ、ラミナも護衛軍への対処で手一杯になる。

つまり、ゴン達は当たり前ながら、イカルゴやティルガ達にも独自判断で動いて貰わなければならない。

そのためにあらゆる事態への対処法を教授するのが一番確実だが、あまりにも経験がないティルガ達に伝えるには時間がなさすぎる。

何より相手は王と護衛軍。

こちらの戦術は容易く予想出来るだろう。

「……なんかもう国民、殺した方が一番効果的な気いしてきたわ」

「そんなことしたら俺達全員A級首にされて、ハンター協会潰れちまうだろ」

「うちは問題ないでな」

「……そうだ。コイツもうA級首だった……」

「ゾルディック家のお前も大した差はないで」

「けど、そんなことしたら流石にモラウやナツクル達がブチ切れるぞ？」

「知るかい、んなもん。元々うちの依頼者は別口や」

あくまで一番効率的だからネテロ達の作戦に参加しているだけだ。

そして、ゴンやキルアのことでもジンやシルバ達に余計な口出しされないように近くで見張りたいというのもある。特にゾルディック家がメンドクサイことになりそうだった。

「くそ……もう少し早よ思い出しとったら、『シーフ』や『チャリオツト』とか呼び寄せたのに……」

「クモの連中は？」

「間に合わんわ。つちゆうか、来てええんか？ クロロまで来たら、うちでも止めれんぞ。護衛軍や王を仲間にしてええんか？」

「……絶対やめてくれ」

「まあ、クロロも師団長と遭遇したらしいから、もしかしたらもう近くまで来とるかもしれんけどな。来んことを祈るとき」

「はあ!？」

「師団長の1匹を殺したんはクロロや。流星街とは別口みたいやし、王達に興味を持つ可能性は否定出来んでな。で、クロロが来るなら全員来るやろなあ。……マチ姉にカルトの奴も」

「げっ!」

「まあ、それはそれで戦力としては最高やけどな。勝った後が怖いで。ハンター協会の方は、な」

「……連絡は？」

「知りたないからしてへん。する気もない」

「……」

ジト目を向けるキルアに、ラミナは肩を竦めるだけで答えた。

これ以上この話をするとな本当にクロロ達が現れそうだと思うたからだ。

(……正直、マチ姉が何も連絡してこんのがめっちゃ怖い)

マチとてクロロがキメラアントと戦ったのは知ってるはずだ。

あの姉がクロロと流星街に面倒事を持ち込んだラミナに連絡してこないのはありえない。

最低でもメール、もしくは電話1本くらいかけてくるはずだ。

だが、それが一度もない。

流星街のことでもシャルナークではなく、マチから報告のメールが来ると想像していたくらいだ。

そして、好奇心旺盛なカルトも、ラミナとキルアがいるここに来ないのも違和感がある。

どちらかが東ゴルトーに行くと言い出してもおかしくはない。

フィックスはなんだかんだで面倒見がいいので、流星街を放っておくことはないだろうが、フェイタン辺りが来るのも想像している。

(……もしかして、ホンマに近くまで来とる? ……ありえるなあ。めっちゃありえるわ)

比較的常識人寄りであるパクノダやシャルナークも、こういう時は『驚かせてやろうぜ』と誰かが言えばノリノリで同意する可能性がある。そうなると、ラミナに教えてくれる優しい人がいない。

本当にこの近くの山の中に潜んでも納得出来てしまうラミナだった。

だが、ここでそんなこと知れば、完全にやる気をなくす。

旅団が揃えば、ラミナの事情など気にする者はいないし、むしろ喜んで引つ掻き回す連中だ。今回はクロロもラミナのプライドなどあまり考慮しないだろう。

ジンの依頼は『キメラアントの駆除』だ。クロロ達が手出しをしても、ラミナへの依頼は成功と言えるし、言わせる気のはずだ。

ジンも今回は無理を言っている自覚がありそうなので、渋ることもないだろう。

なので、クロロ達からすれば横槍を入れない理由がない。

(ネテロのジジイは【貧者の薔薇】を仕込んでるから、王の方には誰も

行かせんようにせんとあかんのもメンドイわあ)

近場で戦わないことを祈るのみだ。

ラミナはため息を吐いて、

「そろそろ行こか。ペイジンでも移動が始まる頃やろし」

「ああ」

「アモンガキツドの念獣に気い付けや」

「分かってるよ」

ラミナ達は小屋を出て、ペイジン近くにノヴが設置した【4次元マシジョン】の入り口に向かうことにした。

作戦決行まで、後10時間。

同時刻、宮殿。

護衛軍の4人はいよいよ始まった国民の行進に、玉座の間前のベランダに集まって打ち合わせを行っていた。

「始まったねえ」

「これで明日の15時にはこの周囲を500万人の人間が埋め尽くすってわけか。ペイジンの方は相変わらずか？」

「うん、手練れが数人。相変わらずだニヤ」

「牽制……それだけのこと」

「大会のどさくさに紛れて接近してくる可能性が高いな」

「なら一番危険なのは『選別』中だニヤ」

「ええ。『選別』には王も参加なさるとおっしゃってますし」

「でもでもくそれをこっちが一番警戒してるのも向こうは理解してるよねえ、残念だけど」

「そうだニヤア……」

「ハンター達が国民を巻き込むことを避けるのであれば……視界が制限される真夜中か、慌ただしくなる大会の直前か、ですか……」

「そう思っておくべきだねえ。おいちゃんがやられたみたいに、煙人形に扮して接近されたらピトっちの【円】でも、残念ながら判別は難



しいよねえ」

「キツドの念獣じゃ駄目なの？」

「駄目じゃないけどねえ。んくく……なんかここに来て、一度見せた方法で来るってのは彼女らしくないかなあってさ」

「問題はどのようにして来るかではなく、敵の目的でしょう。我々にとって最も怖いのは、王が我々の目の届かない場所に連れ去られることです。奴らの中に物質移動が出来る能力者がいると仮定して、それによって王だけが全く別の場所に強制移動させられてしまう場合……『選別』中でも我々の内最低1人は王の傍にいなければなりませんね」

「王が許さないだろう？　ただでさえ、最近俺達が近くに居過ぎると煙たがるし」

「まあ、それはおいちゃんがやるよ。おいちゃんの念獣なら【隠】で姿を消せるからねえ」

「そうですね。その上で全員がすぐに王の元へ駆けつけられるように心がけるとしましょう」

話が纏まったところで、ネフェルピトーが突如ペイジンの方へと顔を向けた。

「どうしましたか？」

「……連中の気配が、完全に消えたニヤ。オーラの残り香が全然感知できなくなった。恐らく【絶】を使い……人民の行列に紛れ込んだ……」

「ふむ……行列の中に紛れ込むことで行進を止めるのが狙いかな？」

止めなければ、そのまま宮殿に近づくことが出来るってわけだねえ。

……あちらさんは国民を囮にする気ってわけだ。『選別』で死ぬ可能性があるのなら、おいちゃん達を倒すために犠牲になっても変わらないうってわけかねえ……」

「……ここで行進を止めるわけにはいきません。先ほども言った通り、どんな手段で近づこうとも王に迫る前に我々で殺せばいいだけのこと」

「移動が始まった。もうボクの人形じゃ誰が誰か分からないニヤ。ど

うする？ 人形こつちに戻そうか？」

「いえ、敵を完全にフリーにするのは危険です」

「そうだねえ。ピトつちの【円】に触れる前に列を抜け出すかもしれないし。おいちゃんの念獣も潜ませておくよ。それなら簡単に抜け出せないし、飛び出せないでしょ」

ネフェルピトーはややメンドクサそうな表情を浮かべるも、文句を言うことはなかった。

同時にアモンガキッドが周囲に念獣を生み出して、ペイジンに向けて飛ばす。

それを機に解散となり、それぞれの持ち場へと戻るのだった。

ビゼフはかなり焦っていた。

「くそっ……いー あの女……いー」

ビゼフは数日前に部下に頼んで女数人を王達に黙って連れ込んだ。その内の1人、つまりパームと情事に及ぼうとしたがいつの間にか眠りについていて、起きた時には姿はすでになかった。

待機場としていた家にもおらず、他の女がいる家にもいなかったことからパームが工作員だと気づいた。

ビゼフは慌てて宮殿へと戻るエレベーターに乗り込み、関係者各位に連絡を取ろうとした。

そして、エレベーターのドアが開いた、その時。

アモンガキッドが目の前に立っていた。

「ひっ!？」

「やあやあびくぜくづくくん。お楽しみだったかい？」

「い、いや……な、なんのこ……!？」

「まあ、君も人間だし、1人で頑張ってるからねえ。女を連れ込むくらい大目に見てあげたのにさあ」

「っ……!？」

完全にバレていることに、ビゼフは死を覚悟した。

アモンガキッドはビゼフと肩を組んで、

「残念だったねえ、ビゼフくん。隠さずに正直においちゃん達に女を連れ込みたいて頼むか、秘書として雇いたいとでも言えば良かったのに」

「……」

「まあ、そう怖がんなさんな。逃げた女はこつちで処分済みだからねえ。それに、まだ君に死なれたら困るしさ。ここで殺すことはないよ」

ビゼフはホツと安堵の息を吐く。

しかしその時、アモンガキッドがビゼフの喉を掴んだ。

「っ?!?!」

「でもねえ、あんまりオイタするとお……流石に庇えないよ? これからは……ちやくんと心を入れ替えて、お仕事頑張ってほしいねえ」

「……わ、分かりました」

ビゼフの喉から手が離れ、最後に肩を軽くポンポンと叩いてアモンガキッドはビゼフの前から歩き去って行った。

ビゼフはその場に尻もちを着くように崩れ落ち、しばらくただただ大きく呼吸して冷や汗を流し続けるのだった。

そして、作戦決行6時間前。

ラミナ達はモラウ達がいる「4次元マンション」の部屋に飛び降りた。

「よう、どうだ? 調子は」

「まあまあやな。宮殿の方はどないや?」

「着々と国民が集まって来てるぜ。さつきノヴが監視してたんだが、シャウアップが鱗粉を使って集合した人民に催眠をかけているらしい。これで懸念の1つだったパニックが起こる可能性はグンと低くなったってことだな」

「戦闘音で催眠解けんのも、それはそれで心配やけどな」

「茶化すんじゃないよ……」

「モラウさん、パームから連絡はあった？」

「いや」

「そう……」

「ゴン。今さっきブラールが梟2羽飛ばしてくれたから、それを待とうぜ」

「うん」

キルアの言葉にゴンは頷き、イカルゴと雑談を始める。

ラミナは再びモラウに声をかける。

「そつちはまだ戦える余力あるか？」

「……正直厳しいが、逆に諦めがついて足止めに専念出来そうだ」

「……お前も他の連中のフォローは厳しいか」

「……そうだな」

「まあ、全力出せても大して変わらんやろうけどな」

「確かにな」

揃って肩を竦め、ラミナは続いて申し訳なきような顔を浮かべているいつの間にやら白髪になって少しやつれたノヴに顔を向ける。

「ノヴ、頼んどいたモンは？」

「……ああ、あそこだ」

ノヴは部屋の隅に置かれている箱を指差し、ラミナは服を脱ぎ捨てながら箱に向かう。

それにモラウやノヴ達は呆れ顔を浮かべる。キルアとシュート、イカルゴは顔を赤くして、そつぽを向いていたが。

「お前なあ……もう少し恥じらいつてモンをだな」

「別に全裸ちゃうし。どうでもええお前らに見られたところで恥ずかしがる理由ないわ」

ラミナはジト目を向けて下着姿で言い放ち、箱を開けて中身を取り出す。

箱の中には服を始め、様々な装備が入っていた。

ラミナはタンクトップを着て、黒のカーゴパンツを履く。

ベルトを締めると、更にその上に小さなポケットがいくつも付いているベルトを嵌める。

下着ではなくなったことで平静に戻ったキルアは、テイルガと共にラミナの傍に歩み寄って中を覗き込む。

「……また随分と色々持ち込んできたな」

「オーラを少しでも節約したいでな。使えるもんは使うしかないやろ」

ラミナはポケットの蓋を開け、そこに次々と詰め込んでいく。

「でも、キッドにはバレるんじゃないのか?」

「ちゃんとポケットの中はもちろん、武器も出来る限りアルミで覆つとる」

続いて、拳銃を取り出して点検を始める。

弾倉を抜き、一度分解して異常がないか素早く確認していく。

異常がない事を確認したラミナは、手慣れた手つきで組み立て直してカーゴパンツの太腿のポケットに仕舞う。

最後に黒の革ジャンに袖を通して、ブーツを履く。

「そういえば、ビゼフとか言う奴はどうするんや? 放置でええんか?」

「理想は捕縛だが、戦闘中なら放置で良い。王に脅されていた中、女を宮殿に連れ込むような奴だ。無理して保護する価値はない」

ノヴが眼鏡を直しながらはつきりと告げる。

「ほな、他の人間が宮殿内におつたら?」

「他の? どういうことだよ?」

ナツクルの疑問に、ラミナとキルアはプロ棋士のこと、そしてその存在が王が自身を傷つけた原因である可能性について話した。

内容を聞いたモラウ達は顔を顰めて考え込む。

「……確かに難しいな。下手に手を出せば、王の怒りを買って予想外の行動に出る可能性があるか……」

「やから、うちらは基本放置でええんちゃうかつちゆう話になったんやけどな」

「ああ、俺もそれでいいと思う。イカルゴがパームと合流した後に、可能であれば救出してくれればいい。もし戦いに巻き込まれたら……そこは各自の判断で良い」

つまり、助けようが見捨てようが本人次第。

元々すでにネテロを始めとするハンター協会は、東ゴルトー国民はすでに死者として計算している。なので、ここでその者が死んでも、ハンター協会が責任を追及することはない。

そもそもハンター協会は世界救済でも人民救済でもなく、キメラア  
ント討伐が最優先任務なのだから。

「結局王の能力とジジイ共の突入方法は分からんままか……」

「会長達の突入方法が分からないってのに、こっちで作戦決めて大丈夫なのか？」

「問題ない。会長ならすぐにこっちの動きを把握するだろうし、どう  
とでも対応できる方法を準備してるはずだからな」

「突入と同時に仕留めてくれる人が一番やけどな」

「確かにそれが一番だな！ 失敗したら、悲惨どころじゃねえけど！」

「まあ、うちのヤバさは大して変わらんけどな」

肩を竦めたラミナは次に食糧が詰められた箱に歩み寄る。

「テイルガ達も今のうち食うときや。戦いが始まったら、次はいつ食  
えるか分からんでな」

「分かった」

「……」

命運をかけた戦いまで、すでに6時間を切っている。

その事実にごンやキルア、モラウ達は色々なことが頭を過ぎる。

しかし、ラミナは普通に食事をして、普通に横になって睡眠をとる。

今更思うことは何もない。

いつも通り、ただただターゲットを殺すだけなのだから。

故に敵が強い程度のことなど、大した問題ではない。

そして、遂に0時まで、1時間を切ったのであった。

## #139 トツニユウ×マデ×ビヨウヨミ

宮殿ではいよいよ『選別』が迫ってきたことで護衛軍一同に気合が入り、物々しい雰囲気になっていた。

その雰囲気のせいかな、宮殿にいる師団長以下のキメラアント達も嫌でも緊張を強いられていた。

ウエルフィンとブロヴーダは部屋でのんびりする気にもなれず、宮殿内を歩いていると、

「ブロウ！ ウエルフィン!!」

声をかけられて振り返ると、そこには上機嫌なチートウがいた。

「チートウじゃないか。まだいたのか？」

「一体何してたんだ？」

「いや、新能力修得に手間取ってさ。でも、とうとうマスターしたぜ！」

モラウに敗れて数日。

その間ずっとチートウは新たな能力修得に時間を費やしていたのだ。

「名付けて【紋露戦苦】!!」

「ふーん」

「リアクション薄っ!? ちょっと聞いてくれよ、凄いだって！ これでハギヤの奴の助っ人に戻れるし、あのグラサンにリベンジ出来るぜ！」

「ハギヤってお前、知らねえのか？」

「何が？」

「アイツはお前が宮殿に戻った後にやられちゃったよ。モルモもやられたし、バジリヤンは逃げ出したぜ」

「はあ!? マジで!?!」

チートウは目を丸くする。

1つのことに集中すると周りが見えなくなる性格が幸いしたのか、それとも災いしたのか、チートウはこれまでレオルの事を全く知らなかったのだ。

もつとも、護衛軍達がわざわざチートウに伝える理由も必要性もないのだから知らされなくて当然ではあるのだが。

「それに『選別』の準備も大詰めに入ったから、今ペイジンに行くのは無理だと思うぜ」

「だな。下手に抜け出そうとすれば、護衛軍に殺されちまうぞ」

「マジでえ……ちえっ、つまんねえの」

チートウは頭の後ろで両手を組んでそっぽを向く。

「そういえば、ビトルファンは？」

「少し前に会ったけど。なんでも護衛軍の命令で、襲撃者に備えて準備するように言われたらしいぜ。しばらく会えねえってさ」

「なんで？」

「そこまでは答えてくれなかったよ。ただ、『巻き込んでも恨むなよ』だよ」

「……へえ〜」

チートウの間に、ウエルフィンとブロヴーダは行く気だなと直感した。

「ビトルファンってどこにいんの？」

「俺は知らねえな」

「俺も」

「はあ？　なんだよ〜……」

チートウは2人の答えにガクリと肩を落とす。

その後、チートウは宮殿内を駆け回って他の兵隊蟻達に訊き回るも、誰1人としてビトルファンの居所を知らないのだった。

そのビトルファンはというと。

「ふー……！　ふー……！　ふー……！　ふー……！」

とある一室で荒く息を吐いていた。

ビトルファンの周囲にはドラム缶や木箱の残骸が足の踏み場もなくなるほど散らばっていた。

部屋の隅にはまだまだ山のように積まれており、その陰には雑務兵が隠れていた。



そして、時々積まれた木箱を持ち上げて、ビトルファンに向けてぶん投げる。

「おお!!」

ビトルファンは裏拳を振り上げて一撃で木箱を砕く。

「オオオオオオオ……!」

息を吐きながら腕を下ろすビトルファン。

普段の陽気な雰囲気は一切感じさせず、まるで今にも檻が開くのを待つ獣が如き凶暴性を秘めていた。

その様子をアモンガキッドは一つ目念獣を通して観察していた。

「うんうん、いい感じだねえ。やっぱり彼はイジって正解だった」

シャウアップ達は、ビトルファンを繭で包んで能力を開発させる際、ビトルファンの頭を少しだけ弄った。

記憶を書き換えたわけでもなく、性格を変えたわけでもない。

ただ、護衛軍が望んだ能力を創るように意識誘導しただけだ。シャウアップの鱗粉とネフェルピトーの【玩具修理者】による誘導が『だけ』と言えるかは定かではないが。

それでも今改造中の『実験兵1号』に比べれば可愛いものだろうと、アモンガキッドは思っていた。

「それにしても……王様も随分と荒れてきたねえ」

つい先ほどの事だ。

王が護衛で傍に控えていたモントウトウユピーを殴り飛ばして追い出し、更にはネフェルピトーの【円】も煩わしいと宣った。

しかし、ネフェルピトーも【円】を消すわけにはいかない。

そこでアモンガキッドが助け舟を出した。

「おいちゃんの念獣を【隠】で姿を隠して、離れた場所に控えさせるのはどうですかねえ？ それならピトつちは【円】で1階と外を張ってもらえば、瞬間移動でもしない限り、警戒網を潜り抜けることはほぼ不可能でしょう。他に可能性があるエレベーターもおいちゃんの念獣がすでに見張ってますしねえ。まあ、残念ながら完全にフリーにすることは難しいので、王様にはこれで我慢してもらおうことになります

が……」

「……それでよい。しかし、絶対にその念獣を余の前に見せるでないぞ！」

「御意に」

「それと2階以上には誰も近づけるな!! 余が呼ぶまで、貴様らであろうともだ!! 侵入すれば狼藉とみなす!!」

その後、一度シャウアップ達も呼んで正門に集合し、王の意向を共有する。

話し合いの結果、ネフェルピトーは正門で引き続き警戒し、モントウトウユピーは中央階段で待機。シャウアップは鱗粉散布の継続で、アモンガキツドは一応宮殿裏側に待機して、念獣を筆頭に王の護衛と警邏に専念することになった。

というところで、現在アモンガキツドは宮殿裏で口だけ念獣に胡坐を組んで座りながら、あちこち覗き見していた。

「まあ、この『選別』もプフちちとピトちちが主体で決めたことだしねえ。残念ながら王様からすれば退屈というか、いまいちノリきれないのかな? それとも……あのお嬢ちゃんかねえ」

王は生まれて半年も経っていない。

人間の遺伝子は混ざっていても、人間そのものと混ざったわけではないので、護衛軍以下の兵隊蟻のように人間の記憶を引き継いでいない。

なので、王の精神面において情緒などが知識や思考とアンバランスとなるのは当然のことではあった。

「さてさて……明日は色んな意味で修羅場になりそうだねえ。平和に終わりたいのに、残念だなあ……」

アモンガキツドはそう呟きながらも、心の中ではラミナが来るのを心待ちにしていたのだった。

作戦開始10分前。

ラミナ達は一度【4次元マンション】を出て、中央階段横に設置さ

れた出口に繋がる部屋に飛び込んだ。

「決行1分前にコールするから出口に集まってくれ。それまでは各々一番良い方法で待機だ」

モラウの言葉に、ラミナ達はそれぞれに動く。

ナツクルは入念なストレッチを始め、メレオロンとシユートはその近くに座る。

ゴン、キルア、イカルゴの3人はジユースと菓子を広げてくつろぎ、モラウは煙管でゴルフのスイングを始め、リラックスを始める。

そして、ラミナ、ティルガ、ブラールは出口近くの壁にもたれるように並んで座り、目を瞑る。

ティルガは純粹に身体を休め、ブラールは部屋に入る前に飛ばした二羽の梟の操作を行い、ラミナはその視界を共有していた。

高速で飛翔し、宮殿横側から接近する梟達。

すでに姿は透明にしており、出来る限り静かに宮殿敷地内へと潜入する。

そこにノヴが飛び降りてきた。

「護衛軍が少し動いた。正門の上に集まって、少し話した後すぐに解散した。ピトーはそのまま正門に、プフは鱗粉の散布に戻り、ユピーはまた宮殿内に戻り、キッドはピトーの反対側に移動して念獣に座って警戒しているようだ」

「ふむ……特別な何かが起きたわけではないって感じか……」

「ああ、簡単な打ち合わせって感じた。また動きがあれば伝えに来る」  
「頼む」

ノヴはすぐさまマスターキーを使い出口を出て行く。

それに飲み物を飲んでいたキルアはペットボトルを置く。

「これで『護衛軍が宮殿にいない』ってパターンはほぼ無くなったな」  
「まあ、王と護衛軍は100%近くに居るよ」

まだ断言しないキルアにイカルゴは呆れた顔を浮かべながら言い、ゴンもイカルゴに内心同意だった。

「それ言い過ぎ！ 実際キッドの奴はNGLとペイジンの2回、女王や王の傍を離れてる。もっと他の場合に気持ちを備えておかねえと

ハプニングの時に身体動かねえぞ」

「だからって、いくら何でも『選別』の直前に離れるわけねえって！」  
「だーかーらー！　そう思ってもいいから違う場合も頭に入れと  
けてー！」

「具体的にどんな場合だよ!?!」

「ラミナが前に話してただろ!?!　例の第三者の存在！　それに集結中  
の国民の中で騒動が起こったり、師団長やビゼフが下手こいて護衛軍  
がそれに対応に動く場合だってあるし！　それに……クモとか俺達  
が知らない誰かが宮殿を襲撃するかもしれない」

キルアはジト目をラミナに向ける。

それにイカルゴやゴン、モラウ達も視線をラミナに集中させる。

ラミナはそれに目を閉じたまま口を開く。

「それならそれで護衛軍の動きを読みやすなるから大した問題やな  
い」

「いや、スツゲエ問題だよ」

「それよりも問題は今の護衛軍の位置や。現状誰一人玉座の間におら  
ん。アモンガキッドとモントウトウユピー、ネフェルピトーは数秒も  
あれば飛び込めるやろうけど、それでも爺共の突入法次第では下手し  
たら先に爺連中と護衛軍がぶつかるで」

「……確かに今、王の傍にいるのはユピーだけってことになるな……。  
まあ、それで十分っちゃあ十分なのかもしれないねえが……」

「キッドはブラールのように念獣で宮殿中を監視しているだろうしな  
……」

ナツクルとシュートの言葉にキルア達も腕を組んで顔を顰める。

「宮殿から一番離れてるプフが厄介だな。催眠作用のある鱗粉を宮殿  
の外から使われると太刀打ち出来ない」

「ボス、どうします?」

「今更下手に作戦を変えねえ方がいい。奴はどうにかして俺が封じ込  
めてやるさ」

モラウは不敵に笑い、自信たっぷり宣言する。

それにナツクル達も笑みを浮かべて頷き返す。

「……ティルガ、ブラール、お前らは最初にモラウの援護に動け。プフの封じ込めに成功次第、師団長の捜索に向かいや」

「承知した」

「……」

「助かる。さて、他に想定外があるとすれば……女だな」

モラウがサングラスを直して告げた言葉に、ゴン達がキョトンとした。

「王の目的の1つが繁殖なんだろう？ ずっと宮殿内でボードゲームをしてるわけでもなし。他にやるとするなら子作り！ これに決まりだ」

「……なるほど」

「確かにそれなら王が護衛軍を遠ざける可能性もあるにはあるっすね。もしかしたら、ビゼフが調達した女の何人かは王のため——」

ゴン、ティルガを除く全員の脳裏にある可能性が過ぎった。

((((パームが……王と……!?)))

まさかの可能性に全員が一度即座に否定したが、しかし悲しいかなこれまでの王達の行動を鑑みると、パームが王と子作りしている可能性がやはり浮上する。

何故ならパームは念能力者だからだ。

王の繁殖方法ははつきりとしていないが、一般人の女よりも念を使える女の方が強い次世代を出産する可能性は高い。

現状、モラウ達が把握している限り、この国で念能力が使える女性はラミナ、パーム、ティルガ、ブラールのみ。

そして、今宮殿にいるのはパームだけ。

パームと未だに連絡が一切取れないことがその想像を強めるのがまた厄介だった。

「……け、計画に変更はない……!! 仮に……パームがどんな状況であつてもだ……!」

やや動揺しながらのモラウの言葉に、ゴンだけは真面目な顔で頷いた。

それにキルアは『ぜってえ分かってねえな』と確信を持ち、ナツク

ルとシユートはここで想像出来て正直ホツとしていた。  
しかし、そこにラミナが新たに爆弾を投げる。

「もしパームやら他の女が王のガキを孕んどった場合、どうするんや？」

危険を承知で保護するのか。

王以上の怪物が生まれる可能性を考慮して母体ごと殺すか。

口にしなかつた言葉を、これまたゴン以外が正確に読み取った。

「……基本は、保護だ。……だが、もし発見時、すでに生まれそうなら……」

モラウは明確に言葉にしなかつた。

しかし、これには流石のゴンもニュアンスから続くであろう言葉を理解して目を剥いた。

「そんなの——!!」

「ゴン!!」

立ち上がって叫ぼうとしたゴンをキルアが制止する。

「でも……!!」

「確かに理想は保護だけど、それでまた女王か王が生まれたら同じこととの繰り返しだ。それだけは絶対阻止しないといけないのは……わかるよな?」

「……それは……」

「すでに数万人もの犠牲者が出てる。もし、保護して逃げられでもしたら……またどこかでNGLやここと同じことが起こるかもしれない。……パームがそれを許すと思うか?」

「……」

諭すようなキルアの言葉に、ゴンは両手を握り締め俯く。

ナツクルやシユート、イカルゴ達は心配そうな視線を向けるが、

「まあ、まだ受胎しとる母体がおるかどうかも分からんでな。ただ……覚悟はしとけっちゆう話や」

「……うん」

(まあ正直、うちとしてはパームは改造兵士にされとる可能性が高いと思うけどな)

流石にラミナもそこまでは言わなかった。

「とりあえず、ゴン。パームのことはパーム自身、そしてイカルゴに任せて、どんな場面でもお前は標的に集中しろよ!!」

「……うん」

ゴンは自信なさげに頷く。

もちろん、キルア達はそれを信じることはない。

その時、共有していた梟の視界にあるモノが映った。

「宮殿内が見えたで。……モントウトウユピーは中央階段に座り込んでいる。王は玉座の間で苛立たしそうに玉座に座つとるな」

「中央階段にか……。厄介なことになったな……」

「つまり、玉座の間に行くには……」

「ユピーをどうにかしなければならぬ、というわけか……」

「はっ！ 逆に好都合だぜ。どこに居ようと足止めすんのが俺達の任務。ユピーをそこに食い止めりゃあ、ユピーは王の下に行けねえ！」

バシン！とナツクルが拳を掌に打ち付けて気合を入れながら言い、

それにシユートとメレオロンも力強く頷く。

「それと……西側の塔に、人間の女、少女が1人。パームやない」

「少女……ビゼフが調達した女じゃないな。……前にお前達が話して

た連れ去られたプロ棋士か？」

「やろうな。女の前に盤がある。……東塔は空。ブラール、一羽はそ

のまま宮殿を探らせて、もう一羽はモントウトウユピーと中央階段周囲を監視せえ。他の兵隊蟻が来るかもしれんぞな」

「……」

「モラウ」

「分かつてる。突入と同時に煙でユピーの視界を塞ぐ」

ブラールは頷き、モラウもラミナに言われるまでもなく自分がやるべきことを理解していた。

メレオロンは何度も大きく深呼吸を繰り返し、少しでも長く息を止められるように準備を始め、シユートも目を閉じて静かに深呼吸して

精神を集中させる。

しかし、ラミナは少女―コムギの様子を見て違和感を感じていた。  
(……扉の方に何度も意識を向けとるのに、怯えとる様には見えなかった。むしろ……まるで誰かを待ち望んだる様な……?)

今にも扉が開くのを今か今かと待っている。

まるで親が帰ってくるのを待つ子供のよう。

まるで――恋人が現れるのを扉の前で待つ乙女のよう。

その様子が、少女はラミナが恐れていた存在であるという確信を強くした。

(強者でもなく、蟻でもない。ただの弱者。それを王達が、娯楽とは言え庇護しとる事実。それは……王の弱点でもあり、逆鱗にもなる。作戦を狂わせる最大懸念要因……!)

厄介なのは王を縛る人質にすることが出来たとしても、護衛軍にとっては人質成り得ない可能性があることだ。

王を縛りうる存在諸共殺しに来る可能性は高い。

王を守るためならば、たとえ王に殺されることになっても手を出す忠義を持つのが護衛軍。

(王が連れ出されるまで下手に手を出さぬが吉、か……。やけど、最悪の最悪は……覚悟しとくべきやな)

ラミナは目を開けて立ち上がる。

それと同時にモラウが宣言した。

「時間だ」

突入1分前。

それに他の者達も立ち上がり、出口の前へと向かう。

ラミナはサングラスを取り出して掛ける。

そして、一度だけ小さく深呼吸する。

ただそれだけのこと。

なのに、その一呼吸でラミナが纏う空気がガラリと変わった。



それを感じ取れない者が、ここにいるはずはなかった。

(っ！　なんだ……？　気配が鋭く、冷たくなったのと同時に……血の臭いが、濃くなったような……)

ティルガはラミナの変化に戸惑う。

「言うところで。こつから先、うちは暗殺者として動く」

ラミナはサングラスの位置を整えながら、冷たく言い放つ。

「人道なんざ知らん。大義なんざ知らん。うちの仕事は世界やこの国を救うことやない。殺すことやでな」

まさしく鋭い刃を思わせるオーラと気配を纏うラミナに、全員が目の前にいるのは真正正銘『暗殺者』としてのラミナであると理解した。

「王を殺す。護衛軍を殺す。キメラアントを殺す。やから、うちは保護なんざせん。邪魔もんは全員殺す。それ以外の事はする気ないで」  
ラミナの宣言にモラウ、ナツクル、シユート、キルアの4人は言外に『パームが母体にされていても保護せず殺す』と言っていることを理解した。

それは恐らく例の少女に対しても同様だろうことは想像に難くなかった。

何度も言うが、ラミナは暗殺者としてNGLに来て、依頼者はネテロではなくジン。

あくまで『ネテロ達討伐隊の協力者』だ。

そして依頼は『人を害するキメラアントの討伐』。

これまでは依頼達成のためにモラウ達と行動を共にするのが最も効率が良いと判断していたから、協力してきたに過ぎない。

つまり、ここまで来た以上、ラミナにはもうモラウ達の都合を考慮する必要がないのだ。

故にここからのラミナの仕事は宣言通り『殺す』こと。

暗殺するのであれば、後顧の憂いを最大限断つのが習性。なので、母体がいれば母子共に殺すのは当然の結論となる。

ナツクルはそれに言い返そうとしたが。

「分かった」

モラウが先に頷いた。

「っ!? ボス!!」

「文句があるなら、お前がさっさとユピーを倒して全員保護しろ。それならラミナも文句は言わねえよ。だよな?」

「まあな」

「ここからは誰もが現場判断、自己責任だ。そして、俺は現場で下した判断に文句を言うつもりはねえ! 作戦に支障がなければ、だがな。保護することも、殺すことも、俺は咎めない。ただし! テメエのケツは、テメエで拭けよ!!」

モラウの言葉にナツクルは更に気合を入れる。

「突入20秒前、並んでくれ」

突入隊一番手：ナツクル、メレオロン、シユート。

相対するは『猛将』モントウトウユピー。

二番手：ゴン、キルア。

標的は『人形兵師』ネフェルピトー。

三番手：ラミナ。

暗殺対象は『智謀毒蛇』アモンガキッド。

四番手：モラウ。

捕獲対象は『妄忠参謀』シャウアプフ。

五番手：テイルガ、ブラール、イカルゴ。

パーム救出、師団長撃破、戦地偵察などの遊撃援護。

「さあ腹くくれよ、お前ら!!」

ナツクルはメレオロンを背負い、シユートは3つの手と鳥籠を浮か

べる。

ラミナはソードブレイカーとブロードソードを具現化し、ブラールも具現化出来る最大数の梟を周囲に具現化させる。

「突入10秒前！ 9、8——」

カウントを始めたモラウに全員が腰を僅かに屈める。

それと同時にゴンの瞳が深く、暗く、冷たく、静かに沈んでいくことにキルアは気づき、ゴンの変化を後ろのラミナも気配で感じ取っていた。

だが、それを指摘することはなかった。

キルアはもう時間がないから。

ラミナはある意味現状では理想的な心情変化だと判断したからだ。ここからは殺す覚悟がいるのだから。

そして……遂に——

「GO!!!」

作戦が始まり、全員が死地へと続く門へと飛び込んだ。

そのラミナ達が作戦を開始したのとほぼ同時刻。

東ゴルトー共和国最東端の海辺に。

一隻の小型船が接岸した。

## #140 オチルリユウ×ノチ×トンダトリ

ラミナ達が突入する30秒前。

宮殿正門において【円】での警戒を続けていたネフェルピトーは、なんとなく空を見上げた。

特に何かが見えたわけでもない。

【円】は王の命令で2階より上には展開していないこともあって、何も感知出来ない。

故に見える夜空は、いつも通り代わり映えの無い、なんてこと無いただの夜空のはず。

しかし、ネフェルピトーは野生の本能とも言える直感で、迫りくる脅威を予感した。

ネフェルピトーは正門から飛び上がって、繭の樹を足場にして宮殿の上まで跳び上がった。

着地した時にはすでに敵の接近は確信へと変わっていた。

着地と同時にネフェルピトーは【円】を解除して、膨大なオーラを空へと向ける。

その異変に、宮殿にいた全ての護衛軍と師団長が気付いた。

外にいたシャウアップとアモンガキッドは、ネフェルピトーのオーラが昇った空へと意識を向け、アモンガキッドは宮殿外に設置していた【<sup>ナザル・ボンジュウ</sup>地母神の邪眼】達を空へと向かわせ、自身の周囲に【<sup>グ</sup>満たされない胃袋】を具現化し、いつでも跳び上がれるように構えた。

その直後、ほぼ3体同時にその存在を視界に捉えた。

雲を突き破って降りてきた、光り輝く龍を。

((龍!!))

ネフェルピトーは面白そうになったと笑みを浮かべ、アモンガキッドは内心『遂に来た』と思い、シャウアップはまさかの存在にただた

だ驚愕した。

だがしかし、すぐに3体の意識はその光龍の背中に移る。

そこにいたのは、2人の老人と1人の少年。

ハンター協会会長、アイザック・ネテロ。

ゾルディック家先代当主、ゼノ・ゾルディック。

最悪最強の暗殺者、「アルケイデス」。

見た目は取るに足らない老人と子供。

なのに、3体は『絶対に目を離してはならない』と確信していた。否、させられていた。

光龍がネフェルピトーの【円】に触れた瞬間、ネフェルピトーとゼノは互いの力量を察知して、互いに好戦的な笑みを浮かべる。

それと同時に【円】を解いたネフェルピトーは、完全な臨戦態勢へと移行した。

アモンガキッドもネフェルピトーに続こうとしたが、これまでの敵の動きから違和感を見逃さなかった。

(……ミナつちがいない？ あんな3人が来て?)

この好機を己が好敵手が無視するはずがない。

なのに、少なくとも空には見当たらない。ということとは。

(ピトつちの【円】を掻い潜って突入することで、おいちちゃん達の意識を上に向けて……！ 別働隊を他の場所から突入させるため!!)

「ちい!!」

アモンガキッドは空に向けていた一つ目念獣の群れを地上に戻して、ラミナ達の姿を探そうとした。

しかしその直後、

光龍はその身を崩して分裂し、無数の光る槍となって宮殿全体に降り注いだ。

それを視認した瞬間、それぞれの行動は速かった。

「王おー……！！！」

シャウアップフは鱗粉散布を中断し、ただただ王の元へと飛び向かう。

たとえそれで王から断罪されようとも、シャウアップフにとって王の無事は最優先事項なのだ。

「やって、くれるねえ……！！！」

アモンガキッドは自分の念獣では容易く貫かれると即座に理解して解除し、オーラを回収する。

そして、シャウアップフ同様玉座の間へと向かおうとしたが、

「っ!? これ、は……！・ちい!!」

しかし、ある予測に舌打ちして方向を変え、全力で駆け出す。

ネフェルピトーは【円】を解除したことで分裂した小龍の群れに隠れたネテロ達を見失ってしまった。

だが、王に迫った危機にネフェルピトーの感覚は極限まで研ぎ澄まされ、直感的にネテロを見つけて全力で跳び上がった。

1秒と掛からずにネテロに接近したネフェルピトーは本能のままに戦闘用の能力を発動する。

（黒子無想<sup>テレブシコウラ</sup>！）

能力が完全に発動するまで0・1秒を切るはずなのに、ネフェルピトーは確かにその声が聞こえた。

「ほっほ。受け攻めいくつか予想しとったが……」

ネテロの口がグニヤリと歪な三日月に歪む。

「そりゃ悪手だろ。蟻んこ」

スラリとネテロの両腕が動き、胸の前で合掌する。

ネフェルピトーの眼には、以前のラミナと同じ様にとてもゆっくりと動いていたように見えていた。

しかし、自分の背後に現れるはずの能力の姿が未だに具現化を終わていないという事実にも、今の会話も今の動きも全て0・05秒を楽に切る時間の中で起こったことだと理解させられた。

それだけでも衝撃的だというのに、ネフェルピトーの眼に映るネテロはまだ動いていた。

合掌したネテロは左腕が下ろされ、すぐに軽く突き出される。

直後ネテロの左下から謎の衝撃波が放たれ、ネフェルピトーは為す術なく吹き飛ばされた。

攻撃の正体はもちろん【百式観音】だ。

【隠】で姿を消し、掌底による衝撃波を叩き込んだのだ。

ネフェルピトーは落下方向からの突然の攻撃に理解が追い付かず、あつという間に宮殿の敷地の外へ飛ばされた。

(このままじゃ相当遠くまで吹き飛ばされる……!)

その時、ネフェルピトーの真下をシャウアップフが通り過ぎた。

「プフ!!」

ネフェルピトーは呼び止めようとしたが、シャウアップフには届かなかった。

(王のことで頭が一杯か……!?)

更にアモンガキツドの【地母神の邪眼】の姿も見えない。つまり、アモンガキツドにも自身の状態は見えていないとネフェルピトーは理解した。

「【玩具修理者】!!」

ネフェルピトーは治療用の能力を発動する。

【玩具修理者】はネフェルピトーの尻尾と繋がっており、発現させた場所から20m以上離れられないという制約がある。

それを利用してネフェルピトーは尻尾が伸び切る前に、尻尾の根元を両手で掴む。

尻尾が千切れそうになるのを耐え、止まったのを確認して即座に能力を解除して落下を始める。

高さ約100m、宮殿まで約500m。

空中移動の術を持たないネフェルピトーは地面に落下するまで待つしかなく、その時間があまりにももどかしかった。

(早くー・もつと早くー!)

しかし、その願いは叶わず。

無慈悲にも、小龍の雨―【龍星群】ドラゴンダイブが宮殿を貫いた。

【龍星群】が墜落する約1秒前。

ラミナ達は中央階段傍から宮殿へと潜入した。

ラミナはモントウトウユピーに目もくれずに【円】を発動して、周囲を探る。

そして、この突入の数秒で事態が大きく変わっていることを理解させられた。

(空から何か来る!?)

「天井!!」

ラミナは反射的にそう告げ、そのまま全速力でアモンガキッドと思われる気配の元へと走る。

すでにモントウトウユピーがそこにいることを知っていたゴン達は、ラミナの言葉を頭に残しながらも目の前の怪物に意識を向ける。

モントウトウユピーも一瞬突然現れた侵入者達に虚を突かれたが、すぐに思考を止めた。

すぐに意識を目の前の人間達に集中させ、身体を戦闘形態に変化させる。

モントウトウユピーは魔獣との混成体である。

人語を理解する知能は女王と魔獣によるものに過ぎない。故に、モントウトウユピーの思考回路は本来の兵隊蟻に非常に近かった。

―我が役目は王の盾。

―この身を以って、王を護るのみ。

―故に、敵は殺す。

今のモントウトウユピーの思考はそれだけで埋め尽くされる。

鋭い爪を持つ6本の腕を生やしたモントウトウユピーは、凶暴性しかない好戦的な笑みを浮かべる。

そして、最も近くにいたシユートに視線を向ける。

ロックオンされたことを肌で感じ取ったシユートは足を止めて、睨み合う。



足を止めた理由は、これ以上進めばモントウトウユピーの間合いに入ると本能的に感じたのと、あの6本腕が振るわれると恐らく最短距離で近づいているであろうナツクルとメレオロンに直撃する可能性があったからだ。

シユートは出来る限り、中央階段の真ん中に陣取る。そして、3つの手と鳥籠を動かそうとした、その時。

上から僅かに音がした。

その瞬間、全員の脳裏にラミナの言葉が蘇る。

全員が天井に意識を向けた直後、大量の光り輝く槍が天井を突き破って中央階段に降り注いだ。

(これは……爺ちゃんの【龍星群】!?)

まさかの祖父の攻撃にキルアは一瞬驚きに動きを止め、モラウやシユート達もまさかの事態に意識を回避に切り替えざるを得なかった。

しかし、そんな中で2人、足を止めなかった者がいた。

1人はもちろんラミナだ。

【円】で【龍星群】の動きを感知していたので、目を向けることなく軌道を読んで駆け続けていた。

そしてもう1人は、ゴンだった。

だが、ゴンは何故か一直線にモントウトウユピー目指して走っていた。

(なに!?)

(お前の相手はユピーじゃねえ——いや、違う!!)

キルアは驚きながらもゴンの行動の意味に気づき、モラウ達も遅れて理解して駆け出した。

(あの野郎……! この状況で、何て早く! なんてとところに気付きやがるんだ!!)

それはナツクルとメレオロンのことだ。

以前ラミナが懸念した通り、この【龍星群】はナツクルとメレオロ

ンにも襲い掛かっている。

もしメレオロンが息を吐く間もなく即死していたら？

【神の不在証明】と【神の共犯者】は解除されるのか。

その答えは当然ながらメレオロンさえも知らない。知りようがない。

血が流れれば分かるかもしれないが、血が2人の身体に触れたままであれば見えないかもしれない。

もし2人が姿が見えないまま死んでいたならば、誰かがモントウトウユピーと戦わなければならぬ。

その事実をゴンはあの一瞬で、本能的に理解していたのだ。

怯むことなくモントウトウユピーへと駆け迫るゴンの後ろ姿、そしてその後を追うキラアに、シユートはこれまでで一番の衝撃を受けていた。

それは本来ならシユートの役目だ。

これまで誰よりも未熟と言われていた少年達が、誰よりも先に最も危険な役目に突っ込んでいく。

モラウは衝撃を受けたシユートの顔を見て、『自分を責めるな』『精神を持ち直せ』と声をかけたかった。

今までのシユートであれば、確実に心が折れていた。

だが、今のシユートの心にはモラウの予想とは全く異なる感情が渦巻いていた。

(ゴーン!!)

感動である。

危険や好機、争いから全力で逃げ続け、安全な檻の中で引き籠っていた弱い己に、彼らは本当の意味での強さを教えてくれたのだと。

(ずっと弱い自分がイヤだった。何度も直そうとしたが、それすらも恐くて直せなかった。仲間や師の言葉も、強い者の理屈と本当には聞いていなかった。ラミナの言葉は不思議と師よりも胸に響いたが、あまりにも強過ぎて、俺には太陽のように眩し過ぎて、月のように冷た

過ぎて、刃のように鋭過ぎた……)

強い者は最初から強いのだ。

どこかでずっとそう思っていた。

それほどにシユートがこれまで出会ってきた強者は、そんな性格や実力の持ち主ばかりだった。

だが、ゴンは違う。

心は強いとは思っていたが、それは無知故だと思っていた。そして、実力は誰よりも下だった。

逆立ちしてもナツクルやシユートに勝てる実力ではなかったはずなのに。

キルアも出会った時からすでに強かったが、まだまだ不安定さが目立っていた。

ようやく強さを手に入れたばかりのような、雛を卒業したばかりの未熟さがあった。

しかし今日の前を走っている2人は、もう別人だった。

僅か数カ月でこんなにも変わった。強くなった。

だからこそ、シユートはようやく理解し、受け入れることが出来た。

(弱くとも変われる！ 弱くとも強くなれる!!)

当たり前のことではあるが、現実で強くなったと実感することは意外と難しい。

特に精神面の強さはその基準は己の中にしかなく、それを認めるのも己しかないのだ。

まさしくシユートは、ゴンとキルアによって自分の心を囲っていた鳥籠が壊れたのを自覚した。

(俺の恩人よ!! 生きて言わせてくれ!! ありがとう!!)

シユートの顔から怯えが消えたことをモラウはしっかりと読み取り、口を吊り上げる。

その時だった。

「!?」

モントウトウユピーの左脇腹が不自然に凹み……1mほどだが横に飛んだ。

それが意味することは、ただ一つ。

(( (ナツクル達は、生きてる!!) ))

全員が笑みを浮かべて、思考を再び切り替える。

突如正体不明の攻撃をされたモントウトウユピーは、連続での異常事態に流石にすぐに冷静には戻れなかった。

(なんだあ!? 何をされた!? どいつに攻撃された!? 影も見えなかったぞ? 飛び道具!? 死角からか!?)

周囲には未だに降り注ぐ光の槍雨。

しかし、それは真下に落ちるだけで軌道を変えるような素振りは見せていない。何より今の衝撃は間違いなく打撃だった。

一番可能性があるとするれば、目の前にいるひ弱そうな片腕の男の周囲に浮いている謎の手。

だが、不可解なのは衝撃は感じたもののダメージは一切ないことだ。

いくらモントウトウユピーが強靱な身体を持ち主とは言え、何のダメージも感じないのはあり得ない。

蚊に刺された程度に感じはしても、衝撃だけなのはあまりもおかしい。

しかし、特に異変は何も起こらない。

正確には異変は起きているが、モントウトウユピーには感じ取れない。

(ならばは……!)

戦闘に支障がないのであれば、モントウトウユピーがすべきことは変わらない。

しかし、これ以上敵の好きにさせる気もない。

故にモントウトウユピーは顔を変化させて目玉を増やすことにした。

完全なる怪物となったモントウトウユピーに、討伐隊で怯む者はいなかった。

見た目の変化に対しては。

しかし、別の理由で慄く者がいた。

姿を隠したナツクルである。

モントウトウユピーを殴り飛ばし、「天上不知唯我独損」を発動させたナツクルの目にはポットクリンが確認出来ていた。

だが問題はそこではない。

モントウトウユピーのオーラを視たナツクルは、

(マジかよ……!? オーラの……底が見えねえ!!!)

数千もの戦闘経験から培った相手のオーラの数値化が、モントウトウユピーには通じなかったのだ。

全く底が見えない。

海の底を覗き込んでいるかのような感覚に襲われていた。

(師匠やラミナの5倍!? 10倍!? いや、それ以上……!? 冗談じゃねえ……! 本当にトブまで10分以上は……!!)

ラミナの推定通りのオーラ量に、ナツクルは覚悟はしていたが、やはりその衝撃は大きかった。

その時、宮殿全体を、討伐隊の全身を、ネフェルピトの禍々しいオーラが撫で包んだ。

『?!?』

覚悟を決めていたゴンやモラウ達も流石に一瞬本能的に身体が強張ることは抑え切れなかった。

いや、むしろ一瞬で済んだことを称賛すべきである。

しかし、その一瞬がモントウトウユピーにとっては十分すぎる時間だった。

その一瞬の一瞬で、3本の腕を纏めて太い1本の巨腕を成す。

それを目にした瞬間、全員が即座に回避行動に移り、巨腕が中央階段に叩きつけられて爆発したかのように碎け散った。

ここまでで、突入から3.28秒が経過した。

粉塵が舞い上がる崩れ落ちた大階段。

モントウトウユピーは2階に陣取り、玉座の間に続く此処を通ろうとする者を仕留めようと待ち構えていた。

その背中にナツクルとメレオロンが姿を隠したまま何とか滑り込んでおり、ゴンとキルアは階段を飛び降りて別ルートからネフェルピトーへと迫ることにしていた。

ティルガは瓦礫の陰に潜んでシュートやモラウの援護にいつでも出られるように機を窺っており、ブラールとイカルゴは「龍星群」をやり過ごして大階段が崩れた瞬間にパームがいるであろう地下へと向かった。

そして、モントウトウユピーの最も近くにいたシュートだが、直撃こそ免れたものの瓦礫が右脚を直撃して軽くない傷を負ってしまった。

歩くどころか立つのもやっとだと理解したシュートは痛みではなく、あまりの不甲斐なさに顔を顰める。

ようやく檻を破ったというのに、また檻の中に引き戻されそうになった、その時。

「シュート!!」

モラウの声が響き渡った。

「後は、任せたぞー!」

師の力強い言葉にシュートは再び心が震える。

自身の状態を理解しているの言葉だと、シュートは欠片も疑ってはいなかった。

(まだまだ……俺はまだ死んでいない……!!)

そう、たかが足一本失っただけ。

元々片腕がないのだ。

ならば、片足が動かなくなった程度で嘆く理由などないではないか。

しかし、どうにかして動かなければ、ただの的でしかなかったしまう。

そう思ったシュートの視界の端に、己が操る手が入り込んだ。

その時、粉塵が全く晴れないことに違和感を感じ始めていたモン

トウトウユッピーの目の前に、突如真つ白な人間達が飛び出してきた。  
モラウの【紫煙機兵隊】だ。

「しゃらくせえ!!」

モントウトウユッピーは6本の腕を鞭のようにしならせて高速で振り、一瞬で【紫煙機兵隊】の群れを斬り払った。

(煙……!?)

手応えの無さに驚いたモントウトウユッピーだが、すぐ傍から煙管を振り被るモラウが現れる。

だが、目玉を全方位に出現させていたモントウトウユッピーはそれを見逃さず、煙管が直撃するであろう場所から新たな腕を生やして、煙管を受け止める。

その衝撃と重さに煙管は本物であると確信したモントウトウユッピーは、鈎爪状の腕を更に生やしてモラウへと振るうが、これもまた煙だった。

(本物は煙管だけ……!?)

困惑したモントウトウユッピーの右側から、無手のモラウが全速力で駆け抜ける。

「馬鹿が!! 逃がすかあ!!」

玉座の間に行かせまいとモントウトウユッピーはモラウを仕留めようとしたが、

再び左脇腹に衝撃が走った。

ナツクルである。

不意の衝撃に一瞬身体のバランスを崩し、意識がモラウから逸れる。

すぐに体勢を立て直して、すぐにモラウを追おうとしたが、すでにモラウの姿は煙の中に消えていた。

「おおのおれええええ!!」

怒りに沸騰しかけた、その時。

モントウトウユッピーの背後で何かが動いたのを増やした眼が捉え、

同じ光景をナツクルとメレオロン、テイルガも目にした。

それは3つの手の1つに片足で乗り、空を飛ぶシュートだった。

シュートが手の上に乗ったのは無意識、衝動に近かった。

だが、シュートはこれこそが己の、今の己の奥義だと確信していた。更にシュートはこれまた無意識に右の長襟を結った髪の毛の根元に結び、右目を覆う。

片腕が無く、片足が使えず、片目を塞ぐ。

どう考えても戦士としてはあり得ない状態だが、シュートは追い込まれているからこそ力が漲ることが嬉しく、楽しくて仕方がなかった。

だからこそ、

鳥籠を壊し、思う存分翼を広げた鳥の速さと啄ばみは、

モントウトウユピーの意識を完全に独り占めすることに成功した。

それはコンマ数秒でしかなかったが、コンマ数秒もモントウトウユピーから奪ったことは間違いなく、この後の作戦を支えた偉業であった。

だが、高速で飛翔する鳥はそれだけでは満足せず。

その奪ったコンマ数秒を最大限に活かして、高速で飛ぶ手の1つで床を転がる煙管を掴み、それをモラウに届け渡した。

モラウは親指を立てて煙管を受け取り、そのまま玉座の間へと駆けあがる。

すでに煙でシャウアプフがそこにいるのを感じ取っていたからだ。

それを見届けたシュートとナツクルはモントウトウユピーに意識を戻し、テイルガはシュート達の雄姿に掻き立てられるかのように駆け出し、ブラール達を追いかけるのだった。



一方その頃。

西塔において、異常事態が発生していた。

「…………ごめんよ、王様」

「」

護衛軍の1体アモンガキツドが、腹から血を流すコムギを抱き抱えた王を。

見下ろしていた。

## #141 オモイ×ヲ×タクス

ラミナは【龍星群】を躲しながら西塔へと迫っていた。  
(また派手なことしよってからに……。一言言えちゆうねん。誰の能力か知らんけど)

『容易に躲せるからええじゃろ』とか思っていそうだが、これで動きが鈍ってその一瞬を突かれたら死ぬ可能性もある。

せめて『奇襲をかける』くらいの連絡があつて然るべきだと思うラミナだった。

その時、ネフェルピトーのオーラが宮殿中を覆う。

ラミナの動きが鈍ることはなかったが僅かに眉を顰める。

何故、今更【円】を発動したのか。その理由が不明だったからだ。

それに飛び込んだ直後のラミナの【円】でも居場所が掴めなかったのが気にかかり、嫌な予感を覚える。

しかし、その直後。

ラミナが目指す西塔から、ネフェルピトーやアモンガキッドなどよりも暗海で暗澹たる負のオーラが放出された。

「っ!! (なんや…ねん……! このオーラ……!?)」

触れたわけでもないのに鳥肌が立った。

今まで感じたことがない暗黒としか言いようがないオーラ。まるで地獄にでも落とされたかと思う程、負の感情しかない。

足が鈍りそうになったが、それでもラミナは足に力を籠めて跳び上がり、【龍星群】で穴が開いた屋根から中へと入ろうとしたが。

中の光景を見て、思わず動きを止めた。

遠くで何かが崩れる轟音を聞きながら。

ラミナが西塔に到着したのとコンマ数秒差で、ネテロ達やネフェルピトーも西塔『迎賓の間』へと到着していた。

しかし、彼らもまたラミナ同様、部屋に入ってそれを目にしたと同時動きを止めた。

腹部と口から血を流し、力なく横たわるコムギ。

その少女を優しく支え、されど負のエネルギーを醸し出す王。

そのすぐ傍でコムギと同じく腹部から血を流して、立ち尽くしているアモンガキッド。

誰もがその光景の意味を瞬時に理解した。

「……………ごめんよ、王様」

「……………」

「その子……………守れなくて、ごめんよ……………」

アモンガキッドが項垂れながら謝罪の言葉を紡ぐ。

アモンガキッドは【龍星群】を目にした直後、その脅威はコムギのいる迎賓の間にも襲い掛かることを瞬時に悟り、一目散にコムギの保護に向かったのだ。

もしコムギが巻き込まれて死ねば、王の精神にどんな影響が出るか想像も付かないと思ったからだ。

全速力で西塔へと跳び、吹き抜けの窓から滑り込む様にして中に入る。

しかし、それとほぼ同時に【龍星群】が天井を貫いた。

「ひいあ!?! な、なんですう!?!」

コムギは目が見えないため、何が起きているのか理解出来ない。

アモンガキッドは声をかける余裕もなく、コムギを抱き抱えて逃げようとした。

下手に傷つけないように丁寧に。

しかし、それが仇となった。

「ひいやああ!?! 誰ですか!?! いきなり何するすか?!」

突然誰かに触られたコムギが大暴れしたのだ。

落としそうになったため体勢を立て直そうとしたアモンガキツドであったが、

運悪く、そこに一頭の小龍が真上から墜落してきた。

「!? (ちい!!)」

アモンガキツドはコムギを床に下ろして覆い被さり、全力の【堅】を発動する。

しかし、一瞬遅く。

アモンガキツドのオーラが全開になる直前に、小龍はアモンガキツドとコムギの腹を、喰い破った。

その直後、

「コムギ!!!」

王が飛び込んで来たのだった。

コムギを抱き抱えた後、一言も発しなかった王は、ネフェルピトーの到着を感じ取ったのか僅かに顔を上げる。

それと同時にそれまで垂れ流しにされていた負のエネルギーは跡形もなく霧散した。

しかし、それでも動く者は他に誰もおらず、ただただ王の動向を見つめていた。

王を仕留めるのに絶好の機会であったにも拘わらず、ネテロ達も未だ動かない。

それはコムギのことを知らなかったこともあるが、そのコムギに対する王の所作全てが慈愛に満ちていたからだ。

王は座布団を枕にして、コムギをゆっくりと床に寝かせると、ネフェルピトーへと顔を向ける。

「ピトー」

「はっ」

呼ばれたネフェルピトーは無意識に、されど迅速に返事をする。  
その胸中に込み上げるのは『不安』。

先ほどの王とのギャップがあまりにも大きすぎたからだ。

しかし、

「コムギを治せ」

王はネフェルピトーとしつかりと視線を合わせ、有無を言わさぬ迫力ある威厳に満ちた声で告げる。

「頼んだぞ」

これまでの王では絶対にありえない言葉だった。

しかし、ネフェルピトーはそんなことも、先ほどの不安さえも、一瞬で吹き飛び即座にコムギの傍へと降り立った。

全身が歓喜で満ち震え、頬には何故か涙が伝う。

「キッド」

「……はい」

王は続いてアモンガキッドにも声をかけ、アモンガキッドは片膝をつく。

「よくぞコムギを護った」

「……いえ、それは——」

「二度言わすな。お主がおらねば、コムギは即死であっただろう」

王はコムギの頬を一撫でして、

「大儀であった」

アモンガキッドは一瞬大きく身震いして、深く頭を下げる。  
心を満たしていたのはネフェルピトーと同じく歓喜だった。

「コムギの治療が済み次第、お主も治療してもらおうといい」

「はい」

その時だった。

紅髪の暗殺者が天井からブロードソードを振り上げて飛び降り。

顔を隠した小柄な暗殺者がネテロ達の背後の扉の陰から飛び出した。

ラミナはアモンガキッドへと迫り、アルケイデスは一瞬で王の背後へと回り込んで拳を握る。

それに気づいていたアモンガキッドは、立ち上がりながら【悲劇を齎す毒の杯】を発動して、8頭の大蛇を具現化する。

腹に穴が開いているなどと思わせない速さで戦闘態勢に移行したアモンガキッドは、以前ペイジンと戦った時とは比べ物にならない殺気とオーラを纏う。

背後には守るべき王とコムギがいる。

護衛軍であれば、ここで本気にならないわけがない。遊び心を出すわけがない。

モントウトウユピー同様、ただただ王を護る盾となるべく我を殺す。

「やめよ」

「待て」

王とネテロの迫力ある声が響き、ラミナは大蛇に弾かれて距離を取った場所で足を止め、アルケイデスは拳を途中で止めながら後ろに跳び下がり、アモンガキッドは大蛇の動きを止めて能力を解除した。

「……王様」

「ここで戦うことは許さぬ」

「しかし……」

「二度言わすな」

コムギの治療と治療中無防備になるネフェルピトの事を考えれば、王の言い分は至極真つ当ではあるが、目の前にいるのは全員1対1でも厳しい強者ばかり。しかも、数も向こうが上なのだ。

アモンガキッドが洩るのも至極真つ当と言える。

一方、ラミナはネテロを睨みつけていた。

「……何で止めんねん」

「すまんが、ここは手出し無用で頼む」

「……本気で言うтонのか？」

「そうじやのう。標的を前にポケットと突っ立っておれと言うのは、些か理屈に合わん」

師弟とも言える2人の暗殺者はネテロの言葉に正気を疑った。

しかし、ネテロは顎髭を撫でながら、

「それは承知しておるが……少し、な」

ネテロの頭の中にある王の情報は一〇日前のものでしかなく、もちろんコムギの存在も知らない。

つまり、ネテロ、ゼノ、アルケイデスの3人にとって、王や護衛軍の情報は『人を喰らい、世界を乱そうとする獣』で止まっていた。

故にネテロ達にとって、目の前で行われた光景はにわか信じがたいモノであったのだ。

もつとも、アルケイデスにとってはすぐに『だから何じゃ』と意識を切り替えたが。

母の腹を破って生まれ落ち、瀕死の母を見捨てて、同族の部下を食べた怪物。

それが1人の少女に対して、一個の生命に対して慈愛溢れる振る舞いをした。

しかも、その少女を傷つけたのは自分達。

たとえば人を食べたことがある怪物であったとしても、ここでその慈愛を踏み躪ることはネテロには出来なかった。

これを侵すことは、人の世界を守るためという大義を失い、それこそ獣以下の存在と成り果てる。

「……おい爺よお。話が随分違うじゃねえかよ」

「……」

ゼノは横たわる少女と少女を見下ろす王を見つめたまま、ネテロに

言い放つ。

それにネテロは答える術はない。

ゼノは殺し屋ではあるが、無駄な殺しを好まない。

特に無関係の一般人を殺してしまったことは今まで一度もなく、今回も無関係の人間はすでに殺されるか追い出されていると聞かされていた。

「……はっ。今更なに言うてるんや」

しかし、ラミナからすればそんな感傷は今更過ぎた。

「元々この国の人間はすでに被害者としてカウントしとるやろうが。その覚悟でこの作戦を決めたんちゃうんか、ジジイ」

「……」

「あの程度で怖気づくんやったら、とつとと帰って布団で死ねや。殺し屋呼んどいて、今更人道も大儀もあるかアホらしい」

容赦なくネテロを口撃するラミナに、アルケイデスは腕を組んで声を出さずに笑って肩を揺らす。

ラミナはこれまで溜まりに溜まったストレスをここで一気にぶつけることにした。

正直、数日前にゼノを雇うことだけでも伝えてくれれば、ラミナがキルアのどちらかがゼノにメールで報告することも出来た。

そうすれば、ラミナもギリギリになってブラールの能力で宮殿を覗こうとはせず、もう少し余裕をもって偵察し、ゼノにコムギのことを報告していれば何かが変わったかもしれない。

これまでずっと情報を集め続け、考えられる最悪の事態全てを推測してきたラミナからすれば、今日までのネテロの行動には苛立ちしかなく、その結果がこの体たらくである。

命懸けで動き続けてきたラミナからすれば、ネテロの感傷など『知ったこっちゃない』という心境になるのは至極当然だろう。

「人やろうがなからうが、命奪いに来た以上人道なんざ気にしてどないすんねん。殺し合いに人とか人外とか意味あるかっちゅう話やろが」

「おっおっ、言われとるのお」



「お前もや、チビジジイ。うちの性格とか思考知つとるんやから、連絡する提案くらいせえや」

「……ホンに年寄りに厳しいのう」

「偉そうにしたいんやったらボケる前にやることせえ、この老いぼれ共」

ラミナはそう言い捨てると、アモンガキツド達に顔を向ける。

それと同時に王が予想外の事を口にした。

「場所を変えるか」

立ち上がった王がそう呟いた。

その言葉にラミナ達はもちろん、アモンガキツドも動きを止める。

「その方が都合が良いのは、うぬ等も同じであろう？」

今作戦最大の肝であった『王と護衛軍の分断』。

それを為すためにネテロは巨額を投じてアルケイデスとゼノを呼び寄せたのだから、その提案を断る理由はない。しかし、先ほどから己が想定を悉く外されている。

その事実がこの先の行く末を表しているようで、百戦錬磨のネテロと言えど、その心中は穏やかではいらなかった。

そして、それはアモンガキツドも同じであった。

「王様……！ それは流石に……！」

「構わぬ。どうせ……ここでは戦えぬ」

「では——」

「貴様はここでピトーとコムギを守れ。これは勅命である」

「……」

アモンガキツドは納得出来ていないようだったが、ラミナが鋭い殺気を飛ばして来たことでそれ以上何も言えなくなった。

ラミナは沸騰寸前の苛立ちを殺気に変え、アモンガキツドやネフェルピトーに叩きつけたのだ。

ネテロにもはや期待など出来ないが、それでも王が宮殿に残るのはやはり今後の戦いにはリスクが大きすぎると判断したからだ。近い

うちにここにゴン達や他の護衛軍もやって来るだろう。その時、ここにまだ王がいれば、混乱どころの話ではない。

ラミナの殺気を感じていたネフェルピトーは、それを無視してコムギの治療を開始した。

「〔玩具修理者〕」

ネフェルピトーの頭上に看護師を思わせる念獣が具現化される。

突如発動された能力にネテロ達の意識が一瞬、王から移るのは百戦錬磨故の条件反射と言える。発動された念能力を見逃すなど熟練の念能力者であれば、まずありえない。

だが、それは王を目の前ではあまりにも大き過ぎた隙だった。

それに気づいた時、誰もが死を覚悟したのも当然のことである。

しかし、ネテロ達の硬直に気づいていながらも、

王はそれを悠然と無視してネテロとゼノの間を横切った。

あまりにも一瞬だった。

ネテロも、ゼノも、ラミナも、決して王から意識を完全に放したわけではない。だというのに、王が移動したことをネテロ達は全く気付けなかった。それほどまでに王は敵意も殺意も警戒心も抱かずに、本当にただただ悠然と歩いたのだ。

王の動きに気づいたのは、アルケイデスのみ。

アルケイデスは徹頭徹尾標的である王から意識を逸らさなかった。

アモンガキッドやネフェルピトーの能力に意識を向けなかったのは、ネテロやラミナ達がいたからに過ぎない。

しかし、だからこそアルケイデスは王の実力の一端を理解させられていた。

(なるほどのう。爺と小娘があれだけ神経質になるだけはある。これは大した怪物が生まれたものよ)

ゾワリと背筋に怖気が走る。

それはアルケイデスにとって、数十年ぶりの感覚だった。

(ああ……これが、我が人生か)

とある確信を抱いたアルケイデスはネテロに目を向ける。

ネテロは顔を向けずとも視線の主と意味に気づいており、黙り込んだまま王を追って歩き出す。

それにゼノも神妙な顔で続き、アルケイデスも歩き出そうとしたところで、

「おい小娘」

「……なんや？」

背を向けたままラミナに声をかける。

突然声をかけられて、ラミナはアモンガキッド達に視線を合わせたまま訝しむ。

「儂の後釜、しっかりとこなすんじやぞ」

「……」

念を押すようなアルケイデスの言葉に、ラミナはもちろんネテロとゼノも視線をアルケイデスに向ける。

「それとの……立場や過去にプライドを持つのは構わんが、もう少し好き勝手に生きることじゃ。殺し屋に拘る必要もなからうよ。兄妹達を見習え」

「うっさいわ」

「くっくっくっ！」

アルケイデスは心底楽しそうに笑ったかと思うと、ずっと被っていたフードを脱いだ。

露になったのはサイドショートの前髪。

まさしく少年のような顔をしているアルケイデスは、ラミナに顔だけ振り返り、

ニカリと笑う。

「たった一度の人生じゃ。流星が如く燃え尽きるならば、楽しんだモン勝ちじゃて」

「……ふん」

言葉の意味を理解したラミナは、真面目に答える気が起きず鼻を鳴

らしてそっぽを向く。

「くくく！　じゃあ、達者での」

アルケイデスは再び笑い、別れを告げて部屋を去って行った。

ラミナはその後ろ姿を、見送ることはしなかった。

それが最後の姿になれば……永遠にその背中に追いつけない気がしたから。

ネテロ達は王と共に西塔を出ようとしていた。

「……ラミナを世話役にするつもりか？」

ゼノがアルケイデスに小声で訊ねる。

「まあな。良かったのお、婚約者にしておいて」

「ふん……今後どうなるかは分からんがの」

「ラミナは頑固じゃからなあ。お前の孫の奮闘に期待するしかあるまいて。まあ、あの小僧は中々に奥手のようじゃが。じゃから前に言うたじやろ。あまり縛り過ぎると碌なことにならないとの」

「それは儂じゃなくてシルバに言うんじやな」

「くくく！」

西塔の外に出た王とネテロ達。

ネテロとアルケイデスは東側の塔に気配を感じて目を向ける。

そこにいたのはゴンとキルアだった。

ネテロはゴンの標的であるネフェルピトーがいる西塔を親指で示す。

その意味に気づいたゴンは、抑え込んでいた感情が一瞬噴き出して顔に怨恨の色が歪んだ。

「……ふむ。若気の至り、かの」

「……」

アルケイデスはゴンの漏れた感情を見逃さず、それはネテロも同様だった。

しかし、それ以上ネテロは何も言うことはなかった。

生きており、命の奪い合いをしている以上、怨恨や復讐など珍しいことではない。

その結果が如何なるものであっても、それは本人の選んだ結果だ。ネテロはそれを否定する気も止める気もない。『惜しいな』と思いはしても。

アルケイデスとゼノもまた同じだ。

ただし、2人の場合は単純に顔見知り程度が復讐鬼に堕ちようがどうでもいいからだが。

そしてそれ以上に、3人はこれ以上ゴン達に関わることは出来ないというのもあった。

(殺し屋を引退したい小僧に、殺し屋に染まったその弟。蟻の娘共に、復讐に堕ちかけた小童。曲者揃いの教え子ばかりとは、やはりあ奴は面白い)

託したばかりの小娘を思い浮かべて、笑みを浮かべる老師。

(儂もネテロを笑えんな。結局、人は誰かに何か爪痕を残さずにはいられん軟弱者というわけか……)

これまで孤高の暗殺者として生きてきた。

流星街から外界へ出る未熟者達の世話をしてきたのは、単なる気紛れのつもりだった。

だがそれは……人を殺し続けたが故に、人との絆が恋しくなっていたようだ。

(ここで己を見返すとは、やはり人間死ぬまで精進と言うことかの)

普通の人間ならば、ここで死にたくないと思うだろう。

(ならば、我が人生の悔いは消えた)

化け物と呼ばれようと、最強の暗殺者と言われようと、軟弱者で結局はただの人であるならば、強者に殺されて死ぬのは摂理。

ならば恐れることは何もない。

託すモノも託した。

故に老兵は、悠々と死地へと赴く。

後はただ、思う存分楽しむくらいしか出来ないのだから。

## #142 トビタツリユウ×ニ×トビダスゾウ

建物の端に立つ王は、ゴン達に気づいていながらも一瞥することなく、口を開く。

「運べ」

王の言葉にネテロは僅かに目を細める。

「其の方等が人間の犠牲を最小限に抑えながら目的遂行を図っていることは十分に理解出来た。混乱に乗じて成し遂げんと望んだのは余と護衛軍の分断であろう？ 構わぬ、運べ」

その言葉にゼノはネテロに視線を向け、ネテロは小さく頷く。

ゼノは慎重に構え、オーラを纏って能力を発動しようとする。

【ドラゴンヘッド龍頭戯画】

オーラで模られた龍の頭が出現するも、王は目を向けることも、構えることもしない。先ほどのネテロ達が見せた隙を嘲笑うかのよう

に。王は『繰り出された技に害意は一切ない』とオーラを一瞬で肌で感じ取っていた。

その事をネテロ達も悟り、改めて王の異常さを思い知らされる。

故にゼノは最後の最後までオーラに欠片ほどの殺意も敵意も籠めることはなかった。

「はああ!!」

ゼノの気迫、衝撃音と共に再び宮殿に光の龍が夜空へと舞い昇る。

王は一切の戸惑いも見せず、龍の前足を尻尾で掴み、ネテロとアルケイデスはその背中に飛び乗った。

飛び立った龍を、ゼノやゴン達は神妙な顔で見送るのだった。

その少し前。

ブラールとイカルゴは【龍星群】を躲しながら、エレベーターを指していた。

イカルゴは飛翔しているブラールの真下を走り、ブラールは梟の一

羽で上を見渡しながら【龍星群】の落下地点を見極めて躲していたのだ。

ブラールが動けば、イカルゴもその真下から出ないように必死に走る。

「一体何だつてんだよ!?!」

「……」

もちろん、ブラールも知らないので答えることは出来ない。

すると、進行方向に兵隊蟻2体が【龍星群】に戸惑いながら立っていた。

その奥にはエレベーターと思われる扉。

敵を視認した瞬間、ブラールはオーラを翼に流す。

2体の兵隊蟻はまだブラール達に気付いていない。

仕留めるなら今しかない。

ブラールは勢いよく翼を羽ばたかせ、羽根数枚を高速で撃ち出す。

兵隊蟻達がブラール達の姿を捉えたのと同時に、身体に衝撃が走り、視界と意識が闇に染まる。

イカルゴはあつという間に頭が吹き飛び、胸に穴が開き、両足が千切れ飛んだ兵隊蟻2体に目を丸くする。

(無音の狙撃！ それもかなり精密の……!)

ブラールの適性は操作系。

ある程度自分の羽根を操るくらいは朝飯前である。梟の念獣との視界共有を組み合わせることで、客観的な距離感や障害物を把握し、ピンポイントの狙撃を可能としている。

兵隊蟻を始末したブラール達はエレベーター前の通路に出ようとしていた、その時。

突如ブラールがイカルゴの前に降り立って制止する。

「うお!?! な、なんだよ……!」

「……」

驚いたイカルゴの問いに答えず、鋭い目つきで通路の合流前で止まっていた。

それにイカルゴが再び問いかけようとしたら、目の前の横に伸びる



通路から扉が開く音が耳に届いて口を閉ざす。

開いたのは通路両端にある使用人の部屋の扉。

そこは王達が占領して以降、兵隊蟻達の待機場所となっていた。

ブラール達のすぐ傍の部屋から出てきたのはヂートウだった。

だが、ブラールの鼻はその反対側の部屋の扉も同時に開いて、そこからブロヴーダが出てきたのが見えていた。

通路真ん中にある中庭に続く入り口に、咄嗟に身を潜めたウエルフィンの姿も。

今殺されたのはウエルフィンの部下だった兵隊蟻である。

殺される直前にテレパシーでウエルフィンに敵発見の警戒音を飛ばしていたのだ。偶々近くにいたウエルフィンは即座に止まった警戒音と血の臭いに即座に動かなかった。

理由は言うまでもなく、その『敵』が宮殿を貫いた攻撃の使い手だったら危険だからである。

故に敵の姿を確認してから攻撃するかどうか決めようと考えていたが、その敵が中々やって来ない。

その時、前後の扉が開いたので反射的にすぐ近くにあった中庭への入り口へと身を隠したのだ。

「お!! ブロウ! 無事だったか!」

「まあな」

「それにしても何この騒ぎ!? スツゲエことになってんじやん!」

「またピトー殿の【円】も消えちまったしな」

「どうする!? 外行ってみるう? って、ん?」

ヂートウはブロヴーダに声をかけながら歩き、エレベーターの前まで来たところでブラールとイカルゴの存在に気づいた。

それと同時にブラール達の真横を猛スピードで黄色の旋風が吹き抜けた。

「おわっ!?!」

ヂートウは突如襲い掛かってきた黄色の旋風に目を丸くしてブロヴーダがいる方へと飛び退いた。

襲い掛かったのはもちろんテイルガである。

「おお！ テイルガじゃん！ ひっさしぶりい！！ なんでここにいの？」

「いやいや……それよりも攻撃してきたことを訊けよ」

ヂートウの間抜けな問いに、駆け寄ってきたブロヴーダが呆れる。未だ隠れたままのウエルフィンも内心やや呆れながらも、テイルガ達から意識を外さなかった。

（このタイミングに現れて攻撃してきた以上、奴らは敵……正確には王達を殺しに来たってことだ）

他の敵はまだ不明だが、少なくとも今ここには自分達のみ。

そして、こちらはウエルフィン、ブロヴーダ、ヂートウと師団長3体。対して、向こうに師団長はテイルガー体のみで、後は兵隊長クラスブラールと誰か分からないタコ。

普通に考えれば、ウエルフィン達が優勢なのは間違いない。

そう考えたウエルフィンだが、

（だが、油断は出来ねえ。あいつらだって王や護衛軍が化け物だつてのは理解してるはず。なのに、攻めてきたつてことは間違いなく何かしら勝算があるからだ）

故にウエルフィンは隠れたまま能力を発動した、その時。

「ホーツ！ ホーツ!!」

突如すぐ目の前でいつの間にか現れた梟が大きく鳴いた。

「なっ……!?!」

目を丸くして動きを止めてしまったウエルフィン。

そしてテイルガ達はもちろん、ヂートウ達も声がした方に顔を向けて、ウエルフィンに気づく。

「ん？ あれ？ なんだよ、ウエルフィン。いたのか」

「つてか、なに？ あの梟」

梟はテイルガ達の方へと飛んで、そのままブラールの頭の上に下り立った。

それを見て、あの梟はブラールが操っているのだろうとウエルフィン達は納得した。

念能力で操っているのか、単純にブラールが梟のカメラアントだか

ら手懐けることが出来ているのかは不明だが。

ウエルフインは舌打ちしながらブロヴーダの横に移動する。

「ちっ……。おい、ティルガ、ブラール。お前ら、本気で俺らと……。王と敵対する気かよ?」

「……。お前達が王や護衛軍の仲間なのかどうかは少々疑問ではあるが……。敵対するつもりはない」

「あん?。じゃあ何しに——」

「王達を殺しに来た」

ティルガの強い言葉に、ウエルフインとブロヴーダは一瞬驚きに固まり、チートウは面白くなってきたとばかりに笑みを浮かべる。

「……。本気で言ってるのか?」

「本気も何もすでに作戦は始まっている。王にはハンター協会会長が、護衛軍には手練れのハンター達が相手をする事になっている」  
「まさか……。!? 少し前にペイジンでレオル達を殺したのはお前らか!?」

「ああ、ハギヤは我が殺した。フラツタもな」

今度はチートウも含めて、驚愕を顔に浮かべる。

「お前がレオルを……。!? マジで言ってるの……。?」

「奴は頭と両腕を失っていただろう? 右腕は我とブラールの師によるものだが、頭と左腕は我だ」

「へえ、お前がハギヤをねえ」

チートウは好戦的な笑みを浮かべ、今にもティルガに飛び掛かりそうな気配を醸し出す。

「……。イカルゴ。隙を見つけてエレベーターに乗れ」

「……。いいの?」

「問題ない」

「……。言ってくれんじやないの」

会話が聞こえていたブロヴーダも目が険しくなり、殺気が漏れ始める。

「私の役目はお前達の足止めだ。……。もし、お前達が今すぐここを離れるのであれば、我らは追わん。……。もう生き残っている師団長はN

GLに残ったコルト達を除けば、ここにいる我らだけだ。他の地へ向かった師団長は全員、殺されている」

「なっ……!?!」

「我らは人間の恐ろしきを見誤ったのだ。今もまだ人間達は本気で我ら蟻を殲滅しようとしていない。もし、王達が生き残ったとしても、次はもっと過激な攻撃がここを襲うだけだ。世界は王の物にも、お前達の物にも決してなりはしない。……だから、死にたくなければ今すぐここを去れ」

テイルガはオーラを纏いながら、一切ウエルフィン達から目を逸らすことなく力強く言い放つ。

その力強さと、ウエルフィン達も知っているテイルガの性格からその言葉が嘘ではないことを理解した。

「それでも戦うというのであれば……我らはお前達を殺す」

テイルガは両手を鉤爪状にして構え、ブラールも僅かに翼を広げる。

イカルゴもその後ろで構えるが、いつでもエレベーターへ駆け出せるように心がけていた。

「はっ！ テイルガよお、お前らこそ寝返んなら今だぜ？ いくら人間共がまた押しかけてこようが、その時には選別を終えて生まれ変わった念が使える兵士達がいんだぜ？ 今とは戦力が段違いなんだよ。それでも負けるってのか？」

ウエルフィンには内心冷や汗を流しながら強気にテイルガを丸め込もうと策略するが、

「負ける」

テイルガは一切動揺することなく断言した。

「お前達はもう知っているはずだ。未熟な念能力者が何人集まろうと、熟練の念能力者1人で簡単にひっくり返ることを。NGLやこの国で、我らの師によって兵隊蟻はどれだけ殺されたと思っている？

……そんな我が師でも、勝てないと、何故ここに呼ばないのかと、言い切る者達が何人もいる。その者達が集うだけでも、兵隊など壁にもならんだろうな」

「っ……い」

簡単に反論されたことにウエルフィンが顔を顰めた時、

ドオオオオオン!!

と、轟音が響き渡り、宮殿が揺れた。

ゼノの【龍頭戯画】が飛び立った衝撃である。

「うおっ」

「でけ……!?!」

「なっ……!?!」

チートウ達やイカルゴが驚く。

それと同時にテイルガが念弾を放ち、ブラールが羽根を数枚撃ち出した。

「ちい!!」

ブロヴーダは舌打ちしながら両手の鋏を開いて、念弾を連射する。ウエルフィンとチートウは後ろに跳び下がり、テイルガの念弾はブロヴーダの念弾と相殺され、爆煙が舞い上がる。

「今だー！ 行け、イカルゴ!!」

「!!」

イカルゴはテイルガの号令に反射的に駆け出す。

それと同時にエレベーターの扉が突如開いた。

イカルゴが目丸くしたが、エレベーターのスイッチの前に一瞬ブラールの鼻が姿を現したことで即座に理解した。

イカルゴは開いたエレベーターに飛び込み、閉スイッチを押す。

扉が閉まり始めると、テイルガとブラールは再びブロヴーダ達がいる方向に攻撃を仕掛けながら来た通路へと飛び戻る。

再び爆発が轟き、大量の念弾がそれまでテイルガ達がいた場所を通り過ぎる。

だが、その念弾の群れに続くようにチートウが煙を突き破って、テイルガ達の目の前に現れた。

チートウは一瞬エレベーターに視線を向けるが、すぐに興味を失っ

て笑みを浮かべながら一気にテイルガに詰め寄った。別に宮殿の守護を任されたわけでもなく、見た目が弱そうないカルゴよりもテイルガと戦う方が面白いと本能に素直なチートウは考えた。

それに何より今のチートウの頭を占めているのは、

「はっはあ!! 見せてやるよ! 俺の新ワザ!!」

ようやく完成した新能力を使いたいことだけである。

テイルガは冷静にチートウ目掛けて念弾を発射する。

チートウはそれを躲そうとしたが、その前にテイルガが自身が放った念弾に跳び乗ったのを見て、反射的に足を止めてしまった。

直後、ブラールの羽根がチートウの左側を牽制するように飛び迫ってきた。

それを見たチートウはもちろん右に避けて一気に回り込もうとしたが、その前にテイルガが跳び上がると同時に念弾が爆発した。

「!!」

目の前で爆発したことでチートウはこれまた反射的に後ろに跳び下がってしまう。

そこにテイルガが猛スピードで天井と壁を高速で跳び移りながら、まるでチートウが考えていたことを読んでいたかのようにチートウの背後に回り込んだ。

そこにブロヴァダが追いかけてきて、両手の鋏をテイルガの着地点に向ける。

しかし、テイルガは真下に再び念弾を放ち、念弾は地面に当たる前に停止した。

テイルガは着地してすぐにブロヴァダへと飛び出し、念弾の爆風で一気にブロヴァダの背後の壁へと着地する。

「!! コイ、ツ……!!」

「ははっ!! おんもしれえ!!」

ブロヴァダは顔を顰めながら振り返り、チートウはブラールのことなど頭から消えてテンションを上げながらテイルガへと猛スピードで駆け迫る。

「ちっ……! これじゃあアイツの思う壺じゃねえか……!」



お!! お前はティルガではないか! カブファツファツファツ  
ファツ!! お前も王に仕えに来たのか!?

「……いや、我はお前達を倒しに来た」

「ぬぬ!? 倒すだど!? もしや、ティルガよ! お前は人間に寝返つたというのか!? オイラ達を裏切ると言うのか!?

「……裏切つてなど、いない。お前達が巢を出た時に、我らはもう仲間では無くなった。我は自らの意思で、お前達と戦うことを選んだ」

「……ふむ……なるほどなるほどお? つまり……なんだ……お前は敵なのだな?」

「ああ。我とお前達は、敵だ」

「そうか……。残念だ、ティルガよ。本当に、残念だな……」

ビトルファンは僅かに俯いたかと思うと、直後強烈なオーラが噴き出した。

『?!?』

あまりにも膨大なオーラに仲間であるはずのウエルフィン達も目を見開いて硬直する。

ティルガとブラールは巢にいた頃のビトルファンのオーラとはあまりにもかけ離れていたからであり、ウエルフィン達はこの宮殿で最後に会った頃数日前と比べてもかけ離れているビトルファンのオーラに驚いていた。

護衛軍ほどではないが、明らかに師団長クラスのオーラではなかった。

(これは……! 下手したら、ラミナ達よりも……!?)

「カブファツファツファツ!! 流星は護衛軍だ! 本当にこの宮殿に敵が現れるとはな!!」

「っ……!」

「つてか、ビトルファン……。お前、なんかデカくなってねえか?」

ブロヴーダはビトルファンの変化に動揺しながらも声をかける。

ビトルファンの雰囲気が変わったせい、強大なオーラのせいなのか、ビトルファンの身体が一回りも二回りも大きくなったように錯覚しただけなのだが、ウエルフィンやティルガも同じように感じていた



ので、誰からも否定の言葉は出なかった。

「細かいことは気にするな!! ところで……ウエルフィン、ブロヴーダ、チートウ! お前達はオイラの敵か!? お前達も王様達に仇為すのか!?!」

「お、俺らはチゲエよ!!」

「そうだぜ! むしろ、今俺達はティルガを倒そうとしてたんだ!」

「そうかそうか! それは良かった! 悪いがここはオイラに譲ってもらおうぞ!! この宮殿の守護と侵入者の排除はオイラが王様と護衛軍に直々に命じられた責務だからな!!」

「ちよつ!? オイオイ待ってくれよ、ビトルファン!! ティルガは俺の獲物だぜ!? 俺の新能力の実験台になってもらうって決めたんだからな!!」

いきなり獲物を横取りされたチートウはビトルファンに抗議したが、

「この場にいる全員に忠告しておくぞおお! オイラはあ!! 手加減が苦手だあああ!!!」

ビトルファンはそれを無視して、勢いよく駆け出してティルガへと殴りかかる。

ウエルフィンとブロヴーダは慌てて飛び退き、ティルガは念弾で牽制しようとしたが、

「知ったことかあああ!!!」

なんとビトルファンは念弾に左拳を叩き込んで自ら破壊した。

念弾は爆発するも、ビトルファンは全く怯むことなくそのまま爆煙を突き破ってきた。

ティルガは歯を食いしばりながら鉤爪にした両手を構える。

しかし、ティルガとビトルファンの上に高速で滑り込む影が現れ

た。

それはチートウだった。

「無視すんな、よっ!!!」

チートウは超高速のラッシュをビトルファンの顔面と身体に叩き込む。

「はっはあ!! これで俺の能力がはつど——」

僅かに距離を取りながら、得意気な笑みを浮かべて口を開いたチートウ。

しかし直後、視界をビトルファンの拳が埋め尽くしていた。

「!?」

チートウは目を見開いて後ろに跳び下がろうとしたが、背中に衝撃と痛みが走って動きが止まってしまった。

「こそばくもないぞおおおお!!」

ビトルファンの大きな右拳はチートウの顔面に突き刺さり、そのまま腰を捻ってチートウを振り回し、エレベータすぐ横の壁に叩き込んで轟音と共に壁を砕いて大穴を開けた。

チートウの頭部は潰れて血を撒き散らし、残った身体は大穴の向こうに吹き飛んでいった。

護衛軍を含めて1、2を争うスピードを持つチートウは、その速さを活かすために生き残っている師団長の中では最も体重が軽い。

それに対し、ビトルファンはその真逆。

護衛軍を含めて1、2を争う頑丈さを持つビトルファンは、その頑丈さを活かすために生き残っているキメラアントの中では最も重い。

それはそのまま2人のパワー差でもあり、同じ師団長であっても、チートウ程度ではビトルファンの拳はあまりにも重く、耐えられる威力ではなかったのだった。

一撃でチートウが殺されたことにウエルフィンとブロヴーダは凍り付き、テイルガも驚いてはいるもチートウが殺された最大の要因で

ある謎の一撃の正体を理解したのでビトルフアンの猛攻に備えていた。

チートウの背中を襲ったのは、ブラールの羽根だった。

全員の意識がビトルフアンに集まっていたことを見逃さなかったブラールは、【隠】で気配を殺しながら翼を広げて羽根を撃ち放つ体勢でその時を待っていた。

そして、チートウがビトルフアンの前に割り込んだ瞬間、羽根を発射して弾道进行操作し、チートウの背中に直撃させてチートウをティルガの壁にしようとしたのだ。

常に後方支援、ティルガのサポートを第一に考えて動くブラールだからこそ、ビトルフアンに存在すら認識されなかったからこそ、冷静に動いて最高の結果を生み出すことが出来たのだった。

「フウー……!! ……む? ……む!! ……今潰したのはチートウか!!」

ビトルフアンはようやく今殴ったモノの正体に気づいて驚く。

「むう……だから邪魔をするなど言ったではないか!!」

言っていないが、この戦いが始まる前に『巻き込まれても恨むなよ』と伝えたことを今さつき告げたと混同していた。

ティルガはその様子を見ながらも、ビトルフアンに新たな違和感を感じ取っていた。

(ビトルフアンから感じる威圧感……力強さが増した……?)

オーラも僅かに増大したように感じた。

普通ならばあり得ない。オーラで攻撃をして、オーラの攻撃を防いだ以上、必ずオーラは消費するのが摂理のはず。

しかも、その増強したタイミングもまた問題であった。

(攻撃した直後……チートウを殺した直後に増えた? ……ということは……)

「……相手を殺すことで力を上げる能力、か?」

ティルガの独り言なのか、問いかけなのか、分からない眩きをビトルフアンは聞き逃さなかった。

「ん? カブツファツファツ!!! 残念だが違うな!」

ビトルフアンは大きく笑って否定したかと思うと、左裏拳を薙いで

再び穴が開いている壁を砕いた。

すると、またビトルフアンの気配が僅かに大きくなったように感じたティルガとブラール。今度はウエルフィン達もそれを感じ取り、冷や汗を流す。

「オイラが授かった能力は【進撃の巨兵】!! 何かを殴れば殴るほど、身体は硬くなり!! 攻撃や衝撃に耐えれば耐えるほど、力を増す!! 単純明快、攻防一体の能力だ!!」

ビトルフアンの特性は強化系。

そしてゴンやモントウトウユピー同様、本人も公言しているがあまり頭を働かすことが得意ではない。

モントウトウユピーのように身体を自在に変化させて敵を掃討することが出来るならば、そう難しく能力を考える必要はない。

ビトルフアンは怪力で、頑丈で、巨体である。それだけでも普通であれば十分に脅威で、そこらへんの人間相手ならば戦車と戦うに等しい絶望を与えるが、『熟練の念能力者相手では隙が大きすぎる』ということアモンガキッド達護衛軍は理解していた。

だが、下手な能力では逆に隙を大きくするだけで、複雑な能力はビトルフアンの頭では活かしきれない可能性がある。

故にアモンガキッド達が思いついたのは、単純明快。

『彼はただの壁役にするしかないねえ、残念だけど』

『出来れば、とことん敵に嫌がらせしてもらいたいところですね』

であった。

そして完成させたのが【進撃の巨兵】である。

ただ耐久力を上げるのではなく、ただ力を上げるのではなく、戦えば戦う程面倒になる能力。

護衛軍達が唯一ビトルフアンを認めていたのは、そのキメラアントの中でも強靱過ぎる肉体。

護衛軍達でさえ、ビトルファンを瞬殺するのは簡単ではない。

それはつまり、人間達では更に手間取るということに他ならない。ビトルファンが暴れば暴れるほど、敵はビトルファンを殺し辛くなり攻撃が苛烈になる。しかし、攻撃を激しくすればするほどビトルファンの一撃一撃が凶悪になって迂闊に近づけず、殺し辛くなる。

まさに『怪物』。止まらぬ『巨兵』。

ビトルファンも余計なことを考えず、ただ暴ればいいだけで硬く強くなるのだから、壁役にされたところで不満は一切ない。

むしろ、

『この能力こそ、兵士の本懐であろうよ!! これほどオイラに相応しい力はない!!』

と断言して喜んでいた。

しかし、1つだけ問題があった。

「さあ……まだまだ行くゾオ!! ウェルフィン、ブロヴーダ!! お前達ももし敵ならば、チートウのように粉碎するゾオ!!」

先ほど『敵ではない』と言ったばかりであるのに、そしてこれまで仲間として何度も顔を合わせてきたのに、まるで忘れてしまったかのような言葉。

ウェルフィンとブロヴーダは顔を見合わせて困惑を顔に浮かべる。

ティルガは必死にビトルファンの能力と今の言葉の違和感の原因を推測していた。

(確かに凶悪な能力だ。ビトルファンにこれほど相応しい能力はないだろう。だが、ラミナの話ではこの手の能力は必ず上限が存在するはず。自ら設定しなくても自動で設定され、もしその上限を増やすならば確実に制約が増えるか、重くなると)

実際ラミナが使う身体強化系の能力にも限界がある。

(となると……先ほどの言葉はその制約の可能性が高いか? 記憶が曖昧になる? それとも……理性が消えるであったり、知能が下がるのか? ……ただ目に付いたモノを壊し続ける暴獣に成り下がる。……ありえるな。護衛軍ならば、その程度は容易にするだろう)

ティルガの推測通り、ビトルファンの【進撃の巨兵】にはある制約

が生まれていたのだ。

『頑丈さとパワーが上がれば上がるほど、理性が消えていく』というものが。

人間の理性を得ようが、ビトルファンはやはり『キメラアント』。その理性の奥底には『蟻の本能』『獣の本能』が確実に存在するのだ。そしてキメラアント故に、人間では越えられない壁を越えることが出来てしまった。

彼らをこれまで以上に進化させたと言える『人間の理性と感情』と言う要素にして、籬を捨てることで強化の上限を無理矢理上げたのだ。

人間であれば、そんなことをすれば一時的に力を得てもすぐに自滅、自壊してしまうだろう。人間にとって理性と感情は、念能力のみならず全ての行動の根幹だ。それを捨てれば、人間は間違いなく何も出来なくなってしまう。

人間では絶対に捨てられない『人間性』を捨てる。

これは『人間』が自らを構成する一部でしかないキメラアント故に可能な条件なのである。

(……すまぬ、皆。今の我らでは……ビトルファンの足止めで精一杯だ)

ウエルフィンとブロヴーダにはとてもではないが、意識を向ける余裕はない。

ティルガは一度深呼吸をして、目を鋭くして構える。

「ブラール、無理はするな。下手な攻撃は奴を強くするだけだ」

「……」

「カブツファツファツファツ!! さあ、踏み潰すゾオ!!」

ティルガとブラールも、死闘が始まった。

●ビトルファンの能力！

・【進撃の巨兵】

強化系能力。

何かを攻撃すればするほど身体を覆う甲殻が硬くなり、攻撃を受ければ受けるほど力が増大する攻防一体の能力。

一対一や乱戦にも力を発揮するタイプ。

地面を殴っても硬くなるが、壊したモノによって強化値が異なる。一番硬くなるのは建物や戦車などの大きなモノで、次が生物。

攻撃も正確にはあくまで身体に『衝撃』を感じることが条件なので、落石などでも力を増す。ちなみに自分が攻撃したことで発生する衝撃でもパワーが上がるが、これも強化値は低い。明確な敵意、殺意が籠められた攻撃が最も効果が高い。

制約は『一定時間強化されなければ、徐々に強化が戻る』『強化されればされるほど、理性を失う』。

良くある能力ではあるが、人間の皮膚や筋肉では少し頑丈になったくらいでは大した意味はない（ウボオーギンという例外はいるが）。鎧やプロテクターを身に着けて強化するにしても壊されれば意味が無くなるし、やはり思い入れが無いと強化が知れているので意外と難しい。

天然の甲殻を持つビトルファンだからこそ、少しの強化でもそこらへんの相手では絶望的。

つまり、ウボオーギンの【超破壊拳】の正統後継者になれる逸材である。

ちなみに本編現在の耐久力は、フィックスの【廻天】15回分の一撃を本気で防御すればほぼ無傷で耐え切ることが出来るレベル。ウボオーギンの【超破壊拳】でも重傷は負うが死にはしない。

本編現在のパワーは、ゴンの【グー】と同等レベル。

●私が考えるチートウの【紋露戦苦】！

拙作でも詳細不明のまま退場となった悲しき能力。

前回の【ザバンナ鬼ごっこ】はある程度活用している可能性が高い。更にナツクルの【天上不知唯我独損】、モラウとの戦闘経験も最大限活かしていると思われる。

そして、名前から想像すると……。

『相手を殴ることで発動する』『殴った箇所にて念で作った【紋】を付ける』『【紋】の数が増えると、動きが遅くなるか体が重くなっていく』『チートウに一撃入れると【紋】が1つ消える』『時間が経つことに【紋】が広がり、全身を覆うと死亡する』『能力を説明することで効果を高める（これは自動設定による制約。だってチートウさん口軽いから）』

と言った感じでしょうか。

最初期【紋】の大きさは10cm。その後、20分毎に20cm広がっていく。

これならばチートウも相手を思う存分走って殴れるし、相手も必死にチートウと追いかけてこしなればならない可能性が高いかなど。



## #143 フキダスカンジヨウ×ト×ヒエキルカン ジヨウ

ネテロ達が去った西塔ではラミナとアモンガキツドの睨み合いが続いていた。

ラミナは正直ネフェルピトールとコムギのことは頭の片隅に追いやっていた。

アモンガキツドを無視してネフェルピトールを仕留めることは厳しいと言わざるを得ず、コムギに関しては生き延びようが死のうがどうでもいい。

(正直、治癒能力があるネフェルピトールがここで、あの女に釘付けにされるんは超ラッキーやな。下手に動き回って他の護衛軍を助けられたら無限地獄になつとつた可能性が高かったでな)

だが、コムギの治療は王の厳命。

ネフェルピトールは絶対にコムギの治療が終わるまで他のことに動かないはずだ。たとえばアモンガキツドやシャウアップ達が致命傷を負おうとも。

アモンガキツドは王が命令するところに同席していたのでネフェルピトールに頼ることはないだろう。

そうラミナは推測するが、問題は残りの2体。

モントウトウユピーは恐らく『王の命令だから』と言えば納得する。だが、シャウアップは怪しい。シャウアップに『王がコムギを救けよと命じた』という事実がどう影響するか、ラミナでは想像出来ない。ラミナは視線をコムギに、正確にはネフェルピトールの「玩具修理者」に向ける。

(治療速度はそこまで速いわけやない。応急処置つちゅうレベルやなくて再生、いや再成か……。千切れて穴が開いた臓器、血管、皮膚、神経を完全に創り治しとる。あの怪我やと生命維持も考えながらやろうから、完治までは数時間、最悪でも1時間つちゅうところか)

つまりネフェルピトールはほぼ戦線離脱したと言える。

（1時間もあれば他は決着が付いとるはず……。理想はネフェルピトー以外仕留めとることやけど。まあ、それは望み過ぎか。とりあえず、今は……）

アモンガキツドをここから引き離すこと。

それが今の最優先事項だ。

「おい、蛇。こっからどうするんや？　うちは別にここでおつ始めても構わんけど」

「……やれやれ、過激だねえ。別にこのままでもいいじゃない。そつちの目的は王とおいちゃん達の分断と足止めでしょ？　残念ながら今の所そつちの狙い通りだしさ。無理して均衡崩す必要はないんじゃないの？　そつちだって彼女が助かったらありがたいでしょ？」  
「どうでもええわ、そんな女。今更人間1人死のうが助かろうが大した差もないつちゆうねん」

「あらら……やっぱり君はそう言っちゃうかあ……。残念だねえ……」

今のアモンガキツドとしては、ネフェルピトーとコムギの護衛は王を追いかけるよりも重要な責務となっている。

故にここで戦うことも、ここから離れることも、避けたい事態なのだ。

だが、目の前にいるのは殺し屋である。

その事実をアモンガキツドは甘く見ていない。

むしろ、逆の立場であつたらアモンガキツドも全く同じ言葉を返しただろうと確信に似た思いすらあつた。

だからこそ、どうやつても自分にとつては最悪な事態になるだろうことをアモンガキツドは確信していた。

そろそろ現れる存在も含めて。

ゴンとキルアはネテロ達が去って行ったのを見届けてから、西塔へと飛び移った。

着地した2人は、そのすぐ近くに立っていたゼノに顔を向ける。

「よお」

ゼノはキルアに気軽に声をかける。

キルアはそれに答えず、視線だけを合わせる。

ゼノはその一瞬でキルアの成長を読み取った。

「……儂の仕事はこれで終わりじゃ。任務以外の事は何も知らん」

その言葉でキルアは、祖父はあくまで王と護衛軍の分断、運搬役なのだと理解した。

「中の事はお主らが判断せい。ラミナもおるでな」

(……中?)

どういう意味か訊ねようとしたキルアだが、ゼノはその前に背を向けて静かに、軽やかに闇へと溶け込んでいった。

しかし、キルアはその背中がどこか小さくなっているように感じ、恐らく中で祖父やラミナにとって想定外の事が起こったのだと思わざるを得なかった。

その背中を見送っていたキルアを尻目に、ゴンは塔内へと歩き出す。声をかけてくれないことにキルアは一瞬寂し気な顔を浮かべてしまうが、すぐに顔を引き締めてその後が続く。

塔の2階に上がったキルア達の眼に映ったのは、まさに想像の埒外の光景だった。

向かい合うラミナとアモンガキッド。

それは何も不思議じゃない。

ただし、まだ向かい合っていることがすでにおかしいのだが。

問題はその後。

アモンガキッドに庇われるかのように屈むネフェルピトー。

そして、その尾と繋がった上半身だけの化け物と、その下で横たわる少女。

ラミナと言う異物が存在しながらも、臨戦態勢に移行していないネフェルピトーにキルアは強烈な違和感を感じ取っていた。

何より、アモンガキッドがいるとは言え、隙だらけにしか見えないネフェルピトーに攻撃を仕掛けないなどあり得ない。

キルアは脳をフル回転させて、この異常事態を理解しようとしてい

た。

だが、ゴンの視界に映っていたのはネフェルピトーのみ。

ラミナとアモンガキツドのことは認識してはいるが、そんなことはどうでも良かった。

これまで抑え込んでいた憤怒を開放したかのように、ゴンの【纏】がまるで【練】が如く荒々しいオーラに漲った。

それにラミナとアモンガキツドは視線のみを向けるが、動くことはなかった。

いや、動けないのだ。

お互いに牽制し合っているから。

アモンガキツドがゴンを止めようと動けば、ラミナがその一瞬でネフェルピトーへと迫り。

逆にラミナが攻撃を仕掛けようとするれば、アモンガキツドはゴンとキルアへと襲い掛かるだろう。

それを互いに理解している。

故にラミナとアモンガキツドはとりあえず、ゴンの動向を見守ることにしたのだった。

ネフェルピトーも流石に自身へと向けられる尋常ではない殺気を無視出来ず、ゴンへと顔を向ける。

「俺を、覚えてるか……？」

静かに問いかけたゴン。

だが、答えを聞く前にゴンは更にオーラを噴き出しながら吠えた。

「俺はゴン・フリークス!!! カイトを取り戻すため、お前に会いに来た!!!」

ゴンの覇気にアモンガキツドは僅かに眉を顰める。

(残念ながら思ってた以上に強そうな子だねえ……。流石にアレは今のピトっちじゃヤバイ……。んだけど……)

ラミナとゴンの後ろにいるキルアに意識を向けて、歯軋りしたくなつたアモンガキッド。

(ミナっただけでも厄介なのに、あの後ろの坊やも厄介そうだねえ……。冷静にこの場の状況を理解しようとな努めながらも、無意識レベルでいつでも動けるように構えてる。ホント……残念なくらい追い詰められてるねえ)

八方塞がりな状況にアモンガキッドも必死に解決策を考える。

(いったんお嬢ちゃんの治療を中断してこの場を離れる? ……駄目だ。この3人は流石においちゃんでも抑え切れない。確実にミナつちに隙を突かれる……)

ラミナもNGLやペイジンの時とは纏う気配が違う。間違いなく前回より手強い。

他に意識を向けて戦えるとは思わない方がいいだろう。

故にアモンガキッドがどう動くかはネフェルピトール次第と言えるのだが……。

そのネフェルピトールだが、ゴンの言葉どころか声すらも意識から排除し、ただただ王の命を全うするかのみに思考を支配されていた。

本能的にアモンガキッドはラミナに手一杯になるだろうことを理解していた。故にこの現状を自力で乗り切る必要があつた。

ネフェルピトールは僅かに身体をゴンへと向ける。

しかし、一向にオーラを纏わないことにキルアは訝しんだ。

(この状況でも臨戦態勢にならない? さっきは【円】を使つたのに今はオーラを出す気配すらない……。いや、そもそもラミナがいたのにまだオーラを出してないことがおかしい。さっきまでジツちゃんや会長、アルケイデスまでいたんだぞ? それに……)

キルアはゴンへと視線を向ける。

(今のゴンは無防備で対処できるオーラじゃない。そこにキッドがいたとしても、ラミナに俺もいるんだ。流石に生身で様子を見る状況じゃないはずだ)

ここで注目したのがネフェルピトールの背後にいる少女。

(あいつがラミナが言つてたプロ棋士か……。……もしピトールがオー

ラを出さないんじゃないと出せないんだとしたら……あの尻尾と繋がってるのは治療能力!!)

全てラミナの推測通り。

問題は何故この状況で、少女を治しているのかということだ。

しかし、その答えにキルアはすぐに思い至った。

(王の命令……い。あの女を傷つけたのはジツちゃんの【龍星群】。俺達だってあの女の存在は直前まで分からなかったんだ。会長やジツちゃんが知ってたはずがない。……くそっ……い。最悪だ……い)

ラミナの懸念がほぼ全て的中している。

この状況でネフェルピトーが治療に集中してるのは王の命令以外あり得ない。

それならばアモンガキッドがラミナと向かい合ったままだったことにも納得は出来る。

ラミナならば無視しそうだとキルアは一瞬考えたが、

(いや、ピトーがここで治療に専念していることは、作戦を考えれば理想的な状態だ。ピトーやキッドが王を追いかけないように足止めするのも俺達の任務で、それが一番の懸念だった)

護衛軍相手に戦って、5分持ちこたえられるかどうかというのがラミナ以外の面々の懸念だった。

そして、最も足止めすべき存在はネフェルピトー。

それがモラウヤキルアの出した結論だった。

(でも、少なくとも治療を終えるまで奴はここから動かない。先日の【円】が消えた時間から考えれば、恐らく最低1時間はかかるはず……。だから、ラミナからすれば簡単に会長達を追えない距離まで離れるのを待ってたんだ。キッドとしても王の命令であろう治療を妨げないならば、この状況を維持するのがベストではなくてもベターに決まってる。けど、俺らが来たことでその均衡が崩れようとしている……い)

キルアが解決策を考えていると、ゴンから更に怒りが膨れ上がった。

「その人から、離れろ」

ゴンが一步進んだことにネフェルピトーの緊張が高まった。

「その化け物と一緒に、その人から離れろって言ってるんだ!!!」

ゴンの眼には治療されているコムギの姿が、改造されているカイトの姿と被ったのだ。

何故オーラを纏わないのか、何故攻撃を仕掛けてこないのか、そんなことなどゴンは欠片も疑問に思っていなかった。

「そして……俺と勝負しろ!! 勝負して、カイトを——」

その時、ネフェルピトーが手の平を上にして両手を差し出し、頭を下げた。

突然の所作にゴンはもちろん、キルアやラミナ、そしてアモンガキッドすらも驚きを隠せなかった。

ゴン以外の面々はそれが『何も持っていない』『何もありません』という、無抵抗を示す所作であると知っていた。

「頼む。待ってくれ……」

その言葉にゴンも嫌でもネフェルピトーに戦闘の意思がないことを理解させられた。

だが、まさかの無抵抗にゴンは蓋を外した怒りを、振り上げた拳の落としどころを失ってしまったことに他ならない。

「っ……!! ふざけるな!! 何を待って言うんだ!! 立て!!! 外へ出る!!!」

それだけでゴンとネフェルピトーの立場が変わってしまったことを、逆にゴンが追い詰められてしまったことに、当事者を除く全員が気付いてしまった。

キルアは歯を食いしばって、どうやってゴンを落ち着かせるかを考える。

アモンガキッドは感情をコントロール出来ないゴンに先ほどまで感じていた脅威度を下げ。

そして、ラミナは……ゴンを見つめる瞳がどんどん冷たくなっていた。

ゴンが更に詰め寄ろうと足を進めた、その時。

「なんでも!! 何でも言うことを聞くから!!」

ゴンが追い詰められていることに気づいていないネフェルピトーはただただ懇願する。

「だから待ってくれ……。ボクは——」

そして、ネフェルピトーは、ついにその一撃を放った。

「どうしてもこの人間を、救<sup>ヒト</sup>げなくちゃいけないんだ!!」

キメラアントが人間を救ける。

それもこれまで何人も人間を殺し、壊し、操り人形にしていたキメラアントが。

その事実を、ゴンは受け入れることを本能的に拒絶する。

「……タスケ……? タスケ……なに……?」

ゴンの雰囲気<sup>キルア</sup>が更に変わったことに気づいたキルアは、主導権を握ぎ取ろうとした。

「なんでも? お前の言う何でもって——」

「キルア」

しかし、ゴンはそれを冷え切った声で遮った。

「俺が訊いてるんだ」

その声にキルアの胸中は不安が埋め尽くし、アモンガキッドは再びゴンに漠然とした脅威を感じ始めていた。

(また雰囲気<sup>キルア</sup>が変わった……。それも……。どこかおいちちゃん達に近くなった気がする……)

人間から遠ざかったような気配。

その感覚をアモンガキッドは無視出来なかった。

「タスケナクチャって……。なに?」

ゴンは表情が抜け落ちた顔で冷たく問いかける。

少なからずゴンの変化を感じ取ったネフェルピトーは偽ることなく話すことを選んだ。

「この人間はボクの……。ボクの大切な方が、大切にしている人です。」



この人間がいたから、王は…王に。この人間がいなくなったら王は…王でなくなる。それほどの…だから…ボクは彼女が…救われればそれでいい。彼女を治した後は、キミ達の望むとおりにする…だから、待つてくれ…」

ネフェルピトローの偽りなき言葉に、ゴンはようやくその言葉の意味を理解してしまった。

「救いたいってこと？ ……はあ……はっ」

ゴンは両手を全力で握り締める。

「勝手なこと、言いやがって…!! 勝手だよ…畜生…ツ!!」

ゴンは再び湧き上がってきた怒りに震える。

「誰がツ…!! 誰がお前の、お前らなんかのいう通りになんかつ…!!」

もはやどうすればいいのか分からなくなったゴンは衝動的にネフェルピトローに向かって一歩踏み出す。

「ゴン！ ちょっと待てー！」

そこにキルアが呼び止め、ゴンも足を止める。

「その子を傷つけたのは、恐らく俺達の方だ。ジツちゃんの【龍星群】…それで？」

「ピトローが今その子を治療しているのも多分本当だ。そうだよな？」

「ラミナ」

「まあな」

「…だから？」

「…待とう。治療が終わるまで」

「…それで待った後でコイツが俺の望み通りにするってのは？ 恐らくか？ 多分か!? 本当!!! ふざけるなっ!!!」

やり場のなかった怒りが冷静に諭された故に抑えられなくなってしまった。

「ふざけんなよ!! どうかしてんじやないのか!? こんな…こんな奴の言うこと、信じるのか!!? 信じられるわけないだろ!!!」

「…」

ラミナは混乱と怒りに叫ぶゴンを冷めた目で見つめていた。

が、  
キルアはそれでもゴンを冷静にさせようと言葉を続けようとした

ボギヤツツ!!

ネフェルピトーが左腕を自ら押し折った。

「!?」

「ピトっち……?!」

「……」

「……望むならば、右腕も。それでも足りなければ、両の脚も……!!」  
身体を持って証明しようとするネフェルピトーに、ゴンは嫌でもそれが本気だと理解させられる。

「治療が終わった後でボクが……妙な気を起こすかもしれないと思うならば、治療に……支障が出ない範囲で、ボクを壊してくれて構わない……!」

「——ツッ!」

「頼むから彼女を、救わせさせてくれ……!!」

ネフェルピトーの懇願にゴンは完全に逃げ場を失った。

「——ツツ!!　　~~~~ツツツ!!」

盛大に怒りと困惑に顔を歪め、歯を砕かんばかりに食いしばったゴンは、湧き上がる怒りを堪え切れず、両拳を全力で床に叩きつけた。それにキルアとネフェルピトーは事態が悪化したことを理解した。

「つ……!　　ずるい!!　　ずるいぞチクショウ!!　　なんでそいつばっかり!!!　　カイトにはあんな非道い事したくせに!!!」

ゴンは完全に感情のコントロールを失い、涙を流し、理不尽な現実  
に慟哭する。

「ゴン!!!」

「なんでだよっ!!!」

もはやキルアの声も届かなかった。

ゴンは込み上げる感情のままに叫んだ。

「なんでだああああ!!!」

それと同時にゴンの身体から膨大なオーラが噴き出し、暴風となつてその場にいる全員に襲い掛かる。

「う……うつ、うつ……」

俯いたゴンは嗚咽をこぼしながら、遂に怒りの底に潜んでいた感情へと辿り着く。

「……ふざけんなっ……!!」

鋭くネフェルピトーを睨みつけたゴンは、右拳を構え、オーラを集中させた。

それによくネフェルピトーも焦りを見せ、アモンガキッドも動こうとしたがラミナが僅かに足を開いたのを見逃さずに動きを止めた。

「最初は――」

「ゴン!!!」

衝動に促されるまま能力を発動しようとしたゴンに、キルアは鋭く呼び止めた。

「そいつを殺したら、カイトは元に戻らねえぞ」

最大限冷静に、はつきりと告げる。

ここが正念場だった。

ここで本当にネフェルピトーに殴りかかれば、確実にネフェルピトーはただではすまず、アモンガキッドもゴンに襲い掛かり、【硬】を使ったばかりのゴンも致命傷を負うか死ぬだろう。

そして、攻撃しようとしてるからこそ、己の声が届くとも考えていた。

それは見事に的中し、ゴンは【硬】を解除した。

「……………キルアは、いいよね。冷静でいられて」

ゴンは再び冷え切った声で口を開く。

「関係、ないからっ」

まさかの言葉に、キルアは一瞬心の痛みに顔を歪めてしまった。  
その時、

ドゴオ!!!

ゴンの横つ面に、ラミナの拳が叩き込まれた。

ゴンはもちろん、他の全員が目丸くして固まってしまった。  
アモンガキッドもラミナの動きに注意していたが、殺意が突如自分  
達から外れたのでラミナの動きに一瞬出遅れてしまったのだ。

ゴンはもちろん抵抗できずに横に吹き飛び、床を転がる。  
しかし、ラミナが再び一瞬でゴンの元へと移動して、

ゴンの腹に左蹴りを叩き込んだ。

「がつ——!?!」

ゴンはくの字に蹴り飛ばされて、部屋の入口まで吹き飛んだ。

「ラ——!?! つ!!」

突然のラミナの行動にキルアが問い詰めようとしたが、ラミナの顔  
を見た瞬間に言葉に詰まった。

ラミナの顔は完全に冷め切っていた。

無表情というよりも無感情。

そう言えるほどに、ラミナは冷え切った気配を纏っていた。

「キルア」

「……な、なんだよ?」

「あのクソガキ連れて、今すぐこっから、この国から出ていけ」

「つ……!」

「やっぱ、ガキなんぞ連れてくるんやなかったな」

ラミナはそう吐き捨てて、アモンガキツド達に向き直ろうとした。そこにゴンが腹を抑え、えづきながら体を起こした。

「ぐほっ！　ぐほっ！　ラ、ラミナ……？」

「喋んな。もう邪魔や。お前はいらん」

「で、でも……！」

「状況も読めん。無様に感情に振り回されて、拳句の果てに目的すら忘れるなんぞ目も当てられんわ。そんなクソガキはここにはおらんはずや」

ラミナの言葉にゴンは拳を握り締めるが、当然ながらここで帰るわけにもいかなないので反論しようとする。

「でも……ラミナが…殺す気を……持てって……！」

「別にネフェルピトーを殺す気になったことに呆れとるんちやうわ。うちが呆れとるんはなあ、クソガキ。お前、あの女も、カイトも殺す覚悟は持ったか？」

「っ!!」

「誰がどう見てもあの女が治療中ちゆうんは分かる。誰がどう見ても今ネフェルピトーを殺せば、あの女も死ぬんは分かる。やから、ネフェルピトーを殺すちゆうことは、あの女も殺すことになるんは誰がどう考えても分かる。……で？　お前は分かつたんか？」

ラミナの言葉にゴンは俯いた。

「うちが呆れたんは、結局お前は口だけやったことや。なんや？　うちらが無関係な人間殺すことにキレとった癖に、自分は殺すんか？」

カイトを救いたいとかほざいとった癖に、あつさり殺そうとするんか？」

「……」

「それになんやねん、さっきの言葉。『好き勝手なこと言いやがって』？　『ずるい』？　『なんでカイトにあんな非道いことしたのに』？

アホか、お前は。なんで仲間でもない、しかも敵対関係の奴に配慮せなあかんねん。なんで見知った奴を優先するんがズルイねん。なんで敵対者に優しくせなあかんねん。……戦争舐めんなクソガキ」

ラミナは冷たく吐き捨てる。

「結局お前は感情に振り回されるだけの、ちよつと強いだけのクソガキや。しかも、これまでずっと自分のために身体も命も張ってきて、誰かを見殺しにしても自分を護ろうとしてくれた相棒に『関係ない』とか、うちでもよう言わんわ。そんな感情に振り回された結果、たま・たま助けられるカイトは哀れなやつぢやな……」

ラミナがゴンに冷めた一番の理由は『殺したことによる結末を受け止める覚悟を持たずに、命を奪おうとしたこと』だ。

これまで何度も『殺す覚悟を持って』と告げてきた。

戦いに身を置く者やハンターは、己が意地を通す時に他者の命を奪うことは決して珍しくない。

その場合、重要なのは相手を殺すことではない。

相手を殺した後、親族や友人、仲間、世間から恨まれ、蔑まれ、襲われ、殺されることを、覚悟しなければならぬのだ。

それがラミナの『殺し』に対する信条。

先ほどのゴンの行為はどう考えても、その信条に反するものだ。

ゴンがこの戦いでカイトを救えない可能性、誰かを巻き込んで死なせてしまう可能性を理解し、受け入れた上で殺そうとしたのであればラミナは何も言わなかった。

だが誰が見ても、先ほどのゴンの殺意は衝動的、その場を感情的にやり過ぎそうとした行為だった。

それは、カイトを救うためにこれまで手伝ってきた者達全てに対する裏切りに他ならない。

ナツクル、シユート、パーム、モラウ、ノヴ、ビスケ、ラミナ、ティルガ、ブラール、そして……キルアに対しての。

特に、これまで何だかんだで強くなる手解きをしてきたラミナへの。

ゴンにハンターという道を教え、導こうとしてくれていたカイトへの。

そして、カイトを見捨てたという後悔にずっと苦しんできたキルアへの。

この土壇場において、まるで自分1人で戦ってきて、1人で戦い抜かねばならないと自惚れているゴンに対して、ラミナが呆れを通り越して関わる気を失わせるには十分すぎる言動だった。

12歳と言う少年に対して、求めるにはハードルが高すぎるかもしれない。

しかし、ラミナはこれまでキルアを通し、戦いを通して、その覚悟と重要さを問い続けてきたつもりでいる。

それでも学ばず、正念場でやらかしたゴンを、これ以上自分が命を張る戦場に置いておきたいなど、ラミナは決して思わない。

故にラミナは冷酷無慈悲に告げる。

「うちの前から消えろ。ここは、覚悟を持った奴だけがおる場所や」

ゴンは両手を握り締め、ただただ震えることしか出来ず。

キルアはゴンの傍で、寂しげな顔で立ち尽くすことしか出来なかった。

そしてラミナは、武器を具現化してアモンガキッドへと斬りかかったのだった。

## #144 コロシアウ×シカ×ミチハナイ

ブロードソードとソードブレイカーを具現化したラミナは、ゴンとキルアを放置してアモンガキッドへと高速で斬りかかる。

アモンガキッドも8頭の大蛇を具現化して迎え撃つ。

【二瞬の鎌鼬】による高速の斬撃で4頭の大蛇の頭を斬り落とし、ソードブレイカーで2頭の大蛇を除念し、残りの2頭の噛み付きを紙一重で躲しながら更に詰め寄る。

だが、躲した大蛇の頭と斬り落とした大蛇の頭が融合して、ラミナの左右斜めから襲い掛かり、正面にいたアモンガキッドの右脚が振り上がる。

ラミナはソードブレイカーを消し、スローイングナイフを具現化して手首の力だけで投げ、大蛇達の隙間を飛び抜ける。

そして、両脚を前後に開いて屈み、ギリギリでアモンガキッドの猛攻を躲して指を鳴らす。

直後、ラミナの姿がスローイングナイフへと変わり、スローイングナイフが飛んでいた場所にラミナが現れる。

スローイングナイフを消したラミナは、ブロードソードをもう一振り具現化する。

すでに目の前には大蛇の群れが迫って来ていた。

アモンガキッドは入れ替わったの同時到大蛇を再構成して、ラミナが現れるであろう場所に差し向けていたのだ。

ラミナは今度は詰め寄ろうとはせず、後ろへと跳び下がる。

下がりながら高速の斬撃で迫る大蛇達の頭を正確に両断していくが、すぐに壁際に追い込まれる。

「ふっ！」

ラミナは後ろ回し蹴りを壁に繰り出し、壁を蹴り砕く。

そして、躊躇なく開けた穴から外へと飛び出した。

アモンガキッド、ネフェルピトー、キルアはまさかの行動に一瞬戸惑ったが、

「ちっ!!」



1秒もせず、アモンガキッドがラミナを追いかけて穴から外へと躍り出た。

キルアは追いかけるとは思っていなかった。アモンガキッドの行動に目を丸くしたが、ネフェルピトーはアモンガキッドの行動の理由に思い至っていた。

(そうか！ NGLで見せた超高速の閃光……!!)

アモンガキッドとネフェルピトーは、「天を衝く一角獣」を実際に見て、防いでいる。

故にラミナが外に飛び出したのは、ここから動かないと踏んだアモンガキッド達を長距離から狙撃するためだとアモンガキッドは考えたのだ。

普通ならまだ仲間がいるのでありえないと考えるとところだが、直前に仲間割れした光景を目の当たりにしている。

アモンガキッドが把握しているラミナの性格ならば、キルア達を犠牲にしようとも自分達を仕留めるチャンスを逃すことはしない。

なので、アモンガキッドは嫌でもラミナに「天を衝く一角獣」を使う隙を与えないようにしなければならなかった。

出来ればネフェルピトーの傍を、コムギの傍を離れたくはないが、今の自分達ではあの攻撃を防ぐのは厳しい……いや、不可能に近い。故にアモンガキッドはここで退くわけにはいかないのだ。

それがたとえ、ラミナの誘いであろうとも。

ラミナの狙いはアモンガキッドを誘き出すこと。

狭い空間、邪魔者が多かったあの場所では全力で戦い辛い。下手にコムギを殺してしまえば、まず間違いなく王の命令を邪魔したラミナをネフェルピトーは許しはしないだろう。

流星に護衛軍2体が全身全霊を懸けて殺しに来れば、ラミナに勝ち目はない。

故にラミナはあの場から離れ、アモンガキッドを誘き出す必要があったのだ。

そこで思い出したのが、アモンガキッド達に一度「天を衝く一角獣」を使用したことであった。NGLの奇襲でも明らかに余裕をもって防いだわけではなかった。であれば、オーラを使えないネフェルピトーと腹に穴が開いているアモンガキッドでは、まず間違いないかわれたくない攻撃のはずだとラミナは確信を持っていた。

アモンガキッド達もあの攻撃を忘れているはずはないと考えたラミナは、自分が外に出たら間違いないアモンガキッドは追いかけてくるだろうと推測していたのだ。

西塔から飛び出してきたアモンガキッドを顔だけで振り返って確認したラミナは、外壁を跳び越えて宮殿外の荒野へと移動する。

アモンガキッドも躊躇なく追いかけてきて、ラミナのすぐ近くに着地する。

「やれやれ……完全に君の狙い通りって感じだねえ。すつごく残念ながら」

「さてなあ。うちはただ広いところで暴れたかっただけや」

「よく言うねえ。まあ……残念ながら、それも嘘じゃなさそうだけどさ」

アモンガキッドは肩を竦め、能力を発動して8頭の大蛇を具現化する。

ラミナは視線を上に向け、上空にひっそりと浮かぶ一つ目念獣を捉える。

素早く視線を動かして他には念獣が存在しないことを確認したらミナは、アモンガキッドに視線を戻す。

（あの蛇を使うと他の念獣は最低限しか出せんっちゆうことか……。まあ、いくら護衛軍でも念能力は人間由来のもの。無制限に使えるわけやない）

ラミナはこれまでのアモンガキッドとの戦闘を思い出す。

（2種類の念獣とオーラも溶かす髪を媒体にした8頭の大蛇。具現化系、変化系、放出系、操作系は確定で、強化系まで使ってもおかしくない。特に大蛇の再生速度、強度、速度、毒を考えれば、かなりのオーラを消費するはず。やから球体の念獣は最低限、必要時のみ具現

化しとった)

それでも十分異常なのだが。

しかし、その理由もラミナはある程度推測していた。

(あいつは視力がほぼはない。ピット器官と念獣だけで視力を補うことで制約を強化しとるわけか)

己と同じく『目』を持たない【満たされない胃袋】。

『目』の代わりとなり、それ以外の能力を持たない【地母神の邪眼】。

先天的欠陥を制約に盛り込んだ能力強化。

これは珍しい事ではないので驚くことはない。

面倒だと心底思うが。

「始める前にさ、最後にいいかい？ ミナっち」

「あ？」

「君から見てどうだった？ 王様は。正直、本当に今なら王様は君を快く仲間にしてくれると思うけど」

「どうでもええわ阿呆。しつこいやっちゃな」

「そう言わないでさあ。君と仲良くしたいんだよ」

「意味ない事すんなや。理解しとるやろが。もううちらは殺し合うしかないっちゆうことくらい」

「……」

「お前らのボスがどう変わろうが、人間社会はお前らを根絶することを見て決定した。暗殺者のうちはもちろん、ハンター協会もそれを承諾した。お前らがどれだけ人間を受け入れようが、こっちはもうお前らを受け入れん。ま、お前らがほぼ全ての国を潰したら、降伏するかもしれへんけどな。ただ、少なくともうちは死んでもする気はないで」

「……んんん……」

アモンガキッドは俯いて後頭部を掻きながら呻く。

「やっぱり駄目か……。残念だなあ……こればかりは、心の底から、本当に残念だよお……。おいちゃん、本当にミナっちのこと気に入ってたんだけどねえ」

「キモイわ阿呆」

「……はつきり言って、いくらアイザック・ネテロ会長でも王様には勝てないと思うよ?」

「……あ? なんてお前が爺の名前と顔知つとんねん」

「おいちゃん、前はハンターだったから」

アモンガキツドの暴露にラミナは顔を顰める。

「……護衛軍は記憶持ちなんか?」

「ユピッチ以外はある程度は憶えてるよ。まあ、だから何だって話だけどさ。前が人間だろうが、今は蟻だしねえ」

「……分かつとるやないか」

「ん?」

「結局蟻と人間は相容れんちゆうこつちや。一度人間を食糧と見なしたお前らが、人間と共存なんて出来るわけないねん。どれだけ気に入った個体がおったかてな。一匹飼うんと牧場を管理するんは話が違い過ぎるわ」

「……」

「人間の欲望を、蟻如きが管理できるわけない。絶対に殺したあなんで。同じ人間ですら、殺したなるんやからな」

話は終わりとばかりにラミナはブロードソードとソードブレイカーを具現化して構える。

アモンガキツドはもう一度頭を搔いて、

「やれやれ……本当に残念だ。……本当に」

小さく呟いたアモンガキツドは髪を蠢かし、大蛇を形作る。

「ところで、おいちゃんがハンターの記憶を持つてることには何も思わないのかい?」

「どうでもええわ。ここまで来たら、ただのハンターを相手にするんとなんも変わらん」

「あはは……それ言っちゃう?」

あっけらかんと言い放つラミナにアモンガキツドは空笑いするしかなかった。

その直後、ラミナが全力で飛び出してアモンガキツドに斬りかかる。

アモンガキッドはそれ以上の速さで大蛇を操り、ラミナに襲い掛かった。

【「瞬の鎌鼬」と「脆く儂い夢物語」で対応し、以前のペイジン同様斬っては再生され、斬られては再生する終わりが見えないせめぎ合いが始まった。

「んんん、それはそつちが不利だつて理解してるよねえ？」

「まあ、なっ!!」

ラミナが後ろに跳び下がりながらソードブレイカーを投げ、大蛇の1頭に突き刺して除念する。

同時にソードブレイカーを消して、スロージングナイフを具現化し、すぐさま投擲した。

アモンガキッドはスロージングナイフを大蛇で呑み込もうとしたが、直前でスロージングナイフがラミナと入れ替わった。

そのラミナの右手にはブロードソードではなく、偃月刀が握られていた。

ラミナは左脚を振り上げて大きく口を開く大蛇を蹴り上げ、左脚を下ろす勢いを利用して偃月刀を鋭く突き出す。

アモンガキッドは迫る刃を仰け反つて躲しながら、両腕の大蛇で偃月刀に噛みつきこうとした。

しかし、偃月刀は途中で止まり、ラミナは体を捻りながら大きく横に薙いで周囲の大蛇を一掃した。

ラミナが後ろに下がると、アモンガキッドは大蛇を再生させながら距離を詰めようとしたが、

ラミナが指を鳴らそうとしたのを見て、足を止めた。

その時、ニヤリとラミナが笑ったのを見て、アモンガキッドは失策を理解した。

パチン！

ラミナが指を鳴らした瞬間、

ボボオオオン！！

突如アモンガキツドの周囲から炎が噴き出した。

「?!?」

アモンガキツドはいきなりの炎に大きく後ろに跳び下がる。

「つとおー！ おくどろいたねえ……。炎を生み出す能力？ いや、それは流石に無理があるねえ……。それに今の炎の噴き出した場所は……」

ラミナはスローイングナイフを拾い、すぐさまアモンガキツドに攻めかかる。

アモンガキツドは頭の大蛇6頭をラミナに喉け、ラミナは舞うように偃月刀を振り回して大蛇の群れを斬り飛ばしながら隙を突いてスローイングナイフを投擲する。

アモンガキツドは今度は無理に撃墜せず、顔を傾げるだけでスローイングナイフを躲す。

再びラミナが指を鳴らす。

背後、そして炎に警戒するアモンガキツド。

しかし、炎も噴き出さず、ラミナも消えない。

その事に訝しんだアモンガキツドだったが、空に浮かんだ「地母神の邪眼」が、

消えたスローイングナイフの場所に手榴弾が出現したのを捉えた。

「!?」

警戒に留めていたせいかアモンガキツドは逃げる間もなく、爆発に巻き込まれる。

ラミナは距離を取り、常に軽いステップで場所を変えながら奇襲に備える。

「さて……どこまで効いたか……」

あまり期待はしていないが、やはり少しでもダメージがあるかないかは今後の戦闘プランに大きく影響する。

それでも金に物を言わせて、小型ながら高威力の違法改造レベルのを調達したのだ。効果がなければ、苦情では済まさないというラミナは内心決めていた。

そこに煙の中からアモンガキッドが姿を現す。

アモンガキッドは服をボロボロにしながらも、傷はほぼないに等しかった。

しかし、肌が汚れてすらいないことから、ラミナは脱皮して回復しただけだと看破した。

（ある程度戦いに支障をきたすと思わせるだけのダメージはあったっちゆうことか。やけど、もう同じ手は使えんやろなあ……）

「いや／＼やられたねえ……。それ、物とも入れ替われるのかい」

「自分だけしかあかんとか言うたことないでな」

「そりやそうだねえ。まったく……まさかここに来て爆弾を使って来るなんて、ホントに厄介だねえ」

もちろん、何か道具を使ってくる可能性は考慮していたし警戒していたのだが、それはあくまでアモンガキッドの目を欺くためのものだろうとどこかで決めつけていた。

その裏をかくのがラミナの戦術の1つだったのは理解していたはずなのに。

「うちは別に念能力で殺すことに拘つとるとか言うたことないで。使えるもんは全部使う」

「そうだよねえ……ミナつちはそう言う子だよねえ」

ラミナはそれには答えず、スローイングナイフと偃月刀を構えて攻めかかる。

アモンガキッドもおしやべりを止めて大蛇を操り、ラミナへと襲い掛かる。

猛スピードで迫りくる大蛇を紙一重で躲し、時に偃月刀で首を斬り落とし、スローイングナイフを額に突き立てる。

そして、アモンガキツドに隙が出来た瞬間、ラミナはスローイングナイフを高速投擲して指を鳴らそうとする。

今度はスローイングナイフを先に壊そうと、アモンガキツドは大蛇の1頭を喉ける。

しかし、噛み付く直前にスローイングナイフが消滅し、ラミナが指を鳴らすと再び何もない空間から炎が噴き出して大蛇数頭とアモンガキツドの右腕を焼く。

「ぐっ……い」

後ろに跳び下がるアモンガキツドに、ラミナはスローイングナイフを再び具現化して投擲する。

アモンガキツドは蹴り払おうとしたが、その前にラミナは【妖精の悪戯】で入れ替わり、振り上げられたアモンガキツドの脚に乗って偃月刀で突きを放とうとしたが、再成した大蛇がラミナに襲い掛かる。

ラミナは左手にブロードソードを具現化して、大蛇の首を刎ねてアモンガキツドの脚を斬り落とそうとしたが、首を刎ねた大蛇がそのまま飛び掛かってきて舌打ちしながら後ろに跳び下がる。

下がりながらラミナはブロードソードを投げて指を鳴らし、スローイングナイフと入れ替えてブロードソードを消す。

ラミナは偃月刀を片手で振り回しながらアモンガキツドと大蛇を牽制し、その隙間を縫うようにスローイングナイフを投げる。

アモンガキツドの後ろにスローイングナイフが抜けた瞬間、ラミナは指を鳴らす。

アモンガキツドは背後に意識を向けるも現れたのは偃月刀だった。

(フェイント……い)

ラミナに意識を戻すと、その時にはすでにラミナは再びスローイングナイフを投擲していた。

同時に手榴弾を2つ。アモンガキツドの足元に放り投げて。



アモンガキッドは手榴弾を対処しようとした、その時、  
ラミナは再びニヤリと嗤って指を鳴らし、アモンガキッドの後ろの  
偃月刀が手榴弾に変わり、偃月刀はラミナの背後に現れる。

(二重罨<sup>トラップ</sup>……!)

手榴弾の1つを自分の背後に投げておき、【妖精の悪戯】で入れ替える。

しかし、何故それに気づけなかったのか。

アモンガキッドは足元に放り投げられ手榴弾に意識を向けると、手榴弾が銀の膜で覆われているのを捉えた。

(前に使った……アルミコーティング!)

そして、上に浮かぶ【地母神の邪眼】に見られないようにジャケツトの内側に投げていたのだ。

ラミナは更に後ろに下がりながら偃月刀を右手で掴み、左手で指を鳴らそうとする。

その左手には手榴弾が握られていた。

「ちよっ……!?!」

驚きを露にするアモンガキッドを尻目にラミナは手に持つ手榴弾を軽く投げて指を二度鳴らした。

直後、スローイングナイフが手榴弾と入れ替わり、更にアモンガキッドの目の前で炎が噴き上がって、その炎が手榴弾を呑み込んだ。

「やりす——」

ドドドドオオオオオン!!!

4つの手榴弾が炸裂し、ラミナは爆発の瞬間に大きく後ろに跳び、爆風に吹き飛ばされながら距離を取る。

数回地面を転がり、起き上がったラミナはスローイングナイフを空へと投擲し、偃月刀を消してブロードソードを具現化し指を鳴らす。

そしてラミナはスローイングナイフと入れ替わって空中の一つ目

念獣の目の前に現れる。

高速の斬撃で一つ目念獣を両断し、再びスローイングナイフと入れ替わって、スローイングナイフを消す。

「ふう〜……」

大きく息を吹いたラミナは油断せず爆煙を見据える。

(さて……上手く嵌まったはええけど、これで手榴弾は残り2発。同じ技はもう使えん。【炎蛇瞬来】もオーラ残量を考えれば、そろそろ厳しいか)

偃月刀に付与された能力【炎蛇瞬来<sup>えんだしゆんらい</sup>】。

切っ先から剣筋に合わせて極細のオーラを線状に這わせ、更にごく少量のオーラを散布する。散布したオーラは周囲の酸素と水素と吸収して線状オーラへと集め、指を鳴らすことで線状オーラが炎へと変化して周囲に集められた水素と酸素と反応して一気に燃え上がる。

しかし悲しいかな、発動の制約がそこまで厳しくないことと放出系と相性が悪いラミナでは、一気に人体を燃やすほどの威力は出せなかった。

(まともに浴びせてもアイツにや軽い火傷レベルっぽかったし。大蛇も表面を焼いただけ。フェイントには最適やけど、決定打にはならへんな。これ以上の削り合いでは不利、か)

次の作戦を練るラミナ。

その時、宮殿の中央塔付近からラミナが起こした以上の爆発が起きた。

「今のは……」

「君のお仲間の仕業かい？」

煙から声がして、ラミナは視線を鋭く戻す。

煙からヌルリとアモンガキッドが現れる。

アモンガキッドの身体はどこどころ血が流れ、火傷を負っていた。しかし、それもボロボロと皮膚が崩れ落ちていくたびに綺麗になっっていく。

「やれやれ……流石に今のはちよつと焦ったよ。ホント、残念なくらいこつちの裏をかいてくるねえ……」

「それが格上を殺す常套手段やろが」

「いやいや、格上つて……。そこまで差はないでしょうに」

「よう言うわ。まだ本気出しとらんやろ。ペイジンの時の動き見せてへんしな」

「いやあそれはそうなんだけど……それは単純にミナつちの手が読めないから攻めるに攻められないだけなんだよねえ……。ところでさつき爆発、あれは君のお仲間の手榴弾かい？」

「さあな。他の奴らがどんな装備で動いとるかまでは知らん」

「その嘘は下手だねえ。ミナつちがお仲間の実力や装備を把握してないわけないじゃないの」

「知らんもんは知らん。そつちこそ、他の護衛軍か師団長ちやうんか？」

「んんん……おいちゃんは心当たりないねえ。流石にあんな爆発する能力を持つ子を宮殿内に置いたときたくないからねえ」

爆発の原因は護衛軍のモントウトウユピーなのだが、それはモントウトウユピー本人も自覚していなかったことなので、誰も知らなくても仕方がないことだった。

「ところでミナつち。訊きたいことがあるんだけどさ」

「……まだあるんかい……」

「君、さつきからずつと戦ってる理由として『暗殺者』って言ってるけど……幻影旅団としてはどうなんだい？」

「……」

「ペイジンで君と戦った後、ビゼフ君にお願いして幻影旅団の情報を集めて貰ったんだけど……君のイメージと幻影旅団のイメージがどうにも合致しなくてねえ。共通してるのは君や幻影旅団の面々が流星街出身だったってことくらい？ 他の集めた情報からだど、どうにも君が団長を王として崇めるほどの存在じゃないように思えるんだ

よねえ」

アモンガキッドは集めた情報が所詮は上辺面であることは理解している。それで個人の性格や主義の全てを把握できるわけがない。

ただでさえ幻影旅団の活動は一貫性が無いことで有名で、プロファイリングのプロでも『訳が分からない』と言われているのだから。

それを考慮に入れたとしても、ラミナの性格と幻影旅団の在り方が合わないように感じて仕方が無かったのだ。

「それに流星街出身としては、今の世界の在り方が壊れることに文句はないでしょ？ むしろ、おいちゃん達が暴れ続けた方が君達にとっては都合いいんじゃないの？」

アモンガキッドは首を傾げながら訊ねる。

ラミナはそれを冷めた顔で見返し、

「もうこちらは流星街から出た身やから爺共がどう考えようが知ったこっちゃないわ。それにうちはお前らと違って別に何でもかんでも王のために〜とか言うタイプちゃうねん。気に入らんかったら気に入らなくて言わせてもらおうで」

「あく……うん。それは納得。でも、それなら尚更君は所属してる理由がなさそうだけどねえ」

「クモは別に常に一緒に行動してへん。招集がかかれば話は別やけど、そうでないなら何をしようが個人の自由やねん。盗もうが、人助けしようが、殺しまくろうが、ハンターになろうがな」

「ふうん……」

「ちなみに団長はこの依頼を受ける時、一緒に話聞いたつたし、許可も貰とるでな。それ以降は特になんも連絡も命令もない。やから別に気にする必要ないわ」

「ん〜……」

「ただし」

「ん？」

「NGLを出た元師団長が2匹。片方はうちの王に手え出して、片方は流星街を占拠しようとして暴れたらしくてな。どっちもうちらクモが殺しとる」

「あらら……。それはごんね——」

「つうまありい、お前ら蟻はうちらクモにすでに喧嘩売つとるつちゆうことや」

「いやいやいや、流石にこつちに来なかつた師団長達の暴走をこつちのせいにされても」

「それを決めるんはうちらや。流星街の方は確かにあんま関係ないけど、お前らの『選別』と同じこととつたらしいでな。お前らをこのまま放置したら、また流星街で同じことが起こる可能性は高い。やから、また依頼される前にここでお前らを潰すつちゆうんはおかしなことか？ ただでさえNGLでお前らを仕留められんかつたせいで流星街や他の団員に借りが出来てしもたからな。これ以上手え煩わせると、しばらく奴隷扱い確定や」

ラミナは肩を竦めながら言うど、アモンガキッドは右手で顔を覆つて天を仰ぐ。

「なるほどねえ……。あく……それは納得出来るし、残念ながらすつごくしつくり来たよ」

「まあ、ぶつちやけた話。団長やつたらお前らを面白がつて仲間にしたがるかもしれんな。もつとも、お前らが団長に従うんやつたら話やけど」

「いや〜残念だけど、それは無理じゃないかなあ」

「やつたら……やっぱうちらは殺し合うしかないわ」

王に対するスタイルは違つていても、絶対に譲れないことがある。

自分の王が誰かの下に就くこと。

それだけは絶対に納得出来ないし、許すわけにはいかない。

クロロがどこかの国の王などになったら爆笑する自信があるが、それでもクロロが誰かの下で命令を聞く姿など想像もしたくないし、見たくもない。

幻影旅団の団長は無秩序で自由だからこそなのだから。

故に、ラミナとアモンガキッドが手を握ることはありえない。

殺し合うしか道はないのだ。

「もう話すことはなんもない。次にどっちかが話すとしたら……遺言の時や」

「……そうだねえ。残念だけど、それしかなさそうだ」

アモンガキッドはゆっくりと俯き、

直後、禍々しいという言葉ですら足りないほど不気味なオーラを放出しながら8頭の大蛇を生み出す。

その姿は先ほどとは違い、殺気と怖気しか感じさせない。

完全に殺す気になった様子のアモンガキッドに、ラミナも剣のように鋭い殺気が籠められたオーラを纏う。

そして合図もなく、全く同時に駆け出した。

クモと蟻の戦いは、もはや誰にも止められない。

## #145 ケツシ×ノ×イジ

ラミナがアモンガキツドを誘い出した直後、ゴンとキルアは茫然とラミナ達が飛び出した穴を見つめていた。

ネフェルピトーはゴン達に意識を向けながらもコムギの治療に専念する。

(どうする? ネフェルピトーは動けないし、あの訴えは嘘じゃない。だから、あの女の治療が終わるまでは絶対にこつちを攻撃してやることはない。脅威度は格段に下がる以上、無理にここに留まる理由はない。けど……ゴンをここに置いて行くのも、連れていくのも不安だ……!)

キルアは頭の中で自分は動くべきか考えていた。

そのすぐ傍でゴンは未だに項垂れている。

(それに動くとしてもどこに合流する? ラミナを追うならゴンは絶対に連れていけない。モラウはプフと【監獄ロック】で閉じこもってるから合流は無理。ということは行くならナツクル達のところになるけど……一番激しい戦闘が予想される場所に今のゴンはやっぱり連れていけない……。なら、テイルガ達の方か? それか……イカルゴの方? いや、駄目だ。もしパームが死んだり、改造されていたらゴンはもう耐えられない……!)

やはり全てはゴン次第。

あんな言葉を投げつけられても、どれだけ心を傷つけられても、キルアはゴンを見捨てるという選択肢だけはありえない。

それがキルアが決めた覚悟なのだから。

その時、ゴンがゆらりと立ち上がった。

「っ……!?!? ゴン……」

「……」

ゴンはゆっくりとネフェルピトーに向かって足を進める。

「おい、ゴン! 大丈夫なのか?」

何に対して大丈夫なのか。それとも全てに関してなのか。

「ああ……もう、大丈夫……」

しかし、ゴンから返ってきた言葉は短かった。

その顔は虚ろに過ぎて、どう見ても大丈夫そうではなかったが、キルアはそれ以上何も言わなかった。

少なからず先ほどまでの怒りと混乱は消えている。だが、それでも決してキルアやラミナが求めた答えにも行きついていない。

キルアはそれを理解してしまった。

思わず寂しさを顔に浮かべるが、今はゴンの動きを注視することにした。

ゴンはネフェルピトーの前で足を止める。

「……時間は？　どれだけ待てばいい？」

ゴンの問いかけにネフェルピトーは背後のコムギに視線を向ける。

「……完全に回復させるには……3〜4時間はかかると思う」

「駄目だ。待てない」

一切表情を動かさず、間も置かず、冷徹なまでに切り捨てるゴン。

ネフェルピトーは数秒考え。

「……1時間もあれば……重大な危機を乗り切れるところまでは治せる。お願いだ……頼む……！」

「……」

キルアは今のネフェルピトーの交渉が罠であることに気づいていた。

以前の【円】が消えていた時間を考えれば、いくら何でも長すぎる。故に今のは『値切り』の交渉と同じ。長めの時間を最初に言い、その次に本命の時間を言うことで譲歩したように思わせる手法。

「……一時間したら俺と一緒にペイジンに行き、カイトを元に戻してもらおう。……約束するか……!?!」

「……必ず、約束する……！」

一時間が本命であったとしても、それだけ足止め出来れば十分すぎる。これを拒否する理由はなかった。

するとゴンはその場で片膝を立てて座る。

「一時間、ここに待つ」

ネフェルピトーは安堵すると共に、根拠不明の不安も込み上げてき



ていた。

目の前の相手がどう動くか全く読めなくなったからだ。

情緒の不安定さが隙ではなく、不気味さを生み出している。

それは本来自分たちキメラアントの特性であったはずなのに、今は相手が勝っている。

ネフェルピトーはここに来て、正体不明な存在と相対する漠然とした恐怖を知った。

それほどまでにネフェルピトーは追い詰められ、コムギの治療を絶対の使命と考えているのだ。

そして、それを見届けたキルアは、

静かに歩き出して、その場を後にしたのだった。

その少し前。

ティルガとブラールは宮殿廊下に開いた穴から裏庭に飛び出して、頭部を失った無残な死骸を跳び越える。

直後、その穴を更に広げるように壁が爆ぜ、ビトルファンが飛び出してくる。

「ブファファファファア!! どうしたどうしたあ!! それではオイラは倒せんゾオウ!!」

「っ……! (広い場所で戦うことを選んだはいいが……! 奴を倒す方法が思い浮かばん……!)」

狭い屋内ではティルガの高速立体機動が活きるが、ビトルファンの能力にも有利に働く。

故に屋外で戦うことを選択したが、ここからどう戦うべきかが思い浮かばない。

(奴を倒すには攻撃をしなければならんが、攻撃をすればするほど奴の攻撃力は上がり、一撃でも浴びれば即死する可能性が高くなる。ブラールは絶対に近づけさせられない。我とて無理に近づくことは出来ん。……理想は一撃で仕留めることだが……)

ラミナの教えからすれば、一撃必殺が可能なのは格下相手のみ。

『同等、格上相手に一撃必殺を当てるんやったら相討ち覚悟か、直前までコンビネーションが意味分からんくらい上手く嵌まるくらいで、それ以外はもはや誘いやと思とき。念使いの戦いは基本初見。全部の攻撃を警戒されて然るべきやでな』

その言葉をティルガは正しいと思っている。

基本的にオーラが含まれた攻撃は絶対に喰らうわけにはいかない。そもそも念使いの戦いは拳一発が一撃必殺になる可能性があるのだ。

その一発が一撃必殺なのか、その一発が一撃必殺のトリガーとなるのか、違いはただそれだけ。

ティルガは『一発が一撃必殺』タイプなのだが、問題は相手がビトルファンであること。

(奴の硬さはただでさえ師団長、いやキメラアント一と云われていたほど。力もビホーンには劣るが、次点にはいるだろうと云われていた。オーラを得て、能力が発動している今では私の【虎咬拳】でも決まるところか掠り傷がやつとの可能性がある)

すでに少なくない強化を行っているであろうビトルファンの様子に、ティルガは自分の推測が正しいと直感している。

恐らく普通の一撃ではまともに傷はつけられない。

(ビトルファンは耐久力に自信があるからこそ、誘いを前提とした能力を創ったわけか……。『肉を切らせて骨を切る』を前提とし、最後には『肉も切らせず骨を潰す』。私の天敵に近い……。速さで翻弄しようにも、奴からすれば攻撃されるまで待ち構えればいいわけだから焦る必要もない……)

互いに強化系に特化した能力故に、地力が勝負の流れを支配していた。パワーも耐久性もティルガの上に行くビトルファンに真つ向勝負では絶対に勝機はない。

だが、ティルガは性格的にも知識でも小細工が得意な方ではない。(理想はナツクルと交代することだ。だが、ユピーと戦っているナツクルに更に負担をかけるのはあり得ない)

【天上不知唯我独損】はポットクリンを憑けた相手の半径100m圏内にいなければカウントが進まない。

ユピー相手にメレオロンの能力を使っていると云っても、100m以内に居続けるのは想像を絶する緊張を強いられているはずだ。

ここで更に対象を増やすのは本当に潰れかねない。

だが、このままでは本当に足止めするだけで限界だ。

それでは他のメンバーのフォローなどする余裕がなく、もし誰かが倒れたら一気に瓦解してしまう。

どうにかして倒す算段を立てなければならぬ。

その時、

ドオオオオオオオオン!!

中央塔の1階部分が突如内側から爆発した。

「なっ……!!?」

「又ウオ!」

ティルガ達は突然の爆発と宮殿の崩壊、そして支えを失った中央塔の上階部分がティルガ達のいる裏庭側に倒れてきているのを見て、驚きを隠せなかった。

中央塔上階部はそのまま東西の塔を繋ぐ通路を潰して着地する。

モラウの【監獄ロック】がクッションの役割を果たし、完全に崩壊することは免れた。

(今のは誰の仕業だ? 我らにそのような攻撃が出来る者はいないはず……。ラミナならば可能性はあるが、ブラールの情報ではラミナは宮殿の外に出ている。そして、何よりあそこで戦っていたのはナックル達とユピー……。まさかユピーが?)

「ぬぬウ!? 宮殿が破壊されタあ!? 他にも敵が忍び込んでいたカア!!」

ビトルファンは崩れた中央塔を見て、拳を握りしめて猛る。

それを見たティルガは、頭にある作戦が思い浮かんだ。

(……奴の能力は力と耐久を上げるに反比例して知能が下がる、と考

えられる。ならば、もしや……？ ……試す価値は、ある！

ティルガは覚悟を決めるとほぼ同時に地面を全力で蹴って、身を低くしながら猛スピードでビトルファンへと迫る。

「ムムツ!?」

「フウ!!」

ビトルファンがティルガに気付いたのは、ティルガの爪が右脇に叩きつけられたのと同時だった。

だが、ビトルファンの体には掠り傷1つ付いていない。

「ブファファアアア! 効かんゾオ!!」

もちろん、そんなことは織り込み済みであるティルガは駆け抜けざまにスピードを緩めぬまま方向転換し、崩れた通路の中に飛び込んだ。

「ブツファアー!! また逃げるカア!!」

ビトルファンはすぐさま叫びながらティルガを追いかけて、頭の角で通路の壁を吹き飛ばして中に入る。その衝撃で通路の天井が碎けて崩れ落ち、ビトルファンの体に当たる。

更に崩れて通路に落ちていた瓦礫を腕を振るって吹き飛ばす。

すると、ティルガも小さな瓦礫をオーラを籠めながらビトルファンに投げつけ始めた。

「ヌヌウ!! 鬱陶しいイイ!!」

ビトルファンは苛立ちを露わにしながら両腕を無茶苦茶に振り回し、投げ付けられた瓦礫や落ちていた、落ちてきた瓦礫を殴り飛ばす。

一気に能力が発動したビトルファンは、ビキビキ!と体を膨れ上げ始める。

甲殻にヒビが入った直後に、甲殻が弾け飛んで前のより更に大きな新しい甲殻が作り出される。

「ブボオ…ブヴォオ…! ゴザ…カジイゾオウ…!!」

身体が二回り近く膨れ上がり、息遣いと言葉が怪しくなってきたビトルファンを見て、ティルガは冷や汗を流すも狙いは上手く行っていることを確信する。

しかし、



「ブヴァオオオオオ!!」

ビトルファンもテイルガを追いかけてクレーターに飛び込む。

「ああ？ なんだあ？ ちつ、アイツじゃねえのかよ。邪魔しやがって」

モントウトウユピーは僅かに苛立ちを露わにしながら右手を3本爪の鞭のように変化させる。

テイルガはゾツとするほどの強大で凶暴なオーラに挟まれ、大量の冷や汗を流し、頭の中で大鐘が鳴らされると錯覚するほどの死を予感させる警鐘を必死に無視して、全力で両脚を動かす。

(チャンスは一瞬……！ 失敗は死……！ だが……ここでやらねば、師に負担を強いてここに来た意味はない!!)

「ウウル、ル、ル、ル……!!」

全神経を注ぎ集中するテイルガの瞳が更に細まり、牙を？き出しにして唸り、身を低くして地を駆ける。

クレーターの外で動向を見守っていたナツクルの目には、テイルガが本物の猛虎のように見えた。

そして両手と両足にオーラを集中させ、更にスピードを上げる。

「邪魔だ。とつとと死ねえ!!」

モントウトウユピーが攻撃を仕掛けようとした瞬間、テイルガは両手を突き出してモントウトウユピーの目の前に視界を埋め尽くすように念弾を放つ。

モントウトウユピーは攻撃を一瞬止めてしまい、その隙をテイルガは逃さずにスピードを緩めることなく、念弾に飛び乗った。

テイルガは跳び上がると同時に念弾を爆破して、一気に高く跳び上がった。

爆発した念弾で視界が更に塞がれたモントウトウユピーは、テイルガがジャンプしたことに気付かず、顔を顰めながらも前方に向かって高速で3本の鞭爪を振るう。

しかし、その攻撃はテイルガではなく、その後ろから突っ込んで来たビトルファンに直撃する。

「ブボヴォオ!?!」

「……ああん？」

「ブファ：ブバボオオオオン!!」

攻撃されたビトルファンは雄叫びを上げて、モントウトウユッピーに突撃する。

モントウトウユッピーは舌打ちして更に追撃を繰り返すも、ビトルファンはモントウトウユッピーの攻撃を無視してシヨルダータツクルを放つ。

モントウトウユッピーは左腕を盾にしてタツクルを防ぎ、後ろに吹き飛ばされるも倒れることなく堪える。

「つ……い・テメエ……さっきの奴と言い、蟻のくせして俺らに、王に逆らおうってえのかあ？」

ビトルファンであることに気付いていないモントウトウユッピーは更に苛立ちを強める。

「ブヴォオオオオン!!」

しかし、ビトルファンはモントウトウユッピーの問いかけを無視して右腕を振り被って殴りかかる。

モントウトウユッピーも右腕を大きく太く変化させて振り被り、ビトルファンの拳に合わせる。

拳と拳がぶつかった衝撃に両者の間の地面が割れる。

ティルガはクレーターの外に着地して、大汗を流し息を荒く吐きながら、ゴングが鳴ったバケモノの戦いを見下ろしていた。

「はあ！ はあ！ はあ！ ……なんとか、上手く、行ったよう、だな……はあ！ はあ！」

「おい、ティルガ！」

ナツクルが身を低くしながら素早くティルガの元に駆け寄ってきた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……ナツクル……無事だったようだな」

「まあ、俺はずっとメレオロンと隠れてたし、逃げ足にも自信があっからな。それよりもお前、ありやなんだ？」

「ビトルファンだ。奴の能力は攻撃を受ければ受けるほど力が増し、攻撃して何かを壊せば壊すほど頑丈さが上がるそうだ。だが、その反

動なのか、力が増せば増すほど知能が下がるようだ」

「知能が下がる……。なるほどな。それで相手が護衛軍かどうかも分かんなくなっちゃったわけか」

「ああ。情けないことだが、我とブラールではビトルファンには勝てん。相性が悪すぎる。だから、わざと能力を発動させ、知能を下げた状態でモントウトウユピーとぶつければ、仲間割れする可能性が高いと考えた」

「それがさっきの特攻ってわけか。だが、悪くねえ作戦だ。あれならユピーも少なくねえオーラを消費するし、隙も出来るはず……。俺らも突っ込んで乱戦に持ち込みゃあ、ユピーをぶん殴ることが出来るはずだ……。！」

ナツクルの言葉にテイルガはギョツとする。

「殴るだど!? あの死地の中にわざわざ飛び込むというのか!?!」

「ああ。まだ……。まだユピーがトぶまでにや10分近くはかかる……。最低でももう1回、さっきの爆発を起こさせる必要がある……。それにシユートと約束しちまったんだよ。あいつの顔面に拳を叩き込んでやるってな!!」

「……」

その言葉にシユートはもはや戦えないのだと理解したテイルガ。

止めなければならぬ。

ラミナであれば、絶対にぶん殴ってでも止めるだろう。

だが、テイルガは何故かナツクルの暴走を止める気になれなかった。

「奴のあの爆発の引き金は『怒り』。俺らとの戦いや今のビトルファンの暴走は確実に奴を苛立たせてるはずだ……。奴がブチ切れて爆発する瞬間が勝負だな」

「……本気、なのだな?」

「つたりめえだ」

「……ならば、我はその爆発の瞬間にビトルファンをユピーの傍から逃がさんようにしよう。あれだけの爆発だ。いくら奴でもただではすむまい」



汗を拭い、両手に力を籠めながら作戦に乗るティルガ。

無茶苦茶な作戦に乗ってきたティルガに、ナツクルは好戦的な笑みを浮かべて頷く。

作戦を考えれば絶対にここは無茶をする場面ではない。

だが、それでもやらねばならない意地がある。

死ぬことになっても、貫かねばならない誇りがある。

どんなに周りから、師から怒鳴られ、呆れられ、失望されようとも、譲れないものがある。

命を懸けた戦場だからこそ、使命よりも重いものがある。

だから、死地へと飛び込むことに躊躇はない。

## #146 ナカマ×ノ×タメニ

更に時が戻って、突入直後。

エレベーターに飛び乗ったイカルゴは、地下に下りてトラックに乗り込み、ビゼフの隠しエリアであるDエリア倉庫へと一直線に向かった。

(兵士も戦闘兵の死体もない……。この姿で接触するしかないか)

戦闘兵の死体を利用して、普通の人間からすれば恐ろしいバケモノだが、まだ人の形をしている。

だが、イカルゴはどう見ても人ではない。このまま話しかけても、まずまともに返答などしてくれないだろう。

(まあ、それならそれでいい。バケモノがいると分かれば、そう簡単に逃げ出したりもしないだろう。最悪脅して、縛り付ければいい)

一応抵抗された際に拘束する縄は積んである。

地下倉庫は宮殿から5km以上離れているので、戦闘に巻き込まれることはないだろう。

迅速にパームの所在を確認して倉庫から離れる。

倉庫に関しては、それで十分だとイカルゴは考えた。

問題はその後。

(車用の出口はエレベーターがある通路の先。流石に誰も待ち構えてないってことはない…はずだ)

イカルゴが地下に下りたことはあの場にいた全員が知っている。

流石に誰も追いかけてこないと言うのは考えにくい。

(もちろん、全員でテイルガを倒す可能性もあるが……ウエルフィンが他の師団長達の前で能力を使うとは思えない……！ 懐疑主義者の奴なら、絶対にチートウ達を先に戦わせて様子見るはずだ。そして、手を出す必要がなさそうなら……1人で行動している俺を狙ってくるのは想像に難くない)

ウエルフィンはハギヤ達同様、権力への欲は高い。

なので、隙あらば手柄を独占しようと動く可能性は十分にある。

(問題はビートルファン。他にも俺が知らない兵隊長クラスの奴がいる

可能性もある。……そこが俺の正念場だ！)

イカルゴは戦いの予感に一瞬身震いして、顔を引き締める。

(戦わずに終わるなんて都合が良いことが起こるわけがない……！  
ここまで来て日和るな俺……！)

イカルゴは死体を利用する能力を創っておきながら、実は自身で手にかけてことは一度もない。NGLにいた時でさえも。

ラミナ達と敵対した時も、初撃でもっと威力が高い弾丸を使っていたら、ラミナとキルアはこの決戦に参加出来なかった可能性すらあったのだ。

いや、もしそうなっていたら、ラミナはペイジンでアモンガキッドにやられ、キルアは地底湖でラミナの救援も間に合わず死んでいただろう。

ラミナがイカルゴにプレッシャーをかけ、キルアに見定めを委ねたのはこの可能性に思い至っていたからだ。

だが、ラミナはすぐにイカルゴの性格から人を殺した経験がないに等しいと見抜いたので、それ以降は何も言わず、イカルゴに期待することも止めたのだが。

もし、イカルゴが殺しを躊躇しない性格であれば、ぶっちゃけラミナは一番イカルゴを気に入っていたことだろう。旅団に勧誘した可能性すらある。

あれだけの超正確な超遠距離狙撃を為す狙撃手など、それこそ世に5人といないだろうから。ブラールの能力と組み合わせ、ティルガと組ませれば最強のトリオになるとすら考えていた。

実際はゴン以上に殺しを忌避する性格だったために夢物語となったのだが。

そして、それをモラウ達にも見抜かれていたために、イカルゴは戦鬪班から外されたのだ。

そのことをイカルゴ自身も理解していたが、やはりどこかで受け入れがたい思いがあった。

(俺だって……！ 俺だってあいつらの仲間だ！ 仲間が護衛軍や師団長相手に死ぬ気で戦ってるのに、俺が怖気づいてどうする!?)

己を叱咤しながらイカルゴはトラックを走らせる。

(だからこそ……だからこそ！ 必ずパームを見つけて連れて帰る！！)

イカルゴは資料や写真、ナツクル達の話でしかパームのことを知らない。

だが、イカルゴはこの宮殿に身一つで潜入し、今も命を懸けているパームを心の底から尊敬していた。

あの化け物達を相手に潜み、探り、後から来るであろう仲間達の為に道を切り開こうなど、どれほどの恐怖と戦っているのだろうか。

パームを尊敬しない理由の方が思いつかない。

そんなパームを救う。

イカルゴにとつて、戦場に出て命を懸けるには十分な理由だった。

(義務でも任務でもない！ 救いたい！ 救けると決めたから!!)

イカルゴの……覚悟は決まった。

時は戻って。

ウエルフィンが吹き飛んできた瓦礫の陰に隠れていた。

(くそっ……いー！ ビトルファンだけじゃなくてユピーの奴も暴走してやがんのか……!!)

ヂートウが殺されたのを見た瞬間、ビトルファンとテイルガの戦いから逃げ出したウエルフィンは、弱そうなイカルゴを狙おうとしたが、ビゼフのことを思い出して慌てて探し始めた。

しかし、携帯電話を持っておらず、臭いも捉えられず。

轟音や爆音、雄叫びが聞こえる度に焦りが強くなっていった。

ネフェルピトーの【円】が未だに復活せず、アモンガキツドの念獣も消え、シャウアップの姿も見えず。

そんな時にモントウトウユピーの叫びと宮殿の崩壊である。

ウエルフィンはテイルガの言葉を思い出し、本当に王や護衛軍達人間達に敗れるのではないかと疑心暗鬼に襲われていた。

(どうする……!?! ビゼフを見つけたとしても、それは王や護衛軍が生き残らなきや意味がねえ！ だが、俺が援護に参戦したとしても護

衛軍や王から邪魔者扱いされて殺されたら元も子もねえ……)

どちらが勝つか読めなくなってしまうた今、ウエルフィンはこちらに付くべきかで大きく揺れていた。

この選択で己が運命が決まると言っても過言ではないのだから当然だ。

(くそっ……い！ どうすりゃいい……い！ ……いや、待てよ。どつちに傾くにしろビゼフは見つけておくべきか?)

王達が勝ったならば当初の予定通りにビゼフを操って『影の王』になればいい。

人間達が勝ったならば……ビゼフを手土産に取引すればいい。

ビゼフが王達の暴虐の陰で好き勝手していたことは知られている可能性が高い。

最初の無差別攻撃を考えれば、ビゼフの生死は重要とされていないのがあるりと分かる。しかし、内情を知っている唯一の人間を捕らえて損はないはずだとウエルフィンは考えた。

しかし、

(だが、本当にあんな奴が取引材料になるか？ ここにいるのはハンター達であって為政者でも何でもない。ハンター達がこの国のことなんてどうでもいいと考えていれば、ビゼフはただの裏切り者なだけでは……?)

懐疑主義のウエルフィンには、考え付いたこと全てが疑わしくなってしまう。

命が懸かっているのだから、尚の事その疑り深さは度を増している。

(ちくしょう！ とりあえず、ビゼフを見つけれ！ 奴が生きてるか死んでるか分かんねえままじゃ決められるもんも決められねえ！)

今悩んでいる事的前提は『ビゼフが生きている』ことが条件だ。

死んでいたら『影の王』はもちろん、取引どころでもない。

ウエルフィンは周囲を注意深く見渡しながら瓦礫の陰から動いて、建物の中に入る。

この間、一度としてブラウーダのことを思い出すことはなく、それ

はウエルフィンにとって仲間など存在しないことを示していた。

ナツクルとテイルガ、そして合流したブラールは崩壊した建物の陰に潜んでいた。

ブラールの鼻を介してモントウトウユピーとビトルフアンの戦いを監視していたのだ。

「ブヴォオオオン!!」

完全に獣になったビトルフアンが巨大な拳をモントウトウユピーへと振り下ろす。

モントウトウユピーはその拳を軽やかに後ろに跳んで躲し、

「いい加減に鬱陶しんだよオオ!!」

再び拳を巨大化してビトルフアンの顔面に叩きつける。

しかし、ビトルフアンは僅かに仰け反っただけで、そのまま頭突きを放った。

モントウトウユピーはまた後ろに下がって躲したが、ビトルフアンは頭を下げた姿勢で止まり、角を突き出した体勢になる。

そして、その体勢のままモントウトウユピーに勢いよく突進する。

モントウトウユピーは両腕で角を受け止めるも、勢いまでは止められなかった。

「いい加減にい……!!」

モントウトウユピーは額に青筋を浮かべながら、背中から新たな両腕を生やして両手を組み、ビトルフアンの後頭部目掛けて全力で叩きつけた。

「しやがれエエ!!」

「ブヴォオオア!?!」

ビトルフアンは勢いよく顔面から地面に叩きつけられる。

もはや怪獣同士の戦いになりつつある状況に、ナツクルとテイルガは冷や汗が流れ始める。

「……本当にあの戦いに飛び込むのか?」

「ユピーは爆発する直前にオーラを溜めて身体が膨れ上がる。その隙

を狙う。一発ぶん殴って、そのまま駆け抜けければ巻き込まれねえはずだ」

一か八かの作戦にしか感じなかったが、ナツクルの自信に満ちた言い方に、テイルガは信頼してビトルファンの足止めに集中することにした。

ナツクルとテイルガは身を低くした状態で、クレーターの傍まで近づく。

モントウトウユピーとビトルファンは2人に気付かず、殴り合っている。

「アアアア!! クソがアアア!!」

明らかにモントウトウユピーは苛立っている。

ナツクル達にはそうとしか見えなかった。

しかし、

(いいぞ!・もつと俺を苛立たせろ! 怒らせろ!! 奴らを誘い出す隙を作らせろ!!)

モントウトウユピーはビトルファンを相手にしながらも、鬱陶しいとは思っていても、思考は努めて冷静だった。

更に意識は今もナツクルに向けられていた。

最初の爆発自体は言い訳のしようもなく、怒りで我を忘れたものだ。

モントウトウユピー自身もまさかあんなことが出来るとは思ってもいなかった。

だが、モントウトウユピーは爆発後の虚脱感、怒りをぶちまけた開放感の後に来た喪失感によって、一瞬で頭が冷え、冷静に何が起こったのかを分析していた。

それは本能と使命第一で動くモントウトウユピーからは考えられない、されど本能と使命で動くモントウトウユピーだからこそ至った境地。

『今の力を、感情を、如何にして王の為に役立てることが出来るのか』

ただそれだけに、思考の全てを費やした。

本来のキメラアントには存在しなかった自我を、個性を得たからこそ『澱み』。

レオルの敗因となった自我によるこだわりとも言える『キメラアントとしてのノイズ』。

それすらも、モントウトウユピーは排除すべきものではなく、役立つべき己の力として捉えていた。

それは他の蟻とは異なり人間の要素を極限まで薄めたからこそなのか、純粹にモントウトウユピーという存在の力なのか、それは本人すらも分からない。

ただ言えることがあるとすれば。

今、戦場で最も成長しているのは、モントウトウユピーである。

(アイツは膨れ上がった爆発寸前の俺を見て、身を翻して逃げ延びるだけの時間があった。つまりそれは、奴にとって唯一俺を全力で攻撃する隙。つまり、奴は再び俺を爆発させようとするはず。だから……俺が怒りで我を忘れた演技をすれば、奴は必ず俺の前に現れる……！)

そう考え、怒りに捕らわれたままのフリをしていたところに、ビトルファンが乱入してきた。

モントウトウユピーはそれでも乱れず、邪魔と思わず、利用しようとして冷静に考えた。

(我を忘れた同士で潰し合わせ、邪魔に思えるコイツに俺が苛立ち、爆発する瞬間を狙うってどこか？ いいぜえ、乗ってやるよ)

テイルガとナツクルの策を瞬時に見抜き、モントウトウユピーは己が内で暴れ回るオーラの感覚を掴もうと全神経を注ぐ。

ビトルファンの攻撃は確かに強烈だが、モントウトウユピーからすれば全然遅いし、明らかに我を忘れているために攻撃が単純なので、防ぐのも躲すのも苦労しない。

硬いのが少し苛つくが、それはそれで己の力の糧となる。



待ち構えるつもりでいるモントウトウユピーにはまだまだ余裕があった。

一方、ナツクルは……。

【天上不知唯我独損】を発動して、もうすぐ5分経つ!! そうしたら貸したオーラは7000に迫る!! この数値なら、直撃さえ避ければ一括返済されることはないか……!? 最悪なのは、直撃を喰らってポットクリンが消滅し、尚且つ俺自身がダメージを受けること……! それくらいなら、このままジツとして、ビトルファンと相討ちを待つ方がいい。だが! それにはまだ後10分以上はこのまま待たなきゃならねえ!! シュートは……シュートはそれじゃ保たねえ……!!) )

そう、今最も追い詰められているのは……ナツクルの方だった。ただの意地とプライドによる約束。

勝つためなら無視しても問題ない些末なものだ。

しかし、戦いの恐怖を克服した、あれだけボロボロになるまで一人で戦い続けた、いつもは現実的に自分を諫めてくるはずのシュートが言ったのだ。

『チクシヨウ』と。

『頼む』と。

それまでの全てを見てきたナツクルには、それを無視するなど、絶対に出来なかった。

(ケリがつく前に、シュートが!! 死んじまう!!!)

ナツクルは身を低くしたまま走り出し、モントウトウユピーの背後に回り込もうとした。

いきなり動き出したナツクルにテイルガは一瞬目を丸くしたが、すぐに表情を引き締めて反対方向に走り出してビトルファンの足止めする準備を行う。

モントウトウユピーは肩口に薄く開いていた眼から、標的が動き出したのを見逃さなかった。

(来たなあ。いいぜえ、来いよ!)

「オウラアア!! 俺を忘れんなよ、単細胞バカがあああ!!」

ナツクルが叫んで、自分の存在を知らしめながら挑発する。

挑発であることをモントウトウユピーは分かっていたが、それにわざと乗る。

「ウルツセエエ!! ゴミ共ガアア!!」

モントウトウユピーは猛りながら、ビトルファンを押し飛ばす。

ビトルファンは後ろに滑りながらも全力で踏ん張って耐える。

「ブヴァヴァオオオオオ!!」

すでにビトルファンの身体はウボオーギンやフランクリン、そしてブハラすら超えるレベルまで巨大化していた。

しかし、その動きが徐々に緩慢化してきており、大雑把になってきていた。

故に一度バランスを崩すと体勢を立て直すのに、少し時間がかかる。

モントウトウユピーはその隙を逃さずナツクルに身体を向け、ナツクルもモントウトウユピーに身体を向ける。

「はっ!! ゴミはこれから這いつくばって死ぬテメエだよ、ゴキブリ野郎オオ!!」

ナツクルは挑発しながらモントウトウユピーに向かって駆け出す。

モントウトウユピーはナツクルの挑発にキレたフリをしながら、オーラを身体中に満たしながら体を膨張させた。

ナツクルは3、4歩でモントウトウユピーへと迫り、拳を振り被りながら飛びかかる。

ティルガは全身に顔のようなものをいくつも浮かべながら体とオーラを膨張させるモントウトウユピーに、怖気が走りながらもビトルファンに向かって念弾を放つ。

だが、その直後、『あれは何か違う!!』とティルガの本能が叫んだ。根拠はない。しかし、あのモントウトウユピーの膨張に強烈な違和感を感じ取ったのだ。

しかし、それをナツクルに告げる余裕も時間も、すでになかった。ナツクルは、そんなティルガの察知に気付くわけもなく、ただただ目の前の化け物を殴り飛ばすことだけに集中していた。

(行ける!! このタイミングなら確実に一発! いや、二発!! 奴の顔面に渾身の拳をぶち込んで爆発前に回避できる!!)

ナツクルはモントウトウユピの膨張スピードと、先程爆発した直前の膨張度合いを比べて、確信していた。

(喰らえブタ野郎!! まずはシユートの分! 次もシユートの分だ!!)

ナツクルはそう考えながら、拳に力を込めていた。

(しかし、おかしーなオレ。アイツのことそんな好きじゃねえのに、いやむしろ、いけ好かねえ奴とか思ってたのに、いつの間に俺の中で親友までランク上がって、なんでこんなムキになって敵討とうとしてんだ? いや、アイツまだ死んでねえけど。ま、やっぱ一緒に死線潜つたのがデケエな。命懸けで何かを共に闘れる奴なんて無条件で親友だろ。あ、でもそれじゃあラミナも親友になっちゃまうな。やっぱ無し。でも、シユートは親友だろ。なのに、このクソツタレエイ! そんなシユートの覚悟を足蹴にしやがって、死ぬ気で戦って殺されることすら覚悟してる奴をシカト!? 武士の情けもねえのか!! 蟻野郎!!)

ナツクルは何故こんなことを考えているのか理解できずに、ただただ怒りが湧き上がっていた。

(うおおお!! マジますますムカついてきたぜ!! 俺の分も含めて三発殴る!!)

そう結論付けたことで、ようやく現状に違和感を抱く。

(って俺スゲエな。今人生で一番頭回転してんじゃね? まだ拳振り上げてる途中? もう300文字くらい考えてつけど!? ……あれえ? これってアレじゃね? 時間がゆっくり……周りがスゲエスローになるって……死ぬ前の……)

本能的に極限状態になることで起こる時間凝縮現象。

その事実気付いた直後、一気に時間が動いた。

膨張していたモントウトウユピの身体が一気に萎んだのだ。

そして喘いながら右腕のみを太くして、拳を握り締めた。

「っ!?」

(膨張を……途中で止め……!)

(しまっ……! 罨……!?)

ナツクルとテイルガは目を見開いて、何が起こったのかを瞬時に理解した。

しかし、ナツクルはもう地面から足が離れており、拳を止められる段階でもなかった。

そして、テイルガも念弾を放った直後故に、ナツクルを助けるために動く体勢になかった。

(やられた……コイツ、クールだった!!)

(あの一回で……会得したのか……!?)

(止め……られねえ! ……悪い、シユート。しくった……!)

振るわれようとしている巨大な拳と、籠められたオーラ。

それにナツクルはどうしようもないことを理解した。

(これは……利息分じゃ到底済まねえ……。終わった……)

数十万のオーラを持つモントウトウユピーの手加減無しの一撃だ。

数千程度の利息など、余裕で一括払い出来るだろうことは嫌でも分かかってしまった。

(シユート……ボス……みんな……。後は……頼む!!)

「ナツクル!!!」

テイルガの声が遠い。

巨大な拳が迫る風切り音の方が大きかった。

視界を拳が覆った——その時。

モントウトウユピーに——雷が落ちた。

## #147 カミナリ×ト×カミカゼ

突如モントウトウユピーに降り注いだ落雷は、完璧に怪物の動きを止めた。

何が起きたのか理解が追い付かないナツクルだったが、動きが止まったモントウトウユピーを目にして、

「ううおおおおお!!」

全力で拳を宿敵の顔面に叩き込んだ。

モントウトウユピーは一切防御することも避けることもなく、無抵抗で殴られた。

(雷?! 完全に硬直してる!!)

状況を瞬時に理解したナツクルはこのチャンスを見逃さなかった。

ナツクルは拳を振り被り、

「ふええあああああ!! 膨らんでなきやテメーなんざあ!! 何発でもオオオオ!!」

ただただ両腕を振り回して、連続でモントウトウユピーの顔面に拳を叩き込む。

モントウトウユピーは未だに動けない身体と思いがけない事態に完全に混乱して、まともに反応することが出来なかった。

痛みがあれば、まだ反応したかもしれないが、ナツクルの能力によりダメージが全くないことも混乱を助長させていた。

そして、ナツクルは地面に下り立つと同時に片足だけで跳び上がり、渾身の右飛び蹴りをトドメとばかりにモントウトウユピーの顔に突き刺した。

顔面を蹴った反動を利用して、モントウトウユピーから離れた。

着地と同時にナツクルはなりふり構わず背を向けて、全力疾走で駆け出した。

(やった!! やった!! やった!! 無理! もう無理!! やつべえ俺完全に死にかけて!! 花畑見えた!! まずはシユートを病院に連れ

て行かねえと!! ツツシヤア!! 8 発入れてやったぜえ!!)

「ビヤツハーハハハ!! ウオーーホオウ!!」

ナツクルは死にかけたり、思う存分モントウトウユピーをぶん殴ったり、ヤバかった恐怖を振り払うために限界突破ハイテンションで湧き出す感情のままに雄叫びを上げてジャンプする。

その様子を見ていたティルガはホツと息を吐く。

「全く……心臓に悪い。それにしてもあの雷は……」

ティルガは空を見上げようとしたが、視界の端に突然人影が現れたのを捉えてすぐさまそちらに視線を向ける。

そこにいたのは——キルアだった。

「キルア……!? (何故ここに……ゴンはどうしたのだ?)」

クレーター傍に両手をポケットに入れて佇むキルアは、冷え切った瞳でモントウトウユピーを見下ろしていた。

静かに纏う殺気にティルガは一瞬背筋に寒気が走った。

(な、なにがあつた……? ゴンに何かあつたと言うのか? いや、だったらこんなところに来るわけがない……)

ティルガが混乱している逆に、モントウトウユピーは徐々に冷静さを取り戻していていた。

モントウトウユピーはナツクルの猛攻を受けたというのに、倒れることなく僅かにバランスを崩すだけだった。

(……何が起きた? 完璧に奴をハメたはず……何が起きた? ……決まってる。別方向からの攻撃に、気付かなかつたのだ! あり得るか!?! あれほどの電撃を真上から喰らう直前まで全く気付かないなど……!)

そう考えるモントウトウユピーの頭に、とある事が思い浮かび、傍にいたポットクリンに意識を向ける。

(そうだ……その前もそうだ。この目障りな生物も突然俺に憑いた。なんの前触れもなく——)

モントウトウユピーがとある存在に思い至ろうとした、その時。

「ヴヴァボオオオオオン!!」

ティルガの攻撃から回復したビトルファンが、モントウトウユピー

の無防備な背中に拳を叩き込んだ。

「ガッ——!?!」

流石にビトルフアンの強烈なパワーで不意打ちを喰らっては堪え切れず、前のめりに吹き飛ばされた。

まさかの光景にビトルフアンの暴走を知らないキルアは訝し気に眉を顰める。

「ぐうー・ちい!! いい加減、鬱陶しいんだヨオ!!」

モントウトウユピーは今度こそ苛立ちを抑えられずに、拳を巨大化して振り返りながら右腕を振り、アッパー気味にビトルフアンの胴体を全力でぶん殴った。

ビトルフアンは大きく吹き飛ばされて、クレーターの外へと、ティルガの近くへと落下する。

「ぐっ……! あの大巨体をここまで殴り飛ばすなど……化け物め!」

「ブガバオオオオ!!」

ビトルフアンはすぐに起き上がり、ティルガに目もくれずに再びモントウトウユピーへと突撃していく。

それを見送ったティルガは、

(……ナツクルはもう無茶をすることはないだろう。我も目的は達した。このままここで潜み、ビトルフアンの標的が我に移ったら元も子もない。問題はキルアだが……)

キルアに視線を向けるが、キルアはそこから動く気配はない。

(……だが、先程まで匂いも気配もなかったことから、恐らくメレオロンが近くに潜んでいるに違いない。……キルアであればナツクルほどの無茶はすまい。我はイカルゴの方へと一度向かうとしよう。ブロヴーダやウエルフィンの動向も探らねば)

ティルガはキルアの様子に一抹の不安を覚えるも、今は己が役目に集中することにした。

ティルガが去っていくのを横目で確認したキルアは、すぐに意識をモントウトウユピーへ戻す。

(何度も爆発音がしたから来てみたものの……随分と厄介なことに

なってるな)

キルアはゴンの元を離れた直後にメレオロンと合流したのだ。正確にはゴンの叫びやラミナとアモンガキッドが飛び出したのを見て、そこにキルアがいると分かったメレオロンがやってきた。

メレオロンからナツクルやシュートたちのことを聞き、応援を頼まれたキルアはそれに頷いて、「神の共犯者」で気付かれぬように移動してきたのだった。

到着とほぼ同時にナツクルがモントウトウユピーに突撃を仕掛けるところだったので、詳しい状況までは把握出来ていなかった。

ビトルファンが暴走してるの見れば分かるが、聞いていた話とは見た目の印象が全く違う。

メレオロンもビトルファンの変貌ぶりに驚いており、しかも仲間割れをしているので何が何だかと言う状況だった。

(ティルガもいたってことは、ビトルファンを連れてきたのはティルガだな。確かにあの感じはそう簡単に倒せそうにないな。だが、敵味方の区別も出来ない状態……。だから、モントウトウユピーにぶつくて互いに消耗させようとしたってわけか)

状況からティルガの作戦を正確に読み取ったキルアは、静かにクレーターへと足を踏み入れる。

モントウトウユピーはそれを横目―正確には肩に出現させた目―でキルアを観察しながら、ビトルファンの相手をしていった。

(アイツはさつき階段で会った……)

キルアはゆっくりと両手をポケットから出す。

「取り込み中悪いけど……これからアンタらにすること全部。ただの八つ当たりだから」

バチバチ！とオーラを電気に変化させて纏うキルア。

その姿と言葉に訝しんだ瞬間、

キルアの姿が消えた。

「!! (消え――)」



モントウトウユピーが目を見開いた瞬間、キルアが自身の足元に現れていた。

視線をキルアに向けて攻撃に移ろうとしたが、それよりも速く、キルアの右手がモントウトウユピーの腹に当てられる。

それと同時にモントウトウユピーの身体に強烈な電流が迸る。

「ぐがああああ!？」

予想外の攻撃に悲鳴を上げたモントウトウユピーだったが、無理矢理拳を振るってキルアに攻撃しようとしたが、次の瞬間にはキルアが目の前に右足を振り被った体勢で跳び上がっており、気付いた時にはキルアの蹴りがモントウトウユピーの頬に叩きつけられていた。

モントウトウユピーはよろめきながら再び体に走る電流に、体が強張ってしまう。

キルアは更に追撃をしようとしたが、そこにビトルファンが襲い掛かってきた。

「ブバオ、オン!!」

「【神速】『疾風迅雷』」

キルアは相手の攻撃に反応する『疾風迅雷』でビトルファンの攻撃を躲して、懐に滑り込む。

そして、先程のモントウトウユピー同様に電気を溜めた掌をビトルファンの鳩尾に押し当てて、電撃を浴びせる。

「ヴオバババア!？」

(ユピーと違って、見た目のまんま動きはトロイ。でも、パワーはユピーと同等で、今の触れた感覚からするとかなり硬い……。接近戦は間違いなく不利。ティルガじゃ相性最悪だ——)

キルアがビトルファンの分析をしていると、ビトルファンの身体とオーラが僅かに膨れ上がったのを感じ取った。

(今のは……。もしそうなら、ティルガがコイツをユピーにぶつけさせたのも納得だな)

今の一瞬でキルアはビトルファンの能力の概要を簡単に理解して、現状に納得した。

しかし、キルアは身体を変化させようとするモントウトウユピーを

視界に捉えて意識を切り替える。

『電光石火』

一瞬で体に纏う電流が強まったと思った瞬間、キルアはモントウトウユッピーの目の前に移動して、電流を浴びせる。

「っ——!!?」

モントウトウユッピーは身体が硬直して呻き声を出すことも出来ず、ちよつとでも動こうとした次の瞬間にはキルアに攻撃されてしまう。

それだけでも面倒だと言うのに、

「ブヴァオオオオ!!」

ビトルファンが角を突き出してキルアに突進したが、キルアはそれを華麗に躲し、その先にいたモントウトウユッピーに突っ込んだ。

モントウトウユッピーはギリギリでビトルファンの角を両手で掴んで受け止めるが、次の瞬間にキルアがビトルファンの背中の上で一瞬で現れ、背中に電流を叩き込み、そのまま流れるような超高速の動きでモントウトウユッピーの頬に蹴りを浴びせる。

ビトルファンは身体が上手く動かせなくなって、そのまま顔から地面に倒れ落ち、モントウトウユッピーも身体が硬直して角を掴んでいる手を離せず、倒れるビトルファンに引っ張られてバランスを崩す。

それでも意地のように膝が地に突く前に無理矢理手を放す。

だが、バランスを崩すのまでは耐えられず、僅かに前のめりになってしまう。

その隙をキルアは見逃さずに、モントウトウユッピーの懐に一瞬で飛び込んで、連撃を叩き込んだ。

「っ——!!」

モントウトウユッピーは全く手も足も出せないと言う、生まれて初めての状況に戸惑いを感じていた。

（一体こりゃあ、どういうことだ!! 総合的な力と言えば……どいつもこいつも確実に俺の十分の一以下だ。なのに……分からねえ。手も足も出ねえ……!）

考えられるのは念能力のみ。

ただそれだけで、取るに足らないと思っていた能力だけで、今自分

は手も足も出ない。己が使命を邪魔されている。

(深いな……オーラって奴は。……やべえな、ちよつと面白くなつてきたぜ)

「くつくつくつ」

突然笑い出したモントウトウユピーに、キルアは訝しむ。

(なんだ? いきなり笑い出しやがった。……それにしても、これだけぶん殴つても全つ然倒れる気配がねえ……! 『雷斬』使う隙が見つからない!)

まだ『雷斬』を発動するには十数秒の溜めの時間がある。その間は『疾風迅雷』『電光石火』は使えない。

1秒も満たずに硬直から回復し、回復した瞬間には攻撃しようとする以上、『疾風迅雷』は絶対に使えるようにしておかないといけない。それに加えてビトルファンもいる。モントウトウユピー同様に一撃も喰らうわけにはいかない攻撃の使い手もいるため、『疾風迅雷』は使えるようにしておく必要がある。

更に更に『雷斬』は発動すると、電力を使い切ってしまう。ビトルファンであれば、まだ逃げ切る隙はあるだろうが、モントウトウユピーを仕留められなければ確実に反撃されて殺されてしまう。

なので、キルアは『雷斬』を使うタイミングを見つけられずにいた。すると、充電が切れたようでキルアが纏っている電流が消える。

「っ! (やべ……もう全部使いきっちゃった)」

『落雷』を使い、『雷掌』『疾風迅雷』『電光石火』を絶え間なく何度も使用したためにあつという間に使い切ってしまったのだ。

キルアはすぐさま跳び下がってモントウトウユピーから距離を取る。

モントウトウユピーは逃げの体勢に入ったのを見て、追いかけてようとした。

「待て!! テメエは逃がさねえ!!」

だが、その時ビトルファンが起き上がった。

「ヴァオ、オオオン!!」

ビトルファンは起き上がりながら右裏拳を放って、モントウトウユ

ピーを殴り飛ばした。

「ぐっ！ つとオしいんだよオ!!」

モントウトウユピーは邪魔されて怒りに吠えて、巨大化して腕でビートルファンを薙ぎ払った。

ビートルファンは無茶な体勢で攻撃したため、簡単にバランスを崩して仰向けに倒れる。

モントウトウユピーはすぐさまキラアを追いかけ、猛スピードでクレーターの外に出たのだが……。

すでにキラアの姿はそこにはなかった。

「なっ……(これだ!! まるで存在がなかったみてえに、この場から消えやがった)」

先程のように超高速で離脱したとしても、その痕跡や気配があるはずだ。

だが、モントウトウユピーは全くと言っていいほどに、それを見つけれなかった。

そもそも、その超高速移動が出来なくなったから逃げ出したはずなのだ。もちろん、離脱の為に力を残していた可能性もあるが、それでもあの電流が発生していた痕跡も感じられない。

(やはり、いる！ 奴らが突入してきた時や目障りなコイツが出てきた時のように……奴らの中に一匹！ 自由に出たり、消えたりする奴が!!)

モントウトウユピーはようやく護衛軍の中で唯一、まだ他にも隠れている存在に気付いた。

そのすぐ傍ではキラアとメレオロンが姿を消して、その場から急いで離れようとしていた。

結局モントウトウユピーは、キラアもメレオロンも見つけることも出来ず、苛立ちが湧き上がる中でビートルファンの相手をする事になるのだった。

その少し前、イカルゴは地下倉庫エリアD隠しエリアに到着していた。

運よく扉が開いており、イカルゴはトラックから降りて扉の前に立った。

(扉が開いているのはラッキーだった。恐らくパームに眠らされたビゼフが、慌ててパームを追いかけて閉め忘れた可能性が高いということだろうが……おかげで火薬庫から大量の爆弾や武器で扉を破壊する必要はなくなったな)

この地下倉庫はシエルターも兼ねているため、扉は当然防弾防火仕様になっている。

開けるには当然ながら暗証番号が必要で、その番号はビゼフ以外に知らない。

なので、もしビゼフが扉を閉めていたら、イカルゴはこの扉をあらゆる手段を使って破壊しなければいけなくなっていた。

しかし、この状況をイカルゴは全く喜べなかった。

(それはつまり……パームはもうここにはいないという事に他ならない)

イカルゴは【凝】で周囲を見渡すが、手掛かりは何も見つけられなかった。

もちろん、別の理由でビゼフが扉を閉め忘れた可能性はあるが、それならばそれでパームは必ず行動に移しているはずだ。

(もしかしたらここにも何かメッセージを残しているかと思っただが……いや、ここは護衛軍に見つかる可能性が高いからか?)

イカルゴはエリア内に入り、周囲を見渡す。

変な住宅地を模した隠しエリアには数軒の一軒家が建っており、その内の一軒の扉が僅かに開いていた。

「あそこかー」

イカルゴは走り出して、その家に駆け込む。

入り込むと同時に【凝】を発動し、家内をくまなく搜索する。

そして、寝室に入ったところで、部屋の隅に輝く文字のようなものを見つけた。

「あつたー」

それは『念文字』というオーラで記した文章である。

変化系と放出系の鍛錬を積まなければならぬため、あまり使われない連絡手段ではあるが、念が使えないビゼフ相手であれば、下手な紙や物を利用した暗号にするより安全で確実だと判断されたのであった。

イカルゴは壁に歩み寄り、目を凝らして念文字で記された文章を読む。

(……『宮殿へ。決行時まで連絡無き場合』……『亡き者として、行動されたし』……！)

イカルゴは読み終えた暗号の内容に歯を食いしばる。

「くそっ……！」

可能性が高いことは最初から覚悟していたが、やはり叩きつけられた事実胸に鋭い痛みが走る。

突入からすでに5分以上経過しており、あの攻撃と自分達が問題なく突入出来たことを考えればパームの役目はすでに終わっている判断できる。

(まだだ！ まだ死体を見たわけじゃないし、戦いも終わっていない！ ここでの仕事は終わった！ ならば次は……！)

イカルゴはパームの救出に失敗、または救助は不可能と判断した場合、モラウとラミナから次の指示をされていた。

『もしもパームの死……あるいはそれに準ずる事態に際したら、他にビゼフに連れ去られた女達の安全を確保し、テイルガ達を手助けするか、負傷者を助け出して脱出する手段を確保してくれ』

『お前の遠距離狙撃とブラールの梟を組み合わせれば、援護狙撃くらい出来るやろ。殺さんまでも脚を撃ち抜いて行動不能に追い込むくらいはせえや』

「……は宮殿より離れているし、壁もかなり分厚くて頑丈だ……。女性達は下手に連れ出すより、もう少しここにいた方が安全だろうな」  
それにそもそもイカルゴの姿ではまともに説得も出来ない。

なので、今は下手に声をかけずにここを離れた方がいいと判断してトラックに戻る。

すると、

「ホーッ！ ホーッ！」

ブラールが付けてくれた梟が突然鳴き出した。

それにイカルゴは目を丸くするも、素早く車内に置きっぱなしだったブラールの羽根を手にとって、目を瞑る。

そこに映ったのはイカルゴが地下に下りてきたエレベーター。

そして、その前にいたのは——ブロヴーダだった。

ブロヴーダはティルガとビトルファン達が外に飛び出したすぐ後に、エレベーターに乗ってイカルゴを追って来たのだ。

イカルゴを追って来たのは、地下倉庫を狙う理由を探るためだ。

王や護衛軍を狙ってきたと言うのに、地下に下りる理由をブロヴーダは思いつかなかったのだ。

ブロヴーダはビゼフが連れ込んだ女性達の存在を知らず、地下倉庫の奥にあるのは食糧庫や武器庫くらいで、この状況でわざわざそこに向かう理由など普通に考えれば存在しない。

武器の調達が目標だとしても、王や護衛軍に今更武器が通じるとは思えない。

故にブロヴーダは地下で待ち受け、地上に戻る前にイカルゴを仕留めることにしたのだ。

地上に戻るにはブロヴーダの目の前を必ず通らなければならない。車であろうとも念弾で吹き飛ばせば問題はないと考えたのであった。

（くっ……！ やはりティルガとブラールだけじゃ全員は抑え込めなかったか……！ でも、流石にわざわざここまで来る気配はない。……当然か。ここから出るには奴のいる通路を通らなきゃならない。ブロヴーダの能力は詳しくは知らないが、エレベーターに乗り込む直前に見た感じでは鉄から放たれる連射できる念弾）

イカルゴは己が乗ってきたトラックを見る。

このトラックではブロヴーダの念弾に耐えられないことは容易に予想できる。

(ダメだ……！ このトラックじゃブロヴーダに近づく前に吹っ飛ばされる。荷台に火薬を積んで突っ込んでも意味はない。むしろ、俺が車から飛び降りても爆発に巻き込まれるだけだ)

だが、攻撃するためには近づかなければならない。

(俺の狙撃の方が遠距離から攻撃出来ると思うが、連射は出来ないし、精密射撃は難しい。……ここじゃ手が少なすぎる！ 一度武器庫に行ってみるか！)

武器庫の暗証番号は亡命した高官から聞き出しているため、扉が閉まっても開けることは出来る。

トラックで素早く移動して、武器庫を開ける。

そして、中にある物を確認したイカルゴは……ある作戦を思いついた。

「かなり博打だが……どうせ無策で突っ込んでもヤバイのは変わらない！ 俺もキルア達の仲間なんだ！ ここでブロヴーダを倒せば、テイルガ達はかなり楽になる！ 命を懸けるには十分だ！」

そして、イカルゴは早速準備を始めたのだった。

ブロヴーダはエレベーターから50mほど進んだところで待ち構える。

時折通路が揺れて、外の戦いの激しさが窺える。

「はく……上、ヤベエな。他にどんな奴らが来てるのかは知らないが、護衛軍相手によくやるぜ。……こりやテイルガの言葉も、あながち嘘ってわけじゃなさそうだな……」

ブロヴーダが地下に下りてきた一番の理由は『地上の戦いに巻き込まれたくないから』であった。

イカルゴの狙いを探り、阻止するのも確かではあるが、それよりもビトルファンやモントウトウユピーに殺されたくないかったのだ。

突如宮殿を貫く謎の攻撃に、目の前で仲間だと思っていたビトルファンに殺されたチートウを見れば、恐れるのも仕方がないことではある。



「あんな死に方なんて冗談じゃないぜ。とりあえず、あのタコ殺して手柄は確保しといて……護衛軍が負けそうだったら、とつととんずらさせてもらおうとするかねえ」

ブロヴーダも当然ながら王や護衛軍に忠誠を誓っているわけではない。

あくまで死にたくないからここに来て、王達に逆らえないから従っているだけだ。

なので、旗色が変われば裏切ることなど何もおかしなことではない。

「でもなく……ここを出たところで、どこに逃げるって話だよなあ。俺の見た目じや人間の街に潜り込めねえし」

ブロヴーダは人間だった頃の記憶はほとんど憶えていない。

故に人間の街に憧れも帰属意識もなく、純粹に『己はキメラアント』だと自覚していた。

だからこそ、冷静に自分は人間社会に居場所はないことを受け止めることが出来たのであった。

「くっそ……当てが外れたぜ。今更降伏しても、コルト達みたいな待遇は望めねえだろうしなく」

王達が勝てばキメラアントでも生きていける国が出来る。

だが、人間達が勝てば王に従って人間を殺し続けたブロヴーダがまともな扱いをされるわけがない。

まず処刑は間違いないし、良くて死ぬまで隔離。最悪で体を弄られるモルモット。

逃げ出したとしても、人間に見つかれば速攻で通報され、追手が放たれるだろう。永遠に追われて逃げて隠れる生活は想像するだけだからキツイ。師団長である自分を殺せる存在などいくらでもいることは、嫌という程思い知らされてしまったのだから。

ぶっちゃけ、どれもご免なので王側に就くしかないのだが、未だ戦いが続いている現状では心が揺れ動くのも仕方がない話だろう。

ブロヴーダがため息を吐いて、どうするか悩んでいると……通路の奥から音が響いてきた。

「お……来やがったな」

両手の銃を開いて、やってくるであろうトラックにいつでも念弾を放てるように構える。

しかし、

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!!

「……あ?」

耳に届いた走行音が明らかにおかしかった。

「なんだ? この音……」

ブロヴーダは訝しみながら目を凝らす。

そして、視界に映ったのは——装甲車だった。

「装甲車あ!! ぶ、武器庫にもあったのかよ!! くっ!!」

ブロヴーダは銃を開いて念弾を連射する。

だが、念弾でも装甲を撃ち破ることは出来ず、僅かにスピードを落とすだけで終わった。

「ぐっ……! (硬え……!)」

依然として猛走してくる装甲車に顔を顰めるブロヴーダ。

(あれでこのまま外に逃げる気か!! くそっ! タコ野郎が! ……でもなあ!!)

ブロヴーダは目の前まで迫った装甲車を左に飛んで避け、すれ違いざまに装甲車の右側面とキャタピラ周辺に念弾を連射する。

やはり装甲部分はビクともしなかったが、車輪部分に念弾が直撃して外れ、キャタピラが空回りを始める。

装甲車は右に曲がってエレベーター横の壁に追突して止まる。

ブロヴーダはそれに一息吐いて、口を開こうとした時、再び背後からエンジン音が聞こえてきた。

目を丸くして振り返ったブロヴーダの眼に映ったのは、猛スピードで迫るトラックだった。

「はあ!? 他にもまだ仲間がいたのかよ!? って……は? 無人?」  
トラックの運転席には誰もいなかった。

「どうやって動いてんだよ……?!? ちつ、念能力かなんか知らねえが、鬱陶しいんだよお!!」

ブロヴーダは銃を開けて念弾を発射する。

念弾の群れは装甲車とは違い、易々と運転席を貫き――

ドドオオオオオオオン!!!

大爆発を起こした。

「うおがああ?」

ブロヴーダは爆風に吹き飛ばされて背中から装甲車に叩きつけられる。

「がっ……?!」

うつ伏せに倒れたブロヴーダは痛みと爆煙に顔を顰め、ふらつきながら起き上がる。

「ぐっ……ゲホツゴホツ……一体なんだってんだよ……?!」

煙で視界が覆われており、何が起こったのか分からず混乱していた。

「どうやって動かしてたかは知らねえが……荷台に爆弾を積んでやがったな……!」

しかし、イカルゴの作戦はまだ終わってはいなかった。

未だ爆発によって耳鳴りに襲われるブロヴーダの耳に、ギャギャギャと先ほども聞いたキヤタピラ音が、僅かに届いた。

「?!」

ブロヴーダは目を見開いて、顔を通路奥側へと向ける。

それと同時に――装甲車が煙を突き破って突進してきた。

「しまっ――!?!」

ブロヴーダはまだ吹き飛ばされたダメージから回復しておらず、回避動作が取れなかった。

ブロヴーダは装甲車に追突され、最初に突っ込んだ装甲車との間に挟まれた。

「があああっ?!」

悲鳴を上げたブロヴーダは身体に激痛が走りながらも、無我夢中で両腕を前方やや下向きに突き出し、無我夢中で念弾を発射してジェット噴射のように身体を後ろに押しつけて装甲車の間から抜け出した。

ブロヴーダは地面を転がり、うつ伏せに倒れる。

「が……ぐつ……」

爆発の衝撃と念弾でもビクともしない装甲車の突撃、そして装甲車の挟撃は、流石のブロヴーダでもダメージが大きかった。

すると、1台目の装甲車の運転席のドアが開かれ、そこから赤い影が飛び出す。

ブロヴーダは痛みに堪えるのに必死でそれに気付かず、

ダウン!!

狙撃音とほぼ同時にブロヴーダの左足に再び激痛が走った。

「ガアアアアア!?!」

頭を仰げ反らして悲鳴を上げたブロヴーダの横を、赤い影が通り過ぎた。

イカルゴだ。

イカルゴは痛みに悶えるブロヴーダを横切り、全力疾走で警備兵エリアとされているモニター室へと向かう。

ブロヴーダはイカルゴの存在に気付くも、身体中が痛く、何が起きたのか、何をされたのかと頭がパニックを起こしており、攻撃する余裕がなかった。

（上手く嵌った！ 装甲車が耐えられるか一か八かだったが……!）

イカルゴは1台目の装甲車に乗って突撃した。

1台目故にブロヴーダは冷静に対処すると予想し、念弾か壁に激突するかで走行不能に追い込んだ時に、2台目3台目が来れば意識はそつちに向き、3台目が本命だと思わせることでブロヴーダを混乱させて隙を作ることが出来ると考えたのだ。

2台目の爆弾たっぷりトラックは念弾によって手前で破壊されることがベストだが、破壊されずにイカルゴの乗る装甲車に突撃して爆発しても、『装甲車ならば耐えてくれる!』と一か八かの大博打に賭けたのだ。

そして、3台目の対処にブロヴーダが手間取っている隙に、装甲車から抜け出して狙撃で行動不能に追い込む作戦とも呼べない、まさしく神風特攻と言わんばかりの無謀だった。

ちなみに装甲車とトラックの無人運転は、ワイヤーとブラールの念獣梟によるものである。

ハンドルをワイヤーで固定し、アクセルをブラールの念獣が調整する。

ここにはいないはずのブラールには紙に作戦を書いて、梟を通して伝えていた。

アクセルにもワイヤーで固定出来るように細工しており、爆破・攻撃される直前に姿を消した状態でワイヤーでアクセルを固定し、窓や扉から脱出したのだ。

イカルゴはモニター室入り口の暗証キーを素早く入力してロックを解除し、中に滑り込む。

そして、モニターのコンソールを操作してシャッターを下ろし、エレベーター前を完全に封鎖しようとした。

その間にブラールの梟二羽が、トラックの破片をエレベーターと通路の境目に置き、一羽が中に入ってエレベーターのスイッチを操作する。

『暗証番号を入力してください。番号と照合データが合わない場合、拘束の対象となります。二度の入力ミスも同様です』

エレベーターより警告音声が流れる。

梟はそれを無視しながら、適当にボタンを足で連打する。

『ピーー！ 暗証番号が違います。30秒以内に正しい暗証番号を入力してください』

それも無視して更にボタンを連打し、そのすぐ後にエレベーター内から脱出する。

『ピーー！！ 侵入者と判断。これより拘束措置を開始します』

エレベーターの扉が閉まり始めるが、大破したトラックの破片が妨害する。

プシュー！！

エレベーターの角より煙が噴き出し、閉まり切らなかった扉の隙間から煙が流れ出る。

これは催眠ガスで、本来であればエレベーター内の侵入者の中に閉じ込めて眠らせるのだが、イカルゴはそれを利用してブロヴーダを無力化することにした。

ブラールの鼻を通して、ブロヴーダの様子を確認するイカルゴ。「くっ……そがあ……い！」

ブロヴーダは四つん這いに体を起こし、右腕を上げてシャッターに向かつて念弾を放つがビクともしなかった。

「ちいーこのままじゃあ……」

逃げ道を塞がれたブロヴーダは顔を顰めて迫る催眠ガスを睨みつけるしか出来なかった。

（一体どうなってんだよ……！ 誰がエレベーターを操作したんだ？ あのトラックもそうだ。運転席には誰も……待てよ？ 見えな  
い？）

ブロヴーダは追い詰められたからこそ、頭にとある存在を思い出した。

（まさか……!? メレオロンまで裏切ってるのか……!?）

テイルガより東ゴルトーとNGLに残った以外の師団長は全員殺されたと聞かされたが、それが事実かどうかは判断出来ない。

故にまだ東ゴルトーに現れていないザザンやメレオロンなどが生きており、見逃してもらおう代わりに王達やブロヴーダ達の情報を売った可能性は十分に考えられる。

（ちくしょう……！ エレベーターにでも潜んでやがったのか……!? ウエルフィンは何して……まさかウエルフィンまで裏切りやがったんじゃねえだろうな!?)

もはや周り全てに疑心暗鬼になってしまったブロヴーダ。

仲間だったコルト達を見捨て、仲間だったテイルガ達と戦った以上、当然のことではあるが。

（こんな……とここで……！ あんな……タコ野郎……なんか……に……）

ブロヴーダは催眠ガスに吞まれ、ガスを吸ってしまい意識が遠のき始める。

(やっぱ……逃げ……しと……よかつ……)

ブロヴーダは遂に堪えきれずに意識を失う。

動かなくなったブロヴーダの様子をブラールの梟やモニターで確認したイカルゴは、大きく息を吐いて椅子に崩れ落ちるのであった。

## #148 コウカイ×ト×カケヒキ

ブロヴーダを無力化したイカルゴは大きく息を吐いて、椅子に座り込む。

「はあく……（これでブロヴーダは当分起きないはず……起きる頃には戦いは終わってるはずだ）」

これでブロヴーダは戦線離脱したも同然だ……だが。

（いや！ 駄目だ！ 戦いが終わってもあの奥にはまだ人間が残ってる！ あそこに放置してたら駄目だ！ 理想は……ブロヴーダを殺すこと……！）

イカルゴは導き出した結論に吐き気がこみ上げそうだった。

（ブロヴーダが眠りに落ちる瞬間にウエルフィンやビトルファンに通信を飛ばした可能性がある！ ブロヴーダを殺して、その死体を利用して敵を混乱させる！ それが一番皆の助けになるはずだ！）

イカルゴは催眠ガスを止めて、シャッターを僅かに開ける。

そして、重い足取りでシャッターの前まで歩み寄る。イカルゴであれば数cmの隙間があれば、通り抜けることが出来るため、シャッターを操作されない限り邪魔者が入ることはない。エレベーターも扉が閉まらないようにしているので、誰かが下りてくることもない。

つまり、このシャッターを越えれば、ブロヴーダを殺すしかなくなる。

（怖気づくな！ ここには俺しかいないんだ!! わざわざブラール達をこんなところに呼ぶわけにいかないだろ!! 俺が……俺がやらなきゃ……!!）

イカルゴは大きく息を吸って止め、隙間に潜り込む。

ニユルと分厚いシャッターを潜り抜けて中に入り、ブロヴーダを視界に捉えた瞬間……吐き気が込み上げた。

「うっ……！」

片足が無意識に後ろに下がるも、すぐに身体に活を入れてゆっくりとブロヴーダへと歩み寄りながら手の一本を狙撃銃に変える。

近づくほどに体が震え、涙が浮かび始める。



しかし、後2、3歩と言うところで、今度は本当に胃から何かが進み上げてきた。

「うー！」

イカルゴは手を戻し、口を押さえながらシャツターに戻って再び隙間をニユ〜と潜り抜ける。

そして、隙間から出たところで限界を迎えた。

「うおえっ……げえ……！」

膝について、上がったきたものを吐き出す。

「はあ……はあ……うう……うっ！」

あまりの情けなさに涙が溢れだすイカルゴ。

（出来ない……！ 出来なかった……！ 情けない……！ テイルガやブラールも乗り越えてきたのに……俺は、こんな土壇場になっても……!!）

今地上では、ゴンが、テイルガが、ブラールが、メレオロンが、ナツクルが、シユートが、モラウが、ラミナが、そしてキルアが命懸けで戦っている。しかも、自分より格上と分かっている護衛軍相手に。

自分は戦いに参加することを望まれなかったとは言え、同じ戦場に立つ以上自分も覚悟は決まったと思いついていた。仲間のためならば、友のためならば、敵を殺すこともできると思い込んでいた。

だが、結果はこの体たらくだ。

戦場に立つてまで、最高のチャンスが目の前にあつてまで……自分は引き金も引くことも出来ない。

死ぬ可能性の低い足や腕なら撃てる。相手の体格などに左右される失血死狙いの蚤弾ならば撃てる。

なのに、確実に、直接殺す弾丸は……撃てない。

（なんて中途半端……！ 俺は……俺は……卑怯者だ……！）

「うえ……うええええん!!」

イカルゴは人の眼を気にする余裕もなく、周りを警戒する余裕もなく、その場で地面に蹲って大泣きし始めた。

その隙にモニター室へと忍び込む存在がいたことには、全く気付か

なかった。

またまた少し時は戻って、地上。

崩れた中央塔3F玉座の間外縁にて、【監獄ロック】内で睨み合っていたモラウとシャウアップであったが、モラウの内心はとても順風満帆とは言える状況ではなかった。

モラウがシャウアップを閉じ込めた直後、シャウアップはなんと敵であるモラウの目の前で蛹に変態したのだ。

モラウは当初戦闘形態へ移行するためだと思い、時間稼ぎには持つてこいだと思っていたが、数分経過したところで流石におかしいと気付いた。

護衛軍であれば何より王の元へと赴くために急ぐはずだと、考えていた。

しかし、未だにシャウアップに動く気配はなく、先程やってきたモントウトウユピーの呼びかけに反応する素振りすら見せなかった。

（何故動かねえ……。俺の息だって無限に止められるわけじゃない。コイツの催眠鱗粉と身体能力なら十分俺を倒すことは出来るはずだ。……もちろん、簡単にやられるつもりはねえが）

そもそもいきなり蛹に変態したのも違和感があった。

出会い頭はモラウを無視して飛び出そうとしていたのに、逆に全く動けなくなる蛹になるなど普通は選択しない。

（何かの能力か？ 一定時間身動きが取れなくなる事を制約とした一発逆転狙いの博打技……。ありえない話じゃねえ。だが一番厄介なのは、俺が攻撃することで発動するカウンター能力！）

普通であれば、こんな無防備な相手が目の前にいたら、まず攻撃するだろう。

それを狙った能力であれば確かに効果的ではあるが……。

（俺の狙いが王との分断、時間稼ぎなのは奴も理解しているはず……。なのに、悠長にカウンターを待つ

理由はなんだ？ 【監獄ロック】を脱出できるほどの能力？ ……

いや、いくら何でも蛹になる程度じゃ、除念だろうが自爆だとしても不可能だ)

カウンタータイプの除念であれば、基本的に除念したい能力で攻撃される事が絶対条件となる。

自爆だとしても、それも与えられたダメージに比例するはずで、増幅するには更に達成すべき制約が必要となる。

モラウの攻撃手段は基本的に巨大煙管による打撃。

自爆したとしてもたかが知れている。

(そうでないならば、何が目的だ? ……もし本当に蛹になっているのだとしたら、中身はドロドロで生物の形も、それどころか意識すら保てていないはず……。するか!? こんな場面で、そんな致命的なミスを……!?)

モラウは攻撃するべきか、このまま待ち続けるべきか悩む。

しかし、直後抱いていた違和感に気付く。

(待て……こいつは俺の狙いを理解した上で蛹になったということになる? その状態で動けず、意識も保てなくなるかもしれない蛹になるってことは……ミスリード?)

モラウは煙管を握る力を僅かに強める。

(蛹になった生き物は動けない、反応出来ないという情報を利用したミスリード! そう、蛹になったからと言って、その生物が本当に液体状態なのか、本当に応答できない状態なのかは不明!! キメラアントと言う生まれた時点で成体の生物の蛹が、他の生物の蛹と同じとは限らない! くそっ! こんな当たり前のことを見逃すたあ……俺も焼きが回ったもんだ)

自虐に内心で苦笑するモラウ。

それを【麟粉乃愛泉】で読み取ったシャウアップは蛹の中で眉を顰める。もちろん、一切反応は見せないが。

(……困惑、迷いの色が自虐へと変わった……? この状況で浮かべる感情としてはやや歪……しかし、だからこそ油断はできませんね)

この状況で浮かべる感情ではないからこそ、見逃してはならない。

そして、それが正しかったことはすぐに証明された。

モラウの感情が自信と覚悟の比率が上がった。

それを表すようにモラウが煙管を肩に担いで、振り被る構えを見せた。

「っ！やる気ですか……!? 初志を捨てて、根拠のない答えに身を投じると?」

シャウアップは理論的ではないモラウの行動に、内心小さく驚く。対してモラウは、

（確信はねえ。だが……やはり反応もねえ！つまり、コイツはどうやってか【監獄ロック】を抜け出している!!）

【監獄ロック】は一見逃げ場がない正しく監獄に思えるが、実は隙間が存在する。

ただし、その隙間は人が到底通ることが出来ない大きさだ。だから、本来であれば気にすることはない。

だからこそ、モラウはシャウアップの意図に至らず、迷った。

（蛹の後ろから液体かどうかは知らねえが、少しずつ【監獄ロック】から抜け出していた。俺が迷えば迷う程、時間稼ぎに徹底すればするほど、奴は外で好き放題に暴れることが出来るってわけだ。俺の狙いを利用した、良い作戦だ。……たとえば、これすらも罠だとしても関係ねえ!! それならそれでやりようはあるってもんよ!!）

モラウは躊躇なく煙管を豪快に振り抜き、蛹を破壊する。

蛹は簡単に粉碎され、その中身は空っぽだった。

やはり蛹がフェイクだったことを確信したモラウは、煙管を肩に担いで能力を解除する。

煙のドームが解除されて煙が霧散すると、シャウアップが【監獄ロック】の範囲外で背中を向けて立っていた。

『……よくぞ、決心されましたね?』

「考えてみりゃ簡単なことだ。お前の蛹は後出しだった。こつちの意図を把握した上での待機なら、それがお前のトラップなのさ」

『……それだけですか?』

「いや? ダメ押しは最後の煙管を構えた時。気を入れた瞬間の反応の無さだよ。ありえねえだろ。反応すまいとする気配すらないなん

てよ。それで蛹の中にお前さんがいないのは決定的さ」

『……………くつくつくつ』

モラウの言葉を最後まで聞いたシャウアップフは突然笑い出し、それにモラウは訝しみながら僅かに両足を開いて構える。

『……………15分』

「あ？」

『そう……………15分。貴方が煙の結界を解除を決断し、実行するまでに消費すると踏んだ時間です。私はその間に煙の隙間をそつとすり抜け、自由に動き回るつもりでした。私を結界に閉じ込めたのは王、そして他の護衛軍達との分断でしょう？　つまり、煙の牢獄がある限り、それを見た貴方の仲間が『まだあの中に私はいる』と判断する』  
丁寧な説明を始めるシャウアップフに違和感を感じ始めるモラウ。

(……………なんでこんな悠長に話してやがる？　どう考えても、俺があのかを破壊した瞬間が離脱するにはベストだったはずだ。そのためにあんなフェイクを使ったんじゃないやねえのか?)

モラウが疑問を抱いている間も、シャウアップフは話し続けていた。  
『その誤解を突き、貴方の仲間を静かに始末していく。実行するのに十分な時間、貴方は迷っているだろうと……………』

「15分もの間、抜け殻を前にか？　随分と見くびられたもんだな才  
イ」

『いいえ。私は買い被っていたのです……………貴方を!!』

シャウアップフが勢いよく空に跳び上がる。

モラウは逃がさないと能力を発動しようとしたが、シャウアップフの身体の輪郭が揺らいだのを捉えて、思わず動きを止める。

その直後、シャウアップフの身体が——花火のように炸裂して散り散りとなった。

「!?（一瞬にして超細かい粒子に……………!!　液体じゃなくて、これで【監獄ロック】をすり抜けてたんなら、一粒一粒は目に見えねえわけだ）」  
すると、粒子があちこちで集まりだした。



『有難『有難う』』

『有『有難『有難う』』』

『有難う』『有難う』

モラウはシャウアップフの挑発を無視して、煙管を咥えて煙を吸い、一気に吹き出して【紫煙機兵隊】を発動する。

煙の兵士はシャウアップフの群れに突撃し、腕を振るって数体のシャウアップフを叩き砕く。

身体を砕かれたシャウアップフ達は消滅するかわかれたが……なんと身体を再び鱗粉に戻り、すぐにまた集まり出した。

「!!」

数秒と経たずに、新たなシャウアップフの群れが再出現した。

『『『キャハハハハハ!! ザンネンでしたー!!』』』

(破壊、出来ねえ?! 鱗粉に分裂し、また集まるだけ?! ……無敵?!) モラウは一瞬最悪を想像したが、すぐに否定する。

(ありえるわけねえ!! 奴の能力の真髄は『鱗粉』! ただそれを自分の姿に模してるだけ! そして、この手の能力は必ず操る本体がいるはずだ! そいつを見つけ出さねえ限り、周りをどれだけ倒しても意味はない!)

すぐさまシャウアップフの能力を見極める。

しかし、対策に打って出る前に、シャウアップフ達も動き出した。

『『『キャハハハ!! サンキュー! バイバーイ!!』』』

シャウアップフ達は高笑いを上げながら、高速で上空へと飛び去っていった。

「ぐ……!」

モラウは歯噛みするが、すぐに意識を切り替えて外縁を飛び降りる。

(騙されるな! これは奴の心理作戦! あの時点での蛹への攻撃はベストの選択だった! 奴の本体がもし【監獄ロック】の中にいたとしても、奴の分身が動き回れば意味はねえ!)

あの手の能力は分身が見たもの、聞いたものを本体と共有することが出来るのがセオリー。

つまり、分身が自由に動き回って情報を集めれば、本体が解放された瞬間に王の元へと一目散に飛んで行っていたはずだ。

だが、今ならばまだシャウアップは情報を手にしていないはず。

まだ十分に挽回するチャンスはあるとモラウは判断した。

（奴が次に狙うとすれば……『他の護衛軍との合流』『俺以外の敵を発見・殲滅』、そして『王との再会』!! これは全て俺の利害と一致し、全てが繋がっている!）

この状況を考えれば、他の護衛軍と合流すれば自然と敵を見つけることが出来、加勢することで仕留めることが可能。敵を倒せば、王の元へ赴く障害はなくなる。

（まだ突入して10分も経っていない! 爺さんは上手く王を連れ出したとしても、どこまで離れているかは不明! まだ追いつかれる可能性は十分にある! 護衛軍の誰のところに行くのかは分からねえが、一番最悪はアモンガキッド! ラミナのところだ!）

最大戦力であるラミナが倒れば、一気に戦況は瓦解する。

逆に言えば、ラミナが無事ならばモラウや他の誰かが倒れても、まだ任務を継続できる可能性は残っているということだ。

故にラミナだけは守らなければならない。

しかし、モラウもまたラミナの居場所をまだ知らない。

（煙で宮殿を覆うか……?! オーラはかなり厳しくなるが、奴の目くらましにもなるし、居場所を探ることも出来る）

一か八かの博打に近いが、少しでもシャウアップの動きを妨害するために足を動かしながら作戦を練るモラウ。

その時——突然背中にシャウアップが出現した。

「!!」

モラウが後ろを振り返ろうとしたのと同時に、シャウアップはモラウの煙管を掴んで、モラウの背中を踏み蹴った。

完全に不意打ちを浴びたモラウは堪え切れずに煙管から手を放してしまい、地面に倒れてしまう。



「キャハハハハ!! イタダキイー!!」

シャウアップは馬鹿にするように笑いながら、一瞬で猛スピードで飛び上がって宮殿の外へと飛び去っていった。

煙兵がシャウアップを捕えようとするが、残念ながら触れるどころか近づくことすら出来なかった。

(速い! くそつたれ! 飛び去ったふりして鱗粉に戻って、近づいてやがった!)

「コイツは大事に捨てておくよー!! キャアハハハハ!!」

(やられた……!! これでもう新しい技は出せねえ……)

モラウの能力は『煙』。

一度吐き出してしまうとある程度姿形は変えられても、能力の『核』に込めた命令は変えられない。

つまり【紫煙機兵隊】を【監獄ロック】にすることは出来ない。人形一体一体に姿と行動を指定する『核』となるオーラが存在するからだ。

『核』を解除すると煙が霧散してしまう。新たな煙を出すには煙管がいる。

故に【紫煙機兵隊】を解除すれば、モラウは完全に丸腰になってしまふ。

モラウは頭をフル回転させて打開策を考えるが、残念ながらその時間を与えてくれる程、そこにいる怪物は甘くなかった。

「バゴオオオ!?!」

「!?!」

すぐ近くのクレーターから巨人が吹き飛んで、モラウの反対側の宮殿に落下する。

更にそれに続いて、モントウトウユピーがクレーターから飛び出てきた。

「ちっ……いい加減鬱陶しいんだよ。……あん?」

モントウトウユピーは振り返って、モラウの姿を捉える。

モラウの周りにいる煙兵を見て、モントウトウユピーは額に青筋を浮かべて口を吊り上げる。

「…………お前も階段で見たなあ。…………よお、テメエがエスパーか？」  
「……………」

モラウはモントウトウユピীর問いには答えず、両手を握り締める。

(くっ……………！ シュートとナツクルはやられた……………いや、ポットクリンがまだ憑いてる！ ナツクルは無事！ メレオロンと潜んでいるか……………シュートが限界を迎えたか。さつき吹っ飛ばされたのが誰かは知らんが、ナツクル達が姿を見せねえってことは少なからず味方つてわけじやなさそうだな……………)

しかし、この状況で姿を見せないという事は、この近くにはいない可能性が高い。

つまり、モントウトウユピীর相手をモラウがしなければならぬということだ。

(…………こりゃあ、本当に覚悟を決めねえといけねえようだな)

シャウアップとは戦ったわけではないが、数分間息を止めて、「監獄ロック」を維持し、相手の動きに警戒し続けるのはかなりの精神力を消耗し、体力も決して軽微とは言えないレベルで消耗していた。

そこにシャウアップより戦闘に特化しているモントウトウユピীর戦えば結果は目に見えている。

ただでさえ、もう技を出すことは出来ない状況なのだから。

(奴は身体を変化させることが出来る。それにあのクレーター……………ナツクル達じゃ出来ねえ以上、奴の能力と考えるべきだ。後何発放てるかは分からねえが……………まだポットクリンが生きてるなら、一発でも撃たせて破産する時間を早めるしかねえな!!)

やるべきことが決まればモラウに迷いはない。

モントウトウユピীর相手に少しでも時間稼ぎをしようとした、その時。

モントウトウユピীর以上の怒りが全身から迸るナツクルが姿を現した。

(ナツクル!? 馬鹿野郎! 何出てきて——)

「シュート、どこやったコラア……!」

(っ! ちい! ブチ切れて頭に血が上ってやがる!! こんな時に、大馬鹿弟子が!!)

モラウは腕を振るい、煙兵をモントウトウユピーに嚇ける。

モントウトウユピーはすぐさま撃退に動こうとしたが、煙兵の姿が全てナツクルに変わったことで一瞬動きを止めてしまう。

ナツクルの大群はモントウトウユピーを囲い込むように移動する。その中に本物のナツクルも紛れたことで、モントウトウユピーはすぐさまモラウ達の狙いを看破する。

(狙いは分かった。いいぜえ、一発はくれてやる。だが……代わりに、命を貰う!!)

命の駆け引きが、再び始まった。

そして、吹っ飛ばされたビトルファンは、覆い被さった瓦礫を押し退けながら起き上がった。

「ブボハアアア……!」

ビトルファンの身体はもはや元の面影を失いつつあった。

3 mに及ぶ背丈に、腕や脚はゴンやキルアどころか、ラミナすらすっぽり収まりそうな程の太さになり、頭部は膨れ上がった身体にほとんど埋もれていた。

「ブボボオオオオ……!」

立ち上がったビトルファンは周囲を見渡して、標的を探す。

そして、その視線がナツクル達に向けられようとした時、

「こつちだ」

背後から声をかけられ、ビトルファンはズシン!! ズシン!!と地面を揺らしながら素早く振り返る。

そこにいたのは、テイルガだった。

「お前の相手は我では厳しかった故、出来ればモントウトウユピーと相討って欲しかったが……流石にあの戦いにお前を突っ込ませるわけにはいかぬ」

テイルガは一度イカルゴの元へ行こうとあの場を離れたが、ブラールの鼻からの映像で手出しは難しいと判断し、イカルゴの代わりにパームを探そうとしていた。

その矢先に突如モラウとシャウアップフが解き放たれ、2人の動きを見定めようとしたところに、ビトルファンが目の前に殴り飛ばされてきた。

「シャウアップフが解き放たれた今、混戦は不利……。元より私の役割はお前達の足止めだ。我も覚悟を決め、命を懸けよう」

「ブウヴオバアアア!!」

ビトルファンが両腕を振り上げて、テイルガに攻めかかってくる。

テイルガは両手を構え、牙を剥き出しにして瞳を縦に細める。

「ウ、ウオオオオオ!!」

雄叫びを上げて、ビトルファンに飛びかかった。

その頃、シャウアップフは宮殿を離れ、煙管を捨てるために高速で飛んでいた。

回収される可能性を少しでも減らすために、戦場から遠く離れた場所に捨てるつもりだった。

人間は空を飛べないし、例えば一瞬で場所を移動出来る能力を持っていたとしても、捨てた場所が分からなければ意味はないと考えて。

だからこそ、シャウアップフは油断していた。

もつと周囲を警戒すべきだった。

シャウアップフの遥か下——地面スレスレを無音で飛んで追跡している存在がいることを。

シャウアップフは最後まで気付かなかった。

ラミナ，sウエポン！（お久し！）

・【炎蛇瞬来】  
えんだしゆんらい

偃月刀に付与された能力。

切っ先から振り抜かれた剣筋に合わせて極細線状のオーラを這わせ、更にそのオーラの周囲に極少量のオーラを散布する。

散布したオーラが周囲の酸素と水素を吸収して、線状オーラへと集め、指を鳴らすことで線状オーラを炎に変化させて、周囲に集められた酸素と水素と反応して、一気に燃え上がる能力。

制約がほぼ無いに等しいのと、ラミナが放出系が得意ではないので火力はそこまで高くない。

更に雨が降ったり、海や湖の傍など水気が強い場所では、更に火力が下がってしまう。

見た目と違い、オーラの消費も激しいので、中々に使いどころが難しい。

指を鳴らすのが発動条件のため、【妖精の悪戯】とのコンビネーションが可能。

## #149 ゲンカイ×ト×ジヤクテン

中庭から離れて、宮殿内に戻ったキルアとメレオロン。

「……よし。今なら大丈夫だ」

「……ふはあー!」

メレオロンが能力を解除して、息を大きく吸って吐き呼吸を整える。

キルアは視線を素早く動かす。

「ちっ! どこもボロボロで電源がどこにあるか分かんねえ……」

充電しなかったが瓦礫で通路が埋まっていたり、隠れていたりで電気が通っている電源が見つけれなかった。

キルアとメレオロンは周囲を警戒しながら電源を探すことにした。

メレオロンは時折窓や壁に空いた穴から外を覗き込んでいたが、

「っ!! キルア! 旦那の煙が解けた!」

「!!」

キルアは素早くメレオロンの傍に移動して、壁の陰に潜んで外を覗き込む。

メレオロンもキルアの背後に隠れて、キルアの上から外を覗く。

【監獄ロック】が解除されており、空に跳び上がったと思っただけのアプフが花火のように弾け、一瞬で体を鱗粉に変えた。

「なっ……!!」

「自爆……!! いや、あの微妙に輝いてるのは……粒子? 身体を粒子に変える能力? なんのアカよ……!!」

キルアは流石の視力と観察眼で、シャウアプフの状態を見逃さなかった。

(あれで【監獄ロック】から抜け出そうとしたことに気付いて、モラウは能力を解くしかなかったってことか? くそっ! 催眠能力を持つプフがこのタイミングで解き放たれたのは最悪だ!)

キルア達でさえ、戦況の把握が厳しい状態だ。

ここで誰かが操られた可能性が浮上すれば、連絡を取り合うのも、合流するのも慎重にならざるを得ない。

(しかも、体を粒子に変えるとか冗談じゃねえぞ……！ 粒子を焼き飛ばせば本体もダメージを負うのか、それとも回復が出来るのか、そもそもダメージを負うのかも分からない。流星に無敵ってことはないだろうけど、倒すのに相当手間がかかる可能性がある……！)

すると、モラウが【紫煙機兵隊】を発動して、小さくなったシャウアップの群れを攻撃するが、見た感じ効果はあまりなさそうだった。シャウアップの群れは空へと飛び上がっていき、モラウはすぐさま煙兵と共に中央塔から飛び降りた。

着地して駆け出したかと思うと、背中にシャウアップが出現してモラウの煙管を奪って、宮殿の外へと猛スピードで飛び去って行った。

「まずいぞ……！ 旦那の煙管が!？」

「あれじゃあ、もう能力を解けないし、解いたら丸腰だ……！ くそつ！ 【神速】が使えれば追いかけられるのに……！」

どうにかモラウを援護する術がないかを考えるが、更に状況は悪化する。

クレーターからビトルファンが殴り飛ばされ、モントウトウユピーが飛び出してきた。そして、モラウの存在に気付いた。

それだけでも最悪に近いというのに、そこに何故かナツクルまでも現れた。

「ナツクル!? 馬鹿野郎! なんで戻って……！」

「それに……なんか怒ってる?」

ナツクルの様子に訝しんでいると、モラウが煙兵の姿をナツクルに変化させて、モントウトウユピーを取り囲むように移動させる。

本物のナツクルもその中に紛れ込み、キルア達も本物がどれか分からなくなった。

「流石旦那だ……！ あれならユピーの隙を突けるかもしれない！」

「でも、あれじゃあモラウの兵隊も滅る。全滅する前にユピーを仕留めないと終わりだ……！」

「じゃ、じゃあどうする……!?! 俺らも加勢に……！」

「ダメだ。下手に飛び込めば、モラウの負担を増やすだけだ。ユピーの狙いを狭めるわけにはいかない」

もしキルアが参戦したら、モラウはキルアの偽物も作るだろう。

しかし、それは同時にナツクルの偽物の数が減るといふ事。モントウトウユピーからすれば、別にナツクルとキルアを同時に殲滅する必要はないので、どちらか一方にのみ専念されればあつという間に数を減らされてしまう。

しかも、キルアは現在充電切れ。

電撃を放てない状態では、囀以上の役目を果たせない。ならば、ナツクルの偽物だけにして、少しでも破産するチャンスを増やすべきだとキルアは判断した。

その時、視界の端に動く存在を捉えた。

「っ!! メレオロン！ 隠れろ！」

「!!」

メレオロンは反射的に大きく空気を吸って、「神の共犯者」を発動して揃って存在を消した。

その数秒後、2人の目の前を虫サイズのシャウアップが大量に通り過ぎた。

「?!?」

「プフの分身だ。宮殿中に散らして状況を把握しようとしてるんだ。これで王がいけないことがプフにもバレる」

キルアは目を鋭くしながらシャウアップの分身達を観察する。

「……ちっ。やっぱり見分けるのは不可能か。まあ、本体は俺達の攻撃が届かない場所にいるんだろうけど」

キルアは庭園に視線を向ける。

モントウトウユピーが最初のように両腕を6本に増やし、鞭のように鋭く動かしてどんどんナツクルの分身を切り裂いていく。

「……モラウの人形は大体70体くらい。今のペースだと1分もせず全滅だな……」

それでも攻撃を止めないという事は、何かしらの作戦があると言ふことだとキルアは考え、急いで救援に向かう必要はなさそうだと判断する。

すると、シャウアップの分身達が急に身を翻して、一斉に外へと飛



び出していった。

「行ったな」

「ふはー」

メレオロンが能力を解除して息を整える。

「一斉に戻ったって事は、奴の分身は宮殿全体に飛ばせる程の数を出せるってことか……」

「じゃあ、もう奴は王がいないことを知ったってことか？」

「ああ。だから次は他の護衛軍のところ……恐らくピトーのところに  
行くはずだ。王の居場所を教えてもらえそうな状況なのはピトーだ  
けだろうからな」

「じゃあ、ゴンが……！」

「ああ。俺は充電をある程度したらゴンのところに戻る。お前はナツ  
クル達のところに行ってくれ」

「……いいんだな？」

「問題ねーよ。プフを止められない以上、ユピーだけでも抑え込まな  
いとな」

「……分かった。……気を付けろよ」

「そっちな」

メレオロンは様々な感情や疑問が喉まで出かかったが、キルアのど  
こか覚悟を固めたような表情を見て、それらを呑み込んだ。

メレオロンはただただ無言で親指を立て、キルアも手を上げるだけ  
で応え、それぞれに動き出したのだった。

その直後、庭園で爆発が起こった。

モラウは頭を庇いながら地面に伏せていた。

そのすぐ後ろでは新たなクレーターが出現しており、もうもうと爆  
煙が立ち上がっていた。

（何とか全部狩られる前に爆発させられたが……まだ破産まではして  
ねえか……。もう同じ手は通じねえだろうが……。奴をここに留めて

おかなきやならねえ。……だが、今ので84体いた【紫煙機兵隊】も40体まで減らされた)

本物のナツクルを隠すためにモントウトウユピーの近くに配置していたため、爆発に巻き込まれて多くの煙兵が消えてしまった。

それによりオーラも吹き飛ばされて回収出来なかったため、モラウはただただオーラを消費し、死を目前としたプレッシャーに心身ともに消耗していた。

(ナツクルは今ので頭が冷えたはず……ブチ切れてた理由は知らねえが、これで無茶はしねえだろう。問題は……俺がもう【紫煙機兵隊】を遠隔操作するほどの力がほとんど残ってねえってことだ)

モラウはそれでも時間を稼ぐために、煙兵の数体を自身の姿に変える。

(プフを追いかける力は残っていない以上、俺はもうリタイアしたも同然……。ここで死んでも作戦に影響は出ねえ。……なら、なけなしの力で奴だけでも食い止める！)

すでに自身の限界を悟ったモラウ。

それに対して、モントウトウユピーは遂に目的を達成した。

(……掴んだ!! 爆発を操作する、あの感覚だ!!)

怒りによるオーラの爆発。

その手綱を遂にモントウトウユピーは掴み取った。

(もう一回……もう一回やれば、完全に自分のものに出来る!!)

「オ、オオオオツ!! 一度ならず二度までも俺をコケにしたあのクズ!! ゴミイ!! クサレカスがあ!!」

もう一度爆発を引き起こそうと、わざと怒りを溜めるためにナツクルを思い浮かべる。

「ぬうあがあああああ!!」

モントウトウユピーは怒りに吼えると、全身にビキビキ!と血管の  
ような筋が浮かび上がり、直後身体が変化を始める。

後頭部が伸びて兜のように硬質化し、左腕は肩が膨れ上がって老人

のような顔の瘤に、手先は銃身のような形になる。更に右手は刃のように鋭く変化し、トドメには下半身が馬のように四本脚となった。

(怒りを左肩に溜めろ!! そして、俺の頭は冷静に!)

変化を終えたモントウトウユピーから湧き上がる、不気味という表現すら生温いほどの悍ましいオーラ。

それを目にしたモラウは冷や汗が噴き出し、更に身体に圧迫感を感じるのであった。

(底をつくどころか、更に力を増した……!?! いや、今感じた力はさっきの爆発か……!?! あれを完全にコントロールしたのか……)

「くはっ……ひやはははは!! ぶっ壊死て殺る夜!!」

モントウトウユピーは湧き上がる力に大喘息を上げながら、クレター内にいるモラウの偽物目掛けて勢いよく突撃して、ほぼ一瞬で胴体を切り裂いた。

(速い……いや、だが待て……あの爆発の力を利用したところで、そもそもその力も奴のオーラ。つまり、奴はオーラを今まで以上に消費しているってことか……! なら、まだ勝ちの目は残ってる! なら、やることは変わらねえ!!)

モラウは身体に活を入れて、【紫煙機兵隊】の操作に集中するのだった。

一方その頃、テイルガとビトルファンは最初に飛び出した宮殿裏手側で死闘を始めていた。

「ヴオバアアア!!」

巨大な拳をハンマーのように振り下ろして、テイルガを叩き潰そうとする。

それを身を低くした姿勢で駆け続けていたテイルガは余裕で躲し、素早く身を翻してビトルファンの後ろ腰に右鉤爪をすれ違いざまに叩き込む。

しかし、やはり掠り傷すら付かず、怯む様子もなくビトルファンは

左手を後ろに振る。

ティルガは全力で後ろに跳んで、左手を躲す。

(威力は今まで以上に油断ならぬが、巨大になったせいで動きは愚鈍になった。まあ、気を抜くことは全く出来ぬがな)

今もビトルファンはどんどん硬くなり、攻撃の威力が上がっている。

もはや掠るどころか、紙一重で躲しても風圧で潰されかねない。

(先程の衝撃……またユピーか？ プフも解き放たれた今、ビトルファンに時間をかけるわけにもいかぬが……やはり我では決定打がない)

そう考えている合間もビトルファンが両腕を振り回しながらティルガに攻めかかるも、ティルガはビトルファンから一定の距離を保つように動き続けながら顔を顰める。

(このまま硬度が上がれば、逆に我の爪が耐えられぬやもしれぬ。その意味でもあまり時間をかけられんな)

その時、

バギリッ!!

ビトルファンの右前腕部に、小さな亀裂が入った。

「!!」

ティルガはそれを見逃さずに、僅かに目を丸くする。

(割れた……?! 一体何が……)

何もしていないし、攻撃もしていないのに突然独りでに割れた。

ティルガは原因を考えたが、すぐにその答えに辿り着いた。

(限界を超えたのか!! 奴の身体はこれ以上強化に耐えられなくなったのだな!!)

ビトルファンは、モントウトウユピーのように自在に肉体を変化させる身体をしていない。

そして、モントウトウユピーのように膨大なオーラを持っていたわけでもない。

能力によって無理矢理肉体とオーラを強化していたに過ぎない。特に増幅されたオーラは、ビトルファンが本来十数年と修行や戦いを経た上で手にしたもので、言わば後払いで商品を受け取っていたにすぎない。

普通であれば、その代償は簡単に支払えるものではないが、ビトルファンは『理性を失うこと』『ダメージを負う必要がある』『肉体を少しずつ変化させる』など代償を少しずつ支払っていたので、すぐに限界を迎えることはなかった。

しかし、先程遂に利用限度を超えてしまったのだ。後はまさしく破産するのみである。

その隙を見逃すティルガではなく、全力で地面を蹴ってビトルファンへと詰め寄った。

「オオオオオ!!」

「ブツヴァアア!!」

ビトルファンは自身の腕に亀裂が入ったことなど気付いた様子もなく、ティルガに向かって左ストレートを放った。

ティルガは直前で急ブレーキをかけて後ろに跳び、ビトルファンの拳が地面に突き刺さり、地面を砕く。

その直後にティルガはビトルファンの左腕に全力で跳びかかり、

「オオオオオオ!!」

ビトルファンの左前腕に連続で攻撃を叩き込んだ。

「ヴァオオオ!!」

ビトルファンはそのままティルガを払い除けようと左腕を振り上げるが、ティルガは横に全力で跳んで躲し、地面を一度転がって素早く立ち上がって距離を取る。

ビトルファンの左腕を注視したティルガ。

しかし、残念ながら左前腕部にダメージは入っていないかった。

だが、

バギバギ!!

と、次は左肩と右太腿の甲殻にヒビが入った。

(私の攻撃ではなく、膨れ上がることで割れるのか……！　つまり、脆くなったわけではない！　だが、全身にヒビが入れば流石に脆くなるだろう!!　光明は見えた!!)

まだパワーが弱ったわけではないので、一撃でも攻撃を受ければ終わりではあるが、それでもこの戦いの終わりが見えた事はティルガに力を与えた。

「お前の限界が先か！　私の限界が先か！　勝負だ!!　ビトルファン!!」

「ブヴァオオオオオン!!」

2人の決着は、すぐそこまで迫っていた。

王宮より離れた空。

雲よりも高い場所に、龍を思わせる胴体の長い生物が飛んでいた。

その背中には、2つの人影があった。

シルバとゼノだ。

シルバはただ仕事を終えたゼノを迎えに来ただけである。

それでも王宮方向より時折届く爆音や強大な気配を感じながら、シルバ達は東ゴルトーのはずれを飛んでいた。

もちろん、キルアがいることも何だかんだで待機する理由になっている。

「やれやれ……随分と派手にやつとるの」

「……それなりの手練れが残っていたようだな」

「まあ、話に聞いた護衛軍とやらじゃろうて。王の傍にいた2匹もかなりの実力を持つておったしの。面白そうな奴らじゃったわい。ありゃあキルもラミナも苦労するじゃろうなあ」

くつくつくつ！と他人事のように笑うゼノに、シルバは腕を組んではやや呆れた視線を向ける。

「……それにしても、蟻が人を食べただけでそこまでの力を得るとは

な」

「そうじやの。そもそも女王が異質じやったようじやからな」

「ラミナでも厳しそうなのか？」

「ふむ……何とも言えんのう。あのガキ爺が言うところの弱点がどうなるかと言ったところじやろうな」

「弱点？ ラミナのか？」

「まあ、あくまでアルケイデスの話じやがな」

しかし、シルバからすればラミナに弱点と呼べるほどの弱点は思い浮かばなかった。

眉を顰めるシルバを見て、ゼノはまたくつくつと笑う。

「あそこに行く前にの、アルケイデスと少し話してな」

『本当に儂は王とネテロを分断するだけで良いのか？ ラミナでも手こずりそうな相手が他にも数匹おると聞いたが？』

『お前が気にしとるのは、その婚約者でもある孫のほうであろうが。まあ、ラミナは問題なからうて。奴がしっかりと本気でやれば一匹くらいは殺せるだろうよ。もつとも……あ奴の悪癖と言うか、弱点が露呈せなんだらの話じやがの』

『……弱点？』

『まあ、弱点と呼べるかは微妙じやがな。暗殺者からすれば仕方がない部分もあるのでな』

『ふむ？』

『お前も分かっているから正直に言うが、あの娘の能力は見事に尽きる。あれだけ使い勝手の良い万能型の能力など滅多に見ぬ。……じゃがなあ、あの娘の性格がそれを十全に活かそうとしておらん』

『ふむ……そうは思えなかつたがのう……』

『では、訊くがなゼノ坊。お前、把握しておる範囲でも、あ奴の能力の使い方……もつたいたいと思つたことはないと言う気か？』

『……まあ、のう。じゃがそれがあ奴の弱点とでも言う気か？ 暗殺

者からすれば、派手に能力を使うのも変な話であろう』

『じゃから、悪癖とも呼べると言うたじやろう』

『悪癖のう……』

『お前が前に愚痴った孫と同じようなもんじやい』

『ふむ？』

『確かに暗殺者、そして熟練の念能力者からすれば、相手の実力や能力を押し量りながら戦い、出来る限り力を隠し、温存し、ここぞと言う時に力を解き放つのがセオリーではある。暗殺者は殺して終わりではないからの。その場から離れる力も残しておかねばならぬ。じゃが、相手の力量が互角以上であれば、押し量る前にこちらの全力で押し潰す事もまた出来ねばならん。しかし、ラミナはどうにも押し量ろうとする慎重さが前に出てくる。奥の手が奥の手なので仕方がないかもしれないが、じゃからと言って少々武器の出し惜しみが過ぎる』

『じゃが、それでこれまで生き残っておるでう』

『確かにの……。しかし、それ故に無用な傷や消耗を負う事も多いのもまた事実じやて。状況、相手に応じて両方を使い分けることが出来ねば、あ奴は壁を越えきれまいよ』

『やれやれ……妙にラミナに入れ込んだるのう』

『お前とてそうじやろうが。あ奴のあの才能と能力は中々に諦めきれぬよ。あと一步で高みに上れる者を見ると、引っ張り上げたくなるもんじや』

『……ふん』

『此度の決戦で、その殻を破ればええんじやがなあ』

『……もし、その殻を破ったら、ラミナはどう変わる？』

『決まっておろう』

——たかが蟻など、軽く捻り潰せるじやろうて。



ザシユツ!!

「ぐっ……!!」

蛇は右脇腹から血を噴き出し、後ろに跳び下がる。

「……やれやれ……ここにきて……まだ上がるのかい？」

蛇の視界に映るのは――

十数本もの刀剣が地面に突き刺さっており、

その中心で紅髪を靡かせる、女暗殺者の姿だった。

「あく……もう、ええわ」

女暗殺者は割れたサングラスを投げ捨て、頬に流れる血を袖で拭う。

「やったらうやないか。見せたるわ、蛇」

そう言って、すぐ傍に突き刺さっていた武器を掴む。

「全力全開や」

## #150 カベ×ヲ×ヤブル

時は戻りに戻って、モントウトウユピーが一度目の爆発をした、少し後。

まだキルアがメレオロンと合流する直前の頃。

すでにラミナとアモンガキツドの戦いはピークを迎えていた。

「しいっ!!」

「シャアッ!!」

ラミナは二振りのブロードソードで高速の斬撃を放ち、アモンガキツドは8頭の大蛇を斬り飛ばされながら右貫手を繰り出す。

ラミナは首を傾げるだけで躲すも、斬り飛ばした大蛇の1頭が反対側から口を大きく開けて飛び迫ってきた。

「ちいー!」

後ろに仰け反って大蛇の噛みつきを躲そうとしたが、今度は正面からアモンガキツドの髪から再生した大蛇が、飛びかかってきた大蛇を取り込みながらラミナに迫る。

ラミナは再び高速の斬撃を全方位に繰り出して、大蛇の群れを細かく斬り刻みながら後ろに跳び下がる。

しかし、アモンガキツドは逃がさないとばかりにラミナに詰め寄り、両腕の大蛇は解除して連続で貫手を繰り出しながら、頭の大蛇6頭で取り囲んで逃げ道を塞ごうとする。

ラミナは左手のブロードソードを消してハルバードを具現化し、【一瞬の鎌鼬】で貫手を放つ両腕を斬り落とそうと斬撃を放ちながら、後ろに下がって大蛇の群れに飛び込む。

アモンガキツドは貫手の軌道をずらして、高速の斬撃を全て払い除ける。両腕がいくつか斬られて血が少量吹き出すも、すぐに皮膚が捲れて傷が消える。

ラミナはブロードソードを消して、【不屈の要塞】を発動して大蛇達を無力化しながらハルバードが溶かされないように素早く振り回して、大蛇を斬り払う。

そこに両手を突き出していたアモンガキツドの両腕を、髪が高速で

蠢いて覆って大蛇を形成し、まるで砲撃の様に勢いよくラミナに向かって飛び出してきた。

ラミナは無力化されることを分かっているながら放ってきたことに訝しみながらも、大蛇2頭を対処しようとした、その時、

突如大蛇が直角に下に曲がり、地面に噛み付いた。

「!!」

ラミナがアモンガキツドの狙いを理解したのと同時に、アモンガキツドは以前ペイジンで見た大蛇をスリングショットのように扱う技で、高速の飛び蹴りを放った。

ラミナは鎧とハルバードを解除して、両腕をクロスして【硬】でガードするも、踏ん張り切れずに後ろに吹き飛ばされる。

「ぐっ……!?!」

地面を数回転がったところで、体勢を整えて滑りながらも立ち上がる。

「まだまだ行くよお」

しかし、アモンガキツドが大蛇の頭を蜘蛛の足の様に支えにして、再び高速ですぐ目の前まで迫ってきていた。

ラミナは顔を顰めるも偃月刀を具現化して、冷静に薙いで斬撃を繰り出す。

だが、空中にいたアモンガキツドは大蛇の脚を伸ばして上に移動して楽々と斬撃を躲し、更に振り子が弧を描くようにラミナの横に回り込んで左蹴りを放つ。

パチン!

しかし、ラミナが指を弾くと、ラミナがいた場所にスローイングナイフが出現し、アモンガキツドの後方にラミナが現れる。

ラミナは先程偃月刀を具現化した時に、もう一方の手でスローイングナイフを【陰】の状態で具現化し、投げておいたのだ。

(ペイジンと違って、ここは平地。壁も段差もない場所やったら立体機動にも限界がある。軌道は読み易い……。やけど、それは向こうも承知しとるやんな)

それを証明するかのようになり、脚にしている大蛇から新たな大蛇が出

現して、ラミナに襲い掛かる。

ラミアは偃月刀とスローイングナイフを消し、ソードブレイカーとブロードソードを具現化して、大蛇を斬り捨てる。

するとその直後、ラミナの周囲に口だけ念獣の大群が出現し、

「平地だから立体機動もたかが知れてるって思ったかい？」

と、アモンガキツドが口だけ念獣を足場にしながら、空中を高速で縦横無尽に移動しながら言い放った。

「残念だったねえ」

「阿呆。お前も忘れとるやろ」

ラミナはブロードソードを消してファルクスを具現化し、【円】を発動する。

「！」

「消えろ」

ラミナはファルクスを二度振り、アモンガキツドは反射的に【堅】を発動する。

直後、【狂い咲く紅薔薇】によって口だけ念獣はバラバラに分断され、アモンガキツドも右腕、左足、胴体、大蛇の2頭に切り傷が走る。

「っ……っ……」

アモンガキツドの動きが一瞬止まった。

ラミナはその隙を見逃さず、ファルクスを消すと同時にチャクラムとブロードソードを具現化して、【小生意気な雷童子】を発動し、その動きが止まった一瞬の内にアモンガキツドの懐に飛び込んだ。

そして、【小生意気な雷童子】によって速度が更に跳ね上がった【一瞬の鎌鼬】による超超高速の斬撃が、アモンガキツドの首へと放たれた。

しかし、斬撃が首に触れる直前で、アモンガキツドとラミナの合間に口だけ念獣が現れて、ラミナとアモンガキツドはそれぞれ後ろに押

されてしまう。

その結果、超超高速の斬撃はアモンガキツドの首には届かず、首元を僅かに斬りつけるだけで終わった。

「ちいー」

ラミナは口だけ念獣を蹴って、後ろに高速で跳び下がる。

その直後、ラミナがいた場所に漆黒の大蛇4頭が通り過ぎ、勢いよく閉じられた口は空振りに終わった。

ラミナはチャクラムを消して地面に着地し、それに続くようにアモンガキツドも地面に下り立つ。

「ふう……今のはかなり焦ったよ。具現化に間に合わなかったら、やられてたねえ……残念だったけど」

「……」

「ペイジンでその能力は見させて貰ってたからねえ。隙が出来たら来るとは思ってたんだ。まあ、残念なことに全くおいちちゃんの誘いには乗ってくれなかったけどねえ」

アモンガキツドは「小生意気な雷童子」の詳細までは、まだ看破出来ていないが、それでもその能力を使えば体に負担がかかることは気付いていた。

だから、ラミナの性格と戦い方からして、必ずトドメを刺す時に使ってくるはずだと予想していた。だから、この戦いが始まってから時折怪しまれない程度にわざと隙を作って誘っていたのだが、ラミナは全く使う様子を見せず、ラミナもアモンガキツドの考えに気付いていると理解したのだ。

（さてさて……参ったねえ。残念なことに……お腹の穴が結構響いてきてる）

コムギを庇った際に負った腹部の傷。

人間であれば普通にとつくの昔に失血死しているレベルの致命傷なのだが、キメラアントの生命力でこれまで何ともないように動いていたが、何も影響がないわけがなかった。

（流石においちちゃんの脱皮でも、内臓や骨までは戻せないからねえ。血を止めて穴を隠すだけで精一杯。でも、これまでのミナっち相手

だったら、それでもそこまで支障がないと思っただけど……)

手榴弾の爆発が内側に響いていた。

流石に身体の内側からの、内側を走る衝撃は、アモンガキッドに少なくないダメージを与えていたのだ。

そして、何より――

(脱皮のし過ぎと念獣を消費し過ぎた……。おいちゃんのオーラも……限界が近い)

元々念獣は戦闘用ではなく、あくまで偵察と「凝」、そして威嚇を目的にしている。

単純な仕様のため、一体一体に消費するオーラはそう多くはないが、重傷を負い、極限状態での戦いをしている状況では馬鹿に出来ない消耗になりつつあった。

そこに加えて、脱皮による再生だ。別に無視してもいいのだが、ラミナ相手では掠り傷1つ油断できない。

前回は斬られたことで手足の動きと視界を妨害されたのだから。他にも同じように斬られたり、傷を負う事で、どんな能力を仕掛けられるか分からないのだから、脱皮しないわけにはいかなかった。

それに脱皮することで、ラミナに攻撃は無駄だと思わせる狙いもあった。

全くの無駄であったが。

(でも、ミナっちだつてかなりオーラを消耗してるはず……。今のペースで行けば、おいちゃんよりも先にオーラが尽き――)

キイン

ラミナがズボンの太腿ポケットから、手榴弾とは異なるピン付きの細いアルミ製の筒を、ピンを指に引っかけながら一瞬で取り出し、放り投げながらピンを引っこ抜いた。

「――げっ」

それが『閃光弾』であることを理解したアモンガキッドから声が漏れる。

その直後、強烈な閃光が戦場を包む。

光熱によりピット器官を封じられ、閃光により念獣の視界も封じられる。

即座にアモンガキッドは【円】を発動して、ラミナの動きを探る。ラミナはすでにアモンガキッドの背後に回り込んでおり、ブロードソードを構えていた。

(ホントト……い……ここぞつて時ほど殺気が全くないねえ!!)

アモンガキッドは【円】を引っ込めると同時に後頭部から1頭の大蛇が飛び出し、ラミナへと襲い掛かせながら振り返ろうとした。

しかし、ラミナはそれを読んでいたかのように大蛇が噛み付く直前にブロードソードを消し、両腕を胸の前に抱くようにして身を翻して、アモンガキッドに背中を向ける。

まさかここで視線を外して背中を向けるというラミナの行動に、アモンガキッドは虚を突かれてその狙いを探るために思考が一瞬占領されてしまった。

——そして、

ドパン!!

音と共にラミナの革ジャン左脇側から何かが高速で貫通して飛び出し、ちょうど振り返ったアモンガキッドの左肩に直撃して、血が噴き出す。

「ぐう!? (拳銃?!)」

まさかの攻撃にアモンガキッドは反射的に後ろに跳び下がる。

しかし、ラミナは左手にブロードソード、右手に拳銃を握った状態で振り返り、アモンガキッドに追い迫る。

「そこま……で! (プライド捨てるのかい……!?!)」

「阿呆。ターゲットを殺す以上のプライドやあるかい」

別に刃で殺すことに執着しているわけではないし、能力で殺すことに躍起になってるわけでもない。

ただ剣や槍が好きなだけ。

依頼に必要以上の私情は挟まないのがプロだ。

故に今のラミナにとって最も重要なことは、どう殺すかではなく、必ず殺すことのみである。

ラミナは「一瞬の鎌鼬」で接近を阻もうとする大蛇を斬り飛ばし、銃口をアモンガキツドの胸に向けて迷うことなく引き金を引く。

アモンガキツドは半身になりながら、大蛇を胸の前に滑り込ませて弾丸を防ぐ。

（貫通力は低いけど……！ 当たった直後に弾丸が裂けたように広がる……！ 弾丸が、異物が身体に残る！）

最初に撃たれた左肩も貫通はしておらず、弾丸は肩内部に未だ残っており、更に撃たれた場所よりも広範囲にダメージが入っている。

（これじゃあ脱皮が意味を為さない！ ペイジンの戦いだけで、どこまで対策を……!?!）

本来、アモンガキツドが万全の状態であれば、この銃弾とてそこまですダメージはなかった。

しかし、重傷を負った今では、このダメージはかなり痛手となるものだった。

（これ以上銃弾を受けるのはマズイ!!）

アモンガキツドは意識が拳銃の銃口に集中してしまう。

その隙を見逃すラミナではなく、ブロードソードを高速で背中に振り抜いたその時。

ブロードソードを手放し、直後にレイピアを具現化した。

「!!」

「ふっ!!」

鋭く突き出されたレイピアを、アモンガキツドは大袈裟に思えるほどに無理矢理身を捻じって切っ先から逃れる。

ラミナはすかさず銃口をアモンガキツドの左太腿に向ける。

アモンガキツドは当然それを見逃さずに、足を動かさそうとした。

しかし、ラミナはアモンガキツドの動きを読んでおり、真上に刺突を放って空中にいた一つ目念獣を仕留め、更に指を鳴らしてアモンガキツドの背後に瞬間移動して、ラミナが先程までいた場所にはスロー



イングナイフが出現した。

「ちい!!」

アモンガキッドは大蛇2頭をラミナに向かって突撃させる。

だが、ラミナが指を鳴らそうとしたのを見て、一瞬動きを止めるが、すぐさま他の大蛇をスローイングナイフに向かって伸ばし、最初の2頭はそのままラミナに襲い掛かる。

パチパチン!!

ラミナが指を2度鳴らす。

ラミナがいた場所にはスローイングナイフが出現した。

そして、スローイングナイフがあった場所には——手榴弾が現れた。

「!!」

ラミナはアモンガキッドから5 m程離れた場所に移動しており、銃口をアモンガキッドに向けていた。

ラミナは後ろに跳び下がりながら連射する。

手榴弾が爆発し、爆煙がアモンガキッドを覆う。

しかし、ラミナはすぐさまポケットから再び閃光弾を取り出して、上空に放り投げる。更にスローイングナイフを具現化して、アモンガキッドから少し逸れた場所目掛けて投擲する。

閃光弾が炸裂して再び強烈な光に覆われる。

それとほぼ同時に指を鳴らしたラミナは、爆煙の中に飛び込んだスローイングナイフと入れ替わり、アモンガキッドのすぐ傍に一瞬で移動する。

そして、気配がする方へ拳銃を構えて引き金を引こうとした、その時。

突如、黒蛇が口を開きながら煙を突き破って飛び出してきて、一瞬で銃口部分を噛み挟った。

更に指ほどの太さの黒蛇が続くように3頭、ラミナに猛スピードで襲い掛かり、ラミナは目を見開きながら拳銃を投げ捨てて後ろに全力

で跳び下がる。

黒蛇達はそれこそまるで銃弾が如く猛スピードでラミナを追尾してくる。

ラミナは顔を顰めながらブロードソードを具現化して高速の斬撃を繰り返すも、

その全てを黒蛇は躲して掻い潜り、ラミナへと噛み付きにかかる。「なっ……!!?」

ラミナは目を丸くしながらも無理矢理体を振じりながら噛み付きを躲そうとする。

しかし、黒蛇はその動きすら対応し、一瞬でラミナの体を締め付けるように巻き付き、3方向からラミナの顔面に噛み付こうとした。

ラミナは歯を食いしばって、ギリギリ縛られなかった左腕で顔を庇い、右手で指を鳴らす。

【妖精の悪戯】でスローイングナイフと入れ替わり、スローイングナイフが碎かれる前に武器を消す。

しかし、その直後ラミナの背筋に悪寒が走った。

反射的に横に跳ぼうとしたラミナ。

だが、その前にラミナの顔面に、アモンガキツドの足裏が迫っていた。

ラミナはギリギリで左手を差し込んで顔面への直撃は避けるも、勢いは全く防げずに勢いよく蹴り飛ばされる。

「っっ——!!」

数回地面を転がり、すぐに立ち上がったラミナであったが――

すでに目の前に両手と右足に大蛇を纏うアモンガキツドがいた。

頭の大蛇5頭はそれぞれ指ほどの細さの黒蛇に変わっており、両手を覆っていた大蛇も最初より小振りになって、ほぼ両手を薄く覆っているような状態になっていた。

しかし、それを視認した瞬間、ラミナは全身に鳥肌が立つほどの悪寒が走った。

(こいつ……この土壇場で成長しよった!!)

アモンガキツドの大蛇は小さくなったのではない。  
更に圧縮されたのだ。

髪の毛は減るところか増えており、それを極限まで圧縮して束ねたことで硬度を増し、それにより攻撃力と速度を向上させた。

それだけでも厄介だというのに、アモンガキツドは遂に脚にまで大蛇を纏い、殺傷力を上げていた。

それらをオーラと圧から感じ取ったラミナはソードブレイカーとブロードソードを具現化して、対抗しようとする。

そして、武器を振ろうとした瞬間——気付いてしまった。

大蛇と黒蛇に——両目があることを。

その目が——あの一つ目念獣であることを。

(ふぎげ——)

「ありがとねえ、ミナっち」

アモンガキツドは纏う殺気とは裏腹に、穏やかな口調でラミナに礼を告げた。

「君のおかげで……おいちゃん吹っ切れたよ」

前世の記憶があらうと、アモンガキツドもまた生まれたてのキメラアントには違いない。

前世の記憶があらうと、アモンガキッドは自分が前世とは違う存在であることは理解していた。

だが、それを受け入れていたかと言えば、答えは——『否』であった。

アモンガキッドもまた揺れていたのだ。

人間と蟻との狭間で。

人間と蟻は共存出来る。だから、自分もまた人間のような存在なのだ。

そう、心の奥底で思っていたのだ。

それがラミナをしつこく勧誘していた理由である。

王のためではなかった。人間のためではなかった。

己が、自分達が、人間と近い存在であり、この世界に受け入れられる存在であると、認めて欲しかったのだ。

だが、ラミナに否定された。

何度説得しようとしても否定された。

何度認めてもらおうとしても否定された。

何度受け入れてもらおうとしても……殺そうとしてきた。

それはラミナが暗殺者、殺し屋だからだ。

そう思おうとした。実際はその通りなのだが、それだけではないと、何かを感じていたアモンガキッドであったが、その答えは……何度考えても、やはり『己がキメラアント』であるという結論に至る。(そんなにその違いはダメなのかい？ そんなに……その違いは絶対的な壁なのかい?)

アモンガキッドはずっと自問自答を繰り返していた。

だがやはり、結論は変わらない。

人間とキメラアントは分かり合えない。

しかし、ラミナの仲間にはキメラアントもいる。なのに、何故自分は受け入れてもらえないのか。その結論もすぐに出た。

王だ。

アモンガキッド達は王を何より最上位に置き、最優先に考えている。

絶対にそれが変わることはなく、変えることもない。

アモンガキッドがどんな人間と手を繋ごうとも、王が『殺せ』と言えば殺す。どんなに気に食わない人間であろうとも、王が『守れ』と言えば守る。

そして、王が『人間を全て殺せ』と言えば、人間全てを殺す。

アモンガキッドがどう言って、どう思おうと、結局は王次第。

アモンガキッドには……『己』が存在しない。

『キメラアントの護衛軍』以上の『己』になれない。なつてはいけない。

それこそが、アモンガキッドとラミナの道が絶対に交わらない壁。

それを理解した瞬間、アモンガキッドは打ちひしがれて……すぐに反対側の壁を溶かし破った。

(そうだったねえ……。おいちゃんは、蟻。王様を守る護衛軍。前世が人間だろうがハンターだろうが関係ない。おいちゃんは……アモンガキッドなんだから)

我は毒。

身を以て、王を護る。

我が想いは、王の意思に非ず。

王に仇なす者は、須らく溶かすべし。

(おいちゃんは……ミナっちを殺す)

揺れが定まった。

ただそれだけで、アモンガキッドは壁を破ったのだ。

アモンガキッドの両手の大蛇がうねりながらラミナに迫る。

ラミナはブロードソードを高速で振り、まずは右腕の大蛇を斬り捨てようとしたが、

ガギン!

と、大蛇の鱗に弾かれた。

「っ! (かった……!)」

ラミナはすぐに意識を切り替えてソードブレイカーで左腕の大蛇を斬りつける。

【脆く儂い夢物語】により大蛇は髪に戻るが、アモンガキッドはそのまま左腕を突き出して、ラミナの鳩尾に叩き込んだ。

「っおっ——」

ラミナは後ろに吹き飛び、そのおかげで右腕の大蛇の噛み付きを回避できた。

しかし、

「シッ!!」

頭の大蛇5頭が弾丸のように高速で放たれ、ラミナに追い迫る。

ラミナは空中で体勢を整え、ブロードソードとソードブレイカーを構える。

すると、黒蛇が途中で動きを止めた。

ラミナはその不可解な動きを訝しむと、なんとアモンガキッドが黒蛇の頭に引っ張られるようにラミナに跳び迫ってきた。

「なっ!?!」

「残念だったねえ。仕込んでるのは【地母神の邪眼】だけじゃないんだ

よねえ」

「！あの口だけか……！」

アモンガキツドは【地母神の邪眼】のみでなく、【満たされない胃袋】も蛇の口に組み込んでいたのだ。

あくまで組み込んでいるだけなので、先程のように立体機動の足場にするのが可能だった。

（ブロードソードじゃあかん!!）

ラミナはブロードソードを消して、もう一振りソードブレイカーを具現化し逆手に握る。

（あの毒だけは絶対に受けたらあかん!!）

アモンガキツドはまるで空中を飛んでいるかのように身を捻りながら移動し、ラミナの左斜め上空から右足の太蛇を鋭く突き出す。

ラミナは上半身を後ろに反らして紙一重で躲しながらソードブレイカーの刃を掠らせて解除する。

ラミナも左脚を振り上げて、【打蠅】でアモンガキツドの鳩尾を狙う。

そのラミナの脚を、アモンガキツドは黒蛇で難なく巻き掴む。

ラミナはすぐさま関節を嵌めて、巻きつかれた脚を支えにして体を持ち上げ、巻きつかれた黒蛇を斬りつけて除念しながら、もう一振りのソードブレイカーでアモンガキツドに突きを放つ。

その鋭い突きを、アモンガキツドは右前腕で受け止めた。

能力は解除され、刃は右前腕に突き刺さるが、アモンガキツドはそんなことなど気にも留めずに、左貫手をラミナの顔目掛けて繰り出した。

ラミナはそれを恐れずに逆に距離を詰め、ソードブレイカーを更に右腕に刺し込みながら、右手のソードブレイカーを消してブロードソードを具現化する。

顔を傾けてアモンガキツドの貫手を躲すが、右頬を掠って皮膚が裂け、サングラスの右目側にヒビが入る。

それを無視してラミナはアモンガキツドの首を狙って高速の斬撃を放つ。

しかし、アモンガキッドも頭を前に出して間合いの内側に入り込み、ラミナの額に頭突きを浴びせて斬撃を躲す。

超至近距離で睨み合うラミナとアモンガキッド。

アモンガキッドが右腕に力を入れたのを感じて、ソードブレイカーを折ろうとしているのを即座に見抜いたラミナは、逆にソードブレイカーとブロードソードを解除して、アモンガキッドの両腕を両手で掴み、アモンガキッドの鳩尾に左膝を叩き込んだ。

僅かに距離が開いた瞬間に、右脚を振り上げてアモンガキッドの顎を蹴り上げる。

「っー」

アモンガキッドは頭を仰げ反らしながらも、頭から5頭の黒蛇を具現化する。

しかし、その前にラミナも蹴りの勢いを利用して、後ろに下がって距離を取っていた。

(くそっ……反応も上がつとるな。可能性としては考えとつたけど……)

キメラアントと戦う際に一番恐れるべき事態。

それが『追い詰められたことによる成長と能力の発展』であった。

特に護衛軍は追い詰められたことが少ない。というか無いに等しい。

故に決戦になった際、死や王の危機を目の前にして精神的に追い詰められた時に、どのような変化が起きるか予想し切れなかったのだ。

しかし、アモンガキッドはこれまでの戦闘や会話から、かなり精神面でも成熟しているとラミナは思っていた。

(正直、ここで急に成長するタイミングやなかったと思うんやけど……。まあ、してもうたんはどうしようもない。問題は、あの硬さと速さ。ブロードソードが弾かれるってことは大抵の剣が弾かれる。やけど、バルディッシュとかの長物やとあの速さに付いていけへん。もう拳銃も閃光弾も効果はないと思うし、手榴弾も後一個。オーラもぼちぼち限界レベル)

完全にジリ貧に追い込まれていた。



(奴も大分オーラ消費したはず……腹の穴を塞ぎ、傷をつける度に再生し、念獣や蛇もかなりの数除念した。奴もそろそろ底が近いと思うんやけど……今の能力もオーラの消費量は大きく変わらんか、むしろ増したはず)

しかし、敵もまた限界が近いはずだと推測する。

(さて、どうしたもんか、つちゆうても……もうやれることは限られるなあ)

兵器も限界で、格闘戦はかなり厳しい。

やはり念能力で戦うしかない。

だが、それには今のままでは決定打を生み出せない。

(まあ……ここまで来たなら撤退するんも厳しいつちゆうか無理やろうしな。後の事を考えとる場合やないか)

ラミナはいつも戦闘後の余力を計算に入れて作戦を考える。

標的を仕留めても死んでしまっただけでは意味がない。雇われの殺し屋なのだから、それは当たり前だ。

しかし、それがアルケイデスやマチ達が思うラミナの弱点であり、『枷』になっていた。

オーラの消費量やストックの消耗を常に把握しておかないといけないのだから、下手に全力を出して仕留めきれなかったら最悪だ。慎重になるのも仕方がないことではある。

だからこそ、ラミナは常に色々な武器や能力を試行錯誤し、基本戦闘技術や情報収集能力などを磨いているのだ。

だが、それを考えているのはアモンガキッドを仕留めきれないのは明白だ。

更に王と護衛軍の分断、ネテロと王を宮殿から離すという最低限の作戦は成功した。

護衛軍は厄介ではあるが、仕留められないわけではないことはこれまでの戦闘経験上間違いない。

つまり、今回ここで仕留められなくても、それこそゾルディック家や十二支ん、名のある実力者達を動かせば犠牲は半端なく出るだろうが、キメラアント殲滅という仕事は達成出来るだろう。

(なら、うちはコイツだけでも仕留めれば……依頼の最低ラインは達成したってジンには言えそうやな)

「……ふう〜」

ラミナは息を大きく吐いて、呼吸を整える。

それにアモンガキッドは本能的に足を止めて、ラミナの動きを注視する。

(……ちよつと雰囲気が変わったかねえ。出来ればこのまま攻め切らせてもらいたいんだけど……)

ちなみにアモンガキッドは先程の手榴弾の爆発はもちろん、銃撃も2発、左脇腹と左上腕に直撃していた。傷はすでに塞いだが、やはり銃弾の破片が体内に残り、今も内側から筋肉を傷つけている。

(参ったねえ……これはミナつちを倒せたとしても、ピトつち達を守り抜くまでの力は残らないかも)

その時、宮殿内に雷が落ちた。

「!!」

まさかの落雷に、アモンガキッドは一瞬そちらに気を取られてしまった。

雨雲もないのに、いきなり雷が発生したのだ。

気にするなという方が無理だろう。

それがキルアの能力だと知らなければ。

アモンガキッドは失態に気付いた時には――

すでにラミナはすぐ目の前まで迫ってきていた。

アモンガキッドが迎撃しようとした直後、ラミナがアモンガキッドの真上に跳び上がる。

すぐさま黒蛇を放とうとしたアモンガキッドであったが――

ドドドドド!!

「!?」

突如アモンガキツドの周囲にラミナが具現化した剣や槍などの武器が降り注いで突き刺さった。

まさかの武器のばら撒きに、アモンガキツドは再び思考がラミナの狙いへと集中してしまう。

どんなにそれが罠だと分かっているにしても、気になってしまう。

それが、強敵を前にした時の当然の思考だ。

そして、それはやられた時点で、すでにもう罠にかかっているのだ。

ラミナが両腕を高速で動かし、柳葉飛刀10本を投げ放つ。

アモンガキツドは黒蛇で打ち落とそうとしたが、直後にラミナが指を鳴らして、アモンガキツドの左横に一瞬で移動し、すぐ傍に置かれていたハルバードを掴む。

アモンガキツドは黒蛇の2頭をラミナに放つも、ラミナは鎧を纏って黒蛇の噛み付きを防ぐ。

更にアモンガキツドは右腕の大蛇を蠢かして、自分に直撃しそうな柳葉飛刀を3本ほど噛み砕く。

残った7本の柳葉飛刀は地面に突き刺さる。

直後、アモンガキツドは身体が硬直し、能力が解除される。

（っ?!? なに——）

アモンガキツドの思考が驚きに染まったその瞬間に、ラミナはハルバードを地面に突き刺して鎧を解除しながら指を鳴らし、アモンガキツドの背後へと瞬間移動する。

移動すると同時に左右に突き刺さっていたフランベルジュと斬首剣を掴んで斬りかかる。

アモンガキツドは歯を食いしばって全身に力を籠め、オーラを全力で放出してこの謎の拘束を振り払おうとする。

ラミナの刃が届く0.5秒前に拘束が解除され、アモンガキツドは全力で跳び下がって斬撃を躲そうとしたが、斬首剣の刃が右脇腹を掠って血が噴き出す。

「ぐっ……っ!!」

アモンガキッドは武器の包囲網から抜け出して、距離を取る。

そして、脱皮して傷を治しながら、生まれて初めて冷や汗を流す。

「……やれやれ……ここに来て……まだ上がるのかい？」

斬撃を躲されたラミナは両手の剣を地面に突き刺す。

「あゝ……もう、ええわ」

そして、割れたサングラスを投げ捨て、頬に流れる血を袖で拭う。

「やっつたろうやないか。見せたるわ、蛇」

そう言っつて、すぐ傍に突き刺さっていたレイピアを掴む。

「全力全開や」

## #151 ゼンリヨク×ノチ×ケツチャク

ラミナはレイピアを鋭く突き出すと同時に、もう片方の手で指を鳴らす。

【啄木鳥の啄み】を躲すアモンガキツドの右側に【妖精の悪戯】で瞬間移動し、レイピアを投げ捨ててフランベルジュとブロードソードを掴んでアモンガキツドに斬りかかる。

「くっ！」

アモンガキツドは黒蛇3頭をラミナに放つ。

(その武器じゃ斬り落とせないはず！)

アモンガキツドがそう判断したが故の攻撃だが、ラミナが二度連続で指を鳴らし、フランベルジュが一瞬スローイングナイフになり、更にソードブレイカーになったところで甘かったことを理解した。

しかし、ラミナは更にもうその上を行った。

ラミナがソードブレイカーで黒蛇を斬りつけようとした、その瞬間。

パチン！

と、指が鳴り、ラミナがアモンガキツドの背後に現れた。

「!? (しまっ——)」

すでにソードブレイカーの刃がアモンガキツドの首を斬りつける直前まで迫ってきていた。アモンガキツドは反射的に左手を差し込んで刃を防ぐも、【脆く儂い夢物語】が発動して能力が解除される。

その瞬間を狙っていたラミナは【一瞬の鎌鼬】で高速の斬撃を放ち、アモンガキツドの背中を斬りつける。

しかし、アモンガキツドは無理矢理前に出ることでダメージを最小にし、すぐに能力を再発動して黒蛇を放とうとするが、その前にラミナはブロードソードを投げ捨てて再び指を鳴らし、アモンガキツドの左側に瞬間移動する。

そして足元に突き刺さっている鎖鎌を蹴り上げて掴む。

「どうやら……こつちを先に潰しておく方が、良さそうだねえ!!」

アモンガキツドは黒蛇5頭と両腕の大蛇を全方位に放ち、周囲に突

き刺さる武器を破壊しようとした。

しかし、

「甘いわ阿呆」

黒蛇が武器に噛みつきこうとした瞬間、全ての武器が消えた。

具現化を解除したのだ。

ラミナはその隙を逃さず、攻撃を空振りした黒蛇たちに鎖鎌を投擲する。

【親愛なる妹のペット仲間】により巨大な狼頭が、アモンガキッドへと襲い掛かる。

黒蛇たちは高速で動き、鎖に噛みつきこうとしたが、鎖鎌もまた噛みつかれる直前に消滅する。

その隙に猛スピードでアモンガキッドへと詰め寄るラミナ。

アモンガキッドは慌てることなく黒蛇と大蛇をラミナへと睨める。

ラミナは全方位から襲い掛かってくる蛇たちを紙一重で躲し、アモンガキッドの真上に跳び上がる。

そして再びアモンガキッドの周囲に武器が降り注いで取り囲む。

「くっ……い！（こりや厄介だねえ……）」

アモンガキッドはこの戦法に歯噛みしていた。

（武器を狙ってもオーラに戻されるだけ……。でも、ミナつちに集中すれば武器の能力に振り回される。両方に意識を割けば、隙が出来ちゃってミナつちの対応が間に合わない）

しかもまだラミナは拳銃や手榴弾を隠し持っている可能性もある。

アモンガキッドはラミナが動く度に、動きを変える度に、武器を変える度に、その狙いを看破しようと思いが動いてしまう。

それにより行動が半歩遅れてしまう。その隙をラミナが的確に突こうとしてくるため、行動が後出しになってしまい対応がギリギリになつてしまう。

（まさか出せる武器の数と場所に制限がなかったなんて、残念なぐらい読み間違えたねえ）

アルマセン・デ・エスバダ  
ラミナの能力【刃で溢れる宝物庫】の制約は以下の通り。

『【月の眼】発動時のみ、本体となる武器収納が可能。ただし、必ず刃を持つている武器であること』

『一度収納すると、壊れるまで本体を取り出すことは出来ない』

『収納できるのはオーラを纏っている武器のみ。ただし、他者の念により具現化された武器は収納できない』

『形状が80%以上一致している武器は収納できない。ただし、長さが1m以上、および大きさが3倍以上の差があれば認められる』

『具現化した武器が10回破壊されると、収納している本物も砕ける』  
『ストック数はいかなる手段をもつても回復しない』

『同じ能力は2つ以上の武器には付与できない。付与したい場合は、現在その能力を付与されている武器を破棄しなければならない』

『具現化した武器は、5分以上ラミナの手から離れていると砕けてストックが減る』

『【月の眼】を一度発動すると、必ず武器のストックが最低1つ減る。発動後3分経過ごとに、ストック減少数が1つずつ増える』

『武器に付与できる能力は、収納した武器が持っているオーラの量、質によって限界がある。【月の眼】状態でなければ発動できないかどうかは、作ってみなければ分からない』

『【刃で溢れる宝物庫】に収納されている武器が0になると、二度とこの能力は使用できない』

そう、ラミナの能力に『具現化数』と『具現化場所』の制限は存在しなかった。

ストックが0にならない限り何十本であろうと同じ武器を具現化出来、必ずしも両手に具現化しなければいけないわけではない。

だが、基本的に具現化された武器は『振るうことで発動』するため、大量に具現化することに意味はなく。更にストックが減るリスクを少しでも減らすために両手に具現化するのが一番安全だったため、ラ

ミナはこれまでこの戦法を選ぶメリットがほとんどなかったのだ。もちろん、今回のような時の為のブラフとして考えてはいたが、ラミナからすれば消耗が激し過ぎるため、この戦法を使う気はなかった。

なので、アモンガキッドが勘違いしたのも無理はない。むしろ当然だったのだ。

だが、ラミナも、アモンガキッドも、気付いていなかった。

そして、今揃って気付いてしまった。

この戦法の恐ろしさを。

(あの位置を入れ替えるナイフ。そして……あの螺旋状の剣を、無視出来ない……!!)

武器の包囲網の端に、あのNGLで見た超高速の閃光を放った螺旋剣が突き刺さっていた。

アモンガキッドはキメラアントの中で唯一、ウニコルニオ・レランパード【天を衝く一角獣】を放つ瞬間を、ラミナが螺旋剣を振るう瞬間を目撃していた。

故にその存在を絶対に無視出来ない。

そのすぐ隣にスローイングナイフが刺さっていれば猶更。

特に【妖精の悪戯】を擁するスローイングナイフは至る所に突き刺さっていた。

どこにでも移動して、どの武器でも取り寄せることが出来るように。

それが、アモンガキッドの動きを鈍らせる。

そう、この戦法は……ラミナや武器の事を知れば知るほど思考を鈍らせるのだ。

そして、その危険度はアモンガキッドが消耗すればするほど増していく。



(次はどれで来る？ そのまま斬りかかってくるのか？ 入れ替わるのか？ 武器を変えるのか？ そう見せかけて拳銃を使ってくるか？ 手榴弾を使ってくるか？)

ラミナが一步前に進む度に、アモンガキツドの頭に大量の選択肢が浮かび上がる。

(あの速い斬撃？ レイピア？ 全身を斬る剣？ 視界と手足の動きを逆にする剣？ 除念？ 鎖鎌？ 鎧を纏うハルバード？ 火を生み出す槍？ 高威力の大斧？ チャクラム？ あの螺旋の剣？ どれだ？ どれで来る!?)

黒蛇の眼で全方位を絶え間なく見渡し続ける。

(待てよ？ そもそも全部の武器を具現化してるのか？ チャクラムもさっきの手裏剣も見当たらない。あの糸を出すグローブみたいなものもない。爆発する籠手も。それに全部の武器をもう見たのか？ 他にもとんでもない能力を持つ武器があるんじゃないのか？ 他にも武器を隠し持つてるんじゃないのか?)

見えるモノ、見てきたモノ全てが疑わしく思えてならないアモンガキツド。

一度頭に浮かんでしまうと思考が止まらない、止められない。

(そもそも何で今この能力を出した？ ペイジンでも使えたはず。いや、ペイジンの方がもっと効果的だったはずなのに……。ああ……。駄目だ。考えれば考えるほど、ミナっちのことが分からなくなってきた)

もはやこれまで築いてきたラミナへの印象すらも崩壊してきていた。

出し惜しみを止めたラミナの力は、これまでの暗殺・戦闘経験の引き出しを全て吐き出すことに等しいものだった。

故にこそ、アモンガキツドは思考を定められない。

ラミナという存在と能力が、まさに闇に染まっていくかのように分からなくなっていく。

アモンガキツドの頭には、ペイジンでのラミナの言葉が頭を過った。

『目に見えとるなら、逃げることも出来る。対策を考えることも出来る。倒すことも出来る。なんとか出来る可能性があるなら、怖がとる合間に動く方がええに決まつとるやろ』

『やから、うちは見えんもんの方が怖い。見えんもんは対処しようがないでな。どこから来るか分からんのやから逃げようがない。どんな姿か分からんのやから対策を考えることも出来ん。見えん奴に攻撃なんざ当たらへん。何をすればええのか、全く分からん。そつちの方が断然怖い』

今、まさにアモンガキツドはその言葉の意味を理解した。

ラミナが見えなくなつたわけではないのに。武器が見えなくなつたわけでもないのに。

あまりの選択肢の多さに、アモンガキツドは見えていないに等しい状況に追い込まれていた。

アモンガキツドにはラミナの姿が視えなくなつた。だから対策が考えられない。逃げ道が見つけれられない。攻撃が当たるイメージが浮かばない。

だと言うのに、あらゆる方向から襲い掛かってくるラミナが、まるで分身でもしたかのように思えてしまうほどに全方位を埋め尽くすほどのラミナの姿が視え過ぎる。

どれから対処すればいいのか、どれが一番危険なのか分からない。

故にどう動けばいいのか、何をすればいいのか分からない。

ラミナの動きが、視え過ぎて視えない。読め過ぎて読め切れない。

キメラアント護衛軍軍団長の優れた能力と前世の記憶を持つアド

バンテージで上に立ち続けてきたアモンガキッドであったが、ここに来て己の持つ経験と予測を越える相手を前に、恐怖を覚えた。

更にアモンガキッドはある事実気付いた。

(ミナつちのオーラが……まだ増えている?)

先程よりもラミナから感じるオーラが力強くなっていた。

(ここに来て、まだオーラを出し惜しみしてたのかい? 全く……本当に残念なことになったあ……)

アモンガキッドは諦観にも似た感情が湧きつつあった。

ちなみに当の本人のラミナだが……同じく違和感を感じていた。

(オーラも限界に近いと思とつたんやけど……なんかまだ行けそうやな)

武器の具現化で消費したオーラもある程度は回収出来ているが、全てではない。

確かにオーラを消費しているはずなのに、まだオーラが尽きる気配がなかった。

オーラは生命力であり、そして精神に影響される。

ラミナはこれまでも述べてきたように、ずっと力をギリギリまで温存する戦い方と生き方をしてきた。

それは精神面にも当然大きな影響を与え、その影響は——オーラにすらも及んでいた。

ラミナは、無意識の内にオーラを制限していたのだ。

ヨークシンにおけるウボオーギンとの戦いでも、オーラを使い切ったように見えて何だかんだ動き続けていた。

そして、ペイジンにおけるアモンガキッドとの戦いにおいても、スツカラカンと言っておきながら気絶することもなく鈍くはあるが動き続けていた。

そう、ラミナはそもそも戦闘においてオーラを完全に使い切ったことがほぼない。

ラミナが最大と思っていたオーラ量は、どんな状況であろうと生き延びることを常に頭の片隅に置いていたラミナの無意識下で、制限さ

れたオーラ量だったのだ。

それを今、完全に解き放った。

(まあ、言うて微々たるもん。限界は着実に近づいとる。これで決められんかったら、終わりや!!)

ラミナの頭には多くの攻撃ルートが視えていた。

アモンガキッドがどう動こうと、どうとでも軌道修正出来ると確信出来るほどに。

(ああ……腹立つわ)

これまで培っていた経験を放棄し、勝つために全てを投げ出した捨て身の戦い方だ……そう思ったのに。

逆に全ての経験を活かす事が出来ているという皮肉。

暗殺者の理想——相手に『何をしてくるのか』と恐怖を感じさせる戦い方。

それが今出来ている事をアモンガキッドの様子から容易く理解させられてしまった。

だと言うのに、これまでの自分を否定されたようにも感じてしまう。

故に——腹立たしかった。

別に特別な能力を使ったわけでもない。特別な戦法というわけでもない。切り札と呼べるほどのことでもない。

ただ、解き放っただけだ。

それだけで、ラミナはアモンガキッドから感じる圧が一気に小さくなったように感じた。

これに苛立たなくて、何に苛立てと言うのか。

そう思う程に、ラミナは胸の奥から湧き上がってくる激情を必死に抑え込んでいた。

「さあ……殺したる」

ラミナが偃月刀とレイピアを掴んで、レイピアを連続で突き出しながらアモンガキッドに迫って、偃月刀を振り下ろす。

アモンガキッドは紙一重で躲しながら、偃月刀の刃を右腕の大蛇で、ラミナの顔面を黒蛇で噛み付こうとする。

しかし、直前で両手の武器を消したラミナが指を鳴らして姿を消し、アモンガキッドの右に現れる。

そしてすぐ傍にあったバルディッシュを左手で掴んで、片手で回してオーラを増強させながら猛スピードでアモンガキッドに突っ込む。

アモンガキッドはすぐさま黒蛇を方向転換させ、更に3頭の黒蛇をラミナに全力で放つ。今のアモンガキッドにはラミナと入れ替わったスロージングナイフを破壊する余裕すら無くなっている。

だが、ラミナは再び指を鳴らして、アモンガキッドの背後に瞬間移動する。

アモンガキッドはそれを予測しており、両腕の大蛇をラミナに向かって伸ばす。

それと同時にラミナは右手に柳葉飛刀1本を具現化し、すぐさま先程いた場所に向かって投擲する。

高速で飛ぶ柳葉飛刀の先には——銀色に輝く筒が転がっているのを、アモンガキッドは捉えた。

それに対処する前に柳葉飛刀は筒に突き刺さり、直後強烈な閃光が弾ける。

【地母神の邪眼】の視界を封じられたアモンガキッドは、すぐさま【円】を発動し、ラミナの動向を探る。

ラミナはまた【妖精の悪戯】でアモンガキッドの右斜め前方に移動し、一対の白黒の短刀を掴んで駆け出す。

視界が回復したアモンガキッドは【円】を引っ込めながら黒蛇2頭をラミナに放つ。

ラミナはまた指を鳴らし、反対側に瞬間移動してアモンガキッドに斬りかかる。

アモンガキッドはすぐに黒蛇を方向転換しようとしたが、正面にも

ラミナが現れたことに一瞬動きを止める。

すぐにオーラによる分身を判断したアモンガキツドは、本体と分身両方に黒蛇を2頭ずつ喉ける。

黒蛇が牙を突き刺そうとした瞬間に、分身が消えてラミナ本体も消え——螺旋剣の横に瞬間移動した。

「っ——!!」

異だと分かっているにもかかわらず、アモンガキツドは動かざるを得なかった。黒蛇5頭全てを螺旋剣とラミナに向かって、一直線全速力で飛ばす。

ラミナはそれを嘲笑うかのように螺旋剣を消し、指を鳴らしてその場から消える。

アモンガキツドは能力を解除して、すぐさま再発動。頭に黒蛇を出現させて全方位に放てるように構える。

ラミナは左斜め後ろに現れ、ブロードソードを右手で掴んで、左手にソードブレイカーを具現化して同時に駆け出し、アモンガキツドに詰め寄る。

黒蛇5頭はすぐさま放たれ、ラミナへと襲い掛かってくる。

アモンガキツドは両腕と右脚の大蛇を構え、再び瞬間移動した時に備える。

しかし、ラミナは今度は【妖精の悪戯】を使わずに堂々と真正面から突破しようとした。

噛みつきを紙一重で躲すと同時にソードブレイカーで除念し、ブロードソードで黒蛇を弾いてソードブレイカーで除念して突き進む。

黒蛇を再発動しながら両腕の大蛇をラミナに放とうとしたアモンガキツドだが、指が鳴る音がしてラミナの姿が消える。

ラミナは両手の武器を消して、両手にスローイングナイフを合わせて8本具現化し、上空に放り投げる。

そして連続で指を鳴らし、アモンガキツドを翻弄・挑発するように上空と周囲を連続で瞬間移動する。

移動すると同時に柳葉飛刀を2枚ずつアモンガキツドに向かって投擲し、アモンガキツドは全方位から迫る柳葉飛刀を黒蛇3頭で一掃

しようとしたが、これも攻撃を加える直前で消えた。

それと同時に、ラミナがアモンガキツドのすぐ目の前に現れた。

右肩に電気を帯びて高速回転するチャクラムを携えて。

「っ!？」

アモンガキツドは上空の柳葉飛刀に気を取られ、【陰】で足元に滑り込まれたスローイングナイフに気付けなかった。

ラミナは両手に柳葉飛刀を持っており、現れると同時に超高速でアモンガキツドの影に全て突き刺した。

アモンガキツドは身体が視えない鎖で拘束されたかのように動けなくなり、能力が強制解除された。

そして、大太刀を具現化して電流を最大で身体に流し、大太刀を超超高速で振り上げる。

「オオオオオオ!!！」

アモンガキツドはこれまでの飄々さからは想像出来ない雄叫びを上げて、渾身の力を振り絞って右腕を動かして斬撃を掴み止めようとした。

僅かにオーラを出すことは出来たが、能力を発動することまでは出来ず。

ラミナの超超高速の斬撃が右腕に斬り込んでいくのを感じ取った。

【無垢村雨】による斬撃はアモンガキツドの右親指を斬り落とし、大太刀はそのままアモンガキツドの右腰から左脇を一閃し――

アモンガキツドを上下に斬った。

だがラミナはそれでも止まらず、大太刀を振り抜いた勢いを利用して上に跳び上がる。

そして、全ての武器を消し、右手にバトルアックスを具現化する。

「――終わりや」

そう呟いたラミナは、バトルアックスを振り被って右肩に担ぐ。

下半身はうつ伏せに、上半身は仰向けに倒れていくアモンガキツドは、ラミナを見上げる。

「……ああ」

アモンガキツドは何故か息を吐いて、力を抜いた。

ラミナはそれに疑問を感じつつも、最後の一撃を放つ。

「<sup>ビッグバン</sup>敬愛する——<sup>インパクト</sup>兄の剛腕」オ!!!」

膨大なオーラを纏う大斧を、【小生意気な雷童子】によって強化された力で振り下ろして、猛スピードでアモンガキツドに落下する。

アモンガキツドは、それでも一切抵抗する素振りを見せず、

「——残念だなあ」

そう呟いて、

ドツツゴオオオオオオオオン!!!

宮殿内の爆発にも負けない衝撃と轟音が轟いた。

アモンガキツドに叩きつけられた猛烈な一撃は、地面を吹き飛ばしてクレーターを生み出しながら地面を抉る。

バキン!

もうもうと土煙が立ち上がるクレーターの中心付近で、大斧が砕けて消滅したラミナは大斧を振り下ろした体勢のまま肩で息をしていた。

「はあ! ……はあ! ……はあ! ……はあ! ……はあ!」

【小生意気な雷童子】も解除して、地面に落ちたチャクラムを消す。しばらく同じ体勢のまま肩で息をして大汗を流すラミナは、ゆっくりと上半身を起こしながら後ろに数歩ふらついて下がり、足を止めて夜空を見上げ——そのまま大の字に倒れた。



「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

汗が止まらないラミナは、ゆっくりと呼吸を整えながら、視線だけを横に動かす。

そして僅かに顔を顰めて、

「はっ……くそっ……たれ……はっ……はっ……」

そう、呟いた。

苦々しい顔の勝者の視線の先に映るのは――

地面に開いた、穴であった。

## #152 ナマエ×タテマエ×オトコマエ

煙管を川に投げ捨てたシャウアップフは、満足げに頷いた。

「これで煙使いは脱落ですね。次は……宮殿に戻り現状を把握し、王の元へ」

シャウアップフは宮殿を飛び出しながら「蠅の王」を発動して、無数の分身を生み出す。

そして分身達を宮殿へと放ち、一気に宮殿の状況を掌握しに走る。あつという間に分身達は宮殿中に散り、戦場を俯瞰する。

しかし、得られた情報は信じ難いものばかりだった。

ネフェルピトーは何やらコムギの治療をしているが、その傍に見知らぬ人間の子供―ゴンが座り込んでいた。

だが、コムギを治療していて無防備のネフェルピトーを攻撃する素振りもない。

モントウトウユピーは煙管を奪ったモラウと大量の謎のヤンキー―ナツクルと戦っていた。

シャウアップフはすぐにそれが先程の煙人形だと見抜き、どんどん数を減らしていることからもう新たに分身を出すことが出来ないと判断した。

それならばモントウトウユピーであればすぐに殲滅させることが出来るだろう。

だが、モントウトウユピーの傍にいる変なとんがり頭は何だ？とシャウアップフは眉を顰めるが答えは出なかった。

更に宮殿北部外壁傍でビトルファンが戦っていた。

それは問題ない。だが問題なのはその相手がカメラアントだという事。

(あの者は確か師団長の……どうやら人間に与したようですね。まあ、それだけのこと。我々の障害にはなりえないでしょう)

その他はウエルフィンやビゼフがウロチヨロしていたが、やはり問題は王とアモンガキッドの姿が見当たらない事だった。

(王はどこに……!!? キッドと共にいるのでしょうか? ならばピ

トーとユピーが宮殿に留まっている事にも納得が――)

その時、分身の1体が宮殿外の惨状を目にした。

(これは……!?)

クレーターが出来ており、いくつもの爆破跡が刻まれていた。

そのクレーターの底付近には1人の女が倒れており。

そして……クレーターの端付近に、見慣れた片足が転がっていた。

(あれは……もしやキツドの……!?! まさか……キツドがやられたというのですか!?)

シャウアプフは同志の死に衝撃を受ける。

(あの女は……例のNGLで暴れた女ですか! まさか……キツドを倒すほどの実力があつたとは!?)

シャウアプフはアモンガキツドがコムギ同様ゼノの【龍星群】によつて傷つけられたことを知らない。もつとも、知っていたとしても、アモンガキツドが人間程度にやられるとは思つてもいなかっただろうが。

(では王はどこへ?! 王がいない!?! 皆さん、一旦戻つてくるのです!)

分身に呼びかけて、身体を再構成する。

小さくなつたままでは速度もパワーも全力を出せないからだ。

そして、分身達が続々と戻り、身体を再構成していると、モントウトウユピー達が戦っていたはずの場所でオーラの爆発が起こつた。

(オーラの爆発!?! ユピーの!?! あの状況から使う程の技ですか!?! くっ!)

アモンガキツドの死が再び頭に過り、最悪を考えてしまう。

(……気にはなりますが、今優先すべきは王の行方を知ること!!)

故にシャウアプフは、唯一会話が出来そうな者の元……ネフェルピトーの元へと向かつた。

そして、その肝心の王は……宮殿より遙か南の荒野にやってきました。

ゼノが生み出した【龍頭戯画】の前脚に尻尾で掴まっていた王は、一切の不安もなく、それどころか空からの景色を楽しんでいるようにさえ見えた。

その時、龍がその姿を消し、王とネテロ、アルケイデスは空中に放り出された。

しかし、誰一人として慌てることなく、楽々と地面に着地する。

「……………ここは戦争兵器の実験場じゃよ。好きに暴れていいぜ」

ネテロは周囲を見渡す王に説明する。

正々堂々気兼ねなく戦うことが出来るように。

アルケイデスはすぐにでも始めるつもりだったが、ネテロも王も全く闘気すら纏わないので呆れた顔でネテロの後ろで立っていた。

すると、王は視線を横に向けたまま口を開いた。

「……………何故戦う？」

「……………は？」

まさかの問いかけにネテロは呆気に取られ、アルケイデスは眉を顰める。

「其の方らに勝ち目は無い。死に急ぐことはあるまい」

結果は分かり切っていると傲慢不遜に言い放つ王に、ネテロは少し不貞腐れたように耳に指を入れて穿る。

「やつてもみねえで分かるかよ。儂らのこと何も知らんだろうが。見た目で判断すると足元を掬われるぞ？」

「……………くくくー！」

ネテロに対してアルケイデスは愉快そうに笑う。しかし、その内側に殺気が膨れ上がったのをネテロは感じ取っていた。

それでも尚、王は涼しい顔をして2人に視線を向けた。

「逆だ。戦局が読めぬほど、凡庸な指し手には見えぬ」

だがしかし、王の言葉は2人が強者、それも並外れた実力を抱くからこそその言葉だった。

ネテロとアルケイデスが極致にも至る強者だからこそ、このまま戦えばどうなるかなど理解しているはずだと、王も理解していた。

見た目子供でしかないアルケイデスを、見た目通りに侮らない時点

で、ネテロ達も王の実力の一端を嫌でも理解させられていた。

「余はこの世を統べるため生を受け、当初人間等に家畜以上の感情を持ち得なかったが、今は違う。僅かながら生かすに足る人間がいることを知った。あの娘がそうだ」

「……」

「お主らにも同じものを感じる。今、矛を収めるなら、許してやらんでもない」

それでもやはり己が絶対強者で王であると言う態度は変わらない。あくまで王の慈悲で生存を許されている事実を強調するかのよう

に。

「……それは、儂らだけをつて話だろ？」

ネテロは顔を引き締めて、ゆっくりと両腕を広げていく。

「そいつは立場上、聞けねえ相談だわな」

「そうじゃのう」

アルケイデスもコキリと首を鳴らして、ゆっくりと殺気を身体に纏わせていく。

「……負けを覚悟の戦いか」

王はそれでも構えようとすらせず、まっすぐに2人を見据える。

「理解出来ぬな……人類という種のためか？ ならば、余の行為はむしろ協力だと言っておく。……例えばお前達の社会には国境という縄張りに似た仕切りがあっただろう。境の右では子供が飢えて死に、左では何もしないクズが全てを持っている。狂気の沙汰だ」

「……」

ネテロ達は王の言葉を静かに聞いていた。

「余が壊してやる。そして与えよう。平等とは言えぬまでも、理不尽な差のない世界を！」

「……ん〜」

「……くっ！」

ネテロは思わず構えを解いて頭を掻き、アルケイデスは顔を背ける。

そんな2人の反応を無視して、演説を続ける。

「始めの内は『力』と『恐怖』を利用することを否定しない。だが、あくまでそれは秩序維持のためと限定する。余は……何のために力を使うかを学習した。弱く、しかし生かすべき者を守るためだ。敗者を虐げるためでは決してない」

「ぶっはっ！ くっ、くくくく!!」

非の打ち所がない高尚な王の演説が終わった瞬間に、アルケイデスが吹き出して腹を抱えて笑い出す。

それに王は初めて顔を歪め、ネテロは視線をアルケイデスに向ける。

「……何がおかしい？」

「いやいや……くくく！ すまぬすまぬ。まさか蟻の口からそのような戯言が出て来るとは思ってもおらんのだのう」

「……戯言だと？」

「おお、戯言も戯言だの、蟻の王とやら。残念ながら、お前は人間を過剰評価し過ぎぞ」

「……」

「人間は、この世で最も下等な生き物よ」

アルケイデスは悟り切った、清々しいとすら言えるほどに曇りのない微笑みを浮かべて言い切った。

「この世に生かすべき人間などおらぬよ。じゃが、この世に死ぬべき人間もまたおらぬ」

「……どういう意味だ」

「別に難しいことではない。例えば、無償で人々に食べ物を分け与え、寝床を提供し、治療を施す者がいたとしよう。さて、この者は生かすべきか？」

「当然だ」

「ほう、なるほどなるほど。じゃが、その者が無償で施したせいで、料理屋や宿屋、病院が儲けを失った。それはどう思う？」

「……」

「これだけだと料理屋などの方が矮小に見えるやもしれん。されど、その者達も守るべきものがある。家族であったり、従業員であったり、店であつたりな。そして、それらの店が潰れれば、その店と契約していた店や者達もまた儲けを失い、潰れるやもしれん。……さて、そう考えると、その慈善溢れる者は……悪行を尽くしたとも言えるのではないか？」

「……」

「では、今度は盗賊がいたとしよう。いくつもの村や町から食料や物を盗み、村人を殺し傷つける者達。さて、今度は殺すべきかの？」

「……殺すべきであろう」

「そうかの？ もし、その盗賊の行いは同じように行き場を失くし、他の場所へと逃げられぬ弱者達のためであつたならば？ そして、その襲われた村や町の者達が、その者達から搾取し苦しめ、追放した張本人達であつたならば？ そう考えると……その盗賊は善行を為したと言えるのではないか？」

「……」

「つまりじゃ。お主が無価値と思う人間は、お主以外の者からすれば価値ある人間であるやもしれぬし。お主が価値あると思う人間は、それはもう死んで欲しいと思われ、儂のような殺し屋に依頼される程の愚か者やもしれぬ。故に、あり得ぬのじゃよ。平等な社会など、理不尽な差がない世界など。何故ならば、それを定めるのがお主という時点で、それはもう完全なる不平等で、理不尽なのだからの」

「どんなに心掛けようと、複数名による議会制にしたとしても、どれだけ客観的な判断材料を集めようとも。」

「それが他でもない『誰か』が作った基準であるならば、それはそこに関われなかつた者からすれば不平等で、理不尽な決定だろう。自分の意思関係なく決められたのだから。」

「そう、人間はの、他人の定めた基準に従うという事実が耐え難い愚か者なんじゃよ」

「……だが、貴様ら人間は国を作り、法を作り、規則を作り、それを順守しているではないか。だというに、それが本当は耐え難いものだ」と

？」

「いかにも。だが、仕方なかろう？ そうしなければ、自分は本当は人間ではないという事実を叩きつけられ、人間社会から追い出されてしまふのだからの」

「何？」

「『人間』とは種族の名前ではない。カテゴリー……ただの巨大な集団の名称に過ぎん」

「……どういう意味だ？」

「確かに儂らは見た目、体の構造は似ておる。それに子も為せる。そのせい社会を形成することが出来ておるが……儂らは本能的に氣付いておるんじやよ。儂らは互いに別の生き物じやとな。だからこそ、儂らは他人を傷つけ、貶め、殺すことが出来る。たとえ、肉親であらうともな」

世界最高峰の殺し屋であり、世界からその存在を抹消されている流星街の生まれのアルケイデスだからこそ、至った『人間という存在』への結論。

「知能を得たが故に、人間と呼ばれている生き物は本能的な同族との？がりを感じ取れなくなつてしもうた。それこそ理由がない限り、他者を思いやる、愛しようという感情が芽生えぬ哀れな生き物じや」

親は己と血が繋がった、自分が腹を痛めて産んだ子供だからこそ愛する。しかし、その子が自分と血が繋がっていないと判明した瞬間に、これまで愛してきた事実がなかったかのように捨てる。

もちろん、そんな親ばかりではないが、それでもそれは『これまで自分の子供として育ててきた』事実があるからだろう。

恋人も友人も同じだ。

愛する恋する慕うに理由はないと言う者は多いが、結局それも見た目であったり、性格であったり、居心地であったりと理由がある。

そして、それは容易く裏返ることも、また誰もが知っている。

愛はきっかけ一つで憎悪になり、恋は理由一つで嫌悪になり、友情



は時に大した理由もなく、あまり会わなくなつたと言う程度で無関心になる。

そのような感情は、全て知能から生まれると、アルケイデスは理解した。

「僕は殺し屋故に、これまで様々な理由で殺しを依頼されてきた。『あいつが気に入らないから』『あいつがいると俺が上に立てないから』『あいつは俺を馬鹿にしてるはずだから』『あいつは太ってるから』『あいつが女だから』……『あいつが生きてることが気に食わない』。挙げればきりが無い。そして、そんな依頼は、驚くことに周囲からは人徳者と云われている人間がしてくることが多い」

元は本当に人徳者だったのだろう。

だが、周囲に持て囃され、いつしかそれが当たり前になり、ずっとその状態を維持したために演じるようになる。

「それでも変わらぬ者もある。だが、そんな者でも……社会から弾き出されるか、追い出されようとされると、自分を苦しめる悪やその現実に屈する。そして……闇に手を伸ばす」

つまりは殺し屋などのアウトローを頼ったり、自分自身が犯罪に手を染めるようになる。

『そうしなければ、生きていけなかったから』

『そうしなければ、全てが奪われていたから』

『そうしなければ、自分はこの社会で生きていけない』

と、言い訳をして。

少し前まで慈しんでいた人々を手にかける。

『人間』と言う超巨大なコミュニティーで生きていたいから。

ただそれだけの為に。

それはアウトローな者達も同じだ。

流星街の住人達も結局のところ、コミュニティーがなければ生きていけない事実は変わらない。

「結局のところ、人間という生き物は、自分が満足出来るかどうか、重要なんじゃないよ。決して他人のためでは動けぬ。そんな生き物は、どう

考えても家畜以下じやろうて」

アルケイデスの言葉に、王は理解不能とばかりに顔を歪める。

「ならば、何故余と戦う？ 人間を下等と、己とは異なる生物というのであれば、戦う理由はないはずだ」

「そりゃあ儂が殺し屋だからに決まっておろう。依頼され、引き受けた以上、仕事は熟さねばのう」

「……やはり、理解に苦しむ」

「かっかっかっ！ 出来るわけなからう、たかが小童に。知能が高いからと言って、全ての物事が理解出来るわけがない。そんな事を思えるのは、世界を知らぬ粹がった小僧だけじゃて」

「……ならば、猶更戦う必要はなからう」

「……ほお？」

「互いに理解出来ぬのであれば、理解出来るまで論を交わせれば良い」

王はそう言い放ち、その場に腰を下ろす。

「やはり、貴様らとは戦わぬ。ここに来たのは、忌憚なく論を交わすために過ぎぬ」

「……」

「近う寄れ」

座るように促す王に、アルケイデスはネテロに視線を向ける。

ネテロは先ほどからずっと王を観察していた。

（……奴は揺れている。人間と蟻の狭間で）

人間の性質を受け継いだせいだ。人間以上の身体能力と知能を手にしたが故の結果か。コムギという戦闘能力とはかけ離れた存在と関わったからなのか。……あるいはその全てか。

王は人間と同じように言葉を交わすことが出来、思考することが出来るからこそ、共に在ることが出来るという結論に至っている。

——だが。

（まだ気付いていない。その2つが絶対に交わらないことを！）

人間として在るのであれば、蟻の王としての能力や思考は不要だ。

そして、蟻として在るのであれば、人間への慈悲と共存は絶対に成

立しない。何故なら今のキメラアントにとって、人間は家畜であり――『食料』なのだから。

(……だが、そうだな。どちらに傾いたとしても、結論は変わらない) 人間として在ることを選んだ場合、NGLと東ゴルト―を侵略・占領した事実によりテロ主犯として極刑になるだろう。

そして、蟻としてであれば……これまで通り危険生物として処理しなければならぬ。

もはや王の存在を認めることはない、ハンター協会会長として認めるわけにはいかないのだ。

そう、再確認したネテロは、一歩踏み出す。

――早めに闘つちまつた方が良い

「王よ」

――心が、ぶれる前に

「お互い大変だな」

片や互いを認め、共存の道を探ろうとする怪物。

片や『人間社会の平穏の為に』という建前の為に、手を差し伸べてくる怪物を殺す狩人。

もはやどちらが世の為に戦っているのか分からない状況で、狩人は怪物の期待を裏切らなければならず、怪物は狩人につまらない理由で殺されようとしている。

独り言のように呟いたネテロを訝しんだ王は、その瞬間周囲と己の時が止まったかのように錯覚した。

されどその中でもネテロは当たり前前のように動いており――王の見開く瞳に見惚れるほど澱みのない流線を描く合掌が映される。

その直後、合掌より光が輝き、ネテロの背後に巨大な仏像が出現した。

王がそれを認識したと同時に、

「【百式観音】『壹乃掌』」

巨大な手刀が叩きつけられた。

王は防御する暇もなく地面へと沈む。

アルケイデスはゴキゴキと指を動かして鳴らし、追撃に出ようとしたがネテロが手を上げて制する。

挟めた地面を鋭く見据えるネテロとアルケイデスの目に、当然のように立ち上がる王の姿が映る。

「……ぺっ」

王は口から血を吐き出すも、その身体には傷は全くなかった。

「ほう……」

「……（直撃したはず……硬い！）」

王は悠々と穴から外に出てくる。

「いい技だ。太刀筋が見え——」

褒め讃えようとした王の目の前に、脚があった。

これまた王は防御することも出来ず、直撃して顔を跳ね上げる——が、それだけで吹き飛ぶどころか倒れることもなく、足を開いて堪えた。

そして、視線をすぐに攻撃の主へと向ける。

空中に脚を振り抜いたアルケイデスがいた。

「ほう……本に硬いの」

心底楽しそうな笑みを浮かべながら呟くアルケイデス。

完全に不意を突かれたことに王は声をかけようとしたが、

そこに再び輝く巨大な掌が両側から迫ってきていた。

アルケイデスは地面に倒れて身を低くして躲していたが、王は今度も避けることも出来ずに両掌に挟まれる。

「【百式観音】『参乃掌』」

両腕を交え、王を叩き潰そうとしたネテロだが、手応えから仕留められていない事に気付いていた。

すると、力強く閉じられた両掌がネテロの意に反して、ゆつくりと開かれていく。

それと同時に掌の隙間から、ネテロやアルケイデスですら背中に怖気が走る怒気が溢れる。

——そんなに、死にたいか？

それは王からすれば、聞き分けの無い子供に向けるような僅かな苛立ちでしかなかったが、生物としての次元が少し上であるため、その稚児に向ける程度の苛立ちでさえも、そこら辺の一般人であればショック死するレベルの物であった。

その怒気に対して、2人の反応は正反対だった。

ネテロは後ろに跳び下がって王から先程の倍以上の距離を取り。

アルケイデスは、狂気を孕んだ笑みを浮かべながら、手刀を構えて王の背後に迫る。

王は鋭く放たれた手刀を僅かに屈んで躲し、尻尾をアルケイデスに叩きつけようとしたが、アルケイデスは左脚を絡ませてポールダンスのように尻尾を軸にして回転して躲す。

回転の勢いを利用して右肘を繰り出すアルケイデス。

王は左腕で受け止め、振り返りながら右拳を放つ。アルケイデスはそれに左ストレートを放って、王の拳に打ち合わせる。

拳と拳の間の空気が衝撃となって弾け、それをゴングとして王とアルケイデスの更に激しい拳の応酬が始まる。

僅か5秒。

その間、五十にも及ぶ衝突が空気を揺らし、その結末は——

「ぐうー！」

アルケイデスの押し負けて決着がついた。

アルケイデスは後ろに勢いよく吹き飛び、背後の岩壁に背中から突っ込んだ。

そしてその間、ネテロは……己の後退に果てしないショックを受け

ていた。

死を決意したはずの己が、あの程度で後ろに下がったという事實は、己の覚悟を嘲笑われたに等しいのだから。

王はそんなネテロに視線を向け、

「悟れ」

と、先程の怒りを全く感じさせずに言い放った。

「其の方らが余と交わすことが叶うのは、言葉だけだ」

(……産まれたての、餓鬼がッ)

まさしく稚児に優しく理解させるようにネテロに告げてくる王に、ネテロは遂に感情の手綱を手放してしまった。

(それが出来れば、苦勞はしねえ!!)

ハンター協会会長という重責を背負って死地に立ったネテロからすれば、好き勝手に振る舞う王に苛立ちを感じるのも仕方がないことだろう。

更にこれまで己が積み上げてきた力が通じないことも、また拍車をかけた。

その怒りのまま飛び出そうとしたネテロだったが、直前であることを思い出して踏み止まった。

(……待てよ。言葉、か……)

ネテロは構えを解いて、王を見据える。

「王よ……自分の名を知りたくはないか？」

まさかの問いかけに王も流石に一瞬反応が遅れてしまう。

「……何故貴様が、余の名を知っている？」

興味を引けたことで、ネテロはようやく流れを掴んだことに僅かに口端を上げる。

「部下がお主の母親の臨終に立ち会ったのよ。今際の言葉がお主の名前だったそうだ」

ネテロは右手で顎を撫でながら、笑みを浮かべる。

「その部下も護衛軍との戦いで死んでしまったかもなア……。闘る気になつたかね？ 儂に負けを認めさせれば……。教えてやらんでもないぞ？」

王はそれがネテロの挑発だと理解していた。

しかし、その挑発が今最も自分が知りたかった情報であったことから、王はその挑発に乗るしかなかった。

「……殺さず、気の済む迄…か」

王は呟きながら立ち上がる。

「飛車角落ち、と言ったところだな。まあ……」

そして、ゆっくりと身構える。

「すぐに詰んでやろう」

王がそう応えると同時に、王の後方にある岩壁から岩が勢いよく飛び出した。

それに動こうとした王とネテロは揃って足を止めて、意識をそちらに向けて。

「やれやれ……まさか、己が名前で釣れるとはのう」

土煙から現れたアルケイデスは、汚れてはいるが王同様一切傷らしい傷はなかった。

「世界を支配しようとする王ともあろう者が、自分で殺した母が残した名前に今更興味を持つとは、随分と軟弱なことだの」

「……なんだと?」

「名など己の好きなように決めればよいものを。所詮名など記号、称号と変わらぬと言うに」

「……だが、貴様とて親より名を授かったのであろう?」

「いや? 儂に名はない。儂は生まれたと同時に捨てられたからの」

【アルケイデス】は周囲が付けた名に過ぎず、誰一人、ネテロでさえもアルケイデスの本当の名を知らない。

何故ならアルケイデス自身も名を知らないだから。

流星街の端で母親が人知れず産み落とし、そのままその場に捨て置かれた赤子。

それがアルケイデスだった。

捨て子を拾い育てるという流星街の慣習がなければ、この世にはいなかっただろう。

だからこそ、その恩返しの一環として、アルケイデスはラミナやク

ロ口達など流星街出身の若者の面倒を見てきたというのもある。

だが、アルケイデスは絶対に己に『名前』を付けず、付けさせなかった。

それこそ、名を付けようとしてくれた育ての親を殺してでも。

己は社会から抹消された異端であり、この世界の闇に生きる者なのだから。

「まあ、鬨る気になったのであれば理由はどうでも良いか。儂はただ、お前を殺すのみじゃて」

「……」

「じゃが、流石に今の儂では勝ち目はないのう」

「……」

王はアルケイデスに不気味な雰囲気を感じ取って、出方を窺っていた。

ネテロも同じくアルケイデスの動向を窺っていた。

何故なら、アルケイデスはネテロにも殺気を放っているから。

「やれやれ……これはその爺に使うつもりだったんじゃないがなあ。まあ、良いか。お前を殺して、そのまま爺を殺すでしょう」

そう言ったアルケイデスは上着を破り捨てる。

露わになったのは、まるで岩のように鍛え抜かれた筋肉の身体と、その身体に刻まれた大小無数の傷痕。

王はその身体が見た目以上の年月をかけて鍛え上げられたものだとすぐに看破した。

アルケイデスは両脚を肩幅に開き、僅かに腰を落とす。

その動きに王とネテロは、先ほどの最初の【百式観音】発動時のネテロの姿を重ねた。

アルケイデスはゆっくりと両手を胸のあたりまで上げ、本当にネテロのように胸の前で合掌し――



合わせた両掌を下に向けた。

その直後、膨大なオーラが噴き出したかと思うと、一瞬でアルケイデスの背後に巨大な仏像が出現した。

だが、それはネテロの【百式観音】とは似て非なるものだった。

白金に輝く巨大な仏像。

その両肩から伸びる両腕は、数十本もの太細様々な腕が束ねられたもので、それは全て——アルケイデスの全身を握り潰すかの如く握り締めていた。

頭部は完全に掌で埋め尽くされており、目、鼻、耳、口が指の隙間から覗いている。首はもちろん胴体や両腕両脚も、指すらもほぼ隙間なく握り締められていた。

【重愛慈縛千手如来】

王とネテロは現れた如来像に目を見開く。

今もギリギリ！と耳に届きそうな程力強く握り締められており、今にも潰れて千切れそうだった。更に上からも押さえつけるように力を掛けられていた。

(なんだアレは……？ 他者ではなく己を押さえつけて何の意味がある？ それに先程の……いや、これまで奴はあの状態で動いていたというのか？)

どう考えても、あの状態ではまともに動けるはずがない。それほどまでにギチギチに固められている。

王はアルケイデスの能力の意図が読めずに警戒心を高める。

だが、

「安心せい。これは正真正銘、ただ自分を押さえつけ、鍛えるためだけの能力じゃよ」

「……鍛えるだけ、だど？」

「おうさ」

アルケイデスは目、鼻、口、耳だけが指の隙間から剥き出している不気味な姿で軽々と応じる。

「六十年」

「……………」

「儂がこの能力を発動し続けた年月じやよ。儂は六十年、この状態で生きて、戦い、殺して来た。ただ……あそこの爺を殺すためだけに、の」

ただ宿敵を殺すために、アルケイデスはずっと己を縛り、過重を重ねてきた。

「この能力は年々、徐々に、本に少しずつ力と重さを増してゆく。そうして我が身体を限界以上に鍛えとるんじやよ」

増していく重さは己が勝ち、生き残るための『自愛』であり。強まる縛りも己を生かし、勝ち残るための『慈愛』である。

されど孤独の暗殺者故に、殺して来た者達の無念を背負った如来が、その無念を無数の手として己を地獄に突き落とすかのように。

または、悪を為す己であつても人間として生きよと、重すぎる『慈愛』と『慈悲』を押し付けるかのように。

そして、それを振り払おうとする己は——最低最悪の生き物だと自覚し続けることが出来る。

ただただ、それだけの……己を縛るだけの能力。

ただ一人の武人を殺す力を得る為だけの能力である。

それを今、解き放つ。

アルケイデスは下に向けていた合掌を、上に向けてる。

「反解」

解除の号を告げると同時に、全身を覆う全ての掌が解放された。

直後、強烈な闘気が突風となって王とネテロに叩きつけられる。

そして、アルケイデスの身体が変化を始める。

ギヂヂ！ ゴギ！ ビギギ！

どう考えても身体が傷ついているようにしか思えない音を鳴らしながら、アルケイデスの身体が大きくなっていく。

アルケイデスの身体はビスケとは違い、念に加えて【重愛慈縛千手如来】の圧力によって少年サイズまで無理矢理に圧縮されていた。

それによって肉体に常に負荷をかけ続け、鍛え抜いてきた。

それを解放した今、アルケイデスの身体は最も戦闘に適した状態へと戻る。

身長は170cmほどまで伸び、手足は太くなったが王やモラウ達などに比べれば細いが、岩鋼のように極限まで引き締まった筋肉が覆っている。

胴体も同じく極限まで引き締められた腹筋が晒され、王はもはや本当にこれまで見てきた人間と同じ肉を持つ身体なのかと疑問が過ぎった。

顔は30代ほどに見えるほど若々しく、老人とは思えない見た目をしている。

そして、纏うオーラは【纏】のように見えるが、感じる圧は【練】にも等しい。

だが、最も注目すべき変化は『額』だった。

アルケイデスの額には、縦に開く『金に輝く瞳を持つ第三の目』が出現していた。

【戦極阿修羅明王】

殺し屋の王が、降臨した。